

スーパーロボット大戦 X 一輝きの翼一

カイト・レイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

始まりのアル・ワース……神と獣、光と闇、過去と未来が集う世界。

それは永遠に覚めぬ夢……大地は人の想いを吸い、木々には知恵の実が熟す。

生と死の狭間に浮かび、誰にも知られず世界は回る。すべては、智の神エンデの名の下に……。

そして、さまざまな異世界から到来した者たちによつて、アル・ワースに戦乱が巻き起こる……。

戦え、鋼の勇者達よ……アル・ワースを救う為……そして、自分達の世界へ帰還する為……。

戦神達の運命は、新たな世界で交差 X | c r o s s | する！

〈追加参戦予定作品〉

機動戦士ガンダムSEED DESTINY (機体、パイロットのみ参戦)

機動戦士ガンダムOO (機体、パイロットのみ参戦)

劇場版 機動戦士ガンダム00 | A w a k e n i n g o f t h e T r a

i l l b l a z e r | (機体、パイロットのみ参戦)

機動戦士ガンダムUC (機体、パイロットのみ参戦)

機動戦士ガンダムAGE (機体、パイロットのみ参戦)

機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ (機体、パイロットのみ参戦)

インフィニット・ストラトス (機体、パイロットのみ参戦)

マシンカイザーSKL (機体、パイロットのみ参戦)

真ゲッターロボ 世界最後の日 (機体、パイロットのみ参戦)

獣装機攻ダンクラーガノヴァ (機体、パイロットのみ参戦)

機神咆吼デモンベイン (機体、パイロットのみ参戦)

ヒーローマン (機体、パイロットのみ参戦)

ガン×ソード (若干のストーリー、機体、パイロット参戦)

アクエリオンEVO L（機体、パイロットのみ参戦）

トップをねらえ！（機体、パイロットのみ参戦）

レガリア The Three Sacred Stars（ストーリー、機体、パイロット参戦）

ノブナガ・ザ・フル（機体、パイロットのみ参戦）

クレヨンしんちゃん（パイロットのみ参戦）

超電導カンタム・ロボ（ストーリー、機体、パイロット参戦）

ケロロ軍曹（機体、パイロットのみ参戦）

機動戦艦ナデシコ | The prince of darkness |（機体、パイロットのみ参戦）

リーンの翼（機体、パイロットのみ参戦）

劇場版 マクロスF 恋離飛翼くサヨナラノツバサく（機体、パイロットのみ参戦）

マクロス30 銀河を繋ぐ歌声（機体、パイロットのみ参戦）

海賊戦隊ゴーカイジャー（機体、パイロットのみ参戦）

ウルトラマンゼロ外伝 キラーザ ビートスター（ストーリー、機体、パイロット参戦）

スーパーロボット大戦UX（機体、パイロットのみ参戦）

目次

スーパーロボット大戦Tー交わる運命一 PV風予告	
スーパーロボット大戦Tー交わる運命 一PV第二弾	1
スーパーロボット大戦Tー交わる運 命一PV2	12
設定	
オリジナルキャラ&amp;オリジナル ル機体紹介	32
ボーナスシナリオ	
ボーナスシナリオ1 龍神丸の秘密	84
ボーナスシナリオ2 メガファウナ	
騒乱	
ボーナスシナリオ3 姫様奮戦記	104
123	
ボーナスシナリオ4 背中合わせの 二人	139
ボーナスシナリオ5 アル・ワース	
食堂開店	167
ボーナスシナリオ6 プリティ・サ リアンの冒険	192
クロスオーバーシナリオ 運命の理 を変えるドラゴンライダー	218
ボーナスシナリオ7 強く正しく美	

第2話 嵐を呼ぶ5歳児と救世主

618

スペシャルシナリオ 集え、始まり

の場所に | 659

第3話 ブルーウォーターの少女と

漆黒の復讐鬼 | 681

第4話 闇の翼 | 733

第5話 放浪の聖戦士達 | 779

第6話 海賊部隊のGと緑の侵略者

| 819

第7話 鋼鉄の星 | 865

第8話 異界から来るもの | 909

第9話 あの空の出会い | 941

第10話 異境、そして歌舞く戦い

| 986

第11話 暗闇の灯火 | 1028

第12話 覚醒のバスタード

1078

第13話 姉妹／SISTER

1133

第14話 立つ／STAND U

P | 1174

第15話 成層圏まで狙い撃つ男

1224

第16話 めぐり合う螺旋 | 1274

第17話 宿命の二人と大切な存在

第18話	オーラバトラー飛翔	1315
1361	シークレットシナリオ	想いとい
うオーラ	——	1397
第19話	リターン・ヒーロー	1423
第20話	ナディアの家出	1466
分岐シナリオ	——	1512
創界山ルート1	——	1529
第21話	再会のアルゼナル	1562
第22話	春日部防衛隊	——

第23話	勇者特急、到着	1599
第24話	闇を照らす太陽	1641
マナの国ルート	——	1687
第21話	ターゲット確認	1723
第22話	神機 / TRUTH	1763
第23話	片翼の二人	1806
第24話	戦場の再会	1844
共通ルート	——	1865
合流	——	1905
第25話	眠る魔王と復活の破壊王	1844
第26話	二人の王	1865

第27話	決別	1948	第32話	輝く星神と龍王の咆哮	
第28話	宇宙と大地と	2024	325		
第29話	想いの人	2057	第33話	越えるべき壁	2363
分岐シナリオ2		2103	第34話	偉大な勇者	2409
地上ルート			第35話	エンデの名の下に	
第30話	灼熱の激闘	12128	2454		
第31話	極寒の死闘	2171	第36話	自由という翼	2500
宇宙ルート			第37話	吹雪の中の暖かさ	
第30話	未知の宇宙	2214	2564		
第31話	レイハントンの血とゴ		第38話	進化の奇跡	2607
カイな奴ら			第39話	借金女王と家族と宿命の	
共通ルート		2239	ライバル		2637
合流2		2295	第40話	対話の歌	2705

第41話	闇と光	2761
シークレットシナリオ2	最凶対最	
強		
第42話	薔薇のバーサーカーと黒	2821
いたキシード野郎		
第43話	ヨロイVSイクサヨロイ	2838
分岐シナリオ3		
対ドアクダールート		
第44話	正義と友情と	2927
第45話	ネモの秘密	2883
第46話	過去からの亡霊	
第47話	白き翼	3105

第48話	ビヨン・ザ・トッド	3149
第49話	正義を持たぬ力	3196
対ミスルギルート		
第44話	胸の中の嵐	3230
第45話	ふたりの絆	3284
第46話	帰還 / HARMON	3230
Y		
第47話	金星から来た災い	3332
3393		
第48話	それぞれの迷い	3433
第49話	完全な世界	3492
共通ルート		

3874	第56話	俺／私の大切な場所	3790
3832	第55話	誰も知らない明日へ	3790
	第54話	心の涙	3790
3724	第53話	決戦、ミスルギ皇国	3679
	第52話	未来への再誕	3654
	の矜持		3654
	シークレットシナリオ3	赤い彗星	3607
	第51話	さらなる高みへ	3565
	第50話	覚醒の一撃	3535
	合流3		3534

	第64話	NとZの真実	4330
4256	第63話	正義と盟友の名の下に	4244
	ピネガーの秘密		4244
4203	シークレットシナリオ4	シュワル	4203
	第62話	希望を司る混沌の翼	4142
	翼		4142
	第61話	天を貫く螺旋と無垢なる	4099
	第60話	楽園の終わり	4054
	第59話	双翼の友人	4396
	第58話	輝く絆の翼	8391
	第57話	帰るべき世界	13

第76話 運命のしずく |

第77話 起死回生 |

第78話 可能性の宇宙 |

シークレットシナリオ5 遭遇のZ

第79話 永遠のアル・ワース

5416 最終話 絆の光(前編) |

最終話 絆の光(中編) |

最終話 絆の光(後編) |

エピソード 輝く未来 |

5784573656595585

5407 Z 535252715225

スーパーロボット大戦Tー交わる運命一PV風予告 スーパーロボット大戦Tー交わる運命一PV第一弾

〈特報〉

並行世界に存在する地球…。

多くの戦争を終え、革命を成しても、人々は戦争を続けていく地球…。

ーブルー・アースー

様々な厄災が起こり、衰退しつつ世界で人類が戦い続ける地球…。

ーレッド・アースー

この二つの地球は決して、交わるはずがなかった。

だが、この二つの地球が交わった時…二つの地球の運命をかけた戦いにへと人類は直

面する…。

そして…二つの地球の戦いは…黄昏の地球の戦いをも巻き込んでいく。

スーパーロボット大戦Tー交わる運命ー

〈追加参戦作品〉

・機動戦士ガンダムSEED

キラ「世界は…僕が守る！これで…！」

・機獣創世記ゾイドジェネシス

ルージ「村を…みんなを守るために僕は…！ムラサメ・ブレードだ！いけえええつ！」

・天元突破グレンラガン

・劇場版 天元突破グレンラガン 螺巖篇

ヴィラル「この様な奴等に容赦は無用だぞ、シモン！」

シモン「当たり前だ、俺はいつでも全力を出す！指でもドリルだ、貫く！」

・鉄のラインバレル（原作漫画版）

浩一「さあ、行くぜ！叩き斬ってやる！うおおおっ！」

・クロスアンジュ 天使と竜の輪舞

アンジュ「生きる……。それが私の選んだ道よ！接近戦に持ち込めば……！これで、終わりよ！」

・劇場版 機動戦士ガンダム00 — Awakening of the Tra

illblazer —

刹那「ここは……俺の距離だ！はあああつ！」

・蒼穹のファフナー

・蒼穹のファフナー HEAVEN AND EARTH

一騎「止めてやる……この戦いを！やるぞ……！終わりだあああつ！」

・機動戦士ガンダム 閃光のハサウェイ

マフティー「警告はした。覚悟があると認める！ビームサーベルで……もらった！」

・銀河旋風ブライガー

お町「それじゃあ、行きましょ、キッドちゃん！」

キッド「OK、決めるとしますか！ブライスピアー！これで串刺しだ！」

アイザック「チエックメイト！」

・地球防衛企業ダイ・ガード

青山「しくじるなよ、赤木！」

赤木「おうよ、青山！任せとけて！男は度胸、ぶん殴つてやる！うおおおりやああつ
！」

・コードギアス 反逆のルルーシュR2

ゼロ「私はゼロ、奇跡を起こす男だ！ハドロン砲を受けよ！」

・バディ・コンプレックス

・バディ・コンプレックス 完結編 —あの空に還る未来で—

青葉「逃がさないぜ！接近する！これで、終わりだ！」

・新機動戦記ガンダムW Endless Waltz
ヒイロ「行くぞ、ゼロ。速やかに任務を遂行する…。落ちろ…！」

・絶対無敵ライジンオー

吼児「仁君、無理しないでね！」

仁「わかったぜ、吼児！ライジンググソオオド！行くぜ！これで真つ二つだ！」

・機甲界ガリアン

ジョジョ「ガリアンで相手だ！剣なら誰にも負けない！終わりだ！」

・魔神英雄伝ワタル

ワタル「僕は救世主として戦うんだ！」

龍神丸「ワタル、ここは炎龍拳だ！」

ワタル「よおし！そこだ、炎龍拳！」

・鋼鉄神ジーク

剣児「よっしやあ、行くぜ！こいつを喰らいな！ナツクル、ボンバアアアツ！」

・エヴァンゲリオン新劇場版：序

・エヴァンゲリオン新劇場版：破

・エヴァンゲリオン新劇場版：Q

シンジ「接近戦なら……！はあああつ！」

・銀河機攻隊 マジエスティックプリンス

・劇場版マジエスティックプリンス 覚醒の遺伝子

イズル「僕はヒーローになるんだ……！レッドファイブの機動性なら……！これでえええつ！」

・重神機パンドーラ

レオン「ネオ翔龍は僕が守ってみせる！やるしかない……！うおおおつ！多重次元アタック!!？」

・六神合体ゴッドマーズ

タケル「地球を襲うと言うのなら、容赦はしない！喰らえ、ゴッドファイヤー！」

・機動戦士ガンダムSEED DESTINY

シン「こいつでどうだ！吹っ飛ばええええつ!!？」

〈2019年9月5日時点 新規参戦作品〉

・ガンダムEXA

レオス「ビームサーベルで叩き斬ってやるぜ！落ちやがれ！」

・ナイツ&マジック

エル「僕のロボットは負けない！イカルガの加速に乗り、斬り裂きます！落ちてくだ
さい！」

・特命戦隊ゴーバスターズ

レッドバスター「バスターズ、レディ、ゴー！」

モーフインブレス『It's time for buster!』

レッドバスター「デイメンションクラッシュ！」

・天蒼軌道アルヴアドリング

綾人「ゲーム脳、舐めるんじゃねえぞ！サーベルで勝負だ！ゲーム殺法、居合斬り！」

・ウルトラマンオーブ

オーブ「俺の名はオーブ、闇を照らして、悪を討つ！シェア、スペリオン光線！」

・ガリー・エアフォース

グリペン「敵なら、倒す！」

慧「グリペン、俺を気にせず、ぶっ放せ！」

グリペン「了解、ミサイルで終わり！」

・仮面ライダージオウ

ジオウ「タイムマジーンなら、いける気がする！これでも喰らえ！はあっ！」

・ 神無月の巫女

ソウマ「姫子は…俺が守る！終わりにさせるぞ、日輪光烈…大撃破！」

・ SSSS・GRIDMAN

裕太「行こう、グリッドマン！」

グリッドマン「ああ。任せろ、裕太！グリッド、ビイイム!!？」

・ ガンダムビルドダイバーズ

リク「戦いを終わらせる！GNダイバーソードで…！うおおおっ！」

・ 最弱無敗の神装機竜

ルクス「僕はみんなを守る為に戦う！懐に飛び込む！」

・ スーパーヒーローージェネレーション

セオ「必ず勝ってみせる！今だ、シューティング・レイ！これで終わりだ！」

命を懸けて護るべき故郷——それは、地球（TERRA）だ。

リーシャ「私の攻撃：受けてみる！」

森次「本物の暴力を教えてやろう」

ジャグラー「ゼツパンドンの力を味わえ！」

翔子「どこまでも高く！ 高く、高く、高くっ！」

イクス「見せてみる、貴様等の力をな」

ゲイツ「ジオウに遅れを取るつもりはない！」

アンチ「グリッドマンは：俺が倒す！」

アデイ「行くよ、キッド！」

キッド「ナイマ」「ああ、エルに負けてられないからな！」

ダグ「俺からは逃れられないぜ」

ツバサ「お前に終焉を与えてやろう」

ジアート「狩らせてもらうぞ、我がラマタよ！」

アリス「一鷹さん！敵との距離、全く問題ありません！」

一鷹「おう！これで決めるぜ、メーザーアイ！」

リー「ヤール、フロム！決めるぞ！」

レ・ミイ「突き刺してやるわ！」

まい「ビンゴ！終わりだね」

グラハム「この距離、仕掛けるぞ！」

剣児「ジীগ、ブリーカアアアツ!!？」

リク「トランザム！」

仁「ゴッドサンダークラッシュ！」

ワタル「登龍けえええん！」

スーパーロボット大戦TⅠ交わる運命Ⅰ
近日投稿予定

スーパーロボット大戦Tー交わる運命ーPV2

〈特報〉

これは三つの地球の命運を賭けた大いなる戦いの歴史…。

退墟と諦めが支配する黄金の時代を迎えているゴールド・アース…。

一度は平和を掴みかけたが、再び争いへと発展してしまったブルー・アース…。

廃墟化仕掛けている世界で、多くの侵略者から各地域を守り続け、平和な世を目指しているレッド・アース…。

この異なる三つの世界で…人類と地球の存在意義を懸けた戦いが始まる。

スーパーロボット大戦Tー交わる運命ー

ソウマ「オロチ衆は…俺が倒す！これで終わらせる！日輪烈光・飛天鳳凰脚!!？」

ーTー

デイケイド「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」

デイケイドライバー『ファイナルアタックライド デイデイデイケイド!!？』

デイケイド「ふっ！はあああああつ！」

ーTー

レオス「世界を守る為に…俺は…！アリス・ファンネル！行けええええツ！！？」

ーTー

ルクス「この力を…みんなを守る為に使う！暴食（リロード・オン・ファイア）！」

ーTー

アイザック「キッド、ブライソードビームだ！」

キッド「OK！ブライソードビーム！イエイ、発射！」

ーTー

慧「イーグル、頼む！」

イーグル「よし！イーグルもやっちゃうよ！そらそら！」

グリペン「ロツク1…！」

ーTー

レオン「ここまで近づけば…当たるはずだ！ハイパードライブの具現化で…！うおおお
おおっ！」

ーTー

リック「俺は…負けない！行くぞ…ダブルオースカイ！トランザムインフィニティ！はあぁあぁあつ！」

ーTー

裕太「マックスさん！」

マックス「わかった！アクセスコード、バトルトラクトマックス！さあ、行くぞ、グリッドマン！」

グリッドマン「ああ！」

グリッドマン&amp;mp;マックス「剛力合体超人、マックスグリッドマン！超電撃、キイイイツク！！？」

マックス「ラストはこれだ！」

グリッドマン&amp;mp;マックス「マックスグリッドビイイイム！！？」

ーTー

青葉「コネクティブ・デイオ！」

デイオ「アクセプション！タイミングを合わせろ、青葉！」

青葉「了解だ、デイオ！」

青葉& a m p ; デイオ「これでえええええつ!!?。」

ーTー

ヨウタ「援護任せるぜ、ユキ！」

ユキ「わかったよ、ヨウタ！」

ヨウタ「熱々にしてやるぜ！」

ファルセイバー「火力は任せるぞ！」

ヨウタ「燃えやがれ、ファルブレイズッ！」

ーTー

オーブ「俺に触れると…火傷するぜ！ストビューム…ダイナマイトオオオオツ!!？」
シエアアアアツ！」

ーTー

セオ「お前達の好きにはさせないぞ、ムサボルデス！フェザー、展開。ライトクロス
エツジ！」

ーTー

刹那「目覚めろ、フルセイバー！ トランザム……これが……フルセイバーの力だ！」

※スーパーロボット大戦Tー交わる運命ー

オリジナル主人公メカ& a m p ; キャラクター

〈男主人公〉

搭乗者により、ソード、ガンと形態が変わる機体……。

・デイスエイド

デイスエイド・ソードでブルー・アースを駆け、ある者に復讐を誓う少年……。

・小田切おだぎり
拓哉たくや

拓哉「俺の邪魔をするな…。ブレードで…斬り裂く…！」

・デイシエイド・ガンいけなみに乗り、拓哉をリーダーと慕い、サポートする少女…。
・池波いけなみ 夏華なつか

夏華「逃しません！下手だとは言わせませんよ…ガトリング発射！」

〈女主人公〉

搭乗者の力をエネルギーに変える機体…。

・メルガラム

レッド・アースである者を探し出し、罪を償わせようとする少女…。

・井崎いぞき 萌香もえか

萌香の妹でメルガルムのサブパイロットの少女…。

・井崎いざき 萌菜もえな

萌菜「姉さん、敵との距離は計算済みだよ！」

萌香「ありがと、萌菜！よし、それなら…エネルギーイイイ…！ナツクルウウウウツ
!!?」

Tread on the Tigers Tail

彼等は巡り会い、危険に挑む

一騎「元気がないな、シンジ。どうかしたのか？」

シンジ「…一輝さんやヒロムさんは…フェストウムやヴァグラスと戦う事…怖くな
かったんですか？」

一騎「最初は怖かったさ。でも、守りたいものがあつたから、戦つたんだ」
シンジ「守りたいもの？」

ヒロム「俺には守りたい約束があつたんだ」

一騎「俺は守りたい島があつた……。だから、戦えたんだ」

ヒロム「シンジ、お前も必ず…見つけられるぞ。守りたいものを」

ルクス「それにしても、突然、ソウゴ君達が現れた時は驚いたよ」

リーシャ「それも助けた者が未来の魔王だとはな」

ソウゴ「うーん、元、が正しいかな？」

ゲイツ「気楽に話している場合か、ジオウ。何故死んだはずの俺がいるんだ？」

ツクヨミ「私も消えたはずなのに、復活しているし…さらに、仮面ライダーの力もなくなっているわ」

ソウゴ「そんな事聞かれてもわからないよ。（オーマジオウの力で世界を変えたはずなのに、どうして…？）」

浩一「一体何なんだよ、あんた等は?!？」

ボウイー「ほう、なかなか威勢のいいお子様だ事！」

お町「勇ましい子は嫌いじゃないわ！」

アイザック「早瀬 浩一君。君を石神社長へ協力させる」

キッド「大人四人だが、悪く思わないでくれよ！」

浩一「ケツ！あの社長…結局脅してくるのかよ！」

キッド「じゃあ、始めるとしますか！」

ガイ「ん…？お前さん…」

裕太「え、な、何ですか？」

ガイ「いや、何でもない。邪魔したな」

裕太「は、はあ…」

六花「何だったんだろう、あの人？」

サムライ・キャリバー「(あの男…もしかや…)」

刹那「ダブルオー…ダイバー…？」

ロックオン「へえ、モビルスーツがプラモデルになつているとはな」

ユツキー「本物のソレスタルビーイングの人達に会えるなんて、感激だよ！」

リク「これが…本物のダブルオー…」

刹那「リック、お前は間違いなく、ダブルオーダイバーのマイスターだ」
リック「あ、ありがとうございます！」

レオン「あ、あの！」

士「何だ？」

レオン「次元の壁を越えた感想を聞きたいのですが…」
士「別の世界に行く事か？…面倒だ、海東にでも聞け」

海東「僕かい？うーん、ハイパードライブをくれるって言うなら、考えなくもないよ」
レオン「え…？ハイパードライブをですか？？」

ダグ「おつ、究極の選択だな、学者先生？」

クイニー「どうするのだ、レオン？」

レオン「…すみません、海東さん。ハイパードライブはネオ翔龍の希望なので…簡単に提供するわけにはいかないんです」

海東「…そうか、それは残念だ」

ブライト「…」

マフティー「何か？」

ブライト「き、君は…ハサウエイなのか…？」

マフティー「…いえ、人違いです。僕はマフティー・ナビュー・ユリンですよ、ブライト艦長」

ブライト「そ、そうか…すまない、マフティー」

マフティー「構いません。(ごめん、父さん…)。この世界には若い頃のハサウエイ・ノアがいる。ここにいるのはマフティーになってしまった哀れな男だ」

雷鳴轟く戦場——

それは滅びか、新たな時代への金か

クルルシファア「逃さないわ。財禍の叡智（ワイズ・ブラッド）で…！」

サラマンディーネ「直撃、もらいます！」

操「もう、これ以上戦わせないで！」

柳生「トリニティーアタック、決めるよ！」

アナザージオウⅡ「今度こそ、お前は俺が倒す！」

アスカ「逃さないわよ！どりやあああつ!!？」

命を懸けて護るべき故郷——それは、地球（TERRA）だ。

オーブ「銀河の光が我を呼ぶ！」

真矢「逃さない。これで終わり…！」

グリッドナイト「ナイト爆裂光波弾！」

クルーゼ「滅びるがいい！ふははははっ！」

浩一「くらええええっ！奪い取れ、ラインバレル！」

セイジウウロウ「落とす…！」

アサギ「怖いなんて、言つてられるかよ！」

グランドジオウ「終わりだ！」

ジクウドライバー『フィニッシュタイム！オールトウエンテイタイムブ레이크！！？』
グランドジオウ「でやあああああつ！！？」

剣児「頼むぜ、つばき！」

つばき「バズーカ、シュート！」

剣司「よっしゃあ！ジグバズーカアアアアアツ！！？」

セオ「これで決める…！ターゲットロックオン、ノーベンキャノン発射します！」

スーパーロボット大戦Tー交わる運命ー

近日投稿予定！

スペシャル参戦オリジナルロボット& a m p ;オリジナルキャラクター

- ・南雲 一鷹& a m p ; A L | 3 アリス
- ・ラッシュバード
- ・夕風・グライフ& a m p ; H L | 0 ハルノ
- ・ストレイバード
- ・終 ヨウタ& a m p ; 終 ユキ
- ・ファルセイバー
- ・ブルーヴィクター

追加参戦作品一覧

☆Ⅱ現時点でのスパロボ新規参戦

● II 機体のみ参戦

- ・機動戦士ガンダム 閃光のハサウェイ ●
 - ・新機動戦記ガンダムW Endless Waltz
 - ・機動戦士ガンダムSEED
 - ・機動戦士ガンダムSEED DESTINY ●
 - ・劇場版 機動戦士ガンダム00 | Awakening of the Tra
- i
l
b
l
a
z
e
r
|
- ・ガンダムEXA☆
 - ・ガンダムビルドダイバーズ☆
 - ・魔神英雄伝ワタル
 - ・六神合体ゴッドマーズ
 - ・エヴァンゲリオン新劇場版：序
 - ・エヴァンゲリオン新劇場版：破
 - ・エヴァンゲリオン新劇場版：Q ●
 - ・鋼鉄神ジーク
 - ・地球防衛企業ダイ・ガード

- ・ 銀河旋風ブライガー
- ・ 機獣創世記ゾイドジェネシス
- ・ 鉄のラインバレル（原作漫画版）
- ・ 蒼穹のファフナー ●
- ・ 蒼穹のファフナー HEAVEN AND EARTH
- ・ 最弱無敗の神装機竜☆
- ・ クロスアンジュ 天使と竜の輪舞
- ・ 神無月の巫女☆
- ・ コードギアス 反逆のルルーシュR2
- ・ バディ・コンプレックス
- ・ バディ・コンプレックス 完結編 —あの空に還る未来で—
- ・ ナイツ& amp ;マジック☆
- ・ 絶対無敵ライジンオー
- ・ 天蒼軌道アルヴァドリリング☆
- ・ 機甲界ガリアン
- ・ 特命戦隊ゴースターズ☆
- ・ 銀河機攻隊 マジェスティックプリンス

- ・ 劇場版マジエスティックプリンス 覚醒の遺伝子☆
- ・ 重神機パンドーラ
- ・ ガーリー・エアフォース☆
- ・ 天元突破グレンラガン
- ・ 劇場版 天元突破グレンラガン 螺巖篇
- ・ ウルトラマンオーブ☆
- ・ 仮面ライダージオウ☆
- ・ SSSS・GRIDMAN☆
- ・ スーパーヒーロージエネレーション☆

設定

オリジナルキャラ& a m p ; オリジナル機体紹介

・オリジナルキャラ紹介

新垣 零（にいがき れい）〈イメージCV 下野 紘〉

本作品の主人公。成績優秀、イケメン、運動神経抜群、紳士的と女子から人気が高い。弘樹、優香とは幼馴染で家族同然の関係。

困っている人をほっておく事が出来ず、誰でも助ける性格。

ファンクラブが出来るほどだが、恋愛には奥手。

子供をトラックから庇い、跳ねられて、死亡したに見えたが、目を覚ますとアル・ワースに転移する。

転移した時、初めて出会った為か、一夏としんのすけとは仲が良く、しんのすけの暴走を頭を抱きながら止める。

基本的に年上には敬意を払って、敬語を使うが、使わなくても良いと言われれば、碎けた話し方をする。

彼自身も敬語を使われてほしくなく、さん付けを嫌う。

過去に両親の事で自害しようとしたが、弘樹と優香に止められ、生きる資格を見つけ、生きる事を誓う。

アル・ワースの研究所でシャイニング・ゼフィルスを見つけ、ゼフィルスのパイロットとなる。

アマリや仲間達と共に過ごす中で大切な存在を守りたいと思う様になり、特にアマリを傷つけられた時の怒りは凄まじい。

実はアマリに異性としての好意を寄せており、魔徒教団にアマリが捕らえられた時はエクスクロスをも敵に回してでも彼女を助けようとし、アマリをエンデから解放し、彼女に告白し、無事に恋人同士になった。

恋人同士となった二人はまるでバカップルのような関係となるが、ホープスとはアマリを奪い合うライバルという関係になる。

状況の飲み込みが早く、難しい話でも理解する。

オニキスに入り、敵となった弘樹には胸を痛めながらも、彼と戦う事を決意する。

何故か、時折アル・ワースの事を知っているのかの様な記憶が頭に流れ、オニキスのパイロットが使うバスタードモードも使用できるようになる。

後にバスタードモードの進化に身体が追いつかず、セルリックに傷つけられた身体と

疲労のせいで身体がボロボロになるが、エボリユーションモードを使えるまでに進化した。

彼の正体はオニキスの首領、ハデス・エメラルドとマリア・エメラルドの息子であるレイヤ・エメラルド本人。

平穏の世界を侵略すべく、ハデスがレイヤを送り込んだが、転移の衝撃で記憶を失い、子供に戻ってしまう。

意識を覚醒させていたレイヤによって、身体を奪われてしまい、エクスクロスとの戦闘になるが、それはレイヤが零を強くする芝居であり、レイヤと一つになり、レイヤ・エメラルドであり、新垣 零と言うようになり、息子としてハデス、そしてネメシスと戦う決意をする。

アスナ達がアル・ワースに転移する前はアスナとは恋人であったが、零はアマリを選ぶが、アスナとの関係は良好で、ゼフィルスが進化したゼフィルスネクサスに彼女と共に乗り込む。

後に擬人化したゼフィルスネクサスことゼフィを娘として、接し、弘樹からは親バカと呼ばれる様になる。

その後も少しずつ、レイヤの力を取り戻し、最終的に全ての力を取り戻す。

零の身体の中にはネメシスの遺伝子もあり、生身でも凄まじい戦闘力を得る様にな

氷室 弘樹（ひむろ ひろき）ヘイメージC V 浪川 大輔〈

零と優香とは幼馴染で家族同然の存在。

自害しようとした零を優香と共に止める。

勉強は苦手で、零や優香にいつも教えてもらっている。

ある理由でアル・ワースに転移し、オニキスに所属している。

オニキスの首領、ハデスとの約束を果たす代わりに零の捕獲及び抹殺を企み、ダークネス・ヴァリアスに乗り込み、彼に襲いかかる。

零に敵対しつつも彼がバスタードモードの影響で暴走した時はエクスクロスと共に彼を助けたり、アスナを救い出す為に彼に手を貸している。

後にハデスとの約束が囚われている優香の解放だった事が明かされ、平穏の世界へ転移した零と決闘するが、敗北する。

戦闘後に暮らした街を守るため、零と共闘するが、優香とカノンがオニキスによって、洗脳された事に絶望し、デイビウスによってトドメをさされそうになるが、零に庇われ、零が連れ去られる原因を作ってしまう。

零とカノン、優香をオニキスの元から助け出す為にエクスクロスに加入し、零を救い出す事に成功するが、オニキスに騙され、彼を攻撃していた事を悔やみ、彼との距離を置くが、和解し、共にカノンを助け出し、カノンと共にヴァリアスが進化したヴァリアスデストロイに乗り、戦う様になる。

彼もハイバスターモードを使用出来るようになる。

白木 優香（しらき ゆうか）ヘイメージCV 牧口真幸

零、弘樹とは幼馴染で家族同然の存在。

何かと零に気をかける。

実は零に対して異性としての好意を寄せているが素直にはなれない。

だが、アル・ワースに来て、エクスクロスのメンバーに触れる事で積極的な性格になり、彼女のアマリの目の前で彼のキスをし、宣戦布告するなど大胆な行動を取るようになり、

なる。

実は彼女もアル・ワースに転移していたが、オニキスに捕らえられているが、後にオニキスによって、洗脳されてカオス・デイビウスに乗り、エクスクロスと戦うが、零達によって、救出される。

そして、メルと共にデイビウスが進化したデイビウスホーププレイに乗り、エクスクロスの一員として戦う様になる。

彼女もハイバスターモードを使用できる様になる。

アスナ・ペリドット／樹咲 明日菜（きさき あすな）ヘイメージCV 竹達 彩奈

オニキスに所属し、機動兵器リリスのパイロット。

活発的で好戦的な性格で臆する事を知らない。

零の存在を激しく憎んでいるが、零から誰かを解放しようと零に襲いかかる。

だが、零の優しさを知り、今までの行為を悔やみ、零との遭難後、彼に好意を抱くようになる。

だが、ギルガに強制的に連れ去られ、零を倒す為の人質とされるが、弘樹やカノンに

助けられ、エクスクロスのメンバーとなる。

エクスクロス加入後は子供達と遊んだり、メルと和解したりと、いいお姉さんの存在になっている。

アスナ・ペリドットという名前は1年前にアル・ワースへ転移させられ、記憶を改善された時に付けられた名前で本名は樹咲 明日菜である。

エクスクロスが平穩の世界へ転移した事によって、記憶を取り戻すが、レイヤによって撃墜されてしまう。

だが、それはレイヤの演技であり、精神世界に彼女を写して、死んではいなかった。零とレイヤの力のぶつかり合いを見守り、一つになった零と共にゼフィールスネクサスに乗る。

彼女もハイバスターモードを使用できる様になる。

アマリを選んだ零に対して、影で涙を流したが、アマリを認め、良好な関係を築き続けているが、零の事を忘れられずにいる。

零とは稀に夫婦喧嘩の様なり取りをするが、現彼女であるアマリ、積極的になった優香がいる為、危機を感じている。

メル・カーネリアン／鮎川 芽流（あゆかわ める）（エイメージCV 水瀬いのり）
オニキスに所属し、機動兵器メサイアのパイロット。眼鏡をかけ、オニキスの司令塔を任されている。

誰に対しても丁寧口調で話す。

それゆえか頭が切れ、戦術を組むのが得意だが、争いを好まない性格なのか、話し合
いで済ませようとする事がある。

後にオニキスのやり方が合わずにオニキスを裏切り、エクスクロスのメンバーとな
る。

そして、自信を助けてくれた零に対して好意を抱くようになる。

後にアスナと和解し、彼女を姉の様に想う様になるが、リンと敵対し合う事に胸を痛
める。

メル・カーネリアンという名前は1年前にアル・ワースへ転移させられ、オニキスに
よって、記憶を改善された時に付けられた名前。本名は鮎川 芽流である。

エクスクロスが平穏の世界へ転移したと同時に記憶を取り戻す。

メル・カーネリアンとしては零に好意を抱いていたが、実はイオリに好意を寄せてい
た事を思い出し、彼に様々なアップローチをかけるが、鈍い彼には届かず、呆れている。
バスタードモード、ハイバスタードモードを使用できる様になるが、実は体が追いつ

いていなく、限界を迎えていた。

そして、心臓が止まってしまい、生命を落としてしまうが、マスターテリオンの提案に零、弘樹、優香、アスナ、カノンが乗り、彼等の力で生命を取り戻し、ハイバスタードモードを使用できる様になり、優香と共にデビウスホープレイに乗って戦う。

カノン・サファイア／結城 花音（ゆうき かのん）〈ハイメージCV 阿澄 佳奈〉
オニキスのメンバーでジェイルのパイロット。

ハデスから弘樹の監視を任せられてはいるが時に彼の頼みを聞き入れ、暴走した零を助けるためや人質になったアスナを助ける為に戦ったりする。

カノン・サファイアという名前は1年前にアル・ワースへ転移させられ、オニクスによって、記憶を改善された時に付けられた名前で本名は結城 花音である。

後にオニクスによって、洗脳されてしまうが、弘樹に助け出され、ハイバスタードモードを使用可能になり、ヴァリアスデストロイに彼と共に乗り込む。

ギルガ・カルセドニー〈ハイメージCV 置鮎龍太郎〉

オニキス首領の右腕として動く男でラゴウの弟。
機動兵器、アマテラスのパイロット。

オニキス内では何もかもが完璧な男と呼ばれ、恐れられる。

その理由は自分の思い通りになる者を配下に置き、…思い通りにならない者は洗脳をするか、拷問後に死刑で殺す事をする。

しかし、女性には紳士的に接しようとする。

登場初戦はエクスクロスを圧倒する様な力を見せるが、零達に敗北するにつれ、街を狙ったり、人質をとったりと小悪党地味た行為が目立つ様になる。

それにより、オニキス内での自身の立場も危うくなり、零を激しく憎むようになる。

後に大破したアマテラスを回収、改造したアマテラス・ツヴァイにリンと共に乗り込む。

後にネメシスの存在が明るみになり、自分達が利用されていた事を知るが、リンを脅し、ネメシスに従う様になる。

リン・マラカイトへイメージC V 和氣あず未

オニキスの一人。

メルの親友で彼女が敵になった事に胸を痛める。

首領の命でギルガのパートナーとなり、アマテラス・ツヴァイのサブパイロットとなる。

後にネメシスの存在が明るみになり、ギルガに脅され、彼と共にネメシスに従わざる負えなくなり、ネメシスに洗脳される。

ラゴウ・カルセドニーヘイメージCV 森川智之

ギルガの兄で首領の左腕と呼ばれている。

ナイトメア・ゼフィルスのパイロットでパイロット技術はギルガ以上。

零との初戦を経て、彼をライバルと認める様になる。

零の正体がレイヤと知り、心の何処かで不満心かられていたが、零とレイヤが一つになった事で彼を倒す事が生き甲斐だと気づく事になる。

後にネメシスの存在が明るみになり、オニキスを騙した事に反発するが、ギルガの裏切りにあい、一人何処かへ飛び去っていつてしまう。

ハデス・エメラルドへイメージCV 小杉十郎太

オニキスの首領で零ことレイヤの実の父親でマリアの夫。

元々、彼は妻であるマリアやレイヤの事を気遣う心優しい性格だったが、突如として豹変するようになる。

その理由はネメシスに身体を乗っ取られていたせいである。

今までのオニキスの悪行は全てネメシスのせいという事である。

ネメシスの存在が明るみになった今でも乗っ取られたままである。

マリア・エメラルドへイメージCV 渡辺美佐

ハデス・エメラルドの実は妻で零ことレイヤの実の母親。

豹変したハデスのやり方に反発し、オニキスを離反する。

後に零と接触し、エクスクロスのメンバーとなる。

ハデスがネメシスに乗っ取られていたと知り、彼を助け出すために戦うようになる。

新垣 ゼファイヘイメージCV 日高里菜

ゼファイルスネクススが擬人化した姿。

長きにネメシスと戦い続け、徐々に人格が生まれていくが、そのせいで次々に自分の中で死んでいくパイロットを見て、何もできない自分が嫌になり、自暴自棄になるが、零とアスナの説得で再び、彼等と共に戦う事を決意する。

零と始めて出会った時に彼に触れられ、話せるようになる。

基本的にネメシス以外の人物には敬語を使う。

零とアマリを。パパとママと呼び、慕う。

弘樹、アスナ、優香、メル、カノンをお兄ちゃんやお姉ちゃんと呼び、マリアの事を
お婆ちゃんと呼ぶ。

ネメシスヘイメージCV 金尾哲夫

まず一つ言わせて頂きたい。彼は仮面ライダービルドのエボルトではない。

かつてアル・ワースを破滅寸前にまで追い込んだ究極生命体で生身でも星一つを簡単に滅ぼす事が出来る。

だが、ゼファイルスに乗っていたオニキスの先祖が彼を封印したはずだが、ネメシスは分身を作り、難を逃れるが力を使い切ってしまう、ハデスの身体に宿る。

正体が明るみになった後はオニキスの全兵士を洗脳して、手駒として置く。

自らがゲームマスターの立場だと言い、魔従教団、ドアクダー軍団、エンブリヲやガーゴイルの協力者などの組織に力を与え、エクスクロスにも力を与えて、戦いをゲーム感覚で楽しんでいる。

普段は人をバカにしたような態度でいるが、楽しみがないと判断した相手を簡単に切り捨て、彼直々にトドメを刺す事もある冷徹な性格をしている。

力を取り戻した零に興味を抱き続けている。

彼だけ唯一、モチーフが存在する。モチーフが何か言わずとも読者の皆様はご存じであらう：そう、エボルトだ。

・ オリジナル機体紹介

シャイニング・ゼフィルス

零の愛機で別名、輝きの翼。

武装は二刀のクロスソードと二丁のクロスガン、それぞれの武器から出るブレードビットとガンズビット。

二刀のクロスソードと二丁のクロスガンはそれぞれ合体させる事が出来る。

零は研究所でゼフィルスを見つけ、触った瞬間にゼフィルスの操縦の仕方が頭の中に流れた。

零が来いと望めば、何処であろうと来る。

零がバスタードモードやエボリューションモードを発動するとゼフィルスの目も赤やエメラルド色に輝く。

実は歴代のオニキスの人間が乗り継ぎ、ネメシスと戦っていた。

シャイニング・ゼフィルスネクサス

シャイニング・ゼフィルスがレイヤと一つになった零とアスナの絆の力で進化した姿。

クロスソードとクロスガンが分離され、ブレードビットとガンズビットを同時に発射出来るようになり、アスナがその操縦をする。

バスタードモード、エボリューションモードの力を兼ね備えたクロスレイズモードと擬人化したゼファイと零、アスナの心を一つにする事で発動できるシンクロクロスを使用する様になる。

ダークネス・ヴァリアス

弘樹の愛機で別名、闇の翼。

武装はゼフィルスと同じ。

オニキスが所持していた事しか詳しい事はわからない。

後にゼフィルスの兄弟機とわかる。

ダークネス・ヴァリアスデストロイ

ダークネス・ヴァリアスが弘樹とカノンの絆の力で進化した姿。

近距離戦が強化され、セイバービットを使用できる様になり、操縦はカノンがする。

カオス・デイビウス

優香の愛機で別名、混沌の翼。

ゼフィールスやヴァリアスと同じ武装で兄弟機。

オニキスが持っていた理由は不明。

カオス・デイビウスホープレイ

カオス・デイビウスが優香とメルの手で進化した姿。

射撃が強化され、ブラストビットを使用できるようになり、操縦はメルがする。

リリース

アスナの愛機。

近接戦闘に特化し、凄まじい機動性とブレードさばきで相手を翻弄する。
後にレイヤの乗るゼフィールズに破壊される。

メサイア

メルの愛機。リリースとは違い、射撃に特化した機体。幾つかの銃を隠し持っていて、その銃にはバスタービットを兼ね備えている。

後にヴェイガンギア・シドに破壊される。

ジェイル

カノンの愛機。弘樹のダークネス・ヴァリアスに合わせた機体で援護射撃を得意にしている。

後に戦いに耐えられなくなり、爆発する。

アマテラス

ギルガの愛機。中距離メインの機体でハイバスターモードで凄まじい性能で動く事が出来る。

アマテラス・ツヴァイ

ギルガとリンの愛機。大破したアマテラスを改造し、二人乗りとなる。性能はアマテラスよりも上がっている。

後にネメシスによって強化される。

ダークネス・ゼフィールス

ラグウの機体。ゼフィールスと擬似している以外、情報のない謎の機体。ハイバスターモードによって、強化される。

スペリオル

マリアの愛機。

狙撃メインの機体。

アルガイヤ

ハデスの機体。

全ての武装がゼフィルス以上であり、凄まじき破壊力を見せる。

アルガイヤ・ノヴァ

アルガイヤがネメシスの力によって、変貌した機体。

武装は使用せず、素手と足の身だが、手や足から相手の機体に力を流し込み、内側から爆発させる能力を持つ。

ガラム

オニキスが所持する量産機。

武装はブレードとライフルガン。

グレモリー

ネメシス自身が量産した量産機。

量産機だが、リリスやメサイアと同等の性能を見せる。

各世界観

〈アル・ワース〉

※所属作品

- ・ 真マジンガー衝撃！乙編（ミケーネの出身世界）
- ・ 魔神英雄伝ワタル

- ・ 天元突破グレンラガン
- ・ 劇場版 天元突破グレンラガン 螺旋篇
- ・ ふしぎの海のナディア（アトランティス大陸の転移した世界）
- ・ クロスアンジュ 天使と竜の輪舞
- ・ レガリア The Three Sacred Stars
- ・ バンプレストオリジナル
- ・ 本小説オリジナル

原作のアル・ワースと違うのは北部にルクスの国が存在し、そこではレガリアなどの兵器が戦っている。

さらに、オニキスがアル・ワースで戦火を広めつつあり、魔徒教団がその対処に当たっている。

故に、オニキスはドアクダー軍団、ミスルギ、魔徒教団とは組まず、独自で動いている為、敵対しあっている。

〈平穩の世界〉

※所属作品

- ・ バンプレストオリジナル
- ・ 本小説オリジナル

核兵器を廃止し、戦争が起こらなくなった世界だが、喧嘩などの争いはある。原作でいう現代世界に入る。

新垣 零や氷室 弘樹、白木 優香の出身世界。

後に記憶を改変されたアスナ・ペリドット、メル・カーネリアン、カノン・サファイア、アマリ・アクアマリン、イオリ・アイオライトの出身世界と判明する。

オニキスの首領、ハデス・エメラルドはこの世界へレイヤ・エメラルドを差しむけるが、レイヤ自身が記憶を失い、子供に戻り、零になってしまうという事態に陥る。

約1年前に魔徒教団とオニキスにアマリ、イオリ、アスナ、メル、カノンはそれぞれ召喚され、零、弘樹、優香もハデスによって、召喚される。

〈戦争の世界〉

※所属作品

- ・ 機動戦士Zガンダム
- ・ 機動戦士ガンダムZ
- ・ 機動戦士ガンダム 逆襲のシャア
- ・ 機動戦士ガンダムUC
- ・ 機動戦士ガンダムF91
- ・ 機動戦士クロスボーン・ガンダム 鋼鉄の7人
- ・ ガンダムGのレコンギスタ

原作と違う点はバナージ達の存在である。彼等の世界も宇宙世紀である為、戦争の世界に分類されるが、ガンダムUC原作通りの世界の為、矛盾が生じている。

バナージ達も戦争終了後にアル・ワースへと召喚され、戦死したはずのマリーダ・クルス、アンジェロ・ザウパー、フル・フロンタルが召喚される。

〈M78星雲スペース〉

※所属作品

- ・ バディ・コンプレックス

- ・ バディ・コンプレックス 完結編 ―あの空に還る未来で―
- ・ ウルトラマンゼロ外伝 キラーザビートスター（レイ、ヒュウガ、ゼロの出身世界）

原作における西暦世界（21世紀）に入る。

1966年に怪獣が現れ、その数ヶ月後にベムラーを追って、初代ウルトラマンが地球に降り立つ。初代ウルトラマンが地球を去った1年後、ウルトラセブンが来て、地球を侵略者の魔の手から守ってくれて、地球を去り、その4年後、帰ってきたウルトラマンことウルトラマンジャックが再び、地球に降り立ち、そこから約1年ずつ、交代するように、ジャックが去り、ウルトラマンエースが現れ、エースが去り、ウルトラマンタロウが現れ、タロウが去った後にウルトラマンレオが降り立つ。

約5年後にウルトラマン80が地球を守り、1981年に80が去った後、暫く、怪獣や宇宙人が現れなくなるが、25年後の2006年に再び、怪獣や宇宙人が出現するが、ウルトラマンメビウスが現れ、2年間、地球の防衛に入った。

2008年から渡瀬 青葉の住む2014年まで完全に怪獣や宇宙人が出現しなくなる。

青葉は弓原 雛との接触により、74年後の世界へ飛ばされ、そこで自由条約連合と大ゾギリア共和国の戦争に巻き込まれる。

それから数千年後、ギャラクシークライシスと呼ばれる事件が発生し、さまざまな並行世界から時空を超えて怪獣たちが出現する様になる。

レイオニクスの遺伝子を持つレイはZAP SPACYの仲間達と共に様々なレイオニクスとのレイオニクスバトルやレイブラット星人との戦いに身を投じ、ついにレイブラット星人を倒し、レイオニクスバトルを終わらせる。

それから翌年、光の国が悪のウルトラマン、ウルトラマンベリアルによって、凍結させられ、ウルトラマン、ウルトラセブン、ウルトラマンメビウスはレイや怪獣達と共にウルトラマンベリアル討伐へと動き出し、戦いの最中、修行を終えたセブンの息子であるウルトラマンゼロがベリアルを倒し、光の国を取り戻した。

それから暫く経ったある日、光の国にゼロそっくりのロボット、ダークロプスが襲来するもゼロやセブンの活躍でこれを撃破、ダークロプスの残骸を回収・分析したところ、光の国のある宇宙には存在しない物質で構成され、それから発せられるマイナスエネルギーを別の宇宙へと送っていることが判明。ゼロはこれを作り出した者の正体を探る為にアナザースペースへと向かう……。

レイとヒュウガは休暇で惑星プラムを目指していたが、アル・ワースに召喚される。

〈アナザースペース〉

※所属作品

・ウルトラマンゼロ外伝キラークザービートスター（ウルティメイトフォースゼロの活動世界）

ゼロが訪れた世界でかつてゼロに倒されたと思われたウルトラマンベリアルがカイザーベリアルとして君臨し、ベリアル銀河帝国を築き上げ、支配しつつある世界。

エメラナ、グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットの出身世界でもあり、ゼロと協力して、カイザーベリアルを撃破し、ベリアル銀河帝国を壊滅させた後、ゼロは自分が作った宇宙警備隊……ウルティメイトフォースゼロのメンバーにグレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットを加え、全宇宙を守る為に活動を開始する。

約1年後、ウルティメイトフォースゼロはエメラナと会おうとしていたが、一足先にエメラナの下へ向かったジャンボットとエメラナが鉄の球体に囚われてしまい、球体が別世界へワープしたと知り、追いかける為にゼロ、グレンファイヤー、ミラーナイトもアル・ワースへワープする。

〈女尊男卑の世界〉

※所属作品

- ・ インフィニット・ストラトス

インフィニット・ストラトスの原作通りの世界。

一夏を始めとする専用機メンバーと教師の千冬、摩耶、そして、ファントムタスク所属のマドカ、ISの開発者、篠ノ之 束とクロエ・クロニクルがアル・ワースに召喚される。

〈正義の世界〉

※所属作品

- ・ 機神咆吼デモンベイン
- ・ ヒーローマン
- ・ 海賊戦隊ゴーカイジャー

34のスーパー戦隊が地球を守り続けていた世界。

数年前、宇宙の全てを我が物にしようとすする宇宙帝国ザンギャックの大艦隊が地球を襲撃したが、地球の平和を守るために34のスーパー戦隊が立ち向かい、ザンギャックの大艦隊を退けることには成功したものの、その代償として戦う力を失い、その力はレインジャーキーと呼ばれる鍵となつて宇宙へ散らばつてしまふ。彼らはやがて伝説の存在になり、この戦いは後にレジェンド大戦と呼ばれるようになった。

その数年後、スクラッグと呼ばれる知的生命体がマシユ・デントンの宇宙に向けた電波を辿る事により地球に襲来し、地球征服を開始するが、それに対抗する様にジョセフ・カーター・ジョーンズことジョーイがヒーローマンと共に戦い始める。

それと同時期にアーカムシティに住む三流私立探偵、大十字 九郎が霸道財閥より力ある魔導書の搜索を依頼され、その中で状況に流されるまま魔導書、アル・アジフと契約してしまい、デモンベインを駆つて秘密結社ブラックロツジと戦うことになる。

ジョーイとヒーローマン、そして九郎とその仲間達が戦う中、地球に眠るといふ宇宙最大のお宝を求めて、キャプテン・マーベラス率いる海賊戦隊ゴーカイジャーと名乗る5人の宇宙海賊が地球に訪れた。お宝を探して地球を散策する5人だが、時を同じくしてザンギャックが地球への再侵攻を開始。ザンギャックの非道なふるまいが気に入らない5人は宇宙からかき集めた34大スーパー戦隊のレインジャーキーを使い、勢いで戦いを挑む。

ザンギヤックとの戦いや多くのレジエンドとの出会いを経験して、ゴーカイジャーの五人は地球の守るべき価値を見出していき、地球を守る為にジョーイや九郎達と共に戦う様になり、スクラッグの司令官であるゴゴールを撃破するが、ゴゴールは復活してしまう。

だが、再び、ジョーイ達は力を合わせて、完全にゴゴールを撃破する。

その後、ブラックロッジの大導師マスターテリオンを倒し、ブラックロッジを壊滅させ、そしてついにザンギヤックをも打ち倒した。

地球を平和にしたゴーカイジャーはレンジャーキーをレジエンド達に返し、地球の未来をジョーイや九郎達に託し、次なる宝探しをする為に宇宙へと旅立っていった。

その後、宇宙へと旅立ったゴーカイジャーとジョーイ達と九郎達はアル・ワースへ召喚された。

〈運命の世界〉

※所属作品

・機動戦士ガンダムSEED DESTINY

機動戦士ガンダムSEED DESTINYの原作通りの世界。

キラと和解したシン、ルナマリアは彼やアスランと共にアル・ワースに召喚され、戦死したはずのステラ、ハイネも転移する。

〈対話の世界〉

※所属作品

・機動戦士ガンダムOO

・劇場版 機動戦士ガンダムOO | Awakening of the Tr

ailblazer |

OOの原作通りの世界。

クアンタム・バーストにより、ELSとの対話を成功させた刹那・F・セイエイとティエリア・アーデはELSの母星へ量子ワープしたが、アル・ワースへと召喚されてしま

う。
2人と同じ、ガンダムマイスターの2代目ロックオン・ストラトスことライル・ディランデイとアレルヤ・ハプティズム、ソーマ・ピーリスことマリー・パーファシーやプ

トレマイオスのメンバー、地球連邦平和維持軍所属のパトリック・コーラサワーと過去の戦いで戦死した初代ロックオン・ストラトスことニール・ディランデイ、グラハム・エーカー、セルゲイ・スミルノフ、アンドレイ・スミルノフ、アニユー・リターナー、デカルト・シャーマン、アリー・アル・サーシエス、リボンズ・アルマークも召喚される。さらにELSも転移していた。

〈鉄の世界〉

※所属作品

- ・機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ

機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズの原作通りの世界。

鉄華団とギヤラルホルンが戦っている。

ギヤラルホルンとの戦いで三日月・オーガス、鉄華団の団長、オルガ・イツカを始めとする鉄華団メンバーが戦死していき、事実上、鉄華団は壊滅する。

戦死したはずの鉄華団メンバーの三日月、オルガ、明弘・アルトランド、ビスケット・グリフォン、ノルバ・シノ、アストン・アルトランド、ハツシユ・ミデイ、タービンズ

のメンバーの名瀬・タービン、アミダ・アルカ、ラフタ・フラン克蘭ド、そして、マクギリス・フアリドとギャラルホルンのイオク・クジャンがアル・ワースに召喚される。同じくギャラルホルンのヴィダールことガエリオ・ボードウイン、ジュリエッタ・ジュリス、元鉄華団のアトラ・ミクスタとクーデリア・藍那・バーンスタインが召喚される。

〈救世主の世界〉

※所属作品

・機動戦士ガンダムAGE

機動戦士ガンダムAGEの原作通りの世界。

三世代に渡り、ヴェイガンと戦う。

ヴェイガンとわかり合った後、キオ・アスノ、キャプテンアツシユことアセム・アスノ、フリット・アスノが召喚される。

さらに戦死したはずのセリック・アビス、シャナルア・マレン、オブライト・ローレイン、ジラード・スプリガン、ヴェイガンのゼハート・ガレット、フラム・ナラ、レイル・ライト、デイン・アノンもアル・ワースに召喚される。

〈愛の世界〉

※所属作品

・機動戦艦ナデシコ — The prince of darkness —

機動戦艦ナデシコ — The prince of darkness — の原作通りの世界。

愛する妻のユリカを火星の後継者へ拉致された事により、テンカワ・アキトはユリカを助け出す為、そして怨敵の北辰を殺す為に復讐鬼となる。

アキトはナデシコクルーと協力し、北辰を倒し、火星の後継者を壊滅させ、ユリカを救い出す事に成功するが、アキトは仲間達にも告げずに仲間達の前から姿を消す。

仲間達の前から姿を消したアキトはアル・ワースへと召喚され、ナデシコクルーとユリカ、北辰もアル・ワースに転移する。

〈戦の世界〉

※所属作品

・ノブナガ・ザ・フール

ノブナガ・ザ・フールの原作通りの世界だが、龍脈はアウラの世界から流れ着いたドラグニウムが変化したものだという事になっている。

この世界には東の星と西の星があり、それぞれの星で戦が起きている。

後の戦いでオダ・ノブナガとモリ・ランマルことジャンヌ・カグヤ・ダルクは光となり消える。

光となったノブナガ、ジャンヌや戦死したイチヒメとガイウス・ユリウス・カエサル、アーサーがアル・ワースに召喚される。

アケチ・ミツヒデとトヨトミ・ヒデヨシ、ウエスギ・ケンシンやアレクサンダーは東の星と西の星の同盟を目指していたがそこで転移にあう。

〈歌の世界〉

※所属作品

- ・ 劇場版 マクロスF 恋離飛翼〜サヨナラノツバサ〜
- ・ マクロス30 銀河を繋ぐ歌声

原作通りのマクロスの世界。

早乙女 アルトはバジユラ・クイーンと共にフォールドしてしまい、行方不明となる。バジユラ事変から1年後にリオン・榊達の世界が広がるが、リオン達の時代にはアルトがフォールドせずにいるという矛盾が生じている。

バジユラ・クイーンと共にフォールドしたアルトや戦死したはずのブレラ・スターンがアル・ワースへと転移する。

さらにマクロス・クォーターメンバーやリオン、ミーナ・フォルテ、アイシャ・ブランシエツトも召喚される。

〈激戦の世界〉

※所属作品

- ・ 真ゲッターロボ 世界最後の日

- ・ 獣装機攻ダンクーガノヴァ
- ・ トップをねらえ!
- ・ マジンカイザーSKL

ムゲ・ゾルバドス帝国やデイラドとの戦いから200年後、人類はアウラの世界から流れ着いたドラグニウムが変化したゲッター線の採取に偶然にも成功する。だが、インベーダーの侵略により月が占拠される。人類は叡智の粋を集めスーパーロボット軍団を作り上げ、月面でインベーダーの撃退に成功した。

だが、その翌年、ゲッター線の暴走および早乙女博士の反乱が起き、地球は壊滅的ダメージを受ける。

13年後、インベーダー、さらに宇宙から出現した宇宙怪獣に対抗する為、新ゲッターチームとガンバスターのパイロット、タカヤ・ノリコ、アmano・カズミが奮闘する。

さらにダンクーガノヴァのパイロットであるチームDとカイザーを始めとするWSOのロボットも戦局に加わる。

後に13年前から跳ばされてきた流竜馬、そして神隼人、車弁慶の旧ゲッターチームも加わるが、月からはムーンWILL率いる軍勢が現れる。

新旧ゲッターチーム、ガンバスター、チームD、WSOはそれぞれに別れ、インベ

ダー、ムーンWILL打倒に動き出し、新旧ゲッターチームとガンバスターはコーウエントとステインガーが融合した惑星級インベーターを撃破し、旧ゲッターチームは地球の未来を新ゲッターチームや仲間達に託し、時空の狭間へと消え、チームD、WSOもムーンWILLを撃破した後、チームDは元の生活へと戻っていく。

その翌年、WSOは奇械島で八稜郭と協力し、キバ軍、ガラン軍との戦闘を開始し、ガラン軍を撃破したが、制御を失った重力炉を止めるためにカイザーのパイロット、海道剣と真上 遼がキバ軍のリーダー、キバの乗るアイアンカイザーと共に対消滅し、行方不明となる。

そして、唯一残ったガンバスターは新ゲッターチームやカイザーを失ったWSOのメンバーと共に宇宙怪獣との戦いを続けている。

時空の狭間に消えた旧ゲッターチームと行方不明となった海道と真上、戦死したはずのスカレット、地球を託された新ゲッターチームと再会したチームDと奇械島を後にした由木や宇宙怪獣と戦闘の最中のガンバスターメンバーがアル・ワースに召喚される。

さらにキバや宇宙怪獣、インベーターの残党、ムーンWILLも転移する。

〈笑顔の世界〉

※所属作品

・クレヨンしんちゃん

クレヨンしんちゃんの原作通りの世界。

野原 しんのすけを始めとする野原一家を中心に様々な事件が起きる。

野原一家や春日部防衛隊がアル・ワースに召喚される。

〈機械の世界〉

※所属作品

・超電導カンタム・ロボ

しんのすけの笑顔の世界で放送しているアニメ、超電導カンタム・ロボ通りの世界。

カンタムが山田 ジョンと共にカンタム・ロボに乗り込み、秘密結社ミッドナイトと戦っている。

ジョンはアル・ワースへは召喚されず、カンタムとミッドナイト達がアル・ワースに

召喚される。

〈共存の世界〉

※所属作品

・ケロロ軍曹

ケロロ軍曹の原作通りの世界。

地球を侵略しようとする地球に降り立ったケロロ小隊と日向家が様々な事件に巻き込まれつつ、友情を築いていく。

ケロロ小隊や夏美と冬樹、さらにダークケロロとシヴァヴァ、ドルルがアル・ワースに召喚される。

〈想いの世界〉

※所属作品

・リーンの翼

リーンの翼の原作通りの世界。

エイサップ・鈴木がリユクス・サコミズや反乱軍など様々な人達と出会い、シンジロウ・サコミズことサコミズ王を止めようとしている。

後にサコミズ王を止める事に成功する。

しかし、サコミズ王はエイサップを守る為に核ミサイルによる核爆発に飲み込まれてしまう。

戦いを終えたエイサップやリユクス達はアル・ワースに召喚され、朗利や金本…そして、核爆発に飲み込まれたサコミズ王も転移する。

〈神話の世界〉

※所属作品

・ アクエリオンEVO L

アクエリオンEVO Lの原作通りの世界。

エレメント候補生とアルテア界が戦い合っている。

後にトワノ・ミカゲを止めたアマタ・ソラ達はアル・ワースに召喚される。

〈希望と絶望の世界〉

※所属作品

・ガン×ソード

ガン×ソードの原作通りの世界。

惑星エンドレス・イリユージョンで手がカギ爪の男に結婚式で最愛の女性、エレナを殺され、カギ爪の男に復讐を誓うヴァンと行方不明になった兄を探すウエンデイ・ギャレットの旅が始まる。

ヴァンとウエンデイは旅の中で様々な人と出会い、ついにカギ爪の男の下へとたどり着き、あと一步の所でアル・ワースへの転移が起こる。

よつて、ヴァン、ウエンデイ、カルメン99、ジョシユア・ラングレン、エルドラメンバーやユキコ・ステイブン、プリシラやカギ爪の男、ミハエル・ギャレット、フアサリナがアル・ワースに転移する。

さらに戦死したはずのレイ・ラングレンやガドヴェド・ガオード、ウイリアム・ウイ
ル・ウー、カロツサ、メリツサが転移する。

〈始まりの世界〉

スーパーロボット大戦U Xの世界。

様々な種族などの混成部隊、アルティメット・クロスが活躍する。

世界を救ったアエス・ベルジュことアーニーやサヤ・クルーガー、戦死したはずのリチャード・クルーガー、ジン・スペンサーやアユル・デイルンがアル・ワースに召喚される。

〈アウラの世界〉

アウラの民が住む世界。

今作ではこの世界にダークザギとウルトラマンノアが現れ、激突した。

その際に発生した光と闇の力が龍の力が合わさって、ドラグニウムが誕生した。

さらにドラグニウムの全てがアル・ワースに流れ着いたわけではなく、戦の世界と激戦の世界に流れ着き、それぞれ、龍脈とゲッター線に変わる。

それ故にドラグニウム、龍脈、ゲッター線は同一の存在という事が判明した。

- ・追加参戦作品のBGM

〈機動戦士ガンダムSEED DESTINY〉

- ・Ignited | イグナイテッド |
- ・PRIDE
- ・Life Goes On
- ・vestige | ヴェステイジ |

〈機動戦士ガンダム00〉

- ・DAYBREAK'S BELL
- ・夢くも永久のカナシ
- ・POWER ATTACK

〈劇場版 機動戦士ガンダム00 | Awakening of the Traini

l b l a z e r | >

・閉ざされた世界

・ E N V O Y F R O M J U P I T E R

・ F I N A L M I S S I O N } Q U A N T U M B U R S T 1

・ F I N A L M I S S I O N } Q U A N T U M B U R S T 2

〈機動戦士ガンダムUC〉

・ U N I C O R N

・ R X | 0

・ U N I C O R N G U N D A M

・ S t a r R i n g C h i l d

・ I n t o t h e S k y

〈機動戦士ガンダムAGE〉

・ A U R O R A

・君の中の英雄

・ガンダムAGE | 3 | 覚醒

・ガンダムAGE—FX

〈機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ〉

・ Raise your flag

・ Fighter

・機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズBGM (Iron—Blooded Or
phans)

〈インフィニット・ストラトス〉

・ STRAIGHT JET

・ True Blue Traveler

〈マジンカイザーSKL〉

・ The ETERNAL SOLDIERS

・ LEGEND of KAISER

〈真（チェンジ!!）ゲッターロボ 世界最後の日〉

・ 今がその時だ

・ HEATS

・ 勇壮

〈獣装機攻ダンクーガノヴァ〉

・ 鳥の歌

〈機神咆吼デモンベイン〉

・ 機神咆哮―交錯する刃金と刃金

・ 破神昇華―渴かず飢えず無に還れ

〈HEROMAN〉

・ Roulette

・ missing

・ JOEY AND HEROMAN

〈ガン×ソード〉

- ・GUN×SWORD
- ・El Dorado V
- ・Dann Of THURSDAY
- ・虹の彼方

〈アクエリオンEVOL〉

- ・君の神話くアクエリオン第二章
- ・パラドキシカルZOO

〈トツプをねらえ!〉

- ・トツプをねらえ!くFly Highく

〈レガリア The Three Sacred Stars〉

- ・Divine Spell
- ・クリムゾン・レイド!
- ・マグナ・アレクト

〈ノブナガ・ザ・フール〉

・FOOL THE WORLD

・Breakthrough

・Maverick 〱 覚醒されし獣 〱

〈クレヨンしんちゃん〉

・T.W.L

〈超電導カンタム・ロボ〉

・立て！カンタムロボ

〈ケロロ軍曹〉

・ケロツ！とマーチ

・ハローダーウイン！ 〱 好奇心オンデマンド 〱

〈機動戦艦ナデシコ ー The prince of darkness ー〉

・Dear est

・ブラックサレナIII

・なぜなにナデシコ

・ナデシコのテーマII

〈リーンの翼〉

・MY FATE

〈劇場版 マクロスF 恋離飛翼〜サヨナラノツバサ〜〉

・The Target

・ライオン

・放課後オーバーフロウ

・オベリスク

・サヨナラノツバサ〜the end of triangle

〈マクロス30〉

・プラネット・クレイドル

・ワンダーリング

〈海賊戦隊ゴーカイジャー〉

- ・海賊戦隊ゴーカイジャー
- ・海賊合体！ ゴーカイオー
- ・完成！ 豪獣神
- ・KANZEN TREASURE
- ・海賊旗を上げろ！

〈ウルトラマンゼロ外伝 キラーザ ビートスター〉

- ・ウルトラマンゼロのテーマ
- ・すすめ！ウルトラマンゼロ
- ・奴らがウルティメイトフォースゼロ
- ・レイの戦い
- ・エターナル・トラベラー
- ・誓い
- ・運命のしずくDestinystars

- ・ベリアル銀河帝国 戦慄のテーマ
- ・カイザーベリアルのテーマ

〈スーパーロボット大戦UX〉

- ・未来への闘志
- ・闇を斬る影
- ・輝くは命の光
- ・目覚めるは人の意思
- ・唸る必殺の一撃
- ・誇り高き挑戦者たち

ボーナスシナリオ

ボーナスシナリオ 1

龍神丸の秘密

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、ワタル様達一行がメガファウナと合流した頃のお話です。異なる文化や文明に触れた際、それを受け入れる、拒否するといった道は非常に興味深いものです…」

それでは始まります。

ーメガファウナと合流したワタル達。異なる世界から集まった一行は互いの存在に驚きながらも心を通わせていった…。

ー新垣 零だ。

俺達はメガファウナのメンバーと話をしていた。

ノレド「救世主かあ：。」

アイーダ「立派なのですね、ワタルは」

ワタル「イシシ：。それ程でもないよ」

シバラク「ワタルは確かに伝説の救世主だが、戦士としては、まだまだ半人前：。故に拙者達でワタルをフォローしていかねばならん」

ヒミコ「オツサンの場合、ワタルに助けられる事も多いけどな」

シバラク「あら!!？」

九郎「ヒミコには勝てないようだな、シバラク先生でも：。」

ワタル「僕には龍神丸がついているからね。どんな敵が来たって僕達のコンビなら負けないさ」

ベルリ「：。で、龍神丸って何なの？」

ケロロ「あ、それは吾輩も気になっていたのであります！」

ワタル「何って：。魔神（マシン）だけど」

エイサツプ「それはわかってるけど、シバラク先生の戦神丸とかとは全然違うから」

ワタル「そんな事言われても、僕だって、まだアル・ワースに來たばかりだから、よくわからないや」

アル「もしや、神のような存在ではないのか？」

テイエリア「確かに、あの力は少し普通ではないな……」

刹那「神、か……」

ハンソン「神様ね……」

サンソン「神様かよ……」

…… 何でそんな盗人みたいなサングラスかけてくるんですか……

クラマ「龍神丸の事が気に入らないようだな」

そして、結局、サングラス外すし……

ハンソン「そう言うわけじゃないけど……」

サンソン「どうも取っつきづらいんだよな…… 何か偉そうだよ…… あのいかにも上

から目線な所はどうかならないもんかね……」

グランデイス「無理言ってるんじゃないよ。あいつはワタルの保護者みたいなもんなん

だから」

サンソン「要するに俺達はみたいなのは縁のないご立派な御方って事です

かい」

ハンソン「はあく…… 僕達、やっぱり救世主…… 一行には不似合いだね……」

零「俺はそうは思えませんが……」

サンソン「同情は良いぜ、零」

零「いや、同情とかそういうのじゃなくてですな……！」

クラマ「何処の世界にも、こういう奴はいるもんだな」

サンソン「……喧嘩売ってんのか？」

クラマ「逆だよ。俺はどっちかって言うまでもなく、お前等寄りの人間だからよ」

グランデイス「あんた……」

サンソン「人間じゃなくてトリだろうが……」

クラマ「俺は人間だったの！今は事情があつて、こんな姿してるけどよ……」

しんのすけ「クラマって、鳥人間だったのか!?!？」

クラマ「だから、鳥じゃねえっての！」

ワタル「グランデイスさん、サンソンさんからハンソンさん！そろそろ時間だよ！」

グランデイス「つと忘れてた。あたし達……偵察の当番だったね」

サンソン「はいはい、救世主サマ。では、行つて参りますよ」

そう言つて、グラタン三人組は出て行つた……。

ワタル「何か変なの……」

クラマ「気にすんな。お前には関係のない事だ」

ワタル「……」

あの目は…… はあ……。 わかりましたよ、救世主様……。

ボーナスシナリオ1 龍神丸の秘密

「あたしはグランデイスだよ。」

あたし達はカトリエイヌに乗り、偵察に来ていた。

ハンソン「こちら、グラタン。ポイント1507付近、異常なし」

サンソン「そんなもんでいいだろ、ハンソン。どうせ敵なんて来やしないんだ」

グランデイス「サンソン、ハンソン！だらけてんじゃないよ！」

サンソン「そうは言うけど、姐さん……」

ハンソン「あの空中戦艦もいるんだし、僕達はテキトーにやっつてれば、良いんじゃないかなですか？」

グランデイス「やれやれ……。 すっかり気合が抜けちゃったもんだ……」

ハンソン「やっぱり、僕達……。 合わないと思うんですよ……」

サンソン「ハンソンの言う通り！どう見ても俺達、救世主サマゴ一行に相応しくね

え…。」

グランデイス「そうかい…？」

サンソン「あの龍神丸つてのが一番いい例だ」

ハンソン「所詮、僕は裏稼業…。神様と一緒なんて、とてもとても…」

グランデイス「… だらしなない連中だよ」

サンソン「だらしなないって俺達がですか？」

ハンソン「待った、サンソン！何か来るよ！」

あれは… 魔神とかいう奴だね！

シユワルビネガー「フハハハ！凄い奴がやってきた！」

サンソン「ドアクダー軍団のゴリラ野郎！」

シユワルビネガー「ワタルと一緒にいたオンボロタンクか」

ハンソン「あいつ！グラタンをオンボロって言った！」

グランデイス「グラタンじゃない！カトリエヌだよ！」

シユワルビネガー「ワタルを片付ける前の景気付けだ。我がタンク軍団で血祭りに上

げてやるぞ！」

ちっ、売ってきたね…！

サンソン「野郎！やる気かよ！」

ハンソン 「どうします、姐さん！後退しますか!?!？」

グランデイス 「今、退いたって後ろから撃たれるだけだ！ここは前に出るよ！」

ハンソン 「無茶ですよ！数が違い過ぎます！」

グランデイス 「あたし達から無茶を取ったら何が残るんだよ！」

ハンソン 「姐さん……」

グランデイス 「やるよ、ハンソン、ハンソン！神様も救世主も関係ない！あたし達はあたし達の力で道を切り拓く！」

ハンソン 「忘れてたね、この感じ……」

ハンソン 「おう……。ノーチラス号に拾われてから、ちよいと俺達、誰かに頼るのを覚えちまったようだ……」

グランデイス 「だけど、そうじゃないだろ？あたし達つてのは」

ハンソン 「合点」

ハンソン 「承知！」

グランデイス 「カトリイヌ、突撃！あのゴリラ野郎のニヤケ面に食らわせてやるよ！」
あたし達は戦闘を開始した……

カトリイヌで奮闘するあたし達……

シュワルビネガー「よく頑張つてはいるが、たった一機では、どうしようもあるまい！」

サンソン「くそっ！ 救援は、まだ来ないのかよ！」

ハンソン「来るわけないよ！ メガファウナはらは、かなりの距離があるんだから！」

グランデイス「だらしなね、サンソン、ハンソン！ 苦しい時の神頼みかい!?？」

ハンソン「まさか……！」

サンソン「俺達は俺達だけでやっていきますよ！ これまでも……そして、これからも！」

グランデイス「その意気だ！ 気合、入れなよ！」

シュワルビネガー「フハハハ！ 意気込みだけは買ってやろう！ だが、ここまでだ！ そのオンボロタンクをスクラップにしてやる！」

ワタル「そうはさせない！」

ワタルの声が聞こえると、シャイニング・ゼフィルスと龍神丸が現れた……。

―新垣 零だ。

まさか、グランデイスさん達の後をつけていたら戦闘に出くわすとはな。

ワタル「お待たせ！救世主ワタル、只今参上！」

零「同じく、新垣 零、参上だ！」

グランデイス「ワタル！」

ハンソン「どうして、ここに!?!？」

ワタル「へへ。。。ハンソンさんとハンソンさんの様子がおかしかったから、追ってきたんだ。結局、グラタンに追いつけなくて龍神丸やゼフィルスを呼び出したら、戦いが始まったんで急いで来たんだよ」

零「俺はその付き添いですよ」

ハンソン「馬鹿野郎！ワタルだけをこんな危険な場所に連れてくんじゃねえよ！」

零「そんなこと言われても。。。俺、保護者じゃないですし。。。ってか、その為に俺がいるんですよ！」

龍神丸「さあ、ワタル！みんなを助けるんだ！」

ハンソン「余計なことをすんな！」

ワタル「え。。。」

ハンソン「気持ちがありますがたいけど、僕達は僕達の力でやってくよ」

ハンソン「そういう事だ！神様の世話にはならねえ！」

零「はあつ!?!?こんな時に何を言っているんですか!?!?」

龍神丸「…」

シュワルビネガー「フハハハ！強がりを書いてくれる！もつとも二機増えただけで我がタンク軍団が負けるとは思えんがな！」

ワタル「龍神丸をただの魔神だと思うなよ！」

シュワルビネガー「ならば、その凄い所を見せてみる！」

ワタル「龍神丸！あいつに凄い所を見せてやりなよ！」

龍神丸「凄い所…」

シュワルビネガー「出来まい！ならば、我がタンク軍団の力で目にもの見せてくれるわ！」

くそっ！グラタンメンバーはわけわかんねえ事言うし…何なんだよ、いったい！

龍神丸「ははははは！そんくりやあの事で驚きやせんわ！」

…は？

グランデイス「え!?？」

龍神丸「おみやあ知つとるきや？これは第二界層ナゴーヤ地方の言葉だ」

サンソン「な、何だ、あれ…？」

ハンソン「すごいなまりだ…」

…何なんだよ、いったい…。

龍神丸「ぼっえんよかですたい！これは第四界層ハクーダ村の言葉だ。あんたら、そつたらこと言つたらきりないっしょ！これは同じく第四界層のキタホツケードー地方の言葉。他の地方の言葉も隅から隅まで、しゃべってみせよおか！あ、さあ！さあ！！？」

ワタル「やったあ！龍神丸、すごい！」

何がやったで凄いんだよ！

シユワルビネガー「ぬ、ぬうう！た、確かに凄い奴かも知れん！」

グランデイス「ゴリラ野郎が怯んでいる！」

ワタル「ここで零さんも一発行つて！」

零「何でここで俺に振るんだよ！」

龍神丸「零。。。あ、さあ！さあ！！？」

零「。。。つたく、あーもう！おかしくて笑うなよ。。。！」

俺は一息吐いて言い放つた。

零「おいコラ、シユワルビネガー！今からボコボコにしてやるさかい。。。首長くして

待つとれよ！泣いて謝つても許さへんからな！」

ワタル「。。。え」

龍神丸「。。。関西弁というものか」

… ほら滑ったじゃねえかよ！

グランデイス「あ、あの零が関西弁…」

ハンソン「ぷ…ぷ…！はははははは！」

サンソン「はははははは！何だよ、そりや!?？」

ハンソン「りゆ、龍神丸つて！おかしな奴だったんだね！それに零も…」

零「やつぱりやるんじゃなかった！」

サンソン「とんだ神様もいたもんだぜ、こりや！」

龍神丸「私は神などではない…」

サンソン「じゃあ、何だよ？」

ワタル「決まってるじゃん！僕達の仲間だよ！」

ハンソン「仲間…」

ワタル「仲間は僕と龍神丸だけじゃないよ！」

するとゼルガードと戦神丸もきた。

アマリ「やつと追いつきました！」

シバラク「こら、零、ワタル！勝手に行くでない！」

ワタル「そんなこと言ったってグランデイスさん達のピンチだったんだから！」

零「…」

アマリ「れ、零君……？」

零「何でもないよ」

アマリ「(嘘です、絶対に機嫌が悪いです……)」

サンソン「シバラクの旦那にアマリ……」

ハンソン「あんた達も僕達を追って……」

アマリ「ごめんなさい。お節介だったかもそれませんが……」

シバラク「そう遠慮するな。困った時に助け合うのが仲間というものだ。それにグラ
ンデイス殿のピンチは放っておけん」

グランデイス「今日は素直にお礼を言っておくよ、先生！」

ワタル「サンソンさん、ハンソンさん！そういう事だから、一緒に頑張ろう！」

ハンソン「……僕達の負けみたいだね」

サンソン「そうだな」

グランデイス「神様も異世界も関係ない！生きてくためにあたし達も仲間と力を合わ
せるよ！」

ハンソン「合点」

サンソン「承知！」

シユワルビネガー「い、いかん……。完全に勢いで負けている！」

零「…おいゴリラ」

シユワルビネガー「誰がゴリラ…え！」

零「その腹が立つニヤケ顔を今すぐぶっ潰してやるから覚悟しとけよ、コラ」

シユワルビネガー「なんか、怒っている!?」

アマリ「れ、零君何があつたの!?」

零「話は後だ、とつととやるぞ!!」

シバラク「零め…ものすごい気迫だな…」

ハンソン「な、なんかごめん…零…」

龍神丸「我々も行くぞ、ワタル！」

ワタル「うん！みんなで力を合わせて、ドアクター軍団をやつつけるんだ！」

…行くぞ、戦闘開始だ。

〈戦闘会話 零VSシユワルビネガー〉

シユワルビネガー「あの時の借りを返すぞ！」

零「もういい口を開くな。お前のせいで俺は笑われ、おかしな奴のレッテルを貼られたんだよ…。」

シユワルビネガー「それは俺は関係ないだろ!?」

零「口を開くなって言ったろ？これ以上口を開くなら、口を針で縫ってやる！」
シユワルビネガー「俺達よりも悪役ではないか、これでは!?？」

グラタンの突撃攻撃にシユワルビネガーのゲツペルタンクはダメージを負った。

シユワルビネガー「お、俺は必ず戻ってくるぞー!!？」

ゲツペルタンクは爆発したが、多分脱出しただろうな。

ワタル「あいつのしぶとさは確かに凄いね」

シバラク「負け続けているのだから、威張れるものではないがな」

ホープス「ドアクター軍団の壊滅を確認しました」

アマリ「メガファウナを呼ぶまでもなかったですね」

零「あー！スツキリしたぜ！」

アマリ「ほ、本当に何があったの、零君!?!？」

零「頼む、思い出したいくない」

サンソン「いや、今回は笑わせてもらったぜ」

ハンソン「ほんと、ほんと。たっぷり笑って気分爽快だね」

シバラク「何じゃ、お主ら？ピンチだったんじゃないのか？」

グランデイス「それなりにあぶなかったけの、龍神丸のおかげでなんとかなったよ」
シバラク「ワタル：。。ピンチを笑いに変えるとは龍神丸はどんな魔法を使ったんだ？」

ワタル「言っている、龍神丸？」

龍神丸「ダメだ」

グランデイス「照れてるのかい？可愛い所もあるんだね」

サンソン「今日はありがとうよ、龍神丸。凄い所を見せてくれてよ」

ハンソン「龍神丸のすごさにあのゴリラ野郎もビビってたね」

龍神丸「役に立てたのなら、私としても嬉しい」

グランデイス「これからもよろしく頼むよ。一緒に旅する仲間としてね」

ワタル「こつちこそ！みんなで力を合わせて戦って行こうね！」

俺たちはメガファウナに戻り、夜になった。。。

サンソン「：。詳しい事は話せないが、龍神丸のマシガントークで相手はびびっちまったわけだ」

ノレド「さすがは龍神丸！すごいね！」

ベルリ「それは是非、その場で聞きたかった！」

クラマ「そもそも喋る魔神つてのがかなり珍しいからな。シユワルビネガーの野郎も

それで度肝を抜かれちまったんだろうさ」

ワタル「そうなんだ……！」

シバラク「拙者の戦神丸も喋りはするが、龍神丸ほど、口数は多くないな」

エレボス「本当に……？」

サンソン「考えてみれば、旦那の戦神丸の声って聞いた事がないな」

シバラク「よおし、わかった！ならば、龍神丸の次は戦神丸のすごさを皆に見せようではないか！」

アイーダ「それは楽しみです」

ベルリ「お願いします、シバラク先生！」

シバラク「では、しばし待たがいい！」

シバラク先生は電話をかけた。

シバラク「あ、もしもし、戦神丸？戦闘じゃないんだけど、ちよつと来てくれる？え……！酒を飲んでフラフラだから無理……？何……？本当は今日も風邪気味だったのに無理矢理呼ばれて辛かった……？」

何だそれ……。

アーニー「……」

サヤ「……」

シヨウ「…確かに凄いな」

チャム「うん…。龍神丸とは違う意味だけど」

グランデイス「いいじゃないか。いろんな奴の寄せ集めの方が面白い！」

ベルリ「そうですね！生まれた場所も時代も違う人達が一つになって旅をするなんて！」

ワタル「うん！よおし…。やるぞおおおつ！みんなで打倒ドアクダーだ！」

アマリ「旅の仲間ですか…」

ホープス「いいものですか」

アマリ「ホープスが、そんな事を言うなんてちよつと意外です」

ホープス「何よりマスターよりも頼りになる方が大勢いらつまじやいますからね」

アマリ「いじわる…」

零「また拗ねてるな…」

ワタル「戦神丸がダメなら、零さんのを見てよ！」

零「わ、ワタル！」

アマリ「私も気になります」

シバラク「見せてくれぬか、零？」

零「…ぐぬぬ…。一回だけだから…」

またやるのかよ…。

零「さあ、みんな！これからもドアクター打倒を頑張っていくで！俺らは仲間やからな！」

刹那「…」

アンドレイ「…」

アイーダ「…ぷ、ぷふふ…」

ノレド「…ぷっ」

零「…笑いたければ笑えよ」

だから、嫌だったんだよ！

アマリ「だ、大丈夫よ、零君！面白いわ！」

マサキ「フオローになってねえよ…」

ホープス「録音機で今の言葉を録音しておきました」

零「おい、ホープス。今すぐ消せ」

ホープス「嫌です」

と言い、ホープスの野郎は飛び去ろうとしていた。

零「逃がすか、腹黒オウムがあああつ!!？」

その後、俺とホープスの追っかけあいはず十分続き、アマリが録音を消してくれ

た
・
・
・
。

ボーナスシナリオ2

メガファウナ騒乱

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、ワタル様達一行がメガファウナと合流した頃のお話です。人間は、それぞれ立場や役割を持っています。では、それを見つけれない人間はどうするか…非常に興味深いです…」

「ワタル達を乗員に迎えたメガファウナ。寄せ集めの集団は混乱の中にあり、それが思わぬ危機を招こうとしていた…。」

―新垣 零だ。

メガファウナで移動する事になった俺達は格納庫に集まった。

ジャン「…じゃあ、あのベルリさんって人はアイーダさんって人を…！」

ノレド「そうなのよ。アイーダさんや、この艦が所属しているアメリカって国は…。ベルやあたし達のいたキャピタル・テリトリーと対立していたんだけど…。ベルはア

イーダさんに一目惚れして、そのオシリを追っかけて、このメガファウナに来たの」

冬樹「お、オシリ……」

ナディア「ノレドさんは？」

ノレド「へ……？」

夏美「ベルリさんの事は何となくわかりましたけど、ノレドさんは、どうしてこの艦に乗っているんですか？」

ノレド「あたしは……ベルの保護者役みたいなものだから。それにラライヤとここが気に入ってるみたいだし」

エレボス「ラライヤって……あのいつもニコニコしている子だよね？」

ノレド「ラライヤはね……記憶がないの」

エイサップ「え……」

ノレド「ラライヤは、あのGーセルフに乗って宇宙から地球に降りてきたんだけど、そこをキャピタル・アーミイに捕まって……その時のショックで記憶を失っちゃったみたいな」

零「そうだったのか……」

記憶がなくなる……か……。

ノレド「それでね、パイロットのラライヤはアーミイに捕まっちゃったけど……Gー

セルフの方はアメリカ軍が手に入れて、それに乗って攻めてきたアイーダさんを捕獲したのがベルなの」

千冬「なるほど、そこで一目惚れしたというわけか」

ジャン「ベルりさんとアイーダさん。。Gーセルフを通じて、運命的な出会いをしたんですね。。」

チャム「聞いた、シヨウ？何だかベルりってロマンチックね！」

シヨウ「そうか。。。？女の子を追って、敵に寝返るなんてちよつと軽薄すぎだと思いが。。」

チャム「へえ。。。マーベルを追って、ドレイクを裏切ったシヨウがそういう事を言うんだ！」

九郎「何だよ、シヨウ！お前もやった事があるのかよ！」

シヨウ「ち、違うって！俺がドレイクの下を去ったのは、そんな理由じゃないさ！」
すると、ハツパさんが来た。

ハツパ「まあ。。。ベルリの恋の前途は多難だろうがな。。」

アル「汝は？」

ハツパ「メカニツクのハツパ中尉だ。よろしく頼む」

チャム「ねえねえ。。。ベルリの恋ってうまくいかないの？」

ハツパ「聞いた話だが、奴は身を守るためとはいえ、カーヒル大尉を撃墜しちまったからな……」

アンドレイ「カーヒル大尉？」

ハツパ「このメガファウナに所属していたパイロットだ。そして、アイーダ姫様の恋人でもあった」

セルゲイ「！」

アキト「ベルリは……好きな人の恋人を殺してしまったのか……」

ハツパ「戦闘中の事だ。ベルリを責めるのは筋じゃないってのは姫様もわかってる……」

アキト「でも、そういうのは頭でわかるだけじゃダメだからな……」

ハツパ「そういう事だ……誰が悪いつてわけじゃなく、間が悪かったとしか言い様がない……」

すると今度はアイーダが来た。

アイーダ「ハツパ中尉……。ラライヤを知りませんか？」

ハツパ「いえ……。こちらでは見ていませんが……」

次に焦った表情をしたベルリが走って来た。

ベルリ「アイーダさん！ワタル達の仲間の女の子二人と男の子一人もいません！」

ワタル「ヒミコとマリーの二人が昼ご飯の後からいないんだ！」

一夏「しんのすけの奴も探したんだけど、いないんだよ！」

サヤ「え…?」

ジャン「マリーが?」

ナディア「キング!あなた、マリーがどこに行ったか、知らない?」

キング「?」

知らないってか…。

零「しんのすけはいつまでいたんだ？」

一夏「ヒミコ達と同じく、昼ご飯まではいた！」

…これはまさか…。

アイーダ「ヒミコとマリーとライヤとしんちゃん…。どうやら四人で連れ立って

艦を降りたみたいね」

シバラク「その四人の事だから遊びに行ったんだと思うが…」

ハツパ「まずいですよ。まだ、この辺りにはキャピタル・アーミイの連中がいるかも

知らないんです」

アーニー「わかりました。すぐに捜索隊を派遣しましょう」

ノレド「でも、もうすぐ夜だよ!闇雲に飛び回っても見つけられないよ！」

チャム「じゃあ、どうすればいいのよ!?!」

アイーダ「…」

刹那「…」

ジャン「僕に考えがあります」

ナディア「ジャン…」

いつたい、考えって何だ…? ?

ボーンナスシナリオ2 メガファアウナ騒乱

ーホツホーイ! オラ、野原 しんのすけだゾ!

ヒミコちゃんとライヤお姉さん、マリーちゃんと一緒に遊んでいたら、変な人と会ったゾ。

バララ「…そいつらが例の海賊部隊の一員だって?」

C・アーミイ兵「はい…。この付近をうろろろしている所を捕獲しました」

ヒミコ「きやはは! かくれんぼしてたら、見つかってしまったのだ!」

マリー「でも、そろそろ帰らないとナディア達が心配するかも…」

ラライヤ「おなか、へった」

しんのすけ「オラ、アキトお兄ちゃんからゲキガンガーを見せてもらうって約束を今、思い出したゾ！」

バララ「緊張感のない連中だな。。。本当に海賊部隊の人間なのか？」

しんのすけ「へい、お姉さん！オラと一緒に海賊人生を歩まない？！」

バララ「な、何だよこいつ。。。！」

C・アーミイ兵「尋問には時間ばかりりましたが、あの艦に乗っていた事は確かです」
バララ「まあいい。。。こいつらを人質に使って海賊部隊に揺さぶりをかけるぞ」

C・アーミイ兵「了解です」

バララ「ふふ。。。マスクには悪いが、副官の私が海賊部隊を仕留めさせてもらう」

しんのすけ「副官。。。？それって、アンコ。。。？」

バララ「それはこしあんだ！」

すると、またおじさんが走って来た。

C・アーミイ兵2「バララ中尉！海賊部隊と思われる機体がこちらに接近しています
！」

バララ「こちらの位置がバレたと言うのか？！？もしかして、あいつら。。。このガキ共を囮にしてこちらに探りを入れたのか！」

―新垣 零だ。

アイーダ「聞こえますか、キャピタル・アーミィ！」

G―セルフとG―アルケインが現れたって事は… 始まったか。

アイーダ「私の名前はアイーダ・スルガン！我々の仲間の解放を要求します！」

ベルリ「応答、ないですね…」

アイーダ「聞こえますか、キャピタル・アーミィ！小さな子供達を人質にとるなど、人間として許される行為ではありません。下劣です！破廉恥です！恥を知りなさい！」

お、おいおい、大丈夫なのか… ！！？

ベルリ「あの… そういう風に相手を怒らせるような事を言うのは逆効果だと思うんですけど…」

アイーダ「あなたは黙っていなさい、ベルリ・ゼナム！」

ベルリ「はい…。(まっすぐなのはいいんだけど、直情的というか、融通が利かないというか…)。そういう所も含めてアイーダさんなんだろうけど…)」

アイーダ「聞こえてるのですが、キャピタル・アーミィ！すぐに人質を解放しなさい！」

さてと、こつちも始めるとするか！

マリー「あれってメガファウナのお姫様？」

ラライヤ「うん」

バララ「何なんだよ、あいつは！こんな訳のわからない世界に来て、正論をかまして！女子供を囮に使ってこつちの位置を探るような女が言ってくれるよ！」

サンソン「そうじゃねえんだよ、お嬢ちゃん」

ハンソン「こつちには優秀な追跡システムがあるんだよ」

バララ「何っ!?？」

ジャン「それは、このキングの鼻と野性の勘だ！」

キング「ガウ！」

バララ「何だ、こいつ！可愛いぞ！」

いや、おい。

マリー「キング！ジャン！来てくれたんだね！」

ハンソン「姫さんに注意をそらしてもらって、その間に潜入する作戦……」

サンソン「大成功だな！」

C・アーミイ兵「う、動くな！動けば人質を撃つぞ！」

ヒミコ「へ？」

しんのすけ「お？」

ワタル「帰るぞ、ヒミコ！もう晩ご飯だ！」

カンタム「しんのすけ君、迎えに来たよ！」

ヒミコ&しんのすけ「「ほーい！」」

C・アーミイ兵「動くなど言つたぞ！」

ヒミコ「ご飯だから帰るね！」

しんのすけ「じゃ、そういう事で！」

C・アーミイ兵「な、何だ、こいつら！やたらとすばしっこいぞ！」

C・アーミイ兵2「ええい！これでは狙いが定まらない！」

しんのすけ「鬼ごっこなら負けないゾー！」

零「ナイスだ、しんのすけ、ヒミコ！そのまま逃げるぞ！」

ハンソン「マリーとライヤはこっちに任せて！」

ジャン「サンソン！思いっきり暴れちゃって！」

サンソン「おう！女の子を人質に取るうなんて連中には容赦なしだ！行くぞ、零！」

零「はい！」

C・アーミイ兵「な、何なんだ！こいつらの馬鹿力は！」

零「はあつ!? 流石に俺は馬鹿力じゃないだろ！」

サンソン「おい、そこは俺も否定しろよ！」

バララ「撤退だ！こうなったらモビルスーツで相手をするぞ！」

キャピタル・アーミー達はモビルスーツを取りに行った…。

サンソン「へ！楽勝、楽勝！」

グランデイス「ご苦労だったね、みんな」

アマリ「…よ、よかった…。私に順番がなくて…」

ホープス「そんなに怖いのでしたら、メガファウナの守りについていけば、よかったですか…。」

アマリ「で、でも…。もしかしたら、私のドグマが必要になるかも知れないと思いましたから…。」

零「しつかりしろ、アマリ！」

テイエリア「まだ戦いは終わってはいない！相手はモビルスーツを出してくる！」

グランデイス「マリー達は、あたし達が運ぶ。後はあんた達と突撃娘に任せるよ」

アマリ「わかりました！今度は私も頑張ります！」

零「行こうぜ、人質を取ろうなんざ卑怯な手を考える奴らには痛い目を見てもらわないとな！」

俺達もメガファウナへ向かった…。

どうやら、あいつらもモビルスーツで来たようだな。

アイーダ「モビルスーツが出て来た！」

ベルリ「突入部隊は人質奪還に成功したみたいですね！」

アイーダ「本当は私も陽動ではなく、あちらの舞台を希望したのに…。」

ベルリ「え!?？」

アイーダ「女子供を人質に取るような人間には直に非道を叫弾すべきだと思ったので
す」

ベルリ「アイーダさんって… 本当に突撃娘なんですね…。」

アイーダ「何か言った、ベルリ？」

ベルリ「何も言ってますせん！ほら！零さん達も来ましたよ！」

俺達も出撃した。

エイサツプ「人質はグランデイスさん達が安全な所まで運んでいます！」

アイーダ「ごくろうでした、皆さん。そして… ショウ・ザマ。」

チャム「(さっきの言い方、ちよつとシーラ様に似てたね)」

ショウ「(本人の性格はだいぶ違うけどな)」

アイーダ「では、皆さん！卑劣な手を使ったアーミイを撃退します！」

アマリ「了解です！」

刹那「メガファウナの守りはシバラク達に任せてある…俺達で連中を叩くぞ！」
ワタル「マリー達を怖がらせた奴らは許さないぞ！」

零「みんな、突撃娘に続くぞ！」

アイーダ「棘がありますね、その言葉！…取り敢えず、各機、突撃！」

ベルリ「やつぱり、こうなった…」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「大切な仲間を人質に取られたんだ…それなりの覚悟はあるんだろうな？今回ばかりは本気でやらせてもらおうぜ！」

〈戦闘会話 エイサップVS初戦闘〉

エレボス「アイーダって凄いね」

エイサップ「勝手に突撃されるとたまったもんじゃないけどな…。(まあ、そこはベルリが何とかするだろう…)」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「人質を取る行為……貴様達は歪んでいる……。その借りは取らせてもらおう……！」

俺達はリーダーのカットシーにダメージを与えた。

バララ「これではマスクに合わせる顔がない！撤退する！」

カットシーは撤退した……。

シヨウ「あの後退していった指揮官……。女の子だったな……」

アイーダ「キャピタル・アーミイの跳ねっ返り娘といたところですね」

零「向こうは跳ねっ返り娘で、こっちは突撃娘……」

ベルリ「ダメですって、零さん!!？」

零「わ、悪い……！」

アイーダ「ありがとう、ベルリ。今回は私の名誉を守ろうとしたと判断します」

ベルリ「あ、ありあとあす！」

エイサップ「(大変だな、ベルリ……)」

チャム「あたし達の勝ちね！」

アイーダ「あのような輩に負けるわけにはいきませんからね」

零「同感だ」

シヨウ「しかし、今日のような事がまた起きては困るな…」

アマリ「マリーちゃんやヒミコちゃんはまだ子供です…。大人しくしてろというの
は無理があると思います」

零「しんのすけも無理だろうな…」

ベルリ「それなんですけど、ノレドにいい考えがあるそうです」

刹那「いい考え？」

ベルリ「それについては帰ってからにしましょう」

俺達はメガファウナに戻り、格納庫に集まった…。

ドニエル「ダメじゃないか！勝手に艦を降りて出歩いては！」

マリー「ごめんなさい…」

ドニエル「あ…いや…その…まあ…無事だったのは、本当によかった…。お

じさんも怒りたくて怒ってるわけじゃなくて、君達が心配だったからでな…」

大変だな、ドニエル艦長…。

サンソン「苦戦しているようだな、艦長サンは」

ハンソン「そりや部下を叱るのとは勝手が違うだろうからね」

グランデイス「あ… あれを見る限り、悪い人間じゃないってのは確かだろうね」
サンソン「惚れましたか？」

グランデイス「ちよつとタイプじゃないね。あたしの好みは、ネモ様みたいなちよつとクールな大人だから」

ラライヤ「見て、ヒミコ！ しんちゃん！ チュチュミイだよ！」

しんのすけ「可愛いゾ」

ヒミコ「きやはは！ 金魚さんなのだ！」

ドニエル「こら！ ちゃんと話を聞かんか！」

マリー「ごめんなさい…」

ドニエル「ああ、もう！ 泣かんでくれ！」

零「ドニエル艦長…。この事態を打開する案がノレドにあるそうですよ」

ドニエル「任せる！ もうこつちはお手上げだ！」

ベルリ「だつてさ、ノレド」

ノレド「では、このノレド・ナグにお任せあれ！ ラライヤ、ヒミコ、マリー！ それに

ナディアア！ 全員集合！」

ヒミコ「何だ、何だ？」

ナディアア「え… 私も…？」

ノレド「これよりあたし達はメガファウナ生活班として任務にあたります」

ラライヤ「生活班……？」

そう来たか……。

ノレド「簡単に言えば、掃除、洗濯、食事の支度なんかの身の回りの事をする係よ。ベルやアイーダさんの仕事を戦う事……あたし達の仕事は、みんなのお世話……。勿論しんちゃんも手伝ってもらうけど」

しんのすけ「うっ……！」

ノレド「出来るよね、マリー？」

マリー「できる！」

ナディア「私も……やるの？」

ノレド「じゃあ、戦う？」

ナディア「それは絶対に嫌！」

ノレド「それなら決まり！そして、決まったからには文句は言わない！」

ナディア「は、はい……」

ノレド「生活班の班長は、このあたし！頑張ろうね、みんな！」

ラライヤ「うん！」

しんのすけ「仕方ないゾ」

シヨウ「なるほど…。暇になると遊んでしまうから仕事を与えるわけか」
チャム「あたしもやる！」

一夏「俺達もやるか、零！」

零「だな！家事の腕を見せてやるとするか！」

アイーダ「職務を与える事で各人に責任感を与え、同時に連帯感を高める…。素晴らしい案です、ノレドさん。私も、このメガファウナの機動部隊の隊長として責務を全うします」

アマリ「え!?？」

零「…嘘だろ、おい…。!?？」

ベルリ「アイーダさんが隊長…。なんですか？」

アイーダ「当然でしょう？」

シヨウ「…」

零「…」

アマリ「…」

アイーダ「特に反応もないようですので、皆さん、私の指示に従ってもらいますね」

零「(ベルリ…)」

アマリ「(アイーダさんの事は、あなたに任せます)」

ベルリ「(了解です！ベルリ・ゼナム、全面的に任されます！)」
刹那「どうなるんだ…俺達の部隊は…」

アイーダ「何をこそこそと話しているのです？」

ベルリ「何でもありません！これからもよろしくお願いします、隊長！」

アイーダ「期待させてもいません、ベルリ」

ベルリ「(みんながそれぞれ自分の役割を果たす…。だったら、僕も僕の役割を果たそう…。アイーダさんを守るって役を…)」

頑張れよ、ベルリ…。

ボーナズシナリオ3

姫様奮戦記

「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、ノーノーチラス号が合流された頃のお話です。海賊部隊メガファウナ：…。それを率いるドニエル艦長は何かと気苦労が絶えないようです。」

ノーノーチラス号と合流した一行は戦力を飛躍的に増大させた。しかし、その裏でメガファウナ艦長のドニエルは、大きな悩みを抱えていた…。

「どうも、皆様…エメラナです。」

私とセシリーさんはドニエル艦長に呼び出され、メガファウナのパイロット待機室に来ました。

セシリー「…お待ちいたしました、ドニエル艦長」

ドニエル「よく来てくれた、セシリー君、エメラナ姫。まずはかけてくれ」

エメラナ「では、失礼させていただきます」

セシリー「私も・・・失礼させていただきます」

ドニエル「その上品な言葉遣い・・・やはり、君達が適任だな」

セシリー「と、おっしゃられますと?」

ドニエル「実は、こうして二人に来てもらったのは折り入って頼みがあるからなのだ」

エメラナ「私達二人に・・・ですか?」

ドニエル「優雅な物腰とどことなく溢れる気品・・・。それを見込んで頼みがある。君達にアイーダ姫様の教育係をお願いしたい」

セシリー「アイーダさんの教育・・・ですか・・・?」

ドニエル艦長の話を聞いた後、私達は彼の勢いに負けて承諾してしまい、悩み、メガファウナの格納庫で話しています・・・。

セシリー「どうしましょう・・・」

エメラナ「ドニエル艦長の勢いに負けて承諾してしまいましたけれど、私達に出来るのでしょうか・・・」

セシリー「アイーダさんの名誉もあるだろうから、シーブック達にも相談できませんし・・・」

すると、マーベルさん、リユクスさん、チャムが心配して聞いてきました。

マーベル「どうしたの、二人共？」

エメラナ「マーベルさんにリユクスさん……それにチャムも……」

チャム「二人共……ため息ついてたね」

リユクス「何かお悩みゴトですか？ 私達でよければお話をお聞きします」

セシリー「……では、お言葉に甘えさせていただきます」

エメラナ「マーベルさんとリユクスさんはプリンセスと呼ばれる人間とはどうあるべきだと思われませんか？」

マーベル「プリンセス……？」

リユクス「と、突然どうしたのですか……？」

私達はマーベルさん達に事を話しました。

マーベル「……なるほど。突撃娘のアイーダに頭を悩ませたドニエル艦長があなた達に依頼したのね……」

セシリー「はい……」

リユクス「政府高官の娘……その様な人が前線に出て、怪我でもされてしまつてはドニエル艦長のさも困つてしまうというわけですね……」

エメラナ「ですが、アイーダさんもお遊びで戦っているわけではないでしょう……。安

請け合いました自分が情けないです…。」

セシリー「そんな… エメラナ姫が悪いわけでは…。」

リユクス「いいえ…。困っている艦長を見て、引き受けたあなた方は立派ですよ」

エメラナ「私達は… どうすれば、よいのでしょうか…？」

マーベル「そうね…。」

チャム「お姫様のお手本を見せればいいと思うよ」

セシリー「お手本…？」

ユイ「そういう事でしたか」

アンジュ「それで私達を呼んだわけね」

セシリー「アンジュにユイ…？」

チャム「知らなかった、セシリー？アンジュってお姫様だったんだよ」

セシリー「え!?？」

アンジュ「驚きすぎだよ、セシリー。無理もないけど…。」

ユイ「お姫様の頃のアンジュは品も良くて、可愛かった思い出がある！」

アンジュ「ふーん、じゃあ、今は可愛くないって事？」

ユイ「そ、そうは言っていないよ！」

セシリー「…ごめんなさい、アンジュ…。ちよつと意外すぎて…。」

アンジュ「まあ、いいわ。頼ってくれた以上、私のやり方でアイーダを鍛えてあげるわ」

…あれ、目的が違う様な…。

エメラナ「鍛える?!?」

ユイ「あ、それでしたら、あの人にもお声をかけておいたよ」

あの人…? ?

ポーナスシナリオ3 姫様奮戦記

ーユインシエル・アステリアです。

アイーダさんを含めた私達は出撃しました。

ちなみにエメラナ姫はグラタンに乗せてもらっています。

アイーダ「…よくわからないまま、ここまで来ましたが、これは何の集まりなので
すか?」

アンジュ「あなた達のための訓練よ」

アイーダ「訓練?」

ユイ「アイーダさんの成長を願っている方からの依頼です…そうですよね、セシ

リーさん、エメラナ姫？」

エメラナ「え、ええ……」

アンジュ「アイーダ……。あなたには、より強くなってもらう必要があるわ」

アイーダ「それは私としても望む所です」

ナディア「アイーダさんはともかく、あたしは……」

アンジュ「口答えは許さないわよ、ナディア。あなた、この間の事で私達に借りがあるのを忘れてない？」

ナディア「でも……」

グランデイス「そこまでだよ、ナディア。とりあえず、あんたはここに座ってな」

ナディア「……はい……」

レナ「いつたい、これは何なの、ユイ？」

ユイ「特訓だよ」

レナ「と、特訓……？」

チャム「ワクワクするね、マーベル！アンジュなら、きつとアイーダを立派な戦士にしてくれるよね！」

マーベル「チャム……。あなた、セシリーの話を半分くらいしか聞いてなかったでしよ……」

リユクス「…でも、もしかしたら、アイーダさんには、この様なやり方の方が向いているかも知れませんが」

マーベル「…そうみたいね」

チャム「どういう事？」

マーベル「まずはアンジュのお手並みを拝見しましょう。…セシリーとエメラナ姫も、それでよくて？」

セシリー「は、はい…」

エメラナ「構いません…」

アンジュ「じゃあ、模擬戦を始めるわよ！覚悟はいい!?？」

アイーダ「いつでも！」

アンジュ「行くわよ、突撃娘！」

模擬戦が始まり、お互い一步も引かない攻防を続けましたが、ヴィルキスがGーアールケインに一撃を入れました。

アイーダ「くっ！」

アンジュ「どうしたの、アイーダ！突撃娘から後退娘に改名したらどう!?？」

アイーダ「その名で私を呼ぶ事は許しません！」

アンジュ「いい気合じゃない！さあ、二本目をやるわよ！」

ハンソン「ねえ、ハンソン…」

ハンソン「何だ、ハンソン…」

ハンソン「これって… お姫様修行なんだよね…」

ハンソン「そう聞いてたけどな…」

ハンソン「もしかして、アル・ワースのお姫様って僕達の世界と全然違うものなのかもね…」

グランデイス「こんな世の中だからね。お姫様に必要なのはドレスじゃなく、ピストルなんだろうさ…」

ナディア「…」

グランデイス「やっぱり、戦うのは嫌かい？」

ナディア「はい…」

グランデイス「でもね、ナディア…」

ハンソン「ちよつと待った、姐さん！何か来る！」

現れたのは… ネオ・アトランティスのロボット… !!?

ハンソン「ネオ・アトランティスかよ！」

レナ「大した数じゃない！あのぐらいなら、私達だけで勝てるわ！」

アイーダ「レナちゃんの言う通りです！行きますよ、皆さん！」

セシリー「(敵全体の戦力がわからないのだから、ここはもつと慎重に対処すべきでは……)」

エメラナ「セシリーさん？」

セシリー「……大丈夫です。やれます」

アイーダ「戦力は、こちらが上です！各機、速やかに敵機の迎撃を！」

アンジュ「突撃娘の本領発揮ね」

アイーダ「アンジュ……！」

アンジュ「了解！命令通り、突撃します！」

戦闘から数分後のことでした……。

チャム「何か来るよ！」

リュクス「敵の増援ですか!?!？」

現れたのはキャピタル・アーミイのモビルスーツでした……。

ユイ「キャピタル・アーミイ！」

アイーダ「これ辺りにも部隊を展開していたようね……！」

マーベル「気をつけて！別方向からも来る！」

「今度はオーラバトラーというものですか!?!?」

チャム「ドラムロだ!」

マーベル「ドアクダー軍団に雇われた兵達…!」

グランデイス「一つ一つは大した戦力じゃないが、こうも重なると鬱陶しい!」

アンジュ「ここから救援を呼んでもすぐには来ない!やるしかないよ!」

セシリー「(私があの時、注意をしていれば、こんな事には…:~)」

アイーダ「セシリー…」

エメラナ「…」

私達は戦闘を再開しました…。

だんだんと数に苦戦する私達…。

サンソン「くそつ…!このままじゃどん詰まりだぜ!」

ハンソン「姐さん!後ろから撃たれる覚悟で逃げるしかないよ!」

グランデイス「それを決めるのは、あたしじゃないよ!」

アイーダ「…」

セシリー「ごめんなさい、アイーダさん…」

ユイ「セシリーさん……」

セシリー「私があの時、後退を進言していれば……」

エメラナ「そんな事ないです！」

アイーダ「そうです。すべての責任は、皆を率いる立場にある私にあります」

エメラナ「あ、アイーダさん……」

アイーダ「だから、大丈夫です。私の生命と誇りを懸けて、あなた達を守ってみせます。それが私の務めです。来なさい、ならず者！あなた達は、このアイーダ・スルガンが相手をします！」

セシリー「アイーダさん……！」

チャム「アイーダ……格好いい……」

アンジュ「言ってくれるじゃない……。ただの突撃娘じゃないって事ね」

アイーダ「間違えないで、アンジュ。私は突撃して勝利を掴む者です。そのためには自らの身体を張ります」

ナディア「アイーダさん……死ぬのが怖くないの……」

グランデイス「そんな事はないさ。ああやって威勢のいい事言ってるけど、あの子は今、恐怖と戦っている」

エメラナ「そこから逃げない……。それがアイーダさんの誇りなんですよ」

ナディア「… 私には… よく分かりません…」

グランデイス「誰かを傷つけたり、誰かに傷つけられたりするのが嫌いなあんたにはわからないかもね…。でもね、ナディア…。誰だって譲れないものを持つている…。それだけは理解しな」

ナディア「… はい…」

セシリー「アイーダさん…」

アイーダ「… とは言ったものの私一人では、この状況を打破できるとは思っていません。手を貸してくれますか、セシリー？」

セシリー「はい…！」

アンジュ「やるよ！アイーダ、みんなに気合を入れて！」

アイーダ「各機、戦いはここからです！私達は絶対に生きて帰ります！」

ユイ「了解！」

アイーダ「行きます！各機は私には続きなさい！」

戦闘再開です！

〈戦闘会話 リュクスVS初戦闘〉

リュクス「アイーダさんの勢いがセシリーさんの生真面目なモヤモヤを吹き飛ばし

ました…。これなら、もう大丈夫ですね」

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

ユイ「私達もアイーダさんに負けてられないよ、レナ！」

レナ「ええ！私もユイを引っ張ってみせる！」

私達は敵を全滅させました…。

アンジユ「終わったわね…」

アイーダ「この勝利は、皆さんの頑張りのおかげです」

エメラナ「アイーダさん…」

チャム「見て！メガファウナが来たよ！」

チャムの言う通りにメガファウナが来ました。

零「ようやく見つけたぞ！」

ベルリ「無事ですか、アイーダさん！」

アイーダ「何とか」

ミラーナイト「姫様もご無事ですか!?!？」

エメラナ「大丈夫ですよ、ミラーナイト」

シーブック「あの残骸……。かなりの敵の数がいたようだけど……」

ドニエル「姫様！また勝手をされて！」

セシリー「いいえ、ドニエル艦長。アイーダさんは立派に自らの務めを果たしました」
エメラナ「ドニエル艦長にもご覧になって欲しかったですよ。アイーダさんの姫様ぶり」

ドニエル「そ、そうか……」

アイーダ「ですが、少々疲れしました。帰還しましょう、皆さん」

セシリー「了解です」

チャム「アイーダのオーラ……。！シーラ様やエレ様みたい！」

リュクス「良きオーラです」

マーベル「タイプは違うけれど、彼女はプリンセスの……。人の上に立つ者の資質を持つているわ」

レナ「マーベルは気づいていたの？」

マーベル「まあね……。ドニエル艦長が望む方向ではないかもしれないけど、彼女はきつと立派なプリンセスに成長すると思うわ」

私達はメガファウナに戻りました……。

ーエメラナです。

私とセシリーさんはドニエル艦長に報告をする事になりました。

ドニエル「その…セシリー君、エメラナ姫…。姫様の方は…どうなのかね？」

セシリー「ご安心ください、ドニエル艦長」

ドニエル「おお！うまくいったのか？！」

エメラナ「うまくいくも何もその必要はありませんでした」

ドニエル「え…？」

セシリー「アイーダさんは、まごう事なくプリンセスの素質を持つておられる方です。

私達のような未熟な人間があなたの方に教えるような事はなく…」

エメラナ「むしろ、大切な事を学ばせていただきました」

ドニエル「そ、そうか…」

セシリー「今回の訓練に参加したマーベルさんやユイ、アンジュも同じように思った

事でしょう」

ドニエル「うん…。少し信じられないが…」

エメラナ「今はまだ未熟な所もあるかも知れませんが、必ずあの方は誰もが認めるプ

リンセスに成長されると思います」

ドニエル「成長……。か……。そうだな。君達がそこまで言うのなら、その日が来るのを待つてみるとしよう。それまで私の神経がもつか、わからんがな……」

セシリー「（ありがとうございます、アイーダさん……。？私は今日、あなたから大切な事を学びました……。ロナ家を捨てた私にあなたのような役割を求められる事はもうないでしょう……。でも、もしそのような事になったのなら、私もあなたのように自らが先頭に立ち、皆を導く事を誓います……。）」

セシリーさん……。いい笑顔です！

ボーナズシナリオ4

背中合わせの二人

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、赤龍と青龍の謎を解いた頃の話です。青葉様とディオ様…。背中合わせの二人の戦いは、私にとっても非常に興味深いものです」

「カーカップリングシステムの適合者である青葉とディオ。少しずつ心の距離を縮めつつあるかに見えた二人だったが、相変わらず衝突の絶えない日々が続いていた…。」

「みんな、渡瀬 青葉だ！」

俺はディオと一緒にリーさん達とシミュレーションによる訓練を受けていた。

リー「…今日の訓練は、此処までだ。シミュレーションの結果を見て、各自、反省点をまとめておけ」

ヤール「お疲れさん…。っと。さっさとシャワーを浴びて、飯にすっか」

ディオ「青葉……。後退する敵に対して、うかつに前に出るな。罠の可能性もあるんだぞ」

青葉「それはわかっているけど、勢いってものがあるだろ？ここは勝負所だつていう……。俺に言わせれば、ディオが慎重過ぎなんだと思うぜ」

ディオ「だが事実として、今日のシミュレーションでもお前は敵機を深追いして手痛い反撃を受けた」

青葉「つて言うけど、撃墜される前に返り討ちにしたんだから、文句ないだろ？」

ディオ「……おめでたいやつだ」

青葉「何……？」

ディオ「まぐれで勝ちが続くほど、戦場は甘くない。死にたくなければ、運に頼るな」
青葉「俺だつて、デタラメにやってるわけじゃねえよ……。自分なりに考えてやってるつもりだ」

ディオ「その考えが無闇やたら突撃とはな……」

青葉「防御が手薄になってる所を見抜いてそこを攻めるつて作戦だったんだ。突っ込む前にも、そう言っただろうが……。！苦戦したのだつてバディを組むお前がついてこなかったからじゃねえかよ！」

ディオ「無謀な策になど乗るつもりはない。お前こそ、俺の指示を聞いて止まればよ

かったんだ」

青葉「何様のつもりだよ、お前は！」

ディオ「同じ台詞を言ってる。お前は何様のつもりだ？」

―エルヴィラよ。

エルヴィラ「…まったく。あの二人、またケンカして…」

アネツサ「ほんと飽きないですよね。出会った時から変わってないっていうか」

まゆか「でも、青葉さんはすごいです。カップリングの知識共有があるからといって、もうルクシオンを乗りこなしてるし…」

リー「戦術理解はまだまだだが、思い切りの良さと土壇場の集中力を見るべきものがあるな」

まゆか「それに青葉さんってやさしいんですよ。私が重い荷物を持つてると自分から手伝ってくれるし…。この間なんて、自分が非番だったのに近くの村まで買い出しに付き合ってくれたんです」

ヤール「へえ…。まゆかは青葉が気になるみたいだな」

エルヴィラ「あら、そうなの？」

まゆか「だ、だって…。青葉さん…。一人で私達の世界に来て、いきなり戦う事に

なって……。そ、それに貴重なカップラーなんですなら、私が……。じゃなくて私達が出来る限りサポートしてあげるべきですよ」

アネツサ「(ふくん……。サポートねえ……。)」

ヤール「(ほほーう……。こいつは面白くなりそうだぜ……。)」

リー「しかし、肝心のディオとはケンカばかりだな……。もう少し何とかならんものかね……。」

ヤール「赤龍と青龍の所で少しは仲良くなったように思えたんだけどな」

エルヴィラ「お互いにそっぽを向いて背中合わせの状態ね……。今は問題ないけど、このまま二人の連携が取れないんじゃないかと心配。カップリングの意味がないわ。それどころか、最愛の場合、カップリング自体が不可能になるかも……。」

リー「カップリングが出来なくなるって……。」

アネツサ「そんな事が起きるんですか!?!?」

エルヴィラ「あくまでも可能性の話だけだね。でも、無いとは言い切れない。カップラー間の相性についてはまだ不明な点も多いしね……。」

ヤール「何か起こってからじゃ遅いし、あの二人には仲良くしてもらわないと困るっつーことか」

エルヴィラ「そういう事。さて、どうしたものかしらね……。」

アネツサ「仲良くしろって命令すれば、いってもんじやないでしょうし…」

リー「… 手本を見せれば、いいんじゃないか？」

まゆか「お手本… ですか？」

リー「そうだ。エクスクロスの色々なコンビを二人に見せて、そこから連携を学んでもらうんだ」

エルヴィラ「… なるほどね。確かに良いアイデアかも…。そうと決まれば、早速、お手本となるコンビを選定しましょう」

これは忙しくなりそうね…！

ポーナスシナリオ4 背中合わせの二人

―新垣 零だ。

話はエルヴィラ博士から聞いて、俺達は出撃した。

メンバーはゼフィールス、ゼルガード、龍神丸、戦神丸、ビルバイン、ダンバイン、アツカナナジン、リュクスのギム・ゲネン、二機のシンデン、ダブルオークアンタ、ガンダ

ムデユナメス、ガンダムハルト、アレクト、ティシス、デモンベイン、Gーセルフ、Gーアルケイン、グレンラガン、ゼロ、グレンファイヤー、ルクシオン、ブラディオンド。

ディオ「… シミュレーションではなく実地訓練なのは構わないが…」

青葉「何なんだよ、この統一感のないメンバーは…？」

ワタル「えへん！僕達は、青葉さんとディオさんのお手本だよ」

青葉「お手本?!？」

シバラク「エルヴィラ博士に頼まれてな。お主達に息を合わせるコツを伝授する事になつたのだ」

ディオ「俺と青葉が息を合わせる…？」

青葉「気を遣わせて悪いけど、あの石頭をどうかしない限り、それは無理なんじゃねえかな…」

ディオ「石頭とは俺の事か？」

青葉「自覚はしてるみたいだな」

ディオ「感覚だけで生きているお前には理性や知性というものは理解できないらしい」

青葉「言ってくれるじゃねえかよ…！」

アル「また始まった…」

九郎「ケンカする程仲が良いって言うけど、これはな……」

アマリ「零君と氷室さんとそっくりですね」

零「え……俺達って、あんななのかよ!?!?」

ワタル「ケンカしないでよ!」

青葉「わ、悪い……」

ベルリ「とりあえず、まずはこつちの話聞いてよ」

シヨウ「とにかく青葉とディオには良好な人間関係を目指してもらうからな」

マーベル「より良いカップリングには普段からのコミュニケーションが大切だって博士もおっしゃっていたわ」

シモン「加えて、連携がうまくいかなきゃ、せつかくのカップリングシステムも宝の持ち腐れになるしな」

青葉「確かに、そうですね……」

ディオ「自分も異論はありません」

ティア「ティア達が先生になるから、覚悟してね!」

サラ「私達は甘くないから!」

シバラク「それでは、自分達を客観的に見るがいい。それによつて気づく事もある」

レナ「まずは、博士に選ばれた私達とあなた達自身を比較してみたら?」

青葉「了解っす！」

ベルリ「それじゃ、まずは僕とアイーダさんから！」

アイーダ「…」

ベルリ「僕とアイーダさんのコンビを学べば、青葉とデイオは、もつと強くなるはずだ。ね、アイーダさん！」

アイーダ「…とは言うけど、ベルリは一人で前に突っ込んでいってしまっから、あまりコンビという感じでは…」

ベルリ「え…?!？」

アイーダ「私としては、この場に私とベルリが呼ばれた事に疑問があるのだけど…」

ベルリ「僕… アイーダさんのサポートをしているつもりですけど…」

アイーダ「だったら、普段からもっと私の指示に従いなさい」

ベルリ「は、はい！」

ダメじゃねえかよ…。

エレボス「(ベルリ…。エルヴィラに自分とアイーダのコンビを売り込んでいたけど…)」

エイサツプ「(完全に一方通行だったな…)」

九郎「次は俺達だ」

アル「妾達の様に互いを信頼し合えば何とかなる」

青葉「信頼：…こいつがしてくれれば何とかあります」

ディオ「お前など信頼したくない」

青葉「何でだよ!!？」

ディオ「信頼などしても無意味だからだ」

九郎「…おい、アル。何とかなるとか簡単に言うんじゃねえよ！」

アル「妾は他の者に教えるなどできん」

零「じゃあ、何で出たんだよ…」

サラ「次は私達の番だね！」

青葉「よろしく頼むぜ、サラ、ティア」

サラ「仲良くなるのは簡単！青葉とディオの好きな食べ物を一緒にすればいいんだよ！」

ティア「それを一緒に食べたなら次第と仲良くなるよ！」

ディオ「…お前達と一緒にするな」

青葉「それに流石に好きな食べ物を統一させるのは無理があるんじゃないか？」

ティア「やつぱりダメ…？それなら、ユイちゃんとレナ、よろしく！」

ユイ「…思ったけど、私とレナって姉妹だから息がぴったりなんじゃ…」

レナ「… あ」

確かに姉妹で組むのとは違うから…

青葉「… ベルリ達やユイ達とサラ達、九郎さん達からは、アドバイスはもらえそうにないな」

ディオ「それでもない。片方だけからの一方通行なコミュニケーションは無意味だといふのは理解できた」

シモン「その通りだ」

青葉「シモンさん…」

シモン「次は俺達だ。俺とヴィラルがお前等二人に合体の極意を教えてやる」

青葉「いや… あの… 俺達… 合体は関係ないんですけど…」

シモン「関係ない事があるかよ！」

シモン「ひえっ！」

シモン「要するに全ては気合と魂だ！無理を通して道理を蹴つとばせ！」

ヴィラル「覚えておけ…。強さを求めるのなら、全てを捨てる覚悟が必要な時もある。お前達のちっぽけなプライドなど、その道を進む上ではなんの役にも立たない」

青葉「は、はい…！（言っている事は格好いいけど、具体的にどうすりゃいいんだよ…）」

デイト「(精神論を否定するつもりはないが、俺たちの問題には適用できんな...)」
アレルヤ「次は僕達だね」

ソーマ「あなた達はお互いに息を合わせようとしなから、うまくいかないの」

青葉「いや、俺は息を合わせようと思ってるんですけど、こいつが...」

デイト「それは俺の台詞だ」

青葉「何?」

ソーマ「喧嘩をするな!」

青葉「は、はい...!」

ハレルヤ「まあ、口で言っても無駄なもんは無駄だな」

ニール「ああ、まっ、要するに慣れつて事だ。俺と刹那はコンビを組む事が多かった

からな」

朗利「俺と金本も昔っからの連れだからな」

金本「時間が経てば、仲良くなるよ」

刹那「元々、エクシアとデュナメスの相性が良かったのもあるだろう。青葉、デイト...

オ...。人はわかり合う事ができる」

青葉「そ、そうですね! (いや、それができないから困っているんだけどな...)」

ワタル「それじゃあ、次は僕達だね! 僕とシバラク先生の救世主師弟コンビだ!」

シバラク「拙者達の固い絆で結ばれた連携はどんな敵をも打ち破るぞ！」

ディオ「確かに二人の戦い方は見習うべきものがある」

青葉「お……！ やつと有用なお手本が出て来た！」

ディオ「ならば、お前は俺に従え」

青葉「どうして、そうなるんだよ……？」

ディオ「俺はお前の戦技のコーチもしている。つまり、お前にとっては師匠だ。師匠の言う事に弟子は従う……。これで連携が取れる」

青葉「お前が俺のコーチなのは否定しねえよ。だがな、命懸けの戦いなんだ。尊敬できない相手の言葉を土壇場で聞けるかってんだ！」

ワタル「またケンカになっちゃった……」

シバラク「どっちの言ってる事も間違いではないのだが、どうにもうまくいかんのか……」

ゼロ「いや、ケンカするならさせていけばいいさ」

アマリ「そ、そういうわけにはいきません！」

グレン「ファイヤー」「よく言うだろ？ ケンカする程仲が良いってよ！」

青葉「ゼロさん達はどうかやって、仲良くなっただんですか？」

ゼロ「俺とグレンはお互い知らない状態で戦いあったんだ……。男同士の拳の友情つ

てやつをな」

グレンファイヤー「だから、お前らも拳をぶつけ合えば、仲良くなる！」

デイオ「……流石にそんな非科学的方法では無理です」

青葉「気持ちはわかりますけど、俺も怒りが先に来て、仲良くなつてなれないです」

九郎「これでもダメか……」

マーベル「二人に足りないのは愛ね」

デイオ「愛!?」

チャム「シヨウとマーベルは連携もバツチりだもんね！」

エレボス「それはエイサツプとリユクスも一緒だよ！」

マーベル「それに互いを想う気持ちは互いのオーラを高める事にもなるわ」

リユクス「その気持ちはよくわかります、マーベルさん。私もエイサツプの事を想う

とオーラが増す事があります」

青葉「い、いや……あの……二人とも……。カップリングって……そう言う意味

じゃ……」

エイサツプ「な、何考えてるんだよ、青葉！」

シヨウ「どうぞ！誤解しているのはお前の方だ、青葉！」

マーベル「愛つていうのはね、男と女以外の間にも色々な形があるのよ」

ディオ「色々な形の愛……」

零「それよりもどうして、俺とアマリが呼ばれたんですか？」

アマリ「私達はあまり、みなさんと変わらないと思いますか……」

エイサツプ「(マーベルさん……流石にこれには無理があつたんじゃないですか?)」

マーベル「(想い合つてる二人からも何か得る事があると思つただけど……。二人して大分奥手ね)」

アイーダ「待つて！何か近づいてくる！」

現れたのはヴァリアンサーかよ！

ベルリ「ゾギリア……！」

ディオ「こんな所にまで部隊を展開させているとは……！」

青葉「偵察か……？」

九郎「いや……。それにしても数が多すぎるぜ！」

ゼロ「少人数で行動していた俺達を見つけて、奇襲を仕掛けた……つて所だな」

グレンファイヤー「なめやがって……。俺達だけでやるぜ！」

シモン「おう！俺達を狙うとは運の悪い奴等だ！返り討ちにしてやるぞ！」

零「遅れんなよ、青葉！ディオ！」

青葉「了解！行くぜ、ディオ！」

ディオ「俺の足を引っ張るなよ」

青葉「ちえっ……。何処までも可愛くねえ奴……！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零 or アマリ VS 初戦闘〉

アマリ「どうすれば、青葉君とディオ君は仲良くなるんだろう……」

零「……いや、あいつらはあれでいいのかも知れないぜ」

アマリ「え？」

零「まあ、見てればわかると思う……。取り敢えず今は、敵を倒すぞ！」

ホープス「(零様のあの余裕の表情……。何かありますね……。)」

〈戦闘会話 刹那 or ニール VS 初戦闘〉

ニール「そんなじゃあ、見せてやるとしますか、俺達の連携を！」

刹那「了解、後方射撃を頼むぞ、ニール」

ニール「おう！背中任せな、刹那！」

〈戦闘会話　アレルヤVS初戦闘〉

アレルヤ「ごめんね、マリィ。君に厳しい教官役を演じさせてしまって…」
ソーマ「そんな事はないわ…。少しはソーマ・ピーリスの事を思い出したから」
アレルヤ「マリィ…。僕達も息を合わせていこう！」
ソーマ「わかったわ、アレルヤ！」

〈戦闘会話　九郎VS初戦闘〉

アル「マーベルの言う通り、あいづらには愛が足りないのかも知れないな」
九郎「お前がそんな事言うなんて、思っても見なかったぞ」
アル「たまにはいいだろう」
九郎「ふっ、まあな…。じゃあ、行くぜ、アル！」

〈戦闘会話　エイサップorリユクスVS初戦闘〉

エイサップ「全く…。青葉もディオも世話がやけるな…。」
リユクス「ですが、別の意味で信頼しているようにも見えます」
エレボス「エイサップとリユクスには及ばないけどね！」
エイサップ「とにかく、今は目の前の状態をどうにかしないと！」

〈戦闘会話 朗利 or 金本 VS 初戦闘〉

朗利「やるぜ、金本！」

金本「うん！二人に負けない連携を見せよう！」

〈戦闘会話 ユイ VS 初戦闘〉

レナ「そう言えば私たちって、喧嘩した事なかったよね？」

ユイ「お姉ちゃんが優しいからだよ！」

レナ「ユイこそ、優しい妹だからだよ」

ユイ「行こう、お姉ちゃん！私達の敵は私達が相手をします！」

〈戦闘会話 サラ VS 初戦闘〉

サラ「ケンカばかりしても楽しくないのね」

ティア「よし！後で青葉とディオにもティア達が好きなご飯をご馳走してあげよう！」

サラ「そうだね！まずはここを切りぬけよう！」

〈戦闘会話 ゼロorグレンファイヤーVS初戦闘〉

グレンファイヤー「俺達が仲間になった話……懐かしいな」

ゼロ「あの時はお互い退かない攻防が続いたからな」

グレンファイヤー「やろうぜ、ゼロ！俺達の戦いを青葉とディオに教えてやろうぜ！」

ゼロ「おう！遅れんなよ、グレン！」

敵を倒していく俺達……

ワタル「いきなり来たからビックリしたけど、何とかかなりそうだね！」

龍神丸「油断するな、ワタル。敵には何か策があるかも知れない」

青葉「よし……一気に押せ押せだ！突っ込むぜ！」

ディオ「待て、青葉！迂闊に出るな！」

ルクシオンが突っ込もうと、そこに伏兵のヴァリアンサーが数機現れた。

青葉「げっ！待ち伏せかよ！」

アル「やはり、ゾギリアは何かを企んでおるのか……？」

青葉「あつぶね……！突っ込んでたら、囲まれてたかも……！」

ディオ「だから言っただろうが！油断するな、バカ！」

青葉「わ、わかったよ！でもバカはねえだろ、バカは！」

シヨウ「言い争ってる場合じゃないぞ！体勢を立て直せ！」

青葉「わ、わかりました……！」

くそつ、これじゃあ、まだ出てくる可能性も……！

敵の数が多すぎて俺達は押され気味になっていた……。

ディオ「敵の数が多すぎる……！このままでは、いずれ押し切られる！」

青葉「くそつ……！後退するしかねえのかよ！」

刹那「気をつけろ、また来るぞ……！」

おいおい、またかよ……！つてか、隊長機らしき機体も……！

ニール「二機、突っ込んで来るぜ！」

青葉「ディオ！」

ディオ「わかっている！」

ルクシオンとブラディオンは攻撃を仕掛けた……。

青葉「敵が来たなら……！コネクティブ・ディオ！」

ディオ「アクセプション！」

青葉「こうなったら、あれで行くぞ！」

ディオ「この状況では無茶だ！」

青葉「無茶でもやるしかない！」

青葉&ディオ「うおおおおっ!!？」

ゾギリア兵「ゾギリアに栄光あれーっ！」

ルクシオンとブラディオンのカップリング攻撃で突っ込んで来たヴァリアンサーを撃墜させた。

チャム「やったあ！流石、青葉とディオ！」

アレルヤ「さっきの彼等の動き……」

シモン「もしかしたら、あいつ等……」

マルガレタ「フフ……最後の悪あがきをしてくれたわね、連合の新型機……」

ワタル「一体だけ形が違う奴がいる！」

ディオ「親衛師団用のヴァリアンサー……！あれが隊長機か！」

マルガレタ「(連合の新型機に搭載されたカップリングシステム……)。その弱点は、も

う判明している……。カップリングシステムは驚異的な戦闘力を生み出すもののパイロットへの負担も大きい……。我がゾギリアの科学者によって、その稼働限界時間も調べがっている……。そして、さっきの戦闘で限界時間は突破した。後は……」

あいつ等……青葉達を……！

青葉「こいつ等の狙い……俺達なのか！」

ディオ「くっ……！俺達は罠にはまったのか！」

金本「後退しろ、二人共！」

朗利「これ以上、カップリングを使うのは危険だ！」

青葉「だけど、カップリング無しでこれだけの敵と戦うのは……！」

ディオ「泣き言を言っている暇があったら、一機でも多く敵を落とせ！」

青葉「簡単に言うなよ！」

ディオ「諦めるな、渡瀬　青葉！お前はその程度の男だったのか……？」

青葉「！」

ディオ「お前はバカだ！それも救いようのないな！だが、自分で決めた事を曲げるよ
うな、そんな男ではなかったはずだ！生きて元の世界に帰りたいのならさっさと戦え！
このウスノロ！」

青葉「ディオ……。てめえ……！言わせておけば、調子に乗りやがって！お前が、そん

な事言える立場かよ!?？」

デイト「何っ!?？」

青葉「偉そうな事言っておいてまんまと罫にはまってんじやねえかよ！結局、お前も俺と同レベルって事だな！」

デイト「言うに事欠いて：：！さっきまでほとんど諦めかけていたくせに！」

青葉「アル・ワースに跳ばされた直後のお前の真似をただけだ！このガミガミ野郎が！」

デイト「このウスノロのメソメソが！」

青葉「俺がウスノロかどうか、その目で確かめてみやがれ！」

デイト「出来るものならやってみる！」

二人は喧嘩をしながら、隊長機以外の敵機を落とした。

ユイ「あれだけの敵をあっという間に：：！！」

レナ「あの二人：：！ケンカしながら敵を：：!?？」

サラ「凄いよ！青葉もデイトも！」

ティア「連携がちゃんと取れてるね！」

デイト「やるじゃないか、ウスノロのメソメソ！」

青葉「まだまだだ、ガミガミ！」

マルガレタ「ひ！」

ルクシオンとブラディオンは隊長機に接近した。

青葉「行くぞ、ルクシオン！コネクティブ・ディオ！」

ディオ「アクセプション！俺の指示に従え、青葉！」

青葉「黙つてろ、ディオ！」

ディオ「黙るのは、そちらだ！」

青葉&ディオ「うおおおおおっ！！？」

マルガレタ「いやあああつ！！？」

さ、さつきよりも凄いい、カップリング攻撃だ……。

隊長機が吹っ飛んだぜ……！

マルガレタ「ば、バカな……！！？理論上、カップリング接続時間はとつくに超えてい

るはずなのに……！！？」

隊長機は撤退した……。

リユクス「お二人共、凄いです！」

ゼロ「なんて息のあつた連携をしゃがる……！」

マーベル「これがカップリング機の……青葉とディオの真の力なのね」

零「……俺と弘樹みたいだな！」

アマリ「零君……！」

九郎「要するにあれが、あいつ等のやり方ってわけか！」

グレンファイヤー「やるぜ！あいつ等の勢いに乗って、残りの敵も片付けてやる！」

ルクシオンとブラディオンは戻ってきた。

青葉「どうだ！これでもウスノロ扱いするか!?!？」

ディオ「ウスノロの次は先走りか？まだ戦闘が終わっていないのに勝った気になるな」

青葉「そんな事言われるまでもねえ！やるぞ、ディオ！遅れるなよ！」

ディオ「お前こそな、青葉！」

戦闘再開だ！

数分後、ルクシオンとブラディオンを軸に俺達は全ての敵を倒した。

ワタル「ふう……何とかなったね……」

アマリ「一時はどうなる事かと思いましたが……」

零「青葉とディオのおかげだな」

ディオ「……おい、メソメソ。やれば出来るじゃないか」

青葉「うるせえ、ガミガミ」

エイサップ「…結局、俺達のお手本は必要なかったみたいですね」

朗利「そうだな…。一見すると喧嘩しているようだが、あれがあいつ等なりの絆なんだな」

ゼロ「本音をぶつけ合って、互いを確かめる…。あの二人、まだまだ強くなるな」

青葉「…デリオ」

デリオ「何だ？」

青葉「助かったよ。突っ込みそうな所を止めてくれて」

デリオ「気にするな。お前を止めるのは俺の役目だ」

とりあえず、戻るか…。

俺達はそれぞれの艦へ戻り、シグナスの格納庫に集まった。

エルヴィラ「…報告は聞いたわ。ゾギリアがカップリング機を狙ってくるなんてね…」

リー「それだけルクシオンとブラディオンを脅威に感じてるんだらうは」

シバラク「だが、青葉とデリオの二人なら、それを跳ね返してくれるだらう」

ヤール「そううまくいくもんかね…。あいつ等…今回もケンカしたんだろ？」

アイーダ「ですが、立派に戦い抜きました」

まゆか「戦闘データを見ましたが、二人はこちらが想定していた限界時間を超えて

カップリングを持続させていたようです」

アマリ「今日の勝利はお二人のコンビプレイのおかげと言ってもいいと思います」

エルヴィラ「あんな調子なのに……？」

デイオ「青葉……今日の戦闘でコードT2ライズに入る前にコンマ2秒、タイミングが早かったぞ」

青葉「ウスノロって言ったり、早すぎって言ったり、いったいどつちなんだよ!?」

デイオ「その場の状況を読み。感覚頼りでの戦いはいつか破綻するぞ」

青葉「大げさな事を言う前にまずは今日の勝利を褒めろよ！」

デイオ「それは結果論だろうが！この先の事を考えろ！」

まーたやってるよ、あの二人。

エルヴィラ「……とてもうまくいってるようには見えないけど」

ユイ「アル・ワースには、こういう言葉があります。ケンカする程、仲がいい……です！」

零「それは俺達の世界にもあるぜ」

リー「ちなみに俺達の世界にもある」

まゆか「青葉さん達もそれに当たるかも知れませんが、私、思うんですけど、あれがあの二人のコミュニケーションなんじゃないですか？」

エルヴィラ「コミュニケーション…」

まゆか「いがみ合いとかじやなくて、相手と本気でぶつかり合っているから、言い合いになつちやうんですよ、きつと」

アマリ「零君と氷室さんも一緒？」

零「似たようなものだったな…。よく優香に怒られてた」

優香も…元氣かな…？

エルヴィラ「…ふふ…。確かにそうかもね…。青葉君は負けず嫌いだし、ディオも表面的にはクールだけど、意地っ張りだしね」

シモン「要するに…」

エイサツプ「似た者同士って事だな」

エルヴィラ「ある意味、最高のバディなのかもね」

まゆか「この前は、青葉さん達の事…背中合わせの二人っておっしゃいましたけど…。お互いに背中を預けられる間柄って素敵だと思えます」

エルヴィラ「あの二人…そこまでいけるかな…」

リー「しかし、まゆかちゃんは青葉の事…本当によく見てるな」

まゆか「ぎ、技術士官補佐としてはパイロットの状態とかをチェックするのは義務ですから…！」

ベルリ「でも、まゆかさんの気持ちもわかるよ。本当に青葉はよくやってるから」
アル「確かに今はまだ、生きるために精一杯かも知れないが」

ゼロ「だが、あいつには根性がある」。そして、何より強い意思がある」

シモン「青葉はきつと強くなると思うぜ」。ディオと一緒にな」

まゆか「青葉さん」。青葉さん。みんながあなたに期待しています。私も期待しちゃいます。このまま青葉さんがずつとシグナスにいてくれる事を」

背中合わせの二人「か」。

弘樹「俺はお前とすれ違いの二人にはなりたくねえんだ。だから、俺がお前を止めてやるよ」。

ボーナスシナリオ5

アル・ワース食堂開店

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。様々な世界から寄り集まったエクスクロス…。それぞれの世界にはそれぞれの文化というものがあつたでしょう。帰還のめ目処が立っていない状況に置いて郷愁の想いにかられた皆様は心にストレスを抱えていました。」

それでは、始まります。

「アル・ワースでの生活に慣れてきた異界人達。しかし、小さなストレスの蓄積は彼等の心を少しずつ蝕み始めていた…。」

―新垣 零だ。

俺達はメガファウナの格納庫にいた。

セシリー「…」

ルー「どうしたの、セシリー？」

エル「元気ないけど、何か悩み事？」

セシリー「大丈夫よ。心配かけてごめんなさい」

ジユドー「そんな沈んだ表情で大丈夫っていうのは無理があると思うな」

ルナマリア「セシリーが元気ないと、シーブックの元気もなくなるわよ」

セシリー「ありがとう、みんな。でも、本当に何でもないので…。ただ…」

零「ただ？」

セシリー「時々言い様のない不安や苛立ちが襲ってくる事があって…」

ビーチャ「無理もないよな。俺達、いつ元の世界に帰れるかわからないし…」

アニュー「要するにストレスが溜まるのよね…」

ロツクオン「どこかで息抜きでもしないと潰れちまうかもな…」

カレン「ストレスか…」

ジャンヌ「カレンは、そういうのとは無関係っぽいわね」

カレン「ひどいなあ、ジャンヌは！私だって、不安になる時はあるよ！まあ…だい

たいの事はご飯をたくさん食べて寝ちゃえば何とかかなるけど」

サラ「そうだよね！」

ティア「ご飯って、偉大だよね！」

零「…」

カレン「何よ、その目は…」

零「お前の苦勞がわかつた気がしたのに、今ので台無しだ…」

カレン「え…」

零「お前が不安になる事なんて、ルルーシユぐらいしかないだろ」

カレン「ル、ルルーシユだけじゃないんだね…」

ネネ「…その顔は…誰か他の男に気がある顔ね！」

カレン「なっ…ネ、ネネ！」

零「カレンも女の子ってわけか」

カレン「それどういう意味よ!?!」

セシリー「でも、その強さ…見習いたいわ」

ジャンヌ「カレンを見習うのならまずは食事からね。生活班に頼んで美味しいものを作ってもらいましょうか」

カレン「ねえ…何か食べたいものはない？」

C・C「ヒザ」

カレン「あんたには聞いてないよ！」

C・C「私もストレスを感じているぞ」

カレン「どの口が、そんな事を！」

ヒミコ「ピザって何だ？」

カレン「え……」

ユイ「ヒミコちゃん……。ピザを知らないの？」

ヒミコ「うん」

シバラク「モンジャ村は田舎だからな。そういうハイカラなものは入ってこなかったのだろう」

零「ん？ジャンヌの世界にはピザがあつたのか？」

ジャンヌ「東の星にはなかったけど、西の星にはあつたわ」

千冬「シバラク先生はピザを知っているのですか？」

シバラク「もちろん！その昔、書物で読んだ事がある！」

ワタル「食べた事は？」

シバラク「ほ、ほら……。拙者は武士だから、その手のものは……」

ヒミコ「オッサンもないのか！」

一夏「ピザっていうのはな、ヒミコ……。平たくした小麦粉の生地の上に具材を乗せて

焼いたものだ」

アンジュ「チーズとトマトソースを使うのが一般的かな。私はアンチョビを使ったのが好きだけど」

零「俺はソーセージやベーコンを使ったのが好きだな」

ヒミコ「よくわからないけど、美味しそうなのだ！」

ヴィヴィアン「ねえねえ、エルシャ！作ってよ！」

エルシャ「うゝん… アルゼナルのメニューにはなかったものだし、ちよつと難しいかな…。作り方は何となくわかるけど…。自身がないわ」

零「何回か、作った事があるから、作れるぜ」

ヴィヴィアン「うおゝ！零も料理が作れるのか？」

零「一人暮らしなんだから、当然だつて」

ヒルダ「へえゝ。料理が出来るなんて、あんた…。いい旦那になりそうだね」

アマリ「いい、いい旦那…」

千冬「女子力が高いのもモテる秘訣かもしれないぞ」

一夏「何で俺を見るんだよ、千冬姉？」

千冬「別に何でもない」

ヒミコ「じゃあ、零ニイちゃん！作って欲しいのだ！」

零「・・・でも、材料がなかったよな・・・」

アンジュ「そうだね。少なくともトマトソースとモッツアレラチーズは必要だし・・・」
カレン「残念だったね、C・C。ピザは無理みたいよ」

C・C「ダメなのか？」

零「うーん・・・時間があれば、トマトソースとモッツアレラチーズも作るけど・・・」

カレン「え・・・」

零「何だよ？」

カレン「その二つまで作れるって・・・あんだ、何者!?!？」

零「別に・・・。料理が趣味なだけだ」

メル「零さん、料理が趣味だったのですか!?!？」

ヒルダ「・・・それは意外だね」

アンジュ「そんな事、一言も言っていないかったじゃない」

零「・・・男の趣味が料理って、なんか変だろ・・・」

アマリ「そんな事ないわ、零君・・・。どの様な趣味を持つなんて、その人の自由なもの」

零「・・・そっか、そうだよな！ありがとうな、アマリ！」

アマリ「お礼を言われる程の事はしていないわよ」

C・C「ダメなのか？」

零「悪い……」

C. C. 「ピザを食べられなければ、私は……私は……」

零「わ、わかった！何とかするから、その顔はやめろ！」

シン「つて安請け合いをしたけど、材料を手に入れる当てはあるのか？」

零「……仕方ねえ、時間はかかるが作るか……」

カレン「流石に零にそこまでさせるのは悪いよ！」

すると、ルルーシユが来た。

ルルーシユ「各員、警戒態勢につけ」

マリーダ「敵が来るのか？」

ルルーシユ「この周辺でミスルギ軍の大規模な展開が見られる。場合によっては、こ

ちらに仕掛けてくるだろう」

モモカ「アンジュリーゼ様……！」

アンジュ「この時期……多分、あれだろうね」

ユイ「……ああ、あれね！」

ステラ「あれって？」

アンジュ「ミスルギ貴族の恒例行事よ。皇族が地方に赴いて、臣民に顔見せするの」

ユイ「私もエナストリアを代表として、何度か参加しましたが、訪れた地方では大歓

迎を受けて、山海の珍味が用意されるんです」

C・C・「山海の珍味…」

ビーチャ「王様の食べるご馳走なんてのは想像も出来ないぜ！」

ジユドー「アンジュ、零さん…」

零「お前等も思いついたか…」

アンジュ「考えてる事は同じようね、零、ジユドー」

ルルーシユ「何をするつもりだ、お前達？」

アンジュ「貴族って言ったら、今は兄上とシルヴィアだけ…」

零「あの二人が相手なら、遠慮はいらねえな」

さあてと… いっちよおっぱじめるとしますか！

ポーナスシナリオ5 アル・ワース食堂開店

ー私はマスクだ。

C・アーミイ兵「警備隊、配置につきました」

マスク「無能でも貴族に生まれれば、贅沢な宴を楽しみ、クンタラの我々は警備か……」
C・アーミイ兵「は……？」

マスク「愚痴だ。忘れろ」

全く、嫌になる。

「みんな大好き、シルヴィアです。」

市民「……皇帝陛下、皇女殿下……。料理の方はいかがでしょうか？」

ジュリオ「まずいな」

シルヴィア「ほんと……。特産品のチーズの質が落ちたんじゃない？」

市民「も、申し訳ございません。ですが、チーズの出来は私共も自信があり……」

ジュリオ「神聖ミスルギ皇国の皇帝である、この私に口答えするつもりか？」

市民「め、滅相ありません……！」

シルヴィア「お兄様……。私、気分が悪くなりましたわ」

ジュリオ「私もだ。この頬の傷のうずき……。全ては、あの女が我々の前に現れたからだ」

シルヴィア「ええ、あのノーマの彼氏らしき男……。新垣 零から与えられた傷は治り

ましたが……心の傷は癒えませんか」

私から全てを奪ったあの憎つくきノーマ風情が男を作るなんて……許せません……！

すると、リイザが入って来ました。

リイザ「お食事中に申し訳ございません、陛下。至急、避難の準備を」

ジュリオ「何事だ？」

リイザ「先日、皇宮を襲った賊が現れました」

ジュリオ「何だと!?」

ヒイツ……！という事はあの新垣 零が……！

「新垣 零だ。

来たぜ、ミスルギ皇国！

出撃機体はゼフィールス、ヴィルキス、ZZガンダム、ガンダムF91、レイザー、エルシヤカスタムのハウザー、紅蓮聖天八極式、ランスロット・フロンティア、ティシス、オルレアン、白式だ。

マスク「エクスクロス！ジュリオ陛下を狙ってきたか！」

アンジュ「勘違いしないで。私は、この街を救いに来たのよ」
マスク「何？」

零「どうせ、あのクソ陛下の事だ……。公務なんかそつちのことで特産品のチーズを食べあさっているんじゃないか？」

マスク「う……。」

凶星かい……。

アンジュ「そんな奴が来たって街にとつては迷惑なだけよ。だから、さつさと帰ってもらうために私達が来たってわけ」

零「これはミスルギ皇国への攻撃じゃない……。立派な正義だと思うぜ？」

ジュード「さすがはアンジュと零さん！言ってくるぜ！」

カレン「本当は、この街からチーズを仕入れに来ただけなんだけどね」

C・C「アンジュと零のストレス解消とチーズの入手……。まさに一石二鳥だな」

カレン「C・C、ヴィヴィアン、サラ、ティア！ピザが食べたければ、しっかりと働きなよ！」

ヴィヴィアン「了解〜！」

エルシャ「あらあら、ヴィヴィちゃん……。張り切っちゃって……」

ティア「ピザの為だもんね！」

サラ「あれ？そう言えば、ユイちゃんは？」

一夏「あの皇帝陛下の顔は見たくないからって、不参加だよ」

零「まあ、下手したら暴走しかねないからな……。主に、レナが……」

ジユドー「しかし、意外だな。シーブックさんも付き合ってくれるなんて」

シーブック「ピザを作るって言うんなら、僕も協力したいからな。それに家柄や生まれで他人を支配しようとする人間は好きじゃない」

アンジュ「聞こえる、そっちの隊長さん？あんな男に仕えているようじゃあなた達の程度もたかが知れたものよ」

マスク「……黙れ……。お前達に私の何がわかる！」

……なんかキレてねえか？

サラ「怒った！」

一夏「アンジュの言葉……。触れちゃいけない部分に触れたみたいだな」

シーブック「あの男……。ベルリをずっと狙っているマスクとかいうやつか」

C・C「随分と屈折した男のようだな」

カレン「どうする、アンジュ、零？」

アンジュ「何に腹を立てたか知らないけど、あの男を守るような奴に負けるつもりはないわ」

零「…ん？待て、アンジュ…それじゃあ、目的が！」

アンジュ「行くわよ、マスク！あんたを倒して、名前だけの皇帝は叩き出してやるわ！」

だから、目的が！

と、取り敢えず戦闘開始だ！

戦闘開始から数分後の事だった。

ジャンヌ「気をつけて。増援が来るわよ！」

現れたのはゾギリアの親衛師団のヴァリアンサー部隊か！

シーブック「ゾギリアの親衛師団か！」

ドルジエフ「何をしている、マスク大尉！ジュリオ陛下の御前であるぞ！」

マスク「私に指図するな！」

ドルジエフ「な、何…？!?？」

マスク「賊は私が叩く！黙って見ているがいい！」

ドルジエフ「貴様…！この私に向かって！」

マスク「私は貴官の部下でもなければ飼いだでもない！好きにやらせてもらう！」

ジュドー「あいつ…」

C・C 「見えてきたぞ。あの男の強い上昇志向は劣等感の裏返しのようなだ」
カレン 「劣等感って？」

C・C 「何らかの差別：と見た」

カレン 「差別：。ブリタニアとイレヴのようにな」

エルシャ 「あの人もノーマの私達や朗利君達と同じ想いを味わったのね」

アンジュ 「：だから、どうしたっていうのよ？」

零 「アンジュ：」

アンジュ 「マスク！あんなの八つ当たりにはやられるつもりはないから！」

マスク 「何っ？！」

アンジュ 「世界が気に入らないのなら、その手で世界を壊せばいい！それも出来ずに強い者に従うだけの男に負けるつもりはないわ！」

マスク 「言わせておけば！」

アンジュ 「来なよ、マスク！私は生きるために戦う！たとえ、世界を破壊しても！」

ジュード 「チーズを手に入れに来ただけなのに話が大きくなったな」

それはつつこんじゃダメだぜ、ジュード。

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSドルジエフ〉

ドルジエフ「き、貴様はあの時の…！」

零「その声…プルを操っていた男か」

ドルジエフ「あの時の屈辱…今晴らしてやる！」

零「またボコボコにされるのがオチだぜ！」

ゼフィルスの攻撃でグバルディアSはダメージを負った。

ドルジエフ「しまった…！これでは下の者に示がつかない！」

マスク「お下がりください、ドルジエフ閣下。あなたの失態は下々の者が尻拭いをお願いします」

ドルジエフ「私に指図するな、マスク大尉！」

零「退かねえんなら…もつと痛い目を見る事になるぜ、ドルジエフ閣下さんよ？」

ドルジエフ「くっ…！覚えているがいい、金色機体のパイロット、そしてマスク大尉！」

グバルディアSは撤退した…。

マスク「俗物め……。俺は自らの力での上がつてみせる……。！クンタラの未来のためにも！」

零「なんか変なのに因縁つけられちまった……」

〈戦闘会話 零VSマスク〉

零「あんたもあんたで……。悩みがあつたんだな」

マスク「俺の事を分かったように言わないでもらおうか！」

零「そうだな、俺はあんたの事を何も知らない……。だが、ミスルギについた時点で俺達の敵だ！」

〈戦闘会話 ジャンヌVSマスク〉

ジャンヌ「あなたも違う人から差別されていたのね……」

マスク「まさか、貴様も……？」

ジャンヌ「私は……。天啓という力のせいでみんなから悪魔憑きつて呼ばれて恐れられていたの……。でも……。そんな私を変えてくれたのはノブナガだった……」

マスク「そうか……。ならば、その男、大切にしているがいい」

〈戦闘会話 一夏VSマスク〉

一夏「差別つて辛いよな…」

マスク「お前も差別の経験を…？」

一夏「俺には出来る姉がいるからな…。それとよく見比べられていたんだ」

マスク「そうか…。だが、目標を決めた分、お前は強い…。だからこそ、負けるつもりはない！」

ヴィルキスの攻撃でマックナイフにダメージを与えた。

マスク「くっ…！このような失態を晒しては、ミスルギからの信頼を失う…！い

や…！すでにその考えが負け犬の…クンタラの発想なのだ！」

ジユドー「マスクの動きが止まった！」

アンジュ「チャンス!!？」

ヴィルキスは皇宮へ近づいた。

アンジュ「聞こえる、元お兄様！皇帝を名乗るのは勝手だけど、私の視界に入ったのなら、容赦なく潰すから！」

すると、輸送機が出て来た。

ジュリオ「ア、アンジュ！よくも…よくもおおつ!!?」

シルヴィア「に、新垣 零！どうして、そのノーマの彼氏なんか…」

…はい？

零「え、は…? どういう事だ？」

シルヴィア「あなたはそのノーマに心をときめかせて恋をしたのでしょうか!!?」

アンジュ「ち、違うわよ、何言ってるの!!? 私はタス…! ごほん!」

今、とんでもない事言いかけたな、アンジュの奴…。

零「何言い出すのかと思えば…俺はアンジュの彼氏なんかじゃねえよ…って

か…勝手な妄想に俺を巻き込んでんじゃねえ!!?」

シルヴィア「ヒツ…!!? 逃げましょう、お兄様! あの者達は本気で撃ってきますわ

!!」

ジュリオ「ノーマめ! 覚えていろよ!!?」

輸送機は撤退した…。

マスク「最低限の任務は果たした…。撤退する!」

それに続いて、マックナイフも撤退した…。

ジュード「偉そうな奴等は逃げてった!」

カレン「これでピザの材料が手に入るね」

サラ「脅して奪うの？」

シーブック「そんな事はしないさ。ちゃんと代金を払うよ」

アンジュ「あいつ等は戻ってこないだろうから、皇族向けの高級食材を譲ってもらおうよ」

零「最初から、それが狙いつてわけか。知恵者だな」

ヴィヴィアン「よ！女ルルーシユ！」

アンジュ「そんなんじゃない。私は私のためにやったまでよ」

零「ま、そういう事にしておいてやるよ。さてと…次は俺が腕を振るう番だ。ピザでみんなのストレスを解消してやるよ！手伝ってくれよな、エルシャ、一夏」

エルシャ「わかったわ」

一夏「料理男子の腕を見せてやろうぜ、零！」

そうと決まれば、食材を貰って、とつとと戻るか！

その後の夜…。

俺達は食材を持ち帰り、ピザなどの料理を作り、パーティーをする事になった。

倉光「それでは、みんな！」

ドニエル「乾杯！」

倉光艦長とドニエルの言葉でパーティーが始まった。

エルシャ「皆さくん！ピザはたくさん焼きますから、どんどん食べてくださいね！」

一夏「色んな味のピザを作ってるんで、楽しんでください！」

ベルリ「ありあとあす、エルシャさん、一夏！」

ノレド「他にも珍しい食材が入ったから、今日は大盤振る舞いだよ！」

ジャン「ナディアア！野菜だけのピザも焼いてもらったから、一緒に食べようよ！」

ナディア「待って、ジャン。今は、このスナックを食べてるから」

マリー「ナディア」さつきからナディア：「こればかり食べてるね」

ジャン「（バーベキュー味：。ベジタリアンなのに、こういうのは食べるんだ：。）」

ワタル「どう、ヒミコ？ピザ、美味しい？」

ヒミコ「美味しい！美味し過ぎるのだ」

シバラク「溶けた熱々のチーズがたまらんのう！これは初めての味だ！」

クリス「あれ？そう言えば、零と一夏君は？」

零「みんなお待ちせ」

サリア「何処に行っていたの、二人共？」

零「チーズが大量に余ったからチーズリゾットを作ったんだ」

一夏「俺はチーズフォンデュを作った！」

ティア「おー！二人共、すごい！」

ロザリー「チーズフォンデュ、うまい！」

ヒルダ「チーズリゾットもなかなかだね」

千冬「ふむ…」

零「どうしました、千冬さん？」

千冬「…確かに美味いが、酒のあてがな…」

零「…そういうと思つて、チーズスティックパンも作りました」

千冬「！」

スメラギ「これ…お酒に合うじゃない！」

千冬「お前は天才か！」

零「流石に一夏に手伝ってもらいましたけど」

一夏「でも、喜んで貰つて良かったよ」

ワタル「二人はいい夫になるね、絶対！」

夫…
!??

零「や、やめてくれよ、ワタル…」

一夏「あ、ああ！俺の事を好きになる人なんていないって！」

アマリ「…」

メル「…」

箒「…」

楯無「…」

鈴「…」

ラウラ「うぬぬ…」

シャルロット「はあ…」

簪「バカ一夏…」

一夏「え…!!?」

一夏「つて、ホント鈍いよな…」

すると、近くの村の人達が来た。

住民1「何だか、いい匂いがする…」

住民2「これ…何かのお祭りですか？」

ワタル「うん！ピザ祭だよ！」

ピザだけじゃないけどな。

住民3「ピザ…？」

グランデイス「よかったら、あんた達も食べていきなよ！まだまだピザはたくさんあ

るんだ！」

住民4 「これが…ピザ…？」

住民2 「美味しい！ほっぺたが落ちそう！」

住民5 「こんなの食べるの初めて！」

住民 「こつちのリゾットやチーズフォンデュも美味しい！」

クラマ 「大評判だな。こりや店を出したら流行るんじやねえか？」

ワタル 「そうだね！色々な世界の料理が食べられる食堂を開けば大人気間違いなしだ

よ！」

零 「よしてくれよ、俺は趣味でやってるだけなんだからよ」

スザク 「零はどうして、料理を作る事が趣味になつたんだい？」

零 「弘樹や優香によく作ってくれて言われていたからな…」

ユイ 「零さんはお菓子なども作れるのですか？」

零 「ああ、一応はな」

サラ 「今度はケーキ作つてよ！」

零 「また時間と材料があればな」

万丈 「しかし、これだけのピザを焼くのも大変だけど、生地をこねるのもかなりの重

労働だな」

一夏「それは心配ないみたいです」

零「ありがたいな、セシリー。生地をこねるのを手伝ってくれて。おかげで大評判だ」
アンジュ「すごいね、セシリー！あれだけの小麦粉を全部、生地にしちやうなんて！」
セシリー「気づいたら、止まらなくなつて……」

シーブック「いいストレス解消になつたみたいだな」

セシリー「ええ……」

レナ「どういう事？」

セシリー「私、パン屋の娘だったの。だから、パン生地をこねていると無心になれる
みたい」

ジャンヌ「そうか！シーブックがピザ作戦に参加したのはこのためだったのね！」

セシリー「ありがとう、シーブック……」

シーブック「お礼は、このピザで十分だよ」

全く……色々な意味でご馳走様つと。

カレン「どう、C・C.? ストレスは解消出来た？」

C・C.「後はコーラが欲しいな」

カレン「あんたねえ！」

C・C.「冗談だよ。大満足の出来だ」

零「… ほらよ、コーラ」

C・C「零、お前…」

零「ピザにはコーラかと思つてな」

C・C「気がきくところもモテる秘訣か」

零「やめろ、それ」

「… ったくよ、調子に乗るとこれだ…」

アマリ「零君…」

零「ん、どうした？」

アマリ「美味しいものを作ってくれてありがとう」

零「… ふっ、どういたしまして」

まあ、たまにはこういうのも悪くねえな…」

ボーナシナリオ6

プリティ・サリアンの冒険

ホープス「……皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これはアスナ様が仲間になった頃の話です。人間は生きて行く上で趣味や娯楽というものが必要になります。ですが、それが他人に知られたくないものの場合、なかなか苦勞が絶えないようです……」

それでは始まります。

ローパラメイル第一中隊のサリア……。品行方正な彼女には人知れぬ趣味があった。そして、それが抑圧された想いがついに爆発する日がやってきた……。

「アマリ・アクアマリンです。」

「N—ノーチラス号の通路九郎さんとアルさんというところだと、ホープスが慌てて飛んできました。」

ホープス「はあ…はあ…」

アマリ「どうしたの、ホープス？ そんなに慌てて」

ホープス「わ、私は…私は…」

九郎「何があつた、ホープス!?」

ホープス「い、言えません…」

アル「明日の偵察当番の件でサリアの部屋へ行つたのであろう？ そこで何があつたのか？」

ホープス「マスター、九郎様、アル様…私を…助けてください…」

すると、鬼の形相をしたサリアさんが走ってきました。

サリア「ホープス！」

ホープス「わ、私は何も見ていません！何も言っていないません！」

サリア「嘘おつしやい！あなた、アマリ達にあの事をバラそうとしたじゃない！」

アマリ「お、落ち着いてください、サリアさん。あなたらしくないですよ、そんな興奮して…」

九郎「一体何があつたんだよ!?!」

サリア「アマリ、九郎……」

アマリ「な、何です……?」

九郎「ど、どうした……?」

サリア「毒を食らわば、皿まで……。こうなったら、あなた達にも協力してもらおうわ」

アマリ「協力……? 私が……?」

アル「いったい、妾達に何をさせる気だ?」

サリア「……それは……」

サリアさんはアルさんの耳元である事を呟くと明らかにアルさんの目が輝きました。

アル「……面白い、やろう!」

九郎「おい待て、アル!何を吹き込まれた!」

アル「九郎……またあれをせぬか?」

九郎「あ、あれつてお前……まさか……!」

アル「そうだ」

九郎「い、嫌だ!あれだけは嫌だ!」

アル「フフ、良いではないかあ!」

九郎「こ、ここは逃げるが勝ちだ!」

九郎さんが逃げようとしたが……。

サリア「逃さないわよ！」

アル「往生際が悪いぞ、九郎！」

九郎「じ、自由を！ さもなくば死を！ ギャアアアアアアアアアアツ！」

サリアさんとアルさんに捕まった九郎さんは悲鳴をあげました……。

一体、何にが嫌なのでしょう……？

アル「それでは……始めるとするか」

九郎「いやああああっ！ ダメエエエエツ！」

アマリ「九郎さん!!？」

九郎さんがアルさんに引き摺られていきました……。

サリア「あなたも嫌とは言わせないわよ、術士様！」

アマリ「い、いやああああっ!!？」

た、助けて……零君……！

ポーナスシナリオ6 プリテイ・サリアンの冒険

「新垣 零だ。」

俺はゼフィールズで他の人と偵察に出た。

今回の偵察部隊のメンバーは俺、アマリ、アスナ、一夏、アキト、シヨウ、チャム、ルーシユと……後、三人だと聞いているが……。

てか、何だ、この統一感のないメンバー……？

シヨウ「アマリ……。このメンバーで偵察に出た意味は？」

アスナ「メンバーが大分変わっているけど……」

ルーシユ「ああ……。本来の当番とは違う面子である以上、理由を聞かせてもらおうぞ」

アマリ「……」

チャム「どうしたの、アマリ？」

零「具合でも悪いのか？それなら、無理しなくてもいいぞ？」

アマリ「ごめんなさい……。あなた達を巻き込む事になってしまつて……」

巻き込む……？

一夏「何を言っているんですか？」

アマリ「お願いです……。私と約束してください。これから何が起きても心を乱さな

いと」

零「な、何だよ急に……？」

アキト「いったい何なんだい……？」

一夏「そう言えば、偵察隊つて、あと三人いるんだよな？」

ホープス「その方々なら、もうすぐ来ます」

アマリ「みなさん、覚悟を決めてください」

覚悟つて何のだ……？

現れたのはサリアのアーキバスとデモンベインだった。

シヨウ「アーキバス……」

アスナ「それにデモンベインね……」

ルルーシュ「偵察隊の最後のメンバーはサリアと九郎、それにアルか」

？「……の光を………パワーで……」

？2「……真の………を……！」

零「……ん？」

チャム「え？」

サリア「サリア様……！ここまで来たら、覚悟を決めてください！今こそ、欲望を解

放して、あなたの新たな世界を!!？」

アル「九郎！お前も男ならば覚悟を決め、全てを曝け出せ！」

サリア「！」

九郎「…」

サリア「愛の光を集めてギュツ！恋のパワーでハートをキュン！美少女聖騎士、プリティ・サリアン！あなたの隣に突撃よ！」

九郎「… 見せて差し上げるわ！美しき刃の真なる力を…！それがアタシ、大十字九郎子よ！」

…ん？は…？…うえええい！！？

ルルーシユ「！！？」

シヨウ「！！？」

一夏「！！？」

アキト「！！？」

零「！！？」

アスナ「！！？」

ど、どういう意味だこれ！！？

アマリ「ま、待ってましたよ、プリティ・サリアン！」

サリア「ありがとう、魔法使いさん」

アマリ「あなたの旅の仲間…： 九郎子と聖戦士と聖女と白馬の王子、仮面の王子と黒きヒーロー、勇者も一緒です」

サリア「では、行きましょう！冒険の旅へ！」

ちよつと待てええええい！！？

零「(アマリ！どういう事だよ、これ！！?)」

アマリ「(約束よ、零君…： 動揺しないで…：)」

零「(無理があるだろうが！どういう事か、説明しろ！)」

アマリ「(…： サリアさんは…： ストレス解消のためにああいうコスプレをする趣味があるらしいんです…：)」

一夏「(ス、ストレス解消…： ！！?)」

アスナ「(コスプレ…： ！！?)」

ホープス「(それを偶然から知ってしまった私とマスターは彼女に協力を頼まれたのです。一度だけでいいから、コスプレで出撃し、プリティ・サリアンの世界を現実で楽しみたいと)」

アキト「(九郎のあの女装はいつたい…： ！！?)」

アマリ「(九郎さんとアルさんも知ってしまったのですが…：。よりプリティ・サリアンの世界を広げたいとアルさんに頼み込んで九郎さんを無理矢理女装させたんで

す….)」

く、九郎さんが可哀想過ぎる…！

一夏「(と、所で魔法使いはアマリさん、聖戦士はショウさん、仮面の王子はルルーシユさん…と思うんですけど…。他のは…?)」

ホープス「サリア様曰く、アスナ様は愛の聖女様…一夏様は愛の白馬の王子様、アキト様は愛のヒーロー様…。そして、零は愛の勇者様…。みたいです)」

アスナ「(わ、私が聖女?!?)」

一夏「(何で、俺が白馬の王子何だよ…?!?)」

アキト「(ヒ、ヒーローと言われるのは嬉しいけど、流星に愛は…)」

零「(つてか、俺、勇者要素なんてないけど?!?)」

ルルーシユ「(…俺達も彼女の趣味の世界を彩る小物か…)」

サリア「(ごめんなさい…。ごめんなさい…。サリアさんの迫力に圧倒されて断ることが出来なかつたんです…)」

ショウ「(いや、だからってこれはないだろ、これは!)」

アスナ「(九郎さんなんて無理矢理、乗せられて泣いてるのが目に見えるわよ!)」

九郎「(うう…)」

アキト「(…待ってみんな…。サリアを見るんだ)」

一夏「サリアを…？」

サリア「清く正しく美しく…。プリティ・サリアンは今日も戦う…」

零「(しよ、正気をシャットアウトして完全に自分の世界に入つてやがる…)」

チャム「サリア…いい笑顔…」

シヨウ「あんな風な顔もするんだな…」

ルルーシユ「問題児揃いのパラメイル第一中隊を率いるのは並々ならぬストレスがある…。そして、彼女の性格から考えれば、この秘密の趣味を他人に知られるのは、恥辱とも言えるものだろう」

ホープス「聞いた話では、アンジュ様には一度、見られた事があるそうです」

一夏「その時は、どうなったんだ？」

… なんか、読めた…。

ホープス「他人に興味のないアンジュ様ですからね。口外はしなかったそうです」

アマリ「(そして今… ストレスに押しつぶされそうになったサリアさんの心は恥ずかしさよりも解放を選んだんです…。私達に出来る事はその彼女の心を守る事だけです)」

九郎「(もしかして、アルはその事に気付いて、俺に女装を?)」

アル「(ん、うーん…。まあ、半分はな…)」

九郎「(結局お前は面白さ半分狙いか、コンチクショウ!!?)」

ショウ「(わ、わかったよ。。。このお芝居に付き合っただけでやればいいんだろ?)」

ルルーシュ「(ただ付き合うだけではダメだ!全力でやるぞ!)」

アスナ「(こうなったらやるしかないわね!)」

一夏「(お、俺もやる!)」

アキト「(演じるのは得意だよ。。。!)」

え、ええー?!?みんなマジで言ってるのか?!?。。。帰ってえー。。。

サリア「何をしているのですか?出発しますよ、皆さん」

ゼロ(ルルーシュ)「わかった。。。行こう、プリティ・サリアン。我が名はゼロ。。。

亡国の王子にして、君の旅の仲間だ」

ルルーシュの奴、マジでゼロの仮面まで被りやがった。。。

アスナ「神は仰っています。。。私は聖女。。。プリティ・サリアン。あなたと共に参

ります」

アキト「俺は黒き愛のヒーロー。。。プリティ・サリアン。。。ヒーローとして、君に

同行するよ」

一夏「え、えっと。。。プリティ・サリアン!俺は白馬の王子だ!何があっても君を守つ

てみせる!」

九郎「ぐぬぬぬ…！りよ、了解ですわ！プリティ・サリアン！」
サリア「頼りにさせてもらうわ、ゼロ、聖女様、ヒーロー、白馬の王子様…。聖戦士様も準備はよくて？」

シヨウ「いつでもいいぞ、サリア…ン」

…みんな、マジだ…。

サリア「では、魔法使いさん、勇者様！行きましょう！」

アマリ「は、はい…。オドの導きのままに…」

零「う…うぐぐぐ…！」

サリア「どうしたんです？もつと元気よく行きましょう！」

アマリ「行きましょう、皆さん！私達の戦いは、ここから始まるのです！」

アマリまで…。!??

サリア「ほら、勇者様も！」

アマリ「(零君、お願い…！)」

…し、仕方ねえ…！

零「ええ、わかりました！俺は愛の勇者…。勇者としてプリティ・サリアン！君の仲間として戦います！」

シヨウ「(やけくそだな、アマリも零も…)」

ゼロ（ルルーシュ）「やめろ、シヨウ……。今ここでサリアの心のバランスを崩すと精神が崩壊する可能性もある」

一夏「何だって……!?」

アキト「だから、サリアのストレスが解消されるまで俺達は全力で彼女の世界を守ろう」

アスナ「（それしかないのか……）」

俺はもう嫌だよ……。

ホープス「気をつけてください、皆様。何かが来ます」

現れたのはルーン・ゴレムじゃねえか！

アマリ「ルーン・ゴレム！」

ホープス「術士はいません。我々の進路上に用意されたトラップでしょう」

アキト「下手をすれば、魔従教団が来る可能性もあるな……」

おいおい、アーキバスが前に出たぞ……！

シヨウ「前に出過ぎだ、サリア！」

サリア「来たわね、悪の魔法使いの手先！プリティ・サリアンが相手になるわよ！」

一夏「こんな時に何を言ってる……」

ゼロ（ルルーシュ）「行こう、プリティ・サリアン！」

アマリ「正義のパワーを一つにして悪の手先をやっつけましょう！」

ゼロ（ルルーシユ）「話を合わせろ、みんな！こうなったら、このまま戦うぞ！」

シヨウ「やれるのかよ!?」

零「その心配はなさそうぞ」

サリア「ミラクルパワー・チャージアップ！美少女聖騎士プリティ・サリアン、ここに見参！この世に愛がある限り、プリティ・サリアンは美しく戦う！」

チャム「ステキ、サリアン！」

ホープス「かわいそうですが、ゴーレム達はサリア様への生け贄になってももらいましよう」

サリア「さあ、行くわよ！悪の手先！シャイニング・ラブエナジーで……！私を大好きになくれっ!!？」

アル「妾達も行くぞ、九郎子！」

九郎「ええ、アタシ達の力を見せてやりましょう、アル！」

アル「(案外ノリノリではないか……)」

さあ、戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「… 他人の趣味に口出しはしないけどよ…。衣装が変わるだけで性格が変わるなんて、サリアって、変わってるな…。」

〈戦闘会話 アスナVS初戦闘〉

アスナ「魔法少女か…。確かに女の子は憧れるわね！よし、こうなったら私もことんやるわよ！聖女として！」

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

九郎「ぶつとぼしてやるぜ！」

アル「違うだろ、九郎！」

九郎「ぶ、ぶっ飛ばして差し上げますわ！」

アル「そうだ、それでいい！」

九郎「（か、勘弁してくれ…）」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「… あ、サリアに俺が白馬の王子として選んだ理由を聞いてない…。まあ、そ

れは後でいいか！取り敢えず、今はゴーレム達を倒す！」

〈戦闘会話　アキトVS初戦闘〉

アキト「あの様になるまでサリアはストレスが溜まっていたんだな……。これからは彼女にもら気を遣おう……」

着実とルーン・ゴーレムを倒していく俺達……。

サリア「さあ来なさい！愛がある限り、プリティ・サリアンは一歩も退かないわよ！」

チャム「(サリア…… やっぱり怖い……)」

シヨウ「(さすがにこのままだとちよつとまずいだろ……)」

ルルーシュ「気をつけろ！また来るぞ！」

ルーン・ゴーレムの増援か……！

アスナ「別地域に配備されたゴーレムが集まって来たようね！」

サリア「プリティ・サリアンにお任せを！」

さ、サリアの奴…… 前に出過ぎだつての！

一夏「無茶だ、サリア！」

サリア「プリティ・サリアンに不可能はないわ！」

零「…あれって、欲望が解放されて、暴走状態になってないか!?」

アキト「戻るんだ、サリア！」

サリア「私はプリティ・サリアンよ!!？」

一夏「何が来るぞ！」

来たのは…第一中隊のみんなか!…いや、待て!

最悪じゃねえか…!

サリア「ア、アンジュ！」

ロザリー「敵を発見したって聞いたから…」

クリス「急いで救援に来たけど…」

ヒルダ「サリア…。何なんだよ、その格好は…」

やめろ、お前等!

サリア「あ、あの…。こ、これは…」

アンジュ「サリア…。また例の趣味？」

ヒルダ「また？」

やめてくれよお…!

クリス「てか、九郎が女装してる…」

ロザリー「何だよ、その格好！」

九郎「もう俺の事なんてどうでもいいんだよ！それよりも…！」

サリア「あああああああああああああつ!!?殺してやるうううううつ!!?»

マジで暴走しやがった！

シヨウ「このオーラ力…！ハイパー化するのか!!?»

ルルーシュ「まずい！恥ずかしさでサリアの精神が崩壊する！」

アスナ「零！どうにかできないの!!?»

零「無理言うな！これ以上はどうにもならねえよ！」

ホープス「マスター!!?»

アマリ「VESTIS！」

アマリのドグマでサリアの服装が元のライダースーツに戻った!!?»

サリア「！」

ロザリー「サリアの服が変わった！」

クリス「アマリの魔法なの…?»

アマリ「ご、ごめんなさい、サリアさん！悪ふざけが過ぎました！」

ホープス「そうですね、マスター。サリア様の服を魔法少女に変えるなんて、失礼に

も程があります」

… アマリの奴…。

ヒルダ「何だよ、さっきの妙な格好はアマリの仕業か…！」

アマリ「そ、そう！そうなんです！私、ああいう服が好きなんです！」

ロザリー「だったら、自分で着りやいいのに…。」

クリス「サリアよりもアマリの方が似合うと思うけど…。」

アマリ「そ、そうですね！今度から、そうします！」

一夏「（ナイスです、アマリさん！）」

アキト「（強引だけど、何とか誤魔化せたか！）」

ヒルダ「じゃあ、九郎のは？」

アマリ「…さ、さあ…？」

九郎「嘘だろ、アマリ!?!？」

アル「これはこ奴の趣味だ」

クリス「何それ、キモ…。」

九郎「もういいよ、それで!!？」

ヤケクソになってしまった九郎さん…。

サリア「…もういいわ、アマリ。今はそれより目の前の敵よ」

アマリ「は、はい！そうですね！」

サリア「アンジュ達も手伝ってもらわよ」

アンジュ「言われなくてもわかってるよ。そのつもりで来たからね」

サリア「各機は私の指示に従い、敵機の迎撃を！」

アンジュ「了解、プリティ・サリアン」

サリア「う……」

零「よ、余計な事言うな！」

取り敢えず、戦闘再開だ！

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

九郎「……」

アル「す、すまん、九郎……。流石に悪ノリが過ぎた……」

九郎「いいんだよ、アル……。これで第一中隊のみんなには俺が女装好き男というレッテルが貼られるんだ……。アハハハッ！もう、アタシ、お嫁にいけない……！」

全てのルーン・ゴーレムを倒した俺達……。

ロザリー「よっしゃ！片付いた！」

クリス「結構、手間取ると思ったけど意外に楽勝だったね」

アンジュ「指揮官がよかつたからじゃない？」

サリア「アンジュ……」

アンジュ「いい戦いぶりだったわよ、サリア」

ヒルダ「おかしな格好にされた腹いせか？」

サリア「そ、そんな所よ」

一夏「お疲れ、サリア」

アスナ「じゃあ、一件落着という事で帰還しましょう」

サリア「……アマリ」

アマリ「な、何です？」

サリア「後で私の部屋に来て」

アマリ「わ、わか、わか……わかりました……」

サリア「零と九郎、アルも来なさい」

九郎「ははは、何でつていいよお！」

アル「……九郎が壊れてしまった……」

零「な、何で俺まで…!?？」

サリア「いいから」

零「わ、わかりました…」

何だよ…。なんか、俺のストレスが溜まりそうだよ…。

ロザリー「こりや説教2時間コースかな…?」

クリス「あんな事をやったんだから、それでも足りないよ。九郎はキモいし」

一夏「く、クリス！」

ホープス「心より同情させていただきました」

アマリ「あ、あなたも付いてきてよ、ホープス！」

…もう嫌だよ…。

Nーノーチラス号に戻った俺はアマリ、九郎さん、アルと共にサリアの部屋に来た。

サリア「アマリ…」

アマリ「ど、どうです、サリアさん？ストレス解消できました？ヒルダさん達の事なら大丈夫です！私の方で、ちゃんと誤魔化しておきますから！」

サリア「ありがとう…」

アマリ「え…。」

サリア「あなたとホープスには感謝している。私の趣味をバカにするどころか、手を貸してくれるなんて…。」

アマリ「(だ、だって、逆らったら、身の危険を感じたからで…。)」

ホープス「(やめましょう、マスター…。生命が惜しければ…。)」

サリア「それでね、アマリ…。あなたにもうちよつとだけ頼みがあるの」

アマリ「な、何です？」

サリア「あの衣装を変える魔法…。もつと私にかけて欲しいの」

アマリ「え!??!」

サリア「お裁縫が得意じゃない私は既製品の衣装を持つしかなかった…。でも、あの魔法があれば、あらゆるプリティ・サリアンを楽しむ事が出来る! スーパー・プリティ・サリアンも、エターナル・プリティ・プリティも、プリンセス・プリティ・サリアンも!」

… 頭が痛くなって来た…。

サリア「それだけじゃない…! あなたも私と一緒に楽しみましょう!」

アマリ「ええ!??!」

サリア「プリティ・サリアンとマジカル・アマリン! 最強のコンビの誕生よ!」

： マジカル・アマリンか……。見てみたいかも……。

アマリ「(どうなってるのよ、ホープス?!? ストレスを解消させれば、いうものサリアさんに戻るって言うってたのに……。これじゃ状況が悪化してるじゃない!)」

ホープス「(彼女の抱える闇は我々の想像以上だったという事でしょう)」

アマリ「(そんな無責任な……。!)」

ホープス「(では、責任を持ってプリティ・サリアンとマジカル・アマリンのプロデュースをさせていただきます。これは忙しくなりそうです)」

アマリ「(そうじゃなくて!)」

サリア「さあ、アマリ! 変身して、この世界を救いましょう! 私達のシャイニング・ラブレナジーで今こそ奇跡を!」

アマリ「(私……。どうなっちゃうの……。)……。れ、零君!」

零「俺に助けを求めるのかよ?!?」

サリア「アマリの魔法少女姿を見れるのよ?」

零「……。ごめん、少し見てみたいかも」

アマリ「ふえ?!? そ、そう……。? それなら、私……。頑張ってみるわ!」

ホープス「(チョロいですね……。)」

零「所で俺と九郎さん達を呼んだ理由は?」

サリア「アマリの魔法があれば、あなたにも着せ替えができるわ」

…はい？

零「は、え…ちよっ！」

サリア「男の着せ替えとかにも興味があるのよね！」

零「いや…待ってって！俺はお前の着せ替え人形じゃねえ！」

サリア「良いじゃない、減るものじゃないし」

零「そういう問題じゃねえよ！」

…くっ、こうなったら、逃げる…！

逃げようとした俺の両腕を九郎さんとアルが掴んだ。

九郎「フッフフ…どこ行くんだよ、零？」

アル「九郎が味わった苦しみを味わえ」

零「ちよっ！…は、離せ、俺は嫌だ！」

アマリ「私も…零君の色々の姿を見てみたい！」

零「マジで待ってくれ、アマリ！」

ホープス「その時は全力でプロデュースをしよう」

零「お前も悪ノリすんな、腹黒オウム！」

サリア「そうね…ヒーロー好きの小型ロボット使いや戦場を飛び回りながら重火器

を連射する神の存在を信じない子や目の色が緑から赤に変わると気弱な性格から強気な性格に変わる騎士とか似合いそうね」

何だよ、その三つ……!!?

サリア「さあ、零……。今夜は寝させないわよ」

零「い……い……嫌だアアアアアアアアアアアッ!!?」

クロスオーバーシナリオ 運命の理を変えるドラゴンライダー

——これは俺達、エクスクロスが体験した運命の理を変える男との出会いの物語……

クロスオーバーシナリオ 運命の理を変えるドラゴンライダー

——俺の名は一条 一誠……。仮面ライダードライブの変身者だ。

俺は美遊とドライブ、レッド、イストワールと共に完全聖遺物『ギヤラルホルン』の力でこの世界に来た。

美遊「ふうー、着いたね、お兄ちゃん」

ドライブ「辺りを見渡す限り、此処はファンタジーの様な世界ですね」

イストワール「今、軽い情報収集が終わりました。この世界はアル・ワースという名前らしいです」

一誠「お、今回の情報収集は早いな、イストワール」

イストワール「今は褒め言葉と受け取っておきます、一誠さん。ですが、これ以上の情報を得る事は出来なかつたです」

レッド『調査に来たのはいいが、どうやって情報を得る？』

一誠「何処か、この世界についての情報を得られる場所を探さないとな…」

ドライグ「皆さん、あそこを見てください！」

ドライグの言葉に俺達はドライグの指差す方を見ると複数の戦艦が停泊していた。

美遊「ファンタジーな世界に戦艦…ギャップが凄いな…」

レッド『あそこならば何かわかるかもしれない』

一誠「よし、流石に真正面から入らないだろうから、忍び込むぞ」

ドライグ「だと、思いました…」

一誠「忍び込むのは俺と美遊で行く。ドライグとレッド、イストワールは此処で待機しててくれ」

レッド『了解した』

イストワール「お気をつけください」

俺と美遊はドライブグとレッドをその場に待機させて、複数の戦艦の元まで来た。

美遊「それで？何処に入るの？」

一誠「あの中心にある赤い戦艦に行こうと思ってる」

美遊「よしっ、じゃあ、忍びこもつか！」

一誠「ああ。美遊、入ったら別々に行動して、調査するぞ」

美遊「うん！」

俺と美遊は赤い戦艦の中へと忍びこんだ……。

↓新垣 零だ。

俺はメガファウナのパイロット待機室でアマリとメル、アスナとトランプをしてい
た。

メル「うーん……」

アスナ「ムムム……！」

アマリ「えつと……」

零「……」

アスナ「よし、ツーペアで勝負よ！」

メル「…フルハウスです！」

アマリ「ストレートフラッシュです！」

アスナ「嘘!?？」

アマリ「私、こういうのは得意なんですよ！」

零「悪いな、アマリ…。ロイヤルストレートフラッシュだ！」

メル「ロイヤルストレートフラッシュ!?？」

アマリ「ま、負けた…。」

零「それより、アスナ。お前、よくツーペアで勝負を仕掛けたな」

メル「そして、10回目の敗北ですね」

アスナ「うわぁーん!どうせ、私は弱いわよ!」

アマリ「だ、大丈夫ですよ、アスナさん!次こそは絶対に勝てます!」

アスナ「…勝てる気がしない…。」

零「完全に弱気になってんじゃないかねえか…。」

アスナ「だいたい、零とアマリは何でそんなに強いのか!?？」

メル「確かに、二人は全然負けませんね」

零「運も味方につけるもんだぜ」

アマリ「今日はずいているみたいですよ」

アスナ「くっく！もう一回！」

零「負けを重ねるのがオチだぜ！」

もう一度、ポーカーを始めようとしたその時だった……。

メガファウナ内に警報が鳴り響いた。

メル「敵襲ですか!!？」

デュオ「零、いるか!!？」

零「デュオ、何があつたんだ？」

デュオ「何でもメガファウナに2名の侵入者が入つたみたいだ」

アスナ「二人も……!!？」

ジユード「艦長達がすぐさま捕まえて欲しいって言つていたんだ！」

タスク「俺達も行くこう！」

アマリ「では、もう一人の方は私達で対処します！」

アスナ「ちょうどムシャクシャしていたところだったの、気を晴らすわよ！」

メル「零さん達も気をつけてください！」

甲児「そつちもな！」

アマリ「零君……」

零「気をつけろよ、アマリ」

アマリ「零君もね！」

俺、甲児、ジユドー、デュオ、タスクはアマリ、アスナ、メルと別れ、侵入者の元へ向かう。

ーアマリ・アクアマリンです。

零君達と別れた私達は二人目の侵入者の元へ駆けつけました。

そこにいたのはメルさんと同い年に見える女の子がいました。

メル「そこまでです！」

アスナ「見つけたわよ、侵入者さん？」

美遊「あれ？見つかっちゃった…」

アマリ「忍び込んで何が目的ですか!?!」

美遊「うーん、凄く大ごとになってる…。お兄ちゃん、大丈夫かな…?」

メル「もう一人の事を言っているのですか…?」

アスナ「他の人の心配をしている場合？」

アマリ「すみませんが、あなたを拘束して欲しいと言われたので、大人しくしてもら

えますか？」

美遊「嫌だ…… って、言ったらどうしますか？」

アスナ「やりたくないけど、力尽くで……！」

メル「拘束させていただきます！」

アスナさんとメルさんが女の子を捕まえようと動き出しましたが……。

美遊「あまり、騒ぎたくないのですが…… 仕方ありません」

女の子は赤いボトルの様なものを取り出し、振ると凄まじい速さで動き、アスナさんとメルさんの背後に回り込みました。

メル「え……!?？」

アスナ「いつの間に……!?？」

美遊「これが私の発明品の力です！はあっ！」

メル「きやあっ！」

アスナ「っ……！」

アマリ「アスナさん！メルさん！」

あの二人をいとも簡単に蹴り飛ばした……!?？」

この人、異星人なの……!?？」

アマリ「抵抗するならば、ドグマを使わせていただきます！光の矢よ、舞いなさい！」

I M P E T U S !」

私は光の矢のドグマを放ちましたが……。

美遊「っ……!?!?」

女の子はそれを難なく避けました……。

美遊「魔法?!?へえー、興味深いですね!」

アマリ「観念してください!」

美遊「するわけにはいかないんですよ!」

女の子はダイヤモンドが描かれたボトルを振りながら、私に言いました。

それを見て、私はもう一度、光の矢のドグマを発動させましたが……。

女の子の前にダイヤモンドのオーラが現れ、光の矢を私に向けて跳ね返しました。

アマリ「かはっ……!?!?」

光の矢を受けて、私は吹き飛び、壁に激突しました……。

アスナ「アマリ!」

か、勝てない……。ごめん……。ね、零君……。約束、守れないかも……。

―新垣 零だ。

一人目の侵入者は男だった。

それも俺と同じ年の様だ。

一誠「……見つかったか」

零「観念しろ、コソ泥」

一誠「コソ泥って……俺は何も取ってないぜ？」

デュオ「侵入しといて何言ってるんだよ」

一誠「これには深い訳があるんだよ。あんた達に話を聞きたい」

甲児「話があるんなら何で、直接来ない!?？」

ジユドー「こいつ、まさかミスルギかドアクダー軍団……オニキスの奴か!?？」

一誠「ミスルギ? ドアクダー軍団? オニキス? 何だそれ?」

甲児「しらばっくしても無駄だぜ!」

タスク「悪いが君を捕らえる様に言われているんだ。従ってくれないか?」

一誠「歓迎されていないって訳か……。捕らえられると聞いて大人しく従うと思うか

?

甲児「それなら仕方ねえな……」

ジユドー「行くぞ!」

甲児とジユドーは男に殴りかかったが、男はそれを受け止め、カウンター攻撃で二人

を吹き飛ばした。

タスク「なっ…!?」

デュオ「おいおい、あの二人を簡単に吹き飛ばすなんて… あいつ、なかなかやるな…！」

一誠「力尽くで来るってんなら相手になるぞ」

タスク「ますます君を野放しには出来なくなつた！」

デュオ「大人しくしてもらうぜ！」

タスクとデュオも挑んだが、この男…。この二人をも意図の簡単に相手をして、気絶させた。

零「みんな！」

一誠「後はお前だけだな。他を呼ばれても面倒だ…。悪いが黙らせてもらうぜ」

零「余裕ぶっこくのも此処までだ！」

俺は男に殴りかかるが、払いのけられ、蹴りを入れられそうになるが、それを受け止め、バックステップで距離を取る。

一誠「なかなかやるじゃないか…。だがな！」

零「っ!?…ぐっはあつ!?」

こ、こいつ…いつの間にか俺の懐に…!??

懐に入られ、強烈な右ストレートを入れられ、俺は軽く吹き飛んだ。

一誠「一手及ばなかったな」

零「ぐっ……！」

すると、そこへアマリとメル、アスナが吹き飛んできた。

零「アマリ、メル、アスナ！」

アマリ「れ、零君……！」

嘘、だろ……。!?メルとアスナは気を失って、アマリもボロボロじゃねえか……。

まさか、もう一人の侵入者に負けたのか……？

美遊「あれ、お兄ちゃん発見！」

一誠「つたく……。あれだけ、穩便に済ませろって言っただろ？」

美遊「お兄ちゃんだって揉めてるじゃない」

この女の子がアマリ達を……。!?それにこいつら、兄妹なのか……。!??

だが、この女はアマリ達を傷つけた……。負ける訳にはいかねえ……。!

零「ぐっ……！」

一誠「無理すんな、きつめの一撃だったんだ。身体に触るぜ」

零「お前等は俺の大切な人達を傷つけた……。こんな所で寝てられる程、俺は甘ちゃんじゃねえ！」

一誠「… お前…」

零「アマリ達から離れるオオオオオツ!!?」

一誠「っ!」

俺はエボリユーションモードを発動させて、凄まじい速さで男を殴り飛ばし、女を蹴り飛ばした。

美遊「かはっ…!!?」

一誠「美遊!ぐっ… てめえ!」

零「ぐはっ!」

俺は男に殴り飛ばされ、地面に叩きつけられた。

そして、ついに立ち上がれなくなった。

一誠「美遊、大丈夫か?」

美遊「う、うん…」

一誠「(俺や美遊に攻撃を当てるとはな…。それに瞳の色が変わった…。こいつから何か話を聞けそうだが…)」

すると、そこに鉄也さん、竜馬さん、ヒイロ、ノブナガ、スザクが来た。

スザク「みんな!」

鉄也「どうやら、強敵の様だな…!」

ノブナガ「無事か、零、アマリ？」

零「な、何とかな……」

アマリ「そ、それよりもアスナさん達が……」

竜馬「散々好き勝手やってくれたみたいだな、てめえ等！」

ヒイロ「ターゲット、侵入者……排除開始」

ノブナガ「零達の仇も取らせてもらう」

美遊「まだいるの……？」

一誠「下がってろ、美遊。俺が相手をする」

竜馬「へっ、大した自身じゃねえか……」

ノブナガ「参る！」

五対一という戦いが始まったのだが、俺は今の光景に目を見開いた。

零「そ、そんな……！」

エクスクロスの中でも実力のある五人と互角にやりあっているなんて……あの男、何

者だ……？

スザク「なかなか隙を見せない……彼は強い……！」

鉄也「だが、ゲームセットの様だ」

鉄也さんがそういうと残りのみんなが来た。

海道「俺達も混ぜてもらおうぜ！」

ヴァン「たく……！人が気持ち良く寝ている時に騒ぎやがって……！」

アムロ「卑怯ではあるが、場合によっては俺達、全員を相手にする事になるぞ」

シモン「それでもいいならかかって来やがれ！」

一誠「（……この部隊、どれだけ人がいやがるんだよ……。さすがにこれは分が悪いか……？ん……？）」

一夏「遅くなってすみません！」

舞人「俺達も手を貸します！」

マーベラス「人の寝床に土足で入って来やがって……」

レイ「悪いが、相手をしてもらう！」

ゼロ「行くぜ！」

美遊「え、ええっ!?？」

一誠「（一夏にゴーカイジャーのマーベラスにレイオニクスのレイと舞人さんまで……それにあの男は……ウルトラマンゼロか……？どうやら、この部隊は……）……降参だ」

真上「何……？」

美遊「え、お兄ちゃん!?？」

一誠「いいから話を合わせろ、美遊。俺にこれ以上の戦闘意識はない。あんた達と話

をしたい」

九郎「散々、俺達の仲間をぶっ倒しておきながら、何言ってる!?？」

零「待つてください、九郎さん……こいつは悪い奴ではないです」

一誠「お前……」

ベルリ「どうしてそんな事がわかるんですか？」

零「何となくだけど……俺達を本気で潰せるなら、そうしているはずだ」

一誠「……」

零「だけど、お前についての話も聞かせてもらおうぞ」

一誠「いいぜ、こつちもその気だからな」

すると、俺達の元に女性と小さな女の子、バイクが現れた。

いや、バイク……!??

ドライブ「心配して、来てみれば……」

レッド『やはり、揉め事になっていたか』

美遊「ううん、お兄ちゃんが収めてくれたよ」

イストワール「流石は一誠さんですね」

零「お前達の仲間か？」

一誠「ん、ああ。てか、レッドには驚かないんだな」

零「こつちにも色々な種族の仲間がいるからな」

そして、気を失っていた者が起きた後、俺達は彼等の話を聞く。

一誠「まずは自己紹介だな、俺は一条 一誠、よろしくな！」

美遊「お兄ちゃんの妹の一条 美遊です！」

ドライグ「初めましてウエルシユ・ドラゴンの事、ドライグと言います。よろしくお願いたしますね」

レツド『私はレツド、一誠をサポートするAIだ』

イストワール「イストワールです。よろしくお願いたします」

向こうからの自己紹介が終わり、俺も名前を名乗る。

零「俺は新垣 零……。シャイニング・ゼフィルスのパイロットだ」

一誠「よろしくな、新垣」

そして、俺達は一条達にアル・ワースについてを話した。

一誠「大方の事はイストワールが得た情報と一緒だな」

零「ああ、そして、一条。お前達は異界人だ」

レツド『異界人……。？』

零「別の世界からこのアル・ワースに転移して来た者の事をそう呼んでいるんだ。俺達、エクスクロスの大半も異界人だ」

一誠「そのエクスクロスというのは？」

ワタル「僕達のチーム名だよ！元の世界に戻るのとアル・ワースを平和にするのが目的なんだ！」

一誠「あんた達が元の世界に戻るには確か…ドアクダーって奴を倒さないとダメなんだよな？」

アマリ「はい。ですが、私達の敵はドアクダー軍団だけでなく、ミスルギやオニキスなどという組織もあります」

零「一条、お前達はどうかやってアル・ワースに来たんだ？」

一誠「完全聖遺物『ギヤラルホルン』の力でこの世界を調査に来た」

刹那「完全聖遺物？」

ガエリオ「ギヤラルホルン…!?？」

美遊「異世界と私達の世界を繋げる物です」

一夏「ま、待ってくれ！じゃあ、あんた達は自分自身でこの世界に来たのか!?？」

一誠「ああ。そういう事だ、一夏」

千冬「ずつと、考えていたが、お前は舞人、マーベラス、一夏、レイ、ゼロを見て動きを止めた…何故だ？」

一誠「それは俺が彼等を知っているからですよ、千冬さん」

マーベラス「俺達の事を知っているだど？」

鈴「じゃあ、あんたの世界にもIS学園があるの？」

一誠「いや、IS学園は存在しないが一夏達とは友達で舞人さん達とは知り合いだ」
零「並行世界の一夏達って事か……」

それはアーニー達と同じだな……。

一誠「そう言えば、この世界には法と秩序を守る魔徒教団つてのがあるんだよな？」
イストワール「情報の収集に時間がかかりましたが、確かに存在します」

ホープス「情報を収集するものが時間をかけてしまうとは大丈夫ですか？」

イストワール「余計なお世話です、黒焦げ焼き鳥」

マサキ「まあ、俺達は魔徒教団のやり方が気に入らなくてあいつ等からも狙われているけどな」

一誠「そうか……。魔徒教団が崇める智の神エンデ……。もしや、そいつが原因なのか……？」

アスナ「ところで、零。ダメージが大きそうだったけど、身体は大丈夫なの？」

零「いや、何ともないぜ。心配してくれてありがとうがとうな」

アスナ「だつ、誰も心配なんてしていないわよ！」

メル「何かあったら言ってくださいいね」

零 「メルもありがとう」

俺はメルの頭を撫でるとメルは顔を赤くした。

一誠 「なる程、お前も同類か」

零 「何の同類だよ一条？」

一誠 「いや、何でもない。それから俺の事は一誠でいい。俺も零って呼ばせてもらうからよ」

零 「そうか、なら一誠と呼ばせてもらうな」

美遊 「あの… アマリさん」

アマリ 「どうかしましたか、美遊さん？」

美遊 「アマリさんやメルさん、アスナさんのあの感じを見るとあなた達は零さんのことが好きなんですか？」

アマリ 「私、零君とはお付き合いをしているんです」

美遊 「そうなんですか!?! 凄いですね！それよりも零さんもモテるんですね…」

アマリ 「も… という事は一誠さんですか？」

美遊 「いや、零さんよりも酷いかも…」

アマリ 「そ、そうなんですか…」

ルルーシュ 「所で、君達、兄妹の事はわかったが、まだ詳しい話を聞けていないもの

もいるな」

ドライグ「それならば、まずは私の事をお話しします。私の正体は赤龍帝と呼ばれる赤き龍です」

ヴィヴィアン「あんたもドラゴンなの？」

ドライグ「そういうあなたもドラゴンの方です、ヴィヴィアン。そして、私は神器に封印されてしまったのですが、今は人の姿を持てるようになりました」

サラマンディーネ「親近感が湧きますね、ドライグ殿」

ドライグ「私もです、サラマンディーネさん」

レッド『次は私だ。私はこのバイク……マシンドライグダーに搭載されたAIだ。私にはこの姿の他にロボットの形態にもなれる』

カンナム「どこの世界にもAIが存在するのだな……」

シヨウ「一番気になるのが……君だ、イストワール……君は……何者なんだ？」

イストワール「私は……一誠さんをサポートする人工生命体です……。失礼ですが、それ以上は言えません……」

シヨウ「わかった……」

取り敢えず、話は聞けたな……。

一誠「この部隊にはお姫様もいっぱいいるんだな」

アンジュ「まあ、私も元、お姫様だし……」

美遊「あの…… アンジュさん？」

アンジュ「何？」

美遊「もつとまじな嘘は無かったんですか？」

アンジュ「それどう言う意味よ!?!？」

美遊「あ、そうだ！話に聞いたヘルメスの薔薇の設計図というものを見せてもらえませんか？」

アンジュ「無視すんじゃないわよ！」

タスク「お、落ち着いて、アンジュ……」

ハツパ「…… 本来、簡単に見せるものではないのだが…… いいだろう」

そう言い、ハツパさんは美遊を連れて行き、アマリ、メル、アスナもその後をついて行った。

一誠「さてと…… 暇だし、ゲームでもするか」

零「ゲームが好きなのか？」

一誠「まあな。どうせなら、対戦でもするか？」

零「望む所だ！」

俺は一誠とゲーム勝負を始めた……。

サラマンディーネ「ドライグ殿は料理はできるのですか？」

ドライグ「これでも料理が出来るんですよ？ただ、冷たい物は…」

サラマンディーネ「その気持ち…なんとなくわかります！」

サラマンディーネとドライグ…仲がいいな…。

ーアマリ・アクアマリンです。

私達はヘルメスの薔薇の設計図を見たいと言った美遊さんについてきて、メガファウナの格納庫にいました。

ハツパ「これがヘルメスの薔薇の設計図だ」

美遊「へえ…ふむふむ…」

そこから数十分、美遊は物凄く集中して、ヘルメスの薔薇の設計図を読んでいた。すると…。

美遊「…理解できました！凄いですね、これ！過去のモバイルスーツの設計図がたくさん載っています！」

メル「え、も、もうですか!?!」

ハツパ「素晴らしい理解力だな...」

アスナ「あ、あなた... 天才じゃないの!?!」

美遊「そうですか? いや、そうですね!?! 私凄いでしょ? 私最高でしょ? 私天才でしょ?」

アマリ「は、はい...」

ホープス「物凄くテンションが高いですね...」

美遊「それにしても頭を使うとお腹が空きました...」

アマリ「そろそろ、お昼の時間なので食堂へ行きましょう」

アスナ「何なら、零にでも作って貰いましょう」

美遊「え? 零さんは料理が得意なのですか?」

メル「はい。このエクスクロスの中でも一二を争う程ですよ!」

美遊「ヘエ、一二を争う、ですか...」

私達は零君に会うために一度戻りました...。

―新垣 零だ...。

俺は、無力だ……。

零「か、勝てない……」

一誠「腕は悪くないぜ、零。ただ、俺には及ばなかったな」
すると、アマリ達が来た……。

アマリ「……どうしたんですか？」

アスナ「どうして、零はへこんでいるの？」

青葉「じ、実は零さんは一誠さんとゲーム勝負を挑んだんですが……」

ユイ「み、見事に完敗してしまつて……」

ゼロ「しかも、10戦中10敗だ」

メル「そ、それは……」

美遊「お兄ちゃんは今私達の世界では天才ゲーマー……って言われている程の腕ですか
らね……」

アーニー「て、天才ゲーマー……?」

リチャード「無謀な戦いを挑んだな、零」

零「う……!」

美遊「そう言えば、零さんは料理が得意なのですよね?」

ドライグ「え、そうなのですか、零?」

零「あ、ああ……。いや、得意って訳じゃないが……」

一誠「おい、美遊……。何のつもりだ？」

美遊「お兄ちゃんも料理が得意なんですよ！ですから……」

イストワール「お二人で料理対決を……という事ですか？」

美遊「はい！」

零「……。いや、だから……。俺は料理で勝負とかは……」

美遊「怖いんですか？そうですよ？ゲーム勝負で負けたのですから」

そんな挑発乗るかよ……！

アマリ「……。ちよつと待つてください！幾ら何でも言い過ぎではないですか？」

……。いや、何でアマリが挑発に乗るんだよ……？

アマリ「言っておきますけど、零君の料理は天下一品です！彼女である私が保証します！」

嬉しい事言ってくれているんだけど……。頼むから煽らないでくれ……。

美遊「でも、お兄ちゃんの方が料理が得意ですし……」

アマリ「それならば、零君が受けて立ちます！」

零「はあつ……？いや、ちよつと待て！」

アマリ「ねっ？零君！」

零「いや、だから俺の話を…」

アマリ「やるでしょ、零君!?」

零「は、はい！やります！やらせていただきます！」

一誠「れ、零、お前…」

零「頼む、一誠。付き合ってくれ……。こうなったアマリに逆らうと生命が危ない…」

一誠「…わかった」

俺は一誠との料理対決を始めた…。

料理はオムライス……。オムライスはいかに卵をフワフワにできるかが勝負だ。

俺は横目でチラリと一誠を見るが、手際が良すぎる…。

数十分後、俺達は同時にオムライスを完成させて、みんなに食べてもらう事になる。

まずは俺のから…。

シバラク「うむ、やはり零の作るものはうまいな！」

アキト「卵もフワフワだ」

一夏「流石は零だな！」

評価は良かったみたいだ…。さて、次は一誠のだが…。

三日月「何これ、凄い…」

刹那「零のもうまいが…。また違う味がする…」

舞人「すみません、零さん……俺は……」

零「みんな、お世辞なしで評価してくれ」

ヒイロ「お前の負けだ、零」

本当にハツキリと言いやがったヒイロの奴……

零「そうか……」

すると、一誠は俺の作ったオムライスを食べた。

一誠「……美味しいじゃねえか、零」

零「え……」

一誠「お前が勝負を拒んだ理由……理解できるぜ。料理は勝負するものではなく、人を笑顔にするものだ。俺もそう思うからな」

零「一誠……」

一誠「俺には俺の良いところも悪い所もあるようにお前にも良いところと悪い所がある。それでいいだろ？」

零「…… そうだな、ありがとうな、一誠」

俺は一誠に礼を言い、一誠の作ったオムライスを食べた。

…… 本当に美味しいな……

すると、メガファウナ中に警報が鳴り響いた。

レッド『警報だど!!?』

オルガ「まさか：：敵襲かよ！」

カミーユ「こんな時に：：！」

零「一誠、お前達は安全な場所で待っていてくれ！すぐにカタをつける！」

俺達は格納庫へ向かった……。

一誠「：：」

出撃準備を整い、俺達は出撃した……。

ワタル「楽しい時間だったのに、空気が読めないな！」

ジョーイ「愚痴を言っても仕方ないよ、ワタル君！」

竜馬「挑んでくるのなら、ぶっ倒してやるだけだ！」

ホープス「来ます」

現れたのは魔徒教団だった。

アマリ「魔徒教団!!?」

イオリ「見つけたぞ、エクスクロス！」

零「あいも変わらずアマリを付け狙うのか、アイオライト！」

イオリ「その前にお前を始末するのが先だ、新垣！」

零「それ何回目の言葉だよ、いい加減しつけえんだよ！」

イオリ「アマリを連れ戻すのならば、何度でも俺はお前達の前に現れる！」

ホープス「あれはもはや、ストーカーですね」

アンジユ「あいつからアマリを解放させてあげないとね！」

九郎「ストーカーは立派な犯罪だぜ！」

しんのすけ「みつともない大人にだけはなりたくないゾ！」

イオリ「だ、黙れ黙れ！お前達も潰してやるぞ、エクスクロス！」

甲児「やれるもんならやってみやがれ！」

ヴァン「潰されるのはどっちか、試してやる！」

俺達は戦闘を開始した……

美遊「お兄ちゃん……私達はどうするの？」

一誠「……」

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「メガファウナには一誠達がいるんだ！ここは絶対に通さねえぞ！」

戦闘から数分後の事だった。

零「……！オニキスが来るぞ！」

俺の言葉通り、ガルム部隊とアマテラスが現れた。

アスナ「ギルガ！」

ギルガ「魔徒教団に先を越されていたか……；まあ、どっちでもいいけどね」

イオリ「オニキス！何をしに来た!?？」

ギルガ「知れた事！新垣 零を捕まえるためだ！」

イオリ「ダメだ！新垣は俺が倒す！」

ギルガ「君に決められる筋合いはない！」

…… 全く、こいつ等は……！

零「どっちでもいいからとっとと来やがれ！」

アマリ「イオリ君！私達は負けません！」

俺達は戦闘を再開した……。

一誠「（あれが智の神エンデに心酔している魔徒教団と零を狙うオニキスか……）」
ドライブ「一誠、これでは流石のエクスクロスも……」

一誠「……」

敵機を倒していく俺達……。

イオリ「このままではいつもと何も変わらない……！」

ギルガ「仕方ない…… これを使うか！」

アマテラスがバズーカ砲の様なものを取り出し、真上に撃つと光の玉は分裂して雨の様になって、俺達に襲いかかった……。

しかし、機体にはダメージはなかった。

零「何しやがった、カルセドニー！」

ギルガ「今にわかるよ」

零「何……？つ、な、何だ!?？」

ゼ、ゼフィルスの動かなくなり、地面に落下した……!??

零「ゼフィルス……!?どうしたんだ!?？」

何とか再び、ゼフィルスを動かさそうとしたが、全く反応を示さない……。

他のみんなの方を見ると、みんなも動けなくなっていた。

ゼロなんて本来、あまりならないカラータイマーが鳴っている。

ゼロ「力が抜けていく……！」

グレンファイヤー「な、何なんだ……こりや……！」

ミラーナイト「先程の光の玉に何かある様です……！」

アムロ「影響があるのは機体だけではない……！」

バナージ「身体が……重い……！」

アスナ「ギルガ……それは、一体……！」

ギルガ「僕が開発したダウンバズーカだ。これを受けた者は身体が自由が効かなくなるんだ」

こいつ……ブラックホールキャノンだの、やつかいなものばかり作りやがって……！

イオリ「オニキスの技術も侮れないな……！」

ギルガ「アマリ・アクアマリンを連れ出すなら今だよ」

イオリ「……お前」

ギルガ「勘違いするな、僕は新垣 零を捕まえるためにやっただけだ」

イオリ「……そうか」

アマリ「ど、どうにかできないの、ホープス……？」

ホープス「今の状態ではオドの収束も出来ません……万事休すというやつです……！」

一夏「くそっ！動いてくれ、白式！」

リディ「このままでは……零やアマリが連れて行かれるだけでなく……俺達まで全滅

する……！」

零「ぐっ……！動け……動いてくれ、俺の身体！ゼフィルス！」

ギルガ「無駄だよ、新垣 零。ダウンバズーカの呪縛なら逃れられない」

美遊「……もう我慢できない！このままじゃ、零さん達が潰されちゃうよ、お兄ちゃん！」

一誠「……いや、そうでもないぞ」

イストワール「え……」

零「……ぐっ……！うあああつ……！」

俺は無理矢理、立とうとしたが身体に力が入らない……。

ギルガ「無駄だと言っているのに……」

零「まだだ……俺は……こんな所で負ける訳にはいかねえ……こんなもんで……俺達を止められると、思うなああああつ!!?」

俺は身体に力を込めると身体が軽くなった。

零「お前もそうだろう、ゼフィルス！」

俺の言葉に呼応するかの様にゼフィルスも動き出し、ゼフィルスから放たれた光がエクスクロス全員に降り注ぎ、みんなも動ける様になった。

ギルガ「な、何だと……!!?」

プリシラ「動ける様になった！」

箒「零さんとゼフィルスの気迫が……私達の呪縛も消してくれたのか……！」

メル「流石です、零さん……」

零「はあ……はあ……！」

イオリ「だが、体力の消費も激しかったはず……奴を叩けば、エクスクロスは総崩れだ！」

一誠「残念だが、それは無理だ」

……！一誠達がメガファウナから降りていた……！！？

デュオ「あ、あいつら、何やってんだ！！？」

イオリ「無駄だと！！？」

一誠「さっきの作戦がうまくいかなかったのです。すでに勝負は決まった……。お前達では零に勝つ事すら出来ない」

零「一誠……」

一誠「こいつは自らを犠牲にしても誰かを守ろうとする……。仲間の……。沢山の人の笑顔を守る為に……。それを阻む事は出来ない……。いや、俺がさせない！」

ギルガ「偉そうに……。君は一体、何なんだ！！？」

一誠「一条 一誠……。仮面ライダーだ！零達を潰そうとしているんだろ？悪いがそ

の運命のシナリオ、俺が書き換える！」

一誠と美遊は腰にベルトのバックルのものを装着すると、それはベルトになる。

一誠はカードを構え、美遊は二本の赤と青のボトルを振り、ベルトに装填する。

ビルドドライバー《ラビット！ タンク！ ベストマッチ！ Are you ready?》

一誠&美遊「「変身！」」

ドラグニックドライバーレッド《チェンジ！ドラゴンライダー！ドライブウー！》

ビルドドライバー《鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエーイ!!?》

音声聞こえると一誠はドラゴンの様な仮面の戦士、美遊は赤と青の仮面の戦士に変身した。

青葉「え、ええっ!!?」

ケロロ「変身したでありますよ!!?」

しんのすけ「おー！あれは！」

マサキ「あいつら・・・仮面ライダーだったのかよ！」

サヤ「仮面、ライダー・・・？」

マサキ「悪と戦い、バイクに乗る戦士だ」

ゼロ「ウルトラマンからは話を聞いていたが、本人に会えるなんてな・・・」

仮面、ライダー……。

仮面ライダードライブ「俺は仮面ライダードライブ」

仮面ライダービルド「私は仮面ライダービルド……勝利の法則は決まりました……！」

仮面ライダードライブと仮面ライダービルド……それが、一誠と美遊のもう一つの名前……。

ドライブ「一誠、私達も！」

イストワール「共に戦います！」

ド、ドライブとイストワールが仮面ライダードライブの中に入った!?

仮面ライダードライブ「それ、と……これだ！」

仮面ライダードライブは二枚のメダルの様なものを取り出した。

仮面ライダービルド「あ、巨大化のエンジューアイテム！」

仮面ライダードライブ「これで戦えるだろ」

仮面ライダービルド「よし！大きくなるう！」

巨大化！

二枚のメダルが光り、仮面ライダードライブと仮面ライダービルドを包み込み、光が消えると……つて、ええ!!?!

仮面ライダードライブと仮面ライダービルドの2人が巨大化していた。

ノレド「大きくなったよ!?!?」

メル「それにドライグさんとイストワールさんも一誠さんの中に…」

デイオ「原理が全くわからない…」

仮面ライダードドライブ「取り敢えず、そのバズーカ砲は邪魔だ!」

仮面ライダードドライブはアマテラスに攻撃を仕掛けた…。

仮面ライダードドライブ「勝負開始だ!これで決めるぜ!」

ドライグ『はい!一誠!フィニッシュです!』

仮面ライダードドライブは一枚のカードをベルトに装填した。

ドラグニツクドドライブバーレッド《フィニッシュ!!?ドライグ!ディメンションドラゴ

ニツクウ、キイイイイイツク!!?》

仮面ライダードドライブ「はっ!」

仮面ライダードドライブは跳躍して、飛び蹴りの状態に入った。

仮面ライダードドライブ「でやああああつ!!?」

ギルガ「ぐあああつ!キ、キツクだと…?!?」

仮面ライダードドライブの必殺キツクはダウンバズーカごとアマテラスを捉え、アマテ

ラスにダメージを与えた。

それと同時にダウンバズーカが大破した。

ギルガ「し、しまった…！ダウンバズーカが…！」

仮面ライダービルド「流石、お兄ちゃんやるう！」

仮面ライダードライブ「レッド、お前も来い！」

レッド『了解、これよりロボモードになり、一誠達を援護する』

すると、レッドはバイクの姿からロボットの姿になる。

零「一誠、助かったぜ」

一誠「逆に助けに入るのが遅くて悪かったな」

零「俺達を見ていたんだろ？俺達がこの世界を救える器かどうかを」

一誠「お前には敵わないよ、零。遅れた分は返す…俺達も手を貸すぞ！」

アマリ「ありがとうございます！」

イオリ「くっ…！こんなはずでは…！」

ギルガ「あいつだ…あの仮面ライダードライブという仮面の男のせいで全てが狂ったんだ…！」

仮面ライダードライブ「俺のせいだというのなら当たり前だろ、俺はお前達の敵だからな！」

ギルガ「許さないぞ、新垣 零！仮面ライダードライブ！君達を纏めて倒す！」

仮面ライダードライブ「倒されるのはそっちだ！言ったはずだぞ、運命のシナリオを

書き換えると！さあ、やろうか、零！エクスクロス！」

零「おう、行くぜ、仮面ライダードライグ！」

戦闘再開だ！

《戦闘会話 零VS初戦闘》

零「やっぱり、凄すぎるぜ、一誠は……。俺達も負けてられないぞ、ゼフィルス！」

《戦闘会話 仮面ライダードライグVS初戦闘》

イストワール『一誠さん！敵が来ます！』

ドライグ『一気に蹴散らしましょう！』

仮面ライダードライグ「ああ！仮面ライダーの力、見せてやるぜ！」

《戦闘会話 仮面ライダービルドVS初戦闘》

仮面ライダービルド「来るなら、来てください！既に私の勝利の法則は揺るぎませんから！」

《戦闘会話 レッドVS初戦闘》

レッド『大きければ良いというものでもない…それを教えてやろう!』

レッドが敵機を撃墜した…。

カンナム「彼はなかなかの強者だね」

しんのすけ「カンナムとお仲間だゾ!」

仮面ライダードライブ「やるじゃねえか、レッド」

レッド『まだまだ、これからだ!』

《戦闘会話 零VSイオリ》

イオリ「やはり、お前は正面から潰さないとダメなようだな、新垣!」

零「正面だろうと左右だろうと背後だろうと俺は負けねえ!特にお前だけはな!お前が何度でも俺達を狙うのなら、何度でも相手をするまでだ!」

《戦闘会話 アマリVSイオリ》

イオリ「アマリ：：俺の手で引導を渡してやる！」

アマリ「本当ならばあなたは戦いたくありません」

ホープス「マスター、何を：：」

イオリ「アマリ：：」

アマリ「でも、エクスクロスの皆さんや零君に手をあげるとなれば話は別です！覚悟してください！」

《戦闘会話 仮面ライダードライブVSイオリ》

イオリ「仮面ライダーとやら、邪魔をするのならお前も倒す！」

仮面ライダードライブ「お前が魔徒教団の術士か：：。一つ聞く、お前、このまま人形のままでもいいのか？」

イオリ「人形だと：：？俺が魔徒教団の人形だと言いたいのか？？」

仮面ライダードライブ「お前の中には本当のお前がいるはずだ！それを表に出せ！」

イオリ「黙れ！訳のわからない事を言うな！俺は俺：：イオリ・アイオライトだ！」

仮面ライダードライブ「（ちっ、元に戻すのには骨が折れそうだな：：！）」

《戦闘会話 仮面ライダービルドVSイオリ》

仮面ライダービルド「アマリさんを狙うストーリーカーさんは私が退治します！」
イオリ「お、俺はストーリーカーじゃない！」

仮面ライダービルド「残念ですが、私からはそう見えますのでお引き取り願います！」

《戦闘会話 レッドVSイオリ》

イオリ「バ、バイクがロボットに……？？これはいつたい……！」

レッド『気にする必要はない……。考える前にお前は終わる』

イオリ「随分、自信があるんだな……。ならば、俺のドグマと勝負だ！」

ゼルガードの攻撃でアイオライトのデインベルはダメージを負った……。

イオリ「くそッ！やはり、このままでは、アマリは……」

アマリ「イオリ君！」

イオリ「忘れるな、アマリ……。お前が魔徒教団の敵である限り、俺はお前の前に現れる。必ずな！」

そう言い残し、アイオライトのデインベルは撤退した……。

仮面ライダービルド「ストーリーカー病は治らないようだね……」

仮面ライダードライグ「(本当のあいつを取り戻す役目は零達に任せるとするか……)」

《戦闘会話 零VSギルガ》

ギルガ「ダウンバズーカがなくなろうと僕が勝つ！」

零「なら、そろそろはつきりさせようぜ、俺が勝つか、お前が勝つかをな！」

《戦闘会話 仮面ライダードライグVSギルガ》

ドライグ『あれ、あの人居たんですか……。気がつきませんでした』

ギルガ「何気に失礼な事を言うな、君は！」

仮面ライダードライグ「俺が言ったんじゃないっての、モダオ」

ギルガ「モ、モダオ……。それはなんだい……。？」

仮面ライダードライグ「モテないダメな男の略称だ」

イストワール『お似合いのお名前ですね』

ギルガ「君も僕をバカにしているのか！許さないぞ！」

仮面ライダードライグ「黙れって言ってんだろ、この変人、小物、声優無駄使いが！」

ギルガ「変人や小物はともかく、声優とはなんだい!?？」

《戦闘会話 仮面ライダービルドVSギルガ》

ギルガ「君、可愛いね。名前は？」

仮面ライダービルド「一条 美遊こと仮面ライダービルドです！」

ギルガ「君はどうして戦うんだい？」

仮面ライダービルド「私は大切な人達やラブ&ピースを守る為に戦っています」

ギルガ「ラブ……それは僕に対しての告白かな？」

仮面ライダービルド「そんな訳ないじゃないですか、キモいですよ、モダオ」

ギルガ「キモい……!!? 君も僕を……！」

仮面ライダービルド「女の敵は私が排除します！」

《戦闘会話 レッドVSギルガ》

レッド『お前の相手は私だ!』

ギルガ「小さい君に何ができると言うんだ!」

レッド『小さいだからといって、甘くみるなよ? お前など一捻りだ!』

ギルガ「僕を舐めると痛い目を見るぞ!」

レッド『その言葉、そっくりそのまま返してやる!』

俺と仮面ライダーダードライグの連携攻撃にアマテラスはダメージを負った。

ギルガ「うっ……！このままでは負ける……！」

零「ここで蹴りをつける！」

ギルガ「こ、ここは戦略的撤退だ！」

アマテラスは撤退した……。

仮面ライダーダードライグ「何処が戦略的撤退だよ……。尻尾を巻いて逃げただけじゃねえかよ」

仮面ライダービルド「みつともないなあ」

弁慶「どうやら、今ので最後だな」

隼人「今回はあいつ等に助けられたな」

零「ありがたいな、一誠、美遊、レッド」

アムロ「君達のおかげで今回を乗り切れた」

仮面ライダーダードライグ「いえ、仮面ライダーとして、当然の事をしたままです」

仮面ライダービルド「私はラブ&ピースの為ですし！」

仮面ライダーダードライグ「それよりも、みんなに話がある」

仮面ライダーダードライグから話があるとの事で、俺達はそれぞれの艦に帰還し、仮面ラ

イダー達も変身を解除し、ドライグとイストワールも一誠の中から出てきた。

そして、俺達はメガファウナの格納庫に集まった。

倉光「それで、話とは何かな？」

一誠「一通りの調査を終えたので俺達は元の世界へ戻ります」

ドニエル「もうか!?？」

一誠「本当はこれからも皆さんに力をお貸ししたかったです… すみません」

零「残らない理由は？」

一誠「例え自分達が居ようが居なくとも、お前等が居る。それにこの世界の運命を決めるのはお前等だ」

零「一誠…」

美遊「そう言うことですので、お世話になりました!」

メル「いえいえ!それはこちらのセリフです!」

ドライグ「また何処かで出会えればいいですね」

サラマンディーネ「はい、その時は私の他の仲間もご紹介します」

レッド『元気でな』

ワタル「うん!レッドも元気でね!」

ホープス「イストワール様。もう少し情報収集を早く出来るよう練習する事をお勧め

します」

イストワール「だから大きなお世話です、黒焦げ焼き鳥……。あなたもお元気で」
ホープス「またお会いしましょう」

それぞれが別れを済ませると一誠達の目の前に時空の穴が現れた。

それを確認した後、一誠は俺の元へと来て、手を差し出した。

一誠「信じてるぜ、お前達がこの世界を救う事を」

零「ああ。お前も頑張れよ、一誠！」

一誠「おう！」

俺と一誠は笑い合いながら、握手をした後、手を離し、一誠達は時空の穴の前に立つた後、振り返った。

一誠「またな、零！エクスクロスのみんな！」

零「元気だな、一誠！」

そう挨拶を終え、一誠達は時空の穴に飛び込んで、時空の穴は消えた……。

時空の穴があつた場所を見続ける俺達……。

アマリ「零君」

零「……ふっ。みんな！別の世界で戦っている一誠達に負けないように俺達も頑張ろう！」

俺の言葉にみんなは声出して、頷いた。。。。

また会おうぜ、運命の理を変えるドラゴンライダー、仮面ライダードライドグこと。。。
一条 一誠。。。。

ボーナスシナリオ7

強く正しく美しく

ホープス「……皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これはオニキスの決戦の後、ネメシスの存在が明るみに出た頃のお話です。男女の間には愛が生まれる事があります。では、女性と女性の間には何が生まれるのでしょうか……。私としても興味は尽きません……」
それでは始まります。

ーネメシスとの接触を終えた一行。一つの大きな戦いを終えたものの、それに勝るとも劣らない激戦が彼女達を待ち受けていた……。

ー新垣 ゼファイです！

私達はメガファウナの格納庫にいました。

シバラク「どうしようかな〜と…。グランデイス殿は素敵だし、ヨーコ殿のナイスバディはたまらないし、ジル殿の冷たい視線も慣れれば気持ちいいし…。迷っちゃうな〜と…。」

ゼフィ「独り言を言つて、どうかしたのですか、シバラク先生?」

ワタル「何か困り事?」

シバラク「まあ困つてると言えば、困つてるな」

ワタル「僕達で良かったら、力になるよ」

シバラク「いやいや…。幾ら救世主やゼフィルスでもこればかりは、どうにもならん。

男と女の事だからな」

ゼフィ「男の人と女の人…。男の人はシバラク先生だとして、女の人というのは…?」

シバラク「それが決められないから、困っているのだ」

ワタル「でも、先生が誰かを選んでも、その人が先生の事を好きになつてくれるとは限らないじゃん!」

シバラク「こ、子供に何がわかる!」

ワタル「ひどいなあ、先生!言つとくけど、僕だってガールフレンドぐらいいたからね!」

シバラク「な、何だと!?？」

ゼファイ「ワタルさんも男の子ですからね！」

ワタル「だから、先生よりも女の人の事だつてわかるよ」

シバラク「ぬ、ぬうう…!ここで師匠越えをさせるわけには…!」

ワタル「ゼファイはボーイフレンドとかいるの?」

ゼファイ「わ、私は…ゼフィルスの中にいたのでそういう方は…」

すると、ママが来ました。

アマリ「どうしました、先生?ゼファイちゃんとワタル君が何か?」

ゼファイ「ママ!パパはどうしたのですか?」

アマリ「パパなら、一夏君と一緒にお昼ご飯を作っているわ」

ワタル「本当に仲がいいね、零さんと一夏さんって!」

シバラク「アマリ…。恥を忍んで、お主に頼みがある」

アマリ「何でしょうか?」

シバラク「拙者に女心というものを教えてくれ!」

アマリ「女心…ですか…。その…女の子が喜ぶプレゼントや女の子が好感を持つ

フアッションとか、そういうのはお話しできますけど…」

シバラク「それでいい!まずは女受けをするフアッションを伝授してくれ!」

アマリ「それでは、まず…そのお侍スタイルを変える事から…」
シバラク「！」

アマリ「やつぱり、無理ですか…。シバラク先生の生き方そのものを變えろと言つて
るようなものですしね…」

シバラク「…すまん、アマリ…。拙者…お嫁さんも欲しいが、劍の道を捨てる事は出
来んのだ…」

アマリ「それでいいんです」

シバラク「へ…？」

アマリ「自分というものを持っていて、それを貫く人…。女の子が素敵だな…つて思
うのはそういう人ですから」

シバラク「そうか…：そうなのか！拙者は、このままでいいのか！」

ワタル「さすが、アマリさん！先生が自信を取り戻したや！」

ゼフィ「ママ、格好いいです！」

アマリ「私はちよつとアドバイスしただけです」

ワタル「そのちよつとのアドバイスが効果抜群！やつぱり、アマリさんは凄いよ！エ
クススクロスの女神様！エクススクロスのお姫様！ハッキシ言つて、素敵可愛いぜ！」

アマリ「もう、ワタル君…！からかわないでくださいよ！」

零「そして、俺の女神でお姫様でもあるな」

パパが来ました！

ゼファイ「パパ！」

アマリ「れ、零君もからかうのをやめて…！」

零「からかうつもりでは言っていないぜ。事実なんだからよ」

アマリ「も、もう…！」

ワタル「零さん、お昼ご飯作っていたと言っていたけど…」

零「働き詰めだから休めって、一夏に言われてな。あと少しで終わるから、任せてきたんだ。それで、何の話をしていたんだ？」

ゼファイ「シバラク先生が困っていたのをママが解決したんです！」

零「…シバラク先生の困り事はわかったが、流石だな、アマリ」

アマリ「私も女の子だからね」

やつぱり、パパもママも凄いです！

カレン「相変わらず、零とアマリは熱々だね」

ルー「そうね。それにしても真面目で純情だよ、アマリって…。そういう所が人気の秘密かな？」

優香「人気？」

ルー「ほら…零は兎も角、敵だった時のイオリとかセルリックとかつて、アマリの事をムキになって追っかけ回してたじゃない」

エル「アマリってルーとは正反対の性格だから、可愛いもんね」
ルー「言ってくれるじゃないの、エル…」

グランデイス「とは言っても、まだまだアマリは小娘…。あたしのオトナの女の魅力には敵わないね」

サリア「オトナの女性とオバサンは全然違うと思うけど…」

ヒルダ「言ってる！要するに年増は引っ込んでなってる事だ」

グランデイス「…表に出な、小娘達」

ジル「失礼があつたのかも知れないが、サリアもヒルダも私の部下だ。話があるなら、私が聞こう」

グランデイス「上等だよ、司令さん」

マリア「大人気ないわよ、グランデイス！そんな挑発に乗って！」

グランデイス「あんただって、似たようなものだろうが！」

マリア「…ふーん、潰されたいみたいね」

アスナ「ちよ、ちよつと、マリアさん！あなたも挑発に乗ってどうするんですか!?？」

マリア「子供が口を出さないで、アスナさん！零の奪い合いで何のアップローチも出

来ないくせに！」

アスナ「いいオトナ同士で惨めな争いをしてる人達に言われたくありません！」

スカーレット「確かに惨めだが、少し言い方というものがあるのではないか？」

鈴「でも、それを見せられる私達も立場も考えて欲しいわよね〜」

セシリア「少し、年上の威厳というものが…」

由木「あなた達は少し黙りなさい！」

ラウラ「そこまで上から言われるとこちらからしても少し、反抗的な態度を取らざる

おえませんよ」

シャルロット「ラ、ラウラもやめてよ！」

箒「シャルロット、女には止まつてはいけない時がある。ボクっ娘にはわからなかつ

たか？」

シャルロット「うん、わからないね。何かと木刀で暴力を振るう箒の気持ちなんて…」

箒「いいだろう、決着をつけるか！」

カノン「箒もシャルロットもやめて！」

楯無「あら？カノンちゃんも苦労するわね！おバカな彼氏を持つているからかしら

？」

カノン「弘樹さんを悪く言わないでください！いつも人をバカにする楯無さんに彼の

何がわかるんですか?!? 彼氏もいない人が!

楯無「私はいないんじゃないよ!」

簪「作れないだけだと思う…」

楯無「ちよつと、簪ちゃん! それは聞き捨てならないわね!」

メル「み、皆さん! 少し冷静に…」

C・C「一大事になった時、冷静になれないがな、お前は…」

メル「そ、それは…私だって、頑張っているのに…」

優香「それ以上、メルちゃんをバカにするなら、私が相手をしますよ」

C・C「いいぞ、相手をしてやろう。小娘が…」

ヒナ「止めなくていいの、アンジユ?」

アンジユ「その必要はないよ。ジル達が勝手に割り込んだんだから」

サリア「アンジユ! アレクトラは私達の為に戦おうとしているのよ!」

アンジユ「要するにあんたが悪いって事じゃないの、サリア?」

ヒナ「挑発はやめなさいよ、アンジユ」

ジャンヌ「そうよ! 話をもつとややこしくしないで!」

サラマンディーネ「言っても無駄です、ヒナ、ジャンヌ。アンジユは戦いや争いを好

む女ですから」

ノレド「サラ子も言うねえ！」

サラマンディーネ「わたくしはサラマンディーネです。アンジュのような下品な呼び方はおやめなさい」

ラライヤ「下品って…失礼じゃないですか？」

アイーダ「ラライヤの言う通りです。同じ志で集った仲間と言う言葉ではありません」

マーベル「少し静かにしてくれない？精神集中が出来ないわ」

サラ「この程度で集中力が乱されるのも問題だと思っただけ…」

レナ「サ、サラは余計な事言わないで！」

セシリー「せっかく女同士で集まってお茶会をしようという話だったのに…」

さやか「このメンバーでそういうのって無理みたいね…」

リユクス「さやかさん！このメンバーという言い方は少し、納得がいきませんね」

マリア「自分達は違うと言いたいの？」

クリス「チンピラ年増…」

マリア「聞こえてるわよ、クリス！」

クリス「ご、ごめんなさい！」

ロザリー「クリスは正直に感想を言ったただけだろうが！」

千冬「やめろ、みんな！仲間内で争ってどうする!!?」

ミック「無駄だよ、千冬。こうなっちまったら、誰も聞く耳もたない」

千冬「じゃあ、どうしろと言うのだ!!?」

ミック「あたしに当たるなよ！」

エルシャ「あらあら…。どんどん飛び火していくわね…」

シルキー「争いがみんなの心を支配していく…」

ブル「みんな、どうして喧嘩してるの？」

ヴィヴィアン「アマリが可愛いつて話から始まって、みんなが自分も可愛いつて言い

だしたのが、原因じゃない？」

チャム「じゃあ、誰が一番いい女か決まれば、決着がつくんじゃない？」

ホープス先輩が飛んできました…。

ホープス「話は聞かせてもらいました」

ダリー「ホープス！」

ホープス「お嬢様方…。事態の解決は、このホープスに全てお任せください」

アーニヤ「嫌な予感しかない…」

ボーナスイナリオ7 強く正しく美しく

えーつと…。どうして、こうなってしまったのでしょうか…？

ホープス「皆さん、お待たせしました！これより、第一回ミス・エクスクロスを開催致します！」

どうして、歓声が聞こえるのですか…？

ホープス「様々な世界からエクスクロスに集いし美女達…。戦士である彼女達には同時に強さを競い合ってもらいます。私ホープスが独断で決めさせていたのだいたトーナメントを勝ち抜いた女性こそが栄えあるミス・エクスクロスです。なお、コンテストの状況はリアルタイムでエクスクロスの男性陣にお届けしております。それでは早速、出場者の皆様を一回戦の組み合わせと共に発表します」

は、始まりますね…。

ホープス「一回戦第一試合！その血のなせる業か、はたまた育った環境か、エクスクロスの姫様対決！アルゼナルの美しきイタ姫、アンジュVS海賊部隊の美しき突撃姫、アイーダ・スルガン！」

ヴィルキスとGーアルケインが出てきました。

アンジュ「イタ姫……。久々にその名で呼ばれたわ」

アイーダ「至らない所だらけの姫……。あなたにぴったりの名前ね、アンジュ」

アンジュ「…アイーダ……。その抜けっぶり…。あなたの方が姫の名に相応しいかもね
…」

アイーダ「引つかりますね、その物言い」

アンジュ「いいさ…！全てまとめて決着をつける！」

アイーダ「望む所よ、アンジュ！」

ベルリ「頑張れ、姉さん！僕がついてます！」

タスク「アンジュ…。やり過ぎないようにね…」

ホープス「続いて、第2試合！性格が真逆の姫君対決！美しき想いの姫、リユクス・サ
コムズVS美しき気高い皇女コーネリア・リ・ブリタニア！」

ギム・ゲネンとグロースター・エアが現れました。

リユクス「この対決…負けるわけにはいきません！」

コーネリア「そう気負うな、リユクス。お互い、全力を出して、勝負しよう。皇女や
姫など関係なく、一人の女として」

リユクス「コーネリア殿…。望む所です！」

コーネリア「というわけだが、こちらにはダールトン、ギルフォードもいる。悪く思

うなよ」

リユクス「数が勝敗をわかつ事ではないのを教えて差し上げます！」

ギルフオード「素晴らしい気迫ですね」

ダールトン「こちらにも負けるつもりではないがな！行きましよう、姫様」

コーネリア「ああ。では、勝つぞ！我が騎士達！」

エイサップ「リユクス！頑張れ！」

サコミズ「今のお前ならば、必ず勝てる」

スザク「ルルーシュ、コーネリア様の応援はしないのかい？」

ルルーシュ「お前はあの人が誰か知らないのか、スザク？かつて、ゼロと何度も敵対したコーネリアだぞ？姉上はそう簡単には負けん。応援も不要だ」

ホープス「第3回試合！エナストリアの美しき皇女、ユインシエル・アステリアVS

惑星エスメラルダの美しき姫君、エメラナ・ルルド・エスメラルダ！」

アレクトとジャンボットが現れた。

エメラナ「ユイ、模擬戦の様なものですが、お互いベストを尽くしましょう！」

ユイ「エメラナ姫……。レナ！エメラナ姫に負けない様に私達も頑張ろう！」

レナ「ええ、そうね。ユイ！ジャンボット、私達は手加減なしでいくからね！」

ジャンボット「いいだろう。私も姫様を守り抜く使命がある。レナ、君も君の妹を

守ってみせろ！」

ゼロ「頑張れよ！エメラナもユイも！」

ミラーナイト「ジャンボットも姫様をお願いしますよ！」

アオイ「ユイ、やるからには全力でね！」

ナル「応援していますよ、ユイ様！」

ホープス「続いて、第4試合！女の意地はキャノンに乗せて！注目のタンク対決！美しき姐さん、グランデイス・グランバアV S大グレン団の美しきスナイパー、ヨーコ！」

グラタンとヨーコタンクが現れました。

グランデイス「あたしの相手はヨーコかい……！」

ヨーコ「参ったな……。まさか、あたしまで年増枠なんて……」

グランデイス「まずは口で先制攻撃かい？」

ヨーコ「失礼。ここは年増じゃなくて、オトナって言うべきね。そういう事だから、オトナの女として若い子達にお手本を見せようじゃない、グランデイス姐さん」

グランデイス「上等だよ、ヨーコ先生！エクスクロスのタンクの女王はあたしがもうよ！準備はいいかい、サンソン、ハンソン！」

サンソン「合点承知……つと」

ハンソン「（完全に僕達、巻き込まれたね……）」

キタン「うおおおおお、ヨーコオオオオオツ！俺はお前の勝ちを信じてるぜええええつ！！？」

マリ「ナディア」「頑張つて、グランデイスさん〜！」

ジャン「グラタンが世界一のタンクだつて証明してよ〜！」

ナディア「…戦いで、いい女を決めるなんて馬鹿げてる…」

ジャン「大丈夫だよ、ナディア。こんなの出場しなくても、君がステキなのをわかっている人はちやんといるから」

ナディア「どこに？」

ジャン「(毎度の事ながら、僕つて…色々と報われないな…)」

ホープス「第5試合！恋する心を狙い撃たれた！スナイパーの男を持つ者対決！美しきセントラーディ、クラン・クランVS美しきイノベイド、アニュー・リターナー！」

クアドラン・レアとガツデスが現れた。

クラン「わ、私は別にミシエルの事など…！」

アニュー「でも、クランがミシエルの事に必死なのは、知っているわよ」

クラン「や、やめてくれ、アニュー！」

アニュー「じゃあ、スナイパーの相棒がいる者同士…尋常に勝負しようか！」

クラン「…ふつ、負けないぞ！」

ララミア「私達も全力を出します！」

ネネ「F」「行きましよう、お姉様！」

ミシエル「頑張れよ、クラン！まあ：負けな様にな！」

アルト「(素直じゃねえな)」

ライル「アニニュー！怪我だけはするなよ！」

ニール「刹那、あの二人：どっちが勝つと思う？」

刹那「わからない。想いの力は二人共同じだからな」

テイエリア「要するに互角というわけか」

ホープス「第6試合！想いを寄せる相手は不器用でかつて、仮面に素顔を隠していた者同士！だが、その想いは忘れない！優しき心を持つ者対決！美しきニュータイプ、ハーマン・カーンVS美しきXラウンダー、フラム・ナラ！」

ハーマンさんのキュベレイとフォーンファルシアが現れました。

ハーマン「シヤアとゼハート：。確かにそっくりだな」

フラム「そうですかね：？」

ハーマン「お前は素直だな、フラム。だが、負けるわけにはいかない。私にもニュータイプの維持というものがあるのでな」

フラム「私にもXラウンダーの誇りがあります！」

レイル「フラムー！頑張れよー！」

アセム「ゼハート、お前も何か言ってやれよ」

アムロ「お前もだ、シヤア」

ゼハート「フラム：私は君が勝つ事を祈っている」

シヤア「応援しているぞ、ハマーン。頑張れよ」

ハマーン「！…これは負けられないな…！」

フラム「そうですね…！」

ホープス「第7試合！次代のエースは誰だ？？？青い果実対決！美しき未来のスナイパー、ダリーVS美しきナイト・オブ・シックス、アーニヤ・アールストレイム！」

スペースガンマールとモルドレットが現れました。

ダリー「青い果実って何だか恥ずかしいですね、アーニヤさん」

アーニヤ「ダリー…。あなた、何歳？」

ダリー「え…正確な年齢はよくわかりませんが、13歳ぐらいだと思います」

アーニヤ「…」

ダリー「アーニヤさん？」

アーニヤ「あなたは本物の青い果実…。私は栄養不足のB級品…」

ダリー「え…ええ…?!？」

アーニヤ「あなたには…負けられない…」

ダリー「どうしてそうなつちやうんです?!?」

ギミー「うおおおおおつ、ダリー! 負けるなああああつ!!?」

スザク「アーニヤ! 応援しているよ!」

ジエレミア「ふふ…珍しいな。アーニヤが闘志を前面に出すのは」

ジノ「言われてみれば、そうだな」

ホープス「第8試合! 小きき身体に強き心! 次世代の戦士候補対決! 美しきエクステ

ンデッド、ステラ・ルーシエVS美しき新生オリジナル7、メリツサ!」

ガイアガンダムとセン・オブ・サタデイが現れました。

ステラ「メリツサが相手か! よろしくね!」

メリツサ「う、うん」

ステラ「怯えなくてもいいよ。でも、手加減はしないからね!」

メリツサ「シンの妹候補同士…」

ステラ「!」

メリツサ「負けられない…!」

ステラ「そうだね!」

カロツサ「メリツサ、頑張れ!」

ハイネ「ステラも負けるな！」

アスラン「どっちを応援するんだ、シン？」

シン「俺には片方を選ぶ事なんて出来ません。だから、どっちも応援します」

ホープス「第8試合！運命に抗い続ける男の相棒対決！美しき天啓少女、モリ ラン
マルことジャンヌ・カグヤ・ダルクVS美しき赤服、ルナマリア・ホーク！」

オルレアンとフォースインパルスガンダムが現れました。

ジャンヌ「天啓少女って…褒めてるのか、貶しているのか…」

ルナマリア「褒めているに決まっているじゃない。だって、天啓の力をノブナガの為に使っているんだから」

ジャンヌ「…そうね、ありがとう、ルナマリア」

ルナマリア「でも、勝負は負ける気はないから！」

ジャンヌ「こっちだって負けないわ！」

ヒデオシ「ジャンヌちゃんもルナマリアちゃんも頑張れー！」

シン「ルナー！負けるなー！」

ノブナガ「ジャンヌ…。俺はお前が勝つと信じている」

ホープス「第9試合！お次は打って変わって両極端！年の差対決！アルゼナルの美しき鬼司令、ジルVS美しき永遠の妹、エルピー・プル！」

レイジアとプルさんのキュベレイが現れました。

ジル「よりもよって、相手がプルとはな…」

プル「でも、ジルとプルって名前、似てるよ。プルプルプル〜！ジルジルジル〜！」

ジル「…言われてみれば、そうだな。お手柔らかに頼むぞ、プル」

プル「うん！わかったよ、ジルおぼさん！」

ジル「…気が変わった。全力で来い、プル。その代わりに、私も全力でやるからな」

プル「こ、怖いよ、ジルおぼさん！」

ジル「一つだけ教えてやるぞ、プル…。自業自得だ！」

タスク「ア、アレクトラ…」

モモカ「意外に年齢の事…気にしてられるようですね…」

ジユドー「負けるな、プル！若さで跳ね返せ!!？」

トビア「そういう事を言うのは火に油を注ぐ結果になる様な…」

ホープス「第10試合！両極端第2回戦！年齢はかけ離れているが、それぞれの優しい気持ち対決！美しき魔術師、ネロことエンネアVS美しきリムガルドの元皇女、イングリッド・ティシス&mp;ケイ・ティシス！」

ネームレス・ワンとメガエラが現れました。

ケイ「優しい気持ちだって、イングリッド」

イングリッド「少し気恥ずかしいわね」

エンネア「そんな事ないよ！イングリッドはいつでも優しいよ！」

イングリッド「ありがとう、エンネア。あなたと戦える事を嬉しく思うわ」

ケイ「でも、一切の手加減はしないから」

エンネア「私だって、負けないよ！」

アオイ「イングリッドさん：嬉しそうね」

ナル「ケイ様もです」

九郎「応援してるぞ、エンネア！」

ホープス「第1試合！こちらも両極端でありながら、それぞれの人気の魅力対決！

美しき無邪気さの魅力、ヴィヴィアンVS美しき大人の魅力、ミック・ジャック！」

レイザーとトリニティが現れました。

ヴィヴィアン「いいなあ…。あたしもミックみたいに髪の毛を伸ばしてみたい」

ミック「やってみれば？手入れの仕方は教えてあげるから」

ヴィヴィアン「お化粧品もしてみたい！」

ミック「わかったよ。あたしので良ければ、化粧品も分けてあげるよ」

ヴィヴィアン「本当？？」

ミック「その代わり、さっさと負けておくれよ」

ヴィヴィアン「うーん…それはやだ」

ミック「さすがはアルゼナルのエースだ。これは正々堂々と戦うしかないみたいだね」

ヴィヴィアン「ミックが負けたら、あたしを綺麗にしてね！」

ミック「ごめんね、ヴィヴィアン。あたし、強いんだ」

クリム「さすがはミック・ジャック！その戦いぶり、期待させてもらおう！」

ヒミコ「フアイトだ、ヴィヴィアン！鬼ごっこで鍛えた根性を見せろ〜！」

ワタル「僕達、いつも遊んでる仲間のヴィヴィアンを応援するよ！」

ホープス「第12試合！内に秘めるは獣の力！だが、片方はリスの様な元気さ！気合
対決！美しき鷹、飛鷹 葵VS美しきリス、凰 鈴音！」

ダンクーガノヴァと甲龍が現れました。

鈴「誰がリスよ！」

葵「あら、あなたにぴったりよ。可愛くて」

鈴「ちよ、ちよつと、葵さん…！」

エーダ「それにしても…」

くから「完全に私とエーダの事、忘れてるわね、ホープスの奴…」

朔哉「なあ、ジョニー…。俺達、完全に巻き込まれているよな」

ジョニー「僕はエーダを一番にしたいので」

朔哉「お前はブレないな…」

葵「つて、事で！五対一だけど、悪く思わないでよ、鈴！」

鈴「数なんて関係ないわ！私と甲龍は負けないから！」

一夏「頑張れ、鈴！」

海道「負けんじゃねえぞ、チームD！」

摩耶「(火力的に凰さんがダンクーガノヴァに勝つのは不可能だと思いますが…)」

ホープス「第13試合！今度は男子の憧れの包容力の勝負！母性対決！アルゼナルの美しきお母さん、エルシャVS美しき保護者役、弓 さやか！」

エルシャさんのハウザーとビューナスAが現れました。

エルシャ「あらあら…。お母さんだなんて…」

さやか「エルシャはともかく、どうして私が保護者…？」

エルシャ「ふふ…。手がかかるでしょ、甲児君は？」

さやか「う、うん…」

エルシャ「でも、甲児君の世話を焼いているさやかちゃん…とつても楽しそうよ」

さやか「そ、そうかな…」

エルシャ「そうよ」

さやか「エルシャ…。この戦いが終わったら、お料理…教えてくれる？」
エルシャ「喜んで」

さやか「でも、甲児君の為にこの戦い、絶対に勝つかから！」

エルシャ「あらあら、料理を作る前からご馳走様」

ボス「くーっ！羨ましいぜ、兜の奴！」

甲児「頑張れよ、さやかーっ！ここから応援しているからな！」

ヒミコ「エルシャ！いつも美味しいご飯、ありがとう！」

ワタル「そのお礼に僕達、エルシャさんを応援するからね！」

ホープス「第14試合！今度は優しく見守る本当の母親対決！美しきエメラルド家のお母さん、マリア・エメラルドVS美しき医師お母さん、カナリア・ベルシュタイン！」
スペリオルとケーニツヒモンスターが現れました。

マリア「私の相手はカナリアね」

カナリア「母親対決…面白くなりそうだ」

マリア「ええ、母として負けないわ！」

カナリア「それはこちらの台詞だ！」

零「母さん、応援してるぜ！」

オズマ「カナリア！気合いで吹き飛ばせ！」

ホープス「第15試合！勇ましく、そして優しい！だが、妹には甘い、お姉さん対決！更識 楯無VSシヤナルア・マレン！」

ミステリアス・レイディとクランシエが現れました。

楯無「お姉さん対決…。シヤナルアさんにも妹がいると聞きましたが…」

シヤナルア「ああ、難病に苦しんでいるが、生きようとしている」

楯無「難病…」

シヤナルア「楯無、これは姉の先輩である私の言葉だ。妹は大事にしなよ」

楯無「はい。いつも大事にしています」

シヤナルア「あんたの場合、過保護すぎだけどね」

キオ「シヤナルアさん！応援しています！」

一夏「楯無さん！頑張ってください！」

ホープス「第16試合！3人の変則バトル！今度は妹対決！美しき剣道妹、篠ノ之 箒VS美しきエルプスوندهの妹、アウル・テイランVS美しき眼鏡っ娘妹、更識 箒！」

紅椿、ドラウパ、打鉄式式が現れました。

箒「妹、か…」

箒「箒、今は妹とか関係なく、戦おう」

箒「簪…」

簪「そして、この戦いで見せよう！妹がお姉ちゃんを越える所を！」

箒「そうだな！」

アユル「お二人だけで盛り上がらないでください！私もいる事を忘れずに！」

簪「勿論、忘れてない」

箒「アユル、私達は手加減しないぞ！」

アユル「望む所です！私もお姉様を超えたいので！」

束「箒ちゃん！頑張れ、負けるなー！」

クロエ「束様…。必死ですね…」

一夏「あはは…。束さんらしいな。そうじゃなくて、簪も箒も頑張れー！」

ジン「UX」「アユル、今までの成果を見せる時だ」

ホープス「第17試合！その明るさが美しさの証！元気が取り柄対決！美しき歌い

手、ミーナ・フォルテVS美しきチャンピオン、プリシラ！」

サンザーボルトとブラウニーが現れました。

ミーナ「30」「私の相手がプリシラさんだなんて…」

プリシラ「よろしくね、ミーナ！」

ミーナ「30」「は、はい…！そうだ、私を稽古してもらえますか？」

プリシラ「勿論、いいよ！それなら、今度、歌を教えてよ！」

ミーナ「30」「構いませんよ！これが終わった後、一緒に歌いましょう！」

リオン「無理だけはするなよ、ミーナ！」

ヴァン「楽しませてくれよ、プリシラ！ジョツキにミルクを入れて、準備は出来てるからな！」

ウエンディ「楽しそうね、ヴァン……」

ホープス「第18試合！打って変わって、次はシビアな勝負！軍人対決！美しきプリンター・ファイヤー、ルクレツィア・ノインVS美しきエウーゴ・ガール、ファ・ユイリイ！」

トーラスとメタスが現れました。

ノイン「奇しくも可変機同士の戦いになったな」

ファ「ええ……」

ノイン「しかし、驚いたぞ。ファが軍人だったとはな」

ファ「私やカミーユのいたエウーゴも一応は軍でしたから。いい機会です、ノインさん。この戦いを通して、私を鍛えてください」

ノイン「ファ……」

ファ「カミーユを支えるためにも私も強くならなければいけないんです」

ノイン「その意思……。フアはもう十分に強い」

フア「でも……」

ノイン「その意思で私を越えてみるがいい。もつとも、私にも負けられない理由があるがな」

フア「わかりました、ノインさん！胸をお借りします！」

カミーユ「（フア……。ありがとう……）」

ゼクス「（ノイン……。私はどんな時でも君の勝利を信じている）」

ホープス「第19試合！またまた軍人同士！尚且つ、似た境遇を持つ者対決！美しきプルトウエルブ、マリーダ・クルスVS美しきシユヴァルツエ・ハーゼの隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

クシャトリヤとシユヴァルツエア・レーゲンが現れた。

マリーダ「似た者同士……言われてみれば、そうだな」

ラウラ「……」

マリーダ「ラウラ、私はお前がどれ程辛い目を味わってきたのかはわからない。だが、今のお前には……大切な、そして掛け替えのない仲間がいるだろう？」

ラウラ「マリーダ……。確かに私達はある男達のおかげで変わる事が出来た。やはり、似ているな」

マリィダ「そういえば、バナージと一夏の声も似ているな」

ラウラ「では、似た境遇も持つもの同士…勝負だ」

マリィダ「望む所だ！」

一夏「ラウラ！負けるなよ！」

バナージ「マリィダさん！応援しています！」

フロンタル「確かに二人の声は似ているな…」

リディ「カグラとディオも似ているがな…」

ホープス「第20試合！全てを狙い撃つスナイパー対決！英国の美しきスナイパー、セシリア・オルコットVS自称天才美少女の美しきスナイパー、アイシャ・ブランシェット！」

ブルー・ティアーズとエクスカリバーが現れました。

アイシャ「ちよつと！私はスナイパーじゃないし、自称でもないわよ！」

セシリア「いえ、アイシャさんの射撃の腕は見習うべきものがあります。それに美しいのは事実です」

アイシャ「まったく、煽っても何も出ないわよ、セシリア」

セシリア「ですが、この勝負…負けるわけにはまいりません！」

アイシャ「なら、私の力を見せてあげるわ！」

一夏「セシリア！お前なら、勝てる！」

リオン「やり過ぎるなよ、アイシャ！」

ホープス「第21試合！ここは趣向を変えまして団体戦を！美しきドラ姫、サラマン
ディーネ率いるナーガ&mp;カナメVS美しき聖戦士、マーベル・フローズン&a
mp;チャム・ファウ&mp;シルキー・マウ！」

焰龍號達とサーバインが現れました。

ナーガ「この様な場に私達も参加させていただき、光栄に思います！」

カナメ「必ず勝ちましょう、姫様！」

サラマンディーネ「ナーガ、カナメ……。あなた達の働きに期待します」

チャム「マーベル！今日は特別にマーベルに力を貸すからね！」

シルキー「私達の力を合わせて勝利を掴みましょう！」

マーベル「ありがとう、二人共。一緒に頑張りましょうね」

サラマンディーネ「3対1の戦いになるが、よろしいか、聖戦士マーベル？」

マーベル「機体は一機でもオーラ力は三人分……。負けるつもりはないわ」

サラマンディーネ「あなたは武人の心を持った方だ。この戦い……本気でいく」

マーベル「私を支えてくれるオーラもある……。戦ってみせる」

シルキー「ほら、シヨウ！ちゃんと声出して応援してよ！」

シヨウ「う、うん……。頑張れ、マーベル」

チャム「もっと想いを込めて！ライク・ミーではなく、ラブ・ミーで！」

シヨウ「頑張れ、マーベルウウウ！」

マーベル「ありがとう、シヨウ」

サラマンディーネ「……いいものですね。あのように応援してくれる殿方がいるのは」

ワタル「頑張つてね、サラマンディーネさん」

サラマンディーネ「救世主様！もったいないお言葉を……！ナーガ、カナメ！私達には救世主様がついています！この戦い、必ず勝ちましょう！」

ホープス「団体戦二戦目！美しきエレメント候補生達、ミコノ・スズシロ&amp;mp;ゼシカ・ウォン&amp;mp;MIX&mp;サザンカ・ビアンカ&amp;mp;ユノハ・スルー&mp;クレア・ドロセアVS美しきエステバリス隊リーダー、スバル・リョーコ率いるアマノ・ヒカル&amp;mp;マキ・イズミ！」

アクエリオンEVOLOとエステバリスカスタム達が現れました。

ゼシカ「数で言えば、こつちの方が上だけ……」

クレア「こちらはパイロットとしてです」

ユノハ「向こうは三機います！」

MIX「でも、こんなので怖じける私達じゃないわ！」

ミコノ「リョーコさん、ヒカルさん、イズミさん！こちらは全力で相手をします！」
ヒカル「おー！向こうはやる気だね〜」

イズミ「ふふ、年上の威厳というものを見せてやらないとね」

リョーコ「よっしやあ！トンデモアクエリオンが何だ！こつちだつて負けられない理由があるんだよ！」

サブロウタ「リョーコちゃん達も頑張れよ！」

アマタ「ミコノさん！応援しているよ！」

カグラ「みつともねえ、負け方はすんじやねえぞ、どん底女！」

アンデイ「頑張れえええっ！MIXウウウ!!？」

ジン「EVOLE」「無茶はしないでね、ユノハ！」

モロイ「腐らせすぎには気をつけるよ、サザンカ！」

ミカゲ「アポロニアスに代わり、私が応援するよ、クレア・ドロセア」

ホープス「第22試合！その瞳には裏がある！偽名使い対決！美しき貴公子、シャル・デュノアことシャルロット・デュノアVS地球連邦軍の美しき元エース、レイナ・スプリガンことジラード・スプリガン！」

ティエルヴァとラファール・リヴァイヴ・カスタムIIが現れました。

シャルロット「偽名使いて…」

ジラード「え…シャルロットって名前は偽名なの？」

シャルロット「ち、違いますよ！シャルルの方が偽名です！」

ジラード「あ、そっちね」

シャルロット「ジラードさんはどっちが偽名なんですか？」

ジラード「うーんとね、秘密！」

シャルロット「な、何ですか、それ！」

ジラード「知りたければ、私に勝ってみなさい！」

シャルロット「それなら、手加減はしませんよ！」

キオ「ジラードさん…ノリノリだなあ…」

アセム「今の状況が楽しいんだろうな」

一夏「負けるな、シャル！絶対に勝て！」

ホープス「第23試合！静かな雰囲気、見た目の裏には熱き心を隠し持っている！クールビューティー対決！アルティメット・クロスの美しきクールビューティー、サヤ・クルーガーVSギャラルホルンの美しきクールビューティー、ジュリエッタ・ジュリス！」

ライラスとレギンレイズ・ジュリアが現れました。

サヤ「ジュリエッタさんと手合わせが出来るとは…光栄です」

ジュリエッタ「私も同意見です、サヤさん。お互いベストを尽くしましょう」

サヤ「はい。オデユツセアになれなくとも私は戦えます！」

アーニー「サヤ！ 気負いすぎず、いつも通りで戦ってください！」

ガエリオ「ジュリエッタ、君の勝利を信じているよ！」

ホープス「第24試合！ 次の戦いはトラツシユトークにも注目！ 口喧嘩対決！ 美しき口撃隊長、ロザリーVS美しきタッグ、ラライヤ・アクパール& amp ;ノレド・ナグ
！」

ロザリーさんのグレイブとGールシフアーが現れました。

ラライヤ「私…そんなに口が悪いですか…」

ノレド「そんな事ないよ、ラライヤ！ あんなの腹黒オウムが勝手に言ってるだけだつて！」

ロザリー「ま、ラライヤはともかく、そのケツに乗ってるノレドの方は陰険オウムの言う通りだけだな！」

ノレド「ロザリーの方こそ、意地悪オウムの言った通りの性格じゃないのさ！」

ロザリー「言ったな、ノレド！ お前の口の悪さはあの身勝手オウムにもばれてるぜ！」

ラライヤ「ホープスが、この組み合わせを選んだ意味が理解できました…」

リンゴ「気にしないで、ラライヤさん！」

ケルベス「自分はラライヤさんの心の美しさをちやんとわかってますから！」

リング「ロザリー！ラライヤさんにひどい事をしたら承知しないからな！」

ロザリー「うるせえ！お前達のお姫様はあたしに負けるんだよ！」

ベルリ「どっちも頑張れ！ノレドもラライヤもロザリーも！」

ノレド「ちよつと、ベル！あたしだけを応援しなさいよ！」

ラライヤ「ああ…。どうして争いがなくならないの…」

ホープス「第25試合！気を取り直して、今度は奥ゆかしい二人の戦い！控え目対決

！美しきタイムトリッパー、ヒナ・リヤザンVS美しき逆ギレ娘、クリス！」

カルラとクリスのハウザーが現れました。

ヒナ「よろしくね、クリス」

クリス「う、うん…」

ヒナ「そんなに怯えないで。模擬戦みたいなものなんだから」

クリス「あたし…何となく出場したけど、ヒナはどうなの？エクスクロスで一番いい

女って言われたいの？」

ヒナ「…一番いい女って言うのは、よくわからないけど…。もし、それに選ばれたら

誰かに認められたって思えるから」

クリス「ヒナ…」

ヒナ「知ってるでしよ、私に記憶がない事…。私は自分が誰だかわからない…。だから、誰かに自分の事を認めてもらいたいのかも…」

クリス「あたしも同じだよ、ヒナ…。自分に自信がなくて、誰かに認めてもらいたくて…」

ヒナ「クリス…」

クリス「ヒナ…」

ヒナ「お互いに頑張りましょうね」

クリス「うん！」

青葉「雛ああああ！頑張れええええつ!!?クリスも頑張れええええつ!!?」

ディオ「しかし、ヒナのカップリングを維持するため、俺達も機体に乗って待機とはな…」

ホープス「第26試合！今度は仲のいいタッグ対決！トップ部隊所属の美しきコンビ、タカヤ・ノリコ&mp;アマノ・カズミVS美しき大食いコンビ、サラ・クレイス&mp;ティア・クレイス！」

ティシスとガンバスターが現れました。

ノリコ「コンビ対決と聞いたら、負けるわけにはいかないわ！」

カズミ「ええ、そうね、ノリコ。沖ジョ代表として…絶対に勝つわよ」

ティア「うわー、やる気満々だね、あの二人」

サラ「ねえねえ、ノリコ！スーパーイナズマキックを教えて欲しいんだ！」

ノリコ「スーパーイナズマキックを？」

ティア「確かに格好いいもんね！」

ノリコ「でも…あれはガンバスターの技で…」

サラ「お願いだよ、コーチ！」

ノリコ「！…わ、わかったわ！教えてあげるわ！そのかわり、私は甘くないわよ、サ

ラちゃん、ティアちゃん！」

カズミ「ノリコ…乗せやすさは変わらないわね…」

竜馬「ノリコ！お前の気合と根性を見せてやれ！」

隼人「これは案外実物かもな」

弁慶「そうだな。サラ達も強いからな」

ホープス「第27試合！ここからは宿命の対決が続きます！因縁対決の第一弾！美し

き青き流星、ルー・ルカVS美しきジャンク屋の姫、エル・ビアンノ！」

ルーさんの乗るZガンダムとガンダムマークIIが現れました。

ルー「エル…。ついに、この日が来たわね」

エル「そうだね、ルー。待ってたよ、この時を。人の顔を見れば、ギャーギャーと文

句ばつかりのあんたを泣かせてやるよ！」

ルー「そうはいかないよ！ここで完全勝利して、二度とあんたに反抗させないから！」

ビーチャ「頑張れ、エル！ルーなんて、ぶっ飛ばせ！」

ジュード「どっちも頑張れよ！でも、あんまりやり過ぎるな！」

ルー「ちよつと、ジュード！応援するなら、私だけにしなさいよ！」

エル「残念でした！ジュードとは長い付き合いだからね！あんたにはわからない絆があるんだよ！」

ルー「ムカつく！そうやって女を除け者にして！」

エル「べくつだ！見せてやるよ、シヤングリラ魂を！」

ルー「ジュード！この戦いが終わったら、話があるからね！」

ホープス「第28試合！二つ目の宿命の対決です！因縁の対決の第二弾！美しき姐さ

ん、アミダ・アルカVS美しき若者、ラフタ・フランクランド！」

百鍊と百里が現れました。

ラフタ「ついに姐さんを越える日が来た！」

アミダ「まだまだ…甘ちゃんのおんたじや私を越える事は出来ないよ」

ラフタ「その余裕…今回の戦いで打ち砕いてあげるよ！」

アミダ「まあ、頑張りなよ。あんたの信頼する男の為にも」

ラフタ「か、からかわないでよ、姐さん…！」

アミダ「ふふ、ウブだね〜」

ラフタ「もうアツタマ来た！勝負！」

名瀬「アミダもラフタも頑張れよ！」

オルガ「いいのか、明弘？ラフタを応援しなくて」

明弘「お、応援しているぞ、ラフタ！」

ラフタ「うん！ありがとね、明弘！」

ホープス「第29試合！三つ目の宿命の対決！因縁の対決、第三弾！美しき赤い悪魔、紅月 カレンVS美しき魔女、C・C・！」

紅蓮とランスロット・フロンティアが現れました。

C・C・「この対戦…太平洋決戦以来だな」

カレン「あの時は…ごめん…。あんた達の事…わかってあげられなくて…」

C・C・「気にするな。ルルーシュはお前達の真つ直ぐさを信じたからこそ、自分が全てを背負ったんだ。私は共犯者として、その片棒を担いだ者…悪い魔女だ」

カレン「でも…」

C・C・「まあいい…。お前の中に負い目があるのなら、この戦い…負けてくれ」

カレン「それとこれとは話は別だよ！」

C. C. 「何だ…？お前もミス・エクスクロスの称号が欲しいのか？」
カレン 「その…それは…」

C. C. 「自分の心に正直になれ、カレン。欲しいのか？」

カレン 「…私だって…その…女の子だから…」

C. C. 「はつきりと言葉にしろ。欲しい、と」

カレン 「欲しい！」

C. C. 「やらない」

カレン 「あんたねえ！人に恥ずかしい思いをさせておいて！」

C. C. 「真っ赤になつて怒る様はまるで赤鬼だな、カレン」

カレン 「頭に来た！因縁の対決の決着、ここでつけてやる！」

スザク 「ルルーシュ…。止めなくていいのかい？」

ルルーシュ 「俺に振るな！だが、心配はいらん。拳で語り合えば、そこに友情が生まれる…と信じる」

カレン 「バカにするな、ルルーシュ！私は熱血少年漫画の主人公じゃないんだよ！」

C. C. 「同時にヒロインでもない」

カレン 「C. C. !あんたは力尽くで黙らせてやる！」

ホープス 「第30試合！宿命の対決のラスト！因縁の対決！最終弾！美しき妹分、カ

ノン・サファイアVS美しき美女タツグ、白木 優香&mp;メル・カーネリアン！
ヴァリアステストロイトとディビウスホープレイが現れました。

メル「負けないよ、カノンちゃん！」

カノン「それはこちらの台詞だよ、メルちゃん！」

優香「（そう言えば、メルちゃんとカノンちゃんつて…キャラが微妙に被ってるわね…）」

メル「…優香さん？今失礼な事、考えていませんでした？」

優香「ぜ、全然！カノンちゃんは一人で大丈夫なの？」

カノン「弘樹さんがいなくとも…私は戦えます！」

優香「ふふ、そうね。よろしく頼むわね！」

弘樹「カノンー！応援してるぜー！」

零「優香とメルも頑張れよ！…イオリ、お前もメルに何か言つてやれよ」

イオリ「ええっ!?…ええつと…が、頑張つて、メルさん！」

メル「は、はい！頑張ります！」

ホープス「第3ー試合！こちらは月とスツポンの戦いです！憧れ対決！美しき百合の花、ヒルダVSセシリー・フェアチャイルド！」

テオドーラとビギナ・ギナが現れました。

セシリー「月とスツボンって一体何を言っているの…」

ヒルダ「…」

セシリー「ヒルダ…?」

ヒルダ「どうせ、あたしはスツボンだよ…。あんたやアンジュやアイーダ、ドラ姫は月でさ…。どんなに頑張ってもあたしは姫にはなれない…。このトーナメントに勝つて、エクスクロスで一番いい女になっても…」

セシリー「そんな事はないわ」

ヒルダ「気休めはよしてくれよ!」

セシリー「そうやって壁を作っている限り、あなたはあなたの望む何かにはなれないわ」

ヒルダ「え…」

セシリー「姫を姫たらしめているのはその人の心の中にある誇り…皇族である事を剥奪されてもアンジュが姫であり続けるのは、彼女の心の成せる業よ」

ヒルダ「じゃあ、あたしも姫になろうと思えば、なれるのか?」

セシリー「ええ…」

ヒルダ「でも、あたしなんかじゃ…」

セシリー「その弱い心に打ち勝った時、あなたもプリセスになるのよ」

ヒルダ「ありがとう、セシリー！あたし、やってみるよ！」

セシリー「応援するわ、ヒルダ。戦いは負けられないけど」

ヒルダ「しかし、意外だな…。セシリーが、ミス・エクスクロスに興味があるなんて

…」

セシリー「それは…」

シーブツク「頼んだよ、セシリー？君のクイーンに小遣い全部賭けたんだから！」

ヒルダ「…あんたのナイト…随分と俗っぽいな…」

セシリー「それでも、私の大切な人よ」

しんのすけ「ヒルダお姉さんも負けるなー!!？」

ヒルダ「ありがとうよ、しんのすけ！」

ホープス「第32試合！何かと気疲れをする苦労人対決！アルゼナルの美しき苦労

人、ナオミVS日向家の美しき苦労人、日向 夏美！」

ナオミさんのグレイブとパワード夏美さんが現れました。

夏美「確かに…ポケガエル達には毎回苦労しているわ…」

ナオミ「でも、嫌そうな顔はしていないよね、夏美って」

夏美「そういうナオミさんも嫌そうな顔はしていないじゃないですか！」

ナオミ「だって、みんなは…私の大切な仲間だから…」

夏美「ナオミさん……」

ナオミ「それよりも、負けないからね！」

夏美「私だって、負けません！」

冬樹「姉ちゃん！頑張れー！」

ギロロ「夏美ー！応援しているぞー！」

タママ「ナオつちも頑張るですー！」

ケロロ「ゲロゲロリ……これは楽しめそうですありませぬ！」

ホープス「第33試合ー！ついに来た、最強の鬼ライダーー！ベテラン対決！美しきブリュンヒルデ、織斑 千冬VS美しき地獄ガールズ、スカーレット・ヒビキ&amp;由木 翼！」

暮桜とウイングルが現れました。

スカーレット「千冬、お前と戦える時を楽しみにしていたぞ」

千冬「私もです、スカーレット大尉。私の腕がどこまで通じるか……試してみたかった
ので」

スカーレット「ふっ、少し手荒になるぞー！」

由木「(わ、私が入り込める隙がない……?)」

海道「行け行け！くそ女、由木！」

真上「由木大尉が空気になっっているがな」

一夏「負けるな、千冬姉！最強を見せてくれ！」

ホープス「第34試合！ここでは打って変って、可愛さ同士の勝負です！そして、綺麗な翼対決！美しき黒き翼、マドカVS美しき金の翼、新垣 ゼフィ&amp;mp;アスナ・ペリドット！」

私とアスナお姉ちゃんはゼフィルスネクサスで出撃するとマドカさんも黒騎士で出てきました。

マドカ「あのオウム…ふざけた事を…！私は可愛くなどない！」

ゼフィ「そんな事ないですよ、マドカさん。マドカさんは可愛いです」

マドカ「お前も私をからかっているのか、ゼフィ！」

ゼフィ「い、いえ…。だって、マドカはよくいうツンデレ…というものですよね？」

マドカ「な、何…?!?!？」

ゼフィ「え、違いました？」

マドカ「わ、私がツンデレなわけないだろう?!?!いいからやるぞ！」

ゼフィ「あれえ…？マドカさんはツンとデレているような気がします…」

マドカ「も、もういい！」

アスナ「(その表情がツンデレなのよ、マドカ…)」

一夏「行け！マドカ、応援しているぞ！」

マドカ「黙れ！お前に応援などされたくない！」

零「ゼファイ！無理はするなよ！俺がついてるからな……あ、後、アスナも頑張れよ」

ゼファイ「はい、パパ！」

アスナ「ちよつと！私はずいでつてわけ！？？」

零「冗談だって、しつかりゼファイのフォローを頼んだぞ、アスナ！」

アスナ「結局私の応援はないのね……」

ホープス「さあ：残るは最終試合のみ！こちらもある意味、因縁の対決です！魔法対決！美しき美少女聖騎士、プリティ・サリアンVS美しき魔法使い、アマリ・アクアマリン！」

クレオパトラとゼルガードが現れました。

イオリ「頑張れ、アマリさくん！」

零「行けえええつ！アマリイイツ！！？」

弘樹「うるせえよ！お前、本当にアマリの事となるとキャラ変わるよな！」

零「カノンに対してキャラが変わるてめえには言われたくねえよ」

弘樹「よ、余計な事言つてんじやねえ！」

やはり、パパはママの事を大切に思っているのですね！

それにしても…プリティ・サリアン…懐かしいですね…。

マサオ「プリティ・サリアン…？」

ネネ「何、それ…？サリアさんの名前を言い間違えたの？」

アキト「(ホープス…！余計な事を…！)」

九郎「着せ替えを思い出すな、零」

零「…ひっ…!!?や、やめてくださいよ、九郎さん！あれもうトラウマなんですから…！」

…あの光景は私も確認しましたが…パパの精神状態が危なかったですね…。

アマリ「え…え…と…サリアさん…？」

サリア「(聞こえる、アマリ…？あなたのドグマを私に貸して欲しいの。あなたのドグマで私を美少女聖騎士プリティ・サリアンに変身させて！)」

アマリ「(そ、それは前回、きっぱりと…とはいきませんでした、一応、断つたはずじゃ…)」

サリア「(だから、ホープスに頼んで、この組み合わせにしてもらったの！)」

アマリ「(わ、私は…ホープスにお願いされて出撃しただけで…)」

サリア「(あなたも女の子なら持つているでしょ！変身願望を！さあ、欲望を解き放つて！あなたと私でダブル変身を！)」

アマリ「(い、いやあ……)」

欲望を解き放つ……ハッピーバース……って、私は何を……!!?

それにしても……私も魔法少女になってみたいですよ……。

ホープス「そこまでです、サリア様。あなたの望みはマスターに勝利すれば叶えられます」

サリア「……ならば、この戦い……負けられない」

アマリ「ホープス！無責任じゃないの！」

ホープス「ですが、マスター……。ここで完全にサリア様に勝利すれば、流石にあの方も諦めるでしょう」

アマリ「でも……」

ホープス「大丈夫です、マスター。私の力で必ずマスターを優勝させます」

アマリ「ホープス……」

ホープス「それに万が一負けたとしても、零を巻き込めばいいのです」

零「お、俺を何に巻き込む気だよ、クソオウム……!!?」

ホープス「……楽しい楽しい、お着替えだ」

零「も、もう嫌だよ、俺は……!」

アマリ「れ、零君……！零君の為にも……負けられない！」

ホープス「では、皆様……。準備はよろしいでしょうか？」

アンジユ「……」

ヨーコ「……」

ユイ「……」

ラフタ「……」

ホープス「二回戦35試合は同時進行です！この対決に勝利した方が二回戦へ駒を進めます！では、ガールズ・ファイト！レディイイ……」

こ、攻撃……!!?

スカーレット「何……!!?」

ステラ「みんな！あれ、見て！」

ルーン・ゴレムがあんなに……！

ロザリー「魔徒教団の岩人形!!?」

クリス「結構、たくさんいるよ！」

ヒナ「どうします!!?本隊に応援を求めますか!!?」

千冬「その必要はない」

箒「ここには、これだけのメンバーが揃っている……」

夏美「あれくらいの数なら、やれます！」

エンネア「そういう事だよ、ホープス。余計な心配は必要ないって、本隊に伝えて！」
ホープス「かしこまりました」

ルー「そうと決まれば、覚悟を決める…！」

ラライヤ「頑張りましょう、皆さん！」

葵「いい気合いじゃない、みんな」

カズミ「伊達にエクスクロスで一番いい女を争っているわけじゃないですね」

シャルロット「もう！せつかくやる気になってたのにあのゴーレム…こっちの邪魔して！」

エル「こうなったら、この欲求不満は、あいつ等にぶつけてやる！」

サリア「みんな、準備はいい!?？」

セシリア「いつでも全エネルギー発射、完了いたしてますわよ！」

アイーダ「では、各機！突撃っ!!？」

今日はパパに変わり、私が言わせていただきます…戦闘開始です！

〈戦闘会話 リュクスVS初戦闘〉

リュクス「私が一番になれば、エイサップは褒めてくれるのでしょうか…？だとした

「ら、ここは勝つまでです！」

〈戦闘会話 ハマーンVS初戦闘〉

ハマーン「(一番いい女か…。ふつ、少し興味がある私がいる…。では、ミス・エクス
クロスの称号を取りに行きましょう!)」

〈戦闘会話 マリーダVS初戦闘〉

マリーダ「マスター、見ていてください。私は一番になってみせます！」

〈戦闘会話 ルナマリアVS初戦闘〉

ルナマリア「ミス・エクスクロスか…。まあ、私はシンの一番でいいんだけどね。で
も、やっぱり女としては狙いたいわね！」

〈戦闘会話 ステラVS初戦闘〉

ステラ「私が一番になるときつとシンが褒めてくれる！だから、頑張る！」

〈戦闘会話 アニューVS初戦闘〉

アニュー「一番いい女か…。いつまでもライルにそう言ってもらうためにもっと女を磨かないと…。！今回のミス・エクスクロスをその練習として戦うわ！」

〈戦闘会話 シヤナルアVS初戦闘〉

シヤナルア「やっぱり、女はいつになつても一番になりたいんだね。それなら、私も頑張つてみるか！」

〈戦闘会話 ジラードVS初戦闘〉

ジラード「いい女というのには興味がないけど、やっぱり一番って言葉には興味があるわね。よし、一番を勝ち取つてみましょうか！」

〈戦闘会話 フラムVS初戦闘〉

フラム「(いい女…。それになつたら、ゼハート様も…振り向いてくれるのかな…?)」

〈戦闘会話 ラフタVS初戦闘〉

ラフタ「そろそろ姐さんに見せてあげるよ！私が変わった所を！」

〈戦闘会話 アミダVS初戦闘〉

アミダ「何度でも見せてあげるよ、ラフタ！年上の力量って奴をね！」

〈戦闘会話 スカーレットVS初戦闘〉

由木「それにしても意外でした、スカーレット大尉がミス・エクスクロスに興味があったなんて……」

スカーレット「……まあ、どちらかというところの場合だったら、いい女よりも強い女の方がいいのだから」

由木「……スカーレット大尉はスカーレット大尉でしたね！それではいきましょう！」

〈戦闘会話 葵VS初戦闘〉

エイーダ「ジョニーさん！援護お願いします！」

くらら「朔哉も力を貸しなさいよ！」

葵「じゃあ、私達五人で一番を勝ち取りましょうか！」

〈戦闘会話 エンネアVS初戦闘〉

エンネア「一番になったら……九郎をとつ捕まえて、あんな事やこんな事を出来るね！」

…楽しみになつてきた！」

〈戦闘会話　プリシラVS初戦闘〉

プリシラ「ヨロイバトルのチャンピオンの称号の次はミス・エクスクロスの称号も取っちゃおつか！そして、ヴァンに告白するんだ！」

〈戦闘会話　メリッサVS初戦闘〉

メリッサ「前は同志の為に戦ってきたけど…今はたくさんの人のために戦ってる…。シンに褒めてもらうために頑張る…！」

〈戦闘会話　ミコノorゼシカorMIXorユノHorサザンカorクレアVS初戦闘〉

ユノハ「理事長もこの戦いには興味があつたんですね」

サザンカ「少し意外でした！」

クレア「私も女です。いい女と言われて嫌な気はしません」

ゼシカ「じゃあ、私達が一番になるために頑張ろう！」

MIX「6人もいれば、絶対に勝てるわ！」

ミコノ「行くこう、みんな！ 私達の事を愛してくれている人達の為にも！」

〈戦闘会話 ノリコVS初戦闘〉

カズミ「ノリコ、よろしくて？」

ノリコ「はい！ 私とお姉様の二人が揃えば、怖い敵なんていません！そして、必ずミス・エクスクロスの座を勝ち取ってみせます！」

〈戦闘会話 コーネリアVS初戦闘〉

コーネリア「このエクスクロスのメンバーで競い合う事になろうとはな。行くぞ、ギルフオード、ダールトン！」

〈戦闘会話 ナオミVS初戦闘〉

ナオミ「…もしかして、一番になったら借金免除とかには…なるわけないか！ まあ、一番目指して頑張るぞ！」

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

レナ「ユイも一番になりたいんだね」

ユイ「一番というか……。少しでも強くなって、みんなを守りたいから……」
レナ「ユイ……。私もユイを手伝うわ」

ユイ「ありがとう、お姉ちゃん！行こう、二人で！」

〈戦闘会話 サラVS初戦闘〉

ティア「一番になって、美味しいものいっぱい作ってもらおうよ、サラ！」

サラ「いいね、それ！零や一夏辺りなら、聞いてくれそうだから、これが終わったら頼んでみようよ！」

〈戦闘会話 イングリッドVS初戦闘〉

ケイ「私、頑張つて、イングリッドを一番にするから」

イングリッド「ありがとう、ケイ。でも、私とあなたが揃って、ミス・エクスクロスの称号を手に入れないと意味がないわ。だから、二人で手に入れましょう！」

〈戦闘会話 ジャンヌVS初戦闘〉

ジャンヌ「ミス・エクスクロス……！誰にも譲らないわ……！私には見えてる……私が勝利する未来を！」

〈戦闘会話 夏美VS初戦闘〉

夏美「たまにはこういうので息を抜いてもいいかもね…。今の私は負ける気がしないわ！」

〈戦闘会話 リョーコVS初戦闘〉

ヒカル「合わせていくよ、二人共！」

イズミ「トリオを組むトリオ君…ふふふっ！」

リョーコ「なら、行かぜ、二人共！あたし等の力を見せてやるぜ！」

〈戦闘会話 クランVS初戦闘〉

クラン「これに勝利して、ミシエルの奴をあつと言わせてやる！手伝ってくれるか、ラミア、ネネ「F」？」

ラミア「当然、手を貸します」

ネネ「F」「いきましよう、お姉様！」

クラン「うむ、では…攻撃開始だ！」

〈戦闘会話〉 カナリアVS初戦闘〉

カナリア「来い！母親の手本というものを見せてやる！」

〈戦闘会話〉 アイシャVS初戦闘〉

アイシャ「私は天才美少女！自称なんかじゃないわ！それを証明してあげるわ！」

〈戦闘会話〉 ミーナ「30」VS初戦闘〉

ミーナ「30」「リオンに認めてもらうため…私も頑張ります！」

〈戦闘会話〉 ジャンボットVS初戦闘〉

エメラナ「少しでも姫として強くなるため…相手になってもらいます！」

〈戦闘会話〉 箒VS初戦闘〉

箒「行くぞ！エクスクロスの女だけではない…。私は一夏の一番になってみせる
！」

〈戦闘会話〉 セシリアVS初戦闘〉

セシリア「一番はわたくしがとってみせますわ！そして、一夏に褒めて貰えば……。ふふ、高ぶってきましたわ！」

〈戦闘会話 鈴VS初戦闘〉

鈴「さーてと、やるわよ！絶対に一位になって、みんなを見返してやるんだから！」

〈戦闘会話 シャルロットVS初戦闘〉

シャルロット「エクスクロスで一番いい女を決める大会……。こんな大会に出られるのも一夏のおかげだね……。一夏に振り向いてもらうために僕も戦うよ！」

〈戦闘会話 ラウラVS初戦闘〉

ラウラ「一夏は私の嫁だ……。誰にも渡さん……。！」

〈戦闘会話 簪VS初戦闘〉

簪「弱い私はもういない……。もう誰にも負けない！お姉ちゃんも越える……。！」

〈戦闘会話 楯無VS初戦闘〉

楯無「簪ちゃんに越えられるわけにはいかないわね…。姉として…学園最強として…負けるわけにはいかないのよ！」

〈戦闘会話 千冬VS初戦闘〉

千冬「(ここ)で一番の称号を取っておかなければ、元の世界へ戻ってしまえば、また出会いを逃してしまうかもしれない…。私は、年増扱いされるわけにはいかないんだ！」

〈戦闘会話 マドカVS初戦闘〉

マドカ「どいつもこいつも…私はツンデレなどではない…！それを証明してやる…！」

〈戦闘会話 サヤVS初戦闘〉

サヤ「アーニー、少佐…。見ていてください…。私が一人前になったところを…！」

〈戦闘会話 アユルVS初戦闘〉

アユル「(ジン、お母様…。私はまだまだ強くなっています…。必ず…！)」

〈戦闘会話　ゼフィVS初戦闘〉

ゼフィ「メインの操縦はいつもパパがやっていたが…難しいものですね…！」
アスナ「無理はせずにいつも通りいきましよう、ゼフィ。私がサポートするわ！」
ゼフィ「ありがとうございます、アスナお姉ちゃん！二人で一位を勝ち取りましよう！」

〈戦闘会話　カノンVS初戦闘〉

カノン「二人ではないです！私にはいつでも弘樹さんがついていてます…！ですから、負けません！」

〈戦闘会話　優香VS初戦闘〉

優香「いきましよう、メルちゃん！私達の魅力を全開にして勝負をつけるわよ！」
メル「み、魅力って…。私にそこまでの魅力は…」
優香「ううん！メルちゃんは十分に可愛いから！」
メル「も、もう…！早く、始めますよ！」
優香「ええ！一番いい女の座は私達が手にするわ！」

〈戦闘会話　マリアVS初戦闘〉

マリア「見せてあげるわ！母親の…そして、年上の威厳というものをね！」

私達は全ての敵を倒しました。

ヒルダ「楽勝だったな！」

ジル「当然だな。これだけのメンバーなのだから」

アーニャ「これでお互いに戦ったら…」

イングリッド「冗談にならない事態になったかもしれないわね」

ホープス「では、皆さん…。ミス・エクスクロスの方はいかがいたしますか？」

ノイン「もういいだろう」

マールベル「考えてみれば、あれつて些細な事から始まったイライラを解消するための手段だったし…」

リュクス「頑張つて戦えば、そのようなものは吹っ飛んでしまいました」

サラ「思い切り身体を動かしたから、お腹はすいたけどね」

千冬「では、零と一夏が作った料理で昼食にするか」

エルシャ「その後、お茶会でもしましょうか」

さやか「その方が女子らしいしね」

アイーダ「では、本隊へ帰還しましょう」

ゼファイ「はい！パパに今回の事を報告して、褒めてもらいます！」

アスナ「…涙は流さないでしょうね、零の奴…」

メル「流石にそこまではいかないと思いますけど…」

カノン「わ、私も弘樹さんに褒めてもらいたいです…」

優香「心の声が漏れてるわよ、カノンちゃん…」

アマリ「ホープス…」

ホープス「何でしょうか、マスター？」

アマリ「あのゴーレム…あなたが用意したものでしょ？」

ホープス「さて、何の事やら…」

アマリ「もしかして、フラストレーションを発散させるためにミスコンなんて方法を

思いついたの？」

ホープス「さて、何の事やら…」

アマリ「いいわ。今回はホープスの思惑通りで一件落着だから。ありがとう、ホープス」

ホープス「いい笑顔です、マスター。やはり、私にとってミス・エクスクロスはマスター以外ありえません」

：聞かなかった事にしましょうか…。

私達は本隊に帰還しました。

ゼファイ「パパ！」

零「よく頑張ったな、ゼファイ！偉いぞ！」

ゼファイ「えへへっ！」

パパに頭を撫でられました！嬉しいです！

零「アマリもお疲れ様」

アマリ「も、もう！私はいって…！」

私を撫でている方とは反対の手でママの頭を撫でるなんて…パパって器用ですね。

優香「私も頑張ったんだけど…」

零「優香も強くなったじゃねえか」

アスナ「…」

零「アスナ、ほれ」

アスナ「え…」

パパがアスナお姉ちゃんに向けて右手で拳を作り、突き出しました。

零「ゼファイのフォローをしてくれて、ありがとな！」

アスナ「零…。うん、当然でしょ？ゼファイは私の妹でもあるんだから」

アスナお姉ちゃんは。パパと拳をぶつけ合いました。

弘樹「頑張ったな、カノン！」

カノン「あ、頭をぼんぼんしないでください！」

弘樹「満更でもない顔してんじやねえか」

カノン「も、もう！」

メル「…」

イオリ「メルさん」

メル「はい…？あ…」

イオリお兄さんが…メルお姉ちゃんの頭を撫でました…!?レアです！珍しいです

！

イオリ「お疲れ様、よく頑張ったね」

メル「あ…え…ふ、ふあい！ありがとうごさいます…！」

イオリ「あはは！どうして囁んでいるんだよ」

メル「あ、あうう…」

照れているメルお姉ちゃん…。可愛いです…。

ホープス「ふう…」

アマリ「お疲れ様、ホープス。見事だったわよ」

ホープス「お褒めに預かり光栄です、マスター。実際、私に言わせれば、ミス・エクスクロスコンテスタトなど茶番以外の何物でもありませんけどね。なぜなら、ミス・エクスクロスに相応しいのは……」

零「バ、バカ鳥！それ以上言うな！」

ホープス「え……」

カレン「ふうん、ホープス……」

ジャンヌ「アマリと比べたら、私達は雑魚って事？」

ホープス「い、いえ……そういうわけでは……」

千冬「迂闊だったな、ホープス」

スカレット「今回はお前に乗せられてやったが、それを理解せずに、そういう態度を取るといふのならこちらにも考えがあるぞ」

ホープス「考え……とおっしゃられますと？」

由木「聞いたら、生まれてきた事を後悔するかも知れないわよ」

零「みんな！落ち着いてくれ！」

アマリ「そ、そうです！ホープスは、そんなつもりで言ったんじゃ……！」

セシリー「はいはい、マスターは私達と一緒にあっちに行つてみましょうね」

アイーダ「アンジュ……。後の事は、あなたに任せます」

ママが連れていかれてしまいました…。

そ、それよりも皆さんの顔が怖いです…。

ホープス「あ…あ…マスター…」

零「ア、アマリ！み、みんな！本当に落ち着いてくれ！気持ちはわかる！でも、ここにはゼファイもいるんだぞ！」

ケイ「そんな事はわかつているわ」

零「え…」

葵「零、あなたにもここへ残ってもらおうわよ」

零「ええっ!!? 何で…!!?」

ユイ「零さんにはアマリさん以外の一番を決めてもらいます」

零「はあっ!!? 何だよ、それ!!?」

ゼファイ「パ、パパ…!」

レナ「ゼファイ、零はちよつとみんなとお話があるから、あっちに行こうか」

私はレナさんに引つ張られてしまいました…。

―新垣 零だ。

何で俺まで巻き込まれるんだよ……!!?

てか、ゼファイまで連れていかれちまったし……!

零「ゼ、ゼファイ……!」

イングリッド「さあ、始めましょうか、零、ホープス」

ミック「せっかくだから、楽しもうじゃないか」

楯無「嬉しいでしょ? こんなに美人に囲まれて」

優香「まあ、二人にすればアマリには負けるかも知れないけどね」

ジル「さて……長い夜になりそうだよ」

ノイン「時間がかかりそうだから、エレクトラ副長やルリ艦長にも参加を願おう」

箒「どうせなら、一夏も呼ぶか」

鈴「ふふふ……それはいいわね……!」

C・C「嬉しいだろう、二人共?」

ホープス「あの……出来れば、お手柔らかに……」

アンジュ「やだ」

零「じ、慈悲は……?」

アスナ「ない」

優香「覚悟してね」

零「ひ、弘樹、イオリ！助けろ！」

カノン「弘樹さんとイオリさんなら、やる事を思い出したみたいで、既にいませんよ」

零「あ、あいつ等アアアアアツ!!？」

ホープス「(さようなら、マスター…。あなたの笑顔を…私は忘れません…。さようなら、アル・ワース…。もうすぐ世界は終わります…。)」

ホープスが完全に諦めてるな…。こうなったら…!

零「に、逃げるぞ、ホープス！このままじゃ、俺達の生命が危うい…!」

ホープス「れ、零…」

俺はホープスの羽を掴み、そのまま逃げようとするが…。

サリア「逃すと…」

ヒルダ「思っているのかい？」

サリアとヒルダに回り込まれた…!!?

簪「零さん…往生際が悪い…!」

あ、IS組はISを纏ってやがる…!

セシリア「さあ、楽しみましょうか！お二方！」

ホープス「零…すまない。私がバカな発言をしたばかりに…」

零「お前は悪くねえよ…。俺達の…自業自得…だ…」

アマリ、ゼファイ……。幸せに……生きろよ……！

クロスオーバーシナリオ2 悪魔のドラゴンライダー

「ああの時の事を俺達、エクスクロスは忘れない…。俺達の覚悟を知る為に戦いを挑んだあいつの事を…。」

クロスオーバーシナリオ2 悪魔のドラゴンライダー

「新垣 零だ。」

「一時的だが、アンチスパイラルの軍勢を退けた俺達はアル・ワースに戻り、それぞれ
の班に分かれて、偵察をしていた…。」

メンバーはゼフィールスネクス、ヴァリアスデストロイ、ゼルガード、メサイア、ヴィ
ルキス、焰龍號、H i i r r ガンダム、白式、サイバスター、ウルトラマンゼロだった。

メル「このエリアの偵察も問題ないようですね」

マサキ「そうみたいだな」

アムロ「では、艦へ戻るぞ」

一夏「了解です！」

アンジュ「早く帰って、シャワーを浴びたいわ」

サラマンディーネ「アンジュ、もう少し緊張感を持ちなさい」

アンジュ「あのね、サラ子。敵もいないんじや緊張感も何もないでしょ」

弘樹「そうだけ、龍姫様。あまり、気負いすぎると疲れるぜ？」

零「お前の場合にはリラックスしすぎだがな」

アスナ「油断して、ボコボコにやられるのが、弘樹だからね」

カノン「そこは注意してくださいね、弘樹さん！」

弘樹「わ、わかったよ……！」

イオリ「カノンの言葉には従うんだな」

アムロ「……」

ゼロ「どうしたんだ、アムロ？」

アムロ「こうやって、若い世代の子供達が次の世代にバトンを渡すのだなと思っ

たんだ」

ゼロ「以外にジジくさい事言うんだな、あんたは」

アムロ「それ程、俺も歳をとったと言う事か。ゼロもそうだろうか？」

ゼロ「悪いな、アムロ。俺は人間の歳で例えると18歳ぐらいだ」

アンジユ「え、そうなの!!？」

マサキ「ウルトラマンの高校生ぐらいなのか…」

アマリ「私や零君達と同じ歳だったなんて…」

ゼロ「つてそんなに若いんだな…」

つ…！この感覚は…！

零「みんな、来るぞ！」

現れたのはガルド部隊とナイトメア・ゼフィールスだった。

ラゴウ「奇遇だな、エクスクロス。この様な場所で会うとはな」

零「ラゴウか…！」

マサキ「オニキスの奴等とかち合うとはな」

ラゴウ「だが、エクスクロスは関係ない！零、勝負だ！」

零「俺を狙うしつこきは変わらねえみたいだな、ラゴウ！いいぜ、相手をしてやる！」

アムロ「ラゴウ・カルセドニーは零達に任せて、俺達は他の部隊の相手をするぞ！」

弘樹「行くぜ、オニキス！ぶっ飛ばしてやるぜ！」

俺達は戦闘を開始した…。

戦闘から数分後の事だった…。

ラゴウ「やはり、お前は俺の脅威となる男だな、零！」

零「お前にそう何度も付き合ってられねえんだよ！」

ラゴウ「そう言うな、まだ終わるわけにはいかない！」

零「なら、いやでも終わらしてやる！」

ゼフィルスネクサスとナイトメア・ゼフィルスは攻撃をぶつけ合おうとしたその時…
二機の機体の間に青色の影が現れる。

零「な、何だ…?!?!」

ラゴウ「何者だ…?!?!」

? 「名乗る必要はないが、言わせてもらおうか、仮面ライダーアルビオンだ」

か、仮面ライダーだと…?!?!

マサキ「仮面ライダーだと…?!?!」

アマリ「一誠さんと同じという事ですか…?!?!」

仮面ライダーアルビオン「まあ、そんなもんだぜ。とりあえず…邪魔だ」

仮面ライダーアルビオンと名乗る仮面ライダーはガラム部隊を一撃で壊滅させた。

イオリ「う、嘘だろ!?!」

メル「一撃でガラム部隊を壊滅させるとは…!」

仮面ライダーアルビオン「こんなもんは朝飯までだ」

ラゴウ「俺の邪魔をすると言うのか…!」

仮面ライダーアルビオン「うるせえ、三流以下は引っ込んでろ」

ラゴウ「俺が…三流だと…!?!? 貴様あああつ!!?!」

ナイトメアは仮面ライダーアルビオンに攻撃を仕掛けたが、それを仮面ライダーアルビオンは片手で受け止め…。

仮面ライダーアルビオン「お返しだ!」

カウンター攻撃を浴びせ、ナイトメアに大ダメージを与える。

ラゴウ「グアアアアッ! や、奴の力は何だ…!」

仮面ライダーアルビオン「お前には用はねえ、消えろ」

ラゴウ「くっ…!」

ナイトメアは撤退した…。

あのラゴウを一撃で…。

仮面ライダーアルビオン「何だよ、つまらねえな…。さてと、エクスクロスさんよ、次はお前等の番だ」

何…!!??

弘樹「やるってのかよ！」

アムロ「奴の力は未知数だ、気をつける！」

仮面ライダーアルビオン「アムロ・レイ、いい心がけだ。だがな…」

アムロ「！」

仮面ライダーアルビオン「ニュータイプでも隙は見せるんだな」

仮面ライダーアルビオンはゼフィールスネクサス以外の機体とゼロを戦闘不能にさせ、

ゼロは人間態に戻る。

ゼロ「ぐっ…！」

アマリ「そ、そんな…！」

零「みんな…！」

仮面ライダーアルビオン「後はお前だな」

零「ふざけるな！お前は許すわけにはいかねえ！」

ゼフィールスネクサスは攻撃を仕掛けた…。

零「一誠と同じ仮面ライダーだろうが、許すわけにはいかねえ！クロスソードで…！」

ゼフィールスネクサスはクロスソードで攻撃を仕掛けたが、仮面ライダーアルビオンに

避けられた。

仮面ライダーアルビオン「遅い。この程度か？」

今度は仮面ライダーアルビオンがゼフィルスネクサスに攻撃を仕掛けた…。

仮面ライダーアルビオン「お前の覚悟を見せてみるよ。終わりだ、消えろ」

ゼフィルスネクサスは仮面ライダーアルビオンに斬り裂かれた。

零「うわあああああつ!!？」

ゼフィルスネクサスは大ダメージを受ける。

零「グアツ…！」

仮面ライダーアルビオン「それが今のお前の限界だ」

零「クソツ…！」

俺とアスナは気を失ってしまう…。

ーアマリ・アクアマリンです。

ゼフィルスネクサスがダメージを受けて、動けなくなってしまうなんて…！

仮面ライダーアルビオン「所詮はこの程度か」

すると、マジンカイザーとマジンエンペラーGが現れました。

甲児「大丈夫か、みんな!?!？」

鉄也「遅れてすまない！ここからは俺達が相手をする！」

仮面ライダーアルビオン「マジンガーか…。じゃあ、俺はここら辺で失礼するぜ。また会おうな」

そう言い残すと仮面ライダーアルビオンはジャンプで飛び去ってしまいました…。

その後、私達は帰還し、零君とアスナさんは目を覚まし、他の皆さんに仮面ライダーアルビオンについて話し合いました…。

―新垣 零だ。

俺は仮面ライダーアルビオンの攻撃を受けて、アスナと共に気を失っていたようだ…。

目を覚まし、俺達を倒し、甲児や鉄也さんが増援に来た所で飛び去ってしまったと聞いた。

舞人「仮面ライダーアルビオンか…」

一夏「姿には仮面ライダードライグに似ていたけど、全くの別人だったよ」

アムロ「何より、あの強さは驚愕に値するものだった。あの余裕の態度が何より恐怖によるものだ」

シヤア「お前を恐怖させるとはな」

零「恐らくだけど、あいつはまだ本気を出していないと思うんだ」

アスナ「私もそれは感じたわ」

弘樹「何でそんな事がわかるんだよ？」

零「あいつは本気を出せば、ゼフィルスネクサスを跡形もなく消し飛ばせる程の力を持っていた…それなのになかった…。あいつにはまだ何かある…」

？「へえ、様子を見に来たけど、お前、なかなかいい感じしているな」

突然の声に俺達は振り向くとそこにはイストワールに似た者がいた。

キオ「イストワール!?？」

クロワール「おい、あんなポンコツと一緒にするんじゃないやねえよ。俺はクロワール。まあ、よろしくな」

フリット「クロワール…だと？」

クロワール「簡単に言うとお前達の知るポンコツと一緒にドラゴンライダーをサポートする人工生命体だ。あいつの後輩でもある」

ホープス「ほう、自らの先輩をポンコツ呼ばわりとは…」

クロワール「うるせえ黙れよ、焼き鳥クソオウム」

零「クロワール、お前は仮面ライダーアルピオンの仲間なのか？」

クロワール「そうと言えばどうするんだ？」

零「教えてくれ、あいつがどうして俺達を攻撃するのか」

クロワール「残念だが、それはトップシークレットだ」

青葉「なんか、生意気な奴だな！」

デイオ「落ち着け、青葉」

アマリ「それなら、クロワールさん。仮面ライダーアルビオンはどうして、仮面ライダードライブと似ているんですか？」

メル「仮面ライダーアルビオンは仮面ライダードライブと同じ、仮面ライダーであり、ドラゴンライダーだから、ですか？」

クロワール「当然だろ？知らねえのかよ」

弘樹「知るわけねえだろうが、このクソチビ！」

クロワール「うるせえ、脳筋バカ。プロテインでも飲んでろ」

弘樹「俺は筋肉質じゃねえっての！」

クロワール「ドラゴンライダーつてのは、イレギュラーを狩るイレギュラー竜騎士だ。

別世界や住人のどちらかドラゴンライダーに接触すると能力や力、技を身に付け取得出来る」

零「それがドラゴンライダーか…」

クロワール「さらに、今のドラゴンライダーは仮面ライダーやスーパー戦隊、ウルトラマン、勇者ロボの力以外に戦闘民族サイヤ人、チャクラの忍術、覇気、悪魔の実の能力者、死神の力、超人のヒーロー、人間を護り伝説となった悪魔、戦姫の装者、神樹に選ばれた勇者、最強の分解と再成の魔法師もある」

ゼロ「ウルトラマンの力まで…」

フロンタル「ならば、仮面ライダーアルピオンはどこから来た？」

クロワール「何言ってるんだよ、お前等なら、一度似た奴にあっているだろう？」

アスナ「一誠の事ね…」

クロワール「言っておいてやるぜ、エクスクロス。お前等じゃ、仮面ライダーアルピオンには勝てねえよ」

零「勝るとか勝てねえとか、やってみなくちゃわからねえだろ」

クロワール「はあっ？」

零「勝てないから、はいそうですかって、退けねえって言っているんだよ！例え、どんな絶望にぶち当たっても、俺達は負けねえ！」

クロワール「お前…甘いな」

零「…」

クロワール「まあ、いい。俺はここら辺でお暇させてもらう、また会おうぜ」

アンジュ「待ちなさい、まだ話は終わっていないわよ！」

アンジュがクロワールを捕まえようとしたが、クロワールは消えた…。

アンジュ「あー！逃げられた！」

タスク「化け物じみた力を持つ仮面ライダーアルビオンか…」

クリス「そんな敵に勝てるの…?!?!」

ロザリー「今までどんな敵も倒してきたけど、流石にこれは…」

零「弱気になるなよ、みんな！それでも俺達は勝ってきたじゃねえかよ！」

サリア「だから、どうとでもなるって言いたいのか？」

ヒルダ「零、お前はあいつに勝てる算段はあるのかよ？」

零「そ、それは…」

ジル「気合と根性だけで、どうにかなる敵じゃないぞ」

零「…」

くそツ…！俺自身が不安がって、どうするんだよ…！

その後、夜になり俺は自室にいた…。

零「…」

もし次に仮面ライダーアルビオンが襲って来たら…俺は勝てるのか…？

零「…だめだ、ダメだ！勝てるのかじゃない！勝つんだ！そうじゃないと、アル・ワー

スは守れないんだ！」

すると、アマリが部屋に入ってきた…。

アマリ「零君…」

零「アマリ…」

アマリ「浮かない顔をしていたから、心配になってきたの…。大丈夫？」

零「…だ、大丈夫に決まっているだろ！全く…アマリは心配性だな！」

強がりながら、そう言った瞬間、アマリが勢い良く抱きついてきて、俺はベッドに押し倒される。

零「っ…！何するんだよ!?？」

アマリ「みんなを勇気付ける為に強がっているのは丸わかりよ、零君！私と二人っきりの時ぐらい、強がるのはやめてよ！」

零「アマリ…」

アマリ「私は零君を助きたい！だから、怖いなら…私の前だけでもいい！弱気になつてよ！自分の中に溜め込まないでよ！」

零「…悪い、アマリ」

アマリ「もう、変な所で不器用なんだから…。明日も早いし、寝ましよう」

零「…ああ」

アマリ「怖いなら、一緒に寝る？」

零「：お、お前って、そんな積極的だったか？」

アマリ「ふふつ、準備は出来ているわよ」

零「何のだよ!!？」

この後、俺達は一夜を過ごした…。

翌日、俺達は救難信号を探知し、俺はその場所まで向かう。

そこには一人の青年がいた。

零「あんたか、救難信号を出したのは？」

？「ああ、そうだ。信号は無事に届いたようだ。この姿で会うのは初めてだな、新

垣 零」

零「どうして、俺の名前を…!!？」

ヴァーリ「俺の名はヴァーリ・R・スパードだ。またの名を…」

すると、ヴァーリという男は仮面ライダーアルビオンに変身した。

零「仮面ライダー…アルビオン…!!？」

仮面ライダーアルビオン「昨日ぶりだな、新垣 零」

零「俺達を誘き出す罠だったのか…！」

すると、今度はレッドに似たバイクが現れる。

仮面ライダーアルビオン「ホワイト、辺りの偵察を頼む」

ホワイト「了解した」

ホワイトと呼ばれるバイクはロボモードになり、飛び去ってしまう。

仮面ライダーアルビオン「さて、第2ラウンドと開始といくか!」

アルビオンが手を上に上げると、モビルスーツのジエガンに似た無人の機体を複数召喚した。

零「ジエガン…いや、違う!」

仮面ライダーアルビオン「お前等にはこいつ等の相手をしてもらうぜ」

巨大化、鋼鉄化、マッスル化のエナジーアイテムを召喚したジエガン達に上げ、巨大化させた。

すると、エクスクロスの戦艦が来て、みんなが出撃した…。

アマリ「零君、大丈夫!?」

一夏「あそこにいるのは…!」

マサキ「仮面ライダーアルビオンか…!」

仮面ライダーアルビオン「エクスクロスも来たようだな。新垣 零、機体に乗れ。お前をぶっ倒してやる」

零「…簡単に倒されるつもりはねえ!」

俺はゼフィールスネクサスに乗った。

アムロ「あれは、ジエガンか!?!」

ジユドー「でも、少し違うぜ!」

仮面ライダーアルビオン「本当に似ているんだな。そのジエガンはモビルスーツではなく、コンバットフレームと呼ばれるパワードスーツだ」

アセム「パワードスーツだと…?!?!」

九郎「それでも相当な力があるみたいだ!」

仮面ライダーアルビオン「さて、お前等で勝てるかな?」

零「舐めるなよ、仮面ライダーアルビオン!俺達は絶対に負けない!」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「俺は…俺達は負けるわけにはいかないんだ!こいつ等を倒して、仮面ライダーアルビオンの野郎をあぶりだしてやる!」

アスナ「(零、気負いすぎよ…。あなたに何があったの…?)」

〈戦闘会話 アマリVS初戦闘〉

ホープス「昨晚は零とお楽しみだったようですね、マスター」

アマリ「…」

イオリ「アマリさん…」

アマリ「(このままやつても私達では勝てません…。零君が無理をしなければいいです。が…)」

俺達は少しずつだが、ジエガンを倒していく。

クロワール「へえ、口だけの事はあるな」

アルビオン「それでも、あの程度で手こずっている様では意味はないわ」

仮面ライダーアルビオン「相変わらず厳しいな、アルビオンは」

アルビオン「別に当たり前の事を言っているだけよ」

仮面ライダーアルビオン「さてと…俺も出るか」

クロワール「これで全てが決まるな」

仮面ライダーアルビオン「ああ、そうだな」

仮面ライダーアルビオンが出てきたか…！

仮面ライダーアルビオン「さて、エクスクロス。俺が直々に相手をしてやる」

タママ「このーっ！上から目線で腹がたつです！」

ギロロ「だが、ついに奴が出てきたか！」

ドロロ「ここで奴を討つでござる！」

零「…」

アスナ「零、ブーツとしないで！行くわよ！」

零「あ、ああ…」

せ、戦闘…再開だ…！

〈戦闘会話 零VS仮面ライダーアルビオン〉

仮面ライダーアルビオン「クロワールから聞いたぜ。俺を倒すんだよな？」

零「ああ！アル・ワースを危険に晒すと言うのなら、お前を倒す！」

仮面ライダーアルビオン「少なくとも今のお前じゃ無理だな」

零「なんだと…!?？」

仮面ライダーアルビオン「いくぜ、俺の力を見な！」

俺達は仮面ライダーアルビオンに少しダメージを与えた…。

仮面ライダーアルビオン「俺に少しでもダメージを与えとはな、流石はこのアル・ワースで戦い抜いてきた事はある。だったら、少し俺も本気を出してやる」

突然、仮面ライダーアルビオンが力を込めると、仮面ライダーアルビオンの姿が龍と魔人が混ざった様な姿になり、さらに髪の毛が青色になる。

ワタル「な、何なの、あの姿!!?」

アキト「まるで龍の魔人だ…!」

魔人アルビオン「ご名答。俺の今の姿は魔人アルビオン…。デビルトリガーとスーパーサイヤ人ブルーの力を使った姿だ」

カノン「まだ、あれだけの力を…!」

魔人アルビオン「さあ、どんどんいくとするか!」

こいつ…どれ程の力をまだ、隠し持っているんだ…!!?

戦闘再開だ!

魔人アルビオンの攻撃に苦戦する俺達…。

魔人アルビオン「おいおい、これで終わりなのか?」

零「まだだ…まだ、戦える!」

魔人アルビオン「なあ、新垣 零…。お前は何のために戦うんだ?」

零 「俺は大切なものを守って、アル・ワースを平和にする！その為に全ての戦いを終わらせるんだ！」

魔人アルビオン 「本当にそれで終わると思ってるのか？」

零 「何…?!？」

魔人アルビオン 「どれだけ戦いを終わらせ、平和にしても、俺達のような存在が居る限り…消えはしないさ」

バナージ 「何故、そんな事がわかるんですか?!？」

クロワール 「平和になっても、地球やこの世界、全ての世界や星に居る人間。同じ物語を繰り返す事しかない存在だからな。人間は必ず同じ過ちを繰り返すんだよ」

同じ…過ちを…！

魔人アルビオン 「時が経てば、必ずオニキスのハデスやエンブリヲ、ミケーネ、キャピタル・ガードのグンパ、ドアクダー、ゾギリアのヴィルヘルム、そしてネオ・アトランティスのガーゴイルみたいな人間は必ず現れる。どんなに望んでなくともな…。それにより強い力は同じ力に引き寄せられる。俺やお前達の様にな」

ゴカイレッド 「俺達の力が…悪を呼び寄せているとも言いたいのか！」

魔人アルビオン 「どんなに悪党悪党をたおして、平和にしても時が経てば必ず現れ繰り返す、より強い力を持つ者は何でも引き寄せてしまう。終わる事も無い物語なんだ

よ。お前達のやっつけている事は」

ワタル「じゃあ、僕達の戦いって意味はないの…?」

しんのすけ「そんな…」

ヒイロ「…」

刹那「…」

俺達の戦いに…意味は、ない…?」

零「だったら…俺は…俺達は何の為に…!」

ユイ「そんなのって…」

魔人アルビオン「(やはり、この程度か…)はあ…もういい。俺が書き換えた運命のシ

ナリオは、いよいよ終幕だな」

魔人アルビオンはゼフィルスネクサスに必殺技を放とうとする。

終わりかよ…。でも、終わらない戦いに身を投じるより、いいかもしれないな。

一誠「何諦めているんだよ、零!」

一誠「…?」

突然、俺の精神世界に一誠の幻影が現れた。

零「一誠…!」

一誠「絶望しかけるなんて、お前らしくねえぞ、零!」

零「一誠…。仮面ライダーアルビオンが言っていた事は本当なのか？俺達の戦いは…何の意味もなかったのか？！」

一誠「…意味はあるとかないとかじゃない、大事なものは戦うと決めた切っ掛けだ！」
零「戦うと決めた切っ掛け…？」

一誠「俺が仮面ライダーになったのは、単に友達を傷付けようとした奴を許せなかった。最初はそんな小さい切っ掛けだった。だが、その小さい切っ掛けがその内大きくなり、色んな人と出会い、そして教えられた。どんな事が起きようと、自分が戦った切っ掛けを忘れるな！何より俺には護るべき家族や仲間、友達が居たからこそ、これまで仮面ライダーとして戦ってこれた」

護るべき家族や仲間…。

一誠「お前にもいるんだろう？大切な…護るべき仲間や家族が」

零「ああ…！」

最後に「お前の運命のシナリオは簡単に書き換えられないものだろ？お前の運命のシナリオはお前が書くんだ！信じてるぜ！」

一誠の言葉で俺の目が覚め、ゼフィルスネクサスは魔人アルビオンの攻撃を避け…。

零「うおおおおおっ！」

魔人アルビオン「ぐっ…！」

アルビオン「ヴァーリ！」

魔人アルビオン「お前……！」

零「俺は……絶望しない……。誰に何と言われようと俺は戦う目的を曲げない！例えば、それが永遠に続く戦いだとしても、俺は戦い続ける！そして、その永遠を破壊して、平和を勝ち取ってやる！俺の運命のシナリオは、俺自身が書く！」

アマリ「零君……」

シモン「零の言う通りだ、みんな！」

甲児「例え、敵がどれだけ現れても俺達は諦めない！」

ヴァン「どんな野郎が来ようがぶった斬る！」

零「仮面ライダーアルビオン！どれだけの絶望を俺達に突きつけようが全部、俺達が吹き飛ばしやる！」

クロワール「へっ！」

アルビオン「殻を突き破ったわね、彼等」

魔人アルビオン「みたいだな、俺に見せてみる！俺が書き換えられない程の、お前達の運命のシナリオを!!？」

零「なら、存分に見やがれ……！これが……俺達全員の運命のシナリオの力だああああつ!!？」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS魔人アルビオン〉

魔人アルビオン「お前を中心にエクスクロスが立ち上がったのなら、お前を潰せば、あいつらは総崩れだな！」

零「そんな事させるかよ！みんなも、俺自身も…俺は守ってみせる！これで終わりだ、仮面ライダーアルビオン！」

〈戦闘会話 アマリVS魔人アルビオン〉

アマリ「零君の邪魔はさせません！」

魔人アルビオン「成る程な、あいつが他の奴らを奮い立たせるのなら、お前があいつを支えるってわけか。美しい愛だな」

アマリ「そうです！私は零君を支えていきます！これからもずっと！」

ついに俺達は魔人アルビオンに膝をつかせた。

零「どうだ、これが俺達の決意と想いだ！」

魔人アルビオン「成る程な、よく見せてもらったぜ。その決意と想いを、忘れるなよ」
魔人アルビオンが立ち上がると同時に仮面ライダードラゴンが現れた。

仮面ライダードラゴン「どうやら、終わったみたいだな」

零「い、一誠…!!?」

仮面ライダーアルビオン「よっ、偵察ご苦労さん！」

仮面ライダードラゴン「つたく、零を倒そうとしやがって、ヒヤヒヤもんだったぞ」

仮面ライダーアルビオン「当てる気は無かったさ」

はっ…!!? どういう事だ…!!?

零「ちよつと待て、どういう事だよ！」

仮面ライダードラゴン「理由は説明してやるから、まずは艦に戻るとしようぜ」

俺達は返信を解除した一誠とヴァーリと共にN-1ノーチラス号に戻り、格納庫に集

まった…。

ヴァーリ「改めて、ヴァーリ・R・スパードだ。よろしくな」

アルビオン「初めまして私はウェルシュ・ドラゴン。またはアルビオンって呼ばれる

わ

クロワール「俺はもういいな」

ホワイト「私はホワイト、ヴァーリをサポートするAIだ」

零「自己紹介はもういいとして：ドライブグやイストワール、レッドもいたんだな」
ドライブグ「お久しぶりです、皆さん！」

イストワール「お元氣そうで良かったです（・・・）」
竜馬「お前等は何処にいたんだよ？」

レッド「我々はホワイトと共に戦いの邪魔が入らないように偵察をしていたんだよ」
ナオミ「それで、ヴァーリはどうして私達を襲ったの？」

一誠「実はな、ヴァーリがお前達の実力を確認したかった為の演技だったんだよ」
エルシャ「演技!?？」

アイーダ「どうして、その事を言わなかったんですか？」

ヴァーリ「そうしないとお前等の本氣の実力を測れないだろ？だから、ああしたんだよ」
「よ」

零「：やはり、お前は手加減をしていたんだな」

ヴァーリ「お？見破れていたか」

クロワール「当たり前だろ。ヴァーリが本氣で戦っていたらお前等は既に全滅していたんだぜ」

イオリ「考えたくない事だな：」

一誠「よう、イオリ・アイオライト」

イオリ「一条 一誠……。すまない、お前達にもひどい事を……」

一誠「良かったぜ、イオリ。お前がお前自身を取り戻してくれてよ」

イオリ「一誠……」

一誠「それが本当のお前なんだよな。これからも零達に力を貸してくれ」

イオリ「ああ！」

ジャンヌ「それにしても、疲れたわ……。なんか……」

アルビオン「ごめんさいね。お詫びに何か料理を作るわ」

クロワール「やめろ、アルビオン！ エクスクロスを絶滅させる気か！」

アルビオン「失礼ね、クロワール！」

一誠「それで、ヴァーリ。エクスクロスと戦ってどうだったんだ？」

ヴァーリ「実力はまあまあだが、決意と覚悟、熱意は認めるぜ」

アンジュ「何よ、その言い方！」

ヴァーリ「俺に手こずっている様ではダメだって言ってるんだ。俺や一誠より強い奴なんてごまんといえるからな」

アルビオン「そういう事よ、グレたフェイト」

アンジュ「私はアンジュよ！ 誰よ、フェイトって?!？」

ヴァーリ「お前と容姿と声が似た俺の仲間だ」

零「お前達にもたくさん仲間がいるんだな」

ヴァーリ「ああ、まあな。それにしても零、お前は一誠の言った通りの同類だな」
零「何のだよ？」

ヴァーリ「好きな相手と抱きまくって、一夜を共にしたんだろ？」

はあああああつ!!?

零「い、いや……！ちよつ、待て！ヴァーリ！そんな抱いてない！」

アマリ「れ、零君！」

あ…。

一誠「抱いたのは事実みてえだな」

アスナ「零、アマリ！どういう事か、説明してもらおうわよ！」

アンジュ「逃がさないからね！」

零「いや、お前等！ちよつと落ち着け！」

アマリ「誤解なんですよ！」

ホープス「今言われても説得力はありませんね」

ヴァーリ「零、俺からのアドバイスだ。結婚する時は一夫多妻にした方が良いぜ」

零「大きなお世話だ！」

一誠「からかってやるな、ヴァーリ」

ヴァーリ「ははっ！ からかいがいのある奴だぜ！…さて、そろそろ帰るとするか。舞人、おまえの前にどんな敵が現れても、もし、お前達の人生が誰かに作られたものと言われても、そんな言葉は無視しろ。例え神だろうと、そんな事を言った奴は最早三下以下だ」

舞人「は、はい…」

一誠「零、シモン、アマリ、イオリ。魔徒教団やアンチスパイラルには気をつけろよ」
シモン「忠告、ありがとよ」

零「お前等の期待に応えられる様に俺達は戦い続ける」

一誠「別の世界からだが、応援しているぜ」

ヴァーリ「頑張れよ、エクスクロス！」

零「ありがとな、ヴァーリ、一誠、みんな！」

一誠やヴァーリ達は時空の裂け目を作り出し、その中に入っていった…。

零「さて、みんな！俺達も戦い続けるぞ！アル・ワースを平和にするまで！」

俺の言葉にみんなは頷いた…。

「一条 一誠だ。」

俺達は元の世界に戻る最中だった。

ヴァーリ「なあ、一誠。エンデの事をエクスクロスに教えなくて良かったのか？」

一誠「俺達が介入しなくともエクスクロスが必ず倒すさ。もし、エクスクロスがへまをしても俺達が介入し倒せばいいだけの話だ。まあ、そうならないと思うがな」

ヴァーリ「それもそうだな。じゃあ、俺はそのもしもの時のためにもビルス様の所に行って身体を鍛えるか」

一誠「そうだな。ビルス様やウイスさんへのお土産もあるしな」

俺達はアル・ワースの美味しい食べ物を持ち、元の世界へ戻った…。

ボーナシナリオ8
もう一つのアル・ワース 前

編

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これは零とゼファイから聞いた話です。今から話すのは零、アスナ様、ゼファイの三人がネメシスによって、もう一つの可能性のアル・ワースに転移させられた話です。長いので二つに分けて話す事になるでしょう…」

ーージャン達の世界のパリでガーゴイルを倒したエクスクロス…。アル・ワースへ戻った彼等はドアクダー打倒の為の準備をしていたが、零、アスナ、ゼファイは周辺の偵察をしていた…。

―新垣 零だ。

俺はアスナとゼフィと共に辺りの偵察をしていた。

アスナ「特に変わった様子はないわね」

零「ゼフィルスネクサスで偵察をしていたが、あまり意味はなかったのかもな」

ゼフィ「でも、備えあれば、憂いなし、ですよ、パパ！」

零「その通りだ、ゼフィ。さて、戻るとするか」

アスナ「そろそろ、ドアクターの元へ行く準備も終わっているだろうしね」

ゼフィ「はい、アル・ワースを平和にするために頑張りましょう！」

俺達はみんなの元へ戻ろうとした…その時だった。

零「この感覚…！ネメシスか…！」

アルガイヤが現れた。

ネメシス「よう、零！今はお前等だけか？」

ゼフィ「ネメシス！」

アスナ「そういうあなたも一人のようね！」

ネメシス「今回に関しては人数なんて関係ないからな。お前達を招待してやろうと思っただけ」

招待…だと…!??

零「何の事だ!!?」

ネメシス「行つてみれば、わかるさ。さあ、ゲーム開始だ!三人様と一機、ご招待!」
ネメシスが力を込めると、俺達の前に時空の渦が現れる。

アスナ「このままじゃ跳ばされる!」

ゼファイ「パパ…!」

零「だめだ、逃げられねえ…!うわあああああつ!!?」

俺達はゼフィールスネクサスごと、時空の渦に巻き込まれた…。

ネメシス「もう一つの可能性によつて生まれたアル・ワース…。大いに楽しめよ、零。
すぐに俺も行くからよ」

そのまま俺達は意識を失った…。

ボーナスイナリオ 8

もう一つのアル・ワース 前編

ゼファイ「…。パパ…。パパ…!」

この声…。ゼファイか…?」

ゼファイ「パパ、起きてください！しっかりしてください！」

零「ん、うん…ゼファイ…？」

ゼファイの声で俺は目を覚ました…。

ゼファイ「ご無事それで良かったです、パパ」

アスナ「起きたのね、零」

零「アスナも無事だったか…。それにしてもここは何処だ…？」

アスナ「位置的に変わっていないわ。私達がいた場所ね…」

ゼファイ「ですが、私達はネメシスが出した渦のようなものに飲み込まれたはずですが

…」

零「考えても仕方ない。ゼファイ、エクスクロスに連絡を取ってくれ」

ゼファイ「…その事なのですが、実は先程からエクスクロスに連絡を送っているのです

が、応答がないんです」

アスナ「え、それって、どういう事…!!？」

零「まさか、みんなに何かあったって事なのか…!!？」

ゼファイ「わかりません…。ですが、これは一刻も早く、皆さんと合流した方が良いよ

うです」

零「そうだな。早く戻るぞ」

俺達はエクスクロスの艦が停泊している場所にまで来たが…。

アスナ「ど、どういう事…?!?!」

どうして…エクスクロスの艦が停泊していないんだ…?!?!?

ゼフィ「皆さん…まさか、私達を置いて、ドアクダーの下へ行ってしまったのでしょうか…?!?!」

零「流石にそれはないだろう…!だが、どういう事なんだ…?!?!と、取り敢えず、近くの村に行こう。詳しい話を聞くぞ」

俺達はゼフィルスネクサスから降り、近くの村に入った…。

零「すみません、この近くに停泊していた戦艦は何処へ行ったかわかりますか?俺達はエクスクロスに所属しているのですが…」

村人「エクスクロス…?あなた達もエクスクロスの一員なのね」

村人2「でも、この近くにエクスクロスの戦艦が停泊していたなんて、聞いてないよ」
村人3「止まっていたら、サインをもらおうところだもん!」

アスナ「どうして…確か、混乱を避ける為に倉光艦長が村の人達に話をしたって聞いたけど…」

零「倉光艦長の事だから、伝え忘れたって事はないだろうが…。こうなったら、獣の国か、ルクスの国に行つて、エクスクロスと連絡を取るしかないな」

ゼファイ「そうですね、パパ。あの……ここから、獣の国とルクスの国のどちらが近いですか？」

村人4「獣の国は兎も角、ルクスの国……？そんな国、アル・ワースにあつたか？」

村人5「聞かないな、そんな国……」

アスナ「え……?!？」

ル、ルクスの国を知らない……？どういう事だ……？

村人「それよりもあなた達もエクスクロスなのよね？それなら、お願いを聞いて欲しいのだけれど……」

零「どうかしましたか？」

村人2「実はこの村は今、山賊に荒らされているんです。お願いです、助けてください！」

ゼファイ「また、山賊騒ぎですか……」

アスナ「どうする、零？」

零「騒ぎを聞きつけて、エクスクロスのみんなが来るかもしれない。それに見逃す事は出来ないしな。わかりました、俺達が山賊をなんとかします」

村人3「ありがとう！」

俺達はゼファイルスネクサスに乗り、山賊のアジトへ向かい、着いた。

アスナ「ここが山賊のアジトね」

零「油断するな、二人共。敵の規模は計り知れないからな」

ゼファイ「お気をつけください、お二人共！機体が出てきます！」

現れたのはオーラバトラーとガンメン部隊か……！

アスナ「オーラバトラーとガンメン部隊……あの山賊部隊も見飽きてきたわね」

零「機体を出してきた時点で、話し合いは無理か。なら、相手をしてやる！やるぞ、ゼファイ、アスナ！」

アスナ「いつでも良いわよ！」

ゼファイ「行きましょう、パパ！」

零「わからない事だらけだが、村を荒らすつて奴らを見逃すわけにはいかねえんだよ
！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「本当に山賊というのは人の迷惑を考えない連中ね！」

ゼファイ「そんな方達を許しはしません！」

零「覚悟しろよ、山賊共！容赦ない一撃でお前等の目を覚まさせてやる！」

敵の数は多いが、勝てない戦力ではないな！

アスナ「このまま押し切れば、エクスクロスが来る前に私達で片付けられるわ！」

ゼフィ「待ってください！何かきます！」

っ……！射撃攻撃だと……!!？

先程の攻撃のせいでオーラバトラー、ガンメン部隊は全滅した……。

現れたのはルーン・ゴーレムとデインベルだった。

零「魔徒教団か……！」

術士「新たな異界人か！エクスクロスの仲間になる前にここで倒す！」

攻撃してきたか……！って、俺達が新たな異界人だと……!!？

アスナ「あいつ等、何を言っているの!!？」

ゼフィ「私達は既にエクスクロスに所属している事をあの人は知らないのでしょうか……？」

零「それに俺達を新たな異界人扱いをした……。よくわからないが、襲ってくるのから相手をするしかない！」

俺達は戦闘を再開した…。

戦闘開始から数分が経過した頃だった…。

ゼファイ「パパ、アスナお姉ちゃん！こちらに近づいてくる艦があります！これは…メガファウナ、シグナス、Nーノーチラス号です！」

ゼファイの言葉通り、メガファウナ、シグナス、Nーノーチラス号が現れた。

ドニエル「ホープスが魔従教団の魔力を感知して来てはみたが…」

倉光「戦闘を行っているようですね」

ネモ船長「我々も参戦しよう。機動部隊は出撃しろ」

みんなが出撃してきた…。

だが、おかしい…。機体の数が少ない…。

それに戦艦の方もマクロス・クォーターや真ドラゴン、プトレマイオスにハンマーヘッド、ナデシコCがいない。

それに機動部隊もゼロやブラックサレナ、クアンタなどの機体の姿がない…。

別行動を取っているのか…？

シモン「教団は容赦なく、異界人を襲うようになったようだな！」

イオリ「その金色のパイロット、無事か!? 俺はイオリ・アイオライト…。このゼ
ルガードのパイロットだ!」

零「イオリか! 助かったぜ…って、ゼルガードのパイロット…?」

アスナ「あなたもメインパイロットを務めるようになったの? メインパイロットはア
マリの方でしょう?」

アマリ「わ、私がゼルガードのメインパイロット…!? そんな事、出来ません!」

零「何言っているんだよ、アマリ!」

アマリ「私の事を知っているの…?」

ホープス「その様ですね」

ゼフィ「ママ、イオリお兄ちゃん、ホープス先輩! 刹那さん達は何処ですか!?」

イオリ「刹那…? 誰だ、それは?」

零「な、何を言ってる!?」

アマリ「それはこちらの台詞です! もしかして、ママとは私の事ですか!? 私には娘が
いる歳でもないです!」

ホープス「アマリ様の隠し子ですか? 大変だな、マスター。強敵が登場の予感がする
ぞ」

アマリ「ご、誤解だから、ホープス!」

イオリ「お前は少し黙れ、腹黒オウム！」

零「アマリ様…？それにイオリの事をマスターと呼んだのか…？ホープス、どうしちまったんだ…？」

ホープス「どうやら、アマリ様だけでなく、私やマスターの事も知っている様ですね」
イオリ「君には少し話を聞かなければならないな。ひとまず、この場を乗り切るために力を貸してくれないか？」

零「そ、それは構わないが…」

何だ…？イオリ達と話が全く噛み合わない…。

アスナ「そうだ、イオリ！弘樹達は何処なの…？」

イオリ「弘樹という名の人物はエクスクロスにはいないが…」

弘樹達がいらないだと…？！

アスナ「ど、どういう事なの…？」

ゼファイ「ママ…」

零「こうなったら、まずは魔徒教団をどうにかして、アマリ達から話を聞くしかないな！」

ゼファイ「…はい、パパ！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

ゼフィ「ママ達…どうしたんでしょう…？」

アスナ「またヨハンの様な力でみんなの記憶がなくなったの？」

零「わからない…。(術士達やアマリ達の反応…忘れているといふより、初めから知らないという感じだな…。兎に角、早く終わらせて直接話を聞かぬかな…)」

〈戦闘会話 イオリVS初戦闘〉

アマリ「私達やホープスの事を知っているなんて…あの人は一体何者なのかな、イオリ君…」

ホープス「(私達の事やアル・ワースを知っている…まさか、彼等は…)」

イオリ「それは話を聞いてみないとわからない。すぐに終わらせるぞ！」

俺達は敵機を全て倒した。

アネツサ「敵機の全滅を確認しました！」

まゆか「増援は無いようです！」

ヤール「終わったな……」

リー「問題はあいつ等だけだな」

零「……」

イオリ「その君、付いてきてくれるか？」

零「わかった……」

俺達はそれぞれの艦に収容され、メガファウナの格納庫に集まった……。

ネモ船長「では、まず……名前を名乗ってもらおうか」

アスナ「何を言っているんですか、ネモ船長！」

零「……はい、わかりました。俺は新垣 零……あの金色の機体、シャイニング・ゼフィールスネクススのパイロットです。そして、こつちがサブパイロットのアスナとゼファイです」

鉄也「零と言ったな？お前は どうして俺達の事を知っているんだ？」

零「俺達はエクスクロスに所属しています。そして、アル・ワースを平和にする為にネメシスやドアクダーなどの敵組織と戦っています。俺は……オニキスの首領、ハデス・エメラルドの息子です」

ドニエル「ネメシス？オニキス？ハデス・エメラルド……？先程から何を言っているんだ、君は……？」

倉光「それにエクスクロスに所属しているって…」

ネモ船長「…」

ダメだ…話がいつまでも平行線だ…。向こうの話に合わせようと思ったが、無理があつたか…？

ホープス「…成る程、そういう事ですか」

イオリ「何がそういう事何だ、ホープス？」

ホープス「彼等は別の次元のアル・ワースから転移してきた様ですね」

ヒナ「別の次元のアル・ワース…？」

ジユドー「どういう事だ？」

ホープス「いくつもの並行世界には同姓同名の人間が全く別の人生を歩んでいるものです。ならば、もう一つのアル・ワースがあってもおかしくは無いです」

零「俺達の世界のアル・ワースも…この世界のアル・ワースも…並行世界の可能性の一つという事か」

ホープス「ほう、話が早いですね」

零「お前に褒められるって、寒気がするな」

ホープス「あなたはあなたの世界の私をどう思っているのですか…」

アスナ「ちよっと待って…じゃあ、ここは別世界のアル・ワースなの!?？」

零「そういう事になる」

ベルリ「様々な世界があるのは知っていたけど、全く違うアル・ワースから来たなんて…」

カミーユ「だから、話が噛み合わなかったのか…」

イオリ「だが、零。アマリがゼルガードのメインパイロットとはどういう事だ？ミス・

エクスクロスの時は確かにアマリが一度ゼルガードのメインパイロットをやったが…」

零「そうか、こつちの世界のアマリとイオリは俺達の世界の二人とは全く、真逆の道を選んだのか…」

アムロ「全く、真逆？」

零「俺達の世界ではアマリが教団を抜け出し、ホープスと共にゼルガードに乗り、俺達、エクスクロスに加入したんだ。そして、イオリは教団の刺客として、何度も俺達と戦い、後に加入したんだ。つまり、俺達の世界のホープスのマスターはアマリとなっているんだ」

アマリ「私が…ホープスのマスター…」

イオリ「俺がエクスクロスに牙を剥くなんて…！」

アンジュ「あなたが言っていたネメシスやオニキスというのは？」

零「オニキスというのは俺達の世界の組織の一つで、世界を戦火に包んでいた組織だ。

だが、オニキスは生命体、ネメシスによって、操られていた…」

トビア「生命体、ネメシス…」

零「そして、俺はネメシスの遺伝子をも受け継いでいるんです」

サリア「同じアル・ワースでも、世界によって違うのね…」

零「ああ、この世界にはルクスの国も存在しないようだしな」

ディオ「ルクスの国…?」

零「俺達の世界のアル・ワースの大国の一つで、レガリアなどの兵器があるんだ」

倉光「驚く事ばかりだね…」

アマリ「ねえ、ゼフィちゃん?」

ゼフィ「は、はい…何でしょうか?」

アマリ「ゼフィちゃんは私の事をママと呼んだけれど、ゼフィちゃん達の世界では私

があなたのお母さんなの?」

ゼフィ「…そう、ですね…」

ジユドー「マジかよ!」

青葉「つて事は、アマリさんとイオリさんの娘つて事か!おめでたですね!」

零「…」

アスナ「そう言えば、私とゼフィの事はしっかりと名乗っていなかったわね。私はア

スナ・ペリドット…零の幼馴染よ。それでゼフィの本名は新垣 ゼフィよ」

ワタル「へえー！新垣…え…？」

シヨウ「待て、それは零の苗字と同じじゃ無いか?!？」

零「ゼフィは俺達の機体、ゼフィルスネクサスが擬人化した存在で…俺の娘でもある」
ナディア「ちよ、ちよつと待って！どういう事?!？」

ジャン「ゼフィちゃんが零さんとアマリさんの娘って事は…！」

零「…」

ゼフィ「…」

アスナ「そう、私の世界のアマリは零の彼女でもあるの」

アマリ「ええっ?!？」

ホープス「何と…」

青葉「あ、あの…ごめんなさい、零さん、ゼフィちゃん…」

零「気にするな、青葉」

ゼフィ「青葉さんは何も知らなかったのですから、当然です！」

万丈「零、君の世界のイオリはアマリの事をどう思っているんだ？」

イオリ「ば、万丈！」

零「…俺とイオリ、それからホープスはアマリを奪い合うライバルって、所だな」

イオリ「え……」

ホープス「ま、待つてください！わ、私がアマリ様に恋をしていると……?!?!?」

零「イオリは兎も角、俺の居ない間にアマリを口説いているぜ」

イオリ「お前はアマリになんて事をしているんだ、ホープス！」

ホープス「それは零様の世界の私だ！私が知った事じゃない！」

零「それにセルリックの野郎も熱心にアマリを追いかけているしな」

アマリ「法師セルリックが……?!?!?」

チャム「じゃあ、人気者なんだね、零の世界のアマリって！」

アマリ「ちよ、ちよっとチャムちゃん！」

ネモ船長「零、君達はこれからどうするんだ？」

零「元のアル・ワースへ戻れない以上、このアル・ワースで生きていくしかありません」

倉光「だったら、君達が元の世界のアル・ワースへ戻れるまで、ここにいないかい？」
アスナ「いいんですか?!?!?」

ネモ船長「別の世界だが、君達もエクスクロスの一員だ。他のみんなは構わないか？」
イオリ「はい、構いません。それに彼には彼の世界の世界の俺達もお世話になっているみたいですし」

零「では、お言葉に甘えて、しばらくの間、お世話になります！」

アマリ「よろしくね、零君！」

零「あ、ああ…よ、よろしく、アマリ…」

零君…か…なんか複雑な気持ちだな…。

ボーナナスシナリオ9

もう一つのアル・ワース

後編

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。引き続き、零、アスナ様、ゼフィの三人がもう一つのアル・ワースに転移したお話を話します。別世界のアル・ワースで別世界のエクスクロスと合流した零達…。知り合いと同じだが、知り合いではなくなつた、彼等とエクスクロス…。そして、その世界でイオリ・アイオライトに好意を寄せているマスターを複雑そうに見る零とゼフィはどうなるでしょうか…」

それでは始まりませう。

――異なる並行世界のアル・ワースに跳ばされた零、アスナ、ゼフィの3人…。この世界のエクスクロスと合流した彼等だが、少し違う仲間達に戸惑いを隠せなくある…。

「新垣 零だ。」

俺はシグナスの格納庫にいた…。

ワタル「ねえ、ゼファイ！今度は鬼ごっこで遊ぼうよ！」

ヒミコ「それがいいのだ！鬼はトラちゃんて決定なのだ！」

虎王「俺様ばかりじゃないか！」

ゼファイ「では、私が鬼をやりますね」

プル「じゃあ、ゼファイから逃げよ！プルプルプルプル！」

プルツ「プルプルプルプル！」

ゼファイ「ふふっ、負けませんよ！」

この世界に来て、ゼファイはずっと浮かない顔をしていたが、どうやら、少しずつ馴染んできているみたいだな。

アスナ「娘を心配する父親みたいな顔をしているわよ、零」

零「まさしくその通りなんだっての」

アスナ「でも、心配はなさそうみたいね」

零「ああ、そうだな」

アマリ「ゼファイちゃん、すごく楽しそうね」

イオリ「ワタル達も楽しそうにみえるぞ」

アマリ、イオリ…。

アスナ「やっぱり、歳の近い子がいた方が子供達も楽しいでしょうね」

アマリ「アスナさん、お母さんみたいですわね」

アスナ「何言っているのよ、お母さんはあなた…って、あなたは違うのね。ごめんなさい、アマリ」

アマリ「気になさらないでください、アスナさん。例え、別の世界の私だとしても、私はアマリ・アクアマリンですから」

零「どこの世界でもアマリはアマリなんだな。本当にすごいぜ」

アマリ「ほ、褒めすぎです…!」

イオリ「それがアマリに対しての零の対応か」

零「…本当なら、もっと話をしたいんだがな」

アマリ「で、ではどうです?」

零「…無理しなくていいぞ、アマリ。お前にはお前の好きな男がいるはずだ」

アマリ「そ、それは…」

零「成る程、この世界のイオリも鈍いのは変わらないのか」

イオリ「ちよつと待て!それはどういう意味だ!?!」

アマリ「言葉通りの意味よ、イオリ君。ねえ、零君?あなたの世界の私と零君はいつ

も何をしているのか聞きたいわ」

零「…悪いな、そこからは機密事項だ」

アスナ「キスは当たり前として、人目を気にしないで、イチャイチャ…こつちが気恥ずかしくなってくるわ」

零「お、おい、アスナ！余計な事言ってるじゃねえ！」

アマリ「四六時中イチャイチャ…」

零「流石に戦闘の時はしていないがな」

イオリ「イチャイチャしているのは認めるのか…」

ルルーシュ「零、少しいいか？」

零「どうした、ルルーシュ？」

ルルーシュ「お前の世界では口口やシャーリー、扇達がいると聞いた…。そして、ナナリーも…」

零「誰もお前を恨んでいないぞ」

ルルーシュ「…強くなったんだな、お前の世界の俺は…」

零「いいや、この世界のお前も相当強く見えるぜ」

ルルーシュ「ありがとう、そう言ってもらえて安心した」

ホープス「零様、あなたはアル・ワースの事を何処までご存知なのですか？」

零「何だ、突然?…俺達の世界のシヨウから少し聞いたぐらいだ。まだ、詳しくはわからない」

ホープス「そうですか」

零「そうだ、シヨウ、アンジュ。バーンとナオミはいないのか?」

シヨウ「バーン…?もしかして、バーン・バニングスの事か?」

トッド「零の世界にはエクスクロスにバーンがいるのか?」

マーベル「これには驚かされたわ」

シヨウ「もちろん、この世界にはバーンはいないぞ」

零「じゃあ、ナオミは?」

アンジュ「さつきからそのナオミって、誰なの?」

アスナ「え!?」

サリア「そう言えば、アンジュは知らなかったわね。あなたが、第一中隊に配属される前にいたメンバーよ」

ヒルダ「あー、あのお節介か」

アンジュ「へえ、そんな子がいたのね。それで、今は何処にいるの?」

ロザリー「…」

エルシャ「…」

ヴィヴィアン「ドラゴンに食べられちゃったんだ」

アンジュ「え……!?」

クリス「今でも覚えているよ……。目の前で食べられちゃったから……」

ナオミが……ドラゴンに食べられただと……!??

アスナ「そ、そんな……!」

世界が違っていると、本当に人の生死まで変わってくるんだな……。

すると、ゼファイが何かを持って走ってきた。

ゼファイ「パパ、ワタルさん達が拾ってくれていた貝殻でブレスレットを作りました!」

零「お! ありがとうな、ゼファイ!」

ゼファイ「えへっ!」

俺はゼファイの頭を撫でるとゼファイはニコリと笑った。

ゼファイ「ママの分も作りました、どうぞ……あ……。す、すみません……つい……!」

アマリ「謝らないで、ゼファイちゃん。もちろんもらうわ。それから、もう一つ……零君

達の世界のママにも作ってあげよ?」

ゼファイ「……はい!」

零「……ゼファイの事、ありがとうな、アマリ」

アマリ「ゼファイちゃんを悲しませるわけにはいかないから……」

イオリ「アマリ……」

アスナ「どの世界のアマリもいい母親になりそうだね」

ホープス「そうですね」

？「確かに、アマリの笑顔は天下一品だな」

零「！」

この声は……！

ネメシス「零の女にしておくのはもったいなく感じる事もあるがな」

アマリ「あ、あなたはいつたい……？」

アスナ「ネメシス……！」

ゼファイ「ママ、皆さん！彼から離れてください！」

零「お前もこの世界に来ていたとはな……！」

ネメシス「様子を見て来てやったが、随分と元気そうだな、零」

零「お前からこつちに来てくれるのは好都合だ……！俺達を元の世界に戻せ！」

ネメシス「そう簡単には戻せねえな。もっと楽しませてくれないとな！」

イオリ「こいつがネメシスか……！」

零「ネメシス、この世界のエクスクロスは関係ない！狙うなら俺達を狙え！」

ネメシス「そうはいかねえよ。こいつらもゲームのキャラクター何だからな」

ホープス「ほう、我々もゲームの駒だと…」

ネメシス「かかってきな、エクスクロス！俺の力を見せてやる！」

ネメシスは消えた…。

零「アマリ、イオリ、ホープス！艦長達にこの事を話して、この場から離れてくれ！イオリ「だが、零達は どうするつもりだ?!?」」

零「あいつは俺達の世界の敵だ。お前等を巻き込むわけにはいかない！」

アスナ「大丈夫、早く片付けるから」

ホープス「ですが…」

ゼファイ「行つてください！」

アマリ「…ゼファイちゃん…」

イオリ「…わかった、行こう」

アマリ「イオリ君?!?」

イオリ「ネメシスの力は未知数だ。戦つた事のない俺達が戦つても、零達の迷惑になる」

アマリ「でも…!」

零「イオリ、みんなを頼んだぞ」

イオリ「ああ！」

俺達はイオリ達と別れ、ゼフィールズネクススに乗り込み、出撃した…。

ボーナスシナリオ9 もう一つのアル・ワース 後編

俺達はエクスクロスから離れるとガルムとグレモリー部隊、そして、アルガイヤ・ノヴァが現れる。

ネメシス「何だよ、エクスクロスはいないのかよ」

零「この世界のエクスクロスは関係ねえ！お前の相手なら、俺達がする！」

ゼファイ「そして、元の世界に帰らせてもらいます！」

ネメシス「…フツ、威勢はいいが、奴等は来たようだぜ」

Nーノーチラス号、メガファウナ、シグナスが現れ、みんなが出撃してきた…。

零「みんな…！何しにきたんだ?!？」

倉光「何しについて、君達の手伝いだよ」

アスナ「ネメシスは私達の世界の敵です！みんなを巻き込むわけには…！」

ネモ船長「だが、奴は今、この世界で暴れている…。ならば、我々も奴を止める権利

はあるはずだ」

アンジュ「そういう事よ、三人共！私達は私達の世界を守るだけよ！」
ルルーシュ「そして、たまたまお前の手伝いをするだけだ」

零「みんな…」

舞人「零さん、あなたはもう俺達の仲間です！」

ワタル「仲間を助けるのは当然の事だよ！」

零「…ありがとう。それなら、みんな…力を貸してくれ！」

シモン「当たり前だ！」

甲児「そういう事だ、ネメシス！俺達、全員で相手をしてやるぞ！」

ネメシス「いいじゃねえか、ゲーム的に盛り上がって来たぜ！さあ、ゲーム開始だ！」
零「俺達はお前のゲームに付き合うつもりはない！すぐに終わらせてやる！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「世界は変わっても、エクスクロスのみんなは変わらないのね」

ゼフィ「この世界のアル・ワースを守り、元の世界に帰るためにも頑張りましょう、パ

パ！」

零「勿論だ！俺達は絶対に負けない！」

〈戦闘会話　イオリVS初戦闘〉

ホープス「零様達にはああ言っておきながら、艦長達に協力を要請するとはな、マス
ター」

アマリ「さっきのイオリ君、すごく格好良かったわよ」

イオリ「見過ごす事は出来ない。それに零達はもう俺達の仲間だからな。アマリ、
ホープス…俺達も零達に負けないようにやるぞ！」

少しずつ敵を倒し続ける俺達…。

ネメシス「粘るな、流石はエクスクロス…。別世界でも強いな」

万丈「あまり、僕達を舐めない方がいいぞ！」

キタン「お前の出してくる奴等なんぞ、ボコボコにしてやるぜ！」

ネメシス「なら、俺からのプレゼントだ」

ガラムとグレモリー部隊の増援…!!?」

ギミー「また増えた!!?」

ヨーク「もう、キタンが余計な事を言うから！」

ダリー「ど、どうするんですか!!?」

ヴィラル「どうするも何も無い！倒すしかないだろう！」

シモン「ヴィラルの言う通りだ、俺達の心は折れはしねえ！」

ネメシス「フツ…その余裕、いつまで続くかな？」

…ネメシスのあの余裕…まだ何かあるのか…?

俺達は戦闘を再開した…。

戦闘開始から数十分後の事だった。

ボス「これだけ倒してもまだいるのかよ…！」

ネメシス「ほい、追加だ！」

また増援かよ…！

さやか「また増えたわ！」

ファ「このままじゃ、戦力差でこちらが負ける…！」

零「…」

ネメシス「さてと、まだ抵抗するか、エクスクロス？」

ジユドー「当たり前だろ！」

ネメシス「何故、他の世界の奴等の為にそこまで動く？お前達には関係ないだろう」

ベルリ「関係なくはない！零さん達は僕達の仲間だ！」

青葉「仲間が困っていたら、助けるのが普通だろ！」

ネメシス「仲間…ね。それなら、エクスクロス、俺の下にはまだまだ戦力がある」

カミーユ「何…!?？」

ネメシス「そう、お前達の手じゃ俺には敵わない。それでだ、零達を残して、何処かへ消えるなら、お前達を見逃してやってもいい」

シャア「零達を見限れというのか…！」

スザク「そんな事、出来るはずがない！」

零「…いや、みんな。この場所から離脱してくれ」

カレン「何を言ってるのさ!?？」

ゼファイ「ネメシスの言っている事は本当です…。このままでは数で圧倒されて、全滅します…」

零「みんなにはこの世界のアル・ワースを平和にする使命があるんだろ？ だったら、こんな所で全滅させるわけにはいかない！」

アムロ「だが、それでは君達が……！」

零「俺達なら大丈夫です……だから……！」

アスナ「私達もこれでもエクスクロスとして、様々な敵と戦ってきたんですよ？」

ワタル「……でも……」

アンジュ「……」

ヒイロ「……」

ネモ船長「……了解した。各機、直ちにこの場所から離脱しろ」

倉光「ネモ船長……!?」

ドニエル「何を言っているんですか！」

ネモ船長「我々には我々の使命がある……。そして、彼等の意思を無駄にはしたくない」

シヨウ「だが、それでは零達が……！」

零「心配するなよ、俺達は負けない……」

ネメシス「いい心がけじゃねえか、零。後悔するんじゃないか？」

零「するかよ、お前を倒すまではな」

ネメシス「その強気がどこまで続くか、実物だな！」

アルガイヤ・ノヴァの攻撃を受ける。

零「くっ……！」

サリア「零！」

ヒルダ「おい、本当にこれでいいのかよ！」

ネモ船長「……」

イオリ「ダメに……決まっているだろう……！」

アマリ「イオリ君……!!？」

イオリ「誰かを見捨ててまで得る平和なんて……偽りに過ぎない！」

ネモ船長「……その通りだ」

イオリ「うおおおおっ！」

ゼルガードがアルガイヤ・ノヴァの攻撃を弾き飛ばした……!!？」

イオリ「大丈夫か、零!!？」

零「イオリ……!!？何しているんだよ、早くみんなと一緒に離脱しろ！」

イオリ「断る！俺は仲間を見捨てたりしない！お前だつて、そうしろ！」

零「お前……」

甲児「勿論、俺達もやるぜ！」

鉄也「イオリがやると言うのに俺達が退くわけにはいかないからな！」

ゼファイ「皆さん…」

ルルーシュ「ここからは気合いの勝負だ！ネメシスを倒せば、敵の増援もなくなるはずだ！」

アーニヤ「だったら、あの人を倒す」

ネメシス「やれるかな、お前達に…？」

零「当たり前だ…」

アマリ「零君…」

零「俺達、エクスクロスを舐めるなよ！」

ホープス「それでこそです、零様」

零「狙うはアルガイヤ・ノヴァ！みんな、あと少しだけ、俺達に力を貸してくれ！」

イオリ「ああ！行くぞ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSネメシス〉

ネメシス「お前には仲間を惹きつける何かがあるようだな、零」

零「さあな、それはわからない…。だが、例え俺の世界だろうと別世界だろうと…俺達は戦い抜く！世界から争いを無くす日が来るまで！」

〈戦闘会話　イオリVSネメシス〉

ネメシス「こつちの世界ではお前がエクスクロスの中心とはな、イオリ！」

イオリ「お前達の世界の俺は関係ない！俺は俺の守りたいもの…そして、世界を守るだけだ！零達は俺達の大切な仲間だ！失わせるわけにはいかない」

アマリ「それにここで零君達を死なせてしまったら、零君達の世界の私達に申し訳ないです！」

イオリ「だからこそ、お前をここで止める！俺達がな！」

ゼフィールスネクサスとゼルガードの攻撃でアルガイヤ・ノヴァはダメージを負う。

ネメシス「ここまでやるとは…賞賛の言葉を送ってやる。ゲームのクリア特典として、零…お前達を元の世界に戻してやるよ」

零「え…」

ネメシスが手をかざすと、時空の裂け目が現れる。

ネメシス「決着は元の世界でだ。待っているぜ」

そう言い残し、アルガイヤ・ノヴァは時空の裂け目にへと消えた…。

そうか、戻れるのか…。

零「…みんな、お別れみたいです」

イオリ「零、お前に出会えて良かった」

零「俺もだ、イオリ…。お前の覚悟、見せてもらった。この世界とアマリを頼むぞ」

イオリ「任せろ！」

アマリ「零君、ゼフィちゃん…」

零「アマリ、イオリといつまでも仲良くな」

ゼフィ「この世界のママ、お世話になりました！」

アマリ「忘れません、零君達の事を…」

ゼフィ「私もです！」

アスナ「ホープスも元気でね」

ホープス「あなた達があなた達の世界のアル・ワースを平和にする事を心から祈っています」

零「俺もだ、ホープス。…じゃあ、みんな、お世話になりました！」

そう言い残し、ゼフィルスネクサスも時空の裂け目に入ると、裂け目は消えた…。

イオリ「…」

アマリ「イオリ君…」

イオリ「行こう、みんな…。零達のエクスクロスに負けないように俺達も戦うぞ！」
アマリ「ええ！」

イオリ「（また会おう、零。次に会う時はお互いに平和を掴んだ時にな）」

俺達は時空の裂け目から出ると、裂け目は消滅した…。

アスナ「ここは…私達が跳ばされた場所ね」

零「そうだな」

ゼフィ「この反応…ゼルガードです！」

ゼルガードが現れた…。

アマリ「零君、ゼフィちゃん、アスナさん！無事ですか!?？」

零「アマリ！迎えに来てくれたのか？」

アマリ「迎えに来てくれたじゃないわよ！ゼフィルスネクサスの反応が途絶えたって聞いて、心配したんだから！」

ゼフィ「ご心配をかけてすみません、ママ。私達は大丈夫です！」

イオリ「どうやら、本当に大丈夫なようだな」

ホープス「まったく、無駄な労力を…」

アマリ「何があったか、話してくれるよね？」

零「エクスクロスのみんなにも迷惑をかけてしまったからな、わかってる。帰るぞ、二人共」

アスナ「ええ」

ゼファイ「話すのに時間がかかりそうですがね」

零「でも、信じてくれるさ。みんな、大切な仲間だからな…」

また会おうな、別世界のエクスクロス…。みんながそつちの世界のアル・ワースを平和にすることを信じているぜ…。

この後、俺達は別世界のアル・ワースに跳ばされた事をみんなに話した…。

ボーナスシナリオ10 狙われた星

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、ミスルギで起こったある事件の話です。人間は気を許した相手には好意的に接しますが、少しそれをいじられただけで、気が狂った様に暴れ出すのです…」
それでは始めます。

ーオニキスの手から優香を取り戻したエクスクロス。再び、アル・ワースの平和を取り戻す為に進み出したが…。

ー新垣 零だ。

俺達はシグナスの格納庫に居た…。

ゼロ「青葉の時代では俺達、ウルトラマンの事が歴史の教科書で載っているんだよな？」

青葉「ああ！特に初代ウルトラマンのウルトラマンは神様ではないって言葉は好きだぜ。自らの力を過信しないって所がな」

ゼロ「自らの力を過信しない、か？」

アンジュ「あのベリアルって、ウルトラマンはあなた達の星で犯罪を犯したって聞いたけど」

ゼロ「プラズマスパーク：まあ、ウルトラマンの力の源にあいつはさらなる力を求めて、手を出したんだ」

冬樹「それで悪に墜ちてしまうなんて？」

ゼロ「：まあ、俺もそうなんだがな」

零「え？」

ゼロ「俺もプラズマスパークのエネルギーに手を出したんだ。：まあ、親父に止められて、俺はベリアルのように悪の道へは落ちなかったが？」

青葉「それで、レオに特訓してもらったのか？」

アンジュ「ベリアルの前例があつたから、ゼロは止められたのね」

ゼロ「それだけじゃねえ。親父が：俺の事を想っていてくれたからだ」

青葉「ウルトラセブン…いい父親なんだな！」

アンジュ「国を追われて、悪の道に堕ちる、か…」

アンジュ…。

アスナ「ねえ、アンジュいる?!？」

アンジュ「どうしたの、アスナ? 血相を変えて…」

アスナ「今、艦長達から聞いたんだけど、ミスルギ皇国の様子がおかしいみたいなの

!」

零「おかしい…? 何がおかしいんだ?」

アスナ「何でも、突然人が凶暴化して、暴れ出しているみたいなの」

アンジュ「え?!？」

冬樹「凶暴化って…一体どうして?!？」

零「ジュリオを失い、混乱しているにしても、なぜ今になって…?」

青葉「取り敢えず、様子を見に行こうぜ! 何か嫌な予感がする!」

ゼロ「…人が凶暴化する…まさか…!」

ゼロの奴…何か思い当たる事があるのか…?

ボーナスシナリオ9 狙われた星

俺とアスナ、アンジユ、青葉、冬樹、ゼロは騒ぎが起こっていたミスルギ皇国に来ていた…。

国民「お前、今肩にぶつかっただろ！」

国民2「いいや、お前こそぶつかっただろ！」

ほ、本当に至る人間が凶暴化していやがる…！

零「一体何が起こっているんだ…?!?!」

青葉「ちよ、ちよつと！やめてください！」

冬樹「落ち着いてください！」

国民3「邪魔しないで！」

青葉「うおっ?!?!」

冬樹「うわっ?!?!」

アスナ「青葉！冬樹！」

アンジユ「あなた達ねえ…！」

零「落ち着け、アンジユ！お前まで参加してどうするんだよ?!?!」

ゼロ「この気配…」

青葉「どうしたんだ、ゼロ？」

ゼロ「宇宙人の気配を感じる…。こっちだ」

ゼロが歩き出した…？

アンジュ「ちよ…宇宙人って…!!？」

アスナ「ちよつと待ってよ、ゼロ！」

仕方ない…ゼロについていくしかないな…。

ゼロに連れられ、ある部屋に入ると…。

そこには何処か古臭いアパートの部屋のテーブルの前に一人の宇宙人が座っていた…。

メトロン星人「来たか、エクスクロスの諸君」

アスナ「宇宙人…!!？」

ゼロ「やはり、人間の凶暴化の原因はお前だったか、メトロン星人」

メトロン星人「ようこそ、冬樹君、零君、青葉君、アンジュ君、そして、ウルトラマ

ンゼロ。僕は君たちを待っていたよ」

零「どういう手でミスルギの国民を凶暴化させた？」

メトロン星人「何、簡単な事さ」

ゼロ「アンジュ、ミスルギ皇国にもタバコはあるか？」

アンジュ「あ、あるわよ」

ゼロ「こいつはタバコに周囲の者がすべて敵に見える効果を持つ赤い結晶体を仕込み、人間を凶暴化させたんだ」

メトロン星人「流石はウルトラセブンの息子だ」

ゼロ「お前等の悪事は親父だけでなく、マックスからも話は聞いていたからな」

メトロン星人「成る程、ウルトラマンマックスか……。懐かしい響きだ」

青葉「そんな事どうでもいい！どうしてこんな事をしたんだ！」

メトロン星人「僕はただ、この国の人たちの本性を出しただけだよ。君たちも知っているだろ、この国の真実を。未だに認めていない人たちのために、その本性を出しただけ。だから、これは侵略じゃないの」

冬樹「本性……？」

メトロン星人「地球人というのは、都合が悪いのは変えてしまったり、忘れたりする悪い癖があるからね。青葉君は、ジャミラを知っているか？」

青葉「……！教科書で見た事がある……。確か、人間衛星に乗っていた宇宙飛行士が水のない惑星に不時着して、人間に見捨てられ、怪獣になってしまったという……」

零「人間に見捨てられて……怪獣に……?!?!」

メトロン星人「ジャミラだけじゃないよ。超兵器によつて住む星を無くし怪獣化に

なった生き物、宇宙人がいるだけで侵略者と思ひ込んだ地球人の自己正義、地球人の環境破壊によつて怪獣や超獣になった者、金儲けのために住む島を追いやれた怪獣、怪獣が悪者だけ思ふ偏見な考え、人間の憎しみや怒りなどによつて生じるマイナスエネルギー、さらには核兵器の放射能により、変貌して人間を恨む様になつた怪獣王、自分だけ助けたいという醜い感情。分かるかい？これが全部地球人の本性だよ。確か、最後の辺りの地球人は、惨めな最期を送つたと噂で聞いたけど、これは関係ないね」

ゼロ「…」

メトロン星人「だから、本当の感情を出しただけで、この有様。地球もアル・ワースも本当の気持ちを出しただけで滅びる。僕やケロン人、他の宇宙人が来ても地球は勝手に自滅する。僕は自分の星に帰るよ。それにしても地球と同じようにアル・ワースの夕日は綺麗だな。何よりもこの黄昏を忘れないのが一番よいことだ」

零「…あなたの言っている事はわかる。でも、俺は認めるわけにはいかない。俺は人間が滅びない可能性を信じている」

ゼロ「零の言う通りだ。俺達ウルトラマンは人間の可能性にも助けられて来たんだからな」

零「それと…アル・ワースの夕日が綺麗なのも同意せざるおえないな」

メトロン星人「君達がそれでも、そちらの二人はどうかな？」

青葉「…」

冬樹「…」

アンジュ「青葉…冬樹…」

すると、野良であろうルーン・ゴーレムが複数現れた。

零「ルーン・ゴーレムか！」

アスナ「術士がいない野良ゴーレムの様ね」

メトロン星人「ほらね、人間が作り出したモノが暴走したよ」

ゼロ「その暴走…俺達が止めてやる！行くぞ、みんな！」

アンジュ「ええ！冬樹、あなたはここにいなさい！」

冬樹「は、はい…」

零「お前もいくぞ、青葉！」

青葉「わ、わかりました！」

俺達はゼロを残し、機体の所へ向かった…。

ゼロ「メトロン星人、見ていろ。様々な世界から集結した、俺達エクスクロスの戦いを。それから、冬樹に手を出したら、許さねえからな。シエア！」

ゼロもウルトラマンになる。

メトロン星人「ああ、見るさ。この夕日を見れるのもこれで最後だからね」

冬樹「…」

メトロン星人「君も一緒に見よう、冬樹君。彼等の活躍を…」

俺達はそれぞれの機体に取り、出撃すると、ゼロも変身してきた。

アスナ「ただでさえ、凶暴化して混乱しているミスルギ皇国をこれ以上荒らさせはしないわ！」

アンジュ「気は乗らないけど、お母様が愛した国だからね…。やるよ！」

青葉「…」

零「青葉…。メトロン星人の事も気になるのはわかる。だが、今は…！」

青葉「わかっていますよ、そんな事！」

ゼロ「行くぞ、ゴーレム野郎！お前達にこの国は好きにはさせねえぞ！」
俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話　　アンジュVS初戦闘〉

アンジュ「たしかにメトロン星人の言う事は得ているわ…。でも、それはあくまでも可能性の話よ！こんな私でも、少しは信じているのよ…この国が変わる事をね」

〈戦闘会話　　青葉VS初戦闘〉

青葉「人間は…侵略などされずに、滅びる生き物…。それが人間の本性…？くっ…！
今は敵がいるんだぞ！余計な事は考える前にいくぞ！」

〈戦闘会話 ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「(メトロン星人…。親父も奴の言葉に悩まされたと聞く…。それに夕日の決闘も…)だが、俺は信じる事をやめねえ！人間は…俺達ウルトラマンの仲間だからだ！」

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「メトロン星人の言葉…少し胸が痛いわ」

零「人間には変わろうとする人間とそもそも変わる気がない人間がいるから…。でも、俺達は信じて行動を起こすしかないんだ。じゃなきや、本当の平和な世界なんて来ないんだ！」

ルーン・ゴーレムを倒していく俺達…。

だが、ゴーレム共の増援が現れる。

零「増援か…！」

アンジュ「ミスルギでも人が暴れているし、もうめちやくちやよ！」

青葉「人が人の手で滅ぶ…。それは戦争も同じ…」

ゼロ「くそッ…！」

しかし、そこへゴッドケロン、ブラディオンネクスト、カルラが現れた。

ケロロ「冬樹殿！大丈夫でありますか！」

冬樹「軍曹！みんな！」

ディオ「無事か、青葉？」

青葉「…」

ヒナ「青葉…？」

ディオ「聞こえているのか、青葉!?？」

青葉「…ディオ、ヒナ…。ゴーレムを止めるぞ！」

ディオ「あ、ああ…」

ヒナ「わ、わかったわ…！」

零「ケロロ達も援護頼むぞ！」

ギロロ「了解だ！」

ドロロ「行くでござる！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 青葉VS初戦闘〉

ディオ「青葉、前に出すぎるなよ！」

青葉「わかってる！俺はこんなところで死ねないんだ！」

ヒナ「(負い過ぎよ、青葉…。あなたに一体何があったの…?)」

青葉「来いよ、ゴーレム共！お前達は俺が止めてやる！」

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

クルル「クーククツ！隊長、間に合ってよかったな」

タママ「フツキーも無事で何よりですよ！」

ケロロ「(だが、何だか、冬樹殿の表情が浮かない顔をしているであります…。何か

あったのでありますか…?) 考えるのは後であります！今はゴーレムを倒す！」

俺達はゴーレムを全滅させた…。

零「ふう…何とか片付けられたか…」

メトロン星人「見事だ、エクスクロス」

メトロン星人が：巨大化した：！！？

ヒナ「宇宙人：！！？」

ケロロ「ケロー！！？メトロン星人であります！」

アスナ「今度はあなたが相手ってわけ！！？」

メトロン星人「いいや、私は戦わないさ。君達に守ってもらった身だしね。凶暴化した人間も元に戻したよ」

だが、メトロン星人は何故か足踏みをする。

何のための足踏みなんだ：？

すると、メトロン星人の頭上に宇宙船が現れる。

メトロン星人「さらばだ、エクスクロス。くれぐれもこの世界の夕日を汚さない事を祈っているよ」

そう言い、メトロン星人は宇宙船に吸い込まれ、宇宙船は飛び去ってしまった：。

青葉「：」

ディオ「青葉、先程からどうしたんだ？」

青葉「：何でも、ない：」

ヒナ「青葉：」

アンジユ「騒動も終わったし、帰りましょう」

零「そうだな。ケロロ、冬樹を頼む」

ケロロ「了解であります！」

ゴツドケロンが冬樹を回収し、俺達はエクスクロスの元へ戻った…。

その夜…シグナスの格納庫では…。

青葉「…」

冬樹「…」

ケロロ「冬樹殿と青葉殿にその様な事が…」

俺達はメトロン星人から話を聞き、その話に冬樹と青葉がショックを受けた事を話した…。

ヒナ「青葉は…世界を平和にするために必死に戦っているのに…そんな事…」

デイオ「…」

零「何とか、励ましているんだが…今のあいつらに何を言っても効果がないんだ」

ゼロ「俺に考えがあるぜ」

アスナ「え？ 考えって…」

ゼロ「おい、青葉、冬樹」

冬樹「ゼロさん…?」

青葉「…どうしたんですか?」

ゼロ「話がある。ちよつとついてこい。零とアスナ…アンジュとケロロ、ディオとヒナもだ」

アンジュ「私達も?」

ディオ「一体どこに行くんですか?」

ゼロ「いいから、ついてこい」

俺達はゼロに連れられて、星の見える丘にまで来た…。

ケロロ「これは…!」

ヒナ「綺麗…」

青葉「それで…ゼロさん、話ってなんですか?」

ゼロ「メトロン星人の言っている事は事実だ。地球は人間の手で滅ぶ可能性もある」
冬樹「…!」

青葉「じゃあ…俺達は何のために…?!?」

ゼロ「生命を守るためだ」

青葉「え…?」

ゼロ「俺達、ウルトラマンが地球を守るのは生命を守り、人間の可能性に賭けている

からだ。現に俺達は人間との絆に何度も助けられてきたんだ」

冬樹「絆……」

ゼロ「冬樹とケロロみたいに……種族や住んでいた星が違えども絆を深める事が出来るんだ。青葉、ウルトラマンが神様じゃないってのは、神の様に俺達、ウルトラマンはお前達人間に天罰を下す事が出来ない……。俺達は地球を守るが、その地球の未来を作っていくのは人間自身だからな」

青葉「俺たち自身……」

ゼロ「親父も……ウルトラセブンも、多くの侵略者と戦い、時には負けかけたが、地球人との絆の力で何度も立ち上がってきたんだ。例え、自分の身が危険になろうとも親父は地球を守る事をやめなかったんだ。だからよ、俺からはお前達に託したい……。本当の平和な未来を……エクスクロスには様々な種族がいる。ここぞにかを学べると思うぜ」

青葉「ゼロ……」

冬樹「ゼロさん……」

青葉「そうだな……。未来は変える事が出来るんだもんな！」

冬樹「僕……忘れていました！どんな辛い事があっても、軍曹という友達を決して、僕を見捨てはしなかった……」

ケロロ「冬樹殿！」

冬樹「これからもよろしくね、軍曹」

ケロロ「こちらこそであります！」

青葉「ディオとヒナも心配かけてすまなかつたな」

ディオ「別に心配などしていない」

ヒナ「素直じゃないわね、ディオ……。でも、良かった……青葉が元気になって……」

青葉「それにしてもこの世界の星も綺麗だな」

ヒナ「ええ……」

青葉「約束だ、ヒナ。元の時代に戻ったら、必ず星を見よう」

ヒナ「ふふ、約束ね」

ディオ「……」

アンジュ「何よ、ディオ？ヒナに嫉妬？」

ディオ「変な誤解を招く事を言うな」

零「それにしても、アンジュ。この世界の出身であるお前もこの丘を知らなかつたんだな？」

だな？」

アンジュ「私は元皇女だし、アルゼナルから簡単に出れなかつたからね」

零「……そうか。にしても、混乱しているミスルギは……落ち着くのかな？」

アンジュ「さあね。でも……少し、信じている私がいるわ」

零「あのよ……。俺も見たいものがあるんだ」

アンジュ「何？」

零「お前とシルヴィアが和解する所を……」

アンジュ「え……」

零「恐らく、シルヴィアは本当の人間つてものをあまり、わかっていないと思うんだ。

だから、周りに流されて、お前にあの仕打ちをしたんだと思う」

アンジュ「どうしてそんな事がわかるの？」

零「あいつはどれだけお前の事をノーマや化け物と呼んでも、稀にお前の事をお姉様と呼んだら？」

アンジュ「あ……」

零「多分、まだあいつの中にはお前に対する想いがあると思うんだ」

アンジュ「……ふふ、そうだといいわね。ありがとう、零」

零「星が見える丘……。平穩の世界にいた時に思い出の場所だったからな」

アスナ「だって、あなたが私に告白した場所だったものね」

零「なっ……?!? い、今ここで言うか、普通?!?」

アスナ「お前と星をずっと見ていたって、言ったのは誰かしら？」

零「ぐ、ぐぬぬぬ……!」

アンジュ「あなた、案外キザなのね」

ゼロ「アマリにもお前の全てが好きだって、言っただけだしな」

零「も、もういいだろうが！その話は！」

青葉「顔を真っ赤にして、言っても説得力はないですよ、零さん！」

零「青葉、てめえ！そこを動くな！」

青葉「わっ!?？す、すみません、零さん！」

たくつ…。まあ、こんな綺麗な星を見せられたら、懐かしさも出てくるよな…。

ホープス「メトロン星人の活動はこれで終わりました。人間の本性を表すことをしていたとは、恐ろしいものです。でも、ご安心してください。この話は別世界の物語です。え、何故ですって？そんなの簡単じゃないですか。あなた達人間、いやこれからの

人類も宇宙人に狙われるほどお互いの本性を知りませんから……」

ボーナスシナリオ11

奮い立つ好敵手達

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、別働隊が合流した頃のある人物達のお話です。必ずしもと言いませんが、人には宿敵、ライバルというモノが存在します…。そして、そのライバルに勝つために人は少しづつ強くなるうとしていくのです…」

それでは始まります。

——宇宙と地上でそれぞれの戦いを終え、再集結したエクスクロス…。再び、創界山を突き進もうとした彼等の中にはある疑問を持つ者達がいた…。

「氷室 弘樹だ…。」

俺はプトレマイオスでシミュレーションをしていた…。

弘樹「…結果は70点…こんなもんか」

カノン「訓練ですか、弘樹さん？」

弘樹「カノンか…。ああ、少しでも零を追い越すためにもな」

カノン「努力家ですね、弘樹さんは！」

弘樹「まあな。さてと、そろそろ休むとするか」

カノン「シミュレーションでも、すごい結果を出す零さんを追い越そうとする弘樹さ

んは格好いいです！」

弘樹「…ははっ！そう言われると少し照れるな…ん？シミュレーションでもいい結

果を出す零さん？」

カノン「…あつ…！あ、あの…！」

弘樹「なあ、カノン…。零の結果は何点だったんだ？」

カノン「ひ、弘樹さん！いいじゃないですか！他の方がどうであろうと弘樹さんは弘

樹さんなのですから！」

弘樹「それとこれとは話は別だ！カノン、教えろ！零の奴は何点だったんだ？！」

カノン「…は、85点です…」

85点…：そうかそうか…。

弘樹「さあ、もう一回やるぞ！」

カノン「ま、待つてください、弘樹さん！今日はもう休んでくださいよー！」

弘樹「いいや、やめねえ！零を越えるまでやめねえぞ！」

カノン「弘樹さんー！」

すると、ビーチャとトッドが来た…。

トッド「訓練室で何イチャついているんだよ、二人共」

ビーチャ「どうしたんだ、カノン？いつも以上に必死だな」

カノン「あ！トッドさん、ビーチャさん！弘樹さんを止めてください！」

弘樹「邪魔すんな二人とも！」

俺は怒鳴りつつ、二人に結果の事を話した…。

トッド「成る程な。つまり、弘樹は零を越えたくて、もう一度シミュレーションをしようとしているのをカノンは止めようとしているんだな」

ビーチャ「おい、弘樹。気持ちは分かるが、お前を心配しているカノンの事も考えてやれよ」

弘樹「冷静に語っているけど、俺はわかるぞ！お前等だって、シヨウやジユドーに負

「目を感じているんだろ？」

トツド「何だと……？」

ビーチャ「お、俺は別に……」

すると、シヤアさんを初めとする人たちが来たが……このメンバーって……

シヤア「何の騒ぎだ？」

リデイ「どうしたんだ、四人共？」

俺はシヤアさん達に事の事情を話した……

トツド「お前等からもこのバカに言つてやつてくれ。無理しても何も起こらないとな」

弘樹「バカつて言うなよ！」

デイオ「そこに気がいくから、バカと言われるのですよ」

ジョー「マイトガイン」「少しは落ち着く事を知れ」

弘樹「落ち着け？あんた達だって、ライバルの事となると、冷静さを失うじゃねえか！」

虎王「実際、ジョーは舞人の事になると、熱くなるからな！」

カエサル「デイオも相方である青葉が力をつけてきて、焦っているのだろう？」

デイオ「お、俺がああウスノ口……!?」

ジョー「マイトガイン」「他人事のように言うな。お前達こそそうだろう」
サリア「私達もそうだって言いたいのか!?」

レイ「Destiny」「待て、その様な事で争いあつてどうする?」

ビゾン「自分だけは蚊帳の外か、レイ?お前も人の事は言えないぞ」

レイ「Destiny」「何だと…?」

朗利「よせよ、ビゾン。自分もそうだからって、レイに当たるなよ」

ビゾン「俺は別にそんなんじゃない!」

金本「朗利は何も悪くないだろ!」

レイ「ガンソ」「全く…騒がしいやつ等だな」

ジン「UX」「だが、レイ…。お前こそ、このままではヴァンに遅れをとるぞ」

レイ「ガンソ」「俺がああポソに負けるだど…?」

グレンファイヤー「おいおい、ジンちゃんよ!お前もそうだろ」

バーン「何故、飛び火を増やしていく」

スザク「これは…嫌な予感がする…」

ウィル「…なぜこの様な状態になつた?」

ダークケロロ「原因は弘樹が意地を張っていることだ」

マスク「そこから色々なところへ飛び火しているとは…」

ウエスト「だが、元はと言えば、カノンの原因ではないのであるか？」

カノン「…え…」

ブレラ「そうだな。カノンが余計な事を言わなければ、こんな事にはならなかっただろう」

カノン「そ、そんなの言いがかりです！」

ゼハート「確かにそれは少し言い過ぎだぞ」

バーン「それぞれが落ち着けばいい話だ」

トッド「シヨウに対して、憎しみからられてたお前が言えるかってんだ！」

バーン「トッド・ギネス、貴様…！」

ゼクス「バーン、君まで熱くなってどうする」

グラハム「この皆の気持ち…まさしく愛だ！」

ギユネイ「そんなわけあるか！」

サラマンディーネ「これでは…収束がつきませんね…」

シヤア「みんな、私に考えがある」

弘樹「考え…？」

カノン「(何か…嫌な予感がします…)」

ボーナスシナリオー 奮い立つ好敵手達

「俺達は実地訓練と称して、出撃した…。

メンバーはビアレス、二機のシンデン、フルアーマーZガンダム、ナイチンゲール、ヤクト・ドーガ、レジエンドガンダム、バンシィ・ノルン、トールギスIII、ガンダムエクシアリペアIV、ガンダムレギルス、カバカーリー、破壊ロボ、VF-27γ
ルシファー、ブラディオン；ネクスト、ヴィジャーヤ、邪虎丸、轟龍、ランスロット；アルビオン、クオ・ヴァデイス、ガイア、ウイル、クレオパトラ、焰龍號、グレンファイヤー、レッドキングとグランデさん、ダークケロロボ、カイザム、それからヴァリアステストロイだ。

いや、あの場にはいないアレクサンダーさんやグランデさん、カイザムまでいるじゃないかよ。

「つてか、ピーチャなんて、ダブルゼータ引つ張り出して来ているし…。

グラハム「弘樹、一つ言いたい事がある」

弘樹「何ですか？」

グラハム「私のガンダムの名はグラハムガンダムだ！」

弘樹「何で人の心を読んでんだよ、あんたは!?？」

アレクサンダー「カエサルに呼ばれて、来てみたが…」

カイザム「これは何の集まりなんだ？」

ゼクス「シヤア大佐…これは…？」

シヤア「今から私を含め、最強を決めたい」

ウィル「最強？」

ニツク「何の最強なの？」

シヤア「強力な…そして、頼りになるライバルを持つ私達…そこで誰が一番強いのかを決めたい」

サリア「ミス・エクスクロスみたいなものですか？」

シヤア「そう思ってもらって構わない」

ビーチャ「いいじゃねえか！面白くなって来たぜ！」

スザク「あまり、気乗りはしないが…強くなるという言葉ではいいかもしれないね」

カノン「わ、私なんて、完全に巻き込まれてしまっています…」

グランデ「それじゃあ、始めようじゃないの！」

すると、何処かから、砲撃が跳んできた…。

金本「何だ…!?？」

現れたのは…グレモリーやガルム軍…ネメシスの配下共か…!

カノン「オニキスの配下です!」

ゼハート「別で動いていた私達を見つけ、仕掛けて来たか」

グレンファイヤー「だが、あいつらもバカだな!」

グランデ「おうよ!こちとら戦いの邪魔されて、腹を立てているのによ!」

シャア「いいや、これはこれでいい」

レイ「Destiny」「え…?」

シャア「これだけの敵がいるんだ。撃墜数が多い者が最強…という感じでやればいい

だろう」

ギユネイ「確かにそうだな!」

カイザム「面白い、奴等も倒せて一石二鳥というわけか」

マスク「ならば、我々の力…見せてやろう!」

弘樹「強いのは零達だけじゃねえって事…教えてやるよ!」

戦闘開始だ!

〈戦闘会話 トッドVS初戦闘〉

トッド「確かに俺はシヨウに負けた…。だがな、一生負けるつもりはねえ！だが、俺はもう憎しみに囚われはしないんだ！俺は俺の力で…一番になってやるよ！」

〈戦闘会話 バーンVS初戦闘〉

バーン「シヨウには負けたが、いずれ勝ってみせる…！その為にもこの場で負けるわけにはいかないのだ！お前達はその礎となってもらうぞ！」

〈戦闘会話 朗利VS初戦闘〉

朗利「何体でも掛かってきやがれ！俺はそう簡単に負けを譲る気はねえぞ！俺に勝てるのはエイサップだけだからな！」

〈戦闘会話 金本VS初戦闘〉

金本「俺だって、いつまでも朗利やエイサップ達に守ってもらおうわけにはいかないんだ！それを証明する！この戦いで！」

〈戦闘会話 ビーチャVS初戦闘〉

ビーチャ「さあ、行くぜ！オニキスの配下共！ダブルゼータに乗った俺の力は一味違
うぜ！ジユドーがいなくとも俺はやれる…それを見せてやる！」

〈戦闘会話 シヤアVS初戦闘〉

シヤア「必ずしも人にはライバルという者が存在する…。そして、それは私もだ。若
き頃を思い出す…純粹にアムロと戦っていた頃を」

〈戦闘会話 ギユネイVS初戦闘〉

ギユネイ「丁度いいぜ！お前等を倒して、大佐より上だという事を証明してやる！そ
の後はアムロだ！さあ、やるぞ！」

〈戦闘会話 リデイVS初戦闘〉

リデイ「ライバル心、か…。かつての俺なら、容赦なくバナージに敵対心を向けてい
たから…。まあ、そんな俺がいて、今の俺があるものだから。変わったという俺の
実力…受けてもらおうぞ！」

〈戦闘会話 ゼクスVS初戦闘〉

ゼクス「ミリアルド・ピースクラフトの時の私は確かにヒイロのライバルだったのかもしれない。だが、今の私でもヒイロは越えたいと思っっている…。今回だけは昔に戻り、戦うとする！」

〈戦闘会話 レイ「Destiny」VS初戦闘〉

レイ「Destiny」「シンは確かに強くなった…。肉体的にも精神的にも…。だが、そう簡単に俺も負けを認める気は無いのも事実だ。久しぶりにやってみるとするから…。自分のためだけの戦いを！」

〈戦闘会話 グラハムVS初戦闘〉

グラハム「かつてはガンダムを追い、ガンダムを越えようとし、修羅にまで堕ちた私を変えたのもガンダム…。そして、私は今、ガンダムに乗っている。フツ、運命というのは何が起きるのかわからないな。では、行くとしよう、グラハムガンダム！我々の勝利の為に！」

〈戦闘会話 ゼハートVS初戦闘〉

ゼハート「アセムへのライバル心…。歳を取ろうが変わらないものもあるのだな。で

は行こう、勝利を勝ち取る為に！」

〈戦闘会話　マスクVS初戦闘〉

マスク「ベルリとの決着……。元の世界へ戻ったら、必ず着ける！その為にもここで負けるわけにはいかないのだ！」

〈戦闘会話　虎王VS初戦闘〉

虎王「ワタルは友達だ！だが、同時にライバルでもある！俺様はいつか必ず、ワタルに勝ってみせるぞ！」

〈戦闘会話　ジョー「マイトガイン」VS初戦闘〉

ジョー「マイトガイン」「俺はまだ奴との決着をつけたつもりはない……！今度こそ、必ず俺が勝ってみせる！待っている、旋風寺　舞人……元の世界へ戻った時……俺の勝利を見せてやるぞ！」

〈戦闘会話　スザクVS初戦闘〉

スザク「僕は……ルルーシュの事はライバルではなく、友達だと思っているのだけど……」

でも、彼がゼロの時は間違いない、ライバル同士だったのかも……。そうになると、複雑だな、僕って……」

〈戦闘会話　ディオVS初戦闘〉

ディオ「俺が青葉の成長に焦っている……？確かにあいつはカッティングなしの操縦力も高め、大切な者の為に戦っている……。だが、バディとして……俺は負けるつもりはない！」

〈戦闘会話　ビゾンVS初戦闘〉

ビゾン「俺は……負けを認め、青葉にヒナを託した……。だが、ない事を願っていたが、もしあいつがヒナを裏切るような事をするのであれば……その時は俺が奴を倒す！」

〈戦闘会話　サリアVS初戦闘〉

サリア「そう言えば、私にも一時期、アンジュに対して、ライバル心を持っていたわね……。まあ、理由はもう思い出したくないわ。さあ、行くわよ！」

〈戦闘会話　サラマンディーネVS初戦闘〉

ナーガ「姫様、参りましょう！」

カナメ「私達が姫様が一番という事を証明します！」

サラマンディーネ「感謝します、ナーガ、カナメ……。アンジュとの決着……いずれつけてみせます！」

〈戦闘会話　ウエストVS初戦闘〉

ウエスト「そうだ！今度こそ、大十字　九郎を倒してみせるのである！」

エルザ「無理ロボ。博士がダーリンに勝つのは永遠にないロボ！」

ウエスト「エエルザ!? その一言は何気にひどい！ええい！我輩は何を言われようがメゲないのである！」

〈戦闘会話　ウイルVS初戦闘〉

ウイル「ヒーローマンとジョーイを越えるか……」

ニツク「随分険しい道だね」

ウイル「そうだな。だが、お前と二人なら越えられなくもない！行くぞ、ニツク！俺達の戦いを奴等とジョーイ達に教えてやるぞ！」

〈戦闘会話　カエサルVS初戦闘〉

カエサル「義兄上に認めてもらう為にもここは切り抜けるとしよう！そして、彼に勝つてこそが、イチヒメの心を本当に掴むというものだ！」

〈戦闘会話　アレクサンダーVS初戦闘〉

アレクサンダー「ノブナガと私の戦い…まだ決着はついていない…。いずれ着ける事になるだろう…。最強は誰なのか！」

〈戦闘会話　ダークケロロVS初戦闘〉

シヴァヴァ「全く…俺たち達も巻き込まれるとは…。まあ、一位にするのも仲間の役目だぜ！」

ドルル「任務開始」

ダークケロロ「すまぬ、二人共。受けるがいい…！もう一人の吾とは違う…力を！」

〈戦闘会話　ブレラVS初戦闘〉

ブレラ「いくら、アルトでもランカを傷つけると言うのであれば容赦はしない…。その時はオズマと共に殴るとする！」

〈戦闘会話 レイ「ガンソ」VS初戦闘〉

レイ「ガンソ」「俺はあのポンコツに負ける気はない……。かぎ爪は俺が殺す……！それを邪魔するのならば、容赦はしない！」

〈戦闘会話 カイザムVS初戦闘〉

カイザム「ライバルか……。確かに俺もカンタムに対して、ライバル心を抱いていたのかもしれない……。負けられない……！カンタムという弟に勝つ為にも……！」

〈戦闘会話 グレンファイヤーVS初戦闘〉

グレンファイヤー「あん時はゼロがリードしていたが、あのままやっていたら絶対に俺が勝ってた！また今度、勝負を挑んでやる！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVS初戦闘〉

EXレッドキング「ギヤアアアアン！」

グランデ「おうおう、レッドキング……。お前もやる気か！そんなじゃあ、行くとしますか！」

〈戦闘会話 ジン「UX」VS初戦闘〉

ジン「UX」「フツ、そういえば俺はアーニーと世界をかけて、戦っていたんだつたな。昔に戻るなら…また競い合ってみたいものだな」

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

弘樹「行くぞ、カノン！この勝負に勝って、零達よりも俺達が強いって証明してやる！」

カノン「零さん達って…アスナさんやゼフィちゃんも相手に入っているんですか?!
?って、ちよつと、弘樹さん！待ってくださいって、話を聞いてえええつ！」

敵を倒していると、ゼフィルスネクサスが現れた。

ほう、零達か…。

零「皆さん、お待ちせしました！俺達だけです、加勢に来ました！」

ビーチャ「悪いが、加勢なんていらなげ、零！」

零「え…」

ウイル「ここは俺達だけで十分だ」

朗利「誰もお前の助けなんていらぬ！」

零「は……?!? 何でそんなに嫌がつているんだよ?!?」

トツド「成る程な、弘樹の気持ちがあつたぜ」

弘樹「おい、零。お前達はそこで黙つて見ている！」

零「そういうわけにはいかぬ！来た以上俺も戦う！」

弘樹「必要ねえつて言つてんだよ！お前は黙つて、アマリとイチヤついてろ！」

零「何……? 弘樹、今日はやけに機嫌が悪いじゃねえか」

弘樹「誰かさんのせいだな！」

零「目で俺だと語つてんだよ！俺はお前に何もしたわけじゃねえぞ！」

金本「へえ……タチが悪いね、零つて」

零「何の事だ?!?」

ゼクス「零……」

零「ゼクスさん！あなたからも何か言つてください！」

ゼクス「今回は我々に任せてもらう」

零「あなたまで何言つているんですか?!?」

シヤア「我々にはやらなければならぬ事がある」

零「一体何なんだよ…!!?」

ゼファイ「皆さんの様子が変わです…」

アスナ「ちよつと、カノン！これはどういう事なの!!?」

カノン「ひ、人には…やらなければならぬ事があるんです！」

アスナ「だから、何の事よ!!?」

カノン「だから…もう私に聞かないでください！」

アスナ「何、逆ギレしてるのよ!!?」

ゼファイ「パパ、どうしますか？」

零「…よくわからねえが、俺達は俺達で動くぞ！なんか嫌な気がするからな！」

零は関係ない！戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「零…あなた本当に弘樹達に何もしていないの？」

零「してねえつての！身に覚えが全くないんだ！」

ゼファイ「あれ…？私達を除く方達のメンバー…まさか…」

零「兎に角、俺達も行くぞ！」

俺達は全ての敵を倒した…。

トツド「案外、早く片付いたな」

虎王「そりや、これだけの猛者がいれば、当然だろ」

ビーチャ「自分で言うか、普通？」

シヤア「勝負の結果は戻り次第伝えるとする。皆、お疲れと言っておこう」

零「勝負？みんなで勝負していたんですか？」

弘樹「零！俺の結果を聞いて、腰を抜かさなよ！」

零「…は？何で俺がお前の結果に腰を抜かさなきゃならねえんだ？」

アスナ「ほ、本当に何だったの、カノン？」

カノン「もう嫌ですう…」

これで…零に…！

戻った俺達はプロレマイオスの格納庫に集まった…。

ビゾン「それで…シヤア大佐。勝負の結果はどうだったのですか？」

カイザム「俺はかなりの自信があるぞ」

金森「俺だって！」

シヤア「…では、結果を発表する…」

レイ「ガンソ」…」

ジョー「マイトガイン」…」

シヤア「結果は…引き分けだ」

…何だって…？」

朗利「…は？」

サリア「…え？」

ディオ「引き分け…？」

リデイ「ぜ、全員が同じ撃墜数って事なんですか？」

シヤア「…実は恥ずかしながら…撃墜数を数えていなかった」

ウエスト「なぬー!?」

グレンファイヤー「な、何じゃそりや！」

ゼハート「…フツ」

ゼクス「ゼハート…シヤア大佐はもしや…」

ゼハート「想像にお任せするさ」

グラハム「成る程…あの人にいっばい食わされたという事か」

シヤア「さて、何の事かな？」

ゼフィ「皆さん：撃墜数勝負をしていたんですね。でも、シヤアさんもうっかりさんで驚きました」

零「いや、シヤアさんはそもそもそれぞれの撃墜数なんて数える気なんてなかったんだ」

ゼフィ「え？どうしてですか？」

零「ゼハートさんに聞いた所、弘樹を中心にみんながヒートアップしたみたいなんだから……」

ゼフィ「……あっ！皆さんのストレス解消の為に……ですか!?!？」

零「正解だ、流石はゼフィだな」

ゼフィ「それに、いくらシヤアさんでも皆さんの撃墜数は数え切れませんしね！」

零「まあ、もうじき弘樹は痛い目を見るけどな」

ゼフィ「え……?」

優香「弘樹！」

弘樹「ん？どうしたんだ、優香、メル？」

優香「あなた、カノンちゃんに何したの!?!？」

メル「カノンちゃん、もう疲れたと泣きついてきましたよ！」

弘樹「は…!?」

アスナ「散々彼女を連れ回した罰よ。自業自得ね」

弘樹「い、いや…だから…」

優香「ちよつと、詳しくお話しましょうか？」

メル「女の子を泣かせる人には容赦はしませんから」

アスナ「みつちりとなつちめてやるわ」

弘樹「あ、あ、いや…ビーチヤ、トッド！助けてくれ！」

ビーチヤ「アスナの言う通り、自業自得だ」

トッド「頑張れよ、弘樹」

弘樹「お前等アアアアツ!!」

俺は優香達に連れ去られてしまった…。

―新垣 零だ。

零「周りを見ていなかったあいつが悪いな」

ゼファイ「…パパ」

零「どうした？」

ゼファイ「女の方は強し、ですね！」

零「それを言うなら母は…いや、間違ってもいないか」
俺もアマリを怒らせないようにしないと…。

ボーナシナリオ12 6人の幼馴染

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、ゼフィが仲間となった後の話です。零、弘樹様、優香様、アスナ様、メル様、カノン様の6人は記憶を失い、お互いの事を忘れていましたが、記憶を取り戻し、昔の幼馴染の様に接しています。やはり、どんな人物でも仲のいい幼馴染や親友の前では気を許してしまうものなのでしょう…」

それでは始めます…。

ローゼフィという新たな仲間を迎え、さらに一団となるエクスクロス…。零、弘樹、優香、アスナ、メル、カノンの6人の幼馴染はアマリとイオリ、ホープス、そして、ゼフィに昔の事を話していた…。

―新垣 零だ。

ゼファイ「では、パパと弘樹お兄ちゃん達は幼馴染なんですかね」

弘樹「おう、そうだけ、俺と零、優香、アスナとメル、カノンは昔からの付き合いだ」
優香「懐かしいね。昔色々な事があつたし」

ゼファイ「ママとイオリお兄ちゃんは違うんですか？」

アマリ「私は零君と同じクラスの時に知り合つたの」

イオリ「俺も一緒だ」

アスナ「あの時、アマリって…イジメを受けていたのよね？」

アマリ「はい、それを零君に助けてもらいました」

弘樹「そこから零に惚れたつてワケか…。それで恋は実つたと」

アスナ「へえ…。弘樹、それ私に喧嘩売つてるの？」

弘樹「い、いや…そういう意味で言つたんじゃねえよ！」

メル「ですが、零さんとアスナさんが恋人同士だったという事には学校中が大騒ぎして
ていましたよ」

アマリ「どうしてなんですか？」

アスナ「…」

優香「あー、あのね。アスナちゃんって、結構…男勝りな性格じゃない？だから、彼女にしたくない美女ランキング一位だったの！」

アスナ「ゆ、優香！」

イオリ「そ、そんなランキングがあつたのか…」

アマリ「ひどい…」

ゼファイ「そんな事ないです！アスナお姉ちゃんは格好いいですよ！」

零「…ゼファイ、それフオローになつてないぞ」

ゼファイ「えっ…?!?あ、すみません！」

アスナ「いいえ、ありがとうね、ゼファイ。フオローしてくれて」

零「そう言えば、優香やメル、カノンも人気だったな」

カノン「零さんがそれ言います？」

弘樹「お前等の中にいる俺って何だったんだ？」

メル「お言葉ですけど、弘樹さん…。私達のクラスの子には大人気でしたよ」

弘樹「え、待ってくれ！それ初めて聞いたぞ！」

ホープス「ほう、人は見かけにはよらないとはこの事ですね」

弘樹「どういう意味だ、ホープス?!?」

零「覚えているか？メルがストーカーにあつた事件」

カノン「覚えています！つけられているから助けてって言われて、私が一緒に帰ったんでしたね」

弘樹「でも、結局カノンも被害にあって、俺と零がストーカー野郎をぶっ飛ばしたんだったな」

アスナ「あれ？ストーカーに仲間がいて、ピンチになったのはどこの誰だったわけ？」

優香「あの時のアスナちゃんは凄かったね！」

零「地面に倒れている相手のマウントをとって、ボコボコに殴っていたからな」

弘樹「俺達が止めてなかったら、綾行く殺していた所だったんだぞ」

アスナ「流石に殺しはしないわよ！」

メル「それにしても零さんとアスナさんって、よく喧嘩をしていましたね」

優香「うん、なにかと意地を張り合って、一週間口を聞かなかった事あったよね」

弘樹「あの時、俺達が必要に仲を戻そうとして、大変だったんだぞ」

カノン「もう少し感謝してほしいです」

アスナ「いやいや、弘樹と優香が言えないでしょう！」

零「お前等…喧嘩して一ヶ月ぐらい口を聞かなかったじゃねえか」

弘樹「そ、それは…」

アスナ「意を決して、二人の仲介に入ったカノンに当たって、怒鳴ったでしょう？」

零「それで泣き出してしまったカノンを見て、メルがブチギレて、椅子をお前等にぶん投げたんだっただな」

優香「う、うん……。あの時のメルちゃんは本当に怖かったよ……」

アスナ「クラス中、唾然となっていたのを覚えているわ」

メル「どうして私が悪者のように言うんですか……」

弘樹「まあ、そのおかげで優香と仲直りが出来たんだからな」

零「いや、仲直りしないとお前等死んでたぞ」

メル「失礼ですね、零さん!!?」

カノン「そう考えると私が一番まともですね」

アスナ「調子に乗らないでよ、カノン。あなたがよく迷子になった事は忘れないわよ」

カノン「ア、アスナさん……!!?」

メル「確かあの時は……キャンプに行つて、一人だけ迷っていましたね」

零「方向音痴だから、よく迷子になっていたよな」

弘樹「そんで見つけた時には野生の熊に襲われそうになっていて、優香が熊を蹴り飛ばしていたな」

アスナ「そうそう!あの時の優香はまさに鬼神だったわ!」

優香「鬼神つて、酷いよ!アスナちゃん!」

メル「その後、これ以上カノンちゃんが迷わないように弘樹さんがカノンちゃんをよく見るようになったのですね」

弘樹「まあな。放っておく事はできなかったしな」

優香「思えばあの時から二人の関係って、始まっていたのね」

カノン「や、やめてくださいよ、優香さん！」

アスナ「鬼神と言えよ：ほら、私が男達にボコボコにされて、襲われそうになった時の事覚えてる？」

メル「あ！零さんが怒って、その男の人達を半殺しにしたあれですね！」

零「何言ってるんだよ。ちゃっかりお前等も参加していたくせによ」

アスナ「あの時の零を見て、惚れ直したわ」

弘樹「いや、アスナ。お前も喧嘩に入っていたじゃねえか」

零「…何か…。最近の事なのに懐かしいな。ん…？どうした？アマリ、イオリ、ホー
プス？」

イオリ「い、いや…」

ホープス「何と言いますか…」

アマリ「零君達って、ヤンチャだったのね…」

零「いや、まだ序の口だぜ。まだまだ話はあるぜ」

アマリ「い、いや…もう十分…お腹いっぱい」
すると、警報が鳴った。

優香「警報…!?？」

ホープス「皆さま、どうやら魔徒教団が来たようです」

イオリ「まじぞ！今、ゼルガードを始めとする機体は修理中ぞ！」

アスナ「唯一、動かせるのは…」

メル「私達の機体だけですわね！」

カノン「行きましょう、皆さん！」

アマリ「さ、3機だけでですか!?もう少しお待ちした方が…」

弘樹「悪いが、動けるのに待機なんて真つ平ゴメンだぜ」

優香「ゼフィちゃん、あなたにも付き合ってもらうけどいい？」

ゼフィ「勿論、お付き合いします！」

零「よっしゃあ！行くぜ、みんな！」

俺達はそれぞれの機体に乗って入った。

俺達は機体に取り、出撃した…。

零「ルーン・ゴレムとデインベル…。セルリックはいないようだな」

弘樹「まつ、楽に済むってもんだな！」

メル「油断は禁物ですよ、弘樹さん！」

優香「増援の危険性も考えないと！」

アスナ「でも、この6人だけでやるのは久しぶりね」

ゼフィ「アスナお姉ちゃん、私もいます！」

アスナ「あ…ゴメン、ゼフィ…」

カノン「では、ゼフィちゃんに見せましょう。私達、6人の戦い方を！」

零「(教育上心配だが…)まあ、大丈夫か…)ああ!じゃあ、行くぜ！」

戦闘開始だ!

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

ゼフィ「頑張ってください、皆さん！」

アスナ「そう言われたら、断れないわね、零！」
零「ああ！何か、物凄く懐かしい気分だ！さてと、やろうぜ、アスナ！」

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

カノン「参りましょう、弘樹さん！」

弘樹「おう！俺達の長年の連携…見せてやろうぜ、カノン！」

〈戦闘会話 優香VS初戦闘〉

メル「他の方には負けられませんね、優香さん」

優香「うん！援護はよろしくね、メルちゃん！」

俺達は魔徒教団のオート・ウォーロックを全て倒した…。

アスナ「ざっと、こんなものよ！」

カノン「待ってください、この反応は…！」

現れたのは…数十体のガラム軍か…！

優香「今度はガラム…ネメシスの配下ね！」

弘樹「すぐにぶっ倒してやる！」

だが、奴等の動きが変だ…。

メル「気をつけてください！何か仕掛けて来ます！」

っ…！来る！

3機のガルムは同時攻撃を仕掛けてきたが…。

この動きには覚えがあるんだよ！

アスナ「メル！」

メル「ゼフィールスネクサスとデイビウスホーププレイはそれぞれ左右へ、ヴァリアステストロイは上空へ回避してください！」

優香「ええ！」

メルの指示通りに俺達はガルムの攻撃を避け…。

カノン「弘樹さん、今です！」

弘樹「喰らいやがれ！」

ヴァリアステストロイはクロスソードで急降下斬りを先頭のガルムに喰らわせた。

アスナ「零！優香！」

零「おう！」

さらに残った左右のガルムにはゼフィールスネクサスとデイビウスホーププレイの攻撃

を浴びせ、3機のガルムは爆発する。

アスナ「どう？勝負は先頭と上を取るが勝ち作戦！名付けて、勝先取作戦！」

零「だから、ダサいつての！」

優香「懐かしいね！よく、絡んできた人に対してやってたよね！」

メル「跳躍力の高い弘樹さんと身体能力の高い零さんと優香さんだからこそ、出来る技です！」

零「いや、アスナとメル、カノン三人の適切な指示があつてこそだ！」

弘樹「それじゃあ、残った敵をとつと片付けるとするか！」

カノン「了解です！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

ゼファイ「お久しぶりであの動き…やはり、皆さんは凄いです！」

アスナ「あの攻撃…私と優香が変わってやった事もあったわね」

零「俺と弘樹が変わった事もあったな。さてと、こっちはこっちで片付けてやるよ！」

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

カノン「久しぶりですが、やれました！」

弘樹「指示の腕も上がってたぜ！俺も負けてはいられないな！」

〈戦闘会話 優香VS初戦闘〉

メル「そう言えば、オニキスにいた頃も私は司令塔をやっていましたね」

優香「きつと、向いているんだよ！実際にメルちゃんには何度も助けられているしね！よーし！私もやるよ！」

俺達はガラムとアマテラス軍を全て倒した…。

優香「全機撃墜したよ！」

零「！…：優香！」

突然の砲撃を感じ取り、ゼフィルスネクサスはデイビウスホーププレイを庇い、攻撃を受けた…。

零「ぐっ…：！」

弘樹「零！」

優香「ゴメン…大丈夫、零!?!?」

零「ああ、かすり傷程度だ!」

アスナ「今の砲撃は…!」

現れたのは複数のグレモリーとアマテラス・ツヴァイか!

ギルガ「今の攻撃に対応できるとは流石だね、新垣 零!」

零「油断していたデイベウスホープレイを狙ったつもりだったが、残念だったな!」

ギルガ「残念なのは君達の方だよ!こちらの物量に勝てるかな?」

アスナ「へえ…。物量、ね」

カノン「では、あの作戦で参りましょう!」

メル「あの作戦…?了解!」

物量で攻めてきた時の作戦か!やるか!

零「弘樹!優香!合わせろよ!」

優香「うん!」

弘樹「任せろ!」

3機は一斉に動き出し、複数のグレモリーを3機で囲い、攻撃し、一箇所に纏める。

零「今だ、任せたぜ!三人共!」

アスナ「ブレードビット!ガンズビット!」

カノン「セイバービツト！」

メル「プラスチックビツト！」

複数のビツトは一箇所に纏められていたグレモリー軍を一機残らず全滅させた。

ギルガ「な、何?!?あれだけのグレモリーが全滅…?!?」

アスナ「名付けて、多い敵は一箇所に纏めて、集中砲火作戦！」

零「ダサイ…。しかも略称もない…」

優香「よくやっていたよね！私と零、弘樹が強盗の人達を一箇所に纏めて、メルちゃん、カノンちゃんが机、アスナちゃんがロツカーを強盗に投げていたもんね！」

弘樹「カノンが力持つて事には驚いたがな」

カノン「い、言わないでくださいよ…」

ゼフィ「ご、強盗の人達に椅子や机、ロツカーを投げたんですか?!?その方達は大丈夫だったんですか?!?」

メル「大丈夫だったよ！」

ギルガ「な、何だ…?!?いつもの彼等とは違う?!?」

優香「まあ、懐かしさに浸っているからね！」

弘樹「さてと、後はお山の大將ただ一人だけ！」

アスナ「これで終わらせるわよ！」

よしっ！戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ゼファイ「…」

アスナ「ゼ、ゼファイ？あ、ダメだ…。あまりの攻撃の荒さに固まってる…」

ギルガ「あ、当たり前さ！何だい、あの規格外の攻撃は!!？」

零「俺達の懐かし攻撃だ。お前にも見せてやるよ！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

カノン「今度は鉄球を持ち上げて、当ててみようと思いましたが…」

ギルガ「て、鉄球!!？」

弘樹「本気で人を殺す気か！いいから、行くぞ！」

〈戦闘会話 優香VSギルガ〉

ギルガ「椅子を人に向かって投げたのかい、メルちゃん!!？」

メル「えつと…パイプ椅子に木の椅子…鉄の椅子に機械の椅子を投げた事があります

！

優香「ほ、本当にバリエーション豊富だね…。よし、これで終わらせよう！」

俺達はアマテラス・ツヴァイにダメージを与えた。

ギルガ「な、何か…。今回の彼等は危険すぎる！撤退だ！」

アマテラス・ツヴァイは撤退した…。

零「増援は…ないな」

弘樹「よっしゃあ！完全勝利！」

優香「丁度、エクスクロスのみんなも来たみたいだよ！」

エクスクロスの戦艦が現れた。

アマリ「零君、みんな！無事…ですな」

青葉「す、すごい機体の残骸だな…」

ディオ「まさか、たった3機で…?!？」

アスナ「まあ、私達なら朝飯前よ！」

スメラギ「調子に乗らないの！」

ドニエル「後で艦長室に來い！勝手な行動をした罰で説教だ！」

メル「ええっ?!？」

弘樹「何で俺達が怒られるんだよ…!!?」

零「…はしやぎ過ぎたな」

ゼファイ「もう…言葉も出ません…あ、出ていました…」

俺達は帰艦し、メガファウナの艦長室に集まった…。

ドニエル「馬鹿者！今回は無事だったから、よかったものの、何かあったらどうする気だったんだ！」

カノン「ご、ごめんなさい…」

弘樹「で、でも！結果的に敵を倒せたから、いいじゃないですか！」

レーネ「それとこれとは話は別だ！」

倉光「零君、君がいながら、こんな事になるなんてね」

零「う…!ご、ごめんなさい…」

スメラギ「罰として、全艦の廊下掃除！それと零には全艦の男トイレの掃除よ！」

優香「そ、そんな〜！」

零「ちよつと待っててくださいよ！どうして俺だけ、トイレ掃除まで…!!?」

オルガ「やんちゃし過ぎた罰だ」

名瀬「頑張れよ、零！」

ジェフリー「だが、確かに動けない機体の中、君達がいなければ危なかったのも事実

だ」

扇「これからはもつと落ち着いて、行動してくれよ」

ネモ船長「一応、言っておく。感謝する、6人共」

弘樹「…はい！」

零「本当に申し訳ありませんでした！では、失礼します！」

俺達は艦長室から出た…。

スメラギ「ふう、いつも落ち着いている零でも、幼馴染と一緒にいるとやんちゃな子になるのね」

倉光「ですが、彼等の潜在能力は凄まじいの一言です」

ドニエル「ええ、それは私も認めています」

ネモ船長「見守っていこう。彼等、6人の未来を…」

ボーナスシナリオ13

獅子の弟子達

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、別働隊が合流した頃のお話です。ウルトラセブンの息子であり、ウルトラマンレオの弟子であるウルトラマンゼロ様とアル・ワースでウルトラマンレオの弟子となった織斑 一夏様…。お二人は種族は違えども、レオ様という師匠を持ちます。ですが、彼等にはある悩みがあるようです…」
それでは始まりませう…。

ーレオの弟子であるゼロと一夏。弟子同士である彼等は今日も訓練をしていたが、二人には共通のある悩み事が存在していた…。

「ウルトラマンゼロだ。」

俺は変身して、人間サイズで白式を纏った一夏と訓練をしていた…。

ゼロ「ぜりやあつ！」

一夏「っ！」

ゼロ「喰らえ、一夏！ゼロツインシユート！」

一夏「嘘だろっ!!? おおっと!!?»

俺はゼロツインシユートを一夏に向けて放ったが、一夏はそれを避けた。

ゼロ「やるじゃねえか、一夏！」

一夏「やるじゃねえかじゃねえよ！何、ゼロツインシユート撃ってんだよ!!? 反則だ

ろ、それ！」

ゼロ「撃ってはダメっていう決まりもないだろ！」

一夏「それなら、こっちだつて…零落白夜！」

ゼロ「っ！ゼロツインソード！」

一夏は零落白夜を発動し、俺のゼロツインソードと雪平二型は激突する。

俺達は一度離れ…そして、変身と白式を解除した。

ゼロ「ふう、今日はこれぐらいしておくか」

一夏「そうだな。それにしてもゼロは技と技の切り替えが早いな」

ゼロ「元々、ウルトラマンは光線技を多く持つからな。一夏も技の一つや二つ教えてやろうか？」

一夏「い、いや…シールドエネルギーをごっそり持っていていかれそうだからいいよ」

ゼロ「そういえば、あつちでは零が優香とアスナとメル、カノンと一緒に訓練しているんだよな…」

一夏「珍しいな、零がああ4人と訓練を…」

アスナ「行くわよ、零！」

メル「はっ！」

カノン「ふっ！」

零「待って待って！投げる物がおかしい！アスナ、包丁投げるな！メルとカノンはさりげなく、ビームライフル投げてんじゃねえって！」

優香「捕まえた！えいっ！」

零「っ、しまっ…い…って、ちよつと待て、優香！その関節はそつち曲がらねえええええええっ!?？」

ゼロ「…」

一夏「…見なかった事にしよう」

ゼロ「…そうだな」

俺と一夏は零の断末魔を聞かないように両耳を塞いだ…。

一夏「それにしても、ゼロ…。何だか納得していないって顔だな」

ゼロ「…人の事が言えるか？お前もなんか悩みがあるのか？」

一夏「…実はまだ完成していない技があるんだ。その特訓中だな」

ゼロ「お前もか？実は俺もなんだ」

一夏「ははっ！同じ師匠を持てば、悩みも一緒なんだな」

ゼロ「そうだな…。そんじゃあ、同じ弟子同士、もういつちよやるか！」

一夏「おう！」

だが、箒が走ってきた…。

箒「ゼロ、一夏！訓練中にすまない！この近くの村に宇宙人が現れた！」

一夏「宇宙人だって!?？」

ゼロ「箒。俺と一夏はその宇宙人の元へ向かうって、伝えておいてくれないか？」

箒「そ、それはいいが…」

一夏「わかった！行くぜ、ゼロ！」

俺と一夏はその宇宙人が暴れているという場所へ向かった…。

ボーナラスシナリオ13
獅子の弟子達

俺はウルトラマンになり、一夏も白式を纏って、宇宙人が暴れているという場所に着くと…。

マグマ星人「来たな、ウルトラマンゼロ！」

ゼロ「お前は…マグマ星人！」

一夏「知っているのか、ゼロ!?？」

ゼロ「サーベル暴君マグマ星人…。親父を变身不能に追い込み、レオと因縁を持つ宇宙人だ」

一夏「師匠との因縁の相手…!?？」

マグマ星人「そうだ！セブんとレオさえいなければ…我々の計画は達成できていたのだ！」

ゼロ「どうしてお前がアル・ワースにいるんだ？」

マグマ星人「ベリアル陛下の命で、このアル・ワースのコアを破壊しに来た！」

一夏「アル・ワースのコア…!?？」

ゼロ「そんなものが破壊されたら…アル・ワースが滅んじまう！」

マグマ星人「それが我々の狙いだ！来い！」

現れたのは…複数のレギオノイドとブラックギラスとレッドギラスか…！

一夏「あの怪獣は…？」

ゼロ「双子怪獣、レッドギラスとブラックギラス…。マグマ星人の配下の怪獣だ」

一夏「エクスクロスのみんなが来るのには時間がかかるそうぞ！」

ゼロ「それなら、俺達がやるしかねえな…！」

一夏「ああ！師匠に因縁のある相手なら、弟子の俺達がする！」

マグマ星人「レオの弟子だと…？ならば、お前もここで消してやるぞ、地球人！」

一夏「地球人を舐めるなよ！俺だつて、やれるんだ！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「まだあの技は完成していないけど…このままやるしかない！行くぞ！小さくても俺はお前達を止めてやる！」

〈戦闘会話　ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「(マグマ星人を倒す為にはまずはあの双子野郎共をどうにかしないと…だが、今の俺にはそれができねえ…どうすればいいんだ…?)」

俺達はレッドギラスとブラックギラスにダメージを与えた…。

一夏「どうだ?!?」

マグマ星人「甘いぞ、小僧!それしきの攻撃でブラックギラスとレッドギラスを倒せると思うなよ!」

ダメージが回復しただと…?!?

ゼロ「くそツ…!」

マグマ星人「やれ!レッドギラス、ブラックギラス!」

レッドギラスとブラックギラスはギラsspインを発動して、おれはその攻撃を受けてしまう。

ゼロ「うわあああつ!」

一夏「ゼロ!」

マグマ星人「他人を気にしている場合か、小僧!」

一夏「グアアアツ！」

一夏はマグマ星人の攻撃を受けた。

ゼロ「一夏、大丈夫か!?？」

一夏「な、何とかな」

ゼロ「…一夏…。マグマ星人を引きつけてくれないか？」

一夏「え…構わないけど…」

ゼロ「頼んだぜ！」

一夏「な、何だかよくわからないけど…よし！」

一夏はマグマ星人の気を引いてくれている…。今なら…！訓練の成果、見せてやる！

ゼロ「終わりだ、双子怪獣！シエア！」

俺は跳躍して、レオのきりもみキックの動きを真似、ブラックギラスとレッドギラス

の頭を蹴り飛ばした…。

漸くできたぜ…！新・きりもみキック！

マグマ星人「ば、馬鹿な…!?？ブラックギラスとレッドギラスが…!?？」

一夏「あれがゼロの新しい技か…。俺も負けてられないな！行くぞ！」

一夏はレオの流れ斬りの技を応用した技でマグマ星人のかぎ爪を破壊した…。

マグマ星人「ぬうっ…！な、何だと…!?？」

ゼロ「お前も新しい技が出来たようだな、一夏！レオの流れ斬りの技を応用した技…さしずめ、流水斬って、所か？」

一夏「おい！勝手に名前をつけないでくれよ！」

ゼロ「悪い悪い！」

マグマ星人「貴様等…！なめるな！まだ俺は負けていない！」

ゼロ「いいや、お前は俺達によって、負けるんだぜ！終わらせるぞ、一夏！」

一夏「ああ！俺達は負けない！例えどんな敵が現れたとしてもな！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 一夏VSマグマ星人〉

マグマ星人「地球人よ！その妙な機械を持っていたとしても、俺に敵うと思うな！」

一夏「だったら、教えてやるよ！白式と俺の力を！」

〈戦闘会話 ゼロVSマグマ星人〉

マグマ星人「お前達を倒した後は今度こそ、ウルトラセブんとウルトラマンレオを倒す！そして、全ての世界をベリアル陛下に捧げる！」

ゼロ「そういう事をいうのは俺達を倒してからにするんだな！お前を銀河の果てまで吹っ飛ばしてやるぜ！」

俺達はマグマ星人にダメージを与えた…。

マグマ星人「ぐっ…！おのれ…おのれえええええつ！！？」

ゼロ「お前はここで終わりだ！一夏！」

一夏「ああ！」

俺と一夏は攻撃を仕掛けた…。

ゼロ「さあ、やるぜ！一夏、合わせろよ！」

一夏「任せろ、決めてやる！」

ゼロ「はあああつ！吹っ飛べ！」

俺達は一斉に動き出し、俺はマグマ星人を何度か攻撃し、アツパーで打ち上げる。

一夏「遅い！斬り刻む！」

一夏は上空に飛び、空へ打ち上げられたマグマ星人を何度も斬り裂く。

ゼロ「決めるぞ、一夏！ゼヤアアアツ！」

一夏「うおおおっ！」

俺は下から、一夏は上から蹴りを発動し、マグマ星人に浴びせた…。

マグマ星人「グアアアアアアッ！」

ゼロ「ナイスキックだったぜ、一夏！」

一夏「お前もな、ゼロ！」

俺達はグータッチをした…。

ダメージを受けたマグマ星人は吹き飛ばす…。

マグマ星人「こ、この俺が…！」

マグマ星人は爆発した…。

ゼロ「何とかなかったな…」

一夏「でも、ここがアル・ワースのコアだとしたら、また悪い奴が来るぞ」

それなら…。

ゼロ「一夏、ある物を作りたい…。手伝ってくれないか？」

一夏「え…？あ、ああ」

俺達はある物を作り、みんなの元へ戻ってきた…。

榎無「お疲れ様、二人共」

セシリア「アル・ワースのコアが狙われたとは…」

鈴「よく二人で守りきれたわね」

ラウラ「だが、また奴等は来るのではないのか？」

ゼロ「それに関しては大丈夫だ」

簪「え……？」

一夏「俺とゼロで魔除けの風車を作ってきたからな」

シャルロット「魔除けの風車……？」

ゼロ「ああ。俺のウルトラの力で立てた風車だから、心配はないぜ」

簪「それにしても、一夏……。強くなったのだな」

一夏「まだまださ。もっと強くならないと……」

ゼロ「気負うなよ、一夏。少しずついいんだからな！」

一夏「……そうだな！」

ん……。零が来たな……。

零「はあ……。はあ……。し、死ぬ……」

一夏「よ、よう、零！お疲れ様！」

零「お疲れなんてレベルじゃねえ……。死んだ父さんと母さんが見えたぜ……」

ゼロ「マジで死にかけてんだな」

零「聞いたぜ。二人共、大活躍だったみたいだな」

一夏「へへっ！なんか照れくさいな…」

零「俺も二人に負けないように頑張らないとな」

アスナ「ふくん、頑張らないと、か」

零「…げっ…!!？」

カノン「それなら、もつと過激にやりましょうか！」

メル「どうせなら、ダイターンハンマーかグレンラガンのドリルをお借りしましょうか」

零「ま、待ってくれ…！す、少し休憩を…！」

優香「い・や・だ♪」

零「それは俺の台詞だあああああつ!!？」

零は優香達に連れ去られてしまった…。

ゼロ「れ、零も…大変だな」

一夏「ア、アハハハ…。そうだな」

気を強くな、零…。

ボーナスシナリオ14 宇宙からの落とし物

ホープス「…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、パリでネオ・アトランティスとの決着を付け、アル・ワースに戻って来た頃のお話です。人は必ずとは言いませんが、物を落とす時があります。その中には大切な物もあります。落とし物をするのは宇宙人も同じなようです…」

それでは始まります…。

―新垣 零だ。

俺達はハンマーヘッドの格納庫にいた…。

ケロロ「ケロロケロケロ」

零「何やってるんだ、ケロロ？えらく上機嫌だな」

ケロロ「あ…零殿！今、ガンプラを作っているであります！」

零「へえ…これがガンプラか…。本当に小さくてもガンダムそっくりだな」

ケロロ「零殿も作りますか？」

零「折角だが、遠慮しておくよ。ハンマーヘッドに来たのは用事があつて来たんだ」

ケロロ「用事…でありますか？」

零「ああ。肉嫌いのナディアの為に野菜スティックを作ってみたんだ。ネモ船長の話ではハンマーヘッドに居るって聞いたからな」

ケロロ「あー！ナディア殿なら、ジャン殿やゼロ殿と一緒に部屋にいますよ
！」

零「サンキュー、ケロロ。何なら、お前も来るか？お礼に野菜スティックご馳走する
ぜ」

ケロロ「ご一緒するであります！」

俺とケロロはナディアの部屋に向かい、着いた。

零「ナディア、すまない。部屋にいるか？」

俺はドアをノックする…。

ナディア「零さんですか？今開けます！」

ナディアの声が聞こえ、ドアが開くとナディアが出てきた。

ナディア「あ、ケロロもいたんだ。それで…私に何か用ですか？」

零「肉嫌いのお前に野菜スティックを作ってみただが、食べてくれないか？」

ナディア「わあ〜！ありがとうございます！是非いただきます！どうぞ、入ってください。ジャンとゼロさんもいますので！」

俺とケロロはナディアの部屋に入る。

ジャン「零さん、ケロロ！こんにちは！」

ゼロ「よう！お前等も来たのか！」

ケロロ「ゼロ殿、ジャン殿達と何をしていたのでありますか？」

ゼロ「ナディアやジャンが俺達の世界にいる怪獣や技術を聞きたいって言ったからな。話していたんだ」

零「確かに、怪獣も様々な種類がいるみたいだな」

ナディア「地球に元々いた怪獣、宇宙から来た怪獣、異世界から来た怪獣、人間と共存する怪獣…。私は人間と共存している怪獣と会ってみたいです！」

ゼロ「それなら、コスモスの宇宙が最適だな」

ジャン「コスモス？」

ケロロ「怪獣を倒すのではなく、落ち着かせる戦いをするウルトラマンであります」

零「落ち着かせる戦い…。敵を倒す以外の方法で戦うなんて…凄いな、コスモ

スってウルトラマンは…」

ゼロ「ああ。俺も会ってみたいと思ってるぜ」

わかり合う…か…。刹那やアルトもELSやバジユラとわかり合ったんだよな…。

ネメシスとわかり合う道も…あるって事か…。でも、俺は…。

すると突然、辺りが揺れだした。

ジャン「な、何?!?」

ケロロ「じ、地震でありますか?!?」

零「地震にしては妙だ！これは何かが落下してきた様にも思える！」

ゼロ「兎に角、外に出るぞ！」

俺達が外に出ると、他のみんなが集まっていた…。

零「アマリ！ゼファイ！何があったんだ?!?」

アマリ「零君！これ…！」

俺達はアマリの指差す方向を見ると、大きなクレーターが出来、中心には宇宙船の様なモノが埋まっていた…。

ナディア「宇宙船…？」

すると、宇宙船が開き、中からカタツムリの様な宇宙人が出てきた…。

ファントン星人「~~~~~！」

こ、言葉を発していると思うが：何を言っているのかわからねえ…。

ゼロ「あれは：フアントン星人じゃねえか」

冬樹「フアントン星人？」

ケロロ「確か：深刻な食糧危機に陥っている母星を救うために食糧探しの旅をしている宇宙人でありますな」

ギロロ「ちなみにフアントン星人は友好的な宇宙人だから、心配しなくても襲っては来ないぞ」

タママ「でも、どうしてフアントン星人がアル・ワースに来たのでしょうか…？」

クルル「あいつから情報を聞くしかねえが、言葉がわからないんじゃないかな」

ゼロ「なら、俺に任せろ」

レイ「大怪獣」「俺とゼロ、グランデは一応言葉がわかるぞ」

グランデ「まあ、ウルトラマンであるゼロちゃんは兎も角、俺とレイは怪獣を従えるレイオニクスだからな」

ドロロ「そうでござるか！」

千冬「三人共、頼めるか？」

ゼロ「わかった。~~~~~」

ゼロ達はフアントン星人に話しかけた。

フアントン星人「~~~~~。~~~~~」

レイ「大怪獣」「~~~~~?」

フアントン星人「~~~~~」

ゼロ「~~~~~。~~~~~。どうやら、フアントン星人は空間転移に迷い込んでこのアル・ワースに来た様だ」

グランデ「しかも、宇宙船からある物を落とした様だぜ」

ゼファイ「ある物…ですか？」

アスナ「何なの? そのある物って…」

グランデ「待ってくれよ…。~~~~~?」

フアントン星人「~~~~~!~~~~~」

ゼロ「どうやら、宇宙船のエネルギータンクを二個落としたみたいだ。あれがないと宇宙船を動かせず、帰れないんだよ」

零「つまり、アル・ワースに迷い込んで、エネルギータンクを二個落としてしまつて

落下したって事なのか…」

フアントン星人「~~~~~!」

ん? 俺を指差して何か言っているな?

レイ「大怪獣」「君は頭がいいと言っているぞ」

零「え？あ…どうも」

アマリ「それでどうするんですか？恐らく、二つのエネルギータンクはアル・ワースの何処かにあるみたいですが…」

マーベラス「何処にあるか検討は付いているのか？」

ゼロ「……………？」

フアントン星人「……………」

ゼロ「…わからないみたいだ」

ルカ「『ゴークイ』『ちよつと、何よそれ？』」

ハカセ「でも、ここに不時着したって事は、ここ最近にあると思うよ」

アムロ「仕方がない。手分けして探そう」

…ん？何か音が鳴ったな…。フアントン星人からだ…。

フアントン星人「……………」

グランデ「…腹が減ったみたいだ」

アイム「…はい？」

ルー「本当に自分の危機感がわかっていない宇宙人ね…」

零「仕方ない。ここは俺が腕を…」

すると、フアントン星人はアマリとナディアの肩を叩く。

フアントン星人「くくく！」

ゼロ「アマリとナディアの料理を食べたいみたいだな」

アマリ「え…!?？」

ナディア「…わ、私…!?？」

零「…」

ゼロ「零、堪えろ。フアントン星人も悪気があるわけじゃないんだ」

零「…わかつてるよそんな事」

優香「だ、大丈夫！零の料理は美味しいって、わかつてるから！ただ、宇宙人の人は合わないって、だけで！」

メル「優香さん…フォローになっていません…」

零「どうせ、俺の料理は地球止まりですよ」

優香「う、嘘嘘！嘘だから、気にしないでよ、零！」

零「…フン」

優香「ちよつ!?？顔を逸らさないで！私が悪かったからー！」

アスナ「これは減点ね、優香」

弘樹「何のだよ…」

この後、アマリとナディアが作った料理にフアントン星人は気に入ったとかなんとか

…。

何か悔しいな…。

ボーナスシナリオ14 宇宙からの落とし物

結局、エネルギータンクを探すメンバーは俺、ケロロ小隊、しんのすけを初めとする春日部防衛隊、カンタム、シヤングリラーメンバー、ゴーカイジャー、ジャン、グラタンメンバー、レイさん「大怪獣」だ。

ビーチャ「エネルギータンクを探してくれって言われてもな…」

エル「当の本人がついて来ないとどんなものかもわからないのにな…」

ジユドー「まあ、それらしいものを見つけて、持って行ったらいいんじゃないか？」

トオル「大丈夫ですよ！こっちにはハカセさんがいるんですから！」

ハカセ「そ、そんなに期待しないでよ〜！」

ジョー「ゴーカイ」「それにしても、ケロロ…。こんな所にもガンプラ…というものを

持つてきているのか？」

ケロロ「これは我輩のお守りみたいなものであります！」

零「大事なものならしつかりとしまっておけよ」

ボーちゃん「ボー…？みんな…何か、ある」

マサオ「え？」

俺達はボーちゃんが指差す方向を見ると、そこには二つの何かがあった。

ネネ「何あれ？」

鎧「ドンさん、あれって！」

ハカセ「おそらく、あれがフアントン星人の言っていたエネルギータンクだよ！」

しんのすけ「おー！凄い風前！」

レイ「大怪獣」「それを言うなら、偶然だ」

ギロロ「二個まとめ同じ場所に落ちていたのは付いていたな」

ケロロ「そうでありますな！よし！早速回収を…！」

ケロロが駆け出した時だった…。

ケロロ「ケロツ…!?？」

ケロロは小石に躓き、持つていたガンプラを手放してしまう。

さらにそのガンプラはエネルギータンクの穴に落ちてしまう…。

しんのすけ「あ…」

ケロロ「ケロー!??わ、我輩のガンプラがアアアツ!??」

だから、しつかりと持つておけと…。??何だ、このエネルギー…!??

すると、エネルギータンクが光り出した。

零「気をつけろ！様子が変だ！」

すると、エネルギータンクから、巨大なガンプラが出てきた…。

いや…巨大化したらプラモデルか本物かわからなくなるが…。

ハンソン「な、何!??」

サンソン「ケロロのガンプラが巨大化したぞ！」

グランデイス「あのエネルギータンクの中に落ちたのが原因なのかい!??」

零「恐らく、そうでしょうね…!ん?あれは…」

おいおい…:よりもよって巨大化したガンプラの両肩にエネルギータンクが引つかかっているなんて…。

ジャン「エ、エネルギータンクがガンプラの両肩に…!」

ギロロ「おい、ケロロ!なんて事してくれたんだー!??」

ケロロ「ケ、ケロー!??我輩、何も悪くないであります!」

冬樹「ま、待って！攻撃してくるよ！」

ドロロ「まずい！」

零「くそっ！」

巨大化したガンプラは俺達目掛けて拳を振り下ろしたきた。

それを見た俺はみんなの前に立ち、巨大なバリアを張って、ガンプラの攻撃を防いだ
…。

しかも、あのガンプラ…若い時に乗っていたアムロさんのガンダムなんだよな…！

零「ぐっ…！」

タママ「おー！零っちー、流石ですー！」

零「みんな！艦に戻って出撃してくれ…！」

マーベラス「わかった！暫く、任せたぞ、零！」

零「はい…！」

俺を残して、みんなは艦の方へ走って行く…。

零「っ…！」

ヤバイ…！バリアが破られる…！

バリアが破られ、俺目掛けて拳が飛んでくるが、俺は間一髪避ける。

零「こうなったら…ゼフィールスネクサス！」

俺はゼフィールスネクサスと呼んだが…。

来なかった…。

零「…あれ？来ない…？うおっ！！？」

俺はガンプラの攻撃を避け続ける。

零「…あ、そう言えば、ゼファイが擬人化してからは、ゼファイが側にいないと呼び出せないだった…」

だったら…！

またもや俺目掛けて、拳を振り下ろしてきたが、俺はそれを避け、腕をつたって、飛ぶ。

零「プラモデル風情が…調子に乗ってんじやねえ！」

俺は右拳に電撃を纏わせて、ガンプラの頬部分を殴った…が…。

零「硬っ…！！？やっぱり、無理か…！って、うわあっ！！？」

俺はガンプラに振り払われ、宙に投げ飛ばされる。

そんな俺目掛けて、ガンプラはビームライフルを構えた。

零「しまっ…！！？」

上空では流石に避けられないと俺は目を瞑るが…。

しかし、ビームライフルは俺に当たらず、俺を受け止める機体の姿が…。

ゼファイ「パパ、ご無事ですか！！？」

ゼフィールスネクサスだった…。

アスナ「まったく、もう！生身で機体とやり合おうなんて、あなたバカなの!!?」

零「悪かったよ！助かったぜ、ゼファイ！アスナ！」

ゼファイ「パパ、早くネクサスにお乗りください！」

零「わかった！」

俺はゼフィールスネクサスに乗ると、エクスクロスの戦艦が現れ、みんなも出撃してきた…。

ゴーカイレット「待たせたな、零！」

一夏「ここから反撃だ！」

零「待つてください！まずはあのガンプラの両肩にあるエネルギータンクを回収しないと！」

海道「倒して奪っちまえばいいんじゃないのか!!?」

ゼロ「いや…下手にエネルギータンクを攻撃して、破壊しちまったら、フロントン星人が帰れなくなる！」

グランデ「それにエネルギータンクが爆発したら、エネルギー爆発によって、ここら

一体が吹き飛んじまうぞ！」

ベルリ「そんな!!?じゃあ、どうすればいいんですか!!?」

アイーダ「まずは様子を見るしかないです！」

マスク「悔しいがそれしかないようだな……！」

ノブナガ「戦闘開始！だが、くれぐれもガンプラには手を触れるな！」
行くぞ！戦闘……いや、様子見開始だ！

くそッ……！攻撃できないってのは、菌痒いな……！

プリシラ「このままじゃ、ジリ貧だよ！」

夏美「でも、どうしたら!?？」

アマリ「下手に刺激してしまって、エネルギータンクに負荷をかけて仕舞えば……！」

ホープス「お気をつけください、ゴーレムが来ます」

ルーン・ゴーレムの軍団が現れた……!??

イオリ「ルーン・ゴーレム……!?？」

メル「術士はいません！という事は……野良ゴーレム……？」

するとゴーレム達はガンプラ目掛けて動き出した。

弘樹「まずいぞ！あいつら、あのガンプラを狙うつもりだ！」

優香「このままじゃ、倒されちゃう！」

ルルーシユ「ゴーレム共をガンプラに近づかせるな！迎え撃つぞ！」
カレン「了解！」

今度こそ…戦闘開始だ！

全てのゴーレムを倒した俺達…。だが、どうすれば…！

ジャン「皆さん！僕に任せてください！」

ナディア「ジャン、どうするの!?？」

ジャン「ジャン、行きます！」

ハンマーヘッドから飛行機に乗ったジャンが現れた。

ラフタ「何、あの飛行機!?？」

ジャン「僕が作った飛行機です！」

アルト「凄えじゃねえか、ジャン！飛行機も作れるのか！」

ジャン「ここだ！」

ジャンは飛行機を動かし、右肩に掛かっているエネルギータンクを取った。

ジャン「よしっ！もう片方も！」

左肩のエネルギータンクも取ろうとしたが…そんなジャンの飛行機にガンプラは

ビームサーベルで斬りかかろうとした…。

ゼロ「危ねえ！シエアツ！」

それをゼロがゼロスラッガーで防ぐ。

ジャン「ありがとう、ゼロさん！」

ゼロ「レイ、リトラを呼んでくれ！」

レイ「大怪獣」「そうか！行け、リトラ！」

レイさんはリトラを呼び出し、リトラは左肩のエネルギータンクを回収する。

だが、ガンブラのビームライフルが直撃し、リトラはエネルギータンクを落としてし

まう…。

ゼロ「しまった!?？」

ひろし「エネルギータンクが落ちちまう！」

しんのすけ「カンタム、ハッチを開けて！」

カンタム「わ、わかった！」

しんのすけ「とおーッ！」

カンタム・ロボのハッチが開くと、しんのすけが飛び出し、尻でエネルギータンクを

キャッチする。

そして、そのしんのすけをカンタム・ロボがキャッチする。

みさえ「ナイスキャッチよ、しんちゃん！」

しんのすけ「伊達に尻は鍛えていないゾ」

零「よしっ！ エネルギータンクの回収は完了したぜ！ 後はあの化け物ガンプラを倒すだけだ！」

ケロロ「ちよ、ちよつと待つであります、零殿！ あ、あれは我輩の……」

零「……ケロロ、各世界にはこんな言葉がある……。自業自得だ！」

ケロロ「ガ、ガッン！」

よーし、戦闘開始だ！

〈戦闘会話 アムロVSガンプラ〉

アムロ「プラモデルとは言え、あのガンダムと戦う事になるとはな。本当のガンダムのパイロットというものを教えてやる！」

〈戦闘会話 シヤアVSガンプラ〉

シヤア「ほう、かつてアムロが乗っていた初めてのガンダムか。懐かしいものだ。私も歳をとったものだな。さあ、行こうか！」

〈戦闘会話 ケロロVSガンプラ〉

ドロロ「隊長殿！ここでトドメを刺すでござる！」

ケロロ「うう…！吾輩の、ガンプラがあっ…！」

クルル「クーククツ、今何を言っても無駄なようだな」

ギロロ「おい、やる気を出せ！やらなければコツチがやられるぞ！」

ケロロ「こ、こうなったらもうヤケクソであります！我が、ガンプラよ…さらばであります！」

〈戦闘会話 グランデイスVSガンプラ〉

サンソン「手作り飛行機を作るなんて、ジャンはやるな！」

ハンソン「うん、流石はジャンだよ！」

グランデイス「それじゃあ、ジャンに負けないように私達も行くよ！」

〈戦闘会話 零VSガンプラ〉

零「行くぜ、プラモ野郎！機体に乗ったらもうこつちのもんだぜ！」

アスナ「いや…生身で機体に殴りかかる方がおかしいのよ」

ゼファイ「機体が金色…拳…生身で機体と戦う人…うつ、頭が…！」

零「どうした、ゼファイ!?？」

ゼファイ「これ以上やると怒られるので、行きましょう！」

零「誰に怒られるんだよ!?？」

俺達の攻撃でガンブラにダメージを与え、ガンブラは爆発した…。

ケロロ「わ、我輩の…ガンブラがあ…！」

タママ「軍曹さん…！」

零「…！」

鈴「ふう…何とかなったわね」

箒「ファントン星人のエネルギータンクも無事、回収出来たな」

セシリア「これでファントン星人さんは無事にお帰りになられますね！」

ラウラ「取り敢えず、彼の宇宙船に取り付けよう」

俺達は協力して、ファントン星人の宇宙船に二個のエネルギータンクを取り付けた。

ファントン星人「~~~~~！」

冬樹「宇宙船が直ったと喜んでいますよ！」

夏美「冬樹、言葉がわかるの!?!?」

冬樹「う、うん…。何となくだけどわかるんだ…」

ファントン星人「くくく!」

ゼロ「ありがとう、だどよ」

すると、ファントン星人は俺達の前に立ち…。

ファントン星人「ジャン、ナディア、レイ、シンノスケ、フユキ、アマリ。キエテ・コ

シ・キレキレテ」

そう言い残すと、ファントン星人は宇宙船に乗って、宇宙船は動き出し、空高く飛び

去ってしまった…。

シャルロット「行っちゃったね…」

楯無「最後まで友好的な宇宙人だったわね」

簪「それよりも…キエテ・コシ・キレキレテって…?」

ゼロ「ファントン星の言葉の一つで、僕・君・友達って意味だよ」

しんのすけ「オラ達だって、キレキレテ、だゾ！」

ケロロ「…」

零「何だか腹が減ったな…ケロロ、何か食べたい物、あるか?」

ケロロ「ケロ？」

零「まあ…自業自得としても、俺達はお前の大切な物を壊してしまったのは事実だ…。そのお詫びにならないとは思いますが、せめて、な…」

ケロロ「零殿…！ありがとうございます！」

その後、俺達はそれぞれの艦に戻り、俺はみんなに料理を作った…。

マーベラス「これまた、すごい量だな」

零「夢中になったら、作りすぎてしまつて…。どうぞ、お召し上がりください！」

優香「…ねえ、零？どうして私の料理だけは少し違うの？」

零「聞いて驚けよ、優香。お前の料理は豆腐を米粒サイズに丸めて作った豆腐ご飯、豆

腐ハンバーグ、豆腐のみの味噌汁、豆腐の煮物…それから冷奴だ」

優香「うわー！私だけ凄く手間がかかてるね！ありがとう！…じゃないよ!?？何で

豆腐ばかりなの!?？お婆ちゃんの料理じゃないんだから！それから、わたしが豆腐嫌
いってことは知っているでしょう!?？」

零「え？そうだったか？」

優香「もしかして…料理の事、まだ怒っているの？」

零「さーてと、明日はブロッコリーやトマトをメインとした料理でも作るかー」

優香「待つて、お願い！何でもするから許して、零！それだけはやめて！」

零「暫く、優香の料理だけは手間がかかるな」

優香「零ー!!？」

イオリ「め、珍しく零が主導権を握っている…」

弘樹「まあ、前に料理に関して優香が零を怒らせた事があってな。暫く、優香の晩御飯はあいつの嫌いなものだったぜ」

アスナ「流石の優香も泣いて謝っていたものね」

カノン「そう言えば、メルちゃんって…あの時の事、何も言わないよね？」

メル「人が作った料理にいちやもんをつける方は好きではないので…。それに各世界にはこんな言葉があります。自業自得…と」

マリア「零の言葉…気に入ったのね」

メル「あ、アハハ…」

ゼファイ「ママ、私も好き嫌いしなくなります!」

アマリ「うん、偉いわね、ゼファイちゃん!（私も…零君を怒らせない様に、好き嫌いをしないようにしましょう…）」

この後、一週間ぐらい、優香の晩御飯は嫌いなものばかりだった…。

ボーナシナリオ15　オラたちの山賊退治だゾ

ぶりぶりざえもんの冒険　アル・ワース編!!？

しんのすけ「むかーし、昔…ぶりぶりざえもんという豚がおりました……………終わり」

ぶりぶりざえもん「終わるなあああああつ!!？」

ホープス「…という茶番は置いておき…皆様、私の研究室へようこそ。ここでは大きな戦いの合間に起きた小さな日常を振り返ってみます。これから私が語るのは、ゼフィがエクスクロスの一員となった頃の話です。子供というのは自分自身の描くキャラクターが現実世界にいて欲しいと願うものです。ですが、ここは異世界、アル・ワース…そういう事が起こっても不思議ではないのです…」

それでは始まりませ…。

ーネメシスの存在が明るみになり、ゼフィという最愛の娘を仲間と迎えた零達…。彼等の戦いも終幕へ目指していたが…。

ー新垣 零だ…。

俺達はマクロス・クォーターの格納庫にいた…。

零「なあ、しんのすけ？」

しんのすけ「何、零お兄ちゃん？」

零「俺達が始めて会った頃、お前はぶりぶりざえもんって、名前を叫んだだろ？」

しんのすけ「お、そう言えば、そうでしたな」

零「そのぶりぶりざえもんってのもしんのすけ達の世界で放送されているのか？」

しんのすけ「その通りだゾ！ぶりぶりざえもんはオラ達の世界では大人気なんだゾ！」

零「へえ、にしても絵がうまいな！」

トオル「ちよ、ちよつと待ってください、零さん！」

零「どうした？」

マサオ「しんちゃん、嘘をついてるの！」

ネネ「ぶりぶりぎえもんはテレビで放送されていないのよ！」

零「…はっ？どういう事だ？」

ボーちゃん「ぶりぶりぎえもん…しんちゃんが、作った」

…はい？

零「え…？おい、待て、しんのすけ？これはどういう事だ？」

しんのすけ「まあ…五歳児の可愛い…そよ」

零「ほーう…なら、嘘つきには…こうだ！」

ゲンコツ!!?

俺はしんのすけの頭にゲンコツを落とした。

しんのすけ「お、おーう…」

トオル「自業自得だ」

ゼフィ「あ、パパに春日部防衛隊の皆さん！」

ワタル「春日部防衛隊のみんな…探したんだよ！」

来たのはゼフィ、プル、カロツサ、メリツサ、ワタル、ヒミコ、虎王、ユイ、レナ、サラ、ティア、イングリッドさん、ケイだった。

マサオ「僕達を探していたんですか？」

ティア「うん！みんなで鬼ごっこしようと思ってね！」

レナ「わ、私は別にいいのに……」

ケイ「嘘、すぐく乗り気だったのに！」

レナ「ケ、ケイ！」

零「そうだったのか。ほら、遊んでこいよ！」

サラ「零も遊ぼうよ！」

虎王「ユイやイングリッドも付き合ってくれるんだぞ！」

零「鬼ごっこか……。なら、俺も入れてもらおうかな」

プル「わーい！零も入ってくれるんだ！」

メリツサ「ありがとう、零」

カロツサ「じゃあ、零が鬼」

零「よしっ！早く逃げねえと捕まえるぞ！」

ヒミコ「逃げるのだー！」

サラ「わーい！」

……とみんなが走り出そうとした時だった……

ベルリ「零さん、いますか？！」

ベルリにキオ、ジョーイじゃねえか。

零 「三人共…どうしたんだ？」

キオ 「近くの村で山賊騒ぎがあったみたいなんです」

ジョーイ 「それで零さんに相談を…」

トオル 「また山賊騒ぎですか…？」

零 「…待て、なんで俺に相談するんだ？」

ベルリ 「そ、それは…」

アスナ 「各戦いに備えるため、今殆どの機体が整備中…その為に他の人達は手が離せないのよ」

アスナ…？

零 「それで…？」

アスナ 「早い話、鬼ごっこをしている程、暇なら山賊退治に行くわよって事」

零 「…わかったよ。悪いな、みんな…これが終わったら、遊んでやるから」

ワタル 「何言っているの、零さん！」

レナ 「私達も行くわ」

しんのすけ 「村の人達をお助けに行くゾ！」

零 「お前等…」

ゼファイ 「パパ、人助けに大人も子供も関係ありません！」

アスナ「それにみんなもエクスクロスの一員なのよ」

零「：そうだな！悪かったな、みんな。それじゃあ、みんなにも協力してもらおうぞ！
ユイ、イングリッドさん、キオ、ベルリ、ジョーイ、アスナ：お前等にも手伝ってもら
うぞ」

キオ「はい！」

しんのすけ「それじゃあ、出発おしんこー！」

ゼファイ「ナスのぬか漬けです！」

零「頼む、ゼファイ。お前はしんのすけの影響を受けないでくれ！」
心配だ：：物凄く：：。

ポーナスシナリオ15 オラたちの山賊退治だゾ

：：なんか、サブタイのBGMがいつもと違うような：。
って、何だサブタイのBGMって？俺は何言ってるんだ：？
そんなこんなで俺達は山賊に襲われている村へ来た：。

イングリッド「ここが山賊騒ぎがある村ね」

村人「あなた方は…」

零「突然、すみません。俺達はエクスクロスに所属している者です」

しんのすけ「ハイ！お姉さん！オラと一緒にこの異世界の果ての先まで一緒にいない？」

村人「えっ…?!？」

…ナンパしてやがる…。

アスナ「しんちゃん…遊びに来たわけじゃないでしょ！」

アスナ渾身のぐりぐり攻撃がしんのすけにクリーンヒット！

しんのすけ「う、うおー！母ちゃん並みに強力だゾー！」

…しんのすけはアスナに任せておこう、うん。

ユイ「実はこの村が山賊に襲われていると聞いて、来たのですが…村長さんはいますか？」

すると、村長らしき人が来た。

村長「私がこの村の村長です」

しんのすけ「オッス、組長！」

村長「私は園長…じゃなく、村長です！」

サラ「それで山賊の人達はどうしたの？」

村長「実は…ある方が追いつ返してくれたのです」

レナ「ある方？」

？「私だ…」

零「…」

アスナ「…」

ベルリ「…」

ジョーイ「…」

キオ「…えっ…!?？」

お、おお、キオ…。よく声を出せたな。村を救った奴が衝撃的過ぎて、俺達は言葉が出なかつたんだぞ…。だって、そいつは…。

カロツサ「豚…?」

メリツサ「豚だね…」

？「誰が豚だ!?？」

プル「いや、豚じゃん！」

ワタル「いやいや、待って！触れる所はそこじゃないよ！」

ヒミコ「うーん、ワタル。豚なのにズボンを履いて、仁王立ちしているところか？」

ワタル「そこでもない！」

虎王「ならば、豚なのに喋っている所か？」

ワタル「違うって！彼…しんちゃんがよく描いているぶりぶりぎえもんじゃないか！」

しんのすけ「おー、ぶりぶりぎえもん！お久しぶりぶり！」

ぶりぶりぎえもん「しんのすけか」

零「いや、待ってくれよ！何でしんのすけの作った存在が実在するんだよ!!?」

しんのすけ「ぶりぶりぎえもんは何度もオラをお助けしてくれたゾ！」

ぶりぶりぎえもん「そんな事もわからないのか、この豚野郎！」

零「豚はお前だろ！」

ゼファイ「それで…ぶりぶりさんが山賊の人達を追い返したのですか？」

零「ぎえもんもつけない、ゼファイ」

ぶりぶりぎえもん「その通り…。その事を褒めてもいいのだぞ？特にその金髪の女性」

ユイ「え、え…？わ、私…ですか？」

ぶりぶりぎえもん「お前は何より大きい…ああ、何が大きいのかと言うと」

ぶりぶりぎえもんが何か言うのを察し、俺とアスナは全力のゲンコツを落とす。

零「この豚が……！」

アスナ「この作品を汚すんじゃないわよ……！」

ぶりぶりぎえもん「フツ、お姉さん。この作品などとメタイ事を言う。ただの小説ではないか」

零「お前が一番メタイんだよ！」

マサオ「ねえ、ユイさんの何が大きいの？」

レナ「気にしなくていいから！」

イングリッド「しんちゃんを作った通り……生みの親とは似るようね……」

ぶりぶりぎえもん「さてと、組長」

村長「村長です！」

ぶりぶりぎえもん「お助け料の100億万円はまだか？」

村長「そ、そんな大金払えません！」

ぶりぶりぎえもん「ふざけるのも大概にしるよ、豚野郎！こちとら、善意があつて助けたんだぞ！ならば、金を払ってもおかしくないだろう！」

零「善意があるんなら、金をせびるな！」

俺は村長に掴みかかるぶりぶりぎえもんを引き離して、ゲンコツを浴びせた。

ぶりぶりぎえもん「この……何なんだお前は……？」

零「お前こそ何なんだよ!? 何処まで自分勝手なんだ!?」

ぶりぶりざえもん「私は救いのヒーロー、ぶりぶりざえもんだ!」

零「金をせびる奴がヒーローな訳あるか!」

ベルリ「れ、零さん：落ち着いてください」

零「逆にこんな奴を前に落ち着けるか!」

ぶりぶりざえもん「こんな奴とは失礼な豚野郎だな」

零「だから、豚はお前だろ!」

…も、もういい：疲れた…。

アスナ「まあ、いいわ。問題が解決したのなら、帰りましょう」

山賊リーダー「お前等か? 俺の部下共を可愛がってくれたのは」

いかにも山賊の親玉が来たな…。

山賊リーダー「それで? どいつが俺の部下を可愛がってくれたんだ?」

ぶりぶりざえもん「この男だ」

零「おおい!? やつたのはお前だろ!?」

ぶりぶりざえもん「何を言っている私は、豚だぞ」

しんのすけ「こんな時に豚だと認めているゾ…」

山賊リーダー「お前か、豚野郎!」

ぶりぶりざえもん「何故、気づいた？」

キオ「いや、普通、気付くよ！」

山賊リーダー「部下を可愛がってくれた札をしなければならぬな」

ぶりぶりざえもん「ほう、では……」

ぶりぶりざえもんが山賊のリーダーの前に立つ。

そして、勢いよく振り返り、俺達に言い放った。

ぶりぶりざえもん「さあ、早くあいつ等を倒そう！」

ジョーイ「ええっ!??嘘!?」

カロツサ「卑怯者！」

ティア「戻ってこいー！」

ぶりぶりざえもん「断る。私は常に強い者の味方だ」

山賊リーダー「ふざけるな！」

山賊リーダーはぶりぶりざえもんを俺達の方へ蹴飛ばした。

ケイ「当たり前だよ」

山賊リーダー「こいつ等……俺達をなめやがって……獣人共から奪ったガンメンで踏み潰してやるよ！」

すると、獣人のリーダーがガンメンに乗ると、複数のガンメンも現れる。

トオル「手下が来たんだね！」

ネネ「一応、機体も持ってきて良かったわね！」

ボーちゃん「カンタム達も、来た」

カンタム・ロボ、幻王丸が現れた。

ひろし「しんのすけ、みんな、大丈夫か!?？」

みさえ「心配して、駆けつけてきたわ！」

幻龍斎「ヒミコ、幻王丸に乗るウラ！」

ヒミコ「わかったのだ！」

俺達はそれぞれの機体に乗った。

山賊リーダー「魔神だと…？まさか、貴様等、エクスクロスか!?？」

ゼフィ「知っているのであれば、大人しく降参してください！私達は無益な争いは好みません！」

山賊リーダー「フン、ここでエクスクロスを倒せば、名も上がるというもの！野郎共、エクスクロスを倒せ！」

虎王「ゼフィ、言っても無駄な奴等のようだぞ！」

零「仕方ねえ、奴等を止める…行くぞ！」

ベルリ「こんな時にぶりぶりぎえもんは何をしているの!?？」

カンナム「何、ぶりぶりざえもんがいるのか?!？」

ジョーイ「ぶりぶりざえもんなら、さつきお腹が空いたと、その食堂に入っただけど…」

キオ「何処まで自由なの?!？」

レナ「この争いの原因を作ったのはあいつなのに…!」

ユイ「レナ、今は愚痴っても仕方ないよ!」

零「これが終わった後…あの豚野郎を丸焼きにしてやる!」

ゼファイ「パパ、丸焼きではダメです!串刺しです!」

アスナ「親娘揃って、物騒な事言わないでよ?!?まあ、気持ちはわかるけど!」

取り敢えず、戦闘開始だ!

〈戦闘会話 プルVS初戦闘〉

プル「山賊なんて悪い事しないで、しっかりと働きなよ!そんな事しているから、悪
いって言われるんだよ!」

〈戦闘会話 ベルリVS初戦闘〉

ベルリ「全く…どうしてあなた達はマトモな道を進もうとしないんですか！柄じやないけど、僕が目覚まさせてやる！」

〈戦闘会話 キオVS初戦闘〉

キオ「村の人達を困らせると言うなら、僕が相手になる！誰かの涙は見たくないから！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVS初戦闘〉

ジョーイ「行こう、ヒーローマン！村を困らせる人達を止めよう！」

ヒーローマン「ウオオオツ!!？」

〈戦闘会話 ワタルVS初戦闘〉

ワタル「この村はお前達の好きにはさせない！救世主である僕が守ってみせる！」

〈戦闘会話 幻龍斎VS初戦闘〉

幻龍斎「山賊達を懲らしめるチャンスだウラ。ヒミコ、行くウラ！」

ヒミコ「わかったのだ！ヒミコも頑張るのだ！」

〈戦闘会話 虎王VS初戦闘〉

虎王「アル・ワースにはこんな小悪党がいるとは…俺様が言えた義理ではないが、アル・ワースを乱すというのなら、俺様が相手になつてやる！」

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

レナ「あの豚…絶対に許さない」

ユイ「も、もういいから、レナ！今は戦闘に集中するよ！」

〈戦闘会話 サラVS初戦闘〉

サラ「よし、私達の力を、山賊達に見せよう！」

ティア「うん、そして謝らせてやるー！」

〈戦闘会話 イングリッドVS初戦闘〉

ケイ「イングリッド…あの山賊達を素粒子レベルまで分解しよう」

イングリッド「ほ、程々にしましょう、ケイ。分解したらダメだから…」

〈戦闘会話 カロツサorメリツサVS初戦闘〉

カロツサ「悪い事するの、許さない！」

メリツサ「私とカロツサが止める…。絶対に…！」

〈戦闘会話 しんのすけVS初戦闘〉

ひろし「ま、まさか、アル・ワースにぶりぶりざえもんがいるとは…」

みさえ「不思議な事もあるものね…」

カンナム「これでアクション仮面もいれば、完璧だね」

シロ「ワン！」

しんのすけ「ぶりぶりざえもんじゃ、頼りにならないから、オラ達が頑張るしかないゾ！」

〈戦闘会話 トオルVS初戦闘〉

ネネ「アル・ワースって…何が起きてもおかしくないわね」

ボーちゃん「だから、異世界」

マサオ「もしかして…仮面マツサオとかもいるかも！」

トオル「（も、もえPも…？）って…今はそれどころじゃなかった…行くよ、みんな！」

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「今回は振り回されっぱなしね、零」

零「うまい具合に相手のペースに呑まれるんだよな…」

ゼフィ「では、気を取り直していきましよう！」

零「そうだな。こうなったらこつちのもんだ、行くぜ！」

敵を倒していく俺達…。

山賊リーダー「このままではこちらが負ける…！ならば、この村事…！」

山賊リーダーの乗るガンメンが村に向かった…!!?

零「しまった…！」

メリツサ「村が危ない！」

山賊リーダー「俺達を怒らせた罰だ！潰れちまえ！」

ぶりぶりざえもん「おい、さつきから騒がしいぞ」

ぶりぶりざえもん「奴がバナナを食いながら出てきた…!!？」

山賊リーダー「元はと言えば、お前のせいだ！踏み潰してやる！」

ガンメンがぶりぶりぎえもんを踏み潰そうとする…。

アスナ「危ないわよ！」

零「おい、逃げろ！」

しんのすけ「ぶりぶりぎえもん！」

ぶりぶりぎえもん「わあっ!!?」

突然の事にぶりぶりぎえもんは足を滑らせ、間一髪、踏まれずにすんだが、持っていたバナナの皮はその場に落ち、それを踏んだガンメンは転んでしまう。

山賊リーダー「バナナの皮っ!!?」

ゼファイ「す、凄いです！バナナの皮をトラップの様に置くとは！」

零「…いや、あれはたまたまだぞ…だが、今なら！」

俺はゼフィルスネクサスを動かし、倒れたガンメンを吹き飛ばした。

山賊リーダー「うおおっ!!?」

ベルリ「上手くいった！」

ジョーイ「これで村を守れます！」

しんのすけ「流石だぞ、ぶりぶりぎえもん！」

ぶりぶりぎえもん「フッ、それみたことか」

零「たまたまで威張るな…まあ、助かったのは事実だがよ…。さて、後は俺達の番

だ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　しんのすけVS初戦闘〉

カンナム「たまたまだとしても彼もやる時にはやるんだね」

しんのすけ「カンナム、オラ達も負けていけないゾ！」

〈戦闘会話　零VS初戦闘〉

零「ふう…あいつ、本当にしんのすけが作ったキャラクターだな…。たまたまでも誰かを守る…そして、いざとなったら、その力をみせる…流石だ、ぶりぶりざえもん」

山賊リーダー「ば、ばかなああああっ！」

山賊リーダーのガンメンを倒し、俺達は全ての敵を倒した…。

ゼフィ「敵の全滅を確認しました」

マサオ「ふう、終わったよ…」

トオル「一件落着だね」

龍王丸「ワーハツハツハ！」

ワタル「ど、どうしたの、龍王丸？」

龍王丸「…わからない、何故か今回はやらなければならないと思った…」

俺達は機体から降り、村へ戻った…。

カンタム「久しぶりだね、ぶりぶりぎえもん」

ぶりぶりぎえもん「カンタムか。お久しぶりぶりだな」

カンタム「また君と会えるとは、何かの縁かな？」

ぶりぶりぎえもん「フツ、光栄に思った方がいいぞ」

…調子のいい奴…。

ぶりぶりぎえもん「ん…？」

ぶりぶりぎえもんの体が消え始めた…!?!?

しんのすけ「ぶりぶりぎえもん！」

ぶりぶりぎえもん「ふう…結局お助け料ももらえないとは…。しんのすけ、他の者も

さらばだ。私は救いのヒーロー、ぶりぶりぎえもんだ」

零「知っているよ、そんな事…。村の事、ありがとな」

ぶりぶりぎえもん「やはり、それならば…お助け料、一億万円を払ってもらおうか、零」

零「払えるかよ、この豚が」

その言葉を聞き、ぶりぶりざえもんは微笑みながら、消えた…。

しんのすけ「ぶりぶりざえもん…」

俯くしんのすけの頭を俺は撫でた…。

零「格好いいな、お前の作ったヒーロー…。お前に似て…。だから、俺達もぶりぶりざえもんに笑われないように頑張ろうぜ、しんのすけ」

しんのすけ「わかったゾ、零お兄ちゃん！」

全く…最後の最後までお前には敵わなかったよ、ぶりぶりざえもん…。またな。

クロスオーバーシナリオ3

星屑と神狼

ー並行世界……。そこには同じ世界でも全く違う人や同じ人でも違う人生を歩んでいる場合がある……。これは、俺達が別の世界のアル・ワースから来た人物達と会った話だ……。

クロスオーバーシナリオ3

星屑と神狼

ー新垣 零だ。

俺とゼファイ、アスナは前回に起きた事をアマリ達に話していた……。

アマリ「異世界のアル・ワース？」

零「ああ。そこでは同じアル・ワースでも世界の構造、存在する人も国も人の歴史も全く変わっていた」

アスナ「エクスクロスにいない人がいたり、ルクスの国がなかったり、こっちの世界で生きている人が死んでいたりって、珍しい経験だったわ」

ホープス「その世界のアル・ワースにも私達はいたのか？」

ゼファイ「いたのはいたんですが…」

零「まず、ホープスのマスターはイオリになつていた」

イオリ「は…!!？」

ホープス「私のマスターが…このオド袋だと!!？」

アマリ「では…私は？」

零「…」

アマリ「零君…？」

アスナ「…えつとね。あっちのアマリはイオリに好意を持っていたの」

アマリ「ええつ!!？」

イオリ「ア、アマリさんが…俺に…!!？」

ホープス「イオリ・アイオライト…貴様あああつ!!？」

イオリ「それは別世界の俺だろ！俺は悪くない！」

弘樹「それに俺達や零もいないとは…」

優香「うん、ビックリしたよ！」

メル「どこのイオリさんもアマリさんの事が好きなんですネ」

イオリ「ど、どうして睨むんだい？」

ゼフィ「ママ、プレゼントです！」

ゼフィはもう一つの世界で作ったプレスレットをアマリに渡した。

アマリ「これは…？」

ゼフィ「あちらの世界で私とあちらの世界のママで作ったプレスレットです！」

アマリ「ありがとう、ゼフィちゃん。いつかもう一つの世界の私にもお礼を言わなくちゃ」

ホープス「確かに、別世界の自分に会いたいとは私も思います」

零「俺もまたあの世界のイオリ達に会いたいな…」

話を終えた俺達は解散し、料理を作るために俺はNーノーチラス号の調理室に向かうとしていた…。

だが、突然、警報が鳴り響く。

零「何だ…!?？」

エレクトラ「エクスクロス各員へ、ただいま、Nーノーチラス号とハンマーヘッドに侵入者の存在を確認しました。各員は対処に向かってください」

零「ハンマーヘッドとNーノーチラス号に侵入者…!?？なんか、前にもこんなのが

あつたな……。兎に角、N-1ノーチラス号なら俺も近いな……！」
俺は侵入者を探すために走り出した……。

「セイヤ・遊星です。」

僕達は元の世界でハシユマルと戦っていたのですが、ハシユマルが異世界の門に吸い込まれてしまい、僕達もその後を追ってきたのですが、イージスと逸れてしまい、僕とタスクさん、エルシャさん、アンジュさんはこの戦艦へ、風輝さんと暦さんと風華さんは別の戦艦にへと入りました。

実はこの世界のエクスクロスに協力を要請しようとしたのですが……。何故、侵入みたいな事になってしまったのでしょうか……？

タスクさん達とも別行動を取っていますし……。まあ、都合良く、誰かと鉢合うはずないと思います……。

零「見つけたぞ、侵入者！」

……都合はいいみたいです……ね。」

―新垣 零だ。

侵入者を見つけた俺は侵入者の前に立った。

セイヤ「貴方はエクスクロスのメンバーですか？」

零「そういうお前は？つてか、何の用でこの艦に侵入したんだ？」

セイヤ「（…今話しても余計な誤解を招くだけですな…。）すみません、貴方の腕を見せてもらいます！」

零「腕を…？ただ単に見せる意味ではないようだな」

セイヤ「よくお分かりで…では、行きますよ！」

俺は侵入者と戦いを始めた。

でも、こいつ…強い…！

セイヤ「はあっ！」

零「ぐっ！やる、じゃねえか！」

セイヤ「うっ…！（この人…強い…！それに瞳の色が変わるなんて…！）」

すると、アンジュが来た…服装がおかしいが…。

アンジュ「星屑」「大丈夫、加勢に来たわよ」

零「アンジュか！助かる！」

セイヤ「つ…！待って、アンジユさん！」

零「なっ!!?グアアッ！」

俺はアンジユに殴り飛ばされた…。

零「何すんだ、アンジユ…!!?」

アンジユ「星屑」「あなた、誰？」

零「はあつ…!!?」

アンジユ「零、大丈夫!!?」

ア、アンジユ…!!?

アンジユ「えっ…!!?」

アンジユ「星屑」「あなた…」

アンジユが…二人…?

セイヤ「これは…面倒な状況になりましたね…。ん…?通信…風輝さん…?」

風輝「セイヤさん、風輝です。こちらのハンマーヘッドの艦長、名瀬艦長に僕達の事を離したので、ハンマーヘッドに来てください」

セイヤ「行きたいのは山々なのですが…。こちらもこの世界のアンジユさんとエクスクロスに所属している人に出会ってしまつて…」

風輝「では、その方に変わってください」

セイヤ「了解しました。すみません、僕の仲間の人が貴方とお話をしたいと申し立てるのですが…」

零「仲間…?…はい?」

俺はセイヤという男から通信機を受け取り、通話に出る。

風輝「初めまして、新垣 零さん。綾波 風輝と申します」

零「どうして俺の名前を…? あんたは一体…」

すると、通信機から名瀬さんの声が聞こえてきた…。

名瀬「零か?」

零「名瀬さん…一体何が起こっているんですか?」

名瀬「思う所はあると思うが、今は兎に角、ハンマーヘッドに来てくれ」

零「…わかりました。では、こちらにいる人達を連れて向かいます」

俺は通信を切り、セイヤという男に通信機を渡す。

零「すまないが、着いてきてくれないか?」

セイヤ「わかりました」

アンジュ「星屑」「わかったわ」

アンジュ「…」

零「アンジュ、お前もいいな?」

アンジユ「ええ…」

俺達はハンマーヘッドに向かった…。

セイヤ「あの…新垣さん？」

零「どうした？」

セイヤ「貴方がエクスクロスを纏めているのですか？」

零「纏めている訳じゃないけどな。でも、何故か副リーダーみたいにはなっているが…。つて、どうしてお前がエクスクロスの事を知っているんだ？」

セイヤ「それは着いてからお話します」

俺達はハンマーヘッドの艦長室へ着いた…。

零「すみません、新垣 零…入ります」

名瀬「わざわざ悪いな、零」

…艦長室に他のみんなと…タスク、エルシャが二人ずつに一人の男、二人の女がいる…？

零「名瀬さん…一体どういう事何ですか？彼等は一体…それにどうして、アンジユ、タスク、エルシャが二人いるんだ？」

タスク「星屑」驚かせてすまない。僕達は…」

風輝「タスクさん、それは僕から話します。まずは自己紹介から…改めて軍事組織、朧

月の上級大将：綾波 風輝と申します」

曆「同じく、朧月の中尉、如月 曆です」

風華「風輝兄さんの双子の妹で綾波 風華と言います。私の階級は少将です」

セイヤ「次は僕達ですね…。僕はセイヤ・遊星。鋼の連合所属、第一遊撃隊長です」
タスク「星屑」「タスク：とは言ってもご存知ですね。セイヤと同じく、第一遊撃隊副隊長です」

アンジュ「星屑」「あなた達も知っているとは思うけど、アンジュよ。同じく、第一遊撃隊所属よ」

エルシヤ「星屑」「エルシヤです。同じく、第一遊撃隊所属です」

零「新垣 零だ。よろしく…。それで綾波…だったか？」

風輝「綾波では、風華と被るので、風輝でいいですよ、新垣さん」

零「じゃあ、俺も零でいいよ。それで…お前等は何者なんだ？」

風輝やセイヤ達は俺達に事の事情を話した…。

セイヤ「まず僕達はこの世界の人間ではありません。僕達は別の世界のアル・ワースから来ました」

弘樹「別の世界のアル・ワースって、零の言っていた並行世界のアル・ワースか！」

風輝「零さんは異世界のアル・ワースの存在を知っていたのですか？」

零「ああ。少し前に別の世界線のアル・ワースへ行った事があるんだ」

アスナ「それで：あなた達は どうしてこの世界に来たの？」

暦「ハシユマルを追ってです」

オルガ「ハシユマルだと：！！？」

アマリ「それは：確か、オルガさん達の世界のモビルアーマーでしたよね？」

零「ハシユマルなら、俺達も倒した事あるぞ」

風輝「別世界のハシユマルです。それで僕達は巨大戦艦、イージスに乗って、ハシユマルを追いかけてきたのですが：」

風華「恥ずかしながら、ハシユマルを見失うどころか、イージス共逸れてしまったのです」

タスク「星屑」「それでこの世界を守っているエクスクロスの君達に協力を要請しよう
と決めたんだ」

エルシャ「星屑」「侵入の様な真似をしてごめんなさい：」

アンジュ「星屑」「事態は一刻を争っていたから：」

零「まあ、侵入者に関しては何回もあったからな。それにセイヤ達は悪者じゃない
てのがわかったから、良いよ」

セイヤ「ありがとうございます、零さん」

名瀬「…各艦長達と話し合った結果、彼等と協力し、ハシユマルを倒す事が決定したぞ」

風輝「本当ですか!?!?」

アミダ「流石に私達のアル・ワースにも危害が及ぶ可能性があるから、見逃してはおけないからね」

零「…じゃあ、暫く、よろしくな!」

風輝「はい、零さん!」

俺達はハシユマルが現れるまでの間、セイヤ達と交流を深める事にした…。

風輝はマクギリスさんにハシユマルの事を聞いていた。

マクギリス「ハシユマルの情報を…?」

風輝「はい、僕達には少し情報が不足しているので…」

マクギリス「そうだな…。ハシユマルはワイヤーブレードや攻撃オプシヨンのプルーマなどがある。気をつけてかかった方がいいよ」

風輝「ありがとうございます、マクギリスさん」

暦はアマリと話していた。

暦「あの…アマリさん」

アマリ「どうしました、暦さん?」

曆「零さんとアマリさんはその…恋人同士と聞きましたが…零さんはお優しいですよ
ね」

アマリ「はい！たまに無茶しすぎて心配ですが、格好良くて、優しい大好きな彼氏です。そういう、曆さんと風輝さんもお似合いですよ！」

曆「ありがとうございます、アマリさん！」

風華はプルとプルツ、マリィダ、ハマーンさんとキュベレイについて話していた。

ハマーン「ほう、お前の機体はキュベレイなのか」

プルツ「だが、流星に異世界ともなると少し違うな」

プル「でも、キュベレイ友達だね！」

風華「いいですよ、キュベレイは！」

マリィダ「…フツ、楽しそうだな、風華は」

風華「はい！これだけキュベレイの事で語れるなんて、初めてです！」

ハマーン「では、我々のキュベレイの良さも語ろう」

鋼の連合のみんなは第一中隊のみんなやエンブリヲと話していた。

タスク「星屑」「この世界にリベリタスがあつた様だね」

タスク「後の道は変わっている様だけだね」

エルシャ「私が別行動をしているなんて…」

エルシヤ「星屑」「でも、別世界の私でも、私は私ね。子供好きなのは変わらない」
エンブリヲ「スターダスト…確かに良い機体だね」

セイヤ「まさか、エンブリヲに言われる日が来るなんて思いもしませんでしたよ。しかも、良いエンブリヲとは…」

アンジユ「星屑」「ねえ？」

アンジユ「何？」

アンジユ「星屑」「あなたは、タスクの事が好きなの？」

アンジユ「え…う、うん…。まあ、変態なのが傷だけど。あなたも気をつけなさいよ」
アンジユ「星屑」「変態…？あなたの世界のタスクについてよくわからないけど、私の世界のタスクは変態とか呼ばれていないわよ」

アンジユ「世界が違うだけで、性格までも違うなんてね…」

数十分後…。

俺はゼフィルスネクサスの整備をする為に格納庫に来ると…。

零「あれ？セイヤに風輝、ゼフィじやねえか。どうしたんだ？」

セイヤ「スターダストの整備です」

風輝「僕もフェンリルレクスの整備をしています」

ゼフィ「私はそのお手伝いです！」

セイヤ「ゼフィさんのおかげで整備が早く終わりました。ありがとうございます、ゼフィさん」

零「えらいぞ、ゼフィ！」

俺はゼフィの頭を撫でるとゼフィは嬉しがる様にニコリと笑った。

風輝「お似合いの親娘ですね。アマリさんを含めると本当に家族に見えます」

零「まあ、実際家族だからな。そういう風輝だつて、暦といいカップルじゃねえか」

風輝「す、少し照れますね……」

セイヤ「フツ、風輝さんも暦さんへプロポーズしたら、どうですか？」

風輝「まだ早いですよ、セイヤさん」

零「にしてもあれだな……。違う世界のアル・ワースで平和の為に戦っている俺達が出会うつて、何かの運命のかな？」

セイヤ「例え、何者かの策略としても、僕は零さんと出会えてよかったです」

風輝「僕もです。零さん達を見ていると僕達も頑張ろうと思えてきます」

零「や、やめてくれよ、照れくさいな……まあ、俺もそうなんだけどよ。二人に負けない様に俺も頑張ろうつて、思うんだ。そして、平和な世界をお互い取り戻したら、また会いたいなつて……」

セイヤ「その時は僕達の世界の仲間と零さんの世界の仲間と打ち上げをしたいです」

風輝「いいですね、それ！世界を越えた打ち上げ…楽しそうです！」

ゼファイ「私もセイヤさん達の世界に行ってみたいです！」

零「だからよ、お互い、頑張ろうな！セイヤ、風輝！」

セイヤ「はい！」

すると、アスナが走って来た。

アスナ「零、セイヤ、風輝、ゼファイ！ここにいたのね！」

ゼファイ「どうかしましたか、アスナお姉ちゃん？」

アスナ「ドツコイ山にハシユマルの反応を感知したの！今からエクスクロスは向かうみたいよ。あなた達も出撃の準備をして！」

零「わかった！行くぞ、セイヤ、風輝！」

俺の言葉に二人は頷いた…。

俺達はドツコイ山に着いた。

確かに…ハシユマルがいるな…！！

いや…ハシユマルだけじゃねえ！

風華「あれは…ベクターにグレイズ・リッター！」

ジュリエッタ「それにイオク様のレギンレイズ…！」

タスク「[星屑]」「ゴーストジャックの影響か…！」

弘樹「確か、無人機がジャックされるんだったよな？」

ヒイロ「モビルドールと似たようなものか」

シノ「ハシユマルだけでも面倒なのに、幽霊兵器ともまでいやがるのか！」

零「言っているも始まらねえ！行くぞ、みんな！」

セイヤ「皆さん、増援の可能性もあります！気をつけてください！」

風輝「指揮は僕が取ります！戦闘開始です！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　アンジュVS初戦闘〉

アンジュ「別世界の私、か……。雰囲気は違うけど、私は私なのね……。行くわよ、ヴェルクス！あつちの私達には負けてられないわ！」

〈戦闘会話　エルシャVS初戦闘〉

エルシャ「第一中隊にいない私……。少し新鮮ね……。行きましようか、私も私として！」

〈戦闘会話　タスクVS初戦闘〉

タスク「世界は違えども、君もアンジュやヴェルクスの騎士なんだね……。俺もアン

ジユの騎士としてアンジユを守る！」

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「行くぜ、アスナ、ゼファイ！俺達の力をセイヤや風輝達に見せてやる！やるぞ！」

〈戦闘会話 セイヤVS初戦闘〉

セイヤ「零さん達の世界を荒らさせるわけにはいきません！ここで僕達が必ず止めてみせます！」

〈戦闘会話 タスク「星屑」VS初戦闘〉

タスク「星屑」「こっちの世界の僕だって、戦っているんだ…負けるわけにはいかないな！」

〈戦闘会話 アンジユ「星屑」VS初戦闘〉

アンジユ「星屑」「ヴィルキス、異世界の私達に恥ずかしい所を見せないようにやるわよ！」

〈戦闘会話 エルシャ「星屑」VS初戦闘〉

エルシャ「星屑」「第一中隊にいた頃私……。なんだか、懐かしいわ。……懐かしさに浸っている場合じゃないわね……。行くわよ！」

〈戦闘会話 風輝VS初戦闘〉

風輝「零さんとゼフィルスネクサスに負けない戦いをしましょう、フェンリルレクス！この世界は僕達を守る！」

〈戦闘会話 暦VS初戦闘〉

暦「アマリさん達がこれからも暮らす世界を壊させるわけにはいかないわ！行くわよ、フェニックス・ゼロ！」

〈戦闘会話 風華VS初戦闘〉

風華「この部隊はいい人達ばかりです……。だからこそ、悲しませるわけにはいきません！キュベレイ・ウインド……。力を合わせましょう！」

戦闘開始から少し経った頃だった…。

さらに敵の機体が増えた…。

カノン「増援ですか…！」

ガエリオ「グレイズ・アインだと…?!?!」

エンブリヲ「ヒステリカまでいるとは…！」

風華「ベクターも増えましたね…！」

曆「風輝君、あのベクターがハシユマル達を暴走させた原因と推測するわ！」

風輝「では、あのベクターを倒せば暴走は収まるということですね！」

曆「遠距離攻撃で撃破しましょう！」

優香「了解！」

戦闘再開だ！

ヴィルキス「星屑」、ハウザー・ブラストがベクターを倒し、残るは一機となった。

零「この調子で行けば…！」

アスナ「零、避けて！」

零「！しまっ…?!?!」

ベクターに気を向けていた俺はハシユマルのワイヤーブレードに気がつかず、攻撃を受けてしまう。

零「うわあああああつ！」

アマリ「零君！」

セイヤ「零さん！」

風輝「今行きます！」

アンジユ「星屑」「待つて、二人とも！」

スターダストとフェンリルレクスがゼフィルスネクサスを助けようと動き出したが

…。

敵の砲火を受けてしまう。

セイヤ「ぐっ…!!」

風輝「くっ…!!」

エルシャ「星屑」「セイヤ君、風輝君！」

暦「このままじゃ…!!」

アマリ「大丈夫です、暦さん！」

暦「アマリさん…」

アマリ「零君とセイヤさん達なら…大丈夫です！」

零「…その通りだ、アマリ…！」

セイヤ「こんな攻撃では…負けません！」

風輝「僕達は死ぬわけにはいかないんです…。絶対に！」

そう言い放ち、俺達は連携でハシユマルを吹き飛ばした…。

セイヤ「タスクさん！」

タスク「[星屑]「これで終わりだ！」

アーキバス・レイズの攻撃で残るベクターも破壊された。

これで他の機体の暴走は収まり、弱体化したはずだ！

暦「ベクター全機の破壊を確認しました！」

アスナ「残るは他の機体だけよ！」

セイヤ「決めましょう、零さん！」

零「ああ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 三日月VSグレイズ・アイン〉

三日月「あのパイロットは乗っていないみたいだけど…。お前、邪魔なんだよ…オル

ガの声が聞こえないだろ！」

〈戦闘会話　ガエリオVSグレイズ・アイン〉

ガエリオ「グレイズ・アインは…アインそのものでもあるんだ！お前みたいな幽霊が使っているものじゃない！完全に破壊してやる！」

バルバトスルプスレックスの攻撃でグレイズ・アインは撃破された…。

三日月「倒したよ」

ガエリオ「(アイン、これで安らかに眠れる、よな…?)」

〈戦闘会話　エンブリヲVSヒステリカ〉

エンブリヲ「私の前でヒステリカを扱えると思わないでもらおうか。私が相手をしよう！」

スターダストの攻撃でヒステリカを撃破した…。

セイヤ「ヒステリカ、撃破成功しました！」

エンブリヲ「(ヒステリカは私の分身…汚すものは許さない…)」

〈戦闘会話 昭弘VSレギンレイズ〉

明弘「お前の顔はもう見飽きたんだよ…。とつとつと、消えろ！」

〈戦闘会話 ジュリエッタVSレギンレイズ〉

ジュリエッタ「幽霊になってまで、邪魔をするのですね、イオク様…いや、イオク様ではありませんか。まあ、どちらにしろ、破壊します！」

ゼフィルスネクサスの攻撃でレギンレイズは破壊された…。

零「よしっ！撃破成功だ！」

昭弘「助かるぜ、零。見飽きていたんだよ、あいつは…」

ジュリエッタ「哀れと言っておきましょう、イオク様…。もう会う事ありませんが…」

〈戦闘会話 三日月VSハシユマル〉

三日月「もうお前を見たくないよ。粉々にするから覚悟しなよ……!」

〈戦闘会話 零VSハシユマル〉

アスナ「この世界に逃げてきたのが運の尽きのようね!」

ゼファイ「ここで撃破します!」

零「セイヤ達には悪いが、ぶっ壊してやるから、覚悟しやがれよ!」

〈戦闘会話 セイヤor風輝VSハシユマル〉

セイヤ「ハシユマル……今度こそ、破壊します!」

風輝「もう逃がしません……僕達と零さん達の手で、必ず倒してみせます!」

ガンダム・フェンリルレクスの攻撃にハシユマルはダメージを負った…。

青葉「やったか?!」

デイト「いや、まだだ!」

ハシユマルがまだ立ち上がるか…！

セイヤ「零さん！」

零「任せろ！」

ゼフィルスネクサスとスターダストの連携攻撃でハシユマルにダメージを与えた。

零「今だ、風輝！」

風輝「はい！うおおおっ！」

ガンダム・フェンリルレクスの攻撃を受けて、今度こそハシユマルは爆発した…。

セイヤ「ハシユマルの撃破を確認…！」

零「やったな、風輝！」

風輝「お二人の援護があつてこそです…。ありがとうございました、零さん、セイヤさん」

全ての敵を倒した頃…一隻の戦艦が現れた…。

アマリ「巨大戦艦…？あれは…」

暦「イージスです！」

風矢「エクスクロスの皆さん。初めまして、風輝と風華の祖父、綾波 風矢です。この度はハシユマル撃墜の協力と風輝達の身の安全の件…誠にありがとうございます」

名瀬「いえ、俺達もこの世界を危険に晒す訳にはいかなかっただけです」

風矢「新垣 零君……。孫達を守ってくれて、ありがとう……」

零「……いえ、逆に俺が守られました。感謝します」

すると、スターダスト達はイージスの近くに移動するとイージスの前に異世界の門が現れた……。

風矢「我々はこの辺で失礼します。本当はお礼を差し上げたいのですが……」

ゼファイ「お気になさらないでください！ 私達はお礼が欲しくて、協力したわけではないので！」

風華「エクスクロスの皆さん、お元気で！」

プル「風華も元気でね！」

エルシャ「星屑」「子供達を大切にしてくね」

エルシャ「ええ、そっちもね」

タスク「星屑」「また会おうね、異世界の僕……」

タスク「勿論さ、元気でね」

アンジュ「星屑」「……そっちの世界のタスクと仲良くね」

アンジュ「ありがとう、私……。そちらこそ、いつまで仲良くしなさいよ」

暦「アマリさん、またお話ししましょう！」

アマリ「はい、暦さん！ありがとうございました！」

風輝「零さん…エクスクロスの皆さん…。ご協力、本当にありがとうございました！
全員を代表して、感謝します」

零「気にするなよ、風輝。俺達は俺達の世界を守った…ただそれだけだよ」

セイヤ「またお会いしましょう…。次はお互いの世界が平和になった時に…」

零「そうだな、セイヤ。お前達の事を別世界からだが、応援しているぜ」

風輝「僕達も…零さん達の事を応援しています」

セイヤ「忘れません…。皆さんの事は…絶対に…本当にありがとうございます！」

セイヤの言葉を最後にセイヤ達は異世界の門の中にへと入り、異世界の門は閉じた
…。

零「フツ…俺もお前達の事は忘れねえよ。セイヤ、風輝…。またな」

俺達は再び、アル・ワースを平和にするために動き出した…。

異世界のアル・ワースで戦いを続けているのであろうセイヤ達に負けないように…。

俺達も負けないからよ…。お前達も頑張れよ、セイヤ、風輝…。

共通ルート

プロローグ

輝きの翼

「俺……新垣 零はごく普通の高校生だ。

現在、18歳……俺は大学へ行く為に猛勉強している。

今日も俺は友人で幼馴染の白木 優香と氷室 弘樹と共に図書館で勉強をしていた。

弘樹「んー……此処わかんねえ……零、此処わかるか？」

零「どれどれ……って、此処は前に教えただろ……」

弘樹「そうだったか？覚えがない」

零「……ホントにお前、受かる気あるのか？」

弘樹は勉強が苦手な俺に何度も聞いてくる。

そんな彼に対しての俺のため息に優香が苦笑しながら、弘樹に教えた。

優香「此処をこうだよ！弘樹！」

弘樹「おっ！成る程な！サンキュー！優香！」

優香「どういたしまして！」

零「多分、明日にもなれば全部忘れていると思うがな」

弘樹「それどういう意味だよ!? 優香は本当に優しいよな! こいつと違つて!」

零「散々教えてやったやっさしい友人に随分ごあいさつな返したな」

俺と弘樹はふざけながらも取っ組み合い、それを見て優香も笑う。

俺はこの生活に満足している。俺の家族は俺の幼い時に事故で亡くなっている。

こいつらは幼い時から一緒に居て、いわば兄弟の様なものだった。

優香「あ、もうこんな時間だ... 私帰るね!」

零「んじゃあ、俺達も帰るか」

弘樹「そうだな!」

俺達は鞆の中に教科書を入れて持ち、図書館を後にする。

弘樹「零って何でそんな無駄に頭が良いんだ?」

零「無駄って何だよ? 授業で習った通りに予習とかやつてるだけだぜ?」

優香「それでも零って、女の子からも凄い人気なんだよ!」

弘樹「顔も良い、成績優秀、運動神経抜群に優しく、紳士的... お前完璧じゃねえか

よ! ファンクラブもできてるって話だしよ!」

零「待て! ファンクラブについては初耳なんだが!?」

そんなこんなで俺達は歩き続け、俺達は別れる事となった。

弘樹「じゃあ！零！」

優香「また明日！」

零「ああ！」

そう言つて、俺達は別れ、それぞれ家へ向かう。

だが、帰り道の途中、公園の横を通っていると、目の前からボールが飛び出て、道路に出る。

子供が遊んでいるボールか……。？ん？つてか、これまづくねえか……。!??

俺が予想した事が現実となった……。ボールを取りに来た子供が道路に出た。

そこまでは良かったが猛スピードのトラックが走ってきていた。

零「クソツ！間に合え……！」

俺は勢いよく駆け出し、トラックに怯えている子供を庇う様に抱き抱えた。

当然、トラックのぶつかる衝撃は俺に来て、俺は子供を抱き抱えながら、吹き飛ばされた。

地面に叩きつけられる俺……。しかし、痛さは一瞬で意識が朦朧としていた。

周りから叫び声と俺が庇った子供が俺に声をかけて来た。

だが、俺はそれに答えられずにいた。

まず……い、意識が……。

こんな……こんな所で終わりかよ……悪い、弘樹……優香……。

そう思い、俺は意識を手放した……。

? 「……い……お……ろ!……」

……んっ……? 声が聞こえる……? 俺は死んだはずじゃ……なら、空耳か……?

? 「おい! 起きろ!!?」

嫌、空耳じゃない! 確かに聞こえる……!

そう思い、俺はゆっくりと目を開いた。

すると、俺の目の前には白い学生服を着た少年と赤の服と黄色のズボンを履いた坊主

頭の子供が居た。

零 「此処……は……?」

? 「おっ! 目を覚ました! おーい! しんのすけー! こいつ起きたぞー!!?」

しんのすけ 「ほほーい!」

学生服の少年はしんのすけという坊主頭の子供を呼ぶと坊主頭の子供が俺の方へ駆け寄ってくる。

？「おい！大丈夫か？」

零「あ、ああ……大丈夫だ」

そう言い、俺は立ち上がり、周りを見渡す。

此処は……何処だ？……俺は確か、トラックに跳ね飛ばされて……死んだはず……。

それに……こいつらは……？

？「良かったぜ、倒れていたから何かあったのかと思つたんだ」

零「お前が俺を見つけてくれたのか？」

？「いや、お前を見つけたのはしんのすけだよ」

零「そっか、ありがとな」

しんのすけ「それなら、お助け料一億万円ローンも可！」

は……？一億万円……？ローン……？こいつ俺に助け料を払えって言ってるのか……？

のか……？

？「こら、あんまり困らせるなよ……あつ！俺は織斑 一夏！一応、人類初の男性

IS操縦者って呼ばれているんだ！」

しんのすけ「オラ、野原 しんのすけ5歳！春日部に住む、嵐を呼ぶ幼稚園児だゾ！」

うん、取り敢えずツツコミ所が満載だ。

織斑は取り敢えず置いとくとしてしんのすけ……何だ嵐を呼ぶ幼稚園児って……つてか、春日部って埼玉じゃねえか。

それよりも俺は織斑の言葉が気になるな…… IS って何だ……？

零「織斑…… IS って何だ？」

一夏「一夏で良いよ…… やっぱり、お前も IS を知らないか」

お前も？…… つて事はしんのすけも知らないのか？

しんのすけ「所でお兄ちゃんのお名前は？」

ん？…… ああ、そう言えば名乗ってなかつたな。

零「悪い悪い、俺は新垣 零…… 高校3年だ」

一夏「うえつ…… ！！？せ、先輩だったんですか！！？」

先輩……？つて事は一夏は俺よりも歳が下なのか？

零「一夏…… お前歳は幾つだ？」

しんのすけ「オラ5歳！」

零「お前には聞いてねえよ！」

一夏「15です！…… ちなみに高校1年です…… すみません！先輩！タメ口で！」

零「あー…… 別にタメ口で良いぞ？敬語は苦手だし、たいして歳も変わらないし……」

俺の事も零で良い」

一夏「は：： ああ！よろしくな！零！」

俺は一夏と握手をして、再びISについて聞き出す。

零「一夏、ISについて教えてくれ」

一夏「ああ：： 悪い、話が逸れたな：： ISって言うのはインフィニット・ストラトスの略で宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだ」

ほお：： そりゃ凄げえ：： 宇宙に行く為の言わば、宇宙服のかわりか：：。

一夏「でも、白騎士事件っていう事件の所為でISは宇宙進出よりも飛行・パワー・スーツになって、軍事に使われる事になったんだ」

元々宇宙進出の為にスーツが軍事兵器の1つにか：：。

一夏「でも、ISに欠陥があるんだ」

零「欠陥？」

一夏「ISは女性しか動かせない事なんだ」

女性しか動かせない?!? そりゃ、欠陥品に近いんじゃないのか：： ? つて、ん? 待てよ、なら何故一夏はISを動かせるんだ?

しんのすけ「それなら一夏お兄ちゃんはどうして、あいえすをさせるの?」

お? しんのすけがそこに気がつくか：： 5歳の割に勘は鋭いな：：。

一夏「そこはまだ俺にもわからないんだ……。それで俺は男性唯一のIS操縦者になって、IS学園に入学する事となったんだ」

零「IS学園……？」

一夏「ISについて学んだり、将来、優秀なIS乗りになる為の学校だよ」

成る程な……。あれ？ISは女しか使えない……。つまり、IS学園にも基本女しかいない……。つて事は！

零「一夏……。お前は女子校に放り込まれたつて訳か」

一夏「あ、ああ」

しんのすけ「う、羨ましいゾ！」

零「お前、本当に5歳児か？しんのすけ」

5歳児の癖にドスケベすぎんだろ……。親の顔が見てみたいぜ……。だが、食い合わない点が多い……。俺としんのすけはISについて知らない……。そもそも俺の世界にISなんて存在しない。

考えられる事は1つしかない……。

零「俺と一夏の世界は別つて事か」

一夏「やっぱり、零もそう思うか」

零「それしか考えられない……。それともう1つ……」

しんのすけ「お？」

俺はしんのすけに視線を移し、一夏もしんのすけを見る。

零「俺の世界としんのすけの世界が同じかどうか……だな」

一夏「お互い、ISを知らないから……共通の世界なんじゃないのか？」

零「確かに、俺の方にも埼玉と春日部はある……だけど、これだけで決めつけるのは

早い……しんのすけ……何か知っているものを言ってくれないか？」

しんのすけ「知っている事……んーと……」

しんのすけは首を捻り、考え始め、暫くすると背負っていたリュックの中から一つの
ファイギュアを取り出した。

一夏「それは？」

しんのすけ「アクション仮面だゾ！」

零「アクション仮面？」

しんのすけ「地球を守る正義のヒーローだゾ！オラは毎週、アクション仮面を欠かさ
ず見ているゾ！」

一夏「テレビで放送されているんだな」

アクション仮面か……だが、これで確定した……俺としんのすけの世界も共通じゃな

い……俺の世界にアクション仮面なんて放送されていない。

特撮作品はいくつか放送されているがアクション仮面なんて聞いた事ない。

零「俺の世界にはアクション仮面は放送されていない。つまり、俺としんのすけの世界も別だつて事だ」

一夏「3人共別世界の人間か。…」

3人はそれぞれの情報を話し合い、ついにこの場所について話し出す。

しんのすけ「此処つて、何処かな？」

零「わからない。少なくとも俺の世界じゃない」

一夏「俺の世界とも違うな。しんのすけは？」

しんのすけ「オラわかんないゾ」

だよな。5歳児に地理は無理か。。

だが、この世界。何処かファンタジーっぽさを感じさせるな。

零「取り敢えず、人を探そう。」

一夏「そうだな！人が居たらこの場所について聞けるかもしれない！」

しんのすけ「よーし！出発おしんこー！」

零・一夏「それを言うなら、出発進行な！」

何か、しんのすけと居ると調子が狂うな。。

取り敢えず歩き出すか。そう思っていたその時だった。

突然地響きが起こり、俺達は上を見上げるとそこにはゴーレムの様な巨大ロボットが数機、俺達を見下ろしていた。

一夏「ろ、ロボット!?」

しんのすけ「おおう! カンタムロボのロボットみたいだゾ〜!」

零「カンタムロボが何かは知らないが、おい一夏! あれがISか!?」

一夏「嫌、ISは人間サイズなんだ! あんな馬鹿でかいISなんて聞いた事ない! それよりも、彼奴らは俺達を狙ってる! 早く逃げるぞ!」

零「そうだな! しんのすけ! 逃げるぞ!」

しんのすけ「かっこいい〜!」

零「見惚れてる場合か!」

まあ、気持ちは分からなくもないが……!

俺はしんのすけの手を引こうとするが、しんのすけはそれをスルリと避け、リュックを弄る。

しんのすけ「大丈夫だゾ! こんな時こそ救いのヒーローぶりぶりぎえもんの出番だゾ!」

零「ぶりぶりぎえもん……?」

そうやってしんのすけが取り出したのは一枚の画用紙で画用紙には豚だか、侍だかわ

からない絵が書いていた。

あれがぶりぶりぎえもんか？

そして、しんのすけはぶりぶりぎえもんが描かれた画用紙は天高く上げ、叫んだ。

しんのすけ「ぶりぶりぎえもんー！オラ達をお助けしてー!!？」

天高く叫んだしんのすけ：。しかし、一向に何も起こらなかつた：。

零「つて、画用紙から出てくるかあああああつ!!？」

しんのすけの行動に俺は大声でツツコミを入れる。

そこへ一夏が戻ってきた。

一夏「何やってんだよ!!？行くぞ！零！しんのすけ！」

一夏の言葉に俺は我を取り戻し、しんのすけを担いで巨大ロボットから逃げ出した。

すると、巨大ロボット達も俺達を追いかける様に走り出してきた。

しんのすけ「追いつかれるゾ！」

零「これでも全力疾走だつての！」

暫く、走っていると目の前に古びた研究所が見えてきた。

一夏「研究所：。!!？」

零「1度あそこに隠れるぞ！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！」

ブはいらねえよ！

しんのすけのボケを心の中でツツコミながら、俺達は研究所の中へと入った……。

プロローグ 輝きの翼

俺達は研究所の中で身を潜める事にした。

だが、見つかるのも時間の問題だ。

零「研究所なら武器庫ぐらいあるだろ！武器を探すぞ！」

一夏「武器って……彼奴らと戦う気か?!？死ぬぞ?!？」

零「だったら、何も抵抗せずに死ねるか?!？それこそ嫌だ！」

一夏が掴みかかってくるが、俺はそれを振りほどき、武器を探し始める。

最悪、武器の1つでも見つかれば、俺が囿になって一夏としんのすけは助かる……それで良い……それで良いんだ！

一夏「……わかったよ！」

零「しんのすけは危ないから何か見つけたら、俺か一夏に言えよ！」

しんのすけ「ホホーイ！」

しんのすけは挨拶をしながら、何かのスイッチをポチツと押した。

零・一夏「だから、勝手に触るなっば!!?」

つたく、何もなかったから良かったものの……。

つと！すぐに武器を探さないと……！

しんのすけを一夏に任せ、俺は武器を探し始める。

零「……くつ、ない……か……！」

一夏「こつちも何も無いぞ！」

結局、何もなしかよ……！まずいな……このままじゃ……つて、うおっ!!?」

しんのすけ「うおっ!!?」

零「あのロボット共……！この研究所ごと俺達を潰す気か……!!?」

研究所が揺れ、倒れそうになるしんのすけを支え、俺は舌打ちをする。

そう言えば一夏の奴、ずっと黙ってるが……どうかしたのか？

零「一夏……？どうしたんだ!!?」

一夏「零……しんのすけを任せても良いか？」

零「お前、何する気だよ!!?」

一夏「… 彼奴らと戦う！」

拳を強く握り、言い放った一夏に俺は反論する。

零「自分が何言ってるのかわかってんのか?!? 例え、お前がISっていう力を持つていたとしても、巨大な敵と戦った事ないんだろ?!?」

一夏「だったらお前はどんなんだよ?!? 武器を持つて戦った事もないくせに囿になろうとか思うなよ！」

こいつ、気づいていたのか！

一夏「… 大丈夫だ！俺は死なない！元の世界に戻るまで死ぬるか！」

そう言っつて、一夏は研究所の入り口まで走り出した。

零「待てよ一夏！」

俺としのすけは一夏を追いかけるが…。

一夏「白式!!?」

研究所から出た一夏は白式を纏い、ロボット軍団に向けて上昇する。

刀剣の形をした雪片式型を構え、一夏は突撃していく…。

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「やつぱり… この世界に来てから、雪羅が使えない…！理由はわからないけ

ど、やるしかない！来い！巨大ロボット！！？」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使いながら一夏は巨大ロボット達に攻撃を与えていく。

そうか、身長差がある分、スピードは一夏の方が上回っているんだ！

しんのすけ「うお〜！一夏お兄ちゃんかつこい〜！」

一夏の戦いにしんのすけは目を輝かせて、応援している…。やっぱりああいうものに興味を示すものか。

一夏「でやあ！」

一夏が巨大ロボットの1体を倒した…。

でも、あいつの疲労がそろそろやばいところだ…。それに一夏の武装はあの剣1つ…。

長期戦になれば確実にあいつは負けるぞ！

すると、しんのすけが心配の表情を浮かべ、俺の方を見上げていた。

零「しんのすけ…？」

しんのすけ「零お兄ちゃん…一夏お兄ちゃん…大丈夫だよね？」

そうか……。こいつ強い様に見せつけているけど、内心では怖いのか……。嫌、そんなの当たり前だ。

この状況で怖くないと思う奴はいない。

零「大丈夫だしんのすけ！一夏は必ず帰ってくる！お前も必ずまた家族に会える！」
しんのすけの頭を撫で、俺は再び武器探しを再開する。

一夏にばかり負担はかけていられない！

しんのすけと協力して、部屋の隅々まで探していると、しんのすけが俺に声をかけた。
しんのすけ「零お兄ちゃん！此処に扉があるゾ！」

零「部屋？本当だ……。でかしたしんのすけ！」

しんのすけを褒め、俺は勢い良くドアを開ける……。すると、そこにあつたのは……。

零「ロボット……。!?？」

俺達を襲っている巨大ロボットとは形状が違う巨大ロボットがあつた。

金色のボディに翼の巨大ロボットを見て、俺は立ち尽くした。

しんのすけはまたもや目を輝かせて興奮しているが、俺はとうとう……。。

何だ……。？こいつを見ると懐かしい感じになる……。

俺は興奮しているしんのすけに構わず、巨大ロボットにゆっくり歩み寄り、そつと触れた。

すると、俺の頭の中に何かの情報が膨大に流れてきた。

な、んだ……これっ……!!? あたま、が……!ぐうっ……!!?

零「ぐっ!!?」

膨大な情報が頭に流れ、俺は頭痛を感じて、左ひざを地面につく。

しんのすけ「零お兄ちゃん!!?大丈夫か!!?」

俺の異変に気付いたしんのすけが心配して、駆け寄ってくる。

すると、頭に情報が流れてこなくなり、頭痛も治まった……。

何だったんだ……?い、今は……。

零「だ、大丈夫だ、心配ない」

心配するしんのすけに大丈夫だと語り、俺は立ち上がる。

何なのか良く分からないが……このロボットに乗れば、一夏を助ける事ができる……。

やるしかねえ!!?

零「しんのすけ!此処で待っていてられるか?」

しんのすけ「え?零お兄ちゃんは!!?」

零「このロボットに乗って、あのロボット軍団と戦う」

しんのすけ「あ!オラも行く!オラも行く!」

零「ダメだ!危険すぎる!」

自分も行くと言いだしたしんのすけに駄目だと言った俺はしんのすけの頭を撫でる。

零「約束する……一夏を連れ戻し、3人でこの場所を脱出する」

しんのすけ「……男と男のお約束だゾ！」

零「ああ！」

しんのすけとの約束……破るわけにはいかないな……。

俺は巨大ロボットのハッチを開け、中に入り、ハッチを閉める。

コックピットの椅子に座ると、周りのモニターが一斉につき、目の前のモニターにある名前が表示された。

零「シャイニング・ゼフィールス……それが、お前の名前なのか……ふっ」

シャイニング・ゼフィールス……この機体に乗ってから何処かすごい安心感に包まれる気がした……。

こいつとなら何処までも戦える……さあ、行くぞ……！

零「シャイニング・ゼフィールス！発進する！」

ゼフィールスの目が輝き、ゼフィールスは動き出した……。

戦闘の疲労で一夏は肩で息をしていた。

一夏「はあ……はあ……クソッ、このままじゃ……！」

すると、巨大ロボットの1体が一夏の目の前にまで来ていた。

一夏「っ!??しまった!??»

反応が遅れ、一夏は巨大ロボットの攻撃を受けてしまうとと思った……その時だった。放たれたビームが巨大ロボットを襲い、後退させた。

一夏「な、何だ!??»

驚いた一夏は俺の乗るゼフィルスに視線を移す。

一夏「ま、また違うロボット!??まさか、あの研究所から……!??零としんのすけが……！」

零「安心しろ！一夏！俺だ！」

一夏「れ、零!??そのロボットに乗っているのは零なのか!??»

一夏の白式と回線を繋いだ俺は乗っているのは俺だと一夏に話した。

一夏「そのロボット……一体何なんだよ!??»

零「詳しい話は後だ！取り敢えず今はこいつらを片付けるぞ！」

一夏「わ、わかった！」

俺と一夏は巨大ロボット軍団と戦い始めた……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「不思議だ……初めて乗るのにこいつの武装や動かし方がわかる……よし！行くぜ！ゼフィルス！此処からが俺達の初陣だ!!？」

シャイニング・ゼフィルスの武装の1つ……二刀の剣、クロスソードでロボット軍団を真っ二つに斬り裂いていく。

さらに、敵のロボットの攻撃をかわし、二刀のクロスソードを銃に変形させたクロスガンを何度も撃ち、銃撃を受けたロボットは爆発していく。

零「消し飛べ!!？」

一夏「零落白夜！」

それぞれ、目の前に居たロボットを斬り裂き、ロボットは爆発する。

全部倒し終えたか……？って、あれは……!!？

よく見ると、残る1体のロボットが研究所目掛けて拳を振り下ろそうとしていた。

一夏「しんのすけ！」

一夏はイグニッション・ブーストでロボット目掛けて、飛ぶ。

俺も動こうとしたその時だった。

目の前のモニターに2つの武装の名が浮かび出された。

ブレードビットにガンズビット……？

零「武器が……追加された……？これなら……！ブレードビット!!？」

2つのクロスソードから複数のひし形のビットが出てきて、ロボットに迫り、斬り刻んで行く。

すげえ…… つか、今あのビットって、俺の頭で操作してるんだよね……。

一夏「BT兵器!!？」

一夏も一夏で驚いているが、そんな事よりもロボットが研究所から離れた。

ブレードビットが全てクロスソードに戻り、俺は次の武装を使う事にする。

零「ガンズビット!!？」

クロスソードをクロスガンに変えると、今度はクロスガンからビットが複数飛び出て、ロボット目掛けてレーザー光線の雨が降り注いだ。

今だ……！

零「ハアアアアッ！」

ゼフィルスを勢い良く動かし、クロスガンをクロスソードに戻し、ガンズビットのレーザー光線で怯んだロボット目掛けて、二刀のクロスソードで斬り裂いた。

斬り裂かれ、ロボットは爆発した。

クロスソードをクロスガンに変え、ガンズビットを収納する。

全てのロボット軍団を倒し終えた俺達……。

一夏は俺の方を見て、驚いた顔をしている。

まあ、当たり前か……。兎に角、一夏には話さないとな……。こいつの……。シャイニング・ゼフィールの事を……。

少ししてから、俺はゼフィールスから降り、一夏も地面に着地して、白式を解除する。すると、俺達の元にしんのすけが駆け寄ってきた。

しんのすけ「一夏お兄ちゃんも零お兄ちゃんもカツコよかったぞ！」

一夏「ははっ！ありがとな！しんのすけ！」

零「その様子だと怪我はないみたいだな」

しんのすけの無事を知った俺と一夏だが、一夏はすぐに俺に視線を移してきた。

一夏「零、あのロボットは一体何なんだ？」

零「わかった……。教えるよ……。あの機体の名はシャイニング・ゼフィールス……。この研究所にあつたんだ」

一夏「この研究所に……。？何で？」

零「知るかよ……。お前が戦っている間にまた武器を探していたら、しんのすけがこいつが置かれていた部屋を見つけたんだよ」

一夏「じゃあ、お前もこのロボットが何なのかまではわからないのか？」

一夏の言葉に俺は無言で頷いた。

一夏「それにしても良く動かせたな！」

零「ああ……乗った瞬間に操縦方法が頭に流れてきたんだ」

確かにゼフィルスについては謎が多いな……。ん？そう言えば……。

零「しんのすけは？」

一夏「え？さつきまで居たのに……。」

あいつ……。また勝手に何処かへ行きやがったな！

しんのすけ「お兄ちゃん達ー！」

そこへ、何かの紙を持ったしんのすけが部屋に戻ってきた。

一夏「しんのすけ！駄目だろ、勝手に出歩いたら！」

しんのすけ「嫌々、それほどでも」

一夏「褒めてないからな」

うん、しんのすけはしんのすけだな……。それよりも……。

零「しんのすけ……。その紙は何だ？」

しんのすけ「お？こつてり忘れてたゾ！」

一夏「それを言うならうっかりな！」

もう、俺がツツコミを入れずに全部一夏に投げやりをしようか。

一夏「零、させないぞ」

零「何故心を読めた!?!」

つて、そうじゃない!

俺はしんのすけの持つ紙をしんのすけから貰うと、一夏と一緒にそれを見た。

一夏「こ、これって……!?!」

零「この世界の地図か!?!」

この世界の地図らしきものを手に入れ、俺と一夏は大いに驚き、地図の左上に堂々と書かれている文字を俺は声を出して読んだ。

零「アル・ワース……この世界の名が……アル・ワース……」

この世界での一夏やしんのすけとの出会い……そして、シャイニング・ゼフィールズに乗って戦った事……。

これがこれから起こる大きな戦いの序章だった事を俺はまだ知らない……。

第0話 旅の始まり

俺と一夏、しんのすけの3人はこの世界……アル・ワースについての情報を得る為に再び、研究所を探し回る事にした。

勿論、しんのすけには一夏をつけてだが。

取り敢えず、めぼしいものはないな……機材もほとんど潰れて使い物にならない。

ん……？これは……。

俺は机に置かれていた資料を見つける。

資料にはアル・ワースについてと書かれていた。

資料を見つけた俺は一夏としんのすけと合流し、2人に資料を見せる。

一夏「神……エンデか」

零「まさか、神様までいるとはな……それに地図を見る限りだと西部には創界山つていう山があるみたいだな」

一夏「それと後は北部にルクスの国、東部にマナの国、南部に獣の国か……獣の国つて、どんな国なんだろうな？」

しんのすけ「きつと、人の言葉を話した動物がいっぱい居るんだゾ！」

零「アハハ……ありそうで怖いな」

取り敢えず、今わかった事はこの世界の名はアル・ワースでこの世界にはアル・ワースの法と秩序を守っている集団で智の神エンデを崇拜している魔徒教団があるのと、獣の国、マナの国、ルクスの国があるのがわかった。

一夏「零、これからどうするんだ？」

零「取り敢えず、この地図を見ると、この場所から一番近い所のモンジャ村っていう場所を目指そうと思う……。この村なら人も居るだろうし、食料や飲み物も調達できるだろう」

一夏「そうだな……。よし行くか！」

しんのすけ「出発おしんこ〜！」

一夏「ナスのぬか漬けー！」

一夏がボケに回つただと……!??

ちなみにゼフィルスは元にあつた場所に置いた。

ゼフィルスを触った時にゼフィルスの情報が全て頭の中に入り、ゼフィルスは一度乗ったパイロットが頭で来いと命じると自動的に来るみたいだ。

便利だな、これ。

第0話 旅の始まり

研究所を後にした俺達はそこから暫く歩いた。

1時間程歩いたかな？

しんのすけ「疲れたゾ〜… 喉渴いたー！」

零「… お前、疲れたつて、歩き始めて5分ぐらいで俺におんぶを要求してきたじゃねえかよ」

そう、今俺はしんのすけをおんぶしている状態だった。

まあ、確かに喉は乾いたけどな…。

一夏「俺も喉が渴いた…」

零「食べ物も兎も角、この世界に来てから飲まず食わずだもんな… 俺と一夏は戦闘後だし」

しんのすけ「水〜!!？」

零「ない物は仕方ないだろ… つか、耳元で騒ぐなよ…」

一夏「何処かに池かオアシスがあつたら、良いんだけどな〜」

そんな都合が良いものがあるわけ……。

しんのすけ「あつ！池があつたゾ！」

零「あつたんかい!!？」

まあ、幸いだな！これで水分補給もできて、当分の水も困らない！

俺達は池に駆け寄り、それぞれ水を飲んだ。

俺も正直、歩きっぱなしで喉がカラカラだったんだよな。

零「よし、後は水をいくつか入れていこう！……あ」

一夏「ん？どうしたんだ？」

零「水を入れる様な容器を持ってない」

一夏「あー!!？そうだった!!？」

しまった……！そうだ！俺達、ほとんど何も持ってねえじゃねえかよ！畜生！

しんのすけ「大丈夫だゾ！口の中にいっぱい含めば良いんだゾ！」

零・一夏「そんなもん、一秒たりとも持たねえよ!!？」

ーポチャン！

っ!!？何だ!!？

零「しっ！誰か居る！」

一夏「え!!?」

しんのすけ「お、オラ達は怪しい者じゃないゾ!!?」

零「静かにしろって…!」

しんのすけの口を塞ぐが、水が弾いた音が聞こえた方から声が聞こえる。

?「誰だ!!?誰か居るのか!!?」

零「クソツ…!気づかれたか…!」

声からして女か…?人が見つかった事は嬉しいが、正直良い人かもわからないから、警戒はしないと…!

一夏「あれ?この声は…!」

すると、向こう側からスーツの女性が歩み寄って来た。

凄美人だな…。ってあれ!!?しんのすけは!!?

口を押さえていたはずのしんのすけの姿がなく、俺は辺りを見渡すと、女性の前にしんのすけは居た。

そして…。

しんのすけ「へい!お姉さん!オラと人生という名の旅をしない?」

ナンパしていた。

?「ほう?その歳でナンパか?見事なものだな」

そこ褒めるとこじやねえだろ!!?

零「あーもう！ナンパしてる場合か!!？」

一夏「千冬姉!!？」

俺が女性からしんのすけを離していると、一夏が声を上げる。

一夏の声に俺としんのすけ、女性は一夏の方を向くと女性の表情が驚きに変わる。

？「い、一夏……なのか？」

一夏「そうだよ！俺だよ！千冬姉！」

？「無事で何よりだ！」

一夏の顔を見て、安心の表情を浮かべた女性は一夏の肩を持った。

それよりも、一夏……あの女の人の事を姉って呼んだか？

零「一夏、その人は？」

一夏「あー、悪い！この人は織斑 千冬！俺の姉だ！」

千冬「織斑 千冬だ、よろしく頼む」

姉貴だったのか……。

零「俺は新垣 零です！んで、こっちが」

しんのすけ「オラ、野原 しんのすけ5歳！好きな言葉はモーレッツだゾ！」

嫌、意味がわからん……。

全くこのスケベ園児は……

その後、俺達と千冬さんで知っている情報を交換した。

まさか、千冬さんがIS学園の教師だったなんてな。

千冬「アル・ワースか…… 私達は異世界に来たという事になるのか？」

一夏「そうなるな」

千冬「俄かに信じがたいが、信じるしかないだろう…… それと、新垣…… 一夏が世話になった様だな…… 礼を言う」

零「いえ！俺達も一夏には助けて貰いましたんで！それと、俺の事は零で良いです！」

しんのすけ「オラの事もしんちゃんが良いゾ！」

千冬「そうか…… では、零と呼ばせてもらうぞ…… 野原はしんのすけと呼ぶ」

しんのすけ「うう……」

しんのすけのペースに乗せられないとは…… 流石だな……

一夏「それと、千冬姉…… ごめん、俺勝手にISを使っちゃったんだ」

千冬「此処は私達の世界とは違う…… それに、零達を助ける為に使ったんだろ？私からは何も言わん」

一夏「ありがとな！千冬姉！」

千冬「織斑先生だと…… まあ、良いか」

一夏も千冬さんも嬉しそうだな……。

まあ、当たり前か……。実の姉貴に逢えたんだもんな。

千冬「所でお前達はこれからどうするんだ？」

しんのすけ「お好み焼き村に向かうんだゾ！」

零「モンジャヤ村だ！……そこで食料や飲み物も調達をしようかと」

千冬「だったら、私も同行させて貰っても良いか？」

零「勿論です！よろしくお願いします！」

良かった……。大人と一緒にいるだけで此処まで心強いとはな。

すると、俺達の周りに研究所の近くで戦った巨大ロボットが数体現れる。

資料にもこいつらの事は載っていた。

何でも魔徒教団のルーン・ゴーレムという名前らしい。

でも、何でアル・ワースの秩序を守ってる魔徒教団のロボットが俺達を襲うんだ？

一夏「零！行くぞ！」

零「嫌、彼奴らは俺一人でやる！お前は千冬さんやしんのすけを守っていてくれ！」

一夏「でも！……わかったよ」

零「頼むな！よし……。来い！ゼファイルス!!？」

俺が叫ぶとゼファイルスが凄まじい速さで来た。

俺はゼフィルスに乗り込み、ルーン・ゴーレム軍団と戦い始める。

戦いを始めて、数十分が経った。

零「これでラストだ!!？」

残り1体を倒した……。しかし、またもやルーン・ゴーレムの軍団が10体程現れる。
零「キリがねえ！」

ルーン・ゴーレム軍団の攻撃を避け続ける俺。

しかし、そこへ悲鳴が聞こえ、一夏達の方へ視線を移すと、1体のルーン・ゴーレムが一夏達の目の前に居て、攻撃しようとしていた。

零「させるかよ!!？」

俺はすぐさま、ゼフィルスを動かして二刀のクロスソードを合体させ、バスターソードモードに変えると、一夏達を攻撃しようとしていたルーン・ゴーレムに突っ込み、斬り裂いて爆発させた。

零「よし、何とか…。グアアツ!?!？」

一夏達が無事と知り、安心するのもつかの間…。俺は周りのルーン・ゴーレムから一斉攻撃を受ける。

一夏「零！」

しんのすけ「零お兄ちゃん！」

千冬「このままではマズイぞ！」

みんなの声が聞こえるが俺は攻撃による衝撃に耐える事が精一杯でそれどころじゃなかった。

クソツ：：こんな所で終わるのか：：
!!?

このままじゃ：：。

だが、そんなルーン・ゴーレム達にビームが襲い、ルーン・ゴーレム達は俺から一旦離れる。

零「今のは：：？」

銃撃：：？いたい誰が：：
!!?

周りを見ると、東の方から機動兵器が1機、こちらに向かって飛んで来ていた。

機体からは赤色の粒子の様なものが出ている。

一夏「また新しいロボット!!？」

千冬「あの赤色の粒子は一体：：？」

零「あのロボットは：：？」

考える俺の元へある通信が入る。

？「その金色の機体のパイロット！聞こえるか！！？」

零「は、はい！聞こえます！貴方は一体！！？」

？「私は地球連邦平和維持軍所属のアンドレイ・スミルノフ大尉だ！この機体の名はGNーX（ジンクス）！軍人としてそちらの援護に入る！」

零「ありがとうございます！俺は新垣 零！この機体はシャイニング・ゼフィルスです！」

アンドレイ「了解した！では、行くぞ！新垣 零君！」

零「はい！」

すると、そこへ白式を纏った一夏も浮上してくる。

一夏「俺も戦います！」

アンドレイ「何だ…？スーツなのか…？」

零「詳しい話は後でします！彼も俺の仲間です！」

アンドレイ「了解した！では、行くぞ！」

スミルノフ大尉のGNーX I V（ジンクスフォー）に続き、俺達はルーン・ゴレム軍団との戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「さつきはよくもやってくれたな！この借りは倍にして返してやるよ！ゴーレム野郎！！？」

〈戦闘会話 アンドレイVS初戦闘〉

アンドレイ「どういう事だ？私はELSと共に自爆したはず…否、今は考えるのはよそう！例え、何処かはわからなくとも私は軍人だ！民間人を守ってみせる！」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「戦えない相手を狙うなんて卑怯な真似をする奴らは絶対に許さない！やつと千冬姉に会えたんだ！失ってたまるかよ！！？」

スミルノフ大尉が援護に入ってくれたお陰でスムーズにルーン・ゴーレムを倒せた。残り数体となり、残るルーン・ゴーレムが一箇所集まったのを見て、俺は二丁のクロスガンを合体させて、ブラスターモードに変え、ビームを放ち、残るルーン・ゴーレムを全て撃墜させた……。

戦いを終え、一夏は白式を解除して、俺とスミルノフ大尉はそれぞれゼフィルスとGN-ⅩⅣから降りる。

そして、スミルノフ大尉から詳しい話を聞いた。

零「西暦2314年!!?」

俺の世界は西暦2018年だ…。まさか、スミルノフ大尉の世界が296後の未来だなんて…。

アンドレイ「君達が過去の人間とは…。信じがたいが信じるしかないのだろうか。」

一夏「じゃあ、零の未来がスミルノフ大尉の世界って、事なのか?」

千冬「嫌、そうとも限らないぞ」

零「どういう意味ですか?」

アンドレイ「ああ、零君の世界の歴史と私の世界の歴史が食い違っているところがあ
るんだ…。勿論、過去にアクション仮面というものやISなどというものもない」

つまり、スミルノフ大尉の世界は俺とは別の歴史を歩んだ世界って訳か…。

零「擬似太陽炉という事は擬似じゃない太陽炉もあるんですか?スミルノフ大尉」

アンドレイ「ああ、正式名称はGNドライブだがね!それと私の事はアンドレイと呼

んでくれても構わないよ」

スミルノフ：「嫌、アンドレイ大尉の世界ではモビルスーツと呼ばれる機動兵器があると聞いた。」

それで戦争をしていたとも……。

しんのすけ「アンドレイのオジさんはお巡りさんなの？」

アンドレイ「お、オジ……ゴホン！警察ではなく、軍人だよ、しんのすけ君」

今、オジさんと言われてシヨック受けたな……。

零「と、兎に角！俺達はこれからモンジャ村という村へ向かいます！アンドレイ大尉も一緒に行きませんか？」

アンドレイ「……そちらが良ければ、私も御一緒させて頂きたいのだが……」

千冬「構いません……私達も偶然出会った仲です……此処であつたのも何かの縁です

！共に元の世界へ戻る為の方法を探しましょう」

アンドレイ「はい！ありがとうございます（私は本来死んだ身だ……そんな私が戻つても良いのか……？）」

一夏「これからよろしく願います！アンドレイ大尉！」

アンドレイ「ああ、よろしく頼むよ」

千冬さんとアンドレイ大尉を迎え入れた俺達はモンジャ村へ向かった……。

第1話 出会い、そして始まり

千冬さんとアンドレイ大尉を仲間に取り入れた俺達はモンジャ村へ目指して歩いてきた。

ちなみにゼファイルスは研究所へ戻ったが、アンドレイ大尉のGN-XIVは呼び出す事が出来ないで俺達の足に合わせて、操縦して貰っている。

千冬「随分歩いたが……まだ着かないのか？」

零「地図を見るからにもう少しなんです……」

一夏「水は補給できたけど、食いもんがないから……」

今俺達は物凄い空腹に襲われていた。

当然だろ……こちとら戦闘を2回した後なんだぞこの野郎。

しんのすけ「オラこんなもの見つけたゾ！」

すると、しんのすけが何かの果実を持ってきた。

一夏「果物か？それ」

零「食うなよ……いくら、腹が減っていても得体が知れないんだからな」

しんのすけ「大丈夫だゾ！オラもう食べたから！」

零「勝手に食うなよ!!?」

俺がしんのすけと言いつい合いをしてしている間に一夏と千冬さんは果実を齧っていた。
つてか、だから食うなよ!!?」

一夏「… ますっ!」

千冬「味がしないな」

ほれ見ろ! 得体の知れないのに食うからだ!

アンドレイ「アハハ… 取り敢えず早く、モンジャ村へ向かおう」

零「そうですね、このまま餓死になるなんて冗談じゃないですし…」

?「こ、来ないでください! 来ないでえええええつ!!?」

っ!!? 何だ… !!? 女の子の悲鳴か!!?

しんのすけ「お姉さんがオラを呼んでるゾ!!?」

零「誰もお前を呼んでねえって! ちよっ! お前足早いな!!?」

俺の制止も聞かずにしんのすけは声のする方へ走って行ってしまふ。

一夏「はあ… しんのすけって、女の人の事に敏感だな」

零「あいつの将来が心配だぜ…」

千冬「話している場合か! 行くぞ!」

俺達は駆け出し、アンドレイ大尉もGNーXIVから降り、俺達の後を追う。

ー私… アマリ・アクアマリンはピンチに陥っています。

ブリキントン1「！」

ブリキントン2「！」

今、私は複数のブリキントンに襲われています。

アマリ「や、やめてください…！」

ブリキントン「!!？」

アマリ「こ、来ないでください！来ないでえええええつ!!？」

こ、こうなったら、ドグマで…！

？「あ、あれ…？」

え…!!？茂みから男の子が出てきた!!？

ブリキントン1「!!？」

ブリキントン2「!!？」

？「も、もしかして… 僕… お邪魔しちゃったかな…？」

ブリキントン！「!!？」

？「こ、この人形っていうか、ロボット… 怒ってる…？」

い、いけない！ブリキントン達の標的が男の子に変わっています！

？「もしかして、このロボット… Dr. ヘルの手下なの…？」

ブリキントン「!!?!」

？「ちよ、ちよつと待った！ぼ、僕は、戦部（いくさべ）ワタルっていつて、此処がどこなのかもわからなくて…！」

此処がどこなのかもわからない…？このワタル君って言う子…もしかして…。

ブリキントン1「!!?!!?!!?」

ワタル「だ、ダメだ！こつちの話をちつとも聞いてくれない！」

ブリキントン2「!!?!!?!!?」

完全にブリキントン達はワタル君を狙っています…！このままでは…！
すると…。

しんのすけ「ホホーイ！」

おしりでブリキントンの1体に攻撃する坊主頭の子が現れました。
さらには…。

零「子供と女相手にお前ら何人がかりだ!!?」

私と同じ年くらいの男の子も走ってきました…。

―新垣 零だ…。

俺は変なロボット軍団に襲われている女の子と少年を守る為にロボット軍団を殴り飛ばした。

って、痛って…。

吹き飛んだが、こつちにも軽くダメージが…。

てか、しんのすけやるな…こいつもおしりで戦ってるし。

一夏「はあ！雪平!!？」

俺の後から白式を纏った一夏、千冬さん、アンドレイ大尉が駆け付け、それぞれロボット軍団を倒していく。

このメンバー生身でも強ええ…！

全てのロボットが機能停止し、俺達は襲われていた女の子達の元へ歩み寄った…その時だった。

ブリキントン「!!？」

一夏「零！後ろだ!!？」

零「何…!!？」

俺の後ろから機能停止したはずのロボット数体が俺に殴りかかってきた。

反応が遅れ、俺は殴られると思った……。

アマリ「ほ、炎よ、舞って！い…… I G N E S T！」

ブリキントン1「!? ? ? ? ?」

ブリキントン2「!? ? ? ? ?」

て、手から炎が出た!? ?

彼女の炎を見たロボット軍団は逃げ出した。

アマリ「よ、良かった……。あの程度の炎のドグマで逃げてくれて……」

ど、ドグマ…… ? 彼女は一体…… ?

アマリ「それとも魔徒教団の術士だと思って、逃げ出したんでしょか……」

魔徒教団だと…… ? ? 彼女は魔徒教団なのか…… ? ?

アンドレイ「魔徒教団といえば、この世界の秩序を守っている教団の事じゃないか！」

千冬「ですが、我々は魔徒教団のルーン・ゴーレムに何度も襲われています…… 油断

はできません」

アンドレイ大尉と千冬さんは彼女を警戒してるな……。

取り敢えず、助けてくれた礼は言わないとな。

零「すまない、君のおかげで助かった……。ありがとうございます」

ワタル「ぼ、僕もありがとうございます！」

俺に続き、少年も女の子に礼を言った。

アマリ「気にしないでください…。その為に私…。此処に来たんですから…。ワタル君を助ける為に…。」

成る程、少年の名前はワタルっていうのか。

アマリ「つて偉そうに言えませぬね…。私もピンチだったんですから…。すみません！ありがとうございます！」

ワタル「僕からもありますがどうございます！おかげで助かりました！」

一夏「無事で良かったよ！」

一夏が笑いかける…。だが、あのバカが動いた。

しんのすけ「へい、お姉さん！大粒納豆と小粒納豆のどっちが好き？」

アマリ「え、ええ…。!?？」

案の定困ってんな…。ったく。

零「おい、しんのすけ…。この人が困ってんだろ」

しんのすけを女の子から離していると、1羽の鳥が飛んできた

？「全く…。何をしていますか、マスター」

千冬「オウム…。？」

ワタル「オウムだね…。」

ん？待て！このオウム喋らなかつたか……！！？

？「私達は、こちらの少年を保護する為に来たのに彼とこの者達が来てくれなかつたら、ブリキントンに為すがままだったではないですか」

あのロボット……ブリキントンって言うのか……。

アマリ「それはその通りですけど、ホープス……見ていたんなら、助けなくても良いのに……」

女の子が拗ね、ホープスというオウムに文句を言っている。

ホープス「それは私の職務ではありません」

一夏「オウムの職務って、何だよ……」

アマリ「そんな……」

何か、この子……このホープスっていう、オウムに一方的に言い負けてないか……？

アンドレイ「彼女達はこの世界の者なのだろうか……？」

零「わかりません、少し聞いてみましょうか……あの」

ホープス「申し訳ありませんが話をしてる時間はありません……連中は魔神（マシン）を出してきたようです」

アマリ「え！」

千冬「魔神……？」

アマリ「だったら、急がなきゃ……！」

零「お、おい！何が何だか……！」

さつきから俺達何処か空気がしみますが!!??

第1話 出会い、そして始まり

話し込んでいる俺達の前に7体の見たことも無いロボットが現れる。

な、何だ……!!? ルーン・ゴーレムと違うロボット……!!??

アマリ「え……え……魔神（マシン）が7体もいます……！幾ら何でも多すぎじゃないですか！」

ワタル「さつきの手から出る炎で何とかならないの!!?？」

アンドレイ「それよりもあの炎は一体、何なんだい!!?？」

アマリ「あれはエンデのドグマ……別の言い方をすれば魔法です！」

おいおい、今度は魔法ときたよ……この世界……本当にファンタジーっぽいな。

千冬「魔法だと……!!?？」

しんのすけ「魔法だなんて、まー本当!!?？」

一夏「しんのすけはちよつと黙っていてくれ……！」

こいつ、どんな時でも自由だな……。

アマリ「異界人（いかいびと）の皆さんは驚くかもしれませんが、アル・ワースでは知らない人はいません」

アンドレイ「という事はそのドグマはそれ程この世界では珍しい物ではないと？」

アマリ「はい、あ……でも、実際に術士にあつた事がある人はそうはいないでしょうけど……」

零「君はその術士……というものなのか？」

アマリ「そうです！ 私は藍柱石（らんちゆうせき）の術士と呼ばれています！」

ワタル「ちよ、ちよつと待って！ 異界人とか、アル・ワースとか、一体何の事なの？！」

俺達は事前に資料でこの世界の事を知っているがワタルは知らなくても当然だ。

零「アル・ワースってのはこの世界の事だ……俺達は異世界に来たんだよ！ ワタル」

ワタル「い、異世界!!？」

零「それであつてるだろ？」

アマリ「……」

零「な、何で黙るんだよ……？」

千冬「大丈夫か……？」

アマリ「……覚悟を決めました……」

か、覚悟……？

ワタル「え……？」

一夏「覚悟って、一体……？」

アマリ「ごめんなさい……色々と聞きたい事があるのはわかりますけど、それを説明している時間はありません」

アンドレイ「……嫌、こんな時に色々と質問してしまつて、こちらこそすまない」

アマリ「い、いえ！大丈夫ですよ！でも、名前だけは名乗ります！私はアマリ・アクアマリンです！皆さんがわかる言葉で言えば、魔法使いです！」

零「アマリ・アクアマリン……それが君の名前か……」

一夏「魔法使い……か……」

俺達が話しているとロボットの1体がこっちに向かって来やがった……！

しんのすけ「ロボットが来るゾ！」

アマリ「あれはワタル君……君を狙っているんです」

千冬「なぜ彼だけ……？」

ワタル「そうだよ！僕……ただの小学四年生だよ！」

アマリ「大丈夫です！」

ワタル「大丈夫って…」

アマリ「私が絶対に君を守りますから！」

アマリは本気だ…こいつ…まさか、あの魔神って、ロボットと戦う気か…!!?
すると、1体の魔神が俺達に迫って来ていた魔神を吹き飛ばした。

零「あれも魔神なのか…!!？」

アマリ「お、おそらく…でも、あの魔神…私達を助けてくれたの…？」

ワタル「でも！ たった1機で、あれの相手をするのは…！」

アマリ「来ました…！」

アマリの言葉と同時に1体のロボットの現れた。

アンドレイ「また違う形状のロボット…!!？」

アマリ「もう！ 遅いですよ、ホープス！」

一夏「え!!？ ホープスって…!!？」

あのオウムじやなかったか!!？

すると、ロボットからホープスの声が聞こえた。

ホープス「その様子では、覚悟を決められたようですね」

アマリ「…自信がなくても、やらなきゃいけない状況ですからね…」

ホープス「かしこまりました…では、どうぞ」

すると、アマリはロボットに乗った。

しんのすけ「アマリお姉さん！」

アマリ「心配ありません！私がゼルガードで戦います！皆さんは茂みに隠れて待っててください！」

ゼルガード：…あれが、ロボットの名前なのか…。

零「アンドレイ大尉」

アンドレイ「わかった！」

アンドレイ大尉は俺の言いたい事が分かったのか、GN-XIVの所まで走って行った…。

そうしているとアマリの乗るゼルガードが俺達を助けてくれた緑色の魔神の隣まで移動した。

アマリ「そちらの緑の魔神さん！手を貸してください！」

？「女の子か…」

アマリ「え…」

？「いや、いい… 助太刀する」

アマリ「ありがとうございます！」

アマリは緑の魔神と協力して、魔神軍団と戦い始めた。

ワタル「あつちのロボットも、こつちのロボットも機械獣でもなければ、勇者特急隊でもない……何がどうなってるんだよ、此処は!!?」

だいぶ混乱しているな……無理もないか。

よし、俺達もすぐに出れるように準備するか……!

ホープス「あの少年……混乱していますね」

アマリ「当たり前ですよ!いきなり見知らぬ世界に連れてこられたんですから」

ホープス「それに対し、あの集団は混乱していませんね」

アマリ「……後で詳しく話を聞いてみましょう……兎に角、絶対に守ります!」

ホープス「それは世界の為にですか?」

アマリ「それ以前の問題です」

ホープス「かしこまりました……では、存分にどうぞ」

アマリ「お願い、ゼルガード……!私に応えて……!」

つ!!?今、ゼルガードにエネルギーが……!!?

千冬「これは案外、お前達の順番はないのかもしれないぞ」

一夏「そんな気がしてきた……」

俺達がそんな話をしていると、再び、ゼルガードから声が聞こえた。

ホープス「オドの収束率……戦闘レベルに到達を確認」

アマリ「やりますよ、ホープス、ゼルガード！必ず、あの子は守ってみせます！」
そのアマリの言葉を最後に戦いが始まった……。

戦いが始まってから数分後……。

ゼルガードと緑の魔神の攻撃に魔神軍団は数を減らしていく。

この調子なら勝てるな…… 本当に俺達の出番はないかもな。

そう思っていたが、残り3体となった所でさらに10体程、魔神軍団の増援が現れた。

アマリ「そ、そんな……！ 此処で増援だなんて……！」

？「ドアクダーめ…… 小癩な真似を……！」

流石に部が悪いな……！

千冬「零、一夏」

零「わかりました！」

俺が頷くと背後にGNーXIVが現れる。

アンドレイ「遅れてすまない！」

一夏「いえ！ほとんどジャストタイミングです！」

ワタル「ま、またロボット……？」

零「安心しろ！ワタル…あのロボットは味方だ！そして、今から出てくるロボットもな」

一夏「千冬姉！ワタルとしんのすけをよろしくな！」

千冬「誰に言っている？お前達も気をつけていけ！」

こういう時の千冬さんって、ホントかつこいいいな…。

零「じゃあ、いくか一夏！ゼファイルス!!？」

一夏「おう！白式!!？」

俺はゼファイルスを呼び出して乗り、一夏も白式を纏い、俺達はアマリの乗るゼルガードの元まで動く。

アマリ「ろ、ロボット!!？貴方達は一体…!!？」

零「落ち着けアマリ…俺達だ！」

アマリ「そ、その声は先程の…」

アンドレイ「今から我々も援護に入る」

一夏「そちらの緑の魔神も良いですか？」

？「承知した」

こうして俺達は魔神軍団と戦い始める。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「小学生一人目的の為にロボット軍団か…ワタルに何が隠されてるかわからないけど、あいつには指一本振るわせないぞ！」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「足が短い機体だな…ルーン・ゴレムと大違いだ…けど、油断はしない！全力で行くぞ！」

〈戦闘会話 アンドレイVS初戦闘〉

アンドレイ「罪もない子供を狙うとは許されない！軍人の私が彼を守ってみせる！」

俺、アマリ、一夏、アンドレイ大尉、緑の魔神はそれぞれ一体ずつ、魔神を倒した。

だが、またもや4体程、魔神の増援が現れる。

一夏「ま、また増援だって!?？」

アンドレイ「まずい…！長期戦となればこちらが不利だ！」

ホープス「此処は撤退をお勧めします」

アマリ「ダメです！此処で退いたらワタル君が……！」

ホープス「ですが、このままではマスターの身が……」

零「まだ、撃墜されてるわけじゃねえだろ！口よりも手を動かせ！」

弱いくせに数だけで押して来やがって、この短足ロボ……！

それ光景を見ていた千冬さん、ワタル、しんのすけもどうすれば良いのかを考えていた。

ワタル「ど、どうするの!?この数じゃ負けちゃうよ！」

しんのすけ「大丈夫だゾ！零お兄ちゃん達は絶対に負けない！正義の味方は絶対に勝

つんだゾ！」

ワタル「正義の味方……」

しんのすけ……嬉しい事言ってくれんじやねえか……。

千冬「聞こえるか、みんな……確かに数では押されているがお前達だけが、戦っているのではない！だから、絶対に勝て！」

千冬さん……。

零「そうだよな……負けてらねえ！」

アマリ「私なんかを応援してくれているワタル君達の為にも……負けられません！」

俺の次にアマリが叫び、俺達は再び戦おうとする。

だが、東側が一瞬光り、光が消えると2機のロボットが現れる。

おいおい、決心を固めたところでこれかよ……！

これで敵の増援だったら、詰むぞ！

アマリ「ま、また新しいロボット?!?!」

零「でも、あの機体の形状……アンドレイ大尉のGN-XIVに似ていないか？」

1機は赤色の粒子を出しているが、もう1機は緑色の粒子を出していた。

アンドレイ「あ、あれは……まさか……?!?!」

やつぱり、アンドレイ大尉はあの2機の機体を知っているのか……！

?「こ、此処は……？俺達はELSの母星へ向かったはずでは……テイエリア、無事か?」

テイエリア「あ、ああ……刹那、君も無事のようだな」

刹那「問題ない……それよりもテイエリア……何故、肉体を持ち、再びラファエルへ乗っている?」

テイエリア「……わからない、気づけばこうなっていた……それにヴェーダにアクセスができない」

刹那「何だと……?」

テイエリア「考えられるのは此処は僕達の世界ではないという事だ」

回線越しに聞こえる2人の会話……名前は刹那とテイエリアか……？

すると、アンドレイ大尉のGN-XⅣが2機の機体に近づく。

アンドレイ「そちらの機体に告ぐ！私は地球連邦平和維持軍所属のアンドレイ・スミルノフ大尉だ！応答を頼む！」

刹那「連邦軍のGN-X……何故、こんなところに……」

テイエリア「取り敢えず、応答に応じよう……こちらはテイエリア・アーデだ」

アンドレイ「君達はソレスタルビーイングのガンダムなのか？」

ソレスタルビーイング？ガンダム？一体何の事だ？

しんのすけ「カンナムと全然違うゾ！」

千冬「多分、しんのすけの考えているものと違うぞ」

ガンダム……あれもGN-XⅣと同じ、モビルスーツなのか……？

刹那「そうだ、俺達はソレスタルビーイングのガンダムマイスターだ」

アンドレイ「やはり……！」

テイエリア「連邦のモビルスーツだな……今の状況を教えて欲しいのだが……」

俺達が話していると一体の魔神が緑色の粒子を出している機体に近づき、攻撃を仕掛

ける。

まずい……！

俺が動こうとしたが、緑色の粒子を出す機体は魔神の攻撃を避け、ブレードで真つ二つに斬り裂いた。

一夏「つ、強い……！」

零「なんて性能だ！」

刹那「いきなり攻撃してきた……!? お前達は何者だ！」

アンドレイ「ソレスタルビーイング……この足の短い機体は我々の敵だ！彼らはあの少年を狙っている」

アンドレイ大尉は2機にワタルの映像を送る。

テイエリア「成る程な、それは見逃せない……状況を見る限り、その他の機体は味方

か……刹那、どうするか？」

刹那「少年を守る……武力による戦争根絶……それが俺達、ソレスタルビーイングだ」

テイエリア「了解……では、戦闘を開始する！」

刹那「クアンタ……行くぞ！」

成る程な……緑色の粒子を出している機体の名はクアンタで赤色の粒子を出している機体の名はラファエルか……。

兎に角、2機のガンダムという機体が加勢に入り、俺達は魔神軍団との戦闘を再開する……。

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「お前達は何者だ…… 何故、あの少年を狙う…… 答える気はないか…… ならば、破壊する…… 俺とクアンタが！ ダブルオークアンタ！ 刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する！」

〈戦闘会話 ティエリアVS初戦闘〉

ティエリア「まさか、ELSの母星へ向かう為の量子ジャンプでこの様な場所へ来るとは…… だが、争いを起こすなら僕達は戦う！ ティエリア・アーデ、ラファエルガンダム！ 目標に風穴を開ける！」

戦闘から数分後……。

周りに居た魔神軍団を全て倒した俺達……。

アマリ「ふう… つ、疲れました…」

ホープス「緊張の糸が途切れた様ですね」

零「まあ、仕方ねえよ… あんだけの数を相手にしたらな」

アマリ「それにしても彼らの動きが活発になってきましたね」

ホープス「ええ… この様子では近々、魔徒教団も動き出すでしょう」

アマリ「ですね」

アマリとホープスが話していると緑色の魔神がこの場を去ろうとしたので俺とアマリが礼を言う。

零「あの！ 助けていただき、ありがとうございます！」

アマリ「せ、せめてお名前を！」

？「名乗る程の者でもないウラ」

一夏「ウラ？」

千冬「語尾の様なものだろう」

何か、途中までカツコよかったのにウラで台無しだな…。

刹那「すまない… そろそろ説明を頼む」

零「そうですね、1度ロボットから降りて話をしましょうか」

俺達はロボットから降り、刹那とテイエリアにこの世界の事を話した。

ちなみに呼び捨てなのは刹那達がそれで良いと言ったからだ。

テイエリア「アル・ワースか…」

アンドレイ「君達は どうして此処へ？ ELSはどうなったんだ？」

刹那「俺達は ELS との対話を成功させ、彼らの母星へ向かおうと量子ジャンプをしたのだが…」

千冬「何故か、アル・ワースに来てしまった…」

テイエリア「ああ」

俺達がこの世界に集まったのは偶然なのか…？ それとも…。

零「それにしてもアマリ… 凄かったぜ？ ゼルガードの戦いっぷりは」

アマリ「いいえ… 私なんてまだまだです」

ホープス「そうですね… いちいち覚悟を決めないと戦えないのですから」

アマリ「き、気にしている事を言わないでください！」

一夏「小言の多いオウムだな…」

ホープス「私はオウムではありません… 魔法生物です」

ワタル「魔法生物…？」

アマリ「魔法で作られた生物の事です」

否、まんまだな… それ。

ティエリア「魔法……か……」

刹那「やはり、此処は異世界という事なのだな」

アンドレイ「それよりもアマリ君……何故、ワタル君が狙われていたのかわかるかい？」

アマリ「ええつと……その事については私じゃなくて、これから行くところで説明を聞いた方が良いと思います」

千冬「これから行くところ？」

アマリ「はい……あ……改めて自己紹介をします！私はアマリ・アクアマリンです。アマリと呼んでください！こっちのオウム……じゃない……魔法生物はホープスです」

ホープス「以後、お見知り置きを」

アマリが改めての自己紹介をしたので俺達も自己紹介をした。

てか、アマリもオウムって言いそうになってんじゃねえか。

アマリ「それでは行きましようか！救世主ワタル君……君をモンジャ村に送り届けて、私の受けた依頼は完了します」

ワタル「救世主……？何それ？」

救世主だと……？それがあいつらがワタルを狙っていた理由か？

アマリ「君はこの世界……始まりのアル・ワースを救う人間だそうです」

ワタル「始まりの……アル・ワース……」

ワタルがアル・ワースを救うだって……？こいつは小学生だぞ？

一夏「それなら俺達も同行させて貰ってもいいか？」

アマリ「え……構いませんが、どうして……？」

アンドレイ「私達も食料の調達などでモンジャ村を目指していたんだ」

アマリ「そういう事ですか……わかりました！どっちにしても異界人である皆さんも守るのも私の役目の様なものです……行きましよう」

零「これからよろしくな！アマリ！」

アマリ「はい、零さん」

刹那とティエリアを仲間につけ、俺達はアマリの案内でモンジャ村へ向かった……。

第2話 嵐を呼ぶ5歳児と救世主

俺達はアマリに案内されながら、モンジャ村を目指していた。歩いてる最中に俺はアマリにこの世界についての事を聞けるだけ聞く。

零「成る程・・・そのオドってのは、ドグマを使う為に必要な物質ってわけか」

アマリ「そうです・・・零さんって、理解力が早いですね」

零「そうか・・・？」

一夏「俺なんてさっぱりだぞ？」

千冬「それは単にお前がバカなだけだ」

一夏「ごはっ!?？」

一夏の胸に何かが突き刺さる音が聞こえたが気のせいだろう。

ワタル「それにしても、零さん達は随分と落ち着いてるね！僕なんてまだ戸惑ってるのに・・・」

アンドレイ「君達と出会う前に結構な戦闘が起こったからね」

刹那「焦っても仕方がないと見た」

しんのすけ「気楽に行くゾ・・・気楽に！」

テイエリア「野原しんのすけ、どさくさ紛れでラファエルに乗ろうとするな」しんのすけ「ぶーっ！テイエリアちゃんのケチー！」

テイエリア「ちゃんって……僕は女じゃない！」

刹那「だが、女装した事もあつたよな？テイエリア」

テイエリア「せ、刹那！」

テイエリアが……女装だと……
!!?

しんのすけ「ほうほう……それは是非見たいですな」

ワタル「僕も見してみたいかも！」

テイエリア「ぜ、絶対に断る！」

テイエリア……子供相手にタジタジだな……。

千冬「一夏、お前も女装してみないか？」

一夏「え……
!!？」

アンドレイ「確かに、一夏君も似合いそうだね」

一夏「い、嫌だ!!？」

他のみんなの会話を見て俺は苦笑しているとアマリがクスリと笑い、話しかけてきた。
た。

アマリ「賑やかな人達ですね」

零「緊張感がないのがたまに傷だけだな……」

アマリ「それにしても零さんは本当に落ち着いていますね」

零「まあな…… ってかアマリ…… 俺達、同い年だろ？敬語のさん付けはやめてくれ」

アマリ「ですが……」

うーん、まあ、それが普通のアマリだつて事はわかるけど、なんか敬語を使われると抵抗があるんだよな……。

零「頼む」

アマリ「は……う、うん…… わかったわ…… 零君」

零「…… 悪い、やっぱり慣れてからでいい」

アマリ「す、すみません…… 零君」

一応君付けでは呼んでくれるんだな。

ホープス「そろそろモンジャ村へ着きます」

お、やっと着くか……。

ここまで長かったからなく……。

刹那、テイエリア、アンドレイ大尉はそれぞれモビルスーツから降り、俺達はモンジャ村へと入った。

アマリにモンジャ村の広場へ連れてこられた俺達……。

そこには沢山の村人が居た。

しんのすけ「お？オラ、こつてりもんじや焼きが暮らしてると思つたゾ」

零「流石にそうだったら、俺はもう何も驚かない」

もんじや焼きが暮らしてる村とか面白すぎだろ……。

アマリ「……此処が目的地のモンジャ村です……私……この村の人から、ワタル君を

保護して、此処に送り届けるように頼まれたんですよ」

ワタル「アマリさんつて困つてる人を助ける正義の魔法使いなんだね！」

アマリ「そんな立派なものじゃありませんよ……」

照れてるし……ちよつと可愛いな。

千冬「そんな事はない、私達はお前に助けられたんだからな」

一夏「それにしても、此処……田舎の村つて感じだな……」

零「確かに、ファンタジーっぽい世界だったのにな……」

アマリ「この辺りは、あまり機械に頼らない文明なんです。のどかな雰囲気なのは、そのためだと思います」

アル・ワースにも色々な所があるという事か……。

刹那「他の所は違うのか？」

零「アル・ワースは各地で文明や文化が大きく異なるらしいんだ」

ホープス「私が説明しようとしたのですが……」

あ、なんか悪い……。ホープス……。

ワタル「どうでもいいけど、僕……お腹がすいちゃったよ」

ホープス「子供ですね……。未知の環境よりも欲求の方が勝るとは……」

まあ実質、ワタルは小4の子供だから……。仕方ないって言えば仕方ないだろ。

ワタル「当たり前じゃん！お腹が減ったら、何もできないもの！」

しんのすけ「そうだぞ！腹が減ってはいいいクソは出ない、だぞ！」

アンドレイ「それを言うなら、戦はできないだよ……。しんのすけ君」

ことわざ軽く覚えてんのに何処かが違うんだよな……。

ホープス「……確かに真理ですね。空腹は生命あるものにとって最も恐るべきもの
すから」

零「あれ？わかってんじゃねえかよ？ホープス」

アマリ「ふふ……。私には厳しいホープスもワタル君としんちゃんの素直さには勝てな
いみたいですね」

ホープス「だから、子供は苦手です……」

嫌、オウムが言う言葉か。

ワタル「ねえねえ！あつちの木になつて果物つて食べられるの？」

一夏「ワタル、やめた方が良いぜ。あれまずいし、ほとんど味がしないから」
アマリ「…食べたんですか？」

一夏「すみません…」

だから言っただよ… 自業自得だ。

ワタル「そうなんだ。さっきの森にも、沢山なっていたけど、それじゃ意味ないね」
逆にワタル… お前よく食わなかったな… こちとら、ほとんどが果物に手を出してたのに。

千冬「それにしてもアマリとホープスは物知りだな。やはり、魔法使いというものだからか？」

アマリ「は、はい… それなりに色々な事を学びましたから」

俺達が話していると龍の顔がついた杖をついたお婆さんが来た。

？「流石は魔従教団の術士サマジやな。見事、依頼を果たすとは」

零「失礼ですが… 貴方は？」

？「ワシはおババ… こっちの爺さんはオジジじゃ」

オジジ「よろしくのう」

オジジさんが挨拶をして来たので俺達も挨拶をした。

アマリ「み、見事だなんて、そんな…！」

そこ照れるところか?!?もしかして、アマリって褒められるのに慣れてない…?

オババ「おうおう…奥ゆかしいのう!流石は術士サマじゃ!」

なんか、オババさん楽しんでないか?!?

アマリ「は、はは…そういう事にさせてもらいます」

?「オババさん…救世主が見つかったのですか?…ん?しんのすけ君?!?」

しんのすけ「お?おー!カンタムー!」

緑色のロボット…つて、うええええつ?!?

ティエリア「か、彼は人間の言葉を話しているのか?!?」

零「ティエリア、ツツコミ所がそこじゃない!」

一夏「何で、しんのすけの持つてる玩具のカンタム・ロボが居るんだよ?!?」

カンタム「ははっ、確かに僕はしんのすけ君の世界では玩具だが、僕にだって、僕の

世界があるよ」

な、成る程…そういう事か…!

千冬「という事はしんのすけの世界で放送されているカンタムの話はカンタムの世界

では本当に起こっているという事か?」

カンタム「大体は…ですけどね」

?「カンタム君…君の知り合いに会えたのだな」

カンタム「はい、セルゲイさん」

今度は男の人が来たな……ん？何処か、アンドレイ大尉と似ている気が……。

アンドレイ「と、父さん……？」

セルゲイ「なっ？！？あ、アンドレイ……？！？」

父さん？！？え？！？マジかよ？！？

すると、アンドレイ大尉は涙を流しながら、セルゲイさんという人に駆け寄る。

アンドレイ「ど、どうして父さんが此処に？！？」

セルゲイ「機体が爆発した後……気がつくど私はこの世界に居たんだけ」

零「俺が事故にあつて目を覚ましたのほとんど同じですね……」

セルゲイ「気を失っていた私をカンタム君が介抱してくれたんだ……それよりもアン

ドレイ……お前は何故此処へ？」

アンドレイ「私も地球を守る為に死んだのですが……後は父さんとほとんど同じです」

考えてみればおかしいな……。俺、アンドレイ大尉、セルゲイさんは死にそうになった状態でこのアル・ワースに転移してきた……。

だが、一夏、千冬さん、しんのすけは生きている状態でこの世界に転移し、さらには刹那とティエリアはワープの手違いでこの世界に来ている……。

俺達がこの世界に集められたのは理由があるのか……？

セルゲイ「……お前が立派になつてよかつたよ」

アンドレイ「いえ……私は……父さんをこの手で……！」

セルゲイ「息子は……親を越す時もあるのだな……良いんだ、アンドレイ……こうしてお前と出会えたのだからな」

アンドレイ「うう……うっ、父さん！」

ついには泣き出したアンドレイ大尉はセルゲイさんに抱き着いた。

相当、嬉しかったんだな……俺達はアンドレイ大尉から既に勘違いによつて父……セルゲイさんを殺してしまったと聞いている。

暫くして、アンドレイ大尉が泣き止み、セルゲイさんはアンドレイ大尉を離して、刹那とテイエリアに視線を変える。

セルゲイ「君達はソレストアルビーイングだな？」

テイエリア「な、何故わかつた!?？」

セルゲイ「アレルヤ・ハプティズム君と似た様な服装をしていたからな」

刹那「そうか……お前が……！」

セルゲイ「ああ、ロシアの荒熊と呼ばれたセルゲイ・スミルノフだ」

ロシアの荒熊……なんか、かつこいいな。

刹那「マリー・パーファシー…嫌、ソーマ・ピーリスならアレルヤと元気にしている」

セルゲイ「そうか…それなら、良かった」

再会を終えたところで、オジジさんが口を開いた。

オジジ「しかし言い伝えでは、このモンジャ村の龍神池に救世主は降りてくるはずじゃったが、少しズレとったようじゃの」

ホープス「私が異界の門を開いた事を感じできたのは幸運でしたね」

オババ「その通り！これも魔法オウム殿のおかげじゃ！」

ホープス「お褒めをいただき、光栄ですが、私にはホープスという名前がごきます」
オババ「それにしても、術士サマ…結構な大所帯になったものじゃのう」

アマリ「彼らも異界人です。ワタル君を見つける時に出会って、此処に連れて来ました」

アマリが説明してくれて助かったぜ。

ワタル「あの…」

オババ「おおおっ！」

住民1「喋った！」

住民2「喋ったぞ！」

否、言つていいか……？あたりまえじゃねえか！！？アンタら、ワタルをなんだと思つてんだよ！！？

ワタル「そんなに驚かなくても……」

オババ「お前の名は？」

ワタル「戦部 ワタル……」

オババ「龍を見たか？」

ワタル「う、うん……。龍神池で龍を見て、それで僕……。このアル・ワースつて所に来たみたいなんだ」

オババ「おおおっ！」

いちいち声上げるなよ！

オジジ「オババ……。やはり、その子が伝説に予言されたワタルじゃというのかの？」
伝説に予言された……。？ワタルが……。？

オババ「いかにも！」

テイエリア「その伝説というのは……。？」

オババ「言い伝えには創界山が危機に陥った時、これを救う者が降りてくる……。」
え？何か、勇者モノの様な物語だな……。

オババ「その名をワタルと言い、龍の神と共に悪を倒す！その救世主が、今此処に現

れたのじゃ！」

ワタル「……所で救世主って、よくわからないんだけど……」

ホープス「この世を救う人間の事です」

一夏「否ぎっくりとした答えだな!!？」

ワタル「この世って……このアル・ワースって世界の事だよね……」

零「そうだと思うぞ」

オババ「今日はもう陽が暮れる……ワタルよ、この村で休むといい……術士サマと

ホープスサマ、それと旅の方々もお休みなされ」

零「すみません……お世話になります！」

オババさんの言葉に甘え、俺達はこの村の人達にお世話になった。

風呂に入って、夕食を食べ、皆眠りに入った。

だが、俺は変わった環境な為、あまり、寝付けずにいたので外に出て、夜空を眺める事にした。

その場に座り込み、右足を曲げて、夜空を見る。

零「この世界の星も……綺麗なんだな……」

オレは夜空を眺めながら、弘樹と優香の事を思い出す。

彼奴ら…… どうしてるかな……？

アマリ「零君？」

すると、アマリの声が聞こえ、俺はゆっくりと振り返る。

零「…… アマリか」

アマリ「どうしたんですか？」

零「少し眠れなくて…… 夜空でも眺めようかと思つたんだ……」

アマリ「そうなんですか……」

俺の話を聞いたアマリも体育座りで俺の隣に座つた。

アマリ「零君は…… やつぱり、元の世界へ帰りたいですか？」

零「ああ…… 大事な家族みたいな奴らを置いて来ちまつたから……」

アマリ「家族…… ですか」

零「と言っても、友人で幼馴染つてだけなんだけどな……」

アマリ「零君の本当の両親は？」

俺の本当の両親…… か……。

零「死んだよ…… 俺が幼い時に」

アマリ「す、すみません！私…… 無責任な事を……！」

零「良いよ、アマリは知らなかつたんだし…… なあ、アマリ…… 変な事を聞いても良

いか？」

アマリ「え？は、はい？何でしょうか？」

零「……アマリ……俺達って……何処かで会った事はないか？」

お、俺は何を言ってるんだよ？アマリとは初対面のはずだろ……！

でも、このアル・ワースに来てから違和感があるんだ……俺はこのアル・ワースについて知っているのではないかと……アマリと何処かで会っているのではないかと……

アマリ「い、いえ……初対面ですよ」

零「そうか……変な事を聞いてすまない」

アマリ「大丈夫ですよ……そろそろ寝ましようか」

零「そうだな」

翌日。

俺達と村の人々は再び、集まって、昨日の話の続きする。

オババ「ワタルよ！我がモンジャ村に代々伝わる戦士の装束じゃ！身にまとうがいい！」

ワタル「かっこいい！じゃ、遠慮なく！」

EXマン達 「「エクスキューズ・ミー！」」

…え？何…？

俺はこの時知らなかった…この子達の名がEXマンという事に…。

ワタルの着替えが終わるとワタルの服装は本当に勇者の様なモノとなっていた。背中に剣、背負ってるし…。

ワタル「着替え完了！ハツキシ言って、決まったぜ！」

しんのすけ「おお〜！かっこいいゾ〜！」

アンドレイ「似合っているよ、ワタル君」

ワタル「ありがとう！しんちゃん！アンドレイさん！」

オババ「さらにワタルよ！後ろを見るのじゃ！」

ワタル「後ろ…？」

オババさんに言われて俺達は後ろを振り返ると山が見える。

ワタル「あの山を見ろって事？」

オババ「そうじゃ。あの山こそが、創界山じゃ」

ワタル「創界山…」

オババ「創界山にかかる虹が灰色になった事こそ、この世界の乱れの証…」
確かに虹が灰色になっているな…。

オババ「虹の色を取り戻さない限り、アル・ワースに待つのは破滅じゃ！」
一夏「灰色の虹か……」

オババ「誰も、その正体を見た事のないドアクダーなる悪の帝王が、平和そのものだった創界山を支配し、七色の虹を灰色に変えてしまったのじゃ」

千冬「虹を灰色に変える……か」

オババ「創界山は、このアル・ワースのヘソ……。その虹が灰色になった事で世界はフランスを失っていくじゃろう」

ワタル「で、僕が創界山に登ってドアクダーと戦うって事？」

オババ「そうじゃ」

零「夢みたいな話だな……」

ワタル「そ、そうだね……」

でも実際、俺達は既にこのアル・ワースという夢みたいな世界に来てしまってるからな……。

ワタル「でも、いい！僕やるよ！」

アマリ「ちよつと待ってください、ワタル君！そんなに簡単に決めていいんですか？！

？」

セルゲイ「これはゲームとは違うのだぞ？」

ワタル「困っている人がいるなら助けなくっちゃ！」

こいつ……。

零「よく言っただぜ！ワタル！」

アマリ「でも……」

アマリは納得していないみたいだな……ん？向こうから女の子と男の人が……。

？「ぬははははは！子供にしては肝が据わっておる！」

と、男の人が話しかけて来た。

ワタル「うわああああ！カバだ！」

否失礼だろ!!?

？「こらあ！拙者のどこがカバだ！」

？2「顔！」

おおう……今度は女の子が酷い事言ってる……。

？「なんと！」

？2「きやはは！オツサン、ガックシ！」

カンナム「君は？」

？2「あちし、ヒミコ。忍部（しのびべ）一族十三代目の頭領だよ！」

頭領!!? その歳で!!?

一夏「だ、大統領なのか!!?」
あ、馬鹿が居た。

零「大統領じゃなく、頭領だ」

オババ「そうじゃ。ヒミコは、忍びの一族である忍部のお嬢様じゃ」

ヒミコ「そう。あちし、お頭なのだ」

?「人は見かけによらんのお...」

アンタが言うな。

千冬「失礼ですが、貴方は？」

?「うむ... 拙者、ミヤモト村の劍豪、劍部（つるぎべ）シバラクという者！」

ミヤモト村の劍豪って... 宮本武蔵じゃねえか!

シバラク「創界山の危機を、この目で確認するため、モンジャ村へと参った」

ワタル「大丈夫だよ、おじさん!この救世主ワタルが、創界山の虹を元に戻してみせ

るから!」

シバラク「子供が笑わせてくれる!救世主を名乗るのならば、お主の力... 拙者が試

してやる!」

すると、爆発音が聞こえ、辺りが揺れた。

な、何だ...!!? 砲撃か...!!?

ワタル「うわっ！」

ヒミコ「きやはは！オツサン、馬鹿力だね！」

シバラク「あ、あの爆発……！拙者ではござらんぞ！」

零「つて事は……！」

アマリ「ホープス！」

ホープス「はい。連中がやってきたようです」

やっぱりかよ……！

第2話 嵐を呼ぶ5歳児と救世主

砲撃は続き、村の人達はパニックに陥っている。

ヒミコ「きやはは！花火、花火！」

しんのすけ「たーまやー！」

んー？ヒミコもしんのすけと同様自由人なのかな？

ワタル「何言ってるんだよ！これは彼奴等の攻撃だよ！」

って、話しているうちにまた撃って来やがった!??

既に刹那達は自分達のモビルスーツを取りに行っている……俺達も出るか……？
すると、リーダーっぽい機体から声が聞こえた。

？「又ハハハ！すごい奴がやってきた！モンジャ村の者共よ！俺様は創界山の支配者
ドアクダー様の7人衆が1人、第一界層の大ボス、クルージング・トム様の右腕、シュ
ワルビネガーだ！……はく長い自己紹介だったぜ……」

長いのに説明どうも。

零「彼奴の言う第一界層と言うのは？」

オババ「創界山は7つの界層に分かれており、ドアクダーは界層それぞれにボスを置
いているんじゃない」

まんま、RPGのゲームじゃねえか。

シュワルビネガー「創界山を手に入れた以上、世界の隅々までゼーンぶ支配しろとい
うドアクダー様のご命令だ！大人しく従えば、手荒な真似はしないでやる！」

ワタル「何だよ、あいつ！偉そうに！」

零「ああ、気に入らねえな……ああいう態度」

ヒミコ「ワタル！零兄ちゃん！彼奴に言いたい事があるなら、手伝ってやるのだ！」

……え？

ヒミコ「ヒミコミコミコヒミコミコ！」

一夏「な、何だ……？」

ヒミコ「忍法・スピーカーの術！わわわわあああああつ！！？」

シバラク「う、うるさいーっ！！？」

た、確かにうるさいけど、シバラクさん……貴方の顔物凄いことになってますよ！

ワタル「オジサンの声もうるさいよ！」

ヒミコ「みんな、声が大きくなってるから、これね彼奴に声が届くのだ！」

しんのすけ「便利だゾ」

便利なのは便利だ……ん？つてか、セルゲイさんとカンナムどこ行つた？

シュワルビネガー「さあ、モンジャヤ村の者共よ！さつさと服従を誓え！」

ワタル「やだね！」

シュワルビネガー「何だと！？生意気な小僧だな！名を名乗れ！」

ワタル「救急車ワタルだ！」

シュワルビネガー「救急車！？？」

零・一夏「救世主だ、救世主！」

ワタル「ああ、そうか！」

え！？今、マジで間違えたのかよ！？？

ワタル「救世主ワタルだ！」

シユワルビネガー「又ハハハ！救世主とはチャンチャラおかしい！このスペシヤルな
ゲツペルタンクのキツイ一発で全員を吹き飛ばしてやる！」

ワタル「ちよ、ちよと待ったあああつ！」

？「(ワタルよ…)」

ワタル「！」

零「何だ…？この声…」

？「(ワタルよ…)」

ワタル「え…？誰？？」

？「(ワタルよ…)」

謎の声はワタルを何度も呼んでいる…？何なんだ…？一体…？

ワタル「もしかして… 龍神丸か！」

龍神丸「(そうだ！)」

零「ワタル… 龍神丸って何だ？」

ワタル「龍神丸…。凶工の授業で作った粘土人形んだけど、僕と一緒にこつちの世
界に来てたのか…」

龍神丸「(勇者の剣をかざし、私の名前を呼べ！)」

ワタル「龍神丸……。龍神丸が僕に話しかけている……。」

龍神丸「(急げ、ワタル!)」

ワタル「わかった!」

龍神丸の言葉に了承したワタルは村から出た。

ワタル「よおし!いくぞおっ!!?」

龍神丸に言われた通りにワタルは剣を翳して……。

ワタル「龍神丸ー!!?」

龍神丸の名を叫ぶと天が光り、そこから魔神が1体降りてきて、ワタルはそれ魔神の中に入る。

あの魔神が龍神丸なのか……。

ヒミコ「おとおおっ!」

シバラク「何だ、あの魔神は!!?」

オババ「あれこそまさしく伝説の龍の神じゃ!」

千冬「あれが……!!?」

ワタル「うわあああ!龍だ!また変な世界に来ちゃった!」

龍神丸「安心しろ、ワタル。今、お前がいるのは龍神丸……。すなわち私の中だ……。さあ!龍の角を掴め!」

ワタル「うん！」

龍神丸「ワタル、これから私はお前と共に戦う。お前の思った通りに動き、戦う事が出来るのだ」

ワタル「わかった！よし…行こう、龍神丸！」

龍神丸が少し移動すると、今度はデカイカンタムが現れる。

ワタル「お、大きなカンタム!?」

カンタム「僕が乗っているんだ！」

で、デカイカンタムに小さいカンタムが乗るってどういう意味だよ!??

カンタム「しんのすけ君…危険な事を言っているのは承知だが…一緒に戦ってくれないか?」

千冬「な、何を言う!??しんのすけは5歳児なんだぞ!?」

しんのすけ「…オラ、戦うゾ！」

一夏「しんのすけ…!?」

しんのすけ「オラもカンタムと一緒に戦う！モンジャ村の人達をお助けするんだゾ！」

零「しんのすけ…」

こいつは本気になるとたくましいからな。

カンタム「ならば、しんのすけ君！カンタム・ロボに乗って戦おう！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！」

そして、しんのすけはカンタム・ロボに乗った。

しんのすけ「ワタル君！一緒にオラも戦うゾ！」

ワタル「しんちゃん？！……わかった！行こう！」

凄げえ……龍神丸とカンタム・ロボか……揃うとかっこいいな……！

シュワルビネガー「ぬうう！何者かは知らんが、この俺様の邪魔をするのなら、只で

はおかんぞ！」

ワタル「そっちこそ！これ以上、好き勝手はさせないぞ！」

シュワルビネガー「その声！さっきの救急車の小僧か！」

しんのすけ「違うゾ！消防車だゾ！」

ワタル「否、救急車でも消防車でもないよ！救世主だ!!？」

シュワルビネガー「救急車と名乗ったのは自分だろうか！」

ワタル「それはそうだけど、怒ったぞ!!？」

……半分ヤケクソじゃねえかワタル……

ワタル「やるぞ、龍神丸、しんちゃん、カンタム！あいつを倒して、モンジャ村を守るんだ！」

龍神丸「おう！」

しんのすけ「ホホーイ！」

カンタム「了解！」

龍神丸とカンタム・ロボは魔神軍団との戦いを開始した。

〈戦闘会話　しんのすけVS初戦闘〉

カンタム「しんのすけ君！僕がカバ―するから全力で行こう！」

しんのすけ「ホッホーイ！なら、全力でやるゾ!!？」

戦闘から数分……

ヒミコ「頑張れ、ワタルーッ！」

シバラク「だが、まずいぞ……」

ヒミコ「オツサンの昼ご飯、腐ってたのか？」

シバラク「そうではない！」

千冬「はい、しんのすけにはカンタムが居ますが、2人は戦闘の初心者です」

零「当たり前ですよ！あの2人は戦闘とは無縁の生活を送っていたんですから！」

俺はゼフィルスに乗った時に戦い方が頭に流れたから、操縦できたが……。

オババ「何をしてるんじや、術士サマ！早くワタルを助けてください！」

アマリ「そんなこと言われても……私……」

……もう我慢できねえ！

零「一夏！行くぞ！」

一夏「ああ！ちようど刹那さん達も来た！」

一夏の言葉通り、クアンタ、ラファエル、GN-XIVが現れた。

ヒミコ「おおおっ！」

シバラク「あれは魔神……？嫌、違う！」

零「あれは刹那達だ……千冬さんみんなをお願いします！ゼフィールス!!？」

俺はゼフィールス呼び出し、一夏も白式を纏い、クアンタ達の元へ立つ。

アマリ「零君はしっかりと戦ってる……それなのに私は……」

シバラク「仕方がない、術士とは言っても、か弱き乙女……！此処は拙者に任せるが

いい！」

千冬「シバラクさん、何を？」

シバラク「爺さん！この辺に電話はないか!?!？」

オジジ「公衆電話なら、そこにあるぞ」

シバラク「よし！ならば……！」

ん：：？シバラクさんが移動した：：？

シバラク「10000・10・0：：と」

千冬「誰に掛ける気ですか？」

プルルルル：：ガチャツ！

シバラク「見ておれ：：あ：：センちゃん？こちら、シバちゃんだけど：：今、モン

ジャ村だけど、来てくれるかな？そう！大至急で！」

すると、赤い色の魔神が来て、シバラクさんはそれに乗り込んだ。

オババ「何か来たぞ！」

シバラク「これが拙者の魔神、戦神丸だ！此処は任せるがいい！」

セルゲイ「私も行こう！」

すると、今度はセルゲイさんの声が聞こえた。

そこにはアンドレイ大尉とは違うGNーXが現れた。

アンドレイ「GNーXIIII：：！！？父さん、どうして！！？」

セルゲイ「私もこの村を守る為に戦うさ：：それに、息子に少しでもかっこいい姿を

見せたいじゃないか」

アンドレイ「父さん：：」

此処まで心強いなんて：：ロシアの荒熊って名前は伊達じゃないな！

ヒミコ「ぼんざーい！ぼんざーい！」

シバラク「いざ行かん、戦神丸！」

セルゲイ「やるぞ、GNーXIIーI！」

戦神丸とGNーXIIーIも前に移動した。

シバラク「義を見てせざるは勇無きなり！助太刀するぞ！」

ワタル「もしかして、さっきのオジサンとセルゲイさん？？」

セルゲイ「その通りだ！後は私達に任せて、君は後退しろ！」

ワタル「やった！ラツキー！…なんて言うと思ったら、大間違い！」

しんのすけ「オラ達は戦うゾ！」

ティエリア「しかし…！」

ワタル「しかもカカシもあるもんか！僕は救世主なんだ！」

わ、ワタルの奴…まさか、龍神丸を手に入れて浮かれてるのか？？

ワタル「困っている人がいるんなら、その人を助けなきや！」

否、そんな事はなかったな…。

零「そうだな！ワタル！」

アマリ「ワタル君…！」

シバラク「お主…！」

しんのすけ「大丈夫だゾ！」

ワタル「僕達には龍神丸やカンタムが居るし、零さん、刹那さん、ティエリアさん、アンドレイさん：．．それにオジサンやセルゲイさんも居るんだから！」

アマリ「それだけじゃありません：．．！」

覚悟を決めたか：．．アマリ。

アマリの言葉に呼応したのか、ゼルガードが来て、アマリの前まで来た。

オババ「おおおっ！魔徒教団のオート・ウォーロックじゃ！」

オジジ「初めて見るのう」

ホープス「ワタル君やしんのすけ君の頑張りを見て、そろそろ覚悟を決めた頃合いだと判断しました」

アマリ「ありがとうございます、ホープス！」

アマリはゼルガードに乗り、動かし始めた。

アマリ「ワタル君！しんちゃん！零君！皆さん！今行きます！」

すると、ゼルガードは戦神丸とGN-XIIIの隣に立つ。

シバラク「おお！術士殿も戦ってくれるか！」

零「ちよつと遅刻だけ？正義の魔法使いさん！」

アマリ「そうじゃないです：．．。正義の味方っていうのはワタル君やしんちゃんみた

いな人ですから……でも、私も自分が出来る事をやります！」

零「戦う理由なんて、そんなもんで十分だ！やろうぜ！アマリ！」

アマリ「ええ！零君！」

お？大分話し方が砕けて来たな……。

シユワルビネガー「黙れ、黙れ！お前達如きで何が出来る？！この俺様のパワーの前にひれ伏すがいい！」

ワタル「そうはいくか、シユワルビネガー！」

一夏「ひれ伏すのはお前の方だ！」

シバラク「非道な行いも、此処までだ！」

テイエリア「その行為……万死に値する！」

刹那「貴様のその歪み……俺達が断ち切る！」

しんのすけ「この村の人達はオラ達がお助けするゾ！」

セルゲイ「やるぞ！アンドレイ！」

アンドレイ「了解です！父さん！」

アマリ「私達が貴方を討ちます！」

零「覚悟しやがれ！ゴリラ野郎！！？」

ワタル「龍神丸、みんな！僕達の力をあわせて、あいつをやっつけるよ！」

零「ああ！みんな！救世主に続くぞ！！？」

〈戦闘会話　セルゲイVS初戦闘〉

セルゲイ「まさか、アンドレイとまた出会い、共に戦うことになるとは…彼奴には父親としての姿をあまり、見せれていない…」だから、私は戦う！」

〈戦闘会話　零VSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「ええい！ちよこまかと逃げるな！」

零「てめえの言い分なんて知るかよ！」

シュワルビネガー「な、何だと!?!？」

零「村の人達に危害を加えるなら、俺が相手になってやる!!?！」

〈戦闘会話　一夏VSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「ふん、お前の様な小さい者に負ける俺様ではない！」

一夏「確かに魔神に比べて、ISは小さい…でも、これでも誰かを守れるんだ！お前の様な悪党からな！覚悟しろ！シュワルビネガー!!?！」

〈戦闘会話　しんのすけVSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「お前の様な小僧が何故、俺様の邪魔をする!?？」

しんのすけ「村には綺麗なお姉さんもいっぱい居るんだゾ！オラ、絶対に守る！」

シュワルビネガー「何だそのふざけた理由は!?？」

カンタム「村の人々に危害を加えるお前がしんのすけ君を馬鹿にするな！」

しんのすけ「悪は絶対に滅びるんだゾ！それをオラとカンタムが教えてやるゾ!!？」

〈戦闘会話　刹那VSシュワルビネガー〉

刹那「何故、村の人々を攻撃した!?？」

シュワルビネガー「知れた事！この世界はドアクダー様の支配する場所！それならば、この村も我らが支配すると決まっているのだ！」

刹那「貴様達は歪んでいる…！その歪み、俺が断ち切る！刹那・F・セイエイ！目標を駆逐する！」

〈戦闘会話　テイエリアVSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「何だ!?？その魔神の火力は!?？」

テイエリア「これは魔神ではなくモビルスーツだ…！間違えなくてもらおうか」

シュワルビネガー「どちらも同じだろう！」
テイエリア「では、モビルスーツと魔神の違いを教えてやろう！ラファエル！目標に
風穴を開ける！」

〈戦闘会話　アンドレイVSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「何故、この村とは関係ないお前達が俺様に刃向かう!?」

アンドレイ「私は軍人だ…ならば、この村を…民間人を守るだけだ！」

シュワルビネガー「ならば、その言葉ごとお前を倒してやる！」

アンドレイ「父が見ている側で私は負ける訳にはいかない！」

〈戦闘会話　セルゲイVSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「何という機動性だ！」

セルゲイ「お前では私を捉えることはできない」

シュワルビネガー「良い気になるなよ！お前達を倒し、この村を破壊してやる！」

セルゲイ「悪党が考える事はどの世界でも同じだな…ならば、ロシアの荒熊が相手
をしよう！」

周りの雑魚を倒し、俺達はシュワルビネガーを追い詰めた。

そして最後にカンタム・ロボが拳、龍神丸が剣……登龍剣を構えた。

しんのすけ「これで決めるゾ！カンタム！」

カンタム「了解！カンタムー！パンチ！」

ワタル「ひっさああつ……登龍けええん！」

カンタム・ロボがロケットパンチを決め、龍神丸は登龍剣を振り下ろし、シュワルビネガーのゲッペルタンクを真つ二つにした。

シュワルビネガー「ば、馬鹿なあああつ!!？」

シュワルビネガーのゲッペルタンクは爆発した。

ワタル「よし！やったぜ！」

零「あいつは脱出したみたいだな」

ホープス「魔神の脱出装置は、高い性能を持ってますからね」

話し込んでいる俺達……しかし、俺達は気づかなかった……。

？「(話半分で見物にきたが、こいつはドアクター様に報告の必要があるな……)」
今の戦いを見ていた者が他にも居た事に……。

ヒミコ「やった、やった！ワタル、しんちゃん、強い！みんなもよくやった！」

アマリ「すごいです、ワタル君！しんちゃん！」

零「流石は救世主様と嵐を呼ぶ5歳児だな！」

しんのすけ「いや、それ程でも」

ワタル「龍神丸のおかげだよ」

アマリ「でも、その龍神丸とワタル君、しんちゃんとカンタムの戦う姿を見て、私も覚悟を決める事ができました……。ありがとうございます」

ワタル「アマリさんも僕を助けてくれたから、これでおあいこだね！」

一夏「それに覚悟ができたのはアマリさん自身が決めたから持てたんだぜ！」

シバラク「拙者しかと感服したぞ、ワタル！試すなどと言つて悪かつた！お主は立派な救世主だ！」

ワタル「へへ……。そんな風に言われると照れちゃうな……」

シバラク「だが、戦いの方は、まだまだだな」

千冬「ええ、見ていて少々危なっかしい」

ワタル「だったら、僕を鍛えてよ！ドアクダーを倒して、創界山の虹を元に戻すために！」

シバラク「よし！そういう事なら、拙者の剣技をお主に伝授しよう！」

千冬「私の指導は甘くないぞ？覚悟するんだな」

シバラク「よろしくね、先生！千冬さん！やるぞ！この調子でドアクダーを倒して、必ず創界山の虹を元に戻してやる！」

俺達はそれぞれロボットから降りると村人や千冬さん達が走ってきた。

オババ「よくやったぞ、ワタル！」

ワタル「シバラク先生とアマリさん、零さん達もいたからね…。何より龍神丸がいれば、あれくらいの敵、朝飯前さ！ね、龍神丸！」

龍神丸「油断をするな、ワタル。ドアクダー軍団の力は、あんなものではない」

ワタル「え、そうなの？」

零「敵があれ程の実力の奴ばっかりだったら、創界山の虹の色が灰色になったりしな
けよ」

ワタル「あ、そうか！」

龍神丸「では、私は帰るぞ」

ワタル「一緒にドアクダーを倒しに行くんじゃないの!?!」

龍神丸「私の助けが必要な時は、お前の持つ勇者の剣を抜いて、私を呼ぶがよい……では、しばしの別れだ」

あ、消えた。

ワタル「あ、ちよちよ！ちよつと！一緒に行ってくれたっていいじゃんか！龍神丸のケチ！」

龍の神に対してケチか……。

シバラク「心配するな、ワタル！拙者がいるではないか！」

ワタル「先生……」

シバラク「創界山の虹を元に戻すための戦い！拙者も力を貸すぞ！」

ワタル「ありがとう、先生！」

零「俺達もやるぜ、ワタル！」

ワタル「みんな……！」

テイエリア「どのみちやる事がないなら、やるしかない」

乗りかかった船だ…… やってやる！

オババ「ワタル……。創界山の虹の色を元にもどすためにお前は旅に出なければならん」

旅か…… まあ、予想はしていたが。

オババ「言い伝えでは、ドツコイ山の龍岩に救世主の旅の道標があると聞く…。まずは、そこを目指すのじゃ」

ワタル「そのドツコイ山ってのは、どこにあるの？」

オババ「此処から南に行つたところじゃ」

ワタル「え！創界山にあるんじゃないの!?!」

オババ「創界山は、このアルワースのヘソじゃ。言い換えれば、この世界の全てが創る界山に通じておるのじゃ…。創界山を救う為にもお前は、この世界の全てを救わねばならん」

ワタル「わかつたよ、じゃあ、そのドツコイ山に行つてみる」

シバラク「しかし、こまつたのう…。諸国を漫遊してきた拙者でも、ドツコイ山には行つた事がないぞ」

刹那「アマリ、どうだ？」

アマリ「私が案内します」

シバラク「アマリ殿が！」

アマリ「旅の仲間になるんですから、普通にアマリと呼んでください」

ワタル「やったあ！アマリさんとホープスが来てくれるんなら百人力だ！」

一夏「ああ、そうだな！」

アマリ「問題ないですよね、ホープス？」

ホープス「無論です。私達の旅の行き先を決めるのはいつでもマスターですから…この世界を救うための旅ならば、私にとつても利があるでしょう」

アマリ「ええ…」

ホープス「ですが、これだけは…。常に注意は怠らないようお願いします」
アマリ「わかっていきます…」

一夏「じゃあ、アマリさん。道案内をお願いします」

アマリ「任せてください…。ワタル君も、よろしくお願いします」

ワタル「こつちこそ！みんなで力を合わせて、ドアクダーを倒そうね！」

セルゲイ「ああ」

ワタル「まずはドツコイ山に向けて出発だ！」

俺達はドツコイ山を目指し、動き出した。

俺も行くか…。

アマリ「零君！」

零「ん？どうした？」

アマリが話しかけて来たので俺は立ち止まる。

アマリ「あの…。これから頑張ろうね！」

零「おう！…ってか、敬語じゃなくなってるな」

アマリ「え、あ…すみません！」

零「良いって！これからよろしくな！アマリ！」

アマリ「うん！零君！」

俺はアマリと握手をして、ワタル達の後を追いかけた…。

スペシャルシナリオ 集え、始まりの場所に――

スペシャルシナリオ 集え、始まりの場所に――

ドツコイ山を目指している俺達……。

今はテントを張り、休憩を取っていた。

ワタル「……じゃあ、その魔徒教団っていうのは、正義の魔法使いの集まりなんだね」
シバラク「その通り！魔徒教団は、魔法を使って、アル・ワースの戦いを収めてきけるのだ」

アマリ「あの……教団は正義という言葉を使いませんよ……」

シバラク「智の神エンデの使徒にして、法と秩序の番人……！それこそが魔徒教団なのだ！」

刹那「智の神エンデ……？」

一夏「えつと……確か、このアル・ワースを創ったと言われる神様の事だよな？」

零「ああ、魔徒教団以外にも、エンデを崇めている人間は多いらしいぜ」

テイエリア「では、その魔徒教団のメンバーであるから、アマリは僕達を助けてくれ

るのか」

アマリ「え、ええ… まあ…」

しんのすけ「オラも、その魔従教団に入れば、魔法が使えるようになるの？」

アマリ「うーん… どうでしょう…。魔法を使うには、素質が重要ですし…」

セルゲイ「素質とは？」

千冬「確か… オドを感じられるか… だったか？」

カンタム「オド…？」

アンドレイ「アル・ワースそのものを構成する元素のようなものだよ」

アマリ「言い換えれば、この世界の全てのもの… 空気も光も炎も、何もかもがオド

で出来ているって言えます」

聞いただけでも凄いな… オドって…。

ワタル「それと魔法に、どういう関係があるの？」

零「アマリ達が使う魔法… 確か、ドグマだったか？… 兎に角、ドグマはオドと自

分の中の魔力を一体化して、それを制御する事らしいんだ」

アマリ「例えば、炎のオドを感じ、それを自分の身体の一部として制御できれば、自

由自在に炎を操れる事になります」

ワタル「へえ！ 凄いんだね！」

テイエリア「だが、アマリは魔法を使う時に、呪文の様なものは唱えないんだな」

アマリ「ドグマの発動に一番大切なのは精神を集中する事です」

精神を集中ね……。

アマリ「テイエリアさんの言ったような言葉を唱える事で精神を集中する術士もいますけど、私は……ちよつとそういうのは違うと思っただんです」

セルゲイ「成る程……人それぞれという事か」

千冬「確か、教団の使うオート・ウオーロックは術士の魔力を増幅するんだっただな？」

アマリ「はい、と言つても、戦闘レベルでの稼働を続ければ、術士の精神の方が参つてしまいますけど……」

ワタル「ふうん……。ゼルガードを使えば、ドツコイ山までひとつ飛びと思つただけど、そうはいかないんだね」

嫌、楽しようとすんなよ……。

アマリ「ごめんなさいね。魔力を使わない巡航モードだと、人間が歩くのと大して変わらないスピードなんです」

しんのすけ「じゃあ、刹那お兄ちゃん達のロボットで飛んでいったら良いんだゾ！」

零「嫌、やめた方が良いでしょうな」

ワタル「どうして？」

零「慣れない世界に見慣れないロボットが飛んでいるんだぜ？ 只でさえ俺達はドアクダー軍団に目をつけられてるんだ。空飛んでる時に攻撃なんてされてみる。」

ワタル「そ、そうか！」

ワタルは気づいてくれたみたいで助かったよ。

一夏「ちよつと待っててくれ、アマリさん！ 術士である貴方は、その気になればこの世界の全てを好き放題にできるんですか!!？」

零「1人の術士にそんな力があるかよ。そんな事になったら、ドグマとかを悪用する奴が出てくるだろ」

アマリ「でも……いい意味ですけれど、それを理想として、魔従教団の術士達は、自分の魔力を磨いています」

ワタル「じゃあ、僕の身長を伸ばしてよ！ とりあえず、180センチまで！」

しんのすけ「あ！ オラもオラも！」

零「お前らな……」

全く、子供組は……

アマリ「ごめんなさい、ワタル君、しんちゃん。そういうドグマはないんです」

一夏「そうなのか……。魔法と言っても、万能じゃないんだな」

零「当たり前だ。魔法はチートとは違う……。確か、ドグマって教団の教え……つま

り、教義そのものと言つてもいいもの何だよな？」

アマリ「ええ、そう言えるわね。だから、ドグマは教団全体の財産であり、新しいドグマを生み出すには、何人もの術士が協同で何年も研究と修練を重ねる必要があるんです」

カンタム「大変なものなのだな……」

アマリ「でも、逆に言えば、自分だけのドグマは全ての術士にとって見果てぬ夢でもあるんです……」

ワタル「ねえねえ、アマリさん！僕に魔法使いの素質があるか、テストしてみてくださいよ！」

しんのすけ「あ、オラもー！」

アマリ「そうですね……。ワタル君としんちゃんは、此処までの私と零君の話を聞いて、何かピンと来ませんでしたか？」

え……。？そう言うのでわかるのか……。？

ワタル「特には」

しんのすけ「オラも来ないゾ」

アマリ「ごめんない……。残念だけど、ワタル君やしんちゃんはドグマを使うのは向いていないようです」

一夏「訓練とかで、どうにかならないんですか？」

アマリ「こればかりは生まれつきのものでらしいんです。素質のある人間は、幼い頃から直感的にオドを感じ：：。ドグマの体系を簡単に説明されただけで、その真理が理解できるんです」

零「つまり、簡単に言うとは：：。選ばれた人間ってわけか」

シバラク「アマリも、そうだったのか？」

アマリ「ええ：：。私：：。誰かに教えられたわけでもなく5歳の頃にはドグマのようなものを使っていたそうです」

零「凄えじゃねえか！」

アマリ「い、いえ：：。それで、その噂を聞きつけた魔徒教団が私をスカウトして、それからはずっと教団で暮らしていました」

アンドレイ「では、君の父と母とは：：。？」

アマリ「それ以来、会ってません」

父と母：：。か：：。

アマリ「零君？」

零「嫌、何でもない：：。寂しくはなかったのか？」

アマリ「：：。子供の頃は多分、寂しかったと思います。でも、もう昔の事なので忘れちゃいました」

多分……？

何だ……？何か違和感が……！

シバラク「魔徒教団の術士と言えば、人々から尊敬を集める存在だからな。法と秩序の番人として働く事が出来て、アマリも幸せなのだろう」

一夏「そういうものなのか……あ！そう言えば、アマリさん！オドの話に戻るけど……」

テイエリア「どうかしたのか？」

一夏「俺の白式の武装の1つで……雪羅つてのがあるんだけど、この世界に来てから使えないんだ」

千冬「何……？何故、それを言わなかった……？」

一夏「ご、ごめん千冬姉……色々あつて忘れてた……」

刹那「……俺のクアンタにも異常があるんだ……」

テイエリア「クアンタにも？」

刹那「ああ、実はライザーソードとクアンタムシステムが使えないんだ」

零「クアンタムシステム？」

テイエリア「対話の為の切り札だ……まさか、この世界に来た影響で……」

うーん、使えなくなった能力……か……。

アンドレイ「アマリ、心当たりはあるかい？」

アマリ「すみません……。私にはちよつと……。もしかして一夏君は使えなくなつた武装の影響はオドにあると？」

一夏「あ、ああ……。直感だけだな……」

まあ、もしかしたら、影響があるかもな……。

ワタル「あれ？そう言えば、ホープスは？」

アマリ「そこらで遊んでいると思いますけど……」

零「嫌、そんなペットみたいに……」

シバラク「ペットのしつけができとらんとう」

アマリ「ホープスはペットじゃありませんよ」

すると、ホープスが飛んで来た。

ホープス「そうです。契約により、主従関係を結んでいます。私達は精神的には対等の立場です」

零「まあ、アマリはホープスには頭が上がらないみたいだけだな」

アマリ「だって、ホープスは厳しいから……」

ホープス「これは失礼しました。ですが、それらの言葉はマスターへの期待の裏返しとお受け取りください」

千冬「モノは言い様だな」

ホープス「この話はこちらまでにしましよ。報告します、マスター」
 ……ホープスの表情がマジだ。何かあったのか？

ホープス「ここより少し南に行った地点に門の印を感知しました」

アマリ「えっ…?!？」

一夏「門…? 印…?」

ホープス「異界の門が開く兆候…。このアル・ワースと何処かの世界がもうすぐ繋がるのです」

つて事は、異界人が来る…?!？」

僕… アニエス・ベルジュとサヤ・クルーガーは今、未知の体験をしていた。

アーニー「こ、此処は?!? サヤ! 無事か?!?」

サヤ「え、ええ…少尉…。此処は一体…?」

アーニー「わからない…だが、どうやら、僕達の世界じゃないようだ」

今僕達はそれぞれオルフェスとライラスに乗っていた。

僕達は辺りの搜索を始めようとすると、何か門のような物が出現して、そこから一機

の機動兵器が出て、門は消えた。

？「くっ……！何が起きた……!? クロ、シロ！」

クロ「私達……次元の歪みみたいニヤものに巻き込まれて……」

シロ「此処に転移して来たみたいニヤ……マサキ」

マサキ「確かにここは、ラ・ギアスでもなければ、地上でもねえ……」

こ、このロボットは一体……!? ?

サヤ「しよ、少尉あの機動兵器は一体……!? ?」

アーニー「わからない……でも、モビルスーツではないようだな……回線を繋いでみる」

僕は相手の機体と回線を繋いだ。

アーニー「その機動兵器のパイロット！聞こえますか!? ?」

マサキ「な、何だ!? ?この通信は……!? ?」

シロ「前のロボットと戦闘機からみたいだニヤ！」

よし、繋がれた！

アーニー「こちらはアルティメット・クロス所属のアニエス・ベルジュ少尉とサヤ・クルーガーだ！そちらの所属を知りたい！」

マサキ「しよ、所属はない！俺はマサキ・アンドー！この機体……魔装機神サイバス

ターのパイロットだ！」

サヤ「サイバスター……？聞かない名ですわ……」

アーニー「貴方はこの世界の事がわかりますか？」

マサキ「嫌、わからねえ……此処は俺の世界でもないからな……」

シロ「マサキ！何か、来るニヤ！」

もう一人乗ってるのか……？それよりも何か……？

すると、目の前にゴーレムの様なロボット軍団が現れる。

アーニー「な、何だ？！？あれは……！」

マサキ「デモンゴーレム？！？嫌、違うぞ！」

クロ「でも、似た様ニヤ存在みたいニヤ！」

すると、ゴーレムの様なロボット軍団は攻撃を仕掛けて来た。

サヤ「攻撃して来ましたよ！」

クロ「問答無用ニヤんで、酷いニヤ！」

マサキ「人が乗ってねえんだったら、話し合う事なんて無理か……！」

アーニー「そうだな……。だな、無人機なら、遠慮をする必要はない！」

サヤ「そうですね！少尉！」

僕とサヤが戦闘体制に入るとマサキ・アンドーの乗るサイバスターも戦闘体制に入っ

た。

マサキ「そのこの2人！話は後だ！手を貸してくれ！」

アーニー「わかった！僕達も行こう！サヤ！」

サヤ「了解！行きましょう！少尉！」

マサキ「風の魔装機神の力を見せてやる！」

〈戦闘会話 アーニーVS初戦闘〉

アーニー「此処が何処かはわからない…。でも、僕達はこんな所で終わる訳にはいかない！」

〈戦闘会話 サヤVS初戦闘〉

サヤ「正直…。わからない場所で戦闘は不安が多いです…。でも、少尉が…。アーニーが側に居る…。それだけで十分です！」

戦闘を開始したが、僕達はある違和感を感じる。

マサキ「プラーナ出力が上がらねえ！どうなってる!?!？」

サヤ「少尉、原因は不明ですがオデユツセアに合体する事ができません！」

シロ「歪みに巻き込まれた時、どこか壊れたんじやニヤいか!?？」

クロ「でも、警告表示は出てニヤいニヤ！」

アーニー「だが、ヘルストリングーは使える！これなら何とか！」

マサキ「原因不明って事かよ……！仕方ねえ！騙し騙しで戦うぞ！」

〈戦闘会話　アーニーVS初戦闘〉

サヤ「少尉、もしかすればヘルストリングーにも何か影響があるかもしれません！気をつけてください！」

アーニー「ああ、これでまた死にかけて、サヤを心配させる訳にもいかないしな……わかった！」

サヤ「少尉……」

アーニー「その分、フォローを頼む！」

サヤ「了解！」

戦闘から数分で敵機を全滅させた僕達……。

マサキ「何とか片付いたか… 協力ありがとよ！ 2人とも」

アーニー「嫌、何てことはないよ」

戦闘体制を解いた僕達は再び、通信越しに話をする。

シロ「思ったより呆気なかったニヤ」

クロ「操る人間がいニヤい… いわゆるはぐれゴーレムだったかも知れニヤいわね」

アーニー「こちらは、状況がよくわかっていない」

サヤ「はい、あの様なものでも、大量に相手にする事になれば…」

マサキ「確かに面倒だな…」

サヤ「少尉！ マサキさん！ また何か来ます！」

な、何… ！！？

すると、2機のロボットが現れた…。

ー新垣 零だ… 異界の門が開くって来てみれば、目の前には2機のロボットと1機の戦闘機がいた。

零「あれが異界人の乗るロボットか？」

アマリ「おそらくは…」

すると、相手の機体から通信が入った。

アーニー「そちらの機体のパイロット、聞こえますか？僕はアルティメット・クロス所属のアニエス・ベルジュ少尉だ！こっちはサヤ・クルーガーだ」

マサキ「俺はマサキ・アンドー…俺達は多分、此処とは別の世界から来た。状況の確認のためにも話がしてえ」

ワタル「やつぱり異界人だ！」

一夏「悪い人達ではなさそうだけどな…」

刹那「だが、警戒した事には越したことはない」

零「だけど、敵意は感じない」

アマリ「私も、そう思います」

零「こちらは新垣 零とアマリ・アクアマリンです！そちらの希望は了解しました」

アマリ「お互いに機体を降りてお会いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

アーニー「わかりました。マサキもそれでいいかい？」

マサキ「ああ…じゃあ…そっちへ行くぜ」

ホープス「新たな異界人ですか…」

アマリ「やつぱり、このアル・ワースに何かが起きているんですね…」

そう、みたいだな…。

俺達はロボットから降り、話を始めた。

零「ラ・ギアス：：神聖ラングラン王国：：」

アマリ「そのラングランを守るためにマサキさんのサイバスターは造られたんですね」

マサキ「ま、ざっくり言えばな」

零「そのゲートを開いて、ラ・ギアスには帰れないのか？」

マサキ「今のサイバスターでそれをやるとろくな事にならねえ。前にも今回と同じ様な目に遭った事があるんでな」

ワタル「そうなの？」

マサキ「ああ：：まあ、俺がこの世界に落ちまった理由を探すためにも、ラ・ギアスへ確実に帰る方法を見つける為にも、当面はお前達のドアクダー打倒の旅に協力するぜ！」

カンタム「良いのかい!?？」

マサキ「取り敢えず、お前達が悪党じゃないのはわかった。世界を救う為に旅をしているのもな。ここで、こうして知り合ったのも何かの縁だ。手を貸すぜ」

シバラク「なかなか話せる男だのう！」

マサキ「じゃあ、俺の連れを紹介するぜ。シロ、クロ！降りてこい！」

しんのすけ「クロ!? シロ!?」
ん? 何でしんのすけが驚いてんだ? : : サイバスターから降りて来たのは : : 白き猫と黒い猫?

シロ「話がまとまったみたいだニヤ」

クロ「最初の印象通り、悪い人じやニヤかったのね」

マサキ「こいつらは俺のファミリア : : いわゆる使い魔だ」

しんのすけ「ほうほう : : マサキお兄ちゃん シロとクロは猫なんですな」

マサキ「ん? お前にもファミリアが居るのか?」

しんのすけ「違うゾ! オラのペットでシロっていう犬が居るんだゾ! 短い間だけ、クロっていう犬も居たんだゾ!」

ワタル「よろしくね! シロ、クロ!」

クロ「ニヤ? あたし達を見た人は、大抵驚くんだけど : :」

シロ「そう、ネコが喋った : : って」

零「喋る動物はホープスで見慣れてるからな」

アマリ「もつと南に行けば、ケモノ人間も居ると聞きます。」

ああ、獣の国って所か。

アマリ「でも、ホープスよりも可愛いです : :」

おいおいマスターさんよ、そりや言っちゃダメだぜ……。

すると、ホープスが飛んで来たが、めちやくちや不機嫌そうな顔をしている。

ホープス「……もし、マスターが私に愛らしさや愛嬌を求めたのなら、それにお応えしましょう」

ほら、拗ねた。

アマリ「む、無理しなくてもいいですから……！」

ホープス「私は、あなたのペットではないのです。その点をお忘れなく」

アマリ「ごめんなさい……」

零「怒られちゃった」

ホープス「お気になさらずに。マスターのそういう素直な所はとても愛らしく思えますし」

んー？

アマリ「そ、そうですか……？」

おいおい、照れてんじやねえよ。

マサキ「ご主人様と家来つて関係とはちよつと違うみたいだな」

シロ「そうニヤ。おいら達とマサキみたいニヤ感じニヤ」

ホープス「それについては、後ほど、じっくり聞かせていただきます」

零「マサキ、これからよろしくな」

マサキ「おう、零！これからはよろしく頼むぜ」

さて、問題はあつちか……。

俺達は現在、刹那、テイエリア、アンドレイ大尉と話している……確か、アニエス・ベルジュ少尉とサヤ・クルーガーって人に視線を移した。

アーニー「刹那さん、テイエリアさん、アンドレイ大尉……まさか、皆さんもこの世界に来ていたとは……」

サヤ「お久しぶりです」

え？あの2人……刹那達を知ってる……？つて事は、あの2人も刹那達の世界から来たのか？

刹那「……すまない、俺とは初対面のはずだが……テイエリアとアンドレイは？」

テイエリア「僕も知らない」

アンドレイ「連邦軍にも彼らの様な人は居ないはずだが……」
アーニー「そ、そんな！一体どういう事だ……!?」

ベルジュ少尉達は刹那達を知ってるけど、刹那達は知らない……？

千冬「零、これは……」

零「恐らくはそうでしょう」

やつぱり、千冬さんは気づいていたか。

一夏「どういう事だ？」

まあ見てろ。

俺はベルジユ少尉達の元へ歩き、口を開いた。

零「お話の所すみません…」

サヤ「貴方が…」

アーニー「新垣 零君だね？」

零「はい、ベルジユ少尉とクルーガーさん… 貴方達の言っている刹那達… それと俺達の目の前に居る刹那達は違います」

アーニー「どういう意味だい？」

零「ベルジユ少尉達の世界の刹那達と今ここに居る刹那達は別人という事です」

サヤ「別人…？それはまさか、パラレルワールドの事を仰っているのですか？」

零「はい」

テイエリア「成る程… 君達は別世界の僕達と知り合いなのか」

アーニー「つという事は僕達の目の前の刹那さん達は僕達の知る刹那さん達とは別人という事か… ありがとう、新垣君」

零「いえ！それと俺の事は零で良いです！」

アーニー「僕の事もアーニーで良いよ、それに敬語じゃなくても良いよ！零君」
サヤ「私も呼び捨てで構いません…これからよろしくお願いします、零さん」

零「ああ！よろしく！アーニー！サヤ！」

挨拶を終えた俺達は集まる。

アーニー「僕とサヤも君達の旅に同行させてもらえないかな？」

アマリ「それは良いですけど…本当に良いんですか？」

サヤ「はい、これは私と少尉が話し合つて決めた事です…それに困っている人はほつておけない…それが少尉です」

アーニー「サヤだつてそうだろ？」

アーニーとサヤ…良いコンビじゃねえか！

シバラク「では、新たな旅の仲間を歓迎して、晩飯にしようではないか！」

ワタル「やったー！僕、お腹ペコペコだよ！」

零「お前はいつもそうだな…マサキ、アーニー、サヤ…慣れない場所で疲れただろ？今夜はゆつくり休んでくれ」

マサキ「ありがとうよ、零」

アーニー「これからよろしくね！」

零「こつちこそ、よろしく頼む！」

俺達が笑い合いながら、話し合っているのをホープスはじっと見ていた事に気付かなかった……。

ホープス「(異界の門が偶発的に開く事はアル・ワース3000年の歴史の中でもほんの数回しか記録されていません……マサキ・アンドー……そして、アニエス・ベルジュとサヤ・クルーガー……。彼等の来訪は何を意味するのでしょうか……)」

俺達はマサキとアーニー、サヤと一緒に晩御飯を食べた……。

第3話 ブルーウォーターの少女と漆黒の復讐鬼

―俺……渡部 クラマは前回のモンジャ村の戦闘を見た後、ザン・コックからの通信を待っていた。

すると、彼奴……ザン・コックから通信が来た。

ザン・コック「渡部 クラマ……。ドアクダー様からのご命令を伝える」

ついに来たか……。

ザン・コック「ワタルの仲間に加わり、スパイとして各階層のボスに情報を伝えるべし。さらには奴等の手によりドアクダー軍団がピンチに陥った時にはこれを助けよ」

ピンチを助けるか……。難しい注文だぜ……。

クラマ「とは言いますが、向こうには魔徒教団の術士や謎のロボットを使う集団まで居るんですぜ」

ザン・コック「そのための魔神……。空神丸をお前に与える」

クラマ「空神丸……」

驚いた……。まさか、魔神をもらえとはな……。

ザン・コック「ただし、ワタル達にお前が空神丸に乗っている事を知られてはならん。

見事、その役目を果たした暁には約束通り、お前の願いを叶えてやろう」

クラマ「へへえ……！何とぞ、よろしくお願いします！」

そういう事だ……。悪く思うな、救世主さんよ……。

「俺……新垣 零は仲間達とテントを張り、休息を取っていた。

マサキ「……そのドツコイ山って所に行くのはわかったけど、どうして歩きなんだよ？」

アマリ「ごめんなさい、マサキさん。ゼルガードの巡航モードに合わせてもらって」

セルゲイ「旅の基本は、自らの足だ。歩いて行けば、修行にもなるしな」

アーニー「セルゲイさんの言う通りだよ、マサキ」

ワタル「僕……アル・ワースに来たばかりだから、なるべく自分の目で色んな物を見たいんだ」

零「それに、途中で困っている街とかあれば、助けられるしな」

マサキ「へえ……よく考えてんだな、ワタル、零」

ワタル「へへ……アマリさんや零さんを見習って、勉強しようと思ったんだ」

千冬「いい考えだ……一夏もワタルを見習え」

一夏「……返す言葉ありません」

一夏のヤツ……凹んだな。

サヤ「そう言えば、アマリさんは魔徒教団という所の指示で旅をしているのでしたね？」

アマリ「ええ……」

マサキ「お前……俺やワタル、零達みたいに他の世界から来た人間と会った事があるんじゃないかねえのか？」

カンタム「え……？」

アマリ「マサキさんって……意外に鋭いんですね……」

意外って、酷いなおい……。だが、確かに俺も思っていたところはある。

零「俺達と会った時、すんなりと状況を受け入れたのは、経験済みだったってわけかしんのすけ「そうなのか、アマリお姉さん!!?」

刹那「どうして今まで言わなかった？」

アマリ「……すみません……。隠しているわけじゃなかったんですけど……」

ティエリア「その人物は、何処の世界から来たんだ？今、どうしている？」

アマリ「……それが……よくわからないんです」

アンドレイ「え……!!?」

零「よく分からない？」

シバラク「どういう事だ？」

アマリ「私は旅の途中で別の世界から来た人…。異界人（いかいびと）に何度か会った事があります。でも、その人達はまるで抜け殻みたいな状態でした」

しんのすけ「抜け駆けするなんて、ズルいぞ！アマリお姉さん！」

一夏「抜け駆けじゃなくて、抜け殻だ。しんのすけ」

アーニー「抜け殻とはどういう事だい？」

アマリ「感情が死んだ様になっていて、何を聞いても、ぼんやりとした反応しか見せないんです」

零「心が壊れた…。って事か？」

アマリ「分からないの…。何とかわかったのはアル・ワースとは別の世界から来たらしい…。って事ぐらいでした」

サヤ「転移のシヨックが原因でしょうか…。？」

もしかしたら、それも影響してるかもな…。

アマリ「わかりません…。でも、教団の資料でも見ましたが、この数年…。歴史の中でもかつて見ないほど異界人が現れているらしいんです」

ヒミコ「それはびっくりなのだ」

うんうん、そうだな…。ヒミコ…。ん？ヒミコオオつ！！？
アマリ「きやあつ！」

ワタル「ひ、ヒミコ！！？」

テイエリア「モンジャ村にいた女忍者か！」

ヒミコ「ワタルもオッサンもみんなも久しぶりなのだ！」

零「つたく…。心臓に悪いぜ…」

アマリなつて驚きすぎて尻餅ついてんじゃねえか。

零「アマリ、大丈夫か？」

アマリ「え、ええ…。ありがとう、零君」

アマリを立たせているとしんのすけがヒミコに問う。

しんのすけ「どうして、ヒミコちゃんが、ここに？」

ヒミコ「決まっているのだ！ワタル達を追いかけて来たのだ！」

アンドレイ「す、凄いな…。モンジャ村から、此処まで1人で来るなんて…」

一夏「流石は忍者だな…。(何か、ヒミコは将来、千冬姉や楯無さんみたいになりそうだな…)」

千冬「ほう…。一夏、後でゆつくりと話をしようか？」

一夏「マジですみませんでした!!？」

一夏と千冬さんの話を無視し、ヒミコは続ける。

ヒミコ「アマリ姉ちゃん、びっくりしすぎなのだ」

アマリ「だ、だって……いきなり音も立てずに現れましたから……」

まあ、忍者だからな……それよりも……。

ワタル「ふふ……アマリさんってびっくりしやすいんだね」

零「からかうな……ワタル。アマリ、怪我はないか？」

アマリ「え、ええ……大丈夫よ、零君」

しんのすけ「桃色の空間が見えるゾ」

アーニー「青春っていいね」

サヤ「少尉、オヤジ臭いです」

うんー？何も聞こえない。ってかアマリは顔を赤くするな……誤解を生むだろ。

マサキ「で、どうするんだ、みんな？この子も連れて行くのかよ？」

カンタム「本人が行きたいと言うのなら良いんじゃないかな？」

セルゲイ「ああ、それなりの覚悟を決めて、モンジャ村を旅立ったのだらうからな」

アマリ「そうですね。本人の意思を尊重するべきだと思います」

テイエリア「それに彼女の忍術は時によっては役に立つ」

マサキ「みんながそう言うんなら構わねえ。俺も同意見だったからな」

ヒミコ「きやははは！みんな、気が合うのだ！」

零「じゃあ、ヒミコ。改めて、よろしくな」

ヒミコ「ん！誰か来るのだ」

ワタル「え…？？」

すると、茂みから女の子が1人と男女が1人ずつ、そして、ライオン？が現れた。

？「人が居た！！？」

？2「この人にお願ひしましょう！」

？3「うん！お願ひ助けて！」

？4「！！？」

アンドレイ「き、君達は？」

しんのすけ「ね、猫が居るゾ！」

？4「！！？」

？3「キングは猫じゃないよ！ライオンだよ！」

やっぱ、ライオンなのかな。

ワタル「この人達の… 使い魔なのかな…？？」

セルゲイ「普通の動物のようだが…」

サヤ「どうかしたんですか？」

シバラク「お嬢ちゃん達、誰かに追われているのかな？」

? 3 「あたしじゃなくて、ナディアとジャンがピンチなの！」

ナディア? ジャン? この子達の知り合いか? : : : ! ?

? 「待って! マリーちゃん！」

マリー「どうしたの冬樹お兄ちゃん！」

冬樹「名前も名乗らずにじゃ、警戒するよ! すみません、僕は日向 冬樹です！」

? 2 「それもそうね! 私は日向 夏美: : : 冬樹の姉です! ほら、マリーも！」

マリー「う、うん! あたし: : : マリー・エン・カールスバーグだよ! こつちのライオ

ンはキング」

キング「!! ?」

よろしくと言っている様だな。

マサキ「ナディア? ジャン？」

アーニー「君達の知り合いかい？」

冬樹「はい! 僕達、助けを呼びに来たんです！」

零「悪い。もう少し、状況を説明してくれないか? 俺は新垣 零だ」

マリー「だから! ナディアとジャンがピンチなの！」

カンナム「本当にピンチの様だな！」

しんのすけ「早くお助けしないと！」

刹那「そうだな：：案内を頼む！」

冬樹「は、はい！」

すると、また茂みから誰か出て来た。

クラマ「だったら、俺も同行させてくれ」

と、鳥人間!!?

ヒミコ「トリさん、誰だ？」

クラマ「俺は渡部クラマってもんだ。通りすがりに、その子のツレらしいのが襲われてるのを見た」

テイエリア「なら、何故その時に助けなかった？」

クラマ「無茶言うなよ。相手だって結構な数が居たんだけ？」

結構な数が：：？って事はドアクダーの奴らか：：!!?

ワタル「取り敢えず、そこに案内して！」

夏美「ええ！」

クラマ「じゃあ、ついてきな。(きて：：お手並み拝見させてもらうぜ、ワタル)」

俺は冬樹や夏美、クラマの案内の元、襲われているナディアとジャンという人物のと

ころへ向かった：：。

冬樹達に案内され、現場に着いた俺達。

ワタル「待て、待て、待てーっ！」

? 「な、何だあ……!?」

? 2 「何なんだよ、お前等は？」

ワタル「僕はワタル……救世主ワタルだ！」

零「マリー！ ナディアとジャンというのは!?」

マリー「あ、あそこにいるよ！」

マリーの指をさした方向には褐色の肌の少女と眼鏡をかけた少年が居た。

彼女達がナディアとジャンか……！

一夏「悪事も此処までだ！」

シバラク「少年少女に乱暴を働く狼藉者は、この剣部シバラクが相手をする！」

? 「いきなりやってきて、何言ってるんだよ！」

この人達がナディアとジャンって、子達を襲っていた奴らなのか!??

千冬「……渡部は結構な数が居ると言っていたはずだが……」

? 2 「おもしろええ！ そっちがその気なら、やってやろうじゃねえか！」

シバラク「ならば、参る…！」

零「ちよ、ちよつとシバラクさん！話も聞かずにやめてください！」

マリ―「そうだよ！カバのオジサン、やめて！」

シバラク「か、カバ…？それつて拙者の事…？？」

な、何だろうか…？シバラクさんの顔が本当にカバ様に見える…。

ナディア「マリ―！キング！それに冬樹さんや夏美さんも！」

ジャン「良かった！無事だったんだね！」

マリ―「ナディア、ジャン！」

？3「安心しな、マリ―。ネオ・アトランティスの連中はあたし達が片付けたから」

今度は赤毛の女性が現れ、マリ―に笑いかけた。

ネオ・アトランティス…？

夏美「あ、ありがとうございます！」

冬樹「あの… お2人もありがとうございます！ほら、マリ―ちゃんも！」

マリ―「うん、ありがとうございます！グランデイスさん、ハンソン、サンソン」

ハンソン「どういたしました」

サンソン「ま…俺達が来たからには、全て任せときな、マリ―」

グランデイスさん、サンソンさん、ハンソンさん…か…。

この人達は一体……？

グランデイス「そんな大口を叩いていいのかい、サンソン。此処がどこかもわからないってのに」

ジャン「じゃあ、グランデイスさん達も……！」

グランデイス「ああ、そうさ。ノーチラス号から脱出して、気がついたら、此処にいたってわけだよ」

刹那「……話が見えない……」

零「アマリ……」

アマリ「ええ、おそらく、この人達は……」

セルゲイ「取り敢えず、彼等は悪い人間ではないようだな」

アマリ「そして、あのナディアっていう女の子達を含めて、異界人です」

零「やっぱりか……」

その後、俺達はグランデイスさんという人達と情報の交換をした……。

マサキ「……で、そのノーチラス号がネオ・アトランティスって連中の攻撃を受けて沈没したってわけか……」

ジャン「僕とナディアとマリーとキングは脱出したんですけど、気がついたら、この

森の近くの海岸に流れ着いていたんです」

ナディア「：。」

ジャン「そして、暫く歩いたら、同じく倒れていた冬樹さんと夏美さんを見つけたんです」

零「2人はどうして此処に来たかわかるか？」

冬樹「い、いえ……僕達はいつもの様に学校へ行こうと玄関のドアを開いた瞬間……」

夏美「気を失って、この世界に来て……ジャン達に助けられたんです」

アンドレイ「という事は、冬樹君達とナディア達の世界は別という事か……」

一夏達と同じってわけか……

クラマ「こつちのお嬢ちゃん……ナディアって言ったか？お嬢ちゃんがそのネオ・アトランティスって連中に狙われているのか……」

ナディア「ジャン……」

ジャン「どうかした、ナディア？」

ナディア「私、やっぱり動物の言葉がわかるのよ！だって、この鳥の喋っている事が分かるもの！」

ジャン「お、落ち着いて、ナディア！」

うん、ナディアにシロやクロ、ホープスを見せたら、とんでもない事になりそう……

マリー「私もわかるよ」

ワタル「僕も……」

しんのすけ「オラも！」

ヒミコ「あちしも！」

ジャン「ナディア……。あの人は鳥みたいな姿をしているけど、人間の言葉を話すんですよ」

ナディア「そんなのおかしいわよ！」

一夏「な、何でキレてんだよ……」

アマリ「さつきも話しましたが、此処はアル・ワース……。あなた達のいた世界とは違う世界なんです」

アーニー「此処は、そういう所だって納得した方が良いでしょう」

ナディア「でも……！」

信じられないか……。まあ、当然か。

いきなり、見知らぬところへ来たたら普通こうなる……。俺達がいい例だ。

ジャン「落ち着こうよ、ナディア。まずは今、僕達がいる場所の情報を集めなきゃ」

零「こつちからも質問させてもらうぜ。お前らを襲ったのは、そのネオ・アトランティスの人間なのか？」

ジャン「それは間違いありません。ネオ・アトランティスの人間は全員、仮面をかぶっていますから」

グランデイス「マリーがあんた達に助けを求めている間に同じくここに流れ着いたあ
たし達が合流して、連中を追っ払ったのさ」

ハンソン「あいつ等も僕達と同じ様にここに飛ばされて来たんだろっね」

サンソン「それで俺達にぶっ飛ばされてあたふたと逃げ出すとは、とことんついてな
い連中だぜ」

シバラク「そんな事情とは知らずに悪い事をした。拙者、お詫びを致す」

一夏「すみませんでした！」

グランデイス「構わないよ。ま…誤解するのも無理ないかもね。あたし達も他人様
に胸を張れるような生き方をしてきたわけじゃないからさ」

シバラク「いえ…。あなたのような美しい方ならば、どのような過去であろうと拙者
は受け止めます」

しんのすけ「さあ、オラの胸に飛び込んできて良いんだゾ」

シバラク「何なら、将来までまとめて面倒みますぞ」

こいつらあ…。

グランデイス「ふふ…嬉しい事言ってくれるね」

アマリ「し、シバラク先生……」

千冬「あなたもそちら側でしたか……」

マサキ「あの目……完全にのぼせあがっちゃってるな」

アーニー「あ、あははは……」

零「あんまり、相手にしない方が良いでしょう、グランデイスさん」

シバラク先生に任せて、ワタルは大丈夫か……？

ジャン「それでも皆さんが僕達を助けに来てくれた事には変わりありません。僕はジャン・ロツク・ラルティーング……。よろしくお願いします」

グランデイス「あたしはグランデイス・グランバア。こっちのデカイのがサンソン、丸いのがハンソンだよ」

ハンソン「僕達をネオ・アトランティスの一味と間違えたのは許すけど……」

サンソン「姐さんにちよっかい出した時には覚悟してもらおうぜ」

シバラク「なんの……！ 障害が多いほど、拙者の恋心も燃え上がるものよ！」

サンソン「こりや、痛い目を見なきやわからんようだな」

マリー「ダメよ、サンソン！ シバラク先生は、良い人なんだから！」

サヤ「話がこじれますから、シバラクさんもやめてください！」

サンソン「マリーの頼みでも聞けねえ事つてのがあるな」

シバラク「男には退けぬ時戦いがある！」

ジャン「ちよ、ちよつと、サンソン！ほら！ナディアも見えてないで止めてよ！」

テイエリア「良い加減にしろ、剣部 シバラク…今度ふざければ、君を後ろから撃つ」

刹那「それは俺に対して言った言葉じゃないか？テイエリア」

ナディア「…」

しんのすけ「ナディアちゃん、元気ないゾ…」

ワタル「クラマが喋れる事がシヨックだったの？」

ナディア「そうじゃない…。もう…色んな事にウンザリなのよ…」

零「…」

ジャン「ナディア…」

ナディア「パリであなたと出会ってから、グランティスさんに追われて、海に逃げたら漂流する事になって…。そこでノーチラス号に拾われて、パリに帰ろうとしたら、ネオ・アトランティスに捕まって…」

…こいつはこいつで辛い道を辿って来たのか…。

ナディア「私達を助けてくれなノーチラス号はネオ・アトランティスの攻撃で沈んで、みんな、死んでしまつて…」

ジャン「そんな事はない……！ネモ船長やエレクトラさん達はきつと生きています！」
ナディア「もう……嫌……。全部……ブルーウォーターのせいよ……」

ジャン「ナディア……」

零「ブルーウォーター……？」

グランデイス「ナディアが持っている宝石だよ。あの子が親と生き別れた時から身につけていたものだとき」

ハンソン「よくわからないけど、ネオ・アトランティスがナディアを狙うのは、そのブルーウォーターのせいらしいんだよ」

つて事は……ブルーウォーターとナディアの両親とネオ・アトランティスは何かしらの関わりが……！！？

サンソン「だからって、生き別れた親御さんのくれたものを、ハイどうぞと渡すわけにはいかねえよな……」

すると、足音が聞こえ、見慣れた顔の男が来た。

シユワルビネガー「……ほう……そんな値打ち物を持っているのか」

ワタル「お前は……！」

シユワルビネガー「すごい奴がやって来た！そう！シユワルビネガー様だ！」

零「盗み聞きとは趣味が悪いな……！」

シュワルビネガー「周りを警戒しないお前達が悪い！救世主ワタル！…と、その仲間達！此処で一氣に片付けてくれる！」

…つて、俺達はその仲間扱いかい！？？

ブリキントン1「！」

ブリキントン2「！」

アマリ「ブ、ブリキントンもいます！」

しんのすけ「なんの！オラ達がブリキントンを栗きんとんにしてやるゾ！」

シバラク「迎え撃つぞ、ワタル！」

千冬「遅れるな！一夏もだ！」

ワタル「はい、先生、千冬さん！」

一夏「了解！」

シュワルビネガー「ヌハハハ！女子供を抱えて、戦えるものか！」

零「それが戦えるんだよ！」

ヒミコ「ヒミコミコミヒミコミコ！忍法、火炎の術！」

アマリ「ヒミコちゃん忍法に私のドグマを組み合わせます…！熱と光…手を取り

合つて…！FLAMMA！」

ブリキントン1「！？！？！」

ブリキントン2 「!??!?!」

2人の連携にブリキントンは倒れていく。

ハンソン 「やるなあ、あの子!それに魔法も、すごいもんだ!」

サンソン 「俺達も負けてられないぜ!」

セルゲイ 「アンドレイ!合わせろ!」

アンドレイ 「はい!父さん!」

零 「刹那!!?!」

刹那 「わかつている!」

ティエリア 「僕もやろう!」

サンソンさん、セルゲイさん、アンドレイ大尉、刹那、ティエリアと一緒に俺達もブリキントンを薙ぎ払う。

ブリキントン1 「!??!?!」

一夏 「ハアアアアツ!雪平一閃!」

ブリキントン2 「!??!?!」

最後に雪平式型で一夏はブリキントン達を一閃した。

シユワルビネガー 「ブ、ブリキントンを素手で……!それも一撃で……!」

ハンソン 「出た、サンソンの馬鹿力!」

サンソン「馬鹿は余計だ、ハンソン！」

グランデイス「いいよ、サンソン！ガンガンやんな！」

サンソン「ジャン！冬樹！ナディアとマリー、夏美はお前らに任せるぜ！」

ジャン「う、うん！」

冬樹「わかりました！」

ブリキントン1「!!？」

ブリキントン2「!!？」

ワタル「お前達の相手は僕達だあああつ！」

しんのすけ「行くゾー!!？」

ワタルとしんのすけもそれぞれ、ブリキントン達を剣で斬り裂いたり、おしりで攻撃したりし、ブリキントン達を倒していく。

ワタル「へへへ！先生と千冬さんとの修行の成果見たか！」

しんのすけ「オラに触れると火傷するゾ！」

ヒミコ「凄いのだ、ワタル！」

カンタム「しんのすけ君も流石だ！」

マサキ「流石は救世主！良い太刀筋だぜ！」

アーニー「しんのすけ君のおしりもなかなかだね！」

サヤ「しよ、少尉！その様な恥ずかい事を大声で言わないでください！」

シュワルビネガー「ええい、想定外の事態だ！こうなったら……！」

そう言い残し、シュワルビネガーは走り去った。

ヒミコ「顔の大きいオツサンが逃げてくのだ！」

夏美「コラ〜！待ちなさい！」

これは……あの野郎、魔神に乗ってくるな！

アマリ「ワタル君！皆さん！」

ワタル「うん……敵が魔神を出してくるなら、こつちも龍神丸を呼ぼう！」

俺達も準備するか……！

第3話 ブルーウォーターの少女と漆黒の復讐鬼

俺の考え通り、シュワルビネガーは魔神に乗り込み、複数の魔神が出現した。

シュワルビネガー「凄い奴がやってきた！パワーアップした、ゲツペルタンクの力を

見せつけてやる！」

ヒミコ「こつちも凄い奴らが来るのだ！」

ワタル「龍神丸うううっ!!?」

零「ゼフィルス!!?」

一夏「白式!!?」

俺達はそれぞれ、叫び、俺とワタルはゼフィルス、龍神丸に乗り、一夏も白式を纏った。

シュワルビネガー「出たな！龍神丸とその仲間ロボット！」

一夏「ISはロボットじゃない！」

ワタル「それにそれだけじゃない！」

俺達の後ろにゼルガード、戦神丸、ダブルオークアンタ、ラファエルガンダム、GNⅩⅣ、GNⅩⅩⅠⅠ、カンタム・ロボ、サイバスター、オルフェス、ライラスが現れた。

アマリ「お待たせしました！ワタル君、零君、一夏君！」

アーニー「シバラク先生がなかなか公衆電話を見つけられなくて遅くなってしまっ
て..」

シバラク「それを言うな、アーニー」

零「心配ないですよ、シバラク先生！」

ワタル「戦いは、まだ始まってないから！」

シバラク「そうか、そうか！これでグランデイス殿に拙者の活躍を見せる事ができる！」

しんのすけ「オラもグランデイスお姉さんと夏美お姉さんに良いところを見せられるぞ！」

ティエリア「あの3人組は居ない様だが……」

すると今度はまた俺達の後ろに戦車の様なモノが現れる。

ハンソン「世紀の大傑作！万能戦車、グランデイスタンク……略して、グラタン参上！」

グラタン……？あれがあの戦車の名前か……？

ジャン「グラタンも、こっちの世界に来てたんだ！」

サンソン「けどよ、ハンソン……。あんな見た事もないようなメカ相手にこいつで勝てるのか？」

ハンソン「大丈夫！ノーチラス号から分けてもらったパーツでグラタンも大幅にパワーアップしてるから！」

グランデイス「どうでもいいけど、ハンソン……こいつの名前はグラタンじゃなくて、カトリイヌだよ」

成る程、あのグラタンって、戦車にはグランデイスさん、サンソンさん、ハンソンさ

んが乗っているのか。

ハンソン「きつと姐さんも驚きますよ、パワーアップしたグラタンの力に！」
聞いてねえし……。

グランデイス「だから！グラタンじゃなくて、カトリイヌ！」

刹那「後にしろ、グランデイス……」

アンドレイ「向こうはやる気満々の様だな」

グランデイス「わかってるよ、刹那、アンドレイ！このグランデイス……売られたケ
ンカは倍返し主義だからね！」

ハンソン「んじや、ハンソンご自慢の生まれ変わったグラタンの試運転だ！全開で行
くぜ！」

ジャン「頼んだよ、グランデイスさん！ハンソン、ハンソン！」

ワタル「行くぞ、シュワルビネガー！僕達を追って来たんなら、返り討ちにしてやる
！」

シュワルビネガー「やってみろ！今日の俺様は負けられない理由があるのだ！」
こうして俺達の戦いが始まった……。

〈戦闘会話 零VSシュワルビネガー〉

零「まさか、ストーカー趣味があつたとはな！」

シユワルビネガー「へ、変な趣味を追加するな！」

零「そうなのか？でも、どっちにしてもこれ以上、お前につけられても面倒だ！此処で倒す！」

〈戦闘会話 一夏VSシユワルビネガー〉

シユワルビネガー「あの時のスーツ男か！」

一夏「懲りないな！まだ倒され足ないのか！」

シユワルビネガー「良い気になるなよ小僧！前回は油断したが今度はそうはいかないぞ！」

一夏「こつちだって、お前に負けるつもりはない！」

〈戦闘会話 刹那VSシユワルビネガー〉

刹那「…」

シユワルビネガー「な、なぜ何も話さない!?？」

刹那「話し合えば人は分かり合える…だが、お前は分かりあおうとしない…ならば、破壊する…この俺とガンダムが！」

〈戦闘会話　しんのすけVSシュワルビネガー〉

シュワルビネガー「あの時の小僧か！」

しんのすけ「しつこい男は嫌われるゾ！シュシユネガー！」

シュワルビネガー「シュワルビネガーだ！わざとらしく間違えるな！」

カンナム「シュワルビネガー！僕達に挑んで来るなら、何度でも相手になるぞ！」

〈戦闘会話　アーニーVSシュワルビネガー〉

アーニー「成る程な、悪党というのは何処の世界も同じだな」

シュワルビネガー「何だ!? おまえも正義の味方という奴か!?」

アーニー「悪いね、僕は傭兵でね。正義の味方と言われれば、そう答えは出来ない

だよ。でも、悪党を見逃す事は出来ない！覚悟しろ！」

周りのゲツペルタンクを次々に倒し、俺達はシュワルビネガーのゲツペルタンクを追い詰めた。

シュワルビネガー「い、いかん…！このままでは、また負ける！無様な姿を晒すの
に比べれば、逃げる方がマシと判断する！」

そう言い、シュワルビネガーのゲッペルタンクは逃げ始めた。

龍神丸「追うぞ、ワタル！」

ワタル「わかつてるよ、龍神丸！」

ワタルと龍神丸はシュワルビネガーを追おうとしたその時だった…。

ナディア「あ…。」

ジャン「ブルーウォーターが…！」

ナディア「何かの警告なの…？」

そして、ワタルと龍神丸はシュワルビネガーのゲッペルタンクの元まで辿り着いた。

ん…？この気配は…？

刹那「気をつける、ワタル！何か来る！」

シロ「それも別々の方向からニヤ！」

すると、龍神丸を取り囲む様に2機の魔神が現れる。

クラマ「(シュワルビネガーの野郎を追い込むとはやるじゃねえか、ワタル)」

アンドレイ「あの2機の魔神…空を飛んでいる！」

シュワルビネガー「セ、セカンドガン！クルージング・トム様がおいでになられたの

か!?？」

クルージング・トム「その通りだ、シユワルビネガー! この筋肉だけが取り柄の役立たずめ! 後方から見物させてもらっていたが、もう我慢できん! そこで、この俺の戦い方を見ておれ!」

龍神丸「後退だ、ワタル! 奴は、こちらを狙っている!」

ワタル「え...!」

っ! まずい! このままじゃワタルが!

クラマ「(まずい...! 此処でクルージング・トムがワタルを倒したら、俺が手柄を立てられん! こうなったら、俺が先にワタルを倒すしかない...!)」

クルージング・トム「死ね、ワタル!」

ワタル「!」

零「ワタル!!?」

だが、2機の魔神はお互い、ワタルの龍神丸を狙ったが、激突しあった。

クルージング・トム「き、貴様! この俺の邪魔をするのか!」

クラマ「(ち、違う! 俺はワタルを倒そうとして...! 言い訳を重ねても奴を怒らせるだけだ...! 此処は退くしかねえ!)」

な、何だ!?? 彼奴ら、連携が取れていないのか!??

すると、青き鳥型魔神の方は撤退した。

クルージング・トム「シユワルビネガー！奴を追え！」

シユワルビネガー「は、はい！」

クルージング・トムとか言う奴の命令でシユワルビネガーは青い鳥型魔神を追いかけ
ていった。

ワタル「あの鳥型の魔神……。僕を助けてくれたの……？」

ティエリア「どちらかと言えば、連携が取れずに、激突した様に見えたが……」

シバラク「今のうちだ、ワタル！体勢を立て直せ！」

ワタル「う、うん！」

龍神丸は俺達の元へ戻り、体勢を立て直した。

クルージング・トム「ええい、仕切り直しだ！よく聞け、ワタル！俺こそがドアクダー
様に第一界層を任された大空の覇者、クルージング・トム様だ！」

ワタル「あいつが、創界山の第一界層のボスか！」

一夏「ボスが自ら出て来るとは手間が省けたぜ！」

千冬「馬鹿者！油断するな！」

零「第一界層の頭を張れるほどの奴だ……。実力も確かだろう！」

一夏「わ、わかったよ！」

クルージング・トム「妙な邪魔が入ったが、此処でお前と仲間達の息の根を止めてやる！来い、我が部下達よ！」

クルージング・トムの掛け声と共にゲッペルタンクと赤いカニの様なロボットが現れる。

クルージング・トム「ん？あつちの赤いカニみたいなのは何だ？」

何……？あのカニロボット……ドアクダーのロボットじゃないのか？

ハンソン「ハンソン！」

ハンソン「間違いねえ！あの赤いのはネオ・アトランティスのメカだ！」

グランデイス「あいつ等……！あんなものまで持ち出して、ナディアを狙うつてのかい！」

クルージング・トム「よくわからんが、あの丸っこいタンクを狙っているんなら、放っておけばいい！俺様の狙いは……ワタル！お前だ！」

ワタル「来るなら来い、クルージング・トム！創界山の虹を元に戻すためにも界層ボスがお前には絶対に負けないぞ！」

？「ならば、俺も混ぜてもらおう」

すると、今度はトンがったロボットが現れた。

しんのすけ「か、カンタム！」

カンナム「そんな、馬鹿な！」

セルゲイ「どうかしたのか!?カンナム君！」

「やはり、お前もこの世界に居たのか、カンナム・ロボよ」

カンナム「何故だ！何故、ミッドナイトのロボットが此処にいる!?」

アマリ「ミッドナイトって・・・カンナムさんが戦っている秘密結社の事ですよね・・・

!?」

ミッドナイトのロボット「フン知れたこと・・・我々ミッドナイトもこのアル・ワースに來たのだ」

カンナム「ミッドナイトが!??と言う事は・・・ギルギロス大統領も・・・！」

ミッドナイトのロボット「さよう・・・だが、この世界にお前が居るとはついている・・・

此処でお前を倒す！」

しんのすけ「カンナムはやらせないゾ！カンナムはオラが守る！」

カンナム「しんのすけ君・・・！」

零「今度はカンナムだけじゃない！俺達も居るんだ！」

アンドレイ「行こう！カンナム！私達も手を貸す！」

カンナム「ありがとう・・・みんな！」

クルージング・トム「俺の邪魔をする気か？」

ミッドナイトのロボット「案ずるな……人間よ。俺の目的はカンタム・ロボだけだ……だが、お前が俺の邪魔をするのならば……」

クルーディング・トム「良いだろう……あの緑色のロボットはお前にくれてやる」
何か、勝手に手を組んでるし……。

取り敢えず、やるしかねえな！

俺達が覚悟を決めたその時だった……。

ホープス「マスター、異界の門が開きます」

アマリ「え……!?」

また異界人が来るのかよ!??

すると、異界の門が出現しそこから黒い機体が現れ、門は消える。

? 「此処は……!?」

ワタル「な、何!?? あのロボット!?」

一夏「あれも別世界のロボットなのか!?」

テイエリア「見たところ、モビルスーツとは違うが……」

アマリ「零君！」

零「ああ……回線をつなぐ！」

俺は現れた黒い機体に回線を繋いだ。

零「その黒い機体のパイロット！こちらはシャイニング・ゼフィルスのパイロット……新垣 零です！名前を聞かせてください」

？「テンカワ・アキト……この機体の名はブラックサレナだ。今の状況を知りたい」
ミッドナイトのロボット「奴らの仲間か？」

クルージング・トム「知らん……だが、仲間になられても面倒だ！あの黒い機体を落とせ！」

そう言い、魔神軍団はブラックサレナを攻撃した。

アキト「……！成る程、大体は理解したよ。彼等は敵なんだね？」

零「はい！この世界を支配しようしているドアクダーです！」

アキト「世界の支配……つまり、悪党という事か」

ワタル「そうだよ！こいつらは悪い奴らなんだ！」

アキト「だったら、俺も手を貸す」

アマリ「ありがとうございます！アキトさん！」

こうして俺達はアキトさんの乗るブラックサレナと共にクルージング・トムとその軍団……そして、ミッドナイトのロボットと戦い始めた……。

〈戦闘会話　アキトVS初戦闘〉

アキト「北辰達を倒し、ユリカ達と別れた後にこの様な世界へ来てしまうとは……まだ、俺に戦えというのか……？ ガイ」

〈戦闘会話　零VSガラツパ3号〉

零「こいつ等がネオ・アトランティスか……。来るなら来やがれ！ ナディアはお前等には渡さない！」

〈戦闘会話　一夏VSガラツパ3号〉

一夏「本当に世界が変わるとロボットの形状も変わるんだな……。アイエスで何処まで対抗できるかわからないけど、やってやる！」

〈戦闘会話　刹那VSガラツパ3号〉

刹那「（ブルーウオーターとネオ・アトランティス……。そして、ナディア……。この2つにどの様な共通点が……。）取り敢えず、今は彼女を守る……。ただ、それだけだ！」

〈戦闘会話　しんのすけVSガラツパ3号〉

しんのすけ「ナディアちゃんはオラ達がお助けする！行くゾ！カンタム！」
カンタム「しんのすけ君も男の子だね。女の子を守ろうとするなんてね。僕も協力するよ！さあ、行こう！」

〈戦闘会話 アキトVSガラツパ3号〉

アキト「どんな理由があろうとか弱い女の子を狙うとは言語道断だ… 悪党共、俺が相手になってやる…！」

数分後、ネオ・アトランティスのロボットを絶滅させた俺達…。

ハンソン「ネオ・アトランティスの連中は片付いたね」

サンソン「こんな所でブルーウォーターを手に入れて何の意味があるってんだ…」

グランデイス「後はいけ好かない飛行機野郎とトンガリロボットだけだ！2人共、気合い入れな！」

ハンソン「合点承知！」

刹那「…」

テイエリア「どうかしたのか？ 刹那」

刹那「何でもない。戦闘を続行する…」（あの、ブルーウオーターという石が反応した後に、クルージング・トム達が現れた… あれは一体…。）

俺達は再び、戦闘を再開した…。

〈戦闘会話〉 しんのすけVSミッドナイトのロボット

しんのすけ「本物を見るとリアルだゾ…」

ミッドナイトのロボット「カンタム・ロボ！ 世界は違えど、この世界をお前の墓場としてくれる！」

カンタム「僕は負けない！ 僕は1人じゃないんだ！ しんのすけ君や零君達が居る！ ミッドナイト軍がこの世界に居るならば、決着をつける！」

ミッドナイトのロボット「良いぞ！ 来い！ カンタム!!？」

〈戦闘会話〉 零VSミッドナイトのロボット

零「何で、お前達の世界の戦いをこの世界に持ち込むんだよ!!？」

ミッドナイトのロボット「人間……お前には関係ない……どけ」
零「俺はそういう上から命令する奴は好きじゃないんだよ……良いぜ、ミッドナイト
！相手になつてやる！」

〈戦闘会話 アマリVSミッドナイトのロボット〉

ミッドナイトのロボット「魔法を使うロボットか……小賢しい！」

アマリ「ミ、ミッドナイトのロボットが来ます！」

ホープス「恐るなら、後退をお勧めします。マスター」

アマリ「そ、それはできません！しんちゃんが戦っているんです！私だって！」

ホープス「わかりました。では、全開で参りましょう。」

アマリ「はい！行きますよ！ホープス！」

〈戦闘会話 ワタルVSミッドナイトのロボット〉

ミッドナイトのロボット「お前の様な小さなロボットで何ができる！」

ワタル「カンタムとしんちゃんはドアクターを倒す為に手を貸してくれている……僕
達もカンタム達に協力しよう！龍神丸！」

龍神丸「了解だワタル！全力で行くぞ！」

〈戦闘会話 刹那VSミッドナイトのロボット〉

刹那「カンタムと同じロボットのお前達は何故、分かりあおうとしない!?」

ミッドナイトのロボット「わかり合うだと? そんな事は簡単だ。彼奴が下等生物である人間と共に我々と戦うからだ…。あんな欠陥品とは分かり合えないな」

刹那「貴様も世界の歪みだ!俺が…。破壊する!」

〈戦闘会話 アキトVSミッドナイトのロボット〉

ミッドナイトのロボット「ほう、良い機動性だ。人間にしては流石だな。」

アキト「いわゆる、ロボットアニメの敵ロボットか…。ならば、スピードで攪乱する」

ミッドナイトのロボット「だが、そのスピードも我々の前では無意味!」

アキト「果たしてそうか試させてやる…。!」

〈戦闘会話 グランデイスVSミッドナイトのロボット〉

ミッドナイトのロボット「フン、人間の兵器である戦車如きじゃ、俺には勝てんぞ」

ハンソン「ぼ、僕のグラタンを馬鹿にするな!」

ハンソン「言わせるだけ、言わせておけハンソン…。見せつけてやろうぜ!グラタン

の真の恐ろしさを！」

グランデイス「そうだね……。私達に喧嘩を売った事……。後悔させてやるよ！」

俺達はミッドナイトのロボットを追い詰め、カンタム・ロボのカンタムゴットウイン
ドでミッドナイトのロボットにダメージを与えた。

ミッドナイトのロボット「くっ！新たな仲間を増やすとはな……。今日はこの辺で退
いてやる……。次は必ず、お前をスクラップにしてやるぞ！カンタム!!？」

そう言い残し、ミッドナイトのロボットは撤退した……。

カンタム「来るなら来い……。何処の世界でも僕は負けない！」

しんのすけ「それを言うなら、僕達は……。だぞ！カンタム！」

カンタム「そうだね、すまない、しんのすけ君！」

零「後はクルージング・トムだけだ！行くぜ！」

俺達は残るクルージング・トムのセカンドガンとゲツペルタンク軍団との戦闘を再開
した……。

〈戦闘会話

零VSクルージング・トム〉

零「お前を此処で倒せば、第一界層はクリアだ！」

クルージング・トム「そう簡単に行くと思うなよ！小僧！」

零「ああ……油断はしねえ！だが、全力でやるぞ！」

〈戦闘会話 一夏VSクルージング・トム〉

一夏「くっつ^{!!}? 早すぎて、狙いにくい……！」

クルージング・トム「フハハ！お前の様なパワードスーツではこのセカンドガンを捉える事はできません！」

一夏「だけど、動く場所を計算して動けば、どうという事はないだろ！やってやる！」

〈戦闘会話 しんのすけVSクルージング・トム〉

クルージング・トム「その機体……空を飛べる様だが、それでは俺のセカンドガンには勝てんな！」

カンナム「確かにスピードでは劣るが、戦いはスピードだけではない！しんのすけ君！合わせて行くぞ！」

しんのすけ「ホホーイ！隙を見つければこっちのものだゾ！」

〈戦闘会話 刹那VSクルージング・トム〉

刹那「あれが界層ボスの魔神か……！」

クルージング・トム「ほう？この俺とセカンドガンに恐れをなしたか？」

刹那「クアンタは対話の為の機体だ……。だが、世界を戦争で包むなら……。俺が相手になる！」

〈戦闘会話 アキトVSクルージング・トム〉

アキト「お前が敵のボスの様だな」

クルージング・トム「このセカンドガンに対抗できるとはその機体の運動性もなかなかのものよ！」

アキト「褒めてくれて光栄だな……。だが、悪党は容赦なく倒す……。！」

〈戦闘会話 アーニーVSクルージング・トム〉

クルージング・トム「フン！どうやら、その機体では空は飛べないようだな！」

アーニー「空を制したからといって良い気になるな！」

クルージング・トム「な、何だと!?？」

アーニー「その油断……。僕のパイロット技術で撃ち壊してやる！」

〈戦闘会話 サヤVSクルージング・トム〉

サヤ「あの魔神……！早いですね」

クルージング・トム「そうかそうか！俺のセカンドガンに恐れおののいたか？その戦闘機ではセカンドガンには勝てんぞ？」

サヤ「ライラスをただの戦闘機と思っていれば痛い目を見ますよ！」

俺達は協力してゲッペルタンク軍団を倒していき、龍神丸も登龍剣でクルージング・トムのセカンドガンを斬り裂いた。

ホープス「ん？」

アマリ「どうしたんです、ホープス？」

ホープス「あのクルージング・トムなる者の行動を観察した結果、私のインスピレーションがスキル習得の為にプログラムを生み出しました」

零「は……？スキル習得……？何じゃそりゃ」

アマリ「凄いですねらホープス……。この数日、新しい発見で一杯です」

ホープス「今の状況はマスターとの二人旅よりも刺激がありますからね」

そりゃ、こんな旅してれば刺激はありまくりだろうな。

クルージング・トム「ちいっ！最初に余計な邪魔が入ったおかげでセカンドガンの調

子がイマイチだ！覚えていろ、ワタル！次の機会には、必ずお前を倒して、勝利をドアクダー様に報告してやる！」

そう言い残し、クルージング・トムのセカンドガンは撤退した。

ワタル「べーっだ！やれるもんなら、やってみろっつてんだ！」

グランデイス「取り敢えず、一段落だ」

サンソン「とにかく腹が減ったぜ。。。こっちに跳ばされてきてから、ロクに何も食ってないからな」

ワタル「だったら、ご飯にしようか！そろそろ夜になるし！」

零「ああ！そうだな！」

ワタル「もちろん、みんなと一緒にだよ！」

ハンソン「いいのかい？」

一夏「何言ってるんですか、ハンソンさん！」

ワタル「一緒にドアクダー軍団と戦ってくれたんだから、もう僕達、仲間だよ！」
グランデイス「話せるね。流星は救世主様だ」

ワタル「そういうわけだから、みんなの事は僕達に任せてよね」

ジャン「良かったね、ナディア。これで取り敢えずは何とかなりそうだよ」
ナディア「・・・」

ジャン「ナディア…」

ナディア「（こんな所まで来て、ネオ・アトランティスに追われるなんて…。全部、このブルーウォーターのせいなの…。？）」

刹那「…」

アキト「すまない、そろそろ状況の説明をよろしく」

零「はい、わかりました！」

俺達は夕食を食べながら、アキトさんと情報を交換した。

アキト「成る程…。異世界…。アル・ワースか…。まるでファンタジーの様な世界だね…」

零「やっぱりそう思います？」

アキト「ああ、俺の世界はそう言うのとは無縁だからね」

アマリ「アキトさんは火星の後継者という組織との戦いの後、アル・ワースに転移して来たと言う事ですよね？」

アキト「そうなるね…。それと、これからは俺もドアクター退治に力を貸すよ」

ワタル「良いの!?!?」

アキト「悪党は見逃せないからね…。これからよろしく」

零「はい！よろしくお願いします！アキトさん！」

アキト「さんは良いよ……よろしく、零」

こうして、アキトが新たな仲間となった。

サンソン「いや〜シバラクの旦那！しんのすけ！あんた等はお目が高い！」

ハンソン「うちの姐さんに一目惚れとはよくわかってらっしゃる！」

シバラク「あの様な美女はな従えているお主等は本当に果報者よ！」

しんのすけ「羨ましいゾ〜！」

ハンソン「だったら、旦那としんちゃんも僕達と一緒に姐さんを守っていいこうじゃないか！」

シバラク「おお！それは良い！」

サンソン「つて事は、今日から俺達は同志だ！」

しんのすけ「おう！同志だゾ〜！」

零「なんか、意気投合してるし……」

マサキ「結局、このオツサン達は似た者同士だったつて事だな……」

グランデイス「仲よさそうだね…… あっちは！」

ナディア「……」

グランデイス「しっかりとおしなよ、ナディア。物事つてのは、なる様にしかならないんだから」

ナディア「…」

グランデイス「とにかく、まずは食べなよ。食べなきや人間、力が出ないからね」
ナディア「… 肉は… 食べないから…」

夏美「ナディアはお肉が嫌いなのね」

グランデイス「こんな所に来てまで菜食主義とはね…。ま…。好きにしな。でも、あなたの事を心配している人間がいるのを忘れるんじゃないよ」

ナディア「…」

ジャン「…」

ヒミコ「ジャンはナディアをずっと見てるのだ」

ワタル「もしかして、ジャンさんってナディアさんの事が好きなの？」

ジャン「まあね。僕は何があってもナディアを守るって決めているから」

アンドレイ「愛する者を守ろうとするその姿勢…。カツコイイよ、ジャン君」

ワタル「うん！ハツキシ言っつて、めちやくちやカツコイイぜ！」

ジャン「ありがとうございます、アンドレイさん、ワタル」

一夏「でも、俺と千冬姉のいた世界とジャン達の世界も別の世界みたいだな」

千冬「お前達の世界は私達や零、ワタルのいた時代よりもずっと昔みたいだな」

セルゲイ「そもそも同じ地球なのかもわからないが…」

ジャン「一夏さん……。僕達……。元の世界に帰れると思うかい？」

一夏「それは……」

ヒミコ「帰れるよ」

え……。？何でヒミコがそんな事……。

ワタル「本当かい、ヒミコ?!？」

ヒミコ「ワタルはオババが呼び出したのだ！だったら、きつと帰れるのだ！」

ワタル「そうか！オババなら、きつとみんなを返す方法を知っているはずだ！」

確か、そんな事言ってたな。

シバラク「おお！それは気がつかなかった！」

ハンソン「僕達……。帰れるの?!？」

サンソン「へ……。もう少し、この世界で冒険を楽しんでも良かったけどな」

グランデイス「ふざけた事を言ってるんじゃないよ！さつさと元の世界に戻って、ネモ

様達の行方を追うよ！」

ワタル「先生！早くオババ様に連絡してよ！」

シバラク「ちよ、ちよつと待て！今、電話してみるからな！」

シバラク先生は公衆電話をかけた。

シバラク「あ……。もしもし……。モンジャ村のオババ様？拙者、剣部 シバラクでござ

る。聞きたい事があるのだが、別の世界から来た人間を元に戻す方法ってあるかな？え：：ある？？」

ジャン「やった！やったよ、ナディア！」

ナディア「元の世界に帰れる：：（でも：：帰って何をすればいいの：：）」

シバラク「：：はあ：：。はい：：。はい：：。わかった：：。では、おやすみなさいませ：：。」

それだけ良い、シバラク先生は通話を切った。

シバラク「ふう：：。」

零「シバラク先生、ジャン達は帰れるんですか？」

シバラク「帰れる事は帰れるらしいんだが：：。」

アマリ「何だか歯切れの悪い言い方ですね」

シバラク「オババ様が自分で呼び出したワタルならば、すぐに返す事ができるんだそうだが：：。そうでもない人間の場合、それなりに準備が必要だそうだ」

ジャン「じゃあ、その準備が終われば、帰れるんですね？」

シバラク「ところが、そうはいかないんだと：：。」

テイエリア「何か問題があるのか？」

シバラク「オババ様は、創界山の力を借りて術を使うんだそうだが：：。今の虹の状態

では、とてもじゃないが、力が足りんと言う」

って事は……。

ワタル「つまり、虹の色が元に戻らなければ……」

刹那「ジャンやグランデイス達を元の世界に帰す事はできない……」

シバラク「ああ……無理だそうだ」

ジャン「そんな……！」

グランデイス「情けない声を出すんじゃないよ、ジャン」

ジャン「でも、グランデイスさん……」

グランデイス「方法がわかったんなら、後はそれを全力でやりやあ良いんだよ」

グランデイスさんって、男勝りだよなあ……。

ハンソン「それって……！」

サンソン「要するに……！」

ワタル「虹の色がを元に戻す事……つまり……」

しんのすけ「ドアクダーを倒す事だゾ！」

グランデイス「そう言う事だ、ワタル。元の世界に帰る為にもあんた達の旅に協力さ

せてもらうよ」

冬樹「僕も手伝うよ！」

夏美「冬樹!?」

冬樹「ごめん、姉ちゃん…。でも、ほっておく事は出来ないんだよ。それに…。軍曹達もこの世界に居るかもしれないし!」

夏美「そうね…。ボケガエル達は良くトラブルに巻き込まれるしね…。わかった、私も行くわ」

軍曹やボケガエルはよくわからないが、冬樹と夏美も旅に同行するみたいだ。

クラマ「その旅…。俺も行くぜ」

ヒミコ「あ、トリさん!」

シバラク「戦闘になったら真っ先に逃げ出したお主が何を言っている!?」

クラマ「空から逃げる場所を探してたんだよ。飛べる俺は、こう言う時に役に立つぜ」
セルゲイ「確かな…。小回りが利く航空戦力があれば、色々と便利だ」

アーニー「偵察とかも出来ますしね!」

クラマ「あんた等、ドアクダー軍団と戦っているんだろ? だったら、俺も一緒に行くぜ。あいつ等のやり方には俺も腹が立っていたからな」

ワタル「ありがとう、クラマ! これからも一緒に戦おうね!」

クラマ「よろしくな、ワタル! (さっきの言葉の半分は嘘じゃねえ…。だがな、ワタル…。悪いがお前達を利用してもらうぜ)」

結構な人数が仲間になって来たな……ん？テイエリアがクラマを険しい顔で見ている……？

零「テイエリア……？どうしたんだ？」

テイエリア「……零、渡部　クラマには気をつけろ」

零「え……！！？」

テイエリア「奴には裏があるかもしれない……十分に注意しろ」

零「わ、わかった」

クラマが俺達に何かを隠しているって事か……？そうは見えないが……。

ヒミコ「仲間がいつぱいなのだ！」

ワタル「よし！みんなで力を合わせて、ドアクダーを倒そう！！？」

ワタルの声に俺達は頷いた……。

第4話 闇の翼

ドッコイ山を目指している俺達はテントを張り、休憩を取っていた。

え？前々回からずっと休憩を取ってないかって？そりや、言っちゃダメな事だよ。

……って、俺誰と話してんだ……？

本当は、食料が底をつきそうなので手分けして食材を探していたのだった。

ちなみに俺はアマリとアーニー、サヤと共に味のしない果物とは別の果物を探している。

サヤ「なかなかありませんね……」

アーニー「ほとんど味のしない果物しかないね」

アマリ「この辺りにはないんでしょうか……？」

これは……。手分けして探した方が良いな。

零「しやあねえ……。手分けして探すか……。アーニーと俺、サヤとアマリで探そう」

サヤ「わかりま……。フグツ!?？」

……。ん？何でアーニーはサヤの口を塞いだ!?？」

アーニー「僕とサヤで探すよ！零君はアマリさんと2人で探してよ！」

零「それは構わねえけど……何だよ？急に」

サヤ「ぷはっ！……苦しいです少尉！突然なんですか！！？」

アーニー「特には、僕がサヤと2人つきりになりたいだけだよ」

サヤ「しよ、少尉……」

アーニー「それに、2人つきりなら、君も落語を話しやすいだろ？」

サヤ「結局それですか！！？」

仲よさそうに話しながら、アーニーとサヤは歩き去った。

零「あの2人、あれで付き合ってないのか」

アマリ「そ、そうね……。 (アーニー少尉…… どうして私と零君を2人つきりに……

?)」

零「じゃあ、行くか」

アマリ「は、はい！」

俺とアマリは再び、果物を探し始めようとする……だが……。

ホープス「お2人だけでは不便でしょう。私も手伝います、マスター、零様」

零「ホープス！」

アマリ「…… どうして此処に？」

ホープス「マスターの力になりたいと思ひまして……」

アマリ「…早く探しましょう」

え!??アマリ!??

アマリは一人で先々と行ってしまった…。

ホープス「零様…マスターの機嫌が悪くなりました…。どうしてですか?」

零「俺が知るかよ、そんな事…。」

俺とホープスは先々行く、アマリを追いかけた…。

うーん、うん、ないね。

全部味のしない果物ばかりじゃねえかよ。

アマリ「もしかしたら、この辺りにはないのかもしれないですね…」

零「他のみんなが見つ付けてくれてれば良いんだけど…」

みんなの元へ戻ると、既にみんなも戻って居り、話をしていた。

しんのすけ「アキトお兄ちゃんのその仮面…カッコイイゾ〜!」

アキト「これは視力補佐の為のバイザー何だ…。しんちゃんが言うほど、カッコイイものでもないよ」

剎那「視力補佐…？」

セルゲイ「君は目が見えないのか…?!？」

アキト「…俺は人体実験をされたんだ」

ワタル「人体実験って何？」

アンドレイ「しんのすけ君やワタル君にはまだ早いかな」

カンタム「アキト君…まさか、その代償で…」

アキト「ああ…五感の大半を失っているんだ」

一夏「な…何なんだよそれ?!?アキトさんが何したってんだよ!!？」

剎那「一夏…」

千冬「…お前もI・S学園に入学できなかった場合…拉致されて人体実験されていたらかもしれないから怒っているのか？」

一夏「そんな理由だけじゃない!同じ人間なんだぞ!!?それなのに、何でそんな酷いことができるんだよ!」

シバラク「それが外道という道を外れた人間の事だ…」

冬樹「(軍曹達も侵略者だ…。でも、軍曹達は地球を、僕達を守る為にも戦ってくれた…侵略者だと、言ってる悪い人ばかりじゃないんだよね)」

夏美「冬樹?どうしたの？」

テイエリア「気分が優れないのか？」

冬樹「う、ううん！何でもないよ！」

ヒミコ「みんな笑顔で手を取り合えば良いのだ！」

ハンソン「それが1番良いんだけどね」

サンソン「それができないから犯罪とか起こってるんだよな……」

零「戻りました」

アーニー「ただいま」

ん？アーニーとサヤも帰ってきたか……。

マリー「おかえりなさい！」

グランデイス「どうだった？収穫はあったのかい？」

アマリ「ダメでしたね……」

サヤ「すみません……収穫ゼロです」

アマリとサヤが申し訳なさそうに呟く。

ところでみんなはどうなんだ？

零「みんなはどうでした？」

ワタル「いくつかは見つけたよ！」

おっ！これならいけるか……ん？なんか違和感が……。

あれ……!!?

零「何で、肉類や魚類がないんだ!!?」

アーニー「ほ、本当だ!」

マサキ「そ、それは……その……」

ナディア「……」

……なんかナディアはすごい威圧的な目でこつちを見てくるんだけど!!?……あ!
そう言えば、こいつ、肉類がダメだったな……。

ジャン「す、すみません……皆さん」

ナディア「だつて可哀想じゃない!」

ナディアの前では狩は難しそうだな……。

一夏「それで肉類はどうするんだ?」

ナディア「食べないで良いじゃない!」

ワタル「や、野菜や果物ばかりじゃ流石にキツイよ!」

だな……肉は流石に食いたい……。

アマリ「それなら、この近くに街がありますよ?そこで買いませんか?」

街……?いや待て……なんで今更言うんだよ!!??

刹那「街があつたのか……?」

零「… アマリ？」

アマリ「す、すみません…。今の今まで忘れていました」

ホープス「私は気づいていましたが、こっちの方が面白いと見て、敢えてお教えしませんでした」

焼き鳥にしたるかこのオウム…。

サンソン「じゃあ、行くか」

テイエリア「待て、全員で行かない方な良い」

ハンソン「どうして？」

千冬「ただでさえ、私達はドアクダーに狙われている。街の人達を巻き込みたくない」

アンドレイ「それもそうですね…。ならば、街へ行くのは零とアマリにお願いして良
いかな？」

俺とアマリ？

アマリ「は、はい！わかりました！」

零「俺も了解です」

ホープス「では私も…。」

千冬「お前はここで待っている」

ホープス「ですが、マスターを…。」

千冬「まっ・て・い・ろ」

ホープス「わかりました……」

一夏「出た……千冬姉渾身の脅し……！」

あ、余計な事言ったから、また出席簿で叩かれてる……てか、あの出席簿、どれだけ強いんだよ……。

街に買い物か……。ちようど良い、買いたい物もあつたんだ。

俺とアマリは街へと入り、肉屋や魚屋で買い物をした。

零「結構盛んな街だな……何て言う街なんだ？」

アマリ「コールシティよ」

零「コールシティ……？呼ぶ、街か……」

結構安直だな……。ん？コール？

零「コールって何を呼ぶんだよ？」

アマリ「この街は異界人が多く転移してくる街なの」

成る程……。だから、コールシティか……。

すると、アマリは八百屋で止まった。

って、野菜はもう良いだろ。

アマリ「…」

零「アマリどうした？野菜はもう沢山あるから、買わなくても良いだろ？」

アマリ「このキノコ…。美味しそう…」

アマリが指差したキノコと札を見る。

零「いたって普通の…。笑い茸…。ふーん」

…ん？…笑い茸？！

イヤイヤイヤイヤ！これ毒キノコだろ？！食ったら、暫く、笑いが止まらないってい

うキノコじゃねえか？！

アマリ「これ買ってみようかな？」

零「やめとけ、他の奴らがガチで心配するからマジでやめとけ！」

アマリ「わ、わかったわ…」

び、びつくりしたぜ…。まさか、毒キノコが売ってるなんて…。

零「あ…。アマリ、少し良いか？」

アマリ「何？」

零「少し寄りたい店があるんだけど、付き合ってくれないか？」

アマリ「良いわよ。どんな店？」

それは着いてからのお楽しみってやつだ。

少し歩いて、俺達はその店の前に止まった。

アマリ「服屋？どうして？」

零「いつまでも学生服で居るのもな……折角だから、この世界の服も着てみようと思ってる」

アマリ「そういうことね！じゃあ、入りましょうか」

俺とアマリは服屋に入り、服を探す。

うーん、悩むな……。あまり、普通過ぎるのもなあー。

アマリ「零君、こういうのは？」

零「どれどれ？……っておいおい！」

何だよこの金色の服？！？派手過ぎんだろ？！？

零「俺、派手過ぎんのはパス」

アマリ「え？零君って、金色が好きなんじゃないの？」

零「ゼフィールスが金色だからか？お前は機体の色で他人の好きな色だと決めつけるのか？」

アマリ「ご、ごめんなさい……」

全く……。あれ？これは……。

零「良いなこれ……。これにしよう！」

自分にあつた服を見つけ、俺は購入して、早速着替えた……。

トイレから出てきた俺を見たアマリは驚きの顔をした。

アマリ「ぜ、全身真っ黒!?」

零「こういう地味な色の方が良いんだよ」

今の俺の服装は黒のシャツに黒のズボン、そして、黒いコートを着ていた。

黒の……。ゴホン！何でもない……。

零「変か？」

アマリ「ううん！似合ってるわ！」

零「そ、そうか……」

なんか面と向かつて言われると照れるな……。

？「このうつけがー！」

？2「仕方ないだろ！元々大した金を持っていなかったんだし、俺達の金でも使える

だけマシだろ！」

？「なくなつてしまつては意味がないではないかー!!?」

何か、男と女の子が喧嘩してるな……。

兄妹喧嘩か……？それにしても似てないが……。

その後、俺達は休憩のために、ソフトクリームを買い、ベンチに座る。

零「この世界にもソフトクリームがあるんだな」

アマリ「うん……。ねえ。零君」

零「ん？」

アマリ「零君の世界で……。零君が何やっていたのかを知りたいの」

俺の事を？

まあいいか……。

零「やっていた事か……。俺は普通の学生だったよ。大学進学に向けて必死に勉強していた」

アマリ「……。勉強……。零君に友達は居たの？」

零「人を友達いない子みたいに言うな」

言つとくが、友達なら結構居たからな！

零「結構な数の友達が居たけど、それでも1番仲が良かったのは幼馴染の白木 優香と氷室 弘樹だな」

アマリ「確か、そのお2人は零君にとって家族のようなモノ……。だったのよね？」

零「ああ、彼奴らが居たから今の俺が居ると言ってもおかしくないからな」
アマリ「え……？」

どう言う事だとアマリは首を傾げて質問して来た。

零「俺の両親が死んだ事に気付いたのは俺が小学五年生の時だったんだ」

俺は過去の記憶を蘇らせた。

零「父さんと母さんが死んだ事を知り、俺は生きる気力をなくし、今まで俺に嘘をついていた周りの人間に嫌気がさしたんだ」

今思えば、俺の為に嘘をついていたのかもしれない……だが、過去の俺はそれを激しく憎んだ。

零「それで、生きている事に嫌気がさした俺は……自殺しようとしたんだ……」

アマリ「っ……!?」

零「小学校の屋上から飛び降りようとした俺に沢山の先生や友達が止めようとしてくれた……だが、俺は止まる気はなかった……」

……ちようど良い、ここで回想を入れるか。

17年前。

教師1「バカな事はやめろ！新垣！」

教師2 「貴方が死んでしまったら、みんなが悲しむのよ！」

クラスメート「新垣君！」

過去の零「来るな！俺は……みんなの事が嫌いだ!!？俺に嘘をついて……友達や教師面して！」

思えば、あの時俺は激しい憎しみに囚われていたのかもな……。

過去の零「どうせ俺が死んでも……誰も悲しまないんだ！家族や親戚がない俺なんて……ただのお荷物じゃないか！」

そして、俺は飛び降りようとした……。だが、彼奴に止められたんだ。

？「馬鹿野郎!!？」

過去の零「うっ!!？弘樹!!？」

聞き慣れた声が聞こえて、俺はある人物に引つ張られて、反対側に投げ飛ばされた。

その人物こそ、俺の最高の友達……氷室 弘樹だった。

過去の弘樹「誰も悲しまないだと……？お荷物だと!!？」

よく見てみたら、弘樹の後ろには目に涙を浮かべている優香の姿もあったな。

過去の弘樹「じゃあ何で……何で、俺達はこんなにも悲しくなるんだよ!!？何で、優香は今にも泣き出しそうになっているんだよ!!？」

過去の零「それは……」

過去の弘樹「お前が死のうとして悲しんでるからじゃねえのか!!? お前に死んで欲しいくないからみんな、必死になって悲しんでんのじゃねえのかよ!!? 零!!?」

過去の零「…」

過去の弘樹「生きろ零! お前の親は絶対そう言う!」

過去の零「今の俺に… 生きる資格なんて…」

過去の弘樹「だったら、生きる資格を見つける為に生きろ!!?」

過去の零「え…!!?」

生きる資格を見つける為に生きろ…。その言葉で俺の心の中のモヤモヤが一気に消えた。

過去の優香「そうだよ! そんな事言わないで! 資格がなかったら、見つければ良いんだよ!」

過去の弘樹「それまで、たとえ誰かがお前に死ねと言っても、死なせねえ! 俺がお前を守ってやる!」

過去の零「弘樹… 優香…」

過去の優香「生きて、零! まだ… 零と弘樹と一緒に居たいよ!!?」

過去の弘樹「お前が苦しいなら俺達と一緒に背負ってやる! 俺達… 友達で幼馴染で… 家族のようなもんだろ?」

過去の零「家族……俺は……」

過去の優香「零！貴方はどうしたいの？」

過去の零「俺は……生きて良いのか……？」

過去の弘樹「当たり前だろ!!？」

過去の零「俺は……俺は……！ううっ……！うわああああ!!？」

その後俺は全ての悲しみを出すように泣いた……。

そして、先生達にも滅茶苦茶怒られたが、先生達もクラスメート達も泣いてくれた……。

……その笑顔を見て俺は思ったんだ……。俺の命を繋ぎとめてくれたみんなを守りたい……。俺自身の生きる資格を見つける為にも……。

ー現在。

零「だから、今の俺があるんだ。弘樹達の言葉があったから……。俺は今を生きているんだ」

アマリ「零君にそんな過去が……。ごめんなさい……。思い出したくない事を思い出させて……」

零「思い出したくない記憶じゃねえよ……。だって……。それが俺、新垣 零の新たな始まりみたいなもんだっただからよ！」

俺が笑ったのを見て、アマリも笑う。

やっぱり、アマリは笑顔の方がいいな……。

話が終わり、俺達はベンチから立った。

零「そろそろ戻るか！」

アマリ「ええ。そうね」

買い物も終わったし、みんなの元に戻ろうとした俺達。

?3 「貴女がアマリ・アクアマリンですか？」

赤い髪の男が話しかけてきたので俺とアマリは振り返る。

アマリ「は、はい？何ですか？」

?3 「……貴女を殺しに参りました」

っ!? 拳銃!? っ! まずい!

男が拳銃を取り出したのを見て、俺はアマリを突き飛ばした。

それと同時に拳銃は発砲されるが、銃弾はアマリには当たらず、地面に当たった。

? 3 「ちっ！外したか……。なかなかいい反射神経じゃねえかよ！ええ!!?ガキ！」
 先程の紳士的口調から荒々しい口調に変わった男……。これがこいつの本性か……。!!

零 「てめえ……。何者だ!!?何が目的だ!!?」

? 3 「名乗る必要はねえよ！どうせてめえらは死ぬんだからよ!!?」

零 「簡単に死ねるかよ!!?」

俺は男が拳銃のトリガーを引く前に、仕掛け、殴った。

しかし、男は軽くのろけただけで、すぐに不敵な笑みを浮かべながら、俺に視線を戻した。

? 3 「やるじゃねえかよ……。ちよつとばかり痛かったぜえ!!?」

零 「ガハツ!!?」

仕返しと言いたいように男は俺の腹に蹴りを入れ、俺は軽く吹き飛ばされる。

アマリ 「零君!!?」

アマリが俺の下まで駆け寄り、俺を守るように立つ。

? 3 「へえ……。勇ましいねえ！流石は術士様だぜ！」

アマリ 「零君は……。私が守ります！」

零 「何言ってるんだ!!?逃げろ!!?」

アマリ「零君を置いていけません！」

? 3 「お熱いねえく……結局どっちも殺すんだから意味ねえよ!!?」

男は拳銃のトリガーに手をかけた……その時だった。

刹那「2人共！伏せろ!!?」

刹那の声が聞こえ、俺とアマリは伏せたと同時に拳銃の発砲音が聞こえ、銃弾は男の頬を掠めた。

刹那が俺達の下まで来て、拳銃を構えながら男を睨む。

? 3 「久しぶりだな！クルジスのガキ!……嫌、もう兄ちゃんか!!?」

刹那「なつ……!!?アリー・アル・サーシエス！何故貴様がアル・ワースに居る!!?」

貴様はロックオンとの戦いで死んだはずだ！」

サーシエス「知るかよ！目が覚めたら、この世界に居たんだよ！仕方なく、この世界で傭兵をやってるんだよ!!?」

刹那「この世界でも戦争を広める気か貴様は!!?」

サーシエス「当たり前めえだろ！俺は戦争屋だぜ!!?」

刹那「歪んでいる……！貴様は俺が駆逐する！」

サーシエス「なら、ガンダムに乗れよ！相手してやる!!?」

そう言い残し、サーシエスという男は走り去った。

刹那「零、俺はクアンタを取りに行き、みんなに今の状況を伝える……。その間は頼む」
零「ああ！何とか持ちこたえる!!？」
刹那はダブルオークアンタを取りに、走り去った……。

第4話 闇の翼

俺達の居るコールシティの前に複数のモビルスーツ部隊が出現した。

しかも、その中心にいるのは……。

アマリ「ガンダム……？」

赤色のガンダム……!!？」

サーシエス「クルジスの兄ちゃんやんはガンダムを取りに行ったか……。まあいい！今はアマリ・アクアマリンを殺すのが先だ！アルケーガンダムで踏み潰してやらあ！」

って、あのアルケーガンダムっていうガンダムに乗ってるのサーシエスって、奴かよ

！

アマリ「あのガンダムに乗っているのはあの男の人なんですわ……。！」

零「アマリはみんなとゼルガードが来るまで街の人達を避難させてくれ！」

アマリ「零君は!!?」

零「みんなが来るまで時間を稼ぐ……。ゼファイルス!!?」

俺はゼファイルスを呼び出し、乗る。

サーシエス「モビルスーツ!!?嫌、違うな!」

零「アマリとこの街は俺が守る!」

サーシエス「その声……。てめえ!あの時のガキだな!」

零「だったら何だ?」

サーシエス「てめえとの戦いは楽しめそうだ!行くぜえ!」

零「お前は戦いたいのかアマリを殺したいのかはつきりしろ!!?」

俺はモビルスーツ部隊との戦闘を開始した……。

皆さんこんにちは、私はアマリ・アクアマリンです。

アマリ「逃げてください!早く!」

零君の乗るシャイニング・ゼファイルスがモビルスーツ部隊と戦闘している間に私は街の人々を避難させています。

街の人々は混乱しています……。

アマリ「とてもではないけど、避難しきれない……。」

でも、零君は私達を守る為に戦ってくれています……。こんな事で退くわけには……

!

俺……新垣 零はゼファイルスに乗り、モビルスーツを撃墜していく。

この機体……刹那達の話ではAEUのイナクトつというモビルスーツだったよな？

零「よし！この調子なら……！」

サーシエス「そう簡単にいくかな？今頃、街は地獄となっているはずだぜ？」

零「どういう意味だ!!？」

サーシエス「今街に複数の俺の部下を忍び込ませたのさ!!？」

零「な、何だと!!？」

こ、このままじゃ……アマリ達が!!？」

サーシエス「余所見してる場合かよ!!？」

零「なっ!!？グアアツ!!？」

視線が街の方へ行っていた為、サーシエスのアルケーガンダムの接近に対応できず、ゼファイルスはブレードで斬り裂かれ、攻撃を受けた……。

アマリ・アクアマリンです……。

れ、零君のゼフィルスが攻撃を……！

傭兵「動くな！」

アマリ「そ、そんな!? 伏兵がいたなんて！」

傭兵2「アマリ・アクアマリン！ 大人しく、俺達に殺されれば、街の奴らには危害を加えないでおこう」

人質なんて卑怯な……！でも、此処で逆らえば、街の人達は……。

アマリ「……わかりました。私の命ぐらいで街の皆さんが助かるなら……」

そう言つて、私が両手を広げたその時でした……。

零「バカ言つてんじやねえぞ!!？」

っ!? 零君……!??

零「アマリお前！俺が必死になつて戦つてんのに何諦めようとしてやがんだよ!? もう少し粘れ！俺がすぐに向かう!!？」

アマリ「零君……！そうだ。まだ、諦めない!!？」

傭兵「そうか。ならばお前ら！街の住人を殺せ!!？」

? 2「そうはさせるかよ!!？」

伏兵の人達が街の人達に銃を向けた瞬間、服屋で見かけた男の人が叫んでこちらに来て、伏兵の人達を殴り飛ばしていきました。

その後に彼と一緒に居た女の子も駆けつけました。

？「片付けたのか？九郎」

九郎「ああ、アル。。。にしても、悪党つてのは何処の世界にも居るんだな」

あの2人は九郎さんとアルちゃんと言うですか。。。。

アマリ「あ、あの！助けていただき、ありがとうございました！」

九郎「良いって良いって！人質使つて脅す奴らが許せなかつただけだからよ！」

アル「あのロボットも妾達を守る為に戦つておるようだぞ？」

九郎「なら、俺達も加勢しよう！」

か、加勢!?？それよりも伏兵の人達を全員気絶させてます。。。この人達は一体!?？

アル「ふっ、汝ならそう言うと思つたぞ！ぶちかますぞ！九郎!!？」

九郎「応よ！憎悪の空より来たりて、正しき怒りを胸に、我等は魔を断つ剣を執る！

汝、無垢なる刃——デモンベイン！」

―新垣 零だ。

俺は何とか、アルケーガンダムを攻撃を避けつつ、町を守る為にモビルスーツ部隊を撃墜していく。

サーシエス「なかなか持ちこたえるじゃねえか！だが、もう限界だろ!!？」

サーシエスの言葉通り、俺一人で町を守りきるのは限界が来ていた。

だが、その疲れが仇となった。

別方向から数体のモビルスーツが現れ、街の目の前まで移動した。

零「っ!??!し、しまった…!??!」

くそッ！言い訳にしたくないが、疲労のせいで集中力が…！

零「まずい…！このままじゃあ、街のみんなが…アマリが…！」

だが、それよりももっと驚くことになる。

街の目の前に巨大な魔法陣が出現して、そこから巨大ロボットが現れ、魔法陣が消える。

零「今度は何だよ!??!」

これ以上の厄介ごとはゴメンだぞ…！

九郎「大丈夫か!??!金色のロボット！」

アル「妾達が援護する！」

零「み、味方なのか…!??!」

九郎「信じられないのも無理はねえ…。だが、俺は街のみんなを助けたいんだ！」
「…信じられる…。この人は本気だ。」

だからこそ信じられるんだ！

零「わかりました！一緒に街を守りましょう！俺は新垣 零です！」

九郎「俺は大十字 九郎だ！こっちは相棒のアル・アジフだ！」

アル「よろしくと言っておこう！この機体の名はデモンベインだ！」

九郎「まずは周りの雑魚を片付ける！」

アル「良いぞ！飛べ！」

九郎「応よ！」

九郎さんの言葉に呼応するようにデモンベインが高く飛び、一回転して、急降下キックの状態に入る。

九郎「アトランティス・ストライイク!!？」

アトランティス・ストライイクという技で街の近くにいたモビルスーツ部隊を壊滅させた。

す、すごいパワーだな…。

すると、今度はダブルオークアンタ達が現れる。

そして、ゼルガードも現れ、街の近くまで来て、降りる。

アマリ「ホープス！」

ホープス「遅くなりました、マスター。さあ、早くゼルガードへ」

アマリ「わかりました」

アマリもゼルガードに乗り、俺の隣まで来る。

アマリ「零君、遅くなってごめんなさい！」

零「街の人達を逃がしてくれてありがとな！こつから一緒に戦うぞ！」

アマリ「うん！」

九郎「な、何だ!? 敵の増援か!?」

零「違います！みんな俺の仲間です！」

アル「ふむ、どうやらその様だな」

九郎「よっしゃ！これで数の問題は解決だな！」

サヤ「少尉！あれは……！」

アーニー「ああ。デモンベインだな……。でも、どうやら、彼等も僕達の知る大十字架
んとアルさんではない様だな」

……もしかして、九郎さん達もアーニーの世界に居るのか？刹那達と同じで……。

テイエリア「刹那から話を聞いたが、やはりお前か……。アラー・アル・サーシエス！」

サーシエス「ガンダム……。ソレスタルナンタラか！」

刹那「俺達の世界の争いをこの世界に持ち込む気は無い……。だが、歪みである貴様を野放しにはできない……。貴様は駆逐する！」

サーシエス「良いぜ！いつも緑色のガンダムに邪魔されるが、そろそろケリをつけようぜ！」

ワタル「あの人、刹那さん達の知り合い？」

刹那「奴のせいで俺は歪められたんだ」

一夏「前に言っていたゲリラの事か……」

アンドレイ「名だけは聞いたことがある。アリー・アル・サーシエス……。戦争屋だとセルゲイ「ソレストアルビーイング壊滅の時は共に戦った事があるが……今は敵と見る」

グランデイス「なんだって良いさ！」

カンナム「罪もない街の人々を傷つける奴は許さない！」

サーシエス「良いじゃねえか！楽しくなって来たぜー！」

しんのすけ「……」

零「どうした？しんのすけ」

しんのすけ「……父ちゃんの声とそっくりだゾ」

サンソン「は!?？」

ハンソン「しんのすけのお父さんと？」

サーシエス「何わけわからねえ事言ってるだ！早くやろうぜ!!？」

しんのすけ「違うゾ：。父ちゃんのわけない！父ちゃんはオラの父ちゃんは係長で、足が臭くて：。でも、カツコよくて大好きなんだゾ！オラ、お前を倒すゾ!!？」

サーシエス「ずいぶん生意気じゃねえかよ！ガキだからと言って容赦しねえぞ！」

千冬「各機、街を守りながらの戦闘になる、気を抜くなよ!!？」

零「了解！」

俺達はサーシエスの乗るアルケーガンダム率いるモビルスーツ部隊との戦闘を開始した：。

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

アル「理由はわからんが、シャイニング・トラペゾヘドロンとファイナル・シャイニング・トラペゾヘドロンも使えない様だな：。」

九郎「シャインタクも装備してないし、姫さんも居ないから、レムリア・インパクトも撃てねえ：。」

アル「だが、そんな事で臆する妾達とデモンベインではない！」

九郎「応！デモンベインの力、たつぷり味わあせてやるぜ！！？」

〈戦闘会話 零VSサーシエス〉

サーシエス「てめえとはこつちでもやりあつてみたかつたんだよ！行くぜガキ！」

零「俺には新垣 零つて名前がある！それに俺は、お前の遊びに付き合うつもりはない！」

サーシエス「釣れない事言うなよ！もつと楽しもうぜえ！！？」

零「戦闘狂に何を言つても無駄か……。なら、お前の火遊びを此処までにしてやる！」

〈戦闘会話 九郎VSサーシエス〉

アル「九郎！ガンダムとやらが来るぞ！」

サーシエス「ご大層な機体だが、良いのだぜ？」

九郎「舐めんじゃねえ！デモンベインの力を見てもそんな余裕ぶれるか！！？」

サーシエス「だったら、見せてみるよ無駄なる刃と呼ばれたデモンベインの力をよお！」

〈戦闘会話 刹那VSサーシエス〉

刹那「アリー・アル・サーシエス！貴様は……！」

サーシエス「また違うガンダムに乗ってるじゃねえか！クルジスの兄ちゃん！どれだけ成長したか、見てやるぜ!!？」

刹那「クアンタは戦争をする為の機体ではない……！だが、貴様との対話はもはや不可能だ……！貴様は俺が断ち切る！ソラン・イブラヒムではなく、ソレスタルビーイングのガンダムマイスター……刹那・F・セイエイが！」

〈戦闘会話 ティエリアVSサーシエス〉

ティエリア「アリー・アル・サーシエス……。まだ争いを起こす気か……！」

サーシエス「てめえらも似た様な事をして来たじゃねえか！ソレスタルナンタラ！」
 ティエリア「僕達は違う！僕達は人類の未来の為に戦っている！戦闘を快樂と思ってる君と一緒にするな！」

〈戦闘会話 アンドレイVSサーシエス〉

アンドレイ「お前の戦争屋としての仕事も終わる」

サーシエス「へっ！何を言い出すのかと思えば……。散々、世界を混乱させて来たガンダムと手を組んだ連邦軍なんぞ俺の敵じゃねえ！」

アンドレイ「彼等も地球を… 人類を守る為に戦っている！私は軍人として、戦争を広める者を倒すだけだ！」

〈戦闘会話〉 セルゲイVSサーシエス

セルゲイ「ソレスタルビーイング壊滅の時は世話になったな」

サーシエス「お前確か、ロシアの荒熊って言われた男だろ？お前なら俺を楽しませてくれるか？」

セルゲイ「戦争を楽しむつもりはないが、期待には添えようとしよう！だが、此処でその楽しみが終わっても私は責任は取らんぞ！」

〈戦闘会話〉 アマリVSサーシエス

サーシエス「オラオラ！かかってこい！術士！俺が相手になってやる!!？」

アマリ「く、来る…！あの人操縦の腕は確かなようですね…！」

ホープス「今までの敵とは大違いですよ。マスター」

アマリ「それでも負けません！街と自分の命は私が守ります！」

〈戦闘会話〉 ワタルVSサーシエス

ワタル「わっ!??あのガンダムが来る!??」

サーシエス「何だ?救世主って言う割には戦闘がど素人じゃねえか!」

ワタル「あ、あの人……早い!」

龍神丸「スピードに惑わされるなワタル!集中して敵の位置を測れば、攻撃は当たる!」

ワタル「うん!やってみるよ!龍神丸!」

〈戦闘会話 一夏VSサーシエス〉

サーシエス「おいおい!そのパワードスーツを使えば、モビルスーツがなくても戦うし放題じゃねえか!」

一夏「I Sは戦争の道具じゃない!」

サーシエス「結局は誰かを傷つけるもんだろ!」

一夏「そんな事はさせない!俺がみんなを守ってみせる!」

〈戦闘会話 しんのすけVSサーシエス〉

カントム「ガンダムが来るぞ!しんのすけ君!」

サーシエス「お前、しんのすけと言うんだな?俺とお前の父ちゃんの声が似ているん

だよなあ？しんのすけ〜」

カンナム「お、お前：：！」

しんのすけ「オラはおバカだから、どれだけおバかにされてもいいゾ：：。でも、オラの大好きな父ちゃんをおバカにするのは許せない！オラがお前をやつつけるゾ！！？」

〈戦闘会話〉 グランデイスVSサーシエス

サーシエス「戦車でモビルスーツに挑むってか！？一瞬で粉碎してやるぜ！」

サンソン「ハンソン、お前のグラタンを馬鹿にされてるぜ？」

ハンソン「グラタンをただの戦車だと思ったら痛み目をみるぞ！」

グランデイス「なら、見せてやろうじゃないか！カトリイヌの力を！」

サンソン・ハンソン「合点！」

〈戦闘会話〉 アキトVSサーシエス

アキト「戦争を好む戦争屋か：：！」

サーシエス「てめえからも人を殺した匂いがするぜ？」

アキト「確かに俺は復讐鬼となった：：。だが、復讐鬼としてのテンカワ・アキトはもういない！俺は孤独に生きていくだけだ！」

〈戦闘会話　シバラクVSサーシエス〉

シバラク「その戦ぶり……お主は強者と見える」

サーシエス「よくわかってんじやねえかよ！侍!!？お前の剣と俺の剣、どっちが強えんだろうな!!？」

シバラク「民を傷つけるお主の剣などに拙者の剣が負けるわけないでござる！その報いを受けよ!!？」

〈戦闘会話　マサキVSサーシエス〉

サーシエス「変形する機体か！これは楽しめそうだぜ！」

シロ「マサキ！赤いガンダムが来るニヤ！」

マサキ「お前に付き合う気はないが、街の人々を守る為ならやつてやるよ！俺達とサイバスターで！」

〈戦闘会話　アーニーVSサーシエス〉

アーニー「成る程、お前も傭兵か」

サーシエス「あん？って事はためえも傭兵か！傭兵同士、戦争を楽しもうぜ!!？」

アーニー「生憎と時間をかけるのは好きじゃなくてね……。一瞬で終わらせる!!?」

〈戦闘会話 サヤVSサーシエス〉

サーシエス「戦闘機が相手か!落とし甲斐があるぜ!!?」

サヤ「こう言う人を見ていると前の少尉の言っていた事も理解できません……。でも、私達と貴方は違います!戦いを快楽としか感じない貴方を私が倒します!」

俺達は協力して、モビルスーツ部隊を壊滅させ、ダブルオークアンタもトランザムを発動させて、アルケーガンダムを攻撃しまくり、サーシエスを追い詰めた。

サーシエス「ぐっ!!?やっぱり、まだ機体の差があるのか!?!」

テイエリア「此処で終わりだ。アリー・アル・サーシエス!」

サーシエス「こうなったら、任務が先だ!アマリ・アクアマリン!死にやがれえええええ!」

っ!!?あの野郎……。アマリに狙いを定めやがった……。!!?」

ホープス「マスター、回避を!」

アマリ「ま、間に合いません！」

：：このままじゃ、アマリが死ぬ…？ そんな事…？ そんな事…！

零「させるかあああああつ！！？」

俺がゼフィリスを動かすと、何故かアルケーガンダムが目の前にいて、クロスソードで斬り飛ばした。

サーシエス「な、何？？ てめえいつの間に？？」

千冬「何だ？？ あの速さは？？」

：：俺はこの時、気がついていなかった…。アマリを守ろうとした一瞬、俺の目の黒目部分が赤く発光したことを…。

アル「今だ！ 九郎！！？」

九郎「あれで行くぜ！！？ はあああああつ！！？」

アル「イア！ クトウグア！ イア！ イタクア！」

九郎「いつけええええつ！！？」

デモンベインは二丁の拳銃を装備して、銃弾を発射した。

九郎「旧支配者の力、受けてみやがれ！！？」

銃弾を受け続けたアルケーガンダムは大きなダメージを受けた。

サーシエス「く、クソが…！ 一旦退くしかねえ！」

そう言い残し、アルケーガンダムは撤退した……。

ワタル「あの人は逃げたようだね」

刹那「だが、奴は必ずまた来る」

マサキ「その時はまた返り討ちにしたらいいさ」

そうだな……。ん……。!? 何かが複数近づいて来る!??

サーシエスとの戦いが終わった俺達の目の前に数機のロボット軍団が現れる。

カンナム「な、何だ!? 彼らは!?」

アマリ「ホープス！ 彼等は……！」

ホープス「はい。どうやら、オニキスが来たようですね」

アーニー「オニキス……。!?」

シバラク「このアル・ワースを戦火に包む輩だ。」

こいつらの組織の名がオニキスってわけかよ！

すると、奴らは銃撃を発砲して来た。

しんのすけ「撃ってきたゾ！」

アキト「迎え撃つぞ！ このままではこちらが危ない！」

だが、奴らの狙いは俺になる。

俺を……。狙っているのか!??

一夏「零を狙ってるのか!!?」

グランデイス「つて事は、零か、ゼフィルスに何か用があるようだね!」

千冬「零! 気をつけてかかれ!」

零「はい!」

よくわからねえが…… やってやるよ!

俺達はオニキスのロボット軍団との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VSオニキス兵士〉

零「こいつらの乗っている機体の名前は…… ガルム……。 何故……。 俺はこいつらの事を知っているのか……!!? それともゼフィルス……。 お前が……」

〈戦闘会話 アマリVSオニキス兵士〉

ホープス「まさか、彼等が動き出すとは……。 この旅は過酷になるかもしれません」

アマリ「それでも彼等を許す事は出来ません! それに、零君を守らないと!」

ホープス「では、奴らに我々のドグマを見せてやりましょう。マスター」

俺達はオニキスのロボット… ガルム軍団を撃墜していき、残り1機となった。

零「お前で最後だ!!？」

俺はゼフィルスを動かし、残り1機のガルムをクロスソードで斬り裂こうとした…。だがそれは、突然の銃撃によって阻まれた。

零「ぐっ!!? な、何だ!!？」

俺はガルムから距離を取り、銃撃を放った者の方向に視線を移すとそこには黒いゼフィルスが居た…。

零「な… 何だと… !!？」

アンドレイ「ば、馬鹿な!!？」

刹那「黒い…」

アキト「ゼフィルス… !!？」

黒いゼフィルスの登場に俺を含めたみんなは驚く。

こ、このゼフィルスは一体… !!？」

零「お前… 何者なんだ!!? そのゼフィルスは何なんだ!!？」

? 「俺の正体は聞かずともわかるだろ? 零」

黒いゼフィルスからの音声通信… !!? って、この声は… !!? !

零「嘘……だろ……。？何だよ……。何でお前がこの世界に……。そもそも、何でそんな機体に乗ってんだよ!!？弘樹!!？」

声だけでわかった……。嫌、わからないわけない……。

黒いゼフィルスに乗ってるのは間違いない、俺の幼馴染で親友で……。家族の氷室 弘樹だ。

弘樹「やっぱ、わかったか……。零」

アマリ「ひ、弘樹って……。零君の家族と言っても良い人の……。！」

アマリが何かをつぶやくが俺には聞こえてこない……。それ程、驚いているからだ……。

零「答えろ！何故お前がアル・ワースに居る!!？その黒いゼフィルスは何だ!!？」

弘樹「……。お前が知る必要はない。此処で俺と、このダークネス・ヴァリアスに倒されるんだからな！」

ダークネス・ヴァリアス……。それが、あの黒いゼフィルスの名前か……。？

それよりも、俺を倒すだつて!!？

零「な、何故俺を倒すんだよ!!？」

弘樹「お前が邪魔だから……。ただそれだけだ！」

零「何わけわかんねえ事言ってるんだよ！良い加減俺にわかる説明をしやがれ！」

弘樹「その必要はないと言ってるだろ！覚悟しろ！零!!？」

それだけ言った後、ダークネス・ヴァリアスは俺目掛けて動き出した……。

零「……ちっ！仕方ねえ……！やるってんならこっちだつて容赦しねえぞ！弘樹！！」

一夏「零！俺達も！」

零「みんなは手を出さないでください！この馬鹿は俺1人でやります！」

俺達の戦いにみんなを巻き込むわけにはいかないからな……。

ワタル「わかったよ！零さん！」

アマリ「でも、危なくなったら、加勢に入るから！」

零「ああ！」

俺は弘樹の操るダークネス・ヴァリアスとの戦いを開始した……。

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

零「弘樹！本当にやる気なんだな!!？」

弘樹「しつこいぞ零！俺はお前を倒すつて言つてんだろ！」

零「なら、もう容赦はしねえ！負けて泣きべそかいても知らないからな！」

弘樹「それはこっちのセリフだ!!？」

シャイニング・ゼフィルスとダークネス・ヴァリアス……

この2機は見た目が似ているだけではなく、性能、武装も全く同じだった。

違うと言ったら、パイロットの操縦技術か……？

ヴァリアスの銃撃攻撃を避け続け、俺はクロスソードを持ち、ヴァリアスに斬りかかる。

だが、ヴァリアスもクロスソードで防ぎ、何度もぶつけ合った。

そして、最後、すれ違うように一閃を入れ合う。

零「ぐあっ!!?」

結果は俺のゼフィルスがダメージを受けて、地面に落下……激突した。

そんな俺とゼフィルスを見下ろす弘樹とヴァリアスはクロスガンを合体させ、プラスターモードにして俺とゼフィルスの方へ構えた。

……そろそろか？

俺の思惑通り、ヴァリアスにも軽いダメージが入り、ヨロけた。

弘樹「な、何!!?」

零「……俺がお前だけの攻撃を受けると思ったか？お返しだよ」

弘樹「：．．くっ！零！今日はこのぐらいで勘弁してやる！」

零「お、おい！弘樹！待ちやがれ！」

弘樹「次こそはお前を倒すからな！」

そう言い残した弘樹はヴァリアスこと撤退する．．．

あの野郎．．．全然俺の話を聞きやしねえ．．．！

見れば、俺が倒し損ねたガルムも撤退していた。

零「クソが．．．馬鹿野郎．．．馬鹿野郎オオオオツ!!？」

今になって、弘樹が敵になった事に怒りが込み上げて来て俺は大きく叫んだ．．．

戦闘が終わり、俺達はロボットから降りた。

ティエリア「では、アル・アジフ．．．君はその、魔導書なのか？」

アル「うむ、そうだ！そして妾は九郎と契約を結んだ」

九郎「ほぼ無理やりだったけどな．．．」

ワタル「九郎さんは探偵．．．なんだよね？」

九郎「ああ、冴えない私立探偵さ」

みんなは九郎さんとアルの情報を聞いていたが、俺はそれどころではなかった。

親友だった弘樹が敵になった……何故なんだ……。

刹那「零、あの黒いゼフィルスのパイロットは本当にお前の親友なのか？」

零「ああ……」

マリ「でも、どうして友達の方が零さんを狙うの？」

零「……俺が聞きてえよそんな事……！」

マリ「の言葉にムキになる俺をアンドレイ大尉が制止した。

それ程、混乱してらるって事かよ……。

クラマ「お前さん、その親友とやらの気に触ることをしたんじやねえのか？」

零「……わからない。」

わからない……でも……もう悩んでる場合じゃないかも……。

セルゲイ「零君、次に彼が来たらどうする？」

零「……俺はこのアル・ワースを救うって決めました……それを阻むのが彼奴なら、

機体を無力化して止める……。それでも、駄目なら彼奴を……倒す!!？」

冬樹「零さん……」

グランデイス「私達もできるだけ援護するよ。零」

零「ありがとうございます！グランデイスさん！」

俺は決心を固めて、再び、ドッコイ山へ目指し始めた……。

：： 来るなら来やがれ、弘樹：：。
お前がどんな理由で俺に戦いを挑んでこようが俺
は負けない：：！

第5話 放浪の聖戦士達

「俺……水室 弘樹は撤退して、オニキスの基地へ戻ってきた……。」

司令室に入ると、仮面をつけたオニキスの首領が居た。

「逃げて帰ってきたと判断すれば良いのか？水室 弘樹」

弘樹「こっちは機動兵器に乗るのが初めてだったんだ……。このぐらい大目に見てくれよ」

「まあ、初陣にしてはよくやったほどだ……。だが、これを超えるのなよ？」

弘樹「アンタに言われなくてもわかってるよ。それよりも、俺の約束は守るんだろうな？」

「ああ、必ず守る」

正直信用して良いのかはわからない……。でも、俺達の運命はこいつが握っているのは変わらない。

……だから、零。悪く思うな……。次は必ずお前を……！

？「それと任務を勘違いしているようだが、お前の役割は新垣 零とシャイニング・ゼ

ファイルスの捕獲だ」

弘樹「何故、アンタが異世界の零にそこまで興味を示す？」

？「余計な搜索はしないという話だ」

結局、目的はわからないってわけか……。

零、次に会った時は覚悟しやがれ……！

俺…… 渡部 クラマはピンチに陥っていた。

クラマ「も、申し訳ありません！本当に申し訳ありませんでした！」

クルーゾング・トムとの通信で前回の戦闘の事を物凄く怒られている。

クルーゾング・トム「いいや、許さん！貴様の邪魔のせいでワタルを葬るチャンスを逃したのだ！本来なら、俺のセカンドガンにくくりつけて引き回しの刑にしてやるつもりだぞ！」

クラマ「あ、あれは偶然が重なって……」

クルーゾング・トム「…… まあいい」

…… は？

クラマ「え……」

クルージング・トム「ザンコック様……と言うよりドアクダー様はワタル達の一行に加わった女の子に興味があるそうだ」

クラマ「女の子……と言いますとナディアとかいう奴でしょうか……」

クルージング・トム「そう！そのナディアだ！」

ドアクダーがナディアに興味を示している……だと？

クルージング・トム「あの娘を見張れ！何かおかしな動きを見せたら、すぐに知らせろ！」

クラマ「一体何のためにです……？」

クルージング・トム「知らん！俺は別の任務で忙しくなるんだ！いいか、クラマ！この任務があるから、生かしておいてやるんだ！それを忘れるなよ！」

くそっ……！俺が生き残るためにも……何より俺の願いのためにももう失敗は許されねえ……！

俺……新垣 零はまたもやテントを張り、休息を取っていた。

今現在、アマリとホープスがなんかやってるし。

アマリ「…」

ホープス「此処で格言を1つ…。下手の考え、休むに似たり…」

アマリ「私が考えても無駄だって事ですわね…」

ホープス「いい機会ですので、はつきり申し上げますが、そのようにすぐに自信を失うのはマスターの大きな短所です。悩みがあるのなら、皆さんと共有すれば良いのです。今は私と2人旅ではないのですから」

アマリ「でも…」

ホープス「否定の言葉は、自分自身を殺す事になるのを、お忘れなく」

アマリ「…」

零「言い方はきつめだが、ホープスの言う通りだな。」

マサキ「ああ。1人で悩むこたあねえぜ、アマリ！」

アーニー「まあ、君が何に悩んでいるかは、口に出さなくてもわかるけどね」

アマリ「零君、マサキさん、アーニー少尉…」

サヤ「こうも立て続けに異界人と出会えば、不安になるのも当然です」

アマリ「でも、私が今まで遭遇した人達と違って、零君達もジャン君達も特に異常は

見られません…」

マサキ「そいつらが抜け殻みたいになっても気になるがよ…」

零「… まずは異界人が立て続けに現れる方法を何とかしないとな」

マサキ「俺のセリフを取られた!!？」

アーニー「そうだね。この間のネオ・アトランティスのようにドアクダー軍団に協力する事になれば…」

アマリ「はい。今まで以上に彼等は勢力を拡大させるでしょう」

サヤ「それにアリー・アル・サーシエスやミッドナイトの事もあります」

確かに、みんながみんな、ドアクダーと手を結びやがったらとんでもない事になるな…。

オニキスの件もあるし…。

ワタル「でも、こつちだつて、零さん達やグランデイスさん達に手伝ってもらつてるんだから…」

一夏「そうだな。もし、また異界人が来たら、こつちの仲間になつてくれるように頼んでみようぜ」

アマリ「ワタル君と一夏君はポジティブですな」

零「お前がネガティブすぎんだよ…」

アマリ「うっ…!!？」

ワタル「… それつて前向きつて意味だよな。そんな風に言われたら、嬉しくなるな」

一夏「褒められてるって感じがするな」

アマリ「……そう言う所……見習わせてもらいます」

零「俺もワタル達の提案には賛成だな。仲間が多い方が良いし」

マサキ「上手くいくかどうかは別にしてな」

ワタル「ネオ・アトランティスの人達も状況がわかったら、僕達に協力してくれると思おうよ」

刹那「そうだな。人は話をすれば分かり合える」

ジャン「でも、あいつ等がナディアを狙う以上、仲良くは出来ないよ」

アーニー「そう言えば、ワタル君はオババ様と言う人に呼ばれてアル・ワースに来たそうだけど、僕達はどうやって、来たのかな？」

アキト「みんながボゾンジャンプで転移してきたわけでもなさそうだしね」

ジャン「異なる世界の壁を越えるような自然災害に巻き込まれたんだと思うけど……」

マサキ「そうとも限らねえぜ」

サヤ「どう言う事です？」

零「何者かが何らかの意図を以て、アル・ワースに異界人を招き入れてる……って事か？」

アマリ「そうかもしれません……」

アーニー「成る程、僕達の戦力を自分のものにするために……か……。」

ジャン「その何者か……」

刹那「……オニキスか？」

零「嫌、あくまであいつらは俺だけを狙っていた……あいつらは違うだろう」

ーシユピーン！

俺達が話していると遠くから何かが横切った。

一夏「うわっ!!?」

アキト「今……何かが横切った……！」

ーシユピーン！

ま、また横切った……！

刹那「ダメだ……！早すぎて、何かはわからない……！」

アマリ「お、大きな虫……!!?それとも鳥……!!?」

アーニー「な、何だか見覚えが……」

ホープス「マスター、こう言う時には速度強化のドグマをお勧めします」

アマリ「わかりました……！やってみます！」

零「頼む！アマリ！」

「ヒミコ」それより、あちしに任せるのだ！」

ヒミコ…… ！！？

ヒミコ「忍法、トンボつかみの術！それっ！」

嫌、それ忍法じゃ……？

ヒミコ「捕まえたのだ！」

…… 何イイイイイツ ！！？

アキト「凄いやないか、ヒミコちゃん」

ワタル「流石は忍部一族のお頭！」

マサキ「さあ……！正体を拝ませてもらうぜ！」

ヒミコが手を開くと、そこには赤い妖精の様な者が居た。

？「もう乱暴じゃないの！」

ワタル「ええっ…… ！！？」

零「な…… 何だ？こいつ…… ！！？」

？「驚かせたのは悪かったけど、やり方ってものがあるんじゃないの！」

アマリ「え…… 妖精…… なの…… ！！？」

？2「何やってんの！チャム！」

チャム「仕方がないじゃない！エレボス！」

こ、今度は人間サイズの妖精が現れた……。
零「な、何なんだ？ 一体……」

「俺…… ショウ・ザマは暗闇の中にいた……」

？ 「ショウ…… ショウ・ザマ……」

突然、俺に声が聞こえた……

その声は…… シーラ・ラパーナ……？

？ 「目覚めなさい、ショウ・ザマ……。そして……」

そして、俺が目を覚ますと、見知らぬ場所にいた。

ショウ「……！」

俺は自分の体を見渡す。

ショウ「俺は…… 生きている……。腹の傷もない……。あの戦いで俺はバーンと刺し違えて、その後、シーラ・ラパーナの浄化で……」

俺はもう1度辺りを見渡した。

シヨウ「ここ……地上でもなければ、バイストン・ウエルでもないようだけど……」
すると、誰かが近づいてきた……。

足音からして……2人か……？

？「目を覚ましたか、シヨウ」

シヨウ「トツド！……それと……」

？2「俺はエイサツプ・鈴木です！」

歩いてきたのはトツドともう1人の金髪の少年だった。

少年はエイサツプ・鈴木と名乗った。

シヨウ「トツド……どうしてお前が……？」

トツド「ハ……！驚くのも無理はないか。お前に負けた俺が、こうして生きているんだからな」

シヨウ「それを言うなら俺も……。エイサツプ、君もか？」

エイサツプ「俺はある戦いが終わった後、ある人の墓の前に居たんですけど、気がつけば此処に……」

トツド「それで俺と会ったって訳だ。どうやら、こいつもバイストン・ウエルやオーラバトラーの事を知っているみたいだぜ」

え……！！？

シヨウ「そうなのか!!?」

エイサツ「でも、話を聞く限り、俺の知るバイストン・ウエルとは少し違うんですよ..」

トツド「な?わけわからんだろ?」

シヨウ「.. バイストン・ウエルは異世界だ..。もしかすれば、もう1つの俺達とは別世界にあるバイストン・ウエルかもしれないな」

トツド「パラレルワールドって奴か?俄かには信じがたいが..。状況が状況だ。信じられないだろう..」

確かに俺達はバイストン・ウエルという異世界に居たからな..。パラレルワールドがあってもおかしくはないだろう..。

トツド「事情は、よくわからんが、地上でもバイストン・ウエルでもないここで俺達は再会したってわけだ。そういうわけなんで、今さらお前と争うつもりはないぜ、シヨウ」

シヨウ「トツド..」

トツド「エイサツが居てくれて助かったぜ..。見知らぬ世界でシヨウと2人つきりつてのはぞつとするからな」

シヨウ「でも、バイストン・ウエルで初めて会った時を思い出すよ」

エイサツプ「2人は仲が良いんですね」

トツド「やめてくれ、余計にぞっとするからよ」

そこまで引かなくても良いじゃないか……」

シヨウ「それにしても、ここにいるのはお前達だけか？」

トツド「ああ……。俺達も目を覚ましたのは、ほんのついさっきの事だ。で、エイサツプを見つけたら、近くを搜索したんだ」

エイサツプ「そうしたら、倒れているシヨウさんを見つけたんです」

マーベルも、ニー達もいないのか……」

トツド「俺の方にはピアレスがある。とりあえず、そいつで探索の範囲を広げてみるか……」

シヨウ「トツド！エイサツプ！空を見ろ！」

エイサツプ「あれは……？」

第5話 放浪の聖戦士達

トツド「あれって……」

シヨウ「ドラムロだ！」

エイサツプ「あれがシヨウさん達の世界のオーラバトラー……」
すると、ドラムロが現れる。

見た事もないオーラバトラーも居るが……。

トツド「ドレイク軍か、ビシヨット軍の生き残りか……」

エイサツプ「そ、そんな…… 何機かは僕の世界のオーラバトラーも居ます……！ホウ
ジヨウ軍がどうして……！」

すると、オーラバトラーからフレイ・ボムが放たれて、俺達の近くに着弾した。

シヨウ「フレイ・ボムを撃ってきた！」

トツド「逃げろ、シヨウ！エイサツプ！」

エイサツプ「トツドさん……？」

トツドはビアレスに乗り、動かす。

トツド「何しやがる、お前等！こんなどこだかわからない場所で戦うつもりか……？」

バイストン・ウエル兵「……」

ホウジヨウ軍兵士「……」

トツド「俺はトツド・ギネスだ！ホウジヨウ軍とか言うのは兎も角、ドレイク軍か、ビ

シヨット軍の奴らは聞いた事があるはずだ！」

バイストン・ウエル「相手が聖戦士だろうと俺達は生きてために戦う……！」

ホウジヨウ軍兵士「例え、異世界でも……！」

すると、奴らはビアレスに砲撃を仕掛けた……！

シヨウ「トッド！」

トッド「くそっ！やるってんなら、相手になってやるぜ！後悔するなよ、お前等！一度死んだ俺だが、2度死ぬ気はないからな！」

そう言い残し、トッドはビアレスを操り、オーラバトラー軍団と戦い始めた……。

トッドの操るビアレスがドラム口を一機撃墜する。

エイサップ「あいつ等……！一体何のために俺達を狙うんだ……！」

シヨウ「わからない……何か、目的が……」

ーシユピーン！

すると、見慣れた姿の妖精と人間サイズの妖精が飛んできた。

チャム「シヨウ！」

エレボス「エイサツプじゃんか！」

シヨウ「チャム！チャム・ファウか！」

エイサツプ「え、エレボス……？リクス達と一緒にバイストン・ウエルに戻ったはずじゃ……？？」

チャムに……エレボスと言うのはエイサツプの知り合いの様だな……。

チャム「やつぱり、シヨウだ！やつと見つけた！」

エレボス「また会えて嬉しいよ！エイサツプ！」

チャム「シヨウ！ダンバインを持ってきたよ！」

エレボス「ちょうど良かった！実は私もナナジンを持ってきたんだ！」

すると、ダンバインと青いオーラバトラーを抱えた機動兵器が複数現れた……。

―新垣 零だ……。

俺達それぞれロボットに乗り、チャムとエレボスの頼みであるオーラバトラーというロボット……ダンバインとナナジンを運ぶ。

どうやら、シヨウという人物を見つけた様だ。

シヨウ「ダンバイン……！」

エイサツプ「ナナジン……！でも、色が青に戻ってる！」

チャム「あたし、ダンバインと一緒にこの世界に跳ばされたみたいなの！それで、ずっとシヨウを探してたのよ！」

エレボス「私も同じ！ナナジンと一緒に跳ばされて、リユクス達を探していたら、チャム達と会って、一緒に探してたんだ！」

エイサツプ「リユクスもこの世界に……？」

「どうやら、ナナジンはあのエイサツプって奴の物らしいな。」

チャム「シヨウ！早く乗って！」

エレボス「行こう！エイサツプ！」

シヨウ「わかった！」

エイサツプ「ああ！」

それぞれ、シヨウはダンバインに、ナナジンにはエイサツプが乗った。

シヨウ「トツド！今、行く！」

エイサツプ「俺も続きます！」

ダンバインとナナジンは戦っているオーラバトラーの隣に立つ。

トツド「シヨウとエイサツプか！」

シヨウ「ああ！ダンバインがあれば、俺も戦える！」

チャム「やつちやえ、シヨウ！」

エイサップ「久しぶりだな……ナナジンに乗るのは……」

エレボス「頼んだよ！エイサップ！」

3機のオーラバトラーは戦闘態勢に入る。

それをワタルが止めた。

ワタル「待って、チャム！戦う前にやる事があるから！」

…… おっと、そうだな。取り敢えず、話し合いだ。

ワタル「えーと……そちのコーラバトラーさん達、聞こえますか？」

しんのすけ「コーラじゃなくて、ソーダーだゾ！」

零「いや、それも違う！」

千冬「オーラだ！」

ワタル「あ、間違えた！聞いてください、オーラバトラーさん！僕はワタルって言います！戦いをやめて、僕達と話をしましょう！」

さて、うまくいくか……？

バイストン・ウエル兵「あいつがワタルか……！」

ワタル「え……！僕の事、知ってるの……？」

アンドレイ「ワタル君の事を知っている……？」

セルゲイ「これはまずい……既に遅かったか……！」

……まさか、もう既に……！

ホウジョウ軍兵士「お前を見つけたら、攻撃しろと言われている！」
そう言つて奴らは龍神丸を攻撃する。

ワタル「うわつと！」

冬樹「そ、そんな……！いきなり攻撃するなんて！」

シバラク「ええい！血の多い奴等め！」

テイエリア「やはり、戦うしかない様だな」

グランデイス「ワタルを攻撃しろと命令されているつて事は……！」

アマリ「あの人達はもう……！」

一夏「ドアクダーと手を組んでるつて事か！」

やっぱり、手をくれだったか……！

龍神丸「ワタル！残念だが、こうなったら戦うしかない！」

アキト「その様だな……！」

刹那「まずは奴等のオーラバトラーを無力化する！」

ワタル「わかったよ！龍神丸！刹那さん！」

トッド「何処のどいつだか知らないが、結果としては火に油を注ぐ事になったな！」

シヨウ「向こうも生き残るために戦うなら、こっちも同じだ！やるぞ、チャム！」
チャム「うん！行こう、シヨウ！」

エイサツプ「出来れば、話し合いで済ませたいけど… そうも言つてられないな！本気でやるぞ！しっかり掴まってるよ！エレボス！」

エレボス「うん！頑張って！エイサツプ！」

俺達はオーラバトラー軍団との戦いを開始した…。

〈戦闘会話　エイサツプVS初戦闘〉

エイサツプ「また争いが起こるのか…！」

エレボス「これも、運命なのかもね…！」

エイサツプ「何が運命だ！俺達はサコミズ王に世界を託されたんだ！こんな所で負けてられるか！」

次々とオーラバトラーを撃墜していく俺達…。

バイストン・ウエル兵「くっ…！あんな連中に従った結果が、これか…！」

そう言い残し、爆発する。

チャム「あの人達……誰かに命令されていたの……？」

エレボス「そうみたいだね」

シヨウ「あのドラム口部隊も俺達もシーラ様の浄化によって、ここに跳ばされてきたのか……」

そして、俺達はオーラバトラー部隊を全て撃墜した……。

トッド「聖戦士2人を相手にするなんて馬鹿な連中だぜ……」

エイサツプ「俺も一応、聖戦士何ですけどね……」

シヨウ「油断するな、トッド！次が来た！」

シヨウの言葉通りに今度はクルージング・トムに乗るセカンドガンも魔神、オーラバトラー部隊が現れた。

ワタル「クルージング・トム！」

クルージング・トム「何だ、何だ！折角雇ってやったのにムシ軍団は、もう全滅か！」

シヨウ「ムシって……オーラバトラーの事か！」

刹那「やはり、奴等はドアクダーの配下となっていたのか……」

クルージング・トム「まあいい。あいつ等のおかげで腕の立つ奴等を見つけたからな」
零「何…？」

クルージング・トム「その灰色と水色と青色の！」

トッド「あのオツサン…。ピアレスとダンバイン、ナナジンの事を言っているのか？」

お、おいおいまさか…？

クルージング・トム「どうだ、お前等？ドアクダー軍団に来ないか？」

シヨウ「ドアクダー軍団…？」

エイサツプ「それがお前達の組織なのか…？」

チャム「行っちゃ駄目だよ、3人共！」

エレボス「あいつ等は悪い奴だって、ワタル達が言ってたんだ！」

シヨウ「ワタルって、ダンバインを運んでくれたあの子か…」

エイサツプ「彼等はドアクダー軍団と敵対している様ですね」

クルージング・トム「ドアクダー様は、このアル・ワースの支配者になられる御方だ。

その部下になれば、いい思いが出来るぞ」

零「ちっ…！物は言いようだな…！」

アル「他の異界人もその様にして、配下に収めているのか！」

九郎「やり方が気に入らないぜ…！」

だが、シヨウウ達が敵になると厄介だぞ……！

トツド「支配者ね……。さっきのオーラバトラーの奴等もそうやってスカウトしたつてわけかよ」

クルージング・トム「連中を返り討ちにした事は許してやる。だから、俺と一緒に来い」

アキト「あいつは悪だ！」

ワタル「そうだよ！言うこと聞いちゃ駄目だ！」

クルージング・トム「お前達は黙っている！」

トツド「まあ確かに正義の味方って面構えじゃないな……」

クルージング・トム「この際、灰色と青色はどうでもいい！水色の方はどうだ？」

トツド「何っ!?？」

クルージング・トム「さっきの戦いを見ていたが、水色の方が明らかに強さが上だからな」

トツド「おい、オッサン……。あの程度で俺の実力をわかった気になるなよ。何なら、あんたの目の前でシヨウウを倒して、俺の力を見せてやろうか？」

アマリ「え……。!?？」

はあ!?？こいつ、何言ってるんだよ……。!?？」

シヨウ「何を言うんだ、トツド…！ 奴の背後の悪しきオーラがわからないのか！」
エイサツプ「そうですね！これは罠です！」

トツド「俺に意見するな、シヨウ！エイサツプ！」

シヨウ「トツド…！」

トツド「確かに俺は一度はシヨウに負けたさ…！だがな、お前のしたり顔の説教な
んぞ、聞く気がないんだよ！エイサツプ、お前の説教もな！」

エイサツプ「そ、そんな…！」

トツド「此処が、地上でもバイストン・ウエルでもないなら、丁度いい！俺は此処で
人生をやり直す！」

エイサツプ「そ、そんなのダメだ！トツドさん！」

シヨウ「どうしたんだ、トツド！憎しみのオーラに取り込まれたのか！」

チャム「や、やだ…。トツドのオーラが歪んでいく…！」

エレボス「まるでサコミズ王みたいだよ…！」

トツド「あばよ、シヨウ！エイサツプ！」

トツドの乗るビアレスはセカンドガンの隣まで移動した。

トツド「そこで見ていな、オッサン！俺とシヨウ…どちらが強いか教えてやる！」

クルージング・トム「いいぞ！お前は、どうやら俺の想像以上の男だったようだ！お

前達も来い！」

クルージング・トムが叫ぶと新たに2機のオーラバトラーが現れる。

エレボス「エイサップ！シンデンだよ！」

エイサップ「2機のシンデン……？まさか……！！？」

？「そのまさかだよ！エイサップ！」

？2「久しぶりだな！」

エイサップ「朗利！金本！お前達なのか！！？」

あの2機のオーラバトラーのパイロット……エイサップの知り合いなのか……？

エイサップ「何故、お前達が此処に！！？」

朗利「俺達もこの世界に飛ばされてな！」

金本「それで、ドアクダー軍団に雇われたんだよ！」

エイサップ「奴等は悪い奴ら何だぞ！」

朗利「だから何だよ！俺達はお前の敵なのは変わりねえだろ！」

金本「この前の戦いの借りを返してやるよ！」

エイサップ「分ならず屋が……！なら、容赦しないぞ！！？」

何で、オーラバトラーに乗る奴って、友人と敵対するんだよ……！

朗利「って事だ！俺達は俺達でやりたいようにやる！」

トツド「勝手にしろ。だが、シヨウだけは俺の手で倒す！」

クルージング・トム「良いだろう！この場はお前達に任せる！グッドラック！」
そう言い残し、セカンドガンは撤退した……。

トツド「ちっ……！こつちを煽っておいて、自分は後退かよ……！」

朗利「まあ、命令されるよりマシだけだな！」

シヨウ「やめろ、トツド！俺達は……」

トツド「黙れ！」

すると、ビアレスの力が蓄積された。

チャム「トツドのオーラ力がどんどん上がっていくよ！」

千冬「あれがオーラ力と言うものなのか……！」

シヨウ「この感じ……！トツドがハイパー化した時と同じだ！」

トツド「お前はいつだってそうだ、シヨウ！バイストン・ウエルでも、地上でも、そして、此処でも俺の邪魔をする！」

エイサツプ「シヨウさん！」

シヨウ「戦うしか……ないのか……！」

ワタル「何がどうなってるの……！！？」

龍神丸「あの男は危険だ、ワタル！」

ホープス「周辺のオドが乱れています」

カンナム「全て彼の仕業なのか……？」

アマリ「お、恐らく、あの人が原因なのは確かです……！」

一夏「ど、どうするんだよ！」

零「どうするも何も、やる事は決まってるんだろ！」

チャム「みんな！トツドを止めて！」

グランデイス「止めるも何も、向こうは完全にやる気なんだ！」

サンソン「あの様子じゃ、俺達も標的になっているな……！」

ハンソン「ええ!?？そんなあ……！」

シヨウ「だけど、このままじゃ、あの時の繰り返しじゃないか……！」

チャム「シヨウ……」

シヨウ「掴まっている、チャム……！トツドが俺への憎しみで変わってしまったのなら、俺がトツドを止める！」

トツド「来い、シヨウ！バーストン・ウエルと地上での借り、此処で纏めて返してやる！」

金本「俺達も始めようか！」

朗利「倒されても文句を言うなよ！エイサップ！」

エイサツプ「くっ…！お前達、ふぎけるんじゃない!!？」

俺達はトツドを止める為に戦いを再開した…。

周りの雑魚を倒しつつ、ダンバインはビアレスに近づいた。

シヨウ「どうしたんだ、トツド！あんな男の口車に乗って！」

まさか、シヨウの奴… トツドを説得する気か…!??

トツド「馴れ合うな、シヨウ！俺とお前は、こうなる運命だったんだ！」

シヨウ「機体から降りろ！此処にはドレイクもビシヨットも居ないんだぞ！」

トツド「あいつ等の命令で戦うんじゃない！俺はいつだって自分の力で自分の欲しいものを手に入れる為に戦ってきた！だから、此処でもそうするだけだ！」

チャム「シヨウ！トツドのオーラが歪んでいってる！」

シヨウ「俺への憎しみのためなのか…！俺は…：力でトツドを止めるしかないのか…！」

トツド「それでいいんだ、シヨウ！お前の全てを俺にぶつけてみせろ！」

次にナナジンがビアレスに接近した…。

エイサツプ「戦いをやめてください！トツドさん！」

トツド「俺の何も知らないお前が俺に命令するな！エイサップ！俺はシヨウを倒して、俺が強いつて事を証明してやるんだ！」

エイサップ「力に飲み込まれないでください！貴方は力に負けるような人じゃないはずです！」

トツド「俺は負けるつもりはない！力であっても…シヨウであっても…エイサップ、お前であつてもな!!？」

エイサップ「くっ!!？やつぱり、やるしかないのか…！」
シヨウとエイサップの説得も無駄だったか…！」

〈戦闘会話 エイサップVS朗利〉

朗利「エイサップ！俺の力を見せてやるぜ！」

エイサップ「此処は俺達の世界じゃない！戦いを広げようとするな！朗利！」
朗利「だったら、何もせずに落とされるよ！」

エイサップ「それはできない…！お前が止まらないなら、お前を斬る!!？」

〈戦闘会話 零VS朗利〉

零「わかっているのか!??このままだと、この世界がドアクダーに支配されるんだぞ!??」

朗利「だから何だ?そんな事、俺達には関係ないだろ?」

零「お前も力に溺れているタイプか?...なら、俺が頭を冷まさせてやる!」

〈戦闘会話 ショウVS朗利〉

ショウ「お前はエイサップの友人なんだろう!??何で戦う!??」

朗利「しれた事!復讐だよ!彼奴が俺達の邪魔をするからだ!」

ショウ「お前達も悪のオーラに飲み込まれつつあるのか?...!来い、エイサップに変わって、俺が止めてやる!」

〈戦闘会話 アマリVS朗利〉

アマリ「戦闘をやめてください!」

朗利「やめろと言われてやめるわけないだろ!」

アマリ「そ、そんな...!ですが、私も退くわけにはいきません!全力で貴方を止めます!」

〈戦闘会話　ワタルVS朗利〉

朗利「お前が救世主ワタルか！お前を倒せば、俺の名がもつとあがるぜ！」

ワタル「貴方がエイサップさんとどれだけの戦いをしたのかはわからないけど…みんなを困らせるなら、容赦はしないぞ！」

龍神丸「そのいきだ！ワタル！」

〈戦闘会話　一夏VS朗利〉

一夏「何でその力をみんなを守る為に使わないんだよ!?？」

朗利「俺の力だ！お前が口を挟むな！」

一夏「力だけを求めても正しい力を持っていないと意味がないって事を教えてやるよ！」

〈戦闘会話　刹那VS朗利〉

刹那「何故、言葉が通じ合うのに話し合おうとしない…！」

朗利「話し合いなんてまどろっこしい事するかよ！力で何でも振り伏せれば良いんだよー！」

刹那「見つけたぞ貴様の歪み…！俺とクアンタが断ち切る！」

〈戦闘会話　しんのすけVS朗利〉

朗利「俺はガキだからと言って容赦はしないぜ！」

しんのすけ「エイサップお兄ちゃんはおオラ達がお助けするんだゾ！」

カンナム「誰かを傷つける力などで僕達に叶うと思うな！目を覚まさせてやる！」

〈戦闘会話　アキトVS朗利〉

アキト「お前達の行なっている事で悲しむ人達が居るんだぞ」

朗利「知るかよそんな事！散々切り捨てられてきたんだ…仕返しと言ってもいい！」

アキト「その子供の様な考えを捨てない限り、お前は前に進めない…一度は復讐鬼となつた俺がそれを見せてやろう」

〈戦闘会話　九郎VS朗利〉

九郎「何だつて自ら、争いに加担するんだよ!?？」

朗利「その方が楽しいじゃないか！これほど、刺激的な事はないぜ！」

アル「これが人間の欲か…」

九郎「欲望に負けたら、後に残るのは孤独なのによ…それをわかれよ!!?」

〈戦闘会話 マサキVS朗利〉

マサキ「そんな力を持ちながら、何で誰かの為に戦おうとしないんだよ!」

朗利「何で俺が関係のない奴らの為に戦わないといけないんだよ!」

マサキ「それが力を持つって意味なんだよ…!そんな事もわからないで何が力が欲しいだ!」

〈戦闘会話 アーニーVS朗利〉

アーニー「何処の世界のお前も同じだと言うことか」

朗利「何を訳が分からない事を言ってるやがる!来ないならこっちから行くぞ!!?」

アーニー「力を持つ者の生き様というものを僕が教えてやる!」

〈戦闘会話 エイサップVS金本〉

金本「エイサップの分からず屋め!俺達と一緒に来いよ!」

エイサップ「分からず屋なのはお前の方だ!金本!こんな事をしても無駄だつて事、気つけよ!!?」

俺達は2機のシンデンを追い詰める。

金本「ま、まずいよ……朗利！」

朗利「ちつ……こいつらめ、バカにしゃがって……！エイサップ！覚えてやがれ、次こそお前を……！」

そう言い残し、2機のシンデンは撤退した……。

エイサップ「どうして戻れないんだよ……朗利、金本……」

エレボス「彼等も悪のオーラから抜けられないのかもね……」

エイサップ「だつたら、次こそ俺の全身全霊であいつ等を止める……！友人として……！シンデンが居なくなり、俺達は狙いをピアレスに絞った……」

〈戦闘会話　エイサップVSトッド〉

エイサップ「戦闘をやめてください！トッドさん！」

トッド「俺は誰の命令も受けない！俺を止めなければ、力付くで来い！エイサップ！」
エイサップ「力で解決しても何も変わらないでしょうが！」

〈戦闘会話 零VSトッド〉

零「力に飲まれるな！お前自身を保て！」

トッド「俺は俺を保っている！俺の邪魔をするな！」

零「邪魔をする気はないが、お前のその力は誰かを傷つける！だから、まずは止める！」

〈戦闘会話 一夏VSトッド〉

一夏「もうやめろ！こんな事して何になるんだよ!!？」

トッド「お前にはわからないだろうな！誰かに超えられていく無様な俺の気持ちなんて…」

一夏「俺も力が欲しい…。でも、俺が欲しいのはみんなを守る力だ!!？」

〈戦闘会話 しんのすけVSトッド〉

トッド「これは遊びとは違うぞ！小僧！」

しんのすけ「そんな事分かってるゾ！そして、お兄ちゃんが苦しんでる事も！」

トッド「俺が…苦しんでいるだと!!？」

しんのすけ「だから、オラがお兄ちゃんをお助けするゾ！」

カンナム「行くぞ！君の悪の心を打ち砕いてやる！」

〈戦闘会話 刹那VSトッド〉

刹那「手を伸ばせトッド・ギネス！俺達は分り合うことができるんだ！」

トッド「分り合うだと？俺の何を知っているんだよ！！？知ったような口きいてんじやねえよ！」

刹那「くっ…！今は戦うしかないのか…！」

〈戦闘会話 アキトVSトッド〉

アキト「復讐の先に何が待っているのかをお前は知らない」

トッド「知ったような口をきくんじやねえよ！」

アキト「知ったような口…？いや、知っているんだよ…俺自身がそうだったからな」

トッド「何だと…！！？」

アキト「復讐鬼はもう十分だ…。これ以上俺の様な人間を生み出すわけにはいかな
い！」

〈戦闘会話 九郎VSトッド〉

九郎「男と男の真剣勝負…流石に手を出すのに罪悪感があるな…！」

トッド「だったら、邪魔するなよ！俺とシヨウの戦いを！」

アル「九郎！何を迷っておるのだ！」

九郎「くそッ！でも、今のあんたを止めないと被害が出るかもしれないんだ…今回だけは邪魔させてもらうぜ！」

〈戦闘会話 アーニーVSトッド〉

アーニー「武器を捨て、ロボットから降り、こちらに着けば、手荒な真似はしない」

トッド「舐めんじゃねえ！俺がお前なんかに負けるわけないだろ！」

アーニー「僕は君の身を心配して言ったんだがね…。警告はした、覚悟があると認める!!？」

ダンバインのオーラ斬りでビアレスにダメージを与えた…。

トッド「ちいっ！こんな所で死ぬるかよ！」

シヨウ「トツド！」

ビアレスが撤退しようとしたのをダンバインが追いかけ、掴みかかった。

トツド「しつこいんだよ、シヨウ！」

だが、ビアレスの攻撃を受け、ダンバインは弾き飛ばされ、手を離してしまった…。

シヨウ「くっ…！」

エイサツプ「シヨウさん！」

トツド「シヨウ！ 決着は、次に会った時だ！」

そう言い残し、ビアレスも撤退した…。

全ての敵を倒し終えた俺達は戦闘態勢を解除する。

チャム「もう！ 何なのよ、トツドは！」

シヨウ「…」

チャム「シヨウ…」

シヨウ「(トツド…。お前は…。まだ悪夢の中にいるのか…。)」

戦いが終わり、俺達はロボットから降り、今の状況を話しあった。

マサキ「これで俺達の仮説が証明された様なもんだな」

零「そうだな・・・」

サンソン「その仮説ってのは何だ？」

アマリ「ドアクダー軍団は、異界人を自分達の戦力に取り込んでいます」

アーニー「裏を返せば、異界人を呼んでいるのは彼等だと言える・・・って事だね」

夏美「私達がアル・ワースに來たのは、ドアクダーの仕業だと言いたいのか？」

零「多分・・・だが・・・」

ジャン「待つてください！零さんやグランデイスさんはともかく、僕達なんて戦力になりませんよ！」

ハンソン「そのドアクダーって奴の狙いは僕達とネオ・アトランティスでジャン達は、そのついでだろうね」

ナディア「また私達・・・戦争に巻き込まれるのね・・・」

しんのすけ「ナディアちゃん・・・」

シバラク「って事はだ・・・！このままドアクダーを放っておけば、どんどん異界人が来るのか！」

サヤ「それはつまり、彼等の戦力が増強されるという意味でもあります」

ワタル「でも、ショウさんみたいにドアクダー軍団のスカウトを断った人もいるよ！」

ティエリア「あのトッド・ギネスという男の様にそれに乗りかかる奴もいるが・・・」

シヨウ「…」

エイサツプ「シヨウさん…」

零「シヨウ、エイサツプ…。俺達に手を貸してくれるというのは本当か？」

シヨウ「少なくともトッドは俺の手で止めなきゃならないと思っっている。その上で、これからの身の振り方を考えさせてもらう」

エイサツプ「俺も朗利と金本を止めないといけないからな…。それに、エレボスの話が本当なら、この世界に居るであろうリユクスも探さないとけないし」

アンドレイ「ずいぶん落ち着いているんだね」

シヨウ「こういう体験は2度目だからな」

エイサツプ「俺もです」

マリー「そうなの!?」

異世界に転移した事があるってのか？

シヨウ「悪いけど、俺達の身の上話は明日にさせてくれ」

ワタル「わかったよ。今日はゆっくり休んでね、シヨウさん、エイサツプさん」

エイサツプ「ありがとう、ワタル」

チャム「頑張ってドアクダーを倒して、帰ろうね、シヨウ」

シヨウ「帰るって…。何処にだ？」

チャム「え……」

シヨウ「地上…… バイストン・ウエル……。もしかしたら、何処にも居場所がないから俺は、このアル・ワースに呼ばれたのかもな……」

エイサツプ「シヨウさん、そんな事……っ……」

エイサツプはそれ以上口を開けなかった……。彼はシヨウとは別の世界の人間……。そんな彼が口を挟むのはあまり、良くない。

シヨウ「(トツド……。お前も帰る場所なんてないから、此処で生きていく腹を決めたのか……。チャムが見つけたダンバインは無人だったと聞く……。マーベル……。もう俺達……。会えないのかな……。)」

続く、知り合い、友人との戦闘……。

弘樹、お前も俺に恨みがあるから、俺に襲いかかるのか……？

第6話 海賊部隊のGと緑の侵略者

「俺……新垣 零は仲間達とドツコイ山を目指し、歩いてた……。」

ワタル「……ねえ、零さん、アマリさん」

零「何だ？」

アマリ「どうしました、ワタル君？」

ワタル「一晩考えたんだけどさ……ドアクター軍団が異界人を呼び出して、自分達の仲間にしようとしてるなら……。こっちは世界中の人と協力して、戦えばいいんじゃないかな？」

一夏「世界中……つまり、アル・ワースに住む人達って事か」

グランデイス「正論だね。あたし達みたいな余所者を頼るより、そっちの方が自然だよ」

零「確かに一理あるな」

アマリ「……」

シバラク「どうしたもんかのう……」

ん？何か問題があるのか？

ハンソン「アル・ワース組が黙っちゃった…」

千冬「ワタルの提案が無理な理由があるのか？」

アマリ「正しい事を言っていると思いますが、アル・ワースの人間全てが協力するとうるのはちよつと難しいんです…」

え…？

刹那「何故だ…？」

マサキ「みんなの意思を統一する様な人や組織は、この世界には存在しないのか？王様とか、政府とかよ」

ジャン「獣の国つて所と、マナの国つて所、ルクスの国つて所に頼んでもダメつて事？」

ホープス「それについては、私から説明しましょう」

九郎「ああ、頼むぜ、ホープス」

ホープス「このアル・ワースの社会は、大きく分けて3つの文明圏と幾つかの地域の集合で構成されています。過去にはいくつかの国家もありましたが、それらは災害などで滅び、今の状態となりました」

一夏「文明圏つて国つて意味だよな？モンジャ村は、そのどつちなんだ？」

ホープス「そのどちらでもありません」

カンナム「そうなのかい？」

ホープス「創界山はアル・ワースの聖地ではありますが、モンジャ村を含む、その周辺は一地域という扱い……いわゆる田舎です」

シヨウ「その3つの文明圏というのは？」

エイサツプ「それが、マナの国と獣の国とルクスの国……であつてるよな？」

ホープス「そうです」

チャム「マナって何？」

ヒミコ「あちし、知つてるのだ！それって魔法なのだ！」

魔法……？それってドグマジやねえのか？

しんのすけ「アマリお姉さんが使う魔法の事？」

アマリ「私達の使うドグマとは発生とかの体系は異なります」

テイエリア「同じ魔法でも違うという事か……」

アル「ふむ、興味深い」

アンドレイ「アル君は魔導書だから……興味を示しても仕方がないか……」

ホープス「……話を戻します。マナの国とは、その名の通り、社会の全てがマナの上
に成り立っている国家の集合です」

社会全てがマナに……？

ホープス「マナとは、あらゆるものを思考で操作できる高度情報化テクノロジーと定義づけられるものです」

零「確かに、ドグマとは違うな……」

マリ「わかる？ ヒミコ、一夏さん」

ヒミコ「ハツキシ言つて、わからないのだ！」

一夏「日本語なのか……？ それ」

千冬「バカはバカらしく黙っているバカ」

一夏「3回もバカつて言われた!!？」

一夏の頭はヒミコ達と同じレベルか……？

ホープス「それも無理はありません。マナの国以外では、マナを使う人間はいませんから、その実態はよく知られていません」

アキト「つまり、こちら辺や獣の国、ルクスの国ではマナを使う人間は居ないと……」

ホープス「逆の言い方をすれば、マナを使えない人間は、マナの国では生きていけないのです。一部の例外を除いて……」

冬樹「例外……？」

アマリ「……ホープス、その話はそこまでにしましょう」

ホープス「かしこまりました」

：： 珍しいな。アマリが、あそこまで嫌そうな顔をするのは：：。その例外つてのに何かありそうだな：：。

夏美「獣の国っていうのは何？」

しんのすけ「きつとクラマの様な言葉を話す動物さんがたくさんいるんだゾ」

クラマ「俺を、あそこの獣人と一緒にすんじゃねえよ！」

零「獣人：：？」

サンソン「獣人って：： 獣か？それとも人間か？」

ホープス「しんのすけ様の例えで少なからずあっています。獣人は人間でもあり、獣でもあるんです。見た目は：： クラマ氏によく似ています」

クラマ「だから俺を獣人扱ひすんじゃねえよ、陰険オウム！」

ヒミコ「どうどう、トリさん」

クラマ「馬でもねえよ！」

ナイスツツコミ、クラマ。

シバラク「拙者、諸国漫遊の旅で何度か獣人と会った事があるが：：。」

セルゲイ「あるが：：？」

シバラク「あそこの国な、7年前に大きな戦いが起きて、国全体が丸つきりかわって

しまったそうだ」

ホープス「新たな体制となった国造りで忙しいらしく、あまり他の地域と交流を持っていないというのが獣の国の現状です」

・・・成る程な。

一夏「ルクスの国ってのは？」

ホープス「ルクスの国については零様の世界に近い、文明を築いています」

零「つて、事は争いがいいのか？」

ホープス「簡単に言うとそうです」

ワタル「ルクスって・・・？」

ホープス「・・・ルクスとは異界の力です。それを利用して、レガリアという人型機動兵器を使用するのです」

ティエリア「そんなものがあれば、争いになるのでは？」

アマリ「ルクスやレガリアの存在はルクスの国の極一部の人しか知らないんです」

零「ん？つて事はルクスの国の人間は自分達の国の名前のルクスって意味もわかっていないのか・・・？」

アマリ「そうなるわね」

千冬「では、ルクスの国に頼んでも無理か・・・」

ワタル「じゃあ、まずはマナの国の人にドアクターの事を話して、協力してもらおうよ」

アーニー「皆さんがアマリさんのように魔法を使えるなら、頼りになりそうだね」

アマリ「私のドグマほどは役には立たないと思いますけどね」

サヤ「そ、そうなんですか？」

零「マナの国の奴らに結構な喧嘩腰で言っただな…」

マサキ「そのマナの国っていうのは、ここから遠いのか？」

ホープス「それなりの距離はあります」

零「ドツコイ山へは遠回りになるが、これからの事を考えたら、行った方が得だな」

ワタル「僕もそう思います！」

シヨウ「俺も零やワタルに賛成だ。悪しき力があるなら、それに対抗する良き力は

きつと存在する」

エレボス「それはどこの世界も同じだね！」

ナディア「そうやって、あなたも戦うのね」

ジャン「ナディア…！」

ナディア「理屈をつけても、あなたも結局は戦いでしか物事を解決できないのね」

… ナディアの言い分もわかる…だが…。

エイサツプ「お、おい！シヨウさんだつて…！」

シヨウ「良いんだエイサツプ。…そうかもしれないからな」

ナディア「え…」

シヨウ「俺は愚かだから、それしか方法を知らないんだ。もし、君が他に良いやり方を見つけたら、俺にも教えてくれ。イヤミでも冗談でもなく、本気でそう思うよ」

ナディア「…」

ナディアはシヨウを睨み付け、歩き去ってしまった…。

ヒミコ「ナディア、怒っちゃった！」

シヨウ「あれぐらいの年の子は扱いが難しいな…」

零「同感だ」

千冬「だが、重みのある言葉だったぞ、シヨウ」

セルゲイ「だからこそ、ナディアも言い返せなかったのであるう」

ジャン「ごめんなさい、シヨウさん。ナディアが失礼な事を言つて」

シヨウ「気にしてないさ」

チャム「ジャンも苦労するねわ。ナディアのお守り役なんて」

ジャン「全然、苦労だなんて思つてないさ。好きでやってる事だから」

零「言つてくれるぜ」

マサキ「ああ、この色男！」

余程、ナディアに好意を持っているって事だな。

ホープス「マスター……。ジャンさんからは学ぶ事が多そうですね」

アマリ「は、はい……。でも、自分が使うのではなく、あんな風に言われてみたいで
す……」

そっちかい……。でも、アマリも恋愛に憧れる年だもんな。

……。俺？俺に出会いはないさ。

ってか、俺は気づいていなかった……。アマリが頬を少し赤く染め、俺の方をチラホラ
見ていた事に……。

ホープス「……」

ワタル「じゃあ、ナディアさんの機嫌が直ったら、出発しよっか！」

アーニー「目指すは、マナの国だね」

さて、この選択が吉と出るのか、それとも凶と出るのかな……。？

第6話 海賊部隊のGと緑の侵略者

「僕はベルリ・ゼナムです！」

僕達の乗る航宙艦メガファウナは見た事もない世界に居た。

しかも、彼奴らも居る……。

すると、ギゼラさんが艦長のドニエル艦長に叫んだ。

ギゼラ「モビルスーツ隊、来ます！」

ドニエル「しつこい連中だ……！」

メガファウナの前方に複数のモビルスーツが展開される。

キャピタル・アーミイのモビルスーツが出て来た……！！

ドニエル「キャピタル・アーミイめ……！！こんな所で我々を叩く事に何のメリットが

あるというんだ！」

すると、今度は副長がドニエル艦長に問う。

副長「どうします、艦長？」

ドニエル「応戦するぞ！異世界に来てまでリギルド・センチュリーの戦いを続けるよ
うな連中に話し合いなど無意味だ！姫様には急いでもらえ！ベルリ・ゼナムにも出ても
らうぞ！」

現在、僕達はメガファウナの格納庫にいた。

ハツパさんがアイーダさんに話しかける。

ハツパ「姫様！アルケインのフルドレスは調整不十分で武装は使えませんから、ご注意を！」

アイーダ「わかりました。今ある装備で出来る事をします」

アイーダさん……。

ベルリ「……」

アイーダ「ベルリ……。この間の戦闘で、あなたに何があったかを聞くつもりはありません。ですが、こうして見知らぬ世界に来た今、私達は生き延びるために戦わなくてはならないのです」

ベルリ「わかっていきます」

アイーダ「いいえ。あなたはわかっていません」

……何？

ベルリ「……！」

アイーダ「そんな気持ちの人間が戦場に出ても死ぬだけです」

好き勝手に言つてこの人は……！

ベルリ「その方がアイーダさんにとっては嬉しいんじゃないですか？僕はカーヒルッ

て人を殺したんですから」

アイーダ「ベルリ・ゼナム！あなたは……！」

ベルリ「……」

アイーダ「好きにしなさい。私は出ます」

そう言つて、アイーダさんはアルケインへ向かった。

ベルリ「……」

ハツパ「出撃しないんなら、どいてろ！邪魔だ！」

ベルリ「出撃しろ……つて命令はしないんですか？」

ハツパ「お前はアメリカの軍人じゃないんだ。自分の事は自分で決めろ。Gーセルフ

は、お前しか扱えない……。全てはお前次第だ」

ベルリ「……」

僕が俯いているとノレドが話しかけてくる。

ノレド「ベル……」

こうなつたら……！

ベルリ「……出ますよ。このままメガファウナにいたつて、攻撃されて死ぬのを待つだけです。出撃しても、しなくても死ぬんなら、まだ出撃した方がマシです」

ハツパ「だつたら、急げよ。頭に血の上つた姫様はきつと突撃するだろうからな」

ベルリ「はい……！」

すると、今度はラライヤが話しかけて来た。

ラライヤ「ベルリ！」

ベルリ「行つてくるよ、ラライヤ、ノレド」

ノレド「うん！頑張つてね、ベル！」

僕はGーセルフに乗り込み、アイーダさんの乗るGーアルケインと共に出撃した。

副長「Gーアルケイン、発進！続いてGーセルフも出ました！」

ドニエル「アイーダ姫様！アーミイのモビルスーツの迎撃を頼みます！」

アイーダ「了解です……！私が前線に維持しますのでメガファウナは砲撃をお願いします！」

ます！」

ベルリ「……」

アイーダ「ベルリ……。出て来たのなら、自分の身は自分で守りなさい」

つて、アイーダさん、前に……！」

ベルリ「人の気も知らないで、あの人は……！」

でも、デレンセン教官との事はノレド達の耳には入れたくない……。

自分の中で消化しなきゃならない……。こんな気持ちで……戦えるのか……？

僕達はキャピタル・アーミイのモビルスーツ……。カットシーの軍団との戦いを始め

た……。

？「ケロー!??」目が覚めたら、わけのわからない世界に居るし、目の前ではモビルスーツが戦争を始めてるであります……！しかも、あんなモビルスーツ見た事がないであります！」

地上から僕達の戦闘を見ているものが居るとも気づかず……。

？「も、もう我慢できないのであります……！」

キャピタル・アーミイのモビルスーツ部隊を迎撃している僕達……。

すると、地上の方から反応が出て、キャピタル・アーミイのモビルスーツ共々地上を見る。

そこには、カエル……？のような生物が乗ってる緑色のロボットがいた。

？「ギロロー！タママー！誰でも良いから助けに来てー！吾輩、ケロ口軍曹はここだよー！」

アイーダ「ええっ……!?？」

ドニエル「な、何だ？あの生物は……！」

ベルリ「カエルが……喋っているの……？」

ケロロ「ゲロゲロゲロゲロ」

副長「艦長！あのロボットから謎の振動波が感知されました！」

ドニエル「あのカエルが出しているのか……？どう見ても、キャピタル・アーミー側ではなさそうだが……」

すると、キャピタル・アーミーのモビルスーツ部隊は緑色のロボット目掛けて、一斉射撃をした。

ケロロ「ケロー！？う、撃ってきたであります！」

撃ってきたことに驚いてる……？

そして、またはや緑色のロボットは一斉射撃を受ける。

ケロロ「や、やめてー！やめるでありますー！吾輩は何もしていないでありますよー！」

こ、このままじゃ、あのロボットが……！？

ケロロ「くっ！斯くなる上は……！ケロロロボMk-IIで倒すであります！」

すると、緑色のロボットは動き出し、カットシー機に向けてビームライフルを放ち、撃墜した。

アイーダ「び、ビームライフル……！？あれはモビルスーツなのですか！？」

ドニエル「あの様なモビルスーツは見た事はありませんが……」

敵では……ないのか？

だが、カットシーの1機は緑色のロボット……ケロロボMk-IIというロボットを後ろから攻撃しようとした。

ベルリ「っ！危ない！」

僕はGーセルフを動かして、ビームサーベルでカットシーを真つ二つに斬り裂いた。

ベルリ「大丈夫?!？」

ケロロ「あ、ありがとうございます！吾輩はケロロ軍曹であります！」

ベルリ「僕はベルリ・ゼナムだよ！」

僕達が自己紹介をしていると、Gーアルケインとメガファウナが近づいてきた。

アイーダ「ベルリ！」

ベルリ「アイーダさん！彼は味方です！手伝ってもらいましょう！」

ドニエル「それは構わんが……ケロロ……軍曹だったな？良いか？」

ケロロ「了解であります！吾輩も手を貸すであります！」

ベルリ「ありがとうございます！ケロロ！」

僕達はケロロのケロロボMk-IIと協力して、カットシー軍団との戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

ケロロ「吾輩に喧嘩を売った事を後悔させてやるであります！恐らく、此処は異世界……生き抜いて、みんなの元へ戻るであります！」

戦闘を初めて、数分……此処でギゼラさんが叫んだ。

ギゼラ「艦長！敵の追撃が来ます！」

ドニエル「何っ……?!？」

ギゼラさんの言葉通り、カットシー軍団の増援が来る。

ドニエル「数からして、こちらが本命か！」

ケロロ「ケロー?!? キリがないのであります！」

ドニエル「姫様とベルリを戻し、メガファウナも後退だ！軍曹もだ！」

ドニエル艦長の言葉にステアさんが頷く。

ステア「イエッサー！」

僕達はメガファウナと共に後退していくが……。

?「後退などしません！」

中心のカットシーのパイロットが叫んだと同時に僕達に接近し、Gーアルケインのを

ビームサーベルで斬り裂いた。

アイーダ「ああっ！」

ケロロ「アイーダ殿！」

？「あの程度のパイロットならば、このマスク…これくらいは造作もない事！」

マスク…。彼奴が指揮官か？

マスク「私は自らの境遇と同胞のために戦果を挙げなくてはならない！その生贄になつてもらう！」

ベルリ「アイーダさん！」

アイーダ「来てはなりません、ベルリ・ゼナム！」

ベルリ「しかし…！」

アイーダ「カーヒルの生命を奪ったあなたに助けられる訳には…！」

ベルリ「そんな事を言ってる場合じゃないでしょうが！」

マスク「何をごちゃごちゃと！」

ベルリ「うおおおっ！スコードオオオオオツ!!？」

僕はアイーダの近くにいるマスクってやつに乗るカットシーをビームサーベルで斬り飛ばした。

マスク「ぐっ?!?Gーセルフめ!!？」

僕に恨みの視線を飛ばし、マスクの乗るカットシーは出現した時の位置に戻った。

ケロロ「アイーダ殿！大丈夫でありますか!!？」

アイーダ「は、はい！ペルリ・ゼナム！勝手な真似を…！」

ペルリ「目の前で仲間が危機に陥った時は… 全力で… これを助ける…！」

アイーダ「え…！」

ケロロ「ペルリ殿…！」

ペルリ「僕はね…！キャピタル・ガードでデレンセン教官にそう教わったんですよ

！だから！全力でやるんですよ、何だって！」

アイーダ「あなた…！」

ギゼラ「艦長！アーミーとは別の機体群が来ます！」

ドニエル「このタイミングで何だ!!？」

タイミングが悪すぎでしょ!!？」

すると、ギゼラさんの言葉通りに複数の機体が来た…。

↓新垣 零だ…。

俺達は今、ロボットに乗り、戦闘の中へ入る。

アンドレイ「あれは……モビルスーツ……!?」

セルゲイ「だが、私達のは形状が違う！」

シヨウ「確かに……！あっちの2機はガンダムに似ている！」

刹那「俺達の知らない……ガンダムだと……!?」

アーニー「僕達の世界にもあの様なガンダムは居ないよ」

テイエリア「それよりもシヨウ・ザマ、君はガンダムとモビルスーツを知っているのか？」

シヨウ「あ、ああ……まあな」

夏美「ちよ、ちよつと冬樹！あの緑色のロボットの顔と乗っているのって！」

冬樹「軍曹！やっぱり、軍曹も居たんだ！」

アマリ「あちらの空中戦艦と、それを追う部隊……。どちらも異界人であるのは確かです」

零「そうみたいだな……敵対している様にも見えるが……」

ワタル「よし！兎に角、呼びかけてみる！」

ワタルは話をする様だな。

ワタル「えくと、皆さん！ちよつと僕の話聞いてください！」

マスク「攻撃を開始しろ……！」

って、撃ってきやがった… ? ?

しんのすけ「い、いきなり撃ってきたゾ！」

ワタル「大人のくせに人の話を聞かないのか！」

マスク「ミスルギ皇国に属する以外の全ては排除しろとの命令を受けている！ 問答は無用だ！ それに… 奴も来たか！」

俺達を攻撃して来た奴らの後ろから白い機体が現れる。

零「な… あれは… ? ?」

刹那「ガンダム… ? ?」

そう、またはガンダムが現れたのだ。

？「オルガ、彼奴らを倒せば良いんだな？」

オルガ『そうだ、ミカ！ 俺達の仕事はキャピタル・アーミィを援護する事だ！ 今回はお前のバルバトス・ルプスだけが、行けるか？』

？「任せて。それがオルガの望む事なら… 三日月・オーガス、ガンダムバルバトスルプス… 行くよ」

あ、あのガンダムは敵なのかよ… ? ?

仲間と通信でもしていたのか… ? ?

グランデイス「お仲間発見と思つて、ノコノコ出て来たのが、こつちの運の尽きつて

事かい！」

ワタル「こうなったら、あっちの戦艦と協力して、何とかするしかないよ！」

エイサツプ「異界人同士で争う事になるなんて……！」

冬樹「軍曹ー！聞こえるー!!？」

ケロロ「ケロ!!？冬樹殿！」

夏美「聞こえるなら、応答しなさいよ！ボケガエルー！」

ケロロ「夏美殿も一緒でありますか！無事で何よりであります！」

冬樹「軍曹！この人達は悪い人じゃないんだ！僕達と協力してー！」

副長「ど、どうします、副長!!？」

ケロロ「冬樹殿は吾輩の友達であります！信じてみるしかないでありますよ！ドニエル艦長！」

ドニエル「仕方ない……。戦力的には、圧倒的に不利なんだ！あの連中を利用してでも、この場を切り抜けるぞ！よろしいですか、姫様！それにベルリ・ゼナムも！」

アイーダ「了解しました」

ベルリ「Gーセルフと似ている機体があるなんて……。わかりました！僕も死にたくないですから……！」

マスク「Gーセルフ！それに乱入者！まとめて、私の踏み台になってもらおう！」

ベルリ「あんたは…！アーミーの自分勝手そのものみたいな人だ！」

三日月「あんた達に恨みはないけど、これが鉄華団の仕事なんだ…悪く思うなよ」

刹那「ガンダムが…敵に…！あれも本当にガンダムなのか…？」

俺達はモビルスーツ部隊とバルバトスルプスとかいうガンダムとの戦闘を開始した…。

戦艦の赤いガンダムはビームライフルでモビルスーツを1機撃墜した。

ベルリ「(アイーダさんも頑張ってる…。僕もやるんだ…！いつまでも情けないままの男でいたら、デレンセン教官にも申し訳が立たない…！)ベルリ・ゼナム生徒、気合を入れます！ウオ、ウオ、ウオ、ウオーツ!!？」

は!!?もう1機のガンダムのパイロット、何叫んでんだ!!?」

アイーダ「何ですの、それ？」

ベルリ「キャピタル・ガード伝説のウォークライです！(デレンセン教官…！)ベルリ生徒は教官の教えを生涯忘れません！」

ワタル「やっぱり、あのモビルスーツにも人が乗ってるんだよね…。」

龍神丸「心配は要らない、ワタル。魔神も、オーラバトラーも、モビルスーツも全て

脱出装置が完備されている。多少は痛い目を見るだろうが、ちゃんと爆発から脱出できる」

ワタル「それを聞いたら一安心だ！やるよ、龍神丸！」

〈戦闘会話 零VS三日月〉

零「あんたもガンダムのパイロットなら俺達の話聞いてくれ！」

三日月「俺、オルガからあんたらを倒せって言われてんだけど……」

零「……ちっ！全然話を聞いてくれねえじゃねえかよ……！！」

〈戦闘会話 アマリVS三日月〉

アマリ「刹那さんのガンダムとは戦い方が全然違います……！！」

ホープス「彼等もドアクターと手を組んでいるのでしょうか？」

アマリ「わかりません……」

三日月「喋るほど余裕があるんだ？なら、容赦はしないよ」

〈戦闘会話 ベルリVS三日月〉

ベルリ「Gーセルフと似ているモビルスーツが来る！」

三日月「…あれ？あの機体はマスクって人が倒すんだよね…まあいいか
ベルリ「ぼ、僕だって負けないぞ！来るなら来い！」

〈戦闘会話 アイーダVS三日月〉

アイーダ「あのモビルスーツ…まるで獣ですね…！」

三日月「射撃に特化してる様だけど、俺には当たらないよ」
アイーダ「では、当たるまで何度も打ち続けます！」

〈戦闘会話 ケロロVS三日月〉

ケロロ「ガンダムが相手でもやってやるであります！」

三日月「このカエル…ガンダム・フレームの事を知っているのか？」
ケロロ「強いのがガンダムだけではない事を教えてやるでありますよ！」

〈戦闘会話 刹那VS三日月〉

三日月「ん？あんたからは俺と同じ感じがする…何だかわからないけど」

刹那「何…？！？貴様は…！」

三日月「同じガンダム・フレームに乗ってるからかな？まあいい。倒すには変わらないから」

刹那「くっ…！同じガンダム何だぞ！対話の道だつてあるはずなのに…！」

〈戦闘会話 ティエリアVS三日月〉

三日月「空を飛べるガンダム・フレームっていいな…」

ティエリア「あのガンダムは陸上戦に特化したガンダムなのか…？ヴェーダにもなかったあのガンダム…やはり、異世界のものか…！」

三日月「異世界…？とりあえず早く終わらせるぞ…！」

〈戦闘会話 ワタルVS三日月〉

ワタル「戦闘をやめてください！僕は貴方と戦うつもりはないんです！」

三日月「言っただろ？俺は仕事の為に戦ってるだけだよ」

ワタル「何で、誰も話を聞いてくれないんだよ…！あーもう！」

龍神丸「乱れるなワタル！相手のペースだ」

ワタル「わかってるよ！龍神丸！こうなったら、やるしかない！」

〈戦闘会話 一夏VS三日月〉

三日月「珍しい兵器だな……。モビルスーツとは大違いだ」

一夏「この人……。本当に強い……。！」

三日月「小さいから狙いにくいけど……。オルガの邪魔をするなら容赦はしないよ……。！」

〈戦闘会話 しんのすけVS三日月〉

カンナム「気をつけろしんのすけ君！彼は戦闘のプロだ！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！兎に角、頑張るゾ！」

三日月「子供……。？何で戦場に……。？でも、子供だからと言って手加減はできないから」

〈戦闘会話 アキトVS三日月〉

三日月「あんた、なかなかやるね。機体の動きでわかるよ」

アキト「褒められるほどじゃないよ。この動きなんて無理やり覚えた様なものだからね」

三日月「油断していたら、こっちが負けそうだ……。全力で行くぞ、バルバトス……。！」

〈戦闘会話 九郎VS三日月〉

三日月「まるで魔法だね……面白いよそれ」

アル「実際魔法の様なモノだからな」

九郎「デモンベインの力はこんなもんじゃねえ！それを体に叩き込んでやる！」

〈戦闘会話 ショウVS三日月〉

チャム「おかしいな……あの人からは悪のオーラを感じないよ……」

ショウ「確かに……なら彼は一体？」

三日月「オーラとか何だかわからないけど……やるの？やらないの？」

ショウ「そっちが来るなら迎え撃つしかない！」

〈戦闘会話 エイサツプVS三日月〉

エイサツプ「あいつ……今までの敵と動きが全然違う……！」

エレボス「あれが本当の戦闘のプロってまつだよ！」

三日月「なんか虫みみたいな機体だな……叩き落としてやるよ」

エイサツプ「簡単に叩き落とされてたまるか！逆にこっちが狩ってやる！」

〈戦闘会話　マサキVS三日月〉

マサキ「飛べないからって、油断はできないな……！」

三日月「よくわかってるじゃん、手を抜いたら一瞬で死ぬよ？」

マサキ「それはごめんだぜ！手なんて抜く気はねえから安心しな！」

〈戦闘会話　アーニーVS三日月〉

アーニー「その動き、君も傭兵か？」

三日月「それに近いかな？あんたこそ良い動きするね」

アーニー「褒められて悪い気はしないけど、僕達と敵対するなら容赦はしないよ！」

三日月「俺もオルガの敵となるあんたに対しては容赦はしない……やるぞ！」

俺達はバルバトスルスプスというガンダムを追い詰める。

三日月「……なかなかやるな……！」

オルガ『此処は退けミカ！お前を失うのはまずい……！』

三日月「……わかった。すぐに帰るよ」

バルバトスルスプスは通信をして撤退した……。

セルゲイ「ソレスタルビーイングのガンダムと違うガンダムと戦う事となるとは

な……」

刹那「奴はガンダムだ……」

アンドレイ「刹那……？」

刹那「奴は……ガンダムなんだ」

テイエリア「そうだといいがな……取り敢えず、後は彼奴らをだけだ」

俺達は再び、モビルスーツ部隊と戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 零VSマスク〉

零「あんたが敵のエースか！」

マスク「君の機体はなかなかのものだ。だが、機体に振り回されているな」

零「何……!?？」

マスク「それでは私には勝てないぞ！」

零「舐めやがって……！俺だって少しづつ成長してるつもりなんだよ！それを見せて

やるよ！」

〈戦闘会話

ケロロVSマスク〉

ケロロ「このまま指揮官機を落とすであります！」

マスク「まさか、人外の存在と戦う事となるとはな…！」

ケロロ「違う世界の争いに首を突っ込む気は無いですが、吾輩達自身が危険な
ら話は別であります！」

〈戦闘会話 一夏VSマスク〉

マスク「そのI Sという兵器… 戦争で使えば有利になれるな」

一夏「I Sは戦争の道具じゃない！宇宙に行く為のスーツだ！」

マスク「ならば何故、武装を積んでいる？争いを起こす為だろ！」

一夏「違う！武装は誰かを守る為のものだ！I Sで戦争なんて起こさせるか!!？」

〈戦闘会話 しんのすけVSマスク〉

マスク「子供が戦場に出て来るとはな…！」

しんのすけ「オラを子供と見ると怪我するゾ！」

カンナム「今は異界人同士で争いあっている場合ではないのに…！」

しんのすけ「カンナム、倒すよりも止めるんだゾ！」

カンナム「…そうだね。よしやろう！しんのすけ君！」

〈戦闘会話 刹那VSマスク〉

マスク「Gーセルフと似ている機体だが… その実力はどの様なものかな？」

刹那「此処にも戦争を広げる者が居る…！」

マスク「まさか、戦争を止めようなんて甘い考えではないな？」

刹那「止めてやる！俺とガンダムが！例え、異世界のモビルスーツだとしても…！」

〈戦闘会話 アキトVSマスク〉

アキト「指揮官を叩けば、戦いは終わる…！」

マスク「そう簡単にはいかせないぞ！黒い機体のパイロット！」

アキト「機動性の戦いだ…！少しでも遅れた時点で負けが確定だ…！」

〈戦闘会話 九郎VSマスク〉

アル「異世界のモビルスーツか！」

マスク「見た目からみて凄まじいパワーだ！だが、モビルスーツの機動性に勝てるかな？」

九郎「そんなもん、デモンベインの力でねじ伏せてやるよ！行くぜ！マスク野郎！」

〈戦闘会話　エイサップVSマスク〉

マスク「オーラバトラーという機体か！小さい分、機動性が高い！」

エレボス「ナナジンを褒められてるよ！エイサップ！」

マスク「だが、その分、火力が引くとみた、」

エイサップ「オーラバトラーのオーラ力を甘くみていると痛い目を見るぞ！」

〈戦闘会話　アーニーVSマスク〉

マスク「君の動きを見てわかる。君は相当な手練れだという事が！」

アーニー「敵の指揮官か……！」

マスク「君も指揮官の様に見えるが？」

アーニー「僕は指揮官には向いてない。だが、指揮については勉強したからなんとかできるが……」

マスク「面白い！では、勝負と行こう！」

アーニー「ああ！指揮勝負というのも悪くない！」

Gーセルフっていうガンダムは二本のビームサーベルで敵のエースのモビルスーツを切り裂き、殴り、蹴り飛ばした……。

マスク「ちいつ！カットシーでは、これが限界か！」

ベルリ「わかつているのか！ここは僕達のいた世界とは別の場所なんだぞ！何だってキャピタル・アーミィは戦いを仕掛けて来るんだ！」

マスク「わからないだろうな、ベルリ・ゼナム！生きるために戦うという事の意味が！」

ベルリ「あいつ……！僕の名前を知っている……？！」

マスク「覚えておくがいい、飛び級生ベルリ！このマスクが、お前を必ず倒す！」

それを言い残し、残るモビルスーツは撤退した……。

ベルリ「マスク……。何なんだ、あれ……」

戦いが終わり、俺達は戦闘態勢を解除する。

九郎「さっきの部隊……。組織ぐるみでアル・ワースに来ていた様子だな」

アマリ「どうやら、向こうの戦艦とは元の世界から敵対関係らしいですね」

零「それにしても、戦艦なんて初めて見たぜ……」

グランデイス「そうだね。ノーチラス号にも驚いたけど、ネオ・アトランティス以外にも空を飛ぶ艦なんてものがあるなんてね……」

ハンソン「あの戦艦の中……是非とも見てみたい！」

しんのすけ「オラも見てみたいゾー！」

アル「どうやら、向こうの艦は妾達の話を聞いてくれそうだぞ？」

零「まずはあの人達にあつてみよう」

アイーダ「帰還しますよ、ベルリ」

ベルリ「あ、はい……」

アイーダ「それと……。助けしてくれた事には、お礼を言います。ありがとう、ベルリ・

ゼナム」

ベルリ「どういたしまして、アイーダさん！」

ケロロ「仲が良くなって、良かったでありますな……さて、吾輩も冬樹殿達との再

会をするであります！」

俺達は戦艦……メガファウナに入り、ロボットから降りて、彼等の世界について聞いた。

ドニエル「……以上が、リギルド・センチュリーの人間であつた我々がこの世界に来たあらしだ」

零「磁気嵐の様なものに巻き込まれ、気がついたら、アル・ワースにいた……です

か……」

マサキ「規模は違うが、俺と似た様なもんだな」

ドニエル「改めて自己紹介をさせてもらう。私は、このメガファウナの艦長のドニエル・トスだ。まずは艦を救ってくれた事を感謝する」

アマリ「いえいえ、そんな。異界人であるあなた達を保護する事は、アル・ワースのためだと考えていますので」

ドニエル「アマリ君と言ったかな……。君が、この部隊の責任者かな？」

アマリ「いえ……。私達は救世主ワタル一行ですから。それと責任者なら零君の方が向いています」

……何言ってるのかな？この子は。

零「俺も責任者っていう器じゃねえよ」

ワタル「つまり、僕がリーダーで零さんが副リーダーって事！」

零「だから、勝手に副リーダーにするな！」

ノレド「そうなんだ！」

納得しないでくれよ！

ベルリ「子供なのにすごいね、君」

ライヤ「すごい、すごい」

しんのすけ「いや、それほどでも」

一夏「お前を褒めてるわけじゃ無いからな」

ドニエル「こら！今は大事な話の最中なのだから、向こうへ行つてろ！」

アイーダ「私が許可しました」

ドニエル「しかしですな、姫様……」

姫……？

アイーダ「私もベルリも戦場で彼等に助けられました。顔を見て、礼を述べるのが道理でしょう」

刹那「ならば、お前達があのだんだムのパイロットか？」

ベルリ「ガンダム……？」

アイーダ「それはG系統の事でしょうか？」

ティエリア「成る程、君達の世界ではガンダムをそう呼んでいるのか」

セルゲイ「ところでシヨウ君、君もモビルスーツやガンダムを知っていた様だが？」

シヨウ「……実は俺のいた世界もモビルスーツやガンダムと呼ばれる機体が存在していたんです。」

刹那「何……？」

千冬「シヨウの世界にもガンダムが……？」

シヨウ「だが、ベルリや刹那……あの時、敵として出て来たガンダムも知らないし、形式も少し違う様だ」

ベルリ「偶然の一致……って事なのか……」

アイーダ「まずは挨拶を。私はアイーダ・スルガン……。Gーアルケインのパイロットを務めています」

零「姫様って呼ばれている様だが……？」

アイーダ「私の父が、アメリカのトップだからです。ですが、余計な気遣いは無用です。ですのでただのアイーダとして接してください」

カンナム「わかったよ」

ノレド「さすがベルリの憧れの人……！話せるう！」

ベルリ「ノレド！ちよつと！」

ノレド「だって、そうじゃない。ベルリはアイーダさんのお尻を追いかけてこのメガファウナに来たんだから」

ほう？「それはなかなか……ん？あれ？しんのすけは？」

しんのすけ「アイーダお姉さん！オラとお茶でもどうですかな？」

アイーダ「ええ、ぜひ、ご一緒しましょうか」

ヒミコ「早速口説いてるぞ！」

夏美「… はあ」

ん？夏美がしんのすけに近づいたな。

そんで…？

ーゲンコツ！

あ…。ゲンコツを受けた。

夏美「話が進まないでしょ！」

しんのすけ「な、夏美お姉さん… 母ちゃんみたいだゾ…」

しんのすけの母親か… 見てみたいな。

ノレド「あはは！楽しい人達だね！あたしはノレド・ナグ。ベルリの友達で、成り行きでここまで付き合ってるの！で、こっちはライヤ・マンデイ」

ライヤ「…」

ノレド「ライヤは記憶がないの。マンデイって名前も月曜日に拾われたからってつけられたのよ」

ベルリ「(Gーセルフは、ライヤが乗って宇宙から来たって聞いている…。Gーセルフは特殊な軌道制限がかけられていて、僕とアイーダさんとライヤしか操縦できないけど、それに何の意味があるんだ…)」

アイーダ「ベルリ…。あなたも挨拶なさい」

ベルリ「僕はベルリ・ゼナム。色々な事があつたけど、今はGーセルフのパイロットをやつてる」

ケロロ「吾輩も挨拶をします！ 吾輩はケロロ軍曹であります！ ガマ星雲第58番惑星ケロン星出身のケロン人です！」

冬樹「それで僕の友達です！」

ティエリア「つまり、君は宇宙人という事か」

ケロロ「そうでありますな！」

カエルの宇宙人とは……世界は広いな。

アマリ「取り敢えず、まずはお互いの情報を交換しましょう。」

零「そうだな。あのキャピタル・アーミーという組織についても気になるし……」

ドニエル「わかった。こちらの世界に来て約一週間……我々も置かれた状況を確認したい」

よし、取り敢えず、情報の交換だな……。

アイーダ「……」

ベルリ「あの……アイーダさん……さつきノレドの言った事は……」

アイーダ「待って、ベルリ。ギゼラ少尉が来たわ」

ベルリ「(こ)れって……はぐらかされた……？」

ギゼラ「艦長！クリム・ニック中尉から通信です！」

ドニエル「何だと!?？」

サヤ「そのクリム・ニック中尉というのは…?」

ノレド「前にこの艦に乗っていた天才パイロットよ。おまけにアメリカの大統領の息子何だって」

ワタル「アイーダさんと同じで偉い人の子供なんだね」

ノレド「こつちの世界に跳ばされる前に別方面に配置になったって聞いたけど…」

ドニエル艦長は通信を開いた。

クリム「遅いぞ、艦長」

ドニエル「クリム中尉！」

クリム「勝手知ったるメガファウナだ。直接、格納庫に通信を繋いだ。そちらには姫様もいらつしやるだろうから、一緒に聞いてくれ」

ベルリ「お久しぶりです、クリム中尉」

クリム「ベルリ・ゼナムも元氣そうだな。このような状況で再会するとは思ってもみなかったよ。なお、私は戦時特例で大尉となった。以降はクリム大尉と呼ぶように」

ドニエル「戦時特例…?クリム大尉は、今どちらにいます?」

クリム「そちらと同じくアル・ワースにいる。アメリカこ一個大隊もだ」

ドニエル「一個大隊：：！」

一個大隊って相当だな：：。

クリム「キャピタル・アーミイもそれなりの数が跳ばされている。驚く程の事ではない。問題なのは、連中が既にミスルギ皇国に雇われている事だ」

アマリ「ミスルギ皇国：：。マナの国の中でも最大勢力の国家ですね：：。」

クリム「アル・ワースの住民がいるなら、話が早い。アーミイは、そのミスルギ皇国に雇われ、我々に対して攻撃を仕掛けて来ている」

つまり、あのバルバトスとかいうガンダムのパイロットもミスルギ皇国に雇われているのか：：？

零「それはつまり、雇い主であるミスルギ皇国の意思なのですか？」

クリム「：：君は？」

零「新垣 零です。メガファウナとは共同でキャピタル・アーミイと戦いました。クリム中尉」

クリム「そうか、よろしく。それと、メガファウナには、ミスルギ皇国の事を調べてもらいたい」

ドニエル「え：：！」

クリム「我々の本隊が陽動で動く。その間にメガファウナは単艦で行動し、ミスルギ

皇国の状況を調査してくれ。これはアメリカ軍アル・ワース隊を預かる事となった私からの命令だと思ってくれ」

アル・ワース隊ね……。

クリム「補給物資その他は、追ってそちらに送る。健闘を祈るぞ、艦長」

通信が切れたな……。

ギゼラ「通信、終了しました」

ベルリ「言いたいことだけ言って、行っちゃいましたね」

ドニエル「あの男は……！相変わらずの天才ぶりだ！」

アイーダ「どうします、艦長？」

ドニエル「どうするもこうするもない。やるしかないだろう」

ワタル「だったら、僕達も行くよ」

ドニエル「何と……？」

零「俺達もマナの国に用事があるんです」

アマリ「ミスルギがどういうつもりであなた達を敵視しているかはわかりませんが……。この世界全体の危機を知れば、そういった小競り合いも収まると思います」

ドニエル「こちらの置かれている状況が好転する可能性もあるのか……。では、ワタル君……。正式に君達に同行を依頼したい」

ワタル「了解です！僕達に任せてください！」

エイサップ「これで徒歩での移動もなくなるね」

マサキ「野宿とも、おさらばだぜ」

アマリ「…」

ん？アマリ…？

アマリ「（ミスルギ王国…。魔徒教団でも干渉できない謎の国…。大規模転移がマナの国で起きた事も含めて、警戒しなくてはなりませんね…）」

こうして、俺達はメガファウナに乗り、ミスルギ王国へ向かった…。

「俺はオルガ・イツカ…。鉄華団の団長だ。」

俺達は今、ミスルギ王国に居た。

すると、バルバトスルプスが戻って来た。

三日月「オルガ、帰ったよ」

オルガ「良くやってくれたな、ミカ」

ミカはバルバトスルプスから降り、俺の目の前に立った。

オルガ「彼奴らはどうだった？」

三日月「強かったよ……鉄華団と良い勝負が出来そうだった」

オルガ「……俺達はそれぞれ死んだ後、このアル・ワースに来た……。俺達を拾ってくれたミスルギ皇国には借りを返さないとな」

？「その割には早い退きだったね？オルガ・イツカ」

こいつは……。

オルガ「……あんたか。鉄華団とタービンの代表は俺と名瀬の兄貴だ。指揮権はオレにあるはずだが？」

？「それもそうだね。それにしても、君達のガンダムのシステムも凄いものだね。阿頼耶識システムだっけ？」

三日月「……何が言いたいのか？」

？「いや、僕はただ知りたいだけなんだよ……。未来を切り開くガンダムは君達か……。刹那・F・セイエイなのかをね……。楽しみに見ているよ」

そう言い残し、奴はその場を後にした……。

オルガ「……いつも何考えてるのかわからない奴だな」

三日月「オルガが望むなら彼奴を殺すけど？」

オルガ「いや、今、ミスルギと彼奴を敵に回したくない」

三日月「わかったよ」

あの男……
リボンズ・アルマーク……。
彼奴は一体何を考えてるんだ……？

第7話 鋼鉄の星

「俺はゼロ……ウルトラマンゼロだ。」

俺、グレンファイヤー、ミラーナイトはエメラナと久しぶりに会う事になっていた。

俺達、ウルティメイトフォースゼロは4人だが、もう1人の仲間であるジャンボットは相当、エメラナに会えるのが嬉しかったのか、先に行ってしまった……。

ゼロ「エメラナに会うのは久しぶりだな」

ミラーナイト「はい。姫様と会えると思うと胸が熱くなります」

グレンファイヤー「そうだな！つてか、焼き鳥の奴、先に行きやがって！」

ミラーナイト「貴方が寝坊するからですよ」

グレンファイヤー「お前だつて身だしなみがどうとかつて鏡をずーつと見てたじゃねえか！」

ミラーナイト「身だしなみは大事ですよ」

……たくつ……こいつらは……

ゼロ「はいはい。早くいくぞー。エメラナが待つてる！」

俺は飛ぶスピードを速めた。

グレンファイヤー「お、おいおい！待てよ、ゼロー!!?」
そんな俺を追いかけるようにグレンファイヤーとミラーナイトが飛ぶスピードを速めた……。

エメラナとの合流ポイントについた俺達……。だが、感動の再会とはいかなかつた……。

ゼロ「おい!!?何だあれは！」

俺達の目の前には巨大な鉄の塊があった。

ゼロ「くっ！何だ!!?この鉄の塊は!!?」

ミラーナイト「折角、姫様との再会の時に……!!」

グレンファイヤー「愚痴っても仕方ねえだろ！おい！姫さん何処だー!!?」

鉄の塊から光弾が発射され、俺達は光弾を弾きながら、鉄の塊の周りを飛ぶ。

すると、俺達は知り合いの人物を見つけた。

ジャンボット「姫様！脱出不可能です！」

エメラナ「何が起こっているの!!?」

エメラナが乗ってるであろう宇宙船を抱えながら、ジャンボットは鉄の塊から出た電

波ネットに捕まり、中へ引きずられていた。

ゼロ「っ!? ジャンボット!?」

ミラーナイト「姫様も居ます!」

グレンファイヤー「焼き鳥はどうでもいいけど、姫さんは返せー!!」

俺達はジャンボットとエメラナを助け出そうと動き出したが、ジャンボット達は中に引きずり込まれ、扉を閉じられてしまう。

ミラーナイト「シルバークロス!」

グレンファイヤー「ファイヤーフラッシュ!」

ゼロ「セヤアツ!」

それぞれの攻撃で扉を破壊しようとするが、扉は固く、傷一つつかなかった。くそッ! エメラナとジャンボットがこの中にいるのに…!!

俺は何とか扉をぶち破る方法を考えるが、鉄の塊は突如として消えた。

ミラーナイト「なっ!?」

グレンファイヤー「な、何だあ…?」

ゼロ「…消えた…!?」

恐らく、あの鉄の塊は別の宇宙へ向かったんだろう…。

エメラナとジャンボットを助け出さねえとな…!!

「俺の名はレイ、地球のレイオニクスだ。

俺とボスであるヒュウガは人口2千万人ほどいるZAP最大の開拓惑星と呼ばれている惑星ブラムを目指していた。

ヒュウガ「見えてきたぞ、レイ！あれが惑星ブラムだ！あそこはリゾート地が豊富でな！楽しめるぞ？」

レイ「リゾートか……俺は宇宙を飛び回っている方が良いがな」

ヒュウガ「そう言うな。折角の休暇だ！お前やゴモラ達もゆっくりと羽を伸ばせ！」

レイ「……確かに、それも良いかもな」

リゾート地で遊ぶ俺達や相棒であるゴモラを頭で想像しながら、内心、俺も休暇を楽しむにしていた。

一刻も早く、惑星ブラムへ行こうと俺は宇宙船のスピードを上げる……。

だが……。

レイ「ボス！俺達の周りに時空の歪曲を確認した！」

ヒュウガ「何?!? どう言う事だ?!?」

レイ「恐らく、俺達は……っ！駄目だ……！うわああああっ！」

俺達は別の世界へ跳ばされると言おうとした俺だったが、既に俺達の乗る宇宙船は時空の歪曲に巻き込まれてしまった……。

―新垣 零だ。

俺達はメガファウナに乗り、ミスルギ皇国を目指していた。

移動の間は暇なので、俺、アマリ、しんのすけ、一夏、ワタル、ヒミコはメガファウナの艦内をベルリ、アイーダ、ノレド、ライイヤに見学の案内して貰っていた。

ノレド「じゃあみんなは戦艦の中も見た事ないんだ」

一夏「ああ、言ってテレビの中……だけだな」

ワタル「僕なんて魔神でさえも驚いてるのに……」

ベルリ「僕達の世界じゃ、考えられないな……」

ヒミコ「何にしても、移動手段ができて良かったのだ！」

ライイヤ「良かった、良かった」

アマリ「はい、これでゼルガードを巡航モードにしなくても良いです」

零「……そう言えば、アイーダとしんのすけは？」

さつきまで居たはずだが……。

ん……？

アイーダ「なる程、これがぶりぶりぎえもんね…… 上手ですね。しんちゃん！
しんのすけ「アイーダお姉さんに褒められたゾ」

…… 姉弟みたいだな。

ノレド「しんちゃんっていつもああなの？」

零「いつもああだぜ？」

アマリ「私もナンパされました」

ベルリ「僕からしたらI Sが凄いや。僕も乗ってみたい」

一夏「乗せれるなら乗せてやりたいけど、俺以外の男は乗れないんだ…… ごめんな、ベルリ」

ベルリ「いやいや！乗ってみたいって思ったただだから一夏は悪くないよ」

俺達が話していると刹那とシバラク先生、千冬さんが来た。

シバラク「此処に居たか」

零「千冬さん達…… どうしました？」

刹那「ドニエル艦長がお前達を呼んでいる」

千冬「何でもクリム大尉からまたもや通信があつたようだ」

ベルリ「クリム大尉から：：？」

アイーダ「わかりました。すぐに向かいます」

俺達はメガファウナの艦長室へ向かった：：。

艦長室に着くと、ドニエル艦長が焦った様に話しかけて来た。

ドニエル「おお、来たか！ 実はアル・ワースの宇宙空間に謎の巨大球体が突如として出現したとのクリム大尉から報告があつた」

アイーダ「巨大球体：：？」

九郎「それって、惑星って事か？」

ドニエル「詳しい事は分からないが、脅威になる可能性も考え、すぐさま調査をしてほしいとの事だ」

エイサツプ「確かに、何かあつては遅いからな：：」

ケロロ「突如として出現したあたり、別世界から来たと睨んでも良いでありますな」

カンナム「何にしても、調査が必要だね：：。という事はメガファウナは宇宙へ上がるという事になりますよね？」

ドニエル「ああ」

ワタル「やったー！宇宙を見れるなんて！」

シヨウ「遊びじゃないぞ？ワタル」

テイエリア「得体の知れない惑星：着陸したら、戦闘警戒は持っていた方がいいな」

アンドレイ「突然襲撃という場合があるし、それが良いだろう」

零「アマリも宇宙へは行ったことがないのか？」

アマリ「はい。特にはないですね」

セルゲイ「では、警戒しつつ宇宙へ上がろう」

セルゲイさんの言葉に俺達は頷く。

ナディア「…宇宙…か…」

ジャン「どうしたの？ナディア」

グランデイス「こんな形で宇宙に上がるなんて思っても見なかったんだね？」

ナディア「うん…」

戦艦があつてこそだからな…。

ドニエル「話は以上だ！各員は宇宙に上がる衝撃に備えてくれ」

ドニエル艦長の言葉を最後に俺達は解散した…。

だが、不意にケロロが夏美を呼び止めた。

ケロロ「夏美殿」

夏美「何よボケガエル？」

ケロロ「夏美殿にこれを渡しておくであります！」

ケロロは夏美にチョーカーの様な物を渡した。

冬樹「それって前にギロロが姉ちゃんに渡した変身チョーカーだよな？」

夏美「何であんたが持つてるのよ？」

ケロロ「調子が悪いとの事でギロロがクルル曹長に治させて欲しいと言っていたので吾輩がクルルに渡したのであります！それで治ったから夏美殿に渡そうかと」

夏美「何ですよ？」

ケロロ「吾輩達はロボットで戦うので、少しでも夏美殿達の身の安全を考えたのでありますよ」

冬樹「軍曹……」

夏美「ボケガエルにしては優しいわね。ありがとう！でも、これで私も皆さんと一緒に戦えるわね」

ケロロ「ケロロ!?? 聞いていたのではありませんか!?? 危険なのでありますよ!??」

夏美「一夏さんだって、同じ状態なのよ？私もやってやるわよ！大丈夫、無理はしな
いから」

ケロロ「もしも無茶をするのなら、強制的に変身チョーカーを破壊するでありますよ

？」

夏美「了解！」

夏美も一緒に戦ってくれるのか……。俺も頑張らないとな……。

こうしてメガファウナは謎の巨大惑星の調査の為に宇宙へ上がった……。

ーレイだ。

俺は目を覚ますと、何処かの宇宙空間に居た。

多次元宇宙は前に経験した事があるから、驚きはしない。

レイ「ボス！大丈夫か!!？」

俺の声にボスは目を覚ました。

ヒュウガ「お、おお……。レイ。大丈夫だ……。この宇宙は一体……。？」

レイ「恐らく、俺達はまた多次元宇宙へ来てしまったんだ」

ヒュウガ「多次元宇宙？前のサロメの時のあれか！」

レイ「ああ……。ん？何だあれは!!？」

ヒユウガ「どうした… 何!?？」

辺りを見渡す事で俺は気づいた、俺達の前方に大きな鉄の惑星があった事に…。

ヒユウガ「惑星なのか…?」

レイ「全身鉄で出来ている」

ヒユウガ「鋼鉄の星という事か…。あの星を調査しよう。何処かに入れる場所があるだろう」

レイ「了解」

鉄の惑星の周りを飛ぶと、一箇所だけ、小さい隙間があった。

ヒユウガ「あそこから入れそうだな」

レイ「よし、行くぞ!」

宇宙船を動かし、俺達は隙間の中に入った…。

第7話 鋼鉄の星

鉄の惑星の中は荒地が広がり、タワーの様な物があった。

ヒユウガ「何だ?人の気配がしないな…。」

レイ「着陸する」

宇宙船を着陸させ、外に出た俺達は辺りを見渡す。

レイ「この惑星は一体……？」

すると、地響きが聞こえる。

ヒユウガ「地震?!？」

レイ「ボス！あれを！」

俺が指差す方向に白いドレスを着た女が走ってきた。

女は俺達に気づくと、俺達の前で止まる。

エメラナ「貴方達もこの惑星に閉じ込められたのですか?!？」

ヒユウガ「嫌、我々はこの惑星を調査しに来たんだ！」

エメラナ「私はエメラナです！お2人共、早く逃げてください！彼等が来ます！」

レイ「彼等……？うわあっ?!？」

またもや地震が起こり、俺達は上を見上げると三体のロボットが俺達を狙い、歩いて来た。

3体の内、1体は知らんが、後の2体はわかる……。エースキラーとインペライザーだ。

ヒユウガ「ロボット?!？」

エメラナ「彼等は私を追いかけて来たのです。早く逃げないと……！」
レイ「大丈夫だ！俺が行く！」

そう言い残して、俺は駆け出す。

エメラナ「危険です！戻ってください！」

ヒュウガ「彼奴なら大丈夫だ！」

エメラナ「え……？」

エメラナという女が俺を心配してか、呼び止めようとしたが、ボスがうまくフオーロをしてくれた。

俺はロボット達の目の前に行き、見上げ睨む。

そして、俺は腰からネオバトルナイザーを取り出し、構えた。

ネオバトルナイザー『バトルナイザー！モンスロード!!?』

レイ「行け！ゴモラ!!?」

ネオバトルナイザーが光り、中から俺の相棒……古代怪獣　ゴモラが召喚された。

ゴモラは鳴き、唸りながら、ロボット怪獣3体を睨む。

ゴモラに気づいたのか3体も戦闘態勢に入った……。

エメラナ「か、怪獣……!!?」

ヒュウガ「大丈夫。あの怪獣は味方さ」

エメラナ「あの方は一体……？」

ヒュウガ「怪獣使いさ」

エメラナ「怪獣使い……」

俺はゴモラに指示を出して、ゴモラはロボット達との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話　ゴモラVS初戦闘〉

レイ「こいつらの目的は分からない！油断するな！ゴモラ！」

ゴモラ「キシヤーン!!??!!??」

ゴモラはロボット怪獣3体との戦闘を繰り広げる。

俺の数の差はあるが、俺のゴモラには関係ない。

このまま行けば、ゴモラの勝利で終わるだろう……そう。このまま行けば……。

ヒュウガ「レイ、気をつけろ！まだ来るぞ!!??」

ボスの言葉通りに今度は20体という数のロボット怪獣軍団が現れる。

レイ「この数は……！」

流石のゴモラでもこの数では……だが、逃げるわけには……。すると、今度は赤い戦艦が現れた……。

―新垣 零だ。

俺達は謎の惑星を調べる為に僅かな隙見の中に入り、惑星の中に入ると怪獣と20体程のロボット軍団が戦う光景を目にした。

シバラク「これは……！」

ハンソン「どういう事!??中に怪獣が居るなんて……！」

サンソン「どうやら、あのロボット軍団と戦っている様だな！」

ホープス「皆様、3つの生体反応があります」

アマリ「え……」

ホープスの言葉通り、2人の男性と1人の女性が居た。

一夏「本当だ!あそこに人が居る!」

ベルリ「でも、何で逃げないんだろう?」

零「逃げないというより、戦いを自ら見ているように見える」

あの人達は一体……？

ドニエル「取り敢えず、機動部隊は出撃してくれ！」

ケロロ「了解であります！」

俺達はロボットに乗り込み、出撃する。

エメラナ「彼等は貴方方のお知り合いですか？」

レイ「いや、知らない。敵の増援か……？」

ヒユウガ「ロボット怪獣とは違い、人が乗っているようだ。待ってくれ！コンタクトを取ってみる」

すると、俺達のロボットとメガファウナに通信が入る。

ヒユウガ「こちらはZAP SPACYのヒユウガだ！君達は何者なんだ？」

ドニエル「私は、このメガファウナの艦長のドニエル・トスだ！我々は敵ではない。此処は我々に任せて避難をして欲しい！」

ヒユウガ「了解した！だが、避難に関しては心配しなくとも大丈夫だ。あの茶色の怪獣が戦ってくれているからな」

ワタル「え……？って事は、怪獣は味方なの……？」

レイ「その判断で構わない。俺の名はレイ。あの怪獣は俺の相棒のゴモラだ」

刹那「相棒だと……？ならば、お前が……」

レイ「ああ、怪獣に指示を送っている」

アル「ふむ、怪獣を操るとは…」

零「兎に角、怪獣は味方として、俺達も戦おう！」

夏美「私もやります！」

ん…？ 夏美が… ええっ!!？

何と、夏美がパワードスーツを身に纏い、メガファウナから出てきた。

夏美「パワード夏美！行くわよ!!？」

一夏「夏美もI Sを持っていたのか!!？」

ケロロ「違うであります一夏殿！あれはケロン軍の技術力で作り上げたパワードスー

ツであります！」

アキト「… 戦うのかい？ 夏美ちゃん」

夏美「心配してくれてありがとうございます、アキトさん。でも、私だって守られて
いるだけは嫌なんです！」

千冬「わかった… では、戦闘開始だ！無理はするなよ！」

アンドレイ「了解！」

俺達は怪獣のゴモラと共にロボット軍団との戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「怪獣と一緒に戦えるなんて、これを逃したら、経験できないな。あの、レイって男の人からも話を聞きたいな…。名前が一緒だしな」

〈戦闘会話 アマリVS初戦闘〉

アマリ「マナの国のドラゴンとはまた違いますね」

ホープス「あれはドラゴンではなく、怪獣です」

アマリ「ち、違いがわかりませんが、取り敢えず、倒します！」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「怪獣って…。本当に特撮の世界だな…。後で触れたりしないかな…。？」

〈戦闘会話 ワタルVS初戦闘〉

ワタル「ロボット怪獣って、テレビで見た事があるけど…。人は乗ってるの？」

龍神丸「いや…。あれは無人機だ。全力で破壊しても大丈夫だ！ワタル」

ワタル「なら、手加減はしないぞ！」

〈戦闘会話 シバラクVS初戦闘〉

シバラク「最近は驚く事ばかりでござるな。もう何が起こつても驚かん！参る！」

〈戦闘会話 しんのすけVS初戦闘〉

カンナム「胸が踊るかい？しんのすけ君」

しんのすけ「オラの大好きなアクション仮面とカンナムが合わさってるゾ！」

カンナム「まだ、増援という場合もある！気をつけていこう！」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「意思を持たないロボット…。そして、人間と分り合う怪獣…。か。本当ならば、

お前達ともわかりあえたら良いのだが…。！」

〈戦闘会話 ティエリアVS初戦闘〉

ティエリア「これが特撮映画というものか…。？これを映画ソレスタルビーイングに

すれば、視聴率が上がるのでは…。？？」

〈戦闘会話 アンドレイVS初戦闘〉

アンドレイ「私も幼き頃は怪獣などに憧れた物だ…それがもはや、現実で本物に出会えるとは…もう何があってもおかしくないな！」

〈戦闘会話 セルゲイVS初戦闘〉

セルゲイ「うーむ、実にカッコいい。あの怪獣の頭の上に乗ってみたいものだ…。その為にも早く終わらせるとしよう！」

〈戦闘会話 グランデイスVS初戦闘〉

ハンソン「あの怪獣を操る機械…調べてみたいな〜」

グランデイス「そんなのは後でやりな！今は目の前の事に集中するよ！」

サンソン「グラタンでも戦える事を証明してやる！」

〈戦闘会話 アキトVS初戦闘〉

アキト「こんな光景をガイが見たら、とんでも無いことになりそうだな…。俺も内心テンションが上がっている…。後で、写真撮影をさせてもらおう…」

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

九郎「あの怪獣どもを見てるとダゴンを思い出すぜ」

アル「まあ、巨大生物には変わりないからな……」

九郎「でも、こういう相手の方がデモンベインにはピッタリだぜ！全力でやるぜ!!？」

〈戦闘会話 ショウVS初戦闘〉

チャム「おつきな敵だなく。オーラバトラーじや攻撃を受けたら、一撃でやられちゃう！」

ショウ「でもああいう生物は恐獣で慣れている！簡単には落とされないぞ！」

〈戦闘会話 エイサツプVS初戦闘〉

エイサツプ「怪獣か……。敵にならない事を願いたいけど……」

エレボス「大丈夫だよ！あの怪獣からは悪しきオーラは感じないから！」

エイサツプ「怪獣を使役する男……か。まあ、あのレイって、人が敵にならない限りは大丈夫か」

〈戦闘会話 ベルリVS初戦闘〉

ベルリ「モビルスーツと怪獣が並ぶ事になるなんてね……。こんな状況じゃないのから、楽しめたものなの……！」

〈戦闘会話 アイーダVS初戦闘〉

アイーダ「間違えてあの怪獣を撃たないようにしないと……。それに後で頭を撫でたいです……！」

〈戦闘会話 ドニエルVS初戦闘〉

ドニエル「怪獣の尻尾が長いというのは本当の事なのだな」

副長「艦長？」

ドニエル「嫌、何でもない。では、戦闘開始だ！」

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

ケロロ「ケロケロ……。あの怪獣を操る機械があればペコポン侵略など……。って、今はやめておくであります。敵が増えたら嫌であります……。兎に角、行くぞー!!？」

〈戦闘会話 夏美VS初戦闘〉

夏美「まだちよつと慣れないけど、やってやる！飛び回れば攻撃は当たらないのよ！」

〈戦闘会話　マサキVS初戦闘〉

マサキ「ゴモラにエースキラー！つて…何で彼奴らが此処に…此処は惑星エルピスなのか…!!？」

クロ「違うみたいだニヤ！」

シロ「あの怪獣達も違う世界の怪獣みたいだニヤ！マサキ！」

マサキ「おいおい、まさかウルトラマンまで出てくるつて事はないだろうな！」

〈戦闘会話　アーニーVS初戦闘〉

アーニー「ロボット怪獣…彼等もあなたはそこにいますかと聞くのかな…？つて、それは違うか…。怪獣狩りも傭兵の仕事だ！」

〈戦闘会話　サヤVS初戦闘〉

サヤ「取り込まれないだけ、ありがたい事ですね…スピードで翻弄してみせます！」

俺達はロボット怪獣軍団を着々と倒して行く……。

あのゴモラって怪獣……中々の強さだな……。

レイ「良いぞゴモラ！」

ワタル「このまま押し切れば勝てるよ！」

……っ!!?この気配は……。

零「来るぞ!!?」

俺が叫んだと同時にオニキスのガラム軍と2機の機動兵器が現れた。

アーニー「オニキスがどうしてこんな所に!!?」

?「見つけたわよ!新垣 零!」

零「……弘樹が居ない……?お前らは誰だ!!?」

?2「私はメル・カーネリアン……オニキスの司令官をやっています」

?「私はアスナ・ペリドット……新垣 零!貴方を捕らえるわ……!」

メル「アスナ・ペリドット……私達の目的はそれだけではありませんよ」

アスナ「わかっているわよ、メル！」

零「お前達……弘樹はどうした？」

アスナ「あんな奴が居なくても私達だけで充分よ！」

メル「彼は待機中です。再開したいのなら、私達と共に来てください……。新垣 零さ

ん

零「来いって言われて来る奴は居ねえだろ！俺を連れて行きたいなら、力づくで来い！」

アスナ「良い度胸じゃない！手加減はしないわよ！リリース！行くわよ！」

メル「争いは好みませんが… 致し方ありません。メサイア… 戦闘を開始します」

アスナ「奴の機体はリリース、メル「奴の機体はメサイア」って言うのか…」

こつちだつて負けるわけにはいかねえんだよ！

零「お前らが何故俺を狙うかはわからないが、黙つて捕まつてやるかよ！」

ヒュウガ「彼等は一体…？」

サヤ「彼等はオニキス… 私達の敵です」

ベルリ「彼奴らは零さんを狙つてるね…」

九郎「しつこいストーカーだな！」

マサキ「返り討ちにしてやるぜ！」

俺達はロボット怪獣軍団とオニキスとの戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VSアスナ〉

アスナ「新垣 零！貴方を倒して、彼奴を呼び戻して上げるわ！」

零「彼奴……？一体誰の事だ!!？」

アスナ「本当に覚えていないのね……私の探してるのは貴方じゃないのよ！新垣 零！」

零「お前が誰を探してるかなんて知るかよ！力づくでお前達の目的を聞き出してやる！」

〈戦闘会話 アマリVSアスナ〉

アスナ「貴女、新垣 零の何なの？」

アマリ「私は零君の仲間です！」

アスナ「本当にそれだけ？貴女の視線は仲間の視線じゃないわね……。貴女、新垣 零の事が好きなのね？異性として……」

アマリ「なっ!!？え、ええ!!？そ、そそそそんな……！わ、私は……！」

ホープス「ドグマが乱れていますよマスター。相手のペースに乗せられてはダメです」

アマリ「わ、わかっています……！」

アスナ「彼奴を取り戻すためには貴女は邪魔ね。此処で倒して上げるわ！」

〈戦闘会話　サヤVSアスナ〉

アスナ「貴女もエルプスウンデなのよね？」

サヤ「どうして貴女がエルプスウンデの事を知っているのですか!?？」

アスナ「貴女の妹っていう…あの…。何て名前だっけ？」

サヤ「まさか、アユルですか!?？」

アスナ「ああ、そうそう」

サヤ「(アユルがアル・ワースに居る…? 一体どういう事なの…?)」

〈戦闘会話　零VSメル〉

メル「新垣　零さん、もう1度だけ言います。大人しく私達と一緒に来てください。

私は争いを好みません」

零「俺だつて出来たら、戦いたくねえよ!でも、お前らが誰かを傷つけるなら戦うし

かねえんだよ!」

メル「私だつて…誰かを傷つけたくないです…!」

零「お前…」

メル「でも、あの方の為に私は負けられないのです！」

零「…俺だって、負けられない理由はある！だから、負けるわけにはいかないんだよ!!?」

〈戦闘会話 アマリVSメル〉

アマリ「戦闘をやめてください！」

メル「ならば、武装を解除して、新垣 零さんを手渡してください」

アマリ「それは出来ません！零君は私が守ります！」

メル「くっ…！やるしかないですね…！」

〈戦闘会話 アーニーVSメル〉

アーニー「オニキスの司令官が来るか…！」

メル「貴方がアニエス・ベルジュ少尉ですか」

アーニー「どうして僕の名前を知っているんだ！」

メル「貴方のご友人に貴方の事を聞いたのですよ」

アーニー「僕の友人だと…?!?（まさか、ジン…?ジン・スペンサーなのか…?!

?どうして、ジンがアル・ワースに…!）」

ガルムの軍団を倒し、俺達はリリースとメサイアを連携で追い詰める。

メル「やはり、戦力の差がありますね…！」

セルゲイ「大人しく投降すれば、命までは取らない」

アスナ「舐めないですよ…私の力はこんなものじゃない!!？」

な、何だ!!？リリースの雰囲気が変わった…!!？

メル「バスタードモード…!!？アスナ・ペリドット！その力を使っては駄目です！」

アスナ「うるさいうるさい!!？新垣 零…絶対に許さないんだからあああああつ!!

？」

零「っ!!？」

突如としてリリースの機動性、パワーが格段に上がり、俺の目の前まで接近し、俺は回避や防御も間に合わず、リリースの連続攻撃を受け、最後にブレードで斬り飛ばされた…。

零「グアアアアアアッ!!？」

あまりの衝撃に俺は悲鳴をあげる…。

一夏「零!!？」

アイーダ「な、何…!? あの方は…!」

シヨウ「おぞましいオーラを感じる…!」

エイサツプ「これは…負のオーラなのか…!?」

千冬「あの動き…コールシテイでの戦闘で零のゼフィルスが見せた動きに似ている…!」

アスナ「まだまだー!!?」

零「ぐっ…うう…!」

正直まずい…今の機体ダメージレベルじゃ、いくらゼフィルスでも…!

アマリ「零君!…ああっ!?」

だが、何と、俺とリリスの間にゼルガードが割り込み、俺を庇い、攻撃を受けた…

零「あ、アマリ…!…くっ、てめえええええっ!!?」

攻撃を受けたゼルガードを見て、俺の中の何かが発動し、俺の体が軽くなる。

自分ではわからないが、またもや黒目部分が赤に染まっている。

ゼフィルスを動かし、ゼルガードに追撃をかけようとしたリリスに連続攻撃を与えた。

アスナ「うっ…あああっ!?」

零「…っ、あれ…!?」

え…!!?俺、いつの間に攻撃を…!!?

メル「あの動き…！」

アスナ「やっぱり貴方もバスタードモードを使えるのね…！」

零「バスタードモード…？」

アスナ「これだけの条件が揃っていても、思い出さないのでね… 新垣 零」

零「お前はさつきから何の事を言ってるんだよ！」

アスナ「…ならば、これはどう?レイヤ・エメラルド」

零「レイヤ・エメラルド…？」

な、何だ…?その名前…。俺は聞いた事がある… つつ!!?

突然、俺の頭に痛みが走り出す。

零「ぐっ… ああつ…！あた、まが… 痛い…！何だ、これは…！」

刹那「零!どうした!!?」

九郎「おい!返事をしろ!零!!?」

アマリ「零君!!?」

頭が… 割れる…!ぐっ… うあああつ…!

零「グアアアアアツ…!!?」

私はアマリ・アクアマリンです。

リリスという機体と戦ったシャイニング・ゼフィルス。

けど、突然、零君の苦しみの声が聞こえてきました……

他の人達が零君に心配の声をかけますが、零君はそれどころじゃないのか、返す言葉もありませんでした……

零「グアアアアアツ……！」

アマリ「れ、零君!!？」

最後に聞こえた大きな零君の悲鳴を聞き、本格的にまずいと思いました、既に遅かったです……

零君の悲鳴が聞こえた後、ゼフィルスは操縦を失った様に落下した……

アマリ「零君……？零君！起きて！起きてよ！零君!!？」

何度も零君を呼びますが、一向に零君からの応答がありませんでした……

気を失っている……？

テイエリア「ゼフィルスが……！」

一夏「お前ら、零に何をしやがった!!？」

アスナ「別に何もしていないわよ……それに今なら……メル」

メル「……」

アスナ「どうしたのよメル」

メル「……新垣 零さんとシャイニング・ゼフィルスを回収してください」

メルという人が指示を送るとゼフィルスの周りに3機のガルムが現れました。

このままじゃ零君が……！

カンナム「このままでは零君が連れ去られてしまう……！」

アキト「そんな事させない！」

夏美「早く零さんを助けださないと！」

レイ「ゴモラ！彼を助けろ!!？」

皆さんはそれぞれ、零君を助け出そうと動き出しましたが……。

アスナ「やらせるわけないでしょ！」

リリスとガルム軍から一斉射撃が放たれました……！

ケロロ「くっつ!?？これでは近づけないであります！」

ワタル「零さんを連れていかれちゃうよ！」

グランデイス「何か良い手はないのかい!?？」

アーニー「くっ……！せめて、オデュッセアが使えれば……！」

私達が一斉射撃に苦戦している中、3機のガルムはゼフィルスに手をかけようとして

いました……。

零君が……連れていかれちゃう……？そんな……零君……そんなの……そんなの……！

アマリ「駄目えええええつ!!？」

？「デエヤアアツ!!？」

突然現れた青い影がゼフィルスを捕らえようとしていた3機のガルムを破壊しました……。

メル「な、何……!!？」

アスナ「だ、誰よ！一体！」

私達とオニキス達はゼフィルスを助けた者を見る。

そこには赤と青、銀の姿の巨人が立っていました。

エメラナ「ゼロ!!？」

この惑星に居たドレスの人が巨人を見て、そう叫びました。

ゼロ「探すのに時間がかかったが、ようやく見つけられたぜ。お待たせ」

ゼロという巨人はドレスの人に気づいたのか、指で挨拶をしました……。

そんなゼロにロボット怪獣の2機が襲いかかろうとしていました……。ですが、ゼロという巨人は一向に動こうとしません……。何故ならば、背後に赤の巨人と銀の巨人が

居たからです。

2体の巨人はそれぞれの方法でロボット怪獣を倒しました……。

ミラーナイト「姫様！ご無事ですか?!？」

グレンファイヤー「助けに来たぜ。姫さん」

エメラナ「グレンファイヤー！ミラーナイトも！」

銀の巨人をミラーナイト、赤の巨人をグレンファイヤーと呼びました……。

ヒュウガ「ウルトラマンゼロ！」

レイ「彼もこの宇宙に来ていたのか……！」

ゼロ「怪獣使いのレイか……また会えて嬉しいぜ」

ワタル「何なの?!？あの巨人……！」

アンドレイ「味方……なのか？」

しんのすけ「かっこいいゾ〜！」

マサキ「あのウルトラマンゼロってのは味方で間違いないぜ」

アル「何故、汝がその様な事がわかる？」

マサキ「詳しい話は後だ」

エメラナ「ゼロ！そのロボットをあの戦艦まで運んでもらえませんか？彼等は味方で

す！私達を助けてくれたのです！」

ゼロ「わかった！あの赤い戦艦で良いんだな…。？ほらよ」

ゼロという巨人はゼフィールスを担ぎ、メガファウナまで運んでくれました。

ゼロ「確かに届けたぜ」

アマリ「零君…。良かった…」

喜びも束の間でした…。またもや数体、ロボット怪獣軍団の増援が現れました。

グレンファイヤー「また増えたぞ！」

ミラーナイト「姫様との再会の時に…。！」

ゼロ「愚痴ってねえでやるぞ！」

ゼロ、グレンファイヤー、ミラーナイトはロボット怪獣軍団と戦うみたいです！

メル「アスナ・ペリドット…。今日は退きますよ」

アスナ「流石に部が悪いわね…。！覚えてなさい！」

そう言い残し、オニキスは全て撤退しました…。

レイ「ゴモラ！もう一踏ん張りだ！」

アマリ「私達も巨人達と協力して戦いましょう！」

アキト「わかった！」

私達はゼロ、グレンファイヤー、ミラーナイトと協力して、ロボット怪獣軍団の退治に当たりました…。

〈戦闘会話　ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「見た事のある奴らばかりだな… この惑星… 一体何が隠されてるってんだ？」

〈戦闘会話　グレンファイヤーVS初戦闘〉

グレンファイヤー「機械野郎なんざ、俺の熱い炎でドロドロに溶かしてやるぜ！行くぜえー！！？」

〈戦闘会話　ミラーナイトVS初戦闘〉

ミラーナイト「ジャンボットが居ない分、私が姫様を守らなくては…！鏡の騎士の力を見せてあげますよ！」

戦闘から数分後… 戦力の差があつたのか、素早く、ロボット怪獣軍団を倒す事が出

来ました。

ホープス「今ので最後の様です」

一夏「さ、流石に色々ありすぎて疲れた……」

刹那「1度状況を整理させた方がいい」

ドニエル「そうだな…… ヒュウガ船長。お話を聞かせてもらっても良いですか？」

ヒュウガ「了解した」

ゼロ「この世界の事を聞く為に俺も人間の姿になるか……」

グレンファイヤー「お、おいおい！俺達はどうすんだよ!??ゼロ！」

ミラーナイト「私達は貴方と違って人間の姿にはなれませんよ？」

ゼロ「仕方ねえな…… シェアツ！」

ゼロはグレンファイヤーとミラーナイトに光を送ると、グレンファイヤーとミラーナ

イトは私達と同じサイズになりました。

ミラーナイト「小さくなりましたね」

グレンファイヤー「これ元に戻れんのか!??」

ゼロ「お前らが戻りたいと思った時に戻る様にしてある。小さくなりたいと思えば

小さくなるしな…… フンツ！」

すると、ゼロも光に包まれ、人の姿になりました。

エメラナ「貴方は… ナオのお兄様の…！」

ゼロ「これは俺がランの姿をコピーしたにすぎないから気にしなくて良いぜ。エメラナ」

レイ「ウルトラマンというのは本当に凄いな」

レイさんは手に持っていた機械にゴモラを戻しました。

ゼロ「レイオニクスほどじゃないぜ」

… 聞く事は沢山ある様ですね…。 零君も心配ですし…。

私達はロボットから降り、皆、メガファウナに乗りました。

あ、ちなみにヒュウガ船長とレイさんの乗っていた宇宙船もメガファウナに搭載済みです。

ヒュウガ「なる程、この宇宙の名はアル・ワースで我々は異界人になってしまったという訳か…」

アイーダ「信じられない事ですが…」

レイ「嫌、俺達も何度か別の宇宙へ来ているからな。ゼロ達も飛ばされたのか？」

ゼロ「俺達はエメラナと会う約束をしていたんだが、仲間のジャンボットと一緒にこ

の惑星に閉じ込められてな」

ミラーナイト「それで追いかけて来たという訳です」

グレンファイヤー「でも、結局姫さんは居たが、焼き鳥は居なかつたな」

ゼロ「エメラナ、ジャンボットは？」

エメラナ「わかりません。私も気がついたらあそこに居たので……」

わからない事だらけですね……

零「俺も会話に入れてくださいよ」

突然、扉が開いて、零君が入って来ました……

―新垣 零だ。

俺は目を覚まして、みんながいる所に入った。

一夏「零！動いて大丈夫なのかよ!!？」

零「心配かけてすまないな。だが、何ともないぜ？」

それを証明させようと俺は両腕を広げ、アピールした。

その後、俺はゼロという青年に声をかけた。

零「貴方が俺を助けてくれた様ですね……。ありがとうございます！」

ゼロ「礼には及ばないぜ。困っている奴を助ける…。それが俺達、ウルティメイトフォースゼロだからな」

ヒュウガ「自己紹介をした方が良いな。改めて、私はZAP SPACYのヒュウガだ。よろしく頼む」

レイ「俺の名はレイ。こっちは相棒のゴモラとリトラだ」

レイさんはネオバトルナイザーという機械からゴモラともう一体の怪獣を見せてくれた。

ワタル「まだ怪獣が居たんだね！」

ゼロ「俺はゼロ。ウルトラマンゼロだ！」

グレンファイヤー「炎の戦士、グレンファイヤーだ！よろしくな！」

ミラーナイト「鏡の騎士…。ミラーナイトです。よろしく願います」

エメラナ「惑星エスメラルダ王女のエメラナです」

自己紹介を終え、俺達は情報を交換した…。

だが、何故かケロロはゼロを見て、怯えていた…。

冬樹「どうしたの？軍曹」

ケロロ「け、ケロ…。ウルトラマンといえば全宇宙の平和と秩序を守る正義の宇宙人でありますよ！」

ゼロ「ん？お前、何処かで見たと思ったたら、ケロン人か！」

ケロロ「け、ケロー！？ご存知でありましたか！」

ゼロ「侵略宇宙人だとは聞いてるぜ」

それは一応、冬樹から聞いた。

ケロロ達はケロロの世界の地球を侵略しようとして地球に来た宇宙人らしい……。でも、今は侵略行為をしていないとかなんとか……。

すると、今度はマサキがゼロに話しかけた。

マサキ「ゼロ。少し良いか？」

ゼロ「何だ？マサキ」

マサキ「ゼロの頭についているブーメラン……アイスラッガーか？」

ゼロ「悪いがあればゼロスラッガーだ。アイスラッガーは親父の……待てよ。何でお前が親父のアイスラッガーを知ってる？」

マサキ「以前、別世界に飛ばされた時、ウルトラマンと一緒に戦った事があるんだ。その中にはガンダムも居たが」

刹那「ガンダムも……？」

マサキ「それと、仮面の戦士と一緒に戦ったぜ？」

アーニー「仮面の戦士……？しんのすけ君の言うアクション仮面かい？」

しんのすけ「オラ、知ってるゾ！仮面の戦士！赤いぶりぎりざえもと弦ちゃんゾ！」
赤いぶりぎりざえもん？弦ちゃん？誰の事だ？

零「そろそろ話を戻そう。ゼロ達はこれからどうするんだ？」

ヒュウガ「俺とレイは君達に協力するつもりだが…」

ゼロ「俺達はこの惑星で消えた仲間を探す」

アル「言っておくがこれ以上は進めぬぞ？」

グレンファイヤー「何だよ？」

アル「妾も調査しようと思ったが、周りに電磁シールドが張られておった…先には進めなかった」

ミラーナイト「これ以上は探す方法がないという事ですか…」

エメラナ「ゼロ…どうします？」

ゼロ「調べられない以上待つていても仕方ねえな…俺達もドアクター退治に協力するぜ」

ワタル「良いの？？」

ゼロ「ああ。この宇宙の危機もほっておけないからな！」

零「では、ドニエル艦長」

ドニエル「ああ。1度、アル・ワースへ戻ろう」

こうして俺達は再び、アル・ワースに戻り、ミスルギ皇国の調査を再開する事となった……。

……あの、アスナっていう女が発したレイヤ・エメラルドという名前……一体何なんだ……？

アマリ「零君」

零「アマリ……」

アマリ「無事でよかった……」

零「心配させて悪かったな……」

……これ以上、アマリを心配させる訳にはいかないな……。アマリやみんなは俺が

守ってみせる……！

……所で時たま感じるあの感覚はいつたい……？

第8話 異界から来るもの

―新垣 零だ。

俺達は鉄の惑星からアル・ワースに戻り、マナの国へ向かっていた……。

今現在俺達はメガファウナのパイロット待機室で話している。

ワタル「……いよいよマナの国だね」

ジャン「大丈夫かな……。この間のキャピタル・アーミイの人達や白いガンダムがいきなり襲つてくるんじゃない」

グランデイス「その時はその時だよ。今からビクビクしていても仕方ないさ」

ノレド「格好いい、グランデイスさん！」

九郎「結局は奴等とはやり合う日が来るんだ……。此処で叩いてた方が良いかもな」

零「でも、出来れば事を穏便には済ませたいですね」

刹那「俺としてはそれを望んでいる」

ベルリ「それにしてもグランデイスさんが来て、メガファウナは、ますます海賊部隊っぽくなったね」

ハンソン「海賊部隊……？」

サンソン「何だ、そりゃ？」

アイーダ「元々この艦は、敵国に秘密裏に潜入して、情報を収集する事を目的としていたのです。そのため国籍などを隠していたので、そのような扱いだったのです」

ジャン「元の世界でも今と同じような任務についていたんですね！」

グレンファイヤー「何だよ、お前らも海賊に近い部隊だったのかよ？」

テイエリア「お前らもと言う事は君も元海賊なのか？」

グレンファイヤー「炎の海賊っていう海賊の用心棒をしてたんだぜ！」

ミラーナイト「暑苦しい貴方にはピツタリでしたね」

グレンファイヤー「あんだと？ミラちゃん！俺の何処が暑苦しいってんだ？」

ミラーナイト「全部です。見た目から筆頭に」

グレンファイヤー「ぐっ……！何だよ！ゼロも何か言ってる、話さずして、話し中か」

ゼロが仲間になってから、マサキは良くゼロと絡んでいた。

マサキ「成る程、お前はセブンの息子なのか」

ゼロ「だけど親父からお前の事なんて聞いた事ないぜ？」

マサキ「恐らく、俺の出会ったセブンとお前の親父さんのセブンは全くの別人だ」

ゼロ「多次元宇宙に存在する親父……か」

マサキ「でも、あの真紅のファイター、セブンの息子なんだろう？頼りにしてるぜ！ゼロ！」

ゼロ「おう！」

あの2人仲が良いな。

アーニー「その海賊部隊という名があるから、クリム大尉に今回の作戦に選ばれたんだね？」

アイーダ「ええ……。任せられたからには、期待以上の成果を必ず上げてみせましょう」

エメラナ「私達も協力しますよ。アイーダさん」

アイーダ「ありがとうございます、エメラナ姫。」

エメラナ「此処では王女や姫など関係ありません……。エメラナとお呼びください」

アイーダ「わかりました、エメラナさん」

グランデイス「2人共、見かけによらず、度胸が据わってるじゃないか。気に入ったよ、姫様達」

グレンフアイヤー「そっちの姫さんも暑いぜ！」

アイーダ「ありがとうございます。ですが、あなた方は協力者なのですから、ただのアイーダで結構です」

エメラナ「私もエメラナで良いですよ」

ハンソン「偉ぶらない所もいい……！」

サンソン「そうだな。あの子と比べれば、ナディアの方がお姫様してるぜ」

エイサツプ「言えてますね」

ミラーナイト「ナディアというのは、ジャンと一緒にいる彼女の事ですよ？ 此処には来ていないのですか？」

ヒミコ「ナディアなら、前回の戦闘からずつと部屋にこもってるのだ！」

夏美「戦争をする艦なんかには本当は乗りたくなかった……とか言ってます」

一夏「俺達……戦争をするんじゃないやなくて、アル・ワースを平和にするために戦ってるんだけど……」

零「ただ争いを広げる為の戦いと誰かを守る戦いの違いをナディアは分かっていないんだらうな」

ジャン「いえ、ナディアは分かっていますよ。ただ、その違いをナディアは納得できないみたいなんです……」

ノレド「ねえ、ジャン……。ナディアの事……あたしとライヤと夏美さんに任せてもらえない？」

ジャン「え……」

夏美「ええ、難しく考え過ぎちゃう時には身体を動かすことに限るわ」

ノレド「だから、ナディアにはメガファウナの生活班としてあたしと夏美さんの指揮官に入ってもらおうわ」

ラライヤ「おそうじ！せんたく！」

冬樹「でも、姉ちゃんは戦いもしてるんだよね!?!」

アンドレイ「流石に体が持たないよ？」

夏美「良いんです！私がやりたいと思つてやる事ですから！それに、零さんや一夏さんも手伝つてくれるらしいですし！」

エレボス「そうなの？零、一夏」

零「ああ。みんなで協力すれば、疲れも分散できるだろ？」

一夏「俺達も俺達で戦い以外のやる事を探さないと思つたんだ」

千冬「言う様になつたではないか。馬鹿者め」

ヒミコ「あちしもやるよ！忍法・火事……じゃなくて家事手伝いの術なのだ！」

ノレド「了解！よろしくね、零さん、一夏君、ヒミコ」

ジャン「わかりました。ナディアの事……よろしくお願いします」

刹那「ジャンはどうする？」

ジャン「僕はハンソンと一緒にメカニックのハツパさんの手伝いをやります。せつかく違う世界の人達と会つたんだから、そこから出来るだけ多くの事を学びたいんです」

しんのすけ「ジャン君偉いゾ！」

ジャン「ワタルやしんちゃんと違って、戦いの役には立てないからね。でも、だからといって他人事を決め込むつもりもないさ。力がないなら、ないなりに出来る事をやるよ」

立派だな・・・ジャンは・・・

彼奴を見ていたら俺も頑張らないとって思ってくるよ。

アマリ「力がないなりに・・・か・・・」

零「アマリ・・・」

クラマ「難しい顔してんな」

零「珍しいな・・・。クラマがこう言う場に顔を出すなんて」

アマリ「いつもべつたりのナディアちゃんが部屋にこもっているから、行き場がないんですか？」

クラマ「からかうなよ。あの子・・・。どうにも危なっかしいんで、目が離せないんでな・・・。(こいつ等・・・。俺がナディアを見張っているのに気づいてやがんのか・・・)」

テイエリア「・・・」

・・・ やっぱり、テイエリアはクラマを警戒しているな。

アマリ「私に何か用ですか？」

クラマ「なあ、アマリ……。お前……。マナの国の事でみんなに話してない事があるだろ？」

零「……。何？」

アマリ「……」

アマリのこの反応……。凶星なのか……。？

零「どう言う事だ？クラマ」

クラマ「魔従教団の術士サマほどじゃねえが、この俺もそれなりに情報通だよ。マナの国に生まれて、マナを持たない人間の事も知っているのさ」

何……。!? マナを取り扱うマナの国でマナを持たない人間が居るだと……。!?

アマリ「……。ノーマの事ですか……」

零「ノーマ……。？それがマナを使えない人間の呼び方なのか？」

クラマ「その通りだ。アマリ、別に責めてるかわけじゃねえぜ。胸クソ悪い話だから、ワタル達に聞かせたくなかったってのもわかる。そっちの方は、どうでもいい。問題はアレの事だ」

アマリ「……」

クラマ「俺も噂でしか聞いた事がないが、アレの方がマズイだろうぜ」

アマリ「グランデイスさんの言葉じゃないですけど、その時はその時です。今、考え

ても仕方ないって事にしましょう」

何か置いていかれてんな……俺。

クラマ「……前から思っていたが、お前……本当に術士サマか？」

アマリ「え……」

零「……何が言いたい？」

アマリが魔徒教団の術士じゃない……？って、事はアマリは俺達に嘘をついているって事か……？

クラマ「さつきも言った通り、俺はそれなりの情報通だよ。何度か術士サマも見かけな事もある。そいつ等とお前……あまりにも雰囲気が違うんでな」

アマリ「何を言ってるんですか！クラマさんだって、私のドグマを見たでしょ？」

クラマ「まあ……そうだな。教団の人間でもないのにオート・ウォーロックを使えるはずもねえか……」

……なんか納得いかねえ……アマリから聞くしかねえな……ノーマの事もアレの事も……。

すると、ホープスが飛んできた。

ホープス「ここにいましたか、マスター」

アマリ「どうしました、ホープス？」

ホープス「残念ながら、恐れていた事が起きる様です」

アマリ「そんな……！」

一体……何が起るってんだよ……？

ドニエル・トスだ。

メガファウナのブリッジでは、ギゼラが焦った表情をしていた。

ギゼラ「艦長……！」

ドニエル「どうした、ギゼラ？ キャピタル・アーミイが来るのか？」

ギゼラ「各種センサーが異常を計測……！ この状況は、アル・ワースをに跳ばされた時に似ています！」

ドニエル「何だと!?？」

何がどうなつてると言うんだ……！

すると、ブリッジのドアが開き、アマリ君と零君が入って来た。

―新垣 零だ。

俺はアマリと共にブリッジに入る。

ブリッジに向かいながら、俺は大体の事をアマリから聞いた……。

これ……マズイってレベルじゃねえだろ……！

零「ドニエル艦長！大至急、メガファウナをこのエリアから退避させてください！」

ドニエル「何が起きるんだ、零君！アマリ君!!?」

アマリ「あれが来ます……！」

ドニエル「あれ……!!?」

ギゼラ「空が……裂けます！」

ステア「オーツ！マイ・スコード!!?」

来るのか……あれが……ドラゴンが……！

第8話 異界から来るもの

空が裂け、中から20体程のドラゴンが出現した……。

アマリ「あ……ああ……」

零「くっ…！間に合わなかったか…！」

既に怪獣を見ているからああ言うのにはもう慣れたと思っていた…！
ラゴンの威圧感は何が怪獣とは違う…！

副長「か、怪物だ！空の裂け目から怪物が出て来た！」

ドニエル「アマリ君！何なんだ、あれは…？」

アマリ「ドラゴン…。異界からマナの国に出現する生物…。分かっているのは、それくらいです」

ギゼラ「怪獣とは違うのかい…？」

零「あの威圧感がわからないんですか…？あれは並大抵の怪物とは違う…！」

アマリ「出来るなら、出会いたくはなかったんですけど…！」

すると、ドラゴンの一体が攻撃を仕掛けて来た。

アマリ「気をつけてください！とても好戦的な生物だと聞いています！」

ドニエル「逃げられないのなら応戦するまでだ！各機を出撃させろ！」

俺達はそれぞれ出撃した…。

龍神丸「むう…！」

ワタル「せ、先生！何なのさ、あれ…？」

シバラク「何と言われても…！」

ケロロ「あれはドラゴンでありますよ！」

アキト「ドラゴンって……絵本に出てくる空を飛ぶ生き物の事かい……!?」

ベルリ「こつちに来て、驚きの連続だったけど、これは桁が違う！」

ゼロ「今まで戦った怪獣とは何か違うな……レイ! どうだ!?」

レイ「ゴモラも警戒している……並大抵の力で敵う生物じゃない！」

零「彼奴らには話は通じません！」

刹那「対話は無理だと言う事か……！」

ハンソン「じゃあ、あんなのと戦うの!?」

一夏「じよ、冗談じゃないぞ! 後ろの方の大きいのはサイズが違いすぎるだろ!?」

サンソン「一夏の言う通りだ……! グラタンで敵うかどうか……！」

グランデイス「ガタガタ言ってんじゃないよ! ごめんなさいすれば、見逃してくれる

様な相手じゃないんだ！」

カンタム「その様だね……！」

マサキ「やるしかねえって事か……！」

シヨウ「ああ……! 死にたくなければ、戦うしかない！」

アル「うむ、気を引き締めて行くぞ！」

セルゲイ「用意は良いな? みんな。ドラゴン撃退を始めるぞ！」

しんのすけ「やってやるゾ！」

アマリ「(異界から来るもの……。今の私の力で戦えるの……)」

来るならやるしかない……。！こんな所で食われるなんてごめんだ！

俺達はドラゴンとの戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「加減して勝てる相手じゃない……。！始めっから全力でやるぞ！ゼフィルス!!？」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「あんなのに勝てるのか……。？嫌、勝たないとダメなんだ！やってやる！やって

やるぞー!!？」

〈戦闘会話 しんのすけVS初戦闘〉

カンナム「まさか、ドラゴンと戦う事になるとは……。！」

しんのすけ「オラ達……。食べられちゃうのかな？」

カンナム「そんな事はさせないよしんのすけ君、やろう！」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「本当にお前達ともわかり合う事は出来ないのか… ドラゴン、お前達の声を聞かせてくれ…！」

〈戦闘会話 ティエリアVS初戦闘〉

ティエリア「怪獣の次はドラゴンか… もうELSで驚いていられないな…！ ラファエル、ドラゴンを殲滅する！」

〈戦闘会話 アンドレイVS初戦闘〉

アンドレイ「よもや昔読んだ絵本に出てくるドラゴンと戦う事となるとは… モビルスーツでどれ程対抗できるがわからないがやるぞ!!？」

〈戦闘会話 セルゲイVS初戦闘〉

セルゲイ「動物の狩りにしては少々難関だが… ロシアの荒熊がお前達の相手をしてやろう！」

〈戦闘会話　アキトVS初戦闘〉

アキト「ファンタジーの世界でドラゴンとの戦闘か……。だが、お前達ではブラックサレナを捕らえる事はできない！」

〈戦闘会話　九郎VS初戦闘〉

九郎「ドラゴンつてもう何でもありじゃねえかよ！」

アル「今更何を言っておる！うつけが！」

九郎「わかっているよ！あーもう！ドラゴン！デモンベインに挑んできた事を後悔させてやるぜ！」

〈戦闘会話　エイサップVS初戦闘〉

エレボス「ドラゴンが来るよ！エイサップ！」

エイサップ「たとえ強力な相手でも、攻撃さえ通れば勝てる！本気で斬るぞー!!？」

〈戦闘会話　ケロロVS初戦闘〉

ケロロ「ドラゴンには馴染みがありますが、挑んで来るなら容赦しません！」

〈戦闘会話 夏美VS初戦闘〉

夏美「近くで見ると大きいわね…！私でどれだけやれるかわからないけど… やってやるわよ!!？」

〈戦闘会話 ゴモラVS初戦闘〉

レイ「ゴモラ！俺達はいつもの様に戦うぞ！場合によってはリトラも出す！」

ゴモラ「キシヤーオン!!？」

〈戦闘会話 ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「ドラゴンみたいな怪獣とは何度も戦って来たが… こいつらは一味違うぜ… だが、そんな事で臆するウルトラマンゼロじゃねえんだよ！ドラゴン！宇宙の彼方まで吹っ飛ばしてやるぜ！」

〈戦闘会話 グレンファイヤーVS初戦闘〉

グレンファイヤー「来やがれドラゴン！俺の炎で焼きドラゴンにしてやる!!？」

〈戦闘会話 ミラーナイトVS初戦闘〉

ミラーナイト「可愛げがあるのなら、ウルティメイトフォーセズの仲間として入れるのも考えますが……仕方ありません、倒します！」

ドラゴンとの戦闘から数分後の事だった。

テイエリア「みんな、気をつけろ！何か来る！」

ベルリ「キャピタル・アーミイですか……!?」

エイサツプ「それともあのガンダムか……!?」

アイーダ「数は2機……！かなりのスピードです！」

現れたのは白い機体とピンクの機体だった。

アマリ「パラメール……！」

パラメール……？それが機体の名前か……？

？「シンギュラー反応があつたんで偵察の足を伸ばしてみたけど……」

？2「ドラゴンだけじゃなく、知らない機体もいるよ！アンジュ！」

アンジュ「その様ね、ヴィヴィアン……それよりも、海道と真上の2人は何処に行つ

たのよ！」

ヴィヴィアン「地獄の使いさん居ないね……」

乗っているのは両方女か……？

シヨウ「アマリ！あの機体は何だ!?？」

アマリ「あれはパラメイルです。ドラゴンを狩る人間が乗っています」

ドラゴンを狩る……つまりは、パラメイルのパイロットはノーマッて事なのか……。

ヴィヴィアン「アンジュ……！あたし達の事を知っている人がいるみたいだよ」

アンジュ「私達の事を人間扱いしたって言う事は外の国から来たみたいね」

ワタル「何を言ってるの……？」

ヒユウガ「さっきの言葉からすると……彼女達は人間じゃないのか!?？」

零「そんな事ねえ！」

一夏「零……」

アマリ「聞こえますか、パラメイルのライダーさん！此処は協力して、ドラゴンと戦いましょう！」

ヴィヴィアン「……だつてさ。どうする、アンジュ？」

アンジュ「そんなのは決まってる……！」

……よし、こつちに……つて、は!?？あの2機、突っ込んで行つたぞ!?？

零「たつた2機で突っ込む気か!?？」

アンジュ「私達は勝手にやらせてもらうわ。知つての通り、ノーマだから」
ミラーナイト「ノーマ？」

アンジュ「manaが使えない化け物よ」

グレンファイヤー「な、な、何だつて!? 化け物だつて!?？」

あの白いパラメイルのライダー……自分の事を……!

ヴィヴィアン「大丈夫だよ! あたし達、ドラゴン退治のプロだから!」

アンジュ「行くよ、ヴィヴィアン! 海道と真上なんて待つてられないわ! 私達である群れを叩いて、特別ボーナスをもらおう!」
ヴィヴィアン「りょーかい!」

サヤ「い、一体どうなっているのですか!?? アマリさん!」

アマリ「彼女はノーマ……生まれつきmanaが使えない事を理由に社会から抹消された存在……。生存を許される代わりにドラゴンと戦う事が義務付けられると聞きま
す……」

何度聞いても胸クソ悪いな……! ふぎけやがつて……!

ゼロ「何だよそれ!?? 何でそんな酷い事が……!」

しんのすけ「可哀想だゾ……」

ケロロ「話は後であります! まずはドラゴンを迎え撃つてありますよ!」

ホープス「マスター……。あのアンジュと呼ばれる女性……。アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギと思われませう」

アマリ「ミスルギ皇国の皇女でありながら、16歳の誕生日にノーマである事が発覚した堕ちた皇女……。あれが……。かつて皇女アンジュリーゼだった方なんですわね……」

皇女まであんな扱いに何のかわ……。！マジでふざけんなよ……。！

アンジュ「やるわよ、ヴィルキス！私は私の力だけで生き抜いてみせる！」

俺達はパラメール2機と共にドラゴンとの戦闘を再開した……。

ドラゴンを倒していく俺達……。

数も残り僅かとなった。

ワタル「よし……。！この調子で戦えば……。！」

龍神丸「気をつけろ、ワタル！また門が開くぞ！」

また空が裂けて、ドラゴンが数体出て来た……。しかもデカイのも多いな……。！

ヴィヴィアン「また来た！」

テイエリア「これではキリがない！」

アンジュ「でも、今度はドラゴンだけじゃない！」

確かに、ドラゴンの中心に赤いパラメイルがいる。

ゼロ「あれもパラメイルというやつか！」

零「あの赤いパラメイル、ドラゴンを指揮している…!?？」

しんのすけ「レイお兄ちゃんと同じ、怪獣使い…？」

レイ「レイオニクスではなさそうだが…」

グランデイス「アマリ！あの赤いのは何だい!?？」

アマリ「わかりません…！教団の資料でも見た事がない機体です！」

ワタル「アマリさんでも知らない事があるんだ…！」

刹那「正体はわからないが、こちらに仕掛けて来るのを見て、敵意はある様だな」

九郎「やるしかないって事かよ…！」

？「…」

赤いパラメイルのライダーはダンマリかよ…！

アンジュ「あの赤いパラメイル…私を見ている…」

ヴィヴィアン「わかるの、アンジュ!?？」

アンジュ「何となくだけどね…。ヴィヴィアン…！あいつは私が相手をする！」

ヴィヴィアン「おっほー！アンジュ、強気い！」

アンジュ「やるよ…！私は私の生命を奪おうとするものに容赦はしない！」

? 「… そう…。来るのですね、ビルキス…。」

… ? 今、赤いパラメイルから声が…。

アイーダ「待ってください！まだドラゴンが来ます！」

アマリ「え… 何?」

アイーダの言葉通り、またもやドラゴン軍団が現れる。

幾ら何でも増えすぎだろ！

一夏「いい、いい加減にしろよ！」

セルゲイ「素早く、ドラゴンを倒し、このエリアから退避しなければならないな…。」

！

アマリ「で、でも！この数では…！」

万事休すか…。そう思った俺達の元に通信が入る。

? 「だったら、俺達にやらせな!!?」

現れたのは黒いボディに頭部にドクロをつけたロボットだった。

? 2 「この様な場所にいたとはな。アンジュ、ヴィヴィアン」

アンジュ「それはこっちの台詞よ！海道！真上！何処に行っていたのよ！」

海道「何処だっさいいだろ！暴れさせてもらうぜえー!!?」

髑髏のロボットは大きな剣を持ち、目の前のドラゴンの接近して、何度か、斬り裂く。

海道「神においては神を斬り」

真上「悪魔においてはその悪魔をも撃つ」

海道「戦いたいから戦い」

真上「潰したいから潰す」

海道・真上「俺達に大義名分なんてないのさ!!?」

最後にドラゴンを真つ二つにした…。

マサキ「な、何だよ… あれ… まるで…」

ワタル「うん… 龍神丸達とはまた違う、魔神…!」

海道・真上「俺達が地獄だ!!?」

一目見ただけでわかる… あのロボットは強すぎる…!

… あのロボットの周りにも小さいドラゴンが…!

海道「ウジャウジャとメンドクセエな!」

真上「ならば俺と変われ、海道。やはり、お前の戦い方には花がない」

海道「何だと?!?… ちっ、俺の分も残しておけよ!」

すると、今度は髑髏のロボットは大剣を地面に刺し、2丁拳銃を取り出す。

真上「己の不幸を呪うんだな。さあ、何処を撃ち抜かれない? 3秒以内ならクエス

トに答えてやる」

しかし、ドラゴンは答えるはずもなく、3秒過ぎると同時に髑髏のロボットが動き出した。

真上「時間切れだ！」

周りにいるドラゴンに向けて連射する髑髏のロボット。

だが、どの弾も確実にドラゴンに当たり、ドラゴン達は爆発する。

千冬「あの機体はパイロットが変わる事によつて戦闘スタイルが変わるのか……!!」

サヤ「少尉あれは……！」

アーニー「カイザーだ……！」

零「カイザー……？」

アーニー「地獄の使い…… または、地獄への道先案内人…… 彼らも僕達の知らない海

道さん達なのか……？」

な、なんか凄いな……。

カイザーと呼ばれた機体はまたもや大剣を持つ。

恐らく、パイロットが最初の人に戻つたのであろう……。

兎に角、カイザーのおかげでドラゴンの数がかなり減つた。

夏美「この数なら何とかなるわね！」

アーニー「カイザー！僕達は味方です！手を貸してください！」

海道「あん？カイザーの事を知っているのか？」

真上「勝手にしろ。俺達も俺達でやる……それと、お前が織斑一夏か？」

一夏「え？は、はい……そうですけど」

海道「もう来ても大丈夫そうだけ」

すると、今度はISを纏った2人の女の子が来た……

? 2 「一夏！一夏だよ！簪！」

簪「うん、やっと一夏と会えたね……！シャルロット……！」

一夏「シャルに簪！お前らも無事だったのか!!？」

? 3 「私も居ますよ。織斑君！」

千冬「その声は……真耶か？山田真耶なのか!?!？」

一夏「山田先生！」

真耶「織斑先生も一緒にでしたか！お会いできて良かったです！」

あの人達は一夏の知り合いなのか……

真上「山田教師、貴方はあの戦艦の中にいて欲しい」

真耶「わかりました」

すると、カイザーは山田先生という人をメガファウナに送り、戻って来た。

アンジュ「あの赤いパラメイルは私の獲物だから、取らないでよ！」

海道「だったら、早く仕留めろ！じゃないと、俺達がもらっちゃうからな！」

シャルロット「一夏！僕達もやるよ！」

簪「私達だけ逃げる事なんて出来ない……！」

一夏「ああ！やってやろうぜ！」

俺達は再び、戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 海道VS初戦闘〉

真上「ドラゴンを倒しただけで金が貰えるなどうまい話だな」

海道「俺達に金なんて関係ねえよ！戦いたいから戦うだけだ！」

真上「フツ、そうだな。さてと、ウイングクロスを壊した猿」

海道「言ってる！ナル野郎！あれはキバの大将の時の戦いの衝撃で壊れたんだよ！俺は悪くねえ！」

〈戦闘会話 シャルロットVS初戦闘〉

シャルロット「このわけのわからない世界に来て、海道さん達に助けられて、一夏と

会えた……。折角の一夏の再開を無駄に終わらせるわけにはいかないね！」

〈戦闘会話 簪VS初戦闘〉

簪「お姉ちゃんがない事が少し不安……。でも、今は一夏が近くに居る……。それだけで私、頑張れる……。！」

龍神丸がドラゴンを倒すと、赤いパラメイルは龍神丸を見ていた。

？「……」

ワタル「な、何か……。視線を感じる……」

龍神丸「気をつけろ、ワタル。ドラゴンの指揮官が、こちらを見ているぞ」

ワタル「もしかして、ライバルと思われてる……。!? ？ だったら、龍と龍の対決だ！ 絶対に負けないぞ！」

〈戦闘会話 零VS？〉

？「貴方は……。！」

零「……。？ 何だよ……。？」

? 「… いえ、人違いですね」

零 「つておい！人の話を聞けよ！」

〈戦闘会話 海道VS?〉

? 「あなた方が地獄の使いですか？」

真上 「何者か知らんが間違っているぞ」

海道 「ああ！俺達は使いなんかじゃねえ！俺達が地獄だ!!？」

俺達はドラゴンを倒し、赤いパラメイルも白いパラメイルのヴィルキスが追い詰めていた。

? 「視察のつもりで来てみましたが、面白いものが見られました。それに…」
ワタル 「あの赤い機体… また僕を見ている…?」

? 「今日の所は、ここまでとします」

すると、赤いパラメイルは撤退しようとした。

ヴィヴィアン 「逃げ出した！」

海道 「部が悪くなったら、尻尾を巻いて逃げるってか！」

アンジュ「そうはさせない……！」

ヴィルキスは赤いパラメイルを追いかけ、逃さないようにする。

アンジュ「(何だろう、この胸騒ぎは……。もしかして、あいつのせいなの……)」

? 「追いかけてきたか……。!ならば……。!」

な、何だ……。? 赤いパラメイルから歌が聞こえる……。!??

チャム「歌……。!」

刹那「あの赤い機体が歌っているのか……。!??」

アンジュ「この歌……。!」

ヴィヴィアン「アンジュも歌っていた歌だ!」

真上「何……。?」

アンジュ「(永遠の語り……。進むべき道を示す、皇家の護り歌……。お母様が私に遺し

てくれた歌……。その歌を、どうして……)」

シャルロット「あの人も歌ってるよ……。!」

簪「何が起こってるの……。?」

? 「真なる星歌……。やはり、彼女も龍の……」

2人が歌っているとヴィルキスが何かの動きを見せた……。

すると、辺りが光に包まれる。

龍神丸「これは……!?」

ワタル「何が起きているの、龍神丸!?」

龍神丸「この感覚は……間違いない！」

ホープス「世界が……壊れますか……」

零「……世界が……壊れる……!?」

あの歌に……一体何が……!?

「僕はリボンズ・アルマーク。

今僕は神聖ミスルギ皇国内でキャピタル・アーミイのクンパ・ルシータと調律者エンブリヲと共にいた。

エンブリヲ「……！」

クンパ「どうされましたかな？」

エンブリヲが何かに気づいたのかな？

エンブリヲ「いや……。気にする事はない。ちよつと予想外の出来事が起きたようですね……」

リボンズ「予想外か……。アクシデントでない事を祈るよ」

エンブリヲ「これがどう転ぶかはわからないが、退屈しのぎになる事を願うよ……ね

え？ I S 学園最強の更織 楯無」

楯無「……」

エンブリヲ「そんな怖い顔をしないでくれ……。君達に危害は加えないよ。君達が私

達を裏切らない限りね」

楯無「貴方って人は……！……っ！」

悔しそうな表情を浮かべているね……。

エンブリヲも人が悪い……。

クンパ「これは私の持論ですが、退屈は退廃となり、安寧は墜落となり、人類という種を衰退させるだけです」

エンブリヲ「同感だ、クンパ・ルシータ。君に出会えた事を智の神エンデに感謝しよう」

クンパ「それは私もです、調律者エンブリヲ」

リボンズ「……」

エンブリヲ「どうかしたのかい？ リボンズ・アルマーク」

リボンズ「何でもないさ。僕はただ観察するだけだからね……。更織 楯無。君も仲間

の元へ戻ったらどうだい？」

楯無「わかりました……。(私達は……。どうすれば……。助けて……。一夏君……。!)」

僕の言葉に更織 楯無は出て行った……。

僕も外に出て、先程から盗み聞きをしていた男に声をかけた。

リボンズ「盗み聞きとは趣味が悪いね。名瀬・タービン」

名瀬「気づかれていたか……。流星はイノベイド」

リボンズ「君達はミスルギ皇国に雇われている身だろ？こんな事をして大丈夫なのかい？」

名瀬「気づかれなかったら大丈夫だよ」

リボンズ「……。僕がエンブリヲに言えば、君は終わりだよ？」

名瀬「だけど、アンタはそれをしなかった……。何でだろうな？」

リボンズ「さあね……。」

名瀬「まあ、ありがとうな。庇ってくれて……。」

そう言い残し、名瀬・タービンはこの場を後にした……。

全く……。自由な男だ……。

さてこの世界……。どうなるかな？

第9話 あの花の出会い

第9話 あの花の出会い

12014年 日本……

―俺は渡瀬 青葉……

俺は今、大ピンチに陥っていた……

青葉「な、何がどうなってるんだよ!!? 何なんだよ、あのロボットは! どうして俺を狙ってくるんだよ!!?」

お、俺が何したってんだよ……!

? 「ハハハハハ! 怯えろ、渡瀬 青葉! (どういう理屈かは知らないが、俺は70年前の過去にきた! そして、貴様に会えた! 渡瀬 青葉! 今こそ俺は貴様を……!)」

ロボットは少しづつ俺に近づいてくる。

青葉「う、うわああっ!」

すると、俺の手を引く女の子の姿があった……

確か、弓原 雛だったな……

雛「走って、青葉!」

青葉「弓原…… 雛…… ！！？」

雛「死にたくないなら走って！お願いだから！」

青葉「わ、わかった……！」

俺は弓原に連れられて、建物に入った。

？「まさか……！まさか……！！？何故だ……！何故だあああああつ！！？ヒナ！どう

して、お前がここにいるんだあああああつ！！？」

俺は弓原に連れられて、ロボットに乗せられた。

？「ヒナアアアツ！！？」

雛「さよなら……」

雛はロボットを操作して、俺を襲おうとしていたロボットを攻撃した。

？「うおおおおおつ！！？」

雛「対象の活動エネルギー、消滅……」

青葉「……倒した……のか？」

雛「ええ……」

青葉「色んな事がありすぎて訳わかんねえよ……！今日の席替えで弓原の隣になった
と思つたら、あんなロボットに襲われて……！それで弓原もロボットに乗って、あいつ
を倒して……！」

弓原：「お前は一体何者なんだよ……」

青葉「弓原……！お前、帰国子女だつて聞いてたけど、どうなってんだよ、これは……」

「??」

雛「……」

青葉「……聞いてもいいか？」

雛「何を？」

青葉「全部」

雛「……わかったわ」

話してくれるみたいだな……。

雛「信じられないと思うけど、私は、あのロボットに乗つてた人と同じ未来から、この世界に来たの」

青葉「え……それって……！」

雛「未来人つてこと……。私も、そして彼もね」

青葉「じゃあ、これは？このロボットも……」

雛「そうよ。同じ未来から来たの。もう色んな所がガタガタになってきちゃつてるけど」

青葉「……」

何か……すごい話だな……。

雛「私は、この時代に来てからずっとあなたを見守ってたの」

青葉「俺を？」

雛「そう……渡瀬青葉をずっと……。私が出会う前の青葉……。あなたをね。今日、席が隣になった時はほんとにびっくりしたわ。まさか、あなたと私が隣同士に座る時が来るなんて夢にも思わなかったもの」

青葉「……」

雛「不思議そうね。でも私は、あなたから離れるわけにはいかなかった……。だって、いつか彼があなたを殺しに来るって知ってたから」

青葉「何で？」

雛「それは……。あなたに聞いたからよ」

……は？俺から……？

青葉「……」

雛「青葉……降りて」

青葉「え……」

雛「私の仕事は終わったわ……。あなたの生命を狙う敵は倒せた。あなたは、またここでの生活に戻るの。未来から来た連中なんて話、忘れていいわ」

青葉「待てよ、弓原！お前はどうすんだよ!!？」

雛「逃げるのよ。ここにいたら面倒な事になるだろうし」

青葉「未来に… 帰るのか？」

雛「そんな方法、知らないわ。ただ逃げるだけよ」

弓原…！

青葉「ただ逃げるだけって、どこ行くんだよ!!？こんな大きなロボット、一度見つかったら…！」

雛「わかってるよ！でも、今はそうするしかないでしょ！」

俺達が話し込んでいると、弓原が倒したはずのロボットが動き出した。

青葉「あいつ、動くぞ！」

雛「！」

？「うおおおおおっ！」

って、うおっ!!？攻撃して来た…!!？

雛「きゃあっ！」

？「ヒナ！たとえ戦えなくても、出来る事はある！」

雛「まさか… 自爆する気!!？」

？「その通りだ！」

雛「あなたは……！」

？「まさか、お前が来ていたとはな、ヒナ！」

雛「私は、あなたが来る事を知っていたわ」

？「そうか……。だったら、この先も知っているか？」

雛「……」

？「お前は渡瀬青葉と、そして、この俺と一緒に死ぬんだ！」

すると、俺達を襲うロボットの背後に金色の渦の様なモノが現れる。

青葉「なんだよ、あれ!!？」

雛「あれは……特異点の……。そうか……。そうなんだ……」

青葉「え……」

雛「しっかりつかまって！」

雛は再び、ロボットを操作した……。って、あの金色の渦に向かってないか!!？

？「何をする気だ、ヒナ!!？何を考えている!!？」

雛「やっとわかったわ。こういう運命だったのね」

青葉「運命……？」

雛「ずっと不思議だった……。どうして、あなたが私の前に現れたのかって。どうして、私があなたを忘れられないのかって」

青葉「弓原……」

雛「ヒナよ」

青葉「雛？」

雛「青葉……私を信じて」

青葉「……わかった、雛」

？「ヒナ！あれに飛び込む気なのか？？」

雛「行くわよ！」

俺達は前のロボットごと、金色の渦の中へと入っていった……。

俺と雛は今、金色の空間にいる。

青葉「何だよ、ここは？？」

雛「青葉……。これでお別れね……」

青葉「え……お別れ……？」

雛「あなたは今から未来に行くの」

青葉「未来に……？雛は？」

雛「デイオが待ってる」

青葉「え……？誰……？雛、何なんだよ？？何なんだよ、これ？？」

雛「デイオが待ってるわ、青葉」

青葉「雖！雖あああああつ！！？」
その後俺は光に包まれた……。

―新垣 零だ。

あの赤いパラメイルとの戦闘の後、俺達は光に包まれ、眼が覚める。

ドニエル「何がどうなったんだ？」

副長「あの白い奴と赤い奴がぶつかった後の異常現象に巻き込まれたんでしょうか……」

ドニエル「周辺の状況はどうなっている？」

ギゼラ「か、艦長……ここは……地球らしいですー！」

地球だって……！！？

ドニエル「そのらしいというのは、どういう意味だ！！？」

ギゼラ「地形データを照合した結果、ここは太平洋上のポイント1226……である可能性が88.6%です」

零「随分中途半端な数字ですね…」

千冬「それがらしいの意味ですか…」

ギゼラ「各機はメガファウナに収容済み、パラメールと呼ばれる2機と髑髏のカイザーと呼ばれる機体も健在を確認しています」

千冬「こちらのIS乗り2人も収容済みです」

ドニエル「…此処がアル・ワースでないとしたら、また一から情報収集だ。パラメールとやらとカイザーとやらにも協力を呼びかけろ」

ギゼラ「了解です」

ギゼラさんは2機のパラメールとカイザーに通信を送った。

ヴィヴィアン「アンジュ、海道、真上、向こうの赤い船から通信が来たよ」

真上「その様だな」

アンジュ「…」

ヴィヴィアン「アンジュ…?」

アンジュ「すぐに行くって返信しといて…。(この状況…あの赤いパラメールのライダーと私が起こしたっていうの…。だとしたら、一体何なのよ、あいつは…。)」

海道「入った途端に拘束されたりしてな」

アンジュ「それなら、反撃するだけよ」

俺達は格納庫に集まり、アンジュ、ヴィヴィアン、海道さん、真上さん、シャルロット、簪から話を聞いた。

ドニエル「…アルゼナルとノーマ…。ドラゴンと戦うための存在か…」

ゼロ「人間同士が差別するなんてな…」

一夏「俺達の世界と似ているな…」

アイーダ「ええ…。容認する事は出来ません」

アンジュ「所詮は別の世界の話…。何とでも言えるね」

エイサツプ「お、おい！なんて言い方をするだ！」

零「…俺達の怒りが口だけだっけって言いたいのか？」

アンジュ「気持ちだけは受け取っておく。だから、私達の事は放っておいて」

アマリ「ここはアル・ワースでもなければ、私たちの仲間がいた世界でもないようです。まずは情報を集めて、対応を考えましょう」

アンジュ「アクアマリン卿…。対処とは？」

ケロロ「(卿…。でありますか?)」

アンドレイ「アマリ君から聞いたが、魔徒教団の術士は社会的な地位が高く、人々に敬われる存在だそうだよ」

アイーダ「(そして、あちらのアンジュという女性…。ほんの数ヶ月前は皇女であつ

たそうです)」

セルゲイ「(それがノーマとして扱われ、あのようにやさぐれたというわけか…)」

エメラナ「アンジュリーゼ皇女…」

アンジュ「余計な気遣いは、逆に苛つくわ…。今の私はアンジュよ」

刹那「では、アンジュと呼ばせてもらう」

ゼロ「よろしくな！アンジュ」

アンジュ「あなた達、良い声ね」

刹那・ゼロ「え…？」

確かに刹那とゼロの声は似ているが…。

零「…俺達のすべき事はアル・ワースの帰還だ。それを最優先にしたいと思う」

アンジュ「あなた達はそれでいいけど、他の人はどうかしら？」

シヨウ「…」

テイエリア「…」

ベルリ「…」

シバラク「ふむ…。拙者やアマリにとってはアル・ワースは故郷だが、零達にとって

は別世界なものな…」

サヤ「アル・ワースも、この世界も異世界という意味では同じなんですわ…」

ワタル「それはそうだけど、僕はドアクダーと戦わなきゃならないんだ！」

ミラーナイト「私達も鉄の惑星の調査と仲間の捜索があります」

アンジュ「どうやら、この艦の中でもアル・ワースへの帰還について温度差があるみたいね」

零「お前はどんなんだよ、アンジュ？」

アンジュ「私……？」

アーニー「アル・ワースは君の故郷だろ？ 帰りたくはないのかい？」

アンジュ「……その問いに答える気はないわ」

ヴィヴィアン「帰ってもドラゴンと戦うだけだもんね。だったら、こつちの世界で好き放題やるのもアリかも！」

海道「まあ、ノーマって差別がなくなるからな。願ったり叶ったりだろ？」

アーニー「海道特務中尉……その様な言い方は……」

真上「そう言えば、ベルジュ少尉。お前は俺達の事を知っていると云っていたな？」

アーニー「はい。僕達はあなた方と共に戦いました。」

海道「そつちの俺達はどうかしたんだ？ 奇械島の爆発で行方不明か？」

アーニー「それを行おうとしましたが……僕達の知り合いの人が2人の変わりに……」

真上「それ以上は聞かないでおこう……。ウイングルの翼の修復はどうだ？」

ジャン「暫くは掛かりそうですね」

海道「ま、そんなもんなくてもカイザーは最強だけだな」

真上「相変わらず、バカの言う事は一味違うな」

海道「てめえ…その場を動かすなよ！」

なんか喧嘩を始めちゃったよこの2人…。仲が良いのか悪いのか…。

一夏「シャル達も俺達と同じ様にアル・ワースに来たのか？」

シャル「うん、私と簪はアリーナで操縦訓練をしてたんだけど、急に視界が真っ白になつて…」

簪「それで、気がついたら、この世界に居たの…」

千冬「真耶もか？」

真耶「はい。職員室へ向かおうとしたら、急に気を失つて…」

シバラク「アル・ワースに転移して来たと言うわけか」

IS組はほとんど同じなんだな…。

しんのすけ「山田先生〜！」

真耶「ひやつ?!？」

つて、しんのすけの奴、山田先生に抱きつきやがった?!？

夏美「やめなさい！」

アンジュ「あなた何やってるのよ！」

しんのすけの頭の右側を夏美が、左側をアンジュがそれぞれグリグリする。

アキト「似た者同士だね……」

こ、この2人は怒らせたらダメだな……。

グリグリ攻撃を終えたアンジュは息を吐いて、俺達に視線を戻した。

アンジュ「話が逸れたけど、言っておくわね。この世界に跳ばされた現象をもう一度、起こそうとしても無駄よ。ヴィルキスの、あの機能……狙って使えるものじゃないから」

アマリ「そうですか……」

アンジュ「ついでにもう一つ……私……同情されるのは真つ平御免だから。いくら

あなたが法と秩序の番人たる魔徒教団の一員だろうとね」

アマリ「覚えておきます。でも、私の事はアマリと呼んでください」

アンジュ「わかったわ。もつとも、これ以上、教団の人間に世話になるつもりはないけど」

……不穏な空気だな……。

九郎「どうするんだ？アマリ、零」

アマリ「まずは状況の確認ですね」

零「アル・ワースに帰る、帰らないはその後でみんな考えてよう」

ホープス「では、ドニエル艦長……。これより東へ向かいましょう」

ドニエル「何のためにだ？」

ホープス「そこに時空の歪み……。異界の門に似た反応を感知しましたので」

ドニエル「何だと……。!?？」

ホープス「ただ、その地点では戦闘が発生している模様です」

千冬「そこに行けば、巻き込まれる可能性もあるか……」

真耶「で、ですけどー！もしかしたら、その歪みを利用して、帰れるかも知れません！」

ドニエル「……わかりました。この世界の情報を得るためにもその地点へ向かいましょう」

アマリ「アンジユ、ヴィヴィアン……。状況がわからない以上、備えが必要です。付き

合っていただけですか？」

零「海道さん、真上さん、シャルロット、簪、山田先生も良いですか？」

アンジユ「わかったわ。でも、その後は好きにさせてもらうから。（どうせ私には、も

う帰る場所なんてないんだから……）」

海道「俺達も良いぜ！」

真上「のんびり待つよりかは良いだろう」

シャルロット「一夏達が行くなら、僕達も行くよ！」

簪「お姉ちゃん達とも会えるかも知れないし……」

真耶「私達も一緒にします」

零「ありがとうございます。それじゃあ行こう」

俺達はホープスの言う地点へ向かった……。

「僕は倉光 源吾……今、僕達はゾギリア軍との戦闘を行なっていた。

アネツサちゃん、エルヴィラちゃん、まゆちゃん、レーネちゃんがそれぞれ今の状況を話している。

アネツサ「敵の攻撃により、基地にかなりの被害が出ています！」

エルヴィラ「まゆ！マーカスの反応は……？」

まゆか「駄目です！敵の第一派攻撃から生命活動がモニター出来ません！」

エルヴィラ「そんな……！これではルクシオンは出撃できない！」

レーネ「どうします、艦長……？」

うーん、仕方がないねえ……。

倉光「……ブラディオンに発進指示を」

アネツサ「はい！」

レーネ「では……」

倉光「このまま防戦に徹してもただの時間稼ぎでしかないよ。だったら、打って出た方がマシだね。シグナス、発進！」

レーネ「シグナス、発進！」

僕の指示で戦艦……シグナスが動き出す。

アネツサ「ブラディオン、出ます！」

そして、シグナスからディオの乗るブラディオンが出撃した。

倉光「ベリル部隊には、シグナスの直掩を指示して

アネツサ「コンラッド大尉とドウラン中尉はシグナスの直掩をお願いします！」

アネツサちゃんの言葉にリー君とヤール君が反応した……。

リー「了解！」

ヤール「ディオ！前線はお前に任せるとなるが、やれんのか！」

「俺は隼鷹・ディオ・ウエインバークだ。

ディオ「やってみせます…！」

ドウラン中尉にやれるのかと聞かれ、俺は答えた。

俺はブラディオンを動かした。

エルヴィラ「無茶です！ブラディオン1機だけでは…！」

倉光「だが、今はこれしか選択肢はない」

エルヴィラ「ルクシオンさえ無事ならば、状況をひっくり返す事も可能であるの
に…。」

ビゾン「あの赤い奴が、我々が追っていた新型か…。自由条約連合の秘密兵器…。

まずはデータを集める」

倉光「シグナスとベリル隊はブラディオンを援護…！まずは敵の数を減らすんだ
！」

ディオ「コンラッド大尉、ドウラン中尉。シグナスをお願いします」

リー「こっちは任せておけ！お前は無理するなよ、ディオ！」

ゾギリア「。俺はお前達を許さない…。」

倉光「(まずい状況だね…。彼女達には待機して貰っているけど…。巻き込んでしま
うかもしれないね…。)」

俺はゾギリア軍と戦い始めた……。

戦いを行なつて数分後……。

ロセツテイ管制士が口を開いた。

アネツサ「艦長！ プトレマイオス2改が来ます！」

エルヴィラ「何ですって?!？」

ロセツテイ管制士の言う通りにプトレマイオス2改とガンダムサバーニヤ、ガンダムハルト、GN-XXXXIVが出て来た。

倉光「スメラギ艦長……なぜ出て来たのですか？」

スメラギ「私達、ソレスタルビーイングは戦争根絶を目指す武装組織です。よって、戦争を広げるゾギリアに対し、武力介入を行います」

ラツセ「全く……素直じゃないな」

ロツクオン「全くだな」

パトリック「素直にこの時代に転移して来た俺達を匿ってくれた自由条約連合に借りて返しと言えはいいのによ。ソレスタルビーイングの戦術予報士は本当に素直

じゃないな！」

アレルヤ「スメラギさんらしいよ」

ソーマ「そうね」

フェルト「それがスメラギさんだから」

ミレイナ「ミレイナもやるです！」

ソレスタルビーイングは手を貸してくれるみたいだな…。

倉光「ありがとうございます」

スメラギ「じゃあ、始めるわよ！みんな！」

ロツクオン「オーライ！デイトもよろしくな！」

デイト「勝手にしてください。俺はゾギリアを倒すだけです」

パトリック「よっしゃあ！幸せのコーラサワーの力を見せてやるぜ！」

ソレスタルビーイングを味方に付け、俺達はゾギリアとの戦闘を再開した…。

〈戦闘会話　スメラギVS初戦闘〉

ミレイナ「敵機近づいて来てるです！」

スメラギ「別世界でも私達は死ぬわけにはいかないわ！折角、ELSとの対話に成功

できたもの！」

フェルト「はい！絶対に生きぬきましょう！」

ラッセ「砲撃の合図は任せるぜ！」

スメラギ「ええ！トレミー、攻撃開始！」

〈戦闘会話　ロックオンVS初戦闘〉

青ハロ「敵が来た、敵が来た」

ロックオン「了解了解。敵がすばしこくつても乱れ撃つだけだぜ！」

ハロ「乱れ撃つぜ、乱れ撃つぜ」

〈戦闘会話　アレルヤVS初戦闘〉

ソーマ「アレルヤ、敵は素早い。気をつけて」

アレルヤ「わかっているよ、マリィ。ガンダムハルト、迎撃する！」

〈戦闘会話　パトリックVS初戦闘〉

パトリック「大佐が居ないこの世界でまさか、ガンダムと一緒に戦う事になるなんてな……来やがれ！俺は何度撃墜されても死なないからな！」

ソレスタルビーイングと協力してゾギリアのヴァリアンサーを撃墜していく俺達……。

ビゾン「様子見は終わりだ……！ 一気にケリをつけるぞ！」

すると、今度は俺たちの反対側から数体のヴァリアンサーが現れた……。

増援か……!!?

レーネ「別働隊です！」

倉光「敵の狙いは基地か……！」

エルヴィラ「そんな……！ あそこには、まだルクシオンがあるのに！」

ラッセ「ルクシオンって、新型のヴァリアンサーの事か!!?」

スメラギ「敵の狙いはルクシオンの鹵獲……！」

倉光「デイオを基地に向かわせるんだ！ ルクシオンを失うわけにはいかない！」

アネツサ「了解です！ ウェインバーク少尉は基地へ向かってください！」

スメラギ「ロックオン！ アレルヤ！ マネキン准尉も基地へ向かって！」

アレルヤ「了解！」

俺達は基地へ向かおうとした……。

ビゾン「奴等を行かせるな！」

ディオ「ちいつ！このままでは……！」

パトリック「なんか、この状況を覆せるものはないのかよ!?？」

ミレイナ「ストラトスさん！狙撃をお願いしますです！」

ロックオン「サバーニャは狙撃に特化した機体じゃねえつての！それにこんな状態じゃ無理だ！」

フェルト「……こんな時に刹那が居てくれたら……」

スメラギ「……」

まゆか「これは……！」

エルヴィラ「どうしたの、まゆ!?？」

まゆか「ルクシオン、ファイリングマッチ指数が上昇していきます！」

ソーマ「え……!?？」

エルヴィラ「ちよつと、まゆか！あつちは誰も乗つてないわよね!?？」

まゆか「でも、反応が……。それにディオとすごいマッチングしています！」

ディオ「俺とマッチングするなんて、誰だ!?？」

レーネ「敵の攻撃、ルクシオンのハンガーに來ます！」

ロックオン「つてまずいじゃねえか！」

すると、ゾギリアの攻撃により、ルクシオンはハンガーから押し出された……。

ディオ「ルクシオン！ハンガーから押し出されたか！」

倉光「弾幕を張るんだ！敵をルクシオンに近づかせるな！」

「俺、渡瀬 青葉は目を覚ますと見慣れない所に居た。

青葉「……どこだよ、ここ……？それに俺……こんな服を着て……。雛は……!?雛は

どこにいるんだ!?？」

レーネ「ルクシオンに乗ってない者！氏名と所属は!?？」

青葉「えつと……誠應高校1年、渡瀬 青葉……」

ディオ「渡瀬 青葉……？」

アレルヤ「高校1年って事は、学生かい……？」

レーネ「ラボの人間か……？とにかく、そこは危険だ！すぐにルクシオンを移動させ

ろ！」

青葉「移動って言われても……」

フェルト「もしかして、初心者…?」

レーネ「まさかカテゴリーAも持つてないのか!?? ライセンス無しの搭乗は軍規違反だぞ! 直ちに降りろ!」

青葉「降りろって… どうやれば!??」

ロックオン「おいおい、もしかして降り方も知らないのかよ…!??」

エルヴィラ「その様ですね…。彼は一体…!??」

倉光「まゆちゃん… さつきなんて言っただけ?」

まゆか「ルクシオンがブラディオオンにナイスカップリング反応を…」

倉光「だね。2機をカップリングさせよう」

レーネ「艦長!??」

スメラギ「そのカップリングというのは?」

エルヴィラ「2人のヴァリアンサー搭乗者の感覚を脳だけでなく全てを共有(リンク)させ、互いの戦闘能力を劇的に向上させることができるシステムの事です!」

倉光「状況は悪い。このままじゃルクシオンは無抵抗で的に鹵獲されてしまう。ディオとアビリティを共有すれば、初めてでもルクシオンを避難させるくらいはできるだろう?」

エルヴィラ「ディオを誰ともわからない相手とカップリングさせるつもりなんですか」

「!?」

倉光「反応はグリーンなんだろう？」

エルヴィラ「ですが……！」

レーネ「機密保持の面でも問題が！」

パトリック「今、そんな事を言っている場合かよ！」

倉光「マネキン准尉の言う通りだよ。その点は僕の責任でいいさ。放っておけば、どころか僕等も危ないんだし……。それに僕、負けっぱなしは嫌な性分なんだ。知ってるだろ、少佐」

スメラギ「倉光艦長……！」

レーネ「……ルクシオン、ブラデイオン、カップリングプロセス開始！」

エルヴィラ「了解！」

一体、何の話をしているんだ……？

デイオ「しかし、レーネ副長！」

レーネ「指揮官命令だ！」

デイオ「……了解。聞こえるか、ルクシオンに乗っている奴！」

青葉「俺の事……？」

デイオ「今からお前とカップリングする！」

青葉「え…： カップリング？」

ディオ「とにかく俺のいう通りにすればいい！」

な、何なんだよ？カップリングって…：！

ビゾン「このままでは新型に逃げられる！別働隊は突っ込め！」

ゾギリア兵「自分が行きます！」

って、1機がこっちに来やがった!!？

フェルト「敵ヴァリアンサー、ルクシオンに急速接近！」

ソーマ「捨て身で来たわね…：！」

青葉「く、来るな…：！」

ディオ「コネクティブ・ディオとコールしろ！」

青葉「こ、コネクティブ…：？」

ディオ「コネクティブ！コネクティブ・ディオだ！」

ディオ…：！雛が言っていた名前…：！

ディオ「早くしろ！」

青葉「ディオ！俺は渡瀬 青葉だ！お前が待つてるって雛が！」

ディオ「ちいっ！」

すると、ディオの乗っているロボットが俺に近づいた。

ディオ「渡瀬 青葉！いいから俺のいう通りにしろ！」

青葉「……わかった！」

…… また敵が近づいて来る……！

ディオ「急げ!!？」

青葉「うおおおおお!!？」

俺はやるって決めたんだ！

青葉「とにかく、やってみないと……！コネクティブ・ディオ!!？」

ディオ「アクセプション…… 誰だか知らないがこちらに合わせろ！」

青葉「そ、そんな事言われても……！」

ディオ「大人しく従え！」

な、何だ……？俺、この機体の動かし方がわかる……？

青葉「うわああああつ!!？」

ディオ「うおおおおお!!？」

俺はディオのロボットと同時に敵機を斬り裂いた……。

ゾギリア兵「うっ、うわあああああつ!!？」

敵機のロボットは爆発した……。

ビゾン「何だ、あのスピードは!!？」

ロックオン「まるでトランザムじゃねえか！」

スメラギ「これがカツプリング……」

倉光「よし……！」

アネツサ「カツプリング……」

エルヴィラ「成功したわ！」

まゆか「マツチ最高です！」

ディオ「すごい……。ここまで俺と適合するなんて……！」

青葉「俺……ロボットを動かしたのか……？」

エルヴィラ「そうよ。カツプリングの成立で君はディオの操縦知識を共有したの」

青葉「共有……？」

パトリック「おいおいそれって……！」

ミレイナ「意識共有のイノベーターと似ています！」

まゆか「イノベーターは何かはわかりませんが、渡瀬 青葉さん。あなたは、もう知っ

てるんです。ヴァリアンサーの操り方を」

青葉「わかる……。！わかるぞ、こいつの動かし方が！」

エルヴィラ「長時間のカツプリング状態は危険だから、必殺のコンビネーション攻撃

の時にいったら、システムを起動させるのよ」

青葉「さつきみたいにやればいいんだな……！」

よし、やれる…… やれるぞ！

ディオ「俺がこいつと……」

アネツサ「艦長！所属不明の艦が来ます！」

倉光「ゾギリアの増援か……！」

ラツセ「こんな時に……！」

敵……なのか……？

―新垣 零だ。

メガファウナはホープスの言葉通り、戦場に着いた。

ドニエル「あのオウムの言う通り、戦闘の真っ只中か……」

スメラギ「あの艦……ゾギリアのものとは思えないわ……」

ビゾン「連合の艦……？それにしては不自然だが……（ん？通信か……？）」

マルガレタ「何をしていますのです、ジェラフィル中尉。敵の増援を攻撃しなさい」

ビゾン「あれは敵の艦なのですか？」

マルガレタ「ゾギリアに所属していない以上、そう判断します。先制の機を逃してはなりません」

ビゾン「これはアルフリード中佐の命令ですか？」

マルガレタ「指揮権は行政局の特務武官である私にあります」

ビゾン「……了解しました」

ちっ！紫の機体がメガファウナに攻撃して来やがった……！

ギゼラ「片方の陣営が仕掛けてきます！」

ドニエル「通信回線を開け！こちらが敵でない事を両方に伝えるんだ！」

ギゼラ「駄目です！こちらの通信は聞こえているはずですが、止まりません！」

ドニエル「やむを得ん！機動部隊を出して、応戦するぞ！」

やっぱりそうなるか……！

俺達はドニエル艦長の言葉でそれぞれ出撃した……。

ベルリ「別の世界に来たのにまた戦いなんて……！」

零「ベルリ！今は目の前の事に集中しろ！」

アマリ「状況がわからない以上、危険です！」

ベルリ「わかってますよ……！けどね、愚痴の1つも言いたくありません！」

ワタル「だけど、ホープスが門を開くのを感知したんだ！ここを離れるわけにはいかないよ！」

九郎「そうだな！何が何でもここに居ないと！」

シヨウ「俺達を狙って来る方は迎え撃つとして、もう片方の勢力はどうする？？」

海道「両方共やっちまえば良いんじゃないか？」

エイサップ「話も聞かず、そんな事駄目ですよ！」

海道さん……好戦的だな……！

真上「だが、もう片方からも攻撃を受ける場合があるぞ」

アンジュ「そうね。それなら、こっちから仕掛けた方が良いかもね！」

ゼロ「だから待って言ってんだろ！」

カンナム「僕達のすべき事は戦いを広げることではないはずですよ！」

テイエリア「みんな待ってくれ……！あの片方の部隊の中に……！」

刹那「あの青い艦……プロレマイオス……トレミーか？！」

セルゲイ「ソレスタルビーイングの艦か。それに、2機のガンダムも居る」

アル「ん？アンドレイと同じGN-XIVも居るようだぞ？」

ケロロ「ケロ？吾輩も知らないモビルスーツであります！」

ロックオン「スメラギさん！あれって……！」

スメラギ「クアンタとラファエル……？もしかして、刹那とティエリアなの……？」

パトリック「GN-Xも2機居る……あれは俺達の世界の奴か？」

倉光「あれは……ソレスタルビーイングの仲間なのですか？」

スメラギ「2機のガンダムはそうで、2機のGN-Xは仲間とは言えにくいですが、私達の世界のものです。他の機体はわかりませんが……」

ディオ「あからさまロボットじゃないのも居るが……」

エルヴィラ「怪獣も居るわね……。何なのあの部隊は……！」

青葉「あの赤と青の巨人……間違いない！ウルトラマンだ！」

レーネ「ウルトラマン……？」

まゆか「過去のデータにあります。地球を守る為に宇宙から来た正義の宇宙人だと……」

アネツサ「カツコイイわね……！」

スメラギ「とにかく通信を繋げてみます！」

……片方のトレミーとか言う艦から通信が来たな……。

スメラギ「こちらはソレスタルビーイングの戦術予報士、スメラギ・李・ノリエガで

す。今は自由条約連合とは協力体制の中ですよ」

刹那「スメラギ・李・ノリエガ！俺だ。刹那・F・セイエイだ」

フェルト「やっぱり……刹那！」

ロツクオン「その部隊は何なんだよ？」

アレルヤ「どうして、連邦軍のGN-Xも居るんだい？」

テイエリア「これには深い訳が……」

セルゲイ「その声……アレルヤ君か？！」

アレルヤ「……えっ……？！その声って……！」

ソーマ「大佐……？スミルノフ大佐ですか？！」

セルゲイ「び、ピーリスなのか？」

ソーマ「ど、どうして……スミルノフ大佐が？！」

アンドレイ「ピーリス中尉。話は後です。今はこの場を切り抜けましょう！」

ソーマ「アンドレイ大尉まで……！」

パトリック「ガンダムと一緒に戦ってるのは俺だけじゃなかったんだな」

ラツセ「そっちの部隊は味方でいいのか？！」

刹那「その判断であっている」

ミレイナ「ノリエガさん！」

スメラギ「ええ。倉光艦長」

倉光「…わかりました。今からあの部隊は僕達の味方とする！」

ディオ「了解！」

青葉「りよ、了解！」

「どうやら、片方とはやり合わずに済みそうだな…。」

グランデイス「これで戦わずに済みそうだね」

アイーダ「ですが、もう片方からは完全に敵視されるようになりました」

零「どのみち、向こうから仕掛けて来たんだ…。このままじゃ、こっちがやられる！」

レイ「ゴモラ！あっちの部隊と一緒に戦うぞ！」

アーニー「別世界のソレスタルビーイングか…。」

しんのすけ「アーニーお兄ちゃん、始まるゾ！」

アーニー「わかってるよ。しんのすけ君」

ディオ「渡瀬 青葉… やれるよな？」

青葉「あ、ああ…。俺だって死にたくはないからな」

ディオ「俺がフォローする。お前はルクシオンを守る事だけを考えろ」

青葉「（此処がどこだかわからないけど、死んじまったら、何もかも終わりなんだ…。」

雖…。お前は、どこに行っちゃったんだよ…。）」

俺達は敵部隊との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「此処も俺の世界とは違う……。でも、俺はアル・ワースに戻らなければならない……。何故かはわからないけど、あそこには何かがある……。！（あのアスナって奴の言ったレイヤ・エメラルドって名前……。一体誰なんだ……。？）」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「俺達の世界と似ているけど違う……。もしかしたら、箒達もアル・ワースに居るのかも知れない……。だったら、今はアル・ワースに戻る為に戦う！」

〈戦闘会話 しんのすけVS初戦闘〉

カンナム「敵が来るぞ！しんのすけ君！」

しんのすけ「素早い相手だゾ！」

カンナム「なに、素早さだけで勝てる程戦いは甘くないと教えてあげるよ！」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「トレミーが……。仲間達が居る……。フェルト、俺はお前に伝えなければならない事があるんだ……。！その為にもこの場を切り抜ける！」

〈戦闘会話　テイエリアVS初戦闘〉

テイエリア「またもやミレイナ達と出会うとは思わなかったな……。そう言えば、ミレイナのあの言葉には答えなければならないな……。だが、イノベイドである僕が幸せになつて良いものなのか……。？」

〈戦闘会話　アンドレイVS初戦闘〉

アンドレイ「父さん……」

セルゲイ「ああ、私達はピーリスに謝らなければならない。その為にもこの場は切り抜けるぞ！」

アンドレイ「はい！」

〈戦闘会話　アキトVS初戦闘〉

アキト「機動性がなかなかの様だが、ブラックサレナには勝てない……。それを証明してやる……。！」

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

九郎「また別の世界に飛ばされる事になるとはな…！」

アル「うむ、だが、どの世界でも妾達のやるべき事に変わりはない！」

九郎「応よ！良し！やってやらあつ！」

〈戦闘会話 エイサツプVS初戦闘〉

エイサツプ「また別の世界で戦闘になるなんて…！」

エレボス「驚きの連続だね…！」

エイサツプ「アル・ワースにはリユクス達も居るかも知れないんだ！こんな所で足止めを食らってられるかよ！」

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

ケロロ「このペコポンを侵略するのも手ではありますが、そうになると零殿達を敵に回す事になります…。今はこの場を切り抜けるしかないでありますな！」

〈戦闘会話 ゴモラVS初戦闘〉

ゴモラ「キシヤーン!!？」

レイ「わかつてる、ゴモラ！あれには人が乗っているんだ、なるべくコックピットは外すぞ！」

〈戦闘会話　ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「此処でも人間同士が戦争をしているのか…！人間の悪しき欲望…そんなものがあるからマイナスエネルギーは減らないんだよ！」

〈戦闘会話　アーニーVS初戦闘〉

アーニー「この世界でも戦争が起こっているのか…。完全に争いを終わらせる事は出来ないのかも知れない…。でも、僕は見て見ぬ振りだけは絶対に出来ない！」

俺達は敵部隊の機体を倒していき、白の機体と赤の機体の連携で紫の機体を追い詰めた。

ビゾン「ちっ…！あの増援部隊のおかげで想定外の事態となったか…！まあい

い。新型をあぶり出した以上、最低限の任務は遂行した。仕留めるのは次の機会だ。ここは撤退する……！」

紫の機体は撤退した……。

アネツサ「敵機、後退していきます」

スメラギ「何とか、ルクシオンとブラディオンを守り抜けましたね」

倉光「問題は山積みですけどね……」

レーネ「艦長……。所属不明艦の責任者がこちらにコンタクトを求めています」

倉光「こちらとしても望む所だよ。お礼も言わなきゃならないしね。スメラギ艦長もそれで良いですね？」

スメラギ「構いません。私の仲間も居ますし」

フェルト「刹那に、会える……」

ミレイナ「良かったですね！グレイスさん！」

アネツサ「ルクシオンのパイロットは、どうします？」

倉光「そちらはディオに任せるよ。でも、なるべく手荒な真似はしないように伝えてくれ」

アネツサ「了解です」

青葉「終わった……んだよな……」

ディオ「渡瀬 青葉……。こちらの誘導に従ってもらおうぞ」

青葉「そんな怖い声を出すなよ。俺は逃げも隠れもするつもりないぜ。何しろ、此処がどこかさえもわからないんだからな……。 (雖……。俺……。どうなっちまうんだろうな……。)」

俺達はロボットから降り、白い戦艦……。シグナスの艦長室に入った。

倉光「……」

スメラギ「……」

アマリ「以上が、私達が此処に来るまでの経緯です」

零「ご質問があるなら、わかる範囲でお答えしますが……」

倉光「…… 大変だったようですね。月並みな感想で申しわけありませんが」

ドニエル「信じられないのも無理はありません。体験している自分自身さえ、夢を見ているのではないかと思う時がありますから」

倉光「いえ……。信じさせていただきます」

スメラギ「私も信じます」

ドニエル「本当ですか?!？」

倉光「軍人として、あなた方が保有している兵器……。兵器とは言えない存在もありま

すが……それらは明らかに我々とは異なる技術体系です。それを目の当たりにし、さらにそれに助けてもらった以上、疑うのは失礼というものでしょう。それに、前例もありますし」

零「前例……？」

スメラギ「私達です。私達もこの時代に転移して来たので場合によつては皆さんと同じです」

刹那「俺達が量子ジャンプした後、ELSはどうなった？」

ロックオン「ELSの数体は集まって、大きな花になつたぜ」

テイエリア「花……？」

アレルヤ「何故そうなったかはわからないけどね」

スメラギ「それと……この時代に来てから、ある事が起きたの」

刹那「何だ？ある事とは……」

ロックオン「まずは壊れた機体が直つてゐるって事だ……それに……」

パトリック「死んだはずの人間が蘇つてゐるってのもな……」

セルゲイ「……」

アンドレイ「……」

ソーマ「スミルノフ大佐……アンドレイ大尉……」

セルゲイ「立派になったな。ピーリス」

ソーマ「いえ、私なんてまだまだです……。それと……」

突然、ピーリスはセルゲイさんに抱きついた。

ソーマ「またお会いできて嬉しいです……！」

セルゲイ「私もだ」

そんなピーリスをセルゲイさんも優しく抱きしめた。

そんな光景を見て、アンドレイさんとアレルヤは微笑んだ。

スメラギ「それと……デュナメスの事なんだけど……」

テイエリア「デュナメスがどうかしたのか？」

スメラギ「GNドライヴが勝手に取り付けられているの……見た目も以前のデュナメ

スそのままだし……」

刹那「……」

テイエリア「使えない武装……死んだ人間が転移……壊れたはずの機体が復活して

いる……デュナメスに取り付けられたGNドライヴ……まさか、彼も……？嫌、流石に

それはないか……」

倉光「とにかく、まずはお疲れでしょうから、休息を取ってください。今後の事は、その後に協議しましょう。もっとも、あまりゆつくり出来る状況ではありませんけど

ね…」

ドニエル「今日戦った敵が、また来ると…？」

倉光「否定はできません。下手をすれば、あなた方をその戦いに巻き込むかも知れません」

零「…今日の戦闘で既に向こうの標的となつているかも知れませんね…」

ドニエル「とは言うが、あの場では応戦しか選択肢はなかつただ…」

アマリ「責めているわけではありません。私と零君も同じ選択をしたでしょうから」

零「ああ。俺達はそれを結果として、俺達の事を信じてくれる倉光艦長と出会えたんですから、良しとしましょう」

ドニエル「ありがとう。そうだな。ここはポジティブに考えよう」

倉光「我々も作戦行動中ですが、可能な限りの情報や物資は提供させていただきます」

ドニエル「ありがとうございます、倉光艦長。では、皆に状況を説明し、今後の方針を検討してきます」

倉光「部屋の外のドウラン中尉が皆さんを案内してくれますので、彼の誘導に従ってください」

零「では、失礼します」

俺達は倉光艦長に頭を下げ、艦長室を後にした…。

「僕……倉光 源吾は彼らを見送り、息を吐いた。

倉光「……異世界アル・ワースとそこに召喚された人間達……か……。ちよつと僕のキヤパをオーバーしちやつてるな……」

すると、レーネ少佐から通信が来た。

レーネ「艦長……。今、お時間よろしいでしょうか？」

倉光「問題ないよ。いや、問題だらけかな……」

レーネ「と、おつしやられますと？」

倉光「ドニエル艦長のお話が、なかなか刺激的でね……。で、そつちはどうだったの？ ルクシオンのパイロット君の聴取は」

レーネ「それが……」

倉光「ん？ 珍しいね。いつも明朗快活な艦長が言いよどむなんて……」

レーネ「あのパイロット……渡瀬 青葉と名乗ったのですが……。自分は70年前の世界から来た……と言っているんです」

倉光「……はい……？」

一体……どう言う事なのかな？

第10話 異境、そして歌舞く戦い

「私……エルヴィラ・ヒルはアレックス・サンドロ・フェルミ先生と通信で話していた。

フェルミ「……では、カップリングシステムの実戦での使用の目処が立ったと？」

エルヴィラ「ええ……」

フェルミ「どうした、エルヴィラ君？そんな顔を見ると小じわが増えるぞ」

エルヴィラ「……」

フェルミ「いつもの冗談にも乗ってこないとなると、深刻な状況のようだね」

エルヴィラ「確かにシステムの起動には成功しましたが、あまりにも未知の部分が多すぎて……」

フェルミ「そういう時には、目の前で起きた事があるがままに受け止める事から始めよう。理論が事実を追いかける事になっても良いじゃないか」

エルヴィラ「先生……」

フェルミ「何はともあれ、君の開発したコックピットシステムを組み込み、カップリングシステムは完成した。そのデータを送ってもらった事でより完成度の高いカップリング機体も開発できよう」

エルヴィラ「これで戦局は変わるのでしょいか…」

フェルミ「そう信じて、今日まで戦って来たんだらう？」

エルヴィラ「はい」

フェルミ「では、再会の日を楽しみにしているぞ。達者でな、エルヴィラ君」

通信を切った私は軽く息を吐いた。

エルヴィラ「あるがままを受け止める…か…。そうは言うけど…。(渡瀬 青葉 君…。70年前から来たという彼…どう受け止めればいいのか…)」

―俺、渡瀬 青葉がシグナスとかいう戦艦の艦長室で此処の事を聞いた。

青葉「今が… 2088年…」

レーネ「そうだ」

青葉「日本は… 世界は、この70年の間にどうなっちゃったんだ…」

レーネ「現在、日本という国は自由条約連合に加盟しており、この艦もその所属だ」

自由条約連合…か…。

レーネ「連合は一昨年から、大ゾギリア共和国と戦争状態にあり、戦況は厳しい状態にある」

青葉「それが… 未来の世界…」

ディオ「また、それか」

ディオ…！

青葉「まだ信じてくれないのかよ、ディオ！俺は2014年の日本から来たんだ！」

ディオ「人を気安く名前で呼ぶな」

青葉「でも、ディオなんだろう？」

ディオ「お前に、そう呼ばれる筋合いはない」

青葉「だつて雛が…！」

倉光「そこまでにしよう。えくと… 渡瀬 青葉君…」

青葉「はい」

倉光「君の話は、なかなか信じがたいものだが、事実は小説より奇なり… という言葉もある。こちらも取り込み中でね。君の話は追って検討するのでまずは休息を取ってくれたまえ」

青葉「あ… はい…」

倉光「では、ディオ…。当面、彼の事は、君とコンラッド大尉に任せるから」

ディオ「自分にですか？」

… 何で嫌そうな顔するんだよ。

倉光「君と彼はバディだからね」

ディオ「…… あれは緊急避難です。では、隼鷹・ディオ・ウエインバーグ少尉……。渡

瀬 青葉を連行します」

…… はあ!!?

青葉「連行つて……!」

ディオ「自分の立場をわきまえろ」

青葉「1つだけ聞かせてくれ、ディオ。お前……。弓原 雛っていう子を知らないか？

髪の長い子で……」

ディオ「知らない」

青葉「…… そうか」

ディオ「では、行くぞ……。失礼します」

ディオに連れられ、俺は艦長室を後にした……。

――倉光 源吾だよ。

僕と少佐、エルヴィラ先生はディオと渡瀬 青葉君を見送った後、彼について話し合
う。

倉光「……どう思う、彼の事？」

エルヴィラ「ルクシオンのコックピット内に彼の所持品が落ちていましたが……。それらは全て70年前に存在したものです。とはいえ、模造が可能なものも多く、言葉を信じるのは無理があります。何しろ、時間旅行……ですから」

倉光「と言つても、異世界人も同時に現れたんだ。時間旅行が、ことさら特別とは思えないけどね。それに、怪獣使いのレイ君やウルトラマンゼロ君達は僕達よりもさらに未来から来たと言つていたし……。ソレスタルビーイングの事もある」

レーネ「艦長は、彼等の言葉を信じるんですか？」

倉光「正確には、信じざるを得ない……。つてところかな。少なくとも彼等が敵となるのは好ましくない。特に今この状況ではね」

レーネ「渡瀬 青葉については、いかがいたしますか？」

倉光「僕等を救ってくれたヒーローなんだけど、ルクシオンの事を知られてしまったのはちよつと困ったね……。となれば、ルクシオンとブラディオンを本部基地に移送するまでは、付き合つてもらおうしかないだろう」

レーネ「妥当な判断だと思います」

倉光「だが、もし彼が本当に過去から来たのなら、人権にも配慮しなくてはならない。出発まで、まだ時間がかかるのなら、その間に彼にも最低限の事は学んでもらおう。つ

いでにエルヴィラ先生にもお願いしたい事があるのだけど……
エルヴィラ「私にですか……？」

「俺、新垣 零は仲間達と共に奈須 まゆかという女の子に呼び出された。

まゆか「……皆さん、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます」
アンジュ「……」

ワタル「……」

千冬「……」

まゆか「私はシグナス所属の奈須 まゆか伍長です。これから皆さんと青葉さんにご
世界の状況を説明させていただきます」

九郎「……」

刹那「……」

まゆか「(艦長は……この人達の事、異世界から来たって言ってたけど……。魔法使い
や妖精、鳥人間、宇宙人に意思を持ったロボットにカエルを見ちゃうと本当かも……」

て思っちゃう：：）」

ゼロ「俺から質問いいか？」

まゆか「はい、ウルトラマンさん」

ゼロ「俺の事はゼロで良い：：。それで、この世界で初めて怪獣が出たのはいつだ？」

青葉「それは2014年の人間である俺でも答えられる：：。1966年だよ」

ゼロ「ウルトラマンが初めて来たのも1966年か？」

まゆか「そうですね」

青葉「俺も歴史の教科書で習った。そこから初代ウルトラマンが地球を去った1年後、ウルトラセブンが来て、地球を侵略者の魔の手から守ってくれて、地球を去った：：。」

まゆか「1971年になり、再びウルトラマンジャックが地球に来て、そこから約1年ずつ、交代するように、ジャックが去り、ウルトラマンエースが現れ、エースが去り、ウルトラマンタロウが現れ、タロウが去った後にウルトラマンレオが現れましたよ？」

青葉「その約5年後にウルトラマン80が地球を守り、1981年に80が去った後は暫く、怪獣や宇宙人が現れなくなっただ」

零「青葉の時代までか？」

青葉「嫌、2006年から2008年までにまた怪獣や宇宙人が出現したのを見て、ウルトラマンメビウスが地球を守ってくれたんだ。それから、約6年間は怪獣や宇宙人も

現れていない」

まゆか「私達からすると、80年間、怪獣や宇宙人が現れなくなり、次第に私達はウルトラマンや怪獣の事を忘れつつあるんです」

レイ「そこから数千年後が俺達の時代だ」

ワタル「な、なんだかややこしいね……」

真上「つまり渡瀬は過去から、レイ達は未来から来たという事になるのか……」

ゼロ「……信じられないかもしれないが、俺はウルトラセブンの息子でウルトラマンレオの弟子だ」

青葉「はあ!? セブンの息子でレオの弟子!?」

レイ「それは間違いない」

まゆか「逆にこちらが驚かされました……」

つまり、時代は違えど、ゼロ達、M78星雲のウルトラマン達とレイさんとヒュウガさん、青葉達とまゆか達は共通の世界観という事か……

ティエリア「そろそろ、この世界の今の状況について教えてくれないか？」

青葉「そうだ! 副長さんにも聞いたけど、この世界……戦争しているんだよな……」

まゆか「では、まずその事について説明させていただきます」

いよいよ本題か……

まゆか「21世紀前半に発見された革命エネルギーネクトオリビウムは世界の構造を揺るがしました。広大な埋蔵地帯を持つ大国のゾギリアは周辺国を呑み込んで膨張を続け……間もなく、ゾギリアに対抗する国家が結成した自由条約連合との間で世界規模の大戦が勃発しました」

エイサツプ「世界大戦……」

ゼロ「そう言えば、レオがそんな事言っていたな」

まゆか「数度の大打で劣勢を余儀なくされた連合は画期的な戦闘システムの開発に着手しました。これ以上は機密なのでお話は出来ませんが……」

マサキ「何となくだが、わかるぜ……。あの白いのと赤いものの連携攻撃だろうな……」

アーニー「(あれは……ちよつと普通じゃなかったしね……)」

一夏「やつぱり、此処も俺達の世界じゃないな……」

シヨウ「俺の世界とも違う」

ノレド「でも、まゆかつてすごい！若いのに物知りなんだね！」

まゆか「こう見えても技術担当ですからね。戦史も勉強しています」

青葉「まゆかちゃん、偉い人なの？」

まゆか「ほんとに技術士官のエルヴィラさんのアシスタントなんですけどね」

グレンファイヤー「という事は、あのガリアンサーってロボットの事も詳しいのか？」

ゼロ「ヴァリアンサーだ、ヴァリアンサー」

ミラーナイト「全く、どうやったら間違えるんですか……」

まゆか「あはは……。それにしても、青葉さん……70年前から来たのにヴァリアンサーの存在にはあんまり驚いてませんね」

青葉「雛が乗っていたからな」

アマリ「雛……？」

チャム「それって女の子の名前……？」

エレボス「もしかして、彼女……？」

シバラク「何……？ そうなのか……？ 青葉とやら！」

青葉「そ、そんなんじゃないですよ！」

リー「70年前から来たなんて突飛な事を言ってたが、そういう所は普通の人間だな」

青葉「普通って……」

リー「とりあえず、君がシグナスを救ってくれたのは事実だ。礼を言う。俺はリー・コンラッド大尉。シグナスのヴァリアンサー隊の隊長だ」

ヤール「俺はヤール・ドウラン中尉。いつまでの付き合いか、わからんがよろしくな。いつまで……って言うなら、そっちの自称、異世界人の方もか」

しんのすけ「自称って……？」

アンドレイ「我々が嘘をついてると？」

セルゲイ「よすんだアンドレイ。信じられないのも無理はない」

ワタル「でも、この艦の艦長さんはドニエル艦長の話を信じてくれたって聞いたよ」

ベルリ「その艦長さんはきつと頭が柔らかいんだよ」

ヒミコ「柔らかいって豆腐か?!? それじゃ、頭を豆腐の角にぶつけたら、ヒジョーに危険なのだ!」

ラライヤ「きけん、きけん!」

九郎「そんな訳あるか!!?」

ケロロ「ゲロゲロリ…… 九郎殿、豆腐を凍らせたら危険でありますよ」

簪「ケロちゃん、それはもう凶器」

アキト「みんなそこまで。まゆかちゃんが困っているよ」

まゆか「い、いえ……。そういうわけでは……。(こ、こういう所……。やつぱり、別の世界から来た人っぽい:。)」

ヒユウガ「そろそろソレスタルビーイングの面々の紹介してもらえないか？」

ロックオン「ん? そうだな。戦術予報士のスメラギさんは居ないから俺達だけで済まずぜ。俺はロックオン・ストラトス。成層圏まで狙い撃つ男だ。こっちは相棒のハ口達だ」

ハロ「よろしく、よろしく」

青ハロ「ロックオン狙い撃たない、ロックオン狙い撃たない」

ロックオン「うっせえ！」

アレルヤ「僕はアレルヤ・ハプティズム……。時折性格が変わるのはもう1つ人格があるんだ」

アル「二重人格という事か？」

ハレルヤ「だからそう言ってるんだろうが！」

……っ！確かに性格が変わった……！！？

ハレルヤ「俺はハレルヤ。まあよろしくな」

マリー「マリー・パーファシーよ。よろしくね」

しんのすけ「あれ？セルゲイのおじさんはピーリスって、呼んでなかった？」

マリー「そうね。私も二重人格だったの……。今は違うけど……。でも私は戦闘の時はソーマ・ピーリスだからそう呼んで」

パトリック「パトリック・マネキン准尉だ。不死身のコーラサワーと呼ばれている。コーラサワーってのは旧名だ。」

フェルト「フェルト・グレイスです。プトレマイオスのオペレーターをやっています」

ミレイナ「同じく、ミレイナ・ヴァステイです！」

ラッセ「砲撃手のラッセ・アイオンだ。よろしくな！」

イアン「ミレイナの父親のイアン・ヴァステイだ！メカニックを担当しているからよろしく！そう言えば、刹那、クアンタムシステムが使えない様だが…。どこも異常はなかったぞ？」

刹那「何…。？？そんなバカな…。！」

やっぱり、何かしらの原因があるみたいだな…。

ん…。？フェルトが刹那に近づいた？

フェルト「…。刹那、また会えて良かった」

刹那「フェルト…。俺はお前に言わなければならない事がある…。ありがとう」

フェルト「え…。？」

刹那「お前が俺の手を握ってくれたから…。俺は此処に居る。お前やみんなが俺を立ち上らせてくれたから、ELSの考えがわかる事が出来た。本当にありがとう」

フェルト「刹那…。」

ロツクオン「あま〜い時間だな」

シャルロット「良いなあ…。ああいうの」

簪「私も一夏と…。」

一夏「ん？俺が何だって？」

簪「… 唐変木」

一夏「はあ!?？」

全く… こいつは…。

零「一夏の鈍感さは筋金入りだな…」

アマリ「そ、そうね…」

すると、ミレイナが俺とアマリに視線を移した。

ミレイナ「つかぬ事をお聞きしますが、お2人は恋人同士なのですか!?？」

零・アマリ「「え!?？」」

ミレイナ「乙女の感が当たったです！」

零「ちよ、お、おい！ミレイナ！」

アマリ「わ、わたわた… 私は…！」

千冬「お前達も人の事言えないだろ…」

きゅ、急に何言い出すんだ全く…。

零「そ、そう言えば、昨日、俺達が戦ったのはそのゾギリアだというのはわかった。向

こうの戦力が、どの程度かはわからないけど、追撃が来る可能性が高くないか？」

リ「正論だ。君… 戦争つてものを知っているな」

零「いや、俺は戦争とは程遠い世界出身ですけど…」

サヤ「それでも動かないのは、この基地でまゆかさんの言っていた画期的な戦闘システムを研究してきたからだと思えます」

アイーダ「成る程……。その情報を敵に奪われなかったために研究資料を消去しているのですね」

夏美「そういう事なんだ」

リー「君達の推理が当たっているかは別として、察しの通り、シグナスが此処を発てないのには理由がある」

ヤール「つて言っても、それももうすぐ終わるだろうさ。そうしたら、此処からオサラバだ」

カンタム「僕達はどうするんだい？」

ミラーナイト「ホープスの感じた歪みというのが、結局のところよくわかりませんでしたからね……」

真耶「取り敢えずはこの艦と一緒にここから離れると思えますよ」

アンジュ「結局、状況に流されるしかないのね……」

海道「仕方ないといえ、それはそれで暇だな……」

すると、シグナス全体に警報がなった。

まゆか「これは……敵襲……」

!??

ヤール「ちつ…！こっちの離脱より、敵の仕掛けの方が早かったってわけかよ！」
リー「ヤール、出撃の準備だ！メガファウナ並びにプロレマイオス組は、自分達の艦に戻るんだ！」

マサキ「戻つても、見物を決め込むわけにはいかねえだろうな…」

アンジュ「状況に流されて、結局、死ぬなんて真つ平御免だものね」

九郎「戦いたくないとか、言ってる場合じゃねえんだよな！」

海道「そういうこつた！暴れる時に暴れるだけだ！」

ヴィヴィアン「さーんせい！」

みんなやる気満々だな…！

青葉「この人達は…」

リー「自分達の身は自分達で守る主義らしいな…で、君はどうする？」

青葉「え…？俺は…」

リー「俺達に行くが、君はこの部屋にいればいい。それなりの安全は保証される。扉は、ここを押せば開く。だけど、艦の中は広いから迷子に注意しろよ」

青葉「はい…」

まゆか「では、青葉さん…。また後ほど」

俺達はそれぞれの持ち場に向かった…。

青葉「みんな……行っちゃまった……。また、戦いになるのか……」

第10話 異境、そして歌舞く戦い

俺達はメガファウナに戻り、ロボットに乗る。

アネッサ「ゾギリア、来ます！」

アネッサの言葉通りに、ゾギリアのヴァリアンサー部隊が来た。

倉光「想定以上にゾギリアの仕掛けが早いと思ったけど、彼なら、それも納得だよ」
スメラギ「彼……？」

倉光「敵の指揮官機……あれはアルフリード・ガラントのものだよ」
レーネ「ゾギリアのエース……！」

倉光「だが、彼が噂通りに理知的な人物であるなら、まだ希望がある……。通信回線を開いてくれ」

倉光艦長……一体何を……？

アルフリード「連合の新型艦……。まるで白鳥のようだな。そして、ビゾンから報告の

あつた混成部隊か……」

倉光「こちらは自由条約連合軍所属、シグナス艦長の倉光 源吾大佐だ。応答願う」
アルフリード「こちらは大ゾギリア共和国193独潜旅団501機動中隊隊長、アルフリード・ガラント中佐だ。貴官が降伏の意思を示すのなら受け入れよう」

倉光「そういった期待には、そえないのだけど、あちらの赤い艦と青い艦について話をしたい。昨日は成り行きから、そちらと交戦状態となつたが、彼等は連合の所属ではない。非戦闘員である彼等はこの地域から離脱させたいのだが、どうだろうか？」

アルフリード「……いかがしますが、マルガレタ特務武官殿？」

マルガレタ「昨日の戦闘では、あの部隊によつてこちらに損害が出ています。つまり、非戦闘員と認めるわけにはいきません。また彼等の保有する兵器は、連合の新型と同等の価値を持つと思われまます。可能な限り、鹵獲するべきでしょう」

アルフリード「倉光艦長の言葉が本当ならば、我々は人道的に非難される事になります。また、彼等に攻撃を仕掛ければ、反撃に遭うでしょう。そのリスクについては、どう考えます？」

マルガレタ「全てはゾギリアの為です。そして、指揮権は行政局所属の特務武官である私にある事を忘れてください」

アルフリード「了解しました。倉光大佐……。貴官の提案を受け入れる事は出来ない。

我々は大ゾギリアへの誓いの下、攻撃を開始する」

ちつ：：！交渉は決裂かよ：：！あの機体撃つてきやがった！

レーネ「撃ってきた：：！」

倉光「慌てなくていい。今のは、返答代わりの威嚇だよ。でも、戦いは避けられそうにない。ヴァリアンサー隊に出撃指示を」

アネツサ「了解です！」

シグナスからブラディオンが出撃し、俺達もそれぞれ出撃した。

アネツサ「メガファウナとプロトレマイオスからも機動兵器が出撃しました！」

倉光「ドニエル艦長、スメラギ艦長：：！」

ドニエル「お心遣いありがとうございます、倉光艦長。ですが我々は、自分の身は自分で守るつもりです」

スメラギ「まあ、私達が指示する前にみんな、勝手に出撃しましたけど：：」

レーネ「え：：」

ドニエル「うちは寄せ集めなんで、私やスメラギ艦長に指揮権があるわけでもありませんしな」

倉光「感謝いたします」

スメラギ「ですが、今後の事もありますので、あくまで私達は自衛という事でお願

します」

倉光「その辺は心得ています。まずは彼等に帰ってもらう事を最優先としましょう」
アルフリード「新型と混成部隊が出て来たか……。それにしても本当に特殊だ。過去のデータにある怪獣やウルトラマンが居るとは……。まあ、もつとも、新型の方は2機編成の片方しかいないようだが……。まあいい。出てこないのなら、状況によってはあぶり出すだけだ」

来るか……！

倉光「各機はゾギリアを迎撃……！」

ドニエル「深追いはするな！この場を切り抜ける事だけを考えろ！」

スメラギ「増援という場合もあるわ！警戒しながら戦って！」

零「了解！」

ホープス「……」

アマリ「どうしたんです、ホープス？」

ホープス「お気を付けて、マスター。嫌な空気を感じます」

嫌な空気……。？何だ……。俺も嫌な予感がする……。！

〈戦闘会話　しんのすけVSアルフリード〉

アルフリード「よもや子供が戦場に出るとはな！」

しんのすけ「…あれ？」

カンナム「どうしたんだい!? しんのすけ君！」

しんのすけ「この人の声…何処かで聞いた事があるゾ…」

アルフリード「来ないのかい? だったら、こっちから行かせてもらう！」

戦闘から数分後の事だった…。

倉光「流石はアルフリード・ガラントの指揮する部隊だよ。各機の動きに隙がない」
レーネ「メガファウナとプロトレマイオスの戦力もありますが、苦戦は必至でしょう」

倉光「それに敵の戦力はこれだけではないだろうしね」

レーネ「え…」

ホープス「!…皆様、お気を付けてください。何かが来ます」

アマリ「え…!?」

ホープスの言葉通り、空間に穴が開き、そこから数体の虫の様な生物が現れた。

ディオ「な、何だ!? あれは…!」

ワタル「あれもオーラバトラーなの!? ショウさん! エイサツプさん!

ショウ「いや、あの様なオーラバトラーは見た事がないが…」

エイサツプ「あれはオーラバトラーなんかじゃない!」

パトリック「ELSの仲間か!?」

アンジュ「ドラゴンとも違うわね!」

アーニー「バジユラ…!」

一夏「バジユラ…?」

サヤ「そんな…! バジユラは私達とわかり合ったのではないのですか!? 少尉!」

アーニー「わからない… このバジユラも僕達とは別の世界のバジユラなのかもしれない…」

レイ「さつきから何の話をしているんだ!? アニエス、あの生き物の事を知っているのか!?」

アーニー「バジユラ… 高次元空間に関係する特殊な能力を持つ超時空生命体です!」

零「敵なのか?」

アーニー「前までは敵だったけど… 今は敵ではないはずだよ…」

それなら、良いけど…

だが、現実には残酷だった。

バジユラと言われる生物の群れが俺達を攻撃してきた。

マサキ「お、おいアーニー！ 攻撃してきたぞ!!?」

ゼロ「敵じゃないんじゃないのかよ!!?」

サヤ「しよ、少尉… これは一体!!?」

アーニー「バジユラ！ 僕達は敵じゃない！」

アーニーが何度もバジユラに声をかけるが、バジユラの攻撃が止まる事はなかった。

テイエリア「やむ終えない… 迎撃しよう」

刹那「だが…！」

ミラーナイト「バジユラという生物の群れはゾギリアを襲わず、私達だけを狙っています。このままでは私達が全滅します！」

セルゲイ「やるしかないようだな…！」

シロ「ま、まだニヤにか来るニヤ！」

次に現れたのは赤い戦闘機だった。

アルト「こ、此処は… 一体どこなんだ…?!? 女王バジユラとフォールドしたはず

なのにどうして、俺はデュランダルに乗っているんだ…?!?」

… どうやら、異界人の様だが…。

アーニー「そのデュランダルに乗っているのは早乙女 アルト君かい!?」

アルト「通信……?あの青い機体からか!……おい、あんたどうして俺の名前を知っているんだ!?」

アーニー「詳しい話は後にしたい。だが、これだけは言う。僕は別世界の君と知り合
いなんだ!」

アルト「はあ!?別世界!?どう言う意味だ!?」

サヤ「話は後です!早乙女少尉、バジユラとは和解しましたか!?」

アルト「バジユラ……あ、ああ……したが……って、バジユラまで居るのか!」

すると、バジユラはデュランダルという戦闘機を攻撃を仕掛けたが、デュランダルは
避ける。

アルト「なっ、何をするんだバジユラ!俺だ!早乙女 アルトだ!俺は敵じゃない!」

零「理由はわからないが俺達に敵意を持つてる!それにゾギリアという向こう側の勢
力とも敵対しているんだ……アルト……だったか?手を貸してくれないか」

アルト「……恐らくバジユラは誰かに操られているんだ……!わかった。バジユラを
止める。ついでにゾギリアって、奴等も邪魔をするなら相手してやる!」

アルフリード「現れた戦闘機は奴等に着く様です」

マルガレタ「任務に代わりはありません。あの戦闘機も敵とみなしてください。」

アルフリード「あの複数の生物は連合と混成部隊側を狙っていますが、どうしますか？」

マルガレタ「こちらに敵意がないのなら、放っておいても大丈夫でしょう。それに、あの生物に気を取られている隙に仕掛けるのも良いでしょう。」

アルフリード「……了解しました」

倉光「（これはかなりの乱戦状態になるね……！）」

「俺、渡瀬 青葉はシグナスの格納庫に来ていた。

まゆか「青葉さん！」

青葉「よう…… まゆかちゃん」

まゆか「今は戦闘中なんですよ。それなのに格納庫なんかに来て」

青葉「そう言うまゆかちゃんは何してるの？」

まゆか「ルクシオンの最終調整です」

青葉「俺が乗ったヴァリアンサーか……」

まゆか「今、ルクシオンはエルヴィラさんがデータを青葉さん用書き換えてる最中

です」

青葉「データ？俺用？」

まゆか「カップリング用ヴァリアンサーは本来、パイロットごとに調整されているんです。次に乗る時は前よりずっとフィットしていると思いますよ」

青葉「次に乗る時か：。」

すると、攻撃を受けたのか、シグナスが揺れた。

まゆか「きやあつ！」

青葉「まゆかちゃん！」

ドン「若いの！ぼさつとしているなら、部屋に行つてろ！」

青葉「お、俺の事？」

ドン「ああ、そうだ。。。と言つても、今日の敵の場合、部屋にこもつていても危険かも知れんがな」

すると、倉光艦長から通信が入った。

倉光「ドン整備長、ちよつといいかな？」

ドン「おう、艦長。戦闘中に何の用だ？」

倉光「そこにいるなら、丁度いい。青葉君も聞いてくれ」

青葉「俺も？」

―新垣 零だ。

アルトのデュランダルが味方になったとはいえ、ゾギリアのヴァリアンサー部隊とバジユラの軍勢に俺達は苦戦を強いられていた。

フェルト「新たな敵機を感知！」

アネツサ「シグナスに急速接近しています！」

レーネ「伏兵か！」

倉光「やはり、来るか」

くつ、2機のゾギリア増援だと…!??

倉光「アネツサちゃん、ディオを戻して」

アネツサ「ブラディオンはシグナスの援護を！急いでください！」

ディオ「了解！」

アルト「来るぞ！」

ディオ「敵の方が速いか…！」

ハンソン「このままじゃシグナスがやられちゃうよ！」

サンソン「だが、この数じゃ援護に回れねえ！」

グランデイス「待ちな！何か出て来たよ！」

シグナスから出て来たのは……ルクシオン!!?」

ディオ「ルクシオン……！渡瀬 青葉か！」

倉光「青葉君……再び民間人の君を頼る事になってしまつて本当にすまない。とは言え、四の五の言つてられない状況でね。僕等の艦を救うには、君に戦つてもらうしかないんだ」

青葉「いえ……俺だつてこんな所で死ぬわけにはいかないから……！（でも、やっぱ怖えなあ……）」

エルヴィラ「青葉君！あなたは、この前のカップリングで既にディオの操縦知識を共有したわ！問題なく飛べるはずよ！」

青葉「問題ないつて……簡単に言われても……！」

ディオ「出来ないのなら、引っ込んでいろ！」

青葉「誰が出来ないつて言つた！」

ルクシオンはブラディオンの横に並んだな……。

ビゾン「出て来たな、新型の片割れ！昨日の借りを返すぞ！」

青葉「やるぞ、ディオ！」

まゆか「ルクシオン、ブラディオン、互いのセブンスコード受信範囲内です！」

エルヴィラ「プロポーディング！」

ルクシオンとブラディオンは昨日の紫のヴァリアンサーに攻撃を仕掛けた。

青葉「これが俺の役目なら……！コネクティブ・ディオ！」

ディオ「アクセプション！俺の指示に従え！」

青葉「やるぞ！やるんだ！」

ディオ「これで決める……！」

青葉・ディオ「うおおおおおおつ!!?！」

ルクシオンとブラディオンの合体攻撃で敵ヴァリアンサーを斬り裂いた。

ビゾン「これが連合の新型の力か……！」

す、凄いスピードだな……！

ラーシャ「ビゾン！」

タルジム「なんてスピードだ、あいつ等！」

倉光「すごいもんだね、あれ……！」

アルト「お前等の翼も良い翼じゃないか！」

アキト「連携も心配はないね」

エルヴィラ「カップリング機なら、当然の事です。2機の機体のパイロットを含んだ、全てのポテンシャルを共有するのがカップリングシステムです。リンケージにより、パ

イロツトは脳だけでなく、すべての感覚をも遅延劣化ゼロで共有しあい……」
カップリングか…… 本当に凄いシステムだぜ！

エルヴィラ「互いのヴァリアンサーの能力を級数的に高め合います。ゾギリアのパイロットは今、通常の技術限界をはるかに超えたヴァリアンサーを目前にしているのです！」

グレンファイヤー「よくわからねえけど、熱い機体って事だな！」

アルフリード「あの速度、あのパワー……！ 連合のヴァリアンサーの技術を見誤ったのか……！」

ビゾン「中佐！自分がもう1度、仕掛けます！」

アルフリード「待て、ビゾン……！ 新型2機を引っ張り出せば、作戦の第一段階は成功だ。まずは態勢を立て直せ！」

ビゾン「……了解です」

2機は態勢を立て直したな……！

しんのすけ「カッコイイゾ！ 青葉お兄ちゃんとデイオお兄ちゃん！」

マサキ「伍長さんは隠してたがよ。やっぱり、あのカップリングとかいうのが連合の秘密兵器らしいな」

ケロロ「あの2機を軸にして戦えば、何とかなるであります！」

ディオ「行くぞ」

青葉「行くぞって…」

ディオ「その機体に乗った以上、お前にはゾギリアを叩く義務がある」

青葉「わかったよ！」

ビゾン「新型め…！これまでの借りを返してやる！やるぞ、ヒナ！準備はいいな！」

ヒナ「いつでもいいわ」

ビゾン・ヒナ「ゾギリアの敵に死を…！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 零VSバジユラ〉

零「こいつ等…苦しんでるのか…？つて、何で俺、そんな事がわかるんだ…？」

〈戦闘会話 アルトVSバジユラ〉

アルト「くそッ！またバジユラと戦う事になるなんて…！バジユラ…すまな

い…！」

〈戦闘会話 青葉VSバジユラ〉

青葉「化け物とも戦う事になるなんて…でも、俺は逃げる訳にはいかないんだ！」

〈戦闘会話 刹那VSバジユラ〉

刹那「声が…聞こえない…。お前達は何者なんだ!? 戦いたくないはずなのに…

！」

俺達は、協力して、バジユラを全て倒した。

アルト「…」

零「アルト、すまない…。こうするしかなかったんだ」

アルト「いや…。わかってる」

クソツ「…何かモヤモヤが残るな…。！」

ホープス「！」

アマリ「どうしました、ホープス?!?」

ホープス「門が開きます」

ワタル「じゃあ…。！」

ゼロ「それを通れば、アル・ワースに戻れるんだな！」

零「その様だな……うっ!!?」

一夏「どうしたんだ!!? 零」

零「この……感覚は……！」

まさか…… 奴等が来るのか……？

アイーダ「ドニエル艦長！」

ドニエル「アル・ワースから来た各機とソレスタルビーイングのガンダム各機は注意

しろ！状況次第では、その門とやらを使うぞ！」

スメラギ「わかりました！」

ホープス「来ます」

門が開き、そこから、ルーン・ゴーレムが数体、現れれ門は消えた。

アマリ「あれは！」

一夏「ルーン・ゴーレムじゃないか！」

シヨウ「あの岩の塊の様な奴を知っているのか!!?」

アマリ「あれは…… 魔徒教団の使うルーン・ゴーレムです」

ホープス「鉱石のオドをコントロールして造られたもので、術士の魔力によって制御されるものです」

シバラク「おお！魔徒教団が異境の地で困っている我々を助けに来てくれたか！」
千冬「違う……これは……！」

ルーン・ゴーレムは攻撃を仕掛けてきた……。

シャルロット「攻撃してきたよ！」

簪「それも無差別に……！」

九郎「どういう事だよ、アマリ!!？」

アマリ「私にも……わかりません……」

クロ「暴走してるじやニヤいの!!？」

アンドレイ「私達も何度かアル・ワースで襲われたが……」

シバラク「理由もなしに魔徒教団が無差別攻撃なぞするわけがない！きつとそうだ

！」

エイサツプ「戦うしかないって事か……！」

アンジュ「問題ないわね、アマリ!!？」

アマリ「はい……！」

ホープス「皆様、悪い知らせが……今度は反対側に門が開きます」

グランデイス「またかい!!？」

零「来るぞ！」

今度は反対側に門が開き、ガラムが数機現れ、門が消えた。

ゼロ「おい！あれて、オニキスとかいう組織の機体じゃねえか！」

刹那「オニキスまで来るとは……！」

零「……量産機だけか……？（弘樹やあのアスナって奴は来ていないのか……？）」
カンナム「兎に角、オニキスの機体も倒すしかない！」

ドニエル「倉光艦長とスメラギ艦長には事情を説明した！取り敢えず、応戦するぞ！」
ビゾン「アルフリード中佐……！どうします？！」

アルフリード「説明不能の状況だが、仕掛けてくる以上、迎撃するしかあるまい」
ヴィヴィアン「オニキスの機体はルーン・ゴーレムとも戦うみたいだね」

倉光「ゾギリア側も応戦するという事は四つ巴になるか……」

スメラギ「厳しい戦いになりそうね……！」

シロ「でも、大丈夫ニヤ！ルーン・ゴーレムは前にもたたかっただけ、そんなニヤに強くニヤいニヤ！」

マサキ「……今度の奴は、こないだの様にはいかねえみてえだぜ？」

クロ「マサキ……」

アーニー「ああ、そうだね……。気をつけよう、みんな……。！魔法で動く人形だと舐めていると痛い目にあいます！」

ホープス「来るべき日が来たのかもしれないな……」

アマリ「(そうだとしても私は……)」

零「……オニキス」

俺を追って来たのか……？この異境の地まで……？何で、そこまで俺を狙うんだ……？

〈戦闘会話 零VSルーン・ゴーレム〉

零「どうして魔徒教団が俺達を狙うのかはわからないが、来るなら容赦しないぞ！」

〈戦闘会話 アーニーVSルーン・ゴーレム〉

アーニー「あの時のルーン・ゴーレムとは何かが違う……！一体何なんだ……！！？」

〈戦闘会話 零VSオニキス兵士〉

零「オニキス……こんな所まで来るなんてご苦労な事だな……！だが、俺は捕まってるほど優しくないぞ！」

〈戦闘会話 アマリVSオニキス〉

ホープス「まさか、オニキスまで来るとは思いませんでした」

アマリ「別世界に来てまで零君を狙うなんて… 零君に一体何があるんでしょう…」

ルクシオンはゾギリアのピンクの機体にダメージを与えた。

ヒナ「まだフォルトナは戦える…！」

倉光「気をつけるんだ。あのピンクの機体、こちらに突っ込んでくるよ」

レーネ「回頭、急げ！」

青葉「シグナスは… やらせない！」

ピンクの機体がシグナスに突っ込んだが、それをルクシオンが攻撃して防いだ。

青葉「まずい！ コックピットに当たった?!？」

ヒナ「くっ…！ ハッチが吹き飛んだか！」

青葉「雛！ そこにいるのは、雛なのか?!？」

ルクシオンはピンクの機体を掴んでいた…。

雛って、青葉の言っていた…。

ヒナ「は、離せ……！」

青葉「俺だ、雛！今、顔を見せる！」

はあ!!? ちよつと待て！

アネツサ「ルクシオン、コックピット開放処理、開始！」

デイオ「貴様、戦闘中に何をしている!!?」

青葉「雛が……雛がいるんだ！」

ヒナ「連合のパイロット……！何故、私の名前を……!!?」

青葉「俺だよ！渡瀬 青葉だ！」

ヒナ「青葉……？」

青葉「そうだ！青葉だ！今、そっちに行く！」

ヒナ「近寄るな！お前はゾギリアの敵だ！」

そう言うと、ピンクの機体はルクシオンから離れた。

ヒナ「ヒナ・リヤザン、撤退します……！」

青葉「雛！」

撤退した……のか……？

レーネ「敵に情けをかけたのか……!!?」

倉光「どうかな……。彼は相手を敵だと思っていないんじゃないか……？」

ビゾン「貴様……！よくもヒナを！」

青葉「（雛……どうして……）」

デイオ「貴様……！さっきの真似はなんだ？？」

青葉「……」

デイオ「おい！戦えるのか？？」

青葉「……大丈夫だ。（あれは……絶対に雛だった……！それを確かめるためにも俺

は死ねない……！）」

っ？！この感覚は……！

零「気をつけろ！オニキスの増援が来る！」

ワタル「え？？」

数十機のガラム……と……何だ……？戦闘に何かいる……？

？「ほう、こんな所に居たとはね」

零「お前は……いったい……？」

？「私はオニキスの首領をやってるものだ」

シヨウ「何？？」

零「オニキスの……首領だと……？？」

ゼロ「いきなり親玉の登場かよ！」

？「君達を探しに来たのだよ……特に、新垣 零君……君をね」

アマリ「やつぱり、零君を……」

零「……俺を探しに来たとかどうでもいいんだよ……！お前はレイヤ・エメラルドについて何か知っているのか!!？」

？「ああ、知っているさ……答える気はないけどね？」

零「……ふっざけんなああああつ!!？」

俺は怒り、オニキスの首領が乗るロボットまで接近したが……。

？「……仕方ない。軽く捻ってあげよう」

と言い、拳一撃をゼフィルスに浴びせた。

零「うわあああああつ!!？」

たつた一撃でゼフィルスは吹き飛んだのだ。

エイサツプ「れ、零！」

一夏「あのゼフィルスを一撃で吹き飛ばした……!!？」

零「ぐっ……この野郎……！」

ふざけやがって……！

アイーダ「気をつけてください！あの岩人形が、また来ます！」

またルーン・ゴーレムが… いや、違う戦闘に違うロボットがいる！

? 2 「デ・サイエンティア・デイ・エンデ： エベフィシア・シユア・サルバム・ミ：
FORUS」

すると、辺りが歪み出した。

アマリ「あれは…！」

ホープス「どうやら、我々の望みは叶うようです」

零「な、何なんだ?!? 一体…！」

? 「魔従教団め…面倒な事を…。新垣 零。お別れだね」

零「ま、待て…！」

すると、魔従教団の先頭のロボットから光が出て、俺達を包み込んだ。

アマリ「(でも、私は…！)」

? 「また会おう、新垣 零」

零「待てよ！待てえええええつ!!?」

俺達が目を開くと、そこには見慣れた景色が広がっていた…。

ドニエル「此処は…?!?」

レーネ「空気が光っている…」

倉光「どう見ても、ここ… 僕達のいた世界じゃないね…」

アネツサ「ヴァリアンサー各機は本艦に、メガファウナ、プトレマイオス組はそれぞれ、メガファウナ、プトレマイオスに収容されているようです」

ミレイナ「デュランダルという戦闘機もトレミーに収容されています」

フェルト「ゾギリアと謎の一団はいないようですけど…」

ドニエル「どうやら、我々は帰って来たようだ…」

スメラギ「では、此処が…!?」

倉光「アル・ワース… なのか…」

ステア「オー… マイ・スコード…」

オニキスの首領にあの魔徒教団の機体… 分からない事だらけじゃねえかよ… !

第11話 暗闇の灯火

「氷室 弘樹だ……。」

俺は今、ペリドットとカーネリアンと共に話をしてた。

弘樹「零達がアル・ワースに戻って来ただど？」

メル「はい。ですので、私達も出撃します」

アスナ「あの方の顔を見たっていうのに何も思い出さないなんて……。本当に腹が立つわね」

弘樹「……零が何を思い出さないと駄目なんだ？」

メル「機密事項です。では、参りましょう」

そう言つて、ペリドットとカーネリアンは格納庫へ向かった……。

弘樹「……」

？「浮かない顔ですわね……」

っ!!?この女、何処から現れた!!?

弘樹「お前は……!!?」

？「申し遅れました。カノン・サファイアと申します……。氷室さんのパートナーとし

て派遣されました」

成る程……パートナーと言う名の監視か……。余程信用されてないみたいだな。

弘樹「そうか、俺ももう行くぞ。サファイア」

カノン「あ……。行つてしまいました……。氷室 弘樹さん……。ですか……」

ーアニエス・ベルジュです。

この世界に初めて来たプトレマイオス、シグナス組はこの世界を見回っていた。

アネツサ「見て、まゆか！あの樹……。たくさんの実がなってるよ！」

まゆか「はしやぎ過ぎだよ、アネツサは……」

アネツサ「だって、もう開き直るしかないよ。此処は異世界なんだから」

まゆか「それはそうだけど……」

アネツサ「というわけで、早速、アル・ワースのフルーツの味見を……」

千冬「やめていた方がいいぞ、アネツサ。あの実は味がしないんだ」

アネツサ「そうなんですか?!？」

ノレド「えく！あんなに色とりどりで美味しそうなのに！」

ライヤ「美味しそうなのに……」

ヴィヴィアン「誰でも一度は思うんだよね、それって」

シバラク「ノレドとライヤもまたアル・ワースに逆戻りだというのに元気なもんだのう」

アンジユ「事態を重く受け取り過ぎて、身動きが取れなくなるよりはマシだと思うけどね」

ロツクオン「そうだな。それに問題は2つある……1つはあっちだ」

皆は青葉君とデイオ君の方を見た。

デイオ「……」

青葉「少しは落ち着いたか、デイオ？」

デイオ「馴れ馴れしいぞ」

青葉「そう言うなよ。俺とお前はバディなんだからさ」

デイオ「それはあくまで戦闘中の話だ。プライベートまで踏み込んでくるな」

青葉「それだけ憎まれ口が利ければ、心配ないかもな」

デイオ「……俺はお前とは違う。見知らぬ世界に跳ばされて、ヘラヘラしてはられない」

青葉「ヘラヘラね……。ま……。俺の場合、未来に跳ばされて、さらに異世界に跳ばされたからな。どこか麻痺しちやってるのかも知れない」

ディオ「まだ過去から来たなんて事を言っているのか」

青葉「信じられないなら、それでもいい。このアル・ワースに来ちまった以上、どうでもいい事だしな。今の俺は、お前達と同じ立場の……えーと……イカ……」

ディオ「異界人だ」

青葉「そう！その異界人だ！そういうわけだから、力を合わせて、この世界で何とかやっていこうぜ、ディオ」

ディオ「……」

青葉「な、何だよ？こつちから歩み寄っているのに拒否するのか……！」

ディオ「……この世界にも戦いがあると聞く。俺達もそれに巻き込まれる事になるだろう。これだけは言うておく。戦闘中に俺の足を引つ張るような事だけはするな。俺は必ず元の世界に帰らなくてはならないのだからな」

青葉「……わかった」

アルト「ディオの方は青葉に任せておけば大丈夫だな」

アーニー「アルト君は完全にこの世界を受け入れちゃってるね」

アルト「考えていても仕方ないからです。それにアーニー少尉は俺の事を知っているでしょ？」

アーニー「別世界の君の事だけだね」

アルト「それで：：アーニー少尉の世界の俺って：：どうなってます？」

サヤ「普通に元気で暮らしてますよ」

アルト「そうか：：。俺もみんなと一緒に戦う事になったんでよろしくお願いします
！」

しんのすけ「よろしく！アルトお姉ちゃん！」

アルト「俺は男だ!!？」

ロックオン「テイエリアと良い勝負できそうだな」

テイエリア「ロックオン！」

シヨウ「：：とりあえず、シグナスとプトレマイオスの人達にも現状は理解しても
らったようだけど：：」

ジャン「問題はまだあるね」

グランデイス「そうだね。これからどうするかと：：零の事だね」

ワタル「零さん、アル・ワースに戻って来てから、ずっとシミュレーションルームで
特訓してるね：：」

エイサップ「あの時、オニキスの首領に一撃で負けた事が余程ショックだったんだろ
うな：：」

アレルヤ「それだけじゃないと思うよ」

マリ「ええ。詳しい話を結局聞き出せずに終わったから…。」

ミレイナ「新垣さん…俺が弱いからって言ってたです」

アンドレイ「零君には一夏君とベルリ君、それからアキト君が付いているから大丈夫だと思ふのだが…。」

ワタル「それにしても、あの魔徒教団の人が僕達をアル・ワースに帰してくれたんだよね？」

ハンソン「じゃあ、わざわざアル・ワースから僕達を迎えに来てくれたのかな…。」

サンソン「何言ってるやがる！その前に俺達は岩人形に襲われたんだぞ！」

ケロロ「あれは岩人形が暴走したとも考えられるであります…」

アル「だったら、素直に謝ればいいものを…」

九郎「その魔徒教団つてのは法と秩序の番人…アル・ワースの警察みたいなものなんだろ？いったい何がしたいんだ…。」

アーニー「その辺りはどうなんだい？アマリさん」

アマリ「…私にも、よくわかりません…。」

教団の事になると口が重くなるな…。」

マサキ「(零の事を心配しているつてのもあるかも知れねえが…。)」

チャム「でもさ、教団の人達がその異界の門つていうのを作れるんなら、あたし達も

それで元の世界に帰れるんじゃない？」

エレボス「それもそうだね。少なくともシグナスの人達の世界を往き来する事は出来るんだろうし……」

アイーダ「アマリさん……。あなたを通じて、教団にお願いする事は出来ないのですか？」

アマリ「私……。術士といっても下つ端なので、そういう事はちよつと……」

夏美「駄目なんだ……」

ゼロ「俺がイージスの力を使えば一発なんだけどな……」

エメラナ「使えないのですか？」

ゼロ「本来ならもう回復してもいい頃なんだが……」

グレンファイヤー「壊れたんじゃないのか？」

ミラーナイト「簡単に壊れるとも思えません……」

ジャン「でも、魔徒教団の人がわざわざ別の世界まで僕達を迎えに来てくれたんだから、きっと、また助けに来てくれると思うよ」

ヒュウガ「そうだな。頼み事は、その時してみればいい」

サンソン「岩人形の暴走で迷惑した事を盾にすれば、イヤとは言わないだろうしな」
冬樹「そ、それって、半分脅しなんじゃ……」

アーニー「とにかくもう夜だね……。続きは明日にでも考えよう、アマリさん」
アマリ「はい……」

アイーダ「(アマリさん……)」

？「(懐かしい艦が見えるなど思ったが……。そういうことか)」
僕達はそれぞれの艦に戻る。

……ある一人の人物が紛れ込んだ事も知らずに……。

ーアマリ・アクアマリンです。

夜になり、私とホープスは今、メガファウナの格納庫にいます。

アマリ「……」

ホープス「ここを出て行くのですね」

アマリ「それしかないと思います……」

ホープス「せめてもの零様に声をかけてはどうでしょう？」

アマリ「零君は零君で抱えている問題があります。それに……零君が居ると、私の決

断が揺らぎそうなので……。」

ごめんなさい……。零君……。

ホープス「後悔されませんか？」

アマリ「ドアクターの打倒はきつとワタル君や皆さんがやってくれるって信じてます」

ホープス「マスターも、その皆さんの一人のはずでは？」

アマリ「そうだったらいいな……。って思っていました……」

ホープス「私はマスターの決定に従うのみです。では、参りましょう」

……足音……。!? 誰かに気づかれた……。!?

アイーダ「待ってください」

アマリ「アイーダさん……」

ホープス「何の用です？ マスターの邪魔をするのでしたら……」

アイーダ「ご安心を。あなたの決心を止めるために来たものではありません」

アマリ「では、何の為に……？」

アイーダ「アマリさん……。少しご一緒させてくださいませんか？」

え……？

アマリ「え……。ええ……。？」

「新垣 零だ。」

夜になつても俺はシミュレーションルームで操縦訓練をしていた。

結果は80点……まだ駄目だ……！あいつの強さはこんなもんじゃない！

零「もう一回だ……！」

一夏「零！いい加減にしろ！」

ベルリ「朝からずっとやってるじゃないですか！」

アキト「体を壊しては元も子もない……やめた方が良いでしょう」

零「……悪いが放っておいてくれ……まだ、やれる」

アキト「零君……！」

ベルリ「放っておけて、フラフラじゃないですか！」

一夏「今日はもう休めて！」

零「……放っておいてくれるって言うてるだろ!!？」

あ……。

一夏「！」

ベルリ「零さん……」

アキト「(一瞬……瞳が赤く発光した……!?)」

零「あ、嫌……その……すまない……」

俺……どうして、たかがあんな事で感情的になってんだ……? 最近、怒りの感情を抑える事が出来なくなっている……。

零「ごめん。ちよつとシャワーでも浴びて頭冷やしてくる」

俺は逃げる様に一夏達に背を向け、シャワールームへ向かった……。

シャワーを浴び、頭を冷やす。

このままじゃ俺……一生答えにたどり着けない……! 俺は……弱い……!

零「クソツ! クソクソクソツ! 駄目だ! 今の俺は一人じゃない!……悩んでも仕方ない!」

シャワーを止め、俺は俺はタオルで頭を吹いてから、服を着る。

シャワールームを出た所でベルリと会った。

零「ベルリ……」

ベルリ「零さん、これ!」

零「スポーツドリンク……?……ありがとうな」

俺はベルリに礼を言い、スポーツドリンクを飲む。

シヤワーで火照っていた体にひんやり冷えたスポーツドリンクが沁みた。

ベルリ「零さん、一人で悩まないでくださいね！僕達も居ますから」

零「：：ああ。わかった！本当にありがたいがとうな、ベルリ」

ベルリ「いえ！」

すると、シャルロットとノレドが走つて来た。

シャルロット「零さん！ベルリ君！」

ノレド「大変なの！」

ベルリ「どうしたんだい？2人共」

零「何かあったのか？」

シャルロット「アマリさんとアイーダさんが居ないんです！」

零・ベルリ「「ええ：：はあつ！？」」

居ないって：：：： どういう事だよ：：：：！

第11話 暗闇の灯火

「アマリ・アクアマリンです。」

私とホープス、アイーダさんはそれぞれゼルガードとGーアルケインに乗り、メガファウナを後にしました。

アマリ「もうメガファウナの灯りも見えませぬね……」

アイーダ「……」

アマリ「ええと……アイーダさん……お見送りでしたら、もう十分だと思っんです
が……」

アイーダ「お邪魔でなければ、もう少しだけ……」

ホープス「邪魔です」

そ、そんなハッキリと……！

アマリ「ホープス！」

ホープス「アイーダ様……。アメリカ軍の高官をお父上に持つあなたに周囲はなかなか意見できないでしょう。ですので、私は敢えて直接的な言葉で言わせていただきませ
す」

ちよ、ちよつと……！

ホープス「マスターは相応の覚悟の上で皆様の下を去る事にしたのです。アイーダ様

の存在は迷惑と言わざるを得ません」

アマリ「やめなさい、ホープス」

アイーダ「いいんです、アマリさん。ホープスにも感謝します。彼の言う通り、私は……厄介な姫様ですから」

アマリ「……よかつたら、胸の内を聞かせてくれませんか？」

アイーダ「このままでいいのかな……」と思っただけです」

え……？

アイーダ「ホープスにも言われた通り、私はアメリカ軍総監の娘です。階級的に少尉ですが、メガファウナでは姫様として扱われています。ですが、このアル・ワースにおいて私という存在は何なのでしょうか……」

アマリ「アイーダさん……」

アイーダ「皆を引っ張る器でもなければ、パイロットとしての腕も今一つ……」

アマリ「そ、そんな事は……！」

アイーダ「いいんです。自分の事は自分でわかっていますから」

アマリ「……知りませんでした。アイーダさんが、そんな風な事を考えていたなんて……」

アイーダ「そんな自信満々な女に見えました？」

アマリ「はい……」

アイーダ「それはそうあろうと思つて生きていたためでしょう」

そうあろうと思つて生きていた……。

アイーダ「私からみれば、アマリさんこそ、強い人間なのだと思います」

え、え……？

アマリ「それは…… 買いかぶりですよ」

アイーダ「そうですか？ ホープスも言つてましたけど、今回の出立も並々ならぬ覚悟を以てだと思ひますけど」

アマリ「ただ…… これまでお世話になつた皆さんに迷惑をかけたくなかつただけです……」

アイーダ「迷惑……？」

アマリ「…… それはさておき、アイーダさんは、今のままでいいと思ひます」

アイーダ「今のままで？」

アマリ「悩んでいるアイーダさんにこんな事を言うのは無責任かも知れませんが……。姫様であるアイーダさんに心を捧げた人がいるんですから」

ホープス「お話し中の所、申しわけありませんが、前方に時空の歪みの発生を感じしました」

アマリ「こんな時にですか…?!?」

アイーダ「また新たな異界人が来る…?!?」

異界の門が開き、そこから2機の機体が現れました。

アイーダ「あれは…G系の機体?!?」

アマリ「ガンダム?!?」

シーブック「無事か、セシリー?!?」

セシリー「ここは…?地球…?なのですか?」

シーブック「わからない…。僕達…アクシズで鉄仮面と戦って…」

アイーダ「どうします、アマリさん?」

アマリ「どうしましょう…!」

アイーダ「放っておくわけにはいかないでしょう。まずは保護を」

アマリ「は、はい…!」

ホープス「それでしたら、私達より適任の組織が来たようです」

現れたのは…ルーン・ゴーレム?!?

アイーダ「この間の岩人形!」

アマリ「魔徒教団…!」

…うつ?!?そんな、攻撃してきた…?!?

セシリー「攻撃してきた……！」

シーブック「何なんだ、あれは……!?」

アイーダ「あの岩人形……！また暴走しているのですか!?」

アマリ「そうではありません」

アイーダ「アマリさん……!?」

もう、迷っている場合ではありません……！

アマリ「私は、ここです！無関係な人達には手出ししないでください！」

シーブック「くっ……！」

そ、そんな……それでも攻撃するなんて！

アイーダ「アマリさん！やはり、暴走しているようです！」

ホープス「マスター……」

アマリ「それならば、やるしかありません……！」

私はゼルガードを操作して、目の前の2機を守るように立たせた。

アマリ「その2機のパイロット！後退してください！」

シーブック「君は……？」

アマリ「事情は後で説明します……！まずは生き延びる事を考えてください！」

シーブック「だったら、僕も戦う……！」

セシリー「シーブック…」

シーブック「ここがどこだろうと僕はセシリーを守る…！」

セシリー「その気持ちは、とても嬉しい…。だからこそ、私もあなたと共に戦うわ」

シーブック「セシリー…」

アイーダ「でしたら…！」

Gーアルケインも前に… アイーダさん！

アイーダ「あの岩人形との戦いならば、私の方が慣れています。ここは私の指示に従ってください」

シーブック「了解です…！」

アマリ「アイーダさん…」

アイーダ「アマリさん！あなたの力も貸してください！」

アマリ「喜んで、姫様！」

？「じゃあ、ティア達も戦うよ！」

え…？

今度は白い機体が現れました… あれって…。

ホープス「レガリアですね…」

サラ「レガリアの事を知っているの？」

あのレガリアには2人の女の子が乗っているそうですね。

ティア「ティア達、有名人!?」

サラ「そうみたいだね!ティア!」

アイーダ「あれが…レガリアですか…」

アマリ「どうしてお2人は此処へ?」

サラ「おかしな気配を感じ取って来たんだよ!」

ティア「困ってるならティア達も手伝ってあげる!」

シーブック「だ、だけど…」

セシリー「声からして小さな子供よね…」

アイーダ「…わかりました。ですが、無理はしないと約束できますか?」

サラ「うん、約束するよ!」

ティア「無理しないよ!約束約束!」

アマリ「そちらのお2人も無理しないでください!」

セシリー「わかりました!」

シーブック「僕はシーブック、彼女はセシリーだ!」

サラ「サラ・クレイスとティア・クレイスだよ!このレガリアはティシスね!」

アマリ「必ずあなた達を守ってみせます…!行きましょう、アイーダさん!シー

ブックさんとセシリーさん、サラちゃんとティアちゃんはフォローを頼みます！」
ティア「わかったー！」

アイーダ「(たとえ、自信がなくても毅然として生きる……。それが、アイーダ・スルガンならば、やってみせます…。！)」

私達はルーン・ゴーレムとの戦闘を開始しました……。

〈戦闘会話　サラVS初戦闘〉

サラ「これって、魔徒教団のルーン・ゴーレムだよね……。？」

ティア「お人形さんが相手だね！お人形遊びしょー！」

サラ「そうだね！ちよつとだけ遊ぼつか！」

戦闘から数分が経った頃の事でした……。

アイーダ「大丈夫ですか、シーブックさん、セシリーさん……？」

アマリ「サラちゃんとティアちゃんも大丈夫ですか……？」

セシリー「なんとか！」

シーブック「モビルスーツとは全く違うテクノロジーだが、戦えない相手じゃない！」

サラ「サラ達も大丈夫だよ！」

テイア「大丈夫大丈夫ー！」

アイーダ「やはり、シーブックさん達の機体もモビルスーツと呼ばれるものなんです。もしかして、あの2人：シヨウさんか刹那さんかアーニー少尉の世界から来たのかも：）」

ホープス「マスター：）」

アマリ「ええ：）」

前に戦ったルーン・ゴーレムと比べれば、大した力は持つてないようです：）」

でも、明確な意思を感じる以上、暴走したわけではないと見るべきでしょう：」。ならば、近くに術士がいるはずですよ！でしたら：」！

アマリ「私の目を邪魔するオドよ、去りなさい！REPERTUS！」

サラ「おー！凄いい！ドグマだー！」

テイア「あれ？何かいるよ？」

私の放ったドグマの先に1機のオート・ウォーロックがいました：」。やはり：」！

術士「そんな旧式のオート・ウォーロックで俺の不可視の術を破るとは：」！」

セシリー「何もない空間から現れた：」！」

シーブック「ステルスの類なのか：」？？」

サラ「あれはドグマだよ！」

セシリー「ドグマ……？」

アイーダ「魔法の事です！」

シーブツク「魔法……!?？」

術士「驚いたぞ、籃柱石（らんちゆうせき）の術士、アマリ・アクアマリン。エンデの面を捨てたお前がここまでやるとはな」

アマリ「私を追ってきたのなら、私だけを狙えばいいはずですよ」

術士「俺の受けた指令はお前と共にいる人間を討つ事だ」

そんな……！

アマリ「何のためにです!?？」

術士「教団の決定に疑問を差し込む事が既に背任なのだ！」

あのオート・ウォーロック……魔力を高めてる……！

アイーダ「あの光……魔力なのですか!?？」

ホープス「その通りです。制式採用されたオート・ウォーロックであるティーンベルは、ゼルガードとは比較にならない程の魔力増幅効率を誇ります」

アイーダ「だからといって、尻尾を巻いて逃げるような真似は……！」

っ……！Gーアルケインが移動した!?？」

アマリ「アイーダさん！」

アイーダ「アマリさんは、私の大切な仲間です。彼女を否定するというのなら、私が相手になります！」

術士「ならば、望み通りにしてやる！」

アマリ「駄目!!？」

私は無意識の内にゼルガードを動かし、Gーアルケインの横に立ちましたが、もう既に相手のデーンベルは目の前……間に合いません……！

すると、シャイニング・ゼフィルスとGーセルフが現れました……。

零「やらせてたまるかよ!!？」

ベルリ「うおおおっ！スコードオオオオツ!!？」

GーセルフがゼルガードとGーアルケインを軽く、弾き飛ばし、急スピードで動き出したシャイニング・ゼフィルスは攻撃してこようとしたデーンベルを斬り飛ばしました……。

―新垣 零だ。

何とか間一髪間に合ったぜ……。

アマリとアイーダは無事だな。

アイーダ「ベルリ！零さん！」

ベルリ「無茶ですよ、アイーダさん！何をやってるんですか？？」

アイーダ「あなた達こそ！どうして、ここに？？」

ベルリ「どうしてって… アイーダさんとアマリさんがいなくなったから捜しに来たんですよ」

アマリ「…零君…」

零「…」

俺はまただが、とてつもなく怒ってる…。何故かはわからないが…。

アマリ「あの…」

零「…俺の言いたい事は分かるな？」

アマリ「は、はい…」

零「…後で説教だ…。俺達を心配させたな。勿論、アイーダも含めてな」

アイーダ「うっ…わ、わかりました…」

零「なんかガンダムみたいのを見た事もない機体が居るが、考えるのは後だ！態勢を立て直すぞ！3人共！」

アマリ「はい！」

俺達はガンダム達の元まで態勢を立て直した。

術士「くっ……。異界人の増援か……。！」

零「まさか、魔徒教団が意図的に攻撃を仕掛けてくるなんてな……。アル・ワースの平和と秩序を守るが聞いて呆れるぜ」

術士「だ、黙れ！異界人の貴様に言われる筋合いはない！」

アマリ「お願いします。攻撃をやめていただけませんか？」

術士「出来ない相談だな」

アマリ「でしたら、私は……。あなたと戦います」

術士「アマリ・アクアマリン！ならば、お前を肅清する！」

零「やらせるかよ！アマリは俺が守る！」

アマリ「零君……。！」

零「その代わり、後でたつぷりと話を聞かせてもらうからな！」

アマリ「わ、わかりました……」

ティア「えつと……。お仲間？」

アイーダ「ええそうですね。ベルリ、準備はいいですね？」

ベルリ「いつでも……。！狙うは、あの偉そうな人が乗っている機体ですね！」

アマリ「今の私では、あの人には勝てません……。でも……。！だからといって、諦め

るつもりはありません！」

さてと・・・ 戦闘開始だ!!？

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「まさか仲間であるアマリに攻撃を仕掛けるなんてな。。。アマリを傷つけた借りは返させてやる！来やがれ！魔徒教団!!？」

俺達の連携でルーン・ゴーレムを着実に落としていく。

アマリ「あの術士程度の操るルーン・ゴーレムが相手なら戦えます。。。！」

ホープス「問題は、ディーンベルでしょう」

術士「。。。」

ホープス「相手は教団の制式採用機。。。まともに戦つては敗北は必至です」

アマリ「(ディーンベルに勝つためには。。。覚悟を決めなくてはならないかも知れない。。。)」

〈戦闘会話 零VS術士〉

零「悪いが、アマリは渡さないぜ？」

術士「そうか…… 貴様が…… 貴様が、アマリ・アクアマリンをたぶらかしたのか！」

零「はあ？ たぶらかす？…… 意味わかんねえ事言っつてんじやねえよ！」

術士「黙れ！ 貴様も粛清してやる！」

零「できるものならやってみやがれ！」

戦闘から、数分後……

術士「その程度か、アマリ・アクアマリン！」

ホープス「やはり、ゼルガードでディーンベルを相手にするのは難しいですね」

アマリ「そんな事、最初からわかっていた事です……！」

……ゼルガードがディーンベルとかいう機体の目の前に移動したな……

零「アマリ！」

アイーダ「アマリさん！」

「アマリ「お願いです。あの人達は、今回の件に関係ないのでから、見逃してください」

な、何言つてんだよ?!? アマリ!

アマリ「そして、可能ならば、元の世界へ帰還するための手助けをお願いします」

零「あ、アマリ! お前...!」

こいつ...!

術士「アマリ・アクアマリン...。戻ってくる気はないのか?」

アマリ「今はまだ...」

術士「何故だ?!? 何故、お前は...?!?」

アマリ「それが私の選んだ答えです」

術士「お前は...! やはり、新垣 零か?」

零「っ?」

術士「新垣 零がお前を変えたのか!」

俺が... アマリを変えた...?」

アマリ「れ、零君は関係ありません!」

術士「新垣 零... やはり、貴様は此処で...!」

っ?!? あの野郎、俺を狙つて...!

デインベルは俺に接近して来た……。

アマリ「させません！」

だが、それをゼルガードが阻み、俺を押し飛ばした。

零「アマリ!?」

アマリ「零君は……私が守ります！」

ゼルガードがオドを集中させている……!? アマリ……!?

術士「見たことのないオドの集中パターン!何が起きる……!?」

アマリ「今から私は……私だけのドグマを使います」

アマリだけのドグマ……!?

術士「あり得ない!そんな事が出来るものか!新しい術を生み出すためには智の神エ
ンデの加護の下、気の遠くなるような修練が必要なのだ!失敗すれば、この一帯が吹き
飛ばぞ!」

アマリ「そうなたとしても、私の魔力ならば、あなたと私ぐらいの被害で済むでしょ
う」

術士「お前……そのために1人で……」

また、ゼルガードがオドを集中した……!?

アイーダ「駄目です、アマリさん!死んでは……」

アマリ「大丈夫です、アイーダさん」

零「アマリ！」

アマリ「零君……ありがとうございます。あなたのおかげ私は変わる事が出来ました……生きる意味を見つけるために此処にいるんですから！」

アマリの叫びと同時にゼルガードはデインベルに攻撃を仕掛けた……。

アマリ「やってみせます！私の……私だけのドグマ……！行きなさい、ゼルガード……！これが……電光石火です!!？」

術士「うわあああああつ!!？」

す、凄いい、目にも留まらぬ速さでデインベルに攻撃を与えた……！

アマリ「出来た……！出来ました、ホープス！零君！」

ホープス「お見事です、マスター。今日までの修練の結果、見せていただきました」

零「それがお前の覚悟なんだな！アマリ！」

術士「くそっ……！脱走者がオリジナルのドグマなど、あり得ない！」

……!!?あの術士の仮面が割れてる……!!?

アマリ「！」

術士「いかん……！仮面が……！」

アマリ「あなた……イオリ君なんですか……」

イオリ：「？それがあいつの名前か：：？」

イオリ「だから、何だ!? 教団で共に修練した人間だから、これ以上、戦えないと言
うのか！」

アマリ「それは：：」

アイーダ「アマリさん！メガファウナとシグナス、プトレマイオスが来ました！」

アイーダの言葉通り、メガファウナ、シグナス、プトレマイオスが来た。

マサキ「戦闘してたから、もしやと思つたら：： やっぱりな」

一夏「無事ですか!? アマリさん！アイーダさん！」

アンジユ「アマリ！家出るんなら、もう少し地味にやる事ね！」

ノレド「アイーダさんも！わがままも、いい加減にしてくださいね！」

アイーダ「：：ごめんなさい」

ノレド「意外！素直に謝った！」

ゼロ「それはそれで失礼だろ！」

ベルリ「アイーダさん：：少し気負いが抜けた？」

アイーダ「ベルリ：：あなた、私の中の迷いに気づいたの？」

ノレド「当然じゃないですか！ベルはアイーダさんを追っかけて、メガファウナに來

たような子なんですから！」

ベルリ「ええと… それは…」

アルト「見せつけてくれるな、この色男！」

ベルリ「あ、アルト…」

アイーダ「重要な事をそのような軽い理由で決めるなんて、あなたという人は…！」
ベルリ「それ！それですよ！やっぱり、アイーダさんは強気でないと！」

アイーダ「… そうかも知れませんね…」

アマリ「アイーダさん…」

ワタル「言っておくけど、アマリさんの家出もみんな、薄々気付いていたからね」

アマリ「そうなんですか!?!」

刹那「イノベイターの直感をなめないで欲しい」

シバラク「拙者達の目は節穴ではござらん」

アル「アル・ワースに戻ってから、汝が、何かに悩んだのはバレバレだったぞ？」

シヨウ「周りに話さない以上、黙って出て行くと踏んだんだ」

チャム「ちなみにあたしとヒミコがずーっと監視していたの」

ヒミコ「きやはは！アマリ、隙だらけだったのだ！」

アイーダさん「… だそうです、アマリさん」

アマリ「完敗です…」

簪「……アマリさんがいなくなっただって知った零さんの反応は凄かったけど……」
零「な!??か、簪!」

アマリ「……そんなに凄かったんですか?」

シャルロット「かなり焦っていましたよ!」

零「お、お前らもうやめてくれ!」

アマリ「零君……」

簪とシャルロットめ……!一夏に好意を持つてる事、あいつにバラしてやろうか……

!

シバラク「そ、それより、お主等……!ま、まさか、教団の術士と戦ったのか……

?」

アマリ「ええ……」

零「完全な正当防衛なので大丈夫ですよ!」

シバラク「そ、それはマズイ……!ヒジョーにマズイぞ!」

ベルリ「そうなんですか?」

クラマ「法と秩序の番人サマに齒向ったんだからな。言うなれば、アル・ワース全部

を敵に回したようなもんだ」

アイーダ「ですけど、仕掛けてきたのは向こうです」

しんのすけ「じゃあ、仕方ないゾ」

アキト「正当防衛は成立してるね」

シバラク「な、何を言う、ワタル！アキト！」

ワタル「だって、零さん達は悪い事をしてないんだもの」

ケロロ「そうでありますな。理由もなしに襲ってきたのなら戦うしかありませんよ」

アマリ「ワタル君…ケロロさん…」

九郎「ワタルとケロロの言う通りだな」

レイ「そうになると、この前、あっちの世界で襲われたのも悪意があつたって事だな」

ミラーナイト「少なくとも問答無用というのは納得できません」

ヒミコ「オツサンはどうするのだ？」

シバラク「ま、魔徒教団と戦うなんて…そんな事したら…」

千冬「シバラク先生！」

シバラク「だが、義を見てせざるは勇なきなり！男・剣部 シバラク、正義のために
剣を抜くぞ！」

アマリ「駄目です！」

アーニー「アマリさん…」

アマリ「教団が悪いんじゃないんです……。全ての原因は私にあります」

エイサップ「アマリさん……」

零「気をつけろ、みんな！来るぞ！」

ディオ「この反応は……！」

現れたのはゾギリアのヴァリアンサー、キャピタル・アーミイのモビルスーツ、そして、反対側から来たのはオニキスだった。

ディオ「ゾギリア！」

倉光「どうやら彼等も僕達と同じようにアル・ワースに跳ばされたようだね」

ドニエル「その連中が、何故キャピタル・アーミイと一緒にいるんだ!?？」

イオリ「余計な邪魔が入るか……！」

アマリ「イオリ君……」

イオリ「アマリ・アクアマリン！この雪辱……決して忘れないぞ！」

そう言い残し、ディーンベルは撤退した……。

アマリ「……」

ホープス「いつにない心の揺れを感じます。あれもマスターの求める真実の一部なのですか？」

アマリ「自分でも……わかりません……」

マスク「各機、攻撃を開始しろ」

つ、攻撃して来たか…！

零「弘樹、首領は何処だ？」

弘樹「答える気はない」

零「だろ…。だったら、力付くで聞き出してやる！」

マスク「オニキス！我々の邪魔をする気か？！」

メル「いえ、我々の目的はあくまでも新垣 零とシャイニング・ゼフィルスの鹵獲です」

マスク「ならば良いだろう」

ベルリ「待つてくださいよ！こちらには新たな異界人もいるんですよ！」

マスク「知った事ではない。我々の受けた任務はミスルギ皇国以外の戦力の殲滅だ」

夏美「じゃあ、何で、オニキスの事は知らんぷりなのよ！」

スメラギ「ドニエル艦長、この状況は仕方ないですね」

ドニエル「うむ、応戦するぞ！」

みんなは出撃した…。

青葉「あの機体…！」

ヒナ「私の邪魔をした白い奴も出て来たか…！」

青葉「聞いてくれ、雛！俺だ！渡瀬 青葉だ！」

ディオ「貴様！また勝手をするつもりか!?」

青葉「そうじゃない、ディオ！あれには雛が乗っているんだ！」

ディオ「言つたはずだ！俺の足を引つ張るなど！俺は……どんな手段を使つても元の世界に帰らなくてはならないんだ！」

青葉「ディオ……」

倉光「2人共喧嘩は後にして」

レーネ「今がどう言う時か、考えろ！」

ディオ「……もうしわけありません」

ドニエル「奴等はどうしてもこちらを潰し、オニキスは零君を連れ去りたいらしい！
相手をするしかないぞ！」

アイーダ「シーブックさん、セシリーさん！お2人は下がってください！」

アマリ「サラちゃんとティアちゃんも！」

セシリー「いえ……。あの人達が、私達も敵と認識している以上、戦います」

シーブック「何処の誰だか知らないけど、好きになれそうな手合いではない……！」

サラ「サラ達が懲らしめてやる！」

ティア「だから、戦うよ！」

アイーダ「わかりました……！ご武運を！」

アイーダ「ベルリは気をつけなさい！敵の指揮官が、あのマスクなら、きつとあなたを狙ってきます！」

千冬「零も気をつけろ！オニクス……特にあのペリドットという女はお前を特に憎んでいる！」

ベルリ「了解です！アイーダさんの前で格好悪い所を見せるつもりはありません！」
アイーダ「余計な事を考えてないで、集中しなさい！」

ベルリ「（やっぱりいいな、アイーダさんは……）」

零「わかっています、千冬さん！」

俺達はキャピタル・アーミィとゾギリアの連合部隊とオニクスとの戦闘を開始した……。

ルクシオンとブラディオンの連携で敵の雛という女の子が乗るヴァリアンサーにダメージを与えた……。

ヒナ「くっ……！疑惑を晴らすためにも戦果を挙げる必要があったのに……！」

青葉「待ってくれ、雛！俺がわからないのか？！」

ヒナ「黙れ！馴れ馴れしく人の名前を呼ぶな！お前のせいで私は有らぬ嫌疑をかけら

れたのだぞ！」

青葉「嫌疑……？」

ヒナ「私はお前など知らない！連合の兵士であるお前は敵以外の何者でもない！此処がどこであろうと連合は我々ゾグリアの敵だ！それを忘れるな！」

敵のヴァリアンサーは撤退したか……

つて、青葉の奴！まさか、追いかける気じゃ……！

青葉「雛！」

ディオ「今は戦闘中だ！それ以上の勝手な真似は許さんぞ！」

青葉「……わかったよ」

アンジュ「意外ね……。あの敵を追いかけると思ったのに……」

ヴィヴィアン「敵前逃亡は銃殺だから、びびったのか、青葉？」

青葉「……そうじゃねえ。ディオが行くなと言ったからだ」

ディオ「お前……」

青葉「俺が雛に本当の事を聞きたいのと同じくらい、ディオが元の世界に帰りたいってのがわかったから……。バディのあいつの思いを踏みにじって、自分勝手は出来ねえ……」

倉光「ほう……」

ゼロ「良い面してんじゃねえか！青葉！」

デイオ「……わかつているなら、いい。戦線に復帰しろ」

青葉「ああ……。 (雖……。 お前やゾギリアは、こんな状況でも戦うっていうのかよ……)」

俺達はモビルスーツ、ヴァリアンサー部隊を壊滅させ、Gーセルフもビームサーベル二刀流でマスクという男のモビルスーツを追い詰めた……。

マスク「ちいっ！ マックナイフの力を、まだ引き出せていないか……！ 覚えている、ベリリ・ゼナム……！ 必ずお前を倒す！」

マックナイフという機体は撤退した……。

かなり、ベリリを敵視しているな……。

ベリリ「また、それなのか……」

アイーダ「あのマスクというパイロット、ベリリを異常に敵視していますね……」

一夏「なんか恨みを買ったんじゃないのか？」

ベリリ「いや……。 そんな事はないはずだけど……」

零「話は後だ！ 残るはオニクスだけだ！」

ベリリ「わかつていますよ！」

〈戦闘会話 零VSメル〉

メル「どうして… どうして私達に挑んでくるのですか!?!」

零「お前らが立ちほだかつてくるからに決まっているだろ!」

メル「私だつて… 本当は戦いたくない…!」

零「…!」

メル「ですが、やるしかないのですよ…! 私は!」

俺はメル・カーネリアンの乗るメサイアの攻撃を避け、クロスソードで大ダメージを与えた。

メル「くっ…! これでも勝てないなんて…!」

零「カーネリアン…。俺達の元へ来ないか?」

メル「えっ…!」

零「お前は戦いたくないと言った。俺達… 手を取り合う事ができるかもしれないだろ?」

メル「… 新垣 零さん…。その要求は飲めません。私はオニキスです! それを忘

れないでください！」

それを言い残して、メサイアは撤退した……。

アル「大胆な口説き文句だったな」

倉光「彼女を僕達の元へ来させればオニキスについて聞けたのにね……」

零「い、いえ……。俺はそういうつもりで言ったのでは……」

メル・カーネリアン……か……。

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

弘樹「今日こそはお前を倒す！」

零「お前が俺に勝てた事なんてあるのか？ 勉強もろくに出来ない脳筋野郎！」

弘樹「うつ？！？人が気にしてる事言うな！ウジウジ考え込む自殺未遂野郎がよ！」

零「なっ？！？触れられたくない黒歴史をぶり返してんじやねえよ、このバカが！」

弘樹「誰がバカだ！」

零「バカにバカと言って何が悪いんだよ！」

弘樹「……懐かしいな。俺達はいつもこうだったな」

零「弘樹……」

弘樹「だが、俺は退くわけにはいかないんだよ！覚悟しろよ、零！！？」
零「やってみやがれ！返り討ちにしてやるよ！弘樹！！？」

俺は弘樹との戦闘の結果、ダークネス・ヴァリアスを弾き飛ばした。

弘樹「クソツ！また勝てなかった…！」

零「もうやめた方が身のためだけ、弘樹」

弘樹「舐めんじゃねえ、次こそは負けねえ！」

そう言い残して、ダークネス・ヴァリアスは撤退していった…。

青葉「幼馴染同士で戦うなんて…！」

零「言うな青葉。俺達はもう覚悟して戦ってたよ」

アマリ「覚悟…」

九郎「でも、負ける気はないんだろ？零」

零「… 当たり前です」

アスナ「新垣 零！今度こそ貴方を倒す！」

零「お前に構ってる暇はねえ！早く首領を出せ！」

アスナ「あの方は忙しいの！そうやすやすと遭わせるわけにはいかないのよ！」

零「だったら、お前を倒して、あぶり出してやるよ！」

アスナ「（来るなら、来なさい……。今回は私にも策略があるのだから……）」

俺とアスナ・ペリドットとの戦いは互角だった。

アスナ「そんなんじや私は倒せないわよ！」

零「そつちこそ、俺と互角じゃねえか！」

アスナ「……そろそろね。ガルム部隊！」

すると、アスナの背後から、ガルム部隊が現れた。

ワタル「ま、また出て来た！」

アスナ「アマリ・アクアマリンを攻撃しなさい！」

アマリ「え!?？」

ガルム部隊は一斉にゼルガードへ攻撃を開始した……。

アマリ「ああああっ！」

零「アマリ！」

刹那「なんとか援護を……！」

アスナ「させるわけないでしょ！」

リリースからの砲撃で俺達は動けなくなった……。

このままじゃアマリが……！

アスナ「ほらほら、新垣 零！早く来ないとアマリ・アクアマリンが死ぬわよ？」

アマリが……死ぬ……？

アマリ「れ、零……君……」

零「……やらせるか…… アマリを殺させてたまるかよおおおつ！！？」

ーアマリ・アクアマリンです。

私はオニキスの一斉放火に苦戦していると、シャイニング・ゼフィルスが動き出し
ました……。

零「……やらせるか…… アマリを殺させてたまるかよおおおつ！！？」

すると、ゼフィルスは飛んでないスピードで私の周りにいるガルムを全て倒し、狙い
をリリースに定めました……。

アスナ「ついに…… ついに覚醒したわね！」

零「…！」

ゼフィルスは目を赤く発光させて、クロスソードで斬り刻み、リリスを蹴り飛ばしました…。

アスナ「うわあああああつ！…ふ、ふふつ…やっぱり凄いわね…。後は時間が経てば…！」

それだけ言つて、リリスは撤退しました…。

青葉「す、凄えぜ！零さん！」

千冬「…！」

ロックオン「こんな隠し球を持っていたとはな！」

零「…！」

アマリ「零君…ありがとう」

私は助けてくれたゼフィルスに近づくが…。

ホープス「マスター！今の零様に近づいてはいけません！」

刹那「アマリ、避ける！」

アマリ「え…！」

ホープスと刹那さんが言った言葉が理解できずにいた私にゼフィルスが攻撃を仕掛けて来たのです…。

アマリ「あああっ！」

しんのすけ「アマリお姉さん！」

アマリ「零君！どうしたの!?!？」

零「…！」

私の声にも反応せず、ゼフィルスは攻撃を続けて私は何度も攻撃を受けてしまう…。

九郎「零！どうしたってんだよ!?!？」

エイサップ「何か様子がおかしい！」

千冬「もしかすれば零は…！」

夏美「な、何がどうなってるのよ!?!？」

ハレルヤ「見てわかんねえのかよ！あいつは暴走してんだよ!!?!？」

グレンファイヤー「ぼ、暴走だって!?!？」

シヨウ「確かに、零からは怒りのオーラが見える…！」

アキト「零君を止めるんだ！このままでは、零君がアマリちゃんを殺しかねない！」

零「…！」

皆さんは零君とゼフィルスを止めようと動き出そうとしましたが、ゼフィルスがそれを邪魔をしました。

アマリ「れ、零君… やめて…！」

零「…！」

アマリ「零君…！」

そうか…これは、皆さんに隠し事をしていた私への罰なんですね…。

アマリ「良いよ。これが私への罰なら…零君になら、私の命を捧げても…」

アンジュ「アマリのやつ…！」

アイーダ「駄目です！アマリさん！」

ホープス「マスター…！」

アマリ「大丈夫ですよ、皆さん…。私は…大丈夫ですから」

ゼフィルスはクロスソードを合体させ、バスターソードモードを私に向ける。

零「…！」

そして、ゼフィルスは再び、私に接近して来ました…。

アマリ「零君…！」

零「…！」

アマリ「…あなたと出会えて…良かった…」

…さようなら…。

一夏「良い加減にしろ！零…!!？それはアマリさんなんだぞ!!？」

一夏君…今、叫んだところで…。

零「！」

え……ゼフィルスの動きが止まった……？

それに目も緑色に戻った……？

零「お……俺……は……」

アマリ「零君!!？」

零「俺は……アマリを……なんて事を……うわあああああつ!!？」

泣き叫ぶ様に叫んだ零君はゼフィルスを操作して、何処かに飛び去ろうと動き出した
ました……。

ケロロ「零殿！何処へ行くのでありますか!!？」

零「みんな……ごめん……」

アマリ「待って零君!!？」

私の制止も聞かず、ゼフィルスは飛び去っていつてしまいました……。

零君……。

アマリ「そ、そんな……」

ワタル「は、早く零さんを追いかけないと!!？」

テイエリア「今行っても無駄だと思っぞ」

ゼロ「何でだよ!!？」

アル「零は悩んでおるのだ……。今妾達が行っては逆に苦しめてしまうであろう」
ドニエル「零君の搜索については、アマリ君の話を聞いてからにしよう」

スメラギ「良いわね？アマリ」

アマリ「はい……」

零君……何処へ行ってしまったの……。

第12話 覚醒のバスタード

―俺……新垣 零はアマリを傷つけた後悔からみんなの元から去り、俺は1人になった……。

零「……一旦、ゼフィルスも休ませるか……」

ゼフィルスを着地させ、俺はゼフィルスから降りる。

……1人つてのは……こんなにも静かなんだな……。

俺はそこら辺の岩に腰掛け、停止させたゼフィルスを見る。

零「俺は……俺がアマリを傷つけたんだよな……」

クソツ……。何やってんだよ……。俺は……！

アマリを傷つけて……。俺は、みんなを守るって……。決めたはずなのに……！

零「俺はもう……。みんなとは居られない……。俺が居たら、また誰かが傷つくんだよな……」

だが、この先どうするか……。元の世界に戻る方法もわからない、俺を狙ってオニキスが来るのも時間の問題だ……。

俺は何をすればいいのかもわからなくなり、その場に寝そべる。

すると、突然睡魔に襲われる。

零「駄目だ……寝たら……何が……あるかわからないのに……」

だが、朝から夜までシミュレーションでの訓練、そして、先程の戦闘……俺の身体は激しい疲れがあるのは当たり前だ。

その後、俺は睡魔に負け、目を閉じ眠りについた……。

―私……アマリ・アクアマリンは皆さんに全て話す事にしました。

アマリ「……」

アンドレイ「聞かせてもらうよ、アマリ君。君と魔徒教団の事を」

アマリ「私は……。教団の脱走者です」

シバラク「な、何だって!?？」

クラマ「まあ、そんなこったろうと思っただけ」

シバラク「か、簡単に言うな、クラマ！これはとんでもない事だぞ！」

ワタル「それって……そんなに驚くような事なの？」

シバラク「何度も言っただろうが！」

千冬「魔徒教団は法と秩序の番人。その術士は、アル・ワースでは人々の尊敬を集める存在……でしたよね？」

シバラク「そうだ！」

青葉「あの岩人形……そんな立派な人達の持ち物なんだ……」

アルト「アル・ワースの人間にとつて魔徒教団つて、組織はそれ程までに重要な意味を持つているのか」

ベルリ「そうは言いますが、シバラクさん……僕達、その魔徒教団に襲われたんですよ」

シバラク「そ、それはだな……」

アマリ「教団が法と秩序の番人であるのは、事実です。それは私も保証します。教団が攻撃を仕掛けてきたのは脱走者である私を捕らえる……あるいは肅清するためだと思えます」

アーニー「つまり、悪いのは君つて事か……」

サヤ「しよ、少尉……！」

アマリ「みんなに迷惑がかからないように出て行こうと思っただんですが、結局、巻き込む事になってしまいました……。零君だつて、傷つきました……」

エメラナ「そんな事……！」

アマリ「良いんです。エメラナさん。ごめんなさい……。教団の脱走者であることを黙ってきた事も含めて、お詫びします……」

ジャン「アマリさん……」

アンジュ「脱走術士か……。ちょっと考えられない存在ね」

サラ「サラ達も旅をしていたけど、そんな人は初めてだよ！」

ティア「うーん、確かに不思議だね」

シヨウ「どうして、アマリは魔徒教団を抜けたんだ？」

グランデイス「あんた自身は、教団に不満があったようには見えないけど……」

アマリ「グランデイスさんのおっしゃる通り、わたしは今も教団の在り方を信じています」

エイサップ「じゃあ、何で？」

アマリ「私が教団を脱走したのは、ただのわがままなんです」

ヒミコ「わがまま！子供なのか！」

ラライヤ「こどもなの？」

ワタル「駄目だよ！大事な話なんだから、茶化したりしたら！」

しんのすけ「アマリお姉さん……続きを話していいゾ」

アマリ「教団で術士としての修練をしていたある日、私はホープスに出会いまし

た……」

ホープス「もつとも、その頃の私は名無しの魔法生物でしたけどね」

アマリ「ホープスは教団の研究室で生まれて、そこから脱走したそうです」

刹那「ホープスも脱走者だったのか……」

ホープス「あのまま教団にいて、実験材料などにされるのは御免こうむるものでしたので」

アマリ「私は、そのホープスの話を聞いた時、自分の中に何か生まれたのを感じました……」

ミラーナイト「その何かとは？」

アマリ「うまくは言い表せません……。無理矢理、言葉にするのなら……。自分が生きている事への疑問……。としか言い様がないものです」

ヒュウガ「生きている事への疑問……。か」

クラマ「けつ……。青臭い！まるで思春期のがきじやねえか！」

アマリ「同時に私は、その答えが教団の中には得られない事を直感的に理解しました……。だから私は……。ホープスにも勧められ、教団の倉庫に放置されていたゼルガードで脱走したんです」

ホープス「なお、名無しでは困るという事でホープスの名は、その時にマスターから

いただきました」

アマリ「今でも、あの時の感覚は思い出せますが、理性では自分の決定が理解できない時もあります……。だから、わがままとしか言い様がないんです……。そうして今も、自分自身がよくわからないまま、こうして旅を続けています……」

だから、こんな私を……。みんなは突き放すはずですよ……。

ワタル「問題ないよ」

アマリ「え……」

しんのすけ「オラ、土器がムネムネしたゾ！アマリお姉さんが、悪い事して、逃げてきたのかって……」

アキト「それどころか、困っている俺達を助けてくれた……」

九郎「アマリはちゃんと法と秩序の番人……。いや、正義の味方をやっていると思っぜ」

アマリ「正義の……。味方……」

一夏「アマリさんは、自分の事がよくわからないって言ってたけど……。好きにすれば良いじゃないか！アマリさんは自由なんだから！」

アマリ「自由……。私が……。この旅の中で手にしたものの……。教団に追われても守りたかったもの……。自由……。それが……。自由なんですわ……。！」

ハンソン「その自由で選んだのが、ワタル達と戦う事なんだとしたら……」

サンソン「お前さんは自分の意思で教団のやり方つてのを立派に守つてゐるわけだな」

アマリ「それが私の生き方……。自分の意思で選んだもの……」

レイ「教団の脱走者にはどういふ罰が下されるかって決まってるのか？」

アマリ「いえ……。資料を読む限り、設立から今に至るまで教団を抜けた者の存在は記録されていませんので」

セルゲイ「君は史上初の脱走者というわけか」

グレンファイヤー「そういう事だな！こりや傑作だぜ！」

テイエリア「そうなると向こうも扱いに困っているのかも知れないな」

青葉「それだ！罰則が決まってるから、逆に罰する事が出来ないんだよ！」

クラマ「今日まで、こいつが旅を続けてこられたのも案外そこらが理由かもな」

ベルリ「もしかして、周りにいた僕達が狙われたのつてアマリさんをそそのかした悪人だと思われたんじゃない？」

ディオ「俺達の世界での事はともかく、今回は、その可能性もあるだろう」

ゼロ「アマリは立派に術士をやっているんだ。話せば、わかってくれる可能性もあるしな」

ワタル「だから、もう迷惑になるなんて言つて、勝手に出てつたりしないでよね」

みんな…！

シバラク「そうだぞ。お前は、救世主一行の道案内役でもあるんだからな」

アマリ「ありがとうございます」

アンジュ「…」

ヴィヴィアン「不満なの、アンジュ？」

アンジュ「アマリの事なら、文句はないわ。でも、私は魔従教団を信用しているわけじゃないから」

チャム「どうして？」

アンジュ「世界の真実を知った今となつては、法と秩序の番人なんて存在は信じられないから」

グランデイス「あんたが、そう思うのは勝手だけどら魔従教団と渡りがつけば、あたし達も元の世界に帰る目処が立つ」

クラマ「あいつ等が、今日のように問答無用で襲ってきたら、どうするんだよ？」

刹那「アマリに対する誤解を解けば何とかかなると思うが…」

ワタル「そのためにも僕達は正しい事をちゃんとやろうよ」

アルト「その正しいっていうのは…」

ワタル「もちろん、ドアクダーを倒す事だよ」

千冬「打倒ドアクダー… か…」

九郎「良いんじゃねえか？ドアクダーを倒せば、モンジャ村のオババ様って人の力で異界人は帰還も出来るんだし」

マサキ「そうだな。困っている人達を放っておくのも気分悪いしよ」

ノレド「でも、マナの国に近づくと、またキャピタル・アーミイの攻撃を受ける可能性もあるよ」

ディオ「そして、そこにゾギリアの戦力も加わったと見るべきだろう」

刹那「それにあのガンダムも居る…」

アマリ「マナの国の協力が得られないなら、私達だけの力でドアクダーと戦うしかないでしょう」

すると、リー隊長達が歩いて来ました…。

リー「倉光艦長とドニエル艦長、スメラギさんも同じ意見だ」

アイーダ「マナの国の情報収集については、とりあえず中断ね。なおらドアクダー打倒にはこちらの方達もお手伝いしてくれる事になったわ」

シーブック「シーブック・アノーです。今日は助けてもらって、ありがとうございますました」

セシリー「セシリー・フェアチャイルドです。これからもよろしく願います」

サラ「サラ・クレイスだよ！よろしくね！」

ティア「サラの妹のティア・クレイスだよ！ティシスのコアなんだ！これからも頑張ろうね！」

ベルリ「本当にいいんですか、シーブツクさん、セシリーさん？」

シーブツク「異界人の状況は、アイーダさん達から聞いた。ここでも元の世界の関係をひきずって戦いを仕掛けてくるような連中と一緒にやって行く気はない」

ディオ「ゾギリア：：それにキャピタル・アーミイか：：」

セシリー「それならば、帰還の手段もある、あなた方と行動を共にする事を選びます。何より、まずは保護を申し出てくれたあなた方は信用に値します」

ヒミコ「それは、あちし達が救世主一行だからなのだ！」

ワタル「それに正義の味方の術士もいるしね！」

シーブツク「それは心強いな」

セシリー「その一員に相応しくなれるように頑張るわね」

エイサップ「サラとティアもいいのか？2人はお姉さんを探していると聞いたけど：：」

サラ「うん！ドアクダーは許せないし、ドアクダーを野放しにしているとサラ達がノアお姉様を探す前に邪魔をしてくるし！」

ティア「それにティア達の国とユイちゃん達も危ないし、ティア達も戦うよ！」

サヤ「ありがとうございます。お2人とも……」

青葉「寄せ集めの集団だけど、心は1つだな」

しんのすけ「まだ1つじゃないゾ。青葉お兄ちゃん」

九郎「そうだな。あの暴走バカを連れ戻さないと」

ティエリア「だが……。零のあの力は何なんだ……？」

弘樹「バスタードモードだ」

っ!!?この声……この人は……！

刹那「お前は……！」

ケロロ「ゲロゲロリ、その声……零殿のご友人でありますな！」

アマリ「氷室……弘樹さん……！」

どうしてこの人が……！

私を含めたみんなが警戒しました。

弘樹「安心しろ。俺達の目的はあくまでも零を捕らえる事だ……。お前らには危害は

加えない」

一夏「お前らのせいで零は！」

弘樹「ペリドットのやった事は謝る……。あいつは流星にやりすぎた」

青葉「どうしてあんたは幼馴染である零さんと戦うんだ？」

弘樹「お前には関係ないだろ」

青葉「な、何だと?!？」

千冬「落ち着け、青葉…。氷室、バスタードモードとは何だ？」

弘樹「俺も詳しい事はわからないが、オニキスの極一部の人間が使う力だ。バスタードモードは使用者と使用者の機体のステータスを格段に上げる事が出来る」

アルト「能力を上げる力…か」

アーニー「SEEDやフアクターアイの様なものかな？」

刹那「どうして、オニキス…。いや、この世界の出身ではない零がそれを使える？」

弘樹「そこは俺もわからない…。俺も俺の監視者であるサファイアから聞いたただけだ」

ベルリ「監視者…。？じゃあ、こんな所で僕達に会ったらダメなんじゃないの?!？」

弘樹「心配してくれてるのか？…。大丈夫だ。サファイアも少しは目を瞑ってくれてるんだよ」

アイーダ「ベルリ！敵を心配してどうするんですか！」

ベルリ「す、すみません…。」

アイーダさんに怒られて、シユンとなったベルリ君…。

アキト「他の幹部からは何も聞いていないのか？」

弘樹「他の奴らは企業秘密とか言って、教えねえんだよ…。それに、サファイアの話じゃ彼奴らも知らないみたいだしな」

テイエリア「つまり、知っているのは首領のみという事か…」

弘樹「ああ」

アル「それを何故妾達に教えるのだ？」

弘樹「今のあいつは見てられない…。また、自殺するかもしれないからな」

アマリ「っ…！」

自殺…？ 零君が…？

シヨウ「それを俺達が止めろと？」

弘樹「ああ…。そろそろ俺は戻る」

しんのすけ「ありがとう！弘樹お兄ちゃん！」

弘樹「勘違いすんな。俺はただ俺の手で零を救い出したいだけだ」

ワタル「それでも、僕達に情報をくれた事には変わりないよ！」

弘樹「言いたきや言ってる」

アマリ「氷室 弘樹さん…」

弘樹「アマリとか言ったな…。零を頼む」

… え!? ?もしかして、この人は… !

小声で私にそう言った氷室さんはその場を歩き去りました…。

ゼロ「兎に角、零を捜そうぜ！」

一夏「そうですね。あいつを見つけて、一発ぶん殴らないとですね！」

リー「艦長達にも伝えて、捜索を開始しようか」

アマリ「はい！」

… 待っていてね、零君…。

ー私は、カノン・サファイアです。

アスナ「…」

メル「アスナ・ペリドット… 勝手な行動は控えてください」

今、メルさんがアスナを説教しています。

メル「あなたのせいで計算が台無しです」

アスナ「計算ねえ…。そう言えばあなた、新垣 零から仲間にならないかと誘われた

のよね？」

メル「っ……」

アスナ「もしかして、あいつに惚れたの？」

メル「……私が、あの方を裏切るはずなのはあなたもお分かりでしょう！ 兎に角もう一度言います。勝手な行動は控えてください」

アスナ「わかったわよ……それよりも氷室は何処に言ったのよ？」

カノン「氷室さんはちよつと風に当たりたいと外に出て行きましたよ」

アスナ「ふーん、もしかして、あいつらのスパイだったりしてね」

カノン「ひ、氷室さんはそんな卑怯な事はしません!!？」

アスナ「……何？ あなた、あいつの何を知ってるの？」

カノン「わ、私は……」

メル「やめなさい、今は仲間内で揉めている場合ではないでしょう。カノン・サファアア……あなたも出撃してもらいます」

カノン「わかり……ました……」

私が出撃……。ジェイルに乗るんですね……。

その数時間後に氷室さんは帰ってきました……。

―新垣 零だ。

俺は暗闇の中に居た。

ここは一体……？

すると、俺の背後にしんのすけが現れる。

零「しんのすけ……？」

しんのすけ「零お兄ちゃんのせいだ！零お兄ちゃんのせいでアマリお姉さんが傷ついたらんだゾ！」

つ……！！？

まさか、しんのすけからそんな事を言われるなんて思ってもみなかった……。

零「し、しんのすけ……俺は……！」

一夏「しんのすけに近寄るなよ！しんのすけまで傷つくだろ！」

い、一夏まで……！

一夏「何処かへ行けよ！お前なんて生きてる価値はないんだよ！」

しんのすけと一夏の背後に仲間達の姿が……しかし、他のみんなも俺への非難の声を上げていた……。

零「あ、あああ……」

すると、今度はアマリが出てきた。

零「あ、アマリ……」

アマリ「私はあなたに傷つけられました……。あなたとなんて、出会わなければよかったです……」

俺と…… 出会わなければ…… 俺は…… 俺は…… !

零「うわアアアああああつ!!?!?!」

俺は目を開け、勢い良く起き上がった。

息を荒げ、辺りを見渡すとそこは学校の様な所だった。

しかし、もう潰れて廃校になっている様だ。

零「はあ…… はあ…… ゆ、夢…… だったのか……?」

流れる汗を拭いながら、俺は息を整える。

零「こ、此処は……?」

辺りを見渡していると、部屋の扉を開ける音が聞こえ、視線を移す。

部屋に入ってきたのはオレンジ色の髪の少女だった。

? 「あ! 起きたんだね! おはよう!」

零「お、おはよう…… って、お前は?」

? 「エンネアだよ! よろしくね!」

エンネア「つて言うのか……」

零「あ、ああ……。よろしくな、エンネア。お前が俺を此処まで運んでくれたのか？」
エンネア「違うよ！あなたを運んだのはリチャードだよ！」

零「リチャード？」

すると、今度は男の人が入ってきた。

リチャード「ミーは、落語家で牧師の極楽亭リチャードと言う者でゲス！よろしく
ピース！」

零「……は？」

落語家「……？へ……？この人が俺を助けてくれたのか？」

エンネア「リチャード、真面目にやって」

リチャード「うむ…… 我ながら今回も完璧なお芝居だった」

何処が完璧だよ……。

リチャード「改めてリチャード・クルーガー少佐だ。傭兵をやっていた」

零「新垣 零です、助けていただき、ありがとうございます！」

クルーガー「……？何処かで聞いた名だな……」

リチャード「何、大した事じゃない。所でお前さん、どうしてあんな所で寝てたんだ

？」

零「ちよつと疲れが溜まってしまつて……」

……ちよつと待て、この2人つてもしかして……。

零「リチャード少佐、エンネア……2人はこの世界の出身じゃないですよね？」

リチャード「よくわかつたな、そうだぞ」

エンネア「つて事は零もそうなの？」

零「ああ」

この2人も異界人か……。

ん？そう言ええば！

零「ぜ、ゼフィルスは!?？」

エンネア「ゼフィルス？」

零「俺の近くにあつたロボットです！知りませんか!?？」

リチャード「ああ……それなら……」

？「俺達が運んでやつたぜ」

？2「どうやら起きた様だな」

また部屋の扉が開く音が聞こえたのでそつちに視線を移すと男の人と女の人が立っていた。

零「あの……あなた達は？」

? 「流 竜馬だ」

? 2 「スカレット・ヒビキ大尉だ。よろしく頼む」

竜馬さんとスカレット大尉の自己紹介を聞き、俺も自己紹介を済ます。

零 「皆さんは同じ世界の出身なのですか？」

竜馬 「俺とスカレットは同じ世界だ」

エンネア 「エンネアは違うよ」

リチャード 「俺は別世界のエンネアとスカレット大尉と会ったことがあるが、彼女達と会うのは初めてだな」

別世界のエンネアとスカレット大尉?まるでアーニーとサヤみたいだな。。。

竜馬 「零は1人だったのか？」

零 「.: 仲間が居ました、沢山.:。ですが、俺は仲間の1人を暴走の力で傷つけてしまいました.:。」

スカレット 「それで迷惑をかけない様に仲間達の元から去ったというわけか」

零 「俺の存在がみんなを傷つけてしまったんです.:。俺が居たから.:。」

そう呟く俺の手をエンネアは優しく握った。

エンネア 「零は悪くないよ。零は悪い人じゃないって、エンネアわかるもん」

リチャード 「暴走の力でその大切な仲間を傷つけてしまうなら、制御すればいいん

じゃないか？」

零「…制御…ですか…」

すると、辺りに地響きが起こった…。

第12話 覚醒のバスタード

俺達は外に出ると怪獣でもドラゴンでも、バジユラでもない生物が数体居た。

零「あれは…!?」

竜馬「ちっ！インベーダーか…こんな時まで来やがって！」

スカーレット「流、出るぞ！」

竜馬「おう！リチャードのおっさんとエンネアは零を見ていてくれ！」

そう言うと竜馬さんとスカーレット大尉は走り去り、暫くすると、2機の黒いロボットが出てくる。

エンネア「おー！いつ見てもブラックゲッターとウイングルは格好良いね〜！」

零「あれには、竜馬さん達が乗っているんですか？」

リチャード「ああ、ブラックゲッターには竜馬が、ウイングルにはスカーレット大尉が乗っている」

ウイングル：「確か、海道さんと真上さんがそんな名を言っていたはずが……」

スカーレット「流！油断するなよ！」

竜馬「そつちこそ、ウイングルの翼がないんだ！陸戦は任せるぜ！」

スカーレット「了解した！」

こうして、ブラックゲッター&ウイングルとインベーター軍団の戦いが始まった……

〈戦闘会話 竜馬VS初戦闘〉

竜馬「時の狭間へ飛ばされたはずの俺が何故か、隼人と弁慶と別れ、ブラックゲッターに乗っている……。だが、相手がインベーター野郎なら、関係ねえ！ゲッターの力を見せてやるぜ！」

〈戦闘会話 スカーレットVS初戦闘〉

スカーレット「あの時に死んだと思ったが、まさかウイングルと共にこの世界に来る

とはな……。だが、何故、ウイングルの翼がないんだ……。？……。考えていても仕方ないか、やるぞ！インベーター！」

ブラックゲッターとウイングルは凄まじいパワーでインベーター軍団を全滅させた……。

零「す、凄い……」

エンネア「相変わらず、容赦ないね！あの2人！」

リチャード「そうだな……。俺達の出番もなかったな」

……
!!?この感覚は……！

零「来る……！」

エンネア「零！どうしたの!!?奴らが……。オニキスが来る！」

俺の言葉通り、ガラム部隊が20機程現れた。

竜馬「こいつらが零を付け狙うオニキスか！」

リチャード「だが、全て量産機のようなだが……」

零「幹部が居ない……。まさか、背後に控えているのか……。？」

いや、そんな事はどうでも良い！オニキスが来るなら、俺を狙うなら戦う！
リチャード「零……戦えるのか？」

零「戦えるのかじゃないんです……あいつらは俺が戦わないとダメなんです……ゼ
ファイルス!!？」

俺はゼファイルス呼び、乗ってブラックゲッターとウイングルの隣に立つ。

スカーレット「来たか、零！」

竜馬「戦えんのか？」

零「やるしかないんです……こいつらは俺を狙っている……。俺が指をくわえて見て
いるだけにはいかないんです！」

スカーレット「良い面だ！私の部隊に欲しいぐらいにな！」

竜馬「じゃあ、やるぜ、零！足を引っ張るなら容赦しねえからな！」

零「はい！」

この騒ぎを聞きつけて、アマリ達が来るかも知れない……。あいつらが来る前に片付
けないとまた、みんなを傷つけてしまう……。

俺達はオニキスのガラム部隊との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VSオニキス兵士〉

零「狙うなら俺を狙え、オニキス！アマリ達が来る前に片付けてやる!!？」

〈戦闘会話 竜馬VSオニキス兵士〉

竜馬「俺とゲッターに喧嘩を売るとは良い度胸じゃねえか、覚悟しやがれ！」

〈戦闘会話 スカレットVSオニキス兵士〉

スカレット「狙う相手が悪かったな……。オニキス、此処がお前達の地獄となる！」

俺達は協力して、ガルム部隊を落としていく。

残り、数機となった所で幹部達とガルム部隊の増援が来た……。

アスナ「ようやく見つけたわよ！新垣 零！」

弘樹「零！此処でケリをつけるぞ！」

零「……ちょうど良い。此処でお前らを片付けて、目的を聞き出す！」

カノン「簡単に行くと思わないでください！」

もう1機居る：：!? 新型か!??

弘樹「サファイア、無理はするな。ジェルに乗るのは初めてなんだろ？」

カノン「わかりました！氷室さんを援護します」

メル「争いはもうこれで終わりにしましょう。新垣 零さん！」

零「メル・カーネリアン：：」

メル「全機、新垣 零の確保を優先し、残りの2機は撃墜してください！」

零「竜馬さん！スカレット大尉！あいつらは強敵です！気をつけてください！」

竜馬「けっ！ゲッターに敵うかどうか試してやる!!？」

スカレット「よし、各機、戦闘開始だ！」

オニクス軍団と戦闘していた俺達：：。すると、突然スカレット大尉から通信が入った。

スカレット「気をつけろ2人共！3つの戦艦がここへ近づいて来るぞ！」

竜馬「また敵の増援かよ！」

零「3つの戦艦：：？まさか！」

俺の考えが辺り、来たのはメガファウナ、シグナス、プロレマイオスだった。

ワタル「ホープスが戦闘を行なってるって言って来てみたけど……」

マサキ「オニキスがいるな」

グレンフアイヤー「それだけじゃないみたいだぜ！」

一夏「零！そこに居るのは零だな！」

零「みんな……」

一夏「この戦いが終わったら一発ぶん殴らせろ!!？」

倉光「一夏君、それは後で」

ドニエル「そうですね。各機は出撃してくれ！」

ドニエル艦長の言葉で救世主一行のロボットやヒーロー達が出撃してくる。

アマリ「零君！無事なんだよね!?!」

零「…… ああ」

カンナム「後で君にも説教をしなければならぬな」

エイサツプ「その為にも此処を切り抜けないと！」

竜馬「こいつらが零の仲間か」

海道「あん？くらいゲッターじゃねえか！って事は流か？」

真上「お前は時空の狭間に消えたと聞いたが……」

竜馬「その後このブラックゲッターとこの世界に跳ばされたんだよ！」

スカーレット「おい貴様ら、私の事は無視か？」

海道「てめえもいやがったのか、クソ女！」

真上「ヒビキ大尉、何故翼のないウイングルに乗っている？」

スカーレット「そんな事、私を知るか。この世界に來た時からあつたんだ」

海道「…まあ、アンタとまた戦えるなんて嬉しい事だよ」

真上「…そうだな」

スカーレット「フツ、ではやるぞ、野郎共！」

アーニー「まさか、スカーレット大尉がウイングルに乗ってるなんて…」

サヤ「相手はこれまで以上の地獄を見そうですね」

エンネア「デモンベインだ！って事は、九郎が居るんだ！」

リチャード「オルフェスとライラス…。まさか、また見る事になるとはな…。」

スメラギ「零！その人達は仲間の良いのね!?!」

零「はい」

ドニエル「各機はオニキスの迎撃だ！此処で必ず零を救い出すぞ！」

俺を…救い出すか…。もう此処にもいられないな…。戦いが終わったら、この場から去ろう…。

〈戦闘会話 零VSメル〉

メル「新垣 零さん…… 私はあなたが羨ましい……」

零「え……？」

メル「多くの仲間に信頼されて…… 大事に思ってもらえて……」

零「お前は違うのか……？」

メル「どうぞでしょう……。 もう何もかもがわからなくなっていました……」

零「…… 来い、メル・カーネリアン！お前のモヤモヤを消し飛ばしてやる！」

メル「…… 新垣…… 零さん……！」

〈戦闘会話 零VSカノン〉

カノン「あなたが新垣 零さんですね！」

零「お前は？」

カノン「氷室さんの監視者です！」

零「弘樹の監視者か……。 なら、1つ言いたい事がある」

カノン「何ですか？」

零「弘樹をよろしく頼む……。あいつ、馬鹿だからお前みたいなやつが必要だ」
カノン「……新垣 零さん……。あなたは……」

零「話は終わりだ！俺に挑んでくるなら容赦しないぞ!!？」

〈戦闘会話 零VSアスナ〉

零「お前には随分世話になったみたいだな！」

アスナ「もう元に戻っちゃったのね……。まあ、結局一緒だけど！またバスタードモードになると良いわ！」

零「あれが……。バスタードモードか……。お前だけは絶対に許さない、俺がぶつ殺す！」

アスナ「そうよ、それよ！さあ、私をもっと楽しませなさい！あなたが怒る程あいつの目覚めが早まるの！」

〈戦闘会話 アマリVSアスナ〉

アマリ「あなただけは許しません！」

アスナ「あなたはオマケみたいなものなの。どきなさい」

アマリ「零君を散々傷つけてこれ以上何をするつもりですか！」

アスナ「あなたはあいつな何も知らない！横から入ってくるな!!？」

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

零「弘樹…」

弘樹「何情けない顔してんだよ、零」

零「…俺は…」

弘樹「言っておくが前みたいに優しい言葉はかけねえぞ！今の俺はお前の敵だからな
！」

零「わかってる…今はお前を倒すだけだ!!？」

弘樹「それで良いんだ！来い！零!!？」

〈戦闘会話 しんのすけ&ワタルVS弘樹〉

しんのすけ「弘樹お兄ちゃん…」

ワタルさん「どうしても戦うんだね、零さんと…」

弘樹「言ったはずだぜ？俺はお前らの敵なんだ！お前らが俺の前に立ちはだかるって
んなら、容赦しねえからな！」

しんのすけ「オラ達も容赦しないゾ！」

ワタル「僕達で零さんを助けるんだー!!?」

弘樹「零、お前にはもう俺達が居なくても、お前の事を必要としてる奴らが周りにいるじゃねえか……。大切にしろよ」

ガルトム部隊を全滅させた俺達…。すると、ペリドットの乗るリリスが動き出した…。リリスが狙ったのは…。

零「っ!!?ワタル!」

ワタル「え!うわああっ!」

あの野郎!今度はワタルを集中的に…!

龍神丸「わ、ワタル!何とか回避を!」

ワタル「やってるけど…。うわああっ!」

アマリ「ワタル君!」

アスナ「良い加減邪魔よ!!?」

リリスはみんなに砲火をして、近づかせなくした。

セルゲイ「ぐっ…。!」

ロックオン「あいつ… 今度はワタルを！」

メル「アスナ・ペリドット！勝手な真似はしないでと言ったはずです！」

カノン「こんなやり方、酷いです！」

アスナ「酷い？やり方なんて気にしてられないのよ！私をあいつを呼び覚ましたいだけなのよ！」

弘樹「て、てめえ…！」

零「…いい加減にしろ」

弘樹「れ、零…!!？」

零「お前の都合だけで俺の大切な仲間を傷つけるんじゃねえ…！」

九郎「お、おいおい！これってまさか！」

アマリ「零君… 駄目…！」

零「お前だけは絶対に許さねえぞ！アスナ・ペリドットオオオオオ!!？」
アマリ「駄目えええええ!!？」

「アマリ・アクアマリンです。」

零君の叫びと同時にゼフィルスの目が赤くなりました…。

止められなかった… 零君を…。

千冬「バスタードモードとなったのか…！」

アンドレイ「結局止められなかったのか…！」

竜馬「あれが零の暴走かよ！」

アスナ「あははっ！今度こそあいつを！」

零「…！」

ゼフィルスはリリースに接近し、蹴り飛ばしました…。

アスナ「くっ… 後は新垣 零が仲間を皆殺しにすれば完了よ…。私は退くわね」

そう言い残して、リリースは退きました…。

メル「待ちなさい！アスナ・ペリドット！」

カノン「メルさん… どうしますか!?!？」

メル「私達も退くしかなさそうですね…！氷室 弘樹さん！」

弘樹「退くなら勝手に退け…！俺は零を止める！」

カノン「そんな… 危険です！」

弘樹「あいつを… 零を止めるのは俺の役目なんだ！頼む！やらせてくれ！」

メル「わかりました… では、私も残ります」

カノン「私も！」

弘樹「カーネリアン…… サファイア……」

カノン「私は氷室さんの監視役ですから！」

メル「こちらのせいで彼はあぁなつてしまいましたので…… 私達が止めるのは当然です」

弘樹「ありがとな…… 聞こえるか！ 救世主一行！ 今から俺達も零を止める為に手を貸す！」

アイーダ「零さんを暴走させておいて今更何を……！」

ワタル「わかったよ！ 弘樹さん！」

しんのすけ「一緒に零お兄ちゃんをお助けするゾ！」

一夏「ワタル…… しんのすけ……」

アマリ「わかりました！ お願いします！ 良いですよ！ 艦長方！」

ドニエル「了解した！」

倉光「このまま零君に倒されるのはごめんだからね」

スメラギ「各機は暴走したゼフィルスを止めて！」

シャルロット「了解！」

リチャード「俺達も力を貸そう」

今度は2機の機体が現れました……。

アーニー「え……ら、ライオットB……!?」

リチャード「久しいな、少尉」

サヤ「しよ、少佐……？リチャード少佐!!？」

リチャード「サヤも久しぶりだな……。感動の再会は後だ！今は零を助け出すぞ！」

アーニー「了解！」

アル「もう一つの機体……まさか！」

エンネア「そうだよ！ネロ……いや、エンネアだよ！九郎！」

九郎「エンネア……のネームレス・ワン……本当にエンネアなのか!?？」

エンネア「うん！また会えて……嬉しいよ九郎！でも、今は……！」

九郎「ああ……ああ！零を止める！行くぞ、アル！エンネア！」

アル「うむ！」

エンネア「わかったよ！」

零君は絶対に私達が止める……！

零「…」

アマリ「零君… あなたの全てを受け止める！だから、来て！」

ホープス「ですが、マスター。私達では暴走した零様は…」

アマリ「それでも止めるんです！零君は今も苦しんでいます！」

ホープス「了解しました。（どうして、マスターはそれ程までに彼を…）」

〈戦闘会話 弘樹VS零〉

弘樹「情けねえな零！力に溺れてんじゃねえよ！」

零「…！」

弘樹「いつもみたいにいるせえよバカって言い返してみやがれよ！まったく、痛みは我慢しろよ！零！」

〈戦闘会話 カノンVS零〉

カノン「新垣 零さん… 絶対に止めてみせます！氷室さんがそうしようとしている

様に！」

〈戦闘会話 メルVS零〉

メル「あなたは… 力に負けるような人ではないはずですよ！ 零さん！ 戻って来てくださいー！」

〈戦闘会話 竜馬VS零〉

竜馬「零！ 俺は言葉で戻そうなんざ甘い考えは持ってねえからな！ 容赦無くいくからガマンしやがれ！」

〈戦闘会話 スカレットVS零〉

スカレット「貴様はそれ程までの男だったのか？ 新垣！ だったら、残念だ貴様は力に負ける無能だという事だな！ 私は甘くないぞ！ 新垣！」

〈戦闘会話 リチャードVS零〉

リチャード「待っている、零… お前さんを苦しみから解放してやる… もう少しの辛抱だ！」

〈戦闘会話 エンネアVS零〉

エンネア「零… 苦しんで… エンネアが助けてあげるからね！ 待っててね、零！」

〈戦闘会話 一夏VS零〉

一夏「本当にいい加減にしろよ、零！お前はそんな簡単に力に負ける人間なのかよ！」

零「…！」

一夏「みんな、お前の帰りを待つてるんだよ！早く戻って来いー!!？」

〈戦闘会話 しんのすけVS零〉

カンナム「零君、君には僕達も何度も助けられた…。今度は僕の番だ！」

しんのすけ「零お兄ちゃん…。痛いかも知らないけど、我慢するんだゾ！絶対にオラ達がお助けするから！」

〈戦闘会話 ワタルVS零〉

龍神丸「元と言えば私達が油断したせいで零は暴走したんだ…。行くぞ、ワタル

！」

ワタル「うん！零さんは絶対に僕達が助ける！」

〈戦闘会話 刹那VS零〉

刹那「手を伸ばせ零！お前の帰りを待っている人がこんなにも居る……！お前は俺達
が止めてやる……！」

〈戦闘会話　アキトVS零〉

アキト「憎しみや怒りに囚われては駄目だ、零君！君は俺の様になるな！君には帰る
べき場所があるだろ！」

〈戦闘会話　九郎VS零〉

アル「よもや零と戦う事とはな……」

九郎「こういうタイプは言葉で言っても無駄だな！ぶん殴って目を覚まさせる！デモ
ンベインの力でな！」

〈戦闘会話　シヨウVS零〉

チャム「零から怒りのオーラを感じる……」

シヨウ「ならば、俺達が浄化する！それが聖戦士の役目だ！」

〈戦闘会話　エイサップVS零〉

エイサップ「目を覚ませ、零！俺達が全力でサポートしてやる！」

エレボス「そうだね！零は私達も助けてくれたもんね！よし行こう！エイサップ！」

〈戦闘会話 ベルリVS零〉

ベルリ「正直、零さんの苦しみは全てわからない…。でも、僕達は仲間じゃないですか！僕達にも少しは頼ってくださいよ！」

〈戦闘会話 ケロロVS零〉

ケロロ「零殿…。これ以上は元に戻ってからであります！必ず助けてみせるでありますよ！零殿！」

〈戦闘会話 ゼロVS零〉

ゼロ「暴走したミラーナイトを思い出さず…。零！お前には頼れる仲間がいるんだ！それを忘れんじゃねえぞ！」

〈戦闘会話 ゴモラVS零〉

ゴモラ「キシヤーン!!？」

レイ「そうだな、ゴモラ！必ず零を助け出すぞ！仲間として…同じレイとしてな！」

〈戦闘会話　アンジュVS零〉

アンジュ「何やってんのよ、零！情けないわね！私は手加減しないわよ！とつと戻って来なさい！」

〈戦闘会話　海道VS零〉

海道「つたく、勝手に暴走してんじゃねえよ、新垣！」

真上「早く戻って来い、お前はまだ地獄を見るのは早いからな！」

〈戦闘会話　青葉VS零〉

青葉「零さん！今行きますから待っていてくださいね！仲間を自分の手で消させる様な真似は絶対にさせない！」

〈戦闘会話　アルトVS零〉

アルト「怒りの殻を付き破れ、零！お前の翼はまだ羽ばたけるだろ！無理なら俺が共に飛んでやる！」

〈戦闘会話 シーブックVS零〉

シーブック「僕は彼の事はあまり、知らない…。でも、アマリさん達にとつてかけがえの無い仲間だという事はわかるんだ！だったら、僕が止めてやる！」

〈戦闘会話 マサキVS零〉

マサキ「全く…。世話をかけるやつだよお前は…。だが、お前がいての救世主一行なんだ！必ず連れ戻す！」

〈戦闘会話 アーニーVS零〉

アーニー「力による苦しみはいつだって辛い…。だからこそ、僕達が共に背負って行く！零君！君にも沢山の仲間がいるんだ！僕もその中の1人だ！」

私達は協力して、ゼフィルスを攻撃して大ダメージを与えました…。
しかし…。

一向に止まる気配はありません…。

アレルヤ「駄目だ！止まらない！」

レーネ「このままではこちらが全滅します！」

ミラーナイト「ゼロ！あなたの力で零の精神に入る事はできないのですか!!？」

ゼロ「そうか！その手があつた！でかした、ミラーナイト！」

弘樹「俺も連れて行つてくれ……零を止めるのは俺の役目だ」

アマリ「私も……零君にはいつも助けられてばかりでした……。零君の力になりたい

んです！」

ゼロ「わかつた！行くぞ！シエア!!？」

私、氷室さんはゼロさんと共に零君の精神世界へ入つていった……。

―新垣 零だ。

俺は暗闇の中にいた……。

俺はまた……みんなを傷つけているのか……。俺は……何で生きてるんだ……？

やつぱり、俺には生きてる資格なんてないのか……。こんな俺が死んだって、誰も悲し

まないよな……。

ゼロ「本当にそう思つてんのかよ!!？」

……ゼロ？突然、目の前に光が現れて、そこからゼロと弘樹、アマリが現れた。

零「……何しに来たんだよ……」

ゼロ「お前を連れ戻しに来た」

零「放っておいてくれ……俺はもうみんなとはいられない……いちや駄目なんだよ！」

だから、俺は消える！俺を殺してくれ！」

弘樹「はあ……この馬鹿野郎が!!？」

零「がはっ!!？」

俯く俺を弘樹が殴り飛ばした。

弘樹「殺してくれだど？消えたいだど？……お前が死んだ後、悲しむやつがどれだけいると思っただけ!!？」

弘樹……

弘樹は倒れる俺の胸倉を掴み、無理矢理立たせ、なおも言い放ってくる。

弘樹「言っただけだ！生きる資格を見つかるまでお前は死ぬな！お前は約束も守れない男なのか!!？」

零「俺だって、生きたかったさ！でも……バスタードモードがある限り俺は……！」

弘樹「だったら、克服すれば良いじゃねえか。今のお前には支えてくれる仲間がいるだろ？」

零「……仲間……」

すると、弘樹は俺を離し、変わりにアマリが優しく俺を抱きしめる。

零「アマリ……」

アマリ「零君の苦しみ……痛み、全て私も受け止める……だから、消えたいなんて言わないで……」

零「またみんなを傷つけるかも知れない……迷惑をかけるかもしれない……。例えば、バスタードモードを使える様になったとしても……」

アマリ「良いよ。また暴走したら私達が止めてあげる。零君だって、そうするでしょ？」

アマリ……俺は……俺は……。

零「俺は……まだ、みんなと居たい……一緒に……戦いたい！」

アマリ「私もだよ……零君」

俺はアマリを力強く抱き返した。

ゼロ「帰るぞ、零！みんな、お前を待ってる！」

零「ああ！」

そして、俺達は光に包まれた……。

「アマリ・アクアマリンです。

私達は零君の精神世界から戻って来ました。

一夏「アマリさん！ゼロ！」

カノン「氷室さん！」

メル「結果はどうでしたか…？」

弘樹「…」

アスナ「無駄に決まってるでしょ？」

再び、リリスが現れました…！

アスナ「もう彼は絶望しているの…だから、もう新垣 零は戻ってこないわ！」

零「…勝手に…決めんじゃねえ…！」

アスナ「え…？」

ゼフィルスを見ると、目が緑色に戻っていました…。

「みんな、待たせたな！新垣 零、復活だ！」

メル「零さん!!?」

アルト「元に戻ったのか!」

零「みんな…ありがとうな。俺はまだ戦える」

アスナ「そんな…そんな事って…!」

弘樹「お前は舐めてはいけない男を舐めたな、ペリドット。新垣 零という男をな」
アスナ「ふざけないで…何であなたなのよ…あなたは…邪魔なの…だから、
消えてなくなれええええつ!」

ペリドットがバスタードモードを発動させ、接近して来た…。

アマリ「零君!」

零「大丈夫だ…俺はもう飲まれない!」

リリスのブレードを二刀のクロスソードをクロスさせて防ぐ。

零「俺には仲間が居る!こんな所で負けるわけにはいかねえんだよおおお!!?」
ゼフィルスを操作して、リリスを蹴り飛ばした俺はあの力を発動させた…。

千冬「あの目の色は…!!?」

倉光「バスタードモード…!」

アスナ「ふふっ…結局、力に飲まれたのね!新垣 零!」

アマリ「…零君…」

零「……言ったはずだ」

アスナ「!そんな……嘘……!」

零「俺はもう力に飲まれないと!!?」

不思議と身体が軽い……力が溢れてくる……。これがバスタードモードか……!

ゼロ「バスタードモードを使ってるのに……暴走してない!」

マサキ「全く……お前は凄いやつだよ!」

弘樹「それでこそ零だ……」

零「俺はみんなを守る為に進化して行く!みんなと一緒に……だから、こんな所で立ち止まってられねえんだよ!!?」

俺はバスタードモードの状態でリリスに攻撃を仕掛けた……。

零「絶対に倒す……!全開でやるぞ!ゼフィルス!」

ゼフィルスはブレードビットとガンズビットを全て出し、クロスガンをブラスターモードに変え、一発放った。

ブレードビットとガンズビットの連続攻撃と銃撃ビームを受けたりリスに続けて、クロスガンを二丁に戻し、連射しながら近く。

零「まだだ!」

二刀のクロスソードを構え、何度も斬り裂き、最後にバスターソードモードに変え、大

大きく斬り裂いた。

零「これが：：俺とゼフィルスの力だあああああつ！」

斬り飛ばされた、リリスに接近して、ボディ部分にクロスガン・ブラスターモードの銃口を当て、ゼロ距離で発射した：：。

アスナ「きやあああああつ!!？」

連続攻撃を受けたリリスは大きく吹き飛ばされ、大破する。

それをメサイアとジェイルが受け止める。

アスナ「クソ：：そんな：：こんな事が：：！」

メル「勝手をした罰ですよ。帰還します」

弘樹「零、次会うときは敵だからな」

零「弘樹：：世話をかけたな」

弘樹「へっ：：全くだ」

大破したリリスを抱えながら、弘樹達、オニキスは撤退した：：。

それを見送った俺は息を吐いて、みんなを見る。

千冬「零、メガファウナへ戻って来い：：。大いに説教してやる」

うわー：：。絶対に出席簿アタックが来る：：。

一夏「そうだな。流石の俺も怒る」

ワタル「救世主一行組全員で説教だね！」

零「…それはマジで勘弁してくれ…」

頭を抱く俺だが、不思議と嫌な感じはしなかった…。

俺達はそれぞれの艦に戻り、メガファウナへ集まった。

一夏「零！歯を食いしばれ！」

零「ぐおっ!!？」

いきなりこれだよ。一夏に殴られたよ。

シャルロット「一夏、全力でいったね」

簪「痛そう…」

そうじゃなくて痛いんだよ、簪…。

零「みんな、すみませんでした！ご迷惑をおかけしました！」

千冬「全くだ！愚か者！」

痛!!？これが出席簿アタックか…！

真耶「あ、あははは…。でも、本当に無事で良かったです」

スカーレット「向こうも向こうで感動の再会のような」

竜馬「海道、真上…。お前達も感動しているんじゃないかねえのか？」

真上「バカ言うな、感動するわけないだろ」

海道「逆に見たくもない顔を見た気分だぜ」

スカーレット「ほう？良い度胸じゃないか、馬鹿者共」

竜馬「…まんざらでもない表情じゃねえかよ」

エンネア「九郎…」

九郎「エンネア…おかえり」

エンネア「うん、ただいま！九郎！」

アル「…」

サラ「良いの？アルちゃん」

アル「感動の再会ぐらいは目を瞑ってやろう…九郎も嬉しそうだしな」

リチャード「見知った顔が何人もいるが、やはり別世界の奴らか…」

アーニー「リチャード少佐…」

リチャード「少尉…立派になったじゃないか」

アーニー「僕なんてまだまだです…それよりも、サヤ」

サヤ「…」

リチャード「サヤ…」

サヤ「また…お会い出来て光栄です。お父さん」

リチャード「俺もだ、サヤ」

サヤとリチャード少佐は涙を流しながら、抱きしめあつた……。

リチャード「それよりも少尉……。娘を呼び捨てで呼んでいいとは言つてないが？」

アーニー「うっ!?? そ、それは……！」

リチャード「詳しい話を聞こうじゃないか……。3人でな！」

アーニー「お、お手柔らかにお願いします……」

零「帰つてきたんだな……。俺……」

アマリ「零君!!?」

零「うおっ!??」

目に涙を浮かべたアマリが勢い良く抱きついてきた。

零「あ、アマリ……!??」

アマリ「馬鹿……馬鹿あ……。心配、したんだから！」

零「……ごめんな、アマリ」

俺は抱きつくアマリの頭を優しく撫でた……。

暫くして泣き止んだ後に俺は周りの目線を見て、未だ抱きつくアマリに言った。

零「あの……。アマリさん？そろそろ離れてもらつて欲しいんですが……」

アマリ「え……？」

零「周り周り」

アマリ「周り：．？はっ：．う、うわわ：．こ、これは違うんですううう！」
顔を真っ赤にして、アマリはアタフタとする。

零「あ、あははは：．」

ミレイナ「ブラックコーヒーが飲みたい気分です！」

フェルト「ミレイナにはまだ早いよ」

アネツサ「ヒュー！ヒュー！」

まゆか「アネツサ！からかわないの！」

アルト「零もなかなかの色男だな！」

零「お前だけには言われたくねえよ、アルト」

穴があつたら入りたいぜ：．

ワタル「救世主一行再集合だね！」

アンジュ「ねえ、ワタル：．。その名前変えない？」

ワタル「え？どうして？」

アンジュ「気恥ずかしいのよ：．。もっと別の名前にしましょう」

ワタル「それもそうだね！どうする？」

ゼロ「ウルティメイトアル・ワースゼロってのはどうだ？」

グレンファイヤー「駄目〜！」

ミラーナイト「それは駄目です」

ゼロ「嫌、何でだよ…」

しんのすけ「アル・ワース防衛隊はどう？」

アンジユ「それも気恥ずかしいわよ！」

名前か… どうするか？

アマリ「… エクスクロスというのはどうでしょうか？」

零「エクスクロス？」

アマリ「立場も出身世界も十人十色の者たちが集まっていることから、交わりを意味します」

シヨウ「確かに、俺達にはぴったりだな」

零「じゃあ、俺達は今から、エクスクロスで良いよな？ワタル」

ワタル「うん！救世主一行改め、エクスクロスの誕生だね！」

あ、そうだ、まだ言っていないな。

零「みんな… ただいま！」

俺の言葉にみんなはおかえりと返してくれた…。

第13話

姉妹／SISTER

―新垣 零だ。

俺達は本来の目的であるトツコイ山へ向かおうとしていた……が……。

ワタル「ねえねえ！今ここのって、ルクスの国の近くなんだよね？」

アマリ「そうですけど…… どうかしましたか？ワタル君」

ワタル「ドアクダー軍団の目的って、この世界を支配する事だよね？それと、オニキスもこの世界を戦火に包んでるんだよね？」

零「確かそうだな」

ワタル「だったら、極一部の力しかないルクスの国って、危なくない？」

アマリ「あ……」

零「言われてみればそうだな……。それにレガリアを狙って行動するかもしれないな
！」

エンネア「その点ではどうなの？サラ、ティア」

サラ「確かに危ないね」

ティア「レガリアのコアを脅したり、操ったりすれば、レガリアを手に入れたも同じ

だもんね！」

九郎「ティシスってレガリアは相当な力だった…って事は他のレガリアが敵に回ると厄介だな」

ゼロ「確かにレガリアの力は未知数だからな…」

サラ「うーん、ケイは行方不明だからわからないけど、レナは確かに危険だね！」

ティア「どうして？」

サラ「ユイちゃんを人質に取られたらヤバイ事になるからだよ！」

ティア「た、確かに！」

シヨウ「そのユイとレナという人物もレガリアと関係があるのか？」

サラ「レナはレガリア…マグナ・アレクトのコアなんだ！」

ティア「それでユイちゃんはレナの契約者なんだ！」

レイ「2人と同じというわけか」

ホープス「そのユイというのはエナストリア皇国のユインシエル・アステリア女王陛下

下ですわね？」

エナストリア皇国…？

ティア「オウムさんよく知ってるね！」

ホープス「ホープスです」

零「それはマナの国でいうミスルギ皇国みたいなものか？」

アンジュ「一緒にしない方が良いわよ」

あ… アンジュって、元皇女だったな…。

アンジュ「ユインシエル女皇陛下は若くして、エナストリア皇国をまとめているのよ。
ノーマの私と違うわ」

サラ「アンジュちゃんはユイちゃんを知ってるの？」

アンジュ「私がアンジュリーゼの時に何度か会ってるのよ。真つ直ぐ進む良い女皇
だったわ」

零「そのエナストリア皇国ってのは、此処から近いのか？」

アマリ「うん、此処は北に行った所にあるわ」

エイサップ「凄い偶然だな…」

しんのすけ「じゃあ、そのユイって人をお助けしないと！」

カンナム「よし、それなら艦長達にこの話を…」

スメラギ「その必要はないわ」

刹那「スメラギ、倉光艦長、ドニエル艦長…」

倉光「オニキスやドアクダー軍団の戦力増加は望む事じゃないからね」

ドニエル「クリーム大尉からもレガリアについて調査して欲しいとの通信が入った」

アイーダ「そうなんですか？」

ドニエル「ティシスのようなレガリアが敵に回ると我々の行動にも支障が生じるかもしれない……。それをクリム大尉も気がかりなのだろう……」

ベルリ「じゃあ、そのエナストリア皇国に向かうしかないね！」

アンドレイ「それじゃあ、案内頼むよ？ サラ君、ティア君」

サラ「りようかい！…… あ、もしかしたら、レッツ怒ってるかも……」

ティア「…… 怒られるかなー」

サラ「多分……」

そのレッツってのはサラ達の保護者のようなものなのか？

俺達はルクスの国を調査及び守る為にまずはエナストリア皇国へ向かった……。

ホープス「シャルロット様、簪様…… 少しお話が……」

簪「どうしたの？ ホープス」

ホープス「少し聞かれたくない話なので…… 人が来ない所まで来てもらえませんか？」

シャルロット「それは良いけど……」

ホープス「では、お待ちしております……」

なんか、ホープス達が話してるけど一体何なんだ……？

「氷室 弘樹だ。」

俺はペリドット、カーネリアン、サファイアと共に首領からの命令を受けていた。
? 「ペリドット……。随分勝手な事をした様だな?」

アスナ「申し訳ありません……。私は……!」

? 「良い。ペリドット、これからはお前が指揮を取れ」

カノン「……え!!?」

メル「首領!!?」

アスナ「……ありがとうございます!」

こいつ……何考えてやがんだ!!?

弘樹「あんた……何のつもりだ?」

? 「言葉通りだ。氷室、カーネリアン、サファイア。ペリドットの指揮下に入れ」

弘樹「俺がこの女の命令を聞けつてののか?」

? 「従わなければ、お前の望みは叶わない」

弘樹「……ちっ、わかったよ……」

カノン「氷室さん……」

メル「……了解しました」

カーネリアンの奴、浮かない顔をしているな……。まあ、当然だな。カーネリアンは指揮官だった。それが、急に指揮官でもない、ペリドットの指揮下に入れとか言われればそうなる。

アスナ「つて事よ。私の命令は首領の命令よ。それを忘れない事ね」

メル「……あなたと言う人は……！」

この女……！

だが、俺達は逆らう事も出来ず、ペリドットの言う事を聞くしかなかった……。

「……どうも、ホープスです。」

私は、話があるとシャルロット様と簪様をお呼びしました。

シャルロット「来たよ！ホープス」

簪「話って何？」

ホープス「最近、マスターの様子がおかしいのです」

シャルロット「アマリさんの？」

ホープス「はい。マスターは時に零様の事になるとオドが乱れたり、彼の顔を見て顔

を赤くしたりします」

簪「え？それって：：」

ホープス「その事をマスターに聞くとさらに顔を真っ赤にして、ホープスには関係ないですと言つて、逃げるのです」

シャルロット「うーん、それは恋だよ」

恋：：？

ホープス「恋とは何ですか？」

シャルロット「恋？えつとね：：。アマリさんは零さんの事が好きなんだよ」

ホープス「好きとは：：？」

簪「：：アマリさんは男の人として零さんの事を愛しているって事」

ホープス「愛している！！？：：それはつまり、マスターは零様と結婚をしたいと思いますか！！？」

シャルロット「そ、それはさすがに早いよ！恋人になりたいって事だよ！」

なるほど：：。

ホープス「ですが、零様は別世界の人間ですよ？」

簪「そこが難しい所だね」

ホープス「：：兎に角わかりました。それでマスターを悲しませるぐらいなら、零様

とマスターを引き離れた方がよろしいようですね」

シャルロット「そ、それは駄目く!!?」

簪「それをやるとアマリさんに嫌われるよ?」

ホープス「それも嫌ですね…。シャルロット様、簪様…。お話を聞いて頂きありがとうございます。ありがとうございました」

シャルロット「うん、お役に立てて光栄だよ!」

私はシャルロット様と簪様と別れ、零様を捜しました。

暫く捜していると零様を見つけた事ができました。

ホープス「零様」

零「ん?ホープスじゃねえか。どうしたんだ?」

ホープス「…簡単に手を出させませんからね」

零「は…?」

それだけを言い、零様の元を後にしました…。

零「…あいつ、何が言いたかったんだ?」

私はユインシエル・アステリアです。みんなからはユイと呼ばれています。

私は今、会議室でアオイ、ナルさん、マーガレットさん、ジオナサンさん、テオドアさんとそして、お姉ちゃんであるレナと話をしていました…。

マーガレット「前回のアーベル中佐との戦闘でエナストリアの国民は皆、ユイ様とレナ様を英雄の様に思っている様です」

ナル「あれ一件から、レガリア・ギアによる事件も起きていませんね…」

ユイ「良かった…。怪訝な目で見られると思いましたが…」

レナ「ユイ…」

テオドア「ですが、まずいと言えばまずいですね」

ユイ「え？」

アオイ「レガリアの力を放送した所為で獣の国やマナの国にもレガリアの存在を知られた事になるわ」

ジオナサン「そればかりか、ドアクター軍団や最近ではオニクスなる組織も動いています…。レガリアの力を狙われる可能性があります」

ユイ「つまり…レガリア・ギア以外にもレナを狙う人達が次々と出てくるという事ですか？」

マーガレット「そうなりますね」

レナ「… この街をもっと危険に合わせる事になる… ごめんなさい」

テオドア「レナ様のせいではありませんよ」

ナル「悪いのはレガリア・ギアを使う人達ですよ！」

アオイ「ユイもレナ様も悪くないわ」

ユイ「皆さん…」

私は幸せ者だね…。こんな良い人達に囲まれているんだから…。

ジヨナサン「ですが、もしもこの国が襲われた場合はどうしますか？」

ユイ「その時は私とレナが戦います！」

レナ「！ゆ、ユイ…！」

アオイ「ユイ！それが何を意味するのかわかってるの!?？」

ユイ「勿論わかっています。ですが、この国は私はこの国の女王です！この国は私が守ります！」

ナル「ユイ様…」

マーガレット「… もしもの場合はお願いしますよ？ユイ様、レナ様」

アオイ「マーガレット首相！」

マーガレット「… ですが、無理はしないでください。レナ様もユイ様をよろしくお

願います」

レナ「大丈夫だよ。ユイは私が守るから…」

ユイ「お姉ちゃん…」

すると、警報が鳴りました。

テオドア「け、警報…?!?!」

ジョナサン「どうした?!?!」

ナル「エナストリアの外にオニキスのロボット軍団が現れました!」

マーガレット「恐れていた事が起こったようですね…!!」

ユイ「レナ! 行くよ!」

レナ「うん!」

アオイ「ユイ! 気をつけてね!」

ユイ「行ってきます!」

私とお姉ちゃんは外に出ました…。

オニキスのロボット軍団が現れた事によって、エナストリアの国民はパニックになっ

ています…。

早く何とかしないと…!

レッツ「あつ! ユイ! レナちー!」

ユイ「レッツちゃん！」

彼女は私の友達のレッツ・ナルミです。

レッツ「2人共、行く気なの？」

ユイ「うん！レッツちゃんは避難して！」

レナ「サラとティアは？！」

レッツ「あいつら、昨日から居ないの！」

サラちゃんとティアちゃんが居ない？！

ユイ「2人は一体何処に…？」

レッツ「わからない…」

レナ「あの2人なら大丈夫だよ、きつと！それよりもユイ！オニキスを止めないと！」

ユイ「うん！」

レッツ「ユイ、しつかりね！」

レッツちゃんの言葉に頷き、私達はエナストリアの外まで出ました…。

第13話 姉妹／SISTER

アスナ「なかなかレガリアが出てこないわね……」

弘樹「此処には居ないんじゃないのか？」

アスナ「こうなったら、街に攻撃を仕掛けるしかないわね！」

メル「なっ!? 私達の目的はレガリアの捕獲です！この国の街は関係ないはずですよ！」

カノン「この街には多くの子供も居るんですよ!?」

アスナ「はあ？そんな事知らないわよ。それに指揮権は私にあるの……私に意見しないで」

メル「くっ……！」

弘樹「ペリドット……てめえ、いい加減に……！」

ユイ「待つてください!!?」

私はオニキスのロボットに叫びました。

ユイ「私はエナストリア皇国女皇、ユインシエル・アステリアです！この国に何の用ですか？」

アスナ「女皇が自ら出てくるなんてね。では、女皇陛下。この国にいらると言われているレガリアを明け渡してください」

やつぱり、レナを狙って……！

ユイ「それはできません！」

アスナ「ふーん、ムカつくわね……。だったら、この国がどうなってもいいのね？」

ユイ「そちらがそう来るならこちらにも考えがあります」

アスナ「その考えって何？」

ユイ「私がこの国を守ります！」

アスナ「本当にムカつく女ね！やれるならやってみなさいよ！」

本当は争いたくはないんだけど……この国とレナを狙うというなら……！

ユイ「レナ！」

レナ「うん！」

私の言葉に頷いたレナは力を溜め始めた……。

レナ「闇を知り、闇を還す。永劫の執行者。我が身に宿り耐え無き崩壊に誘え。潰えぬことなき憤怒を湛えし深淵の神器。エリニウスの名に於いてその身を晒せ——マグナ・アレクト！」

黒いエネルギーに包まれ、私はレナの変身したレガリア……マグナ・アレクトに乗る。

レナ「ユイ！レガリア・ギア以外の戦闘だよ！気をつけてね！」

ユイ「うん！一緒に戦おう！お姉ちゃん！」

弘樹「あの女皇自体がレガリアと関係があつたのか…」
メル「では、て初どうりに」

アスナ「ええ。各機、あの赤いレガリアを狙いなさい！」
来る…！

レナ「ユイ…怖くない？」

ユイ「本当はちよつと怖いよ…でも、お姉ちゃんと一緒だもん！大丈夫だよ！」
レナ「ユイ…」

レナ「行くよ、お姉ちゃん！エナストリアは私達が守る！」
私達はオニキスのロボット軍団との戦闘を開始しました…。

〈戦闘会話　ユイVS初戦闘〉

レナ「レガリア・ギア以外の存在と戦う事になるなんて…」

ユイ「今までとは違うって事だよね、お姉ちゃん」

レナ「大丈夫だよ。ユイは私が守るから」

ユイ「ありがとう！でも、私もいつまでも守ってもらうばかりじゃないよ！お姉ちゃん
！」

レナ「じゃあ、行こう！ユイ！」

オニキスのガラムという機体を2機ほど倒す私達。

アスナ「なかなか持ち堪えるわね。女皇と思つて、油断していたわ」

メル「あのレガリアも相当なパワーですね……」

ユイ「はあ……はあ……」

レナ「ユイ、大丈夫？？」

ユイ「だ、大丈夫だよ……」

レナにはそう言つてるけど、正直大丈夫じゃない……。

今までは1機ずつとしかレガリア・ギアと戦つた事がなく、複数の敵との戦闘に疲労を感じていた……。

カノン「このまま包囲して、捕獲しますか？」

アスナ「……いい事思い付いたわ」

弘樹「良い事だと？」

アスナ「エナストリアを攻撃するのよ！」

メル「アスナ・ペリドット！あなたという人は本当に……！」

アスナ「指揮権は私にあるのだけれど？」

メル「・・・くっ・・・」

カノン「メルさん・・・」

弘樹「ろくな目に合わねえぞ・・・ペリドット！」

アスナ「別に？そのろくな目にあう前にケリをつければいいだけよ。各機はエナスト

リアに集中攻撃!!？」

お、オニキス達はエナストリアを包囲して砲撃をしてきた・・・!? 幸い、今のは街に

は当たらなかつたけど・・・

ユイ「やめてください！狙いは私達のはずです！」

アスナ「回りくどいのよ。街を守りたいなら、そのレガリアを渡しなさい」

レナ「なんて外道なの・・・！」

ユイ「くっ・・・！」

このままでは、エナストリアが・・・でも、レナを渡すわけにはいかない・・・！どうすれば・・・！

アスナ「もういいわ、各機！今度は外さずにエナストリアを攻撃よ！」

ユイ「や・・・やめてええええっ！」

サラ「大丈夫だよ！ユイちゃん！レナ！」

そこに現れたのはティシスだった……。

ティシスはエナストリアを包围するガラム数機を撃墜した……。

サラ「ユイちゃん！レナ！怪我はない!!?」

ティア「遅くなつてごめんね！」

ユイ「サラちゃん!!?ティアちゃん!!?」

レナ「2人共、今まで一体何処に行つていたの!!?」

ユイ「レッちゃん心配してたよ！」

ティア「や、やつぱり……」

サラ「これは……怒られるね、絶対……」

でも、2人共無事でよかつた……。

メル「あの白いレガリアは……！」

弘樹「ちよつと待て！あの白いレガリアが居るつて事は……！」

零「その通りだ！オニクス！」

今度は金色の機体が現れた……。

―新垣 零だ。

俺達はエナストリア王国につき、俺は赤いレガリアがオニキスのロボット軍団と戦闘しているところ見て、出撃した。

てか、テイシスも既に出撃していたんだな……。

零「サラ、ティア！先走りすぎだ！」

ティア「ご、ごめんね、零」

サラ「レナ達がピンチでいてもたってもいられなかつたの！」

零「まあ、気持ちはわかるから、これ以上は言わないけどよ……。取り敢えず、ブラスタモード……最大出力、発射!!？」

俺はクロスガン・ブラスタモードのビームを最大出力で発射し、エナストリアを包囲していたガルムを数機撃破し、残り数機には……。

零「アマリ！」

アマリの名を叫ぶとゼルガードが出てきた。

アマリ「嵐のドグマ……！って！TEMPESTA！」

アマリはTEMPESTAで残りのガルムを撃墜させた。

ユイ「魔徒教団のオート・ウオーロック!!？」

アマリ「大丈夫ですか!!？ユインシエル女皇陛下！」

ユイ「は、はい……。あなた達は……？」

零「メガファウナ達も来たようだぜ！」

メガファウナ、シグナス、プトレマイオスが到着して、みんなは出撃する。

ゼロ「ワタルの予想は大当たりだったみたいだな！」

グランデイス「流石じゃないか！救世主様」

テイエリア「確かに彼の提案がなければ、あの赤いレガリアはオニキスのものとなっていたのかもしれないな」

サンソン「救世主さままだな！」

ハンソン「グッジョブだな！ワタル！」

ワタル「えへへっ！そこまで褒められると照れちゃうよ！」

レナ「こ、この人達はいったい……？」

テイア「テイア達のお仲間だよ！」

ユイ「お仲間……？」

サラ「うん、そうだよ！」

アンジュ「まさか、女皇陛下自ら、戦場に出るなんてね……」

ユイ「その声はアンジュリーゼ皇女ですか……？」

アンジュ「……今の私はアンジュだから」

ユイ「え……？」

シバラク「話はそこまでにした方が良いぞ！」

ケロロ「今はオニキスを対処した方がいいであります！」

セシリー「そのようですね！」

シーブック「あの街を守りながら戦わないとな……！」

てか、あのメル・カーネリアンの指揮でエナストリアを狙ったのか……？

弘樹「零！救世主一行が来たか！」

しんのすけ「今のオラ達はエステバリスだゾ！」

アルト「エクスクロスだ！」

アキト「それじゃ、機体名になるよ、しんちゃん」

アスナ「そんなのどっちでもいいわよ！新垣 零！今度こそあなたを捕まえる！」

零「お前も懲りないな！アスナ・ペリドット！」

メル「新垣 零さんが来たなら、好都合です、レガリア共々捕獲します！」

カノン「行きますよ、新垣さん！」

弘樹「零！ケリをつけるぞ！」

零「お前らには感謝しないとダメなんだが……だが、今は戦わせてもらおうぞ！」

レナ「ど、どうするの……？ユイ！」

ユイ「サラちゃん達の知り合いなら悪い人ではないはずよね……。レナ、今はあの人達

にも手伝ってもらおうよ！」

レナ「う、うん……！わかった！」

ヴィヴィアン「あっちのお姫様は素直だね」

エメラナ「本当ですね！」

アイーダ「どうして……」

アンジュ「私達を見るのよ？」

ヴィヴィアン「別に」

零「揉め事は後にしろ！オニキスが来るぞ！」

千冬「各機はオニキスの迎撃をしてくれ！」

一夏「了解！」

赤いレガリア……アレクトを加えた俺達エクスクロスとレガリアの戦いが始まった……

〈戦闘会話 サラVS初戦闘〉

サラ「ユイちゃんとレナを傷つけた分を仕返してやる！行くよ、ティア！」

ティア「うん！ユイちゃん達の国はやらせないよ！」

〈戦闘会話 零VSカノン〉

零「カノン・サファイア、お前にも世話になったみたいだな」

カノン「すっかり元に戻ったようで良かったです」

零「できればお前とはやりあいたくないんだけどな……」

カノン「それは叶いません。あなたは私達の敵なのですから……」

零「そうだな……。だったら、ここからは本気だ！」

俺達はカノン・サファイアの乗るジェイルを追い詰める。

カノン「くっ……。！まだ、ジェイルになれない……！」

弘樹「此処は退け、サファイア！後は俺達に任せろ！」

カノン「了解しました……。カノン・サファイア、撤退します」

カノン・サファイアの乗るジェイルは撤退した……。

零「弘樹、バカのお前がカノン・サファイアには優しいんだな？」

弘樹「茶化すな零、あいつは危なっかしいから見てられないだけだ」

零「……お前も大概だけだな」

弘樹「なんか言ったか!?？」

絶対に聞こえてんだろこのバカは……。

アンドレイ「彼等は本当は仲が良いのでは……？」

セルゲイ「そこに今は触れるなアンドレイ」

誰がこのバカと仲が良いですか。

〈戦闘会話 零VSMメル〉

零「メル・カーネリアン！ どうして、エナストリアを攻撃した!?？」

メル「今の指揮権はアスナ・ペリドットにありますので……」

零「だからって……！」

メル「私だって、こんな事したくありません！」

零「お前……」

メル「正直、あなた達が来てホツとする自分がいます……。ですので、あなたは確実に捕らえます！」

〈戦闘会話 ユイVSMメル〉

メル「ユインシエル・アステリア女皇陛下……。先程の行動について謝罪します……。

すみませんでした……」

ユイ「……え？は、はい……」

レナ「気をつけて、ユイ！罨かもしれないよ！」

メル「私は決してその様な卑怯な真似はしません……ですが、全力で参る事は忘れな
いでください」

ユイ「わかりました！でも、私達も手加減はしませんから！」

俺達の攻撃を受けて、メサイアはダメージを負った。

メル「此処まで差があるなんて……！」

アスナ「情けないわね、メル……。それでも『元』指揮官なの？」

メル「……くっ……」

零「お前がそいつをバカにすんなよ！」

弘樹「てめえも似た様なもんじゃねえかよ、ペリドット」

アスナ「……何ですって？」

弘樹「カーネリアン、撤退しろ！」

アスナ「なっ!? 勝手な指示を出さないでよ！」

零「できれば次は戦いたくないな……」

メル「零さん……。申し訳ありません、氷室さん。後は任せます」

弘樹に礼を言い、メサイアは撤退した……。

ディオ「零さん、やたらとあのカーネリアンという女に気をかけてる様ですけど……」
零「……」

青葉「ディオ、それ以上は聞かない事にしようぜ」

ディオ「だが、今後の戦闘に支障が……」

零「大丈夫だ、ディオ」

ディオ「ですが……！」

グレンファイヤー「硬いんだよ、ディオは！零が大丈夫って言ってんなら大丈夫だ！」
ディオ「……了解」

竜馬「言うじゃねえか、グレン。お前とは気が合いそうだぜ」
グレンファイヤー「おう、そうだな！竜馬！」

真上「暑苦しい奴らだ」

海道「そうか？ああいうのも良いぜ」

スカーレット「類は友を呼ぶというやつか」

海道「ああ!!?誰と誰が友だ!!?」

エイサツプ「か、海道さん落ち着いてください！」
スカレット「このバカは放っておいて、戦闘を続行するぞ」
しんのすけ「ブ・ラジャー！」

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

弘樹「零！まさか、お前が来るなんて予想外だったぜ！これこそ飛んで歯に入る冬の鳥ってやつだな！」

零「・・・飛んで火に入る夏の虫だ、バカ。お前も相変わらずだな、バカ」

弘樹「人をバカバカ言うな！」

零「なら、阿保」

弘樹「一緒にやねえかよ！・・・どうやらいつも通りだな」

零「おかげさまでな」

弘樹「だったら、もう加減する必要はねえな！」

零「ああ、全力で来い！」

〈戦闘会話 零VSアスナ〉

アスナ「認めない……！あなたがバスタードモードを使えるなんて、絶対に……！」
零「使えるもんは仕方ねえだろ！」

アスナ「それはあいつの力なのよ！あなたごときが使わないで！」

零「そのあいつがどう言うやつかは知らないけど、今は俺の力だ！お前にとやかく言われる筋合いはない！」

アスナ「新垣 零いいいつ！」

零「怒り狂ったか……。だが、流星の俺もお前には腹が立ってんだ……。ケリをつけるぜ、アスナ・ペリドット！」

〈戦闘会話 アマリVSアスナ〉

アマリ「アスナ・ペリドット、私はあなたを許しません！」

アスナ「アマリ・アクアマリン！あなたのせいで新垣 零は……！あなたはここで消す！」

アマリ「零君は私を守ります！それに、私も死ぬつもりはありません！」

ホープス「（これが恋……。ですか……）」

〈戦闘会話 ユイVSアスナ〉

アスナ「ユインシエル女皇陛下、大人しくそのレガリアを渡しなさい！」

ユイ「レナは絶対に渡しません！私のたった一人のお姉ちゃんなのですから！」

レナ「ユイ……！」

アスナ「だったら、あなたを倒してでも……！」

レナ「ユイはやらせない！私のたった一人の妹なんだから！」

ユイ「お姉ちゃん……行くよ！」

〈戦闘会話　サラVSアスナ〉

サラ「ユイちゃん達を傷つけたお返しだよ！」

ティア「ユイちゃん達に謝れー！」

アスナ「私は別に悪い事してないわよ、謝る必要なんてないわ」

ティア「悪い人がよく言う言葉だ……」

アスナ「勝手に言つてなさい！あなたのレガリアもあの赤いレガリアと一緒に捕獲してあげるわ！」

サラ「ティアもレナもあんた達に渡すもんですか！」

俺達はガラム部隊を全滅させ、アレクトはリリスに攻撃を繰り出し、俺がそれを援護し、追い詰めた……。

アスナ「くっ……！良いところまで来たのに……！」

弘樹「ほらな、ロクな目に合わねえだろ！」

アスナ「うるさい！氷室 弘樹！メルやカノンが退かなければこんな事には……！」

？「自分の失態を他の奴のせいにするのは感心しないな」

アスナ「！」

アーニー「あ、あれは……!?？」

現れたのは紫の機体と赤い戦闘機だった。

弘樹「スペンサーとデイルン……。お前達が何故ここへ……!?？」

ジン「アスナ・ペリドット、氷室 弘樹……。首領からの命令だ、退かれ」

アユル「後は私達が引き受けます！」

アスナ「異界人のあなた達にこの場を任せろって!?？ふざけないで！」

ジン「お前達は自分達の首領の命令を聞けないのか？」

アスナ「くっ……！氷室、此処は退くわよ」

弘樹「俺に命令すんな！零、勝負は次だ！覚えていろ！」

突然の増援にヴァリアスとリリスは撤退した……。

サヤ「ヴィジャーヤにドラウパ……!?少尉……彼等は！」

アーニー「オニキスの彼等からは既に話を聞いていたが……本当にアル・ワースにいたんだな、ジン！アユル！」

ジン「久しぶりだな、アーニー」

アーニー「この異世界でも戦うというのか！」

ジン「あの時から既に俺達はこうなる運命だったんだよ！」

アーニー「ジン……！」

アユル「お姉様……。今度は負けません！」

サヤ「あなたまでこのアル・ワースに……。どつしてオニキスにいるんですか！」

アユル「私達が私達のままでいるためです！それにジンがいるところに私がいるんです！」

サヤ「アユル……」

アーニー「サヤ、戦うしかない……。これが僕達の為すべき事だ」

サヤ「ですが……。わかりました」

リチャード「戦えるのか？かつての友人と……」

アーニー「迷いはあの時に捨てました……。だから、大丈夫です！」

リチャード「成長したな……。お前も」

零「俺達も手伝うぜ、アーニー」

アーニー「ありがとう…」

マサキ「この手の敵は今更じやねえか！」

夏美「兎に角、機体を止めます！」

ジン「行くぞ、アーニー！」

アーニー「来い、ジン！」

俺達はヴィジャーヤとドラウパとの戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VSジン〉

ジン「お前が氷室の言っていた新垣か」

零「俺の事を知っている…？弘樹の奴…人の事をベラベラと…」

ジン「あいつとは相当仲が良いらしいな」

零「ただの腐れ縁なだけだ…そういうあんたはどうなんだよ？」

ジン「…あの様な運命がなければ、昔のお前達のように笑いあっていたのかもしれないな」

いな…」

零「…その運命に抗う事だつてできたはずだろ？」

ジン「知った様な口を聞くな、アーニーの前にお前を倒す！」

〈戦闘会話　アーニーVSジン〉

ジン「お前とこうしてまた戦う事とはな、アーニー！」

アーニー「僕はUXに入り、君はノーヴル一派に入った。。。君の言う通り、こうなるのは運命だったのかもしれないな。。。」

ジン「今度は俺とアユルが勝つ。。。！絶対に！」

アーニー「負けない。。。！僕だって、負けられない理由があるんだ！」

〈戦闘会話　サヤVSジン〉

サヤ「スペインサー大尉。。。あなたは！」

ジン「お前の命の輝きがアーニーをもっと強くする。。。もっと輝かせてみせろ！」

サヤ「ならば、見せてあげます！私とアーニーの命の輝きを！」

〈戦闘会話　リチャードVSジン〉

リチャード「お前さんには悪い事をしたな」

ジン「今更謝るな、俺達の運命は既に決まっていたんだよ」

リチャード「ふつ、初めて戦闘した時とは大違いな落ち着き様だな」
ジン「過去の俺は過去の俺だ……。俺は今を生きている。それだけだ！」

〈戦闘会話 アーニーVSアユル〉

アユル「ベルジュ少尉！ジンの邪魔はさせません！」

アーニー「ならば、君を倒してでもジンを倒すだけだ！」

アユル「命を知った私を簡単に倒せると思わないでください！」

アーニー「僕達だって、命の輝きを知っている！抜かるつもりはない！」

〈戦闘会話 サヤVSアユル〉

サヤ「アユル……。どうしても戦うと言うのですか！」

アユル「お姉様……。ジンとベルジュが戦う運命の様に私とお姉様も戦う運命なのです！」

サヤ「お互い、命を知ったもの同士……。ですか……」

アユル「ですから、お姉様！この姉妹対決は私が勝ちます！」

サヤ「簡単に行くと思わない事です！私も負けるつもりはありませんから！」

〈戦闘会話　リチャードVSアユル〉

リチャード「お前は……！」

アユル「あなたが、リチャード・クルーガー……。お母さんのお友達なのですわね……」

リチャード「お母さん……。ノーヴル・ヴィランの事か……。彼女は死んだと聞いたが？」

アユル「お母さんがこのアル・ワースにいるかどうかはわかりません……。ですが、お母さんが友と認めたあなたの事を知りたいです！」

リチャード「お前がサヤの妹の様な存在なのなら、俺にとって娘同然だな、来い相手になつてやる！」

〈戦闘会話　海道VSアユル〉

アユル「別世界の真上　遼さん……」

海道「あん？別世界のお前の事を知っているみたいだぜ？真上」

真上「お前は……。まさか……」

アユル「はい、私もエルプスウンデです」

海道「はあ!? それって、真上と同じじゃねえか！」

真上「お前も作られた命なのか……」

アユル「お仲間ですね。だからと言って手加減は無用です！」

海道「へっ！真上がそんなんで手加減するとも思ってたのか！」

真上「そうだな、同じ仲間同士地獄を見ようじゃないか！」

俺達はヴィジャーヤとドラウパを追い詰めた……。

アユル「ジン……そろそろ……」

ジン「頃合いか……。アーニー、勝負はお預けだ。また会おう」

そう言い残し、ヴィジャーヤとドラウパは撤退した……。

九郎「あいつら、結局何だったんだ……？」

ゼロ「俺達の力を測る為に来たのか……？」

アーニー「(ジン、君は……)」

ユイ「ふう……終わった……」

レナ「お疲れ様、ユイ」

零「ユインシエル女皇陛下……お疲れのところ申し訳ありませんが、俺達の話聞いて

てもらえませんか？」

ユイ「はい、皆様も王宮へ来てください」

ミラーナイト「ですが、我々が町に入っても大丈夫なのでしょうか……」
一夏「何でだ？」

スカーレット「エナストリアを守ったといえ、私達の力を見たら、国民は恐れの日を向ける可能性があるからだ……」

ユイ「そこは大丈夫だと、思います。国民の人達は良い人達ばかりですから」

竜馬「だが、全員で行くわけにはいかないだろ」

アーニー「でしたら、ドニエル艦長、倉光艦長、スメラギさん、ヒユウガボス、織斑先生、零君、アマリさん、ワタル君でどうでしょうか？」

ゼロ「そのメンバーなら大丈夫そうだな」

レイ「ボス、頼んだ」

ヒユウガ「わかった！行きましょう、皆さん」

アマリ「零君、私達も行きましょう」

零「そうだな」

俺達はロボットから降り、ユインシエル女皇陛下の案内の元、エナストリア国内に入っていった……。

「僕、アニエス・ベルジュはみんなと艦長達を待っていた……。」

その間に真上特務中尉はアユルの存在に気づいたのか、サヤに話しかけていた。

真上「クルーガー……。お前もエルプスウンデだったとはな……。」

サヤ「隠すつもりはなかったのですが……。すみません……。」

真上「気にするな、所詮は別世界の話だ……。」

ロツクオン「零達、大丈夫なのか？」

刹那「流石に追い出される事はないはずだが……。」

ゼロ「まあ、あいづらならうまくやってくれるだろ！」

僕達は零君達がうまく話をしてくれると信じて彼等の帰りを待った……。

？「別世界の存在か……。ライルや刹那達も大変だな……。」

この中に名のわからない者が乗っている事も知らずに……。

「俺、新垣 零は艦長達、ヒュウガボス、アマリと共にエナストリアの宮殿に入り、ユインシエル女皇陛下達と話をしていた。」

マーガレット「異界人……それらの組織、エクスクロスですか……」

ジョナサン「俄かには信じがたいですな……」

千冬「ですが、事実なのです……」

アマリ「魔従教団の術士である私が保証します」

テオドア「確かに、異界人なる情報もチラホラと聞いた事があります」

ナル「では、皆さんは何を目的とした組織なのですか？」

ワタル「1つはドアクダーを倒す為だよ」

レナ「ドアクダーを……倒す？」

ヒュウガ「創界山の虹の色を取り戻す為な戦っているんです」

倉光「そして、もう1つは元の世界の帰還の為です」

ユイ「元の世界……ですか」

ドニエル「我々は別世界の集まりですので、主にそれが目的です」

スメラギ「その為にはドアクダーを倒さないといけないという事です」

アオイ「それが……エクスクロスですか……」

マーガレット「では、どうしてエナストリアに？」

零「今回の様に各敵がレガリアの力を狙って、ルクスの国に襲いかかると思い、来ました」

レナ「やっばり、私の力を狙って……」

アマリ「ですから、私達は敵ではないのです……。これがお話してできる全てです」

マーガレット「……ユイ様、いかがいたしますか？」

ユイ「私は……この人達を信じてみようと思います」

アオイ「ユイ……」

ユイ「それに、例え、どの様な理由があろうともエナストリアを守ってくれた事は事実です。皆さん、エナストリアを代表してお礼を申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました！」

零「やめてください、陛下。俺達はただしき事をやっただけです」

千冬「それで、陛下……少しお願いが……」

ユイ「何でしょう？」

倉光「エナストリアの国民に我々は敵ではないとお伝えして欲しいのですが……」

ユイ「わかりました。アオイ、数時間後に会見を開くわ」

アオイ「身体は大丈夫なの？ユイ。戦ったばかりでしょ？」

ユイ「大丈夫よ、私は。皆さんもゆつくりとごくつろぎください」

零 「ありがとうございます！」

これで兎に角、エナストリアに憎悪の目で見られる事はない様だな…。俺達は会見まで、それぞれの艦へと戻っていった…。

第14話

立つ／STAND UP

「私はメル・カーネリアンです……。」

前回の戦闘後、私は首領様の所へ向かいました。

理由はアスナ・ペリドットの事です。

メル「首領様……お話があります」

？「何だ？」

メル「何故、アスナ・ペリドットに指揮をおまかせになるのですか？」

？「理由などない。ただ、あいつの指揮能力が高いからあいつに任せているだけだ」

でも、彼女は……！

メル「で、ですが、彼女は……！」

？「カーネリアン。任務を失敗し、挙げ句の果てには新垣 零に情を移すお前に指揮を任せるとでも思ったのか？」

メル「……っ！」

？「それよりもお前に命令を与える」

メル「え……？」

？「明日もう一度、ペリドットに指揮を任せ、今一度レガリアを狙う。お前はその前にエナストリア皇国の内部を調べて来い。失敗は許されないぞ」

メル「内部を……わかり……ました……」

私は俯きながら、部屋を後にしました……。

辛い……助けて欲しいです……。でも、氷室さんもカノン・サファイアも別に任務でいません……。零、さん……。

……どうして敵である彼の顔が頭に浮かぶのでしょうか……？

―新垣 零だ。

ユインシエル陛下が会見を行う事になったのは良いが、その会見の場に俺とアマリが出席している。

いや、何でだよ！こういうのは艦長方や千冬さんとかじゃねえのかよ！

すると、ユインシエル陛下がマイクの前に立ち、話し始めた。

ユイ「先程のエンASTリア皇国外で起こった戦闘は皆様もご存知だと思います。私も戦いました。そして、エンASTリア皇国を襲ったオニキスという組織……彼等の攻撃もありましたが、被害者が出ていないという事を聞いて、胸を撫で下ろしています」

これで本当に17歳なのか……？しつかり、話せてるじゃねえか……。

ユイ「オニキスとの戦闘中、もう1つの勢力が私達の前に現れました……。それが彼等、エクスクロスです！」

エクスクロスという名を聞いて、皆はガヤガヤと話し出す。

ユイ「彼等、エクスクロスはアル・ワースを騒がせているオニキスやドアクダー軍団とは違い、アル・ワースを守る為……。そして、ドアクダーを倒す為に活動している独立組織です。現に彼等は私達を攻撃せずにエンASTリア皇国を守る為に奮闘してくださいました」

あの戦闘を国民の人も見ていてくれたのか何人かは頷いていた……。

ユイ「ですので、エンASTリア皇国、国民の皆様……。どうか彼等を受け入れて貰えないでしょうか？彼等には様々な種族がありますが、正義の心は1つです。」

正義の心……か……。

ユイ「ユインシエル・アステリアが宣言します！エンASTリア皇国はエクスクロスと手を取り合い、同盟を結びます！」

ユインシエル陛下のその言葉に皆は立ち上がって拍手した。

…これって…うまく、いったんだよな？

ユイ「折角ですので、エクスクロスの方からお話をしてもらいましょう」

…ん？

アマリ「零君…」

…俺えっ!??よりにもよって俺えっ!??

ま、まあ…アマリは脱走者だから仕方ないか…。うん、仕方ない！

俺は前に出て、マイクの前に立った。

零「エクスクロス所属の新垣 零です。ユインシエル女皇陛下がおっしゃった様に俺達はドアクダーを倒す事を目的とした独立組織です。俺達は種族、年齢、など統一のな
い言わば寄せ集めの組織です」

皆は真剣な顔で聞いている。

零「俺達がエナストリア皇国に来たのは、先ほどの様にオニキスやドアクダー軍団がこのルクスの国を襲う可能性を考えた為です。そして、俺達の予想は的中し、オニキスはエナストリア皇国を襲いました。間に合って、ホツとしています」

実際、本気でホツとしているからな…。

零「国民の皆さん俺達は出て行けと言われれば出て行きます。ですが、皆さんが俺達

を信じてくれると仰るなら… エナストリアで時間を過ごす事を許してくださいませんか？勿論、エナストリア皇国が危機に陥れば、俺達もエナストリア皇国を守る為に立ち上がります。どうか、よろしくお願いします！」

俺は一步下がって、頭を下げた。

すると、またもや大きな拍手が聞こえ、俺は顔を上げると皆は笑顔でこつちを見ていた…。

それで俺は確信した…。 エナストリア皇国はユインシエル陛下が思う様にいい国だと…。

ユイ「ありがとうございます。これにて会見を終了させていただきます」
ユインシエル陛下のその言葉で会見は終了した…。

零「ふう…。 き、緊張した…」

アマリ「お疲れ様、零君」

零「お疲れ様じゃねえよ… 見事に逃げやがって…」

アマリ「だって、私…。 大勢の前で話すのは苦手だから…」

零「まあ、貸し一個な」

アマリがそういう性格なのはわかってるっての。

ユイ「零さん、お疲れ様でした」

零「いえ。今回の会見を開いていただき、ありがとうございます。ユインシエル女
皇陛下」

ユイ「私の事はユイと呼んでください！」

アマリ「で、ですが…」

ユイ「零さんやアマリさん達はこの国のものではありません…。ですので、ユイツて
呼んでください！」

零「わかったよ、ユイ」

アマリ「それにしてもプライベートと女皇陛下の姿を使い分けるなんて凄いですね」

ユイ「初めの頃は大変でしたが、慣れとは怖いものですね！零さん、アマリさん…エ
クスクロスの皆さんにエナストリアを紹介します！」

俺達は一度、艦に戻り、ユイにエナストリアを紹介してもらったことにしたが、驚いた
事がある…。

国民の人達が俺達の事を祝って、祭を開いていてくれる事だ。

屋台の用意とかはつつこんだらダメだが、正直嬉しい…。

俺達はそれぞれ別れて、祭を楽しむことにした…。

海道さん、真上さん、スカーレット大尉は祭には行かずに艦内にいた。

真上「随分賑やかだな」

海道「祭り事なんだろう？」

真上「お前も行きたいんじゃないのか？」

海道「バカ言え、俺達に祭りは似合わねえよ」

スカーレット「お前達の場合、地獄祭りがお似合いだな」

海道「何だ、お前も残ったのか」

スカーレット「お前達と同じでな」

シバラク「そう言うと思って、持って来ましたぞ」

海道さん達の元にワタル、しんのすけ、ヒミコ、シバラク先生、クラマ、カンタムが歩いて来た。

クラマ「やっぱり、お前らは此処にいたか」

カンタム「待っているだけではつまらないだろうと思って、屋台の食べ物を持って来たよ」

ヒミコ「みんなで一緒に食べるのだ！」

そう言って、渡したのは焼きそばとわたあめだった。

海道「へえ、気がきくじゃねえか」

しんのすけ「オラが持つて行こうって言ったんだゾ！」

スカーレット「野原、礼を言う」

しんのすけ「スカーレットお姉さんに褒められたゾ」

真上「…それが目的だろ。戦部、俺達と居ていいのか？」

ワタル「海道さんも、真上さんも、スカーレットさんも仲間だもん！みんなで楽しく食べたいよ！」

スカーレット「では、お言葉に甘える事にしよう…」

プトレマイオス組、アンドレイ大尉、セルゲイさん、パトリックさん、シーブック、セシリー、アンジュ、ヴィヴィアンは別の所を見回っていた。

セシリー「沢山の人がいいますね…」

シーブック「みんな、楽しそうだな…」

パトリック「大佐と来たかったぜ…」

ロックオン「何だ？嫁さんと来た事ないのか？」

パトリック「まあな、大佐は忙しいんだよ」

セルゲイ「昔良くこう言う祭に行ったな、アンドレイ」

アンドレイ「そうですね、もう前の話ですけど…」

マリ―「子供達も楽しんでるわね」

アレルヤ「僕達が見たかったのはこれなのかもしれないね…」

スメラギ「そうね！じゃんじゃん楽しみましょう！」

ラッセ「もう完全に酔ってるな… スメラギさんは…」

ミレイナ「アーデさん！チョコバナナを食べるです！」

テイエリア「待て、ミレイナ。君はもう10本目だろ」

刹那「…」

フェルト「刹那も… 笑うんだね」

刹那「俺だつて人間だ、楽しい事があれば笑う…。それをフェルト達が教えてくれたのではないのか？」

フェルト「うん、そうだね」

ヴィヴィアン「おー！いっぱい屋台があるね、アンジュ！」

アンジュ「…」

ヴィヴィアン「アンジユ？」

アンジユ「何でもないわよ。(ミスルギ皇国と大違いね……)」

グランデイスさん、サンソンさん、ハンソンさん、ジャン、ナディア、マリー、キング、シヨウ、チャム、エイサップ、エレボスもそれぞれ見ていた。

グランデイス「本当に仲の良い国だね」

シヨウ「みんなが信頼しあってるって事だな」

チャム「それもユイのおかげって事だね！」

サンソン「あの姫さんもなかなかの強い人間だもんな」

ハンソン「姫はほとんど強いかもよ？」

エレボス「あながち間違っていないかもしれないよ！」

マリー「楽しいね、キング！」

キング「！」

ナディア「みんな……笑ってる……」

ジャン「そう言うナディアも笑ってるよ？」

ナディア「……うん」

青葉、デイト、まゆか、アネツサ、ベルリ、アイーダ、ノレド、ラライヤ、一夏、シャルロット、簪、千冬組は……。

アネツサ「綿菓子に焼きそば、焼き鳥！ いっぱいあるね！」

ラライヤ「いっぱいある！」

まゆか「は、はしやぎ過ぎだつて！ アネツサ！」

ノレド「ラライヤも楽しそうだね！」

アイーダ「こう言うのも良いものですね」

ベルリ「そうですね！ 僕も楽しいです！」

デイト「どうして俺まで……」

青葉「良いじゃねえかよ、デイト。折角、羽を休めるチャンスなんだからよ」

千冬「こう言う祭を見ていると篠ノ之神社の祭を思い出すな」

一夏「昔よく行ったもんね、簪とも」

シャルロット「ふーん、簪と仲良く行ったんだ」

簪「一夏のバカ」

一夏「何でだよ!!?」

ゼロ、グレンファイヤー、ミラーナイト、エメラナ、レイ、ヒュウガボス、九郎、アル、エンネア、竜馬、ケロロ、冬樹、夏美、アルト、アキト組は……。

グレンファイヤー「人がいっぱいだけ!」

竜馬「グレン、あんまりはしゃぐなよ」

ケロロ「ガン普拉売ってるでありますかな?」

冬樹「流星に売ってないと思うよ……」

夏美「実物見てみましょうが……」

エンネア「はい!九郎!あーん!」

九郎「いや、待て!エンネア!自分で食べる!」

アル「つと言ってる割に何、鼻の下を伸ばしておるのだ、このうつけめー!!?」

九郎「ぎやあああああつ!!?」

アルト「みんなに迷惑がかかるから程々にしておけよ」

アキト「そこは止めるべきだと思うよ」

エメラナ「民がこの国で暮らしている事に誇りを持っていきますね」

ミラーナイト「それはエスメラルダも同じですよ、姫様」

ゼロ「今度久しぶりにナオにも会いに行くか！」

レイ「これが祭りというものか……」

ヒユウガ「賑やかだろ、レイ？」

レイ「そうだな……悪い気はしない」

アーニー、サヤ、リチャード少佐、マサキ、クロ、シロは……。

クロ「魚もあるニヤ！」

シロ「美味しいニヤ」

マサキ「あまり喰いすぎるなよ……」

リチャード「こういう時は巫女の姿が似合うぞ、サヤ」

サヤ「巫女……ですか？」

アーニー「サヤなら巫女姿似合うと思うな」

サヤ「そ、そうでしょうか……？」

マサキ「あの天然組には突っ込まない方が良いな……」

そして、俺、アマリ、ホープス、ユイ、レナも見回っていた。

零「でも、本当に俺達の世界の祭りと似ているな……」

ユイ「そうなんですか？」

ホープス「だから、言っただけでしょう？似ていると」

零「……ホープス？」

ホープス「マスター、すみません。私は先に戻っています」

アマリ「え、あ……ホープス！」

ホープスの奴……行っちまいやがった……。

レナ「あのオウムと仲悪いの？」

零「最近やたらと俺に対して冷たいんだよな……。アマリ、何か知らないか？」

アマリ「いえ、わからないわ……。私も驚いているもの……」

あいつ、一体どうしたんだ……？

そして、俺達は焼き鳥屋の前に止まる。

ユイ「あ！レツちゃん！」

レツ「おー！ユイにレナちーにエクスクロスの人だね！」

零「ん？ユイの友達か？」

ユイ「はい！そうです！」

レツ「レツ・ナルミです！よろしくお願いします！」

零「ああ、よろしくな、レツ」

アマリ「あれ？サラちゃんにティアちゃん」

ティア「あ……零にアマリちゃんだ〜！」

サラ「た、助けて〜！レツが虐めるの〜！」

レツ「こら！誤解させる事を言わないの！あんた達が勝手に何処かへ行つて、心配させるからでしょ！」

零「それでもレツ、サラ達は俺達を助けてくれたんだ、あまり怒らないでやってくれ」

サラ「れ、零……！」

零「それ終わったら、みんなでパーっと遊ぼうぜ！」

ティア「うん！ティア、頑張る！」

レツ「そこまで怒ってはないですよ、無事に帰ってきていますし……」

ユイ「あ！そうだ、レナ！私達もレツちゃん達を手伝おうよ！」

レナ「え!?でも、零達が……」

俺達の心配なんてしなくても良いのに……。ん？っ？あいつは……！
突然見かけた人物に驚き、俺はアマリ達に声をかけた。

零「……悪い、みんな！ちよつと1人で行動して良いか？」

アマリ「え？大丈夫だけど……」

零「サラ、ティア！後で必ず遊ぶから頑張れよ！」

サラ「うん！」

ティア「ティアも頑張る！」

それだけを聞き、俺は見つけた人物を追いかけるように小走りした……。

1メル・カーネリアンです……。

私は首領様から言い渡された様にエナストリア皇国の国内に入り、街を調べていまし
た……。

今は新垣 零さん達、エクスクロスを祝う祭をやっているそうです。

メル「それにしても……皆さん、良い方ばかりですね……」

この国に生きている人達は皆、笑顔で手を取り合っています……。

こんな国を攻め落とすのですよね……。

すると、私は3人の男の人に呼び止められました。

男「あれ？君可愛いね！」

男2「この国の子？俺達ね、別の国から来たんだ！」

メル「私も別の国から来ました…。」

男3「おー！奇遇だな！ねえ、俺達と一緒に遊ばない？」

男「絶対楽しいよ！」

声がかけられたのがオニキスの私で良かったです…。この国の人達ではなく…。

メル「申し訳ありません、用事があるので」

男2「良いじゃん！用事なんて放っておけば」

男3「俺達と楽しい事しようよ！」

メル「良い加減に…！」

男「良いから来いっての！」

男の1人に腕を勢いよく掴まれました…。

メル「い、いや…！」

男2「暴れんたっての！」

男3「大人しく来てればこんな事にならなかったのによ！」

メル「だ…誰か…誰か、助けてください!!？」

男「叫んだって誰も助けてくれねえだろうよ！」

零「まあ、ここにいるんだがな」

わたしを強引に連れて行こうとしていた男の人達を殴り飛ばしたのは新垣 零さん
でした……。

男「て、てめえ！何だ!!？」

零「この子に近づくな」

男2「格好つけてんじやねえぞ！」

男3「やっちまえ！」

3人の男の人は零さんに殴りかかりましたが、それを零さんはかわし、カウンターを
浴びせました。

それを受けた男の人達は涙目ながら逃げて行きます。

零「つたく、つまらない軟派しやがって……。大丈夫か？」

気づけば、膝を地面についていた私に零さんは手を差し伸べてくれました。

メル「は、はい……」

零さんが私を立たせてくれて、私達は近くのベンチで座る事になりました。

メル「危ない所を助けていただき、ありがとうございます」

零「お礼を言われる程じゃねえよ。怪我はないか？」

メル「はい……。」

新垣 零さん…… 私に気づいているのでしょうか……？

零「アンタは別の国の出身だって言ったな？ どうしてこの国に？」

え……？ 気づいて…… いない……？

メル「色々な国を旅しているんです」

零「そうか、この国はどうだ？ 良い国だろ？」

メル「はい！ 皆が笑顔で手を取り合っているととても良い国です！」

すると、ギュルルルと音が鳴り、私は顔を赤くしました。

私のお腹が鳴ったからです。

メル「……」

だって、朝から何も食べていないので……。

零「ちよつと待つていてくれ」

そう言い、零さんは近くの屋台から焼きそばを2つ購入して、1つを私に渡しました。

メル「あ、ありがとうございます……」

私は焼きそばを受け取り、一口口に運ぶ。

メル「お、美味しい……」

零「うん、確かにうまいな！ この焼きそば…… 何で泣いてんだよ」

メル「え……!!?」

零さんにそう言われ、私は頬に手を当てると確かに涙を流していた……。

メル「私は……私は……！」

零「……首領に偵察でもして来いって言われたのか？メル・カーネリアン」

つ……!!? やっぱり気づいて……！

メル「気づいていたんですね……」

零「安心しろ、お前をどうこうするつもりはない」

メル「零さん！聞いてください！」

零「……？」

メル「アスナ・ペリドットは再び、このエナストリア皇国を攻撃するつもりです！」

わ、私は何を……!!?」

零「……そんな、作戦目的を俺に話して良いのかよ」

メル「わからないんです……。私は、首領の考えが……だから、こんな酷い真似はしたくないんです……。でも、今の私は首領がいたからいるんです……」

零「だったたら、ずっと嫌々首領について、操り人形になるつもりなのか？」

メル「……あなたに何がわかるんですか！」

零「……確かにわからねえよ、俺はメル・カーネリアンじゃないからな。でも、それ

なら何故お前は情報を俺達に話した？何故、失敗する方向へ進んだ？」

メル「そ、それは……。もう……。誰かが傷つくのを見たくないんです……。！誰かが泣く所を見たくないんですよ！」

零「メル……」

メル「だから……。どれだけ私がオニキスに追われる事になろうとも、今回の作戦で私はこのエナストリアを守ります！」

例え、1人になろうとも……。！

零「だったら、良い考えがある」

メル「え……。？」

零さんは私に考えを話してくれました……。

―新垣 零だ。

メル・カーネリアン……。あいつを守らないとな。

俺はメル・カーネリアンに考えを伝え、ある者の場所に向かった……。

その者とは……。

零「……。アル、話がある……」

アル「何だ？話してみろ」

零「実は……」

俺はこの後、みんなを集めて、考えを話した……。

第14話 立つ／STAND UP

ー私……メル・カーネリアンはエナストリア皇国から出て、アスナ・ペリドットの待つ部隊の元へ行きました。

アスナ「随分遅かったわね……で、どうだった？エナストリア内は」

メル「今はエクスクロスを祝う祭で国内は油断しています」

アスナ「攻めるなら今ね……。メル、行くわよ！」

メル「……」

私は無言でメサイアに乗り込みました……。

アスナ「さて……全機、エナストリアに砲撃！」

メル「……させません！」

私はメサイアを動かして、ガルム1機を撃墜しました……。

アスナ「メル……あなた、血迷ったわね！」

メル「やはり、オニキスのやり方には付き合えません！この国を攻撃させません！私が守ります！」

アスナ「守れたとしてそのあとはどうするの？あなたはもう1人よ！」

メル「例え、1人でも私は戦い続けます！」

アスナ「……だったら、全機、メル・カーネリアンを攻撃目標に！」

メル「負けません……絶対に！」

零さん……。見ていてください……。！私の覚悟を……。！

〈戦闘会話　メルVS初戦闘〉

メル「今までありがとうございました……。私は此处から独自で生きていきます……。まずはこの国を守って！」

私は奮闘しますが、数が多く、苦戦を強いられました……。

メル「はあ…… はあ……」

アスナ「良くやるわね、メル。でも、あなたの行動は無意味よ！全機、再び、エナストリアに砲撃開始！」

メル「だ、駄目！」

アスナ「あなたは邪魔なのよ!!？」

メル「きやああっ!!？」

私はエナストリア皇国へ砲撃しようとしていたガルム部隊に近づこうとしましたが、アスナ・ペリドットのリリスの攻撃受けてしまい、吹き飛ばされました……。

アスナ「全機、撃てえええっ！」

メル「やめてえええっ！」

私の叫びも虚しく、ガルム部隊はエナストリアへ向けて砲撃をしてしまった……。

エナストリアは爆発して、爆煙に包まれました……。

メル「あ、ああ……！」

アスナ「あはははっ！これで木っ端微塵ね！レガリアを渡さないからこうなるのよ！」

爆煙が晴れると、そこにはエナストリアがありました……。無傷で……。

アスナ「なっ!??これはどういう事!??」
すると、エナストリアからパリンと鏡が割れた様な音が聞こえ、元のエナストリアが出てきました……。

メル「今です!」

その隙に私は砲撃部隊を全滅させました……。

これが零さんの作戦……アルという方の力でエナストリア皇国の幻を作り出したのです。

アスナ「あのエナストリアは偽物だったって言うの……?」

メル「見事に引つかかってくれましたね、アスナ・ペリドット」

アスナ「……悔しむのも芝居だったってわけね……メル!!?」

怒ったのか、リリスが急接近してきて、私に攻撃を仕掛けました。

メル「ぐっ……!!?」

アスナ「もういいわ!あなたは此処で私が落とす!」

目の前にリリスのブレードが……此処までですね……。

メル「後はよろしくお願いします……零さん……」

私は目を閉じ、死を覚悟しました……。

零 「勝手に終わってんじゃねえぞ！メル!!？」

その声が聞こえ、私は目を開けると、目の前まで迫ってきていたりリスをシャイニング・ゼフィールスが吹き飛ばしていました……。

↓新垣 零だ。

俺はゼフィールスで出撃して、間一髪、メルを救い出す事が出来た。

アスナ 「新垣 零……！どうしてあなたが……！」

零 「メルに作戦を教えたのは俺なんだから当然だろ！メル、大丈夫か!!？」

メル 「零さん…… どうして私を助けてくれたんですか……？」

どうしてって…… 決まってるだろ！

零 「メルはエナストリアを守る為に戦ってくれた……俺達の仲間なんだからよ！」

メル 「……仲間……」

零 「そうだろ!!？九郎さん！ユイ！」

ユイ 「レナ！」

レナ 「闇を知り、闇を還す。永劫の執行者。我が身に宿り耐え無き崩壊に誘え。潰え

ぬことなき憤怒を湛えし深淵の神器。エリニウスの名に於いてその身を晒せ——マグナ・アレクト！」

アル「ニトクリスの鏡がうまくいったな……。九郎！」

九郎「憎悪の空より来たりて、正しき怒りを胸に、我等は魔を断つ剣を執る！汝、無垢なる刃——デモンベイン！」

アレクトとデモンベインが現れ、俺とメサイアの横に移動してきた。

九郎「エクスクロスのみんなも来たみたいだぜ！」

続き、メガファウナ、シグナス、プトレマイオスが来て、みんなは出撃した。

海道「やつと暴れられるぜ！」

真上「此処からは俺達の地獄祭だ！」

スカーレット「退屈はさせないぞ！」

竜馬「良いじゃねえか、地獄祭！俺も参加させてもらうぜ！」

ワタル「りよ、竜馬さんが入ったら、ホントに地獄になるよ！」

一夏「子供組にトラウマが生まれそうだな……」

サラ「良い加減しつこいよ！アスナ・ペリドット！」

ティア「此処から出て行け！」

アスナ「うるさい、エクスクロス！あなた達はメル諸共倒す！」

ゼロ「お前一人に俺達を相手にする気かよ！」

アスナ「くっ…！」

すると、あの鉄の惑星で見たロボット怪獣軍団とミッドナイトのロボットが現れた。

ミラーナイト「あの鉄の惑星のロボット怪獣?!？」

カンナム「ミッドナイトのロボットが何故彼等と…?!？」

ミッドナイトのロボット「手を結んだのだ…。それにしても情けないな…アスナ

ペリドット。それでもオニキスの新司令官か？」

アスナ「…くっ…！」

零「オニキスも他の世界の組織と手を組んだのか…！」

ゼロ「ミッドナイトのロボット!そのロボット怪獣の親玉を知ってるのか?!？」

ミッドナイトのロボット「ウルトラマンゼロ…。お前に見せたい奴を見せてやる」

ミッドナイトのロボットがそう言うのと、彼の隣に1機のロボットが現れた。

ゼロ「じゃ、ジャンボット?!？」

グレンファイヤー「おい、焼き鳥!お前無事だったのか!」

ジャンボット「有機生命体を抹殺する」

すると、ジャンボットというロボットは攻撃を仕掛けて来た。

レナ「攻撃してきた…?!？」

アンジュ「ちょっと、ゼロ！あのロボットは仲間なんじゃないの？！」

ミラーナイト「何か様子をおかしいですよ！」

リチャード「まさか、洗脳しているのか……！」

ミッドナイトのロボット「誤解を招くような言い方をするな、なあ？ジャンキラー」
すると、またもや1機のロボットが現れた。

ジャンキラー「彼を洗脳しているのはお前達だ。有機生命体」

グレンファイヤー「焼き鳥に似ているロボット？！」

ゼロ「お前、何者だ？！」

ジャンキラー「僕は……ジャンキラー」

ゼロ「ジャンキラーだと……？」

ジャンキラー「有機生命体の抹殺を開始する」

ミッドナイトのロボット「では、始めよう！カンタムロボ、エクスクロス」

エイサップ「ゼロさん、どうするんですか？！」

ゼロ「ジャンボットは俺達の仲間なんだ！助けるのを手伝ってくれ！」

ユイ「わかりました！」

しんのすけ「カンタム！行くぞ！」

カンタム「ああ！しんのすけ君！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話　アマリVS初戦闘〉

アマリ「…」

ホープス「…」

アマリ「…」

ホープス「…どうしたのですか、マスター？」

アマリ「いえ、何もありません…」

ホープス「零様とメル・カーネリアンの関係に嫉妬しているのですか？」

アマリ「…わかりません。ですが、心がモヤモヤします」

ホープス「…とっとと敵を倒しましょう。あなたにはやるべき事があるのですから」

アマリ「ほ、ホープス…？どうしたの？」

ホープス「話している暇があったら、手を動かしてください」

アマリ「（これ…怒っているのよね…？一体、どうして…）」

〈戦闘会話 零VSアスナ〉

アスナ「どうしてあなたがメルを助けるの!?!」

零「あいつがエナストリアを守ろうとしてくれたからだ!」

アスナ「あいつもオニキスなのよ!」

零「お前とメルを一緒にするな!メルはお前とは違う!」

アスナ「訳のわからない事を... 此処であなたを捕らえる!」

零「やってみやがれ!メルを傷つけた分は倍にして返してやる!」

〈戦闘会話 メルVSアスナ〉

メル「今度は負けません!」

アスナ「あなたさえ... あなたさえ裏切らなければ!」

メル「敵対してわかりました。あなたは指揮官には向いていません...。少しの事で感情的になるなど、指揮官の風上にも置けません!」

アスナ「何ですって?!? 黙っていれば良い気にならないで!」

メル「あなたただけには言われたくありません、アスナ・ペリドット!あなたに本当の指揮官がどう言うものかを教えてあげます!」

〈戦闘会話　ユイVSアスナ〉

アスナ「あなた達がさっさとレガリアを渡していれば、こんな面倒な事にはならなかったのよ！」

レナ「失敗しての逆ギレはみつともない証拠よ」

アスナ「黙れ！こうなったら、力付くでもあなた達を連れて行く！」

ユイ「その様な事はさせません！エナストリアを代表して、私があなたを打ち倒します！」

〈戦闘会話　九郎VSアスナ〉

アル「あの様な簡単な策にハマるとは無能な指揮官だな」

アスナ「うるさい！元と言えば、あなた達が邪魔したせいでしょ!!？」

九郎「すぐに人のせいにしてんじやねえよ！お前の日頃の行いがこういう結果を招いてんだろ！」

アスナ「うるさいうるさいうるさいー！消えてなくなれー!!？」

九郎「今度は怒り狂うか。。。お前は本当の悪党だな！俺達がぶっ飛ばしてやる！」

俺はメサイアと協力して、リリスを追い込んで行く。

メル「これで決めます！バスタービット！」
そして、メサイアはバスタービットを出す。

メル「バスタービット……一斉発射!!？」

バスタービットのビームの嵐を受けたリリスは軽く爆発する……。

アスナ「くっ……！こんな……所で……！」

メル「戻って、首領に伝えてください。今までありがとうございました」

アスナ「もう後悔しても遅いんだから……メル！」

メル「後悔などつくの前になっています……あなたと共に戦った事をです」

アスナ「次は必ず殺す！覚えてなさい！」

そう言い残し、リリスは撤退した……。

零「あの女は本当に懲りねえな……」

メル「(アスナ・ペリドット……何があなたをそこまで駆り立てるのです……?)」

〈戦闘会話　ゼロVSジャンボット〉

ゼロ「ジャンボット！俺だ、ウルトラマンゼロだ！」

ジャンボット「有機生命体を抹殺する……！」

ゼロ「クソツ！ダメかよ… 仕方ねえ、ちよつと痛いかも知れねえが我慢してくれよ！ジャンボット！」

〈戦闘会話　しんのすけVSジャンボット〉

しんのすけ「ゼロの友達が来るゾ！」

カンナム「同じロボットである僕にはわかる… 彼は苦しんでいる…」

しんのすけ「それなら、お助けしないと！」

カンナム「そうだな、行こう！しんのすけ君！」

〈戦闘会話　グレンファイヤーVSジャンボット〉

グレンファイヤー「どうしたってんだよ、焼き鳥^{!!}? 焼き鳥^{!!}と呼んだ事を怒ってんのかよ^{!!}? クソツ、俺の炎で頭を冷やしてやるから、覚悟して置けよ！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSジャンボット〉

ミラーナイト「姫様を守る立場であるあなたが姫様を傷つけ様としてどうするんですか！今のあなたは本当のあなたではない！私が止めてみせます！」

〈戦闘会話　ゴモラVSジャンボット〉

レイ「ゼロは何度も俺達を助けてくれた…今度は俺達がゼロの仲間を助ける番だ！行くぞ、ゴモラ！」

ゴモラ「キシヤーン!!？」

ゼロ達は何とかジャンボットを抑えようとするが、一向にジャンボットは止まる気配はなかった…。

ジャンボット「…撤退する」

ゼロ「何…!!？」

ゼロ達を引き離し、ジャンボットは撤退した…。

エメラナ「そんな…ジャンボット…」

シヨウ「逃げられたか…！」

テイエリア「あれは簡単には洗脳を解けそうにはないな…」

刹那「ゼロ…」

ゼロ「大丈夫だ、刹那！あいつは必ず俺達が助け出す！」

竜馬「その意気だぜ！ゼロ！」

ゼロ「その為に今はこの場を切り抜けるぞ！」

ワタル「そうだね！よし、まだまだ行くぞー！」

〈戦闘会話　ゼロVSジャンキラー〉

ジャンキラー「有機生命体は抹殺する！」

ゼロ「何でお前らが有機生命体を憎んでるのは知らねえが、お前達のやってる事は許せねえ！」

ジャンキラー「有機生命体の分際で許せないだと…？」

ゼロ「有機生命体を舐めんなよ！それをこのウルトラマンゼロが教えてやる！」

〈戦闘会話　しんのすけVSジャンキラー〉

ジャンキラー「理解不能… 何故、有機生命体と共に戦うんだ？」

カンタム「それが僕達が理解しあっているからだ！」

ジャンキラー「… もういい。有機生命体に味方するものは誰であろうと倒す」

しんのすけ「カンタムはオラが守る！」

カンタム「しんのすけ君… ありがとう。僕も君を守るよ！」

〈戦闘会話　グレンファイヤーVSジャンキラー〉

グレンファイヤー「焼き鳥のそっくりロボットか！って事はお前も焼き鳥だな！」

ジャンキラー「お前の言っている事は理解できない」

グレンファイヤー「お前も焼き鳥と一緒に頭固いやつだな！俺達を滅ぼすつてんなら、相手になつてやるよ！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSジャンキラー〉

ジャンキラー「俊敏な動きをしようがお前達の敗北に変わりはない」

ミラーナイト「動きや武装があまりにもジャンボットに似過ぎている…彼は一体…」

〈戦闘会話　ゴモラVSジャンキラー〉

ジャンキラー「有機生命体は野蛮だな…。怪獣を戦わせて、自分は指示だけを飛ばす

とは…」

レイ「俺はいつでもゴモラと共に戦っている！命令を聞くだけのお前達と一緒にするな！」

ジャンキラーにダメージを与えた俺達……。

ジャンキラー「ダメージ、50%突破……撤退する」

そう言い残し、ジャンキラーは撤退した……。

マサキ「随分早い撤退だな……」

アーニー「様子見で来たのかもしれませんが……」

ゼロ「どうして、あいつはジャンボットと似ていたんだ……？」

ミッドナイトのロボット「なかなかやるではないか、エクスクロス」

エイサップ「大人しく降参した方が身のためだぞ！」

ミッドナイトのロボット「私も甘く見られたものだ……。ならば、見せてやろう！此処

で私がカンタムロボを倒す所を！」

そう言うミッドナイトのロボットはカンタムロボに攻撃を仕掛けた。

カンタム「ぐっ……！やるな……！」

ミッドナイトのロボット「まだだ！」

またもやミッドナイトのロボットはカンタムロボに攻撃をする。

しんのすけ「うわあああつ！」

アキト「しんちゃん……！」

ユイ「このままでは、しんちゃんが……！」

カンタム「ぐっ…… 大丈夫かい？しんのすけ君」

しんのすけ「だ、大丈夫だぞ……」

カンタム「…… しんのすけ君、あれをやろう」

しんのすけ「あれ……？」

カンタム「正常合体だ！」

しんのすけ「…… ブ・ラジャー！」

何だ……？カンタムロボの上半身と下半身が分離して、入れ替わってまた合体した……？
!!? つか、色も緑から赤に変わってる!!?

カンタム「超カンタムロボ！」

青葉「す、凄え！色が変わった！」

セルゲイ「まさか、この様な隠し球があったとはな…… カンタム君」

ミッドナイトのロボット「正常合体をしても同じだ！お前では私達、ミッドナイトの

ロボットには勝てない！」

そう言つて、ミッドナイトのロボットは突進攻撃を仕掛けるが、カンタムロボはそれを蹴り返した……。

ティエリア「性能もパワーも格段に上がっている…… !!?」

ミッドナイトのロボット「ぐっ…!? まだだ！私はまだ負けん！」
カンナム「いいや、これで終わらせるぞ！ミッドナイトのロボット！しんのすけ君
ま
だやれるね！」

しんのすけ「うん！まだまだオラはやれるゾー!!?」
俺達はミッドナイトのロボットとの戦闘を再開した…。

〈戦闘会話　しんのすけVSミッドナイトのロボット〉

ミッドナイトのロボット「バカな…何故、そんなパワーが!??」

しんのすけ「これがオラとカンナムの力だゾ！」

カンナム「人間を切り捨てるお前達に僕としんのすけ君の友情の力などわからないだ
ろうな！」

ミッドナイトのロボット「黙れ！ならば、その友情など打ち砕いてくれる！」

しんのすけ「簡単に砕けると思ったら大博打だゾ！」

カンナム「それを言うなら大間違いだよ、しんのすけ君。ミッドナイトのロボット！
此処で決着をつけてやる！」

〈戦闘会話 ZERO V S ミッドナイトのロボット〉

ZERO 「お前はあの鉄の塊の事を知っているのか!?!?」

ミッドナイトのロボット 「知っていても教えるわけないだろ?」

ZERO 「だったら、もう良いぜ。自分達で調べるからてめえは宇宙の彼方まで吹っ飛んでやがれ!」

〈戦闘会話 零 V S ミッドナイトのロボット〉

零 「それ程のAIを持っていたら、俺達は手を取り合う事も出来るはずだろ!」

ミッドナイトのロボット 「何故、私達がお前達人間と手を取り合わなければならないんだ? お前達は滅ぼされる存在なのだ!」

零 「誰がいつ決めんだよ! お前らが勝手に決めんじやねえよ!」

しんのすけ 「カンタム! ハリセンアタックで決めるゾ!」

カンタム 「了解! カンタムハリセン!」

超カンタムは肩からハリセンを出し、構えた。

しんのすけ「ハリセンアターック！」

カンナム「うおおおっ！いい加減にしろ！」

カンナムハリセンでミッドナイトのロボットを真つ二つにした……。いや、ハリセンで！！？

ミッドナイトのロボット「こ、こんなはずでは……。！」

カンナム「終わりだ、ミッドナイトのロボット」

ミッドナイトのロボット「バカめ……。私を倒しても、まだまだミッドナイトから刺客が来る……。お前達は消される運命なのだあああああつ！」

それだけを言い残し、ミッドナイトのロボットは爆発した……。

周りのロボット怪獣軍団も倒し、戦闘は終わった……。

ミレイナ「もう敵はいないみたいです！」

零「アスナ・ペリドットもこれに懲りてエナストリアを狙うのはやめるだろ……。」

メル「零さん……。」

零「メル、ありがとな。お前のおかげで、エナストリアを守る事が出来た」

ユイ「私からもお礼を言わせてください。本当にありがとうございました！」

メル「い、いえ……。あの……。！今までの行いを許してもらえないとは思いませんが……。私をエクスクロスのメンバーに入れてもらえないでしょうか？！」

千冬「…」

零「良いぜ、来いよメル！一緒に戦おうぜ！」

メル「零さん…ありがとうございます！」

倉光「ユインシエル陛下…。少しお話したい事があるので王宮でお話ししてもよろしいでしょうか？」

ドニエル「エクスクロスのメンバーは前回の話し合いのメンバー以外はそれぞれの艦で待機だ」

アルト「了解」

戦いを終え、俺達は前回の話し合いメンバーにメルを加えたメンバーでユイ達と王宮で話し合う事にした。

マーガレット「では、首領の名前や目的はわからないと？」

メル「はい…」

スメラギ「あなたもバスタードモードは使えるの？」

メル「いえ、まだ私は使えません…」

零「メル…レイヤ・エメラルドって名前知ってるか？」

メル「…アスナ・ペリドットがよくその名を口にしてますが…。恐らくその名の

意味は首領とペリドットしかわからないと思います…。」

零「…そうか」

メル「お役に立てず、申し訳ありません…。」

ヒユウガ「いやいや、君はエナストリアを守ってくれたんだ。謝らなくても良い」
ジヨナサン「エクスクロスの皆様はこれからどうするのですか？」

倉光「そろそろ、この場を離れ、再びドアクダー退治に動こうと思つています」
ワタル「名残惜しいけど、いつまでも此処にいられないからね」

テオドア「そうですか…。」

ユイ「…皆さんにお話ししたい事があります」

千冬「何だ？」

ユイ「私とレナもエクスクロスに同行させて貰えないでしょうか」

アマリ「え…？」

アオイ「ユイ！何言ってるの！」

零「お前にはこの国を守る義務があるんだろ？」

ユイ「確かに、私はこのエナストリアの女皇です…。でも、このアル・ワースの人間でもありません。アル・ワースの危機はルクスの国の危機です！」

ユイ…。

ナル「ユイ様……」

ユイ「ダメ……ですか？」

倉光「こちらは構いませんが……」

皆はマーガレットさんの方を向く。

マーガレット「……ユイ様は昔から言い出したら聞きませんからね……。わかりました」

ユイ「マーガレットさん！」

マーガレット「ですが、必ず無事に帰って来る事！これは約束してください。レナ様もですよ」

レナ「うん、わかってる」

ユイ「約束します！」

アオイ「私とナルも同行します。よろしいでしょうか？」

ワタル「大丈夫だよ！みんなで行こう！」

こうしてユイとレナ、アオイさん、ナルさんが仲間に加わり、俺達は外を出ると、国民の人達が声を上げていた。

その内容とは……。

国民「陛下ー！頑張ってきてください！」

国民2 「エナストリアはお任せください！」

国民3 「エクスクロスター！ユイ様をよろしくお願いします！」

ユイ 「皆さん：．．．ありがとうございます！ユインシエル・アステリアは必ず戻ってきます！」

本当に良い国だな：．．．エナストリアは。

街中を歩いていると、レツが走り込んできた。

レツ 「ユイ！レナチー！行くんだね？」

ユイ 「うん、絶対に戻って来るからね！レツちゃん！」

レツ 「うん、頑張りなさいよ、ユイ！：．．．サラとティアも行くのよね？」

サラ 「うん」

レツ 「なら、行つてこい！でも、戻ったらお店の手伝いを再開する事！わかった？」

ティア 「了解！」

ユイ 「じゃあ、レツちゃん：．．．行くね」

レツ 「うん。皆さん、ユイ達をよろしくお願いします」

零 「任せてくれ、レツ。責任を持って、ユイ達を守る」

レツ 「それなら、安心ですわね！」

俺達はレツに見送られ、それぞれの艦へ戻った：．．．。

そして、シグナスに皆は集まった。

アマリ「今日からドアクダー退治に同行する人達を紹介します」

ユイ「ユインシエル・アステリアです！此処では私は陛下ではないので、ユイと呼んでください！」

レナ「レナ・アステリア……。よろしくね」

アオイ「アオイ・コノエです。よろしくお願いします」

ナル「首相補佐のナル・アリサカです！これからはよろしくお願いします！」

一夏「よろしく！ユイ、レナ、アオイさん、ナルさん」

零「そして、もう一人、俺たちの仲間になる人が居ます……。メル」

メル「メル・カーネリアンです。皆さん、今までの事、謝って済む事ではないのはわかっていますが、謝らせてください……。すみませんでした！」

メルは深々と頭を下げた。

真上「自分のやった事で謝るな」

刹那「もう俺達は気にしていない」

メル「皆さん……！」

ワタル「これから頑張ってもらわないとね！メルさんもエクスクロスの一員なんだから！」

メル「はい！全力で頑張らせていただきます！」
やる気全開だな。

零「メル、これからよろしくな」

メル「零さん：。はい！共に頑張りましょう！（それに気づいてしまいましたか
ら：。私はあなたに恋している事を：。）」

シバラク「では、今日は宴だな！」

九郎「うつしやー！食うぜー!!？」

アル「汝はそればかりだな」

みんなのやり取りを見て、メルはクスリと笑った。

零「楽しいだろ？エクスクロスは」

メル「：。はい！」

俺達は新しい仲間を祝う宴を開始しながら、エナストリア皇国を後にした：。。

ーやあ、リボンズ・アルマークだよ。

僕は今、エンブリヲと共にある人物がいる部屋に来ていた。

僕達が入るとその人物は睨んで来た。

リボンズ「随分、怖い顔だね……篠ノ之 束」

エンブリヲ「そういう顔も素敵だよ」

束「お前に好かれたくもなんともないよ、エンブリヲ……早く、箒ちゃん達を解放しろ！」

エンブリヲ「君が私の花嫁になればね……」

束「くっ……！」

全く……またそれか……

リボンズ「次の戦闘には専用機組を出す予定だね。ISの調整を任せるよ」

束「箒ちゃん達を戦場に出すつもり!?」

リボンズ「元々、その気だったのでね」

束「お前ら……許さないから！」

リボンズ「では、僕はお邪魔させてもらうよ。エンブリヲ、君はどうするんだい？」

エンブリヲ「今しばらく、我が花嫁の仕事ぶりを見ていることにするよ」

束「みんな！気持ち悪い！」

エンブリヲ「ああ……そういう所も素敵だよ。束……」

……付き合ってもらえないね……

僕はエンブリヲに聞こえない様に溜め息を吐き、部屋から出るとそこに一人の女性が居た。

？「あんな、子供達を戦場に出させる気なの？リボンズ……」

リボンズ「君が意見するなんて、珍しいね。アニュー・リターナー」

アニュー「もう一度言うけど……あの子供達はまだ子供なのよ!!？」

リボンズ「だから、なんだと言うんだい？彼女達にはISという力がある……戦場に出るのは当然だと思うけどね」

アニュー「……」

リボンズ「勿論君にも出てもらうよ。それと……あのブレラ・スターンにも声をかけておいてくれ」

アニュー「……わかった……わ」

それだけを言い、僕はその場を後にした……。

アニュー「……ライル……私は……！」

勿論その言葉も聞いているよ……アニュー・リターナー……。

第15話 成層圏まで狙い撃つ男

「鉄華団団長のオルガ・イツカだ。

俺はリボンズから仕事内容を聞き、兄貴に報告する事にした。

名瀬「鉄華団とタービンス全員で出撃か……」

オルガ「ミカや昭弘達にも伝えてあるので、アミダさんやラフタにも伝えてもらえませんか？」

名瀬「わかった、伝えておくよ」

オルガ「兄貴は……このミスルギ皇国の事をどう思っていますか？」

名瀬「……今はなんとも言えないな……」

オルガ「そうっすか……兎に角、俺等も出撃の準備をします」

名瀬「俺達も準備するから待ってろ」

オルガ「はい……」

ここ数ヶ月、ミスルギ皇国に居るが……どうもこいつ等のやり方には嫌気がさすぜ……。

―新垣 零だ。

エナストリアを後にした俺達は再び、ドツコイ山を目指す。
すると、ユイとアンジュが話しているのが見えた。

ユイ「あの……アンジュリーゼ皇女」

アンジュ「今の私はアンジュだって言ってるでしょ」

ユイ「あ……ごめんなさい、アンジュ……」

アンジュ「あなたは変わらないわね、ユイ……」

ユイ「アンジュだって、変わってないよ」

アンジュ「……変わったわよ、ノーマだとわかって、国を追い出されて、挙げ句の果てには名前まで奪われているのよ？」

アンジュ……

ユイ「でも……アンジュはアンジュだから……」

アンジュ「は……？」

ユイ「例えば名前を取られても、ノーマでも、あなたは私の知っているアンジュだよ」

アンジュ「……何それ？私の事を全て分かったように言わないでくれる!!？あんに

私の何がわかるのよ！」

ユイ「わ、私はただ……！」

アンジュ「あんたは良いわよね！友達も、仲間も、家族も、信用してくれる国民もいて！色々恵まれてるあんたが私の事を知ったような口で話さないで！」

ユイ「そ、そんな……私だって……！」

アンジュ「戦っているって言いたいの？残念、私なんて何度も死にそうになったの……。でも、あんたは国や家族のために戦っている……。対する私は自分が生きる為に戦っているの……。そこが私とあんたの違いよ！」

それだけを言い残し、アンジュは部屋を飛び出て行つた……。

それに耐えきれなくなったのか、ユイは目に涙を浮かべ、膝をついた。

それを見た俺、レナ、一夏、アオイさんはユイの元へ駆けつけた。

レナ「ユイ！大丈夫？！」

ユイ「う、うん……大丈夫……」

アオイ「大丈夫じゃないでしょ？！泣いてるじゃない！」

一夏「アンジュのやつ！流石に言い過ぎだ！」

零「だけど、俺もあいつの言いたい事はわかる」

一夏「けど、泣かせる事ねえじゃねえかよ！」

零「なら、アンジュはもつと泣きたいんだぞ!!？」

ユイ「っ…！」

アオイ「零君…」

零「あいつは信じていた者全てに裏切られたんだぞ… あいつだって本当は泣きたいはずだ！でも、自分の感情を押し殺して、ノーマとして、ドラゴンと戦ってるんだ… きつと…」

一夏「…ごめん、俺、感情的になつた…」

零「いや、俺も怒鳴つてすまない…でも、ユイ…これだけは分かつてくれ…。彼女はお前の知るアンジュリーゼ皇女であつて、今はアンジュなんだ…それだけは忘れないで欲しいんだ」

ユイ「はい…わかりました」

零「うしっ！飯でも食うか！」

一夏「お！付き合うぜ、零！」

零「ユイ達はどうするんだ？」

ユイ「私達はもう少し、この艦を見た後にします…零さん、先程はありがとうございました」

零「大した事はしてねえよ。それじゃあ、また後でな」

俺と一夏は部屋を出て、食堂へ向かった……。

「アマリ・アクアマリンです。」

私はメルさんに呼び出されて、彼女と廊下で話すことになりました。

アマリ「メルさん……それで、お話とは……？」

メル「単刀直入にお聞きします。アマリさん、あなたは零さんの事を異性として好意を寄せていますか？」

異性として……って、えええっ!??

アマリ「わ、わわわ……！私は……！」

メル「やはり、好きなのですね……」

アマリ「も、もしかしてメルさんも……」

メル「大好きです。彼の事を思うと胸が苦しくなります……。ですので、アマリさん……私は負けるつもりはありませんから」

アマリ「……私だって、負けません……！」

今私とメルさんは恋の敵同士となりました……！

ホープス「マスター」

すると、ホープスが飛んできましたね……。

アマリ「どうしました？ホープス」

ホープス「そろそろ昼食の時間なので呼びに来ました」

アマリ「ありがとうございます。メルさんも一緒にどうですか？」

メル「ご一緒にします！」

零「ん……？アマリにメル、ホープスじゃねえか」

ー俺……新垣 零は一夏と食堂へ向かっていると、アマリ、メル、ホープスを見つけた。

メル「あ、零さん！」

アマリ「それと、一夏君！」

一夏「俺はついでですか」

アマリ「あ……いや……その……すみません」

ホープス「……」

零「こんな所でどうしたんだ？」

メル「今から食堂へ行こうと思ひまして……」

零「なら、俺達も相席良いか？」

アマリ「良いわよ、零君と一夏君も来て」

ホープス「……私は用事があるので失礼します」

え？

アマリ「ほ、ホープス……！！？」

今度は逃してたまるかよ……！

零「ホープス！何故俺を避けるんだよ？俺、何かお前の気に触る事でもしたか？」

ホープス「……別に」

零「なら何でそんな態度を取るんだよ？」

ホープス「……あなたが相応しいかどうか、考えていただけです」

零「相応しい……？誰にだ？」

ホープス「……これからは企業秘密なのでお答えできません……。零様、気を悪くしてしまつたのなら申し訳ありません。ですが、私はあなたを毛嫌つてなどいないので心安くください」

零「あ、ああ……」

ホープス「… 今度はお2人でお食事でもしましょう。では、失礼します」
そう言って、ホープスは飛び去って行った…。

零「結局何だったんだ…？」

一夏「まあ… ホープスが零の事を嫌ってないって事で良いじゃないか」

零「… ああ」

アマリ「… ホープス… いったいどうしたんでしよう…」

メル「(零さんも相当ですが、アマリさんも鈍いんですね…。ホープスさん、頑張ってください！)」

俺達はこの後、アマリとメルと共に食堂で昼食を食べた…。

ー刹那・F・セイエイだ。

俺達、プトレマイオス組とアンドレイ、セルゲイ、パトリックはトレミーのブリーフィングルームである事を話していた…。

スメラギ「みんなに集まってもらったのは他でもないわ。デュナメスの事よ」

パトリック「誰があのガンダムに乗るかかって、話だよな？」

ミレイナ「ストラトスさんはどうですか？」

ロツクオン「俺には既にサバーニヤがあるだろ」

アレルヤ「僕達が乗るわけにもいかないしね…」

マリー「大尉達はどうですか？」

アンドレイ「残念ですが、遠慮させていただきます」

セルゲイ「GN-Xの方が扱いやすいのでな」

フェルト「マネキン准尉はどうですか？」

パトリック「俺も遠慮させてもらうぜ、勝手にガンダムに乗ったら大佐に怒られそうだからな」

ティエリア「ラッセはどうだ？」

ラッセ「俺まで抜けるとトレミーの砲撃手がいなくなるだろ？」

刹那「ならば、他の誰かに乗ってもらうか？」

スメラギ「織斑先生なら、扱えそうだけどね…」

ロツクオン「ケロ口はどうだ？あいつ、ガンダムを見て、目を輝かせていただろ？」

ミレイナ「うーん、あの人にガンダムを渡してはダメな様な気がします」

アレルヤ「そもそも彼は人じゃないしね」

スメラギ「取り敢えず、候補は織斑先生という事でこの話を一旦、終えましょう。彼

女には私から話をしておくわ」

刹那「了解」

本当はデユナメスにはあいつが乗って欲しいのだが……。仕方がないか……。

―新垣 零だ。

昼食を食べ終えた俺はアマリとメルと歩いていた……。

ちなみに一夏はというと、シャルロットと簪に連行された。

メル「一夏さんも大変ですね」

零「あいつは歩くハーレム作りだからな……」

アマリ「た、確かに似合ってるかも……」

メル「零さんには好きな女の子はいますか？」

零「いないな……。なんか、ファンクラブはあるって聞いたけど……」

メル「ふあ、ファンクラブ……。ですか!?!?」

零「俺も初めて聞いた時、驚いたけどな……」

アマリ「という事は零君は学校でも人気者という事なのよね？」

零「やめてくれ……俺みたいな男はごまんといふんだからよ……」

メル「でも、私は零さんのおかげで自由になりました……。あなたには感謝しています」

零「や、やめろって……」

何か、面と向かつて言われると照れるな……。

アマリ「零君って、紳士的って言われぬ？」

零「……弘樹に言われた事あるな……」

アマリ「そこが零君の良いところよ」

零「お前ら、今日どうした……？俺の恥ずかしがる顔でも見たいのかよ？」

メル「ええ、少しは……」

アマリ「見てみたいわ」

零「勘弁してくれ……」

？「あ、相変わらず、仲が良いなく！お三方」

突然、声が聞こえると俺達は声の方へ視線を移した。

零「ロツクオンじゃねえか、何してんだよ？」

ロツクオン？「ん？ああ、まあ……ぶらぶらしてんだよ」

メル「あれ？ ロックオンさん… お着替えしました？」

零「確かに：。」

いつもガンダムマイスターはそれぞれの色の服を着ているんだが、今のロックオンの服は私服っぽい服だ。

ロックオン？ 「い、いつもあの服じゃ、肩が凝るんだよ」

アマリ「それで、私達に何かご用ですか？」

ロックオン？ 「お前等に頼みがある。食堂から食べ物を取ってきてくれないか？」

零「プロレマイオスで食ったら良いだろ」

ロックオン？ 「腹が減って動けないんだよ…。頼むよ」

零「まあ、良いけどよ：。」

何か今日のロックオンは変だな…。

零「アマリ、メル… 悪いけど手伝ってくれ」

メル「わかりました」

アマリ「うん、じゃあ行きましょう」

俺達はロックオンに食べ物を渡す為、食堂に戻る事にした。

アマリ「ロックオンさんが私達に食べ物を持ってくる様にお願ひするなんて、珍しい

わね…」

メル「それ程、空腹という事なのでしょいか…？」

零「…」

何か… 嫌な予感がする…。

食堂目前まで来た俺達…。

零「さつさと、作ってもらって、ロックオンに渡しに行こうぜ」

刹那「零… こんな所で何をしてるんだ？」

ロックオン「相変わらず両手に花だな！零」

そこへ、刹那とロックオンが歩いて来た…。

零「刹那と… ロックオンか… ロックオン!?？」

ロックオン「ん？ロックオンだが、何だ？」

は!?？え… ちょっと待て！

アマリ「ど、どうしてそちらからあなたが…!?？」

刹那「何を言っているんだ？」

メル「あなたは先程、私達に食事を持って来て欲しいと仰ったではありませんか！」

ロックオン「… はあ？」

刹那「ロックオンは先程からずっと、俺といたぞ？それにさつきまではプトレマイオ

スでミーティングをしていた」

零「……待てよ……！しまった……！なら、あの男は……！」

すつかり騙されちゃった……！あの男はロックオンになりましたスパイだ……！
すると、メガファウナ内に警報が鳴り響いた……。

刹那「敵か……!?」

夏美「零さん！アマリさん！メルさん！刹那さん！ロックオンさん！」

そこへ、夏美と冬樹が来た。

零「夏美！冬樹！敵はどこ部隊だ!?」

冬樹「キャピタル・アーミイのモビルスーツとゾギリアのヴァリアンサー部隊とキャピタル・アーミイと一緒に襲ってきたガンダムです！」

夏美「それ以外にも何機かモビルスーツとガンダムがいます！」

刹那「何だと……!?」

クソツ……！こっちはそれどころじゃないっていうのに……！

第15話 成層圏まで狙い撃つ男

名瀬「あれが、エクスクロスの戦艦か……。」

ラフタ「おかしな形してるね」

シノ「ハンマーヘッドも似た様なもんだろ」

ラフタ「なんか言った？」

シノ「何でも」

アミダ「あれが、あたし達の倒す敵なんだろう？名瀬」

名瀬「ああ、オルガ。全体的な指示はお前に任せるぞ。リボンズ・アルマークの部隊の到着はまだ時間がかかるそうだし」

オルガ「わかりました！全機、エクスクロスの機動部隊に気をつけてかかれよ！」

アストン「了解、団長」

昭弘「無理はするなよ、アストン」

アストン「わかってる、もう死ぬ気はないよ」

ビスケット「どうやら、向こうも出てくるみたいだね……」

俺達はそれぞれ、出撃した……

ワタル「本当だ！ガンダムがいつぱいいる！」

シヨウ「どう見ても俺の知ってるガンダムとは違う……俺達を襲ったガンダムと同世

界のガンダムという事か！」

アルト「倉光艦長！相手の戦艦とは通信は取れましたか！！？」

倉光「繋がらないね……向こうから通信を切られてるね」

九郎「何でこう、話を聞かない奴らが多いんだよ！」

グランデイス「全くだよ！少しは話し合いで終わらせたいところだよ！」

ユイ「では、戦うんですね……」

アンジユ「やれないなら、下がってなさい！邪魔なだけよ！」

レナ「あなた、何て事を……！」

千冬「仲間内で揉めている場合か！」

サンソン「マジでやらないとこっちがやられるぞ！」

ハンソン「確かに、ガンダムは厄介だからね！」

シーブック「ガンダム同士で戦う事になるなんて……！」

ベルリ「それでも、やらないとこちらがやられます！」

青葉「そうだな！向かってくるなら、相手をするだけだ！」

ゼロ「よっしゃ！みんな行くぜ！」

ハツシユ「本当に三日月さんの言う通り、見た事もないガンダム・フレームがいます

ね……」

三日月「うん、でもあの時より数が増えている…」

アミダ「ガンダム・フレームが何だつてんだい！そんな事で負けるあたし達じゃないだろう？」

ラフタ「そうだね！姐さん！」

名瀬「よし…全機、戦闘開始！」

オルガ「油断はすんな！絶対に生きて帰るぞ！」

ドニエル「来るぞ！」

スメラギ「全機！迎撃に入って！」

アイーダ「了解！」

零「…」

…あの、ロックオンになりました男はミスルギ皇国のスパイなのか…？ク

ソツ、今はとにかく、こいつらを迎え撃たないと…！

俺達はミスルギ皇国の雇うガンダム部隊と交戦を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「タイミングを読めよ…！今はお前らに構ってる時間はねえんだよ！速攻で終わ

らせてやる！」

〈戦闘会話　アンジユVS初戦闘〉

アンジユ「私はユイとは違う…！私はもう、アンジユリーゼじゃないの！もう私は過去には戻らない！アンジユとして生きると決めたから！」

〈戦闘会話　ユイVS初戦闘〉

レナ「ユイ！敵が来るよ！」

ユイ「…アンジユに謝らないと…私、同じ皇女だと思つて、酷い事を…」

レナ「ユイ!!？」

ユイ「あ、ごめんね！今は戦わないと！」

〈戦闘会話　刹那VS初戦闘〉

刹那「彼等もガンダムだ…。それなのに何故、ガンダム同士が戦わなければならないんだ…！」

〈戦闘会話　三日月VS初戦闘〉

三日月「あの時より戦力を増加させたようだけど、バルバトスルプスに勝てると思わない方がよいよ……三日月・オーガス、行くよ」

〈戦闘会話 昭弘VS初戦闘〉

昭弘「グシオンがまさか、リベイクになって、このアル・ワースに俺と共に蘇るとはな……今度こそ、家族を守ってみせる！」

〈戦闘会話 シノVS初戦闘〉

シノ「エクスクロスだか、何だか知らねえが、四代目流星号の敵じゃねえ！かかってきな！」

〈戦闘会話 名瀬VS初戦闘〉

名瀬「オルガ！攻撃の指示は俺が出す。お前は各機に指示を出せ」

オルガ「わかりました、兄貴」

名瀬「俺達はもう死ぬ気はないぞ、それを忘れるな」

オルガ「俺達、鉄華団も誰一人死ぬ気はありませんよ！」

名瀬「フツ、それを聞ければ十分だ……。ハンマーヘッド、砲撃開始！」

「バスケット「了解！」

〈戦闘会話　アミダVS初戦闘〉

アミダ「へえ、私達の世界とは違うモビルスーツもいるんだね。百鍊とどつちが強い
か、試してみようじゃないか！」

〈戦闘会話　ラフタVS初戦闘〉

ラフタ「結構なツワモノが揃ってるね、エクスクロスは！でも、私の百里だって負けてないからね！」

〈戦闘会話　ハッシュVS初戦闘〉

ハッシュ「敵が来る…！辟邪でどこまでやれるかわからないけど、鉄華団は俺が守るんだ！」

〈戦闘会話　アストンVS初戦闘〉

アストン「タカキ、フウカ、見てるか？俺は異世界で生きて、戦ってるんだ…。今度は絶対に死なない…。だから、負けるわけにはいかない！俺はこのランドマン・ロディ

で生き残ってみせる！」

〈戦闘会話 刹那VS三日月〉

刹那「何故、俺達と敵対する！」

三日月「それが俺達の仕事だからだよ」

刹那「俺達是对話だって……わかり合う事だって、出来るはずだ！」

三日月「何あまい事言ってるの？俺はあんた達と対話する気もないし、わかり合う必要もない」

刹那「……戦うしかないのか……ならば、貴様を駆逐する！」

三日月「駆逐されるのはどっちかな」

ガンダム部隊と戦い合う俺達……。

エイサツプ「あのガンダム達……強い！」

ケロロ「ゲロー!?このままじゃ負けてしまうでありますよ！」

アキト「だけど、此処で退くわけにはいかない……！」

アンジユ「だったら、私がやるわ！」

ヴィルキスが敵陣のど真ん中まで移動した……!??

ミラーナイト「危険ですよ！アンジユ！」

メル「戻ってください！このままではあなたが……！」

アンジユ「私の生き様は私が決める……！口出ししないで！」

三日月「I機で突っ込んで来たよ。どうする、オルガ？」

オルガ「特攻か……？まずはあの機体を撃ち落とせ！」

奴ら、一斉にヴィルキスに攻撃を……！

アンジユ「ぐっ……!?？」

ロックオン「戻れ、アンジユ！このままじゃあ、やられちゃうぞ！」

アンジユ「まだ……やれる！」

竜馬「おい！早く、あいつを止めないとんでもない事になるぞ！」

何で俺達の言う事を聞かねえんだよ、アンジユ……！

アンジユ「う、ううっ……！」

本気でまがいぞ、これは……！

ユイ「アンジユ！」

敵の包囲網をかいくぐり、アレクトがヴィルキスの隣に行った。

アオイ「ユイ!?？」

零「お前まで何やってんだよ!!? ユイ!」

アンジュ「そうよ! あんたまで飛び込んで来て、何考えているのよ!」

ユイ「アンジュ、ごめんなさい……。あなたの苦しみも知らずに知った様な口を聞いてしまつて…。」

アンジュ「今はそんな事、どうでもいいでしょ!!? このままじゃあ、あんたまで死ぬわよ!」

ユイ「あなただつて、同じだよ!」

アンジュ「同じじゃない! あんたには帰るべき場所があるじゃない! あんたが死ぬば、エナストリアの国民が悲しむのよ!」

ユイ「同じだよ! 帰る場所がマナの国になくても、アンジュにはエクスクロスがあるじゃない! アンジュが死んで悲しむ人達だっているんだよ!」

アンジュ「…!」

レナ「ユイ:。」

ユイ「だから、あなたは絶対に死なせない! どんな事があつても、あなたを守ります!」

ユイはそう叫び、アレクトはヴィルクスの周りにいるキャピタル・アーミイのモビルスーツとヴァリアンサーを撃墜させた。

すると、今度はアレクトに攻撃を仕掛けようとした。

アンジュ「ユイ!!？」

今度はヴィルキスがアレクトを助け、敵機を数機、撃墜させた。

アンジュ「あんたには負けたわよ、ユイ。。。あんたにそう言われたら、無茶するのもバカらしくなったわ。。。一度体制を立て直すわよ！ユイ！」

ユイ「うん、アンジュ！」

ヴィルキスとアレクトは戻って来たな。

サラ「無茶しすぎだよ！2人共！」

ヴィヴィアン「本当にそっくりだね！」

ティア「息もピッタリだしね！」

九郎「全くだぜ！」

アル「後で軽く説教だな」

本当だよ、全く。。。。

三日月「もういい？」

零「待たせて悪かったな！此処から、逆転と行くぜ！」

アイーダ「待ってください！敵の増援です！」

すると、1機のガンダム、アルケーガンダムが現れた。

サーシエス「楽しそうな戦争をやってんじやねえか！」

ロツクオン「アリー・アル・サーシエスか！」

アレルヤ「それに、あのガンダムは……！」

ティエリア「バカな……！」

刹那「貴様までいたのか……！リボンス・アルマーク!!？」

リボンス「久しぶりだね、ソレスタルビーイング」

ラツセ「最も見たくない奴が出てくるなんて……！」

アンドレイ「あれが……アロウズを支配していたイノベイド……！」

リボンス「鉄華団並びにタービンスは退いてくれ、後は僕達が受け持つ」

シノ「勝手に決めてんじやねえよ！」

アストン「まだ、俺達はやれる……！」

リボンス「その様な口を聞いても良いのかな？」

オルガ「……退くぞ、みんな……！」

名瀬「オルガ……」

昭弘「だが、オルガ！」

オルガ「撤退だ!!？」

アミダ「……ほら！団長が撤退と言ったんだ！退くよ！」

ハツシユ「りよ、了解！」

三日月「了解」

キャピタル・アーミーとゾギリア部隊を置いて、ガンダムとモビルスーツ部隊は撤退した……。

刹那「リボンズ・アルマーク！何故、ミスルギ皇国にいる!?？」

リボンズ「僕の事を理解できる同士がいるからだよ」

一夏「たつたそれだけの理由だけなのか……!?？」

リボンズ「そう言えば……ライル・ディランディ、織斑 一夏、早乙女 アルト……君達に見せたい人が居るんだ、来てくれ」

現れたのは1機のモビルスーツ、戦闘機、3人のISを纏った女の子だった……。

ロックオン「な……!?？あの機体は……！」

アニユー「久しぶりね、ライル」

ロックオン「アニユー……！お前まで……！」

アルト「ブレラ！お前が何で此処に!?？」

ブレラ「理由を聞いてどうする？お前は此処で倒されるんだからな」

千冬「ば、バカな……！」

シャルロット「嘘……だよね……!?？」

簪「どうして……？どうしてなの!?？」

一夏「何で、ミスルギ皇国側にいるんだ！セシリア！ラウラ！楯無さん！」
楯無「簡単な事よ」

ラウラ「私達はお前達の敵となったのだ」

セシリア「悪く思わないでください」

彼等は全員、ロックオン、アルト、一夏達に関係があるのか……!??

一夏「どうしたんだよ、みんな！何でこんな事を……！」

ラウラ「嫁よ……悪いが死んでくれ」

セシリア「私達の為にも……」

簪「みんな、操られているの……？」

楯無「私達は正気よ？簪ちゃん」

シャルロット「こんなの見て、正気だとは思えないよ！」

ラウラ「正気だ……。洗脳など一切受けていない」

千冬「どうやら、あいつらの言っている事は本当らしいな……！」

真耶「そんな……！」

アルト「ブレラ！お前は操られているのか!?？」

ブレラ「俺も俺の意思でお前の前にいる……アルト」

アニュー「ライル…行くわよ」

ロックオン「やめてくれ、アニュー！俺はもうお前と戦いたくないんだ！」
アニュー「だったら、死ぬわよ？ライル」

刹那「迎撃しろ、ロックオン！」

ロックオン「くそ…ッ！リボンズ・アルマーク！てめえは許さねえ！」

俺達はリボンズ・アルマーク達との戦闘を開始した…。

ロックオン？「アリー・アル・サーシエスか…。そろそろ、引きこもるのもやめにするか…！」

〈戦闘会話　アルトVSブレラ〉

ブレラ「此処で死ぬ、アルト」

アルト「どうしてだよ、ブレラ！どうして俺達が戦い合わないとダメなんだよ！」

ブレラ「俺の守る者の為だ」

アルト「…！お前…まさか…！」

ブレラ「だから、此処で負けるわけにはいかないんだ！アルト！」

アルトのデュランダルとルシファーという戦闘機のスピード戦はアルトのデュランダルが勝利した。

ブレラ「此処までか……。アンタレス1、撤退する」

アルト「待て、ブレラ！ミスルギ皇国にはまさか……。！」

ブレラ「……。お前の事を待っているぞ」

ブレラという男はアルトに何かを伝え、撤退した……。

ワタル「あの人……。アルトさんに待ってるって言ったよね？」

シーブック「無理やり戦わされているのか……。？」

アルト「(ブレラ、お前はランカを……。)」

〈戦闘会話 一夏VSセシリア〉

セシリア「一夏さん、手加減はいたしませんわよ！」

一夏「何だよ、セシリア！お前がこんな事するなんて……。！」

セシリア「何でも言ってくださいまし、わたくしにも譲れない者があります」

一夏「……。やるしかないのかよ……。！」

〈戦闘会話 シヤルロットVSセシリア〉

セシリア「シヤルロットさん、覚悟してください」

シヤルロット「セシリア達に何があつたの!?! どうして、僕達の敵になるの!?!」

セシリア「理由が聞きたいのならば、私達と共に来てください」

シヤルロット「それはできないよ! 僕はエクスクロスの一員なんだ!」

セシリア「ならば、仕方ありませんね。お相手します!」

〈戦闘会話 簪VSセシリア〉

簪「セシリア: 私達、友達だよね?」

セシリア「ええ、お友達ですわよ。これからもずっと:」

簪「それなら、どうしてこんな事を!」

セシリア「あなた方に戦う目的がお有りのようにわたくし達にも戦う目的がございませす! それだけですわ!」

〈戦闘会話 一夏VSラウラ〉

ラウラ「嫁よ、せめてもの情けだ:。苦しまずに倒してやる」

一夏「ラウラ、まだ俺の事が嫌いなのか: ?」

ラウラ「っ…！戦闘中に何を聞くかと思えば…！一夏！容赦無くいくから覚悟しろ！」

〈戦闘会話 シャルロットVSラウラ〉

ラウラ「…」

シャルロット「ラウラ…」

ラウラ「何も言うな、シャルロット。私達は敵同士だ」

シャルロット「でも、僕達は友達なんだよ！」

ラウラ「友だからと言って、戦う時には戦う…。それが、軍人だ…。シャルロット、

今まで、ありがとう」

シャルロット「ラウラは本気だ…。！戦うしかないんだよね…。！」

〈戦闘会話 簪VSラウラ〉

簪「本当に私達の敵になったの？」

ラウラ「簪、そう言えば私達はあまり関わりを持っていなかったな」

簪「それでも、一夏を中心に仲良くなったのには変わりないよ。ラウラだって、私を受け入れてくれた…」

ラウラ「昔話をしている場合ではないぞ？私はお前の敵なのだからな！」

〈戦闘会話 一夏VS楯無〉

楯無「行くわよ、一夏君！」

一夏「楯無さんは人をからかっても、悪事に手を貸す人ではなかったはずです！」

楯無「それは私を見た目で判断した意見でしょ？本当の私はこれなの。忘れないでちょうだい」

一夏「ふざけるのもいい加減にしてください！簪を悲しませて、今のあんたは俺の知る楯無さんじゃない！来るなら、倒します！」

〈戦闘会話 シヤルロットVS楯無〉

シヤルロット「学園最強の楯無さんに勝てるの…？」

楯無「よくわかってるじゃない、シヤルロットちゃん。だったら、もう抵抗しないでシヤルロット「それはできません！敵となったあなた達は僕達が止めます！」

〈戦闘会話 簪VS楯無〉

楯無「簪ちゃん、妹とは言え容赦はしないわよ！」

簪「お姉ちゃんが何を考えているかはわからない…。でも、何かあるよね？」

楯無「何の事？」

簪「お姉ちゃんは嘘が下手だよ。私はお姉ちゃんの妹だよ？何かあるかはわかる

よ」

楯無「流星は私の簪ちゃんね！なら、姉の私が倒してあげる！」

簪「倒されるわけにはいかない…。！今日こそ私がお姉ちゃんを超える…。！

楯無「（そうよ、超えなさい…。大切な妹を傷つけようとする最低な姉を。）」

一夏達は相手のIS乗り3人を追い詰める。

一夏「もう降参してくれ、3人とも！」

楯無「勝った気でないでよ！私達はまだ負けてない！」

リボンズ「いや、今日は君達の負けだ。此処は大人しく退いた方が良く」

セシリア「敵に背を向けろと仰るのですか!?!？」

ラウラ「よせセシリア。命令だ」

セシリア「くっ…。！わ、わかりましたわ…。」

楯無「またね、一夏君、シャルロットちゃん…。簪ちゃん」

簪「何度お姉ちゃんが来ても私は負けないから」

楯無「大きくなつたわね、簪ちゃん…。でも、姉として今度は負けないつもりだから、

忘れないでちょうだい！」

そう言い残し、楯無、セシリア、ラウラは撤退した……。

シャルロット「3人とも、操られてないって言ったよね？」

真耶「どうして彼等はミスルギ皇国にいたのでしょうか？」

千冬「わからん。だが、何か弱みを握られているのかもしれない……」

一夏「きつと、そうに違いない！許さないぞ！ミスルギ皇国！」

エイサツプ「一夏、そう簡単に決めつけるのは……！」

アンジュ「いいえ、ミスルギ皇国ならやりそうな事よ」

零「ミスルギ皇国もドアクダーやオニキスの様に異界人を率いれ、戦力を増強させているのか……？ いったい、何の為に……？」

〈戦闘会話　　ロックオンVSアニュー〉

ロックオン「アニュー……俺はお前を撃てない……！もうお前を離す事は出来ないんだよ！」

アニュー「嬉しいわ、ライル。でも、私はイノベーターなの……。それだけで敵対の理

由は充分よ」

ロックオン「何言ってるんだよ！お前はイノベイドでも、アニュー・リターナーっていう1人の存在だろう！」

アニュー「ライル……！」

ロックオン「何度だって言ってる！お前をもう1度、俺の女にする！」

〈戦闘会話　刹那VSアニュー〉

刹那「アニュー・リターナー！ロックオンの……ライル・ディランデイの声を聞け！」
アニュー「刹那、まさかあなたが純粹種のイノベイターになるなんて……！」

刹那「俺達はわかり合う事ができるはずだ……！お前がロックオンと分かり合えた様に……！」

アニュー「私は……私は……！」

サバーニヤはガッデスの攻撃をかいくぐり、取り付いた。

アニュー「は、離して！」

ロックオン「話さないと云っただろ！お前を俺の女にするって！」

アニュー「どうして…… どうして私を信じてくれるの……？」

ロックオン「お前が俺を信じてくれたからだろ!!？」

アニュー「ライル……！」

ロックオン「俺達の間人間だとかイノベイドだとか関係ねえ！俺はお前の事が好きだ！」

アニュー「……」

ロックオン「お前はどうかなんだよ!!？俺の事をどう思っているんだ!!？お前の口から言え！アニュー!!？」

アニュー「私は…… 私だって…… ライルが好きよ！」

ロックオン「アニュー！」

アニュー「あなたといつまでも一緒にいたい！いつまでもずっと……！」

どうやら、彼女はもう敵じゃない様だな……。

リボンズ「そうか、それが君の答えか」

アニュー「リボンズ…… ごめんなさい……」

リボンズ「それが君望んだ道ならば、それを貫くと良い…… アニュー・リターナー……。

君は、もう自由なのだから……」

アニュー「え……？リボンズ、今何と……？」

リボンズ「敵となった君を倒すと言ったんだ！」

サーシエス「なら、大将！それは俺がやってやるぜ！」

アルケーガンダムが、サバーニャとガッデスに接近している……！ロックオン！ア

ニユーさん……！

一夏「ロックオンさん！」

マサキ「避ける、2人共！」

ロックオン「くそっ！ま、間に合わねえ……！」

？「全く……見せつけてくれるぜ、ライル」

ロックオン「……!?？」

フェルト「そんな……！」

ミレイナ「デュナメスが無断出撃したです！」

スメラギ「何ですって!?？」

ラッセ「デュナメスのパイロットがいないのにどうしてデュナメスが……！」

ロックオン？「話は後だ！俺は元ロックオン・ストラトス……成層圏まで狙い撃つ男

だ！」

テイエリア「そんな……彼が……！」

刹那「ニール……デイランデイ……！」

ニール「ライルとその彼女はやらせねえぞ！アリー・アル・サーシエス！… ニール・
デイルンデイ… 狙い撃つぜ！！？」

デユナメスはGNスナイパーライフルを撃ち、アルケーガンダムに直撃させた…。

サーシエス「ぐっ？！？な、何がどうなつてやがる…！」

アルケーガンダムは銃撃を受け、軽く吹き飛んだ…。

サーシエス「ちいつ！… あ、あのガンダムは…！」

ニール「久しぶりだな、アリー・アル・サーシエス」

サーシエス「てめえはあの緑色のガンダムの兄貴か！」

テイエリア「ロックオン・ストラトス！」

フェルト「ロックオン！」

ニール「みんなも久しぶりだな！だが今の俺はもうロックオン・ストラトスじゃない。

ニール・デイルンデイと呼んでくれ」

刹那「わかった、ニール」

ロックオン「兄さん… このアル・ワースにいたのか！」

ニール「ああ、ライル。大切な女のために無茶するとはお前も隅に置けないな」

アニュー「この人が… ライルのお兄さん…」

メル「もしかして、あの時私達に食事を持つてくるのを頼んだ方ですか？？」

アマリ「え、ええ!?？」

零「… スパイじゃなかったのかよ…。」

ニール「混乱させて悪かったな」

零「… 後で話は聞かせてもらいますよ、ニールさん」

ニール「オーライ、そんなじゃま、狙い撃つとしますか！」

ハロ「ニール、ニール」

ニール「ライルの援護、頼んだぜ、ハロ!じゃあ、ライル! 乱れ撃ちと狙い撃ちのオンパレードといくか!」

ロックオン「わかった! 行くぜ、兄さん!」

ニールさんの乗るデユナメスとアニューさんの乗るガツデスを味方に引き入れた俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 刹那VSサーシエス〉

刹那「アリー・アル・サーシエス、此処で貴様を駆逐する!」

サーシエス「お前にできるのかよ! クルジスの兄ちゃんよ!」

刹那「貴様とは分かり合えないという事がわかった…!」

サーシエス「釣れねえな！こうして戦い合ってるじゃねえか！」
 刹那「戦いだけでは何も生まれない…。それを俺が見せてやる…。！」

〈戦闘会話　ロックオンVSサーシエス〉

サーシエス「てめえだけは俺がこの手で殺す!!？」

ロックオン「仕留めたのに地獄から戻ってくんなよ！」

サーシエス「てめえに撃たれた箇所が疼くぜ…。！俺から戦争を奪いやがって…。！
 てめえの大切な物も奪ってやるよ！」

ロックオン「もう、アニューは手放さないって決めたんだ…。！アニューは俺が守る
 !!？お前を何度撃つてもな！」

〈戦闘会話　ニールVSサーシエス〉

サーシエス「てめえのおかげで身体の半分が炭になったんだぜ！兄貴野郎！」

ニール「お前を許す事は出来ねえ…。！でも、仇はライルが取ってくれた！」

サーシエス「ああ、だからお前の弟は絶対に俺が殺す！」

ニール「させるかよ！ライルもあのアニューって彼女も誰一人として死なさせるわけ
 にはいかねえんだよ！狙い撃つ…。狙い撃つぜ！」

〈戦闘会話 アニューVSサーシエス〉

サーシエス「まさか、イノベイドのくせに大将を裏切るとはな！」

アニュー「私はライルと共に生きるって決めたの！」

サーシエス「安心しろ、お前を殺した後にあいつも殺してやる！」

アニュー「私は死なないし、ライルも死なせない！私が守ってみせるわ！」

サバーニヤとデナメスの連携攻撃でアルケーガンダムにダメージが入った。

サーシエス「ちいっ！此処は退くしかねえ…！覚えてやがれ！」

ロックオン「てめえの事は死んでも忘れねえよ！」

ニール「そっちこそ覚えてやがれ！俺達が必ず狙い撃つてやるよ！」

サーシエス「吐かせ！次は必ず殺してやるからな！」

そう言い残し、アルケーガンダムは撤退した…。

ニール「あいつの戦争好きはもう病気レベルだな」

ロックオン「ああいう風にはなりたくないぜ」

ワタル「後はあのリボーンズガンダムっていうガンダムだけだよ！」

アレルヤ「リボーンズ・アルマークが何を仕掛けてくるかわからない…みんな、気を

つけて！」

ソーマ「わかったわ！」

〈戦闘会話 一夏VSリボンス〉

一夏「お前が楯無さん達に何かを吹き込んだのか!?？」

リボンス「心外だな、僕は何も言っていないよ」

一夏「嘘つけ！お前だけは許さないぞ！」

リボンス「世界初のIS、男性操縦者がどんな人間か、興味があつたが… 買いかぶりすぎだったようだね、織斑 一夏」

一夏「何だと!?？」

リボンス「君には白式は相応しくない。よつと、貰い受けるよ」
一夏「お前なんか白式を渡してたまるかよ！」

〈戦闘会話 アンジユVSリボンス〉

リボンス「なるほど、君がアンジユか」

アンジュ「あいつ、私の事を知っているの……？」

リボンス「この様な女の何処がいいのか……僕にはわからないな」

アンジュ「聞こえてるわよ！何なの、あんたは！」

リボンス「すまない、忘れてくれ」

アンジュ「いったい何なのよあんたは……」

〈戦闘会話　刹那VSリボンス〉

リボンス「ダブルオークアンタ……良い機体だね。刹那・F・セイエイ」

刹那「何……!?」

リボンス「0ガンダムがない今、そのダブルオークアンタを貰おうけよう」

刹那「ダブルオークアンタは対話の為の機体だ……貴様には渡さない！」

リボンス「ならば、力付くまで奪うまでだ」

刹那「させるものか……！貴様の行なった再生は俺が何度でも破壊する……！」

〈戦闘会話　ロックオンVSリボンス〉

リボンス「君の存在は許しては置けないね……ライル・デイルンデイ」

ロックオン「奇遇だな、俺もお前のことを許せないんだよな。アニューの運命を散々

かき回しやがって！」

リボンズ「彼女は僕の駒さ、僕がどの様に使おうと僕の勝手だろ？」

ロックオン「やっぱり、許せねえ……！ ロックオン・ストラトス！ 目標を乱れ撃つ！」

〈戦闘会話　　テイエリアV S リボンズ〉

テイエリア「何故君がE L Sの存在を知っている？ リボンズ・アルマーク」

リボンズ「実は僕も自身のデータをヴェーダ奥深くに眠らせていたのだよ」

テイエリア「ヴェーダ奥深くに？！？ そうか、それで僕達の戦いを見ていたのか！」

リボンズ「実にくだらなかつたよ……あの時、E L Sを侵略していれば君達は最強になれたかもしれないのにね」

テイエリア「僕達のすべき事はE L Sを侵略する事ではなく、分かり合うために対話する事だ！ その光景を見ていて、君は何とも思わないのか！」

リボンズ「思っていたら、君達とは此処で敵対していないよ」

テイエリア「確かにそうだな。ならば、此処で君を倒す！」

〈戦闘会話　　アニューV S リボンズ〉

アニュー「リボンズ……」

リボンズ「まさか、君がまた僕を裏切るなんてね」

アニュー「私は……」

リボンズ「僕を裏切った事を後悔させてやろう」

アニュー「私だって、負けない！あなたが相手でも！」

リボンズ「(行くといいさ、アニュー・リターナー。ライル・デイランデイと共に……。君が人類とイノベーターの架け橋となる事を祈っているよ……)」

〈戦闘会話 ニールVSリボンズ〉

ニール「お前がイオリアの爺さんの計画を利用していたイノベイド、リボンズ・アルマークか」

リボンズ「君と会うのは初めてだったね、初代ロックオン・ストラトス……いや、ニール・デイランデイ」

ニール「お前には仲間や弟が世話になったんだよ……だったら、借りは返すぜ」

リボンズ「君の射撃センスでも僕を撃つ事は出来ないよ」

ニール「舐めるなよ、俺はどんな敵でも狙い撃つ男だぜ？元だがな！」

リボンズ「ならば、見せてもらおう、ニール・デイランデイ。君の狙い撃ちというものを」

ニール「ご期待に伝えてやるよ、ニール・デイランデイ… 目標を狙い撃つ！」

俺達は敵の部隊を全滅させ、ダブルオークアンタはトランザムを発動させて、リボーンズガンダムを追い詰めた…。

リボーンズ「っ…！流石は一度、僕を倒した事のある男だ」

刹那「リボーンズ・アルマーク…。大人しく投降しろ」

リボーンズ「残念だが、それは出来ない。ダブルオークアンタは必ず僕が貰う… また会おう、エクスクロス」

それを言い残して、リボーンズガンダムは撤退した…。

アニュー「リボーンズ…」

スメラギ「随分、簡単に退いたわね…」

ロツクオン「相変わらず、何考えているかわからない男だぜ…」

デイオ「彼もゾギリアと手を組んでいるのか…」

シヨウ「あいつの目的いったい何なんだ…？」

夏美「取り敢えず、戦いは終わりましたね…。」

アル「ミスルギ皇国も着実に異界人を仲間に引き入れておるな」

アイーダ「このままでは、ドアクダー軍団に並ぶ脅威となってしまうですね…。」

レイ「何か手を打たないとダメか…。」

零「取り敢えず、詳しい話はアニューさんに聞きましょう、良いですね？アニューさん」

アニュー「ええ、私に話せる範囲なら、話すわ」

俺達は艦に戻った…。

俺達はアニューさんから話を聞いた。

アニュー「私やリボンズは目を覚ました時にマナの国のミスルギ皇国に拾われたの」

刹那「何故、リボンズ・アルマークはミスルギ皇国に手を貸しているんだ？」

アニュー「それはわからないわ…。リボンズに聞いても答えてくれないし…。」

九郎「そうか…。」

ロックオン「何だっといういき、お前が生きてくれたんだからな」

アニュー「ライル…。私は…。」

ロックオン「何も言わなくても良い…。お前をまた俺の女にする事が出来たんだ。今

はそれだけで良い」

アニュー「ええ。大好きよ、ライル」

ロツクオン「俺もだ」

抱き合う2人を見て、俺達は微笑んだ。

ニール「折角の弟との感動の再会なのに、全部持っていかれたな……」

アレルヤ「そんな事はないよ、ニール」

フェルト「ニール……」

ニール「良い女になったな、フェルト」

フェルト「私なんて、まだまだだよ」

ティエリア「ニール・ディランデイ……僕は……」

ニール「まさか、お前が仲間思いになっているとはな……ティエリア」

ティエリア「僕だって、変わろうと思えば変わる」

ニール「……悪い、そうだな！」

パトリック「あのよ……」

ニール「連邦軍か」

パトリック「あの時は悪かったな……。目をやっちゃまって……」

ニール「ん？ああ、あの時、GN-Xで俺に攻撃してきた奴か……。気にしてねえよ。も

う終わった事だ」

ロックオン「相変わらず、心が広いな、兄さんは」

ニール「お前ほどじゃないさ。それにしても俺の後を継ぎ、女まで作るとはな」

アニュー「お義兄さん：：」

ニール「お義兄さんときたか」

すると、イアンさんがハロと赤ハロを抱えて来た。

イアン「元氣そうじゃないか」

ニール「おやつさんもな」

イアン「ロックオン、お前のサバーニヤに乗ってるハロを赤ハロに変えさせてもらう

ぞ」

ロックオン「は？じゃあ、ハロはどうするんだよ？」

イアン「デユナメスに乗せる」

ハロ「ニール、ニール！」

ニール「はっ：： わかってんじゃねえかよ、おやつさん。また会えたな、相棒」

ニールさん：： 本当にみんなと出会えて嬉しそうだな：：。

アンジュ「：：」

ユイ「みなさん、無事で良かったね」

アンジュ「わたしは謝る気ないから……。でも……」

ユイ「アンジュ……？」

アンジュ「ありがとう、ユイ。あなたのおかげで私は今日も生きる事が出来たわ」

ユイ「ふふつ、どういたしまして！」

あつちもあつちで問題は解決したか、全く……。

刹那「どうだ、ニール……。エクスクロスは……」

ニール「ああ、最高だ！」

零「あなたもその一員ですよ、ニールさん」

ニール「これから世話になるぜ、零」

俺はニールさんと握手をして、笑いあった……。

第16話 めぐり合う螺旋

ーベルリ・ゼナムです。

ついに僕達はドツコイ山付近まで来た。

ベルリ「それって本当ですか!?!」

ハツパ「ああ……。細部に違いはあるが、F91とビギナ・ギナの操縦系統はユニバーサル・スタンダードだ」

シーブック「ユニバーサル・スタンダード?」

ハツパ「簡単に言えば、我々の世界のシステムに関する統一規格だよ。要するに、君達のモビルスーツとメガファウナにあるモビルスーツの基礎設計は共通しているって、事だ」

アイーダ「では、私でも、シーブックさんやセシリーさんの機体を操縦する事が出来る?」

ハツパ「そう言う事です」

ノレド「すごい偶然!」

ラライヤ「すごい、すごい！」

九郎「本当にそれは偶然なのか？」

シーブック「…それに、偶然で片付けていいのか…？」

ミラーナイト「シーブック達の世界やベルリ達の世界に何かの必然のものがあるという事ですか？」

ケロロ「シーブック殿のF91は宇宙世紀の機体であつていますか？」

シーブック「ああ…。でも、ベルリの時代は宇宙世紀じゃないし…」

セシリー「そして、ミスルギ皇国や刹那さん達のガンダムも全く違う操縦系統ですよ
ね？」

ゼロ「全く違う存在のガンダムがアル・ワースに揃つてゐるってわけか…。まるで、俺達、ウルトラマンと同じだな」

ハツパ「今の地点では何とも言えないが、技術屋として、偶然という言葉で終わりにするつもりもない。そういうわけなんで、君達の機体…。詳しく調べさせてもらつていいか？」

シーブック「構いません。これから整備をお願いしますし」

ハツパ「そちらは任せておいてくれ。君のF91も可能な限り、修理してみる」

シーブック「ありがとうございます」

アルト「F91の調子が悪いのか？」

シーブック「僕は戦いの直後に転移してきたからな。その影響だと思う」

ハツパ「随分と激しい戦いだったらしいな。機体に相当の負荷をかけたって事はすぐにわかったよ」

夏美「どの様な戦いだったんですか？」

シーブック「すまない……。あまり思い出したくないものなんだ」

夏美「ご、ごめんなさい」

シーブック「いいんだ、夏美。気にしないでくれ」

セシリー「……」

ベルリ「シーブックさんと言うよりも、セシリーさんにとって嫌な思い出みたいですね」

アキト「（そうみたいだね。随分と辛い体験をしたようだ……）」

シーブック「それでも僕は元の世界に帰らなきゃならない……」

冬樹「元の世界に戻って、戦いの続きが待っていても……ですか？」

シーブック「ああ。だから、そのためにも、ドアクターの打倒は協力させてもらう」

エイサツ「俺達も同じだよ。これからも頑張ろう」

セシリー「ええ……」

シーブック「(鉄仮面は倒したけれど、アクシズがどうなったかはわからない…)」
セシリー「(たとえば、どうな結果になっていようと私達はそれを見届けなくてはならない…)」

―新垣 零だ。

今、メガファウナのパイロット待機室でドニエル艦長とアンジュが話をしていた…。

ドニエル「… どうしてもダメかね？」

アンジュ「無理な相談ね」

ドニエル「私としても立場というものがあるんだが、協力してもらえないか？」

アンジュ「私にも誇りというものがあるの。誰になんと言われようとね」

ドニエル「… こんな状況でも姫様は姫様か…。では、失礼する」

そう言い残し、ドニエル艦長は部屋を出た…。

アンジュ「皇女でなくなろうとも生まれた国を売るつもりはないわ」

ワタル「アンジュさんとドニエル艦長… 何かあったの？」

クラマ「ドニエルの旦那は上からの命令だったマナの国の調査つてのを諦めきれない

らしくてよ…。」

ユイ「それで、アンジュから色々な話を聞こうとしたわけだよ」

しんのすけ「アンジュお姉さんはマナの国のお姫様だったゾ」

ニール「ところが、アンジュはノーマとして追放されたとはいえ、自分の国を売る気はないって突っぱねたんだけ」

サラ「流石はアンジュ！カッコいい！」

ティア「うん、カッコいい！」

海道「でも、せっかくの情報源を生かせねえ、ドニエルのおっさんも気の毒だな…。」
零「ですが、マナの国に協力を頼むのは無理じゃないんですか？近づくとか攻撃される」
ヒミコ「ねえねえ、トリさん。獣の国のお友達に協力をお願いできないのか？」

クラマ「だから、言ってるだろうが！俺は獣人じゃねえって！」

ワタル「獣人達の住む国か…。」

テイエリア「ところで、アンジュ達は帰らなくてもいいのか？」

ヴィヴィアン「あたしはアルゼナルに戻ってもいいんだけど、アンジュはいい機会だから、このままどさくさに紛れてだっそうするつもりだよ」

マサキ「良いのかよ？」

ヴィヴィアン「そこでクイズです！あたし達がアルゼナルに捕まったら、どうなるで

しよう!!?」

ヒミコ「お尻百叩き！」

ワタル「晩ご飯抜き！」

しんのすけ「グリグリ攻撃！」

零「流石にそんな甘いもんじゃないだろ…。」

ヴィヴィアン「じゃあ、特別に大ヒント！縛り首と銃殺のどちらでしよう!!?」

やっぱりか…。

ワタル「!!?!!?」

サヤ「それまでにしてください、ヴィヴィアンさん。子供達には刺激が強過ぎます」

真上「フン、そんな事でこの先、戦い抜けるのか？」

青葉「真上さん、きつい言葉ですね」

ヴィヴィアン「確かに刺激が強過ぎたみたいだ。ごめんね、みんな」

しんのすけ「だ、大丈夫だゾ」

ワタル「そんな罰があるのに脱走するなんて、そのアルゼナルって… そんなに嫌な

所なんだ…。」

ヴィヴィアン「アンジユの場合、色々あったからね」

アンジユ「ヴィヴィアン…！余計なこと言うのはやめなさい！」

ヴィヴィアン「ほくい！」

リー「ふう：：。ただいまっ」と

青葉「お帰んなさい、リーさん、刹那さん、それにディオも」

まゆか「どうでしたか、偵察の結果は？」

ディオ「付近にドアクター軍団らしきものは見られなかった」

刹那「とりあえず、シバラクの伝手をたどり、何とか補給の当ても確保した」

青葉「他に何かの情報は？ほら：：。ゾギリアの事とか：：。」

ディオ「この辺りは、マナの国の勢力外だからな。連中の動きは見られない」

リー「ただ、山賊がいるらしく、付近の村が困っているって話だ」

一夏「山賊：：？」

刹那「かなりの戦力があるらしく、魔徒教団に対処を頼んでいるらしいが、すぐには来てくれないだろう：：。」

ワタル「だったら、僕達の出番じゃない？」

簪「でも、ワタル君：：。もうすぐ目的地のドツコイ山だよ？」

青葉「でも、補給物資の積み込みがあるから、此処に少しの間、留まるんですよね？」

リー「まあ、それはそうだが：：。」

しんのすけ「じゃあ、その間にさっさと山菜退治に行ってくるよ！」

フェルト「山菜……？」

アンドレイ「それを言うなら、山賊だよ。しんのすけ君
リー「待てつてお前ら！」

ワタル「待たないよ！だって僕は救世主だもんね！」

竜馬「無駄だぜ、リー。こいつらは言う事を聞かないんだ」

零「そうですね」

まつ、俺達も手伝うんだけどな……。

兎に角、俺はディオと刹那の案内の元、ドツコイ山の近くの村に来た。

ワタル「到着！道案内ありがとう、ディオさん！刹那さん！」

ディオ「……」

エンネア「折角人助けに来たのに、テンション低いね」

青葉「もつとテンション上げていこうぜ」

ディオ「……俺や零さんは倉光艦長にワタル達の護衛を頼まれたが、お前達は何をしに来た？」

一夏「え……？」

エンネア「エンネア達も手伝おうと思って……」

青葉「そう邪険にするなよ。俺達、バディなんだから一緒に行動するのは当然だろ？」

ディオ「前にも言ったはずだ。プライベートには踏み込むなと」

青葉「残念！艦長の指示で動いてるんだから、今は作戦行動中だ」

ディオ「屁理屈を……！」

一夏「一本取られたな、ディオ！」

青葉にしては考えたな……。

青葉「やめようぜ、ディオ。人助けに来たつてのに、俺達が争ってどうするんだよ？」

ディオ「だったら、お前は帰れ」

青葉「そこまで邪魔者扱いするのかよ……！」

ヒミコ「喧嘩はやめるのだ、二人共」

零「ヒミコの言う通りだ。お前らが争っている場合じゃないだろ」

ディオ「……わかりました」

青葉「何だよ……。ヒミコや零さんの言う事は聞くんだな」

アマリ「青葉君も挑発するような事を言うのはやめた方がいいですよ。バディなんですから」

メル「それで、戦闘中に支障が出ても困りますし……」

青葉「それはディオに言ってくれよ……。（ちえっ……。この前の戦闘で、少しは打ち解けたと思ったのよ……）」

メル「まずは村の人に話を聞きましょう」

零「そうだな、エクスクロスが動くのは、それ次第だ」

ワタル「了解！ドッコイ山の近くの人達が困っているのを放つてはおけないもんね
！」

シバラク「しかし、山賊の被害を受けているにしては皆、あんまり不安そうではない
のう……」

アマリ「ええ……。それどころか、皆さん……。リラックスしていますね……」

一夏「すみません。この村は山賊に襲われているんですか？」

住民「あ、うん……」

しんのすけ「でも、そんな風には見えないゾ……」

住民2「それはね、救世主が来てくれたからよ」

ワタル「いや、照れるなあ！そんな風に期待されちゃうと！」

住民「何言ってるのかね、君は？」

住民2「可哀想に。きつと頭が悪いのね」

……随分な言い草だな。

ワタル「そうじゃなくて！」

千冬「ワタルは子供だが、このアル・ワースの救世主なのですよ」

住民2 「そうなの!?？」

住民 「とても信じられんなあ…」

… おいおい。

ワタル 「うぬぬ…」

零 「その救世主って人は何処に？」

住民 「私達が山賊に脅かっていると知ったら、俺に任せとけ… と言つて、奴等のアジトに向かつて行きました…」

住民2 「それも、たった一人で」

一夏 「一人で!?？」

ワタル 「ハツキシ言つて、本気でカツコイイぜ！」

刹那 「山賊はかなりの戦力を持っていると聞くが…」

ディオ 「その男は、余程のバカなのだろう」

青葉 「盛り下がる事言うなよ！」

ディオ 「そうでなければ、報酬目当てで村の人達を脅した詐欺師だ」

住民2 「私達… 彼に報酬を払ってませんけど…」

彼…? っつて、事は男か…

ディオ 「何…?」

住民「それにあの自身に満ちた言葉……決して嘘をついていないと思うな」
ワタル「ますますカツコイイ！」

シバラク「うむ……。まさに漢の中の漢だ」

メル「たつた一人で山賊に立ち向かう男の人……。一体何者なんです……。？」
ただ、わかるのは相当な手練れかもしれないって事だ……。

第16話 めぐり合う螺旋

獣人「あの村の連中はこちらの要求を蹴りやがった！つてなわけで、俺達で少しばかり脅かしてやるぞ！」

獣人2「しかし、いいんですかい……。？雇い主はともかく……。隊長に許可を得ず、勝手に部隊を動かして……」

獣人「構うもんか！細かい事をグチグチと言うとはお前、政府の回し者か!?？」

獣人2 「そうじゃないですけど…。」

獣人 「俺達は獣人だ！ 生きたいように生きるのが獣人の生き方だ！」

獣人2 「ちよつと待った、リーダー！ 何か来ますぜ！」

獣人 「お、おいおいおい！ あれは!?!？」

「俺は穴掘りシモンだ。

俺はグレンラガンに乗って、山賊と呼ばれた獣人達が乗るガンメンの前に立つ。

シモン 「よう… お前等」

獣人2 「げげーっ!!?」

獣人 「グレンラガン！」

シモン 「新政府のやり方に気に食わないってのは構わねえ…。だがな！ 余所の土地で他人様に迷惑をかけてるとなつちや見逃すわけにはいかねえ！」

獣人2 「ど、どうします、リーダー!?!? グレンラガンって事はあれに乗っているのは…！」

獣人 「こ、こんな所にグレンラガンとあの男がいるわけがねえ！ あれは偽物に決まってる！ やつちまえ、者共！ 偽物グレンラガンを叩き潰せ！」

来るか…！

シモン「言うに事欠いて偽物呼ばわりかよ…。だったら、骨身に教えてやるしかねえな…。お前等！俺を誰だと思っついていやがる!!?」

俺はグレンラガンを前に出した。

シモン「シロ、ひまわり！ちよつと揺れるぞ！」

ひまわり「たいや！」

シロ「ワン！」

シモン「心配無用つてわけか…。だったら、加減せずにやるから、しつかりと掴まつてろよ！」

俺は敵のガンメン部隊を倒し、獣人達も脱出した。

シモン「片付いたか…。これであいつ等も根性を入れ替えるといいんだがな…。」

ひまわり「たいや」

すると、またもやガンメン部隊と謎の兵器の部隊が現れた。

ヴィラル「バカ共が…！よくも先走つて勝手な真似をしてくれたな…！」

シモン「ヴィラル！お前なのか!!?」

ウイルス「久しぶりだな、シモン。まさか、こんな所で再会するとは思わなかったぞ」
シモン「それはこっちの台詞だ」

ひまわり「うー？」

シロ「ごうー！！」

ウイルス「まさか…… グレンの方に誰かを乗せているのか？」

シモン「乗せているのは赤ん坊と犬だ……。それに、乗せているのはラガンのほうだな……。村で見つけて、ついて来たんだよ。それにしても、新政府のやり方に反抗して、レジスタンスになったと聞いてはいたが、山賊の大將になつていたとはな」

ウイルス「フ…… 我ながら情けないと思つているさ。笑いたければ笑え」

シモン「…… そんな事はしねえよ」

ウイルス「新政府の総司令官のお前が何故、こんな所にいる？」

シモン「…… 世界は変わつていくからな。総司令官として、広い世界つてのを知らないきやならないと思つたのさ」

ウイルス「それで旅に出たというわけか。勝者のおごりか、シモン！」

シモン「俺達は螺旋王を倒して、地下に住んでいた人間達を解放した……。だが、決して獣人と人間を差別したりはしねえ！新政府は、人間と獣人が平等に暮らせるようにみんな頑張っている！」

ヴイラル「それは人間達の理屈だ！俺は螺旋王を倒したお前達の下につくつもりはない！シモン！ここで出会ったのなら、好都合だ！決着をつけてやる！」

トッド「勝手に盛り上がってんなよ、ヴイラル」

朗利「俺達の任務は、あの村の連中を痛めつける事だろうが！」

ヴイラル「トッド、朗利、金本……。そちらはお前達に任せる」

金本「は!!？」

ヴイラル「俺はこの手で奴を倒さねばならんだ！」

トッド「宿敵ってわけかよ……。いいだろう、好きにやりな」

朗利「いいのかよ？勝手な指示を出して」

トッド「あいつの気持ちは俺にもわかる。だからだ」

金本「理解できないね……。そういうの」

ヴイラル「…恩に着る」

シモン「てめえら!!？」

俺は村を守る様にグレンラガンを動かした。

シモン「俺がいる限り、このラインを超えられると思うなよ！」

トッド「ハ！強がりはやしな！たった一人で何が出来るとってんだ！」

朗利「大人しく逃げた方が身のためだぜ！」

ヴイラル「気をつける、トッド、朗利……！あのシモンという男の爆発力は侮れん！」
朗利「あの熱血野郎の相手は任せるぜ、ヴイラル！」

トッド「俺達は村へと向かう！」

シモン「……ひまわり、シロ……。ここで降りた方がいいぞ？」

ひまわり「たいや、たいやー！」

シロ「うー、ワンワン！」

シモン「最後までいるってか……。お前等もなかなかガッツがあるじゃねえか！悪かったな！」

？「ならば、我が輩達も手伝うのであゝる！」

村の方から破壊ロボが現れた。

シモン「ウエストにエルザか！突然いなくなつてビックリしたぞ！」

エルザ「博士が突然走り出したから、エルザもビックリしたロボ」

ウエスト「いやはや、このアル・ワースという世界は興味深い物がたくさんあるのである！」

シモン「兎に角、手伝つてくれるならありがてえ！」

ウエスト「貴様には世話になつたからな、借りは返すのである！」

エルザ「村はエルザ達に任せて存分に戦うロボ！シモン！」

シモン「なら俺も守りながら存分に戦う！行くぞ、ウエスト！エルザ！」
ウエスト「了解！スーパーウエスト無敵ロボ28号DXの力を見せつけてやるのである！」

シモン「来やがれ、山賊共！村には一歩たりとも入らせねえぞ！」
こうして、俺達の村を守る戦いが始まった……。

〈戦闘会話 ウエストVS初戦闘〉

エルザ「エルザ達の力を見せてやるロボ、博士！」

ウエスト「この天才科学者、ウエストの破壊ロボの性能をとくと見るがいい！行くのである！！？」

戦いが始まって、数分の事だった……。

朗利「さっさと諦めな、ヒーロー気取り共！」

トッド「お前等だけじゃ無理なんだよ！」

シモン「俺達だけじゃねえ！」

金本「何だと…!?」

シモン「誰かが歩きや、そこに道が生まれる！道が生まれりや、そこを誰かが歩く！
そうやって物事ってのは進むんだろうが！」

トッド「笑わせてくれるぜ！その最初に歩く誰かがお前ってわけかよ！だがな…
！」

ワタル「うるさいぞ、悪党！」

すると、そこへ3機の戦艦が現れた…。

―新垣 零だ。

俺達、エクスクロスは村を守っている2機を守る為に動き出し、出撃した。

ワタル「お待たせ、救世主さん！って僕も救世主だけどね！」

シモン「言ってる事はよくわからねえが、手伝ってくれるんだよな？」

ゼロ「勿論だぜ！」

青葉「俺達が来たからには、もう安心してくれ！」

ベルリ「山賊相手に1人で立ち向かうガッツ…！しびれました！」

アキト「君にはヒーローという言葉が相応しい……！」
簪「カツコイイ……！」

ヴィヴィアン「うおおおっ！みんな、燃えてるな！」

シャルロット「簪のヒーロー好きがこんな所で……」

アイーダ「あの方の男気が、皆の心に火をつけたのですね」

ウエスト「何故にか、我が輩達が忘れられてるのである……？」

エルザ「待つロボ、博士！あの部隊の中にデモンベインがいるロボ！」

ウエスト「ぬぁにいいっ……？貴様であるか、大十字 九郎！」

エルザ「ダーリン！久しぶりロボ！」

九郎「何で、変質科学者とエルザまでいるんだよ……？」

エンネア「あの2人も転移して来たみたいだね」

竜馬「九郎、ダーリンってどういう事だ？」

九郎「それはあいつが勝手に言ってるだけだつての！」

ウエスト「貴様とまた共闘となるとは……不気味であるな！」

九郎「それはこっちの台詞だ！」

シモン「ウエスト達も知り合いも会えたようだな……」

シロ「ワンワン！」

ひまわり「たいやー!!?」

しんのすけ「お?その赤いロボットに乗ってるのはひまわりとシロか!!?」

シロ「おいらはここにいるニヤ」

しんのすけ「違うゾ!シロは犬でオラのペット!ひまわりはオラの妹だゾ!」

アマリ「良かったですネ!妹とペットさんと会えて!」

アンジュ「妹...か...」

シモン「お前の兄貴なのか、ひまわり!なら、あの緑色のガンメンに送ってやる!」

そう言い、赤いガンメンはカンタムロボに近づき、ひまわりという赤ん坊とシロという犬を差し出した。

カンタムロボはそれを受け取り、操縦席に入れる。

しんのすけ「会えて良かったゾ!ひま!シロ!」

ひまわり「たいやく!」

シロ「ワンワン!」

しんのすけの奴...嬉しそうだな...。

カンタム「良かったね、しんのすけ君!」

しんのすけ「うん!」

シバラク「今から、共に戦う仲間としてお主等の名前を聞かせてくれ!」

シモン「シモンだ」

ウエスト「天才科学者のウエストであゝる！」

エルザ「エルザロボ！よろしくロボ！」

アンジュ「シモン……」

ホープス「マスター……。もしや、あの方は……」

アマリ「え、ええ……；でも、今は山賊の相手をする方が先です」

ユイ「し、シモンさん……？本当にシモンさんですか！？？」

レナ「久しぶりね！」

シモン「その声……ユイとレナか！？本当に久しぶりだな！」

アル「知っておるのか？」

ユイ「1度だけお会いた事があるんです！」

シモン「立派になったじゃねえか！」

レナ「シモン、今は……」

シモン「わかつてる！今は山賊を倒すぞ！」

シヨウ「トッド！お前、山賊の一味になっていたのか！」

トッド「ちつ……！シヨウの奴もいやがるか！」

エイサツプ「朗利、金本！お前達、まだこんな事を！」

金本「エイサップもいるよ！」

朗利「お前も相変わらずだな！エイサップ！」

トッド「まあいい……。作戦変更だ！シヨウの相手は俺がする！」

朗利「なら、エイサップの相手は俺達にやらせてもらうぜ！」

ヴィラル「今度はお前達の宿敵が来たという事か。いいだろう。それにあの連中……どうやら例の奴等のようだ」

ワタル「やい、山賊共！僕達が来たからには、これ以上、好きにはさせないぞ！」

零「俺達、エクスクロスが、お前等を退治してやるぜ！」

シモン「こいつは頼もしい援軍だぜ！」

ウエスト「流石は我が永遠のライバル、大十字 九郎とその仲間なのである！」

シモン「行こうぜ、エクスクロス！口で言ってもわからない連中には痛い目に遭ってもらうしかねえぞ！」

俺達は山賊達との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話　しんのすけVS初戦闘〉

シロ「うー……。ワンワン！」

ひまわり「たいいやー！」

しんのすけ「ひまとシロもやる気満々だゾ！」

カンタム「流星はしんのすけ君の家族だ……よし行こう！」

〈戦闘会話　エイサツプVS金本〉

金本「エイサツプ！どうして俺達の邪魔をするんだ！」

エイサツプ「お前達こそ、村の人達を襲って何がしたいんだ！」

金本「それが俺達の任務だからやってるだけだよ！」

エイサツプ「多くの人がいるんだぞ！なんでそれがわからないんだよ!!？」

ナナジンのオーラフレイムソードで金本の乗るシンデンを斬った。

金本「くそッ！何で勝てないんだよ！」

エイサツプ「良い加減にしろ！金本！」

金本「お前こそ良い加減に気づけよ！俺達は差別されてるんだぞ！」

エイサツプ「だからって、誰かを傷つけて良いわけないだろ！」

金本「うるさい！次は負けないなら覚えていろよ！」

そう言い残し、金本のシンデンは撤退した……。

朗利「金本に説得なんて無駄だぜ！エイサップ！」

エイサップ「……俺達は同じ、異界人なのに……！」

〈戦闘会話 ショウVS朗利〉

朗利「お前、別世界の聖戦士なんだってな！」

ショウ「何故、自分からオーラを歪めようとするんだ!?？」

朗利「歪めさせたのは世界と人だ！俺は絶対に復讐してやる！」

ショウ「恨みに囚われても何も無いんだぞ！どうしてそれがわからないんだよ！」

〈戦闘会話 シモンVS朗利〉

朗利「大人しく退いたほうが身のためだぜ？熱血ヒーローさんよ！」

シモン「お前こそ、大人しく諦めた方が身のためだぜ？」

朗利「何だと……!?？」

シモン「俺の進む道を阻むなら、お前の機体にどデカイ穴を開けてやる！俺のドリルでな！」

〈戦闘会話　ウエストVS朗利〉

朗利「科学者如きが俺に敵うとでも思ってたのかよ？」

ウエスト「ぬふふ！この天才の我が輩をバカにするとは愚かな男なのである！」

エルザ「ちなみに如きっていう奴ほど負けるのは早いって言うロボ」

ウエスト「そうなのである！よって、貴様の敗北は既に決まっているのである！」

〈戦闘会話　エイサツプVS朗利〉

エイサツプ「此処は俺達の世界と違うんだぞ、朗利！」

朗利「だから何だよ？何処の世界でも俺のやる事は変わらないんだよ！」

エレボス「オーラがどんどん歪んでいくよ……エイサツプ……」

エイサツプ「止めてやる……！それが友人として、俺のできる事だ！」

ハイパーオーラフレイムソードで朗利のシンデンを何度も斬り裂いたナナジン。

朗利「しまった……！また負けたのか……！俺は……！」

エイサツプ「朗利！ドアクター軍団なんて抜けて、エクスクロスに來い！」

朗利「今更、情けをかける気かよ、エイサップ！」

エイサップ「違う！ただ俺はお前と戦いたくないだけだ！」

朗利「そうやってお前等は俺と金本をコケにするんだろ！そうはいかないぜ！お前は必ず倒す！」

朗利のシンデンはそう言つて、撤退した…。

グレンファイヤー「あいつ等にはエイサップの声は届かないのかよ…」

エイサップ「…」

エレボス「エイサップ…」

エイサップ「もしもの場合は朗利達を討たないとダメかもしれないな…」

シヨウ「だが、それは本当の最終手段だぞ、エイサップ」

チャム「どうしても止まらない時はそうするかしかないね」

エイサップ「わかっていきます。俺だって、朗利達を討ちたくないですから…」

〈戦闘会話 エイサップVSトッド〉

トッド「そこをどけ、エイサップ！」

エイサップ「俺が退いたら、あなたはシヨウさんと戦うでしょう!?」

トッド「何当たり前の事を言ってるやがんだ！それが俺の目的だからな！」

エイサップ「戦いは戦いを広めるだけです！それぐらいあなたでもわかってるはずです！」

トッド「だから何だよ？俺はシヨウと戦えれば、良いだけだ」

エレボス「説得は無理だよ……エイサップ」

エイサップ「くそッ……！斬るしかないのか……！」

〈戦闘会話　ウエストVSトッド〉

トッド「科学者が俺の邪魔をするんじゃないやねえよ！」

エルザ「エルザ達は別に邪魔なんてしてない口ボ」

ウエスト「そう！我が輩達が進む道に貴様がいるだけ！つまり、貴様が邪魔なのである！」

トッド「な、何言ってるやがんだよ、こいつ……！」

ウエスト「この言葉を理解できぬものでは我が輩には勝てん、それを証明してやるのである！」

シヨウはダンバインのオーラ斬りでピアレスにダメージを与えた。

トッド「ちいっ！ピアレスが、もうもたん！」

シヨウ「トッド！これがお前の選んだ生き方なのか！」

トッド「お前に俺の人生をどうこう言う資格があるのかよ！俺は俺の生きたいように生きる！シヨウ！その邪魔をする以上、お前は俺の敵だ！」

シヨウにそう言い放ち、ピアレスは撤退した。。。

チャム「トッド…シヨウと戦うとどんどんおかしくなっていくみたい…」

シヨウ「わかつているのか、トッド…。このままじゃ、前と同じ事の繰り返しなんだぞ…。」

〈戦闘会話 零VSヴィラル〉

ヴィラル「お前がその組織の中核と見た！」

零「バカ言うな、俺は一般兵だよ」

ヴィラル「だが、俺にはわかるぞ！お前は相当な手練れという事が！」

零「そう言ってもらえて光栄だが、生憎と俺はまだまだの男なんだな！それでも、お前を倒すことはできる！」

〈戦闘会話　メルVSウイルス〉

ウイルス「その機体……お前はオニキスカ!?？」

メル「私はもうオニキスではありません！ガンメンとの戦闘は初めてですが、やってみせます！」

〈戦闘会話　一夏VSウイルス〉

一夏「あの機体……顔がデカイな……！」

ウイルス「そんな、スーツで俺のガンメンとやりあおうとは相当なバカだな！」

一夏「ISを舐めるな！パワーでダメなら、空から攻撃するまでだ！」

〈戦闘会話　しんのすけVSウイルス〉

カンナム「あれがガンメンか……」

ウイルス「どうやら、そちらもパワーに自信があるみたいだな！」

しんのすけ「カンナムの凄さはそれだけじゃないゾ！それをオラ達が教えてやるゾー！」

ひまわり「たいやー!!?」

シロ「ワン！」

〈戦闘会話 刹那VSウイルス〉

ウイルス「……！何だ、お前は……人間なのか？」

刹那「人の姿をした獣……。俺達も分かり合えるはずだ……！」

ウイルス「何シモンみたいな事を言っつてやがる！俺は人間とわかり合う気なんてないんだよ！」

〈戦闘会話 アキトVSウイルス〉

アキト「お前が敵のエースか……！」

ウイルス「機動性は良いが、捕まえてしまえばこちらのもの……！」

アキト「簡単に捕らえられると思うな……山賊！」

〈戦闘会話 エイサツプVSウイルス〉

ウイルス「朗利や金本には悪いが、お前をここで倒させてもらおう！」

エレボス「わわっ！来るよ！エイサツプ！」

エイサツプ「あの動き……並大抵の敵じゃない！激しく動くからしっぴかり掴まってるよ！エレボス！」

〈戦闘会話 九郎VSウイルス〉

ウイルス「グレンラガンと同等なパワーを持つているガンメンか！これは楽しめそう
だ！」

アル「デモンベインはガンメンではない！」

九郎「今はそんな事、どうでも良いだろ！？顔がデカイ生意気野郎をぶっ飛ばすのが
先だ！！？」

〈戦闘会話 ウェストVSウイルス〉

ウェスト「何とまあ、ブサイクな機体であるな」

ウイルス「お前のガンメンも似た様なものだろうが」

ウェスト「なぬ！？我が輩のスーパーウェスト無敵ロボ28号DXをバカにするなの
である！」

ウイルス「長いんだよ、名前が！！？」

エルザ「そもそも、ガンメンじゃないロボ」

〈戦闘会話 ケロロVSウイルス〉

ウイルス「そのガンメンもなかなかの性能だな」

ケロロ「自分の機体を褒められて悪く思わないであります、これはガンメンではないであります！」

ウイルス「では、その胸の顔は何だ!?!?」

ケロロ「胸に顔があるからと言って、何でもガンメンだと思わない事ではありませんな！
ゲーロゲロゲロ！」

〈戦闘会話　ゼロVSウイルス〉

ウイルス「お前は強者とわかるぞ！」

ゼロ「へえ、俺の強さをわかるとは…流石は獣だな」

ウイルス「だが、俺にだって、負けられん理由がある！」

ゼロ「それは俺も同じだ！パワー対決で勝負してやるぜ！」

〈戦闘会話　グレンファイヤーVSウイルス〉

グレンファイヤー「デカイ顔して生意気なんだよ！」

ウイルス「お前からはあの男と同じ匂いがするな…！」

グレンファイヤー「匂いだあ？わけわかんねえ事言ってねえでかかってきやがれ！」

ウイルス「上等だ！その体を串刺しにしてやる！」

〈戦闘会話　ゴモラVSウイルス〉

ゴモラ「キシヤーン！」

ウイルス「よもや、その様な獣がいるとはな…！」

レイ「怪獣を相手にするのは初めてか？だったから、怪獣の力を教えてやる！」

〈戦闘会話　海道VSウイルス〉

ウイルス「な、何だ…？ 罫髑の魔神か…？！」

海道「驚きながらもカイザーに臆さないとほなかなかの男だな、お前も」

真上「あの男を思い出させる声で虫唾が走るな…！」

ウイルス「(あの男…？まさか、あいつの事を言っているのか…？)」

〈戦闘会話　アルトVSウイルス〉

ウイルス「その翼を折ってやる！」

アルト「簡単に折られてたまるかよ！俺の羽ばたく翼は俺自身を守る！」

〈戦闘会話 ユイVSヴィラル〉

レナ「獣人のガンメンが来るよ、ユイ！」

ユイ「あれが、ガンメン…。初めて見た…。」

ヴィラル「ルクスの国のレガリアか！相手にとって不足はない！」

ユイ「村の人達を襲うなら、容赦はしません！」

グレンラガンのギガドリルブレイクで敵のエンキドウドウにダメージを与えた。

ヴィラル「やってくれるな、シモン！今日はここまでだ！」

シモン「ヴィラル！逃げる気かよ！」

ヴィラル「俺にも義理というものがあるんでな。お前等の事を報告しなくてはならん。だが、次の機会には俺も死力を尽くす！長きに渡るお前との戦い、必ず決着をつけるぞ！」

そう言って、エンキドウドウは撤退した…。

シモン「義理だと…？」

九郎「あのヴィラルって野郎…。俺達の事を上に報告するみたいだな」

マサキ「つてこたあ、山賊の戦力はあれで終わりじゃねえのか」

ワタル「よし！大勝利だ！」

セルゲイ「そうだな、だが今回は……」

スカーレット「今日の勝利は、私達だけのものじゃない。シモンとウエストのおかげだからな」

エルザ「エルザも忘れないでほしいロボ！」

ワタル「そうだったね。ありがとう、シモンさん、ウエストさん、エルザ」

シモン「礼を言われる程の事じゃねえさ」

ウエスト「我が輩達の腕なら当然の事である！」

ヒュウガ「流石だな。なかなか言える台詞じゃないぞ！」

グランデイス「そうだね。ありやかなりの大物だ」

シモン「（ヴィラル：。。 お前が決着をつけたいつてんなら、何度でも相手をしてやる。そして、教えてやる。世界はどんな変わっていくって事をな）」

俺達はそれぞれ艦に戻り、ロボットから降りて、村で話をする事になった。

ワタル「山賊のアジトってドツコイ山にあるの!?？」

住民「連中は、あの辺りを根城にしてると聞いています」

千冬「そうになると、あの山賊共はドアクダー軍団の配下の可能性が高いな」

アーニー「僕達に先回りして、迎え撃つための戦力を集めていたのか……」

エイサップ「朗利や金本、トッドさんもいたということは、あのクルージング・トムという男もいるでしょうね」

ワタル「だったら、こつちから乗り込んでドツコイ山であいつとの決着をつけてやる！」

シモン「その戦い……俺も付き合おうぜ」

ロツクオン「良いのか？シモン」

シモン「あいつらの中には知った顔もいるしな。世界のために戦ってるっていうんなら、俺の力も使ってくれ」

ユイ「心強いです、シモンさん！」

ウエスト「我が輩達も力を貸してやるのである！」

九郎「どういう風の吹きまわしだよ？」

ウエスト「我が輩達の世界へ帰還するためである！」

九郎「そんな事だろうと思つたよ……」

エルザ「ダーリンとまた一緒にいられる口ボ！」

アル「妾の九郎にそうやすやすと近づくでない！」

エルザ「お前のじゃない口ボ」

エンネア「九郎は私のものだから！」

アル「な、何をー!?？」

しんのすけ「ふうー、やれやれ、みつともないぞ」

メル「その子達がひまわりちゃん和シロですか？」

しんのすけ「うん！ひま達も一緒に行く事になったゾ！」

シロ「ワン！」

シロ「よろしくニヤ、シロ！」

シロ「ワン！」

ひまわり「たいやー！」

刹那「な、何だ…!?？」

しんのすけ「刹那お兄ちゃんに抱っこしてもらいたの？」

ひまわり「うーうー」

刹那「…赤ん坊を抱いた事は…」

アレルヤ「刹那、何事も経験だよ」

刹那「他人事だと思つて、お前は…！」

そう言いながらも、刹那はひまわりを抱いた。

なんか、シユールだな…。

ワタル「兎に角、これからよろしくね！シモンさん、ウエストさん、エルザ、ひまわりちゃん、シロ！」

シモン「こつちこそな、救世主」

ワタル「僕だけが救世主じゃないよ。エクスクロス全員が救世主だよ」

零「言ってくれるじゃねえか、ワタル！」

シモン「なるほどな。じゃあ、俺もそれに乗らせてもらおう」

ワタル「ドツコイ山にはドアクダー打倒のための道標があるって聞く……。待ってろ、クルージング・トム！僕達は絶対に負けないぞ！」

シモン「（ヴィラル……。お前とも決着をつける時が来たようだぜ……。）」

ん？シモンの所にアンジュとユイ、アマリが行ったな……。

アンジュ「少しいい？」

シモン「俺に何か用か？」

アマリ「あの赤い機体とドリル……。もしかしてあなたは……。獣の国の総司令官のシモンさんのですか？」

シモン「ああ……」

ユイ「どうして、シモンさんがこんな所にいるんですか？獣の国はどうしたんですか？」

シモン「俺のいる所が、俺の居場所……。ただ、それだけの話だ」
ユイ「……成る程」

アンジュ「あんた、絶対にわかってないでしょ」

アマリ「え、ええと……。申し訳ありません。よくわからないのですが……」

シモン「ここは獣の国のカミナシテイじゃねえ。ここにいるのは、総司令官のシモンでも、大グレン団のリーダーでもねえ、ただのシモンだ」

アンジュ「気に入ったわ」

ユイ「流石はシモンさんです！」

アマリ「あ、アンジュさん、ユイさん……。失礼じゃないですか!?!」

アンジュ「総司令官殿が、そういう風に扱って欲しいって言ってるのよ」

ユイ「でしたら、そうするのが礼儀ではないのですか?」

シモン「その通りだ。このエクスクロスにいる以上、俺はただのシモンだ」

アマリ「……。わかりました、シモンさん。そういう事でしたら、そのようにさせていただきます」

アンジュ「まだ固いんじゃないの、アマリ?」

アマリ「そんな事言われてもすぐには無理ですよ!」

零「俺と初めて会った時もそんな感じだったもんな!」

アマリ「も、もう、零君!...でも、よろしくお願ひしますね、シモンさん」

零「俺からもよろしくお願ひします!」

シモン「おう!こちらこそな!(ニア...これが俺の新しい仲間だ...もつと大き

な男になって俺はお前を迎えに行く...それまで待っていてくれよな...)

俺達はドツコイ山へと向かった...

第17話 宿命の二人と大切な存在

―織斑 一夏だ。

俺と青葉、ベルリはそれぞれの機体に取り込み、ドッコイ山の偵察に来ていた。

ベルリ「偵察に来てはみたけど、ドアクダー軍団も山賊もないじゃないか？」

青葉「でも、ここがドッコイ山の山頂だよな……」

一夏「ああ……。ん？青葉！ベルリ！あれ、見てみるよ！」

俺の指差す方向に向かい合う赤い龍と青い龍の岩があつた。

青葉「赤い龍と青い龍か……！」

ベルリ「クラマが言っていたけど、創界山の神様つて龍なんだつてさ」

一夏「つて事は、ドアクダー打倒のための旅の道標に関係しているのかもしれないな

！」

青葉「二匹の龍か……」

ベルリ「まるで青葉とディオだな」

青葉「そ、そうか？俺達、あんな風に見えるか？」

一夏「戦闘中だけだけどな。普段は、あんな風にお互いを見てるって言うよりそっぽを向いてるけど」

青葉「それは俺のせいじゃねえよ！ デイオのせいだ！」

ベルリ「戦闘中は、ちゃんとカップリングを使いこなしているんだし、無理に仲良くしなくてもいいんじゃないの？」

青葉「そうは言うけど……。雛が……。デイオを待っているって言ったから……」

青葉の言っていた女の子の事か……。

ベルリ「雛って……。前に言ってた青葉が未来の世界に跳ばされるきっかけになった女の子か……」

青葉「言っておくけど、それだけじゃねえぜ。生命を預けて戦うバディなんだから、俺はあいつの事を、もっと知りたいんだ」

ベルリ「……」

一夏「その気持ち、わかるぜ！ 青葉！」

青葉「ありがとな、一夏……。って、暑苦しく語っちゃったな」

ベルリ「……。でも、何かいいな、それ……」

一夏「ベルリ？」

ベルリ「応援するよ、青葉。何となくだけど、青葉の言ってる事って、俺も一夏と同

じで正しいと思うから」

青葉「お前もありがとうよ、ベルリ！」

一夏「偵察の方は何もなしって報告するしかないけどな」

ベルリ「そうだね」

…ん？何か、聞こえた…？笛…？

青葉「何か聞こえたか？」

ベルリ「笛の音のような…」

一夏「2人も聞こえたのか…？」

すると、俺達の目の前に異変が起こった…！

青葉「何だ?!?何が起きる?!?」

ベルリ「あれは！」

そして、今度は巨大な竜巻が現れた…。

一夏「竜巻?!?」

ベルリ「何も無い所にいきなり起きるなんておかしいでしょ、あれは！」

青葉「あんな大ききの竜巻に吞まれたら、一夏は兎も角、ヴァリアンサーやモビルスー

ツでもやばいぞ！」

ベルリ「逃げるよ、青葉、一夏！ここは後退するしかない！」

一夏「ああ、わかった！」

俺達は竜巻に巻き込まれる前に後退した……。

クルージング・トム「グハハハハハ！尻尾を巻いて、逃げ帰りおったか！この神部（しんべ）の笛がある限り、俺の勝ちが決まったな！」

既に後退した俺達に、こんな言葉が聞こえるはずがなかった……。

ーウイルスだ。

俺と手下、朗利と金本はクルージング・トムと共にいた。

クルージング・トム「グハハハハハ！このクルージング・トムの力を見たか！」

ウイルス「……」

クルージング・トム「何だ、ウイルス？不満でもあるのか？」

ウイルス「いや……」

クルージング・トム「忘れるなよ。お前達の雇い主が、この俺であるのを」

ウイルス「……」

クルージング・トム「その目だ……！その反抗的な目が気に入らん！俺に不満があるのなら、トッドのように出て行ってもいいんだぞ」

この男……！

クルージング・トム「もつとも、ドアクダー軍団が世界を支配しようとしている今、俺の下を去れば、待っているのは、のたれ死にだろうがな！」

金本「……」

クルージング・トム「お前もか、金本……。まあいい、もうすぐ、エクスクロスとやらが来る。迎撃の準備をしろ」

朗利「ああ……」

クルージング・トム「俺は後方でお前達の働きぶりを見させてもらう。せいぜい頑張るのだな、グハハハハハ！」

そう言い、クルージング・トムは歩き去った……。

ヴァイラル「クソが……」

獣人「ヴァイラル隊長……。俺達……。こんな事していいんでしょうか……」

ヴァイラル「……」

獣人2「人間達の作った政府が気に入らなくて国を飛び出してきましたが……。結局、やっている事は山賊か、傭兵……」

獣人「ドアクダー軍団に雇われた他の獣人グループは、大暴れしているって噂も聞きますけど……。あいつ等……。思った以上にヤバイのうに思えるんです……」

ウイルス「…わかっている。だが、クルージング・トムの言っていたように俺達に居場所なんてものはない」

獣人「それは…」

獣人2「そうなんですけど…」

金本「…」

朗利「それがわかっているなら、愚痴を言わずに動けよ、ウイルス」

ウイルス「…朗利…」

朗利「なあ、金本」

金本「…」

朗利「金本？」

金本「…俺達、こんな事していてもいいのかな？」

朗利「な、お前まで急に何言い出すんだ！金本！」

金本「だって、異世界にまで来て、友達であるエイサップと争って…。もう、彼奴と戦う理由なんてないんじゃないのかな…」

朗利「俺達は彼奴を倒すって決めただろ！そして、俺達を差別した奴らを懲らしめるって決めたじゃないか！」

差別…か…。

金本「でも、エイサツプはエクスクロスって組織に入っても俺達を差別せずに俺達を助けようとしてくれたよ！」

朗利「だから何だってんだ？ 彼奴だって、いずれ俺達を見限り、差別するさ」

金本「朗利……」

朗利「俺達にも居場所がないんだよ……今更、エイサツプに情けはかけられねえしよ……」

そう言い残し、朗利は歩き去った……。

金本「(そんな事、わかってるよ俺だって……でも……!)」

ヴィラル「人間同士の差別か……」

金本「あんた達も差別される事あるの？」

ヴィラル「人間と獣人で差別ある事はあるな」

金本「辛く……ないの？」

ヴィラル「辛くないと言えば嘘になる……。だが、全員が全員、そんな人間じゃない」

金本「それがあのシモンってやつなの？」

シモンか……。

ヴィラル「ああ。彼奴は差別なんてしないな……。金本……朗利に居場所がないなら、

お前が朗利の居場所になってやれ」

金本「ヴイラル：。」

ヴイラル「俺達と人間：。この世界はいつたどこへ向かうのだろうな：。」

答えを知りたければ、見続ける事：。螺旋王は、そうおっしゃって、この俺に不死の身体を与えてくださった：。その使命ゆえか：。俺の中の何か、もうすぐ何か起きるのを感じている：。だな、その何かを見届ける前に俺にはやらねばならん事がある：。俺を：。そして螺旋王を倒した男、シモン：。お前との決着：。今度こそつけてやる：。！

金本「俺が：。朗利の居場所になる：。なら、俺のすべき事は：。！」

第17話 宿命の二人と大切な存在

―新垣 零だ。

ドツコイ山へ着いた俺達はそれぞれ出撃した。

アーニー「あれが一夏君達から報告のあった竜巻か：。」

ひまわり「たいや!!?」

しんのすけ「お、大きいゾ!」

アンジュ「話には聞いていたけど、やっぱり、不自然ね」

アマリ「何かわかりますか、ホープス?」

ホープス「少なくとも自然発生したものではない事は確かです」

レナ「誰かが意図的に竜巻を起こしたって事…?」

サラ「す、凄いな…」

シーブック「ベルリの言っていた竜巻が発生する前に聞いたという笛の音と関係あるのか…?」

ソーマ「この一帯に潜むドアクター軍団の仕業かもしれないわね」

グランデイス「あんな竜巻を起こす力が、あの飛行機野郎にあるっていうのかい?」

ゼロ「流星に竜巻を起こす怪獣を連れていてるってわけでもなさそうだしな…」

ティア「凄い!アマリちゃんのドグマよりも、凄いよ!」

チャム「う、うん!凄いな!」

エレボス「いったいどういものなんだろう…」

竜馬「その答えは進めばわかるだろう」

ワタル「行こう、みんな!クルージング・トムと決着をつけるためにも!」

零「いや、どうやらお出迎えのようだぜ……！」

シモン「気をつけろ！奴らが来た！」

来たのはウイルス率いるガンメン部隊と朗利、金本率いるハウジヨウ軍のオーラバトラー部隊だった。

ウイルス「待っていたぞ、シモン！そして、エクスクロス！」

朗利「此処がお前らの墓場となるんだ！」

シモン「ウイルス！」

エイサップ「朗利！金本！」

レイ「あのトッドという男はいないみたいだが……」

シヨウ「後方に控えているのか？」

ウイルス「奴ならば、クルーディング・トムを見限って、出て行った」

ワタル「やっぱり、ドアクダー軍団がいるのか！」

エイサップ「朗利、金本……。お前達はこのままでいいのか……？」

朗利「しつこいぞ、エイサップ！俺はこうなる事を望んでいたんだ！お前を倒すこの日をな！」

金本「エイサップ……。俺は……」

エイサップ「金本……。？」

シモン「ヴィラル……。お前もだ！お前は、このままでいいと思っっているのか？」

ヴィラル「そんな問いに答える義理はない。俺達の間にあるのは戦いだけだ！」

シモン「いいいぜ、ヴィラル！俺もそのつもりで、此処に来たからな！」

朗利「行くぜ、金本！今度こそ、エイサップを倒す！」

金本「……うん」

エイサップ「（金本の様子がおかしい……。いったいどうしたと言うんだ……。？）」

倉光「各機は獣人部隊とオーラバトラー部隊の迎撃を」

スメラギ「戦力は大した事ないけれど、向こうの士気は高いから気をつけてね！」

青葉「よし……。！行くぜ、ディオ！」

ディオ「威勢のいい事を言う前に俺の足を引っ張るなよ」

青葉「可愛くない奴……。！」

ヴィラル「来い、シモン！お前を倒して、俺は先に進む！」

朗利「決着をつけようぜ、エイサップ！俺達の決着をな！」

シモン「覚悟しやがれよ、ヴィラル！それに獣人共！お前等、全員まとめてその根性を叩き直してやるぜ！！？」

エイサップ「朗利、金本！お前達は俺が止める！それが俺にできる事全てだ！！？」

金本「……エイサップ……」

俺達は敵部隊との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話　エイサップVSヴィラル〉

ヴィラル「お前の敵は朗利と金本だろ！」

エイサップ「だからと言って、あなたを見過ごすわけにはいきません！」

ヴィラル「良いだろう！朗利と金本が危険視する事だけの事はある！だからこそ、燃えるものもある！」

エイサップ「俺のオーラ力をかけて、あなたを倒します！」

エンキドウドウはグレンラガンの攻撃を受けて、ダメージを負った。

ヴィラル「此処までか……。エンキドウドウ……。俺のわがままによく付き合ってくれた……。悪かったな……」

エンキドウドウは爆発したが、ヴィラルという獣人は逃げ出していた……。

シモン「ヴィラル……」

九郎「あいつ、逃げ出したみたいだぞ？」

シモン「追う必要はねえさ」

ディオ「敵ならば、捕獲してそれなりの対処をすべきでは？」

シモン「あいつは敵じゃねえ」

青葉「え…」

シモン「あいつと俺の間にあるもんは、そんな簡単な言葉で表せるもんじゃねえのさ」

ナル「そ、そうなんですわね…」

青葉「そういうものなのか…」

朗利「ヴィラルは負けたか…。でも、お前の気迫は悪くなかったぜ…」

金本「ヴィラル…」

エイサップ「あとはお前達だ！朗利、金本！」

朗利「やるぞ、エイサップ！今度こそ、決着だ！」

エイサップ「ああ！本気でやるぞ！」

〈戦闘会話 シモンVS金本〉

金本「…」

シモン「どうした、戦う気はあるのか？」

金本「ヒーロ男か…俺は負けない！」

シモン「そんな気迫のこもってない言葉で俺に勝てると思ってんのか！もつと気合を入れやがれ！」

金本「俺とあんたを一緒にするな！」

〈戦闘会話 エイサツプVS金本〉

エイサツプ「来るなら、来い！金本！」

金本「…俺は…」

エイサツプ「金本… いったいどうしたと言うんだ！」

金本「俺は… 朗利の居場所になるんだ!!？」

エイサツプ「か、金本…！それが、お前の戦う理由なのか… なら、俺もそれに答えてやる！」

〈戦闘会話 シモンVS朗利〉

朗利「来いよ！熱血ヒーロー！」

シモン「そこを退け！」

朗利「退かねえよ！ヴィラルには悪いが、お前を此処で倒させてもらうぜ！」

シモン「俺を誰だと思ってやがる！簡単に倒せると思うなよ！」

〈戦闘会話 ショウVS朗利〉

朗利「聖戦士さんよ！かかって来やがれ！」

ショウ「どうして、自ら悪のオーラに近づこうとする!!?」

朗利「うるさい！もう説教はたくさんだ！良いからかかって来い！」

チャム「駄目だよ、ショウ！全然止まんない！」

ショウ「くっ…！俺じゃ、彼奴を止める事は出来ないのか…！」

〈戦闘会話 エイサツプVS朗利〉

エイサツプ「どうしてもやると言うのか、朗利！」

朗利「くどいぞ、エイサツプ！此処まで来て、戦わないなんてないだろ！」

エレボス「エイサツプ…」

エイサツプ「わかってる！朗利！俺もいい加減、お前達とは決着をつけたかったところなんだ！もう手加減はしないから覚悟しろ!!?」

ナナジンの攻撃で、2機のシンデンはダメージを受けた。

金本「くそっ…！」

朗利「また負けたのか……俺達は……！何でだ……何で、エイサツプに勝てないんだよおおおお!!？」

金本「朗利……！」

エイサツプ「もう降参してくれ、二人共……！俺はお前達を討ちたくないんだ！」

金本「え、エイサツプ……！」

朗利「敗北者の俺達に情けをかける気かよ！」

エイサツプ「そうじゃない！例え、戦つても俺達は友達じゃないか！」

朗利「……友達……」

金本「そうか……そうだよな……」

2機のシンデンからは敵意を感じなくなったな……。

クルージング・トム「グハハハハハ！くっさい友情ゴツコは、そこまでだ！」

ワタル「クルージング・トム！」

ケロロ「ゲロゲロゲロ！観念するであります！」

クルージング・トム「お前等がいくら頑張ろうとこの神部の笛がある限り、俺の勝ち

は変わらん！」

笛を吹いた……!!？」

すると、竜巻の勢いが増した……。

ウエスト「竜巻の勢いが増したのである！」

ユイ「あの笛の力なの!!?」

クルージング・トム「その通り！これこそが神部の笛の力よ！」

メル「て、天災さえ引き起こす力……」

ホープス「あれこそが伝説に謳われる創界山の秘宝でしょう」

アマリ「そんな、あれが……!!?」

千冬「秘宝だと!!?」

クルージング・トム「流石は元オニキスと魔従教団の術士だ！その存在を知っていたか！ならば、それを手にした俺が無敵である事も知っていたよう！」

エイサップ「此処にはまだ、朗利と金本もいるんだぞ!!?」

クルージング・トム「だから、どうした？」

朗利「何だと!!?」

クルージング・トム「任務を失敗したお前達はもう用済みだ……エクスクロスと共に死ね！」

金本「あんた、最初からそれを考えていたんだな……！」

夏美「仲間の人ごと私達を倒そうとするなんて……！」

シャルロット「なんて外道なの……!!?」

シモン「ふざけるな！お前のどこが無敵だ！」

クルージング・トム「そこのお前！この俺をバカにしているのか！」

シモン「借り物の力で偉そうにしてんな！男なら、てめえの力で戦ってみやがれ！」

クルージング・トム「言わせておけば……！お前に神部の笛と俺の力を見せてやる！」

ゼロ「まずいぞ！あいつは笛の力でさらに竜巻を大きくするつもりだ！」

テイエリア「まずい！そんな事したら、僕達だけでなくこの一帯にまで被害が出るぞ！」

朗利「クルージング・トムウウウウ！！？」

朗利の乗るシンデンがクルージング・トムの所まで突っ込んで行った……！

金本「朗利！」

エイサツプ「無茶だ！よせ、朗利！」

朗利「止めるな、エイサツプ！俺はこいつを絶対に許せない！」

クルージング・トム「ふん、この役立たずめが！竜巻に呑まれ、死ぬがいい！」

朗利「ぬっ！！？うわああっ！」

エイサツプ「朗利ー！！？」

朗利のシンデンは抵抗も出来ずに竜巻に呑まれてしまった……。

朗利「く、くそっ！動けよ！」

金本「今助けるよ！朗利！」

朗利「バカ、来るな！金本！」

エイサツプ「金本!!？」

金本のシンデンも自ら竜巻の中に入った…。

朗利「金本！バカかお前は！このままじゃ、お前も死ぬんだぞ！」

金本「朗利だって、死んじやうよ！」

朗利「俺はいい！俺はもう何も残っていない…。帰る居場所もない！だから、俺はもういいんだ！」

金本「俺がよくないんだよ!!？」

朗利「金本…。」

金本「朗利に死んで欲しくないんだよ…。朗利が俺の居場所だから！朗利も居場所がないんなら、俺が居場所になってあげるから！だから、死なないで！朗利!!？」

エイサツプ「うおおおーっ!!？」

こ、今度はナナジンが飛び込んだ…。!!？」

シヨウ「エイサツプ！」

エイサツプ「二人共！今助けるからな！」

金本「エイサツプ…！」

朗利「お前まで……！」

エイサツプ「俺も…… お前達の居場所になる！だから、生き残れ！」

朗利「…… お前は本当に凄いや…… エイサツプ……！」

エイサツプ「こんな竜巻如きで…… 俺達を打ち砕けると思うなああああつ……！」

竜巻の中のナナジンが赤く光った……

マサキ「あれは……」

零「ナナジンが…… 赤くなつた……」

アツカナナジンつて、ところか……！

ベルリ「竜巻の動きが止まつた！」

刹那「エイサツプのオーラ力の影響か……！」

クルーディング・トム「な、何だと……？そんなバカな……？」

エイサツプ「シモンさん！今です！」

シモン「任せとけ！エイサツプ……！」

グレンラガンも竜巻の中へと飛び込んだ。

アンドレイ「シモン君！」

クルーディング・トム「な、何をするつもりだ……？」

シモン「こうするんだよ……！」

す、凄い力だ……！

クルージング・トム「な、何だ、あの力は!!?」

シモン「風が渦を巻いているのが竜巻なら、その逆に回転するまでだ！」

零「そう言うことか！」

そして、竜巻が収まった。

ハンソン「嘘だろ！竜巻が収まった！」

サンソン「やつてくれるぜ、あいつ！力業で強引に竜巻を中和しやがった！」

クルージング・トム「ば、バカな！バカなあああつ!!?」

収まった竜巻から、アツカナナジン、2機のシンデン、グレンラガンが出てきた。

シモン「どうだ……見たかよ……」

ワタル「シモンさん！」

セルゲイ「まずいぞ！かなり消耗している！」

パトリック「おい待て！グレンラガンの隣に誰かいるぞ！」

アレルヤ「あれは……！」

ウイルス!!?

ウイルス「無様だな、シモン」

シモン「ウイルスか……」

ヴィラル「竜巻を止めた所まではみごとだったが、その後がな……。立て、シモン！螺旋王を……。俺を倒した男の最期が、こんなものなど認めんぞ！」

シモン「へ……。お前の言葉は効くぜ……。！だがな！」

グレンラガンにパワーが戻った……。!??

シモン「勝手に終わりにしてんじやねえ！あんなもので俺のドリルが止まると思うなよ！」

ヴィラル「フ……。それでこそだ。ハッチを開ける、シモン！」

シモン「グレンラガンに乗るつもりか？」

ヴィラル「お前にぶん殴られて、俺も吹っ切れた。その礼の代わりだ。お前がどこまで行くか、見届けてやる」

シモン「そういう事なら、此処が特等席だろうな。よし！来やがれ、ヴィラル！」

ヴィラル「おう！行くぞ、シモン！」

ヴィラルがグレンラガンに乗ろうとした……。

クルージング・トム「させるものかあああああつ！」

クルージング・トムが叫ぶとあいつの手下の魔神がグレンラガンに突っ込んだ。

メル「このままではまずいです！」

エイサップ「シモンさん！ヴィラルさん！」

金本「やらせるかあああああつ！」

朗利「その通りだ！金本!!？ダブルデイスパッチ行くぞー!!？」
2機のシンデンが魔神に接近した…。

朗利「遅れるなよ、金本！」

金本「朗利だつて！」

朗利「オーラソードダブルデイスパッチだ！」

金本「このおとおおおつ！」

朗利「ハアアアアツ！」

2機シンデンのオーラフレイムソードをつなぎ合わせ、魔神を両断した。

朗利「俺達とシンデンならあああああつ！」

金本「できるんだあああああつ！」

そのまま、一刀両断…魔神は爆発した。

エイサップ「朗利！金本！」

金本「俺達も力を貸すよ、エイサップ！」

朗利「お前には借りができまっただからな！」

エイサップ「ありがとう…二人共！」

そして、ヴィラルもグレンラガンに乗り込んだ。

青葉「敵が味方になった!?!?」

ベルリ「そうじゃない、青葉!あの人達は、そんなものを超えてるんだよ!」

ヴィラル「お前達も吹っ切れたか」

朗利「ああ、大切な友人のおかげでな」

ヴィラル「ふっ…。そして、カミナも座っていた席か…。悪くない座り心地だ」

シモン「ヴィラル!あれをやるぞ!」

ヴィラル「何だ、早速命令か?」

シモン「いや、提案だ!」

ヴィラル「なら、やらせてもらおう!」

シモン「人と獣の2つの道が!ねじって交わる螺旋道!」

ヴィラル「昨日の敵で宿命を砕く!明日の道をこの手でつかむ!」

シモン「宿命合体、グレンラガン!俺を誰だと思つてやがる!」

す、凄え!凄すぎるぜ!!?

ワタル「決まったあ!ハツキシ言つて、めちやくちやカツコイイぜ!」

青葉「すげえ…。ついさつきまで本気で戦つていた二人なのに息ぴつたりだ…。」

クルージング・トム「ぬうう!ヴィラル、朗利、金本、裏切りおつたな!」

金本「先に裏切つたのはそつちだろ!」

ヴィラル「それに勝手に決めるな。おれも仲間も一度たりともお前に忠誠を誓った事はない。螺旋王亡き今、俺に主などいない！ならば、俺は俺の心の命じるままに生きる！」

クルージング・トム「こうなったら、もう一度、神部の笛で竜巻を暴走させてやる！」
ワタル「まずいぞ！そんな事になったら！」

龍神丸「待て、ワタル！クルージング・トムの背後を見ろ！」

クルージング・トム「え、後ろ？」

ヒミコ「きやはは！オツサン、気付くのが遅いのだ！」

クルージング・トム「おわああああっ！いつの間に！」

すると、俺達が初めてアマリと出会った時に手を貸してくれた魔神が現れた。

？「隙ありウラ！」

クルージング・トム「うおっと！」

魔神が攻撃して、クルージング・トムはそれを避けたが、そのせいで神部の笛を手放してしまい、それをヒミコがキャッチした。

ヒミコ「ほい！笛はイタダキなのだ！」

クルージング・トム「あ、こら！返せ、小娘！」

？「ヒミコ！笛をワタルに届けるのだ！」

ヒミコ「わかったのだ！」

そして、ヒミコは龍神丸の前まで行く。

ヒミコ「ほい、ワタル！お届けなのだ！」

ワタル「これが… 神部の笛…」

龍神丸「ワタル！笛を吹いて、竜巻を止めるんだ！」

ワタル「で、でも… クルージング・トムと間接キスになっちゃう…」

… 確かにそれは嫌だな…。

ヒミコ「だったら、洗えばいいのだ！忍法・水鉄砲の術！」

ヒミコが水を出し、神部の笛を洗った。

ワタル「サンキュー、ヒミコ！これなら！」

そして、ワタルは笛を吹いた。

クルージング・トム「い、いかん！」

シバラク「おお！竜巻が!!？」

竜巻は完全に消えた。

ワタル「やったぞ！竜巻が消えた！」

ヒミコ「あちし、エライ！ワタル、エライ！」

？「うむ…。よくやったウラ」

そう言い残し、魔神は撤退した……。

一夏「あの魔神……俺達がモンジャ村に来る前にも助けてくれたやつだよな……」

アマリ「は、はい……」

操縦している人は、ワタルだけじゃなく、ヒミコの事も知っているみたいだったな……。

ヴィラル「フ……お前の仲間、大グレン団に匹敵する面白い連中が揃っているな」

朗利「敵としたら、めんどくさいけどな」

シモン「今日からは、お前らもその一員だぜ」

エイサツプ「行こう！3人共！」

ヴィラル「早速、その腕を振るう時が来たようだ」

朗利「敵が来たな！」

当然、クルージング・トムとあいつの部隊が来た。

クルージング・トム「おのれ、ワタル！おのれ、エクスクロス！こうなれば、俺のこの手で叩き潰してくれる！」

アンジュ「逃げずに向かってくる所は褒めてあげるわ」

グランデイス「おかげ追いかける手間が省けたってやつだよ」

海道「どちらにしろ、逃げたって地獄を見るのは一緒だからな！」

真上「逃げても的、逃げなくても的だ！」

シモン「やるぞ、ワタル！」

ワタル「うん！ヒミコは艦に戻ってるんだ！」

ヒミコ「了解なのだ！」

ヒミコは艦に戻り、龍神丸とグレンラガン、アツカナナジン、2機のシンデンは前に出た。

龍神丸「見ろ、ワタル！」

ワタル「赤い龍と青い龍……」

龍神丸「あれこそが神部七龍神……！我々がドツコイ山に来たのは彼等に会うためだ

！そして、彼等への道が拓かれた今、私も新たな力が使えるようになった！」

ワタル「新たな力？」

龍神丸「その名も龍雷拳！使ってみるんだ、ワタル！」

ワタル「よし！やってみるよ、龍神丸！」

シモン「負けちゃいられねえ！二人乗りになったのなら、こつちも新技を試すぞ！聞

いてるか、ヴィラル!!？」

ヴィラル「お、おう……（神部七龍神……龍神丸……。この胸騒ぎは何だ……？俺の感じて
いる予感と関係しているのか……）」

金本「俺達も連携を深めて行こう！」

エイサップ「そうだな！」

朗利「今なら、トリプルデイスパッチが決めれそうだぜ！」

クルージング・トムが「来い、ワタル！お前を倒して、神部の笛を取り戻さねば、この俺に明日はない！」

ワタル「覚悟しろ、クルージング・トム！今こそ僕と龍神丸とエクスクロスの力をお前に見せてやるぞ！」

俺達はクルージング・トムの部隊と戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 朗利VS初戦闘〉

朗利「正直、今俺は物凄くスッキリしてるぜ！覚悟しろ、ドアグダー軍団！この朗利が相手をしてやるぜ!!？」

〈戦闘会話 金本VS初戦闘〉

金本「今の俺には朗利やエイサップ……エクスクロスの人達もいる……。俺はもう迷わない！大切な人達の為に俺は戦う！」

〈戦闘会話 零VSクルージング・トム〉

零「お前を倒して、この界層はクリアさせてもらうぜ！」

クルージング・トム「そう簡単にこのセカンドガンを墮とせると思うな！」

零「シモンさんやエイサップだって、みんな必死に頑張ってるんだ…。俺もやらなきや男がすたるってもんだ！」

〈戦闘会話 一夏VSクルージング・トム〉

一夏「偵察の時はよくもビビらせてくれたな！クルージング・トム！」

クルージング・トム「あの時のお前達の焦り様は傑作だったぞ！」

一夏「今度はそっちがビビる番だ！俺達に倒されてな！」

〈戦闘会話 しんのすけVSクルージング・トム〉

しんのすけ「シモンお兄ちゃんもエイサップお兄ちゃんも凄いぞ！」

シロ「ワン！」

しんのすけ「オラも負けてられないぞ！」

クルージング・トム「小僧如きが俺とセカンドガンを捕らえられると思うな！」

カンナム「その慢心がお前の敗北の原因となるんだ！クルージング・トム！」

〈戦闘会話 刹那VSクルージング・トム〉

クルージング・トム「邪魔をするな、ガンダム！」

刹那「何故、仲間を攻撃しようとした？」

クルージング・トム「奴等は仲間でも何でも無い、雇ってやった駒だ！」

刹那「貴様は歪んでいる…！この俺が駆逐する…！」

〈戦闘会話 アキトVSクルージング・トム〉

アキト「悪さもここまでだ、悪党！」

クルージング・トム「悪党だと…？違うな、ドアグダー様に逆らうお前達こそ、悪

なのだ！」

アキト「お前はヒーローの何もわかっていないな…ならば、俺が教えてやる…！」

〈戦闘会話 九郎VSクルージング・トム〉

アル「切り札を失って、焦っておるな」

クルージング・トム「黙れ！お前達の邪魔さえなければ、この様な事にならなかった

んだ！」

九郎「邪魔される事は想定済みのはずだろうが！お前自身が倒される事もな！」

〈戦闘会話 エイサツプVSクルージング・トム〉

エイサツプ「お前には色々と言いたい事がある！」

クルージング・トム「友を危険に晒した事か？」

エイサツプ「それもあるけど、一番は朗利達を駒扱いした事だ！俺が叩き斬つてやる
！」

〈戦闘会話 朗利VSクルージング・トム〉

金本「観念しろ、クルージング・トム！」

クルージング・トム「黙れ！裏切り者が！」

朗利「だから、先に裏切ったのはお前の方だろうが！俺達はそれぞれが居場所なんだ
！もう生き方を命令されるつもりはない!!？」

〈戦闘会話 ケロロVSクルージング・トム〉

ケロロ「ゲロゲロリ！化けの皮が剥がれたでありますな！」

クルージング・トム「ならば、もう一度神部の笛を奪って、使うまでだ！」
ケロロ「一度失敗した計画は2度と成功しないでありますよ！侵略者として、当然の事であります!!？」

〈戦闘会話　ゼロVSクルージング・トム〉

クルージング・トム「朗利や金本ごとお前達を倒す俺の計画が……！」

ゼロ「本当に悪党の考える事なんて、どこも同じだな！」

クルージング・トム「何だと!!？」

ゼロ「そんな安っぽい友情で俺達に敵うと思っていたら大間違いだぜ！」

〈戦闘会話　ゴモラVSクルージング・トム〉

レイ「ここで終わりだ！クルージング・トム！」

クルージング・トム「まだまだ！此処でお前達を倒せば、俺はまだ終わらないで済む！」

ゴモラ「キシヤーン!!？」

レイ「そういうのは俺とゴモラを倒してから言うんだな！行くぞ、ゴモラ！」

〈戦闘会話　海道VSクルージング・トム〉

海道「残念だったな、オッサン」

クルージング・トム「まだだ！まだ、やり直しのチャンスがある！」

真上「残念だが、そのチャンスももう潰れているぞ？」

海道「そうだな！オッサン、もうあんたは地獄にいるんだからな！」

〈戦闘会話　アルトVSクルージング・トム〉

クルージング・トム「空を制するのはこのクルージング・トムのセカンドガンだ！」

アルト「お前に制される空はよほど可哀想だな！」

クルージング・トム「何だと!? お前、俺をバカにしているのか!?？」

アルト「今の言葉を聞いて、バカにしてないとよく思うな！空は俺が守る！この翼でな！」

〈戦闘会話　竜馬VSクルージング・トム〉

竜馬「行くぜ、クルージング・トム！」

クルージング・トム「その様なパワー機体でセカンドガンを捉えると言うのか！」

竜馬「俺とゲッターに不可能な事なんてねえ！例えそれがスピードの速い敵でもな

！」

〈戦闘会話　ユイVSクルージング・トム〉

ユイ「あなたの悪事も此処までです！」

クルージング・トム「黙れ！こうなったら、そのレガリアを頂く！」

レナ「私はあなたについて行く気もないし、やられるつもりもないわ！」

ユイ「私達があなたの悪事を終わらせてみせます！」

〈戦闘会話　アーニーVSクルージング・トム〉

アーニー「お前の悪巧みも今日で終わる！」

クルージング・トム「終わるわけにはいかないのだ！ここでお前達を倒し、神部の笛を取り返す！」

アーニー「そう簡単に行くと思うな……。その様な事を言う前に僕を倒してみせろ！」

朗利「3人の息を合わせるぜ、エイサップ、金本！」

金本「俺達なら、できる！」

エイサップ「よし、やるぞ！2人共！」

アツカナナジンと2機のシンデンはそれぞれ、動き出し、次々とセカンドガンを斬りつける。

アツカナナジン「本気で斬るぞ！」

さらに、アツカナナジンは空高く飛ぶ。

朗利「俺達も負けてられねえええええつ!!?!」

金本「うおおおおつ!!?!」

2機のシンデンはオーラダブルデイスパッチでセカンドガンを攻撃する。

エイサツプ「とどめだあああああつ!!?!」

そして、オーラダブルデイスパッチを受けているセカンドガン目掛けて、アツカナナジンが突っ込んで来て、3機は一斉に斬り裂いた。

朗利「これが、オーラトリプルデイスパッチだー!!?!」

クルーディング・トム「う、うおおおおつ!く、くやちいいいいつ!!?!」

オーラトリプルデイスパッチを受けて、セカンドガンは大ダメージを受けた。

クルーディング・トム「だが、お前達では二匹の龍の謎を解く事は出来ない!だから、俺の負けではないぞ！」

そう言い残し、セカンドガンは爆発した。

ワタル「へん!負け惜しみを言うなんてかつこ悪い奴！」

戦闘を終えた俺達は軽く息を吐く。

青葉「今日はハードな戦いだつたな」

セシリー「そうね。色々な事が次から次へと起こつたし」

グレンファイヤー「さっすがに疲れたぜ……」

ミラーナイト「ですが、私達は、1つの部隊としてまとまりができた様に思えます」

アイーダ「私もそう思います」

シーブック「チームワーク的なものが生まれてきたつて事ですか？」

アキト「単なる連携じゃなく、人と人とのつながりの話だよ」

アルト「確かにそうだな！」

ベルリ「それ、僕も思いましたよ！」

ディオ「人と人つながりか……」

ニール「しかし、あの野郎……最後に謎がどうか言つてやがつたな……」

ヒミコ「おーい、ワタル！」

ワタル「ヒミコ！」

ヒュウガ「いつの間にあんな所に……」

ヒミコ「ここに何か書いてあるのだ！」

ヒミコ「赤龍と青龍……。1人の人間が両方の口に同時に手を入れた時、二匹の龍はよ

みがえる……」

ハレルヤ「それがあの野郎の言っていた謎ってやつか」

龍神丸「そして、それを解いた時、我々がここに来た意味もわかるだろう」

一夏「ちよ、ちよつと待った！あの二匹の龍の口って、言うけど、かなり離れてるぞ！」

チャム「機体に乗っていてもいいんじゃない？」

シヨウ「だが、あの距離だと、ゼルガードが腕を伸ばしても届かないぞ」

ホープス「なるほど……。この謎を解き明かせという試練なのでしょうな」

ワタル「どうすればいいの、アマリさん!?」

アマリ「うくん……。1人の人間では、どうやっても出来ないでしょうね……」

……。そうだな……。

ワタル「えーっ！じゃあ、ゴムみたいに腕が伸びる人間でもなきや無理だつて事!?」
エイサツプ「伸びる触手でもあればできるんだけどな……」

零「……。1人で無理なら、2人でやればいいんじゃないか？本当の答えはわからないけど、俺達には、2人の人間を1つにする方法があるじゃねえか」

ベルリ「そうか！青葉とディオだ！」

メル「カッピングですね！」

青葉「俺達が？」

倉光「どうなの、エルヴィラ先生？」

エルヴィラ「確かにカップリングシステムによつて2人の思考のラグをなくした状態は1つの人間になったと言えるかも知れません。カップリングシステムの説明を聞いていた零君はともかく、ベルリ君はいい勘してゐるわね」

ベルリ「言葉にアシストするつて約束しましたからね」

デイオ「そんな方法で謎を解いた事になるのか……」

青葉「論より証拠だ！ やつてみようぜ、デイオ！」

ルクシオンが赤い龍の場所まで移動したが、ブラディオンは動かない。

青葉「何やってんだよ、デイオ!!？」

デイオ「俺には……出来ない」

青葉「え……」

デイオ「戦闘中以外の状況でお前とカップリングをするのは……」

ベルリ「出来ないんじゃない。出来ないと思つてるだけだろ？」

デイオ「何……？」

一夏「ベルリの言う通りだぜらデイオ！ 余計な事考えるなよ」

零「元の世界に帰るためにも俺達は前に進まなくちやならない事はお前でもわかつて

いるだろ？」

しんのすけ「へんな意地張ってるけど、デイオお兄ちゃんは青葉お兄ちゃんの頑張りを認めているんだゾ！」

デイオ「俺は……」

青葉「デイオ……。シモンさん達やエイサップさん達の事を思い出せ」

デイオ「……」

青葉「仲間だとか、バディだとか、そういう言葉なんて、どうでもいい。今、俺とお前は同じ目的のために何かをやらうとしている。ただ、それだけだ」

デイオ「同じ目的のため……。そうだな、青葉」

デイオも吹っ切れたのか、ブラデイオンは青い龍の方へ移動した。

青葉「デイオ！」

デイオ「やるぞ、青葉。ハマするなよ」

青葉「そつちこそな！行くぜ！コネクティブ・デイオ！」

デイオ「アクセプション！」

2人はカップリングシステムを発動させた。

まゆか「今までで最高のエンファティアレベルです！」

エルヴィラ「もしかすると、本当の意味での初めてのカップリングかもね……」

青葉「行くぞ」

ディオ「ああ」

ルクシオンとブラディオンはカップリングシステムを発動させた状態で同時に赤龍と青龍の口に入れた……。

すると、俺達の前に赤龍と青龍がいる。

青龍「よく来た、ワタルと勇者達よ」

赤龍「我々はお前達が来るのをこのドツコイ山で待っていた」

青龍「我こそは神部七龍神の石柱……青龍」

赤龍「同じく赤龍……」

ワタル「えーと、初めまして。まずは僕の仲間を紹介するね」

青龍「聞きたいのは山々だが、我々には時間がない」

赤龍「創界山の秘宝がドラグダーの手の中にある今、我々の復活は一時的なものなのだ」

ワタル「そうなの!?!?」

青龍「ワタルよ。虹を元に戻すためには創界山の秘宝を集めるのだ」

ワタル「秘宝って、この神部の笛以外にもあるの?」

赤龍「創界山の秘宝は全部で六つ存在している」

青龍「その全てを集めた時、創界山の虹を元に戻すための力……ドアクダーを倒すための力が目覚める」

赤龍「頼んだぞ、ワタル。そして、勇者達よ」

青龍「秘宝を集め、必ずドアクダーを倒してくれ」

赤龍「そして、このアル・ワースを新たに……」

赤龍達が何かを言う前に消えてしまった……。

ワタル「消えちゃった……」

アマリ「きつとまた、あの像の中に戻ったんでしようね……」

零「ドアクダーの力か……」

ワタル「それを打ち破るためにも創界山の秘宝を集めなきゃ！」

シバラク「それが拙者達の旅の目的になるか」

リチャード「その秘宝の在処について何か手がかりはないのか？」

シバラク「むう……。赤龍と青龍も、その辺りをもうちつと話してくれてもいいの

に……」

ベルリ「何言ってるんです？ちゃんと教えてくれたじゃないですか」

ワタル「へ？」

ベルリ「創界山の秘宝はドアクダーの手の中にある……つまり、ドアクダー軍団が

持つてるんだよ」

冬樹「そうか！ベルリさん、冴えてますね！」

レイ「奴等は、今日の神部の笛の様に秘宝を戦いに使ってくる可能性もあるな」

九郎「けど、金庫に入れて保管されるより、そっちの方がよっぽど都合がいいぜ」

アンジュ「そうね。そいつを倒せば、お宝が手に入るんだから」

ヴィヴィアン「第一界層のボスを倒したから、ドアクダー軍団も本気を出して、私達を狙ってくるだろうね！」

ワタル「だったら、そいつ等を返り討ちにして創界山の秘宝をゲットだ！」

エルザ「ちよつといいロボか？」

エンネア「どうしたの、エルザ？」

エルザ「あの謎を説明する時……何もカッピングシステムというのを使わなくてもいい方法があったロボ」

は……？

ウエスト「その方法とは何なのであるか、エルザ」

エルザ「カンタムロボやカイザーに手を飛ばしてもらったら良かったんだロボ」

……あ。

メル「た、確かに……！」

ひまわり「たいや…？」

カンナム「す、すまない。僕も気づかなかった…」

海道「すっかり忘れてたぜ！」

スカレット「やれやれだな…」

零「でも、そのおかげでより一層、絆が深まったんだからいいじゃねえか」

ワタル「うん！ 零さんいい事言う！」

俺達が話している一方、ウイルスは手下の獣人と話していた。

ウイルス「じゃあ、お前等…」

獣人「…」

獣人2「…」

ウイルス「ちゃんとカミナシテイに戻って仕事につけよ」

獣人「でも、俺達みたいな連中を雇ってくれるような所は…」

シモン「心配するな。よくわからねえが、カミナシテイでは今、人手を必要としてい

るって聞いている。何より、俺に向かってきたガッツがあるんなら、どんな事があっても

やっていけるはずだ！」

獣人2「ア、アニキ…！」

獣人「俺達…、ウイルス隊長とシモンのアニキの合体を見て、人間ともやっていける

んじゃねえかと考えを改めました！」

獣人2「俺達……迷惑をかけた人達にお詫びしながら、獣の国に帰ります」

ヴイラル「達者でな。俺はシモンと共に、この変わっていく世界を見届けるつもりだ。何より、ドアクダーの名を聞くと俺の血が騒ぐんでな」

獣人「ご武運を、隊長！それにアニキも！」

獣人2「他にもフラフラしている獣人がいたら、ぶん殴って目を覚まさせてやってください！」

シモン「おう！任せとけ！」

獣人達は獣の国に目指して、歩き出した……。

金本「……」

朗利「エイサツプ……迷惑かけたな。悪い……」

エイサツプ「いいさ、2人とまたバカでできるんだから……それで俺は充分だよ」

金本「ありがとう……エイサツプ！」

朗利「これからもよろしくな！ダチ！」

エイサツプ「ああ！」

エイサツプと朗利、金本はグータッチをした。

青葉「新しい旅の目的か……」

ディオ「その先には、俺達の世界への帰還がある」

青葉「そのためにも絶対に死ぬわけにはいかねえ！」

ディオ「だったら、腕を上げるんだな」

青葉「特訓に付き合ってくれよな？」

ディオ「いいだろう。足を引つ張られたくないからな」

青葉「こいつ！言ってくれなぜ！（雖…。。お前が待つているつて言つたディオがこいつの事はわからないけど…。。こいつが俺のバディだ。俺は絶対に生き延びて、お前に本当の事を確かめるからな）」

俺達は新たな目的のために動き出した…。。

第18話

オーラバトラー飛翔

ークラマだ。

俺は今、ザン・コックと通信を取っていた。

ザン・コック「わかっているのか、貴様は!?」

クラマ「も、申し訳ございません！」

ザン・コック「目の前でクルーキング・トムがやられるのを黙って見ていたとは、どう言うつもりだ!?」

クラマ「い、いえ……あの……獣人達も頑張っていましたんで邪魔をしては悪いと思つて、その……」

ザン・コック「フン……。獣同士で感じ合つたというわけか」

誰が獣だ……！

クラマ「……」

ザン・コック「何だ、その目は？不満でもあるのか？」

クラマ「そんな……！滅相もない！」

ザン・コック「言っておくぞ、クラマ。望みを叶えたいのなら、任務を果たせ。もう

すぐ次の刺客が、そちらに行く。その時は抜かるなよ」

ザン・コックが通信を切ったのを見て、俺は息を吐いた。

クラマ「ザン・コックの野郎……。人を獣扱いしやがって……。こうなったら、やってやる……。！村のみんなのためにも、やるしかねえんだ！」

ーシヨウだ。

俺達はシグナスの格納庫で話をしていた。

ディオ「だから、何度も言っているだろうが。さっきのシミュレーターでもあったが、ああいう局面は、各個撃破が最適の戦術だ」

青葉「だからって、母艦が落とされたら元も子もないじゃねえか！あそこはディフェンスを固めるべきだ！」

ディオ「お前と戦術論をかわすつもりはない。戦場では俺に従え」

青葉「俺はお前の部下じゃねえし、そもそも軍人じゃねえ！従わせたいんなら、ちゃんと納得させてみる！」

真上「おい、海道……。何だ、先程のシミュレーターの結果は？」

海道「あん？クリアしただろうが」

真上「何故、あそこで俺に交代しなかった？空中の敵は俺の銃撃戦の方が軽く落とせただけだ」

海道「お前に変わるより俺がやった方が手っ取り早かったから、そうしたんだよ」

真上「やはり、何も考えないオツムの小さい猿か……」

海道「挑発してんなら、買うぜ？このナル野郎!!？」

スカーレット「子供の前でやめんか、馬鹿者共！」

ベルリ「アイーダさん……僕達も青葉達みたいに一緒に訓練しません？」

アイーダ「しません。前線を担当するGーせると後衛の私では連携する機会も、そうありませんから」

ベルリ「そうは言ってもですね！同じ部隊なんですから、こう……仲良くすべきじゃないですか！」

アイーダ「言っておきますよ、ベルリ。付け焼刃のチームワークなど、場を混乱させるだけです。それに、あなたの直感に頼ったやり方……私には理解できませんから」

ベルリ「そんな事を言わずに……」

ノレド「みつともないよ、ベルリ！フラれたんなら、潔く退くのが男つてもんでしょ？」

ベルリ「だけど……」

ラライヤ「ベルリ……おんなのこなの？」

ベルリ「そうじゃなくて、ラライヤ……！」

メル「零さん、エクスクロスの新しい戦術を考えてみたのですが……少し、聞いてもらえませんか？」

零「そう言うのは艦長達に聞いた方が採用されやすいぜ。まずは艦長達に聞いたらどうだ？」

メル「……あ、そ、そうですよね……」

アマリ「零君、ドグマの訓練をしようと思うのだけれど……手伝ってくれる？」

零「ああ、いいぜ！何なら、その手に詳しいホープスも呼ぼうぜ！メルも一緒にやろう！」

アマリ「え……」

メル「わ、私は……はい、ご一緒します……」

シーブック「ベルリのアプローチ……なかなか前途多難だな」

セシリー「でも、あの子の率直さと勘の鋭さには時々驚かされる……というより、零さんがあそこまで鈍いとは思わなかったわ……」

シーブック「零さんに関しては何も同意見だよ……。ベルリは鋭すぎて、周りの人間には突拍子もないと思われるようだけどね」

セシリー「そうね。でも、見ていて元気になるわ」

シーブック「落ち着いたみたいだな、セシリーも」

セシリー「腹を括った……って言った方がいいかもね」

シーブック「これもベルリの効果だとしたら、あいつには感謝しないとな」

セシリー「私が感謝するのは、いつだってあなたよ、シーブック」

シーブック「セシリー……」

ジャン「ほら、ナディア……。みんな、目的がはっきりしたから、気持ちを切り換えてるよ」

ナディア「……結局、戦うって事でしょ」

ジャン「そうは言うけど、ドアクダー軍団は無法者なんだから」

ナディア「悪人の退治なら、魔従教団とかいう人達に任せておけばいいじゃない」

ジャン「それでいいと思う？」

ナディア「いいって……」

ジャン「自分の望みを叶えるのを誰かに任せつきり何て事は僕は我慢できないよ。つて言っても、僕に出来るのは整備班の手伝いぐらいだけだね」

ナディア「……部屋に帰る」

そう言つて、ナディアは部屋に戻つた……。

ジャン「ナディア：：」

マリー「ナディア：： 怒っちゃったの？」

ジャン「そうじゃないよ、マリー。ナディアも、自分がどうすればいいのかわからなくて迷っているんだ（だよ、ナディア：：？）」

チャム「みんな、仲がいいね。：： ちよつとうるさいけど」

シヨウ「：：」

チャム「寂しいの、シヨウ：：？」

シヨウ「そんな事はないと言ったら、嘘になるかもな：：」

チャム「トツドの事を考えていたの？」

シヨウ「あいつの事だけじゃない。マーベルの事：： ニーやキーンの事：： 一緒に戦っていた人達の事：：」

シヨウ「ベルリや青葉達のように一緒の世界から来た誰かがいれば、もう少し気楽になれたかもな：：」

チャム「あたしがいるじゃない！」

シヨウ「チャム：：」

チャム「あたしじゃ、シヨウの心の支えにならないの：：？」

シヨウ「ごめん、チャム。俺は一人なんかじゃなかったな」

エイサツプ「：：」

エレボス「エイサツプ：： リュクスの事、考えてるの？」

エイサツプ「リュクスの事だけじゃないよ。ご老体やキキさんやベベさんの事もだよ。：： それから：：」

エレボス「それから？」

エイサツプ「サコミズ王の事も考えてたんだ：：」

エレボス「最後には分かり合えたからね：：。そして、この世界では朗利達と分かり合えた：：」

エイサツプ「やっぱり、またみんなと会いたいな：：」

クラマ「けつ：： はぐれ者同士が傷の舐め合いかよ：：」

シヨウ「クラマか：：」

朗利「少し言い方つてもんがあるんじゃないのか？」

チャム「イーっだ！あんたなんかに関係ないでしょ！」

クラマ「言い方に関してはずまんな、こういう性格でな。おチビちゃんもそう邪険にすんなよ。俺達だって仲間なんだしよ」

すると、ヴィラルとシモンが来た。

ヴィラル「おい、お前：：」

クラマ「俺の事かい、獣人のダンナ？」

ヴィラル「お前……シトマンドラ様の配下の者か？」

クラマ「俺は獣人じゃねえよ」

シモン「そうなのか……!?こっちに馴染んだ獣人だと思ってた」

クラマ「(くそっ……。どいつもこいつも……)」

エイサツプ「人間でも獣人でも、どっちでもいいさ。そんな事は関係ないよ」

金本「流石はエイサツプ！」

クラマ「簡単に言うんじゃねえよ！」

エレボス「ちよつと！エイサツプは仲良くしようと思つて言つてるのに！」

エイサツプ「良いんだよ、エレボス。俺の発言が無神経だったみたいだから」

エレボス「でも……」

すると、今度はワタルとヒミコ、シバラク先生が来た。

ワタル「何かあったの？」

ヒミコ「ケンカか、トリさん？」

クラマ「そんなんじゃねえよ」

シバラク「どうせクラマが、イヤミでも言つて、もめていたんだろ？」

クラマ「だから、俺のせいじゃねえって言つてんだろが！」

シバラク「そう怒るな。冗談だ、冗談」

ワタル「クラマは口が悪いけど、頼りになるってのは僕達、わかってるから」

クラマ「そ、そうか……？」

ヒミコ「トリさん、嬉しそうだ！」

クラマ「うるせえよ！大人をからかうなっての！」

シモン「ワタルとヒミコにかかっちゃクラマの毒舌も形なしだな」

ヴィラル「フン……はぐれ者かと思つたが、ちゃんと仲間がいるか」

シヨウ「余計な気遣いは無用って事だな」

エイサツプ「そうですね！」

ヴィラル「氣遣われるべきは、奴ではなく、お前の方だろうな、シヨウ・ザマ」

シヨウ「俺が……？」

ヴィラル「貴様の腕は認める。だが、今の貴様は戦士ではない」

何……
!??

エイサツプ「お、おい、ヴィラル！それは……！」

シヨウ「聞き捨てならないな、それは」

シモン「おい、ヴィラル……いきなり揉め事を起こす気か？」

ヴィラル「口を出すな、シモン。これは俺にしかわからん事だ」

ヴイラルにしかわからない事だと…？

シヨウ「どう言う事だ？」

すると、シグナス内に警報が鳴る。

シモン「敵襲か!?？」

すると、アネツサから通信が入る。

アネツサ「機動部隊、各員へ。このエリアにオーラバトラー部隊が接近中。各員は直ちに攻撃準備をお願いします」

朗利「創界山での戦いでハウジョウ軍のオーラバトラーは全部破壊されたよな」

金本「と言う事は…！」

チャム「シヨウ！」

シヨウ「トツドが来るのか…」

ヴイラル「丁度いい。自らの甘さを思い知れ」

シヨウ「…」

第18話 オーラバトラー飛翔

―新垣 零だ。

敵襲と聞いて、俺達は出撃した。

なんだか、シヨウが浮かかない顔をしていたのが気になるが……。

チャム「……」

シヨウ「ヴェラルが言った事なら気にするな。俺はいつも通りだ」

チャム「そうじゃない……」

シヨウ「チャム……？」

チャム「怖い……。トツドの事を考えると……。トツドの憎しみは普通じゃない……。

あんなのと戦っていたら、シヨウまでおかしくなっちゃう……」

シヨウ「心配するな、チャム。俺は……。俺達は同じ過ちは繰り返しはしない。そうで

なければ、ここにこうやって跳ばされた意味がないからな」

チャム「どう言う事？」

シヨウ「アル・ワースに来る直前……。多分、シーラ様に浄化された後、俺は誰かの声

を聞いた……。その声は、俺に何かを訴えようとしていた……」

チャム「じゃあ、シヨウはその人にアル・ワースに送られたの？」

シヨウ「わからない。でも、俺がこうしてここにいる事には意味があると思っている。

俺にはバイストン・ウエルにも地上にも帰る場所なんてものはないのかも知れない……」
シヨウ……。

シヨウ「だから俺は、この戦いの中でその意味つてものを探してみたいんだ。手伝ってくれるか、チャム？」

チャム「もちろん！」

零「そろそろ敵が来るぜ、シヨウ」

シヨウ「ああ……わかってる」

アマリ「あの……その前に……さっきチャムちゃんと話していた事ですけど……」

シヨウ「俺が跳ばされて来た意味の事か？」

零「その答えを探す事……出来る事があるなら、俺達にも手伝わせてくれ」

アマリ「出来る限り、力になります」

シヨウ「ありがとうな、アマリ。その時が来たら、頼らせてもらう」

チャム「来たよ、シヨウ！」

ピアレスとオーラバトラー部隊が来たか……！

トツド「待たせたな、シヨウ！決着をつけに来たぜ！」

エイサツプ「トツドさん……！」

シヨウ「その様子では、まだドアクダー軍団にいるようだな」

トツド「おかげで程度のいいピアレスが手に入った！この前のようにいくと思うなよ！」

チャム「やつぱり、トツドはシヨウを……！」

アニュー「心配いらなわ、チャム！私達がシヨウを守るから！」

ロツクオン「そう言う事だ、シヨウ！もしもの時は、任せておけ！」

ニール「おい、ライル！もしもの時つてなんだよ……！！？」

マサキ「向こうは決着を望んでんだ。逃げてたら、いつまで経っても戦いは終わらねえ」

シヨウ「……その通りだ」

シヨウ「うおおおつ！男と男の勝負か！」

ゼロ「存分にやれ、シヨウ！」

ユイ「他の敵は私達が引き受けます！」

ヴィラル「だが、今のお前でトツドに勝てるかな？」

シヨウ「俺には生きて、やる事がある。死ぬつもりはない」

ヴィラル「フ……骨は拾ってやるから、精々頑張るのだな」

エイサツ「シヨウさんを骨なんかにさせてたまるか！」

チャム「本当に嫌な奴！応援するなら、素直に応援しろ！」

クラマ「(丁度いい...)。シヨウの野郎がトツドに気を取られていれば、隙が生まれる...。ワタルの代わりにあいつを討てば、とりあえずへの点数も上がるだろう)」

千冬「...？」

トツド「いいぜ、シヨウ！お前もその気になったか！」

シヨウ「トツド！お前が決着を望むなら、受けて立つぞ！」

トツド「甘いな、シヨウ！今のお前ごときに俺が負けるかよ！」

オーラバトラー部隊との戦闘を開始した...。

俺達はオーラバトラーや魔神を倒していく。

ホープス「(力の高まりを感じます...)。この力が集まった時、きっと私の望みも叶うでしょう。その日が来るまで、この世界が続く事を願います)」

戦闘から数分後...。

トツドのオーラ力がシヨウより上なのか、シヨウは押されていた。

トツド「その程度かよ、シヨウ！」

つて、またオーラ力を高めやがった!??

九郎「何だよ、あの光は!!?」

アンジユ「あれがオーラ力ってやつなの!!?」

エレボス「それにしたって異常だよ!」

チャム「あれって:~!」

シヨウ「まさか:~ ハイパー化を:~!!?」

エイサツプ「ハイパー化って:~ サコミズ王と同じ:~!!?」

シヨウ「チャム! トツドをこちらに引き付けるぞ!」

チャム「う、うん!」

トツド「逃すかよ、シヨウ!」

ダンバインはビアレスを引きつけるように動くが、ビアレスの攻撃を受けてしまう。

シヨウ「くっ!」

チャム「やられちやう!」

トツド「覚悟おおおお!」

エイサツプ「駄目だあああああつ!!?」

ビアレスはダンバインにとどめを刺そうとしたが、アツカナナジンがダンバインを庇い、ダメージを受けた。

エイサツプ「うわああつ!」

エレボス「エイサップ！」

朗利「何やってんだ、お前！」

トツド「邪魔をするな、エイサップ！」

エイサップ「トツドさん！憎しみで戦ったって、残るのは悲しみだけなんですよ！」

トツド「知った事か！俺はシヨウを倒せれば、それでいいんだよ！」

エイサップ「本当にあの時のサコムズ王と同じだ……！」

トツド「邪魔をするなら、お前ごとシヨウを倒してやる!!？」

金本「エイサップー!!？」

ヴィラル「ここまでか……」

シモン「仲間のピンチに何言ってやがる、ヴィラル！」

ヴィラル「無駄だ！戦士の魂を失った男など助けるに値しない！」

トツド「わかってるじゃねえか、ヴィラル」

ヴィラル「お前と俺は似た者同士だからな。お前がシヨウに感じる苛立ちが理解でき

るのは俺ぐらいだろう」

シヨウ「トツドが……俺に苛立っている……？」

トツド「シヨウ！俺を哀れむのはやめろ！」

シヨウ「……！」

トッド「バイストン・ウエルや地上で戦った時のようにお前の全力でねじ伏せろ！それに勝つ事こそが、俺の望みだ！それとも今のお前は戦う意味さえ失っちゃまったのかよ！」

シヨウ「俺は…」

零「何やってんだよ、シヨウ！アル・ワースに來た意味を探すんじゃないのかよ!?」

ホープス「それは建前というものです。理屈で人は動けませんが、果たしてそれは真の力になり得るでしょうか…」

アマリ「だけど！このままじゃ終わりなんです！」

トッド「愛想が尽きたぞ、シヨウ！せめてもの情けだ！ここで俺が終わらせてやる！」
エイサップ「シヨ…シヨウさん！」

シヨウ「南無三！」

すると、前に出て來た鳥型の魔神と複数の魔神が現れた。

一夏「あの鳥の魔神は…!?」

しんのすけ「ワタル君を襲った魔神だゾ!?」

アンドレイ「狙いはシヨウ君か…！」

千冬「まさか、あの魔神に乗ってるのは…」

クラマ「(悪く思うなよ、シヨウ。お前にはワタルの身代わりになってもらう…。身代わり…。？俺は…。無意識にワタルをやるのをためらっているのか…。？ええい！考えるのは後だ！ここはシヨウを！)」

アキト「シヨウ！」

メル「早く回避を！」

ホープス「前にはオーラバトラー、後ろには謎の魔神と複数の魔神…。これは詰みでしょう…。」

カンタム「待て！まだ何か来るよ！！？」

ヒミコ「鳥か！？飛行機か！？？」

チャム「あれは…。！」

現れたのは1機の戦闘機だった。

シヨウ「ビルバイン！」

ビルバインと呼ばれる戦闘機は鳥型の魔神を攻撃した。

クラマ「うおっ！」

マーベル「シヨウ！ダンバインに乗っているのはシヨウなのね！」

シヨウ「マーベル！マーベル・フローズン！」

ビルバインはダンバインの前まで移動する。

シヨウ「本当にマーベルなんだな！」

マーベル「ああ、シヨウ……」

チャム「シヨウのオーラ力が……上がっていく……」

朗利「どうやら、あの女が……」

ヴィラル「奴の戦いの……生きる意味のようだな」

トツド「シヨウ……。ビルバインに乗れ」

シヨウ「トツド……」

トツド「やつと、俺が倒すに値する男になったようだからな。そこの鳥！」

クラマ「！」

トツド「誰に雇われたんだか知らないが、俺達の戦いの邪魔するな！」

クラマ「……いいだろう。だが、手助けを拒否したのはお前だつてのを忘れるなよ」

そう言い残し、鳥型の魔神は撤退した。

つて、配下は置き放しかよ！

ワタル「あいつ……何者なんだ……」

千冬「(……これは、確かめる必要があるな……)」

マーベル「シヨウ……」

シヨウ「マーベル……。ビルバインを」

マーベル「わかったわ。気をつけて」

シヨウとマーベルって人はそれぞれ機体を乗り換えようとした。

しかし、あの鳥型の魔神の配下の魔神が2人目掛けて、攻撃を仕掛けて来た。

まずい……！

トツド「シヨウ！」

シヨウ「！」

すると、今度は4機のオーラバトラーが現れた。

エレボス「あれって、まさか……！」

エイサツプ「4機のギム・ゲネン!? それに、あの先頭のギム・ゲネンは……！」

アマルガン「男同士の戦いに水を差すなど……！」

リユクス「恥を知りなさい！」

まずは後ろの3機のギム・ゲネンが数体の魔神に近づいた。

へべ「ギム・ゲネンの総攻撃といこうかい？」

キキ「面白いじゃん！ やってやろうじゃない！」

アマルガン「では、ワシも乗らせてもらうか！……ゆくぞ！」

3機のギム・ゲネンは一斉に動き出した。

へべ「外さないよ！」

アマルガン「ふんっ！」

赤いギム・ゲネンと片方の緑のギム・ゲネンがガダや改造砲で攻撃する。

キキ「お次はこれ！」

アマルガン「ぬあっ！」

さらにもう片方なギム・ゲネンがオーラソードで何度も斬り裂き、赤いギム・ゲネンが突進で吹き飛ばした。

へべ「はあっ！」

キキ「でえっ！」

吹き飛んだ所に2機の緑のギム・ゲネンが待ち構え、それぞれオーラフレイムソードで斬り裂く。

アマルガン「ぬおおおおっ!!？」

最後に赤いギム・ゲネンがオーラフレイムソードで魔神を真つ二つにした。

リュクス「流石です、皆さん！私も負けていません！」

今度は薄緑のギム・ゲネンがオーラフレイムソードを構え、動き出した。

リュクス「この一太刀で!... はあああああっ!!？」

そして、オーラフレイムソードで残る魔神を全て斬り裂いた。

アマルガン「お見事です、姫様！」

リユクス「いえ、私なんてまだまだです」

エイサップ「リユクス：．．．それに、ご老体にへべさん、キキさん！」

キキ「ようやく会えたね、エイサップ！」

へべ「随分、探したよ！」

リユクス「エイサップ：．．．」

エイサップ「リユクス：．．．」

リユクス「まずは、この戦を負わらせましょう」

エイサップ「ああ！」

どうやら、エイサップの探していた人物達みたいだな！

そして、シヨウもビルバインに乗るとビルバインを戦闘機の姿からオーラバトラーの姿になり、オーラ力を溢れさせる。

シバラク「すさまじい気迫だ！」

ケロロ「あれが：．．．オーラ力でありますか！」

ヴィラル「そうだ、シヨウ！恐れるな！そして、悲しむな！お前は戦士だ！」

トッド「感謝するぜ、ヴィラル。シヨウに火を点けてくれてよ」

ヴィラル「お前とは、1度は共に戦った仲間だからな。その義理を果たしたまでだ。だが、あの男に戦士の魂を取り戻させたのは俺ではない」

？「そういう事だア!!？」

すると、1機の赤い機体が現れる。

真上「やはり来たか…。」

海道「必ず出てくると思っていたぜ、キバの大将！」

キバ「久しぶりだな！ドクロ!!？」

スカーレット「あれが…キバなのか…！」

サヤ「…！」

リチャード「大丈夫だ、サヤ。俺はここにいる」

サヤ「…はい！」

ヴイラル「キバが出て来たか！」

トッド「何だよ、キバ…。俺の邪魔をする気か？」

キバ「安心しな！俺の目的はドクロを倒す事だア！」

トッド「だったら、勝手にしろ」

キバ「そうさせてもらうぜエ！」

海道「そう言うと思っただぜ！」

真上「久しぶりに撃ちごたえのある敵が出て来たな…。また撃ち抜いてやるぞ！キ

バ！」

あれが海道さん達の宿敵か……。

マーベル「シヨウのオーラ力を感じる……」

シヨウ「マーベル……。俺は……必ず勝ってみせる……！」

トツド「いいぞ、シヨウ！そのお前を倒してこそだ！」

シヨウ「お前は、まだそんな事を！」

トツド「最終ラウンドを始めるぜ！ついて来な！」

ビルバイン、ダンバイン、ビアレスは移動した。

トツド「覚悟はいいな、シヨウ！」

シヨウ「トツド……！俺はお前の憎しみを止めるためなら最悪、刺し違える覚悟が

あった……！」

マーベル「シヨウ……」

シヨウ「だが、マーベルと再会した今、俺は生きる！生きて俺は、この戦いの意味を

見つける！」

チャム「やっっちゃえ、シヨウ！」

シヨウ「トツド……！俺はお前にも、憎しみのオーラにも負けはしないぞ！」

キバ「今度こそぶつ倒してやるぜ、ドクロオオオオオ!!？」

海道「結局、死ぬのはためえなんだよ！」

真上「再び、俺たちの前に現れたおのれの不幸を呪うがいい！」

リュクス「行きましょう、エイサップ！」

エイサップ「ああ！リュクスと一緒になら、どこまでも行ける！」

俺達は、キバのアイアンカイザー、ピアレス、オーラバトラー軍団との戦いを再会した……。

〈戦闘会話 リュクスVS初戦闘〉

リュクス「ようやく、エイサップと出会えた……。これ程までに嬉しい事なのです。ここで死ぬわけにはいなくなりました！」

〈戦闘会話 アマルガンVS初戦闘〉

アマルガン「悪党の相手をするぞ、キキ、へべ！ついて来い！」

へべ「了解だよ、ご老体！」

キキ「歳なんだから無理したらダメだよ！」

アマルガン「舐めるな！お前達はワシの援護をしろ！」

〈戦闘会話 シモンVSキバ〉

ウイルス 「よう、キバ」

キバ 「その機体に乗ってるのはウイルスか！本当に敵になったんだな！」

ウイルス 「お前ならば相手にとって不足はない！」

キバ 「それはこっちの台詞だ！」

シモン 「俺を置いて話を進めるな！グレンラガンは俺とウイルスがいる事を忘れんじゃねえ！」

〈戦闘会話 スカレットVSキバ〉

スカレット 「お前がキバか」

キバ 「その機体……てめえ、あの時の女か！」

スカレット 「恐らく違うな、私は由木ではない」

キバ 「何だって、一緒だ！その機体をボロボロにしてやるぜ！」

スカレット 「もう死ぬわけにはいかな。簡単にやれると思うなよ！」

〈戦闘会話 海道VSキバ〉

海道「てめえもしつこい男だな、キバの兄ちゃんよ！」

真上「いい加減お前の顔を見飽きたところだ」

キバ「そんな事、言うなよ！もつと楽しもうぜ！ドクロ！地獄の果てまでな！」

海道「何言つてやがる！ここはもう地獄なんだよ！」

真上「忘れたとは言わせんぞ、俺達が地獄だと言う事をな！」

カイザーの攻撃でアイアンカイザーはダメージを受けた。

キバ「ヒヤハハハッ！これだ…この痛みだ！俺はまだ生きているぞー!!？」

海道「うえ、気持ちわりいな…見た目も」

真上「見た目は元からだろう」

キバ「ドクロオ！次こそは引導を渡してやるから覚えてやがれ！」

そう言い残し、アイアンカイザーは撤退した…。

ワタル「なんか、ものすごい人だったね…」

海道「心配すんな、戦部！あいつは俺達が息の根を止めてやるからよ！」

シャルロット「いやだから、それを言ったらダメですよ…」

全く…この地獄コンビは…。

〈戦闘会話 アマルガンVSトッド〉

トッド「エイサップの世界のオーラバトラーか！」

ヘベ「ここまでオーラが歪んだ男がいるとはね……」

キキ「ご老体！容赦無くいくよ！」

トッド「いいぜ、3人まとめてかかってきな！」

アマルガン「年寄りをなめるなよ、小僧！貴様とは生きた場数が違うわ!!？」

〈戦闘会話 リュクスVSトッド〉

リュクス「かつてのお父様を思わせるオーラですね！」

トッド「お前がエイサップの戦う理由の女か！それ程のオーラ力で俺に挑む気か!!」

？

リュクス「オーラ力で負けていたとしても、私は負けません！エイサップと共に歩む

ためにも！」

トッド「エイサップが強い理由がわかったぜ……」

リュクス「え……？」

トッド「だが、加減はできないから覚悟しやがれ！」

〈戦闘会話 朗利VSトッド〉

トッド「お前達までドアクター軍団を見限っていたとはな！朗利、金本」
金本「トッド、手加減はしないよ！」

朗利「俺達は共に戦った元戦友にも優しくはねえぞ！」

トッド「それでいい！逆に手なんて抜いたら俺が許さない！」

〈戦闘会話 エイサツプVSトッド〉

エイサツプ「… トッドさん」

トッド「もう言葉は必要ないだろう、エイサツプ！」

エイサツプ「はい。俺はもうあなたを止めると決めましたから…そして、リユクス達と生きる！」

トッド「お前もいい顔になったじゃねえか！」

エレボス「リユクス達と出会って、エイサツプのオーラ力も上がってる！」

エイサツプ「トッドさん、本気で斬ります!!？」

トッド「来い、エイサツプー!!？」

ビルバインはオーラ斬りでビアレスを真つ二つに斬った……。

トツド「う、うおおおおっ!!？」

斬り裂かれたビアレスは爆発した。

チャム「やったよ！シヨウの……エクスクロスの勝ちだ！」

戦闘が終わり、俺達は警戒を解いた。

ヴィラル「(トツド……。見事な散り際だったと言っておくぞ……)」

シヨウ「……」

チャム「泣いてるの、シヨウ？」

シヨウ「そうじゃない……」

チャム「トツドは……きつと死んでないよ」

エイサツプ「だから、きつとまた会えると思いますよ」

シヨウ「ありがとう、チャム、エイサツプ……」

マーベル「シヨウ……」

シヨウ「ありがとう、マーベル……。マーベルが来てくれなかったら、きつと俺はトツドに負けていた……。ビルバインの問題じゃない。マーベルがいたから、俺は戦う事が

出来たんだ」

マーベル「シヨウ：：」

シヨウ「もう一度言わせてくれ、マーベル：：。ありがとう」

エイサツプ「リユクス達もありがとう：：」

リユクス「私は：：。また、あなたと出会えただけで幸せです」

エイサツプ「リユクス：：」

へべ「いい雰囲気だね：：。あの二組は」

キキ「確かにね！」

アマルガン「これ、茶化すな。（見ておるか：：。？サコミズ：：。お前が認めた皆はどん

どん成長していつておるぞ：：。お前も見守っていてくれ：：。）」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、プトレマイオスに集まった。

シヨウ「：：。じゃあ、マーベルよあの声を聞いたんだな？」

マーベル「その後は、あの戦いで受けた傷もない状態でアル・ワースで目覚めて：：。

私の傍らにはビルバインがあつたから、きつとシヨウもいると思つて、旅をしていたの」

シヨウ「そうか：：」

マーベル「私は：：。あの声はシーラ様のものだと思うわ。あの方が私達に何かを託し

たんだと」

シヨウ「それはこれから考えればいい。今は、また会えた事を素直に喜びたい」

マーベル「ふふ…」

シヨウ「おかしなこと言ったか？」

マーベル「少し会わないうちに情熱的になったと思つて」

シヨウ「いいだろ、別に…」。マーベルだつて、そういうのを望んでいたし」

マーベル「茶化するような事を言つて、ごめんさい。シヨウ…。あなたに、また会えただけで私は幸せよ」

シヨウ「マーベル…」

リユクス「良かったですね、シヨウさんとマーベルさん…」

エイサツプ「…リユクス、また君と会えて俺も嬉しいよ」

リユクス「…」

エイサツプ「ど、どうしたんだ？」

リユクス「そう面と向かつて言われると…照れますね…」

エイサツプ「当たり前だよ、もう会えないと思つていたから…」

リユクス「エイサツプの居る所に私もいます…離れていても私達の心は繋がつていきますよ」

エイサツプ「…ふつ、敵わないな…リユクスには…」

リユクス「エイサツプほどではありませんよ」

エイサツプ「リユクス……」

チャム「……」

エレボス「……」

クラマ「残念だったな、お二人さん。あの彼女達が来なければ、シヨウやエイサツプの隣を独占できたのに」

チャム「そんなこと考えてるわけじゃない！」

エレボス「……リユクスに敵わない事なんてとづくにわかってるよ」

チャム「シヨウとマーベルが、また会えたんだから……私だつて嬉しいに決まってる……じゃない……」

クラマ「……悪かったな。つまんねえこと言つて……」

チャム「……」

エレボス「……」

クラマ「何だよ、驚いた顔して」

エレボス「クラマつて……思つたよりもいい奴なんだね」

ヒミコ「そうなのだ！チャムもトリさんのいい所にやつと気付いたのだ！」

クラマ「いきなり出て来んじゃねえよ、ヒミコ！」

ワタル「諦めなよ、クラマ。ヒミコは忍者なんだからさ」

クラマ「…」

ワタル「どうしたの、クラマ？」

クラマ「何でもねえよ…。(俺は…心のどこかで、こいつ等と一緒にいる今の生活が続く事を望んじまっている…。このままじゃ俺は…村のみんなに顔向け出来ねえ…)」

零「…クラマ？」

ヒミコ「トリさん？」

クラマ「ほれほれ、ヒミコ！戦闘じや役に立たねえ俺達は生活班で頑張るぞ！零も手伝え！」

ヒミコ「りよーかい！ナディアとラライヤ、夏美にも収集をかけるのだ！」

零「何なら、一夏とアマリ、メルも呼ぶか」

ワタル「頑張つてね、クラマ、ヒミコ、零さん！」

クラマ「(シヨウの覚悟は、俺にも火を点けてくれやがった。俺は、もう甘さは捨てる…。許せよ、ワタル…。次の指令が下されたら、俺はもうためらわねえからな。)」

「僕はティエリア・アーデだ。

今、僕は織斑 千冬に呼ばれ、トレミーの人気のない廊下まで来た。

千冬「急に呼び出してすまない、ティエリア」

ティエリア「それで話とは？」

千冬「・・・クラマの事だ」

・・・クラマだと・・・？

千冬「お前は以前、零にクラマに気をつけろと言ったな？」

ティエリア「ああ。確かに言ったが・・・」

千冬「今回も出て来たあの鳥型の魔神・・・パイロットはクラマかもしれない・・・」

・・・何？！？

ティエリア「確かなのか？」

千冬「確信はないのだが・・・あの戦闘中にクラマの姿が消えたんだ」

ティエリア「・・・それはあの鳥型の魔神が現れた頃か？」

千冬「ああ」

ティエリア「・・・警戒は強めた方が良いな・・・」

千冬「この事を零に話すのか？」

ティエリア「いや、確信がない以上、事を広めたくない……。今は僕達だけで警戒をしておこう」

千冬「わかった」

渡部 クラマ：：彼は一体、何者なんだ：：？

シークレットシナリオ

想いというオーラ

シークレットシナリオ

想いというオーラ

ーシヨウ・ザマだ。

俺とマーベルは偵察をしていた。

シヨウ「… 偵察の報告は以上だ。追ってメガファウナに帰還する」
通信を切った俺にマーベルが話しかけて来た。

マーベル「お疲れ様。後は帰るだけね」

シヨウ「艦長達から、少しぐらいの寄り道なら許可をもらっている」

マーベル「ふふ… 気を遣われたみたいね」

シヨウ「参ったな…。マーベルに再会できたのが嬉しかったせいか、みんなの前で恥ずかしい事を言ってしまった…。おかげでシバラク先生やしんのすけは不機嫌になるし、ノレドやジャン、シャルロットには、散々突っ込まれるし、たまったもんじやない」
マーベル「せっかくだから、ゆっくり話をしましょう。チャムも散歩に行っているし」

シヨウ「…その前に謝りたい事がある」

マーベル「私に？」

シヨウ「ドレイクとの最後の戦い…俺はマーベルが苦しい時…側にいてやれなかった…」

マーベル「それは、あなたのせいじゃないわ。その代わりあなたは、憎しみの塊となつたバーンを討つたじゃない」

シヨウ「でも、俺達は…シーラ様の浄化でもバイストン・ウエルに帰れなかった…。そして、地上にも帰れなかった」

マーベル「その答えは、これから一緒に探していくんでしよう？」

シヨウ「思うだ…俺達がバイストン・ウエルに帰れなかったのは…。きっと…あの戦いがまだ終わってないからなんだと」

マーベル「では、アル・ワースに來たのはそれを終わらせるためだと？」

シヨウ「ああ…」

マーベル「責任感の強さは、相変わらずね」

シヨウ「茶化すなよ」

マーベル「そんなつもりはないわ。でもね…考えても答えが出ない事を考えるより、大事な事があるんじゃない？私達…今、二人きりなのよ。それを感じて」

シヨウ「マーベル…」

マーベル「私が欲しいのはライク・ミーではなく、ラブ・ミーよ」

シヨウ「わかつている」

っ!? 草むらから音が聞こえた…!?

シヨウ「誰だ!?」

ヴィヴィアン「あちゃあ…見つかっちゃった…」

アンジュ「前に出すぎなのよ、ヴィヴィアンは」

朗利「お前が押すからバレちまったじゃねえかよ、金本」

金本「だって、俺も見なかったんだよ!」

シヨウ「ヴィヴィアン、アンジュ、朗利、金本…!」

マーベル「あなた達は別のエリアの偵察任務のはずよ。そもそも、朗利達…エィ

サツプとリユクス姫はどうしたの?」

朗利「偵察を終えたんだが、エィサツプとリユクスの甘い雰囲気になんか耐えられなくなつたんだよ…」

金本「見ていたこつちの身にもなつてよ」

朗利「それで、散歩をしていたら、アンジュ達と会つたんだ」

アンジュ「私達も偵察は終了よ。で、ちょっと散歩しようつてなつて…何故か、ヴィ

ヴィアンがシヨウ達の所に行きたいって言い出したの」

シヨウ「ノゾキをするためにか？呆れたもんだな……」

チャム「ごめん、シヨウ、マーベル……。あたし達も、止めたんだけど……」

エレボス「ヴィヴィアンが聞かなくて……」

チャム「せっかくの二人つきりだから、邪魔が入らないようにしてたのに……」

アンジュ「チャム達のせいじゃないよ。悪いのはヴィヴィアンだ」

マーベル「気にしてないわ、チャム、エレボス。それにアンジュも」

アンジュ「……ありがとう、マーベル」

すると、エイサツプとリユクスが来た。

エイサツプ「朗利、金本、エレボス……。こんな所に居たのか」

リユクス「散歩に行くって仰って帰ってくるのが遅かったので心配しましたよ」

朗利「悪かったな、二人共」

エイサツプ「シヨウさん達の所に来ていたのか……。ダメじゃないか、二人の邪魔をし

ちゃ……」

マーベル「良いのよ、エイサツプ……。気にしていないから。ヴィヴィアンも、そうい

う事に興味がある年頃なのね」

ヴィヴィアン「あたしじゃない。興味があるのは、サリアだよ」

金本「サリア？」

ヴィヴィアン「アルゼナルのパラメイル第一中隊の隊長だよ。すつごく真面目だけどら男と女がチュツチュする本が大好きなんだよ」

エレボス「チュツチュ?!？」

な、何の本を読んでるんだよ、一体…！

アンジュ「へえ…あのサリアがねえ…」

マーベル「(邪悪なオーラを感じる…)」

リユクス「(アンジュは敵に回したくないですね…)」

ヴィヴィアン「というわけで、サリアへのお土産話のためにシヨウとマーベルのチュツチュを見に来たわけ」

チャム「二人に何を期待してるのよ…」

エイサツプ「でも、ヴィヴィアン…。アルゼナルに帰ったら、まずい事になるんじゃないのか？」

ヴィヴィアン「そう言えば、そうだった！うくん…困った…。そろそろキャンデイのストックもなくなりそうなの…」

シヨウ「いつも舐めてるやつか…」

ヴィヴィアン「あれ、アルゼナル特製なんだよ」

アンジュ「戻りたいなら、ヴィヴィアンは戻ればいいわ。私に脅されて、付き合わされたとしても言えば、何とかなると思うし」

ヴィヴィアン「アンジュは帰る気はないの？」

アンジュ「ないわ。あそこにはロクな思い出がないしね」

チャム「アンジュも、そのサリアって人と同じなの？」

アンジュ「え…？」

金本「アンジュもショウとマーベルの事、ずっと見ていたじゃないか」

アンジュ「そ、そんな事あるわけじゃないじゃない！（言えない…。あいつを…あの夕スクの事を思い出してたなんて…）」

ショウ「邪魔が入ったし、そろそろ帰るとしようか」

マーベル「そうね。あまり遅くなれば、みんなにも心配かけるし」

朗利「やたらと心配性の奴が多いからな、エクスクロスは…」

チャム「！」

エレボス「これは…！」

リユクス「どうしました？お二人共…」

エレボス「向こうから何か来るよ！」

ショウ「みんな、機体に乗れ！あれは…魔徒教団のゴーレムだ！」

俺達はそれぞれ、機体に乗り込み、ルーン・ゴーレム部隊を見る。

エイサツプ「魔徒教団が仕掛けてきたのか!?」

マーベル「どういう事なの、シヨウ!??あなた達、教団に追われているの!?」

シヨウ「事情があるんだ」

アンジユ「術士は近くにいないみたいだけど…」

ヴィヴィアン「じゃあ、野良ゴーレムか?」

リユクス「暴走しているのでしょうか…」

アンジユ「さあね。また前のように制御している人間が隠れているかも知れないわ

」

金本「事情があるにしても、このままじゃまずいよね…!」

朗利「ああ、標的は俺達の様だしな!」

シヨウ「術士がいないのなら、事情を話しても無駄か…!」

俺はビルバインを動かした。

マーベル「シヨウ!」

エイサツプ「シヨウさん!」

アツカナナジンもビルバインの隣に来た。

リユクス「エイサツプ！」

エイサツプ「俺も手伝います！」

シヨウ「俺とエイサツプが前に出る！マーベル達はフオローを頼む！」

ヴィヴィアン「うおおおっ！シヨウ、エイサツプ、かつちよいい！」

朗利「余程、マーベルやリユクスにいい所を見せたいみたいだな」

チャム「(違う...)」

マーベル「(シヨウは気負っている...。この感じ...。ロンドンでの戦いと同じだ...)」

チャム「シヨウ...」

エレボス「エイサツプ...」

シヨウ「心配するな、チャム。やってみせるさ...！」

エイサツプ「俺も大丈夫だよ、リユクス、エレボス。無茶はしないから」

俺達はルーン・ゴレムとの戦闘を開始した...。

エレボス「無茶したらダメだよ、エイサップ！」

エイサップ「わかってる！シヨウさんだってやろうとしているんだ…俺だって！」

〈戦闘会話　リユクスVS初戦闘〉

リユクス「（どうして…何か、エイサップが遠くに行ってしまう…そんな気が…）…いいえ、私はエイサップを信じるって決めたのです！」

戦闘から数分…。

敵のルーン・ゴーレムはそこまで強くないが数に苦戦する。

アンジュ「一体一体は大した事がなくても数が多い…！」

金本「あーもう！あいつ等、固いなー！」

ヴィヴィアン「あたしも嫌いだ！」

シヨウ「このまま戦いを続けては取り返しつかない事になるかも知れない…。そんな事になったら、またマーベルを失う事になったら…。」

エイサップ「シヨウさん！」

ヴィヴィアン「うおおおっ！オーラが燃えている！」

リユクス「ですが、様子が変です！」

シヨウ「俺は……マーベルを……守るんだ！」

朗利「何だよ、あれ？！」

金本「暴走しているのか、シヨウ？！」

エレボス「まずいよ、このままじゃ……！」

チャム「ダメ、シヨウ！オーラ力を押さえて！このままじゃハイパー化しちゃう！口
ンドンでの戦いと同じになっちゃうよ！」

シヨウ「だけど……！マーベルを危険にさらすには！」

チャム「シヨウのバカ！バカ、バカ、バカ！マーベルばかり心配して、あたしの言
葉なんて聞いてくれないの！」

すると、チャムが俺にビンタを浴びせて来た。

シヨウ「痛いぞ、チャム！何の真似だ、邪魔するなよ！」

チャム「じゃ、邪魔……？私、が……？」

リユクス「な、何て事を……！」

エイサツプ「……シヨウさん……」

今度はアツカナナジンが俺に近づいて来た。

シヨウ「エイサツプ…？」

エイサツプ「歯を食いしばれ!!？」

シヨウ「グアツ!!？」

アツカナナジンはビルバインを殴った…。

エレボス「エイサツプ！何やってるの!!？」

シヨウ「な、何するんだよ…。エイサツプ！」

マーベル「シヨウのオーラが落ち着いた…。」

チャム「エイサツプ…。」

エイサツプ「まずはチャムが言いたい事言いなよ」

チャム「うん…。」

言いたい事…？

チャム「シヨウはいつもそうだ…。！いつもマーベルの事ばかりであたしの事なんてどうでもいいんだ！」

シヨウ「な、何を言ってるんだ、チャム…。!!？」

チャム「でも、いい！シヨウかまマーベルを守るなら、あたしがシヨウを守るから！安心して、マーベル！シヨウが暴走しそうになったら、蹴っ飛ばして止めるから！」

マーベル「わかったわ、チャム。戦闘中のシヨウは、あなたに任せる」

チャム「だから、シヨウ！シヨウは全力で戦いなよ！好きな人のために！」
シヨウ「チャム……」

チャム「次、エイサツプが言いなよ！」

エイサツプ「……シヨウさん……。俺はあなたがマーベルさんに向ける感情の気持ちはわかります。俺もリユクスも守りたいですから……」

リユクス「エイサツプ……」

エイサツプ「でも、あなたの大切な存在はマーベルさんだけ何ですか!!?」

シヨウ「！」

エイサツプ「あなたには、チャムも居るんですよ！それに俺やエクスクロスのみんなの事は仲間だと思っていないんですか!!?」

シヨウ「そんな事は……！」

エイサツプ「だったら、焦らないでください！マーベルさんを守りたいと思っ
ているのは、あなただけではないんですよ!!?」

エイサツプ「……。そうか……。そうだな……。！」

シヨウ「……ありがとう、チャム、エイサツプ」

俺はオーラ力を高めた。

金本「また暴走か!!?」

マーベル「ううん。今度はさつきと違って落ち着いたオーラだわ」

シヨウ「チャムが……仲間がいてくれれば、俺は全力で戦える！」

チャム「シヨウ！」

朗利「どうやら、暴走は収まったみたいだな」

シヨウ「ああ……。チャムとエイサップの言葉を目が覚めたよ。ありがとう、二人共。

マーベルだけじゃなく、俺にはやっぱり仲間が必要だ」

チャム「今頃わかるなんて遅いよ！」

エイサップ「行きましょう、聖戦士シヨウ！」

リユクス「シヨウさん……。互いを想う気持ちがあれば、それは破壊の力に……。ハイ

パー化にはならないはずですよ」

マーベル「もう、あなたは大丈夫よ」

シヨウ「わかった……。！シヨットを倒した時の感覚だな！」

アンジュ「さつきとは、また違う力……」

ヴィヴィアン「何だか、あつたかい……」

すると、ゴーレムの一体が俺達に向かって来た。

エイサップ「シヨウさん！」

シヨウ「エイサップ、合わせて行くぞ！」

エイサツプ「はい！」

向かって来たゴーレムに俺とエイサツプは攻撃を仕掛けた…。

チャム「違う世界の聖戦士が力を合わせたら…。」

エレボス「もう負けないよ！」

エイサツプ「行きましょう、シヨウさん！」

シヨウ「ああ！」

まずは俺がビルバインで接近した。

シヨウ「はっ！」

エイサツプ「でやああっ！」

俺はオーラソードで何度も斬りつけ、後ろからアツカナナジンもフレイムオーラソードで斬り裂いた。

シヨウ「悪しき力は俺達が断つ！」

エイサツプ「それが聖戦士の役目だ！」

俺達は一斉にハイパーオーラソードとハイパーフレイムオーラソードで斬り裂いた。

エイサツプ「とどめだあああああっ！！？」

シヨウ「落ちろよおおおっ！！？」

最後にもう一度、ゴーレムを斬り裂き、ゴーレムは爆発した。
ヴィヴィアン「凄いや！シヨウ、エイサップ！」

朗利「俺達に負けない連携だな！」

チャム「シヨウ！みんなも来たよ！」

チャムの言葉通り、エクスクロスのみんなが来た……。

―新垣 零だ。

俺達はシヨウ達が戦つてると聞いて、襲撃した。

一夏「無事ですか、シヨウさん！」

シヨウ「大丈夫だ！やれている！」

刹那「……シヨウの気負いが取れている……」

ヴィラル「戦いだけに集中する自然体……。強い男のあるべき姿だな」

竜馬「マーベルと二人にしたのが効いたみたいだな」

零「何で、アンジュとヴィヴィアン、エイサップ達もいるんだ？」

デイオ「このエリアは、彼女達の偵察担当ではないはずだ」

アーニー「もしかして、邪魔したの？」

アンジュ「私じゃない！ヴィヴィアンよ！」

朗利「俺達は悪くねえよ！」

ハンソン「ヴィヴィアンが、そういう事に興味を持つとはとても思えない」

サンソン「やめてやれ。アンジュの照れ隠しなんだからよ」

グランデイス「可愛い所、あるじゃないか！」

アンジュ「そうじゃなくて！」

ワタル「話は後だよ！まずはゴーレムを、どうにかしないと！」

アマリ「ホープス、術士を感知できます？」

ホープス「気配は感じません」

メル「では、あのゴーレム…偵察か警備目的で配備されたものですね」

ドニエル「やむを得ん。正当防衛という事で応戦するぞ」

倉光「消耗が激しいようなら、シヨウ君達は後退してくれ」

スメラギ「後は引き受けるわ」

シヨウ「こちらは大丈夫です…マールベルもやれるな？」

マールベル「問題ないわ。シヨウがいれば」

リユクス「私もエイサップがいるから…」

エイサップ「そうだな、リユクス！」

シモン「見せつけてくれるぜ、お前ら！」

チャム「私達も忘れないで！」

エレボス「3人で一つみたいなものなんださら！」

シヨウ「そうだ！俺とマーベルとチャムだ！」

エイサツプ「俺とリユクスとエレボス……だな！」

ゼロ「よくわからねえが、期待させてもらうぜ！」

シヨウ「行こうみんな！俺達の力で状況を打開する！」

エイサツプ「俺達は絶対に負けない！」

マーベル「二人には負けていられないわね、リユクス姫」

リユクス「はい、私も頑張ります！チャムとエレボスもお願ひします！」

エレボス「了解！やってやるよー！」

チャム「うん！あたしも頑張るよ！」

俺達はルーン・ゴーレム部隊との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「術士から命令を与えられてなくても、与えられても魔徒教団つてのは面倒な事

ばっかり起こしてくるな……！俺達を襲うなら、破壊させてもらおうぞ！」

〈戦闘会話 朗利VS初戦闘〉

朗利「ルーン・ゴーレム如きで俺に敵うと思ってるのか？だったら、粉々に打ち砕いてやるよ！」

〈戦闘会話 金本VS初戦闘〉

金本「正直、魔徒教団との面倒は避けたいけど、そうは言ってもらえないよな……！だったら、俺が相手になってやる！」

〈戦闘会話 エイサップVS初戦闘〉

エレボス「さっきのエイサップ、すごくカッコよかったよ」

エイサップ「俺なんてまだまださ……でも、俺だって、聖戦士なんだ！オーラ力を収めるのは当然だろ？」

エレボス「そうだね！それじゃ、こつちでも活躍しよう！」

エイサップ「俺もリユクスを守る……！でも、守るのはみんな一緒にだ！サコミズ王……見ていてください！これが俺の選んだ道です！」

〈戦闘会話　リユクスVS初戦闘〉

リユクス「エイサップからは色々な事を学ばされる…。でも、エイサップも私は必要としてくれている…。だから、私もエイサップと皆さんの力になる為に戦います！」

俺達はルーン・ゴレム部隊を全て倒した…。

ヴィヴィアン「よし！あたし達の勝ちだ！」

アイーダ「今日の勝利はシヨウさんとマーベルさん、エイサップさんの活躍によるものでしょう」

戦いが終わり、俺達は戦闘態勢を解く。

シヨウ「心配かけてすまない、マーベル、チャム、エイサップ…。俺は…。」

マーベル「謝ってばかりね、シヨウ」

エイサップ「それとありがとうという言葉もよく言いますね」

シヨウ「返す言葉もない」

マーベル「人の事を気遣ってくれないと思ったら、今度は過保護になって…。」

チャム「不器用なのよ、シヨウは！」

マーベル「でも、誠実だわ」

シヨウ「そう言ってもらえると助かる、マーベル」

チャム「もう！またそうやってマーベルばかり！」

エイサツプ「本当にマーベルさん一筋ですね」

シヨウ「いや、マーベルもチャムも俺にとっては大切な人だ」

マーベル「ありがとう、シヨウ」

アンジユ「…いいね、あの二人…」

ユイ「アンジユ！やっぱり、興味があるんだね！」

アンジユ「シヨウとマーベルを見てるとそんな気持ちになったりするよ。（世の中にはハレンチな男だけじゃないって事ね…）」

シヨウ「勿論、エイサツプやエレボス、リユクス達… エクスクロスのみみんなも俺の

大切な仲間だ！」

リユクス「シヨウさん…」

エレボス「今更だね」

エイサツプ「何当たり前の事を言っているんですか！」

しんのすけ「オラ達だけ、仲間外れにしたら怒るゾ！」

アルト「そういう時はまた、エイサツプに頼んだら良いんじゃないか？」

海道「そりやいい、聖戦士には聖戦士ってやつだな！」

シヨウ「みんな…」

マーベル「帰りましょう、シヨウ。あなたに話したい事もあるし」

シヨウ「わかったよ、マーベル」

倉光「結果としてゴーレムを破壊した以上、今、教団と接触するのは避けた方がいいだろうね」

ヒユウガ「ここに長く居座るのもまずいな…」

ドニエル「各機は速やかにこのエリアから離脱だ。合流地点は追って知らせる」
俺達はこのエリアから離脱していった…。

？「なるほど…。導師が着目されるだけの事はある。彼等が我々の同志となってくれば、このアル・ワースにも平穏と安らぎが訪れるだろうな…」
この戦いを見ていた者がいるとも知らずに…。

シヨウ・ザマだ…。

俺達は艦に戻り、俺とマーベル、チャムはメガファウナの格納庫に集まった。

シヨウ「マーベル、話って…？」

マーベル「ずっと考えていたの。何故、アル・ワースに跳ばされた私の所にビルバインがあつたのかを」

チャム「そう言えば、おかしいよね！」

マーベル「それはね、チャム…シヨウが私を守ってくれようとしたからだと思うの」
チャム「そうか！ロンドンでの戦いと同じなのね！」

マーベル「あの時は、シヨウの思いはビルバインの形をしたバリアになった…。今回の場合はビルバインそのものが来てくれたのよ」

シヨウ「そうなのかな…」

マーベル「あなたは私の最期を看取れなかった事を悔いていたけど、気持ちはいつでも私の側にいてくれた。ビルバインは、その証よ」

シヨウ「マーベルが、そう思ってくれるなら、それでいい」

チャム「あれ…？ビルバインって、最後の戦いの前に色を塗り替えたのに戻ってるね」

シヨウ「夜間迷彩か…」

チャム「ねえ、シヨウ…。あつちの色がいいなら、ハツパに頼んで塗り替えてもらおう」

よ。性能は変わらないけどね」

シヨウ「ビルバインのカラーか……」

そうだな……。塗り替えてもらうか……。

シヨウ「そうだな……。あの時の気持ちを忘れないために塗り替えてもらう」

チャム「わかった！ あたし、頼んでくるね！」

そう言つて、チャムは飛び去つてしまった……。

シヨウ「あの時の気持ち……か……」

マーベル「悲しみ……。怒り……。愛……。後悔……。あの戦場には、色々な感情が渦巻いていた……」

シヨウ「あの戦いは、まだ終わつちやいない……。俺はマーベルと一緒にその終わりを見届けるよ」

マーベル「付き合うわ、シヨウ。今度は最後まで一緒に」

アル・ワースに跳ばされた時に聞いた声……。それが何なのかわからない……。だが、俺に託された何かがあるのなら、俺はそれを成し遂げる義務がある。俺に聖戦士の名を受ける資格があるのなら……。

エイサツプ「シヨウさん」

そこへ、エイサツプが来た。

エイサツプ「少し、いいですか？」

シヨウ「ああ、いいぞ」

マーベル「それなら、私は少し出るわね」

エイサツプ「すみません…」

マーベルは格納庫を出ていった…。

シヨウ「それで、どうしたんだ、エイサツプ？」

エイサツプ「シヨウさんは立派な聖戦士です」

シヨウ「…どうしたんだよ、急に…」

エイサツプ「実は俺…立派な聖戦士になるにはどうしたらいいのかって…」

シヨウ「…」

エイサツプ「シヨウさんを見て、聖戦士がどうなのか、わかりました」

シヨウ「エイサツプ…」

エイサツプ「俺はまだまだです…だから、もし…俺が道を間違えてしまった時

は…俺を止めてくれますか？」

シヨウ「当然だろ、エイサツプが俺にしてくれたように俺もお前を止めてやるよ」

エイサツプ「ありがとうございます、シヨウさん！」

俺とエイサツプはお互いに笑いあった…。

「マーベル・フローズンよ。

私はエイサップと入れ替わるように格納庫を出る。
すると、そこへホープスが飛んで来た……。

ホープス「マーベル様」

マーベル「あら、ホープス……。どうかしたの？」

ホープス「マーベル様にそこにお話があります」

私に話……？

マーベル「何かしら？」

ホープス「マーベル様がシヨウ様に向けている感情についてです」

マーベル「愛の事かしら？……ホープスは愛の事を知らないの？」

ホープス「知っています……ですが、わからない事があるんです」

マーベル「それは？」

ホープス「マスターが零様に異性としての好意を寄せている事はご存知ですよね？」

マーベル「ええ」

ホープス「それを知ってから、私は何故か、零様に冷たい態度を取ってしまったのです……。このような感情は初めてで戸惑っています。」

マーベル「それは嫉妬だわ」

ホープス「嫉妬……!? 私……!?」

マーベル「零にアマリを取られなくないと思っているのよ……あなたは」

ホープス「ですが、私とマスターはその様な関係では……!」

……成る程、これに気づくにはまだ時間がかかりそうね……

マーベル「それなら、アマリではなく、零に好きな子がいるなどの質問をしてみたらどう? もちろん、冷たい態度はダメよ」

ホープス「わかりました。試してみます……。ありがとうございました。それでは……
そう言い残し、ホープスは飛び去って行ってしまった……

ふう……。どうして、こう男の人って言うのは鈍い人ばかりなのでしょうね……

それから、私はシヨウとエイサップが出てくるまで格納庫の入り口の前で待った……

第19話
リターン・ヒーロー

―新垣 零だ。

俺はホープスに呼び出され、ホープスの所へ行くと、こいつは自身の空間を作り出した。

よつて、今はこいつと二人だ。

零「こんな空間まで作り出して、何の用だ？」

ホープス「零様、あなたにお聞きしたい事があります」

聞きたい事……？

ホープス「零様は過去にお付き合いいなされた女性はいますか？」

零「いや、いねえよ。女友達は沢山いたが、みんな友達っていう感情しか持っていないかったからな」

ホープス「では、エクスクロスの方々はどうですか？皆、素敵な女性ばかりですよ？」

零「……みんなもどちらかと言うと仲間って感情だから……。恋愛対象としては見
ていない」

ドアクダーを倒したら、みんな元の世界に戻るし……。

ホープス「今度は名指しで聞きます。マスターとメル様はどうです?」

零「随分、絞り込んできたな……。メルか……。あいつは守ってやりたい存在かな……?」

ホープス「ほう……。というと?」

零「あいつ、元はオニキスのメンバーだっただろ?でも、あいつはオニキスを裏切り、俺達の仲間になった……。時々だが、見るんだよ……。あいつが俺達の為により効率の良
い戦術を考えてくれてる事を……」

ホープス「それは私もご存知です」

零「だから、あいつは無理しぎてるんだよ……。誰かがあいつを守って……。支えてやらないといけない……。そんな気がするんだよな……」

ホープス「では、マスターはどうですか?」

……
アマリ……。アマリか……。

零「……。アマリは……。あいつと一緒にいると楽しいんだ……。歳が近いってのもあるんだと思うけど……。俺が暴走した時、俺は弘樹とアマリに助けられた……。今度は俺がアマリを助けたい。ずっと、一緒にいたいんだ」

ホープス「……。それは……。マスターに異性としての好意を持っているという事ですか

「？」

異性としての好意……？俺が、アマリに……？

零「ま……待て待て待て！ちよつと待て……俺は別に……！」

ホープス「まあ……あなたが思っていないならそれでいいのですが……」

……俺はアマリの事が好き……なのか……？

ホープス「最近の私は少々、マスターに対して、過保護となつてきているのです」

零「それは見たらわかる」

ホープス「ですので、マスターを悲しませるような事があれば……容赦はしません」

零「……悲しませるかよ……誰一人、もう悲しませない……！アマリもメルも……エ

クスクロスもみんな俺が守る……！」

ホープス「……それがあなたの意志ですか……。その言葉、忘れないでください」

零「……ああ……つてか、どうしてこんな事聞いたんだ？」

ホープス「私の知的好奇心を刺激したからですよ。ただ、それだけです」

……どうなんだろうな……俺は……。

それに……何だ……？表情はわからないけど、誰かの顔が俺の頭に浮かび上がってくる……。

ホープスの作り出した空間から出た俺は、ブレマイオスの食堂へ向かった。

アキト「零……お昼か？」

零「アキトじゃねえか。ああ、腹が減ったしな。アキトもか？」

アキト「食べ物に味がしなくても、腹は減るからね」

零「……味がしない……か……」

そうだったな……味がしないって事はどれだけ美味しい料理でも美味しく食べられないって事なんだよな……。

アキト「悲しい顔しないでくれよ。例え、味覚がなくなっても、俺は俺なんだから」
零「……ああ」

それから俺とアキトは食堂へ向かうと、調理室にアマリとノレド、ライヤ、シモンさん、サラとティア、簪がいた。

アマリ「あ……零君！」

サラ「アキトも一緒って珍しいね」

零「そんなに集まって何やってんだ？」

ティア「ノレドちゃんがラーメンを作ろうとしてるんだ！」

零「ラーメン？」

シモン「普通にうまいぜ、このラーメン」

ノレド「そ、そうですか……？ありがとうございます！」

アキト「俺も頂こうかな」

え……？

アマリ「アキトさん……」

零「俺の分も頼む、ノレド」

ノレド「はい、どうぞ！」

ノレドは俺の分とアキトの分のラーメンが入った器を差し出した。

俺とアキトはラーメンの器を受け取り、ラーメンを食べる。

スープまで飲み干した俺達はノレドを見る。

零「お世辞抜きで美味かったぜ！」

アキト「ああ。本当に美味しかったよ、ご馳走様」

美味しかったって、アキト、お前……。

ノレド「お粗末様でした！」

アキト「ノレドちゃんなら、ラーメン屋を開けるんじゃないか？」

零「ラーメン屋ノレド……なんてどうだ？」

ノレド「そ、そうですか？ そう言われてると照れるね……」
ライヤ「てれる、てれる！」

照れるノレドを見て、微笑んだアキトは食堂を出て行った。

アキト……！

食堂から出るアキトの表情が少し悲しみのこもっているのを見て、俺はアキトを追いかけた……。

簪「……」

そんな俺達を無言で簪が見つめていたのは気づかなかった……。

アキトを追いかけて、俺は外に出た。

すると、丘の上にアキトが立っていた。

アキト「零……追ってきたのか……」

零「すまない……居ても立っても居られなかったからな……」

アキト「……俺の表情に気づくとはね」

零「……何で辛いのを背負い込むだよ……辛いなら辛いって言えよ！」

アキト「それを言ったところで、君達に何かできるのかい？」

零「…！そ、それは…」

アキト「零… ドアクターを倒して、元の世界に戻れたとしても… 俺は、アル・ワースに残るよ」

アル・ワースに残るだって…
!!?

零「それ本気で言ってるのか?!? アキトの世界にもアキトを待っていてくれる人が居るんじゃないのかよ?!?」

アキト「居るさ… 仲間や、友… 愛する妻も…」

零「妻… !!? お前、妻がいたのか…」

アキト「俺にだって妻ぐらいいるさ…」

零「だったら…！」

アキト「でも、俺はもう、戻れない… いや、戻ったらダメなんだ…」

何だよ…！

アキト「俺は妻を捕らえた男に復讐を誓い、復讐鬼となった…。妻を取り戻したけど、俺が失った物は大きかったんだ…」

零「…」

アキト「俺はかつて、あるヒーローに憧れていた…。そのヒーローの様になりたいって思っていたんだ…」

零「ヒーロー……か」

アキト「でも、今の俺はそのヒーローとは正反対の姿となつたんだ……。悪を倒すなら手段を選ばない……。ダークヒーローへと……」

ダークヒーロー……闇に堕ちたヒーローの事か……

アキト「ヒーローを夢見たテンカワ・アキトはもういない……。今、ここにいるのは復讐の鬼に取り込まれたテンカワ・アキトなんだ……」

簪「そんな事ない！」

アキト「！」

零「か、簪……!?？」

な、何で簪が……!?？」

アキト「簪ちゃん……。どうして……?」

簪「あ、あの……。アキトさんは私達のヒーローです……。！元の世界に戻る気はなくても、ドアクダー退治を手伝ってくれてるんですよね……。?そんな、人が……。ダークヒーローなわけじゃないですよ！」

零「簪……」

簪「私の知るヒーローは……。弱き人や大切な人を守る為に戦う人の事です……。アキトさんは私から見れば、真正正銘のヒーローですよ！」

アキト「俺が……ヒーロー……？」

零「アキト……俺は過去のお前を知らない……でも、今の……テンカワ・アキトが復讐鬼だったら……元のヒーローに憧れたテンカワ・アキトに戻ればいいんじゃないのか？」

アキト「そんな簡単には……！」

零「いかないだろうな……でも……例えば、元の世界の人達がいなくとも、俺や簪……エクスクロスのみんながいる……」

簪「私達が手を貸します……。ヒーローのアキトさんに戻るために……」

アキト「零……簪ちゃん……」

零「だから……辛いなら辛いつて言えよ！少なくとも、エクスクロスにお前の事を突き放す奴はいないと思うぜ」

簪「ヒーローアニメ好き同士……力になります」

アキト「2人共……ありがとう」

北辰「本当にこの男が元に戻れると思うのか？」

……
!!? な……声……!!?

俺達は振り返ると三度笠を被った男が立っていた。

簪「え……だ、誰……!!?」

アキト「お前は……！」

北辰「久しいな、テンカワ・アキト」

アキト「北辰……！お前までこのアル・ワースで生き返っていたのか……！」

北辰「左様、我はある目的の為に黄泉の国から舞い戻って来たのだ」

零「お前……何者だよ？」

北辰「我が名は北辰……テンカワ・アキトの因縁の相手と申しておこう」

因縁の相手……って事はこいつが……！

零「お前が……アキトを復讐鬼にした男なのか……！」

北辰「左様、鋭い男であるな、小僧」

アキト「目的は俺か？」

北辰「……汝も知っているだろう？復讐の果てに何が待っているのかを」

それって、まさか……！

アキト「俺に復讐をする気か……！」

北辰「それが我が黄泉から戻った理由だ」

零「復讐に復讐を重ねても、何も無いだろ！」

北辰「黙れ、小僧。貴様に何がわかる」

簪「……この人……怖い……」

北辰「機体に乗れ、我との戦を始めるぞ」

アキト「……いいだろう、もう一度お前を闇に葬ってやる」

北辰「その前にその小童2人は消す」

アキト「この子達は関係ないだろ！」

北辰「ならば、早く来るのだな」

北辰という男はそれだけ言うと、走って行った……。

零「アキト、簪を連れて、みんなの元へ戻ってくれ」

アキト「お、お前はどうするんだ……？」

零「向かって来るなら迎え撃つ！」

簪「それなら、私も戦います……！」

アキト「簪ちゃんまで……！」

簪「戦わせてください、零さん」

零「……わかった。だけど、無理はするなよ」

簪「はい！」

アキト「……すぐに来るから、なんとか堪えて……！」

アキトはみんなの所を目指して走り出した……。

第19話 リターン・ヒーロー

アキトが走り去ったと同時にロボット軍団が現れ、その中に赤い機体が現れる。

零「来たか：：！」

北辰「逃げずに迎え撃とうとした勇氣：：褒めよう」

あの赤い機体に乗ってるのは北辰って男か：：！

簪「行きましょう、零さん」

零「ああ！援護頼むぜ、簪！ゼフィールス！」

簪「打鉄式式！」

俺はゼフィールスを呼んで、乗り、簪は打鉄式式を纏った。

北辰「それが汝らの機体か：：我が夜天光にどこまで追いついてこられるのか：：試してやろう」

零「お前を倒すのは俺達じゃない！」

簪「アキトさん：：ヒーローが来るまで持ち堪える：：それが私達の役目！」

北辰「いいであろう、かかって来るがいい」

俺と簪は北辰の乗る夜天光率いる部隊との戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「数が多くても俺達は屈しない！アキトが来るまで、持ちこたえてみせる！」

〈戦闘会話 簪VS初戦闘〉

簪「正直怖い……でも、ヒーローは必ず来るから……一夏のように……だから、それを信じて私も戦う……！」

バツタの様なロボットを撃墜していく俺達……。

北辰「ほう……臆せずはこの戦力に挑むとは……見所のある小童共だ……」
零「……」

あの男……何故、攻めてこない……？何を企んでいるんだ……？
っ!!??この感覚は……！

零「簪、気をつけろ！オニキスが来る！」

俺がそう叫ぶとガラム部隊を引き連れたダークネス・ヴァリアスとジェイルが現れる。

カノン「シャイニング・ゼフィルスを確認しました、氷室さん！」

弘樹「わかった。よお、零！」

零「ペリドットはどこ行っただよ？」

弘樹「あいつは謹慎中だよ、バカやらかしすぎたらしい…さまあねえぜ」

カノン「北辰さん… 私達の目的は新垣 零さんの捕獲です！」

北辰「承知している… だから、痛めつけてから捕らえようとしていたのだ」

簪「お互いの事を知っているの…!!？」

零「あの北辰って男… オニキスに雇われたのか…!!」

ちっ… 北辰の部隊にオニキスカ… そろそろ限界になって来た…!

弘樹「さてと… 始めるか、零!!？」

零「バカがバカっぽく吠えるな、バカ… そんな大声出さなくともお前を返り討ちに
してやるよ！」

弘樹「言ってる！今回こそ後悔させてやるよ！」

零「その言葉、そっくりお前に返すぜ、弘樹！」

俺達は戦闘を再開した……。

戦闘から数分……俺と簪は何とか戦うが、数の多さに圧倒されていた……。

簪「……はあ……はあ……」

まずいな……簪が疲れ始めてる……。

弘樹「よそ見してる場合かよ！」

零「ぐっ……!!?」

ヴァリアスの攻撃をクロスソードで防ぐ俺……。

攻撃を防ぎながら、再び、簪に視線を移すと、マジンという機体数機が簪に攻撃を仕掛けていた。

バツタに気を取られすぎた、簪は気づくのに遅れてしまう。

簪「！」

零「簪!!?」

俺は簪を助けようと動き出したが、間に合わない……！

一夏「零落白夜——!!?」

アキト「デイスティーションフィールド展開……！」
すると、そこへ白式を纏った一夏とブラックサレナが現れ、簪に攻撃を仕掛けた口ポットを撃墜した。

簪「い、一夏……？」

一夏「大丈夫か、簪！零！」

アキト「遅くなつてごめん、2人共！」

零「いや、ちよūdの時間だけ、ヒーロー！」

北辰「来たか……テンカワ・アキト」

アキト「北辰……2人を傷つけた分の借りを返してやる……！」

北辰「良いだろう……今日が汝の最後だ」

一夏「勝手に終わらせようとするな！」

簪「ヒーローに最後はない……！」

零「そういう事だ！お前を倒して、ハッピーエンドだ！」

カノン「変に盛り上がってます……」

弘樹「なんだつていい！なら、俺はお前に勝つて、ハッピーエンドにしてやるぜ！」

零「それは一生来ねえよ、弘樹！」

アキト「北辰……此処で決着をつけてやる……！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話　アキトVS初戦闘〉

アキト「ヒーロー…か…。復讐鬼となつてから、そんな事、考えた事もなかったな…戻れるかわからないけど、やれるだけの事はやる…！」

〈戦闘会話　一夏VS初戦闘〉

一夏「簪達が持ち堪えた分、俺達も答えないとな！みんなももうすぐ来る！だから、俺達も持ち堪えてやる！」

戦闘から数分…。

北辰「流石はテンカワ・アキトだ…」

アキト「雑魚に構っている時間はない…」

北辰「ならば、我等だけの決着を…」

アキト「つける…！」

ブラックサレナと夜天光は移動した……。

そして、殴り合いを始める。

しかし、次第にブラックサレナが押され始めた。

一夏「アキトさん！」

アキト「ぐっ……！」

北辰「……この程度なのか？」

さらに夜天光はブラックサレナを殴り飛ばした。

このままじゃ、ブラックサレナが……！

アキト「まだ……だ……！」

なんとか立ち上がるブラックサレナ……。

北辰「面白い……我からの餞別だ」

すると、夜天光の最後に複数のバツタが現れる。

簪「伏兵……!?？」

アキト「貴様……！」

北辰「この攻撃に耐えられる事ができるか？」

すると、バツタ軍団はブラックサレナを集中攻撃をする。

アキト「くっ……！」

零「アキト!!?」

弘樹「さつきから気を取られすぎじゃねえか!!?」

零「しまつ・・・グアツ!!?」

アキトに気を取られすぎて、ヴァリアスの攻撃を受けてしまう。

一夏「零!」

アキト「・・・やはり、此処までか・・・」

北辰「そうだ、これが貴様の限界なのだ」

アキト「俺は・・・変わる事はできなかったのか・・・ごめん、ユリカ・・・」

零「諦めてんじやねえええええつ!!?」

アキト「・・・!零・・・!」

零「何諦めようとしてんだよ、アキト!お前の決意はそれ程の物だったのかよ!!?」

単に壊れる物だったのかよ!!?」

俺はゼフィルスを立てたせ、迫り来るガルド数機をクロスソードで斬り裂く。

零「北辰!お前がどんな言葉でアキトを闇に引きずり込もうとしようが、無駄だ!ア

キトは正義のヒーローだ!それは変わらない!」

北辰「こやつを消せばその様な事は関係なくなる」

零「だから、アキトは簡単に消えない!俺達がそんな事、させるわけないだろ!」

北辰「やはり甘いな、小僧……。人の生というのは脆いものだ」

零「知ってんだよ、そんな事！でも、その脆い命で……。たった一つの命で人間、生きてんだよ！それを簡単に消す権利はお前にはない！」

一夏「そうですねよ、アキトさん！アキトさんが消えそうになるなら、俺達が手を伸ばします！」

アキト「零……。一夏……。そうだ、俺は……」

ブラックサレナは立ち上がった。

アキト「最後の最後まで精一杯、戦う……。！それが、ヒーローだ！」

？「それでこそ、アキトさんです」

すると、白い戦艦が現れた。

シグナスじゃない……。？あの戦艦は……。？

北辰「あれは……！」

アキト「ナデシコC……。!?？」

ルリ「ハーリー君、グラビティ・ブラスト、スタンバイ」

ハーリー「了解！グラビティ・ブラスト、発射しまーす！」

ナデシコCと呼ばれる戦艦からビームが放たれ、ブラックサレナを攻撃していたバツタ軍団を全て撃墜した。

簪「す、凄い……！」

アキト「ルリちゃん……！」

ルリ「エステバリス部隊も出撃してください」

すると、ナデシココから色とりどりの機体が4機出てきた。

リョーコ「コラア、アキト！お前、何死のうとしてんだ？？」

サブロウタ「別に死のうとはしてなさそうだったけどな……」

ヒカル「でも、相変わらず、君は無茶するね！」

イズミ「無臭のお茶で無茶……フフツツ……」

こ、この人達はアキトの仲間なのか……？

アキト「リョーコちゃん、ヒカルちゃん、イズミちゃん、サブロウタまで……」

？「俺もいるぜ！アキト！」

すると、もう1機、ナデシココから出てきた。

アキト「もう1機のスーパーエステバリス……？？一体誰が……？？」

ガイ「おいおい！このガイ様の事を忘れちゃったのかよ！」

アキト「が……ガイ……？？本当にガイなのか……？？」

ガイ「バツカヤロウ！そう、このダイゴウジ・ガイが何人もいてたまるかってんだ！」

アキト「……ふっ、そうだったな」

ガイ「お前に何があつたのはみんなから聞いたぜ。取り敢えず、お前に会いたいって人がいるから聞け」

アキト「え……？」

ユリカ「アキトー!!？」

アキト「……ユリ、カ……？ユリカ……？」

ユリカ「そうだよ！アキトの可愛い奥さん、ユリカだよ！」

アキト「ユリカアアアアつ!!？」

あの人が……アキトの奥さんなのか……。

ユリカ「とにかく……アキトのバカー!!？」

アキト「……！」

ユリカ「何勝手に私に黙って、何処かへ行っているのよ！行つてきますのキスもなしに！」

簪「き、キス……!!？」

アキト「それは……」

ユリカ「ルリちゃん達から聞いたよ、アキトはどれだけ変わっても、私の大好きな旦那様……テンカワ・アキトなんだよ！」

アキト「ユリカ……」

ユリカ「だから… 帰ってきてよ… 私達の所へ！」

アキト「… ふっ… お前には敵わないな」

ユリカ「アキト！」

アキト「わかつたよ、ユリカ。俺はもうお前から離れない… でも、お前も俺の元からは離れさせないから覚悟しておけよ」

ユリカ「勿論！」

ルリ「ごちそうさまです」

零「… 良かったな、アキト…」

北辰「愚かなり、テンカワ・アキト。ならば、もう一度、ミスマル・ユリカを捕らえればいい事」

ガイ「2人の邪魔すんじゃねえよ！」

アキト「ガイ…！」

ガイ「合わせろ、アキト！」

アキト「ああ！」

ブラツクサレナとガイという人のスーパーエステバリスは夜天光に近づいた…。

ガイ「よっしゃあ！ダブルゲキガンフレアをやるぜ！アキト！」

アキト「俺の歳を考えてくれ、ガイ」

ガイ「ちえっ、なら俺だけでも！」

アキト「行くぞ……！」

ブラックサレナとスーパーエステバリスは連携攻撃を与えて行く……。

そして、最後に2機ともデイストーションフィールドを展開する。

ガイ「決めてやる！ダブルゲキガン！」

アキト「フレア！」

2機のデイストーションフィールドの突進が夜天光に決まり、夜天光はダメージを負った。

北辰「ぐっ……ば、バカな……！」

ガイ「文句言いながらもお前も叫んでたじゃないかよ！」

アキト「ついな」

ヒカル「うんうん。いい連携だね！」

イズミ「流石だね」

リョーコ「何言つてんだ、あたしらも負けてられねえぞ！」

サブロウタ「リョーコちゃんのそういう所、可愛いよ」

リョーコ「う、うるせえ！とつととやるぞ！」

一夏「みんなも来たみたいだぜ！」

メガファウナ、シグナス、プトレマイオスも現れ、そこからみんなが出撃してきた。アマリ「大丈夫ですか、皆さん！」

零「この通り、無事だぜ！」

千冬「一夏、あの色とりどりの機体の部隊と戦艦はなんだ？」

一夏「アキトさんの仲間の人達だよ、千冬姉！」

シヨウ「という事は味方だな」

テイエリア「オニキスもいるとなると、あのブラックサレナと戦っている赤い機体は敵と見ていいな？」

簪「はい！」

メル「氷室さん：：カノン・サファイア」

カノン「メルさん：：！」

弘樹「本当にオニキスを裏切っていたとは驚きだぜ、カーネリアン」

メル「私を連れ戻すんですか？」

カノン「勘違いしないでください。私達の目的は新垣 零さんの捕獲です！」

弘樹「てめえの事は知らねえよ、勝手に生きろ」

メル「お2人共：：」

弘樹「だが、邪魔をするなら容赦しねえから覚悟しやがれ！」

メル「承知しました……。私も零さんの為に戦います！」

弘樹「（おいおい……。あいつも零に惚れたのかよ……。全く、隅に置けないな、あいつも……）」

青葉「取り敢えず、あの戦艦とかは仲間で良いんだよな？」

デイオ「それでいいと思うが……」

ケロロ「アキト殿の仲間であるなら、信じてみるであります！」

アンジュ「そうね。今はオニキスを倒すわよ！」

刹那「了解」

零「アキト、行こうぜ！此処から反撃だ！」

アキト「ああ、俺はもう立ち止まらない……。生きてユリカ達と共に帰る！」

エクスクロスの増援もあり、俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　ルリVS初戦闘〉

ユリカ「ルリちゃん！敵が来るよ！」

ルリ「では、ナデシコCに挑んできた事を後悔させましょう」

ハーリー「了解！いつでもいいですよ、艦長！」
ルリ「では、攻撃を開始してください」

〈戦闘会話 リョーコVS初戦闘〉

リョーコ「さてと、ついて来いよ、ヒカル、イズミ！」

ヒカル「うん！3人いれば怖いものなしだね！」

イズミ「やってやるよ〜！」

リョーコ「あたしらの連携・・・よく目に焼き付けておきやがれ！」

〈戦闘会話 サブロウタVS初戦闘〉

サブロウタ「こんな形でこの世界での初陣になるとはな・・・。生きていたら色んな事が起こるものなんだな！」

〈戦闘会話 ガイVS初戦闘〉

ガイ「来るなら、来やがれ、悪党共！俺の必殺技で相手をしてやるよ！」

〈戦闘会話 零VSカノン〉

カノン「新垣 零！覚悟してください！」

零「お前いつつも弘樹と一緒にいるな。もしかして、惚れたか？」

カノン「な：：。なあつ！？ち、違います！私はあの人の監視役なのですから、一緒にいるのは当然の事です！」

零「取り乱しすぎだろ：：。」

カノン「あ、あなたのせいです！もう許しません！」

〈戦闘会話　メルVSカノン〉

メル「ジエイルに慣れてきた様ですね、カノン・サファイア」

カノン「はい！これでもう、遅れは取りませんよ！」

メル「では、私の戦術と勝負です！」

カノン「望むところです、メルさん！」

〈戦闘会話　簪VSカノン〉

カノン「あなたには聞きたい事があります」

簪「何：：？」

カノン「ヒーローとは：：。本当に格好いいものなのですか？」

簪「格好いいよ…誰かを守ってくれる理想の人だもん！」

カノン「…よ、よくわかりませんが、少し興味が湧きました！」

簪「良かった、ヒーロー好きが増えて…」

カノン「でも、今はあなたを倒します！」

簪「私だって、負けない…！」

簪は山嵐でジェイルにダメージを与えた。

カノン「きやあつ！」

弘樹「サファイア！」

カノン「くつ…流石はエクスクロスと言ったところです…！氷室さん、後はお任せします！」

そう言い残し、ジェイルは撤退した。

ベルリ「監視役とか言ってるながら、監視対象を残して、撤退するんだ…」

アル「あの者…監視というよりどうも…」

シャルロット「きつとそうだね」

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

弘樹「いい加減あの言葉は覚えてたぜ」

零「あの言葉……？」

弘樹「飛んで金に入る春の豚ってやつだよ！」

零「……うん、お前はもう喋るな、バカが感染る」

弘樹「誰がバカだよ!? っつか、いい加減バカっていうのやめろ！」

零「なら、バカになるなよ」

弘樹「うっせえ！好きでバカやってんじやねえよ！」

零「あーもうわかった……とつと来い、ボケ」

弘樹「おう!……つて、さつきよりも酷くねえか!?？」

零「ちっ、バレたか」

〈戦闘会話 アキトVS弘樹〉

弘樹「漆黒のヒーローっつか、格好いいじやねえか！」

アキト「そう思っているところ悪いけど、いつからこの黒もなくすつもりだからね」

弘樹「決めんのはあんただろ？好きにしるよ。でも、簡単にハッピーエンドになると

思うなよ！」

アキト「それには心配ないよ。ハッピーエンドは自分の手で勝ち取ってみせる！」

〈戦闘会話　メルVS弘樹〉

弘樹「行くぜ、カーネリアン！お前の戦術を叩き潰す！」

メル「やれるものなら、やってみてください。ですが、私だって、そう簡単に潰されるつもりはないです！」

メル「バスタービット……一斉発射！」

メサイアのバスタービットがヴァリアスを捉えた。

弘樹「ぐっ……!?やるじゃねえか……！カーネリアン！」

零「後は俺に任せろ、メル！」

メサイアの援護に入り、俺はバスタードモードを発動させ、ヴァリアスに大ダメージを与えた。

弘樹「ちいっ……お前会うたびに強くなってるじゃねえかよ！」

零「そりゃ、成長はするもんだからな」

弘樹「俺も強くならなとダメって事か……！」

零「弘樹……」

弘樹「覚えていろ、零！今度はお前を驚かせる力を見せてやるからな！」

そう言い残し、ヴァリアスは撤退した……。

零「弘樹……そろそろ、言えよ……。お前がオニキスに所属している理由……！」

アマリ「零君……」

シバラク「零よ。前を向け！まだ戦は終わっておらぬぞ」

零「わかってます、シバラク先生！」

弘樹……お前がどんな目的で俺を捕らえようとしているのか知らねえ……。お前がど

れだけ強くなるうが、俺は負けるわけにはいかない……！！

〈戦闘会話 アキトVS北辰〉

北辰「テンカワ・アキト……我を憎め、そして汝の中の復讐の鬼を覚醒させろ」

アキト「……残念だが、俺はもう復讐鬼になるつもりはない」

北辰「何だと……？」

アキト「俺は既にユリカを救い出し、お前を倒した……。俺の復讐はもう終わったん

だ……だから、今のお前は邪魔な悪党なだけだ」

北辰「……ふざけるな……」

アキト「俺の前から消えろ、北辰……。お前に構っている時間はない」

北辰「貴様アアアツ!!？」

アキト「だが、お前という存在を生み出したのは俺だ……。そのケジメは着ける!」

〈戦闘会話　ルリVS北辰〉

北辰「電子の妖精の敗北する日が来たのだ」

ルリ「あなたの事は生理的に受け付けないのでご了承ください」

ユリカ「うわっ!ルリちゃん、腹黒い!」

ルリ「大好きな人2人の人生をめちゃくちゃにした人なんです。このぐらいの扱いで充分です。ハーリー君、容赦無くぶっ放しちやってください」

ハーリー「わかりましたよ、艦長!」

〈戦闘会話　ガイVS北辰〉

北辰「私もゲキガンガーは好きなのでな」

ガイ「そうなのか!お前とは違う場所で会えたら、仲良くできたのに残念だぜ!」

北辰「どうだ？我と共に修羅の道へ歩まないか？」

ガイ「アキト達の運命を弄んだお前を俺は許さねえ！お前と一緒に行動なんて、真つ平ごめんだぜ!!？」

〈戦闘会話 零VS北辰〉

零「アキトの邪魔をするつもりはないけど、お前だけは許さねえ！」

北辰「フン、奇妙な気を纏った瞳だ……」

零「バスタードモードの事を言ってるのか……？」

北辰「良いであろう、小僧。汝の力を見せてもらおう」

〈戦闘会話 一夏VS北辰〉

一夏「こ……こいつ、強い……！」

北辰「ISという力……汝では宝の持ち腐れだ」

一夏「お前にそんな事言われたくないんだよ！アキトさん達を悲しませた事を後悔させてやる！」

〈戦闘会話 簪VS北辰〉

北辰「ヒーロー好きならばわかるであろう…。ヒーローは必ず、ハッピーエンドで終わらないという事を」

簪「確かに最終回で敵と一緒に死んじゃうヒーローもいる…。でも、アキトさんにそんなヒーローになって欲しくないから…。だから、私達が支える…。！ヒーローが死なないように！」

北辰「何と愚かな…。では、貴様が死ぬがいい」

簪「私は死なない！お姉ちゃん達を取り戻して…。一夏に想いを伝えるまで…。！」

俺達は夜天光を追い詰める。

アキト「闇へ叩き落としてやる…。！デイストーションフィールド展開…。！」

ブラックサレナはハンドカノンを連射させながら、デイストーションフィールドを展開させて、夜天光に突進した。

アキト「まだだ、アーマーページ！」

ブラックサレナの装甲がページされると装甲から現れたのはピンク色のエステバリスだった。

エステバリスは右腕を突き出し、デイストーションアタックを決めた…。。

北辰「……み、見事なり……！テンカワ・アキト……」

アキト「闇に消えろ、北辰」

北辰「……我はまた蘇り、貴様の前に現れる……復讐を果たすまでは……」

アキト「蘇ったら……また俺が消すだけだ」

北辰「その時を待っている……」

その言葉を最後に夜天光は爆発した……。

フェルト「周囲に敵機はいません」

アルト「終わったか……」

アキト「……」

ルリ「帰って来てくれますよね？アキトさん」

アキト「……うん」

ユリカ「おかえり、アキト！」

アキト「こっちの台詞だよ、ユリカ……おかえり」

俺達は戦闘を終え、それぞれの艦へ帰還した……。

――織斑 一夏だ。

サブロウタ「成る程、異世界の人物が集まった部隊… エクスクロスか」

ロツクオン「そういう事だ、だからお前らの敵じゃないぜ」

リョーコ「それはわかつてるぜ、あたしらもお前らと一緒に戦う事になったからな！」

ひまわり「たや？」

しんのすけ「そうなの？」

イズミ「嘘じゃないよ… これは艦長の決定事項だからね」

ヒカル「だから、よろしくね！」

カンタム「頼もしい仲間が入ったね」

リョーコ「褒めても何も出ねえぞ？あたしはスバル・リョーコだ」

ヒカル「アマノ・ヒカルだよ！漫画家なんだ！」

イズミ「バーの店長をしているマキ・イズミだよ… よろしくね、ちなみに好きな食

べ物はチョコバーだよ。ふふ… ふふふつ」

サブロウタ「タカスギ・サブロウタだ。かわい子ちゃんは特によろしく！」

ヴィラル「そちらの男の名は何だ？」

ガイ「聞いて驚け！ゲキガンガーの大ファン！ダイゴウジ・ガイだ！よろしくな！」

アーニー「は、はあ…」

ガイ「何だ何だ！テンションが低いな！そういう時はゲキガンガーを見ろ！」

リョーコ「異世界の奴らにも広めるなよ……」

ベルリ「今度、貸してもらえませんか？」

青葉「興味があるんです！」

一夏「俺も！」

アイーダ「男の人というのは……」

ヒカル「此処にもゲキガンガーの感染者が多発しそうだね」

サブロウタ「逆に何で、ゲキガンガーの良さがわかんないのかな？」

イズミ「趣味の問題だね」

ガイ「さつきも簪って子に進めたら目を輝かせてたぜ！」

シャルロット「さ、流石は簪……」

しんのすけ「なら、ガイお兄ちゃん！オラもアクション仮面を進めるゾ！」

ガイ「おう、しんのすけ！ありがとな！」

アニュー「兎に角、悪い人じゃなくて良かったわ」

真耶「そう言えば、その更織さんは何処へ……？」

サヤ「先程、零さんと一緒に何処かへ行ってきましたよ」

一夏「零と？仲がいいんだな！あの2人！……って、痛って!!？」

ソーマ「すまない、足が滑ってしまった」

何で、マリーさんが俺の足を踏むんだよ!!?

千冬「……はあ…… お前も苦勞するな、デユノア」

シャルロット「全くです」

ワタル「これからよろしくね！ナデシコのみんな！」

ーテンカワ・アキトだ。

今俺は俺の部屋でユリカと2人で話していた。

ユリカ「良かった……。変わったって言っていたからハゲちやったのかと思った」

アキト「そんな訳ないだろう……」

ユリカ「それもそうだね！それにしても…… 久しぶりに会いすぎて何を話したらいいのかわからなくなってきたよ……」

アキト「大丈夫、時間はたくさんあるんだ。俺は側にいるよ…… ユリカ」

ユリカ「うん、わかってるよ、アキト」

そのまま俺はユリカとキスをした……。

―新垣 零だ。

俺と簪はユリカさんに会うためにアキトの部屋に訪れたが、2人のキスを見て、入らずに簪と共に微笑んだ。

簪「アキトさんとユリカさん…嬉しそうですね」

零「アキトも吹っ切れたみたいだし…うまくいったようだな」

良かったな、アキト…。

ルリ「覗き見とは趣味が悪いですね」

すると、女の子と男の子が歩いて来た。

簪「あの…あなた達は…？」

ルリ「ナデシコ艦長のホシノ・ルリです。皆さんからは電子の妖精と呼ばれています」

ハリー「副長補佐のマキバ・ハリです！ハリーと呼んでください！」

簪「え!??あなたが艦長…!??」

ルリ「そうですよね。艦長にしては若すぎますよね」

零「い、いやごめん！ちよつと驚いて…」

ルリ「いいんです。いつもの事ですから」

零「それで……俺達に何か用か？」

ルリ「今日から私達、ナデシコ部隊もエクスクロスに参加する事となったので挨拶をと」

簪「そ、それはご丁寧に……」

ハーリー「話はそれだけじゃないですよ、艦長」

ルリ「そうでした。零さん、簪さん……ありがとうございます」

え……？

零「おいおい、礼を言われるような事した覚えはないぞ？」

ルリ「アキトさんの事です」

簪「アキトさんの……？」

ルリ「お2人のおかげで私達はまたアキトさんと出会う事が出来ました……。彼を連れ戻す事が出来たんです」

ああ……その事か。

零「それは違うぜ、ルリ。俺達は何もしてねえよ」

ルリ「え？でも、アキトさんにエールを送っていましたよね？」

簪「私達は後押しをしただけ……。ルリちゃん達の所へ戻ったのはアキトさん自身の意

思だよ」

ルリ「アキトさんの意思……」

零「だから、アキトがお前らの元に戻るのは決まっていたかもしれないな」

ルリ「そうか…… そうですね」

お？表情がないと思っただけ、笑うんだな。

アマリ「零君ー！」

すると、アマリとメルが来た。

メル「皆さんがナデシコクルーの皆さんとのパーティーをやるみたいですよ！」

アマリ「零君達も行きましょう！」

零「だとよ、簪、ルリ、ハーリー」

ハーリー「パーティー！楽しみですね！」

簪「うん！」

ルリ「行きましょう、零さん」

零「ああ！」

大切な者への想いか……。俺もアマリに対しての自分の感情を整理しないとダメだな……。それに、頭に浮かび上がる彼女の事も……。

ーアスナ・ペリドットよ。

私は数々の失態で首領様から自室での謹慎を言い渡されたので自室にいるの。

アスナ「…」

何が悪いの…？私のやっていたことは間違っていたの…？もう…わからない…。

？「浮かない顔をしているね、可愛い顔が台無しだよ？アスナちゃん」

アスナ「あ、あなたは…！ギルガ・カルセドニー…！」

突然のギルガ・カルセドニーの登場に私は驚くしかなかった…。

第20話 ナディアの家出

―渡部 クラマだ。

俺は今、ザン・コックとの通信を取っていた。

クラマ「……」

ザン・コック「その面構え……腹を括ったようだな」

クラマ「前回の任務失敗……言い訳はしません」

ザン・コック「所詮は異界人同士の戦いだ。あんなものはどうでもいい。俺としては、お前から甘さが消えた事の方が喜ばしい」

クラマ「それで……次の指令は？」

ザン・コック「次も異界人がらみだ。だが、今度はドアクダー様直々の命令だぞ」

クラマ「ドアクダー様が……？」

ザン・コック「ドアクダー様は連中に興味を持っておられるようだ」

どういう事だ……？異界人はドアクダーが呼び込んだんじゃないのか……？

ザン・コック「では、クラマ……お前には次の任務を与える」

ザン・コックから次の任務を聞き、俺は頷いた……。

「ナディアよ。」

あたしは生活班のみんなとメガファウナ内の掃除をしていた……。

ナディア「……」

マリー「ねえ、ナディア……。さぼっていたら、いつまで経っても掃除……終わらないよ」

ナディア「いつまでやるのかな……」

マリー「だから、あたし達が働かなきゃ終わらないんだって」

ナディア「掃除の話じゃなくて、この戦いよ……」

冬樹「そっちの方は、僕達が考えてもしようがないよ」

ラライヤ「しようがないの？」

ノレド「そっちはベルやアイーダさんに任せて、あたし達はあたし達のやるべき事をやるの」

夏美「掃除が終わったら、晩ご飯の支度よ。今日はビーフシチューだから、みんな、期待してるよ、きつと」

真耶「それにしても、夏美さんは偉いですね。戦闘にも参加しながら生活班の手伝いもするんですから」

夏美「そんな事ないですよ、山田先生。零さんや一夏さん、ユイさんも手伝ってくださいまし」

ヒミコ「そんな事より、ビーフシチュー！最高なのだ！」

ナディア「あたし：：肉は食べないから」

すると、アンジュさんとセシリーさん、エメラナ姫が来た。

アンジュ「食べないのは、あなたの勝手。でも、生活班が炊事をさぼるのは見過ごせないわね」

ナディア「：：」

セシリー「ナディア：：。あなたが、今の状況を受け入れる事が出来ないのは理解できるとは、：：」

エメラナ「ですが、人は生きていくためにやらなければならない事：：。義務というものがあるといふ事も理解してください」

ナディア「それは：：わかっていません。働かざる者、食うべからず：：。サーカスにいた時に、そうやって教えられましたから」

セシリー「いい言葉ね：：。それを知っているのなら、自分のやる事もわかるわね？」

ナディア「はい……」

マリ「セシリーさんって優しい！」

アンジュ「でも、ちよつと甘くない？ アイーダには、もつと厳しく監督しろつて言われたのに」

セシリー「実は……私の母もナディアのいう名前なの。だからかもね」

エメラナ「そうなんですわね！」

母……お母さん……。あたしは両親の事を何も知らない……。肉親との唯一のつながりは、このブルーウォーターだけ……。

アンジュ「ナディア……。ちよつと、その宝石……見せてくれる？」

エメラナ「わたしもお願いします」

ナディア「ブルーウォーターの事ですか？」

アンジュ「(似てる……。お母様から託された皇家の指輪に……。)」

エメラナ「(色は違いますが、エメラルド鉱石に似ていますね……。)」

ナディア「……。もういいですか？あまり他人に見せるものでもないのです」

アンジュ「そう言わずにもう少し見せてくれない？」

ナディア「戦う事でお金を稼いでいるような人にあまり触られたくありません」

アンジュ「……悪かったわね。そんな生き方しか出来ないようなノーマで」

ナディア「ここはアルゼナルって所じゃないんですから、それ以外の生き方を選べばいいじゃないですか？」

アンジュ「余計なお世話よ。私はそれなりに今の立場を気に入ってるから」

ナディア「やっぱり、戦うのが好きなんですわね……」

アンジュ「その何が悪いの？ 私達が戦わなきゃ、あなたも死んでたかも知れないのよ」

ナディア「それはそうですけど……」

アンジュ「だったら、私は戦いとは関係ありません……ってその顔、いい加減にしてもらえない？」

セシリー「やめなさい、アンジュ。それにナディアも」

エメラナ「そうですね。寄せ集めである私達は他人の価値観を認め合う事と必要です」

アンジュ「……わかったよ、セシリー、エメラナ」

ナディア「マリィ……あたし、パイロット待機室の掃除に行くから」

マリィ「待つてよ、ナディア！ あそこは格納庫が終わってからだよ！」

ナディア「あたし……1人でやるから」

そう言い残し、あたしは格納庫から去った……。

「アンジュよ。

ナディアは一人、パイロット待機室へ歩いて行った……。

ノレド「行っちゃった……」

冬樹「ナディア……」

アンジュ「やつぱり、あの甘やかされたお姫様には一度ガツンと言う必要があるわね」

夏美「でも……あまり、きついのも……」

すると、ジャンが来た。

ジャン「あの…… またナディアが原因のトラブルですか？」

エメラナ「今回はアンジュとお互い様という所ですね」

アンジュ「え…… 私も？」

セシリー「あなただっただけわかってるでしょ？あんな言い方をすれば、ナディアの気持ち逆天でするだけだっただけ」

アンジュ「でも、あのまま放っておくのも……。だいたいね、ジャン……！悪いというのなら、あの子を甘やかすあなたが一番悪いんじゃない?!？」

ジャン「え……！僕…… ナディアを甘やかしています？」

マリー「してる！」

ヒミコ「してる！」

ラライヤ「してる！」

冬樹「ごめん：．．僕もしてると思うよ」

アンジュ「これでも、甘やかしてないって言える？」

ジャン「は、はは：．．認めます：．．。でも、僕らやり方を変えるつもりはありません」
セシリー「でもね、ジャン：．．」

ジャン「確かにナディアはワガママ放題で皆さんに迷惑をかけていると思います。でも、誰かがナディアを受け止めてあげなきゃナディアは壊れてしまいます」

ノレド「それがジャンの役なの？」

ジャン「そのつもりです。ナディアは、パリからずっとシヨックの連続で現実をうまく受け止められていないんです。このアル・ワースに来る時もノーチラス号の皆さんとお別れしなければならなかったし：．．」

真耶「その様な辛い過去が：．．」

アンジュ「気持ちはわからなくはないけど、そういう過去つてのは、ここにいる人間誰もが持つてるものじゃない？それを受け入れられないのはあの子自身の弱さだと思っただけ」

ジャン「アンジュさんの言っている事はその通りだと思えます。でも、僕は信じています。ナディアがいつか変われるのを。だから、その日までナディアに対する不満は全部僕にぶつけてください！」

ノレド「……」

アンジュ「……」

夏美「……」

真耶「……」

ジャン「……あれ？僕……おかしいこと言いました？」

セシリー「みんな、呆れているんだと思うわ」

エメラナ「好きな人の為にここまでするのですから」

アンジュ「でも、あなた……すごいわ。尊敬すると言ってもいい。ここまで裏表なく

真つ直ぐに言われたら、協力するしかないじゃない」

ジャン「本当ですか、アンジュさん!!？」

アンジュ「ナディアの事は、あなたに任せる。他の誰が何と言おうとね……それでい

い、セシリー、エメラナ？」

エメラナ「私は構いませんよ」

セシリー「勿論よ。アイーダさんやみんなにもそう伝えておくわ」

ノレド「頑張りなさいよ、ジャンン！こうなったら、あたしも応援するから！」
ジャン「はい！ありがとうございます！」

ーナディアよ。

私はメガファウナのパイロット待機室で掃除をしようとしていた…。
すると、クラマが入って来る。

クラマ「よう、ナディア」

ナディア「出て行ってくれる？今、掃除中よ」

クラマ「そう怖い顔すんなよ。また誰かとモメたのか？」

ナディア「答えたくない」

クラマ「ま…そのツラを見てりや、だいたい事はわかるぜ」

ナディア「聞こえなかったの？掃除中なんだから、出て行ってよ」

クラマ「出て行って…か…。なあ、ナディア…。そんなに、ここに居るのがイヤ
だったら、出て行ってみちやどうだ？」

ナディア「え…」

クラマの提案で私はエクスクロスから去る事にした…。

ードクター、ウエストである！

我が輩とエルザはクラマとナディアの会話を聞いてしまったのである。

エルザ「ナディア：… 出て行くロボ？」

ウエスト「今の様子だとそうなのである。エルザ：…」

エルザ「わかったロボ！」

我が輩の言葉を聞いて、エルザはナディアの後を追いかけたのである。

：… あの渡部 クラマという男：… 何か胡散臭い：…。一体、何を企んでいるのか：…。

―新垣 零だ。

俺は今日もシミュレーションを終え、メガファウナの休憩室へ向かった。

休憩室に入ると机に顔を伏せて寝ているアマリの姿があった。

零「たくつ：… 風邪ひくぞ：…」

近くにあった掛け物をアマリに被せて、ふと俺はアマリの寝顔に目がいく。
：：： アマリの寝顔：：： 初めてみたな：：：。可愛い顔：：： してるな：：：。

って！何考えているんだ、俺は!!??: : : えーっと、ドリンク、ドリンク！

冷蔵庫からスポーツドリンクを一本取り、俺は休憩室から逃げる様に出た：：：。

メル「零さんがアマリさんに気があるのは本当みたいですね：：：。こ、これって：：：。うかうかしてられないのでは：：：。!!??: : :」

その光景をメルに見られていた事も気付かずに：：：。

第20話 ナディアの家出

「ナディアよ。」

私はメガファウナから降りて、歩いていった。

ナディア「：：：。」

クラマは、ここを真っ直ぐに進めば、この前の村に着くって言った……。そこに行けば、とりあえず戦いはない……。これからの事は、それなら考えればいい……。ごめんね、ジャン、マリィ、キング……。きつと話せば、止められると思うから何も言わずに出て来たけど……。

そう言えば……。何でクラマはあんなにも、あたしを急かしたんだろう……。考えるのは後でも出来る……。今は進もう……。

しばらく歩くと目の前に遺跡の様なものが見えた。

ナディア「何……。ここ……。？こんなものがあるなんて聞いてなかったけど、何かの遺跡……。？……。！」

すると、首にかけていたブルーウオーターが輝いた。

ナディア「ブルーウオーターが輝いている……」

クラマ「ザン・コックの指示通りナディアをここに誘導したが……。あの青い宝石……。いったい何なんだ……。？まあいい……。やる事はやったし、後はナディアをさらうだけだぜ」

しばらく、遺跡を見渡していると目の前に鳥型の魔神が現れた。

ナディア「あのトリ……。！見た事がある！」

クラマ「悪く思うなよ、ナディア……。！空神丸でお前をさらって、ザン・コックに届

ければ、任務終了だ。そうすりゃ俺達は……」

すると、今度は別方向からネオ・アトランティスのロボット軍団が現れた。

ナディア「ネオ・アトランティス!!?」

クラマ「(あいつ等……! 確かナディアを狙ってる連中だ! まずい……! 奴等にナディアを渡すわけにはいかねえ!)」

鳥型の魔神があたしを守る様に移動した……?

クラマ「(こっぴごうなつたら、やってやるぜ!)」

そして、鳥型の魔神はネオ・アトランティスのロボット軍団に攻撃を仕掛けた。

ナディア「あのトリ……あたしを助けてくれた……?」

すると、今度はあたしの背後からシャイニング・ゼフィルス、ゼルガード、メサイア、破壊ロボ、グラタンが現れた……。

―新垣 零だ。

俺達はナディアが出て言ったと聞いて、ナディアの元まで来た。

ジャン「ナディア!」

グランデイス「あそこだよ、サンソン! 飛ばしな!」

サンソン「合点承知！」

俺達はナディアアのある遺跡に近づき、グラタンからジャンが出て、ナディアアを呼んだ。ジャン「早く乗って、ナディアア！」

ナディアア「う、うん……！」

言われるがままにナディアアはグラタンに乗った。

ナディアア「どうして、ここがわかったの……？」

ジャン「実はウエスト博士とエルザが教えてくれたんだ」

ウエスト「クラマとの会話を聞いていたのである」

エルザ「エルザも途中まで、跡をつけていたロボ！それで後はアマリに見つけてもらったんだロボ！」

アマリ「私も家出経験者です。だから、家出した人の考えている事は何となくわかります」

零「自慢げに言う事じゃねえだろ」

アマリ「うっ……は、はい……」

メル「それと、アマリさん、嘘はいけませんよ」

ホープス「はい。というのは冗談で、探索の術を使ったのです」

ナディアア「余計な事をして……！」

アマリ「でもね、ナディアちゃん……。探索の術は、探す人の心残りを追うものなんです」

グランデイス「要するにあんたはあたし等の所に心は残っていたってわけさ」

ジャン「帰ろうよ、ナディア。アンジュ達も心配していたよ」

零「勿論、説教はきっちりさせてもらうからな」

ナディア「……」

クラマ「ちいっ！任務は半分しか達成できなかった……！へ……お前は恵まれてるぜらナディア。こうして迎えに来てくれる人がいるんだからよ……」

あの鳥型の魔神……撤退した……？

サンソン「あのトリ野郎、行っちゃったぜ……」

ハンソン「ドアクターの一味かと思っただけれど、ナディアを守ってくれたなんて、いい所あるね」

ウエスト「(家出を進めたクラマがいないのである……まさか、あのトリは……)」

グランデイス「安心してんじゃないよ！こっから本番だよ、あんた達！」

零「合点承知！」

アマリ「合点承知です！」

メル「が……合点、承知です……」

メル：「恥ずかしいなら言わなくても良かったんだぞ……。

ハンソン「ああっ！僕達の台詞を！」

エルザ「エルザもノリ遅れたロボ！」

零「いいじゃないですか。一回言ってみたかったですよ」

アマリ「私もです」

ハンソン「やめときな、零、アマリ。お前らみたいな真面目くんじゃ荒事稼業は似合わない」

アマリ「それはそうですけど……くんは納得できませんね……。私は女です」

零「拗ねんな、拗ねんな」

メル「というより、ハンソンさんって時々すごい紳士ですね……」

ホープス「マリー様にもお優しいですね」

サンソン「ジャン！ナディアはお前に任せるぜ！」

グランデイス「あいつ等はあたし達が叩き潰す！だから、あんたはナディアを守ってやんな！」

ジャン「お願いします、皆さん！」

グランデイス「行くよ、仮面野郎！未練たらしくナディアを追ってるんなら、あたし達が相手になってやるよ！」

俺達はネオ・アトランティスのロボット軍団と戦闘を開始した……。

戦闘から数分後、メガファウナ、シグナス、プトレマイオス、ナデシコCが来て、みんなが出撃した。

青葉「エクスクロス、参上！」

しんのすけ「オラ達、参上！」

アンジュ「ナディア！グラタンにいるんなら、返事しなさい！」

ナディア「は、はい……！」

へべ「どうやら、無事みたいだね」

キキ「間に合って良かったよ」

アマルガン「うむ、零達も無事の様だな」

リユクス「ですが、生活班の職務を降り出して家出した事は、許せませんね」

アイーダ「はい。後で詰問させてもらいます」

ティア「それって、アイーダが言えるの？」

サラ「アイーダも家出した事があるんだよね？」

ベルリ「確かに……家出前科ありのアイーダさんが言っている台詞ですか？」

アイーダ「それはそれ、これはこれ、です！」

九郎「滅茶苦茶じゃねえか！」

アルト「取り敢えず、ナディアの事はジャンに任せればいいだろ」

アマリ「気をつけてください！何かが来ます！」

戦艦と……ヴァリアンサー……！！？

レーネ「あのヴァリアンサーは……！！？」

倉光「ゾギリア親衛師団のものだね」

ルリ「ゾギリアという事は彼等はミスルギ皇国の手の者ですね」

青葉「ディオ！その親衛師団ってのは何だ！！？」

ディオ「ゾギリアの行政局……つまり、政治上のトップが直接管理する戦力だ。これ

までに戦った国防軍とは別管轄だが、そんな奴等までアル・ワースに来ていたとは……」

シーブック「後方の巨大戦艦は奴等の母艦か……！」

ジャン「違います……！」

ナディア「あれは……」

グランデイス「間違いないよ！あれはノーチラス号をやった奴だ！」

……何！！？

ガーゴイル「聞こえるかな、ナディア」

ワタル「あの戦艦に乗っている人がしゃべっているのか！」

刹那「何だ……この威圧感は……！」

ハンソン「この声……！」

サンソン「忘れはしねえ！奴は……！」

ジャン「ネオ・アトランティスの首領！ガーゴイル！」

アンドレイ「奴が……ネオ・アトランティスの首領だと……？」

ガーゴイル「ナディア……。君がそこにいる事は既に報告を受けている」

ナディア「……」

ガーゴイル「単刀直入に言おう。仲間を救いたくば、私の下へ来るのだ。そうすれば、

私は君の仲間を見逃し、君にはプリンセスとしての待遇を約束しよう」

セルゲイ「あの男……！」

零「何言つてやがる！」

ジャン「そうだ！お前なんかナディアを渡すものか！」

ガーゴイル「私は君達と話をしていない。ナディアに問うている」

ナディア「……」

ガーゴイル「……残念だよ。沈黙は拒絶と受け取らせてもらう。全軍、攻撃開始。彼女に自分の選択が、いかに愚かだったかを思い知ってもらおう」

エイサツプ「ゾギリアはミスルギだけじゃなく、あのネオ・アトランティスつて言う連中とも手を組んだのか！」

アニュー「違う：．．どちらかと言うと、ネオ・アトランティスとミスルギが手を組んで、ゾギリアと協力しているんだと思うわ：．．！」

ニール「兎に角、話は後だ！どうやら、敵さんは俺達を潰して、ナディアを手に入れる気だぜ！」

シモン「心配するな、ナディア！俺達がいる限り、お前には指一本触れさせねえ！」
ナディア「え：．．」

シヨウ「女の子を力づくで従わせようとするような奴に君を好きにはさせない！」

ゼロ「だから、心配するな！ジャンと一緒に大船に乗った気でいればいいぜ！」

レイ「奴は俺達が引き受ける！」

ナディア「みんなが：．．あたしのために：．．」

アンジュ「勘違いしないで。あなたの：．．というより、あなたとジャンのためだからしんのすけ「オラ達、ナディアお姉さんを守るジャン君を絶対に守るゾ！」

ジャン「ありがとう、みんな！」

シバラク「サンソン！グラタンは頼むぞ！」

サンソン「任せときな！俺達がついてる限り、絶対に逃げ延びてみせるぜ！」

グランデイス「何言ってるんだい！あたし達の手で、ネモ様の……ノーチラス号の仇を討つよ！」

ハンソン「そ、それはさすがに無理では……」

ドニエル「腹は決まった！各機、やるぞ！」

スメラギ「狙いは、敵の母艦……！」

ユリカ「あれを落とせば、勝負は決まります！」

ガーゴイル「現実を直視せず、愚かにも自らの生命を捨てる……。彼等もネモと同じだな」

ジャン「ナディア……。手を握ってもいい？」

ナディア「ジャン……。震えているの？」

ジャン「武者震いだよ。そして僕は、この戦いを絶対に見届けなきゃならないんだ。

どんなに怖くても」

ナディア「（みんなが……。あたしのために戦ってくれる……。でも、あたしは……）」

俺達はガーゴイル率いる部隊との戦闘を開始した……。

敵の部隊を減らしていく俺達……。

… つ！これは…！

零「みんな！オニキスが来るぞ！」

俺がそう叫ぶとガラム部隊とリリス…そして、もう1機の機体が現れた。

テイエリア「オニキスか！」

… あの中心の機体は… 新型か…？

？「お初にお目にかかるよ… 新垣 零… そして、エクスクロス」

メル「あ、ああ…！その、声…は…！」

メ、メル…？

？「久しぶりだね、メルちゃん。元気だったかい？」

メル「ぎ、ギルガ・カルセドニー…！」

ギルガ「うん、いつ聞いても可愛い声だね」

メルが… 怯えている…！！？

零「め、メル！どうした？！？あいつは何者なんだ？！」

メル「首領の右腕… 何もかもが完璧な男… ギルガ・カルセドニー… です！」

ギルガ「完璧だなんて… 嬉しい事言ってくれるじゃないか」

零「奴が… 首領の右腕だと…！！？」

ギルガ「メルちゃん。僕達の下へ戻っておいで… 今ならばくの下で働かせてもらえ

るように僕から首領様に頼むよ」

メル「い…… いや…… !嫌です!あなたの下へは…… 行きたくありません!」

零「落ち着け、メル!どうしたってんだよ!?!?」

メル「彼は…… ギルガ・カルセドニーは…… 自分の思い通りになる者を配下に置き…… 思い通りにならない者は洗脳をするか、拷問後に死刑で殺す人なんです!」

何だよ…… それ…… !

ギルガ「酷いなあ…… そんな言い方。メルちゃん、ワガママ言わないで戻って来なよ……。僕は君の顔を傷つけたくないんだよ。君を僕の側に置いておきたいだけなんだよ」

メル「い…… いや…… !いやいやいや!行きたくない!」

ギルガ「全く…… ならば、仕方ないね、手荒くいくよ」

ふざけんよ…… !

零「いい加減にしやがれ…… !」

ギルガ「…… ?」

アマリ「零君……」

ギルガ「何かな?新垣 零」

零「さつきから聞いてれば…… メルを怖がらすんじやねえよ!」

メル「零さん……」

零「大丈夫だ、メル！お前をあいっになんて渡さない！俺が絶対に守ってやる!!？」
ギルガ「……ふーん、やつぱり、君は気に入らないね……。ま、どの道、君も捕らえるつもりだったから、2人仲良く連れて行つてあげるよ」

シヨウ「簡単に零達を連れて行けると思うなよ！」

アマリ「零君とメルさんは……私達が守ります！」

零「みんな……ありがとう」

ギルガ「愚かだね、エクスクロス……。なら、潰してあげるよ」

メル「アスナ・ペリドット！何故、その方に従うんですか!?!？」

アスナ「……私にはもう何も無いの……。だから、カルセドニーに従うしか……。首領様の下へ戻る方法はない！だから、私はこいつに身を売つてでも……。這い上がる！」

メル「アスナ・ペリドット……！」

ギルガ「アスナちゃんは僕の事を理解してくれているんだよ」

零「メル……。辛いなら、メガファウナに戻れ」

メル「大丈夫です……。私も零さんと戦います……。！」

零「……わかった。でも、もし危険だと感じたらすぐに逃げろよ」

メル「はい……。！」

ガーゴイル「オニキスだな…。君達もナディアも狙う気か？」

ギルガ「僕達が狙うのは新垣 零のメルちゃんさ…。何なら、君達がナディアという少女を捕らえられる様に手伝おうか？」

ガーゴイル「邪魔をしないのなら別にいい」

ギルガ「だったら、好きにやらせてもらうよ…。さあ！新垣 零！僕の機体…。アマテラスに怖れよ！」

零「メルは渡せねえし、怖れもしねえよ！お前は此処で倒してやる！カルセドニー！」
俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 零VSアスナ〉

零「ペリドット、そんな男にすぎないように、お前もまだまだだな！」

アスナ「何とでも言いなさい、新垣 零！私は必ず成果を上げる！何としてでも！」

零「残念だが、俺達はお前の礎になるつもりはない！」

〈戦闘会話 メルVSアスナ〉

アスナ「あなたを捕らえるわ…。メル！」

メル「アスナ・ペリドット！その先へ行くともう戻れなくなりますよ！」

アスナ「あなたのせいでしょう!?!？」

メル「!」

アスナ「あなたが裏切らなかつたらこんな事にはならなかつたの!こうなつたら、縄で引つ張つてでもあなたを連れ戻す!!?」

メル「私は戻るつもりはありません、絶対に!」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「さあ、来たまえ…。新垣 零!どちらがメルちゃんに相応しいか勝負だ!」

零「相応しいとか相応しくないとか関係ない!お前にメルは渡せない!」

ギルガ「だから、力付くで手に入れるよ。そして、連れ戻し、洗脳をかけて僕の側に置く」

零「それを聞いたらより、お前に渡すわけにはいかなくなつた…。メルは俺が守る!!?」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

メル「ギルガ・カルセドニーが来る…。!」

ギルガ「怖がる顔も素敵だね、メルちゃん」

メル「っ……！怖がってしまっただめです……！零さんと共に戦うと決めたんです！こんな所で負けてはいられません！」

ギルガ「その顔がもつと怯える顔になるのが楽しみだよ」

〈戦闘会話　アマリVSギルガ〉

ギルガ「君が魔徒教団の術士……アマリ・アクアマリンか」

アマリ「わ、私の事を知っている……？」

ギルガ「可憐だ……君も僕の側に欲しくなったよ」

ホープス「マスターの側にいるのは私か、零様だけで充分です」

アマリ「ホープス……」

ギルガ「へえ……君は……魔法生物……というより、どう見ても……」

アマリ「わ、私はあなたには屈しません！覚悟してください！」

オニキスの部隊にガーゴイルの部隊……流石に戦力の差がありすぎたのか、俺達は追

い込まれていく……。

ガーゴイル「戦力差は圧倒的だな」

サンソン「この野郎！ 高き所からふんぞり返ってるんじやねえよ！」

ハンソン「で、でも……！ あいつの言う通り、このままじゃ……！」

グランデイス「ジャンとナディアの前で情けない事言ってるんじやないよ！」

ギルガ「その程度かい？ 期待外れもいい所だね、新垣 零……」

零「ま、まだだ……！」

ギルガ「諦めが悪い男は嫌われるよ？」

零「なら、嫌われてもいい……！ メルを……みんなを守るなら……！」

メル「(零さん…… いったいどうしたら……！)」

ナディア「……」

ジャン「大丈夫だよ、ナディア……！ みんな、頑張ってくれてる！」

グランデイス「ジャンの言う通りだよ。勝利つてのは、最後まで希望を捨てない奴の所に来るもんだ」

ナディア「でも……」

ガーゴイル「ナディア……。どうやら君だけが、現実を見えているようだね。そう……。

君達に勝ち目などないのだよ」

ギルガ「やるだけ無駄さ」

九郎「あいつら……！言わせておけば……！」

アル「だが、今の妾達の戦力では奴等に敵うのは難しいぞ！」

エンネア「それにあの艦のバリアを抜くのは難しいよ！」

リチャード「このままの状況が長引けば、撤退も視野に入れなくてはならんな……」

海道「何言つてやがる！リチャードのオツサン！敵に背を向けるつてのかよ!?？」

真上「今の状況を悟れ、サルが！俺も嫌だが、退く事も大事だ！」

ガーゴイル「その必要はない。君達は安全に、この場を収める方法を知っているはずだ」

ギルガ「その答えは君達だ、ナディアちゃん、新垣 零、メルちゃん。ナディアちゃんがガーゴイルの下へ行き、新垣 零とメルちゃんが僕の下へ来てくれれば、全てが解決する」

ガーゴイル「さあ、決断を」

ナディア「私は……」

メル「……行くしか……」

零「……断る!!？」

ナディア「！」

メル「零さん…！」

アスナ「新垣 零…。」

零「戦力差が何だ！俺達は諦めない！俺達は絶対にお前らの下へなんて行かない！！？」

ギルガ「本当に愚かだね、新垣 零…。メルちゃんはどうかな？」

メル「私も零さんと一緒です！あなたの下へは行きません！」

ギルガ「はあ…愚かすぎる…。」

ガーゴイル「プリンセスはわかるね？」

ナディア「わ、私は…。」

ジャン「答えちゃダメだ、ナディア！」

ナディア「でも、このままじゃ…！」

ワタル「言ったはずだよ、ナディアさん！大丈夫だつて！」

ヒュウガ「男に二言はない！我々を信じてくれ！」

ナディア「でも…。」

アンジュ「さつきから、でもでも、うるさきー！いつもの強気はどこにいったのよ！！？」

ナディア「でも、私がいたら、みんなに迷惑が…。」

ユイ「迷惑だなんて、思っていないせん！」

レナ「迷惑だと思っただけなら、まず、あなたを助けに来ていないわよ！」

アマリ「それにそれを言うならば、教団の脱走者の私も同じです」

青葉「ゾギリアの連中が狙っている新型に乗ってる俺もだよ！」

ベルリ「アーミイのマスクに狙われている僕もだよ！」

零「もちろん、俺とメルも同じだぜ、ナディア！」

ナディア「…」

グランデイス「わかるかい、ナディア。みんな、それぞれに事情を抱えてるんだ。あんなだけが特別じゃないのさ。そして、それをお互いに支え合うのが仲間ってものだよ」

ナディア「仲間…」

ジャン「そうだよ、ナディア！君だって、エクスクロスの1人なんだから！」

ナディア「私が… みんなの中の1人…」

ギルガ「話が長いな… いい加減、飽きたよ。こうなったら、メルちゃんだけでも、落して連れて行く…！」

メル「！」

アマテラスはメサイアに近づき、ビーム砲を構えた。

ギルガ「すぐに私の下へ連れて行ってあげるからね…メルちゃん」

メル「い……いや……！」

ギルガ「ガンブラスター……最大出力、インパクト!!？」

ビーム砲の最大出力がメサイア目掛けて発射された。

ナディア「メルさん!!？」

零「メルウウウウウウツ!!？」

アマリ「れ、零君!!？」

俺はバスタードモードを発動させ、ゼフィルスをメサイアとビームの前に動かし、クロスガン・ブラスターモードの最大出力ビームを放った。

零「ぐっ……！うう……っ！」

マーベル「ビームがぶつかり合ってるわ！」

シバラク「だが、零の方が押し負けている……！」

ギルガ「無駄だって言っているだろ！新垣 零……。」

零「無駄じゃねえ！諦めなければ……必ず道は開ける!!？お前に勝つって言う道がない!!？」

ギルガ「本当のバカだね……君は！」

零「うぐっ……!!？」

威力を上げやがった……!!？」

倉光「このままではまずい！」

アマリ「大丈夫です……！零君な必ず勝ちます……！」

シャルロット「アマリさん……」

一夏「零いいいっ！そんな奴に負けてんじやねえぞおおおッ！絶対に勝てええええッ！！？」

零「当たり前だあああッ！ゼフィルス…… まだだ！お前の力を全て貸せええええッ！！？」

俺はさらに目を赤く発光させると、ブラスターモードの出力が上がり、アマテラスのビームを押し返し始めた。

ギルガ「ば……バカな！！？そんな事が……！」

零「はあああああッ！！？」

ギルガ「うわあああああッ！！？」

ビームを完全に押し返し、アマテラスにビームを浴びせ、爆発が起きた……。

爆煙が晴れると完全には破壊できなかったアマテラスを支えるリリスの姿があった。

零「はあ…… はあ…… はあ……」

ギルガ「ふ、ふふっ……！どうやら、君の事を甘く見ていた様だね……。次は本気で捕まえさせてもらう！覚えていろ！」

そう言い残し、大破したアマテラスに乗るカルセドニーはリリスと共に撤退し、残るガルド部隊も撤退した……。

来るなら来やがれ……！俺は負けない……！

グレンファイヤー「す、凄えぜ、零！」

ミラーナイト「あのビームを押し返すとは……流石です」

零「ま、まあな……！」

メル「ありがとうございます……零さん。私……」

零「言っただろ？大丈夫だって」

メル「……はい！」

ガーゴイル「オニキスも大した事ないのだな……。それはそうと、プリンセス君は彼等とは違う……。君は特別な人間……。そう、この私と同じなのだ」

アマリ「黙りなさい……！」

すると、ゼルガードが巨大戦艦の真隣に移動した。

アマリ「私は、あなたのような人間に屈するつもりはありません！」

ガーゴイル「教団の術士か……。特攻でもするつもりかな？」

アマリ「あなたは自分の力を過信しすぎです！光の子よ、集まりなさい……！POT

ENTIA！」

ゼルガードが光の壁を纏い、突進した。

ホープス「なるほど……。光壁の術とは考えましたね」

アキト「ゼルガードのフィールドが敵の戦艦のバリアを干渉している……！」

ガイ「凄え、ゲキガンフレアだぜ！」

ロツクオン「よっしやあ！奴のご自慢のバリアに穴が空いたぜ！」

アマリ「今です！皆さんで一斉攻撃を！」

零「何言ってるんだよ!!? そんな事したらお前が！」

アマリ「大丈夫です！私、こう見えても、そこそこ頑丈なんです！それに……」

アマリ……!!?

アマリ「もし危なくなったら時……零君が助けしてくれるんでしょ？」

…… そうだったな……！

零「…… 当然だろ！みんな！」

グランデイス「アマリ！あんたの覚悟は受け取った！」

ゼロ「行くぜ、みんな！ありったけをぶち込め!!?」

マサキ「いつけええええつ!!?」

竜馬「食らいやがれえええつ!!?」

俺達は巨大戦艦に一斉攻撃をした。

ガーゴイル「小賢しい真似を…！」

すると、何処かから砲撃を放たれ、巨大戦艦にダメージを与えた。

ガーゴイル「ぬうっ！」

スメラギ「どこからの砲撃なの!!?」

フェルト「所属不明艦、接近！」

ミレイナ「先程の攻撃は、その艦のものみたいですよ！」

砲撃を放ったであろう紫の戦艦が現れた。

エレクトラ「初弾の命中を確認」

ネモ船長「このまま戦闘を続行する。電子砲雷撃戦用意！」

エレクトラ「全艦、電子砲雷撃戦用意！」

ネモ船長「N-1ノーチラス号、全速前進！」

あの紫の戦艦… 敵部隊の中に入っていったぞ…!!?

サンソン「き、聞こえたか!!?」

ハンソン「聞こえた…！聞こえた！」

グランデイス「あ、あの声…忘れもしない！」

ジャン「ネモ船長！」

エーコー「船長、戦闘中の一団にグラタンを確認しました」

エレクトラ「ネオ・アトランティスの通信を傍受した結果、グラタンにはナディアもいるようです」

ネモ船長「そうか」

セシリー「グランデイスさん！あの戦艦を知っているのですか？！」

グランデイス「あの空飛ぶ艦は知らないが、乗っているのは、ノーチラス号の人間だよ！」

パトリック「ノーチラス号つて言えば、ネオ・アトランティスとの戦いで沈んだ艦じゃなかったか？！」

ジャン「皆さん、生きていたんですよ！」

アネツサ「艦長！こちらの呼びかけに対して、あの艦から返答ありません！」

倉光「こちらに敵対行動を取る様子がないから、今は放っておけばいい」

今の際にゼルガードが戻ってきた。

アマリ「あの艦の火力ならば、敵のバリアを破れると思います！」

シモン「よし……！ここから一気に逆転だ！！？」

ガーゴイル「ネモめ……。 奴も戦艦を発掘していたか……」

ネモ船長「……」

ガーゴイル「ならば、その力……少しの間だけ試してやろう」

ジャン「ナディア！ネモ船長も来てくれたんだ！これできつと大丈夫だよ！」
ナディア「(あの人が生きていた...)。ノーチラス号が沈む時、あの人とエレクトラさん... いったい何の話をしていたの...)」

Nーノーチラス号という戦艦を軸に俺達は反撃を開始した...

〈戦闘会話 零VSガーゴイル〉

ガーゴイル「先程のオニキス撃退は見事だったと言っておこう」

零「あんなのまだまだだ！お前にもナディアは渡さない！」

ガーゴイル「意気がらない事だ。戦力の差を教えてやろう」

〈戦闘会話 一夏VSガーゴイル〉

ガーゴイル「(世界で唯一の男性IS操縦者... 彼もまた、特別な人間という事か...)。彼の力は如何な物かな？」

〈戦闘会話 刹那VSガーゴイル〉

ガーゴイル「(あれがりボンズ・アルマークのお気に入り機体か... あれを手に入れ

るのもいいかもしれないな……)」

〈戦闘会話 ユイVSガーゴイル〉

ガーゴイル「(レガリア：未だ未知数のその力：ヨハンという少年が何を考えているのか：戦ってみればわかるのかもしれない)」

俺達はガーゴイルの乗る空中戦艦を追い詰めた。

ガーゴイル「流石は幻の発掘兵器エクセリヨン……。それを操るネモ君の手腕と合わせて、見事と言っておこう」

ネモ船長「逃げるつもりか、ガーゴイル？」

ガーゴイル「相変わらず辛辣だな、ネモ君。こうして君と再び話す機会が来るなど思わなかったよ」

ネモ船長「あの戦いで私にとどめをさせなかったのは残念だったな」

ガーゴイル「その通りだよ。君がエクセリヨンを用意したのなら、私も相応の準備が必要になる。再会を楽しみにしている。その日まで、しばしの別れを」

そう言い残し、空中戦艦は撤退した……。

ネモ船長「：：」

エレクトラ「(船長：：)」

ドニエル「退いてくれたか：：」

倉光「薄氷の勝利だったね、今回は」

スメラギ「そうですね：：」

ルリ「勝ちも勝ちなので良かったじゃないですか」

ユリカ「ルリちゃん、前向き！」

ハーリー「艦長！所属不明艦が、こちらに接触を求めていますよ！」

ルリ「それはいい事です。あのまま何も言わずに行ってしまうかと思いましたが」

グランデイス「サンソン、ハンソン！あの新しいノーチラス号に行くよ！つと！ネモ

様にお会いするんだから、せめて化粧ぐらいいは直さないと！」

ハンソン「大はしやぎだね、姐さんは」

サンソン「逆にこっちは複雑な表情だな」

ナディア「：：」

ジャン「ナディア：：」

それぞれの思いが交錯する中、俺達は艦に戻り、NーNーチラス号に集まる事となつた：：。

ギルガ・カルセドニーか……注意だけはしていた方が良いな……。

俺達はNーノーチラス号の格納庫に集まった。

ネモ船長「ジャン君、よく無事だった」

ジャン「ネモ船長こそ！それにエレクトラさんも、皆さんも！」

エレクトラ「また会えて嬉しいわ、ジャン君。それにナディアも」

ナディア「髪……切ったんですね」

エレクトラ「……色々とおったのよ。それは、あなた達の方も同じでしょうけど」

ナディア「……ジャンや、みんながいましたからなんとかやってこられました……」

グランデイス「そういう事！」

サンソン「ジャンとナディアとマリーとキングは今日まで俺達と一緒にやってきたん

だ」

ハンソン「このアル・ワースでね」

ネモ船長「あなた方とも、こうして再会できた事を嬉しく思う」

グランデイス「私もです、ネモ様。伸びた髪も、お似合いです」

サンソン「意外だな……。もっと熱烈な歓迎をすと思うたのに……」

ハンソン「(うん……。髪型が変わったんで熱が冷めたのかな……)」

ジャン「ネモ船長達も、あの戦いの後にアル・ワースに跳ばされたんですか？それに、この戦艦……いつの間に、こんなものを用意したんです？」

ネモ船長「君の質問には、追って答えよう。一つだけ……。この艦の名はノーノーチラス号だ」

ジャン「ノーノーチラス号……」

つと、艦長組が来たか。

倉光「ジャン君……。そろそろ我々を紹介してくれないかな？」

ドニエル「ピンチを救ってくれたお礼もしたいしな」

ジャン「あ……すみません！」

スメラギ「良いわよ、謝らなくて、知り合いの人に再会できたもの」

ルリ「興奮するのも当たり前です」

ジャン「ありがとうございます……こちらが僕達を保護してくれたエクスクロスのドニエル艦長、倉光艦長とスメラギさん、ルリ艦長です」

ネモ船長「ネモです。彼らを世話していただき、ありがとうございます」

ドニエル「いえ、ネモ艦長。こちらこそ、今日はありがとうございます」

ネモ船長「この艦は軍艦ではありません。よって、私を艦長と呼ぶのはやめていただきます」

ドニエル「はあ……」

ルリ「失礼しました」

ネモ船長「情報の交換が済み次第、我々はジャン君達を引き取り、出発します」

倉光「……我々と行動を共にする気はないと？」

ネモ船長「そのつもりです」

ジャン「ネモ船長……」

ナディア「相変わらず勝手なんですわね」

ネモ船長「何と言ってくれても構わない」

ナディア「あなたが何と言おうと今、私の居場所は、このエクスクロスです」

ナディア……

ネモ船長「……君は戦いが嫌いではなかったのかね？」

ナディア「あの人達は、ネオ・アトランティスを滅ぼすためだけに生きているあなた

とは違うんです！」

ネモ船長「……」

ナディア「……」

ジャン「(ナディア……)」

ナディアもようやく俺達の輪に入れたって訳か……

俺はそれを見届け、廊下に出た。

アマリ「零君：。」

すると、アマリが話しかけて来た。

零「ん？どうした、アマリ」

アマリ「：。また無茶をしたよね？」

零「：。お互い様だろ。あんな特攻はもうやめてくれ、ヒヤヒヤしたぞ」

アマリ「私だって：。！」

零「にしても、ブリキントンを前にして、大声を上げていたお前が特攻なんて：。変
わったな」

アマリ「前にも言ったでしょ？私はあなたのおかげで変わる事ができたって：。」

零「そうだったな。それよりも最近のお前は無茶しすぎだ」

アマリ「あなただって、そうでしょ？」

零「俺は男だからいいんだよ」

アマリ「なっ?!?男の人だからって、関係ないわ！前にはウジウジ、私を傷つけた事を悩んでたのに！」

零「お、お前！それを蒸し返してくるか?!?お前だって、ビクビク怯えてたじゃないか！」

アマリ「昔の話はしないで！」

零「こつちの台詞だつての！」

メル「ふふ……！アハハハ！」

つて、メル^{!!}？

零「め、メル^{!!}？」

アマリ「いたんですか^{!!}？」

メル「ふふ……ご、ごめんなさい。お二人の話が夫婦喧嘩みたいに見えてしまつて……」

零・アマリ「「ふ、夫婦^{!!}？」」

メル「でも、それはお互いが信頼しあっている証拠ですね」

零「信頼……か……」

アマリ「そうですね」

メル「でも、あまりいちやつくど誰かが不機嫌になるかもしれませんから、気をつけてくださいね！（自分の事を柵に上げてますね……。アマリさん、あなたは数歩リードしています、負けませんよ！）」

それだけ言い残し、メルは走り去っていった……。

ーみんな、初めまして、ヨハンだよ。

ヨハン「あのガーゴイルを退けるなんて・・・ エナストリアの皇女陛下様達もやるね、
イングリット」

イングリット「ヨハン・・・ あなた何を考えているの？」

ヨハン「さあね？そのうちわかるよ」

イングリット「・・・」

ふふ、面白くなりそうだ・・・。

分岐シナリオ1

―ネモだ。

私はナディアの見つけたという遺跡に来ていた。

ネモ船長「：：」

すると、エレクトラが歩いて来た。

エレクトラ「やはり、こちらでしたか：：」

ネモ船長「：： ここでナディアと再会したのも運命なのだろうな：：」

エレクトラ「彼女の言葉にシヨックを受けていらつしやるのですか？」

ネモ船長「ネオ・アトランティスを滅ぼすといった誓いに嘘はない」

エレクトラ「信じております。同時に変わっていくあなたの事も信じております」

ネモ船長「：： 感謝している。君にも：： 皆にも：：」

エレクトラ「あなたと同じようにナディアと変わっていくと思います」

ネモ船長「：：」

エレクトラ「あの子を従わせたいのなら、真実を告げてはいかがでしょうか？お前は

私の娘だ……と」

ネモ船長「今は、その時ではない。そして、その時が来る事はない」

エレクトラ「……この後、どうされるおつもりで？」

ネモ船長「考えを改めた。ガーゴイルが異界人を自らの戦力とするなら、こちらと同じ手段を使う」

エレクトラ「エクスクロスを利用すると？」

ネモ船長「利用……という言葉は相応しくない」

エレクトラ「あの少年の存在ですか？」

ネモ船長「その通りだ。盟約に従い、救世主と龍の神に我々は協力する義務がある」

サンソン「どうだ、ハンソン？2人の話……聞こえるか？」

ハンソン「ダメだ……。僕の造った集音器でも聞き取れないや」

グランデイス「再会した時から、あの2人の雰囲気が変わっていたんで、警戒していたけど……行くよ、お前達。野暮は、ここまでだ」

ハンソン「いいんですか、姐さん……あの2人……このままだとくつついちゃうんじゃないですか！」

サンソン「あいつの事、諦めるんですか？」

グランデイス「そんなわけないだろ！でも……今の2人の間には入っていけない空気がある……」

ハンソン「姐さん……」

グランデイス「言っておくけど、あたしは自分の欲しいものを簡単には諦めない！戦いは、これからだ！ハンソン、ハンソン！どんな事になろうと、あたし達はネモ様についていくよ！」

ハンソン「いいえ！その命令には従えません！」

ハンソン「俺達がついていくのは姐さんですからね！」

グランデイス「ふふ……ありがとうよ、二人共」

―新垣 零だ。

俺達は外で話を始めようとしていた。

ドニエル「……当直の者以外は、全員、この場に集まっているな？」

ベルリ「はい！」

青葉「こうして見回すと本当に俺達って……寄せ集め部隊なんだな」

ケロロ「青葉殿、今更でありますな！」

シーブック「アル・ワースの人間と異界人……。その異界人も様々な世界から来ている」

アンジユ「アル・ワース組の方もノーマ、術士、魔神乗り、レガリアのコアとその契約者、獣の国からの流れ者……。千差万別ね」

グレンファイヤー「てか、人外もいるしな」

スカーレット「お前が言うな」

倉光「その寄せ集めの集団に新たにNーノーチラス号の皆さんが加わる事になった」

エレクトラ「皆さんと情報を交換したところ、やはり、異界人である我々が単独で行動するのは危険と判断しました。こちらはNーノーチラス号船長のネモ……。私は副長のエレクトラです。今後はよろしくお願いします」

ネモ船長「……」

ノレド「何か迫力あるね、ネモ船長って……」

ジャン「ノーチラス号のみんなはネモ船長に絶大な信頼を寄せてるんだよ」

ユイ「確かに、そう見えますね！」

マーベル「あの人……。少しドレイクに似ている……。？」

チャム「悪い人って事？」

シヨウ「そうじゃないよ、チャム」

マーベル「固い意志……他人を引きつける強さ……そして、何より自身の持つ覚悟……。そんな所が共通しているように思えるの」

エイサップ「確かに悪しきオーラも感じませんね」

クラマ「しかし、あつちのエレクトラって姐さん……すごい格好だな」

マリー「前は普通のスカートだったんだけどね……」

九郎「でも、あのNーノーチラス号って戦艦についても多く語ろうとしねえ……。油断ならない一団かも知れねえな」

アレルヤ「仲間を疑って、どうするんですか、九郎さん」

デイオ「それは俺も思います……」

シバラク「何を言っているか、デイオまで」

デイオ「しかし……」

リー「シバラク先生の場合、あの副長さんが美人なんて無条件で信用してるんじゃないですか？」

シバラク「そ、そんな事は……なかったり、あつたり……」

ゼロ「あるのかよ……」

ヤール「凶星かよ、オッサン……」

ワタル「えーっ！先生はグランデイスさんにメロメロじゃなかったの!?？」

シバラク「覚えておせ、ワタル。男というものは、一度に複数の女性を愛する事も出来るのだ」

九郎「それしたら、二股だつての…」

リユクス「シバラクさん、幼き子供もいるのであまり、そういう事は…」

しんのすけ「流石はシバラク先生！話がわかるゾ〜！」

シロ「アウ〜」

ひまわり「たやたや…」

零「しんのすけの場合、幼き子供の分類に入れなくてもいいかも知れないな」

一夏「同感だ。なあ、アルト」

アルト「え？あ、ああ…」

零「まさか、お前も経験あるのか…？」

アルト「そ、そんな事ない！」

ベルリ「凶星みたいだね」

アルト「べ、ベルリ！」

ヒミコ「所で、オッサン。そうは言うけど、あつちの2人はオッサンの事、相手にしてないけどな！」

ヒカル「そうだね〜！」

サブロウタ「俺が見る限り、2人共あつちの船長さんにゾッコンだろうぜ」

イズミ「ゾッコン……連続の球根……ふふふっ」

シバラク「な、何故だ……。同じ中年、同じヒゲで……。何故この差が生まれる……」

リョーコ「その下心だろ、絶対……」

ルリ「それですね。エクスクロスの今後の行動について皆さんにご説明をしたいんです」

スメラギ「昨日戦闘を行なった、あの空中戦艦……。あれだけの戦力を持つネオ・アトランティスがゾギリアやミスルギと組んだとすれば……」

ドニエル「うむ、マナの国に追われるアメリカ軍本隊も危機に立たされる事が予想される。というわけで改めてメガファウナにはマナの国の状況調査の任務が下された」

ベルリ「ドニエル艦長……。クリム大尉の依頼を断れなかつたんですね……」

ドニエル「まあ……。そういうわけだが……」

アイーダ「ですが、キャピタル・アーミイが我々を標的としている以上、彼等の所属するマナの国を調べるのは意味のある事でしょう」

アンジュ「それはそつちの事情……。私はパスさせてもらおうわ」

ワタル「僕も今はドアクダーと戦うのが先だと思う！」

エイサップ「でも、マナの国を放つて置いて、ドアクダー軍団と挟み撃ちつて事にな

るかも知れないし…。」

ヒュウガ「そういう意見が出るのは予想済みだ。というわけで、ここはエクスクロスを二つに分けようと思うのだが」

倉光「すなわち、ドアクダー打倒組とマナの国調査組だ」

スメラギ「五艦の責任者とヒュウガボスで話し合った結果、編成はこのようにしたいわ」

ドニエル「ドアクダー打倒組はNノーチラス号とナデシコCを母艦として…。」

ルリ「ナデシコクルーとアキトさん、ガイさん、ワタル君とシバラクさん、シヨウさんとマーベルさん、エイサツプさんとリユクス姫、アマルガンさん達3人と朗利さんと金本さん、シモンさんとヴィラルさん、九郎さんとアルさん、エンネアさんとウエスト博士にエルザさん、アンジュさんとヴィヴィアンさん、ウルティメイトフォースゼ口の三人とレイさんと怪獣さん達、ケロロさんと日向さん達、竜馬さんとカイザー乗りのお二人とスカレットさん、しんちゃんとおひまちゃん、シロちゃんにカンタムさん、一夏さんとシャルロットさん、簪さん、それにグラタンの三人です」

スメラギ「マナの国調査組の方はメガファウナとシグナス、プトレマイオス2改を母艦として…。」

倉光「ベルリ君、アイーダ嬢、ガンダムマイスターの4人とニール君、アニユー嬢と

アンドレイ大尉にセルゲイさん、マネキン准尉、シーブツク君とセシリー嬢、アルト君、ユインシエル嬢とレナちゃん、サラちゃんとティアちゃん、青葉君とディオで構成する」
成る程、そういう構成か… って、あれ？

アマリ「あの… 私と零君にメルさん、マサキさんやアーニーさん達がいらないんですけど」

倉光「君達については戦術的なウエイトからもどちらに編成するか、迷ってね…」
ドニエル「なので、本人の選択に任せる事にした」

スメラギ「でも、こちらの要望で零君とアマリは同じ部隊に入って欲しいの」
零「どうしてですか？」

ルリ「2人の連携がバツチリだからです」

アマリ「わ、わかりました…」

マサキ「そういう事なら俺は、アマリ達に合わせるぜ」

アマリ「良いんですか、マサキさん？」

マサキ「お前の生き様ってやつに興味があるんでな」

零「…は？」

何言ってるんだ、こいつ…。

アマリ「え… それって… その…」

マサキ「い、言っておくが、愛の告白とか、そういうのじゃねえからな！」

アマリ「あ…… そうなんですか。それなら安心です」

零「そうか……」

つて、俺…… 何で安心してんだよ……！

マサキ「さりげなくキツイな、お前……。 (もつとも、アマリ以上にホープスの奴が気になるんだがな……)」

アーニー「それなら、僕達も零君達に任せるよ」

メル「私もお願いします」

…… おいおい。

零「お前ら、投げやりになってるだろ」

リチャード「そんな事ないでゲス」

全く…… この天然トリオは……！

アマリ「でも、これは責任重大ですね……。 零君！お願い！」

零「つておい!!? お前もかい!!?」

アマリ「…… ダメ？」

零「…… ぐっ…… !!? し、仕方ねえな……！」

上目遣いなんてあいつ、何処で……！

朗利「(零も案外チョロいな)」

金本「(え…俺はアマリの上目遣いにビックリなんだけど…)」

メル「…」

零「これは…しっかりと考えねえとな…」

ドニエル「では選んでくれ、零」

零「ドアクダー打倒とマナの国調査だな…」

…どっちにしよう…

※ここからは分岐です！

〈ドアクダー打倒組を選択の場合〉

零「決めた。ドアクダー打倒組を希望します」

アマリ「じゃあ、私達もそっちね」

ネモ船長「どちらの部隊も困難が待ち受けていると思われる」

ルリ「お互いの部隊の健闘を祈り、無事に再会できる事を願います」

ワタル「頑張ろうね、零さん達！」

アーニー「うん、まずは二つ目の創界山の秘宝を取り戻そう！」

零「どっちが正しい…。何が正しいかなんて、わからない…。。だから俺は…。己の決めた道に進む…。アマリと一緒に…。」

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

- ・ N1ノーチラス号／ネモ船長
- ・ ナデシコC／ルリ
- ・ ダンバイン／マーベル
- ・ ビルバイン／シヨウ
- ・ アツカナナジン／エイサップ
- ・ ギム・ゲネン／リユクス
- ・ ギム・ゲネン／アマルガン
- ・ シンデン／朗利

- ・ シンデン／金本
- ・ 龍神丸／ワタル
- ・ 戦神丸／シバラク
- ・ デモンベイン／九郎
- ・ 破壊ロボ／ウエスト
- ・ ネームレス・ワン／エンネア
- ・ ヴイルキス／アンジュ
- ・ レイザー／ヴィヴィアン
- ・ ケロロボMk-III／ケロロ
- ・ パワード夏美／夏美
- ・ グレンラガン／シモン
- ・ ブラックゲッター／竜馬
- ・ マジンカイザーSKL／海道
- ・ ウイングル／スカーレット
- ・ ブラックサレナ／アキト
- ・ エステバリスカスタム／リョーコ
- ・ スーパーエステバリス／サブロウタ

- ・ スーパーエステバリス／ガイ
- ・ ウルトラマンゼロ
- ・ グレンファイヤー
- ・ ミラーナイト
- ・ ゴモラ／レイ&ゴモラ
- ・ カンタムロボ／しんのすけ
- ・ 白式／一夏
- ・ ラファール・リヴァイヴ・カスタムII／シャルロット
- ・ 打鉄式／簪
- ・ グラタン／グランデイス
- ・ サイバスター／マサキ
- ・ オルフエス／アーニー
- ・ ライラス／サヤ
- ・ ライオットB／リチャード
- ・ ゼルガード／アマリ
- ・ シャイニング・ゼフィルス／零
- ・ メサイア／メル

〈マナの国調査を選択の場合〉

零「決めた。マナの国調査組を希望します」

アマリ「じゃあ、私達もそっちね」

ドニエル「どちらの部隊も困難が待ち受けていると思われる」

倉光「お互いの部隊の健闘を祈り、無事の再会ができる事を願うよ」

ベルリ「改めてよろしくお願いします、零さん達！」

マサキ「いい機会だ。連中が俺達に喧嘩をふっかけてくる理由……絶対に突き止めてやるぜ」

零「(どつちが正しい……何が正しいかなんて、わからない……。だから俺は……己の決めた道に進む……アマリと一緒に……)」

「このルートに以下の機体とパイロットが編成されました」

- ・メガファウナ／ドニエル
- ・シグナス／倉光
- ・プトレマイオス2改／スメラギ
- ・ガンダムF91／シーブツク
- ・ビギナ・ギナ／セシリー
- ・ダブルオークアンタ／刹那
- ・ガンダムサバーニャ／ロックオン
- ・ガンダムハルト／アレルヤ
- ・ラファエルガンダム／ティエリア
- ・ガンダムデュナメス／ニール
- ・ガツデス／アニュー
- ・GN-XXIV／パトリック
- ・GN-XXXIV／アンドレイ
- ・GN-XXXIII／セルゲイ
- ・G-セルフ／ベルリ
- ・G-アルケイン／アイーダ
- ・アルト／YF-29 デュランダル

- ・ルクシオン／青葉
- ・ブラディオオン／ディオ
- ・アレクト／ユイ
- ・ティシス／サラ
- ・サイバスター／マサキ
- ・オルフェス／アーニー
- ・ライラス／サヤ
- ・ライオットB／リチャード
- ・ゼルガード／アマリ
- ・シャイニング・ゼファイルス／零
- ・メサイア／メル

創界山ルート1

第21話 再会のアルゼナル

「ネモだ。」

Nーノーチラス号のブリッジに私達はいた。

ネモ船長「進路を北北東に取れ」

操舵長「……！」

ネモ船長「操舵長、復唱はどうした？」

操舵長「進路、北北東！」

エレクトラ「船長……その海域は……」

ネモ船長「無論、理解している。ガーゴイルが、ゾギリアなる者と組んだのなら、こちらに対抗策が必要だ。ナデシコCのメンバーにも連絡を頼む」

エレクトラ「了解」

ネモ船長「いい機会だ。奴にも我々の存在を知らしめよう。我々の復讐と弔いのために」

―新垣 零だ。

俺達はN―ノーチラス号の格納庫にいた。

エレクトラ「……間も無く本艦とナデシコCは、危険海域を通過します。各員は持ち場につき、不測の事態に備えてください」

ナディア「危険海域……？」

サヤ「先程、進路を変更したようですけど、そのせいでしようか……！」

シバラク「ちよつと待てい！それじゃ、わざわざ危険な所に踏み込んだというのか！！？」

リチャード「そういう事になりますね」

ナディア「どうして何の説明もなく、そんな事をするのよ……！」

エイサツプ「でも、ナデシコCも付いてきてるとなると、あつちには説明をしたみたいだな」

グランデイス「ガタガタ言うんじゃないよ。ネモ様が決めた事なんだから、あたし等はそれに従うだけさ」

九郎「それにルリも納得してるみたいだしな」

シバラク「し、しかしですな…」

グランデイス「文句あるの、シバちゃん？」

…シバちゃんて。

シバラク「ありませぬ〜！」

ワタル「ダメだ、こりや…」

ジャン「でも、危険海域って何だろう…」

竜馬「インベーターが出てきたりしてな！」

アーニー「わ、笑えない冗談はやめてください！」

ヴィヴィアン「惜しいね、竜馬！そのクイズの答えはズバリ！ドラゴンが出る海だよ

！」

零「…最悪じゃねえか」

シヨウ「ドラゴンって、デイト達の世界に行く前に戦った生物の事か！」

ゼロ「確かに危険だな」

ヴィラル「ほう…ドラゴンか…」

シモン「話には聞いていたが、ついに戦う時が来たってわけか」

シャルロット「なんか、楽しんでません？」

アマリ「こちらのお二方には、危険って言葉はないみたいですね」

零「この2人自体が危険だな…」

真上「ふん、変に驚いても意味はないだろう」

海道「そう言うこつた！結局の所、ドラゴンとはやり合わないといけないんだからよ

！」

エレボス「それもそうだけど…」

リユクス「できれば出会いたくはないですね」

マリ―「でも、ドラゴンってすつごい大きな空飛ぶトカゲでしょ！」

ナディア「そうよ！そんなのに襲われたら…」

しんのすけ「心配いらないうぜ！ね、アンジュお姉さん！」

アンジュ「まさか、このコースって…！」

ヴィヴィアン「正解っ！」

アンジュ「冗談じゃない！マナの国行きを断つたら、今度は地獄行きだなんて！」

スカーレット「アンジュ、地獄の2人の前でそれは言うな」

ジャン「じ、地獄って…？」

カンナム「ヴィヴィアン君は心配いらなうと言っているのにこの差はいつたい何なん

だ…」

マーベル「どう言う事なの、ヴィヴィアン？」

ヴィヴィアン「正解は……アルゼナル！」

ヘベ「アルゼナルって……あんたやアンジュが所属している組織の事だよな？」

キキ「確か……対ドラゴンの前線基地だっただけ」

アマルガン「そう言えば、2人はその脱走兵だったな」

アル「確かに地獄だな」

海道・真上「俺達が、地獄だ！」

ウエスト「ほら、言ったのである」

エルザ「2人の事じゃない口ボ！」

アンジュ「あのネモって男……！私達をアルゼナルに引き渡す気なの!?？」

千冬「だが、そんな事をしてネモ船長に利益などないと思うが……」

真耶「確かにそうですね」

簪「こちらの戦力が減るだけです……」

ハンソン「それに君達……そのアルゼナルの位置をあの人に教えたわけじゃないだろ

？」

サンソン「どうなんだ？」

アンジュ「それは、そうなんだけど……」

マサキ「適当な方向に進路を取ったら、偶然、アルゼナルへ向かう事になったんじゃない

ねえのか？」

そんな偶然が起こるか……？

シロ「そんなニヤ……マサキじやあるまいし」

アンジュ「とにかく！このままじや面倒な事になるから、何としても進路を変えさせないと！」

……警報が鳴りやがった!!？

サンソン「敵か!!？」

グレンファイヤー「つて、本当にドラゴンが来たのかよ！」

サヤ「これがフラグというやつですね」

メル「納得している場合ですか！」

ヴィヴィアン「どうする、アンジュ？どさくさに紛れて逃げるか？」

アンジュ「……逃げるなんてのは、私の性に合わない……ドラゴンが来たのなら、まずはあいつ等を叩く……！」

零「そういうと思った、頑張ろうぜ、アンジュ！」

アンジュ「あのね……とてもじゃないけど、そんな気分になれないから……」

何だよ、せつかく気を楽しにしてやろうとしたのに……。

第21話 再開のアルゼナル

ドラゴンを迎え撃つ為、俺達は出撃した。

エレクトラ「シンギュラー反応、確認！来ます！」
すると、ドラゴンが複数出て来た。

チャム「やっぱり、ドラゴンが来た！」

イズミ「本当にドラゴンなんだね……」

ヒカル「うわー！本物だー！」

ガイ「あいつ等と戦えるのか！くーっ！テンション上がるぜ！」
リョーコ「興奮してる場合か！」

サブロウタ「食われるのだけはごめんだぜ！」

ヴィヴィアン「アンジュ！あれ、見て！」

ヴィヴィアン達は黒いドラゴンを見ている……？

アンジュ「データにないドラゴン……？」

ヴィヴィアン「うおおおっ！初物だあああっ！」

一夏「初物？」

ヴィヴィアン「初めて遭遇するタイプのドラゴンだよ！あれのデータを持ち帰るだけでボーナスが出る！」

ルリ「なるほど、ドラゴンを倒して報酬を得るお二人にとっては宝箱のようなものですね」

アンジュ「アルゼナルに帰る気のない私には関係ないわ」

ヴィヴィアン「じゃあ、あれのデータ、あたしが独り占めしていい!?？」

アンジュ「好きにすれば」

ヴィヴィアン「うおおおっ！アンジュ、最高！」

夏美「こんな時でもお金の話だなんて……」

ケロロ「ゲーロゲロゲロ！やはり、お金の力は凄まじいのであります！」

アキト「彼女達のいたアルゼナルという所はお金さえ払えば、何でもいいって聞いたよ」

ユリカ「うわー！お金が神様なんだね！」

シバラク「まずは命あつての物種だ！その初物とやらに負けてしまつては元も子もない！」

ワタル「先生の言う通りだ！行こう、みんな！」

シモン「おう！でっかいトカゲなんざ、丸焼きにして食ってやるぜ！」

シヨウ「本気か!?？」

零「流石にあれを食べる気は……」

シモン「気構えの問題だ」

マサキ「シモンはともかく、あつちの船長さんも初見なのに少しも動じてねえな」

ネモ船長「……」

グランデイス「海の底には、想像も出来ないような怪物もいるからね。肝が据わって
るのさ」

ネモ船長「各機は前線を形成しろ。大型種はNーノーチラス号とナデシコCが仕留め
る」

アンジュ「ドラゴン退治は私達が専門……！指図は受けないよ！」

ネモ船長「こちららも命令するつもりはない。君の好きにするがいい」

アンジュ「時間はかけたくない！あの初物狙いで行く！」

俺達はドラゴン軍団との戦闘を開始した……。

戦闘から数分後……

アンジュ「このままちんたらやっけていても終わらない！さっさとあいつを仕留める！」

シヨウ「アンジュ！うかつに突っ込むな！」

アンジュ「もう止まらないよ！」

ヴィルキスは初物と呼ばれたドラゴンに近づいた。

アンジュ「その目立つ角をへし折る！」

すると、初物のドラゴンが動き、衝撃波の様なものを出した。

次の瞬間、ヴィルキスが地面に叩きつけられた。

アンジュ「機体が……動かない!?？」

ヴィヴィアン「アンジュ！」

零「まさか、あのドラゴン……重力を操っているのか！」

マーベル「離脱を急ぎなさい！このままでは、やられるだけよ！」

アンジュ「そんな事言っちゃって！ヴィルキスが……飛べないんだよ！」

アマリ「ホープス！」

ホープス「あのドラゴン……零様の言う通り、周辺の重力を操っているようです」

夏美「重力!?？」

ワタル「何、それ!!?」

ホープス「ワタル様にもわかるように説明するとあのドラゴンの周辺では機体の重さが数倍にもなっているのです」

エイサップ「じゃあ、助けに行く事も出来ないのか!!?」

ホープス「残念ながら」

しんのすけ「そんな…!」

一夏「アンジュさん!」

シモン「俺が行く!」

九郎「手伝うぜ、シモン!」

シバラク「とはいうが、シモン、九郎!」

シャルロット「あのドラゴンに近づいたら、アンジュさんと同じ目に遭うんですよ!」

簪「それにあの位置じゃ狙撃する事も出来ません…!」

シモン「だったら!こうするんだよ!!?」

グレンラガンは地面に潜った。

シヨウ「地面に潜った!」

メル「成る程、その手がありました!」

地面に潜ったグレンラガンは下からドリルで初物ドラゴンを吹き飛ばした。

シモン「今だ、九郎！」

九郎「アトランティス・ストライイクツ!!？」

吹き飛んだ初物ドラゴン目掛けて、デモンベインのアトランティス・ストライイクが直撃した。

それによつて、ヴィルキスも動ける様になった。

シモン「どうだ！」

アル「やつたではないか、九郎、シモン！」

アンジュ「助かったよ、シモン！九郎！これでヴィルキスも動ける！」

ワタル「急いでアンジュさん！あいつが来る！」

アンジュ「くっ…！」

動ける様になつたけど、間に合わねえぞ…！

すると、何処かから、初物ドラゴン目掛けて射撃が放たれた…。

シモン「援護射撃だと!!？」

ヴィラル「あそこだ！」

アンジュ「あれは…！」

ヴィヴィアンとはまた違うピンクのパラメイルが現れた…!!？

タスク「逃げるんだ、アンジュ！」

アンジュ「タスク……！あなた、タスクなの！？？」

タスク「早くするんだ、アンジュ！」

アンジュ「う、うん……！でも、その前に！こいつに借りを返す！」

動き出したヴィルキスは初物ドラゴンに攻撃を仕掛けた。

アンジュ「これでどう！」

ホープス「重力をコントロールしていると思われる角の破損を確認しました。もう大丈夫でしょう」

タスク「アンジュ……。様子を見に来ただけだったけど、君のピンチを救って良かった。あのまま重力に押しつぶされた君なんて見たくなかったからね」

アンジュ「タスク……」

タスク「君の胸やお尻がペチャンコになるなんて考えるだけでゾツとするよ」

……お、おいおい……。何なんだよ、あいつ……。

アンジュ「あんたは……！一瞬間でも感謝した自分がバカらしくなる！」

タスク「ご、ごめん……。会えたのが嬉しくて、つい本音が……」

アンジュ「だいたいね！どうして、あなたがパラメイルに乗ってるのよ！」

タスク「それには色々事情があるんだよ」

ヴィヴィアン「知り合いか、アンジュ？」

アンジユ「通りすがりのヘンタイよ」

タスク「ちよ、ちよっと！」

アンジユ「でも、今日も助けてもらった……。ありがとう、タスク」

タスク「もつと君と話をしたいけど、そうも言ってもらえないみたいだ」

すると今度は色とりどりのパラメイルが5機現れた。

アンジユ「！」

サリア「見つけたわよ、アンジユ！」

ヴィヴィアン「サリア！それにみんなも！」

エルシヤ「ヴィヴィちゃんもいるのね！」

ロザリー「ヴィヴィアンはともかく、イタ姫は野垂れ死にでもしてりやいいのによ……」

クリス「本当にウザい……」

ヒルダ「安心しな、ロザリー、クリス。あいつには、司令がキツイお仕置きをしてくれるだろうからね」

アンジユ「相変わらずムカつく女ね、ヒルダ」

ヒルダ「お前に言われたくねえよ」

タスク「じゃあ、アンジユ……。俺は行くから」

アンジユ「待って！まだ話が……！」

タスク「きつとまた会えるさ」

タスクと呼ばれた男の乗るパラメイルは撤退した……。

アンジユ「タスク……」

ヒルダ「おい、イタ姫！あのアーキバスに乗っていたの、男じゃねえか！」

サリア「どういう事なの、アンジユ！説明しなさい！」

アンジユ「知らないわよ！あいつが勝手にやって来て、勝手に去って行ったんだから……！」

エルシャ「はいはい、みんな。まずはドラゴンの相手をしましょう」

ロザリー「そうだ！初物をとつと倒して、ボーナスゲットだぜ！」

クリス「脱走兵を捕まえたとなれば、さらにボーナスも出る……！」

サリア「各機はフォーメーションを！」

あのパラメイル5機……独自在ドラゴンと戦うみたいだな……。

リユクス「あれがヴィヴィアンさんの仰っていたアルゼナルのパラメイル部隊ですね」

朗利「ドラゴン退治のプロのおでましか！」

金本「アンジユとヴィヴィアンも強烈だったけど……」

エンネア「あの人達も全員、クセが強そうだね……」

サリア「こちらはアルゼナルのパラメール第一中隊隊長のサリアです。ジル司令の指示により、これよりそちらを援護します」

協力してくれるのか……？

ネモ船長「了解した。協力を感謝する」

クロ「ネモ船長は、あの子達を事前に手配していたみたいだニヤ」

マサキ「抜け目のねえオツサンだぜ」

零「全くだな」

アンジュ「これ……どういう事よ、サリア？」

サリア「話は後にしなさい。援軍が来るわよ」

またドラゴンが現れ……ちよつと待て！あの機体つて……！

ロザリー「大型か！キヤツシユにしてやるぜ！」

ヒルダ「何だ!!？パラメールみたいな奴がいるぞ！」

ワタル「アンジュさん！あれ、この間の奴だよ！」

アンジュ「あいつ……」

サリア「アンジュ！あのパラメールもどきについて説明しなさい！」

アンジュ「話は後よ、サリア」

サリア「私は、この第一中隊の隊長よ！命令を聞きなさい！」

アンジュ「脱走兵の私にそんな理屈が通じると思う？」

悪い顔してんな、アンジュのやつ……。

サリア「それは……」

アンジュ「そんなに知りたくないなら、一つだけ教えてあげる。あいつの目的は私よ。だから、私が相手をする！私の敵は、私が倒す！」

？「ビルキス……。その存在は許されない……」

俺達はパラメイル部隊と共に戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　ゼロVS？〉

？「前回の戦闘では気付きませんでした……あなたのそのブレスレットは……！」

ゼロ「な、何だ……？あいつ、ウルティメイトブレスレットの事を知っている……？
どうして、アル・ワース出身のあいつが、イージスの事を……？！！？」

？「成る程……伝説の超人様はあの盾をあなたに託したのですね……」

ゼロ「一人で納得してんじゃねえ！お前まさか……あの巨人の事を知ってるのか？！！」

？「ならば、伝説の超人様が認めたあなたの力量を試させてもらいます！」
ゼロ「一方的に話を進めてんじやねえよ！仕方ねえ！俺が勝つたら、話を聞かせても
らうからな！」

ヴィルキスの高機動攻撃で敵のパラメイルにダメージを与えた。

？「不覚……！」

このままではまずいと思ったのか、敵パラメイルは撤退しようとした。

アンジュ「待ちなさい！」

エイサップ「アンジュ！深追いをしたらダメだ！」

アンジュ「あいつには聞かなきゃならない事がある！」

ミラーナイト「だからって、これは罠です！」

アンジュ「そんな事わかってるわよ！それでも……！」

俺達の制止を聞かずにヴィルキスは敵パラメイルを追いかけた。

？「誘いに乗ったか、未熟者め！」

アンジュ「……！」

すると、敵パラメイルはヴィルキスを攻撃した。

アンジュ「しまった！」

しんのすけ「アンジュお姉さん！」

ケロロ「だから、言ったのでありますよ！」

？「ビルキス！覚悟!!？」

ワタル「アンジュさん！」

ヴィルキスを助けようと龍神丸が敵パラメイルの前に立ちはだかった。

？「…！」

夏美「ワタル君！」

ワタル「アンジュさんはやらせない！」

アンジュ「ワタル…」

？「…」

何だ…？動きを…止めた…？

その後、敵パラメイルは凄まじい速さで撤退した…。

ワタル「ふうう…」

シバラク「よくやった、ワタル！お主の気合い勝ちじゃ！」

千冬「お前も成長したな」

アンジュ「ありがとう、ワタル。今日の私……みんなに迷惑をかけてばかりね」

零「何だよ、わかってんじやねえか。てか、今更だろ」

アンジュ「……零、何か言った？」

零「な、何でもございせん！」

ワタル「あ、あはは。気にしないでよ、アンジュさん。僕達、仲間なんだから」

アンジュ「仲間……か……。（あの赤いパラメイルもどきのライダー……私がお母様に教えられた歌と似た歌を知っていた……あいつとは、いつか決着をつけなければならぬ……。それにしても、あいつ……ヴィルキスの事をビルキスって言うけどなまっているの……？）」

ゼロ「（あいつは、イージスの事を知っていた……。だけど、俺がイージスの力を見つけたのはアナザースペースだ……。あいつもアナザースペースの出身……。？いや、あの巨人が訪れた宇宙の出身だという考えもあるな……）」

ネモ船長「（どうやら、あれも、救世主伝説を知る者か……）」

残るドラゴンも倒し、俺達は戦闘を終えた。

ヴィヴィアン「大勝利！」

ロザリー「浮かれてんなよ、ヴィヴィアン」

クリス「あんたとイタ姫に待ってるのは鬼より怖い指令だよ」

ヴィヴィアン「げげっ！忘れてた！」

アンジュ「ヴィヴィアンは私に付き合っただけよ。責任なら、私にあるわ」

ヒルダ「へえ……覚悟はできてるってわけだね、イタ姫」

サリア「では、アンジュ……。あなたをアルゼナルに連行します」

アンジュ「そんな言葉に私が大人しく従うと思う？」

サリア「反抗する気!?？」

ヒルダ「てめえ！あたしら全員を相手にして勝てると思うなよ！」

アンジュ「そんなのやってみなきゃわからないよ」

……え。何でこんな雰囲気になってんだよ!??

アンジュ「少なくともヒルダ……。あなたにはエンジントラブルの借りを返すよ」

エルシャ「アンジュちゃん……」

レイ「ボス……俺達はどうすればいいんだ？」

ヒユウガ「どうすれば……と言われてもな……」

ヒルダ「てめえらも邪魔をするんなら、容赦しないよ！」

零「何でこう血の多い奴らなんだよ……！」

アマリ「待ちなさい……」

アンジュ「アマリ……」

アマリ「私は魔徒教団の術士…。アマリ・アクアマリンです。アンジュさんの件は、私が預らせていただきます」

シモン「(魔徒教団と言えば、アル・ワースの法と秩序の番人だ。これならば、場も収まる)」

グランデイス「やるじゃないか、アマリ。いつものオドオド娘とは思えない堂々とした演技だよ」

ヒルダ「笑わせるんじゃないよ。あたし等は人間じゃない…。ノーマなのさ」

ロザリー「アルゼナルの法はキャッシュユなんだよ！魔法使いサマは引っ込んでな！」

クリス「同情するなら、お金ちようだいよ」

九郎「うるせえ！やる金があるなら俺だって困ってねえよ!!？」

アル「汝は黙っておれ！」

アマリ「あ…。あの…」

ああ…。いつものアマリに戻っちまった…。

ホープス「残念ながら、アルゼナルにはアル・ワースの論理は通用しませんね」

みたいだな。はあ…。仕方ねえ…。

零「やるなら、いいぜ？だが、お前ら、この戦力に敵うとでも、思ってるのか？場合によってはキャッシュユが無くなるぜ？」

メル「れ、零さん…!?」

千冬「煽ってどうするのだ、馬鹿者…」

ヒルダ「いい度胸してんじゃねえか！」

ロザリー「男だからっていい気になるなよ！」

零「じゃあ、俺も女だからと言って手加減はしないぜ」

さあ…どう来る…？

ネモ船長「そこまでだ」

ヒルダ「外野は黙ってな！」

ネモ船長「サリア隊長、私の隊の人間に勝手はやめてもらおう」

サリア「アンジュの事を言っているのですか？」

ネモ船長「その通りだ。彼女の件は、私がアレクトラ司令に直接話す」

ロザリー「アレクトラ？」

クリス「誰それ？うちの司令はジルっていうんだけど…」

サリア「…」

すると、サリアという女のパラメイルに通信が入った。

ジル「聞こえるか、サリア？」

サリア「司令…！」

ジル「状況は把握している。あの男の提案を受け入れろ」

サリア「……わかりました」

ネモ船長「話は、まとまったようだな」

サリア「そちらの提案通り、アンジュの身柄はそちらに預けた上でアルゼナルにご案内します」

ネモ船長「了解した。君達の誘導に従おう……ホシノ艦長もそれでよろしいかな？」
ルリ「はい、構いません」

エレクトラ「では、アンジュさん……。以降は私達の指示に従ってください。安心してください。決して悪いようにはしませんから」

アンジュ「……わかった」

グレンファイヤー「流石のアンジュもネモの旦那には従うってわけか」

アンジュ「そうじゃない……（いざとなれば、強引に逃げればいい……。その前に、あのネモという男の正体を確かめてやる……）」

サリア「……（司令の本当の名前を知っていた、あの男……。一体何者なの……？）」
俺達はサリア達の案内の元、アルゼナルについた。

「ネモだ。」

私は今、アルゼナルの司令執務室でアレクトラ……いや、ジル司令と話をしていた。

ジル「……そちらの申し出は理解した、ネモ船長」

ネモ船長「返答は？」

ジル「いいだろう。アンジュ、ヴィヴィアンを含むパラメール第一中隊をそちらに預ける。あの男が新しい玩具で遊んでいる今こそが、好機だろうからな」

ネモ船長「パラメール隊を直掩とする事で敵航空戦力とも対等に渡り合える」

ジル「本命はアンジュなのだろう？」

ネモ船長「それは君も同じと見る、アレクトラ・マリア・フォン・レーベンヘルツ」

ジル「その名で呼ばれるのも久しいな。あなたが私の前に現れた以上、期待していいのだな？」

ネモ船長「ガーゴイルの背後には、必ず、奴がいる。ならば、我々の敵は共通だ。それなりの戦力が揃った今、機を見て、我々は行動に出る」

ジル「了解した。アンジュの事は、あなたに任せよう」

ネモ船長「我々が次に会う日……」

ジル「その時こそが、新たなリベルタスの始まりだ」

そうだ、この様な所で止まっている場合ではないのだ……。

ーサリアよ。

私達、第一中隊は今、アルゼナルの格納庫にいた。

ヒルダ「マジかよ……」

サリア「司令にからの通達通りよ。本日を以て、パラメール第一中隊はエクスクロスの指揮下に入る事になったわ。報酬は今後、Nーノーチラス号のネモ船長から支払われる事になるそうよ」

ロザリー「それはかまわねえよ。むしろ、アルゼナルから出られるって聞けば、ワクワクしてくる」

クリス「でも、どうしてアンジユが無罪放免なの？」

ヒルダ「無理に付き合わされたヴィヴィアンはともかく、あいつがおとがめなしってのはおかしいだろうが……！」

サリア「司令が決定した事よ」

ヒルダ「ハ……！さすがは司令の飼いだ。あの女が決めた事なら、なんでも従うのかよ」

サリア「それがアルゼナルのルールよ」

ロザリー「ちっ：：胸クソ悪いぜ：：。またイタ姫と一緒にやるのかよ」

クリス「あんな女：：死ねばいいのに：：」

エルシャ「そこまでにしましょう。アンジュちゃんはゾーラ隊長やココちゃん、ミラ
ンダちゃんの事も償いは済ませたのだから」

ヒルダ「だからって、あいつを仲間って認めるわけにはいかねえよ」

すると、アンジュとヴィヴィアンが歩いてきた。

アンジュ「こっちも認めてもらおうなんて思っただけから」

ロザリー「来やがったな、イタ姫」

ヴィヴィアン「みんな、久しぶり！」

エルシャ「お帰りなさい、ヴィヴィちゃん。外の世界で困ってなかった？」

ヴィヴィアン「キャンデイがなくなりそうになった時は焦ったけど、マギーにたっぷり補充してもらったからもう問題なしだよ」

すると、今度はまた違う人達が来た：：。

「新垣 零だ。」

俺達はアルゼナルの格納庫に来た。

メル「失礼します」

ワタル「そつちのお姉さん達がパラメール第一中隊の人達なんだね」

シバラク「いや、結構、結構。一気にエクスクロスも華やかになるのう」

しんのすけ「全くですな〜！」

下心が丸見えだつての。

ヒルダ「何だよ、お前等？」

アマリ「これから一緒に戦う事になるエクスクロスのものです。よろしくお願いしま
す」

ヒルダ「こつちはよろしくするつもりはねえよ」

アマリ「そんなこと言わずにせっかくですから、仲良くやっていきましょうよ」

ロザリー「その声…… あんた、術士サマかよ？」

クリス「想像通り、ウザい」

アマリ「そんな風に言わなくてもいいじゃないですか……」

零「…… 予想通り…… 荒くれ者の集まりだな……」

ヒルダ「お前…… あの時、あたし達に喧嘩を売ってきた男だね！」

零「声で認識する頭は持っているんだな」

ロザリー「何だと!?？」

クリス「何様のつもり？」

零「気を悪くしたなら、謝る。だが、お前等はエクスクロスの指揮下に入った身だ。勝手な行動を起こして、みんなを危険な目に合わすんなら、容赦しねえからな」

ヒルダ「ハ……！ そうならない様に祈りたいね」

シモン「これは仲良くなるのに時間がかかりそうだ……」

冬樹「零さんは物凄く、喧嘩腰ですし……」

ヴィラル「おい……大グレン団のリーダー……。奴らを助けてやれ」

シモン「お、俺は……女の人相手は……」

ヴィラル「そう言えば、お前……ニア姫様はどうしている？」

シモン「……」

ヴィラル「な、何だ、その反応は!?？いつもの気合はどうした!?？」

シモン「放っておいてくれ……」

エルシャ「向こうの方……何だか落ち込んでらっしやるみたいね」

ヒルダ「こんな連中と一緒にやっていくのかよ……」

零「嫌なら抜けりゃいいだろ」

ヒルダ「一々口の減らない奴だね！」

零「お前ほどじゃねえよ」

竜馬「（珍しく零も突つかかるじゃねえか…）」

ワタル「（うん、それに僕達も歓迎されてないね…）」

シヨウ「（話には聞いていたけど、想像以上にやさぐれているな）」

ゼロ「（零が突つかかるのも気持ちが悪くはわからなくてもないぜ…）」

サリア「こちらの隊のメンバーを紹介します。奥からヒルダ、ロザリー、クリス、エルシヤ…」

ヒルダ「…」

ロザリー「けっ…」

クリス「…」

エルシヤ「よろしくお願いします」

サリア「そして私が隊長のサリアです」

チャム「あーっ！チュツチュの人だ！」

… チュツチュ！！？

サリア「チュツチュ！！？」

チャム「ヴィヴィアンが言ってたよ。サリアって真面目だけど、男の人と女の人

チュツチュする本が大好きだつて」

サリア「ヴィ、ヴィヴィアン！あなた、勝手に私の机の引き出しを開けたわね！」

ヴィヴィアン「ごめんなちやいゝ！」

しんのすけ「へい、彼女達！オラの所で楽園暮らしをしない？」

クリス「な、何……こいつ……！……あつ!!？」

ロザリー「ち、近寄んじやねえよ、このクソガキ!……つて、うわつ!!？」

しんのすけのナンパに後ず去つたクリスとロザリーは躓き、コケそうになつたが……

一夏「危ない！」

そんな2人を一夏が支えた。

一夏「大丈夫か？」

クリス「う、うん……」

ロザリー「あ、ありがとよ……」

一夏「怪我がなくて良かったよ」

物凄いイケメン笑顔……

ロザリー・クリス「！」

あれ、あいつら、頬が赤くなってねえか……？

ロザリー「あ、あたし等は全然大丈夫だよ！そつちは!!？」

一夏「俺も何でもないぜ…。それよりもこれからよろしくな、俺は織斑 一夏って言うんだ」

クリス「うん！こちらこそよろしくね、一夏君！」

ロザリー「仲良くしていこうぜ、一夏！」

おいおいおいおい…。さつきとキャラが違うぞ。

ヒルダ「お、おい！ロザリー！クリス！」

シャルロット「むう…。」

簪「一夏…。」

千冬「あいつの人を引き寄せるオーラは異世界の人間にも効くのか…。」

真耶「あ、あははは…。流星は織斑君です…。」

一夏って、元の世界でもこうなんだな。

マサキ「…。寄せ集め集団のエクスクロスにとんだトラブルメーカー達がやってきたようだぜ」

アーニー「このままで大丈夫なのかな…。」

ワタル「ねえ、アンジュさん…。何とかしてよ！」

アンジュ「どうにもならないよ。こいつ等も私も、ノーマだからね。（野蠻で下品で暴力的…。だから、全力で生きる…。誰かを殺してでも…。司令がどんなつもりで私を

無罪にしたかなんて知った事じゃない……！どんな事になろうとも私は生き抜いてみせる……。生命だけが、今の私に残されたものだから……」

俺が言えた事じゃないが…… 今後は荒れそうだな……。

第2話 春日部防衛隊

―新垣 零だ。

俺達はアルゼナルを出て、創界山の攻略を再開しようとしていた。

俺とアマリ、メル、ホープスはナデシコCのパイロット待機室で話をしていた。

メル「そういえば、第一中隊の方達はどうですか？」

アマリ「…あまり、打ち解けてませんね」

零「特にあのヒルダって奴は相当ひねくれもんだな」

アマリ「それにしても、零君があそこまで突っかかるなんて、どうしたの？」

零「別に…特に理由はないよ」

ヒルダ「おいおい、女2人をそばに置くななんて、異界人の男は結構な女たらしなんだな」

… 噂をすれば。

零「そう見えるなら、勝手に言ってる」

ヒルダ「なら、そう呼ばせてもらうぜ、女たらし」

零 「ところで何の用だ？ わざわざ、ボロクソに言われたいが為に来たのか？」

ヒルダ 「それは私じゃなく、お前がボロクソに言われるって事か？」

零 「現実を見やがれよ。えーつと…アサダ？」

ヒルダ 「ヒルダだ！ さつき名前で呼んでたじゃねえか！」

零 「あー、そうだったな…で？ 実際の所、何しに来たんだよ？」

ヒルダ 「これから一緒に戦うお仲間の顔でも見ておこうと思つてな」

白々しい事、この上ないな。

零 「よく言うぜ、仲間なんて言葉を知らないくせに」

ヒルダ 「…てめえ、あたしをバカにしてんのか？」

零 「いや、別にバカにはしていないぞ？ 気に障つたなら、謝る」

ヒルダ 「やつぱりてめえの事は気に入らねえな！」

零 「お前に気に入られたいとも思つてないがな」

ヒルダ 「てめえ！」

すると、ヒルダは俺の胸倉を掴み、睨みつけた。

零 「おいおい、俺にボロクソ言いに来たんじやないのか？ 言葉よりも手が出てんじやねえか」

ヒルダ 「てめえがそうさせてんだろ！？…てめえと一緒にいるその2人も、こん

な男についていくなんて、余程性格が悪い女なんだな！」

メル「あなたという人は……！」

アマリ「それは流石に酷いんじゃないですか？」

こいつ……。

零「おい」

ヒルダ「ああ?!?…っ！」

零「俺の事をバカにしようが構わねえが……アマリ達をバカにするのは許さねえぞ……！」

アマリ「零君……」

メル「零さん……」

ヒルダ「……ハッ！許さねえと来たか……なら、あたしをどうする気だ？」

零「そうだな……どうしてやろうかな？」

ヒルダ「そもそもお前にやれんのかよ？」

零「試してみるか？」

流石の俺達にアマリとメルが止めようと動き出した瞬間……。

しんのすけ「零お兄ちゃん、ヒルダお姉さん……喧嘩してるの？」

……し、しんのすけ……?!?

零「い、いや！喧嘩なんかしてないぞ！」

しんのすけ「そう？」

ヒルダ「… ああ、喧嘩してるぞ」

つ… ！！？こいつ…！

しんのすけ「喧嘩はダメだつて母ちゃんが言つてたゾ！」

ヒルダ「喧嘩はダメか… なら、お前は妹と喧嘩をしないのか？」

しんのすけ「そ、それは… してるゾ…」

ヒルダ「何だよ、お前もしてんじやねえか！喧嘩なんてな… 誰でもする事何だよ！
いずれ、お前も友達と喧嘩をして、友達はお前の事を見限るだろうよ！」

アマリ「ヒルダさん！！？」

零「てめえ、いい加減にしろよ！！？」

いくら、肝が座つてるしんのすけでも、こいつは五歳児だ… そんな子供に友達が見
限るとか言いやがつて… もう許せねえ！！？

ヒルダ「だつてそうじゃねえかよ！」

しんのすけ「そんな事ないゾ！！？」

ヒルダ「… ！！？」

メル「しんちゃん…」

しんのすけ「みんなは……春日部防衛隊のみんなは……オラの事を見限ったりしないゾ！」

零「しんのすけ……」

しんのすけ「ボーちゃんはたまに何を考えてるかわからないけど……石が大好きで、オラと一緒に遊んでくれる！ネネちゃんはリアルおままごとをやらせてくれるけど……オラが困ったらお助けしてくれる！マサオ君はおにぎりで泣き虫だけど……此処ぞつて時は力を合わせてくれる！風間君は……時にはおふざけしあつて、喧嘩もするけど……オラがメキシコへ引っ越した時、怪我をしてもオラの事を見送ってくれたゾ！」

それが……春日部防衛隊……。

しんのすけ「みんな、オラの大切な友達だゾ！そんな風間君達を悪く言うなら、いくらヒルダお姉さんでも許さないゾ!!？」

ヒルダ「……！あたしだって……あたしだって大切な人がいたさ！でも……あたしは1人になったんだよ！」

零「……お前……」

そうか……ノーマだとわかって……。

しんのすけ「……それなら、オラがヒルダお姉さんのお友達、第1号になるゾ！」

ヒルダ「しんのすけ……」

しんのすけ「ダメ？」

ヒルダ「……か、勝手にしろ！」

しんのすけ「だから、零お兄ちゃんも喧嘩はやめて」

零「……ヒルダ、すまない……。俺は何処かお前の人をバカにする態度が気に入らな

かったのかもしれない……」

ヒルダ「良いんだよ、別に……。あたしも悪かったんだ。仲間をバカにした事や女たら

しとか言つてごめん……」

零「お互い様だろ！」

笑い合う俺とヒルダを見て、アマリ達も微笑んでいた。

ロザリー「(あんなヒルダ、初めて見たぜ……)」

クリス「(でも、ヒルダ……何だか楽しそう……)」

エルシャ「(良かった……ヒルダちゃんも何とかやっていけそうね)」

ヴィヴィアン「(そーだね!)」

サリア「(私では纏められなかったヒルダを纏めた……あの零という男としんのすけ

という子……何者なの……?)」

カンナム「此処にいたのか、しんのすけ君」

ゼロ「おい、しんのすけ！助けてくれよ！」

ひまわり「たいやー！」

ゼロ「ひまわりが俺から離れねえんだよ！」

しんのすけ「ゼロが格好いいのが悪いんだゾ！」

ゼロ「そんな事、ランに言ってくれ！」

アキト「探したよ、みんな」

アンジュ「どうしたのよ、アキト、ユリカ」

ユリカ「オモイカネが近くでロボット怪獣が現れたのを見つけたんだって！」

アキト「これより、俺達はその現場に向かうらしい、ネモ船長の許可も得ているよ」

零「わかった、俺達も準備する」

しんのすけ「その前にひまはゼロから離れるんだゾ！」

ひまわり「いやーいやー！」

しんのすけ「嫌だつて」

ゼロ「…か、勘弁してくれ…」

ゼロ「…強く生きろよ！」

第22話 春日部防衛隊

「僕は風間 トオルです。」

僕はマサオ君とネネちゃんとボーちゃんと一緒に公園へ遊びに行こうとしていた時、このどこかわからない場所に跳ばされました。

ネネ「見渡す限り、崖ばかりね……」

トオル「こんな場所じゃ、人はいないだろうね……」

マサオ「えー！そんなあ！」

ボーちゃん「ボー……」

マサオ「どうするのさー！こんなどこかわからない場所に来て！」

ネネ「私達……帰れないの……？」

マサオ「そんなのやだよー!!？」

トオル「みんな落ち着いて！少し探せば、もしかしたら人がいるかもしれないだろ!!」

ネネ「そ、そうね」

マサオ「う、うん… あれ？ボーちゃん、どうしたの？」

ボーちゃん「何か… 来る」

え!!? 何かって…。

すると、僕達の周りにロボット軍団が現れました。

マサオ「ろ、ロボットー!!?」

ネネ「人じゃなくて、ロボットが出て来ちゃった！」

ボーちゃん「もしかしたら、人が乗ってるかもしれない」

トオル「そうだね！声をかけてみようよ！」

マサオ「えー!!? でも、危険だよー！」

ネネ「やってみなければわからないでしょ!!?」

僕達はロボット軍団に声をかけようとしたが…。

それよりも前にロボット軍団が周辺を攻撃し始めた。

ボーちゃん「こ、攻撃した…!!?」

マサオ「ほら、やっぱり危険だよー！」

ネネ「どうするの、風間君！」

トオル「此処は逃げるしか…」

マサオ「でも、何処に逃げるの!!?」

トオル「それは…」

ボーちゃん「また何か来るよ」

すると、今度は二隻の戦艦が現れた…。

↓新垣 零だ。

俺達はオモイカネが示した場所へ向かうとそこにはロボット怪獣軍団がいた。

ネモ船長「オモイカネの言った通りだったな」

ルリ「はい。皆さんは出撃してください」

俺達は出撃した。

ミラーナイト「このロボット怪獣達がいるという事は…」

グレンファイヤー「ああ、焼き鳥と焼き鳥もどきもいるだろうな！」

カンタム「(ミッドナイトは奴等と手を組んでいる… 次に来るロボットは一体なん

なんだ…?)」

しんのすけ「カンタム… どうしたの？」

カンタム「何でもないよ、しんのすけ君」

アーニー「零君、オニキスが出て来る可能性もある、気をつけて！」

零「わかった！」

だが、今回は彼奴らの気配を感じないんだよな……。

マサキ「こいつらが近くの村に行ったら、大惨事だ！絶対に此処で倒すぞ！」

エイサツ「ゼロの仲間が増援として来る可能性もあります！注意していきましよう！」

マサオ「本物のカンタムロボだ！」

ポーちゃん「格好いい……！」

トオル「じゃあ、あれに乗ってるのはジョン君なの……!?？」

マサオ「あれ、風間君。お子様番組は見ないって言ってなかったっけ？」

トオル「ぼ、僕ぐらいならそれぐらいの事も知ってるのさ！」

ネネ「そんな事、今は関係ないでしょ!?？とにかく、早く此処から逃げましょう！」

トオル「まだ、此処を動いたら、危ないよ！」

マサオ「どうして!?？」

ポーちゃん「今動いたら、巻き添いを食うよ」

ネネ「なら仕方ないわね……カンタムが勝つまで此処にいるしかないわね！」

トオル「（後はあの怪獣みたいなロボットが僕達に気づかなければいいんだけど…）」
俺達はロボット怪獣軍団との戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「俺は何をしていたんだろうな… ノーマだと言われて苦しかったのはヒルダじゃねえか… それなのに俺は突っかかって… 自分自身が情けないぜ…」

〈戦闘会話 ヒルダVS初戦闘〉

ヒルダ「零… それにしんのすけ… 友達… か…。アルゼナルにいた時はあんな奴らはいなかったな… でも、あたしはまだ全員と仲良くなれる気はない…。取り敢えず、あたしは生きる事に専念するよ！」

〈戦闘会話 しんのすけVS初戦闘〉

カンナム「ミッドナイトからの増援という事もある… しんのすけ君、注意していこ

う！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！オラは絶対に生きて、春日部防衛隊のみんなとまた会おうんだゾ！」

カンナム「その意気だ！しんのすけ君！」

〈戦闘会話 ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「てめえらの相手をしてる暇はねえ！とつととジャンボットを出しやがれ！」

ロボット怪獣軍団と戦闘を続ける俺達……。

すると、ついにジャンボットとジャンキラーが来た。

ジャンキラー「見つけたぞ、有機生命体」

ジャンボット「有機生命体を抹殺する」

ゼロ「ようやくおでましか！」

レイ「今度こそ、ジャンボットを元に戻すぞ！」

リョーコ「なるほどな、あれがゼロの仲間のロボットってやつか！」

リユクス「洗脳されているとは……可哀想です」

アマルガン「必ず助け出してやらねばならん！」

ハーリー「待つてください！まだ何か来ます！」

すると今度は数機のロボット怪獣軍団とその背後に青色のロボットが現れた。

何処か、カンタムに似ている……？

カンタム「そ、そんなバカな……！！？」

カイザム「久しぶりだな、カンタムロボ」

しんのすけ「あれって……カンタムの！」

カンタム「カイザム兄さん！」

に、兄さん！！？

スカーレット「兄だと！！？本当なのか、カンタム！」

カンタム「あ、ああ。まさか、ミッドナイトに居たなんて……！！」

カイザム「カンタム……ミッドナイトへ戻って来ないか？共にギルギロス大統領の元

で人間を支配しようじゃないか」

カンタム「断る！僕は人間を守ると決めたんだ！」

しんのすけ「カンタム……」

カイザム「ならば、スクラップにしてやるぞ！カンタムロボ！」

ゼロ「ジャンボットを救い出して、お前らの野望は絶対に阻止してやるからな！」

ガイ「そうだ！それがヒーローだ！」

シヨウ「これ以上、敵の増援が来ても面倒だ！」

九郎「一気に片付けるぞ！」

俺達は戦闘を再開した……。

カイザムロボに押されるカンタムロボ。

カイザム「どうした？カンタム……その程度なのか！カイザムパンチ！」

カンタム「うわああっ！！？」

しんのすけ「わああああっ！！？」

チャム「しんちゃん！カンタム！」

エレボス「駄目だよ！このままじゃ負けちゃう！」

カイザム「そうだ、大人しく負けを認めろ。カンタム」

カンタム「くっ……！」

しんのすけ「負けない……」

一夏「しんのすけ……！！？」

しんのすけ「オラ達は負けない!!?」

カンタム「…!しんのすけ君…」

カイザム「ふはははつ!何を言い出すのだ小僧。今のカンタムと俺の力を見ただろう? 圧倒的差があるんだよ!」

しんのすけ「そんな事関係ない!カンタムは絶対に勝つんだゾ!お前なんかよりもカンタムは格好良くって強いんだゾー!!?」

カンタム「…」

ー風間 トオルです。

マサオ「このままじゃ、カンタムが負けちゃう!」

トオル「あ…」

ネネ「どうしたの、風間君?」

トオル「何となくだけどわかつたんだ…あのカンタムに乗ってるのはジョン君じゃない…しんのすけだ!」

マサオ「ええっ?!?しんちゃんが?!?」

ネネ「本当なの?!?」

トオル「わからない…。でも、何処かあいつがみんなの為に戦ってる…。そんな気がするんだ！」

ネネ「風間君…。よし！こうなったら、私達でカンタム達を助けるわよ！」

マサオ「ええー!? そんなの無理だよー！」

ネネ「…。やるだろ？」

ネネちゃんがいつものようにウサギのぬいぐるみを殴ってる…。

つて、あれ？ ボーちゃんは？

トオル「そう言えばボーちゃんは？」

マサオ「あれ？ さっきまでいたのに…。」

ボーちゃん「みんな！ こっちに来て！」

いつの間にあんな所に！

僕達はボーちゃんに呼ばれて、その場所に行くと、目の前にボーちゃんの見た目をしたロボットがあった。

マサオ「こ、これって…。」

トオル「未来のボーちゃんが発明したロボットだよね！」

ボーちゃん「ボー！」

トオル「どうして、それが此処に…。」

ネネ「そんな事、考えるのは後よ！これに乗って戦いましょう！」

マサオ「ええー!!?危ないよ！」

トオル「ボーちゃん、操縦できる？」

ボーちゃん「やってみる」

僕は未来のボーちゃんが作った鉄人ボーちゃん28号に乗り込んだ。

そして、色々、スイッチを弄り、ボーちゃんがレバーを引くと鉄人ボーちゃんが28号が動き出した。

マサオ「動いた！」

ネネ「やるじゃない、ボーちゃん！」

ボーちゃん「ボー！風間君、メインの操縦はお願い！」

トオル「わかった！鉄人ボーちゃん28号…発進!!?」

―新垣 零だ。

しんのすけ「うわああっ!!?」

シャルロット「しんちゃん！」

カイザム「その様な力で俺達に勝とうなど片腹痛い！」

ヒルダ「くっ！しんのすけ！今行くからな！」

零「無理するな、ヒルダ！」

トオル「うおおおっ！」

すると、そこへ金色のロボットがカイザムロボに頭突きを浴びせた。

カイザム「グアアアッ!? な、何…!?」

しんのすけ「あれって… 未来のボーちゃんが作ったロボットだゾ!?」

トオル「大丈夫か、しんのすけ！」

しんのすけ「おー！風間君！」

マサオ「しんちゃん大丈夫!?」

ネネ「助けに来たわよー！」

ボーちゃん「ボー!!?」

しんのすけ「マサオ君にネネちゃん、ボーちゃんも！」

トオル「しんのすけ！僕達も力を貸すよ！」

しんのすけ「ホッホーイ！春日部防衛隊、アル・ワースでもファイヤー、ダゾ！カンタム、操縦をオラに任せて！」

カンタム「わかった！」

カンタムロボと鉄人ボーちゃん28号というロボットは共にカイザムロボに攻撃を

仕掛けた……。

ボーちゃん「攻撃開始！」

マサオ「や、やっぱり、怖いよー！」

ネネ「情けない声を出さないの！」

トオル「みんな、しつかり掴まってて！」

しんのすけ「春日部防衛隊のチームワークを見せるゾ！春日部防衛隊、ファイヤー！！
？」

春日部防衛隊「ファイヤー！！？」

カンタム「まずはカンタムパンチで！」

ボーちゃん「パンチ！」

カンタムパンチで攻撃したカンタムロボに続き、鉄人ボーちゃん28号かパンチを浴びせる。

ネネ「まだまだ行くわよ！やあああああつ！」

こんどは鉄人ボーちゃん28号がカイザムロボを投げ飛ばし、その先にカンタムロボがカンタムミサイルを放つ。

マサオ「ご、ごめんなさいごめんなさい！」

爆煙の中に鉄人ボーちゃん28号が突っ込み、キックを浴びせる。

しんのすけ「トドメは同時に決めるゾ！」

トオル「合わせろよ、しんのすけ！」

最後に右側からカンタムロボ、左側から鉄人ボーちゃん28号がそれぞれ、拳を構え、加速した。

春日部防衛隊「春日部防衛隊……ファイヤーアタック!!？」

カイザム「ぬあああつ！ば、バカな……！」

交差する様にカイザムロボを殴った2機にカイザムロボは大ダメージを負った。

カイザム「ど、何処にこんな力が……！」

しんのすけ「これがオラ達、春日部防衛隊のハマーだゾ！」

マサオ「それを言うなら、パワーでしょ！」

トオル「そちらの皆さん！僕達も力を貸します！」

簪「でも……」

ネモ船長「了解した」

エレクトラ「船長……!!？」

ネモ船長「彼等のやる気を損ねてはダメだ……。子供の君達に頼るのは情けないが……私達に力を貸してくれないか？」

ネネ「わかりました！」

ボーちゃん「まだまだ行くよ、しんちゃん！」

しんのすけ「ホッホーイ！それじゃあ、始めるゾ！」

鉄人ボーちゃん28号を仲間に引き入れ、俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 トオルVS初戦闘〉

マサオ「ヒーツ!!? やっぱ怖いよー！」

ネネ「今更何ビビってるのよ、ビビりおにぎり！」

ボーちゃん「風間君、サポートは任せて！」

トオル「うん、わかった！僕達も僕達で戦おう！」

〈戦闘会話 ゼロVSジャンボット〉

ゼロ「元に戻れ、ジャンボット！エメラナが待っているんだぞ！」

ジャンボット「有機生命体を抹殺する」

ゼロ「くそッ！やっぱり届かねえか……！だが、俺は絶対にお前を取り戻す!!?」

〈戦闘会話 しんのすけVSジャンボット〉

カンナム「仲間を失うのは辛い事だ……」

しんのすけ「それなら、オラ達がゼロとジャンボットをお助けしないと！」
カントム「そうだね、やろう！しんのすけ君！」

〈戦闘会話 トオルVSジャンボット〉

マサオ「あのロボット……操られてるみたいだよ！」

ネネ「だったら、気合いで元に戻してあげるわよ！」

ポーちゃん「気合いでどうにかなる問題じゃないよ」

トオル「でも、それであのロボットが苦しんでるなら、春日部防衛隊が助けないと！
すぐに戻してあげるから、待ってて！」

〈戦闘会話 ゼロVSジャンキラー〉

ジャンキラー「今度こそ、此处で抹殺する」

ゼロ「やってみやがれよ！お前を銀河の彼方まで吹っ飛ばしてやるぜ！覚悟しろよ
！」

〈戦闘会話 しんのすけVSジャンキラー〉

ジャンキラー「我々に楯突くものは破壊する」

カンタム「本当は君と話がしたいのだが……」

ジャンキラー「話などしても無駄だ」

しんのすけ「人の話を聞かないなんてロクな大人にならないゾ！」

ジャンキラー「そもそも大人とかない」

カンタム「ならば、動きを封じさせてもらうぞ、ジャンキラー！」

〈戦闘会話 トオルVSジャンキラー〉

ジャンキラー「子供といえど容赦はしない」

トオル「あ、あのロボット……強い！」

ネネ「でも、反撃の機会はあるわよ！」

ボーちゃん「僕の鉄人ボーちゃん28号は負けないからね」

マサオ「これって、未来のボーちゃんのロボットじゃなかったっけ？」

トオル「あーもう！みんなちよつと黙って！集中できないよ！」

ジャンキラー「まるで素人だな……一瞬で潰してやる……」

何とか、ジャンボットの説得を試みる俺達であったが、ジャンボットが止まる気配が

なかった。

ジャンボット「有機生命体を抹殺する！」

ヒルダ「なっ!!？」

すると、ジャンボットは手を飛ばし、ヒルダの乗るグレイブを掴み、地面に叩きつけた。

ヒルダ「かはっ…！」

ワタル「ヒルダさん！」

シバラク「これはマズイぞ…！」

グランデイス「早く逃げな、ヒルダ！」

ヒルダ「グレイブが…動かねえ…！」

ケロロ「なんですと!!？」

夏美「今ので壊れたの…!!？」

零「待ってろ、ヒルダ!今行く！」

ジャンキラー「させない」

だが、ヒルダを助けようとした俺にジャンキラーはビームを放ってきた。

零「うわあああああつ!!？」

サブロウタ「零！」

メル「零さん、ご無事ですか!!?」

零「な、何とかな...!」

だが、結構なダメージが...

ジャンキラー「丁度いい、ジャンボット。お前はその有機生命体を排除しろ。僕はこちらの有機生命体を排除する」

ジャンボット「了解」

ヒルダ「ま、マジかよ...!」

零「くっ...!」

アマリ「零君! ヒルダさん!」

アンジユ「何してんのよ、二人共! 早く逃げなさいよ!」

ヒルダ「うるせえ! 逃げれたら、逃げてるんだよ...!」

くそツ:...! 今のダメージでゼフィルスも動かねえ...!

ジャンボットはアックスを持ち、ジャンキラーはビームを放つ体制を取った。しんのすけ「零お兄ちゃん! ヒルダお姉さん!」

ジャンボット「抹殺する!」

エメラナ「やめて、ジャンボット!!?」

千冬「エメラナ姫!!?」

冬樹「危険です！」

エメラナ姫がナデシココから出て、グレイブとジャンボットの間に入っていった…
!??

ゼロ「エメラナ!?？」

ミラーナイト「姫様!!？」

ヤバイ！ジャンボットがアックスを振り下ろした…！

ヒルダ「何やってんだ、逃げろ！」

エメラナ「やめなさい!!？」

アックスは振り下ろされた……が…。

ジャンボット「！」

動きを…止めた…!??

って、ジャンキラーってやつも動きを止めて、エメラナ姫を見ている…？

すると、今度はジャンボットが自らの動きに抵抗しているような動きを見せた。

ジャンボット「ひ…姫、さま…」

エメラナ「ジャンボット…!?？」

そのまま、ジャンボットは機能は停止した…。

ジャンキラー「撤退する…」

それを見たジャンキラーは撤退していった……。
レイ「いったい……何があつたんだ……？」

……つ、ゼフィルスが動けるようになった……。

ヒルダ「……動く！」

グレイブも動けるようになったみたいだな……。

そのままグレイブはエメラナを手の平の上に乗せ、ナデシココまで運んだ。

ヒルダ「全く、無茶しすぎだぜ、姫さん」

エメラナ「すみません……」

ヒルダ「別に謝れとか言つてねえよ。でも……ありがとうな」

エメラナ「……！いえいえ！」

カイザム「この程度か……ジャンボットも……エクスクロスと共に抹殺してやる」

ゼロ「そんな事絶対にさせるかよ!!？」

カンナム「カイザム兄さん！僕があなたを止める！」

カイザム「やってみろ、我が弟よ!!？」

〈戦闘会話　しんのすけVSカイザム〉

カイザム「カンタム！人類は自らの手で世界を滅ぼそうとしているんだぞ！」

カンタム「全ての人類がそうしているわけではないのだ！」

カイザム「ふふっ… 相変わらず甘いな、カンタム。人類が生きている事こそが自然破壊に繋がるのだ！」

カンタム「カイザム… それは違うんだ！」

カイザム「どうやら… 俺とお前には見た目以上に大きな隔たりがあるようだな！行くぞ、カンタム！」

カンタム「カイザム…！」

しんのすけ「迎え撃つぞ、カンタム！」

カンタム「ああ…！」

〈戦闘会話 トオルVSカイザム〉

カイザム「人類の子供如きが俺の邪魔をするな！」

マサオ「カンタムのお兄さんが来るよ！」

トオル「僕達じゃ敵わないとしても… 足止めぐらいはできる！」

〈戦闘会話 ゼロVSカイザム〉

カイザム「ウルトラマンゼロ… エンペラ星人は元気か？」

ゼロ「何故、お前がエンペラ星人の事を…?!？」

カイザム「ギルギロス大統領とエンペラ星人は旧知の仲なのだ」

ゼロ「エンペラ星人なら俺の先輩のメビウスが倒した！」

カイザム「そうか… ならば、ウルトラ一族の力を試してやろう！」

ゼロ「良いぜ！俺の攻撃を受けて、オーバーヒートすんじゃねえぞ！」

カンタムロボは正常合体をして、ハリセンアタックでカイザムロボに大ダメージを与えた。

カンタム「どうだ！カイザム!!？」

カイザム「くくくつ… 少々、お前達を見くびっていたな… 次はこうはいかんど、カンタム!!？」

そう言い残し、カイザムロボは撤退した…。

カンタム「カイザム…。」

しんのすけ「カンタム… 大丈夫？」

シロ「ワン？」

カンタム「ああ、心配ないよ、しんのすけ君、シロ君。(カイザム)…僕はどれだけ言われようと人類の味方として戦う…それが、僕の使命なんだ…！」

その後、俺達はロボット怪獣を全滅させた…。

真上「今ので最後までな」

海道「何だよ…つまんねえな！」

エンネア「今ので充分だよ…」

朗利「兎に角、今はあのジャンボットってロボットの何を調べようぜ」

金本「その方がいいかもね」

エメラナ「ええ、行きましよう…。ジャンボットの中へ…何かわかるかもしれませ
ん」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、ゼロ、グレンファイヤー、ミラーナイト、レイさん、ヒュ

ウガボス、エメラナ姫はジャンボットの中へと入っていった……。

残る俺達はしんのすけと春日部防衛隊のみんなとの再会を見ていた。

しんのすけ「みんな！よっ！」

トオル「よっ！じゃないだろ全く……」

ボーちゃん「しんちゃんも元氣そうで何より」

マサオ「ひまわりちゃんとシロもいたんだね！」

ひまわり「たいや！」

シロ「ワン！」

しんのすけ「所でどうしてみんな、アル・ワースに来たの？」

トオル「わからないよ。僕達、公園で遊ぼうと走り出した瞬間に周りの景色が変わったんだ」

ネネ「ねえ、しんちゃんのパパとママはいないの？」

しんのすけ「いないゾ。全く……勝手にどこほつき歩いているのか……」

マサオ「どちらかと言うと、いなくなったのはしんちゃんの方じゃない？」

しんのすけ「いやー、それほども〜」

トオル「褒めてない！」

この子達がしんのすけの友達か……。確かに、この子達ならしんのすけを見限ること

はないな。

ヒルダ「…」

零「どこ行くんだよ、ヒルダ？」

ヒルダ「感動の再会なんだ… 邪魔したら悪いだろ」

零「それもそうだな」

ヒルダ「零…」

零「ん？」

ヒルダ「ありがとうな… ノーマであるあたしを助けようとしてくれて…」

零「でも、結果的にはお前と俺を助けたのはエメラナ姫だ。礼ならエメラナ姫に言おうぜ」

ヒルダ「でも、お前があたしを助けようとしてくれた事には変わりない… だから…」

… 何で、顔を赤らめる。

ヒルダ「あ、あたしと！友達になってくれ！」

… はい？

零「… ぷっ！あはははっ！」

ヒルダ「わ、笑うな！」

零「悪い悪い！わかった、なら俺は… 友達第2号って事だな」

ヒルダ「第一号はしんのすけだからな」

零「じゃあ、友達として！改めてよろしく頼むぜ、ヒルダ」

ヒルダ「ああ」

俺とヒルダは笑顔で握手をする。

アマリ「零君？どうして笑顔でヒルダさんと握手してるの…？」

メル「も、もしかしてお二人は… そう言う関係なのは…！」

零「バカ！違う！こいつとは友達だ！」

ヒルダ「ああ、そうだな…。 ってか、あたしはまだ全員と慣れ合う気はないからな」

メル「なっ?!? またあなたは…！」

出た、照れ隠しの人を小馬鹿にする様な笑み…。

そう言いながら、ヒルダはアマリとメルの間を通り抜けようとした…。

ヒルダ「安心しな、お前らの男は取る気はねえからよ」

アマリ・メル「へえあつ?!?」

…？ 何で、ウルトラマンの掛け声みたいな声上げるんだよ。

そのままヒルダは歩き去ってしまった…。

アマリ達を見ると顔を赤くする始末… 何なんだよ、いったい…。

ーウルトラマンゼロだ。

俺達は機能が停止したジャンボットの中へと入った。

ゼロ「久しぶりだな、ジャンボットの中に入るのも……」

エメラナ「パワーコンジェッタが何本も焼焼き切られてる!」

ジャンボット「ひ……め……姫……様……姫様」

エメラナ「ジャンボット!?」

ジャンボット「自分で切ったのです……。敵のコントロールを断ち切るために……」

ヒユウガ「敵とは……誰だ!?」

ジャンボット「お許しください、姫様……。敵のコントロール下にあったとはいえ、私

は……あなたをこの手で……!」

エメラナ「あなたに非はありません!」

ジャンボット「あ……私は何と言う過ちを……この罪、万死に値します!」

グレンファイヤー「なんか、テイエリアちゃんみたいな事言ってる……」

ミラーナイト「あなたは黙っていてください」

グレンファイヤー「何をお…?」

邪魔だな、こいつら…。

エメラナ「ジャンボット! 懺悔なら後で聞きます!… 敵とは何者です!?!?」

ジャンボット「はい。ビート・スターです」

レイ「ビート… スター…?」

ヒュウガ「何者だ、そいつは?」

ジャンボット「この天球のマスターコンピューター… というより、天球そのものだ…。 奴は、異なる宇宙をいくつも旅して来た…。 同時に… その宇宙の有機生命体を抹殺しながら…」

それが… ビート・スター…。

ジャンボット「ビート・スターは… 有機生命体を敵だと思っている…。 奴は、殺戮兵器として、僕となるロボット達を集め、武器と特性を融合し、宇宙最強のロボットを誕生させた…」

ゼロ「それがまさか…!」

ジャンボット「そう… あの、ジャンキラーだ。私をベースモデルにあいつは作られた…。 おそらく… 私の優秀な人工知能を… コピーされました…」

グレンファイヤー「自分で優秀とか言っちゃってる」

ゼロ「黙れって」

ミラーナイト「おすわりです」

グレンファイヤー「つて、うおおい!?俺は犬か!?」

ヒュウガ「… 待てよ、そう言えばあの時… ジャンキラーもエメラナ姫… 君の声で活動が停止した」

ゼロ「言われてみれば…！」

エメラナ「本当ですか!?」

ヒュウガ「一瞬だが、間違いない」

ジャンボット「私と同じ人工知能が… 姫様の声に反応したと…？」

ヒュウガ「そう考えれば、合点が行く。君達はいわば、兄弟ロボットだ」

ジャンボット「… 兄弟、ロボット…」

エメラナ「あのロボットには… 心が…！」

その後、俺達は一度、ナデシコCに戻り、ジャンボットを乗せて、この事をみんなに話した…。

第23話 勇者特急、到着

ーレイだ。

俺とボス、エメラナはジャンとドクターウエストに手伝ってもらいながら、ジャンボットの修理を行なっていた。

レイ「頼む」

俺はエメラナから修理道具を要求するが、いつまでも渡されないので振り返る。

レイ「どうした？」

エメラナ「すみません…」

エメラナから修理道具を受け取り、俺は再び修理を再開する。

レイ「…ジャンキラーの事か？」

エメラナ「…えっ…？」

レイ「実は俺も… 奴とは同じような境遇だね。けど、俺は暴走を克服できた…。仲間達との… 絆のおかげだね」

エメラナ「…」

ジャンボット「プログラム修復の為……人工知能の再起動に入る。地球人、くれぐれも……姫様に無礼のないように」

え……!!?

レイ「え、あ、お、ちよつ……！」

そのまま、ジャンボットは話さなくなつた……。

ウエスト「勝手な人工知能なのである」

ヒュウガ「おいおい！次の作業は？」

ジャン「地道にやっけて行くしかないですね……」

ヒュウガ「……はあ……」

こんな時……クマさんがいてくれたらな……。

ー新垣 零だ。

俺達はN-1ノーチラス号の格納庫でヒルダを除く第一中隊メンバーと話していた。

ロザリー「次やってくれよ、次！さらにすげーやつをよ！」

ヒミコ「了解なのだ！ヒミコミコミコヒミコミコ！忍法・花畑の術！ほれ！」

… 凄えな。

クリス「すつごーい！すごすぎる！」

エルシャ「あらあら、綺麗なお花ねえ」

サリア「よろしければ、術士様も魔法を見せてくださいませんか？」

アマリ「わ、私…あの手の派手なドグマはあまり得意ではないんで…」

サリア「そんな事おっしゃらずに」

アマリ「で、では… ちよつとだけ… やつてみますね…。 風よ、春を運んで…！」

FL O S !

… 何も起こらねえな…。

サリア「え…」

ロザリー「何も起きねえぞ、おい」

クリス「失敗って事…？ダサ…」

アマリ「… だから、苦手だつて言つたじゃないですか…」

零「ドンマイドンマイ、次、頑張ろうぜ」

俺は拗ねるアマリの頭をポンポンと叩き、慰める。

アマリ「もう… 零君つたら…」

メル「(良いですね… 頭、ポンポン)」

サリア「だ、大丈夫です、術士様！私… 次の機会を楽しみにさせていただきます！」
アマリ「あ、ありがとうございます…。次までには、うまくなっておきますね…。それとサリアさん…。お話しした通り、私は教団を抜け出した身ですので、普通に接してください」

サリア「いえ！私にとって術士様は術士様ですから！」

ワタル「サリアさんって本当に魔法使いが好きなんだね」

ホープス「（この興味の示し方…。少し調べてみる必要があるかも知れませんね）」

クリス「ねえ、零は何かできないの？」

俺にきたか…。

零「悪いな、俺は何にもできないぞ？」

ロザリー「何だよ、つまんねえな…」

ほーう…。

零「なら、これはどうだ？」

俺はバスタードモードを発動させる。

エルシャ「赤い瞳…!?」

ロザリー「おおー！」

クリス「か、格好いい！」

零「ぎつとこんなもんだ」

メル「バスタードモードを特技の様に披露しないでください!」

零「ごめんごめん」

すると、ヒルダがやってきた。

ヒルダ「何やってんだよ、お前等?」

ヴィヴィアン「あ…ヒルダも来た!」

なーんか、不機嫌そうだな…。

ロザリー「凄いんだぜ、ヒルダ! ヒミコの忍法!」

クリス「それに聞いた? ホープスに頼めば、どんな服も作ってもらえるんだって」

ヒルダ「たった三日で余所者に尻尾ふってんじゃねえよ!」

クリス「だって…」

ロザリー「そういうヒルダだって、昨日の夜、零と楽しく話してたじゃないか!」

ヒルダ「そ、それは…!」

メル「え!?」

アマリ「零君…2人で何してたの?」

零「話してただけだって…やましい行為は何もしてねえよ!」

アンジュ「言った通りでしょ、ロザリー、クリス。この部隊は異界人混じりで構成さ

れてるから、ノーマも差別されないって」

ロザリー「イタ姫の言う事だから、当てにならねえと思ってたが、まさか本当だとはな」

サリア「そうね。エレクトラさんは、私達の戦術を尊重してくれるし、パラメイルの整備も他の機体と同じようにしてくれる」

エルシャ「私、ナディアちゃんとマリーちゃんにお料理を教える約束しちゃった」

クリス「マーベルやグランデイスはお化粧のやり方を教えてくれた」

ヒルダ「お前等…」

零「そろそろ、お前もみんなの輪に入ったらどうだ？」

ヒルダ「大きなお世話だよ」

アマリ「この後、みんなでお茶するんですけど、ヒルダさんも一緒にいかがです？」

ヒルダ「うるせえ！仲良しゴッコにあたしを巻き込むじゃねえよ！」

零「おい、ヒルダ…」

アマリ「仲良しゴッコって…ちよつとひどくありません？」

…おいおい。

ヒルダ「カマトトが怒りやがったか。法と秩序の番人サマが聞いて呆れるぜ。ベッドで可愛いがってやれば、さらに素の顔が見られるかもな」

：俺は何も聞いていないぞ。

アマリ「ワ、ワタル君やしんちゃん達の前で何を言ってるんですか!!?」

ヒルダ「意外にウブなんだね、術士サマは」

アマリ「もうダメ：：零君、助けて：：」

零「何故、俺に振る」

ワタル「ヒルダさんは僕達と仲良くしたくないの？」

ヒルダ「当たり前だろうが！」

しんのすけ「オラと友達じゃないの？」

ヒルダ「そ、そんな事はないけどよ：：！」

零「情緒不安定かお前は」

ヒルダ「う、うるせえ！」

零「痛つ!??殴んなって!??」

ワタル「ヒルダさん、ケンカばかりしてると疲れちゃわない？」

ヒルダ「そ、それは：：」

ワタル「だったら、しんちゃんや零さんだけじゃなく、僕達とも仲良くしようよ。遊んだり、オヤツ食べたりするのもみんなで作った方が楽しいに決まってるから」

ヒルダ「う、うるせえ：：！」

あー、逃げた……

ワタル「ヒルダさん……」

零「あの照れ屋も相当だな」

アンジュ「放っておきなよ、ワタル。あんなひねくれ者は」

ワタル「ひねくれてるって言えば、アンジュさんだって似たようなものだよ」

アンジュ「そ、そう……!?」

ワタル「でも、今はこうやって仲良く旅をしているじゃない。だったら、ヒルダさんだって」

アンジュ「……そうだね」

メル「さすがは救世主ワタル君です。アマリさんのお説教なんかよりも、ずっと効果的です」

アマリ「……返す言葉ありません……」

零「後の事はおれやしんのすけに任せろ」

ワタル「うん！」

ロザリー「大したもんだぜ、ワタルは。猛獣使いにでもなれるんじゃないのか」

アンジュ「それ、どう言う意味よ、ロザリー！」

マサオ「あはは！ アンジュさんって、確かに虎やライオンみたいだもんね！」

サリア「この子達の笑顔にアンジュとヒルダも毒気が抜かれるのね……」
トオル「……」

サリア「どうしたの？ 風間君」

トオル「サリアさんって……もしかして、魔法少女が好きなんですか？」

サリア「……！ど、どうして……？！」

トオル「実は僕も好きなので……みんなには内緒にしていますけど……」

サリア「あなたとは仲良くやっていけそうね！」

ネネ「ねえねえ！ 女の子に囲まれた学校はどう？」

一夏「最初は動物園のパンダみたいな感じだったけど、もう慣れたよ」

ネネ「一夏さんって好きな人とかいるの？」

一夏「いないよ。俺なんか、釣り合わない子達ばかりだよ」

ネネ「……へえ。これは良いのが書けそう……！」

ボーちゃん「これは……苦労する予感……」

エルシャ「でも、ワタルちゃん達……子供なのに戦うのは怖くないの？」

クリス「あたし達、ノーマは小さい時から戦う訓練を受けさせられてきたけど、あんなは、この前まで普通に生活してたんでしょ？」

ワタル「大丈夫だよ。だって、僕は救世主なんだもん」

しんのすけ「オラ達も春日部を守る春日部防衛隊だから、大丈夫だゾ！」

ヒミコ「ワタル、しんちゃん、偉い！ワタル、しんちゃん、立派！」

ワタル「ありがとう、ヒミコ」

トオル「僕達、これでも何度も世界を守ってるんですよ」

ヴィヴィアン「それは、しんちゃんから聞いたよ」

アマリ「前から思ってたけど、その誇りだけで戦えるなんて素晴らしいです」

零「しんのすけ達の場合、世界がぶっ飛んでるけどな……」

ワタル「へへ……僕には憧れのヒーロー達がいるからね。それを見習ってるのさ」

零「ヒーロー……か？」

ガイ「何だ？ワタルの世界にもゲキガンガーがあつたのか？」

ワタル「違うよ。僕の世界にいた正義の味方だよ。その二人は全国の子供達の憧れ

だつたんだ」

アマリ「正義のヒーロー……。とてもステキですね、それ……」

シヨウ「何だかんだでアルゼナル組も馴染んできたみたいだな」

エイサップ「これで連携の方も大丈夫そうだな」

零「お疲れ、シヨウ、エイサップ。偵察の方はどうだった？」

シヨウ「エレクトラさんには、もう報告したが、この先の村が山賊の被害にあつてるっ

て話を聞いてきた」

あ……デシヤヴだ。

アンジユ「また、それ!?？」

ワタル「つて事は……！」

零「ドアクダー軍団の可能性があるな、これは……」

エイサツプ「行くなら、案内するよ」

メル「お願いします！」

俺達は山賊の被害を受けている村へ向かった……。

ーよお、サンソんだ。

俺とハンソンは今、山賊の被害にあっているとされている村で姐さん達を待つていた。

サンソン「しかし、わからねえよな……」

ハンソン「何が？」

サンソン「ネモの事だよ。この間のアルゼナルの事や、NーNーチラス号の進路について何の説明もねえし」

ハンソン「まあ……ノーチラス号の時からそんな感じだったけどね……」

サンソン「かと思えば、ワタルには妙に甘くねえか？この山賊の調査だって最初は無言だったのにワタルが提案したら、すぐに部隊を派遣したしよ」

ハンソン「あれじゃないか？ワタルの事を子供のように思ってるとか……」

サンソン「あのネモが人の親ね……。あんまり想像できねえな……」
すると、姐さん達が戻ってきた。

↓新垣 零だ。

聞き込みを終えた俺達はサンソンさんとハンソンさんのところへ戻ってきた……。

グランデイス「留守番、ご苦労さん。一通りの聞き込みはしてきたよ」

ハンソン「で、どうでした、姐さん？山賊の方は」

グランデイス「それがさ……。どうもドアクター軍団とは別物らしいんだ」

サンソン「別物……？」

ワタル「うん……。村に脅しをかけてきたメカは魔神よりも、ずっと、大きかったみた

「い」

ハンソン「オニキスでもないの？」

零「あいつらの気配はしないので、多分、違います」

メル「……前々から思っていたのですが、零さんはどうして、オニキスが来る事を感じ取れるんですか？」

零「さあな……俺もわからないんだ」

アマリ「(時より零君が見るっていう記憶……それが零君とどの様な関わりが……)」

シバラク「正体不明の謎の敵……。もしかすると異界人も知れんな」

九郎「異界人が悪さをしてるって事か……」

リチャード「的の詮索は後回しにしても急がなければならんな……」

サヤ「この村の学校の先生が一人で話をつけるといって山賊のアジトへ向かったそうです」

ハンソン「シモンみたいだな、そいつ……」

ハンソン「でも、ただの学校の先生なんだよね。そりやマズインじゃない？」

アーニー「だから、急がないとダメなんです！」

すると、一人の少年が現れた。

？「……その通りですね。事態は一刻の猶予もないでしょう」

竜馬「誰だ？」

？「名乗る程のものではありません。敢えて言うならば、通りすがりの正義の味方……とでも」

しんのすけ「……！」

？「……君、何処かで会わなかったか？」

しんのすけ「……わからないゾ」

？「そうか、ごめんね。変な事聞いて……」

ワタル「通りすがりの……」

零「正義の味方……」

？「その先生の事は僕に任せてください。では……」

アマリ「あ、すいません！ちよつと待ってください！」

？「すみません。時間が惜しいので失礼します」

そう言い、少年は歩き去って行った……。

海道「何だ、あいつ……」

ワタル「か……か……か……格好いい！ハツキシ言つて、超スーパーメチャクチャ

カツコイイぜ!!？」

アキト「まるでヒーロー番組の主人公の様な子だったね」

零「まだ若いのに風格っていうか、貫禄っていうか……独特の雰囲気があるやつだったな」

千冬「感心している場合か！あの少年一人に何ができると言うんだ！」

アル「その通りだ！早く、NーNーチラス号とナデシコCに連絡をとって先生とやらを救いに行くぞ！」

俺達は先生を助ける為に動き出した……。

第23話 勇者特急、到着

ヨー……ごほん！ヨマコよ。

私は今、村を襲う山賊達の元へ向かっていると、山賊達のガンメンが出現した……。

ミフネ「行くぞ、者共！年貢の撤収に応じぬ村人にこのシヨーグン・ミフネの威光を思い知らせてやれい！」

ビトン「何が年貢よ……。単なる強盗じゃないの、これ……」

ミフネ「何を言う、こそ泥女！この世界で生きていくためには必要な事なのだ！」

ビトン「あたくしは誇り高き怪盗ピンクキャットなの！こんな山賊みたいな真似は耐えられないのよ！」

ミフネ「黙れ、黙れい！このアル・ワースに真の江戸を築くためにも今は耐えねばならぬのだ！」

ビトン「何なのよ、その真の江戸というのは！そんなの全然オシャレで可愛くもない！」

ミフネ「貴様、このシヨーグン・ミフネの大望を愚弄する気か!?」

ビトン「笑わせてくれるじゃない！今のあんたは、シヨーグン・ミフネじゃなく、ローニン・ミフネよ！」

ミフネ「ぬうう……。！言わせておけば……！」

ビトン「訳のわからない世界に跳ばされてやむを得ず手を組んだけど、やっぱり無理だったみたいね……。！」

オードリー「カトリーヌ様……。お取り込み中、申し訳ありませんが、何者かが、こち

らに來ます」

よし、こうなつたら、言つてやるわよ！

ヨマコ「私の声が聞こえる、山賊達！」

ミフネ「女！名を名乗れ！」

ヨマコ「私の名前はヨマコ。あなた達が脅しをかけている村にある小学校の先生よ。今すぐ村の皆さんに謝罪し、その後、この地から立ち去りなさい！」

ビトン「言つてくれるじゃないの。そんな言葉をあたくし達が聞くと思つて？」
考え通り、言う事は聞かないわね。

ヨマコ「… やつぱりね。悪党を言葉でいさめるのは無理みたい」

ミフネ「ならば、どうする？七人のサムライでも集めて、村を守るつもりか？」

ヨマコ「その必要はないわ…。私一人でも、あなた達を倒す！」

そう言い、私はスナイパーライフルを敵に目掛けて打ち、直撃させた…。

ミフネ「ぬおっ!?？」

ビトン「手持ちのライフルで、あの距離を撃ち抜くなんてやるじゃないの！」

ミフネ「よくもやつてくれたな、女！我が輩を誰だと思つている!?？」

あの男…！

ヨマコ「その台詞をあんたのような卑劣な男が使うのは許さない！たとえば、途中で力

尽きようとこの生命が続く限り、あなた達と戦つてみせる！」

？「その覚悟……！俺達が引き継ぎます！」

そこへ、戦闘機と三機の巨大ガンメンが現れた。

「やあ、俺は嵐を呼ぶ旋風寺 舞人だよ。」

俺達、勇者特急隊は山賊達に脅されているムラがあると聞き、この村に来て、今は出撃している。

舞人「勇者特急隊、ただ今到着！」

ミフネ「な、何っ!?？」

ビトン「嘘！勇者特急隊の坊やもアル・ワースに来ていたの!?？」

舞人「見ての通りだ！」

バトルボンバー「シヨーグン・ミフネと怪盗ピンク……。別の世界に来てても悪事を働いているとはな」

ガードダイバー「同じ世界から来た者として、見過ごすわけにはいきません！」

舞人「ヨマコ先生、後は俺達に任せてください」

ヨマコ「ありがとう。あなたになら任せても大丈夫そうね」

舞人「美人の信頼を裏切るような真似はしませんよ。この旋風寺 舞人の名に懸けてもね」

ヨマコ「ふふ…じゃあ、後はお願いな」

そう言い残し、ヨマコ先生は村へ戻っていった…。

ビトン「な、何よ！美人なら、ここにもいるのに！」

ミフネ「格好つけても、今のお前に何ができるといふのだ!?」

舞人「果たして、どうかな？」

ビトン「相変わらず、小僧らしい！キャットガールズ、やっておしまい！」

ミフネ「行け、影の軍団よ！勇者特急隊を切り伏せよ！」

バトルボンバー「つてな事を言ってるぜ、舞人」

ガードダイバー「予想通り、話し合いでは終わらないですね」

舞人「ならば、受けて立つ！正義は…勇者特急隊は負けてはならないんだ！」

ガイン「了解だ、舞人！マイトウイングでフォローを頼む！」

舞人「よし！前線は任せるぞ、ガイン！勇者特急隊、攻撃開始！まずは手下のロボットを叩くんだ！」

俺達は戦闘を開始した…。

敵の数を減らし行く俺達……。

ガイン「よし……！こちらの方が優勢だ！」

舞人「気をつけろ、ガイン！何か来るぞ！」

バトルボンバー「あのロボット……飛龍だ！」

舞人「エースのジョー！お前もアル・ワースに来ていたのか！」

ジョー「それはこちらの台詞だ、旋風寺 舞人。これで俺も、少しはこの世界を楽しめるといふものだ」

ミフネ「ジョー！貴様、何しに来た!?？」

ジョー「爺さん二人に頼まれて、あんた等に援軍を届けに来ただけだ。だが、旋風寺

舞人がいるなら、話は別だ！ここからは俺の好きにやらせてもらう！」

舞人「ジョー！お前という男は、こんな所にまで来て、俺と戦うというのか！」

ジョー「お前の信じる正義とかいふものを徹底的に叩き潰す……！それが俺の望みだ！」

ガイン「舞人！まだ何か来るぞ！」

現れたのは二隻の空中戦艦だった……。

「新垣 零だ。」

俺達は村を守る為に戦っているロボットを援護する為に駆けつけた。

ガードダイバー「空中戦艦…?!?!」

バトルボンバー「新たな敵かよ！」

ワタル「勇者特急隊のみんな！僕達は味方だよ！」

ガイン「我々の事を知っている人間が、あれには乗っているようだ」

ジョー「勇者特急隊の味方という事は俺の敵という事だ！」

っ?!?! 攻撃を仕掛けて来たか…!!

エーコー「山賊の部隊、こちらに仕掛けてきました！」

ネモ船長「ここに来た以上、連中と戦う事は既に決めている。各機を発進させろ」

エレクトラ「各機は出撃してください」

エレクトラさんの指示で俺達は出撃した…。

ジョー「余計な邪魔が入る前に決着をつけてやるぞ、旋風寺 舞人！」

ガイン「舞人…!!」

舞人「…!!」

大阪「待たせたな、舞人君！」

舞人「大阪室長！では！」

大阪「既にこちらを出発している！もうすぐ到着するはずだ！」

浜田「全て定刻通りだよ！後は頼むよ、舞人！」

舞人「了解だ、浜田君！必ず勝利してみせる！」

……？あの戦闘機……何かするつもりか……？

舞人「やるぞ、ガイン！」

ガイン「了解！」

シャルロット「あの飛行機とロボット、何をやる気なの……？」

エルザ「まずいロボ！敵の赤いのが、彼等を狙っているロボ！」

ワタル「大丈夫！黙って見ていて！」

すると、今度は汽車が現れた。

マーベル「あれは……汽車……？」

ガイン「待っていたぞ、ロコモライザー！」

舞人「徹夜で調整してくれた青戸工場みんなに感謝だ！」

ガイン「行こう、舞人！」

舞人「よし……！レエーツ！マーマイトガイン……？」

汽車と飛行機とロボットが合体していく…!??

舞人「マイトガイン、起動！」

そして、三機は合体ロボとなった。

ワタル「やったあ！噂のマイトガインだ！」

舞人「そう…その通り！」

マイトガイン「銀のつばさへのぞみを乗せて、灯せ、平和の青信号！勇者特急マイトガイン、定刻通りにただ今到着！」

へべ「な、何だい!?? あれは!??」

キキ「とんでもなく派手で豪快なやつだね…」

ワタル「決まった！ハツキシ言つて、超スーパーマチャクチャカツコイイぜ!!?」

シモン「いいぜ！まさに魂の合体だ！」

ヴィラル「おまけに名乗りも決まっている」

アキト「やはり、合体はいいね」

ガイ「おう！ドリルもだが、やっぱり、合体も男のロマンだぜー!!?」

簪「か、格好いい…！」

ヒカル「ありやりや…ヒーロー好き組のテンションマックスだね」

イズミ「マックスにハッスル…ウフフ…！」

ジョー「合体したか、マイトガイン！これで少しは楽しめそうだぜ！」

舞人「ジョー！」

マイトガインというロボットは少し移動した…。

舞人「戦いを楽しみ、悪党に荷担するお前を俺は許さない！お前が俺との戦いを望むなら、受けてたつてやる！」

ジョー「その正義の味方面…！苦痛と恐怖で歪めてやるぜ！」

零「あれが、正義の味方か…。」

ワタル「行こう、零さん！マイトガインと一緒に山賊軍団をやつつけるんだ！」

零「ああ！村人を困らせる奴らはまとめて退治してやる！」

ミフネ「あの連中、村人が雇った用心棒か！」

ビトン「こうなったら、マイトガインとまとめて片付けてやろうじゃない！」

ジョー「奴等の相手は、お前達がやれ！その代わり、マイトガインは俺が引き受ける！」

舞人「いいだろう、ジョー！お前がいくら否定しようとも俺はどこまでも正義を貫く！
教えてやるぞ！正義の力を… マイトガインの力を！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「あのマイトガインってロボット… なかなかのナイスガイだな…。俺達も負けてられないぞ、ゼフィルス！」

〈戦闘会話 しんのすけVS初戦闘〉

カンナム「… あのマイトガインというロボットは… 高性能なAIを搭載しているよだね」

しんのすけ「やっぱり、合体は格好いいゾー！」

カンナム「しんのすけ君、気持ちはわかるけど今は戦闘に集中しよう！」
ひまわり「たやたや…」

〈戦闘会話 トオルVS初戦闘〉

ボーちゃん「エクスクロスのロボットも格好いいけど、あのマイトガインというロボットも格好いい…！」

マサオ「やっぱり、合体はいいね！」

ネネ「男の子って、どうしてこう合体ロボットが好きなのかしら… ねえ、風間君？」

トオル「さ、さあね。(言えない……。僕も格好良すぎて見とれていたなんて、絶対に……)」

俺達はシヨーグン・ミフネの二オーにダメージを与えた。

ミフネ「おのれ、マイトガイン！このミフネ、大望を果たすまで決して歩みは止めぬ！覚えてるがいい！男は黙ってえく退却!!？」

そのまま、二オーは撤退した……。

舞人「シヨーグン・ミフネ……。異世界に跳ばされたというのに江戸建設の夢は捨てていないのか」

マイトガイン「常識外れは変わっていないという事だな」

そして、さらに、カトリーヌ・ビトンのスノービーにもダメージを与えた。

ビトン「え……。嘘！あたくしのスノービーが……！」

オードリー「残念ですが、ここは撤退するしかありません」

ビトン「覚えてなさいよ、マイトガインの坊や！このカトリーヌ・ビトン、アル・ワースで誰よりも美しく輝いてみせるから！」

そう言い残し、スノービーも撤退する。

舞人「怪盗ピンクキャットこと、カトリーヌ・ビトン……。彼女も相変わらずだな」
マイトガイン「私のAIは、彼女の行動原理を理解できない……。」「

〈戦闘会話　ゼロVSジョー〉

ジョー「まさか、本当に正義のヒーローみたいな戦士が現れるとはな」

ゼロ「俺がヒーロー？ 勘弁してくれ、俺は当たり前的事をしてるだけだぜ？」

ジョー「成る程、貴様はそういう奴か……。俺の邪魔をするなら、お前も倒す！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSジョー〉

ジョー「まるで騎士だな」

ミラーナイト「はい、私は鏡の騎士と呼ばれています」

ジョー「だったら、騎士は騎士らしく守ってみせるんだな！ 飛龍の力を見せてやる！」

マイトガインは飛龍というロボットに目掛けて、剣で斬り裂き、大ダメージを与えた……。

ジョー「ちいっ……！不覚を取ったか！」

舞人「負けを認めろ、ジョー！そして、潔く降参するんだ！」

ジョー「確かに今日の勝負は、お前の勝ちだ……。だが、アル・ワースを舞台にした俺とお前の戦いは、まだ始まったばかりだ！それを忘れるな！」

飛龍は撤退した……。

バトルボンバー「あの野郎……！まだ諦めないつもりかよ！」

ガードダイバー「だが、あの男の力は侮る事は出来ません」

バトルボンバー「それは、あいつに一度負けた俺が一番よく知ってるぜ」

舞人「(来るなら来い、ジョー。正義を憎むお前に負ける事は正義の敗北を意味する。

だから、俺は絶対に負けない……。お前の挑戦……必ず退けてやるぞ)」

周りの雑魚も倒し、俺達は戦闘態勢を解いた。

アンジュー「結局、あの山賊の一味……。ドアクター軍団とは関係なかったみたいね」

ワタル「いいじゃない。困った村の人達を助けられたんだから」

舞人「ありがとう。君達のおかげで奴等を倒す事が出来たよ」

ワタル「嬉しいなあ！あのマイトガンと一緒に戦う事が出来たなんて！」

九郎「あいつの事を知ってたのかよ、ワタル？」

ワタル「うん！僕達の世界では、勇者特急隊と言えば、世界を守るヒーローなもの！」

レイ「まるでウルトラマンみたいだな」

ゼロ「やってる事は変わらねえからな」

零「……ちよつと待て、ワタル。もしかして……」

ワタル「そうだよ、零さん。僕の憧れの正義のヒーロー……その一人は、あのマイト
ガインなんだ」

マイトガイン「嬉しいな、舞人。あのように言つて貰つて」

舞人「そうだな。あの子のため……いや、全ての人達のため、この世界でも俺達は正義を貫こう」

この後、俺達はそれぞれの艦へ戻り、脅されていた村で話をしていた。

ヨマコ「シモン！」

シモン「久しぶりだな、ヨーコ。まさか、こんな所で学校の先生をやつてるなんて思つてもみなかったぞ」

ヨマコ「そうね。シモン達には行き先も告げずにカミナシティから旅立つたものね……。でも、新政府の仕事よりもこの村で子供達を相手に行っている方が私には合つて
るみたいよ」

シモン「ヨーコが選んだ生き方だ。俺がどうこう言う事じゃないさ」

すると、しんのすけとシバラク先生が来た。

シバラク「シモン……。そろそろ、そちらの美しいお嬢さんを拙者達に紹介してくれんか？」

しんのすけ「気になるゾ」

出た、下心コンビ。

サンソン「(シバラクの旦那はまた懲りずに一目惚れかよ……)」

ハンソン「(仕方ないさ……。それが先生の生き様なんだから)」

スカーレット「(しんのすけも大概だな……)」

ヨマコ「初めまして。この村の小学校教師のヨマコと申します」

真耶「小学校の先生なんですわね！」

エンネア「ヨマコはシモンとどう言う関係なの？」

ネネ「もしかして、シモンさんの昔の恋人だったりして〜！」

ヨマコ「いえいえ。シモンには、ニアというステキなお相手がいいますから」

メル「え……。ええええええつ!?？」

シバラク「何だと!?？」

メルとシバラク先生……。驚きすぎだろ。つてか、シモンにも恋人がいたんだな。

朗利「(またシバラクの旦那の嫉妬が始まったぜ……)」

金本「(面倒だから、嫌なんだよなあ……)」

シモン「ま、待つてくれ、シバラク先生……！」

零「お、落ち着いてください、シバラク先生！ 出会いはいずれありますよ！」

シモン「お主にだけには言われたくないわ！」

零「何ですか?!？」

いや、本当に何でだよ……?!？」

シバラク「取り敢えず、シモン！ お主には、その辺りをきちんと説明してもらおう！」

ヨマコ「そういえば、シモン……ニアには会えたの？」

シモン「え……？」

ヨマコ「私……ニアとだけは連絡を取り合ってたんだけど、三日前にニアも、この村を訪ねてきて……。シモンを探して旅をしてるって言うってたわよ。ツインテールの女の子と一緒に」

シモン「!!??!!??」

シバラク「シモン！ お主という男は、なんとوراやましい！」

しんのすけ「ふどうびょうだゾ、それは！」

真上「それを言うなら、不公平だろう」

ヴィラル「おい、シモン！ お前、ニア姫様を放っておいて旅に出たのか！」

シモン「俺は……。ニアにフラれたんだ……」

…… はあああああつ!!?

マサオ「え!!?」

シモン「勇気を振り絞ってプロポーズしたのにイヤですって言われて……」

グレンファイヤー「う、うわあ……」

リユクス「では、まさか……」

零「……旅に出た理由って……そのニアって子にフラれたからなんですか?」

シモン「……俺は……もっと大きな男にならなきなダメなんだ……。ロシウも賛成し

てくれて……だから……」

シバラク「そうか、そうか!お主もなかなか苦労しているな、シモン!よしよし!今

夜はお主の苦勞話を肴に酒を酌み交わそうではないか!」

しんのすけ「オラもジユースで付き合おうゾ!」

チャム「(シバラク先生の機嫌が直った!)」

エレボス「(すつごく、嬉しそう……)」

エイサツプ「(仲間意識か……)」

海道「(本当にめんどくさいオッサンだな……)」

千冬「所で、シモン。ツインテールの女の子というのもお前の知り合いなのか?」

シモン「いや……覚えはないけど……」

ヨマコ「あ、その子から伝言を頼まれてるんだった」
零「伝言？」

ヨマコ「なんかね、織斑　一夏って男が来たら、探してやつてるわよって、言つてたわ」

一夏「お、俺?!？」

ヨマコ「あなたが織斑　一夏君？」

一夏「は、はい」

ヨマコ「そう言えば、あなた達と同じ制服を着ていたわね…」
シャルロット「え?!?それって、もしかして！」

簪「一夏…！」

一夏「鈴がいるって事か！」

アル「その鈴というのは誰だ？」

一夏「鈴は俺のセカンド幼馴染で中国の代表候補生なんだ」
メル「では…一夏君達の世界で…専用機持ちという事ですね？」

一夏「はい、そうです」

こりや、ニアって人達を探さねえとな…。

すると、俺達がこの村に来て、出会った少年が来た。

舞人「皆さん、先程はご協力いただきありがとうございます」

アマリ「君が、あのマイトガインのパイロットだったんですね」

舞人「正確には、俺と同じガインのコンビですけどね」

ガイン「勇者特急隊のガインです。よろしくお願ひします」

カンタム「こちらこそよろしく頼むよ、ガイン」

舞人「カンタムも超AIを搭載されているのかい？」

カンタム「僕はヒューマロボノイドで超AIとは少し違うかな」

ガイン「そうなのか・・・」

舞人「そして、俺が勇者特急隊の隊長の旋風寺 舞人・・・人呼んで、嵐を呼ぶヒー

ローです」

嵐を呼ぶ・・・どこかで聞いたような・・・。

しんのすけ「オラ、野原 しんのすけ！オラは嵐を呼ぶ五歳児だぞ！」

舞人「君も嵐を呼ぶのか！仲良くできそうだね、しんちゃん！」

しんのすけ「うん、舞人君！」

握手してるし・・・。

ワタル「びつくりしたよ、僕。あの旋風寺コンツェルンの社長さんがマイトガインの

パイロットだったなんて」

零「旋風寺コンツエルン？」

ワタル「僕のいた世界で一番大きな会社だよ。舞人さんは、その一番偉い人なんだ」
九郎「お前、その若さで大したものだな……」

舞人「この程度の事は驚くに値しませんよ」

ウエスト「そう言い切る所が既に只者ではないのである」

ワタル「さつすが僕の憧れのヒーローだぜ！」

舞人「ワタル……と言ったかな？ 君は俺と同じ世界から来たんだね」

ワタル「うん。今はアル・ワースで救世主をやってるよ」

舞人「救世主か……。俺とは出会うべくして出会ったんだろうな」

ワタル「そうかもね。舞人さん達もドアクターを倒すためにエクスクロスに参加してよ」

舞人「ドアクター……。それが君達の倒すべき敵か……」

アマリ「そして君達、異界人の帰還の鍵を握っている存在です」

ガイン「では……!?？」

舞人「そのドアクターを倒せば、俺たちは元の世界に帰れると……？」

マサキ「簡単に言えば、そうだな」

舞人「重要な話になるのなら、落ち着ける場所です……聞きたくないな……。補給もかね

て、皆さんを俺達の活動拠点の青戸へ案内したいのですが、よろしいでしょうか？」

零「待て待て！異界人のお前が活動拠点まで持っているのかよ!?？」

舞人「ええ……。俺達は、その青戸の町ごと、このアル・ワースに跳ばされて来たんです」

な、何だと……。!?町ごと転移って……。そんな事があり得るんだな……。!

ワタル「そうだったんだ！」

ヨマコ「割り込みゴメン。そのアオトって、ここから南に行つたところにある町の事？」

舞人「ええ、そうですけど……」

ガイン「我々は付近の村が山賊に襲われていると聞き、こちらに調査に来ていたんです」

舞人「それが俺達の世界の犯罪者だったのには驚いたけどな」

ヨマコ「そのアオトだけど、この村を出たニア達は、そこに行くって言ってたわ」

シモン「何だって!?？」

一夏「という事は、鈴もその青戸って所に……！」

千冬「行っているだろうな……」

ヴィラル「ほう……。それは是非とも俺達も行かねばならんな」

シモン「しかし……」

一夏「いつもの気合はどうしたんですか、シモンさん！」

ヨマコ「一夏君の言う通りよ。どんな困難もぶち抜くのがあなたのドリルなんでしょ？」

グランデイス「そつちの社長さんのお招きなんだ。断るのは失礼つてもんだよ」

ワタル「じゃあ、決まりだ！よろしくね、舞人さん！」

舞人「そうと決まれば、すぐに出発しよう」

シモン「……」

アマリ「シモンさん……」

ヴァイラル「腹をくくれ、シモン」

零「こう言う時は、考えるよりもまずは行動ですよ」

シモン「…… わかった。いつまでも逃げ回っているのは男らしくないからな」

ヨマコ「頑張ってね、シモン。私は結末を見届けられないけど、いつだってあなたを信じているから」

シモン「ありがとうよ、ヨーコ。必ず、また会おうな。（此処でヨーコと再会したのもきつと何かの縁だ……。アニキ……。俺、もう一度勝負してくるよ……）」

俺達は舞人の案内の元、青戸を向かう事になった……。

「わしはウォルフガングだ。」

ウォルフガング「……で、お前達はマイトガインとその協力者に負けて、逃げ帰ってきたわけか……」

ミフネ「今回は返す言葉もない……」

ホイ・コウ・ロウ「小さな村一つ手に入れられないとは、この偉大なるアジアマフィア、ホイ・コウ・ロウ様の手下には相応しくないネ」

ビトン「待ちなさいよ！いつ、このあたくしが、あんたの部下になったのよ!!?」

ミフネ「この我が輩もだ！」

ホイ・コウ・ロウ「そんなものは、お前達が生まれ落ちた時から決まってるネ」

ビトン「このジジイ！調子に乗って！」

ミフネ「我らは元の世界に帰るまで一時的に同盟を結んだに過ぎん！それを忘れるな
！」

ウォルフガング「とは言うが、今後の活動のためにもリーダー役は必要じゃろうな」

ビトン「それは当然、あたくしね！ついでに組織の名前はデンジャラスワールド同盟

に決定！」

ミフネ「勝手に決めるな、こそ泥め！組織の長は我が輩で、名前は大江戸新撰組に決まっている！」

ホイ・コウ・ロウ「何を言うネ！お前達は、ホイ・コウ・ロウ大兄とその他大勢の一員なのネ！」

ジョー「下らん争いだな……」

ウオルフガング「ジョー！涼しい顔をしとらんで、この場を収めろ！」

ジョー「俺は誰がリーダーでも構わん。もつとも、従うつもりはないがな」

ビトン「んま、生意気！」

ミフネ「貴様……！何様のつもりだ!?？殿様か!?？」

ジョー「俺はエースのジョーと呼ばれる男……。誰も俺に命令する事は出来ない。だが、心配するな。お前達の邪魔者となるマイトガインはこの俺が倒す。奴の正義の味方面を見ていると俺の血が怒りで煮えたぎるんでな」

ウオルフガング「そのためにお前には、ワシのロボット工学の全てを注ぎ込んだ飛龍を与えている。必ず奴を倒してみせろよ」

ホイ・コウ・ロウ「では、改めてリーダー役を決めるネ」

？「それはとつづくに決まっている」

すると、ある男が来た。

ホイ・コウ・ロウ「お前は……パープル！」

パープル「あんた達のリーダー……それは、この俺だ」

ビトン「はあああ!!？」

ミフネ「若造が！シヨーグンの御前で何を言っている!!？」

ホイ・コウ・ロウ「パープル！我がアジアマフィアの新参者のお前がどういふつもりネ!!？」

パープル「では聞くよ、ホイ・コウ・ロウ。俺の主人であるあんたは、俺達を元の世界に返してくれるのかい？」

ホイ・コウ・ロウ「そ、それはだな……」

パープル「そっちの年増とニセ侍とマッドサイエンティストはどうなんだい？」

ミフネ「ぬう……！」

ビトン「あたくしは永遠の29歳よ！年増扱いは許さないから！」

ウオルフガング「逆に聞くぞ、パープルとやら。お前には、その手段があるのか？」

パープル「その手段を持つ、この世界の有力者と渡りをつけている」

ウオルフガング「有力者だと？」

パープル「そう……。その名はドアクダーだ」

ミフネ「ドアクダー…」

ビトン「いかにも悪そうな名前ね…」

ホイ・コウ・ロウ「貴様…いつの間に…！」

パープル「かの司馬 遷も言っている…先んずれば人を制すつてね。そういうわけだから、元の世界に帰りたいたいのなら、俺の指揮下に入るんだな」

ミフネ「…」

ビトン「…」

パープル「決まりだな。今日から俺達はブラックダイヤモンド連合だ！この世界に華麗な悪の華を咲かせようぜ！」

ジョー「おかしな奴がリーダーになったが、これで悪党共も本格的に動き始める…。

旋風寺 舞人「。お前の信じる正義で、こいつ等が止められるかな…」

パープル「そして、早速、俺達ブラックダイヤモンド連合に新たな仲間だ…。来い、マドカ」

マドカ「…私をその名で呼ぶな。私の名はエムだ…それを忘れるな」

パープル「わかったから怒るなよ」

ビトン「まあ、まだ子供じゃない！」

ジョー「そんな奴を引き入れて大丈夫なのか？」

パープル「大丈夫さ、彼女はISという機械で戦う…心配はない」
マドカ「…すまない、スコール、オータム…もとの世界へ戻るためにはこいつら
と手を組むしかないんだ…だが、織斑 一夏…お前だけは私がこの手で殺す…
！」

第24話 闇を照らす太陽

―新垣 零だ。

俺達は舞人とガインに連れられ、旋風寺重工 青戸工場に来ていた。

シバラク「ほう：：。これがワタル達のいた世界の建物か」

ヒミコ「きやはは！広い、広〜い！」

舞人「ここは旋風寺重工の青戸工場だよ。この地下には、勇者特急隊の秘密格納庫があるんだ」

ワタル「本当に町ごと、アル・ワースに跳ばされてきたんだね」

舞人「そのおかげで町の人達は何とか生活できているし：：。青戸工場もあつたから、勇者特急隊のメンバーの整備も出来るんだ」

すると、1人の少年と2人の男の人が来た。

浜田「お帰り、舞人。そちらが連絡のあつたエクスクロスの人達だね」

大阪「空中戦艦の受け入れも問題なく終わった。工場の裏手に降りてもらっている」

青木「補給と皆様を歓待する準備は既に出ております」

舞人「ありがとう、みんな。エクスクロスの皆さんにも紹介します。この青戸工場の工場長の大阪さん…」

大阪「勇者特急隊の整備も担当しています」

舞人「旋風寺家の執事の青木さん…」

青木「青木 桂一郎です。舞人様のお父上の代より従わさせていただきます」

舞人「そして、僕の親友であり、勇者特急隊の知恵袋の浜田君です」

浜田「浜田 溝彦です。よろしくお願いします」

ワタル「しっかし、驚いたよ…。青戸の町に勇者特急隊の秘密工場があったなんて」

浜田「と言っても、もう秘密じゃなくなっちゃったけどね」

舞人「今は非常事態って事で町中の人達に状況を説明して、全員に勇者特急隊の協力者になってもらったんだ」

九郎「個人で正義の味方やるって、お前…。ものすごい資産家なんだな」

舞人「否定はしませんよ」

青木「旋風寺コンツエルン是世界最大の企業であり、そのトップである舞人様は個人資産においても世界ナンバーワンです」

ロザリー「要するに世界一の大金持ちかよ！」

クリス「服一枚買うのも相当の覚悟があるあたしとは大違いだ…」

エンネア「九郎とは月とスッポンだね！」

九郎「くそ：：。何がいけないってんだよ、とほほ：：。」

グランデイス「その金を使って、悪党退治をやっているとね：：。金持ちの考えている事はわからないよ」

舞人「勇者特急隊の設立は俺の父の手によるものだったんです」

零「親父さんも、こつちの世界に来ているのか？」

舞人「いえ：：。父は母と共に三年前に亡くなっています」

つ：：！

零「ご、ごめん：：。事情も知らずに：：。」

舞人「気になさらないでください」

アンジュ「じゃあ、あなたは父親の意思を継いで正義の味方つてのをやってるのね」

舞人「始まりはそうであつたかもしれませんが、勇者特急隊として悪と戦うのは俺自身の意味です」

ゼロ「流石はヒーロー！格好いい事、言うぜ」

舞人「こちらの世界にいる以上、表の顔である旋風寺コンツェルン社長は休まざるを得ない。その代わり、勇者特急隊として一刻も早くドアクダーを倒して、元の世界に帰るつもりだ」

海道「へえ……。立派なヒーロー様だな」

真上「地獄である俺達とは正反対だな」

ん？今度は女の子が走って来た。

サリー「舞人さん、皆さん。お茶の準備ができましたので、こちらへどうぞ」

舞人「ありがとう、サリーちゃん」

しんのすけ「お？」

サリー「え？」

しんのすけ「……」

サリー「……」

何で見合ってるんだよ……？

しんのすけ「よろしくね！」

サリー「こちらこそ！」

何なんだ……？

ワタル「あれ！もしかして、サリーさん……？」

サリー「え……戦部　ワタル君……？」

舞人「サリーちゃんとワタルは知り合いだったのかい？」

サリー「ええ……。弟のテツヤのお友達なんで何度かあった事があるんです」

ワタル「テツヤもアル・ワースに来てるの？」

サリー「私は青戸のたこ焼き屋さんでアルバイトをしていたから、町と一緒に跳ばされたけどテツヤはこちらにはいないわ。だから、あの子の事が心配で……」

確かに……弟が残つてるとなると心配するな……

舞人「大丈夫だからサリーちゃん。すぐに……というわけにはいかないが、元の世界へ帰る方法が見つかったんだ」

サリー「本当ですか、舞人さん!?？」

舞人「ああ……。だから、約束するよ。必ず君を元の世界へ帰してみせる」

サリー「ありがとうございます、舞人さん」

ネネ「成る程ね。サリーさんと舞人さんつてそういう関係なんですね」

トオル「茶化したらダメだよ、ネネちゃん！」

シバラク「むう……。金も力もある色男というのは反則だ……」

また嫉妬してるよ……

ヒミコ「オッサンにあるのは河馬力だけか」

シバラク「河馬力ではない！馬鹿力だ！」

エイサップ「自分でバカと言つてしまつてますよ、シバラク先生……」

すると、秘書の様な女の人が歩いて来た。

いずみ「舞人さん……。ご依頼の調査が完了しましたが、こちらで報告いたしますか？」

舞人「その方がいいかもね。頼むよ、いずみさん」

ヒカル「いずみさんだつて」

イズミ「うーん、似た様な名前があるなんてね」

リョーコ「零とレイがいるじゃねえか」

サブロウタ「犬のシロと猫のシロもいるけどな」

シバラク「舞人……。こちらの美しき方は？」

しんのすけ「綺麗だぞ〜！」

マサオ「立ち直り早っ!?」

舞人「彼女は松原 いずみさん。僕の秘書です」

いずみ「以後、お見知りおきを」

シバラク「拙者の名は剣部 シバラク。趣味は剣の修行で……」

だーもう！話が進まねえ！

千冬「後にしてください、シバラク先生」

シャルロット「織斑先生の言うとおりですよ！その報告というのは、私達にも関係があるみたいなんですから」

シバラク「わ、わかった…」

いずみ「では、舞人さん…。ご依頼のありましたニアさんと鈴さんという方々の調査報告を」

シモン「ニアの行方がわかったのか!?!」

一夏「鈴は何処に!?!」

いずみ「ご期待にそえず、申し訳ありません。ニアさんと鈴さんは、ほんの少し前までは青戸にいたのは確認出来たのですが…」

ヴィラル「この町を発ったという事か…」

ケロロ「入れ違いになったのでありますな…」

一夏「ど、何処へ行ったのか、わからないんですか!?!」

簪「落ち着いて、一夏…!」

サリー「ニアさん達は行き先を適当に決めるって言ってました」

シモン「君はニア達を知っているのか?」

サリー「ええ…。この街に来たニアさん達と偶然知り合って、仲良くさせてもらいました」

ヴィラル「どうする、シモン、一夏? 追うか?」

マサキ「追うと言っても、どっちに行ったかぐらいわからねえと無理だろうが」

一夏「……」

真耶「織斑君……」

いずみ「もし町を出るなら、気をつけてください」

舞人「何かあったのかい、いずみさん？」

いずみ「舞人さんから連絡を受けて、ニアさんと鈴さんを探していた時に不審な人物を見かけました」

舞人「不審な人物……？」

いずみ「ただならぬ雰囲気を持った男性で素性を確かめるために尾行したのですが、途中で見失ってしまいました」

浜田「スーパー秘書のいずみさんの追跡をかわすなんてそいつ……只者じゃないね」

青木「いかがします、舞人様？町全体に警戒宣言を出しますか？」

舞人「いや……いたずらに町の人達を不安がらせるのは良くない。それに、その人間が俺達の敵ならば、遠からず目の前に現れる……。そして、悪は悪を呼ぶ……。出会った悪は一つになり、より巨大な悪になる」

ボーちゃん「巨大な悪……？」

アーニー「それはつまり……」

舞人「今、俺達が警戒しなくてはならないのは俺達の世界の犯罪者達がドアクダー軍

団と手を組む事です」

確かに、それは厄介だな……。

ヒユウガ「そうだ、浜田君、大阪さん…… ロボットの修理を手伝ってもらえませんか？」

浜田「ロボット？」

ヒユウガ「情けない話…… 我々では手が足りずに困っていたのです」

大阪「わかりました、ご協力しましょう」

ヒユウガ「ありがとうございます！」

そう言い、ヒユウガボス達はジャンボットの方へ向かった……。

ーエムだ。

パープルはドアクダー軍団のザン・コックと通信で話していた。

ザン・コック「…… 同盟を結んだ以上、必要な物資があるなら、こちらで手配する」

パープル「サンキュー、ミスター・ザン・コック。俺達はいいい関係を築けそうだ」

ザン・コック「軽口を叩く前にお前達の実力を見せてもらおうぞ。ドアクダー軍団が求めるのは圧倒的な力だ。期待させてもらおうぞ、ブラ…… ブラ……」

パープル「ブラックダイヤモンド連合だ、ミスター」

ザン・コック「幾らか戦力も貸してやる。今そちらに1人の男が向かっている」

パープル「男……？」

ザン・コック「少々手にかかる男だが、髑髏の魔神が敵にいるのなら、使えるぞ」

パープル「成る程ね……」

ザン・コック「では、期待させてもらうぞ、ブラックダイヤモンド連合」

そう言い残し、通信を切った。

パープル「やれやれ……脳ミソまで筋肉で出来たような輩では俺のセンスにはついてこれられないか……。まあいいさ。行動の基盤が固まったからには楽しいギグを始めよう」

エム「だが、本当に大丈夫なのか、人外の者と手を結んで……。油断していると寝首を掻かれるぞ」

パープル「心配ない。その時の対処法も考えてある」

エム「ならば、いいのだが……」

すると、今度はチンジャという男から通信が入った。

チンジャ「こちら、チンジャ。応答を願う、パープル」

パープル「チツチツチ……。今の俺はブラックダイヤモンド連合……略してBD同盟

のリーダーだ。いくらホイ・コウ・ロウの右腕のあんたでもミスター・パープルと呼びなよ」

チンジャ「…失礼しました。では、ミスター・パープル…報告してもよろしいでしょうか？」

パープル「言ってみなよ」

チンジャ「例のものの起動実験に成功しました」

パープル「そいつはナイスだ。これで、あのマイトガインに一泡吹かせてやれる」
例のものとは一体なんなんだ…？

ーウオルフガングじゃ。

わしらはブランカの格納庫にいた。

イツヒ「…ウオルフガング様…」

ウオルフガング「何だ？」

リーベ「なんだかんだ言っつて、パープルの奴…すごいですよね」

デイツヒ「ドアクター軍団とやりに渡りをつけて、こんな戦艦まで用意するなん

て……」

ウオルフガング「それよりもだ、お前等……。その女の子達は、いったい何だ!?？」

鈴「こ、こんにちは〜! 鈴でーす!」

ニア「始めまして、ニアと申します」

ウオルフガング「名前を聞いとるんではない! どうして、ここにいろ!?？」

ニア「どうして……と言われてもイツヒさん達についてきたんです」

鈴「あたしは止めたんですけど、ニアさんが聞かなかくって……」

ウオルフガング「説明しろ、イツヒ!」

イツヒ「そ、その……青戸の町にマイトガインの情報を調べにいったら、ひつついて

きたんですよ」

リーベ「このニアという子は……アル・ワースの人間ですから、勇者特急隊とは無関

係ですし……」

デイツヒ「それに……どちらもとっても可愛いし……」

鈴「か、可愛い!?？」

ウオルフガング「だからといって、連れてきて良いわけがないだろうが!」

ニア「そんなに怒られてはお身体に毒ですよ」

ウオルフガング「お、おう……。心配かけて済まんな」

リーベ「見ての通りです、ウォルフガング様。ニアちゃんは、とっても優しいんですよ。鈴ちゃんも……まあ優しいんですよ」

鈴「まあつて何よ!?？」

デイツヒ「加えて、とっても可愛いし！」

ウォルフガング「それとこれとは話は別だけど！」

イツヒ「……ウォルフガング様が不機嫌なのはもしかしてホイ・コウ・ロウが例の実験を成功させたせいですか？」

リーベ「あんなのはまぐれですよ、まぐれ」

デイツヒ「そうです！世界最高の科学者はウォルフガング様です！」

ウォルフガング「うるさい！うるさい！」

わしらが話していると影の軍団の奴らが資材搬入をしていた。

影の軍団「うるさいのは、お前達の方だ！」

影の軍団2「資材搬入の邪魔になるから、どいてろ！」

すると、クレーンが傾き始めた。

イツヒ「い、いかん！」

リーベ「クレーンが倒れるぞ！逃げろーっ!!?？」

デイツヒ「まずい！ニアちゃんが逃げ遅れた！」

鈴「ニアさん！」

ドイツヒ「ダメだよ、鈴ちゃん！」

ニア「！」

ウォルフガング「危ないっ!!？」

すると、黒いロボットがクレーンを止めた…。

？「… お嬢さん達、ご老人… 怪我はないか？」

ウォルフガング「お、お前は…！」

ニア「ありがとう、ロボットさん。あなたが助けてくれたんですね」

鈴「おかげで助かったわ、ありがとう」

？「礼を言われるまでもない」

すると、今度はホイ・コウ・ロウ奴が来た。

ホイ・コウ・ロウ「見たか、ウォルフガング！こいつのちからを！」

ウォルフガング「では、奴が噂の…！」

チンジャ「はい、その通りです。これまでに集めたマイトガインのデータをコピーして造り上げたアジアマフィアの最高傑作！」

ホイ・コウ・ロウ「天下無敵史上最強国土無双！ブラックゲインとは、こいつの事ネ

！」

ブラックガイン「我が名はブラックガイン……。最強の正義の戦士だ！」
チンジャ「せ、正義……!?」

ホイ・コウ・ロウ「何を言っているネ、ブラックガイン！お前はワシの手下……悪の戦士ネ！」

ブラックガイン「違う！私の超A Iの最も深い所には正義の心が燃えている！」

ホイ・コウ・ロウ「な、何だとおお!?」

ウオルフガング「バカめ、ホイ・コウ・ロウ！貴様、マイトガインの持っている正義の心までコピーしてしまったようだな！」

ホイ・コウ・ロウ「ぬ、ぬうううううっ！こうなったら、仕方がない……！」

な、何をする気だ……!??

第24話 闇を照らす太陽

―新垣 零だ。

たつた今、青戸工場の警報が鳴った。

浜田「舞人！謎のロボット軍団が、この青戸工場に接近中だ！」

舞人「こちらでもキャッチした！ネモ船長とルリ艦長から迎撃の指示も出ている！」

俺達は出撃して、戦闘態勢に入った。

舞人「来るぞ…！」

ワタル「あれは!?？」

複数のロボットが現れた。

バトルボンバー「アジアファイアのロボットか！」

ガードダイバー「それだけではない…！」

シモン「ガンメンに魔神もいやがる…！」

夏美「どうやら、舞人さんの言う通り、悪党達は手を組んだようですね！」

ホイ・コウ・ロウ「その通り！我々はドアクター軍団と同盟を結んだ！」

舞人「ホイ・コウ・ロウ！」

ホイ・コウ・ロウ「驚くのは早いぞ、マイトガイン！今からお前達に度肝を抜くものを見せてやる！」

… は!?? 四機の何かが出て来た…!??

マイトガイン「何だ、あれは!??」

舞人「黒いロコモライザー、黒いマイトウイング…そして、黒いガイン…!」

ブラックガイン「我が名はブラックガイン…! 最強の戦士…! マイトガイン! お前を地獄へと送る使者だ!」

マイトガイン「ブラックガイン…!」

海道「へっ! 地獄の前で使者を名乗るったあい度胸じゃねえか!」

ワタル「あいつ、ガインにそっくりだ!」

チンジャ「では、ホイ・コウ・ロウ様! どうぞ!」

ホイ・コウ・ロウ「では、行くぞ! レエエツ・ブラックマイトガイン!」

四機が合体して、黒いマイトガインになった…!??

舞人「黒いマイトガイン…!」

ホイ・コウ・ロウ「黒い翼に殺意を乗せて、灯せ、不幸の赤信号!」

チンジャ「悪者特急ブラックマイトガイン、定刻破って、ただ今到着!」

ホイ・コウ・ロウ「ブラックマイトガインよ! お前の悪の力でマイトガインとその仲間達をギッタギッタにしてやるのだ!」

ブラックマイトガイン「おう!」

ゼロ「まるでダークロプスゼロやダークロプスだな！」

舞人「そうはさせない！来るなら来い！悪のマイトガインに本家のマイトガインが負けてたまるものか！」

シモン「あの黒い人には悪党も一緒に乗ってるなら、あいつごと、ぶん殴ってやるぜ！」

ワタル「マイトガインは正義の味方なんだ！形が一緒でも悪い奴なら、容赦しないからな！」

零「偽物が本物に勝つことなんて、絶対にならないだよ！」

ホープス「ほう……これは面白い事になってきましたね」

アマリ「何か言いましたか、ホープス？」

ホープス「いえ……何も……。誰も、あの黒いロボットの精神が外部から制御されている事に気付いていません……。お一人を除いては……」

カンタム「……」

ホープス「(さすがは、カンタム様です……。ですが、良心の呵責なく、あれを撃破できる方が幸せだと考えれば、余計な口を挟むべきではないでしょう……。最悪の場合、カンタム様が仰るでしょう)」

舞人「行くぞ、ブラックマイトガイン！お前に本当のマイトガインの力を見せてやる

！」

俺達はブラックマイトガインやホイ・コウ・ロウ達の部隊との戦闘を開始した…。

シモン「ギガドリルブレイクウウウツ!!?」

ウエスト「ドリル・トルネード・クラッシュャー!!?」

ど、ドリルって凄えな…!」

浜田「ドリル…! そうだ、ドリルだよ!」

大阪「何か閃いたのかい、浜田君?」

浜田「はい。今、デザイン中の新しいメカに良いアイディアをもらいました」

大阪「それはいい。もしもこの時のためにあれの完成を急がなければならぬな」

〈戦闘会話　しんのすけVSブラックマイトガイン〉

ブラックマイトガイン「俺の邪魔をするものは誰であろうと倒す!!?」

しんのすけ「偽物のマイトガインなんて怖くないゾ!!?」

カンタム「…君はまさか…」

しんのすけ「カンタム!? どうしたの!?」

カンタム「いや、今は彼を止めよう、しんのすけ君!」

マイトガインの縦一文字斬りでブラックマイトガインに大ダメージを与えた。

ホイ・コウ・ロウ「ちいつ! このブラックマイトガインでも勝てんのか!」

ワタル「正義は勝つ! そんな当たり前前の事もわからないみたいだね!」

ブラックマイトガイン「う… うう… ! うおおおおつ!!」

舞人「よし… ! とどめだ!」

カンタム「ま、待ってくれ、舞人君!」

しんのすけ「か、カンタム!?」

マイトガイン「どうしたんだ、カンタム!?」

舞人「どいてくれ、カンタム! そいつを倒さないと町に被害が… !」

? 「待ってください!」

ヴィラル「あれは… !」

シモン「ニア!!？」

あの人が……!!？」

ニア「聞いてください！あのブラックさんは、悪いロボットではないんです！」

一夏「ど、どういう意味ですか!!？」

鈴「あいつらが無理やり、悪い心を植え付けたのよ！」

すると、今度はISを纏った女の子が現れた。

一夏「り、鈴！無事だったのか！」

鈴「再会に浸るのは後よ！」

舞人「超AIを……精神制御したのか……！」

マイトガイン「それを感じ取って、カンタムは……！」

カンタム「……」

ニア「だから、お願いです！私達を助けてくれたブラックさんを助けてください！」

ヒルダ「ぼつと出てきて簡単に言うんじやねえ！こっちは命懸けで戦ってんだよ！」

サリア「待って、ヒルダ！何かが来る！」

戦艦に……ロボット軍団!!？それに、アイアンカイザーもいる！

キバ「ヒヤッハー！見つけたぜ、髑髏ー!!？」

真上「キバか！」

海道「面白いタイピングで来るじゃねえか、キバの兄ちゃんよ！」

パール「残念ながら、その願いは届かないな、お嬢さん」

舞人「何者だ!?？」

パール「俺の名はパール：。このブラックダイヤモンド連合：。略してBD連合のリーダーだ」

グランデイス「ブラックダイヤモンド：。！ちよつと魅力的じゃないの！」

ハンソン「ちよ！ダメですよ、姐さん！」

アマルガン「それが奴らの組織の名か：。」

マイトガイン「舞人！あいつの周りにいるのはウオルフガングのメカだ！」

舞人「BD連合：。！ウオルフガングとアジアファイアが手を組んだのか！」

ウオルフガング「不本意ながらな：。」

パール「彼等だけじゃない。ショーグン・ミフネもカトリヌ・ビトンも今では俺の配下さ：。それに、来なよ」

すると、戦艦からISを纏った女の子が現れる。

マドカ「：。」

千冬「：。！」

鈴「あ、あんたは！」

一夏「亡国企業（ファントムタスク）のエム!!？」

マドカ「久しぶりだな、織斑 一夏」

一夏「ファントムタスクもこの世界にいるのか!?!？」

マドカ「いるのは私だけだ。織斑 一夏……此処が異世界だろうが関係ない……お前は此処で殺す！」

一夏「くっ……！」

ニア「あの人達です！あの人達がブラックさんに悪い心を植え付けたんです！」

パープル「悪……闇……欲望……。それこそが世界を美しくするのさ。それがわからないお嬢さんは消えてもらおうか！」

シモン「逃げろ、ニア！」

ニア「！」

ニアさんがめて、砲撃が発射されたが、ニアさんは誰かに助けられた。

パープル「かわした!?!？」

シヨウ「あれは……！」

？「いけないな、パープルとやら……。君はレディに対する礼儀がなっちゃいない」

いずみ「舞人さん！あの男です！あの男が、私が町で見かけた不審者です！」

しんのすけ「でも、あのお兄さん……ニアお姉さんを助けてくれたゾ！」

舞人「では……」

ワタル「あの人も僕達の味方……ううん、正義の味方なんだよ！」

万丈「僕は、そんな大層なものじゃないよ。だが、悪党の敵である事は確かだ」

パープル「貴様……名を名乗れ！」

万丈「波嵐 万丈……！日輪は我にあり！」

メル「日輪……。太陽の事ですね……！」

パープル「貴様！何のために俺の邪魔をする?!？」

万丈「言っただろう？僕は悪の敵だと。暴力で誰かの幸せを踏みにじるエゴの塊を僕は許さない……！」

パープル「たった、それだけの理由で俺達の邪魔をするのか？」

万丈「それだけ……？悪党にとって、そうかも知れないな。だが、この波嵐 万丈にとってそれは戦うには十分なさ。そして、その力がこれだ！ダイターン・カムヒア！」

あの男……。ロボットに乗った……?!？」

万丈「世のため、人のため、悪の野望を打ち砕くダイターン3！この日輪の輝きを恐れぬなら、かかってこい!!？」

チャム「やったあ！ダイターン3だ！」

シヨウ「万丈さん！」

マーベル「あなたなんですわね！」

万丈「久しぶりだね、シヨウ、マーベル、チャム。こんな状況だけど、また会えて嬉しいよ」

リユクス「あの方はシヨウさん達のお知り合いですか……？」

鈴「ニアさん！今の内に逃げて！」

ニア「イヤです！」

シモン「え!?？」

鈴「今はあなたのワガママを聞いている暇はないのよ！」

ニア「ブラックさんの無事を見届けるまでここを動きません！」

ブラックマイトガイン「う、うおおおおおっ!!?？」

っ!?? 何だ、まさか暴走しているのか!??

ホイ・コウ・ロウ「い、いかん！完全に制御不能だ！脱出するネ、チンジャ！」

チンジャ「はい、ホイ・コウ・ロウ様！」

あ、あいつら、此処まで振り回して、種は置いておくのかよ……！

ヴォルフガング「ホイ・コウ・ロウめ……。逃げ出しおったか……。奴にとっては、あ

のブラック……。生命ではなく、ただの機械という事か……」

ミラーナイト「まずいですよ！彼を止めなければ、町が破壊尽くされてしまいます！」

グレンファイヤー「だけど、ミラーちゃん！あいつは操られているだけなんだろう!?」
サンソン「そんな事を言ってる場合じゃねえんだよ！」

ハンソン「気持ちはわかるけど…。どうしようもないんだ…。」

舞人「…。」

くそっ！どうすればいいんだよ…！

パープル「そうだ、旋風寺 舞人！お前のその絶望に暮れる顔が見たかったんだ！」

舞人「… ヴォルフガング…。ブラックマイトガインを止める方法はないのか…。」

？」

ヴォルフガング「無駄だ。超AIの制御装置は完全に埋め込み式だ。機体を破壊しなければ、停止させようがない」

パープル「ヴォルフガング…。余計な事は言うな！」

ヴォルフガング「…。」

万丈「機会を止めるためには破壊するしかない…。だが、心はそうじゃないはずだ」

舞人「え…。」

パープル「何をしても無駄だ！もう奴を止める事はできない！さあやれ、旋風寺 舞人！その手でブラックマイトガインを葬るのだ！」

争いの火種を作っておきながら…！

零「黙れよ、紫野郎……！」

舞人「パープル……！」

パープル「正義の心を持つ者を見殺しにする！その時、お前のアイデンティティは崩壊し、2度と戦う事は出来なくなる！」

舞人「……」

アマリ「あの人……舞人君の心を壊すために、こんな事を……！」

海道「このクソ外道がッ……！」

ワタル「舞人さん……」

舞人「俺は……」

万丈「君は、そんなつまらない選択をするのか？」

舞人「え……」

万丈「都合よく、格好良く勝利するなんて僕には出来ない……。だが、君がヒーローならば、奇跡だって起こせるはずだ」

舞人「俺は……。最後の瞬間まで奇跡を起こす可能性に懸ける！目を覚ませ、ブラック！お前の中には正義の心があるはずだ！」

パープル「笑わせてくれる！何をするかと思えば、結局、呼びかけるだけか！」

零「うるさい！てめえは黙ってろ……！」

ニア「ブラックさん！私を助けてくれた優しいあなたに戻ってください！」

鈴「悪の心に負けてんじゃないわよ！あなたの正義はそこまでの弱さだったの！？？」

カンナム「届かないならば、手を伸ばすんだ！必ず、僕達が手を掴む！」

マイトガイン「負けるな、ブラック！お前は私の兄弟だ！」

バトルボンバー「マイトガインの兄弟って事はお前も勇者特急隊の一員だろうが！」

ガードダイバー「つまり、あなたは私達の仲間なんです！」

ジャンボット「その通りだ」

そこへジャンボットが現れた。

エメラナ「ジャンボット！」

ゼロ「ジャンボット、お前大丈夫なのか！？？」

ジャンボット「心配をかけてすまない、みんな」

ヒュウガ「間に合ったようだな……」

レイ「ボス！」

ヒュウガ「浜田君達が手伝ってくれたおかげで何とか修理完了だ！」

ジャンボット「ブラック……君にも有機生命体を守りたいという心があるはずだ！」

シモン「気合だ、ブラック！男なら根性を見せる！」

しんのすけ「ブラック、負けるな！オラ達がついてるゾ！」

ワタル「頑張れ、ブラック！悪い心なんかぶっ飛ばせ！」

ゼロ「お前自身の魂の力を見せてみやがれ、ブラック！」

アマリ「あなたは自由なんです！あなたの正義の心を縛れる人なんていないんです！」

メル「踏ん張ってください、ブラックさん！あなたは1人ではないんです！」

零「お前の本当のなりたいたいのは何だ！？正義の味方か！？悪の味方か！？自分の心に従え！制御に抵抗しろ！」

ブラックマイトガイン「セイ……ギ……」

舞人「ブラック！お前は正義の戦士……！勇者特急隊の一員だ！！？」

ブラックマイトガイン「う……うあああああつ！！？」

…… なっ！？爆発した……！？

舞人「ブラック！」

ケロロ「みんな、見るのであります！ブラック殿の目が……！」

ブラックマイトガイン「私は……何を……」

九郎「ちゃんと、喋っているぞ！」

アル「正気に戻ったようだな……！」

舞人「よし！」

やった…… やったぜ!!?

パープル「バカな……！そんなバカな事が起きるものか！」

ヴォルフガング「正義の心を抑え込んでいた超AI制御装置にとつともなく高い負荷がかかり、オーバーヒートを起こした……。理屈で説明してしまえば、それまでだが、確かに信じられる事ではない」

万丈「人はそれを奇跡という」

パープル「奇跡だと……!!？」

万丈「そして、それを起こしたのは彼の……旋風寺 舞人という男の勇氣だ！残念だったな、パープル。彼は、どうやらお前の想像を上回る男だったようだ」

パープル「覚えていろ、旋風寺 舞人……！そして、波嵐 万丈！この雪辱……！必ず倍にして返すからな！」

そう言つて、パープルの乗る戦艦は撤退した。

サヤ「彼は逃げた様ですね」

エルシャ「あらあら……プライドが傷つけられちゃったみたいね」

ブラックマイトガイン「私は……今まで何をしていたんだ……？」

ニア「悪い夢を見ていたんですよ」

ブラックマイトガイン「君の事は覚えている」

ニア「ではまた、あの時のように私を助けてくださいますか？」

ブラックマイトガイン「当然だ。私は正義の戦士なのだから」

マイトガイン「ブラック：。」

ジャンボット「もう心配はないみたいだな」

カンナム「ああ。今の彼は彼自身だ！」

舞人「俺が誰だかわかるか、ブラック？」

ブラックマイトガイン「私のメモリーの中にその声は記録されている。勇者特急隊

長、旋風寺 舞人：。私に命令を」

舞人「命令はしない。なぜなら、俺達は仲間だから。だから、共に戦おう！悪を倒す

ために！」

ブラックマイトガイン「了解だ、舞人！」

マイトガイン「ブラック！ならば、心の奥にある想いを解き放て！」

ブラックマイトガイン「わかったぞ、兄弟！黒い翼にのぞみを乗せて、灯せ平和の青

信号！勇者特急ブラックマイトガイン、定刻通りにただ今到着！」

ガイ「決まったぜ!!？」

アキト「ああ。最高の決め台詞だ」

ユリカ「格好いいですよ、ブラックさん！」

アーニー「もう大丈夫ですね」

ヴォルフガング「フ：．．フハハハハ！フハハハハハハハ！」

イツヒ「どうしたんです、ヴォルフガング様：．．!!?」

ヴォルフガング「壊れた機械は直せるがら人の生命に代わるものはない：．．か：．．まさか、あいつ等にそれを教えられるとはな」

大阪「：．．！」

ヴォルフガング「いいものを見せてもらったぞ、旋風寺 舞人とエクスクロス！ワシは科学者として、科学の研究こそが真理だと信じておる！だが、同時に科学では超えられない壁があるのも知っている！今日は、それを思い出させてもらった！その礼代わりだ！現時点でのワシの科学の枠を集めたロボット軍団でお前達を叩き潰してくれる！」

舞人「そうはさせない！ブラックを加えた勇者特急隊とエクスクロスがお前を迎え撃つ！」

シモン「ニア：．．」

ニア「聞こえてますよ、シモン」

シモン「すぐに迎えに行く。だから、待っていてくれ」

ニア「はい！」

一夏「鈴、行くぞ！」

鈴「ええ！すっかり、ついて来なさいよ、一夏！」

万丈「及ばずながら、この波嵐 万丈もお手伝いをさせてもらおう」

ワタル「やった！ 舞人さんに並ぶ新たなヒーローの登場だ！」

ジャンボット「もちろん、私もやらせてもらうぞ、ゼロ！」

ゼロ「おう！ やつと、ウルティメイトフォー스ゼロが揃ったぜ！」

舞人「行くぞ、ヴォルフガング！ 人々の幸せのためにならない科学はただの暴力だと

言うのを教えてやる！」

ルリ「いい展開ですね」

ネモ船長「人の幸せと科学か…」

エレクトラ「彼は、その二つが並び立つ未来を信じているのですね」

さーて、戦闘再開だ！

〈戦闘会話 ジャンボットVS初戦闘〉

ジャンボット「姫様に刃を向けた私に出来ることは姫様に尽くす事… その為にも私は戦う！」

〈戦闘会話 鈴VS初戦闘〉

鈴「ようやく、一夏に会えた……。あいつには言いたい事や聞きたい事がたくさんあるけど……。今はこの場を切り抜ける事を考える！」

〈戦闘会話 一夏VSマドカ〉

一夏「やめろ！異世界で俺達が争う理由なんてないだろ！」

マドカ「貴様にはなくとも私にはある！貴様を倒し、私は元の世界へ帰る！」

一夏「休戦っていう、手もあるだろうに……。くそっ！」

一夏は雪平二型で敵ISを斬り裂いた。

マドカ「ぐっ!? 第一シフトのIS如きにこの私が……！」

一夏「降参してくれ！異界人である俺達がこの世界で戦う必要はないんだよ！」

マドカ「場所など関係ない！倒すべき敵は倒す……。ただ、それだけだ！」

そう言い残し、マドカという少女は撤退した……。

シャルロット「まさか、ファントムタスクのエムまで来るとはね……！」

簪「一夏…大丈夫？」

一夏「あ、ああ…。(あいつは何でそこまで俺を恨んでいるんだ…？ いったい、俺が何をしたってんだよ…！)」

〈戦闘会話 海道VSキバ〉

海道「やつぱり、ドアクターと手を組みやがったのか、キバ！」

真上「ふん、お前が誰かと仲良しゴツコをするとはな」

キバ「勘違いすんなよ、ドクロ！俺はてめえらをぶっ潰せればそれでいいんだよ！」

海道「いいぜ！どこからでもかかって来やがれ！キバアツ！」

〈戦闘会話 舞人VSキバ〉

キバ「さつきは見事と言っておくぜ、ヒーローさんよ！次は力の方も試してやるぜ！」
 マイトガイン「あいつ…まさに戦いの塊だ…！」

舞人「あいつを野放しにしていたら…アル・ワースが戦火に包まれる…！ここで食い止めるぞ、ガイン！」

マイトガイン「わかった、舞人！」

〈戦闘会話 万丈VSキバ〉

万丈「お前は闇だ……太陽を覆う闇だ……」

キバ「ああ!? 急に何を言ってるやがる!」

万丈「戦いを好む戦闘狂はこの波嵐 万丈が相手をしてやる!」

カイザーとダイターン3の攻撃にアイアンカイザーはダメージを負った。

キバ「ちいつ! また負けたのか、俺はア!」

万丈「潔く負けを認めた方が身のためだよ?」

キバ「調子に乗るんじゃないよ、日輪野郎! ドクロ! 勝負は次の機会だ!」

そのままアイアンカイザーは撤退した……

万丈「うーん、あの手の輩には説得は無駄かな?」

真上「おい、波嵐……。勝手な事をするな」

海道「あいつとは俺達がケリをつける! それに、あいつが説得に応じる玉かよ」

万丈「……それは済みません。では、トドメはお二人に任せる事にします」

海道「わかりやあいんだよ」

〈戦闘会話 零VSヴォルフガング〉

ヴォルフガング「そのロボット…興味深いな！ワシに渡して分析させろ！」

零「渡すわけねえだろ、ボケてんのかあんた」

ヴォルフガング「年寄りをバカにするな！」

零「なら、若人も舐めない方がいいぜ？痛い目みても責任は取らねえからな！」

〈戦闘会話 鈴VSヴォルフガング〉

ヴォルフガング「まさか、IS乗りだったとはな」

鈴「あなたも悪い奴の仲間だったなんて…思ってたなかったわ」

ヴォルフガング「こうなったら、そのISはワシが頂く！」

鈴「甲龍（シエンロン）はあんたなんかには渡すわけにはいかないのよ！悪の科学者なら、あたしが成敗してやるわ！」

〈戦闘会話 ジャンボットVSヴォルフガング〉

ヴォルフガング「その人工知能…興味深いな！」

ジャンボット「残念だが、地球人では私の技術を奪う事は出来ない。青戸工場の人達以外は……」

ヴォルフガング「そんな事、やってみなければわからないじやろ！こうなったら力付くで貴様を捕らえてやる！」

マイトガインとブラックマイトガインの連携でヴォルフガングのロボットにダメージを与えた。

ヴォルフガング「まあいい。負けはしたが、今日は気分よく帰るとしよう。エクスクロス！次こそ、ワシの造ったロボットがお前達を叩きのめしてくれるぞ！」

舞人「ヴォルフガング……最強のロボットを造るといふ夢に取り憑かれた科学者……」

マイトガイン「その力を人々のために使えば、有意義なものにな……」

大阪「(壊れた機械は直せるが、人の生命に代わるものはない……) という言葉……まさか、あのヴォルフガングという男は……)」

雑魚も全て倒し、俺達は戦闘態勢を解いた。

舞人「終わったか……」

万丈「いや……。そうじゃない。あのBD連合とドアクター軍団のタッグはこの世界を混乱させるだろう」

舞人「悪と悪が手を組むのなら、俺達も仲間を増やし、それに対抗します。手伝ってくれますね、万丈さんも？」

万丈「その笑顔で言われては断れないな」

チャム「もう！最初から、そのつもりだったくせに！」

シヨウ「快男児ぶりは、相変わらずですね」

万丈「そう生きたいと願っているからね」

舞人「ブラックもお疲れ。さあ、帰ろう」

ブラックマイトガイン「帰る……？」

舞人「お前も今日から勇者特急隊……。さらにはエクスクロスの一員だ……。そこが前の帰るべき場所なんだ」

ブラックマイトガイン「了解……。！ブラックマイトガイン、回送となります！」

舞人「(BD連合)……。パープル……。どんな卑劣な手を使おうと俺達は負けない……。悪が手を組み、その闇を増すのなら、俺達はそれを照らす光となるぞ)」

俺達はそれぞれの艦に戻った……。

「ネモだ。」

私は今、ブリッジでエレクトラと話していた。

エレクトラ「……マナの国の状況の調査に向かったシグナスの倉光艦長より入電です」

ネモ船長「読み上げてくれ」

エレクトラ「エクスクロス別働隊はマナの国調査を完了……。新たに加わったメンバーと共にこちらに合流する……。との事です」

ネモ船長「合流地点にポイントSP21、RP09を指定。Nーノーチラス号とナデシコCも補給を済ませた後、そちらへ向かう。よろしいですか、ホシノ艦長」

ルリ「了解です、こちらの補給を開始します」

ネモ船長「(マナの国……ミスルギ皇国……。いずれは挨拶に行かねばならんだろうな……)」

「ーシヨウ・ザマだ。」

俺とマーベル、チャムは万丈さんとNノーチラス号の格納庫で話していた。

シヨウ「……では、万丈さんは一人で、このアル・ワースに跳ばされたんですね」

万丈「その後も各地を巡り、情報を収集していたんだ。マナの国にも潜入したけど、あそこにはヒイロ達がいる」

マーベル「ヒイロ・ユイ……。ガンダムを駆る少年……」

万丈「さらにあちらにはマリーメイヤ軍もいて、ミスルギ皇国に協力しているんだ」

チャム「そのマリーメイヤ軍って何？」

万丈「そうか……。君達は太平洋の戦いの後の事は知らないんだな……。それについては、ヒイロ達が合流してから話そう」

チャム「え……。！あの子達、エクスクロスに来るの？」

万丈「先程、ゼクス・マーキスから連絡があったが、彼等はマナの国の調査に向かったエクスクロスと行動を共にしているそうだ」

ゼクス・マーキス……。!??

チャム「ゼクスって……。ミリアルド・ピースクラフトの事よね……。！」

マーベル「彼もこのアル・ワースについてエクスクロスに協力しているなんて……」

シヨウ「つまり、俺達とも共に戦う事になるのか……。参ったな……。あいつがいるだけでも、ちよっと気が重いのに……」

マーベル「ふふ… ショウはヒイロの事がちよつと苦手だものね…」
万丈「(聖戦士、ガンダムのパイロット、そして僕…)。このメンバーが揃ったとなれば、僕が追っている噂の主の正体も早々にはつきりさせねばならないだろうな…。それに、つい最近、ドアクダー軍団に入った龍の破壊王という人物も気になる。」

―新垣 零だ。

俺達が行く事になり、浜田君とサリーが出迎えてくれた。

舞人「…じゃあ、浜田君、サリーちゃん…。勇者特急隊はエクスクロスの一員としてドアクダー軍団との戦いに出発するよ」

浜田「気をつけてね、舞人。僕は大阪さん達と、この青戸でバックアップするから」

サリー「…また会えますよね、舞人さん？」

舞人「約束するよ、サリーちゃん。必ず君を迎えに来て、そして一緒に元の世界に戻るって」

サリー「待ってます、その日を」

すると、そこへ一夏、鈴、シャルロット、簪、ニアさんが来た。

ニア「お世話になりました、サリーさん。私と鈴さんもシモン達について行く事にし

ました」

サリー「あの… ニアさん… 大事な人へプロポーズの返事をもう一度するため、旅をしていたんですよね？」

ニア「はい」

サリー「その大事な人って… あのシモンさんなんですよね」

ニア「はい」

… 両思いか。

零「ニアさん、聞いてもいいですか？ どうして、シモンさんのプロポーズを断ったんですか？」

ニア「シモンは私に、こう言っただけです… 同じものを見て、同じ音を聞いて、同じように笑う… 俺の目がニアの目で、ニアの耳が俺の耳で… そういうの、いいんじゃないかって…」

零「それに不満があっただけですか？」

ニア「二人で同じ人間にはなれないんじゃないかなあ… って思って…」

零「… へ？」

舞人「それは… そう言う意味じゃ…」

ニア「お友達にも、そう言われました。だから、私… シモンの気持ちにちゃんと応

えようと思つて旅に出たんです」

サリー「プロポーズのお返事……したんですか？」

ニア「それが……シモンは聞きたくないっていうんです」

……何で？」

サリー「え……？」

ニア「返事を聞くのはもつと自分が大きな男になつてからだつて言つてました」

舞人「すごいな、シモンさんは……。さらに成長しようとしているんだ」

一夏「でも、シモンさんらしいな……」

舞人「サリーちゃん、さっきの約束に付け足しだ」

サリー「付け足し……ですか？」

舞人「次に会う時まで俺ももつと大きな男になつてみせる。約束するよ」

サリー「はい！頑張ってくださいね、舞人さん！」

鈴「やるわね、舞人……。一夏に爪の垢を煎じて飲ませたいわ」

一夏「ん？それどういう意味だよ？」

鈴「わからないなら良いわよ！」

一夏「それにしても、無事でよかつたよ」

鈴「一夏……心配をかけたわね」

一夏「お前に何かあったら…俺は…」

鈴「い、一夏…そ、それって…」

おいおい、あの唐変木が…。

ロザリー「一夏ー！そろそろ出発するみたいだぞ！」

クリス「一緒に戻ろ、一夏君！」

一夏「おう！待ってくれ！」

鈴「…一夏？」

一夏「え…？」

鈴「あんた…あんたって奴はあああつ!!？」

一夏「な、何でISを纏うんだ?!?う、うわあああつ!」

一夏は鈴に追いかけられる羽目になった。

シャルロット「全く…一夏は…」

舞人「一夏って、いつもああなのか？」

簪「はい」

メル「でも、一夏君…嬉しそうですね」

アマリ「鈴さんは一夏君の幼馴染と聞きます」

零「幼馴染…か…」

アマリ「零君……？」

零「……いや、何でもないよ」

……弘樹はアル・ワースにいる……。優香もこのアル・ワースにいるのか……。？いたと
したら……。会いたいな……。また、弘樹と優香と三人で……。

マナの国ルート

第21話 ターゲット確認

「ドニエル・トスだ。」

私は今、クリム大尉と通信していた。

クリム「……そちらからの報告でドアクダーなる者の打倒による帰還の可能性については理解した」

ドニエル「では、アメリカ軍も対ドアクダー戦に参加してくれると?」

クリム「そうはいかない。今、下手に軍を退けば、背後からマナの国の攻撃を受ける事になる。また、ここで退却すれば、帰還した後の対キャピタル・アーミー戦略に支障が出る」

ドニエル「面子の話をしている場合ではないでしょうが……!」

クリム「簡単に言わないでもらいたいな。敗北の記憶は、兵達の心に傷を残し、後の憂いとなる」

ドニエル「……天才の感性というものは理解し難いですな」

クリム「言っておくが、私とて無駄に戦闘をしたいわけではない。当然、アメリカ軍の代表としてマナの国のリーダー的存在であるミスルギ皇国に講和を申し出たが……。ジュリオ・飛鳥・ミスルギに拒絶……いや、一蹴されたと言うべきだな、あれは」

ドニエル「その理由は？」

クリム「我々が秩序を乱す存在だからだそうだ。まったく……同じ異界人である、アーミイやゾギリア、ガンダム達と何の差があるというのだ」

我々は奴らに従わないと思われているからか……？

クリム「そう言った経験もあって私は、あの無能が服を着て歩いているような男と言葉を重ねても無駄だと判断する。だから、この下らない戦争を早期終結させるためにも敵の拠点を一点突破で叩く事が必要となるのだ。貴官には、そのための情報収集を頼みたい」

ドニエル「その戦略が正しいかはさておき、マナの国がアメリカ軍を敵視する理由と
いうものは確かに気になります」

クリム「では、頼むぞ。吉報を待っている」

そして、通信を切った。

ドニエル「……結局、こうなるのか……」

倉光「あれが天才、クリム・ニック大尉ですか……。なるほど……。確かに才気に満ちて

いますね」

ドニエル「彼はアメリカ大統領の息子でしてな……。その血筋の良さと高い能力で、こちらに跳ばされたアメリカ軍の司令に収まっています」

スメラギ「大変な任務を押し付けられた事には辞易しますが、ドニエル艦長のおつしやられた通りに、ミスルギの出入を調査するのは必要でしょう」

倉光「それにドアクターの事を明かせば、ゾギリアやキャピタル・アーミイ、ガンダム達もミスルギを離脱する可能性もあります」

ドニエル「そうですね。そう言った道もあるでしょう」

倉光「もつとも……。元の世界へ帰還した後を考えれば、ゾギリアは我々の持つカップリングシステムを標的にしてくるでしょうが……」

スメラギ「劣勢にある自由条約連合の切り札、カップリングシステム……。確かに驚異的なテクノロジーですけど、現状では、多くの問題があるように思います」

倉光「その点については、私も同感です。第一にカップラーの適性というものもありますのでたとえ、機体が量産に成功したとしても、即時の大量投入は無理でしょう」

ドニエル「あのシステムが戦局を一変させる力になる……と言われれば、やはり疑問が残りますな」

倉光「ですが、最重要戦略兵器であると言われた以上、軍人として全力であれを守る

のみです」

ドニエル「了解しました。今後のマナの国調査においても、その点は留意させていただきます」

―新垣 零だ。

俺達はシグナスのパイロット待機室にいた…。

ディオ「…なんども言った通りだ。お前の甘い戦い方では、いずれ取り返しのない事になる」

青葉「また、それかよ。逃げる敵を追撃するよりも、先にやる事があるだろうが…！」

ディオ「攻勢にある時には徹底的にやる。それがセオリーだ」
… まーた、喧嘩してんのか…。

セシリー「あの二人… またやりあっているわね」

シーブツク「バディを組んでいるけど、性格は正反対だからな」
アンドレイ「どちらも言っていることは間違っていないのだがね」

ユイ「でも、流石に止めないと…！」

刹那「口を挟まない方がいい、ユイ」

ユイ「ど、どうしてですか!?!」

零「これはあいつらの問題だ。それに、男同士の喧嘩に入らない方が身の為だぜ？」

アオイ「そう言う事よ、ユイ」

ユイ「はい……」

レナ「男の人つてよくわからない……」

セルゲイ「君達にもいずれ分かる時がくるさ」

レナ「……子供扱いしないで」

ナル「ま、まあまあ……レナ様」

サラ「そうだ、ベルリ君！青葉君とディオ君の両方と仲がいいベルリ君がどつちかのバディになってみたらどう？」

ティア「それいいね！操縦テクニクもリンクされるから、機種転換訓練？……つていうのも受ける必要がないしね」

ベルリ「それは無理だよ！僕にはGーセルフがあるし！」

リー「そう慌てるなって。ベルリがその気になっても、無理かもしれないしな」

ロツクオン「どうしてだ？」

まゆか「それは私から説明します」

テイエリア「頼む」

まゆか「はい！… カップリングシステムを起動させるには二人のエンフアンティアレベルが規定値を突破する必要があります」

アレルヤ「そのエンフアンティアレベルとはなんだい？」

まゆか「簡単に言えば、精神状態のシンクロ度合いです。二人のエンフアンティア波形が一致すればカップリングが可能となります」

ニール「つまり、誰でも使えるってわけじゃないのか…」

まゆか「カップラー養成機関では、基準の波形を設定し、候補生達は自らの波形をそれに一致させる訓練をしていました」

アルト「じゃあ、青葉の場合はどうなんだよ？ 訓練もしていない全くの素人なのにどうしてカップリングが出来たんだ？」

まゆか「信じられない事ですが、青葉さんのエンフアンティア波形はその基準波形をほぼ一致していました。エルヴィラさんが言っていました、これは偶然だしたら、天学的な確率だそうです」

アニュー「彼はカップリングの天才という事ね…」

リー「すごく大雑把に言えば、そうなる」

ディオ「俺は… 認めません」

リー「聞いていたのか、ディオ」

ディオ「確かにこいつは生まれながらにして基準波形と同一のエンフアンティア波形を持っているかも知れません……。ですが、戦いに関する心構えはただの素人です」

青葉「お前の言う通り、俺はシロウトだよ。当然だろ、戦争のない時代に生まれて育つたんだから」

ディオ「百歩譲って、それを信じるとしても、ゾギリアと講和くるなんて事を言い出すような奴を俺は認めない」

まゆか「ゾギリアと講和って……」

青葉「そんなにおかしいか？俺から見れば、別世界に来てまで戦争をする方がよっぽどおかしいぜ」

アルト「青葉の言う通りだな。俺達の目的は元の世界に帰る事だ」

刹那「それに相手は人間だ。言葉を交わせばわかりある事だつてできる」

リー「気持ちにはわかるが、ゾギリアやキャピタル・アーミィ、ガンダム部隊が合意してくれなきゃ、どうしようもない」

パトリック「そうだな、こつちが話し合いの場を設けても相手が好戦的なら意味がない」

ディオ「ゾギリアは暴力によって他を支配する事を国是とするような連中だ。話し合

いなどしても無駄だ」

青葉「……ディオ。お前って、いつもはクールで合理的だけど、ゾギリアが相手になると目の色が変わるな……」

ディオ「お前に俺の何がわかる……!!?」

青葉「お前こそ、俺の何がわかるって言うんだよ!!?」

マリ「これは流石に止めるわ、やめなさい、二人共！」

すると、シグナス内に警報が響いた。

レーネ「各員へ。本艦に友軍機からの救援信号が届いた」

ディオ「友軍機……!!?」

リー「ゾギリアはかなりの数の部隊がこちらに跳ばされて来ているんだ。自由条約連合の方も同様の状況にあってもおかしくない」

レーネ「方角から判断して、友軍機はマナの国から逃亡中と判断する。本艦とメガファウナ、プトレマイオスは友軍機を保護し、マナの国の情報入手する」

リー「行くぞ、みんな……！出撃だ！」

メル「了解です……！」

ディオ「……」

青葉「……」

ベルリ「青葉もディオも、そんな顔してないでやるべき事をやらないと」
ディオ「俺のやるべき事…」

青葉「それは…」

俺達は出撃準備を急いだ…。

第21話 ターゲット確認

ーゼクス・マークスだ。

私とノイン、ガエリオとジュリエッタ、フロムはミスルギ皇国から逃げていた。

ガエリオとジュリエッタとはミスルギ皇国で出会い、彼等も別の世界から来た異界人でモビルスーツに乗っていると言う。

ゼクス「ミスルギ領内は脱した。これで一息つけるだろう」

ガエリオ「だが、警戒をする事に越した事はないね」

フロム「助かりました、皆さん。一人では、ここまで来るのは無理でしたよ」

ジュリエッタ「ゼクスさんが一息つけると言いましたが、油断はしないでください、フロムさん」

ノイン「ミスルギのやり方は常軌を逸している。ここで仕掛けてくる可能性もある」
フロム「さすがにそれはないと思いますけど……」

すると、ゾギリアのヴァリアンサーとマリーメイア軍、鉄華団とタービンスのモビルスーツが現れた。

やはり来たか……！

ノイン「ゾギリアとマリーメイア軍！」

ガエリオ「鉄華団とタービンスもいるな……！」

ゼクス「我々を追って来たか……！」

我々を狙って、ヴァリアンサーは攻撃してきた。

フロム「街があるのに攻撃してきた……！」

ジュリエッタ「なんとと言う事を……ここはマナの国ではないんですよ！」

シノ「お、おい！いきなり攻撃はねえだろ！」

アストン「街に民間人があるかもしれないんだぞ！」

マルガレタ「そんな事は承知している」

ガエリオ「何だと……!?？」

マルガレタ「我々は神聖ミスルギ皇国のジュリオ陛下から周辺の自治都市の併合も依頼されている。お前達を追って、ここまで、来たのだ。その任務も果たさせてもらう」

ラフタ「偉そうにしちやって…！」

明弘「だが、他ならない、名瀬さんとオルガの指示だ。ここは抑えろ、ラフタ」

ラフタ「わかっているわよ！」

ノイン「ミスルギ皇国は異界人の戦力を自国の領土拡大に使うのか…！」

ジュリエッタ「見損ないましたよ、鉄華団並びにタービンズ！その様な小悪党と手を結ぶなど！」

シノ「俺達にだって俺達の生きる理由つてもんがあるんだよ！ギャラルホルンのお前らに指図される義理はねえよ！」

フロム「このままでは僕達の存在がミスルギの武力侵攻のきっかけになってしま…！」

ゼクス「フロム…！君は、このエリアを離脱しろ！」

ガエリオ「後は俺達が引き受ける！」

フロム「ちよつと待ってください！僕だけ逃げるなんて…！」

ジュリエッタ「あなたの機体は消耗が激しいです。長時間の戦闘は無理ですよ」

ノイン「先程、救援信号を送った友軍に合流して、こちらに誘導してくれ」

フロム「しかし、それでは……！」

ゼクス「案ずる事はない。あの程度の戦力に後れを取る私達ではない」

ガエリオ「これでも元の世界では激戦を勝ち抜いて来たんだ、任せてくれ」

フロム「……そうですね。皆さんならば、安心してお任せできます。すぐに戻ります……！それまで、前線をお願いします！」

そう言つて、フロムは退いた。

マルガレタ「一機、逃げたか……。まあいい。各機は残った四機を殲滅し、そのまま、あの都市を制圧しろ」

明弘「……」

アストン「明弘……？」

明弘「何でもない……やるぞ！」

ゼクス「すまん、ノイン。また君に苦勞を背負わせて」

ノイン「あなたと一緒にならば、この程度の事は困難でも何でもありません」

ガエリオ「ジュリエッタ……俺は……」

ジュリエッタ「今はその様な甘い言葉は必要ありません」

ガエリオ「て、手厳しいな……」

ジュリエッタ「病み上がりなので、無理はしないでください」

ガエリオ「：：心配してくれている君の為にも約束するよ」

ジュリエッタ「し、心配なんてしてません！」

ガエリオ「あはは！相変わらずだな。では行こうか、ゼクス」

ゼクス「ああ、ガエリオ。やるぞ：：！ここが異世界であろうと、力で無法を働く輩を許すわけにはいかない！」

私達は戦いを始めた：：。

〈戦闘会話　ガエリオVS初戦闘〉

ガエリオ「また戦う事になるとは：：。アイン、また俺に力を貸してくれ：：！やるぞ、キマリスヴィダール！」

〈戦闘会話　ジュリエッタVS初戦闘〉

ジュリエッタ「異界でまたもや鉄華団と戦闘になるとは：：。これも運命なのですな。（あの人：：ガエリオさんが隣にいるならば私も答えるまでです！）だから、力を貸してください、レギンレイズ・ジュリア！」

戦闘開始から数分の事だった……。

マルガレタ「この反応は……！」

ゼクス「どうやら間に合ったようだな」

反対方向から3隻の戦艦が来た……。

―新垣 零だ。

俺達は友軍機と出会い、仲間が戦っているとフロムから聞き、出撃した。

フロム「お待たせしました、ゼクスさん、ノインさん、ガエリオさん、ジュリエッタさん！」

ガエリオ「信じていたよ、フロム」

倉光「こちらはシグナス艦長の倉光大佐だ。君達の事は、フロム少尉から聞いた。あちらの都市を守る為にも君達を援護する」

ノイン「ご協力に感謝します、倉光大佐」

ジュリエッタ「彼等がミスルギに敵視されているアメリカと自由条約連合の連合部隊

ですか……」

ゼクス「我々の居場所に相応しいかもな」

マルガレタ「白鳥が来たのなら、好都合だ。新型を捕獲してやる」

ディオ「ゾギリアめ……！ミスルギの手先となつて、侵略に荷担するか……！」

青葉「ディオ！熱くなるのはいいが、俺達の目的は都市の防衛なのを忘れるなよ！」

ディオ「ゾギリアを叩けば、その目的は達成される！」

青葉「だからつて、街に被害が出たら、意味ねえだろうが！」

零「こんな時まで喧嘩している場合か！」

フロム「（二対の機体の片方にディオ……。では、あれがカップリングシステムを搭載

した新型か……。でも、あのコンビ……あまりうまくいってないようだな……）」

リー「聞こえるか、フロム少尉。お前は俺達と一緒にシグナスの直庵だ」

フロム「了解です。それと僕の事は、フロムで結構ですから」

ドニエル「各機はミスルギを迎撃！データの無い機体には注意を払え！」

スメラギ「特にガンダムには気をつけて！」

倉光「増援も考えられる。ペースの配分には気をつけてくれ」

ディオ「ゾギリアの好きにはさせません……！」

青葉「あいつ……！勝手をしやがつて！」

ルクシオンとブラディオンが前に出た……って、何してんだよ!??

マサキ「何やってんだよ、あいつ等!」

アーニー「コンビプレイっていうよりも、意地を張り合ってるみたいだね……」

リチャード「ミスルギよりもお互いが敵みたいだな、あれは……」

アマリ「あの二人に注意しながら戦いましょう!」

零「たくつ……! 世話にかかるコンビだな!」

俺達は敵との戦闘を開始した……。

ゾギリア軍との戦闘の最中、ギゼラ少尉が叫んだ。

ギゼラ「艦長! ゾギリアと思われる部隊がこのエリアに接近しています!」

ドニエル「やはり、増援が来たか!」

そして、ゾギリアの増援が現れる。

あれは……アルフリードとかいうやつはヴァリアンサーか!

それに、ルシファアって、戦闘機もいる……!

マルガレタ「アルフリード中佐……! 部隊の展開が遅いではないですか!」

アルフリード「申し訳ありません、マルガレタ特務武官」

タルジム「あの女： 行政局から派遣されて来たからって威張りやがってよ：）」
 ラーシヤ「今回の命令もアルフリード中佐としては拒否したかったんだろうけど：）」

マルガレタ「では、手筈通りに：：！」

アルフリード「：： 最後に確認します。我々が邪魔者を叩けば、あの都市を無血解放させる事も可能です」

マルガレタ「これは行政局の決定です。今後の戦略を考えれば、あの都市を壊滅させる事は無意味とは言えません。恐怖により、後の戦略を円滑にする：：。それこそが最小の犠牲で最大の効果を発すると行政局は判断したのです」

シノ「最小の犠牲って：： 結局あの街の奴らは犠牲になるって事じゃねえか！」
 マルガレタ「そう言っている」

シノ「て、てめえ：：！」

明弘「やめろ、シノ：： やめるんだ：：！」

ラフタ「明弘：：」

アルフリード「：： 了解しました」

「？？」街の近くに新しい部隊が：： 「？？」あいつら、直接街を狙う気か：： 「？？」

マルガレタ「各機、都市に向けて攻撃開始！」

新しく現れた部隊は街を攻撃し始めた。

シーブック「あいつ等！都市を直接攻撃した！」

アルト「なんて汚い真似しやがる！おい、ブレラ！早くやめさせろ！」

ブレラ「…あの街がどうなるうと俺の知った事ではない」

アルト「お前…！」

ガエリオ「鉄華団とタービンス！お前達もこの様な悪行を見逃すのか！」

アストン「お、俺達だって…！」

明弘「もうみんな、我慢の限界だぞ…オルガ…！」

ディオ「ゾギリアめ…？またお前達は市民を戦争に巻き込む気か！」

ぶ、ブラディオオンがあいつ等の射線内に移動した!?!?

アイーダ「盾になるつもり!?!？」

青葉「ディオ！」

ルクシオンまで…！

ディオ「何をしに来た!?!？」

青葉「お前ばかりに、いい格好させるかよ!!？」

あいつ等、いい加減に…！

マルガレタ「馬鹿め！わざわざ的になりに来たか！」

案の定、ルクシオンとブラディオンの銃撃が当たる。

青葉「うおっ！」

ディオ「お前は下がれ！」

青葉「馬鹿言ってるじゃねえ！ここで俺が退いたら、あの街がやられちゃうじゃねえか！お前だって、そう思ったから無茶してんだろが！」

ディオ「青葉……」

ユイ「どうする事も出来ないんですか!?？」

レナ「あの位置じゃ、私達が攻撃しても街に被害が……！」

ベルリ「ハッパさん！あれの用意を!!？」

Gーセルフがメガファウナへ戻ると何かを装備した。

アイーダ「リフレクターパック……！」

ベルリ「こいつならば……！」

Gーセルフがルクシオンとブラディオンの前まで移動した。

ベルリ「下がれ、青葉、ディオ!!？頼んだぞ、リフレクター！」

すると、敵のビーム攻撃をGーセルフのリフレクターが弾いた。

アストン「ビームを弾いた!?？」

アイーダ「相手のビームを吸収し、それをエネルギーにしてIフィールドを形成す

る……。あのパックを装備したGーセルフならば、ビームに対する盾になります」

青葉「いいぞ、ベルリ！」

アルフリード「ならば……！」

さ、さらに敵の数が増えた……!??

零「あいつ等……！数で舞台を広げた!?？」

アマリ「駄目です！あんなに広げられたら、あのパックでは防げません！」

ベルリ「ハツパさん！どうしたら、いいんです!?？」

ハツパ「エネルギーを大量消費すれば、フィールドは広域化できる！」

ベルリ「そのエネルギーはどこにあるんです!?？」

ハツパ「敵のビームを吸収するんだよ！」

ベルリ「それじゃ第一波の攻撃の大半は防げないじゃないですか！」

刹那「くっ……！こんな時にライザーソードが使えれば……！」

零「テイエリア！俺達のビームで何とかなるんじゃないやねえか!?？」

テイエリア「可能だが、間に合わない……！」

すると、Gーセルフに通信が入った。

？「確認する。リフレクターは用意できているな？」

ベルリ「誰だ!?？」

？「リフレクターは完璧なんだな？」

ベルリ「そのつもりだけど！」

？「その位置を絶対に動くな」

ベルリ「ちよつと……！君、誰なんだよ!!？」

アルフリード「気をつける！上空に高エネルギー反応！」

ゼクス「これは……！」

Gーセルフに向けて、上空からビームが放たれた……!!？」

アンドレイ「ベルリ君！」

ベルリ「大丈夫です！リフレクターが効いています！」

ジュリエッタ「また来ます！」

再び、ビームが放たれた。

青葉「すげえ！リフレクターにドンピシャの位置だ！」

ディオ「あのビーム……！ベルリを攻撃したんじゃない！」

ベルリ「これだけのエネルギーがあれば、やれるぞ！Iフィールド、全開だあああつ

!!？」

よし、ビームを弾けた！

マルガレタ「馬鹿な!!？」

青葉「やったぜ！全部のビームを止めた！」

ディオ「後はあいつ等を叩けば……！」

マルガレタ「後退だ！態勢を立て直せ！」

街を攻撃していた部隊は後退を開始した。

アルフリード「いかん……！」

上空から後退した部隊の中心にガンダムが現れた……！！？

ブレラ「上空からだ……！！？」

ティア「じゃあ、あのガンダムがGーセルフにビームを撃つたの……！！？」

アルフリード「各機、展開！急げ！」

ヒイロ「遅い」

上空から現れた翼のガンダムが動いた。

ヒイロ「……わかってる、ゼロ。ターゲットロックオン、攻撃開始」

す、すげえ……！体を回転させて、周りの部隊を全滅させた……！！？

青葉「すげえ……！一撃かよ！」

ベルリ「助かったよ。おかげで、あの街を守れた」

ヒイロ「まだ終わってはいない」

ディオ「わかってる。あいつ等を叩くまで戦いは終わらない」

四機は俺達の下まで来た。

ゼクス「ヒイロ……。やはり、お前も来ていたか」

ヒイロ「ゼクスとノインか……」

ノイン「こうなると彼等ともいずれ会えるだろうな」

ゼクス「まずは目の前の脅威を排除する」

刹那「あれもガンダムなのか……！」

ガエリオ「本当に見た事もないガンダム・フレームばかりだね」

ジュリエッタ「まるでガンダム・フレームのバーゲンセールですね」

ガエリオ「違うない」

ドニエル「あの羽付きも我々に協力してくれるか」

倉光「絵になる機体だね。あっちの方が白鳥つてニツクネームに相応しいかも」

スメラギ「何にしてもガンダムが味方となるのは大きいです！」

マルガレタ「邪魔者は叩く……！それが我々に下された命令だ！」

アルフリード「各機へ……！あのモビルスーツとは何度か戦闘経験がある！奴の火力

には注意しろ！」

ヒイロ「ターゲット確認……。攻撃目標……。未だ見えず」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 アルトVSブレラ〉

ブレラ「アルト、ミスルギ皇国に来る気はないか？」

アルト「何…？？」

ブレラ「お前の腕ならばミスルギ皇国でもやっていける」

アルト「断る！悪事に手を染めている奴らに協力なんてできるか！」

ブレラ「そうか…ならば、やはりお前を倒す！」

デュランダルはルシファーを追い詰めた。

ブレラ「…此処までか…アルト、またの再会を楽しみにしている。必ず来い」

そういう残し、ルシファーは撤退した…。

アマリ「あの人…アルト君に待っているって言ってますけど、すぐに撤退するんですね…」

アルト「（…いや、待っているのはおそろくあいつじゃない…。必ず行くから待っている、ランカ…）」

〈戦闘会話 ジュリエッタVSシノ〉

ジュリエッタ「その機体……あの時に特攻して来たガンダム・フレイムですね……！」
シノ「スーパーギヤラクシーキャノンの邪魔をした奴か！ 思えば、あいつの邪魔がなければ俺達は勝っていたのかもしれないだよな……」

ジュリエッタ「私を恨んでいますか……？」

シノ「いや、あれは戦争なんだ……恨んだって何にもならねえよ。でも、今は別だ！」
ジュリエッタ「そうですね……。私も負ける気はありません！」

〈戦闘会話 ガエリオVS明弘〉

明弘「ギヤラルホルンのガンダム・フレイムか！」

ガエリオ「此処は異世界だ。俺達が手を取り合う事だつてできるはずだ！」

明弘「そうかもな……。だが、俺達はこの生き方しか知らねえんだ……。容赦はしねえぞ！」

〈戦闘会話 ジュリエッタVS明弘〉

ジュリエッタ「あなたは……あの悪魔と共に私達に挑んだ……」

明弘「そうか、お前だったな。三日月を倒したのは……此処にいないあいつの仇を取る！仲間として！」

ジュリエッタ「私だけで勝てるかはわかりませんが……やってみせます！」

俺達は敵ガンダム部隊を追い詰めた。

アストン「あいつ等強い……！」

ラフタ「このままじゃ私達が負けちゃうよ！」

シノ「どうすんだ、明弘！」

明弘「退くぞ……。誰一人ともう失うわけにはいかないんだ……」

ラフタ「明弘……了解！」

シノ「この借りは必ず返してやる！」

そう言い残し、鉄華団とタービンスのモビルスーツ部隊は撤退した……。

ヒイロ「見事な引き際だな……」

刹那「奴らは街を攻撃するのを拒んでいた……一体なぜ……」

ヒイロ「その答えはマナの国にある」

刹那「え…？」

ヒイロ「お前もガンダムならばわかるはずだ」

刹那「翼のガンダムのパイロット…」

ジュリエッタ「…鉄華団…」

ガエリオ「この世界でも彼等と戦う事になるとはな…」

ジュリエッタ「(…もし彼等が味方となつても私は…手を取り合う事が出来るの

でしょうか…)」

〈戦闘会話 零VSマルガレタ〉

零「あなたのやり方はあいつみたいで気に入らねえ…！」

マルガレタ「だから、何だ？私は行政局の命令に従っただけだ」

零「そう何でもかんでも命令のせいにするもんじゃねえぜ？」

マルガレタ「何…？！」

零「やったのはあんた自身だろ！自分自身の行いに尻拭いもできないやつに俺は加減なんかしないからな！」

ルクシオンとブラディオンのコンビネーションに敵ヴァリアンサーはダメージを受けた。

マルガレタ「わ、私は、こんな所で終わるわけにはいかない……！」

は、早い撤退だな…… 本当にあいつに似てるな……。

アルフリード「前線で指揮を執るといふ熱意は買いますよ、特務武官殿。ですが、戦場には戦場の流儀があるのです。後はお任せください」

〈戦闘会話　ガエリオVSアルフリード〉

ガエリオ「アルフリード・ガラント…… 君には要注意だったな」

アルフリード「ガエリオ・ボードウィン…… 君も我々と敵対するのか？」

ガエリオ「どうにも俺には君達のやり方は合わないので……。向かってくるなら容赦はしないぞ！」

ウイングゼロとトールギスの連携により、アルシエルは大ダメージを受けた。

アルフリード「不本意な作戦とはいえ、失敗は認めなくてはならない…。この借りは
いずれ返させてもらうぞ」

アルシエルも撤退した…。

サラ「な、何とか街を守る事が出来たね…」

メル「マナの国…というよりもミスルギ皇国は周辺への侵略を開始するみたいです
ね」

零「一刻も早く状況を調べて、対策を練らないとな…」

ドニエル「各機は帰還しろ。協力者と合流して、今後の対策を検討する」

ゼクス「ヒイロ…。お前も来てくれるな」

ヒイロ「そのつもりだ。(この状況…。急がなくてはならない…。)」

ベルリ「あいつ…。ヒイロって言うのか…」

青葉「今日の勝利は、あいつとベルリのおかげだな」

ベルリ「そうじゃない。その前の青葉とデイオの頑張りがあったから、リフレクター
パックに換装する事が出来たんだ」

青葉「俺は……ディオに引つ張られたただけだ」

ディオ「青葉……」

青葉「ディオ……。帰ったら、話がある……」

俺達はそれぞれの艦に帰還した……。

―渡瀬 青葉だ！

俺はシグナスの格納庫でディオと話をしようとしていた。

ディオ「……話とは何だ？」

青葉「そのさ……これまでのカップリングで俺……時々見たんだ……。お前の記憶みたいなものを……」

ディオ「……」

青葉「よくわからなかったけど、ゾギリアが

市民を戦闘に巻き込んでいたみたいだった……。今日、その意味がわかったよ……。

ディオ「……あれが、お前がゾギリアを憎む理由なんだよな」

ディオ「……そうだ」

青葉「そうか……。悪かったな……。今まで、お前のやり方を否定するような事ばかり言ってる。」

ディオ「青葉……」

青葉「お前の怒りとか、悲しみとかも伝わってきたんだ……。だから、お前……同じ様な状況だった今日はあんな無茶したんだな……」

ディオ「……」

青葉「あんな想いをしたお前を止める言葉を俺は持つてねえ……。だから……」

ディオ「……妹だ……」

青葉「え……」

ディオ「妹のフィオナは、その戦いで歩けなくなった……。だから、俺は……ゾギリアを許せない」

青葉「どうして、それを俺に？」

ディオ「俺の記憶に触れたのなら、隠す必要もないと思った……。同時にわかったんだ。お前が俺と同じ様に怒り、悲しんでくれた事を。だから……」

青葉「ディオ……」

すると、フロムとか言う奴が歩いてきた。

フロム「……思った以上にちゃんとバディをやってるね」

ディオ「フロム…」

フロム「久しぶりだね、ディオ。まさか、こんな風に再会をするとは思ってもみなかったよ」

青葉「こいつ…あの救援信号を出したベリルに乗ってた奴か」

フロム「僕はフロム・ヴァンタレイ少尉…。所属していた部隊が壊滅したんで、今日からこちらに厄介になる。ディオとはカップラー養成機関の頃からの仲だよ」

ディオ「お前の所属していた部隊は…？」

フロム「小規模な戦力だったけど、アル・ワースに転移した後、ゾギリアとその協力者に攻撃されてね。生き残ったのは僕だけ…。ってわけ」

青葉「大変だったんだな、お前…」

フロム「いい奴だね、君って。だから、ディオとバディを組んでいるんだね」

青葉「え…」

フロム「カップリングシステムが完成したのなら、僕がディオと組もうと思ったけど、君がいるんじゃないか。ディオは…。どう思う？僕と彼…。どっちが君に相応しいかな？」

ディオ「俺は…。青葉と戦うつもりだ」

青葉「ディオ…」

フロム「了解だ。今更君達の間割りに割り込むのも無理っぽいね。そう言う事だから、僕はコンラッド大尉達と、この艦の直庵に専念するよ。それじゃ、また…」

そう言い残して、フロムは去っていった…。

青葉「へ：：へへ：：何か照れるな：：。改めてバディ宣言されると：：」

ディオ「おかしな事を言うな。もともと高い実力を持つているフロムなら、システムなしでも戦果が挙げられると判断したまでだ。その点、お前の場合、俺のアシストがなければ、ロクに戦えないだろうからな」

青葉「何言ってやがる！俺の操縦技術は、お前のコピーだろうが！」

ディオ「そのテクニックを活かしていない事が問題なんだ」

青葉「：：やめようぜ。これじゃいつもと同じ展開だ」

ディオ「確かにな：：」

青葉「やろうぜ、ディオ。戦争をしたいわけじゃないが、ゾギリアは止めなきやならねえ」

ディオ「その通りだ、青葉」

青葉「またシミュレーターで特訓だ。お前のテクニックを活かすためにもな」

ディオ「いいだろう。嫌という程、付き合っただけ」

やれる…：：ディオと一緒になら何処までも…：：！

―新垣 零だ。

俺達はメガファウナの格納庫で新たに仲間となった人達と話し合っていた？

ゼクス「お前も私達と同様にマリーメリア軍との戦いの最中にアル・ワースに跳ばされたのか…」

ヒイロ「そして、そのマリーメリア軍はミスルギ皇国の戦力の一部となっている」

ベルリ「君、ヒイロっていうのか。今日は助けてくれてありがとう」

ヒイロ「…」

ベルリ「…何かまずいこと言った？」

ノイン「気にしなくていい。ヒイロは誰に対しても同じような態度だ」

ベルリ「はあ…」

アレルヤ「まるで僕達が初めて武力介入した時の刹那みたいだね」

ロツクオン「確かに雰囲気は似てるな」

刹那「そ、そうか…？」

テイエリア「自覚はないのか…」

ニール「刹那らしいっちゃあ刹那らしいな…」

アマリ「そのマリーメリア軍もキャピタル・アーミィやゾギリアと同じ道を辿ったんですね……」

メル「あなた方はミスルギと戦っていたんですか？」

ガエリオ「当初は彼等に保護されていたけど、我々を強引に戦力に取り込もうとした事が決別する要因となったんだ」

ジュリエッタ「そして、ゼクスさんとノインさんと出会って、ミスルギを離脱し、追っ手の人達と戦っていた所でフロムさんと合流したんです」

ゼクス「私はゼクス・マークス……。今後あなた方に協力させていただきます」

ノイン「ルクレツィア・ノインです。私も彼と同じ考えです」

ガエリオ「ガエリオ・ボードウィンだ、これからよろしく」

ジュリエッタ「ジュリエッタ・ジュリスです。今後、お世話になります」

ドニエル「そのマリーメリア軍というのは君達が元の世界で戦っていた組織か？」

ゼクス「はい……。彼等是我々と異なり、積極的にミスルギに取り入ったようです」

ノイン「生きるためとはいえ、この世界の戦争に荷担する事の危険さを彼等はわかっています」

アイーダ「あの鉄華団やターピンズというモビルスーツもそうですか？」

ジュリエッタ「彼等には彼等の大義があり、目的があるのでしょう……」

ガエリオ「だが、彼等は傭兵のようなものだ…彼等は悪じゃないんだ」

刹那「…悪ではない、傭兵…か…」

ヒイロ「マリーメリア軍がミスルギに加わった理由はそれだけではない」

ゼクス「何か知っているのか、ヒイロ？」

ヒイロ「この世界に転移した後、俺はミスルギの配下となっていたマリーメリア軍の攻撃を受けた」

ノイン「連中は、異世界に来てまで元の世界の戦いを引きずっていたのか…」

ヒイロ「それを退けた俺はミスルギに潜入して、その動きを探っていた。その結果、ミスルギの配下となった異界人は元の世界への帰還を条件に奴等に協力している者と人質を取られて協力せざるおえない者がいると知った」

スメラギ「何ですって!?!」

アルト「それって…」

ベルリ「じゃあ、一夏の友達は後者かもしれないってことか!」

ユイ「元の世界への帰還という事は…」

零「ミスルギには異界の門を開く力があるってのか…」

これは、ますますマナの国を調査する必要があるな…! !

第22話

神機



TRUTH

ーイングリット・テイエストよ。

私はケイと共にリムガルド王国の跡地に来ていた……。

リムガルドは氣候が寒いためか、ケイが寒そうにしていたのを見て、私はマフラーをかけてあげた。

ケイ「……！」

イングリット「……行きましょう」

私はケイの手を引き、リムガルドの奥へと入っていく……。

ー新垣 零だ。

俺達はプロトレマイオスの格納庫でユイ達と話していた。

零「そういえば、サラとティアはレナと……ケイ……だったか？二人を探すために旅をしていたんだよな？」

サラ「うん、そうだよ！」

メル「探してどのくらいなんですか？」

ティア「えーっと… たくさん！」

は…？ 覚えられないくらいに年月って事か…？

ユイ「た、たくさんって…」

レナ「多分… 2000年くらい…」

ユイ「え…？？」

レナが何かを呟いたが聞こえなかったな…。

刹那「そのケイという人物は何者だ？」

サラ「ケイもレガリア… メガエラのコアだよ！」

ティア「本当に… どこにいるんだろう…」

ロックオン「まあ、そのうちひよっこりと出てくるんじゃないか？」

アニユール「無責任な事言わないの、ライル」

スメラギ「あら、ここに居たのね」

ニール「どうしたんだよ、ミススメラギ？」

スメラギ「ルクスの国のエナストリア皇国から通信が入ったの… 相手はマーガレッツ

トさんよ」

ユイ「マーガレットさんから!?!?」

スメラギ「どうやら、ユイ達に話したい事があるらしいわ」

レナ「何だろう・・・話したい事って・・・」

ユイ「兎に角、行ってみよう!お姉ちゃん!」

ユイとレナ、サラ、ティアは格納庫から出て行った・・・。

ーユインシエル・アステリアです。

私はレナ、サラちゃん、ティアちゃん、アオイ、ナルさん、艦長さん達と一緒にマーガレットからの通信に出た。

マーガレット「お元氣そうで何よりです、ユイ様、レナ様」

ユイ「はい、私達もサラちゃん達もアオイ達も元氣ですよ」

マーガレット「それは何よりです・・・それよりも本題に入ります」

アオイ「お願いします」

マーガレット「実はエナストリア皇国にユイ様とレナ様にお会いしたいとの連絡が来たのです」

ナル「ま、またですか・・・!?!?」

レナ「それは一体……」

マーガレット「その方はレガリアと言っていました」

レナ「え……!?」

レガリアの人が私達に会いたがってる……?

ティア「えー!? 凄くいい!」

サラ「会えるの?」

ユイ「その人の名前は……ケイという名前ですか?」

マーガレット「いえ、違いましたよ」

ユイ「じゃあ……みんな以外にもレガリアっているんだ……」

サラ「そうだよ!」

ティア「でも、私達以外のレガリアに会うのは初めてなんだ!」

マーガレット「その相手の方はルクスの国のアファマルド共和国の出身と言っていました」

倉光「アファマルド共和国……?」

ナル「アファマルド共和国は砂漠に覆われた国です」

ドニエル「そこにレガリアなる人物がいるという事か……」

マーガレット「いかがいたしますか?」

ユイ「私は：：行きたいです！行って、レガリアの人にお会いしたいです！」
アオイ「ユイ：：」

スメラギ「私は賛成ですが、ドニエル艦長と倉光艦長はどう思います？」

ドニエル「本来ならマナの国の調査を継続したいのですが：：」

倉光「正直、ルクスの国やレガリアについても謎が多いので僕達も賛成です」

ユイ「あ、ありがとうございます！」

マーガレット「どうかお気をつけて：：」

そして、通信が切れました。

アオイ「全く：：ユイは言い始めたら聞かないわね」

ユイ「ごめんなさい、アオイ：：」

アオイ「良いわよ、それにお礼を言うなら皆さんに言って」

ユイ「皆さん、ありがとうございます！」

スメラギ「私達の目的だけを尊重してあなた達をつき合わせるのも悪いと思っただけ
よ」

ナル「でも、私もあつた方がいいと思います」

ユイ「はい！」

こうして、エクスクロスはルクスの国のアフマルアルド共和国を目指し始めた：：。

―新垣 零だ。

「どうやら、ユイの提案でルクスの国のアフマルド共和国っていう国へ向かう事になったみたいだな……。」

ガエリオ「マナの国の調査の途中なのに、よく艦長達は納得したね」

ゼクス「それ程、レガリアも謎が深いと言う事だろう」

マリ「レナ達みたいなレガリアの子がまだまだいたなんて……」

青葉「でも、こんな大所帯で行って大丈夫なんですかね？」

ベルリ「話を聞くのはレガリアの契約者とコアだけみたいだよ」

青葉「なーんだ、俺達は留守番だよ……」

ディオ「お前にはまだシミュレーターをやる必要があるだろ、青葉？」

青葉「…… へいへい」

零「……」

アマリ「どうしたの、零君？」

零「レガリアがレナやティア……それからケイって子を除いてまだいるとしたら……」

まずいかもな」

アイーダ「何がまずいのですか？」

テイエリア「敵勢力に力を貸すレガリアの存在もあるかもしれない…。そう言いたいのか？」

零「確信はないけどな」

アレルヤ「確かに、アレクトやテイシスの様な強力なレガリアが敵として現れると厄介だね…。」

アルト「今回は大丈夫だとしても今後は警戒しないとイケないな…。」

アマリ「そういえば、ユイちゃん達はどこへ…。？」

あれ、確かにいないな…。

「私、ユインシエル・アステリアはレナ、サラちゃん、テイアちゃんに先程の話を聞いていた。」

ユイ「サラちゃんとテイアちゃんはその…。2000年もレナを探してたの？」

テイア「うん！」

サラ「私達、歳とらないもん！」

ティア「ねー！」

と言う事はもしかして……

ユイ「じゃあ……レナも？」

レナ「……」

ユイ「レナ……？」

ノレド「あ、こんな所に居た！サラ、ティア！ちよつと手伝って！」

サラ「はい！」

ティア「わかったー！」

サラちゃんとティアちゃんはノレドちゃんに連れられて、部屋を出て行った。すると、レナも悲しそうな顔で外に出る。

……追いかけなきゃ……！

私が追いかけると、レナは廊下の窓から外を眺めていた。

ユイ「レナ」

私はレナの隣に立って、窓の外を眺める。

レナ「……寂しかったんだと思う」

ユイ「え……」

レナ「ティアにはサラが居たけど、私には誰もいなかったから。．．．一緒にいてくれる人が欲しかった」

レナ．．．。

レナ「でも、どんなに探してもやっぱり私は一人ぼっちのままだった。．．．だから、ユイのお父さんとお母さんと出会えて、すごく嬉しかった。．．．。二人が私を家族にしてくれたから」

それを聞いた私はレナを抱きしめた。

レナ「ずっと思ってた。．．．何でこんな体になっちゃったんだろうって。．．．でも、今はレガリアでよかったんだと思う、こうやって、ユイに会えたから」

ユイ「レナ。．．！」

そうだよね、私にはお姉ちゃんがいる。．．．例え、お姉ちゃんが何年生きてようとレナは私のお姉ちゃんだもん！

暫くして、アフマルアルド共和国に着きました。

そんな私達をカリム・タラ・アルキ大統領が出迎えてくれました。

カリム「陛下、お待ちしております。アフマルアルド共和国大統領、カリム・タラ・アルキです」

ユイ「お会いできて光栄です、大統領閣下」

カリム「私もです、陛下」

私はカリム大統領と握手をした。

カリム「そちらの人達がエクスクロスの方々ですね？」

零「この様な大所帯ですみません」

カリム「良いのですよ、このアル・ワースをドアクダー軍団の魔の手から救おうとしてくれている方々なのですから」

大統領閣下が・・・レガリアってわけじゃないんだよね・・・？

カリム「早速ですが、ご案内します」

ユイ「はい！」

私達は大統領閣下に連れられて歩き出した。

カリム「この地は古より、聖域として崇め奉られてきた場所です。私の一族は代々、彼らと共に生きてきました」

アニュー「彼等・・・？」

カリム「どうぞ、中でお待ちです」

洞窟の様な場所に来ました……。

カリム「これより先はレガリアと呼ばれた者しか足を踏み入れる事は出来ません」

ユイ「っ！……わかりました！……行つてきます」

アオイ「ユイ……」

ナル「お気をつけて」

零「何かあつたらすぐに逃げてこい」

ユイ「はい！」

そして、私とレナ、サラちゃんとティアちゃんは中へと入りました……。

しばらく歩いていると、ある物が見えてきました。

ユイ「……！こ、これ……全部レガリアなのかな……！！？」

ティア「動けなくなっちゃったの、何で？」

レナ「行こう」

私達はさらに奥へと進んだ……。

―新垣 零だ。

洞窟の前でユイ達を待つ事にした俺達……。

零「それにしても……暑いな……」

アマリ「砂漠だからね……」

零「アマリはそんな薄着で肌が焼けはないのかよ？」

アマリ「場合によってはドグマを使うから大丈夫よ」

零「……ドグマの使い道！」

ホープス「グレンファイヤー様ではありませんが、このままでは焼き鳥になってしまいます」

アルト「そんな澄ました顔で冗談言うなよ……」

カリム「失礼します、あなたはもしや……」

アルト「え……俺……ですか？」

カリム「あなたにお会いさせたい人がいます。ついてきてください」

アルトに会わせたい人……だと？

カリム大統領は歩き出し、アルトも首を傾げながら、アオイさん達にここに残つてもらい、俺達はカリム大統領を追いかけた。

少し歩くとある病院が見え、俺達は中に入るとある機械に横たわる女の子が見えた。

アルト「!……なっ……
!!??しえ、シエリル……
!!??」

この子……アルトの知り合いなのか……!??

カリム「やはり、お知り合いでしたか……。彼女がこの写真を持っていたので……」

アルト「この写真は……！」

アルトと……シエリルって子が映った写真……か？

アルト「大統領！シエリルは……！」

カリム「彼女は数週間前にこの街に現れたんです……この機械ごと……」

テイエリア「アルト、彼女の今の状態は一体……」

アルト「シエリルは……V型感染症なんだ」

メル「V型感染症……？」

アルト「俺の世界の病気の一つでバジユラに接触して感染する症状の事だ」

セルゲイ「バジユラに接触して……だと？」

ディオ「その様な病気が……」

アルト「シエリルのV型感染症は喉にあつたんだ……でも、こいつは歌を歌いたいからつて、声帯を切らなかつた……。くそっ！俺がフォールドした後、お前は気を失つちまつたのかよ!!？折角会えたのに……！」

青葉「アルト……どうにかならないんですか!?？」

カリム「私達も何とかしようと動きましたが……ダメでした。今は生命維持カプセル

で何とか一命をとりとめている状態です」

スメラギ「……アルト、彼女をトレミーに運ぶわよ」

アルト「っ！スメラギさん……!?」

スメラギ「あなたがいた方が彼女も目覚めるだろうし……。ドニエル艦長や倉光艦長には私から話を通しておくわ」

アルト「……っ、ありがとう……。ございます……！」

零「俺も手伝うぜ、アルト」

ベルリ「僕も手伝う！」

青葉「俺だって！」

アルト「みんな……！ありがとう」

俺達は協力してシエリルを生命維持カプセルこと運んだ……。

ーユインシエル・アステリアです。

私達はついに洞窟の奥まで来ると、湖の様な物が見えました。

ユイ「綺麗……洞窟の先にこんな所が……」

サラ「凄い！私、近くで見えてくるね！」

ティア「ティアもー！」

あ、サラちゃんとティアちゃんが走っていった…。

ユイ「私達に会いたってレガリア、どんな子なのかな？」

レナ「私も私達以外のレガリアに会った事ないなら…。」

サラ「おーい！ここにもレガリアいるよー！」

ティア「これも動かないのかな？」

すると、レガリアの胸部分が光った。

サラ「うわあっ！！？」

レナ「サラ！ティア！」

リユー「驚かせてはダメよ、ロウ。大事なお客様なのですから」

ユイ「え…。」

リユー「私はリユー。初めまして、エリニウスのレガリア達」

ユイ「エリニウス…？」

私達はリユーさんからレガリアの事を聞くことにしました。

リユー「ロウやつと会えましたよ」

リユーさんはレガリアから降りて来ました。

リユー「ロウはエンキのレガリア。私はその契約者です」

ティア「わあー！この子ロウって言うんだね！」

サラ「私サラ！」

ティア「ティアだよ！」

レナ「レナ：：アステリア：：です」

リユー「はい！」

ユイ「リユーさん、ロウちゃん！はじめまして、ユイと言います」

：：そっぽ向いちゃった：：。

ユイ「あれ？恥ずかしいのかな？ロウちゃん！」

リユー「ふふ、ロウは男性ですよ」

：：嘘。

ユイ「え：：」

リユー「彼は私の婚約者ですから」

ユイ「ふ、ふええええつ！！？ごめんなさい、私、てつきり！」

リユー「ふふ、謝らなくてもいいですよ」

ユイ「は、はい：：。ここは綺麗なところですね。何だかすごく落ち着きます」

リユー「ありがとう」

ユイ「それに不思議……外はあんなに砂漠に覆われてるのにここは豊かな泉が湧いて……」

リユー「それがエンキのレガリアの力です。ロウはどんな場所でも水の恵みをもたらすことができます」

そうなんだ……。

リユー「レガリアのコアに選ばれし人間とその真の力を引き出す契約者は人々に良き恵みをもたらしてきました。様々な力を神に表す……それがレガリアという存在なのです」

ユイ「じゃあ、レナ達にも……」

リユー「エリニウス……復讐の力を司る三体のレガリア……」

ふ、復讐……？！

ユイ「復讐……？」

リユー「エリニウスは戦うために造られたレガリアなのです」

ユイ「……！」

リユー「その恐ろしく強大な力はある物を封印するために使われました」

ユイ「あるもの……？」

リユー「ルクス・エキスマキナです」

ルクス：… エクスマキナ：…
!?!?

ーイングリット・テイエストよ。

協会で寝てしまったケイの寝顔を見ながら私はヨハンとの会話を思い出していた。

ヨハンはアレクトのレナとティシスのティアを狙っている…。今度はヨハン自身が向かうと言っていた…。

イングリット「ケイ…」

私は逆らう事が出来ない…。だって、ケイを人質に取られているのだから…。

ケイの頭を優しく撫で、私は下唇を噛んだ…。

ーユインシエル・アステリアです。

リユーさんに話の続きを聞いています。

リユー「ルクス・エクスマキナの強大な力は私の家族や仲間達も、世界中も飲み込んでいきました…」

はっ… レナが手を重ねてきた… 震えてるの、レナ…？

リユー「それを止めるために、多くのレガリアが彼の地へ向かいましたが… 誰も戻ってきませんでした…。」

そんな…！

リユー「私とロウ、此処に残ったレガリア達は助かりました。全てを飲み込む前にルクス・エクスマキナは封印されたから」

ユイ「封印…？」

リユー「私達、人類はレガリアに認められた最後の三人に復讐の神… エリニウスの力を託してしまったのです。ルクス・エクスマキナを封印する為に… 遠い… 遠い昔の話です…。」

ユイ「…。」

サラ「…。」

リユー「それ以来、私達以外のレガリアの存在を感じる事はありませんでした…。でも、数千年経った後に二度あなた達の力を感じて…。」

ユイ「！」

レナ「リムガルドとエナストリア…！」

リユー「きつとエリニウスのレガリアだって… そう思っ、タラキさんを通じて何

とか来てくれるようにお願いしたんです。本当はこちらから行くべきだったのです
が……ロウが動けなくなっていたから……」

ユイ「あの、どうして私達に……？」

すると、リユーさんが頭を下げてきました。

リユー「あなた達に全てを背負わせてしまって、本当にごめんなさい……。そして、あ
りがとう。あなた達のおかげで私達はこうやって生きていますから」

リユーさん……。

リユー「ありがとう…… 本当にありがとう……」

サラ「えへへ！」

サラちゃん達の照れる姿を見て、私とレナも微笑んでしまいました。

ユイ「あの、他の皆さんは？」

サラ「そうそう！こんなにいっぱいレガリアがいるのにどうして!?？」

ティア「寝てるの？」

リユー「みんな、この世を去ったのですよ」

ティア「え……？」

サラ「レガリアは死なないよ」

リユー「みんな自らの使命を全うしながら……消えていきました。ロウもみんなが遺

したものに水を与えてきました。もう、力はほとんど残されていません……。随分前にも元の姿に戻れなくなりました……。」

ユイ「……」

サラ「レガリアって死んじやうんだ……」

リユー「私達の願いはこの地をかつての緑溢れる大地に戻す事でしたが、残された力ではそれは果たせませんでした。でも、人々は今でもこの地を愛し、一生懸命生きています」

レナ「それじゃあ、どうして今も力を使い続けてるの？」

リユー「此処は私達、レガリアが……。みんなが生きた証ですから……。この場所を守りながら、人々を見守るのが私とロウの幸せなのです。私達もみんなの元へ行くまで。此処で水を沸かし続けるつもりです」

ユイ「……リユーさん……」

リユー「でも、これは、私達の見つけた幸せの道……。あなた達は別の道を見つけてください」

ユイ「……！」

突然、リユーさんが優しく抱きしめてきました。

リユー「あなた達はその身を捧げて、私達に幸せをくれました。あなた達には本当の

幸せを見つけて欲しい…。それが私達の、最後の願いです」

サラ「あー！いいなー！」

ティア「ティアもー！」

突然、サラちゃんとティアちゃんが抱きついた為、リユースさんが体勢を崩しましたが、ロウさんが右手で支えました。

すると、ロウさんから光が放たれ、オドとは違う、黄色い光が出てきました。

サラ「わあーっ！」

ティア「綺麗ー！」

私は驚くリユースさんの顔を見て微笑みました…。

リユース「！これは…！敵が来ます！」

ユイ「え…？！」

ど、どういう事…？！

「新垣 零だ。」

まさか、鉄華団とタービンズのモビルスーツが向かってくるなんて……！

それを迎え撃つ為に俺達は出撃した。

それと同時に鉄華団とタービンズ、マリーメア軍のモビルスーツが現れた。

三日月「此処がアフマルアルド共和国って場所か……」

アミダ「この街にいるレガリアを捕獲するのが私達に与えられた仕事だね」

ハツシユ「でも、エクスクロスもいます、簡単にはいけませんよ……！」

ヒイロ「三日月・オーガスか」

三日月「そのガンダム・フレイム……。ヒイロだね？」

ヒイロ「未だお前達はミスルギに手を貸すのか？」

三日月「それがオルガの望ん事だよ」

ヒイロ「了解した、三日月・オーガス……。お前を殺す」

三日月「殺されるのはどっちかな、それに俺を殺したモビルスーツのパイロットとガリガリもいるのか」

ガエリオ「ガエリオだ！」

ジュリエッタ「三日月・オーガス…」

三日月「あんたとはまた本気でやれそうだよ」

ジュリエッタ「何度だってあなたを打ち倒してみせます！」

アミダ「いいかい!? 出来れば、あの小僧が来る前に終わらせるよ！」

ハツシユ「りよ、了解！」

三日月「わかった」

パトリック「行くぜ、何度もガンダムと戦った俺に続け！」

ニール「お前は模擬戦なんだろう」

零「レナとティアは渡さない！お前達を一步も街へ入れさせるか！」

俺達は鉄華団とタービーズ、マリーメイア軍のモビルスーツとの戦闘を開始した。

〈戦闘会話 アルトVS初戦闘〉

アルト「必ず、シエリルを助ける方法はある…！それを探る為にこんな所で死んでたまるか！」

三日月「なかなか粘るね」

刹那「もうやめろ、三日月・オーガス！」

三日月「刹那……だっけ？俺は止まる気はないよ」

ヒイロ「あいつはかつての俺達と同じだ、刹那……。戦いに生きていたが、ある女のおかげで平和を知る事が出来た」

三日月「……クーデリアの事か……」

刹那「マリナ・イスマイル……」

ヒイロ「俺にもリリーナがいる……三日月・オーガス。俺達は手を取り合う事が出来るはずだ。お前を変えてくれた女を悲しませるな」

刹那「……ヒイロ……」

三日月「……うるさいよ、これが俺のやるべき事なんだ」

ヨハン「そうだよ、彼等に説得なんて無駄だよ」

っ!? 上空から戦闘機が来た……!??

アミダ「……来たのかい、ヨハン」

ヨハン「随分苦戦しているようだね、此処からは僕も参加させてもらうよ」
せ、戦闘機がロボットになっただと!??

アイーダ「あなたは何者ですか!?!」

ヨハン「ヨハンだよ。まあ、敵と見てもらって構わない。さあ、エクスクロスの人達！僕とこのウォラーレと戦おうよ！」

ディオ「まさか、あれがレガリア・ギアなのか…?!?!」

セシリー「どうして、ルクスの国の敵がミスルギ皇国の勢力と…?!?!」

シーブツク「まさか、国同士で手を組んだのか?!?!」

ヨハン「ご名答！僕はミスルギ皇国と手を結んでるんだよね！」

異界人に合わせて、レガリア・ギアかよ…?!?!

ヨハン「さあ、出てきなよ。アレクト、テイシス」

すると、アレクトとテイシスが現れた。

青葉「ユイさん！」

ユイ「遅くなつてすみません！」

サラ「お前は…ヨハン！」

ヨハン「久しぶりだね、三人共」

ユイ「彼が…レガリア・ギアでレナ達を狙ってるんだね…!!」

ヨハン「初めまして、エナストリアの皇女陛下様…単刀直入に言うけどさ、彼女達を渡してくれない？」

レナ「……！」

ユイ「渡さないよ！レナも、ティアちゃんも誰一人あなたには渡さない！」

ヨハン「へえ……その強気がどこまで続くかな？」

ノイン「どうやら、あいつがレガリア・ギアをばら撒く黒幕らしいな」

ソーマ「子供なのに狂気に満ちているわね……」

ベルリ「彼を止めないと、レナ達が連れて行かれますよ！」

アルト「わかってる！来るなら相手をするだけだ！」

ハツシユ「ややこしい事になりましたね……」

三日月「……刹那、ヒイロ……。クーデリアは関係ない、これが俺達、鉄華団の選んだ

道だ」

刹那「ならば、それを止める……！俺が……俺達が……！」

ヒイロ「攻撃目標……三日月・オーガス並びにヨハン」

俺達は戦闘を再開した……。

三日月「ガリガリが相手か」

ガエリオ「…鉄華団のエース…今度こそ、お前を倒す！」

三日月「負けないよ、オルガのためにも…！」

〈戦闘会話 ジュリエッタVS三日月〉

ジュリエッタ「三日月・オーガス、覚悟！」

三日月「今度覚悟するのはあんただよ、ギャラルホルンの人」

ジュリエッタ「何度だって、あなたを止める、それが私の使命です！」

〈戦闘会話 刹那VS三日月〉

三日月「そっちのガンダム・フレームが対話の為の機体なら、バルバトスルプスは誰かの為の機体だ」

刹那「その誰かと言うのは…」

三日月「鉄華団のみんなだよ…みんな、家族なんだから…オルガが守ろうとしている家族は俺が守る！」

刹那「これが、三日月・オーガスの覚悟か…ならば、俺も俺自身の覚悟を見せる…！」

〈戦闘会話　ヒイロVS三日月〉

三日月「珍しいね、あんたが言葉で説得しようだなんて」

ヒイロ「これもリリーナが教えてくれた事だ」

三日月「俺もクーデリアに読み書きを教えてもらったな…」

ヒイロ「…昔話をし合うつもりはない」

三日月「そうだね、あんたは面倒だ、ここで潰す」

バルバトスルプスに向けて、ウイングガンダムゼロが動いた。

ヒイロ「三日月・オーガス… 覚悟しろ。ターゲット… 三日月・オーガス… 攻撃

開始！」

バルバトスルプスに向けて、ツインバスターライフルを最大出力で放った…。

三日月「ぐっ…！こんな所で…！」

ハッシュ「三日月さん！」

アミダ「命あつての物種だ！此処は退くよ！」

三日月「…わかったよ」

鉄華団とタービンスのモビルスーツは撤退した。

ヒイロ「…」

刹那「三日月…」

ヒイロ「あいつなら大丈夫だ。(あいつは必ず、立ち上がる…俺達と共に…)」

ヨハン「あらら、鉄華団やタービンスも案外使えないね」

ユイ「あなたも降参してください！」

ヨハン「冗談はやめてよ、僕が、君達なんかに恐れるわけないだろう？」

レナ「ヨハン…！」

ヨハン「それに僕には策があるからね」

零「策だと…！」

ヨハン「来なよ」

つ!?まさか、別部隊が…!??

メル「まさか、アフマルアルド共和国を襲う気ですか!?？」

ヨハン「その通り!でも、彼等だけにやらしても意味はないから…別方向から僕も

やるよ!」

アンドレイ「何だと!?？」

あ、あいつ…! 反対側を別部隊にやらせて、自分ももう反対からアフマルアルド共

和国へ攻撃を……！

ユイ「レナ！」

レナ「駄目！もう片方が追いつかない！」

ティア「それにこの数じゃ……！」

サラ「どちらにしても、阻止できないよ……！」

アルト「くっ……！お前ら、邪魔だ！うわああっ！」

零「アルト！」

敵の包围網を掻い潜ろうとしたデユランダルだが、攻撃を受けてしまう。

ユイ「駄目……！このままじゃ、リユースさんとロウさん達が……！」

間に合わない……！

刹那「どうすれば……！」

？「お困りならば、私に任せてもらおう」

刹那「……！」

パトリック「あれは……！」

現れたのは……疑似太陽炉を積んだ機体……！！？

グラハム「我がブレイヴの奥義……見せてやろう！トランザム！」

ブレイヴという機体はトランザムを発動して、ヨハンの別部隊を全滅させた。

ヨハン「へえ……やるね。だけど、僕の方は間に合わないよ？」

グラハム「止めるのは私ではない頼むぞ、ガンダム！」

シン「わかりました！行くぞ、ルナ！」

ルナマリア「了解！」

現れたのは……二機のガンダム……！！？

二機のガンダムは見事なコンビネーションでウオラーレにダメージを与え、軽く吹き飛ばした。

ヨハン「……おーっと！！？いいコンビネーションだね」

刹那「二機のガンダムだと……！！？」

ヒイロ「シンとルナマリアが来たか……」

シン「遅くなってすまない、ヒイロ！」

ルナマリア「此処からは私達も参加させてもらうわ！」

グラハム「勿論、私もやらせてもらおうぞ」

刹那「お前は……」

グラハム「この様な異界の地でも出会うとはやはり私達は運命の赤い糸で結ばれているのかな、少年」

刹那「やめろ、寒気しかない」

グラハム「冗談だ。では、刹那・F・セイエイ。我々で未来を切り開くとしよう！」
刹那「了解だ、グラハム・エーカー」

何だ……？この人、刹那の相棒と言うより、ライバルの様な人だな……。

アーニー「シン君とルナマリアさんも行けるかい？」

シン「俺達の事を知っているのか……？」

ルナマリア「シン、詮索は後よ、今は……！」

シン「ああ！わかってる……！アンタ等、こんな異世界でも戦争したいのかよ!?？」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　グラハムVS初戦闘〉

グラハム「ブレイヴが爆発した時は流石の私も死を覚悟したが……よもや、異世界に転移し、少年と再開するとは……。乙女座には感謝しきれんな！彼の道を切り開くと決めたからには全力でやろう！」

〈戦闘会話　シンVS初戦闘〉

シン「(キラさんとアスランはまだミスルギ皇国にいる……。あの人もあの人が……)

スルギ皇国を探っているんだ…俺達は俺達でできる事をする！ルナと一緒に！」

〈戦闘会話 ルナマリアVS初戦闘〉

ルナマリア「本当に戦争っていうのは何処でも起こるのね…！絶対に私達が止めてみせる！シンと一緒に！」

〈戦闘会話 ユイVSヨハン〉

ヨハン「皇女様はエナストリアで大人しくしてればいいのに」

ユイ「レナを狙うなら、それはできない！」

ヨハン「まあ、いいよ。結局アレクトは貰うから。お姉さんを殺してでもね」

ユイ「…！」

レナ「大丈夫だよ、ユイ！私がついてるから！」

ユイ「うん…！」

〈戦闘会話 サラVSヨハン〉

ヨハン「久しぶりにあったってのに随分、敵意を剥き出しにするんだね、二人共」
サラ「ティアとレナを狙うからだよ！」

ヨハン「だって、二人が欲しいんだもの」
 ティア「……絶対に行きたくない……！」

ヨハン「あらら、嫌われちゃった」

サラ「ヨハン！あなたの腕を真つ二つに切り刻んであげるから覚悟して！」

〈戦闘会話　　グラハムVSヨハン〉

ヨハン「あそこで増援とか都合が良すぎない？」

グラハム「それもまた運命というものだ」

ヨハン「ふーん……。軍人さんが僕みたいないな子供を攻撃していいの？」

グラハム「子供……。？ふつ、違うな。君は子供の姿を借りた物の怪にすぎない」

ヨハン「ひつどい言われようだな」

〈戦闘会話　　シンVSヨハン〉

シン「あの国を襲おうだなんて……。何考えてんだ、お前は！」

ヨハン「何って、レガリアのコアを手に入れるためだよ」

シン「たったそれだけの為に……。お前は誰かを傷つけようとするのか？？」

ヨハン「それだけ？僕にとっては重要な事なんだよね。お兄さんだって、誰かを傷つ

けたでしょ？」

シン「……！お、俺は……！違う！俺はルナやキラさん達と共に花が散らない世界を作る為に戦っているんだ！」

ヨハン「だったら、その世界を作る前にすべての花を散らすのも面白いね」

シン「お前……ふざけるなああつ！」

俺達はヨハンのウォラーレを追い詰めた。

ヨハン「なかなかやるね。その強さに免じて此処は退いてあげるよ、じゃあね」
そう言い残し、ウォラーレは撤退した……。

青葉「退いた……？」

ベルリ「どちらかというと、退いてくれたっぽいけど……」

ガエリオ「撤退した者の事は後だ！今は目の前の敵を倒すぞ！」

サヤ「了解！」

この後、俺達は敵を全て倒した。

マサキ「終わったみたいだな」

メル「街を守れてよかったです」

ヒイロ「シン、ルナマリア、グラハム……。話を聞かせて貰うぞ」

グラハム「私達が話せる範囲ならばな」

シン「取り敢えず、落ち着いて話をしよう」

俺達はそれぞれの鑑へと戻っていった……。

ルナマリア「並行世界の私達……」

アーニー「信じられないと思うけどね」

シン「……。あなたが嘘をついてるようにも見えないので信じます。俺はシン・アスカ。ガンダム、デイスティニーのパイロットです」

ルナマリア「同じく、ルナマリア・ホークです！ガンダム、フォースインプルスのパイロットです」

シン「今後、俺達もエクスクロスに参加する事となりましたのでよろしくお願いします！」

ベルリ「よろしく、シン！」

シン「ああ、ベルリ」

ヒイロ「キラとアスランはどうした？」

シン「二人はまだ、ミスルギ皇国の調査をしているよ」

ルナマリア「私達は先にグラハム少佐と共にミスルギ皇国を脱出したの」

ロックオン「ELSに対して特攻して爆発したあんたもアル・ワースに来ていたとはな」

グラハム「まだ私に何か成し遂げなければならぬ使命があるのだろう」

刹那「お前も俺達と共に戦ってくれるそうだな」

グラハム「ああ、これからは君とライバルではなく、戦友として接しよう。少年……いや、もはやその容姿、青年と言った方がいいかな？」

刹那「どちらでも構わない」

グラハム「ならば、青年の様な少年……！」

刹那「軽いトラウマを掘り起こすのはやめてくれ……」

グラハム「冗談だ。これからよろしく頼む。刹那……。そして、ガンダム達」

刹那「了解だ、グラハム」

微笑みながら、握手をする刹那とグラハム少佐。

シーブック「そう言えば、ユイ達は？」

零「アフマルアルド共和国のレガリアの人に別れの挨拶をしてるみたいだぜ」

「ユインシエル・アステリアです。」

リユー「もう、行くのですね？」

ユイ「はい。私達にもやり遂げなければならない事があるので……」

リユー「私もロウもあなた達を応援しています。頑張ってください。エリニウスのレガリア達」

ティア「ティア達頑張るよ！」

サラ「また来るからね！ロウ！」

ロウさんは頷く。

レナ「また……お会いしましょう」

リユー「ええ……」

リユーさんとロウさんとの別れの挨拶を終え、私達は艦に戻り、エクスクロスはアフマルアルド共和国を後にしました……。

「オルガ・イツカだ。」

エクスクロスと戦ったミカ、ハツシユ、アミダの姐さんが帰って来た。

名瀬「おかえり、アミダ」

アミダ「待っていてくれたのかい、名瀬」

ハツシユ「団長もわざわざありがとうございます」

オルガ「気にするな、俺が好きでやってる事だ」

三日月「オルガ：：」

オルガ「ん？どうした、ミカ？」

ミカが険しい顔してるな：：。

三日月「いつまでここに居るの？」

オルガ「：： さあな。あいつらに恩を返すまでだ」

三日月「いくら、オルガのためとは言っても：：俺、もう我慢の限界だよ」

オルガ「ミカ：：！」

まさか、こいつ：：！

三日月「オルガ、俺：：。エクスクロスで戦いたい」

ミカの言葉に俺は声を発せられなかった：：。

第23話 片翼の二人

ービゾン・ジエラフィルだ。

俺達は敵となったゼクス・マーキス達について、みんなと話していた。

ラーシャ「……あのゼクスとガエリオというパイロット達、想像以上に手強い敵だった」

タルジム「聞いた話じゃ、あいつ等……本来なら、俺達の隊に配属されるはずだったんだよ。そいつがまさか、あの羽付きの仲間だったとはな……」

ラーシャ「ヒイロ・ユイ……。彼の破壊工作により、ミスルギ陣営にはかなりの被害が出てるって聞く」

ビゾン「それだけじゃない。少し前にグラハム・エーカー、シン・アスカ、ルナマリ・ア・ホークもミスルギ皇国を裏切り、エクスクロスに着いたそうだ」

ラーシャ「う、嘘!?」

タルジム「何でこう、ミスルギを裏切るんだ? ヒイロ・ユイ達や、ゼクスとガエリオも馬鹿な奴だぜ。この世界の覇権は、ほぼミスルギが握ってるんだから、その下に着けばいいのによ」

確かに……。何故、エクスクロスはミスルギ皇国の配下にならない……？

何か、他に元の世界へ戻れる方法を知っているのか……？

ヒナ「……」

ビゾン「どうした、ヒナ？」

ヒナ「きつとヒイロ・ユイはそんな理由では戦わないわ……」

ビゾン「ヒナ……」

ヒナ「その目は、強い意思に満ちていた……。彼は世界の行方とは別に自らの大切なこのために戦っているんだと思う……」

タルジム「そう言えば、ヒイロ・ユイが基地を襲撃した時、ヒナは営倉にいて、あいつと対面したんだっただな……。俺……。一瞬だけど、ヒイロ・ユイは仲間のお前を助けに来たのかと思っちまったよ」

……タルジム……！

ビゾン「やめろ、タルジム。釈放された以上、ヒナの無罪は決まったんだ」

タルジム「冗談だって。そう怒るなよ、ビゾン。ヒナも悪かったな。下らないこと言っただけ」

ヒナ「大丈夫よ。気にしていないから」

すると、マルガレタ特務武官が歩いて来た。

マルガレタ「… 言っておきます、リヤザン少尉。あなたの容疑は完全に晴れたわけではありませんから」

ヒナ「…」

マルガレタ「戦闘中に敵パイロットと私的な通信をしていた事は事実であり、それは私に疑念を抱かせるのに十分です」

ヒナ「何度も述べたようにあれは、あのパイロットが一方的に意味のわからない事を言っていただけです」

マルガレタ「そこまでです。あなたからの弁解を聞く気はありませんから」

ヒナ「…」

マルガレタ「もう一度、言います。リヤザン少尉… あなたの嫌疑は完全に晴れたわけではありません。今は一人でも多くの戦力が必要です。それが、あなたの釈放の理由です」

マルガレタ「原隊への復帰も許可しましたが、あなたには監視が付いている事を忘れてください」

それだけ言って、マルガレタ特務武官は歩き去った。

言いたい事を言って…！

ヒナ「…」

ラーシャ「気にしない方がいいよ、ヒナ」

タルジム「そうそう。特務武官殿は前回の作戦失敗でヒスを起こしてんだよ」

ヒナ「ありがとう、二人共」

ビゾン「心配するな、ヒナ。お前は…俺が守ってみせる」

ヒナ「ビゾン…」

タルジム「へ…ヒイロ・ユイは大切なもののために戦ってるって言うが…。ビゾンの場合、ヒナのために戦っているみたいだな」

ヒナ「え…」

ビゾン「タ、タルジム…！」

ラーシャ「いつも一言多いよ、タルジムは」

タルジム「はは…悪い、悪い！」

すると、今度はアルフリード中佐が来た。

アルフリード「全員、揃っているな」

ヒナ「アルフリード中佐…。ヒナ・リヤザン少尉、原隊に復帰いたしました。私が戻ってこられたのも中佐のお口添えがあったからだでしょうか。ありがとうございます。うございませす」

アルフリード「礼には及ばん。それに…納得はしていないようだな」

ヒナ「マルガレタ特務武官殿にはまだ信用されていないようですので」

アルフリード「身の潔白は、自分の働きで証明してみせろ。すぐに出撃になる」

ヒナ「了解です」

タルジム「ところで中佐…。そちらの二人は新入りですか？」

アルフリード「その通りだ。マリーメイア軍から、こちらに転属になった張 五飛

(ちゃん・うーふえい)とミスルギ皇国から派遣されたIS操縦者、篠ノ之 箒だ」

五飛「…」

箒「篠ノ之 箒です。よろしくお願いします」

ヒナ「(五飛って人の目…。ヒイロ・ユイに似ている…。でも…。何かに迷ってい

る…。?)」

箒「(一夏、すまない…。これが私にできる事なのだ…。)」

ー早乙女 アルトだ。

俺は今は生命維持カプセルで眠るシエリルを見ていた。

アルト「なあ、シエリル…。俺、お前とランカの歌のおかげでバジユラ達とわかり合

う事が出来たんだぜ？それに俺はお前に対して、思いも伝えた…。」

恐らく、爆発音で聞こえなかったと思うが、俺はシエリルに愛してると言った。

アルト「俺は女王バジユラと一緒にフォルドして、このアル・ワースに来て、お前も来た……。折角会えたのによ……。お前がこんな事になっていたなんて……。！シエリル、起きてくれ……。起きてお前の歌をもう一度聞かせてくれよ……。！」

それでも、シエリルは目を覚まそうとしない。いや、覚ますはずがない。

アルト「畜生……。！こいつが……。シエリルが何したってんだよおつ!!？」
悔しさで俺は地面を殴りつけた……。

ーアニエス・ベルジュ少尉だよ。

僕は眠るシエリルさんの前で涙を流すアルト君を見ていた。

アルト君……。

僕達の世界の彼等は平和に暮らしているが、僕の目の前のアルト君は悲しんでいる……。
……。

世界が違うとここまで人生が変わるなんて……。

アーニー「どうすれば、シエリルさんは目覚める事ができるんだ……。」

サヤ「女の子の為に悲しむ男性を隠れて見るなんて趣味が悪いですよ、少尉」

そこへ、サヤが歩いて来た。

アーニー「……サヤもそうだろ？」

サヤ「……心配なんです。アルトさんもシエリルさんも……」

アーニー「そうだね……」

サヤ「それにしても、少尉……。グラハム少佐とは話さないのですか？」

アーニー「……僕は少佐を助けられなかった」

サヤ「で、ですが、あのグラハム少佐は私達の世界のグラハム少佐ではないのですよ

！」

アーニー「それでもさ、僕はあの人に顔を合わす資格なんてないよ」

サヤ「少尉……」

グラハム「その様な悲しい事を言わないで欲しいな、ベルジュ少尉」

……！グラハム少佐……！

グラハム「話は刹那から聞いた……。君の世界の私は君の上官だった様だな」

アーニー「そして、僕とジンの目標でした」

グラハム「ジン……君の親友で今はオニクスに在るといふ者の事か……」

ジンのやつ、この世界でもグラハム少佐を見たらどういふ反応するのかな……。

グラハム「君の世界の私も特攻した様だな」

アーニー「はい……」

グラハム「私が死んだと思っただら大間違いだぞ、少尉」

アーニー「えっ？」

グラハム「私は死んだのではなく、人類の道を切り開く存在へとなったんだ。それに対しては後悔していない。君の世界の私もそうだったはずだ」

アーニー「グラハム少佐……」

グラハム「私はグラハム・エーカーであり、君の知るグラハム・エーカーではない。此処では上官と部下という関係ではなく、戦友として共に戦おうではないか、アーニー」

アーニー「……は、はい！」

サヤ「（良かったですね、アーニー……）」

握手をする僕とグラハム少佐を見て、サヤは微笑んでくれた。

―新垣 零だ。

俺達はシグナスの格納庫で話していた。

てか、青葉とミレイナがなんか話してるな……。

ミレイナ「渡瀬さんは黒いコートと二本の剣が似合いそうです！」

青葉「い、嫌々！地味なのは勘弁して欲しいよ、ミレイナちゃん！それに二本の剣って何だよ？！」

零「ほう？それは俺に対しての嫌味か、青葉」

青葉「あ、い、いや。：。あはは。：。そ、そうだ！ミレイナちゃんって、料理できるの

？」

逃げやがったな、こいつ。

ミレイナ「うーん、兎なら調理できますよ」

青葉「兎って喰えるのか？！」

零「喰えるらしいけどな」

フェルト「ミレイナ、兎なんて調理できないでしょ？嘘はダメよ」

ミレイナ「えへへっ！ごめんなさいです！」

なんか、青葉とミレイナのやりとりが夫婦の様に見えてきた。：。

まゆか「。：。」

メリツサ「嫉妬しないの、まゆか」

まゆか「べ、別にしていないよ！」

一方、他の奴らはゼクスさん達から話を聞いていた。

ベルリ「じゃあ、ゼクスさん達はシヨウさん達と同じ世界から来たんですか!?!?」
ゼクス「ああ、そうだ。そして、私とシヨウ・ザマ達は敵対関係にあった」

刹那「そうか……。シヨウ達の言っていたガンダムとはヒイロのガンダムだったのか……」

シーブック「だから、同じガンダムの名を持っていても俺達のモビルスーツとは操縦系統が違うんだな……」

ユイ「でも、そうなるとガンダムって並行世界にたくさんいますね」

レナ「シーブック達の世界、刹那達の世界、ヒイロ達の世界、シン達の世界、ガエリオ達の世界、ベルリ達の世界……」

サラ「まるでシヨウの世界とエイサップの世界のオーラバトラーみたいだね」

アイーダ「アーニー少尉の世界の様に同じ人間が並行世界に存在しているんです。ガンダムが複数いてもおかしくはないでしょう」

ガエリオ「だが、ガンダムの呼び方も世界によって変わる様だな」

ベルリ「僕達の世界ではG系統ですもんね」

ジュリエッタ「私達の世界ではガンダム・フレイムです」

ガエリオ「それに俺達の世界のモビルスーツにはナノラミネートアーマーというものがある」

セシリー「ナノラミネートアーマー？」

ジュリエッタ「ビーム兵器の威力を半減する事のできるアーマーの事です」

ヒイロ「……バルバトスが落ちなかった理由はそれか」

ゼクス「なお、ヒイロやノイン達はシヨウ達とは協力関係にあった」

ニール「ヒイロとシヨウ達が組んで、お前と戦っていたんだな」

アレルヤ「一体、どの様な状況だったんですか？」

ノイン「この件について話すのは、彼等と合流してからにしたい」

ゼクス「多角的な視点から語らなければ、あまりよろしくないだろうからな。だが、今の私は君達と共に戦うつもりだ。その点は、安心してほしい」

ロックオン「ミスルギに帰還の手段があってもか？」

ゼクス「生まれによって人を差別し、力で他人を従わせようとする連中の言葉を信用するつもりはない」

ノイン「仮に彼等が、その手段を本当に持っていたとしても今はあなた達がいる」

ゼクス「たとえば、困難な道であろうと人々のために行動する君達と共に戦う事を私達は選択したい」

マサキ「了解だ。シヨウ達との過去の事は置いてくとして、あんたとはうまくやれそうだ」

ヒイロ「…」

刹那「ヒイロ… 三日月・オーガスの事だが…」

ヒイロ「… その事を今考えても意味はない。刹那、お前とは何処かであった様な気がする」

刹那「俺もだ… 実は、三日月・オーガスともあつた様な気がするんだ」

テイエリア「だが、君達の世界は別のはずだ」

ヒイロ「… そうだな」

刹那「(ヒイロに三日月… 何だ…？この違和感は…)」

アンドレイ「ミスルギがアメリカや連合だけでなく、周囲の国や自治都市に対しても侵略戦争を仕掛けるのなら、急がなくてはならないな」

パトリック「ミスルギについた異界人を叩けばなんとかなると思うが…」

セルゲイ「出来れば穏便にすませたいのだが…」

青葉「…」

ん？急に青葉が俯き出した…？

アマリ「どうしちゃったんです、青葉君は？」

デイオ「あの雛とかいう女の事を考えているのでしょうか」

青葉「わかるのか、デイオ？」

「ディオ「お前が落ち込むとしたら、それぐらいしか心当たりがないからな」

メル「この二人、なんだかんだ喧嘩していてもどんどんバディらしくなっていますね」

青葉「…ミスルギの手先となつたゾギリア…。そんな所に雛がいると思うと俺…どうしていいか、わからなくなつて…」

ヒイロ「その女なら、営倉にいた」

青葉「お前、雛を知っているのか!?」

ヒイロ「ゾギリアの基地に潜入した時、そう呼ばれていた女を見た。内通の容疑をかけられて営倉に入れられていたようだ」

青葉「内通つて…スパイの事か…」

ディオ「以前の戦闘で、お前はあの女に接触しようとし、さらに撤退を見逃した。ゾギリアから見れば、あの女が敵…。つまり、お前と通じている様に見えるのだろう」

青葉「じゃあ、俺のせいで雛が…」

ヒイロ「それ以上の事は自分で確かめろ」

ヒイロは歩き去つた。

青葉「ちよつと待てよ！もつと雛の事を…」

ディオ「やめろ、青葉。あれ以上の情報は奴も持っていないようだ」

零「あのヒイロって奴、優しい性格してんな」

青葉「あんな無愛想なのに……!?」

零「冷たい奴だったら、青葉が落ち込んでいようと無視したんじゃねえか？」

ルナマリア「それにヒイロと青葉は出会って間もないのによ？」

青葉「そう言えば、そうですね……」

零「青葉、その雛って子の事はヒイロの言う通り、お前自身が確かめるしかないと思
うぜ」

アマリ「このまま私達が進めば、ゾギリアとは、またぶつかる事になるでしょうから、
きつと、あの子に会う事もありません」

メル「大切な存在なら、もう一度話を試みてもいいのではないですか？」

青葉「やりますよ、俺……。あの雛が、俺の知っている雛かどうか、わからないけど……
わからないのなら、わかるまでぶつかってみます」

零「応援してるぜ、青葉。だが、無茶はするなよ」

青葉「それは約束できませんけどね」

いや、そこは嘘でも約束しろよ、バディが心配するだろうが……。

シン「大切な者に話を試みる……か……」

ルナマリア「シン？」

シン「何でもないよ、ルナ」
ディオ「…」

第23話 片翼の二人

話し込んでいると敵の警報がなった。

レーネ「ゾギリアと思われる部隊、急速接近…！」

倉光「やれやれ…。隠密行動のつもりだったのに完全にこちらの動きは捕捉されているようだね」

ゾギリアとマリーメア軍、キャピタル・アーミイの部隊が来たか…！
ドニエル「こうなったら、強行突破で行ける所まで行くしかない…！各機を発進させろ！」

俺達が出撃した…。

ベルリ「見ろ、青葉！あいつが出て来たぞ！」

青葉「雛……！」

ヒナ「出て来たわね、白いの！」

ビゾン「ヒナ……！自らの手で疑いを晴らす気なら、俺はそれを手助けする！」

ヒナ「ありがとう、ビゾン……！フォローをお願い！」

ビゾン「聞こえるか、ヒイロ・ユイ、シン・アスカ！お前への借りを返すのは後回しだ！」

ヒイロ「……」

シン「な、なんで俺まで……」

アニュー「ヒイロとシンは、ゾギリアにかなり恨まれているようね」

ノイン「ヒイロは一流のエージェントだからな。情報収集目的で潜入しただけでなく、破壊工作も行ったのだろう」

メル「気をつけてください、青葉君！あの子とあの紫の機体はあなたを狙っているようです！」

青葉「望む所ですよ！」

零「彼奴らがフォローしあうなら俺達もお前をフォローする！」

青葉「はい！」

何……！！？ルクシオンが前に出た……！！？

ソーマ「青葉！勝手はやめなさい！」

アレルヤ「ごめん、ピーリス。今は止めないでくれないかな」

ソーマ「アレルヤ……」

刹那「止まるな、青葉！お前はお前のできる事をしろ！」

青葉「アレルヤさん……！刹那さんも！」

ゼクス「青いな……」

ガエリオ「だが、その青さもたまにはいいんだよ」

ノイン「はい。それにそれは力になります」

アイーダ「ゼクスさん達まで……！デリオ！こうなったら、あなたが青葉を止めなさい！」

いー！」

デリオ「了解です」

ブラディオオンがルクシオンの隣まで移動する。

青葉「デリオ……！お前が何と言おうと俺は行くからな！」

デリオ「……そう言うだろうと思った」

青葉「え……」

デリオ「行くぞ、青葉。向うが二機で来るなら、こちらも二機で対応する。あの女と話をしたいのなら、まずは機体から戦う力を奪え」

青葉「やってみる！」

本当に良いバディだな、あの二人！

アイーダ「デリオ！あなたまで何をやってるの!?!？」

デリオ「青葉は言い出したら聞かない男です。敵戦力の中核を叩き、速やかに奴の欲求を満たす事が戦術的にも最も合理的であると判断します」

アイーダ「で、ですが、あまり突撃しすぎては……！」

零「それ、ものすごいブーメランだからな、アイーダ」

ティア「突撃娘のアイーダが言えないね！」

アイーダ「そ、それは……」

ベルリ「デリオの言う通りだと思います、アイーダさん」

セシリー「こうなったら、私達も彼等をフォローしましょう」

アイーダ「もう！わかりましたよ！」

ヤケクソになりやがった……

レーネ「よろしいのですか？」

倉光「構わんよ。デリオは状況が見えているからね。我々も、その戦術に乗ろう」

ヒイロ「隼鷹・デリオ・ウエインバーグ……。感情に従って行動したか」

デリオ「俺は合理的に判断したまでだ」

ヒイロ「否定する必要はない。俺はお前を肯定する」

ディオ「ヒイロ・ユイ……」

ゼクス「変わらん、ヒイロ……。お前のその真っ直ぐさによって多くの人間……。最後は世界さえも変わっていった……」

青葉「よし行くぜ、ディオ！ 雛のお付きの紫の奴は任せる！」

ヒイロ「あの紫は俺達の事も標的としている。手を貸す。行くぞ、シン」

シン「何で、恨まれてるかはわからないけど……。わかった！」

青葉「ありがとうよ、ヒイロ、シン！ お前等……。やっぱり、良い奴だ！」

シン「や、やめろ！ 照れるだろ！」

ディオ「こんな無茶に何度も付き合うつもりはない！ この一回で何とかしろ、青葉！」

青葉「おう！ 必ず雛から真実を聞き出してやるぜ！」

？「（あれがエクスクロスか……。ミスルギから離脱して正解だったな。何とかしてミネバとバナージを助けださなければな……。！）」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話　アーニーVS初戦闘〉

アーニー「（また、グラハム少佐と戦える……。！でも、今の彼は僕の上官のグラハム少

佐でなく、同じ仲間だ！ならば、戦友として彼を支える……！」

戦闘から数分後……。

レナ「気をつけて！こつちに接近する部隊がある！」

ジュリエッタ「ゾギリアの増援ですか！」

現れたのはアルフリード・ガラントの機体とガンダム、それにIS……！！？

ゼクス「アルフリード・ガラント……！」

ノイン「ヒイロ……！あれは……！！？」

ヒイロ「間違いない。あそこにいるのは五飛だ」

五飛「……」

零「それに、あのISを操縦しているのは……！」

アマリ「何か知っているの！！？零君！」

零「一夏の写真で見た……一夏の幼馴染だ！確か名前は……篠ノ之 箒！」

箒「一夏め。他人に人の事をベラベラと話したようだな」

タルジム「おい、張 五飛と篠ノ之 箒！お前等……ヒイロ・ユイ達と知り合いなの

か！！？」

五飛「俺は、奴の敵だ」

アルフリード「だが、それは元の世界での話だろうか？」

五飛「…」

箒「五飛…」

アルフリード「迷いは自分の手で断ち切るがいい」

五飛「そのつもりで来た…！」

箒「私もお前達を裏切る気は無い。(少なくとも今は…)」

ガンダムとI.S.が近づいて来た…！

タルジム「あいつ等…！やる気満々じゃねえか！」

アルフリード「果たしてどうかな…」

ラーシヤ「中佐…？」

アルフリード「まずは彼の戦いを見させてもらおう」

箒「(この場には一夏はいないようだな…。正直ホツトする…。今の私の姿は絶対に一夏には見られたくない…。！)」

零「篠ノ之 箒！お前、何考えてんだよ？！お前も他のI.S.乗りと同様に敵になつたつてのよかよ？！」

箒「見ての通りだ。容赦はしない」

零「くっ…！一夏には悪いが、戦力を力付くで奪うしかねえな…！」

ヒロ「五飛…。あの日の決着をつけに来たか」

五飛「…」

ヒロ「いいだろう。それでお前の気が済むなら相手をしてやる。これが最後だ、五飛。お前の戦いを終わらせる」

？「(敵の増援か…。ならば、俺も…！)」

アルフリード「ゼクス・マーキス。此処で倒させてもらう」

ゼクス「簡単に終わるわけにはいかんだ！」

？「ならば、俺も手を貸すぞ！」

現れたのは…黒い一本角のモビルスーツ？

アルフリード「何者だ？」

リディ「リディ・マーセナス。この機体の名はバンシイだ！今からそちらを援護する！」

ラーシャ「中佐！彼です！彼もヒロ・ユイ達同様、ミスルギから離反した男です！」
リディ「華麗に逃げたと思ったけど、気づかれていたのか…」
ガエリオ「味方だと信じていいんだな？」

リディ「ああ」

スメラギ「倉光艦長、どうしますか？」

倉光「信じてみよう、今彼が敵に回っても面倒だし」

レーネ「了解しました」

リデイさんのバンシィ・ノルンと協力して戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　リデイVS初戦闘〉

リデイ「待っていてくれ……。ミネバ、バナージ……。絶対に二人を見つけて助け出す
！その為にも今は……！」

〈戦闘会話　シンVSヒナ〉

ヒナ「あなた、シン・アスカね……！」

シン「リヤザン！青葉はお前と話したがってるだ！」

ヒナ「私があいつと話す事なんて何もない！」

シン「くっ……。！このままじゃ、あの時みたいになる……。ステラ……。！」

〈戦闘会話　ルナマリアVSヒナ〉

ルナマリア「話を聞いて、ヒナ！」

ヒナ「ルナマリア……。どうして、ミスルギを裏切ったの……？ 営倉にいた時、あなたは話し相手になってくれたのに……」

ルナマリア「ミスルギのやり方には賛同できないから…… 私はシンと共に行くのよ！」

ヒナ「だったら…… あなたもゾギリアの敵よ！」

ルクシオンの攻撃でフォルトナにダメージを与えた。

ヒナ「しまった！ フォルトナが……！」

アルト「今だ、青葉！」

青葉「よっしやあああつ!!？」

ルクシオンはフォルトナに組みついた。

ヒナ「またお前か！ 離せ！」

青葉「離すもんか、雛！ 俺はお前と話しがしたいんだ！」

ヒナ「私はお前など知らない！ 私はヒナ・リヤザン……！ ゾギリアのヴィクトル・リヤザンの娘よ！」

青葉「ヒナ：：リヤザン：：。弓原 雛じゃない：：」
ヒナ「隙が出来た：：！今なら！」

隙が出来たルクシオンをフォルトナは引き離れた。

ヒナ「ヒナ・リヤザン、撤退する！」

フォルトナはそのまま撤退した。

青葉「ヒナ：：リヤザン：：。弓原 雛じゃない：：」

ディオ「しつかりしろ、青葉！そのままでは、敵の的になるだけだぞ！」

青葉「あ、ああ：：！」

アルフリード「気づいた時には遅い！」

つ：：
!!? アルシエルがルクシオンを捉えた：：
!!?

青葉「し、しまった：：！」

ディオ「青葉！」

アルフリード「新型は頂く！」

リデイ「やらせるものか！」

バンシィ・ノルンはアルシエルの攻撃を防いだ。

アルフリード「邪魔をするのか、リデイ・マーセナス！」

リデイ「これから仲間になるであろう彼をやらせるわけにはいかないんでな：：！行

くぞ、お前の力を見せろ！バンシイ!!？」

：：
!!?バンシイ・ノルンから黄色い光が：：
!!??

すると、バンシイ・ノルンが変形して、角が割れ、二本角になった。

ユイ「角が割れてガンダムになった：：
!!?」

刹那「ぐっ!!?この感覚は：：!」

シン「あ、あの人の感覚：：!」

セシリー「間違いない：：あの人は：：!」

シーブック「ニュータイプ：：!」

リデイ「まさか、エクスクロスにもニュータイプがいたとは：：。取り敢えず、これで

!」

角が割れたバンシイ・ノルンはアルシエルを蹴り飛ばし、ルクシオンを連れて、俺達の元まで戻ってきた。

アルフリード「ぐっ：：!蹴り飛ばされた：：?」

アルシエルも元の位置まで戻る。

リデイ「大丈夫か？」

青葉「は、はい！ありがとうございます！」

シーブック「リデイさん、あなた：：!」

リデイ「話は後だ、今はこの場を切り抜けるぞ！」

セシリー「わかりました！」

デイオ「青葉、気が済んだか？」

青葉「わかんねえよ……」

デイオ「そうか……」

アルフリード「(新型は奪い損ねたが、あの様子では、ヒナが敵に通じている事はないようだな)」

ビゾン「貴様……！まだヒナに付きまとうか！」

青葉「うるせえ！こっちにも事情があるんだ！」

ビゾン「だが、お前の存在によつてヒナに要らぬ嫌疑がかけられた……！その報いを受けてもらうぞ！」

〈戦闘会話 シンVSビゾン〉

ビゾン「見つけたぞ、シン・アスカ！」

シン「何故俺を恨む?!？」

ビゾン「争いを止めたいたいなどと言いながら、ゾギリアに刃向かうからだ！」

シン「そんな理由か……。お前等のやっつてる事は戦争を引き起こしているだけだろ！」
ビゾン「ゾギリアに刃向かわなければ戦争は終わる！」
シン「それはお前達のエゴだ！俺は戦う！戦争を無くすためにお前達と戦う！」
ビゾン「それが矛盾していると言うんだ！」

〈戦闘会話 リディVSビゾン〉

ビゾン「俺とヒナの邪魔をするな！」

リディ「彼を見ているとかつての俺を思い出す……。歪んだ愛に取り憑かれた俺のな……」

ビゾン「俺がお前と一緒だと……。？ふざけるな！」

リディ「お前は行いはバナージに変わって俺が止めてやる！」

ウイングガンダムゼロのツインバスターライフルでネビロスにダメージを与えた。

ビゾン「ちいっ……！これ以上はネビロスがもたんか！連合の白い……。！そして、ヒイロ・ユイとシン・アスカ！貴様達との決着は、いずれつけるぞ！」

そう言い残し、ネビロスは撤退した。

シン「ビゾン……。憎しみで生きちやダメなんだよ……」
ルナマリア「シン……」

ヒイロ「あの男も、自分の感情に従って生きるか……」

リディ「いつか止めなくてはならないな……。バナージが教えてくれた、可能性の力で……」

ウイングガンダムゼロのビームサーベルでアルトロンガンダムはダメージを負った。

五飛「ここまでか……！」

ヒイロ「お前が、そう思うのならな」

五飛「ヒイロ……」

ヒイロ「マリーメア軍との戦いの中、お前は自らが戦争そのものとなる事で兵士の魂の拠り所となろうとした」

五飛「戦争がなくなれば、兵士は生きる場所を……意味を失う……。だから、俺は……」

シン「でも、戦争が続けば、兵士は死ぬ」

五飛「……！」

ヒイロ「だが、お前は知った。それでは悲劇という名の歴史が繰り返されるだけだと

いう事を」

五飛「そして、俺は……自らの戦う意味を失った……」

箒「五飛……お前は……」

ヒイロ「死に場所を求めるなら、好きにしろ。自爆スイッチを押せ。だが、未だ戦いを続けるマリィメイアの兵達に未来を見せる事が出来るとしたら……。五飛……。それはお前にしか出来ないだろう」

五飛「俺が……」

リデイ「君ならば、戦いの抑止力に……なる。兵達の命を伸ばす事が出来るはずだ」

刹那「兵士は……争いがなくとも生きていける……。俺達の世界のように……」

ヒイロ「戦士として生きる必要などない……。人は人として生きていけばいい。生命の使い道を誤るな、五飛」

五飛「……俺の負けだ、ヒイロ」

ヒイロ「そんな言葉は無意味だ。俺達は最初から敗者だ」

五飛「そうだな……。ヒイロ……。俺の生きる道を探す旅……。お前に付き合ってもらおうぞ」

あの五飛って男から迷いが消えたな。

五飛「ミスルギの旗の下に集う者よ……！俺は、お前達の敵となる！」

箒「(強いな、五飛の意思是……。まるで一夏のようだな……。)私達を裏切るのか、五飛！」

五飛「勘違いするな、俺は初めからどちらの味方とも言っていない」
タルジム「ふざけんじやねえよ！簡単に心替わりしてんな！」

五飛「笑いたければ笑え……。俺は生き恥を晒す事を選んだ！」

アルフリード「やはり、こうなるか……」

ラーシャ「中佐……」

アルフリード「各機へ……。！張 五飛は我々を離反した！ミスルギ皇国の情報流出を防ぐためにも奴を逃がすな！」

ヒイロ「来るぞ、五飛」

五飛「俺は恥さらしではあるが悪党に後れは取らん……。！今の俺に正義を名乗る資格はない……。だが、悪は討つ！」

俺達は戦闘を再開した……。

零「一夏はお前の事を心配していたぞ」

箒「だから、何だと言うだ？私はお前達の敵なんだぞ！」

零「一夏はそんな風に思ってたねえんだよ！これ以上、あいつを傷つけるんじゃないよ

！」

箒「（：：！私だって、あいつを傷つけないわけじゃないのに：：！）」

〈戦闘会話 ヒイロVS箒〉

ヒイロ「お前は戦闘に関しては素人とみた」

箒「た、確かに私は代表候補生じゃない：：。他の奴には敵わない程に素人だ：：」

ヒイロ「違う、迷いを戦場に持つて来るなど言っている。いずれお前は死ぬ事になるぞ」

箒「う、うるさい！お前の説教など聞きたくない！」

〈戦闘会話 五飛VS箒〉

箒「来るか、五飛！」

五飛「篠ノ之 箒。俺はお前を女だとは思わない」

箒「なっ!!?!、失礼だろ、それは！」

五飛「一人の戦士と見ていると言う事だ。だから、自分の中の迷いを捨てろ」
箒「五飛……。黙れ！お前は敵だ！此処で倒す！」

俺達は箒のISを追い詰めた。

箒「……くつ、このままではこちらが負ける……。！退くしかない……。！新垣 零？」

零「……！」

箒「一夏に伝えろ。お前は必ず私達が倒す……。首を洗って待っているとな」

零「……わかった。ならば、そちらにいる専用機持ち全員に伝えろ……。一夏が必ずお前達を救い出すと……」

箒「……了解した」

そのまま箒は撤退した……。

青葉「この事を知った一夏……。どんな顔するかな？」

ベルリ「取り乱すかも……」

アルト「一夏ならその心配はねえよ」

レナ「え……。？」

零「一夏の意味の強さはお前達も知ってんだろ？あいつなら大丈夫だ……。きつと。」
待っている、篠ノ之 箒。必ず一夏と共にお前達を助け出してやる……。

〈戦闘会話 零VSアルフリード〉

零「… あんたなら、話を通じそうだけど…」

アルフリード「ならば、話をしようではないか」

零「どうせ、降伏しろとか言うんだろ？」

アルフリード「ご名答！どちらも傷つかなくて済む」

零「俺達が降伏したらお前達の行なってきた行為を許す事になる…！それは絶対に
ごめんだ！だから、俺は全力であんたに抵抗する！」

〈戦闘会話 ガエリオVSアルフリード〉

ガエリオ「お前もしつこい男だな、アルフリード・ガラント」

アルフリード「それが私の取り柄なのでね」

ガエリオ「人の事は言えないがしつこい男は嫌われるぞ？」

アルフリード「ならば、しつこきは今日で最後としよう、覚悟してもらおう、ガエリ

オ・ボードウィン」

ガエリオ「覚悟するのはどちらか教えてやるさ！」

〈戦闘会話　リデイVSアルフリード〉

アルフリード「リデイ・マーセナス。先程の借りを返させてもらおう」

リデイ「なら、俺は今度こそ、お前を落とす！」

アルフリード「出来るものなら、やってみたまえ。あまり、アルフリード・ガラントを甘くみないほうがいい」

リデイ「可能性の力を知った俺とバンシイも舐めない方がいいぞ？気を抜いていたら、怪我だけじゃ済まないからな！」

バンシイ・ノルンの攻撃でアルシエルはダメージを受けた。

アルフリード「(最低限の目的は果たした。。。情報を得る事で彼等の存在はミスルギへの牽制になるだろう。。。それ以降の事は流れに任せるしかない。。。)アルフリード・ガラント、撤退する。。。！」

雑魚も全て倒し、アルシエルも撤退した。

青葉「やったぜ！敵のエースを追い返した！」

ゼクス「(あの男：： 五飛がこちらにつく事を予測していた節がある：：)」

ノイン「どうしました、ゼクス？」

ゼクス「アルフリード・ガラント：：。彼の動きには注意が必要かも知れん：：」

ロツクオン「何はともあれ、終わったみたいだな：：」

ティア「つ、疲れた〜」

シン「五飛が来たおかげでミスルギの情報収集も大きく前進するだろうな」

リデイ「(アルフリード程の男が情報源の彼を簡単に見逃すとは：： 何かあるな：：)」

ガエリオ「(奴は、こちらに意図的に情報を流すつもりだったのか：：?)」

五飛「ヒイロ：：」

ヒイロ「進む道はお前が決める。死に場所も、生きる場所も」

五飛「そのつもりだ。(この生命：：。俺は：： 俺の信じるもののために使う：：)」

俺達はそれぞれの艦へと戻り、シグナスの格納庫で五飛からミスルギ皇国について聞こうとしたが：：。

スメラギ「じゃあ、あなたもミスルギがどういった手段を使って異界人を帰還させるかまではわからないのね」

五飛「だが、キャピタル・アーミー、ゾギリア、そして、マリーメイア軍のトップはそれについて完全にミスルギを信用している」

ドニエル「騙されているのか…？」

倉光「流石に組織のトップに立つ人間が何の根拠もなく、それを信じているとは思えません」

零「確かに…」

アルト「五飛…。ブレラやIS乗り達はどうかんだ？」

五飛「ブレラ・スターンはランカ・リーという少女を人質に取られているみたいだ。IS乗りはお互いが人質の様だ」

アルト「やっぱり、ランカが…！」

メル「IS乗りの方々もそれぞれ、皆さんを守る為に戦わされているのですね…」

五飛「この中でも特殊なのが、鉄華団とタービンスだ。奴らは人質もいなければ、元の世界へ帰る気もない」

アレルヤ「自分達の意味で戦っているという事か…？」

五飛「異界人として、アル・ワースに來た奴らは拾ってくれたミスルギ皇国に恩を感じているそうだ」

ジュリエッタ「彼等らしいですね…」

五飛「奴らの件については、これ以上は不明だが、先程の三軍の戦力についての情報は提供できる」

ドニエル「これで取り敢えずの任務は達成と言えますな」

スメラギ「ですが、何故ミスルギがアメリカや自由条約連合だけを敵視するかの理由はわかりません」

ゼクス「五飛……。それについては、どう思う？」

五飛「見当もつかない。と言うより、調べれば調べる程、ミスルギの戦略には疑問しか出て来ない。今回の周辺自治都市への侵略にしても元々高い国力を持つミスルギにとつてそれ程の利益があるとは思えない」

ユイ「ドアクダー軍団の様にアル・ワース全土を征服する気では？」

シン「それについても考えたけど、ミスルギの歴史上、そういった気運はこれまで全くなかった様なんだ」

倉光「こうなるとクリム・ニツク大尉曰くの無能が服を着て歩いているジュリオ陛下の気まぐれと見るべきかも知れませんか」

ユイ「私、あの人苦手だな……」

テイア「どうして？」

ユイ「実はミスルギ皇国に行った時、ジュリオ陛下から物凄いプロポーズをされ続け

て……断つても何度も何度も……」

レナ「……は？」

サラ「レ、レナ……。殺気、殺気！」

ドニエル「気まぐれで標的にされる、こちらとしてはたまつたもんじゃないですがな」
倉光「どうします、ドニエル艦長？ 取り敢えず任務は達成しましたので、別働隊と合流しますか？」

ドニエル「うむ……」

ゼクス「ならば、私から提案があります」

ドニエル「聞かせてくれ、ゼクス君」

ゼクス「ゾギリアの戦略を決定しているのは行政局です。これまでの状況から見ても、ゾギリアは部隊レベルではなく、その行政局もアル・ワースに来ていようです」

五飛「それは俺もつかんでいる。行政局の局長クラスの人間もこちらに転移しているようだ」

スメラギ「そう言えば、私達も行政局直属の親衛師団と一度交戦したわね……」

倉光「読めたよ。その行政局を狙う事でゾギリアの情報をダイレクトに引き出すと」

ゼクス「その通りです」

五飛「親衛師団の作戦行動に関する情報は俺の方にある」

倉光「これで決まりですね」

ドニエル「うむ……。親衛師団を突けば、ネモ船長の追っていたネオ・アトランティスに関する情報も入るかも知れない」

ガエリオ「ネオ・アトランティス？」

倉光「ゾギリア親衛師団と行動を共にしていた組織なんだけど、それに関する情報はないかな」

五飛「聞いた事がない名だ」

スメラギ「そうになると、他の三軍とは、全く別の系統で動いているかも知れませんね……」

ドニエル「それも親衛師団を叩けば、わかるだろう」

倉光「では、五飛君……。彼等に関する情報の提供を頼む」

五飛「了解した。無用な争いを終わらせる為、俺も全力を尽くす」

ヒイロ「……」

デイオ「ヒイロ……。お前に礼を言う。感情に従って行動する……。お前の言葉で随分と楽になれた」

ヒイロ「それならば、俺よりもお前の相棒に言うんだな」

デイオ「青葉に？」

ヒイロ「合理的でも効率的でもない……。ただ己の感情のままに動く……。だが、そこが俺達が戦う事の意味なのだろう」

デイト「そうかも知れない……」

すると、青葉が来た。

青葉「何だよ、仏頂面同士で新コンビ結成か？」

デイト「……お前、落ち込んでないんだな……」

青葉「弓原 雛じゃなくて、ヒナ・リヤザン……。でも、そう名乗っているのは理由があるかも知れない。だから俺は、これからもあの子を追うつもりだ」

デイト「懲りない奴だな」

青葉「俺は、俺が納得するまでやるつもりだ。悪いが、お前達にも手伝ってもらおうぜ」

ヒイロ「付き合いきれんな……。俺は抜けさせてもらう」

青葉「あ、おい！ヒイロ！」

ヒイロのやつも素直じゃないな。

青葉「お前の都合で他人を巻き込むのはやめろ」

青葉「バディのお前は、他人じゃないよな？」

デイト「それは……」

青葉「だけど、俺は誰が何と言おうとやるつもり」

ディオ「…頑固な男だ」

青葉「お前だって似たようなもんだ。だから、観念しろ。付き合ってもらうぜ、ディオ！」

ディオ「…だが忘れるな、青葉。俺たちの目的は…」

青葉「わかつてる。元の世界に帰る事が、最優先だ。(ただ帰るだけじゃない…。俺が元の世界に帰る時…。それは絶対に難と一緒にだ…)」

リディ「なかなか良いコンビじゃないか、二人共」

そこへ、リディさんが来た。

ディオ「あなたが、リディ・マーセナスですか？」

リディ「そうだよ」

青葉「あ、あの！さっきは助けてくれてありがとうございました！」

リディ「当然の事をしたまでさ…。元気なら良かった」

すると、今度は、シブブック、セシリーが来た。

シブブック「リディ少尉…」

リディ「君達がニュータイプか」

セシリー「あなたも私達の世界の人間なのですか？」

リディ「さあね…。少なくとも君達のモビルスーツは見た事がないよ」

シーブック「アクシズ落としと言うのはご存知ですか？」

リデイ「… アクシズ落としたと!?？」

セシリー「知っているのですか!?？」

リデイ「シャア・アズナブルが地球に向けて小惑星アクシズを落としたあの事件の事か…!?？」

シーブック「じゃあ、やっぱり、リデイ少尉も俺達と同じ世界から…。」

リデイ「だけど、その事件はもう三年も前の話だぞ…！」

セシリー「そ、それって…！」

リデイ少尉は… シーブック達の世界から三年後の世界の出身という事か…？

第24話 戦場の再会

―新垣 零だ。

俺はシグナスのパイロット待機室でみんなと話していた。

フロム「……デイトって……雰囲気、変わったね」

デイト「そうか？」

フロム「アネツサも言ってたよ。前はもつと近寄りがたい雰囲気だったって」

デイト「別に人を避けていたわけではないが……」

ヤール「いんや、フロムの言う通りだね。お前は周りに壁を作ってた。はつきり言えば、ちよつとばかり浮いてたぜ」

リー「感情むき出しの青葉や逆にお前よりもさらにクールなヒロとの付き合いで影響を受けたのかもな」

デイト「……そうなんでしょうか……」

零「でも、それは悪い事じゃないと思うぜ」

アマリ「私も教団を飛び出した事で色々な人と出会う事が出来て、少しだけ視野が広がりましたから。（それに……零君とも出会えましたし……）」

零「俺もアル・ワースに来てから沢山の人と出会えて、勉強になるよ。(まあ… アマリとも出会える事が出来たし…)」

メル「うぬぬぬ…！」

リー「ご、ごほん！… アマリと零の言う通りだ。変わっていく自分を楽しめばいい
 デイオ「変わっていく自分… か…！」

リー「ゼクス達に聞いたが、あのヒイロも他人との交わりの中で変わっていったそう
 だ」

ユイ「あのヒイロ君がですか？」

シーブック「それって… 前はもつと親しみやすい性格だったって事ですか？」

リー「その逆だ。もつと近寄りがたい雰囲気だったそうだ」

嘘… だろ… ？

零「… う、嘘だろ… そんな… 馬鹿な事が…」

アマリ「… 嘘… そんな… そんな…」

ロツクオン「今よりも無愛想だったって… それって… あり得るのかよ…」

ニール「この感じだと、刹那は大分変わったな…」

刹那「… 逆にもつと無愛想なら、ここまで言われるのか…」

シン「みんな驚きすぎだろ…」

ヤール「ま……あいつの場合、お袋さんの腹から生まれた瞬間からしかめっ面ってイメージだな」

零「……つくくっ……！」

メル「零さん！失礼ですよ……！」

だ、だって、あの顔で生まれてくるなんて、笑えてくるじゃねえかよ……！くくっ……！

アマリ「さ、さすがにそれはないと思いますけど……」

ヤール「じゃあ、聞くがよ……。あいつにも子供時代があつて、天使のような微笑みを浮かべている姿が想像できるか？」

アマリ「……ごめんなさい。私の想像力では無理です……」

零「つはははっ！も、もう、堪えられねえ……！あはははっ！」

メル「れ、零さん！いい加減に……プフッ……！」

テイエリア「君も笑っているじゃないか……」

リー「聞いた話じゃ、あいつにも仲間がいてそいつ等の影響で少しはマシになったらしい」

リデイ「仲間とは……五飛の事ですか？」

リー「彼も、その一人だそう。そして、他の仲間も、このアル・ワースにいてミス

ルギの状況を調べているんだとさ」

：：！警報が鳴った：：！！？

ディオ「敵襲か：：！！？」

すると、アネッサから通信が来た。

アネッサ「本艦が向かっている自治都市においてゾギリア親衛師団の軍事行動が確認されました。機動部隊各員は機体に搭乗して、出撃指示に備えてください！」

アルト「五飛の情報以上に親衛師団の仕掛けが早いな：：！！」

グラハム「こちらに情報が漏れたのを見て、急いでいるようだな：：！！」

アネッサ「なお、既に親衛師団は交戦状態にあるようです」

アレルヤ「誰かがゾギリアと戦っている：：？」

零「誰だかわからねえが：：俺達が到着するまで、踏ん張ってくれ：：！！」

とにかく、急がねえと：：！！

第24話 戦場の再会

デュオ・マクスウエルだ。

俺とトロワ、カトルはミスルギについて、調査していた。

親衛師団兵「マルガレタ特務武官などに任せてはおけん。あの都市は、我々ゾギリア親衛師団が直々に制圧する。他地域への見せしめもある…！あの都市の住民を脅かしてやれ！」

親衛師団兵2「隊長…！都市に機体が隠れています！」

親衛師団兵「また奴等か…！」

バレたならしようがねえ！

俺達はガンダムに乗って、姿を現した。

デュオ「ちっ…！こっちの予想以上に仕掛けが早いぜ！」

カトル「ヒイ口を通じて連絡を入れたから、すぐに援軍が来るはずだよ」

デュオ「単純な戦力なら、俺達だけでもやってやれない事はないが、問題はあれだぜ…！」

トロワ「あのサイズからして、対人掃討兵器と見るべきだろう」

デュオ「ミスルギはやる事がメチャクチャなんだよ！ついでに、それに従うゾギリアやマリィメアとかもな！」

カトル「救援が来るまで、僕達だけで守り切るしかない！」

トロワ「とつくに覚悟は出来ている」

デュオ「やるぜ、トロワ、カトル！あの円盤を街に入れんなよ！」
戦闘開始だ！

戦いの最中にカトルが叫んだ。

カトル「気をつけて！何か来る！」

デュオ「この状態で増援かよ！」

現れたのは……四機のモビルスーツ……!??

カトル「ガンダム……!?？」

トロワ「だが、俺達の世界のものではない」

ジュード「そっちのゾギリアと戦っている人達！聞こえるか！俺はジュード・アーシタ！とりあえず、手を貸す！」

デュオ「どこの誰だか知らないが、見ての通りの状況だ！手伝ってくれるなら大歓迎だ！」

ビーチャ「いいのかよ……。俺達、ミスルギに追われている身なのに……」

エル「何言ってるのさ、ビーチャ！あいつ等、街の人達を狙ってるんだよ！」

ルー「一体何を考えてるのよ、ミスルギは！こんな虐殺じゃない！」

ジユドー「そんな奴等を放っておけるか！」

あいつ等も、前に出たな……！

ジユドー「脅されたってあんな奴等の仲間になんてなるかよ！やるぞ、みんな！あの円盤を絶対に街に入れるなよ！」

俺達は戦闘を再開した。

途中で現れたモビルスーツ部隊と協力して、俺達は円盤を全て撃墜させた。

デュオ「人食い円盤は倒したか……」

カトル「ヒイロ達も来たようだよ」

カトルの言葉の後、三隻の戦艦が来た……。

―新垣 零だ。

俺達はゾギリア親衛師団と交戦しているモビルスーツ部隊の戦場に降り立ち、出撃した。

ドニエル「こちらはエクスクロスだ。これより君達を援護し、ゾギリアを迎撃する」

デュオ「ヒイロにしちや、随分と気の利いた救援を届けてくれたぜ」

五飛「デュオ！それにカトルとトロワか！」

カトル「五飛！ヒイロの所に五飛もいるんだね！」

デュオ「こいつは驚いたぜ！てつきり、あのままマリーメイア軍にいるんだと思ってたのによ！」

トロワ「収まるべき所に収まったという事だ」

カトル「五飛だけじゃない。ノインさん達もいるようだね」

デイオ「あれがヒイロのかつての仲間か」

青葉「陽気な奴、お坊ちやま風、無口なタイプ……。バリエーションあるな」

リディ「お、おい！あのガンダムは……！」

シーブック「Zガンダム……！乗っているのはルー・ルカか……？」

ジユドー「シーブックさん！俺だよ！ジユドーだ！」

ルー「私はこつち！ビーチャとエルもいるわよ！」

セシル「あなた達もアル・ワースに来ていたのね」

リデイ「ジュードロー……ハマーン・カーンと戦ったジュードロー・アーシタか！」

ジュードロー「俺の事を知っているんですか？」

シーブック「詳しい話は後にする！」

ベルリ「あつちの一団はシーブックさんの知り合いか」

刹那「気をつけろ、増援が来る！」

刹那が叫ぶと敵の増援が現れた。

青葉「また親衛師団が来た！」

デイオ「師団長クラスの機体もいるか……！」

ユイ「あの円盤は何ですか!?？」

セシル「まさか……！」

ルー「察しの通りよ。あれはバグと同じような対人兵器見たい」

アレルヤ「オートマトンと同じという事か！」

テイエリア「ミスルギは、そんなものまで使って、周辺都市を制圧しようとしている

のか……！」

アルト「これじゃあ、もう虐殺じゃないか！」

アーニー「これがミスルギの……人間のやる事なのか……！」

ドルジエフ「噂の白鳥も来たか。ならば、こちらも切り札を使わざるを得ない」

黒いモビルスーツ……!??

ルー「黒いキュベレイ……！」

ジユドー「プルが乗っていた機体だ！」

リデイ「プル……プルシリーズの素体となったニュータイプか……！」

ドルジエフ「さあ、プル……。お兄ちゃんの敵を倒しておくれ」

プル「うん！わかったよ！」

ドルジエフ「年端もいかぬ少女にこのような真似をさせるとは心が痛むな……。まし

てや、このドルジエフを兄と思ひ込ませるなど、妹を持つ身としてはなはだ遺憾だ……」

親衛師団兵「しかし、本当に問題ないのでしょうか……」

ドルジエフ「Dr. ハーンの話では精神制御は完璧だそうだ。ならば、使わぬ手はな

い」

プル「大丈夫だよ、お兄ちゃん！敵は全部、あたしがやっつけるから！」

ジユドー「プル……！それに乗っているのはプルなんだな！生きていたんだな、お前

！プルツーとの戦いで行方不明になったかと思つてたけど！」

プル「あんた、誰よ？」

ジユドー「俺がわからないのか……？ジユドーだよ！」

プル「ジユドー……。何処かで聞いた名前だけど、思い出そうとすると頭が痛くなる

！って事は、あんたはあたしとお兄ちゃんの敵だ！」

ジュード「プル！」

ルー「あの様子……精神制御を受けているの!?？」

シーブック「ジュード！あの子はお前の知り合いなのか!?？」

ジュード「プルは元はネオ・ジオンだったけど、俺達の仲間になったんだ……。戦いの中で行方不明になって……。それで、やっと会えたと思ったのに……。！」

マサキ「くそっ！精神制御とは汚い真似をしやがる！」

サラ「いったい、どうしたらいいの……!?？」

ジュード「頼む！プルを助けるために力を貸してくれ！会ったばかりの人にこんな事を頼むのはムシがいいってわかってる……。！だけど……。！」

ベルリ「わかった……。！まずは、あの子の乗っている機体を止めよう！」

アイーダ「ベルリ……。！そんな安請け合いを！」

ベルリ「安請け合いじゃありません……。！あいつの頼みを聞いたらそうするしかないと思つて、そう言つたんです！」

ジュード「お前……」

シーブック「僕もベルリと同じ気持ちだ。やるぞ、ジュード」

青葉「心配するな、お前！この部隊は、いい人揃いだからよ！」

零「それに、見ず知らずの俺達に頼んでんだ…。それに答えないとダメだろ！」
ベルリ「戦いたくない女の子を無理矢理、戦わせるような奴の好きにはさせない！」
トロワ「いい人揃いか…。」

カトル「そのようだね」

五飛「やるぞ…！卑劣な手を使う輩の思い通りにさせるわけにはいかない！」

シン「(あの子もあの時のステラと同じ様に苦しんでる…。！そんなのもうごめんだ！あんな思いをするのは俺だけで充分だ！)」

ヒイロ「まずは、あの黒い機体を止める」

ジユド「恩に着る！待っている、プル！すぐに助けに行くからな！」

プル「うるさい！あたしのお兄ちゃんはお前じゃない!!？」

俺達はプルという子を助けるために動き出した。

〈戦闘会話 零VSAI〉

零「ふざけんよ…。！直接手を汚さずに人を殺すなんて、そんな事させるかよ！一機も残さず破壊してやる！」

俺達は円盤兵器を全て撃墜させた。

ロックオン「これであの兵器が街に侵入する事は阻止できたな！」

ソーマ「私達が戦う相手はあの様なものを使う人間なのね……」

〈戦闘会話 シンVSプル〉

シン「精神制御に負けるな！お前はステラの様になつてはダメだ！」

プル「誰、ステラって？あたしの邪魔をするなら消えちやええ！」

シン「クソツ……！やっぱり俺じやどうする事も出来ないのか……！」

〈戦闘会話 リディVSプル〉

プル「あたしとお兄ちゃんの道を阻まないで！」

リディ「（この状況……プルトゥエルブの時と似ている……。この場にはバナージはいない……。俺がなんとかしないと……。！）俺が君を止める！」

〈戦闘会話 刹那VSプル〉

刹那「彼女に思いを届ける為にもその機体を止める……！」

プル「何よ、あんた？あんたもニュータイプなの？」

刹那「似て非になる存在なのかもしれないな……だからこそ、やるしかない！」

〈戦闘会話　ガエリオVSプル〉

プル「ガンダムが……！私とお兄ちゃんの前に立ちはだからないで！」

ガエリオ「この様な幼き少女を無理矢理戦わせるなどと……やはり、ミスルギのやり方は許せない！待っている、俺が止めてやる！」

〈戦闘会話　ジュリエッタVSプル〉

プル「あなた達じゃ、お兄ちゃんを止める事は出来ない！」

ジュリエッタ「同じ子供でも、自分自身の意思で戦う鉄華団とは全然違います……！それに、女の子の手を血で染めてはなりません！」

俺達は協力して、キュベレイに軽いダメージを与えた。

プル「あああああっ!!？」

ジュード「プル！」

プル「みんな、嫌いだああつ!!？」

つ：：!!？キュベレイが街の中に：：!!？

レナ「錯乱しているの!!？」

ティア「まずいよ！このままじゃ、街が危ないよ！」

アルト「じゃあ、どうするんだよ!!？」

ゼクス「可愛そうだが、とどめを刺すしかない：：！」

ユイ「そ、そんな：：！」

メル「ま、待ってください！ギリギリまで、方法を考えましょう！」

セルゲイ「だが、そうしている間にも町の人達は危険にさらされるのだぞ：：！」

メル「でも：：でも：：！」

零「メル：：！」

アマリ「ホープス、何か方法は!!？」

ホープス「：：時間が足りません。誰だって、その様な手段は選択したくありません。ですが、仕方がないのです」

メル「：：！」

クソ：：！打つ手なしかよ：：！

リディ「諦めるのは早い……！」

シープック「リディ少尉……！！？」

リディ「俺とバンシイが彼女を止めてみせる！」

バンシイがNTTDを発動させて、街の中に入り、キュベレイの前まで移動した……

！！？

プル「何なのよ、あんた……！来ないで……！来るなああつ！！？」

キュベレイがバンシイに攻撃をした。

刹那「リディ！」

ロックオン「戻れ！このままじゃジリ貧だ！」

リディ「あいつなら……バナージなら、こんな状況でも絶対に退かなかつた！俺が退

くわけには……！」

零「あなたは、そのバナージって人じゃないでしょう！！？」

リディ「……零……」

零「バナージって人がどれほど凄い人かは俺は知りません……でも！あなたにはあな

たの良いところも悪い所もある！あなたはリディ・マーセナスでしょう！！？」

リディ「……そうだったな……。俺は何処かバナージを羨ましく思っていたのかもし

れない……。あいつがいない状況であいつになりきろうとしていた……。だけど、今気づ

いた！バナージ・リンクスはバナージ・リンクス！俺は俺だ！バンシイ！俺に力を貸してくれえええつ！！？」

すると、バンシイが黄色く発光した。

アンドレイ「バンシイが彼女に答えたのか！！？」

アニユー「でも、彼だけでは……！」

？「それがお前の覚悟なのだ、リディ・マーセナス」

リディ「！」

現れたのは……緑色のモビルスーツ……！！？

リディ「お、お前……その機体は……！」

マリィダ「私も手を貸そう。同じ、バナージによつて変わった者同士」

リディ「マリィダ・クルス！どうして……お前は俺が……！」

マリィダ「……わからない、気がつけば、この世界にいた」

リディ「……」

マリィダ「私を殺した事を悲しんでいるのなら、悲しまなくても良い。それによつて、お前がバナージや姫様の為に戦ってくれたのだからな」

リディ「マリィダ・クルス……」

マリィダ「行くぞ、リディ！プルを……私の姉を止める！」

ジユドー「あ、姉!!?まさか、あの人も……!」

ルー「プルツと同じ、プルのクローンなの!!?」

シン「驚くのは後だ!あの2人でも止められないぞ!」

プル「私の敵は消えろおとおお!!?」

リデイ「うっ……!」

マリィダ「くっ……!」

シン「こうなつたら……俺が!」

ルナマリア「ダメよ、シン!あなたが死んでしまうわ!」

シン「でも、このままじゃ、あの子と街が……!もう、あんな……ステラの様な思い

はしたくないんだ!」

ルナマリア「シン……」

デイスティニーガンダムも街の中に入るが、キュベレイのファンネルを受けてしまつた。

シン「グアアッ!」

アルト「シン!」

シン「ここまでか……結局、俺は……。ごめん、ルナ。ごめん……。ステラ……!」

? 「死んじやダメ、シン!!?」

黒いガンダムが現れて、デイスティニーガンダムに向けて放たれたビームをシールドで弾いた。

シン「ガイア……ガンダム……？ いったい、誰が……」

？「会えた…… やつと…… やつと！ シンに会えた！ シン!!？」

シン「え……？ そ、その声…… まさか……！ ステラ…… なのか……？」

ステラ「うん！ そうだよ！」

シン「ステ、ラ…… ステラあああつ!!？ 俺は…… 俺はあつ！」

ステラ「うん…… シンが頑張ってくれていたの、知ってるよ。でも、今は……！」

シン「ああ！ この場を切り抜ける！」

ルナマリア「（シン…… 良かったわね……）」

ベルリ「……」

アイーダ「ベルリ？」

ベルリ「要するに機体の動きを止めさえすれば……！」

メガファウナへ戻ったGーセルフは新たなパックに換装した。

青葉「換装した!？」

零「ベルリ！ そのパックは!？」

ベルリ「こいつはトリッキーパック！ 試運転もまだの、組み立てが終わったばかりの

新品です！こいつなら、もしかしたら…！」

トリツキーパックをつけたGーセルフもキュベレイの前に立った。

プル「来るな！私をいじめる奴はみんな、消えちやえば良いんだ！」

刹那「…！これは…！」

シン「感じる…！」

ベルリ「何だ、これ…？あの子の感じている痛み…？」

プル「みんな、本当は私なんていららないんだ！あたしが死んだって誰も悲しまないんだ！」

ジュード「プル…」

ベルリ「今は、あの子を止める事だけを考える…！」

リデイ「ベルリ！俺も手伝う！」

ベルリ「はい！フォトン・バッテリー、最大出力！フラッシュ・アタック、いっけえええっ！！？」

暴れるキュベレイをバンシイが抑え、Gーセルフの攻撃がキュベレイに決まった。

ベルリ「どうだ！機体の電子系統が一時的に死んだはずだ！」

ステラ「これでこの人は暫く動けないよ！」

プル「動け！動いてよ、キュベレイ！戦えなくなったら、誰もあたしの事を好きになっ

てくれないのに！」

って、トリツキーパックも爆発した…!??

ベルリ「試作品のトリツキーパックじゃ、これが精一杯か…！」

シーブック「ジュードー！後はお前がやるんだ！」

リデイ「マリーダ！君の妹は君が救い出せ！」

アマリ「敵は私達が引きつけます！」

ジュードー「プル!!？」

マリーダ「今、行くぞ！」

乙ガンダムとクシャトリヤがキュベレイの前まで行った。

ジュードー「プル！俺達の声を聞け！」

プル「いやだ！来ないで、ジュードー！」

エル「ジュードーの事を認識している！」

ピーチャ「よっしゃ！あと少しで元に戻るぞ！」

刹那「いや…違う…！」

ジュードー「プル！俺の事が分かるなら、どうして俺を拒絶する！」

プル「だって…あたしのせいで…リイナが死んじやったから…」

ジュードー「プル…」

プル「だから……ジュードは……あたしの事を……きつと嫌いで……」

マリイダ「本当にそうだと思うのか？」

プル「え……？」

マリイダ「この男がお前の事を嫌うと本当に思っているのかと聞いているんだ」

プル「……あんたに……あんたに何が分かるのよ！」

マリイダ「妹だから……」

プル「妹……？あんたが……？」

マリイダ「うん。今のお前は私の世界のプルではない……。でも、例え、世界が違えど、私はプルシリーズの……プルの12番目の妹……プルトウエルブなんだ」

プル「あたしの……12番目の妹……」

マリイダ「私もかつてプルの様になった……。でも、マスターとバナージは必死に私を止めてくれた……。マスターは私の父に等しい存在だった。ジュード・アーシタはお前の兄の様な存在なのだろう？」

プル「うん……」

マリイダ「彼の言葉に耳を貸してみてもいいのではないか？」

プル「……」

ジュード「プル！俺がお前の事を嫌いになるわけないだろ！」

プル「ジュードは優しいね……。でも、わかるんだ……。あたしじゃ……。リイナの代わりに出来ない……。って……」

ジュード「どうしてだ……。？？？どうして、想いが伝わらないんだ！想い……。カミーユさん……。！俺に力を貸してくれ……。！」

な、何だ……。？？？Zガンダムから流れるこの気は……。？？？

ベルリ「何だ……。？？？これって……。あのジュードって奴の心そのもの……。？」
シーブック「ジュード……」

刹那「想い……」

ステラ「ポカポカするね、シン！」

シン「ああ、これならいける！」

ジュード「感じるか、プル？俺の想いを」

プル「分かる……。言葉なんかなくても、ジュードの想いが……」

リディ「それが彼の覚悟だ！」

ジュード「だったら、一緒に来い。俺にとってお前は、もう一人の妹だ！」

プル「でも……」

ルー「あのね、プル……。リイナは生きてるわよ」

プル「え！」

エル「ハマーンとの戦いが終わった後、ちゃんとジユドーと再会してるよ！」

ピーチャ「だからよ……。結果オーライだけど、その…。あんまり気にするな」

プル「リイナが…。生きている…。」

ジユドー「リイナの所に帰るためにも、お前も一緒に来い、プル！」

プル「うん！」

マリーダ「プル…。」

プル「マリーダ、ありがとう！妹に助けられるなんて、情けない、お姉ちゃんだね」

マリーダ「姉妹は助け合うものだろう？気にしなくてもいい」

プル「わかった！」

すると、キュベレイの機体の機能停止が解けた。

アイーダ「機体の機能停止が解けた…。！」

ベルリ「でも、もう大丈夫みたいです！」

ジユドー「ありがとうな。あんた達のおかげで、プルを落ち着かせる事が出来た」

リデイ「当然の事をしたまでで、少しでも罪滅ぼしとなるなら…。」

シン「俺やステラの様な思いはもうさせたくないからな！」

ステラ「でも、再会できた！」

シン「そうだな！」

ベルリ「一か八かだったけど、うまくいったよ。ハツパさんにも感謝しなきゃ」

ジユドー「行くぞ、プル！お前をひどい目に遭わせた奴等は許しちや置けない！」

マリーダ「私の姉に手を出した事を後悔させてやろう！」

プル「わかったよ、ジユドー、マリーダ！あたしも一緒に戦う！」

Gーセルフもメガファウナに行き、トリッキーパークを外し、戻ってきた。

五飛「後は敵を殲滅するだけだ」

デュオ「汚い手を使った事をたつぷり後悔させてやるぜ！」

ドルジエフ「Dr. ハーンの施した精神制御が破れるとは……いや……。やはり、あの様な手段は許されるものではない……。ならば、正面から叩き伏せるのみ！ゾギリア親衛師団の恐ろしさを教えてやろう！」

俺達は戦闘を再開した……。

俺達は敵のグバルディアSにダメージを与えた。

ドルジエフ「馬鹿な……！この私まで敗れるというのか！」

って、逃げる気かよ!!？

倉光「この機を逃すわけにはいかない！」

ブラディオオンがグバルディアSを抑えつけようとしたが……

ドルジエフ「私を止められると思うな！」

ディオ「くっ……！」

ブラディオオンは弾き飛ばされた。

再び逃げようとしたグバルディアSだったが、相手は気がつかなかった……

既に目の前に俺がクロスガンのブラスターモードの銃口を向けていた事を……

零「おっと、ここは通行止だぜ？」

ドルジエフ「何っ……！」

アマリ「れ、零君!? いつの前に……！」

ディオ「助かりました、零さん」

零「気にするな、ディオ」

倉光「ゾギリア親衛師団長のあなたに聞きたい。何故、ミスルギ皇国はゾギリアや

キャピタル・アーミーなどを受け入れ、我々を敵視する？」

ドルジエフ「敵に情報を与えるつもりはない……！」

倉光「それでは仕方ない……。零君」

零「目の前で撃たれるのと、斬り刻まれるのどっちがいい？ リクエストに答えてやる

よ」

俺は今、バスタードモードを発動させて、物凄い悪役顔してるんだよな……きつと……。

パトリック「お前は真上か……」

アンドレイ「言ってる事は悪役だよ……」

倉光「ここが地球でない以上、捕虜に対する規定も制約もない……」

ドルジエフ「非人道的な手段で情報を引き出すつもりか！」

零「対人掃討兵器を使う奴等に言われたくねえな……？」

メル「だから、その顔は悪役ですよ……」

ドルジエフ「ま、待て……！ミスルギ皇国の戦略は現場レベルには知らされていない事が多い！対アメリカ、対自由条約連合については各組織のトップの人間でなければ、わからない！」

倉光「嘘は言っていないようだね。では……」

仕方ねえな……。

俺はクロスガンを下ろした。

ドルジエフ「くっ……！この屈辱は忘れない……！ネストル・ヴィクトロヴィチ・ドルジエフの名に懸け、次の機会には必ず汚名を返上する！」

そう言い、奴は撤退した……。

倉光「やれやれ……。少し脅しすぎたかな」

レーネ「迫真の演技でした、艦長」

倉光「零君の演技力もなかなかだったね」

零「いいえいえ！ですが、結局の所、有益な情報は得られなかったですね……」

ギゼラ「ですが、これで敵の全滅を確認しました」

ドニエル「結局、ミスルギがこちらを敵視する理由はわからないままか……」

スメラギ「ですが、町を守る事は出来ました。今はそれを喜びましょう」

ベルリ「それに今回は人助けも出来ましたよ」

プル「ありがとう、ジュード、マリィダ。それにみんなも」

ジュード「いいって事よ。こうして、またプルと会えた事が俺にとって一番嬉しい事

だからな」

プル「ジュード……」

ジュード「行こうぜ、プル。このエクスクロスが、これから俺達の帰る場所だ」

プル「うん！」

リデイ「マリィダ、君も来てもらおうぞ」

マリィダ「わかっている」

ステラ「シン！話したい事いっぱいあるんだ！」

シン「俺もだよ、ステラ……。まずは戻ろう」

俺達はそれぞれの艦へ戻った……。

機体から降りた俺達はメガファウナの格納庫で新しく仲間になったみんなと話していた。

ジユドー「……じゃあ、シーブックさん達もアクシズでの戦いの途中で跳ばされたのか……」

シーブック「そっちも同じか……」

ジユドー「つて事は、シーブックさん達もあの戦いの結末は知らないんだな……」

シーブック「どうやら、リデイ少尉はアクシズ落としから三年後の世界から来たみたいなんだ」

ルー「え？じゃあ、どういう結末なのか、知っているんじゃない？」

リデイ「それもそうはいかないんだ」

ピーチャ「どうしてですか？」

リデイ「俺の知るアクシズ落とし事件にはシーブック達や君達、ガンダムチームは居ないんだ」

エル「え…!?」

ビーチャ「ど、どういう事だよ!?」

シーブック「恐らく、俺達の世界の宇宙世紀とリデイ少尉達の宇宙世紀は全く違う世界という事だ」

ジユドー「並行世界だけど、全く違う、宇宙世紀…」

リデイ「そういうわけで、俺の知るアクシズ落としの結末と君達の世界のアクシズ落としの結末が必ずしも同じじゃないという事だよ」

ルー「分かりづらいですね…」

セシリー「ところで、ダブルゼータはどうしたの、ジユドー? アクシズの戦いでは、あれに乗っていたと思っただけ」

ジユドー「それが… わからないんだ」

シーブック「わからない?」

ジユドー「アクシズでの戦いの時、確かに俺はダブルゼータに乗っていた…でも、アル・ワースに跳ばされて、気がついた時にはゼータに乗っていたんだ」

ルー「ゼータに乗っていた私は押し出されたのかわからないけどリ・ガズイに乗って

いたの」

ジユドー「(アクシズで光に包まれた時、カミーユさんの声を聞いた様な気がする…。俺がゼータに乗っていたのは、それに関係あるのか…。)」

シーブック「とにかく、みんなが無事でよかったよ」

ビーチャ「ラー・カイラムでメカニックをやったモンドやイーノはこっちに来てないみたいだけどな」

リデイ「(ラー・カイラム…。別世界のブライト大佐…。か)」

エル「こんな事になるんなら、あたしも出撃なんてしなけりやよかった」

ジユドー「で、アル・ワースに跳ばされた俺達はミスルギに従えって言われたんだけど…。あいつ等の偉そうな態度に我慢できなくて、逃げ出したってわけだ」

セシリー「でも、もう大丈夫よ。エクスクロスには、そういう異界人が集まっているし」

シーブック「何より、元の世界への帰還する方法も一応の目処がついてるからな」

ビーチャ「本当かよ、それ！」

エル「やったね！これで逃亡生活とも、おさらばだ！」

シーブック「そう簡単に帰れるわけじゃないけどな」

ジユドー「それでもいいさ。ここの人達は信用できるっただけで気持ちが悪くなる」

すると、プルという子とマリィダという女性が歩いて来た。

プル「ジュードー！」

ジュードー「プル！身体は大丈夫なのか！？？」

マリィダ「この艦の医者に診てもらったが、問題なしと言っていた」

ジュードー「そうか。でも、あんまり無茶はするなよ。お前が行方不明になった時みたいな想いは二度としたくないからな」

プル「うん……！ジュードーがそう言うんなら、そうする！」

シーブック「君の事はジュードーから聞いたよ」

セシリー「これからはよろしくね、プル。それから、マリィダさんも」

マリィダ「ああ」

プル「ここ……いい人が、たくさんいるんだね。ここなら、あたし……やっていける」

ジュードー「言っただろ？ここが俺達の新しい帰るべき場所だつて」

プル「そして、ジュードーもいるんだね」

ジュードー「もちろんだ……頑張ろうぜ、プル。一緒に元の世界に帰るためにもな」

リデイ「マリィダ……君も協力してくれるのか？」

マリィダ「この世界にバナージと姫様がいるのなら、私も戦わなければならない」

リデイ「ふっ、そうだな。バナージとミネバに会ってビックリさせてやろう」

マリーダ「それもいいな」

ステラ「シン！」

シン「ステラ……！」

シンとステラという子は抱き合っていた。

シン「ごめんな、ステラ……俺はっ……！」

ステラ「ううん、シンとまた出会えただけで私、嬉しいよ……」

シン「俺もだ……」

ルナマリア「……」

ノレド「ルナマリアさん……」

ルナマリア「い、いいのよ……。シンが嬉しいならそれで……」

シン「何言ってるんだよ、ルナ。確かにステラは好きだけど、それは妹の様な感じで好きだって事だ」

ルナマリア「え、それって……」

シン「俺が心の底から愛しているのはルナマリア・ホークだよ」

ルナマリア「シン……！」

ステラ「これで、ルナマリアともお友達だね！」

ルナマリア「ええ！」

良かったな、シン、ルナマリア、ステラ……。

デュオ「しかしよ……。ミスルギの連中が言っている元の世界への帰還方法って、マナを使うんじゃないか？」

トロワ「可能性としては、それが最も妥当だろう」

アマリ「マナですか……」

カトル「あなたは魔従教団の術士ですよ。それについて、どう思われますか？」

アマリ「確かにマナの力を使えば、ドグマに似た現象を起こす事は出来ます……」

ゼクス「似た現象？」

リチャード「俺には両者は同一の様に見えるが、違うのか？」

アマリ「発生のメカニズムにおいて教団のドグマ……魔法とマナは大きく違います。

ですので、教団が異界の門を開けるからと言って、同じ事がミスルギのマナで出来るとは思えないんです」

ベルリ「じゃあ、ミスルギはハツタリを言っているんですか？」

零「だが、各組織のリーダーともある存在が、そんなハツタリに騙されるとは思わないけどな……」

ホープス「私も一つ仮説を立てたのですが、よろしいでしょうか？」

アマリ「お願いします、ホープス」

ホープス「私達は教団以外に異界の門を開く事が出来る組織を知っております」

刹那「ドアクダー軍団か…」

五飛「ここよりも西で勢力を振るう一団か…」

ホープス「ミスルギ皇国の不可解な侵略行為…。それとドアクダー軍団の侵攻の符

号…。これを意味する事を考えると…」

零「…。待て、ミスルギは既にドアクダーに支配されていると言いたいのか？」

ホープス「その通りでございます」

アンドレイ「ミスルギの侵略行為はドアクダー軍団の世界征服の一環なのか…！」

ホープス「さらに、そうであるとしたらアメリカと自由条約連合だけを敵視する理由

も筋が通ります」

メル「その二つを敵視しているんじゃない、本当は私達、エクスクロスが病的なので

すね」

ニール「救世主ワタルの仲間だからって、わけか…」

アマリ「それが理由だと思います」

ホープス「あくまで仮説ですが、検討の余地はあるでしょう」

セルゲイ「そうなるドアクダー軍団を叩く事はミスルギを止める事にもなるな」

ユイ「でも、ミスルギ皇国を放っていたら、また今日のように強引な手段で周りの自

治都市を侵略するかも知れません」

デュオ「それなら、当面は心配いらなげ」

トロワ「五飛が持っているデータを使えば、ミスルギと異界人の連絡ネットワークに侵入して、破壊工作を行う事も出来る」

デュオ「これで連中は、他国への侵略どころじゃなくなるだろうぜ」

五飛「時間稼ぎにはなるな」

零「その間に俺達は別働隊と合流して、ドアクダー軍団を叩こう」

アイーダ「わかりました。では、そのプランを私からドニエル艦長達に提案します」

ゼクス「我々はマナの国から離れる事になるのか…」

デュオ「色々あったが、五飛含めてこうして一緒に戦う事になったわけだな」

ヒイロ「…」

デュオ「何だよ、少しは嬉しそうな顔しろっての。この見知らぬ世界で再会したんだからよ」

ヒイロ「俺はお前の様に浮かれるつもりはない」

デュオ「相変わらずだな、お前はよ」

ヒイロ「俺の戦いは、まだ進む先も決まっていな…。リリーナ…。お前は今、何処にいる…。」

ードニエル・トスだ。

私は今、メガファウナのブリッジでギゼラ少尉と話していた。

ギゼラ「……N-1ノーチラス号から合流ポイントの指定がありました」

ドニエル「この短い期間に向こうも色々あったようだな」

ギゼラ「ですが、新たな異界人の加入もあり、戦力は増大しているとの事です」

アイーダ「こちらの新メンバーも合わせれば、アル・ワースの中でも有数の戦力ではないでしょうか」

ドニエル「確かにそうでしょう。もつとも戦力が大きくなればなつたで気苦労も多くなりそうですな……」

アイーダ「艦長……」

ドニエル「アル・ワースは我々の住む地球とは別の世界です。このまま戦力が増大していけば、どうなるのか不安になる時があります」

アイーダ「艦長のお気持ちはわからなくはありません。だからこそ私は、この力を良き方向に使う事で、我々とアル・ワースの双方に益があるようにしたいと考えます。今回のマナの国の調査で私はそのように思うに至りました」

ドニエル「…了解です。姫様のそのお考えは、今後の行動指針とさせていただきませう」

アイーダ「よしなに」

ドニエル「各員！これより本艦とシグナス、プトレマイオスはNーノーチラス号とナデシコCとの合流ポイントへ向かう！マナの国での任務は終わった！元の世界への帰還のためにもドアクター軍団を打倒するぞ！」

私達は別働隊との合流を急いだ…。

共通ルート

合流

―新垣 零だ。

別働隊同士が合流し、情報交換と新たな仲間を紹介する為に俺達シグナスの格納庫に集まった。

グランデイス「あんた等が万丈の知り合いかい？」

ヒイロ「ああ・・・」

サンソン「愛想のねえ奴だな。これから一緒にやっていくんだから、笑顔ぐらい見せろってんだ」

シヨウ「無駄ですよ、サンソンさん。ヒイロにそういうのを求めても」

デュオ「そういう事。。。さすがにシヨウは慣れたようだな」

チャム「最初は礼儀知らずだ、態度が悪いつて腹を立ててたのにね」

デュオ「言っても無駄って事で最後は諦めたんだよな」

マーベル「結局、シヨウが一人で騒いでいただけで、ヒイロの方はどこ吹く風・・・って感じだったわね」

シヨウ「もういいだろ……！昔の話は！」

チャム「ふふ……！シヨウは空回りしてたから、恥ずかしいんだね！」

カトル「嬉しいよ。またチャムにも、こうやって会えて」

デュオ「んじや、お初の人のために自己紹介だ。あっちの無口で無愛想なのがヒイロ・ユイ。俺はデュオ・マックスウエルだ」

トロワ「トロワ・バートンと名乗っている。そう呼んでくれればいい」

カトル「カトル・ラバーバ・ウイナーです。よろしくお願いします」

五飛「張 五飛（ちゃん・うーふえい）だ」

万丈「歓迎するよ、五飛。やはり、君とは敵対するよりも共に戦いたい」

五飛「笑いたければ、笑うがいい。だが、これが俺の選んだ答えだ」

シヨウ「どういう事なんだ、万丈さん？」

万丈「彼はマリーメア軍に参加し、ヒイロ達と敵対していたんだ」

ゼロ「じゃあ、そいつは仲間を裏切ったってわけかよ……」

九郎「ところで、そのマリーメア軍って何だ？」

カトル「僕達が元の世界で戦っていた相手です」

トロワ「連中もアル・ワースに跳ばされ、今はゾグリア、キャピタル・アーミイ、鉄華団と共にミスルギの配下になっている」

ゼクス「我々は、そのマリーメイア軍と戦っている最中にこちらに転移してきたんだ」
マーベル「ミリアルド・ピースクラフト…」

ゼクス「今はゼクス・マーキスの名を使っている」

ノイン「ゼクスは私と共に特務機関プリベンターの一員となった。私はルクレツィア・ノイン…。ヒイロ達と共にマリーメイア軍と戦っていた」

シヨウ「ノインさんが幾ら弁護しようと戦いの元凶の一人だった、この男を俺は認める気はありませんよ」

ゼクス「君に許しを請うつもりはない、シヨウ・ザマ」

シヨウ「そうやって、いつもあんたは一人だけ高い位置から見下ろして…！」

エレボス「あっちのヒイロとは仲間だったけど、あのゼクスって人とは敵対してたみたいだね…」

リユクス「それが、これから一緒にやって行くというわけですか…」

万丈「この件については、余計な誤解を生まないためにも一度、きちんと話をするつもりです。いい機会ですので、この後、時間を取ってもらいましょう」

シモン「ところで、鉄華団って何だ？」

ディオ「マナの国に協力しているあのガンダム部隊の事です」

ワタル「あの人達、強いからね…。また来るのかな…」

ガエリオ「恐らく、また来るだろう。彼等は目的を必ずこなす男達だからな」
エイサツプ「あなた達は？」

ガエリオ「鉄華団と同じ世界から跳ばされてきたガエリオ・ボードウインだ。こちらはジュリエッタ・ジュリス」

ジュリエッタ「ジュリエッタです。私達はギャラルホルンという組織に入っていて、鉄華団とは敵対関係にありました」

エイサツプ「では、戦闘の最中にアル・ワースに来たんですか？」

ガエリオ「いや、俺達はすでに鉄華団を打ち倒したんだ」

アル「という事は倒した敵が蘇るといふやつか」

ジュリエッタ「その原理は理解できませんが、鉄華団が私達に刃を向けるというのなら、私は戦います」

グラハム「戦う乙女とはいつ見ても美しい者だ」

エンネア「えーつと、誰？」

グラハム「グラハム・エーカー少佐だ。刹那達、ソレスタルビーイングと同じ世界の出身だ」

シン「グラハム少佐、さっきの言葉は誤解を招きますよ」

アンジュ「あんた達も刹那達の世界出身なの？」

シン「いや、違うよ。俺達の世界の名はコスミック・イラという名前だ。俺はシン・アスカだ」

ルナマリア「ルナマリア・ホークです。これからよろしくお願いします！」

ステラ「ステラ・ルーシエだよ！よろしくね！」

しんのすけ「よろしくだゾ！ステラちゃん！」

アンジユ「足を引つ張らないですよ」

シン「そうならないように頑張るよ。(あのヴィルキスつて機体…何処か、キラさんのストライクフリーダムに似ている…。ただの偶然か…?)」

一夏「また別の世界のガンダムか…。ガンダムつて、どれだけいるんだ…」

五飛「お前が、織斑 一夏か…」

一夏「俺の事を知っているのか？」

五飛「篠ノ之 箒がお前の事を楽しげに話していたからな」

一夏「箒がいたのか!?」

ベルリ「彼女もミスルギの部隊にいたよ」

千冬「オルコット達と同じという事か…」

トロワ「そして、彼女達は無理やり戦わされている」

鈴「…腹が立つわね…！」

シャルロット「うん、みんな、可哀想だよ…」
簪「お姉ちゃん…」

ヴィヴィアン「ジーツ…」

青葉「な、何だよ、ヴィヴィアン？」

ディオ「俺と青葉の顔に何かついてるか？」

ヴィヴィアン「そこでクイズです。しばらく会わない間に青葉とディオの間に何があつたでしょう!?」

青葉「色々あつたんだよ、色々な」

アンジュ「二人共、いい顔になってるね。前よりバディらしくなってると思う」

ディオ「気のせいだと思うが」

フロム「いい加減に認めなよ、ディオ。君は変わりつつあるって」

ヴィヴィアン「誰、あんた？」

フロム「僕はフロム・ヴァンタレイ。アル・ワースに跳ばされて来た異界人だよ。所属していた部隊が壊滅したんで、シグナスのヴァリアンサー隊の一員になって、艦の直掩を担当している」

グレンファイヤー「リーやヤールと同じってわけか」

フロム「僕もカップリングシステムの候補生としてディオと一緒に訓練を受けていた

から、ルクシオンに乗る事も考えたんだけど。。。今のディオと青葉の間にはとてもじゃないけど割り込めないからね」

青葉「そういう事だから、ルクシオンとブラディオンは今まで通り、俺とディオのコンビでいくぜ」

ミラーナイト「お二人に何があつたから知りませんが、仲がいいに越した事はないですぬ」

青葉「(マナの国での戦いの中、俺はディオの記憶に触れた。。。ディオはゾギリアはとの戦いに巻き込まれて大怪我をした妹さんのために戦っているのがわかつた。。。雛がゾギリアにいる理由は未だにわからないが、俺はディオと一緒に戦っていく。。。そう決めたんだ。。。)」

ケロロ「ケロロ!??本物のZガンダムにジユドー・アーシタであります!」

シーブック「さすがにケロロは知っていたか。一緒に戦っていた仲間なんだ」

ケロロ「(ケロ。。。?ジユドー殿とシーブック殿が共に戦う事は不可能のはずであります。。。)」

ジユドー「俺達の世界の戦いがテレビで放送されていたなんて。。。俺はジユドー・アーシタ。仲間と一緒にアル・ワースに跳ばされてミスルギに引つ張り込まれそうになつたけど。。。あんな連中に従うのは嫌だつたんで、逃げ出して来たんだ」

ルー「ルー・ルカよ。よろしくね」

ビーチャ「で、俺がこの一行のリーダーのビーチャ・オーレグだ」

エル「エル・ビアンノだよ。あつちのビーチャの言っている事はあんまり気にしないでいいからね」

プル「あたし、エルピー・プル！好きなものはアイスクリームだよ！」

ワタル「君、子供じゃない！」

プル「あんただって、子供じゃない！」

ジュード「こう見えても、プルは凄腕のパイロットなんだぜ」

マリーダ「それは妹である私が保証する」

サンソン「は？妹……？」

ハンソン「どう見ても姉だろ……？」

マリーダ「私はプルのクローン……つまり、姉妹の様なものなんだ」

夏美「でも、マリーダさんの世界とプルちゃんの世界は違うんでしょう？」

リデイ「どうやら、世界は違うが、俺達の世界とジュードー達の世界は同じ宇宙世紀らしいんだ」

冬樹「あの……あなたは？」

ケロロ「リデイ・マーセナス少尉！バンシィ・ノルンのパイロットではありませんか

！」

リデイ「俺のやった行いもテレビに放送されていたのか……恥ずかしものだな……」
ケロロ「吾輩はそうは思わないであります。愛する者の為に戦おうとしたリデイ殿は格好いいでありますよ！」

リデイ「ありがとう、軍曹。そう言ってもらえて光栄だ。俺はリデイ・マーセナスだ」
マリィダ「マリィダ・クルスだ。不束者だが、頑張らせてもらう」

プル「そういうわけだから、ちゃんとあたしの事も一人前として扱う様に！」

ヒミコ「あちし、ヒミコ！仲間になったからには、まず一緒に遊ぶのだ！」
プル「それは賛成！それ、プルプルプルプルプルッ！」

ヒミコ「んじや、負けずにヒミコミコミコミコー！」

しんのすけ「オラだって！ウホホーイ！」

ワタル「あはは！やっぱり、こどもじやんか！」

しんのすけ「所で、アルトお兄さん！その車椅子で寝ているお姉さんは？」

アルト「シェリル・ノーム。俺の世界のアイドルで銀河の妖精と呼ばれている」

真上「何故、彼女は目を覚まさない？」

アルト「シェリルは……V型感染症なんだ」

シバラク「V型感染症……？」

アルト「俺の世界の病気の一つでバジユラに接触して感染する症状の事で、シエリルのV型感染症は喉にあったんだ……でも、こいつは歌を歌いたいからって、声帯を切らなかつた……。バジユラと和解し、俺がフォールドした後でこいつは目を覚まさなくなつたんだ……」

ゼロ「そんな状態なのに、こんなところに連れて来て良かったのか？」

アルト「少しだけの時間なら、外に連れ出す事は出来るって言われたんだ……。もし、こいつをこの場に連れてこなかつたら、こいつが起きた時、何言われるかわからないからな」

ワタル「そっか！よろしくね、シエリルさん！」

海道「一気に賑やかになりやがったな」

シモン「でも、いい事じゃないか」

ニア「本当ですね。心強いただけじゃなく、楽しくなりそうです」

ワタル「よおし！この勢いで一気にドアクター軍団を倒してやろうぜ！」

ベルリ「その前にそっちでも仲間になった人達を紹介してくれませんか？」

シモン「それもそうだな」

アイーダ「アンジュのお友達もエクスクロスに来たのね」

ヒルダ「言っておくぜ。あたしは、このイタ姫の仲間なんかじゃねえからな」

ロザリー「ヒルダの言う通りだぜ。こんな奴と一緒にされちゃうたまったもんじゃねえ」

クリス「あたし達……あのネモって人に雇われただけだから」

アンジュ「見ての通りロクでもない連中だから、別によろしくしなくてもいいからね」
ノレド「そういうわけにはいかないよ。これから一緒にやっついていくんだから」

ベルリ「皆さん、よろしくお願いしますね。困った事があつたら、言ってください」
ノレド「ベルはデレデレしないの！」

ベルリ「デレデレなんてしてないって！」

サリア「この子達も……私達がノーマだって事、気にしないのね……」

一夏「だから、言っただろ？ エクスクロスは寄せ集めの部隊だから、そんなの関係ないって」

クリス「一夏君の言ってる事は信じてたよ！」

ロザリー「流石は一夏のチームだな！」

アルト「一夏……」

青葉「お前はまたか……」

一夏「またってなんだよ？」

ベルリ「……ノーマの事は僕達の世界にも差別みたいなのが残ってたけど、そういう

の嫌いだから」

エルシャ「ありがとう。あなた達とも仲良くやっていけそうだわ」

サリア「改めて自己紹介を。私はパラメール第一中隊隊長のサリア。。。こちらがエルシャ。。。向こうでアンジュと睨み合っているのがヒルダ、ロザリー、クリスよ」

アイーダ「共に戦っていく仲間としてあなた達を歓迎します」

ヒルダ「こつちの女の方が、イタ姫よりも、よっぽど姫様っぽいな」

アンジュ「否定はしないけど、そういう口の利き方は腹が立つ。(腹が立つって言えば、私達をネモに売り払った司令もよ。。。ネモ船長とジル。。。異界人とアルゼナルの司令だけど、あの二人。。。まるで前からの知り合いのようだった。。。)」

マサオ「ほ、本当に人がいっぱいいるんだね。。。」

ネネ「それに自分を助け、未来に転移した後に敵となった女の子を追いかける男の子。。。ふふふ！これは新しいのが浮かび上がるわ！」

ボーちゃん「みんなのロボットも凄い。。。」

トオル「ぼ、僕達、完全に場違いな存在だよね」

しんのすけ「トオルちゃんは心配性なのよ！」

トオル「その呼び方やめろ！」

ティエリア「そちらの彼等はしんのすけの友達か？」

しんのすけ「オラの手下の春日部防衛隊のメンバーだゾ！」

トオル「誰がお前の配下だよ！変な紹介をするな！……ゴホン、風間 トオルです、よろしく願います！」

マサオ「さ、佐藤 マサオです！せ、精一杯頑張ります！」

ネネ「ネネです！面白い話があれば、教えてください！」

ボーちゃん「ボー！」

しんのすけ「……とまあ、困った時にオラをお助けしてくれる春日部防衛隊のメンバーだゾ！」

青葉「しんのすけと同じく、肝の座った奴らだな！これからよろしくな！」

ネネ「青葉さんもお話聞かせてくださいね！」

青葉「あ、あはは……。お手柔らかなな、ネネちゃん……」

ファイアーダイバー「……あなた達とも初めて顔を合わせますね」

ライオボンバー「だったら、挨拶しなくてはな」

シーブック「君達も話すロボットなのか……」

舞人「勇者特急隊のメンバーは超AIを搭載しているんで、人間と同じように自分の判断で行動するんです。俺は旋風寺 舞人……。勇者特急隊の隊長です」

セシリー「その勇者特急隊というのは？」

ガイン「世界の平和を守るため。舞人の父上が結成した秘密組織です。私の名はガイン。舞人のパートナーであり、舞人と共にマイトガインを制御しています」

舞人「マイトガインは僕達の世界では、正義のヒーローなんだよ」

刹那「お前達はワタルの世界からアル・ワースに跳ばされてきたのか…」

舞人「跳ばされて来たのは俺達だけでなく、勇者特急隊の基地のある青戸の街とそこに住む人達もです」

ニール「街ごと転移って、スケールでかいな！」

ロックオン「その街の人達も丸ごと、エクスクロスに参加しているのか？」

舞人「いえ…。青戸の街で、そのまま生活し、俺達をバックアップしてくれています」

ガイン「その人達のため、そして、アル・ワースの人々のため、我々はドアクダーを打倒するつもりです」

しんのすけ「流石は、ヒーローだぞ！カッコいいゾ!!？」

舞人「では、皆さんに勇者特急隊のメンバーを紹介します」

ライオボンバー「俺はライオボンバー、こっちがダイノボンバー、バードボンバー、ホーンボンバー…」

ダイノボンバー「人呼んで猛獣特急ボンバーズだ」

バードボンバー「俺達は戦う時は合体してバトルボンバーとなる」

ホーンボンバー「よろしく頼むぜ、みんな」

ファイアーダイバー「私はファイアーダイバー、こちらはポリスダイバー、ジェットダイバー、ドリルダイバーです」

ポリスダイバー「我々はレスキュー特急ダイバーズとして、人命救助をメインとして
います」

ジェットダイバー「と言っても、戦闘も任せてください」

ドリルダイバー「戦場では、合体してガードダイバーとなって戦います」

ブラックガイン「最後は私……ブラックガインだ」

アンドレイ「先程のガインと似ているな……」

セルゲイ「もしや、兄弟か？」

ブラックガイン「その通り。私はガインのデータをコピーして造られた」

舞人「ブラックガインは、悪の組織のBD連合に操られて、俺達と戦ったんだが、正義の心がよみがえって仲間となったんだ」

パトリック「そのBD連合ってのは？」

舞人「ブラックダイヤモンド連合の略です。アル・ワースに跳ばされて来た俺達の世界の悪党が手を組んで誕生した一団です」

ワタル「困った事にそいつ等……ドアクター軍団の一員になっちゃったんだ」

アレルヤ「さらに、ドアクダー軍団の勢力が増したのか……」

ワタル「大丈夫だよ、アレルヤさん！悪い奴等が手を組んだように僕達も力を合わせるんだから！」

舞人「ワタルの言う通りだ。どんな巨悪が来ようと俺達は絶対に負けはしない。(待っていてくれ、サリーちゃん……。俺達は必ずドアクダーを倒す……。そして、みんな一緒に元の世界へ帰ろう)」

ジャンボット「彼等もゼロの新しい仲間か」

ユイ「あ、ゼロさんの仲間の……！」

ジャンボット「ジャンボットだ。私を知っている者にまず、迷惑をかけてすまない」

ティア「気にしないで、ジャンボット！」

サラ「困った時はお互い様だよ！」

ゼロ「な？言っただろ？他の奴らもお人よしの集まりだったな」

ジャンボット「確かに、アルティメイトフォースゼロに負けずとも劣らないな。これからは私も戦闘に参加させてもらうが、これだけは言わせてもらおう……。姫様に無礼な振る舞いをするのは許さないからな」

エメラナ「じゃ、ジャンボット……」

ティエリア「ちやつかりしているな……」

鈴「じゃあ、あたしも挨拶するわね、凰 鈴音

(ふあん・りんいん) って言います! 鈴って、呼んでください!」

ディオ「お前もI S乗りなのか?」

鈴「ええそうよ。I Sの名前は甲龍(シエンロン)って名前よ」

五飛「シエンロンか?」

鈴「何よ?」

五飛「良い名前だな、お前とは気が合いそうだ」

デュオ「珍しいな、五飛が女を口説いてやがる?」

トロワ「五飛が初めの頃に乗っていたガンダムの名がシエンロンだったからな」

カトル「親近感?」 というものだと思うよ」

鈴「あたしもそう思うわ、よろしくね。五飛」

まゆか「?」 シモンさん、そちらの女性は?」

シモン「それは?」 その?」

ニア「ニアと申します。よろしくお願ひします。シモンを追って、こちらに出て来ましたが、これからはエクスクロスにご厄介になります」

青葉「きれいな人だな?」 。もしかして、シモンさんの彼女?」

シモン「なんと言うか、その?」

ヴィラル「ちゃんと説明しろ、シモン。結婚を申し込んで、断れられたと」

まゆか「結婚!?!」

アネツサ「断られた!?!」

ミレイナ「驚愕です!?!」

シモン「……実はそうなんだ……」

アネツサ「もしかして、シモンさん……旅に出たのつて失恋旅行だったんですか?」

まゆか「ちよ、ちゃんと……!アネツサ!」

シモン「……恥ずかしながら、その通りだ……」

青葉「マジかよ!がっかりだぜ、シモンさん!」

シモン「だが、このままでは終わらない……!俺は、もつと大きな男になって、もう

一度、ニアにプロポーズするんだ!」

ニア「はい。待ってます、シモン」

青葉「(どういう事情で最初のプロポーズを断ったのか知らないけど、さつさとくつつ

けばいいのに……)」

まゆか「(いいじゃないですか。お二人が、それでいいのなら……)」

アネツサ「(いいなあ……。こんな風に私も誰かにプロポーズされたいなあ……)」

カトル「それにしても、お久しぶりです、万丈さん」

デュオ「こんな形であんたに再会する事になるとはな」

万丈「君達も元氣そうで何よりだよ。ヒイロとも連絡がついたんで、お互いに情報交換をしていたけど、こうして君達にも、また会えてよかったよ」

こうして、お互いの自己紹介は終わった…。

ーネモだ。

今私はドニエル艦長、倉光艦長、スメラギ戦術予報士、ホシノ艦長と話をしていた。

ネモ船長「…あなた達は、既にミスルギはドアクダーに支配されていると推測しているのですね」

スメラギ「断言はできませんけど…」

倉光「ミスルギはキャピタル・アーミー、ゾギリア、マリーメイア軍、鉄華団、タービンを傘下に収め、さらにはルクスの国のレガリア・ギアを使いのヨハンという少年とも結託し、周辺地域への侵略行為を開始しています」

ドニエル「これはドアクダーの世界支配の一環と見る事は出来ないでしょうか？」

ルリ「確かにそう言えますね…」

ネモ船長「…」

ドニエル「なお、キャピタル・アーミー、ゾギリア、マリーメイア軍は元の世界への帰還を条件にミスルギに協力しているそうです」

ルリ「異界人を自軍の戦力に加えるドアクダー軍団の戦略に符合していると言えますか……」

スメラギ「加えて、この説が正しいのだとしたら、アメリカや自由条約連合がミスルギに攻撃される事も一応の説明がつきます」

ネモ船長「救世主ワタルを擁するエクスクロス……。その母体である事が理由ですか……」

倉光「あくまで仮説に過ぎませんがね」

ドニエル「とにかく、改めて調査しましたが、ミスルギの考えている事はよくわかからんと言いかい様がありません。このアル・ワースを支配しようとしているドアクダーが頂点にいるのでもなければ、その戦略が納得できません」

ネモ船長「その感覚は理解できませんが、ドアクダー軍団とミスルギは無関係だと私は考えます」

スメラギ「その根拠は？」

ネモ船長「現時点では、勘の領域を出ないものです」

ドニエル「(そういう態度を取られると、こちらとしても、それ以上は聞きづらくな

る….)」

倉光「(やはり、この御仁… 我々に話していない何かがあるようだ….)」

ネモ船長「ともあれ、ドアクダーの打倒を急ぐには私も異論はありません。なお、その件も含めて、波嵐 万丈から皆に話があるそうです」

私達は格納庫へ向かった…。

第25話

眠る魔王と復活の破壊王

―新垣 零だ。

シグナスの格納庫で万丈が彼やシヨウ、ヒイロ達の世界の事について話し始めた。

万丈「… 皆さん、お集まりいただき、ありがとうございます」

ベルリ「…」

シモン「…」

万丈「こういつた場を設けていただいたのは、僕達の世界について話をするためです。このエクスクロスには同じ世界から来た異界人として、ヒイロ達、シヨウ達… そして、僕がいます」

ヒイロ「…」

シヨウ「…」

万丈「既にご存知の方もいらつしやると思いますが、僕達は互いに別の組織に所属し、敵同士だった時もあります。その辺りも含めて、僕達の世界… そして、僕達の戦いについてお話しします」

ドニエル「…」

倉光「…」

ヒイロ達の世界の戦い、か…。

万丈「僕達の世界は、長い間、地球圏統一連合という組織が人々を管理していました」
アイーダ「管理…ですか…」

万丈「統一連合とは名ばかりで、組織内では一部の大国が強い発言権を持ち、その力の下、弱者は虐げられてきました。その地球圏統一連合の弾圧に対しスペースコロニーは五機のガンダムによる犯行作戦を開始しました」

マリー「まるで初めて、武力介入を実行した頃のソレスタルビーイングですね…」

刹那「五機のガンダムとは、まさか…」

万丈「そう…。そのガンダムのパイロットがヒイロ、デュオ、トロワ、カトル、五飛だ。だが戦いの中、地球圏統一連合は、連合内の軍事特務機関OZの反乱によって壊滅した。こちらのゼクス・マーキスは当時、OZの士官であったが、その理念に反乱し、後に離脱する事となった」

ゼクス「…」

万丈「そして、地球圏統一連合の壊滅によって世界は混乱し、戦乱は加速していった。最終的にトレイズ・クシュリナーダを旗頭にしたOZとゼクス・マーキス、改めミリアルド・ピースクラフト率いる革命組織ホワイトファンク…。さらに地球上で最大の国家

であった神聖ブリタニア帝国の三つ巴となったんだ」

デイオ「そのミリアルド・ピースクラフトという名の意味は？」

ゼクス「私の本当の名前だ」

万丈「ゼクスは地球圏統一連合に滅ぼされた王国、サンクキングダムの子だった…。そして彼は、反OZ組織のリーダーとしてかつての盟友であったトレーズ・クシユリナーダに戦いを挑んだんだ」

九郎「世界を三つに割った戦い…。俺達の世界にも宇宙人とか来たが、そっちも壮絶だったみたいだな…」

う、宇宙人…。？ま、まあ、九郎さんの世界の話は後にでも聞かか…。

青葉「ヒイロ達とショウさん達と万丈さんは最終的には仲間になったって聞いたけど、どこの組織にいたんです？」

万丈「そのどこでもない…。僕達は全く別の角度から戦争に参加していたんだ。その前にショウ達の立場について説明しよう」

エイサツプ「…。ショウさん達はバイストン・ウエルから地上…。つまり、万丈さん達の世界に転移したんですね…。」

万丈「そうか、エイサツプの世界にもバイストン・ウエルがあったんだったね」

ショウ「元々は俺とマーベルは、万丈さん達と同じ世界の人間だった。バイストン・

ウエルについてはエイサップの世界のものと似ているが少し違う：：」

エイサップ「それぞれ違う組織があった事ですな：：」

マーベル「私達は異世界であるバイストン・ウエルに召喚され、そこでオーラバトラーに乗る聖戦士となって戦っていた：：。だけど、バイストン・ウエルからオーラマシンが排除された際にマシンと共に地上に戻ったの」

チャム「ちなみにあたしは、バイストン・ウエルのミ・フェラリオよ」

アーニー「僕達の世界でもシヨウ君達とエイサップ君達のバイストン・ウエルは異世界だったからね」

シモン「オーラマシンの排除っていうのはどういう事だ？」

シヨウ「オーラバトラーを始めとするオーラマシンは召喚された地上人シヨット・ウエボンがバイストン・ウエルにもたらしたもののなんだ」

マーベル「それによってバイストン・ウエルが戦乱に包まれた事を怒ったジャコバ・アオンによって全てのオーラマシンが地上に跳ばされたの」

アマルガン「ジャコバ・アオンじゃと：：。!?」

エレボス「そっちのバイストン・ウエルにもジャコバ様がいたんだ！」

ワタル「そのジャコバ・アオンって誰？」

チャム「エ・フェラリオの中でも一番えらい人よ！」

キキ「ジャコバ様の偉大さはどっちのバイストン・ウエルも同じだったんだね」
へべ「二つのバイストン・ウエルに別世界同士のジャコバ様……か」

ゼロ「全てつて事は、それなりの数のオーラバトラーが地上に跳ばされたんだな……」
万丈「そんな生易しいものじゃない。オーラマシンの大軍団は、戦局を一変させ、世界はさらなる混乱に見舞われた。オーラマシン率いるドレイク軍は神聖ブリタニア帝国と結託し、戦いは激化していった」

シヨウ「万丈さんとヒイロ達、そして他のレジスタンス達と俺が所属していた反ドレイク軍は手を結び、戦争を終わらせるために戦ったんだ」

マーベル「そして、太平洋で私達は神聖ブリタニア帝国ならびにドレイク軍との最後の戦いに挑んだの」

ジユドー「その戦いはどうなったんだ？」

シヨウ「犠牲を払いながら、俺達はドレイク軍を倒す事には成功した。もつとも、その戦いで俺も生命を落としたんで最終的にどうなったかまではわからないけどな」

メル「え……!!? シヨウさん、あなたは死んでしまっていたのですか!!?」

マーベル「シヨウだけじゃないわ。私もよ」

朗利「それが前にシヨウが暴走した理由か……」

シヨウ「でも、こうして俺達は生きています。理由はわからないけど……」

万丈「その太平洋の決戦でドレイク軍は壊滅したが神聖ブリタニア帝国は滅びなかった……」

デユオ「だが、その戦いとほぼ同じ頃、宇宙ではOZとホワイトフアングの決戦も始まっていたんだ」

カトル「僕達ガンダムチームは宇宙に上がり、その戦いに加わりました」

万丈「そして、OZを率いるトレーズは五飛に討たれ……。ホワイトフアングのリーダーであったミリアルドもヒイロに敗れ、宇宙での戦いも終止符が打たれたんだ」

ヒイロ「……だが、戦いは終わらなかった」

デユオ「情けない話だが、そこまでの戦いで俺達はポロポロになっちまってよ……。最後に残った神聖ブリタニア帝国が世界を握る事になったんです」

アルト「汚いやり方だな、それ」

トロワ「ブリタニアの皇帝ルーシユにとってそこまで計算ずくだったようだ」

五飛「そして奴は、世界に対して戦乱は全て自分がコントロールしていた事を語り、自らが世界の王である事を宣言した」

万丈「だが、そのルーシユとパレードの最中、レジスタンス組織黒の騎士団の総帥ゼロに暗殺された」

ゼロ「ゼロ……？」

万丈「勿論、ウルトラマンの君じゃないよ。常に仮面を身につけた謎の男だ。天才的な知略を持ち、黒の騎士団を率いてブリタニアと戦ってきた」

万丈「なお、その正体は本当ならば、皇帝ルルーシュ本人だ」

一夏「すみません、言っている事がよくわからないのですが…」

零「…皇帝ルルーシュは皇帝になる前はゼロとしてブリタニアと戦っていたって事か？」

万丈「その通りだ、零。皇帝ルルーシュはブリタニア皇家に生まれた人間であったが…。数奇な運命を辿った結果、自らの正体を隠しながら、ブリタニア打倒を揚げ、レジスタンス組織を率いたんだ」

デュオ「それが仮面の男ゼロであり、黒の騎士団だ」

万丈「彼は、最終的にブリタニアを打倒し、その皇帝に収まった…。そして、世界の敵となったんだ」

デュオ「そのルルーシュが、ゼロに討たれた…。あいつを討ったゼロの正体は、今に至ってもわかってないがな…」

ユイ「複雑だったんですね…」

リデイ「そのルルーシュという者は世界をを引っ掻き回して何がしたかったのだろうか…」

ヒイロ「戦乱の元凶であった皇帝ルルーシュが倒され、世界は憎しみから解放された……。もう戦いは終わった……。誰もが平和な時代が来たのだと思った」

シヨウ「……。その言い方……。世界に平和は訪れなかったんだな……」

デュオ「ああ……。俺達があつかり合っている間に着々と力を蓄えていた奴がいたんだ」

トロワ「それがマリーメイア軍だ」

万丈「彼等は、新たに設立された地球圏統一国家の要人を人質に取り、復興の始まった世界に対して宣戦布告をした。僕やヒイロ達……。そして、ゼクスとノインはそれを阻止するために戦っていたのだが……。その戦いの最中にマリーメイア軍と共にアル・ワースへと跳ばされたんだ」

シヨウ「ゼクス・マーキス……。あなたに聞きたい事がある」

ゼクス「何だ？」

シヨウ「世界を混乱に包んだあなたが、何故、マリーメイア軍と戦ったんだ？」

チャム「やめようよ、シヨウ……。！ヒイロ達も、もう気にしてないみたいだし……。！」
シヨウ「そんなわけにはいかない……。！俺自身が納得できなきや、一緒にやっっていく事なんて出来ない！」

ゼクス「その素直さ……。シーラ女王が見込んだ聖戦士だけある」

シヨウ「知ったような口を……！」

マーベル「待って、シヨウ……！ゼクス・マーキス……。あなた、シーラ様に会った事があるの？」

ゼクス「ああ……」

ノイン「ゼクスはホワイトフアングの代表として秘密裏にシーラ女王にコンタクトを取っていたそうだ。そして、全てのオーラマシンを最終的には自らの手で排除する事を決めていた彼女の決意に感銘し……。痛みによつて、世界を変える事を思い至つたのです」

ヒイロ「そして、それは……トレーズ・クシュリナーダも同じだった」

シヨウ「シーラ様とトレーズ、ミリアルドが同じ考えだつたつていうのか……」

五飛「違つていたのは、その立場だけだつたようだ」

シヨウ「……」

ゼクス「納得できないのなら、私を討つがいい。だが、それは全ての為すべき事を終えてからだ」

シヨウ「その為すべき事とは？」

ゼクス「多くの人間の血の上に築かれた平和……。それを奪おうとする者を討つ事だ」
ゼクスさん……。

ゼクス「そのためにも私は泥を啜つてでも、元の世界に帰還するつもりだ」

シヨウ「…」

ゼクス「納得できないようだな…」

シヨウ「… 何度も立場を変えたあなたという男を俺は信じる事は出来ない…。だが、為すべき事を為すといった、その言葉は信じられるような気がする」

ゼクス「シヨウ・ザマ…」

シヨウ「その生命は預ける…。俺が殺すのは、戦いを生む意思だけだ」

ゼクス「感謝する、聖戦士シヨウ」

ネモ船長「古き血が戦いによつて新たになる…。世界は革命によつて、新たな地平へと進む…」

スメラギ「なるほど…。あの子達の世界は、変革する革命の只中であつたのですね」
ベルリ「シヨウさんとゼクスさんの二人が収まったのはいいけど、そのためにこの話をしたんですか？」

万丈「それも重要な事だが、目的は別のところにある。僕はアル・ワースに跳ばされた後、様々な地域を巡り、世界の敵であるドアクダー軍団を調べていたんだが…。彼等の中の一団が妙な動きを見せている事を知った」

ガエリオ「妙な動き…？」

ジュリエッタ「それは…」

っ!!? 何だ!!? シグナスが揺れた…!!?

ナディア「きやあっ!」

ジャン「な、何が起きたんだ!!?」

マサオ「ゆ、揺れてるよ!」

トオル「みんな! 何かに掴まるか、身体を固定して!」

ポーちゃん「これ…艦が落ちる…!」

何だと…!!?

第25話 眠る魔王と復活の破壊王

リチャード「みんな、無事か!!?」

ワタル「アマリさんが、魔法でクツションを作ってくれなきや危なかつた…!」

青葉「シグナスに何が起きたんだよ…!!?」

アニュー「シグナスだけじゃない…! NーNーチラス号やメガファウナ、プトレマ

イオスやナデシココも墜落しているわ！」

グラハム「単純なエンジントラブルではないようだな……」

ネネ「み、みんな！向こうの街を見て！」

ネネが言った街を見ると俺達は驚いた。

しんのすけ「な、何、あれ!?!？」

舞人「建物が逆さまになっている！」

ヒミコ「きやはは！みんな、逆立ちなのだ！」

ケロロ「笑っている場合ではありませんよ！ヒミコ殿！」

千冬「アル・ワースには、あのような街があるのですか、シバラク先生!?!？」

シバラク「い、いや……！そんな話は聞いた事がござらん！」

カンナム「だとしたら……！」

すると、俺達の前に魔神部隊と死神の様な魔神が現れた。

デユオ「死神!?!？」

デス・ゴツド「引っ掛かったな、救世主ワタルとエクスクロス！我が名はデス・ゴツ

ド！ドアクター様より第二界層を任された者だ！」

クラマ「(クルージング・トムが失脚して、第二界層のボスが出てきやがったか……

！)」

サヤ「ドアクダー軍団が来たのであれば、戦うしかないです！」

ワタル「みんな、出撃だよ！」

俺達は出撃した……。

金本「機体は動く様だね……！」

ドニエル「メガファウナは浮上でできないのか！」

副長「ダメです！ミノフスキー・フライトの出力以上の力で上から押さえつけられて
いるようです！」

ホープス「周辺で解析不能な力を感知しています。各艦の航行不能は、その影響で
しょう」

デス・ゴッド「フフフフ……。逆転の力に抗う事は出来まい」

アンジュ「逆転の力ですって!?？」

デス・ゴッド「その通り！この真実の鏡を曇らせれば、物事は正反対となる！空を飛
ぶ船は地面に沈み、人も建物もひっくり返るのだ！」

ワタル「真実の鏡……」

アマリ「そんな力を持つものがあるとしたら、きっと創界山の秘宝に違いありません
！」

零「機体は動く！あいつをぶっ倒して、真実の鏡を手に入れば、必ずこの状況は収

まる！」

ゼロ「戦艦が動かない以上、俺達だけでやるぞ！」

デュオ「あの死神野郎を狙えばいいんだな！」

デス・ゴッド「いいだろう、ワタルと仲間達。このデス・ゴッドが、お前達と少くしだけ遊んでやろう！」

ワタル「余裕の態度も、そこまでだ！待ってるよ、デス・ゴッド！」

俺達は、デス・ゴッドのスカルバット並びに魔神部隊との戦闘を開始した……。

デュオのデスサイズヘルがビームサイズで魔神部隊を斬り刻む。

デス・ゴッド「(むう……！)」

デュオ「な、何だ……!? 嫌な視線を感じるぜ……！」

デス・ゴッド「(フッフッフ……。奴からは、このデス・ゴッド様と同じ匂いを感じる……。いずれ奴とは死神対決をせねばならんだろう……)」

俺達はスカルバットに攻撃を与えるが……。

デス・ゴッド「無駄無駄！そんなヘナチヨコにやられるデス・ゴッド様ではないわ！」
レナ「だったら、倒れるまで攻撃を叩き込む！」

デス・ゴッド「もう少し遊んでやりたいが、このデス・ゴッド様には別の任務があるので、後は別の者に任せる！フフフ。。破壊王を仲間とした。後は魔王を復活させれば、お前達など、あつという間にあの世行きだろつな！」

それだけを言い残し、スカルバットは撤退した。。。

ワタル「偉そうな事言っておいて結局逃げるのかよ！」

ジュード「あいつ。。。最後に何か言ってたみたいだけど。。。」

万丈「(魔王。。。それに、破壊王。。。)」

アイーダ「気を抜いてはダメです！また何か来ます！」

現れたのは。。。BD連合の機体か！

舞人「BD連合か！」

ホイ・コウ・ロウ「パープルめ。。。ドアクター軍団へ渡りをつけたぐらいで偉そうにリーダー面しておって。。。！」

チンジャ「ホイ様、ここは我慢です」

ホイ・コウ・コウ「こうなれば、エクスクロスを倒して、憂さ晴らしをするネ！」

刹那「あれが舞人達の世界の悪党の集まり。。。BD連合か」

シン「なるほどな！小悪党って言葉がぴったりだな！」

ホイ・コウ・ロウ「うるさい！お前達は大人しくワシにやられるネ！」

しんのすけ「そうはいかないネ！」

トオル「話し方が移ってるぞ、しんのすけ……」

舞人「しんちゃんの言う通りだ！ここがどこだろうとお前達のような悪がのさばる事は許されない！ドアクダー軍団と手を組んだのなら、まとめて叩き潰してやるぞ！」

俺達は戦闘を再開した……。

戦闘から数分後の事だった……。

チャム「シヨウ！何か来るよ！」

シヨウ「あれは……！」

現れたのは……赤い機体と白い機体……？敵か……？！？

チャム「あの赤いの……！紅蓮だ！！？」

シモン「グレンだと……？！？」

グレンファイヤー「グレンだって？！？」

シヨウ「カレン……！紅月 カレンなのか！」

カレン「その声…… ショウなんだね！」

ショウ「俺だけじゃない！ヒイロ達や万丈さんもいる！」

デュオ「こいつは驚いた……！カレンもアル・ワースに来ていたとはよ！」

トロワ「隣にいるのはナイトオブゼロか」

五飛「あの男…… 太平洋での戦いで死んだはずでは……」

スザク「……」

ゼクス「(枢木 スザク……。新たな使命に生きていたはずの君とこんな形で再会するとはな……)」

カレン「事情は後で話す……！とりあえず、今のスザクは敵じゃない！」

デュオ「またまた驚きだぜ。皇帝ルルーシユの騎士、ナイトオブゼロとカレンが和解するとはよ」

カレン「まずはそっちの援護をする！さっさとこいつ等を片付けて、話がしたい！」

カトル「わかりました。よろしくお願いします」

ユイ「ショウウさん達のお知り合いですか？」

ショウ「カレンは俺達の協力者だった……。もう一人の方は敵だったんだが、カレンがそう言うなら、今はその事は忘れる」

マーベル「二人共、とても頼りになるわよ」

デュオ「あのカレンと枢木 スザクが来たんだ！ここからは楽勝だぜ！」

ヒイロ「はしゃぐのは後にしろ。まだ何か来る」

また二機の機体が現れた…！？

カレン「オレンジ…！」

スザク「モルドレッド…！乗っているのはアーニヤか！」

ジェレミア「紅月君、枢木…。久しぶりだな」

アーニヤ「でも…。」

え、あいつ等知り合いじゃなかったのかよ！？紅蓮達を攻撃したぞ！

カレン「どういう事さ、ジェレミア！？」

ジェレミア「見ての通りだ。君達がドアクダー軍団に敵対するなら、それは私にとつても敵ということだ」

五飛「ジェレミア・ゴッドバルト…！ドアクダー軍団についたか！」

スザク「アーニヤ…。君もジェレミア卿と同じなのか？」

アーニヤ「うん…。」

ホイ・コウ・ロウ「ホツホツホ。あれがデス・ゴッドが言っていた頼もしい助っ人やらか。（だが、破壊王とかいう者はまだ来ていないな…。）まあいい！おい、お前達！さつさと奴等を片付けるネ！」

ジェレミア「ご老人……。あなたに、この私に命令する権利はない」

ホイ・コウ・ロウ「な、何っ!?？」

ジェレミア「だが、安心するがいい。このジェレミア・ゴットバルト、身命を賭して、己の使命を果たそう！」

アーニヤ「手伝う、ジェレミア」

カレン「あんた達が、その気なら……！」

スザク「アーニヤ……！僕達にも退けない理由があるんだ！」

カレン「やるよ、スザク！あたし達は、こんな所で足踏みなんてしてられないんだ！」

敵部隊を確実に倒している俺達……。

刹那「この感覚は……気をつけろ、みんな！何か来る……！」

すると、またもや二機の機体が現れた……。

だ、だけど何だ……？あの鎧のような機体から発せられている威圧感は……。

ノブナガ「ここが、デス・ゴッドが示した戦さ場か……」

ジェレミア「ようやく、来ましたか。ノブナガ公」

ノブナガ「あの者達を斬り捨てればよいのだな？」

ホイ・コウ・ロウ「そうネ！遅れた分はしっかりと働くネ！」

ジャンヌ「お前がノブナガに命令する権利はない」

ホイ・コウ・ロウ「な、何だと…?!？」

ノブナガ「よせ、ランマル。今の俺達はドアクター軍団の配下でしかない」
ジャンヌ「わかっているわ、ノブナガ」

零「の、信長つて…織田 信長の事か?!？」

ノブナガ「左様。我はオダ家当主、オダ・ノブナガなり！」

青葉「あの鎧の様な機体に乗っているのが、織田 信長つてマジかよ?!？」

デイオ「落ち着け！嘘に決まっている」

ノブナガ「嘘を吐いて何となる？オダ・ノブナガは俺一人だ！」

九郎「おiii！歴史上の人物が何でロボットに乗つてんだよ?!？」

アル「わ、わからぬ…！」

トオル「もしかして、もう一機に乗っているのは森 蘭丸なの?!？」

ジャンヌ「そうだ。私はモリ ランマル…。ノブナガと共に道を歩む者だ！」

ヒイロ「どうやら、嘘はついていない様だな…」

ゼクス「まさか、織田 信長と森 蘭丸とは…」

ケロロ「ま、まだ何か来るでありますよ！」

こ、今度は何の機体だ!??

つて：：何か、孫 悟空みたいな機体だな：：。

ヒデヨシ「ようやく見つけたぜ：： ノブ様、ジャンヌちゃん！」

ジャンヌ「ヒデヨシ：：。!? どうしてあなたが：：。！」

ミツヒデ「私もいるぞ、ノブ、ランマル」

ノブナガ「フツ、久しいな：：。ミツ、サル」

ジャンヌ「ミツヒデまで：：。！」

秀吉に光秀つて：：。！

ミツヒデ「ノブ！ドアクダー軍団なる者達と同盟を結び何をする気だ!??」

ノブナガ「知れた事。さらなる乱を起こす」

ヒデヨシ「乱を：：。!? ここは俺達の世じゃないんだぜ！」

ノブナガ「知った事ではない。ミツ、サル。もう一度俺に従え」

ミツヒデ「断る。今のお前に従う程、私達は愚かではない」

ヒデヨシ「流石の俺も今回は賛成できねえ！」

ジャンヌ「あなた達：：。！」

ノブナガ「そうか。ならば、奴等と共に斬る！」

ヒデヨシ「どうすんだ？ミツヒデ！」

ミツヒデ「彼等がドアクター軍団と敵対するエクスクロスか……ならば。エクスクロスに次ぐ、私はアケチ・ミツヒデ！ドアクター軍団並びにオダ・ノブナガを討つ為にそちらと手を結びたい！」

カレン「今度は明智 光秀と豊臣 秀吉……！！？もうわけがわからないわよ！」

アマリ「ど、どうするんですか！！？」

倉光「わかりました。取り敢えず今は手を組みましょう」

スメラギ「倉光艦長……！！？」

ルリ「賛成です。彼等まで敵に回って欲しくないのでから」

ユリカ「確かにね……」

アキト「今はこの場を彼等と乗り切ろう！」

ミツヒデ「感謝する……。ヒデヨシ」

ヒデヨシ「おう！覚悟しろよ！ノブ様、ジャンヌちゃん！」

ノブナガ「フツ。来い、サル！」

俺達は戦闘を再開した……。

ヒデヨシ「あの戦いが終わって、西の星の王になったアレクサンダーと手を組んだ後にこんな異界な世に来るなんてな……。だが、武将トヨトミ・ヒデヨシ、何処までも戦ってやるぜ！」

スザクのランスロット・アルビオンはアーニヤという少女が乗るモルドレッドにダメージを与えた。

アーニヤ「やるべき事はやったから、帰る」

スザク「アーニヤ……。君は、もしかして……」

アーニヤ「あなたには関係ない」

そう言い残し、モルドレッドは撤退した……。

ジェレミア「アーニヤ……。先に帰っていてくれ」

カレン「あの子……。相変わらず何考えてるんだか全然わからない……！」

スザク「……」

〈戦闘会話　ヒデヨシVSジェレミア〉

ジェレミア「まさか、豊臣　秀吉公と戦う事となるとは……。それにしても猿と呼ばれ

ていたのは本当の様だな」

ヒデヨシ「へっ！俺の事をサルって呼んでいいのはノブ様だけだ！… たまーにミツの奴も呼んでるけどな…」

ジェレミア「私もオレンジと呼ばれた者だ。オレンジとサル… どちらが強いかいぎ尋常に勝負だ！」

ヒデヨシ「良いぜ、サルを舐めていると顔を引つ掻き回されるぜ！」

紅蓮の攻撃でサザーランド・ジークを追い詰めた…。

ジェレミア「これ以上の戦闘は危険だ。ここは撤退する」

カレン「ジェレミア！あんたに話がある！」

ジェレミア「私にはないな」

カレンの話を聞かずに撤退しやがった…。

カレン「あいつ…！一体何を考えているのよ！」

スザク「まさか、あの人も…」

〈戦闘会話　ヒデヨシVSジャンヌ〉

ジャンヌ「ノブナガに最後まで従っていたあなたまで裏切るなんてね……」

ヒデヨシ「今のノブ様のやつてる事はこの世の民を傷つけるだけなんだよ！」

ジャンヌ「それでも私はノブナガについていく……例え、あなた達が相手でも！」

ミツヒデ「ランマル……止まる気は無いようだな……」

ヒデヨシ「だったら、こつちだって容赦しねえぜ！」

〈戦闘会話　カレンVSジャンヌ〉

ジャンヌ「ノブナガに手を出させはしない！」

カレン「その声……えっ!? 蘭丸って女だったの!?」

ジャンヌ「何でどの人も私の性別に気づくのよ！」

カレン「そんな女々しい声を出していれば誰でもわかるわよ！あんたがノブナガを守りたい様に私にだって、守りたい奴がいるんだから、あんたを倒させてもらおうよ！」

〈戦闘会話　スザクVSジャンヌ〉

スザク「森　蘭丸が来るか……！」

ジャンヌ「あなた何者？ミツヒデに声が似ているけど……」

スザク「何者でもないさ……。でも、お前達があいつを傷つけようというのなら、僕はお前達を許さない！」

モリ・ランマルの乗る機体にダメージを与えた俺達……。

ジャンヌ「くっ……！ダメージを受けた……！！？」

ノブナガ「っ……ジャンヌ！退け、またお前を失うわけにはいかない！」

ジャンヌ「……わかったわ、先に戻ってるからノブナガも気をつけて……」

ノブナガ「承知した」

そう言い残し、モリ・ランマルの乗るオルレアンという機体は撤退した……。

ヒデヨシ「あくまでも愛するノブ様についていくってのかよ……！！」

ミツヒデ「今のあいつは敵だ。迷いを捨てろ、サル」

ヒデヨシ「んなもんわかってるよ！てか、お前がサルって呼ぶんじゃねえよ！」

ノブナガ「（ミツもサルも迷いはないという事だな……それでよい……）」

〈戦闘会話　ヒデオシVSノブナガ〉

ノブナガ「お前とも一度は本気で剣を交えてみたかったところだ」

ヒデオシ「俺もだぜ、ノブ様！手加減はしねえからな！」

ミツヒデ「ノブ、お前が立ちはだかるといふのなら……何度でも私達がお前を討つ！」

ノブナガ「是非もない！来い、友よ！」

〈戦闘会話　シバラクVSノブナガ〉

ノブナガ「ほう、この世にも侍がいたとはな……」

シバラク「拙者にはわかる……この者、只者ではござらん……！」

ノブナガ「俺の力量を見定めるとはお前もなかなかの侍だな」

シバラク「だが、簡単に負けはせん！」

ノブナガ「是非もない！やるぞ！」

〈戦闘会話　刹那VSノブナガ〉

刹那「何故、争いを好む……!?」

ノブナガ「俺は乱が好きだからだ」

刹那「貴様もあの男と同じか…… だったら、俺が断ち切る！」

ノブナガ「フツ！ 斬られるのは貴様の方だ！」

〈戦闘会話　　グラハムVSノブナガ〉

ノブナガ「俺にはわかるぞ、お前…… かつて修羅に堕ちたことがあるな？」

グラハム「確かに、私は修羅の武士道の道へ堕ちた事がある。だが、その修羅は刹那のおかげで断ち切る事が出来た」

ノブナガ「奴と似た様な声からその様な言葉を聞くとはな……？ さすれば見せてみる、修羅を断ち切ったお前の剣を！」

グラハム「織田 信長と交える事など、この後一生ない事だ！ では、参る！」

〈戦闘会話　　ワタルVSノブナガ〉

龍神丸「むっ…… ！？ あいつの中に眠るものはまさか……！！」

ノブナガ「あの機体…… 龍か……」

龍神丸「奴は強敵だ！ 気をつけろ、ワタル！」

ワタル「天下を取りかけた織田 信長だもんね……。油断はしないよ！」

〈戦闘会話 アンジユVSノブナガ〉

ノブナガ「龍を狩り、生きている女達か……。ならば、俺を狩れるか?」

アンジユ「あいつと似た様な声でふざけた事言うとは腹がたつ……。!私をあまく見ていると痛い目を見るよ!」

〈戦闘会話 ゼロVSノブナガ〉

ゼロ「織田 信長か……。80から地球の歴史を習ったが……。本物に会えるとはな……」

ノブナガ「ウルトラマン……。相手にとって不足なし!」

ゼロ「良いぜ!なら、お前を本能寺までぶっ飛ばしてやるぜ!」

ヒデヨシのゴ・クウが織田 信長の乗るザ・フールにダメージを与えた……。

ノブナガ「やるじゃねえか、気に入ったぜ!エクスクロス!此処は退いてやる……。だが、次はないと思うんだな!」

そう言つて、ザ・フールは撤退した……。

零「強敵だったな……。流星は織田信長だ……」

ヒデヨシ「随分簡単に退いたな、ノブ様は……」

ミツヒデ「（ノブよ……。お前は何を考えているのだ……）」

〈戦闘会話 鈴VSホイ・コウ・ロウ〉

鈴「あんたにはブラックを苦しめたお礼をしないとね！」

ホイ・コウ・ロウ「小娘が！このホイ・コウ・ロウに敵うと思わない事ネ！」

鈴「小娘だと思っていたら、いつの間にかあんたはやられてるわよ！」

マイトガインの動輪剣で二オーに大ダメージを与えた。

ホイ・コウ・ロウ「ええい、腹がたつ！今日は、ここまでネ！」

舞人「待て、ホイ・コウ・ロウ！」

ホイ・コウ・ロウ「待てと言われて、待つ悪役は、この世にいないネ！では、サラバ
！」

二オーは撤退した……

メル「確かにそうですね」

零「納得してる場合か……」

ブラックマイトガイン「しぶときは天下一品だな……」

マイトガイン「だが、次は逃しはしない」

ジャンボット「その粹だ、マイトガイン」

舞人「(BD連合をまとめ上げたパープルという男……。他の悪党とは違う薄気味悪さを奴から感じる……)」

ワタル「なんとか敵は倒したけど……」

リョーコ「戦艦が動かねえ以上、ここを離れるわけにはいかねえだろうな」

カレン「……」

シヨウ「カレン……。まずは話を聞かせてくれ」

カレン「うん……」

ゼクス「スザク……。君には聞きたい事がある」

スザク「わかりました、ゼクスさん。こうして、あなたとまた会えた事も何かの啓示と考えますので」

万丈「(カレンとスザク……。そうなれば、次に来るのは……)」

倉光「ヒデヨシ公とミツヒデ公もいかな？」

ミツヒデ「承知した。そちらの星船で話をしよう」

ヒデヨシ「話を通じそうによかったぜ……」

ミツヒデ「(ノブ……。私は何度でもお前を討つ……。だが、本当にそれでいいのか……)」

俺達はそれぞれの艦へ戻った……。

？「フフ……騒がしくなってきた……。さて……ここからどう転がっていくのだろうか……」

だが、俺達は気がつかなかった……。俺達を見ている者がいたことに……。

俺達は、カレン、スザク、ヒデヨシ、ミツヒデから話を聞くためにメガファウナの格納庫に集まった。

デュオ「そうか……。カレンはブリタニアとの戦いが終わった後は学生をやったんだっただったな」

カレン「でも、気がついたら、破壊されたはずの紅蓮と一緒にこのアル・ワースにいたんだ……」

五飛「枢木 スザク……。お前は？」

カトル「あなたは太平洋の戦いで死んだのではなかったのですか？」

スザク「僕は……ルルーシユの指示で死んだふりをしていた」

デュオ「あの皇帝陛下……。またお得意の仕込みトリックかよ……！」

ヒイロ「いったい何のためにだ？」

スザク「自らを……皇帝ルルーシユを殺させるために……」

五飛「何っ!?？」

スザク「そこまでがルルーシユの計画……ゼロレクイエムだった……」

カトル「では、皇帝ルルーシユを殺したゼロは……あなただったんですね」

デュオ「マジかよ……！ルルーシユに憧れた誰かの仕業だと思つてたけど、ある意味、

あいつの自作自演って事か……！」

トロワ「何のために……という質問は野暮だろうな」

ヒイロ「あいつは最後まで、あいつだったという事か……」

ゼクス「その通りだ。世界の全ての憎しみを自分が背負い、その自分を討たせる事で

世界を解放しようとしたんだ」

ミツヒデ「(まるであの時のノブの様だな……)」

シヨウ「あなたは、それを知っていたのか？」

ゼクス「言葉は交わせなかったが、その真意は気づいていた……」

マーベル「あなたと皇帝ルルーシユとトレイズ・クシュリナーダ……。みんな、同じ

だったのね…」

シヨウ「だからといって、あいつのやってきた事を許せるもんじゃない」

チャム「ちよつと待つて！ ジエレミア達もここにいて、デス・ゴツドの言つていた魔王つて言葉…」

ゼクス「…その可能性は高い…」

ワタル「何なの…？ いったい何の話…？ ！！？」

デュオ「あの死神野郎が復活させると言つていた魔王の正体…」

ゼクス「それは我々の世界の天才戦略家…ゼロこと、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを蘇らせる事かも知れない…」

ゼロ「ゼロ…」

カレン「あたし達…このアル・ワースで何度かデス・ゴツドと戦つて、その事をしつたの…」

スザク「ルルーシュは、自らの死の衝撃をより強く世界に与えるために僕に遺体を爆破させるように命じた…」

デュオ「それは俺達も見たぜ」

トロワ「いや…正確に言うなら、本当に皇帝ルルーシュが死んだというのは確認してない」

五飛「遺体が爆破される前にこのアル・ワースに来ていたら……」

ヒイロ「奴が生存している可能性もある……」

カレン「ルルーシユの戦いは終わったんだ……！もう戦う必要なんてないよ！」

スザク「その天才的な頭脳を誰かに利用させるわけにもいかない」

アキト「あのデス・ゴツドの口ぶりからして……あいつには皇帝ルルーシユを従わせ

る何かの手段があるというのか……」

ガエリオ「これは、急がないとな……」

エイサツプ「でも、問題はあちらもです……」

ミツヒデ「……」

零「神器にイクサヨロイ……。どれも俺達の知っている歴史には載っていない事だ

な……」

ヒデヨシ「でも、あんたらの世の歴史書には俺達の事が記されていたんだろ？」

千冬「それにおかしな点がまだある……」

一夏「おかしな点……？」

簪「うん。信長が生きている時の秀吉の名前は羽柴 秀吉だもん……」

ヒデヨシ「そんな事言われてもなあ……。俺は生まれた時からトヨトミ・ヒデヨシだぜ

？」

ミツヒデ「噛み合わない歴史……。これが異界の世というものか？」

アーニー「つまり、ミツヒデ公達の世界は僕達や零君達の世界の過去じゃないって事か……」

カレン「私からも一つ……。あの時、戦った森 蘭丸だけ……。私達が習った蘭丸は男のはず……。だけど、彼女は女だった……。彼女は何者なの？」

ミツヒデ「モリ・ランマルの本当の名は……。ジャンヌ・カグヤ・ダルクだ……」
鈴「ジャンヌ・カグヤ・ダルク……。？」

一夏「カグヤ……。って事は！あの蘭丸の正体はかぐや姫なのか!?!？」
シャルロット「ち、違うよ、一夏！ジャンヌ・ダルクだよ！」

零「ジャンヌ・ダルクだと……。?!？」

摩耶「それって……。フランスの革命を起こした人ではないですか！」

零「……。ちよ！待て待て待て待て！歴史が違いすぎる……。！」

夏美「お二人の世界でさらに変わったものはないですか？」

ヒデヨシ「変わったもの……。東の星と西の星だな……」

サブロウタ「東の星と西の星……。？」

ミツヒデ「東の星は私達の出身の地……。西の星は……。アーサー王がまとめている星だ」

冬樹「今度はアーサー王……」

頭が痛くなってきた……！

ミツヒデ「ヒデオシとランマルはノブにつき、私はアーサー王について……決戦した」
ヒデオシ「結局、アーサー王は討ち死に、ノブ様はミツヒデによつて、討たれ、ジャ
ンヌちゃんと共に消えたんだ……。その後、俺達は西の星の王となったアレクサンダー
と同盟を結んだんだが……。突然、地震が起こり、目を覚ますと俺とミツヒデはこのアル
ワースという地にいたんだ」

刹那「それがお前達がこの世界に來た時の話か……」

ミツヒデ「この地を調べている内に、ノブとランマルがドアクダー軍団なる軍の配下
となつていた事を知つた我々は奴らを追つていたというわけだ……」

ロックオン「ノブナガが破壊王で……。ミツヒデが救星王……。だつたな？」

ミツヒデ「ああ……」

ヒデオシ「どうしたんだよ、ミツヒデ？」

ミツヒデ「何故、東の星でも西の星でもないこの地で龍脈の力を使用し、扱える事が
出来るイクサヨロイや神器が使えるのだろうか……」

ヒデオシ「この地にも龍脈があるんじゃないのか？」

アマリ「その様な話は聞いた事がないですが……」

メル「オドが関係していると考えられませんか？」

ホープス「まだ、わかりませんね……」

ヒデヨシ「まっ、考えても仕方ないだろ！ 使えるもんは使わないとな！」

ミツヒデ「フツ……。気楽なお前が羨ましい……。私達の世に戻るためにはドアクダーというものを討たねばならない……。だったな？」

ワタル「うん、そうだよ」

ミツヒデ「ならば、私達もドアクダー打倒に手を貸そう」

トオル「いいんですか？」

ヒデヨシ「どちらにしろ、ドアクダー軍にはノブ様達がいるんだ。これを見過ごしておく事は出来ないだろ？」

ミツヒデ「ああ。私は誓ったのだ……。ノブが平和の道を阻もうとするのなら、何度でも討つと……」

零「わかった、ミツヒデ、ヒデヨシ……。これからよろしく頼む」

ミツヒデ「（ノブ……。お前は私に平和の世を託したのではないのか……。？ お前はいつたい何をするつもりだ……。？）」

チャム「ねえ……。そう言えば、万丈は？」

マーベル「戦いが終わってから、見ていないけど……」

カレン「(ルルーシュ……あなたも、このアルワースにいるの……)」
スザク「(君は僕達を守る……。だから……無事でいてくれ……)」

―波嵐 万丈だ。

僕はある人物と会っていた……。

万丈「やつと見つけたよ……」

?「……」

万丈「死んだはずの君がいるのは、未だに信じられないが、この世界は死を超えた所にあるらしいからね。だが、もう逃さない。神聖ブリタニア帝国、最後の皇帝……ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア……。いや……ゼロと呼ぶべきかな」

ルルーシュ「波嵐 万丈か……」

万丈「君のその頭脳……誰かに利用されるぐらいなら、余計な邪魔が入る前に、ここで……」

ルルーシュ「そうしてくれ……。今の俺に……生きている意味など……ないから……」

万丈「……」

この時僕は気づいていなかった……。

ノブナガ「奴が世を変えた魔王か……。だが、今の奴を見るからに世捨ての人間しか見えな……い。だが、臭う……。奴はすぐに化けるな……。」

僕達の会話を見て、聞いていたオダ・ノブナガがいた事に……。

第26話 二人の王

―新垣 零だ。

俺はアマリ、メル、ワタル、シバラク先生、ヒミコと共にデス・ゴッドを探していた…。
ワタル「…デス・ゴッドのがあの真実の鏡を持つている限り、戦艦は身動きが取れない…！」

ヒミコ「だから、あちし達でデス・ゴッドを捜し出すのだ！」

シバラク「偵察部隊の話では、この辺りでブリキントンが何かしていたそうだが…。
メル「恐らく、近くに彼のアジトがあるのだと思います…。」

アマリ「他の皆さんもデス・ゴッド捜索に動いています。私達も頑張らしましょう」
シバラク「こういう時、クラマが空から捜してくれば、楽なのに…。」

アマリ「申し訳ありません。うちのホープスですよね」

メル「空を飛べる人達というのはそのような所まで自由です…。」

零「一夏、鈴、シャルロット、簪はISで空から捜してくれているから見つかるのも
時間の問題だけだな…。」

茂みから何か聞こえた…。
!??

零「誰だ！」

ルルーシユ「す、すまない……。驚かせるつもりはなかったんだ……」

この男……何者だ……？

零「いや、こつちこそ突然、怒鳴ったりしてすまない……」

ヒミコ「ニイちゃん、こんな所で何をやってるのだ？」

ルルーシユ「この辺りの地層を……調べていたんだ……」

メル「では、あなたは学者さんですか？」

ルルーシユ「俺は……。何者でもないし……。何者にもなりたくないんです……」

零「っ……！」

シバラク「（この覇気のない顔……世捨て人という奴か……）」

メル「零さん……？」

零「いや……。何でもない……」

似ている……。両親が死に、自殺しようとしていた昔の俺に……。

アマリ「……」

ワタル「ダメだよ、それじゃ！」

ルルーシユ「え……」

ワタル「ナディアアさん達が言ってきましたよ！働かざる者、食うべからず……つて！病

「氣だったら仕方ないけど、ちゃんとやる事はやらないと」

ルルーシユ「…やる事か…」

シバラク「やめんか、ワタル。人には、それぞれ事情というものがある」

ワタル「…そうだね、先生。ごめんさい、生意気な事を言つて…」

ルルーシユ「気にしないでくれ…。君の言う事は、もつともだと思つから」

零「…あんた、何かが怖いのか？」

ルルーシユ「そう見えるのか？」

零「…ああ。今のあんたとそっくりだった人間を知っているからな…」

アマリ「零君…」

ルルーシユ「その人はどうしたんだ？」

零「大切な友人の言葉で立ち直つたよ…」

ルルーシユ「大切な…友人…」

ワタル「もしかして…お兄さん、ドアクター軍団に逆さまにされた街の人？」

ルルーシユ「あ、ああ…」

口ごもつた…。本来、嘘をつくのが得意な人間ほど、こういう時は嘘をつくのが下手になるものだ…。

こいつ、アル・ワースの人間じゃねえな…。

ワタル「だったら、大丈夫！僕がデス・ゴッドを倒してちゃんと街を正常にするから！あの街だけじゃないよ！世界全部を元通りにしてみせるから！」

ルルーシユ「世界を変える……か……。君は強いんだな……」

零「何だよ、笑えんじゃねえか」

ルルーシユ「何でだろうな……笑顔が込み上げてきた……」

零「……それはあんたが生きているって証拠だ」

ルルーシユ「生きている……そうか……」

ワタル「強いのは僕が救世主だからだよ！」

ヒミコ「あちしも強いよ！」

シバラク「ちなみに拙者もだ！」

メル「私も……多分、強いと思います」

アマリ「私は……残念ながら、そこまでではないですけど、頑張るつもりです」

零「俺は強くない……まだまだの男だ」

ルルーシユ「いや、一目見た時からわかった……。君は強いよ」

零「ありがとうな。あんただけじゃなく、他の人にもそう言ってもらえるように頑張るつもりだ」

ルルーシユ「そうか……」

すると、男の人と女の子が歩いて来た……。

？「…… そのような笑顔が見られるとは思いませんでしたよ」

ルルーシユ「……！」

……？な、何だ……？

ジエレミア「捜しましたよ」

捜していた……？それにこの男の声……！

ルルーシユ「う……うう……。うああああつ!!？」

俺達と話していた少年は恐怖な顔を浮かべ、逃げる様に走り去ってしまった……。

メル「ま、待つてくださいい！」

アーニヤ「逃げられちゃった……」

ジエレミア「いささか無礼だったようだ……。だが、生きておられる事さえわかれば、

今はそれでいい」

ワタル「お前達……！お兄さんに何をするつもりだったんだ!!？」

ジエレミア「君に関係のない話だ、少年」

ワタル「関係なくなるとはい！僕はお兄さんの不安を叩き潰すって宣言したんだ！」

アマリ「待つてくださいい、ワタル君……！」

零「お前ら…… 昨日、戦った相手だな！」

メル「え……！」

ジエレミア「という事は、君達はエクスクロスとやらか……」

アーニヤ「敵だとわかったら、どうする？」

零「別にどうするつもりもねえよ……。お前らが手を出さない限り…… だけどな」

アーニヤ「いいの？」

アマリ「あなた方も異界人なのですよね……。でしたら、無用な戦いはしたくありません」

？「フツ、甘いな……。術士とやら」

さらに男と女が来た。

ノブナガ「その様な戯言を言っているといつかは戦で命を落とすぞ？」

アマリ「それでも私は……」

メル「アマリさん……」

零「……確かに甘いな。でも、それがアマリの強さだ」

アマリ「零君……」

ジャンヌ「強さ……」

零「人の甘さも時として、強き力になるつてもんだぜ？あんななら、それぐらい気づいているだろ？オダ家嫡男…… オダ・ノブナガ公」

シバラク「何だと……!?」

ノブナガ「よく気づいたな。お前の名は？」

零「新垣 零だ」

ノブナガ「では零、お前に問おう……強さとは何だ？」

零「誰かを守り抜く力だ」

ノブナガ「その誰かとは誰の事だ？」

零「大切な人達や俺の守れる範囲の人達だ」

ノブナガ「では、守れない範囲の人間はどうするつもりだ？」

零「……俺は守れる範囲がどれぐらいか言つてないだろ？」

ノブナガ「……」

零「俺の守れる範囲は無限だ。もし手が届かなければ、走つてでも届かせる……。それだけだ」

ジャンヌ「そんな夢物語……！」

零「確かににお前達からしたら夢物語だな……。だが……その夢物語を夢物語にさせないようにするのも悪い事じゃねえだろ？」

ノブナガ「……フツ……」

ジャンヌ「ノブナガ……？」

ノブナガ「フハハハハッ！そうかそうか！まつ事面白い男だ、お前は！」

零「ノブナガにそう言ってもらえて光栄だな」

ノブナガ「お前との戦は楽しめそうだな！」

零「…俺自身は楽しむ気はないけどな」

ジャンヌ「（ノブナガに認めさせるなんて…彼、只者じゃないわね…！）」

アマリ「それにはあなた方がドアクダー軍団に手を貸す悪党とは思えませんし」

ジェレミア「…では、その君に問う。先程逃げだした方は、どう見る？」

アマリ「あの人は…正直に言つて、よくわからないです…」

シバラク「どうしてだ、アマリ？」

ジェレミア「無理もない。あの方は、少々複雑だからな」

メル「その言葉…何となくわかります」

ジェレミア「ともあれ、無用な戦いを好まない点は評価しよう」

ワタル「デス・ゴッドは、どこにいる？」

アーニヤ「君達を攻撃するための準備をしている」

ジャンヌ「結構な軍を引き連れているわ」

ワタル「何だつて?!？」

シバラク「こうしてはいられん…！戻つて、襲撃に備えねば！」

ジエレミア「その方がいいだろう」

ノブナガ「ミツやサルにも伝えておけ……。俺とランマルも出ると……。そして、零。お前とも剣を交えるでしょう」

零「挑んでくるなら、望むところだ」

アマリ「これだけははつきり言っておきます。無用な戦いはするつもりはありませんが、襲ってくるのなら、話は別です。ですが、ドアクダー軍団を抜ける気があるなら、私達の所に来てください」

俺達はみんなの元へ戻るためにその場を走り去った……。

ジエレミア「……さすがは教団の術士だ。正しき事を知っているな」

アーニヤ「術士……。初めて見た」

ジエレミア「彼女の事が気になるのかな、アーニヤ？」

アーニヤ「でも、何故なのかはわからない……」

ノブナガ「新垣 零か……。フツ、面白い男だ……」

ジャンヌ「もし彼がオダ家にいたとしたら、あなたの友達になつていたと思う？」

ノブナガ「さあな、だがあいつは俺にもアーサー王にも従わなかつたであろうな」

ジャンヌ「もうすぐ戦が始まるわ……。零という男はあなたの強敵になるかしら？」

ノブナガ「間違いなく、俺を脅かす脅威へとなるであろうな……。俺達の世にいらなくて

安心した」

ジャンヌ「ノブナガ……」

ノブナガ「案ずるな、ランマル……。俺は負けはしない……」

第26話 二人の王

俺達はデス・ゴツドの部隊を迎え撃つ為に出撃した……。

サヤ「あの死神が来ます！」

俺達の前に魔神部隊とスケルバット、サザーランド・ジーク、モルドレット、ザ・フリー、オルレアンが現れた。

デス・ゴツド「全く……？ ジエレミア達が、あの男を見つけていれば、こんな面倒しなくても済むのに！」

ジエレミア「申し訳ありません」

デス・ゴツド「まあいい……。この真実の鏡が曇っている限り、戦艦共は、あの場を動けん。その間に正面から、ワタルとエクスクロスを叩き潰してやれ！」

ノブナガ「承知した」

デス・ゴツド「このデス・ゴツド様は高みの見物をさせてもらうがな！」

スケルバットは逃げやがった……！

しんのすけ「逃げたゾ！」

ネネ「異界人に戦いを押しつけて逃げるなんてとんだ死神ね！」

ミツヒデ「来たか！ノブ、ランマル！」

ジャンヌ「もう容赦しないわよ！」

ヒデヨシ「今度こそ、討たせてもらうぜ！」

ノブナガ「やれるものならな……零！この戦でお前の誰かを守る強さというものを見

せてみる！」

零「正直、お前とはやりたくねえが……仕方ねえ！やるしかないのならやってやる！」

ノブナガ「フツ、是非もない！」

カレン「ジェレミアとアーニヤもやる気なんだね！」

ジェレミア「無論だ。そのために私は、ここにいます」

アーニヤ「そつちこそ、怪我したくなかつたら引つ込んで」

スザク「わかつてるのか！ドアクダー軍団はルルーシュを戦わせようとしているんだ

ぞ！」

ジエレミア「無論、承知の上だよ。そのために我々は、彼らについたのだ」

スザク「そんな事は……させない！」

アマリ「やっぱり、戦うのですね……」

アーニヤ「さっきの術士さん……。あなたは何のために戦うの？」

アマリ「私は……自分の心のおもむくまま……自分の意思に従って戦うだけです」

アーニヤ「あなたは……自由なのね」

ホープス「(ほう……面白い事を言いますね、あの子……)」

竜馬「こうなりや、あいつ等をぶつ倒して死神野郎を引きずり出すまでだ！」

カレン「ジエレミア、アーニヤ！あんだ達が何のためにルルーシュを戦わせようとし

ているのか知らないけど……！」

スザク「その計画……！絶対に止めてみせる！」

ヒデヨシ「行くぜ、ノブ様、ジャンヌちゃん！」

ミツヒデ「私は……何度でもお前を討つ！オダ・ノブナガ！」

俺達は戦闘を開始した……。

ノブナガ「(どの世であろうと俺は戦う。。。俺は殺す事しか知らないからな。だが、俺が本当に殺すのはあいつではない。。。)」

〈戦闘会話 ジャンヌVS初戦闘〉

ジャンヌ「(ノブナガに認めさせた新垣 零という男。。。ちよつと妬けるわね。。。つて、バカなの、私！男に嫉妬してどうするのよ！)」

紅蓮はモルドレッドにダメージを与えた。。。。

アーニヤ「もう帰る。。。。(ルルーシユを保護すれば、もうこんな事はしなくても済む。。。)」

モルドレッドは撤退した。。。。

スザク「(アーニヤ。。。君とも、いつか共に戦えると信じてる。。。)」

ランスロット・アルビオンもサザーランド・ジークにダメージを与えた。。。。

「ジェレミア「ここまでか……。 (ならば、戦線を離脱して、あの方の保護を……)」
サザーランド・ジークは撤退した……。

スザク「(ジェレミア卿……。僕は……。あなたを信じたい……)」

ゴ・クウの攻撃でオルレアンは追い込まれた……。

ジャンヌ「此処で死ぬわけにはいかない……。ノブナガ、先に行ってるから……。 (時は稼げた……。後は時の問題ね……)」

ノブナガやなそう言い残し、オルレアンは撤退した……。

ヒデヨシ「……。 !ジャンヌちゃん、お前まさか……。」

〈戦闘会話 零VSノブナガ〉

零「オダ・ノブナガだろうと容赦はしねえぞ！」

ノブナガ「望む所だ！手は抜かないぞ、零！」
零「こつちも加減してゐる場合じゃねえんだ……！やつてやるぜ！」

ゼフィルスとゴ・クウの連携にザ・フルもダメージを負つた。

ノブナガ「フハハハハッ！やはり、乱は良い……！此処で再び死ぬのは惜しいな！」

ミツヒデ「ノブ、お前に次などない！」

ノブナガ「案ずるな、これで終わりだ。ミツ……。（これで俺自身の欲は満たされた……。後は、世捨ての魔王にでも会いに行くとするか……）」

ミツヒデ「これで終わりだと……？やはり、お前の読みは読めぬ……！」

スザク「ジエレミア卿達は退けた……！」

ゼロ「後は、あの死神野郎を倒すだけだぜ！」

ワタル「お前の手下はやつつけたぞ！出て来い、デス・ゴッド！」

ワタルの言葉に答えるように再び、スケルバットが現れた。

デス・ゴッド「呼ばれて飛び出て、何とやら。デス・ゴッド様、参上！」

ガイ「死神野郎！観念して、真実の鏡つてやつを渡しやがれ！」

デス・ゴッド「フッフッフ、そんなにも、これが欲しいか？」

舞人「よし：：！デス・ゴッドは真実の鏡を持っている！」

アンジュ「欲しいものは奪ってでも手に入れる！覚悟しなよ！」

デス・ゴッド「まあ、そう急かすな。お前達に真実の鏡の使い方というものを見せてやろう」

ユイ「使い方：：？戦艦を飛ばなくしたり、街を逆さまにする以外にも何かあるのですか？？」

デス・ゴッド「フッフッフ！まあ、見ているがいい！」

移動したスケルバットに乗っているのは：：あの時あつた少年か：：？

ルルーシュ「くっ：：！」

カトル「デス・ゴッドの機体に捕らえられているのは：：！」

デュオ「間違いねえ！あれは：：！」

カレン「ルルーシュ！！？」

零「は？？マジかよ：：？？」

ワタル「えーっ！あの人、噂のルルーシュって人なの！」

メル「あの気弱そうな人が大罪人だったなんて：：！」

九郎「カレン達の世界の戦いの元凶：：皇帝ルルーシュ：：！」

ゼロ「またの名を……黒の騎士団のゼロ！」

デス・ゴッド「そう！その通り！この男こそ、とある世界を震撼させた魔王である事は調べがついている！」

万丈「（ゼロ……。捕まってしまったか……）」

スザク「その真実の鏡を使い、ルルーシュに何をするつもりだ……!?」

デス・ゴッド「真実の鏡を曇らせれば、正常が異常になるが……本来の使い方は、物の事の真実を照らす事にある」

カレン「真実……」

デス・ゴッド「さあ、魔王よ！世界を戦いに包んだ、お前の中の悪意を今、白日の下へさらせ！その残虐非道の心を以て、ドアクダー軍団の軍師となるのだ！」

ルルーシュ「！」

あれが……真実の鏡の力……！

カレン「ルルーシュ……」

デス・ゴッド「今、魔王はよみがった！これで世界はドアクダー軍団のものとなる！さあ、魔王よ！ドアクダー様への忠誠の証として、このデス・ゴッドにひざまずけ！」

ルルーシュ「……黙れ」

……！性格が変わった……!??

デス・ゴツド「何っ!?」

ルルーシユ「下郎が、この俺に指図するな」

デス・ゴツド「ぬ、ぬうう…！」

青葉「さつきまでの怯えていた姿と全然違う！」

デイオ「あれが、あの男の本性か…！」

リデイ「流石は、世界を震撼させた魔王だ…。氣迫が違う…！」

デス・ゴツド「ま、まあいい…！お前の悪意を以てすれば、この世界は炎に包まれる！それが、ドアクダー様の望みだ！」

ルルーシユ「お前も戦いを望むか…。要するに俺と同じという事だな」

デス・ゴツド「そ、それです！その邪悪さ！それを私共は待っていたのでございます！」

デュオ「まずいぜ、こいつは！ドアクダー軍団にゼロがついたとなれば、大変な事になる！」

シヨウ「ここで何としても奴を仕留めなくては…！」

アルト「でも、仕留められるのかよ…！」

カレン「待って…！」

マーベル「カレン…！」

カレン「もし、あの真実の鏡がルルーシユの本当の姿を照らすなら……」

スザク「僕は彼を信じたい」

ヒルダ「そんな事言ってる場合かよ！」

真上「甘さを捨てろ！今の奴は敵だ！」

サリア「取り返しのつかない事になる前に早く対処を！」

ワタル「待って、ヒルダさん、真上さん、サリアさん！」

ヒルダ「邪魔するんじゃないよ、ワタル！」

メル「零さん……」

零「……あいつは本当は戦う事が嫌いなんだ」

シヨウ「そうなのか……？」

ワタル「うん……。だって、あの人……。すごく悲しそうだったよ……」

万丈「ルルーシユは自らが悪になる事で全ての憎しみを自分に向けさせた……。そして、その死と共に世界から戦いを葬ろうとした……」

ゼクス「正しいやり方でないと知りながら、それしか方法がないとして……」

デス・ゴツド「笑わせてくれる！だからといって、こいつのやってきた罪が許されるものか！もうこいつは悪として生きるしかないのだ！ドアクダー軍団の軍師……魔王としてな！」

ルルーシュ「お前が俺の生き方を決めるな」

デス・ゴツド「いやいや、滅相もない！あなた様はあなた様の心のおもむくままに生きればよろしいのでございます！」

ルルーシュ「そうか……。ならば……！お前を、ここで討つ！ルルーシュ・ランペルジでも、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアでもない男が命じる……！」

デス・ゴツド「な、何か！とてつもなくヤバい気がする！」

スカルバットはルルーシュから距離をとった……。

ルルーシュ「さすがは死神だな。ギアスの危険さを本能的に感じ取り、俺を解放したか。もつとも……この力を俺は二度と使う気はないがな」

あいつ……！

カレン「ルルーシュ！」

万丈「あの露悪的な口の利き方……君は自分を取り戻したんだな」

ルルーシュ「……本意な過程ではあったがな」

万丈「罪の意識と目的の喪失で生きる意味を失った君ならば、放置しても問題ないと思つたが……。まさか、デス・ゴツドがあんな手を使つてくるとは思わなかつたよ。結果オーライだつたけどね」

ルルーシュ「……俺は、俺という人間の存在と俺のやってきた事を、今もこれからも

許すつもりはない……」

零「さっきの全てを放棄したあなたの姿はその想いによるものか……」

ルルーシユ「だが、浅ましいな……。俺の心の奥底には、まだ戦う心が残っていたよう
だ」

スザク「違うよ、ルルーシユ。それは戦う心じゃない……。生きる意思だよ」

カレン「そうだよ！あんたはいつだって生きるために戦ってきたじゃない！」

ルルーシユ「ふ……。今の俺が、どう取り繕っても何の説得力もないな……」

カレン「いいさ……。！素直なあなたに、また会えたんだ！あの鏡に感謝するよ！」

スザク「君の真実……。悪を許さない心が開放された事にもね。そして、君自身が悪を
討つ事を……。戦う事を選ぶのなら、僕達からは何も言う事はないよ」

デス・ゴツド「ば、馬鹿な……。！このデス・ゴツド様は自らの手でドアクダー軍団の
敵を作り出してしまったのか！わ、私は悪くない！悪いのは、あの男と……。この鏡だ！」

ヒミコ「いらぬなら、あちしにちよーだい！」

ヒミコ、いつの間に……。!??

ヒミコはデス・ゴツドから真実の鏡を奪った。

ヒミコ「真実の鏡、もーらい！」

デス・ゴツド「あ！ドロボウ!!?！」

カンタム「ナイスだ、ヒミコちゃん！」

ひまわり「たいやく！」

ヒミコは龍神丸の元まで走った…？

ヒミコ「ほい、ワタル！ 真実の鏡なのだ！」

龍神丸「ワタル！ 鏡を磨き、天に掲げるのだ！」

ワタル「よおし！ 真実の鏡よ！ この一帯を正常な状態に戻してくれ！」

デス・ゴツド「あ、ウソ！ やめてーっ!!？」

ワタルが真実の鏡を掲げると真実の鏡が光り、光が消える。

ヒミコ「ワタル、あれを見るのだ！」

街が戻ってるな！

ヒカル「やったー！ 街の建物が正常になってるよ！」

サブロウタ「つて事は…！」

機関長「各機関、正常に作動！」

エレクトラ「N-1ノーチラス号、航行可能です！」

ネモ船長「よくやってくれた」

ハーリー「ナデシコもいけますよ！ 艦長！」

ルリ「では、遅れた分を取り返しましょう」

ドニエル「よし：！これでこっちのものだ！」

スメラギ「攻撃もできるようになったわね：！」

倉光「我々も戦線に復帰しよう」

デス・ゴツド「ぬううっ！よくも：よくも!!？」

ルルーシユ「簡単に取り乱しているようでは器の小ささを自ら教えているようなものだぞ」

デス・ゴツド「う、うるさいっ！元はと言えば、お前が全て悪い!!？魔王め！死ぬーっ!!？」

ルルーシユを攻撃しようとしたスカルバットめがけて銃撃が襲った。

デス・ゴツド「な、何だ!!？」

銃撃を警戒し、スカルバットは軽く後ろに下がった：。

現れたのはサザーランド・ジークとモルドレッド：!!？

カレン「ジェレミアとアーニャ！」

そして、二機はルルーシユの前に移動した：。

ジェレミア「さすがはルルーシユ様：。もしもの時に備え、ドアクダー軍団にいたのは正解でした」

ルルーシユ「悪となつてでも、この俺を守ろうときてくれた忠義：。苦勞をかけた

な、ジエレミア。それにアーニヤも」

ジエレミア「いえ……。ルルーシユ様にお仕える事こそが、このジエレミアの至上の喜びでございます。そして、ルルーシユ様が自らのご意思で戦いに臨まれるなら、お供いたします」

アーニヤ「よかった。これでもう、あの薄気味悪い奴の言う事を聞かなくてもいいのね」

スザク「ジエレミア卿！ルルーシユの保護を！」

？「坊やお守り役は私の役目だろう」

現れたのは黒い機体とピンクのランスロット……？

C・C「相変わらず世話が焼けるな、ルルーシユ」

ルルーシユ「魔王と一緒に魔女まで登場か……」

カレン「C・C！あんたも跳ばされてたんだね！」

C・C「そういうわけではないが……。だが、こうなったらあいつのお目付役の私も傍観者を気取るわけにもいくまい」

二機もルルーシユの目の前に降り、黒い機体はルルーシユが乗れるように蹲った。

ルルーシユ「フ……。俺だけでなく、蜃気楼もよみがえっていたか」

C・C「コックピットには、お前の欲しいものも入っているぞ」

ルルーシュ「助かる、C・C。」

ルルーシュは蜃気楼という機体に乗った……。

ルルーシュ「俺は……俺自身を捨て去る……！」

蜃気楼とピンクのランスロットは浮上した。

ルルーシュ「各機、俺の周りに集え！」

ジェレミア「イエス！ ユア・マジエステイ！」

ルルーシュの言葉に紅蓮、ランスロット・アルビオン、モルドレット、サザーランド・

ジーク、ピンクのランスロットが集まった。

カレン「ゼロの衣装だ！」

ルルーシュ「フ……これを着ると気持ち引き締まるな」

デス・ゴッド「おのれえ！こうなれば、力押しで叩き潰してくれる！」

デス・ゴッドがそう言うと、大量の戦力を投入してきた。

デス・ゴッド「見たか！デス・ゴッド軍団の全戦力を！」

ワタル「とんでもない数を出してきた！」

ルルーシュ「案ずるな、少年」

ルルーシュが仮面を被った……あれがゼロか……。

ゼロ（ルルーシュ）「俺はゼロ！奇跡を起こす男だ！」

デュオ「出やがったぜ！お得意のフリーズが！」

ゼロ（ルルーシユ）「各機、あの岩山を狙え！」

スザク「了解！」

紅蓮達は岩山を狙い、撃った……。

……まさか……！

デス・ゴツド「飛んだマヌケ軍師だな！どこを狙わせている!!?」

ゼロ（ルルーシユ）「身についたクセのようなものだな……。おれは無意識の内に戦場

を調べていたようだ。そして、知った！あの岩山の中が空洞である事を！」

デス・ゴツド「え!!?」

ゼロ（ルルーシユ）「もう遅い！」

やはり……岩山が崩れて、岩山上の魔神は全滅した……。

デス・ゴツド「わ、私の軍団が……!!?」

夏美「崩れた岩山に敵が吞まれた……」

ケロロ「飛べない機体ではひとたまりもありません！」

ルルーシユ「俺の見せた奇跡……お気に召してくれたかな？」

デス・ゴツド「ま、魔王！鬼、悪魔、死神!!?」

死神はお前だろ。

一夏「すげえ……！すごすぎるぜ、あいつ！」

五飛「復活早々にやってくれるな……」

シモン「戦局に風穴をぶち開ける！あいつ、ドリルみたいな奴だぜ！」

ロザリー「で、でも、ヤバくねえか、あいつ！」

クリス「う、うん……！絶対にあいつ……いい人じゃない！」

アンジュ「そう？目的のためなら手段を選ばない奴って嫌いじゃないけど」

真上「同感だ」

海道「面白え奴じゃねえかよ、あいつ！」

サリア「わ、わかった……。あのルルーシュという男……アンジュに似ているんだ……」

ヴィヴィアン「確かに！」

ヒイロ「……来るぞ」

すると、現れたのは魔神軍団を引き連れたザ・フルとオルレアンだった。

ミツヒデ「ノブか！」

ノブナガ「苦戦を強いられているようだな、デス・ゴッド」

デス・ゴッド「そうだ！私には破壊王、お前がいたのだったな！」

ジャンヌ「あなたが隠していた残りの軍団も連れてきてあげたわよ」

デス・ゴッド「よくやった！破壊王、その力でエクスクロスと魔王を倒せ！」

ノブナガ「承知した……だが、俺が討ち取るのは……お前だ！」
すると、ザ・フールの周りに雷が発生した。

ノブナガ「轟くこと、雷の如し！」

雷はノブナガ達が連れてきた魔神部隊を一掃した。

デス・ゴツド「な、何ー!?？」

ノブナガ「フン、これが最強の軍だと？片腹痛い！」

デス・ゴツド「裏切る気か、破壊王!?？」

ノブナガ「何か忘れてはいないか？俺は破壊王……お前も破壊される定めだったのだ」

九郎「ど、どうなってるんだよ!?？」

ルルーシユ「敵を騙すのは味方から……流石は天地を取りかけたオダ・ノブナガだ」

ノブナガ「ようやく、真の自分を取り戻したか、魔王」

ルルーシユ「あなたもそれを望んでいたようだな、破壊王」

ミツヒデ「ノブ……お前は……」

ノブナガ「……言つたはずだ、俺は乱が好きだ。俺は殺す事しかできないと。だが、この地はお前のいるべき地ではない、ミツ」

ミツヒデ「私を試したのか……異界の地でも戦えるのか……」

ノブナガ「ドアクダーを打ち取れば、お前達は元の地へと帰る事が出来る…。ならば、俺はお前達の邪魔をする者を殺し、破壊する。構わないか？」

ヒデヨシ「へへっ！それで充分だぜ、ノブ様！」

ミツヒデ「真に不器用な男だ、お前は」

ジャンヌ「それがノブナガだもの。ノブナガ、私もあなたと共に行くわ」

ノブナガ「フツ、是非もない」

アルト「け、結局、ノブナガ達は味方となったのか？」

ノブナガ「そちらがそう思うのならな」

零「心強いぜ、ノブナガ！」

ノブナガ「零、お前の強さをしかと見せて貰った…。今度は俺の番だ！」

デス・ゴツド「お、おのれおのれえ！許さんぞ、魔王！破壊王！」

ルルーシュ「フ…。二人の王がお前達の下に着くはずないだろう？」

ノブナガ「お前は俺達を受け入れられない器なのだ…。大人しく、討たれる！」

しんのすけ「ホッホーイ！後は死神さんを倒すだけだゾ！」

ルルーシュ「エクスクロス全軍は俺に続け！ここで奴を叩く！」

ノブナガ「先陣はこのオダ・ノブナガがきる！後に続け！」

C・C・「フ…。世捨の人を気取るより、こちらの方がマシだな、ルルーシュ」

ミツヒデ「やはり、お前は凄いやつだ。ノブ……」
俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 ノブナガVS初戦闘〉

ノブナガ「平和の世の為に殺すか……。我ながら随分、浅ましい考えだが……この地で選んだ我が道だ！貫き通す！オダ・ノブナガ、推して参る！」

〈戦闘会話 ジャンヌVS初戦闘〉

ジャンヌ「(伝わってきたよ、不器用だけど優しいノブナガの意思が……)私も、ノブナガを……そして、ヒテヨシやミツヒデ……エクスクロスを守る為に戦う！」

〈戦闘会話 ノブナガVSデス・ゴッド〉

デス・ゴッド「こうなれば、お前をここで倒し、お前の首をドアクター様に差し出してやる！」

ノブナガ「よかろう。だが、そう簡単に俺の首を持ち出せると思うな！」

デス・ゴッド「な、何だと!?？」

ノブナガ「お前が持ち出そうとしている首は破壊王の首だ……。災いを招いたとしても俺は知らぬぞ！」

デス・ゴッド「ど、どちらも災いではないか、この破壊王！」

〈戦闘会話〉 ジャンヌVS初戦闘〉

デス・ゴッド「ジャンヌ・カグヤ・ランマル！裏切った事を後悔させてやる！」

ジャンヌ「名前を一緒にしないで！私の名はジャンヌ・カグヤ・ダルクであり、モリ・ランマルよ！それから私はあなたを裏切つてなどいない！」

デス・ゴッド「罪を認めないとは……。何という悪女!?？」

ジャンヌ「罪……。？そんなもの、以前から持つているわ。私はノブナガの盾になると決めたの、あなたなんて眼中にないわ！」

デス・ゴッド「こ、これが女の本性……。怖い！」

〈戦闘会話〉 海道VSデス・ゴッド〉

真上「ほう。俺達の前でドクロの機体に乗るのはいい度胸をしているじゃないか」

デス・ゴッド「ドクロ対決に勝つのはこのデス・ゴッド様だ！死神の私は負けん！」

海道「死神？だったら、お前が相手してんのは地獄だぜ？」

デス・ゴッド「お前達は地獄の使いだとも言いたいのか！」

海道「あ？何言ってるやがる？」

真上「全く、バカはこれだから困るな……」

デス・ゴッド「何？？」

海道・真上「俺達が地獄だ！！？」

残りの魔神軍団を倒し、スケルバットはデスサイズヘルのビームシザーズによって、斬り裂かれた……。

デス・ゴッド「う、うう……！じ、地獄で待っているぞ！！？」

スケルバットは爆発したが、デス・ゴッドは脱出した。

海道「此処はすでに地獄だったのによ！」

デュオ「何が地獄で待ってるだ……。ちやつかり脱出して行くせによ」

アーニー「ですが、これで第二界層のボスを撃破で、二つ目の秘宝も手に入れました

！」

レイ「この調子で界層ボスを倒していこう」

戦いが終わり、俺達は戦闘態勢を解いた。

零「ノブナガ、お前の生き様……しつかりと見せてもらったぜ」

ノブナガ「フツ……まだまだ、俺はこんなものではない！」

ヒデオシ「そう言うと思つたぜ、ノブ様！」

ミツヒデ「ノブ……話がある。勿論、ランマルもだ」

ジャンヌ「ええ、わかつたわ。ミツヒデ……」

ノブナガ「フハハ……是非もなし」

ワタル「ルルーシユさんもありがとう。おかげでデス・ゴツドを倒せたよ」

ルルーシユ「礼を言うのは俺の方だ、救世主クン。君の言葉が、俺に戦う心を思い出させてくれたよ」

C・C「いつになく素直だな、ルルーシユ。これも真実の鏡とやらのおかげかな」

ルルーシユ「久々に会つたというのに、お前も変わらんな、C・C。」

C・C「過程はどうであれ、再び時は動き出した。これから、どうするかはお前次第だ」

ルルーシユ「……」

スザク「ルルーシユ……」

ルルーシユ「スザク、みんな……。俺の話を聞いてくれ」

俺達はそれぞれ艦に戻り、Nーノーチラス号に集まった。

ルルーシユ「……」

カレン「ルルーシユ……」

ルルーシユ「弁解も釈明もしない。今、此処にいる俺が全てだ」

シヨウ「俺は……。初めてお前と言う男の心に触れたように思える」

ルルーシユ「……」

シヨウ「黒の騎士団のゼロ……。そして、皇帝ルルーシユ……。そのどちらもお前であり、お前でなかったんだな……」

ルルーシユ「シヨウ・ザマ……。神聖ブリタニア帝国と手を組んだドレイク・ルフトと

戦った聖戦士……」

シヨウ「……」

ルルーシユ「ヒイロ・ユイ……。黒の騎士団の盟友にして、皇帝ルルーシユの敵……」

ヒイロ「……」

ルルーシユ「ゼクス・マーキス……。黒の騎士団の敵であったOZの戦士にして皇帝ルルーシユと同じ志を持っていた者……」

ゼクス「…」

ルルーシユ「そして、スザク、カレンをはじめとする俺の友であり、同志であり、敵であり、共犯者であつた者達…」

スザク「…」

カレン「…」

ルルーシユ「その全てと、こうして再び会う事になるとは思わなかつた」

C・C「では聞かせてもらおうか、ルルーシユ。お前の進む先を」

ルルーシユ「…わからない…」

デュオ「おいおい…！世界の進む先を決めた人間が今更、何言つてやがる!!?」

ヒイロ「黙っている、デュオ」

ルルーシユ「…アル・ワースで目覚めた俺は目的も生きる意味も失い、全てから逃げていた…」

スザク「でも、今は違うよね？」

ルルーシユ「少なくとも生きる意味がないのなら、それを探す気にはなつた…」

カレン「それでいいんだよ、ルルーシユ！せつかく拾つた生命なら、あんたは生きるべきだよ！」

ルルーシユ「許されるのならばな…」

シヨウ「お前が、そんな殊勝な人間だとは思えないけどな」

ルルーシユ「俺を討たなくていいのか、聖戦士？」

シヨウ「一度死んだ人間は殺せない……。お前に集まった怨念と憎しみは浄化されたしな」

ルルーシユ「……すまん」

チャム「頭を下げる先が違うよ！」

ルルーシユ「そうだな。わびるのならば、世界中の人間にすべきだろう」

マーベル「ならば、世界に対して償いをなさい」

C・C・「その世界とは、お前が生きている世界全てだろうな」

ルルーシユ「つまり、このアル・ワースにもか……」

スザク「僕も手伝うよ、ルルーシユ。だって、僕は君と同じく世界の敵を討つ者……ゼロなのだから」

ルルーシユ「……わかったよ、スザク……。当面、それが俺の生きる意味だ。俺は何者でもない者……。ゼロとして人々のために戦おう」

カレン「お帰りなさい、ルルーシユ」

ルルーシユ「まだだ、カレン……。世界が俺を許す前に俺は俺自身を許してはいない。だから、戦おう……。この生命をゼロに捧げて」

カレン「わかったよ。でも、もうあたし達の前では仮面を被らないでね。あんたは、あんたなんだから」

ジエレミア「これで私の進む先も決まった」

アーニヤ「…」

ジエレミア「アーニヤ…。私のわがままに付き合ってくれて済まない。これからは君の好きにしてくれ」

アーニヤ「私も…。ルルーシユと行く。それが私の進む先でもあるから」

ジエレミア「了解だ、アーニヤ。君の選択を尊重しよう」

アーニヤ「何だろう、この感じ…。胸の奥が…。おかしい…」

ノブナガ「償い…。そして、生きる意味…。か…」

ヒデオシ「ノブ様はどうやって償うんだ？」

ノブナガ「俺に償いなど必要ではない。俺は自身の歩んだ道を後悔していない」

ヒデオシ「そっか！そうだよな！」

ミツヒデ「では、お前の生きる意味とはなんだ？」

ノブナガ「俺が此処にいる事が生きる意味だ…。消滅したと思われた俺は生きてい

る…。ならば、為すべきことをするだけだ」

ミツヒデ「為すべき事？」

ノブナガ「天地統一は俺の夢であった……。だが、一度死した俺には届かん夢だ……。それをお前が平和という道で成し遂げてくれる」

ミツヒデ「ノブ……」

ノブナガ「違うか？」

ミツヒデ「いや、違わない。では、ノブ……。私が平和な世を作る為にも……。お前には劍の稽古を共にやつてもらいたいのだが……。よいか？」

ノブナガ「是非もなし」

ジャンヌ「ノブナガ……。ミツヒデ……」

ヒデヨシ「ジャンヌちゃんはどうすんだ？」

ジャンヌ「決まっているわよ。ノブナガがエクスクロスにいるというのなら、私もエクスクロスにいるわ」

ノブナガ「済まない、ランマル」

ジャンヌ「この地ではジャンヌと呼んで……。私の、一度は捨て去ろうとした本当の名前を……」

ノブナガ「わかった。これからもよろしく頼むぞ、ジャンヌ」

ジャンヌ「ええ！」

ヒミコ「あちしからもよろしくと言っておくのだ！あちしは忍部 ヒミコなのだ！」

ノブナガ「ヒミコ… か…」

ヒミコ「ん？ 具合でも悪いのか？」

ノブナガ「いや、何でもない…。(ヒミコ… 見守っていてくれ…。俺の進むべき道を…)」

ヒルダ「回りくどい連中だけ。要するにあたし達と一緒に来るって事だろ？」

ロザリー「でも、ヒルダ…。あいつら、ヤバくねえか…」

クリス「う、うん…。敵に回したくないけど、味方にいても怖い…」

ヴィヴィアン「やる事メチャクチャで、自分勝手な所がアンジュそっくりだしね！」

アンジュ「ヴィヴィアン！ それ、どういう意味よ！」

ヴィヴィアン「そこでクイズです！ どういう意味でしょう！」

すると、エレクトラさんが走ってきた…。

なんか、慌ててるな…。

エレクトラ「ここにアンジュはいる？」

アンジュ「私に何か用？」

エレクトラ「落ち着いて聞いてね…。今、ミスルギ皇国から発表があったのだけ

ど…。元皇女シルヴィア・斑鳩・ミスルギが三日後に処刑される事が発表になったわ」

アンジュ「シルヴィアが…！」

サラ「誰、それ？」

ティア「あれ？皇女って言わなかった？」

レナ「ええ言ったわ。もしかして、アンジュの姉妹？」

アンジュ「(何故：？どうしてシルヴィアが処刑されるの：？それは：？姉である私がノーマだったから：：なの：：)」

フェルト「大変です！」

すると今度はフェルトが焦った表情で走ってきた。

刹那「どうした、フェルト？」

フェルト「送った者は不明ですが、たった今、トレミーにミスルギ皇国に囚われている人達のリストが送られてきたんです！」

ヒュウガ「な、何だと!?!？」

俺達は急いでそのリストを見た：：。

千冬「やはり、更識姉、篠ノ之、オルコツト、ボーデヴィツヒは囚われているようだな」

一夏「何とかして助けださないと！」

アル「お、おい、九郎！この名を見ろ！」

九郎「霸道 瑠璃：：?!? な、何?!? 何で姫さんがミスルギに：：！」

アルト「ランカ・リー……。やつぱりな。必ず助け出す……。ランカを……。！そして、シエリル……。 お前と必ず会わせてやる！」

シエリル「ラン、カ……。 ちゃ……。 ん……」

一方、俺達の艦の近くで話している人物が二人いた。

? 「いいのですか？あのデータを簡単に渡してしまつて……」

? 2 「ああ。あのデータは俺には必要ないからな。俺のすべき事は奴の復活を阻止する事だ」

? 「ですが、エクスクロスと協力すれば簡単に防げるのでは？」

? 2 「いや、奴は俺達の世界の問題だ……。 俺がカタをつける。それよりもあの部隊にはお前の兄がいるのだろう？行かないのか？」

? 「今はまだ……。 僕にもやるべき事があるのでまだ兄さんにも会えませんが……。(彼

女は必ずこの世界の何処かに居る……。 待つていてください、シャーリーさん……)」

? 2 「(奴の復活は必ず阻止する……。 あいつの……。 ヒーローの代わりに俺が……。！)」

「オルガ・イツカだ。」

俺達はミスルギ皇国の廊下で話し合っていた。

三日月「……」

シノ「自らの妹を処刑するなんてよ……！」

明弘「狂ってやがる……！」

名瀬「どうするんだ、オルガ？見限るなら今だぜ？」

オルガ「それは……」

すると、そこへブレラが歩いてきた。

ブレラ「鉄華団か……」

ラフタ「どうしたの、ブレラ？」

ブレラ「実はミスルギ皇国に捕らえていた人物のリストが何者かによって奪われた」

ハツシユ「は……？」

アミダ「犯人は？」

三日月「ヒイロってやつ？」

ブレラ「わからない……。だが、このデータがエクスクロスに渡っていると……」
アストン「あいつらが来るな……」

ブレラ「だが、これは好機なのかもしれない」

ビスケット「え!!?それってどういう……?」

オルガ「お前まさか、ミスルギを裏切る気か!!?」

ブレラ「声が大きいい。そもそも俺はあいつらに従うつもりなどなかった……。鉄華
団……お前達はとうするんだ?」

オルガ「……」

三日月「オルガ……。オルガがどんな道に進もうと俺はオルガについていくよ」

オルガ「ミカ……。フツ。俺達の進む道……。そんなもん決まってるんだろ!!?」

俺は笑顔で皆に言い放った……。

第27話 決別

「アンジュよ。」

私は今、Nーノーチラス号のブリッジでジル司令と通信で話をしているわ。

アンジュ「…」

ジル「妹の処刑の報にシヨックを受けているようだな」

アンジュ「わざわざ、ネモ船長を通して私に連絡してきた意味は？」

ジル「モモカ・荻野目という人間に心当たりは？」

アンジュ「…私の筆頭侍女だった子よ」

ジル「そのモモカから、アルゼナルにメッセージが届いた」

アンジュ「モモカから…？」

ジル「アルゼナルに渡りをつけるだけでも相当の苦勞をしただろうな…。そちらにメッセージを転送する。それを見て、どう判断するかはお前の自由だ」

アンジュ「…」

エレクトラ「アルゼナルからの映像、受信しました」

ネモ船長「再生しろ」

そして、映像が再生された……

モモカ『……アンジュリーゼ様にこの映像が届く事を祈ります』

アンジュ「モモカ……」

モモカ『これは、シルヴィア様がジュリオ様に捕らえられる直前に私に託されたものです。シルヴィア様からアンジュリーゼ様へのメッセージ……お聞きください』

シルヴィア『お姉様……』

アンジュ「シルヴィア……」

シルヴィア『もうすぐ私はジュリオお兄様によって処刑される事になるでしょう……ですが、私は少しも怖くはありません。だって、この胸にはいつだってお姉様がいるのですから。ただ最後に一目だけでもお姉様にお会いしたかった……』

シルヴィア……！

シルヴィア『さようなら、お姉様……。シルヴィアはお姉様の妹に産まれて幸せでした……』

アンジュ「……」

モモカ『申し訳ありません、アンジュリーゼ様……。モモカはどうしようもなく無力です。シルヴィア様のお声をアンジュリーゼ様にお届けする事が、このモモカに出来る事

の精一杯です……。さようなら、アンジュリーゼ様……。シルヴィア様と共に遠い地でお元気である事を祈っております』

此処で映像が途切れた……。

アンジュ「シルヴィア……モモカ……」

二人の為にも……。やってやるわよ！

―新垣 零だ。

俺達、数名はN―ノーチラス号の格納庫でアンジュが来るのを待つていた。

アンジュ「……」

そして、アンジュは来た。

ホープス「お待ちしておりました、アンジュ様」

アンジュ「私の脱走を手伝ってくれる物好きがこんなにもいるとはね……」

ゼロ「そう言うなよ、アンジュ！」

レナ「妹が大切だって気持ち……。わかるから」

しんのすけ「妹は大切なんだゾ！オラも前にひまを遠い星に連れていかれて、寂しく

なつたんだゾ」

ひまわり「たいやく〜！」

カレン「とりあえず、あんたはアイーダさんの指示で周辺の偵察に出るって事になつてる」

ジャン「ヴィルキスには燃料を積めるだけ積んでおきましたから」

リョーコ「どこまで行けるかは、おめえ次第だ」

イズミ「頑張つてきなよ」

ワタル「僕達……出来るのは、これくらいだけどアンジュさんの無事を祈ってるから」
アンジュ「ありがとうね、ワタル。その気持ちだけで十分よ」

ノブナガ「妹……か……」

ミツヒデ「イチ姫様の事を考えているのか？」

ノブナガ「……あいつが死に、破壊王である俺が生きているのは酷な話だな……」

ヒデオシ「ちがうだろ、ノブ様！あんたはそのイチ姫様の分まで生きなくちやダメなんだろ!?？」

ノブナガ「そうだな……」

ジャンヌ「アンジュ……大丈夫かな……？っ！」

ノブナガ「どうした、ジャンヌ!?？」

ジャンヌ「こ、これは……！そんな事つて……！」

ミツヒデ「天啓を見たのか？」

ジャンヌ「うん……」

ヒデヨシ「どんな内容だったんだ？」

ジャンヌ「うん、実は……」

ミツヒデ「な、何?!？」

ノブナガ「……そうか」

……ノブナガ達、何話してるんだ？

アンジュ「それに意外な面子がいたのも嬉しかったわ」

ディオ「……送られてきたメッセーじは俺達も見た。妹は……歩けないのか？」

アンジュ「小さい頃……シルヴィアは私と一緒に馬に乗っていた時に落馬して、それ

からずっと車椅子なの……。だから、私には……あの子を助ける義務がある」

ディオ「俺と同じだな」

アンジュ「え……」

ディオ「俺の妹もゾギリアの攻撃で歩けなくなつた……。俺達の部隊が、もう少し早く妹の住む街に着いていれば、そんな事にはならなかつただろうに……。だから、俺はゾギリアを必ず潰すと誓つた……」

アンジュ「話してくれてありがとう、デオ。頑張ってくるよ」

零「無茶だけはすんなよ」

アンジュ「あなたには言われたくないわ」

零「フツ、それもそうか……応援してるからな」

アンジュ「ええ、零。あなたとはこれからもいい友達関係を築けそうね」

零「同感だ」

ナディア「でも……本当に無理はしないでね」

アンジュ「……」

ナディア「おかしな事言った？」

アンジュ「ううん……。そう言えば、あなたとは何度もケンカしたな……って思っ

て……」

ナディア「そういう最後の別れみたいな事は言わないで」

ユイ「私の知るいつも強気で自信満々なアンジュを見せて！」

アンジュ「自信なんてないよ……。でも、必ずやってみせるから」

ユイ「帰ってくるのを待ってるから」

ホープス「ここにいらっしやらない方々もそれぞれのやり方でアンジュ様を支援してくださいます。ヴィルキスに資材や物資を回してくれた方……各セクションに根

回ししてくれた方……上位者へ進言してくれた方……多数の励ましの言葉も預かっております」

シン「必ず、戻ってきてくれ、アンジュ。妹を失う悲しみは……辛いからな……」

アンジュ「わかったわ、シン」

ステラ「約束だね！」

ルナマリア「破ったら針を千本飲ますわよ」

アンジュ「それは遠慮したいわ」

アマリ「ホープス……。あなたも頑張ってください」

ホープス「お任せください。全身全霊でアンジュ様をサポートするつもりです」

アンジュ「じゃあ行こうか、ホープス」

すると、ヒルダ達、第一中隊が歩いてきた。

ヒルダ「……どいつもこいつも脱走を甘く見やがってよ……」

アンジュ「ヒルダ……」

ロザリー「わかってんのかよ、イタ姫？一応、今はあたし達……任務中なんだぜ」

クリス「それを放棄して勝手な行動をしたら、脱走扱いになるに決まってる」

アンジュ「この前はアクシデントって事で不問になったけど、今回は極刑になるかもね……」

ヒルダ「そいつは噂だけだ。本当は全財産と任務拒否権の没収だよ」

アンジユ「詳しいじゃない、ヒルダ」

エルシャ「アンジユちゃんとヴィヴィちゃんが行方不明の間にヒルダちゃんも脱走したのよ」

サリア「もつとも逮捕されて結果は、さっきのヒルダの言った通りの事になったのだけどね」

アンジユ「そんな事があつたんだ……」

ヒルダ「それでも行くのか？」

アンジユ「当然よ」

零「つてか、ヒルダ。お前は何で脱走なんかしたんだよ？」

ヒルダ「……会いたい人がいたんだよ……」

マサオ「会いたい人……？」

ヒルダ「あたしを生んだ人だ」

……！ヒルダ……。

ヴィヴィアン「(生んだ人…… どういう事?)」

エルシャ「(お母さん…… 事よ)」

ヴィヴィアン「(何だ、それ……?)」

アンジユ「その人に会えたの？」

ヒルダ「まあな……。だが娘と言ったって、あたしはノーマだ……。あの人にとっては化け物が現れたのと同じ扱いだったさ……」

アンジユ「……」

零「実の娘を……。ふざけんよ……！」

朗利「差別以上の問題だろ、これは……！」

ヒルダ「だから、言つとく。お前がどれだけ意気込んだって、世界はお前を裏切るに決まってるからな」

アンジユ「……優しいんだね、ヒルダは。私を氣遣つてくれて」

ヒルダ「ば、バカ！お前……。何言つてやがる！」

零「……ヒルダ……」

ヒルダ「れ、零！笑つてんじゃねえぞ、こいつ！」

零「痛つ!?？照れを隠すために殴んなよ!?？」

ヒルダ「照れてねえ！」

アンジユ「でも、大丈夫……。私は絶対にシルヴィアを救い出してみせるから」

ルルーシュ「……まったく……。脱法するんなら、もう少しひっそりとやれ」

うわ、厄介なのが来た……！

ノブナガ「ルルーシュか：：」

アンジュ「エクスクロス参謀様としては私を止めに来たわけ？ だったら、覚悟してもらう。邪魔をするのなら、たとえ仲間だろうと私は：：」

ルルーシュ「お前の決意を挫くことは出来ないのはとづくに理解している」

ヴィヴィアン「さっすが、似た者同士！ 男アンジュ！」

サリア「黙ってなさい、ヴィヴィアン：：！」

アンジュ「じゃあ、何：：？ 柄にもなく激励に来たの？」

ルルーシュ「もう少し役に立つものを持ってきてやった。エクスクロスを挙げてのミスルギ皇国突撃作戦、並びに捕らえられている者の救出プランだ」

アンジュ「え：：」

ルルーシュ「プランの発案はネモ船長だ。それを俺が実施計画にまとめた。ランカ・リー、覇道、瑠璃、IS組にはそれぞれ、アルト、九郎、一夏達に任せる」

九郎「おうよ！」

一夏「絶対に箒達を助け出す！」

アルト「待っている：：。ランカ！」

アンジュ「あなた：：。意外にいい奴なのね」

ルルーシュ「誤解するな。これは救出作戦を中心に考えただけで、お前の分はおまけ

のようなものだ！決してお前の境遇に同情したとか、そう言ったものでは……」

C・C・「よく言う。自室でアンジュの妹を助け出すプランをいくつも練り直していったのにな」

ルルーシュ「だ、黙れ、魔女！」

C・C・「魔女は口が軽いのだよ」

ルルーシュ「……くっ……！」

ネネ「ルルーシュさん、照れてるの？」

ボーちゃん「真実の鏡の効果は、まだ続いている……」

トオル「ちよ、ちよつと二人とも！」

ルルーシュ「とにかくだ……！作戦として承認された以上、もうここそそする必要はない！30分後には、ブリーフィングを開始する！各自、アンジュ、そして囚われている者を助けたいのなら、作戦遂行に全力を尽くせ！」

青葉「了解！」

アンジュ「ありがとう、みんな……」

サリア「いつになく素直ね」

ロザリー「いつもそんなんなら、ちつとは可愛げもあるんだけどな！」

アンジュ「うるさいよ……！」

ヒルダ「精々頑張んな、イタ姫。失敗した時の泣きつ面を楽しみにしてるよ」
アンジュ「そんな顔をあなたに見せたくない…。っただけでさらにやる気が出るよ。
(待っていてね、シルヴィア：。私が：。ううん、私達があなたを助けに行くから：。)」
俺達はミスルギ皇国へ向かった…。

第27話 決別

ーアニエス・ベルジユです。

ミスルギ皇国に着いた僕達はそれぞれの作戦位置に着いた。

シルヴィア皇女救出にはアマリさんとアンジュさんが、ランカさん救出にはアルト君とヒデオシさんが、瑠璃さん救出には大十字さんとアルさん、ミツヒデさんが、IS組救出には一夏君、鈴さん、シャルロットさん、簪さん、千冬さんが向かった…。

ホープスは先陣を切り、ミスルギ皇国に乗り込み、零君とメルさん、ノブナガさん、ジャンヌさんは敵の気を惹かすため動き、ルルーシュ君とスザク君もある作戦の為に動き出していた。

レーネ「湾岸の防衛部隊を突破！Nーノーチラス号は、そのまま敵部隊を足止めして
います！」

フェルト「ミスルギ皇国の皇宮、視界に入ります！」

倉光「シグナスとプロトレマイオスは、このまま前進！」

スメラギ「上陸後、すぐに機動部隊を展開！」

アネツサ「各機、発進準備を願います！」

僕達は出撃した……。

ケロロ「出撃できるのは、これだけでありますか……！」

夏美「メガファウナやナデシコCの方にも機体を回してるから、仕方ないでしょ!!？」

グレンファイヤー「しかしよ、思い切った作戦を考えるよな、あのルルーシュって奴
！」

ジャンボット「マナの国に侵入した後はメガファウナとナデシコCを陽動に使い、残
り三艦はミスルギ皇国に直行……」

ミラーナイト「さらにNーノーチラス号が防衛部隊を食い止めている間に皇宮を
目指すとは……」

リディ「こうもスムーズに、ここまで来られたのはネモ船長が提示したルートがあつ
たからだって聞く」

マリィダ「あの人は異界人だったな？」

マサキ「ああ。あのオツサン……。相変わらず、独自の情報源を持つてやがるぜ」

ジエレミア「今、皇宮突入部隊、各自から連絡が来た。協力者と接触したとの事」
カンナム「こちらの相手も来たよ！」

現れたのはキャピタル・アーミーとマリィメイアのモビルスーツ、ゾギリアのヴァリアンサー部隊だった。

サヤ「キャピタル・アーミーにゾギリアにマリィメイア軍……」

アイィダ「ミスルギに従う者が勢揃いですね」

刹那「待て、鉄華団とリボンズ・アルマーク達がいな……！」

ガエリオ「今回の件で彼等が出ないとは……いささかおかしいな……」

ユイ「あのヨハン君という子もいません！」

ニール「当然ながら、IS組も出て来て来ないようだな！」

ロツクオン「彼女達の救出は一夏達に任せよう！」

舞人「あの円盤みたいなものは？」

アンドレイ「あれは対人用兵器のはずだが、ここで出して来た以上、機動兵器とも戦えるようにチューンされているだろう」

シーブック「面倒だな……！」

ヒルダ「ハ……！おもしれえ！片っ端から叩き落としてやるぜ！」

万丈「突入部隊を援護する為にも派手に行くぞ！」

ワタル「よおし！思い切り暴れて、この国を支配しているドアクダー軍団を引きずり出してやる！」

僕は動き出した……。

―新垣 零だ。

それぞれの救出並びに突入部隊の俺達はミスルギ皇国にの皇宮付近まで来ていた。

モモカ「アンジュリーゼ様！」

アンジュ「出迎えありがとう、モモカ」

モモカ「髪の毛、お切りになられたのですね……。それに雰囲気も少し変わられたよう
な……」

アンジュ「少しじゃないと思うけどね」

モモカ「でも、アンジュリーゼ様はアンジュリーゼ様です。モモカの忠誠は変わりま
せん」

アンジュ「言っておくわね、モモカ。今、あなたの前にいるのはミスルギの皇女アン

ジュリーゼじゃないから。私はアンジュ……。アルゼナルのパラメール第一中隊所属、エクスクロスの只のアンジュだから」

モモカ「かしこまりました、アンジュリーゼ様！」

全然わかってねえ……。

アンジュ「……もういいわ、それで」

アマリ「急ぎましょう、アンジュさん。周囲が陽動を仕掛けている間に妹さんを救い出します」

モモカ「こちらの方々は？」

アンジュ「今話したのは魔徒教団の術士よ。個人的に協力してくれてる。それと彼等はエクスクロスの仲間よ」

モモカ「教団が助けに来てくれたわけではないのですね……」

アンジュ「法と秩序の番人を名乗りながら、連中はミスルギのノーマ差別や侵略行為は見逃しているものね」

……確かに、変だな。

アンジュ「もつとも、私も……。自分がノーマだと発覚する前は彼女達を人間扱いしてなかったけど……」

アマリ「ホープスが先行しています。私達も行きましょう」

ミツヒデ「私達もそれぞれの救出に動こう」

九郎「そうだな！」

ヒデヨシ「ぜってえにランカちゃんって子を救い出そうぜ、アルト！」

アルト「ああ！」

零「皇宮内にいる敵は俺達がどうにかする」

メル「皆さんは出来るだけ早く、救出作戦を完了させてください」

アマリ「零君、気をつけてね……」

零「お前もな」

一夏「千冬姉は生身で大丈夫か？」

千冬「お前は私を舐めているのか、一夏？」

鈴「千冬さんは生身でも化物クラスよ」

千冬「今何と言った？」

鈴「ヒイイイイイツ!!？」

シャルロット「此処に箒達がいるんだね……」

簪「待っててね……お姉ちゃん……！」

ノブナガ「では、向かうでしょう」

ジャンヌ「モモカさん、途中までの案内をよろしく！」

モモカ「では、アンジュリーゼ様、術士様、皆様！案内はお任せください！」
アンジュ「（待っていてね、シルヴィア…！今、行くから！）」

ジャンヌ「（私が天啓で見たあの出来事が本当の事なら…アンジュは…どうしたら、いいの…？）」

俺達は救出作戦を開始した…。

ーアニエス・ベルジュです。

敵部隊との戦闘を開始しようとした時だった。

ジュリオ「そこまでだ、暴徒達め！我が名はジュリオ・飛鳥・ミスルギ！この神聖ミスルギ皇国の皇帝にして、マナの国々の盟主でもある！」

倉光「あれが噂のジュリオ陛下か…。（この無意味に芝居めいた登場の仕方…。クリム大尉の言う無能が服を着て歩いている評も的外れとは言えないね…）」

ジュリオ「我が臣民達に告げる！私はアル・ワースの秩序のためにも暴徒に容赦はない！我等のミスルギに土足で踏み込んだ者達に今こそ正義の鉄槌を下そう！」

ユイ「変わらないですね、ジュリオ陛下」

ジュリオ「その声は…… エナストリアのユインシエル陛下!?? 何故、暴徒部隊に……!??」

ユイ「見ての通りです」

ジュリオ「ユインシエル陛下! あなたは別です、我が妃となってくれますのであれば、あなたをお助けしよう!」

ユイ「絶対に嫌です!!?」

ジュリオ「な、何と……!??」

ユイ「私はあなたの事が大嫌いです! 昔から結婚を何度も迫って来て…… 気味が悪いんです!!?」

ジュリオ「気味が悪い……!??」

サラ「う、うわく…… ユイちゃん言っちゃった……」

ティア「ユイちゃん、激おこだね!」

アオイ「存分にやりなさい、ユイ!」

ナル「女の敵は見逃してはダメです!」

レナ「あなたには妹に何度も手を出そうとした報いは受けてもらおう」

ジュリオ「な、ならば…… その暴徒部隊を鎮圧し…… 自力でユインシエル陛下を我が妃に……!」

ユイ「私だって、選んで恋愛をします！貴方なんかとは一生、結婚しません!!？」
レナ「しつこい男ね…。粉々にしてあげるから」

マサキ「怖いっての、レナ…。」

レーネ「いかがします、艦長？」

倉光「協力関係にあるアメリカ軍への義理もあれば、これまで一方的に攻撃されてきた事に対するお礼もある。向こうを黙らせるためにも一度、こちらの力を示す必要もあると判断する。良いですか、スメラギさん」

スメラギ「構いません。口で言っても聞かない相手ですから。行くわよ、みんな！
アレルヤ「了解！」

ソーマ「街や市民に危害を加えるつもりはないけど、ミスルギに着き、悪事を働くのなら叩くわ…。！」

シモン「この国は変わっちゃった…。少なくとも前の王様は周りを侵略するなんて事はしなかった…。行こうぜ、みんな！悪党に成り下がったミスルギの土手っ腹に風穴を開けてやれ！」

僕は戦闘を開始した…。

数分後、敵部隊の壊滅を完了する。

ミレイナ「敵部隊の壊滅を確認したです！」

ラツセ「気を抜くなよ、まだ何か出てくる可能性があるからな！」

倉光「突入部隊が戻るまで、我々は、警戒態勢ままで待機だ」

待機しているが一向にみんなが戻る気配がない……。

ベルリ「まだなの、みんな！」

エイサツプ「まさか、みんなに何かあつたんじゃ……？？」

エレボス「みんなに限ってそれはないと思うけど……」

シヨウ「あの皇宮で、いったい何が起こっているんだ……」

ー大十字 九郎だ。

俺は零達と別れた後、記された姫さんが捕らえられている場所までアルとミツヒデと共に向かっていた。

九郎「邪魔だ！」

ミツヒデ「成敗！」

俺とミツヒデの攻撃にミスルギの兵士達は倒れて行く……。

アル「彼女がいるのはこの部屋だぞ、九郎！」

俺達は急いで部屋に入ると牢屋に入れられていた姫さんがいた。

九郎「姫さん！」

瑠璃「大十字さん：．来てくれると信じていました」

九郎「もう大丈夫だからな」

俺はクトウグアとイタクア撃ち、牢屋を破壊して、姫さんを救出した。

だが、部屋に大量の兵士達が入って来た。

ミスルギ兵士「逃がさんぞ、暴徒共！」

ミツヒデ「まだこれだけの兵士がいたのか！」

九郎「くそッ！姫さんを守りながら戦うのは：．！」

だが、兵士達は何者かに撃たれ、倒れて行く。

全ての兵士が倒れると俺達の目の前には二人の少年と女がいた。

シノ「大丈夫かよ、エクスクロス」

アミダ「間一髪だったね」

九郎「お、お前ら、鉄華団か？？」

アル「敵である汝らが何故、妾達を：．」

アストン「団長の指示だ：．。 出口へ案内する」

シノ「早く行くぜ！」

ミツヒデ「今は従うしか道はなさそうだ」

仕方ねえ……行くぞ！

俺達は鉄華団の奴らについていった……。

―織斑 一夏だ。

俺と千冬姉、鈴、シャル、簪は箒達を助ける為に動いていた。

そして、ついに箒達が捕らえられている部屋までたどり着き、入ると牢屋の中に箒達
がいた。

一夏「みんな、無事か!?？」

箒「一夏！」

セシリア「鈴さん！」

ラウラ「シャルロット……来てくれたのだな！」

楯無「簪ちゃん……良かった、無事だったのね」

簪「お姉ちゃんも無事で良かった」

千冬「一夏、牢屋を破壊しろ！」

一夏「了解、ハアアツ！」

俺は雪平二型で牢屋を破壊し、箒達を解放した。

外に出て、逃げようとした俺達の前に男の人と女の人 came。

ラウラ「明弘！ラフタ！」

明弘「こちらの敵は殲滅した」

ラフタ「早く逃げましょう！」

一夏「あんたら、鉄華団のメンバーだろ!? 何で俺達を……！」

楯無「一夏君、今は逃げましょう！」

一夏「わ、わかりました！」

俺達は明弘さんとラフタさんの案内の下、出口へ急いだ……。

一早乙女 アルトだ。

俺とヒデヨシはランカが捕らえられている部屋に入った。

アルト「ランカ！」

ランカ「アルト君……」

アルト「怪我はないな!? 今助けてやる! ヒデオシ、頼む!」

ヒデオシ「任せろ、うっきやー!」

ヒデオシはトンフアーで牢屋を破壊し、ランカを外に出したが、ミスルギの兵士達は数名が入って来た。

ヒデオシ「ちっ! まだいやがんのかよ!」

アルト「ランカ、逃げるぞ!」

ランカ「……いいよ、アルト君……」

アルト「良いって……何言ってるんだよ、お前!」

ランカ「私なんか助けなくて良いよ……」

アルト「ら、ランカ……!?」

ヒデオシ「アルト、前だ!」

アルト「うおっ!?」

ランカ「きやつ!?」

ランカとの話に夢中になり、目の前に兵士が迫っていた事に気が付かず、ヒデオシよ声で何とか避けたがランカの手を離してしまった。

そして、ランカはミスルギの兵士に捕らえられてしまう。

アルト「ランカ、待ってる！今…！」

ランカ「アルト君…。アルト君が握る手は私じゃないでしょ？」

アルト「さつきから何言ってるんだ?!？」

ランカ「…私じゃなく、シエリルさんの側にいてあげて…あなたが愛するシエリルさんの側に…」

アルト「ランカ、お前…！」

すると、俺達のいた部屋の天井が崩れ始めた。

俺達は廊下に出るが、ランカが兵士達に引つ張られて行く。

アルト「ランカ！」

ヒデヨシ「もうダメだ、逃げるぞ！アルト！」

アルト「だが、ランカが！」

ブレラ「良い加減にしろ、アルト！」

そこへ、ブレラが駆けつけた…。

ランカ「お兄ちゃん…！」

ブレラ「此処は退くぞ！」

アルト「何言ってるんだよ?!？ランカが…ランカが目の前にいるんだぞ！」

ブレラ「お前…！」

ランカ「アルト君、大好きだよ……。さよなら……」

そのまま、俺達と兵士達の間にも崩れた天井が落ち、先へ進めなくなってしまうた……。
アルト「ら、ランカ！」

ヒデオシ「もうまずい！おい、最短で外に出れるルートはないのか？？」

ブレラ「案内する、行くぞ、アルト！」

アルト「離せよ、ブレラ！俺はランカを助けるんだよ！」

ブレラ「今では無理だ！」

アルト「……！くそッ……ランカあああッ！！？」

クソがッ……！

ー新垣 零だ。

俺達は周りの兵士を薙ぎ倒していく。

零「フンッ！」

俺はバスタードモードの力で兵士達を殴り飛ばした……。

なんか、最近……生身でもバスタードモードの力を使える様になつたんだよな……。

メル「……（零さんの力が強くなってきている……どうして、零さんはこれ程までの力

を……？」

零「大方片付いたな……」

ノブナガ「そうだな……」

ジャンヌ「……」

零「ジャンヌ……？どうしたんだ？」

ノブナガ「ジャンヌが天啓と呼ばれる未来予知を見れる事は話したな？」

メル「はい……」

ノブナガ「ジャンヌは見たんだ……今回の出来事、天啓を……」

零「どんな内容だったんだ……？」

ジャンヌ「実は……」

俺とメルはジャンヌの話聞いて、目を見開いた。

な、何だよ、それは……！

メル「それが人間のする事なのですか……？！？」

ノブナガ「急いでアンジュ達の下へと向かうぞ！」

零「ああ！」

アンジュ、アマリ、ホープス……無事でいてくれ……！

ーアンジュよ。

私はモモカとアマリと共にシルヴィアの元まで急いでいた。

ミスルギ兵士「何もしても止める！これ以上、奴等を先に進ませるな！」

ミスルギ兵士達が銃を撃ってくる……！

アマリ「申し訳ありませんが、ドグマを使わせていただきます！光の矢よ、舞いなさい！IMPETUS！」

光の矢がミスルギ兵士達を倒していく……。

ミスルギ兵士「バカな……。何故……魔徒教団が……ミスルギに介入を……」

そのまま、ミスルギ兵士達は倒れていった……。

アマリ「教団は関係ありません……。私は一人の人間として、行動するのみです……。

アンジュさん！こちらは沈黙させました！急いでください！」

アンジュ「わかつている！」

ホープス「アンジュ様！この先にある広場にシルヴィア様らしき方がいるようですよ！」

アマリ「アンジュさん、モモカさん！ここは私一人で食い止めます！」

アンジュ「恩に着るよ、アマリ！」

モモカ「行きましょう、アンジュリーゼ様！」

アンジュ「シルヴィア！今、行くからね！」

私とモモカは広場に入った……。

モモカ「ひ、広場が、こんな事になっているなんて……」

アンジュ「暗くて、よく見えないけど…… 処刑場のつもり……？」

…… 車椅子の音…… もしかして！

シルヴィア「アンジュリーゼお姉様！」

アンジュ「シルヴィア！無事なのね！」

シルヴィア「来てくださったのですね……！お姉様！」

アンジュ「妹のためだもの、当然でしょ！さあ逃げるわよ！私の背中に乗って！」

シルヴィア「アンジュリーゼお姉様…… 死になさい！」

え……
!!?

？「伏せろ、アンジュ！」

私は何者かに助けられた……。

それよりも、シルヴィアがナイフを…… !!?

アンジュ「シルヴィア……！何を…… !!？」

シルヴィア「余計な邪魔が入らなければ、このナイフで化け物を殺せたのに……！」

アンジュ「シルヴィア……！」

シルヴィア「馴れ馴れしく呼ばないで！あなたなんて姉でも何でもありません！この化け物！どうして……！どうして生まれてきたんですか……？」

アンジュ「シル……ヴィア……」

やめて……。

シルヴィア「あなたさえ生まれまてこなければ、お父様も、お母様も、お兄様も、わたくしも！みんな……みんな幸せだった……。あなたがいなければ……わたくしが歩けなくなる事もなかった……！お母様が死ぬ事もなかった……！あなたが全部奪ったんです！全部壊したんです！お母様を返して」

やめて……！

シルヴィア「この化け物！この化け物！大っ嫌い！」

やめてえええつ！！？

すると、そこへ仮面を被ったルルーシュと零、メル、ノブナガ、ジャンヌ……そして、三人の男が現れた。

―新垣 零だ。

俺達は途中で一緒に行く事となった鉄華団団長のオルガと三日月、ハツシュに案内され、広場に着いた。

零「遅かったか……！」

ジャンヌ「アンジユ！大丈夫？？」

ゼロ（ルルーシュ）「そこまでにしろ。これ以上は聞くに耐えん」

私を助けてくれたスザクが私を立たせてくれた……。

スザク「立てるか、アンジユ？」

アンジユ「スザク……。それにあつちの仮面はルルーシュ……零達も……」

ゼロ（ルルーシュ）「悪に対峙する時の俺は、一個の人間ではない。ゼロという記号だ」

シルヴィア「悪？？？化け物を退治しようとした私を悪だと言うの……！」

メル「化け物……？？？アンジユはあなたと実の姉なのですよ……？」

シルヴィア「だから、何だと言うの！この人はノーマ……化け物じゃない！」

零「クズが……！」

ジャンヌ「酷い……」

ノブナガ「これが人の業そのものか……。オルガ・イツカ。案内ご苦労だった」

オルガ「実の家族を化け物呼ばわりとはな……」

アンジュ「こいつら、鉄華団の…！一体どうして…」

三日月「話は後だ」

ゼロ（ルルーシュ）「アンジュ宛のメッセージを見た時から気付いていた。悲しみを装う裏にドス黒い怒りと悲しみが渦巻いていたのを」

アンジュ「あなた…こうなる事を知っていて、スザクを用意させていたの？」

ゼロ（ルルーシュ）「確信を得たのはジャンヌの未来予知を聞いてからだ。ジャンヌは君に話そうとしたが、君に真実を認識してもらうためにこのようなやり方をした事は詫びる」

ジャンヌ「ごめんなさい、アンジュ…」

シルヴィア「何なのよ、あなたは!?？」

ゼロ（ルルーシュ）「人の醜さを散々見てきたおかげで俺は肉親の情さえも信じなくなつた…」

ゼロ（ルルーシュ）「そして、今回の件で世の中には生命を懸けて信じられる妹もいれば、信じるに値しない妹もいる事を知つた」

ノブナガ「お前は人という名の皮を被つた魔だ…」

シルヴィア「私が魔ですって…!?？」

すると、ある人物が歩いてきた…。

ジュリオ「：。 貴様という男のせいで私の描いた筋書きは台無しだよ。。。だが、絶望にくれた化け物の表情が見られたのは良しとしよう」

アンジュ「ジュリオ。。。お兄様。。。？」

ジュリオ「無様な姿だな。落ちぶれ果てた皇女殿下の哀れな末路に相応しい」
メル「あなたがジュリオ陛下ですか。。。！」

スザク「この男がミスルギ皇国の皇帝。。。！つまりは戦いの元凶！」

ノブナガ「いや。。。違う。。。この男は、その器ではない。。。」

ジャンヌ「え。。。」

ジュリオ「まあいい。。。どうせ、お前達は袋のネズミ。。。邪魔者共々、私の用意したステージに上がってもらおう」

アンジュ「ステージ。。。？？」

ハツシユ「何だ、それは。。。？」

ジュリオ「鉄華団。。。私達を裏切るのだな？」

オルガ「人として死んだあんたらにこれ以上従う気はねえんだよ！」

ジュリオ「では、彼等と共にステージに上がるがいい。。。灯りをつけろ、リイザ」
リイザ「かしこまりました」

沢山の人達が入ってきた。。。？

…！兵士じゃない…！あの人達は…！

ノブナガ「この国の民か…」

市民「あれが16年の間、我々を騙っていたアンジュリーゼか！」

市民2「いや、もうアンジュリーゼはちない！あそこにいるのは薄汚いノーマだ！」

アキホ「つるせ！絞首台のノーマをつるせ！」

市民「つるせ！」

何だよ…何なんだよ、こいつら…！

スザク「こんなにたくさんの方がいたのか…！」

零「狂ってるなんてもんじゃねえ…！」

オルガ「…」

モモカ「ア、アンジュリーゼ様のご学友のアキホさんいる…！」

ゼロ（ルルーシュ）「ジュリオ・飛鳥・ミスルギ…。貴様、アンジュを捕え、処刑する様を見世物にするつもりだったか…！」

ジュリオ「その通り！臣民には、それを見る権利がある！」

シルヴィア「それに、この化け物を辱めなければ、わたくしの気が済みません！」

モモカ「シルヴィア様！何故…何故、こんなひどい事を…！」

シルヴィア「ひどい…？このノーマが…汚らわしく暴力的で反社会的な化け物が

わたくしのお姉様だったのですよ？それ以上にひどい事が、この世にあつて？」

零「てめえ……！」

アンジュ「……」

シルヴィア「謝りなさい！私がノーマだから悪いんです。ごめんなさいって！」

アキホ「シルヴィア様の言う通りよ！」

臣民の奴等の言葉……。ユイを信じていたエナストリアとは違いすぎる……！

モモカ「アンジュリーゼ様……」

ジュリオ「感謝しているよ、モモカ」

モモカ「え……」

ジュリオ「私達に断罪の機会を与えてくれた事を。洗礼の儀でアンジュリーゼの正体を暴いたのは私だ」

アンジュ「……」

ジュリオ「フフ…… 16年もの間、皇室に巣くっていた害虫はようやく駆除された。後はドラゴンに食い殺されたという報告を待つだけ……」と思っていたが、それも待てなくなつたのでね……。そこでだ、モモカ……。シルヴィアと共に、このステージを考え、お前に手伝ってもらつたんだよ」

モモカ「！」

ジュリオ「そうでなければ、一介の侍女が世界の果てに追放されたノーマに連絡を取る手段などあるわけないだろう？ 踊らされているとも知らず、シルヴィアのために戦うお前達の必死な姿……。実に見ものだった」

モモカ「そんな……。そんな……！」

ジャンヌ「アンジュとシルヴィアを助けたいというモモカの思いまで踏みこむなんて……！」

ジュリオ「ノーマを守ろうとしたバカな皇后は死に、国民を欺いた愚かな皇帝は処刑された！」

アンジュ「お母様、お父様……」

ジュリオ「皇家の血を引く忌まわしきノーマ、アンジュリーゼ！ お前の断罪を以て、皇家の粛清は完了する！ 今日より、この国は生まれ変わるのだ！ 神聖ミスルギ皇国として！ 初代神聖皇帝ジュリオ一世が宣言する！ 今日より、ノーマとその仲間をこの場で処刑する！」

スザク「お前は……。最低の人間だ」

オルガ「この外道が……！」

ゼロ（ルルーシュ）「その下劣さ……。悪という言葉さえもお前には足りない」

ジュリオ「何とでも言うがいい！ 暴徒の言葉など、この私の耳には届かぬ！」

アンジュ「…」

モモカ「どうして…！どうして、アンジュリーゼ様だけが…こんなひどい目に…」

ジュリオ「決まっているだろう？あの女がノーマだからだ」

零「俺からしたらお前の方が化け物だ…！」

ジュリオ「何だと?!？」

零「忠誠を誓う人の想いまで踏みにしり、大勢で罵り…お前ら、それでも人間かよ！」

シルヴィア「黙りなさい…！」

シルヴィアは鞭で俺を殴ってきた。

零「ぐっ…?!？」

アンジュ「零！」

シルヴィア「何も知らない、異界人が口を挟まないで！」

零「ぐはっ?!？」

アンジュ「零…もうやめて！」

ジュリオ「フフ…実にいい顔だ、アンジュリーゼ」

アンジュ「モモカ…あなたやエクスクロスの人達はこの国の人間とは違う…」

零なんて、私のせいで傷ついている……。差別や偏見……。ノーマだとか人間だとか関係なく、私を受け入れてくれた……。それに比べて……」

アキホ「つるせ！絞首台にノーマをつるせ！」

市民「つるせ！」

市民2「つるせ！」

シルヴィア「この……。この……！」

零「ぐっ？がっ？ごはっ？？」

くそっ！こいつ、人の身体をバチバチと……！

メル「も、もうやめてください！零さんが死んでしまいます！」

シルヴィア「この様な分ならず屋は死ねばいいんです！」

零「がアアッ？？」

アンジュ「これが……。平和と正義を愛するミスルギ皇国の民……。？豚よ……。！こいつ等みんな……。言葉の通じない醜くて無能な豚共よ！こんな連中を生かすために……。私達ノーマはドラゴンと……。！」

ジュリオ「黙れ、ノーマめ！」

アンジュ「！」

アンジュが……。歌っている……。？

リイザ「これは……歌……？」

ジュリオ「永遠語り……。ミスルギ皇国の皇家に代々伝わる歌……」

シルヴィア「それはお母様の歌よ！ノーマの分際で汚さないで！」

アンジュの歌に反応し、シルヴィアの鞭攻撃は止まった……。

ハツシユ「大丈夫ですか？」

零「ありがとな……」

ハツシユと三日月が俺を支えてくれた……。

アンジュ「お母様……。あなたが、この歌を私に教えてくれた日の事を昨日の様に思い出します……。お母様には私に光の加護があらん事を願ってくれた……。でも……私は……」

ジュリオ「いいだろう、化け物め！その歌と共に死すがいい！」

ゼロ（ルルーシユ）「フ……。フフフフ……。ハハハハハ！」

ジュリオ「貴様、何がおかしい!?？」

ノブナガ「やはり、貴様は王の器ではないな……」

ジュリオ「何だと!?？」

ゼロ（ルルーシユ）「詰めが甘いどころか、勝手に勝ったつもりになっているのが、あまりにおかしくて……。罨である事を知っていた俺が何の準備もせずに、ここに来て

いると思ったか？」

ジュリオ「何っ!?？」

爆発が起きた……計算通りだ……!

ジュリオ「うおっ!」

リイザ「ジュリオ様! 皇宮内の各所に爆発物が仕掛けられているようです!」

ジュリオ「か、仮面の男と侍! お前達の仕業か!」

ノブナガ「その通りだ」

ゼロ(ルルーシュ)「ただ、時限装置のタイミングが遅かったおかげで貴様のつまらん話を聞かねばならなかったのは失敗したがな」

ノブナガ「零もよき演出であった」

零「時間稼ぎにしても……結構いてえんだぞ」

ゼロ(ルルーシュ)「すまない、よく耐えてくれた」

モモカ「で、でも…… やりすぎでは?」

ゼロ(ルルーシュ)「ここまで腐りきった国ならば徹底的に破壊するしかあるまい」

オルガ「フ……フハハ!…… 気に入ったぜ、ゼロ、ノブナガ!」

三日月「鉄華団よりの大胆な作戦だね」

ジュリオ「貴様らはー!!?」

ゼロ（ルルーシユ）「覚えておくがいい、無能な男よ！我が名はゼロ！アル・ワースに巣くう悪はこの私が潰す！」

ノブナガ「我は破壊王、オダ・ノブナガなり！腐りきった国は俺が破壊する！」

スザク「立つんだ、アンジユ！僕が先導する！彼女を頼んだよ、ジャンヌ！」

ジャンヌ「ええ！」

アンジユ「…」

スザク「アンジユ！」

シルヴィア「逃さない！」

シルヴィアはアンジユに鞭攻撃を…!??

アンジユ「！」

零「アンジユ！」

オルガ「危ねえ！…グアツ!?？」

オルガがアンジユを庇い、鞭攻撃を背中で受けた。

アンジユ「あなた…」

ハツシユ「団長！」

オルガ「へへっ…大丈夫みたいだな…」

シルヴィア「よ、よくも邪魔を！」

三日月「おい」

シルヴィア「ヒツ：：？？」

三日月「お前、オルガに何した？」

いつの間にか三日月はシルヴィアの前にいて、シルヴィアの首元を掴み、締め上げながら持ち上げる。

シルヴィア「ア：：ガッ：：！」

三日月「無能な妹なら殺してもいいよね、オルガ：：」

よ、容赦ねえな：：三日月：：。

シルヴィア「じ、じにだく：：ない：：！」

三日月「死にたくない？お前は零を殺そうとしただろ」

シルヴィア「い：：や：：！」

ミスルギ兵士「シルヴィア様から離れろ！」

ミスルギの兵士が三日月に銃を撃ち、三日月は逃げる為に舌打ちをしながらシルヴィアを離した。

アを離した。

シルヴィア「げほっ！げほっ！」

三日月「：：覚えていろ、お前は必ず殺すから」

シルヴィア「あ、あああつ：：！」

オルガ「俺なら大丈夫だ、ミカ！」

ジャンヌ「行くわよ、アンジュ！」

アンジュ「徹底的に……破壊する……」

ジュリオ「こうなれば、あの女だけでも……！」

メル「アンジュさん！」

？「アンジュ！」

アンジュ「あなたは……！」

タスク「逃げるよ、アンジュ！」

アンジュ「タスク……！どうして、ここに……？」

タスク「ジルに頼まれたんだ。君がピンチになったら、助けてやってくれって」

アンジュ「ジルって……司令に……？」

タスク「事情は後で離す！とにかく今は逃げよう！」

アンジュ「その前に……タスク！何か武器、持ってない！」

タスク「シユリケンなら……」

零「いくつ持つてるんだ？」

タスク「二つだけ……」

アンジュ「借りるわよ！」

零「俺も借りるぜ！」

ジュリオ「おのれ、アンジュリーゼ！逃げられると思うなよ！」

シルヴィア「あなた達は絶対に逃さない！」

アンジュ「感謝してしますわ、お兄様。私の正体を暴いてくれて……。ありがとう、シルヴィア。薄汚い人間の本性を見せてくれて」

シルヴィア「ひ……！」

ジュリオ「こ、こいつらを逃がすな！殺しても構わん！」

アンジュ「さようなら、腐った国の家畜ども！」

アンジュの投げたシュリケンがジュリオの頬を掠めた。

零「やんじやねえか……。おい、シルヴィア」

シルヴィア「ひ、ヒツ……。!?？」

零「演技で受けたとはいえ、お前は散々傷つけたんだ……。肉体的にも精神的にもな……。その報いを受けやがれ!!？」

バスタードモードを発動させた俺はシュリケンを投げ、シュリケンはジュリオと同じく、シルヴィアの頬を掠め、壁にめり込んだ。

ジュリオ「ひあああああつ！」

シルヴィア「嫌あああああつ！」

リイザ「ジュリオ陛下、シルヴィア様！」

ジュリオ「い、痛い……！痛いよおとおおつ！！？」

シルヴィア「いや……嫌ああああつ！」

ざまあみやがれ！

俺達はその隙に逃げ出した……。

ーネモだ。

私はエレクトラとある部屋に向かっていた……。

そして部屋に入った。

エンブリヲ「珍客のご登場か」

ネモ船長「……」

エンブリヲ「久しぶりだね、あなたとは。少しお年を召されたかな？」

ネモ船長「お前は変わらん」

リボンズ「ほう、知り合いだったとはね」

サーシエス「感動のご対面ってわけじゃなさそうだな！」

エンブリヲ「そちらの女性は、君の娘さんかな？」

エレクトラ「…」

エンブリヲ「あなたに近い人間であるけど、娘ではないようだね。しかし、驚いたよ。あのエクスクロスなる連中を陽動に使い、あなた自身が乗り込んでくるとはね」

ネモ船長「こちら的手段を選んでいる余裕はない。ガーゴイルと組んで、何をするつもりだ？」

エンブリヲ「答える義務はないよ。彼の方は、あの時と目的は変わらないだろうけどね」

ネモ船長「そうか…」

エンブリヲ「もうお帰りかな？お茶ぐらい飲んでいったら、どうだい？」

ネモ船長「今日は挨拶に来たまでだ。どのみち、今の我々に出来ることはない」

リボンズ「よく理解できているじゃないか」

ネモ船長「だが、お前達とガーゴイルを我々は絶対に許さない」

サーシエス「挨拶と言うよりも宣戦布告だな！」

エンブリヲ「いいだろう、王よ。いずれ君と君の娘のブルーウォーターは貰い受けよう」

リボンズ「（ブルーウォーターを持つ少女が彼の娘…？ネモという男とエンブリヲ

はどういう関わりが……！」

ネモ船長「私の生命に代えてもお前の企み…… 阻止してみせる」

エンブリヲ「フフ…… 楽しみが一つ増えたよ」

私達はノーノーチラス号へ急いだ……。

―新垣 零だ。

俺達はそれぞれの機体に乗し、モモカはゼルガードに、オルガはバルバトスルプスに乗った。

それと同時に千冬さんを担いだ白式、甲龍、ラファール・リヴァイヴ、打鉄式、デュランダル、ミツヒデを乗せたゴ・クウ、デモンベインが出て来た。

さらにその後からはルシファー、四機のIS、五機のモビルスーツが出て来た。

明弘「お前ら、無事だったか！」

シノ「当然だろ！」

オルガ「急いでこの場を退くぞ！」

スザク「アマリさん！モモカさんを頼みます！」

アマリ「任せてください！ゼルガードの操縦席ならば、女の子一人ぐらゐは余裕で入

れますから！」

モモカ「よろしくお願いします、術士様」

ホープス「ご安心を。モモカ様は我々が守りますので」

アマリ「ホープス：。。あなたには、後で話があります。。。零君も」

零「。。。ああ」

ホープス「かしこまりました。まずは、ここからの脱出を考えましょう」

ジュリエッタ「鉄華団のモビルスーツがどうして!?!」

三日月「味方になったから。。。ただ、それだけ」

ガエリオ「心強いよ、三日月」

三日月「そっちもね、ガエリオ」

青葉「一夏、友達を救えたんだな！」

一夏「ああ！みんなのおかげだ！」

竜馬「九郎、そっちはどうだ!?!」

九郎「無事に救い出せたぜ！」

ベルリ「アルトの方は、ランカって子を救えたの!?!」

アルト「すまない。。。ランカは救い出せなかった。。。俺が弱いせいで。。。！」

金本「アルト。。。」

ブレラ「アルト、今は逃げる事に集中しろ」
アルト「くそッ！わかってるよ！」

カレン「アンジュ！妹さんは救えたの！？」
ルルーシュ「それについては、後で説明する」

ミツヒデ「気をつけろ！追っ手が来る！」

倉光「ネオ・アトランティスも出て来たか」

フェルト「N-1ノーチラス号と…もう一隻来ます！」
N-1ノーチラス号とハンマーヘッドという戦艦が来た。

アミダ「名瀬か！」

名瀬「遅くなつたな」

ビスケット「三日月！オルガをハンマーヘッドへ！」

三日月「わかった」

バルバトスルプスはオルガをハンマーヘッドまで運んだ。

その隙にデモンベイン、白式、ゴ・クウもそれぞれ瑠璃、千冬さん、ミツヒデを戦艦に運んだ。

エーコー「ご無事で何よりです、ネモ船長」

ネモ船長「留守番の間、ご苦労だった」

機関長「奴は？」

ネモ船長「昔と変わらぬ姿だった」

操舵長「どうします？ 皇宮に一発ぶち込んでやりますか？」

ネモ船長「無駄だ。まずは、この場を離脱する」

スメラギ「お出迎えありがとうございます、ネモ船長」

ネモ船長「倉光艦長、スメラギ戦術予報士。戦闘が長引けば、こちらが不利になります。今は脱出を優先しましょう」

エレクトラ「周囲の状況から判断して、4分以内にこの場を離脱しなければ、決定的な追撃を受ける事になります」

ネモ船長「聞いた通りだ、諸君！ 4分以内にシグナスとプロトレマイオス、ハンマーヘッド、N-1ノーチラス号はここを離脱する！ 各機は援護を！ 道を切り拓け！」

名瀬「オルガ、俺達も援護するぞ！」

オルガ「了解だ、兄貴！」

エレクトラ「離脱ルート、表示します！」

俺達の機体に離脱ルートのデータが送られて来た……

リチャード「あそこまで戦艦を誘導すればいいんだな！」

アマルガン「だが、これまでの借りもある！」

へべ「可能な限り、追っ手は叩き落とすよ！」

キキ「了解！」

アルト「……」

アンジュ「……」

ブレラ「アルト、戦う気がないのなら、下がれ」

アルト「俺は……戦う！次にランカを救い出すために……！」

ブレラ「……それを聞いただけでよしとする」

ルルーシュ「戦えるか、アンジュ？」

タスク「無理しないで、後退した方が……」

アンジュ「……私は戦う……。私が生きる事を否定する全てのものと……！」

モモカ「アンジュリーゼ様……」

ヒルダ「で、そっちのアーキバスに乗ってるのは誰だよ？」

タスク「俺はタスク……。ヴィルキスの……。アンジュの騎士だ」

サリア「もしかして、あたは……。！この前に見た、男のライダー……？」

ロザリー「それに騎士って、どういう事だよ……？」

タスク「話は後だ……。！今はアンジュを守って、この場を離脱する！」

アンジュ「助けはいらないから、タスク……」

タスク「でも……」

アンジュ「私の敵は私が倒す……！私が生きるために!!？」

俺達は離脱戦を開始した……。

〈戦闘会話 三日月VS初戦闘〉

三日月「オルガの進む道は俺の進む道……。俺はエクスクロスだろうと鉄華団として戦い続ける！」

〈戦闘会話 明弘VS初戦闘〉

明弘「これからは全力でやれる……。容赦はしないぞ！」

〈戦闘会話 シノVS初戦闘〉

シノ「もうここそこそこの必要はねえ！流星号の力を見せてやるぜ！」

〈戦闘会話 名瀬VS初戦闘〉

名瀬「オルガ、砲撃は頼む」

オルガ「わかりました!... ビスケット、不安か?」

ビスケット「ちよつとね...。でも、俺はオルガ達と進むって決めたんだ!」

名瀬「覚悟を決めたのならいい... ハンマーヘッド、攻撃開始だ!」

〈戦闘会話　アミダVS初戦闘〉

アミダ「ほらほら、来なよ!ミスルギの犬ども!あたしが相手をしてやるよ!」

〈戦闘会話　ラフタVS初戦闘〉

ラフタ「明弘だつてやつてるんだ!よーし!私も頑張るぞー!」

〈戦闘会話　ハッシュVS初戦闘〉

ハッシュ「俺達も宇宙ネズミだとかで差別されて来たけど... ここも人間の居場所じゃなく、ゴミ溜めだ!俺達が壊す...!」

〈戦闘会話　アストンVS初戦闘〉

アストン「今まで一緒に戦った仲だけど... 敵になるなら容赦はしないぞ!」

〈戦闘会話 箒VS初戦闘〉

箒「よくも私達を脅し、戦わせてくれたな…。この借りは返させてもらうぞ！」

〈戦闘会話 セシリアVS初戦闘〉

セシリア「もう慈悲もございませぬ…。遠慮なく撃ち抜きますわ！」

〈戦闘会話 ラウラVS初戦闘〉

ラウラ「覚悟しろ、嫁と私の仲を裂こうとした貴様らは万死に値する！」

〈戦闘会話 楯無VS初戦闘〉

楯無「可愛い妹と戦わせられた屈辱忘れないわよ…。今回は本気でいくわよ！」

〈戦闘会話 ブレラVS初戦闘〉

ブレラ「待っている、ランカ…。お前を助け出す…。アルトと一緒に…。」

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「…。こんな国、二度と来たくねえ…。！胸糞が悪すぎるんだよ！」

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

九郎「よっしゃあ！姫さんも救い出したし、後は逃げるだけだ！」

瑠璃「無理はしないでください、大十字さん！」

アル「油断はするなよ、九郎！」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「またみんなと戦える……。これだけで心強いぜ！よし、行くぜ！」

〈戦闘会話 アルトVS初戦闘〉

アルト「ランカ……。俺はお前に謝らないといけないかもしれないな……。その為にもこの場を乗り切ってやる！」

戦いの中で、シグナスが離脱ルートに入った。

レーネ「艦長……。！追撃部隊を振り切りました！」

倉光「シグナスは、ここで待機……。！砲台となって、NーNーチラス号とプロレマイ

オス、ハンマーヘッドを援護する！」

レーネ「了解です！」

次にハンマーヘッドも離脱ルートに入った。

ビスケット「ハンマーヘッド、離脱ルートに入りました！」

オルガ「まだまだ！Nーノーチラス号とプロトレマイオスを援護するぞ！」

名瀬「いい判断だ、オルガ！」

残りの追撃部隊も倒した。

エレクトラ「追撃部隊の壊滅を確認！」

ネモ船長「我々の目的は、この場の離脱だ。それが果たせられない場合は敗北する事になる。各員、それを忘れるな」

次にNーノーチラス号も離脱ルートに入った。

エレクトラ「Nーノーチラス号も追撃部隊を振り切りました！」

ネモ船長「残るプロトレマイオスは援護する！」

エレクトラ「了解！」

その後、すぐにプロトレマイオスを離脱ルートに入った。

レーネ「プトレマイオスも追撃部隊を振り切りました！」
スメラギ「すぐに逃げましょう！」

よし、これで……。

サーシエス「簡単に逃すとも思ってたんのかの!!?」

なっ!!? プトレマイオスの前にアルケーガンダムが現れただど!!?」

ニール「アリー・アル・サーシエスか！」

スメラギ「振り切って！」

ミレイナ「む、無理です！相手が早すぎるです！」

刹那「このままではトレミーが……！」

九郎「アル、姫さん……やるぞ！」

アル「!……おう！」

瑠璃「はい！」

デモンベインがアルケーガンダムの下まで移動した……。

九郎「姫さん、レムリア・インパクトを頼むぜ！」

瑠璃「わかりました、大十字さん。術式解凍、ナアカル・コード送信！」

アル「ぶちかませ、九郎！」

九郎「はあああああつ……！光射す世界に、汝等闇黒、凄まじう場所無し！渴かず、飢

えず、無に還れええっ！レムリアアア：：インパクトオオツ！！？」

アル「昇華ー！！？」

サーシエス「ば、バカなあああっ！！？」

レムリア・インパクトという技でアルケーガンダムを吹き飛ばしたが、既にデモンベインを取り囲むようにミスルギの部隊がいた。

メル「九郎さん！」

九郎「へっ、こんな数でデモンベインを止められると思うなー！！？」

九郎「レムリア・インパクトの連打版行くぜ！」

アル「それも悪くない！」

瑠璃「ナアカル・コードを送信！」

九郎「光射す世界に、汝等闇黒、凄まじう場所無し！渴かず、飢えず、無に還れええっ

！レムリアアア：：デイレイイイ：：インパクトオオツ！！？」

アル「昇華ー！！？」

マリーメイヤ軍「な、何だこの力はー！！？」

九郎「見たか！デモンベインの力を！」

デモンベインはレムリア・インパクトを周りの部隊に次々と撃ち込み、最後に部隊は一斉に爆発した……。

シモン「トンデモない威力だな、九郎！」

九郎「まだまだ、デモンベインのチカラはこんなもんじゃねえぜ！」

倉光「よし、今の内に離脱する。急ごう！」

アンジユ「(さようなら、ミスルギ皇国：私の故郷：。もう私に帰る場所はない：。この国は：私の敵だから：)」

戦艦に続き、俺達も撤退した：。

エンブリヲ「(フフフ：。面白い事になってきたよ：。それだけではない：。私はずっと求めていたものが見つかったかも知れない：)」

？「上機嫌だな、エンブリヲ」

エンブリヲ「君も得るものがあつただろう？標的とその仲間達を見る事が出来たのだから」

？「：。お前には感謝している」

エンブリヲ「それには及ばないさ。(今ここにある全ては私のために存在しているのだからね：。ウルトラマンキングの目を掻い潜り、ようやく出来た事なのだ：。失敗するつもりはない：)」

「アリエス・ベルジュです。」

僕達はミスルギ皇国から離脱した後、それぞれの艦へ戻り、Nーノーチラス号の格納庫に集まった。

アイーダ「…メガファウナから連絡が入り、向こうの無事も報告されたわ」

舞人「とりあえず、これで一安心ですね」

ワタル「でも、結局…ドアクダー軍団は出て来なかつたね」

シバラク「あれだけ大暴れしたのに奴等が出て来なかつたとなると…」

リュクス「ミスルギがドアクダーに支配されているという線はなさそうですね」

ゼロ「でも、そうだとしたら、ますますミスルギの戦略ってもんがわからねえぜ…

！

ジャンボット「異界人を帰還させる方法はともかく、ドアクダーと同じくらい悪い奴がミスルギのトップとしているのだろうな」

レイ「そいつが世界征服を企んでいるというわけか…」

トオル「ミスルギのトップ…あのジュリオという人の事ですね…」

しんのすけ「あの人…アンジュお姉さんのお兄ちゃんなんだよね…」

すると、アンジュが歩いてきた…。

アンジュ「気にしなくていいよ、しんのすけ。あんな奴は、兄でも家族でも何でもな

い」

エメラナ「アンジュ…」

セシリー「何て言えばいいか、わからないけど…」

アンジュ「そんな顔しないでよ。シルヴィアの事も、もう吹っ切ったから…」

モモカ「ですが…」

アンジュ「それよりいいの、モモカ？私に付き合うって事はミスルギを捨てる事になるのよ」

モモカ「どこまでもお供させていただきます。アンジュリーゼ様のお側が、このモモカの居場所ですのよ」

アンジュ「ありがとう…」

ヒルダ「強がりはみつともねえな、イタ姫」

アンジュ「ヒルダ…」

ヒルダ「早く泣き叫びなよ。それを見るのが、あたし達の楽しみなんだから」

アンジュ「残念だったわね、ヒルダ。あなたが警告してくれたおかげでそれ程のシヨックはなかったみたい。それに私…新しい目標が出来たから、泣いてる暇なんてないの」

ヒルダ「目標？」

アンジュ「生きる意味って言うてもいいわ」

ヴィヴィアン「それってエクスクロスで戦うことか？」

アンジュ「確かにノーマにあるのは戦いだけだから、それは当たらずとも遠からずね。でも戦いが終われば、存在する意義もなくなる。。要するに、この世界には最終的にノーマの居場所なんてものはないのよ」

サリア「仕方ないじゃない。。」

ヒルダ「それがノーマってもんだからな。。」

アンジュ「あなた達は、それでいいの？誰かが勝手に決めたルールに従って、一生負け犬として暮らすのがお望み？」

ヒルダ「けどよ。。」

アンジュ「まったく。。バカバカしくって笑えてくるわ。。！偏見と差別に凝り固まった愚民ども。。ノーマってだけでバカみたいに否定しか出来ない。。。マナが使えないのは、そんなにいけない事。。？違ってちゃ。。いけないの？全てが嘘っぱちなよ、あのミスルギって国は！家族とか。。友情とか。。絆なんて。。！ああーっ！」

ヒルダ「お、おい。。！」

ヴィヴィアン「アンジュが切れた！」

アンジュ「友情が素晴らしいとか、絆こそが美しいとか、見せかけの繁栄の中で平気

で口走ってた自分を殴りたくなつたわ！」

ヒルダ「お前……バカ？」

アンジュ「ほんと、バカよ！どいつもこいつもバカばかり！世界は腐ってるわ！……壊しちゃおつか、全部……？」

こ、壊す……！！？

クリス「ぜ、全部って……！！？」

ロザリー「世界をぶっ壊すって事か！！？」

エルシャ「それがアンジュちゃんの目標……」

サリア「アンジュの生きる意味……」

アンジュ「少なくともマナの国の中心にいるミスルギは潰す……！私を虐げ、辱め、貶めることしか出来ない世界なんて私から拒否してやる……！こんな……腹立たしくて、苛立たしくて、頭にくる世界……！」

オルガ「気に入つたぜ、アンジュ」

そこへ、鉄華団の少年達が来た。

シノ「世界をぶっ壊すか……面白い事を考えるな！」

ラフタ「否定されたんだもの、当然よ！」

アストン「奴等は痛い目を見ないと気が済まないだろうからな」

明弘「そうだな」

三日月「その気なら、俺達も協力するよ」

アンジユ「ありがとう、三日月」

ヒルダ「ふふふふふふ。ふふふふふふ。ははははは！ 気に入ったよ、イタ姫……いや、ア
ンジュ」

アンジユ「やる気になったみたいじゃない、ヒルダ」

ヒルダ「まあな……。お前のバカが、あたしにも伝染したみたいだよ。あたしもぶっ壊してやるよ！ 脱走したあたしを逮捕したポリ公共もこの世界のルールも何もかもな！」

ロザリー「あ、あたしもやるよ！ いつまでもドラゴンと戦わされるなんて真つ平御免だ！」

エルシャ「そうね……。アルゼナルの幼年部の子供達に未来や希望をあげたいし」

クリス「で、でも……」

サリア「落ち着いて、みんな！ アンジユの口車に乗っちゃダメよ！」

アンジユ「あなたでも止められないよ、サリア。このエクスクロスに来た事でみんな、自由の味を知っちゃったから。そうなるとエクスクロスがミスルギに追われているのは好都合……！ みんなの力を使えば、やってやれない事もない！」

アイーダ「私達を利用するつもり……？」

「アンジュ「あなた達だつて身にかかる火の粉は払わなきゃならないし、丁度いいじゃない」

アミダ「これは一本取られたね」

シン「俺もミスルギのやり方には腹が立つてる！協力するぜ、アンジュ！」

アルト「ミスルギにはまだランカがいる……壊すのはともかく、いずれ決着をつけなきゃならないだろうからな！」

九郎「どうせ放つておいても向こうが襲ってくるんなら、受けて立つてやろうぜ！」

瑠璃「私も協力させていただきます」

箒「私達もだ！」

一夏「いいのか？」

ラウラ「借りを返さなければ気が済まん」

楯無「という事よ、一夏君」

アンジュ「決まりね。みんな、これからもよろしく！まずは、あのイケ好かないジュリオを叩くよ……！」

すると、タスクという少年が来た。

タスク「……ミスルギのトップはあのジュリオ・飛鳥・ミスルギじゃないよ」

アンジュ「タスク……」

ヒルダ「そう言えば、お前……誰だよ？」

タスク「俺は……タスク。さっきも言った通り、アンジュの騎士だよ」
マサオ「騎士って……？」

ミラーナイト「その人を守る事を専任とする者って意味だと思います」

カレン「あんた……アンジュとどういう関係なの？」

タスク「一週間を一緒に寝泊まりした仲だよ」

嘘!!?

サリア「な、何ですって!!？」

ヒルダ「どういう事だよ、アンジュ!!？」

アンジュ「あなたに言われる筋合いはないわよ、ヒルダ！元はと言えば、あなたのおいなんだから！それより、タスク……。さっきのミスルギのトツプの話……。どういう意味よ？」

タスク「ミスルギの……。マナの国の本当の支配者の名前はエンブリヲ……」

アンジュ「エンブリヲ……」

タスク「俺は今日までジルの指示でミスルギの情報収集をしていた……。その中で、エンブリヲの名前も聞かされたんだ」

サリア「あなた……。司令の何なの？」

タスク「それは彼女の口から聞けばいい」

アンジュ「エンブリヲ……。それがミスルギの支配者……」

ルルーシユ「アンジュも心当たりがないようだな……」

アンジュ「……。ルルーシユ……。今回の作戦の発案者はネモなのよね……。？」

ルルーシユ「ああ……」

アンジュ「……。行ってくる」

ジャン「どこに行くんです、アンジュさん!?」

ナディア「まさか……！」

アンジュ「そのまさかよ。きつと、あの男は何かを知っている。それを確かめてくる」

ーアンジュよ。

そして、私はN-101号のブリッジに入った。

ネモ船長「……。それが無断でブリッジに入り込んだ理由か……」

アンジュ「私は、あなたの部下じゃない。雇い主として気に食わなければ、解雇にすればいい」

ネモ船長「そうだな……」

アンジュ「あなたとジルの間には明らかに何かの関係がある。そして、異界人でありながら、あなたはミスルギの地理に関して情報があつた」

ネモ船長「だから、そのエンブリヲなる者についての何かを知っていると聞きたいのか……」

アンジュ「その答えは？」

ネモ船長「君に話すことは無い」

アンジュ「いいわ。どうせ、そう言うのは予想していたから。だけど、はつきりさせておく。もし、そのエンブリヲがミスルギの支配者だとしたら……。私は、その男ごと、あの国を壊す……！」

ネモ船長「君の意思は理解した。それが私にとって利益となるのなら、協力しよう」
アンジュ「了解よ……。とりあえず、雇用の関係は続けられるみたいね」

ネモ船長「扉の向こうに隠れている者も、それでいいかな？」
すると、扉が開き、ジャンとナディアが入って来た……。

ジャン「……すみません。盗み聞きをするつもりはなかったんですが……」
ナディア「……」

ネモ船長「アンジュの事が心配だったようだな」

ナディア「それもあります……。そして、あなたがどう答えるかを知りたかつたんで

す」

ネモ船長「：：」

ナディア「いつも通りでしたね。そうやって、あなたは何も話してくれない：：」

ネモ船長「何と言われようと、これが私のやり方だ。(ナディア：：。お前のブルーウォーターを狙って、エンブリヲも動き出す：：。だが、お前は私が守る：：。父として：：。そして、王として：：)」

「アマリ・アクアマリンです。

私はホープスの作り出した空間でホープスと話をしようとしています。

ホープス「：：。お話とは何です、マスター？」

アマリ「あなたは：：。何のためにアンジュさんに協力したんです？」

ホープス「ご存知の通り、私が教団を脱走したのは、自由を得るためであり：：。また、その自由で知的好奇心を満たすためでもあります。今回のミスルギ侵入作戦は謎に包まれたミスルギ皇国の暗部を見られると思ったままです」

アマリ「嘘を言うのはやめてください。少なくとも、半分は偽りですよね」

ホープス「：：。とおっしゃられますと？」

アマリ「あなた… アンジュさんが妹に裏切られるのを知っていたんじゃないやありませんか？」

ホープス「それでしたら、ルルーシユ様、ノブナガ様達も同じです。私だけが責められるいわれはないのでは？」

アマリ「あの人達はアンジュさんのためにやった事で彼女を守るための算段もつけていました。でも、あなたは事の成り行きを面白半分で見物するためにアンジュさんに協力したのではないですか？」

ホープス「ご冗談を。そのような悪趣味な事を何故、私が？」

アマリ「その答えはあなたに聞くしかないでしょう」

ホープス「悲しくなりますよ。まさか、そのような目で私を見ていたとは」

アマリ「誤解でしたら、謝ります…。でも、ホープス…。私は、あなたの事がわからなくなってきました…。」

ホープス「あなたは今、怒りで混乱しているのです…。無茶ばかりをする零様に対する…。怒りでね…。」

アマリ「…。」

ーリボンズ・アルマークだよ。

エンブリヲが部屋を出た後、僕はある人物の下へ向かった。

リボンズ「気分はどうだい？クーデリア・藍那・バースタイン…」

クーデリア「…」

リボンズ「君もエンブリヲに花嫁候補として捕らえられたはずだね？逃げようとは思わないのかい？」

クーデリア「逃げずとも…必ず、三日月達が助けに来てくれます…」

？「だが、彼等はミスルギを発ったようですよ」

クーデリア「あ、あなたは…！」

リボンズ「君がここに来るなんて、珍しいね…。マクギリス・フェアルド」

マクギリス「彼女は私の世界の間人なのだから、当然だ」

クーデリア「どうして、あなたまでミスルギ皇国に協力するのですか！」

マクギリス「私は…知ってしまったのですよ。復讐をね…」

クーデリア「ふ、復讐…？！」

マクギリス「ええ、そうです…。(待っている、ガエリオ…。お前は私が必ず、殺

す…！)」

復讐か…。惨めだな…。

―新垣 零だ。

俺はN―ノーチラス号の医療室でメルにシルヴィアから受けた傷の治療をしてもらっていた。

メル「全く… 無茶すぎです！」

零「ごめんって… 痛っ!!？」

メル「我慢してください！」

いや、鬼か…。

治療が終わったのと同時にアマリが部屋に入ってきた。

零「アマリ… ? ホープスとの話は終わっ…。」

―パシン!

… え… ? 俺… ? アマリにビンタされたのか… ?

零「… 何すんだよ？」

アマリ「いい加減にして… !」

零「… ? 何だよ、ホープスとの話でイラついたから八つ当たりか？」

アマリ「そんなボロボロになってまで……どうして、あなたは無茶をするの!!?」
零「……それは……」

アマリ「……そうだね、あなたは私が心配していても何も思っていないのよね」
……あ?

アマリ「私達は違う世界の人間なのだから」

メル「アマリさん!!?」

メルの怒鳴り声と同時に俺は机を力強く叩き、立った。

零「……俺がお前の心配に気づいていないとでも思ったのか?」

メル「零さん……」

零「俺だって、お前を心配してんだ……そんな俺が気づかないわけないだろ!!? 自分ばかりが心配していると思うなよ!!?」

アマリ「……そんな事、わかってるわ! だけど、どうして零君が傷つくの!!?」

零「俺が傷つかなければアンジュがどうなっていたかもわからないとしてもか?」

アマリ「……!」

零「お前は俺が無事だったら、他の奴らは傷ついてもいいのか? アンジュが傷ついてもいいのかよ!!?」

アマリ「そんな事言っていないでしょ!!?」

零「遠回しにそう言ってるようなもんじゃねえか！」

メル「も、もうやめてください！二人共！」

メルが止めてきたが俺達は止まらない……。

零「お前はアンジュ達を仲間だと思ってるねえのかよ?!? あいつらがどうなつてもいいのかよ?!?」

アマリ「そんな事……！」

零「エクスクロスでみんなといて…… お前は何も感じなかったのかよ?!? 仲間としての感情を!!?」

それを言った俺の頬をまたアマリが叩き、俺はハツとなる。

怒りで気づいていなかったが、アマリの目元には涙が浮かんでいた……。

アマリ「私が…… 何も思っていないわけなんてないじゃない…… 酷いよ、零君……！」
そのまま、アマリは走り去ってしまった……。

メル「アマリさん！」

零「……」

メル「零さん……」

零「悪いな、メル……。ちよつと一人にさせてくれ」

メル「……はい……」

メルもこの部屋に出た後、俺は壁を殴りつけた。

零「違う：： 違う違う、違う!!? : : :」

俺は気づけば、涙を流しながら、何度か壁を殴り、その後、背中を壁につけて座り込んだ。 : : :
んだ : : :。

零「あんな事を言うつもりはなかったんだ : : : なのに俺は : : : 俺はあつ : : : !」

その後、俺は一人で泣き続けた : : :。あまりも泣いているであろうに : : :。俺は追いかける事が出来なかった : : :。

第28話 宇宙と大地と

「私はマスクだ。」

私はマスク部隊のみんなとミーティングをしていた。

マスク「…先日、ミスルギの皇宮を攻撃したエクスクロスは、まだマナの国の勢力内にいる」

マスク部隊隊員「…」

マスク部隊隊員2「…」

マスク「そして、ついに我々の隊に奴等を追撃する命令が下された。これはチャンスだ…！今こそ、我々の力をミスルギ皇国に示す時が来たのだ！出撃の前に私の真実を伝えよう。私はクンタラ出身だ」

マスク部隊隊員「え…」

マスク「私の隊の諸君達もクンタラ出身である事は知っている。ならば、我々が勝利する事でクンタラの地位は向上する！」

マスク部隊隊員「そうだ…！」

マスク部隊隊員2「我々の勝利は、クンタラの勝利だ！」

マスク「ノーマへの差別によって国家が成立しているミスルギ王国……。そのミスルギで、差別されるクンタラが栄光の道を歩む……。！痛快ではないか！それはいつかキャピタル・アーミーをも……。世界をも変えていく！そのために諸君等の力を私に貸して欲しい！」

隊員の皆は私に賛同してくれたようだ。

マニイ「(ルイン・リー……。私はあなたを追って、キャピタル・アーミーに入隊し、このアル・ワースに跳ばされた……。でも、後悔はしていない……。マスク大尉となったあなたの側において、あなたを助ける事が出来れば……。)」

バララ「随分と熱い目でマスクを見ているね」

マニイ「バララ中尉……。」

バララ「でも、残念……。マスクの視線は常に上を向いてるからね。そう言う男が必要としているのは戦える人間だよ、男も女も関係なくね」

マニイ「そんな事は中尉に言われなくてもわかっていきます」

バララ「本当に〜？」

マスク「出撃だ、バララ。準備しろ」

バララ「了解だよ、マスク……。じゃあ、マニイ……。行ってくるね」

マニイ「お気をつけて」

マスク「心配はいらんぞ、マニイ。今回の作戦は、他の部隊も参加する大がかりなものになる。さらに、その隊には我々のマックナイフとは別系統の最新鋭機が与えられているそうだ」

マニイ「それって… 強いのですか？」

マスク「噂では、クンパ大佐自らが手配した禁忌の技術で導入したものらしい」

マニイ「その禁忌の技術って何です？」

マスク「詳しい事は知らされていないが、我々の時代の人間が触れてはいけないものだと言われている。もともと、我々が元いた世界では各国がそれを秘密裏に導入し始めた事で戦乱が始まろうとしていたそうだがな。では、行ってくる。戦果を期待するがいい」

バララ「(さて… お手並みを拝見させてもらうよ、マスク…)」

―ベルリ・ゼナムだよ。

メガファウナの格納庫でみんなと話していた。

エル「…じゃあ、ベルリっていわゆるお坊ちゃんなんだね！」

ベルリ「まあね」

シーブツク「地球と宇宙をつなぐ最重要インフラである軌道エレベーターの運行長官の一人息子…」

ジユドー「つていうけど、あんまりお高くとまったところはないな」

青葉「同感…！大企業の御曹司つて、性格が悪いのが定番だつてのに」

ディオ「…悪かったな…」

ノレド「それがベルのいい所なんだけどね」

ルー「でも、私は納得できるな。ベルリの大らかさや率直さつて育ちの良さを感じるし」

ビーチャ「しかし、王族とか皇帝とか、この部隊つて偉そうな家の出身が多いな」

アルト「そのほとんどに元がつくけどな」

リデイ「(偉そうな家の出身…か…)」

マリーダ「…？」

ジユドー「ジャンク屋で自活していた俺から見れば、うらやましいもんだ」

ノレド「苦労してたんだね、ジユドー達つて」

ラライヤ「くろう… たいへん…」

ジユドー「ま… 宇宙世紀つてのは色々大変だったのは事実だ」

シーブック「そうだな…。人類の宇宙への進出は地球と宇宙の対立の歴史と言つてもいい」

マリィダ「世界は違えど、同感だな」

セシリー「ネモ船長はヒイロ達の世界を革命の世界と呼んでいたけど…。私達のは宇宙世紀は、戦争の世界つてところね」

ジユドー「戦争の世界… か…」

ベルリ「(宇宙世紀…。その言葉… どこかで聞いた事がある気がする…。前にハツパさんと話していた時に出て来たような…)」

ノレド「でも、宇宙つていいよね…。よくわからないけど、なんだかワクワクする」
エル「その軌道エレベーターつてやつを使つて、ノレド達の世界の人達は大気圏を突

破してたんだよな」

ビーチャ「で、いったい何のために宇宙に上がるんだ？」

ノレド「よくわからないけど、私達が使うフォトン・バッテリーは宇宙の人が作つて
いるんだつて。それを受け取つて、地上に下ろすのが、エレベーターの一番大事な役目
よ」

シーブック「じゃあ、宇宙空間で生活している人達もいるのか…」

ベルリ「と言つても、ほとんど接触がないから、どう言う人達が、どんな風に暮らしているかまではわからないんですけどね」

ライヤ「うちゅう…うちゅう…うちゅう…」

プル「どうしたの、ライヤ？」

エル「なんだか興奮してるみたいだけど…」

ノレド「今まで、こんな事なかったのに…」

セシリー「少し様子を見て、この状態が続くようならお医者様に診せた方がいいわね…」

ベルリ「(そう言えば、ライヤつて宇宙からGーセルフに乗ってやってきたんだよな…)」

ルー「…ところで、このアル・ワースの宇宙つてどうなってるの…？」

ベルリ「綺麗だったよ」

シモン「行つた事があるのか？」

シヨウ「一度だけな」

シモン「凄いな…。俺達は大地で生きる事で精一杯だったからな…。でも、獣の国では少しづつだけ、空の上…宇宙に対して関心が高まっているんだぜ。(周りは反

対していたけど、ロシウは強引に研究用の予算を取っていたわけ……」

ニア「宇宙……ですか……」

マリーダ「ニアも宇宙へ行ってみたいのか？」

ニア「はい……。天の光を、もつと近くで見たいと思う時があります」
シモン「きつと、いつかは行けるさ……。この大地が平和になればな……」

第28話 宇宙と大地と

―新垣 零だ。

マナの国を出ようとした俺達……。

その時だった。

ギゼラ「こちらを追ってくる部隊はキャピタル・アーミイのようです」

副長「もう少しでマナの国の勢力圏内を抜けるっていうのに……」

ドニエル「逃げ切れないのなら迎え撃つまでだ……！機動部隊を出せ！」

俺達が出撃した……。

アマリ「…」

ホープス「ご忠告差し上げます、マスター。意識が別の方向に向いている事はオドの収束を妨げます。あなたが自由を貫きたいのなら御身のためにも今は目の前の事に集中なさるべきでしょう」

アマリ「わかつています…。でも…」

ホープス「私への不信任は今では忘れてください。死にたくないのでしたらね。(…というよりも、零様との喧嘩が一番の原因なのでしようね)」

サリア「アマリとホープス…喧嘩したみたいね…」

ヒルダ「アマリを怒らせるなんて、あのクソオウム…大したもんだぜ…。なあ、零？」

零「…」

ヒルダ「お、おいおいシカトかよ…」

零「…い、いや…そうだな…」

し、しまった…。今は、アマリとの喧嘩の事は忘れよう…。忘れるんだ…！

ヒルダ「…？」

アキト「零君…？」

アイーダ「各機は警戒を…！アーミィが来るわよ！」

俺達の目の前にアーミーのモビルスーツ部隊とマスクの乗るマックナイフが来た。

ベルリ「あの目玉付き……！マスクのモビルスーツが来た！」

ジユドー「マスクつてベルリを追い回してるキャピタル・アーミーの奴か……！」

シーブツク「今回は編隊で来ている……！手強いな……！」

マスク「ベルリ・ゼナムも出て来たか……。これは個人的にも闘志がわくというものの……！」

バララ「マスクの獲物……。どの程度のものか、楽しみだね」

マスク「出撃前に言った通りだ！各機、この戦いに我々と同胞の未来が懸かっている事を忘れるな！追って援軍も来る……。だが、我々自身の手で勝利を掴むぞ！」

俺達は戦闘を開始した……。

バララという女が乗るマックナイフの攻撃をGーセルフは避けた。

アイーダ「アーミーの増援が来るわ……。！各機は迎撃を！」

エル「え……。ちよつと待って！」

リデイ「ま、まさか……。あれは……。！」

現れたモビルスーツ部隊にジユドー達が反応した……。

ジュード「あのモビルスーツは…!?」

バララ「マスク…！何か向こうは驚いてるみたいだよ！」

マスク「フ…無理はない。この新型が、名機である事は一目見てわかるだろうからな。生産性に優れたつつ、各局面でいかななく性能を発揮するバランスの良さ…。これが我等、キャピタル・アーミーの新型…。ジエガンだ！」

ジュード「何言ってるんだよ！あれはロンド・ベルの機体だ！」

マサキ「どういう意味だ、ジュード!?」

ジュード「あのジエガンってのは俺達の世界のモビルスーツなんだよ！」

リディ「どうして、宇宙世紀の機体をキャピタル・アーミーが…？」

シロ「確かにジュード達の機体と似てるニヤ」

クロ「でも、マスクは新型だって言ってるニヤ」

オルガ「アル・ワースに跳ばされたジエガンつてのをキャピタル・アーミーが捕獲して量産したって事か…？」

シロ「拾ったものを勝手に増やして自分達の新型だって言い張るとはロクなもんじゃねえな！」

ベルリ「そんな事までして、アーミーは…！どれだけ戦いを拡大させたいんだ」

マスク「何とでも言うがいい、ベルリ・ゼナム！お前の乗るGーセルフのような機体

がある限り、それに対抗する手段が必要になるのだよ！つまり、そのモビルスーツが…
そして、それにお前のような人間が乗るのが戦いの元凶そのものだと言う事を知るがい
い！」

俺達は戦闘を再開した…。

Gーアルケインの攻撃でバララの乗るマックナイフはダメージを受けた…。

バララ「やるじゃないか、エクスクロス…！想像以上だよ！」

マスク「後退しろ、バララ！後は私がやる！」

バララ「（マスクお気に入りのベルリ・ゼナムも見られたし、今日はここまででいい
か）」

バララのマックナイフは撤退した…。

Gーセルフもマックナイフに連続攻撃を与えた。

マスク「ちいつ！何たる失態か…！こうなれば、こちらも切り札を使うしかあるま

い！」

ジェガンと輸送機を出して来やがったか……！

ハツシユ「またジェガンつてのを出して来た……！」

マスク「ケルベス中尉……！例の機体は持つてきているか！」

ケルベス「調整に手間取ったが、何とかなつた！もうすぐ出せるはずだ！」

ベルリ「え……！あれに乗つてのつてケルベス教官殿……！」

輸送機から何かが出てきた……あれは……ガンダム……！！？」

マスク「来たか！我等の切り札、モンスターマシン……！！？」

しんのすけ「ガンダムだぞ！」

ケロロ「あ、あの機体は……！」

ジユドー「ダブルゼータ……！」

マリィダ「あれもキャピタル・アーミィがコピーしたものか……！」

ジユドー「違う……！あのマーキング……俺が乗つていたダブルゼータだ……！！？」

マスク「さあ、行け！その火力でエクスクロスを叩くんだ！」

な、何だ……！！？上空からの攻撃……！！？

マスク「何っ……！！？」

エイサツプ「な、何だ……！！？」

ブレラ「上から来るぞ！」

上空からの新たなモビルスーツ部隊が現れた。

箒「キャピタル・アーミーの増援か！」

ラウラ「違う：：！ 奴等は私達とアーミーの両方に攻撃を仕掛けてきた！」

楯無「ミスルギとは別の新たな勢力が現れたという事ね：：！」

セシリア「第三勢力という事ですの!!？」

ヒイロ「奴等は大気圏外から降下してきたようだ」

簪「宇宙からの敵：：！」

ケルベス「だが、あのモビルスーツ：： 我々の世界のものを見た：：！」

マスク「そうか：：！ あれが噂に聞く宇宙からの脅威か：：！ ならば、迎え撃つ！ モ

ンスターを前面に出せ！」

ダブルゼータが奴等の前に行こうとしているがフラフラし始めた。

ジユドー「な、何だ!!？」

マスク「何をしている!!？ もっとしっかり狙え！」

摩耶「パイロットが機体に振り回されています！」

鈴「慣れない機体を使うからよ：：！」

ピーチャ「そうだよ！ そんなじよそこのパイロットがダブルゼータを扱えるもんか

！

エル「ビーチャも初めて乗った時は使いこなせなかったもんね！」

敵の砲撃を受けたダブルゼータは撤退しようとして敵に背を向けた。

マスク「ええい、情けない！敵に後ろを見せるとは！」

ケルベス「そんな事を言ってる場合じゃない！パイロットはパニックを起こしている

！

零「こうなったら俺が……！」

アマリ「……」

零「……！」

な…… どうしたんだよ、俺……！何で動かないんだよ……！

千冬「零！どうしたんだ？！」

零「…… な、何でもありません……！」

ジュドー「うおおおっ!!？」

するとゼータがダブルゼータに突っ込んだ。

ジュドー「落ち着けて、あんた！ゆっくりスロットルを戻すんだ！」

C・アーミイ兵「う、うわあああっ!!？」

ジュドー「うおっ！」

ダブルゼータがゼータを弾き飛ばした……！

ルー「ダメ！ゼータじゃ、ダブルゼータのパワーを押さえきれない！」

プル「ベルリ！あたしを止めたパックは使えないの!!？」

ベルリ「トリツキーパックはあの一回で壊れちゃったよ！」

ケルベス「ベルリ!!？そこにいるのはベルリ・ゼナム生徒か！」

ベルリ「その通りです、ケルベス教官殿！」

ケルベス「ならば、自分と一緒に来い！あのモンスターを止めるための力をお前に託す！」

ベルリ「何だかわかりませんが、謹んで受け取ります！」

Gーセルフはアーミイの輸送機からパックを装備した。

ベルリ「これは!!？」

ケルベス「高トルクパックだ！それならパワー負けはしないはずだ！」

マスク「ケルベス中尉！勝手な事を……！」

ケルベス「作ってみたのいいが、こっちにはこいつを使いこなせる機体はないんだ！宝の持ち腐れをやるよりは、いいだろうが！ベルリ生徒！あのモンスターを止めてくれ！」

ベルリ「了解であります！」

な：：？Gーセルフがダブルゼータの元まで瞬間移動したぞ：：！

ベルリ「うわっ！すごいパワー！」

ジュード「ベルリ！」

ベルリ「ジュードの大事な機体なんだ！無傷で止めてみせる！」

Gーセルフは高トルクパックのパワーを使い、ダブルゼータを押しさえ込んだ。

ベルリ「僕が機体を押しえています！落ち着いて、ゆっくりスロットルを戻してください！」

C・アーミー兵「わ、わかった：：！！」

ダブルゼータが止まった：：。

ジュード「今だ！」

その隙にゼータがダブルゼータの前まで移動した。

ジュード「コックピットから出る！あんたじゃ、ダブルゼータは無理だ！」

C・アーミー兵「りよ、了解：：！」

そして、ゼータを戻し、ジュードはダブルゼータに乗った。

ジュード「ありがとうよ、ベルリ！おかげでダブルゼータを取り戻せた！」

ベルリ「この高トルクパックのおかげだよ。もつとも、もうあちこちにガタが来てるけど」

すると、ケルベスという人が乗ったジェガンがGーセルフのバックを持って来た。

ケルベス「まあアーミーの技術ではこんなもんだろう。よくやったぞ、ベルリ生徒！お前のバックを持ってきてやったから、そっちは脱ぎ捨てろ！」

ベルリ「ありあとあす！」

Gーセルフは高トルクバックを脱ぎ、元のバックを装備した。

マスク「ケルベス中尉！何のつもりだ？！」

ケルベス「お小言は後にしてくれ！宇宙からの脅威が、こちらをお待ちかねだ！」

ぐっ…！あいつら、見境なしに…！

マスク「ちいつ！見境なしか！ダメージを受けた機体は輸送機と共に後退しろ！」

マスクの言葉にケルベスという人以外のジェガンと輸送機は撤退した。

マスク「ベルリ・ゼナム！お前との戦いは一時休戦だ！」

ベルリ「こつちと手を組むというのか？！」

マスク「お前もキャピタル・ガード候補生ならば、宇宙からの脅威の噂は知っていよう！」

シヨウ「あいつ…ベルリの事しか考えていないと思ってたが、ちゃんと状況が見えているんだな…」

ルルーシュ「ならば、あちらの謎の一団への対処に集中しよう」

ノブナガ「是非もなしか！」

ジユドー「俺はこのままダブルゼータで戦う！ゼータの回収は任せるぜ！」

ミツヒデ「各機は謎の軍の迎撃を…！」

アイーダ「なお、マスク大尉には手を出さないように！」

ベルリ「宇宙からの脅威だからって、こんな別の世界で戦争なんてしちゃダメでしょ

うが！」

俺達はマスク達と協力して、宇宙からの脅威というモビルスーツとの戦闘を開始した…。

戦闘中、刹那が何かに気づいた。

刹那「気をつける…！上空から、また何か来る…！」

アニュー「また増援!?？」

敵の増援か…？って、あの中心にいる赤い機体は…？

マスク「またも宇宙からの脅威か…！」

ベルリ「う…！」

刹那「な、何だ…この威圧感は…！」

シン「あの赤い機体から感じ取られるのか……！」

三日月「……！」

リディ「あ、あの機体……まさか……！」

シーブック「このプレツシヤ……！そして、あの赤いモビルスーツ……！」

ジユドー「サザビー……！シヤア・アズナブルが来たのか！」

シヤア「ジユドー・アーシタか……。このような形で再会するとはな

エル「や、やつぱり、シヤアだ！」

ルー「あの人も、アル・ワースに来ていたなんて……！」

マリィダ「あれが……シヤア・アズナブル……！赤い彗星……！」

グレンファイヤー「お前らの世界の奴か？」

セシリー「ネオ・ジオン総帥、シヤア・アズナブル……。私達の世界の戦争の中心にい

た人間です」

ケロロ「け、ケロー!?？ほ、ほほほほ、本物のシヤアでありますか!?？」

夏美「ちよつと、うるさいわよ！ボケガエル!!？」

ジユドー「あんた……俺達と戦うのか？」

シヤア「そのつもりだ」

シーブック「いったい何のために!?？元の世界の関係をアル・ワースに持ち込んで何

の意味があるんだ!?？」

シヤア「私にとつては、あの戦いは、まだ続いている」

ジユドー「くそっ！話にならないぜ！」

グランデイス「どうやら、あいつもキャピタル・アーミイやゾギリアと同じように戦争をした人間のようなね」

舞人「ならば、相手をするしかない！」

刹那「迂闊に近寄るな……！」

グラハム「あの男……只者ではない！」

パトリック「俺でもわかる……あいつはやばい！」

ヒロ「(それだけの男という事か……)」

シヤア「各機は私に続け。だが、無理はするなよ」

リンゴ「了解です！」

ジユドー「シヤア・アズナブル……！あんたがその気なら、相手をしてやる！あんたは危険すぎるんだよ！」

リデイ「(このプレツシャー……フロンタル以上だ……！)」

勝てるかどうかはわからないが…… やってやる！

サザビーとの戦闘から数分……何だよ、あいつの強さは……！

シヤア「それがお前達の限界だ」

ジユドー「まだまだ！俺達は諦めない！」

リデイ「諦めなければ……必ず……！」

シヤア「無駄なのだよ……。ジユドー……君達が挑んでくるから戦争が続く」

シーブック「だからって、あなたの言いなりになる気はない！」

シヤア「未来がどのようなものになるのかも知らなくよく言う……」

マリーダ「確かに私達の時代でも戦争は続いている……。だが、私達は信じている！人

間の持つ可能性の力を！」

リデイ「それを教えてくれたあいつのためにも……俺は何度でも抵抗してやる！」

シヤア「愚かだな……。異世界の宇宙世紀の住人よ……。未来は絶望しか待つてはいな

い」

？「愚かなのはあなたの方だ、シヤア・アズナブル」

シヤア「！」

サザビーとは違う赤い機体が現れた……

！！？

マリーダ「シユナンジュ……

！！？」

リデイ「まさか……あれに乗っているのは……！」

フロンタル「久方ぶりだな、マリーダ・クルス、リデイ・マーセナス」

リデイ「フル・フロンタル……！」

マリーダ「どうして……貴方が……！」

フロンタル「バナージ君に敗れた後、このアル・ワースに転移してきたのだよ」

リデイ「……何をしにきた……？」

フロンタル「随分と嫌われたものだ……。安心しろ、私も……人間の可能性に懸けて

みたくなった」

マリーダ「え……!?？」

フロンタル「私もバナージ君によって変わったと言う事だ」

リデイ「フロンタル……」

シヤア「フロンタル……また私を追ってきたか……」

フロンタル「私がかつてなろうとした人間がこれ程まで分からず屋だったとは少々悲

しいよ」

シヤア「何とも言うがいいさ……。私は止まらん」

フロンタル「ならば、力尽くで貴方に教えてあげよう……人の持つ可能性の力を……」

！」

ルー「あの機体の色にあの声……。リディ少尉！あの人は……」

リディ「フル・フロンタル……。俺達の世界のネオ・ジオンを率いて、バナージ達と戦った男だ……。だが、どうやら、味方となったらしい」

ディオ「信用していいんですか……？」

フロンタル「信用は……。戦って示そう」

リディ「それで結構だ。だが、もしも妙な動きをしたら、撃つぞ？」

フロンタル「了解だ」

マツクナイフはモランという機体にダメージを与えた……。

リング「くっ……。！やっぱり、あの人のようにはいかないか……。！」

モランは撤退した……。

〈戦闘会話 リディVSシヤア〉

リディ「例え本物の赤い彗星が相手でも俺は負けるわけにはいかない！」

シヤア「君の事はバナージという少年から聞いているよ」

リディ「バナージの事を知っているのか!?!」

シヤア「良いだろう、可能性の力を知った君の力を見せてもらおう」

〈戦闘会話　マリーダVSシヤア〉

マリーダ「これが赤い彗星のプレツシャー…!」

シヤア「強化人間の君では私に勝つ事は出来ない」

マリーダ「例え勝ち目がなくとも…戦う!それが可能性の道へと繋がるんだ!」

〈戦闘会話　フロンタルVSシヤア〉

シヤア「フロンタル…お前はココで倒す」

フロンタル「一度は死んだ身、簡単には死なんよ」

シヤア「その思いがりがお前を死へと誘うのだ!」

フロンタル「果たしてそうかな?時には誰かを守るために戦うのも悪いものではないな…」

シユナンジユの攻撃を受け、サザビーはダメージを負った……。

シヤア「状況は確認できた。ここは後退する」

シーブック「待ってくれ！あなたは何のために戦うつもりなんだ!?？」

シヤア「それをお前達を知る必要はない」

そう言い残し、サザビーは撤退した……。

ジユドー「あいつ……！何を考えているんだよ!?？」

レイ「未来がどうか言っていたな……」

ベルリ「シヤア・アズナブル……か……」

リデイ「フロンタル、何か知らないか？」

フロンタル「これはシヤア本人から聞いた方がいい……」

マリィダ「そうですね……」

マスク「噂に聞いていた宇宙からの脅威とこの世界で遭遇する事になるとはな……。

まずは上へ報告しなくてはならない。後退するぞ、ケルベス中尉」

ケルベス「悪いが、このまま自分はベルリ生徒達に合流する」

マスク「何っ……!?？」

ケルベス「自分はキャピタル・ガード……防衛が本職だ。ミスルギのやり方には、と

てもじゃないが、ついていけないのでな」

マスク「…勝手にするがいい。ベルリ・ゼナム…！これも全てはお前のせいだ！」
同じセリフを言ひ残し、マックナイフは撤退した…。

メル「結局、最後はそれなのですね…」

セルゲイ「彼のベルリ君憎しは徹底しているな…」

アイーダ「宇宙からの脅威は、このままキャピタル・アーミイと敵対するのかしら…」

デュオ「そうだとすれば、ミスルギへの牽制になるけどよ…」

カトル「これ以上、戦いが広がるのを見過ごす事は出来ない」

ケルベス「今、それを考えても仕方がない。まずは、この場を離脱すべきだろう。そういうわけで、エクスクロス…。今日から、この不肖ケルベス・ヨーも世話になる」

ラフタ「勝手に決めてるよ…」

ドニエル「了解した、ケルベス中尉。貴官を受け入れよう」

ジユドー「量産されたジェガン…。新しい敵…。シヤア・アズナブル…」

シーブツク「この戦い…。これからどうなる…」

俺達はそれぞれの鑑へ戻った…。

そして、メガファウナの格納庫に皆は集まった。

ピーチャ「あのケルベスって中尉さんが乗ってきた機体…。やっぱり、俺達の世界の

ジエガンだよ」

エル「すごいね……。拾った機体をコピーしちゃうなんて……」

ケルベス「事情はよくわからんが、最新鋭の量産機って触れ込みで回ってきたものだ。モンスターマシンの方は落ちてたものを回収したって聞いているけどな」

ジュード「どう思う、ハツパさん？」

ハツパ「……」

シーブツク「ハツパさん……？」

ハツパ「……ケルベス中尉……。このモビルスーツ……。調べさせてもらっていいでしょうか？」

ケルベス「もちろんだ。今日から自分も、ここで厄介になるのだからな。改めて自己紹介をさせてもらう。ケルベス・ヨー中尉だ。よろしく頼む」

アイーダ「ケルベス中尉……。今日、戦った部隊についての情報はお待ちでしょうか？」

ケルベス「残念ながら、キャピタル・アーミーの方も初めての遭遇だ。と言っても、連中の正体についての見当はついている」

アイーダ「宇宙からの脅威……。ですか」

セシリー「それは……？」

アイーダ「私達の世界では地球に住む者と宇宙に住む者の交流はほとんどありません。ですが、地球には、いつか宇宙に住む人間が地球に侵攻してくるといふ半ば伝説めいた噂があつたのです」

真上「それが宇宙からの脅威か……」

ハツパ「我々が使用するフォトン・バッテリーは宇宙から供給されている。それを見ての通り、技術レベルは向こうの方が格段に上だ。故に地球に住む人間は宇宙に住む人間に対して恐怖心を持っているんだ」

アイーダ「キャピタル・アーミーやアメリカが軍備を増強させているのは、その脅威への対処のためという側面もあります」

海道「あいつ等もあんた等と同じようにアル・ワースに跳ばされてきたつてわけか……」

ジュード「わからないのはそんな連中にシャア・アズナブルが協力している事だ……！」

ゼクス「あの赤いモビルスーツに乗った男か……」

刹那「脅威と呼ぶに相応しい力を持つていたな……」

ルー「シャア・アズナブルはネオ・ジオンの総帥……つまり、宇宙移民者の代表みたいなものだから、彼等に味方しているの？」

ビスケット「このアル・ワースにおいてその関係性が意味を成すと思えないですけど……」

ノレド「とにかく！あの宇宙の連中が来たら、さらに混乱する事になっちゃうじゃない！」

ラライヤ「うちゅう……」

アイーダ「もしかして、宇宙から来たラライヤさんは彼等と何か関係が……」

ケルベス「このラライヤという少女……」

零「どうしたんですか、ケルベス中尉？」

ケルベス「可憐だ！」

……はい？

アイーダ「はあ……」

ラライヤ「ほめられた？うれしい！」

ケルベス「後でな、カワイコちゃん。もっとお話したいが、俺には先に用事がある人間がいる」

ベルリ「……」

ケルベス「どうした、ベルリ生徒。生意気なまでに元気なお前さんのしよげてる顔な感じ、初めて見たぞ。キャピタル・ガード候補生とその教官のせつかくの再会なんだ。

もつと喜んでみせろ」

ベルリ「僕は……ケルベス教官殿に報告しなくてはならない事があります」

ケルベス「……言ってみろ」

ベルリ「僕は……デレンセン大尉と戦う事になり……大尉を撃墜しました……」

ケルベス「そうか……」

ベルリ「僕は……」

ケルベス「……こちらに跳ばされる少し前にアーミイに転属になった大尉の戦死の報は聞いていた。まさか、その相手がベルリ生徒だったとはな……」

ベルリ「……」

アイーダ「ベルリ……あなたは……」

ノレド「ベルは、ずっと一人でそれを抱えてたんだね。バカだよ、ベルは！あたし達に話してくれればいいのに！」

アイーダ「それをあなたは……自分の中だけで解決しようとして……」

ベルリ「だって……」

ケルベス「顔を上げろ、ベルリ・ゼナム！聞きたい事がある！」

ベルリ「は、はい！」

ケルベス「お前は信念に基づき、戦闘に参加したのであるな？」

ベルリ「……成り行きであつたのは事実です。でも、守りたい人がいたから戦いました」

ケルベス「だまし討ちや卑怯な手を使ったのではないな？」

ベルリ「誓つて」

ケルベス「戦場での事だ。これ以上、気に病むな」

ベルリ「でも……！」

ケルベス「きつとデレンセン大尉も自分と同じ事を言つただろう」

ベルリ「ケルベス中尉……」

ケルベス「そうやって割り切れ！割り切れなければ、死ぬぞ！」

ベルリ「はい！」

ケルベス「宇宙で生き延びる事だけを考えて！これはキャピタル・ガードの鉄の掟だ

！よし！気合を入れてやる！」

ベルリ「キャピタル・ガード伝統のあれをやるんですね！」

ケルベス「そうだ！ウォークライだ！みんな、輪になれ！俺に続け！」

ジユドー「よし！やろうぜ、みんな！」

ケルベス「このアル・ワースで俺達は絶対に……！」

ベルリ「生き抜く!!？」

ケルベス「相手がアーミイだろうと宇宙からの脅威だろうと……！」
シーブック「やってみせる!!？」

ケルベス「どんな困難が来ても、どんなピンチになっても……！」
ジユドー「負けはしない!!？」

ケルベス「フアイト!!？」

ベルリ「ウオ、ウオ、ウオ、ウオーツ!!？」

なんか、凄いな…… こういうの……。

ケルベス「よし！その調子だ、ベルリ！飛び級だなんだと言っても、所詮は学校の中のこと！これからは大いに世界を学べ！」

ベルリ「ありあとあす、教官！」

ケルベス「もう教官じゃない！戦友だよ、戦友！」

ベルリ「はい！（デレンセン教官……。僕はもう振り返りません……！前だけ見て、やっていきます！そして、学びます……！世界を……自分を取り巻く全てを！）」

…… 部屋に戻るか……。

俺は格納庫から出た。

アマリ「零、君……」

ヒルダ「（ふーん、そういう事か……）」

部屋を出た俺だったが、一夏が話しかけてきた。

一夏「零、これからケルベス中尉達の歓迎パーティーをやるんだが……」

零「悪い、一夏……。少し体調が悪くてな……。部屋で寝るよ」

一夏「そうなのか……。大丈夫か？」

零「ああ」

一夏「ゆつくり休めよ！」

……。ごめん、一夏……。

嘘をついた罪悪感に呑まれた……。本当はアマリと顔を合わしたく……。いや、合わせないだけなんだよ……。

俺は部屋へ戻ろうとするとフロントルさんとすれ違う。

フロントル「……」

フロントルさんは俺を見たが俺は構わずに歩き去った……。

リデイ「零がどうかしたのか？」

フロントル「零君というのか……。彼もいずれ自分に正直になるだろうね」

そんなフロントルさんの声も聞こえず、俺は部屋に入り、眠りに入った……。

第29話 想いの人

―新垣 零だ。

俺達はメガファウナの掃除をしていた。

ノレド「それじゃあ、零さんとアマリさんで格納庫をお願いします！」

零「悪い、ノレド。俺はパイロット待機室をやるよ」

アマリ「では、私が格納庫をやります」

ナディア「え……で、でも……！」

零「じゃあ、俺は行く」

そのまま俺は逃げるようにパイロット待機室へ向かった……。

―アマリ・アクアマリンです。

ヒミコ「あんな零は見た事ないのだ」

ジャンヌ「零……ミスルギ突入の後から様子がおかしいわね……」

カレン「アマリ、何か知らない？」

アマリ「い、いえ……。それでは私も格納庫へ行きます……」

私は逃げる様に格納庫へ向かいました……

ヒルダ「……」

ーヒルダだ。

なんか、零の様子が変だと思っていたが……そういう事だったのか……

ノレド「アマリさんも様子がおかしいね……」

マリー・パーファシー「零君とアマリさん……何処か、お互いを避けている様だった

わね……」

ワタル「喧嘩したのかな？」

ロツクオン「熱々の次は喧嘩かよ……本当に仲がいいな」

一夏「俺、零のところに行つてきます！」

ユリカ「何するつもり？」

一夏「それは仲直りをする様に言ってくるんです！」

ルリ「ストップです、一夏さん」

一夏「何で!?!」

楯無「こういうのは時間をかけてするものなのよ」

アキト「だから、二人に任せよう」

一夏「は、はい……」

サリア「でも、戦闘に支障が出るかもしれませんよ……」

フロンタル「では、零君は私に任せてくれ」

リディ「え、フロンタルが……!?!」

フロンタル「私が行くのは不満かな?」

マリーダ「い、いえ……意外なだけです」

ヒルダ「なら、アマリはあたしに任せな」

ロザリー「え……」

ヒルダ「あたしも意外なのかよ……」

メル「お願いします、フロンタルさん…… ヒルダさん……」

ブル「メルも少し休んだ方がいいよ!」

グランデイス「この所、働き詰めだろ?」

メル「い、いえ…… 私は……」

アンジュ「あーもう！とにかく休みなさい！戦いの最中に倒れられても困るのよ！」
エルシャ「二人の事はフロントアルさんとヒルダちゃんに任せましょう」

メル「……はい……」

メルは申し訳なさそうに部屋を出て、それに続き、フロントアルとあたしも部屋を出た……。

「アマリ・アクアマリンです。」

格納庫の掃除を始めた私ですが、零君やホープスの事が頭でいっぱいでは手が全く動いていませんでした……。

アマリ「……」

零君との喧嘩……あれから私は零君と顔も合っていないし、勿論言葉を交わしてもない……。

本当は謝りたい……叩いてしまった事……ひどい事を言ってしまった事……。

アマリ「でも、今更言えませんかよね……」

ヒルダ「邪魔するよ！」

突然、ヒルダさんが格納庫へと入ってきた……。

アマリ「ひ、ヒルダさん……!!? どうしたんですか!!?」

ヒルダ「ウジウジ術士に説教をしにきた」

せ、説教……?

ヒルダ「どうやら、喧嘩しているのはホープスだけじゃなかったんだな」

アマリ「……」

ヒルダ「零と何があつたんだ?」

私はヒルダさんに喧嘩の事を話しました……。

ヒルダ「……成る程な……。確かに女を泣かす零は一発ぶん殴る必要があるな……」

アマリ「本当は謝りたいのですが……。顔を合わせずらくつて……」

ヒルダ「お前は零の事が好きなんだよな?」

アマリ「はい……」

ヒルダ「だったら、すぐにでも謝って来いよ」

アマリ「か、簡単に言わないでくださいよ!」

ヒルダ「だったら、零はあたしがもらうけどいいか?」

え……?

ヒルダ「あいつ、面白いし、話もあうから……。今日にでもあいつの部屋にでも行くか……」

アマリ「だ、ダメ……！」

ヒルダ「は？」

アマリ「ダメなんです……！零君は渡しません……！」

ヒルダ「でも、顔を合わせないんだろ？喧嘩した相手と付き合うのも零は辛くなるだろうぜ？」

アマリ「……そ、それは……」

ヒルダ「確かに零の無茶つぶりはもはや病気だな……でもな、この部隊はそんな奴らばかりだろ？お前やあたしも含めて」

アマリ「……！」

ヒルダ「零の無茶を止めたいのなら……お前が支えてやればいいんだよ」

アマリ「支える……」

ヒルダ「そう、無茶をしあつて支え合う……。付き合うならいずれ、そういうのが多くなるんだぜ？」

アマリ「無茶をしあつて、支え合う……。そうですね……。私が零君を支えればいいんですよね……！」

ヒルダ「その意気だ、やっぱり零にはお前やメルがお似合いだぜ」

アマリ「ありがとうございます、ヒルダさん！早速、零君の所へ……」

ヒルダ「取り敢えず、待ちなよ。ノレド達がお前の事を心配して、お茶会をしようつて言っていたんだ…来いよ」

アマリ「…はい！」

零君が無茶をするなら、私も無茶して止める…それが支え合うという事なんです
ね…！

私はヒルダさんに連れられて、ノレドさん達の所へ向かいました…。

―新垣 零だ。

俺はパイロット待機室の掃除をばっばと終わらせて、ベンチでくつろいでいた。
…だが、アマリとの喧嘩を思い出すたびに胸が苦しめられる…。

アマリに謝りたい…でも、いざ顔を合わせようとなるとあわせられない…。

零「…ダメだよな、俺…。こんなんだから弘樹の奴にウジウジ野郎って言われるんだよな…。」

でも、どうしたらいいんだ…。

フロントル「失礼させてもらおうよ」

ふ、フロンタルさん……!!?

零「フロンタルさん……？どうしたんですか？」

フロンタル「君に話があつて来たんだよ」

零「話……？」

フロンタル「アマリ君と喧嘩をしているみたいじゃないか」

零「な、何でその事を……!!？」

フロンタル「今の君達を見ているとニュータイプじゃなくてもわかるよ」

零「そうですか……」

フロンタル「仲直りはしないのかい？」

零「……顔が合わせられないんです……」

フロンタル「乙女かな？」

零「……違います」

何を言いだすんだ、この人は……！

フロンタル「君達のギスギス感が皆を心配させている事は気づいているな？」

零「はい……」

フロンタル「君達のせいで誰かを危険に晒す気か？」

零「そ、そんな事は……！」

フロンタル「実の所言うところの君達を戦場に出す事は出来ないな」
零「…」

フロンタルさんの言う事はもつともだ…。ギスギスした空気で連携も取れないんじゃないの足手まといになる…。

フロンタル「無茶をする事は悪い事じゃない…。だが、君を大切に思ってくれている人間がいる事も忘れてはいけない」

零「…はい…」

フロンタル「零君、戦いというのは悩む事が多い…。私のかつての好敵手もそうだった…。戦場で多くの事を悩み、そして答えを見つけた…」

零「その答えとは…?」

フロンタル「可能性を信じて戦う事だ」

零「可能性…」

リディ少尉やマリィダも言っていた…。バナージって人の事か…。

零「フロンタルさんもその…。バナージって人の影響で変わったんですよね?」

フロンタル「恥ずかしながら…。彼がいたから今の私がいる」

そこまでなのか…。

フロンタル「君も多くの事を悩み…。そして、見つければいい。本当の答えを…」

零「本当の答え……」

フロンタル「おそらくだが、アマリ君も君の事を待っている」

零「……」

フロンタル「いるべき大切な存在を失ってはならない……。失って気づくものがあるのも事実だ」

零「フロンタルさん……」

そうか……。そうだな……。俺が無茶して、アマリは怒ってくれた……。それって、俺の事を仲間として大切な存在だと思ってくれているんだよ……。何やってたんだよ、俺は……！

零「ありがとうございます、フロンタルさん！」

フロンタル「私は年上ぶるつもりはない。呼び捨てで構わない」

零「はい、フロンタル！」

フロンタル「男として立派な顔になつたじゃないか……。それならば、身体の中に残つたモヤモヤを発散しようじゃないか」

零「え……？」

モヤモヤを発散して……。どうするんだ？

フロントル「悩んだ時は身体を動かすのが一番だ。ついて来てくれ」
俺はフロントルさんに連れられて、トレーニングルームへ入った。。。
中に入ると俺は開いた口が塞がらなかった。。。。

ルルーシユ「ようやく来たか」

ノブナガ「待ちわびたぞ、零！」

真上「俺達を待たせた代償は大きいぞ」

海道「違いねえ！」

竜馬「容赦しねえから、覚悟しやがれ！」

。。。。

零「フロントルさん。。。？」

フロントル「トレーニングを楽しみたまえ」

零「いやいやいやいや!!？」

楽しめねえよ！何だよ、このメンバー！

魔王に破壊王、地獄の二人に破天荒つて。。。ラスボス五人衆じゃねえか！

ルルーシユ「お前の戦闘データをもとに戦略を立ててやる」

立てなくていいです！俺死んでしまいます！

零「慈悲は。。。？」

海道「あるわけねえだろ！」

零「ですよええー……」

この後のトレーニング……本当に死ぬかと思った……。

海道さんとノブナガが俺に剣で斬りかかり、避けたと思つたら、竜馬さんが殴りかかって来たのでそれを防いでいると、真上さんは容赦なく、銃を発砲してくるし……。

それが30分ほど続き、俺は息を激しく荒げながら、その場に座り込んだ。

てか、いつの間にかフロントルさんいねえし……。

俺が息を切らしていると、隣に俺の戦闘データを取り終えたルルーシュがスポーツドリンクを持ち、隣に座り、俺にスポーツドリンクを渡した。

俺は礼を言い、スポーツドリンクを受け取って飲み干した。

ルルーシュ「どうだった、あの四人は？」

零「普通に死ねるわ」

ルルーシュ「だろうな……」

俺の言葉に苦笑するルルーシュ。

ルルーシュ「迷いは捨てたようだな」

零「フロントルさんのおかげだな」

ルルーシュ「… 零、お前は大切な女を手放すなよ…。」
零「え…？」

ルルーシュの言葉に俺はルルーシュの方を見るとルルーシュは俯き暗い顔をして
いた。

零「… 何があつたんだ？」

ルルーシュ「俺はかつて… 俺の事を好きだと言ってくれた女を二度殺してしまった
んだ…。」

零「二度…？」

ルルーシュ「一度は友達として… もう一つは人として… な」

ど、どういう事だ…？

ルルーシュ「シャーリーという友達だった…。俺が黒の騎士団を率いてゼロとして
ブリタニアと戦っていた時の話だ」

ールルーシュだ。

零にシャーリーの話をするとはな…。

俺は語り出した……。

俺の愚かな話……。俺の事を想ってくれていた友達を……偽りだったが、俺の事を兄と慕ってくれた弟の話を……。

ルルーシュ「俺はある作戦の時、街の人達を巻き込んだ作戦を執行したんだ……。だが、その巻き込まれた街には……シャーリーの父親がいたんだ」

零「……！」

ルルーシュ「シャーリーの泣き崩れた姿に俺は何も言えなくなった……。俺がシャーリーの父親を殺してしまったのだからな……。」

零「……」

ルルーシュ「その後、ある出来事でシャーリーは俺の……。ゼロの正体を知ってしまった……。マオという男のせいでシャーリーは散乱し、苦しんだ。そんなシャーリーを目の前にした俺はある行動をとった」

零「ある行動……？」

ルルーシュ「ギアスでシャーリーの記憶を奪った……。俺がゼロという事……。そして、俺の事を……」

零「な……。!?？」

やはり、驚くか……。

ルルーシュ「そう、このせいで俺の友人のシャーリーは死に、シャーリーと俺は初対面という事になったんだ……だが、一年後の事だった」

思えばあの出来事の影響で俺はゼロ・レクイエムを考えついたのかもしれない……。

ルルーシュ「ジェレミアのギアス・キャンセラーの影響でシャーリーの失われた記憶が元に戻ったんだ」

零「その後……どうなったんだ？」

ルルーシュ「記憶を取り戻したシャーリーを危険視したロロに……シャーリーは殺されたんだ……。今度は物理的にな……」

零「……そ、そんな……」

ルルーシュ「俺はシャーリーに生きろというギアスをかけたが……ダメだった……。俺が……シャーリーを殺したも同然なんだ……」

零「……その、ロロってというのは？」

ルルーシュ「俺は父によってゼロという記憶を消され、偽りの記憶を植え付けられたんだ……。その偽りの記憶にいた偽りの弟……それがロロだった」

零「偽りの……弟……」

ルルーシュ「C・Cのおかげで俺は再び、ゼロとしての記憶を取り戻したと同時に俺はロロの存在を憎み、ロロを利用するために説得したんだ……」

あの時、ボロ雑巾のように捨ててやると思わなければ、ロ口は……。

ルルーシユ「だが、俺を慕うあまり、ロ口はシャーリーを殺してしまつた……。俺はあいつを突き放したが……。俺が追放された時にロ口が助けてくれた……。あいつはギアスで俺を助け……。そして死んだ」

零「……。お前を助けたかつたんだな……」

ルルーシユ「全ては結果なのかもしれない……。あの時、あの様な作戦を実行しなければ、シャーリーの父親は死ぬ事はなく、シャーリーも悲しむ事はなく、シャーリーは死ななくても良かったのかもしれない……。そして、記憶を取り戻した時にロ口を受け入れていれば、あいつを苦しめず、死なせなくても良かったのかもしれない……。全ては俺の犯した罪だ……」

零「ルルーシユ……」

だから、俺はゼロ・レクイエムを決行したんだ……。

ルルーシユ「俺はたくさんの人を殺めてきたんだ……。これこそが魔王の過去だ……。

零、お前の大切な存在はまだすぐそばにいる。お前は道を見失うな」

零「……。ルルーシユ、ごめん……。嫌な事を思い出させて……」

ルルーシユ「気にしていない……。それと謝るのならアマリやみんなに謝れよ」

零「そうだな……。よし、謝ってくるよ」

そう言った俺の腹が鳴った……。

ルルーシユ「まずは腹ごしらえにでも行ってこい」

零「あ、ああ……」

ルルーシユに言われ、俺は食堂へ向かった……。

ーアマリ・アクアマリンです。

私はヒルダさん達とお茶会をした後に、零君の心を掴むにはまず、腹を掴めと箒さんと鈴さんに教えて貰ったので、今、私は食堂でミネストローネを作っています。

アマリ「完成しました……。後は零君に渡すだけ……」

……渡せるかな……。？ロクに顔も合わせられなかったのに……。それに零君だって、喧嘩した相手が作ったご飯なんて食べたくないんじゃない……。アマリ「つて、ダメです！弱気になつたら！」

すると、食堂のドアが開きました。

零「何か簡単に作って食うか……。ん？」

え、え……!??れ、零君……!??どうしてここに!??」
アマリ「れ、零君……」

―新垣 零だ。

食堂に入ると俺は動きを止めてしまった……。

アマリがいるからだ……。

零「アマリ……」

……悩んでもダメだ……!

零「アマリ、話がある」

アマリ「え、うん……」

零「ごめん!」

アマリ「っ……!」

零「お前は誰よりも仲間の事を大切に想っているのに……俺は……!」

言えた……ちゃんとアマリの顔を見て……。

アマリ「わ、私も!ごめんなさい!零君は誰かを守りたくてやってる事なのに……私

がワガママを言つて……！」

零「いや、俺だつて……！」

アマリ「私だつて……！」

謝り合う俺達……。するとそれがおかしくてクスリと笑つてしまう。

零「なんか、お互いに謝り合うつて変な感じだな」

アマリ「お互いが悪いと思つている証拠ね」

零「俺、決めたよ……。みんなを守るためなら無茶はやめない。でも、お前を心配させないぐらいの無茶をする！」

アマリ「私も……零君が無茶をするなら、私も無茶をして手伝う。そして、あなたの居場所になる」

アマリ……

零「ありがとう、アマリ……」

アマリ「仲間なのだから当然でしょ？」

零「それもそうだな！……つと、腹が減つたから何か作るか」

アマリ「あ、あの……。これ食べて」

ん？これは……。

零「ミネストローネか？」

アマリ「うん、食べて」

零「じゃあ、ありがたくいただくよ」

そう言い、アマリは皿にミネストローネを入れ、俺に差し出してくれた。

俺は皿を受け取り、スプーンでミネストローネを一口啜った……。

うん、美味……。

零「ぐっ！……ごほっ！ごほっ！！？」

な、何だ、この辛さ！！？

アマリ「れ、零君！！？どうしたの！！？」

零「あ、アマリ……一口食ってみてくれ……」

俺はコップに水を注ぎ、水を飲んだ。

アマリは頷き、ミネストローネを一口啜った。

アマリ「っく！か、辛いー！」

アマリは辛さに顔を真っ赤にさせ、水の入ったコップを手に取り、水を飲み干した。

って、それは……！

アマリ「は……はあ、はあ……。か、辛かった……。トマトじゃなく唐辛子を使ったの

が間違いだったわ……」

零「うえっ！！？唐辛子を使ったのか！！？ミネストローネはトマトだろ！！？」

アマリ「ご、ごめんなさい…。」

今もなお水を飲み続けるアマリ…。

零「所で、アマリ…。」

アマリ「何？」

零「それ俺の飲んだコップだけど…。」

アマリ「っ！…ゴフウ!!？」

零「うわ、汚な!!？」

アマリは驚いて、口に含んだ水を俺に吹き出した。

アマリ「ご…ごほっ！ごほっ！」

零「だ…大丈夫か…？」

アマリ「けほっ！あ、あわわわわ！こ、これって…か、かかか…かん…！」

零「かん…？っ…！ま、待て待て！」

間接キスだと言いたいのか!!？

零「お、落ち着け！これはノーカンだ！そうだ、ノーカンなんだよ！」

アマリ「の、ノーカン…そうよね…。」

顔を赤くし合う俺とアマリ…。すると、警報が鳴った…。

この気配は…オニキスが来る…！

第29話 想いの人

警報を聞き、俺達は出撃準備に入る。

ルリ「また、オニキスが仕掛けて来るみたいですよ…。」

名瀬「オニキスか…。話には聞いていたが、本当に戦闘になる事になるなんてな」
ハーリー「オニキスの部隊、来ます！」

現れたのはガラム部隊とアマテラスとリリスだった。

ドニエル「ギルガ・カルセドニーとアスナ・ペリドットか」

倉光「各機は出撃して」

俺達は出撃した。

ギルガ「出て来たね、新垣 零！エクスクロス！」

零「オニキス、お前ら本当にしつこい奴らだな！」

ギルガ「何とでも言うがいいさ、僕達は任務をこなすだけなのだから！」

アスナ「覚悟しなさい、新垣 零……！」

メル「私達はあなた達には屈しません！」

零「ああ、そうだ！」

アマリ「零君、行きましょう！」

零「おう！」

エルザ「零とアマリがいつの間にか仲直りしてるロボ！」

ウエスト「ふむ、喧嘩を通してさらに仲良くなったのであるな……」

エンネア「良かったよ、零もアマリも！」

ヒルダ「(やっぱりお前らはいいコンビだよ……)」

フロントル「(さて、絆を取り戻した君達の力を見せてもらおうか)」

メル「(良かったですね、零さん、アマリさん……)」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(なんか、スッキリしたぜ……。心の中のモヤモヤが一気に晴れた感じだ……。)」

〈戦闘会話 アマリVS初戦闘〉

アマリ「行きますよ、ホープス！」

ホープス「零様との仲直りを果たし、迷いが取れたようですね」

アマリ「正直、私はまだあなたの事を分かっていません……。ですが、あなたも私達の仲間です、今はそうしておきます！」

ホープス「かしこまりました。では、始めましょう」

戦闘開始から数分後……

ギルガ「このままではラチがあかない……。あの手で行くか」

アスナ「あの手？」

ギルガ「見てなよ、アスナちゃん」

すると、アマテラスが高速で動き出し、ゼルガードとメサイアを捕らえた。

メル「し、しまった……！」

アマリ「そ、そんな……！」

ホープス「マスター、脱出を」

アマリ「できません！」

零「アマリ！メル！」

ジャンボット「あの様な速さを隠し持っていたとは……！」

零「カルセドニーてめえ！二人を離せ！」

ギルガ「新垣 零……此処は一つゲームをしようじゃないか」

ゲーム……だと……？

ギルガ「簡単なゲームだ……。今からこの二人の内、君に一人決めてもらう。その君が決めた一人は解放しよう。だが、もう片方は連れて行く」

な、何だと……!??

スカレット「外道が……。結論から言うとアマリかメルどちらかを必ず連れて行かれるという事ではないか！」

零「そんなゲーム、俺がするわけねえだろ！」

俺は二人を助けるために動き出したが、アマテラスの攻撃を受けた。

零「ぐっ……!?？」

アマリ「零君！」

ギルガ「君にどちらもという選択肢はない。さあ、選べ！アマリ・アクアマリンか、メル・カーネリアンか！」

サリア「彼の狙いは零とメルだけだったはずじゃ……!?？」

アマルガン「何故、アマリまで……！」

ギルガ「彼女の可憐さに一目惚れしたという感じかな？」

カレン「あんた……最低の男だね！」

三日月「どうするの、零？」

零「……」

アマリ「零君！私の事は良いから、メルさんを助けてあげて！」

メル「いいえ、これはオニキスを抜けた私への罰です！アマリさんをお願いします！」

零「っ……！」

ど、どうすれば良いんだよ……。アマリを選べば、メルが……。メルを選べば、アマリが連れて行かれる……！

ギルガ「悩んでいる様だね、あ、そうだ！もし連れて行かれた方がどうなるかは……

知っているよね？」

零「くっ……！」

アスナ「(何を悩んでいるの、新垣 零……。どちらかを切り捨てれば良いだけじゃない！)」

ギルガ「フフ……フハハハハハッ!!？」

アマリ「零君！」

メル「零さん！」

どうすれば……どうすれば良いんだよ……！

ヒルダ「てめえら……ちよつと黙れー!!？」

突然のヒルダの怒鳴り声に俺達は一斉にアーキバスを見た。

ヒルダ「零の選択の時間なんだから、零に決めさせろよ！零……！ 悩む必要はない。お

前がどんな選択をしようとしたし達が支える！」

ルルーシユ「俺達は仲間なのだからな」

ヒルダ、ルルーシユ……。

っ！そう言えば、この場にいるはずのあいつが居ない……。まさか、ルルーシユ、そう

いう事なのか！

零「カルセドニー…… 答える」

ギルガ「へえ、どっちを選ぶんだい？」

零「アマリとメルの両方だ」

ギルガ「は？人の話を聞いていなかったのかい？君にどちらとも言おう選択肢はないと

言っただけだ！」

零「そんなもの知るか！俺は手を伸ばす！例え不可能な距離だったとしても、俺は絶

対にアマリとメルの手を掴む！」

メル「零さん……」

零「待っている、二人とも！必ず助ける！」

俺は再び、二人を助けるために動き出したが、アマテラスに阻止される。

ギルガ「良い加減にしておらおうか……。新垣 零！」

何度も挑むが攻撃を受け続けてしまう……。

だが、後ろに控える蜃気楼を見ると、ある信号を送ってきた。

完了か……。よし！

零「ルルーシュ！」

ルルーシュ「了解だ、拡散相転移砲……発射！」

ルルーシュの計算された相転移砲のビームがアマテラスに襲いかかるが、ゼルガードとメサイアを抱えながら、アマテラスは避けきる。

ギルガ「甘いのだよ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア！」

ルルーシュ「ふっ、甘いのは貴様の方だ」

ギルガ「な、何……!?」

ルルーシュ「戦略というのには二手、三手先をよむのが基本だ……。故にお前は三手まで読んでなかった様だな、デューオ！」

すると、アマテラスの背後からデスサイズヘルが現れた。

デュオ「呼ばれて飛び出て死神様ってな！…でりやあああつ！」
ギルガ「うおっ!?？」

ハイパージャマーで隠れていたデスサイズヘルはビームサイズでアマテラスを斬り飛ばし、その隙に俺はゼルガードとメサイアを救出した。

零「二人とも、大丈夫か!?？」

メル「はい！」

アマリ「ありがとう、零君！」

零「二人が無事で、良かったよ…」

ホープス「あの…私の存在を忘れていませんか？」

あ…。

零「わ、忘れるわけねえだろ、ホープス！」

ホープス「嘘ですね」

零「うっ…！ご、ごめんで…！」

正直、忘れてましたよ、はい。

零「ルルーシユ、デュオ…ありがとう、二人のおかげでアマリ達を助けられた」

デュオ「良いって事よ」

ルルーシユ「言っただけは、お前は大切なモノを守れと」

ギルガ「く、クククツ……！ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア……やはり君はいい策士だな」

ルルーシユ「貴様などに褒められたくない」

ギルガ「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア、オニキスの新たなる司令官になる気はないかい？」

な……！！？あいつ、今度はルルーシユを誘いやがった……！

ルルーシユ「断る。貴様達の組織の味方などになる気はない」

ギルガ「そうか、ならば……彼女がどうなつてもいいんだね？」

彼女……？

リリースの手の平に女の子が……！！？

ルルーシユ「！」

カレン「そ、そんな……！」

スザク「あれは……まさか！！？」

ルルーシユ達……どうしたんだ……？

ノブナガ「ルルーシユ、どうしたのだ？」

ルルーシユ「しゃ、シャーリー……！シャーリー・フェネットなのか！！？」

零「しゃ、シャーリー……！」

ルルーシユの言っていた女の子か……!??

カレン「どうして、シャーリーがアル・ワースに!??

ジェレミア「死んだはずのルルーシユ様達がこのアル・ワースに転移したのだ」

アーニヤ「そう考えるのが妥当……」

スザク「だけど、どうしてシャーリーがオニキスに……!??

ミツヒデ「こちらに來た時にオニキスの側に來たのではないのか!??

ヒデヨシ「だけど、何故あの子は逃げないんだよ!??

メル「まさか……ギルガ・カルセドニー……貴方は!」

ギルガ「流石は元オニキスのメルちゃんだね。その通り、彼女にはすこーしと脳をい

じらせてもらったんだよ」

アマリ「脳を……という事は!??

ホープス「奴は彼女を洗脳したという事ですな」

ディオ「何だと……!??

ルルーシユ「ギルガ・カルセドニー……貴様は!」

零「てめえは何処まで卑怯な真似をすれば気がすむんだよ!」

ギルガ「卑怯もらつきよも大好物だよ!」

悪党が必ず言う臭いセリフを言いやがって……!

シャーリー「ルル…」

ルルーシュ「シャーリー…」

ギルガ「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、オニキスに来なければ、彼女には痛い目を見てもらう事になるけど… どうするかな？」

ルルーシュ「…！」

C・C・「つまらない真似を…！」

零「ルルーシュ…」

ルルーシュ「俺がオニキスに行かなければシャーリーは… だが、カレン達を裏切るわけには…！俺は… また、シャーリーを巻き込んで…」

アスナ「ギルガ！流石にこのやり方は…！」

ギルガ「これこそが魔王を味方につける最も最前な作戦だ」

アスナ「でも…！」

ルルーシュ「俺は… 俺は…」

カレン「ルルーシュ！」

ルルーシュ「カレン…」

カレン「何怖気付いてるのよ！どんな、状況でも奇跡を見せてくれたのが、ゼロでしょ？？」

スザク「君ならば必ずシャーリーを救い出せる！君が命じるなら僕達も君に従う！」
C・C・「お前はもう孤独ではないんだ、私達を頼れ」

零「俺もお前の為に動く！さっきアマリ達の為にしてくれたように！」

ノブナガ「お前の邪魔をする者は破壊王である俺が破壊する！」

ジャンヌ「行つて、ルルーシュ！あなたと彼女を絶対に守ってみせるから！」

ルルーシュ「みんな……よし！」

蜃気楼はガラム部隊の攻撃をかくぐり始める。

ルルーシュ「シャーリー！目を覚ませ！」

シャーリー「ルル、オニキスに来て……そうじゃないと私がつらい目に合うのよ」

ルルーシュ「そんな事は俺が……俺達がさせない！」

シャーリー「また、私を殺すの？」

ルルーシュ「！」

ギルガ「何をやつても無駄なのだよ！」

アマテラスは蜃気楼に攻撃を仕掛けた。

零「させるかよ！」

だが、俺はゼフィリスを動かし、アマテラスの攻撃を防いだ。

ギルガ「新垣 零！」

零「お前の相手は俺だ！」

ルルーシユ「どうする……？こうなれば、ギアスを使って……！いや、ダメだ！ギアスを使えば、またシャーリーを傷つける……！俺はもうギアスを使わないと決めたんだ！何か……何か手はないのか……！」

シャーリー「……」

ルルーシユ「シャーリー、俺はお前を今度こそ救い出す！」

？「なら、僕も手を貸すよ」

すると、機体が現れた……。

ールルーシユだ。

俺の目の前に信じられない機体が現れた……。

あれはナイトメア……それにあのナイトメアは……！

ルルーシユ「お前……ロロ、なのか……？？」

ロロ「そうだよ、兄さん！」

ロロの声と同時に周りの時が止まった……。

ロロのギアスの力か……!

ルルーシュ「ロロ、お前……!」

ロロ「兄さん、今だよ! シャーリーさんを助け出して!」

ルルーシュ「ああ!」

時を止めるギアスの影響で動けなくなったリリスからシャーリーを救い出した俺は
蜃気楼のコックピットにシャーリーを乗せた。

ルルーシュ「シャーリー!」

シャーリー「ルル……」

ルルーシュ「俺だ! ルルーシュだ! 目を覚ましてくれ!」

シャーリー「……」

ルルーシュ「俺はお前を助け出したい! 例え、お前が俺を恨んでいたとしても俺はも
う、お前を失いたくないんだ! だから……戻って来てくれ、シャーリー!!?」

シャーリー「る、ルル……あ、ああ……! あた、まが……!」

ルルーシュ「シャーリー!」

シャーリー「私は……わた、しは……あああああつ!!?」

シャーリーは叫んだ後にゆっくりと目を閉じ、そして目を開けて俺を見て微笑んだ。

シャーリー「ルル、久しぶりだね」

ルルーシュ「シャーリー……！洗脳が……解けたのか……？」

シャーリー「うん、ルルのおかげだね」

ルルーシュ「シャーリー！」

気づけば俺はシャーリーを抱きしめていた……。

そんな、シャーリーも俺を優しく抱きしめていた。

ルルーシュ「すまない、俺はお前を……！」

シャーリー「謝らないでルル……。ルルが優しいって事、みんな知っているから……」

ルルーシュ「シャーリー、今度は生きてくれ……。生き延びてくれ……。これはギアス

による命令ではなく、俺からの願いだ」

シャーリー「うん、生きるよ……。ルルと一緒に……」

ルルーシュ「ああ……」

それと同時に口口のギアスが解除された……。

―新垣 零だ……。

は……？リリスの手の平にシャーリーがいない……？

てか、いつの間に蜃気楼があんな所に移動したんだ……？

ベルリ「え、何があつたの!?!?」

青葉「ルルーシユさん、シャーリーさんは!?!?」

ルルーシユ「助け出したよ」

アーニー「いつの間に!?!?」

ルルーシユ「詳しい話は後だ…今は…!」

蜃気楼はナデシココにシャーリーを乗せた。

ルルーシユ「必ず、戻る…待っていてくれ、シャーリー」

シャーリー「ええ」

カレン「良かったわね、ルルーシユ!」

ジレミア「成る程、ロロのギアスか…」

ロロ「兄さん…」

ルルーシユ「ロロ、もうギアスは使うな…」

ロロ「というより、この世界に來た影響のせいか、もうギアスは使えなくなつたんだけどね、あの一回で…」

ルルーシユ「そうか…」

ギルガ「アスナちゃん!何をしていたんだ!?!?彼女をそうやすやすと奪われるなんて…!」

アスナ「わ、私にも何が何だか……！（良かった……っ！私って何を……!?）」
零「よ、よくわからないけど、その機体に乗ってるのって……お前の弟の口口ってやつか!?？」

ルルーシユ「ああ」

零「なら、反撃開始と行くか！」

ロロ「ええ！」

ルルーシユ「今こそ、悪党に天罰を与えるぞ！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　ロロVS初戦闘〉

ロロ「（僕の目の前に兄さんやシャーリーさんがある……今度こそは僕が守ってみせる……！それが僕に与えられた罰を償う手段だ！）」

〈戦闘会話　零VSアスナ〉

零「行くぜ、ペリドット！」

アスナ「……新垣　零……あなたは、強いのね……」

零「…は、はあ…？お前、何があつた…？」

アスナ「何でもないわ…今度こそ、あなたを倒す！」

俺はリリスに連続攻撃を与えた…。

アスナ「くっ！私では…彼等に勝てないの…！！？」

ギルガ「今回の失態は君の責任だ、戻ったら罰を与える」

アスナ「…ひっ…！！？わ、分かったわ…！」

怯えながら、リリスは撤退した…。

零「お前、あいつに何をする気だよ…！」

ギルガ「君が知る必要はない」

メル「アスナ・ペリドット…！」

零「あいつを苦しめるなよ…！」

ギルガ「まさか、アマリちゃんやメルちゃんだけでなく、アスナちゃんまでたぶらかす気なのかい？」

零「何が言いたい…？」

ギルガ「まあいいよ、君をとらえれば一緒の事だしね…！」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「こうなれば、力づくで君達を連れていく！」

零「そうはさせるかよ！アマリもメルもルルーシユも俺が守ってみせる！」

ギルガ「君はやはり、気に入らない！」

零「てめえに気に入られようと思ってもねえんだよ！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

ギルガ「ワガママな子にはきつめの罰を与えないとね」

メル「私はもう恐れませぬ…。私には零さんや皆さんがいる…。あなたは私が倒し

ます！」

〈戦闘会話 アマリVSギルガ〉

アマリ「私を捕らえ、零君を悲しませたあなたは許せません！」

ギルガ「やはり、君は可憐だ…。必ず連れていく！」

ホープス「気持ち悪いですね、あなたは…」

ギルガ「黙れ、魔法生物！」

アマリ「あなたは私達が討ちます！零君の代わりに！」

〈戦闘会話　ルルーシユVSギルガ〉

ルルーシユ「魔王を脅そうなどと馬鹿な真似をする者には報いを受けてもらわねばな」

ギルガ「ならば、君をこちらに引き込む別の方法を考えればいいだけの話だ！」

ルルーシユ「その全てを打開してみせよう……我が名はゼロ！奇跡を起こす男だ！」

〈戦闘会話　ロロVSギルガ〉

ギルガ「君は一体何をしたんだ!?？」

ロロ「あなたが知る必要はありません。今ここで僕達に討たれるあなたには……」

ギルガ「あまり、意気がらない方がいい」

ロロ「その言葉、そっくりそのまま返します！」

俺とメルの連携にアマテラスはダメメージを受けた。

ギルガ「な、何故なんだ… 何故勝てないんだ！」

零「つまらない真似をするお前が俺達に勝てるわけないだろ！」

メル「私達はあなたには屈しません！」

ギルガ「次は必ず後悔させてあげるよ…！必ずね!!？」

そう言い残し、アマテラスは撤退した…。

ガラム部隊も蜃気楼の相転移砲で駆逐された…。

ワタル「終わったみたいだね」

シヨウ「一時はどうなるかと思っただけど、何とかなつたな」

エイサツプ「今日はルルーシュが大活躍だったな」

ルルーシュ「そんな事はない」

零「そんな事あるって！」

ロロ「…」

すると、ロロの乗るヴァインセント可翔式が何処かへ飛び去ろうとした…。

それを蜃気楼が止めた。

ルルーシュ「何処へ行く、ロロ？」

ロロ「僕の役目は終わったんだ…。シャーリーさんを殺した僕は兄さん達とは一緒

にいけないよ」

ルルーシユ「違うな、間違っているぞ。ロロ」

ロロ「え……？」

ルルーシユ「お前がいたからシャーリーを救い出す事ができた……。それにお前は兄である俺に借りも返させてくれないのか？」

ロロ「兄さん……」

ルルーシユ「俺にはお前が必要だ……。共に来てくれ、ロロ……。俺の……大切な弟……」

ロロ「兄さん……うん！」

シャーリー「良かったね、ルル、ロロ……」

俺達はそれぞれの艦へ戻った……。

ールルーシユだ……。

俺は今、ナデシコCの格納庫でカレン、スザク、C、C、シャーリー、ロロと話していた……。

カレン「久しぶりね、シャーリー！」

スザク「また会えて嬉しいよ」

シャーリー「カレンもスザク君も変わらないね」

ロロ「…シャーリーさん…」

シャーリー「ロロ…」

ロロ「ごめんなさい、僕は…」

シャーリー「謝らないで、ロロはルルを守りたくてやった事でしょう？怒ってないよ」

ロロ「でも…」

ルルーシュ「お前はしっかりとシャーリー救出に手を貸してくれたじゃないか…。

もう悩むな」

ロロ「兄さん…シャーリーさん…ありがとうございます」

カレン「二人もエクスクロスに参加するんだよね？」

ロロ「はい、兄さんと共に戦う事を決めましたから」

シャーリー「私も生活班でルルを支える事に決めたの…。」

ルルーシュ「ありがとう、シャーリー」

すると、零が歩いて来た…。

―新垣 零だ。

俺はシャーリーとロロに会うためにナデシコCの格納庫に来ていた…。

C・C。「零が来たぞ」

ルルーシュ「どうしたんだ、零？」

零「二人に会いたかったんだ、ルルーシュから話は聞いていたから…」

ルルーシュ「そうか…」

シャーリー「私を助けてくれて、ありがとう… 零君」

零「いや、ルルーシュに借りを返していただけだよ」

ロロ「零さん、これからよろしくお願いします」

零「こつちこそ、よろしく頼むぜ、ロロ！」

俺はロロと握手をするとアマリとメルが来た…。

メル「零さん、ルルーシュさん。今日はありがとうございました」

ルルーシュ「必死に頑張ったのは零だ。俺は手伝ったに過ぎない」

アマリ「零君… 本来にありがとう」

零「礼を言うのはこつちだ。アマリ、メル…。二人からは学ばせてもらってばかりだ

な…。大好きだよ、二人共」

アマリ・メル「…」

ん、何で顔を赤くするんだよ……？って、あ……！

零「ち、違うぞ！好きっていうのは仲間だという意味であって……そういうやましい意味じゃないからな！」

俺は顔を真っ赤にさせ、逃げる様にそう言い、その場を走り出した……。

ルルーシュ「……全く、不器用なやつだ」

ロロ「兄さんも似た様なものだよ」

シャーリー「ホントね」

ルルーシュ「な、何っ……？？」

アマリ「(大好き……か……。私から言えるかな……？)」

メル「(仲間だという意味でも大好きと言われたら……嬉しいものですね)」
そんな会話を俺は聞けなかった……。

分岐シナリオ2

ー氷室 弘樹だ。

オニキスの基地へ戻ったカルセドニーはペリドットを鎖で拘束して、鞭で殴りつけていた。

アスナ「うあっ！」

ギルガ「君がシャーリーちゃんを奪われたせいで僕が首領に怒られたじゃないか…」
アスナ「ご、ごめんなさ… きやあっ！」

ギルガ「可愛い声で鳴くじゃあないか」

カノン「っ…！」

あまりの行為にサファイアが飛び出そうとしたが、俺はそれを止める。

弘樹「落ち着け、サファイア」

カノン「で、でも…」

カノン「落ち着くんだ…！」

俺だって、正直止めたいさ…！

鞭攻撃をやめ、カルセドニーはペリドットのアゴをクイと持つ。

ギルガ「次失敗したら、これじゃ済まないからね」

アスナ「は、はい…」

ギルガ「そうだ、新垣 零が君に苦しい目に合わすなよと言っていたんだ」

アスナ「え…？（に、新垣 零が…？！?）」

零のヤツ… 本当なお人好しだな…。

ギルガ「まさか、彼と裏で繋がっていたりとかしないよね？」

アスナ「と、当然よ！私は彼を許さないんだから！（ど、どうして彼は私なんかの事を…！）」

ペリドットの返事を聞き、カルセドニーは鎖を外すとその場を去り、俺達はペリドットに駆け寄った。

カノン「アスナさん！」

サファイアが手を伸ばし、彼女を支えようとするがペリドットは立ち上がる。

アスナ「助けなんていらぬわよ…」

弘樹「… このままあいつに従うとお前の身が危ないぞ？」

アスナ「わかりきっているわ。でも、もう私は退けないの…」

そう言い、ペリドットは部屋へ戻っていった…。

カノン「アスナさん…」

弘樹「あいつはひどい事を何度もしてきたんだぞ？」

カノン「それでも… 助けたいです…」

弘樹「… お前は強いな、サファイア」

俺は微笑み、サファイアの頭を撫でた…。

カノン「はう…！ あ、頭を撫でないでください！」

弘樹「わ、悪い！」

カノン「(でも、何だか悪い気はしませんでした…。 氷室さん…)」

何で、サファイアは顔を赤くしていたんだよ…？

ドニエル・トスだ。

私は今、メガファウナのブリッジでクリム大尉と通信で話していた。

クリム「そうか…。 宇宙からの脅威と遭遇したか…」

ドニエル「報告した通り、彼等是我々とキャピタル・アーミー双方に攻撃を仕掛けてきました。彼等についての情報は、そちらにないのですか？」

クリム「連中は月の裏側のコロニーに居住する一団でトワサンガと名乗っている」

ドニエル「トワサンガ…」

クリム「その存在を知る者は少ないが、かねてからの噂されていた通り、敵対するとなれば脅威と呼ぶに相応しい。だが、裏を返せば、こちらに味方してくれれば、頼もしい存在となる」

ドニエル「我々は彼等と交戦しましたが……」

クリム「条件はキャピタル・アーミーと同じだ。ここから何とかすればいい。規模から考えて、彼等の本隊は宇宙にいると考えられる。私は少数の部隊と共に宇宙に上がり、彼等と交渉するつもりだ」

ドニエル「成功を期待しております」

クリム「他人事のように言ってもらっては困るな、艦長。エクスクロスには、その護衛をしてもらう」

何……？

ドニエル「護衛……ですか？」

クリム「そうだ。ミスルギの追跡をかわすために合流ポイントは大気圏外とする。追って連絡するので、準備をしておいてくれ。以上だ」

話すだけ話して通信を切ったか……

ドニエル「……反対意見も言う暇もなく、押しつけられたか……。だが、対ミスルギの戦略としては間違いではない……。ここは天才の策に乗るとしよう」

「新垣 零だ。

俺とアマリは艦長室に呼び出され、話を聞かされた。

零「……それでまたエクスクロスは部隊を二つに分けて、対応する事になったんですね？」

ヒュウガ「その通りだ。対ドアクダーに集中する地上部隊とトワサンガへ交渉に向かう宇宙部隊だ」

ネモ船長「地上部隊はNーノーチラス号、ナデシコCを母艦とし……」

ルリ「ナデシコクルーとアキトさんにガイさん、ワタル君とシバラクさん、シヨウさんとマーベルさん、エイサツプさんとリユクス姫にアマルガンさん達と朗利さんと金本さん、九郎さんとエンネアさんにウエスト博士、シモンさん、しんちゃん達と春日部防衛隊にカンタムさん、パラメイル第一中隊の方々、ノブナガさん達のオダ家、ルルーシユさんとその仲間達、地獄の二人とスカーレット大尉、竜馬さん、ウルティメイトフォー、スゼロの方々、レイさんと怪獣さん達、ケロロさんと夏美さん、一夏さん達専用機持ち、万丈さんと勇者特急隊、それにグラタンの三人を編成します」

オルガ「宇宙部隊はメガファウナとシグナス、プトレマイオス2改、ハンマーヘッド

を母艦にして：：」

名瀬「モビルスーツ隊とヴァリアンサー隊、レガリアとヴァルキリーを編成する」

アマリ「私と零君、メルさんにマサキさんやアーニーさん達の行き先はまた選ばせてくれるのですね？」

スメラギ「事前にマサキやメル、アーニー少尉達にも確認したけど、あなた達に任せるそうよ。もちろん、二人は同じ部隊よ」

倉光「というわけで、君達の選択を聞かせてくれ」

アマリ「ドアクダーと戦う地上部隊とトワサンガへ向かう宇宙部隊ですよね：：」
ん？なんかデジャブだ：：。

アマリ「零君、お願い！」

零「またかよ：：」

仕方ねえ：： どうしようかな：：。

※ここからは分岐です！

〈地上部隊を選択の場合〉

零「地上部隊を希望します」

ドニエル「了解だ。では、君達とメル君、アーニー少尉やマサキはノーノーチラス号とナデシコCへ行ってもらう」

アマリ「あの・・・それを確認するためだけに私達を艦長室に呼んだのですか？」

名瀬「流石に、それは不自然だよな。。。というわけで、ここからが本題だ」

ルリ「アマリさんとホープスさんが喧嘩している事を気にしている人間が多いんですよ」

アマリ「・・・」

アマリ「・・・」

倉光「プライベートな問題であるし、君達は僕の部下でもない。。。だけど、僕達の旅においてアマリちゃんとホープス君の占めるウェイトが大きいのが事実だ」

アマリ「ゼルガードの戦力なんてたかが知れていると思いますけど。。。それに、占めているなら零君の方が・・・」

スメラギ「たけど、アル・ワースという世界全体を知るあなた達の存在は貴重なの」

オルガ「そして、ただの情報源っていう以上にお前らの戦う姿勢つてのは俺達に一本の筋を通して」

アマリ「自由のため… というものがですか？」

ヒュウガ「その通りだ。自分の意思で、自分の信じるもののために戦う…。この部隊は、そうありたいと考える人間の集まりだよ」

アマリ「… そんな風に言っていただけるとうれしく思います…」

名瀬「そういう恥じらいが奥ゆかしくていいな」

アマリ「ホープスとの事は私自身で解決します。みんなのためにも… 私達自身のためにも」

スメラギ「そうしてもらえると助かるわ。次に会う時には、息の合ったあなた達が見られる事を願うわ」

零「… あのー。俺は？」

名瀬「お前がほとんど一番の本題だ」

え…？

倉光「オニキスの者にしか使えないバスタードモード… そして、君がいるところにオニキスが現れる…。そこで私はある結論に出た」

零「結論…？」

倉光「零君、君はオニキスのスパイではないのかとね……」

……は？？

零「……俺が異界人と偽って、エクスクロスに入り、情報をオニキスに渡していると？」

ドニエル「……」

名瀬「勿論、お前にはみんな助けられている……エクスクロスにはなくてはならない存在だ。だが……」

零「みんなを助けたのもエクスクロスを欺く為の演技……だという事ですか？」

アマリ「そ、そんな！零君は一夏君としんちゃんと初めてあつたと言っていたじゃないですか！」

スメラギ「……一夏達が目を覚ます前に気を失ったフリをしていたら辻褄があうわ」

……おいおい、此処で疑われんのかよ、俺は……！

零「俺はスパイなんかじゃありません……信じてください！」

倉光「……と、これはあくまでも考えの一つだよ、名瀬艦長が言うように君は我々にとつてもアマリちゃんにとつてもいなくてはならない存在だ。すまない、さっきの事は忘れてくれ」

……スパイじゃないとしたら……俺は何でバスタードモードを使えるんだ……？そ

れだけはわからない……！

ーリボンズ・アルマークだよ。

僕はジュリオ・ミスルギに呼び出され、皇宮内に入った……。

おや、他の人達もいるね……。

ジュリオ「……諸君、我が招集に伝えてくれた事にまずは礼を言おう」

デキム「……」

クンパ「……」

マクギリス「……」

リボンズ「……」

ハーン「局長の体調が優れない為、本日は私が代理で出席させていただいております。宇宙に上がられておられたクンパ・ルシータ大佐とは初めてお会いするのでしたね。私の名はヴィルヘルム・ハーン。ゾギリア科学アカデミー研究所の所長を務めております」

クンパ「科学者が政治に口を出すのかな？」

ハーン「科学の発展が世界を変えていく…。 行政局局長も同じように考え、私を重用されているのです」

クンパ「了解した。先程の失礼は謝罪する」

デキム「ジュリオ陛下…。 あの方は、まだいらつしやつておらんのですかな？」

ジュリオ「私の招集が不満か、デキム・バートン？」

デキム「そうではございません。ですが、あの方にお目通りできる機会はなかなかございませぬので」

マクギリス「デキム公のおつしやる事も理解できません。我々は、彼の方の持つ帰還の術に忠誠を誓っているのですからね」

ジュリオ「マクギリス・フアリド！この私を愚弄するつもりか？！」

全く、惨めだね…。

すると、エンブリヲが来た。

エンブリヲ「騒々しいね、ジュリオ」

ジュリオ「も、申し訳有りません、エンブリヲ様！」

エンブリヲ「妹に…。 アンジュにつけられた傷が疼くようだね」

ジュリオ「あの化け物は…。 私自らの手で必ずや始末してみせます…。！」

エンブリヲ「彼女がビルキスのライダーとはね…。 ますます面白い…。！」

エンブリヲ「では、諸君…」

ハーン「…」

クンパ「…」

リボンズ「何かな？」

エンブリヲ「これより、この世界行く末を討議しよう…」

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

・N1ノーチラス号／ネモ船長

・ナデシココ／ルリ

・ダイターン3／万丈

・ダンバイン／マーベル

・ビルバイン／シヨウ

・アツカナナジン／エイサップ

・ギム・ゲネン／リユクス

- ・ギム・ゲネン／アマルガン
- ・シンデン／朗利
- ・シンデン／金本
- ・龍神丸／ワタル
- ・戦神丸／シバラク
- ・マイトガイン／舞人
- ・バトルボンバー
- ・ガードダイバー
- ・ブラックマイトガイン
- ・蜃気楼／ルルーシユ
- ・紅蓮聖天八極式／カレン
- ・ランスロット・アルピオン／スザク
- ・ランスロット・フロンティア／C・C.
- ・モルドレッド／アーニャ
- ・サザーランド・ジーク／ジエレミア
- ・ヴァインセント可翔式／ロロ
- ・ザ・フル／ノブナガ

- ・オルレアン／ジャンヌ
- ・ゴ・クウ／ヒデオシ
- ・デモンベイン／九郎
- ・破壊ロボ／ウエスト
- ・ネームレス・ワン／エンネア
- ・ヴィルキス／アンジュ
- ・アーキバス　サリア・カスタム／サリア
- ・グライブ　ヒルダ・カスタム／ヒルダ
- ・レイザー／ヴィヴィアン
- ・グライブ　ロザリー・カスタム／ロザリー
- ・ハウザー　エルシャ・カスタム／エルシャ
- ・ハウザー　クリス・カスタム／クリス
- ・アーキバス　バネツサ・カスタム／タスク
- ・ケロロボ Mk-III／ケロロ
- ・パワード夏美／夏美
- ・グレンラガン／シモン
- ・ブラックゲッター／竜馬

- ・マジンカイザーSKL／海道
- ・ウイングル／スカーレット
- ・ブラツクサレナ／アキト
- ・エステバリスカスタム／リョーコ
- ・スーパージェステバリス／サブロウタ
- ・スーパージェステバリス／ガイ
- ・ウルトラマンゼロ
- ・グレンファイヤー
- ・ミラーナイト
- ・ジャンボット
- ・ゴモラ／レイ&ゴモラ
- ・カンタムロボ／しんのすけ
- ・鉄人ボーちゃん28号／トオル
- ・白式／一夏
- ・紅椿／箒
- ・ブルー・ティアーズ／セシリア
- ・甲龍／鈴

- ・ラファール・リヴァイヴ・カスタムII／シャルロット
- ・シュヴァルツェア・レーゲン／ラウラ
- ・打鉄式式／簪
- ・ミステリアス・レイディ／楯無
- ・グラタン／グランデイス
- ・サイバスター／マサキ
- ・オルフェス／アーニー
- ・ライラス／サヤ
- ・ライオットB／リチャード
- ・ゼルガード／アマリ
- ・シャイニング・ゼファイルス／零
- ・メサイア／メル

〈宇宙部隊を選択の場合〉

零「宇宙部隊を希望します。やっぱり、宇宙には憧れますから」

ネモ船長「了解だ。では、君達とメル君、アーニー少尉やマサキはメガファウナ、シグナス、プトレマイオス、ハンマーヘッドへ行ってもらおう」

アマリ「あの……それを確認するためだけに私達を艦長室に呼んだのですか？」

名瀬「流石に、それは不自然だよ……。というわけで、ここからが本題だ」

ルリ「アマリさんとホープスさんが喧嘩している事を気にしている人間が多いんですよ」

アマリ「……」

アマリ……

倉光「プライベートな問題であるし、君達は僕の部下でもない……。だけど、僕達の旅においてアマリちゃんとホープス君の占めるウェイトが大きいのが事実だ」

アマリ「ゼルガードの戦力なんてたかが知れていると思いますけど……。それに、占めているなら零君の方が……」

スメラギ「たけど、アル・ワースという世界全体を知るあなた達の存在は貴重なの」

オルガ「そして、ただの情報源っていう以上にお前らの戦う姿勢ってのは俺達に一本の筋を通して」

アマリ「自由のため……というものがですか？」

ヒュウガ「その通りだ。自分の意思で、自分の信じるもののために戦う……。この部隊は、そうありたいと考える人間の集まりだよ」

アマリ「……そんな風に言っていただけとうれしく思います……」

名瀬「そういう恥じらいが奥ゆかしくていいな」

アマリ「ホープスとの事は私自身で解決します。みんなのためにも……私達自身のためにも」

スメラギ「そうしてもらえると助かるわ。この任務の間に息の合ったあなた達が戻ってくる事を願うわ」

零「……あのー。俺は？」

名瀬「お前がほとんど一番の本題だ」

え……？

倉光「オニキスの者にしか使えないバスタードモード……そして、君がいるところにオニキスが現れる……。そこで私はある結論に出た」

零「結論……？」

倉光「零君、君はオニキスのスパイではないのかとね……」

……は……？

零「……俺が異界人と偽って、エクスクロスに入り、情報をオニキスに渡していると

「？」

ドニエル「……」

名瀬「勿論、お前にはみんな助けられている…… エクスクロスにはなくてはならない存在だ。だが……」

零「みんなを助けたのもエクスクロスを欺く為の演技…… だという事ですか？」

アマリ「そ、そんな！ 零君は一夏君としんちゃんと初めてあつたと言っていたじゃないですか！」

スメラギ「…… 一夏達が目を覚ます前に気を失ったフリをしていたら辻褄があうわ」

…… おいおい、此処で疑われんのかよ、俺は…… ！

零「俺はスパイなんかじゃありません…… 信じてください！」

倉光「…… と、これはあくまでも考えの一つだよ、名瀬艦長が言うように君は我々にとつてもアマリちゃんにとつてもいなくてはならない存在だ。すまない、さっきの事は忘れてくれ」

…… スパイじゃないとしたら…… 俺は何でバスタードモードを使えるんだ…… ？ それだけはわからない…… ！

ーリボンズ・アルマークだよ。

僕はジュリオ・ミスルギに呼び出され、皇宮内に入った……。

おや、他の人達もいるね……。

ジュリオ「……諸君、我が招集に伝えてくれた事にまずは礼を言おう」

デキム「……」

クンパ「……」

マクギリス「……」

リボンズ「……」

ハーン「局長の体調が優れない為、本日は私が代理で出席させていただいております。宇宙に上がられておられたクンパ・ルシータ大佐とは初めてお会いするのでしたね。私の名はヴィルヘルム・ハーン。ゾギリア科学アカデミー研究所の所長を務めております」

クンパ「科学者が政治に口を出すのかな？」

ハーン「科学の発展が世界を変えていく……。行政局局长も同じように考え、私を重用されているのです」

クンパ「了解した。先程の失礼は謝罪する」

デキム「ジュリオ陛下……。あの方は、まだいらっしやっておらんのですかな？」
ジュリオ「私の招集が不満か、デキム・バートン？」

デキム「そうではございません。ですが、あの方にお目通りできる機会はなかなかございませぬので」

マクギリス「デキム公のおつしやる事も理解できます。我々は、彼の方の持つ帰還の術に忠誠を誓っているのですからね」

ジュリオ「マクギリス・ファリド！この私を愚弄するつもりか!?？」
全く、惨めだね……

すると、エンブリヲが来た。

エンブリヲ「騒々しいね、ジュリオ」

ジュリオ「も、申し訳有りません、エンブリヲ様！」

エンブリヲ「妹に……。アンジュにつけられた傷が疼くようだね」

ジュリオ「あの化け物は……。私自らの手で必ずや始末してみせます……！」

エンブリヲ「彼女がビルキスのライダーとはね……。ますます面白い……」

エンブリヲ「では、諸君……」

ハーン「……」

クンパ「……」

リボンス「何かな？」
エンブリヲ「これより、この世界行く末を討議しよう……」

- ・メガファウナ／ドニエル
- ・シグナス／倉光
- ・プトレマイオス2改／スメラギ
- ・ハンマーヘッド／名瀬
- ・Zガンダム／ルー
- ・ZZガンダム／ジユドー
- ・百式／ビーチャ
- ・ガンダムMk-III／エル
- ・キュベレイMk-III／プル
- ・リ・ガズイ
- ・ジエガン／ケルベス

- ・バンシイ・ノルン／リディ
- ・クシャトリヤ／マリーダ
- ・シナンジュ／フロンタル
- ・ガンダムF91／シーブツク
- ・ビギナ・ギナ／セシリー
- ・ウイングガンダムゼロ／ヒイロ
- ・ガンダムデスサイズヘル／デュオ
- ・ガンダムヘビーアームズ改／トロワ
- ・ガンダムサンドロック改／カトル
- ・アルトロンガンダム／五飛
- ・トールギスIII／ゼクス
- ・トールス／ノイン
- ・デイスティニーガンダム／シン
- ・フォーサインパルスガンダム／ルナマリア
- ・ガイアガンダム／ステラ
- ・ダブルオークアンタ／刹那
- ・ガンダムサバーニャ／ロックオン

- ・ガンダムハルト／アレルヤ
- ・ラファエルガンダム／ティエリア
- ・ガンダムデユナメス／ニール
- ・ガツデス／アニュー
- ・ブレイヴ指揮官用試験機／グラハム
- ・GNーXIV／パトリック
- ・GNーXIV／アンドレイ
- ・GNーXIII／セルゲイ
- ・Gーセルフ／ベルリ
- ・Gーアルケイン／アイーダ
- ・ガンダムバルバトスルプス／三日月
- ・ガンダムグシオンリベイク／明弘
- ・ガンダムフラウロス／シノ
- ・百鍊／アミダ
- ・百里／ラフタ
- ・辟邪／ハツシユ
- ・ガンダムキマリスヴィダール／ガエリオ

- ・レギンレイズ・ジュリア／ジュリエッタ
- ・ランドマン・ロディ／アストン
- ・YF―29 デュランダル／アルト
- ・VF―27γ ルシファー／ブレラ
- ・ルクシオン／青葉
- ・ブラディオオン／デイオ
- ・アレクト／ユイ
- ・テイシス／サラ
- ・サイバスター／マサキ
- ・オルフェス／アーニー
- ・ライラス／サヤ
- ・ライオットB／リチャード
- ・ゼルガード／アマリ
- ・シャイニング・ゼフィルス／零
- ・メサイア／メル

地上ルート

第30話 灼熱の激闘

ークラマだ。

俺はザン・コックと通信をしていた……。

クラマ「……以上でナディアの行動についての報告を終わります」

ザン・コック「ご苦労」

クラマ「あの子に何の意味があるんですか？」

ザン・コック「お前は命令された事をやっていればいい。余計な事は考えるな」

クラマ「……了解です」

ザン・コック「もうすぐ次の刺客がエクスクロスに攻撃を仕掛ける。その混乱の中でお前には任務を遂行してもらおう」

クラマ「それが成功すれば、俺の望みは叶えられるのでしょうか？」

ザン・コック「全てはお前の働き次第だ。では、指令を与える」

くそつ……。このままじゃ、俺の精神の方が先に参っちまう……。さつさと任務を果たして俺は望みを叶えるんだ……。

―新垣 零だ。

俺達はN―ノーチラス号に集まっていた。

クラマ「…」

何か、いつもうるさいクラマが黙ってるな…。

ヒミコ「トリさん、元気ないのだ」

ナディア「またシバラク先生に仕事をサボってるって怒られたの？」

クラマ「そんなんじゃないよ…。(人の気も知らないで、のんきなもんだぜ…。)」

シャーリー「元気が出ない時は美味しいものを食べるといいわよ」

ヴィヴィアン「そういう事なら仕方ない。この特製キャンディ、あげる」

クラマ「ヴィヴィアンが、いつも舐めてるやつか？」

ヴィヴィアン「本当は誰かにあげちゃダメだけど、特別だよ。クラマはあたしやマリーと遊んでくれるから」

クラマ「ありがとよ…。それにしても変な味だな、これ…。」

ヴィヴィアン「ダメだよ！せつかくあげたんだから、全部、舐めなきや！」

クラマ「わかった、わかった」

しんのすけ「クラマ、そのまま飲み込むんだゾ！」

クラマ「おう！……って、喉に詰まるわ！」

ナディア「何かあったら、行ってね。あたし達で出来る事なら、何でもするから」

クラマ「随分と優しいじゃねえかよ、ナディア」

ネネ「ナディアさんは動物が好きだからね！」

クラマ「俺は動物じゃねえよ！」

ボーちゃん「元気……出た……！」

マサオ「ホントだ！良かった」

クラマ「かなわねえな、お前達には……」

ナディア「本当はね……。クラマは、いつもあたしに優しくしてくれるから、そのお礼がしたいの……」

クラマ「そつか……。だったら、ジャンにもとつと優しくしてやってもいいんじゃないやねえのか？」

零「茶化してやるなよ……」

悪い顔してるな、こいつ……。

ナディア「ジャ、ジャンは関係ないじゃない！」

ヴィヴィアン「そこでクイズです！どうしてナディアは顔が真っ赤なのでしょう！」

ヒミコ「お猿のお尻は真っ赤つか！ナディアのほっぺも真っ赤つか！」

ナディア「ヴィヴィアン！ヒミコ！」

シャーリー「ほっぺが真っ赤つかと言えば、零君もあの時顔が真っ赤つかだったわよ」

零「しや、シャーリー!!？」

シャーリー「アマリさんとメルちゃんに俺はお前達の事が好きだ!… って、言っ

ていたよね？」

ネネ「そんな事言っていたんですかー？」

零「だ、だから、やましい意味はねえつての！」

しんのすけ「顔を赤くして言っても説得力ないゾ〜？」

零「しんのすけ!!？」

スザク「シャーリーに振り回されているね、零は…」

ルルーシュ「御愁傷様と言っておいてやるか」

アマリ「…」

メル「…」

カレン「こつちの二人も真っ赤だけどね…」

クラマ「ほれほれ、お前等… こんな所で油を売つてるとエレクトラ姐さんに怒られ

るぜ」

夏美「そうね……。そろそろ晩ご飯の支度をしなきゃ……」

ヴィヴィアン「あたしはパラメイルの整備だ！」

ヒミコ「んじゃ、トリさん！待ったねー！」

そう言い、俺達と生活班とヴィヴィアンは格納庫を出た……。

ークラマだ。

あいつ等を見送った俺は息を吐いた。

クラマ「本当に騒がしい連中だぜ……。」

けどよ……。この騒がしい暮らしが段々と心地よくなってきちまっている……。すまねえな、ナディア……。俺がお前の世話を焼いてるように見えるのはお前を監視してるからだ……。すまねえな、ワタル……。俺はお前等の行動をドアクダー軍団に報告して、隙あらば邪魔しているんだよ……。けど……。けどよ……。俺は……。村のみんなのためにも……。やらなきゃならねえんだ……。くそ……。このおかしなキャンデイのせいだよ……。胸が苦しく……。なって……。

クラマ「ぐ……。ぐうう……。ああ……！」

な、何だ、この飴……!!?

クラマ「……な……何がどうなってんだ……。俺……人間の姿に戻ってる!!?」
いったい、何が起こってんだよ……。!!?

ーネモだ。

私達はNーノーチラス号のブリッジにいた。

エーコー「ネモ船長……！前方のエリアに異常な熱反応を観測！」

エレクトラ「地形データを照合しましたが、この一帯に火山活動は記録されていません」

エーコー「なお、そのエリアで何者かが交戦状態にあるようです！」

ネモ船長「確かめる必要がある……。ナデシココにも連絡を入れる。その後、全速前進と同時に機動部隊には出撃の準備をさせろ！」

エレクトラ「了解です！」

第30話 灼熱の激闘

「俺は兜 甲児だ。」

俺達はまるでマグマのような場所に来ていた。

甲児「何なんだよ、ここは… ！！？」

さやか「地下からマグマが噴き出してきている！」

溪「この世界にはこんな場所もあるんだね…」

凱「も、もう勘弁して欲しいぜ…」

ヌケ「た、確かにこの世界に来てから驚きの連続だったけど…！」

ムチャ「これは、ちよつとヤバすぎだーっ！！？」

ボス「ガタガタ言ってるじゃねえ！ここまで来たら腹をくくれ！」

號「… 来るぞ！」

號の言葉と同時にブロッケン伯爵達のロボットが現れた。

ブロッケン「ヌハハハハ！我輩を追ってきたか、兜 甲児とその仲間達！」

甲児「見つけたぜ、ブロッケン伯爵！ドアクター軍団とまとめて、ここで片付けてや

るぜ！」

ブロッケン「別の世界に来てまで物好きな男よ……。何ならお前もドアクダー軍団に入れる様に我輩が口を利いてやってもいいぞ？」

甲児「誰が悪党の仲間なんかになるかよ！」

さやか「あなた達のような恥知らずな真似なんて出来るもんですか！」

テイベリウス「あらあん、勇ましい子達ね！食べちやいたいくらいにね！」

凱「あ、あのゾンビ野郎もいるのかよ……！」

溪「あたし、あいつ嫌いなよね……！」

テイベリウス「そう嫌わないでちょうだい！」

ブロッケン「こちらに来ないのならば、この灼熱地獄をお前達の墓場にしてやろう！」

甲児「黙れ、ブロッケン！」

號「このマグマだ、長居はできないぞ、甲児！」

甲児「おう！ブロッケン伯爵、テイベリウス！俺達は絶対にお前達の思い通りにはならない！絶対に生き抜いて、元の世界に帰ってやるぞ!!？」

俺達は戦闘を開始した……。

数分後の事だった……。

號「!::: この反応は::: インベーターが来る!」
インベーターが複数現れた。

溪「本当にしつこいわね、インベーター!」

さやか「でも、流石に数の差がありすぎる::: !」
すると今度はボスが叫んだ。

ボス「兜! まだ何か来るぜ!」

甲児「ドアクター軍団の増援か!!?」

俺達の背後に戦艦二隻が現れた:::。

―新垣 零だ。

俺達はマグマのような場所に来て、出撃した:::。

竜馬「あれは::: 真ドラゴン::: !!? 號、溪、凱か!!?」

凱「ブラックゲッターだと!!?」

號「竜馬なのか!!?」

竜馬「久しぶりにあったのに変わらねえな!」

號「お前は時空の狭間に行ったのでは::: !!?」

竜馬「どうやら、アル・ワースに転移した来たみたいだ」

溪「竜馬！親父達は!?？」

竜馬「さあな、この世界で目を覚ました時には俺とこのブラックゲッターしかなかつたぜ」

アマリ「竜馬さんのお知り合いですか？」

竜馬「共に戦った仲間だ！」

何だろぅ……。竜馬さんの仲間って破天荒じゃねえだろうな……。

スカレット「まさか、號達に出会おうとはな……。ん？どうした、海道、真上……」

真上「あそこにいる機体……」

海道「まるでカイザーじゃねえかよ！何なんだよ、あの機体は！」

ワタル「あー！やっぱり、あれ……。マジンガーZだ!!？」

舞人「甲児さん……。！無事なんですね！」

甲児「舞人！お前もアル・ワースに来ていたのか！」

万丈「あのロボットのパイロット……。舞人の知り合いのようだな」

ワタル「紹介します！あれこそが無敵のスーパーロボット！鉄の城、マジンガーZ！」

海道「マジンガー……」

真上「Z……」

グレンファイヤー「歌になるとゼエエエエツト!!??:: つて、叫びそうだな」

ジャンボット「グレン、この暑さでおかしくなつたか？」

ミラーナイト「いや、逆に住み心地がいいのでしよう」

ケロロ「この暑さは勘弁して欲しいのであります。」

ワタル「そして、マジンガーZのパイロットな悪を許さぬ不屈の男、兜 甲児さんです！」

す、凄え……。ワタルのべた褒めだ……。！

甲児「誰だか知らないが、解説ありがとうよ！」

一夏「あれがワタルの言っていたもう一人の憧れのヒーローなんだな！」

ラウラ「あのはしやぎっぷりは……。そのようだな」

簪「た、確かにヒーローの威厳が出てる……。！」

楯無「簪ちゃんのヒーロー好きも相変わらずね」

ガードダイバー「お久しぶりです、さやかさん！」

バトルボンバー「ボス、ヌケ、ムチャの三人組も元気そうだな」

ヒュウガ「ボスだと……。？」

さやか「甲児君と一緒に何とかやってるわよ！」

ボス「お前等がいるって事はそつちの皆さん方が俺達の味方なんだよな！」

ワタル「その通り！ドアクター軍団と戦うエクスクロスだよ！」

ヒデヨシ「ワタルの奴、上機嫌だな」

ノブナガ「己の夢見た男と出会えたのだ……突然であろう」

ブロッケン「ぬうう……！こやつ等がエクスクロスか！」

テイベリウス「あら？そちらにいるのはデモンベインじゃないのよお！」

九郎「触手ゾンビ野郎！？てめえは俺達が異界へ飛ばしたはずだろ！？」

アル「何等かの方法でアル・ワースへと転移したのであろう……。全く、しつこいゾンビだな」

ブロッケン「こやつ等を待ち伏せするつもりが、兜 甲児達まで来るとは予想外……

！」

零「悪いが、そっちの都合なんか知った事じゃねえからな！」

アンジュ「ええ、そうね！容赦無く叩き潰すわ！」

ヴィヴィアン「やる気満々だね、零、アンジュ！」

零「シモンを見習って、気合いを入れる事にした！」

シモン「その粋だ、零！だが、まだ足らねえぞ！」

零「ここからですよ！俺を誰だとおもっていやがる!!？」

メル「し、シモンさん！零さんを熱血キャラにしないでください！」

ヴィラル「無駄だ。こうなったシモンはテコでも止まらん」

アンジュ「私はこの所、ストレスが溜まる事が多かったから、少し暴れさせてもらおうとおもってね」

ブロッケン「むう！」

な、何だ…？

アンジュ「な、何…？ あいつ、こつちを見ている…？」

ブロッケン「気に入った！」

アンジュ「はあ…？」

ブロッケン「わざわざ露出たつぶりのパイロットスーツで出て来るとは嬉しいではないか！ そのムチムチのボディ… 我輩がたつぷりと可愛がつてやる！」

サリア「ハ、ハレンチ!!？」

チャム「下品！」

エレボス「クズ！」

アンジュ「な、何なのよ、あいつ…！」

タスク「そうはさせない！」

アンジュ「タスク…！」

タスクの奴、格好いいじゃねえか…！

タスク「あの綺麗な髪も、澄んだ瞳も、バラ色のほほも、つややかな唇も何一つお前には渡さない！ 豊満な胸も、しまったウエストも、柔らかなヒップと、滑らかな太もも何一つだ！」

九郎「ま、まあ、気持ちは分からなくもねえが……」

こ、こいつらあ……！

アマリ「や、やだ……！ 味方にも、同レベルの人達がいます！」

零「ちよつとでも、格好いいと思つた俺が馬鹿だつた……」

アンジュ「口を閉じなさい、変態！」

アル「黙らんか、このうつけが……!!？」

九郎「ごはあつ!!？」

殴られたな……。

エルザ「ダーリン……」

エンネア「自業自得だよ」

タスク「ア、アンジュ……！ また何か来たよ！」

すると、ブロッケンとかいう奴等の背後に魔神部隊、BD連合のロボット……そして、アイアンカイザーに大イクサロイと黒いケロロロボが現れた。

ソイヤ・ソイヤ「何をしておるか、ブロッケン！」

ブロッケン「ソイヤ・ソイヤ！我輩を呼ぶときは伯爵をつけんか！」

ソイヤ・ソイヤ「かくしやくがどうのとはお前はジジイか！」

ブロッケン「かくしやくではない！はくしやくだ！」

ソイヤ・ソイヤ「がはははは！冗談だ、冗談！笑って許せ！」

シバラク「暑苦しい奴が出て来た！」

ソイヤ・ソイヤ「聞けい、ワタルとエクスクロス！俺の名はソイヤ・ソイヤ！ドアクダー様から第三界層を任せられた男だ！クルージング・トムとデス・ゴッドを倒して来たようだが、このソイヤ・ソイヤは一味も二味も違うぞ！この灼熱地獄をお前達の墓場にしてやるわ！」

甲兎「ブロッケンと同じセリフを言ってやがるぜ！」

ソイヤ・ソイヤ「ブロッケン！お前、俺の決め台詞を使いおったな！」

ブロッケン「又ハハハハ！こういうのは早い者勝ちだ！」

ダークケロロ「いつまでくだらぬ、会話をしているつもりだ」

ケロロ「け、ケロロ？お前は…！」

冬樹「もう一人の軍曹？！」

ダークケロロ「久しいな、もう一人の吾、そして冬樹…！」

夏美「どうして、あんたがドアクダー軍団の奴らと一緒にいるのよ？！」

ダークケロロ「強き者と一緒にいるのは当然の事だ」

しんのすけ「お前はぶりぶりぎえもんかー！」

冬樹「そんな……どうして……」

カエサル「オダ・ノブナガ、アケチ・ミツヒデ……。またお会いする事になるとはな……。ミツヒデ「その声！それにその大イクサヨロイは……。！」

ノブナガ「……カエサル、何の真似だ？」

か、カエサル……。ガイウス・ユリウス・カエサルの事かよ……。！

カエサル「見て分からないのかな、ノブナガ！私は貴公の敵だ！」

ヒデヨシ「な、何だと……。!?？」

ジャンヌ「そ、そんな……。どうしてなの……。カエサル！」

カエサル「……」

キバ「よお、来てやったぜ！ドクロ！」

海道「キバの兄ちゃんか！」

真上「かつて自分が死んだ場所と同じような場所で俺達に挑んでくるとはいい度胸だ」

キバ「はっ！ほぎけ、今度は俺がやってやるぜ！」

ビトン「あくあ……。どうして、このあたくしがこんな奴らと組まなきゃならないの

よ……」

オードリー「我慢です、カトリーヌ様。せめてスノービーの冷凍攻撃で私達だけでもクールにいきましょう」

ソイヤ・ソイヤ「やるぞ、ブロッケン、ティベリウス、カトリーヌ・ビトン、キバ、ガイウス・ユリウス・カエサル、ケロロ大軍曹！奴等を地獄の業火で燃やし尽くしてやれ！」

ビトン「だ・か・ら！その暑苦しいノリにあたくしを付き合わせないで!!？」

ダークケロロ「同感だ」

カエサル「いや、たまにはヒートアップというとも悪くない」

キバ「おうよ！燃えるぜー!!？」

舞人「甲児さん！あのソイヤ・ソイヤおいう男はドアクダー軍団の幹部です！」

甲児「そんな奴が出て来たなら好都合だ！あいつを叩いて、ドアクダーにマジンガー乙の力を見せつけてやる！」

ワタル「さっすが兜 甲児！ハツキシ言つて、超ウルトラハイパーカッコいいぜ！」
マサキ「心強い仲間が増えたな。それに、気が合いそうだぜ」

甲児「おう、ありがとよ！これからはよろしく頼むぜ！行くぜ、悪党共！俺達がいる限り、お前達の思い通りになると思うなよ!!？」

竜馬「行くぜ、號！」

號「インベーターもいる…油断せずに行くぞ！」

俺達は戦闘を開始した…。

? 「マグマみたいになったと思ってきてみたけど…。」

? 2 「それにデモンベインもいるぞ」

? 3 「大十字さんも戦ってるんだ…僕達は、どうする…?」

この戦いを見ている者がいるとも知らずに…。

〈戦闘会話 號VS初戦闘〉

凱「敵が来たぞ、二人とも！」

溪「真ドラゴンの力、見せてやろうよ！」

號「ああ、行くぞ、ゲッターアアアツ!!?」

インベーターを全て倒した俺達…。

竜馬「インベーター野郎は全部やってやったぜ！」

メル「気をつけてください、まだ何か来ます！」

現れたのは……ゴキブリ……
!!?

エイサツプ「な、何だこいつら!!?」

しんのすけ「き、気持ち悪いゾ……」

アーニー「彼等は……！」

九郎「おいおい、スクラッグじゃねえか!!?」

シヨウ「スクラッグとは何ですか!!?」

九郎「俺達の世界の地球に攻めて来た宇宙生命体だ！」

サヤ「(そちらの世界にもスクラッグが……!!?)」

ゼロ「スクラッグ……噂に聞いていたが、まさかこんな所で会うなんてな……！」

ケロロ「我輩の最も会いたくない宇宙人ランキングでもトップに入る分類であります

よ……！」

アル「だが、妾達と奴らで全て駆逐したはずでは……！」

ウエスト「どうやら、アル・ワースで蘇ったのである……！」

ワタル「そんな……此処でさらに増援だなんて……！」

?3「大丈夫だよ、僕達もいます！」

九郎「そ、その声は……！」

ジョーイ「行くよ… ヒーローマン・エンゲージ!!?」

つ…！突然現れた少年の持っていた玩具のロボットに雷が当たった。

ヒーローマン「…」

玩具のロボットが白いヒーローになった…!!?

九郎「来たぜ、ヒーローマン！」

エンネア「何度見ても格好いいね！」

九郎「お前、ジョーイなんだな!!?」

ジョーイ「お久しぶりです、大十字さん！」

アル「汝もこの世界に来ていたのだな！」

ジョーイ「僕だけじゃなくて、サイやリナ、デントン教授も来ていますよ！」

デントン「久しぶりだね、大十字君！」

サイ「またデモンベインを見れるなんてな！」

リナ「お元気そうで何よりです！」

ジョーイ「教授、サイとリナをお願いします！」

デントン「心得たよ、ジョーイ君！」

リナ「気をつけてね、ジョーイ…」

ジョーイ「うん！」

彼女達は安全な場所まで移動した…。

すると、ヒーローマンは俺達の元まで移動する。

ジョーイ「エクスクロスの皆さん！僕達もお手伝いします！」

アキト「名前にヒーローがつくヒーローが出てくるなんてね」

ガイ「くーっ！ゲキガンガーに負けない格好良さだぜ！」

簪「格好良すぎる…！」

ルリ「協力感謝します、良いですよね、ネモ船長」

ネモ船長「了解しました」

ジョーイ「よし行くよ、ヒーローマン！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 ヒーローマンVS初戦闘〉

ヒーローマン「…」

ジョーイ「うん、わかっているよ、ヒーローマン。この世界でも僕達は一緒に戦う！ヒー

ローマアアン…ゴオオオッー!!？」

〈戦闘会話　ヒーローマンVSスクラッグ兵士〉

ジョーイ「(スクラッグがこの世界で復活した。。。奴らの目的は一体。。。?)」

〈戦闘会話　九郎VSスクラッグ兵士〉

九郎「またこいつらと戦う事になるなんてな。。。」

アル「だが、一度敗北した者に負ける気はない」

九郎「そうだな、忘れたならまた教えてやる！デモンベインのチカラをな!!?」

俺達はスクラッグ兵士を全て倒した。。。。

零「よし、スクラッグ兵は倒したぞ！」

ジョーイ「(スクラッグはドアクターの元で動いているって聞いた。。。彼等の目的。。。まさか。。。)」

ソイヤ・ソイヤ「ふん、スクラッグというのも使えんな。。。」

マイトガインの攻撃を受けたスノービー……。

ビトン「ちよつと！この灼熱地獄の一服の清涼剤になつてるスノービーを撃墜するとは何事よ！」

甲児「そんなの決まつてるだろうが！」

舞人「お前が悪だからだ！」

ビトン「覚えてなさいよ、マイトガインの坊やにマジンガーZの坊や！このカトリィ又・ビトン！アル・ワースに輝く宝石になつてみせるから！」

嫌なんだよ、その捨て台詞!!？

スノービーは撤退した……。

甲児「相変わらず、訳のわからない女だぜ……」

マイトガイン「同感です、甲児さん」

〈戦闘会話〉 ケロロVSダークケロロ

ケロロ「もう一人の吾輩、まだわからないのでありますか!!？」

ダークケロロ「知らん、吾は吾の生き方で生きる…。邪魔をするのなら、始末する」
ケロロ「この…。バカチンがああつ!!？」

〈戦闘会話 夏美VSダークケロロ〉

夏美「今すぐこんな事やめなさいよ、黒いポケガエル！」

ダークケロロ「やめる気はない。というより、そのポケガエルという呼び方はよして
もらおうか。吾はケロロ大軍曹だ」

夏美「知らないわよ、そんな事！こうなったら力付くでも止めるわよ！」

ケロロボMk111の攻撃により、ダークケロロボはダメージを受けた。

ダークケロロ「ふむ、やはりお前達は強いな…。だが、その友情を必ず打ち砕く。覚
えている、冬樹…」

そう言い残し、ダークケロロボは撤退した…。

ケロロ「どうしたのでありますか…。もう一人の吾輩…！」
冬樹「軍曹…！」

〈戦闘会話 海道VSキバ〉

キバ「こういう場所にいると身体が疼くぜ！」

海道「なんなら、その卯月をすぐにでもとってやるよ！」

真上「そうだな、貴様の死でな！」

キバ「そう簡単にくたばってたまるかよ！」

〈戦闘会話 甲児VSキバ〉

甲児「何だ……？あいつの気迫は……！」

キバ「ドクロのそっくりな魔神か！ドクロとどっちが強いか、試してやるぜ！」

甲児「お前の様な奴を野放しにはできない…… 此処で倒してやるよ！」

カイザーの攻撃でアイアンカイザーはダメージを負った。

キバ「クソツ…… また負けたのか、俺は……！次だ、次こそドクロの息の根を止めて

やるぜ！」

そう言い残し、アイアンカイザーは撤退した……。

真上「去台詞だけは一人前だな」

海道「そうか？古臭いと思うけどな……」

〈戦闘会話 ノブナガVSカエサル〉

カエサル「今度こそ、負けないよ。ノブナガ」

ノブナガ「何度挑もうと俺には勝てん」

カエサル「良い自身だ。ならば、尋常に勝負だ！」

ノブナガ「フツ、是非もなし！」

〈戦闘会話 ジャンヌVSカエサル〉

ジャンヌ「カエサル……」

カエサル「ジャンヌ・カグヤ・ダルク……。君の天啓を見込んでドアクダー軍団に来ないかい？」

ジャンヌ「無駄よ、私はノブナガと一緒にいくと決めたの」

カエサル「ノブナガを慕う愛情……。かつての私みたいだな……。ならば、もう容赦はない！」

〈戦闘会話 ヒデオシVSカエサル〉

ヒデオシ「おい、カエサル！こんな事して、イチ姫様が悲しまないでも思ってるのかよ!?」

カエサル「イチ姫は関係ない……。これは私の意思なのだから」

ヒデオシ「クソッ！わけ分からねえやつかと思っただけ、此処までとはな！覚悟しろよ、カエサル！」

ザ・フルルは風の神器の力でクオ・ヴァデイスに大ダメージを与えた……。

カエサル「今日は此処までだ」

ノブナガ「カエサル……何故俺達を狙う？」

カエサル「愛するもののためだ」

それだけ言い残し、クオ・ヴァデイスは撤退した……。

ミツヒデ「愛する者の為だと……？（まさか、イチ姫様もアル・ワースに來ているとも言いたいのか……？）」

〈戦闘会話 九郎VSティベリウス〉

ティベリウス「今度は負けないわよ！」

九郎「もうてめえにはうんざりなんだよ！」

ティベリウス「そんな事言わずに楽しみましょうよ！」

アル「ゾンビに付き合っている暇はない！」

九郎「おう！てめえをもう一度、異界にぶっ飛ばしてやるぜー!!？」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSティベリウス〉

ティベリウス「あら？久しぶりね、坊や。相変わらず可愛い顔しているじゃないの！」

ジョーイ「うん。何度見てもこの人は苦手だ……。早く蹴りをつけないと！」

デモンベインはレムリア・インパクトでベルゼビュートにダメージを与えた。

ティベリウス「コンノオオツ！また勝てないなんて……。悔しいイイイイツ！覚えてな

さい！」

そうやって、ベルゼビュートは撤退した…。

九郎「まためんどくさい事になりそうだな」

アル「そうだな…。早い所あの技を取り戻さなければ…」

九郎「あんまり気負いすぎるなよ、アル」

アル「ふっ、わかっている」

〈戦闘会話 海道VSブロッケン〉

ブロッケン「な、何だ!? マジンガーZにそっくりなロボットだと!?」

真上「確かに似ているがこれはあいにくマジンガーZではない」

海道「ああ、これはカイザー…。俺達が地獄だ!!」

ブロッケン「じ、地獄だと…。!?」

海道「さあやるぜ、首だけ野郎！」

マジンガーZのプレストファイヤーで飛行要塞グールにダメージを与えた…。

ブロッケン「い、いかん……。！せっかく、生き残ったのにこんな所で死んでは意味がない！」

甲児「待て、ブロッケン！あしゆらもアル・ワースに来ているのか？？」

ブロッケン「奴の事なの知らん！我輩は自分の事だけで精一杯だ！」

飛行要塞グールは撤退した……。

ボス「しぶとい奴だぜ！」

さやか「Dr. ヘルもあしゆら男爵もいないのによくやるわよ……」

甲児「Dr. ヘルとの決戦の最後にあしゆらの儀式によって、俺達は、この世界に跳ばされた……。あの儀式は、生命を捧げたものだと言っていた以上、奴は生きていないだろう……。わからない……。あしゆらは何のために俺達をこのアル・ワースに跳ばしたんだ……」

龍神丸はキングヘラクロスにダメージを与えた。

ソイヤ・ソイヤ「ぬおおおつ！馬鹿なあああつ！！？」

ワタル「観念しろ、ソイヤ・ソイヤ！マジンガーZも加わった僕達に勝てると思うな

！」

ボス「俺達の事も忘れんな！」

ソイヤ・ソイヤ「ぬうう……！こうなれば……！灼熱の剣よ！この地を燃やせ！」

零「あ、あいつ、何をしやがった?!？」

シヨウ「何が起きている?!？」

シモン「まずい！溶岩部分が煮えたぎっている！」

箒「奴の言っていた灼熱の剣という物の力か！」

ルルーシユ「そうか……！この不自然な溶岩地帯もあの剣によるものか！」

カレン「そんな力を持っているって事は……！」

シャルロット「あれも創界山の秘宝に違いないよ！」

メル「灼熱の剣……！アツサムとウララの伝説の……！」

一夏「メル！そのアツサムとウララって誰だ?!？」

メル「アツサムは秋と冬を司る神……ウララは春と夏を司る神です……」

アマリ「愛し合う二人は、片時も離れる事がありませんでした……。ですが、そのために季節は失われ、世界は混乱に包まれました……」

ホープス「罰を受けた二人は石像にされましたが、哀れと思った者によつて、その手には互いの季節の剣が握られました……」

メル「アツサムには灼熱の剣が… ウララには極寒の剣が…」
な、何だよ、その織姫と彦星をもっと悪くしたような伝説…！」

ソイヤ・ソイヤ「グハハハ！そんなくっさい伝説など知った事ではないわ！エクスクロスよ！この灼熱地獄の中で溶けて死ね!!？」

あ、あの野郎…逃げやがった…！」

ユリカ「ここに留まるのは危険です！各機は離脱を！」

ヴィヴィアン「…」

アンジュ「何してるの、ヴィヴィアン！離脱するよ！」

ヴィヴィアン「このままじゃ…世界が…」

ゼロ「お、おい！ヴィヴィアン！」

あいつ…レイザーから降りて何する気だよ…」

って…ちよつと待て！

エルシャ「ヴィヴィちゃん！」

ロザリー「パラメイルから降りるなんて何やってんだよ、あいつは!!？」

ジェレミア「この高熱の中を歩いているだと…」

千冬「何故、ヴィヴィアンが…」

ヴィヴィアン「このままじゃ…世界が…壊れる…！」

ヴィヴィアンの身体が変わった……？って、あれって……？

ヴィヴィアン「!!?!!?」

アンジュ「ヴィヴィアンが……ドラゴンになった……」

朗利「おい、第一中隊！何なんだよ、これは……？」

金本「どうして人がドラゴンに……？」

クリス「あたし達だつて知らないよ！」

サリア「何なのよ！どうなってるのよ、これ……？」

ヒルダ「知るかよ！こつちだつて信じられねえんだ！」

エルシャ「ヴィヴィちゃん！」

ヴィヴィアン「!!?!!?」

ヒデオシ「俺達の声が届いていないのかよ……？」

ネモ船長「各機は撤退を急げ」

リョーコ「何言つてんだよ……？ヴィヴィアンがまだいるんだぞ……？」

サブロウタ「彼女を見捨てろつての……！」

クリス「で、でも……あれはドラゴンで……」

レイ「みんな、見ろ！」

ヒミコ「きやはは！ヴィヴィアンも忍法・変化の術が使えるのか！」

ノブナガ「ヒミコ！」

ヒミコ「ここは暑いからさっさと帰るのだ！」

アーニヤ「ダメ……！あの子に声は届いていない！」

ロザリー「ヒミコが食われる!!？」

アンジュ「くっ……！」

どうすれば良いんだよ……！

すると、二度俺達を救ってくれた緑の魔神が現れた。

？「継承者よ！真なる星歌を歌うのだ！」

ワタル「忍者の魔神！」

ひまわり「たや！」

？「急げ！あの子を救うためには真なる星歌しかない！」

アンジュ「真なる星歌……あのドラゴンの指揮官も言っていた……」

アンジュが歌った……この歌は……！

アンジュ「（それは……お母様から伝えられた歌……永遠語り……）」

ヴィヴィアン「……！」

ヒミコ「ほら、ヴィヴィアン！アンジュが歌っているのだ！ヴィヴィアンが好きって

言ってたアンジュの歌なのだ！」

ヴィヴィアン「…」

ヴィヴィアンが元に戻った…！

アマルガン「元に戻ったぞ！」

アンジュ「ヴィヴィアン！」

サリア「人間に戻った…！」

ヒミコ「気絶はしてるけど、大丈夫なのだ！」

アンジュ「ヒミコはヴィヴィアンをお願い！こっちはレイザーを回収する！」

レイ「ヒミコ、リトラを出す！乗ってくれ！…リトラー！！？」

ネオバトルナイザー『バトルナイザー・モンスロード！！？』

リトラ「キシャアアアツ！」

レイ「ヒミコを乗せてくれ、リトラ！」

これで何とかなったが…。

？「取り敢えず何とかなったか…」

緑の魔神は撤退した…。

しんのすけ「あの魔神…また何も言わずに行っちゃったゾ…」

シロ「ワン…」

ミツヒデ「各機、離脱だ！急げ！」

アマリ「灼熱の剣……。あれをソイヤ・ソイヤから奪わなければ同じ事の繰り返しになります。」

零「ああ……。絶対に取り返さないと……。とにかく、今は行くぞ！」
俺達はこの場から離脱した……。

一流 竜馬だ。

Nーノーチラス号の格納庫に俺達は集まった……。

竜馬「そうか、あの戦いが終わった後にこつちに転移してきたのか……」

凱「ああ……」

溪「親父達もアル・ワースにいるのかな？」

號「竜馬がいるという事はあると思う……」

溪「うん、そうだね……」

九郎「お前らもこつちの世界に跳ばされていたとはな」

ジョーイ「いつもの様に学校へ向かっているといつの間にか……」

サイ「まあ、九郎さん達に出会えたのは不幸中の幸いだけだよ……」

リナ「どうしてスクラッグが蘇ったんだろう……」

デントン「それはまだ謎だよ……そして、何故ドアクダーに手を貸しているのかもね……」

ジョーイ「(僕に助言してくれたのって…… ウイル、君なんだよね……。君もこの世界に……いるの……?)」

舞人「…… Dr. ヘルとの決戦で行方不明になっていた甲児さん達がアル・ワースにいたとは……」

甲児「俺としては、全く別の状況で舞人達が跳ばされていた事に驚いたぜ」

舞人「エクスクロスには、他にも俺達の世界から跳ばされて来た人間がいますよ」

甲児「あのワタルっていう子か……。まだ小学生なのに救世主をやつてるとはな」

舞人「後で励ましてやってくださいよ。ワタルは甲児さんに憧れてますから」

さやか「そのワタル君は、どこに？」

舞人「ヴィヴィアンに…… ドラゴンになった少女の側についてあげています」

┆新垣 零だ。

俺達はヴィヴィアンの様子を見に来た……。

ワタル「… デンギル先生…。 ヴィヴィアンさんは、どうなんです？」

デンギル「呼吸や脈拍は正常だから、大丈夫だと思いが…。」

イコリーナ「でも、こんなケースは初めてだから、いつまたドラゴンに変わるか、わからなくて…。」

クラマ「… このキャンディを食わせとけば、問題ねえ」

ナディア「クラマ…。」

瑠璃「それは… ヴィヴィアンがいつも舐めているキャンディですね」

クラマ「さあな、どういう理屈かわからねえが、こいつはヴィヴィアンが変身するのを抑える効果があるらしい」

千冬「待て、何故そのような事をお前が知っている？」

クラマ「俺の事が信じられねえのなら、それでいい。だが、嘘をついてるつもりはねえ」

千冬「… わかった。疑うような事を言って、すまなかつた…。」

クラマ「気にしてねえよ…。」

そのままクラマは船室から出て行った…。

ワタル「クラマ…。」

ヒミコ「今日のトリさん… 何かシリアスだな…。」

千冬「……」

ウエスト「……」

ノブナガ「……臭うな……」

ジャン「ヴィヴィアンの事や灼熱の剣の事とか、色々あったからね……」

エルシャ「ねえ、サリアちゃん……。あなたはヴィヴィちゃんの変身の事……。知っていたの？」

サリア「何も聞いてなかったわ……」

ヒルダ「隊長のサリアにも言っていないとは司令の奴……。どういうつもりだよ……！」

ロザリー「司令は知ってたって言うのか!?」

アンジュ「ヴィヴィアンのキャンディはマギーが用意した特別のものだった……。もし、鞍馬の言う通り、あれが変身を止める力を持つなら、マギーはヴィヴィアンの事を知って来た事になる」

ヒルダ「マギーって言えば、司令の片腕みたいなもんだ」

クリス「司令はヴィヴィアンの事を知っていたのに、あたし達に秘密にしていたんだ……」

零「タスク……。お前はどうか？お前はこの事を知っていたのか？」

タスク「いや……」

ヒルダ「こんな風に何もかも秘密にされた状態で戦えるかよ……！」
アンジュ「いい加減はつきりさせないとね……。タスクの事、ヴィヴィアンとドラゴンの事……。そして、司令とネモ船長の事……」

アンジュ「ヴィヴィアンが落ち着いたら、Nーノーチラス号を降りてでもアルゼナルに行くわよ……」

サリア「(司令……。いえ、アレクトラ……。何故、何も話してくれないの……)」

ークラマだ。

俺は外に出ていた。

結局、ソイヤ・ソイヤが仕掛けている間には任務を果たす事は出来なかったか……。

ナディア「クラマ……」

そこへ、ナディアと一夏が来た……。

クラマ「ナディアと一夏か……」

一夏「ナディアからこっちにいるって聞いたからよ……」

クラマ「何だよ……。また、慰めに来てくれたのか？」

ナディア「戦闘が終わってからクラマ……。何だか凄く悲しそうだったから……」

クラマ「それでわざわざこんな所まで来たのかよ……」

ナディア「こういう時はあんまりたくさんの人と話したくないって知ってる……」

一夏「でも、誰かに声をかけてもらえると嬉しいだろ……？」

クラマ「……なあ、二人共……。一番ショックを受けるのってどういう時だかわかるか……？」

ナディア「え……」

クラマ「俺は今日……。わかった。それは、絶望的な現実の中、少しだけ希望が見えたのにまた現実に戻られた時だ……」

一夏「それが……。クラマが悲しそうな顔をしていた理由なのか……？」

クラマ「たくつ、お前らは凄いや、ホント……。こんな俺の表情がわかるなんてよ……。だが、たった二人でしかも、人を信じやすい一夏と一緒に来てくれたおかげで俺の仕事がやりやすくなったぜ」

……もう覚悟を決めたんだ……！

クラマ「ナディア……。俺と一緒にドアクダー軍団に来てもらおうぜ」

ナディア「え……！」

一夏「な、何言ってるんだよ、クラマ……？」

クラマ「俺はドアクダー軍団のスパイなのさ。で、先方はナディアがお望みなんだと

よ」

一夏「じよ、冗談だろ… クラマ!!?」

クラマ「悪いが冗談じゃねえんだよ…」

ナディア「う、嘘…！あたし…！あなたが悪い人だなんて思えない！」

クラマ「今の俺は人じやねえ！トリなんだよ！だから、ナディアをドアクダーの所に連れていかなきゃならねえんだ!!?」

一夏「く、クラマ…！」

すると、走って来たのは… ヒミコ…！??

ヒミコ「何をしているのだ、トリさん!?!?」

クラマ「くっ…！どうしてヒミコが、ここに!?!?ならば…！」

俺はヒミコに催眠ガスをかけた。

ヒミコ「あ、あれ…」

そのままヒミコは眠りについた。

ナディア「ヒミコ！」

クラマ「安心しろ。ただの催眠ガスだ。普段のヒミコならかわせただろうが、さすがに今日はヴィヴィアンを助けてへとへとだったようだな」

一夏「ふざけんなー！」

一夏が俺に殴りかかって来たが、俺はカウンターを一夏の腹に決めた。

一夏「がっ!!?ゴフツ…!」

ナディア「一夏さん!」

そのまま一夏も気を失った…。

ジャン「ナディアアーツ!!?」

ワタル「ヒミコーツ!!?」

箒「一夏ーッ!何処だーッ!!?」

他の奴らの声だな…!

クラマ「ちつ…!邪魔者が来るか…!」

ナディア「クラマ…!ヒミコと一夏さんをどうするつもりなの!!?」

クラマ「お前が俺と一緒に来ないなら、こいつらを人質にする…!みんなに言っ

ておけ!ヒエヒエ神殿で待つてな!」

そのまま俺はヒミコと一夏を抱き抱えて飛び去った…。

ナディア「ヒミコ…一夏さん…クラマ…」

…悪く、思うなよ…。

第31話 極寒の死闘

―織斑 一夏だ。

俺とヒミコはクラマにヒエヒエ神殿と呼ばれる神殿まで連れて来られた…。

ヒミコ「きやははは！きやははは！この建物の中、ぜくんぶ凍ってるのだ！」

ソイヤ・ソイヤ「ええい、うるさい！人質なら人質らしく大人しくせんか！」

ヒミコ「オツサン！こんな氷の中でも暑苦しいのだ！」

ドクトル・コスモ「クラマ！ザン・コツク様はナディアをさらって来いと命じたはずだぞ！」

クラマ「邪魔が入ったんだ…。だが、こいつらはワタルの大切な仲間だ。人質としての価値は十分にあるはずだ」

くそつ！白式を奪われなければ…！

ヒミコ「違うよ、トリさん」

一夏「ヒミコ…？」

ヒミコ「ワタルにとっては、みくんな大切な仲間だよ！もちろん、トリさんもなのだ

！」

クラマ「ヒミコ……」

ソイヤ・ソイヤ「まあいい……。ナディアとかいう小娘を捕らえるのはワタル達を始末してからでいいだろう」

一夏「そんな事はさせない！」

ソイヤ・ソイヤ「ISというものがないお前に何が出来ると言うのだ！ドクトル・コスモ！エクスクロスへの連絡は済んでいるだろうな？！」

ドクトル・コスモ「耳元で怒鳴るな、ソイヤ・ソイヤ！それに同格であるワシに命令するのは許さん！ドアクター軍団最高の頭脳を持つ、このドクトル・コスモのやる事に抜かりはない！ちやくんとワタルとアンジュとか言う女……。そして、流 竜馬とかいう男だけで来いと告げたわ！」

ソイヤ・ソイヤ「アンジュ……。？あの白いパラメイルに乗った女か……」

ドクトル・コスモ「あの女を指名したのはザン・コック様だ。理由はわからんけど……。所で、他の奴らはどこに行った？」

ダーケケロロ「カエサル、キバ、テイベリウス、ビトン。ドアクターが呼び戻したそうだ……。吾だけでは不満か？」

ドクトル・コスモ「そうではないのだ」

ソイヤ・ソイヤ「所で何故、流 竜馬という男まで呼んだ？」

ドクトル・コスモ「ゲッター線というものに個人的にに興味を示してな…。とにかくここで奴等を始末すれば、ワシの出世は間違いないだ！」

クラマ「…俺の任務は終わった。これで望みは叶うんだろうな？」

すると、三人組が来た。

ザン・コック「まだだ、クラマ」

クラマ「ザン・コック様…！」

ザン・ゴロツキー「中途半端な任務の達成では、褒美をやる事は出来んな」

ザン・ギャツク「そーだ、そーだ。ソーダ村の村長さんも、そう言っている、エヘヘ」

ソイヤ・ソイヤ「おお…。！ザン・コック様、ザン・ゴロツキー様、ザン・ギャツク様！」

ドクトル・コスモ「ドアクダー四天王のお三方がわざわざおいでになるとは…。は…。！もしかして、このドクトル・コスモに昇進の通達をされるために…。！」

ザン・ゴロツキー「気の早い奴だ」

ザン・ギャツク「尻みたいな頭のくせに」

ザン・コック「我等、ザン兄弟がここに来たのは救世主ワタルの最後を確認するため

だ」

クラマ「ワタルの最期……」

ザン・コック「クラマよ……。お前の望みは、奴の死を確認してからだ」

クラマ「動物に変えられた俺と村の人達……。人間に戻してくれるのですか？」

……何だと……。!??

ザン・コック「何度も言わせるな。全てはワタルを倒してからだ」

ザン・ゴロツキー「だが、安心するがいい」

ザン・ギヤック「もしもの場合は、我等ザン兄弟も出撃するつもりだからな。もしもし、かめよ〜」

ザン・ゴロツキー「……ザン・ギヤック……。お前は、もう喋るな……」

ザン・ギヤック「す、すまねえ、兄者……」

ザン・コック「さあ来い、救世主と歌姫、そしてゲッター線に選ばれし者よ……。灼熱と極寒の地獄がお前達を待っているぞ。お前達が神龍の力を使おうと、我らの前では無力である事を教えてやる」

クラマ「(すまねえ、ワタル……。だが、俺は……。村の人達のためにもどうしてもやらないやならなかったんだ……)」

クラマ……。

第31話 極寒の死闘

一流 竜馬だ。

俺とワタル、アンジユはそれぞれの機体に乗し、指定された場所まで来た。

ワタル「指定された場所に来たけど……」

アンジユ「炎と氷……。大地が完全にくつきり色分けされている……」

ワタル「炎の方が灼熱の剣の力だとしたら、氷の方は……」

竜馬「極寒の剣の力というわけだな」

ドクトル・コスモ「その通り！少しは考える力があるようだな！」

竜馬「俺達を呼び出したのは、てめえか！」

ドクトル・コスモ「ワシの名はドクトル・コスモ！ドアクター軍団最高の頭脳を持ち、

第四界層を任せられた者だ！もつとも、ここでお前達を倒す事でさらに出世するがな

！」

アンジユ「暑苦しい男の次は、薄ら寒い男が出て来た……」

ソイヤ・ソイヤ「グハハハハハ！これぞ炎と氷の無敵のタッグよ！」

ワタル「ソイヤ・ソイヤ！やっぱり、お前もここにいたのか！」

ソイヤ・ソイヤ「逃げ出さずに来た事は褒めてやるぞ、ワタル、アンジュ…そして、

流 竜馬！」

竜馬「約束通り、俺達だけで来てやったんだ… ヒミコと一夏を返してもらおうか」

ワタル「そして、クラマがいるなら話をさせろ！」

ドクトル・コスモ「まあ、そう焦るな」

ソイヤ・ソイヤ「まずはお前達を歓迎してやる」

すると、敵部隊が出て来やがった…。

龍神丸「やはり、敵を潜ませていたか！」

ワタル「畏なのは承知の上だよ、龍神丸！」

ソイヤ・ソイヤ「たった三人で、どれだけ戦えるかな？」

ドクトル・コスモ「見せてもらうぞ！お前達の最後の足掻きを！」

アンジュ「準備はいい、ワタル、竜馬!?やるよ！」

竜馬「おう！俺達を舐めた事を後悔させてやるぜ！」

ワタル「待って、アンジュさん、竜馬さん！その前に…！聞こえますか、一夏さん、

ヒミコ！絶対に助けるから、少しだけ待っていて！それと、クラマ！お前があんな事し

たのは何かの間違いだって僕はわかってるから！だから、こいつ等を片付けたら一緒に帰ろう！」

クラマ「ワタル…。。お前って奴はよ…。」

一夏「(ワタルはしっかりとみんなのために戦っている…。なのに俺は…。)」

アンジュ「行くよ、卑怯者！」

竜馬「容赦無くぶっ飛ばしてやる！」

ワタル「僕は絶対に負けないからな！」

俺達は戦いを始めた…。

〈戦闘会話 竜馬VS初戦闘〉

竜馬「来るなら来やがれ！てめえ等を返り討ちにして一夏とヒミコを救い出してやるぜ！」

戦闘から数分後…。。

ドクトル・コスモ「ムフフ……。楽しいな、ソイヤ・ソイヤ！」

ソイヤ・ソイヤ「まったくだ、ドクトル・コスモ！クルージング・トムやデス・ゴツドを倒した、あのワタルを俺達が仕留めるのだからな！」

ダークケロロ「（ふん、浮かれているとは……。足元を掬って欲しいと言っているのも同じだぞ）」

ワタル「あいつ等……。もう勝った気になって……。！」

龍神丸「待て、ワタル！何か来るぞ！」

現れたのは……。アンジュを狙うパラメイルじゃねえか!?!?

竜馬「あれは……。！」

アンジュ「ドラゴンを指揮していた女……。！」

すると、パラメイルはこっちの方まで来た……。

アンジュ「今は取り込み中なの！あなたに構っている暇はないから！」

サラマンディーネ「アンジュ……。わたくしはあなたに会いに来たものではありません」

アンジュ「いつの間私の名前を……。！」

サラマンディーネ「それぐらいの調べはついています。ですが、一方的なのは望む所ではありませんので、わたくしも名乗りましょう。神祖アウラの末裔にして、フレイヤの一族が姫……。近衛中将、サラマンディーネ……。！」

サラマンディーネ…それが奴の名か…。

サラマンディーネ「アウラの民として、古の契約に基づき戦部の救世主様のお手伝いをする！」

ワタル「戦部の救世主って…」

龍神丸「お前の事だ、ワタル」

竜馬「古の契約とはなんだ？散々俺達に敵対していたお前が何故、ワタルを助ける？」

サラマンディーネ「勿論、救世主様だけではなく、あなたの事もお助けします。ドラグニウムの戦士殿」

竜馬「ドラグニウム…？何の事だ！」

サラマンディーネ「そう言えばあなた達の呼び方は違うのでしたよね」

竜馬「何…？てめえ、何が言いたい？！」

龍神丸「話は後だ。まずは彼女と協力して、状況を打開するぞ」

ワタル「わかつたよ、龍神丸…！サラマンディーネさん…！よくわからないけど、僕に力を貸して！」

サラマンディーネ「喜んで、救世主様…！」

ナーガ「あれが伝説に謳われた戦部の救世主様…」

カナメ「可愛い方ですね」

サラマンディーネ「後になさい、カナメ、ナーガ。あなた達には、わたくしの支援を命じます」

カナメ「かしまりました、サラマンディーネ様」

ナーガ「姫様と救世主様、そして、ドラグニウムの戦士様のためにこの身命を賭して……！」

アンジユ「……」

サラマンディーネ「不満もあるでしょうけど、今はそれを忘れなさい、アンジユ」

アンジユ「信じていいの、サラマンマン？」

サラマンディーネ「無論……。なお、わたくしの名はサラマンディーネです」

アンジユ「……わかったわ。今は手を貸してもらおうわ、サラマンデンデン」

サラマンディーネ「……あなた、わざとやってませんか？」

ドクトル・コスモ「何だ、あいつは!? ワシの完璧な計画がズレてしまうではないか……！」

ソイヤ・ソイヤ「いかがします、ザン・コック様？」

ザン・コック「あの女についても調べはついている歌部（うたいべ）の民が揃ったのなら、まとめて片付けてやればいい」

竜馬「とにかくやるぜ、アンジユ、ワタル、龍の姫さん！あいつ等を蹴散らして、ボ

ス供を引きずり出してやろうぜ！」

アンジュ「遅れないでね、サラ子！」

サラマンディーネ「アンジュ……。その無礼についてはいずれ代価を払ってもらいます」

俺達は戦闘を再開した……。

敵を着実に倒していく俺達……。

ドクトル・コスモ「ぬうう……。！思った以上にやるではないか！」

ソイヤ・ソイヤ「こうなったら、人質を盾にして抵抗できなくさせてやる！」

あいつら、汚い真似を……。！

ワタル「アンジュさん、竜馬さん……。！」

アンジュ「大丈夫だよ、ワタル……。！そろそろのはずだから！」

すると、神殿の方が軽く爆発する。

始まったか！

ドクトル・コスモ「な、何だ？？」

ソイヤ・ソイヤ「ええい、侵入者か！」

竜馬「今だ、ワタル！」

龍神丸「行け、ワタル！」

ワタル「うおおおっ!!？」

龍神丸は神殿まで行き、龍神丸から降りて、神殿の中へ入った……。

―新垣 零だ。

俺達はアンジユ、ワタル、竜馬さんが戦っている間にヒエヒエ神殿へと侵入した。

ブリキントン「!!？」

挑んでくるブリキントンをシバラク先生、海道さん、ノブナガが斬った。

シバラク「寄らば斬る！道を空けい！」

海道「空けても斬るけどな！」

ノブナガ「覚悟！」

九郎「卑怯な手を使う奴らに手加減はしねえぞ！」

シモン「何処だ、ヒミコ、一夏！俺達が助けに来たぞ！」

サンソン「いるんなら、返事しろ！すぐに行くからよ！」

ソイヤ・ソイヤ「お、お前達！いつの間に神殿に入り込んだ！」

ミツヒデ「ワタル達に気を取られすぎたな、お前達は」
 ドクトル・コスモ「ワ、ワシはワタルとアンジユ、流 竜馬の三人で来いと言つたはずだぞ！」

零「何言つてんだよ！ちゃんとワタル達は三人で来て、俺達は別行動じゃねえか！」
 アマリ「どこもルールは破つていません！それなのに文句があるんですか!!?」

ソイヤ・ソイヤ「な、何だと…!!? そんな、屁理屈を…！」

アマリ「屁理屈ではありません！これはトンチです！どこか間違っている所があるなら、言つてみてください！さあ！さあ!!?」

ソイヤ・ソイヤ「ぬうう！く、悔しいーっ!!?」

零「へっ、ざまあねえな、ブサイクコンビ！」

シバラク「ぬははは！もつと言つてやれ、アマリ、零！」

ザン・コック「愚か者共め！やつてきたのから、飛んで火に入る夏の虫にしてくれる！」

ザン・コックがシバラク先生に攻撃を仕掛けた…！

クラマ「危ねえ、ダンナ！」

クラマがシバラク先生を庇つて、攻撃を受けた…!!?

クラマ「ぐうっ!!?」

シバラク「クラマ！拙者を庇つて……！」

ザン・コック「ちつ……！邪魔が入らなければ、田舎侍を始末できたのに！ならば、クラマ！ドアクダー軍団を裏切つた貴様から血祭りに上げてくれる！」

零「クラマ！」

だが、そこへワタルが来た。

ワタル「やめろ！これ以上、僕の仲間に出すな！」

クラマ「ワタル……！」

ザン・コック「救世主ワタルが来たか。ならば、自己紹介をせねばなるまい」

ワタル「何つ……!?？」

ザン・コック「我こそはドアクダー四天王の一人、ザン・コック！」

ザン・ゴロツキー「その弟にして四天王の一人、ザン・ゴロツキー！」

ザン・ギャック「さらに、その弟にして四天王の一人、ザン・ギャック！ゲバゲバ！」

弟の弟……いや、めんどくせえ!?？」

ワタル「ドアクダー四天王……！」

ザン・コック「ワタルよ……。貴様の強さは、先程までの戦いで見せてもらった。そして、理解した。ドアクダー様に逆らう者達の旗頭である貴様は正面から叩き伏せねばなるまいと」

ワタル「魔神で戦うというのか…！」

ザン・コック「その通りだ！貴様が無様に敗北する様を見せれば、ドアクダー様に逆らう者達も大人しくなる！ゴロツキー、ギャック！ソイヤ・ソイヤ、ドクトル・コスモ、ケロロ！行くぞ！」

ザン・ゴロツキー「了解だ、兄貴！」

ドクトル・コスモ「エクスクロス…！よくもワシの作戦を…！かくなる上は、あの小娘とガキだけでも我が手で始末してくれる！」

ヒミコ「小娘って、あちしの事？」

万丈「どうして逃げてないんだ、ヒミコ!?？」

一夏「危ない、ヒミコ!!？」

ドクトル・コスモ「もう遅い！死ねえええつ！」

クラマ「一夏！」

クラマが一夏に白式のガントレットを投げ、一夏はそれを受け取った。

一夏「よし、白式！」

白式を纏い、一夏は雪平二型でドクトル・コスモの攻撃を弾いた。

ドクトル・コスモ「な、何!?？」

ヒミコ「ヒミココミココヒミココミコ！忍法・火炎車！」

ドクトル・コスモ「う、うおおおっ！あちちちちち！」

ソイヤ・ソイヤ「何をやっている、ドクトル・コスモ！俺達もザン・コック様に続くぞ！」

ドクトル・コスモ「りよ、了解だ！」

ダークケロロ「吾も出るか……」

ケロロ「待つであります、もう一人の吾輩！」

ダークケロロ「……」

ケロロ「お前の考えている事は……わかるでありますよ」

ダークケロロ「……何を言っている？吾はかつての吾とは違うのだ」

ケロロ「……」

ダークケロロ「（バカでも流石はもう一人の吾だ……。なかなかの勘をしている……。）決着をつけよう、もう一人の吾」

ケロロ「……わかったであります！」

ダークケロロ、ドクトル・コスモ、ソイヤ・ソイヤも外に走った……。

クラマ「ヒミコ……」

ワタル「全部話してくれるよね、クラマ」

クラマ「言い訳はしねえ……。俺は最初からお前等をスパイするために仲間になっ

たのさ」

ワタル「もしかして、あの鳥型の魔神って……」

クラマ「ああ、そうだ。空神丸に乗っていたのは、俺だよ」

ゼロ「お前の行為がナディアを……ヒミコをどれだけ傷つけたのかわかってんのかよ!?」

シバラク「そこに直れ、クラマ！拙者が叩き切ってくれ!!?」

クラマ「謝ったって許されない事をしていたのはわかってる……。ダンナに斬られるんなら本望だ……。さあ……。すっぱりやってくんな」

シバラク「覚悟はできているようだな！ならば、行くぞ！」

ワタル「先生、ダメだよ！」

シバラク「どけ、ワタル！こいつのおかげでヒミコと一夏は危険に晒されたんだぞ！」

ヒミコ「でも、あちし……。無事だったのだ」

一夏「俺も無事だったんです、だから……！」

シバラク「それは結果の話だ！事実、ナディアだったら、こうはうまくいかなかった！」

一夏「だから、クラマはナディアじゃなくて俺達を人質にしたんですよ！」

シバラク「……そうなのか、クラマ」

クラマ「それは……」

ワタル「クラマは先生を助けてくれたよ！先生は恩人を斬つちやつていいの!!?」
ヒミコ「トリさんは友達だよ！」

一夏「そして、俺達、エクスクロスの仲間です！」

シバラク「しかしだな……！」

ワタル「きつと今までの事は訳があつたんだよ！」

しんのすけ「だから、クラマは悪いけど悪くないゾ！」

クラマ「ありがとうよ、ワタル、一夏、しんのすけ……。だが、もういいんだ……」

クラマが……泣いている……。

クラマ「お前等に仲間と呼んでもらえただけで、もう十分だ……。これで思い残す事は
ねえ……。さあ、ダンナ！やつてくんない！」

メル「そ、そんなのダメです！」

零「止めるな！」

エンネア「零……」

メル「でも……！」

零「男には……はじめをつけないければならない時がある……。だから……。止めるな……
！」

メル「……」

シバラク「……お主の覚悟、受け取った……！さらばだ、クラマ！」

クラマ「！」

シバラク先生はクラマを斬った……。

いや、クラマの肉体は斬っていないが……。

ヒデヨシ「直前で止めた……」

箒「いや……気では斬っている」

クラマ「ダンナ……」

シバラク「今の一太刀で昔のクラマは死んだ……。何処へでも行くがいい」

ノブナガ「甘いな。だが、流石だ……。シバラク」

クラマ「俺を……許すつてのか……？」

シバラク「先程の涙、お主の真心から出たものと見た。生きておれば、良い事もあ
る……」

クラマ「……そうだな。じゃあな、ワタル、ヒミコ……。それにみんな……」

クラマは歩き去った……。

シバラク「達者でな、クラマ……」

ヒミコ「トリさん……」

ワタル「クラマアアアツ!!？」
ワタルの声が神殿中に響いた……。

一流 竜馬だ。

アンジュ「竜馬、サラ子！もうすぐワタル達が出てくる！私達で援護をするよ！」
竜馬「言われるまでもねえ！」

サラマンディーネ「わたくしは救世主様をお助けしますが、あなたの指揮下に入ったつもりはありません」

アンジュ「そんな事を言ってる場合じゃないわよ！」

ちっ……！新たに魔神部隊とダークケロロロボが現れたか……！

ザン・コック「クラマ！ドアクダー軍団を裏切った貴様には制裁を加える！」

クラマ「！」

何で、クラマがあんな所に……？

ワタル「アンジュさん、サラマンディーネさん、竜馬さん！クラマを助けて！」

サラマンディーネ「心得ました、救世主様！」

竜馬「だが、間に合わねえぞ！」

サラマンディーネ「心配ありません、来ます！」

現れたのは……真ゲッター……!!?

竜馬「真ゲッターだと!!？」

隼人「生きていたのか、竜馬」

弁慶「ようやく見つけたぜ！」

竜馬「隼人、弁慶!!？お前達もアル・ワースに来ていたんだな！」

隼人「まあな。そしてその姫さんに世話になっていた」

弁慶「話は後だ、乗れ、竜馬！」

竜馬「おうよ！」

俺はブラックゲッターから降り、真ゲッターに乗った……。

アンジュ「あれが……竜馬の仲間……」

サラマンディーネ「ドラグニウム……いえ、ゲッター線に導かれし者達が再び集まり

ました！」

竜馬「やっぱり、この感じの方がしっくりくるぜ」

隼人「フツ、鈍っていないだろうな？」

竜馬「当たり前だ！」

弁慶「ならば、行くぞ！」

竜馬「おうよ！」

俺は真ゲッターを動かし、ドン・コツクのガツタイダーの元まで瞬時に移動し、攻撃を仕掛けた……。

竜馬「隼人、弁慶！忘れちゃいねえだろうな？…… オープンゲット！」

オープンゲットをして、真ゲッター2に変形する。

隼人「誰に聞いている！ドリルハリケーン!!？」

真ゲッター2のドリルハリケーンでガツタイダーを何度も攻撃し、地面に潜る。

その隙に真ゲッター3となる。

弁慶「へっ、身体が覚えてるさ！大雪山おろしー!!？」

大雪山おろしでガツタイダーを叩きつける。

弁慶「オープンゲット！」

竜馬「チエーンジ、ゲッター1!……ゲッタービイイム!!？」

真ゲッター1に戻り、ゲッタービームを放って、ガツタイダーにダメージを与えた。

ザン・コツク「ぐおっ!!? な、何だと……!!？」

サラマンディーネ「続きますよ！」

アンジユ「でも、この距離じゃ……！」

サラマンディーネ「あなたは、そこで見ていなさい！」

今度は龍の姫さんのパラメイルが近づいて来た。

アンジュ「あの女……！ヴィルキス！あんな女に負けていられないよ！」

な、何？？ヴィルキスの色が青くなって、ガツタイダーの前まで瞬間移動しただと？！

？

ザン・コック「何っ？？」

サラマンディーネ「次元跳躍？？」

アンジュ「やるじゃない、ヴィルキス！この力なら……！」

ヴィルキスは攻撃を仕掛けた……。

アンジュ「生き延びる……！そのために！やるわよ、ヴィルキス！全力で！」

ヴィルキスは次元跳躍ってやつを繰り返して攻撃を繰り返す。

アンジュ「間合いに入った！」

今度は赤くなるヴィルキスはビームを纏わせた剣でガツタイダーを斬り裂いた。

アンジュ「これで……とどめ！」

攻撃を受けたガツタイダーは大ダメージを受ける

ザン・コック「ぬわあああつ！！？？ば、馬鹿な！！？」

ソイヤ・ソイヤ「ザン・コック様！」

弁慶「な、何なんだ、あの力は!?!」

隼人「あれが……ヴィルキスの力か……!」

竜馬「やったじゃねえか、アンジユ!」

クラマ「アンジユ……。竜馬……。俺を……。助けてくれたのか……」

アンジユ「ワタルの頼みじゃ断れないよ。ほれにヴィヴィアンが目を覚ました時、あんたが死んだなんてのを聞かせたくないしね」

竜馬「貸しを作ってやっただけだ!」

すると、龍神丸が再び現れる。

ワタル「ありがとう、アンジユさん、竜馬さん! さっきの技、凄かったね!」

アンジユ「何だか、わからないけどヴィルキスが頑張ってくれたみたい」

龍神丸「(歌部の民の出会いが新たな力の扉を開けたか……)」

竜馬「へっ! こんなもんまだまだだ! 俺達とゲッターの力はこんなもんじゃねえよ!」

サラマンディーネ「アンジユ……。どうやら、あなたはビルキスの力の全てを使いこなしていないようですね」

アンジユ「人が、いい気持ちにいる所に水を差さないでくれる?」

ワタル「喧嘩は後! まずはNーノーチラス号とナデシコC、真ドラゴンに合流しよう

！」

そして、その三隻が現れた……

エレクトラ「神殿への突入部隊は収容しました。なお、クラマは消息不明です」
ネモ船長「すぐに機動部隊を出撃させろ」

―新垣 零だ。

俺達はそれぞれ出撃した……

ヴィヴィアン「突入部隊のみんな、お疲れ！」

トオル「ヴィヴィアンさん！もう起きても大丈夫ですか!?!？」

ヴィヴィアン「クラマの言った通り、キャンディを舐めていけば問題ないみたい。さて、ここでクイズです！人間なのにドラゴンなのって、なくんだ？」

アンジュ「え……」

ヴィヴィアン「あ……違うか。ドラゴンなのに……人間？あれ？あれ……？自分で……よくわかんなくなっちゃった……」

アンジュ「わかるよ、私は。ヴィヴィアンはヴィヴィアン……。ドラゴンでも人間でも、答えはヴィヴィアンよ」

ヴィヴィアン「アンジュ……」

エルシャ「私達も同じよ、ヴィヴィちゃん」

ジャンヌ「エクスクロスはいろんな人が集まっているのだから」

カンタム「人間も獣人もフェラリオも宇宙人もヒューマロボノイドも超AIもいるんだ。ドラゴンがいたって何も問題はないさ」

舞人「そして、みんなが仲間なんだ」

サラマンディーネ「あの子は…周囲に恵まれたようですね」

ミラーナイト「アンジュ、何故ドラゴンを指揮していた彼女がここへ…？」

グレンファイヤー「味方なのか？」

アンジュ「私にとっては敵みただけど、ワタルにとっては味方みたいよ」

ジャンボット「理解不能だが、とりあえずは味方として判断する！」

海道「何だよ、流！懐かしいゲッターに乗ってんじやねえか！」

真上「真ゲッター…神と車も来たか」

弁慶「久しぶりだな、地獄組！」

隼人「お前達も相変わらずのようだな」

溪「親父…！」

弁慶「溪…」。心配をかけちゃったようだな」

溪「ううん！親父と会えただけであたしはそれでいいよ！」

凱「(良かったな、溪……)」

ダークケロロ「来たか、もう一人の吾」

冬樹「軍曹……」

ダークケロロ「吾はお前達を倒し、冬樹……お前を吾の配下としておく」

ケロロ「……ならば、吾輩が止めてみせるであります！冬樹殿の友達として！」

冬樹「……」

ワタル「一夏さんとヒミコも救出したし、後はドアクダー軍団を倒すだけだ！」

一夏「捕らえられた借りは返さないとな！」

アンジユ「敵の大將は私が仕留めた……！残るは暑苦しい男と薄ら寒い男と偽ケロロだけよ！」

ザン・ギヤツク「勝手な事を言わないでもらいたいな……！」

ザン・ゴロツキー「さっきは不意を突かれたが、このザン兄弟のガツタイダーがあゝの程度で終わると思つたら、大間違いよ！」

ザン・コック「ソイヤ・ソイヤ、ドクトル・コスモ！灼熱と極寒の劍の力をガツタイダーに集めよ！」

ソイヤ・ソイヤ「仰せのままに！」

ドクトル・コスモ「かしこまりました！」

灼熱と極寒の剣の力でガツタイダーのダメージが回復した……。

カレン「ダメージが回復した……！」

ルルーシュ「自然環境さえも操る二本の剣の力をエネルギーとしたか！」

マサキ「奴等が、あの剣を持っている限り、あのデカイ魔神は無限に復活するってのか！」

アーニー「だったら、あの二人を先に倒すしかない！」

ルルーシュ「聞いている通りだ！各機はソイヤ・ソイヤとドクトル・コスモの魔神を狙え！」

レイ「それまではザン・コックの魔神を攻撃しても無駄だという事か……！」

ドクトル・コスモ「ほう……なかなか頭の回る奴がいるようだな」

ソイヤ・ソイヤ「だが、この俺達を倒す事など出来はしない事を思い知らせてやる！」

ジョーイ「そんな事はない！僕達は絶対に負けない！」

ワタル「ジョーイさんの言う通りだ！クラマにひどい事をさせて来たお前達に絶対に負けるもんか！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 竜馬VS初戦闘〉

隼人「さっさと決めるぞ、竜馬！」

弁慶「行けえええ！竜馬ー!!？」

竜馬「おうよ、行くぜ、隼人、弁慶！俺達とゲッターの力を見せてやるよ!!？」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「もうみんなには迷惑をかけられない…俺は、もつと強くなる！」

〈戦闘会話 ケロロVSダークケロロ〉

ダークケロロ「お前を倒し、吾は冬樹を手に入れる！」

ケロロ「そんな事はさせないであります！友達の事をまだわからないのならば、もう

一度吾輩が教えてやるであります！」

ダークケロロ「もうそろそろだ…。あいつらが戻ってくるはずだが…」

ケロロロボMK-IIはダークケロロボにダメージを与えた…。

ダークケロロ「ぐっ！馬鹿な… 吾はまた…！」

冬樹「もうやめてよ、もう一人の軍曹！」

ダークケロロ「止めるわけにはいかんだ！吾の望みを果たすまでは！」

素晴らしい残し、ダークケロロボは撤退した…。

夏美「言う事を聞かない、ボケガエルね！」

ケロロ「…」

冬樹「どうしてなの… 軍曹…」

俺達はドクトル・コスモのギーガンにダメージを与えた…、

ドクトル・コスモ「な、何で!? どうして、ワシのギーガンが負けるのだ！こ、これではワシは… 出世の道が閉ざされる!!？」

そして、ギーガンは爆発し、ドクトル・コスモは脱出した。

エイサツプ「よし！ドクトル・コスモは倒した！」

ヒミコ「極寒の剣は、ヒミコに任せろのだ！」

シヨウ「頼んだぞ、ヒミコ！」

甲児「あとはあつちのソイヤ・ソイヤを倒すだけだ！」

ソイヤ・ソイヤ「ドクトル・コスモ……。俺達の祭りは、まだ終わっていないのに……！許さんぞ、お前等！コスモの仇は俺が取る！」

俺達はソイヤ・ソイヤのキングヘロクロスにダメージを与えた。

ソイヤ・ソイヤ「く、くそっ！連続で負けた!!？うおおおおおっ!!？俺の祭りは、まだ終わってないのに！」

そう言い残し、キングヘロクロスは爆発し、ソイヤ・ソイヤは脱出した。

リュクス「これで灼熱の剣の力も使えませんか！」

エレボス「後はあいつを倒すだけだね！」

九郎「お付きの二体は倒したぜ！」

ワタル「ザン・コック！もうこれで復活は出来ないぞ！」

ザン・コック「それで勝ったつもりだと笑わせてくれる！来い、エクスクロス！ドアクダー四天王の力、貴様達の骨身に思い知らせてくれる！」

龍神丸「ワタル！奴の力は、これまで戦った魔神の比ではない！我々も生命を懸ける必要がある！」

ワタル「わかったよ、龍神丸……！僕も全力を尽くす！」

〈戦闘会話 竜馬VSザン・コック〉

ザン・コック「来い、ゲッター線に選ばれし者達よ！」

弁慶「俺達をご指名のようだな」

隼人「ならば言つてやれ、竜馬」

竜馬「四天王だか何だか知らねえがゲッターに喧嘩を売った事を後悔させてやるぜ、そつちが三人ならこつちだつて三人だ……行くぜ!!？」

〈戦闘会話 一夏VSザン・コック〉

一夏「ここでお前を倒す！」

ザン・コック「ほぎくな、小僧！何もできない無能が！」

一夏「確かに、俺は無能だ……。でも、この力でみんなを守るって決めたんだ！だからお前は俺が倒す!!？」

龍神丸の登龍劍で斬り裂いた。

ザン・コック「まだだ！まだガツタイダーは戦える！」

龍神丸「ワタル！」

ワタル「わかつてるよ龍神丸！ここで決着をつける！」

一夏「俺だって……！」

千冬「ま、待つんだ、一夏！」

龍神丸と一夏はガツタイダーに近づいた。

一夏「逃さないぞ、ザン兄弟！」

ザン・ゴロツキー「ええい、しつこい奴等め！」

ザン・ギヤツク「しかし、兄者！このままでは……！」

ザン・コック「案ずるな！我等にはドアクダー様の加護がある！」

な、何だ……？？？またダメージが回復した……？？？

號「何だ、あの力は……？？」

サラマンディーネ「暗黒のドラグニウム……」

隼人「暗黒の……ドラグニウム……？？」

龍神丸「来るぞ、ワタル、一夏！」

ワタル「う、うん！」

一夏「く、来るなら来やがれ！」

ガツタイダーは凄まじい力で龍神丸と白式にダメージを与えた…。

ワタル「うわあああつ!!？」

一夏「ぐああああつ!!？」

シバラク「ワタル！」

セシリア「一夏さん！」

アマルガン「何なのだ、あの力は!!？ 邪悪そのものじゃ！」

アキト「… 威圧に押しつぶされそうだ…！」

ザン・コック「ハハハハハ！これがドアクダー様の加護よ！もうワシを止める事は出来ん！とどめだ、ワタル！地獄へ落ちろ!!？」

すると、クラマが乗った空神丸が現れた。

クラマ「ワタルはやらせねえ！」

ガツタイダーの攻撃から龍神丸をかばう。

ワタル「クラマ！」

クラマ「へへ… 少しは仲間らしい事が… 出来たみたいだぜ…！」

も、もう空神丸は…！

クラマ「すまねえな、空神丸……。少し無理をさせすぎたみてえだ……」
そのまま、空神丸は爆発した……。

嘘、だろ……。？クラマ……。！

ワタル「クラママーッ!!？」

ザン・コック「クラマめ！最後の最後まで邪魔しておつて！」

ワタル「許さない……。！許さないぞ、ザン・コック！」

一夏「お前は……。お前だけは！」

ヒミコ「ワタル！これを使うのだ！」

ワタル「灼熱の剣と極寒の剣！」

ヒミコ「これでトリさんの仇を！」

ワタル「わかった！」

龍神丸「ワタル！灼熱の剣と極寒の剣のエネルギーを私に！」

ワタル「二本の剣よ！アツサムとウララよ！龍神丸に力を！」

す、凄え力だ……。！

ザン・コック「あの力……。！神部七龍神の……。！」

ワタル「クラマの仇だあああつ!!？」

龍神丸は登龍剣でガッターを斬り裂いた……。

ザン・コック「ば、馬鹿な!!？」

一夏「とどめだ！」

白式がガツタイダーに追撃をかける…。

ザン・コック「舐めるな、小僧！」

一夏「なっ…。!!？うわあああっ!!？」

だが、攻撃を防がれて、白式はカウンター攻撃を受けた。

鈴「一夏!!？」

ザン・コック「こうなれば、貴様だけでも…！」

龍神丸「やらせるものか！」

龍神丸は白式を庇う。

ワタル「うっ…！だあらああっ！」

仰け反った龍神丸だが、瞬時にカウンター攻撃を繰り出し、ガツタイダーに大ダメージを与えた…。

ザン・コック「な、何だと…。!!？」

ワタル「僕達の勝ちだ、ザン・コック！」

ザン・コック「おのれ…！覚えていろよ、ワタル！必ずやこの借りは返す！」
ガツタイダーは撤退した…。

シバラク「やった…！やったぞ、ワタル！」

零「灼熱の剣と極寒の剣を手に入れて、ドアクター四天王を撃破…！」

クラマ「流石だぜ、ワタル…。それにエクスクロス…」

クラマ！

ヒミコ「トリさん！」

クラマ「へへ…すまねえな…。死に損なつたみてえだ…」

ワタル「クラマも生きていたし、僕達の完全勝利だね、一夏さん！」

一夏「…ああ」

龍神丸「ワタル…」

龍神丸…！！？

龍神丸がワタルを出すやと軽く爆発した…！！？

ワタル「龍神丸…！どうしたの！！？」

龍神丸「灼熱と極寒の剣の力を受け取るには私の身体は限界だったようだ」

ワタル「何を言っているの、龍神丸！！？」

お、おい…まさか…！

一夏「りゅ、龍神丸…そんな身体で…俺を庇ったのかよ…！」

龍神丸「悲しむな、一夏…。お前の所為ではない…。最期の時が…来たよう

だ…」

ワタル「！」

龍神丸「もうすぐ、私の生命は… 燃え尽きる」

ワタル「りゅ、龍神丸…！そんなの嘘だよね！まだ旅は終わってないんだよ！」

龍神丸「泣くな、ワタルよ…。お前には… たくさん仲間がいる…。力を合わせ

て… 戦い抜くのだ…。さらばだ… ワタル…」

龍神丸が… 光の珠となり… 消えた…。

ワタル「龍神丸!? 龍神丸ううううつ!!?」

一夏「嘘だ… 嘘だあああつ!!?」

ワタルと一夏の叫び声が響いた…。

俺達は戦闘を終え、ヒエヒエ神殿に集まった…。

アンジユ「… 龍神丸は光の珠になってしまったのね…」

サラマンディーネ「こうして馳せ参じたのにわたくしは龍神様を守る事ができませんでした…」

アンジュ「あなた……。いったい何なの？ワタルや龍神丸、竜馬達の事を知っているみたいだけど、どういう関係なの？その前にドラゴンって何なの？何のためにアル・ワースに現れるの？」

サラマンディーネ「今は何も話す気はありません……」

アンジュ「あなたは……！」

サラマンディーネ「まずは龍神様の復活に全力を尽くします。全てはそれからです」

アンジュ「……」

サラマンディーネ「……」

アンジュ「わかったわ、サラ子……。あなたが悲しんでいる姿に嘘はないようだから。

龍神丸が蘇るまで、とりあえずは一時休戦ね」

シバラク「しかし、そうは言うが、龍神丸を復活させる事など出来るのか……？」

クラマ「龍神丸は完全には消滅していないんだ……。何か方法はあると思うが……」

アル「ワタルはどうしておるのだ？」

シャルロット「今は一人にしてあげた方が良いと思います……」

ワタル「（ごめんよ、龍神丸……。僕がもつと強かったら、こんな事にはならなかった

のに……。でも、龍神丸……。龍神丸がいなかったら、僕……。僕……）」

？「（顔を上げるのです、ワタル……）」

ワタル「誰!?」

ウララ「(灼熱の剣と極寒の剣をドアクダーにら取り戻してくれてありがとう)」

ワタル「もしかして… 石になったウララが喋ってるの…」

ウララ「(お礼に良い事を教えましょう。セリーヌの森へ行きなさい)」

ワタル「セリーヌの森…」

ウララ「(そこにある復活の聖水…。それは正義のために生命を失った者を蘇らせる力を持つそうです)」

ワタル「それ、本当!?」

ウララ「(龍の珠となった龍神丸を持って、セリーヌの森へ行きなさい。そして、その助けとなる力をあなたに託します)」

何だ…? 勇者の剣が…!

ワタル「勇者の剣の形が変わった…」

ウララ「(灼熱の剣と極寒の剣の力を加え、勇者の剣は王者の剣になったのです。旅を続けてきた、あなたなら使いこなせるでしょう。行きなさい、ワタル…。そして、このアル・ワースに平和を…)」

ワタル「ありがとう、ウララ…。僕…頑張るよ」

ヒミコ「ワタル!」

ワタル「ヒミコ… それにみんなも…」

シバラク「その様子では、お主もウララから復活の聖水の話聞いたようじゃな」
ワタル「うん…」

エルザ「さつきメガファウナから連絡が入ったロボ」

ウエスト「地上に降下して、こちらに合流するそうなのである」

楯無「その後はエクスクロスの全員でセリーヌの森へ向かいますよ」

ワタル「僕と龍神丸に力を貸してくれるの？」

サヤ「当然ですよ。私達は救世主ワタルと、その仲間達なんですから」

クラマ「俺もやるぜ…。命懸けでな」

ワタル「ありがとう、クラマ…。また僕達と旅を続けてくれるんだね？」

クラマ「お前達さえ、良ければな」

ワタル「そんなの当たり前じゃないか！一緒に行きこう、クラマ！」

クラマ「ああ…！」

ワタル「待っていてね、龍神丸…。僕達、すぐにセリーヌの森へ行くから。そこで復活の聖水を手に入れて必ず龍神丸を復活させるからね…。」

零「やる事が決まったんなら、後はやるだけだな、一夏！」

一夏「…」

ラウラ「どうしたのだ、嫁よ？」

一夏「俺は……もう戦えない……」

箒「何……？」

一夏「龍神丸は俺のせいで珠になった……。俺が戦ったら……。誰かが傷つく……。俺なんか戦場に出たらダメなんだよ！」

そう言い、一夏は走り去ってしまった……。

箒「一夏！」

あいつ……！

俺は一夏を追いかけようとしますが、隼人さんに止められる。

隼人「今は一人にさせてやれ」

零「隼人さん……でも！」

弁慶「多くの事を悩んで成長するのも男の役目だ……。お前ならそれぐらいわかって
いるだろ？」

零「……はい」

竜馬「あいつは必ず立ち直る……。今は見守る事も必要だぜ」

零「わかりました！」

千冬「一夏……。お前の苦しみは私にも伝わってきている……。だが、信じているぞ。

お前が立ち直る事を……)」

ーケロロ大軍曹だ。

ダークケロロ「合流の場所はここのはずだが……」

シヴァヴァ「よう、来たな、ケロロ！」

ドルル「合流完了」

そこへ、シヴァヴァとドルルが来た。

ダークケロロ「シヴァヴァ、ドルル。どうであった？ 奴等は……」

シヴァヴァ「お前の考え通りだ。奴等もアル・ワースに来ていたぜ」

ドルル「生存確認」

ダークケロロ「そうか……。では、吾らも始めなければならんな。(：： 早く合流させなければならんな……。あの小隊を……)」

宇宙ルート

第30話 未知の宇宙

第30話 未知の宇宙

―新垣 零だ。

俺達は宇宙に来た。

レーネ「エアロスケイル展開、問題なし。シグナス、安全高度に到着しました」

倉光「で、眼下に見えるのがいわゆる惑星アル・ワースなのね…」

ノレド「うわあ！」

前回宇宙上がった時はゆっくりと見れなかったからな…。

シーブック「空の光のラインなんかを見て、地球とは違う星だとわかっていただけ

ど…」

ジュード「こうやって、いざ目になるとやっぱり驚くな！」

三日月「でも、綺麗な星だな……。アル・ワースって……」

ユイ「はい。この様な綺麗な星で生活していたなんて知りませんでした」

アルト「宇宙空間も、俺達の知っている宇宙とは全然違うな」

アストン「遠くに見える、あの光……。別の銀河なんだろうか……」

ガエリオ「アマリ、メル。そういつた知識はないのか？」

アマリ「アル・ワースの一般の人と同じく、教団の人間も宇宙に興味を持つ事はタブー視されてきました」

メル「アル・ワースに生きる者は大地の恵みと智の神エンデに感謝すべし……。この考えは多くの人間に行き渡っています」

ベルリ「へえ……。大地の恵みね……」

アマリ「でも、私……。こうして自分の目でアル・ワースを外から見る事が出来て嬉しく思います」

本当に嬉しそうだな、アマリの奴……。

アイーダ「タブーとする事と神聖視する事はある意味、同義だと考えれば、私達の世界と似ています」

レナ「私達は、その神聖視する宇宙からの脅威との交渉の護衛に向かうのよね？」

サラ「なんだか、私達……。便利に使われてるよね？」

ノレド「ねえねえ、ベル……。やっぱり、ラライヤって、その脅威と関係あるのかな？」
ベルリ「ラライヤはGーセルフに乗って宇宙からの地球に降下してきた所をキャピタル・アーミーに捕まったって話だけ……。本当の所は、本人に聞かなかやわからないだろうさ」

ノレド「どうなの、ラライヤ……。？って、記憶がないんじや、答えられないか……」

ラライヤ「うちゅう……。宇宙……。トワサンガ……」

ベルリ「え……」

ラライヤ「レイハントン……。YG……。私には……。使命が……。あります……」

どうしたんだ、ラライヤの奴……？

アイーダ「ラライヤ……！」

ノレド「もしかして、記憶が戻ったの……？」

ラライヤの記憶が戻ったのか……？

俺達はメガファウナの格納庫に集まった……。

ケルベス「……で、その記憶を取り戻したラライヤさんはどちらに？」

マリーダ「今は医務室で寝ている」

ルー「蘇った記憶と今の状況に混乱して、熱を出したんじゃないか……。って」

ケルベス「そうか、そうか……。これは、お見舞いに行かないとならん！弱っている時

に優しくされると女性というものは、ころっといくからな！」

アミダ「ほう……言うじやないかい。ケルベス中尉」

零「……今この人にお見舞いさせるとラライヤがまたぶつ倒れるかもな……」

アマリ「(零君に……優しくされる……?)」

メル「(風邪をひけば零さんがずつと優しく看病をしてくれますよね……)」

零「……何想像してんだよ、お前ら」

アマリ「い、いえ！何も！」

ノレド「ダメですよ、ケルベス中尉！今は休ませないと！」

ベल्ली「教官殿のイメージ……ちよつと変わりましたよ」

パトリック「それで、アイーダよ……俺達はどこに向かっているんだ？」

アイーダ「私達の任務は、アメリカ軍の使節団をトワサンガのコロニーに送り届ける

事です。ですので、まずは合流ポイントを目指しているの」

ブレラ「トワサンガ……それが宇宙からの脅威の名前か……」

アイーダ「彼等はコロニー国家であり、金星のビーナス・グロウブで作られたフォト

ン・バッテリーを地球に降ろす役目を持つ」

青葉「金星……?」

デイオ「そんな所にも人が住んでいるのか……」

アイーダ「正確には、金星周辺のコロニーだけだね。私達の使っているフォトン・バッテリーはそのビーンズ・グロウプでしか作られていないの」

ルナマリア「それって、そんなに作るのが難しいの？」

アイーダ「ビーンズ・グロウプ以外の人間が、その技術を扱う事は、アグテックのタブーで禁止されているの」

テイエリア「そのアグテックのタブーとは？」

アイーダ「簡単に言えば、科学技術の使用制限みたいなものです。私達の世界は、過去の戦争で文明が崩壊する寸前までいったと言う歴史があるんです。同時に環境の保全もあり、地球では、そういった戦争に関する技術を発展させる事に制限を設けたのです」

アレルヤ「逆に宇宙に住む人間はその制限が緩かったようだね」

アイーダ「その通りです。だから、技術的に劣る地球の人間は宇宙に住む者を脅威に思っているのです」

リデイ「(地球と宇宙の対立。。。形は違うとはいえ、ベルリ達の世界にもそれは存在しているのか。。。)」

エル「でもさ。。。そのトワサンガつてのがこっちの味方になってくれれば、アーミイになんて怖くないんじゃない？」

ビーチャ「そうだな。なんて言ったって、宇宙からの脅威なんだからよ」

アイーダ「そう考えて、アメリカ軍は彼等との交渉を考えたのでしょうか」

オルガ「見返りはドアクター打倒で果たされる元の世界への帰還か……」

アイーダ「クリム大尉は、それ以外の取引材料も用意しているそうだけど……」

ベルリ「交渉の使節団の中にはクリム大尉もいるんですね」

セルゲイ「天才クリム・ニック……。噂には聞いていたが、ついに実物が見れるのだな」

ノレド「ちよつと変な人ですけどね」

すると、警報が鳴った……

トロワ「警戒警報……？」

デュオ「こんな所で敵襲か！」

俺達が警戒警報の話をしているとゼクスさんと刹那が走ってきた。

ゼクス「この先で交戦が確認された……！パイロットは機体に搭乗して、出撃に備えろ！」

ヒイロ「何と何が戦っている？」

刹那「アメリカの使節団が襲撃を受けたそうだ」

五飛「俺達が護衛する対象か……！」

ステラ「大変、早く行かないと！」

ベルリ「ハツパさん、宇宙用のバツクバツクの準備、出来ています!?？」

ハツパ「何とか間に合った。もつとも、秘密兵器の方の調整はもう少しかかるがな」

ベルリ「それって……あれの事ですか？」

ハツパ「こいつを使うような事態にならない事を祈るがな。頼んだぞ、ベルリ！使節団がやられたとなつちや、こつちの計画は御破算だからな！」

ベルリ「了解！ベルリ・ゼナム、行つてきます！」

「私は天才のクリーム・ニツクだ。

私達はモビルスーツに乗り、使節団を襲撃したモビルスーツと交戦になっていた。

クリーム「艦は後退させられ、モビルスーツ隊も我々二人だけとなったか……！」

ミツク「まさか、交渉に入る前に攻撃を受けて壊滅させられるとは思つてもみませんでしたよ」

クリーム「うむ……。おまけに虎の子のこの機体の武装が、まさか欠陥品だとはな」

ミツク「誘導兵器が使えないのってやつぱり、何らかのトラブルなんですか？」

クリーム「この天才が使えないのだから、機体側に原因があるに決まっている」

ミック「で、どうします、大尉……？ 投降しますか？」

クリム「冗談はよせ、ミック・ジャック……！ それでは私の計画が遂行できないではないか！ これは好機とみる……！ この状況を逆転できるような男であれば、トワサンガも門戸を開かざるをえまい！」

ミック「了解です、大尉。（惚れ惚れするね、この器の大きさ……。大統領の息子なんてのは、只のボンボンだと思ってたけど、大尉はやはり一味も二味も違う）」

クリム「待て、ミック・ジャック……！ 何か来る……！」
現れたのは…… おお！ メガファウナ達ではないか！

―新垣 零だ。

俺達は現場に着き、出撃した……。

ミック「メガファウナ……。では、あれが……？」

クリム「そうだ！ 私が手配したエクスクロスだ！ このタイミング……！ 天に愛されてるな、私という男は！」

青葉「テンション高……！」

ニール「お、おい……まさか、あれが……」

ベルリ「そのまさかです。あの人がアメリカの天才クリム・ニック大尉です」

クリム「元氣そうだな、ベルリ少年！出来れば、もう少し早く来て欲しかったぞ！」

ベルリ「こつちにも事情つてものがあるんですよ！」

ラフタ「もう一人の人は誰？」

アイーダ「ミック・ジャック……！あなたもいるのですね！！？」

ミック「ご無沙汰しております、姫様」

セシリー「あちらは？」

アイーダ「ミック・ジャック中尉……。アメリカ軍のエースパイロットです。（野心的な方でしたが、クリム大尉についたのですね……）」

リデイ「ちよつと待て！あの二人の乗っているモビルスーツは……！」

フロンタル「間違いない。アクシズ落としの時に使われたヤクト・ドーガだ」

ビスケット「どうして、それをアメリカ軍が持っているんですか……？」

クリム「考えるのは後でも出来る……。まずは、この状況を切り抜けてみせろ！」

名瀬「すつかり、大尉のペースですね」

ドニエル「しかし、交渉相手であるトワサンガと戦つていいのでしょうか……」

クリム「問題ない……。！ここで勝利する事が交渉を有利に運ぶ材料となる！」

スメラギ「どちらにしても、この状況では戦いは避けられないでしょう」

ドニエル「仕方ない…。！各機はトワサンガに応戦しろ！」

ベルリ「全く…。！こんな所に来てまで戦争をやりたがるような人達は…。！」

クリム「見せてもらうぞ、ベルリ少年！そして、エクスクロス！諸君等の力というものをな！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「宇宙って…。こんななにかかかったんだな…。この広い宇宙を守るために…。俺は戦う！」

〈戦闘会話メルVS初戦闘〉

メル「全てが綺麗です…。オニキスにいた時はこのような光景を見れていませんでした…。この美しさを汚すわけにはいきません！」

トワサンガのモビルスーツを倒していく俺達…。

ギゼラ「トワサンガのモビルスーツの増援、来ます！戦艦もいるようですよ！」

ドニエル「向こうも本気を出して来たか……！」

エル「今度はネオ・ジオンの戦艦まで来た！」

ジュリエッタ「ネオ・ジオンは総帥を含めて、トワサンガと絵を結んだという事でしょうか……？」

ラライヤ「気をつけてください！先頭のガイトラッシュに乗っているのはトワサンガのエースパイロットです！」

ら、ラライヤ……!!?

ノレド「ダメだよ、ラライヤ！戦闘中に勝手にブリッジに入っちゃ！」

ラライヤ「私はトワサンガの人間として皆さんに情報をお伝えする義務があります
！」

ラライヤが…… トワサンガの人間……？

ベルリ「やつぱり、ラライヤは宇宙からの脅威の一員だったんだ！」

ドニエル「いいのか、ラライヤ君？君のやっている事は裏切りなのでは……！」

ラライヤ「構いません。確かに私はトワサンガの人間ですが、彼等……ドレット軍とは立場を違えるものですから」

副長「ドレット軍……。それが彼等の部隊名か……！」

アイーダ「どうやら、トワサンガも一枚岩ではないようですな」

ロックパイ「マツシュナー中佐……！敵を補足しました！」

マツシュナー「ロックパイ……。奴等に我々の力を見せてやれ！」

ロックパイ「中佐の望むままに!!？」

すると、敵戦艦から砲撃が放たれた……。

ドニエル「艦砲射撃か！」

ユイ「あんな距離から撃ってくるなんて！」

ロックパイ「逃げ惑え、地球人！宇宙での戦闘でトワサンガのドレット軍に敵うと思

うなよ！」

ラライヤ「ロックパイ・ゲティ！そうやって他人を見下すような事を……！」

アイーダ「このままでは私達は、只の的です……！各機は一時後退を！」

ティア「ダメ、次が来る！」

シン「くそっ！」

デイスティニーガンダムが前に……!!？」

ステラ「シン!!？」

ルナマリア「何を考えているの、シン!!？」

シン「俺が全戦艦を破壊する！」

零「バカ、そんな事したらお前が……！」

シン「けど、誰かがやらないと……！」

？「それなら、僕達に任せて」

現れたのは…… 白いガンダムと赤いガンダム…… ！！？

キラ「行くよ、アスラン！」

アスラン「任せろ、キラ！」

二機のガンダムは見事な連携で戦艦を数隻、撃墜した。

シン「キラさん、アスラン……！」

アスラン「すまない、遅くなったな…… シン」

キラ「君の頑張りで僕達は間に合ったよ」

シン「いえ……。俺なんてまだまだです……」

キラ「僕達だってまだまだだよ、シン」

シン「え……？」

アスラン「完璧な人間なんて存在しない……。だからこそ人は進化して行くんだ」

シン「進化……」

キラ「行こう、シン！僕達の世界へ帰るため……。アル・ワースを平和にするために」

シン「はい！」

デイスティニーを含めた3機は俺達の元まで来た。

刹那「ルナマリア、あのガンダム達は……？」

ルナマリア「ストライクフリーダムとインフィニットジャスティス……！」

ステラ「キラとアスラんだ！」

キラ「君は……」

ステラ「キラは悪くないよ。暴走したのは私なんだから」

キラ「……良かったよ、元氣そうで」

アスラン「ルナマリアも久しぶりだな」

ルナマリア「アスラン……ええ……！」

明弘「あいつらはシン達の仲間の様だな」

零「あの人達のおかげで艦砲射撃も収まった！」

ベルリ「今ならあれを……！」

ベルリ「聞こえるか、ベルリ！秘密兵器が仕上がったぞ！」

ベルリ「さっすが、ハツパさん！じゃあ、メガファウナに戻って……！」

ハツパ「その必要はない！こいつは戦場で換装が出来るようにしてある！使いたい時が来たら、その場でバックを付け替えろ！」

ベルリ「じゃあ、早速……行きます！」

Gーセルフが残る戦艦に近づいた……？

アイーダ「ベルリ！ いったい何を……!?？」

ベルリ「Gーセルフ！ アイーダさんのためにもやるぞ!!？」

Gーセルフは攻撃を仕掛けた。

ベルリ「アサルトパック、接続します！ まずは牽制射撃！」

Gーセルフはアサルトパックというパックパックからミサイルを放つ。

ベルリ「動きが止まった！ そこだーっ！」

さらにアサルトパックからビームを発射し、敵戦艦を全て撃墜させた。

マサキ「あいつ、派手にぶちかましやがったな……！」

アーニー「す、凄いエネルギーだ……！」

ベルリ「誰も死んでないのを願うぞ……！」

ロックパイ「馬鹿な……！ あの距離を精密射撃だと！ それにあの機体……！ 偵察部隊が使用した試作機……確かY Gー111とかいう奴だ！」

クリム「やってくれるな、ベルリ……！」

ミック「戦艦並みの火力と射程に加え、こちらには機動力もある」

ロックオン「これであいつらも接近戦を挑まざるを得なくなっただな！」

アイーダ「各機はGーセルフをちゆうしんに陣形を形成！ トワサンガの部隊を押し切

ります！」

ベルリ「了解です！戦いたくない僕達に戦いを仕掛けてくる人達……！そんな風に生
命わや軽く考えている人達はもうたくさんなんですよ！」

キラ「だから、僕達が止めよう……僕達の力で！」

シン「行くぞ、ベルリ！」

ベルリ「ああ！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　キラVS初戦闘〉

キラ「(元の世界に帰るだけじゃない……。この世界も平和を望んでいる……。だから、
僕は戦う、僕の意味で！)」

〈戦闘会話　アスランVS初戦闘〉

アスラン「何処の世界でも戦争を広める奴等がいるものだな……。！そんなもの達と俺
は戦う、キラと共に！」

〈戦闘会話 シンVSロックパイ〉

ロックパイ「地球人が邪魔をするな！」

シン「何で、戦争をやめないんだよ！」

ロックパイ「お前達に言われる筋合いはない！」

シン「お前……ふざけるなあっ！」

〈戦闘会話 キラVSロックパイ〉

ロックパイ「お前が邪魔をしなければ……！」

キラ「争いを生み出すなら、僕達が相手をするよ……誰かを悲しませると言うのなら……僕は戦う！」

〈戦闘会話 刹那VSロックパイ〉

刹那「地球人と宇宙に住むもの……手を取り合う事は出来るはずだ！」

ロックパイ「別の世界から来た者が知ったような口を聞くな！」

刹那「言葉が届かないなら、止める……俺とクアンタが！」

〈戦闘会話 三日月VSロックパイ〉

ロックパイ「覚悟しろよ、地球人！」

三日月「俺は火星人なんだけどな… まあ、どっちでもいいか。お前を潰せれば」

ロックパイ「な、何?!? お前まさか、戦争を楽しんでるのか?!?」

三日月「戦争を広めるあんたにそんな事言われたくないね。俺はただオルガの望む道を作ってるだけだ」

Gーセルフはガイトラツシュを追い詰めた…。

ロックパイ「情けない…！自分はマツシュナー中佐の期待に応える事が出来なかった！Y Gー111のパイロット！そして、地球人！この屈辱…！ 決して忘れないぞ！」

ガイトラツシュは撤退した…。

ライヤ（ロックパイ・ゲティ…。あなたはドレット軍そのものようだわ…。強引なレコンギスタはトワサンガと地球双方に悲しみをもたらすだけなのに…。）」

ギゼラ「敵の全滅を確認しました」

ドニエル「とりあえず初の宇宙戦は勝利で飾れたか…。」

クリム「心配はいらない、ドニエル艦長。もうトワサンガと戦闘する事はない。我々の力を知った彼等が取る道は講話と共闘しかないだろうから」

零「(凄え自身...)」

ドニエル「(そううまくいけば、いいのだが...)」

クリム「こちらの艦は後退させた。私とミック・ジャックも、メガファウナで交渉の場へと向かう。目指すは彼等の住むコロニー、シラノー5だ...！」

アイーダ「シラノー5...」

ベルリ「そこが僕達の進む先か...」

目的の場所が決まり、俺達はそれぞれの艦に戻り、メガファウナの格納庫に集まった。

シン「久しぶりです、キラさん、アスラン」

キラ「僕達のいない間、頑張っていてくれていたみたいだね、シン」

アスラン「苦勞をかけてすまない」

シン「いえ、ルナやステラもいましたから」

ルナマリア「キラさん達もエクスクロスに参加する事になったんですね？」

アスラン「ああ、元の世界へ戻るため...」

キラ「そして、このアル・ワースを平和にするために僕達も戦うよ」

シン「俺も手伝います、キラさん」

キラ「頼りにしているよ、シン」

キラとシンは握手をする……。

クリム「久しぶりだな、ベルリ少年。今日の活躍も見事だったぞ」

ベルリ「ありあとあす、クリム中尉……じゃなくて、大尉でしたね」

クリム「改めて勧誘する。どうだ、中途半端な協力者ではなく、正式にアメリカ軍に入隊しないか？ 私直属の尉官の席を用意するぞ」

ベルリ「どうせなら佐官にしてくださいよ。クリム大尉に命令されなくてもいいように」

クリム「相変わらずの返しだ。だが、少年はそうでなければな」

ノレド「ダメですよ。クリム大尉。ベルがアイーダさんの側を離れるわけないですから」

クリム「ノレド・ナグか。君も元気そうで何よりだ。では、Gーセルフだけでもアメリカ軍に……」

すると、ラライヤが歩いて来た。

ラライヤ「それは出来ません」

ノレド「ラライヤ……」

クリム「記憶が戻ったと聞いた。祝福しよう、ラライヤ」

ラライヤ「ありがとうございます、大尉。ですが、Gーセルフをアメリカ軍に渡す事は出来ません。あれには大切な使命があり、それと共に地球に降りたのですから」

アイーダ「ラライヤ……。あなたがトワサンガの人間である事が判明したわけですが……。今日のあなたの行為はトワサンガに対する逆行行為ではないのですか？」

ベルリ「こつちとしては助かるけど、後で問題になるんじゃない？」

ラライヤ「構いません。今日、皆さんと戦ったのはトワサンガの中のドレット派の部隊です。私は、それに対するレイハントン派の一員ですから」

ベルリ「ちよつと待って……。レイハントンって……。！」

アイーダ「Gーセルフの認証コードじゃ……」

ラライヤ「ドレットとレイハントン……。全てはシラノー5に着いたら、お話しします」

ミック「トワサンガのスペースコロニー……。つまり、私達の目的地だね」

ベルリ「トワサンガは移住していたコロニーごと、こちらに跳ばされているのか……」

クリム「私の乗って来た艦はダメージを受けて後退した……。そういう事情なのでミック・ジャックもメガファウナでシラノー5へ向かう」

ジュード「ところで、大尉さん……。あのモビルスーツはどこでてにいたの？」

クリム「ヤクト・ドーガの事か……。あれはヘルメスの薔薇によるものだ」

リデイ「ヘルメスの薔薇……？」

エル「何それ？」

ケルベス「その言葉、聞いた事がある……！俺のジエガンも、その何とかの薔薇と関係しているらしい」

クリム「悪いが、これ以上は機密事項だ。姫様も口外をさらぬように」

アイーダ「え、ええ……。…（ついにアメリカ軍も積極的にヘルメスの薔薇の利用を始めたのですね……。）」

クリム「だが、あの機体は私と相性がよくないようだ。運賃代わりに君達に譲渡しよう」

ミツク「もちろん、あたしのもね」

エル「やったあ！さっすが天才！」

ビーチャ「太っ腹だね！よ……。大統領！」

クリム「それは将来の話だ。では、諸君……。いざ、シラノー5に向けて出発しよう。既場所の目星はついている。無益な戦いを止めるためにも私の交渉術に期待してくれ」

アイーダ「トワサンガのシラノー5……」

ベルリ「(何だろう、胸騒ぎがする……。)」

ラライヤ「アイーダさん、ベルリ……。シラノー5に着きましたら、お二人にだけお話

があります」

アイーダ「私とベルリに？」

ライヤ「はい……。それこそが、Gーセルフの…… YGー111の真の使命なので
す……」

ベルリ「Gーセルフの使命……」

ーシャア・アズナブルだ。

私は今、トワサンガのシラノー5内にいた。

シャア「……まだ考えは変わらないか……」

アムロ「お前が何を言おうと俺はトワサンガに協力するつもりはない」

シャア「そうか……」

ミネバ「悪趣味ですね……。別の世界に来たというのに、そんな服を着るとは……」

シャア「私なりの責任の取り方のつもりだよ、ミネバ」

ミネバ「…」

アムロ「そんな感情があるのなら、他のやり方を選べ。お前ほどの男なら、出来るはずだ」

シヤア「私は、私でしかない。それ以上でも、それ以下でもなくな」

アムロ「考える事をやめるな、シヤア」

シヤア「…これ以上は話しても無駄だな。では、トビア君、バナージ君…。君達の答えを聞こう」

トビア「…」

バナージ「…」

シヤア「私とアムロの戦いの結末を知る君達ならば、私のやる事にも賛同してくれると思うが？」

トビア「(シヤア・アズナブルとアムロ・レイ…。伝説のパイロットが、俺の目の前にいる…。キンケドウさん、ベラ艦長…。俺は…。どうしたらいいんだ…。)」

ミネバ「バナージ…」

バナージ「俺も賛同は出来ません…」

シヤア「君もか…」

バナージ「俺は…。可能性の力を信じていますから…」

ミネバ「(流石です、バナージ…)」

アムロ「そう言えば、トワサンガは新たな異界人と手を結んだそうじゃないか」

シヤア「ああ」

アムロ「聞けば人外のメンバーと聞く…。そんな奴らと手を結んで大丈夫なのか？」

シヤア「お前が心配する事じゃない…。(だが、警戒はしていた方がいいな…。ザン

ギヤツクのアクス・ギル…。油断ならない男だったからな…)」

第31話 レイハントンの血とゴーカイな奴ら

「クリーム・ニツクだ。

私はメガファウナのブリッジでドレット軍のノウトウ・ドレット將軍と話していた。ノウトウ「・・・では、そちらと我が軍の戦闘は不幸な行き違いであったと?」

クリーム「その通りです、ノウトウ・ドレット將軍。私としては互いの未来のためにも建設的な話し合いを希望します」

ノウトウ「意図は理解した。クリームトン・ニッキーニ大尉。。。アメリカ大統領の子息である貴官と交渉のテーブルにつこう」

クリーム「ありがとうございます、ノウトウ將軍」

ノウトウ「シラノー5のドッグへの入港を許可する。会談の場所については、追って指示しよう」

そのまま通信を切った。。。。

クリーム「第一関門は突破したな」

ドニエル「あれが名門ドレット家の当主にしてトワサンガ軍の総司令官か。。。」

ライヤ「ドレット家は十数年前のクーデターでトワサンガの王家であるレイハント

ン家を倒し、実権を握りました」

ドニエル「で、君は… そのレイハントン家を未だに崇拜する一派の人間なのだな？」
ラライヤ「はい…」

ミック「なるほどね…。トワサンガの中では生統治者のドレット派とレイハントン派で割れてるのか」

ラライヤ「レイハントン派の方が圧倒的に不利な状況にあります…」

ミック「それであんたみたいなのがドレット軍に潜入してスパイめいた事をやってたわけなのね」

クリム「まずは現状の打破を最優先事項とする。そのためにはトワサンガのお家事情に構ってはいられん」

アイーダ「それで、クリム大尉…。ドレット家の協力を取り付ける策とはいったいなんです？」

クリム「いささか遺憾ではあるが、連中の最も欲しがっているものを鼻先にぶら下げ」

ドニエル「それは…？」

クリム「レコンギスタだよ」

はてさて、どうなるかな…？

第31話　　レイハントンの血とゴークイな奴ら

―新垣　零だ。

ついに俺達はシラノー5が見える位置まで来た。

ギゼラ「シラノー5、目視できる距離に入りました」

ステア「オー・マイ・スコード……」

アイーダ「宇宙空間に浮かぶ岩と人工物の複合体……。あれに人が住んでいるなんて……」

ラライヤ「本来のシラノー5は月の裏側に位置していました」

スメラギ「舞人の工場よりも規模の大きな転移ね……」

ミレイナ「スメラギさん、シラノー5から誘導信号が出てるです」

スメラギ「ドニエル艦長……」

クリム「ふふ……地球人初のトワサンガへの入国か……。心躍るな。いざ行かん……」

！我等の未来を切り拓くために！」

戦艦四隻はシラノー5の中に入った。

ゼクス「……では、クリム大尉……。会談の護衛は私と鉄華団、ケルバス中尉と零、メル、アマリ……。それと刹那、ロックオン、ニール、デュオ達が務めます」

青葉「護衛多すぎないか？」

デイオ「念には念をだろう」

パーファシー「みんな、気をつけてね」

クリム「お手数をおかけする、ゼクス殿。術士殿や少年少女達にも期待させてもらう」
デュオ「ま……。ここは敵の懐の中だからな。俺達が仕事をするような事になったら、そこでアウトだろうさ」

ケルバス「不吉な事を言うなよ、デュオ。死神の予言みたいではないか」

三日月「実際に死神だけどね」

クリム「心配は要らん。このクリム・ニツク必勝の策があれば、ドレット家も首を縦に振らざるを得まい」

クリム「その少年達……。君達にも会談の場に同席してもらおうぞ」

シーブック「その少年達って……」

ジュード「もしかして、俺達の事？」

クリム「そうだ。頼むぞ、シーブック少年、ジュード少年。それとフロントル大佐も

「ご同行いいかな？」

フロントル「私もその様な大切な会談の場に出てもよろしいのですか？」

クリム「君の存在というのは私にとっても大きな存在だ」

フロントル「有り難きお言葉です」

ジュドー「もしかして、ベルリがライヤと別行動だから、その代理かい？」

クリム「素直に言えば、その通りだ。彼の持つ感性にも頼らせてもらおうと思つたのでな。だが、君達からはベルリ少年と似た空気を感じる。これは私の直感だがな」

シーブック「お役に立てるかはわかりませんが、同行させてもらいます」

クリム「気楽に過ごしてくれればいい。だが、何か違和感を覚えたら、サインを送ってくれ」

ヒイロ「(クリム・ニック。。。この男もどこかで危険を感じているか。。。)」

ジュリエッタ「。。。」

ガエリオ「どうしたんだ、ジュリエッタ？」

ジュリエッタ「。。。何か、嫌な予感がするんです」

ガエリオ「俺もだ。。。でも、今はクリム大尉達を信じるしかない」

ジュリエッタ「。。。そうですね」

さてと、俺も準備をしないとな。。。。

ーベルリ・ゼナムです。

僕とアイーダさん、ラライヤさんは今、シラノー5のサウスリングに来ていた。

フラミニア「……お帰りなさい、ラライヤ」

ラライヤ「フラミイ！ ああ……会いたかった！」

フラミニア「私もよ。あなたが地球に降下してから、ずっと心配していたの」

ベルリ「ラライヤさん、こちらの方は？」

ラライヤ「ご近所のフラミニア・カツレさん……。私にとつては姉の様な人です」

フラミニア「フラミニアです。フラミイと呼んでください」

アイーダ「ラライヤさん……。私達に会わせたい方というのは、こちらのフラミイさん

なのですか？」

フラミニア「その者達も、もうすぐここに来ます」

その者達……？

ノレド「楽しみだね、ベル」

ベルリ「ラライヤさんは、アイーダさんと僕に話があるって言うってたのにノレドは強引にくっついて来て……」

ノレド「アイーダさんと二人つきりになろうとしたってそうはいかないから！」
すると、男の人達が歩いて来た。

ロルツカ「ラライヤ：：！」

ミラジ「よく無事にシラノー5に戻ってくれた」

ラライヤ「まさか別の世界で帰還するとは思ってもみませんでしたけど」

ロルツカ「心から嬉しく思う。お前が任務を果たした事も」

ラライヤ「はい：：」

ベルリ「こちらのお二人が僕達に会わせたい人なの？」

ラライヤ「そうです」

ミラジ「ミラジ・バルバロスです」

ロルツカ「ロルツカ・ビスケスです」

アイーダ「お初にお目にかかります。私はアイーダ・スルガン：：。あちらがベルリ・ゼナムです」

ラライヤ「アイーダさんとベルリだけが操縦する事が出来たY G ー111：：。G ーセルフはロルツカさんとミラジさんが造ったのです。私は内偵のためにドレット軍の一員となり、そのまま地球偵察部隊に参加しましたが：：。同時にミラジさん達からは地球でY G ー111を操縦できる人間を探すように指示を受けていました」

ベルリ「それで見つけたのが、僕達ってわけか……！」

アイーダ「Gーセルフを操縦できる者……。きつたいそれに何の意味があるのですか？」

ロルツカ「あれに仕掛けられたレイハントン・コードは生体認証により、ある血筋に連なる者を探すためのシステムなのです」

ミラジ「Y G ー ー を操縦できる者……。それは即ちレイハントンの家の血を引く者です」

ベルリ「え……」

ノレド「それって……。ベルとアイーダさんが同じ家の人って事……。!?？」

アイーダ「それは……」

ロルツカ「お待ちしております。レイハントン家の皇女様おレイハントン家の皇子様……」

ベルリ「何かの冗談……。じゃないみたい……」

アイーダ「私とベルリが……。姉と弟……」

そ、そんな事って……。

「クリーム・ニツクだ。」

「私達は今、会谈の真つ最中だ。」

ノウトウ「……では、貴官は我々のレコンギスタを支援すると言うか？」

クリム「その通りだ。レコンギスタ……即ち地球への帰還は宇宙に住む人間の悲願である事は知っている。その手助けをする事を約束しよう」

ノウトウ「それはアメリカを統治する大統領の言葉と受け取ってもよろしいかな？」
クリム「さすがに今すぐというわけにはいかないが、私はいずれ、その椅子を取るつもりだ」

ノウトウ「アメリカの国家元首は世襲ではないと聞くが……？」

クリム「つまり、そう言う事だと思ってくれて結構……。そして、あなた方には、その力になっていただく事を希望する」

ジュード「(天才大尉さんは親父さんを蹴落として、大統領の席に座るつもりってわけか……)」

シーブック「(先の先まで考えて、この場に臨むとは大した戦略家だ……)」

フロンタル「(流石は大統領の息子……器さの大きさが違うと言っておこう……)」

クリーム「どうか、ノウトウ將軍？この同盟は互いの未来のためへの大いなる一歩となると思うが」

ノウトウ「だが、それは元の世界への帰還が前提となつていると言えよう」

クリーム「そのプランについても説明した通りだ」

ノウトウ「ドアクターなる者の打倒か……。いささか現実味にかけるな」

やはり、そう思うか……。

クリーム「では、逆に聞くが、トワサンガに帰還の術はおありかな？」

ノウトウ「それについては古くからの知己によつて、より具体的なプランを提示されている」

クリーム「知己？」

ノウトウ「ビアニ・カルータ……。君達にはクンパ・ルシータの名の方が通りがいいかな？」

何だと……！

クリーム「キャピタル・アーミイの創設者……！奴も、アル・ワースに来ているのか！」

ノウトウ「残念だよ。クリーム大尉。貴官がより魅力的なプランを提示してくれれば、考えを改めたかも知れないが……。我々は貴官の野望のパートナーを務める気はないのだよ」

「クリーム」「ノウトウ・ドレット……！我々とアーミイを……ミスルギを天秤にかけたな！」

「ノウトウ」その答えは決まった。貴官等は神聖ミスルギ皇国への土産となつてもらおう」

すると、ドレット軍の兵士達が入つて来た。

「新垣 零だ。

やっぱり、こうなつたか……。

マツシユナー「ドレット軍のマツシユナー・ヒューム中佐だ！アメリカの人間は武器を捨てて、おとなしく投降しろ！」

アマリ「あなた達は卑怯です！交渉が決裂したら、私達を捕虜にするつもりで動いていましたね！」

零「いや、違うな……」

メル「何が違うのですか……！！？」

零「こいつ等はハナつから俺達と同盟を結ぶ気なんてなかつたんだよ！」

ノウトウ「ほう、その根拠は？」

零「既にミスルギと手を組んでるのがいい証拠だ！ どうせ、あのクソ皇子から俺達を捕らえる様に言われていたんだろ！」

ノウトウ「見事だ、少年」

零「だが、俺達をあまり甘く見るなよ……！」

ケルベス「こうなれば暴れ回って……」

クリム「撃つな、ケルベス中尉！」

ケルベス「大尉！ 降参するってのかよ！」

ノウトウ「賢明な判断だ。抵抗すれば、犠牲者が増えるだけだからな」

マツシユナー「逃げようとしても無駄だぞ。ここは我々の領内なのだからな」

クリム「……所詮、宇宙で安穩をむさぼっていた連中だ。危険意識が低いな」

……考え通りだ。

零「そう言つては可哀想ですよ、クリム大尉。まあ、もう少し注意力をつける事はオ

ススメするけどな」

ノウトウ「何……？」

クリム「言い換えれば、お前達は腹の中に俺達を入れたようなもの……！」

零「つまり、腹の中を荒らすには絶好な機会つてわけなんだよ……！ こっちには優秀

な工員がいてな……」

クリム「このコロニーの各所に爆発物を仕掛けている！」

マッシュユナー「何だと!?？」

シーブック「いつの間に、そんな事を……」

クリム「ヒイロ・ユイに依頼しておいた……それにしても、零少年も私の目論見に気がついていたとは思わなかったぞ」

零「護衛部隊にヒイロを選ばなかったのが疑問だったので、そこを推理すれば答えにたどり着きます」

クリム「君もなかなかの天才なのだな！」

零「俺なんて全然です、大尉！」

フロンタル「二人の天才だな」

デュオ「流石だな！適材適所の使い方だぜ！」

ノウトウ「はったりに決まっている！マッシュユナー中佐、奴等を捕らえろ！」

クリム「試してみるかな？まずは、この会談の場に仕掛けたやつからいくぞ。こちらは最初から命懸けで来ている。死なばもろともだ」

ノウトウ「ま、待て……！」

また人が入って来たな……。

シヤア「あなたの負けだな、ノウトウ將軍」

フロンタル「シヤア：：！」

メル「シーブックさん達が戦っていたネオ・ジオンの総帥：：。宇宙世紀の戦争の元

凶：：」

ジユドー「あんたも宇宙に戻っていたのか！」

シヤア「君達がシラノー5を発つまでの安全は私が保証しよう」

マツシユナー「シヤア大佐！それは：：！」

シヤア「それ以外にこの場を収める方法はあるまい」

クリム「ノウトウ將軍：：。賢明な判断というのは、こちらの彼のような者に使うべき

だな」

ノウトウ「くっ：：！」

クリム「では、我々は行かせてもらう。爆発物の設置場所については、シラノー5を

発つてからお知らせしよう」

シヤア「マツシユナー中佐：：。彼等の案内を任せる」

ジユドー「待てよ、シヤア・アズナブル。あんたは、こんな卑怯な手を使うドレット

軍に手を貸すつもりかよ？」

シヤア「：：。否定はしない」

シーブック「何故だ?!? 無関係な世界に戦争を広げるような者を容認するのか?!?」
シヤア「アル・ワースはともかく、リギルド・センチュリーの人間は我々と無関係とは言えない」

フロンタル「:」

ジユドー「何を言っている?!?」

シヤア「その答えはいずれ分かる:。今はこの場を立ち去るがいい」

シーブック「あなたという人は:」

ジユドー「どうやら、あんたとはわかり合う事はないようだな:」

クリム「シヤア・アズナブルとやら、ここは貴官の登場に感謝する。だが、あなたが

我々と敵対するのなら、戦場では容赦はしないと云っておこう」

シヤア「:。それは私としても望むところだ」

フロンタル「:」

シヤア「君はいかないのか、フロンタル?」

フロンタル「一つ聞かせてほしい」

シヤア「何だ?」

フロンタル「あなたは誰だ?:。シヤア・アズナブルか?フル・フロンタルか?:。そ

れとも別の存在か?」

「シャア……意味がわからないな。私はシャア・アズナブル本人だ……。正真正銘のな」

フロントル「それだけ聞ければいい」

俺達は会議室を後にした……

ノウトウ「シャア大佐……。あなたは我々の協力者ではあるが、分をわきまえていたただこう」

「シャア」では、協力者として彼等を追撃する役は任せてもらう。（人類の進むべき正しい道……。その答えは遠いな……）」

ーベルリ・ゼナムです。

僕達はレイハントン家の屋敷にきています。

ロルツカ「……こちらがお二人が幼い頃を過ごしたお屋敷です」

ベルリ「覚えていますか？」

アイーダ「全然、覚えていません。ですが、この空気……。知らないとは言えない気持ちになります」

ベルリ「じゃあ、やっぱり… 僕達は… ここで過ごした事があるんですね…」

ロルツカ「レイハントン家がクーデターでドレット家に滅ぼされた後… お二人にはピアニ・カルター大尉の指揮の下に地球に亡命していただきました。そして、それぞれに捨て子として処理されたのです。お互いに知らない方が安全だろうという事で」

ミラジ「我々はレイハントン家の元家臣であり、ドレット家の政策に反対するものです。お二人を捜すためにレイハントン・コードを搭載したYG-111を地球へ降ろしました。オペレーター役として登録したライヤ以外にあれを動かせる者こそが、レイハントンの血を継ぐ者… その方が、このシラノー5に戻ってくれば、レイハントン家を再興できると信じて」

アイーダ「… 私達は、あなた方のこの仕掛けに乗せられ、とてもひどい現実と対決してきました」

ミラジ「え…」

アイーダ「もちろん、私達を育ててくれたスルガン家とゼナム家の気質を受け継いだという事もあるでしょう。けれど、G-セルフを操れたおかげで私は恋人を殺され、ベルリは… 弟は人殺しの汚名をかぶる事になったのです」

ベルリ「…」

アイーダ「あなた方に使命というもの… 理想とする目的があるにしてもそのような

ものは私は私自身で見つけて成し遂げます。時代は年寄りを作るものではないのです！」

ロルツカ「……」

ミラジ「……」

アイーダ「……口が過ぎました。あなた方が私達に寄せる期待もまったく理解できないわけではありません。ですが、レイハントン家の再興……その旗頭になる事については現時点ではお断りさせていただきます。少なくとも元の世界に帰還するまではそれらを優先すべきでしょう」

ミラジ「……ベルリ皇子はどうなのでしょう？」

ベルリ「僕は……。まだ……。事実を受け入れるだけで精一杯です……」

アイーダ「ベルリ……」

すると、青葉が入ってきた。

青葉「ベルリ、アイーダさん！いるか？！」

ベルリ「青葉……どうしてここに？」

青葉「エクスクロスはすぐにここを出発する事になった！急いで戻るぞ！」

ベルリ「う、うん……」

アイーダ「ロルツカさん、ミラジさん……」

ロルツカ「…」

アイーダ「貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございます。ここには、またの機会に弟と共にゆつくり尋ねさせていただきます。その時には父と母の事も聞かせてください」

ロルツカ「わかりました」

ミラジ「お二人のご無事をお祈りしています」

青葉「え…弟って…」

ベルリ「知らないよ！行こう、青葉！」

僕達は屋敷から出て急ぐ。

？「ここから先には行かせるわけにはいかないな」

突如、謎の集団が現れた。

ベルリ「な、なんなんですか、あなた達は！」

インサーン「私はザンギャック第二次地球侵略艦隊所属、開発技官インサーンだ」

アイーダ「ザンギャック…？」

インサーン「ベルリ・ゼナム、アイーダ・スルガン…。お前達、二人を捕らえる」

青葉「そ、そんな事はさせねえ！」

インサーン「無駄よ。私達に対抗するすべを持っていないお前達では私には勝てない

！
「インサーンという怪人は周りの取り巻き怪人達に命令して僕達を襲わせようとした……」

すぐに戻らないといけないのに……！

すると、何処かから銃弾が放たれ、取り巻きの怪人達は吹き飛ぶ。

銃弾が放たれた方を見ると三人の男性も二人の女性がいた。

先頭に立つ人は赤い服を着て、何処か海賊のようだった。

マーベラス「久しぶりだな、インサーン」

インサーン「な!? お前達は……宇宙海賊!?」

宇宙海賊……!?

ルカ「やつぱり、ザンギャックもアル・ワースにいたのね」

「ジョー」だが、これで探す手間が省けたな

ハカセ「うん、あいつらがここにいるならアクロス・ギルもいるはずだからね」

アイーダ「あ、あなた達は……？」

マーベラス「お前らがエクスクロスか……。早く戻らないといけないんだろ？早く行

け」

アイム「此処は私達にお任せください」

青葉「え、で、でも！」

ジョー「心配しなくとも大丈夫だ」

ハカセ「僕達はスーパ―戦隊だから！」

ベルリ「す、スーパ―… 戦隊…？」

すると、五人の人は携帯電話の様な物と人形の様なものを鍵に変えて、取り出した。

五人「ゴカイチェンジ!!?」

モバイレーツ『ゴカイジャー!』

すると、五人はそれぞれ、赤、青、黄、緑、ピンクの戦士になった。

ゴカイレッド「ゴカイレッド！」

ゴカイブルー「ゴカイブルー！」

ゴカイエロー「ゴカイエロー！」

ゴカイグリーン「ゴカイグリーン！」

ゴカイピンク「ゴカイピンク！」

ゴカイレッド「海賊戦隊！」

ゴカイジャー「ゴカイジャー！」

ゴカイレッド「派手に行くぜ！」

ご、ゴカイジャー…？ウルトラマンとは違う…のか？

青葉「な、なんかまるつきり戦隊ヒーローだな……」

ゴークイイエロー「何やってんの、早く行きなさい！」

ゴークイブルー「巻き込まれるぞ」

ベルリ「あ、ありがとうございます！」

この場をゴークイジャーの人達に任せ、僕達はメガファウナに急いだ……。

インサーン「邪魔をするな、宇宙海賊！」

ゴークイレッド「何言ってるんだ……俺達が大いなる力を手に入れるのを邪魔したお前らに借りを返すだけだ！行くぜ！」

ゴークイジャーはザンギャックという組織との戦闘を開始した……。

―新垣 零だ。

俺達は戦艦に戻り、シラノー5から脱出しようとする。

ドニエル「飛ばせ、ステア！最大戦速でシラノー5から離れろ！」

ステア「イエッサー！」

ギゼラ「シラノー5から、多数の機体の発進を確認！」

ドニエル「出発まで見逃しても追撃はしてくるか！当然と言えば当然だが、腹がたつ

！」

クリム「逃げ切れないのなら、追撃部隊を叩く……！機動部隊を出撃させろ！」
俺達は出撃した……。

アイーダ「我々は追撃部隊を振り切り、アル・ワースに帰らねばなりません！敵の連携を崩すためにも隊長機を狙います！」

ベルリ「……」

アイーダ「聞いているんですか、ベルリ!?？」

ベルリ「聞いてますよ！（アイーダさんは賢い人だから、そうやって事実を受け止める事が出来るかも知れないけど……。アイーダさんは姉さんだったなんて……！僕は……僕は……！）」

零「おい、ベルリ！ノレドとラライヤはどうした!?？」

ベルリ「え……」

ノイン「二人はメガファウナに戻っていない……！何か聞いてないのか!?？」

アイーダ「ラライヤさんとノレドさんは私達がロルツカさんと話している間にフラミイさんに連れられて……」

ベルリ「僕は……自分の事ばかり考えて……ノレドとラライヤを……」

っ、Gーセルフが前に……！

青葉「ベルリ！前に出すぎだ！」

ベルリ「僕が二人を迎えに行きます！」

アスラン「落ち着け！死ぬつもりか！？？」

キラ「ライイヤは、シラノーフの出身なんだ。きっと大丈夫だよ」

レナ「今はここから離脱する事が最優先たまよ！あの二人は、後から迎えに行くしかないよ！」

ベルリ「そんなのは認められない！」

シン「ベルリ……」

ロックパイ「来たか、YG……！この前の戦いの借りを返すぞ！」

ベルリ「（僕は……最低の人間だ……！自分の事ばかり考えて……！僕は……僕は……！）」

俺達は戦闘を開始した……

数分後、ロボット一機と複数の怪人が現れる。

ワルズ・ギル「此処で私達の登場だ！」

サヤ「な、何ですか、あの人達……！！？」

零「怪人……？何なんだ、あの部隊は……！」

ワルズ・ギル「我々はザンギャック！アル・ワース侵略のためにミスルギと手を組むものだ！」

ブレラ「新たな、異界人か…！」

メル「またもや、ミスルギと手を組むものが…！」

ワルズ・ギル「今貴様らを倒し、我々ザンギャックの力を証明してやろう！」

アルト「来るぞ！」

ユイ「どの様な人達かはわかりませんが…迎え撃ちます！」

ロツクパイ「ワルズ・ギル、インサーンはどうした？」

ワルズ・ギル「そう言えば…ん？」

すると、シラノール5から一機のロボットが出てきた。

ワルズ・ギル「グレートインサーン…？インサーン！何をしていたのだ？！」

インサーン「すみません、殿下…。。とんだ邪魔が…！」

ワルズ・ギル「邪魔だと？」

すると、今度は赤い船と四機のマシンが現れる。

ディオ「今度は何だ？！」

ワルズ・ギル「あ、あの船は…！」

ゴーカイレッド「海賊合体！」

赤い船と四機のマシンの合体して、一機の巨大ロボットになった。

アレルヤ「合体してロボットになった……？」

ゴーカイレッド「奴等の相手は俺達がするぜ、エクスクロス」

アイーダ「その声は……先程の……！」

青葉「えーつと確か……ゴーカイジャー！」

アマリ「ゴ、ゴーカイジャー……？」

アンドレイ「何者なんだ？」

アイーダ「よくわからないのですが、悪い人達ではありません」

ゴーカイブルー「ザンギヤックは俺達の敵だ……俺達が始末する」

ゴーカイピンク「ですが、手伝ってくれるのなら、嬉しいです」

名瀬「どうしますか、ドニエル艦長？」

ドニエル「どちらにしろ、今の状況ではこの場を退く事は難しいです。彼等と協力し

ましよう。いいかな、ゴーカイジャー」

ゴーカイグリーン「良かった……手伝ってくれるって！」

ゴーカイイエロー「どうするの、マーベラス？」

ゴーカイレッド「いいぜ、だが俺達は海賊だ……。あんたらの命令は一説受けねえから

な」

倉光「了解したよ」

スメラギ「各機はゴーカイジャーと協力して敵機の殲滅を！」

ゴーカイレッド「よっしゃー！ド派手に行くぜ！」

俺達は戦闘を再開させた……。

〈戦闘会話　　ゴーカイレッドVS初戦闘〉

ゴーカイグリーン「敵が来たよ！」

ゴーカイイエロー「何ビビってんのよ、ハカセ！」

ゴーカイブルー「今回はロボット戦が多発しそうだな……」

ゴーカイピンク「異世界でも私達はド派手に参りましょう、マーベラスさん！」

ゴーカイレッド「よし、行くぜお前ら！」

俺達は敵のモランにダメージを与えた。

リンゴ「なんて強さだ……！これが地球人の力なのか!?」（ただ強いだけじゃな

い……。こいつ等は……自由なんだ……）」

モランは撤退した……。

〈戦闘会話　　ゴーカイレッドVSインサーン〉

インサーン「今度こそ、倒してやる…宇宙海賊！」

ゴーカイイエロー「倒されたのに諦めが悪いわね」

ゴーカイピンク「簡単に負けるわけにはいきません！」

ゴーカイレッド「いいぜ、インサーン！何度だってお前の相手になつてやるよ！」

俺達の攻撃でグレートインサーンにダメージを与える。

インサーン「ば、バカな…こちらでも勝てないなんて…！この屈辱は忘れな
い…。覚えてなさい、宇宙海賊！」

ゴーカイブルー「どのみち、ザンギャックは倒す」

ゴーカイレッド「ああ、次に返り討ちにするだけだ」

〈戦闘会話　　ゴーカイレッドVSワルズ・ギル〉

ワルズ・ギル「あの時の雪辱……此処ではらしてやる！」

ゴーカイレッド「言ったはずだぜ、ワルズ・ギル……。お前じゃ俺には勝てない」
ワルズ・ギル「な、何だと!?!？」

ゴーカイグリーン「それにこんな言葉があるよ！二度ある事は三度あるってね！」
ワルズ・ギル「黙れ！海賊風情がー!!?！」

ゴーカイレッド「今のお前なんざ、ゴーカイオーで十分だ！覚悟しやがれ！」

ゴーカイオーはグレートワルズにダメージを与えた。

ワルズ・ギル「ば、バカナーツ!?!？」

ゴーカイレッド「終わりだ、ワルズ・ギル」

ワルズ・ギル「ま、まだだ！私はこんな所で敗れるわけにはいかんのだー!!?？」
そう言つて、グレートワルズは撤退した……。

ゴーカイブルー「逃げたな」

ゴーカイイエロー「何あれ、ダッサ」

ゴーカイレッド「逃げてても無駄だ。必ずあいつを倒すだけだ」

「Gーセルフの攻撃にガイトラッシュのビームマントも耐えきれず、ダメージを受けた。」

ロツクパイ「まだだ……！まだガイトラッシュは戦える！」

ベルリ「しつこいんですよ、あなたも！」

ロツクパイ「我等にはレコンギスタの使命がある……！そして、自分には愛するマツシュナー中佐のために戦う誇りがある！」

ベルリ「愛する……」

ロツクパイ「そうだ、地球人！それが力を与えてくれる！」

ベルリ「それでこちらに仕掛けてくるんなら、迷惑でしかありませんよ！」

トビア・アロナクスだ。

俺は今、バナージとオードリー、シャア・アズナブルと一緒にいた。

シャア「（人類は変わらないな……）」

ミネバ「何を考えているの？」

シヤア「過去から未来へと流れる刻に思いを馳せていた」

バナージ「余裕ですね。あなたも出撃するはずなのに」

シヤア「その前にやるべき事をやっておこうと思う」

トビア「それが俺達を釈放する事ですか……」

ミネバ「いいのですか、シヤア？私を使えば交渉材料になりますよ」

シヤア「このアル・ワースでは君の立場など関係ないのだよ。オードリー・バーン」

ミネバ「(あえてミネバ・ラオ・ザビと呼ばないつもりか……)」

シヤア「アル・ワースに転移した君達を保護したのはネオ・ジオンだ。決定権は私にある。そして、君達のような人間を中に置いておくのは、ドレット軍にとっても好ましくない結果を生むだろう」

トビア「……俺は宇宙海賊です。自由にすれば、何をするかかわらないですよ」

バナージ「俺だって……可能性を閉ざすと言うのなら容赦はしません」

シヤア「君達を手放したくないが、やはり、私は一人でやるのがお似合いのようだ。今日も声をかけようと思った人間に手厳しい事を言われてしまったよ」

すると、マクギリスさんが歩いてきた……。

マクギリス「そう言いながらもアムロ・レイ以外の人物はどうでもいいと思っていないかな？」

シヤア「マクギリス・ファリドか……。若者に期待して、その人間を失った時の痛みはもう二度と味わいたくないのでな……」

ミネバ「あの伝説の赤い彗星が随分ひねくれてますね」

バナージ「本当はアムロさんに自分を止めて欲しいって思ってるんじゃないですか？」

シヤア「君達の想像に任せる。我々の時代より未来から転移してきた者、トビア・アロナクス、バナージ・リンクス」

バナージ「未来といっても……俺の世界があなたの世界の未来とは限りません」

シヤア「だが、分岐によつては君達の未来へと向かう可能性もある」

トビア「……」

シヤア「私とアムロの戦いの結末を知る君達には傍観者の立場でいてもらいたかったが、それは君達としても本意ではないだろう」

トビア「目の前で起こっている事を見過ごす気はありませんよ」

バナージ「例え、拳銃を突きつけられようとも俺達は行きますよ」

トビア「もつとも歴史に対しては介入するつもりはありませんけどね。じゃあ行くこ
う、バナージ、オードリー……」

バナージ「ああ……。シヤア・アズナブル……。俺達があなたを止めてみせます。可能

性の力で！」

俺達は格納庫に向けて走り出した……。

「シャア・アズナブルだ。」

私はトビア君達を見送り、息を吐いた。

シャア「バナージ・リンクス、オードリー・バーンと名乗ったミネバ・ラオ・ザビ、トビア・アロナクス……。時を超えて出会った少年少女……。彼等のいた時代を超え、さらに長い時を経ても人は変わらない……」

マクギリス「（そう簡単に人は変わらないのだよ。シャア・アズナブル……）」

「リボンズ・アルマークだ。」

僕はエンブリヲの命でシラノー5に来ている。

アムロ「……」

リボンズ「行かないのかい？アムロ・レイ」

アムロ「リボンズ・アルマーク……。お前の目的は何だ？」

リボンズ「それを君が知る必要はないよ」

アムロ「何故俺を釈放する？」

リボンズ「シヤア・アズナブルがトビア・アロナクス達を釈放するのと同じさ……。この世界で君を保護したのは僕だ。決定権は僕にある」

アムロ「俺を精神制御などすれば、お前達の戦力は上昇するが？」

リボンズ「……君がどれだけ、元の世界で伝説と言われようがこのアル・ワースではただのアムロ・レイだ」

アムロ「……」

リボンズ「さあ、行きたまえ、アムロ・レイ」

アムロ「お前がどの様な契約を立てようと俺が止めてみせる」

リボンズ「期待せずに待っているよ」

アムロ・レイは警戒しながら格納庫へ向かった……。

さてと、僕も出撃をしないと……。

……見せてもらうよ。君の起こした奇跡というものを……。

―新垣 零だ。

ロツクパイ「宇宙に住む人間がフオトン・バッテリーを地球に送り続けてきたから、貴様達は地球上でモヤシのような歴史を作れたのだぞ！落ちろ、YG！そのモビルスーツは、地球人が扱っていいものじゃない！」

ベルリ「母さんの子じやないって言ったと思えば、逆に地球人って言ったり…！あんな達は僕をどうしたいんですか!!?」

Gーセルフはガイトラツシユを斬り裂いた。

ロツクパイ「ま、マツシユナー中佐ああつ!!?」

ベルリ「邪魔をするならば!!?」

クリム「やめろ、ベルリ少年！それ以上は戦争でもなく、ただの殺し合いだ！」

アイーダ「ベルリ！」

青葉「駄目だ、ベルリ！」

ゴーカイレッド「ちっ…！あの野郎…！」

ルクシオンとゴーカイオーがGーセルフを止めた…？

青葉「落ち着け、ベルリ！もう相手は戦えない！」

ゴーカイピンク「無益な怪我人を増やさないでください！」

ベルリ「…！」

ロツクパイ「く、くそ…」

ガイトラツシユは撤退した…。

ベルリ「僕は…何を…」

青葉「ベルリ…。お前とアイーダさんに何があったか、聞かないけど…。らしくないぜ、そういうの」

ベルリ「…」

青葉「無神経な言い方は謝る！でも…。さつきみたいなお前を俺は見たくねえんだ…」

ベルリ「…どうして、青葉は…僕を助けてくれるんだ…」

ゴーカイブルー「それは、こいつがお前の仲間だからだ」

ベルリ「え…？」

ゴーカイレッド「仲間がお前の為に必死になってる…理由はそれだけだろ」

ベルリ「仲間…」

青葉「それにお前だって、俺とデイオを応援してくれたじゃねえかよ！」

ベルリ「え…」

青葉「忘れちまったのかよ！ドツコイ山に偵察に行った時だよ！」

ベルリ「そう言えば…」

青葉「お前は何気なく言ったかも知れないけど、結構、あれ……効いたんだぜ」
プル「ベルリは、あたしの事も助けてくれたよね！」

ジユドー「ダブルゼータを取り返す時も身体を張ってくれた！」

零「俺が暴走した時もみんなと一緒に助けてくれたじゃねえかよ！」

すると、一機のモビルスーツが現れた……。

ノレド「そうだよ、ベル！ベルの元氣にあたしだって何度も助けられたんだから！」

何で、あのモビルスーツからノレドの声が？！

ベルリ「そのモビルスーツ……！乗っているのはノレドなの？！」

ラライヤ「ノレドさんにはナビゲーター役をやってもらいます」

ケルバス「ラライヤ！」

ラライヤ「この機体はGールシファー……。フラミィから私に託されたものです」

ベルリ「元々パイロットだったラライヤはわかるけど、どうしてノレドまで……」

ノレド「あたしだってね！ただのカナリアにはなりたくない！みんなの……ベルの役に立ちたいの！出来ないかも知れないけど、手を伸ばしてやってみる！何度だってやってみる！そういうのって全部、ベルが教えてくれたんだよ！天才でも、タフでもないベルが！」

ベルリ「僕が……」

ノレド「だから、ベルリ！自分の中だけで終わらないで、あたし達に本当の心を教えてよ！ベルリがあたしを助けてくれたようにあたしもベルリを助けるから！」

ベルリ「僕が……みんなを……」

アイーダ「そうですね、ベルリ。あなたは常に前向きな姿にみんな、少しずつ影響されたのです。もちろん、私もです」

ベルリ「アイーダさんが……ですか？」

アイーダ「あなたは何も考えていないようで、ちゃんと正しい道を選ぶ……。あなたに……弟に負けてられないものね」

……はい!?? 弟!??

マサキ「弟!??」

リチャード「アイーダがベルリの姉という事か……!??」

ドニエル「どういう事なんだ……?」

アイーダ「詳しくは後でお話します。今は……」

サザビーにリボーンズガンダムとモビルスーツ部隊……それに、ガンダム……!??

明弘「あのガンダム・フレームは……!」

オルガ「おいおい、マジかよ……!」

三日月「……」

ガエリオ「マクギリス…なのか…?」

マクギリス「そうだよ。久しぶりだね、鉄華団…そして、ガエリオ」

三日月「チョココレートの人…何しに来たの?」

マクギリス「状況を見てわからないかな?」

ジュリエッタ「私達と…戦うつもりですか?!?」

マクギリス「そうだ…。ガエリオ、覚悟しろ」

ガエリオ「ま、マクギリス…!」

刹那「リボンズ・アルマークか…!」

リボンズ「君達を逃すわけにはいかないね」

テイエリア「だとしても、僕達はこの場所で立ち止まっては行かない!」

シーブック「シヤア・アズナブルも出て来たか!」

グラハム「消耗した戦力である男達の相手をするのは…!」

ジュード「大丈夫だ!!?」

マリーダ「心配はないようだ」

現れたのは三機のガンダム…?!?

セシリー「あれは…!」

シーブック「間違いない!ッガンダムだ!」

アムロ「ジュドー、シーブック！お前達なんだな！」

ジュドー「待つてたぜ、アムロ大尉！シャアがいるんなら、大尉も絶対にいるって思っ
てたから！」

アムロ「要らぬ心配をかけたようだな。すぐにそちらを援護する」

ハツシユ「一本角のガンダム・フレーム…？」

バナージ「バンシィ・ノルンにクシャトリヤ、それに…シナンジュ…」

マリィダ「バナージ、元氣そうだな」

バナージ「マリィダさん…？？どうして…！」

ミネバ「話は後です、バナージ」

マリィダ「…！姫様も一緒に居ましたか！」

ミネバ「お久しぶりです、マリィダ…。リィイも」

リィイ「ああ…！ミネバ！」

フロンタル「やはり、ここに居たのだな。バナージ君」

ミネバ「フロンタル…！」

バナージ「どうしてあなたも…！」

フロンタル「話は後にしよう…。ゆっくりと話をしたいからな」

バナージ「…わかりました」

零「あの一本角のガンダムに乗っているのが……フロンタルさんの言っていたバナージって人……」

刹那「もう一機のモビルスーツは……？」

ティエリア「ガンダムのようなだが……」

トビア「僕はトビア・アロナクス……。こいつはクロスボーン・ガンダムです」

セシリー「クロスボーン……？」

トビア「あ、あの！僕は宇宙海賊で！だから、クロスボーンを……ドクロをつけてるんです！」

ロックオン「何慌ててんだ、あいつ？」

ティア「変なの……」

アムロ「話は後だ……！まずは……」

シヤア「アムロ……！何故お前が……！！？」

リボンス「僕が釈放した。決定権は僕にあるはずだよ、シヤア・アズナブル？」

シヤア「……」

アムロ「シヤア……！お前を止める！」

シヤア「いいだろう、アムロ。私としても、こうなる事を何処かで望んでいたようだ」
全機は再び集まった。

ゴーカイレッド「いいチームじゃねえか、エクスクロスつてのは！」

ゴーカイグリーン「マーベラスが気に入ったね」

ゴーカイピンク「私もマーベラスさんと同じ気持ちです」

アイーダ「もう大丈夫ですね、ベルリ？」

ベルリ「そんなのわかりませんよ。でも、アイーダさんに…姉さんにこれ以上、心配をかけるつもりはありません！」

ノレド「こら、ベル！」

青葉「俺達もいるんだぞ！」

ゴーカイイエロー「忘れてるでしょ!?!？」

ベルリ「忘れてませんよ！ありあとあす、みんな！」

ドニエル「敵の指揮官は、あの赤い奴とガンダム・フレイムだ！あいつ等を落とせば、勝負はつく！」

デュオ「つて言うけど、この間と違って、赤いの本気っばいぜ！」

カトル「あのアムロという人の事を意識している…？」

アンドレイ「どうやら、お互いの宿敵のようだな…」

リボンス「今度こそ、ダブルオークアンタを貫き受けるよ、刹那・F・セイエイ」

刹那「リボンス・アルマーク…何度だって言う、クアンタは渡さない！」

マクギリス「ガエリオ… お前倒す」

ガエリオ「俺だつて負けるわけにはいかない…。来い、マクギリス！」

シヤア「行くぞ、アムロ。私は自らの責任を果たす…！」

アムロ「ならば、俺は俺の責任としてお前を止める！」

な、何だ…？レガンダムから出る力は…！

バナージ「行くぞ、ユニコーン！」

ユニコーンガンダムの角が二本になり、緑に輝いた…！？

ベルリ「(何だ、これ…)」

アムロ「シヤア…！世界は戦争なんでものを望んでないんだ！」

フロンタル「それを我々が教えてやろう！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 三日月VSマクギリス〉

マクギリス「三日月・オーガス。私の下へ来ないか？私は君をかつているんだよ」

三日月「俺を従わせたいなら、まずはオルガに言つてよ」

マクギリス「君自身の意思はどうしたのかな？」

三日月「どうでもいいよ、そんなの。あんたがオルガと敵対するなら、相手をするだけだ」

〈戦闘会話 名瀬VSマクギリス〉

オルガ「モンタークか」

マクギリス「オルガ・イツカ……。また私達と手を結ぼうじゃないか」

ビスケット「オルガ……」

オルガ「あんたと手を組んだ事は後悔していない……。己が選んだ道だ。だが、俺達はもうあんたとは組まない！」

マクギリス「残念だよ、オルガ・イツカ」

名瀬「よく言っただけ、オルガ。さてと、始めるか！」

〈戦闘会話 ガエリオVSマクギリス〉

マクギリス「お前にやられた傷が痛むよ」

ガエリオ「マクギリス……。また俺達は争うのか……」

マクギリス「それが運命なのかもしれないな。かつて君はヴァイダールと名乗り、私を恨んだ。今は私がお前を恨んでいる」

ガエリオ「やるなら…俺が止めてやる！」
マクギリス「それでこそだ！我が友よ！」

〈戦闘会話　ジュリエッタVSマクギリス〉

マクギリス「君には随分と邪魔をされたからね」

ジュリエッタ「マクギリス・ファリド…。私でどれだけ敵うかはわかりませんが…
負けません！」

〈戦闘会話　刹那VSマクギリス〉

マクギリス「対話など甘い考えだ」

刹那「何故、対話を拒む…？！」

マクギリス「統治された方が平和を得ると何故わからない？」

刹那「マクギリス・ファリド…貴様はガンダムではない！」

マクギリス「勿論、私はガンダムなどとなるつもりはないからな」

キマリスヴィダールはガンダムバエルを追い詰めた。

マクギリス「流石に戦力に差があるか…」

ガエリオ「マクギリス！此処は俺たちの世界じゃないんだ…もうやめてくれ！」

マクギリス「異世界としても私の憎しみは止められない」

それを言い残し、バエルは撤退した…。

ガエリオ「…」

ジュリエッタ「迷っているのですか…？」

ガエリオ「決めたはずなのに情けないな…」

ジュリエッタ「そんな事はありません。あなたは優しいのはわかっていますから…」

ガエリオ「ありがとう、ジュリエッタ…」

〈戦闘会話 刹那VSリボンズ〉

刹那「俺達の戦いを見ていて何も思わないのか？」

リボンズ「思っていたら、君達と敵対していないよ」

刹那「お前とはわかり合う事は出来ないのか…！」

リボンズ「(わかり合う…か。僕にそんな資格はないよ)」

〈戦闘会話　アムロVSリボンズ〉

リボンズ「さあ、君の力を見せてくれ、アムロ・レイ」

アムロ「リボンズ・アルマーク……。お前のエゴは俺が止める！」

リボンズ「君では止められないよ」

クアンタの攻撃を受け、リボーンズガンダムはダメージを受けた。

リボンズ「なかなか強敵な部隊となったね、エクスクロス。それでこそ、僕が認めた部隊だよ」

アムロ「諦めろ、リボンズ！」

リボンズ「無駄だよ、アムロ・レイ。僕はこれしきの事では止まらないよ」

そう言い残し、リボーンズガンダムは撤退した……。

〈戦闘会話　バナージVSシャア〉

シャア「バナージ・リンクス。君ならば理解してくれると思っていたが……」

バナージ「答えを急ぎ過ぎてるんですよ、あなたは…！どうして、人類の可能性を信じないんですか！」

シヤア「可能性など…もう散々信じたさ。だが、結果はこれだ」

バナージ「あなたはまだ信じきっていないんですよ、だからこの様なやり方しかできないんです！」

〈戦闘会話　フロンタルVSシヤア〉

シヤア「私と共に来い、フロンタル」

フロンタル「お断りする、墜ちた赤い彗星には興味はないからな」

シヤア「ならば此処で終わりにしよう。私達の因縁を…」

レガンダム「フィン・ファンネルでサザビーは追い込まれた…。」

シヤア「ちいっ…！」

アムロ「終わりだ、シヤア！」

シヤア「違うな、アムロ…！ここからが始まりだ！彼等と共に私と戦うのならば、お前の口から話せ…！リギルト・センチユリーの真実を！」

ノレド「リギルト・センチュリーってあたし達の世界の事よね…」
ベルリ「何を言ってるんだ、あの人は…？」

アイーダ「まずは、この場を離脱しましょう！そちらの三機と宇宙海賊の方々もよろしいですか?!？」

トビア「はい！」

バナージ「わかりました！」

ゴークイレッド「仕方ねえな…！」

ギゼラ「艦長！トワサンガの機体からこちらに投降するとの通信が…！」

ドニエル「自分達の家が近いのだから、そちらに帰ればいいだろうが！」

ギゼラ「どうします?!？」

ドニエル「受け入れるしかあるまい！合流ポイントを指定してやれ！」

スメラギ「各機、離脱！遅れないように！」

俺達は離脱した…。

シャア「(理解しろ、アムロ…。宇宙世紀の進む先に待ち受けるのは絶望である事を…。)」

俺達は離脱した後、それぞれの艦に戻り、メガファウナに集まった…。

アムロ「……状況については理解した。苦勞したようだな、ジユドー達も」
ジユドー「アムロ大尉はアクシズでシヤアと戦っている最中にアル・ワースに跳ばされたのか……」

ルー「その後、アクシズがどうなったのか、わかります？」

アムロ「いや……。それについては俺もシヤアも知らない」

バナージ「……」

フロンタル「彼等には話さない方がいい……。歴史を乱したくないのならな」

バナージ「わかっていますよ、そんな事……」

ミネバ「バナージ……」

リディ「辛いのはわかる……。だが、それを話すのは俺達のすべき事じゃない」

マリィダ「未来は彼等自身が見るんだ……。お前だって、未来は知りたくないだろ？」

バナージ「そう……。ですね……」

ジユドー「シヤア何のためにトワサンガに協力しているんだ？」

ベルリ「それにリギルト・センチュリーの真実って何の事ですか？」

アムロ「……重要な話になる。この後、地上部隊と合流するのだから、そこでまとめ

て話そう」

ジユドー「もったいぶらないでくれよ、アムロ大尉！」

アムロ「ここに地球連邦軍はないんだ。階級はつけないでいい。俺は、ただのアムロ・レイという個人でシヤアを止めるつもりだ」

トビア「それがアムロさんの戦いなんですね」

シーブック「君がトビア・アロナクスか」

トビア「は、はい……！」

ジュード「見た所、あのクロスボーンってガンダムも俺達の世界の機体か、バナージ達の世界の機体のようだけど……」

トビア「そ、それが……俺……自分が跳ばされてきた時の事、よく覚えてないんだ！」「シン「そうなのか？」

シーブック「戦闘中に宇宙海賊とか言っていたが……」

トビア「そ、それぐらいしか、覚えてないんですよ！」

ルナマリア「本当なの？あからさまに怪しいわね……」
確かに怪しいな……。

シーブック「そう言うな、ルナマリア。何か事情があるかも知れないんだから」

トビア「ありがとうございます、シーブックさん」

シーブック「君に名乗ったかな？」

トビア「あ、あの……！アムロさんに聞いてたイメージとぴったりだったんで！」

：： シーブックと何かしらの関係があるな、これは：：。

シーブック「そうか：：。でも、歳も近いから、僕の事は呼び捨てでいい」

トビア「いえ：：！僕にとつてキン：：。じゃなくてシーブックさんはシーブックさんです！」

シーブック「よくわからないけど、そうしたいなら、そうすればいい」

セシリー「あなたも今日から私達の仲間なんだから、困った事があつたら、何でも言つてね」

トビア「よろしくお願いします、セシリーさん。（やっぱり、二人には話せないよな：：。クロスボーン・バンガードの事は：：）」

マーベラス「よお、お前も宇宙海賊だつてな？」

トビア「あなた方は：：。ゴークイジャーの：：」

マーベラス「キャプテン・マーベラスだ。俺達もエクスクロスに参加する事にしたぜ」
ニール「良いのか？」

ジョー「あいつらが手を組んでいる以上、あんたらと一緒にいた方がいいと思つてな」
ルカ「それに元の世界に帰る方法もわかつてるなら、一緒にいるしかないでしょ！」
アレルヤ「あなた達以外に仲間はいらるんですか？」

ハカセ「メンバーがもう一人いるけど、この世界に来た影響か、離れ離れになつたん

だよ」

マサキ「無事だといいな」

アイム「はい。では、皆さん。これからはよろしくお願いします」

リング「向こうは、賑やかですね。こういう雰囲気……嫌いじゃないです」

ケルベス「少し気楽すぎないか、お前？捕虜なら、捕虜らしくしている」

リング「あのラライヤって子は自由にしているの？」

ケルベス「彼女は特別だ。それにもうトワサンガの人間じゃない」

リング「では、俺も同じようにさせてもらいます」

アイーダ「あなた……亡命を希望するの？」

リング「はい。リング・ロン・ジヤマノツタ少尉……こちらへ亡命します」

ラライヤ「よろしいんですか、リング少尉？」

リング「君がラライヤだね……。想像通りに可憐だ」

おいおい、またかよ……。

ケルベス「こいつ……！立場をわきまえろ」

ノレド「ケルベス中尉こそ、私情が入りまくりです！」

ラライヤ「亡命する理由を聞かせてください、リング少尉」

リング「内部で対立しているトワサンガに嫌気が差した事……地球に行ってみたい

事：… この部隊の自由な雰囲気は気に入った事：… そんな所かな」

アイーダ「地球と言いますが、ここは私達の世界とは違うのですよ」

リング「それでもトワサンガにいるより、ずっといい。あそこは過去に縛られていて、息がつまりそうだし」

アイーダ「… わかりました。あなたの、その感覚：… 理解できません」

リング「ありがとうございます！」

ライヤ「これからはよろしくお願いします、リング少尉」

リング「気をつけるんだよ、ライヤ。ドレット軍の人間は、レコンギスタのために地球人と戦う気でいたんだ。だから、地球に降りたライヤを憎む奴もいる」

ライヤ「え：…」

リング「でも、安心してくれ。俺が君を守るから」

ケルベス「こいつ：… !それが亡命の目的なんじゃないのか!」

リング「俺のモラン：… 識別のためにカラーリングの変更をお願いします! シャア・アズナブルにあやかかって、赤を希望します!」

零「：… ライヤも罪な女だな」

アマリ「え：…」

メル「零さんがそれ、言います?」

零「え？俺は男だが…」

アルト「意味がちげえよ…」

アムロ「(トワサンガの中でシヤアの存在は、俺の想像以上に大きいものかも知れない…。シヤアは別の世界に来て、再び絶望に直面した…。だが、俺は信じてる…。リギルト・センチュリーにも…。未来にも希望がある事を…。)」

マーベラス「(ミスルギって国と手を組んだアクロス・ギル…。ザンギャックは一体何を考えてやがる…。?)」

「私はザンギャックのアクロス・ギルだ。

ギガントホースにワルズ・ギルとインサーンが帰って来た…。

ワルズ・ギル「申し訳ありません、父上！次こそ、次こそは必ず海賊共をあの世に！」

アクロスに・ギル「良い、我等の目的は騒ぐだけでいいのだ…。ん？」
すると、通信が入り出る。

アクロス・ギル「お前達か…」

？「エクスクロスと戦闘した様ですな？」

アクロス・ギル「情報が早いな」

？「我々の情報網を舐めないで欲しいですね。：。後ほど、エクスクロスの戦闘データを送ってください」

アクドス・ギル「了解した。それよりもあの方の復活は進んでいるのか、ダークゴークイ？」

ダークゴークイ「ご心配なく。：。このアル・ワースに拡散したあの方の魂は全て集めたので復活も時間の問題です」

アクドス・ギル「ならば、急いでくれ」

ダークゴークイ「かしこまりました。：。：。（待っていてください。：。もう少しで貴方様の魂は解放されます。：。カイザーベリアル陛下。：。）」

共通ルート

合流2

ーネモだ。

エーコー「メガファウナ達が来ます」

私達は宇宙組が来るのを待っていて、宇宙組が戻って来た。

エレクトラ「皆さん：：長旅、お疲れ様でした」

ドニエル「出迎えに礼を言う」

名瀬「そちらの方々にも見せたかったよ。宇宙から見たアル・ワースの美しさを」

ルリ「興味はありますが、事態はあまりよろしくありません。お土産話を聞く前に報告交換の場所を設けたいと思います」

スメラギ「了解です。そして、こちらもトワサンガの件で残念な報告をしなくてはなりません」

私達は情報交換をする事となった……。

ードニエル・トスだ。

私はクリム大尉と話していた。

クリム「では、艦長……。私とミック・ジャックは、アメリカ軍本隊へと帰還する」

ドニエル「お気を付けて、クリム大尉」

クリム「トワサンガとの交渉が決裂し、連中がミスルギについて今、戦局はさらに厳しくなると思われる」

ミック「こうなったら、さっさとエクスクロスにドアクターを倒してもらって、元の世界に帰還するしかないでしょうね」

クリム「ミスルギはアメリカ軍が引きつける。その間に……」

ドニエル「わかっています。一刻も早くドアクター打倒を成し遂げましょう」

クリム「頼むぞ、艦長。今や希望は、エクスクロスに託されたのだからな」

―新垣 零だ。

俺達は集まり、情報交換を始めた。

ジャン「… アイーダさんとベルリさんって姉と弟だったんですか？？」

ベルリ「僕は宇宙からの脅威って言われるトワサンガの人達と交渉するためにその人達が住むスペースコロニーに行っただけけど…。そこでその事を教えられたんだ」

ノレド「それもベルとアイーダさん…。そのトワサンガの王様の一族、レイハントンって家の人だって」

グランデイス「じゃあ、世が世ならお姫様と皇子様だったわけかい…」

サンソン「なるほどね…。アイーダ姐さんは、本物の姫様だったのか…」

アイーダ「と言っても、レイハントンの家はクーデターで滅び、トワサンガの実権はドレット家に移っています。残った家臣達は私とベルリを担ぎ上げて、家の再興を考えていたようですが、今はそんな事を言っている場合ではありません」

ロロ「そうですね。そのトワサンガという人達もミスルギについたと聞きましたし…」

ハンソン「交渉が失敗しただけじゃなく、逆に敵の勢力が拡大したのか…」

ベルリ「ダメですよ、ハンソンさん。後ろ向きになっちゃ。少なくとも僕達にはドアクダーを打倒すれば元の世界に帰れるって道があるんですから」

九郎「その意気だぜ、ベルリ！」

エレボス「でも、いいの？ベルリはアイーダに一目惚れして、Gーセルフに乗るようになったって聞いたけど…」

ベルリ「いいんだよ。もう、それは。（姉さんだとわかったからってアイーダさんが大切な人である事は変わらない…）。Gーセルフの宇宙用パックも完成した…。僕は今まで通り、アイーダさんを守って戦うだけだ」

ノレド「落ち込んで、すぐに立ち直るのが、ベルのいい所だよ」

エイサップ「そう言えば、ノレドは記憶の戻ったラライヤと一緒にモビルスーツに乗るようになったんだってな」

ノレド「うん。あたし… Gールシファアのナビゲーターになったの」

チャム「よかったね、ラライヤ。記憶が戻って」

ラライヤ「ありがとう、チャム」

チャム「なんか不思議な感じ！ふわふわしてたラライヤがすっかり者になったなんて！」

マーベル「いいの、ラライヤ？あなたはトワサンガの人間だったそうだけど…」

ラライヤ「今のトワサンガは、ドレット家の指示で、地球への帰還…レコンギスタを強攻しようとしています。今回のミスルギへの協力も目的のためには戦争という手

段さえも肯定するドレット家の意向によるものです」

ゼロ「ラライヤは、それに反対しているのか……」

ラライヤ「はい……。私は、このエクスクロスでもつと自分の世界を広げるつもりです」

リンゴ「そのラライヤを守るのが俺の役目ってわけだな」

ミラーナイト「あなたは？」

リンゴ「リンゴ・ロン・ジャマノツタ少尉……。トワサンガからの亡命者だ」

ケルベス「亡命者なんぞと気取ってるが、こいつの正体はラライヤさんに近づく悪い虫だ」

ヒデヨシ「じゃあ、ケルベスと同じってわけだな！」

ケルベス「酷いな、ヒデヨシは！俺はラライヤを守る紳士として……」

ミツヒデ「そういう所が、あちらの男と同じだと申しておるのだ」

シモン「シンの仲間とも合流したみたいじゃないか」

キラ「キラ・ヤマトです。ストライクフリーダムのパイロットをやっています」

アスラン「同じくアスラン・ザラです。インフイニットジャステイスのパイロットです」

クリス「……」

ロザリー「…」

アスラン「な、何だ？」

ロザリー「何でもありません！アスラン様！」

…一夏に引き続きこいつらは…。

バナージ「フロンタルから話は聞いていたけど、本当に様々な種族の人がいるんだな…」

ミネバ「ですが、どの方もいい人ですね」

ノブナガ「お前がリディ達の言っていたバナージという男か」

バナージ「はい。バナージ・リンクス…ユニコーンガンダムのパイロットです！」

ミネバ「ミネバ・ラオ・ザビです、よろしくお願いします」

鈴「…！」

バナージ「ど、どうかしたの？」

鈴「な、何でもないわ…。(なんか、爽やかな一夏って感じがする…)」

トビア「…この部隊の自由な空気…いい感じだな」

舞人「見ない顔だけど、君は？」

トビア「俺はトビア・アロナクス。宇宙世紀から、アル・ワースに跳ばされてきたんだ。トワサンガのシラノー5で保護されてたけど、あそこのやり方についてはいいけそう

もないんで、メガファウナに拾ってもらったんだ」

シーブック「気をつけるよ、舞人。トビアは宇宙海賊だったらしいからな」

舞人「宇宙海賊……!?」

アキト「らしい……とは、随分と曖昧な言い方だな」

セシリー「トビアは過去の記憶がないんだそうです」

リョーコ「記憶喪失なのかよ！」

トビア「まあ……そうですね」

シーブック「だが、乗っているガンダムを見ると確かに海賊って感じがする」

トビア「よしてくださいよ、キン……じゃなくて、シーブックさん」

万丈「年はそう変わらないのにシーブックの事をさん付けで呼ぶとは礼儀正しいんだな」

トビア「え、ええ……まあ……。そんな所です……。 (気をつけなきゃな……。アムロさんに相談して、俺がシーブックさん達より未来の時代から来たつてのは伏せておくつて決めたんだ……。シーブックさんやセシリーさん達にクロスボーン・バンガードの事やお二人の未来について話すわけにはいかないしな……。もつとも、アムロさんの考えでは未来は不確定だから、このシーブックさんの未来がキンケドウさんになるとは限らないそうだけど……。まあ、バナージ達の例もあるしな)」

シーブック「トビア……。また難しい顔をしてるな」
セシリー「どうしたの？記憶が戻ってきたの？」

トビア「これからの事を考えてたんです。俺がどうやって生きていくかを……。とにかく、俺は決めたんだ。ここがどこだろうと、この後どうなろうとシーブックさん達を守るって……。そして、必ず帰ってみせる。ベルナデットが待っている元の世界へ……」

マーベラス「まさしく海賊の顔をしているじゃねえか、トビア」

アンジュ「この人達は？トビアよりも、海賊っぽい服装をしているけど……」

九郎「あー！ゴーカイジャーじゃねえかよ！」

ジョーイ「本当ですね！お久しぶりです、皆さん！」

ジョー「九郎にジョーイか」

ルカ「あんた達も元氣そうね」

ハカセ「デントン教授も久しぶりです！」

デントン「うむ、また会えて嬉しいよ、ハカセ君！」

アイム「その他の方達もお久しぶりですね」

リナ「はい、アイムさん！」

シバラク「何だ、九郎達の世界の者だったのか」

マーベラス「俺達は宇宙海賊……。海賊戦隊ゴーカイジャーだ。地球人はスーパー戦隊

と呼んでいたがな」

ゼロ「聞いた事はあるぜ、海賊の汚名を誇り変えて戦うスーパー戦隊がいると」

マーベラス「お前の事もアカレッドから聞いていたぜ、ウルトラマンゼロ」

ゼロ「あいつと知り合いだったのか…それで、アカレッドはどうしてる？」

マーベラス「…わからない」

ゼロ「え？」

マーベラス「アカレッドはザンギヤックとの戦いで行方不明になったんだ…」

ゼロ「あいつが行方不明か…」

マーベラス「だが、俺はアカレッドが生きてるって信じてんだ！そんなわけで俺達、

ゴークイジャーもエクスクロスに参加する事になった！俺はキャプテン・マーベラ

ス…こつちからジョー、ルカ、ハカセ、アイムだ」

九郎「ナビイと鎧はどうしたんだよ？」

マーベラス「知るか、こつちに転移してきた時にいなくなってたんだよ…返したは

ずのレンジャーキーも全部あるし」

九郎「まあ、お前らとまた一緒に戦えるなんて嬉しいぜ！」

ジョー「俺達もだ」

カレン「……で、噂のアムロ・レイってのは誰？ ジュドー達の世界の伝説のエアスパイロツトなんでしょ」

カレン「意外にミーハーなのね、カレンって」

ジュドー「アムロさんなら、この後の話のための準備をしている」

ユイ「話とは？」

ジュドー「俺達……宇宙でシャア・アズナブルと戦ったんだけど、その時、気になる事を言っていたんだ。リギルド・センチユリーの真実をアムロさんが知ってる……って」

ルルーシュ「リギルド・センチユリー……。メガファウナのいた世界か……」

ジャンヌ「その真実って何？」

ルー「それがね……。重要な事だから、部隊が合流してからにするって私達も聞いてないの」

ジュドー「この後、それについてみんなの前で話すんだってさ。(アムロさんは、それはシャアが戦う理由に関係しているって言ってた……。その真実ってのは、それだけの重さがあるって言うのかよ……)」

次に地上部隊の話聞いた。

ジュドー「龍神丸が死んだ!?？」

ワタル「うん…」

シバラク「拙者達は第三界層のボス、ソイヤ・ソイヤと第四界層のボス、ドクトル・コスモを倒し… それぞれが持っていた創界山の秘宝… 灼熱の剣と極寒の剣を手に入れたのだが…」

ワタル「ドアクダー四天王のザン兄弟との戦いで龍神丸は力尽きちゃったんだ」

クラマ「すまねえ…。全ては俺のせいだ」

青葉「クラマ…」

クラマ「お前等にも話さなきゃならねえ…。俺は… ドアクダー軍団のスパイだったんだ」

ルナマリア「何ですって!?!?」

レナ「スパイ!?!?」

クラマ「俺はザン兄弟のザン・コックの指示でお前達の動向を探り、時には旅の邪魔をしてきたんだ…」

ティエリア「やはりか…」

セルゲイ「ティエリア君、君は気づいていたのか?」

ティエリア「確証はなかったがな…。でも、まさかこの様な事になるとは…」

千冬「すまない、ティエリア…。私が油断したばかりに…」

テイエリア「あなたのせいではない。タイミングが悪かっただけだ」

ワタル「でも聞いて、みんな！ クラマはドアクダー軍団を抜けて、命懸けで僕達を助けてくれたんだ！ そのせいでクラマの魔神、空神丸もやられちゃったし。クラマは僕達の仲間なんだ……！ だから……だから……！」

ユイ「わかったよ、ワタル君」

サラ「ワタルが許すなら、私達は何も言わないよ」

ティア「クラマはティア達と一緒にたくさん遊んでくれたし！」

ワタル「ありがとう！」

シバラク「だが忘れるなよ、クラマ。お前を完全に許した訳ではない人間がいる事も」

クラマ「ああ……。俺は、それだけの事をしでかしてきたからな」

刹那「ワタル。もう龍神丸は呼び出せないのか？」

ワタル「龍神丸の魂は、この光になっているんだ……。でも、セリーヌの森にある復活の聖水を使えば、龍神丸は蘇るって聞いた」

ジュード「って事は、まだ完全に死んだ訳じゃないんだな！」

ワタル「うん……。龍神丸を復活させるために絶対に復活の聖水を手に入れてみせるよ。灼熱と極寒の剣の力でパワーアップした、この王者の剣に誓って」

甲児「その意気だ、ワタル。どんな時でも希望を捨てるなよ」

號「必ず、龍神丸は戻って来る」

ジョーイ「だから、僕達も手伝うよ！」

シーブック「君達は？」

甲児「俺は兜 甲児：。マジンガーZのパイロットだ。こつちが仲間の弓 さやかとボス、ヌケ、ムチャだ」

さやか「弓 さやかです。ビューナスAのパイロットをやっています」

ボス「俺様はボスだ！ 子分のヌケ、ムチャ共々、よろしく頼むぜ」

ワタル「甲児さんは、僕や舞人さんと同じ世界の人で僕の憧れの人なんだ」

アレルヤ「前に言っていた、ワタル君が目標とするヒーローのもう片方というわけだね」

ディオ「マジンガーZという機体は見せてもらったが： 海道さん達のカイザーに似

ていないか？」

海道「ああ。俺達も初めて見た時は驚いたぜ」

真上「だが、俺達は別の世界の存在：。ただ単に似ているだけだろう」

號「俺は號：。溪や凱と共に真ゲッタードラゴンのパイロットをやっている」

グラハム「真ゲッタードラゴンと言うのはあの戦艦の様な物のことか」

溪「ええ、そうです。私は溪です、これからよろしくお願いします！」

凱「凱だ。これからよろしく！」

ブレラ「竜馬も仲間と出会えた様だな」

竜馬「おうよ！神 隼人に車 弁慶だ！」

隼人「内の竜馬が世話になったみたいだな」

弁慶「まあ、俺達もやっかいになるんだけどな」

ジョーイ「この人達が… 別働隊の人達…」

サイ「今更怖気付いてどうすんだよ、ジョーイ」

ジョーイ「お、怖気付いてなんかないよ！えつと… ジョセフ・カーター・ジョーンズです。ジョーイって呼んでください！それでこっちが友達のサイとリナ… デントン教授です」

三日月「あんたもパイロットなのか？」

ジョーイ「ううん。僕はヒーローマンに指示を送って戦っているんだ」

明弘「ヒーローマン？」

ジョーイ「これがヒーローマンです」

ラフタ「何これ、おもちゃ？可愛いー！」

アストン「でも、これで戦ってるって事？」

リナ「このおもちゃがロボットになって戦うんです」

オルガ「い、意味がわからねえ…」

ジョーイ「と、とにかく！僕達もエクスクロスに参加する事になったんでよろしくお願います！」

マーベラス「お前とヒーローマンが来ただけで百人力だぜ、ジョーイ」

ジョーイ「ゴークカイジャーのマーベラスさんにそう言ってもらえて光栄です！」

シーブック「この後、アムロさんからリギルト・センチュリーの真実についての話があるが…エクスクロスの最優先事項は龍神丸を復活させる事だな」

ワタル「お願いします、皆さん。僕と龍神丸に力を貸してください」

シン「当たり前だろ！何と言つても、ドアクター打倒のためには龍神丸の力が絶対に必要だからな！」

アルト「所で一夏はどうしたんだ？」

箒「…」

簪「…」

ワタル「一夏さんは…」

楯無「灼熱と極寒の剣の力で追い詰めたガツタイダーに一夏君が突っ込んだのだけだ、振り返りにあつてしまつて…それで一夏君は龍神丸に庇われたの」

セシリア「状態が状態でしたので…一夏さんはその事が原因で戦う事を拒否してし

まっ……

ラウラ「今は部屋に引きこもっている……。教官が話しても無理だったみたいだ」
シャルロット「一夏は俺のせいで龍神丸が死んだんだって……。言っていたんです」
ユイ「そんな！一夏君が悪いわけじゃないのに……」

千冬「だが、あいつの不注意でこうなったんだ……。あいつにも責任はある」

九郎「おい、少しいい方ってもんがあるんじゃないやねえか？」

千冬「事実を話しただけだ」

九郎「っ……！てめえ……！」

ジョー「やめろ、九郎。こいつの言っている事も一理ある」

九郎「だけだよ！」

ルカ「戦えない奴の心配をしている場合じゃないんでしょ？今はその龍神丸を復活させる事が先決よ」

九郎「……くっ……！」

九郎さんの気持ちもわかる……。だけど、一夏……。俺は信じてるぞ、お前が立ち上がるって事を……。

みんなを集め、アムロさんの大切な話が……。リギルド・センチュリーの真実についての話が始まった……。

アムロ「……。今から、シャア・アズナブルの言っていたリギルド・センチュリーの真実について話をしたい」

ベルリ「……」

アイーダ「……」

アムロ「俺はアムロ・レイ……。宇宙世紀の人間だ」

スザク「（あれが白き流星の異名を持つエースパイロット、アムロ・レイか……）」

シヨウ「（物静かな雰囲気の中に独特のたたずまいがあるな……）」

アムロ「その事について語る前にまず、俺達の世界……。宇宙世紀について時系列に沿って話そう」

時系列……。

アムロ「宇宙世紀の歴史……。それは戦争の歴史と言い換えてもいいものだ」

青葉「戦争の……」

アムロ「宇宙世紀は、その始まりからして血塗られた幕開けであり……。地球に住む人間と宇宙移民者の衝突は、地球からの独立を訴える一年戦争へと繋がる。その後もグリ

プス戦役、第一次ネオ・ジオン抗争へと連なり……。シャア・アズナブル率いるネオ・ジオンによる第二次ネオ・ジオン抗争へと発展していった」

グラハム「シャア・アズナブル……。我々が戦った、あの男か……」

アムロ「奴もかつては俺達と共に戦う同士だった。しかし、一向に変わらない地球の人間に業を煮やし、ついには地球そのものを破壊するという考えに至った」

デイオ「何……?!？」

カレン「地球を破壊って……」

ケロロ「それが地球寒冷化作戦……。通称、アクシズ落としてありますな?」

アムロ「その通りだ、軍曹。シャアは小惑星を地球に落とし、そこを死の星とする事で人類を強制的に宇宙へ上げようとしたんだ。宇宙という環境に適応して認識力が拡大した存在……。ニュータイプに人類全体を変革させるために」

ベルリ「ニュータイプ……」

アムロ「その作戦を遂行するために奴はエリートによる人類管理……。コスモ貴族主義を唱えるクロスボーン・バンガードと手を組んだ。俺やジウドーやシーブックが所属していた地球連邦軍外部独立部隊ロンド・ベルは奴を阻止するために戦っていた」

ルルーシュ「その戦いの結末は?」

アムロ「シーブックとセシリーはクロスボーン・バンガードの指導者である鉄仮面と

呼ばれる男を倒した…。俺は地球に向けて移動を開始したアクシズの上でシヤアと戦っていたのだが、その最中でアル・ワースへと跳ばされたんだ」

万丈「つまり、その小惑星がどうなったかは、不明というわけか…。」

バナージ「(本来なら、その数年後が俺の世界という事になる…。)」

トビア「(そして、その戦いから十数年後の時代から俺は来た…。)」

ケロロ「(本来ならば、過去のキンケドウ殿…。シーブック殿とトビア殿が出会う事はないのでありますが…。)」

グレンファイヤー「人間が自らの手で地球を滅ぼそうとするなんてな…。」

アイーダ「シヤア・アズナブルという人は理知的な人間というイメージでした…。その彼が、そこまで追い詰められる程の戦いが宇宙世紀にはあったのですね…。」

ベルリ「宇宙世紀が大変だったって事はわかりましたけど、それと僕達のいたリギルド・センチユリーの真実に何の関係があるんですか?」

アムロ「…。リギルド・センチユリーは宇宙世紀の遥か未来だ」

ベルリ「え?!?」

ケロロ「宇宙世紀の遥か未来でありますか?!?」

夏美「ちよつと、あんたでも知らなかったの?!? ポケガエル!」

ケロロ「と、当然であります! 吾輩の知るガンダムにGーセルフという機体はなかつ

たのであります！勿論、デイスティニーガンダムやストライクフリーダム、ウイングガンダムゼロやダブルオークアンタ、ガンダムバルバトスなども知らないのであります！」

シーブック「じゃあ、時代は違うけど僕達とベルリは同じ世界の人間って事なのか……!?」

……随分話がややこしくなってきたな……。

ベルリ「ちよつと待ってくださいよ……！どうして、そんな風になるんですか!?」

ハツパ「落ち着け、ベルリ。おそらく、その話は事実だ」

ベルリ「ハツパさん……」

ハツパ「その根拠はヘルメスの薔薇の設計図にある……」

ケルベス「その名……キャピタル・アーミイがジエガンを開発した経緯にも関係があると聞いた事がある」

ハツパ「姫様……。ヘルメスの薔薇について、お話ししてもよろしいでしょうか？」

アイーダ「……許可します。今、我々に必要な事は真実を知る事でしょう」

ハツパ「では……。ヘルメスの薔薇とは、過去の戦争で使われた技術記録です。我々の世界、リギルド・センチユリーでは人類の文明が崩壊するレベルの大戦が過去に起こったと言われています」

ジュード「その大戦つてのが、アクシズ落とすだけだつて言いたいのかい？」

ハツパ「そうであるかも知れないし、そうではないかも知れない……。その事は、さほど重要ではないでしょう。重要なのは、ヘルメスの薔薇には宇宙世紀の技術と記録されているという事です」

ケルベス「それを引き出して造られたのが俺のジエガンだつてののか？」

ハツパ「その通りです。宇宙世紀……。つまりはバナージ達の歴史の機体も存在しているという事です」

バナージ「え、でも、俺達はアムロさん達と同じ世界では……」

ハツパ「そこがまだ謎です。アムロ大尉達の世界にもお前達がいいたのかはな……」

トビア「恐らく、俺達の世界のバナージは存在する……。何故なら、ラプラスの箱という歴史があるから……」

ハツパ「本来、ヘルメスの薔薇は厳重に管理され、そこに記された技術を使用する事は禁忌とされてきました。ところが、近年……。各組織がその技術を積極的に使用するようになりつつあります」

シーブック「そこまで危険視されていたものが、どうして、そんな事に？」

ハツパ「詳しい事はわかりませんが、それを管理していた人間達の中の一人が、あえて流出させたのでは……と言われています」

ジユドー「何だよ、それ!?!」

シーブック「その人間……再び文明が崩壊するような戦争が起きるのを望んでいるのか……」

ライヤ「G系と呼ばれるモビルスーツとそういつた経緯で誕生したと聞きます」

ベルリ「Gーセルフもヘルメスの薔薇から生まれたのか……」

ハツパ「ケルベス中尉のジェガンを見ても、宇宙世紀がリギルド・センチュリーの過去であるのは間違いないでしょう」

アムロ「トワサンガで過ごした俺とシャアもその結論に至った……。そして、シャアは宇宙世紀の先にあるのが文明の崩壊……。つまり、絶望である事を知った。さらに奴は、ヘルメスの薔薇の開示によって宇宙世紀が繰り返されようとしている今に絶望し、それを変えようと行動を開始したんだ」

ベルリ「それがトワサンガに協力する事なんですか?」

ジユドー「環境保全のために宇宙に上がった人間が地球に帰るためなら戦争をするって考えのどこに絶望を超える方法があるってんだよ!」

アムロ「それは俺にも理解できない……。だが、奴の持つ指導力……。別の言い方をすればカリスマ性は下手をすれば、ミスルギ陣営全体にも影響を与える」

シーブック「それは戦いを加速する事を意味するんですね……」

アムロ「そうだ。宇宙世紀から連なるリギルド・センチユリーの存在がこのアル・ワースを戦火に包む事になる」

ノレド「そもそもガンダムって何なの？」

メル「アムロさんやバナージさん達の世界…宇宙世紀だけでなく、ヒイロさん達の世界や刹那さん達の世界、シンさん達の世界に三日月さん達の世界…どうしてガンダムが複数あるのでしょうか…」

ゼロ「それぞれの宇宙にもガンダムがある…ウルトラマンと似たようなものだな…」

ネモ船長「宇宙世紀からのリギルド・センチユリー…まさに戦争の世界だな…」

ドニエル「情けない事ですが、認めざるを得ません」

ボス「そう考えると俺達のいた世界ってのはまだ平和だったんだな…」

ワタル「甲児さんや舞人さん達が頑張ってくれてたおかげだね」

ルリ「平和の世界…ですか…」

エレクトラ「革命の世界、戦争の世界、そして平和の世界ですね…」

スメラギ「三つの世界ですか…」

零「待ってください」

名瀬「どうした、零？」

零「一度、エクスクロスのメンバーの世界の分け方を整理するべきだと思います」

號「確かにその三つの世界と異なる世界が多すぎるからな」

倉光「では、零君、纏めてくれないか？」

零「はい。まずは俺の出身世界……。これは平穩の世界と言いましよう。実際、俺の世界には戦争は現在ありませんから……」

甲児「平和の世界よりも平和なのか……」

零「そして、アンジュ達、シモン達、ユイ達、ワタルを除く魔神乗りの人達、メル……」

そして、アマリとホープスの出身世界……。アル・ワース……」

アマリ「……」

零「バナージ達の世界も一応、戦争の世界に入れるぞ？アムロさん達、ジユドー達、シーブック達、バナージ達、その未来のベルリ達の出身世界の戦争の世界……。恐らく、トビアもこの世界出身だろう」

トビア「はい……」

零「ヒイロ達、ショウタ達、万丈の出身世界の革命の世界……。ワタル、甲児達、舞人達の世界の平和の世界……。そして、ネモ船長達の世界」

ネモ船長「……」

零「青葉達やゼロ達の世界はゼロの話でM78星雲スペースと呼ぶ事にしました……」

そして、残る人達の世界です」

九郎「確かにバラバラもあれば、共通の世界もあるからな」

零「まずは一夏達の出身世界……これを失礼ですが、女尊男卑の世界と呼ばせていただきます」

千冬「構わない、本当の事だ」

零「次に九郎さん達、ジョーイ達、マーベラスさん達の出身世界……これを正義の世界と呼ばせていただきます」

マーベラス「正義か……」

零「シン達の世界を運命の世界……。刹那達の世界を対話の世界……。三日月達の世界を鉄の世界と呼ぶ」

オルガ「俺達の世界は鉄華団から取ったな」

零「アキト達の世界は……愛の世界……かな？」
ユリカ「愛……悪くないね！」

零「ノブナガ達の世界を戦の世界と呼ぶ」

ノブナガ「世界状、戦争の世界とやらとなんら変わりはないからな」

零「アルト達の世界を歌の世界……。竜馬さん達と海道さん達の世界を激戦の世界と呼びます」

海道「激戦か：」

真上「確かに言えてるな」

零「しんのすけ達の世界を笑顔の世界……。カンタムの世界を機械の世界……。ケロロ達の世界を共存の世界……。エイサップ達の世界を想いの世界と呼ぶ」

冬樹「共存……。僕達と軍曹の事ですね」

零「そして、マサキ達の世界のラ・ギアス、アーニー達の世界の始まりの世界……。これが現在分けた世界です」

名瀬「うまくわけたな」

倉光「M78星雲スペース、ネモ船長達の世界、アル・ワース、平穏の世界、平和の世界、革命の世界、戦争の世界、戦の世界、正義の世界、愛の世界、笑顔の世界、機械の世界、共存の世界、激戦の世界、女尊男卑の世界、歌の世界、対話の世界、運命の世界、鉄の世界、想いの世界、ら・ギアスに始まりの世界か：」

ルルーシュ「それぞれの世界に帰るためには、ドアクターを倒さなくてはならない」

サラマンディーネ「そのためには龍神様の力が必要になるでしょう」

刹那「お前は？」

アンジユ「そう言えば、宇宙組にまだ紹介していなかったわね……」

サラマンディーネ「では、自己紹介させていただきます。私の名はサラマンディー

ネ：…。神祖アウラの末裔にして、フレイヤの一族が姫です」

カナメ「その部下のカナメと申します」

ナーガ「同じくナーガだ」

ロツクオン「尻尾が…。生えてないか…？」

アンジュ「この女達…。ドラゴン一族だからね」

アイーダ「ドラゴンって…。アンジュ達のアルゼナルが戦っている、あの凶暴な生物よね…」

アンジュ「そうよ。この女…。サラ子は、その指揮官…。何度か戦った事がある赤いパラメイルに乗ってる」

サラマンディーネ「焔龍號（えんりゆうごう）です、アンジュ。そして、わたくしの名前はサラマンディーネです。おかしな略称は使わないように」

アンジュ「…。長いのよね、あなたの名前…」

ナーガ「このやり取り…。もう何度目だろうな…」

モモカ「でも、最初の頃のような険悪さがなくなってきたように思えます」

カナメ「そうですね。少しずつですが、歩み寄りをしているようです」

零「なら、サラ姫様ってのはどうだ？」

サラマンディーネ「…。それほどまでにわたくしの名は呼びづらいですか？」

零 「あんたがそう呼んで欲しいなら呼ぶけど… アンジユは呼ぶ気はないだろうぜ」
 サラマンディーネ 「アンジユ…」

アンジユ 「何よ、サラ子？」

零 「…頼むから喧嘩はやめてくれよ。何なら、サラマンディーネもアンジユの事を
 アン子って呼んだらどうだ？」

サラマンディーネ 「それは良いですね」

アンジユ 「ぶっ飛ばすわよ、零！」

零 「お互い様だろうが！良いじゃねえかよ、アン子って！」

アンジユ 「いやよ！黒くてモツサリしてて、ていうか、ライバルが名前を呼び合うの
 にアン子って！」

零 「そうか、そんなに嫌か…。なら、きな子は？」

アンジユ 「喧嘩売ってんのかー!!？」

タスク 「お、落ち着いてよ、アンジユ！」

ヴィヴィアン 「あつちはほつといて、ここでもう一つ重大発表！実はあたしもドラゴ
 ンなんだよ」

ステラ 「言ってる意味が… わからないんだけど…」

アニュー 「人間がドラゴンって… どういう事なの？」

サリア「ヴィヴィアンはドラゴンに変身できるんです」

ヒルダ「逆に言えば、あたし達が戦ってきたドラゴンも元は人間らしいんだよ」

アルト「何だと!?？」

ユイ「いきなり、そんな事を言われても……」

アンジュ「驚くのも無理はないわ。私達も未だに信じられないもの」

エルシャ「でもね……私達は目の前でヴィヴィちゃんがドラゴンに変身するのを見たの」

ヴィヴィアン「よくわからないけど、このキャンディを舐めると変身しなくて済むんだよ」

サラマンディーネ「おそらく、それに封じ込められた龍の力があなたに力を貸していると思われれます」

ワタル「龍の力……」

ミツヒデ「龍の力……もしか、ノブ達が大イクサヨロイを扱えているのも……」

ジャンヌ「それが原因って事？」

サラマンディーネ「はい、そうですよ。破壊王様と救星王様」

ノブナガ「俺達の事も存じていたか……」

セシリー「サラマンディーネさん……。もう少しドラゴンの事を教えてくれないで

しようか？」

竜馬「ドラグニウムってやつのも聞きたいしな」

ゼロ「あんたがイージスの存在を知っているのも気になる」

サラマンディーネ「はい。ですが、まずは龍神様を復活させる事を最優先とします」

アンジュ「この調子で肝心な事は少しも話そうとしないの」

ブレラ「先程から言っている龍神様とは龍神丸の事だな？」

アンジュ「そうよ。ワタルの事は救世主様。龍神丸は龍神様って呼んでるの」

マリィダ「同じドラゴンだから、仲間意識を持つているのか。？」

サラマンディーネ「全ては龍神様をお救いしてからです」

アンジュ「結局、それなのね。？」

ワタル「わかったよ、サラマンディーネさん。明日になったら、すぐにセリーヌの森

に出発しよう」

シノ「そのセリーヌの森って何だ？」

ワタル「そこにある復活の聖水を使えば、龍神丸は復活するんだ」

話を終え、俺達は寝る事にした。。

第32話

輝く星神と龍王の咆哮

―新垣 零だ。

俺は一夏の部屋の前にいた。

龍神丸が死んだ事を自分のせいだと言い、部屋に引きこもった一夏と話をするためだ。

零「一夏、入るぞ」

部屋をノックして、部屋に入った……。

部屋に入ると、暗い部屋の中でベットに横になっている一夏の姿が見えた。

一夏「何の用だよ……零」

零「もうすぐセリーヌの森に着く……俺達は必ず、龍神丸の復活を成し遂げる」

一夏「……それが何だよ？」

零「お前も来い、お前自身が自分のせいだと思うなら龍神丸の復活を手伝ってくれ」

一夏「無理だ」

零「……無理だと？……じゃあ、お前は逃げるのかよ？自分の責任も果たせないのか

よ！」

一夏「簡単に言うなよ!!？」

俺の言葉にカツとなった一夏は立ち上がり、俺の胸ぐらを掴んだ。

一夏「俺はお前とは違う！俺の気持ちも知らないのに他人事のように言うなよ!!？」どんな状況でもみんなを引っ張ってきたお前と一緒にしないでくれ！」

零「一夏……」

一夏「出ていけ……」

零「一夏、俺は……」

一夏「出てけよ!!？」

一夏に出ていけと言われ、俺は無言で頷いて、ドアノブに手をかける。

……だが、振り返り、一夏に言った。

零「……一夏、待ってるから……」

一夏「……」

俺の言葉に反応せず、一夏はベットに座る。

俺はそれを見て、一夏の部屋を出た……

一夏「くそっ……！」

部屋を出ると、一夏の部屋の前には箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、ロザリー、クリスが心配そうな顔で立っていた。

零「お前ら……」

セシリア「零さん……一夏さんは？」

ロザリー「大丈夫なのかよ？」

零「……正直大丈夫じゃないな……。だいぶ参ってる」

箒「私達も一夏に話を……」

零「今行かない方がいい。逆にあいつを苦しめる……」

ラウラ「わかりました……」

零「……これは俺からの頼みだが聞いてくれるか？」

クリス「何？」

零「もしもの時は……。一夏を支えてくれ」

シャルロット「零さん……」

零「情けない話だが、俺だけじゃあいつを……支えきれるか、わからない……。だから……」

楯無「心得ました！」

鈴「あいつのために動くのは今に始まった事じゃないしね！」

簪「私も頑張る…！」

零「ありがとな、みんな。(一夏、信じてるぞ。お前が必ず立ち直る事を…)」

第32話 輝く星神と龍王の咆哮

「俺はギロロ伍長だ。

ケロロを除く俺達ケロロ小隊はおかしな森にいた。

ドロロ「クルル殿、この森はなんと言う名前でござるか？」

クルル「クーツクク！どうやら、セリーヌの森らしいぜ」

ギロロ「村に向かうはずが、まさかこんな森で迷ってしまうとはな…」

タママ「僕達、これからどうするですか、ギロロ先輩」

ギロロ「迂闊に動くのは危険だ。ここはこの森で待機するしかないな」

ドロロ「っ、この気配は!?!？」

ギロロ「どうした!?？」

クルル「面倒な事だ、五隻の戦艦が近づいて来てるぜ」

クルルの言う通りに五隻の戦艦が現れた……。

―新垣 零だ。

俺達はセリーヌの森についた。

ワタル「アマリさん……。ここがセリーヌの森なんだね？」

アマリ「それは間違いないんですけど、復活の聖水についてはほとんど私も知らないんです」

零「メルはどうなんだ？」

メル「すみません……。私もちよつと……」

ホープス「セリーヌの森に咲くセリーヌの花が開く時、そこから神秘の雫が溢れる……。それこそが復活の聖水……。その力は正義の心を持つ者の魂を蘇らせる……」

アマリ「でも、その花がどこにあり、どういったものなのかまではわからないんです……」

クラマ「こうなったら、手分けして探すしかないぜ」

ホープス「そう簡単にはいかないようです」

刹那「来るぞ……！」

現れたのはドアクダー軍団とグール、ダークケロロボだった。

シバラク「ドアクダー軍団！」

ジョーイ「どうして此処に!?？」

ドクトル・コスモ「驚いたか、アホウ共め！ウララの像の言葉……ワシ達も盗み聞きしていたのだ！」

ソイヤ・ソイヤ「龍神丸の復活など絶対にさせてなるものか！」

アンジユ「ドクトル・コスモにソイヤ・ソイヤ……！」

クルージング・トム「グフフフ！久しぶりだな、お前達！」

デス・ゴッド「お前達に受けた屈辱……一時たりとも忘れた事はなかったぞ！」

シモン「クルージング・トムにデス・ゴッド！」

一度倒した界層ボスが勢ぞろいかよ……！

舞人「一度倒した悪党達が再びやってきたのか！」

ブロッケン「その通り！借りを返してやるぞ、エクスクロス！」

ダークケロロ「今度こそ、貴様らを倒す！」

甲児「ブロッケン！お前もいるのかよ！」

ケロロ「いい加減にしつこいでありますよ、もう一人の吾輩！」

万丈「いいだろう！龍神丸の復活を邪魔するのなら、受けて立つ！」

俺達は出撃した……。

ノブナガ「ワタル！奴らの相手は俺達がする！その間にお前はセリーヌの花を探せ！」

ワタル「わかったよ、ノブナガさん！」

ヒミコ「あちしも行くのだ！」

クラマ「俺も行くぜ、ワタル！償いのためにも！」

シバラク「クラマ！もし、ワタル達が傷つくような事があつたら、今度こそ拙者はお

前を斬るぞ！」

クラマ「覚えておくぜ、ダンナ」

九郎「白式はやつぱり、出撃していかないか……」

真上「戦えない奴の事は放っておけ」

海道「邪魔になるだけだからな！」

ユイ「そ、そんな言い方……！」

スカーレット「だが、こいつらの言っている事はあつている」

箒「一夏なら大丈夫です……私達が信じていますから……」

エイサツプ「そうだな、俺達も一夏を信じるだけだ！」

ルルーシユ「各機へ！狙うは敵戦力の中核だ！」

シヨウ「要するに界層ボス達の事だな……！」

ヒイロ「任務、了解」

ゼロ「何度挑んでこようが銀河の彼方にぶっ飛ばしてやるぜ！」

サラマンディーネ「救世主様……！こちらはお任せください！」

ワタル「待っていてね、みんな……！絶対にセリーヌの花を見つけて、龍神丸を復活させるから！」

ワタルとヒミコはセリーヌの森の中に入っていった……。

ドロロ「あれは……ケロロロボMk-11！」

ギロロ「あいつもこの世界に来ていたのか……」

クルル「クーツクク！どうやら、敵の部隊には隊長の偽物もいるようだな」

タママ「あ、ナツチーもいるです！」

ギロロ「何だと!?？」

ドロロ「クルル殿！隊長殿と通信を！」

クルル「多少時間がかかるが、試してみるぜ」

俺達は戦闘を開始した……。

「織斑 一夏だ。」

外が騒がしい……。どうやら、戦いが始まったようだ。

すると、部屋のドアが開き、千冬姉が入って来た……。

千冬「一夏、何をしている……。皆はもう出撃したぞ」

一夏「何だよ千冬……。俺はもう行かない……。戦わない！」

千冬「……。自分の失態に目を背け続けると言うのか？」

一夏「何度だって言ってくれ……。俺はもう戦うのが嫌なんだよ！」

千冬「一夏……。何故だ……。どうして姉である私は何もしてやれないんだ……。！」

〈戦闘会話 ケロロVS.ダークケロロ〉

ダークケロロ「(シヴァヴァ達の言う通り、奴等は此処にいたか……)」

ケロロ「戦闘中に考え事とは吾輩も舐められたものでありますな！」

ダークケロロ「安心しろ、お前は此処で終わる(そう、お前一人の戦いはな……)」

俺達はブロッケンに乗るグールにダメージを与えた。

ブロッケン「ええい！こうも負けが連続するとドアクダー軍団の中で居場所がなくなる！次こそは、何とかせねばな！」

甲児「あいつもドアクダー軍団の中で苦労しているみたいだな…。だが、遠慮をするつもりはないぜ。襲ってくるのなら、何度でも叩きのめしてやるさ」

戦闘から結構な時間が経ったが、一向にワタル達が戻ってこない…。

シバラク「ええい！まだか、ワタル!!？」

サラマンディーネ「…！」

サラ姫が黙ってる…？

アンジュ「どうしたの、サラ子!!？」

サラマンディーネ「救世主様が…！」

な、何だよ!!？ワタル達に何があったってんだよ!!？

―戦部　ワタルだよ。

僕たちはついにセリーヌの花らしき場所まで辿り着いた。

ヒミコ「きゃはは！お花だ、お花だ、お花が咲いてるのだ！」

クラマ「ワタル……！ここは……！！？」

ワタル「うん……！ここからは何かの力を感じる……！きつと、この一番綺麗な蕾がセリーヌの花だよ！」

すると、ザン・コック達が現れた。

ザン・コック「その通りだ、ワタル。ここを嗅ぎつけるとは、さすがは救世主だな」

ワタル「お前は……！」

クラマ「ドアクター四天王のザン・コック！」

ザン・ゴロツキー「兄者だけではない」

ザン・ギャック「俺達も呼ばれて飛び出て、じゃじゃーんと登場だ」

クラマ「ザン・ゴロツキー……！ザン・ギャックも！」

ザン・コック「フフフ……クラマよ。久しぶりだな。お前に最後のチャンスをやろう。ここでワタルを殺せば、裏切りを帳消しにしてやる」

クラマ「断る……！俺はもうお前等の言いなりにはならねえ！」

ザン・ギャック「いいのか、そんな態度を取って？」

ザン・ゴロツキー「お前の望み……人間に戻る事が出来ないぞ」

ワタル「人間に……！！？」

ヒミコ「トリさん、人間だったのか!?？」

クラマ「ああ、そうだ。ドアクダーの呪いのせいで、俺の村に住む人間はみんな、動物にされちゃった……。俺は……。村のみんなを元に戻すためにドアクダー軍団の命令に従っていたんだ」

ワタル「そんな理由があつたのか……」

クラマ「だがな、ワタル……。だからって、仲間を裏切つていいなんて事はねえんだ……。だから、俺は！お前と一緒に戦つて、村の人間を苦しめたドアクダーを倒すつて決めただんだ！」

ザン・コック「馬鹿め！最後のチャンスが無駄にしおつて！」

ザン・ギャック「ドアクダー様に歯向かうお前はここで終わりだ！」

ザン・ゴロツキー「救世主ワタルと共に死ぬ、クラマ！」

ザン兄弟がクラマに襲いかかった……。！

ワタル「クラマアアアツ！」

だけど、銃撃がザン兄弟を吹き飛ばした。

ギロロ「なる程、よくはわからんが、状況だけは理解できた」

ドロロ「こやつ等がこの世界を支配するドアクダー軍団なるものでござるな！」

ザン・コック「な、何だ、お前達は……。!?？」

ワタル「あれ、君達は…！」

ヒミコ「ケロちゃんと似ているのだ！」

タママ「やっぱり、軍曹さんとお知り合いのようですね！」

クラマ「まさか、お前等がケロロの言っていたケロロ小隊か？」

ギロロ「そうだ、うちの隊長が世話になったようだな」

ワタル「そんな事ないよ、ケロロは僕達のために必死に戦ってくれているんだ！」

クルル「クーツクク！流石は隊長だぜ… あ、もう少しで通信が繋がるから待ってな」

ドロロ「もうその必要もないでござるよ！」

ザン・コツク「何を話し込んでいるんだ、貴様等… こうなったら、死ぬ！ワタルーッ

!!？」

ワタル「…！」

ザン・コツクが僕に迫ってきた。

クラマ「ワタルはやらせねえ！」

すると、クラマは僕を庇って攻撃を受けた…。

クラマ「ぐわあああああつ!!？」

ヒミコ「トリさん！」

ギロロ「お前…！」

ワタル「ク라마！僕を庇って……！」
ザン・コック「心配するな、ワタル！すぐにク라마の後を追わせてやる！」

―新垣 零だ。

サラマンディーネ「救世主様！」

サラ姫の叫び声を聞く限り、かなりやばいみたいだな……！

シバラク「ワタル！ヒミコ！」

ケロロ「まさか……ギロロ達がこのような所に……！」

すると、またもや、忍者の魔神が現れた……。

？「そうはさせんウラ！」

忍者の魔神はザン・コックを攻撃した。

ワタル「忍者の魔神！」

ザン・ギャック「ちいっ！邪魔が入ったか！」

ザン・コック「まあいい……！龍神丸のないワタルなど、恐るるに足らずだ！」

ワタル「もうすぐに龍神丸は復活する！そうしたら、お前達なんかにも負けるもんか！」

ザン・コック「ハハハハ！無駄な事を！」

ワタル「何っ!?？」

ザン・コック「セリーヌの花が咲く事はない!つまり、復活の聖水は絶対に手に入らないのだ!ダークケロロ!」

ダークケロロ「:」

ダークケロロロボがワタル達に近づく:。

ザン・コック「ワタル達を叩き潰すのだ!」

ワタル「くっ:」

ケロロ「させるかあああっ!!?」

しかし、ダークケロロロボの動きをケロロロボがMk-11が止めた。

ワタル「ケロロ!」

ドロロ「隊長殿!」

タママ「軍曹さん!」

ダークケロロ「くっ:」 何処までも邪魔を:」

ケロロ「これ以上、我が小隊とワタル殿達を: 吾輩の友達を傷つけさせないのであります!」

ギロロ「ケロロ:」 つ、おいクルル!あれはできるか!?」

クルル「あれ?ああ、できるぜ」

ギロロ「ならば、ケロロに通信を繋げ！」

クルル「クーツクク！わかったぜ。」

すると、ケロロロボMk-IIIに通信が入った。

クルル「隊長。珍しく格好いい姿を晒してんじやねえか」

ケロロ「クルル曹長でありますか！」

タママ「軍曹さくん！」

ドロロ「ご無事でござったか！」

ケロロ「夏美殿や冬樹殿も無事であります！」

ギロロ「そうか……ならば、ケロロ！あれを行くぞ！」

ケロロ「あれ……？了解であります！」

返事をしたケロロは、ダークケロロロボを蹴り飛ばした。

そして、ケロロを除く小隊の4匹もロボットに乗り込んだ。

ケロロ「ケロロ小隊、行くであります！」

ケロロの掛け声で小隊は共鳴の声を上げた。

ケロロ「ケロロロボ、コンビネーション！ワン！」

タママ「ツー！」

ギロロ「スリー！」

クルル「フオー」

ドロロ「フアイブ！」

ケロロ「クローズ！」

ケロロ小隊「二三エックスー!!?二三」

ケロロ小隊全員の掛け声の後、五機のロボは合体した……。

ケロロ「究極合神！ゴッドケロン！世のため、人のため…… 悪人共の野望を砕くケロ

ロ小隊！このケロンスターの輝きを恐れぬなら！」

ケロロ小隊「二三かかって来いやあ!!?二三」

ゴッドケロン…… 凄すぎるぜ、あいつら！

ヴイラル「フツ、あいつら…… 俺達以上の合体を見せてくれる！」

万丈「台詞は取られたけどね」

ダークケロロ「貴様らが集まった所で、吾は負けん！」

ケロロ「その思い上がりがお前の敗因であります！」

ゴッドケロンはダークケロロボに接近した……。

ドロロ「隊長殿！行くでござる！」

ケロロ「まずはケロンミサイルで牽制するであります！」

ミサイルでダークケロロボを吹き飛ばし、ゴッドケロンは両手にビームサーベルを

出す。

ギロロ「チャンスだ、ケロロ！あれをやるぞ！」

ケロロ「わかったであります！今、必殺の……」

またもやケロロ小隊は共鳴の声を上げる。

ケロロ小隊「……大共鳴斬・ケロンスタァ斬り!!?」「……」

ダークケロロ「ぐあああつ!!?」

ダークケロロロボを星型に斬り裂き、大ダメージを与えた。

ダークケロロ「これが……共鳴の力……！これが……ケロロ小隊の力……！つ、次こそは負けん！覚えていろ！（準備は整った……後は奴の魂を滅ぼせば……）」

そう言い残し、ダークケロロロボは撤退した。

冬樹「軍曹……伍長……タママ……クルル……ドロロ……」

夏美「これで全員集合ね！」

しんのすけ「凄い攻撃だぞ、ケロロ小隊！」

トオル「僕達、春日部防衛隊も負けてられないね！」

ザン・コック「フン、ケロロめ……。使えん奴だ」

ワタル「ザン・コック！」

ザン・コック「待っている、ワタル！すぐにガツタイダーで叩き潰してやる！」

ザン兄弟はガツタイダーを取りに行つた……。

ワタル「セリーヌの花が咲かない……」

クラマ「諦めるんじゃねえ、ワタル……」

ワタル「クラマ！」

クラマ「ちつとドジを踏んじまったが、俺は大丈夫だから、心配すんな」

ヒミコ「流石はトリさんなのだ！」

幻龍斎「お主……」

クラマ「へ……驚いたぜ。謎の魔神を操縦していたのがサルだったとはよ……」

幻龍斎「ワシの名は忍部 幻龍斎……。娘のヒミコを助けてくれた事に感謝するウラ」

マサオ「嘘!?？」

ワタル「ヒミコのお父さん!?？」

零「マジかよ……!?？」

俺達を何度も助けてくれた人がヒミコの父親だったなんて……。

シバラク「ちよつと待て！さすがにそれは信じられん！」

幻龍斎「だが、事実だウラ。すまん、クラマとやら……。セリーヌの花の情報を集める

ために遅れてしまったウラ……」

ヒミコ「きやはは！父上、可愛いのだ！」

ワタル「ヒミコは信じるのね……」

クラマ「よかったな、ヒミコ……。親父さんに会えてよ……」

……だが、そこへガツタイダーと魔神部隊が来た……。

空気の読めない奴らだ……！

ザン・コック「待たせたな、ワタル！このガツタイダーで踏み潰してくれ！」

幻龍齋「ヒミコ、幻神丸に乗るのだウラ！ワシ達でワタルを守るぞウラ！」

ヒミコ「了解、父上！あちしも頑張るのだ！」

幻龍齋さんとヒミコは幻神丸という魔神に乗った。

幻龍齋「ヒミコ……。今まで黙っていて、すまなかつたウラ。ワシはドアクダーを倒す

ために一人で行動していたのだが、返り討ちに遭い、サルにされてしまったのだウラ」

ヒミコ「なあなあ、父上。父上はセリーヌの花が咲かない理由って知っているか？」

幻龍齋「……知っているウラ」

ワタル「その理由って……？」

幻龍齋「セリーヌの花が咲くには強い太陽の光が必要なのだウラ……」

ワタル「太陽の光……？」

ザン・コック「残念だったな、ワタル！創界山の虹が光を失った今、このアル・ワースの太陽は力を失っている！よって、セリーヌの花が咲く事はない！つまり、幻神丸の

復活もあり得ないのだ！」

確かに本来なら……な。

でも、こつちには日輪の太陽がいるんだよな！

万丈「ほう……。確かに今のアル・ワースの太陽は弱いかも知れない……。だが、ここにはこの波嵐 万丈とダイターン3がいる！」

ザン・コック「何をするつもりだ、貴様!?？」

万丈「日輪は我にあり！受け取れ、ワタル！」

ダイターン3の光がセリーヌの花を包む……。

ザン・コック「あ、あれは……！」

万丈「そう！ダイターン3に蓄えられた太陽の光だ!!?？」

ワタル「ありがとう、万丈さん！」

クラマ「見ろ、ワタル！セリーヌの花が咲く！」

ホープス「その花が開く時にあふれる神秘の雫……。それこそが復活の聖水……」

アマリ「ワタル君！龍神丸の珠に復活の聖水を！」

ワタル「うん！」

ザン・コック「さ、させるかあああつ!!?？」

零「こつちの台詞だああつ!!?？」

俺はゼフィールスでガツタイダーの動きを止める。

だが、尚も攻撃しようとしてくるガツタイダーをゴッドケロンが抑えてくれた。

ケロロ「手伝うであります、零殿！」

零「助かるぜ、ケロロ小隊！…ワタル、今だ！！？」

ワタル「ありがとう、みんな！甦れ、龍神丸！！？」

ワタルは龍神丸の珠に復活の聖水をかけた。

ワタル「龍神丸ー！！？」

珠から龍神丸が出て来て、ワタルは龍神丸の中に入った…。

ワタル「龍神丸！龍神丸っ！！？」

龍神丸「ワタル…。よくやってくれた。お前と仲間達のおかげで私は新しい生命を得る事が出来た。礼を言うぞ」

ザン・コック「ええい、ワタルめ！龍神丸を蘇らせおったか！」

ワタル「行こう、龍神丸！ザン・コックを倒すんだ！」

龍神丸「待て、ワタル…。お前のすべての生き物を愛する心とそして悪にくじけぬ勇気が、私にもう一つの生命を与えてくれた」

な、何だ…？あの力…？

ワタル「さっきのは…？？」

龍神丸「悪との戦いで生命を落とした空神丸の魂だ」

ワタル「わかる… わかるよ！もう一つの生命って… 空神丸の魂なんだね！」

龍神丸「そうだ。私は空神丸と合体して、さらにパワーアップした魔神に生まれ変わる事ができる。名付けて… 龍王丸！」

ワタル「龍王丸…！」

龍神丸「私が龍王丸に変身するには、お前の愛と勇気力がなくてはダメなんだ。ワタルの戦う心が高まり、正義のパワーが全開になった時、龍王丸に変身できる！」

ワタル「わかったよ、龍神丸！」

龍神丸「さあ、名を呼ぶのだ！龍王丸と！」

ワタル「よおし！やるぞ!!？パワー全かあい！変身、龍王丸ーっ!!？」

本当に変身した… あれが、龍王丸…。

ワタル「これが龍王丸…！僕の服も変わってる！」

龍王丸「全てがパワーアップしたのだ！私も鳳王に変化する事で空を飛べるようになった！やるぞ、ワタル！この力でガツタイダーと戦うんだ！」

ワタル「よし！行ってくるよ、クラマ！」

シモン「ただ蘇っただけでなく、パワーアップまでするとはな！」

ゴーカイレッド「やるじゃねえか、ワタル！龍王丸もな！」

サラマンディーネ「嗚呼……救世主様、龍神様……」

アンジュ「こっちはメロメロだね……！」

クルル「へっ、登場の格好良さを全部持っていかれちゃったな、クーツクク！」

タママ「でも、格好いいです！」

ザン・コック「おのれ！龍神丸も龍王丸も同じ事だ！二度と生き返れないようにしてやる！」

ギロロ「ふん、俺達を甘く見ているぞ、ケロロ」

ケロロ「そのようでありますな……。そうはさせないでありますよ、ザン・コック！ワタル殿、行くでありますよ！」

ワタル「うん、ケロロ！生まれ変わった龍王丸と僕の手を見せてやる！」

幻龍斎「ヒミコ！ワシ達も行くウラ！」

ヒミコ「あちしも頑張るのだ！見ててね、トリさん！」

龍王丸「やるぞ、ワタル！そのすべての力で戦うのだ！」

ワタル「わかったよ、龍王丸！もう僕達は絶対に負けない!!？」

さあ、反撃開始だ!!？

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

クルル「十分に戦闘できるぜ、隊長」

タママ「僕も頑張るですよ、軍曹さん！」

ドロロ「ケロロ小隊に敵うものなど存在しないのでござる！」

ギロロ「見せてやるぞ、ケロロ！俺達の力を！」

ケロロ「わかったであります、ケロロ小隊、行くであります！」

〈戦闘会話 エイサップVSクルージング・トム〉

クルージング・トム「貴様さえいなければ、朗利と金本をうまく利用できたのに！」

エイサップ「俺なんていなくてもあいつらは自分達の意味でお前の元に去っていた

さ……。だけど、俺の友人を巻き込んだお前を俺の許さないぞ！」

〈戦闘会話 朗利&金本VSクルージング・トム〉

クルージング・トム「朗利、金本……。もう一度俺の配下として戦わせてやってもいい

ぞっ！」

金本「何言つての、こいつ」

朗利「さあな」

クルージング・トム「なんだと!?!?」

金本「俺達はもうエイサップ達と共に行くって決めたんだよ!」

朗利「そういう事だ。だから、消えやがれ、クルージング・トム!!?」

オーラトリプルデイスパッチを受けたセカンドガンはダメージを受けた。

クルージング・トム「い、いかん!セカンドガンが落ちる!!?ええい!借りを返すのは次の機会だ!」

そう言い残し、セカンドガンは撤退した…。

〈戦闘会話 ノブナガVSデス・ゴッド〉

デス・ゴッド「お前は許さないぞ、破壊王!」

ノブナガ「へっ、俺達に一度敗北したお前が俺に勝てると思うな!我は破壊王、オダ・ノブナガなるぞ!」

蜃気楼のゼロビームとザ・フルの神器の力での攻撃でスケルバットを大ダメージを受けた。

デス・ゴッド「まずい!このままでは、このデス・ゴッド様の方が死神に連れていか

れる！お、覚えているよ！次に戦う時こそ、お前達を地獄に送ってやる！」
逃げる様にスケルバットは撤退した……。

〈戦闘会話　ヒーローマンVSソイヤ・ソイヤ〉

ソイヤ・ソイヤ「こうなればそのロボットを我が手に……！」

ヒーローマン「……」

ジョーイ「ヒーローマンは僕の相棒でヒーローなんだ、お前達には絶対に渡さないぞ
！」

マジンガーズのロケットパンチ100連発とヒーローマンのヒーローマンオーグメントでキングヘラクロスに大ダメージを与える。

ソイヤ・ソイヤ「何という事だ！この俺とキングヘラクロスがまた負けるとは！エクスクロス！この勝負、ひとまず預けるぞ！」

キングヘラクロスは撤退した……。

〈戦闘会話 竜馬VSドクトル・コスモ〉

ドクトル・コスモ「そのゲッターという機体をいただく！」

隼人「まだ、こんな事を言つてやがるぜ、竜馬」

弁慶「よほど地獄を見たいようだな」

竜馬「ああ、そうだな…。それなら、何度でも教えてやるよ、俺達とゲッターの恐ろしさをな！」

ヴィルキスの能力解放と真ゲッターのストナーサンシャインでギーガンを追い詰めた。

ドクトル・コスモ「い、いかん！ここで敗北したら、完全に出世コースから外れる！
そうだ！ここは腹痛になったという事で帰るとしよう！」

ギーガンは撤退した…。

てか、理由が小学生か。

〈戦闘会話 ケロロVSザン・コック〉

ザン・コック「おのれ、貴様等が邪魔をしなければ龍神丸復活は阻止できたのに…

！」

ケロロ「ゲーロゲロゲロ！そういう計算を入れていないとは侵略者失格でありますな

！」

ギロロ「お前がいうな！」

ザン・コック「黙れ！我等、ザン三兄弟の力を見せてやる！」

ケロロ「ならば、こっちはケロロ小隊五人で相手をするであります！」

龍王丸の鳳龍剣でガツタイダーを斬り裂いた…。

ザン・コック「馬鹿な…！馬鹿なああつ!!？」

ガツタイダーは爆発した…。

ヒミコ「やった、やった！勝ったよ、トリさん！」

幻龍斎「いや…。あのザン兄弟が、あれで終わりとは思えんウラ」

残る敵も倒し終えた俺達…。

龍王丸「よくやったぞ、ワタル。お前の愛と勇気が、今日の勝利を呼んだんだ」

ワタル「へへ…。そう言われると照れちゃうな。でも、僕達が勝てたのは、エクスク

ロスのみんなの力だよ。まずは僕を守ってくれたクラマを迎えに行こう」

そう言い、龍王丸はセリーヌの花の下まで行く。

ワタル「勝ったよ、クラマ！これもクラマのおかげだ！」

：：だが、クラマからの返事がない：：。

おい：：まさか：：！

ワタル「クラマ：：クラマアアアツ！！？」

ワタルの声がセリーヌの森中に響いた：：。

俺達はそれぞれの艦へと戻った後、すぐさまセリーヌの花の下まで駆けつけた。

そこで見たのは倒れるクラマの姿だった。

クラマ「：：」

ワタル「クラマ：：」

ネネ「そんな：：」

シャルロット「こんなのって：：」

幻龍齋「この男は：：自分の死を悟りながらお主を送り出したのだウラ：：」

ドロロ「：：よほどの覚悟の持ち主だったのでござるな」

ギロロ「そのようだな：：」

ワタル「僕に：：心配をかけない様に：：」

ヒミコ「トリさん……もう目を開けないの……」

ナディア「そんなの……やだよ……」

しんのすけ「クラマ……クラマ！」

ジャン「ナディア……」

ポーちゃん「しんちゃん……」

ナディア「クラマは……あたしを何度も助けてくれた……その……お礼もしてないの……」

しんのすけ「クラマは……オラといつでも嫌な顔をせず遊んでくれたゾ……それなのに、オラは……」

シバラク「クラマ……拙者はお主の事を見くびっていた……生命を懸けてワタルを守ったお主の心……一点の曇りもない正義だ……」

ノブナガ「良き強きであつたぞ……クラマ……」

ホープス「正義……」

零「どうか……どうにかならないのかよ！」

ホープス「ワタル様……セリーヌの花をクラマ様に捧げてください……」

ワタル「え……」

メル「ホープスさん、何を……」

ホープス「さあ、早く」

ワタル「う、うん……」

クラマ「……」

ホープスに言われるがまま、ワタルはセリーヌの花をクラマに捧げた。

ワタル「クラマ……。これがセリーヌの花だよ……」

クラマ「あ……」

……え？

う、嘘だろ……!!?

ワタル「クラマが……生き返った！」

幻龍斎「おまけに人間になったウラ！」

グランデイス「いい男じゃないの！」

シバラク「これがクラマの本当の姿か！」

ワタル「クラマ!!？」

ヒミコ「トリさんっ!!？」

クラマ「俺は……死んだはずなのに……」

アマリ「これは……復活の聖水の力なのですね……」

ホープス「はい……。正義の心を持つ者は復活の聖水で蘇る……。それだけの事です」

シバラク「クラマ！やっぱり、お主は正義の男だったんだな！」

クラマ「よしてくれよ、ダンナ。俺が、そんな特殊な人間に見えるかよ？」

零「でも、復活の聖水で蘇ったんだろ？」

クラマ「もし俺が、正義なんてものを持っていたとしたら。。。それは、ワタル。。。前の優しさに触れたせいだろうさ」

ワタル「クラマ。。。」

ギロロ「良い部隊だな、ここは。。。」

夏美「今日からギロロもその一員よ！」

ギロロ「フツ、そうだな。。。」

タママ「軍曹さんとうまく会えたです！」

ケロロ「ご苦労をかけたでありますな」

クルル「全くだぜ」

ドロロ「エクスクロスの方々、これからはよろしくお願いするでござる！」

零「こつちこそ、よろしくな！ギロロ、タママ、クルル、ドロロ！」

サラマンディーネ「救世主様のその汚れなき美しい心。。。あなたは、やはり救世主様です」

アンジュ「龍神丸は蘇った。。。約束通り、ドラゴンの秘密を話してもらおうよ、サラ子」

サラマンディーネ「いいでしょう、アンジユ……。そして、それはあなたにも関係がありません」

アンジユ「え……」

サラマンディーネ「古の契約……。それはあなたも受け継ぐべきものなのです」

ど、どういう事だ……？

「私はドン・ゴロだ。」

ドン・ゴロ「……報告いたします、ドアクダー様」

ドアクダー「どうした、ドン・ゴロ？」

ドン・ゴロ「龍神丸がパワーアップを果たし、ザン兄弟はそれに敗北しました。ガッタイダーは大破し、ザン兄弟は重傷を負ったとの事です」

ドアクダー「そうか」

ドン・ゴロ「斯くなる上は、四天王最後の一人である、このドン・ゴロが出撃致します」

ドアクダー「その必要はない」

ドン・ゴロ「しかし……」

ドアクダー「お前には虎王の教育係という役目がある。ワタルと、その仲間の相手は奴等に任せればいい。古の契約に基づき、闇より蘇った、あの者達にな……。それと、全宇宙を喰らい尽くす宇宙の魔の復活も近い……」

ウイル「……やはり、ドアクダーはゴゴールを復活させる気だったのか……。これは急がなければならぬ……。！」

―新垣 零だ。

どうやら、クラマはもう行ってしまおうようだ。

ヒミコ「……行っちゃうのか、トリさん？」

クラマ「俺は一度、村に戻る……。復活の聖水の力があれば、村の人達を元に戻す事が出来るしな」

ヒミコ「父上も聖水をかけてもらえば、人間に戻れるんじゃないのか？」

幻龍斎「元に戻りたいのは山々だが、ワシはドアクダーを打倒する日まで怒りを忘れぬためにも、この姿でいるウラ」

シバラク「しかし、あまりにも突然の別れ……」

クラマ「別れはいつも突然にやってくる……。そういふもんだ」

ワタル「でも、帰ってくるよね？」

クラマ「ああ……。約束するぜ、ワタル」

ワタル「だったら、サヨナラは言わないよ」

クラマ「そらがいい。言葉にすれば、別れは薔薇の棘のように心を突き刺すからな」

零「臭いセリフを吐くようになったじゃねえか」

クラマ「うるせえよ、零」

ホープス「お元気で、クラマ様」

クラマ「お前にも世話になったな、ホープス。この場を貸してくれてありがとよ」

ホープス「いえいえ……。別れの涙を皆に見せたくないというクラマ様の心情を察し

たまでです」

クラマ「フ……。ありがとよ。意外にお前……。人の心をわかってくれるな」

ワタル「戻ってくるのを待ってるよ、クラマ」

シバラク「達者でな、クラマ」

ヒミコ「また会おうね、トリさん！」

クラマ「ああ！必ずな！」

零「次また、鳥の姿で来んなよ？」

クラマ「それは俺も嫌だぜ……。零、アマリやメルと仲良くしろよ」

零「お前に言われなくてもわかってるっての。次会った時はゆつくりと村の事を聞かせてくれ」

クラマ「ああ、必ずな！」

↓渡部　クラマだ。

外に出ようとした俺の下に俯いた表情の一夏が来た……。

クラマ「一夏か……」

一夏「その声…… お前クラマなのか…… ！？」

クラマ「おう、そうだけ。お前に負けずのイケメンだろ？」

一夏「…… 行くのか？」

クラマ「おう、村のみんなが待ってるからな」

一夏「そうか……」

クラマ「一夏、お前にも謝らないといけないな……。すまなかった」

一夏「…… クラマは悪くないよ。悪いのは無力な俺だ……」

クラマ「だが、龍神丸は蘇ったんだぜ？」

一夏「もし、セリーヌの花の存在がなかったら、龍神丸は蘇らなかった……」

こいつ、だいぶ参ってるな……。

クラマ「……一夏、人は誰だって無力だぜ。俺もワタルも零も……」

一夏「……」

クラマ「そこから人つてのは強くなるもんなんだぜ」

一夏「俺は……強くなつてなれない……」

クラマ「……俺は信じてるぜ、お前が強くなるのを」

一夏「クラマ……」

クラマ「必ず戻ってくるからよ、その時に強くなつたお前の強さを見せてくれ！」
そう言い残し、俺は一夏の元を去つた……。

一夏「俺は……」

第33話 越えるべき壁

―新垣 零だ。

俺達はハンマーヘッドの格納庫にいた。

アンジュ「今日こそはサラ子にドラゴンの事を聞くわよ！」

零「待ってくれ、アンジュ」

アンジュ「何よ？」

零「ドラゴンの事をサラ姫に聞くのは一夏が戻ってからのしてくれないか？」

アンジュ「・・・どうして？」

零「ドラゴンについてはおそらく重要な事だ・・・。メンバー全員が知った方が良いだろうと思うてな」

オルガ「俺も零に賛成だ」

アンジュ「・・・わかったわよ。所でその肝心の一夏は？」

三日月「部屋から出てこないね」

シャーリー「ご飯は何とか食べてくれているけど・・・」

海道「こうなったら、織斑も新垣のように稽古をつけてやるか！」

ノブナガ「良き案だ、海道。ルルーシユや真上、竜馬も呼んでこよう」

零「一夏を殺す気ですか、あんたらは!!？」

一度経験した俺が必死にノブナガと海道さんを止めた…。

ルナマリア「でも、いつまでもあの調子じゃ…ね」

アンジュ「私がんばり殴ってくる」

メル「だから、暴力で解決しようとしなくてください！」

箒「一夏には今、休息が必要です…」

ジャンヌ「箒…」

箒「だから、一夏を今は…」

エイサツプ「わかった、そっとしておくよ」

シヨウ「今帰った」

マーベラス「シヨウ、偵察に行っていたみてえだな」

ルカ「何かなかった？」

シヨウ「あつたといえは、あつたな」

刹那「どうかしたのか？」

シヨウ「実はこの近くで廃墟のような場所を見つけて、搜索していたんだが…一つ

の家にＩＳらしきパスワードスーツを見つけたんだ」

セシリア「え!?？」

ラウラ「ＩＳですか…!?？」

シヨウ「ああ、今は山田先生と千冬さんが見ているが…」

千冬「解析は終了したぞ」

ギロロ「で、どうだったんだ？」

千冬「間違いなくＩＳ…それも私に馴染みのあるＩＳだ」

馴染みのあるＩＳ…それってどういう事だ…？

シャルロット「織斑先生の馴染みのあるＩＳって…まさか…！」

ラウラ「そのまさかだな…！」

摩耶「それと、今度は専用機持ちの皆さんが偵察の番ですよ」

セシリア「あ、忘れていましたわ」

楯無「じゃあ、行きましようか」

そう言い残すとＩＳ専用機組は格納庫から出て行った…。

あいつら、一夏が心配なのによくやってくれるよ…。

千冬「私も用事があるので失礼する」

一夏、お前にはこんなにお前の事を想ってくれる仲間がいるんだぞ…。

「織斑 一夏だ。」

部屋に千冬姉が入って来た。

千冬「一夏、そろそろ部屋を出たらどうだ？」

一夏「ほっておいてくれよ……」

千冬「全く……いつまでウジウジ考え込んでいるんだ、お前は？女々しい奴が……」

一夏「うるさいんだよ……！」

千冬「……何……？」

一夏「いつも戦わずに指示だけ送ってくる奴が姉貴ツラすんなよ!!？」

千冬「い、一夏……！」

一夏「……俺は千冬姉みたいに強くないんだよ!!？」

千冬「ま、待ってくれ、一夏……！」

一夏「くっ……！」

俺は千冬姉から逃げる様に部屋を飛び出し、メガファウナから降りた……。

―新垣 零だ。

突然、一夏の叫び声が聞こえ、俺は一夏の部屋まで行き、中に入ると目に涙を浮かべながら、両膝を地面につく千冬さんの姿があつた。

零「ち、千冬さん……!!??」

ていうか、一夏は……!!??

零「どうしたんですか、千冬さん！」

千冬「姉貴ツラ……か……」

零「一夏は何処に行つたんですか!!??」

千冬「あいつなら、出て行つた……」

なんだと!!??

零「なら、すぐにでも追いかけないと！」

一夏を追いかけないとした俺の服を裾を千冬さんが掴んだ。

千冬「待ってくれ、零！」

零「……?」

千冬「今はあいつを……一人にさせてくれ……」

零「でも、もし一夏に何かあつたら！」

千冬「……頼む……！」

零「……わかりました……。取り敢えず、これを……」

俺は千冬さんにハンカチを渡した。

零「俺はみんなの下に戻ります。あ、今までは何も見ていませんから」

そう言い、俺は部屋を後にした……。

千冬「そういう所がモテるんだろうな、零は……」

―織斑 一夏だ。

俺はメガファウナを降りた後、外を歩いていた……。

外に出て冷静になると、千冬姉に言ってしまった言葉を思い出し、言っではいけない事を言ってしまったと思う。

俺は…… どうしたら、いいんだ……！

？「悩み事か、少年？」

突然声が聞こえ、俺は振り返ると一人のお爺さんがいた。

一夏「あなたは……？」

？「なに、ただの拳法の達人だ」

拳法の…… 達人……？

? 「俺は名乗ったんだ、お前も名乗ってくれな?」

一夏 「織斑:… 一夏です」

? 「そうか:… では、一夏。何故、お前は沈んだ顔をしているんだ?」

一夏 「俺を育ててくれた姉にカツとなつて、姉貴ツラするなよつて言つてしまつたんです:…。俺、大切な仲間が死んだ原因を作つてしまい:…。あ、でも、その仲間は生き返つて:…」

? 「だが、お前がその仲間を巻き込んでしまつたのは事実なのだな?」

一夏 「はい:…。俺が:… 俺が弱かつたから:…。俺に力がなかつたから:…。!みんなを危険な目に:…」

氣づけば俺は涙を流していた。

? 「何故泣く?」

一夏 「え:…」

? 「その顔は何だ!?!その目は!?!その涙は何だ!?!何を悩む事がある!?!?お前の涙で、敵が倒せるか!?!このアル・ワースを救えるのか!?!」

一夏 「今さつきあつたあなたに:…。俺の何がわかるんですか!」

? 「わかるんだよ。俺も経験した事:…。そして、俺の後輩達も多く経験した事だ。一夏、戦いというのは簡単な物ではない。それを俺が教えてやろう」

一夏「え……？」

？「鍛えてやると言っているんだ」

一夏「え、えええっ！！？」

？「さあ、やるぞ！それと今から俺の事は師匠と呼べ！」

一夏「は……はい、し、師匠！」

この後、俺は地獄とも言える特訓を受けた。

車で追いかけて回されたり、ブーメランを投げられたり、投げ飛ばされたり、殴られたり……。

これって、特訓じゃなくてイジメじゃないか……？

一時間ほど特訓した後、俺と師匠は休憩する。

一夏「はあ…… はあ……。し、死ぬ…… 死ぬる……！」

？「それほどで根を上げるとは、まだまだ鍛え方が足らんな」

一夏「師匠の特訓がハード過ぎるんですよ！」

？「俺もお前の様な時期があった。身体がボロボロになったんだからな。実はな、お前の前にも一人弟子がいたんだ」

俺の前の弟子……？

？「俺の師匠の息子でな……。ある大きな罪を犯し、俺が鍛える事となったんだ。あい

つは、喧嘩つ早くつてな… 俺の厳しい特訓を乗り越え、立派な戦士へと変わったんだ」

一夏「凄い人なんですね、師匠のお弟子さんつて…」

？「それでもない。生きている者は誰でも壁にぶつかると…。その壁をどうするかを悩み、苦しみ、痛みを感じ… 乗り越えていくんだ」

一夏「壁…」

？「今のお前には… 大きな壁が立ちただかっている。その壁を乗り越えるのか、壊して進むのか… それはお前自身が選ぶ事なんだ」

一夏「選ぶ事… 俺が…」

？「一夏、前を向け。過去を全て忘れてとは言わない。だが、お前が見続けるのは過去ではない、未来だ。辛い過去は必ずお前を強くする。もしそれでも壁を乗り越えられないのなら、手を伸ばせ」

一夏「手を、伸ばす…？」

？「お前にも大切な… 掛け替えのない仲間がいるのだから？ならば、手を伸ばせ…。必ずお前の大切な仲間がお前の手を握り、共に歩んでくれる。特に家族はな…」

一夏「あ…」

俺は千冬姉の事を思い出した…。

そうだ、千冬姉は俺の事を想って…。

？「それに気づいたお前は…… また一歩、壁を越えるのに近づいた……。強くなるとはそういうものだ」

一夏「師匠……！俺、わかった気がします！」

？「フツ、まだまだ青いお前が偉そうな事を言う」

一夏「ならその青さを……。俺は絶対に無くしてみせます！」

？「やつと笑ったな」

一夏「え……」

？「今のお前ならば、大丈夫かもしれないな」

一夏「それって、どういう……」

すると、俺達の近くにオニキスの機体が現れた……。

第33話 越えるべき壁

―篠ノ之 箒だ。

私達は偵察をしている最中にオニキスのガラムとカルセドニーという男の乗るアマ

テラスと遭遇した。

鈴「もう、オニキスの機体と出くわすなんて最悪ね！」

簪「それにあの機体は……！」

ギルガ「あれ？君達はエクスクロスのIS操縦者達じゃないか。どうやら、偵察中だった様だね。じゃあ、君達を捕えるところでしょうか」

簪「な、何だと?!？」

ギルガ「君達はよりどりみどりだからね。攻略しがいがあるというものだ」

セシリア「何なんですの、あの方は！」

楯無「本当に気味が悪いわね……！」

ラウラ「エクスクロスの皆には連絡を入れた……もうじき来てくれるだろう」

シャルロット「それなら、みんなが来るまで僕達も戦おうよ！」

簪「そうだな。では、行くぞ！」

私達は戦闘を開始した……。

一夏「簪、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪、楯無さん……」

？「(あれが一夏の仲間か……)」

〈戦闘会話 箒VS初戦闘〉

箒「一夏は十分に苦しんでいる…。お前にも安らぎが必要だ。だから、お前の代わりに私達が戦う！」

〈戦闘会話 セシリアVS初戦闘〉

セシリア「一夏さんにはいつも助けてもらいました…。今度はわたくしが一夏さんを助ける番ですわ！」

〈戦闘会話 鈴VS初戦闘〉

鈴「(バカ一夏。辛いんなら辛いであたし達を頼りなさいよ…。あたしでもあんたを支える事は出来るんだから…。！)」

〈戦闘会話 シヤルロットVS初戦闘〉

シヤルロット「(僕、一夏には憧れてたんだ…。これで一夏の手伝いができるなら、僕は戦う！)」

〈戦闘会話 ラウラVS初戦闘〉

ラウラ「二夏の代わりならば私が相手になる！私は一夏の夫なのだからな！」

〈戦闘会話 簪VS初戦闘〉

簪「一夏……見ていて、私も頑張るから……！」

〈戦闘会話 楯無VS初戦闘〉

楯無「一夏君は休んでいて……たまにはお姉さんが戦うから、あなたのために……！」

オニキスとの戦闘を続ける私達……。

すると、反対方向からBD連合のロボットと、二オー、黒騎士が現れた。

ミフネ「ほう、この付近を捜索をしていたら、戦さ場に出くわすとはな！」

箒「あいつが一夏達の言っていた、舞人と敵対している犯罪者か……！」

鈴「それに、ファントムタスクの黒騎士もいるわね……！」

マドカ「お前達に用はない。織斑 一夏は何処だ？」

ラウラ「一夏はいない」

マドカ「…逃げたか…」

シャルロット「い、一夏は逃げてないよ！」

楯無「何を言っても無駄よ、シャルロットちゃん。あなた達なんて私達だけで十分よ」

ミフネ「女子の癖に生意気な！」

マドカ「いいだろう。お前達を餌にすれば、織斑 一夏をあぶり出すこともできる」

セシリア「舐めないでください！」

簪「一夏が居なくとも…私は戦える！」

一夏「みんな…。(やつぱり、俺が居ない方がいいのか…?)」

「…」

ギルガ「君達はドアクダーの手の者達だね」

マドカ「お前達がオニキスカ…」

ギルガ「ん？君も可愛いね…。それよりも僕達の邪魔をするのか？」

ミフネ「我が輩達の目的はエクスクロスだ、お主らの邪魔はせん」

ギルガ「それならいいけどね」

鈴「みんなはまだ来ないの!?!」

簪「まだみたい…」

箒「こうなったら、私達だけでやるしかない！」

零「勇ましいのはいいけど、無茶しすぎだぜ！」

そこへ、シャイニング・ゼフィルスが現れた……。

―新垣 零だ。

オニキスの気配を感じ、俺はゼフィルスに乗って、箒達の下に駆け付けた。

零「遅れてすまない、みんな！」

箒「零さん！」

楯無「どうして、あなただけ……？」

零「オニキスの気配を感じて急いで来たんだ。みんなもうじきくる」

セシリア「ありがとうございます、零さん！」

ギルガ「ようやく来たね、新垣 零。アマリちゃんとメルちゃんは何処だい？」

零「そう簡単に教えるわけないだろ！ギルガ・カルセドニー。ペリドットはどうしたんだ？」

ギルガ「気になるのかい？彼女の事が」

零「茶化すんじゃないよ……。お前との決着もつける！」

ギルガ「いいよ。来い、新垣 零！」

一夏「零、俺は…。」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「一夏… 何処かで見ているんだろ。箒達はお前に負けないように戦っているぞ。お前はもうどうしたいんだよ、一夏！」

戦闘が続く中、黒騎士が動き、箒を攻撃した。

箒「ぐっ！」

シャルロット「箒！」

マドカ「出て来い、織斑 一夏！」

一夏「…！」

マドカ「出て来なければ、お前の大切な女達を殺す」

零「そんな事させるかよ！」

俺は黒騎士に斬りかかろうとしたが、アマテラスに止められる。

ギルガ「君の相手は僕だ！」

零「くそつ、邪魔だ！」

マドカ「まずは篠ノ之 箒……。お前からだ」

箒「な、なめるな……。！うわあつ！」

簪「箒……。！」

セシリア「皆さん、箒さんの援護を！」

ラウラ「ああ！」

マドカ「邪魔をするな！」

楯無「キヤアアアツ!!？」

零「みんな！」

ギルガ「よそ見をされていていいのかい!!？」

零「ぐつ……。!!？」

このままじゃ、箒達が……。！

一夏「みんな……。！」

楯無「まだよ、まだ戦えるわ！」

一夏「楯無さん……。！」

簪「負けない…絶対！」

一夏「簪…」

ラウラ「諦める…ものか…！」

一夏「ラウラ…」

シャルロット「こんな時、一夏は絶対に挫けなかった！」

一夏「シャル…」

鈴「馬鹿で無鉄砲だけど…あいつに何度も助けられたわ！」

一夏「鈴…」

セシリア「あの方のおかげで私は変わりましたわ！」

一夏「セシリア…」

箒「私達はみんな…一夏…織斑 一夏によって変わったんだ！絶対に負けるもの

か!!？」

一夏「箒…俺は…」

?「一夏」

一夏「師匠、俺…」

?「行け、俺の二人目の最高の弟子！」

一夏「はい！（俺はもう迷わない…たとえ迷ったとしても箒達やみんなと…未来

に進む！だから、白式：：）俺に力を貸してくれええつ！！？」

突然、白式を纏った一夏が現れた。

箒「一夏！」

でも、何だ：：？左腕に何かが装備されて、スラスターが増えてる：：！！？

ラウラ「あれは：：雪羅か！」

シャルロット「セカンドシフトに戻ったんだね！」

一夏「みんな、ありがとう。みんなのおかげで目が覚めた！俺は戦う！例え、どんな険しい道でも：：エクスクロスのみんなと：：戦い抜く！」

セシリア「それでこそ一夏さんですわ！」

マドカ「ようやく出てきたか、織斑 一夏！此処で貴様を倒す！」

一夏「行くぞ！」

白式は黒騎士に攻撃を仕掛けた：：。

一夏「俺はこの力で戦い抜く！」

雪平二型で何度も斬り裂き、蹴り飛ばす。

一夏「これで終わりだあああつ！！？」

そして、最後にエネルギーを込めた左手を叩き込み、黒騎士を地面に直撃させた：：。

マドカ「グアアアアッ！」

その攻撃にマドカは大ダメージを受ける。

マドカ「な、何なんだ… この力は…！」

零「なんだ、あの威力…！」

鈴「あれ!? 雪羅って、シールドエネルギーを馬鹿みたいに取られるんじゃないの!?」

一夏「なんか、わからないけど、全然減ってないんだ」

簪「もしかして、一夏の想いが… 白式を強くした…？」

ラウラ「そ、そんな事があるなんて…」

箒「では、私も…」

紅椿は身体を金色に輝かせると、セシリア達のISにエネルギーを送った。

楯無「紅椿のワンオフアビリティね！」

セシリア「おかげでシールドエネルギーが回復しましたわ！」

零「!どうやら、みんなも来たようだぜ！」

メガファウナ、シグナス、プトレマイオス、N-1ノーチラス号、ナデシコC、ハンマーヘッド、真ゲッタードラゴンが現れ、みんなが出撃した。

メル「零さん! 先に行かないでください！」

零「悪い悪い! 居ても立っても居られなかったからよ！」

サリア「箒達も無事ね！」

箒「ああ、大丈夫だ！」

青葉「あ、あれ……?!?一夏もいる！」

ベルリ「もう戦えるの?!?」

一夏「ああ！俺はもう大丈夫だ！師匠に鍛えてもらったからな！」

ゴーカイグリーン「師匠……？」

千冬「では、私も戦うとしよう」

ハンマーヘッドから現れたのは……ISを纏った千冬さん?!?」

一夏「ち、千冬姉?!?」

ラウラ「教官、そのISは……！」

千冬「私が現役の頃に使っていたIS……暮桜だ」

倉光「あれが織斑先生のIS……」

竜馬「最強のブリュンヒルデの力を見せてもらおうぜ！」

千冬「いいだろう。その前に零、お前……オニキスが出たとか言って実は一夏を探し

ていたな？」

一夏「え?!?」

零「うっ……！な、何のことですか……？」

千冬「あくまでもシラを切るといふか……。零、後で私の部屋に來い」

零「え、ええっ!??そ、それは勘弁してください!」

千冬「怖がるな、二人でゆっくりと話をしようじゃないか」

零「(な、何でこうなるんだよ……!)」

ミフネ「マイトガイン、此処で倒してやるぞ!」

舞人「正義は絶対に倒れない、それをおしえてやるぞ! ショーグン・ミフネ!」

ギルガ「またも君は女性と楽しそうな会話をして……。!何なんだよ、君は!!?」

零「今の話で何処が楽しそうに見えたんだよ!絶望しか見えないっての!」

千冬「零……?」

零「ヒツ……。!?な、何でもありません!」

マドカ「織斑 一夏……貴様は……。!」

千冬「私の弟に手を出した報いを受けてもらう!」

マドカ「な、何故そんな奴を……。姉さん!」

一夏「M!此処でお前を止める!」

マドカ「黙れ!今度こそお前を殺す!」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「俺は戦う…。みんなのために！見ていてください、師匠…。俺の戦いを！」

〈戦闘会話 千冬VS初戦闘〉

千冬「懐かしいな…。この感じは…。では、行くでしょう！ブリュンヒルデの名は伊達ではないぞ！」

〈戦闘会話 舞人VSミフネ〉

ミフネ「此処でマイトガインを倒せば我が輩がBD連合の新たな頭となる！」

マイトガイン「私達はお前の出世に手を貸す気はない！」

舞人「ああ、そうだ！お前の野望なんて俺達が何度でも防ぐ！」

マイトガインの攻撃で二オーはダメージを負う。

ミフネ「命あつての物種だ！男は黙ってえ…。撤退！」

そう言つて、二オーは撤退した…。

〈戦闘会話 一夏VSマドカ〉

マドカ「織斑 一夏！どうしてお前ばかりが強くなつていくんだ！」

一夏「俺は強くなんかない！まだまだの男だ！」

マドカ「馬鹿にしているのか！」

一夏「そうじゃない！強くないから…成長して強くなるんだ！仲間と一緒に！」

マドカ「ならば、その仲間とやらも全て殺す！」

一夏「そんな事させるかよ！俺がみんなを守るんだあつ!!？」

〈戦闘会話 千冬VSマドカ〉

千冬「弟や生徒達を傷つけた事を後悔させてやる」

マドカ「姉さん… どうして、どうして何だ…！」

千冬「此処でお前を倒し、ファントムタスクについて聞き出す…！」

〈戦闘会話 箒VSマドカ〉

箒「よくも先程はやってくれたな！」

マドカ「死に損ないが… 今度こそ殺してやる！」

箒「一夏の前で死ぬわけにはいかない！だから私がお前を断つ！」

白式と暮桜の連携に黒騎士は大ダメージを受けた…。

マドカ「ば、馬鹿な…！」

一夏「もうやめろ！お前とはもう戦いたくないんだ！」

マドカ「黙れ…！お前に命令されたくない！」

黒騎士は一夏を睨みつけた後、撤退した…。

千冬「あいつはまた来るだろうな」

一夏「俺達は… あいつを倒すしかないのか…」

千冬「迷っているなら、戦うな」

一夏「舐めんよ、千冬姉！俺はもう千冬姉に守ってもらうだけの存在じゃないんだよー！」

千冬「ふん、大口を叩く前に私を倒せる程にまで強くなるんだな」

一夏「いや、千冬姉より強くなるのは…」

千冬「無理だろうな。（強くなったな… 一夏…）」

ギルガ「このままではまた負ける…！」

ルルーシュ「お前がどれ程の知恵を振り絞ろうがお前では俺達には勝てない」

ギルガ「黙れ、魔王！…こうなれば…！」

アマテラスが何かの武器を取り出した…！？

ギルガ「まさか、これを使う羽目になるとはね…！」

メル「そ、それは…まさか…！？」

ギルガ「そう、ブラックホールキャノンだよ。メルちゃん」

ブラックホール…キャノン…！？

メル「なっ！？その武器の危険性がわかっていないはずないでしょ！？」

ギルガ「ああ、わかっているよ」

零「何なんだ、そのブラックホールキャノンって…！？」

メル「ブラックホールキャノン…その名の通り、一つ銃撃を放てば、ブラックホールを作り出してしまふほどの威力があるキャノン砲です！この世界を滅ぼしかねない」と封印されていたはずなのですが…！」

ギルガ「僕が掘り起こしたんだよ」

アマリ「あなたはアル・ワースを滅ぼす気ですか！？」

ギルガ「僕の邪魔をした罰だ！この世界と共に消えろといひ！」

シモン「なんてやろうだ…！」

ユイ「この世界にはオニキスの仲間もいるのに…！」

ギルガ「何とでも言うといいさ！」

千冬「狂っている…！」

ギルガ「ブラックホールキャノン… 発射アアアツ!!？」

メル「ダメエエツ!!？」

ブラックホールキャノンが発射され、そのエネルギーにより、大きなブラックホールが発生した。

ブラックホールは周りの木などを吸い込み始めた。

メル「あ… あああ…！」

ワタル「そ、そんな…！」

アキト「このままではアル・ワースが減ぶ…！」

リョーコ「でも、どうすんだよ!!？」

零「…俺が止める!!？」

バスタードモードを発動させ、クロスガン・バスターモードの最大出力をブラックホールに向けて発射した。

しかし、ビームが次々とブラックホールに吸い込まれていく…。

ギルガ「無駄だ！新垣 零！」

零「まだだ……ゼフィールス、俺に力を……！」

俺はもつとバスタードモードの力を引き出して、ブラスターモードの出力を上げる。

零「……ぐっ！」

……な、何だ……!? 突然、身体に……痛みが……！

まさか……バスタードモードの使用限界……!??

零「くっ……ぬっ……！あああああ……！」

アマリ「零君！もうやめて！」

ゼロ「シエア！」

すると、ゼロが俺の隣に立ち、ゼロツインシュートを放った……。

零「ぜ、ゼロ……！」

ゼロ「零！お前は下がれ！」

零「だけど……この、ままじゃ……！」

ゼロ「ここは俺に任せろおおっ!!??」

ゼロの言葉に甘え、俺はクロスガンを撃つのを辞め、ゼフィールスを後退させた。

ゼロツインシュートの威力を上げる。

しかし、ゼロツインシュートでもブラックホールを消す事が出来ず、ゼロもゼロツインシュートを止めてしまう。

ギルガ「フハハハ！ウルトラマンの力でもこのブラックホールを消す事など出来ないのだよ！」

ゼロ「クソツ！此処までなのかよ……！」

痛さなんて関係ない……こうなったら、もう一度……！

？「最後まで諦めるな！」

地上を見ると、お爺さんが立っていた。

レナ「あそこに人が！」

ゼロ「あ、あいつは……！！？」

一夏「師匠、危険です！逃げてください！」

し、師匠だと……！！？」

？「修行で学んだ事を思い出せ！」

すると、お爺さんは大きく叫んだ。

？「レオオオオツ！！？」

そして、お爺さんはウルトラマンに変身した。

九郎「う、ウルトラマン！！？」

一夏「師匠が……ウルトラマンだったなんて……！！？」

青葉「あれは……レオ！ウルトラマンレオだ！」

ゼロ「レオ！」

レオ「久しぶりだな、ゼロ。見ない間に随分と立派になったな」

ゼロ「どうして、アル・ワースに……？」

レオ「話は後だ！まずはあのブラックホールを消すぞ！」

ゼロ「だが、どうやって……」

レオ「ダブルフラッシュだ…… やれるな？」

ゼロ「…… おう！腕が鳴るぜ！」

頷きあつたゼロとレオは合体技を放つた。

二人の合体光線の威力でブラックホールは消滅した……。

アル「ブラックホールが…… 消えた…… ！？？」

ビーチャ「あの光線…… 凄い威力だぜ！」

青葉「凄え…… 凄すぎるぜ！流石はウルトラマンレオだ！」

ゼロ「おい、青葉！俺も居るつての！」

ギルガ「馬鹿な…… そんな事が…… ！いや、まだだ！もう一度ブラックホールキャノ

ンで……！」

零「ブレードビット！」

ゼフィルスのブレードビットでブラックホールキャノンを破壊した……。

ギルガ「し、しまった……！ブラックホールキャノンが……！！？」

零「これでそのトンデモキャノンは使えねえぞ！」

ギルガ「く、クソクソクソクソツッ！こうなったら、力付くで……！」

千冬「来るようだな」

レオ「行くぞ、ゼロ！一夏！」

ゼロ「おう！」

一夏「わかりました、師匠！」

零「俺達に敵うと思うなよ！ギルガ・カルセドニー！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　レオVS初戦闘〉

レオ「(弟子というのは強くなつていくものだな……俺も負けてはいられないな！)」

〈戦闘会話　零VSギルガ〉

ギルガ「メルちゃんにアマリちゃん、それに他の女性まで……君はどれだけの女をた

らし込めば気がすむんだ……？」

零「相変わらず意味のわからない事を言いやがって……たらしこんでなんかねえよ

！」

ギルガ「気がつかないのも罪と言うものだ！君はすべての男の敵だ！」

零「エクスクロスの敵のお前が何言ってるやがる！（こいつに勝つ為にはバスタードモードを使うしかない……だが、あまり時間はかけられないな……！）」

〈戦闘会話　メルVSギルガ〉

メル「禁断の力を使ってまであなたは私達を連れて行きたいのですか？！」

ギルガ「それが僕の覚悟だからね」

メル「そんなものは覚悟でもなんでもないです！」

ギルガ「言ってくれるねえ……メルちゃん！僕に怯えていた君が随分強くなったものだね！」

メル「もう私は過去の私ではありません！あなたに屈しないと決めました！だから、私はもう逃げません！」

〈戦闘会話　アマリVSギルガ〉

アマリ「故郷のアル・ワースを滅ぼそうとするなんて……恥を知ってください！」

ギルガ「このアル・ワースがどうなっても僕には関係ない！」

ホープス「彼には迷いはないようですね」

アマリ「そんな事は関係ありません！魔徒教団ではなく、エクスクロスとして……私
があなたを討ちます！」

〈戦闘会話 一夏VSギルガ〉

ギルガ「織斑 一夏！君を倒し、専用機持ち達を連れていく！」

一夏「誰一人として連れていかすかよ！」

ギルガ「君も僕の敵だ……！ここで潰す！」

〈戦闘会話 千冬VSギルガ〉

千冬「生徒達が世話になったそうだな」

ギルガ「随分勇ましいね、織斑 千冬……でも僕、年増には興味はないんだよ」

千冬「ほう…… まだまだお子様のお前が大きな事を言う」

ギルガ「僕を馬鹿にしているのか……？」

千冬「ほらな、少しの挑発で怒るなど…… お子様の証拠だ！」

〈戦闘会話 箒VSギルガ〉

ギルガ「君の剣の力を見込んで頼みがある……。僕と一緒に来ないかい？ 箒ちゃん」
箒「気安くちゃん付けで呼ぶな！ 私はお前などと一緒にはいかない！ 私は一夏と共に歩むと決めたんだ！」

〈戦闘会話 セシリアVSギルガ〉

ギルガ「僕の下で一緒に戦う気はないかい？ セシリアちゃん」

セシリア「あなたのような下劣は方と共に戦うなど、ワタクシのプライドが許しませんわ！ ですから、私の視界から消えなさい！」

ギルガ「そう言うお嬢様口調がさらに可愛いよ、セシリアちゃん！」

セシリア「本当に下劣ですわね！ 覚悟してくださいまし！」

〈戦闘会話 鈴VSギルガ〉

ギルガ「君の活発さもいいね、鈴ちゃん！」

鈴「うっさい！ ちゃん付けで呼ばないで気持ち悪い！」

ギルガ「君みたいな活発な子が屈する姿も見たいね」

鈴「お生憎様……。あたしはそう簡単には負けないつもりだから、早く消えなさい！」

〈戦闘会話 シヤルロットVSギルガ〉

ギルガ「さて、行くよ。シヤルちゃん」

シヤルロット「僕の事をシヤルって呼んでいいのは一夏だけだよ！あなたみたいなのがシヤルって呼ばないで！」

ギルガ「ならば、僕の事を忘れられないようにしてあげるよ！」

シヤルロット「絶対に忘れてやる！」

〈戦闘会話 ラウラVSギルガ〉

ギルガ「ラウラちゃん、軍人の君ならば状況がわかるよね？」

ラウラ「ああ。これからお前が私達に倒されると言う事がな」

ギルガ「おっと、強気だね。君を手に入れたくなつたよ」

ラウラ「私の嫁は一夏だけだ！」

ギルガ「……ん？どちらかと言うと君が嫁じゃないの？」

ラウラ「妻と夫についてわからない貴様のもとなど私が行くと思うのか！」

〈戦闘会話 簪VSギルガ〉

ギルガ「内気の君もいいね、簪ちゃん！」

簪「私は… あなたの事が嫌い…！」

ギルガ「随分嫌われたものだね…。ならば、僕が君のヒーローになるよ」

簪「私の中のヒーローは一夏なの…。あなたなんかヒーローにはなれない…！」

〈戦闘会話 楯無VSギルガ〉

ギルガ「さてと…。君を攻略してみせるよ、楯無ちゃん…。それとも刀奈ちゃんと呼んだ方がいいかな？」

楯無「…！どうして、本当の私の名を…！？」

ギルガ「僕には何でもお見通しだよ」

楯無「ふーん、学園最強の私を挑発するなんて、いい度胸ね！私はあなたのような下品な人はお断りよ！」

〈戦闘会話 ゼロVSギルガ〉

ギルガ「ウルトラマンゼロ！よくも…。許さないぞ！」

ゼロ「俺もお前の事は許さねえ！覚悟しやがれ、俺のビックバンはもう止められないぜ！」

〈戦闘会話　レオVSギルガ〉

レオ「故郷を自らの手で滅ぼそうとするととはな」

ギルガ「君の邪魔さえなければ、全てが上手くいっていたのに……！」

レオ「無駄だ。どれ程の計画を進めようと光の戦士達が必ずそれを止める……。絶対にな！」

レオとゼロのレオゼロダブルキックの後、俺のバスタードモードの攻撃を受けたアマテラスは大ダメージを受けた。

ギルガ「ぐううううっ……！このような所で……！許さないぞ、新垣　零！ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア！ウルトラマンゼロ！織斑　一夏！」

そう言い残し、アマテラスは撤退した……。

カレン「え……ルルーシュって今回何かしたっけ？」

ルルーシュ「いや、していないが……」

ガイ「どうやら、あの野郎の憎む相手はこれからも増えそうだな」

全ての敵を倒した俺達……。

ヒカル「今ので最後みたいだね！」

イズミ「疲れたね」

ゼロ「助かったぜ、レオ！あんたが来てくれなかったらどうなっていたか……」

レオ「何、ウルトラマンとして当然の事をしたままで」

一夏「師匠……」

千冬「一夏……ウルトラマンレオが師匠とはどう言う事だ？」

一夏「それは後でゆつくりと話すよ！千冬姉にも伝えたい事があるし！」

あれ……？これって、千冬さんの部屋に行かなくてもいいんじゃない？

千冬「一夏達との話が終わった後はお前の番だ、零」

零「……アイアイサー……」

絶対に死ぬなこれ……

俺達はそれぞれの艦へと戻り、ハンマーヘッドの格納庫に集まった……

箒「一夏！」

一夏「みんな……心配をかけて悪かったな！」

シャルロット「本当だよ、全く！」

ラウラ「嫁を心配するのも夫の務めだ」

箒「嫁じゃないし……」

楯無「でも、流石に心配させすぎね！」

セシリア「ええ！これは少しお仕置きをしなければなりませんわね！」

鈴「それいいわね！」

一夏「うっ……！そ、それは……！」

千冬「一夏」

一夏「千冬姉……あのＩＳはどうしたんだ？」

千冬「おそらく私達の世界から転移して来たのだろう……。それよりも一夏、伝えたい事とは何だ？」

一夏「千冬姉……あの時、姉貴ツラしてるとか言つて、ごめんなさい！」

千冬「！」

一夏「俺……何もわかっていなかった！千冬姉が俺の事を想っていた事に！だから……！」

千冬「ふ、ふん……！私がお前の事を想っていた？バカも休み休みに言え！」

朗利「(ツンデレかよ……)」

金本「(千冬先生も可愛い所あるんだ……)」

摩耶「(なんだかんだ言つて、織斑先生も織斑君の事が心配なんですわね)」

千冬「何か言つたか、朗利、金本、山田君？」

朗利&金本&摩耶「二な、何でもありません！」

ゲン「良き仲間達だな」

一夏「レオ師匠！」

ゲン「今の俺の姿はオオトリ・ゲンだ」

簪「あ、あの……！」

ゲン「ん？何かな？」

簪「サ……サインください！」

ガイ「俺もくれ！」

青葉「お、俺も！」

簪とガイさん、青葉の言葉にゲンさんは笑顔で頷き、サインを書いた。

ゼロ「それにしても一夏、レオに稽古をつけてもらっていたなんて、よく生きていたな」

一夏「正直、死ぬかと思ったけどな……。てか、師匠の弟子がゼロだったなんて……」

ゲン「一夏……これからも仲間を信じ、壁を超えろよ？」

一夏「はい、師匠！」

千冬「オオトリさん……弟がお世話になりました」

ゲン「君が一夏の姉か……。君は良き弟を持ったな」

千冬「：：！はい、まだまだ未熟者ですが：：私の掛け替えのない弟です！」

ゲン「君ならば大丈夫だな」

ゼロ「所で師匠：：何でアル・ワースに？」

ゲン「異常なエネルギー反応をウルトラマンキングが感知してな：：。その調査に来たというわけだ」

ゼロ「キングの爺さんが感知するのは相当の事なのか？」

ゲン「それはまだわからん。だが、これならお前達に任せても大丈夫のようだな」

ゼロ「おう！頼りになる奴らだからな！」

ゲン「では、俺は帰るとしよう」

一夏「え!!? もうですか!!?」

ゲン「一夏、日々の修練を怠るなよ？」

一夏「はい、師匠！ありがとうございます！」

ゼロ「親父達にもよろしく言っといってくれ！」

千冬「お世話になりました」

ゲン「一夏を大切にしてくれ」

千冬「はい！」

ゲン「では、また会おう。エクスクロスの諸君！：：レオオオオツ!!?」

ゲンさんはレオに変身して、飛び去って行ってしまった……。

零「行つちまったな」

一夏「ああ、零も心配かけて悪かったな」

零「おかげで俺に待ってるのは地獄だけだな」

一夏「わ、悪い……」

ロザリー「い、一夏！」

一夏「ん？ロザリー！クリス！」

クリス「一夏君が……無事で良かったよ」

一夏「二人も俺の事を心配してくれてありがとうな！」

はい、出たイケメンスマイル。

ロザリー「あ、当たり前だろ！何か困った事があつたら、私達に言えよ！」

クリス「力になるからね」

一夏「おう、その時は頼らせてもらうぜ！」

シャルロット「いくちくか？」

一夏「ん……？つて、え……！！？」

あーあ、専用機持ち達がISを纏ってるし。

一夏「な……何でみんなISを纏ってるんだよ！！？」

楯無「やつぱり、お仕置が必要みたいね」

鈴「フフフ：．．よし殺そう」

ラウラ「浮気など：．．それが嫁のする事か！」

簪「一夏のバカ：．．！」

セシリア「逃げないでくださいね？外れますから：．．」

箒「一夏、覚悟オオオオオツ！！？」

一夏「う、うわあああああつ！！？何でみんな怒ってるんだよー！！？」

ロザリー「一夏を守るぞ、クリス！」

クリス「う、うん：．．！」

専用機持ち七人が一夏を追いかけ、ロザリーとクリスがその阻止に向かっているつ

て何だよ、これ

アスラン「何をしているんだ、全く：．．」

キラ「一夏とアスランって似た者同士だね」

シン「あ、それ言えてます」

アスラン「えええつ！！？何処がだ！！？」

ルナマリア「自覚がないところがそっくりね：．．」

零「：．．よし、このまま部屋に：．．」

千冬「何処へ行く、零？」

零「ヒツ：：
!!？」

千冬「さうて、楽しい話をしようじゃないか」

零「あ、ちよつ！引つ張らないで下さい！首が締まる！あ、アマリ、メル、助けてくれー！」

メル「：：えーつと、零さん、ファイトです！」

アマリ「お、応援しているわ、零君！」

零「裏切り者オオオオオツ!!？」

そのまま俺は千冬さんの部屋まで引つ張られた：：。

ーウルトラマンレオだ。

レオ「ゼロも成長を続けているという事か：：」

信じているぞ：：。ウルトラマンキングが危険視しているエンブリヲという男をお前達が倒してくれるという事を：：。

俺はワームホールを作り、光の国へ戻る：：。

―新垣 零だ。

俺は千冬さんの部屋まで引つ張られ、椅子に座らされた。

ぜ、絶対に死ぬ……！

千冬「さてと……零」

零「は、はい！」

千冬「お前には感謝している」

……
へっ？

零「え……」

千冬「弟を心配して、嘘までついて探してくれたのだからな」

零「……俺はただ、一夏にも恩があるだけで……」

千冬「お前を私の弟にしたいぐらいだ」

零「……怒りますよ、千冬さん。あなたの弟は一夏だけです」

千冬「そうだな。すまない」

顔に笑みを浮かべながら、千冬さんは冷蔵庫からオレンジジュースの缶を取り出し、

俺に投げ渡した。

それを掴み、おれは頭を下げる。

そして、千冬さんも缶ビールを冷蔵庫から取り出した。

……ん、待て……。今、とんでもない量の缶ビールが入ってなかったか……？

千冬「では、零……。朝まで私の愚痴に付き合ってくれるな？」

零「え、は……。愚痴？……。つて、朝まで……いや、それは……」

つて、もうビール飲んでるし……。

千冬「そうかそうか、聞いてくれるか……。楽しくなりそうだ」

零「千冬さん、酔ってませんか……？」

千冬「まだ酔わん」

零「酔う気満々じゃないですか！」

千冬「実は私はな……」

零「聞いてないし……。はあ……。勘弁してくれ……」

この後、本当に朝まで愚痴を聞かされ、アマリやメルの機嫌が何故か悪くなるし、一夏には茶化されるし、最悪だ……。

第34話 偉大な勇者

―新垣 零だ。

俺達はサラ姫からドラゴンについて聞くために集まった。

アンジュ「… 一夏も元に戻ったし、聞かせてもらおうじゃないの、サラ子。あなたとワタルの事、それにドラゴンの事… 全てを」

竜馬「俺達をドラグニウムの戦士っていう事もな」

サラマンディーネ「約束ですからね。わたくしとしても望む所です」

サラマンディーネ「戦部の救世主ワタル様… ドラグニウムの戦士の竜馬様達… そして、伝説の超人様選ばれしウルトラマンゼロ様… それに皆さんもお聞きください」

ワタル「僕の事はサラマンディーネさんはよく古の契約… って言ってるけど、やっぱり昔の事に関係あるの？」

サラマンディーネ「はい…。それを説明するために、まずはわたくし達の世界の過去についてお話しします」

九郎「わたくし達の世界って……あんたはアル・ワースの出身じゃないのか？」

サラマンディーネ「はい、そうです。わたくし達の世界……便宜上、アウラの世界と呼ぶことにしますが……。それは今から500年ほど前に一度、滅びの時を迎えました」

しんのすけ「ええっ!?？」

アイム「何処の世界にもこういう話はあるのですね……」

サラマンディーネ「アイム殿の御言葉も、もつともな事です。アウラの世界も人類同士の争いによって滅んだのですから」

アンジュ「ドラゴン同士が戦ったって事？」

サラマンディーネ「いえ……。その頃はアウラの民も皆、あなた方と同じような姿をしていました。その戦いは国家間の領土争いであつたと聞きますが、それまでの戦争と致命的に異なっていたのはドラグニウムが使用された事です。最終的に人類は、ドラグニウムの力を制御しきれず、世界そのものを滅ぼすに至りました」

隼人「そのドラグニウムとは……？」

サラマンディーネ「この宇宙に存在する聖獣の力……。つまり、龍神様の使う力とほぼ同種のもんです」

ワタル「龍神丸と同じ力!?？」

……ほぼ……?」

サラマンディーネ「人知を超えた力を持つ絶対的な存在……聖獣は、あらゆる世界……あらゆる宇宙に生息していると言われています。アウラの世界では、その中の一つである龍の力が宇宙から降り注いでいました。ですが、それだけでドラグニウムは誕生しませんでした……」

號「では、どうやってドラグニウムが誕生したんだ？」

サラマンディーネ「アウラの世界に降り注いだ龍の力は大気となり、アウラの世界を覆いました……。それから数十年後……アウラの世界に邪悪なる暗黒破壊神が現れました」

甲児「邪悪なる暗黒破壊神……？」

サラマンディーネ「その名は……ダークザギ」

ゼロ「ダークザギだと!?？」

エイサツプ「そのザークザギというのは……？」

ゼロ「あるウルトラマンの世界で暗躍した最恐の暗黒の巨人だ……まさか、アウラの世界にまで行っていたとは……」

サラマンディーネ「ダークザギの驚異的な力にアウラの世界の住人達は為すすべもありませんでした。しかし、ダークザギはある一人の巨人が撃退してくれました。その巨人の名はウルトラマンノアです」

ゼロ「やつぱり、ノアが関わっていたか……！」

ミラーナイト「ノア……？」

ケロロ「た、太古より全宇宙の平和を守り続ける伝説の巨人であります！」

サラマンディーネ「ノア様のおかげでダークザギは別世界に後退しましたが、ノア様の光の力とダークザギの闇の力……そして、龍の力は合わさり、その力が結晶化したものこそが、超エネルギーの源であるドラグニウムです」

ゼロ「だから、ウルティメイトイージスの事も知っていたのか……」

サラマンディーネ「ノア様がお認めになされたゼロ様を攻撃してしまい……誠に申し訳ありませんでした！」

ゼロ「いや、理由を話してくれたらいい」

サラマンディーネ「ありがとうございます。そして、神祖アウラはドラグニウムの導きによって仲間と共にこのアル・ワースへたどり着きました。廃墟した世界を捨て、新たな生活の場を求めて……。しかし、ドラグニウムの全てがこのアル・ワースへたどり着いた訳ではないのです」

弁慶「どういう事だ？」

サラマンディーネ「はぐれたドラグニウムはある二つの世界にたどり着きました。一つはゲッター線という名前に変わり……」

溪「え、つてことは……！」

凱「ゲッター線とドラグニウムは……同一の存在という事なのか!?？」

サラマンディーネ「ええ、そうです。そして、もう片方の世界でドラグニウムは二つの星を作りだしました……。龍脈という名に変わって」

ミツヒデ「もしや、その二つの星というのは……！」

ノブナガ「俺達の世界……東の星と西の星だということのか……」

ジャンヌ「じゃあ、龍脈の力もドラグニウムと同一の存在だということ!?？」

メル「アウラの世界、激闘の世界、戦の世界の三つの世界がそんな共通点があったとは……」

ルルーシユ「ドラグニウム……龍の力……。それは世界の隔たりを超える力すら持つのか」

シバラク「ふむ……。ワタルが、アル・ワースへ来たのもその力というわけだな……」

サラマンディーネ「そこで神祖アウラは、龍の力の源である神部七龍神に触れたと聞きます」

ワタル「神部七龍神……。僕達の旅を導く者……」

サラマンディーネ「アウラは、神部七龍神の教えにより、その力……。即ちドラグニウムをよりよく使う術を身につけたそうです。そして、アウラは自然を愛する神部七龍神

の言葉に感銘を受け、廃墟した世界を蘇らせるため……。ドラグニウムの力で自らも龍に……。巨大なドラゴンとなり、民にその力を分け与えたのです」

アンジュ「それがサラ子達の間人……。つまり、アウラの民なのね……」

サラマンディーネ「その通りです。男性は成人すると巨大なドラゴンとなり、暴走して世界を汚染したドラグニウムを体内に取り込み、それを浄化します。女達は子を産み、時には小型のドラゴンとなり、男達を助けるのです」

ヴィヴィアン「あたしも女ドラゴンなのか……」

サラマンディーネ「あなたは10年前にアル・ワースに我々が侵攻した際、親について来てはぐれたものと思われます」

エルシャ「それを司令が発見して、保護していたのね……」

サラマンディーネ「文明が滅んで約500年……。神部七龍神の助けを得たアウラの導きにより、世界は美しい自然を取り戻しました」

ワタル「わかった……。！サラマンディーネさんが僕を助けてくれるのは神部七龍神への恩返しなんだね！」

サラマンディーネ「救世主様のおっしゃる通りです。いつの日か、神部七龍神が危機に陥った時、アウラは必ず助けに来ると約束しました。それこそが、古の契約であり、わたくしは、そのためにこのアル・ワースに遣わされたのです」

一夏「ドラゴン事とワタルとの関係はわかりましたけど…。でも、サラマンディーネさん達はアル・ワースを攻撃していますよね？これは、どういう事なんですか？」

サラマンディーネ「… 500年前にアウラと共にアル・ワースに来た人間の中でこちらの世界に残った者達もいます。その中の一人は、こちらの世界でドラグニウムの新たな使い方を学び、自らの王国を造り上げました。その者の名は… エンブリヲといいます」

アンジユ「また、そいつなの…！」

ヒルダ「タスクの野郎が言っていた、ミスルギの支配者じゃねえかよ…！」

タスク「サラマンディーネさんの話は、本当の事だ」

ヒルダ「どうして、お前がそんな事を言えるんだよ？」

タスク「俺は… アウラと共にこの世界に来た人間の末裔… 古の民の最後の一人なんだ」

アンジユ「タスクが… サラ子と同じ世界の人間の子孫…」

サラマンディーネ「エンブリヲはドラグニウムの力を使い、世界の法則を制御する術を確立し、それによって社会システムを構築しました」

モモカ「法則の制御って… ！？？」

サラマンディーネ「多分、あなたの想像通りでしょう。ミスルギの人間達が使うマナ

と呼ばれる術です。マナを使う人間……。それはエンブリヲが理想の社会のために造り上げた自らに都合のいい人類なのです」

アンジュ「ミスルギの人間は……。エンブリヲが造り上げたもの……」

アムロ「理想の社会……。一体何のために、そんなものを求める？」

サラマンディーネ「おそらくは自らが滅ぼした世界のやり直しを考えたのでしょう」

ユイ「世界を滅ぼした……。って、先程のドラグニウムを使った戦争と関係があるのですか？」

サラマンディーネ「エンブリヲは別世界からアウラの世界に来た者で、彼とアウラは元々はドラグニウムを研究する科学者仲間でした。そして、エンブリヲは自身が開発したラグナメイルを戦争に投入し、その暴走によって世界を滅ぼしたのです」

零「そのラグナメイルとは何だ……。？」

サラマンディーネ「アンジュ達が使用するパラメイルの原型になった機体です。そして、アンジュ……。あなたの使用するビルキスは世界を滅ぼした六機のラグナメイルの内の一機なのです」

アンジュ「ビルキスが……。!?？」

ヒルダ「ちよつと待てよ。じゃあ、ビルキスは、エンブリヲって奴の持ち物のはずじゃねえのか？」

サリア「それに…… あれはヴィルキスよ。あなたはビルキスと言った」
 ん……？ そう言えば、タスクもヴィルキスの事をビルキスと呼んだ事があつたな。

タスク「それは古の民がエンブリヲの元からビルキスを奪つたからだよ。彼等は自由への願いを込めて、奪つたビルキスをヴィルキスに変え…… 正しきドラグニウムの使い手である神部七龍神の使者…… 戦部の救世主の白き鎧にならつてその色を白に塗り直したんだ」

トオル「じゃ、じゃあ……！」

ワタル「ヴィルキスが白いのは僕の鎧や龍神丸が白いからなんだね……」

サリア「(そんな事…… アレクトラは教えてくれなかつた……)」

タスク「そして、アレクトラは…… アルゼナル司令のジルは、エンブリヲを倒すためにかつてはヴィルキスに乗っていたんだ」

アンジュ「司令がヴィルキスに乗っていたなんて……」

ロザリー「おまけに、そのエンブリヲって奴と戦つてたのかよ!?？」

タスク「エンブリヲは、かつての同胞である古の民を自らの邪魔者であると攻撃し、マナを使えない変異種であるノーマを差別した……」

マーベラス「ノーマを差別する理由は？」

タスク「自らの理想社会の異物として嫌っているのだろう……。その証拠にエンブリ

ヲは、ノーマを差別するように人々を誘導している。だから、古の民とアルゼナルのノーマ達は手を組み、奴と戦ったんだ」

クリス「その戦いな……。どうなったの？」

タスク「古の民は俺を遺して全滅し、ジルも片腕を失った……。敗北したノーマ達はその後ドラゴンと戦う使命を背負わされたんだ」

サリア「（それが前のリベルタス……。アレクトラの悲しい記憶……。）」

サラマンディーネ「さらなる力を求めるあの男は、ドラグニウムの研究を進めるためにアウラの世界にも現れました。そして、研究の素材として、それ自体がドラグニウムとも言えるアウラわや捕え、アル・ワースへと連れ去ったのです。」

零「まさか、あんた達がこの世界に侵攻する理由はアウラを取り戻すためだったのか？」

サラマンディーネ「そうです、零殿」

万丈「ミスルギ皇国の支配者エンブリヲ……。どうやら想像以上に強大かつ恐ろしい男のようだな」

千冬「奴が異界人を自らの戦力とし、周辺に侵攻を開始したのも、その理想とする社会の実現のためか……」

サイ「なんて奴だ……」

ベルリ「サラマンディーネさん……。そいつの理想って何なんです？」

サラマンディーネ「残念ながら、そこまではわかりかねます」

タスク「わかっているのは、全ては奴の意思の下にあり、それに従わない者は自由も生命も奪われるって事だ」

ヒデオシ「人を何だと思つてやがんだよ、エンブリヲって野郎は……！」

アンジュ「タスク……。あなたはジルと共にエンブリヲと戦つていたのね……」

タスク「そうじゃない……。両親や仲間を失つた俺は自らの使命から逃げていた……。でも、アンジュ……。君と出会い、君がヴィルキスに選ばれた事を知り、俺は自らのすべき事に向き合えるようになったんだ。俺はヴィルキスの騎士じゃない……。アンジュの騎士として、君を守ると決めたんだ」

アンジュ「タスク……」

ロロ「これでキャピタル・アーミィやゾギリアなどがミスルギに従う理由もはつきりしましたね」

アイーダ「そのエンブリヲなる者の時空を超える力……。それこそが、ミスルギが彼等はさを元の世界へ返す術だったのですね」

サラマンディーネ「様々な世界を繋ぐには膨大なエネルギーを必要とします。ですが、アウラの力を手に入れたエンブリヲならそれも可能でしょう」

オルガ「それだけの力を持った奴が俺達を狙っているのか……」

アンドレイ「だが、奴が自由条約連合やアメリカを攻撃させる理由が不明のままだ」
デュオ「ノーマへの差別と同じで気に食わないってだけかも知れないぜ」

バナージ「いくら何でも、そんな理由ではないと思うけど……」

青葉「ゾギリアやキャピタル・アーミイとかは、エンブリヲつてのが悪党と知りながら、従つてるのかよ！」

カンナム「彼等にとつて、別の世界の事情など知った事じゃないんだと思う……」

サラマンディーネ「でしたら、あの男に従う者全てがわたくしの敵です」

三日月「つまり、俺達と同じってわけだね」

アンジュ「ええ、そうよ。サラ子」

サラマンディーネ「アンジュ……」

アンジュ「今までノーマを差別してきた私が言っている事じゃないけど……。それが誰かの意図の下であるならば、私はそいつと戦うわ。自分が生きるために」

サラマンディーネ「敵の敵は味方……。どうやら、わたくし達は手を取り合う事が出来るようですね」

アンジュ「まあね……」

サラマンディーネ「そんな事とは無関係にわたくし……。直情的にあなたの事が以前ほ

ど嫌いではなくてよ、アンジュ」

アンジュ「奇遇ね、サラ子。何だかんだ言つて、面倒見のいいあなたの事……私も嫌いじゃなくなってきたわ」

しんのすけ「アンジュお姉さん！サラサラお姉さん！握手して友達になるんだゾ！」
ワタル「しんちゃん言う通りだよ！」

サラマンディーネ「そうですね。せっかく、しんちゃんや救世主様もそうおつしやつてくれますし、そうさせていただきます」

アンジュ「しんのすけやワタルに言われちゃ、断れないものね」

グランディス「全く……。しんのすけやワタルに言い訳に使わなきゃならないとは似た者同士の面倒くさい二人だよ」

アンジュ「そう言えば、サラ子！あなた、あの歌はどこで覚えたのよ！」

サラマンディーネ「真なる星歌……。あれは聖獣の力……。言い換えれば宇宙そのものの力を制御する術です。元々は時空を制御するための理論をエンブリヲがメロディーに変換したものです」

アンジュ「でも、その使い方に失敗してあなた達の世界は滅んだんでしょ？」

幻龍斎「そのメロディーを神部七龍神が歌にする事で時空を制御する術を完成したウラ」

ヒミコ「父上、物知り！」

ワタル「あの歌の事を知っているの、親父様!?」

幻龍齋「ワシはドアクダーと戦うためにその力となる神部七龍神の伝説についても色々調べたウラ。先程のドラゴンの姫の話…異界から来た者との出会いについても伝説が残っているウラ」

サラマンディーネ「お猿殿…。そのお話、お聞かせください」

幻龍齋「ワシはサルではない！忍部一族の忍部 幻龍齋ウラ！」

シバラク「まあまあ、親父殿。こらえて、こらえて」

幻龍齋「話を続けるウラ…。神部七龍神は、自らの世界を破壊してしまい困っている者に歌を授けた…」

サラマンディーネ「それが真なる星歌…」

幻龍齋「そして、その歌を後の世に伝える者として歌部（うたいべ）の乙女達を選んだウラ。斑鳩、真理亜、譜麗弥…。選ばれた歌部の乙女達は星の歌を歌う…。その歌は邪悪を払う力となる。そして、その内の何人かは異界の者と共に別の世界へ旅立ったウラ…」

ナーガ「その歌部の乙女とは、まさか…」

カナメ「真なる歌姫を継ぐサラマンディーネ様のご先祖なのかも知れませんね」

アンジュ「斑鳩……。お母様の家の名……」

サラマンディーネ「これで全てがわかりました、アンジュ。わたくしとあなたが初めて戦った時に見えた、因果を超えた光景……。あれは、それぞれの血脈が受け継いできた遙か過去の戦いの記憶だったのですね」

アンジュ「今となっては、どうでもいい事だわ。過去なんて関係ない。あなたと私が一緒に戦う……。それで十分よ」

サラマンディーネ「あなたの言う通りですわね、アンジュ」

アンジュ「ありがとうね、親父様。いい話を聞かせてもらったわ」

幻龍斎「なんの、なんの！他にも神部七龍神には様々な伝説が残されておるウラ。その中には、色々な異界の者達との出会いや邪悪との戦いが語られているウラ」

シモン「サラマンディーネさんのご先祖以外にも別の世界からアル・ワースになってきた人達もいるのか……」

甲児「邪悪との戦いつてのはドアクダーとも関係するのかもな……」

幻龍斎「そこらについては調査中だ。また何かわかったら、みんなにも話すウラ」

ナディア「賢いサルなのね」

幻龍斎「ワシはサルではない！忍部一族の忍部 幻龍斎ウラ！」

シバラク「まあまあ、親父殿。こらえて、こらえて」

コントやってんのかこの二人は……。

ジュード「しかし、エンブリヲってのはとんでもない悪党なんだな」

ゼクス「あの男が率いるミスルギへの対処はいずれ考えなくてはならないとして、当面は対ドアクダー軍団を優先させるべきだな」

フロントタル「親父殿……。ドアクダー軍団の動きについて他にわかる事はありますか？」

幻龍斎「ドアクダー四天王がザン兄弟が倒れた今、残るは一人であるドン・ゴロが動くと思われるウラ」

シン「ドン・ゴロ……。そいつが四天王最後の一人か……」

幻龍斎「それと関係するかわからぬが、ここより南の方の一带で何やら不思議な現象が見られたウラ」

ガエリオ「それは？」

幻龍斎「ある日……。真昼なのに空がいきなり曇り、立ち込めた暗雲から巨大な人影が降り立ったと聞くウラ」

ジュリエッタ「もしや、新しい異界人では……？」

シヨウ「巨大な影というからには機体も一緒に来た可能性が高いな」

幻龍斎「その巨人は何処へと消え去ったらしく、それ以降の話は聞いてないウラ」

ジョーイ「でも、放っておくわけにはいきませんね」

ルルーシユ「うむ……。ここは部隊を幾つかのチームに分けて、各方面を偵察しよう」
カレン「ドアクダー軍団が、そいつ等を味方にする前に何とかしないとね」

ミツヒデ「ザン兄弟が当分の間、戦に復帰しないのなら、ここは一気に進めるであろう」

ゼロ「やろうぜ……。ドアクダーを倒して、絶対に元の世界へ帰るんだ！」

ゼロの言葉に皆は頷いた。

甲児「……（みんなと違い、俺はあしゆら男爵の儀式によってこのアル・ワースに跳ばされてきた……。これが偶然ではなく、あしゆらの意図だとしたら、奴はアル・ワースの存在を知っていた事になる……）」

アマリ「どうしたんです、甲児さん？考え事ですか？」

甲児「いや……。何でもない……。気にしないでくれ」

さやか「偵察部隊の編成……。甲児君と零君とアマリと私で決まったわよ」
アマリ「お邪魔かも知れませんが、よろしくお願いします」

さやか「もう……。！アマリったら……。！それはこっちの台詞よ！」

アマリ「ち、ちがっ……。！そんな事はないです！れ、零君から何か言つてよ！」

零「……」

アマリ「零君？」

：前回の戦闘の後、バスタードモードを使っても身体に痛みは走らなかった。じゃあ、やつぱり、あの時に力を使いすぎたのか？

それに何か嫌な予感がする。今後、何かとてつもない事が起こりそうだな。そんな気がする。

甲児「零、どうかしたのか？」

零「…絶対に守る…何が何でも」

アマリ「え…？」

零「…いや、何でもない！アマリ、甲児やさやか邪魔をしないようにしようぜ！」

さやか「れ、零君まで…！」

甲児「よし…早速、出発だ。ドアクダーを倒すためにも頑張らないとな…！」

零「ああ、そうだな！」

アマリ「…」

俺達は寝た後、偵察に出た…。

すると、俺たちの偵察ポイントでドアクダー軍団の反応があった。

アマリ「ドアクダー軍団、来ます！」

すると、ドアクターの魔神部隊が現れた。

甲児「偵察に出た先でドアクター軍団に出会うとはツイてるぜ！」

アマリ「ホープス！近くの部隊とエクスクロス本隊に連絡をお願いします！」

ホープス「……何らかの結界が張られているらしく、現在、通信不能の状態にあります」

アマリ「何ですって……!?」

甲児「心配するな、アマリ！あれくらいの数、俺達だけで十分だ！なあ、零！」

零「あ、ああ……」

何が起こるか、わからない……。出来るだけバスタードモードの使用を抑えないとな……。

さやか「張り切ってるわね、甲児君」

甲児「マジンガーZのパイロットとしては、魔神乗りのワタルに負けてられないからな！」

さやか「マジンと魔神……。そう言えば、似てるわね……」

零「見た目で言ったら、獣人達の使うガンメンも魔神に似ているけどな……」

甲児「行くぜ、ドアクター軍団！俺達がいる以上、村には指一步触れさせないからな！」

戦闘から数分後……。

さやか「気をつけて！グールが来るわ！」

ちっ、機械獣とグールが現れたか……！

ブロッケン「兜 甲児よ！少数で行動していたのが貴様の運の尽きよ！」

甲児「ブロッケン伯爵！性懲りも無く、また来やがったか！」

ブロッケン「ヌフフフ！エクスクロス本隊と別行動の貴様に何が出来る！今までの恨み、此処で晴らしてくれる！」

甲児「来い、ブロッケン！返り討ちにしてやるぜ！」

零「待て、甲児！まだ何か来る！」

何だ……？機械獣……？

甲児「機械獣か！」

ブロッケン「おお、ゴーストファイアーV9！お前も跳ばされてきておったか！丁度いい！我が命に従い、マジンガーZとその仲間を血祭りに上げる！」

すると、ゴーストファイアーV9はグールを攻撃した……！！？

ブロッケン「な、何をする……？！」

戦士の魂「人間風情が、この俺に命令するなど許されぬ事……！」
ゴーストファイアーV9が喋っているのか……！！？

甲児「機械獣が喋った……！！？」

戦士の魂「Dr. ヘルの部下よ！その無礼を冥府で悔いるがいい！」

ブロッケン「ば、馬鹿なあああつ！！？」

嘘だろ……グールが爆発した……？

甲児「ブロッケン……！」

戦士の魂「我が肉体を汚した者よ。本来ならば、貴様は死よりも重い罰を与えられるべきなのだ」

さやか「同士討ちな……！！？」

甲児「わからない……！だが、あの喋る機械獣……普通じゃないぞ！」

戦士の魂「機械獣……？そのような名で俺を呼ぶな。俺は……オリュンポスの戦士だ……！」

甲児「オリュンポス……！！？」

戦士の魂「タロス像よ、俺に続け！オリュンポスの敵は、ここで滅する！」

最初の魔神部隊は撤退した……。

アマリ「甲児さん！あれは何なんです！！？」

甲児「よくわからないが、あいつが俺達を狙っているのは確かだ！戦うしかない！」
戦士の魂「行くぞ！今ここに主の無念を晴らす！」
俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 零VS戦士の魂〉

戦士の魂「ほう、その機体……そして、貴様は……」

零「お前……ゼフィルスの事を知っているのか……」

戦士の魂「なる程、貴様はそういう立場なのか……。面白い」

俺達はゴーストファイアーV9にダメージを与えた……。

戦士の魂「この程度で勝ったつもりか！」

嘘だろ……ダメージが回復した……

甲児「くそっ……！こいつの強さ……機械獣とは桁が違う！」

戦士の魂「俺はオリュンポスの戦士！機械獣などという人形と同じだと思ふな！来い、マジンガーZ！勝負だ！」

甲児「そつちがその気なら、受けて立つ！」
マジンガーZとゴーストファイアーV9は攻撃しあつたが、マジンガーZが吹き飛ばされた。

さやか「甲児君!!？」

甲児「う……うう……！」

零「甲児！こうなつたら……！」

俺はバスタードモードを発動したが……。

零「(ぐっ……!!)?ま、また痛みが……！」

戦士の魂「ハハハハハ、マジンガーZよ！お前への罰は、まだまだ続く！明日だ！明日の夜明けと共に、お前の目の前であの村に住む人間を皆殺しにする！」

甲児「何っ!?？」

戦士の魂「自らの無力さを嘔み締めながら、絶望に沈め！それがお前への罰だ！」

ゴーストファイアーV9が退いた……？

アマリ「オリユンポスの戦士……」

零「ぐっ……はあ……はあ……」

痛みが……ひいた……？

甲児「くそ……！あいつの思い通りになどさせるものか……！」

オリュンポスの戦士……強過ぎるだろ……。

俺達は機体から降り、これからどうするかを話し合う事にした……。

アマリ「……通信が使えない以上、直接、エクスクロス本隊を呼びに行くしかありませんね」

甲児「そつちはアマリ達に任せる」

え……？

さやか「甲児君はどうするの？」

甲児「もしも……って事がある。俺とマジンガーZは、念のためここに残る。敵を足止めする役は鉄（くろがね）の城の異名を持つマジンガーZが適任だしな」

さやか「だったら、私も……！」

甲児「遠慮するぜ、さやか」

さやか「でも……」

甲児「ビューナスAじゃ、あいつとは戦えない。はつきり言って、足手まといなんだよ」

甲児、お前……。

さやか「そんな……ひどい……」

さやかが涙を流しながら、走り去ってしまった……。

甲児「……つと、ちよつと言い方がキツすぎたかな……」

零「いや、ああいう奴は多少キツめの方が良いと思う……」

アマリ「でも、さやかさん……泣いていましたよ」

甲児「フオローを頼むぜ、アマリ、零。ついでにさやかのエスコート役も任せる」

アマリ「……わかりました」

零「……やなことだ」

甲児「え……」

零「俺とゼフィルスも残る」

アマリ「零君……?」

甲児「俺とマジンガーだけで十分だよ」

零「今日、あいつにボロ負けた奴が出しやばんなよ」

甲児「何っ!?」

零「……俺だけ女二人と一緒に前を置いて戻れるかってんだ……」

甲児「零……」

零「少しは役に立つと思うけどな」

甲児「わかったよ……頑固だな、お前も」

零「お前にだけは言われたくねえ……」

アマリ「零君、甲児さん。お願いです。絶対に無理はしないでください」

零「善処する」

甲児「約束はできないな」

アマリ「お願いです。これ以上、私やさやかさんを悲しませないためにも……」

……アマリ……

甲児「……努力はするよ」

零「俺もだ。だから、そんな悲しい顔すんな」

アマリ「……うん。必ず戻ってきます。それまで……頑張ってください」

アマリも歩き去った……

甲児「……術士サマにはすべてお見通しのような……。(すまない、さやか……。でも、ああでも言わなきゃ、残るって言い張っただろうから……。今の俺とマジンガーじゃさやかを守るどころか、本隊を呼びに行く事できえ、足を引つ張っちゃう……。俺にできる事はお前等を信じて待つだけ……。もし、お前等が間に合わなかったとしたら、その時は……)」

零「……甲児……」

正直、俺も怖い……。頼みの綱だったバスタードモードの意味がなくなったから

な……

バスタードモードを使えたとしてもあいつに勝てるか、どうか……。くそっ！今悩んでも仕方ねえのに……！

甲児「(怖い……。これまで戦ってきた中でこんな想いをしたのは初めてだ……。でも、やるんだ……。いや、やらなきゃ駄目なんだ……。マジンガーZは、そのための力なんだから……)」

ゼフィルス……また俺に力を貸してくれ……！

甲児「零、明日は生きてみんなのもとへ帰ろうぜ！」

零「そういうの死亡フラグだから言うのやめろよ……」

さやかを悲しませないためにも……

甲児「ご、ごめん……。 (アマリを悲しませないためにも……)」

俺が盾にでもなつて、甲児を生かす……！

甲児「(俺が盾にでもなつて、零を生かす……)」

第34話 偉大な勇者

翌日……。

オリュンポスの戦士とかいう奴は配下のロボット軍団を連れて現れた。

戦士の魂「来たか」

俺達はオリュンポスの戦士達の前に立つ。

戦士の魂「他の二人はどうした？」

甲児「お前らの相手ぐらい俺達だけで十分だ」

零「一瞬で片付けてやるよ」

戦士の魂「強がりを言ってくれる。昨日の去り際の一撃でお前とマジンガーZが傷を負ったのはとうに承知だ。そんな奴を庇いながら、戦えるのか？」

甲児「……」

零「庇う必要なんてねえよ……。ここに居るのは鉄の城……マジンガーZと最強のヒーローパイロット……。兜 甲児なんだぜ？」

甲児「零……」

戦士の魂「人間というものはどこの世界、どこの時代も変わらん」

戦士の魂2「その誇りは見上げたものだ。だが、勇気と無謀をはき違えている」

戦士の魂3「いい機会だから、教えてやろう。お前達ごときの覚悟など、俺達の前で

は何の意味もない事を」

どの機械獣からもオリユンポスの戦士の声が聞こえやがる……。

甲児「やれるもんなら、やってみやがれ！この兜 甲児とマジンガーZ……！力つきる、その瞬間まで一步も退くつもりはないからな！」

零「おいおい、俺の事も忘れんなよ！」

甲児「……零、勝とうぜ！」

零「……ふうー……当たり前だ!!？」

戦闘開始だ!!？

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「すまねえ、優香……もう会えないかも知れねえ……。弘樹、決着をつけられないかもな……。アマリ……。メル……。生きてくれ……。それが俺からの願いだ……。」

戦闘から数分が経過した……。

戦士の魂「まだ足掻くか、人間風情が！」

甲児「くそっ……！こいつ等の力、底無しかよ！」

零「もう怖じ気付いたのかよ、ヒーローさんよ！」

甲児「へっ、これしきの事で怖じ気付くかよ！」

戦士の魂「お前達に問う。何故、たたかう？」

戦士の魂2「ここはお前達の世界ではない……。あの村の人間がどうなろうとお前達

には関係ない事のはずだ」

甲児「関係ない……。？目の前で誰かの生命が奪われるのを黙って見ていられるかよ！
ここがどこかなんて知るかよ！俺は……マジンガーZは正義と平和のために戦うんだ
！」

零「俺は手を伸ばすって決めた……！例え、手が届かなくても届くまで伸ばすつ
て……。それでも届かないのなら、無理矢理にでも手を掴むって決めただよ……。だか
ら、俺は戦うんだ！」

戦士の魂3「弱き者を守る……。その意思……。やはり、ゼウス神を受け継ぐ者だな」

ゼウスだと……？

甲児「ゼウス……？俺達に超合金Zを遺してくへたあのゼウスなのか……？」

戦士の魂「その通り……。我等、オリュンポスを裏切った逆賊ゼウスの事だ！」

甲児「そうか……。！お前達……。あのハーデスの仲間か！」

くそっ！ここで増援かよ……！！

ガラダブラ「マジンガー乙よ！あの時の屈辱と怒り……我は一時たりとも忘れた事はなかつたぞ！」

甲兎「ガラダブラ！何故、お前がここに……？」

ガラダブラ「トリスタンとイゾルデの生命を懸けた儀式……それにより、お前達は我等の聖地……このアル・ワースへと呼び込まれたのだ！」

甲兎「何だつて……？」

零「あいつ等も……この世界の住人だと言うのかよ……」

戦士の魂「遙か過去……。我等、オリュンポスは次元を超え、お前達の地球へと侵攻を開始した……。だが、ゼウスの裏切りとお前によってハーデス様はお命を落とされた」

ガラダブラ「そして、我等はアル・ワースへと撤退して、復活の時をトリスタンとイゾルデに託して、眠りについた……。時は来た！後はお前の魂をハーデス様に捧げ、その復活を以て、再度の侵攻を開始する！」

甲兎「あしゆらは……。俺をお前達に殺させるためにアル・ワースに俺を送り込んだのか……」

戦士の魂「さあ、マジンガー乙よ！その魂を捧げよ！」

戦士の魂2「お前の死が冥府のハーデス様に届いた時こそが我等の真の復活の時よ

！」

零「勝手な事を言いやがって… 甲児はやらせねえよ！」

オリュンポスの戦士達は俺達を取り囲んだ。

戦士の魂「ならば、貴様もマジンガーZと共に死ね！」

オリュンポスの戦士達の攻撃を俺達は受けた…。

甲児「ぐうっ！」

零「がはっ！」

戦士の魂「泣き叫べ！許しを請え！」

戦士の魂2「その絶望をハーデス様に捧げよ！」

零「ぐっ…！なめ、るなよ…！」

甲児「諦めるものか…！ゼウスの光は、今も俺とマジンガーの中で息づいている！

そして、何より！他人の幸せや平和を力で踏みにするお前達みたいな奴を絶対に許さな

い！」

戦士の魂3「ならば、その光…！ここで消して…！」

すると、何処かから雷が放たれた…。

戦士の魂「うおっ！」

ガラダブラ「何者だ!?？」

甲児「あれは……！」

現れたのって……マ、マジンガー……!!?

甲児「マジンガー……」

戦士の魂「か、感じる……！感じるぞ！」

戦士の魂2「奴からもゼウスの意思を感じる！」

すると、もう一機のマジンガーは俺達の周りのオリュンポスの戦士を吹き飛ばした。

戦士の魂2「！」

戦士の魂3「！」

そのまま、二機のオリュンポスの戦士は爆発する。

戦士の魂「ば、バカナ！オリュンポスの戦士が一撃で！」

鉄也「次はお前だ！」

戦士の魂「つ、強い……」

もう一機も倒した……強すぎるだろ……！

甲児「強い……。そのマジンガーは何て言うんだ？」

鉄也「グレートマジンガー」

甲児「グレートマジンガー……」

鉄也「マジンガーZの兄弟だ」

甲児「兄弟……」

鉄也「そうだ。マジンガーZと共に戦うために造られた偉大な勇者だ。俺の名は剣鉄也。甲児……お前を助けるために来た」

鉄也「剣……鉄也……！」

ガラダブラ「そうか……！貴様……ゼウスの幻の左腕か！」

鉄也「残念だったな、ミケーネ共。お前達の結界は、既にあいつ等が破った」

エクスクロスのみんなが来たか……！

そして、みんなは出撃した……。

アマリ「ごめんなさい、零君！甲児さん！遅くなりました！」

甲児「気にするな、アマリ！ちゃんと間に合った！」

零「もう少しゆっくりでも良かったんだぜ」

ノブナガ「フン、それほどの軽口を叩ければ問題はないな」

さやか「甲児君！」

メル「零さん！」

ビューナスAとメサイアのおかげで、マジンガーZとゼフィルスのダメージが回復した。

さやか「こんなに無茶して……」

甲児「ごめんな、さやか……。あんな酷い事言つてよ……」

さやか「いいの……。それが甲児君の優しさだつてわかっているから」

メル「もう！勝手な事ばかりしないでください！私がどれだけ心配したと思つているんですか！」

零「すまなかつたな、メル」

メル「料理を作ってくれるまで許しません……！」

零「お安い御用だ！」

ホープス「零様、甲児様……。通信を遮断し、オリュンポスの戦士達に暗黒のエネルギーを送つていた結界はクルル様の手伝いによつて破壊しました」

クルル「クーツクク！もうこれで、超常的な力を発揮する事も出来ないぜ」

甲児「よし……。！ここから逆転だ!!？」

零「やられた分は……。倍返しにして返してやるぜ！」

鉄也「いい気合だ」

甲児「やろうぜ、鉄也さん！ダブルマジンガーの力をあいつ等に見せてやるんだ！」

零「俺のはマジンガーじゃないが、やらせてもらうぜ！」

ワタル「やい、三つ首ガイコツ！よくも甲児さんと零さんをいたぶつてくれたな！」

舞人「覚悟しろ、悪党！ここからが本当の勝負だ！」

ガラダブラ「結界を破ったぐらいで、いい気になるなよ！正面から力で叩き伏せてやる！」

鉄也「いいだろう！望む所だ、ミケーネ！」

甲児「来い、ガラダブラ！これまでの借り返してやるぜ！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

レナ「オリユンポスの神々……まさか戦う事になるなんて……！」

ユイ「レナ……？」

レナ「何でもないよ、ユイ。行くよ！」

〈戦闘会話 零VSガラダブラ〉

ガラダブラ「マジンガーZの配下か！」

零「誰が配下だ、誰が!??ここまで来たらこつちのもんだ……悪いが、倒させてもら

うぜ、ガラガラ！」

ガラダブラ「ガラダブラだ！」

ダブルマジンガーの攻撃でガラダブラにダメージを与えた……。

ガラダブラ「勇者と呼ばれた、この俺が人間ごときに……！」

鉄也「そうだ、ガラダブラ！お前は、その人間に負けたんだ！」

甲児「言っておくが、お前が人間に負けたのはこれで二回目だからな！」

ガラダブラ「マジンガーZ、グレートマジンガー！この屈辱、決して忘れんぞ！勇者の名に懸けてお前達の魂は、このガラダブラが刈り取る！」

そう言い残し、ガラダブラは撤退した……。

鉄也「勇者ガラダブラ……。その名に値するだけの強さの持ち主だな」

甲児「だが、負けはしない……。！お前に勇者の誇りがあるのなら、俺達にはマジンガー乗りの誇りがある！」

……。周りのタロス像も倒してやつと終わったか……。

甲児「よし……。！俺達の勝ちだ！」

舞人「でも、甲児さん……。あの敵は、いったい何だったんです？」

鉄也「それは俺が説明しよう」

甲児「鉄也さん……」

鉄也「奴等は、このアル・ワースから俺達の世界へ侵攻を開始した一団だ」

刹那「時空を超えて平和の世界を襲ったという事か……」

鉄也「奴等はオリュンポスの神と名乗り、ミケーネ地方の人間達に自らを崇めさせた。だが、その中の一人……ゼウス神の裏切りによって、支配者であるハーデス神は倒され……。奴等は、このアル・ワースに撤退せざるを得なかったんだ」

しんのすけ「おじさん、事知りだゾ！」

マサオ「それを言うなら物知りだよ！」

トオル「二人共、失礼だよ！」

鉄也「いや……構わんさ。俺は真正正銘のおじさんだからな」

アーニー「真正正銘とは……どう言う事ですか？」

甲児「鉄也さんは、俺の母さんの弟……つまり、俺の叔父さんなんだ」

はあっ!??

さやか「ちよつと待って、甲児君！」

ボス「その剣 鉄也つて人は確か死んだはずじゃ！」

甲児「そうだな……。それについては説明してもらわなきゃ……」

鉄也「待て……！まだ何か来る！」

な、何だ、あの集団は……!??

暗黒大將軍「ほう……勇者と謳われたガラダブラを倒すとはなかなかの男達だ。さ

すがはゼウスの右腕と左腕……。名を聞かせろ」

甲児「あの風格……！ミケーネの幹部か！」

鉄也「自ら神を名乗るにしては礼儀知らずだな。他人に名を訪ねる時にはまず自分から名乗るものだ」

ミケーネ神「貴様！人間の分際で！」

暗黒大將軍「よせ……。確かに礼を失していたのは俺の方だ。我が名は暗黒大將軍！オリュンポスの将にしてハーデス様より無敵の軍勢を預かる者だ！名を名乗れ、人間よ！」

鉄也「グレートマジンガーのパイロット、剣 鉄也！」

甲児「マジンガーZのパイロット、兜 甲児！」

暗黒大將軍「剣 鉄也と兜 甲児か……。我が剣によって死する者！その名、覚えておいてやろう！」

鉄也「来るか！」

え……。暗黒大將軍の軍勢に攻撃を仕掛けた……。！！？

誰だ……。！！？

アマリ「あれは……。！」

ホープス「はい……。爆雷のドグマ……。それもかなり高レベルの使い手によるもので

す」

現れたのは……魔徒教団じゃねえか……！

エイサツプ「魔徒教団！」

ゼロ「先頭のあの機体……！異界の門を開いた時にもいた奴だ！」

暗黒大將軍「魔徒教団め……！この時代でも我々の邪魔をするか！」

セルリック「エンデの名の下に法と秩序を守る……。それこそが我々の使命ですから」

暗黒大將軍「ちいつ……！剣 鉄也と兜 甲児……！この戦い、預けるぞ！」

暗黒大將軍達が撤退した……？

ネネ「ミケーネ達が帰っていく……」

シバラク「さすがは魔徒教団だ！」

テイエリア「安心するのは早い」

アル「妾達は教団と戦った事がある身なのだぞ」

セルリック「ご安心を。過去に不幸な行き違いがあったようですが、私達は、あなた

方と戦う気はありません。私の名はセルリック・オブシディアン……。魔徒教団の法師

を務めております」

タママ「法師ですか……？」

ホープス「術士を束ねる存在……。教団の実行部隊の最上位です」

幻龍斎「そんな大物がおいでになるとは……！」

セルリック「エクスクロスの皆さん……。先程のオリュンポスの神々の復活の事でお聞きしたい事があります。また、ドアクダー軍団やミスルギ皇国の件もありますので、皆さんをご招待して、お話を伺いたいと思います。私共の招待……お受けいただけるとは……でしょうか？」

ドニエル「いきなり言われても……」

倉光「ですが、こちら情報をもとめる必要があるでしょう」

スメラギ「そうですね」

ネモ船長「セルリック法師……。そちらの提案をお受けします」

セルリック「ありがとうございます。アマリ・アクアマリン……。君にも話がある」

アマリ「……」

零「……アマリに何をする気ですか？」

セルリック「君は？」

零「……新垣 零……。アマリの仲間です」

セルリック「……ほう……。ご心配なく、決して悪いようにはしない。ここは私に任せ
てくれたまえ」

零「アマリ……。俺達だけでも行かないっていう手があるが……。どうする？」

アマリ「ううん、行くわ、零君」

零「そうか…」

ホープス「ついに来たのですね、この日が…」

俺達はそれぞれの艦に戻り、Nーノーチラス号の格納庫に集まった…。

甲児「…鉄也さん…。あんたはバードス島で生命を落としたと聞いていたけど…」

鉄也「死んでいなかった…。いや、死ぬ事を許されなかったと言うべきか…」

甲児「え…」

鉄也「お前の父親である兜 剣造は寄生されたケドラからのフィードバックでいつの日かミケーネが復活する事を知った。その時に備え、剣造は俺を蘇生させ、冷凍睡眠処置を施した…。そして、戦う力としてグレートマシンガーを造り上げたんだ」

甲児「グレートは…俺の父さんが造ったマシンガー…」

鉄也「だが、残念ながら剣造も姉さんもあしゆらの企みに踊らされ、結局、儀式を許してしまった。そして、あしゆらの開いた異界の門にお前達が吸い込まれた時、あの場にいた俺も自らその中に飛び込んだ…。そして、このアル・ワースでミケーネの行方を追い続け、今日お前と再会する事が出来たんだ」

甲児「そうだったんだ…」

鉄也「すまん、甲児……。俺達はミケーネの復活を阻止できず、今日もまたお前の危機に間に合わなかった……」

甲児「何を言ってるんだよ、鉄也さん！鉄也さんとエクスクロスが来てくれたから、俺達はこうして生きているんだ」

鉄也「甲児……」

甲児「終わった事は終わった事だ！こうしてダブルマジンガーが揃ったからにはミケーネもドアクダーもぶつ飛ばしてやろうぜ！」

鉄也「我が甥っ子ながら、頼もしいやつだ。お前の成長した姿……。創造にも是非見せてやりたいぜ」

甲児「それを聞いたら、ますます死ねなくなつた！鉄也さん……。この戦い、必ず生き抜いて、一緒に帰ろう」

鉄也「ああ……。(約束するぞ、創造、姉さん……。俺の生命に代えても、甲児を守り抜いてみせる。それが俺とグレートマジンガーの新たな使命だ……)」

さやか「良かったわね、甲児君……」

お菊「弟さんと甲児坊ちゃんの事を知ったら、女将さんも喜ぶだろうね」

安「甲児じゃねえが、俺達もこりや死ぬわけにやいかねえな」

ボス「でも、あのミケーネとかいう連中、並みじゃねえっすよ！」

クロス「ああ……。奴等の大将の暗黒大將軍とかいう奴……。只者じゃねえ迫力だった」
海道「心配すんな、クロスのおツサン」

真上「いくら、迫力が只者じゃなくても、俺達が倒せばいいだけの話だ」

シバラク「うむ……。！こちらにはなんと言っても魔徒教団が付いているからな！」

幻龍斎「お主達が教団と戦ったという話を聞いて、危うく腰が抜けるところだったが、何とか誤解も解けたようであつたウラ！」

ニール「問題は、脱走者であるアマリの処分だろうな」

ワタル「そのアマリさんは？」

マーベル「ホープスの所に行つてゐるわ。今後の事を相談するみたい」

ワタル「もし、教団の人がアマリさんを責めたら、僕達も一緒に謝ろうよ」

グランデイス「あいつには世話になつたからね。弁護ぐらいはしてやるさ」

ジャン「相手は法と秩序の番人なんだから。話せば、きつとわかつてくれるよね」

ユイ「きつと大丈夫ですよ！先ほども悪いようにはしないと書いていましたし」

ロツクオン「悪党共の天敵が味方になつて、おまけに帰還の方も目処が立つたつてわけか」

サンソン「こつちの世界に跳ばされて、色々と苦勞したが、やつとゴールが見えてきたようだぜ」

ハンソン「あとはそこに向けて一直線だ」

シバラク「いやゝ楽しみだなく。魔徒教団の神殿にご招待かゝ」

ワタル「いったいどんな所なんだろうね……！」

零「……」

メル「アマリさんが心配なのですか？」

零「……心配じゃないって言ったら嘘になるな……」

俺はまだ嫌な予感がしている……。何だ……。？何か、アマリが遠くに行ってしまう……

そんな気がする……。

第35話 エンデの名の下に

第35話 エンデの名の下に

―新垣 零だ。

俺達エクスクロスは魔従教団の法師、セルリックさんに案内されて魔従教団の神殿前まで来ていた。

號「あれが魔従教団の神殿か…」

名瀬「とんでもなく馬鹿でかい木だな…」

セルリック「あれはエンデの神木と呼ばれるものです」

ルリ「智の神エンデ…。魔従教団の方々が崇拜している神様ですね…」

セルリック「エンデは自然を愛すると言われ、その使徒である教団は自然との調和…。即ちアル・ワースの大地との調和を重んじています。その現れとして、神殿は神木のあ
る場所に建てるのがならわしになっているのです」

倉光「あのような巨木がアル・ワースの各所に？」

セルリック「はい……。大地のエネルギーの流れである血脈に沿って神木は生えると聞きます。これから皆様をご案内する神殿は、復活したオリュンポスの神の動向を探る部隊の前線基地にもなっております」

ドニエル「智の神を崇拜し、魔法を研究する……と聞くと学究的な集団を想像しますが、思ったよりも武闘派なのですな」

セルリック「法と秩序の番人であるためには力も必要なのです。悲しい事でもありませんが。我々は、エンデのドグマを以て、このアル・ワースに平穩をもたらす事を最大の喜びと考えています」

ドニエル「いや……。その……。批判めいた言い方になっていましたらお詫びいたします」

スメラギ「事実として、教団の存在は必要ですね。私達も、昨日はあなた方に助けていただいていますし……。私達の社会における軍隊の在り方も本来はそういった事が目的でありますから」

セルリック「ご理解いただいて何よりです。長々とお話しして申し訳ありません。では、これより皆様を神殿にお連れします」

ホープス「帰ってきたのですね……」

アマリ「……」

ホープス「震えているのですが、マスター？」

アマリ「ホープスは怖くないんですか？」

ホープス「……いつかは、この日が来ると思っていましたからね……」

零「アマリ……」

震えているアマリを見ていられず、俺は彼女の手を握った。

零「アマリ……俺達がついてる……。何かあったら俺を呼んでくれ」

アマリ「零君……うん、ありがとう……」

俺達は神殿の中に入った……。

神殿の中に入った俺達はセルリックさんと話を始めた……。アマリとホープスを除いて……。

セルリック「救世主様ご一行をお迎えするのに大したおもてなしも出来ず、心苦しく思います」

シバラク「いえいえ、お構いなく！ 神殿に入れてもらっただけで拙者、大満足でございますするゆえ、はい！」

リナ「シバラク先生が本気で恐縮してる……」

デントン「話には聞いていましたが、アル・ワースの人間にとっては魔従教団の存在

は本当に大きいのですね」

セルリック「改めて自己紹介させていただきます。私はセルリック・オブシディア
ン……。黒曜石の術士であり、法師の位にあります」

ワタル「アマリさんに聞いたけど、セルリックさんって偉い人なんだね」

幻龍斎「わ、ワタル！いくらお前が救世主とはいえ、法師様に気安く口を利くでない
ウラ！」

シバラク「親父殿の言う通りだ！お主、礼儀知らずにも程があるぞ！」

セルリック「そう畏まらないでください。私と皆さんは、このアル・ワースの法と秩
序を守る者……。つまり同志なのですから」

シロ「ごうー……！」

ひまわり「たや？」

しんのすけ「どうした、シロ？」

シロがセルリックさんを警戒している……？

セルリック「ははは、どうやら私はそちらのお犬様には懐かれないうです」

ロザリー「それにしても感激だぜ！あの魔徒教団の同志だなんて……！」

クリス「信じられない……。あたし達……。ノーマなのに……」

セルリック「人の役割はあれど、身分の上下など本来はないものです。褒めてくださ

るのは嬉しいですが、必要以上に崇めるのは勘弁してほしいというのが私の本音です」
シモン「意外に話せるんだな」

ユイ「わかりました、では、私達もいつも通りに話させていただきます」

セルリック「智の神エンデの下で人は平等なのですから。ですので、私達もそのように接する事をお許しください、シモンさん、ユインシエルさん」

シモン「俺が獣の国の総司令官だったのも当然知ってるってわけか…」

ユイ「一目見ただけで私をエナストリアの嬢皇だとわかるだなんて…」

アンジュ「…」

セルリック「何かご不満でも、アンジュリーゼさん？」

アンジュ「シモンやユイの事を知っていたのに私については調査不足なんじゃない？」

セルリック「いえ…。あなたの真の名は、アンジュではなく、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギです。ここはマナの国でもアルゼナルでもないのですから、真の名を名乗ってくださいって結構です。サリア・テレシコワさん、ヒルデガルト・シュリーフォークトさんも、そのようになさってください」

それが、サリアとヒルダの本当の名前なのか…。

サリア「私の本当の名前もご存知だなんて…！」

ヒルダ「本当に凄いな、魔徒教団って……」

メル「という事は、私の事もご存知ですよね？」

セルリック「勿論です、元オニキスのメル・カーネリアンさん。」

メル「元とは言え……私もオニキスの一員だったのですよ？」

セルリック「ですが、今は我々の同志です」

メル「……」

アンジュ「ノーマでも差別しない……。悪いけど、そんなものに騙されるつもりはないから」

サリア「口を慎みなさい、アンジュ！あなた、何を言っているのか、わかっているの？？」

セルリック「お気になさらないください、サリアさん。我々の在り方に疑問を持つアンジュリーゼさんの姿勢は智の探求者である我々にとつて尊ぶべきものです」

アンジュ「ちなみにあなた達の在り方に疑問を持っているのは私だけじゃないから」
アンジュはそう言うのと俺に視線を送ってきた。

セルリック「新垣 零さん……。異界人の中で最もアマリ・アクアマリンと関わった方ですね」

零「……」

セルリツク「では、零さん、アンジュリーゼさん……。何故、あなた方は我々を信用なさってくださらないのですか？」

アンジュ「あなた達なら、マナの国の影の支配者、エンブリヲの存在も知っているのでしょうか？」

セルリツク「ええ……」

零「アル・ワースの番人を名乗るのなら、どうして、エンブリヲという男を野放しにしているんですか？」

セルリツク「……完成された社会システムを破壊する……。果たしてそれは、その社会で暮らす人達にとって幸せな事でしょうか？」

アンジュ「え……」

タスク「確かに一理ある。ミスルギの市民が、創造主エンブリヲの存在を知り、もしマナが急に使えなくなったら……」

零「……なるほど。大パニックが起こり、社会は崩壊するだろうな」

アンジュ「だから、エンブリヲを放置するの……!!？」

セルリツク「それを決めるのは魔徒教団ではありません。あの国に住む人達なので、ですから、私達に出来る事はそこから追放されたノーマに手を差し伸べる事だけです」

サリア「手を差し伸べるって。。。もしかして、教団はアルゼナルに。。。」

セルリック「はい。。。アレクトラ司令と連絡を取り、秘密裏に物資の援助をさせていただけいております」

エルシャ「時々聞きますが、そのアレクトラというのはジル司令の本名でしょうか？」
セルリック「アレクトラ・マリア・フォン・レーベンヘルツ。。。それが彼女の真の名です」

アンジユ「レーベンヘルツ。。。マナの国の一つ。。。ガリア帝国の皇家。。。」

ヒルダ「って事は、あの司令もアンジユの同じように姫様だったって事かよ！」

サリア「セルリック様。。。魔従教団は、アレクトラのレベルタスを支援するおつもりなのですか？」

セルリック「時が来れば」

サリア「その御言葉。。。信じさせていただきます」

アルト「サリア。。。そのリベルタスってのは？」

サリア「ノーマが自由を勝ち取るための戦い。。。ヴィルキスも、そのための力です」
アンジユ「じゃあ、そのライダーに選ばれた私は司令の手駒ってわけね。。。」

サリア「。。。アレクトラ。。。私ではなく、アンジユにヴィルキスを与えたのは何故なの。。。？私なら。。。アレクトラのために生命だって投げ出せるのに。。。」

セルリック「… アンジュリーゼさん、零さん、納得いただけましたか？」

零「少しは…」

アンジュ「取り敢えずはだけどね… それと今の私はアンジュリーゼではなく、アンジュだから」

セルリック「わかりました。では、アンジュさんと呼ばせていただきます。ささやかながら宴の準備もできたようですので、皆様はおくつろぎください」

ジョーイ「ありがとうございます」

九郎「やったぜ！俺… 腹が減ってたんだ！」

アル「汝はそればかりだな」

セルリック「ドアクダーやオリュンポスなどの勢力についての情報交換は明日にでも」

ルルーシュ「一つ聞かせていただきたいが、よろしいかな？」

セルリック「なんなりと」

ルルーシュ「法と秩序を守る…。素晴らしい事ではあるが、あなた達にとってその行為は何か益があるのか？」

セルリック「魔徒教団の術士達は利益を求めているわけではありません。我々は教団の教義の下、魔法の修得に喜びを見出し、その力を以て法と秩序を守る事に誇りを持

ち……ひたすら徳を積む事を目的として日々を生きています」

ルルーシユ「では、問う。その徳を積んだ先に待つのはなんだ？ 楽園か？ 救済か？ 永遠の生命か？」

セルリック「……神の概念は、存在する世界で異なるでしょうからそれについての議論はおいておきます。智の神エンデへの信仰は死後の世界ではなく、現世での高みへの到達を目指すものです」

ルルーシユ「その到達点とは？」

セルリック「それは教団の秘儀ですのでここではお話は出来ません」

ルルーシユ「それは残念だ」

スザク「(ルルーシユは、セルリックさんの事を警戒しているみたいだ)」

C・C「(確かに、この男の笑顔……シユナイゼルの虚無に似ている……。だが、先程の問答を聞くに意外に俗な所もあるようだな……)」

しんのすけ「セルリックのおじさん！ アマリお姉さんは、何処？」

青葉「俺達、あの人に何度も助けられてるんです」

ベルリ「もし、弁護が必要ならば、全員で行くつもりです」

セルリック「そう慌てないでください。彼女にも行った通り、決してわるいようにするつもりはありませんから」

零「……信用できませんね」

セルリック「……何故ですか？」

零「俺達は同じ術士であるイオリという男の襲撃にあっているんです……。アマリを一人には出来ません」

セルリック「余程彼女にのめり込んでいるのですね」

零「茶化さないでください……。俺達を祝ってもらえる宴ならば、メンバーの一人であるアマリも参加するのが普通だと思いますが？」

セルリック「……それでも彼女は魔徒教団の術士です。彼女の処遇の決定権は我々にあります」

零「……わかりました。でも、あなたは俺達にアマリの事は決してわるいようにはしないとおっしゃいました……。もしも、彼女が傷つくような事があれば……。いくら法と秩序を守る魔徒教団でも……。俺は許しませんから」

セルリック「……覚えておきましょう。彼女は今、導師と対面していると思われれます」
ジョー「導師？」

セルリック「現在、教団内において最高位にある御方です」

ーホープスです。

私は今、クロさんと猫のシロさんと話しています。

ホープス「…シロさん、クロさん。サイバスターの調整、完了しました。これで悩まされていた出力の異常は解消されるでしょう」

シロ「ありがとニヤ、ホープス」

ホープス「魔装機神は機械的にオート・ウォーロックに近いものがありますので、私もお役に立つ事が出来ました」

クロ「本当にホープスは有能ニヤのね」

ホープス「どうもマスターには、その辺りが伝わっていないようですがね」

クロ「ところでサイバスターの不調の原因っていったいニヤなんだったの？」

ホープス「機械的なトラブルではなく、一部の機関がアル・ワース特有の現象の影響を受けていたのです」

シロ「その現象って？」

ホープス「オドの存在です」

クロ「オドって魔法を使う時に必要ニヤ元素みたいニヤものね…」

ホープス「あれとサイバスターとはどうも相性が悪かったようで、それを遮断する処

理を行いました」

シロ「きつとマサキも喜ぶニャ」

クロ「でもいいの、ホープス？アマリが教団の偉い人に呼ばれてるのに一緒にいニャくて？」

ホープス「構いません。もうマスターには会えないでしょうし…。」

「アマリ・アクアマリンです…。」

私は今、神殿内にあるエンデの間で導師と対面しています。

術士「…。」

術士2「…。」

導師キールデイン「お前達は下がりなさい」

術士「かしまりしました、導師キールデイン…。」

術士2「御用がありましたら、お呼びください」

術士達はこの場を離れて行きました…。」

アマリ「…。」

導師キールデイン「久しぶりですね、藍柱石（らんちゆうせき）の術士、アマリ・ア

クアマリン。と言つても、こうして話をするのはあなたの術士任命式以来ですが」

アマリ「導師キールデイン……。私は……」

導師キールデイン「黙りなさい。これは査問なのです。あなたが口を開いていいのは私の問いに答える時のみです」

アマリ「も、申し訳ありません……」

導師キールデイン「あなたは理解しているのですか？自分が教団創設以来の罪を犯した事を。修行の身でありながら、無私の証であるエンデの面をかぶらず、さらには教団を脱走……。このような事は前例もなく、私達もあなたをどう扱つていいか、審議を重ねなければなりませんでした」

アマリ「……」

導師キールデイン「あなたは何を求めてエンデの加護の下より去つたのです？答えなさい、アマリ」

アマリ「……生きる意味を求めてです」

導師キールデイン「生きる意味……。？それはエンデの名の下、法と秩序の番人として生きる事を以て他ありません」

アマリ「……。それだけでは何か足りない気がしたんです」

導師キールデイン「自身の信仰の不足を言い訳するか……。それは脱路以外のなにも

のでもない！」

アマリ「で、ですが……」

導師キールディン「このエンデの間で導師キールディンに異を唱えるか……。アマリ・アクアマリン……。ならば、お前には背教者の烙印を押さねばならない」

アマリ「背教者……！」

導師キールディン「悔い改めよ、アマリ・アクアマリン。幼き頃よりエンデの使徒として修練を積んできたお前ならば、まだやり直す事が出来る。お前が再び智の求道を進むのなら、教団は喜んでむかえ入れよう」

アマリ「教団に……。戻れる……」

導師キールディン「返答を、アマリ・アクアマリン」

私は……。

アマリ「導師キールディン……。私は……。お許しをいただけるのならば、もう一度、教団で修練を積み、エンデの使徒として生きたいと思います」

導師キールディン「よろしい」

何故だろう……。何故、私は……。あんなにも教団を抜けようと必死になったんだろう……。こうしてエンデの間に立ち、導師キールディンの言葉に耳を傾けると、まるで今までの事が悪夢のように思えてくる……。そう、悪夢の様に……。

導師キールデイン「アマリ・アクアマリン……。改めてあなたを藍柱石の術士に任命しましょう。あなたが自分だけのドグマを創り上げた事は報告で聞いています。その素質を日々の修練で開花させなさい」

アマリ「ありがとうございます、導師キールデイン。一つだけ質問をお許しください。ホープスは、どうなるのです？」

導師キールデイン「あれは教団が生み出した魔法生物です。あなたと同じく、この教団で生きる事こそが幸せなのです」

アマリ「ホープスの……。幸せ……」

導師キールデイン「あなたの修練によつては、あれと再会する事もあるでしょう。今は自らを見つめ直す事に集中しなさい。良いですか、術士アマリ？あの魔法生物とは決して会つてはなりませんよ」

アマリ「会えない……。ホープスに……。それは……」

導師キールデイン「後……。新垣 零……。彼にも会つてはなりませんよ」

アマリ「ど、どうして……！」

導師キールデイン「彼は異界人です。彼の存在はあなたの修練の集中の妨げになります」

アマリ「で、ですが、零君は……！」

導師キールディン「アマリ・アクアマリン……！」

アマリ「かしこまりました。藍柱石の術士、アマリ・アクアマリン…… 今日よりエンデの使徒として生きます」

導師キールディン「そうです。それがあなたの幸せであり、智の神エンデの望みでもあるのです」

…… 私はホープスに会いに、ホープスが創り出した空間にいます。

アマリ「ホープス……」

ホープス「マスター……」

アマリ「今までありますがどうございました。今日はあなたにお別れを言いにきました」

ホープス「そうですか……。その律儀な所がマスターらしいですね……。それよりも、零様の所へは行ったのですか？」

アマリ「私はもう彼に会いません……。会ってはいけません……」

ホープス「マスター……」

アマリ「もうそうやって呼ばれる事もなくなるんですね。少し寂しく思えます」

ホープス「では、アマリ様…… と呼ばせていただきますよう」

アマリ「.:」

ホープス「ご不満でしょうか？」

アマリ「そういうわけじゃないけど、変な感じがします。やつぱり.: マスターって呼ばれる方がいいみたいです。」

ホープス「お望みの名で呼ぶのは構いませんが、もう会う事はないのでしようね.:」
アマリ「そんな事はないと思います。導師キールデインも修練を積みさえすれば、またホープスに会えるとおっしゃってました」

ホープス「なるほど.:。マスターの素質を手放すのは惜しいと考えたようですね.:。しかし、そのマスターでもエンデの間で導師キールデインを前にすれば、抗う事は出来ませんでしたか.:。このような時に零様がいれば.:。」

アマリ「そろそろ行きますね、ホープス。ここに来ている事を導師キールデインに知られたら、また怒られてしまいますから」

ホープス「.:！」

アマリ「どうしたんです、ホープス？」

ホープス「マスター.:。では、あなたは導師キールデインに無断でここに来たのですね?。」

アマリ「う、うん.:。そう言われてみれば、そうでした.:。どうしよう.:。もし

ホープスに会っている事を知られたら、私……私……」

ホープス「フ……フ……フ……」

ほ、ホープス……？

ホープス「ハハハハハ！ハハハハハハハ！！？」

アマリ「ホープス！私が困っているのに笑うんですか！！？」

ホープス「これは失敬……。あの気弱で従順なマスターが導師キールデインの言い方に背いて私に会いに来た……。マスターの心は、やはり誰にも縛られない……。ならば、まだ希望は残されています」

アマリ「ホープス……？」

ホープス「ご安心を、マスター。あなたは私が必ず助けます。ですから、私と意識を一つにしてください」

アマリ「意識を一つに……」

ホープス「そうです。あの日……。私とあなたが初めて会った時のように」

結局、私とホープスはゼルガードに乗り込み、神殿から抜け出してしまいました……。

アマリ「ホープス……」

ホープス「情けない声を出さないでください。ここまで来れば、一安心でしょうから」

アマリ「…」

ホープス「先程、お話しした異界人召喚の真実…。シヨックだったようですね。ですが、教団の真の姿を知ってもらったためにも、必要な事だったのです」

アマリ「それもあるんですけど…。私…。また脱走しちゃったんですね。…」

ホープス「嫌でしたか？」

アマリ「ううん…。よくわからないけど、こうする事がやっぱり一番正しいと思います。でも、何故なんでしょう…。私…。導師キールデインを前にすると途端に何も考えられなくなってしまふんです…。やっぱり、幼い時からずっと尊敬している人をするすると緊張してしまうからなんでしょうか…。」

ホープス「幼い頃からですか…。」

アマリ「私が教団に初めて来た日…。その日も導師キールデインは優しい目で私を見て…。見て…。」

ホープス「どうしました？」

アマリ「その日の事が…。うまく…。思い出せないんです…。お父さんやお母さんと離れて教団の一員となった日…。すごく大事な思い出のはずなのに…。」

ホープス「お気を付けて、マスター。追いつかれたようです」

…え…！

現れたのはイオリ君の乗るディーベルと複数のディーンベル、そしてルーン・ゴーレムでした。

イオリ「見つけたぞ、背教者！」

アマリ「イオリ君……」

ホープス「董青石（きんせいせき）の術士、イオリ・アイオライトですか……。エンデの面をつけていない者に私のマスターを背教者呼ばわりされたくはありません」

イオリ「導師キールデインの指示だ。そして俺はらアマリの討伐隊長に任命された」

ホープス「（そのような事までしてマスターの精神に揺さぶりをかけるつもりですか……）」

アマリ「……」

ホープス「（そして、それは早速効果を発揮したようです。腹立たしい事に）」

イオリ「戻って来い、アマリ。今ならまだやり直しが利く。俺から導師キールデインに取りなす事も出来る」

アマリ「それは……出来ません」

イオリ「何故だ!? 導師の話では、お前は教団に戻る事を一度は承諾したと聞いたぞ！」

アマリ「教団に戻って導師の前に出れば、きっと同じようになってしま……。決心が

鈍ってしまうのならば、私は自分の心が納得するまで教団には帰りません……！」

イオリ「エンデに背を向ける事を認めるか！」

アマリ「それでも……」

ホープス「マスター……！」

アマリ「それでも私は行きます……！追って来たのが、誰であろうと！」

術士「正式採用に至らなかった中途半端なオート・ウオーロックで何が出来……！」

術士2「修行から逃げ出した者がエンデの面を授けられた我々の相手になると思いうなよ……！」

ホープス「追っては正規の術士が三名……。それぞれにルーン・ゴーレムが四体ずつ……。まともに戦っては勝ち目はないでしょう……！」

アマリ「……」

ホープス「気持ちを萎えさせるような事を言って申し訳ありません。ですが……」

アマリ「大丈夫です。自信がないのは、いつもの事です……。でも……！それでも進みます……！」

私はゼルガードにオドを収束させました。

アマリ「無理だとしても諦めきれないものがあるんです……！」

術士「あのオドの収束……！何なんだ……？奴の力……？それとも、あのオート・

ウオーロックの力なのか!?」

ホープス「（これは想定外の状況です…。あのイオリ・アイオライトの影響でしょうか…。だとしたら、導師キールデインの力を認めなければなりませんね）」

イオリ「残念だ、アマリ…。もう申し開きは出来ないぞ！」

アマリ「さようなら、イオリ君…。私は行きます…。私とホープスは、この旅を終わらせるつもりはないんです！」
私は戦闘を開始しました…。

戦闘から数分後…。

やはり、苦戦は強いられます…。

イオリ「なかなか粘るじやないか、アマリ」

アマリ「私は負けません！」

イオリ「： 来たか…。そう言えば、お前は追って来た奴が誰であろうと進むと言つたな？」

アマリ「はい…。」

イオリ「ならば、彼と戦えるのか？」

すると、シャイニング・ゼファイルスが現れました…。

零「… アマリ…」

アマリ「れ、零君… ！？どうして此処に！？？」

イオリ「俺が協力を申し出たんだ。背教者アマリを捕えるためにな」

零「…」

アマリ「そ、そんな…！」

零君まで… 私を…！

ホープス「今のマスターの心の支えである零様を使つて来ましたか…。何処までも

小癪な…。だが、教団は彼を舐めていますね…。」

零「悪いな、これが俺の決めた道なんだ…。覚悟してもらおう」

アマリ「れ、零君…！」

そして、ゼフィルスはクロスガンを構え攻撃しました…。

魔徒教団のオート・ウォーロック達に…。

―新垣 零だ。

俺はゼルガードを攻撃するかと見せかけ、オート・ウォーロック部隊に攻撃を仕掛けた。

イオリ「な、何をする!?？」

アマリ「零君……!?？」

零「何って……俺が依頼されたのは魔従教団の脱走者であるアマリ・アクアマリンの捕獲だ……。だが、目の前にいるのはエクスクロスの仲間のアマリ・アクアマリンだ」

術士「な、何っ!?？」

零「俺の捕獲対象である脱走者は既に遠くへ逃走したと見る。そして、俺はセルリックさんに言っただけ……。アマリが傷つくような事があればお前らでも許さないと」

術士2「我等、魔従教団に歯向かうと言うのか！」

アマリ「そうだよ！こんな事したら……。エクスクロスは……！」

「……。自分の今の状況がわかってんのかよ……。他人の心配をしやがって……。」

零「エクスクロスは関係ない。何故なら、イオリ・アイオライトは俺個人に依頼して来たから」

イオリ「くっ……！新垣 零……！」

ホープス「流星は零様です」

零「やっぱり、お前には見抜かれていたか、ホープス」

ホープス「マスターにベタ惚れのあなたがマスターを裏切るはずがないと思っただけです」

アマリ「え…？？」

零「それ以上口を開くな、腹黒オウム！」

ホープス「これは失敬」

ホープス野郎…これが終わったら、焼き鳥にしてやる…！

イオリ「ならば、お前も我々の敵だ！新垣 零！」

零「アマリは渡さない！絶対にだ！行くぜ、アマリ！」

アマリ「ええ…。零君、私に力を貸して！」

零「当たり前だ！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「（これで俺達はエクスクロスには戻れないかもしれない…。だが、何かあつても俺がアマリを支える…！）」

戦闘から数分後の事だった。

ホープス「マスター…。零様…。シグナスとハンマーヘッドがいらっしやいました」

アマリ「えっ!?」

やっぱり、教団の協力者として俺達を…!

アマリ「倉光艦長!名瀬リーダー!どうして、ここに!?」

零「…俺達を捕らえに来たんですか?」

名瀬「おいおい、何仲間を警戒してんだよ、零」

倉光「きつとアマリ君と零君が困っていると思つてね。迎えに来させてもらった」

アマリ「でも…ご迷惑をおかける事に…」

オルガ「気にすんじゃないよ。動いたのはシグナスとハンマーヘッドだが、これはエクスクロスの総意だ。お前らだつて、仲間が困つていたら、余程の事が無い限り、助けに行くだろ?…つて、零の場合は余程の事とか関係なく、助けに行くけどな」

零「うっせえよ、団長。だけど、教団と敵対する事はその余程の事だと思えますが…」
名瀬「エクスクロスは異界人の集まりだ。それにシバラクの旦那達もとりあえず、納得してくれているからよ」

倉光「早い話、余計な遠慮はしないでもらいたいな」

アマリ「ありがとうございました!」

零「すみません、疑つてしまつて…」

オルガ「全くだぜ」

倉光「うんうん…… やつぱり、アマリ君は笑顔の方が似合うよ」

零「あ、それわかります」

アマリ「ちよ、ちよつと……！」

レーネ「自重を、二人共。この通信…… 全員が聞いているのですから」

え…… マジで……？

ホープス「御言葉ですが、レーネ様。マスターの笑顔の愛らしさは既に周知の事実です、今更の話です」

アマリ「え…… ええ…… 何？！」

ホープスの奴…… 何か変わったか？

まゆか「ホープスったら！」

アネッサ「珍しいね……。ホープスが手放してアマリさんの事を褒めるなんて」

アミダ「だが、約一人不機嫌になっている子もいるけどね」

メル「……」

零「め、メル……？」

メル「知りません」

零「何で怒ってんだよ？！」

箒「(メル、頑張れ……！)」

イオリ「茶番を……！」

イオリの乗るディーンベルはシグナスとハンマーヘッドに攻撃を仕掛けた……。

ビスケット「魔徒教団は僕達に攻撃を開始しました！」

倉光「和やかな雰囲気を持ち込んで、なあなあで終わらせたかったのだけど、うまくいかないね……」

名瀬「だが、こちらでも覚悟を決めている。各機、出撃だ！」

オルガ「機動部隊各機は発進してくれ！」

そして、みんなが出撃した……。

倉光「事前のブリーフィングで言った通りだよ。僕等の目的は、この場をなるべく穏便に収める事だ」

青葉「言いたい事はわかるけど、この状況で、どうしろってんだよ！」

アルト「とりあえず、呼びかけを試してみる！戦いをやめろ！こっちは……」

イオリ「黙れ！背教者をかくまう邪悪の手先め！」

スカーレット「どうやら、奴等からしたら私達は悪党と同じな様だな」

チャム「こわい……」

シヨウ「どうした、チャム？」

チャム「あの人……まるでトッドみたい……」

エレボス「言われてみれば……！」

マーベル「アマリと零への憎しみで暴走しているって事？」

チャム「う、うん……」

エイサツプ「ならば、取り返しのつかない事になる前に止めるしかないですよ！」

アマリ「やめてください！」

ジユドー「やめてって……言われても……」

アマリ「イオリ君は……本当は優しい子なんです！」

アマリ……

パトリック「何言ってるんだよ！あいつ、マジでお前の生命を狙っているみたいなんだぜ！」

ハカセ「昔の仲間を庇いたい気持ちはわかるけど、今はこの場を切り抜ける事を考えようよ！」

ホープス「皆様の言う通りです、マスター。イオリ・アイオライト……あれはあなたの敵なのです」

アマリ「……」

ワタル「アマリさん……」

シン「もうこれはあなただけの問題じゃないんです……！奴等は俺達も標的としてい

ます！」

ステラ「アマリを泣かせるのは許さないから！」

マサキ「俺もやってやるぜ！ホープスにサイバスターを調整してもらった恩もあるしな！」

ロザリー「い、いいのかよ……。本当に教団と戦って……」

幻龍斎「むうう……。これはまずい……。きつとまずい……」

シモン「腹をくくるぞ！後は艦長さん達が何とかしてくれる！」

サラ「それでもダメなら、ルルーシユ君に口で丸め込んでもらおうよ！」

ルルーシユ「期待してくれていい。だから各機は、今この瞬間の事だけを考えろ！」

イオリ「アマリ……。！お前は異界人をたぶらかして！許さない……。！お前は背教者であり、このアル・ワースの秩序を乱す者だ！」

アマリ「さようなら、イオリ君……」

イオリ「アマリ！」

アマリ「私は……。私の求めるもの……。自由のために戦います！たとえ、それが見果てぬ夢だとしても！」

零「そう言う事だ、アマリは諦めろ！イオリ・アイオライト！」

イオリ「黙れ、新垣！アマリをたぶらかした害虫が！」

零「今度は害虫呼ばわりかよ……。アマリは自分自身の意思でこの道を選んだんだ！俺はアマリの夢を手伝うだけだ！」

アマリ「ありがとう、零君……」

イオリ「アマリ……。何故だ、何故、俺を見てくれないんだ……！」

零「アマリの言葉に耳を傾けようとしてもしないのにアマリを振り向かせると思うなよ！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　ユイVS初戦闘〉

ユイ「……」

レナ「ユイ、戦えるの……？」

ユイ「うん、魔徒教団とは戦いたくなかったけど……アマリさんを苦しめるなら私は戦う！」

レナ「私もだよ、ユイ！」

〈戦闘会話　サラVS初戦闘〉

ティア「こんな事になるなんて、思わなかったね」

サラ「アマリちゃんを助けるためだよ、ティア!行くよ!」

ティア「うん!」

〈戦闘会話　メルVS初戦闘〉

メル「私はオニキスだった身…。それをアマリさんも受け入れてくれました…。今度は私がアマリさんを受け入れる番です!」

〈戦闘会話　零VSイオリ〉

イオリ「新垣、此处で引導を渡してやる!」

零「アマリの道の邪魔はさせないぜ、イオリ・アイオライト!」

イオリ「お前を倒し、アマリは必ず連れ戻す!」

零「力づくつてのは悪くねえな…。だが、あいつは俺が守る!」

ゼルガードの電光切禍でイオリの乗るディーンベルに大ダメージを与えた。

イオリ「どうしてだ、アマリ!?!何故、俺を受け入れてくれない?!?」

アマリ「イオリ君…」

イオリ「手に入らないなら、俺は……俺は……！」
イオリの乗るディーンベルは撤退した……。

アマリ「違うの、イオリ君……。（私の記憶の中のあなたは……今のあなたじゃない……。そして……私も私じゃない……）」

ホープス「藍青石の術士、イオリ・アイオライト……。あの男は……危険ですね……」
アマリ「ごめんなさい……」

ホープス「割り切ってください、マスター。でなければ、死ぬのはあなたです」
アマリ「でも……」

ホープス「（いつまでもグジグジと……。この人は、いつもいつも私に世話を焼かせて……！）」

迷う事はダメな事じゃないけど……アマリの場合には……。

シーブック「大丈夫だ、アマリ。術士達は、ちゃんと脱出している」

シノ「向こうが力づくで来たから応戦したってちゃんと弁護するからよ」
アマリ「……」

アイーダ「今はそつとしておきましょう」

アキト「まずはこの場を離れよう」

アムロ「ああ。その上で他の艦と合流しよう」

ロザリー「あたし達……これから教団に追われる身になるのか？」

クリス「こんな事になるのなら、アルゼナルにいた方がマシだったよ……！」

一夏「クリス！」

クリス「で、でも……一夏君……！」

アマリ「……ごめん……なさい……」

零「アマリ、気にするな。お前が悪い訳じゃない！」

ノブナガ「皆、おのれで決断した事だ」

アマリ「……」

今は何を言っても届かないか……。

ホープス「(イオリ・アイオライトを倒したのは逆効果だったようです……。もうこれ

は……限界かも知れませんか……)」

っ！魔徒教団の増援……？

てか、あのディーンベルは……！

セルリック「そこまでだよ、アマリ・アクアマリン」

アマリ「法師セルリック……！」

セルリック「残念だよ、藍柱石の術士……。教団の教えに背き、さらには追っ手に反抗

した君は完全な背教者となった。せめてもの情けは私の手で罰を与える事だけだろう」

零「ま、待つてください、セルリックさん！」

セルリック「口を挟まないでください、零さん。これは我々の問題です」

ホープス「マスター！ここは逃げましょう！」

アマリ「でも……！」

零「俺達の事は良いから逃げてくれ、アマリ！」

ホープス「零様の言う通りです！エクスクロスの皆様に迷惑をかけたくなければ、逃げるしかありません！」

アマリ「……わかりました」

セルリック「逃しはしないよ」

なっ：： ！！？セルリックさんのディーンベルがゼルガードに追いついただと：： ！！

？

そのまま、ゼルガードはセルリックさんのワース・ディーンベルの攻撃を受けた。

アマリ「ああっ！」

零「アマリ！……セルリックさん、お願いです、俺達の話聞いてください！」

セルリック「……」

聞く耳持たずかよ……！

ホープス「やむを得ません……。逃げられないのなら、こちらの最大のドグマをぶつけ

るまでです。さあ、マスター。あなたの全力を見せてください」

アマリ「は、はい……！法師セルリック……！申し訳ありません！」

ゼルガードは電光切禍でワース・デインベルに攻撃を与えたが……。

セルリック「力の差は歴然だ」

う、嘘だろ……!?

アマリ「効いて……いない……」

セルリック「いいドグマだ。君一人でこれを創り上げた事は驚嘆と賞賛に値するよ。

私の魔法障壁が相手でなければ、それなりの効果を与える事も出来ただろうに。だが、

この程度で私に詫げる事はなかったね」

ま、まずい……！

零「セルリックさん……やめてください……やめろおおおつ!!?」

ワース・デインベルはゼルガードに攻撃を仕掛けた。

セルリック「残念だよ、藍柱石の術士。伝説のドグマを見せよう」

ワース・デインベルの周りにいくつもの魔法陣が発生した。

セルリック「さあ……消滅の儀式だ」

魔法陣から無数の光弾が放たれ、ゼルガードに襲いかかった。

セルリック「これがEXHALTだ！」

そして、最後に巨大な魔法陣でゼルガードを包み込み、爆発させた。
アマリ「きやあああああつ!!？」

今の攻撃を受けたゼルガードは大ダメージを受けた。

零「アマリイイイツ!!？」

メル「アマリさん！」

ゼロ「魔法を使えない俺達でもわかる……」

アーニー「あの人の魔法……桁違いだ……」

セルリック「これで少しはわかっただろうね。教団に従わない君がどれだけ哀れ多い事をしているか」

アマリ「あ…… ああ……」

セルリック「…… 見せしめの意味もある。君には、もう少しだけ怖い目に遭ってもらう」

な、何だと……！

ホープス「お待ちください」

…… ホープスがワース・ティーンベルの中に移動した……？

ホープス「私は投降します」

…… は……？

アマリ「ホープス！」

ホープス「申し訳ありません、マスター。ですが、私は死というものを恐れています。故に法師セルリック・オブシディアンと行かせていただきます」

アマリ「ホープス：：。ホープス：：。いやあああああつ!!？」

あ、アマリ：：！

セルリック「かわいそうに：：。肉体の前に精神が死んだようだね。では、彼女を連れて行くでしょう」

ホープス「お好きにどうぞ」

：：。ホープス、てめえ：：。！

ホープスの言葉に俺の何かが切れた。

零「ぎげんな：：。」

ホープス「零様：：。？」

零「ふつぎげんなあああああつ!!？セルリック！ホープス！てめえらはだけは許さねえぞ!!？」

俺はバスタードモードを発動させて、クロスソード・バスタードモードでワース・デインベルに斬りかかる。

しかし、その攻撃も魔法障壁で防がれるが：：。

セルリック「無駄です」

零「無駄じゃねえ……！世の中に無駄な事なんてねえんだよ!!？」

痛む身体を抑え、俺はバスタードモードの出力を上げる。

零「ぐっ……ううううっ……！」

すると、ワース・ディーンベルの魔法障壁にヒビが入った。

セルリック「……！馬鹿な……！」

ホープス「(零様……あなたは……！)」

零「ぐっ……だあらあああああつ!!？」

俺は魔法障壁を完全に叩き割った。

零「喰らええええつ!!？」

再度、ワース・ディーンベルに攻撃を当てようとしたが……。

ゼフィルスが動かなくなってしまった……。

零「な……え……ゼフィルス……!!？」

セルリック「……ふ、ふふふ……驚きましたが、どうやら、その機体の方が耐え切れ

なかったようです。私の魔法障壁を破った事に賞賛を送りましょう、新垣 零さん」

零「っ……！」

セルリック「落ちなさい」

ワース・デーインベルのドグマを攻撃を防ぐ事も出来ずに俺とゼフィルスは受けてしまった……。

零「うわあああああつ!!?」

ゼフィルスは爆発して、俺とゼフィルスは地面に叩きつけられた……。

ヒルダ「零イイイイツ!!?」

零「……が……ガハツ……!」

セルリック「あなたは強者でしたよ、新垣 零さん」

アマリ「れ、零君……!」

セルリック「では、諸君……。藍柱石の術士を取り押さえてくれ」

他のデーインベルがゼルガードを取り押さえた。

セルリック「エクスクロスの皆さん……」

アンジユ「よくも、アマリと零を!」

ヒルダ「魔徒教団だろうと許さねえ!」

リデイ「次の標的は俺達か……!」

セルリック「誤解なさらないでください。あなた方は藍柱石の術士にそそのかされたと聞いております。彼女が捕らえられた今、これ以上の戦いは双方のためにならないでしょう」

マーベラス「……」

バナージ「……」

セルリツク「教団はあくまでもあなた方を同志であると考えています。今後の事もありません。まずは今一度、神殿に戻っていただき、お話をしたいと思います」

ルルーシユ「倉光艦長……名瀬リーダー……」

倉光「……受け入れるしかないだろうね、これは」

名瀬「仕方ねえ、な……」

オルガ「兄貴……」

セルリツク「ありがとうございます。あなた方とは良い関係を築けそうです」

零「……ぐっ、ガッ……！」

今になって、バスタードモードの痛みが……！

だが……アマリは、俺が……守るって……！手を伸ばすって……決めたんだ……！

零「ま、まだ、だ……！」

ホープス「零様……！」

俺はダメージを受けたゼフィルスを動かし、ワース・デインベルの前に立った。

零「まだ……終わってねえぞ……！」

セルリツク「あなたもわからない人ですね」

一夏「もうやめろ、零！」

ユイ「このままでは、あなたが死んでしまいます！」

零「お、れ……は……！」

三日月「……」

すると、バルバトスルプスが俺を取り押さえ、地面に叩きつけた。

零「ガッ……」

ジュリエッタ「三日月さん……何を……」

三日月「零、耐えるんだ……。アマリを助けたいのなら……」

零「みか、づき……！」

三日月「これ以上……メルやみんなを悲しませるな」

零「……くつ、そお……！」

刹那「零……」

ワタル「アマリさん……」

甲兎「ホープス……！あいつの裏切りさえなければ……！」

ホープス「（やはり残念な結果で終わりましたね、マスター……。これも運命というも

のでしょう……）」

くそッ……くそッ……！

零「ぐっ… うああああああつ!!？」
アマリを救えなかった無力さを知り… 俺は痛む身体を忘れて叫んだ…。

ーホープスです…。

私はエンデの間で導師キールデインと話をしています。

導師キールデイン「… よく戻ってくれたね、ホープス」

ホープス「…」

導師キールデイン「魔法生物は最初につけられた名前を変える事は出来ない故、私もそう呼ばせてもらおう」

ホープス「構いませんよ。マスターが私に与えてくださったものですし」

導師キールデイン「随分とアマリ・アクアマリンを気に入っているようだね…。彼女の中に教主の可能性を見たのかな？」

ホープス「… マスターは… アマリ・アクアマリンはどうなるのですか？」

導師キールデイン「君が望むのならば、教団でその素質を伸ばすように教育しようもつとも… 若干の調整は必要になるだろうけどね」

ホープス「そうですか…」

導師キールディン「今日まではワガママを許したが、そろそろ自重してもらいたいな。では、時が来るまでその身体を楽しんでくれ」

そう言うのと導師キールディンは立ち去った……。

ホープス「……ワガママ……ですか……。それこそが生命の意味だと思うのですがね……。(翼を持ちながら自由などない、この身……。ですが……)」

その後、私は魔法空間を創り、ルルーシユ様、ノブナガ様、ネモ船長をお呼びしました。

ルルーシユ「……」

ノブナガ「……」

ネモ船長「……」

ホープス「私の招集に応じてくださいました事をお礼申し上げます。所で、零様は容体はどうですか？」

ノブナガ「ひどい傷で、しばらくは目を覚まさないようだ」

ホープス「そうですか……」

ルルーシユ「俺達を選んだ意味は？」

ホープス「エクスクロスの中であなた方ならば、きっと私の期待に伝えてくださると判断したからです」

ネモ船長「君は……人の心を読むのに長けているようだな」

ホープス「私の趣味のようなものです。気に障りましたら、お詫び致します」

ノブナガ「フ……ネモ船長とルルーシユが俺と同じ思いを抱えていたとはな……」

ルルーシユ「それはこちらの台詞だ」

ネモ船長「人には誰しも過去がある……。そして、そこから生まれた想いは何者の干渉をも受け付けぬ強さを持つものだ」

ルルーシユ「詮索はしません。ですが、船長のおっしゃりたい事は理解できるつもりです」

ノブナガ「俺も同等の答えだ」

ネモ船長「助かる……。では、ホープス……。話を聞こう」

ホープス「これより、あなた方にはある情報をお渡しします。あなた方ならば、これを有効に使つてくださると信じております」

これが吉と出るか、凶と出るか……。それはわかりかねませんが……。

第36話 自由という翼

―氷室 弘樹だ。

俺達は首領に集められた。

? 「よく集まってくれた」

弘樹 「来なかったら文句言うくせによ」

カノン 「首領様、何かご用ですか?」

? 「エクスクロスは現在、魔徒教団の神殿にいるようだ」

ギルガ 「エクスクロスは魔徒教団と手を結ぶ気か?」

? 「その逆だ: :。エクスクロスは魔徒教団と戦闘をしたようだ」

アスナ 「アル・ワースの法と秩序を守る魔徒教団に彼等も敵対するなんてね: :」

弘樹 「敵対理由は何だ?」

? 「どうやら、アマリ・アクアマリンが関係しているみたいだ。彼女は教団から背教

者の烙印を押されたみたいだ」

弘樹 「アクアマリンが: :」

!? 「?」

？「その戦いの最中、アマリ・アクアマリンは法師セルリック・オブシディアンのドグマによって敗北し、捕らえられ、それを助けようとした新垣 零も大ダメージを負った」

弘樹「なんだと…?!?」

アスナ「あ、あの新垣 零が…!」

？「このままではエクスクロスは魔徒教団の力によって取り込まれるであろう」

ギルガ「それで僕達はどうすればいいのですか？」

？「エクスクロスと共に魔徒教団を討つ」

カノン「エクスクロスと共にですか?!?」

アスナ「御言葉ですが、首領様…。エクスクロスが私達を受け入れるとは思えません
が…」

？「だが、今のエクスクロスではセルリック・オブシディアン率いる魔徒教団には勝
てないであろう」

ギルガ「では、あのエクスクロスに恩を売ると言うのですか…?」

？「不満か、ギルガ・カルセドニー？」

ギルガ「…あの新垣 零に恩を売るのは…」

？「…前回のブラックホールキャンオンを無断で使用したお前の罪を消したのは誰だ

「？」

ギルガ「……！」

？「今すぐ牢屋行きでもいいのだが？」

ギルガ「わ……わかりました……」

弘樹「自業自得だ」

ギルガ「黙れええええつ!!？」

？「騒ぐな。氷室 弘樹。新垣 零を助け出す事はお前も本望のはずだ」

弘樹「……あいつは俺の手で倒す……ただそれだけだ」

？「ジン・スペンサー、アユル・デイルン……。お前達にも手伝ってもらう」

ジン「良いだろう、アーニー達を失うのは俺達も望む所ではない」

アユル「わかりました」

？「では、行ってもらおう。(新垣 零……。まだお前を失うわけにはいかないの

だ……。だから、必ず生きろ……)」

零……。勝手にくたばったら承知しねえぞ……！

「アマリ・アクアマリンです……」

私はエンデの間に連れてこられました……。

アマリ「……」

導師キールディン「……これは査問ではない。背教者の裁判だ」

アマリ「……」

導師キールディン「アマリ・アクアマリン……。最後に何か言いたい事はあるか？」

アマリ「……導師キールディン……。智の神エンデとは……。何なんです……？」

導師キールディン「教義の最初の1ページすら、忘れるとはな……。アル・ワース創世の神にして、ドグマという形で自らの智を我等に与える者……。それこそがエンデ……」

アマリ「……創世の神ならば、私の自由を……。私の大切なものを……。大切な人を奪う権利があるのですか？」

導師キールディン「アマリ・アクアマリン……」

アマリ「教団を離れた私は、自分の魔力が弱まった事を感じました……」

導師キールディン「エンデの加護を失ったのだ。当然の事だろう」

アマリ「ですが、ホープスがいれば、私はドグマを使えました」

導師キールディン「……」

アマリ「そして、教団に戻り、ホープスと引き離され、このエンデの間で導師の前に立った時……。私はエンデの存在と、それが自分に侵食してくる事を感じました……」

導師キールデイン「神の存在を、その身で感じるとはな……」

アマリ「エンデが入ってくる感覚……。それは至福どころか、おぞましいものでした……。そして、エンデに心を奪われた私をホープスは助けてくれました。その時、私は理解したんです。私の記憶……。教団で過ごしてきた日々が偽りであった事を」

導師キールデイン「圧倒的な力を見せつけられ、信じていた者に裏切られ、挙げ句の果てには愛する者を目の前でボロボロにされたというのに……。絶望に震えていた気弱で従順な少女……。だが、その心は折れてはいなかった。魔法生物は、この少女の胸の奥に眠るものに懸けたのか……。これは……。荒療治が必要だろう……」

アマリ「さらにホープスは教えてくれました。異界人の召喚は、教団がやった事であるのを。教団は呼び寄せた異界人をドアクダーやオリユンポスと戦わせるために戦力にしようとしたんですね？」

導師キールデイン「……」

アマリ「ミスルギに取り込まれた者もいましたが、結果的には、目論見通り、エクスクロスのような力が生まれました……。と言うより教団は悪と戦う意思を持った人間を選んで呼び寄せたと推測します。違いますか？」

導師キールデイン「そうだ……。だが、一つだけ違う事がある」

アマリ「え……？」

導師キールデイン「お前が愛する新垣 零という男…彼を呼んだのは我々でもドアクダーでもミスルギでも、オリユンポスでもない」

アマリ「そ、それはいったい…?!?」

導師キールデイン「それはまだわからない。だが、これだけは言っておく。新垣 零…彼と関われば確実にお前は絶望を見るであろう」

零君と関われば…絶望を見る…?!?

導師キールデイン「彼は異常なのだ」

アマリ「異常なのは教団です！教団は、今すぐ異界人を元の世界へと返し、戦いの拡大を食い止めるべきです！」

導師キールデイン「嘆かわしい…。魔法生物に惑わされたか…」

アマリ「…法と秩序のために戦ってきた教団の全てを否定するつもりはありません。ですが、私は…教団を信じる事は…」

導師キールデイン「自分の心を偽るな」

アマリ「え…」

導師キールデイン「口では、そう言いながら、お前は心の中ではエンデを信じ、教団に救いを求めている。その証拠にお前は、先程の異界人召喚の真相をエクスクロスには話していない」

アマリ「それは混乱を避けるためで……」

導師キールデイン「違う！お前は智の神エンデの使徒として、魔徒教団を信じているからだ！そして、あの魔法生物に裏切られた今、心はエンデを求めている！」

アマリ「そんな事は……」

導師キールデイン「断じて言おう！お前の心はエンデのものだ！」

アマリ「やめて……ください……」

導師キールデイン「教えてやろう、アマリ。異界人の召喚は、お前の言う通り、魔徒教団がやった事だ。だが、それは……アル・ワースを存続させるために必要な事だったのだ」

アマリ「アル・ワースを……」

導師キールデイン「教団の否定は、アル・ワースの滅びを意味する。それともお前は世界を滅ぼしたいのか？」

アマリ「そ……それは……」

導師キールデイン「かわいそうに……。藍柱石の術士、アマリ・アクアマリン……。もう何も考えなくていい。お前の心の不安はこの私が取り除こう……」

アマリ「！」

導師キールデイン「智の神エンデの名の下、アマリ・アクアマリンに祝福を……」

こ、この力は…… エンデが…… また…… !
助けて…… 零、君…… !

―新垣 零だ……。

俺は暗闇の中にいた……。

そして目の前にはアマリの姿があつたが……。

アマリ「零君……」

零「アマリ…… !」

悲しそうな表情で俺を見てくるアマリの服装はいつもの服とは違い、イオリ・アイオライトと似たような服を着ていた。

すると、アマリはだんだん俺から遠ざかっていく。

零「あ、アマリ！」

俺は遠ざかるアマリを追いかけるように走り出す。

だが、いつまで走ってもアマリには追いつけなかった。

零「はあ…… はあ…… ! 待ってくれ…… 待ってくれ、アマリ！」

すると、アマリの両側にイオリ・アイオライトとセルリツクの姿が現れ、不敵な笑み

を向けながらこつちを見ていた。

イオリ「新垣！これでアマリは俺達のものだ！」

セルリック「君では……彼女は愚か誰も守れないのだよ」

零「待て……！アマリを……アマリを連れて行かないでくれ……！待て!!？」

アマリ「零君……」

零「アマリ……！」

アマリ「ごめんなさい……。さようなら……」

そして、アマリは二人と共に消えた……。

零「アマリ……！アマリイイツ!!？」

アマリの名を叫んだ瞬間、俺は躓き、こけてしまった……。

零「くそツ……！クソツ!!？」

？「……たくつ……女々しい奴だな……」

零「！」

突然、声が聞こえ、俺は振り返るとそこにはもう一人の俺がいた。

零「お、俺……？お前はいつたい……？」

零？「見ての通りだ。俺はお前だ！……んっ？お前が俺か……？え、あれ……？やや

こしいな……」

何を言っているのかわからず、俺は首を傾げながら立ち上がった。

すると目の前の俺はため息を吐き、口を開いた。

零「さつきから見ていたが……アマリ、アマリ、アマリ……いい加減ノイローゼになりそうだぜ……」

零「……わ、悪い……ん？つて！何で俺が謝らないとダメなんだよ！！？」

零「お前が悪いからだよ。あの女にお前が惚れている事はわかる……。魔徒教団にあいつを取られたくなくけりやもう一度奪い返せばいいじゃねえか」

零「簡単に言うなよ……。セルリックの力は強大だ……。俺じゃあ……奴には……」

零「はあ……。だから、女々しいんだよ、お前は……。歯あ食いしばれよ！」

零「え……。ぐはっ！！？」

突然、目の前の俺が殴ってきた。

そのまま倒れる俺の胸倉を掴み、無理矢理立たせた。

零「何すんだよ！！？」

零「ちつたあ目が覚めたか？アアツ？」

零「な、何がだよ……！」

零「お前は一人で教団と戦って、アマリ・アクアマリンを救い出す気なのか？」

零「……！そ、それは……」

零? 「お前には…… エクスクロスっていう仲間がいんだろうが! 奴等と力を合わせれば、アマリ・アクアマリンをも助け出せる!」

零 「……」

零? 「アマリ・アクアマリンを大切な仲間だと思っっているのはお前だけじゃねえって事だ」

零 「お前……」

零? 「だからよお…… 辛い時や困難な時は仲間を頼れ。エクスクロスは物好きな奴等ばかりだろ? お前の頼みを断る奴等はいねえ……。それでもアマリ・アクアマリン救出の邪魔をエクスクロスがするのなら……」

零 「……うるせえよ……」

零? 「…… あ?」

零 「その覚悟はできている……。例え、エクスクロスが教団と手を取り合ったとして、俺の敵になろうとも…… 俺はアマリを救い出すために闘う」

零? 「ほう?」

零 「例えどんなに生き血を啜ってもな」

零? 「それがお前の強さか……。ちったあマシな顔になったじゃねえか……。ちつ、そろそろ時間か……」

すると、俺の視界がボヤけてきた……。

零? 「お前の選んだ道……俺も見続けてやる……。必ず、アマリ・アクアマリンを助け出せ……。またな、相棒」

そして、俺は光に包まれ、目を覚ますと目の前には心配そうな表情をしている山田先生の姿があった。

零「……山田、先生……?」

摩耶「新垣君! 気がつきましたか!?」

零「は、はい……。此処は……?」

摩耶「プトレマイオスの医療室です」

零「俺が気を失った後の状況説明をお願いしてもいいですか?」

痛む身体に顔を歪めながら、俺はベットの所で座り込む。

摩耶「新垣君が気を失った後、アクアマリンさんは魔徒教団の方々に連行されてしまいました」

零「エクスクロスのみんなは……?」

摩耶「今、艦長の方々とルルーシュ君、ノブナガさん、ミツヒデさん、霸道さん、織斑先生とヒュウガ船長、イツカさんがオブシディアンさんと今後についての会議を行っています」

本当にエクスクロスは魔徒教団と手を結ぶ気なのか……？

零「それにしても……俺、どれぐらい気を失ってました？」

摩耶「丸一日ぐらいですわね」

零「ま、丸一日……」

通りで腹が減るわけだ……。

摩耶「……ごめんなさい」

零「え……」

な、何で山田先生が謝るんだよ……？

摩耶「私は大人なのに……戦う事も出来ません……」

零「……それでも、山田先生はずっと俺の看病をしてくれました。ありがとうございます。ありがとうございます。」

摩耶「新垣君……」

零「戦う事だけが誰かの役に立つ事じゃない……。山田先生も俺達の掛け替えのない

仲間ですよ」

摩耶「……ありがとうございます！」

零「いえいえ……。さてと、まだ会議はしていますかね？」

摩耶「え？はい」

俺は痛む身体に鞭を指して、ベットから降りた。

摩耶「だ、ダメですよ、新垣君！まだ安静にしていなと！」

零「……行かせてください。俺もエクスクロスのメンバーです……。会議に参加する権利はあると思います」

摩耶「……無茶はしないでくださいね」

零「了解しました」

俺は山田先生と共にみんなの元へ向かった……。

そう言えば、あの時出てきたもう一人の俺はいったい何だったんだ……？ 夢、だったのか……？

ー ルルー シュだ。

俺達はセルリックと今後についての話をしていた。

セルリック「……では、今後もドアクダー軍団とオリユンポスの打倒についてのご協力をお願い致します」

ドニエル「了解です。こちらでも情報が入り次第、ご連絡します」

ルリ「その代わりと言っては何ですが、私達の元の世界への帰還についてもご協力を

お願いします」

セルリック「お任せください。ご存知の通り、教団も異界の門を開く実験は進めております。ドアクダーが打倒され、神部七龍神の力が元に戻れば、彼等と協力してきつと皆さんを元の世界へ戻す事もできましょう」

倉光「これでミスルギと戦っているアメリカ軍と自由条約連合も安心すると思いません」

セルリック「ところで：：Nーノーチラス号の責任者の方はいらつしやらないのですか？」

ルルーシユ「ネモ船長の代理には俺とノブナガ公として出ている」

スメラギ「(ネモ船長とノブナガとルルーシユ：：昨夜は遅くまで打ち合わせをしていたみたいけど：：)」

名瀬「(あの三人が組むと何となく不穏な空気を感じる：：。気のせいだと思いたいけどな：：)」

セルリック「では、今後ともよろしくお願い致します。こちらを発たれる際には私もお見送りをさせていただきます」

ルリ「所で零さんに対しての謝罪の言葉はないのですか？」

セルリック「彼が挑んできて返り討ちにした：：。それだけの事です」

ノブナガ「だが、貴重な戦力に傷をつけられた事には腹立たしいがな」
セルリック「では、申し訳ありません」

ヒュウガ「本当にそう思っているのですか!?!?」

千冬「落ち着いてください、ヒュウガボス」

ヒュウガ「…すまない」

零「…謝罪の言葉は必要ありませんよ。戦場で起こった事なんですから」
そこに零と山田先生が来た…。

―新垣 零だ。

俺は山田先生に支えられながら、会議の場所に来た。

ヒュウガ「零!」

號「来て大丈夫なのか…?」

零「大丈夫ですよ、これぐらい」

千冬「摩耶! 何故、零を連れてきた!?!?」

摩耶「新垣君の覚悟は止められないです」

千冬「摩耶…」

セルリック「ご無事そうで、何よりです、零さん」

零「… アマリに会わせてください」

セルリック「彼女は背教者です。私達の方で責任を持って処分を下します」

ルルーシュ「それについては何とかならないのか？」

スメラギ「魔徒教団の教えに背いたのであれば、除名といった処分は仕方ないと思います」

倉光「しかし、彼女は悪事を働いたわけではありません。追放という形でも構いませぬので、このまま私達と行かせてもらえないでしょうか？」

セルリック「皆様のお気持ちは彼女に伝えましょう。ですが、事は教団の問題ですので、こちらにお任せください」

スメラギ「やっぱり、無理ですか…」

零「… ルルーシュ、エクスクロスは本当に魔徒教団と手を取り合うんだな？」

ルルーシュ「ああ」

やっぱりか…。

零「… そうか。皆さん、誠に勝手ですが… 俺はエクスクロスを抜けます」

千冬「な、何を言っているんだ、零!?!」

ドニエル「自分の言っている事がわかってるのか!?!」

零「… ええ。みなさんには本当にお世話になりました…。ですが、俺は未だに魔徒教団を信じる事はできません…。信用していかない者がいない方がいいでしょう」

スメラギ「あなたの言っている事は正しいけど…。！」

零「… このままエクスクロスが教団の犬に成り下がるぐらいなら…。俺はいたくありません」

オルガ「何だと…。？」

名瀬「今の言葉は聞き逃せないな、零」

零「事実でしょう？セルリックのドグマの力を恐れ、手を取り合うしか道がないと思っただけでしょう？」

ドニエル「そ、それは…。！」

倉光「零君、すこし言葉が過ぎるんじゃないかい？いくら君でも許す事はできないよ」

零「…。」

皆さん「… すみません…。」

ルリ「早い話…。何が言いたいのですか？」

零「… 俺は必ずアマリを助け出すと決めました…。例え、魔徒教団がそれを拒もうと…。」

瑠璃「… 魔徒教団を…。アル・ワースの全てを敵に回す気ですか？」

零「そう言っている。エクスクロスが教団の味方となり……俺の邪魔をするなら……俺はエクスクロスとも戦います」

セルリック「ほう……」

ルルーシュ「それは俺達、エクスクロスへの宣戦布告とも受け取っていいのか？」

零「……構わない。魔王だろうが、地獄だろうが……破壊王だろうが……俺は負けない」

摩耶「新垣君……」

すると、ノブナガが動き出し、刀を抜いて、俺の首元に刀身を当てた。

ミツヒデ「ノブ……!!?」

零「……何の真似だ？」

ノブナガ「……ならば、此処で切り捨てられる覚悟もあるのか？」

零「……俺の覚悟を甘く見るな」

倉光「(零君……君はそこまでアマリ君のことを……)」

零「……斬るなら斬れ……。だがな……!」

俺は二本の指をノブナガの両目の目の前まで持っていく。

零「俺を斬る前にお前の両目を貫くがな」

ノブナガ「俺に脅しが通じない事はお前も知っていよう」

零「なら斬れよ……。俺も動じないからよ」

ノブナガ「……」

零「……」

ノブナガ「……ふっ……。フハハハハハッ!!？」

零「何笑つてんだよ……？」

ノブナガ「そうかそうか……。！ハハッ……。良き覚悟だ！俺の負けだ、零」

ノブナガ……。

笑いながら、刀を鞘に戻し、俺も手を下ろす。

セルリック「……フフフ……。アマリ・アクアマリンも嬉しがると思います。こんなにも彼女のことを思ってくれる男性がいて……」

ルルーシユ「人当たりがいいが、頑として自分達のやり方を変えない……。あなたは教団の在り方そのものだな」

セルリック「ほう……」

ルルーシユ「要するにあなた達は自分達の正義以外は認めない……。裏を返せば、自分達以外の正義は全て悪と断じているだけだ」

零「ルルーシユ……」

倉光「ちよつと……。ちよつとルルーシユ君……」

ドニエル「いきなり何を言ってるんだ、お前は!?」

セルリツク「…流石ですね、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア君」

ルルーシユ「俺の真の名までご存知とはな…。流石は、異界人召喚の張本人…。魔徒

教団の幹部だけある」

… やつぱり、そんな事だろうと思つたが…。

號「な…。!?」

スメラギ「何ですって…。!?」

オルガ「魔徒教団が俺達をアル・ワースに呼び込んだって事か…。!?」

セルリツク「何を根拠に、そんな言いがかりを？」

ルルーシユ「そのような物言いが既に自分達以外の全てが悪であると断じる思想から出ているんだよ」

セルリツク「あなたの方こそ、我々への不信感を、おかしな妄想で悪意にまで引き上げていませんか？」

ルルーシユ「そう言われても仕方ないだろうな…。」

ノブナガ「だが、俺達はおのれの中の感を信じる…。」

瑠璃「ノブナガ公まで…。！」

セルリツク「そうは言うものの、あなた達程の人物が勘だけを頼りに世界そのものを

敵に回すとは思えませんね……。そこに至った根拠……。それを聞かせてもらおう」

ルルーシュ「ホープスだよ……。隙を突いて、俺やノブナガ……。ネモ船長を呼び出し、この事実を教えてくれた」

セルリツク「なるほど……。あの魔法生物は、我々とあなた達を仲違いさせたいようです。では、問おう。あのような輩と法と秩序の番人たる私達……。そのどちらを信じる？」

零「……。俺はお前もホープスを許していない……。だから、どっちも信じられないな」
セルリツク「何……？」

ルルーシュ「……。俺が知っているある人間は一見すると、あなたによく似ていた。常に笑顔を浮かべ、人当たりの良い所だが……。だが、その男は心に虚無を抱えており、勝敗にも自分の生命にも執着がなく、完全な無私を貫ける人間だった。だが、あなたは違う」

セルリツク「……」

ノブナガ「お前の心の奥には強気欲望を抱えている……。その二面性を俺達は受け入れるつもりはない」

セルリツク「……。それよりもだ。君達に牙を剥いた新垣 零……。彼の処分はどうするつもりだ？」

オルガ「……何言つてんだ、あんた？」

セルリック「何……？」

名瀬「あんたは言つたよな？ 教団の一員であるアマリの処分は自分達が決めると……」

ルリ「私達、エクスクロスの問題です。口を挟まないでもらいませんか？」

セルリック「……いいだろう、エクスクロス。教団の代表……法師である私を信じられないなら、君達に裁きを下す。智の神エンデの下、法と秩序の番人として、君達を力で従えよう」

ルルーシユ「プライドが高い男というのは、見下していた人間に反抗されると途端に激昂する……。それが、あなたの……。いや、魔徒教団の真の姿なのだろうな」

セルリック「傲岸不遜な君には、罰を与えろと言うべきだな」

ドニエル「ちよつと待つてくれ！ それはあまりにも乱暴じゃないか！」

セルリック「そうでもしなければ、そちらの彼等は納得しないだろう」

倉光「……でしようね。そして、それは私も同じです」

ルリ「僭越ながら私もです」

瑠璃「私も同感です」

號「俺も同じ意見だ」

ヒュウガ「私もだ……織斑先生はどうですか？」

千冬「既に答えは出ています」

名瀬「そうだな……なあ、オルガ？」

オルガ「ああ……」

ドニエル「皆さんまで……!?」

千冬「教義という名目で一人の人間の自由を奪うような組織とはいずれ衝突は必至でしょう」

ドニエル「しかしだな……！」

ノブナガ「ドニエル艦長……。ホープスと奴等とアマリとその中の誰を信じるのだ？」

ドニエル「……アマリだ。彼女に嘘はない」

ルルーシユ「これで決まりだな」

セルリツク「無論、この神殿を出るまでは仕掛けるつもりはない。君達が出航した所で私自ら、舞台を動かす」

ノブナガ「正々堂々という姿勢を崩さんのはさすがと言っておこう」

セルリツク「今更だな、破壊王」

ノブナガ「言っておくが、お前の事は信用できんが、お前という人間は嫌いではない」
ルルーシユ「俺も同感だ。欲望を持つ事……。それ自体は人間として当然なのだから」

セルリック「人の心を見透かすような人間は私は好きではないな……」

ルルーシュ「では、行くとしよう」

零「……待ってくれ！」

ノブナガ「どうしたのだ、零？」

零「……俺がみんなに牙を向けた事は本当の事だ……。俺への処罰を言ってくれ」

ドニエル「もういいではないか！」

零「いえ……それでは俺の覚悟が踏み躪られたようで嫌です……。だから……」

ルルーシュ「わかった。ならば、お前への処罰を言い渡す……」

零「……」

ルルーシュ「これからも俺達と共に戦え……。エクスクロスの仲間としてな……」

零「……！ふっ、わかったよ、参謀様」

ありがとう……。ルルーシュ……。

第36話 自由という翼

俺達はそれぞれの艦に戻り、神殿を出た後、出撃した……。

クリス「どうして、あたし達……。魔徒教団に追われる事になっちゃったの……」

ロザリー「全部、あいつらの所為だ！あの戦バカと男アンジュめ！」

アンジュ「うるさいよ。文句を言うんなら、あんた達だけ降参すればいい」

タスク「アンジュ……。君は何処かでこうなる事を予想していたみたいだね」

アンジュ「ああいう張り付いたような笑顔の男は好きじゃないから。何より、慈悲を与える……っていう上から目線が気に入らないのよ」

シバラク「アンジュの言う事も一理ある」

グランデイス「シバラク先生の方は覚悟が決まったみたいだね」

シバラク「アマリや零の件もありますのでな」

ワタル「先生……」

シバラク「……魔徒教団の在り方は、クラマの裏切りがどうしても許せんかった以前の拙者と同じだ。だが、ワタルやヒミコを見て、拙者は過ちを許す事の大切さを知った」
ジェレミア「綺麗過ぎる水に魚は住めない……。アマリを彼等の身勝手な潔癖さの犠牲にするわけにはいかないでしょう」

ヒルダ「それに零が散々やられて、反省の色も0だったからな……。友達としては見逃してはおけねえんだよ！」

ヒルダ……。

シバラク「ジエレミア殿やヒルダの言う通りだ。だから、拙者は拙者の信じる正義で魔徒教団と剣を交えよう」

ワタル「さつつすが、僕の先生だ！」

しんのすけ「ヒルダお姉さんも格好いいゾ！」

サリア「そうは言うけど……」

ラライヤ「いきなり戦闘になるのは……」

刹那「まだためらいを感じる者もいるようだな……」

ルルーシュ「ならば、ワタルの持つ真実の鏡でセルリックを照らしてみるといい……」

きつと面白いものが見られるぞ」

カレン「そんな笑顔で言われても説得力ないよ……！」

瑠璃「ネモ船長……。あなたは、こうなる事を知りながら、ルルーシュさんとノブナガさんを代理として送り込んだのですか？」

ネモ船長「法師セルリックの仮面をはぎとるのは彼等の方が適任だと判断したまでです」

倉光「その真偽はともかく、ルルーシュ君とノブナガ公はホープスの密告を材料としてセルリック氏の真の姿を引き出した……。ホープスが何をしたかかったかはわからない

が、ルルーシユ君とノブナガ公の権謀術数に目をつけた事は理解できる……。わからないのは、その共謀相手としてネモ船長を選んだ事だ……」

ネモ船長「……」

倉光「(ネモ船長とNーノーチラス号には秘密が多い……。ホープスがあの人を選んだのは、それに関係していると見るべきだろうね……)」

アキト「零君、傷の方は大丈夫なのかい？」

零「……大丈夫だよ、心配ない！」

メル「無理をしているのが丸わかりですよ！」

零「でも、止められたって俺は戦うからな」

メル「零さん……！」

フロントル「零君の頑固さは今に始まった事ではないはずだよ、メル君？」

メル「……はい……」

万丈「そろそろ魔徒教団のお出ました。覚悟はいいかな、みんな？」

ルルーシユ「(ホープス……。俺達はお前の希望通りに動いてやったぞ)」

ノブナガ「(後はお前次第だ)」

すると、魔徒教団の部隊が展開された。

ルルーシユ「我々の準備ができてから部隊を動かすとは、さすが法と秩序の番人だ」

セルリック「挑発は無駄だ、ルルーシユ。私は個人の感情で動くつもりはない。智の神エンデの名の下、君達の思い上がりを正すのみだ」

シヨウ「要するに力で俺達を従えるという事か……！」

鉄也「それが法と秩序を守る手段だとしたら、お前達の底も見えたな」

セルリック「そうやってアル・ワースの平穩は守られてきた。君達が口を出す事ではない」

零「他人の世界の事をとやかく言うつもりはない。俺はアマリを救い出すだけだ！」

セルリック「新垣 零……あれ程の敗北を経験しておきながら、まだ私に挑んでくるとはな……！」

零「あいにく肝が座ってるんでな……。それに目の前にアマリがいるのに、怯えてられつかよ！」

シーブック「だが、その身勝手な理屈を僕達にも押しつけるのなら、全力で抵抗する……！」

ミネバ「法師セルリック……。考え直す気はないのですね？」

ジョーイ「こうして僕達が戦えば、それは敵を喜ばせるだけなんですよ！」

セルリック「心配はいらない。アル・ワースの悪は、教団が滅する。エンデの使徒の誇りに懸けて、教団に従わない者の力など借りるつもりはないのだよ」

ルルーシュ「(この様子……。セルリツクは本気で教団が異界人を召喚したのを知らないようだな……)」

シモン「零も言っていたが、俺達は教団と戦いたいわけじゃない！アマリを返してもらいたいだけだ！」

ワタル「ダメなの、セルリツクさん!!?」

セルリツク「それを決めるのはアマリ・アクアマリン本人の意思だよ。さあ……藍柱石の術士……。君の決意を聞かせてくれ」

アマリ「かしこまりました、法師セルリツク……」

な……!!? ワース・ディーンベルの隣にいるディーンベルに乗っているのは……!!?

甲児「何っ!!?」

青葉「嘘だろ、おい……」

メル「アマリさん……アマリなのですか……!!?」

アマリ「私は藍柱石の術士、アマリ・アクアマリン……。法と秩序の番人として智の神エンデの名の下、アル・ワースの平穩を乱す者を討ちます」

しんのすけ「違うゾ！あんなのアマリお姉さんじゃないゾ！」

トオル「どうしたんですか、アマリさん!!?」

アムロ「精神を制御されているのか……!!?」

セルリック「違うな。これは洗礼の結果だ。彼女は再び魔徒教団にその身と心を捧げたのだよ」

カンタム「君達の流儀は知らないが、それを強制的に行う事を僕達の世界では精神制御と言うんだ！」

アーニヤ「そんなのは…許されない…」

零「アマリ！俺だ、新垣 零だ！」

アマリ「あなたなんて知しません…」

…胸糞悪い事しやがって…！

セルリック「無駄だよ、新垣 零…。彼女の心はもう魔徒教団のものなのだからね」

零「セルリック… 貴様アアアツ!!？」

タママ「落ち着いてくださいです、零つちー！」

ギロロ「怒りで我を忘れれば奴等の思うツボだぞ！」

零「…すまない、タママ、ギロロ…」

セルリック「許しを請う必要などない。我々は魔徒教団なのだから」

エイサップ「お前は…！」

刹那「貴様は歪んでいる…！」

エレボス「でも、どうするの!?!? アマリは本気で攻撃してくるよ！」

幻龍齋「どうする……と言われても……その……この場合は……」

九郎「まずは、あのオート・ウォーロックを止めるぞ！話はそれからだ！」

零「……アマリを止めるのは俺にやらせてくれ！」

マサオ「零さん……」

アル「わかった！愛する者は必ず救い出せ！」

ウエスト「こちらで援護するのである！」

ネネ「こんな時にホープスは何をやってるのよ!?？」

箒「あんな卑怯者オウム、知るか！自分が助かりたいからってアマリを売ったような

奴など！」

ルルーシュ「やるしかない……！各機はアマリの機体を止めるゼフィルスを援護しろ

！」

セルリック「エンデの使徒達よ！このアル・ワースのため魔徒教団は何よりも強くな

くてはならない！私に見せてくれ！諸君等の力を……ドグマ！そして、智の神エンデの

加護をあまねく世界へ！」

アマリ「エンデの名の下に！」

零「……待っている、アマリ！すぐに助け出してやるからな！」

セルリック「今度は君の愛する者自身に殺されるんだ……覚悟しろ、新垣 零。では、

エンデの使徒達：…期待している」

マサキ「あの野郎、自分は高みの見物かよ！」

アマリ「エクスクロス：…魔徒教団に従わない者達：…。智の神エンデに代わり、お前達に罰を与えます」

零「くるなら来い：…！お前の全てを俺が受け止めてやる！」

俺達は戦闘を開始した：…。

〈戦闘会話 零VSアマリ〉

零「アマリ、頼む！俺の言葉を聞いてくれ！」

アマリ「黙りなさい。お前の声など聞く気はない」

零「くそつ：…！力づくで止めるしかねえのかよ：…！」

俺の攻撃でアマリのディーンベルにダメージを与えた。

アマリ「お、お許してください、導師キールデイン：…！」

バナージ「しっかりとしてください、アマリさん！」

アルト「お前は俺達の仲間だ！教団の操り人形じゃない！」

ユイ「目を覚ましてください、アマリさん！」

すると、目の前に数機のルーン・ゴーレムとワース・ディーンベル…。そして、俺達の背後から大量のルーン・ゴーレムが現れた。

シャルロット「ま、まだこんなにも…！」

ゴーカイイエロー「挟まれたわよ！」

セルリック「無駄だよ。君達の声は彼女に届かない」

メル「セルリック・オブシディアン…！」

セルリック「諦めるがいい、エクスクロス…。君達では我々には勝てないのだよ」

零「それでも…俺は…！」

？「情けないな…それでも、俺達のライバルかよ」

零「！」

突如、ダークネス・ヴァリアス、アマテラス、リリス、ジェイル、ヴィジャーヤ、ドラウパが現れた。

ギルガ「待たせたね」

セルリック「オニキスだと…？」

零「お前ら…こんな時に何の用だ？？」

アスナ「今日はあなた達と戦いに来たのではないわ」

カノン「今日の目的は魔徒教団の殲滅です！」

セルリック「アル・ワースを戦火に包む者がエクスクロスと手を組むと言うのか!!？」

ジン「勘違いするな、お前達が邪魔なだけだ」

アユル「あなた達の行なっている行為も悪です！」

アーニー「ジン……アユル……」

ギルガ「そう言うわけだ、墜させてもらおうよ」

零「待て！今あのデインベルにはアマリが乗っているんだ!!？」

アスナ「どうしてアマリ・アクアマリンがあなた達と敵対しているのよ!!？」

メル「精神を制御されているんです！」

ギルガ「女の子を洗脳するなど……男の風上にも置けないね……！」

弘樹「そうだな……って、お前が言うな！」

カノン「まずは目の前のルーン・ゴーレムを！」

オニキスの機体達は俺達の背後に現れたルーン・ゴーレムを全て撃墜させた。

弘樹「おい、零！とつととアクアマリンを連れ戻せよ！」

零「言われずともやってんだよ……アマリ、頼む！戻ってくれ!!？」

セルリック「智の神エンデの洗礼が言葉程度で破れると思うのが間違いなんだよ」

ルルーシュ「思い上がりは自らの足下をすくう事になるので、法師殿」
セルリツク「ギアスを使うつもりかな、ルルーシュ？」

C・C「やはり、魔徒教団はギアスについての知識もあるか…」

ルルーシュ「真実を力で曲げる…。かつての俺は、お前達と同じやり方をしてきた…。だが、所詮は外法…。！真実に勝てはしない！」

ドロロ「今でござる、ワタル殿!!？」

ワタル「うん！」

龍丸はアマリの乗るデインベルの前に立った。

ワタル「アマリさん！真実の鏡を見て!!？」

ワタルはアマリに真実の鏡を見せた。

アマリ「あああああつ!!？」

青葉「アマリさん！目を覚ましてくれ！」

ボーちゃん「本当のあなたを取り戻して…。！」

アマリ「私は…。！私はあああつ!!？」

リョーコ「ダメなのかよ!!？」

セルリツク「無駄だよ。神部七龍神の創った創界山の秘宝と言えど、智の神エンデの加護の前では。逆に精神を引つ掻き回す事で彼女を苦しめるだけだろう」

ノブナガ「それで十分だ」

セルリック「何……？」

すると、神殿からゼルガードが現れた。

誰が乗ってるんだ……？

ホープス「ありがとうございます、皆様。エンデと神部七龍神の力がぶつかり合っている今なら、私でも何とかあります」

ワタル「ホープス！」

ジャンヌ「ゼルガードに乗っているの……？」

ホープス「後はお任せを」

そして、ゼルガードはディーンベルに近づいた。

ホープス「マスター……！今、行きます！」

セルリック「無駄だ、魔法生物」

ホープス「な……くっ……！」

ゼルガードが弾き飛ばされた……！！？

セルリック「お前の力だけでは彼女は救えない」

ホープス「確かに……私だけでは無理なのかもしれませんね……ですが……零様！！」

零「…！」

ホープス「一度、マスターを裏切った私が言うのも何ですが… お願いです…！マスターを助けるために力を貸してください!!？」

零「… お前に命令される筋合いはねえ…！」

ホープス「っ…！」

零「でも、それでアマリを助けられるなら、お前の案に乗ってやるよ!!？」

セルリック「新垣 零。お前だけは行かせない！」

すると、俺の顔を阻む様に大量のルーン・ゴーレムが現れた。

カノン「まだあんなにゴーレムが…！」

アスナ「新垣 零…！」

零「くっ…！」

弘樹「零イイイイツ！合わせろオオオっ!!？」

すると、ダークネス・ヴァリアスが突っ込んで来た。

零「弘樹…。いちいち騒ぐんじやねえ、傷口が開く！」

文句を言いながらも俺と弘樹の連携で目の前にいたルーン・ゴーレムは全て撃墜した。

セルリック「な、何だと…!!？」

ベルリ「何て連携だ……！」

青葉「俺達よりもいいコンビネーションだ……！」

デイオ「お互いを信じ合っていないければ、あの連携はできない！」

メル「零君……弘樹さん……」

弘樹「今だ、零！行きやがれえええつ！！？」

零「ホープス！！？」

ホープス「行きますよ、零様！！？」

俺とホープスはホープスの作り出した魔法空間に入った……。

アマリ「ホープス……零君……！」

ホープス「お迎えにありがとうございました、マスター」

零「……ようやく、話せるな……アマリ」

アマリ「私……今まで何を……」

零「悪い夢を見ていたんだよ」

ホープス「さあ、行きましょう。エクスクロスの皆さんもお待ちです」

？「そうはさせん……！」

アマリ「イオリ君……！」

イオリ「迎えに来たよ、アマリ」

イオリ・アイオライト……！

ホープス「導師キールデイン……。私の空間に干渉してくるとは……」

アマリ「あ……。ああ……。あああつ!!?」

アマリがまた頭を抑え出した。

ホープス「マスター……！」

イオリ「戻ってこい、アマリ……。お前は俺達のものだ！」

アマリ「わ、たし……。は……。魔従、教団の……」

零「アマリ!!?」

俺は目に涙を浮かべながら、アマリを力強く抱き寄せた。

アマリ「れ、零……。君……。！」

零「違う！お前は操り人形じゃない！俺の大切な……。大切な存在なんだ……。！」

アマリ「私が……。零君の、大切な存在……」

零「それだけじゃない！ホープスやメル、ワタル達……。みんながお前の事を大切な存

在だと思っている！」

アマリ「みんなが……」

イオリ「アマリを離せ！」

ホープス「邪魔はさせません!!？」

俺とアマリを引き離そうとしたイオリ・アイオライトをホープスが邪魔をした。

零「ホープス：！」

ホープス「零様！あなたの想いを全て、マスターに伝えてください！」

零「ありがとう：。」

アマリ「すべての：。想い：。？」

ホープスの行為は無駄にしない：。！

零「俺、実は好きな人がいたんだよ」

アマリ「え：。」

零「その好きな人は：。会った頃は自分に自信がなくて、臆病で、マスターと呼ぶオウムにいつも叱られていたんだ」

アマリ「：。」

零「それでも、仲間を守る為に何度も無茶をして：。それなのに、俺が無茶したら怒って：。それで喧嘩になって：。でも、仲直りした」

アマリ「そ、それって：。」

零「ああ：。俺は：。新垣 零は：。アマリ・アクアマリンの事が好きだ!!？異界人とか魔徒教団の術士だとか関係ない：。俺はお前自身が好きなんだ!!？」

アマリ「あ…… ああ……！」

気づけば、アマリも大量の涙を流していた。

ダメ…… だったか……？

アマリ「私も…… 私もあなたの事が…… 零君の事が大好きです!!？ずつと…… 一緒に
いたいです！」

零「…… 当たり前だ。俺達はずつと一緒だ」

アマリも俺に強く抱きついた……。

ホープス「(良かったですね、マスター……。 零様、この気持ちの意味はわかりませんが……。 マスターをよろしくお願いします)」

イオリ「新垣！魔法生物！アマリを惑わせていたのはお前らだな！」

アマリ「違う！」

涙を拭ったアマリは俺から離れ、イオリに言い放った。

イオリ「アマリ……」

アマリ「私は…… 私の意思で旅に出たんです。今なら、わかります。私の求めていた
自由…… そして、真実の意味が！」

イオリ「真実……？何を言っているんだ、アマリ!!？」

アマリ「イオリ君……。今の私は……。本当の私じゃないんです……。私が5歳から、教

団で重ねてきた修練の記憶……。あれは全て……。偽りだったんです、きっと。」

イオリ「何を言っている!? 奴に騙されているのか!?」

アマリ「そうじゃありません……。私の中にかすかに残ったお父さんやお母さんやお姉ちゃんの記憶……。そこに真実が……。本当の私がいるんです。私は、その温かな光に向かつて進みます。愛する零君と……。パートナーであるホープスと一緒に。」

零「アマリ……」

ホープス「(パートナー……。ですか……。何でしょう……。このモヤモヤとした気持ちは……)」

イオリ「行くな……。！行かないでくれ、アマリ！」

アマリ「……。さようなら、イオリ君……。私……。この旅であなたとの事の答えも見つけてみせます……」

イオリ「嫌だ！俺は……。俺はお前を離したくない!!?」

零「俺のアマリから離れろ！」

ホープス「はい。マスターに付きまとう輩は私達が排除します」

イオリ「お前達だ……。！お前達さえいなければ、アマリは！」

ホープス「あなたが何を言おうと私には届きません」

零「イオリ・アイオライト……。アマリの手を離したくないなら……。どうして、アマリ

の事を分かってやろうとしないんだよ？」

イオリ「だ、黙れ……！」

零「一方的な愛をアマリに向けても……アマリは振り向かないんだよ!!？」

ホープス「消えなさい、エンデの使徒。マスターは、私と零様が守ります」

イオリ「嫌だ……行くなアアアツ!!？」

俺達は魔法空間から出た。

アマリ「ホープス、零君！」

ホープス「お帰りなさい、マスター」

零「お帰り、アマリ」

アマリ「ただいまです、零君、ホープス。皆さん、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

ゼロ「お前って奴は、こんな時でも気を遣いやがって！」

甲児「気にすんな！それより怪我はないよな！」

アンジュ「あなたが無事なら、それでいいのよ、アマリ」

アマリ「ありがとうございます！」

ホープス「やはり、我々の帰る場所はエクスクロスなのですな」

ヒルダ「てめえは別だ、ホープス！」

ラウラ「貴様、アマリさんを売っておいて、よく戻ってこられたな！」

ホープス「ですが、マスターは生きています。全ては私の計算通りです」

エンネア「どういう事?!？」

ホープス「法師セルリックは、マスターが戦う力を失えば、生命まで奪う事はないと判断したままでです。あの場でも言ったはずですよ。死は最も恐るべきものです。…」と

ゴークイレッド「あれは自分の生命が惜しいって意味じゃなかったのかよ?!？」

ホープス「勝手な判断はやめていただきたいですね。あれはマスターの死を見せたくないという意味で言ったのです」

アマリ「ホープス…」

ホープス「私を信じ、私を受け入れてくださり、ありがとうございます、マスター」
セルリック「背教者アマリ…。まさか、エンデの洗礼を破るとはね…。ならば、私
の手で教団の敵となった君を討たねばならないな」

ワース・デインベルはデインベルを攻撃しようとしたが、俺とゼルガードが攻撃
を防いだ。

セルリック「新垣 零、魔法生物…。邪魔をしてくれるとは…。」

アマリ「零君!ホープス!」

ホープス「申し上げた通りです、マスター。私はマスターが死ぬ所など見るつもりは

ありません。あなたをお守りいたします。この身に代えても」

零「大切な存在だし……それに……大切な彼女を守るのは当然だろ？」

サリア「か、彼女!?？」

ヴィヴィアン「どういう事だ、零？」

零「その話は後にしてくれ！」

ヤベツ、つい口が滑つちまつた……。

アマリ「もう……零君ったら……。ホープス！ゼルガードの操縦席を開けてください

！」

アマリはゼルガードに乗った。

アマリ「ゼルガード……戦闘起動、確認！」

ホープス「やはりマスターは、旅支度の方がお似合いです」

零「何言つてんだよ、ホープス。アマリなら教団の制服以外なら何でも似合うつての」

ホープス「そうでした」

アマリ「ちよつと、もう！二人共！」

ヒルダ「何だ、あの零……」

メル「(まさか、零さんとアマリさんは……)」

セルリック「エンデの加護を失った君がオート・ウォーロックを動かせるとは驚きだ

よ！それとも、その失敗作だからこそ出来る事なのかな？」

アマリ「それは…。」

ホープス「彼の言っている事は、半分正解です。ゼルガードは失敗作として数百年間の間、放置されていたのは事実ですから。ですが、何故、失敗作であるかを知る者は少ないでしょう」

アマリ「ホープス…。」

ホープス「ゼルガードは搭乗者に要求する魔力が高すぎるのです。そのため、一定以下のオドの収束しかできない者にとっては、デインベルの方が扱いやすく、力も発揮しやすいでしょう。しかし、その壁を突破した先にこそゼルガードの真価があるのです」

ゼルガードにそんな秘密が…。

アマリ「何故、そんな事を知っているんです…？」

ホープス「私は…このゼルガードを操るために造られた魔法生物だからです」

アマリ「魔力を失った私が魔法を使えるのはあなたが力を増幅してくれていたからなんです」

ホープス「私はマスターと運命を共にする者…これが、その意味です」

セルリック「魔力を増幅する魔法生物…。導師キールデインの研究の成果か…。」

ホープス「私と意識を一つにすれば、よりアル・ワースを強く感じる事が出来ます」
アマリ「ホープスと心一つにする…」

ホープス「見せてください、マスター。あの法師セルリックを超える所を。私はあなたに懸けたのです。3000年の歴史を持つ魔徒教団ではなく、自分の意思で生きると決めたあなたに。だから、マスター！今こそ、私の翼を！」

アマリ「翼…自由…行きます!!？」

ゼルガードにオドが収束されていく…。

セルリック「この感覚…！智の神エンデの降臨と同じ…」

アマリ「私は…自分の意思で進みます！」

ゼルガードはワース・ディーンベルに攻撃を仕掛けた…。

アマリ「行くわよ、ホープス！」

ホープス「いつでもどうぞ、マスター」

アマリ「魔力とオドを一つに…！身体が勝手に動く…？新しいドグマが…生まれる…！」

ゼルガードの前方に岩のようなものが複数降り注ぐ。

アマリ「あああああつ！…天翔ける翼、ゼルガード！」

周りの岩のエネルギーを通りざまに蓄積させ、ワース・ディーンベルに突っ込み、貫

いた。

アマリ「これが私の……私達の新たなドグマです！」

セルリック「な、何だ……!? あのだグマは！」

ゼルガードの新たな技にワース・ディーンベルはダメージを受けて吹き飛んだ。

セルリック「私の……魔法障壁が効かない……」

アマリ「ゼルガードに翼が……！」

ホープス「あれがゼルガードの真の姿なのです。残念ながら、私達では、一瞬しか翼

は開かないようですけどね」

アマリ「それで十分です」

ギルガ「僕達の出番は終わりみたいだね」

カノン「帰りましょう」

すると、ジェイル、アマテラス、ヴィジャーヤ、エウロパが撤退した。

弘樹「零……またな」

アスナ「新垣 零……ありがとう」

零「え……」

アスナ「でも、次は敵同士だから、覚悟しなさい！」

続いてヴァリアスとリリスも撤退した……。

零「何だったんだ？ペリドットの奴…？」

メル「(まさか、アスナ・ペリドットまで…。零さん、あなたは本当に罪深い人ですね)」

ゼルガードと俺はみんなの元へ戻った。

零「それにしても凄いドグマだぜ…。アマリ！」

アマリ「ふふっ、零君のおかげでもあるわ」

零「そうか？そう言われると照れるな…」

アンジユ「…あんたら、イチャついてないで真面目に戦いなさい!!？」

零&アマリ「は、はい！」

何で怒るんだよ…。

アマリ「法師セルリック…。私は行かせていただきます。できれば、このまま見送って…」

セルリック「アマリ・アクアマリン！調子に乗るなよ、背教者が！」

アマリ「背教者ですか…。確かにエンデの加護を失いましたが、私にはホープスがい
ます。私は藍柱石の術士、アマリ・アクアマリン！私は、このゼルガードで自由と真実
を求めます！」

零「やろうぜ、アマリ！俺達の力で！」
俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「アマリは凄いで……。俺達も負けてられないぞ、ゼフィルス！」

〈戦闘会話 零VSセルリック〉

セルリック「君だけは許さないぞ、新垣 零！」

零「それは俺の台詞だぜ……。！アマリを傷つけた事……。そして、俺にも借りがある！全部ひつくるめて纏めて返してやるよ、セルリック！」

〈戦闘会話 ノブナガVSセルリック〉

セルリック「オダ・ノブナガ……。！やはり、君は破壊王だ！」

ノブナガ「何を分かりきった事を申している……。俺が破壊王だという事は以前からわかっていよう！」

セルリック「ならば、此処で破壊してやる！」

ノブナガ「破壊王を楽に破壊できると思うな!!？」

ゼルガードの攻撃でワース・ディーンベルに大ダメージを与えた。

セルリック「馬鹿な…。」

ルリ「法師セルリックは、もう戦えません」

スメラギ「各機は、このエリアを離脱！指定ポイントで合流して！」

俺とアマリを残して、みんなは離脱して行く…。

アマリ「… 戦いは終わりました。行きましよう、ホープス」

ホープス「法師の肩書きも大した事はありませんね」

セルリック「…！」

零「セルリック… 俺はお前達が何度来ようと… アマリを守り抜く事をやめない！
覚えておけ!!？」

それを言い残し、俺達も離脱した…。

セルリック「く… う… うう…。うおあああつ!!？」

ーセルリック・オブシディアンです…。

セルリック「導師キールデイン……。教団の威信を守る事が出来ず、申し訳ございませんでした」

導師キールデイン「気に病む必要はありません、法師セルリック……。世の中に常勝無敗はあり得ないのでから。重要な事は失敗から何かを学び、新たな何かを芽ぶかせる事です。大地は人の想いを吸い、木々には智の果実が熟す……。それは、エンデの教えそのものと言えるでしょう」

セルリック「……エクスクロスはいかがします？教団が異界人の召喚に関わっているなどという妄言を垂れ流すような事になれば……」

導師キールデイン「監視は必要ですが、彼等の進むに任せるがいいでしょう」

セルリック「しかし……」

導師キールデイン「彼等は自主的にドアクダーやオリユンポスと戦ってくれます。それはアル・ワースにとつても良き事です。それに彼等の元に新垣 零がいる限り……彼等が潰れるのも時間の問題です」

新垣 零がいる限り……!??

セルリック「では、アマリ・アクアマリンの討伐だけでも……」

導師キールデイン「彼女を止める事が出来るのですか？」

セルリック「それは……」

導師キールディン「捨て置かれたに等しいゼルガードをあ魔法生物の補助があつたとはいえ、ああも使いこなすとは……。もしかすると、あなたよりも彼女の方が教主に相応しいのかも知れませんか」

セルリック「……！」

導師キールディン「全ての術士が目指す教団の真義……。教主の座……。その存在の前には導師である私も跪くのみです。教団創設以来、ずっと空位だった教主の座……。ついにそれが決まる日が来るのかも知れませんか……」

セルリック「……。今回の件の後始末もあります故、失礼致します」

導師キールディン「まだまだ若いですね、セルリック……。セルリック・オブシディアとアマリ・アクアマリン……。まさか、こんな形で対立候補が出るとは思いませんでしたよ……。互いに競い合いなさい、教主の候補達……。それこそが魔徒教団の願いです……」

「アマリ・アクアマリンです。」

零君を除く方々がNーノーチラス号の格納庫で集まりました。

ワタル「お帰りなさい、アマリさん！」

アマリ「アマリ・アクアマリン、只今、戻りました」

グランデイス「ホープスも、お帰り。よくやったよ、今日は」

ラウラ「アマリさんが帰ってこられたのも全部、お前のおかげだ。お疲れ様」
ホープス「先程とは打って変った歓迎ぶりですね。逆に警戒してしまいます」

九郎「まあまあ……。そう緊張するなって」

テイエリア「意外にいい奴だったのだな、君は……」

ホープス「意外に……。は余計だと思いますが」

明弘「そう言えば、零はどうした？」

一夏「あれ？来てないか？」

零「悪い……。待たせたな！」

遅れて来たのは傷だらけの零君でした……。

―新垣 零だ。

つたく、無茶するもんじゃねえな……。身体のうちこちが痛いぜ。

アストン「ボロボロじゃないか！」

零「仕方ねえだろ。前回、セルリックの攻撃で負った傷が癒えてなかったんだからよ」

メル「あなたはまた無茶を…」

アマリ「零君！」

アマリは微笑みながら、俺に飛びついて来た。

零「おっと！」

痛む身体を堪えながら、俺はアマリを受け止め、抱きしめる。

零「アマリ、お帰り」

アマリ「ただいま、零君」

シノ「…」

竜馬「…」

真上「…」

あれ、どうしたんだ？みんな…。

グレンファイヤー「零、アマリ…。お前ら何があつたんだ？」

… あー、そういう事か。

零「アマリを助ける時に俺…。アマリに告白したんだよ」

ヒルダ「…は？」

アンジュ&サリア「…、告白…?？」

エルシャ「あらあら」

箒「そ、それで……アマリさんは何と返したんですか!!?」

アマリ「私も零君が大好きですと答えました!」

アネツサ「キヤー!」

まゆか「おめでとうございます、零さん!アマリさん!」

アマリ「ありがとうございます!」

なんか照れくさいな……。

シバラク「おのれ零!羨ましいぞー!!?」

零「わっ、ちよっ!シバラク先生!!?」

ワタル「落ち着いてよ、先生!」

暴れるシバラク先生をワタルが必死に抑えようとしていた。

アマリ「ふふっ……私、零君と出会えて、良かった……」

零「俺もだ、アマリ……」

アマリ「零君……」

零「アマリ……」

お互いに見つめ合った俺達は互いの顔を近づけ合い、唇と唇を重ね合わせようとした……が……。

アンジュ「あーもう!イチヤイチャすんなー!!?」

アンジュに無理矢理離された……。

零「邪魔すんなよ、アンジュ！」

アンジュ「何で私達があなた達のイチャついてる所を見ないといけないのよー！」

ホープス「……」

ルナマリア「どうしたの、ホープス？」

ホープス「いえ、何でもありません」

セシリー「ふふ……微笑ましいですね」

ノレド「うん！今までアマリさんに厳しかったのも照れ隠しだったのかもね」

ナディア「そういうの……ちよつとわかるかも……」

ホープス「何なんです、この妙な空気は……」

ニア「ホープスさん……。今日のあなたはアマリさんを守るために零君と共に生命を

懸けました」

ホープス「マスターを守る事は、私の務めですから」

舞人「そんな義務みたいな言い方をしなくてもいいのに」

さやか「アマリを守る時、気持ち熱くならなかつた？」

ホープス「言われてみれば……」

マーベル「それと同時に心の中には強い気持ちがあつたでしょう？」

ホープス「ええ、まあ……」

ルー「アマリを引き留めようとした奴には腹が立ったでしょう？」

ホープス「それはもう……」

シャルロット「今の零さんとアマリさんを見て、心がモヤモヤしてるでしょ？」

ホープス「は、はい……」

アイーダ「自分の中の変化に気付いています？」

ホープス「少しずつですが、自覚しつつあります」

鈴「やっぱり、そうなのね！」

ホープス「いったい何なんです？私の変化の正体を皆さんは知っているのですか？」

楯無「教えてあげるわ、ホープスちゃん。あなたはね……」

簪「恋をしているの、アマリさんに」

ホープス「恋!?？」

箒「あのイオリという男と今の零さんに対しての感情は嫉妬というものだ」

ホープス「嫉妬!?？」

やっぱり、ホープスもアマリに恋愛感情を持っていたか……。

アマリ「そ、そうなんですか、ホープス……？」

ホープス「え……いや……その……あの……」

アマリ「ふふ……そんな風にホープスが慌てる所って見るのは初めてですね」

ホープス「自分でも自分が、よくわかりません……」

零「知的好奇心が刺激されるか？」

ホープス「されませぬ、とても……。取り敢えず、マスター。私達の関係も変化してい

くようですから、もう少しフランクにいきませんか？」

アマリ「つまり……？」

ホープス「私には、もつと気楽に接してください」

アマリ「……わかったわ、ホープス。これでいい？」

ホープス「結構です。新鮮さが、私の脳を刺激してくれます。それは甘く酸っぱい禁

断の味わいです」

ジャン「それが恋だよ、ホープス！」

ケルベス「恋はいいぞ、ホープス！」

リング「恋は人生を楽しくしてくれるからな！」

ライヤ「皆さん……ちよつと気楽すぎませんか？」

カトル「そうですね。今日の一件で僕達は魔徒教団に追われる身になったのですか

ら」

ヒイロ「だが、進むしかない」

オルガ「そうだな。何があっても止まるんじやねえぞ、お前ら！」

ホープス「その通りです。運命共同体なのは、私とマスターだけではありません。こ
うなつた以上、運命を共にするのは、このエクスクロス全体です」

アマリ「頑張ろうね、ホープス。このアル・ワースに平和を取り戻し、異界人のみ
なを元の世界に返して……。私達の旅のゴールにたどり着く、その日まで」

ホープス「かしこまりました、マイ・マスター。（その日まで私はあなたを守ります）」
シヨウ「元の世界に返すで思い出したんだが……。零はいいのか？」

零「ん？何がだよ？」

リユクス「零さんは異界人です……。ドアクターを討ち取れば元の世界に帰る事にな
りますが……」

零「必ず帰らされるってわけじゃないだろ？もし、強制的に帰らされるとしても……
少ない時間でもアマリと一緒にいる時間を大切にしたい。そして、元の世界から必ず、
またこのアル・ワースに来る。アマリに会いにな」

アマリ「零君……！」

千冬「ふっ、お前達自身がそう言うのならば私達からはこれ以上何も言わん」

アマリ「それとホープス……。私は……」

ホープス「わかっていきますよ、マスター。零様……」
零「何だ？」

ホープス「もし私の変化が恋だとすれば……。あなたは少し前にリードしているに過ぎませんか」

零「つていうと？」

ホープス「私が……。必ず、マスターを振り向かせてみせます。そして、あなたが少しでもマスターを手放す日がくれば、マスターを私がもらいます」

宣戦布告か……。

零「いいぜ、ホープス。その挑戦受けてやるよ！まあ、俺がアマリを手放す事は死んでもないがな。それと……」

ホープス「はい？」

零「つまり、これから俺達はアマリを奪い合うライバルになるという事だな？ だったら、これから俺の事を呼び捨てで呼び、敬語もやめろ」

ホープス「成る程……。良いですね。では、仲間として言う……。お前には負けんぞ、零」

零「望む所だ、ホープス！」

アマリ「零君……。ホープス……」

その後俺達はアマリ帰還の祝いとしてパーティーをした……。

ーメル・カーネリアンです。

アマリさんの帰還パーティーが終わった後、私はホープスさんと彼の作り出した魔法空間で話をしていました。

メル「…。」

ホープス「どうかしたのですか、メル様？」

メル「… 私、このまま身を退いた方が良いでしょうか…。」

零さんとアマリは交際を開始した…。

ならば、私は…。

ホープス「… 私は零に宣戦布告をしました…。あなたはどのようなのですか、メル様？」

メル「私は…。」

そうだ… ホープスさんだった不利な状況で戦っているのですよね…！私だけが逃げる事なんて出来ません！

メル「私も戦います！」

ホープス「良き事です。それに零とメル様がくつついた方が私からしても都合がいい」

メル「…私はあなたの為の恋愛はしませんから」

ホープス「手厳しい事で」

メル「でも、これからお互いに頑張りましょう、ホープスさん」

ホープス「ええ、お互い苦勞すると思いますがね」

私だって、いつかは零さんを振り向かせてみせます…！

第37話 吹雪の中の暖かさ

―新垣 零だ。

俺とメルはそれぞれゼフィルスとメサイアに乗って、辺りの偵察をしていた。

零「こちら、零。付近に異常なし…。直ちに帰還します」

メガファウナに異常がない事の通信を送った。

メル「無事で終わって良かったですね」

零「そうだな。にしても腹減った…。早く帰って、アマリにミネストローネでも作ってもらおうか。」

メル「…あの…。あまり、誰かの前でイチャつくのも…。アンジュさんなんて、ずっと文句を言っていましたよ?」

零「え?メル、知らないのかよ?」

メル「…へ?」

零「アンジュの奴だつて、タスクの奴と何度かイチャついてるぞ」

メル「…皆さん嫌いです。」

すると、あたりに雪が降り始めた。

メル「雪……ですね」

零「アル・ワースでも雪が降るんだな」

だが、雪の勢いがだんだん強くなり、吹雪の様になってきた。

零「……おい、これまずくねえか……？」

メル「もつと酷くなる前に早く、メガファウナに帰還しましょう！」

零「その方がいいな……っ！この気配は……メル！オニキスだ！」

メル「えっ……?!？ほ、本当です！二機がこちらに近づいてきています！」

吹雪のせいでよく見えないが、俺達に接近して来たのはアマテラスとリリスだった。

アスナ「新垣 零！今度こそ、あなたを！」

零「ペリドットか……！」

ゼフィルスとリリスは何度も武器をぶつけ合った。

そして、リリスがゼフィルスに掴みかかってきた。

零「ぐっ……！」

メル「零さん！っ……！吹雪のせいで視界が……！」

アスナ「今度こそ離さない！」

ギルガ「いいよ、アスナちゃん！そのままできてくれ！」

そこへガンブラスターのエネルギーを蓄積させた、アマテラスが現れた。

零「まさか、あの野郎……ペリドットごと……！おい、ペリドット！このままじゃお前も巻き込まれるぞ！」

アスナ「え……！」

零「クソがあっ！」

俺はゼフィルスを動かし、リリスを庇うようにビームを受けた……。

ビームを背中受けた為、ゼフィルスは大ダメージを負った。

零「うわああああああっ！！？」

アスナ「きやああああああっ！！？」

そのまま俺達とゼフィルスとリリスは落下していった……。

ーメル・カーネリアンです……。

アマテラスの攻撃によって、リリスと共に落下してしまつたゼフィルスと零さん……。

ギルガ「……仕留め損なつたか……」

メル「零さん……零さん！」

ギルガ「ちっ……吹雪のせいで視界が悪い……一度、戻るか……」

アマテラスは撤退しました……。

メル「零さんを早く探さないよ……でもっ……！」

このまま吹雪が強くなれば、いずれ探すのも不可能になります……。

メル「零さん……必ず探しに戻ってきます……！」

私はメサイアを動かして、全速力でメガファウナの下へ急ぎました……。

ーアスナ・ペリドットよ……。

アスナ「う、うう……」

私は目を覚ますと、辺りを見渡した。

アスナ「ここ、は……？」

そうだ…… 私は新垣 零と一緒に落下して……。

零「よお…… 起きた…… か？」

その声を聞き、私は飛び起きて声の主の方を見た。

アスナ「新垣…… 零……」

私の目の前には壁に背中を預け、座り込む新垣 零の姿があった……。

零「一応命の恩人なんだぜ？ 少しは警戒を解けよ」

アスナ「落下した後、何があったの？」

零「俺達は機体ごとこの洞窟に落とされたみたいだ。ゼフィルスに運良く遭難時の用品を積んでいたから助かったぜ……」

新垣 零の言葉に私は倒れているリリスを見て、ハッチを開けようとした……。

零「無駄だぜ。ゼフィルスもリリスも完全に壊れてる」

アスナ「通信も……無理なようね……それよりも……！」

私はすぐさま拳銃を取り出し、新垣 零に向けた。

アスナ「おとなしく拘束されなさい！」

零「それが命の恩人に対しての態度かよ……ぐっ……！」

すると突然、新垣 零が倒れると彼がもたれかかっていた壁に血がついていた。

アスナ「……あ、あなた……怪我をしているの……？」

零「前に魔徒教団のセルリツクにボコボコにやられた事があったんだ」

じゃあ、彼は……そんな傷でアマリ・アクアマリンを救って……さつき私達と戦った

の……？

零「お前が……俺を……捕える……のは、絶好の、機会だ……ろう、な……」

そのまま新垣 零は気を失った。

アスナ「ちよ、ちよつと……！」

気を失いながら、辛そうな表情を見せる。

アスナ「……」

今なら、彼を捕えられる……。首領様に喜んでもらえる……。！
でも……。！

アスナ「……仕方ないわね……。！」

私は救急キットから止血剤と輸血パックを取り出し、作業に入った……。

ー氷室 弘樹だ。

格納庫にギルガとアマテラスが帰ってきた。

ギルガ「今帰ったよ、カノンちゃん、アユルちゃん」

アユル「あれ……。？アスナさんは……。!!？」

ギルガ「新垣 零と共に落下して、行方不明になってしまったんだ」

カノン「どうして探さなかったんですか!!？」

ギルガ「無茶言わないでよ。吹雪が酷かったんだよ。大丈夫、吹雪が止んだら探しに行くよ」

弘樹「絶対だろうな？」

ギルガ「ああ、探すよ」

この男……何を隠している……？

「アマリ・アクアマリンです。」

メルさんが帰ってきましたが、ゼフィルスの姿がない事に気がついた私はメサイアに駆け寄ると、ハッチから目に涙を浮かべて、メサイアから降りるメルさんがいました。

アイーダ「メル……!!? どうしたのですか!!?」

レイ「零とゼフィルスはどうしたんだ?」

メル「零さんが……零さんが!!?」

アイム「零さんがどうしたのですか!!?」

メル「オニキスが現れて零さんは……落ちて……!」

アルト「え、え? いや、言っている事が……」

アマリ「メルさん、落ち着いてください!」

私がそう声をかけるとメルさんは落ち着きました……。

その後、皆さんに集まってもらい、メルさんから話を聞きました。

どうやら、メガファウナ帰還の最中にオニキスと戦闘になり、カルセドニーさんの攻

撃を受け、リリースに乗るペリドットさんと一緒に落下したみたいです。

メル「お願いです！零さんを探してください！」

倉光「残念だけど、それは許可できないよ」

一夏「ど、どうしてですか?!？」

ルリ「吹雪が強過ぎます…。吹雪が落ち着くまでは搜索は許可できません」

メル「で、でも…。こうしている間も零さんは…。！」

スメラギ「メル、あなたも少し休みなさい」

メル「わ、私は大丈夫です！私の事よりも零さんを…。！」

アマリ「メルさん！」

メル「…。！」

私はメルさんを抱きしめました。

アマリ「零君なら大丈夫です、あの零君ですよ？」

ホープス「あいつは相当タフですからね…。勝手に生きているでしょう」

メル「アマリさん…。すみません、私…。」

アマリ「それよりもそのような悲しい顔をしていたら、零君に心配されますよ？零君

は誰にでも優しいですから」

メル「…。はい！」

アマリ「いい笑顔です！今のメルさんは凄く魅力的ですよ！その顔ならば零君も振り向くかもしれませんよ？」

メル「勝者のおごりですか？」

アマリ「そ、そういう意味ではありません！」

メル「ふふつ、嘘ですよ。アマリさん、私も負けるつもりはありませんから」

アマリ「望む所です！」

ワタル「零さんつて、モテモテだね！」

千冬「あいつは女の心を簡単に動かせる何かを持っているのかもな」

ヒルダ「それわかるぜ」

ラウラ「教官もまさか、零さんに恋心を…!?」

千冬「私は年下には興味はない」

摩耶「それにしては新垣君とお話をする時は随分楽しそうにしていましたけど…」

千冬「…山田先生。今から二人でお話をしましょうか」

摩耶「じよ、冗談ですー！」

…山田先生が千冬さんに連れ去られてしまいましたね…。

メル「アマリさん、吹雪が止んだら、零さんの搜索を手伝ってもらえますか？」

アマリ「メルさんに言われなくても搜索をします」

メル「そうでしたね、すみません。零さんはアマリさんの彼氏ですもんね」
アマリ「ちや、茶化さないでくださいよ！」

メル「ふふふっ！」

待つていてね、零君……。必ず助けに行くからね……！

―新垣 零だ。

俺はゆっくりと目を覚ます。

確か俺は……。

零「痛っ……！」

セルリツクに負わされた傷が痛み、そこを見ると包帯が巻かれていた。

零「これは……」

アスナ「起きたのね、新垣 零」

よく見ると、その場に座り込むペリドットの姿があった。

零「……この包帯はお前が巻いてくれたのか？」

アスナ「ええ。止血して、輸血はしたから大丈夫よ」

零「どうして俺を助けたんだ？」

アスナ「首領様にあなたを明け渡す前にあなたが死なれたら困るからよ。でも、応急処置だからね」

零「… ありがとうな」

アスナ「… ！だっ、だから勘違いしないでよね！」

パイと顔を背けるペリドットを見て、俺はクスリと笑った。

零「それにしても吹雪は治らないな…」

アスナ「… 明日には治るだろうから、あなたは助かるわね」

零「は？ 何で俺だけは助かるんだよ？」

アスナ「… エクスクロスはお人好し部隊なんでしょう？… 私は必要とされていないな

いから…」

… ペリドット…。

零「もしも、オニキスに頼れる奴がいないのなら… 弘樹を頼れ」

アスナ「氷室を…？」

零「あいつはバカだが… 相当なお人好しだからな。彼奴ならお前の味方になってくれるはずだ」

アスナ「随分と彼を信頼しているのね」

零「… よしてくれ、あいつを信頼しているとか寒気がするぜ」

アスナ「それにしても満更でもない顔しているわね」

零「うるせえよ……」

悪戯っ子ばい笑みを見せるペリドットに呆れ、俺は息を吐いた……。

「アスナ・ペリドットよ。

氷室を頼れ……か。

でも、確かに彼なら……頼れると思う……。

それにしても……急に冷え込んできたわね……。

零「寒いのか？」

アスナ「べ、別に……このぐらい平気よ……」

そうは言いつつも手がかじかんで、身体が震えてきた……。

さ、寒い……。

零「……」

突然、新垣 零が溜息を吐き、着ていたコートを私の頭に被せてきた。

アスナ「……わっ!!?……な、何よ!!?」

零「それ着ろよ、多少は暖かくなるだると思うぜ」

アスナ「だ、誰があなたのコートなんて……！」

零「……目の前の奴が凍死したなんてのは真つ平御免だからな」

アスナ「……でも、あなたが……」

零「俺の事なら心配すんな。鍛え方が違うからよ」

こ、この男は……！

アスナ「だ、誰もあなたの事なんか心配していないわよ！」

私はぶつぶつ文句を言いながら、彼のコートを羽織った。

……暖かい……。

零「さて、と……。取り敢えず、非常食はあるからいいとして……。何もやる事ないな」

アスナ「あっち向いてホイでもやる？」

零「やるわけねえだろうが……」

何よ、ちよつとしたジョークなのに……。

その後、私達は特にやる事もなく、ご飯を食べて、眠る事にしたけど……。

アスナ「……」

ね、眠れない……。もつとも嫌いで敵だとしても異性である新垣 零と同じ空間で眠

るだなんて……。

対する新垣 零はイビキもかかないから、寝ているのかもわからない……。

アスナ「新垣 零……」

零「……何だよ？」

あ、起きてた。

アスナ「……私達、助かるのかな？」

零「そうでありたいな。お前と此処でずっと居るのも辛い」

アスナ「そ、それはこっちの台詞よ！」

零「助かるだろ、必ず……」

アスナ「どうしてそんな事が言えるの？」

零「……さあな……。お前は不安なのか……？」

……不安、か……

アスナ「うん……。不安過ぎて眠れそうにないの……」

零「……そうか」

そう呟いた新垣 零はもう何も話さなくなった……。寝たのかな……？

私も寝よう……。

少しでも眠れるように目を閉じると、突然、手が握られた。

アスナ「えっ……」

目を開けると少し距離を離れて寝ていたはずの新垣 零の顔があった。

新垣 零が私の手を握っているの……!??

アスナ「あ、あなた……！」

零「騒ぐな。嫌いな男に手を握られるのは嫌だとわかってはいるけど……。睡眠不足でお前に倒れられても困るから……。我慢してくれ」

アスナ「新垣 零……」

本当の私なら手を振りほどく所だけど、どうしてだろう……。嫌な気がしない……。てか、顔が近い！

零「……ん？どうした？」

アスナ「あなたは緊張しないの？敵とは言え、異性の顔が近くにあつて……」

零「……あ、そういう事か……。確かに最初は緊張したよ。でも、アマリで経験済みだ」
アスナ「は？どうして、アマリ・アクアマリンの名前が出てくるのよ？」

零「一緒にアマリと寝たからだよ。俺達、付き合う事にしたんだ」

アスナ「っ！……そ、そうなの……」

何……？このモヤモヤとした気持ちは……。

でも、新垣 零の手の暖かさに安心し、私は眠ってしまった……。

「翌日。」

私が目を開けると、眠っている新垣。零の顔があつた。

「……こう見ると子供っぽいよね……。」

てか、私……いつの間にか強く彼の手を握っていたし……！

何とか手を振りほどこうとするが……。」

零「んっ……？」

新垣「零が目を覚ました。」

零「朝か……。ふあああ……。！」

私の手を離して、起き上がった新垣。零は欠伸をし、目を擦った。

零「……さて、と……。」

欠伸を終えた、新垣。零はシャイニング・ゼフィルスとリリースを見る。

零「修理開始といくか！」

アスナ「ええ」

私達はそれぞれの機体の修理を始めた。

その後、一時間程かけて、機体の修理を終えた。

でも、問題が一つ……。」

零「… 一応処置は終わったけど… どうやっても通信機能がダメだな…」

アスナ「私の方も同じよ」

零「… 取り敢えず救難信号は送ったから来ると思うけど…」

アスナ「時間はかかりそうね…」

零「考えても仕方ねえ…。 ちょっと外の空気でも吸うか」

アスナ「そうね」

私達は外の空気を吸うために洞窟から出ると、吹雪は止み、雪が積もっていた。

アスナ「綺麗…」

積もっていた雪が陽の光で反射して、まるで雪結晶のような輝きだった。

隣の新垣 零の顔を見ると、彼もあたりの雪景色に見惚れていた…。

あ、そうだ！

私は足下の雪を丸めて…。

アスナ「新垣 零！」

零「…？ 何だ、ペリド… ぶっ!!？」

彼の顔に丸めた雪をぶつけた…。

アスナ「あ、あはははっ！ ひっ… 引っかかったー！」

零「… お前…。 あ、ペリドット、あれ！」

アスナ「え……？何……ぶっ!!？」

新垣 零が指差す方に視線を送った私の顔に雪がぶつけられた。
やられた……。

零「仕返しだ」

アスナ「……よくもやったわねえっ!!？」

その後、私達は激しい雪合戦を始めた……。

暫く、雪合戦を続けた私達は流石に疲れ、その場に倒れこんだ。

零「はあ……はあ……！誰かと雪合戦なんて久しぶりだ……」

アスナ「はあ……はあ……私もよ……」

息を切らしながら、笑い合う私達……。

零「……そろそろ、戻るとするか……」

……え……。

零「アマリヤメル、みんなを心配させてると思うし……」

アスナ「う、うん……。そうよね……」

わかっていた……。今回ののは偶然一緒に過ごしただけ……。本来なら私達は敵同士……。これが当然なのよね……。

零「ペリドット……。エクスクロスに来ないか？」

アスナ「：：ごめんなさい、それはできないわ。。。私には為すべき事があるから。。。」
零「レイヤ・エメルドという奴の事か。。。いや、悪かったな」
アスナ「別にいいのよ。。。」
すると、私達の周りを砲撃が襲った。。。。

第37話 吹雪の中の暖かさ

「新垣 零だ。」

何者かに攻撃され、俺達は警戒をする。

アスナ「な、何。。。!?」

零「砲撃。。。!?あれは。。。！」

現れたのはルーン・ゴーレム数機とディーンベル三機だった。

イオリ「偵察をしていたらまさか、お前を見つけるとはな。。。新垣！」

零「アイオライト。。。!?魔徒教団か。。。！」

術士「背教者に手を貸す者は此処で排除する！」

術士2「覚悟しろ！」

アスナ「魔徒教団は本格的にあなた達エクスクロスを潰す気なのね……！」

零「そりや、あんだだけの事があつたからな……。ペリドット、此処は俺に任せてお前は行け！」

アスナ「あなたはどうするのよ!?？」

零「あいつらの狙いは俺とエクスクロスだ。お前を巻き込むわけにはいかない！」

アスナ「新垣 零……」

そして、俺達は洞窟に入り、それぞれ、ゼフィルスとリリスに乗り込んで浮上した。

イオリ「オニキスの機体とも一緒にいるとは堕ちる所まで堕ちたか！」

零「待て！彼女は関係ない！相手なら俺になる！」

術士「嫌ダメだ！」

術士2「彼女達、オニキスもアル・ワースの法と秩序を乱す者達だ……。此処でこの女も潰す！」

いくら、法を犯したってこいつは女なんだぞ……！

アスナ「……どうやら、私も逃げられないようね」

零「すまない、お前を巻き込んでしまった……」

アスナ「いいのよ。どのみち魔徒教団は潰す気だったから……。それよりも傷は大丈夫

なの……？」

零「すぐに終わらせればなんとなかなる……。一時休戦だ、行くぞ、ペリドット！」

アスナ「ええ！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(これ以上、ペリドットを巻き込むわけにはいかないな……)……だから、すぐに終わらせる！」

〈戦闘会話 アスナVS初戦闘〉

アスナ「(そう言えば、新垣 零にこのコートを返し忘れたわ……。この戦闘が終わったら返そう……。そして、また私達は敵同士になる……)」

戦闘開始から数分後の事だった。

イオリ「なかなかやる……。だが、たった二機で何ができる！」

アスナ「彼の言う通りよ…このままでは、数で圧倒されるわ…！」
零「いや、心配ない。来てくれたぜ」

すると、エクスクロスの戦艦が現れた。

アネツサ「シャイニング・ゼファイルスを発見しました」

オルガ「やつぱり、あいつもタフだな！」

倉光「取り敢えず、感動の再会は此処を切り抜けてからにしよう」

ビスケツト「はい、全機、出撃してください！」

それぞれの戦艦からみんなが出撃してきた…。

アマリ「零君、大丈夫?!？」

メル「お怪我はないですか?!？」

零「心配してくれて、ありがとうな!この通りピンピンしているぜ!」

メル「良かった…」

零「お前も無事で良かったぜ、メル」

夏美「一緒にいるあの機体は…」

ケロロ「ケロロツ?!オニキスのリリースではありませんか!」

アスナ「…」

メル「アスナ・ペリドット…!」

ラフタ「ちよっと、どう言う事なのよ、零！」

零「……みんな、聞いてくれ！今のペリドットは敵じゃない！」

アスナ「新垣 零……」

アミダ「零にそう言われたら、何もできないね」

スカーレット「だが、詳しい話は後で聞かせてもらうぞ、零」

零「わかりました！」

メル「アスナ・ペリドット……」

アスナ「メル……」

メル「私はあなたを許しません……。ですが、零さんがあなたを信じると言うのであれば何も言いません。ですが、少しでも妙な動きをするのであればあなたを撃ちます」

アスナ「肝に命じておくわ！」

イオリ「アマリ！」

アマリ「イオリ君……あなたは私の大切な人を傷つけました……。流石に許しません

よ！」

イオリ「ち、違う！これはお前を取り戻す為で……」

ホープス「話すな下郎。だが、惜しい事をしたな。此処で零が消えていればマスターは……」

アマリ「そうだったら、ホープスのこと嫌いになるから」

ホープス「…冗談です。零、お前がいけない間、マスターは私が守っていた」

零「感謝するぜ、ホープス！」

ホープス「その感謝の印として、今日1日は私とマスターを二人つきりにさせてはもらえないか？」

零「詠みが丸見えなんだよ、この腹黒オウムが！」

ホープス「私にはマスターが名づけてくれたホープスという名前がある。他人の名前はしっかりと呼べ！」

零「お前は人ではなく、オウムだろうが！つてか、凶々しいにも程があるだろ！」

ホープス「お前には言われたくない！」

アマリ「ちよ、ちよっと、喧嘩しないで二人とも！」

アンジュ「聞いたわよ、零！またアマリとイチヤイチヤして一緒に寝たようね！」

零「だから、お前が言うんじやねえよ、アンジュ！お前だつてタスクとイチヤついてるだろ！」

アンジュ「い、一緒には寝ていないわよ！」

シノ「(イチヤついてる事は否定しないんだな…:~)」

タスク「だから、俺はいつでもいいって言ってるんだけど、アンジュが…:~」

アンジュ「うるさい、黙れ変態！」

ゴーカイレッド「いつまでやってんだ、さっさとやるぞ！」

ゼロ「イチヤつくのは戦いの後にしろ！」

シャーリー「ルル、待ってるよ！」

ルルーシュ「お前まで何を言ってるんだ、シャーリー?!？」

カレン「あーもう! いいからやるよ！」

イオリ「いつまでも茶番を…! 魔徒教団に歯向かうエクスクロスめ! 此処で滅する

!」

零「やり辛いと思うが、我慢してくれよ、ペリドット！」

アスナ「別に、私はやる事をやるだけよ！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 アマリVS初戦闘〉

アマリ「ホープス、二度と零君が消えて欲しいなんて言わないで」

ホープス「ですから、冗談ですよ、マスター」

アマリ「それでも、大切な人には消えて欲しくないの！」

ホープス「私も同じ考えですよ。それにあいつが消えてしまったら、マスターを奪い

合う相手がいなくなりますから」

アマリ「…ホープス…。兎に角、零君と一緒に帰るために行くわよ！」

〈戦闘会話　メルVS初戦闘〉

メル「零さんとアスナ・ペリドットと一緒にいた…。やはり、アスナ・ペリドットは…。今気にしても仕方ありませんね…。今は戦闘に集中します！」

〈戦闘会話　零VSイオリ〉

イオリ「新垣！よくも…。よくも、アマリを変えてくれたな！」

零「あいつは自分自身で変わった…。俺はその手助けをしただけだ！」

イオリ「黙れ！こうなったら、あいつの記憶から俺を忘れられないようにしてやる！」

零「歪んだ愛が此処までくるともはや、病気だな…。！そんな事させるかよ！」

〈戦闘会話　アスナVSイオリ〉

アスナ「イオリ・アイオライト…。新垣　零の元へはいかせない！」

イオリ「オニキスのお前が何故、あいつを守る!?？」

アスナ「守ってなんかいないわ…。私達の目的のために行動しているだけよ！」

〈戦闘会話 アマリVSイオリ〉

イオリ「頼む、戻ってきてくれ！アマリ！」

アマリ「零君を傷つけて、あなたは何をしたいのですか!?!?」

イオリ「お前はあいつに騙されているんだ、だから俺と一緒に行くこう！」

ホープス「零と共に歩むのは許すが、お前と共に歩ませるのは流石に認められないな」

イオリ「黙れ、魔法生物！」

ホープス「私はマスターに恋をしているが、零を失ってマスターを悲しませるような事はしたくはないのでな！」

アマリ「ホープス……ありがとう。勝負です、イオリ君！」

ゼフィルスとゼルガードの連携でイオリの乗るディーンベルを追い詰めた。

イオリ「何故だ……何故だあああつ!?!?」

アスナ「此処で……墮とすわ！」

……!この気配は……!

零「ペリドット、危ねえ！」

俺はゼフィルスを動かし、リリスを突き飛ばし……。

零「ぐああああああっ!!?」

何処かから放たれたビームをモロに受けてしまい、地面に落下して叩きつけられた……。

アスナ「に、新垣 零!!?」

アマリ「零君!」

メル「あのビームは……まさか!」

すると、ガルム軍とアマテラス、ヴィジャーヤとドラウパが現れた。

ギルガ「ようやく見つけたよ、アスナちゃん」

アスナ「カルセドニー……!」

アユル「カルセドニーさん!今、アスナさんごと狙ってませんでしたか!!?」

ギルガ「気のせいだよ、アユルちゃん」

ジン「……」

零「ガハツ……!ぐっ……!カルセドニーッ……!」

クソが……また傷口が開いちまったじゃねえかよ……!

刹那「零、無事なのか……!!?」

零「……な、なんとかな……!」

アーニー「ジン……」

ジン「アーニー……ケリをつけるぞ」

アーニー「望むところだ！」

此処でオニキスの登場か……。

イオリ「オニキスカ……！流石に戦況が悪すぎる……撤退だ！」

魔徒教団は撤退した……。

ギルガ「さてと……アスナちゃん。今こそ任務を遂行する時だよ」

アスナ「で……でも、今日は……！」

ギルガ「僕に齒向かうの？」

アスナ「……そ、それは……！」

このままじゃ、ペリドットが……なら！

零「……ペリドット、来いよ……！」

アスナ「新垣 零……でも……！」

零「忘れたのかよ、俺達は敵同士だ！」

アスナ「っ……わかったわ……！行くわよ、新垣 零！」

ギルガ「……ホントに気にくわないね……」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「くそ…。目眩までしてきやがった…。そろそろ限界なのか…。！」

〈戦闘会話 アーニーVSジン〉

アーニー「ジン…。」

ジン「やはりお前にはまだ迷いがあるようだな…。」

アーニー「それでも、僕は…！」

ジン「お前はもう迷う事を許されないんだ…。全力を出せ、アーニー！」

〈戦闘会話 サヤVSアユル〉

サヤ「アユル、どうしてもやると言うのですね…。」

アユル「あなたがベルジュ少尉と共に歩むように私にもジンという人がいます！」

サヤ「…。そうですね。ならば、私も退く気はありません！」

オルフェスとヴィジャーヤ、ライラスとドラウパは互角の戦いを見せるが…。

ジン「この程度なのか…。アーニー！」

アーニー「くっ……！まだだ……！」

ジン「……これで、終わりだ！」

ヴィジャーヤはオルフェスに攻撃を仕掛けた……。

ジン「勝負だ……アーニー！ヴィジャーヤの力……教えてやろう！」

ヴィジャーヤはジェネレーターをフル回転させ、カノンの砲身にどこからか射出された拡張ユニットを接続した。

ジン「視えるか、俺の意志……俺の命が……！これで……！」

そして、カノンをボウガンのような形状に変形させて全開威力のビームをオルフェスに放った。

ジン「終わりだあああつ!!？」

ビームを受けたオルフェスは軽く爆発した。

アーニー「ぐあああつ!……こ、これがジンの……覚悟……！」

サヤ「少尉!!？」

リチャード「アーニー……！このままでは……！」

アユル「……」

ジン「終わりだ、アーニー!!？」

ヴィジャーヤがオルフェスに接近した……。

このままじゃ、アーニーが…！

アーニー「まだだ…」

ジン「！」

アーニー「僕の命は…こんな所で消えるわけにはいかないんだあああつ!!？」

オルフェスに謎の光が…!!?

サヤ「そうです、見せましょう、少尉！私達の命の輝きを…！」

アーニー「ああ、来い、サヤ!!？」

オルフェスとライラスが光に包まれ、一つになり、光が消えるとオルフェスとライラスが合体していた…。

マサキ「オルフェスとライラスが合体した…!!？」

ヴィラル「何だ…あのエネルギーは…!!？」

アーニー「オデュッセア…終わらせるぞ!!？」

オデュッセアはヴィジャーヤに接近した…。

アーニー「見せてやる…僕達の意志の力を！レプトン・ベクトラー、オールリンク
！サヤ！」

サヤ「少尉…これがわたしの、意志の力です！」

オデュッセアはライラスのパーツと思しき刀の柄を握り、ダスク・ライフルの銃身に

接続し、ベクトラーのエネルギーを流し込んで刀身を形成し、引き抜くと同時に実体化させた。

アーニー「うおおおおおっ!!?」

ダスク・ライフルを左腰に装着し空間跳躍で敵機の懐に入り込んだ。

アーニー「はあっ!食らえっ!これで、トドメだああっ!!?」

そして、ヴィジャーヤに三連続の斬撃を叩き込み、ヴィジャーヤに大ダメージを与え、光が出た。

ジン「そうだ、それでいいんだ...アーニー...!」

刀身を戻したオデユツセアは光の中を歩く。

アーニー「ジン、僕達は...負けない!」

アユル「ジン!」

ジン「久々に視せてもらったぞ...お前達の命の輝きを...ならば、次は俺達が応えるのみだ!」

アーニー「何度だって来い、ジン...。僕達は絶対に負けない!」

ジン「その言葉...そっくりそのまま返してやろう」

そう言い残し、ヴィジャーヤとドラウパは撤退した...

ギルガ「へえ。あのジン君を倒すなんてね...」

アスナ「これが… 自分自身の意志の力…」

サヤ「まだやれますね、少尉？」

アーニー「ああ、行けるよ、サヤ！」

〈戦闘会話 零VSアスナ〉

アスナ「新垣 零… 私は…」

零「全力で来い、ペリドット…。手加減なんてしたら承知しねえからな！」

アスナ「(でも、さっきの攻撃で新垣 零の身体は… 私は、何もできないの…！)」

〈戦闘会話 メルVSアスナ〉

アスナ「やつぱり、あなたの道は間違っていないかったのね」

メル「アスナ・ペリドット… あなたは…」

アスナ「これからもあなたはあなたの道を行きなさい…。私は私の道を行く…！」

メル「あなたに言われずとも私は自分の道を進みます！」

〈戦闘会話 アマリVSアスナ〉

アスナ「あなた、新垣 零と付き合う事にしたのね」

アマリ「ど、どうしてその事を…!?まさか、零君が…!」

アスナ「あなた達はお似合いのカップルよ」

ホープス「(ほう…) 彼女の抱いてる感情もまた、甘さを感じますね…)」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「あの時死んでいれば、君も楽になれたのにね」

零「…一つ聞く。お前にとってペリドットは何だ？」

ギルガ「…大切な仲間だよ」

零「よくわかった… お前という人間がな！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

メル「ギルガ・カルセドニー!あなたはアスナ・ペリドットを狙いましたね…!」

ギルガ「誤解を招く事を言わないでくれないかな?魔徒教団を狙ったのがアスナちゃんに向かつてしまっただけだよ」

メル「あなたは何処まで…絶対に許しません!」

戦闘を続ける俺達……。

アスナ「くっ……！」

ギルガ「……何をやっているの、アスナちゃん？真面目に戦つてよ」

アスナ「あ、あなたに言われなくてもやってるわよ！」

ギルガ「いや、今の君では新垣 零には勝てないよ……彼に惚れてしまった君ではね……」

アスナ「っ……！わ、私が……」

ギルガ「少しお仕置きをしないとイケないね……アスナ・ペリドットを拘束しろ」

カルセドニーに命で三機のガラムがリリスを捕らえた。

零「ペリドット……！カルセドニー……そいつに何をする気だ……？」

ギルガ「それを君が知る必要はないよ」

そうは行くかよ……！

零「ふざけるな……！ペリドットを離せ……！」

俺はバスタードモードを発動させ、アマテラスに斬り込んだ……が……。

ギルガ「甘過ぎるんだよ、君は……」

確実に当たたる距離にあった……。だが、アマテラスに簡単に避けられた……。

零「な、何…!?」

一夏「ゼフィルスの攻撃を避けた…!?」

何てスピードで避けたんだよ…!

零「ぐっ…!」

すると、バスタードモードが解除され、またもや痛みが俺の体を襲った。

ギルガ「…やはり、君はもうその段階にまで来ていたのか」

その段階だと…?

零「どういう意味だ…!?」

ギルガ「バスタードモードは使用するたびに進化する…そして、ハイバスタード

モードになるんだ」

零「ハイバスタードモードだと…!?」

ギルガ「そう、君のバスタードモードはハイバスタードモードに進化する一歩手前ま

で来ているんだよ」

零「なら、この痛みやバスタードモードが強制的に解除されるのは一体…!」

ギルガ「ハイバスタードモードはバスタードモードよりも強力だ。故にその強力な力

に耐えきるほどの器が必要なんだ…だが君はその器ではないんだよ」

零「俺の身体が…進化していくバスタードモードの力に耐えきれなくなっただって事

か：：
!!?」

ギルガ「その通り。そして、それでも使い続けた君の身体は力を増したバスタードモードによって痛みを与え続けられているという事だ。このままバスタードモードを使えば、君は死ぬ」

死ぬ：：。だと：：。
!!?

零「：：バスタードモードを使えば：：死ぬ：：。だが、俺は退く訳にはいかないんだよ!!?」

ギルガ「格好いいね、君の覚悟は：：」

アスナ「やめて、カルセドニー！新垣 零は怪我を：：！：：っ！」

ギルガ「へえー：：いい事を聞いたよ。ありがとう、アスナちゃん」

アスナ「ち、ちがつ：：そんなつもりじゃ：：」

零「心配するな：：ペリドット：：俺は負けない：：！」

ギルガ「愚かだね、君の誰かを守りたいという心が君自身を滅ぼすんだ：：。見せてあげよう、ハイバスタードモードの力を：：！」

アマテラスはゼフィルスに接近して来た：：。

ギルガ「終わりにしよう、新垣 零。ハイバスタードモードの力を味あわせてあげるよ」

カルセドニーはハイバスタードモードを発動させて、スラツシユブレードでゼフィルスは何度も高速斬りで斬り裂く。

ギルガ「まだまだ斬り刻んであげるよ」

そして、ゼフィルスを蹴り飛ばし、スラツシユブレードとガンブラスターを合体させた。

ギルガ「ガンブラスター・フィニッシュモードで決めるよ！」

ゼフィルスに接近してきて、ボディに突き刺し、ガンブラスターの引き金をひいた。

ギルガ「消し飛ばええええつ!!?」

零「うわあああああつ!!?」

ゼロ距離で最大出力のビームを受けてしまったゼフィルスは大ダメージを負い、俺もあまりの衝撃にダメージを負った。

零「ガツ：：！グハアツ：：！」

ゼフィルスは爆発を起こし、地面に落下して、コックピットで俺は大量の血を吐き、傷からは大量の血が流れ出た。

アスナ「新垣 零イイイ!!?」

メル「零さん：：嫌あああつ!!?」

ギルガ「：：新垣 零：：」

零「ガッ：：アアッ：：！」

ギルガ「明日、またこの場所で君を待つよ。今度は男同士：：一対一で戦おうじゃないか」

カルセドニーが：：タイマンで勝負だと：：？

ギルガ「今日はここで帰らせてもらうよ、行くよ、アスナちゃん」

アスナ「私の：：せいで、新垣 零が：：」

ペリドットはコックピットで俺のコートをグッと握り、リリースはガラムに連れられ、オニキスは撤退した：：。

アマリ「しつかりしてよ、零君！イヤ：：零くううん！！？」

アマリの声を聞いて俺は気を失った：：。

俺は：： 負けたのかよ：：。

「アニエス・ベルジュだよ。」

サヤ「ようやく、オデュッセアに合体する事が出来ましたね」

エルザ「それで結局、オデュッセアに合体できなかった理由はなんだロボ？」

ウエスト「ふむ… 機体的には異常は見られなかったのであるからな」

アーニー「おそらく、この世界に來た僕達の命の輝きが失われつつあったのかもしれないね…」

リチャード「何故だ？」

アーニー「詳しい事は分かりませんが… そんな気がします。（もしかして、ジンは僕達に命の輝きを取り戻させるためにあんな事を…」）」

アイーダ「それよりも、零さんの容態はどうなのですか？」

ベルリ「今、N-101号の医務室で治療されています。メルさんとアマリさんが側にいるはずですが…」

「アマリ・アクアマリンです。」

メル「…」

アマリ「零君…」

ホープス「メル様、マスター…。何も零は死んだわけではありません。その様な悲しい顔をしていれば零が目を覚ました時に零が心配しますよ」

メル「はい……」

アマリ「ありがとう、ホープス……」

デンギル「……」

ホープス「デンギル先生、零の容態は……」

デンギル「もう彼を……ゼフィールスに乗せてはダメなのかもしれない……」

え……
!??

メル「ど、どういう意味ですか!??!」

イコリーナ「法師セルリックによつて傷つけられた傷もだけど……彼の身体は既にボロボロなの……。今までこんな身体で戦っていたなんて……」

バスタードモードを使っていたから……。零君の身体がボロボロに……。

零君……私に何かできる事は……。ないの……? ?

ーアスナ・ペリドットよ……。

カルセドニーに叩き飛ばされた私は地面に倒れた。

ギルガ「まさか、君まで新垣 零に惚れるだなんてね……。もう、レイヤ・エメラルド

の事はいいの？」

アスナ「わ、私は……」

すると、カルセドニーは私の髪を掴み、言った。

ギルガ「まあいいよ……。君にはやつてもらいたい事があるからね。新垣 零を容赦なく叩き潰すためのね……」

新垣 零……ごめんなさい…… 私は……！

第38話 進化の奇跡

「新垣 零だ。」

俺はまた暗い空間にいた。

零? 「何だよ、またここに来たのかよ……」

目の前には以前話したもう一人の俺がいた。

零 「お前は……」

どうやらもう一人の俺はまたもやここに来た事にあきれているようだ。

零? 「にしてもギルガ・カルセドニーの奴に見事な負け方をしたな……」

い、痛い所を突いてくるじゃねえか……。

零 「次は負けない……」

零? 「ん? ああ、そう言えばタイマン勝負を挑まれているんだつたな……」

零 「その勝負で俺は勝つ!」

零? 「……ハッキリ言うぜ。無理だ…… お前じゃあギルガ・カルセドニーには勝てない」

え…!??

零「な… 何でそんな事がわかるんだよ!?」

零? 「ハイバスターモードをも扱えない程の貧弱な肉体のお前が勝てるはずないだろ」

零「…」

零? 「それに傷は開きまくるわ、身体はボロボロになるわ… そもそも勝負にならねえよ」

零「それでも俺は…!」

零? 「言っておくが、気合や根性でなんとかなるほど、戦いは甘くねえ…。お前は戦いを舐めすぎなんだよ!!?」

零「うるさい…!俺は…!」

気がつけば俺は怒鳴っていた…。

零? 「勝負はやってみなくちゃわからない? 土壇場でパワーアップして敵を倒す? んな、バトルアニメの主人公みたいな展開くると本気で信じてんのかよ?」

零「そんな事…!」

零? 「いや、お前は心の何処かで信じてんだよ…。必ず勝てる展開がくる…。ハイバスターモードを扱えるようになる…。つてな」

零「……俺は……俺は……！」

零? 「だから、今のお前じゃ……。あいつには勝てないんだよ。そう、今のお前じゃあな……」

勝てない……。今の俺ではカルセドニーに……。

零? 「だが、勝つための方法は存在する」

何だと……。!??

零「な、何だよ、その方法って……！」

零? 「バスタードモードが使用するたびに進化していくなら……。お前自身が別のやり方で進化すればいい」

零「俺自身の……。別の進化……?」

零? 「簡単に言うと、バスタードモードとは違う力を身につければいいんだよ」

バスタードモードとは違う力……。

零? 「お前……。いや、俺ならば必ずその進化を見つけられる……。期待しているぜ」
もう一人の俺のその言葉を聞いた後、俺の目の前は真っ白になった……。

目を覚ますとNーノーチラス号の医務室にいた。

零「……。またここか……」

視線を横に向けるとアマリやメル、エクスクロスのみんながいた。

アマリ「零君!!?」

メル「目が覚めたんですか!!?」

零「見ての通りだよ……。また、心配をかけたな……」

千冬「全くだ、馬鹿者」

ジョーイ「でも、無事でよかったです!」

アムロ「……」

ルリ「零さん、カルセドニーさんとの決闘の事ですが……」

あいつが言っていたあれか……。

スメラギ「あなたを出撃させる事は許可できないわ」

…… なっ……!!?」

零「ど、どうしてですか!!?……っ……!」

ラッセ「その身体が物語っているだろ。お前の身体はもう既に限界を迎えてんだよ」

しんのすけ「限界……?」

ワタル「どう言う事なの、スメラギさん!!?」

スメラギ「零は見た目では何ともないけど、身体の内ではとてつもない疲労が溜まっ

ている…… 疲れているのよ」

しんのすけ「本当なのか、零お兄さん!!?」

零「…」

フェルト「このまま戦えば… あなたの身体は…」

零「それ以上、言わなくてもいい」

アニュー「零…」

零「自分の身体の限界は自分がよく分かっている… それでも、俺は退くわけにはいかないんです…！」

ヒイロ「例え死んだとしてもか？」

零「死ぬ気はない…でも、戦わずに命が消えるなら…俺は戦って命を消したい」
メル「そ、そんな事はダメです！」

アマリ「ええ…ダメよ…死んだら…」

… やっぱりダメか…

アマリ「だから…」

アマリは優しく俺を抱きしめてくれた…

アマリ「必ず勝って…生きて帰ってきて」

零「…！アマリ… ああ！」

俺はニカツと笑い、アマリを抱き返した。

倉光「ちよ、ちよつと！良い雰囲気のところ悪いけど、流星に出撃を認める事はでき

ないよ！」

ネモ船長「だが、彼は言っても効かないでしょうね」

ドニエル「ネモ船長!!?」

ヒュウガ「男にはやらなければならぬ時があるからな！」

摩耶「ヒュウガボスまで…織斑先生！」

千冬「…おい、零」

零「はい…?」

千冬さんに呼ばれ、俺とアマリは一旦離れて、千冬さんを見る。

千冬「勝つ自信はあるのか？」

零「正直ないです…。でも、勝つ自信は戦いの中で身につけます！」

千冬「…フツ、ならば何も言うまい」

一夏「千冬姉…」

ユイ「皆さん、本当にいいのですか!!?このままでは零さんが危険なんですよ!!?」

ノブナガ「それこそが男の覚悟だ」

ユイ「でも…!」

ルルーシユ「ならば、祈ればいい。零が無事帰還する事を…」

レナ「信じよう、ユイ。零を…私達の仲間を…」

ユイ「… うん…。 零さん、絶対に帰ってきてくださいね…。」

零「ああ、ありがとうな、ユイ」

ユイの言葉に笑顔で頷いた俺は彼女の頭を撫でるが、アマリは頬を膨らませる。

アマリ「…。」

零「嫉妬すんなよ…。 ほら」

膨れるアマリも可愛いな…。 そんな事を思いながら彼女の頭を撫でた…。

アマリ「もう、零君ったら…。」

メル「… 零さん…。」

零「メル… お前には心配させてばかりだな…。 ごめん」

メル「… 何を今更…。 でも、信じていますよ、零さんが勝つ事を…。」

零「ああ、約束だ！」

俺はメルと指切りをし、笑いあった。

倉光「… はあ…。 わかったよ、でも無理はダメだよ」

ドニエル「… お前が死ねば、悲しむ奴が大勢いると言う事を忘れるなよ?」

スメラギ「本当にパイロットって命令を聞かないわね…。 でも、流石と言えるわ」

ルリ「勝つてください、ただそれだけです」

零「了解しました！」

その後、決闘まで安静にしろと言われ、みんなは部屋を出て行った……。さてと、寝るか……。

すると、俺の下へ通信が入った。

零「……このコード……誰だ……？」

俺は通信を開くと聞かなれた声が聞こえた……。

零「なっ……！お前は……！」

何故、こいつが通信を……！

通信相手はある事を俺に話した……。

零「そ、そんな事が……」

通信相手の言葉……信じるなら、この決闘は……。

第38話 進化の奇跡

カルセドニーとの決闘の時間になり、俺はゼファイルスで待機する。

取り敢えず、傷は応急処置で塞がれた。

ユリカ「零君、身体は大丈夫？」

零「はい、ぐっすりと寝たので大丈夫です！」

溪「負けないですよ、零！」

ミレイナ「… オニキスが来るです！」

すると、アマテラスとガラム部隊が現れた。

號「一応他の兵士は連れてきているのか…」

ルリ「零さん、頑張ってください！」

ハーリー「ゼフィールス、出撃してください！」

俺は出撃した…。

ギルガ「決闘に応じてくれて感謝するよ、新垣 零」

零「… 逃げる気はなかったからな。それよりも、本当にタイマンで勝負するんだろ

うな？」

ギルガ「勿論だよ、僕だって男だからね…。あ、始める前にこの映像を見せてくれ」

ゼフィールスにある映像が送られた…。

その映像に映し出されていたのは、鎖により拘束され、複数のオニキス兵士に銃を向けられていたペリドットの姿だった。

零「ペ、ペリドット… ！？カルセドニー… てめえ!!？」

ギルガ「この事を仲間教えたり、君が僕に勝利すれば… 彼女がどうなるかはわか

らないよ」

零「… カルセドニー…！」

ギルガ「さあ、やろう… 男同士の真剣勝負というものをね」

何処が男同士の真剣勝負だよ…！」

俺とカルセドニーの戦いが始まった…。

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「さあさあ！ 攻撃してみなよ、新垣 零！」

零「くっ…！ どうすればいいんだよ…！ （何とか時間を稼がないと… 後は頼む

ぞ、弘樹…！）」

ペリドットを人質に取られているため、攻撃ができずにいる俺…。

海道「何やってんだよ、新垣の奴！」

デイオ「何故、攻撃しないんだ…？？」

エンネア「攻撃できない状況じゃないのに…！」

セシリア「もしや、またお傷が……！」

ギルガ「ほらほら、どうしたの、新垣 零？このままじゃあ……負けるよ？」

こ、こいつは……！

零「グアアッ！」

くそっ……！流石にやばい……！まだなのかよ、弘樹……！

ー氷室 弘樹だ。

俺はカルセドニーの作戦を聞き、サファイアの頼みでこの作戦の事を零に通信で話した。

そして、俺とサファイアはカルセドニーによって拘束されているペリドットの下にまで来た。

アスナ「新垣 零……どうして……どうして私なんかを……」

オニクス兵士「馬鹿な男だ……彼女は敵だというのに……」

オニクス兵士2「それにカルセドニー様に勝てるはずないのにな！」

アスナ「あなた達があいつを馬鹿にしないで！」

オニクス兵士「黙れ、人質の分際が！」

アスナ「ガハッ……！」

オニクス兵士2「奴が死んだ後は覚悟しろ……お前にも痛い目を見てもらうからな！」

弘樹「痛い目を見るのはお前らの方だ！」

俺達は兵士達の前に立つ。

オニクス兵士「氷室にサファイア様……？何故、此処へ……？？」

カノン「銃を下げてください！これ以上の行為は許しません！」

オニクス兵士2「……いくら、サファイア様の命令とはいえ聞けません！私達はギルガ様の部下です！」

カノン「……私では……止められないの……？」

弘樹「いいや、よくやってくれたよ、サファイア。後は俺に任せろ！」

サファイアの頭を撫でた俺は駆け出し、オニクス兵士達が銃を発砲する前に殴り飛ばし、全兵士を気絶させた。

弘樹「ふん、俺を舐めるなよ……。サファイア！」

サファイア「はい！」

サファイアは俺の声に頷き、ペリドットの拘束を解いた。

アスナ「あなた達……どうして……」

カノン「どうしてって… 私達、仲間じゃないですか！」
アスナ「カノン…」

ペリドットの救出に成功し、俺は零に通信を送った…。

―新垣 零だ。

アマテラスの攻撃を耐え続ける俺の下へ通信が入った。

通信に出ると弘樹の顔が映し出された。

零「弘樹！」

弘樹「待たせたな、零！ペリドットの救出は完了だ！」

すると、映像が拘束を解かれたペリドットとサファイアの映像に切り替わった。

零「そうか…」

弘樹「俺達はやったぞ… 後はその野郎に勝て!!？」

零「へっ… あつたりめええだ!!？」

もう我慢する必要はねえ!!？

ゼファイルスを動かし、アマテラスを斬り飛ばした。

ギルガ「ぐあああつ…！な、何をしているのか、わかっているのか、君は!!？」

零「何って、攻撃だ」

ギルガ「アスナちゃんがどうなってもいいのだな……って、なんだこれは……!?？」

どうやら、カルセドニーも通信映像で今の状況を見たようだな。

ギルガ「何故、兵士が全員倒れて、アスナちゃんの拘束を解かれているんだ……!?？」

弘樹「残念だったな、カルセドニー」

ギルガ「氷室 弘樹……君の仕業か……！」

零「そう、お前は馬鹿に引つ掻き回されたんだよ！」

弘樹「おい、零！馬鹿って何だよ!?？」

零「冗談だ、筋肉馬鹿」

弘樹「俺はそこまで筋肉質じゃねえ！」

ギルガ「……いいだろう。それ程までに僕を怒らせたのなら……死をもって味わえ!!？」

カルセドニーはハイバスタードモードを発動させ、俺を攻撃した……。

零「ぐおっ……！」

俺はバスタードモードを発動しようとしたが、無理だった。

ギルガ「無駄だ！どちらにしろ、君では僕には勝てないんだ！」

零「……ど、どうすれば……！」

… 戦いの中で強くなる… 進化する…。 そうだ… ! 人間は日々進化して
く… それは俺も同じだ!!?

零 「俺は昨日までの俺と違う…」

ギルガ 「何が違うと言うんだい!!?」

零 「俺は… 昨日の俺よりも進化する! 誰かを守る為に… このアル・ワースを守る
為に!!?」

零? 「(そうだ、進化による奇跡を起こせ、相棒!!?)」

もう一人の俺の言葉が頭に響き、俺は目をエメラルド色に発光させた。

真上 「ゼフィルスの瞳が…」

メル 「エメラルド色に発光した… !!?」

アマリ 「零君…」

ホープス 「(この土壇場で新たな力を身につけたか… 流石だ、零)」

ギルガ 「な、何なんだ、その力は… !」

零 「進化の奇跡… 名付けるなら、エボリューションモードだ!!?」

ギルガ 「何故だ… そんな力は知らない!」

零 「当たり前だ… これは、俺の進化の証だからだあああつ!!?」

俺はカルセドニーに攻撃を仕掛けた…。

零「此処でお前を倒す、カルセドニー！行くぞ、ゼフィルス！」

エボリユーシオンモードの力を使い、俺は高速移動で動き出した。

零「バスタードモードが力なら……エボリユーシオンモードは速さだ！」

俺は速さに乗り、クロスソードで何度もアマテラスを斬り裂き、クロスガンに変えて、撃ちまくった。

そして、クロスソードに戻し、バスターソードモードにした俺はゼフィルスをさらに高速に動かした。

零「まだだ……まだ上がる……！まだだ、ゼフィルス！もつと速く……速く、速く……？」

もはや瞬間移動並みのスピードでバスターソードで何度も斬り裂き、最後にクロスガン・ブラスターモードにした。

そして、アマテラスの周りをグルグルと回り、高速移動による分身を作り出す。

零「これで……終わりだああああっ!!？」

分身は一斉に最大出力のブラスターモードからビームを放ち、それを受けたアマテラスは大ダメージを負った。

ギルガ「馬鹿な……何なんだこれはあああっ!!？」

大ダメージを負いながらも俺を睨みつけるカルセドニー……。

ギルガ「何故だ…… 何故彼ばかり……！」

零「勝負ありだ…… カルセドニー！」

ギルガ「…… まだだ…… もう、決闘など知った事か！全機、新垣 零を攻撃しろ!!？」
つて、結局こうなるのかよ……！」

ネモ船長「そうはさせせん、機動部隊は出撃しろ」

ネモ船長の言葉にみんなは出撃した……。

デュオ「俺達、参上!…… と言わせてもらおうぜ」

トロワ「此処からは俺達も参加させてもらおう」

ゼクス「あの極限の状態でよく勝てたな、零」

零「だいぶ土壇場でしたけど、弘樹がやってくれたんでうまくいきました!」

ノイン「何故、お前の友人の名が出てくる？」

アスナ「そもそも、あの決闘は決闘ではなかったからよ」

すると、リリスが出てきた。

零「ペリドット!」

アスナ「カルセドニーは私を人質にして新垣 零に攻撃をさせないようにしていたのよ!」

カンナム「何だと…… !!？」

シモン「なんて汚ねえ野郎だ！」

五飛「それに勝負に負けたら潔くひくのが男だ、お前は男の風上にもおけん！」

ギルガ「黙れ、エクスクロス！こうなったら、君達を潰す！」

アスナ「私も戦うわ！オニキスのアスナ・ペリドットではなく、ただのアスナ・ペリドットとして！」

ペリドット「……！」

ギルガ「アスナちゃん！君もオニキスを裏切るのか!?？」

アスナ「気安く名前で呼ばないで！もう私はあなたの部下じゃない！」

メル「アスナ・ペリドット……」

アスナ「……私があなた達と一緒に戦う資格がないのはわかってる……。でも、今は……」

メル「私はあなただを許しません……。これからもずっと……。でも、私はあなたと同じ身です。これから罪を償うというのなら……。私もお手伝いします、アスナさん！」

アスナ「……メル……」

零「なら、俺も手伝わせてもらおうぜ」

アスナ「え……！」

零「おいおい、そのあからさまに驚いた顔するのやめろよ……」

アスナ「ご、ごめんなさい……。でも、ありがとう、零……」

零「お安い御用だ、アスナ」

ギルガ「新垣 零！やはり君は此処で消す！」

零「来やがれ、エボリユーシヨンモードが使えた事によつて、バスタードモードもまた使えるようになった……。もうお前には負けねえぞ！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「俺はまだ強くなる……。誰も失わないためにも……。だから、俺は進化し続ける！」

〈戦闘会話 アスナVS初戦闘〉

アスナ「今ならメル of 気持ち分かる……。私も戦う……。零のために！」

〈戦闘会話 メルVS初戦闘〉

メル「やはり、零さんは凄い人です……。あのアスナさんをも変えてしまうのですから」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

零「カルセドニー… 確かにお前は強い…」

ギルガ「そうだ、僕は強いんだ！」

零「だが、お前は守るために戦っていない！」

ギルガ「何かを守るために生命をかける方が理解不能だ！」

零「それがわからないお前に俺は負けるわけにはいかないんだよ！」

〈戦闘会話 アスナVSギルガ〉

ギルガ「アスナちゃん、今戻ってくるのなら、まだ許すよ！」

アスナ「そんな言葉で私が戻るとでも思っているのなら、あなたは女を見る目が合わないわね！」

ギルガ「な、何だと…!?」

アスナ「あなたに散々やられた仕返しを… 今、数倍にしてあげるわ！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

メル「無様ですね、ギルガ・カルセドニー…。アスナさんまでにも見放されると

は……」

ギルガ「メルちゃん……！君も僕を侮辱するのか！」

メル「侮辱ではありません、事実を言ったまでです！覚悟してください、私はもう甘くはありませんよ！」

〈戦闘会話　アマリVSギルガ〉

ホープス「ああいう人間が女の敵なのですわね」

ギルガ「魔法生物のお前に言われる筋合いはない！」

アマリ「ホープスにはホープスという名前があります……。そして、私もあなたの事を許しません、一人の女として！」

〈戦闘会話　シモンVSギルガ〉

ギルガ「螺旋の男、シモン！僕に挑んでくるのか！」

ヴィラル「シモン、奴を思い存分ぶん殴るがいい！」

シモン「言われなくても、そうしてやる！男同士の決闘を踏みにじったお前の性根を叩き直してやる!!？」

〈戦闘会話 ルルーシユVSギルガ〉

ギルガ「何故だ…… 僕の作戦は完璧だったはず…… !!?」

ルルーシユ「それで完璧だと思ったのなら、貴様は所詮それまでの男だ、ギルガ・カ
ルセドニー」

ギルガ「うるさい、魔王！ 全ては僕の思い通りにならないゴミどものせいだ！」
ルルーシユ「ほう、ならばそのゴミに負けるとはお前はゴミ以下だな」

俺達はアマテラスにダメージを与えた……。

ギルガ「ぐっ……！ 嘘だ！ 僕は負けるわけにはいかないんだよおおつ!!?」

アマテラスのダメージが回復した…… !!? ?

青葉「これじゃあ、キリがないぞ！」

マリィダ「だが、何としてでも奴を倒さなければ……！」

アスナ「…… 零、メル。力を貸して！」

アスナの奴…… 何か考えがあるのか…… ?

零「わかった、行くぞ、メル！」

メル「はい！」

俺達は一斉にアマテラスに攻撃を仕掛けた……。

零「これで終わりだ、カルセドニー！」

アスナ「連携で行くわよ、二人共！」

メル「まずは撃ち続けます！」

メサイアはバスタービットと共に何度も銃撃を放ち、その隙にゼフィルスとリリスが近接攻撃を仕掛けた。

零「はあっ！」

アスナ「せやあっ！」

メル「私もダガーで……！」

ゼフィルスとリリスが攻撃する中、ダガーを構えたメサイアがアマテラスに突進し、ダガーで斬り刻んでいる間に俺もクロスガンによる銃撃でメサイアを援護する。

アスナ「行くわよ、零！」

零「おう！」

零&アスナ「バスタードモード!!？」

同時にバスタードモードを発動させた俺達はバスターソードモードとブレードによる連続攻撃を浴びせ、

零「この一撃を……」

アスナ「食らいなさい！」

最後に同時にクロスと描くようにアマテラスを斬り裂いた俺達の後にメサイアが続いた。

メル「これで… 終わりです！」

バスターライフルを放ち、アマテラスに大ダメージを与えた。

ギルガ「う… 嘘だっ！うわあああつ!!？」

俺達の連携攻撃を受けたアマテラスは大きく吹き飛んだ。

アムロ「いい連携だ！」

九郎「あの三人… 本当に一緒に戦うのが初めてなのかよ！」

アマリ「… ちよつと妬けますね…」

ホープス「マスター…」

ギルガ「… ぐっ… 後悔する事になるよ… アスナちゃん！」

アスナ「…」

零「アスナには指一本触れさせない…！」

アスナ「零…」

ギルガ「やはり、僕はお前が嫌いだ… 新垣 零！」

そう言い残し、アマテラスは撤退した…。

零「お前に好かれたいとも思わないけどな…」

残るガラムも全滅させて、俺達は戦闘を終えた。

フェルト「敵の全滅を確認しました」

ラツセ「一時はどうなる事かと思っただが、何とかなつたな」

アマリ「零君、やったわね！」

零「… さつすがに疲れた…。」

アマリ「… な、なら、私が疲れを癒してあげてもいいけど…。」

零「期待してるぜ、アマリ」

アンジユ「また、この二人は…！」

アスナ「…。」

メル「アスナさんも来てください」

アスナ「… いいの？」

メル「アスナさんも仲間ですから！」

アスナ「ふふっ、ありがと」

俺達はそれぞれ戦艦へ戻り、プトレマイオスの格納庫に集まった。

ニール「よく、あんな汚い手の作戦に気づけたな」

零「弘樹からの連絡で知ったんです」

メル「やはり、氷室さんが関わってましたか……」

アンドレイ「そう言えば、零君……怪我はどうしたんだい？」

零「……エボリューションモードを使用できるようになったと同時に治りました」

スザク「え!?？」

アルト「何だよ、それ!?？」

零「俺だつてわからねえよ！」

カトル「いいではありませんか、零さんが無事で」

アマリ「カトル君の言う通りです！」

セルゲイ「そういうことにおこう」

すると、倉光艦長、スメラギさんとアスナが歩いて来た。

倉光「はい、みんな注目！」

スメラギ「今日から一緒に戦う仲間を紹介するわ」

アスナ「アスナ・ペリドット……です。あの……皆さんにまず謝罪をします……申し

訳ありませんでした！」

ユイ「……」

やつぱり、ユイとレナは厳しい顔をしているか……。

まあ、アスナには二度もエナストリアの国民に攻撃されたからな……。

アスナ「許されない事は分かっています…ですが、私は…」

ユイ「顔を上げてください、アスナさん」

アスナ「ユインシエル陛下…」

ユイ「確かにエナストリアを攻撃した事は事実です。その事に関しては私はあなたを許しません…」

アスナ「…」

ユイ「でも、今日、あなたは私達と共に戦ってくれました！そしてあなたは私達の仲間です！」

アスナ「…ありがとうございます…！」

ユイ「敬語なんてやめてください、私の事はユイと呼んで下さい」

アスナ「ええ…ユイ」

しんのすけ「へい、アスナお姉さん！大粒納豆と小粒納豆…どっちが好き？」

アスナ「私は小粒派よ」

しんのすけ「お？」

アンジュ「真面目に答えなくていいわよ…」

零「気をつけるよ、しんのすけ。アスナは結構を難しい女だぜ！…つて、痛っ!?!？」

アスナ「殴るわよ？」

零「殴つてから言うなつての！」

アスナ「…それから… 零もありがとう… これ」

あ、コート忘れてた…。

俺はアスナからコートを受け取り、羽織る。

アスナ「このコートの温もりは… 決して忘れないわ」

零「そうか」

アスナ「… えいつ！」

… へっ…？

アマリ&メル「「ふえっ!?」」

… 何が起こってるんだ？

うん、ありのままに話そう…。アスナが勢い良く俺に抱きついてきたのだった…

いや、わからん…！

零「あ、アスナ、お前！何してんだよ!? 離れる！」

アスナ「イヤよ… アマリ、メル…。私、手に入れた人は力づくで手に入れる主義

だから」

零「い、いや… お前…！」

アスナ「… 良いじゃない、抱きつくくらい…。一夜を一緒に過ごした仲間だから

！」

まゆか「い、一夜を一緒に!!?」

ネネ「やだ、零さん大胆！」

零「い、いやいや待て！誤解だ!…。つて、アスナ！誤解を招く言い方するなよ！お前とは何もなかっただろ！」

アスナ「手は握られたけど…」

零「あ、あれは…！」

アマリ「…零君…?」

零「あ、アマリ?!?誤解だ?!?落ち着け！」

ホープス「これが浮気というものか」

零「話をややこしくすんじやねえよ、腹黒オウム！」

アマリ「零君がそんなことする人じゃないというのはわかってる…。でも、お話ししよう?」

う…！

アンジュ「私も参加させてもらおうわ」

千冬「零…。あまり、女をなめるなよ」

零「何で二人まで…！ひ、ヒルダ！助けてくれ!!?」

ヒルダ「… 馬に蹴られて死ね！」

ヒルダさん!!?」

零「ゆ、ユイ！」

ユイ「あ、えーつと… サラちゃん達と遊ぶので失礼します！」

ユイにまで逃げられた!!?」

アマリ「私は怒らないよ… だって、疲れを癒すって決めたから…」

零「… アマリ…」

アンジュ「結局イチャつくのか、そこー！」

アスナ「ふふっ」

メル「ず、随分悪い顔で笑いますね…」

アスナ「楽しい人達が揃っているわね、エクスクロスは…」

メル「… はい、そしてあなたもその一人です、アスナさん！」

アスナ「そうね、これからよろしく、メル！」

アスナとメルは握手をした…。

良かったな… アスナ…。

第39話 借金女王と家族と宿命のライバル

―新垣 零だ。

俺達はシグナスのパイロットでアマリからある話を聞いていた。

零「記憶が曖昧……？」

アマリ「うん……。今回の一件でなんとなくわかったんだけど、私の教団で過ごした10年間以上の記憶……あれは全て偽りのものだったようなの。と言っても、正しい記憶……つまり、私の本当の過去というものはわからないんだけど……」

ホープス「なるほど……。マスターの感じていた生きている事への疑問とはその偽りの記憶に対してだったのですね」

アマリ「ホープスに出会った時、何かのきっかけで記憶の封印が解けたみたいです。ありがとう、ホープス。あなたに会えた事が、私にとつて旅の始まりだったようです」

ホープス「私自身が何かしたわけではないので、お礼を言われる筋合いはありません」
チャム「(ホープス、照れてる！)」

へべ「(からかうのはやめなよ。絶対にヘソを曲げるだろうからね)」

アスナ「だとしたら、あのイオリ・アイオライトって男も同じように記憶改ざんをされている可能性があるって事ね……」

メル「彼だけでなく、教団の術士達が同じ目に遭っている可能性も考えられます」

アーニー「いったい何のために、そんな事を……？」

アマリ「私にも見当が付きません……」

零「……」

アスナ「どうしたの、零？」

零「アマリには一回聞いたけど……もう一回聞く……。アル・ワースでお前に会う前に何処かで会わなかったか？……アマリだけじゃない……。メルとアスナもだ」

サヤ「え……？？」

アマリ「……ううん、あの時が初対面よ」

メル「いえ、私もです。アスナさんは？」

アスナ「(どういう事……？彼は本当の自分を取り戻しつつあるって事なの……？)」

メル「アスナさん？」

アスナ「……な、何でもないわ……。私もあなたとは初対面よ」

零「そうか……」

アスナやメル、アマリだけじゃない……。オニキスのカノン・サファイアとイオリ・ア

イオライト……。あいつ等とも何処かであった様な気がする……。

カレン「それにしても…… ますます、魔徒教団の事が分からなくなってきたわね」

C・C・「とは言うが、教団が悪と戦ってきたのも事実だろう」

サリア「そうね。アル・ワースの歴史を見てもそれは間違いないわ」

アンジユ「こんな時でも連中を信じるって言うの？」

サリア「そういうわけじゃないけど……」

アンジユ「こうなったら、あんな連中と通じているアルゼナルも信用できないわ」

ヒルダ「サリア……。お前は何か知っているか？」

サリア「私には……。わからない……。(アレクトラは私に何も話してくれなかった……)

ヴィルキスの事も、ドラゴンの事も……」

アンジユ「とりあえず、もう少し情報を集めてからじゃないと司令を追い詰めるのは

危険かもね……」

ヒルダ「ちっ……。イライラするぜ……」

ルー「私達は、教団が自分達の駒にするためにアル・ワースに呼ばれたみたいね……」

エル「でも、異界人を呼び込んだおかげで戦いは拡大してるじゃないのさ！」

ミラーナイト「という事は、彼等の計画は失敗したのでしょうか……？」

アマリ「そうとは限りません。ドアクダーやエンブリヲに召喚された異界人への対抗

戦力として、皆さんが召喚された可能性もあります」

ホープス「法師セルリックも召喚事件の真相を知らなかった以上、導師キールディンに確認する以外、答えは得られないでしょうね」

アマリ「それと…導師キールディンが言っていた事なのですが…。自らの意思でこの世界に来たゼロさん、そして、召喚された皆さん…。ですが、ある一人だけは誰に召喚されたのかわからないんです」

ゼロ「その一人ってのは？」

アマリ「零君です…」

…えっ…?!?

零「俺…?!？」

アマリ「うん、導師キールディンが言っていたの…。あなたを召喚したのはミスルギでも、ドアクダーでも、魔従教団でもないって…」

じゃあ、俺は誰に召喚されたんだ…？

いや、答えは見えているじゃないか…。

零「…オニキスの首領か…？」

キキ「オニキスの首領?!？」

ヒカル「いい線つくね、零君！」

イズミ「確かにオニキスは魔従教団と同じ様に謎な所が多いからね」
リョーコ「アスナは何か知らないのか？」

アスナ「わ、私は……ごめん、何も言えない……」

ユリカ「気にしなくていいよ、アスナちゃん！」

アキト「考えられるのはオニキスの首領が零君を捕らえるために連れて来たという事か……」

朗利「だが、捕らえる前に零はシャイニング・ゼファイルスという機体を手に入れた……」
金本「オニキスの首領もそれは計算外だったと思うけど……」

零「それはない」

エイサツプ「どうして、そんな事がわかるんだ？」

零「奴等は俺がゼファイルスに乗っている事に驚きもしなかった……。それに俺だけでなく、ゼファイルスごと俺を捕らえようとした……」

アマルガン「ゼファイルスもオニキスと何かしらの関わりがあるという事か……」
知らなければならぬ……。オニキスの事……。ゼファイルスの事……。レイヤ・エメラ

ルドの事を……。

アスナ「……」

ジャンヌ「それでどうするの？ 教団に仕掛ける？」

ノブナガ「その策は無謀かつ無意味だ。こちらから魔徒教団に手を出すにはあまりにも情報不足すぎる」

ミツヒデ「そして、私達と奴等がぶつかり合えば、それこそ悪党共を喜ばせるだけだ」
アイーダ「私も、そう思います。多くの人間にとつて、魔徒教団は必要な存在である事も事実ですし……」

エルザ「まずは当面の敵であるドアクダーやエンブリヲへの対処をすべきロボ」

ユイ「後は教団が、どう動くかですわね……」

ノレド「こつちに仕掛けてくるのなら、相手をするしかないと思う！」

ラライヤ「それしかありませんね……」

アマリ「……」

零「怖いのか、アマリ？」

アマリ「正直に言えば……。でも、覚悟は決めてるわ。私はエンデのドグマじゃなくて、私自身のドグマを極めるつもりだから。そして、その力を自分を信じるものと愛する人のために使います」

零「アマリ……」

しんのすけ「アマリお姉さん……。アクション仮面みたいだゾ！」

マサオ「うん、正義のヒーローみたいだね！」

アマリ「ワタル君や舞人君みたいになれたら……と思う時もあります。でも、とてもじゃないけど、私はあんな風に強くはなれません。それに……王子様に助けられるお姫様もいいと思っています……」

スザク「お姫様……？」

レナ「という事は王子様は……」

ヒルダ「零の事か……」

零「……なら、俺はあなたを守る王子にでもなってみせますよ、お姫様」

アマリ「……わっ、れ、零君!!？」

俺は少し微笑んで、アマリの唇にそつと手を置いた。

零「王子となる身、もうあなたを一生離しませんから」

アマリ「れ、零君……」

アンジュ「やめなさい、そこー！」

また邪魔が入ったか……。

零「続きはみんながない後でな」

アンジュ「なんの続きよ!!？」

ロツクオン「所で俺達……どこに向かってんだ？」

ライヤ「青戸の旋風寺重工で補給を受けるそうです」

アマリ「…」

ホープス「まだ何か不安な事があるのですか？」

アマリ「大丈夫よ、ホープス。覚悟は決まったから」

ホープス「でしたら、笑顔を見せてください。私のためにも」

アマリ「ふふ… ホープスは情熱的ね」

… これは油断していたら、アマリを取られるな…。

アマリ「（導師キールデインは異界人の召喚は世界の存続のため… と言っています。世界の存続… 弁明にしても大げさ過ぎるように思えるのですが、少し気になる…）」

エレクトラ「アンジユ達、いる？」

アンジユ「何、何か用？」

エレクトラ「アレクトラ司令から通信が入ったの」

サリア「司令は何と？」

エレクトラ「今から私達が向かう先に最後の第一中隊のメンバーを向かわせる… と言っていたわ」

アンジユ「最後の第一中隊のメンバーって… ！」

ロザリー「あいつ、別任務を終わらせたのか！」

真上「何？第一中隊にはまだメンバーがいたのか？」

ヴィヴィアン「うん、訳あって別の任務を遂行していたから……」

クリス「この様子だと、まだ借金は返せてないようだね……」

舞人「いや、借金……！！？」

青葉「アルゼナルで借金って……どんな人なんだ……？」

ヒルダ「何、ただのお人好し女だよ」

エルシャ「そして、私達、第一中隊には欠かせない子よ」

「いったい、どんな奴なんだ……？」

「ヴオルフガングじゃ！」

「ホイ・コウ・ロウ……」

「ミフネ……」

「ビトン「いつまでも落ち込んでないの！気を取り直して作戦を練るわよ！」

「オードリー」とはおっしゃいますが、カトリーヌ様……」

「チンジャ「毎日毎日、パープルの奴に無能、役立たず、無駄飯食いとこのしられては、

「そう簡単にやる気は出ませんよ」

ヴォルフガング「あの若造……後ろ盾があるからといって威張り散らしおって……！」

イツヒ「でも、ヴォルフガング様……」

リーベ「ヴォルフガングの奴……腹は立つけど、実際はすごいですよ……」

ディッツヒ「異世界に飛ばされた直後にドアクター軍団に渡りをつけるなんて、只者じゃないです……」

ヴォルフガング「むう……。奴が、どういう経路でドアクター軍団に接触したかは調べておく必要があるな……」

ミフネ「ホイ・コウ・ロウ……。パープルは、元はお前の部下だったと聞く」

ビトン「あいつ……。どうやってドアクター軍団に取り入れたのよ？」

ホイ・コウ・ロウ「そんなのワシだって知らんわ」

ビトン「怒鳴らなくてもいいでしょ、怒鳴らなくても！」

ミフネ「貴様さえ、しっかりとっておれば、あの青二才に好き放題はさせなかったのに！ そうすれば、我々はブラックダイヤモンド連合などという名前ではなく、大江戸新撰組を名乗れたものを！」

ビトン「何言ってるのよ！ 組織の名前はデンジヤラスゴールド同盟に決まってるじゃない！」

… DG同盟か… 何か聞き覚えが…。って、それよりも！

ヴォルフガング「やめんか、お前等！そんな事を言っている場合ではなからう！」

―エースのジョーだ。

雷張 ジョー「付き合ってられんな…。」

すると、一人の子供が来た。

？「よう…。」

マドカ「子供は寝る時間のはずだ」

雷張 ジョー「それとも迷子か？」

？「俺様は子供でもなければ、迷子でもない！俺様の名は、虎王（とらおう）！この

アル・ワース最強を目指している…と云うより、もう最強だ！」

雷張 ジョー「フ…。」

マドカ「フン…。」

虎王「あ、お前等！ちよつと自分が強いと思つて、俺様の言葉を疑っているな！」

雷張 ジョー「ほう…。俺達のチカラを肌で感じ取つたか」

マドカ「どうやら、只の子供ではないようだな。」

虎王「だから、ガキ扱いするな！」

マドカ「それでそんなお前がこの様な夜中に何の用だ？」

虎王「よくぞ聞いてくれた。実は俺様は、救世主一行……確かエクスクロスとかいう連中を探している。噂を聞いて、この辺りまできたのだが、お前達……心当たりはないか？」

マドカ「奴等の事は知っている。一人憎い相手がいるのでな」

虎王「それはいい！で、どこに行けば会える？」

雷張 ジョー「……丁度いい」

虎王「丁度いいとは？」

雷張 ジョー「エクスクロスの居場所を教えてやる代わりにお前に頼み事をしよう」
待っている、旋風寺 舞人……

マドカ「(織斑 一夏……今度こそ……)」

ービート・スターである。

私はミッドナイトの基地でギルギロスと話をしていた。

ギルギロス大統領「カンタム・ロボと戦いたいだと？」

カイザム「はっ。他の者に奴が消される前に私がケリをつけたいと思つています。どうかご許可を」

ギルギロス大統領「わかった、良いぞ、勇者カイザム……。お前の手でカンタム・ロボをスクラップにしてこい」

カイザム「了解しました、カイザム……。行つてまいります」

そう言い、カイザムは此処を去つた……。

ビート・スター「あの様な事を言葉にして良いのか？」

ギルギロス大統領「奴がカンタムを倒せなければそれだけの男と言う事だ。それよりも、貴様と手を結んだ組織のウルトラマンゼロそつくりのロボット……。ダークロプスを提供してもらえるのだろうか？」

ビート・スター「無論、機械生命体同士手を取り合いたいのが私の本望だからな」

ギルギロス大統領「こちらもその気だ。仲良くしようではないか……。(ベリアル銀河帝国……。そのカイザーベリアルが蘇ると何が起こるかはわからんがな……)」

―新垣 零だ。

俺達は青戸重工へ戻つて来た。

サリー「お帰りなさい、舞人さん」

舞人「ごめん、サリーちゃん。まだ俺達は、みんなを元の世界に戻す事は出来ない……」
サリー「いいんです。舞人さんが、無事なら。だって、舞人さんは絶対に約束を破らない……。だから、いつかきつと、私達の願いを叶えてくれるって信じています」

舞人「ありがとう、サリーちゃん……。君のため……。そして、みんなのためにも必ず俺達はドアクダーを倒してみせるよ」

サリー「その日を待っています。舞人さんの無事を祈りながら」

ニア「離れていても、お二人の心は、いつも一つみたいです」

サリー「ニアさんも、お久しぶりです。お元氣そうで何よりです」

刹那「二人は知り合いなのか？」

鈴「そうよ。私達がシモンさんや一夏を探して旅をしている時、こちらの青戸にも立ち寄ったんです」

ニア「その時、サリーさんは財布を落として困っていた私にあるばいとを紹介してくださったんです」

トビア「それにしても舞人のガールフレンドが、あんな可愛い子だったなんて……」

ベルリ「おまけにアツアツだ！」

バナージ「未来の人間なのに表現が古い……！」

アマリ「零君、私達も負けてられないわよ……！」

零「さすがに年下に張り合うんじゃないよ！」

青葉「しつかし、この調子じゃ……シモンさんとニアさんより、舞人の方が先にゴールインしちまいそうじゃぜ！」

舞人「言われてますよ、シモンさん」

シモン「そうは行くか……！ さつさとアル・ワースを平和にして、プロポーズのやり直しといくさ！」

ニア「待ってます、シモン」

サリー「……では、皆さん。そろそろ晩ご飯の準備も出来てますので、ご案内します」

九郎「よっしや！ 腹が減ってたんだ」

ジョーイ「もう、みつともないですよ。大十字さん……」

ヒデヨシ「あれ、そう言えばワタル達は何処に行つたんだ？」

シーブック「何処かで遊んでいると思うけど……」

カンタム「しんのすけ君やサラちゃん達も行っている様だね……」

舞人「じゃあ、俺……呼びに行つて来ます」

一夏「俺もついていくよ」

カンタム「僕も行くよ」

舞人、一夏、カンタムはワタル達を呼びに行つた……。

―戦部　ワタルだよ。

僕、ヒミコ、マリ―、キング、サラ、ティア、レナ、プルさん、しんちゃん、春日部
防衛隊のみんな、犬のシロは鬼ごっこをしていた。

マリ―「きゃーっ!!?」

プル「プルプルプルプルプルプル!!?」

サラ「サラサラサラサラサラッ!!?」

ヒミコ「待て、待て、待て、待てーっ!!?」

ヴィヴィアン「鬼さん、こちら!捕まえてみなよ、ヒミコ!」

キング「!!?!!?」

レナ「どうしたの、キング?」

すると、黄色い髪の子が来た。

虎王「……おい、お前等……」

ヒミコ「そんな所に突っ立っていると危ないのだーっ!」

あれ、ヒミコとぶつかった……。

虎王「おわっ!!？」

ヒミコ「タツチしたから、あんたが次の鬼なのだ！」

虎王「鬼だと!!？」

しんのすけ「鬼ごっこだゾ」

ネネ「知らないの？」

虎王「そのぐらい知ってる！」

ヒミコ「じゃあ、鬼交代ね！」

虎王「ちよ、ちよっと待て！」

ヒミコ「きやはは！鬼を待ってたら、鬼ごっこにならないのだ！」

ワタル「逃げろ、みんな！あいつが鬼だーっ!!？」

ボーちゃん「わーっ」

虎王「くそーっ！こうなったら、全員捕まえてやる!!？」

EXマン達「「エクスキューズ・ミー！」」

今日もありがとう・・・ EXマン達！

暫く鬼ごっこをやって、休憩する事になった。

マサオ「はあ・・・はあ・・・少し休憩・・・！」

ティア「すごい盛り上がったね！」

トオル「うん、とつても楽しかったよ！」

ヒミコ「これも飛び入り参加の鬼さんのおかげなのだ！」

虎王「気に入った……」

ヒミコ「ほよ？」

虎王「お前は足も速いし、力も強い！女は丈夫なのが一番だ！お前を俺様のヨメにしてやる。ありがたく思え」

ヒミコ「ヨメって何だ？」

しんのすけ「ご飯の事だゾ！」

トオル「それは米だ！」

虎王「俺様の料理を作ったり、靴を磨いたりする家来の事だ。嬉しいだろう。喜べ」

ヒミコ「うわーい！ヨメヨメ！」

虎王「ふ……可愛い奴」

ワタル「何言ってるんだ、お前……」

虎王「口の利き方を知らない奴だな。俺様は虎王。お前こそ何者だ？」

ワタル「僕か？僕はハツキシ言つて、面白カッコイイ、世界のヒーロー！戦部　ワタルだ！」

虎王「ワタル……。何処かで聞いた事があるような……」

舞人「ワタル、みんな……。そろそろ晩ご飯だぞ」

一夏「早く行かないと九郎さんやジユドーに取られるぞ！」

ティア「それはやだ！」

ワタル「了解だよ、舞人さん、一夏さん。お腹も減つてたし、ちようどいいや」

虎王「舞人……。？一夏……。？お前達……。もしかして、旋風寺 舞人と織斑 一夏か？」

舞人「そうだけど……」

一夏「俺達の事を知っているのか？」

虎王「俺様は約束をきちんと守る律儀な男だからな。まずは頼まれ事を片付ける。ほ

れ……。旋風寺 舞人、織斑 一夏。お前達宛に手紙だ」

カンナム「手紙だと……。？」

ヒミコ「ラブレターか、虎ちゃん？」

虎王「んなわけ、あるか！預かり物だ！」

舞人「これは……。！」

一夏「っ……。！」

ワタル「どうしたの、舞人さん？？」

舞人「この手紙……。エースのジョーからの挑戦状だ」

一夏「こつちもエムからの挑戦状だ…」
挑戦状…
!!?

第39話 借金女王と家族と宿命のライバル

ー織斑 一夏だ。

俺とマイトガインはそれぞれ出撃した。

舞人「(エースのジョー…。お前が一騎打ちで決着を望むのならば、受けて立つ…。)」

一夏「(エム…。何度来ようが俺は負けない)」

すると、サリーと千冬姉から通信が入った。

サリー「聞こえますか、舞人さん？」

舞人「サリーちゃん…！」

サリー「浜田君に頼んで、通信をつないでもらいました。どうしても、ジョーさんと戦わなければならないんですか？」

舞人「え…。」

サリー「…。」

舞人「そうか……。君は、あいつに生命を助けられた事があつたんだね。」

サリー「私は……。ジョーさんが悪い人には思えないんです。」

舞人「だが、あいつは戦いを望んでいる」

サリー「……。ごめんなさい、舞人さん。大事な戦いの前に余計な事を言つて……」

舞人「いや……。ありがとう、サリーちゃん」

サリー「え……」

舞人「確かにエースのジョーは、俺の敵だ。そしてあいつは、BD連合の一員として、ドアクター軍団に加担している。だが、ここはアル・ワースだ。俺達の世界の關係を持ち込んで戦うだけが、決着の仕方ではないはずだ。それを思い出させてくれた君に感謝するよ」

サリー「舞人さん……」

千冬「一夏……」

一夏「どうしたんだ、千冬姉？」

千冬「わかっていると思うが……。必ず勝てよ」

一夏「何当たり前の事言つてんだよ……。俺は勝つよ」

千冬「フン、気合だけのお前が一丁前の事を言う様になつたか」

一夏「何だよ、それ!?」

千冬「冗談だ…… 気負っているお前をリラックスさせてやろうと思つてな」

一夏「ありがとう、千冬姉……」

千冬「篠ノ之達もお前の勝利を願つていたぞ…… 女の期待に応えないとな」

一夏「わかつてる！」

マイトガイン「舞人、一夏…… 来るぞ！」

飛龍と黒騎士…… 来たか…… ！

舞人「エースのジョー！」

一夏「エム…… ！」

雷張 ジョー「旋風寺 舞人……。逃げずに出て来た事は褒めてやる」

マドカ「てつきりあの女共も一緒だと思つたがな、織斑 一夏」

雷張 ジョー「行くぞ、旋風寺 舞人！ 今日こそ決着をつけてやる！」

舞人「待て、ジョー」

雷張 ジョー「此の期に及んで、怖気づいたのか!!？」

舞人「…… 決着は、俺達の世界に戻ってからにしたい」

雷張 ジョー「何…… ?」

一夏「俺も舞人と同じ考えだ、エム」

マドカ「何だと…… !!？」

舞人「今、俺達がすべき事は元の世界へ帰る事だ。そのためにお前達の手も貸して欲しい」

雷張 ジョー「ふざけた事を……。俺はお前を倒せるのならば、場所は……。世界は選ばない！」

マドカ「私もこいつと同じ考えだ。お前を殺すのは何処だろうと変わらない！」

舞人「やめろ、ジョー！アル・ワースに俺達の世界の戦いを持ち込むな！お前の事を信じ、俺達が戦う事を望んでない人もいるんだ！」

雷張 ジョー「あのサリーとか言う子の事か……。女の言葉で戦いをためらうとは堕ちたものだな、旋風寺 舞人！」

一夏「此処にはフアントムタスクもない！元の世界に戻るためには手を取り合う必要があるのだろ！」

マドカ「お前を殺せるのならば、元の世界にへ戻る必要はない」

舞人「ジョー！」

一夏「エム……！」

雷張 ジョー「正義の味方を気取るのなら、俺と戦え！お前の正義を打ち砕く事こそが俺の望みだ！」

マドカ「お前は必ず殺す……。刺し違えたとしても！」

舞人「……すまない、サリーちゃん……。戦うしかないようだ……」

マイトガイン「舞人……」

舞人「だが、戦うのならば！迷いは捨てる！」

一夏「やらなければやられるなら……。俺は負けるわけにはいかない！」

舞人「行くぞ、ジョー！」

一夏「勝負だ、エム！」

アマリ「頑張ってください、舞人君！」

零「一夏、負けは許さねえからな！」

甲児「お前の希望通り、俺達は手を出さない！」

ワタル「だから！必ず勝つてね!!？」

しんのすけ「オラ達が応援しているゾ！」

舞人「ああ！任せておけ！」

一夏「絶対に勝つ！」

マイトガイン「舞人……。一夏……」

舞人「わかつている、ガイン。必ずを約束できるような相手ではない事は。だが、それでも勝たなくてはならない！正義を守るために！そうだろ、一夏！」

一夏「ああ！」

サリー「舞人さん……！」

千冬「一夏……！」

雷張 ジョー「その気になったようだな、旋風寺 舞人！それでこそだ！だが、お前は知る事になる！世の中には決して勝てない相手がいる事を！」

舞人「ならば俺は、お前に教えてやる！正義の心がある限り、必ず悪には負けたくないと言う事を！」

マドカ「それでいい。そうでなければ殺しがいがない！」

一夏「俺は殺されるわけにはいかない！だから、俺は精一杯の抵抗をする！」

俺達は戦おうとしたが……。

俺達の周りに放火が襲った。

雷張 ジョー「何っ……！！？」

一夏「な、何だ……！！？」

現れたのはカイザム・ロボだった。

ブレラ「カンタムとそっくりのロボットだと！！？」

簪「あれはカンタムのお兄さんのカイザムです！」

アルト「カンタムの兄貴だと！！？」

シャルロット「そして、ミッドナイトの一員なんです！」

テイエリア「では、カンタムは実の家族と…！」

マドカ「ミッドナイトが何の用だ!?？」

カイザム「お前達の邪魔をする気はない。だが、カンタムが出て来ないのであれば…この街を破壊する」

舞人「何だと!?？」

マイトガイン「何と言うやつだ！」

一夏「そんな事…俺達がさせるかよ！」

カンタム「しんのすけ君！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！」

しんのすけとカンタムはカンタム・ロボに乗り、出撃した。

カンタム「僕達は此処にいるぞ、カイザム兄さん！」

カイザム「ようやく出てきたか、カンタム・ロボ！」

カンタム「僕達の戦いは僕達だけで決めよう！」

カイザム「いいだろう」

しんのすけ「舞人君、一夏お兄ちゃん！カイザムはオラとカンタムにお任せして！」

一夏「ありがとうな、しんのすけ！」

舞人「カンタムとしんちゃんも気をつけて！さあ、仕切り直しだ、ジョー！」

雷張 ジョー「ああ、行くぞ、旋風寺 舞人！」

一夏「決着をつけるぞ、エム！」

マドカ「此処で息の根を止めてやる、織斑 一夏！」

カイザム「今日こそお前をスクラップに変える！」

カンナム「僕はスクラップなどになるつもりはない！」

しんのすけ「オラとカンナムは負けないんだゾ！」

俺達はそれぞれの戦いを始めた……。

〈戦闘会話 一夏VSマドカ〉

マドカ「まさか、私の挑戦状に応じるとは思わなかったぞ」

一夏「逆に律儀に挑戦状を送ってくるなんてこつちが思わなかったよ！お前なら暗殺とかやりそうなのにな！」

マドカ「フン、それも考えたがお前は徹底的に潰さなければならぬと思つたからな
！」

一夏「潰されるのがどつちか…… 試してやる！」

〈戦闘会話　しんのすけVSカイザム〉

カイザム「カンタム、野原　しんのすけ！此処で纏めてあの世行きだ！」

カンタム「そんな事はさせない！僕が絶対に！」

しんのすけ「そこは僕達は…だゾ、カンタム！」

カンタム「そうだったね、しんのすけ君！」

カイザム「くだらない…人間と手を取り合うなど！」

カンタム「なら、それを僕達が教えてやる！」

俺は黒騎士との勝負に勝った。

マドカ「何だと…！」

箒「一夏が勝ったぞ！」

ラウラ「勝負はヒヤヒヤものだったがな」

一夏「俺の勝ちだ、エム！」

マドカ「いいだろう…認めなければならぬ、お前の力を…」

一夏「それなら…！」

マドカ「だが、それとこれとは話は別だ…私は私の道に行く…次こそはお前を倒

す！」

黒騎士は撤退した……。

一夏「くそッ…… どうすればいいんだよ……！」

マイトガインも飛龍との勝負に勝った。

雷張 ジョー「ちいっ！」

万丈「舞人の勝ちだ」

シモン「大人しく降参しろ、エースのジョー！」

雷張 ジョー「まだだ……！ 飛龍は、まだ戦える！」

舞人「ジョー！ お前が負けを認めないのなら、決定的な敗北をくれてやる！」

雷張 ジョー「行くぞ、旋風寺 舞人！」

舞人「来い、エースのジョー！」

サリー「舞人さん!!？」

え…… 何処かからマイトガインに向けて砲撃が放たれた…… !!？

舞人「ぐうっ!!？」

先程の砲撃で体制を崩したマイトガインは飛龍の攻撃を受けてしまった。

舞人「うわああああっ!!？」

マイトガインがあまりのダメージのせいで合体が解除されてしまった。

スカーレット「舞人！」

舞人「ガイン……。撤退だ……」

ガイン「りよ、了解……」

舞人とガインは撤退した……。

ガードダイバー「そんな……！」

バトルボンバー「舞人が……。マイトガインが負けた！」

ブラックマイトガイン「舞人とジョーが激突する寸前に援護射撃があった！あれが原

因だ！」

九郎「汚えぞ、ジョー！一騎打ちじゃなかったのかよ！」

雷張 ジョー「違う……。俺は……。助っ人など頼んでない！」

そして、戦艦とBD連合のロボット軍団が現れた。

パープル「俺のアシスト……。喜んでくれたかい、エースのジョー？」

雷張 ジョー「パープル！いつ俺が、そんなものを頼んだ！」

パープル「タイムイズマネーだ。旋風寺 舞人の処刑にいつまでも時間をかけている

わけにはいかないんだよ」

雷張 ジョー「奴は俺の獲物だ！お前達には手出し無用と言っておいたはずだぞ！」
パープル「さすがは父親の復讐を誓う男だ。ロマンチストだね」

雷張 ジョー「！」

ウォルフガング「(父親の復讐……。それがジョーの戦う理由なのか……。？ワシ達に雇われているのは、それと関係するの……。？何より何故、パープルがそれを知っている……。？)」

パープル「お前のつまらん美学に付き合うつもりはないんだよ、こちらは。ほら……。俺のギグを楽しむにしているオーディエンス達の登場だ」

エクスクロスの戦艦達が出撃した。

ー新垣 零だ。

B D連合の機体が現れたのを見て、俺達は出撃した。

シモン「てめえ等！よくも男と男の勝負を邪魔してくれたな！」

零「お前もカルセドニーも……。勝負を踏みこむような真似をしやがって……。！」

青葉「お前等さえ出て来なければ、舞人は絶対に負けなかったのに！」

パープル「いいぞ、いいぞ！前座のおかげで奴等のテンションは最高潮だ！」

一夏「前座だと……。!!？お前は……。！」

パープル「さあ、ジョー！お前の荒ぶる魂をあいつ等にぶつけれ！」

雷張 ジョー「俺は……お前の飼いだ犬ではない……！」

飛龍は飛び去ってしまった……。

一夏「エースのジョー……」

ウオルフガング「ジョー……」

パープル「チツ……シラける奴だ。ウオルフガング……後は任せる」

パープルの戦艦が逃げやった……？

ゴーカイイエロー「卑怯者！散々引つ掻き回して、自分はノコノコと逃げるの……？」

ゴーカイグリーン「待ってよ、ルカ！今はこの町を守る方が先だよ！」

カイザム「面白い展開になつたではないか」

カンタム「ガイン君…… 舞人君……」

しんのすけ「こんなの…… こんなの酷いゾ！」

カイザム「何が酷いのだ、野原 しんのすけ？ここは戦場だ。無駄なプライドを持つ

からこうなる」

カンタム「カイザム兄さん…… あなたは……！」

ウオルフガング「こうなつたら、やるしかない……！各機はエクスクロスを叩け！」

ワタル「来い、悪党！舞人さんの代わりに僕達が相手になつてやる……？」

虎王「(あの白いのが噂の龍神丸か……。あれに乗ってるって聞く救世主……。いったいどんな奴なんだろうな……。)」

俺達は戦闘を開始した……。

戦闘から数分後の事だった……。

ノレド「気をつけて！何か来るよ！」

ラライヤ「あれは……。！」

現れたのは……。キャピタル・アーミーとトワサングのモビルスーツとアルケーガンダ

ム……。!??

ケルベス「キャピタル・アーミーか！」

リング「トワサング軍もいるぞ！」

ベルリ「先頭の目玉付きはマスクか！」

ニール「あれはアルケー……。アリー・アル・サーシエスか……。！」

マスク「各機、攻撃開始！標的はエクスクロスだ！」

バララ「マニイ！ついて来なよ！」

マニイ「やってみます！（ルインの……。マスクの力になるにはモビルスーツの操縦

だって出来なきや……。！」

サーシエス「俺達も混ぜてくれよ、エクスタンタラ！」

セルゲイ「こんな時にミスルギが来るとは……！」

ヒイロ「奴等はBD連合は無視して、俺達だけに仕掛けて来る気らしい」

ルルーシユ「ドアクダー軍団とミスルギ……！双方にとつて邪魔者である我々を潰す腹か！」

シン「くそッ……！お前等、それほどまでして戦争がしたいのかよ！」

ちっ……！このままじゃ青戸が壊されちまう……！

ウオルフガング「こ、こら、お前等！無闇やたらと弾を撃つな！」

ジョーイ「ダメだ……！こんな戦いをやっていたら、街が破壊されてしまう……！」

マサキ「くそっ！さっさと敵を叩くしかねえぞ！」

サリー「……」

ニア「ここは危険です、サリーさん。避難しましょう」

サリー「……私のせいです……」

ニア「え……」

サリー「私が……おかしな事を言ったから舞人さんが……」

ニア「そうではありません」

サリー「でも……」

ニア「舞人さんは負けていません。だって、正義のヒーローなんですから。私には：正義もヒーローもよくわかりませんが、舞人さゆがサリーさんやみんなを守るために戦っている事はわかります。だから、きつと……また立ち上がってくれます」

サリー「ニアさん……」

ウオルフガング「こうなったら、やむを得ない！強行突破で工場を制圧して、連中に降伏を迫るぞ！」

くそつ……！ウオルフガングの奴が突撃を……！

真上「突撃を仕掛ける気か……！」

ルルーシュ「各機は火力を奴に集中させる！」

俺達はウオルフガング目掛けて撃つが、全く効かない……。

アムロ「この距離からでは、攻撃が通らない！」

ウオルフガング「無駄だ！このメガソニック8823は特製バリアを装備している！」

ヴィラル「シモン！」

シモン「わかっている！」

グレンラガンがメガソニック8823目掛けて、突っ込んだ。

イツヒ「ウォルフガング様！こちらに迫ってくる機体があります！」

ウォルフガング「構うな！突っ込むぞ！」

？「力尽くと言うのは感心しないな」

？2「ならば、我々が止めるしかないだろう、アセム」

すると、メガソニック8823の前に黒いガンダムと白いガンダムが現れた。

刹那「が、ガンダムが二機……！！？」

ヒイロ「また新たなガンダムか……！」

ウォルフガング「な、何じやお前達は！」

アセム「何、ただの異界人だ……。やるぞ、ゼハート！」

ゼハート「了解した、アセム！」

二機のガンダムはメガソニック8823に攻撃を仕掛けた。

アセム「やってみせる……。行くぞ、ゼハート！」

ゼハート「ふっ、遅れるなよ、アセム！」

二機のガンダムはそれぞれビーム兵器を撃つ。

ゼハート「アセム、奴の足を止めるんだ！」

アセム「よし！アンカー射出！」

黒いガンダムはアンカーを射出して、メガソニック8823に巻きつけ、白いガンダムが光の様なビットを繰り出したと同時に黒いガンダムはアンカーを切り離れた。

アセム「でやああああつ!!?」

ゼハート「そこだああつ!!?」

吹き飛ばされたメガソニック8823目掛けて光のビットが襲いかかる。

ゼハート「合わせろ、アスム！」

アセム「おう！」

立ち込める爆煙の中、二機のガンダムはビームサーベルを出し、左右から突き刺す。

アセム&ゼハート「はあああああつ!!?」

ウォルフガング「な、何じゃ、この連携は…!!?」

二機のガンダムの連携にメガソニック8823は吹き飛ばされた。

ウォルフガング「ぐっ…ぐうっ!だ、だがまだ、特製バリアは…!」

リーベ「あ…!正面からも何か来ます！」

ウォルフガング「何っ!!?」

現れたのは赤い機体だった。

楯無「あれは…!!?」

シモン「舞人！」

舞人「シモンさん！」

グレンラガンと赤い機体のドリルがメガソニック8823の特製バリアを突き破った。

ドイツヒ「あわわわわわっ!!？」

ウォルフガング「い、いかん！奴等…：ドリル持ちだ！特製バリアでも、ドリルは止められん！」

浜田「トドメだ、舞人！」

舞人「行け、マイトカイザー!!？」

マイトカイザーはもう一度攻撃を仕掛けた…：。

舞人「愛の翼と勇気の大車輪で、お前を討つ！マイトカイザー自慢のドリルをお見舞いしてやる！ドリルクラッシュアアアアツ!!？」

ドリルクラッシュアアアアアアツ!!？」

舞人「はあああああつ！」

そして、ドリルクラッシュアアアアツ8823を貫いた。

舞人「これがマイトカイザーの力だ！」

ウォルフガング「そんな馬鹿な！わしの傑作がこうもやられるとは…：！」

メガソニック8823は爆発し、吹き飛んだ。

ウォルフガング「お、恐るべし、ドリル……！」

メガソニック8823は少し移動する。

てか、ドリルって……何でもありだな。

シモン「いいドリルだ、舞人！」

舞人「ありがとうございます、シモンさん……でも、俺が間に合ったのはあの人達

のおかげです。ありがとうございます！」

アセム「気にするな」

シモン「二人も異界人なのか？」

ゼハート「まあ、そうだ」

すると、今度は三機のモビルスーツが現れた。

レイル「待ってくださいよ、ゼハート様！」

フラム「先に行かれては困ります！」

ゼハート「すまなかつたな、レイル、フラム」

ジラード「でも、無事に間に合ったようね」

アセム「ああ、ジラード……。ウイルとかいう男のおかげだな」

ヴィラル「その者達もお前達の仲間か？」

アセム「ああ、簡単だが、挨拶をする。俺はアセム・アスノ。こっちはジラード・ス

プリガンだ」

ジラード「よろしく」

ゼハート「私はゼハート・ガレット。こちらは私の部下のフラム・ナラとレイル・ライトだ」

アセム「今の状況は見逃せないからな……俺達も一緒に戦わせてもらうぜ」

ゼハート「勿論、断つたとしても勝手に戦うがな」

ルリ「どうしますか、倉光艦長」

倉光「いいんじゃないですか、彼等も異界人らしいですし」

ドニエル「では、申し訳ありませんが、ご協力をお願いします」

ゼハート「との事だ、やるぞ、フラム、レイル」

フラム「おうせのままに！」

レイル「俺達はゼハート様に何処までもついていくつて決めていましたから！」

アセム「ジラードもいいな？」

ジラード「構わないわ、街の人達を見逃せないもの」

メル「所で、舞人君……。その機体は……？」

舞人「こいつはマイトカイザー！浜田君がもしもの時のために用意しておいてくれたものだ！」

浜田「マイトガインの弱点だった空を飛ぶ敵への対処のために飛行能力を備えたドリル特急：．．それがマイトカイザーだ！マイトカイザーには超AⅠが装備されてないから、完全に舞人が操縦する必要があるけどね」

すると、飛龍が現れる。

雷張 ジョー「旋風寺 舞人：．．！それがお前の新たな力か！」

舞人「そう：．．その通り！愛の翼に勇気を込めて、回せ正義の大車輪！勇者特急マイトカイザー、ご期待通りにただ今到着！」

ワタル「決まった！さすがは嵐のヒーロー！」

ガイ「うおおおおおっ！！？燃えるぜえええっ！！？」

アキト「ああ、熱くなってくる」

簪「もう、もう：．．最高：．．！」

楯無「お、落ち着いて、簪ちゃん!?!？」

アマリ「か、か、か：．．カッコイイ!!？カッコ良すぎます！」

零「くっそっ：．．！見事なまでにヒーロだぜ！」

ホープス「悔しいですが、今回は認めざるを得ません」

しんのすけ「良かったゾ、舞人君！」

鉄也「ここから攻勢に出るぞ！」

甲児「了解だ！一気に悪党共を追い返してやるぜ！」

雷張 ジョー「旋風寺 舞人！お前の新しい玩具！：一瞬でスクラップにしてやる！」

舞人「そうはさせないぞ、ジョー！ガインの仇！：そして、何より正義のために俺は戦う！お前が俺の言葉を聞く気がないのなら、お前に敗北を刻み、その上で話をする！」

雷張 ジョー「やれるものなら、やってみるがいい！お前ごときの付け焼刃の空戦テクニクが俺に通用すると思うな！」

舞人「ジョー！お前に俺の11番目のキャッチフレーズを教えてやる！不死身のタフガイ、旋風寺 舞人！悪を倒すためなら、何度でもよみがえるぞ！」

俺達は戦闘を再開した……

〈戦闘会話 アセムVS初戦闘〉

アセム「(父さん、キオ……。二人もこの世界にいるんだろ？待っていてくれ、必ず迎えに行くからな！)」

〈戦闘会話 ゼハートVS初戦闘〉

ゼハート「まさか、この世界で蘇り、アセムと手を取り合う事になるとは……。だが、今度こそ私はアセムと共に戦う……。アセムの友人として！」

〈戦闘会話　フラムVS初戦闘〉

フラム「ゼハート様……。あなたがどの様な道を選ぼうとも私達はあなたに従います……。！」

〈戦闘会話　レイルVS初戦闘〉

レイル「どけ、お前ら！俺達とゼハート様の邪魔をするな！」

カンナム・ロボはカイザム・ロボにダメージを与えた。
しんのすけ「やったゾ！」

カイザム「本当にそう思うのか？」

カンナム「何？？」

カイザム・ロボ……。まだ戦えるってのかよ？？

カイザム「今度はこちらの番だ！ハイパー化！」

なっ…!!? カイザムの色が紫に変わった…!!?

カイザム「超カイザム!… カイザムハリセン!!?」

超カイザム・ロボはカイザムハリセンでカンタム・ロボを攻撃し、ダメージを与えた。

しんのすけ「うわあああああ!!?」

カンタム「しんのすけ君! 正常合体だ!」

カンタム・ロボも超カンタム・ロボになり、カンタムハリセンで攻撃を仕掛けるが、カイザムハリセンで受け止められ、カウンター攻撃を受けてしまう。

カンタム「うわああああ!!?」

セシリア「しんちゃん! カンタムさん!」

カンタム「くっ…。大丈夫か、しんのすけ君!!?」

しんのすけ「な、何とか大丈夫だゾ…」

カイザム「勝負あつたな… カンタム・ロボ」

カンタム「…」

しんのすけ「ま、まだだゾ…」

カンタム「もういいよ、しんのすけ君」

ひまわり「たや…?」

カンタム…?」

しんのすけ「何がいいの、カンタム!!?」

カンタム「今の僕達では超超カンタムを使えない……。もうカイザム兄さんには勝てないんだ」

しんのすけ「か、カンタム……。!!?」

カンタム「だから……。君やひまわりちゃん、シロ君だけでも逃げてくれ」

しんのすけ「……。」

カイザム「そうか……。カンタム、もう一度聞くぞ? ミッドナイトへ戻って来る気はないか?」

カンタム「……。ない!」

カイザム「ならば、死ね……。カンタム!」

そして、カンタムはしんのすけ達を脱出させようとしたが……。

しんのすけ「ダメだあああつ!!?」

しかし、しんのすけがそれを阻み、カイザム・ロボの攻撃を回避した。

カイザム「何だと……。!!?」

カンタム「し、しんのすけ君……。!!?」

しんのすけ「カンタム! オラは……。オラ達は逃げないゾ!」

しんのすけの奴……。!

しんのすけ「オラはおバカだから… 難しい事はわからない…。でも、今オラだけ逃げたらダメくらいわかるゾ！」

カンタム「…。」

しんのすけ「それにカンタムはオラを信じてくれたから、オラをカンタム・ロボに乗せてくれたんだよね?!? それなら、こんな所でオラを見放すなら、幾らカンタムでも許さないゾ!!?」

カンタム「しんのすけ君…。」

しんのすけ「オラだって… エクスクロスの一人なんだゾおおつ!!?」

? 「よく言った、しんのすけ!」

すると、グレイブが現れた。

ひろし「今行くぞ、しんのすけ!」

みさえ「お願い、ナオミちゃん!」

ナオミ「はい、しっかりと掴まっていてください!」

グレイブはパトクロスでカイザムを斬り飛ばした。

カイザム「ぐっ…!」

サリア「あのパラメイルは…!」

アンジユ「ナオミ…? ナオミなのね?!?」

ナオミ「うん、そうだよ！みんな、遅くなつてごめんね！」

ロザリー「全くだぜ、もう少し早く来てくれれば良かったのによ！」

ナオミ「だ、だから……。ごめんつて言つてるのに……。つて、そうじゃなかった！大丈夫、しんのすけ君!!？」

しんのすけ「おっ？お姉さんどうしてオラの事を？」

ひろし「無事だな、しんのすけ！」

みさえ「やつと、見つけたわ、しんちゃん！ひまわり！シロ！」

しんのすけ「父ちゃん、母ちゃん！」

ひまわり「たやー！」

シロ「ワンワン！」

カンタム「しんのすけ君のお父さんとお母さん……」

あの二人がしんのすけの両親か……。！

ひろし「よく頑張つたな！此処からは俺達も一緒に戦うぞ！」

みさえ「野原一家が揃つたものね！」

しんのすけ「おう！カンタム、ハッチを開けて！」

カンタム「了解だ！」

カンタム・ロボのハッチが開き、ひろしさんとみさえさんはグレイブから乗り換える。

しんのすけ「よーし！これで怖いものはないゾ！野原一家……ファイヤー!!？」
みさえ&ひろし「「ファイヤー!!？」」

ひまわり「たいやー！」

シロ「ワン！」

マサオ「いつ見ても凄いね、しんちゃん達！」

カンタム「今なら、超超カンタムが使えるかもしれない……！しんのすけ君！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！」

しんのすけとカンタムが同時にバーベルを上げると、超カンタム・ロボの目に瞳が現れた。

しんのすけ&カンタム「「超超カンタム・ロボ!!？」」

カイザム「しまった……！超超カンタムだ……！」

超超カンタム・ロボはカイザム・ロボに急接近して、攻撃を仕掛けた……。

しんのすけ「野原一家、アル・ワースでの初戦闘だゾ！」

ひろし「よっしや！腕が鳴るぜ！」

みさえ「あんまり、無理はしないでよ！」

カンタム「超超カンタムの力を見せてやる！」

超超カンタム・ロボは超高速で錐もみ回転した。

カンタム「カンタム超伝導アンマ!!？」

そして、カイザム・ロボの下半分に突っ込み、攻撃した。

カイザム「ぐおおおっ……！お、己……カンタム……！」

カンタム「カイザム兄さん……これが僕達の力だ！」

カイザム「まだだ！まだ倒れるわけにはいかない！」

しんのすけ「まだまだ行くぞ、カンタム！」

みさえ「私達も手伝うわ！」

ひろし「やってやろうぜ！」

カンタム「ありがとうございます……野原さん……。カイザム兄さん、僕は諦めない！」

僕を必要としてくれる人達がいる限り！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　しんのすけVS初戦闘〉

しんのすけ「行くぞ〜！こっちにはケツでかみさえと足臭ひろしがいるんだゾ！今のうちに逃げた方が身の為だゾ！」

ひろし「足臭は余計だ！」

みさえ「誰がケツでかよ！」

ひまわり「たやたや……」

シロ「くうーん……」

カンタム「あはは！いい家族だね」

しんのすけ「何言ってるの、カンタム？カンタムも今はその一人だぞ」

カンタム「……君には本当に助けられてばかりだね、しんのすけ君……では、行くよ

!!？」

〈戦闘会話 ナオミVS初戦闘〉

ナオミ「やつとみんなと一緒に戦える……。ココ、ミランダ、ゾーラ隊長……見ていてね……。私、頑張るから！」

〈戦闘会話 刹那VSサーシエス〉

刹那「アリー・アル・サーシエス！此処には民間人がいるのはわかってはるはずだ！」

サーシエス「だったら、何だよ！民間人が居ようが戦争には関係ないだろ！」

刹那「まだ貴様はそんな事を言っているのか、貴様は……！」

サーシエス「戦争するのはそういうもんだろうが！」

刹那「駆逐する……！ 舞人達の故郷を守るために……！」

〈戦闘会話　しんのすけVSサーシエス〉

サーシエス「よお、また会ったな！しんのすけ!!?」

しんのすけ「あ…父ちゃんと似た声の人！」

ひろし「た、確かにそっくりだ…！」

みさえ「でも、あなたとは性格は真逆ね」

サーシエス「てめえが、しんのすけの親父か！」

ひろし「お前にはしんのすけが世話になったみたいだからな…　存分に倍返しにして

返してやるぜ!!?」

しんのすけ「おー！父ちゃん格好いいゾ！足は臭いけど…」

ひろし「それは今いいだろ!!?」

クアンタの力でアルケーガンダムにダメージを与えた。

サーシエス「ちいっ！今の戦力じゃ、やってもやりきれねえ…　！また、楽しもうぜ、

クルジスの兄ちゃん！」

刹那「楽しむ気はない！」

サーシエス「つれねえな！まつ、無理矢理にでも戦争は起こすけどな！」

そう言い、アルケーガンダムは撤退した…。

ロックオン「本当にあいつは戦争依存症だな…！」

ティエリア「奴と対話する事は不可能のよう

だな…」

〈戦闘会話　アセムorゼハートVSヴォルフガング〉

ヴォルフガング「お前達のせいでワシの計画が台無しだ！」

アセム「突っ込むだけのあれが計画も何もないだろう」

ゼハート「それにはお前達の自業自得だ」

ヴォルフガング「今度はワシが仕返す番だ！覚悟しとれ!!？」

俺達の攻撃でメガソニック8823にダメージを与えた。

ヴォルフガング「だ、だめだ！せっかくのバリアとドリルの前では無意味だったか！」

メガソニック8823は爆発するが、ヴォルフガング達は脱出したみたいだな…。

ヴォルフガング「イツヒ、リーベ、ディツヒ！無事か!?!？」

イツヒ「三人共、なんとか…」

大阪「あなたは……」

ヴォルフガング「！」

大阪「もしや、あなたはかつて旋風寺重工にいた……」

ヴォルフガング「逃げるぞ、イツヒ、リーベ、ドイツヒ！機会は直せるが、人の生命に代わるものはないからな！」

ヴォルフガング達は逃げたな……。

大阪「……壊れた機械は直せるが、人の生命に代わるものはない……か……。BD連合のヴォルフガング……。あなたは……。あの伴……。なのか……」

Gーアルケインの砲撃でバララのマックナイフにダメージを与える。

バララ「マックナイフは素早いのはいいけど、火力が足りない！ヘルメスの薔薇でもなんでもいいから、もつとあたしに強力な機体を寄越しなよ！」

バララのマックナイフは撤退した……。

Gーシルシアアのスカートファンネルで黄色いマックナイフにダメージを与えた。

マニイ「そんな……！ここまでだなんて！」

ノレド「機体を降りなよ、マニイ！戦うなんて、らしくないよ！」

マニイ「それでもやらなきゃならないのよ！」

ベルリ「何のために!?!？」

マニイ「マスクのために決まってるじゃない！」

マスク「マニイ……。もういい、後は私に任せて撤退しろ！」

マニイ「……はい！」

黄色いマツクナイフは撤退した……。

ノレド「マニイ……」

ラライヤ「大丈夫ですか、ノレドさん……？」

ノレド「うん……。でも、友達と戦うのってイヤな気分だね……」

友達と戦うのがイヤ……。か……。

アイーダ「知り合いなのですか？」

ベルリ「マニイ・アンバサダ……。ノレドの同級生だった子です……。それがまさか

キャピタル・アーミイの一員になっていたなんて……」

モランの攻撃でガイトラッシュにダメージを負わせた。

ロックパイ「くっ…！これではマツシュナー中佐に合わせる顔がない！出直しだ！男としての面子は、次の機会に取り戻す！」

ガイトラツシュは撤退した…。

リンゴ「あいつにとつての俺達の存在って恋人へのプレゼントみたいなものなのかな…。」

ラライヤ「悪い人ではないようですが、トワサンガ人特有のおごりが捨てきれないのですね…。」

Gーセルフの攻撃でマスクのマツクナイフにダメージを与えた。

マスク「ちいっ！こうも失敗が続くと、クンタラどころか私自身の立場もなくなる！

覚えているがいい、エクスクロスとベルリ・ゼナム！私は必ずや、雪辱を果たすぞ！」

ベルリ「こんな状況でも、自分の事ばかり考えている人になんか、負けるつもりはありませんから」

雷張 ジョー「俺の邪魔をする気か、織斑 一夏！」

一夏「邪魔をする気なんてない！でも、あんたが街を破壊する一味なら、俺にも考えがある！」

雷張 ジョー「良いだろう。エムの奴には悪いが俺がお前に引導を渡してやる！」

マイトカイザーのドリルクラッシュャーで飛龍を貫いた。

雷張 ジョー「くそっ！もう飛龍は限界か！」

舞人「考え直せ、ジョー！異界人が争う事はこのアル・ワースの戦いを拡大させるだけだ！」

雷張 ジョー「黙れ、旋風寺 舞人！お前の正義など……」

舞人「ジョー！確かにお前の言う通り、必ずしも正義が勝つとは限らないかも知れない！だけど、この世に悪の栄えた試しはない！最後には必ず正義が勝つはずだ！俺はそう信じて、これからも戦い続ける！どこの世界にしようと、誰が相手でも！」

雷張 ジョー「くそおおおつ!!？」

飛龍は爆発した……。

恐らく脱出したと思うが……。

サリー「ジョーさん……」

舞人「(ジョー……。俺の言葉が届かないのか……。お前は……心の底から悪に染まった人間なのか……)」

〈戦闘会話　しんのすけVSカイザム〉

ひろし「やいやいやい！よくも俺達の家族を痛めつけてくれたな！」

みさえ「今度は家族全員で相手になるわ！」

カイザム「ふん、くだらん……。家族愛など崩してやる！」

しんのすけ「父ちゃんと母ちゃんはオラが守るゾ！」

みさえ「しんちゃん……」

カンタム「よく言った！格好いいよ、しんのすけ君！」

しんのすけ「イヤ。それ程でも」

カンタム「カイザム兄さん！僕達はもう負けない！」

カイザム「良いだろう、カンタム……。その一家ごと消してやる！」

〈戦闘会話　ゼロVSカイザム〉

ゼロ「おい、ビート・スターとジャンキラーは何処だ！」

カイザム「お前に答える気はない、ウルトラマンゼロ」

ゼロ「だったら……力尽くでも聞き出してやるぜ！」

超超カンタムの攻撃でカイザム・ロボは吹き飛ばされた。

カイザム「こ、この俺が……貴様ら如きに……！」

ひろし「教えてやるよ、カイザム！子供を傷つけられた親つてのはな……強いんだぜ

！」

カイザム「黙れ……！次こそは息の根を止めてやる！」

そう言い残し、カイザム・ロボは撤退した……。

みさえ「なんて諦めの悪い奴……！」

しんのすけ「カンタム……」

カンタム「大丈夫だよ、しんのすけ君……。僕は等に覚悟できているからね」

これで全部の敵を倒したな……。

舞人「俺達の勝ちだ……！」

虎王「あく面白かった！噂の龍神丸の活躍も見たし、帰るとするか……」

ワタル「舞人さん……。ガインは……」

舞人「大丈夫だ、ワタル。浜田君の話では、ボディは損傷したが超AIに問題はない
そうだ」

ジャンボット「ガインは無事なんだな……」

ミラーナイト「取り敢えずは一安心ですね」

舞人「それでもボディの修理には暫く時間がかかると聞く。ガインが戻るまでの間、
俺は、このマイトカイザーであいつの分まで戦うつもりだ」

サリー「舞人さん……」

ニア「今の私なら、わかります。あれが正義のヒーローの姿なんですわね」

？「果たして、そうかな？」

サリー「え……」

パープル「ハロー・レディース！」

ニア「あなたは……！」

パープル「お前達を暗黒の楽園へ誘う者……。それが、これ俺……。パープルだ」

サリー「（舞人さん……！）」

っ!!? BD連合のロボットが一機残ってたか!

デュオ「まだ残ってやがったか!」

パトリック「たった一機だ! 撃ち落としてやるぜ!」

パール「いいのかい、正義の味方達?」

舞人「パール!」

パール「ヒーローの復活なんていう茶番を見せられた慰謝料代わりだ。こちらのレディ二人はいたでいていく」

サリー「舞人さん!」

ニア「シモン!!?」

う、嘘だろ...!!?

舞人「サリーちゃん!」

シモン「ニア!!?」

パール「どうもドアクダーってのは女の子が大好きらしくてね。例えば...」

アトラ「は、離してください!」

三日月「!」

オルガ「な、何っ...!!?」

シノ「おい、あれって...!」

三日月「アトラ：：！！？」

アトラ「三日月！！？そこにいるの！」

パープル「そう言えば、君の愛する者だったね。三日月・オーガス」

三日月「紫：：！アトラに何をした：：！」

パープル「彼女を欲しいと言ったのはドアクダーだよ。そう言えば、一人子供がいたけど：：。あれは君の子なんだね」

三日月「三人を離せ：：」

パープル「やだね。あ、それと、シーラ・ラパーナやリリーナドーリアン、マリナ・イスマイルだけでなく、彼女達もご所望なんだそうだ」

ショウ「何っ！！？」

刹那「マリナ・イスマイルが：：！！？」

ヒイロ「リリーナがドアクダーの所にいるだと：：！！」

パープル「グッバイ、エクスクロス！彼女達を取り戻したければ、もっと頑張るんだな！」

ロボットは撤退した：：。

三日月「待て：：！！」

エーコー「敵機、ロストしました！」

エレクトラ「船長……」

ネモ船長「敵の狙いは、最初からあの二人だったのかも知れん……」

舞人「サリーちゃん……」

三日月「アトラ……」

シモン「くそおおおつ!!?」

シモンの声が街中に響いた……。

戦闘を終えた俺達は青戸工場で話し合う。

アマリ「……ドアクダーは何が目的でサリーちゃんとニアさんを狙ったんでしょう……」

零「ク라마から聞いた話じゃ、ナディアが誘拐されそうになったのはブルーウォーターが狙いだったそうだけどな……」

グラハム「彼女達がそれに相当するものを持っていたと言うのか?」

甲児「どうなんだ、舞人?」

舞人「……俺が知る限りでは、サリーちゃんは普通の女の子です。普通の優しい女の子なのに……こんな目にあうなんて……」

オルガ「まさか、アトラもこの世界にいたとはな……」

三日月「…」

ハツシユ「三日月さん…」

シモン「しつかりしろ、舞人、三日月」

三日月「…シモン…」

シモン「奪われたのなら、取り返すまでだ」

万丈「その通りだ。考えている時間があつたら、身体を動かすぞ」

舞人「はい…！」

三日月「言われるまでもないよ…！」

シヨウ「そして、シーラ様とリリーナ・ピースクラフト、マリナ・イスマイルとい
いう人もドアクダーに捕らえられているのか…」

アスナ「その三人とアトラって子はと言う人なの？」

三日月「アトラは…俺の大切な存在で…。どうやら、俺とアトラの子供もドアク
ダーの元へいるみたいだ」

え…？
!??

メル「み、三日月さん…子供がいらつしたんですか!?？」

三日月「うん」

オルガ「それは驚くわな」

マーベル「次にシーラ様はバイストン・ウエルの一国の王女よ」

マーベル「反ドレイク勢力の指導者的な立場にあり、地上に上がったオーラマシンを浄化する役目をジャコバ・アオンに与えられていたの」

デュオ「リリーナお嬢さんは俺達の世界の人間だ」

カトル「変革する世界の象徴であり、彼女の唱える完全平和主義はこれからの世界の一つの理想と考えられていました。彼女はゼクスさんの妹でもあります」

ヒイロ「ヒイロにとっては特別な人間のようなだな」

ヒイロ「…」

デュオ「まあな…」。と言っても、あのお嬢さんの掲げる理想は世界中の人間に影響を与えたんだ」

ルルーシュ「すべての憎しみがゼロレクイエムで消滅した後、世界を導いていくのは彼女のような人間だと俺は思っていた…」

ロックオン「マリナ・イスマイルは俺達の世界の人間で新興国アザデイスタン王国の第一皇女だ」

アレルヤ「彼女は戦いでは何も解決することができないという考えを持つ人だったんだ」

ティエリア「つまり、僕達とは正反対の信念を持っていた…」

刹那「俺は……彼女と関わった事によって……対話の道を見つけたんだ……」

舞人「アトラさんを除くどの女性も世界の行き先を決める力を持つていたのですね」

シバラク「ますますわからんな……。サリーちゃんやニアさんと共通点が見当たらない……」

舞人「答えを探すよりも彼女達を救い出す方が先です」

アセム「それなら、俺達も手を貸すぜ」

あ……あのモビルスーツ部隊の……

ゼハート「遅から早かれ、ドアクダーは倒さなければならぬ」

ジラード「それにこんな状況を見逃せないしね……」

アセム「それに俺達もエクスクロスに入る事になったんだ。よろしくな、改めて、ア

セム・アスノだ」

ゼハート「ゼハート・ガレットだ」

ジラード「ジラード・スプリガンよ、よろしくね」

フラム「フラム・ナラよ」

レイル「レイル・ライトだ！」

ナオミ「私達も手伝うよ！」

今度はナオミ、野原一家とカンタムが来た。

サリア「ナオミ……。あなた借金はどうなったの？」

ナオミ「まだだよ。でも、エクスクロスに参加したらチャラにしてくれるみたい」
ヒルダ「結局、それ目当てかよ！」

ナオミ「違うよ！私だって、みんなと一緒に戦いたいからなの！」

アンジュ「ナオミ……。後でマツサージしてくれない？」

ナオミ「いいよ、アンジュ！あ、ナオミです！よろしくお願いします！」

しんのすけ「父ちゃんと母ちゃんもエクスクロスに入るみたいだよ！」

ひろし「しんのすけとひまわり、シロがお世話になったそうで……。ありがとうござい
ます！俺は野原 ひろし……。こっちは妻のみさえです」

みさえ「これからはよろしくお願いします！」

一気に戦力増加だな！

零「それにしても……。ドアクダー軍団を追うための手がかりがあればいいんだが……」
舞人「それならば既に手配してあります」

何……？

すると、青木さんといずみさんが来た。

青木「お待たせしました、舞人様。ドアクダー軍団の動きについての調査報告書です」
いずみ「かいつまんで報告しますと、ドアクダー軍団は各地の大地を汚染しています」

ユイ「大地を!?」

アマリ「大地と調和を説く智の神エンデを信仰するアル・ワースにおいて、環境を汚染するのは大きな意味を持ちます…」

ホープス「当然、ドアクダー軍団は承知の上でやっているのですよ」

舞人「ありがとう、青木さん、いずみさん。俺達はすぐにドアクダー軍団を追って出発します」

浜田「気をつけてね、舞人。こちらはその間にガインの修理をしておくから」

舞人「頼む、浜田君。ミスルギ皇国の侵攻も本格化してきた今、戦いはこれまで以上に激しくなるだろう…。それを戦い抜くためにはガインとマイトカイザーの力を合わせる必要がある」

浜田「了解だ、舞人。可能な限り、急ぐよ」

舞人「(行つてくるぞ、ガイン…)。お前と共に戦う日が、また来るのを俺は信じている…。待つていてくれ、サリーちゃん…。俺は…。必ず君達を救い出す…。それが俺の戦い…。俺の正義だ」

一夏「あれ…。そう言えば、アルトは？」

摩耶「ノームさんの所です」

ブレラ「…」

「早乙女 アルトだ。

俺はプトレマイオスの医療室でシエリルに会いにきた。

アルト「シエリル……遅くなって悪いな。最近忙しくてな」

シエリル「……」

アルト「最近思うんだ。お前の歌が久々に聴きたいってな……。だから、必ず目を覚ましてくれよ……。悪い、もう行くぜ。また後でゆつくり来るからよ……」

俺はシエリルの顔を眺めた後、医療室を後にした……。

シエリル「……ア、ルト……」

第40話 対話の歌

―新垣 零だ。

青戸を後にした俺達はドアクダ―軍団を追っていた。

刹那「救世主ガンダムにヴェイガンか…」

アセム「俺達の世界とは違うガンダムがいくつも揃っているのか…」

ゼハート「そして、どの世界にもガンダムは救世主なのだな」

テイエリア「それに関しては同意する」

アキト「君達の世界は救世主の世界と呼ぶべきだな…」

ジラード「あなた…」

アキト「俺に何か？」

ジラード「…いいえ…かつての私にそっくりだったから…」

アキト「俺はあなたの事を知らない。だが、俺もそう思っていたが…俺は変わった

んです」

ジラード「ええ。私も変わったもの…。よろしくね、アキト」

アキト「はい、ジラードさん」

ユリカ「むうー……」

ユリカさんが嫉妬してるなこりや……。

ルリ「ユリカさん、膨れないでください」

ユリカ「アキトのバカ！」

アキト「え、いや……待ってくれ、ユリカ！」

リョーコ「アキトの奴もだんだんと昔のあいつに戻ってきたな」

バナージ「それにしても、このアル・ワースに揃ったガンダム達……これになんの意味があるんだろう……」

アスナ「戦争の世界のガンダムと刹那達、ヒイロ達、シンやキラ達、アセムさん達、三日月の世界のガンダムは全く系統が違うのよね……」

グレンファイヤー「なんか、他にもガンダム同士が試合したりしてそうだな」

ブラツクガイン「他にも小さなガンダムがいそうだな」

ミラーナイト「何の話をしているのですか……」

アムロ「ガンダムについては現在も調査中だ」

トビア「今、考えても仕方がないという事です……」

リチャード「では、各自、一度部屋へ戻ろう」

アマリ「そうですね。零君、部屋に来る？」

零「悪い、今から一夏達とシエリルの様子を見に行こうと思っっているんだ」

メル「シエリルさんの？」

アマリ「用があるのはシエリルさんじゃないよね？」

零「…アマリには敵わないな…。ああ、そうだ。最近、アルトの奴が浮かない顔をしていたからな…。当然と言えば、当然だけど、あいつ、最近ずっとシエリルにつきつきりだからな」

一夏「それにランカっていう子の事もあるし…。あいつにばかり、無理はさせられないからです」

ベルリ「少しでもアルトを休ませないといけませんから…。」

ラウラ「だが、シエリルという人もアルトがそばにいた方がいいのではないか？」

ブレラ「いや…。彼女が目を覚ました時にアルトが倒れたとなるとシエリルは怒ると思う」

零「ブレラはシエリルのボディガードをしていたんだよな？」

ブレラ「ああ。シエリルは勝気な女だ。もし、アルトが倒れたらお前達にも文句を言うだろうな」

零「そうならないようにやるしかないな」

青葉「じゃあ、早速行くか！」

俺、一夏、ベルリ、青葉はアルトとシエリルの元へ向かった……。

プトレマイオスの医務室へついた俺達は医務室へ入ろうとしたが、俺がある光景を見て、ベルリ達を止める。

零「(待て!)」

青葉「(え……どうしたんですか?)」

零「(あれを見ろ)」

一夏「(え……?)」

俺に言われて、そつとベルリ達は中を覗くと眠っているシエリルの手を取り、握るアルトの姿があった。

ベルリ「(アルト……)」

……今入るわけにはいかねえな……。

シエリル「……」

アルト「シエリル……。俺……ランカに嫌われたみたいだ……。あの時、お前に言った言葉……。それでランカがああいう風になってしまったなら……。俺のせいになるよな……。なあ、シエリル……。俺は……。どうしたらいい?」

アルト：： お前：：。

アルト「：： つて、こんな事お前に言ったら、自分で考えなさいとか言われそうだな。悪かったな、シエリル：：。お前も必死に戦っているのによ。：：。それで：：。お前らはいつまで覗き見をするつもりだ？」

：：。 気づかれていたか！

零「何だよ、気づいていたのなら、言えよ」

アルト「いつまで覗くか、待っていたんだよ」

青葉「わ、悪い：：。アルト：：。その：：。」

アルト「俺の事を心配してくれたんだろ？それに免じて許してやるよ」

ベルリ「アルト、ランカって子は：：。」

アルト「：：。ランカがどんな考えであろうと俺はあいつを助け出す：：。例え、ランカ

に拒まれようとな。そして、あいつからの言葉を全て受け入れる」

一夏「辛くないのか？」

アルト「これが俺の選んだ道だからな：：。後悔はない」

零「：：。お前がどんな想いでランカって子を助けようとしているのかはわからねえ：：。だがこれだけは言わせる。無理はするな：：。一人で無理だと思ったら俺達を頼れ」

アルト「零……」

零「俺も……他の奴らの事は手を貸そうとするくせに自分の事となると自分で抱え込む……。その点はアマリ達に何度も指摘されてる……。だからこそ、俺はお前とシエリル……そしてランカを助けたい」

ベルリ「僕も手を貸しますよ！」

一夏「俺もだ！」

青葉「勿論、俺もだぜ！」

アルト「……ありがとうな、零、一夏、ベルリ、青葉……」

九郎「お前等だけで水臭い話ししてんじゃねえよ！」

……！俺達を除くみんながいつの間にか来ていた。

アルト「……みんなまで……！」

零「いつの間……！」

アマリ「アルト君を仲間だと思っているのは零君達だけではないですよ」

ブレラ「アルト……失礼するぞ」

一言呟いたブレラはアルトを殴り飛ばした。

アルト「ぐっ……!!？」

リナ「ブ、ブレラさん!!？何を!!？」

アルト「何すんだよ、ブレラ！」

ブレラ「オズマならこうすると思ってるな……」

アルト「……」

ブレラ「この様な事でランカがお前を拒むと思うのか？何か訳があるはずだ」

アルト「それは……」

ブレラ「あまり、俺の妹を舐めるなよ、アルト。ランカは強い子だ……。お前に選ばれなかっただけであのような事になるわけない」

アルト「……それは俺もわかってる。だからこそ、ランカを助けて、話をしたいんだ」

ブレラ「……了解した。お前にならばランカを任せられるからな」

アルト「ありがとう、ブレラ……」

ブレラ「礼を言われる事はしていない」

刹那「……」

ニール「刹那……？どうかしたのか？」

刹那「……嫌、何でもない。」

ジユドー「今思えば俺達って、やる事が山積みだよな」

オルガ「何今更の事を言ってるんだよ、ジユドー」

三日月「うん、俺達は前に進むだけ……。アトラ達も絶対に助ける」

シモン「その意気だ、三日月！よっしゃー！やるぜ、みんな！」
プル「おーっ！」

千冬「盛り上がっているところ、すまない。スカーレット大尉はいますか？」
スカーレット「どうかしましたか？」

千冬「ウイングルのコックピットのハッチが開かなくなっちゃってしまっ……」
スカーレット「え……！！？」

千冬「メカニックの人達が別の方法で試みていますが、開かないのです」

海道「お前、壊しちゃったんじゃないのか？」

真上「お前じゃあるまいしそんな事するか」

海道「ああつ！！？それどういう意味だよ！！？」

さやか「という事は暫く、ウイングルの出撃は難しいという事ですか？」

千冬「そうなるな……」

スカーレット「わかりました。では、指揮に回りましょう」

千冬「お願いします」

すると、警報が鳴り響いた。

シバラク「敵襲か！！？」

ミレイナ「パイロット皆さん、バジユラの群れが現れました！出撃準備をお願いします」

す！」

ブレラ「バジユラだと…!?」

アルト「バジユラまでアル・ワースに来ていたのか…！」

俺達はそれぞれ出撃準備をした…。

第40話 対話の歌

俺達はそれぞれ出撃した。

デュオ「あれがバジユラか…」

ゴーカイレッド「本当に虫みたいな奴等だな！」

ヒイロ「話ではアルト達の世界ではバジユラ達と対話をした様だが…」

カトル「戦いは避けられなそうです…。いいですか、アルトさん？」

アルト「… ああ」

ルルーシユ「だが、いったい誰がバジユラを操っているんだ…？」

バジユラを操っている者… いったい…？

フェルト「！スメラギさん、モビルスーツ部隊が近づいています！」

スメラギ「何ですって!?!」

フェルトの言葉通り、キャピタル・アーミイのモビルスーツ部隊、マスクのマツクナイフ、アルケーガンダム、リボーンズガンダム、ガンダムバエルが現れた。

ゼロ「ミスルギの部隊だと!?!」

ジャンボット「何故奴等が…!?!」

リボンズ「バジユラを操っているのがエンブリヲだからだよ」

アンジユ「エンブリヲがバジユラを操っていますって!?!」

タスク「いや、奴ならやりかねない…！」

シヨウ「お前達は戦う意思を持っていないバジユラを無理矢理戦わせているんだぞ
！」

マクギリス「ならば、君達が止めればいい」

サーシエス「そういう事だ！ぶっ倒して、止めればいいんだよ！」

アイーダ「あの人達… どうしても私達にバジユラを倒させたいみたいですね…
！」

ディオ「だが、やらなければこちらがやられる」

青葉「待てよ、ディオ！何か方法があるはずだろ！」

ディオ「そうしている間にも被害が出る」

青葉「お前には血も涙もないのかよ！」

ディオ「情に流されて、部隊に被害を出すよりマシだ」

青葉「何だと?!？」

アスナ「ちよつと、喧嘩してる場合じゃないでしょ！」

ヴィラル「だが、どちらにしろ。洗脳を解く方法もわからないのでは助けようがない
！」

海道「ぶん殴ってみるしかねえだろ！」

スカーレット「今回はわたしは出る事は出来ないが… 良いな、アルト」

アルト「… はい」

ブレラ「アルト、迷いを捨てろ。今のバジユラは敵だ」

アルト「わかつてる！」

ガエリオ「マクギリス、どうしてこんな事を…?!？」

マクギリス「お前に話すつもりはない、ガエリオ。此処であつたんだ…。今度こそ殺
させてもらう」

マスク「ベルリ・ゼナム、覚悟しろ！」

ベルリ「戦いたくないものを無理矢理戦わせて…。これがキャピタル・アーミイなん

ですか!?」

マスク「何とでも言うがいい！私はお前を倒せばそれでいいのだ！」

キラ「あの人は異常だ…！」

アスラン「今はバジユラの相手をするぞ！」

シン「やるしかないな…！」

リボンズ「さあ、始めよう、エクスクロス！（見させてもらうよ、刹那・F・セイエイ…）。そして、エクスクロス…。彼等がどの様な対話の光を見せてくれるのか…）」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VSバジユラ〉

零「アンジュの次はアルト… エンブリヲって奴は何処まで人を苦しめれば気が済むんだよ！」

〈戦闘会話 刹那VSバジユラ〉

刹那「（どうすれば、バジユラの洗脳を解く事が出来る…？ 鍵を握るのはアルトか…？ それとも…）」

〈戦闘会話　アルトVSバジユラ〉

アルト「バジユラ… どうすればお前達を止められるんだ…
!!? 俺はお前達と…
! いや、今はやるしかないんだ…!」

〈戦闘会話　ブレラVSバジユラ〉

ブレラ「何故俺達とバジユラを戦わせる…? わざわざ、戦わせる必要などあるのか…? 嫌な予感がする…!」

助ける方法が浮かばず、俺達はバジユラを撃墜していく。

マクギリス「流石はエクスクロスだな。リボンズ、そろそろいいんじゃないか?」

リボンズ「そうだね」

ノブナガ「…? 何だ…?」

リボンズ「さあ、来てくれ」

現れたのは大きなバジユラだった。

ブレラ「ハウンドバジユラだと…?」

アル「… 待て、あのバジユラの中に誰かいるぞ!」

本当だ…… あれは…… ！！？

ランカ「ア、ルト…… 君……」

アルト「！」

ブレラ「バカな……！」

アーニー「ランカちゃん…… ！！？」

サラ「どうして、ランカさんが…… ！！？」

マサキ「エンブリヲがあの子を人質にとったのか…… ！！？」

ヒルダ「でも、何であいつは抵抗しようとしねえんだよ！」

ランカ「……」

サリア「どう見ても様子が変だわ！」

サラマンディーネ「もしや、彼女も操られているのではないですか！！？」

號「操られているから逃げる事が出来ないって事か……！」

リボンズ「早く彼女を助けださないとダメだね」

サーシエス「さもねえと…… 誤ってあのバジユラを倒しちまうかもしれないねえぞ？」

ロックオン「何て奴等だよ……！」

アニュー「リボンズ、あなた……」

ジョーイ「どうするんですか、ランカさんをどうやって……！」

楯無「あのバジユラの動きを止めるしかないわ……」

簪「でも、もし間違えて倒しちゃったら……」

箒「その様な事を気にしてはこちらがやられるぞ！」

セシリア「でも、それではランカさんが……！」

マクギリス「話している時間はあるのかな？」

トロワ「どちらにしろ、急がなければならない」

五飛「まずは残る敵を殲滅して、あのバジユラの動きを止めるしかない！」

ランカ「……」

アルト「くっ……！ランカ、待ってる！絶対に助けてやるからな！」

俺達はランカ救出を開始した……

〈戦闘会話 零VSハウンドバジユラ〉

零「君を待っている人が沢山いるんだ！だから、絶対に助ける！」

〈戦闘会話 アマリVSハウンドバジユラ〉

ホープス「もし彼女を助け出せたとしても……」

アマリ「わかってるわ、ホープス。でも、必ずアルト君ならどうかしてくれる。それを信じて、私達は彼女を助け出します！」

〈戦闘会話 刹那VSハウンドバジユラ〉

刹那「ランカ・リー……！アルトが待っている……！だから、お前の……お前の想いと歌を聴かせてくれ！」

〈戦闘会話 アンジュVSハウンドバジユラ〉

アンジュ「(彼女もエンブリヲの被害者……)もう許せない！絶対にエンブリヲを見つけて出してやる！」

〈戦闘会話 アーニーVSハウンドバジユラ〉

サヤ「前回と同じ展開ですね……！」

アーニー「違うと言えば、ランカちゃんが救出を望んでいないという事と操られている事だ」

サヤ「必ず助け出しましょう、少尉！」

アーニー「ああ！僕達の世界の彼女には何度も助けられた……今度は僕達が助ける番

だ！」

俺達はハウンドバジユラに軽いダメージを与えた。

ハウンドバジユラ「！」

エイサツプ「やったか?!?」

アマルガン「いや、まだじゃ！」

ハウンドバジユラの傷が回復した…?!?

クリス「そ、そんな…！」

千冬「傷が回復したと…?!?」

ランカ「あ… ああ…！」

ランカが苦しんでいる…?!?

エンネア「あの人が苦しんでるよ！」

ミツヒデ「もしや、傷が治ると彼女にもダメージが…?!?」

ヒデオシ「そんなのどう助ければいいんだよ?!?」

リボンズ「君達では不可能なんだよ。彼女を救うにはあのバジユラを倒すしかない」

ゴーカイピンク「ですが、そんな事をすればあの方は…！」

マクギリス「彼女はもう十分に苦しんでいるはずだ……。そろそろ楽にさせてあげた方がいいんじゃないか？」

オルガ「それを決めるのはお前等じゃねえ……。ランカ自身だ！」

リボンズ「ならば、彼等を出そう」

現れたのは……。怪物……。!??

シャルロット「バジユラでもドラゴンでもインベーターでもないよ！」

鈴「何なの、あれ!?？」

真上「宇宙怪獣……。！」

甲兎「真上達……。知っているのか!?？」

スカーレット「私達の世界に存在していた化け物だ！まさか、奴等もこの世界に……！」

海道「何だっついていい！倒すだけだ！」

カレン「待って！あの宇宙怪獣……。ハウンドバジユラを狙ってるわ！」

ラウラ「意地でもハウンドバジユラを倒す気か……。！」

ロク「彼等の進行を許せば、ランカさんが……。！」

ゴーカイグリーン「でも、あんな数対処しきれないよ！」

ゴーカイブルー「だが、やるしかない！」

刹那「…」

すると、ダブルオークアンタが動いた。

アレルヤ「何をしているんだ、刹那!!?」

刹那「クアンタムシステムを作動させる…!」

パトリック「待て待て!それは使えないんじゃないのかよ!!?」

刹那「ダメ元でやってみる!」

テイエリア「ダメだ!もし、成功したとしてもその不安定な状態で使えば、君の脳は…!」

刹那「それでも…俺達はわかり合わなければならぬ!アルトとランカも…!」

アルト「刹那…」

しかし、宇宙怪獣達はダブルオークアンタに向かって動き出した。

リチャード「クアンタを狙い始めたか!」

フェルト「刹那ああああつ!!?」

刹那「くっ…!」

?「問題ない、そのまま続けてくれ」

刹那「!」

現れたのは…黒い戦艦…!!?

さらに戦艦はロボットになり、クアンタに接近している宇宙怪獣達に攻撃を仕掛けた。

モニカ「各部問題ありません！」

ジェフリー「マクロスキャノンで決めるぞ！」

キャシー「了解！友軍機は射線から回避してください！」

ジェフリー「マクロスキャノン…撃てえええつ!!？」

ボビー「うおおおりやあああつ!!？」

黒い戦艦ロボットのビーム砲で宇宙怪獣達は爆発した。

ブレラ「マクロス・クォーター…！」

キャシー「デルターよりスカル4へ！生きているわね？」

アルト「あ…はい！」

すると、四機の戦闘機、そして、赤い機体が現れる。

ミシエル「おーい、アルト！生きてるか？生きてなくても返事しろ！」

ルカ「アルト先輩、ご無事ですか!?!？」

アルト「ミシエル、ルカか！」

クラン「どうやら、無事の様だな」

カナリア「見れば、わかる。ほら、オズマ。あんたからも何か言いたい事があるんだ

ろ?」

オズマ「アルト!」

アルト「隊長…」

オズマ「なんて女女しい顔をしてやがる!俺の知る早乙女 アルトはそんな男じゃねえだろうが!」

アルト「…好き勝手言いやがって…俺はまだ諦めてなんかいいえよ!」
オズマ「ふつ、それでこそだ!」

ミシエル「アルト、あのバジユラの中にランカちゃんがいるんだな!?!?」
アルト「ああ!」

ミシエル「それならうってつけの奴がいる!リオン!」
すると、今度は三機のバルキリーが現れる。

リオン「ミーナ、行けるか!?!?」

アイシャ「お願いね、ミーナ!」

ミーナ「30」「はい、行けますよ、リオン、アイシャ!私…歌います!」
水色のバルキリーから歌が…?!?

アルト「歌…?」

リオン「アルト、俺達も助太刀するぞ!」

アルト「あ、あんた達はいったい…！」

アイシヤ「話は後よ！私達が援護するからそのクアンタムなんとかをやって！」

刹那「了解した！…クアンタムシステムを作動させる…！…つ、行ける…！」

クアンタムバースト!!？」

クアンタが光に包まれ、辺りにGN粒子が舞った。

刹那「聴かせてくれ、ランカ・リー！お前の想いを…！」

ランカ「私の…想い…！」

ステラ「ダメ！全然届かない！」

クラン「大丈夫だ、もうそろそろ…妖精のライブが始まる！」

？「アルトオオーツ!!？」

アルト「！…な…シエリル!？」

え…シエリルって…！

一夏「シエリルって、眠っていたんじや…！」

アルト「シエリル！お前目が覚めたのか!？」

シエリル「こない歌を聞かされて、寝てる方がどうかしているわよ！あなたの歌

声、素敵だったわ」

ミーナ「30」「そ、そんな…私なんて、まだまだです！」

シエリル「取り敢えず、今度は私の歌でランカちゃんを目を覚まさせてあげる！だから……私の歌を聴けえええつ!!？」

今度はシエリルが歌い始めた。

彼女の歌でバジユラ達の動きが悪くなる。

サラマンディーネ「何という心の高まる歌……」

アンジユ「ええ……心の底が熱くなってくるわ！」

ブレラ「今だ、アルト！」

オズマ「ランカを救い出せええつ！」

アルト「……了解！」

マスク「……ちいっ！この歌の影響で全てが変わってしまう……！」

サーシエス「なら、あの女を潰せばいいんだろ！」

アルケーガンダムと複数の宇宙怪獣がプロレマイオスに接近した。

アルト「シエリル！」

シエリル「！」

しかし、何処かからの攻撃でアルケーガンダム達は吹き飛ばされる。

アルケーガンダム「な、何だ!?？」

現れたのは三機のロボットだった。

エイーダ「ライブ中に攻撃するとは言語道断です！」

ジヨニー「確かにそれは許せませんね」

朔哉「なら、いっちょ痛い目を見てもらおうとするか！」

くらら「良い提案ね、行くわよ！葵！」

葵「ええ、やってやろうじゃん！ノリコ！アマタ！お先にやらせてもらおうわ！」

まずは一機目の黒い機体が攻撃を仕掛けた。

葵「さあ、怪物退治と行くわよ！」

ジヨニー「やってやるさ！」

朔哉「やーっぱり言われた…っ！」

エイーダ「葵さん、断空剣を！」

葵「断空剣！」

くらら「これで終わりよ！」

断空剣という剣を取り出し、宇宙怪獣に接近した。

葵「はあああつ！断空ウウ斬！」

宇宙怪獣「！」

断空剣で斬り裂かれた宇宙怪獣は爆発した…。

ノリコ「流星はダンクーガノヴァだね！」

カズミ「私達も負けてられなくてよ、ノリコ」

ノリコ「はい、お姉様！」

今度はもう一機の黒いロボットが攻撃を仕掛けた。

ノリコ「覚悟しなさい、宇宙怪獣！ガンバスターが相手よ！お姉様、あれを使うわ」

カズミ「ええ、良くつてよ」

ノリコ「うわあああああつ!!？」

二機目の黒いロボット：：ガンバスターは空高く上昇した。

ノリコ「スーパー！」

カズミ「イナズマ！」

ノリコ&カズミ「キイイイック!!？」

宇宙怪獣「：：」

ガンバスターはとてつもない威力の蹴りで宇宙怪獣達を一網打尽にした。

サーシエス「な、何だよ、あの二機!!？パワーが桁違いだぞ！」

アマタ「余所見している場合じゃないぞ！」

カイエン「行け、アマタ！ミコノ！ゼシカ！」

今度は三機目の機体がアルケーガンダムに攻撃を仕掛けた。

アマタ「戦争しか考えていない奴なんて：：！」

ミコノ「私の……！私達の想いが……！」

ゼシカ「アクエリオンを強くする！」

アマタ「行くぞおおおつ!!?超時空！」

アマタ&ミコノ&ゼシカ「[[無限拳ーっ!!?]]」

……あの機体の腕が伸びて……時空を超えて……アルケーガンダムを殴り飛ばし

た……っつて、何だあれ!!?」

アマタ&ミコノ&ゼシカ「[[うおおおおつ!!?]]」

そのまま、威力を上げて、アルケーガンダムに大ダメージを与えた。

サーシエス「うおおああああつ!!?」

シン「な、何なんだよ、あいっら……!!?」

サーシエス「ぐっ……！何者なんだよ、このトンデモロボット達は……！」

葵「教えてあげるわ、ダンクーガノヴァマックスゴッドと！」

ノリコ「ガンバスターと！」

アマタ「アクエリオンEVOだ！」

海道「何だよ！獣チームにタカヤ達じゃねえか！」

葵「久しぶり、地獄コンビ！」

ノリコ「私達も加勢します！」

真上「勝手にしろ！」

スカーレット「もう一機は…？」

カズミ「彼等も仲間よ、異界人のね」

MIIX「はい、エクスクロスの皆さん！私達も戦います！」

アンデイ「まずはあのランカって子を助けるぞ！」

ユノハ「今なら、あの人を助けられます！」

零「行け、アルトオオオオツ！！？」

アルト「うおおおおおおつ！！？」

デュランダルはハウンドバジユラに突っ込んだ。

そして、GN粒子の光がデュランダルとハウンドバジユラを包み込んだ…。

ー早乙女 アルトだ…。

俺はダブルオークアンタが出したGN粒子の光によって包み込まれ、光の空間でランカと向き合っていた。

ランカ「アルト君…」

アルト「やっと、話ができるな……。ランカ」

ランカ「……な、何しに来たの!? 私はまだもう話す事なんてないよ!」

アルト「……俺にはあるさ。たくさん……。お前と話したい事がたくさん。」

ランカ「シエリルさんの目が覚めたんでしょう!? それなら、シエリルさんと一緒にいた方がいいよ!」

アルト「俺はお前とも一緒にいたんだよ!」

ランカ「私なんて一緒にいない方がいいよ!二人で居てよ……」

アルト「ランカ……どうして……」

ランカ「……私……このアル・ワースに来て……エンブリヲという人にあつたの」

エンブリヲだと……!?

ランカ「その時……エンブリヲさんから聞いたの……私達の未来の事を……」

アルト「未来……?」

ランカ「アルト君が女王バジュラと一緒にフールドした後……シエリルさんはV型感染症が悪化して倒れたの……。それでも、シエリルさんはV型感染症は治つた……。そう思ったんだけど……」

う……。思……。つ……。た……。ん……。だ……。け……。ど……。」

……。だけ……。ど……。?」

ランカ「シエリルさんはアルト君の帰りをずっと待つた……。気が遠くなるまで……」

でも、いくら待ってもアルト君は帰ってくる事はなかった……。そして、シエリルさんは……再び、V型感染症を再発させて……生命を落とした……。これがエンブリヲさんから聞いた未来の話なの……」

アルト「シエリルが……。死ぬ……。!?？」

ランカ「だから、例え……が異世界でも……。アルト君はシエリルさんと一緒にいて欲しいの。じゃないと……。シエリルさんが……」

そうか……。ランカはずつと……。俺やシエリルの事で悩んでくれたんだな……。

アルト「ランカ。お前は……。その未来を見たのか？」

ランカ「え……。ううん、見てないよ……。でも、エンブリヲさんは神だって言っていたから……」

シエリル「情けないわね、ランカちゃん。そんな馬鹿な話を信じるなんて」

突然、シエリルが現れた!!？」

ランカ「シエリルさん!!？」

アルト「お前、どうして!!？」

シエリル「……。そんな事よりも、ランカちゃん！」

ランカ「は、はい！」

シエリル「私が未来で死ぬ？あなた……。私を甘く見ているんじゃないの？」

ランカ「え……」

シエリル「例えそれが私達の未来だとしても……未来は変える事が出来るでしょう？」

ランカ「でも……！エンブリヲさんは未来を変える事は不可能だって言っていました！」

シエリル「……」

アルト「ならその未来……俺が変えてやる！」

シエリル「アルト……」

ランカ「アルト君……」

アルト「それにエンブリヲは俺達がアル・ワースで出会った話はしていないんだろ？」

ランカ「あ……」

アルト「なら、大丈夫だ。俺はもうお前達の前からいなくなならない……。ずっと、ランカとシエリル……。みんなと一緒にいる！」

シエリル「……アルトのくせに……」

アルト「だから……ランカ！戻って来てくれ！俺やシエリルだけじゃない……。ミシエルやルカ、クラン大尉やカナリア中尉……マクロス・クォーターのみんな……。そして、隊長やブレラも待っているんだ！」

シエリル「また一緒に歌いましょう……。ランカちゃん！」

ランカ「……いいの？私、みんなに迷惑をかけたんだよ？」

アルト「俺達だつて、お前に迷惑をかけたんだ。お互い様だろ？」

ランカ「……これからも、迷惑をかけるかもしれないんだよ？」

シエリル「それもお互い様よ」

ランカ「う、うう……。私……。アルト君のいたい……。！シエリルさんと歌いたい……。！」

アルト「ああ、俺もだ！ランカ！」

シエリル「帰りましょう、ランカちゃん！」

ランカ「はい！」

俺達はもう一度光に包まれた……。

―新垣 零だ。

デュランダル達を包む光が消えると、ハウンドバジユラの身体は粒子となり、消滅し始めた。

つて……。デュランダルにランカが乗ってる！

ハウンドバジユラ「…」

ランカ「！」

アルト「どうした、ランカ？」

そのまま、ハウンドバジユラは粒子となり、消えた…。

ランカ「あのバジユラ… ありがとうって言った…」

アルト「… そうか」

オズマ「アルト、ランカは?!？」

ランカ「私なら大丈夫だよ、お兄ちゃん！」

ブレラ「無事で何よりだ！」

九郎「よっしゃー！救出成功だ！」

マスク「ぼ、バカな?!?救出は不可能だったはず…?!??」

マクギリス「これが… 対話の力…!」

リボンズ「… フ、フフ… フハハハハハツ!!?」

サーシエス「た、大将…?」

リボンズ「いや… 見事だったよ、エクスクロス!こうでなくては潰し甲斐がない！」

刹那「リボンズ・アルマーク!先程の光を見て、何も思わないのか…?!??」

リボンズ「… どうだっていいんだよ、そんな事。さあ、此処からは本気の勝負をし

よう！」

戻って来たデュランダルはプロレマイオスにランカを乗せた。

アルト「此処で待っていてくれ、ランカ」

ランカ「うん、待ってるよ！アルト君！」

シエリル「じゃあ、ランカちゃん！行くわよ！」

ランカ「はい！」

シエリル「私達の歌を聴けええっ！」

ランカ「みんな抱き締めて！ 銀河の果てまで！」

今度はランカとシエリルのデュエツト曲か！

青葉「凄え……なんか、力が溢れてくるみたいだぜ！」

ゼロ「これが歌の力か！」

ルルーシュ「各機は反撃開始！彼女達の歌を無駄にするな！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「（これが歌の力か……。心地いいな。この歌に負けないように俺も戦ってやる！）」

〈戦闘会話　アマリVS初戦闘〉

ホープス「非常に気分が良くなりますね、この歌は…。」

アマリ「そうね。まるで私まで歌っている気分になるわ」

ホープス「今なら負ける気はしません、全力で参りましょう！」

〈戦闘会話　刹那VS初戦闘〉

刹那「(歌による対話か…。マリナ・イスマイル…。待っていてくれ、必ず助ける…!)」

〈戦闘会話　アルトVS初戦闘〉

アルト「ランカやシエリルもみんなのために歌っているんだ!おれだって、全力で飛んでやる!」

〈戦闘会話　ミシエルVS初戦闘〉

ミシエル「本当に凄いな、ランカちゃんもシエリルも…。さてと、俺も頑張るとしますか!」

〈戦闘会話　ルカVS初戦闘〉

ルカ「ランカさんを救い出せた…。後は元の世界へ帰るだ！」

〈戦闘会話　クランVS初戦闘〉

クラン「ネネ、ララミア。この世界でも絶対に生き抜くぞ！」

ネネ「F」「はい、お姉さま！」

ララミア「私も力を貸します！」

〈戦闘会話　カナリアVS初戦闘〉

カナリア「この世界でもバジユラと関わる事になるとはな…。縁は切れないな！」

〈戦闘会話　オズマVS初戦闘〉

オズマ「行くぞ、お前等！ランカを傷つけた借りを倍にして返してやる！」

〈戦闘会話　ブレラVS初戦闘〉

ブレラ「妹を傷つけられたんだ…。流石にこの怒りは抑えられないな…！」

〈戦闘会話 ジェフリーVS初戦闘〉

モニカ「艦長、敵が来ます！」

ミーナ「F」「いつでも戦闘は出来ます！」

キャシー「射線上の味方機を退避させてください！」

ラム「了解しました！」

ジェフリー「野郎共、この世界でも波に乗るぞ！」

ボビー「オツケー！派手におつ始めようじゃないの！」

〈戦闘会話 リオンVS初戦闘〉

リオン「たくつ！人質を取るなんて、汚い奴は何処にでもいるんだな！アルトに負けず、俺もこの空を飛ぶ！」

〈戦闘会話 アイシャVS初戦闘〉

アイシャ「ミーナだって頑張ってくれたもの…私も頑張らないと女が廢るわ！」

〈戦闘会話 ミーナ「30」VS初戦闘〉

ミーナ「30」「シエリルさんもランカさんも凄い… 私ももつと頑張ります！」

〈戦闘会話 葵VS初戦闘〉

朔哉「にしてもマクロス・クォーターに拾って貰って助かったな！」

くらら「ええ、見知らぬ世界で迷うなんて真つ平ごめんだからね」

ジョニー「足を見つけたのなら、後はいつも通りにやるだけです！」

エイダー「ええ、この世界でも戦い抜きましょう！」

葵「いい意気込みね、エイダー！そうよ、私達のやるべき事は変わらないのよ！」

〈戦闘会話 ノリコVS初戦闘〉

カズミ「さあ、暴れましょう、ノリコ」

ノリコ「ええ、お姉さま！見せてあげるわ、ガンバスターの力を！」

〈戦闘会話 アマタVS初戦闘〉

ゼシカ「アル・ワースに来て、どうなるかと思ってけど… 何とかかなりそうね！」

カイエン「この世界でも戦い抜くだけだ」

ミコノ「アマタ君、頑張ろう！」

アマタ「ああ、ミコノさん！元の世界に帰るんだ… ミコノさん達と一緒に！」

〈戦闘会話 ベルリVSマスク〉

ベルリ「キャピタル・アーミーはいつたい何がしたいんですか？？」

マスク「そんな事、話して何になると言うのだ！私はただお前を倒せればそれでいい！」

ベルリ「いつまでそんなくだらない事を言うんですか！」

マスク「くだらないだと…？ベルリ・ゼナム！私の事を何もわからないくせして！」「ベルリ「いきなり襲いかかってくる人のことを知るわけもないでしょうが！」

Gーセルフの攻撃でマスクのマックナイフにダメージを与えた。

マスク「ちいっ！このままでは拉致があかん！此処はひかせてもらおう！」

マックナイフは撤退した。

ベルリ「挑んで来ては、撤退して…あの人は本当に何がしたいんだ…？」

〈戦闘会話 三日月VSマクギリス〉

三日月「チョコの人……今度は手加減しないよ」

マクギリス「こちらもだ、三日月・オーガス。容赦はしないよ」

三日月「了承を得たのなら潰してもいいよね、行くよ？」

〈戦闘会話　ガエリオVSマクギリス〉

マクギリス「対話などくだらないな」

ガエリオ「俺は……お前と話し合いたい。お前と対話したいんだよ、マクギリス」

マクギリス「ヴィダールだった頃のお前に聞かせてやりたいな、その言葉」

ガエリオ「くそっ……！ やっぱりダメなのか……！！」

〈戦闘会話　刹那VSマクギリス〉

マクギリス「先程の光は見事だと言っておこう」

刹那「……」

マクギリス「以前、君は私をガンダムではないと言ったな？ では、君にとってガンダムとは何だ？」

刹那「対話を導く存在……。対話の光だ！」

マクギリス「ならば、その光を消せば、私が本当のガンダムになると言う事だな？」

刹那「そうはさせない……！ガンダムを……対話の光を消させはしない！」

俺達はガンダムバエルにダメージを与えた。

マクギリス「……成る程、そろそろ私も本気を出さないとダメなようだな」

ガエリオ「投降してくれ、マクギリス！」

マクギリス「それで私が降るとでも思うのか？」

刹那「それなら、何故一思いにガエリオを倒そうとしない？」

マクギリス「……何が言いたい？」

刹那「マクギリス・ファリド……貴様はまさか……！」

マクギリス「勝手に私の事を分かったような言動は控えてもらおう、刹那・F・セイ

エイ。誰になんと言われようが私は復讐を諦める気はない！」

そう言い残し、ガンダムバエルは撤退した……。

ガエリオ「マクギリス……俺はお前を討たなければならぬのか……。」

ジュリエッタ「……ガエリオさん……」

刹那「……」

〈戦闘会話 刹那VSサーシエス〉

サーシエス「対話だと？随分変わったな！クルジスの兄ちゃんよ！」

刹那「俺達は変わる……。変わらなければ、世界とは向き合えないんだ」

サーシエス「くだらねえ……。なら、変わる前にボコボコにしてやるよ！」

〈戦闘会話 ニールVSサーシエス〉

ニール「最近負け越しが続いて、焦ってんじやねえのか、アリー・アル・サーシエス

！」

サーシエス「うるせえ、この死に損ないが！」

ニール「てめえも似たようなもんじやねえか！てめえだけは俺が狙い撃つ！」

〈戦闘会話 葵VSサーシエス〉

サーシエス「何だあ？まるで獣じゃねえかよ！」

朔哉「あの声……。なーんかやりにくいんだよな……。」

くらら「荒くした田中さんね」

葵「ペコペコした方も嫌だけど、あっちの方がもつと嫌ね！」

サーシエス「んなもん知るか！お前等は楽しませてくれるんだろうな！」
葵「楽しめるか、どうか試してみようじゃないの！」

〈戦闘会話　しんのすけVSサーシエス〉

サーシエス「今度こそ、引導を渡してやるよ、野原　ひろし！」

みさえ「あなた、因縁つけられてるわよ！」

ひろし「いや、何でだよ!!？」

サーシエス「てめえに負けた屈辱は忘れねえぞ！」

しんのすけ「だつてさ、父ちゃん」

ひろし「何でこうなるんだよ…」

しんのすけ「それにしても声が父ちゃんそっくりなら、足の臭いも父ちゃんにそっく

りじゃ…」

サーシエス「俺は臭くねえ！」

しんのすけ「違うって！良かったね、父ちゃん」

ひろし「嬉しくねえよ！」

デユナメスの攻撃にアルケーガンダムはダメージを受けた。

サーシエス「クソがッ！今度は絶対に殺してやるよ、クルジスのガキ！それなら野原ひろし！」

そう言い残し、アルケーガンダムは撤退した……。

ひろし「やっぱり、目の敵にされた……」

刹那「ともに殺されない様に気をつけよう、野原ひろし」

ひろし「縁起の悪い事を言わないでくれよ、刹那君……」

〈戦闘会話 刹那VSリボンズ〉

リボンズ「あの光でELS達も従わさせたのだな」

刹那「違う！俺達はわかり合ったんだ！」

リボンズ「わかり合う事など出来ないんだよ。いずれ人は必ず間違いを犯す」

刹那「そうなる前に教えなければなら無い……。世界はこんなにも簡単だと言う事を！」

リボンズ「(世界は簡単か……。その通りだよ、刹那・F・セイエイ)」

〈戦闘会話 グラハムVSリボンズ〉

リボンズ「君の力を見せてもらおうよ、ミスター・ブシドー」

グラハム「その名は捨てた。私の名はグラハム・エーカーだ！」

リボンズ「そうか、ならば相手をしてあげよう……カモオン」

グラハム「……！なんとという気迫だ……！この勝負……負けるわけにはいかん！」

リボンズ「難しい人だな……」

〈戦闘会話 アルトVSリボンズ〉

リボンズ「見事だったよ、君の翼は……。だが、その翼を折ればどうなるかな？」

アルト「そんな事、させるかよ！俺は飛び続ける！例え、どんな空だとしても！」

リボンズ「（どの様な状況でも飛び続ける自由の翼……。早乙女 アルト……。君は本当に見事だ）」

〈戦闘会話 アムロVSリボンズ〉

リボンズ「人の光……。それが消えた時に人は間違いを犯す」

アムロ「甘いな、リボンズ。だからこそ、俺達が心の光を見せ続けなければならない

んだ！」

リボンズ「甘いのは君だよ、アムロ・レイ。もとより君とわかり合う気はないのだけ

どね」

アムロ「ならば、俺が対話というものを教えてやる！」

クアンタ、デュランダル、レガンダムの攻撃でリボーンズガンダムにダメージを与えた。

リボーンズ「見させてもらったよ、君達の光を……」

刹那「リボーンズ・アルマーク！俺達だってわかり合う事が……」

リボーンズ「くだいよ、僕は人間なんかとは手を取り合わない……絶対にな」

リボーンズガンダムは撤退した……

ゴークイレッド「あいつには言葉が届かないみたいだな」

アルト「それでも、刹那は諦めてないんだろ？」

刹那「……ああ」

全ての敵を倒した俺達……

トオル「敵の反応はありません！」

ひろし「お、終わった……」

みさえ「今日は刹那君やアルト君のおかげで勝てたわね」

アルト「いや、俺なんて……」

ランカ「アルト君！」

シエリル「早く帰って来なさい！ たつぷりと話を聞かせてもらおうわ」
アルト「わかったよ」

俺達はそれぞれの戦艦に戻り、マクロス・クォーターの格納庫に集まった。

ランカ「ありがとう、アルト君！」

アルト「怪我はないか、ランカ？」

ランカ「うん！ 全然大丈夫だよ！」

シエリル「ちよつと、アルト？ 私の事は無視？」

アルト「誰も無視なんてしてないだろ！」

シエリル「いつの間にか偉そうに口を聞ける様になつたのかしら？」

アルト「なっ？！？ お前な……！」

零「両手に花とは…… 見せつけてくれるじゃねえか。アルト」

アルト「お前が言うな！」

リオン「変わらないな、アルト」

すると、リオン、アイシャ、ミーナ「30」が来た。

アルト「あのバルキリーに乗っていた三人だな。お前達には世話になつたな」

アイシャ「別にいいわよ、あなた達にも私達がお世話になったから」

シエリル「あなたにも感謝しているわ、ミーナ」30」

ミーナ「30」「歌が聴けて良かったです！」

アルト「それで、どうして俺達の事を知っていたんだ？」

リオン「それは……」

オズマ「何でも俺達の世界の未来の世界から来たみたいだ」

ルカ「F」「つまり、バジユラとの戦いの後って事です」

克蘭「未来の世界とは……俄かに信じ違ったが、信じるしかないだろう」

……この子誰？

ノレド「……この艦って、子供まで乗っているの？」

克蘭「私は克蘭だ！」

九郎「克蘭ってあの赤い機体に乗っていた奴かよ！」

一夏「モニターで見た時と姿がまるで違うぞ!!？」

ミシエル「こいつはマイクロン化するところなるんだよ」

ネネ「可愛い〜」

克蘭「可愛いと言うな！」

ジェフリー「これから我々もエクスクロスに参加する事になった。マクロス・クオー

ター代表として挨拶をさせてもらう。艦長のジェフリー・ワイルダーだ。よろしく頼む」

ミシエル「ミハエル・ブラン。ミシエルって呼んでくれ、よろしく！」

ルカ「F」「ルカ・アンジェローニです、これからお世話になります！」

クラン「ピクシー小隊長のクラン・クランだ、よろしくな！」

オズマ「スカルリーダー、オズマ・リーだ。これから俺も厳しくするから、そのつもりでな！」

ジャンヌ「リーという名前だけど、貴方はランカの何なんですか？」

オズマ「俺はランカの義理の兄だ」

ブレラ「だが、お前には感謝している。ランカを育ててくれて」

オズマ「礼を言われる事はしていない。お前にとつても俺にとつてもランカは大切な妹だ」

ブレラ「ふつ、そうだな」

ランカ「お兄ちゃん……」

カナリア「カナリア・ベルシュタインだ、よろしく」

リオン「リオン・榎だ、よろしくな！」

アイシャ「天才美少女のアイシャ・ブランシエットよ」

ミーナ「30」「ミーナ・フォルテです！よろしくお願います！」

アマリ「よろしくお願います、SMSの皆さん！」

ミシエル「アマリだったね？どうか、俺とこの世界の夜空でも見ないか？」

アルト「バツ：：！ミシエル！」

ミシエル「ん？何だよ、アルト？」

零「：：アマリと夜空を見るか：：」

ミシエル「いつ：：!?？」

零「それは俺の許可取ってからにしてもらおうか？メガネを割られなくなればな」

ミシエル「い、いやいや！そんなつもりじゃありませんよ！」

一夏「（：：アマリさん関連で零を怒らせるのはやめておこう：：）」

朔哉「何だ？随分賑やかじゃねえか」

ジョニー「話には聞いていましたが、本当に寄せ集めの部隊なのですな」

葵「何と言っても地獄の二人がいるのだからね」

真上「チームDか：：。お前達はムーンWILLとの戦闘後、元の生活に戻ったと聞い

たが：：」

くから「田中さんに呼び出されて、集まった所で転移にあったのよ」

エイーダ「私達は本当に偶然だったんですよ！」

海道「じゃあ、タカヤ達もか？」

ノリコ「はい、宇宙怪獣との戦いの最中に跳ばされてきたんです」

隼人「インベーターだけでなく、宇宙怪獣までアル・ワースに転移していたとは…」

弁慶「今回はあの時以上に激しい戦いになるだろうな」

葵「そうなるね。まあ、私達チームDもエクスクロスに入る事になったから。私は飛

鷹 葵、ダンクローガノヴァのメインパイロットよ。こっちから、館華 くらら、加門

朔哉、ジョニー・バーネット、エーダ・ロツサよ」

ノリコ「タカヤノリコです！ガンバスターのパイロットをやっています！」

カズミ「同じく、ガンバスターのパイロットでノリコのパートナー、アマノカズミで

す。よろしくお願いします」

しんのすけ「あのガンバスター格好良かったゾ！」

ワタル「うん！デカくて強くて、ハツキシ言つてメチャクチャカッコいいぜ！」

九郎「アトランティス・ストライク並みの蹴りだったよな！」

ルカ「ゴーカイ」「でもあの技名… シモンとヴィラルも叫んでいなかった？」

シモン「何か、物凄くその名前がピンときたんだよな」

ヴィラル「思わず俺も叫んでしまっていたが、実の所… どちらが元祖なんだろうな

？」

ノリコ「いいじゃないですか、どっちが元祖でも！」

カズミ「そうね、これから一緒に戦う仲間で競い合っても仕方のないものね」

朔哉「つてなわけですよしくな！」

零「・・・で、今度はあのアクエリオンEVOLって機体の事だ」

竜馬「三機のマシンがそれぞれ、分離して姿が変わるなんて、ゲッターとそっくりじゃねえか」

ルルーシュ「その事は追々話すとして、まずはパイロット達に自己紹介をしてもらおうか」

アマタ「アマタ・ソラです！アクエリオンEVOLのメインパイロットをやっています！エレメント能力は重力干渉です」

ミコノ「ミコノ・スズシロです。エレメント能力は繋ぐ力です」

ゼシカ「ゼシカ・ウオン。エレメント能力は衝撃力と捻じれの力よ」

カイエン「ミコノの兄のカイエン・スズシロだ。エレメント能力は絶望予知だ」

アンデイ「アンデイ・W・ホールだ！エレメント能力は穴掘り力で特技も穴掘りだ！カワイ子ちゃんは特によろしくな！」

MIIX「MIIXです！エレメント能力は空間補填・・・穴を埋めたりできます！」

モロイ「モロイ・ドレッツアだ。エレメント能力は名前の通り、脆弱力・・・物質を脆

くさせる事ができる」

サザンカ「サザンカ・ピアンカでうす！エレメント能力は腐食力。ありとあらゆるものを錆びつかせ朽ち果てさせる事が出来ます！（此処にも興味深い組み合わせが多くあるわね・・・！特にあの青葉って人とデイオって人・・・いいかも・・・！）」

ユイ「あれ？もう一人いませんでした？」

ユノハ「あ、あの・・・」

ユイ「へっ・・・？きやあつ！！？」

ユイの背後から女の子が現れた。

それに驚き、ユイは尻餅をつく。

サラ「ユイちゃん！」

レナ「ゆ、ユイ！！？大丈夫！！？」

ユイ「う、うん・・・」

ティア「ユイちゃん驚き過ぎだよ！」

ユイ「だ、だっぺ・・・」

ユノハ「お・・・驚かせてすみません・・・。私はユノハ・スルールです。見ての通り、エ

レメント能力は光学透過で・・・その、透明になれます」

これで全員か・・・。

ノブナガ「そのエレメント能力というのは何だ？」

カイエン「簡単に説明すると超能力みたいなものだ」

ゼシカ「私達はエレメント候補生として、エレメントスクールに通っているのよ」

シモン「穴掘りか……いい勝負ができそうだな、アンディ！」

アンディ「今度、穴掘り対決をやりましょうよ、シモンさん！」

MI X「まさか、此処にも穴を掘る人がいたなんて……」

サザンカ「ねえねえ、青葉！ デイオ！ 二人の関係を深く聞かせてくれない？」

青葉「関係って……バディだけど」

デイオ「嫌な予感がする……」

モロイ「女子校だと……？ 羨ましいぞ、一夏！」

一夏「羨ましいって……結構疲れるぞ？ 動物園のパンダになった気分だからな」

ユノハ「さ、さつきは驚かせてすみませんでした、ユイさん……」

ユイ「ううん、こっちこそ大きな声を上げてごめんね、ユノハちゃん！」

カイエン「この部隊にも兄妹は多いみたいだな」

シン「お互いに弟や妹を持つと大変だからな」

ゼシカ「……零とホープスって……」

零「ん？ 何だよ、ゼシカ」

ホープス「私達の顔に何かついていますか？」

ゼシカ「…これは楽しめそうね！」

いや、何がだよ!!？」

ミコノ「賑やかになったね、アマタ君」

アマタ「うん。多くの仲間との出会い…カグラや理事長は何処かに跳ばされているのかな？」

ミコノ「わからない…でも、きっと無事だと思うよ」

アマタ「そうだよね」

ランカ「…」

アルト「どうした、ランカ？」

ランカ「…ありがとう、アルト君！」

アルト「…ああ！」

シエリル「それよりもアルト…。バジユラクイーンとフォルドしようとした時に私に何て言ったの？聞き取れなかったの」

ランカ「！」

アルト「あ、いや…。良い歌だった…。つてな」

シエリル「本当にいい？」

アルト「だっ…！もう良いだろ！その話は！」

ベルリ「何何？アルトがシエリルさんに何か言ったの？」

シエリル「アルトはフォールドする前に私に…。」

アルト「だーもう、やめろ!!？」

すると、山田先生が走ってきた。

摩耶「ヒビキ大尉はいますか!!？」

すぐく息を切らしてゐるな…。

一夏「落ち着いてください、山田先生！そうだ！あれです、ヒツヒツフーです！」

サイ「いや、それは赤ん坊を産む時の呼吸方法だろ!!？」

摩耶「ヒツヒツフー、ヒツヒツフー」

カレン「やるんだ…。」

千冬「教師で遊ぶな、馬鹿者」

スカレット「それで、どうしたんだ？山田先生」

摩耶「実はウイングルのハッチがようやく開いたんですが…。」

デントン「ですが…？」

摩耶「二人乗り用になっているんです。まるで海道さん達のカイザーのように」

海道「は？ウイングルがか？」

真上「何故突然…」

摩耶「それと、後部座席の方に… 一人の女性が気を失って座っているんです！」
くから「女性がですって…？」

摩耶「まだ目を覚ましてはいませんが、持ち物を確認した所… 彼女の名前は由木翼という名前でした」

スカーレット「何?!? 由木だと…?!?」

ウイングルに「一体何が起こったんだよ…?!?」

第41話 闇と光

「ロシウだ。

僕達はカミナシテイの地下にいた。

ロシウ「……」

キノン「ニアさんが、さらわれた件……難しい問題のようですね」

ロシウ「ああ……。シモンさんから、ニアさんが狙われた事について心当たりがないかと問われたが、僕には見当もつかない」

リーロン「それにしても、さすがはシモンね……。こちらもわからない……。って答えたら、さつさと通信を切っちゃうなんて」

ロシウ「あの人の事ですからね。理由など、後から分かればいい事で、まずはニアさんが第一なのでしょう。この国や世界の変化に合わせて総司令官であるあの人も変わって欲しいと思う時もありましたが……。やはり、あの人はあの人ですね。そして、それは素晴らしい事なのかも知れません」

キノン「口では厳しい事を言いながら、結局、あの方の事が好きなんですネ」

リーロン「言葉じゃシモンは動かない……。そう考えて、世界をその目で見させるために旅に送り出したけど……。まさか、シモンを追ったニアがさらわれる事になるなんてね……」

ロシウ「対ドアクダー戦略もあります。こちらでも可能な限り、シモンさん達をバツクアツプしましょう……。君は今回の件、どう考える？」

ロージェノム「……」

ロシウ「螺旋王ロージェノムの細胞から培養された整体コンピューター……。人類を地下に閉じ込めていた螺旋王の行いの責任を問うつもりはない。だが、君は、我々に協力してもらおう」

ロージェノム「それについて異論はない……」

ロシウ「では、先程の問いについて君の見解を聞かせてくれ」

ロージェノム「……ドアクダーについては我も知る事は少ない……。奴の存在は、この『始まりのアル・ワース』誕生に関係していると聞く……」

ロシウ「神……。だと言うのか、ドアクダーも？」

ロージェノム「世界の理を司る者を『神』と呼ぶのなら、そうであるといえよう。同時に奴は、その力の片側の頂点にあると言ってもいいだろう」

ロシウ「片側の神……。？」

ロージエノム「即ち… 闇だ」

ロシウ「闇の神… という事か…」

ロージエノム「それがニアをさらった理由であるかは、神ならぬ身としてはわからん…。だが、確実に言える事がある」

ロシウ「それは…？」

ロージエノム「世界の理は破られようとしている」

リーロン「理… つまり、世界の在り方そのもの…」

キノン「それが破れる…」

ロシウ「答えろ！それは何の意味を持つ!?？」

ロージエノム「我の言葉を聞くより、その目で確かめるがいい。それが螺旋王の慈悲を拒絶したお前達の責務だ」

ロシウ「…」

キノン「ロシウ…」

ロシウ「… もしもの時の準備… 急ぐ必要があるだろう…。キタンさん達にも招集をかけてくれ」

シモンさん…。あなたの無事を祈ります…。

「スカレット・ヒビキだ。」

私と海道、真上は医務室で目が覚めたと言う由木の下へと向かった。

スカレット「どうやら、身体の心配はないようだな、由木」

由木「…スカレット大尉…それに海道特務中尉と真上特務中尉まで…」

海道「よっ、くたばらなくてよかったな！」

真上「ヒビキ大尉を見ても驚かないのだな？」

由木「正直、色々な事がありすぎて混乱しているわ…」

スカレット「由木、何があったのか、話してくれないか？」

由木「…奇械島の事件の後…私は八稜郭の皆さんと別れを告げ、戻ろうとした

後…意識が膨張として…気がつけば、此処にいました」

真上「落ち着いて聞け、お前は異世界に転移してきたんだ」

由木「異世界!?」

海道「やっぱ、その反応になるよな」

真上「だが、事実だ。この世界の名はアル・ワース…。俺達はエクスクロスとして

戦っている」

由木「アル・ワース：。エクスクロスというのは？」

スカーレット「お前や私達の様に異世界人：。異世界人とこの世界の住人で組まれた寄せ集め部隊だ。部隊の大半が異世界人だな」

由木「では、私も異世界人という事ですか：。」

スカーレット「それと、実はウイングルの様子がおかしくてな：。」

由木「ウイングルがどうかしたんですか？」

スカーレット「ウイングルがカイザーの様に二人乗りになったんだ」

由木「二人乗りには？！」

真上「この前までは何ともなかったのだが：。」

海道「そんでハッチを開くと二人乗りになっていて後部座席にはお前が乗っていたってわけだ」

由木「そうだったんですか：。」

スカーレット「由木中尉、誠に勝手な判断だが、お前もエクスクロスに参加させる事になった。これからは私と共にウイングルに乗って戦ってもらおう」

由木「わかりました。大尉と共に戦えるなど光栄です！」

海道「丁度、ヴァステイのオッサンもウイングルの翼の修理が終わったって言った

からな」

真上「これならば、ウイングクロスも可能になるな」

とりあえず、由木と共にウイングルの様子でも見に行くとするか……。

―新垣 零だ。

俺達はN―ノーチラス号の格納庫にいた。

マーベル「……」

シヨウ「どうした、マーベル？」

マーベル「サリーさんとニアさん……それとアトラさんとマリナ姫、シーラ様とリリーナさんの事について考えていたの。立場も世界も違う六人だけど、私は彼女達に共通するものを感じるわ」

シヨウ「それは？」

リオン「これからの事もあるし、聞かせて欲しいな」

マーベル「男性の方がわかるんじゃないかしら？」

万丈「……確かにな」

一夏「どう言う事ですか？」

万丈「その六人に共通するのは、優しさや温もり、穏やかさや安らぎ……戦いとは正
反対の所にあるものだ」

カトル「その感覚……理解できません」

五飛「幻想に近い象徴的な女性像……といってもいいものだな」

ジャン「よくわからないけど……要するに女らしい人がさらわれたって事だよね……」

(ちよつとナディアとは違う系統だけど……)」

ナディア「それって……何かの意味があるの？」

デュオ「悪の大魔王が清らかな乙女をさらったとなれば、生け贄にでもするのもか
な……」

チャム「生け贄!?」

エイサップ「それこそ何のためにだよ？」

デュオ「適当に言っただけの俺に聞くなよ……!」

アキト「デュオが言ったら、死神の予言にしか聞こえないよ」

デュオ「悪かったって!」

ヒイロ「……」

ゼクス「待て、ヒイロ。どこへ行くつもりだ？」

ヒイロ「答えのない議論をしても無意味だ。機体の整備をする」

そう言うヒイロは歩き去ってしまった……。

ゼクス「ヒイロ……」

ナディア「さらわれたリリーナさんって人……あの人の大切な人だって聞いたのに……。心配じゃないの……？」

三日月「そうじゃないよ、ナディア。ヒイロは自分なりのやり方で最善を尽くそうと考えているんだと思う」

オルガ「それと同時に身体を動かす事で自分の中の不安を打ち消そうとしているんだと思うぜ」

ナディア「そういうものなの……？」

ジャン「何となくだけど、僕はわかるな……」

マーベル「こういう感覚は男性的なものかも知れないわね」

トロワ「シヨウ・ザマ……。ヒイロという人間が理解できたようだな」

デュオ「そうだな。ちよつと前だったら、態度が悪い……って文句を言ってたのによ」

シヨウ「俺も……。あいつや刹那に三日月、舞人、シモンさんと同じ気持ちだからな」

マーベル「シヨウ……」

シヨウ「もし、俺やマーベルがアル・ワースに来たのがシーラ様の導きならば……。俺はあの人を救い出し、その機体に応え、オーラマシンをめぐる戦いに真の終止符を打つ

つもりだ。それが俺の聖戦士としての使命だと考えている」

ゼクス「君の決意は受け取った。さらわれた女性達を救い出すためにもドアクダー打倒に全力を尽くそう」

アンジュ「…サラ子…」

サラマンディーネ「何です？」

アンジュ「ドアクダーと言えば、あなた達の恩人の進部七龍神の敵なわけだけど、何か知っている事はないの？」

サラマンディーネ「…アウラによつて伝えられた神部七龍神の伝説の中では、彼等の真の敵についても語られています」

シバラク「神部七龍神の真の敵…!?」

零「サラ姫、それって何なんだ？」

サラマンディーネ「それは…闇だと言われています」

セシリア「ヤミー…ですの？」

C・C「ヤミーではなく闇だ」

幻龍斎「ワシの調べた神部七龍神の伝承でも、その敵は、闇や暗黒といった形で語られているウラ」

サラマンディーネ「もし、さらわれた女性が生け贄として何かに捧げられるとした

ら……」

ゼロ「相手は、その闇だって言うのか……」

零「闇……以前話していたダークザギって巨人の事か？」

ゼロ「いや、ダークザギが倒されたのは俺達とは違う宇宙の話だ。だから、ダークザギではないと思うが……」

アマリ「闇……ですか……」

刹那「教団の方では、その辺りについて何か知識はないのか？」

アマリ「智の神エンデがアル・ワースを創ったという創世伝説では、光の龍と闇の龍が登場する一節があります」

ノブナガ「(二体の龍……まるでかつての俺とアレクサンダーだな……)」

ワタル「それって神部七龍神やドアクダーの闇と何か関係があるの？」

アマリ「私も今日までは光と闇というのは対立する概念のない例だと思っていましたけれど……神部七龍神と、その敵である可能性が高いみたいですね」

零「その伝説の中では、闇の龍はどうなったんだ？」

メル「神部七龍神の力を得た救世主によって倒された事になっています」

アスナ「へえ……そうなんだ」

え、何でアスナが納得した顔でいるんだよ？

メル「どうして納得しているんですか？」

アスナ「いやー…。私は歴史が苦手で…。」

メル「…。あれ程、勉強してくださいと言ったのに、サボっていたんですね！」

アスナ「だ、だって…。！歴史なんて覚えられないわよ！」

零「お前の場合、覚える気自体がなかったんじゃないのか？」

アスナ「あなたは余計な事言わないで！」

メル「…。今日からしばらく、歴史について勉強しましょうか」

アスナ「ちよ、ちよつと待ってメル！目が怖い！ちよつと、零！助けてよ！」

零「闇の敵か…」

アスナ「無視しないでよおつ!!？」

幻龍斎「闇の龍…。神部七龍神の真の敵…」

アセム「ドアクダーは生け贄を使って、それを蘇らせようとしているのかも知れないな…」

つ…。？警報が鳴った…。!!？」

ゼハート「この警報…。敵を発見したようだな」

フラム「さらわれた人達の手がかりを掴むためにも頑張らしましょう！」

鉄也「…」

甲児「何してるんだ、鉄也さん!? 早く出撃の準備をしないと!」

鉄也「さっきの光と闇の戦いの伝説だが…。その闇とは、オリュンポスの神々の事を示している可能性とある」

甲児「じゃあ…。!」

鉄也「ドアクダーとオリュンポス…。アル・ワースの闇である両者には何か関係があるのかも知れない…」

リナ「ジョーイ…」

ジョーイ「どうしたの、リナ?」

リナ「気をつけて…。何か嫌な予感がするの…」

ジョーイ「…大丈夫だよ、リナ! 気をつけるから」

リナ「う、うん…」

ジョーイ「(正直僕も嫌な予感がしているよ…。まさか、もう…)」
俺達は出撃準備を始めた…。

第41話 闇と光

準備ができたので俺達は出撃した。

虎王「来た来た、エクスクロスだ！さあ……！今回も俺を楽しませてくれよ！」
アル「ドアクターの魔神部隊とスクラッグ兵共か……」

青葉「大した数はいねえな……」

ディオ「それに界層ボスもないようだな」

オズマ「だからと言って、放っておくわけにもいかんだろう！」

スカーレット「由木……この世界での初戦闘だが、やれるな？」

由木「問題ありません！それにウイングルの翼も治ったみたいですし」

スカーレット「ならば、私達の力をあの二人にも見せてやるとしよう！」

由木「了解！」

海道「やる気満々じゃねえか、あの二人！」

真上「フツ、こちらも負けるわけにはいかんな、海道」

海道「ああ、やってやろうぜ！」

朔哉「台詞取られた!?」

ルルーシュ「……」

スザク「ルルーシュ……？」

ルルーシュ「各機、気をつけろ。あまりにも状況が不自然だ」

アムロ「こうなった以上、可能な限り早く敵を叩くぞ」

甲児「了解！行くぜ、ドアクダー軍団！」

鉄也「（この重苦しい空気……。きつと何かが起こる……）」

ジョーイ「（僕の考えが確かなら……。ウイル、君も此処にいるんだよね……。？）」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「（マリナ・イスマイル……。あなたは何度でも俺が助け出す……。必ず……。！）」

〈戦闘会話 三日月VS初戦闘〉

三日月「待っていてくれ、アトラ……。！絶対にお前を迎えに行く……。！」

〈戦闘会話 由木VS初戦闘〉

スカレット「私達のウイングルも海道達のカイザーと同じく、操縦席を切り替える事が出来るようになったようだな」

由木「そうみたいです……。では、状況に応じて交代していきましょう！」

数分で俺達は敵を全滅させた。

虎王「何だよ！もう終わりかよ！」

ドン・ゴロ「虎王様……」

虎王「ドン・ゴロ……！来ていたのか！」

ドン・ゴロ「今すぐ、この場を離れますぞ」

虎王「イヤだね。今日こそは救世主の顔を見てやると俺様は決めてるんだ」

ドン・ゴロ「なりませぬ……！ここはもうすぐ彼等の戦場になります！」

虎王「何っ!?」

ドン・ゴロ「ここに配置した戦力はエクスクロスをおびき出すためのもの……。後は彼

等に任せましょう」

虎王「父上の盟友……暗黒の神々と……。スクラッグのボス……。あいつ等が本気を出

すんじや、エクスクロスも終わりだな……」

シモン「結局、何の手がかりも得られなかったか……」

舞人「いずみさんの報告にあつた汚染された大地はもう少し先になります。そこへ急

ぎましょう」

鉄也「気をつけろ……！くるぞ！」

アンディ「く、来るって……何が!?？」

甲児「奴等だ！」

現れたのはガラダブラとケドラ、ミケーネ神達、そしてスクラッグ兵達だった。ジョーイ「またスクラッグが来た……!?？」

鉄也「来たな、オリュンポス！」

ミケーネ神「エクスクロス！これ以上、お前達を進ませるわけにはいかない！」

ミケーネ神2「世界の存続のためにもドアクダーの邪魔はさせん！」

甲児「世界の存続だと……!?？」

アマリ「その言葉……導師キールデインも言っていました……」

ワタル「お前達！ドアクダーの仲間なのか!?？」

ミケーネ神3「我等はオリュンポスの神々……。ドアクダーとは、その祖を別とする」ガラダブラ「だが、古の契約に基づき、我等はドアクダーに力を貸す！」

鉄也「やはり、そうか……！」

サラマンディーネ「闇に生きる者達の間にも契約があったとは……！」

アンジュ「要するに悪党同士は昔からお仲間だったって事ね……！」

零「オリュンポス！その契約とは、一体何だ!?？」

ガラダブラ「人間ごときが知る必要のない事だ」

朗利「何っ!?」

金本「完全にとつちを見下してるよ…!」

アスナ「答える気がないのなら、力づくで聞き出すだけよ!」

ミケーネ神「出来るかな、人間ごときに?」

ノブナガ「その問いは、結果で示す!」

甲児「行くぜ、オリュンポス! 人類の敵はマジンガーが相手をする!」

鉄也「そして、話してもらおうぞ! お前達とドアクダーの間の契約とやらを!」

ジョーイ「スクラッグと手を組んでいる事も!」

ガラダブラ「無駄な事を…」

俺達は戦闘を再開した…。

戦闘から数分後の事だった…。

ガラダブラ「!」

…な、何だ…!?

甲児「戦闘中に余所見をしてるんじゃないやねえよ!」

ガラダブラ「お前にはわからないのか? 圧倒的な力が迫るのが」

零「や、奴の言う通りだ……！みんな、何か来るぞ！」

鉄也「何っ!?？」

アマリ「(れ、零君が震えている……!??)」

ガラダブラ「あの方が今、この戦場に降り立つのだ」

来た……あれは……！暗黒大將軍……！

ガラダブラ「お待ちしておりました、暗黒大將軍」

甲児「オリユンポスの大幹部……！」

鉄也「暗黒大將軍が来たか……！」

暗黒大將軍「劍 鉄也……そして、兜 甲児よ。こうして戦場で再び出会えた事を嬉

しく思うぞ。だが……お前達はここで絶望の意味を知る事になる」

鉄也「何っ!?？」

な、何だ……!??この辺りに出る力は……！

すると、一人のスクラッグが現れた。

ウイル「くそッ……！遅かったか……！」

リナ「お兄ちゃん!?？」

ジョーイ「ウイル！やっぱりいたんだ！」

ウイル「再会に浸るのは後だ！」

マサオ「な、何なの、これ!!?」

トオル「空間が…世界が歪んでる…!」

リユクス「この感じ…オーラロードに似ている…!!?」

バナージ「アル・ワースに召喚された時と同じ感覚だ!」

アマリ「何が起きているの、ホープス!!?」

ホープス「理が…破壊されます…!」

零「まずい…このままじゃあ…!」

辺りは光に包まれ、光が消えると辺りの光が消えていた…。

甲児「何なんだ、これは!!?」

トビア「地形はさつきと変わってないけど…!」

レイル「何が起きてんだよ!!?」

ゼロ「光が閉ざされてやがる…!」

さやか「甲児君!これって…!」

甲児「ああ…!あしゆら男爵の儀式で俺達がアル・ワースに跳ばされた時と同じだ

!」

暗黒大將軍「この理が破壊された空間に我が主と奴が蘇る…!」

紫色の裂け目が現れ、そこから巨大なスクラッグが出現し、裂け目が消えた。

ゴゴール「：：」

デントン「あ、あれは：：！」

サイ「そんな：：嘘だろ：：!?？」

リナ「あ、あああ：：！」

ウイル「くっ：：！間に合わなかったのか：：！」

ヒーローマン「：：！」

ジョーイ「ゴゴール：：！」

あれが：：スクラッグのボス：：ゴゴール：：！

ゴゴール「久しぶりだな、地球人共よ」

ゴークイレッド「ちっ：：！またこいつ顔を見る事になるなんてな：：！」

九郎「本当にしつこい奴だな！」

ゴゴール「これより：：我が復讐を開始する」

暗黒大將軍「蘇ったか、ゴゴールよ」

ゴゴール「暗黒大將軍、感謝する」

エンネア「ゴゴールが蘇るなんて：：！」

メル「待つてください、まだ何か来ます！」

今度はゴゴールの隣に炎が現れた。

ボス「炎!?？」

クロス「違うぜ……！」

安「あれは……！」

お菊「悪意の塊だよ」

闇の帝王「我が名は…… 闇の帝王……。元の名は…… 冥府の王ハーデス！」

甲児「何っ!?？」

鉄也「あの悪意の炎……！過去の世界でゼウス神とマジンガーZに破れたハーデス神か！」

闇の帝王「その通りだ。アル・ワースの理が破壊されつつある事で我はこうして復活した」

ゼロ「さつきから何なんだ!?？その理ってのは！」

ホープス「世界を構成する法則……。それが破壊されつつあるという事は世界が世界として存在するための力が歪み始めたという事です」

闇の帝王「故に我は力を取り戻した……。ゼウス神亡き今、我を倒した兜 甲児の魂を手に入れれば、我が肉体も復活する」

甲児「狙いは俺って事かよ！」

鉄也「そうはいくか、闇の帝王！甲児の生命を狙うのならば、返り討ちにしてやるぜ

！」

闇の帝王「フ……フフフ……フハハハハハ！」

甲児「何かおかしい!?？」

闇の帝王「マジンガーよ……。その小さな身体に可能性を宿した者よ……。貴様に敗れた我はその力の源を全ての世界に求めた……。そこに手に入れたものが、これだ」

闇の帝王の隣に現れたのは……マジンガー……!?？」

海道「な、何っ……!?？」

鉄也「あれは……！」

甲児「マジンガー……なのか……」

ワタル「マ、マジンガーなんかじゃない……！あれは……化け物だよ！」

闇の帝王「違うな、救世主よ。あれも真正銘のマジンガーよ。すべての光を呑み込む闇のマジンガー……！その名はマジンガーZERO！」

甲児「マジンガーZERO……！」

グランデイス「くるよ！」

サンソン「あ、あんな化け物と戦うのかよ！」

鉄也「心配するな！奴の狙いは俺と甲児らしい！」

闇の帝王「その通りだ、剣 鉄也よ。ZEROは自分以外のマジンガーの存在を許さ

ないらしい。それと、マジンカイザーに乗る二人もな」

真上「奴は俺達のカイザーをも標的としているのか……！」

一夏「自分以外って……マジンガーって他にもいるのか……？」

闇の帝王「フフフフ……。此奴相手に、どこまでやれるか楽しみにさせてもらう。そうだな……。三分もてば、褒めてやろう」

暗黒大將軍「ゴゴールも良いな？」

ゴゴール「ああ……」

闇の帝王と暗黒大將軍、ゴゴールは撤退した……！！？

アルト「偉そうな事言っというて自分は逃げるのかよ！」

零「……正直に言えば、ありがたいな……」

メル「零さん……？」

アスナ「何言っているのよ、零……？」

鉄也「ああ、そうだな……」

シン「鉄也さんまで……！」

キラ「あの二人が……怯えている……？」

アスナ「どうしたっていうのよ、零……？」

零「わからねえ……でも、震えが止まらねえ……！」

甲兎「気をつけろよ、みんな……。あのマジンガー……。それだけの敵だ」
ヒイロ「了解した」

九郎「マジンガーの事はマジンガーで始末をつけるなんて言うなよ」

ノリコ「私達の全力を奴にぶつけるしかないわよ……。！」

葵「手を抜いてる暇はなさそうね……。！」

甲兎「情けない話だが、とてもじゃないが俺達二人だけで勝てる相手じゃない……。！」

鉄也「だが……。！」

海道「真上！」

真上「ああ！」

マジンガーZとグレートマジンガー、カイザーはマジンガーZEROの元まで移動した。

甲兎「奴の狙いが俺達なら、相手をしてやる！」

海道「ZEROだか何だか知らねえがぶっ飛ばしてやる！」

鉄也「フオローは頼むぞ！」

アマタ「わかりました！四人共、気をつけてください！」

零「……。！」

アマリ「大丈夫なの、零君?!？」

零「やるしか……ないんだ……！」

くそツ……何で俺はこんなにも震えているんだよ……！」

ジョーイ「ウイル、君も力を貸して！」

ウイル「……俺だけ逃げる事は出来ない……仕方ない……！」

甲児「行くぜ、マジンガーZERO！お前の存在は許されなんだ！」

鉄也「俺達の生命に代えてもお前を止める!!？」

真上「お前にも見せてやる！」

海道「俺達の地獄をな!!？」

俺達はマジンガーZEROとの戦闘を開始した……。

俺達はガラダブラにダメージを与えた。

ガラダブラ「人間め……！よくも……よくも！この屈辱……！必ず貴様達の生命で償わせてやるぞ！」

ウイラル「勇者を名乗る者にしては捨て台詞が安いな……！」

舞人「来るなら来い、ガラダブラ。お前が勇者なら、俺達は勇者特急隊だ。その誇りに懸けて、何度でも相手をしてやる！」

〈戦闘会話 零VSマジンガーZERO〉

零「(どうしてだ…？どうして俺は此処まで震えているんだよ…？奴を見ると震えが止まらなくなる…でも、やるしかないんだ…！)」

〈戦闘会話 海道VSマジンガーZERO〉

真上「…どうやら今までの敵と大違いではあるようだな」

海道「いいじゃねえか！強い敵の方が燃えるっもんだぜ！見せてやるぜ、俺達のカイザーの力をな！」

マジンガーZ、グレートマジンガー、カイザーの三機で攻撃してもマジンガーZER
Oはビクともしなかった。

甲児「くそっ！俺達の全力をぶつけてもこの程度なのかよ！」

鉄也「このままでは、いずれは…」

すると、マジンガーZEROのダメージが回復した。

真上「何だと…!?」

アーニヤ「嘘…」

ジェレミア「これまでのダメージが回復していく…！」

マサキ「何が真正銘のマジンガーだ…！あれじゃ、魔神じゃねえか！」

ケロロ「ど、どうするでありますか!?？」

鉄也「甲児…！」

甲児「わかってる、鉄也さん！」

マジンガーZとグレートマジンガーが移動したのを見て、マジンガーZEROは追いかけた。

鉄也「想定通り、追ってきたか…！」

甲児「闇の帝王の言った通り、俺達の存在が目障りなようだな！」

海道「兜、剣！お前ら何する気だ!?？」

鉄也「俺達で奴を止める…！」

甲児「マジンガーを自爆させてでもな！」

さやか「そんな…！」

アーニー「早まっつてはダメだ、二人共！」

鉄也「残念だが、それ以外に方法はないようだ」

甲児「マジンガーは神にも悪魔にもなれる存在だ…。だからこそ、悪魔のマジンガーを許すわけにはいかない！」

鉄也「それが俺達の……マジンガー乗りの使命だ！」

マジンガーZとグレートマジンガーがマジンガーZEROを捕らえた……!!?

甲児「捕まえたぜ、ZERO！」

鉄也「俺達と一緒に死んでもらう！」

甲児「！」

鉄也「！」

え……あ、え……!!?

マジンガーZとグレートマジンガーが……消えた……!!?

さやか「甲児君！鉄也さん！」

スカレット「マジンガーZとグレートマジンガーが消えただと!!？」

すると、暗黒大將軍とゴゴール、そして奴らの手下が現れた。

真上「暗黒大將軍か！」

ウイル「ゴゴールもいるのか！」

暗黒大將軍「剣 鉄也と兜 甲児……因果の果てへと堕ちたか」

しんのすけ「因果の果てって……!!？」

暗黒大將軍「お前達が理解できる言葉で言うなら、完全なる消滅だ」

カンナム「消滅……だと……!!？」

さやか「嘘……！嘘よ、そんなの！」

マジンガーZEROは今度な海道さん達のカイザーを狙っている……！

海道「今度は俺達の番ってわけか……！」

真上「小言を言っている場合か、来るぞ！」

カイザーはマジンガーZEROの攻撃を防ごうとしたが、防ぎ切れずダメージを受ける。

海道「ぐあつ……！」

真上「くっ……！」

由木「海道特務中尉、真上特務中尉！」

アンジュ「あの二人でも勝てないなんて……！」

そして、カイザーの首元を掴んだマジンガーZEROは空高く飛び、カイザーは地面に叩きつけた。

海道&真上「ぐあああああつ!!？」

簪「こ、このままじゃあ、海道さん達が！」

海道「まだ、だ……！」

海道さん……！

真上「俺達はまだ……終わってはいない……！」

真上さん……！

海道「兜や剣が生命かけて戦ったってのに……俺達だけ寝てられるかよおおおつ!!?」

真上「……こうなれば、由木中尉、ウイングクロスをやるぞ！」

由木「で、でも……ウイングクロスをしたとしても勝てるかどうか……！」

海道「勝てるかどうかじゃねえ……勝てなきゃ死ぬだけだ！」

真上「由木中尉……忘れたとは言わせんぞ……俺達は地獄だ……！故に奴にも地獄を見てもらうんだ！」

由木「……」

スカーレット「何を迷っている、由木！海動と真上の志を無駄にする気か！ウイングルを、お前に任せたのは何のためだ!?!」

由木「……わかりました。ティアラエルおよびアーシユガード、分離！」

ウイングルの翼が分離して、カイザーに向かっていった。

真上「ウイングクロスだ！」

海動「おうっ！」

カイザーの背中にウイングルの翼が付き、カイザーは空を飛べるようになった。

真上「決めるぞ、海道！」

海道「食らいやがれ、マジンガーZERO！」

カイザーはマジンガーZEROに攻撃を仕掛けた…。

海道「よし…行くぜえええつ!!？」

マジンガーZEROに接近したカイザーは何度も殴り、蹴り飛ばした。

真上「仲良く空の旅と洒落込もう！」

吹き飛んだマジンガーZEROの顔を掴み、地面に引きずりながら、飛ぶ。

そして、マジンガーZEROを持ち上げながら飛び、地面に叩きつけた。

海道「真上、一気に決めちまえ！」

真上「ふっ…インフェルノオ…プラスタアアツ!!？」

マジンガーZERO「!!？」

インフェルノプラスターという技を受け、マジンガーZEROはダメージを受けた。

海道「マジンガーが恐れ！」

真上「闇のマジンガーすら慄く…！」

海道&真上「俺達が地獄だ!!？」

カイザーの攻撃を受け、マジンガーZEROは大きく吹き飛んだ。

暗黒大將軍「な、何だと!!？」

闇の帝王「マジンガーZEROを圧倒する力…流石は禁断のマジンカイザーだ…」

マジンガーZERO「…」

そのままマジンガーZEROは撤退した…。

リデイ「凄い…あのマジンガーZEROを退けるだなんて…！」

すると、アイアンカイザーが現れた。

キバ「やつぱり、てめえらは凄まじいな、ドクロオ!!？」

由木「アイアンカイザー…！」

スカーレット「キバか！」

キバ「そうだ…その姿のてめえらを倒さないと意味がねえんだよ！」

海道「誰が誰を倒すって？」

真上「倒されるのはお前だ、キバ！」

キバ「へっ、吐かせ！」

カレン「あっちはやる気満々だけど…」

舞人「甲児さん…鉄也さん…」

ベルリ「信じられない、あの人達が…」

チャム「やだ…！こんなのやだよ！」

…甲児と鉄也さんの事が割り切れない…か。

俺もそうだ…！

シモン「余計な事は考えるな！まだ戦いは終わってねえんだ！」

暗黒大將軍「螺旋の男の言う通りだ。俺達はお前達に引導を渡すために来た」

ゴゴール「二機のマジンガーを欠いたお前達に勝ち目はない。降伏するのなら、なるべく苦しまずに殺してやる……。だが、ヒーローマンとジョーイとかいう地球人は別だ」

ジョーイ「！」

ゴゴール「お前だけは……。徹底的に八つ裂きにしてやる！」

ウイル「そのような言葉に従うつもりはない！」

リオン「最後まで足掻いてやるよ……。！生命を懸けて戦った甲児達のためにも！」

ヒイロ「それが人間だ」

暗黒大將軍「……。お前達を侮っていたようだ。その詫び代わりだ！俺達の全力を以て、お前達と戦おう！」

アマリ「(甲児さん、鉄也さん……。！私達もやります……。！全てを懸けて！)」

二人の覚悟に……。負けていられるかよ！

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「甲児と鉄也さんは無事だ……。あの二人が簡単に負けるわけないんだよ……。！二人

が戻って来るまで俺達が倒れるわけにはいかないんだ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVS初戦闘〉

ジョーイ「甲児さんと鉄也さんだつて必死に戦つたんだ！僕達がお前達と戦う！僕とヒーローマンが！」

〈戦闘会話 海道VS初戦闘〉

真上「ウイングクロスは安定している」

海道「へっ、それだけ聞ければいいぜ！此処で負けちまつたら兜と剣に顔向けできねえからな！」

真上「あいつらの代わりとは言わんが、こいつらの相手は俺達がやろう！」

戦闘から数分後……

暗黒大將軍「しぶといな……。流石と言っておこう」

ゴゴール「だが、無意味だ」

キバ「てめえらじゃあ勝てねえんだよ！」

ワタル「……」

龍王丸「顔を上げろ、ワタル！まだ戦いは続いているんだぞ！」

ワタル「龍王丸……。因果の果てって何なの……？」

龍王丸「……。全ての世界の理を越えた所……。別名、時空の狭間だ」

竜馬「時空の狭間だと……。?!？」

ワタル「龍王丸の力で、そこには行けないの?!？」

龍王丸「すまない……。今の私では無理だ……」

ワタル「今の私って……」

ホープス「理を越える事が出来るもの……。それは神と呼ばれる存在でしょう。今の我々に出来る事はそこに想いを届けるだけです」

メル「想いを届ける……？」

アスナ「想いを……。あ、刹那のあれはどう?!？」

テイエリア「クアンタムバーストか！」

シエリル「それに私達も歌えば……！」

ランカ「甲児さん達に私達の想いを届けられるかもしれないですね！」

エルヴィラ「それとサイコミュの力を使えば……」

アムロ「エルヴィラ博士……」

エルヴィラ「人の想いは時空間を越える……。カップリングの研究の際、そういった

データが得られたわ。それを増幅するシステムのサイコミユならば、あるいは……」

ホープス「と言っても、理を揺らがせなければ、そこへの扉が開かれないでしょう」
アマリ「その方法を知っているから、教えて、早く！」

ホープス「今の我々の中で、その可能性を持つのはヴィルキス、真ゲッターと真ドラゴン、ザ・フールだけです」

アンジユ「ヴィルキスが……？」

弁慶「真ゲッターと真ドラゴンもだと？」

ノブナガ「もしや……」

ホープス「ドラグニウムの制御……それは即ち、理の制御なのです。かつて時空を歪め、世界を崩壊させたヴィルキスの真の力、時空の狭間へ飛び込んだ真ゲッターと真ドラゴン、そして龍の力を得たザ・フールならば、あるいは……」

アンジユ「わかった！」

ノブナガ「やるしかない！」

號「やるぞ！」

隼人「その理を揺るがせる役は俺達に任せろ！」

刹那「みんなの想いを伝えるのは俺とアムロ大尉がやる……！」

アムロ「ダブルオークアンタのクアンタムシステムとレガンダムサイコフレームに

俺の意識を同調させればやれるはずだ……！」

ミーナ「30」「シエリルさん！ランカさん！私も歌います！」

アイシャ「頼んだわよ、ミーナ「30」！」

ホープス「言っておきますが、因果の果てに想いを送ったとしても状況は何も変わりません。仮に想いを送ったとしても、もう甲兎様も鉄也様もそれを聞く事が出来ないと……」

アマリ「そんな言葉は聞く気はないわ……！」

零「今、俺達に出来る事を全力でやる……！それだけだ！」

ホープス「……わかりました。お好きになさってくださいませ」

アンジュ「ヴィルキス……！あなたにみんなの想いを託す！」

ノブナガ「竜馬達は後から頼む！まずは俺達だ！参るぞ、ザ・フール！」

ヴィルキスとザ・フールが力を溜めた。

ジャンヌ「どうなの、ノブナガ、アンジュ!!？」

アンジュ「駄目……。何も変わらない……」

ノブナガ「こちらも駄目だ……！」

サラマンディーネ「そんな……！」

アンジュ「何をやってるのよ、ヴィルキス！あなた、世界を滅ぼした事もあるんでしょ

！いつかみたいな力を見せてよ！一瞬でいいから！」

ノブナガ「このような所で終わるお前ではないだろう……。かつての力を見せてよ、ザ・フルー！お前はこの破壊王、オダ・ノブナガのものだぞ！」

アンジュ「目覚めなさい、ヴィルキス！」

ノブナガ「力を示せ、ザ・フルー！」

ネモ船長「……！」

ぶ、ブルーウォーターが光った？！

ナディア「ブルーウォーターが……！」

ジャン「何が起きるんだ……？！」

サリア「ヴィルキスとザ・フルーが……！」

ミツヒデ「目覚めたのか！」

アンジュ「いい子ね、ヴィルキス……！褒めてあげる……！」

ノブナガ「流石は俺の大イクサヨロイだ……。見事だぞ、ザ・フルー」

アンジュ「やるわよ、ノブナガ！ヴィルキス達と私達の全力で……？」

ノブナガ「ふっ、是非も無し！」

ヴィルキスとザ・フルーは同時に動いた。

アンジュ「やるわよ、ヴィルキス！全力で！ヴィルキスの切り札よ」

ヴイルキスが金色に輝いた…!??

アンジュ「お母様から託された歌と指輪で…！」

アンジュが歌っている…！

アンジュ「いつけえええつ!!?」

ヴイルキスは次元破壊砲を発射して辺りを爆発させた。

ノブナガ「行くぞ、ザ・フル！龍の力よ…。我がオダ・ノブナガに力を与えよ！」

ザ・フルが紫色に輝くとまるで本物の龍のような姿に見える…。

ノブナガ「破壊王オダ・ノブナガが…全てを破壊する！はああああつ!!?」

龍は凄まじい力を辺りに浴びせた。

ヴイルキスとザ・フルの力で時空にヒビが入った！

アンジュ「竜馬！號！」

溪「二人共やるじゃん！」

凱「俺達も負けてはいられないな！」

竜馬「おう、見せてやろうぜ！俺達の力を！」

暗黒大將軍「やらせるものか！」

一体のミケーネ神が真ゲッター達の前に立ちふさがった。

だが、真ゲッターと真ドラゴンとは止まる気配がない。

竜馬「俺達に不可能な事なんてない！號、わかってるな！」

號「感じる・・・！六つの心が一つになっていく・・・！」

真ドラゴンの上に真ゲッターが乗り、真ゲッターと真ドラゴンは力を溜める。

竜馬「おおおおおおつ！」

號「はあああああつ！」

二機は光に包まれ、ミケーネ神に突っ込んだ。

號「シャイン・・・！」

竜馬「SPAアアアアク!!？」

ゲッターチーム「!!!!」
「うおおおおおつ!!?」
「!!!!」

そのまま真ゲッターを乗せた真ドラゴンはミケーネ神に突進を浴びせた。

ミケーネ神「ぐあああああつ!!?」

ミケーネ神は爆発し、時空は完全に開いた。

バナージ「今です、アムロさん！刹那さん！」

アムロ「サイコ・フレイム・・・！応えろ!!?」

刹那「クアントムバースト!!?」

アルト「シェリル！ランカ！ミーナ」
「30」!

シェリル&ランカ&ミーナ「30」
「私達の歌を聴けえええつ!!?」

これなら…… いける！

零「甲児!!? 鉄也さん!!?»

俺達は時空の狭間に向かって叫んだ……。

―兜 甲児だ。

俺達は暗闇の中にいた……。

甲児「……」

鉄也「(……)」

何も聞こえない……。何も見えない……。

鉄也「(甲児は近くにいるのか……? それすらもわからない……)」

だんだん意識が遠くなっていく……。

鉄也「(意識が途切れた時、完全に消滅するのか……)」

零「甲児!!? 鉄也さん!!?»

すると、聞き慣れた声が聞こえた……。

甲児「今の声……! 零か!」

鉄也「甲児! そこにいるのか!」

甲児「鉄也さん！」

鉄也「目が見える……！耳が聞こえる……！」

甲児「どうなってるんだ!? さっきまでは意識すら、失いかけていたのに……！」

？「それは……」

この声は……！

ゼウス「お前達の仲間が理を越え、可能性の扉を開いたからだ」

鉄也「ゼウス神……！」

甲児「何故あんたがここに!?？」

ゼウス「お前達と同じだ。あのマジンガーZEROに敗れ、私も因果の果てへと墮ちた……。だが今、お前達の仲間の想いが、この虚無の空間に可能性という光を灯してくれた」

鉄也「可能性……」

ゼウス「そうだ！それは無限の未来と言ってもいい！くじけない闘志と希望がある限り、未来は無限の可能性を秘めている！強き者よ、手を伸ばせ！闇のマジンガーであるZEROが想像もできない可能性へ！」

甲児「想像もできない可能性……」

ゼウス「それこそが無限の未来……！それこそが光！人と鋼が融合した魔神……！こ

こではない、どこかの世界から新たなマジンガーを呼べ！その名… 魔神皇帝！」

甲児「魔神…！」

鉄也「皇帝！」

た、確か海道達の機体はカイザーって名前だったな…！

もしかして、海道達のカイザーも別世界のマジンガーって事なのか…？

すると、俺達の前に二機の新たなマジンガーが現れた…。

―新垣 零だ。

俺達の想い… 甲児達に届いたのか…？

暗黒大將軍「… 気が済んだか、人間達よ」

アキト「何っ…？！」

暗黒大將軍「確かにお前達は理を超え、一瞬とはいえ、神の領域に踏み込んだ。だが、それだけだ。奇跡は起こらない」

アムロ「…」

刹那「…」

暗黒大將軍「そろそろ終わりだ…。世界は闇に閉ざされる」

ジョーイ「そんな事ない！」

ゴゴール「目の前の現実を受け入れろ、ヒーローマンを操る者！希望は消えたのだ！」
ジョーイ「僕は信じてる！甲児さんと鉄也さんは絶対に戻ってくる！」

ワタル「そうだよ！だって……！だって……マジンガーはいつだって僕達のヒーロー
だもの！いつでとやってくるんだよ！マジンガーは！」

暗黒大將軍「黙れ！奴等が、このアル・ワースに戻ってくる可能性は……」
ホープス「ゼロではなかったようです」

何だ……？甲児達が消えた場所に光が……！！？

暗黒大將軍「何だ、この光は！」

甲児「マジン！」

鉄也「ゴー!!？」

辺りに光が戻り、現れたのは……新たな二体のマジンガー……！！？でも、違う……！
甲児「待たせたな、みんな！」

鉄也「兜 甲児と剣 鉄也……！今ここに帰還した
！」

あの二機に甲児と鉄也さんが乗っている……！！？
さやか「甲児君！鉄也さん！」

ボス「待つてたぜ、このヤロー！」

アマリ「見て、ホープス！二人が戻ってきたわ！」

ホープス「正直に言えば、私は目の前の光景が信じられません…」

零「これが奇跡ってやつだよ！」

ホープス「奇跡…」

千冬「ちよつと待て！そのマジンガーは何だ？？」

海道「俺達のカイザーとそっくりじゃねえか！」

真上「俺達のカイザーがああ二機のマジンガーに反応している…まさか、あのマジ

ンガーは…！」

甲児「並び立つ魔神皇帝！その名もマジンカイザー！」

鉄也「そして、マジンエンペラーG！」

甲児「全ての宇宙の可能性が集められた最強のマジンガーだ！」

ワタル「うおおおおおっ！ハツキシ言つて、ウルトラスーパーマジンカツコイイぜ！！

？」

舞人「マジンカイザーのマジンエンペラーG…！」

ジョニー「その雄々しき姿…まさに皇帝と呼ぶに相応しいですね」

カズミ「魔神皇帝の光が、この一帯を覆っていた暗黒を払ったようね！」

ジョーイ「見たか！これが光だ！」

ゴゴール「認めざるおえんな……。地球人の光を……」

暗黒大將軍「馬鹿な……。人間が因果の果てを越えただと！」

甲児「みんなの想いとゼウスの魂が俺達に新たな力を与えてくれた！」

鉄也「暗黒大將軍！ゴゴール！お前達にも味わわせてやるぞ、魔神皇帝の力を！」

暗黒大將軍「……。面白い！ならば、この暗黒大將軍の全力で貴様達を迎え撃つ！」

キバ「へっ！面白くなってきたじゃねえか！」

甲児「やるぞ、カイザー！俺の希望を光に変えろ！」

鉄也「行くぞ、エンペラー！俺の闘志を光に変えろ！」

真上「二機の魔神皇帝に負けるわけにはいかないぞ、海道！」

海道「おうよ！なら、俺達もやろうぜ、俺達のカイザー！俺達の地獄を光に変えやが

れ！」

甲児「魔神皇帝よ！その光で未来を照らせ!!？」

よっしや！反撃開始だ!!？」

〈戦闘会話 海道VSキバ〉

海道「さあ、あの時のケリをつけようじゃねえか！キバの兄ちゃんよ！」

真上「お前に待っているのは地獄だな！」

キバ「何言ってるんだ！てめえらが地獄に堕ちるんだよ！」

海道「お前何にもわかってねえな！」

真上「堕ちる必要などない……俺達が地獄なのだからな！」

〈戦闘会話 由木VSキバ〉

由木「キバ……あなたは此処で止める！」

キバ「あん時の女か！イイゼ……ドクロの前にまずはてめえをぶつ殺してやるぜ！」

スカーレット「悪いが今のウイングルは二人分の力を持っている……簡単には倒せませんぞ！」

〈戦闘会話 甲児VSキバ〉

キバ「何だア？ドクロにそっくりじゃねえか！」

甲児「確かにそっくりだけど、海道達のカイザーとの違いを見せてやるぜ！」

キバ「イイゼ、カイザー！てめえも俺がぶつ倒してやる！」

〈戦闘会話 鉄也VSキバ〉

キバ「てめえは楽しめそうだな！」

鉄也「ならば、期待に応えるようにするでしょう。キバ…… 此処でお前を終わらせる！」

キバ「吐かせ！八つ裂きにしてやるぜ、エンペラー！」

海道さん達のカイザーはアイアンカイザーにダメージを与えた。

キバ「フハハハハハッ！やはり本当の戦いは良い！ドクロオ！次も楽しもうぜ！」
そう言つてアイアンカイザーは撤退した……。

海道「次つて…… 何回その事を言う気だよ、あいつ……」

真上「そろそろ終わりにさせたいものだ……」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSゴゴール〉

ゴゴール「ヒーローマンと操る者！此処でお前達を消してやる！」

ヒーローマン「！」

ジョーイ「うん、わかってるよ、ヒーローマン……。ゴゴール！僕達は絶対に負けない！何度でもお前を倒してみせる！」

〈戦闘会話　ウイルVSゴゴール〉

ウイル「ゴゴール！お前は俺が倒す！」

ゴゴール「実験体01か……。どうだ？もう一度俺の元で働いてみる気はないか？」
ウイル「ふざけるな……。！お前によって変えられた運命を……。此処で断ち切る！」

〈戦闘会話　甲児VSゴゴール〉

ゴゴール「マジンカイザー……。人類の光りそのもの」

甲児「よくわかってんじゃねえか、ゴゴール！」

ゴゴール「だが、その光を閉ざせば人類は絶望へと沈む」

甲児「そんな事させるかよ！俺達の光は誰にも閉ざさせない！」

〈戦闘会話　鉄也VSゴゴール〉

鉄也「観念するのだな、ゴゴール！」

ゴゴール「もう勝った気でいるようだが……。お前達に勝機はない」

鉄也「その言葉……。そっくりそのまま返してやる！お前にもエンペラーの力を味わわせてやる！」

〈戦闘会話 九郎VSゴゴール〉

ゴゴール「あの時は世話になったな魔を断つ剣よ」

九郎「倒されたんなら大人しくしてろよ！あの触手野郎といい何で蘇ってくるんだよ！」

ゴゴール「我等にはなすべき事があるからだ」

アル「それは妾達も同じだ……。よってゴゴール、お前の存在はもう必要ないのだ！」

九郎「蘇ってくるんなら、何度だつてぶつ倒してやるぜ！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSゴゴール〉

ゴゴール「宇宙海賊よ！お前達のせいで我等は壊滅した！」

ゴーカイブルー「何を言っている？」

ゴーカイレッド「お前が俺達のお宝探しを邪魔したからだろ！」

ゴゴール「ならば、今度こそお前達を此処で！」

ゴーカイピンク「お生憎と私達は此処で敗れるわけにはいきません！」

ゴーカイレッド「そう言うわけだ！覚悟しやがれ、ゴゴール！」

〈戦闘会話 ゼロVSゴゴール〉

ゼロ「ゴゴール…噂には聞いていたが、此れほどまでの悪とはな…!!」
ゴゴール「ウルトラ一族の一人か…。いずれ光の国を氷で閉ざしてやる!」
ゼロ「ベリアルみたいな事しようとしてんじやねえ!てめえの計画なんざ俺達が止めてやる!」

〈戦闘会話 ケロロVSゴゴール〉

ゴゴール「我等と同じ、侵略者が何故、人類の味方をするのだ、ケロン人!」

ドロロ「それは拙者達が正義に目覚めたからでござる!」

クルル「別に正義には目覚めていないけどな、クーククツ!」

ドロロ「え…」

タママ「僕達、今でも侵略者です」

ケロロ「ドロロ君、しばらく黙ってて」

ドロロ「ひ、酷いよ、ケロロ君!」

ケロロ「それは置いておいて…ゴゴール!お前に本当の侵略者魂を見せてやるであります!」

ヒーローマンとウィルの攻撃でゴゴールにダメージを与えた。

ゴゴール「ぬうっ！やはりまだ本調子ではないか……」

ウイル「諦めろ、ゴゴール！」

ゴゴール「まだだ…… まだ始まったばかりなのだ！必ずお前達を倒す！」

そう言い残し、ゴゴールは撤退した……。

ジョーイ「ゴゴール…… 僕達は絶対に負けない！」

〈戦闘会話 零VS暗黒大將軍〉

零「勝負だ、暗黒大將軍！」

暗黒大將軍「お前では俺には勝てん。真実を知らぬお前ではな」

零「真実……？お前、ゼフィルスの事を知っているのか!?？」

暗黒大將軍「……」

零「だんまりかよ……！なら、力尽くで聞き出してやる！」

〈戦闘会話 海道VS暗黒大將軍〉

暗黒大將軍「ドクロの魔神よ……。その存在、万死に値する」

海道「あん？てめえ、俺達のカイザーの事も知ってるのか？」

真上「カイザーには謎が多いからな。それに兜のカイザーとあまりにも似過ぎてい

る」

海道「そんな事は今関係ねえだろ！暗黒大將軍……お前にも地獄を見せてやるぜ！」

マジンカイザー、マジンエンペラーG、海道さん達のカイザーの攻撃を受け、暗黒大將軍はダメージを負った。

暗黒大將軍「ぬうつ！この俺が膝をつくとは……！」

鉄也「俺達の勝ちだ、暗黒大將軍！」

暗黒大將軍「……いいだろう、剣 鉄也……！今日の所は敗北を認めよう！だが、この俺に二度の負けはない！次の機会には、その魔神皇帝……必ずや打ち破ってみせる！その日を怯えながら待つがいい！」

暗黒大將軍は撤退した……。

鉄也「その潔さ…… 將軍に名乗るに相応しい男だな」

零「……終わつたな……」

全ての敵を倒し、俺達は息を吐いた。

舞人「暗黒大將軍にゴゴール……。恐ろしい敵だった」

シモン「あいつだけじゃない……。闇の帝王…… マジンガーZERO……」

しんのすけ「それにあのキバって人も……」

海道「別にあいつは恐ろしくも何ともねえよ」

ヴィラル「ドアクダーとオリュンポス……。闇の力か……」

ルルーシュ「結局、奴等の計画とやらも聞く事は出来なかつたか……」

甲児「だが、くじけない闘志と希望がある限り、未来には無限の可能性が待っている」
鉄也「その光を掴めるかは、俺達次第だろうな」

トビア「未来の可能性か……」

みさえ「何かしら？その言葉を聞いただけで元気が出るわ！」

甲児「行こうぜ、みんな。俺達の戦いは、これからだ」

鉄也「この魔神皇帝がある限り……そして、この胸にマジンガー乗りの誇りがある限り、俺達は未来へ向けて進んでいけるはずだ」

真上「フツ、そうだな……」

ウイル「……」

ジョーイ「待ってよ、ウイル！」

ウイル「……なぜ止める？俺はもうお前達とは共にいれない」

リナ「お兄ちゃん……」

ジョーイ「スクラッグだから？」

ウイル「……」

ジョーイ「そんな事、関係ないよ！ウイルはウイルなんだから！」
ウイル「！…ジョ、ジョーイ…！…お前は本当にバカなやつだ」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、ハンマーヘッドの格納庫に集まった…。

鉄也「マジンガーZとグレートマジンガーも無事に回収できたそうだ」

甲児「良かった…。俺達と一緒に因果の果てからちゃんと脱出できたんだな」

鉄也「状況によつては、魔神皇帝から乗換えるのもありだろう」

さやか「でも、良かった…。今回ばかりは、本当にダメだと思ったから」

甲児「俺と鉄也さんも一度は諦めそうになったさ」

鉄也「だが、みんなの声が聞こえた時、俺達は闘志と希望を取り戻した」

甲児「そして、ゼウスの導きによつて俺達は無限の未来を照らす光…可能性を掴む

事が出来たんだ」

バナージ「可能性…」

グレンファイヤー「すげえぜ！…よく分からねえけど…」

ジュード「で、あの魔神皇帝ってのはいったい何なのさ？」

ルカ「F」「甲児さんのマジンカイザーにいたつては海道さん達のカイザーとそっくり

ですものね」

甲児「マジンガーの可能性の一つの形だ」

トビア「よく分からないんですけど……」

鉄也「どうやら、様々な並行世界には様々なマジンガーがいるらしい。その中でも最強の力を待つマジンガーが甲児と俺を救うために来た……としか説明しようがない」

海道「つまり……どういう事だ？」

真上「俺達のカイザーも並行世界のマジンガーだという事か……」

マサキ「ウルトラマンやガンダムと同じだな……」

甲児「これも全て、みんなのおかげだ。改めて礼を言うぜ」

零「何言ってるんだよ。最後まで闘志と希望を捨てなかつた甲児と鉄也さんの勝利だよ、本当に」

ホープス「(あの瞬間……。確かに我々と甲児様、鉄也様は理を越えました……。この力があれば、世界を存続させる事も可能かも知れません……)」

ウイル「……」

ロロ「あなたも来たんですね、ウイルさん」

ウイル「ロロか……。ああ。友人や妹にどうしてもと言われてな。だが、この部隊の人間は俺がスクラッグでも何とも言わないんだな」

ロロ「そういう人以外の人は何人もいる部隊ですからね、今更なのでしょう」

ウイル「… 本当に寄せ集めだな」

リナ「お兄ちゃん…」

ウイル「ジョーイ、リナ、サイ…」

サイ「久しぶりだな、ウイル」

リナ「お帰りなさい、お兄ちゃん」

ウイル「… その言葉は不要だ。俺はまだお前達の元へ戻ると言ったわけでは…」

ジョーイ「でも、君はエクスクロスのメンバーとして戦ってくれる…。それは一度でも帰って来てくれるって事でしょ？」

ウイル「それは…」

リナ「だから、言わせて、お兄ちゃん。お帰りなさい」

ウイル「ああ、ただいま。リナ…」

リナもウイルは抱き合った…。

リー「… しかし、驚いたよ。エルヴィラがサイコミユの研究をしていたなんて」

エルヴィラ「感応波の存在についてはカップリングシステムの開発時に実証されたけど…。サイコ・フレームのおかげで、それらについての研究も飛躍的に進歩したのよ」

アムロ「あれについては、俺たちの世界でも、まだまだ実験中だが、お役に立てて何よりだ」

エルヴィラ「ありがとうございます。引き続き、ご協力をお願いしますね」

まゆか「エルヴィラさん……。何か企んでますね……。？」

エルヴィラ「ふふ……。バレちゃったみたいね。でも、それにはもう少し実践的なデータが必要なのよね……」

ルルーシユ「だが、喜んでばかりはいられない。今回の戦闘でオリュンポスとドアクダー軍団の協力体制が判明したのだから」

シモン「アル・ワースの闇の集合か……」

万丈「神部七龍神の仇敵……。闇の龍の力を求めるドアクダーと自らを神と称するオリュンポス……」

ヒデヨシ「そのオリュンポスの支配者である闇の帝王とマジンガーZERO……」

アスナ「全てが人智を超えた存在ね」

鉄也「だが、戦うしかない。相手が神であろうと」

甲児「それが俺達の……。闇を払う光となる俺達の使命だ」

エンネア「それにしても甲児のマジンカイザーと海道達のカイザー……。なんかややこしくない？」

考えてみれば……。

アマリ「それならば、甲児さんのカイザーをマジンカイザー、またはカイザーと呼

び……。海道さん達のカイザーをカイザーSKL……。またはSKLと呼ぶというのほど
うですか？」

海道「ドクロの魔神だから、SKLか……。いいんじゃないか？」

真上「奇遇だな、俺もそう思っていた」

甲児「これで三大魔神皇帝が揃ったんだ！これからも頑張ろうぜ！（ゼウス……。あなたの魂は俺達が引き継ぐ……。俺達は必ず闇を打ち破ってみせるぞ……。無限の可能性の光……。魔神皇帝で……）」

ーエンブリヲだよ。

私はミスルギの皇宮である人物と話していた……。

エンブリヲ「……！」

？「おや？どうなされたのですか、エンブリヲ君？」

エンブリヲ「闇の帝王が動き出したようです」

？「それはそれは……。運命は着実と動いていますね」

エンブリヲ「あなたはこのアル・ワースで何をしたいのですかな？クー・クライング・

クルー：。。いや、同志：と呼んだ方がいいかな？」

カギ爪の男「呼び方は何でも構いませんよ。ご質問にお答えしますね。。。アル・ワー
スでしたい事ですか。。。元の世界と何も変わりません。全ての世界に住む生き物全て
が幸せに暮らせる世の中を作りたいですね」

この男の計画、幸せの時。。。カギ爪の男。。。食べない男だ。。。。

シークレットシナリオ2

最凶対最強

シークレットシナリオ2

最凶対最強

「兜 甲児だ。」

俺と鉄也さんは特訓をしていた……。

甲児「……コーヒー淹れたよ、鉄也さん」

鉄也「すまん、甲児」

甲児「兜 甲児特製のアウトドアコーヒーだ。味は保障付きだぜ。こう見えても俺……シローとおじいちゃんと暮らしていた時は料理担当だったからな」

鉄也「そうか……。姉さんはお前達と離れて暮らしていたんだっただな……」

甲児「ああ……。くろがね屋の女将が俺とシローの母さんだっただけ聞いて時はびっくりしたけど……。今では、それを当然の事として受け止めている。ついでに父さんも生きていたって聞いた時には素直に嬉しかったよ」

鉄也「そうか……。だったら創造に再会するためにも何としても元の世界に帰らなければならんな」

甲児「そのために全力を尽くすよ」

鉄也「……考えてみれば、こうして二人だけで、じっくり話すのは初めてかも知れないな」

甲児「そうだな。エクスクロスにいと、いつも周りに誰かいるし……。鉄也さんの所にはワタルや舞人や青葉や一夏がコーチのお願いにひっきりなしに来てるからな」

鉄也「そういうお前の所にはいつもいつもさやかか引っ付いている」

甲児「そ、そうかい……。？」

鉄也「で、どこまで行つた？」

甲児「ど、どこまでつて……。いくら鉄也さんが、俺の叔父さんでもプライベートつてものが……。！」

鉄也「何の話をしている？俺はカイザーの力をどこまで引き出せるようになったかを聞いているんだぞ」

甲児「ずるいぜ、鉄也さん!!？」

鉄也「まだまだ青いな、甲児。冗談は、そこまでにしておいて……。残念だが俺も、エンペラーの全てを引き出せてはいない。こうして二人だけの特訓の時間を作ってみた

が、まだ先は見えない状態だ」

甲児「俺も同じだよ」

鉄也「では、休憩は終わりだ。続きをするぞ」

甲児「望む所だ。さっさと始めようぜ」

鉄也「気をつけるよ、甲児……。俺達だけで特訓する事にはもう一つ意味がある……」

俺達はそれぞれマジンカイザーとマジンエンペラーGに乗り込み、特訓の再開をしようとしていた。

鉄也「始めるぞ」

甲児「いつでもいいぜ、鉄也さん！」

鉄也「ならば、行く……！」

海道「待ちやがれ！」

すると、SKL……。それも既にウイングクロスがされている状態で現れた。

甲児「海道……？」

鉄也「真上までどうして……？」

真上「SKLも魔神皇帝だというのなら、俺達も特訓に参加させてもらおう」

甲児「とか言って本当はどれが本当に強い魔神皇帝か、知りたいんじゃないのか？」

鉄也「なる程。別世界とは言え…。お前達も立派なマジンガーの乗りだという事だな」

海道「よくわかってんじやねえかよ、兜、剣！」

真上「二人の大切な特訓に水を差して悪いが、俺達も入れさせてもらおうぞ」

甲児「鉄也さん！」

鉄也「いいだろう、では始めるとしよう！」

海道「行くぜええええっ!!？」

マジンカイザー、マジンエンペラーG、マジンカイザーSKLは戦いを始めた。

正直言うと、マジンエンペラーGが押している…。

甲児「流石は天才パイロット、剣 鉄也だ…。！半端じゃないぜ！」

鉄也「それについてくるお前も大したものだ…。それよりも…」

甲児「ああ、今の攻撃を受けても無傷だなんて…。SKLはどんな装甲してんだよ…？」

海道「こんなもんかよ!!？」

真上「まだまだこれからだぞ！」

鉄也「そうだな。二人に比べれば俺と甲児はまだだ。お互いにな」

甲児「ああ…。カイザーもエンペラーもまだ底を見せちゃいない。それを引き出せ

るようになるまで、ひたすら特訓だ……！」

海道「まだまだ行くぜえ！」

鉄也「……！」

真上「これは……！」

甲児「どうした、鉄也さん、真上？」

鉄也「俺の予想より早く、エサに食いついてきたようだ」

出てきたのは……マジンガーZEROだった。

甲児「マジンガーZERO！」

海道「出てきやがったか！」

鉄也「奴は自分以外のマジンガーの存在を許さない……。やってくると思ってたぜ」

真上「もしや、剣……。あいつをおびき出すために兜との特訓を……？」

鉄也「ああ。海道達が来てくれた事でその可能性が高まった……。甲児にはすまない

と思っている。危険に巻き込んでしまつて……」

甲児「何言つてんだよ！おれとしちや望む所だぜ！魔神皇帝の光がある限り、因果の

果てに跳ばされる事はないんだ！この間の借りを返してやるぜ！」

マジンガーZERO「黙レ……」

甲児「喋つた……！」

真上「Z E R O から生体反応は検出されていない……！」

海道「じゃあ、どう言う事だよ!?？」

鉄也「この前の戦いでも薄々感じていたが、どうやら、奴はマジンガーZ E R O という生命体らしい」

マジンガーZ E R O 「我ハ……最凶ノ魔神……。全テノ……マジンガーヨ……ゼロニ……還ルガイイ」

甲児「凶悪な意思……！この前以上だぜ！」

鉄也「気をつけろ、甲児、海道、真上。俺達の光……つまり無限の可能性を手に入れて、魔神皇帝を呼び寄せたのと逆に……。奴は自分以外の可能性を闇に葬る者……つまり、可能性をZ E R O にする存在だ。そして、それを果たすためにどんな手段を使ってくるか、わからない！」

マジンガーZ E R O 「闇ニ……消エロ」

マジンガーZ E R O から謎の光が放出され、現れたのはグール複数と地獄王ゴードン、そしてもう一機にロボットだった。

甲児「地獄王ゴードン！」

鉄也「Dr. ヘルの最終兵器……！Z E R O が闇の力で呼び寄せたのか！」

甲児「おまけにグールの編隊とはな！やってくるぜ！」

鉄也「だが、あのもう一機は何だ？」

真上「あれは……！」

海道「おいおい……！あれってガランの乗ってた……あの……えつと……！」

真上「ガイストテレスだ！まさか、ガランもこの世界に……？」

鉄也「いや、生体反応はない……つまりは……」

真上「操り人形だという事か……！」

マジンガーZERO「ゼロニ……還レ」

すると、マジンガーZEROは撤退した……。

鉄也「勝ちを確信して帰ったか」

甲児「想像力が足りない事……。そこに付け入る隙があると見たぜ……！」

やるぜ！

甲児「俺達の力を侮ったようだな、ZERO！」

鉄也「無理もない。可能性そのものを否定するような奴だからな」

海道「だったら……。教えてやるしかねえな！」

真上「俺達が地獄だという事を！」

甲児「見せてやるぞ、ZERO！俺達の可能性……。魔神皇帝の力をな！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 海道VS初戦闘〉

海道「俺達を舐めて帰るとは… Z E R Oは俺達の地獄を知らないみてえだな！」

真上「ならば、何度でも教えてやるとしよう… 地獄をな！」

戦闘から数分後の事だった。

鉄也「… そう言えば、Z E R Oの奴が知らない事はまだまだあるな」

甲児「そうだな。自分が一番だと思っっているあいつはきつと知らないんだろう。仲間ってものを」

そう… エクスクロスだ！

―新垣 零だ。

俺達はマジンカイザー達の元へ着き、それぞれ出撃した…。

マサキ「待たせたな！ エクスクロスの登場だ！」

舞人「お節介をさせてもらいますよ、甲児さん、鉄也さん、海道さん、真上さん！」
甲児「大歓迎だ！ZEROの野郎にマジンガー以外にもすごいロボットがいるのを教えてやれ！」

ボス「で、でも：：そんな事したら、あいつ：：俺達の事も狙ってくるんじゃない！」
ゼロ「望む所だぜ。自分が一番強いと思ひ込んでいる自己満足野郎は俺が銀河の果てまでぶっ飛ばしてやるぜ！」

アンジユ「気に食わないのよね。こつちを弱いと決めつけているああいう奴って」
葵「要するに舐めすぎてるって事よね」

ルルーシユ「力に頼るだけの破壊魔を戦略的に追い詰めるのも面白い」

ノブナガ「最凶のマジンガーだが知らんが、その最凶を破壊するのも破壊王の務めだ」
万丈「奴の闇を日輪で照らしてやるのも悪くないな」

ワタル「救世主は、どんな奴にも負けない！相手が悪なら、なおの事だよ！」

零「要するにあいつは俺達全員に喧嘩を売ったってわけだよな？：：いいぜ、もうビビるのも飽きた：：ZEROを本当のゼロに還すのも悪くない！」

アマリ「(零君が悪い顔しています：：)」

鉄也「いい気合だ。これはZEROも無視は出来ないだろう」

海道「やろうぜ、お前ら！俺達の力をZEROに見せてやろうぜ！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零orアマリVS初戦闘〉

アマリ「甲児さんと鉄也さん、海道さんと真上さん……良いコンビね！」

零「なら、俺達も負けない様なコンビネーションを見せてやろうぜ、アマリ！」

アマリ「ええ、零君！私達二人も息をピッタリにあわすわよ！」

零「了解だ！」

ホープス「（……完全に私の存在を忘れられている様な……寂しいです……）」

マジンカイザーとマジンエンペラーGの攻撃でゴードンはダメージを受ける。

だが、ダメージが回復した。

サンソン「ダメージが回復していくぜ！」

ハンソン「すごい！物理法則を完全に無視している！」

グランデイス「あのZEROとかいう奴の仕業って事かい！」

甲児「どうやら、大將各には特別な処理が施されている様だな！」

鉄也「ならば、奴の知らない力であれを倒す！」

甲児「それは……！」

鉄也「やるぞ、甲児！俺に合わせろ！」

マジンカイザーとマジンエンペラーGはゴードンの前に移動した。

甲児「今こそカイザーとエンペラーの力を一つにする！」

鉄也「これが未来を照らす光子力の光……！俺達の可能性だ！」

二機は攻撃を仕掛けた……。

甲児「光子力は可能性の光……！」

鉄也「その力で未来を切り開く！」

エネルギーを溜めた二機の周りに竜巻が起き、竜巻が消える。

鉄也「滾れ、魔神皇帝！」

甲児「俺達の怒りで燃えろ！」

二機はそれぞれのビームの体制に入る。

甲児「魔神！」

鉄也「双皇撃！」

ケドラ「理解不能……理解、不能……！」

鉄也「たとえ神でも……悪魔でも……！」

甲児「俺達を止める事は出来ない！」

二人の技を受け、ゴードンは爆発した……。

ベルリ「さごい！一撃だ！」

一夏「やったぜ！甲児さん、鉄也さん！」

鉄也「これがZEROの知らない力……」

甲児「心と力を一つにする事……人間の絆ってやつだ！」

海道「やるじゃねえか、兜達！」

真上「俺達も負けるわけにはいかんな」

克蘭「残るはあのガイストテレスとかいう奴だけだ！」

スカーレット「海道、真上！早々に決着をつけろ！」

海道「言われるまでもねえ！」

SKLの攻撃でガイストテレスはダメージを受けた。

しかし、ゴードンと同じくダメージが回復した。

九郎「つて、またかよ!!?」

アル「やはり、簡単にはいかんか！」

海道「なら、さつきみたいにやれば良いんだろ？おい、兜！」

甲児「……わかったぜ、海道、真上！」

真上「では、行くでしょう！」

S K Lとマジンカイザーがガイストテレスの前に立った。

甲児「マジンカイザーとマジンカイザーS K L…」

海道「二つのカイザーの力をたつぷりと味わいやがれ！」

二機は攻撃を仕掛けた…。

海道「今から此処が…地獄の一丁目だ！…俺達で決めるぜ！」

甲児「よし！ルストトルネエド!!？」

真上「ルストストリーム!!？」

マジンカイザーとマジンカイザーS K Lから放たれた竜巻がガイストテレスを上空へ吹き飛ばし、自分達も空を飛び接近する。

海道「やるぜ、ツールハンマーブレイカー!!？」

甲児「シヨルダースライサー!!？」

海道「オリヤアアツ!!？」

甲児「でやあああああつ!!？」

雷を纏った牙斬刀とシヨルダースライサーで何度も斬り刻み、S K Lは上空に残り、マジンカイザーは地面に着地する。

甲児「ターボスマツシャー…！」

海道「トルネードクラツシャー…！」

甲児&海道 「「パアアアンチ!!?」」
二機のロケットパンチを受けたのを見て、腕が戻った二機は胸部にエネルギーを蓄積させる。

甲児 「ファイヤーブラスタアアアツ!!?」

海道 「インフェルノ：：ブラスタアアアツ!!?」

それぞれ熱光線が発射され、ガイストテレスに直撃する。

海道 「くたばりやがれえええええつ!!?」

ケドラ 「バカ：：な：：!」

甲児 「俺達が：：」

海道&真上&甲児 「「地獄だ!!?」」

ダブルカイザーの連携でガイストテレスは爆発した：：。

メル 「ダブルカイザー：：連携もバツチリです!」

アスナ 「何かもう敵が可哀想に見えてきたわ：：」

鉄也 「だが、良い連携だ。三人共!」

これで全ての敵を倒したな：：。

ルルーシュ 「終わったか：：」

鉄也 「少し待ってくれ。最後にやらなければならん事がある」

甲児「聞こえるか、ZERO！お前の用意した軍団は俺達が粉碎した！わかるか！これが俺達の：：人間の力だ！」

海道「悔しかったら、今度はお前が自分で戦いやがれ！」

真上「その思いやがりと一緒に木っ端微塵に粉碎してやる！」

エイサップ「甲児達の声：：あいつに届いたのか？」

アマリ「確実に聞こえてるでしょう」

ゴークイレッド「それでも現れねえって事は甲児達の事を警戒しているのか？」

ニール「おそらくそうだろうな」

グラハム「自分の想像以上の力を持つ魔神皇帝：：その存在に対し、心中穏やかではないだろうな」

鉄也「これで宣戦布告は完了した。後は奴が現れる日を待つだけだ」

アンドレイ「その時は我々全員の力を合わせて戦おう」

甲児「そういう事だ、ZERO！エクスクロス全員の光を集めて、お前の闇を払ってやるからな！」

俺達はそれぞれの戦艦に戻った：：。

しんのすけ「凄かったゾ、マジンカイザーとエンペラーの合体攻撃！」

ボーちゃん「カイザーとSKLの合体攻撃も：：良かった」

セルゲイ「魔神皇帝の力を引き出す特訓はうまくいった様だな」

甲児「いや、まだまだですよ」

鉄也「エンペラーもカイザーもSKLもその先があるようです」

真上「それを引き出す事が出来なければ、あのZEROとは戦えないだろうな」

マサオ「それって、いつ出来るんですか？明日、明後日？」

海道「おう、明日には出来るぜ！」

真上「そんなすぐに出来るわけがないだろう、バカが」

海道「そうかそうか・・・そこを動くなよ、ナル野郎！」

由木「はあ・・・あの二人は・・・」

オズマ「また始まったな」

零「あの様に喧嘩していてもあの二人は本当に良いコンビですからね」

スカーレット「ああ、そうだな」

鉄也「もしかしたら、力を引き出せる日は永遠に来ないかも知れないな」

トオル「それで良いんですか!?!？」

甲児「よくないさ。だから、必死にやるんだよ」

鉄也「神にも悪魔にもなれる存在、マジンガー・・・。だからこそ、それに乗る俺達は悪

魔のマジンガーを許しはしない」

甲児「魔神皇帝の力の全てを引き出し、その光でZEROを倒す……！必ずやってみせる！」

鉄也「そうだ。それが俺達、マジンガー乗りの使命だからな！」
マジンガー乗りの使命か……。

俺も甲児達に負けないよう頑張らないとな！

第4 2話

薔薇のバーサーカーと黒いタキシード野郎

「アック・スモツグルだ。」

ワシはホリーウッドの基地でドン・ゴロ様と通信を行なっていた。

アック・スモツグル「……ワタル達が、こちらに？」

ドン・ゴロ「そうだ。エクスクロスは、ホリーウッドに向かっている」

アック・スモツグル「まあ、当然でしょうな。ここには大地汚染作戦の中枢となるヘド口御殿もありますし。ですがご安心をドン・ゴロ様。このアック・スモツグル、奴等を返り討ちにしてやります」

ドン・ゴロ「エクスクロスを侮るなよ。第一から第四の界層のボスだけでなく、ザン兄弟も奴等にやられたのだ」

アック・スモツグル「それにつきましては、ワシの方で用意した切り札もございますので……。気がかりなのは魔徒教団の動きの方です。大地を汚したとなれば、連中が黙っていないと思います。……」

ドン・ゴロ「それこそがドアクター様の狙いなのだろう」

アック・スモツグル「では……！」

ドン・ゴロ「ドアクター様はこの作戦を足がかりに本気で教団と事を構えるおつもりと見ている」

アック・スモツグル「おお……！ ついに目障りな教団を叩き潰す日がやって来るのですな！」

ドン・ゴロ「だが、大地を汚染する事はそこに住む者達の事を考えれば、あまり望ましいとは言えない。オニキスの事もある……。故に作戦が終了した暁には……」

アック・スモツグル「わかつております。ワシが管理しております秘宝ヨカツタネの力で速やかに大地を元どおりにしましょう。それともう一つ気がかりな事が……」

ドン・ゴロ「何だ？」

アック・スモツグル「最近、この辺りでタキシードの男らしき人物が暴れ回っているという情報を耳にしました。その者に関してはどうしますか？」

ドン・ゴロ「……タキシードの男……。あのファサリナという女が話していた男の事か……）気にしなくて良い。だが、邪魔立てするのならば消しても構わん」

アック・スモツグル「了解致しました」

ドン・ゴロ「うむ……。では頼むぞ、アック・スモツグル」

話を終え、通信を切る。

アック・スモツグル「ふう……。ドン・ゴロ様と喋ると肩が凝る……。あの御方は頭が

硬すぎるからのう。ま……ワシの工場がある限り、大地を元通りにするのは無理だな……。だが、ワタルの奴を片付けければ、ドン・ゴロ様も文句は言えまい……。フフ……ついに切り札を使う時が来たようだな」

…… 楽しみになりそうだわい……！

―新垣 零だ。

俺達は大地が汚染されているという場所のホーリーウッドという場所に着いた。

ワタル「……ここがホーリーウッド……？」

ジュード「真つ暗な空に汚い空気……。おまけに変な匂いまでする……」

シン「ドアクター軍団に大地が汚染されたって聞いてたけど、ここまでとはな……」

住民「ここも昔は、その名の通り、木々に囲まれた美しい街だった……」

住民2「でも、アック・スモッグルが強引に工場を造り、そこからの汚染物質でこん

な事になってしまったんです……」

ルー「あの巨大な建物は？」

住民「あれはヘドロ御殿……。工場の中核も兼ねているアック・スモッグルの城です」

ワタル「よおし！あれをぶつ壊して、ホーリーウッドを元通りにしよう！」

住民2 「ダメです！あれを破壊しても、汚染物質がばらまかれるだけで今より酷い事になります！」

リデイ 「破壊するだけではダメだという事か…。」

ガエリオ 「では、どうすればいいんだ…？」

メル 「まずはメガファウナへ戻り、この事を報告しなければなりませんね…。」

アスナ 「ええ、対策は、その後で考えるしかないわね」

ジユドー 「くそっ…。思った以上に状況は厳しいな…。」

すると、一人の女の子が歩いて来た。

ファ 「… もしかして、ジユドー…？」

ジユドー 「え…！ファさん?!？」

ファ 「まさか、こんな所であなたに会うなんてね…。」

キラ 「ジユドー達の知り合いかい？」

ルー 「彼女はファ・ユイリィ…。私と同じようにエウーゴに所属していたけど、事情があつて離脱したの」

ケロロ 「ファ殿がいるという事は…。」

ファ 「… そちらのカエルさんも私の事を知っているのね？… あなたの考え通り、

カミーユも、アル・ワースに来ているわよ」

ジユドー「どこに!??カミーユさんは、どこにいるんだ!??」

ファ「部屋で寝ているわ…」

マリータ「何…?」

ルー「彼…まだ身体が…」

ファ「よくなってはいるけど、まだ日常生活が、やっと何とかぐらいなの」

ジユドー「カミーユさん…まだパプテマス・シロッコから受けたダメージが回復し

ていないのか…」

ファ「このホーリーウッドは空気が綺麗だつて聞いたから静養のために来たんだけど…」

…!微かな物音…!??

零「誰だ!??」

すると、家の陰からタキシードの男と女の子が出て来た。

ヴァン「あ…すまん。驚かせるつもりはなかったんだ…」

ウエンデイ「ほら、ヴァンがコソコソするから!」

ヴァン「お前が隠れようつて言ったんじゃねえか…」

ファ「ヴァンさん!ウエンデイ!」

ジユドー「ファさん…この人達は?」

ファ「この人達はヴァンさんとウエンデイ……。アル・ワースで知り合ったのよ。ちなみにこの人達も異界人よ」

ウエンデイ「ウエンデイ・ギャレットです！……こっちは寝てばかりのヴァンです」

ヴァン「違う、今は夜明けのヴァンだ」

……この男……ボーツとしているが心の中に何かドス黒い何かを持っている……。

ヴァン「何だ……？」

零「……いえ、何でもありません」

ファ「ヴァンさん達にはドアクダー軍団に襲われた時に助けられたの」

ヴァン「別に助けたつもりはないが……」

リデイ「ドアクダー軍団に対抗する力を持っているのか？」

ウエンデイ「ヴァンはヨロイ乗りなので……」

シン「ヨロイ？ノブナガ達のイクサヨロイとは違うのか？」

ヴァン「何だその、イクサヨロイってのは……？」

零「俺達の仲間の機体の事です」

ヴァン「よくわからんが違うと思うぞ」

すると、一人の男が来た。

アック・スモツグル「随分、楽しそうな会話をしているじゃないか！」

ワタル「何者だ!?」

アック・スモッグル「お前……救世主ワタルだな? 子供相手では名刺交換も出来ないが、名乗ってやろう。ワシの名はアック・スモッグル! 第五界層のボスにして、あのヘドロ御殿の主だ!」

アスナ「つて事は、あなたがホーリーウッドを汚染したのね!」

アック・スモッグル「ワシの工場をフル稼働させたら、結果的にそうなっただけだ。大地を汚染したいドアクダー様と工場を大きくしたかったワシの両方の利益が一致した結果というやつよ! グハハハハハ! この華麗なる戦略……カリスマ経営者というものはこうでなくてはな!」

ヴァン「見た目も言葉も行動も何もかも下品なオッサンだな」

アック・スモッグル「お前だな、ワシの縄張りで暴れまくっているタキシードの男とは!……確か、食い逃げのヴァンだったか?」

ヴァン「悪いが、今は夜明けのヴァンで通っている」

ケロロ「こういう奴はさっさとやっつけるに限るであります!」

アック・スモッグル「待て待て待て。いきなり社長を相手にするというのはビジネスマナーに反するぞ。お前達の相手はワシの忠実な部下が務めよう。ほれ……もうすぐ来るぞ」

ジュードー「何っ!?」

アック・スモッグルの部下という奴が来たのでゼフィールス、龍神丸、ガンダムZZ、ガンダムで対抗し、他のエクスクロスのみんなはメガファウナへ戻った…。

龍神丸「アック・スモッグルは逃げ出したか」

ワタル「先にあいつの部下を相手にする!」

零「メル達にはメガファウナへ戻って、みんなに連絡してもらっているから来るのは時間の問題だ!」

ジュードー「ファさんは逃げてくれ! ドアクダー軍団は俺達を狙ってくる!」

ファ「気をつけてね、みんな…!」

ウエンディ「ヴァン、あなたも…!」

ヴァン「あ? どうして俺まで… 俺には関係ないだろ」

ウエンディ「またそんな事言って…!」

ヴァン「兎に角、今はカギ爪の野郎を探るのが先だ! (奴にトドメを刺そうとした時に俺達はこの世界に落ちた…。 俺は呼び出せるがカギ爪の野郎を見つけなければ意味がねえ…。!)」

ルー「来るわよ!」

現れたのは魔神部隊とモビルスーツだった。

ルー「ネオジオンのモビルスーツ!?？」

ジユドー「あの下品はオツサン、異界人を部下にしているのか！」

マシユマー「うおおおおおっ!!？」

な、何だ：：あのザク：：!??

ジユドー「え：：！あのザクに乗っているのって：：」

マシユマー「うおおおおおっ!!？」

ジユドー「ネオ・ジオンのマシユマーさんか！」

零「知り合いなのか、ジユドー!?？」

ジユドー「何度か戦った事がある相手だ。だけど、あんな風な人じゃなかった：：」

アツク・スモツグル「ワハハハハ！あれこそがワシの忠実な部下、異界から来たバー

サーカーだ！」

ワタル「バーサーカーって：：？」

龍神丸「理性を失った凶暴な戦士の事だ」

ルー「あの人：：何らかの方法で正気を失っているみたいよ！」

零「あいつも精神制御をされているのか：：？」

アツク・スモツグル「その通り！奴は戦う事しか知らない男よ！」

ヴァン「：：」

ジュード「くそっ！お前がマシユマーさんをおかしくさせたのか！」

ワタル「どうするの、ジュードさん!!？」

零「あの様子じゃ、こっちの話なんて聞きそうにないぜ！」

ジュード「だったら、力づくで止めてやる！こんな戦い… マシユマーさんだつて望んでいるはずがない！行くぞ、マシユマーさん！ちよつとだけ我慢してくれよ！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VSマシユマー〉

マシユマー「うおおおおっ!!？」

零「ちっ！この世界の奴らはどうして他人を操るのが好きなんだよ… すぐに助けてやるから我慢してくれ！」

俺達はマシユマーさんのザクにダメージを与えたが…。

マシユマー「うおおおおおっ!!？」

ワタル「ダメだ！止まらないよ！」

零「こうなつたら機体を完全に破壊するしかないぞ！」

ジュード「でも、そんな事したら、マシユマーさんが…！」

ワタル「危ない、ジユドーさん！」

ジユドー「マシユマーさん……！」

マシユマー「うおおおっ!!？」

くっ……！滅茶苦茶な攻撃だな……！

ジユドー「くそっ！正気を失ってもシャングリラでやられた事は忘れてないのかよ
！」

ダブルゼータが攻撃を受け続けてる……！

ジユドー「ダブルゼータがここまで押されるなんて……！」

ルー「気をつけて、ジユドー！足下にファが……！」

ジユドー「何だっつて!!？」

ファ「あ…… ああ……」

このままじゃ、ファが踏み潰される……！

ウエンデイ「ファさん…… ヴァン、助けてよ！」

ヴァン「……」

マシユマー「！」

動きが止まった……!!？

アツク・スモッグル「何をやっている、マシユマー!!？さつさとトドメを刺せ！」

マシユマー「う……うあああああつ!!?」
て、撤退したのか……?

アツク・スモツグル「マシユマー! ええい、役立たずめが!」
ワタル「どうなってるの……?」

フアを見た途端に動きを止めた……何故だ……?

零「兎に角、今のうちに離脱するぞ、急げ!」

ジユドー「りよ、了解!」

俺達は離脱した……。

アツク・スモツグル「しまった! ワタル達を逃したか!……まあいい。あのマシユマーをうまく使えば、エクスクロスも恐るるに足らずよ。ワハハハハ、ワハハハハ! スモツグの空が心地いい! 明日もホールインワンだな!」

くそつ…… 覚えてやがれよ、スモツグ野郎……!

俺達はメガファウナへ戻った……。

ピーチャ「……じゃあ、マシユマーさんはフアさんを見て、戦いを止めたのか!!?」
ジユドー「そうとしか思えない……!」

エル「あの二人って知り合いなの?」

ジュード「マシユマーさんは何度かシャングリラに潜入していたからな……。そこで出会ったのかも知れない……」

ビーチャ「よくわからんが、フアさんが説得すれば、あの人も正気に戻るんじゃないか?」

零「それはどうだろうな……。こつちからの言葉は全然届いていなかったからな。」
ルー「フアの姿を見て、撤退したけど、場合によっては、もつと暴走する可能性もあるわ」

ジュード「そつちも何とかしなきゃいけないけど、問題はホーリーウッドの方だ」
シバラク「そうだな……。このまま放置しておくわけにはいかんだろう」

ベルリ「でも、そのヘド口御殿っていうのを壊せば、問題解決つてわけじゃないんだよね……」

ルー「下手をすれば、汚染が広がるだけだつて話よ」

アスナ「それにしてもあのヴァンつて男も戦う力があるのに手を貸さないなんて、何て男なの?」

零「……」

アマリ「どうしたの、零君?」

零「あのヴァンつて人……。恐らくだが、ある人物を探している」

メル「どうしてそんな事がわかるんですか？」

零「あの人の本性……恐らく、復讐鬼だ」

アキト「復讐鬼……？」

ユリカ「私を取り戻そうとしてくれた時のアキトみたいって事……？」

ガイ「ルルーシユも似たような事をしていたって言っていたぞ」

零「あの人にはあの人の為すべき事がある……無理に手伝わせるのはやめよう」

リョーコ「そうだな、あたし達って寄せ集めだからな。無理に戦わせるのはダメだ」

ラライヤ「それにしても、智の神エンデは大地との調和を重んじると聞きます。何と

かならないんですか、アマリさん？」

アマリ「……」

零「アマリ……？」

アマリ「ごめんなさい……。汚染を浄化する方法は私には思いつきません……。私が気

になつているのは、大地を汚染する事の目的の方です」

サリア「そう言えば、それについて検討した事ってなかった……」

アマリ「この数日……ずっと考えていたんですけど……」

零「……もしかして、ドアクターの奴らが魔徒教団を挑発している事か？」

アイーダ「え……!!？」

アマリ「零君もその考えに至っていたの？」

零「ああ。アル・ワースの秩序を守ってる組織だ……。大地との調和を説く魔徒教団に對して、大地を汚染する……。これって挑戦状って言っても言いだろう」

アンジュ「ついにドアクダー軍団と魔徒教団の正面衝突が起きるって事……？」

アマリ「私が恐れているのは、そうするという事はドアクダーには魔徒教団に勝てる算段があるという事です」

甲児「復活したオリュンポスの神々とゴゴール……。それと生け贄で復活させる闇の龍か……」

九郎「いつかは、この日が来ると思っていたが、これは面倒な事になるな……」

ウイル「問題はオニキスやミスルギがどう動くかだ」

ヒイロ「これらの組織は全て敵対しているからな」

カズミ「今は、そっちを考えても仕方ないわ……。まずはホーリーウツドの汚染をどうにかする方法を考えましょう」

しんのすけ「アンデイお兄ちゃんに穴を作ってもらったらどう？」

アマタ「穴を作っても吸い込まれなかったら意味がないよ」

アンデイ「流石に俺の力に吸い込むって力はないからな」

幻龍齋「それらはワシに任せるウラ」

ヒミコ「父上、何か策があるのか？」

幻龍齋「失われた緑を復活させる…。それならば、創界山の秘宝ヨカッタネを使うウラ」

ギロロ「よ、良かったね…。？」

アマリ「秘宝…。ヨカッタネ…。」

幻龍齋「その力は空気や水の汚染を浄化し、あつという間に緑を蘇らせると聞くウラ」
アキト「まさに不思議種って事だね」

ホープス「ところで、そのヨカッタネとやらはどこにあるのですか？」

幻龍齋「そ、それは…。」

ティエリア「もしや…。知らないのか？」

幻龍齋「面目無い…。」

ジャン「それじゃダメじゃないのさ…。！」

マーベラス「何か打つ手はねえのかよ…。」

…。待てよ、ヨカッタネってのが秘宝だとすれば今までの状況を考えると…。確認してみるか。

俺達は一度解散した…。

「戦部 ワタルだよ……」

ジュードーさんの知り合いのバーサーカーさん……汚染されたホリーウッド……魔徒教団とドアクター軍団の激突……。考えなきやいけない事が多いけど、どうすればいいか、わからないや……。

虎王「よう、ワタル」

僕が悩んでいると虎王が来た……。

ワタル「虎王……。どうして、ここに？」

虎王「そんな事はどうでもいいだろ。で、俺様のヨメはどこだ？早く呼んで、一緒に遊ぼうぜ」

ワタル「ごめん……。今はとてもじゃないけど、そんな気にはなれないや」

虎王「どうしてだ!?？」

ワタル「こんな汚れた空気の中じゃ遊ぶ気にもなれないよ……。ヨカッタネさえあれば、何とかなるのにな……」

虎王「何だ、ヨカッタネが欲しいのか。それなら、アック・スモッグルが持つてるぞ」
ワタル「え……。!?？」

虎王「あいつは汚いものが大好きだから、使う気は無いだろうがな」

ワタル「虎王……。どうして、そんな事を知ってるんだ？」

虎王「それはだな……」

すると、舞人さんが来た……

舞人「ワタル……。こんな所にいたのか」

ワタル「あ……。舞人さん！聞いてよ！ヨカッタネの在処がわかったよ！」

舞人「本当か？！」

ワタル「うん！虎王が教えてくれたんだ！ね、虎王！あ、あれ……？」

虎王「いない……。さつきまでいたのに……」

舞人「……。まあいい。エクスクロスは、ヘドロ御殿攻略のために出撃する事になった。

そのブリーフィングでヨカッタネの在処も話してくれ」

ワタル「うん！せっかく虎王が教えてくれた情報だから、絶対に役立つべきや！」

舞人「（虎王……。エースのジョーからの挑戦状を届けてくれた少年……。彼は……。何

者なんだ……）」

第42話 薔薇のバーサーカーと黒いタキシード野郎

―新垣 零だ。

俺達は出撃した……。

アック・スモッグル「エクスクロスめ。今度は全軍で来おったか。ならば、こちらも相応の接待をしてやらんとな」

マシユマーさんのザクと魔神部隊、ネオ・ジオンのモビルスーツ部隊が出て来た……

！

ヒデヨシ「先頭の奴が、ジユドールの言っていたバーサーカーだな！」

シーブツク「周辺にはネオ・ジオンのモビルスーツもいるのか」

セシリー「生体反応がないから、自動操縦のようね」

ワタル「アック・スモッグルは出撃する気はないみたいだ」

ジユドー「だったは、まずはマシユマーさんをどうにかする！」

バナージ「方法はあるのか、ジユドー？」

ジユドー「まずは語りかけてみる！言葉が届かないのなら、届くまでやる！」

アムロ「いいだろう、ジユドー。あのザクの事はお前に任せる」

ルー「フォローは私がするわ！行って、ジユドー！」

ジユドー「助かる、ルー！」

ルー「各機は攻撃開始！まずは第一波を叩いて、アック・スモッグルを引きずり出すぞ！」

ヴァン「… あいつら、また来たのか…」

ウエンディ「お願い、勝って…！」

ヴァン「…」

アツク・スモツグル「やれ、マシユマー！今度こそ、ワタルとエクスクロスを叩き潰せ！」

マシユマー「うおおおっ！！？」

ジユドー「待ってろよ、マシユマーさん！俺達があんたを絶対に助けるからな！」
俺達は戦闘を開始した…。

ダブルゼータがマシユマーのザクに近づいた。

ジユドー「思い出してくれ、マシユマーさん！俺だよ！シヤングリラのジユドーだよ！俺達、何度も戦っただろう！生身で会った事もあるじゃないか！あんたはネオ・ジオンの人間だったけど、嫌な人じゃなかった！だから、俺はあんたを救いたいんだ！」

マシユマー「うおおおっ！！？」

ジユドー「ダメだ！逆に怒らせちゃった！」

ルー「ダブルゼータにやられた記憶が彼を苦しめてるのよ、きつと！」

ジユドー「じゃあ、どうすればいいんだ！！？」

刹那「あの男の中に眠る大切な思い出……。それを呼び起こす事が出来れば、あるいは……」

ジュード「それって何なんだよ!!?」

ビーチャ「そこまでだ、ジュード! まずは力づくでも何でもいいからマシューさんを止めるしかねえ!」

ジュード「くそっ! 悪く思うなよ、マシューさん! コックピットには当てないから我慢してくれ!」

ダブルゼータはハイメガキャノンでマシューさんのザクにダメージを与えた。

ビーチャ「やったか!!?」

エル「ダメ! 全然、止まらない!」

マシュー「うおおおおっ!!?」

あ、あいつ……。闇雲に暴れやがって……。!

アムロ「この感じ……。あの男……。強化されているのか!!?」

ジュード「それが……。マシューさんの変化の原因……」

ブル「あの人もネオ・ジオンの犠牲者なんだね……」

マリーダ「……」

ミネバ「プル… マリーダ…」

ゼシカ「それでどうするのよ!?!?」

ホープス「精神をいじられ、それが原因で暴走をしているのなら、自我を取り戻すのは無理でしょう」

アマリ「やめなさい、ホープス。少なくともジユドー君は諦めてないわ」

ジユドー「アマリさんの言う通りだ! まだ希望は捨てない! 甲兒さんと鉄也さん、ラ
ンカだつて絶望の向こうから戻ってきたんだ! それに比べれば…!」

すると、一体の魔神とBD連合の機体が現れた。

アック・スモツグル「ワハハハハ! 無駄な事をしてくれる! その無駄な事… まるで
耳かきをゴルフクラブに使ってるかのようだわ!」

その例え方独特すぎてわかんねえよ!

ミフネ「あのアック・スモツグルという男… 凄まじいまでの俗物だな…」

ホイ・コウ・ロウ「アジアファイアのボス、ホイ・コウ・ロウがあのような成金オヤ
ジの下につかねばならんとは泣けてくるネ…」

アック・スモツグル「文句を言うな、アルバイト共! マシユマーの暴走に乗じて奴等
を叩き潰すぞ!」

ワタル「出てきたな、アック・スモツグル!」

アマリ「ドアクター軍団の第五層のボス！この魔従教団の藍柱石の術士が相手になります！」

万丈「頼んだぞ、アマリ……」

ルルーシュ「（この作戦の成否はお前にかかっている……。そして、状況次第では俺は零に殺される可能性もあるが……）」

そう言えば、万丈とルルーシュの二人……アマリと何か話していたみたいだが、何だったんだ……？

アマリ「大地を汚す者は魔従教団が許しません！」

アツク・スモツグル「なくにが、許さない……。だ！ドアクター様が本気を出せば魔従教団なんぞ、あっという間に壊滅だ！」

アマリ「黙りなさい！大地を汚し、智の神エンデを愚弄する者はこの私が滅します」

零「え、エラく今日のアマリは強気だな……」

ヒルダ「ちよつと黙つてろ、零！」

零「え、あ……はい……」

な、何なんだよいったい……？

アツク・スモツグル「大層な口を利くなら、お得意の魔法で、この大地を綺麗にしてみせろ！この口だけ術士！」

アマリ「それは……出来ません……」

零「あ、あの野郎……！」

ゴーカーイエロー「落ち着きなよ、零！」

零「でも……！」

アツク・スモツグル「そうだろうなく！そんな事が出来るのは、ヨカツタネぐらいしかないだろう！」

アマリ「え……ヨカツタネって創界山の秘宝の、あのヨカツタネですか!?？」

……あれ、アマリってその手の話には詳しいんじゃないかな？

アツク・スモツグル「ヌフフ……。そのヨカツタネを、このワシが持っているとしたら、どうする?」

アマリ「う、嘘!そんなの信じられない！」

零「……おい、それは……」

スザク「零、静かに！」

零「は、はい……」

ワタル「騙されちゃダメだよ、アマリさん!そんなのハツタリに決まってる！」

突き止めた張本人が何言ってるんだよ、ワタル!?

アツク・スモツグル「黙れ!このワシが嘘をついていると言うのか!」

アマリ「だ、だって……自分の目で見なきや信じられないし」

……あ、アマリ……!!?

アマリ「ねえ、オジサマ……。よかつたら、見せてくださいませんか？」

オジサマ……!!?

アック・スモツグル「どうしようかな」

アマリ「イジワルしないで、お願い」

アック・スモツグル「いいだろう、いいだろう！その可愛さに負けたわ！」

は……？

零「あの親父……ぶち殺す……！」

一夏「待って、落ち着け零！」

千冬「気持ちはわかるが堪えろ！」

アック・スモツグルの野郎がコックピットから出てきてヨカッタネを見せてきた。

アック・スモツグル「目ん玉かつぽじって、よく見ろ！これがヨカッタネだ！」

ワタル「今だ、ヒミコ！」

ヒミコ「任せるのだ！」

……あれえー？この展開何度も見たような……。

ヒミコはアック・スモツグルの手からヨカッタネを奪った……。

ヒミコ「頂きなのだ！」

アツク・スモツグル「ああ！ワシのヨカッタネが！」

ヒミコ「これはオツサンのもではなく、創界山のみんなのものなのだ！」

幻龍斎「よくやった、ヒミコ！さすがはワシの娘ウラ！」

アマリ「ナイス、ヒミコちゃん！お見事！」

零「おい、これってまさか……」

アツク・スモツグル「こ、このインチキ術士！お前……ワシをハメるために芝居を打つたな！」

アマリ「あなたのような人はきつとお宝を見せびらかすなあ……と思いましたので……。ちよつと恥ずかしかつたですけど、うまくいって良かったです」

零「……アマリ、この作戦……みんなは知っていたのか？」

アマリ「う、うん……」

零「発案者は誰だ？」

アマリ「え、えーつと……」

カレン「ルルーシユよ」

ルルーシユ「カ、カレン……？」

零「……アマリを使った事は今回の作戦で流してやる……。だが、俺に何の説明もなく

実行した事には腹立たしいなあ？ええ……？魔王さんよ」

ルルーシユ「ち、違うんだ、零！これは……！」

零「まあ待て、話なら後でゆつつくりと聞いてやるから……」

ルルーシユ「（やはり、殺されるのかもしれない……）」

ヒミコ「それじゃ、オツサン！さらばなのだ！」

ヒミコはこちらに戻ってこようとした。

アツク・スモツグル「追え、マシユマー！あの小娘から、ヨカッタネを奪い返せ！」

マシユマー「うおおおおおっ!!？」

まずいな、このままじゃあ……！

ワタル「気をつけろ、ヒミコ！」

ヒミコ「！」

フア「こつちよ！こつちに逃げて！」

ケロロ「フア殿！」

マシユマー「！」

トビア「ザクが止まった！」

ニール「あの子の出現に動揺してんのか!?？」

マシユマー「う……うう…… ああ……」

ファ「あなたは……。悲しい思いをしたんですね」
マシユマー「わ……。たしは……」

ファ「私の大切な人も……。悲しい思いで心を壊してしまいました……。私は……。もう誰にも悲しい目に遭って欲しくないんです。だから、戦いをやめてください」

マシユマー「その……。清らか……。な……。心……。あな……。た……。は……」

アック・スモツグル「何をしているか、マシユマー！ その女ごと、小娘を踏み潰せ！」
マシユマー「う……。うう……。！」

ヴァン「おい、てめえ……。！ いつまで奴の操り人形になるつもりだ？」

あれは……。ヴァンさんとウエンデイ……。！？

マシユマー「！」

ヴァン「てめえの人生はてめえのもんだ。てめえの道は自分で決めろ！ 誰かに縛られてんじやねえ！」

ウエンデイ「ヴァン……」

マシユマー「わた、し……。は……。うおおおおつ！！？」

デイオ「ダメだ！ また暴走する！」

ルー「そうはさせない！」

ゼータがザクの攻撃を受けた……。！？

ジユドー「ルー!!?」

ヴァン「お前:」

ルー「このゼータはね……。彼の魂が置き去りになってるのよ……。彼女は傷つけさせないって!」

ゼータが小さく爆発した……。!このままじゃあルーは:。!

ファ「ルー!!?」

ルーがゼータから落ちた……。

ルー「う:」

ファ「ルー!」

ウエンデイ「大丈夫ですか!!?」

ヒミコ「怪我はないか、ルー姉ちゃん!」

ルー「大丈夫:。コックピットから、投げ出されただけだから」と、一人の男がルー達の下に歩いてきた。

カミーユ「:」

ファ「カミーユ!」

ルー「待ってたわよ、カミーユ・ビダン。きつとあなたは来てくれると思っていた」
ファ「ルー!あなた、カミーユをまた戦わせるつもりなの!!?」

カミーユ「そう……じゃない……。ファ……。戦う……事を……選ん……。だのは……俺だよ……」

ファ「でも……」

カミーユ「この……アル・ワースに……。跳ばされた……。時……。俺の……。パイロットスーツも……。一緒に……。来ていた……。それは……。俺に……。戦えと……。誰かが……。言っているんだと……。思う……」

ファ「あなたは、もう十分に戦ったわ……。それなのに……」

カミーユ「ヴァンさんに……。言われたよ……。お前の大切な者が……。危険に晒されたら……。どうするか……」

ヴァン「……」

カミーユ「だから……。守りたい者がある限り……。俺は……。戦う……。それで……。傷ついたりしても……。何度でも……。立ち上がって……」

ルー「ブライト艦長やエウーゴの人達が言っていた通りの人ね、あなたって。誇りに思うわ。こうして、あなたにゼータを届ける事が出来て……」

カミーユ「ありがとう……。この機体を……。守ってくれて……」

ルー「今なら、わかるわ。あなたは今日という日のためにゼータをジュードに託したのね」

カミーユ「行つて……くるよ、ファ……」

ファ「カミーユ……」

カミーユ「その前に……種を撒いてみてくれ……」

ヒミコ「種つて……このヨカッタネか？」

カミーユ「見たいんだ。この死んだ土地に……緑が……蘇るのを……」

ヒミコ「わかつたのだ！ヨカッタネ！ホーリーウツドを蘇らせるのだ！」

ヒミコはヨカッタネを撒いた。

ひろし「ヨカッタネを撒いた！」

メル「ヨカッタネ……。その場にいる人達の幸せな思い出を緑に変えるもの……」

みさえ「幸せな思い出……？」

アツク・スモッグル「馬鹿め！コンクリートとアスファルトに覆われた大地ではヨ

カッタネも力を発揮できんわ！緑が蘇るにしても花一輪が精一杯だ！」

ルー「花が咲く……！」

ファ「一輪だけど花が咲くわ！」

ヒミコ「これつて……！」

ウエンデイ「もしかして……！」

ファ「バラの花……？」

バラの花が輝き、光がザクを包んだ……。

マシユマー「！」

アムロ「あのザクの発するサイコミユの波動が変わった……!?」

バナージ「今までとは違う……！怒りや哀しみではなく、もつと温かい何かを感じる！」

マシユマー「バラ……。そして、その横にたたずむ天使……。守るべき美しき者達……。

私は……誰かを守るために戦う者……。そうだ……。騎士だ……。私は……バラの騎士……。

マシユマー「セロだ！」

元……戻ったのか……？

ジユドー「マシユマーさん！自分を取り戻したんだな！」

マシユマー「久しぶりだな、ジユドー・アーシタ。君にも迷惑をかけたようだ」

ジユドー「いいさ！その分、これから働いてくれれば！」

ワタル「あのバラの花……。マシユマーって人の幸せな記憶で咲いたんだね！」

真上「そして、その波動……。大切な誰かを守りたいという想いは力となった……。」

そして、ゼータにカミーユという男が乗った。

ジユドー「カミーユさん！」

カミーユ「ありがとう、ジユドー。お前達のおかげで俺はまた戦う事が出来る」

ファ「カミーユ！」

カミーユ「あのマシユマーって人の幸せな記憶に触れたせいかな。頭がクリアになつていく……。俺も戦うよ。大切な人や信じるものを守るために」

アムロ「やれるんだな、カミーユ？」

カミーユ「はい、アムロさん……！」

ジユドー「カミーユさん！俺も一緒に戦うよ！」

ダブルゼータが力を発動した……。

ジユドー「ダブルゼータ！お前も俺に伝えてくれるのか！」

カミーユ「そのガンダムも人の魂を表現するマシンなんだな」

ファ「カミーユ……！私も一緒に！」

カミーユ「ありがとう、ファ」

マシユマー「天使殿……！このマシユマー・ゼロも共に！」

ファ「感謝します、マシユマーさん。私はファ・ユイリイです」

マシユマー「可憐だ……。そして、この暗い空は、あなたのような方には似合わない。覚悟するがいい、アツク・スモッグル！このマシユマー・ゼロがお前を倒し、ホーリーウツドを蘇らせる！」

幻龍齋「ヒミコは、こちらに早く戻るウラ！」

ヒミコ「じゃあ、ヨカッタネはルー姉ちゃんに預けるのだ！」
ルー「了解！任せておいて！」

アック・スモッグル「おのれ、マシユマー！おのれ、エクスクロス！こうなったら、お前達を力づくで叩きのめして、ヨカッタネを取り戻してやる！」

ヴァン「無理だな、お前じゃあ…。」

アック・スモッグル「何？？」

ヴァン「こいつ等は戦う意味ってもんを見つけたんだ…。吹っ切れた人間ってのは強いもんだぜ？」

アック・スモッグル「黙れ！タキシードの男！お前も此処で奴等と共に叩きのめしてやる！」

ヴァン「フツ、やれるものならやってみな！」

ヴァンさんは帽子のリングに指を通して帽子を180度動かし、剣でVの字に振った。

すると、上空から巨大な剣が落下してきて、剣はロボットに変形する。

そして、ロボットのコックピットの中に入り、剣を床に突き立てた…。

ヴァン「ウェイクアップ、ダン」

ヴァンさんはダンというロボットにはいり、ロボットが動き出した。

ノブナガ「あれが……ヨロイというものか……」

カミーユ「ヴァンさん！一緒に戦ってくれるんですね！」

ヴァン「勘違いすんじゃないよ……。俺はあの男のやり方が気に入らないだけだ！ウエ

ンデイ、その女と一緒にいる！良いな!?!？」

ウエンデイ「わかったわ、ヴァン！」

アック・スモッグル「来い！叩きのめしてくれ！」

カミーユ「人を苦しめた報いをお前には受けてもらう！それが、このアル・ワースで

の俺とゼータの新たな戦いだ！」

ヴァン「念仏唱えてろ！すぐに終わらせてやる！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　ヴァンVS初戦闘〉

ヴァン「こんな所で足止めを食らってる暇はねえんでな……。一瞬で終わらせてやる！」

マシユマーさん凄いな……。

凄い勢いで敵を倒していつている……。

マシユマー「この身体に漲る力……！新たな使命を得た事の喜びか！マシユマー・セロ……！守るべきもののために、身命を賭して、戦おう！」

アーニヤ「暑苦しい……」

ジェレミア「いや……。彼こそは、真の騎士道を知る者だな」

俺達はミフネの二オーにダメージを与えた……。

ミフネ「このような荒んだ土地に真の江戸を造り上げるのは不可能だ！我輩は帰るぞ！」

二オーは撤退した。

ガードダイバー「ショーグン・ミフネ……。このアル・ワースでも、おかしな野望を捨てていないとはな……」

マイトカイザーの攻撃でホイ・コウ・ロウのシャオマイにダメージを与える。

ホイ・コウ・ロウ「あ、あんな下品な成金オヤジのために戦うのはここまでネ！」
シヤオマイは撤退した……。

バトルボンバー「……とは言うが……」

ブラックマイトガイン「ホイ・コウ・ロウも似たようなものだと思うがな」

〈戦闘会話 零VSアック・スモッグル〉

アック・スモッグル「此処でお前達を倒す！」

零「そう言えばお前には前回の戦闘の借りがあつたな……！」

アック・スモッグル「そうだったな！情けなく逃げおつたのだったな！」

零「……よし決めた。てめえは顔の原型を保てなくなるまでぶん殴る！」

アック・スモッグル「き、貴様本当に正義の味方か!?!？」

〈戦闘会話 ヴァンVSアック・スモッグル〉

ヴァン「残念だが、てめえは此処で終わりだ」

アック・スモッグル「まだだ！食い逃げのヴァン！お前を倒せばワシはまだ！」

ヴァン「悪いが俺はカギ爪の野郎をぶつ殺すまでは死なねえんだよ！それから俺は夜明けのヴァンだ！覚えておけ！」

龍王丸とダンの攻撃でコンボスはダメージを負った。

アック・スモッグル「ちよ、ちよと待て！これじゃワシ…ヨカッタネを奪われ、切り札に逃げられ、作戦失敗しただけじゃないか！」

ワタル「その通り！悪役つてのは負けるのがお似合いだね！」

アック・スモッグル「く、くそおおおおつ！！？ホールイン！ワアアアン！！？」

コンボスは爆発したが…どうやらあいつは逃げたようだな…。

舞人「最後の最後まで下品な成金オヤジだったな…。」

ワタル「ドアクダー軍団のボスってそういう奴ぼっかりだね」

ワタル「よし…！僕達の勝ちだ！」

ジユドー「まだ終わりじゃないぜ、ワタル」

カミーユ「そうだな。ヨカッタネを撒くための準備をしないと」

マシユマー「それにはまず、あの悪趣味な城を破壊しなくてはな」

ヴァン「…。」

零「ヴァンさん！」

ヴァン「此処から先の事は俺は知らん…。後は勝手にやれ」

そう言い、ダンは言ってしまった…。

恐らく、ダンから降りて、ウエンディと共に行ってしまおうのだろう。

カミーユ「ありがとう、ヴァンさん……」

龍王丸「アック・スモッグルがやられた時点でヘドロ御殿からドアクダー軍団は完全に撤退している」

ワタル「じゃあ、遠慮なく……！大地を汚すヘドロ御殿なんて消えてなくなれーっ！！？」

龍王丸の攻撃でヘドロ御殿は破壊され、ホリーウッドには緑が戻った……。

俺達は機体から降りて辺りを見渡す。

ベルリ「すごい！本当に一瞬で緑が蘇った！」

アイーダ「これが創界山の秘宝、ヨカツタネの力なのね」

エイーダ「まだまだヨカツタネは、たくさんありますから、ドアクダー軍団が別の所を汚染してもすぐに対処が出来ます」

朔哉「あいつ等の作戦は、失敗って事だな」

くらら「そうね。でも、ドアクダー軍団と魔徒教団の衝突は避けられないみたいね……」

ゼクス「確かに戦火が広がる事は見逃せないが、その隙に奴らにさらわれた人達を救

出す事を考えよう」

ノブナガ「そのために確認したい事がある……」

ゼクス「それは？」

ルルーシユ「このアル・ワースという世界の成り立ちについてだ」

マシユマー「……そうか。ハマーン様は逝かれたのか……」

ジユドー「俺が言うのもおかしな話だけど、立派な最後だったよ」

マシユマー「感謝する、ジユドー君。君は確かにハマーン様の理解者だった」

ジユドー「わかるのかい？」

マシユマー「私はグレミー派との戦いで生命を落とし、このアル・ワースへたどり着いた。いや……こうして生きている以上は生命をおとしたという表現は正しくないのかも知れない。だが私は、その生と死の狭間にいた時、ハマーン様の声を聞いたような気がする。帰ってきてよかった、強い子に会えて……と。それは君の事なのだ、ジユドー君……」

ジユドー「……これから、どうするんだい？」

マシユマー「行く当てのない身だと思っではない。今の私には新たな使命がある」

ジユドー「それって……」

マシユマー「守るべきものがある限り、私は騎士として生きる。そして、それは君達、

エクスクロスと共に進む事でもある」

ルー「だつてさ、フア」

フア「そんな事、言われても…」

エル「いいなあ！頼りがいある男性二人に守られてさ！」

セシリー「そうね。少し羨ましく思うわ」

シーブック「僕じゃ足りないのか、セシリー？」

セシリー「ふふ…冗談よ、シーブック」

ビーチャ「俺じゃ足りないのか、エル!?」

エル「ちよつとね」

ジュード「カミーユさんは、いいの!? マシユマーさんの事!?」

カミーユ「決めるのは俺じゃない。フアだよ」

マシユマー「改めて聞こう。君は天使殿の何なのだ？」

カミーユ「友達ですよ…。少しまあまではあね。でも今は、もう少し先に進みたいと

思っています」

フア「カミーユ…」

マシユマー「君は彼女を守るために再び戦場に戻つたと聞く…。つまり、私と同

じ…。つまり、我々は同志であり、ライバルだな」

カミーユ「それでいいです。宜しく願います、マシユマーさん」

マシユマー「こちらこそな、カミーユ君。そして、天使殿」

フア「普通にフアと呼んでください」

マシユマー「いや：。私を闇の中から救い出してくれたあなたは私にとって崇拜すべき存在だ。この新たなバラと共にあなたに忠誠を誓おう。(ハマーン様：。マシユマーは新たなバラを授かりました。ですが、胸の中にはいつまでも消えない、もう一本のバラがあります。我が心は、永遠にあなたのものです。どうか、このマシユマー・セロの新たな戦いを見守ってください：)」

零「やつぱり、ヴァンさんとウエンディはもう何処かへ行つたか：」

ルー「はい：。ウエンディにまた会えたら会いましょうって言われました」

まあ、また会えるだろうな：。そんな気がする：。

さてと、それは置いておくとして：。

零「ルルーシユ、話をしようじゃないか」

ルルーシユ「ま、待つんだ、零！」

アマリ「零君：。」

すると、アマリが抱きついてきた：。

アマリ「ごめんね、零君：。でも、ルルーシユ君が零君に話をしなかったのは零君を

心配させないためなの」

零「俺を心配させないため…？」

ルルーシュ「この作戦にはアマリの存在が必要不可欠だった…。だが、慣れないあの演技をしてもらうためには初めは挑発をするしかない。だが、もしも方向が変わり、アマリを直接狙われた場合…。お前はまた心配をして無茶をするだろうか？だから、アマリからの提案でお前には話さないで実行したんだ」

アマリ「だから、あなたを信じられないという事じゃないの」

零「…そうか…。俺のためにしてくれたのに悪かったな、ルルーシュ」

ルルーシュ「いや、俺にも原因はある…」

零「だが、次からは俺にも話してくれよな」

ルルーシュ「了解した」

アマリ「じゃあ…今から…私の部屋に来る？」

零「行かせてもらうよ、アマリ…」

アンジュ「…」

ヒルダ「今日はイチャイチャするなー！って、言わないんだな」

アンジュ「別に…。たまには二人つきりにさせないと」

ヒルダ「毎回二人つきりのような気もするが…」

アンジュ「それでもいいのよ」

アスナ「ホント、敵わないわね…。アマリには」

メル「でも、負けません」

アスナ「私もよ！」

この後、俺はアマリの部屋に行った…。

―夜明けのヴァンだ。

俺はアック・スモツグルから話を聞いていた。

アック・スモツグル「タキシードの男…。噂通りだな」

ヴァン「誰から聞いた？」

アック・スモツグル「ドン・ゴロ様の話ではファサリナという女からだ」

ヴァン「！」

ウエンデイ「ファサリナって…！」

カギ爪の野郎の近くにいた女か…！

ヴァン「何処だ!? あいつらは何処に行った!?？」

俺はアック・スモツグルの首を絞める

アック・スモッグル「し……知らん……！ワシ……は……何も聞かされておらん……！」

ヴァン「ちいつ！」

これ以上は無駄だとわかり、俺はアック・スモッグルを投げ飛ばし、歩き出すとウエインデイがついてきた。

ウエインデイ「ねえ、ヴァン……」

ヴァン「何だ？」

ウエインデイ「みんなもアル・ワースに来ているのかな？」

ヴァン「さあ……」

来ているだろうな……あいつ等なら……。

？（やはり、お前もこのアル・ワースに来ていたか……。また会うのが楽しみだな、

ヴァンよ……。その時は私が相手をしてやる……）」

カギ爪の男を探すため、俺達は次の街へ歩き始めた……。

第43話

ヨロイVSイクサヨロイ

―新垣 零だ。

ホリーウッドを元に戻した俺達はホリーウッドを後にし、近くの街へと向かっていった。

一夏「はあっ！」

ゼロ「シエアッ！」

今、ナデシコのトレーニングルームで一夏とゼロが組手をしていた。

てか、よくゼロにくらいついてて行けるな、一夏……。

お互い、ウルトラマンレオの弟子として譲れないものがあるのだろう……。

ゼロ「へっ！やるじゃねえか、一夏！」

一夏「そつちこそ……流石は師匠の一番弟子だ！」

ゼロ「まだまだ！俺の力はこんなもんじゃねえ！」

まだ続くな、これ……。

ノブナガ「零、ここにいたか」

零「ノブナガ? どうしたんだ?」

ノブナガ「手合わせを願いたくてな」

零「手合わせって... さつき海道さんや千冬さんと散々やったんじゃないのか?」

ノブナガ「足りん... 箒ともやったが何だかあいつはジャンヌと似たような感じがしてやりにくかった...」

声が似てるからな、あの二人...。

零「いいぜ。俺もゼロと一夏を見て、高ぶっていたところだ」

ノブナガ「では、始めるとするか!」

俺は刀を手に取り、ノブナガと手合わせを始めた...。

アスナ「男の人って... どうしてああ手合わせが好きなんだろう...」

メル「じつとは出来ないんだと思います」

アスナ「(:... あれ、これって...)」

メル「(汗を流した零さんにタオルとスポーツドリンクを渡せば好感度が上がるので

は...?)」

アスナ「:... 何処行くの、メル?」

メル「アスナさんこそ」

アスナ「:...」

メル「……」

アスナ「負けない！」

メル「こちらこそ！」

……メルとアスナの二人、仲良いな……。

二人は何処かへ向かって走り去ってしまった……。

ノブナガ「零、お前の先祖は侍か？」

零「先祖の事なんて知らねえよ」

ノブナガ「そうか……。だが、武士になる資格はあると見る！」

零「オダ・ノブナガにそう言われたら光栄だな！」

ノブナガ「だが、俺に勝てるとは思わん事だ！」

零「俺だって、負ける気はねえよ！」

幾度なく刀をぶつけ合う俺達……。

ノブナガ「せやあつ！」

零「ちいっ……！」

ノブナガの攻撃で俺の手に持つ刀が弾かれ、地面に落ちる。

ノブナガ「勝負あつたな……。覚悟！」

零「するわけねえだろ！」

ノブナガの振り下ろした刀を蹴り飛ばし、俺は地面に落ちた刀を取りながら横に転がり、立ち上がる。

零「はあああつ！」

ノブナガ「ぬうっ！」

……これ本当に手合わせか？レベルが全然違うぞ……

ノブナガ「フツ……やはり、お前も強者だな」

零「まだまだこれからだ！」

これを数十分続けた後、俺達は床に倒れる。

零「はあ……はあ……引き分け、か……」

ノブナガ「……まさか……俺が勝てぬとはな……」

すると、アマリとジャンヌがそれぞれタオルとスポーツドリンクを俺とノブナガに渡してくれた。

アマリ「お疲れ様、零君」

ジャンヌ「はい、ノブナガ」

零「ありがとな、アマリ」

ノブナガ「感謝する、ジャンヌ」

俺とノブナガは微笑みながら、タオルを受け取り、汗を拭く。

しかし、そこへ勢い良く部屋に入ってきたアスナとメルが…。

アスナ「(先を越された…!?!?)」

メル「(アマリさんの存在を計算のうちに入れておくのを忘れていました…!)」

零「メルとアスナ…? どうしたんだ?」

メル「い、いえ! 何もありません!」

てかいつのまにか一夏とゼロの組手も終わってるし…。

シモン「せいが出るな」

そこへシモンが来た。

零「身体を動かすのって気持ちいいからな」

シモン「それはわかるぜ…。そんなお前らに嬉しい報告だ。次の街にはある大会が

あるみたいなんだ」

アスナ「大会?」

シモン「何でもガンメン同士が戦うガンメンバトルトーナメントってのが開催されているんだとよ」

零「ガンメンバトルトーナメントか…?」

シモン「それで、艦長にこの事を話したら、補給の間、一人だけなら参加してもいいって話になったんだ」

ゼロ「マジかよ!!?」

零「でも、俺達のはガンメンじゃないぜ?」

一夏「俺の白式やゼロなんて、ロボットでもないしな」

シモン「参加できるものなら、生身以外ならいいらしいぜ」

零「…面白そうだな…!」

ノブナガ「奇遇だな、俺もそう思っていた!」

一夏「でも、一人だけなんだよな?」

ゼロ「つて事は…!」

シモン「ここから一人を決めるってわけだ…!」

海道「俺達もいるぜ!」

九郎「優勝したら賞金も出るって話だからな!勝って金は俺がもらう!」

ロザリー「待ちな!金をもらうのは私だよ!」

ルカ「ゴーカイ」「いや、私よ!」

カレン「面白いじゃない!私の腕が何処まで通用するか試してみたいし!」

アンジュ「怪我するだけが関の山よ、カレン」

三日月「そういうアンジュも怪我しそうだし、やめておいた方がいいよ」

ほとんど全員参加かよ…!。

ユイ「わ、私は別に…」

レナ「ユイ、負けるのが怖いのか?」

ユイ「どうしてそんなに乗り気なの、お姉ちゃん?」

アマリ「わ、私もそういうのはちよつと…」

ホープス「零の奴に格好いい姿を見せる事が出来るかもしれないよ?」

アマリ「… やりましょう」

ホープス「(チョコロ甘ですね)」

アスナ「こんなに人がいてどうやって決めるのよ?」

シモン「そりゃあ…」

ヴィラル「戦って決めるしかない!」

グレンファイヤー「いいぜ、早くやろうぜ!」

ルルーシュ「待て…」

スザク「どうしたんだい、ルルーシュ?」

ルルーシュ「最も効率のいい決め方がある?」

ミツヒデ「誰も傷つかない最適なやり方がな」

C・C「そのやり方とは?」

ジェフリー「クジ引きだ」

甲児「クジ：：」

ジョーイ「引き：： ！！？」

ミラーナイト「物凄い数のクジを用意したのでしょね」

レイ「では、クジを引くとするか」

エメラナ「ジャンボット達の分は私が引きますね」

ジャンボット「私は出来るなどさらさらないのですが：：」

そして、全員がクジを引いた：：。結果は：：。

ノブナガ「：： フン、天まで我に味方をしたか」

：： ノブナガだった：：。

ヒカル「う、運まで味方につけた：：！」

イズミ「流石は破壊王だね」

ノブナガ「褒めても何もでないぞ」

鉄也「毎回思うが、それは褒め言葉なのか：：？」

オルガ「仕方ねえ：：。ガンメンバトルーナメントに出場するのはノブナガで決定だ」

ヒルダ「エクスクロスを代表して出るんだ：： みつともない真似して負けるんじゃないよ！」

クリス「賞金は山分けね」

ノブナガ「わかつている……。大船に乗ったつもりでいろ！」

シャーリー「どうしてだろう……。少し不安……」

リオ「まあ……。ノブナガを応援するしかないな」

ノブナガ「見ている、お前達の想いも命も俺が背負ってやる！」

MIIX「想いって、そんな大げさな……」

カイエン「それよりも勝手に殺すな！」

頑張れよ、ノブナガ！

―夜明けのヴァンだ。

俺達はホーリーウツドの隣町に来た……。

ウエンデイ「此処が次の街なのね」

ヴァン「やけに賑やかだな……。何か祭でもあるのか？」

カルメン99「今日はガンメンバトルーナメントの開催日だからよ」

ジョシユア「ヴァンさん！ウエンデイさん！」

ヴァン「お前ら…！」

ウエンディ「ジョシユアさんにカルールさん！」

カルメン99「カルメン99よ！」

ジョシユア「やっぱり、ヴァンさん達もこのアル・ワースに跳ばされていたんですね！」

ヴァン「見ての通りだ…。所で何やってんだ？」

カルメン99「情報屋の経験を活かして、この世界の事を調べているのよ…。カギ爪の男の事もね」

ヴァン「…何？？奴は何処に居る？？」

カルメン99「それが色々な場所に移動しているから探しに辛いのよ…。でも、ミスルギ皇国に多く出入りしてると聞いわ」

ヴァン「ミスルギ皇国…？」

ジョシユア「マナの国に存在する皇国です」

ウエンディ「カギ爪の人はそのマナの国にいるって事ですか？」

カルメン99「毎回いるみたいじゃないけど…。」

ヴァン「何だつて良い！カギ爪の情報があるなら、そこに向かってやる！」

カルメン99「でも、此処からマナの国までは相当な距離があるわよ？…。それにあ

んた達、お金はあるの？」

ヴァン「・・・ウエンデイ」

ウエンデイ「もうないわよ」

ヴァン「・・・ないらしい」

ジョシユア「じゃあ、どうするんですか!?!」

カルメン99「手軽にお金を手にする方法ならあるわよ」

ヴァン「その方法とは何だ？」

カルメン99「ガンメンバトルーナメントで優勝して賞金を取ればいいのよ」

ヴァン「ガンメンってのは獣の国のヨロイだろ？俺のは違うぞ？」

ジョシユア「生身以外で戦えるのなら、何でもいいみたいですよ」

ウエンデイ「それなら、ダンも出れるね！」

ヴァン「・・・はあ・・・仕方ねえか・・・」

カギ爪の野郎を殺すためだ・・・ やってやる・・・！

―新垣 零だ。

街に着いた俺達はコロシウムに向かう。

アル「流石は街1番のイベントだな…」

五飛「此処まで来ると、相当な猛者が揃っているのだろうな」

箒「逆にノブナガは燃えているがな…」

クルル「どうでもいいが、早くエントリーした方がいいんじゃないか?」

ドロロ「そうでござるな」

アキト「では、ロシアムに入ろう」

俺達はロシアムに入り、受付嬢の前に立った。

ノブナガ「ガンメンバトルーナメントに参加する」

受付嬢「かしこまりました、お名前をお教えください」

ノブナガ「オダ・ノブナガだ」

受付嬢「オダ・ノブナガ様ですね…。では、試合まで待機室でお待ちください」

ヴァン「すみません、ガンメンバトルーナメントに参加したいのですが…」

受付嬢「お名前は?」

ヴァン「ヴァンです」

受付嬢「かしこまりました」

零「ヴァンさん!?」

ヴァンさん達もこの街にいたのか!

ウエンデイ「皆さん！」

ジョシユア「お知り合いですか？」

ウエンデイ「前の街でちよつと……」

カルメン99「あら？ エクスクロスじゃない。あんた達、凄い人達と知り合いなのね」
舞人「貴方達は会うのは初めてですね？」

ジョシユア「ジョシユア・ラングレンです、よろしくお願いします！」

カルメン99「カルメン99よ。情報屋だからよろしく」

ナオミ「カ、カルメンナインティナイン……？」

カルメン99「九十九！ 英語で呼ばなくていいわよ！」

アイム「お二人もヴァンさんの世界から来たのですか？」

ジョシユア「そうなるわね」

カミーユ「ヴァンさんもガンメンバトルーナメントに出るんですか？」

ヴァン「ある目的の為に金が必要でな」

零「……その目的って何ですか？」

ヴァン「お前には関係ない」

零「何か役に立てるかもしれませんが……」

ウエンデイ「ある人に会う為に私達はマナの国のミスルギ皇国に向かう必要があつ

て：…その移動手段のお金がなくて：…」

サリア「ミスルギ皇国に：…」

アンジュ「異界人がミスルギに何しに行くの？」

ヴァン「…ある男を殺す為だ」

由木「え：…」

千冬「殺す：…だと？」

タスク「その男の名はエンブリヲという名前ですか？」

カルメン99「いいえ：…。本名は知らないけど、手がカギ爪になっている男よ」

ジョシユア「そのエンブリヲという人は何者何ですか？」

エルザ「マナの国を支配している男ロボ」

カルメン99「もしかしたら、カギ爪の男はそのエンブリヲって男と手を組んでいる

のかも：…」

ヴァン「つまり、その野郎を叩けば、カギ爪の野郎の情報が手に入るって事だな！そ

いつは何処に居る？」

メル「いえ：…。私達もまだ会った事がないのでそれだけは：…」

ヴァン「ちっ：…そうか：…」

すると、一人の女の子がこっちに向かって走って来た。

プリシラ「あれ？ヴァン!!？」

ノブナガ「あ?・・・お前・・・プリシラか！」

ウエンデイ「プリシラさん！」

プリシラ「ウエンデイにカルメンさん、ジョシユア君も！」

カルメン99「何、あんたもこの街にいたの？」

プリシラ「はい！ガンメンバトルーナメントに出る為に！」

ヴァン「はっ!・・・またお前と戦えるとはな・・・。決勝戦が楽しみだ」

プリシラ「勝つのは私だからね！」

ヴァンさんとプリシラという子は笑い合っている・・・。

ノブナガ「水を差して悪いが、勝つのは俺だ」

プリシラ「貴方もガンメンバトルーナメントに参加するの？」

ヴァン「お前・・・名前は何？」

ノブナガ「オダ・ノブナガ」

ヴァン「悪いが、金は俺がもらう」

ノブナガ「金など関係ない・・・。俺はただ勝ちたいだけだ」

ヴァン「面白いじゃねえか・・・。俺と当たる前に負けんじゃねえぞ、ノブナガ！」

ノブナガ「その言葉はそのまま返してやる、ヴァンよ」

プリシラ「ちよっと！私の事も忘れないでよね！」
みんな燃えてるなー……

俺も出たかった……！

ーみなさん、こんにちは……ファサリナです。

私達はガンメンバトルトーナメントが開催される街でウーさん、ガドヴェドさん、カロツサ君、メリツサちゃんと一緒にいます。

ファサリナ「皆さん、揃いましたね」

ウー「私達に何の用だ、ファサリナ？」

ファサリナ「実はこの街に面白い方が来まして……」

ガドヴェド「……ヴァンか？」

ウー「何……？？」

ファサリナ「流石はガドヴェドさん……その通りです！」

カロツサ「欠番……オレ……倒す！」

メリツサ「……ミハエルは？」

カロツサ「あんな、男……必要ない！」

メリツサ「でも……」

フアサリナ「ミハエル君なら、同志と一緒にミスルギ皇国にいますよ」
メリツサ「そうなんだ…」

ウー「それで？ 私達はヴァンを倒せばいいのか？」

ガドヴェド「私とウー… カロツサとメリツサはこのアル・ワースで蘇った身だ。再び、同志の邪魔をするのならば奴を倒すぞ」

フアサリナ「お願いします、皆さん」

ふふふ…。ヴァンさん…。また貴方と逢えるのを楽しみにしていますよ…。

レイ「ガンソ」…」

ー新垣 零だ。

数時間後、ガンメンバトルーナメントが始まった。

ヴァンさん、プリシラ、ノブナガは順調に勝ち上がり、ノブナガは準決勝も勝利した。次にヴァンさんとプリシラの戦いだ。

ヴァンさんのダンとプリシラのブラウニーは戦い出す。

ブラウニーの機動性にダンは翻弄されるが、力押しの戦法でダンがリードしていく。

ヴァン「この程度か、プリシラ！」

プリシラ「まだまだ負けないよ、ヴァン！」

何だろう：：ガンメンバトルなのにヨロイ同士の戦いの方が盛り上がるなんて：：。勝負の結果、ダンが勝利した。

つまり、決勝戦はノブナガVSヴァンさんという事になった。

ヴァン「いい勝負だったぜ、プリシラ」

プリシラ「私も楽しかった！：：。決勝戦、勝ってね」

ヴァン「当たり前だ」

ノブナガ「やはり、勝ち上がったか：：。」

零「ヴァンさん、おめでとうございます！」

ヴァン「祝われる程じゃねえよ：：。ノブナガ、決勝戦で叩きのめしてやる」

ノブナガ「叩きのめすのは俺：：。破壊王ノブナガだ」

ヴァン「なら俺はお前を倒して破壊王潰しのヴァンになってやるよ」

ヴァンさんとノブナガは笑い合った後、拳をぶつけ合って別れた：：。

決勝戦が楽しみだぜ：：！

「オダ・ノブナガだ。」

俺とヴァンはそれぞれの機体に乗る、向かい合う。

この勝負も決勝だ。

ヴァン「さあ、始めるか、ノブナガ！」

ノブナガ「我が生き様……見せよう！」

ヴァン「興味ねえよ、そんなもん！」

勝負が始まり、俺達は一斉に駆け出した……。

〈戦闘会話　ノブナガVSヴァン〉

ヴァン「お前は今まで戦って来たオリジナル7の奴らよりも強い！それは認めてやる！」

ノブナガ「おりじなるせぶん……というのは知らんが、強いのは当然だ。俺はいずれ、天地を納める者だからな」

ヴァン「天地つてのは世界つて事か？デカイ目標があるんだな、お前は！なら、お前を倒せば天地は俺のものってわけだな！」

ノブナガ「そんな事はさせん……！この勝負は俺が必ず勝つ！」

俺達は互角の戦いを見せていた……。

ノブナガ「お前もなかなかの男だ……。オダ家の家臣に欲しい程だ！」

ヴァン「誰がお前の家来になんてなるかよ！」

ノブナガ「俺もそんな気はない！お前とは戦の友でいたい！」

ヴァン「俺に友達なんて必要ねえよ！お互いこれでラストにしようぜ！」

ノブナガ「もう少しこの戦を楽しみたいが……是非もなし！」

俺達は互いに剣を振った……。これが当たった方が勝者だ……。そう当たったら……。

突然の砲火に俺達は動きを止め、砲火が放たれた方を見ると、そこには四機の機体の姿があった。

ノブナガ「何だ、あの機体は……？」

ヴァン「あれは……！」

ガドヴェド「久しぶりだな、ヴァンよ！」

ウー「また貴様の顔を見る事になるとはな……」

カロツサ「欠番……オレが潰す……！」

メリツサ「うん、頑張ろ！カロツサ！」

ヴァン「ガドヴェドにウー！それにあのチビ兄妹か！」

ノブナガ「お前の世の者か？」

ヴァン「ああ、俺が俺の世界で倒した奴らだ！奴らはカギ爪の仲間で……でも、何で生きてやがるんだ！」

ノブナガ「ヴァン、俺も死んだ身でアル・ワースに來た……。異界人の中にはその様な人間が多いらしい」

ヴァン「地獄から蘇ったって事かよ……！」

ウー「ヴァンよ、今一度、お前に勝負を挑む！」

ガドヴェド「あのお方の為に……死ね！」

ヴァン「なんだって良い！てめえらをぶっ倒して、カギ爪の野郎を探し出す！」

ノブナガ「俺も手を貸すぞ、ヴァン。戦の邪魔をする者は斬り伏せる」

ヴァン「勝手にしやがれ！」

ノブナガ「参る！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話　ヴァンVSメリツサ〉

メリツサ「欠番の人……勝つ！」

ヴァン「ガキが出てくるところじゃねえんだよ、死にたくなければ帰りな！」
メリッサ「逃げない！私にはカロツサがいるから！絶対に逃げない！」

〈戦闘会話 ノブナガVSメリッサ〉

ノブナガ「女……それも子供が乗っているのか……」

メリッサ「私は子供だよ……でも、負けない！」

ノブナガ「良き覚悟だ。死なぬ程度に相手をしてやろう！」

〈戦闘会話 ヴァンVSカロツサ〉

カロツサ「同志の敵は……死、あるのみ！」

ヴァン「また死にてえのかクソガキ！てめえには容赦しねえぞ！」

カロツサ「俺、お前嫌い！……だから、倒す！」

〈戦闘会話 ノブナガVSカロツサ〉

ノブナガ「見た目は子供でも中身は獣だな」

カロツサ「邪魔をするなら……殺す……！」

ノブナガ「良いだろう、殺しにかかってくるのなら、相手をしてやる！」

戦闘開始から少しの事だった……。

ノブナガ「……来たか」

俺の考え通りにエクスクロスが来た……。

―新垣 零だ。

たく、勝負のいいところで水を差しやがって……！

俺達は出撃する。

零「ノブナガ、ヴァンさん！お待たせしました！」

ヒデオシ「ノブ様、ご無事ですか!!？」

ノブナガ「俺を誰だと思ってるのだ、サルよ？もう少し時間をかけて来ても良かったんだぞ」

ミツヒデ「フツ、軽口を叩けるのならは無事だな」

ファ「ヴァンさん、私達も戦います！」

シモン「男同士の決勝戦に水を差した奴らをぶっ飛ばさねえとな！」

ヴァン「勝手にしろ！だが、一人ぐらいは殺すな！カギ爪の情報を得たい！」

ウエスト「ふむ、復讐の相手の情報であるな！」

アキト「どちらにしても相手するしかない！」

プリシラ「私もやるわよ！」

すると、プリシラのブラウニーも出て来た。

プリシラ「大会の邪魔をする人は許さない！それがカギ爪の人の仲間なら尚更よ！」

どうやら、一緒に戦ってくれるそうだな！

アルト「やるぞ！この街を守るんだ！」

ガドヴェド「（いつの間にか… お前の周りには沢山の人間がいる様になったのだな… ヴァン）」

戦闘開始と行くぜ！

〈戦闘会話 シンVSカロツサorメリツサ〉

シン「街の人達を危険にさせて… 何考えてるんだ、お前達は！」

メリツサ「ヒツ… ！！？」

シン「あ、ご、ごめん… 怖がらせる気はなかったんだ…」

カロツサ「妹を… 泣かせたな… ？殺す… ！」

シン「妹… ！！？この二人は兄妹なのか！！？（こんな小さな子達が敵だなんて…

「！」

〈戦闘会話　キラVSカロツサorメリツサ〉

カロツサ「お前、ミハエルみたい！」

キラ「ミ、ミハエル……？」

メリツサ「声も一緒……」

キラ「ミハエルとは誰の事なんだい！！？」

カロツサ「ミハエルみたいな奴！オレ、嫌い！」

キラ「ええっ！！？」

〈戦闘会話　スザクVSカロツサ〉

スザク「これは遊びとは違うんだぞ、退がれ！」

カロツサ「お前……オレ達を殺した奴と匂いが一緒……！」

スザク「君達を殺した人……？」

カロツサ「もう、メリツサは殺させない！」

〈戦闘会話 夏美VSメリツサ〉

夏美「挑んで来るなら、子供でも容赦しないわよ！」

メリツサ「…そっくり」

夏美「え、何が?」

メリツサ「だからこそ… 負けない！」

俺達はカロツサという子とメリツサという子の乗るシン・オブ・フライデイとセン・オブ・サタデイにダメージを与えた…。

カロツサ「くっ…！ムカつく奴ら…！」

シン「もうやめるんだ！こんな事して何になるんだ!?!」

メリツサ「あの人… 私達を止めようとしているの…?」

カロツサ「メリツサ… 聞くな… 敵の言葉…！」

メリツサ「う、うん…！」

そう言い残し、二機は撤退した…。

ルナマリア「シン、どうしたの？」

アスラン「あの二人に何かあるのか？」

シン「何かあるってわけじゃないんですけど……何か、見てられなくて……」
キラ「……」

シン・オブ・フライデイとセン・オブ・サタデイが撤退した時の事だった……。

零「……オニキスが来る！」

ホープス「来ます……！」

現れたのはアマテラス率いるオニキス部隊とアイオライトのディーベル率いる魔徒教団だった。

ワタル「魔徒教団！」

アマリ「イオリ君……！」

ホープス「またしつこくマスターを狙いに来ましたか……！」

零「カルセドニー……てめえも懲りない奴だな！」

イオリ「今日の狙いはアマリ……お前ではない」

アマリ「え……!?」

イオリ「新垣！お前を倒す！」

俺が標的対象かよ!??

零「男に追いかける趣味はねえ！」

ギルガ「勝手に話を進めないでもらおうか、魔徒教団！」

イオリ「黙れ、オニキス！お前達は引っ込んでいろ！」

ギルガ「新垣 零を倒すのは僕だ！君達こそ引っ込んでもらおう！」

イオリ「何だと…!?？」

…あれ、これもしかして俺… 戦わずに済む…？

イオリ「こうなったら…」

ギルガ「どちらが先に新垣 零を倒すか…」

イオリ&ギルガ「勝負だ!!?？」

零「いや、何でそうなるんだよ!?？」

アスナ「人気者ね、零」

零「あんな奴らに好かれたくもねえよ！」

とにかく、邪魔するなら、ぶっ倒す！

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 ヴァンVSガドヴェド〉

ヴァン「ガドヴェド… カギ爪は何処だ？」

ガドヴェド「言ったらろう、敵であるお前に教える気はない！」

ヴァン「だったら、力尽くで聞き出す！あんたが何度挑んで来ようとな！」
ガドヴェド「私を一度倒したからと良い気になるな、未熟者め！」

〈戦闘会話　ノブナガVSガドヴェド〉

ノブナガ「邪魔をした報いは受けてもらう！」

ガドヴェド「それはすまなかつたな……。だが、お前達の緩い決闘などいつでもできる
！」

ノブナガ「ならば、緩いかどうか……。自らの身体で確かめてみる！」

〈戦闘会話　甲児VSガドヴェド〉

ガドヴェド「勝負だ、小僧！」

甲児「もつとも聞きたくない声の奴とそっくりだな……。！男同士の決勝戦に首を突っ
込んだやつに俺は容赦しねえぞ！」

〈戦闘会話　舞人VSガドヴェド〉

ガドヴェド「どうした、手が止まっているぞ!!？」

舞人「な、何だかやり辛いな……。聞きなれた声で……。でも、負けるつもりはない！此

処からは倍返しだ！」

ダンの攻撃でディアブロ・オブ・マンデイはダメージを受けた。

ガドヴェド「……まだだ！」

まだ立ち上がるのか……！

タママ「まだ立ち上がるのですか……？」

アムロ「奴の力……長期戦になれば不利だ！」

ヴァン「俺がやる……！」

ノブナガ「ヴァン……」

ガドヴェド「ヴァン！あの時と同じ事を言っただけでやる！私が過ちなら、倒してみろ！それが私の贖罪だ……私が正義なら、ここで倒れる！それが私の断罪だ！！私に待つのはどっちだ、断罪か、贖罪か……？」

ヴァン「どっちも知るか！俺も同じ事を言っただけでやる……あんたの迷いなんて知るかあ……！」

ダンがディアブロに攻撃を仕掛けた。

ヴァン「もう良い加減に黙れ、ガドヴェド！」

ダンが蛮刀でディアブロに斬りかかった。

ヴァン「せいっ！」

蛮刀を二つに分割し、波状攻撃を仕掛け、上空に目掛け、ディアブロを斬り上げた

ヴァン「飛び上がりな！狙い斬りにしてやる！……さあ！お遊びはお終まいだ！」

ヴァンは出て来る時の剣の姿になり、飛び上がったディアブロに突撃した……。

ガドヴェド「私の、私の夢が散っていく……私が犯した、罪と共に……」

攻撃を受け、地面に落下したディアブロを地面に着地したダンは見下ろす。

ガドヴェド「フフフ……強くなったな……ヴァンよ……」

ヴァン「ガドヴェド……俺はあんたに助けられた」

ガドヴェド「いつの話をしている？」

ヴァン「あんたが死んでからだ……ウエンディの馬鹿兄貴にダンのサテライトベース

を壊された事があったな……。その時、あんたのサテライトベースを貸してもらったん

だ。おかげで俺は生きているよ」

ガドヴェド「そうか、ミハエルが……。フツ、これで思い残す事はない……。さあ、トド

メを刺せ……」

ヴァン「嫌だね」

ガドヴェド「何……!?？」

ヴァン「死にたきや勝手に死ぬ…。だがな、死んだからと言って罪から逃れられるわけねえだろ！」

ガドヴェド「！」

ヴァン「積みを負い続ける覚悟があるんなら、生きて罪を償ってみやがれ、ガドヴェド！」

ガドヴェド「…フツ、お前は本当に未熟者だな…」

ヴァン「あんたの弟子だからな」

ヴァンさん…ガドヴェドさん…。

ウー「いつまで話し込んでいる！…ヴァン、覚悟！」

メツツア・オブ・チューズデイのレイピア攻撃がダンに迫る…。

ウエンデイ「ヴァン！」

ヴァン「！」

しかし、レイピア攻撃はダンには当たらなかった…。

何故なら、ディアブロが斧でレイピア攻撃を防いだからだ…。

ウー「何っ…？！」

ヴァン「ガドヴェド…あんた…」

ガドヴェド「我が弟子はやらせんぞ、ウー！」

ウー「ガドヴェド、貴様……！血迷ったか……！」

ガドヴェド「同志の仲間であるガドヴェド・ガオードは二度死んだ！此処にいるのは、ヴァンの師匠でカギ爪の男を倒す……ガドヴェド・ガオードだ！」

ウー「あのお方に反旗を翻すと言うのなら、貴様からあの世に送ってやる！」

ヴァン「ちえあつ！」

メッツア・オブ・チューズデイはディアプロに攻撃を仕掛けたが、それをダンが阻み、メッツアを蹴り飛ばした。

ウー「ぐっ……！ヴァ、ヴァン……！」

ヴァン「借りは返したぜ、ガドヴェド！」

ガドヴェド「ヴァン……！」

ヴァン「あんたがカギ爪を倒そうなんて知らねえが……あいつを倒すのは俺だ！」

ガドヴェド「良き覚悟だ！共に行くぞ、ヴァン！」

ヴァン「勝手についてこい、ガドヴェド！」

ダンとディアプロは同時にメッツアに攻撃を仕掛けた……。

ヴァン「邪魔をするなら誰であろうと倒す！」

ガドヴェド「この師についてこれるか、ヴァン！」

ヴァン「俺に一度倒された奴が何言ってやがる！」

「ガドヴェド「フツ、では行くぞ！」

ヴァン「せいっ！」

まずはダンが蛮刀でメツツアに斬りかかり、二刀流にして、何度も斬り裂く。

ガドヴェド「ぬうっ！はあっ！」

背後から斧を構えたディアブロが突撃してきて、斧でメツツアを切り裂き、斧の先端を足場にして、ダンは跳躍した。

ヴァン「終わりだ！チエストオオオツ！！？」

ガドヴェド「覚悟オオオツ！！？」

最後は同時にダンはV字に斬り、ディアブロは横に斬った。

ウー「バ…馬鹿な…！！？」

ダンとディアブロの合体攻撃を受けたメツツアはダメージを受けた。

ウー「な、なんという力だ…！だが、簡単にまけるわけにはいかんだ！」

まだやる気ってわけか…！

ヴァン「いいぜ、ならてめえも容赦なくぶっ潰してやるぜ！」

ガドヴェド「勝負だ、ウー！」

ガドヴェドさんとディアブロを仲間につけた俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話　ヴァンVSウー〉

ヴァン「カギ爪の野郎は何処だ!?!?」

ウー「お前をもうあの方に会わせるわけにはいかない!」

ヴァン「なら、てめえをぶっ倒して前に進んでやる!」

〈戦闘会話　ガドヴェドVSウー〉

ガドヴェド「ウーよ。今迄世話になったな」

ウー「ガドヴェド、貴様!... あの方を裏切った罪は重いぞ!」

ガドヴェド「私はその罪とも向き合おうと決めた!カギ爪の男を倒してな!」

〈戦闘会話　ノブナガVSウー〉

ノブナガ「お前の剣では俺を捉える事はできん」

ウー「黙れ、破壊王!お前達を倒し、私はあの方の夢を実現させる!」

ノブナガ「自分自身の夢を持たぬお前に俺は負けるわけにはいかない!」

〈戦闘会話　アマリVSウー〉

ウー「魔徒教団の元術士か!」

アマリ「… わかりきってましたけど、元と言われるんですね…」

ホープス「それよりもあの方… 私は好きになれません」

アマリ「ど、どうしてなの、ホープス？」

ホープス「あいつと声がそっくりだからです…」

ウー「丁度いい！お前達もあの方の糧となってもらう！」

〈戦闘会話 カレンVSウー〉

ウー「ヴァンの仲間だというのなら、お前達も私の敵だ！」

カレン「あの人… 扇さんと声が似ている…。でも、全然違う…。 あんたは私達の敵

だから！」

ダンとディアブロの攻撃でメッツァはダメージを受けた…。

ウー「くそッ…！この屈辱… 忘れはせんぞ！」

そう言い残し、メッツァは撤退した…。

ヴァン「あ、てめえ！待ちやがれ、この野郎！」

ガドヴェド「急ぐな、ヴァン。いずれまた奴とは戦う事になる」

〈戦闘会話 零VSギルガorイオリ〉

零「…」

ギルガ「邪魔をするな、イオリ・アイオライト！」

イオリ「お前こそ、邪魔だ！ギルガ・カルセドニー！」

零「…」

ギルガ「君では新垣 零は倒せないよ！」

イオリ「その言葉… そっくりそのままお前に返してやるよ！」

零「…」

ギルガ「何なんだ、君は！」

イオリ「何だ、やるのか!?？」

零「てめえらしい加減にしろ！俺を狙うのか、喧嘩すんのかどっちかにしやがれええっ！」

〈戦闘会話 零VSイオリ〉

イオリ「新垣！アマリを返せ！アマリは俺だけのものだ！」

零「今すぐその口を閉じろ、アイオライト！アマリはものでもねえし、お前には渡さ

ねえ！あいつは俺が守るって決めたんだ！」

イオリ「お前とではあいつが不幸になる！」

零「幸せにしてみせる！これからもずっと……！」

〈戦闘会話　アマリVSイオリ〉

アマリ「イオリ君！オニキスを放置して、魔徒教団は何を考えているんですか!?？」

イオリ「まずはお前達の対処の方が先だ！オニキスなど次でいい！」

ホープス「もう彼等は私達にしか眼中がないのでしよう」

アマリ「それでは何の為の魔徒教団何ですか！」

ゼルガードの攻撃でアイオライトのディーベルはダメージを負った……。

イオリ「くっ……！新垣！俺は諦めないからな！」

そう言い残し、ディーベルは撤退した……。

零「俺だって、諦めねえよ……アマリを守る為なら！」

〈戦闘会話　零VSギルガ〉

ギルガ「今度は負けないよ、新垣　零！」

ギルガ「何故、彼にばかり人が集まるんだ！」

ゼフィルスの攻撃でアマテラスはダメージを負った……。

ギルガ「く……クソツ！次だ！次こそ君を倒す！男の敵が！」

それだけ言うのアマテラスは撤退した……。

アスナ「女の敵のあなたが何を言っているのよ……」

メル「同感です」

全ての敵を倒した俺達……。

プリシラ「勝てたね！」

ヴァン「ああ。ノブナガ、さっきの続きをしようぜ！」

ノブナガ「承知した……と言いたいところだが、今のこの街ではな……」

零「これでは賞金も無くなるだろうな……」

ヴァン「な、何だと……？」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、街に集まった……。

ウエンディ「どうだったの、ヴァン？」

ヴァン「賞金は街の復旧に使いますだとよ……」

シノ「まあ、街がこれじゃあな……」

ヴァン「取り敢えず、ガドヴェド。カギ爪について話せ」

ガドヴェド「カギ爪の男は様々な組織と手を結んでいる…。それでこそヨハンという少年やミスルギ皇国、ドアクター軍団とな…。未だ手を結んでいないのはオニキスと魔徒教団ぐらいだ」

サラ「ヨハンとも手を組んでいるんだ…。」

ヴァン「つて事はカギ爪の野郎はその何処かに…。」

ガドヴェド「ああ、いる」

ジョシユア「でも、お金が無い状況でどうするんですか？」

ヴァン「歩くしかないだろ」

カルメン99「もつといい方法があるわよ」

ガドヴェド「その方法とは？」

カルメン99「エクスクロスに入るのよ、私達、全員で」

ウエンデイ「ええっ!?？」

ヴァン「断る…。団体行動は苦手だ」

カルメン99「でも、カギ爪の男はこの世界の組織と手を組んでいるのよ？それと敵対しているエクスクロスにいれば、カギ爪の男と会う確率が高まるわよ？お金の心配もないし」

ヴァン「…」

ジョシユア「いいじゃないですか、入りましょうよ！ヴァンさん！」

ガドヴェド「敵はカギ爪だけではないという事だ。それに元の世界に帰るためにはドアクターを倒さなければならなかったな？」

しんのすけ「そうだゾ！」

ガドヴェド「ならば、答えは一つだと思うぞ？」

ヴァン「…一応、あんたらの指揮下には入ってやる…。だが、カギ爪の男は俺がやる…。それでいいな!!？」

アイーダ「構いません。艦長方には私から報告をしておきます」

零「つて事でよろしくお願いします！ヴァンさん、ウエンデイ、ジョシユア、プリシラ、ナインティナインさん、ガドヴェドさん！」

プリシラ「うん、よろしくね！」

カルメン99「だから、何で英語で読むのよ!!？」

ヴァン「呼び捨てでいい。行くか、ガドヴェド」

ガドヴェド「ああ、ヴァン…」

新たな仲間を迎え入れ、俺達は先へ進む…。

―氷室 弘樹だ……。

カルセドニーの奴がまた零に負けて傷だらけで帰って来た……ザマアねえぜ……。

ギルガ「くそツ……許さないよ、新垣 零！」

？「大丈夫ですか、ギルガさん？」

ギルガ「君は……！リン・マラカイトちゃん！こつちに来ていたんだね……」

リン「はい、これからはギルガさんのパートナーとなります。ですのでアマテラスも二人乗りになるそうです」

ギルガ「そ、そんな話……聞いていないよ！」

？「俺が決めた……」

ギルガ「あ、貴方は……兄さん……？ラゴウ兄さん……！！？」

ラゴウ「久しぶりだな……。愚かな弟、ギルガ」

カルセドニーの兄貴だと……！！？

カノン「ラゴウ・カルセドニーさん……オニキスでギルガさんよりも上の人……」

弘樹「零……」

何があっても負けんじゃねえぞ……！

弘樹「……行くぞ」

カノン「何処へ？」

弘樹「いつもの所だ……」

俺とサファイアはいつもの場所に来た……。

ある部屋に囚われている俺と零の大切な幼なじみの元に……。

弘樹「調子はどうだ、優香？」

優香「何ともないよ、弘樹……」

絶対に助けてやる……。お前を……！零を倒しても……！

分岐シナリオ3

―新垣 零だ……。

ルルーシュが話があるとみんなを集めた為、俺も集まる。

アマリ「……アル・ワースの創世神話ですか？」

ルルーシュ「そうだ。今後の戦いのためにも、それをみんなに語って欲しい」

万丈「僕は、それぞれの世界で世界征服を目論む科学者や欲望を満たす犯罪者の相手をしたり……。戦争の中で戦ってきたりはしたが、神話に出てくるような存在と遭遇した例はないんだ」

アムロ「そうだったものとも戦う事になる、このアル・ワースの伝承について、俺達はおもつと知る必要があるだろう」

零「教団が崇拜する智の神エンデはアル・ワース創世の神だと聞いているけど……。アマリ……。それにまつわる話を聞かせてくれないか？」

メル「私達もあまり、聞いた事がないので、お願いします」

アマリ「……わかりました。では、魔徒教団で語り継がれている創世の神話を語りま

しよう」

ワタル「アル・ワースが生まれた話か……。何だかワクワクするな……」

しんのすけ「絵本に出てくるお話かな？」

青葉「そうだな。きつと壮大なファンタジー物語なんだろうぜ」

九郎「けど、夢いっぱいのおとぎ話で終わるとは思えないな……」

葵「そうね、何処の世界にも黒歴史つてもものは存在するから……」

くから「だいたい神話なんてもものは神様に都合がよくて、人間にはロクでもないのが相場なのよ」

アマリ「……気の遠くなるような遙か昔……。そこには何もなかった……。宇宙も星も光も闇もない完全な無……。智の神エンデは、そこにアル・ワースを創り上げた。智とは知る事、感じる事、確かめる事……。何も無い無の中でエンデが認識する事で世界が生まれた。だから、エンデはそれを『始まりのアル・ワース』と名付けた」

始まりの……。アル・ワース……。

アマリ「アル・ワースとは星の名前ではなく、世界そのものの名前……。生まれたばかりの、その世界は知恵の実が溢れる楽園となるはずであった……。様々な宇宙から楽園を求めし者達が集まる中、そこは光と闇の龍の戦いの場になった。楽園を求めし者達は龍と共に戦い、そして傷つき、お互いに倒れた……。結果、アル・ワースは光と闇が共に

住まう世界となった」

光と闇か：：。

アマリ「残った人々はエンデを崇拜し、その中の選ばれし者達は、エンデの智を教義という形で授かった。その者達こそが魔徒教団の術士であり、その者達の使う奇跡は、エンデのドグマと呼ばれた：：。教団に伝わる神話はこのようなものです」

シバラク「拙者が知っているアル・ワースのおとぎ話もだいたい同じだな」

ユイ「私も母にそのおとぎ話は聞かされましたが、違う所はありません」

幻龍斎「多少の差異はあるが、各地に伝わっている伝承も似たようなものだウラ」

アンドレイ「待ってくれ、オニキスではその話は聞いていないのかい？」

メル「特には：：」

アスナ「何も教えられてなかったわ」

ワタル「闇の龍っていうのは、きつとドアクダーが関係しているんだらうね」

真上「オリユンポスの奴等も闇の龍に協力していたというわけか」

鉄也「その時の同盟こそが古の契約とみていいだろう」

サラマンディーネ「時系列に不明な点がありますが、アウラがアル・ワースを訪れたのは創世の時代よりも後の事だと思います」

タスク「では、楽園を求めし者達というのは俺の祖先である古の民達よりも古い時代

の入植者なんだな……」

エイサップ「ルクスの国出身のユイが知っているなら……。アンジユ、ミスルギには、こういう創世神話はあるのか？」

アンジユ「基本的な流れは教団のものほとんど変わらないわ。あそこまでエンデ押しじゃないけどね。その代わりに建国の英雄みたいのが出てくるけど、それはきつと例のエンブリヲの事ね」

ヴァン「カギ爪と一緒にいるとか言う奴だな……。」

ミコノ「シモンさん……。獣の国の方はどうなんですか？」

シモン「俺達は地下の生活を強いられていたから、そう言う言い伝えみたいなものは聞いた事がないな」

ヴァイラル「では、代わりに俺が話そう」

朗利「ヴァイラルが？」

ヴァイラル「俺は語り部としての使命を与えられた身だ。獣人に伝わる伝承は、それに調べた。それによれば、獣人の王であった螺旋王はおそらく、その光と闇の戦いにも関与していたと思われる」

幻龍斎「ほう……。！それは初耳ウラ！」

シバラク「獣人は人間の敵であった事を考えると、闇の龍の一派だったのだろうか」

幻龍齋「むう…。ワシやクラマが獣の姿に変えられたのは、それに関係しているかもしれんな…」

レナ「私からもいい？」

金本「どうした？」

レナ「詳しい事はわからないけど…。その戦いにレガリアも関係しているんだと思う…」

アルト「前に話した、ルクス・エクスマキナつてのも関係しているのか？」

レナ「おそらくは…」

メル「そういえば…」

アスナ「どうしたの、メル？」

メル「首領がボソツと言っていたのですが…。ゼフィルスらしき機体が神話に出てくると聞いた事があります」

零「ゼフィルスが…!?？」

メル「あくまでもらしきなので本当にゼフィルスかどうかはわかりませんが…」

…そう言えば、オリュンポスの奴等はゼフィルスの事を知っていたな…。

ナディア「…」

ジャン「どうしたの、ナディア？」

ナディア「な、何でもない……。 (何故だろう……。 あたし……。 この話をどこかで聞いた事があるような気がする……。)」

ネモ船長「……。」

甲児「そう言えば、気になっていたんだが、零の世界については特に何も聞いてなかったよな？」

スザク「そう言えばそうだったね」

零「話すも何も前に言っただろ？俺の世界は平和の世界よりも平和だって。特に大きな事件とかもないからな……。」

ゼハート「君の友人はどうしてオニキスに手を貸すんだ？」

零「そこが一番の謎なんですよ……。 あいつはバカですけど、状況を飲み込めない間抜けではないのですが……。 メル達は何かしらないか？」

メル「いえ……。 氷室さんとは接する機会が少なかつたので……。」

アスナ「私もわからないわ……。」

弘樹がオニキスに所属する理由……。 まさか……。 !……。 って、考えすぎか……。

零「そもそもあいつがどうやってアル・ワースに来たのかもわかりませんから……」

アセム「オニキスの首領が召喚したんじゃないのか？」

零「そうだと思いますが、いったい何のために……」

戦いとは無縁の俺達を召喚して、オニキスは何をやりたいんだ…？

ケロロ「オニキスの事はおいおい考えるところで、まずはドアクダーでありますよ！」

アマリ「ワタル君と私達…それに魔徒教団を加えた一派とドアクダー、オリユンポスとの戦いは光と闇の戦いの再現かも知れませんか」

ノブナガ「遙かな刻を経て、神話の戦いが再び起こっているのか…」

カルメン99「でも、私達と魔徒教団は一枚岩とは言えないし、異界人を組織的に配下に加えたミスルギはそのどちらとも言えない立場にあるわね」

デュオ「神話の時代のようにシンプルにはいかないな、こいつは…」

カトル「だけど、これ以上の戦いの拡大は避けるべきだと思う」

ミツヒデ「そのためにも闇側の筆頭とも言えるドアクダーの打倒を優先すべきだろう」

舞人「俺もそれに賛成です。生け贄によって闇の龍が復活する事になれば、取り返しのつかない事になるでしょうし」

アイーダ「ですが、その戦いにミスルギが介入してくると厄介な事になります」

ヴァン「俺は早い所、カギ爪を殺したい…！」

ガドヴェド「気持ちにはわかるが、お前一人の意見で動くわけにはいかん」

ヴァン「ちっ…！」

ドニエル「倉光艦長…」

倉光「そうですね。みんなも考えている事は同じみたいです」

スメラギ「仕方ないですね…」

オルガ「じゃあ…」

ジェフリー「ここは部隊を二つに分けて、事に当たるべきだろう」

名瀬「この場で、それを提案しようと考えていたから、既に編成も考えてあるぜ」

ヒュウガ「ドアクダー打倒部隊はこのままドアクダー軍団と戦いながら、さらわれた人達についての情報を集め…」。対ミスルギ部隊は、マナの国へ進路を取り、ミスルギの侵略部隊を食い止めてもらうぞ」

ルリ「ドアクダー打倒部隊にはN-1ノーチラス号、ナデシコC、真ドラゴンを母艦に各魔神とグラタン、オーラバトラー…、真ゲッター、ダイターン3、アクエリオンEVOL、勇者特急隊、パラメイル、ガンバスター、ナデシコクルー、IS操縦者、ナイトメアフレーム、イクサヨロイ、ケロロ小隊とその関係者、マジンガーチーム、WSO、ヒーローマンとジョーイさん、ウィルさん、デモンベインとその関係者、グレンラガン、ウルティメイトフォースゼロとレイさん達と怪獣達、チームD、野原一家、春日部防衛隊、カンナムさんを配置します…」

ドニエル「対ミスルギ部隊はメガファウナとシグナス、プトレマイオス、ハンマーヘッ

ド、マクロス・クォーターを母艦に、モビルスーツとヴァリアンサー、レガリアとバルキリー、ヨロイとゴークイジャーを編成する」

零「例によって、俺達は自分で部隊を選ばせてくれるんですね」

倉光「その通りだ。ドアクター打倒部隊と対ミスルギ部隊……どちらか選んでくれ」
クロ「ドアクター打倒部隊には、ワタル達、アンジュ達、スーパーロボットとルルーシュ達、シヨウ達、エイサツ達、ゼロとレイ達、ケロロ達、一夏達、しんちゃん達、アキト達、ジョーイ達、それにグラタンの三人組がいて……」

シロ「対ミスルギ部隊はモビルスーツとヴァリアンサー、レガリアとバルキリー、ヨロイとゴークイジャーがいるんだニヤ……」

マサキ「選択は任せるぜ、零」

アーニー「君の選んだ部隊に僕達はついていくよ」

アマリ「お願いね、零君」

零「じゃあ……」

どうしようかな……。

〈ドアクター打倒部隊を選択する場合〉

零「闇の龍の事も気になりますし、ドアクター打倒部隊に参加します」

ネモ船長「了解だ。君の力に期待させてもらう」

零「…え」

ネモ船長「おかしな事を言ったかな？」

零「ネモ船長から頼りされるなんて思わなかったの…」

ネモ船長「そんな風に思われていたとはな…。(内面の変化が表に出るとはな…)

我ながら情けないものだ」

號「明日には、それぞれの部隊がそれぞれの任務に向けて出発する」

名瀬「今夜は互いの壮行会という事で楽しくやってくれ」

アマリ「(神話の戦いの再現…。きつと魔徒教団との衝突も避けて通れないでしょうね…。でも、私は逃げません…。自分の意思を貫く事こそが私のドグマなのですから)」

神話の戦い…。ゼフィルスらしき機体…。か…。ゼフィルス、お前はいったい何な

んだ…？

それに、いい加減、弘樹のバカからも話を聞かないとな…。

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

- ・ N1ノーチラス号／ネモ船長
- ・ ナデシコC／ルリ
- ・ 真ドラゴン／號
- ・ ダイターン3／万丈
- ・ ダンバイン／マーベル
- ・ ビルバイン／シヨウ
- ・ アツカナナジン／エイサツプ
- ・ ギム・ゲネン／リユクス
- ・ ギム・ゲネン／アマルガン
- ・ シンデン／朗利
- ・ シンデン／金本
- ・ 龍神丸／ワタル
- ・ 戦神丸／シバラク
- ・ 幻神丸／幻龍斎
- ・ マイトカイザー／舞人

- ・バトルボンバー
- ・ガードダイバー
- ・ブラックマイトガイン
- ・蜃気楼／ルルーシユ
- ・紅蓮聖天八極式／カレン
- ・ランスロット・アルビオン／スザク
- ・ランスロット・フロンティア／C・C
- ・モルドレット／アーニャ
- ・サザーランド・ジーク／ジエレミア
- ・ヴァインセント可翔式／ロロ
- ・ザ・フール／ノブナガ
- ・オルレアン／ジャンヌ
- ・ゴ・クウ／ヒデヨシ
- ・デモンベイン／九郎
- ・破壊ロボ／ウエスト
- ・ネームレス・ワン／エンネア
- ・ジョーイ&ヒーローマン

- ・ウイール
- ・ヴィルキス／アンジユ
- ・アーキバス サリア・カスタム／サリア
- ・グライブ ヒルダ・カスタム／ヒルダ
- ・レイザー／ヴィヴィアン
- ・グライブ ロザリー・カスタム／ロザリー
- ・ハウザー エルシャ・カスタム／エルシャ
- ・ハウザー クリス・カスタム／クリス
- ・アーキバス バネツサ・カスタム／タスク
- ・グレイブ ナオミ・カスタム／ナオミ
- ・ダンクーガノヴァマックスゴッド／葵
- ・ガンバスター／ノリコ
- ・アクエリオンEVO L／アマタ
- ・ゴッドケロン／ケロロ
- ・パワード夏美／夏美
- ・マジンカイザー／甲児
- ・マジンエンペラーG／鉄也

- ・ビューナスA／さやか
- ・ボスボロット／ボス
- ・グレンラガン／シモン
- ・真ゲッター／竜馬
- ・マジンカイザーSKL／海道
- ・ウイングル／スカーレット
- ・ブラックサレナ／アキト
- ・エステバリスカスタム／リョーコ
- ・スーパーエステバリス／サブロウタ
- ・スーパーエステバリス／ガイ
- ・ウルトラマンゼロ
- ・グレンファイヤー
- ・ミラーナイト
- ・ジャンボット
- ・ゴモラ／レイ&ゴモラ
- ・カンタムロボ／しんのすけ
- ・鉄人ボーちゃん28号／トオル

- ・白式／一夏
- ・紅椿／箒
- ・ブルー・ティアーズ／セシリア
- ・甲龍／鈴
- ・ラファール・リヴァイヴ・カスタムII／シャルロット
- ・シユヴァルツェア・レーゲン／ラウラ
- ・打鉄式式／簪
- ・ミステリアス・レイデイ／楯無
- ・暮桜／千冬
- ・グラタン／グランデイス
- ・サイバスター／マサキ
- ・オルフェス／アーニー
- ・ライラス／サヤ
- ・ライオットB／リチャード
- ・ゼルガード／アマリ
- ・シャイニング・ゼファイルス／零
- ・メサイア／メル

・リリス／アスナ

〈対ミスルギ部隊を選択した場合〉

零「ミスルギの配下の異界人を放置しておけば、アル・ワースに戦火が広がっていきます。奴等を止めるためにも対ミスルギ部隊を希望します」

ドニエル「了解だ。頼りにさせてもらう」

零「大船に乗った気でいてください！」

號「明日には、それぞれの部隊がそれぞれの任務に向けて出発する」

名瀬「今夜は互いの壮行会という事で楽しくやってくれ」

アマリ「(神話の戦いの再現……。きつと魔徒教団との衝突も避けて通れないでしょうね……。でも、私は逃げません……。自分の意思を貫く事こそが私のドグマなのですから)」

神話の戦い……。ゼフィルスらしき機体……。か……。ゼフィルス、お前はいったい何なんだ……。？

それに、いい加減、弘樹のバカからも話を聞かないとな……。

- ・メガファウナ／ドニエル
- ・シグナス／倉光
- ・プロレマイオス2改／スメラギ
- ・ハンマーヘッド／名瀬
- ・マクロス・クォーター／ジエフリー
- ・Zガンダム／カミーユ
- ・メタス／ファ
- ・ZZガンダム／ジユドー
- ・百式／ビーチャ
- ・ガンダムMk-III／エル
- ・キュベレイMk-III／プル
- ・ザクIII改／マシユマー
- ・Vガンダム／アムロ
- ・リ・ガズイ／ルー
- ・ジエガン／ケルベス

- ・ユニコーンガンダム／バナージ
- ・バンシイ・ノルン／リディ
- ・クシャトリヤ／マリィダ
- ・シナンジュ／フロントタル
- ・ガンダムF91／シーブツク
- ・ビギナ・ギナ／セシリー
- ・クロスボーンガンダムX1改・改／トビア
- ・ウイングガンダムゼロ／ヒイロ
- ・ガンダムデスサイズヘル／デュオ
- ・ガンダムヘビーアームズ改／トロワ
- ・ガンダムサンドロック改／カトル
- ・アルトロンガンダム／五飛
- ・トールギスIII／ゼクス
- ・トールラス／ノイン
- ・デイスティニーガンダム／シン
- ・ストライクフリーダムガンダム／キラ
- ・インフィニットジャスティスガンダム／アスラン

- ・フォースインパルスガンダム／ルナマリア
- ・ガイアガンダム／ステラ
- ・ダブルオークアンタ／刹那
- ・ガンダムサバーニャ／ロックオン
- ・ガンダムハルト／アレルヤ
- ・ラファエルガンダム／ティエリア
- ・ガンダムデユナメス／ニール
- ・ガツデス／アニュー
- ・ブレイヴ指揮官用試験機／グラハム
- ・GNⅠXⅠⅤ／パトリック
- ・GNⅠXⅠⅤ／アンドレイ
- ・GNⅠXⅠⅠⅠ／セルゲイ
- ・ガンダムAGEⅠ2 ダークハウンド／アセム
- ・ティエルヴァ／ジラード
- ・ガンダムレギルス／ゼハート
- ・フロンファルシア／フラム
- ・ギラーガ改／レイル

- ・ Gーセルフ／ベルリ
- ・ Gーアルケイン／アイーダ
- ・ Gールシファー／ラライヤ
- ・ モラン／リンゴ
- ・ ガンダムバルバトスルプス／三日月
- ・ ガンダムグシオンリベイク／明弘
- ・ ガンダムフラウロス／シノ
- ・ 百鍊／アミダ
- ・ 百里／ラフタ
- ・ 辟邪／ハツシユ
- ・ ガンダムキマリスヴィダール／ガエリオ
- ・ レギンレイズ・ジュリア／ジュリエッタ
- ・ ランドマン・ロディ／アストン
- ・ YF―29 デュランダル／アルト
- ・ VF―25 メサイア／オズマ
- ・ VF―25 メサイア／ミシエル
- ・ RVF―25 メサイア／ルカ

- ・クアドラン・レア／クラン
- ・VB—6 ケーニツヒモンスター／カナリア
- ・YF—30 クロノス／リオン
- ・VF—27γ ルシファー／ブレラ
- ・VF—19 エクスカリバー／アイシヤ
- ・VF—11 サンダーボルト／ミーナ
- ・ダン・オブ・サーズデイ／ヴァン
- ・ブラウニー／プリシラ
- ・ディアブロ・オブ・マンデイ／ガドヴェド
- ・ルクシオン／青葉
- ・ブラディオオン／ディオ
- ・アレクト／ユイ
- ・テイシス／サラ
- ・ゴークイオー／ゴークイレッド
- ・サイバスター／マサキ
- ・オルフェス／アーニー
- ・ライラス／サヤ

- ・ライオットB／リチャード
- ・ゼルガード／アマリ
- ・シャイニング・ゼフィルス／零
- ・メサイア／メル
- ・リリス／アスナ

対ドアクダールト

第44話 正義と友情と

「俺様は虎王だ。」

今、俺様は部屋でドン・ゴロと話していた。

虎王「すごいよな、エクスクロスは！アック・スモツグルまでやつつけちまうとは！」
ドン・ゴロ「笑い事ではありませんぞ、虎王様。ヨカッタネを奴等に奪われた今、大地を汚染しても徒労に終わってしまいます。つまり、対魔従教団戦略にあった大地汚染作戦は完全に失敗したのです」

虎王「だったら、エクスクロスを倒せばいいだろ？」

ドン・ゴロ「その通りでございます。よって、次は私も出撃します」

虎王「では、俺様も……」

ドン・ゴロ「なりません！」

ド、ドン・ゴロの奴、鬼の顔に……！！？

虎王「うわああっ！！？」

ドン・ゴロ「虎王様は私の課した算数の宿題をやつていてください」

虎王「鬼の顔をいきなり使うのは、ずるいぜ！何も言えなくなっちゃう！」

あ、ドン・ゴロの顔が戻った……

ドン・ゴロ「どうかご自覚を、虎王様。あなたは魔界のプリンス……。魔界の王ドアク
ダー様のご子息なのですから」

そう言い残し、ドン・ゴロは部屋から出て行つた……

虎王「……わかつたよ、ドン・ゴロ……。なくんて言うと思つたら、大間違い！こうなつ
たらドン・ゴロよりも先回りして、今度こそ救世主の顔を見てやるぞ！」

カエサル「(聞き分けのない子供だ……。一応、ドン・ゴロ殿に監視をしていると言わ
れたが……。これでは無意味だな)」

テイベリウス「あら？子供の部屋を覗き見？」

カエサル「これはこれは、テイベリウス殿……。いえ、私にはそう言う趣味はございま
せん。ただ、任務を受け、虎王様を監視しておるのですよ」

テイベリウス「私達にも出撃命令が出たわ」

カエサル「キバ殿とケロロ殿は？」

テイベリウス「二人共いないわ。どこ行つたのかしらねえ？」

カエサル「(因縁との対決……。待つていてください、イチ姫……。)」

「新垣 零だ。」

ミスルギ對抗部隊と分かれた俺達、ドアクター打倒部隊……。今は外で子供組が遊んでいた。

マリー「ねえ、ヒミコ！今日は何して遊ぶ？」

ヒミコ「鬼ごっこ！」

しんのすけ「流石に鬼ごっこは飽きたゾ」

ヒミコ「じゃあ、かくれんぼ！」

マサオ「ヒミコちゃんが忍法を使ったら、見つけれないよー！」

マリー「久しぶりにおままごとがいいなあ！」

ネネ「いい所つくわね、マリーさん！じゃあ、リアルおままごとしましよー！」

トオル「ええっ!?？」

ヒミコ「いいよ！じゃあ、あちしは母上の役なのだ！」

すると、一人の子供が来た。

虎王「では俺は、そのオットの役だな」

ヒミコ「あ、虎ちゃん！」

ワタル「虎王が来たんなら、他の遊びの方がいいんじゃない？」

ヴィヴィアン「じゃあ…。」

ボーちゃん「缶ケリ…。しよう！」

ワタル「いいね！最後に来たから、虎王が鬼だね！」

虎王「鬼!?？」

トオル「嫌なんですか？」

虎王「そ、そうじゃないが、今はちよつと鬼という言葉を聞くと…。」

ヒミコ「じゃあ、決まりなのだ！」

ワタル「この間はダメだったから、今日はたつぷりと遊ぼうね、虎王！」

虎王「おう！望むところだ！（救世主探しは後回し！まずはたくさん遊ぶぞ！）」

零「楽しそうにしてるな、子供組」

メル「こここのところ、戦いの連続だったので、いい羽休みになると思います」

零「メルは優しいな。いいお母さんになるんじゃないか？」

メル「は、はひつ!?？わ、私がいいお母さんですか…!?？」

零「…。なんで囁んだんだよ今…。」

メル「そ、それは…。」

アスナ「恥ずかしかつてはダメよ、いいお母さん？」

メル「ア、アスナさん！」

零「何言つてんだよ、アスナもいいお母さんになれると思うぞ？」

アスナ「ふえっ!!？」

零「知ってるぜ？お前が空き時間に子供組と遊んでやってるのを」

アスナ「な、なんで見てるのよ!!？」

零「悪いかよ」

アスナ「べ、別に……悪くはないけど……」

メル「そういう零さんも遊んであげているじゃないですか」

零「……あのリアルおままごとつてのだけはもう二度とやりたくねえ……」

いやマジで死にそうになった……。うっ……。思い出ただけで吐き気が……！

アスナ「(な、何があつたの……?)」

舞人「……どう思います、虎王の事？」

万丈「ここから見る限り、普通の子供だね」

ヴィラル「あの身のこなし……。何やらかの訓練を受けたようにも見えるが……」

九郎「それを言うんなら、ヒミコだつて普通じゃないぜ」

ルルーシュ「だが、あの少年……。アック・スモッグルやヨカッタネの事を知っており、

エースのジョーやエムの挑戦状を預かつてきた……。やはり、ドアクター軍団の関係者

と見るべきだろう」

カレン「いいじゃない、そんな事」

ルルーシュ「良くはない！もしかしたら、スパイかも知れないのだぞ！」

C・C「自らの素性や真意を仲間にも隠していたお前が言うセリフじゃ無いな…」

シャーリー「私なんて、記憶を消されたし…」

ルルーシュ「う…！」

カレン「そりやスパイだったら、何とかしなきゃいけないけど、今はいいじゃない。仲良く遊んでいる友達同士なんだから」

ルルーシュ「友達…」

C・C「お前にはわからない概念だろうがな」

ルルーシュ「黙れ、魔女！」

スザク「…」

ロロ「兄さん…」

ルルーシュ「その目をやめろ、スザク、ロロ！俺を哀れむな！」

舞人「友達…か…。そうだな…」

一夏「やつぱり、友達っていいよな！」

ん？誰かが歩いてきた…？

？「のんきなものだな、旋風寺 舞人」

? 2 「そのような甘い事を言っている暇があるのか、織斑 一夏?」

舞人「お前達は…!」

エースのジョーとエム…!

ジョー「メツセンジャーボーイに任せず、今度は自分達で来てやったぞ」

マドカ「今度こそ、お前を潰す!」

舞人「エースのジョー!」

一夏「エム!」

アル「たった二人だけで来るとはな!」

ジョー「では、どうする? 正義の味方を名乗る連中が俺達を袋叩きにするのか?」

マドカ「私達はそれでも構わないぞ?」

シモン「自惚れんなよ。舞人や一夏の前に俺が一人で相手をしてやってといいんだ

ぜ」

ヴィラル「待て、シモン。こういう奴等の鼻っ柱をへし折役は俺に任せろ」

舞人「待つてください、シモンさん、ヴィラルさん」

一夏「あの二人は俺や舞人の相手です」

千冬「お前達…!」

ジョー「言ってくれるな、旋風寺 舞人。その言葉を聞ければ、ここに来た甲斐もあつ

たというものだ」

舞人「用件を言え」

マドカ「お前達に最後の勝負を挑みに来た」

一夏「最後……？」

ジョー「俺は旋風寺 舞人を倒すためにウォルフガングに雇われた男だ……。だが、パープルが組織のトップに立った今、お前との勝負には、この前のような邪魔が入る……。俺に残された時間は少ないだろう」

マドカ「私もジョーと同じ意見だ」

舞人「それが最後の意味か……」

すると、ジェレミアさんが焦った表情で走って来た。

ジェレミア「ルルーシユ様……！BD連合が急接近しています……！」

何だと……？

ルルーシユ「みんな！戻るぞ……！」

ジョー「ちっ……。パープルの奴……。思った以上に仕掛けが早いな」

マドカ「時間がないとは言ったがここまでとは……！」

舞人「ジョー……」

一夏「エム……」

ジョー「俺達の決意は変わらん。旋風寺　舞人、織斑　一夏…俺達の挑戦を受けてもらうぞ」

舞人「いいだろう、ジョー、エム。だが、一つだけ条件がある」

マドカ「条件？」

一夏「俺達が勝つたら、言う事を聞いてもらうからな！」

白式をメンテナンスに出していた為、俺とワタル達を残り、一夏達はそれぞれの艦へ戻った…。

第44話　正義と友情と

ジェレミアさんの言う通り、BD連合の機体が現れた…。

パール「まずは挨拶代わりだ！派手に行くぜ！」

あの野郎…！容赦無く打ってきやがって…！

虎王「馬鹿野郎！不意打ちなんてのは卑怯者のやる事だぞ！ここには虎王様もいるつてのに何をしやがる！」

ワタル「危ない、虎王！」

ワタルは虎王と共に砲撃を避けた……。

虎王「くそ！ パープルの奴、好き放題やりやがって！」

ワタル「何やってんだよ、虎王！ここにいたら危ないじゃないか！」

虎王「うるさいぞ、ワタル！そう言うお前は何で逃げなかつた!?？」

ワタル「友達を放って逃げられるわけないだろ！」

虎王「友達って……何だ？食いもんか？」

零「違うつての！助け合ったりする仲間の事だ！」

虎王「友達……俺様とワタルは友達か！」

ワタル「笑ってる場合かよ！」

虎王「なんだな知らないけど、嬉しい気分だ！そうか！こういうのが友達っていうのか！ははは、そうか！」

零「……なあ、ワタル……。お前の友達、大丈夫か？」

ワタル「う、うん……。取り敢えず、さっさと逃げろ、虎王！BD連合のロボットが来る！」

虎王「お前はどうするんだ、ワタル!?？」

ワタル「僕は……。救世主として戦う！」

虎王「何っ!?？」

ワタル「行くぞ!!？」

ワタルは龍神丸を呼び出した。

零「ゼフィールス！」

アル「九郎！」

九郎「応！憎悪の空より来たりて、正しき怒りを胸に、我等は魔を断つ剣を執る！汝、無垢なる刃——デモンベイン！」

俺と九郎、アルまぜフィールスとデモンベインを呼び、乗る。

虎王「そんな……。ワタルが……。救世主だったなんて……。ワタルは……。父上の敵だったのか！」

後ろに戦神丸と幻神丸も現れた。

パープル「旋風寺 舞人は出てこないか……。では、俺は後退だ」

パープルの野郎……。 舞人以外の奴には興味ないって事か……。！

ワタル「パープルめ！逃げるとは卑怯だぞ！」

シバラク「待たせたな、ワタル、零、九郎、アル！公衆電話がなかったんで、ちよつと遅れた！」

アル「心配はない！」

幻龍斎「魔神を呼び出せるワシ達とゼフィールスとデモンベインだけで、ここは戦うウ

ラ！」

ヒミコ「ちなみにダイターン3はメンテ中なんで、カムヒアできなかつたのだ！」

九郎「これだけの数なら俺達だけでどうにかなる！」

零「行くぜ、ワタル！」

ワタル「うん！よおし！虎王を守るためにも頑張るぞ！」

俺達は戦闘を開始した……。

着実に敵を倒して行く俺達……。

シバラク「よし！この調子で持ち堪えていれば、エクスクロス本隊が来てくれる！」

幻龍斎「気を抜くな、シバラク！何か来るぞ！」

現れたのはクオ・ヴァーティスとベルゼビュート……そして、鬼の魔神だった。

ワタル「鬼だ……！鬼の魔神だ！」

シバラク「奴の放つ殺気……！只者ではないぞ！」

幻龍斎「あの鬼の魔神……！ドアクダー四天王最後の一人、ドン・ゴロのものウラ！」

零「カエサルのもいる……！」

アル「九郎……彼奴もおるぞ！」

九郎「触手野郎か……！久しぶりの登場だな！」

龍王丸「気をつける、ワタル！ザン兄弟よりも手強い敵のようだ！」

ワタル「僕にもわかるよ、龍王丸……！でも、あいつを倒さなければ、ドアクダーに勝つのも無理なんだ！行こう、零さん、九郎さん、アルさん、先生、親父様、ヒミコ！僕達の力を合わせて、ドン・ゴロ達を倒すんだ！」

シバラク「心得た！」

零「先陣は俺がきる！」

幻龍斎「いざ、参るウラ！」

九郎「やるぜ、アル！」

アル「わかつている！」

俺達はドン・ゴロの魔神の前まで移動する。

ドン・ゴロ「身の程知らずめ……！このドン・ゴロをザン兄弟と同じだと思ふなよ！」
カエサル「我々の力が必要ですか？」

ドン・ゴロ「必要ない！」

テイベリウス「なら、任せるわ！」

鬼の魔神の攻撃で戦神丸と幻神丸は吹き飛ばされた。

ワタル「先生！親父様！」

零「無事ですか!!?」

シバラク「ば、馬鹿な……！戦神丸が一撃で……！」

幻龍斎「ヒ、ヒミコ！脱出するウラ！」

そ、そんな……戦神丸と幻神丸が爆発した……!!?

ワタル「戦神丸と幻神丸がやられた！」

ドン・ゴロ「次は貴様だ、救世主ワタル！」

龍王丸「後退だ、ワタル！一度、距離を取れ！」

ワタル「で、でも……！」

零「九郎さん！アル！」

九郎「わかつてる！」

零「今の内にワタルは後退しろ！」

ワタル「でも、零さん達が……！」

九郎「いいから黙って、大人の言うことを聞け！」

ワタル「う、うん……！」

ゼフィルスとデモンベインが龍王丸を後退させようと動き出し、龍王丸も後退して行くが……。

突如現れた魔神の攻撃を受けてしまう……。

ワタル「うわああああつ!!?」

アル「ワタル!!?」

九郎「何なんだよ、あの魔神は!」

零「伏兵を置いていたのか…!!?」

ドン・ゴロ「邪虎丸!!? 虎王様がいらつしやつたのか!!?」

虎王様だと…!!?

ワタル「虎王…!!? 今、虎王と言つたのか!!?」

虎王「そうだ、ワタル」

ワタル「その魔神に乗っているのは虎王なのか!」

虎王「気安く俺様の名前を呼ぶな! 俺様は… 魔界王子、虎王…! ドアクダーの息

子だ!」

九郎「はあつ!!? 何だよ、それ!!?」

零「関係はあるとは思つていただけど… まさか、ドアクダーの息子だつたとはな…!

」

ワタル「虎王が… ドアクダーの息子…」

虎王「ワタル! 貴様は俺様の父上の敵である救世主なのか!!?」

ワタル「虎王! お前がドアクダーの息子だなんて嘘だろ!!?」

虎王「俺様の質問に答えろ！」

ワタル「……本当だ。僕はドアクターを倒して、創界山の虹を七色に戻すために戦っている」

虎王「俺様が馬鹿だったぜ……。父上の敵に騙されて、お前やヒミコを友達だと思っちゃまった！」

ワタル「それは違う！虎王、僕達は本当に……」

虎王「うるさい！友達なんて欲しくない！俺様が欲しいのは、父上のような偉大な力だ！」

九郎「てめえ、このクソガキ！何てこと言いやがるんだ？？」

虎王「黙れ、エクスクロス！」

ワタル「虎王！僕の話聞いて！」

龍王丸「態勢を立て直せ、ワタル！エクスクロスが来た！」

龍王丸の言葉通り、NーNーチラス号とナデシコC、真ドラゴンが現れ、みんなが出撃した……。

舞人「無事か、ワタル！」

一夏「零達も大丈夫か？？」

ワタル「僕達は大丈夫だけど、先生と親父様が……！」

スカレット「シバラク先生と幻龍斎さんがやられたのか!?？」
ルリ「すぐに回収班と救護班を回してください！」

ハーリー「わかりました！」

葵「あの二人を倒したとなると、かなりの強敵って事ね！」

カズミ「あの鬼と虎の魔神……！凄まじい殺気を放っているわ！」

ワタル「違うよ！虎の魔神は敵じゃない！あれに乗っているのは虎王なんだ！」

トオル「え……!?？」

マサオ「嘘……!?？」

しんのすけ「本当に……虎王君なのか!?？」

虎王「その声はしんのすけ……？それに春日部防衛隊の奴らも……！貴様達も敵だったのだな！」

ルルーシュ「やはり、あの少年……ドアクダー軍団の人間だったか！」

ドン・ゴロ「聞け、エクスクロス！私はドアクダー四天王のドン・ゴロ……！そして、こちらは魔界の王ドアクダー様の一人息子……魔界王子、虎王様である！」

ヴィヴィアン「トラちゃんが!?？」

ボーちゃん「ドアクダーの……子供……！」

ネネ「そんな……嘘……」

ジャンヌ「二人はそれを知らないまま友達になった……」

虎王「黙れ！俺様に友達などいない！」

ワタル「虎王！」

ノブナガ「カエサル…… お前もここにいたのか」

カエサル「久しぶりだな、ノブナガ……。今日こそは貴公の首を持ち帰るとしよう」

ノブナガ「ふっ、この破壊王の首を取れると思うな」

ミツヒデ「カエサル……！」

ブラックマイトガイン「気をつけろ！まだ何か来るぞ！」

現れたのは…… 轟龍と黒騎士か……！

ジョー「待たせたな、旋風寺 舞人」

マドカ「……」

舞人「ジョーとエムか！」

ジョー「こいつが俺の新たな愛機…… ウォルフガングの最高傑作、轟龍だ。しかし、

ウォルフガングの奴、前回の敗北が相当悔しかったらしいな。こいつにドリルをつける
とはな」

マドカ「今日で全てを終わらせる……！」

一夏「俺はもう迷わない……。お前が敵なら、倒す！」

虎王「エースのジョー、エム……！周りの連中はお前達とドン・ゴロ達に任せる！」
ジョー「虎王か……。お前の正体は聞かせてもらった」

マドカ「まさか、ドアクダーの息子だったとはな……。まあいい、お前の指示を聞いてやる」

ジョー「だが、それは、お前がドアクダーの息子だからじゃない。ワタルとの決着をつけたというお前の気持ちが変わるからだ」

虎王「へへ…… 挑戦状を届けてやった甲斐があつたつてもんだ」

龍王丸「ワタル！みんなと合流するんだ！」

ワタル「……」

龍王丸「ワタル！」

ワタルの奴…… 虎王の事で頭がいつぱいなのか……！

ワタル「わ、わかつたよ……！」

ジョー「そういう事だ、旋風寺 舞人。虎王の戦いの邪魔はさせんぞ」
マドカ「お前達の相手は私達だ！」

舞人「ジョー！お前は友達が戦うような状況を認めるのか！」

一夏「友達は助け合う存在だ……。それなのに戦うなんておかしい！」

ジョー「お前達の正義はそれを許さないらしいな……」

マドカ「ならば、その正義で私達をねじ伏せてみる！私達を従わせたいのならば！」

甲児「ワタル……！戦えないのなら、後退しろ！虎王の相手は俺達がする！」

ワタル「僕は……」

アマリ「ワタル君……」

ワタル「僕も……戦うよ！だって、僕は救世主だから！先生と親父様、ヒミコのためにも僕はドアクダー軍団と戦う！」

龍王丸「よく言った、ワタル！お前のその勇気を私は力に変える！」

零「だが、無茶だけはするなよ！辛いなら俺達が変わる！」

ワタル「わかつてるよ、零さん！行くぞ、虎王！お前がドアクダーの息子なら、僕は……僕は！」

虎王「ドン・ゴロ！俺様の恥は、俺様が自分で始末をつける！覚悟しろ、ワタル！俺様と邪虎丸が父上の敵であるお前を地獄に送ってやる！」

俺達は戦闘を再開した……。

敵を倒しているとさらに何かが現れた……。

現れたのは……レギオノイドと……黒いゼロが数体……！！？

アンジュ「ぜ、ゼロ!?」

サブロウタ「どうなってるんだよ、これ!?」

グレンファイヤー「こいつら… ダークロプスじゃねえか!」

アキト「ダークロプス…?」

ミラーナイト「ゼロのデータで開発された戦闘ロボットです!」

ジャンボット「ビート・スターはこんなもので…!」

?「それは違います」

ゼロ「誰だ!?」

現れたのは二体の宇宙人だった。

ダークゴーネ「このダークロプスを開発したのはビート・スターではありませんよ」

アイアロン「久しぶりだなア!」

ゼロ「なっ…!? てめえらは!?」

ミラーナイト「アイアロン… それにダークゴーネまで…!?」

グレンファイヤー「てめえらまで生き返っていたのかよ!?」

アイアロン「ああ、お前らに復讐するためにな!」

ダークゴーネ「カイザーベリアル陛下の仇… 取らせてもらいますよ」

ドン・ゴロ「我々の邪魔をする気か?」

ダークゴーネ「そんな拙僧な……。私達の目的はあくまでもウルティメイトフォース
ゼロです。救世主ではありません」

ジョー「ならば、放っておいてもいいだろう」

ティベリウス「わたしはデモンベインをやればそれでいいもの」

ウエスト「吾輩達の事はどうでもいいと!?!」

エンニア「何かムカつくね!」

ティベリウス「勿論、裏切り者にも死、あるのみよくん!」

カエサル「ノブナガ、覚悟してもらおう!」

ノブナガ「するのはお前だけだ、カエサル!」

虎王「ワタル!他の奴らなど関係ない!俺様は貴様を倒す!」

ワタル「僕だって簡単に負けるわけにはいかないんだ!」

俺達は戦闘を再開した……

〈戦闘会話　ゼロVSダークゴーネ〉

ダークゴーネ「ウルトラマンゼロ……。ベリアル陛下に代わり、私があなたを倒しま
す」

ゼロ「お前がベリアルの代わりをするなんて二万年早いぜ！」
ダークゴーネ「フフフ：。いずれあなたが大いに驚いてしまう事が起こります…。その時までせいぜい余裕を見せていてください」

〈戦闘会話　ジャンボットVSダークゴーネ〉

ダークゴーネ「あの時の借りを返すのでしょうか」

ジャンボット「あの時はナオも見てくれたが、今の私ならば私一人で充分だ！」
ダークゴーネ「あまり、嘗めていると痛い目を見ますよ？」

〈戦闘会話　ゼロVSアイアロン〉

ゼロ「ベリアルの配下の甲羅野郎か！」

アイアロン「お前の攻撃でも俺の甲羅を破る事はできん！」
ゼロ「なら、その甲羅事、てめえを銀河の彼方にぶっ飛ばしてやるよ！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSアイアロン〉

ミラーナイト「私に敗れたのに、しつこい方ですね」

アイアロン「今の俺をあの時の俺と一緒にするなよ！俺の甲羅は強化されているんだ

よー！」

ミラーナイト「私だって、あの頃の私とは違いますよ。今から見せてさしあげましょう！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSアイアロン〉

アイアロン「お前……ただの地球人ではないな？」

ルルーシユ「ほう……。よくわかったな」

アイアロン「話に聞いたが、お前は世界と……全ての地球人と敵対したそうだな。悲しいなあ？ 同じ地球人が戦うなどと……」

ルルーシユ「かつてある男がこう言っていた……。人間は平等ではないと……。だからこそ、俺は平等に生きる未来を目指す！ それを邪魔するのなら、貴様を倒す！」

ダークゴーネとアイアロンにダメージを与えた俺達……。

ダークゴーネ「ふむ、あの時よりも少々、手強くなっていますね」

アイアロン「どうするのだ、ダークゴーネ？」

ダークゴーネ「今日の所は退きましよう」

ゼロ「お前ら、ベリアルがない今、何を企んでやがる？」

ダークゴーネ「いずれわかりますよ。いずれ、ね……」
そう言い残し、二体は撤退した……。

ケロロ「ベリアルがいけないのにまだ、暗躍をしているとは思わなかったであります……」

冬樹「軍曹達もベリアルって人の事、知ってるの？」

ギロロ「光の国を襲撃した悪のウルトラマンだ……。知らないはずはない」

ゼロ「(倒したはずの敵がアル・ワースで蘇る、か……。フツ、まさかな……)」

何とかダークゴーネ達を撤退させた俺達だが、轟龍達に苦戦していた……。

ジョー「どうした、旋風寺 舞人！この轟龍に手も足も出ないか！」

舞人「隙ありだ、ジョー！」

マイトカイザーが轟龍の隙について攻撃した……。

ジョー「ちいつ！」

マドカ「ジョー！」

ジョー「心配ない！」

なっ…… ！？轟龍のダメージが回復した…… ！？

エイサップ「あいつの受けたダメージが回復していく…… ！？？」

エレボス「い、嫌なオーラを感じるよ……！」

リユクス「これはいつたい…?!?」

ワタル「どうなってるの、龍王丸?!?」

龍王丸「あれは…闇の力だ」

ワタル「闇の力って、アル・ワースの伝説に出てきた、あれの事?!?」

龍王丸「そうだ。神部七龍神の力の対極にあるものだ。闇の力が、あの若者に力を与えているのだ！」

ジョー「どこの誰だか知らないが、余計な事をしてくれる…！」

マドカ「どうやら、私も与えられたようだ…！」

黒騎士のダメージまで…！

箒「あいつのＩＳまでシールドエネルギーが回復しているぞ！」

ウイル「だが、奴等は闇の力を望んだわけではないようだ」

虎王「チャンスだ！ワタルは怯んでいる！」

龍王丸「来るぞ、ワタル！」

ワタル「う、うん…！」

龍王丸が邪虎丸に追い詰められていく…。

ワタル「うわあああつ!!?」

ヒデヨシ「ワタル！」

虎王「立て、ワタル！ 貴様の力がそんなものではない事は俺様が一番よく知っている！ 俺と本気で戦え、ワタル！」

ワタル「出来ないよ……」

虎王「何っ!?？」

ワタル「だつて虎王は僕の友達だもの！」

虎王「ワタル……。 黙れ、だまれ！ そんなものに俺様は騙されないぞ！」

ワタル「……」

虎王「ならば、トドメを刺すまでだ！ 終わらせるぞ、ワタル！」

ノブナガ「させん！」

ザ・フールが動き出したが……

ノブナガ「うわああああっ!!？」

クオ・ヴァデイスが剣の先を開け、そこからビームを放ち、ザ・フールに直撃させた。

ジャンヌ「ノブナガアアッ！」

ミツヒデ「ノブ!!？」

ノブナガ「ぐっ……！」

カエサル「させんはこちらの台詞だ。言ったはずだ……。 虎王様の邪魔はさせん

と……」

ノブナガ「カ、カエサル……！」

今の攻撃でザ・フールが簡単に動けなくなつたのか……？

ユノハ「ノ、ノブナガさん！逃げてください！」

モロイ「ダメだ！さっきの攻撃でダメージが……！」

カエサル「年貢の納め時だね、ノブナガ……」

ノブナガ「……みたいだな」

カエサル「何か言い残す事はあるかい？」

ノブナガ「……ない」

カエサル「では……覚悟！」

クオ・ヴァデイスかザ・フールに剣を振り下ろした……が……。

突如として地震が起こる。

アマタ「じ、地震……？」

アンデイ「おいおい！今度は何だよ……？」

それと同時に二機の大イクサヨロイが現れ、二機はそれぞれ連環刀とソードを持ち、クオ・ヴァデイスを斬り飛ばした。

ヒデヨシ「大イクサヨロイ……？」

ジャンヌ「あの大イクサヨロイって……！」

ケンシン「ご無事ですか？オダ・ノブナガ公」

アレクサンダー「相変わらず悪運だけは強いな、破壊王」

ノブナガ「ウエスギ・ケンシンに……。アレクサンダーなのか……。？」

ケンシン「ええ、そうです」

アレクサンダー「我等もあの戦の後、この世界に来たのだ」

カエサル「これはこれは……。ケンシン公にジエネラル・アレクサンダー……。お久しぶりですね」

ケンシン「カエサル殿……。何故、ノブナガ公と敵対をしておるのですか？」

カエサル「我が野心の為……。という説明では納得できませんか？」

アレクサンダー「いや、充分だ、カエサル。だが、その野心……。見逃すわけにはいかまい」

カエサル「ほう……。かつて、破壊王と死闘を繰り広げた貴公がその破壊王と手を取るなどと……。」

アレクサンダー「此処は我等の世ではない……。それに今の破壊王ノブナガには邪悪な力を感じん」

ノブナガ「ふつ、知ったような口を……。だが、感謝する」

ケンシン「エクスクロスの方々……。我々もそなた達に手を貸します」

ネモ船長「感謝します、ケンシン公……アレクサンダー殿」

虎王「敵の増援など知るか！ワタル、覚悟しろ！」

ワタル「！」

すると、鳥の魔神が現れた……？あれって……！！？

クラマ「そうは行くかよ！」

鳥の魔神が邪虎丸に攻撃を与え、動きを止めさせた。

虎王「くっ……！邪魔が入ったか！」

ドン・ゴロ「あれは空神丸……！いや、違う！」

クラマ「空王丸、ただ今参上！待たせたな、ワタル！」

この声は……クラマなのか……！！？

ワタル「クラマ……！クラマなの！！？」

クラマ「ああ、そうだ。村のみんなを人間に戻したんでお前達に合流するぜ！」

一夏「クラマ！」

ヒミコ「やった！トリさんが来てくれたのだ！」

みさえ「ヒミコちゃん！無事だったのね！」

幻龍斎「もちろん……！」

シバラク「拙者達もいるぞ！」

ひろし「シバラク先生に幻さん！」

ひまわり「たいやく！」

アスナ「良かった……」

ワタル「でも、戦神丸と幻神丸は……」

シバラク「確かに戦神丸と幻神丸はその生命を落とした……」

幻龍斎「だが、その魂は今も我々と共にあるウラ」

シバラク「だから、拙者達は戦える！たとえ、魔神なくとも正義の心は共にありだ！」

な、何だ……？二人に光が……！

シバラク「これは……！戦神丸を呼び出すテレホンカードの絵柄が変わった！」

ヒミコ「父上！幻神丸を呼び出すペンダントが……！」

幻龍斎「形が変わった！」

龍王丸「彼等の何事にもくじけぬ正義の心……。それが今、魔神達の魂を黄泉の国より

呼び戻したのだ」

ワタル「先生、親父様！戦神丸と幻神丸を呼ぶんだ！」

シバラク「違うぞ、ワタル！戦神丸と幻神丸は生まれ変わったのだ！」

幻龍斎「だから、その名で呼ぶウラ！幻！」

ヒミコ「王！」

幻龍齋「丸!!?」

シバラク「電話はなくとも心は通じる!来てくれ、戦王丸!」

来た……本当に生まれ変わった二機が来た……!

ワタル「やった!やったよ、先生、親父様、ヒミコ!」

シバラク「戦王丸!お主の力、また拙者に貸してもらおうぞ!」

ヒミコ「やつほー、幻王丸!またよろしくなのだ!」

幻龍齋「また共に戦うぞ、幻王丸!」

龍王丸「わかるか、ワタル?彼等の正義の心がこの奇跡を生んだんだ。お前の正義の

心はどうなのだ、ワタル?」

ワタル「僕は……。虎王と戦いたくない……」

零「ワタル……」

ワタル「でも……。!これ以上、虎王が闇の力と共に戦うのを見たくない!」

龍王丸「ならば、ワタル……。!救世主であるお前のやる事はわかってるな!!?」

ワタル「うん……。!僕は……。虎王を倒すのではなく、虎王の戦いを止めてみせる!」

シバラク「それでこそだ、ワタル!」

幻龍齋「うむ……。!救世主の決意、しかと受け取ったウラ!」

クラマ「へ……。しばらく見ない間にまた成長したようだな」

ワタル「虎王……！」

虎王「正義……。父上が一番嫌う言葉……。ワタル！やっぱり、お前は父上の敵だ！」

ワタル「そうだよ、虎王！僕はドアクターの敵だ！だけど、お前の友達だ！だから、僕はお前に勝つ！」

虎王「黙れ！父上の敵であるお前は俺様が倒す！」

ジョー「正義の心……か……」

舞人「ワタルの真つ直ぐな想いはさすがのお前も否定できないようだな」

ジョー「フ……。俺もあいつぐらいの年の頃はあんな風だったさ……」

マドカ「……」

ジョー「マドカ、意外そうだなという顔をするな」

マドカ「す、すまない……」

一夏「(エム……。少なくともジョーの事は仲間意識を持っているのか……)」

ジョー「だが、正義が無力である事を知り、俺は正義に絶望し、正義を憎んだ」

舞人「ジョー、お前は間違っている！正義が無力なんじゃない……！正義は最後には

必ず勝つ！それを信じず、途中で逃げ出したお前が無力なんだ！素直になれ、ジョー！

正義に絶望したお前こそ、最も正義を信じていたんだ！」

ジョー「黙れ！」

マドカ「ジョー……！」

またあの闇の力つてやつを……！

シヨウ「またあの力か！」

ジョー「どこの誰だか知らないが、勝手な真似はやめろ！俺は俺の力で旋風寺 舞人と戦うんだ！来い、旋風寺 舞人！決着をつけるぞ！」

舞人「……ジョー！お前が闇の力の加護を受けるなら、俺は正義の力で、それを打ち払う！仲間と共にな！」

また何か現れた……って……マイトガイン……！！？

マイトガイン「待たせたな、舞人！」

舞人「いや！定刻通りに到着だ！」

ブラツクマイトガイン「ガイン……！待っていたぞ！」

バトルボンバー「最高のタイミングで復活だ！」

ガードダイバー「もうこれで恐れる者は何もない！」

舞人「行くぞ、ガイン！」

マイトガイン「了解だ、舞人！」

ジョー「いいだろう！二人掛かりで掛かってこい！」

舞人「違うぞ、ジョー！」

マイトガイン「我々は二人で戦うのではない！一つになって戦うんだ!!？」
ジョー「何っ!!？」

舞人「レエーッツ！マアイトガーイン!!？」

マイトガイン「グレートダアーツシュ!!？」

舞人「グレートマイトガイン…起動！」

す、凄え！マイトカイザーとマイトガインが合体した！

ジョー「合体しただと!!？」

舞人「そう…その通り！」

グレートマイトガイン「銀のつばさへのぞみを乗せて、灯せ、平和の青信号！勇者特急マイトガイン、定刻通りにただ今到着！」

甲児「グレートマイトガイン！」

鉄也「まさに偉大な勇者だな」

零「来た！ハツキシ言つて、超ウルトラスーパーグレートブレイブカツコイイぜ、舞人、ガイン！」

ワタル「僕の台詞!!？」

ジョー「グレートマイトガイン…」

舞人「そうだ、ジョー！これが地上最強のロボット、グレートマイトガインだ！」

ジョー「面白い！どうやら、ここからが本当の戦いのようだな！」

ジョーイ「だけど、あの人は闇の力を使いますよ！」

ジョー「心配するな。あれがまた俺の邪魔をしようとしてもはねのけてやる。俺は何にも頼らない！俺は俺の力だけで、正義に……旋風寺 舞人に勝利する！」

舞人「ジョー……」

マドカ「やはり、見込みがあつたな、ジョー……」

一夏「何言つてんだよ、お前も俺を倒すんだろ？」

マドカ「ほう、わかつているじゃないか……。正義も闇も関係ない！私はお前を倒す……ただそれだけの事だ！」

一夏「いい加減俺もケリを付けたかったところだ！全力でお前の相手をする！」

虎王「いい気合だ、ジョー、マドカ。この俺様をガキ扱いしただけの事はあるな」

ジョー「さあ来い、旋風寺 舞人！」

マドカ「掛かつて来い、織斑 一夏！」

ジョー&マドカ「決着をつけるぞ！」

舞人「ガイン！一夏！準備はいいな！」

グレートマイトガイン「いつでもいいぞ、舞人！」

一夏「俺も大丈夫だ！」

舞人「やるぞ！俺達は絶対に勝つ！来い、ジョー！ここでお前に敗北を与え、その捻じ曲がった想いを叩き直してやる！」

一夏「もう理由なんて関係ない！男として…みんなを守る者として…俺はお前に勝つ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 アレクサンダーVS初戦闘〉

アレクサンダー「(よもや西の星を震撼させた破壊王と共に戦をするとは…だが、悪い気はせんな)」

〈戦闘会話 ケンシンVS初戦闘〉

ケンシン「私達がこの世界に呼ばれた意味を見定めなければなりませんね…。ですが、今は戦い抜くのみです！」

〈戦闘会話 ノブナガVSカエサル〉

ノブナガ「お前がどのような想いで俺に挑むかは知らん。だが、挑んでくるのなら容

赦はしないぞ！」

カエサル「その言葉、そのまま返そう、義兄上」

ノブナガ「今のお前にそう呼ばれたくはない！」

〈戦闘会話 ケンシンVSカエサル〉

ケンシン「随分と落ちぶれましたね、カエサル殿」

カエサル「何とでも仰ってください、ケンシン公。邪魔をするのならば、貴公でも倒します」

ケンシン「ならば、それ相応の覚悟で挑みましょう」

〈戦闘会話 アレクサンダーVSカエサル〉

アレクサンダー「お前も面倒な男だな。ノブナガと同盟を結び、我々と敵対したと思えば、今はノブナガと同盟を結んだ我と敵対している……」

カエサル「私という人間をご存知かとお思いましたが…… 買いかぶりすぎでしたかな？」

アレクサンダー「言ってくれるな……。まあいい。お前がどの様な事態で我に挑んで来たとしても我はお前を返り討ちにするだけだ！」

ザ・フールと毘沙門、ガイアの攻撃でクオ・ヴァデイスはダメージを負った……。カエサル「流石に手強いな……！」

ノブナガ「カエサル、おとなしく投降すれば生命までは取らん」

カエサル「投降など……。する気はない。戦は次の機会にさせてもらおう」

アレクサンダー「待て……。お前は何故、ドアクダー軍団についた？」

カエサル「言ったはずです。我が野心のために……」

ケンシン「その野心とは何なのですか？」

カエサル「愛する者を助ける為……。とだけでも仰っておきましょう」

ノブナガ「……！」

カエサル「では、またお会いしましょう」

クオ・ヴァデイスは撤退した……。

ミツヒデ「愛する者……。やはり、イチヒメ様も……。！」

〈戦闘会話 九郎VSティベリウス〉

ティベリウス「デモンベイン！今度こそケチヨンケチヨンにしてあげるわ！」

九郎「散々、俺達にケチヨンケチヨンにされてるお前が何言ってるやがる！」
アル「（だが、奴を完全に倒せないのは事実だ……。いったい、どうすれば……！）」

〈戦闘会話 葵VSティベリウス〉

ティベリウス「あら？随分野性的ね……。私も負けずにやってやろうじゃないの！」
くから「声が似てるからって、それは言われたくはないわね！」

ジョニー「では、本物を見せてあげましょう！」

葵「そうね、行くわよ、ゾンビさん！ダンクーガノヴァがお相手するわ！やってやろうじゃない！」

デモンベインのレムリア・インパクトでベルゼビュートにダメージを与えた。

ティベリウス「無駄よ！」

ベルゼビュートのダメージが回復した……。

朗利「また回復したぞ！」

金本「これじゃあ、キリがないよ！」

エルザ「でも、何度でも倒すしかないロボ！」

セシリア「ですが、長期戦になればこちらが不利ですわ！」

テイベリウス「デモンベイン！今度はこっちの番よ！」
ベルゼビュートはデモンベインに攻撃を仕掛けた……。

テイベリウス「やってやろうじゃないの！」

ベルゼビュートは目の前でエネルギーを溜めた……。

テイベリウス「怨霊呪弾……！食らいなさい、怨念達に怒りの力を！」
エネルギー砲弾はデモンベインに直撃した……。

九郎「ぐっ……！や、やべえ……！」

エネルギー砲弾を受けたデモンベインは大きく吹き飛んだ。

九郎「ぐああああっ！」

朔哉「九郎！アル！」

エーダ「デモンベインが……！」

カイエン「援護に向かうぞ！」

九郎「来るな！」

ゼシカ「え……？？」

九郎「あいつは……俺達にやらせてくれ！」

MIIX「な、何を言ってるんですか……？」

ラウラ「倒せない以上……このままではあなた方は……！」

ワタル「僕は九郎さんとアルを信じるよ……」

鈴「ワタル……」

ジョーイ「そうだよ！九郎さんとアルさんは……デモンベインはみんなのヒーローなんだから！」

九郎「ヒーロー……か……。へっ！言ってくれませー！」

アル「全く……。お前も勝手な事を言ってくれな」

九郎「なら、降りてもいいんだぜ？」

アル「妾がいなければ何もできないお前だけでやるのか？」

九郎「冗談だつて！……それよりもアル、わかつてるな？」

アル「ああ！」

デモンベインは力を溜め出した……。

九郎「はああああっ……！」

テイベリウス「何しても無駄よ！今のあなた達じゃ私には勝てないのよ！」

九郎「確かに俺達じゃあ、お前には勝てない……」

アル「汝のいう通り……今の妾達ではな！」

テイベリウス「何ですつて!?？」

九郎「俺達とデモンベインは… 一分一秒と進化していく…！」

アル「デモンベイン…！ 此処には妾と妾の記憶と… 九郎がいる！」

九郎「だから、俺達の力に応える！——正しき怒りと憎悪に応え！我等は魔を断つ剣を執る！汝、無垢なる刃——デモンベイン！」

九郎さんがそう叫ぶと、デモンベインは光に包まれ、光が消えるとデモンベインの背中に飛行ユニットが装着されていた。

九郎「シャントクが装備されたのか！」

アル「今なら放てるぞ！輝くあの技を！」

九郎「応よ！いくぜ、アル！」

デモンベインは空を飛び、上空からベルゼビュートに攻撃を仕掛けた…。

九郎「行くぜ、ゾンビ野郎！アル、最終必滅兵器を使う！」

アル「存在そのものを抹消せしめるこの力で！」

デモンベインは力を溜め、両手で星型を描く。

アル「シャイニング・トラペゾヘドロン！」

魔法陣に手を伸ばし、光の刃を取り出して構える。

九郎「こいつの力で…！全てを断ち切ってやらあああつ！」

テイベリウス「こ、これは…！いやあああつ！！？」

ベルゼビュートごと空間を斬り裂き、空間の裂け目を作り出し、ベルゼビュートにダメージを与えたが、空間に引きずり込まれる前にベルゼビュートは吹き飛んだ。

テイベリウス「ゆ、許さないわよ！その技……ぜつつたいに殺すから！」
そう言い残し、ベルゼビュートは撤退した……。

九郎「ちいつ！しぶとい奴だぜ！」

アル「だが、これで奴をまた光の因果へとばせる事が出来る」

九郎「ああ、そうだな」

ヒルダ「おい！普通に話してるが何だよあの技!!？」

サリア「空間を斬り裂いた……!!？」

「ってかいつの間にか空間の裂け目が閉じている……？」

簪「あ、ありえない……！」

九郎「最終必滅兵器の力だ」

シャルロット「何なんですか、その物騒な名前!!？」

零「話は後だ！まだ敵はいるんだぞ！」

楯無「そうですね。今は敵を倒す事に専念しましょう！」

アル「うむ、そうだな！九郎、シヤンタクが装備された事で空からの奇襲をかけられるぞ！」

「九郎「アトランティス・トルネード・ストライクも撃ってわけだな！よし、やるぜ！」」

〈戦闘会話 零VSドン・ゴロ〉

零「お前を倒せば、ドアクダーに近づけるってわけだな！」

ドン・ゴロ「この私を倒すだど!?夜這いごとを！」

零「夜這いごとかどうか……試してみるか！」

俺達の攻撃でドン・ゴロのドンゴロにダメージを与えた。

ドン・ゴロ「不覚……！このドン・ゴロが後れを取るとは……！」

虎王「ドン・ゴロ！後は俺様がやる！お前は後退しろ！」

ドン・ゴロ「申しわけありません、虎王様……！」

幻龍斎「見たか、ドン・ゴロ！これがワシ達の真の力だウラ！」

シバラク「これで勝負は一勝一敗……！出直してくるがいい！」

ドン・ゴロ「いいだろう！次の機会には救世主ワタルと共に貴様達も叩き潰してくれ

る！」

ドンゴロは撤退した……。

ヒミコ「あのオツサン……すごい迫力だったのだ」

クラマ「ドアクダー四天王の中でも最強と言われる男だ……。ドアクダー打倒の最大の障害と言っても良いだろう」

〈戦闘会話 零VS虎王〉

零「お前、散々ワタル達と遊んだんだろ！何とも思わないのかよ!?」

虎王「思わないな！ワタルは救世主……。ヒミコ達はその仲間！という事は俺様の敵だ！」

零「そんな簡単に割り切るなよ！お前に友達が何なのかを教えてやる！」

虎王「友、達……」

〈戦闘会話 しのすけVS虎王〉

しのすけ「虎王君！こんな事やめてまた遊ぶぞ！」

虎王「黙れ、しのすけ！お前も俺様を騙していたんだろ！」

みさえ「違うわ！しんのすけはあなたと…！」

ひろし「今は何を言っても無駄だ、みさえ…！」

みさえ「でも…！」

カンタム「しんのすけ君…！」

しんのすけ「大丈夫だぞ、カンタム…。虎王君が来るなら、オラも戦う！お友達として！」

〈戦闘会話 トオルVS虎王〉

虎王「春日部防衛隊！邪魔をするのならお前達も倒す！」

マサオ「虎王さんが敵…！勝てっこないよ！」

ボーちゃん「でも、勝たないとダメ…！」

ネネ「そうよ！私達は友達なんだから！」

トオル「虎王さん！少し我慢してくださいね！」

〈戦闘会話 九郎VS虎王〉

九郎「お前がドアクターの息子だったのはわかった！」

虎王「ならば、俺様の邪魔をするな！」

九郎「それはできねえよ！ワタルとお前を戦わせる事なんて絶対にな！」

〈戦闘会話 ノブナガVS虎王〉

ノブナガ「友との敵対か…。虚しいだけだぞ、それは…」

虎王「知ったような口を聞くな！お前に何がわかる!!？」

ノブナガ「オレもかつて大切な友と一騎打ちをした事がある…。その時は、妙に心が苦しめられた…」

虎王「お前…」

ノブナガ「だからこそ、この様な想いをするのは俺だけで充分だ！」

〈戦闘会話 アレクサンダーVS虎王〉

虎王「俺様は… お前達を… そして、ワタルを倒す！」

アレクサンダー「… 不可能だな」

虎王「何!!？」

アレクサンダー「友との絆に迷いを持つお前では… 我どころかあの救世主を倒す事などな」

虎王「黙れ… 黙れ、黙れ!!？」

龍王丸の鳳龍剣で邪虎丸に大ダメージを負わせた。

虎王「くそっ！俺様と邪虎丸が負けるのか！」

ワタル「待って、虎王！」

虎王「敵と話す事などない！勝負は預けるぞ、ワタル！覚えておけ！お前を倒すのは、この魔界王子、虎王様だ！」

邪

虎丸は撤退した……。

ワタル「虎王……」

ヒミコ「トラちゃん……。もう一緒に遊べないのか……？」

ワタル「そんな事はないさ。きつと虎王も、いつかはわかってくれるよ。（僕は信じているぞ、虎王……。だから、絶対に諦めないからな……）」

〈戦闘会話 一夏VSマドカ〉

マドカ「これで終わりにするぞ、織斑 一夏！」

一夏「ああ……。でも、終わらせるのは戦いだけだ！俺達はこれからなんだ！」

マドカ「その様な事を言うのは私に勝ってからにしろ！」

白式の攻撃で黒騎士はダメージを負った。

マドカ「やはり、負けたか…」

一夏「まるで負けるのが当然だって物言いだな…」

マドカ「ふん、何とでも言え…。私は…もう…」

あいつ… ISを解除した…？

箒「勝った…のか？」

摩耶「もう彼女には交戦の意思はありません」

千冬「…」

ジョー「(立派に戦ったな…。マドカ、後は見ていろ…)」

グレートマイトガインのグレート動輪剣による攻撃で轟両手ではダメージを負った…。

ジョー「くっ…！この俺と轟龍が負けるとは…！」

舞人「約束だ、ジョー。俺に従ってもらうぞ」

ジョー「！」

何処かからの射撃がグレートマイトガインに向けて放たれたが、轟龍がそれを庇った……。

舞人「ジョー！」

リョーコ「あの野郎…… 舞人を庇ったのか!?」

ジョー「姿を現せ、パープル！」

すると、パープルの戦艦が現れた……。

パープル「ジョーめ……！ 旋風寺 舞人を葬る千載一遇のチャンスを邪魔するとは……！」

ジョー「旋風寺 舞人は俺に勝利した男だ……！ それを卑怯な手で倒そうとするのは俺の誇りを汚す事と同じだ！」

パープル「やつぱり、お前はつまらないセンチメンタリストだな……！ せっかく、闇の力を授けてもらってもそれを拒絶するとは！」

スカーレット「何っ!?」

アンジュ「あいつ……！ 闇の力を知っているの!?」

パープル「しらけちまったな……。今日はアンコールは無しだ…… と言いたい所だが……。一つだけ面白いショーを見せよう！」

マドカ「…?!?がつ…!」

エムの野郎に闇の力が…?!?

マドカ「がああああつ!闇の…力が…!」

エムは再び、黒騎士を纏った。

一夏「エム?!?」

ジョー「マドカ?!?パール!彼女に何をした?!?」

パール「何、闇の力を暴走させたのさ…!」

マドカ「ガツ…グがアアアツ!」

チャム「何か…怖い…!」

アマルガン「あの娘の一夏に対する憎しみと闇の力のオーラが一つになっておる…!
!」

リユクス「このままでは彼女は…!」

ジョー「パール…貴様…!」

パール「ジョー!BD連合にお前の居場所は既がない!何処かで野垂れ死にするがいい!この俺に刃向かったと言う事はあの方に刃向かったと同じ事…!お前は父親と同じ運命を辿る!」

ジョー「待て、パール!お前…俺の親父が殺された事実を知っているのか!」

パープル「グッバイ！それをお前に教える義理はないな！」
あいつ、逃げやがった！

マドカ「があああああつ！」

エムの奴も無茶苦茶に暴れ回ってやがる……！

ジョー「マドカ！気をしっかり持て！その様な力に負けるな！」

舞人「ジョー……」

マドカ「グガアアアアツ！」

アスナ「だ、ダメ……！止まらない！」

一夏「うおおおおおつ！」

白式が黒騎士に飛びついた……！！？

ラウラ「一夏！！？」

カレン「何やってるの、このままじゃああんたが……！」

一夏「エムを……！助ける！」

九郎「一夏、お前……」

一夏「俺はみんなを守るって決めた……それが敵でもだ！俺は誰も見捨てたくはない

んだ！」

マドカ「グガアアアアツ！」

一夏「うわああああっ！」

箒「一夏！」

鈴「もういい！逃げなさいよ！」

楯無「一夏君、やめて……！」

一夏「俺は……俺は……！」

千冬「いいや……。やめるな、一夏」

暮桜が白式の隣に並んだ。

一夏「千冬、姉……！」

千冬「一騎打ちは終わったのだろうか？ならば、奴を止めるために私も手伝おう」

一夏「……ありがとう。エム！俺達がお前を助け出す！」

白式と暮桜が黒騎士に攻撃を仕掛けた……。

一夏「守ってみせる、絶対に……！姉弟の力を見せてやろうぜ、千冬姉！」

千冬「口を動かす前に手を動かせ！」

一夏「わかってるよ！」

白式と暮桜が雪平二型と雪平を構え、黒騎士を何度も斬り裂く。

千冬「はあっ！」

一夏「でやあっ！」

暮桜が白式の方へ黒騎士を蹴り飛ばし、白式が左手で殴り飛ばした。

千冬「合わせろ、一夏！」

一夏「おう！」

それぞれ右から白式、左から暮桜が接近する。

一夏「零落！」

千冬「白夜！」

マドカ「織斑……一夏……！姉……さん……！」

二人の零落白夜による攻撃が黒騎士を捉え、大ダメージを与えた……。

マドカ「グアアアアッ！」

零「どうだ!?？」

一夏「エム！」

落下していく黒騎士を白式が受け止めようとしたが……。

それを黒騎士が払いのけた。

マドカ「……汚らわしい手で私に触るな、織斑 一夏」

一夏「！」

ジョー「正気に戻った様だな、マドカ」

マドカ「ああ、迷惑をかけた……ジョー、姉さん」

一夏「俺は!?？」

マドカ「貴様など知らん……。だが、ありがとう……」

一夏「……おう！」

とにかくこれで終わつたな……。

舞人「ジョー……」

轟龍は何処かへ行こうとする……。

ジョー「悪いな、旋風寺 舞人……。俺には行かなければならない所が出来た」

マドカ「ジョー……。私も行くぞ」

ジョー「……勝手にしろ」

舞人「お前の父親は……。あのパープルに殺されたのか？」

ジョー「穴戸 英二……。その死の真実を確かめるために俺は行く。今回の件はツケ

にしておけ。いつか必ず返しに来る」

一夏「エム……！」

マドカ「……いずれ、会う事になる……」

そう言うのと轟龍と黒騎士は飛び去ってしまった……。

舞人「……」

ジョー「……」

万丈「無頼かと思えば、義理堅い所もある。。。不思議な男だな」

マサキ「根っからの悪党じゃねえって事か」

鈴「あのエムって奴はどうかわからないけどね」

舞人「はい。。。」

鉄也「穴戸 英二と言えば、数年前に行方不明となつた高名な科学者だ」

甲児「その人が、あいつの父親なのか。。。」

舞人「待つているぞ、ジョー。。。お前が今日の借りを返しに来る日を。その時には、お前に認めてもらう。正義の意味を。。。」

一夏「(エム。。。また会おうぜ。。。今度は。。。元の世界に帰る、仲間として。。。)」

俺達はそれぞれの場所へ戻り、子供組と虎王が遊んでいた場所に集まつた。。。。

ワタル「(不思議だな。。。ほんのちよつと前は、ここで虎王と一緒に遊んでいたのに。。。)」

シバラク「ワタル。。。辛く苦しいだろうが、虎王の事はお前自身で決着をつけるんだ」

ワタル「先生。。。」

舞人「シバラク先生の言う通りだ。虎王の心を受け止めなければ、状況は何も変わら

ない」

ワタル「心を受け止めらるって… 戦う事なの？」

一夏「そうだけ。戦う事で分り合うことが出来る時もあるんだ」

ワタル「舞人さんや一夏さんも、そうなの？ 戦う事で、あのジョーって人やエムって人の心がわかったの？」

舞人「ああ…」

一夏「いや、偉そうな事言ってるけど、俺は全然…」

おい…

一夏「でも、状況がわからない奴じゃないってのはわかる…。何となくだけだな」

舞人「あいつは俺の生命を狙いながら、決して卑怯な振る舞いはしなかった。だから俺は、ギリギリの所ではあいつを信じる事が出来たんだ」

鉄也「エースのジョー…。あいつは、父である穴戸 英二博士の死の真相を追っているのか…」

零「そして、それにはパープルの野郎が関係しているらしいな」

シバラク「奴の振るう剣…。それは悲しみと怒りの剣だったのか…」

箒「あの二人…。これから、どうなるんだ？」

舞人「ジョーは俺に借りを返しに来ると言った。だから、必ずまた現れるさ」

一夏「敵か味方かわからないけど、エムは俺達にまた会う事になるって言ったからなワタル」その時は……また戦うの？」

舞人「わからない。だけど、きつと……俺とあいつの関係は変わると思う」

一夏「俺は……また狙われるかもな……」

千冬「そんな弱気でどうするのだ、一夏……」

ラウラ「お前は教官と共に肩を並べて戦えたのだぞ？それを誇れ」

一夏「いや、俺はまだまだだよ……」

千冬「わかっているではないか。これからはもう少しハードルを上げた訓練が必要だな」

一夏「望むところだ！」

ガイン「しばらく見ない間に皆成長したようだな」

クラマ「そうだな、嬉しい限りだ」

舞人「お帰り、ガイン」

一夏「クラマもお帰り！」

アマリ「今日の勝利はお二人とアレクサンダーさん達が来てくれたおかげです」

クラマ「よせよ。グレートマイトガインはともかく俺の方は大した事ねえよ」

ヒミコ「そんな事はないのだ！トリさんが戻って来てくれて、あちしは、とつても嬉

しいのだ！」

クラマ「おいおい、ヒミコ……。このイケメンを捕まえて、トリさんはよしてくれよ」
ヒミコ「トリさんは、トリさんなのだ！」

クラマ「ま。：。いいか。俺は、俺だしな。にしても一夏が立ち直っていてよかつたぜ」
一夏「約束したからな、お前に俺の強さを見せるって」

クラマ「しつかり見させてもらつたぜ、お前の強さ」

ナディア「お帰りなさい、クラマ」

ジャン「また一緒に旅が出来るんだね」

クラマ「無論、そのつもりだ。これからは空王丸と一緒に戦いに参加するぜ」

ワタル「戦神丸と幻神丸がパワーアップして、ガインとクラマが戻ってきて一気に戦力アップだ！」

アレクサンダー「我等の事を忘れないでもらおうか」

ノブナガ「勿論忘れてなどいない。今日は感謝する、アレクサンダー、ケンシン」

ケンシン「我々も独自にドアクダー軍団を探っていて、あなた方の事を知ったのです」
アレクサンダー「これからは我等もエクスクロスに入る事となった。：。アレクサンダーだ、よろしく頼む」

ケンシン「ウエスギ・ケンシンです。零の世では歴史の書に私の名が記されていたの

でしたね？」

零「俺の世界だけじゃないですけどね。ちなみにアレクサンダーさんの事も載っていませんよ」

アレクサンダー「そうか……。別の世とは言え、未来では何が起こるかわからんな」
ヒデオシ「そのために俺達が手を取り合つたんだろ？」

アレクサンダー「ふっ、そうだな……」

ワタル「よおし！この勢いでドアクダー打倒を目指して突つ走るぞ！」

シバラク「そうだ、ワタル……。たとえば、辛くとも悲しくとも気持ちだけは前を向け」
舞人「(お前のその優しさや明るさはきつと虎王の心を支える事が出来る)」

一夏「(負けるなよ、ワタル。お前の正義と友情を俺達は全力で応援するからな)」
精一杯、自分の道を行け……。辛い時は俺達が支えてやるからよ……。

ミツヒデ「ノブ、話がある」

ノブナガ「……イチがアル・ワースにいるかも知れないという事か」

ミツヒデ「気づいていたのか!?？」

ノブナガ「カエサルのお愛する者という言葉を聞けば、猿……。いや、馬でもわかる」

ミツヒデ「カエサルは……。イチ姫様を守る為に俺達と敵対しているという事なの

か……?」

ノブナガ「恐らく、そうであろう。だが、俺は負ける気は無いがな」
ミツヒデ「（イチヒメ様の為なら悪にでもなる心：：。やはり、イチヒメ様に相応しいのはカエサルという事か：：）」

第45話

ネモの秘密

―新垣 零だ。

俺達はネモ船長から話があると云われ、N―N―チラス号の格納庫に集まった。

ナディア「… ネモ船長は格納庫にみんなを集めて何をするつもりなの…？」

ジャン「エレクトラさんの話では、重大な話があるらしいけど…」

真上「ようやく自分の事を話す気になったのか？」

海道「何か妙なオツサンだからな」

モモカ「はい。不思議な方ですよ。頼れるのに近寄りがたい独特な雰囲気があつて…」

アンジュ「それに圧倒されて、今までは何も言えなかったけど、そろそろそれも限界ね」

ヒルダ「そうだな。司令との関係も含めて、洗いざらい吐いてもらいたいぜ」

ロザリー「ネモ船長と司令か…」

クリス「もしかして、昔の恋人とか…」

凱「だとしたら、エレクトラは心中穏やかじゃいられないだろうな」

溪「ちよつと、凱！」

竜馬「何くだらねえ話してんだ」

ナディア「…」

ヒルダ「つと、お子様にはちよつと刺激が強い話だったかな」

グランデイス「よしな、ヒルダ。ナディアはナディアなりにこれから起こる事に不安になつてるんだから」

ナディア「グランデイスさん…」

グランデイス「長い付き合いだからね。顔を見りや、何を考えているかだいたいのはわかるさ。でもね、ナディア…。何が起ころうとも、あなたには確実に一人は味方がいるよ」

ナディア「それは… 零さん？」

え、えええつ!??

零「はあつ!?? ちよ、何で俺!?? いや、味方にはなるけどよ…!」

グランデイス「… ジャンだよ。だから、ナディア…。何か困った事があつたら、一人で抱え込まないでまずはジャンに相談しな」

アンジュ「私もそれに賛成ね。ジャンぐらいよ、あなたみたいなワガママ姫に付き

合ってくれるのは」

零「ワガママ姫先輩からの言葉をもらっちゃまったな、ナディア」

アンジュ「ちよ、それってどういう意味よ!!?」

モモカ「アンジューゼ様にこのモモカが付き従うようにです」

タスク「アンジュの騎士は俺にしか務まらないのと同じだな」

アンジュ「あなた達まで……!」

ヒルダ「……あたしも……アンジュの味方だからな、何があっても……」

アンジュ「え……」

零「ヒルダ……?」

ヒルダ「バカ……。二度も言わせるな……」

あー、これはあれですね、はい。

アンジュ「ありがとう、ヒルダ」

ナディア「……」

ジャン「笑顔が戻ったね、ナディア」

ナディア「ジャンもあたしの不安……気づいていたの?」

ジャン「もちろんさ。でも、こういう時に下手に声をかけたら逆効果だって事も知っ

てたからね」

ナディア「それは……あなたに迷惑になるかと思つて……」
ジャン「覚えておいてね、ナディア。僕は君がどれだけワガママを言つても迷惑だなんて思つた事はないから」

ナディア「……」

ジャン「もしかして、感動した？」

ナディア「あたし……そんなにワガママ言つてないから……」

ジャン「え……あ……そういう意味で言つたんじゃ……！」

グランデイス「(まだまだだね、ジャン……)」

すると、ネモ船長が来た。

ネモ船長「……わざわざ集まってもらい、すまない」

ギロロ「もしか、初めてではないのか？ネモ船長の方から、俺達に話があるというの……」

ケロロ「そう言えば、そうでありますな……」

ネモ船長「……」

ルルーシュ「では、船長……。お聞かせ願います」

ネモ船長「……諸君等には……。このNーノーチラス号から降りて、ナデシコCや真ドラゴンに移つてもらおう」

…は？

ワタル「ええーっ!?？」

アスナ「ど、どうしてですか!?？理由を聞かせてください!」

しんのすけ「オラ達、何も悪い事してないゾ!」

ネモ船長「理由は…このNーノーチラス号の乗員達の私的な目的のためだ」

零「…では、一時的にエクスクロスとは別行動をとると?」

ネモ船長「その通りだ。我々が目的を果たした後には諸君等と再合流するつもりだ」

ノブナガ「では、俺達もそれに付き合うとしよう」

ネモ船長「…」

九郎「そろそろ秘密主義も限界だと思うぜ、船長さんよ?」

アマリ「私だって、個人的な事情で皆さんを振り回していますし…」

アキト「元の世界に帰るためにドアクターと戦うっていうのも私的な目的と言えます

よね」

ノリコ「ですので、私達がNーノーチラス号の皆さんの目的に協力するのもありだと

思えます!」

メル「Nーノーチラス号の乗員の方々にもお世話になりましたし」

シモン「船長!今更、他人行儀は無しだぜ!」

ネモ船長「……」

エレクトラ「いかがします、船長？」

ネモ船長「…… 私は、この部隊の指揮官ではない。各人の行動に命令する権利はない」
ひろし「じゃあ……！」

エレクトラ「船長は皆さんの協力を許可するそうです」

タママ「了解です！この艦が、どこに行くから知らないけど、付き合おうですー！」

ネモ船長「……」

零「みんな、興味本位でNーノーチラス号の事情に踏み込もうとしているのではありません」

ルルーシユ「あなた達の進もうとしている道を知り、可能ならば、それに協力したいと考えているのです」

ネモ船長「それは理解している…… 感謝する」

アキト「ユリカ、ルリちゃんや號にも報告してくれ」

ユリカ「もうしたよ！オツケーだって！」

エレクトラ「では、皆さん……。Nーノーチラス号はすぐに目的地に向けて出発しますので、準備を」

アル「行き先を説明せぬのか？」

エレクトラ「それは目的地に着いてからにさせてもらいます」

グランデイス「わかったよ。そこが何処だろうとご一緒しようじゃないか」

ジャン「これで、今までずっと謎だったネモ船長の事が少しはわかるかもね…」

ナディア「…」

ジャン「ナディア…？」

ナディア「(怖い…)。あの人の事を知るのが怖い…。それは…。あたしにも関係しているように思えるから…」」

ーネモだ。

我々は目標ポイント付近まで来た。

操舵長「間も無く目標ポイントに到着します」

エーコー「周辺に機影なし。レーダー、ソナーにも反応ありません」

ネモ船長「よし…。では、皆をお借りします」

號「了解した」

ルリ「お気をつけて」

ネモ船長「NーNーチラス号、潜航開始」

操舵長「潜航開始！」

ナデシココと真ドラゴンには上空で待機してもらい、Nーノーチラス号は海の中へと入っていった……。

―新垣 零だ。

潜航開始……。今は海の中なのか……？

それよりもメルがさつきから震えているが……。

ハンソン「さつきの艦内放送……潜航って言ったよね……」

サンソン「すると何か？俺達の行き先ってのは、海の底かよ！」

ボス「何でNーノーチラス号がアル・ワースの海中に用事があるんだ？」

ヌケ「さ、流石に不安になってきた……！」

ムチャ「やつぱり、行き先を聞いておくべきだったような……」

へべ「今更何言ってるのさ」

キキ「そうっすよ！情けないよ、男の癖に！」

グランデイス「その通りだよ、お前達！自分達で乗船を希望しておいて、ガタガタ言うんじゃないよ！」

シバラク「グランデイス殿の言う通り！文句があるのなら、泳いで帰れ！」
メル「お、泳いで……？！」

アスナ「メル？あなた、大丈夫なの？！」

メル「わ、私……その……海がダメで……怖くて……。泳げないんです……」

零「大丈夫だよ、メル。何かあっても俺達がいるからよ」

メル「は、はい……」

アスナ「……シバラク先生……？」

シバラク「い、いや……！そんなつもりはなかったのだ！す、すまん、メル」

メル「い、いえ……大丈夫です……」

安「つて言うがよ……。もうここまで来ちゃったら、泳げない泳げるにしても自力で帰るのは不可能だぜ」

シバラク「何の何の！拙者、泳ぎは得意だぞ！」

メル「だ、だから、泳ぐのは嫌です……！」

零「シバラク先生、少し黙ってもらえませんか……？」

シバラク「す、すまん……！」

ジャン「それに海の中では水圧がかかるんで生身で外に出れば、ペチャンコですよ」

シバラク「じゃ、じゃあ……。もし、ノーノーチラス号に穴でも空いたら……。！その時

は拙者達……海の藻屑となるのか……!?？」

メル「イヤアアアツ！」

アスナ「シバラク先生!!？」

零「懲りねえのかあんたは!!？」

シバラク「いや、待て！そう言うつもりじゃない！それは想定外だ！」

幻龍斎「やめんか、シバラク！みつともないウラ！」

零「……メル、手、握ろうか？」

メル「お、お願いします……！」

アスナ「(流石にこれは……)」

アマリ「(何も言えませぬ……)」

幻龍斎「ヒミコを見習え！少しも動じておらんウラ！」

ヒミコ「きやはは！行き先は竜宮城か!?!？」

トオル「ヒミコさんの場合……何も考えてないだけだと思いますけど……」

ゼロ「とにかく！ここまで来たら、腹を決めるしかないぜ！」

すると、エレクトラさんの放送が入った……。

エレクトラ「各員へ……。間も無く本艦は目的地に到着します。希望者は上陸の準備をお願いします」

サイ「上陸!??海の中なのか!??」

グレンファイヤー「どう言うことなんだよ、それ!??」

零「…海の中に島があるとか…ふん、いやそれはないな」

ジャン「その目的地って…僕達の想像を越えた場所みたいだね…」

第45話　ネモの秘密

ほ、本当に陸があった…。

ネモ船長「アトランティス…。我々は祖先の降り立った地に戻ってきた…」

俺達はN-1ノーチラス号から降りた。

ジャン「ここは…」

エレクトラ「アトランティスよ」

甲兎「アトランティスだと!??」

鉄也「遙か過去に沈んだ伝説の大陸…」

ジャン「僕達…元の世界に戻ってきたんですか?」

エレクトラ「そうじゃないわ。地球にも同じ名前的大陸があったのは事実だけ…」

ここはアル・ワースの底よ」

夏美「で、でも、ここには空気があるじゃないですか!」

エレクトラ「簡単に説明すれば、アル・ワースの海の底に特殊な空間があると考えてもらえば結構です」

リユクス「ですが、この大地は完全に死んでいます…」

零「そうだな…。かつては高度な文明があつたようだけど、全部廃墟と化しているな…」

マサオ「小石が全部、ガラスになつてる…」

ポーちゃん「すごい熱が… 加えられたみたい…」

エレクトラ「その通りよ… この大陸は、かつて戦場になつた…。そして、バベルの塔の力によって全てが滅んだのよ」

ジャン「バベルの塔って…」

ナディア「それって… ガーゴイルがマハル島に造つていた…」

エレクトラ「そうよ。ガーゴイルは、あの島にここにあつたバベルの塔を再現しようとしたのよ」

ルルーシユ「そろそろ聞かせてもらおう、エレクトラ副長。このアトランティスとあなた達… そして、あなた達の宿敵であるガーゴイルの正体を」

ジャン「ガーゴイルは自分達の事をネオ・アトランティスって言ってたけど、このこと関係あるの?？」

エレクトラ「・・・ガーゴイル・・・そして、私達の仲間のほとんどはこのアトランティスで暮らしていた人達の末裔なの」

ジャン「え・・・」

エレクトラ「遙か過去・・・このアトランティス大陸は地球にあった・・・しかし、ここに住んでいたアトランティス人は内戦の最中にバベルの塔を暴走させて、自らの文明を滅ぼした・・・彼等は地球を汚染させないため、大陸をそのままアル・ワースへと転移させた・・・そして、大陸が海に沈んだ後・・・彼等はアル・ワースの大地へと移住した・・・詳しい記録は残されていないけど、それはアル・ワースが誕生した直後の頃と言われているわ」

ナディア「そんな事があったなんて・・・」

エレクトラ「ネモ船長や私達の祖先はそのアトランティス人・・・そして私達は、アル・ワースで生まれた人間なの」

メル「エレクトラさん達は本当は異界人ではなかったのですか?？」

エレクトラ「NーNーチラス号のクルーの中にはアル・ワース出身でない者もいますけどね」

アマリ「アル・ワース創世の頃の移住者……。ネモ船長達の祖先は、伝説の中にあつた楽園を求めし者達だったのですね……」

エレクトラ「その通りです。そして、アトランティス人達も光と闇の戦いに参加していたそうです。アル・ワースに受け入れてもらった彼等はその礼として子々孫々まで光の龍に協力を誓つたと言われています」

ワタル「光の龍つて七部七龍神の事だよね……」

サラマンディーネ「古の盟約の下、救世主に協力する者……。あなた達は私と同じだったのですね」

アンジユ「これで理解できたわ。ネモ船長が妙にワタルに甘かつた理由が」

ジャン「でも……。僕やナディアは、ネモ船長達と僕達の世界であつたじゃないですか!?」

エレクトラ「私達とガーゴイルは10年前のある事件によつて、あの世界へと跳ばされ……。ネモ船長と私達はその事件を起こしたガーゴイルを討つためにずっと戦つていたの。ノーチラス号は私達と共に跳ばされたアトランティス文明の遺産であり……。ガーゴイルの超科学も同じくアトランティス文明を利用したものなの」

ノブナガ「お前達の転移の原因となつた事件とは？」

エレクトラ「申し訳ありません。それはネモ船長の口から語られるべきものです」

アンジュ「とりあえず、あなた達がアルゼナルやミスルギの事を知っていた理由はわかったわ」

エレクトラ「私は面識はありませんでしたが、ネモ船長はアレクトラ司令と旧知の仲だったようです」

ルルーシユ「そうなるとネモ船長の中にあつた魔従教団への不信感は、直感の類ではなく何らかの根拠があつた事になる…」

ジャン「ネモ船長は、今どこにいるんです？」

エレクトラ「あの人は、別の所で吊いの儀式に参加しています」

エンネア「吊い？」

エレクトラ「私達は、元の世界…ジャン君達の住んでいた世界に跳ばされた後、ずっとガーゴイルと戦っていました。その戦いの中で散つていった者達の魂を私達の祖先が眠る、この地に返す事が今回の訪問の目的でもあります」

隼人「お前達がアル・ワースに帰還できたのは偶然だったようだな」

エレクトラ「ええ…。私達の転移の契機もノーチラス号が沈められた戦いでした…。その戦いの後、アル・ワースに転移した私達はかつての情報を元にアトランティス人の遺産を発掘しました」

ミツヒデ「それがノーチラス号…」

エレクトラ「そうです」

ジャン「アトランティス人の遺産って……もしかして、僕達がアル・ワースで再開した時の遺跡も……？」

エレクトラ「ええ……。あれもアル・ワースに入植したアトランティス人の残したものでよ」

ナディア「じゃあ、あたしが感じた懐かしさは……」

すると、エーコーさんが走ってきた。

エーコー「みんな！すぐにN-1チラス号に戻ってくれ！」

ジャン「どうしたんです、エーコーさん……？」

エーコー「このアトランティスに何者かが侵入してきた……！」

アーニー「待ってください！その何者かはここの存在を知っているという事ですか……！！？」

サヤ「という事は……！」

リチャード「ネオ・アトランティスの連中か！」

俺達はN-1チラス号に戻った……。

ネモ船長「機関長……。各部の状況は？」

機関長「遺跡から回収したパーツのおかげで対消滅機関の出力も安定した。武装へ回

せる電力量も飛躍的に増加している」

操舵長「要するに武器の威力が上がったって事か！」

機関長「さらに電磁バリアーも使用可能となったぞ」

操舵長「そいつは心強い！」

エーコー「未確認機、来ます！」

現れたのは……グレイブとネオ・アトランティスの戦艦か……
!??

エーコー「敵機確認！ネオ・アトランティスです！」

エレクトラ「あれだけの空中戦艦を量産するとは……」

ネモ船長「あの男が背後にいるのだ。この程度は想定済みだ」

エレクトラ「各機は出撃をお願いします！」

サンソン「おい、ハンソン！グラタンの出力が上がってるぞ！」

ハンソン「N-1ノーチラス号が改修している間に余ったパーツをもらって、グラタン

も改造したんだよ」

サンソン「要するにパワーアップしたのか！そいつはいい！」

グランデイス「よくやった、ハンソン！生まれ変わったカトリイヌの力、みんなに見

せてやらないとね！」

俺達は出撃した……。

ロザリー「何だよ!? グレイブが、たくさんいるぜ!」

ナオミ「でも、アルゼナルで使ってるタイプとちよつと違うみたいだよ!」

サリア「気をつけて。通常のグレイブより出力も武装もかなり強化されているみたいよ!」

アンジュ「ネオ・アトランティスはミスルギと協力体制にあるみたいけど、他の組織とは別系統みたいね」

タスク「特殊なパラメイルを引き連れている所を見るとエンブリヲ直属の戦力かも知れない」

ネモ船長「諸君……。我々の事は副長から聞いた事だろう」

シモン「・・・」

ルルーシュ「・・・」

ネモ船長「ここは我々の祖先と仲間達の魂が眠る地だ……。この地を戦いの場とする者を駆逐する事に手を貸してくれ」

甲児「了解!」

ゼロ「よつしやあ! 目標を駆逐するぜ!」

シヨウ「死者の眠りを妨げようとする者なら遠慮はいらないな」

アンジュ「エンブリヲと手を組んでるついでだけで、私にはあいつ等と戦う理由がある」

零「俺達は自分の意思で、Nーノーチラス号に乗ったんだ！」

グランデイス「要するにあたし達もネモ様の仲間って事です！」

ネモ船長「すまん」

エレクトラ「船長……」

ネモ船長「Nーノーチラス号、全速前進！奴等の背後にいる、あの男達に我々の力を示す！今こそ我々は宿敵ガーゴイルへの反抗作戦を開始する！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(アトランティスが光と闇の戦いに参加していたのなら……もしかしたら、ゼフィールスらしき機体の事も聞けるかも知れない……。これが終わった後にでも聞いてみるとするか)」

Nーノーチラス号が空中戦艦を撃墜させた。

エーコー「空中戦艦の撃破を確認！」

操舵長「すごいな……！全ての武装の威力が格段に強化されてる！」

機関長「これでもNーノーチラス号の本来の力とは言い難いものだがな……」

ネモ船長「それがアトランティスの科学……。ガーゴイルとあの男が求める力だ。だが、それが人を幸せにするとは限らない事を我々は知っている……」

俺達は全ての敵を倒した……。

エーコー「敵部隊の全滅を確認しました」

ネモ船長「うむ……」

スザク「奴等はNーノーチラス号を追ってここに来たのか……」

エレクトラ「ここにはアトランティス文明の遺産が遺されています。普段は、ここへの入り口は閉ざされていますが、敵は私達を利用して、侵入して来たのですよう」

ジャンヌ「あいつ等がまた来たら、ここ……荒らされちゃうんじゃないんですか？」

ネモ船長「それについては、この管理者に入り口の封印を強化してもらおう」

一夏「管理者……？」

千冬「この地に住む者がいるのですか？」

ネモ船長「私の古い友人だよ」

ージャンです。

僕とナディアはネモ船長に連れられて真つ暗な所に来ました。

ジャン「ネモ船長……。こんな真つ暗な所に船長のお友達がいるんですか？」

ネモ船長「彼は少し変わった人物で、一人で思想にふける事を好むのだ」

ナディア「どうして、あたしとジャンをここに……。？」

ネモ船長「未来ある君達にこの滅びていったアトランティスを知ってもらいたかったため……。何より友人が君に会いたいと言ったからだ」

ナディア「あたしに……。？」

ネモ船長「もうすぐ友人のいる場所に着く」

？「よく来たな、我が友よ」

ナディア「え……。？」

ネモ船長「君にも聞こえたようだな。それは友人の声だよ」

ナディア「でも、さっきの声……。直接、頭に響いてきた……。？」

ネモ船長「その理由は、すぐにわかる……。？」

僕達の目の前には……巨大なクジラが現れた……。

ジャン「あれは……!?」

ナディア「海の底に地面があつて、さらにその地下の湖にクジラがいるなんて……」

ネモ船長「紹介しよう。私の友人のイリオンだ」

ジャン「すごいや、ネモ船長！クジラと友達なんて！」

ナディア「さっきの声……あのクジラからの……」

ネモ船長「彼は君と話したいそうだ」

ジャン「話す……？ナディアと……？」

ネモ船長「そうだ。我々は一度、席を外そう」

ジャン「は、はい……」

僕とネモ船長はこの場から少し去つた……。

ーナディアです。

私は今、イリオンさんと話そうとしています。

ナディア「……」

イリオン「（そうか……。お前がナディアか……）」

ナディア「やっぱり、あなたが喋っているのね……」

イリオン 「(そうだ。。。 お前の心に直接呼びかけている)」

ナディア 「心に。。。？」

イリオン 「(そう。。。 ブルーウオーターを通せば、容易な事だ)」

ナディア 「ブルーウオーターを。。。」

イリオン 「(その様子では、まだお前はブルーウオーターの力を知らないようだな。。。)」

ナディア 「この石を巡って戦いが起きている。。。これって。。。そんなに大切なものなの？」

イリオン 「(全てを捨ててでもブルーウオーターは守らなければならない。。。それが、その石を受け継ぐ者の運命なのだ。。。)」

ナディア 「。。。」

イリオン 「(これ以上の事はネモに聞くといい)」

ナディア 「あの人は。。。何も話してくれないから。。。」

イリオン 「(そうか。。。それも仕方ない事かも知れない。。。)」

ナディア 「あの人と話さなくていいの？」

イリオン 「(もう別れは済んだ)」

ナディア 「別れ？」

イリオン「(そう…。お互いにもう生きて会う事はないという事だ)」

ナディア「どうして？」

イリオン「私は長く生き過ぎた…。もうすぐ、この生命も尽きるだろう…。その長い一生の中で思ったのは人間は面白い生き物だという事だ)」

ナディア「面白い…。？」

イリオン「人間は平和を求めて争い、争いを求めて平和を壊す…。本当に面白い生き物だ…。)」

ナディア「確かに…。そうかも知れない…。)」

イリオン「(だが、ナディア…。人間は面白い生き物ではあるが、愚かではない…。)」

私は、そう信じている…。)」

ナディア「あたしも…。今なら、あなたの言葉の意味がわかるわ」

イリオン「(どうする、ナディア？ネモの事を私の口から聞くかな？)」

ナディア「え…。)」

イリオン「(知りたいのだろう。自分の事…。そして、ネモの事を…。彼は、私にその役を託したのだろう。)」

ナディア「せっかくだけど、私は…。ネモ船長自身が話してくれるのを待つわ。真実を知るのは怖いけれど、ジャンもワタルも…。ネモ船長も自分のやるべき事と向き合っ

てるから」

イリオン「(わかったよ、ナディア。。。お前ならば、そのブルーウォーターを正しく使ってくれるだろう。。。今宵は良い夢が見れそうだ。。。ありがとう、ブルーウォーターの継承者達よ。。。)」

ジャン「。。。」

ネモ船長「ナディアの事が気になるようだな」

ジャン「え、ええ。。。」

ネモ船長「ジャン君。。。君はアトランティスの文明が滅んだ様をどう思った？」

ジャン「。。。怖かったです。。。マハル島のバベルの塔の時も思いましたが、科学の力は破壊の力になる。。。それを知る事が出来ました」

ネモ船長「そうか。。。」

ジャン「でも、エクスクロスのみんなは科学の力を良い事に使おうとしています。僕。。。色々な世界の色々な技術に触れて、ますます科学の力が。。。人間の生み出す力が好きになりました。確かに科学は怖いかも知れない。。。でも、それをどう使うかは人間に懸かっていると思うんです」

ネモ船長「。。。君達をここに連れてきたのはやはり間違いはなかったよ」

ジャン「ネモ船長。。。」

ネモ船長「私も君と同じだ。人間の力を信じたい……。
（だから、ナディア……。君達に
未来を残すために私は生命を懸けよう……）」

第46話 過去からの亡霊

「私はガーゴイルだ。」

私とエンブリヲは空中戦艦のブリッジにいた。

ちなみにかぎ爪の彼はリボンズ君と共にヨハン君のところへ行つたが……。

エンブリヲ「……アトランティスへの門は再び閉ざされたようだね」

ガーゴイル「構わないさ。既に方舟の復活に必要なデータと資材は揃っている。それに私には、君という協力者もいるしな」

エンブリヲ「そう言つてもらえて光栄だよ。10数年前……王ではなく君を選んだ私の決断はやはり間違いいではなかった」

ガーゴイル「そして、継承者の用意も出来た今、残るはブルーウォーターを手に入れ、ネモ君を抹殺するだけだ」

エンブリヲ「フフ……期待しているよ、ネメシス・ラ・アルゴール」

さて、始めるとしようか……。

―新垣 零だ。

今、N―ノーチラス号内でイコリーナさんがヴィヴィアンを追いかけていた……。

イコリーナ「駄目よ、ヴィヴィアン！ちゃんと定期検診を受けなきゃ！」

ヴィヴィアン「ちゃんとキャンディを舐めてるから、大丈夫だよ！」

イコリーナ「仕方ないわね……。じゃあ……」

操舵長「俺の出番だな。逃がさんぞ、ヴィヴィアン」

ヴィヴィアン「そこでマツチヨは反則だよ！」

ありやー、ヴィヴィアンの負けだな……。

すると、メルが俯いていた……。あのアトランティスの一件からずっとだな。

メル「……」

零「どうした、メル？」

メル「も、もう……海の中には行きませんよね……？」

零「大丈夫だって！もう行かないよ」

アスナ「それにしても、あなたの怯え方は尋常じゃないけど、何があったの？」

メル「私が6歳くらいの頃……仲の良い人と海へ遊びに行つたのですが……海で泳い

でいた私は脚をつらせてしまつて……もがく事も出来ずに溺れてしまつたんです……。

それで気がつくど浜辺に横たわっていて、話を聞くと仲の良い人が助けてくれたんです」

アスナ「あなたにとっては命の恩人ってわけね」

メル「それ以来、私は海に潜るのが嫌いになつてしまつて……」

零「それがあれだけ怯えていた原因か……。それで、その命の恩人は？ オニキスのメンバーなのか？」

メル「実は……。その……。覚えていません……。」
は……？

零「覚えてない？」

アスナ「どういう事？」

メル「わかりません……。ずっと一緒にいたという記憶はあるのですが……。その海で一件以降の彼の記憶……。そして、その人の声、顔……。全てが思い出せないんです……」

記憶喪失つてやつか……？

アスナ「記憶喪失にしては不自然ね……」

零「もしや、オニキスにその記憶を抜き取られた……。？」
いや、でもそんな事して何になるんだ……。？

メル「アスナさんはどうですか？」

アスナ「……私も実はある男の人の記憶の欠落があるの」

零「アスナもか？」

アスナ「ええ……。彼とは幼馴染のはずなんだけど……何も思い出せないの……」

零「……」

アスナ「でも、思い出せない記憶よりも今の記憶を大事にしたいわ」

メル「私も同感です！ 零さんと出会えた今を大切にしないと！」

零「……そうだな、その通りだな！」

操舵長「コラ、逃げるな、ヴィヴィアン！」

ヴィヴィアン「助けて〜！」

まだやってたのかよ……。

エルシヤ「アトランティスの一件から、約二週間……。Nーノーチラス号の皆さんとの

間の壁がなくなつたみたいね」

モモカ「そうですね。前よりも皆さんと仲良くなれたように思えます」

アンジュ「今後の事を検討するために一度、アルゼナルに寄る事になつたけど……。ネ

モ船長の素性がわかつた今、次は司令に全てを話してもらおうね」

ヒルダ「もうドラゴンの秘密もバレちまつた以上、隠しても無駄だしな」

アンジュ「その上で司令が何をする気なのか聞かせてもらおうか」

タスク「アレクトラはリベルタスのためにアンジユをヴィルキスのライダーに選んだと思うけど…」

アンジユ「たとえば、司令の目的が例のエンブリヲと戦う事だとしても、私は誰かの駒になるつもりはないわ。私が戦うのは自分自身のため…。リベルタスに私を参加させたいのなら、私を納得させてからね」

ヒルダ「あたしの戦いは…。あたし自身とアンジユのためだ…」

アンジユ「ヒルダ…」

ヒルダ「だから、アンジユ…。何があっても、あんたについていくよ」

アンジユ「ありがとう、ヒルダ。頼りにさせてもらうから」

ヒルダ「そういうわけだ、タスク…。！お前には負けないからな！」

しんのすけ「うおー！ヒルダお姉さんもタスクお兄さんも頑張れだぞー！」

みさえ「コラ、子供が口を挟まないの！」

タスク「俺は…。みんなで仲良くがいいと思うから…。三人で…」

零「…。おい、タスク。それ本気で言ってるのか？」

タスク「え、何が…？」

アンジユ「このヘンタイ！ヒルダまで毒牙にかけるつもりなの？？」

零「場合によっては止めないとな…。ヒルダの友人として」

ヒルダ「零……」

零「ヒルダ、お前の選ぶ道は険しい道のりだ……。だけど、俺は応援してるからな」

ヒルダ「ありがとうよ、零」

アンジュ「……」

零「何だよ？」

アンジュ「あなただって、本当はモテてたでしょ？」

零「自覚はねえ……。その出会いはなかったからな」

アンジュ「はあ……。タスクがあなたみたいならね……」

タスク「ア、アンジュ!!？」

零「俺には俺の良いところや悪いところがあれば、タスクにはタスクの良いところや悪いところがある……。お前もタスクのそこに惹かれたんだろう？」

アンジュ「だ、誰がこんなヘンタイに惹かれるのよ!」

零「イチヤついている現場を見た俺にそれを言うか？」

アンジュ「こ、この……!」

零「……冗談だよ。アンジュやタスクも頑張れよな」

アンジュ「……本当に腹が立つ奴ね……。でも、嫌いじゃない」

タスク「ありがとう、零」

零「どういたしました」

ロザリー「ヒルダの奴……。完全にアンジュにメロメロだな」

クリス「……。もうあたしなんて……。要らないんだね……」

ロザリー「そうだろうな」

クリス「……！」

ロザリー「どっかの誰かと違ってアンジュはいつも前向きだからな。見ているこっちもやる気が出てくるぜ」

クリス「……。そう……。だよ……」

モモカ「皆さん、それぞれに戦う目的があるみたいですけど、エルシャさんはどうなんです？」

エルシャ「私……？」

アンジュ「そう言えば、エルシャのそう言う話って聞いた事がなかったわね」

エルシャ「私は……。みんなのように世界を壊すとか、お金を貯めるとか、あんまり考えてないけど……。アルゼナルの幼年部の子達……。私を慕ってくれる、あの子達が幸せになれる世界が来ればいいな……。って思ってるわ」

アンジュ「エルシャらしい答えだね」

ナオミ「……」

一夏「ナオミ……？どうしたんだ、俯いて……」

ナオミ「みんなは世界や誰かの為に戦ってる……それなのに、私は自分の借金を返す事で精一杯なの……それが情けなくて……」

一夏「それって……情けない事なのか？」

ナオミ「え……？」

一夏「俺もみんなを守る為に戦ってるよ。でも、自分自身が参ったらみんなを守れないだろ？それにナオミがもし、借金返済のためだけに戦ってるなら、みんなを助けたりしないだろ？」

ナオミ「あ……」

一夏「ナオミは立派にみんなを守る為に戦ってると思うぜ！」

ナオミ「ふふっ……ありがとう、一夏！」

一夏「……やっぱり、ナオミは笑った顔の方がいいな」

ナオミ「え……ふえええっ!!？」

あ、このバカまたやりやがった……！

ナオミ「そ、そんな事……ないよ……！」

一夏「いやいや、俺が保証するって！」

鈴「い〜ち〜か〜？」

シャルロット「一夏は誰にでもそんな事を言うんだ？」

ラウラ「それでも私の夫か！」

一夏「ちよつ!?? 何でみんな、そんなに怒ってるんだよ!?? そんな誰にもは言つてないって！」

箒「では、誰に言つたんだ!??»

一夏「エクスクロスならラフタにフェルトさん、ミレイナ、ナディアにエメラナ姫、アマリさんだけだよ！」

だけって多いな!?? ってか、待て！

零「おい、待て！何か今聞きづてならない名前が出てきたぞ！」

一夏「あ！違つ！零……これは！」

簪「女たらし……！」

一夏「たらしじゃない！断じて！」

零「誰でもいい！一夏をぶつ飛ばすの手伝え！」

セシリア「わかりましたわ！」

楯無「覚悟してね、一夏君！」

一夏「待てって、言つてんだろー!!?»

そこから俺達の追いかけてこが始まった……。

ヒルダ「ところで、サリアはどこに行ったんだ？」

エルシヤ「サリアちゃんは司令の事を慕っていたから色々と考え込んでたみたいけど……」

アンジュ「真面目すぎるのよね、サリアは……」

まあ、それが悪いってことでもないけどな……。 って、逃すか、一夏あつ！

ーサリアよ。

私はエレクトラさんと話していた……。

エレクトラ「……それで真面目な自分を変えてみたいと？」

サリア「はい……。ごめんなさい、エレクトラさん……。こんな事……。他の誰にも相談できなくて……」

エレクトラ「いいのよ、サリア。私で良ければ、もつと話を聞かせて」

サリア「……アンジュやみんなは……。自分なりの戦う目的を見つけているのに私は……。そういうのがわからなくて……。私はずっと……。アレクトラの……。アルゼナルの司令の役に立ちたいとそれだけを考えてきたけど……。でも、アレクトラはヴェイルキスのライダーにアンジュを選んで……。もしかしたら、私……。誰にも期待されていない役

立たずなんじゃないかって思うと……」

エレクトラ「……」

サリア「私の話……おかしいですか？」

エレクトラ「ごめんなさい。あなたの話を聞いていたら、昔の事を思い出してしまつて……。あなたって……。昔の私に少し似ているから」

サリア「私とエレクトラさんが……？」

エレクトラ「そんなに驚くような事？」

サリア「だってエレクトラさんは大人で、周りからも慕われていて……。私なんか全然違って……」

エレクトラ「ありがとう、サリア。あなた……。私の事をそんな風に思ってくれていたのね。でもね……。本当の私は頑固で融通の利かない頭でつかちの女なのよ」

サリア「信じられません……！」

エレクトラ「もし私が、そんな私から変わったのだとしたら……。それは……。人を愛する事を知ったからだと思うわ」

サリア「愛する……。それこそ、よくわかりません……。私……。誰かに愛された事がないから……」

エレクトラ「サリア……」

第46話 過去からの亡霊

「ジルだ。」

エクスクロスはアルゼナルに来た。

ジル「来たか、エルシス・ラ・アルウォール……。あの男が覚悟を決めた今、いよいよリベルタス決行の時が来るか……」

さてと、彼等を出迎えなければ……。

私はネモ船長、タスク、竜の姫、アンジユと共に司令執務室で話を始めた……。

ネモ船長「……」

サラマンディーネ「……」

タスク「……」

ジル「ネモ船長とタスクと竜の姫……。大体の事は聞いたようだな、アンジユ」

アンジユ「ええ……」

ジル「それでお前が代表となり、私に確認に来たわけか……」

アンジュ「弁解はしないの？ 私達に全てを黙って、戦わせてきた事に対して」

ジル「そんなものをする必要はない。ただお前達に説明するタイミングがこちらの想定と異なつたに過ぎない」

アンジュ「……魔徒教団と通じている事については？」

ジル「使えるものは何でも利用する。それだけの話だ。タルテロス王としては不満があるだろうがな」

アンジュ「タルテロス王？」

ジル「ネモ船長の事だよ。エルシス・ラ・アルウォール……。タルテロス王国の件は、まだ話してなかつたようだな」

ネモ船長「……」

ジル「とは言うが、私としてはあなたが自分たちの戦いをアンジュ達に話していた事は意外だったよ」

ネモ船長「何とでも言うがいい、アレクトラ・マリア・フォン・レーベンヘルツ。私の覚悟は既に決まっている。後は機を待つだけだ」

アンジュ「司令……。あなたの腹づもりを聞かせてよ」

ジル「……」

アンジュ「あなたの思惑通り、私はヴィルキスの力を目覚めさせた。あなたは私に何をさせるつもり？」

ジル「無論、リベルタスだ。ノーマの自由を奪う神……エンブリヲを討ち、世界に我々の居場所を打ち立てる」

ネモ船長「そのエンブリヲを倒した後はどうするつもりだ？」

ジル「考えた事もないな。その後の事は成り行き任せだ」

ネモ船長「……それでは協力は出来ないな」

ジル「何……？」

ネモ船長「死ぬための戦いになど、協力は出来ないと言っている」

ジル「復讐のためだけに生きてきたあなたの言葉とは思えないな」

ネモ船長「私の生命の使い方の問題ではない」

アンジュ「悪いけど、私もネモ船長と同じ意見よ」

ジル「アンジュ……」

アンジュ「未来を見ていない戦いなんて自殺と同じようなものよ。私は生きるために戦っている……。あなたには協力できないわ、ジル」

ジル「……」

「エルシヤです。」

私とエクスクロスの子供達はアルゼナルの食堂にいるの。

ヒミコ「エルシヤ！何を作ってるのだ!?!?」

エルシヤ「せっかく、アルゼナルに寄つたんだから、幼年部の子達のためにパイを焼こうと思つて」

ヴィヴィアン「うおおおおおっ！エルシヤのパイは大きくて最高だ〜!」

ワタル「ねえねえ、エルシヤさん！それって僕達の分は!?!?」

エルシヤ「もちろん、あるわよ。期待して待つてね」

ワタル「やった〜！ありがとう、エルシヤさん!」

ヴィヴィアン「じゃあ、焼き上がるまであかし達、遊んでるね!」

ヒミコ「たくさん遊んで、たくさんお腹を減らすのだ!」

トオル「じゃあ、行こう!」

子供達は遊びに行つたわね。

エルシヤ「あらあら...」

ひろし「エルシヤちゃん、俺達も手伝おうか?」

みさえ「一人で焼き上げるのは大変でしょ?」

エルシャ「いえ、お二人は子供達をお願いします。ああ見えて心配なので」

みさえ「… わかったわ、無理しないでね。あなた」

ひろし「おう」

ひろしさんとみさえさんは子供達の元へ向かった…。

エルシャ「幼年部の子供達もワタル君達みたいに強くなつてくれるのを願うわ…」

エンブリヲ「だが、このままでは子供達に未来は来ないよ…」

だ、誰…？この人…！

エルシャ「え…」

エンブリヲ「光と闇…。神話の戦いの再現はこのアル・ワースを炎に包む。そこから

人々を…君の愛する子供達を教えるのは私だけだよ」

ークリスだよ。

私はヒルダとロザリーとロツカールームにいた。

ロザリー「先に行くぜ、クリス。この後、カレンやさやか、ジャンヌと一緒にジャス

ミンモールで買い物するんだからよ」

クリス「待つてよ、ロザリー、ヒルダ！」

ヒルダ「鈍くさいな、クリスは。みんなを待たせる気かよ」

クリス「でも、髪の毛を完全に乾かさないとうまく結べないし……」

ヒルダ「一つ縛りにしてるから、そんな風に余計な手間がかかるんだよ。二つ縛りにすりゃいいのに」

クリス「！」

ロザリー「じゃあ、先に行くぜ。お前も後から来いよな！」

ロザリーとヒルダはロッカールームから出て行った。

クリス「ひどいよ、ロザリー、ヒルダ……。もう……。この髪型の事も……。覚えてないんだね……」

エンブリヲ「かわいそうに……」

え……。!??

クリス「誰……。!?？」

エンブリヲ「そんなに怯えないで……。私が君を守るから……。そう……。私は君の真の友達になるためにここに来たんだ」

ーサリアよ。

私は格納庫でメイと話していた。

メイ「サリア：。。。アーキバスの整備、終わったよ」

サリア「ありがとう、メイ：。」

メイ「司令の指示でヒルダにもアーキバスを用意したし、みんなのパラメールもチューンしておいたよ」

サリア「そう：。」

メイ「元氣ないね：。。。どうしたの？」

サリア「大丈夫よ。何でもないから：。」

メイ「サリア達が戻って来たって事はいいよりベルタスを決行するんだね。頼むね、サリア。私達も頑張って、機体の整備するから」

サリア「うん：。」

メイ「私：。。。エクスクロスの艦に補給物資の積み込みがあるから行くね」

メイは走り去った：。。。

サリア「：。。。私は：。。。誰かに期待されるような人間じゃないのに：。。。」

エンブリヲ「そんな事はない」

男：。。。
!!?

サリア「何者!?？」

? 「君の価値を誰もわかってないのだとしたら、それはあまりに悲しい事だ。そうだとしたら、私が君を愛そう」

サリア「愛…。」

ーナオミだよ。

私は今、お墓に来ていた。

ナオミ「ココ、ミランダ、ゾーラ隊長… ただいま。最近来れなくてごめんね… 私、エクスクロスとして戦っているんだ! まあ、借金も返済しないとダメだけど… だから、またしばらく来れない… けど、必ずまた来るから… 私を… ずっと見守っていてね…。」

… よし! 戻ろうか!

エンブリヲ「死者へ自分の想いを告げたのかい?」

え…!??

ナオミ「だ、誰!?？」

エンブリヲ「私は… そうだね。君に対しての救世主かな?」

ナオミ「きゅ、救世主……？」

エンブリヲ「私と共に手を取り合えば、君の借金は無くなり、君の大切な人間も蘇らせることが出来る……」

ナオミ「借金が無くなり……ミランダやココ、ゾーラ隊長も蘇る……」

エンブリヲ「悪い話ではないと思うよ？」

ナオミ「わた、しは……。あなたとは手は取り合えません」

エンブリヲ「何故だい……？」

ナオミ「借金の事は自業自得だし……。それは私の覚悟でもある！それに……。死んだ人間をよみがえらせるなんて……。しちやダメだよ！そんなのココ達は望んでない！」

エンブリヲ「……。ふむ、仕方ない……。あまりやりたくはなかったが、君を力付くで連れて行くでしょう」

ナオミ「……！」

つ、捕まる……！

一夏「ナオミ！」

すると、そこへ一夏が走って来た。

エンブリヲ「……。織斑 一夏か……」

一夏「ナオミから離れろ！」

一夏は私を連れ去ろうとした男の人に殴りかかったけど、片手で受け止められる。
エンブリヲ「その程度かな？」

一夏「ぐはっ!!？」

男の人は一夏を私の元まで蹴り飛ばした。

ナオミ「一夏、大丈夫!!？」

エンブリヲ「君では私には勝てないよ」

ゼロ「ゼエリヤアアツ！」

エンブリヲ「!∴∴ちいっ！」

今度はゼロが現れて、男の人に飛び蹴りを浴びせた。

一夏「ゼロ！」

ゼロ「無事か、一夏、ナオミ！」

ナオミ「な、何とか∴∴！」

エンブリヲ「お前は∴∴ウルトラマンゼロか∴∴！」

ゼロ「俺の事を知っている∴∴?お前、誰だ!!？」

エンブリヲ「許さん∴∴許さんぞ!お前達、ウルトラ一族は絶対にな！」

そう言つて、男の人は走り去つていった∴∴。

ゼロ「なっ!!?待ちやがれ！」

ゼロも男の人を追いかけていった……。

ナオミ「一夏、本当に大丈夫？」

一夏「平気だつて、このくらい」

ナオミ「……ありがとう、助けてくれて」

一夏「仲間なんだから当たり前だろ？」

ナオミ「うん、そうだね！」

一夏「兎に角、ナオミはみんなにこの事を伝えてくれ！俺はゼロを追う！」

ナオミ「わかったよ！」

私は一夏と別れ、みんなにこの事を報告するために走った……。

ーナディアです。

私とジャンはアンジュさんの部屋に来ています。

ジャン「ここがアンジュさんの使っていた部屋か……」

ナディア「本当に何にもないのね」

ジャン「軽い気持ちでアルゼナルでの生活の事を聞いたけど、よくなかったかもね……」

ナディア「あの人は気にしてなかったみたいよ」

ジャン「最近、アンジュさんと仲良いんだね」

ナディア「あの人みたいになりたいって思う時もあるから……」

ジャン「ワガママぶりは似たようなものだよ」

ナディア「そういう話じゃなくて！」

ジャン「ごめん、ごめん！僕……飲み物をもらつてくるよ！」

ジャンは部屋から出て行った……。

ナディア「もう……ジャンつたら……。」

え……ブルーウオーターが……！

ナディア「ブルーウオーターが光った……！これって……何かの警告……！！？」

すると、誰かが部屋に入って来た。

エンブリヲ「失礼するよ」

ナディア「誰……！！？」

エンブリヲ「そう警戒しないでおくれ、プリンセス。それとも、その胸のブルーウオーターが何かを知らせてくれたのかな？」

ナディア「あなた……。ブルーウオーターの事を知っているの？」

エンブリヲ「では、自己紹介を……。私の名はエンブリヲ……」

エ、エンブリヲですって……!!?

ナディア「……！」

エンブリヲ「どうやら、その名は知っていたようだね。プリンセス……。私は君を迎えに来たんだ。さあ……。その胸の青き石と共においで。私と共に争いのない楽園を創ろう」

ジャン「ナディアから離れる！」

ジャン「……！」

エンブリヲ「騎士のお出ましか……。もつとも、出来る事は何もないだろうけどね」
アンジュ「丸腰で乗り込んで来るなんて、あなた……。余程のバカみたいね」

エンブリヲ「君も来たのかい、アンジュ」

零「アンジュだけじゃねえぞ！」

レイ「ゼロ達から話は聞いた！」

一夏「追いついた！」

ゼロ「今度は逃がさねえぞ！」

アンジュ「気安く名前を呼ばないでくれる、侵入者さん」

タスク「気をつけろ、アンジュ！そいつがエンブリヲだ！」

零「こいつが……!!？」

アンジュ「戦いの元凶がわざわざ自分でやって来たって事……!?」

エンブリヲ「その通り。人任せにしたくない事というものがあるのですね。ところでアンジュ……君はどうやって私の来訪を知ったのかな?」

アンジュ「指輪が……お母様に託された指輪が光って……ナディアの危機を教えてくださいましたのよ。それにナオミからも話は聞いたから!」

ナオミ「……」

エンブリヲ「なるほど……。あれはブルーウオーターを解析して創り上げたものだからね……。そういう事が起きても不思議ではない」

ナディア「ブルーウオーターは……アル・ワースのものなの……?」

エンブリヲ「君が望むなら、その石の意味も事細かに説明しよう、プリンセス」

アンジュ「噂以上に色々な事に手を出しているようね、あなたは」

エンブリヲ「それが調律者である私の務めだよ、アンジュ。そして、今日ここに来たのは……君を花嫁として迎えるためだ」

ナオミ「アンジュを花嫁に……!?」

アンジュ「黙りなさい!」

アンジュさんが銃をエンブリヲに撃った……。

エンブリヲ「あ……」

一夏「アンジュ…やったのか？」

アンジュ「ええ、これでリベルタスも完了って事ね」

レイ「…あまりにもあっけなすぎる…」

零「(レイさんの言う事はもつともだ…これが世界を支配していたエンブリヲなのか…?)」

ナディア「あ…ああ…」

アンジュ「ごめんね、ナディア。嫌なものを見せてしまつて。でもね…私はチャンスを逃したくなかつたの」

ナディア「でも…」

アンジュ「それにしても、あの男…最期の言葉が下らない冗談になるとはね…」
エンブリヲ「やれやれ…。求婚の言葉を冗談扱いされるとはね」

え、嘘…?!?

タスク「何っ?!?!」

零「な、何で生きてるんだよ…?!?!」

レイ「アンジュ、外したのか…?!?!」

アンジュ「いいえ、確かに心臓を撃ち抜いた筈なのに…!」

ゼロ「まさか、てめえは…!」

エンブリヲ「その通りだよ、ウルトラマンゼロ……。君達にわかる簡単な言葉で真実を告げよう。調律者である私は不死身なのだよ」

アンジュ「ふざけた事を！」

エンブリヲ「確かに求婚の場としてはいささか無粋ではあるな……。日を改めよう。プリンセス・ナディア……。君への招待も、またの機会に」

エンブリヲは歩き去った……。

アンジュ「……」

タスク「俺達は……何も出来なかった……」

ジャン「何なんですか、あいつは!?!」

タスク「調律者エンブリヲ……。俺達にとって最大の敵……。そして、奴は……。アンジュとナディアをその標的にしているらしい……」

アンジュ「冗談じゃないわ!何が花嫁よ!」

こ、今度は警報が鳴った……。!?!

レイ「敵襲の警報……!」

アンジュ「このアルゼナルが戦場になるの……。!?!」

私達はそれぞれの艦へ戻りました……。

「新垣 零だ。」

俺達は敵襲に備えるためにそれぞれの艦に戻った。

ハーリー「敵機確認しました！ネオ・アトランティスの空中戦艦です！」
敵の部隊が現れた。

ルリ「戦艦を前に出してください。それと同時に機動部隊を展開させてください」

ユリカ「了解！」

俺達は出撃した……。

ヒルダ「アーキバスの乗り心地、悪くないね……！」

ロザリー「あたし達のパラメイルまでチューンしてくれるとはら司令の奴……本気で
リベルタスつてのをやる気なわけか！」

ヴィヴィアン「サリアは？それにエルシャとクリスもいないよ」

しんのすけ「何か知ってる、エレクトラお姉さん？」

エレクトラ「連絡は受けてないけど……」

竜馬「今はいない人間の事はどうでもいい！」

アンジユ「ええ、まずは目の前の敵を叩くよ！」

隼人「だが、面倒だな…！」

チャム「どうして、ネオ・アトランティスがドラゴンを連れてるのよ！」

サラマンディーネ「あの様子…。どうやら、精神を制御されているようです」

號「それにインベーターと宇宙怪獣もいる」

カズミ「奴等も何者かに操られていると見て方がいいわね」

シヨウ「ドラムロとシンデンもいる…！」

エイサップ「ミスルギはバイストン・ウエルの人間やハウジヨウ軍の人間も自軍に取り込んだのか！」

ネモ船長「エンブリヲ…。ついに本気を出すか…。」

ガーゴイル「喜んでくれているかな、ネモ君？」

ネモ船長「ガーゴイル…！」

奴もいたのか…！

ガーゴイル「アトランティスの遺産を手に入れられなかったのは残念だが、私には彼という協力者がいる」

ネモ船長「そしてまた、あの時と同じ過ちを繰り返すのか…。」

ルルーシュ「あの時とは？」

ネモ船長「ガーゴイルこと、ネメシス・ラ・アルゴールはアトランティス人の末裔達

の国……タルテソス王国の宰相であった……」

ガーゴイル「そう……。そして、そこにいる男……ネモの本当の名はエルシス・ラ・アルフォールであり……。そのタルテソス王国の王であった」

グランデイス「ネモ様は……。王様だった……」

アマリ「タルテソス王国……。！確か、あの国は……」

ホープス「謎の災害によって、一夜にして壊滅したと聞きます」

ネモ船長「タルテソス王国を建国した者達は、祖先の超科学を封印し、アル・ワースの人々と共に生きていこうとした」

ガーゴイル「それが、そもそも間違いなのだよ。超科学を有するアトランティス人にとって人類など下等な生物に過ぎないのだ」

ネモ船長「そう考えたガーゴイルはアトランティスの超科学を復活させ、それによりアル・ワースを征服しようとした。そして、その協力者だったのがミスルギ皇国の支配者、エンブリヲだ」

アンジュ「あの男が……！」

ネモ船長「エンブリヲの目的は、ガーゴイルを通じてアトランティスの超科学を手に入れる事だったのだろう。あるいはエンブリヲの危険性を見抜き、密かに第一次リベルタスに協力した我々への仕返しだったのかもしれない」

タスク「ネモ船長とアレクトラはその時以来の関係なのか……」

ネモ船長「協力者を得たガーゴイルは内乱を起こし、王の一族を殺害し……。禁忌とされてきたバベルの塔を復活させた」

ガーゴイル「だが、バベルの塔は君の妨害によって自爆し、その爆発でタルテソス王国は滅んだ……。そう！タルテソス王国が滅んだのは王であった君のせいなのだよ、ネモ君！」

この男……何言ってるんだよ……！

零「何自分は悪くないって言ってるんだよ、クソ野郎が！」

アレクトラ「そうよ！バベルの塔を復活させたあなたとエンブリヲこそが全ての元凶よ！」

ネモ船長「……だが、結果としてタルテソスは滅んだ……。多くの人命と共に……」

そして、その衝撃によって別の世界に跳ばされた私達は同じく転移に巻き込まれたガーゴイルに戦いを挑んだのだ」

ノブナガ「それがそなたとガーゴイルの関係であり、そなた等が地球にいた経緯か……」

ガーゴイル「責任転嫁もはなはだしいな、ネモ君。君があの時、私の提案に従ってくれれば、あの様な悲劇は起きなかった……。そうすれば君は、家族も国も失う事はなかつ

たのだよ」

ネモ船長「…… 黙れ、ガーゴイル。もはや我々の間に言葉は不要だ」

ガーゴイル「決着をつけるのは私も望むところだ。だが、今日は別の目的で、ここにきている」

現れたのは…… 黒いパラメイルが六機と黒いオーラバトラー…… ！！？

ヒルダ「黒いパラメイル！」

サラマンディーネ「あれは…… ラグナメイルです！」

アンジュ「サラ子の世界を滅ぼした最終兵器が来たの…… ！！？」

エンブリヲ「その通りだよ、アンジュ」

アンジュ「エンブリヲ！」

トオル「あの人が…… エンブリヲ…… ！」

九郎「大将首が自ら戦場に出て来たのかよ！」

シモン「なら、チャンスだ！ 奴を倒せば、ミスルギとの戦いは終わるぞ！」

アンジュ「みんな！ とにかく、あいつを狙うわよ！」

サリア「そうはさせないわよ、アンジュ！」

な、何…… ！！？

アンジュ「サリア！！？ どうして、あなたが！！？」

クリス「あなたにはわからないよ、あたし達の気持ちは」

エルシャ「ごめんなさい……。でも、これが私達の選んだ道なの」

サリアもクリスもエルシャも……。何で、ラグナメールに乗ってるんだよ……。!??

ヴィヴィアン「げげっ！クリスのエルシャだ！」

ターニヤ「私達はエンブリヲ様にラグナメールを与えられた……」

イルマ「私達はエンブリヲ様の剣であり、エンブリヲ様の盾となる者……」

ヒルダ「パラメール第三中隊のターニヤとイルマ……。！お前達もいるのかよ！」

サリア「私達はエンブリヲ様と共に生きる者！名付けてダイヤモンドローズ騎士団

！」

……。だ、だせえ……。

アンジュ「ダサツ！何なのよ、それ!?？」

サリア「アンジュ！私達の戦いを愚弄するあなたは許してはおけない！」

アンジュ「落ち着きなよ、サリア!?？どうして、あなた達がエンブリヲの仲間になっ

てるのよ！」

サリア「エンブリヲ様は私に愛を与えてくれた！」

クリス「エンブリヲ君は私の友達になってくれた！」

エルシャ「エンブリヲさんは私達に未来を約束してくれた」

アンジュ「話にならない！あんな男の言葉にころつと騙されるなんて！」

ジャンヌ「どうするつもりなの、アンジュ！！？」

アンジュ「どうするもこうするもないわよ！敵ならば倒すだけよ！」

ワタル「で、でも…！」

アンジュ「覚悟を決めて、ワタル。向こうは本気よ」

舞人「戦うしか…ないのか…」

シヨウ「あのオーラバトラーはいつたい…！！？」

バーン「ふふふ… 久しいな、シャウ・ザマ」

シヨウ「ま、まさか…！バーン… バーン・バニングス…！！？」

チャム「ど、どうしてあなたが！！？」

バーン「あの時刺し違えたお前もこのアル・ワースに辿り着いた…。ならば、答えは

出ているであろう」

シヨウ「ここは俺達の世界とは違うんだぞ！」

バーン「そんな事で我が憎しみのオーラを消せるとでも思っているのか！」

シヨウ「くっ… バーン…！」

バーン「今此処でお前を… このズワウスでお前を討ち取る！」

マーベル「シヨウ…」

シヨウ「：：ならば、俺が何度でもお前を止める：：聖戦士として！」
バーン「良いだろう。流石は我がライバルだ！」

ネモ船長「エンブリヲ：：。人の心に入り込むお前は悪魔だ」

エンブリヲ「厳しいね、タルテソス王：：。いや、国を失った君に王の称号は相応しくないか。そういうわけだよ。ガーゴイルがいれば、君という存在に用はない。そろそろ目障りになって来た君に引導を渡し、私は花嫁を迎えよう」

甲兎「花嫁：：？あいつ、何を言ってるんだ：：？」

アンジュ「頭のおかしな奴の言う事なんて聞く必要はないよ！さっさと片付ける！」
サラマンディーネ「ドラゴン達は無力化した後に精神制御から解放します！下手な遠慮は不要です！」

ネモ船長「各機はガーゴイルの乗艦とラグナメイに攻撃を集中しろ！」

ガーゴイル「無駄な事をしてくれるよ、あの時も今日も」

エンブリヲ「それが彼等の生き方なのだよ。愚かな事にね。今日は挨拶に来ただけだが、5分間ほど、彼等の茶番に付き合ってやろう」

ネモ船長「何とも言うがいい：：！だが、我々の覚悟をなめるなよ：：！」

アンジュ「行くわよ、エンブリヲ！あなたを倒して、全てを終わらせる！その邪魔をふる者は蹴散らして!!？」

バーン「5分などでは終わらせるものか……行くぞ、シヨウ・ザマ！」
シヨウ「来い……！バーン・バニングス！」
俺達は戦闘を開始した……。

俺達が10機ほど敵を倒した時の事だった。

ホープス「……！」

アマリ「どうしたの、ホープス……？」

ホープス「厄介な事になりそうです、これは」

現れたのは魔徒教団だった。

アマリ「魔徒教団！」

アル「もしや、エンブリヲと戦うために来たのか……？」

イオリ「各機、攻撃を開始しろ！」

魔徒教団が俺達に攻撃を仕掛けて来た……。

ウエスト「吾輩達を狙って来たのである！」

ケロロ「何故でありますか……？」

アマリ「どう言う事なの、イオリ君……？」

零「エンブリヲがそこにいるんだぞ！」

イオリ「魔従教団はミスルギ皇国を支持する事を決定した」

アマリ「何ですって!?？」

クラマ「法と秩序の番人である魔従教団が悪党の見方をするのかよ!?？」

イオリ「それがアル・ワースのためであると判断したまでだ」

アマリ「待つてください！そんな事をすれば、戦いが拡大するだけです！」

イオリ「アマリ。。。背教者であるお前の抹殺命令も出ている。だが、お前が投降するのなら、俺から上に取り計らう事も。。。」

こいつ。。。！

アマリ「私の事よりも、ミスルギを支持する理由を説明してください！」

イオリ「残念だ、アマリ。。。最後のチャンスが無駄にしたか。。。」

シモン「問答無用かよ！」

ウイル「こうなった以上、迎え撃つしかない！」

零「。。。！ちいつ！こんな時にかよ。。。！」

今度はオニキスの機体が現れた。

アスナ「オニキスまで。。。！」

メル「で、でも何なんですか、あのアマテラスは！」

確かに。。。アマテラスの姿が。。。変わっている。。。？

リン「アマテラス・ツヴァイです」

零「カルセドニーじゃない…？誰だ!?？」

ギルガ「彼女はリン・マスカライトちゃん。僕のパートナーだ」

メル「そ、そんな…リンちゃん…!?？」

リン「…メルちゃん…。残念だよ。私はあなたを倒さないといけない…」

メル「…」

アスナ「メル、戦えるの!?？」

メル「やり…ます…！」

ギルガ「今回来たのは僕達だけじゃないんだよ、ねえ、兄さん？」

また何か…？って、え…？

現れたのは…紫色のゼフィルス…!?？」

零「む、紫色の…ゼフィルス…!?？」

リユクス「あれはいつたい何なのですか!?？」

アスナ「わ、私も知らないわよ、あんな機体！」

ラゴウ「これはナイトメア・ゼフィルスだ…」

メル「そ、その声は…！」

アスナ「嘘…でしょう…!?？」

!?？」

零「何者だ!?？」

ラゴウ「初めましてだな、新垣 零……。俺はラゴウ・カルセドニー……。ギルガの兄だ」

零「カルセドニーの兄貴だと……。!?？」

アスナ「首領の左腕……。まさか、戻って来ていたなんて……。！」

ラゴウ「弟が世話になったみたいだから……。今回は俺も参加させてもらう」
こいつ……。今までの奴らとは大違いの殺気だ……。！」

零「……。だからと言って、お前には負けるわけにはいかない！」

ラゴウ「……。いいだろう、新垣 零……。此処で潰す」

アスナ「れ、零……。！」

零「アスナ、メル……。怖いなら戻れ！」

アスナ「……。わ、私だって、戦うわよ！」

メル「私もメルさんと一緒です！こうなる事は……。わかっていましたから……。！」

零「わかった……。でも、無理はするなよ？」

ラゴウ「愚かな……。お前達にも贖罪を与えてやる！」

零「させるかよ！お前を倒して、アスナ達には一步も触れさせねえ！」

ギルガ「そう言うわけだ、僕達の目的はあくまでも新垣 零達だ」

リン「ですので、ミスルギの邪魔はしません」

エンブリヲ「これは嬉しい誤算だね」

ガーゴイル「どうやら、教団は我々こそがアル・ワースの覇者に相応しいと認めたようだ」

ネモ船長「魔徒教団……。彼等にとつて重要なのは自らの定めた法だけだ。タルテソス王国が崩壊したあの日も、彼等はガーゴイルを止めるどころか、その行動を支援していた……」

アキト「それがネモ船長が教団を信じない理由なのか……」

ネモ船長「だから、私は誰にも頼らず、自分達の力だけで復讐を果たすと誓ったのだ」

アマリ「考え直して、イオリ君！教団の決定ではなくあなたの考えを聞かせてください！」

イオリ「教団の決定は、俺の意思そのもの！背教者のお前の言葉はもう俺へは届かない！」

ホープス「マスター……。言っても無駄な以上、速やかに迎撃する事をお勧めします」
アマリ「今までの私は、疑いながらも心のどこかでは教団を信じていた……。でも今……。その大切なものが壊されてしまった……」

零「アマリ……」

ホープス「マスター…」

アマリ「戦うわ、ホープス…！私は…私の信じた道のためにも！」

イオリ「ついに完全にエンデに背を向けたか！ならば、せめて俺の手で…！」

零「アマリはやらせねえって何回言えばわかるんだよ、お前は！」

ラゴウ「愛する者のために必死になるのは構わんが…俺の存在を忘れては困る」

零「忘れねえよ、てめえだけは！」

アマリ「戦いを広げる事が世界のためだと言うのなら、その証を見せてください！それが出来ないのなら、あなた達は…魔徒教団の敵です！」

俺達は戦闘を再開した…

俺達はイルマのエイレーネにダメージを与える。

イルマ「これ以上は無理ね…。後退する」

エイレーネは撤退した…

ロザリー「第三中隊のイルマ…」

ヒルダ「何だって、あいつがこんな事になってるんだよ…」

ターニヤのビクトリアにダメージを与えた。

ターニャ「ここまでか……。後退する」

ビクトリアは撤退した……。

ロザリー「あれ……。第三中隊のターニャだよな……」

ヒルダ「あいつ……。脱走したって聞いてたけど、まさか、こんな事になってるとはよ……」

〈戦闘会話 零VSイオリ〉

零「やっぱり、あの時にお前達と手を組まなくて正解だったって事だな！」

イオリ「愚かな奴等だ！エンデに逆らった罪は大きいぞ！」

零「何がエンデだ！間違った道へ進ませようとする神なんて、神じゃねえ！」

イオリ「許さんぞ、新垣！神エンデを馬鹿にする事は絶対にな！」

ゼルガードの攻撃でアイオライトの乗るデューベルはダメージを受けた。

イオリ「ここまでか……。！後退するぞ！」

アマリ「待ってください、イオリ君！」

イオリ「アマリ！教団に戻る気になったか！」

アマリ「それはありません。戻って、導師キールデインに伝えてください。教団がエ

ンブリヲに協力するのなら、私達はそれと戦います」

イオリ「アマリ：：！お前はきつと後悔する事になるぞ！」

アイオライトの乗るディーベルは撤退した：：。

アマリ「後悔するような生き方はしたくない：：。そう思ったから、私は旅に出たのです」

そう言う事だ、アイオライト。お前にアマリは渡さない：：！

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「もう僕は負けない！二人だと二倍の力になる！」

零「何倍になろうと俺だって負けるわけにはいかねえんだよ！」

リン「新垣さん：：お手合わせを願います！」

零「お前達が何人来ようと：：俺が相手になつてやる！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

メル「リンちゃん：：」

リン「メルちゃん：：。今なら私の言葉であなたをオニキスに戻す事が出来るわ：：。だから：：！」

メル「何と言われても……私は戻ることは出来ない……。あなたに守りたい人がいるように私も守りたい人がいるから！」

リン「……やっぱり、ダメなのね……」

ギルガ「リンちゃん、行くよ？」

リン「……はい……。裏切り者のメル・カーネリアン！お前を拘束する！」

メル「簡単には捕まらない！」

〈戦闘会話 アスナVSギルガ〉

アスナ「ギルガ……あなた、リンまでタラシ込んだの!?？」

ギルガ「人聞きの悪い事を言わないでくれないか、アスナちゃん？」

リン「私は私の意思でここにいます！」

アスナ「……リン、あなたとは戦いたくないけど……向かってくるのなら倒すわ！」

リン「変わりましたね、アスナ先輩……」

リリスとメサイアの攻撃でアマテラス・ツヴァイにダメージを与えた。

ギルガ「下見は十分だ。兄さん、先に後退します」

ラゴウ「勝手にしろ」

メル「リンちゃん！」

リン「メルちゃん……。次は負けないから」

そう言い残して、アマテラス・ツヴアイは撤退した……。

零「メル……」

メル「私も……。そう簡単に負けないか……！」

〈戦闘会話　ナオミVSエルシャ〉

ナオミ「エルシャ……。あなたまで……！」

エルシャ「ナオミちゃん……。私は容赦しないわよ！」

ナオミ「……私だって、ここで負けるわけにはいかないよ！だから、あなたを止める
！」

〈戦闘会話　しんのすけVSエルシャ〉

しんのすけ「エルシャお姉さん……」

みさえ「どうしてなの、エルシャちゃん！」

ひろし「やめるんだ！俺達が戦う必要なんてないだろ！？？」

エルシャ「ごめんなさい……。でも、私は止まるわけにはいかないんです！」
ひまわり「たう……」

カンタム「迎撃しましょう……！」

ひろし「だけど！」

みさえ「……やりましょう。今のエルシャちゃんは敵……。だから……！」

ひろし「みさえ……」

みさえ「でも、忘れないで……。！私はいつまであなた達の味方だから！」

エルシャ「……。ありがとうございます……」

俺達はエルシャの乗るレイジアにダメージを与えた。

エルシャ「ここまでね……。後退するしかないわ」

ヴィヴィアン「行っちゃうのか、エルシャ……」

みさえ「エルシャちゃん……」

エルシャ「ごめんなさい、ヴィヴィちゃん、みさえさん……。でも、こうする事が一番正しいと私は思うの。食堂の冷蔵庫にパイが入ってるから……。みんなと一緒に食べてね」

レイジアは撤退した……。

マサオ「エルシヤさん……」

ヒミコ「エルシヤは……どうなっちゃうんだ？」

ヴィヴィアン「わかんない……。わかんないけど……すごく悲しいや……」

みさえ「今は前を向きましょう、みんな」

しんのすけ「母ちゃん……わかったゾ！」

〈戦闘会話　ナオミVSクリス〉

ナオミ「クリス！みんなと一緒に戻ろうよ！」

クリス「みんなと一緒に……？私の事を何も知らないのにそんな事言わないで！」

ナオミ「っ！……ク、クリス……」

クリス「私の友達はエンブリヲ君だけ！あんたは私の敵……それだけだよ！」

〈戦闘会話　一夏VSクリス〉

一夏「どうしたんだよ、クリス！エンブリヲに何かされたのか？？」

クリス「心配するフリはいいよ、一夏君……」

一夏「フリなんかじゃない！俺は本気でお前を……！」

クリス「エンブリヲ君の邪魔をするのなら、一夏君でも倒す！ 覚悟してよ！」

クリスの乗るテオドーラにダメージを負わせた。

クリス「ごめん、エンブリヲ君……！ 期待に応えられなかった……！」

ヒルダ「待てよ、クリス！」

ロザリー「お前、あのエンブリヲの所に行っちゃまうのかよ！」

クリス「エンブリヲ君はあたしの本当の友達なんだ！ あんた達なんかとは違う！」

ロザリー「本当の友達……」

クリス「ロザリー、ヒルダ……。あんた達は……絶対に許さない……」

一夏「ま、待てよ、クリス！」

クリス「一夏君……邪魔をするならあんたも倒すから」

そう言い残し、テオドーラは撤退した……。

ヒルダ「何だよ、本当の友達って……」

ロザリー「わかんねえよ……。何もかも……」

一夏「クリス……。ロザリー……」

〈戦闘会話　ナオミVSサリア〉

サリア「ナオミ……。あなたなら私からエンブリヲ様に取り合って、仲間にしてあげてもいいのよ」

ナオミ「私もエンブリヲに誘われたよ……。でも、自分から断ったの！」

サリア「どうして?!？」

ナオミ「私は私として生きるから!だから、エンブリヲとは一緒に戦えない！」

サリア「残念ね、ならばあなたも私達の敵よ！」

〈戦闘会話　トオルVSサリア〉

トオル「やめてください、サリアさん！」

サリア「トオル……。ごめんなさい。でも、私には愛が必要なの……」

トオル「魔法少女はそんな歪んだ愛は持ってないよ！」

サリア「あなたから見れば、歪んでいるのかもしれない……。でも、私にはこれしかないの！」

ネネ「そんなの本当の愛じゃないわよ！」

ポーちゃん「風間君……。！」

トオル「うん!みんな、サリアさんを止めるために力を貸して！」

マサオ「う、うん！」

サリア「勝負よ……。もえPが強いか、プリティ・サリアンが強いか！」

俺達の攻撃でサリアの乗るクレオパトラに大ダメージを与えた。

サリア「くっ……。！まだクレオパトラの能力を完全には引き出せていないか……。！」

アンジユ「待ちなさい、サリア！あなた、本気で私達を裏切るつもり？！」

サリア「裏切ったのは私じゃない……。アレクトラよ」

トオル「サリアさん！」

サリア「トオル……。じゃあね……」

クレオパトラは撤退した……。

アンジユ「サリア……。あんた……。何がしたいのよ……」

トオル「サリアさん……。そんな……」

しんのすけ「大丈夫か、風間君？」

トオル「う、うん……」

タスク「（見ているか、アレクトラ……。これは、あなたの身勝手さが招いた事なんだ

ぞ……。）」

〈戦闘会話 ショウVSバーン〉

バーン「今わかった……。私がこの世界に来たのは貴様と再び、戦う事だったのだ！」
ショウ「俺も……。この世界で再び、お前の悪しきオーラを浄化するために来たのかも
しれない……」

チャム「ショウ……」

バーン「ならば、答えは一つだ！」

ショウ「ああ……。覚悟しろ、バーン・バニングス……！」

〈戦闘会話 マーベルVSバーン〉

マーベル「ここはバーストン・ウエルでもなければ、私達の世界でもない……。ショウ
に執着するのはやめて別の生き方を探す道だつてあるはずよ！」

バーン「人はそれほど自由にはなれぬ！宿命からも、己自身の感情からもな！だから
こそ今生での決着を求めろのだ！」

マーベル「もう何を言つても無駄ね……。だったら、私だって、あなたを止めてみせる
！」

〈戦闘会話 エイサツプVSバーン〉

エレボス「あの人のオーラ……怖いよ……！」

バーン「異世界の聖戦士か……。貴様の力量も見ておく必要があるな」

エイサツプ「何だってあんた達はシヨウさんを傷つけるんだ……！あの人は充分に傷ついている……。それをいい加減に分かれよ！」

ビルバインのオーラ斬りでズワウスにダメージを与えた……。

バーン「やはり、まだズワウスには慣れぬか……。シヨウ・ザマ！この勝負の決着は次の機会とさせてもらう！」

シヨウ「バーン！俺は何度だって諦めないぞ！」

バーン「それを聞けただけでよしとする……」

ズワウスは撤退した……。

マーベル「シヨウ……平気？」

シヨウ「ああ。俺はもう立ち止まってはいられないからな」

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

ラゴウ「オニキスの兵士達を退けてきたその力……見極めさせてもらう」
 零「お前には全力で向かわないとおそらく勝てない……！だから、加減はしねえぞ！」
 ラゴウ「いいだろう。ならば、俺も手を抜く気はない」

〈戦闘会話 メルorアスナVSラゴウ〉

ラゴウ「オニキスの裏切り者には死、あるのみだ」
 メル「アスナさん……本気で参りましょう……！」
 アスナ「ええ、冗談で勝てる相手じゃないわね……！」
 ラゴウ「本気を出そうと出さまいと……お前達では俺には勝てん」
 アスナ「舐めないでよね、私達の力を！」

〈戦闘会話 アマリVSラゴウ〉

ラゴウ「お前がアマリ・アクアマリン……。新垣 零の愛する女か……」
 アマリ「私はあなたには負けません！」
 ラゴウ「……ほう……」

ホープス「何ですか、あなたもマスターを連れ去るなどと言う気ですか？」

ラゴウ「私をギルガの様な愚かな弟と一緒にしてもらっては困る……。だが、お前は敵であることには変わらない……。それだけだ」

ゼフィルス、リリス、メサイアの連携攻撃でナイトメア・ゼフィルスにダメージを与えた。

零「どうだ!?？」

ラゴウ「なかなかやるではないか……。だが、それがお前達の限界だ」

ナイトメア・ゼフィルスの目が赤く……。?ハイバスタードモードか……。!

零「させるかよ……。!」

俺はエボリューションモードを発動させ、ナイトメア・ゼフィルスと攻撃をぶつけ合ったが……。

奴はエボリューションモード以上の速さで攻撃を繰り出して来た為、ゼフィルスはダメージを受けた。

零「ぐっ……。!?？」

ラゴウ「この程度か?少々実力不足だな」

アマリ「零君!」

零「……果たして、そうかな……？」

ラゴウ「何……？ぬっ……！！？」

ナイトメア・ゼフィルスに軽く電流が走った……。

通っていないと思っていたか……？

零「一発だけ……攻撃が通ったんだよ……！」

ラゴウ「……ふうー……。なるほど、お前の力を見くびっていた様だ。流星は我々、オニキスと敵対するだけの事はある。今日の所は俺に一撃を与えた事を免じて退いてやる……。だが、次はこうはいかんで、零……」

零「その言葉……そっくりそのまま返してやるよ……ラゴウ……！」

ラゴウ「……その言葉が楽しみだ」

そう言い残し、ナイトメア・ゼフィルスは撤退した……。

正直助かった……。あのまま戦っていたら、確実にこつちが負けていた……。

アスナ「あのラゴウを退けるなんて……」

メル「流星は零さんです！」

零「ま、まあな……」

あはは……。こいつらの前では弱音は吐けねえよなあ……。

〈戦闘会話 零VSガーゴイル〉

零「お前は自分自身の悪行を他人のせいにする…。最低の人間だな！」

ガーゴイル「異界人の君に何がわかる？」

零「わからねえな…。お前の歪んだ考えは！その歪んだ夢…。俺が叩き潰してやる！」

Nーノーチラス号の砲撃でガーゴイルの乗る空中戦艦にダメージを与えた…。

ガーゴイル「ネモ君自慢の発掘戦艦とエクスクロスが相手ではこの艦では力不足だな。今日の所は、ここまでとしよう」

ネモ船長「待て、ガーゴイル…！」

ガーゴイル「安心するがいい、ネモ君。君との決着はいずれつける。それに相応しい舞台を私は用意しよう」

空中戦艦は撤退した…。

ネモ船長「…」

エレクトラ「ガーゴイルの最後の言葉…。なんの事を言っているのでしょうか…。」

ネモ船長「虚勢とは思えん……。警戒が必要だろう……」

〈戦闘会話 零VSエンブリヲ〉

エンブリヲ「新垣 零……。君は他の男とは違う……。私の元で働いてみる気はないかな？」

零「残念だが、男に気に入られる趣味はねえんだよ……。散々世界を引つ掻き回して来た報いを受けやがれ！」

エンブリヲ「やはり、今の君がその機体に乗るのは相応しくないね……」

〈戦闘会話 ナオミVSエンブリヲ〉

ナオミ「エンブリヲ……！」

エンブリヲ「ナオミ……。君は私の元へ来なかった事を絶対に後悔する」
ナオミ「後悔なんてしてない……。これが私の選んだ道だから！」

エンブリヲ「……。やはり、私は君が欲しい……。アンジユの次にね……」

〈戦闘会話 一夏VSエンブリヲ〉

一夏「箒達を捕まえて、ナオミまで連れて行こうとしたお前を俺は許さない！」
エンブリヲ「私も君を許さないよ。君のせいでナオミを奪い損ねたのだからね」
一夏「ナオミもみんなも……俺が守ってみせる！」
エンブリヲ「出来るかな、君に？」

〈戦闘会話 千冬VSエンブリヲ〉

千冬「お前の企みもここまでだ、エンブリヲ……！」

エンブリヲ「君が千冬か……。確かにちーちゃんという名が似合いそうだ」

千冬「何……!!? その呼び方……まさか……！」

エンブリヲ「さて、どうだろうね」

〈戦闘会話 ゼロVSエンブリヲ〉

ゼロ「お前、どうしてウルトラ一族を恨むんだ!!?」

エンブリヲ「説明など必要ない……！今ここで倒されるのだからな！」

ゼロ「勝手に勝った気でいてんじゃねえ！こうなったら、ぶっ飛ばしてやるぜ！」

ヴィルキスの能力解放でエンブリヲのヒステリカにダメージを与えた。

エンブリヲ「なかなかやるものだね。それは認めよう」

アンジュ「逃げるつもり!?」

エンブリヲ「逃げる…? そんな事をわたしがする必要がないのを君はよく知っているはずだよ、アンジュ。そう…調律者である私は不死の存在なのだから」

アンジュ「…」

エンブリヲ「心配する事はない、アンジュ。私達は、すぐにまた会える。プリンセス・ナディアと一緒にその時を待っているがいい」

千冬「待て、エンブリヲ！」

エンブリヲ「何かな、千冬？」

千冬「気安く名前で呼ぶな…まさか、ミスルギには…東がいるのか?」
箒「え…!?」

エンブリヲ「ちーちゃんなら必ず来てくれる…そう言っていたね」

千冬「エンブリヲ、貴様…！」

エンブリヲ「怒った顔も素敵だね、千冬…。では、失礼させてもらうよ」
ヒステリカは撤退した…。

ジョーイ「逃げられた…！」

ワタル「な、何なの、あいつ!? 気持ち悪いよ！」

しんのすけ「ブリブリヨのくせに！」

みさえ「エンブリヨよ」

アンジュ「…」

タスク「…」

エンブリヨ「エンブリヨ…。想像以上に恐ろしい相手かもしれない…」

ゼロ「（エンブリヨのあの様々な力…。何処かウルトラの力と似ている…。それに奴はウルトラ一族を必要以上に憎んでいる…。何か関係があるのか…？）」

ようやく戦いが終わった…。

ルルーシユ「エンブリヨらガーゴイル…。そして、魔徒教団…」

シヨウ「オニキスにバーン…」

零「ラゴウ、か…」

アンジュ「それだけじゃない…。サリア、クリス、エルシャ…」

ヒルダ「くそっ…。！何がどうなってんだよ!!？」

メル「リンちゃん…」

ネモ船長「各機を帰還させろ。今後の事を検討する」

エレクトラ「了解です」

ラゴウ・カルセドニー…。次きたその時こそ…。

ジル「：。」

？「浮かない顔だね、アレクトラ」

ジル「お前は：。」

俺達はそれぞれの艦へ戻った：。

ージルだ。

私の目の前にはエンブリヲがいた。

エンブリヲ「フフ：。部下を失った事がショックだったようだね」

ジル「エンブリヲ！」

オリビエ「な、何なんです、この人！？」

ヒカル「クロアン」「いつの間に司令室に侵入したのよ」

パメラ「ヒカル、オリビエ！下がって！」

エンブリヲ「心配しなくていいよ、レディ達。私が用があるのは、アレクトラだから」

ジル「何をしに来た？」

エンブリヲ「久しぶりに顔を見に来た：。そういう答えではダメかな、アレクトラ

？」

ジル「お前という男は：。」

エンブリヲ「私を拒絶するのなら、撃つなり、斬るなり、好きにすればいい。もっとも君に、それが出来るのならの話だけどね、可愛いアレクトラ」

ジル「…」

すると、マギーとジャスマンが司令室に入つて来た…。

マギー「大丈夫か、アレクトラ!!?」

ジャスマン「侵入者つてのは、こいつかい!」

エンブリヲ「騒がしくなってきたね…。では、そろそろ失礼しよう」

ジル「…」

エンブリヲ「アレクトラ…。その気になったら、私を訪ねてくれ。サリア達と同じように君を受け入れよう。あの時のようにね」

エンブリヲは消えた…。

ジル「エンブリヲ…」

マギー「アレクトラ…。あんた…」

ジャスマン「過去にあいつに…。エンブリヲに会った事があるんだね…」

ジル「…」

―新垣 零だ。

俺はエクスクロスの代表として、ネモ船長と共にアルゼナルの司令執務室に来ていた。

ジル「…」

ネモ船長「ジャスミン司令…。あなたに会うのも10数年ぶりか…」

ジャスミン「もうあたしは司令じゃない…。前のリベルタスの後、その座をジルに譲ったからね」

ネモ船長「そうだったな…。かつての司令だったあなた…ヴィルクスのライダーだったアレクトラ…。医師のマギー…。あの時のリベルタスのメンバーで生き残ったのは、あなた達だけか…」

ジャスミン「ああ、そうさ。そして、今も戦っている」

マギー「アレクトラ…」

ジル「…」

マギー「聞かせてもらおうよ。あんたとエンブリヲの間に何があったのか」

ジャスミン「ここにいるのは、あたし達とタルテソス王、それからエクスクロスの代表のその小僧だけだ。全部、話しちまいな」

ジル「…」

零「……」

こんな時までだんまりかよ……！

マギー「アレクトラ！」

ジル「私は……エンブリヲの人形だった……」

マギー「何……!?」

零「人形……？」

ジル「奴に心を支配され、全てを奪われたんだ……。誇りも、使命も、純潔も……。怖かったよ……。リベルタスの大義、ノーマ解放の使命……。仲間との絆……。それが全部、奴への愛情、理想、快楽に塗り替えられていった……」

何だよ……。それ……。

マギー「何で黙ってたんだ……？」

ジル「どう話せばよかったんだろう……。エンブリヲを殺しに行ったら、逆に身も心も奪われました……。って。全部私のせいさ……。リベルタスの失敗も、仲間の死も全部ね。こんな汚れた女を助けるために……。みんな、死んでしまった……。！」

ネモ船長「それを償う事が、君の戦い……。リベルタスか……」

ジル「私の出来る弔いは、ただ一つ……。エンブリヲを殺す……。それだけだ。そう思っ生きてきたのに……。あいつを目の前にしたら、指一本動かす事が出来なかった……」

零「… あんたは個人的な復讐のために新たなリベルタスを準備していたのか」

マギー「私やサリア達はあんたの復讐に利用されてただけとはね…。悲しいね、アレクトラ…。私あんたのダチのつもりだったのに…」

ジル「… すまない…」

零「すまない…？ それだけで許されると思ってたのかよ？ あいつらは… サリア達はあんたの駒とは違うんだぞ！ 一つの生命なんだぞ！」

ネモ船長「零、落ち着け」

零「くっ…！」

マギー「私やジャスマンはいいさ…。エンブリヲに恨みがあるのはあんたと一緒だから…。でも、サリアは違う…。あの子がエンブリヲの下へ行つたのは、あんたがあの子をわかつてやらなかったからだよ」

ジル「…」

ジャスマン「さてと…。知つちまつた以上、あんたをボスにはしておけないね…。どうだろう、タルテソス王…。この女を引き取つちやくれぬか？」

何…？

ネモ船長「エクスクロスでか？」

ジャスマン「ああ、そうさ。煮るなり、焼くなりは任せるよ」

ジル「……」

ネモ船長「私からはいいが……零、君はどうだ？」

零「……俺も構いません……。でも、ジルさん……。あんたの行った事……。俺は許しませ
んから」

ジル「ああ……」

マギー「エンブリヲはアンジュともう一人の女の子に興味を示していたようだが……」
ネモ船長「あの男の事だ。欲しいものは、どのような手を使ってでも手に入れよう
するだろう」

ジャスミン「では……」

ネモ船長「アンジュとナディア……。対エンブリヲ、対ガーゴイルとの戦いの鍵は、あ
の二人が握るだろう」

アンジュとナディアの二人が……？

ーアンジュよ。

私は食堂でナディアといた。

ナディア「……」

アンジュ「少しは落ち着いた？」

ナディア「……」

アンジュ「無理もないか……。あんなおかしな男にさらわれそうになったんだから……」

ナディア「……運命って何……？」

アンジュ「え……」

ナディア「アトランティスで会ったイリオンは、ブルーウオーターを守るのは継承者の運命だって言ってた……。でも、こんなものがあるから戦いが起きる……。ブルーウオーターさえなければ、あたしだって……」

アンジュ「……エンブリヲは私の指輪とブルーウオーターは同じ技術で作られたって言うっていた……。確かに同じかもね……。私も、この指輪の持ち主だからヴィルキスのライダーに選ばれたみたいだし……」

ナディア「それが……。運命……」

アンジュ「でもね、ナディア……。私は、誰かが私の生き方を勝手に決めようとするなら、それと戦うつもりよ。それが運命と呼ばれるものでも、私は私の生き方を自分自身の手で掴み取ってみせる」

ナディア「自分の手で……」

アンジュ「ナディア……。運命に負けるな」

ナディア「私は……」

ジャン「(ナディア……)」

タスク「ジャン……。今はアンジュに任せよう」

ジャン「タスクさんは不安じゃないんですか？ あんなおかしな奴にアンジュさんが狙われて……」

タスク「当然、不安だよ。だけど、俺がそんな状態じゃアンジュを守る事が出来ないじゃないか」

ジャン「あ……」

タスク「頑張ろうな、ジャン……。俺がアンジュの騎士なら、君はナディアの騎士になるんだ」

ジャン「……ありがとうございます、タスクさん。僕には戦う力はありません……。でも僕は……僕なりのやり方できつとナディアを守ってみせます。(だから、ナディア……。もう泣かないで……)」

第47話 白き翼

―新垣 零だ。

アルゼナルを後にした俺達は次なる進路へ向かっていた。

カレン「……あの魔従教団がエンブリヲに協力するなんて、さすがに予想できなかつたわね……」

ルルーシュ「こうなると彼等の言う法と秩序という言葉も怪しいものだな」

ミツヒデ「そして、エンブリヲはアンジュとナディアを狙っている……」

アンジュ「つまり、私が困になれば、あのキモい男が釣れるってわけね」

アレクサンダー「その通りだ」

ケンシン「アレクサンダー殿……」

アレクサンダー「冗談だ」

ヒデヨシ「冗談になってねえっての……」

舞人「アンジュ……無理はしないでくれよ」

アンジュ「ありがとう、舞人。流星は正義のヒーローね。でも、私は退くつもりはな

いわね。サリア達の目を覚まさせるためにもね」

ヒルダ「あたし達もやるよ、アンジュ。あいつ等は放っておけない」

ロザリー「クリスの奴……！今度来たら、ひっぱたいやるからな！」

ヴィヴィアン「あんな黒いパラメイルはエルシャに全然似合っていないしね！」

アンジュ「それじゃ私達の手でふわふわ夢を見てるあの子達に現実つてのを教えてあげようじゃない」

みさえ「私も乗ったわ！」

一夏「クリスを連れ戻さないで！」

トオル「サリアさんは苦しんでいた……だから、春日部防衛隊として、あの人を助けないと！」

しんのすけ「あら、トオルちゃんったら、格好いいわね〜」

トオル「だから、耳に息を吹きかけるな〜！」

カレン「あたしも、それ乗った！」

ロザリー「歓迎するぜ、カレン！お前なら、立派にアルゼナルでやっていけるしな！」
ルルーシュ「あくまで力づくか……。お前達らしいやり方だな」

ジル「……」

零「あれから、約一週間……。あんたの部下達はそれぞれに事態を受け止めたようです

ね」

ジル「私は司令を解任された身だ。もうあいつ達の上官ではない」

エレクトラ「でしたら、一人の人間として御自分にできる事を見つけるべきでしょう。あの子のようにね」

ん？ナディアが来たな。

ナディア「アンジュさん……」

アンジュ「おはよう、ナディア。だいぶ落ち着いたみたいね」

ナディア「その囿の役……あたしもやります」

アンジュ「……いいの？」

ナディア「戦う事を認めたわけじゃない……。でも、自分の運命から逃げるのは……イ

ヤだから……」

真上「フツ……」

グランデイス「言うようになったじやないか、ナディア」

ナディア「あたしもエクスクロスの一員のつもりだから」

由木「つもり……。なんて言う必要はないわ。あなたも立派なエクスクロスの一員よ」

ナディア「はい！」

ジャン「ナディア……。頼りないだろうけど、僕も全力で君を守るから」

ナディア「ジャン…」

一夏「じゃあ、俺達はそのジャンを全力で守ろうぜ！」

カレン「ナディア、ジャン…。頑張ろうね、みんな」

ナディア「はい！」

箒「…」

千冬「束の事か？」

箒「織斑先生…」

千冬「この世界では千冬でいい…」

箒「はい。一夏は割り切っていますけど…。姉さんもこの世界に…。それもミスルギ

に捕らえられているなんて…」

千冬「奴等がISについての知識を持っていた事に疑問を持っていたが、これで納得

がいった…。箒、お前はもうしたんだ？」

箒「…。ここは私達の世界とは違います…。だから、姉さんを助け出したいです」

千冬「ならば、私達も手伝おう」

箒「ありがとうございます！」

甲児「それにしてもジャン…。さっきのお前…。格好良かったぜ」

ハンソン「ほんと、ほんと。ナディアだけじゃなく、君も強くなったよ」

ジャン「僕……タスクさんを見習おうと思つて」

サンソン「なるほど……。ナディアの騎士つてわけか」

零「でもな、ジャン。あいつのダメなところを見習うと確実にナディアにひつぱたかれるからな」

アスナ「言えてる！ ナディアの騎士どころか、女の敵になつちやダメよ！」

ジャン「はい！ 気をつけます！」

タスク「はは……ははは……。俺つて……完全にそう言う人間だと思われてるみたいだね……」

ヒルダ「当然だろうが……！ お前がアンジュにやつて来た事を思い出してしろ！」

タスク「思い出せつて……アンジュの肌の柔らかさとか、髪の毛と同じ色の……」

アンジュ「そういう所がダメだつて言つてるんでしょうが！」

タスク「ご、ごめん……！」

アンジュ「……でも……信じているからね、タスク……」

タスク「任せてよ、アンジュ。（俺の生命に代えても君は守つてみせるよ）」

零「お前等、イチャつくのは勝手だけど、場所を考えろよ？」

アンジュ「あなたには言われたくないわよ！」

マーベル「……嫌な空気を感じるわ。あのエンブリフという男にバーンと接触したせ

いだと思うけど……」

シヨウ「マーベルの勘のようなものか」

マーベル「虫の知らせ……と言った方がいいかも知れないわね」

アマリ「ですが、そういった形にならない何かって意外に大切なものですよ。私達もオドの動きから世界を包む流れというものを感じる訓練を受けてきています」

ホープス「マーベル様もそのような術を身につけている事に驚きましたよ」

マーベル「禅の修行のおかげかもね」

ジェレミア「自然と共にある東洋的な思想か……。素晴らしいものだな。シヨウもオーラ力を高めるトレーニングとしてマーベルに習ってみてはどうかかな？」

シヨウ「……」

アーニヤ「シヨウ？」

シヨウ「……あ、何でもない」

マーベル「バーンの事？」

シヨウ「ああ……。あいつは絶対にまた来る……。その時は俺とバーンの一騎打ちにさせてもらえないか？」

チャム「シヨウ……」

ルルーシユ「わかった。だが、危険と感じたら助けに入るからな」

シヨウ「それでいいよ」

マーベル「それと、習うなら、我流でやっている私よりも適任がいると思います」

ジェレミア「そうだな。コーチ役は彼の方が相応しいだろう。精神修養と言えば、武道と切り離せないものであるしな」

シバラク「拙者を呼んだかな、ジェレミア卿？」

ジェレミア「シバラク先生の場合、武道の腕は問題ないのですが……」

C・C「まずはお前自身が煩悩を断つための修練を積むべきだろうな」
シバラク「がつくし……」

アマリ「ぼ、煩惱って…… いったい何なんです……」

零「あ、アマリ……」

C・C「ウブなフリをして、興味を隠せてないぞ、アマリ」

アマリ「え…… そんな……！」

ホープス「ふふ…… マスターもお年頃ですね」

ジェレミア「これはシバラク先生と一緒にアマリ嬢も修練の必要があるな」

アマリ「はい……」

零「ちなみにもう一人、ここには修練の必要がある人がいますよ？」

ロロ「誰ですか？」

アル「… 助かるぞ、零。九郎だな」

九郎「俺えええええっ!!?」

零「あなたは別の意味で危険ですから」

九郎「お前には俺がどう見えてんだよ!!?」

零「… スケベホームズ?」

九郎「泣くぞ!」

瑠璃「それは違いますよ、零さん!」

九郎「ひ、姫さん…!」

瑠璃「スケベヘツポコホームズです!」

九郎「うわあああああ!」

シャルロット「九郎さんのライフがもう0だ…」

簪「… 自業自得だと思う…」

九郎「…」

エルザ「ダーリン!!?」

流石にやり過ぎたか…?」

シヨウ「シバラク先生ではないとしたら、誰が俺のコーチ役を?」

メル「多分、あの人でしょうね…」

シヨウ「メルは心当たりがあるのか？」

メル「おそらくですけど……」

アマリ「修練は私も付き合いますよ、シヨウさん」

零「何なら、俺もやるよ……。九郎さんも」

九郎「ごふうっ……！」

エンネア「九郎ー！」

零「ちなみに、アマリは煩惱を断つためか？」

アマリ「そうじゃないわよ！教団との戦いになる以上、術士としてさらなる高みに登る必要があるからだよ！」

零「必死になりすぎだっの」

アマリ「む……。零君の意地悪……！」

零「まあ、頑張ろうぜ……。俺も勝ちたい奴がいるからな……」

アスナ「ラゴウね」

零「あの野郎……あの時は本気を出すとか言いながら、まだ本気を出してなかった……だから俺ももつと強くなって……アマリやみんなを守るようになりたいから……」

アマリ「零君……」

クラマ「……」

シバラク「どうした、クラマ？何か気がかりな事でもあるのか？」

クラマ「ドアクダー軍団の中にも魔法使いがいるって噂を思い出したのさ」

ゼシカ「そうなんですか!?!？」

アマリ「ドアクダー軍団の魔法使い……？」

クラマ「このままの進路だと、そいつのテリトリーに入る事になるな……」

なんか…… とんでもない事が起こりそうな予感がする……。

ービビデ・ババ・デブーだよ。

私は部屋である男と話していた。

ビビデ・ババ・デブー「この無駄飯食らいが！」

トッド「まったく……。人の顔を見れば、小言かよ……。嫌いババアだぜ」

ビビデ・ババ・デブー「怪我はしてるが、腕のいい戦士だと聞いたから、拾ってやったの……。傷が治つてもちつとも働かないじゃないか」

トッド「煩いんだよ。横でぎやーぎやー言われちゃやる気も出ないぜ。言っておくぜ、ババア……。俺は遊んでるわけじゃないんだ。機を待つてるんだよ」

ビビデ・ババ・デブー「言い訳とは、みつともないね！聖戦士の名が泣くよ！いいか

い、トツド？若造のあんたに世の中の仕組みを教えてやるよ。働かざる者、食うべからずだ。あたしには息子が五人いるけど、みんな、それぞれドアクダー軍団で立派に働いているんだよ。それなのにあんたと来たら……少しは彼を見習いな！」

トツド「彼……？」

バーン「久しいな、トツド・ギネス」

トツド「バーンじゃねえか……！お前もアル・ワースに来ていたのかよ！」

バーン「シヨウ・ザマを倒すためにな」

トツド「シヨウ……！」

バーン「その様子だと貴様もシヨウを憎んでいるのか」

トツド「当たり前だ！シヨウは必ず俺が倒す！」

バーン「否、シヨウ・ザマを倒すのは私だ」

トツド「何……？！」

バーン「今此処でお前を討ち取ってもいいのだぞ？」

トツド「……ちっ！」

ビビデ・ババ・デブー「どこ行くんだい、トツド……？話は終わってないよ！」

トツド「黙れよ！お袋でもないのに俺のやる事に一々口を出すな！」

トツドは出て行った……。

ビビデ・ババ・デブー「……まったく。あれじゃせつかくの素質も宝の持ち腐れだよ……」

バーン「それに関しては同意する」

ミフネ「あ、あの……ビビデ・ババ・デブー殿……あまり腹を立てられると健康によくないですよ……。トッド・ギネスという男は吾輩と同じくアメリカ人でして、自分の腕に誇りを持ち……」

ビビデ・ババ・デブー「あんたもあんただ！ぼさつと見てないで、加勢するなり仲裁するなりすりゃいいだろうが」

ミフネ「面目ない！このミフネ、一生の不覚！」

ビビデ・ババ・デブー「フン……。この程度が一生の不覚になるとは随分と安い人生だね、あんたの生き方は」

ミフネ「ぬ、ぬうう……」

ビビデ・ババ・デブー「まあいい……。トッドが使えない以上、あんたにはたつぷり働いてもらうよ」

ミフネ「それは任せてください。このシヨーグン・ミフネの愛馬とようやく完成しましたので」

ビビデ・ババ・デブー「そうかい。そいつは期待させてもらうよ。後はあれを締め上

げて、宝の在処を吐かせれば……。ん……。？んん？？」

ビビデ・ババ・デブー「ミフネ、バーン！あんた達、地下室の扉を開けたのかい？？」
バーン「……私は知らぬぞ」

ミフネ「いや〜屋敷の中で迷いましたな、ついうっかり……。びつくりしましたよ。扉を開けたら、中から虫が飛び出して来て……」

ビビデ・ババ・デブー「この大バカ者！あれを逃がしちまったのかい！」
バーン「(あれ……。？それに虫……。もしや……)」

―新垣 零だ。

俺はアマリ、シヨウ、九郎さんと修練をするために艦から降りた。

アマリ「……ネモ船長に許可はいただきましたから、この辺りで修練をしましょう」

零「じゃあ、スザク。コーチを頼むぜ」

スザク「……本当に僕でいいのか？」

アマリ「ジェレミア卿やマーベルさんとあなたを推薦されていました……。いいです

ね、シヨウさんも？」

シヨウ「あ……。うん……」

アーニヤ「不満なの？」

シヨウ「そういうわけじゃないけど……」

九郎「なんで俺まで……」

まだ言ってるよこの人……。

零「ちなみにサボったら、アルに言いつけますから」

九郎「チクショー！」

チャム「ほら、シヨウ！自分の気持ちをちゃんと言葉にしないとまたマーベルに怒られるよ！」

アマリ「まあまあ、チャムさん……。そういう事が出来るようになるのも今回の精神修養の目的の一つですから。でも、意外でした。アーニヤさんが参加されたのは」

アーニヤ「私も……。自分の心を見つめ直したかったから」

アマリ「とてもいい事だと思います。一緒に頑張りましょうね。（初めて会った時から思っていましたけど、アーニヤさんって独特の雰囲気を持ってますよね……）」

九郎「そう言えば、一夏は誘わなかったのか？」

零「一夏はゼロと特訓中です」

アマリ「あの二人もよくやりますね……」

零「……おかげで箒の愚痴を一時間聞かされる羽目になったぜ……。剣道をそつちのけてってな……」

アマリ「お、お疲れ様……」

スザク「じゃあ、まずは呼吸法から始めようか」

シヨウ「そういうのは空手をやってたから、心得はある」

チャム「シヨウ！ちゃんと先生役のスザクの言う事を聞きなさいよ！」

シヨウ「言われなくても、わかってる……」

成る程な……。ジエレミアさん達のスザク達を選んだのは修練とは別の意味があるよ
うだな……。でも、確かにそれは、今のシヨウに最も必要な事なんだろうな……。

零「……つて、九郎さんも真面目にやっていますか？」

九郎「お、おう……」

零「……ちなみに今考えてる事は？」

九郎「どうすれば楽に稼げるか……」

ダメだ、こりや……。

零「結局それかい！」

アーニヤ「シヨウ……」

シヨウ「何だ、アーニヤ？」

アーニヤ「余計な事を考え過ぎ。一番大切なものに集中して」

シヨウ「とは言うけど……」

すると、何かが俺達の周りを通り過ぎた。

シヨウ「何だ?!?」

零「何か似たような状況があつたような…!」

?「助けてください!」

え…あれって…!

シヨウ「フェラリオ?!?どうしてここに?!?」

チャム「あたし以外にもアル・ワースにフェラリオがいたんだ!」

?「私…追われているんです!」

九郎「追われているって…誰にだよ?!?」

スザク「気をつけて、シヨウ!何か来る!」

あれは…!

第47話 白き翼

ドアクダー軍団か…!

アマリ「ドアクダー軍団!」

零「エクスクロスマも来たぞ！」

スザク「まずは戻ろう！」

シヨウ「そっちのフェラリオ！君も来るんだ！」

？「イヤです！」

イヤって……！

チャム「大丈夫！あの艦に乗っている人達はみんな、優しい人だから！」

？「私には行かなければならないんです……！」

シヨウ「追われているのか？」

？「だからそこ、あれを守るのです！」

零「よくわからないけど、ここはシヨウに任せてもいいか？」

シヨウ「俺に……？」

チャム「いいじゃない！ビルバインは調整中で出撃できないし！それにバイストン・

ウエルの子なんだから、シヨウが面倒を見るべきよ！」

シヨウ「……わかった。行くぞ、チャム」

アマリ「皆さん！私達は艦に戻りましょう！」

零「スザク、もしものことがある……！シヨウのサポートを頼む！」

シヨウ「俺とスザクで……」

ミフネ「おのれ、エクスクロス！ここで会ったが百年目！我輩の愛馬シヨールグンロボの刀のサビにしてくれる！」

影の軍団「ミフネ様……。ビビデ・ババ・デブーの指示はいかがいたします？」

ミフネ「逃げた妖精など、後でいい！サムライの本懐は戦にありだ！」

エレクトラ「シヨウ、チャム、スザク以外の人物を収容しました。シヨウ達は別行動との事です」

ネモ船長「各機を発進させろ」

俺達は出撃した……。

ミフネ「出て来たな、マイトガイン！ついに完成した吾輩の愛馬、その名もシヨールグンロボの力を見せてやる！」

舞人「シヨールグン・ミフネ！性懲りもなく……！」

甲兎「しかし、名前そのままのロボットだな……」

カレン「でも、あいつ……日本人には見えないけど……」

グレートマイトガイン「シヨールグン・ミフネの正体は日本マニアのアメリカ人らしい」

エンネア「マーベル、ジヨールイ……。あの人の事をどう思う？」

マーベル「ノー・コメントよ」

ジヨールイ「お、同じく……」

零「シヨウとスザクは迷子のフェラリオの頼まれ事を片付けています…！二人をアシストするためにも速やかに敵を迎え撃ちましょう！」

シバラク「了解！エササムライに真の侍の力を見せてやる！」

箒「私の剣道の力…見せてやる！」

シヨウ「みんなが戦っている間に急ぐぞ…！」

？「はい…！」

チャム「ねえ、あなた…何ていう名前なの？」

シルキー「シルキー・マウです」

シヨウ「何だって!!？」

チャム「じゃあ、この子…」

シヨウ「俺やトッドをバイストン・ウエルに呼び込んだあのシルキー・マウなのか…」

シルキー「え…？」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

九郎「どいつもこいつも…人の事をスケベだのヘツポコだの言いやがって…！も

ういいい！こうなったら、探偵なんてやめて、サラリーマンになってやる！」

アル「戦闘中に何を言っておる!?？それと、探偵で安定できない汝にサラリーマンなど無理であろう！」

九郎「はあ：：：何で俺はこんな人生を送ってんだ：：：」

ふざけた名前なのに：：：あのシヨーグンロボっての：：：結構やるじゃねえか：：：！

ミフネ「見たか！我が愛馬シヨーグンロボの力を！」

ガードダイバー「確かに強い：：：！自慢するだけの事はある！」

バトルボンバー「だが、これ以上、調子に乗らせるわけにはいかないぜ！」

舞人「よし！みんなの火力をあいつに集中させるぞ！」

砲撃を全て斬りやがった：：：！

ミフネ「無駄だ！そのような攻撃がシヨーグンロボに効くものか！」

さやか「嘘！銃弾やミサイルを剣で叩き落としてる！」

ミフネ「これぞミフネ二刀流の奥義。ら、飛び道具では吾輩は倒せんぞ！まさに剣は銃より強し！まさにチャンバラは男達の生き様！男は黙ってえく二刀流！」

な、何だ：：：？何処かから銃撃が：：：。

ミフネ「な、何っ!?？」

？「剣は銃より強し…か…。そいつは聞き捨てならないな」
すると、一機のロボットが現れた。

ミフネ「何やつ!?」

マイトガンナー「決して悪を許さない！正義の早撃ちガンファイター、マイトガンナーとは俺の事だ！」

舞人「マイトガンナー！来てくれたのか！」

マイトガンナー「待たせたな、舞人！今日から俺も一緒に戦うぜ！」

アキト「勇者特急隊の新メンバーか」

甲児「さすがは浜田君と大阪工場長だぜ！こんな隠し球も用意していたとはよ！」

ワタル「よろしく、マイトガンナー！一緒に頑張ろう！」

マイトガンナー「おう！どんどん俺を頼ってくれよ！」

グレートマイトガイン「マイトガンナー！私のフォローを頼む！」

マイトガンナー「任せとけ！俺を使え、グレートマイトガイン！」

グレートマイトガイン「よし…。これでグレートマイトガイン最強の姿、パーフェクト・モードが使える！」

ミフネ「パーフェクト・モード！つまり、完璧形態か！」

舞人「勝負だ、シヨーグン・ミフネ！ご自慢のロボットは、グレートマイトガインと

勇者特急隊が叩き潰す！」

ーシヨウ・ザマだ。

俺達はシルキーに連れられ、ある場所に來ていた。

シルキー「……戦闘……激しくなってきましたね……」

スザク「ここもいつ戦場になるか、わからない。急ごう」

ジャコバ・アオンの所を見た……。オーラロードを開くという禁を犯したエ・フェラリオのシルキー・マウが……。記憶を奪われ、ミ・フェラリオの赤ん坊に転生させられるを……。俺達の目の前にいるのはあのシルキーなのか……。

チャム「ねえ、シルキー……。あなた、あたし達をどこに連れて行くの？」

シルキー「 balan balan の秘宝の所よ」

シヨウ「秘宝……？」

シルキー「私と一緒にこの世界に跳ばされねきたんです。私は悪い人に捕まってしまうましたが、隙を見て、こうして逃げ出す事が出来ました」

シヨウ「君を捉えていた奴等はその秘宝の事を知っているのか？」

シルキー「はい……。最初は悪い人に思えなかつたので秘宝についても話したのです。……。その話を聞いた相手はいきなり私を捕まえて、秘宝の在処を無理に聞き出そう

としたんです」

シヨウ「君は、俺達にそれを守ってもらいたいんだな？」

シルキー「一目見た時から、秘宝を託せるのは、あなたしかいないと思いました」

チャム「その秘宝って何なの？」

シルキー「それは……」

バーン「逃げ出したのが虫と聞き、もしやと思ったが……まさか、シルキー・マウとはな」

シヨウ「バーン！」

バーン「シヨウ・ザマか……。今はいい。シルキー・マウ。その秘宝とやらを教えるもらおうか」

トッド「待ちな、シルキー・マウにバーン。そいつは俺に渡してもらおうぜ」

ト、トッド……？

シヨウ「トッド！」

トッド「久しぶりだな、シヨウ」

トッド「それに枢木 スザク……」

スザク「生きていたんだな、トッド・ギネス」

チャム「そうか……！ドレイク軍とルルーシュ皇帝は同盟を結んでたから二人は知り

合いなんだ！」

トッド「シルキー……。バランバランの秘宝は俺に渡せ」

シルキー「……」

トッド「聞こえないのか！その力があれば、俺はシヨウを……！」

バーン「(秘宝とはそれ程の物なのか……?)」

シヨウ「トッド！お前は、まだそんな事を言っているのか！」

シルキー「……」

チャム「大丈夫よ、シルキー！シヨウが必ず秘宝を守ってくれるから！」

シルキー「違うの……。あの人達が……。怖い……。特にあのバーンって人は……。二

人は……。憎しみに取り憑かれている……」

スザク「君も感じていたか……。トッド達の背後の邪気を」

チャム「スザク……」

スザク「僕の知っているトッド・ギネスは功明心とシヨウに対する強烈なライバル意

識を持っていたけど……。憎しみとは違う感情で戦っていたはずだ」

トッド「スザク！お前もしたり顔で説教か！」

スザク「違う……。悲しいんだ……」

トッド「何……？」

スザク「僕も友達を…… ルルーシユを憎み、そのおかげで大切なものを失いかけたから……」

トツド「笑わせるな！俺とシヨウがダチだと言いたいのか？？」

スザク「少なくとも君達の間には憎しみ以外の感情があつたはずだ！」

シヨウ「スザク……」

スザク「僕達は過ちを繰り返してはダメなんだ！そうでなければ、戦いをしてきた意味がない！」

シヨウ「スザク……。 お前も苦しんでいたんだな……」

スザク「その苦しみが目の前で繰り返されるのを…… 僕は見たくない……」

バーン「枢木 スザク……」

シヨウ「お前も俺達と同じなんだな……。 敵と味方に分かれてきた時から……。 不思議だな……。 そんな当たり前の事を俺は今まで気づかなかつたよ……」

スザク「シヨウ……」

シヨウ「そのせいかな……。 それがわかつたから、急に色々な事が素直に頭に入ってきたよ」

トツド「何を言っている、シヨウ？？」

シヨウ「目を覚ましてくれ、トツド。お前が望むなら、俺はお前と戦う。だが、憎し

みに吞まれたお前と殺し合いをしたくない。それはわかってくれ」

トツド「黙れ、シヨウ！俺は……俺は……！」

シルキー「やめて!!？」

バーン「シルキー・マウ……！」

シルキー「全ては……あなたをバイストーン・ウエルに呼んだ私の罪です……」

チャム「シルキー……」

シヨウ「エ・フェラリオだった時の記憶を取り戻したのか……!!？」

シルキー「今、わかりました……。ジャコバ様が私を、このアル・ワースに送り込んだ意味が……」

シヨウ「何っ!!？」

チャム「ジャコバ様がアル・ワースへの扉を開いた……」

シヨウ「もしかして、俺達もジャコバ・アオンの力でアル・ワースに……」

シルキー「トツド・ギネス……」

トツド「……」

シルキー「今、フェラリオの長、ジャコバ・アオンの力を借り、あなたを縛る邪悪なオーラを断ちます。バイストーン・ウエル全てを巻き込む戦いへと発展していったドレイク・ルフトの野望……。その始まりとなった二人の聖戦士に救いを……」

バーン「これは……！そうか、これが……」

トツド「黙れ！黙れーっ!!？」

シヨウ「アル・ワースの全てとシルキーが共鳴している……」

スザク「生と死が交わる感覚……。僕は……これを何処かで感じた事がある……」

チャム「ダメ！ジャコバ様の力でもトツドを縛る憎しみは断ち切れない」

スザク「シヨウ！君の力も……！」

シヨウ「俺の……!!？」

スザク「君も感じるはずだ！今、この空間を支配している何かを！トツドを救いたければ、君の意思を……オーラを示せ！」

シヨウ「俺の……オーラ……」

トツド「うおおおおおっ！シヨウウウウツ!!？」

シヨウ「トツド！もうやめろ!!？」

トツド「!!？」

トツドの動きが……止まった……？

シヨウ「トツド……！」

バーン「憎しみのオーラが晴れていく……」

トツド「俺は……今まで、一体何を……」

シヨウ「トッド！自分を取り戻したのか！」

トッド「…らしいな。だが、お前との戦いは別の話だ。次に会った時にはすべての決着をつける」

シヨウ「トッド！」

トッド「…じゃあな。シルキーには礼を言っておいてくれ」

トッドは走り去った…。

チャム「何あれ？！結局、変わってないじゃない！」

スザク「そうじゃない、チャム。あれは僕の知るトッド・ギネスだったよ」

シヨウ「ありがとう、シルキー…。君のおかげだ」

シルキー「…よくわからないけど、私…お役に立てて見たいですね」

シヨウ「…また記憶が失われたんだな…」

シルキー「え…？何か言いました？」

シヨウ「いいんだ。でも、君に会えてよかったよ」

バーン「それでこそ、我がライバルだ…。シヨウ・ザマ」

シヨウ「バーン…まさか、お前も…」

バーン「私は待っている…。貴様との決着をつけるためにな」

バーンもその場を歩き去った…。

シヨウ「バーン……」

シルキー「行きましよう、聖戦士。あなたはやはり邪悪を退ける強いオーラの持ち主です。あなたにバランバランの秘宝……白き翼を託します」
白き翼か……。

ー新垣 零だ。

クラマ「気をつけろ！何か来るぞ！」

マーベル「あれは……オーラバトラー!?？」

現れたのはドラムロと魔神だった。

ワタル「先頭にいるのは魔神だ！」

ビビデ・ババ・デブー「よく来たね、エクスクロス！あたしがドアクダー軍団の第六界層のボス、大魔法使いビビデ・ババ・デブーだよ！」

ババアデブ……!??

ヒミコ「でぶババア!?？」

零「ブフツ！」

ビビデ・ババ・デブー「ビビデ・ババ・デブーだよ！間違えるんじゃないよ、小娘！

それから小僧、笑うんじゃない！」

クラマ「アマリ！あいつが噂のドアクダー軍団の魔法使いだ！」

アマリ「でも、オドの収束は感じません……。教団の術士とは違う体系の魔術を使うようですよ」

ビビデ・ババ・デブー「その通り！あたしの力はドアクダー様からお借りした魔界の力よ！見せてあげるよ！あたしの魔法を！」

こ、この邪気は……！

アーニー「何だ、この邪悪な気は……!?？」

リユクス「あのオーラバトラー部隊から異質なオーラ力を感じます！」

ビビデ・ババ・デブー「それがあたしの魔法だよ！あのオーラバトラーに乗っているのはあたしの操り人形さ！」

ミフネ「ビビデ・ババ・デブー！我輩の戦に余計な助太刀は無用だ！」

ビビデ・ババ・デブー「黙りな、ミフネ！そういう風に体裁ばかり気にしてるから、いつもいつもいつもいつも負けるんだよ！」

ミフネ「がふっ！」

ビビデ・ババ・デブー「さあ行きな、オーラバトラー軍団！邪悪のオーラで、あいつ等を蹴散らせ！」

エイサツプ「！」

な、何だ：：？！？今度は白いオーラバトラーが現れた：：？！？

シヨウ「行くぞ！！？」

す、凄え性能だ：：。

マーベル「そのオーラバトラーに乗っているのはシヨウなの！！？」

シヨウ「そうだ、マーベル！」

シルキー「このオーラバトラーこそがバランバランの秘宝、サーパインです」

シヨウ「スザク！しっかり掴まってるよ！」

サーパインと呼ばれるオーラバトラーはナデシココまでスザクを運んだ。

シヨウ「シヨットに聞いた事がある：：。ダンバインの試作タイプは、高いオーラ力を必要とするがその性能は凄まじいものだったと：：。それが、このサーパインか：：」

チャム「でも、このオーラバトラー：：ずっと長い間、誰も乗ってなかったみたいね：：。」

シヨウ「もしかすると、シルキーとサーパインは俺達よりもずっと後の時代から、このアル・ワースに来たのかもな：：。」

スザク「シヨウ！こちらの準備も出来た！」

シヨウ「よし：：。行くぞ！」

チャム「ちよっと、シルキー！どうして、あなたも乗ってるのよ!?？」

シルキー「このサーバインを守るのが、私の役目です。だから、サーバインを駆る者と共に行くのは当然の事です。そして、シヨウ・ザマは私の認めた聖戦士です」

チャム「こらっ！シヨウにくつつくな！」

シルキー「そんな事、あなたに言われたくありません！」

シヨウ「二人して、耳元で怒鳴るな！」

ビビデ・ババ・デブー「あれがシヨウ・ザマ。。。トッドが言っていた男か。。。あれと戦うためには、それなりの準備が必要だね」

あ、あの野郎、逃げやがった！

ヒミコ「オバサン、逃げ出した！」

しんのすけ「きつとシヨウお兄さんの力にビビったんだゾ！」

ミフネ「ええい！偉そうな事を言っておいて、戦いもせずに帰るとは！」

バーン「まさか、あんな者に従っていたとはな」

ズワウスか。。。！

ミフネ「来たか、バーンよ！我輩に手を貸せ！」

バーン「黙れ。草サムライよ」

ミフネ「な、何だと!?？」

バーン「私の目的はただ一つ…… ショウ・ザマを倒す事だ！」

マーベル「(あら？バーンのオーラが……)」

ショウ「バーン……」

バーン「決着をつけるぞ、ショウ・ザマ！」

ショウ「ああ！殺し合いではない方法で決着をつける！」

ミフネ「な、何なのだ、こいつ等は！」

マイトガンナー「動揺しているな、あのシヨーゲンさん」

ミフネ「こうなったら、ガンマンと騎士にサムライの誇りを見せる！男は黙ってえ」

痩せ我慢！」

舞人「ガイン、ガンナー！パーフェクトになったグレートマイトガインの力であいつ

を倒すぞ！」

スザク「ショウ！」

ショウ「わかっている、スザク！俺の……俺達の使命は、このアル・ワースに戦いを広げる者を討つ事だ！チャム、シルキー！俺とサーバインに力を貸してくれ！」

俺達は戦闘を再開した。

俺達は敵を倒して行く……。

ホープス「この力……。初めて出会った時から考えて飛躍的に成長していると
もいいでしょう……。皆さんの成長こそが、私の希望です。願わくば、この力が天を突破
するまで高みに上らん事を……」

〈戦闘会話 ノブナガVSミフネ〉

ミフネ「我が剣のサビにしてくれる！」

ノブナガ「フツ、真の侍に言ってくれる……。その言葉はそっくり返してやる！」

〈戦闘会話 箒VSミフネ〉

箒「お前の剣はなっていないな」

ミフネ「な、何だと!? 貴様、何様のつもりだ!?」

箒「何様でもない! ちょうど鬱憤も溜まっていた所だ! 私の剣道の腕を見せてやる
!」

グレートマイトガインのパーフェクトキャノンでショーンロボにダメージを与え
た……。

ミフネ「ぬううつ！男は黙ってえ〜ド根性！」

回復しやがった…!??

ミフネ「見たか！心頭滅却すれば火もまた涼し！気合があれば、何でもできる！」

グレートマイトガイン「しぶとい！」

舞人「だが、勇者特急隊の全車両が揃った今、恐れるものは何もない！」

グレートマイトガイン、バトルボンバー、ガードダイバー、ブラックマイトガイン、マイトガンナーが並び立つ。

ミフネ「な、何をする気だ!?？」

舞人「マイトガイン、マイトカイザー、マイトガンナー、バトルボンバー、ガードダイバー、そして、ブラックマイトガイン！決して悪は許しはしない！勇者特急隊、究極の合体を今ここに！」

五機は攻撃を仕掛けた。

舞人「世界の平和は、俺達勇者特急隊が守る！勇者特急隊、究極の合体を見せてやる！みんな、合体だ！」

勇者特急隊「一二三了解！一二三」

勇者特急隊のロボット達はそれぞれ、分離した。

舞人「勇者特急隊！六体連結！」

分離した後、電車の様に連結し、シヨーンロボに向かっている。

舞人「行くぞ！六体連結攻撃！ジョイントドラゴンファイアアアアツ！！？うおおおおつ！！？」

ま、まるで炎の龍の如き姿を見せて、シヨーンロボに突撃し、大ダメージを与えた。
ミフネ「ば、バカな！このシヨーン・ミフネが！」

シヨーンロボは大きく吹き飛ばされる。

ミフネ「う、うおおおつ！龍だ！炎の龍だあああつ！！？」

そして、シヨーンロボは爆発した。

まあ、脱出はしていると思うけどな。

龍王丸「見事だ、勇者特急隊。六つの魂を一つにした巨大な龍の舞……見させてもらった」

ワタル「やったぜ、舞人さん！勇者特急隊、万歳！」

舞人「絆は、無敵の力を生み出す！それが俺達、勇者特急隊だ！」

俺達はズワウス以外の敵を倒した。

ホープス「残るはあのオーラバトラーだけです」

ルルーシュ「シヨウ！」

零「勝ってこい！」

マーベル「シヨウ：…必ず勝って…！」

シヨウ「ありがとう、みんな、マーベル：…。バーン、勝負だ！」

ノブナガ「各者は手を出すな！此処からは男と男の勝負だ！」

バーン「良き仲間に恵まれたな」

シヨウ「ああ。感謝しているよ」

バーン「だが、私は加減はせんぞ！」

シヨウ「俺だつて負けない！愛する、マーベルや大切なみんなが見ているんだ…負けるものか！」

チャム「行こう、シヨウ！」

サーバインはズワウスとの戦いを始めた…。

〈戦闘会話 シヨウVSバーン〉

バーン「お互い未知のオーラバトラーに乗り、このアル・ワースで決着をつける事となるとはな！」

シヨウ「お前のそのオーラバトラーはいったい何なんだ？」

バーン「知らぬ。このアル・ワースに來た時に手に入れたオーラバトラーだ」

シルキー「あのオーラバトラーも私と共に跳ばされてきたオーラバトラーです」

チャム「サーバインと一緒に事ね！」

バーン「そんな事は関係ない！勝負だ、シヨウ・ザマ！」

シヨウ「全てを終わらせるぞ、バーン・バニングス……。お前に勝つて！」

サーバインはズワウスにダメージを与えた……。

舞人「やったか!!？」

バーン「まだだ！」

……まだやる気かよ……！

バーン「まだ私は負けていない！」

シヨウ「バーン……。そうだな。だが、これで終わらせるぞ！」

バーン「勝つのはこの私だ！」

ズワウスはサーバインに攻撃を仕掛けた……。

バーン「ケリをつけるぞ、シヨウ・ザマ!……。受けてみる！」

ズワウスはハイパーオーラ斬りの状態に入った。

バーン「ちえあつ！うおおおつ！覚悟おおおつ!!？」

何度か、サーバインを斬り、最後にキツめに一撃で十字に斬り裂いた。

シヨウ「くっ……！バーン・バニングス……！」

しかし、負けじとサーバインも攻撃を仕掛けた。

シヨウ「迂闊だぞ、バーン！これで全てを終局へ！」

チャム「ハイパーオーラ斬りだあああつ!!？」

サーバインもハイパーオーラ斬りの状態に入る。

シルキー「決めて、シヨウ・ザマ！」

シヨウ「うおおおつ!!？」

バーン「見事だ……シヨウ・ザマ……」

ズワウス以上のハイパーオーラ斬りでズワウスを大きく斬り裂き、ズワウスに大ダ

メージを与えた……。

九郎「シヨウが勝ったぜ！」

エイサツプ「シヨウさん！」

バーン「……見事なり、シヨウ・ザマ……」

シヨウ「バーン……やっぱり、お前はもう既に憎しみのオーラから解放されていたん

だな……」

バーン「あの時の浄化で……私は自分を取り戻したのだ。だが、自らのケジメとし

て……貴様との決着はつけたかったのだ……」

シヨウ「……そうだったのか……」

バーン「これで思い残す事は何も無い……。さあ、トドメを……」

シヨウ「……断る」

バーン「何……？」

シヨウ「死ぬにはまだ早いんじゃないか、バーン？俺達は笑顔で向かい合う事が出来た……。なら、答えは一つじゃないのか？」

バーン「……そうか……。貴様はそう言う男だったな……。良かろう、私も……。まだ生きて、別の使命を探すでしょう……」

シヨウ「応援しているぞ、バーン」

シヨウとバーンの戦いはシヨウの勝利で終わった。

エレクトラ「終わりましたね」

ネモ船長「だが、すぐにあの魔法使いとの戦いになるだろう」

シルキー「聖戦士シヨウ・ザマ……。このサーバイン……。あなた方に託します」

シヨウ「ありがとう、シルキー……。だけど、次の戦いにはビルバインを使わせてもらう」

チャム「どうして？」

シヨウ「きつと次はトツドが来る…。あの時の戦いの続きになるのなら、俺はビルバインであいつを迎え撃つ。そして、あいつを悪夢から解放する…。」

バーン「ふつ、それが貴様の新たな使命か…。シヨウ・ザマ」

シヨウ「使命…。そうとも言えるな。バーン、エクスクロスに来てもらうぞ」

バーン「敗者に意見する権利などない。私は貴様に従おう」

俺達はそれぞれの艦へと戻った…。

シヨウ「…ありがとうな、スザク。それに済まなかった」

スザク「え…。」

シヨウ「今日、俺は初めてお前っていう人間に触れたように思える。昨日までの俺は過去に囚われ、本当に大切なものが見えてなかった…。だが、お前と俺と同じ当たり前の人間だと知った時、もつと素直に色々なものが受け止められるようになったよ」

スザク「それは僕の力じゃない。君自身の成長だ」

シヨウ「そんな事はない…。！お前がいてくれたから、お前がいてくれたから、俺はトツドの憎しみを断つ事が出来た！」

マーベル「謙そんは日本人の美德かも知れないけど、今日ばかりは素直になつてもいいんじゃないの、二人とも」

シヨウ「もしかして、マーベルとジェレミア卿はこうなる事を見越して、俺にスザク

を当てたのか？」

ジェレミア「君の可能性を広げるために少しだけお節介をさせてもらった」

ルルーシュ「言っておくが、それはスザクのためでもあった」

スザク「そうなの……？」

ルルーシュ「お前は誤解されやすい人間だから。事実、こういう機会がなければ、シヨウと打ち解ける事もなかっただろう」

カレン「ルルーシュに言われちゃ、スザクも納得できないだろうけどね」

スザク「いや……感謝するよ、ルルーシュ。そして、シヨウにもね」

シヨウ「いや……！それは俺の力じゃなく……」

スザク「そうじゃないよ！やっぱり、それは……」

零「め、めんどくさいなこの二人……」

ジェレミア「やれやれ……。こういう所は、あまり変化してないようだな」

マーベル「ブリタニア出身の私達には理解しづらい部分ですね」

アマリ「いい雰囲気のまま、ビビデ・ババ・デブーと戦う事が出来そうですね」

シモン「あいつ……魔界の力で魔法を使うって言ってたけど……」

へべ「今日のオーラバトラー軍団を見ても、手強い敵になるだろうね」

シヨウ「それに……次の戦いではきつとトッドが決戦を挑んでくる」

ヴィラル「どうするつもりだ、シヨウ？」

シヨウ「受けて立つき。憎しみから解放されたあいつが、俺と同じように素直に全てを受け入れられるようになるためにも」

バーン「優しきオーラだな、シヨウ・ザマ」

シヨウ「バーン……」

バーン「今の貴様ならば、トッドともいい勝負ができると思うぞ」

シヨウ「ありがとう、バーン」

バーン「感謝の言葉を述べるのならば、こちらの方だ。貴様のおかげで、私は憎しみから解放された。感謝する、シヨウ」

シヨウ「……これから、俺達と共に戦うんだろ？」

バーン「そちらがよければだな」

シヨウ「いいや、歓迎するよ、バーン……。これからは憎しみ合う相手ではなく、仲間として一緒に戦おう」

バーン「承知した」

シルキー「シヨウ……。あなたは私の想像以上の強い戦士でした」

シヨウ「強くなれた……。と言うべきかな、色々な人達のおかげで。（バイストン・ウエールに戦いを広げたドレイク……。その野望の出発点であつた俺とトッド……。バーンと

の決着がついた今、トッドとの戦いに決着をつける事が俺がアル・ワースに呼ばれた意味なのかも知れないな。…」

第48話　ビヨン・ザ・トツド

ートツド・ギネスだ。

俺はババアと部屋にいた。

トツド「なあ、ババア……」

ビビデ・ババ・デブー「何だい、無駄飯食らい？」

トツド「そのよ……肩でも揉もうか？」

ビビデ・ババ・デブー「何だよ、急に……？」

やっぱり、驚かれるか……。

トツド「今までの飯代の代わりだ。とてもじゃないが足りないだろうけどよ」

ビビデ・ババ・デブー「あんた……。昨日から様子がおかしいよ……」

トツド「そうか……？」

ビビデ・ババ・デブー「だが、悪くない……。どっちかって言うと、今のあんたの方が自然な感じがする」

トツド「……確かに……。今までの俺は悪い夢の中にいたのかも知れない……」

ビビデ・ババ・デブー「そうだとしたら、あたしも謝らなきゃならないね。あんたには色々といひ事を言っちゃまったから」

トッド「気にしちやいないぜ。俺がおかしかったのは事実だし、あんたに失礼もしまくった」

ビビデ・ババ・デブー「いいって事よ。男の子つてのは、どうしてもそう言う時があるのはわかってるから」

トッド「あんたには勝てないな……」

ビビデ・ババ・デブー「女は弱し、されど母は強し……って事さ」

トッド「そうだな。こうしてあんたと話しているとお袋と一緒にいるみたいだ。もつとも、俺のお袋はあんたよりもずっとスレンダーだったがな」

ビビデ・ババ・デブー「まったく……口の減らない悪ガキだよ。だけど、あんたと過ごした時間は腹も立ったけど、悪いもんじゃなかったよ。久々に息子が帰ってきたような気分だった」

トッド「そうか……」

ビビデ・ババ・デブー「行くのかい？」

トッド「ああ……。奴と……シヨウと決着をつけなきゃならん」

ビビデ・ババ・デブー「何でもバーンの奴もそのシヨウとかいう男と決着をつけて、エ

クスクロスに入ったみたいじゃないか」

トツド「あいつを裏切り者だと言わないのか？」

ビビデ・ババ・デブー「まさか……。男の子はいつかは自分で自分の道を選ばないといけない時が来るのさ……。だから、あたしは何も言わないよ。それよりも……。シヨウという男は手強いよ」

トツド「そんな事は俺が一番わかってる」

ビビデ・ババ・デブー「だったら、これを持っていきな」

何だ、これは……。腕輪……。？

トツド「これは……。？」

ビビデ・ババ・デブー「創界山の秘宝……。千光の腕輪だよ。そいつがあれば、あんたはあいつに勝てる」

トツド「……。いいのかよ……。創界山の秘宝って言えば、大事なものだろう……。？」

ビビデ・ババ・デブー「何言ってるんだよ。息子が大勝負に挑むとなったら、出来る限りの事をして当然だろうが」

ババア……。

トツド「あんた……」

ビビデ・ババ・デブー「いつか、こんな日が来ると信じてたからね……。チューンした

「ビアレスも用意しといたよ。全力でやってきな」

トッド「サンキュー・ママ」

ビビデ・ババ・デブー「頑張りな、トッド。このババアから、最後に一つだけ……。後悔するような生き方だけはするんじゃないよ」

トッド「その言葉……。覚えておくぜ」

ババアの為にも……。シヨウには負けられない……。！

ー新垣 零だ。

俺達はナデシココの格納庫にいた。

そして、今はシヨウとスザクが剣を持ち、訓練をしていた。

シヨウ「……！」

スザク「……！」

ミツヒデ「それまで！シヨウ、スザク……。双方、剣を引け！」

シヨウ「ふう……。！」

スザク「上達したね、シヨウ。いい太刀筋だ」

ノブナガ「だが、まだまだだな」

シヨウ「そんな事は自分が一番よくわかってるさ。それに俺の目的は剣の腕を上げる事じゃない」

零「修行の成果は出ていると思うぜ。肩から余計な力が抜けて、自然体になってる」

シヨウ「真剣を使った訓練に零、お前やバーン、スザクやシバラク先生、ノブナガやアレクサンダー、ミツヒデ、海道が付き合ってくれたおかげだ」

シバラク「うむ…。自らの為すべき事はつきり自覚できた今、もうお主に迷いはない」

アレクサンダー「そして、物事があるがままに受け止められるようになった事で余計な気負いも消えたな」

シヨウ「ありがとうございます」

海道「それよりも新垣は元の世界で剣道とかやってたのか？」
スカーレット「確かに…。お前の剣の腕は確かなものだった」

由木「おまけに真上特務中尉との銃撃勝負でもいいところまでいつていましたし…。」
真上「あれには俺も少々、驚かされた」

零「いえ、俺は習い事とかそういうのはやった事ないですよ…。ただ…。」

エイーダ「ただ？」

零「弘樹とは……よく勝負だとか言つて、色々な事をやっていましたけど……」

カイエン「弘樹というのはお前の友人の事だな？」

朔哉「確か、今はオニキスにいるんだつたよな？」

零「はい。何度も俺達と敵対しています」

くらら「よく友達と戦えるわね」

零「……俺はあいつに負けるわけにはいかない……それだけです」

ジョニー「成る程、ライバル心というものですね」

零「い、いえ……！俺は別にあいつの事をライバルなんて……！」

アマリ「でも、零君。氷室さんと会う時はいつも嬉しそうな顔をしているわよ？」

零「俺が……!?？そ、そんなわけないだろ!?？」

アンデイ「そう隠そうとすんなよ！」

モロイ「男同士の友情というものはたまに素晴らしいものだからな」

アマタ「零も素直になりなよ」

零「み、みんなして俺をからかうなよ……！」

葵「別にからかつてないわよ。凄いつて思っているから……。それと、あなたが他の娘にも特別な感情を抱かず理由がわかつたわ」

零「え…？」

葵「ふふ。罪作りの男ね。まあ、それもあなたの良いところだと思っけれど」

零「や、やめてください、葵さん…！」

サザンカ「男同士…ライバルが勝負して、その後は…フ、フフフ…！」

MIX「何考えているのよ、サザンカ！」

カイエン「…」

ミコノ「お兄ちゃん…どうしたの？」

アマタ「シユレードの事？」

カイエン「そういうお前もカグラの事を考えているようだな…」

アマタ「うん…カグラもクレア理事長もこの世界にいるはずなんだ…」

ゼシカ「それにしても死んだ人間までこの世界に来るなんてね…」

カイエン「…あいつはいない…。それだけだ」

ミコノ「お兄ちゃん…」

ユノハ「亡くなった人…」

ゼシカ「あ、ごめん…！ユノハ…！」

ユノハ「い、いえ！大丈夫ですよ、ゼシカさん！（ジン君…私達を見守っていて

ね…）」

マーベル「それよりもシヨウは座禅よりも身体を動かすやり方の方が合っていたみたいね」

アンジユ「よくわからないけど強くなるんだったら、私も修行つてのをしてみようかな…」

カレン「私も付き合うよ！」

ヴィラル「やめておけ」

ルルーシユ「お前達は、すでに無の境地に近い所にある。今さら精神修養などしても意味がない」

ノブナガ「ようするに何も考えていないという事か」

カレン「何よ、それ!!？」

アンジユ「へえ、ルルーシユ…。あなた…。私達の事をそういう目で見ていたわけね」

ルルーシユ「や、やめろ…。騒ぐのは、シヨウの修行の邪魔になる…。！」

アマリ「ルルーシユさんって相手の足下を崩す戦術が得意ですけど、自分の足下もおろそかですね」

アスナ「まるで私みたいね！」

零「…何で私の思い通りにいかないのー!…!…とか言っていたのか?」

アスナ「む、昔の話はしないでよ！」

メル「掘り出したのはあなたではないですか……」

シルキー「……」

ホープス「どうされました、シルキー様？」

エメラナ「大丈夫ですか？」

シルキー「よく覚えてないけど、あのトッドって人のオーラ力……凄く怖かった……」

チャム「大丈夫だよ、シルキー。トッドは正気に戻ったみたいだから」

冬樹「それでも、トッドさんはシヨウさんに戦いを挑むんですよね……」

シヨウ「あいつにとつてケジメのようなものだよ」

マーベル「トッドと決着がつけば、バイストン・ウエルから続いてきた戦いが一つの
終わりを迎える」

バーン「心してかかれよ、シヨウ。今のトッド・ギネスは憎しみを捨てた強者となつたのだからな」

シヨウ「わかっている」

すると、エレクトラさんが来た。

エレクトラ「……そのトッド・ギネスからこちらに通信が入ったわ」

シヨウ「俺への挑戦状ですか？」

エレクトラ「その通りよ、シヨウ。時間と場所を指定して、あなたと一騎打ちを希望しているわ」

マーベル「シヨウ：。」

シヨウ「この時が来たか：。これが俺達をアル・ワースに送り込んだジャコバ・アオンの意思ならば、俺はそれを果たす。ついてきてくれるか、チャム？」

チャム「もちろん！あたしはシヨウのパートナーだもの！」

ホープス「ビルバインの準備も出来ております」

シヨウ「感謝する、ホープス。特訓に付き合ってくれたみんなも」

零「一騎打ちか：。」

グランデイス「どうしたんだい、零？」

サンソン「あー：。あれですよ、姐さん！零は一騎打ちで痛い目を見えますから」

ハンソン「変に警戒をしているんだね」

アスナ「ごめんね、零：。」

零「アスナが謝る事じゃねえよ。気にするな」

九郎「向こうが一騎打ちを希望しているんじゃない、俺達は手出し出来ない」

ノリコ「でも、信じています！シヨウさんご勝つ事を！」

エイサツプ「シヨウさん：。負けないでください！」

ノブナガ「やるだけの事はやった……。後は、気合いだ、シヨウ」

ゼロ「お前の力でトツドって奴をギャフンと言わせてこい！」

スザク「君ならば、トツドを救えると思う」

マーベル「シヨウ……」

シヨウ「行ってくるよ、マーベル。俺は……必ず帰ってくる」

マーベル「待っている。その言葉を信じて」

必ず勝てよ……シヨウ……。

第48話　　ビヨン・ザ・トツド

ーシヨウ・ザマだ。

俺はトツドが示した座標まで来た。

トツド「来たか」

シヨウ「待たせたな、トツド」

トツド「俺を焦らせて、集中を乱そうとしても無駄だぜ、シヨウ」

シヨウ「どうだ、チャム？」

トッド「正体のわからない怖いオーラは感じない！いつものトッドだよ！」

シヨウ「つまり、ライバル心と功名心で俺に戦いを挑んでくるのか」

トッド「ライバル心はともかく、功名心は、もうどうでもいい……。だが、シヨウ：！これまでの俺にケジメをつけるためにもお前を倒す！」

シヨウ「トッド！」

俺達は互いに距離を取り、戦闘体制に入る。

シヨウ「もう一度だけ言う！俺達と一緒に来い、トッド！」

トッド「お前もとことんお人好しだな。ここまでやった俺を未だに仲間に誘うとは」

シヨウ「俺とお前の間にあつたものは地上での戦いで決着がついたはずだ！だから……！」

トッド「悪いな、シヨウ……。こうして生きている以上、俺は決着がついたと思っちゃいけないのさ。だから、今度こそ勝つ！勝つて、あの夢の続きを見るんだ！」

チャム「どうするの、シヨウ!!？」

シヨウ「……言葉でトッドが止まらない事は覚悟していたさ。だから、戦う！あいつとの事……。オーラマシンの事、全ての決着をつけるために！」

トッド「いいぜシヨウ！それでこそだ！（そう言う事だ、ババア……。悪いが、あんた

の貸してくれた秘宝は万一の時までとっておく」

シヨウ「行くぞ、トツド！」

トツド「いい気合だぜ、シヨウ！だがな……！」

チャム「トツドのオーラ力……！燃えている！」

シヨウ「あいつが純粋な闘志で戦うなら、俺も戦士として、それに応える！」

トツド「来い、シヨウ！これが最後の戦いだ！」

俺は戦闘を開始した……。

俺はトツドに勝利した。

シヨウ「俺の勝ちだ、トツド！」

トツド「くそっ……！くそおおおっ!!？」

チャム「シヨウ！ドアクダー軍団が来る！」

チャムの言う通り、ビビデ・ババ・デブーの魔神とその配下の魔神が来た。

シヨウ「第六界層のボス、ビビデ・ババ・デブーか！」

チャム「エクスクロスも来たよ！」

反対側からエクスクロスの戦艦も現れる。

「新垣 零だ。」

「やっぱり、一騎打ちにはいい思いがねえ……！」

「シヨウの危機だと思ひ、俺達は出撃する。」

「スザク「もしもの時を考えて、控えていたけど……！」」

「ワタル「ビビデ・ババ・デブー！一騎打ちだって言ったのに応援に来るなんて汚いぞ！」」

「ビビデ・ババ・デブー「勝手な事を言うんじゃないよ！応援に来たのは事実だけど、男同士の戦いに割り込むつもりなんてないっての！」」

「トッド「ババア……」」

「ビビデ・ババ・デブー「何やってんだよ、トッド！あたしの貸してやった千光の腕輪を使つてないのかい！」」

「トッド「けどよ……」」

「ビビデ・ババ・デブー「そいつは持ち主の力を飛躍的に高めるんだ！インチキとは違ふんだよ！頑張れ、トッド！あいつを倒して、あんたは前に進むんだよ！」」

「トッド「う……う……うおおおおっ！！？」」

何だ、あのチカラ……！

マーベル「このオーラ力……！」

シヨウ「本当にトツドのものなのか!?？」

ビビデ・ババ・デブー「見たかい！これが千光の腕輪の力だよ！」

トツド「シヨウ!!？俺は……！俺はお前を倒して、いい夢を見るんだ！」

バーン「いかん……！このままでは奴はハイパー化してしまう……！」

シヨウ「そうはさせない！」

ビルバインがビアレスに近づく。

シヨウ「トツド！このままでは地上での戦いと同一結末になるだけだぞ！」

トツド「そうだとしても俺は……！」

シヨウ「自分のオーラ力を……自分自身を制御するんだ！自分以外の全てを感じる！

お前を取り巻く全てを素直に感じれば、力だけが暴走する事はないはずだ！」

トツド「自分以外の全て……!?？それに何の意味がある!?？」

シヨウ「自分の事を心配し、手を貸してくれる人達の想いを感じる！力だけで人は生

きていくんじゃないんだ！それをお前に見せてやる！」

シヨウのオーラ力が高まっていく……！

エイサツプ「シヨウさんのオーラ力が……！」

トッド「シヨウ！」

シヨウ「トッド！これが俺のオーラ力だ！」

ビルバインはビアレスに攻撃を仕掛けた……。

シヨウ「目を覚ませ、トッド！わかるぞ……全てが……！」

ウイング・キャリバー形態になり、ビアレスに接近し、元に戻り、雲を突き抜け、高く飛び、空中でオーラソードとオーラビームソードにオーラ力を溜める。

シヨウ「行けっ!!？」

オーラソードとオーラビームソードをクロスさせ、そこからビームを放ち、ビアレスに直撃させる。

シヨウ「これが俺のオーラ力だっ！」

その後、ビアレスに突撃し、空高く飛んだ後、急降下してビアレスを地面に叩きつけた……。

トッド「くっ！し、しまった……!!？」

シヨウ「今なら、わかる……！オーラ力の意味が！」

ビルバインの技を受けて、ビアレスは吹き飛んだ。

トッド「……覚えてるぜ、シヨウ……。その技……俺を倒した時のやつか……」

シヨウ「そうだ。今の俺なら、この力を制御できる。そして、それが出来るようになった」

たのは一緒に戦ってきた仲間のおかげだ」

ピアレスの力が弱っている…？

シヨウ「トツド！」

トツド「いい夢を見させてもらったぜ、シヨウ…」

シヨウ「夢なんかじゃない！お前は生きているんだ！気をしっかりもて！地平線を見るんだ、トツド！そうすれば機体の位置がわかる！」

トツド「…！」

シヨウ「覚えているか、トツド？俺達が初めてオーラバトラーに乗った時に言われた事だ」

トツド「抜かせ！それをお前に教えてやったのは俺だろうが！」

シヨウ「そうだっけか…」

トツド「お前って男はよ…」

チャム「トツドから…敵意が消えていく…」

リユクス「先程のシヨウさんのオーラ力がトツドさんの敵意のオーラ力を納めたのですね…」

アマルガン「うむ、流石は聖戦士だ」

エイサツプ「シヨウさん…」

トッド「俺の負けだ、シヨウ……。どうやら何をやってもお前には勝てないようだ」

シヨウ「まだ戦いは続くんだ。負けを認めて、全てを投げ出すのは早いんじゃないか」

トッド「シヨウ……」

シヨウ「俺と一緒に来い、トッド……。元々そうするつもりだったはずだろ。ここはバ
イストン・ウエルでも地上でもないんだから」

トッド「そうだったな……。付き合うぜ、シヨウ。いい夢でも悪夢でもなく、ここから
は俺が俺の意思で戦いを選ぶ」

シヨウ「トッド……！」

バーン「良き面構えとなったな、トッド」

トッド「その前にケジメをつけてくる」

ビアレスはヘルライガー2号に近づく。

ビビデ・ババ・デブー「行っちゃうんだね、トッド……」

トッド「せつかくの千光の腕輪だったが、俺には使いこなせなかつたみたいだ。返す
ぜ」

トッドはビビデ・ババ・デブーに千光の腕輪を返した。

ビビデ・ババ・デブー「変な所で義理堅い子だよ」

トッド「俺なりのケジメだ。ババアには世話になったからな」

ビビデ・ババ・デブー「だけど、敵に回った以上、あたしや容赦しないよ」

トツド「言っておくが、意地やプライドを捨てた俺はこれまでに以上に強くなるぜ」

ビビデ・ババ・デブー「精々頑張りな」

トツド「じゃあな、アル・ワースのママ…」

ピアレスは戻ってきた…。

グレンファイヤー「お、おいおい…！千光の腕輪が…！」

ケロロ「どうせ寝返るのなら、秘宝を持ってきてくれればいいのに！」

夏美「セコイ事言わないの！あの魔法使いのお婆さんに勝って、手に入ればいいの

よー」

しんのすけ「そうだゾ！シヨウお兄ちゃん、トツドお兄ちゃん、準備はいいか!?？」

トツド「救世主なんてのは柄じゃないが、生きるため俺もやるぜ！」

ヴィラル「吹っ切れたようだな、トツド」

朗利「バーンも言ったが、いい面になったじゃねえか」

トツド「まあな。今ならお前達の選択もわかるぜ、ヴィラル、朗利」

ルルーシュ「敵の数は大した事はない！一気に攻めるぞ！」

ビビデ・ババ・デブー「このビビデ・ババ・デブー舐めると痛い目に遭うよ！千光の

腕輪よ！我に力を与えよ！」

ビビデ・ババ・デブーの魔法の影響で敵が出てきた。

甲児「何も無い所から敵が出てきた！」

幻龍斎「千光の腕輪でパワーアップした、ビビデ・ババ・デブーの魔法の力ウラ！」

ビビデ・ババ・デブー「その通り！私がいる限り、こちらの軍団は無限の戦力よ！」

サヤ「同じ魔法使いならば、どうにかならないのですか、アマリさん!!？」

アマリ「…私のドグマは破壊専門ですので、ああいう魔法への対処は…。」

ホープス「大丈夫です、マスター。ならば、その破壊の力ですとことんまでやればいいのです」

アマリ「何か作戦があるの、ホープス？」

ホープス「ビビデ・ババ・デブーは魔法を使つて、継続的に増援を送り込んでくるでしょう。ですが、それが無限に続くとは思えません」

零「なるほど…。単純な事か！要するにあのあいつの魔力と俺達のどっちが先にバテるかの勝負だつて事だな！」

リチャード「打ち止めを待つのではなく、あの婆さんを直接狙うという方法もあるがな」

タママ「ありがとうございます、ホープス、リチャードのオジさん！」

マサキ「攻略法がわかれば、恐れる事はねえ！」

ビビデ・ババ・デブー「言うじやないかい、小僧っ子が！このビビデ・ババ・デブーの魔力を甘く見た事を後悔させてやるよ！」

トッド「そうはいくかよ、ババア！俺の本気をあんたに見せてやるぜ！」

エイサップ「トッドさん……！」

シヨウ「トッド……！」

トッド「やるぜ、シヨウ！もう俺に迷いはない！俺は俺の選んだ生き方のために全力で戦う！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話　バーンVS初戦闘〉

バーン「今の私には多くの仲間がいる……。初めてだな……。仲間の為に戦うのは……。では、参るぞ！」

ビビデ・ババ・デブー「千光の腕輪よ！我の力を与えよ！」

ちっ……！またかよ……！

ジャンボット「増援が出たぞ！」

ジャンヌ「ホープス！本当にあの人の力が尽きる時つて来るの……？」

ホープス「この世に無限も絶対も存在しません。後は根比べです」
ギロロ「負けるわけにはいかん！あちらが諦めるまで戦うぞ！」

ようやく敵を減らせたその時だった。

ビビデ・ババ・デブー「せ、千光の腕輪よ！我に力を… あ、与えよーっ！
しっこい…！」

一夏「また出たぞ！」

セシリア「ですが、あのおば様もお疲れのようですわ！」

ラウラ「ホープスの言った通り、やはり、増援の数には限界があるようだ！」

千冬「ここまで来たら、後は我慢比べだ！へばるなよ！」

ビビデ・ババ・デブー「ぜえ… ぜえ…。せ… 千光の腕輪よ… わ… 我に力を…
あ、与えよおおお…」

また増えやがったか…。

エレボス「息も絶え絶えだよ！」

ホープス「おそらく、この増援が最後でしょう」

トオル「もう打ち止めという事ですね！」

メル「な、なんとというか……。物凄く罪悪感が……」

アスナ「バカ！敵の事を気にしていたらキリがないでしょう！」

トッド「無理するな、ババア！もつ歳なんだからよ！」

ビビデ・ババ・デブー「黙りな！限界を超えた時こそ、母親というのは強くなるんだ

よ！千光の腕輪よ……。我に力を与えたまえええ……。！」

ま、まだやるのかよ……。！？

出て来たのは……。デカイオーラバトラー……。！？

バーン「な、何だこの禍々しいオーラ力は……。！」

リユクス「あ、あのオーラバトラーは……。！」

エイサツプ「は、ハイパー化したオウカオー……。！？」

シヨウ「エイサツプ、何か知っているのか！？」

エイサツプ「あれは……。俺達の世界のオーラバトラーがハイパー化したものです……」

！

アマルガン「もшы、サコミズが……。！？」

朗利「いや、サコミズ王のオーラ力は感じねえ！」

金本「他の敵と同じ状態だよ！」

ビビテ・ババ・デブー「ぜえ…ぜえ…。ほらね、最後の最後でトンデモないものが出ただろ？」

トッド「ババア…！」

アーニー「またあのオーラバトラーと戦う事になるなんて…！」

エイサツプ「止めないと…」

リユクス「エイサツプ…？」

エイサツプ「こんなのはサコミスズ王は望んでいない！…俺が…俺達が止めないと…！」

トッド「手伝うぜ、エイサツプ！」

シヨウ「あのオーラバトラーは野放しには出来ない！」

バーン「我々が力を合わせれば、何とかなるであろう！」

エイサツプ「トッドさん…シヨウさん…バーンさん…！」

リユクス「私もやります！」

エイサツプ「リユクス…！」

リユクス「父上の意思を侮辱するようなあのオーラバトラーを黙って見てはいられません！」

エイサツプ「ありがとう、みんな…」

ビビデ・ババ・デブー「あたしもヘルライガーで戦うよ。行くよ、エクスクロス！あたし自ら、あんた等を叩き潰してやるよ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話〉 エイサツプVS邪悪な意思

エレボス「やれるの、エイサツプ!?」

エイサツプ「姿形はハイパー化したオウカオーでも…全然違う…！サコミズ王に変わって俺が倒す…！」

〈戦闘会話〉 リュクスVS邪悪な意思

リュクス「(父上…ご覧なられていますか…？あなたの愛機のオウカオー…それはあなたの誇りでもあります。それを汚すものは娘である私が許しません！」

〈戦闘会話〉 アマルガンVS邪悪な意思

アマルガン「かつての友人のオーラバトラーと戦う羽目になるとはな…だが、サコミズの為にもやるしかない！」

〈戦闘会話 朗利 or 金本 VS 邪悪な意思〉

金本「ハイパー化したオウカオーに勝てるの!?!?」

朗利「エイサップを見ろ! あいつは諦めてない! それなのに俺達が諦めてどうするんだよ!?!?」

金本「そ、そうだね...!」

朗利「行くぜ、金本! あのオウカオー擬きをぶつ倒してやろうぜ!」

〈戦闘会話 ショウ VS 邪悪な意思〉

チャム「あのオーラバトラーのオーラ力...怖い...」

ショウ「だからこそ俺達が止める...! 何があろうとも!」

〈戦闘会話 マーベル VS 邪悪な意思〉

マーベル「異世界のオーラバトラーにもハイパー化があるだなんて...! あれを野放しにしていたら誰かが傷ついてしまうわ...!」

〈戦闘会話 トッド VS 邪悪な意思〉

トツド「あの時の俺もこんな感じだったのかよ…！我ながら恥ずかしくなってくるぜ…。だからこそ、一度経験した俺が止めなきやならねえ！」

〈戦闘会話　バーンVS邪悪な意思〉

バーン「怒りと憎しみのオーラ力…！止めなければならぬ…！私達が！」

〈戦闘会話　アーニーorサヤVS邪悪な意思〉

サヤ「あの時のように説得して止められないのでしょうか…？」

アーニー「あれにはサコミズは乗っていない…。邪悪な意思そのものだ。だからこそ僕達が倒す！別世界だとしてもサコミズ王を知る僕達が！」

アツカナナジンはハイパーフレームオーラ斬りでハイパー化したオウカオーにダメージを与えた。

零「やったか…？！」

倒したかに見えるハイパー化オウカオーの絆がみるみる回復していく。

ドロロ「ダメージが回復した…？！」

クルル「クーククツ！メンドクせえな、あの力……」

ワタル「ど、どうすればあいつを止められるの……！！？」

リユクス「……私が行きます！」

リユクスのギム・ゲネンがハイパー化オウカオーに接近する。

しかし、ハイパー化オウカオーはまるで蠅を叩き落とすかのようにギム・ゲネンに攻撃を与えた。

リユクス「きやああああつ！！？」

アマルガン「姫様！」

リユクスのギム・ゲネンは地面に叩きつけられる。

そんな彼女を叩き潰そうと、ハイパー化オウカオーは拳を振り下ろしたが……。

エイサツプ「させるかああああつ！！？」

アツカナナジンがそれを受け止める。

しかし、パワーが違いすぎて、だんだん押されていく……。

ヒルダ「エイサツプ！」

リユクス「逃げてください、エイサツプ！このままではあなたまで……！」

エイサツプ「何、言ってるんだよ……リユクス……！お前を死なせたら……サコミズ王に顔向け出来ない……！それに俺がお前を守りたいんだよ！」

リユクス「エイ、サツプ……」

しかし、現実はそのなにごくはなく、だんだんと押されていくアツカナナジン。

ジョーイ「エイサツプさん！……リユクスさん！」

ミラーナイト「待っていてください、今……！」

ビビデ・ババ・デブー「させないよ！」

俺達はエイサツプ達の加勢に入ろうとしたが、ヘルライガーと敵部隊に邪魔される。

トツド「くっ……！ババア……！」

これじゃあ、加勢に行く事なんて……！

このままじゃ、エイサツプとリユクスが……！

エイサツプ「ぐっ……うう……！」

エレボス「え、エイサツプ！」

リユクス「お願いです……もう、やめてください……！（私では……何も出来ない

の……？愛するエイサツプを助ける事は……！父上……！）」

エイサツプ「諦めるな、リユクス！」

リユクス「！」

エイサツプ「お前はサコミズ王を止める為に一人で立ち向かったんだろ？！？お前は弱

くない……それは俺が一番知っているから！」

リユクス「エイサツプ……。私……。私……。！）はあああああつ！」
 ギム・ゲネンも動き出し、アツカナナジンと共にハイパー化オウカオーの攻撃を止めようとする。

エイサツプ「リユクス！」

リユクス「私はもう逃げません！エイサツプと共に進みます！」

エイサツプ「ありがとう……」

しかし、それでもハイパー化オウカオーの動きは止められない……！

エレボス「このままじゃあ、エイサツプとリユクスが……。お願い、誰か……。二人を……

二人を助けてええええええつ！！？」

？「その願い……。確かに受け取った！」

エレボス「え……」

現れたのは……。ハイパー化していないオウカオー……。！！？

エイサツプ「オウカオーがもう一機……。！！？」

リユクス「ま、まさかあのオウカオーは……。！」

サコミズ「我が娘と娘の大切な少年に手を出す貴様には罰を与えよう！」

オウカオーはハイパー化オウカオーに突進して、吹き飛ばした。

リユクス「父上……。父上なのですか！！？」

サコミズ「そうだ、リユクスよ」

エイサツプ「サコミズ王……どうしてアル・ワースに……？」

サコミズ「わからぬ。しかし、恐らく、君達と同じであろう。それよりも感謝する、鈴木君……。リユクスを守ってくれて」

エイサツプ「サコミズ王……」

サコミズ「今一度、奴を倒す為に力を合わそう！」

エイサツプ「はい！」

アツカナナジンとオウカオーはハイパー化オウカオーに攻撃を仕掛けた……。

エイサツプ「俺とサコミズ王が力を合わせれば、やれるはずですよ！」

サコミズ「君がそう言うのならそうなのであろう！」

アツカナナジンとオウカオーはそれぞれオーラフレイルムソードを構え、ハイパー化オウカオーに突っ込む。

エイサツプ「今です、サコミズ王！」

サコミズ「つああつ！むん！」

エイサツプ「はあ！」

サコミズ「でやあああつ！」

エイサツプ「このおつ！」

サコミズ「覚悟おおっ！」

エイサツプ「うおおおっ！」

アツカナナジンとオウカオーはオーラフレイルムソードでハイパー化オウカオーを斬り裂いていく。

サコミズ「まだよ！いやああああっ！」

オウカオーはハイパー化オウカオーを地面に投げ飛ばした。

地面にクレーターができるほどの衝撃を起こし、地面に直撃するハイパー化オウカオー。

サコミズ「鈴木君、決めてみせよ！」

エイサツプ「本当はご自身で決めたいんでしょうが！」

サコミズ「それでもあるがああああっ！」

二機はハイパーオーラフレイルム斬りでハイパー化オウカオーを斬り裂くと、さらに接近する。

エイサツプ「トドメだああああっ！！？」

サコミズ「落ちろやああああっ！！？」

最後にアツカナナジンとオウカオーがすれ違う様にハイパー化オウカオーを斬り裂くと、周りに桜吹雪が現れ、ハイパー化オウカオーは爆発した。

へべ「た、倒したのかい…？」

キキ「やった！」

アマルガン「流石だ、サコミズ…」

シヨウ「二人共、いいオーラ力だ！」

サコミズ「別世界の聖戦士に言われて光栄である」

リユクス「父上…！」

サコミズ「リユクスよ。再会に浸るには後だ」

エイサツプ「今は敵を倒そう！」

リユクス「…はい！」

ビビデ・ババ・デブー「へっ！あの大物を倒したからって良い気になるじゃないよ！

あたしが相手をしてやる！」

サコミズ「よくぞ、鈴木君！」

エイサツプ「はい、わかりました！」

戦闘再会だ！

〈戦闘会話

サコミズVS初戦闘〉

サコミズ「(見事だったぞ、鈴木君…。リユクス…。今度は私が君たちの為に罪滅ぼしをする番だな!)」

〈戦闘会話 零VSビビデ・ババ・デブー〉

零「前回、あんたの名前をバカにした事は謝る。すまなかつた」

ビビデ・ババ・デブー「どうしたんだい、急に?」

零「…。あんたは敵でもそこまで悪い奴には見えないからだ」

ビビデ・ババ・デブー「その謝罪は受け取っておくよ。でも、負けるつもりはないからね!全力でかかってきな!」

零「当たり前だ!俺だって負ける気はねえ!」

〈戦闘会話 しんのすけVSビビデ・ババ・デブー〉

みさえ「母親は強し…。か。その言葉、理解できるわ。私も母親だもの」

ビビデ・ババ・デブー「そうなのかい。可愛い息子や娘の為に強くなれるだろう?」
みさえ「ええ、そうね。だから、子供達の為にもあなたには負けられないわ!」

ビビデ・ババ・デブー「良いよ!母親同士、白黒つけようじゃないか!」

しんのすけ「うお!頑張れ、母ちゃん!」

〈戦闘会話　バーンVSビビデ・ババ・デブー〉

ビビデ・ババ・デブー「バーンだね？」

バーン「ビビデ・ババ・デブー。このアル・ワースで私を介抱してくれた事には感謝する。…だが」

ビビデ・ババ・デブー「何辛気臭い顔してんだい！それがあんたの選んだ道ならばそれを貫き通しな！」

バーン「…感謝する。その意思を曲げぬ為にも私は貴様を倒して先に進む！」

〈戦闘会話　エイサツプVSビビデ・ババ・デブー〉

ビビデ・ババ・デブー「さっきの勇氣は流石と言っておくよ！」

エレボス「褒められているよ、エイサツプ！」

エイサツプ「あなたは完全に悪い人には思えない…。でも、ドアクダー軍団の一員なら話は別だ！」

ビビデ・ババ・デブー「いいよ、あたしも本気で向かうから容赦しな！」

〈戦闘会話　サコミズVSビビデ・ババ・デブー〉

サコミズ「娘共が世話になったようだな！」

ビビデ・ババ・デブー「なんだい、あんた？父親かい？」

サコミズ「貴様は母親は強しと言ったな？確かにそうだ。だが、父親も負けずに強いものだ！」

ビビデ・ババ・デブー「そんな事は言われなくともわかつているよ！良いからかかってきな！」

ビルバインとビアレスの攻撃でヘルライガーに大ダメージを与えた。

ビビデ・ババ・デブー「くっ……！まだだよ！まだ……！」

リチャード「諦めの悪い婆さんだな……！」

トッド「だったら、もう一度、ぶっ飛ばすだけだ！力を貸せ、シヨウ！」

シヨウ「……わかった！」

ビルバインとビアレスが攻撃を仕掛けた……。

シヨウ「合わせるぞ、トッド！」

トッド「いいぜ、行くぜシヨウ！」

シヨウ「俺達のオーラ力を受けてみる！」

ビルバインはオーラキャノンとビアレスはオーラバルカンでヘルライガーを攻撃し、オーラソードで斬り込んだ。

トッド「一気に決めるぜ！」

シヨウ「気を抜きすぎるなよ、トッド！」

トッド「もらった!!？」

ビルバインとビアレスは左右からオーラソードをヘルライガーに突き刺した。

シヨウ「落ちろよおおおっ!!？」

最後は二機同時にヘルライガーを斬り裂いた……。

ビビデ・ババ・デブー「こ、このビビデ・ババ・デブーが負けるなんて……！」

アツカナナジンとオウカオーの合体技も凄いいけど、ビルバインとビアレスの合体技も凄え……！

ビルバインとビアレスの合体技を受け、ヘルライガーのコックピットが吹き飛んだ。

ビビデ・ババ・デブー「い、いけない！ヘルライガーのコックピットが吹っ飛んだ！」

ここは逃げるしかない！」

ワタル「待て！負けたんだから、千光の腕輪を置いていけ！」

ビビデ・ババ・デブー「そんなルールを勝手に決めるな！」

ヒミコ「じゃあ、力づくでももらっていくのだ！」

いつの間にかヒミコがヘルライガーの側において、千光の腕輪を奪った。ヒミコ「千光の腕輪は、もらったのだ！」

幻龍斎「よくやった、ヒミコ！さすがワシの娘ウラ！」

ビビデ・ババ・デブー「返せ、小娘！それはあたしの……はうっ！」
な、何だ……!??

トッド「ババア！」

零「何が起きてるんだ!?？」

ホープス「千光の腕輪で引き出していた闇の力が逆流しているのでしょうか？」
メル「自らの力以上に魔力を引き出した代償のようなものですか!?？」

ホープス「そうです」

トッド「おい、オウム！ババアはどうなるんだ!?？」

ホープス「残念ですが、あれだけの闇の力に身体が耐えきれず……すると、闇の力が抑えられた……」

龍王丸「闇の力が抑えられた！」

カンナム「さっきの白い光が影響しているのか!?？」

マーベル「シヨウ！」

シヨウ「俺にもわかる……！あれはシーラ様のオーラ力だ！」

ビビデ・ババ・デブー「身体が動く……！今のうちに撤退だ！」
ヘルライガーは撤退した……。

トツド「どういう事なんだ、シヨウ？」

シヨウ「……シーラ様はドアクダーの所にいながら、ドアクダーの力……つまり闇の力を食い止めているんだと思う」

エイサツプ「それがさっきの白い光なんですね」

龍王丸「あの清らかな光からは神部七龍神の力に近いものを感じる。逆にあの光を塗りつぶす事でドアクダーは自身の持つ闇の力を増大させるのだろう」

サラマンディーネ「そして、その力によって……」

ワタル「闇の龍を復活させるつもりなんだね」

サコミズ「それがドアクダー軍の目的……」

トツド「俺でもわかるぜ。あの闇の力つてのが、とてつもなくヤバイつてのはな」

シヨウ「だから俺達は、シーラ様やさらわれた人達を救い出し、ドアクダーを止めなきゃならないんだ。（シーラ様……あなたはドアクダーの所で必死に抵抗されているのですね……。もう少しだけ待っていてください。俺達が必ずあなたを救い出します。そして、あなたには最後の浄化をお願いします……）」

戦いを終えた俺達はそれぞれの艦へ戻った……。

ーシーラ・ラパーナです。

私達は今、虎王の部屋にいます。

シヨウ・ザマ……。今、あなたのオーラ力を感じました……。

虎王「どうした、シーラ？」

シヨウ「……何でもありません」

虎王「隠したって俺様にはわかるぜ、お前が何かを感じたのは。なんて言っただって、俺様は偉大なる父上の息子、魔界王子だからな」

リリーナ「では、その魔界王子は宿題を片付けてください」

マリナ「先程から手が止まっておりますよ？」

虎王「どうして、そうなる?!？」

サリー「頑張ってくださいね、虎王君。終わったら、美味しいオヤツが待っていますから」

虎王「それを聞いたら、やるしかないぜ！」

イチヒメ「その調子です」

虎王「(ちえ…) ドン・ゴロの奴…。こいつ等ゆ俺様の家庭教師につけるのは反則だ

ぜ……。こいつ等……。か弱い女のくせに何となく反抗しづらいんだよな……」

ードン・ゴロだ。

私はドアクダー様の前にいた。

ドアクダー「……ドン・ゴロ……。女達を虎王にあてがったのはお前の考えか？」

ドン・ゴロ「虎王様は初陣で精神的なショックを受けております。今は心を癒す事が必要かと……」

ドアクダー「そのようなものは不要だ。弱き者は滅びる……。それが魔界の掟なのだから」

ダークゴーネ「随分とご自身のご子息に厳しいのですね？」

ドン・ゴロ「何度も言わせるな……。それが魔界の掟なのだから」

ドン・ゴロ「しかし……」

ドアクダー「まあいい。あの女達は用済みだ。時が来るまで好きに使うがいい。それと、ダークゴーネ……。お前達が欲していた闇の力の準備が整った……。持つていくがいい」

ダークゴーネ「ありがたき幸せ……。これで陛下をこのアル・ワースに蘇らせる事がで

きます」

ドアクダー「銀河大皇帝カイザーベリアル……。復活したら一度見たいものだ」

ダークゴーネ「陛下には私から伝えておきましょう……。では、これで……」

ダークゴーネは歩き去った……。

ダークケロロ「(まずいな……。このままではこのアル・ワースは地獄と化す……。早く阻止しなければ……!)」

カエサル「(ほう?なるほど、そういう事か……)」

ドン・ゴロ「良いのですが、ドアクダー様?あの様なものに闇の力を授けてしまつて……」

ドアクダー「お前が心配する事ではない。それよりも今は、こやつ等を調べる方が先だ」

ニア「……」

アイラ「……」

マリーメイア「……」

ドアクダー「この者達こそが、世界の秘密を解き明かす鍵だ……。待っているがいい、魔徒教団。全てが明らかになった時、お前達は最期わや迎える……。そして、このアル・ワースは永遠の闇に包まれるだろう」

「新垣 零だ。」

俺達はNーノーチラス号の格納庫に集まった。

甲児「それが創界山の秘宝、千光の腕輪か……」

ウイル「ビビデ・ババ・デブーの話では持ち主の能力を飛躍的に高めるって聞いたけど……」

サンソン「つて事は、俺の男ぶりが飛躍的にアップして……」

ハンソン「僕の頭脳が飛躍的にアップするのか」

グランデイス「じゃあ、あたしの美貌も天井知らずってわけね!」

九郎「俺の探偵能力も飛躍的に上がるつて事か!」

カレン「ワタル……。ああいう人達に悪用される前にその腕輪、つけちやいなよ」

ワタル「そうするね!」

ケンシン「どうですか、ワタル?」

アレクサンダー「力が湧いてきたか?」

ワタル「あんまり変わんないや」

ヒデヨシ「だけど、トッドやビビデ・ババ・デブーは確かに普通では考えられないよ

うな力を發揮したぜ！」

カズミ「そうなると千光の腕輪にはまだ隠された秘密があるかも知れないわね」

シヨウ「何か知っているか、トッド？」

トッド「いや……。そこらについては、俺は何も聞いていない。知りたいんなら、知ってる連中に聞くしかないだろうぜ」

チャム「知ってる連中って？」

ワタル「ドアクダー軍団という事だね」

トッド「そういう事だ。流星は救世主だ」

ワタル「へへ……。おだてても何も出ないからね」

トッド「新入りとして、一応は気を遣わせてもらったまでだ」

スザク「……」

トッド「何だよ、スザク？」

スザク「君のそういう顔を見るのは初めてだな……。って思ってる」

ジェレミア「私も同じ感想だ」

アーニヤ「私も」

トッド「オレンジにアーニヤ……。お前達もエクスクロスにいたんだったな……」

チャム「あたしもスザクに同感！あたしの知ってるトッドはいつもシヨウに敵意むき

出しだったから！」

トツド「昔は昔、今は今だ」

シヨウ「そうだぞ、スザク、チャム。トツドはこれで面倒見のいい所もあるからな」

トツド「うるさいぜ、シヨウ！余計な事を言つてんじやない！」

シヨウ「新入りらしく気を遣えよ、トツド。今まで散々俺たちに敵対してきたんだしな」

ヴイラル「シヨウの言う通りだ。まずは俺達がエクスクロスのしきたりを教えてやる」

朗利「ちなみに逃げるのは無しだぜ？」

トツド「ちつ：。お前達に偉そうなツラをされるぐらいなら、もつと早く仲間入りしておけばよかった」

シヨウ「俺もそう思うよ、トツド」

トツド「ま：。このアル・ワースでの戦いが続く限り、俺も手を貸さず。よろしくな、みんな」

シヨウ「シーラ様やさらわれた人達を取り返し、ドアクダーを打倒するためにはお前の力も必要になる」

トツド「お前と組んで、あの女王様を救出するとは嵐の壁以来だな」

シヨウ「期待しているぞ、トッド」

サコミズ「では、私からも一言言わせてもらおう。シンジロウ・サコミズだ。リュクス
の父親である」

エイサップ「サコミズ王もエクスクロスに来るのですか？」

サコミズ「勿論だとも…。それに、娘の恋路も気にはなるしな」

リュクス「ち、父上！」

サコミズ「ははは！まだ青いよのう、リュクス」

エイサップ「それはさておき、これからもよろしくお願いします、サコミズ王！」

ルルーシユ「今、対ミスルギ部隊から連絡が入り、こちらに合流を要請している」

万丈「向こうも色々あったようだ。何より、あのシャア・アズナブルが合流したと
聞く」

甲児「宇宙世紀の戦いの中心にいたっていう、あの男が…？！」

シモン「さっさと合流して話を聞かないとな」

シヨウ「(バイストン・ウェルの戦いは終わったけど、俺の戦いは、まだ終わっていない…。
このアル・ワースに平穩が戻るまで俺の戦いは続くのだろうか。…)」

「エンブリヲだよ。」

私は今部屋でシヨット・ウエボンと話していた。

シヨット「理論の構築は不完全だが、感性では、このアル・ワースという世界の意味がつかめてきたよ」

エンブリヲ「流石だね、シヨット・ウエボン……。君という人間と出会えた事は私にとつて幸運だったよ」

シヨット「私は他の異界人と異なり、ほとんど戦力は持つていないぞ」

エンブリヲ「あんなものは、私の真の目的の前にはどうでもいいものだよ」

シヨット「確かに……。君の計画が進めば、全ての意味は一度失われる」

エンブリヲ「シヨット……。そのためには君のような人間が必要とされる。楽園から

追放された君達と新たな楽園を創る私……。我々は良い関係が築けるだろう」

シヨット「そうである事を私も願うよ」

エンブリヲ「では、語り明かそう。アル・ワースの先にある新世界を……」

第49話 正義を持たぬ力

―新垣 零だ。

俺は今、ナデシココでゼロ、一夏、竜馬さんと組手をしていた。

ゼロ「でやあああつ！」

一夏「はあつ！」

竜馬「くつ：：！やるじゃねえかよ、二人共！」

零「俺を忘れないでくださいよ！」

竜馬「忘れるわけねえだろ！」

なんか、正直楽しいな、これ。

ヒルダ「全く：：よくやるね、あいつ等」

メル「男の人って、ああいうのが好きですよね」

トツド「身体を動かすのが好きだからな」

シヨウ「おまけに悩みも吹き飛ばんだ」

アスナ「それは何となくだけどわかるわ！」

サコミズ「男子というのはいづれ、家族を支えるために強き力と心を持たなければな

るまい。故に彼等は流石と言おう」

ヒルダ「所でアマリ……。零とは何処までいったんだい？」

アマリ「へえっ？！あ、そ、それは……！」

アスナ「(え、何よ、その反応……？！)」

メル「もしかして……。もうそこまで……。？」

アマリ「ち、違います！私はまだ……。そこまでは……。！まだ、アル・ワースは平和になつていませんし……」

メル「……。あれ？私が聞いているのはキスですよ？」

アマリ「……。ず、ずるいですよ、メルさん！」

メル「アマリさんは何を考えていたんですか？」

アマリ「う、うゝ！」

アンジュ「(性格悪いわね、メルって……)」

ロザリー「(ああ、もしかしたら、鬱憤が溜まっていたのか……？)」

メル「アンジュさんとロザリーさん。何か言いました？」

アンジュ&ロザリー「「べ、別に何も！」」

零「ふう……。いい汗、かいた……」

竜馬「にしても一夏、お前強くなったじゃねえか」

一夏「師匠とゼロのおかげですよ！」

ゼロ「レオが弟子に認めた理由が何となくわかったぜ」

零「ゼロはどういう風にレオさんの弟子になったんだ？」

ゼロ「……」

一夏「どうしたんだ、ゼロ？」

ゼロ「あ、ああ……俺は……光の国を追放させられそうになった事があるんだ」

竜馬「追放……？お前、何か悪い事をしたのか？」

ゼロ「まあな……。光の国にはプラズマスパーク・コアつてのがあつてな」

ケロロ「プラズマスパークコアというのは……確か、光の国の科学者が作り出したも

のでありますな！」

ゼロ「俺はさらなる力を手にいれるために、プラズマスパークの光を手にしようとしたんだ」

ギロロ「何？！？ゼロ、お前はベリアルと同じ事をしようとしたのか？！」

ゼロ「……あの時の俺は正義を持たない力の意味を理解していなかったから……。恥ずかしい話だぜ……。その後、俺は取り押さえられて、追放を無くす代わりにレオの弟子として一から鍛え上げられたんだ」

一夏「ギロロの言っていたベリアルつてのも、ウルトラマンか？」

ゼロ「そうだ。俺よりもずっと前にプラズマスパークに手を出し、光の星を追放されたウルトラマンだ」

クルル「クーツクク！ベリアル存在はケロン星でも有名だったぜ。唯一、悪事に手を染めたウルトラマンってな」

ドロロ「確か、ベリアルはレイブラッド星人の手によって悪のウルトラマンになったのでござるな？」

タママ「ウルトラマンキングによって、封印されたベリアルが何者かによって、封印が解かれ、光の国を壊滅させた事件は記憶に新しいです！」

ゼロ「その後、特訓を終えた俺はベリアルを倒したに見えたが、ベリアルは別の宇宙で生きていて、カイザーベリアルとしてベリアル銀河帝国ってふざけたもんを作っていたんだ」

ミラーナイト「それが我々の宇宙です」

グレンファイヤー「俺達は別の宇宙から来たゼロと一緒にベリアル銀河帝国をぶつ倒し、俺達はウルティメイトフォースゼロを結成したんだ」

ゼロ「だから、俺は一夏みたいに誰かを守りたいとかいう理由でレオの弟子になったんじゃないんだよ」

竜馬「だが、お前は今、立派に戦ってんじゃないかよ」

ゼロ「あの時、親父が俺を追放扱いにしなかったから今の俺がいる……。俺は少しでも親父のようなウルトラ戦士になるために……。そして、罪滅ぼしのために戦ってる……。ただ、それだけだよ」

レイ「……。そうか、セブンは生きていたんだな……」
すると、レイさんとヒュウガボスが来た。

ゼロ「レイにヒュウガか……。そういえば、お前達は親父に救われたんだったな」

レイ「ベリアルの影響で俺は暴走し、セブン達を攻撃してしまった……。そのせいでセブンは……」

ゼロ「そう気にするなよ。親父はお前の事を恨んでなんかいねえよ」

レイ「だが……」

ゼロ「それよりも親父が言っていたぜ？光の国を助けてくれたお前達に礼を言えなくてすまなかったってな」

レイ「セブンが……。!?？」

ゼロ「親父は一人の戦士として、お前を認めていた……。レイオニクスであるお前は俺達、ウルトラマンの大切な仲間なんだよ」

レイ「……。ゼロ……」

ゼロ「だから、アル・ワースを救う為にもまた、手を貸してもらおうぜ！レイ！」

レイ「…」

真つ直ぐなゼロの顔を見て、レイさんは黙り込んだが、彼の肩をヒュウガボスが叩き、レイさんはクスリと笑った。

レイ「こちらの台詞だ、ゼロ！」

レイさんはゼロと握手をした。

ヒュウガ「レイオニクスとウルトラマンと地球人…。生まれた星は違えど、俺達は正義の為に戦うのなら手を取り合う事も出来るんだな」

零「そして、今は違う世界の俺達と異世界を守る為に戦っています。これからよろしく願います！」

レイ「ああ！」

ゼロ「おう！」

千冬「そう言えば、前にアイアロンとダークゴーネという敵が現れたが…。あれがベリアル銀河帝国なのか？」

ミラーナイト「ええ、ベリアルの配下のアイアロンとダークゴーネ…。かつての戦いで倒したはずなのですが…」

グレンファイヤー「こりゃ、ベリアルも復活していたりしてな！」

ミラーナイト「冗談になりそうにない冗談はやめてください。ビート・スターの事も

ありますし、これ以上問題を増やしたくはありません」

ゼロ「… そうだな」

すると、警報が鳴った。

ヒルダ「敵か!?」

アンジュ「なんか最近タイミングがいいわね…！」

ルリ「機動部隊の皆さん、ダークロプスとレギオノイド部隊の接近を確認しました。すぐに攻撃準備をしてください」

バーン「やはり、来たか！」

シヨウ「みんな、出撃するぞ！」

零「ああ！」

俺達はすぐさま格納庫に向かう。

ゼロ「…」

グレンファイヤー「何やってんだよ、ゼロ！早く出るぞ！」

ゼロ「わかってる！」

レイ「(ゼロの感じているのか…？この異様な力を…)」

エメラナ「レイ様？どうかしましたか？」

レイ「… いや、何でもない！(何でもいい！俺とゴモラ達がいみんなを守ればいいだ

けの話だ)」

俺達の後にはゼロ達も出撃準備を始めた……。

第49話 正義を持たぬ力

俺達は出撃した。

ジャンボット「アイアロンとダークゴーネはいないようだな」

ルルーシュ「増援という可能性もありえる。全員、気を抜くな！」

ゼロ「てめえらが何度挑んで来ようとな俺達は負けねえ！」

レイ「俺達もやるぞ、ゴモラ！」

ゴモラ「キシヤアアアン！」

ヒュウガ「何か嫌な予感がする……無理はするなよ、レイ……！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「ベリアルを失ったお前達がこの世界で何を企んでやがる!!??:. . . 答えるわけねえか:. . . だったら、アイアロンとダークゴーネをあぶり出してやるぜ!」

〈戦闘会話 ゴモラVS初戦闘〉

ゴモラ「グウウウツ:. . . !」

レイ「(ゴモラも邪悪な力を感じて警戒しているのか:. . . ?これは早くカタをつけた方がいいな!)」

敵部隊を倒していく俺達:. . .

すると、数機のダークロプスとレギオノイドを引き連れたアイアロンとダークゴーネが現れた。

アイアロン「ふふふ:. . . 時は来たのだ!」

ダークゴーネ「まだタネを明かすのは早いですよ」

アイアロン「それもそうだな！」

カレン「やっぱり来たわね！」

朔哉「ちようどいいじゃねえか！あいつらをぶつ飛ばせば、ベリアル銀河帝国つて組織は潰せられるぜ！」

葵「敵の組織を減らせるチャンスね！」

アマタ「一気に行こう！」

ゼロ「おう！銀河の果てまでぶつ飛ばしてやるぜ！」

ダークゴーン「（そうです。そう余裕ぶりなさい。。。あの方が蘇ればあなた達は終わりなのですから。。。）」

俺達は戦闘を再開した。。。。

リョーコ「よっしゃあ！このままいけば、楽勝だな！」

アキト「（あまりにも弱すぎる。。。これがゼロの言っていた宇宙を支配していた帝国の戦力なのか。。。？）」

アイアロン「おい、ダークゴーン！まだなのかよ！！？」

ダークゴーン「そろそろ頃合いですね」

零「何だ……？あいつら、何かを待っている……？」

グレンフアイヤー「どうせ、新しい増援部隊を待ってんだろうぜ！」
ノブナガ「ここは一気にカタをつけるぞ！」

ダークゴーネとアイアロンが一向に動いて来ない……。何故だ……？

スザク「何故、彼等は動いて来ないんだ……？」

ヒデヨシ「余裕ぶりやがって、気に入らねえな……！」

アマリ「待ってください！何か来ます！」

現れたのは……ダークケロロボ……！！？

ダークケロロボ「間に合ったのか！！？」

シヴァヴァ「いや、まずいぜ、ケロロ！」

ドルル「危険警告」

ケロロ「ケロロ！！？もう一人の吾輩！」

夏美「あんた達に構っている暇はないのよ！」

ダークケロロボ「何をやっている！早く、ダークゴーネたちを倒せ！さもないと……！」
冬樹「どういう事なの、もう一人の軍曹！！？」

甲児「敵のお前の命令なんて受けるかよ！」

シヴァアヴァ「状況が捉えられねえのかよ！急がないとマジでやばいんだよ！」
タママ「こんのおく！相変わらず気に入らないやつですく！」

ギロロ「何がヤバイと言うのだ!!？」

ドルル「皇帝復活」

ゼロ「…何!!？」

アイアロン「てめえら、ドアクダー軍団を裏切るつてか！」

ダークゴーン「ですが、もう遅いです。…時間です」

ダークゴーンは謎の力を取り出し、闇を解き放った。

エイサツプ「な、何だ!!？この禍々しい力は…！」

チャム「これ…怖いよ…！」

龍王丸「あれは…もしや…！」

ワタル「どうしたの、龍王丸!!？」

龍王丸「これは闇の力なのか…!!？」

クラマ「闇の力だと!!？」

幻龍斎「ドアクダーが持っているという力の事ウラ！」

シバラク「それを何故、奴等が…！」

カズミ「待って、あれは……！」

闇が空間の裂け目を作り出し、そこから闇が無数現れ、裂け目が消えると同時に闇は一つとなり、あるものを作り出した……。

ダークゴースト「さあ、ウルトラマンゼロとエクスクロス！皇帝陛下の再臨である！」
闇が消えると、そこには黒いウルトラマンが立っていた。

？「ウオオオオオオオオツ!!？」

ドロロ「あ、あれは……もしや……！」

ゼロ「まさか……！」

ダークケロロ「間に合わなかった……のか……！」

？「久しぶりだな、ゼロ……。会えて嬉しいぜ。お前も俺様に会えて嬉しいだろ？」

ゼロ「……ベリアルツ……！」

べ、ベリアルツ……じゃあ、あれが光の国を壊滅させた悪のウルトラマンなのか……

!!?

九郎「あいつが……」

ノリコ「悪に堕ちたウルトラマン……」

シモン「ウルトラマンベリアルだっつての……!!？」

カイザーベリアル「違うな、今の俺様はカイザーベリアルだ」

アイアロン「陛下！」

ダークゴーン「ご復活おめでとうございます、陛下」

カイザーベリアル「お前達も久しぶりだな、お前達のおかげでまた俺様は戻って来れたぜ……！」

ダークゴーン「喜んでいただけたのなら、光栄です」

カイザーベリアル「さてと、ゼロ……そして、その仲間……。俺様の覇道の為の礎となつてもらおうか！特に、ゼロ！てめえはぶつ倒さなきや気が済まねえ……！」

ゼロ「こつちの台詞だ、ベリアル！面倒な時に蘇りやがって……！」

カイザーベリアル「そう悲しい事言うなよ。何度も殺しあつた仲じゃねえかよ！」

ゼロ「だからこそ、もうてめえと会うのはウンザリなんだよ！」

レイ「ベリアル……！」

カイザーベリアル「あん？地球のレイオニクス……てめえもいたのか」

レイ「……」

カイザーベリアル「まあいい。てめえらは俺が倒してやるよ！」

アンディ「簡単に俺達を倒せると思うなよ！」

鉄也「だが、この殺気……マジンガーZERO以上だ……！」

ヴィラル「舐めてかかつては確実に負けるぞ……！」

海道「だったら、俺達の本気をあいつにぶつけりゃいいんだよ！」

ゼロ「海道の言う通りだ！行くぜ、みんな！」

カイザーベリアル「俺様を楽しませろ、エクスクロスとやら！」

ゼロ「地獄に忘れてきたのなら…俺達が送り返してやるぜ！」

カイザーベリアル「いいぜ、来な！ゼロ!!？」

シヴァアヴァ「どうするんだ、ケロロ!!？」

ダークケロロ「…」

ケロロ「もう一人の吾輩、後で話を聞かせてもらおうでありますよ！」

ダークケロロ「…わかってる！吾等も戦うぞ、シヴァアヴァ、ドルル！」

シヴァアヴァ「おう！」

ドルル「任務了解」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話〉

ダークケロロVS初戦闘

「ダークケロロ「もう少し吾達が早ければ、ベリアルの復活を阻止できたのかもしれない…」」

シヴァヴァ「過ぎちまったもんは仕方ねえよ、今はできる事をやるだけだ！」
ドルル「戦闘開始」

ダークケロロ「うむ、わかった！シヴァヴァ、ドルル！援護は任せたぞ！」

〈戦闘会話　ゼロVSダークゴーネorアイアロン〉

ゼロ「てめえ等はベリアルを蘇らせる為に動いていたって訳か……！」

アイアロン「今頃、気がついても遅いんだよ！」

ダークゴーネ「これから私達はベリアル陛下と共に全ての宇宙を支配します」

ゼロ「そんな事させるかよ！ベリアルごとてめえ等をもう一度倒してやる！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSアイアロン〉

ミラーナイト「全く……面倒な事をしてくれましたね……！」

アイアロン「陛下が復活した今、お前達は終わりだ！」

ミラーナイト「いえ、私達は一度、ベリアルを倒しています……。だから、もう一度倒すだけです！」

アイアロン「ちいっ！やるじゃねえか！」

カイザーベリアル「アイアロン、今日の所は下がれ」

アイアロン「わかりました、陛下！」

アイアロンは撤退した……。

ミラーナイト「彼の背中の装甲の強度が増していますね……！」

ゼロ「簡単には破れねえって事か……！」

〈戦闘会話 ジャンボットVSダークゴーネ〉

ジャンボット「我々はまんまとお前達の策にハマってしまったという事か……！」

ダークゴーネ「滑稽でしたよ、あなた方が余裕の表情でダークロプスやレギオノイドを倒していた姿が……」

ジャンボット「失態はお前達を倒し、挽回させる！行くぞ！」

ダークゴーネ「そう簡単にいきますかね？」

ジャンボットはジャンナツクルでダークゴーネにダメージを与えた。

ダークゴーネ「ふむ、今日やるべき事は終えました」

カイザーベリアル「ダークゴーネ、俺様を蘇らせた事に免じて此処は退かせてやるよ」

ダークゴーネ「ありがたき幸せ、エクスクロスの方々、またの再会を望みます」

ダークゴーネは撤退した。

ジャンボット「ビート・スターも厄介だが、奴も厄介だな……」

ゼロ「それでも、俺達は負けるわけにはいかねえんだ、ジャンボット」

ジャンボット「わかっている」

〈戦闘会話　ゼロVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「フハハハハッ！楽しいな、ゼロ！」

ゼロ「こっちはドン引きなんだよ！」

カイザーベリアル「いいぜ、前回とは違う俺様の力を見せてやる！」

ゼロ「俺だって前の俺とは違うんだよ！」

〈戦闘会話 グレンファイヤーVSカイザーベリアル〉

グレンファイヤー「大将自ら出てくるなら話は早いぜ！」

カイザーベリアル「俺様は暑苦しい奴は嫌いなんだ。消えろ、炎野郎！」

グレンファイヤー「何お!?? 嫌いなら、もつと俺の炎を浴びせてやるぜ！」

〈戦闘会話 ミラーナイトVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「ミラーナイト、もう一度俺様の元で働いてみる気はないか？」

ミラーナイト「ふざけるな、ベリアル…! 私はウルティメイトフォースゼロ…! 決して、エクスクロスのミラーナイトです。お前の仲間になど二度とならない!」

カイザーベリアル「そいつは残念だぜ、なら、他の奴と一緒に死ね!」

〈戦闘会話 ジャンボットVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「機械ごときが俺様の邪魔をするんじやねえよ!」

ジャンボット「悪いが邪魔をするのが得意でな…!。特にお前に対しては!」

〈戦闘会話 ゴモラVSカイザーベリアル〉

レイ「ベリアル! 地球のレイオニクスとして、お前を倒す!」

カイザーベリアル「俺様の邪魔をすんじやねえよ、レイオニクスの恥晒しが！」

レイ「俺はレイオニクスの血には負けない！」

カイザーベリアル「果たしてそうかな？ならば俺様が試してやるよ！」

〈戦闘会話 零VSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「あん…？お前…？どちらかと言うと俺様側の奴だな」

零「俺様側…？勝手に俺を悪サイドに決めつけるなよ！」

カイザーベリアル「…成る程な。だが、お前は他の奴とは違う…それだけはわかるな」

零「（こいつ…俺の何を感じたってんだ…？）」

〈戦闘会話 アマリVSカイザーベリアル〉

ホープス「マスター、正直のところ、後退をオススメします」

カイザーベリアル「そっちのオウムの方がわかってんじやねえか、俺様の力を！まあ、てめへの破壊の力も見込みがあるぜ」

アマリ「私のドグマを感じ取ったの…？」

カイザーベリアル「それを見込んでてめえだけは見逃してやってもいいぜ？」

アマリ「それでも逃げません！私の旅を続けるためにも……零君と一緒にいるためにも！」

〈戦闘会話 ケロロVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「フン、ケロン人か」

ケロロ「ベリアル……本当に蘇つたのでありますな！」

ギロロ「今まで見てきたどの様な奴よりも凄まじい殺気だ……！」

ドロロ「これは……気を緩ませればこちらが負けるでござる……！」

クルル「クーツク！今回ばかりはヤバイかもな」

ケロロ「それでも負けるわけにはいかないであります！」

カイザーベリアル「カエルごとき……俺様の敵じゃねえ！」

タママ「このおっ！余裕そうな面して腹がたつです！」

ケロロ「ベリアル！ウルトラマンに変わり、ケロロ小隊が相手をするであります！」

〈戦闘会話 ダークケロロVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「俺様の復活を阻止しようとしたが無駄だったようだな」

ダークケロロ「だが、ケジメはつける……。貴様を倒して！」

カイザーベリアル「ケロン人のコピーごときが意気がってんじやねえ！捻り潰してやる！」

〈戦闘会話　しんのすけVSカイザーベリアル〉

ひろし「これが悪いウルトラマン……！」

カイザーベリアル「地球人が……怪我じやすまないぜ？」

シロ「ワン！」

みさえ「舐めないでよ！」

カンナム「僕達はお前には屈しない！」

カイザーベリアル「俺様は今、家族を使つての計画も考えている……お前達でそれを

学ばせてもらうぜ！」

ひろし「俺達から得られるものなんてねえよ！」

みさえ「悪さしかしないあなたなんかじゃね！」

カイザーベリアル「こいつら……調子に乗ってんじやねえぞ！」

しんのすけ「オラ達は負けない！行くぞ、シリリの父ちゃんと似た声のウルトラマン！」

カイザーベリアル「俺様をナースパディ星の奴らと一緒にすんじやねえ！」

〈戦闘会話 ノリコVSカイザーベリアル〉

カズミ「ノリコ、特撮好きのあなたから見て、彼はどう？」

ノリコ「許せないわ、お姉様！戦う力を持っていながら悪の道へ進んだ、悪の戦士は！」

カイザーベリアル「メンドクせえ！てめえになんか許されようとは思ってねえんだよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「ほう…小僧、面白いオモチャを持つてんじゃねえか」

ジョーイ「ヒーローマンの事を言っているの…？」

ヒーローマン「…！」

ジョーイ「ヒーローマンが警戒している…でも、僕達は負けない！」

〈戦闘会話 ウイルVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「その姿…てめえ、スクラッグか…どうだ？お前も俺様と共に全世界を支配する気はないか？」

ウイル「ふざけるな……。俺はお前のような奴が一番嫌いなんだな！」
カイザーベリアル「そうか……。ならば死ね！虫野郎！」

何て強さだよ、ベリアルの奴……。！

ゼロ「ベリアルの野郎……。！確かに前よりも強くなつてやがる……。！」

カイザーベリアル「この程度かよ、エクスクロス！」

レイ「まだだ！ゴモラ、リトラ！」

レイさんはゴモラとリトラも出し、ベリアルに向けて、攻撃するが……。

カイザーベリアル「邪魔だ！」

向かってきたゴモラを蹴り飛ばし、空から攻撃を仕掛けたリトラを一撃で地面に叩きつけた。

レイ「ぐっ……。！リトラ……。戻れ！」

リトラのダメージを見たレイさんはリトラをネオバトルナイザーに戻した。

ベリアルは倒れるゴモラを無理矢理立たせて、何度もダメージを与えていく。

ゴモラのダメージがレイさんにもフィードバックしていき、レイさんもダメージを負う。

カイザーベリアル「吹っ飛べ！」

ゴモラ「キシヤアアアツ！」

レイ「ぐあああつ！」

アスナ「レイさん！」

エンネア「このままじゃ、マズイよ！」

ゼロ「やめろ、ベリアル！」

カイザーベリアル「やめねえよ。俺はただ同志の恥を消そうとしているだけだ」

レイ「っ……！まだだ……！勝った気でいるなよ……ベリアル！」

カイザーベリアル「フン、正義の心を持つていたとしてもやはり、お前はレイオニク

スか」

レイ「俺は負けない……！大切な仲間を守る為に……！」

カイザーベリアル「大切な仲間……か……。だったら、その大切な仲間とやらを自分の

手で壊させてやるぜ！」

レイ「何……？！」

ベリアルは闇を纏わせた右手でレイさんを叩き飛ばした。

レイ「ぐあああつ！」

九郎「レイ！」

レイ「ぐっ… ああ…！」

何だ…？レイさんの周りに闇が…！

レイ「な、何だ…？これは…？ぐあああつ！」

闇がレイさんの中へと入り、レイさんは苦しみ始めた。

すると、レイさんの姿が変わるがすぐに黄色い目が赤く染まり、レイさんの身体から大量の闇が放出された。

レイモン（バーストモード）「グガアアアアアツ!!？」

レイさんの姿が赤くなり、ゴモラの姿も赤くなった。

ゴモラ（レイオニツクバースト）「キシヤアアアン！」

シヨウ「レイ…」

くから「何なの、あの姿!!？」

カイザーベリアル「うまくいったか…」

ナオミ「レイさんに何をしたの!!？」

ミラーナイト「まさか、お前はまた…！」

カイザーベリアル「察しがいいな、ミラーナイト。そうだ、奴に闇の力を流し込んでやった…。奴は今、レイオニクスの闘争本能のままに暴走するだけの存在となった」

暴走だと…!!?

レイモン（バーストモード）「イケエエエツ!!??」

ゴモラ（レイオニックバースト）「グガアアアアアツ!!??」

赤くなったゴモラが俺達に向かってくる…。ゴモラまで敵になっているのかよ…

!

ゼシカ「ゴモラが来るよ!」

ヒルダ「どうすんだよ、これ!?!」

ヒュウガ「みんな、ゴモラを頼む!俺はレイの目を覚まさせる!」

一夏「そんな事出来るんですか!?!」

ヒュウガ「前にも一度、こうやってレイを助けた…。今回もそうするまでだ!」

千冬「わかりました、よろしくお願いします!ヒュウガ船長!」

ルルーシュ「各機はレイが元に戻るまでゴモラを食い止めるぞ!」

ゼロ「待ってろよ、レイ、ゴモラ!絶対に助けてやるからな!」

ヒュウガボスは暴走するレイさんの元へ走り、俺達も戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 零VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

零「レイさん、あなたは俺が暴走した時も止めてくれた…。今度は俺の番です!必ず助け出します!」

〈戦闘会話　ゼロVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ゼロ「戻って来い、レイ、ゴモラ！お前は俺達の大切な仲間だ！レイオニクスの血に
なんか負けんじゃねえ！」

つ、強過ぎる……！ゴモラって敵に回すとこんなにも強かったのか……！！？

レイモン（バーストモード）「ウオオオオオオオッ！」

ゴモラ（レイオニックバースト）「キシヤアアアッ！」

鈴「は、反則でしょ、この強さ……！」

セシリア「ですが、ゴモラさんも苦しんでいるように思えますわ」

ラウラ「だが、助けようにもあの様な強さでは……」

ゼロ「まだなのかよ、ヒュウガ！」

ヒュウガボスは暴走したレイさんの所まで着き、飛び掛った。

ヒュウガ「何をしているんだ、レイ！目を覚ませ！」

レイモン（バーストモード）「がアアアアッ！」

しかし、ヒュウガボスを離れたレイさんはヒュウガボスを何度も殴り、蹴り飛ばした。

ヒュウガ「ぐはっ……！」

リチャード「ヒュウガ船長！」

ヒュウガ「ぐっ……ぬあああああつ!!?」

声をあげたヒュウガ船長は立ち上がったと同時に走り出し、レイさんにドロップキックを決めた。

レイモン（バーストモード）「グアッ！」

レイさんは吹き飛ばされ、地面に転がると同時にゴモラもネオバトルナイザーに戻された……。

アマタ「ゴモラが……」

ウエスト「どうやら、限界のようである！」

レイモン（バーストモード）「グウウウツ……！」

カイザーベリアル「ちっ……ここまでか……。おい、レイモン……。此処は退け」

レイモン（バーストモード）「！」

ヒュウガ「待つんだ、レイ！」

レイモン（バーストモード）「グオオオオオツ！」

ヒュウガ「ぐあつ!!?」

退こうとしたレイさんを捕らえようと動き出したヒュウガボスだったが、レイさんに

蹴り飛ばされ、レイさんは凄まじい跳躍力でこの場を飛び去ってしまった。

カイザーベリアル「なかなか楽しい見世物だったぜ、エクスクロス」

ゼロ「ベリアル！」

カイザーベリアル「そう熱くなるなよ、ゼロ……。まだ時間はたっぷりある。決着ら次の機会だ」

ゼロ「待ちやがれ！」

しかし、カイザーベリアルは消えてしまった……。

何とか生き残ったけど、レイさんが……。

ハリー「戦闘は終わりました……」

エイサップ「レイさん……」

ゼロ「……」

ヒュウガ「……」

零「話してもらいますよ、ヒュウガボス、レイさん……レイさんのあの姿の事を……」

ヒュウガ「わかった……」

冬樹「軍曹……」

ダークケロロ「わかっている、吾達もそちらの艦に行く」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、ナデシコCの格納庫に集まった……。

ロロ「あれがレイさんの……レイブラッド星人としての姿……!?」
ルルーシユ「ベリアルはあの姿をレイモンと呼んでいた……」

ノブナガ「だが、あの状態は何だ？ゴモラの強さも今までの比でもなかった」

ゼロ「レイのレイオニクスとしての闘争本能が発動した状態……バーストモードだ。ゴモラもレイオニクスバーストという状態になり、レイは……レイオニクスの本能のままに暴れる……」

シャーリー「それが……バーストモード……」

トオル「何とか助けられないんですか!?」

ヒュウガ「助けられる」

ラウラ「ヒュウガ船長……」

ヒュウガ「レイは必ず俺が目覚まさせる……？絶対にだ！」

ヒュウガ船長の目は本気だ……

ネモ船長「わかりました、できるだけ他の敵は我々が引き受けます」

ヒュウガ「ありがとうございます……！」

ケロロ「もう一人の吾輩……。お前達はベリアルの復活を阻止しようとしたのでありますな？」

ダークケロロ「ああ。アル・ワースに転移してきた吾達はドアクダーとベリアル銀河

帝国が手を結んでいる事を知った」

シヴァアヴァ「それで俺たち達はベリアル復活を阻止しようとドアクダー軍団の一員となり、奴等の出方を伺っていたんだよ」

ギロロ「では、俺達と敵対したのも……」

ダークケロロ「敵を欺くためだ」

ドルル「否、任務失敗」

冬樹「ごめんね、軍曹……。僕達がもっと早く気づいていれば……」

ダークケロロ「いや、吾達ももっと早くお前達に教えていればこんな事にはならなかった……。すまない」

ケロロ「お互い様でありますよ、吾輩！」

ダークケロロ「そのケジメとして……。俺達もエクスクロスに入ろうと思う……」

ケロロ「本気でありますな？」

ダークケロロ「ああ」

ケロロ「ならば、吾輩からはもう何も言わないであります。どうですか、ネモ船長」

ネモ船長「いいだろう。君達も仲間として迎えよう」

ダークケロロ「感謝する」

冬樹「良かったね、軍曹！」

ダークケロロ「冬樹、軍曹はお前の友の名だ……。そうになるとややこしい」
冬樹「じゃあ……。大軍曹！」

ダークケロロ「な、何気に過去をぶり返すような名前だが……。悪い気は無い」
ゼロ「よろしくな、黒いケロロ！」

ダークケロロ「ああ」

シヴァヴァ「つて事だ、よろしくな、お前ら！」

タママ「うぬ〜！腹がたつけど前よりかは立たないです〜！」

ヒデヨシ「おうよ、シヴァヴァ！」

ギロロ「まさか、お前とともに戦う事になるとはな」

ドルル「同感」

號「とにかく、早く別働隊と合流した方が良さそうだ」

ルリ「こちらは大変ですが、向こうも大分状況に進行があつたみたいですよ」

竜馬「というと？」

ルリ「まず……。レガリア・ギアを用いていたヨハンという少年を撃破したそうです」

カレン「ユイ達、やったんだね！」

ルルーシュ「だが、いい話ばかりではないらしい」

九郎「悪い事も起きたのか!?!？」

ルルーシユ「ああ。どうやら、戦闘の最中…… グラハム少佐が敵の攻撃を受け、ブレ
イヴは大破…… グラハム少佐も意識不明らしい」

アーニー「グラハム少佐が…… !!？」

いったい…… みんなに何があつたんだ…… !!？

対ミスルギルート

第44話 胸の中の嵐

ービゾン・ジエラファイルだ。

俺はゾギリア艦内でマルガレタ特務武官と話をしていた。

ビゾン「何故、捜索隊を派遣しないのです!?？」

マルガレタ「落ち着きない、ジエラファイル中尉。この嵐の中を下手に動けば、二重遭難になるだけです」

ビゾン「しかし…！」

すると、アルフリード中佐が来た。

アルフリード「そこまでだ、ビゾン」

ビゾン「中佐もヒナを見捨てるといいますか…!?？」

アルフリード「確かにマルガレタ特務武官のおっしゃる通り、この状況で捜索隊を派遣するのは危険だろう」

ヴィクトル「だが、それは並みの連中の話だ」

この人は……！

ビゾン「ヴィクトル・リヤザン少佐……」

ヴィクトル「久しぶりだな、ビゾン……。いや……。いくら自宅が隣同士の縁とはいえ、今はジェラフィル中尉と呼ぶべきかな」

マルガレタ「ヴィクトル・リヤザン少佐……。貴官等の着任は明日のはずだが」

レイ「Destiny」「この一帯が嵐になるって聞いたので早めに到着しました」
マルガレタ「貴官は？」

レイ「Destiny」「レイ・ザ・バレルです。貴方達とは別の世界から来た、異界人と呼ばれるものです」

アルフリード「君もミスルギの軍門に下ったのかな？」

レイ「Destiny」「……はい、そうです」

ヴィクトル「レイは優秀ですよ……。何でもあのガンダムとか呼ばれる機動兵器のパイロットなのですから」

ビゾン「ガンダム……。!?」

レイ「Destiny」「そうだが、どうした？」

ビゾン「……ガンダムにはいい思いがない」

レイ「Destiny」「そうか……」

ヴィクトル「それにしてもまはか娘が……ヒナが行方不明になっているとは思いませんでしたよ」

アルフリード「どうぞでしょう、特務武官殿？リヤザン少佐にヒナ・リヤザン少尉の捜索隊を率いてもらうのは」

マルガレタ「しかし、少佐には親衛師団との合同で仕掛ける重要な作戦に参加してもらう手はずで……」

ヴィクトル「申し訳ありません、特務武官殿。ここは一軍人としてではなく、人の親として娘の捜索に行かせてください」

マルガレタ「しかし……」

レイ「Destiny」「私からもお願いします、マルガレタ特務武官殿……」

ヴィクトル「レイ……」

マルガレタ「……人員は最低限しか認められません」

アルフリード「ありがとうございます、特務武官殿」

ヴィクトル「そうと決まれば、すぐに出発だ……。ありがとうございます、レイ」

レイ「Destiny」「いえ、ヴィクトル少佐には俺も迷惑をかけたので……」

ヴィクトル「迷惑など思っていないぞ。同じ異界人同士だ。助け合っていこうじゃないか」

レイ「Destiny」「了解」

ビゾン「少佐、俺も参加させてください」

ヴィクトル「……いいだろう、ビゾン。お前には今日までヒナのお守りを押しつけてきたからな。悪いが、最後まで面倒をみてくれ」

ビゾン「はい！よろしく頼むぞ、レイ！」

レイ「Destiny」「お互い気負い過ぎないでいこう、ビゾン」

俺はビゾンと握手をした。

ヴィクトル「まったく……張り切るのはいいが、いくつになっても手間のかかる娘だ……。見つけたら、少し説教してやらんとな」

アルフリード「（お気をつけて、リヤザン少佐……。ゾギリアの未来のためにもあなたの力が必要とされているのです……）」

レイ「Destiny」「（父親、か……。ギル……。もしや、あなたが俺をこの世界に來させたのですか……。？シンと……。再び出会うために……）」

「フアサリナです。」

ミハエル「え!?? カロツサとメリツサが行方不明になった!??」

ウー「確かなのか、フアサリナ?」

フアサリナ「はい、確かです…」

ミハエル「すぐにでも探しに行かないと!」

フアサリナ「待ってください、ミハエル君! 今行っても嵐のせいであなただまで遭難してしまいわ!」

ミハエル「でも…!」

ウー「落ち着くんだ、ミハエル…。カロツサもメリツサもオリジナルセブんだ…。」

おそらく無事だ」

ミハエル「…はい…」

ウー「お前はあの方の準備をフアサリナと共に進めてくれ…。嵐が治れば私が行く」
フアサリナ「お願いします、ウーさん」

ミハエル「(カロツサ、メリツサ…。無事でいてくれ…!)」

時間を少し前に戻そう……。

ーシン・アスカだ。

俺と青葉ある島にいた。

青葉「！」

ヒナ「手を上げろ！抵抗すれば、撃つぞ！」

シン「青葉！」

雛……！

青葉「雛！お前も、この島に流されてきたのか……？」

ヒナ「気安く人の名前を呼ぶな！お前のせいで私は……！」
すると、茂みから音が聞こえてきた。

ヒナ「誰だ……？」

メリツサ「ヒツ……？」

こ、この子は……確か、ヴァンさんの敵の仲間の……！

ヒナ「子供……？」

シン「拳銃を下ろせ！その子は関係ない！」

ヒナ「お前に命令されるまでもないわ！」

ヒナという女の子は拳銃を下ろした……だが、また青葉に向けたが……。

俺は女の子に駆け寄る。

シン「大丈夫か!?？」

メリツサ「あ、ああ……！」

そ、相当怯えられているな……！

シン「怖くないから、な？」

メリツサ「……」

ダメ、か……。

カロツサ「メリツサから、離れろ！」

突然、男の子が俺に蹴りを浴びせてきた。

シン「ぐあっ！」

青葉「シン！」

カロツサ「メリツサ、泣かす者……死、あるのみ！」

シン「何すんだよ！」

ヒナ「この子達……兄妹なの……!?？」

メリツサ「やめて、カロツサ！私はこの人達に何もされていけないよ！」
シン「え…」

カロツサ「…わかった」

すると、足場が揺れた。

ヒナ「きやあつ！」

青葉「下手に動くな！雨で足場がもろくなってるんだ！」

メリツサ「何、これ…!?」

シン「まずい！崖が崩れるぞ！」

青葉「うわあああああつ！」

ヒナ「きやあああああつ！」

俺と兄妹の子達は何とか助かったが、青葉とヒナという子は崖が崩れ、落ちた…。

シン「青葉あああああつ！」

そのまま、青葉達の姿は見えなくなった…。

兎に角、俺達も屋根か何かある所を見つけて、雨宿りをしないと…！

シン「兎に角、雨を防げる所に行こう！」

カロツサ「…」

シン「君が俺を警戒するのはわかる…。でも、今は一緒に行こう！」

カロツサ「お前、同志の敵の仲間……！」

メリツサ「カロツサ、行こう……」

カロツサ「……メリツサ……。少しでも、俺達に、何かしたら……殺す」

シン「わかつてるよ、さあ、行こう」

俺達は雨を防げる場所を探し始めた……。

―新垣 零だ。

俺達はシグナスで倉光艦長と話していた。

倉光「ダメだ」

ディオ「……」

倉光「青葉君とシン君の搜索は許可できない」

ステラ「どうして!? 艦長は、シン達を見捨てるの!?」

ルナマリア「……今探しに行つても私達も遭難するかもしれないわ……。わかつて、ステラ」

ステラ「ルナマリア……。わかった……」

ルナマリアのやつ……。本当は自分がいち早くシンを探しに行きたいんだろうな……。

ヤール「しかし、青葉もシンもついてねえな…。偵察に出たら、嵐の中で敵に遭って機体トラブルとはよ…。」

キラ「撃墜されなわけではないなら、生命に別状はないと思いますけど…。」

ジョシユア「で、でも外はまだ嵐です！早く青葉さん達を見つけないと…。」

カルメン99「落ち着きなさい、ジョシユア」

倉光「だからだよ。この悪天候に加え、青葉君とシン君が撃墜したとはいえ、敵がまだ近くにいるかも知れない。この状況下でクルー達の安全を最優先に考えて下した僕の判断は間違ってるかな、リー君？」

リー「いえ…。」

レーネ「各員の気持ちもわかるが、わざわざ直接、状況を説明に来られた艦長のお気持ちも理解しろ」

倉光「我々はこのまま警戒態勢を維持し、嵐をやり過ごしてから次の手を打つ。各員は、そのまま待機だ」

そう言い残し、倉光艦長とレーネ副長は歩き去った…。

ディオ「…。」

ルナマリア「…。」

リー「ディオ…。馬鹿なことを考えるなよ」

アスラン「ルナマリアもだ」

ルナマリア「シン達の捜索に出る事がバカな事だつて言うんですか!?」

ヤール「落ち着けて。艦長があ言った以上、勝手に動けば完全に命令違反だぜ！」

ディオ「しかし…」

ウエンディ「ねえ、ヴァン…。シンさん達、無事よね？」

ヴァン「…さあな」

ウエンディ「怪我とか…。してないかな？」

ヴァン「…さあな」

ウエンディ「…ヴァン！二人が心配じゃないの!?」

ヴァン「あの二人がどうなろうと俺は知っちゃこつちやねえ」

リディ「何…？」

ジユドー「そんな言い方はねえだろ！」

ヴァン「なら、俺が心配だと言え、あいつらは帰ってくるのか？それならば、俺は

何度でも心配だと言うが…」

ガドヴェド「…ヴァンの言う通りだ」

零「みんな、兎に角落ち着こうぜ。焦っても何も始まらないだろ」

ヒイロ「…感情に従って動く事は、悪い事ではない」

ディオ「ヒイロ……」

アルト「無表情、無口、無愛想のお前が言うセリフかよ！」

ヒイロ「……俺はシグナス所属の軍人ではない。誰も俺に命令する事はできない」
マーベラス「ヒイロ、お前……」

ディオ「行つてくれるのか、ヒイロ？」

ヒイロ「お前達も一緒に来い、ディオ、ルナマリア」

ルナマリア「……わかつ……」

エルヴィラ「はい、そこまで！今それを口に出しちゃうとリーも困っちゃうから」

ディオ「覚悟はできています」

エルヴィラ「ルナちゃんは兎も角、あなたは待ちなさいって、ディオ。私があなたを合法的に出撃出来るようにしてあげるから」

リー「艦長を説得するって言うのか？」

ヤール「無駄だと思うぜ。艦長……ああ見えて理詰めで来るからな」

エルヴィラ「だからこそよ。青葉君を100%発見できる方法があるならば、艦長も搜索をOKするでしょ？それにはディオとヒイロの連携が必要になるの」

アスナ「ディオとヒイロで……？」

ミシエル「これはまた想像を絶するようなカップリングだな……」

ランカ「サザンカちゃんなら、腐腐腐って、笑いそうだね……」

オズマ「頼む、ランカ。お前がサザンカの真似をしないでくれ」

ランカ「え、う、うん……」

ディオ「青葉達を見つけるために必要ならば……」

ヒイロ「それでいい、ディオ……。感情に従え」

一体…… どういう作戦なんだ……？

ーシン・アスカだ。

俺達は洞窟を見つけて、中に入った……。

だが……。

メリツサ「はあ…… はあ……！」

突然、メリツサという女の子が倒れた。

カロツサ「メリツサ……？」

シン「大丈夫か……？」

俺はメリツサに駆け寄ろうとしたが、彼女を守ろうとカロツサという男の子が近寄るなというように俺を睨み、メリツサに駆け寄った。

メリッサ「メリッサ、大丈夫か!?？」

カロツサ「頭、痛い：：！」

見ると、すごい汗をかき、顔も少し赤くなっていた。

カロツサがメリッサのオデコに手を当てると、驚いた顔をする。

カロツサ「熱が：：ある：：！メリッサ、センを呼べ！それなら、メリッサは助かる」

メリッサ「だめ、だよ：：。今の状態でセンを呼び出したら、この島、崩れちゃう：：」

カロツサ「くつ：：。待つてる、メリッサ！何か、栄養のある食べ物を見つけてくる

！

カロツサか洞窟を出ようとした為、俺が彼を止める。

カロツサ「何だ：：!?？」

シン「：：探すのなら、俺が行く。君はメリッサの側に居てくれ」

カロツサ「お前の、助けなんていらぬ！」

シン「メリッサの側にはお前が必要だ！だから：：！」

カロツサ「うるさい！メリッサは：：俺が助ける：：！」

シン「：：わかった。でも、俺も行くぞ。二人で探した方が効率がいい」

カロツサ「勝手に、しろ」

取り敢えず、俺とカロツサは濡れて絞ったタオルをメリッサのオデコに乗せて、俺の

上着をメリツサに布団のようになかけ、俺達は食べもを探すために外に出た。

暫く、探すは何もない……。

てか、嵐が強まってないか……？

シン「っ……！カロツサ、もう危険だ、戻ろう！」

カロツサ「まだ見つけて、いない！」

シン「でも、このままじゃお前も！」

カロツサ「お前の指図、なんて……受けない……！」

しかし、雨で又カルんだ地面に足を滑らせたカロツサは……崖から落ちそうになつた。

カロツサ「う、うわあああつ！」

シン「カロツサ！」

俺はすかさず、カロツサの手を掴み、何とか落ちる事は防げた……が……。

シン「くっ……！」

この嵐の中、食べ物を探し続けていた俺とカロツサの体力は限界を迎えていた。

そのため、手にあまり力が入らない……。

このままじゃ、カロツサが落ちる……！

カロツサ「は、離せ！お前の情けなんて、いらぬ！」

シン「そんなこと言ってる場合かよ！お前が死ねば、メリッサが悲しむ！」
カロツサ「っ……！で、でも……このままじゃあ、お前も……！」

シン「絶対に生きる！俺も……お前も……メリッサも！誰一人として死なせない！」
カロツサ「……シン……！」

シン「うおおおおおっ！！？」

俺は最後の力を振り絞り、カロツサを引き上げた。

シン「はあ……はあ……さ、流石に疲れた……」

カロツサ「……なあ、どうして……敵の俺達、助ける？」

シン「……妹を助けようとしたお前が昔の俺にそっくりだったから……」

カロツサ「え……」

シン「俺にもマユって妹がいたんだ……でも……」

カロツサ「でも……？」

シン「マユは……戦争に巻き込まれて、両親と一緒に死んだんだ……」

カロツサ「！」

シン「だから、俺は……花を散らせない世界を作るために……戦っているんだ」

カロツサ「花を散らせない世界……あ！」

シン「どうした？……あ！」

カロツサが指差した方向を向くと、一つのリンゴがあった。

カロツサ「食べ物…… あった！」

シン「頑張った甲斐があったな、カロツサ！」

カロツサ「うん！シン、ありがとう」

シン「頑張ったのは俺達二人だ。俺は礼を言われる事なんてしてないよ」

俺とカロツサはリンゴを取り、メリツサの待つ洞窟に戻ってきた。

メリツサ「シ、ン…… カロ、ツサ……」

カロツサ「メリツサ、リンゴ、食べる」

メリツサ「う、うん……」

メリツサはゆっくりと立ち上がり、リンゴを食べた……。

メリツサ「美味しい……」

カロツサ「見つけられたの、シンのおかげ」

シン「やめてくれよ、カロツサ。俺とお前で見つけたんだから！」

カロツサ「ありがとう、シン、カロツサ」

カロツサの笑顔が一瞬マユにも見えたが……。

俺は外を見ると、嵐が収まったみたいだ。

シン「嵐も収まったみたいだな。よし、青葉達を探さないと！」

カロツサ「俺も、行く……！」

メリツサ「私も！」

シン「え、でもメリツサは……」

メリツサ「シン達が取ってきてくれたリンゴで元気が出た！」

シン「無理はするなよ、カロツサ……メリツサを頼むな」

カロツサ「言われるまでも、ない」

俺達は青葉達を探す為に洞窟を後にした……。

―渡瀬 青葉だ。

俺達は崖が崩れた後、洞窟の中にいた。

ヒナ「！」

青葉「よかった！気がついたか！」

ヒナ「この格好は……」

青葉「ま、待て！何もしないよ！俺達、崖崩れに巻き込まれて気絶したお前をここ

まで運んで……」

ヒナ「黙れ！お前を捕虜にして、私の身の潔白を証明してやる！」

青葉「ちよつと待てよ！お前……生命の恩人にそういう態度を取るのかよ！」

ヒナ「私は軍人だ！敵に対しての当然の行動だ！」

青葉「そつちはそうかも知れねえが、俺は軍人じゃねえ！」

ヒナ「何故、そんな男が連合の新型に乗っている？」

青葉「・・・お前が連れてきたからだよ」

ヒナ「は？」

青葉「学校で突然ヴァリアンサーに襲われてそれをお前が助けてくれたんじゃないか。それでデオオが待つてるとか言つて、俺を70年後の世界に送り込んだんだろ？」

ヒナ「こんな妄想に取り憑かれた男が新型機のパイロットとはな・・・。連合は相当、人材不足らしいな」

青葉「・・・覚えてないのか、雛？」

ヒナ「気安く私の名前を呼ぶな！そもそも何故お前が私の名前を知っている!?!？」

青葉「だから、お前は俺のクラスメイトで弓原 雛っていつて・・・ヴァリアンサーに襲われた時、お前が助けて・・・」

ヒナ「もういい！クラスメイト!?!?助けた!?!?訳のわからない事ばかり並べて！」

青葉「雛・・・」

ヒナ「これだけは言っておく！お前の言うヒナが、たとえどれだけ私に似ていたとしても、それは私じゃない！私の父はゾギリア軍第101独立偵察旅団所属の少佐、ヴィ

クトル・リヤザン！私は10歳で第11幼年士官学校に入学し、卒業後、リペツク基地を経て、第501機動中隊所属となった！お前と接触する事など不可能だ！」

青葉「……そうか……」

ヒナ「え……」

青葉「よくわからねえけど、話の辻褄が合わねえんだから、お前は俺の探している雛じゃないのかも……。でもさ……雛を見つげるための手がかりはやっぱり、お前しかないと思うんだ……」

ヒナ「その雛というのは……」

青葉「雛とは同じクラスだったけど、ほとんど喋った事がなかったんだ……。助けてもらった時が初めてぐらいで……。ほんと、どんな女の子かも、何が好きなのかも知らなくて……。会えたら、色んな事を聞こうと思ってた……。どうして俺を助けたのか、とか、どうやったら元の時代に帰れるか、とか……。なのに、やっと会えたと思ったら、別人とか言われて……。だったら、あいつはどこに行ったんだ……。やっぱり、もう元の時代には戻れないのか……」

ヒナ「……」

青葉「どうした？俺を捕虜にするのはやめたのか？」

ヒナ「……お前を尋問しても無意味らしいから……。当面は、この状況をなんとかす

る事を優先する」

青葉「そいつは助かった。なあ、洞窟の外に出てみようぜ。嵐も収まったみたいだし」
ヒナ「ああ……」

俺と雛は洞窟の外に出た。

青葉「よっし！嵐は完全に去ったみたいだな！」

ヒナ「こんな夜も星は綺麗なのね……」

青葉「さてと、まずはシンを探さないと……」

シン「おい、青葉あーっ！」

声が聞こえ、声の方を向くと手を振り、兄妹の子と一緒に歩いてくるシンの姿があった。

青葉「シン！無事だったのか！」

シン「当たり前だろ！」

拳をぶつけ合う俺とシンを見て、男の子は警戒したが、すぐにシンの顔を見て、クスリと笑う。

ヒナ「あなた達も無事だったのね、よかった」

メリツサ「あ、あの……怪我、してない？」

ヒナ「心配してくれてありがとう。私は何ともないわ」

メリツサ「よかった」

青葉「さて：。これからどうする？俺の機体は通信機がやられちゃってるけど」

ヒナ「こちらと同じような状況よ」

シン「俺のデイスティニーもだ：。」

青葉「こうなると救助が来るまでここで待つしかねえか：。まさか異世界の無人島でサバイバルをやる事になるとはな：。ま、一人きりじゃないだけ、マシか：。」

ヒナ「勝手に私を仲間にならないで」

青葉「こういう時には助け合いだ。俺のいるエクスクロスは色んな立場の人間が協力しあっている」

ヒナ「それは私達も同じよ」

青葉「ミスルギのやり方に従うのが正しい事だと考えているのか？」

ヒナ「それは：。私にとってゾギリアは祖国だから。たとえば、変わってしまったも：。」

青葉「ゾギリアが変わった：。？」

すると、デリオとルナマリアが来た。

デリオ「青葉！」

ルナマリア「シン！」

青葉「ディオ！」

シン「ルナ！それにステラまで！」

青葉「何だよ、お前等！嵐の中を助けに来てくれたのか！」

ディオ「…仕方なくだ」

ヒイロ「そういう事においてやる」

シン「ヒイロまでいるなんてな。こいつは珍しいカップリングだ」

青葉「しかし、あの嵐の中、手がかりもないのに、よく俺達を見つけたな」

ヒイロ「ゼロシステムの未来予測とカップリングシステムをリンクさせた結果だ」

シン「未来予測…？ウイングゼロにはそんな力もあるのか…」

ディオ「カップリング可能性領域を広げれば、バディ機の位置の感知も出来る…。ゼロシステムで範囲を絞り込み、その指示に従って、俺の脳波をアクティブソナーのように使ったんだ」

青葉「へえ…よくわからねけど、すごいもんだな」

ルナ「マリア「そっちの三人は？」」

シン「俺達と同じく戦闘中のトラブルで漂流したんだ」

ヒナ「…」

カロツサ「…」

青葉「安心しろ。手荒な真似はする気はねえから」

シン「大丈夫だ、カロツサ。みんなもいい奴だから」

カロツサ「…シンがそう言う、なら…」

ヒナ「敵の前にして甘いな…。それでは軍人失格だ」

青葉「言つたる？俺は軍人じゃねえって」

ディオ「このゾギリア兵…。青葉の追つていた雛という女か」

青葉「ああ…。だが、名前も顔も一緒だけど、俺の知つている雛とは別人らしいんだ」

ルナマリア「そつちの子達はヴァンさんが探しているかぎ爪の男の人の仲間じゃな

かつたっけ？」

シン「大丈夫だよ、ルナ。カロツサ達は何も悪くない」

カロツサ「シン…」

ステラ「私、ステラ！よろしくね！」

メリツサ「メリツサ… よろしく」

ステラちゃんとメリツサちゃんは笑いあつている…。

それを見て、シンとカロツサも笑っている。

ヒイロ「この者達をどうするつもりだ、青葉、シン？」

シン「…俺もこの二人を捕虜にするつもりはない」

ルナマリア「シン……」

シン「だから、みんなが来る前に二人は元の所に帰るんだ」

メリツサ「そうしたら……シンやステラと戦うことに……」

カロツサ「……」

青葉「俺は軍人じゃねえんだ。捕虜にするとか、そういうのは考えない」

ヒナ「甘い男だな、お前は」

青葉「……かもな。でも、そうするのがいいと思っただ」

ヒナ「青葉とか言っただ……。ちゃんと名前を聞かせてくれ」

青葉「渡瀬 青葉だ。あらためて、よろしくな」

俺はヒナと握手をしようとしたその時だった。

銃声が聞こえて来た。

青葉「撃ってきた!?」

ヴィクトル「伏せろ、ヒナ！」

ヒナ「お父様！」

ディオ「ゾギリアも、この島に来ていたのか！」

ウー「それだけではないぞ！」

カロツサ「ウー……！」

シン「こいつ… かぎ爪の仲間か！」

ウー「迎えに来たぞ、カロツサ、メリツサ…。ミハエルも心配していた」

メリツサ「ミハエルが…！」

カロツサ「… あいつに、心配されたくない…！」

ヒイロ「お前達は退け。ここは俺が食い止める」

シン「俺も残るぞ、ヒイロ！」

ヒイロ「好きにしろ」

カロツサ「シン…！」

シン「カロツサ、メリツサ…。お別れだ。短い時間だったけど、一緒にいれて楽し

かった」

メリツサ「…」

ビゾン「ヒイロ・ユイ！シン・アスカ！貴様達もいたか！」

ヒイロ「ビゾン・ジェラフィル…！」

シン「お前もいたのかよ…！」

何だ…？ あいつ…？ どこかで会った事があるような…。

ビゾン「貴様！ヒナから離れろ!!？」

ビゾンって奴は俺を蹴り飛ばして来た。

青葉「くそっ！やりやがったな！」

ディオ「離れる、青葉！ここは退くぞ！」

ステラ「シン：！」

ルナマリア「私達も行きましよう、ステラ！」

ビゾン「青葉だど！？貴様がヒナに付きまどつていた連合の兵士か！」

青葉「だから、どうした！？」

ヒナ「ヒナは：：俺が守る！！？」

青葉「うるせえ！勝手に一人で盛り上がってんじやねえよ！」

ディオ「退け、青葉！ヴァリアンサーが来るぞ！」

青葉「あれは：：！？」

う、嘘だろ：：！？」

青葉「ルクシオンが奪われた！？」

ビゾン「親衛師団：！我々の並行して動いていたというのか！？」

ヴィクトル「信じられん：：！野戦のプロである俺達だからこそ、ヒナを発見できた

というのに：：！」

ウー「どうやら、逆手に取られたようだな：：！」

親衛師団兵「マルガレタ特務武官：：。指示通り、カップリング機の片割れを発見し、

捕獲しました」

マルガレタ「ご苦労……。 (行政局局长からの敵命……。 カップリング機の捕獲は何とか達成できた……。 しかし、わからない……。 何故、このタイミングで急に捕獲命令が出たんだ……。)」

親衛師団兵「あの島にはカップリング機のパイロットもいるようですが……。」

マルガレタ「(行政局局长エフゲニー・ケダール……。 ゴギリアを変革する男……。 私は……。 正直言つて、彼が……。 恐ろしい……。)」

親衛師団兵「ちいっ！ このチャンスを逃すわけにはいかない！ 攻撃を開始しろ！」

親衛師団兵2「しかし、あそこには国防軍の人間とオリジナルセブンの人間もいます……。！」

親衛師団兵「構わん！ 我々の背後には行政局局长がいるのだ！」

こ、攻撃して来た……。！？

ウー「くっ……。 親衛師団め……。！ カロツサ、メリツサ。 一度退くぞ！」

メリツサ「で、でも……。！」

カロツサ「……。 行こう、メリツサ」

メリツサ「カロツサ？？」

カロツサ「シンは……。 俺達の、敵……。！ 倒すべき、敵……。！」

シン「(ききようなら、カロツサ、メリツサ…)」

ウーという男に連れられて、カロツサとメリツサもこの場を走り去った…。

ヴィクトル「ぐっ！」

ビゾン「無事か、ヒナ!?？」

ヒナ「お父様が！」

ビゾン「離れるぞ！ここには俺達も巻き添えを食らう！」

ヒナ「お父様は私にかまってください！」

ヴィクトル「ヒナ…」

ヒナ「しゃべらないで！出血がひどくなります！」

青葉「俺のルクシオンが…！」

ディオ「今はこの場を離れるのが先だ！急げ、青葉！」

ヒイロ「エクスクロスも来た」

メガファアウナ、シグナス、プトレマイオス、ハンマーヘッド、マクロス・クオーター

が現れた…。

―新垣 零だ。

ややこしい状況になってんな、これは…！

アネツサ「ルクシオン、ゾギリアに鹵獲されているようです！」

まゆか「なお、青葉さんは機体に搭乗していません！」

エルヴィラ「あの嵐の中…ゼロシステムとカップリングを持っているこちらよりゾギリアの動きが早いなんて…」

倉光「すぐに各機を発進させるんだ」

俺達は出撃した…。

シン達も戻って来て、出撃した。

まゆか「青葉さん達を収容し、シンさん、ルナさん、ステラさんは出撃しました！」

アネツサ「ディオとヒイロは、こちらに合流！敵機も来ます！」

現れたのは…トワサンガの部隊とザンギャックの部隊だった。

ロツクパイ「加勢するぞ、ゾギリア軍！」

ベルリ「トワサンガが来たか！」

ゴークカイイエロー「あの機体…インサーンもいるわね！」

インサーン「今日こそはお前達を倒す、宇宙海賊！」

親衛師団兵「マルガレタ特務武官！指示を！」

マルガレタ「(あまりにも早い仕掛け)…どうなっているんだ、これは…？まるで

全てが定められた筋書きに従っているかのようだ……」

親衛師団兵「マルガレタ特務武官！」

マルガレタ「鹵獲したカップリング機を後方へ移送……！残りは私と共にエクスクロ

スを叩く！」

ルクシオンが連れていかれちまった……！

リオン「ルクシオンが奪われた！」

トビア「じゃあブラディオンもカップリングが出来ないのか！」

アムロ「追っても無駄だ！今は目の前の敵を迎撃するぞ！」

あれは……ビゾンとかいう奴のヴァリアンサーにオリジナルセブンのヨロイが3

機……！

マルガレタ「ビゾン・ジェラフィル中尉！こちらに合流しろ！」

しかし、ビゾンのヴァリアンサーは命令を聞く事なく、前に出る。

マルガレタ「ジェラフィル中尉！指示に従え！」

すると、今度は黒いガンダムが現れる。

シン「あ、あれは……！」

アスラン「レジェンドだと……!?」

刹那「あれも……ガンダムなのか……!?」

レイ「Destiny」「久しぶりだな、シン、ルナマリア」
ルナマリア「レイ、どうして！」

レイ「Destiny」「俺はミスルギに従っている…ただそれだけだ」
シン「あいつらは戦争を広めているんだぞ！」

レイ「Destiny」「…お前達とこれ以上話す事などない…。ギルを殺したキラ・ヤマトの仲間となり下がったお前達とはな！」

キラ「…！」

シン「レイ…！」

ビゾン「マルガレタ特務武官殿…。何故、俺達がいるのに撃つたのです？」

マルガレタ「それは…」

ビゾン「俺は…好きにやらせてもらおう！」

レイ「Destiny」「俺も付き合うぞ、ビゾン」

ビゾン「…感謝する、レイ。それにしてもシン・アスカとは友人だったとはな」
レイ「Destiny」「昔の事だ。今ではお前とも友人でありたい」

ビゾン「俺も同意見だ」

ヒイロ「ビゾン・ジエラファイル…」

え…ゼロシステムが…？

ヒロ「(ゼロシステムが、奴に反応している…?)」

ヴァン「来やがったか、かぎ爪の仲間共！」

ウー「ヴァン、そしてエクスクロス…。ここでお前達を倒す！」

ガドウエド「ウー…」

ウー「ガドウエドさん…。もうあなたは私達の敵だ！」

メリツサ「…」

カロツサ「シン…」

シン「カロツサ、メリツサ…」

カロツサ「ごめん、シン…。でも、お前…。導師の敵…。導師の敵は俺達の敵…！」

シン「…。やるしかない…。お前達が花を散らすというのなら…。俺はっ…！」

ビゾン「エクスクロス…。！お前達さえ来なかつたら、ヒナは泣かずに済んだ！許さ

ない…。！俺はお前達を…。青葉という男を許さない！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話　　ゴークアイレッドVSインサーン〉

ゴークアイブルー「アクロス・ギル達はどこに居る？」

インサーン「お前達に教えるとも思ったか、宇宙海賊！」

ゴークアイエロー「それなら、力尽くでも聴きだす」

ゴークアイレッド「ああ、それが海賊つてもんだ！」

ゴークアイオーはグレートインサーンにダメージを与えた。

インサーン「ば、バカな…？？」

ゴークアイレッド「いい加減、諦めやがれ、インサーン！」

インサーン「諦めるわけにはいかない…！ザンギャックのために！」

そう言い残し、グレートインサーンは撤退した…。

ゴークアイグリーン「やつぱり、アクロス・ギルを倒さないとダメだね」

ゴークアイピンク「これはまた熾烈を極めそうですね…」

Gーセルフの攻撃でガイトラッシュはダメージを負った。

ロックパイ「ちいっ…！戦功を挙げねば、ミスルギの中でトワサンガの地位が危なくなる！もうすぐ奴等が来るのだ…！急がなくては！」

ガイトラッシュは撤退した…。

ノレド「あの人……何か焦ってたね」

リンゴ「ロックパイの事だ。どうせ、マツシユナー中佐がらみの事だろうさ」

ラライヤ「(奴等が来る……。もしかして、それって……フラミイが言っていたあの人の達の事なの……)」

〈戦闘会話 シンVSカロツサorメリツサ〉

メリツサ「シン、私……」

シン「メリツサ、俺だって戦いたくない……。だから……！」

カロツサ「でも……。でも！シンは……。俺達の……。敵……。！でも、シンは俺達を……

からない……。わからない！」

シン「カロツサ……。 (どうすれば、いいんだ……。マユ……。！)」

〈戦闘会話 ステラVSカロツサorメリツサ〉

ステラ「メリツサ……」

メリツサ「私、ステラと戦いたくないよ……」

カロツサ「メリツサ……。俺だって……。でも、エクスクロス、導師の敵なんだ……。！」

ステラ「悲しいよ……。こんなの……」

デイスティニーとガイアはシン・オブ・フライデイとセン・オブ・サタデイにダメー
ジを与えた。

カロツサ「くっ…！」

シン「もうやめろ、カロツサ！メリツサ！」

カロツサ「やめられない、シンは…敵…！」

ヴァン「…いい加減にしろ、クソガキ共！」

メリツサ「！欠番の人…！」

ヴァンさん…！！？

ヴァン「さっきから敵だの本当は仲良くしたいだの…はつきりしやがれ！」

カロツサ「欠番には…わからない…！」

ヴァン「ああ、わからねえよ！お前の悩みもシンの悩みも知った事じゃねえ！でも、お前達はシンを理解しようとしているじゃねえか！」

カロツサ「！」

ヴァン「お前達にとって大切なのはかぎ爪か！！？シンか！！？お前達の本音を聞かせろ
！」

シン「…ヴァンさん…」

カロツサ「俺は…俺は…！」

ウー「そんなもの、あの方に決まっている…。我々はあの方に救われたのだからな」

シン「…」

ウー「だが、シン・アスカ！カロツサとメリツサを迷わせた事は許さない！その身を
持つて肅清させてやる！」

メツア・オブ・チューズデイはレイピアでデイスティニーに攻撃しようとした…。
だが…。

メリツサ「ダメえええっ！」

セン・オブ・サタデイがデイスティニーを庇い、メツア・オブ・チューズデイの攻
撃を受けた…。

カロツサ「！」

シン「メリツサ！」

ウー「メリツサ、何の真似だこれは!!？」

メリツサ「私は…導師も大切だけど…シンはもっと大事…大切な人だから！」

シン「メリツサ…」

ウー「あの方の想いを踏みにじるのならば…死ね、メリツサ！」

カロツサ「うおおおっ！」

メツツア・オブ・チューズデイはセン・オブ・サタデイに攻撃を仕掛けようとしたが、それをシン・オブ・フライデイが阻止した。

メリツサ「カロツサ！」

ウー「カロツサ……お前まで……！」

カロツサ「メリツサを泣かす者……死、あるのみ！シンを侮辱する者……許さない！」

ウー「ならば、兄妹纏めて……！」

シン「させるかあああつ！」

今度はデイスティニーがアロンダイトでメツツア・オブ・チューズデイを吹き飛ばした。

ウー「ぐあああつ！」

カロツサ「シン……！」

シン「ありがとうな、カロツサ、メリツサ……。二人のおかげで助かった！」

カロツサ「俺、シンに助けられた……。お互い様！」

メリツサ「私もカロツサも……。シンと居たい！」

シン「俺もだ！……。一緒に来てくれるか？」

カロツサ&メリツサ「うん！」

ウー「許さんぞ……。カロツサ、メリツサ……。そして、シン・アスカ！あの方の敵とな

るのならお前達を倒す！」

ヴァン「いや、倒されるのはお前だ」

ウー「ヴァン……！」

ヴァン「へつ、子供は素直だな……。未だ素直になれないお前じゃあいつ等の仲は裂けられないぜ」

ウー「黙れ、黙れ黙れ！」

シン「いけるか、カロツサ、メリツサ！」

メリツサ「うん！」

カロツサ「今度は俺、シンとみんな、守る……！」

さあて、戦闘再開だ！

〈戦闘会話　カロツサVS初戦闘〉

カロツサ「シンと一緒に戦う……。俺、それだけで心が軽くなった。行く、シンやみんなを守るため……！」

〈戦闘会話　メリツサVS初戦闘〉

メリツサ「私は逃げない……。私を大切に思ってくれた人がいる限り……。だから、私

は、戦う！」

ブラディオンは指揮官機のグルバディアにダメージを与えた。

マルガレタ「カップリング機奪取という任務は果たした……！ここは後退する！」
敵は撤退した……。

ディオ「俺達が……もっと早く到着していれば、ルクシオンが奪われる事もなかったのか……」

倉光「アル・ワースに跳ばされた連合とゾギリア……。これで戦局が変わるかも知れないね……」

〈戦闘会話 シンVSウー〉

ウー「シン・アスカ！カロツサとメリツサを誑かした罪は重いぞ！」

シン「お前達こそ、二人を縛るなよ！」

ウー「縛ってなどいない！これはカロツサ達の思いでもあるのだ！」
シン「勝手に人の想いを決めつけるな！」

〈戦闘会話 ヴァンVSウー〉

ヴァン「ガドウエドに裏切られて、あのガキ共に裏切られるとは滑稽だな！」
ウー「黙れ、ヴァン！こうなればお前を倒して……あの方の前に差し出す！」
ヴァン「それは無理だな……。俺が奴に再び会うのは健全な状態の時だけだ！」

〈戦闘会話 ガドウエドVSウー〉

ウー「後悔しますよ、あの方を裏切った事を……！」
ガドウエド「くどいぞ、ウーよ！私はもう迷いや後悔は捨てた！今の私は自分の信じ
る道のために戦う！それだけなのだ！」

〈戦闘会話 カロツサorメリツサVSウー〉

ウー「今ならば、戻って来れるのだぞ、二人共！」
メリツサ「私は……戻る気ない！」
カロツサ「俺達、シンと共にいる！もう導師の元へ戻らない！」

ウー「ならば、私が引導が渡してやろう！」

セン・オブ・サタデイとシン・オブ・フライデイの連携攻撃でメツツア・オブ・チュウズデイにダメージを与えた。

ウー「くっ…限界か…！私はお前達を決して許さない！絶対に次は倒す！」

そう言い残し、メツツア・オブ・チュウズデイは撤退した…。

ヴァン「あつ！せめて、かぎ爪の居場所を言ってから消えやがれ！」
ガドウエド「奴を探すのは時間がかかりそうだな…。」

〈戦闘会話 シンVSレイ「Destiny」〉

シン「戦闘をやめろ、レイ！」

レイ「Destiny」「やめるつもりはない、これが俺の戦いだ」

シン「この… 馬鹿野郎！」

〈戦闘会話 ルナマリアVSレイ「Destiny」〉

レイ「Destiny」「ルナマリア、手加減はしないぞ」

ルナマリア「あたしだって、もう手は抜かないわよ！あんたが敵として来るなら…シンを苦しめるっていうのなら、私は戦う！」

〈戦闘会話 キラVSレイ「Destiny」〉

キラ「どうして…！」

レイ「Destiny」「理由などない。俺はミスルギの軍門に下っただけだ。だから、キラ・ヤマト。お前を倒す！」

キラ「それでも僕は負けない…。世界のためにも…。シンのためにも…！」

〈戦闘会話 アスランVSレイ「Destiny」〉

アスラン「やめろ、レイ！シンの言葉を聞け！」

レイ「Destiny」「俺はあなたも許さないと言っただけです、アスラン！」
アスラン「友人同士で戦ってはならない…。それは悲しみを生むだけだ！」

〈戦闘会話 ステラVSレイ「Destiny」〉

レイ「Destiny」「君は…。」

ステラ「シンを、いじめるの？」

レイ「Destiny」ならば、シンをいじめる俺を君が倒してくれ……。そして、シンを支えてやってくれ……」

ステラ「え……」

レイ「Destiny」だが、手加減はしないぞ！」

デイスティニーの攻撃でレジェンドガンダムはダメージを受けた。

レイ「Destiny」レジェンドのダメージが限界を超えたか……！」

ビゾン「レイ！後は俺に任せ、お前は後退しろ！」

レイ「Destiny」わかった、そうさせてもらう」

シン「レイ！」

レイ「Destiny」シン。ミスルギと敵対する限り、お前は俺の敵だ」
そう言い残し、レジェンドガンダムは撤退した……。

シン「何でなんだよ、レイ……！」

キラ「大丈夫かい、シン？」

シン「……あのレイが挑んでくるのなら、俺はそれに応えるまでです」

アスラン「強くなったな、シン……）」

〈戦闘会話 シンVSビゾン〉

ビゾン「お前がレイと友人だったとはな、シン・アスカ！」

シン「まさか：： お前達がレイに何かしたのか!?!？」

ビゾン「言いがかりはやめろ！レイは自分の意思でミスルギに手を貸している！」

シン「レイ：：！」

ビゾン「レイの事ばかり、気にしているのか？レイには悪いが、ここでお前を倒す！」

ウイングゼロとティステイニーの攻撃でビゾンのネビロスはダメージを受けた。

ビゾン「くそっ！ネビロスでは、奴等とは戦えないのか!?!？もつと力がなければ、俺は：： ヒナを：：！」

ヒイロ「(ビゾン・ジエラフィル：：。ゾギリアの一兵士にしか過ぎない奴を何故、俺は警戒する：：)」

ドニエル「敵は撃退したが：：」

ジェフリー「まずい状況になりましたね：：」

ヒイロ「……ゾギリアは俺達の想像以上に危険な存在なのかも知れない……」
カトル「ヒイロ……」

デュオ「珍しいな……。お前が、そんな事を言い出すとは……」

ヒイロ「(ゼロ……お前でも見えない未来をゾギリアは見ているのか……)」

ゼクス「……データ通信だと……？これは……」

カロツサ「俺達、みんなといていい？」

シン「当たり前じゃないか、カロツサ、メリツサ！」

スメラギ「ええ、エクスクロスはあなた達を受け入れるわよ！」

メリツサ「ありがとう！」

シン「(レイ……。何でお前がミスルギに……。俺達は……わかり合う事が出来ないの

か……？)」

俺達はそれぞれの艦に戻った……。

ーヒナ・リヤザンよ……。

今、私はお父様の前にいた……。

ヒナ「お父様……」

ヴィクトル「……自分の身体の事は、自分が一番よくわかる……。もう私は……助から

ん……」

ヒナ「そんな……！」

ヴィクトル「お前……に……言っておく事が……ある……」

ヒナ「しやべらないで！傷に障ります！」

ヴィクトル「聞け……。聞くんだ……。！ヒナ……。お前は……。私の本当の娘ではない……」

ヒナ「！」

ヴィクトル「お前も……。薄々とは感じていただろう……。今から10年前の事だ……。激戦地であるザグレブに配属されていた私は……。焼け野原となった戦場で……。お前と出会った……。当時のお前はボロボロの服を着て、ろくに話も出来ず……。記憶がなかった……。覚えていたのは……。ヒナという名前だけだった……。私はお前を戦災孤児として引き取り、こうして私とお前は……。親子になったのだ……」

ヒナ「そんな……。そんな事……。急に言われても……」

ヴィクトル「信じられないか……。死に際の人間が……。冗談でこんな事を言わんよ……」

ヒナ「お父様……」

ヴィクトル「お前は……。優しい子だ……。士官学校に入ったのも……。軍人であった私

を……追つての事だろう……。だが……もういい……。お前は……自由に自分の生き方を……選べ……。遠からずゾギリアは……ぐっ……！」

ヒナ「お父様！」

ヴィクトル「ヒナ……強く生き……ろ……」

ヒナ「お父様!!？」

お父様が……倒れた……そんな……！」

私は……ヒナ・リヤザンでは……なかつた……。もしかしたら、私は……あの青葉の言う雛なのかも知れない……。そうすれば……記憶がなかつた事も……納得いくし……。でも……。

ヒナ「青葉……。私は……どうすればいいの……」

ビゾン「……ヒナ……。お前……さつき何と言った？」

ヒナ「ビゾン……」

ビゾン「青葉……渡瀬 青葉……！連合の新型のパイロット……！何故、あの男の名前を呼ぶ?!？あいつは敵！俺達の……ゾギリアの敵だ！」

ヒナ「待って！話を聞いて！」

ビゾン「黙れ、ヒナ！お前はゾギリアの軍人で俺達の仲間じゃなかつたのか?!？やはり、お前はあいつ等のスパイで俺達を騙していたんだな！」

ヒナ「私は……」

ビゾン「お前を救うために危険を冒して嵐に飛び込んだリヤザン少佐がこれでは浮かばれない！お前は！父親とゾギリアを裏切ったんだ！」

ヒナ「違う……！違うの、ビゾン！私は……！」

レイ「Destiny」「言い過ぎだ、ビゾン！少しはヒナの話を……！」

ビゾン「うるさい、レイ！お前もシン・アスカと繋がっているのではないのか！」

レイ「Destiny」「ビゾン……！」

ビゾン「いいか！お前が何と言おうとお前が島で連合のパイロットと一緒にいたという事実は変えられない！俺がそれを報告すれば、さすがのアルフリード中佐も許してはおかないだろう！お前を許してやれるのは俺だけなんだ！余計な事を考えず、俺の言う事を聞いて大人しくしているろ！」

ヒナ「ビゾン……」

レイ「Destiny」「ビゾン、貴様……！」

ビゾン「お前もだ、レイ！ヒナを守りたいと思うのなら、余計な事を言うな！わかったな！」

レイ「Destiny」「……」

ビゾン「ヒナ……！俺は……俺は……！」

ビゾン：… あなたは… どうしてしまったの…？

―新垣 零だ。

シグナスメンバーを除いた俺達はプロレマイオスの格納庫にいた。

シン「えつと… 今日から仲間になる…」

カロツサ「カロツサ…」

メリツサ「メリツサ…」

零「そんなに堅くならなくても大丈夫だぜ」

キラ「僕達は味方だよ」

ブレラ「しかし、肝心のかぎ爪の男の情報を得られなかったがな…」

メリツサ「ごめんなさい…！」

ブレラ「あ、いや… 怒っているわけではない…。その、だから泣くな…」

カロツサ「…」

キラ「どうしたの？」

カロツサ「お前達、あいつと同じ匂い、する…」

キラ「え…」

ブレラ「匂い…?」

カロツサ「でも、あいつに、比べればいい匂い」

キラ「…僕って臭うかな?」

ルナマリア「どうして、私に聞くんですか!」

ユイ「これからよろしくね、カロツサ君、メリツサちゃん」

サラ「よし!早速、遊ぼう!」

メリツサ「うん!」

カロツサ「お、俺も…」

レナ「ええ、行きましょう」

子供組はメリツサとカロツサを連れて行った…。

アマリ「大丈夫そうですね、カロツサ君もメリツサちゃんも」

零「そうだな」

ロツクオン「そう言えば、シグナス組は何やってんだ?」

テイエリア「奪われたルクシオンについての話をしているのだろう…」

三日月「実際にもうカップリングが出来なくなったからね」

オルガ「それだけじゃねえ…カップリングシステムの技術まで奪われちゃった…」

どうなるんだ…今後…。

―渡瀬 青葉だ。

俺達はシグナスの艦長室で話していた…。

青葉「…すみません、艦長…。俺のせいでルクシオンが…」

まゆか「今回の事は誰のせいでもありませんよ！」

倉光「まゆちゃんの言う通りだよ。青葉君は身の安全という最も重要な事を優先しただけだ。強いて言うならば、搜索部隊の派遣のタイミングを見誤った僕の責任だよ」

青葉「しかし…」

ディオ「やめろ、青葉。自分を責めても状況は変わらない。それにゾギリア側がカップリングシステムの実機を手に入れたからと言って、すぐに戦局に影響が出るとは思えない」

エルヴィラ「D r・ハーン…」

ディオ「誰です、それは？」

エルヴィラ「カップリングシステムを開発したD r・フェルミのラボでの同僚よ。今はゾギリアに亡命しているわ」

青葉「そいつ…ゾギリアでカップリングシステムを開発してるのか…!?」

エルヴィラ「おそらくはね……。カップリングシステムが実用化できたのは私の考案した新型のコックピットによる所が大きいの」

ディオ「つまり、ネットワークであったコックピットのサンプルが入手できた今……」

エルヴィラ「ゾギリア製のカップリング機の実践投入は飛躍的に早まるでしょうね」
まゆか「でも、ゾギリア側にそう簡単にカップラーが養成できるとは思えません！」

ディオ「何より、このアル・ワースにいる限り、機体の開発自体が不可能では？」

倉光「ディオの疑問は最もだ。しかし、ドニエル艦長達とも討議したのだが、不安な事がある……」

すると、レーネ副長が入って来た。

レーネ「……失礼します、艦長。ゼクス・マーキスに送られたデータ通信の暗号解除が完了しました」

倉光「差し支えなければ、要点を聞かせてくれ」

レーネ「それによりますとゾギリアは定期的に我々のいた世界にアクセスしている模様です」

ディオ「何っ!?？」

まゆか「ゾギリアには帰還の術がある……」

倉光「自由条約連合と比較して、ゾギリアは大量の部隊がアル・ワースに来ていると

思ったが……僕達の予測通り、彼等は定期的に戦力を補充しているようだな……」

第45話 ふたりの絆

「マルガレタ・オキーフだ。

私は今、Dr・ハーンのラボにいた。

ハーン「余計な事をしてくれたものだね、マルガレタ・オキーフ特務武官……」

マルガレタ「余計な事……?」

ハーン「あの場で生身の人間に攻撃した事だよ。そのような指示を出した覚えはないのだけど」

マルガレタ「あれは……部下が勝手にやった事で……」

ハーン「それを管理できてない事は君の責任ではないかな?」

マルガレタ「……」

ハーン「だが局長は、カップリング機鹵獲に成功した君を評価している。だから、君の処分は更迭という穏便なものに決まったよ。感謝するんだね」

マルガレタ「Dr・ハーン……!」

ハーン「ここで異議を申し立てても無駄だよ。僕は単なる代行者であり、決定したの

は行政局局長だ。いい機会だから、一度本国に帰るといい。アルフリード中佐も補給線の件で帰国するから、同行を頼んでおこう」

行政局は、これ以上の戦力をアル・ワースにとくにゆうするというのか……。このままではゾギリアは……。

ハーン「まだいたのかい、マルガレタ特務武官？ 悪いけど、僕は忙しいんだよ。君が鹵獲したカップリング機のおかげでゾギリア製のシステムもついに完成するからね。その点だけは君の功績を称えよう」

マルガレタ「……失礼します」

私は部屋を後にした……。

ーどうも、ヴァイルヘルム・ハーンだ。

特務武官が部屋を出たので私は息を吐いた。

ハーン「良い旅を、特務武官殿」

すると、局長から通信が入る。

エフゲニー「首尾はどうだ？」

ハーン「マルガレタ特務武官でしたら、指示通り、更迭しました。各所への通達の手

はずも整っております。これで功を焦つて想定外の事をする人間は出なくなるでしょう」

エフゲニー「その様な事は、どうでもいい」

ハーン「とは、おっしゃりますが、全ては定められたシナリオ通りに進む必要があるのでは？ 多少の差異は修正力で収束されるとはいえ、決定的な事態が発生すれば、何が起きるかは予想できません。故に状況が確定するまでは、不測の事態を引き起こす要因は極力排除するのが得策かと」

エフゲニー「……ネルガルとカルラはどうなっている？」

ハーン「期待通りの仕上がりです。問題はカップラーの方ですね。と言っても、シナリオ通りの人選になるでしょうが」

エフゲニー「頼むぞ」

私は局長との通信を切る。

ハーン「行政局局長エフゲニー・ケダール……。興味深い存在だよ……。さて……。局長お墨付きの天使がそろそろ来る時間だな……。扉が開くとリヤザン少尉が入ってきた。」

ヒナ「……失礼します」

ハーン「待っていたよ、ヒナ・リヤザン少尉。君こそがゾギリアと僕に輝かしい未来

を約束してくれる天使だよ」

ヒナ「……私がカップラーの素質があるからですか？」

ハーン「その通りだ。君に用意する機体は、従来のカップリング機を遥かに凌駕する性能を持つ。これがあれば、君の父親を死に至らしめたエクスクロスも易々と討ち果たせるだろう」

ヒナ「父が死んだのは……」

ハーン「報告は聞いている。だが、全ては我々に歯向かう者の存在に起因しているのだよ。それとも君は巷で噂されているように彼等と通じているのかな？」

ヒナ「そんな事はありません……！」

ハーン「少々興奮気味のようだね。カップリング実験の影響かな……。腕を出して。乱れた脳波を正常な形に戻すための保進剤を打とう」

ヒナ「はい……」

ハーン「なお、カップリング機の片方のパイロットは既に決まっていますので紹介しよう。入りたまえ」

ビゾン「失礼します」

ヒナ「ビゾン……！」

ビゾン「……」

ハーン「ビゾン・ジェラフィル中尉だ。紹介の必要はないだろうけどね」

ヒナ「……」

ハーン「顔色が悪いね、リヤザン少尉。薬も効いてくるだろうから、ゆっくりと休むといい」

ヒナ「……失礼します」

リヤザン少尉は部屋を出て行った……。

投薬は定期的に行なっている……。心理的なゆらぎから考えても後少しで墜ちるだろう。

ビゾン「Dr. ハーン……。本当にヒナはカップリング機のパイロットになるのだから？」

ハーン「その予定だよ。本人は父の意志を継ぎ、ゾギリアのために戦う事を誓っている。彼女のため……。そして、ゾギリアのためにカップラーに志願した君の意志は無駄にはならない」

ビゾン「ならば、いい……」

ハーン「ヒナ・リヤザンとカップリングシステムとの同調は奇跡的と言ってもいいレベルで完璧だった。だが、システムとも彼女とも相性の悪いエンファティア波形の君を彼女との同調させるには少々厳しい処置をしなければならなかった……。だが、君はそれ

に耐えた。君の健気さは賞賛に値する」

ビゾン「俺は……ヒナの力になれるのなら、地獄の業火にも焼かれる覚悟がある……」

ハーン「良い心掛けだ。期待しているよ、ビゾン・ジエラファイル」

ビゾン「了解した、それでは頼む」

ジエラファイル中尉は部屋を出た……。

そう……。君がネルガルに乗ってくれなくては困るのだよ、歴史のためにもね。

？「意志、か……。はは、物は言いようだねえ」

ハーン「！……何だ、君か……。驚かせないでくれ。バスコ・タ・ジョロキア」

バスコ「驚かせる気はなかったんだけどな。それにしてもあんたも悪い人間だなく？

あの二人を良いように言いくるめて」

ハーン「研究者というのはそういうものだよ。それにしても君はアルフリード中佐の

部隊に配属と聞いたが？」

バスコ「いや、ここを離れる前にあんたの顔を見ておこうと思つてね」

ハーン「そうか、それは嬉しいね」

バスコ「でも、そろそろ失礼するよ、アルフリーちゃんは怒ると面倒だから」

ハーン「その方がいい」

バスコ「(さて、と……。マベちゃん達はこの状況をどう乗り越えるかな?)」

ーレイ・ザ・バレルだ。

俺はDr. ハーンの話の全て聞いていた。

バスコという男が部屋から出たのを見て、部屋に入ろうとしたが、何者かに肩を掴まれ、止められてしまう。

レイ「ガンソ」「行ったところで無駄だ。お前では何もできない」

レイ「Destiny」「レイ・ラングレン……！どうしてあなたが？」

レイ「ガンソ」「かぎ爪の情報探しの最中にお前を見かけただけだ。深い意味はない……」

レイ「Destiny」「このままではビゾンとヒナは……」

レイ「ガンソ」「だがそれで、お前まで消えてしまえば意味がない……。少しは落ち着く事だ」

レイ「Destiny」「わかりました……」

ビゾン、ヒナ……。

―渡瀬 青葉だ。

俺達はシグナスの格納庫にいた。

ヤール「：：。ルクシオンが奪われて約一週間：：。青葉の奴：：よくやってるぜ：：」
フロム「暇があれば、操縦訓練：：。その合間に偵察、実践の繰り返し：：。三人分ぐらい働いてるね、青葉」

青葉「デイオ曰く、俺は今までルクシオンの性能とカップリングに頼って戦っていたそうだ」

デイオ「俺の操縦技術がインプットされているからこそ、基礎的な戦術部分がおろそかになっていた：：。そこをきちんと学ぶ事で青葉の戦闘力は飛躍的にアップするはずだ」

フロム「それもだいぶ形になってきたと思うよ」

デイオ「当然だな。俺がマンツーマンでコーチをしているのだから」

青葉「威張んなよ！コーチはお前だけじゃねえんだ！俺の成長は、アムロさんにカミーユさん、刹那さんにアセムさん、オズマさん、フロンタルさん、ケルベス中尉：：。それにマシユマーさんやガドヴェドさん、ヴァンさんのおかげだよ」

ジョシユア「ヴァンさんがコーチをするなんて、珍しいですね」

ウエンデイ「ホント！いつもなら勝手にしろとか言うのに……」

ヴァン「……勝手に言ってる」

マシユマー「女性のために戦う君の姿にほだされた結果だ。礼は要らんよ」

島で会ったヒナは自分の事を雛じゃないと言ってたけど……。でも、俺にはやっぱり別人には思えない……。

ベルリ「ええと……。青葉……。僕もコーチ役……。やってるんだけど……？」

青葉「ベルリの指示はぶっ飛び過ぎてて、よく理解できねえ時があるんだ……」

ノレド「私も青葉に賛成！ベルのやってる事って、時々わかんないのよね！」

ベルリ「そ、そうなの……？」

青葉「でも、感謝はしてるぜ。ありあとあす、ベルリ！」

―新垣 零だ。

アムロ「ゼクス……。ゾギリアの動きを君に伝えてきたのは内部の者だと言いたいのか？」

ゼクス「ええ……。それもキャピタル・アーミーやトワサンガではなく、ゾギリアの間だと考えています」

アイーダ「自国のやり方に反対している勢力の者の仕業でしようか……」
アスナ「多分、そうね」

デュオ「あなたは犯人の目星もついているんだろ、ゼクス？」

ゼクス「ああ」

バナージ「それは誰なんですか？」

零「……アルフリード・ガラントって人ですか？」

ゼクス「よく気づいたな、零……。ほぼ間違いない、彼だと見ている」

ミシエル「ゾギリアのエースと呼ばれる男……。だったな？」

リー「潔癖な所がある人間だと聞いている。あの男なら、今のゾギリアに不満を持っている事もあり得ない話ではないな」

カミーユ「今のゾギリアに？」

リー「艦長の見立てでは、アル・ワース転移後のゾギリアの戦略は元の世界のものから変化しているようだ。確かにゾギリアは軍事大国で強引な侵略政策を打ち立ててきてはいたが……。それをアル・ワースでも続ける事はあまりに不自然だ」

ゼハート「それは私も感じている。異星人特有の事態に対して冷めた感覚を彼等から感じない……。」

グラハム「それに加え、これまでの動きを見ても、アーミィヤトワサンガ以上にゾギ

リアはミスルギに忠実なように見える」

ルカ「F」「ミスルギの駒になったのでは無く、ミスルギと共にアル・ワースの覇権を握ろうとしているのでしょうか…」

ブレラ「自分達の世界とアル・ワースを自由に行き来する術を手に入れているのなら、考えられない事ではない」

ジュリエッタ「異世界を侵略しようとするなんて…」

ジョー「ゴーカイ」「自分達の欲のために別の世界にまで戦いを広げるか…」

ラフタ「ゾギリアが自分の世界とアル・ワースを行き来していると言う話は裏は取れたんですか？」

ノイン「ドニエル艦長はそれについての調査をアメリカ軍本隊に依頼したと聞く」
ん？倉光艦長が来た…。

倉光「ナイスタイミングだ。丁度、その件に関する情報が入ったよ」

ユイ「艦長の方々… わざわざ、格納庫に降りてこられなくても…」

スメラギ「いや…。なかなか衝撃的な話もあるからすぐにあなた達に聞いてもらおうと思つて…」

ドニエル「聞こえるか、みんな！手の空いているものは、集まってくれ！」

青葉「何かあつたんですか？」

名瀬「良い話と悪い話があるが、どっちから聞く？」

ビスケット「何ですか、その質問……？」

ルー「それって……良い話で気分がよくなつたところに悪い話で水を差されるか……」

ジラード「悪い話で落ち込んだ所を良い話で回復するか……ね」

アマリ「でしたら……先に悪い話を聞きます。落ち込んだ気分を引きずるのはイヤで

すから……」

零「俺もアマリに賛成です。どの道両方聞かないといけないんですから……」

ホープス「お二人らしい答えですね」

アマリ「だって、なるべく心は平穏でありたいから……」

ジェフリー「では、リクエスト通りに悪い話から話す……」

ドニエル「クリム大尉から連絡が入ったが、アル・ワースの自由条約連合とアメリカ

軍本隊は……。ゾギリヤの大攻勢によってほぼ壊滅状態にまで追い込まれた」

アレルヤ「そんな……!?？」

アイーダ「アメリカ軍が……」

倉光「ゾギリヤの戦力の中核は超常的な力を持った二機のヴァリアンサーだったそう

だ」

ディオ「！」

青葉「それって、やっぱり……！」

倉光「どうやら、こちらの想像よりもずっと早く、ゾギリアはカップリング機を完成させたようだ」

フロントル「それをすぐさま実戦投入とは……」

マーベラス「カップラーは簡単には養成できないんじゃないかなかったのかよ……！」

ヒイロ「（こちらは全て後手に回っている……。やはり、ゾギリアは……）」

アイム「こうなると、残る話というのに希望を託すしかありませんね……」

倉光「……すまない」

カトル「え……」

倉光「期待されると悪いから、先に謝っておくけど、良い話というのはシグナスのクルーにとっただけかも知れない」

メリツサ「どういう事？」

カルメン99「と言いますと？」

ジェフリー「ゾギリアが元の世界に帰還する術を確立した件が確認された。彼等はミスルギ皇国の手を借り、定期的に我々の世界への異界の門を開いているようだ」

ディオ「では……」

倉光「そうだ。その門を通れば、少なくともシグナス組は元の世界へ帰還が可能だ」

M78ワールドに戻る事が出来るって事か……。

ある地域ではゾギリアのヴァリアンサー部隊が集結していた。

ゾギリア兵隊長「そろそろ時間だ」

ゾギリア兵「本国に帰るのも久しぶりですね、隊長」

ゾギリア兵隊長「だが、休暇が終われば、またアル・ワースへ派遣される事になる」

ゾギリア兵「こちらに来ていてる連合はほとんど叩いたのに、まだ戦いは続くんですね……」

ゾギリア兵隊長「行政局の決定だ。国防軍の俺達はそれに従うしかない……」

ゾギリア兵「隊長！何か来ます！」

やつぱり、異界の門が開いている……！

俺達、エクスクロスは異界の門が開いているという場所に来た。

アネツサ「前方にシンギュラー確認！」

レーネ「サラマンディーネ達と同様にエンブリヲも、あの技術を使って他の世界とアル・ワースをつなぐか……！」

倉光「これよりシグナスはシンギュラーに突入して、元の世界へと帰還する。そのまま

ま我々は、自由条約連合に復隊し、アル・ワースの戦いを拡大するゾギリア本国の打倒に参加する事になるだろう」

ジェフリー「行ってください、倉光艦長。我々がフォローします」

倉光「ありがとうございます、皆さん。艦を代表して、これまでお世話になった皆さんに感謝の言葉を贈らせていただきます。シグナス、全速前進！」

シグナスを軸に俺達は異界の門へ近づく。

ゾギリア兵「白鳥、突っ込んできます！」

ゾギリア兵隊長「狙いはシンギュラーか！迎撃しろ！」

倉光「応戦しつつ、突撃だ！速度を落とすな！」

オルガ「こちらかも援護だ！撃て！」

クソツ：：！敵の守りも硬いな：：！

サラ「なかなか前に出れないね：：」

カロツサ「俺達：：出る？」

ガドヴェド「いや：：事を荒だてて長期戦になれば、目的が果たせなくなる！」

ティア「でも、これじゃあいつまでたつても拉致があかないよ！」

スメラギ「倉光艦長：：」

倉光「：：一手が足りないね：：！」

？「ならば、我々も援護しよう！」

現れたのは：：二機のガンダムと三機のモビルスーツ、一機のヨロイとドリルのついた戦車のようなものだった。

ゼハート「ガンダムA G E―F XにガンダムA G E―I グランサ：：
!!?」

レイル「他のモビルスーツも俺達の世界のものだ！」

アセム「父さん：：それにキオか!!?」

キオ「久しぶりだね、父さん！」

フリット「遅れてすまなかったな、アセム」

あの人達が：：アセムさんの父親とアセムさんの息子：：。

アセム「いや、来てくれるって信じていたぜ！」

シヤナルア「キャプテン・アツシユは言うことが違うね」

セリツク「全くだな！」

ディーン「どう見てもギリギリの状態だな：：！」

ネロ「弟子のヴァンはいるか!!?」

ホセ「俺達も助けに来たぞ！」

プリシラ「あれ、お爺ちゃん達!!?」

ヴァン「やっぱり、来ていたのかよ！」

バリヨ「どうやら、無事のようだな」

カルロス「…」

ユキコ「エルドラメンバー、全員無事です！」

ジョシユア「ユキコさんまで！」

ユキコ「ジョシユア君、よかった！あなたも無事だったのね！」

ルカ「ゴーカイ」「ねえ、あれって豪獣ドリルじゃない??？」

鎧「そうですね、皆さん！伊狩 鎧！ただいま戻って参りました！」

マーベラス「今まで何処にいやがったんだ！」

ハカセ「僕達がどれだけ苦労したと思ってるの??？」

鎧「… あれー？何か、思っていた再会と違うなあ…」

ナビイ「みんな、無事だった〜！」

アイム「ナビイも一緒にだったのですね、良かったです」

ナビイ「オイラも嬉しかったよ！」

マーベラス「騒ぐな、トリ」

ナビイ「トリじゃないってばー！」

フラム「随分個性的な部隊ね…」

セリツク「そつちに言われたくないな…」

レイル「でも、フリット・アスノが来たのなら百人力だぜ！」

フリット「全機、エクスクロスを援護だ！」

キオ「うん！」

フリットさん達の援護もあり、次第に推し始めたが、銃弾のいくつかが異界の門に当たった。

ゾギリア隊長「いかん……！シンギュラーのバランスが崩れる！」

フェルト「各センサーが異常を感知！磁気反応、増大していきます！」

倉光「この感覚は……！」

マサキ「まずいぜ、こいつは！」

アーニー「これは……もしや……！」

アマリ「ホープス！何が起きるの……！！？」

ホープス「この一帯が転移に巻き込まれます……」

零「転移って……ちよつと待って……！」

俺達は転移する気はねえのに……！

俺達は目を覚まし、辺りを見渡す。

倉光「ここは……」

アネツサ「地形データと座標確認！ここは私達の世界です！」

レーネ「あの施設……！ルクシオンとブラディオンの研究開発ラボか！」

倉光「このポイントがアル・ワースと我々の世界の接点なのかもね」

アネツサ「後方にエクスクロスの艦を確認！周辺に展開していた敵ヴァリアンサーと支援してくれた部隊もいます！」

倉光「シンギュラーの暴走により、あの一帯にいた全てが転移して来たか……」

アネツサ「シンギュラーも接続中……。サラマンディーネさんからのデータによれば、あと数分は持続する模様です」

ゾギリアが攻撃して来たか……！

レーネ「ゾギリアめ……！この状況で仕掛けてくるか！」

倉光「こちらとしては一大イベントだったけど、向こうにとつては定期便の航路に敵艦が現れたようなものだからね。エクスクロス各艦に連絡！同時に機動部隊の発進を……！」

アネツサ「了解！各機は発進を！」

俺達は出撃した……。

ヴァン「おい、転移させられるなんて聞いてねえぞ！」

ガドヴェド「落ち着け、ヴァン！敵のヴァリアンサーを倒し、あのシンギュラーを通ればアル・ワースに戻る事ができる！」

青葉「デイオ！一人で大丈夫か？！」

デイオ「俺の事よりも自分の事を心配しろ」

リー「青葉！お前は俺達のフォロワーだ！」

青葉「了解！俺もやれる事をやるぜ！」

ベルリ「ここ……青葉達と初めて会った場所か……」

零「また、ここに戻ってくる事になるなんてな……」

シノ「俺達にとつちやここもアル・ワースと同じ異世界だが……」

ガエリオ「襲ってくる以上、迎撃するまでだ」

ファ「でも、敵を倒した後はどうするの……？」

シーブツク「当然、アル・ワースに戻るべきだろう。僕達が元の世界に帰るためには、

ドアクダーを打倒しなくてはならないんだ」

倉光「シンギュラーの持続時間は？」

アネツサ「計算では6分間と出ています」

スメラギ「つまり、この6分間の間にシンギュラーに飛び込まなければ、アル・ワースに帰る事は出来ないというわけね…」

倉光「皆さん…」

ドニエル「先程とは立場が逆になったようです、倉光艦長。我々のアル・ワース帰還のためにも援護をお願いします」

倉光「了解しました」

デイン「俺達はどうするんだよ、キオ!?」

キオ「勿論、アル・ワースに戻るよ! そうだよね、爺ちゃん!?」

フリット「その通りだ、行くぞ!」

オルガ「各機はゾギリアを迎撃! アル・ワースに戻るためには6分で敵を叩くぞ!」

ベルリ「せっかくデイオ達の世界に来られたのに観光の時間もないなんて…!」

トビア「仕方ないさ。アル・ワースの戦いを放っておくわけにはいかないしな」

アルト「それに俺達は元の世界に帰らなければならぬしな!」

青葉「…」

リ「余計な事は考えるな、青葉。今は目の前の事に集中しろ」

青葉「了解…!」

戦闘開始だ…!

〈戦闘会話　キオVS初戦闘〉

キオ「(父さんにも会えた……！よし、見せるんだ、救世主ガンダムのを！)」

〈戦闘会話　フリットVS初戦闘〉

フリット「(キオにアセム……。息子に孫というのはどんどん大きくなっていくものなのだ……。) 私も出来る事をやろう！」

〈戦闘会話　セリックVS初戦闘〉

セリック「つたく、戦いの次に戦いとはな……。だが、負けるわけにはいかない！争いをなくすためにはな！」

〈戦闘会話　シャナルアVS初戦闘〉

シャナルア「今、争っても仕方がないとわからないようだね……。だったら、それを教えてあげるよ！」

〈戦闘会話　デーンVS初戦闘〉

デイン「ルウ、見ていてくれ……。俺は異世界でも戦う……。お前の見たがっていた花が咲く世界を守るためにも！」

〈戦闘会話 ネロVS初戦闘〉

バリヨ「異世界での戦闘だ、ぬかるなよ、ネロ！」

ホセ「間抜けな戦闘をしたら承知せんで！」

ネロ「わかっておるわい！弟子の前でみつともない姿を見せれるわけないだろう！エルドラ、ゴー！」

〈戦闘会話 ゴーカイシルバーVS初戦闘〉

ゴーカイシルバー「異世界でも俺は負けない！世界を平和にするために！よし、ギンギンに行くぜー！」

敵を倒して行く、俺達……。

ギゼラ「ゾギリア軍、来ます！」

ドニエル「手回しがいい連中だな！」

ゾギリアのヴァリアンサー部隊とヴァリアンサーとは違うロボットがもう一機い

る…!??

ディオ「あのヴァリアンサー…！アルフリード・ガラントか！」

フロム「よりによって、このタイミングで、あいつが来るなんて…！」

アイシャ「でも、これはいい機会よ」

ゼクス「聞こえるか、アルフリード・ガラント？こちらはゼクス・マーキスだ。貴官と話をしたい。戦闘を停止してくれ」

アルフリード「各機、攻撃を開始しろ」

撃ってきやがった…！

リオン「こつちと話をする気はないって事かよ…！」

レナ「じゃあ、あのデータ通信を送ってきたのは別人って事なの!?？」

ヒイロ「どう判断する、ゼクス？」

ゼクス「これも彼なりのメッセージなのだろう」

五飛「こちらの力を見せろという事か…！」

ヤール「あのヴァリアンサーとは違うロボットは何だよ!?？」

ディオ「ザンギヤックのグレートワルズやグレートインサーンと似ているが…！」

ゴークアイレッド「…その機体に乗っているのは、バスコだな？」

ゴークアイエロー「え…！」

!?？」

「ゴーカイブルー」「何だと!?!?」

バスコ「さつつすが、マベちゃん! 相変わらず勘は鋭いね!」

「ゴーカイルバー」「バスコまで蘇っていたなんて…」

ハカセ「その機体はいつたい…」

バスコ「ザンギヤックに作らせたグレートバスコ… その力を見せてやるよ!」

「ゴーカイレッド」「何度来ようが俺がお前を倒す!」

バスコ「いいね、それでこそマベちゃんだよ」

マルガレタ「アルフリード中佐…」

アルフリード「あなたにも覚悟を決めてもらう、マルガレタ特務武官」

マルガレタ「私は祖国ゾギリアのために戦う…。ただ、それだけです」

アルフリード「それでいい。これより我々は同志だ。各機はエクスクロスを攻撃!」

の世界の覇者であるゾギリアの力を彼等に見せるぞ!」

青葉「くそつ…! やるしかないのかよ!」

やるしかねえ… 戦闘再開だ!

〈戦闘会話

ゴーカイレッドVSバスコ〉

バスコ「さてと、あの時の借りを返させてもらおうかな、ゴーカイジャー」

ゴーカイグリーン「ザンギヤックやドアクダーとかでも大変なのに……」

ゴーカイピンク「ですが、彼を見逃すわけにはいきません」

バスコ「じゃあ、決着をつけようか、マベちゃん」

ゴーカイレッド「ああ、てめえの顔を見るのはこれで最後だ！」

〈戦闘会話　　ゴーカイシルバーVSバスコ〉

ゴーカイシルバー「バスコ！また悪事を働く気か!?？」

バスコ「銀色のゴーカイジャーか……。また俺に手を折られたいか？」

ゴーカイシルバー「もう負けない！それがスーパー戦隊魂だ！」

ゴーカイオーと豪獣ドリルから変形した豪獣神の連携でグレートバスコにダメージを与えた。

ゴーカイシルバー「どうだ、バスコ!?？」

バスコ「流石と言いたいけど……生憎、グレートバスコの装甲はヤワじゃないんだよね！」

ゴーカイレッド「まるでしつこいお前と一緒だな！」

バスコ「悪運の強いマベちゃんには言われたくないよ。まあ、今の君達じゃ、俺には勝てないだろうけどね！」

ゴークイレッド「ぐあっ！」

グレートバスコはゴークイオーに攻撃を与えた。

ゴークイシルバー「皆さん！」

プル「ゴークイジャーが……！」

バスコ「この程度じゃないよね、ゴークイジャー？」

ゴークイレッド「当たり前だ、鎧！行くぞ！」

ゴークイシルバー「はい！」

ゴークイオーと豪獣神は並ぶ。

ゴークイジャー「……レンジャーキー、セフトー……」

ゴークイオーの両腕が外れ、代わりに豪獣神の両腕が換装された。

ゴークイレッド「豪獣ゴークイオー！」

サラ「おおー！ゴークイオーと豪獣神が合体したー！」

アマリ「え……あれって合体と言えますか？両腕が交換されただけだと思います

が……」

零「アマリ、それは言うな」

アマリ「で、でも…！」

零「いいから、それ以上は何も言うな…！」

アマリ「は、はい…！」

バスコ「豪獣ゴーカイオーか…。相手にとって不足はない！」

ゴーカイレッド「行くぜ！」

豪獣ゴーカイオーはグレートバスコに攻撃を仕掛けた…。

ゴーカイレッド「バスコ！てめえをもう一度倒す！」

ゴーカイイエロー「一発で仕留めてよ！」

ゴーカイシルバー「ここは必殺技でトドメだ！」

ゴーカイレッド「おう！」

豪獣ゴーカイオーは右腕のドリルを高速回転させ、グレートバスコに接近した。

ゴーカイジャー「ゴ、ゴーカイ電撃ドリルスピン!!？」

ゴーカイ電撃ドリルスピンを発動して、グレートバスコに突進し、貫いた。

バスコ「今日はここまでかな…」

技を受けたグレートバスコは吹き飛んだ。

バスコ「つ…！今日はここで退くのでしょうか、楽しかったよ、マベちゃん」

ゴーカイレッド「バスコ…」

バスコ「また会おう、ゴーカイジャー！そして、エクスクロス」

グレートバスコは撤退した…。

ゴーカイシルバー「本当にしぶとい奴ですな…。」

ゴーカイブルー「だが、こんなもので立ち止まるお前じゃないだろ、マーベラス？」

ゴーカイレッド「誰に聞いてんだ？当たり前だろ！」

敵が数に苦戦する俺達…。

クラン「このままでは、時間が過ぎていくだけだぞ！」

カナリア「ここはゾギリアの勢力圏内だ。下手をすれば、また増援が来るぞ！」

アストン「あの指揮官を叩けば、戦局をこつちに傾ける事もできるけど…。」

ディオ「…。」

青葉「お、おい…ディオ！」

ディオ「俺が行く…！」

ブラディオオンがアルシエルの前まで移動した。

アルフリード「カップリング機片割れか。あのシステムの存在がゾギリアを歪めたの

かも知れないな…。」

ディオ「覚悟しろ、アルフリード・ガラント！」

アルフリード「意気込みは買う……。だが、まだまだだ」

ブラディオオンが攻撃を受けた……。!??

ディオ「くっ……。！」

アルフリード「いい腕だが、一人では、これが限界のようだな。終わらせるぞ……。！」

青葉「そうはさせるかよ！」

青葉の奴、ベリルで出撃しやがった……。！

ディオ「下がれ、青葉！お前では無理だ！」

青葉「それを言うなら、お前だって一人じゃあいつに勝てないんだ！こうなったら、二

人でやるしかないぜ！」

ディオ「だが、カップリングがなければ……。！」

青葉「システムがなけりや、俺達は戦えないのかよ！そんなものがなくても、俺達は

バディだろうが！違うか!?？」

ディオ「……。違うない」

青葉「だつたら、合わせろ！」

青葉「……ルクシオンでなくとも、ブラディオオンに迫いついてる！

ベリル「青葉、ディオ！」

零「いいコンビネーションだぜ、二人共！」

青葉「隙が出来た！今の内に態勢を立て直すぞ！」

ディオ「待て、青葉！何か来る！」

来たのは……シグナス……？いや、でも色が違う……！！？

青葉「シグナスのそっくりさん！！？」

ディオ「同型艦か！」

フェルミ「カップラーの二人、今すぐ、こちらの艦に来るんだ」

エルヴィラ「Dr.フェルミ！」

倉光「エルヴィラ君の先生か……！」

フェルミ「ゾギリアの重要戦略地点としてここをマークしていたんだけど、君達が現れるとはね。あれを持って来た意味もあったようだよ」

エルヴィラ「あれ……？」

フェルミ「論より証拠だ！急いでくれ、カップラー君！」

青葉「行くしかねえぞ、ディオ！」

ディオ「ああ……！」

ベリルとブラディオンはシグナスの同型艦の中に入った。

倉光「各機は援護射撃を！アルフリードを足止めしろ！」

俺達は援護射撃でアルシエルの足を止める。

アルフリード「ちいっ……！これでは進めないか！」

ノレド「あっちの艦から何か出て来るよ！」

メル「あれは……！」

現れたのはルクシオンとブラディオオン……！！？

アスナ「ルクシオンとブラディオオン！！？」

アイーダ「違う……！似てはいるけど、別の機体です！」

フェルミ「その通り！それぞれの制式採用機、ルクシオンネクストとブラディオオンネ

クストだ！」

三日月「もうカップリングシステムが発動している……！」

まゆか「エンフアティアレベル、高い数値で安定しています！」

エルヴィラ「常時カップリングが可能だなんて……。ルクシオンとブラディオオンのシ

ステム上の欠点が完全に克服されている……！」

フェルミ「これもエルヴィラ君が行方不明になる前に送ってくれた実戦データのおか

げだよ。こちらでは、それをベースにシステムの徹底改修を行い、ネクストを開発した

んだよ。もつとも使いこなせるカップラーの方はさっぱりだったけどね」

青葉「デイオ！」

ディオ「青葉！」

青葉「これなら行けるぜ！」

2機は凄まじい速さでアルシエルに接近した。

アルフリード「速い！」

青葉「いつけえええつ!!？」

ルクシオンネクストとブラディオネクストは攻撃を仕掛けた。

青葉「このルクシオンネクストなら……！」

ディオ「俺達で状況を打開する！」

青葉「そう言う事なら乗った！やれると信じる！」

ディオ「俺達の力を合わせれば……！」

ルクシオンネクストとブラディオネクストは瞬間移動の如くスピードでアルシエルに攻撃を与える。

ディオ「この感覚……！」

青葉「俺達は今、一つだ……！」

青葉&ディオ「これが……！俺達のカダ！」

最後に2機は交差しながら、アルシエルを斬り刻んだ。

アルフリード「ダメージを限界を超えたか……！」

攻撃を受けたアルシエルは吹き飛んだ。

アルフリード「くっ……！もてよ、アルシエル！」

バナージ「すごい！スピードもパワーも桁違いに強化されている！」

リディ「あれだけの速度でコンビネーションが合わせられるとは……」

ハツシユ「カップリングシステムってトンデモナイっスね！」

アルフリード「連合は……いや、エクスクロスはより強力な力を手に入れたか……！」

青葉「……」

ディオ「……」

アミダ「どうしたんだい、二人共？機体トラブルかい？」

青葉「だ、大丈夫です……」

ディオ「戦線に復帰します」

青葉「(さっきの戦闘中……。ディオの記憶が見えた……)」

ディオ「(前にも、こういう事があったが、今度はずっと鮮明だった……)」

フェルミ「ナイス・カップリング！流石だよ！」

エルヴィラ「ありがとうございます、先生！」

フェルミ「ネクストの仕上がりは問題ないようだね。では、我々は一度後退する。行

方不明の間の土産話は後でゆっくり聞かせてもらおうよ」

シグナスの同型艦は後退した……。

名瀬「各機へ！ここから攻勢に出るぞ！」

スメラギ「ルクシオンネクストとブラディオネクストを中心に敵を押し返すのよ！」

ディオ「青葉……！」

青葉「わかつている！考えるのは後でも出来る！やるぜ、ディオ！俺達の力で状況をひっくり返すぞ！」

反撃開始だ！

ルクシオンネクストの攻撃でマルガレタのヴァリアンサーにダメージを与えた。

マルガレタ「これ以上の戦闘は無理か……！撤退する！」

敵ヴァリアンサーは撤退した。

ディオ「あのパイロット……ルクシオン鹵獲の指揮を執っていた女か……。（機体から見て行政局の人間だと思うが、国防軍と行動を共にしているようだな……）」

ルクシオンネクストとブラディオネクストの連携にアルシエルは大ダメージを負った。

アルフリード「ここまでか……！（この力ならば、もしもの時の保険となってくれよう……）」

アルシエルは撤退した……。

ヒイロ「退いたか……」

明弘「だが、今日の戦い……あの男は本気ではなかったようだな」

ゼクス「アルフリード・ガラント……我々に何を望んでいる……」

モニカ「敵部隊の壊滅を確認！増援部隊もありません！」

スメラギ「シンギュラーの状況は!?？」

ミレイナ「かなり不安定になっています！もう限界が近いようです！」

ドニエル「急げ、ステア！」

ステア「イエッサー！」

オルガ「最大戦速！取り残されんなよ！」

すると、ルクシオンネクストとブラディオネクストが近くまで来た。

レーネ「何をしている、デイオ、青葉!?？」

青葉「すいません！俺、やっぱリアル・ワースを放っておけません！」

ディオ「青葉が行く以上、俺もアル・ワースへ行きます」

青葉「いいのか、ディオ？」

ディオ「逆の立場なら、お前もこうしたはずだ」

青葉「ありがとうよ、相棒！」

倉光「僕達も行こう」

レーネ「艦長……！」

倉光「アル・ワースの件とゾギリアの動きについては連合の本部に報告を送った。後の事は、そちらに任せよう。僕達は僕達にしか出来ない事をアル・ワースでやろう。すまないね、みんな……。僕のワガママに付き合ってもらおうよ」

レーネ「文句を言う者は一人もいないようです」

リー「アル・ワースの戦いが終われば、こちらの世界に帰って来られるんです。問題ありませんよ」

倉光「ありがとう。みんなには感謝する。シグナス、全速前進！」

ジェフリー「では、行くとしましょう」

倉光「旅は道連れ、世は情け……。今後とも、よろしくお願いしますね」

俺達はシンギュラーの中に入った……。

アル・ワースに帰って来た俺達はシグナスの格納庫で仲間になった人達と顔を合わしていた。

アセム「そうか、父さん達は独自に動いていたのか」

フリット「ああ。少しは自らで情報を得たかったからな」

キオ「だから、合流するのが遅れたんだ。ごめんね、父さん」

アセム「気にするな、逢えただけで良かった」

シヤナルア「…」

セリツク「家族とはいいいいものだな」

シヤナルア「そうだね」

ディーン「守らないといけませんね、彼等を」

フラム「ええ、そうね」

フリット「これからよろしく頼む。私はフリット・アスノ…。アセムの父でキオの祖

父だ」

キオ「同じく、キオ・アスノです！フリット爺ちゃんの孫でアセム父さんの息子です

！」

セリツク「セリツク・アビスだ。よろしく」

シヤナルア「シヤナルア・マレンです、精一杯頑張りましょう」

デイン「デイン・アノンです」

アマリ「これからよろしくお願いします！」

ネロ「そうかそうか、お前もこの世界で頑張ってたんだな！」

ホセ「よし、褒めてやろう！さあ飲め！」

ヴァン「いや、だから……俺は酒は飲めねえって……」

零「あなた達がエルドラソウルのパイロットなんですよね？」

バリヨ「ん？お前さんはあの金色機体のパイロットだな」

ネロ「ふむふむ、いい目をしておる……。弟子に任命しよう！」

零「え!?で、弟子……!?いや、そういうのは……」

ホセ「何、遠慮するな！この老いぼれの話聞いてくれ！」

零「……て、手短にお願いします……」

ネロ「これはザウルス帝国と戦った時の話になる」

……長引くな、この話は……

てか、千冬さんもそうだったけど、酒飲んで酔っ払う人って、何で昔話をしたがるん

だ……？

カルロス「……」

サラ「このお爺ちゃん、こんなにうるさいのに寝れるなんて凄いな！」

ユキコ「カルロスさんはいつもこうなのよ」
名瀬「あなたは？」

ユキコ「ユキコ・ステイブンスです。エルドラメンバーとは古くからの知り合いです。酔っているお爺さん達に変わり、自己紹介しますね。メインパイロットのネロさん」

ネロ「ガハハハッ！」

ユキコ「ホセさんとバリヨさん…。そして、寝ている人がカルロスさんです」

ホセ「フツ…」

バリヨ「うむ」

カルロス「…」

アスナ「ず、随分と個性的なお爺さん達なのね…」

零「納得しないで助けるよ、アスナ！」

アスナ「…無理。メル、パス」

メル「へっ…？わ、私もこういう方々は…ア、アマリさんにレシーブします！」

アマリ「ふえっ？…え、えつと…零君にアタックです！」

零「返すなよ！」

ネロ「おい、零！ちゃんと聞いているのか？！」

零「も、勿論ですよ！」

ネロ「いや、聞いておらんな！もう一度初めからだ！」「
か、勘弁してくれ……。」

鎧「デモンベインやヒーローマンもこの世界にいるんですか？？」

ルカ「ゴークイ」「今は別行動だけどね」

鎧「じゃあ俺も！ゴークイシルバーの伊狩 鎧です！よろしくお願いします！」

ナビィ「オイラはナビィ！よろしく〜！」

ラフタ「うん、よろしく！ナビィ！」

ウエンディ「人がいっぱい楽しいね、カメオ」

カメオ「クエ〜」

青葉「……見慣れたアル・ワースの空も今は少し違って見えるな」

まゆか「そうですね。自分で選択して、ここに来たのですから」

ディオ「……」

青葉「どうした、ディオ？まさか後悔してるなんて言うんじゃないだろうな」

ディオ「すまなかつたな、青葉。お前の事を疑って……」

青葉「言つただろ？俺は嘘はついてねえって」

ベルリ「いきなりどうしたんだ、ディオは？」

ディオ「……俺はカップリングした時、青葉の記憶に触れたんだ」

ミネバ「記憶に……？」

まゆか「前にも、そんな事がありましたけど……」

ディオ「あの時とは比べものにならない程の情報俺の脳に流れ込んできた」

マリーダ「そんな事があるのか……？」

三日月「どうなの、エルヴィラ？」

エルヴィラ「今まで以上に感度の高いルクシオンネクストとブラディオネクストのカップリングシステムのせいだと思っわ」

青葉「やっぱり、そうか……」

エルヴィラ「あなた達のカップラーとしての相性は初めてのカップリングの時よりも格段に向上している。フェルミ先生は初カップリングの時のデータを元にして、ネクストの調整をしただろうから今の二人の結びつきの強さでは……」

キラ「逆に過剰なまでに互いの意識が交感されてしまうんですね」

エルヴィラ「その通り。その結果、思考だけじゃなく、意識や記憶まで共有してしまつたの。でも、安心して。私の方でシステムを調整して、もう二度と、そんな現象は起こさせないから」

シン「ところでディオが見たっていう青葉の記憶って、どんな内容だったんだ？」

ルナマリア「シ、シン！流石にそれは……」

シン「あ……わ、悪い、青葉！」

青葉「構わねえよ、シン、ルナマリア……。ディオ、みんなに話してやれよ、重要な部分だけをな」

ディオ「俺が触れた青葉の記憶……。それは今までに青葉の口から語られたルクシオンに搭乘するまでの過程そのものだった」

まゆか「つまり……？」

ディオ「青葉が俺達から見て70年前の過去の世界から来たという話……。あれは真実だったんだ」

青葉「そういう事だ。やっと信じてくれたか」

アスナ「え……」

アイーダ「え……」

オルガ「それだけ……なのか？」

パトリック「何だよ……。もっと衝撃の真実つてのが明かされると思ったのによ……」

ディオ「何だ……。この反応の薄さは……」

アマリ「ええと……。ここにいるのは様々な世界から集められた人間なので……」

メル「はい……。今更時間を超えたのは本当だった……。つと言われても、その……。大し

た衝撃はなくて……」

アルト「逆に言えば、青葉の話を信じてなかったのってディオぐらいだったんじゃないか？」

ディオ「な……」

青葉「そう言うなって。石頭のこいつの場合、自分で体験しなきゃ納得できないんだから」

ディオ「では聞くが、お前はあの雛という女がどういいう理屈でお前を助け、お前を未来に送り込んだか、理解しているのか？」

青葉「わからねえ。だから、雛と話がしたかったんだ」

ディオ「……そうだな。お前の言う通りだ。お前が、あの女を追っていた理由が今は心の底から理解できる」

青葉「じゃあ……！」

ディオ「勘違いするな。俺達の最大の目的はアル・ワースの戦いを終わらせ、ゾギリアを叩く事だ……。だが、その中で可能な限り、ゾギリアのヒナ・リヤザンに接触を試みる」

青葉「それで十分だ。頼むぜ、ディオ」

ディオ「こうなったら、問題はもうお前だけのものじゃない。青葉……。俺がサポート

するから、とことんまでやれ」

青葉「ああ……！（雛……。俺達は自分の意思でこのアル・ワースに帰ってきた……。俺達の時代でも、ディオ達の時代でもないここで俺は必ずお前とディオと一緒に真実を解き明かしてみせるからな……）」

相棒、か……。

今、この二人が頼もしいな……。

ネロ「そして、ワシ等とチヅルは……」

……いつまで続くんだよ、これ人達の話……。

「エフゲニー・ケダールだ。

俺は今、ミスルギ皇国でエンブリヲ、そしてかぎ爪の男と話していた。

エンブリヲ「……エクスクロスがシンギュラーを通って君達の世界に行ってきたようだね、エフゲニー・ケダール」

エフゲニー「……」

かぎ爪の男「想定外の出来事だったかもしれませんが、こうして君は存在しています。

良かったではないですか」

エンブリヲ「つまり、歴史は揺るがない……。私の施したセーフティの結果だろうね、これも」

エフゲニー「……」

エンブリヲ「感謝して欲しいな、エフゲニー。君が存在しているのは、ある意味、私のおかげなのだよ。アル・ワースに転移した君達がシナリオ通りに進むように調整しているのはこの私だよ。そう……。君たちの世界の調律者である、この私だ」

エフゲニー「それは理解している」

エンブリヲ「それにしても、同志。君の所のオリジナル7二人がエクスクロスについたそうだね?」

かぎ爪の男「……カロツサ君とメリツサ君の事は悲しいです。ですが、彼等は今、混乱しているだけです。いずれ、私の考えをわかってくれますよ。私達は同志なのですから」

エンブリヲ「……」

かぎ爪の男「どうかしましたか?」

エンブリヲ「いや、何も無いよ。私はこれから大事な用があるので出かける。あまり勝手はしないように頼むよ」

かぎ爪の男「では、私も失礼します」

エンブリヲとかぎ爪の男は部屋を出た。

エフゲニー「……エンブリヲ……。必ず貴様を殺してやる……」

ーウイリアム・ウイル・ウーだ。

私は部屋から出てきた父上にある事を確認したくて来た。

ウー「父上！」

かぎ爪の男「おや、ウー君ではありませんか。どうかしましたか？」

ウー「……あなたは私を必要としていますか？」

かぎ爪の男「フフ……。おかしな質問をしますね。勿論ですよ……。私達は同志なので

すから」

ウー「同、志……？」

かぎ爪の男「幸せの時間が完成すれば、あなたの母親とも出会えますよ」

ウー「あなたの母親って……。どうして、その様な他人事のように言うのですか……？」

かぎ爪の男「他人事ではありませんよ。彼女は今でも私の心の中にいますから。私の

大切な存在なのですから」

ウー「……」

私の……だと……？

ウー「……その割には悲しそうに見えませんか」

かぎ爪の男「だから、言っているではありませんか。彼女は私の心の中にいると……」

ウー「母は一人しかいない……。故に母のいるのは私の心の中ですよ」

かぎ爪の男「どっちでもいいですよ」

どっちでもいいだと……!??

かぎ爪の男「それよりもウー君……。血の提供をお願いします」

ウー「……はい」

今にわかった……。この方が必要としているのは私ではなく、私の身体に流れる血だと……。

そして、この男は……。母の想いをも踏みにじった……！

これで最後だ……。母上、申し訳ありません……。私は、ウィリアムは……。自分の意志であなたとの約束を破らせていただきます……。

第46話 帰還 / HARMONY

「ユインシエル・アステリアです。

私は倉光艦長にある話をする為にシグナスの艦長室まで来ています。

ユイ「失礼します」

倉光「やあ、ユイちゃん。それで、話とは何かな？」

ユイ「実は……リムガルド王国に行きたいんです！」

倉光「リムガルド王国……？それって、確か12年前程にリムガルド・フォールという事件が起きた国の事だよな？」

ユイ「はい、そうです」

倉光「反対する気はないのだけれど聞くね……。どうして、リムガルド王国へ行きたいんだい？」

ユイ「……私、リムガルドで何が起きたのか、お姉ちゃんに何があつたのか……。この目で確かめたいんです。そうすれば、イングリットさんが何をしようとしているのかもわかると思う……。だから……」

倉光「… わかったよ、ではみんなで行こう」

ユイ「倉光艦長…」

倉光「君やレナ君達だけを行かしたら、エナストリアの方々に顔合わせできないし、君もエクスクロスの一員だからね…。それにレガリアについても何かわかるかもしれないし」

ユイ「… ありがとうございます！」

倉光「でも、今、リムガルド王国って、国連管理下に置かれていて、立ち入りは禁止だったんじゃない？」

ユイ「あ… そ、そうだった…」

アオイ「その事なら心配はないです」

ユイ「アオイ！」

倉光「どういう事かな？」

アオイ「マーガレットさんが国連の人に許可を取ってくれたみたいなの」

ユイ「マーガレットさんが!?」

アオイ「いづれ、ユイ様がリムガルドに行く事になるだろうって… そう言っていたわ」

ユイ「… マーガレットさん…」

ありがとうございます……。

倉光「それじゃあ何も問題ないね。これからリムガルド王国へ向かうよ」

ユイ「はい！」

リムガルド王国……そこに全ての謎がある……と思う……。

―新垣 零だ。

俺達、エクスクロスはリムガルド王国へ向かう事になった。

カルメン99「じゃあ、私達はユインシエル陛下の提案でリムガルド王国って国に行くのね？」

ヴァン「ちいっ……俺は早くかぎ爪の野郎を見つけないとならねえのに……！」

零「そのかぎ爪の男はヨハンとも繋がっている可能性があります。それならば、ルクスの国に行ってもいいかもしれませんよ？」

ヴァン「……勝手にしろ」

サラ「でも、どうしてユイちゃん……急にリムガルドに行きたいなんて言ったんだろ
うね？」

青葉「ユイさんもユイさんで悩み事があるって事か」

アスナ「その解決はレナに任せましょう。．．．それでもダメなら、私達も協力してあげたらいいし」

零「．．．」

アスナ「な、何よ？」

零「お前って、本当に変わったな」

アスナ「どうしたのよ、急に!?？」

メル「最初は零さんを憎み、エナストリアをも攻撃したあなたが．．．今はユイさんの為に考えている．．．。あなたは本当に変わりました」

アスナ「．．．そんな事は当たり前だから．．．。私もみんなの為に何かしたい．．．。ただ、それだけなの．．．」

ジョシユア「アスナさん．．．」

俯くアスナの顔を見て、俺は彼女の頭にポンと手を置いた。

零「あまり一人で背負うなよ。お前にも俺達がいるんだからな」

アスナ「ありがとう、零．．．」

ヤール「それにしてもリムガルドに着いたらどうすんだ？」

アンドレイ「ユイ君とレナ君、サラちゃんとティアちゃん、リムガルドの街を見回る

みたいだ」

デイト「彼女達だけで大丈夫なんですか？」

キオ「僕達もそれを思つて、護衛をつけようとしたんですけど……」

セルゲイ「彼女自身に断わられたよ」

それが、ユイの覚悟つてわけか……

ミシエル「よし、仕方ない！ここは俺が一肌脱ぐとしますか！」

零「間違えてもお前には行かせられねえよ……。つてか、ユイに手を出したらレナだけでなくエナストリアの国民をも敵に回す事になるからな」

ミシエル「や、やっぱり……遠慮しておきます……」

クラン「フン、自業自得だ！」

アマリ「今はユイさん達を信じましょう」

ロツクオン「そうだな。若いっていつてもあいつは立派な皇女だからな。大丈夫だろ」

みんなそれぞれ……真相を解き明かそうとしているのに、俺は……

アスナ「……」

「ユインシエル・アステリアです。」

リムガルド王国へついた私達は艦を下ろしました。

そして、私、レナ、サラちゃんとティアちゃんは降りました。

アルト「ユイ、危険だと思つたらすぐに戻つて来いよ」

ナル「お気をつけて！」

ユイ「はい、皆さん！行つてきます！」

私達は皆さんに背を向け、リムガルドの街中に入つて行きました。

倒壊した街中を私達は見渡しました。

レナ「ここが、リムガルド……」

ここまで倒壊しているなんて……

私達はショッピングモールらしき場所に入り、ある看板に目を向けました。

サラ「……あれって……」

ユイ「イングリットさんだよね……？」

サラ「レナを見つけた時に行つた所だよ、覚えてない？」

レナ「……行くよ」

ユイ「レナ……」

私達はショッピングモールから出てさらに奥へ歩いて行きました。

奥まで来ると研究所の様な建物を見つけました。

ユイ「ここは……」

……？中から誰か歩いて来る……？

白い髪の……女の子……？

ケイ「……」

サラ「ケイ……？」

ティア「ホントだ、ケイだ！おい！」

ケイちゃんという子に近づこうとしたティアちゃんをレナが止める。

ティア「何するの、レナ？」

ケイ「……」

ケイちゃんしばらく、私達を見た後、研究所の中へと戻って行きました。

ユイ「行こう」

レナ「うん……」

私達は気を引き締め、ケイちゃんの後を追う様に研究所の中に入った……。

――新垣 零だ。

自室の窓から見えるリムガルド王国の街中……。あの倒壊……。並みじやねえな……。
よし……！

俺は自室を飛び出し、倉光艦長に会いに艦長室まで来た。

零「失礼します！」

倉光「今日はお客さんが多いね、どうしたんだい？」

零「俺も街を見に行く許可が欲しくて……」

倉光「……もう、わかったよ。君も言い出したら聞かない男だからね……。でも、この国に来たのはあくまでユイ君達の為だから、ユイ君達が戻るまでには帰って来るんだよ？」

零「はい！」

俺は一礼した後、外へと向い、リムガルドの街中に入った……。

第46話 帰還 / HARMONY

リムガルドの街中を見回る俺……。

零「……近くで見るとまた違うな……」

倒壊した街なんて初めて見たぜ……。

ん？これは……。

俺は熊のぬいぐるみを拾う。

零「……」

おそらく、リムガルド王国に暮らしていた子のものだろう……。

子供まで……。

？「悲しいですね、沢山の命が消えた街というのは……」

零「！」

突然、声が聞こえて振り返るとそこには男女二人組がいた。

零「……何者ですか？」

ファサリナ「申し遅れました……私はファサリナ、こちらはミハエル君です」

男の方……ウエンデイと似ているな……。

ミハエル「君が新垣 零だな？」

零「どうして俺の名前を……？」

ファサリナ「あの方がお待ちです」

零「あの方……？誰の事だ!!？」

ファサリナ「すべての世界を幸せに包み込んでくれる人の事です」

説明になってねえよ……！

フアサリナ「さあ、私達と共にあの方の元へ行きましょう」

フアサリナという女が俺を抱きしめて来た……でも、何で……引きはがせないんだ……？体が……動かねえ……！

零「……！」

フアサリナ「大丈夫ですよ、私に身を任せて……」

零「……っ！」

何かに飲まれそうになったが、アマリの顔を思い出し、俺はフアサリナという女を引き剥がした。

零「……生憎と俺は彼女持ちなんでね……」

フアサリナ「まあ、そうなの」

零「あんた達が敬意を表しているあの方ってのは何をする気なんだ？」

ミハエル「すべての世界の者に幸せを与えるのだ」

フアサリナ「そう……憎しみや恨み、悲しみもない……世界が与えられるのです。だから、あなたも協力を……」

零「……断る」

ミハエル「何……？」

零「幸せは与えられるものじゃない……自らが得るものだ！誰かに与えられた幸せな

んて…… 幸せだと言えねえんだよ！」

ミハエル「貴様…… 同志を侮辱するのか！」

同志…… だと…… ！！？

それって、カロツサ達やガドヴェドさんの言っていた……。

零「お前等、まさか……！」

フアサリナ「仕方ありませんね」

零「つ…… ぐあぁっ！」

フアサリナは突然、俺を三節棍で殴り飛ばして来た。

フアサリナ「力尽くというのは好みませんが…… 仕方ないでしょう」

クソツ…… どうすりゃいいんだ…… ！！

ヴァン「うおおおっ！」

だが、そこへヴァンさんが斬り込んで来て、フアサリナがそれを避ける。

そして、ヴァンさんは俺の隣に立つ。

ヴァン「生きてるか？」

零「見ればわかるでしょうが！」

ヴァン「そうだな」

立ち上がった俺は拳を握り、ミハエルとフアサリナを見る。

ミハエル「ヴァン……！」

ヴァン「あの時の女とウエンデイのバカ兄貴か！」

零「なっ!? あの人がウエンデイの兄貴なのか……!?」

通りで似てるわけだ……！

すると、今度はカルメンさんとウエンデイが来た。

ウエンデイ「兄さん！」

ミハエル「ウエンデイ……」

カルメン99「あんた達、零に何をしようとしたの!?」

フアサリナ「いえ、何も……。ただ、仲良くしようとしただけです」

零「思いきり仲間に取り入れられそうになりましたけどね……」

ヴァン「良かったな、零！あいつの味方になっていたら俺がお前を殺していた所だ」

零「さらつと怖い事言わないでください……」

ヴァン「かぎ爪は何処だ？」

ミハエル「私達が教えるとも思っているのか？」

ウエンデイ「兄さん！」

ミハエル「ウエンデイ、最後の警告だ。その男とは関わるな」

ウエンデイ「嫌よ！兄さんが言う事を聞いてくれないのに私だけ聞くななんてまっぴら

「ごめんよ！」

ミハエル「そうか……。ならば、もういい……。ヴァン！ここで決着をつける！」

ファサリナ「フフフ……。少し痛い目を見てもらいましようか」

そして、ミハエルとファサリナはそれぞれのヨロイを呼び出した。

零「ウエンデイ！カルメンさんと一緒に戻ってみんなに報告してくれ！」

ウエンデイ「はい！」

カルメン99「気をつけなさいよ！」

ウエンデイとカルメンさんがみんなの元へ行つたのを見て、俺はヴァンさんを見る。

零「ヴァンさん！」

ヴァン「言われるまでもねえ！」

ヴァンさんはテンガロンハットを回転させ、蛮刀をV字に振りかざし、ダン・オブ・

サーズデイを呼んだ。

零「ゼフィルス！」

俺もゼフィルスを呼び、それぞれ搭乗する。

ヴァン「ウエイクアップ、ダン……。！」

ゼフィルスとダン・オブ・サーズデイに乗った俺達はそれぞれ身構える。

すると、龍のようなヨロイ、数機と量産機のヨロイが現れる。

ファサリナ「これだけの数をあなた方だけで対処できますか？」

ヴァン「何体いおうが知るか！俺はお前達をぶっ倒して、かぎ爪を殺すだけだ！」

零「お前達のくだらない計画は阻止してやる！」

ミハエル「同志に歯向かう愚か者共め！ここで消してやる！」

ヴァン「消されるのはてめえの方だ、ウエンデイのバカ兄貴！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「すべて無人のヨロイか……。無人機如きじゃ、俺達は止められねえぞ！」

〈戦闘会話 ヴァンVS初戦闘〉

ヴァン「どいつもこいつも邪魔しやがって……纏めてぶっ壊してやる！」

数分後の事だった……。

突然、メッツァ・オブ・チューズデイが現れた。

零「あれって！」

ミハエル「ウーさん！」

ウー「……」

ヴァン「てめえまで来やがったか！」

ウー「ヴァン、私は素直になろうと思う」

ヴァン「…… あ？何だ、突然……」

ウー「今からやるのは私の意志の表だ……。しかも、見よ！」

は……！！？メツツア・オブ・チューズデイが敵機体の一機を倒した……！！？

ミハエル「ウ、ウーさん……！！？何を……！！？」

ヴァン「てめえ…… どういう風の吹き回しだ？」

ウー「勘違いするな……。あの方は私を見ていたのではなく、私の血を見ていた……」

そして、母上の想いを継ぎ、あの方に従っていたが……。あの男は母上の想いを踏みにじった！だから潰す！決して、お前達の仲間になろうとしたわけではない！ただ、お前達といればあの男を確実に殺せると思ったただけだ！

零「え……。それ遠回しに仲間にしろと言っているんじゃないや……」

ウー「その少年、何か言ったか！！？」

零「何でもありませんから、レイピアを向けるのだけはやめてください！」

ウー「わかればいい……」

ヴァン「何言ってやがんだ、かぎ爪を殺すのは俺だ！」

ウー「いいや、私だ！」

何かヴァンさんみたいなのが二人いるんですが!??

ファサリナ「ガドヴェドさんやカロツサ君にメリツサちゃんに引き続き……あなたま

で同志を裏切るとは……」

ウー「先に裏切ったのは奴だ」

ミハエル「残念です……全機、メツツアも攻撃対象に認定！」

ウー「ヴァン！ノロノロとやっていたら先に私が奴を殺すからな！」

ヴァン「後から来て、威張るな！かぎ爪は俺が殺すって言ってるんだろ！」

つ、疲れるよ、この人達……

俺達は再び、戦闘を再開しようとした……。

ーユインシエル・アステリアです。

ケイちゃんに連れられ、私達は研究所の中心まで来ました。

ティア「うわあ……」

サラ「大きい……」

研究所の中を見渡した後、ケイちゃんに視線を戻すとケイちゃんの向かう方には一人の女性が立っていました。

ケイ「！」

ケイちゃんはその人の顔を見た途端、先程までの表情から一変し、笑顔になつて女性に勢いよく、抱きついた。

あの人は……！

レナ「……」

イングリッド「ようこそ、リムガルド王国へ……。ユインシエル……」

ユイ「イングリッドさん……」

サラ「あの人がイングリッド……？」

ティア「ケイの契約者……？」

ユイ「イングリッドさん……。此処で……。リムガルド王国で何があつたんですか？」

イングリッド「12年前までリムガルドは世界有数の技術を持っていたわ。けれど、長きに渡って行われていた新しいエネルギーの研究に成果が出ず……。行き詰まつていたの。そのヘタイミングを見計らつていたかのように助言者が現れた」

助言者：…？

イングリッド「その人物のおかげで研究は再開され… 目覚しい成果をあげたわ。でも… それは大きな間違いだった…」

ユイ「え…？」

イングリッド「リムガルド・フォール…」

レナ「！」

ユイ「！… どういう事ですか？」

イングリッド「助言者は過去の遺物を復活させるためにリムガルドを利用していただけだった…」

レナ「過去の遺物…」

イングリッド「ルクス・エクスマキナ…」

ティア「え…」

サラ「それって…！」

イングリッド「そう、かつてあなた達が封印した… 世界を一度滅ぼしたもの」

レナ「あなたも… ルクス・エクスマキナが欲しかったの…？」

イングリッド「… 違う。でも、国が滅びた後、こうやってあなた達の前に立っている以上、そう思われても仕方ないわね」

ユイ「… だったら…！何の為にレナを… エナストリアを巻き込んでまでこんな事をしているんですか!?!」

サラ「ケイもだよ！ケイも関係ないでしょ!?!」

ティア「そうだそうだ！ケイを返せ！」

イングリッド「それは…」

ヨハン「まさか、そつちから直々に来るなんて思わなかったよ」

ユイ「この声…！」

レナ「ヨハン…！」

ヨハン「覚えていてくれたんだね…。つて、あれ？イングリッドじゃないか。君も来ていたんだ」

イングリッド「…！」

…？イングリッドさん…？

ヨハン「ちょうどいいじゃん。全ての始まりの地でみんなでお決…。イングリッドも一緒にやろうよ」

イングリッド「…」

ヨハン「…あれ？手伝ってあげるよ」

イングリッド「…くっ…。ヨハン…！」

ケイ「光に生まれ、闇を纏う真実の裁定者。わが身に宿り、偽りの煉獄を暴け」
ヨハン「ククク：：！」

ケイ「愠気の焰耐える事なき、獄炎の神器」

ケイちゃんから発せられた光がイングリッドさんをも包み込もうとした…。

しかし、イングリッドは私達に向かって手を伸ばした。

ユイ「イングリッドさん！」

ケイ「エリニウスの名に於いてその身を晒せ」

ユイ「イングリッドさん!!？」

レナ「ユイ、下がって！」

レナに掴まれ、私達は下がった。

ケイ「ーゼノ・メガエラ」

光が発せられ、金色と黒色基調のレガリアが現れた。

あれが：：メガエラ：：。

ユイ「：：イングリッドさん：：」

イングリッド「：：ユインシエル：：！」

メガエラは空を飛び、私達を見下ろしています。

ヨハン「良い子だね、僕もやろうか」

ヨハン君もレガリア・ギアを召喚して、乗り込んだ。

レナ「ユイ……私達も……」

ユイ「でも……」

レナ「ユイ！」

……やるしかないんだよね……！

ユイ「……わかった……！レナ、お願い！」

サラ「ティア、行くよ！」

ティア「うん！」

私達もアレクトとティシスを呼び出し、搭乗した。

ヨハン「フハハハッ！ やつと役者が揃ったねえ……」

ユイ「……」

ヨハン「それじゃあ……因縁の対決を始めようか」

ヨハン君の言葉と同時にメガエラから電撃が放たれ、研究所内は爆発しました……。

↓新垣 零だ。

かぎ爪の男の仲間との戦いの最中、近くで爆発が起こった。

零「な、何だ!?？」

ファサリナ「あちらもあちらで始めたようですね……」
爆発の中から四機のロボットが……って、その内の2機はアレクトとティシスじゃねえか！

ウー「あれは……お前達の仲間のレガリアか？」

零「全部がそうじゃないんですがね……」

ヨハン「あれれ？そつちも面白い事をしているじゃないか」

零「そのレガリア・ギア……お前、ヨハンだな！」

ヨハン「そうだよ、ゼフィルスのお兄さん」

零「ユイ、レナ、サラ、ティア！大丈夫か!?？」

ユイ「零さんにヴァンさん!??どうして戦っているんですか!??」

ヴァン「こつちの台詞だ！そいつらは何だ！」

サラ「あの金色と黒のレガリアはメガエラ……ケイのレガリアだよ！」

零「ケイって……サラ達が探していたレガリアのコアか……。そいつが何でお前達と!??」

レナ「零、話はあとよ！今は……！」

零「……ああ、お互い倒さないといけない敵がいるからな！」

ミハエル「君も来ていたんだね、ヨハン」

ヨハン「これはさらに面白い対決ができそうだ…ねえ、イングリッド？」
イングリッド「くっ…」

ヨハン「どうせなら、そっちも手伝うからこっちも手伝ってよ」

ファサリナ「わかりました、では参りましょう」

零「来る…！迎え撃つぞ！」

ヴァン「お前に言われるまでもねえ！」

ユイ「イングリッドさん…私は…」

イングリッド「ユインシエル…私は…」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 ユイVSヨハン〉

ヨハン「行くよ、エナストリアのお姫様」

ユイ「あの子にはもう負けない…レナ！」

レナ「うん！覚悟しなさい、ヨハン！」

〈戦闘会話 サラVSヨハン〉

ティア「あいつ、空飛んでばっか……！」

サラ「卑怯者ー！降りてこーい！」

ヨハン「嫌だよ、わざわざ君たちの間合いに入るつもりはないよ」

〈戦闘会話 ユイVSイングリッド〉

イングリッド「……」

ユイ「イングリッドさん……」

イングリッド「行くわよ、ユインシエル！」

レナ「来るよ、ユイ！」

ユイ「う、うん……！（イングリッドさん…… どうしてあの時、私達に手を差し伸べたの……？）」

〈戦闘会話 サラVSイングリッド〉

イングリッド「ティシスは此処で倒すわ！」

サラ「うるさい！ケイを返せー！」

ティア「返せー！」

クソツ：… あのウオラーレが邪魔すぎて他の機体に専念できない…！

ヨハン「なかなかやるね…」

サラ「あいつ、邪魔だね…」

レナ「こうなったら、アレクトとティシスで力を合わせましょう！」

ユイ「うん！」

アレクトとティシスは同時に動き出す。

ウオラーレの攻撃をティシスが防ぎ、その隙にアレクトが殴りかかったが、メガエラに止められ、空高く連れ去られる。

零「ユイ！」

ユイ「な、何…？！？」

レナ「捕まった…？！？」

イングリッド「ユインシエル、落ち着いて… じっとしてよく聞いて」

ユイ「イングリッド… さん…？？」

イングリッド「聞こえる…？ エリニウスのレガリアが三体揃っている今なら、共鳴が起こせる」

ユイ「共鳴…？？」

イングリッド「私達を… ケイを…」

ユイ「(…！イングリッドさん…！)」

つ…！アレクトの前にウオラーレが…！

ヨハン「いいねえ。そのまま離さないでよ」

零「ユイ、レナ！」

何とか、アレクトを助けようと動き出したが…。

ミハエル「お前の相手は私だ！」

零「邪魔すんな、このバカ兄貴！」

サウダーデ・オブ・サンデイに邪魔される。

ウオラーレからビームが放たれるが身の危険を感じたのか、メガエラがアレクトを離れた。

ヨハン「もう…ちゃんと抑えててよ」

イングリッド「…」

ヨハン「まあいいや。もつと面白い人達が来たから」

エクスクロスの艦が現れ、みんなが出撃して来た。

アスナ「みんな、遅くなつてごめん！」

ニール「状況はどういう感じだ！」

零「えっと… ウーさんが仲間になって… その…」
ガドヴェド「ほう…」

ウー「な、仲間になった覚えはない！」

カロツサ「サウダーデ… ミハエル…！」

ミハエル「ガドヴェドさん… カロツサ、メリツサ…」

メリツサ「ミハエル…」

ミハエル「敵となったからには容赦はしない！」

ガドヴェド「それはこちらの台詞だ！」

アマリ「ユイさん、あのレガリアは？？」

ユイ「イングリッドさんと… ケイちゃんに乗っています！」

プル「ケイって… サラ達と同じ…」

ジュード「話は後だ！今はあいつ等を倒すぞ！」

青葉「了解！」

イングリッド「…」

ユイ「… イングリッドさん…」

ウー「母上、申し訳ありません…。あなたの約束を裏切った私を許してください…。
ですが、あの男だけは…。私がこの手で殺す！」

戦闘から結構経つたが、ウオラーレが厄介すぎる…！

刹那「まずはあのレガリアをどうにかしなければ…！」

ユイ「…。レナ、イングリッドさんの言っていた共鳴って…」

レナ「…！」

ーレナ・アステリアよ。

私は突然、暗い世界にいて、私の後ろに私そっくりの女の子が立っていた。

それと同時に何かが私の頭の中に…。これは…。拘束されたケイ…？

レナ「ケイが…。いるの？」

？「…。」

ユイ「レナ！」

ユイの声で我に返り、ユイを見た。

ユイ「大丈夫、レナ？」

レナ「ケイが…… ティア、聞こえる!?？」

ティア「う、うん……」

レナ「ケイを助けよう！」

ティア「え……？」

レナ「あそこにいるのは…… 本当のケイじゃない！」

サラ「え、違うの？」

ティア「何で？」

レナ「…… わからない。けど、ケイは私達の…… エリニウスの中にいるんだと思う」

ユイ「…… レナ、ケイちゃんを助けよう！」

レナ「でも…… ユイ一人じゃ、アレクトとの力が使えなくなっちゃう」

ユイ「大丈夫、行つてあげて」

でも、ユイが……。

ユイ「私、頑張るから……」

レナ「…… ユイ……」

零「レナ！ ユイは俺達任せろ！」

メル「必ず守つてみせますから！」

レナ「…みんな…わかった…」

私とティアはエリニウスの中にへと入っていった…。

零「本当にアレクトとティシスが動けなくなった…」

アムロ「全機、ユイとサラを守りつつ、敵を迎え撃つぞ！」

エリニウスの中へと来た私とティア。

ティア「ここに本当にケイがいるの？」

レナ「うん、きつと…」

私達の目の前には大きな何かがあった。

ティア「大つきい…この中にケイがいるのかな？」

ティアが扉に触ると開いた。

ティア「うわあっ?!?何これ?!?」

すると、私達の肩を持つものがいた。

振り返るとそこにはあの時見た私そっくりの人がいた。

ティア「え、ええ?!?レナがもう一人?!?」

私そっくりの人が私を見て、クスリと笑った後、まるで付いて来いと言うように扉の

奥へと入っていった。

レナ「…行こう」

ティア「ええ!?? 待ってよ、レナー!」

私とティアは私そっくりの人の後をついていった…。

↓新垣 零だ。

ティエリア「ユイ、サラ! 君達は下がっているんだ!」

ユイ「私達も…戦います!」

サラ「で、でも…!」

ユイ「任せて、援護をお願いします!」

アスナ「え、ちょっとユイ!」

零「わかった!」

メル「零さん!??」

三日月「やる気があるならやらせてあげれば?」

カトル「何を言いだすんだい、三日月!??」

ヒイロ「あいつもエクスクロスの一員だ」

刹那「信じると言うわけか」

零「そう言うわけだ! サラ、援護しろ!」

サラ「うん！」

ゼフィルスとアレクト、ティシスは同時に動き出し、ゼフィルスとティシスがウオラーレの気を引いた。

ヨハン「無駄なのに…… まあ、挑んでくるなら倒すけど！」

零「…… 今だ、ユイ！」

ユイ「はああああっ！」

ゼフィルスとティシスに気を取られたウオラーレにアレクトの一撃が浴びせられた。

ヨハン「うっ……！」

今の一撃を受けて、流石のウオラーレも吹き飛ばされた。

零「やるじゃねえか、ユイ！」

サラ「ユイちゃん、すっごくいい！」

ヨハン「ふーん、なかなか楽しいじゃないか」

いける…… この調子なら、いけるぞ！

ーレナ・アステリアよ。

ずいぶん歩いたわね……。

? 「…」

そつくりの人が消えた…。あの子はいったい…。

すると、今度は辺りの風景が変わり、賑やかな街中に変わる。

ティア「こ、ここって…」

レナ「リム、ガルド…？」

そして、見えたのは…。ボロボロの姿の…。ケイとイングリッド…？

レナ「これは…。ケイの記憶…？」

記憶が進み、次に見せられたのは…。

過去のヨハン…！

次に見せられたのは…。

レナ「あれは…。アレクトとティシス…？」

ティア「どうして、アレクトとティシスが戦っているの…？」

すると、イングリッドが入って来た。

過去のイングリッド「！これはどういう事なの…？」

過去のケイ「…！イングリッド…！」

すると、ケイの力が増し、辺りを爆風と光が包み込んだ。

ティア「これが…」

レナ「リムガルド・フオール……」
リムガルド・フオールは……レガリアの力の暴走が原因だったんだ……。

―新垣 零だ。

ヨハン「そろそろ、飽きたし……もう終わらせようか」

ウオラーレがアレクトを蹴り飛ばし、首根っこを掴み、持ち上げた。

ヨハン「女皇陛下……こんなボロボロになつてまで……どうして首を突っ込むの？君には関係のない事でしょう？」

ユイ「関係ない事なんか……ありません！」

ヨハン「いや、関係ないね、これは僕等の問題だ」

ユイ「あなた……！」

―レナ・アステリアよ。

崩壊したリムガルドの街に……イングリッドとケイ、ヨハンがいた。

過去のヨハン「バカな国だよね……。僕の言う通りに行けばこんな事にならなかつたのに」

過去のイングリッド「ヨハン……！」

イングリッドはヨハンに拳銃を向けた。

過去のヨハン「わあー、怖い！ケイ、助けてー」

過去のケイ「……」

何と、ケイがヨハンを庇うようにイングリッドの前に立った。

過去のイングリッド「ケイ……」

過去のヨハン「あゝあ。バカのせいで一からやり直しだよ……。まっ、取り敢えず、ケ

イは貰っていくよ」

過去のイングリッド「……ヨハン！あなた、ケイにいったい何を!?」

過去のヨハン「僕のお人形さんになって貰ったんだよ……。もう君の声も聞こえない」

そんな……。ケイが……！

過去のイングリッド「ケイ！」

過去のヨハン「一緒について来てもいいよ。何せ……。君に拾われたせいで、この子は

この風になっちゃったんだからね……。フフツ……」

イングリッド「……」

そのままイングリッドはヨハン達についていった。

それを最後に辺りは再び、暗闇に包まれる。

―新垣 零だ。

アレクトが捕まった… このままでは…！

ユイ「あなたなの…？あなたが… イングリッドさん達に酷い事をさせたんですね！…ぐっ…！」

アレクトを掴む腕が強まった…！！？

ヨハン「だから何？女皇様には関係ないんだから… 一人でお城に帰って大人しくしてなよ」

ユイ「みんな… 私の大切な人です！… 一人で帰る事なんて出来ません！」

ユイ… お前…。

ヨハン「あつそ。でも、あの子達には用があるから… ダメ」

ユイ「どうして… どうしてこんな酷い事が出来るんですか！！？… あなたにだつて、大切な人がいるでしょう！！？」

ヨハン「！… お姉さん、もう死んでいいよ」

ユイ「うわあ…！」

このままじゃ、アレクトがもたない！

そのままウオラーレを空を飛び、アレクトを持ち上げた。

サラ「ユイちゃん!!?」

零「ユイ!」

ヨハン「いけないのは本当に君だけなんだよな……。だから、君だけ死んでね」
ウオラーレから衝撃波が放たれ、アレクトはダメージを負っていく。

ユイ「うわあああああつ……。!」

アスナ「ユイ!」

零「待ってろ、ユイ!今いく!」

アレクトを助けようと俺は動き出したが……。

フアサリナ「……私との戦闘中に他の女の子の所にいくなんて……妬けちやうわね」

ダリア・オブ・ウエンズデイからG—ER流体が発射され、ゼフィルスに絡みついた。

零「何……!!?」

フアサリナ「今のあなたに必要なのは、蜜。焦りや怒りを忘れるような、甘い、あまあ

い……み……つ……」

零「ぐつ……!悪いけど、俺はあんたみたいな女が一番苦手だ!」

フアサリナ「そうですか、でも逃すわけにはいきません」

そのまま、ゼフィルスを地面に叩きつけた。

零「ぐあああつ！」

アマリ「零君！」

ファサリナ「私に向かないのなら… 私色に染め上げます」

零「がつ…！ぐあああつ！」

何度も触手で叩きつけられ、身動きが取れない状態のゼロ距離でビーム光線を受ける。

なす術なしってこの事かよ…！

アレルヤ「零！」

トビア「いくら、ゼフィールスでも装甲が保たない！」

ユイ「カツ…ハ…！アアア…！」

零「グアツ…！ガツ…！アアア…！」

ヤバい、ユイの限界も近いが俺も相当限界に来てる…！

アムロ「零とユイを助けるぞ！」

ヴァン「面倒かけさせるな！」

ミハエル「ファサリナさんの邪魔はさせない！」

ダン・オブ・サーズデイの進行をサウダーデ・オブ・サンデイが阻止する。

ヴァン「バカ兄貴、てめえ！」

ミハエル「奴には天罰が下つたのだ！同志の理想を侮辱したな！」
 グラハム「……」

ヨハン「アハハハハッ！じゃあね、エナストリアの女皇様」

ユイ「ガッ……ハッ……！」

フアサリナ「もう一度言います。私に身を委ね、同志の夢のために手を取り合いますよう」

零「お断……りだ……！」

フアサリナ「……そうですか」

零「ウ……アアアアアアッ!!？」

ビーム光線の威力を高めやがった……。此処までなのかよ……！

グラハム「……何が理想だ。片腹痛い！他人を傷つけてまで得る理想など……必要ない！トランザム！」

イングリッド「！」

すると、ゼフィルスをブレイヴが、アレクトをメガエラが助けた。

ヨハン「へえ……ちよつと裏切るの早くない？まだケイはお人形さんのままだよ」

イングリッド「っ……！」

ヨハン「バカな王様と科学者がやった事を全て背負って……ずーつと我慢して我慢し

て：： チャンスをうかがってたんでしょう？ いいの？」

イングリッド「くっつ：：！ あなたに気を使われる必要はないわ！」

ヨハン「へえ、そっか」

そう言い残して、ウオラーレはメガエラを叩き落とした。

ファサリナ「邪魔を：：！」

零「グラ、ハムさん：：！」

グラハム「死すギリギリの状況でも折れぬその意志：： 心打たれたぞ、零」

零「は、ははは：： 流星に今回はヤバイと思いましたがけど：： これは後でメチャク

チャ、アマリに怒られるパターンのやつだ」

グラハム「ふっ、若いとはいいな」

ミハエル「よくも：： ファサリナさんの邪魔を！」

サウダーデ・オブ・サンデイが最大出力の三連ビームを放った。

グラハム「：：！」

ブレイヴが：： ゼフィルスを突き飛ばして代わりに、ビームを受けた：： ！！？

零「グラハムさん！！？」

刹那「グラハム！」

アーニー「グラハム少佐！」

ビームを受けて、落下していくブレイヴを見て、俺は叫んだ。

零「邪魔だあああつ!!？」

落下していくブレイヴを追いかけようとするが、サウダーデが立ちほだかつたが、エボリューションモードを発動させて、蹴り飛ばし、ブレイヴを受け止め、地面に着地する。

零「グラハムさん… グラハムさん！」

グラハム「バカか、君は…。男の涙は… 女性の為に流す… ものだ…」

零「あ、あああつ…！ 死なないでください、グラハムさん！」

グラハム「私は… 死なんよ… 何せ、私は乙女座の人間なのだから…。これは死などではないんだよ… 仲間、の…」

そう言い残して、グラハムさんは意識を失った。

零「グラハムさああああん!!？」

刹那「零！グラハムを早くトレミーへ運べ！」

零「… ああ…！」

俺はブレイヴを担ぎ、プトレマイオスにブレイヴを運び、戦線に復帰する。

アーニー「グラハム、少佐…」

サヤ「少尉…」

零「許さないぞ、ミハエル……。お前だけは！」

ヨハン「あつちもあつちで面白い事になってるね……。それよりも知ってるよ。ケイを取り戻してから……。僕を殺すつもりだったんだよね？」

イングリッド「くっ……。！」

ヨハン「エリニウスの共鳴で取り戻すつもりだったみたいだけど……。残念だったね」

ーレナ・アステリアよ。

暗闇が光出すと、目の前には囚われているケイの姿があつた。

ティア「ケイ！ケイー！」

レナ「ケイ……。！」

ティア「レナ、どうしよう……。！」

……。イングリッドの言葉……。共鳴……。

レナ「共鳴……。！」

すると、私とティア、ケイのコアが光り出した。

レナ「ケイ……。！」

ケイ「……！」

意識が……ある……？

私とティアは領きあうと私達のコアとケイのコアが一つになった。

ーイングリッド・テイエストよ。

ユインシエルを守ろうと奮闘する私……。

ケイ「イングリッド……」

イングリッド「っ……！」

振り返るとケイが私の拳銃を奪い、私に向けていた。

ケイ「今まで楽しかったよ、イングリッド……」

ヨハンが操っているのね……！

でも、此処までのようね……。

ケイ「バイバイ……」

ケイはゆつくりと拳銃の引き金に手をかけた……。

目に涙を浮かべながら……。

ーケイ・テイエスト…。

私達のコアが一つになったのを感じ、エリニユスの中で私を縛っていた鎖が解かれた。

ケイ「レナ、ティア…」

レナ「おかえり、ケイ…」

そして、私達の身体は光に包まれる…。

ーイングリッド・テイエストよ。

拳銃を落とす音が聞こえ、目を開けると目に涙を浮かべながら、笑うケイの姿があった…。

ケイ「ただいま、イングリッド」

イングリッド「…！ケイ…！」

ケイは私に抱き着き、私も抱き返した。

ケイ「イングリッド…！」

イングリッド「おかえり、ケイ！」

―新垣 零だ。

アレクトとティシスのもとにレナとティアが帰ってきた。

それと同時にユイも目を覚ました。

レナ達が元に戻ってきたって事は……

ユイ「ケイちゃん、助けられたんだね」

レナ「うん……！」

ユイ「私……お姉ちゃんがない間……頑張ったんだよ？」

レナ「うん……！」

ユイの言葉を聞いて、ユイとレナは抱き合った。

サラ「よくわかんないけど、良かったー！」

ティア「良かったー！」

本当に良かったぜ……。

ヨハン「あらあら、これじゃあ形勢逆転だね」

ティア「ケイ！あんな酷い奴、ティア達がやっつけてあげよう！」

レナ「あいつだけは許せない……！」

ケイ「二人共、ありがとう……。でもね……」

イングリッド「私達は12年間、この日を待っていたの……。申し訳ないけど、譲ってもらえないかしら……。！行きましよう、ケイ！」

ケイ「うん……。！」

ミハエル「敵の士気が上がった……。!?？」

青葉「お前等、よくも零さんやユイさん、グラハムさんを痛めつけてくれたな！」

ディオ「今度はこちらの番だ！」

零「さっきの借りを……。返させてもらおうぞ！」

ミハエル「来い、新垣 零！」

ヨハン「フツ……。見せてもらおうよ、三機のレガリアの力を！」

ユイ「みんな、行くよ！」

イングリッド「ユインシエル……。私達も戦うわ……。皆さんと一緒に！」

ユイ「はい、イングリッドさん！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　　イングリッドVS初戦闘〉

イングリッド「私達が犯していた罪を償うわよ！」

ケイ「うん：：！イングリッドとなら何も怖くない！」

イングリッド「：：私もよ、ケイ：：。見せてあげましょう、メガエラの力を！」

〈戦闘会話 零VSファサリナ〉

ファサリナ「ああ：：！あまり、激しく攻撃されると：：私、咲き乱れてしまいます：：！」

零「：：いつもの俺なら調子が狂っているが：：お前は別だ！とつとと失せやがれ、くそ女！」

〈戦闘会話 アマリVSファサリナ〉

アマリ「：：」

ファサリナ「何をそんなに怒っているの？」

アマリ「零君に手を出した事を後悔させてあげます、行くわよ、ホープス！私のドグマで粉々にさせてあげます！」

ホープス「(マスターが怖いです：：！)」

ファサリナ「(成る程、彼女が彼の：：。フフ、お似合いですね：：)」

〈戦闘会話　ヴァンVSファサリナ〉

ファサリナ「ヴァンさん、私と共に楽しい事をしましょう」

ヴァン「生憎だが、お前と遊んでいる暇はねえんだ…てめえをぶつ潰して、かぎ爪の野郎をぶつ潰すまではな！」

〈戦闘会話　ウーVSファサリナ〉

ファサリナ「今なら、まだ間に合いますよ、ウーさん」

ウー「残念だが、我が信念は揺るがらん」

ファサリナ「でしたら、その信念…揺るがせてあげましょう」

〈戦闘会話　ガドヴェドorカロツサorメリツサVSファサリナ〉

メリツサ「ファサリナが来た…！」

ファサリナ「あなた達ももう一度、同志の前に連れて行きます」

ガドヴェド「気迫で負けるな！カロツサ、メリツサ！奴にも必ず隙がある！」

カロツサ「その隙を…つく！」

〈戦闘会話　零VSミハエル〉

零「お前達の理想を俺達に押し付けるな！」

ミハエル「理想を共有する事こそが平和への道なのだ！何故、それがわからない！」
 零「一生わかんねえよ、そんな事！人間、みんながみんな、同じ思想なんてまっぴらごめんなんだよ！」

〈戦闘会話 ヴァンVSミハエル〉

ミハエル「此処で決着をつけるぞ、ヴァン！」

ヴァン「てめえなんてどうだっていい！かぎ爪の野郎を出せ！」

ミハエル「お前と同志を合わせるわけにはいかない！」

ヴァン「だったら、力尽くでも引きずり出してやる！」

〈戦闘会話 ウーVSミハエル〉

ミハエル「どうしてなんですか、ウーさん！」

ウー「……特に意味はない。私があつた男に失望しただけだ」

ミハエル「そんな私情で……！」

ウー「あの男の私情を他の者に押し付けるお前に言われたくない！」

〈戦闘会話　ガドヴェド or カロツサ or メリツサ V S ミハエル〉

ミハエル「皆さん：… 何故、同志を裏切つたんですか!?!？」

ガドヴェド「目が覚めたのだよ：…。ヴァンのおかげで：…。」

メリツサ「シンの：… おかげで」

カロツサ「俺：… 元々、お前嫌い! だから、潰す!」

ミハエル「どうしてみんな：… 同志から遠ざかつて行くんですか：…!」

〈戦闘会話　キラ V S ミハエル〉

キラ「平和を望むのは悪い事じゃない：…。でも、君達のそれは押し付けだ!」

ミハエル「誰かが導かなければ、世界は変わらない!」

キラ「君達は答えを急ぎすぎているんだ! 視野を広く持つんだ!」

ミハエル「黙れ! 同志を侮辱するのは許さない!」

〈戦闘会話　ブレラ V S ミハエル〉

ブレラ「俺達は黙って、お前に従うつもりはない」

ミハエル「そんな奴らは潰していく：… 同志のために!」

ブレラ「お前のその行為が既に矛盾を生じている事に何故気付かない!」

サウダーデ・オブ・サンデイとダリア・オブ・ウエンズデイにダメージを与えた。

ミハエル「くっ……！サウダーデのダメージ限界が来たか……！」

ファサリナ「今日は私達の負けです。退きましよう、ミハエル君」

ミハエル「……わかりました、ファサリナさん」

そう言い残して、二機は撤退した……。

ヴァン「あいつら……また逃げやがった……！」

ウエンズデイ「他の人まで傷つけて……兄さんはもう戻ってこないのね……」

ジョシユア「ウエンズデイさん……」

〈戦闘会話 零VSヨハン〉

零「ヨハン！ユイを傷つけた借りを返させてもらおうぞ！」

ヨハン「君も関係ないんだけどなあ……。ゼフィルスのお兄さん」

零「関係ある！ユイは……レナ達は俺達の仲間だ！だから、俺達には関係大有りなんだよ！」

ヨハン「……鬱陶しいね、そういうの」

〈戦闘会話 ヴァンVSヨハン〉

ヨハン「ヨロイ乗りのヴァンお兄さんがどうして僕の邪魔をするの？」

ヴァン「てめえが気に入らねえからだ。俺が殺すのはかぎ爪だ！だが、てめえも邪魔をするのなら、殺す！」

〈戦闘会話 ユイVSヨハン〉

ヨハン「女皇様、君は邪魔だね」

ユイ「今度は私達の番だよ！」

レナ「ユイを傷つけた分は返す！いくよ、ユイ！」

ユイ「うん、これで最後だよ、お姉ちゃん！」

〈戦闘会話 サラVSヨハン〉

サラ「さつきはよくもやってくれたわね！」

ヨハン「無様に攻撃を受ける姿は滑稽だったね」

ティア「サラを傷つけた分は倍にして返す！やるよ、サラ！」

サラ「うん！」

〈戦闘会話 イングリッドVSヨハン〉

ケイ「久しぶりね、ヨハン……！」

ヨハン「僕は毎日会っていたけどね」

ケイ「よくも……イングリッドとあの子達……そして沢山の人達に手を出してくれたわね……。あなただけは、素粒子レベルまで分解してあげる……！」

ヨハン「笑えないね、それ」

メガエラの攻撃でウオラーレはダメージを負う。

ヨハン「まずいね、これは……！」

ケイ「終わらせるよ、これで！」

アレクト、ティシス、メガエラの三機がウオラーレに攻撃を仕掛けた。

ユイ「みんなの力、見せてあげるよ！」

イングリッド「まずは私達よ！」

メガエラはビットやビームを放ち、ウオラーレにダメージを与えていく。

レナ「今度は私達！」

ユイ「はああああっ！」

次にアレクトがウオラーレに殴りかかり、蹴り飛ばした。

ティア「ティア達の番！」

サラ「いつけえええっ！」

ティシスが大蛇を纏わりつかせ、刃を食いこませて相手を切り裂いた。

さらに、竜巻を発生させて、ウオラーレを飲み込ませた

ティア「ケイ！」

レナ「これで決めて！」

ケイ「ありがとう、二人共！」

イングリッド「これが私達の……エリニウスの怒り……！」

ケイ「エリニウスの名において……メガエラが射抜く……！」

イングリッド&ケイ「ジャッジメント・アロー!!？」

メガエラは両肩の砲口部にランスを差し込み、最大出力で光の矢を放った。

ヨハン「……フッ……！」

ジャッジメント・アローを受けたウオラーレは爆発した……。

イングリッド「これで……」

ケイ「イングリッド……」

サラ「勝ったんだよね……？」

ティア「うん……」

サラ「やったあああつ！」

ユイ「ふう……」

レナ「お疲れ様、ユイ」

ユイ「うん、お姉ちゃん！」

零「やったな、ユイ！」

ユイ「皆さんのおかげです！ありがとうございます！」

青葉「水臭いですよ、ユイさん！」

ベルリ「僕達、仲間じゃないですか！」

ユイ「青葉君、ベルリ君……うん！」

いい笑顔だな……ユイのやつ……。

アマリ「零君もお疲れ様！」

零「ああ……。でも……さすが……に……」

そのまま俺は気を失った……。

アマリ「零君！」

ユイ「零さん！」

レナ「……大丈夫よ、眠っているだけみたい」

ユイ「良かった……」

アマリ「もう、零君ったら……」

アスナ「目が覚めたら、大いに叱ってやりましょう」

メル「そうですね！」

みんなはそれぞれの艦へと戻っていった……。

ーアマリ・アクアマリンです。

私達は仲間になったウーさんの前にいました……。

ウー「……」

ヴァン「……」

ウー「何も言わないのか？」

ヴァン「あ？何がだよ？」

ウー「私の……貴様に行った事を……」

ヴァン「お前がやった事なんて興味ねえ……」

ウー「ヴァン……」

ウー「だが、かぎ爪の野郎を殺すのは俺だからな」

ウー「いや、私だ……」

ヴァン「俺だつて言つてんだろ！」

ウー「私だ！」

ルナマリア「また始まった……」

アスラン「あまり、殺すとかいう言葉は聞きたくないんだけどな……」

シン「あの人達に関しては……言つても無駄だと思いますよ、アスラン」

ルナマリア「そう言えば、アマリ……。零の所に行かなくていいの？」

アマリ「零君ならもう目が覚めていますよ」

ステラ「え？じゃあ、何処にいるの？」

アマリ「ユイさん達の所です……」

―新垣 零だ。

俺はユイの様子を見に行こうとメガファウナの格納庫へ来たが……。

どうやら、イングリッドさんと話しているみたいだ……。

イングリッド「ごめんなさいね、ユインシエル……。ケイを取り戻すためとは言え、あなた達を攻撃してしまつて……」

ユイ「ユイと呼んでください……。私もレナもサラちゃん達も気にしていませんよ」
イングリッド「でも……」

ユイ「イングリッドさんはイングリッドさんの為すべき事をやった……。それだけの事です」

イングリッド「……ありがとう、ユイ……」

ユイ「……所で、零さんはどうして隠れているんですか？」

気づかれていたか……。

零「気づいていたなら言つてくれよ」

ユイ「身体は何ともありませんか？」

零「見ての通り、何ともねえよ」

ユイ「良かったです……。私のせいで無茶をしないでください」

零「ユイにだけは言われたくねえな……」

イングリッド「あなた……零という人よね？」

零「何ですか？」

イングリッド「あなたは……。ユイの事をどう思っているの？」

零「……そうですね……。ほっておけない、妹の様な存在だと思っています」

ユイ「零さん……。私も同じです。レナとは違う……。頼りになる、お兄ちゃんのような人です」

イングリッド「そう……。これからはよろしくね、零」

零「こちらこそ、イングリッドさん」

ケイ「イングリッド！」

すると、レナ、サラ、ティア、ケイが来た。

サラ「みんなでパーティーするんだって！」

ティア「ユイちゃん達も行こうよ！」

ユイ「うん、わかった！行きましょう、イングリッドさん」

イングリッド「ええ！」

レナ以外のみんなは食堂へと向かっていった……。

レナ「零がユイの事を妹の様に思っていたなんてね」

零「何だよ、嫉妬か？お姉ちゃん」

レナ「そんなんじゃないよ……。でも、ありがとうね、ユイを守ろうとしてくれて」

守ろうと……。か……。

零「俺は……。俺だって助けられたんだ……。グラハムさんに……」

レナ「グラハムの容態はどうなの？」

零「重症で意識が戻らないみたいなんだ……。今は刹那達やアーニー達がついてる。今から俺も向かうつもりだ」

レナ「そう、何だ……」

グラハムさん……。

刹那「F・セイエイだ。」

グラハムは未だ眠り続けている……。

アニュー「スメラギさん、グラハム少佐の容態は……」

スメラギ「しばらく目を覚まさないらしいわ……」

ロツクオン「マジかよ……！」

イアン「ふうー、折角、グラハムのためのガンダムを開発中だったのに……」

ニール「グラハム少佐のガンダム……？ おやっさん、それっていったい……？」

イアン「といっても改修しただけだがな。刹那ならよく知る機体だ」

俺ならよく知るガンダムだと……？

刹那「イアン・ヴァステイ……そのガンダムとはいったい……？」

イアン「聞いて驚くな……。そのガンダムの名はガンダムエクシアリペアIVだ！」
エクシアリペアIV……。

まさか……。エクシアがグラハムの機体になるとはな……。

第47話 金星から来た災い

―新垣 零だ。

俺はグラハムさんの容態を見るためにプロトレマイオスの医療室まで来ていた。

グラハム「…」

零「グラハムさん、すみません…俺の…俺のせいで…！」

アーニー「グラハム少佐は…そう思っていないよ」

アーニー「！」

零「どうして…そんな事がわかるんだ？」

アーニー「別世界とはいえ、僕はグラハム少佐の部下だったからね。それと僕とジンの目標でもあった…」

零「目標…」

アーニー「彼は君でなく、他の誰かであの状況に陥っていてもああしていたと思うよ」

零「強いんだな…グラハムさんは…」

アーニー「うーん、でも、グラハム少佐はまだまだ弱いつて言っていたよ、今の自分があるのは刹那さんのおかげで言っていたし」

零「刹那の……？」

アーニー「刹那さんが彼に本当の道を教えたから自分は変わったと言っていたね」

零「本当の、道……」

刹那「…… 本人がいない所で噂話か？」

刹那が来た……。

アーニー「あ、ご、ごめんなさい、刹那さん……！」

刹那「気にはしていない……。それよりも、グラハムがその様な事を言っていたとはな」

零「刹那自身は自覚はないのか？」

刹那「…… 俺は俺のできる事をしたまでだ」

零「自分のできる事、か……」

刹那「零……。グラハムの事で後悔するよりも前に進め……。グラハムはまだ死んでいない、必ず目を覚めます……。だから……」

零「……」

刹那「生きろ、そして、取り合え。そうすれば道は開ける」

零「…… フツ」

刹那「…… ? 何かおかしな事を言ったか？」

零「いや……刹那からそんな言葉を聴けるなんてな、いつも無愛想なのにこういう時は普通の人みたいに見えるよ。まあ、ヒイロとかよりマシだけど……」

刹那「フツ……そうか、所で零、すぐに逃げろ」

零「……は？」

ヒイロ「……誰が誰よりマシだ？」

ヒ、ヒイロ……!!?

零「い、いたのかよ、ヒイロ！それならそうと云ってくればいいのに……」

ヒイロ「ここには寝ている者もいる……。零、トレーニングルームへ来い……。いいな

？」

それだけ言い残すとヒイロは医療室を立ち去った。

アーニー「……ドンマイ、零君」

刹那「……しっかりと説教を受けて来い」

零「……マジかよおおっ……！」

この後、俺はマジで死にかけた……。

ードニエル・トスだ。

私達は他の艦長方とシグナスの艦長室にいた。

ドニエル「……しかし、思い切った決断をしましたな……」

倉光「何がでしょうか？」

スメラギ「今までエクスクロスの異界人にとって最大の目的は元の世界への帰還でした。ですが、あなた方は自ら望んでこのアル・ワースへ戻ってきました」

倉光「一応ですが、帰還の術がある事は確認しましたしね。加えて、対ゾギリア戦略の一環……カッピング機を奪われた事に対する責任といった理由もありました。とは言いながらも青葉君とデイオの覚悟を見せられて、腹をくくったわけですけどね」

ジェフリー「だからと言って、簡単にできる事ではありません」

名瀬「ええ、素直に敬意を払わせていただきます」

倉光「ええいえいえ……。逆の立場でしたら、あなた方も同様な選択をなさったと思いますよ。特にうちのカップラーの役どころはベルリ君か、アイーダ嬢あたりがやってくれたと予想します」

ドニエル「……でしような。その様が容易に想像できます」

倉光「ともあれ、ミスルギの中で特異な地位にあるゾギリアの動きは今後也要注意でしようね」

名瀬「そして、アメリカ軍本隊が事実上、壊滅した今、ミスルギは我々は標的として

くると思われます」

スメラギ「クリム大尉達の状況はどうなってますか？」

ドニエル「残存戦力をまとめ上げて、トワサンガへ向かったとの事です」

ジェフリー「なるほど。。。反ドレットの立場にあるレイハントン派を味方につけるといのですね」

ドニエル「なお、クリム大尉からはこちらもそれに合流するように依頼されています」
オルガ「どうしますか？」

ドニエル「・・・姫様は、それに賛成しています」

名瀬「アイーダが？」

ドニエル「姫様は、トワサンガのパイロットの焦りが気になると言ってます。何かトワサンガに異変が起きているのでは・・・と」

スメラギ「アイーダもベルリ程じゃありませんが、直感で動く所がありますね・・・」

ドニエル「ですが、それに乗るのも悪くないと今の私は考えています」

ジェフリー「ほう・・・」

ドニエル「トワサンガ王家の血筋を引き、アメリカ軍総監の娘として育った事と関係するか、わかりませんが・・・あの姫様は人の上に立つ素質があると今は見えています」

オルガ「突撃娘も成長したってわけだな」

ドニエル「これは個人的な所感ですが、彼女はどこまで伸びるか見てみたい気持ちがあります」

倉光「わかりました。状況を調査するためにも我々も宇宙に上がりましょう」

ドニエル「では、姫様の直感が当たる事を願うとしますか：」

祈っていますよ、姫様……。

「クリーム・ニツクだ。」

私は今、シラノー5のレイハントン家屋敷で話していた。

ロルツカ「：。わかりました、クリーム・大尉。あなた方の支援を約束します」

クリーム「感謝する、ロルツカ・ビスケス。事が成った暁には、レイハントン派の支援とあなた方のレコンギスタに協力しよう」

クリーム「なお、あなた方に一つ確認したい事がある」

ミラジ「何でしょうか？」

クリーム「ビーナス・グロウブも、アル・ワースに來ているのか？。そして、あなた方は彼等とも繋がっているのでは？」

ロルツカ「：：」

ミラジ「：：」

クリム「ヘルメスの薔薇を管理し、金星付近でフォトン・バッテリーを生産するビーナス・グロウブ：：。その存在は無視できない。そのビーナス・グロウブがアル・ワースの戦いに参加する事になれば、また一荒れ起きるだろう」

フラミニア「何故、それを私達にお尋ねするのですか？」

クリム「まどろっこしい事はやめよう。私はあなたに聞きたい、フラミニア・カツレ」
フラミニア「私に：：ですか？この天才の目は誤魔化せないぞ」

フラミニア「：：」

クリム「あなたがライヤに託したモビルスーツ：：。レイハントン派が事前に用意できるようなものではない。オブライト中尉」

オブライト「メガファウナのエンジンアに内密で調べてもらいましたが、ドレット軍で開発されな痕跡もなかった。となれば、金星製と見るのは当然だろうと思います」

フラミニア「あなたは：：？」

クリム「オブライト・ローレン：：。私を手伝ってくれている異界人だ。あの：：キオ・アスノという少年と同じ世界から来たらしい」

ロルツカ「フラミニア：：」

ミラジ「Gールシファーは、ドレット軍の試作機を横流ししたものではなかったのか？」

フラミニア「…そこまで調べがっていたのですね…。さすがです、クリム大尉」
クリム「真相を話してもらおうか？」

フラミニア「…お察しの通り、私はビーナス・グロウブの人間です」

ロルツカ「なんと…」

フラミニア「ロルツカさん、ミラジさん…。今まで黙っていて申し訳ありません。私はトワサンガに潜入し、地球圏の状況をビーナス・グロウブのジット団に送っていました」

オブライト「そのジット団とは？」

フラミニア「ビーナス・グロウブの技術者集団であると同時にレコンギスタを強行しようとする一団です。私は定期的に彼等と連絡を取り、レコンギスタの準備を進めてきました。私に預けられたいくつかの機体はその戦力として使われるはずのものだったのです」

クリム「ヘルメスの薔薇の遺産の最たるものであるG系を提供するとは、さすがはビーナス・グロウブの技術者集団だ」

フラミニア「彼等は、それなりの戦力を地球圏に移動させている最中にアル・ワース

に転移させられました。そして今、機は熟した……とこのシラノー5へ向かってきています」

クリム「地球に降りたトワサンガの連中が慌ただしかったのは、それが原因か」

ロルツカ「トワサンガとビーナス・グロウブ……。共にレコンギスタを望む両者だが、そう簡単に協調は出来ないだろう」

フラミニア「私もそう考え、レイハントン派と繋がったのです」

オブライト「だが、こうして真実を話すのは君の中に迷いが生まれたためと見る」

フラミニア「否定はしません。ですから、クリム大尉……。ジット団の一員として、私はあなたに協力を依頼します」

オブライト「どうなされますが、クリム大尉？」

クリム「彼女は賢明な女性だ。そうやって頼られた以上、このクリム・ニック……。期待に応じてみせよう」

「ノウトウ・ドレットだ。」

「よもやビーナス・グロウブが仕掛けてくるとは……！」

「ノウトウ「ビーナス・グロウブ……！いきなり部隊を展開させるとは！」」

「シヤア（あれが金星圏に移住する一団、ビーナス・グロウブ……。リギルド・センチュリーにおいて最も地球から離れた所で生きる人類か……）」

「ノウトウ「マツシユナー中佐！向こうが示威行動に出るのなら、こちらも防衛部隊を出せ！」」

「マツシユナー「了解です！」」

「こちらでもビルスーツ部隊を出した。」

「ヤザン「モビルスーツが出て来たぜ、隊長。どうするつもりだ？」」

「キア「やれやれ……。俺としては挨拶に来ただけだつてのに手荒い歓迎だな」」

「ヤザン「何言つてやがる。明らかにケンカをふっかけてるのはこつちだろうがよ」」

「ラカン「愚かな連中だ。こちらに大義名分を与えるとは」」

「キア「そういう事だ。自衛という名目で仕掛ける口実が出来た。今後の事もある！連中にジツト団の力を見せてやれ！」」

「イオク「了解！」」

「こ、攻撃して来た……！」

それにこちらのモビルスーツ部隊が……！

ノウトウ「何だと!?？」

マツシユナー「防衛部隊が一瞬で……」

シヤア「よく訓練されている部隊だ。彼等の本気がうかがえる」

ノウトウ「連中は何を考えている!?？我々とやり合うつもりか!」

マクギリス「違いますね……。これは彼等の精神的な駆け引きでしょう」

ノウトウ「何……?」

マツシユナー「ドレット將軍! 所属不明のモビルスーツがシラノー5から出ました
!」

ークリーム・ニツクだ。

私とミック・ジャックはダハックとトリニテイというモビルスーツで出撃した。

クリーム「悪くないな、このダハックという機体! この私に相應しい性能だ! そちらは

どうだ、ミック・ジャック!

ミック「いい機体ですよ、このトリニテイも」

クリーム「この様な贈り物をもらった以上、フラミア女史の期待に応えねばなるまい

!

ヤザン「テンションの高いのが出て来たぜ」

イオク「陰気なトワサンガの連中とは違うようですね」

キア「ああ。それにあのモビルスーツはビーナス・グロウプのものだ」

クリム「その通りだ。我々はフラミア・カッレの頼みでここに来た」

キア「フラミア：。トワサンガに潜入した同志か」

クリム「ジツト団の隊長、キア・ムベツキとお見受けする。私はアメリカのクリム・ニツク大尉だ」

キア「そのクリム・ニツクが俺に何の用だ？」

クリム「単刀直入に言おう。ミスルギ軍に合流するのは考え直してもらえないだろうか」

キア「なぜ、そんな事を？」

クリム「これ以上、異界人である我々がアル・ワースに戦いを広げるのは避けるべきだからだ」

キア「話にならないな。異界人であるからこそ、俺達は元の世界への帰還の術を求める。その目的のためにはこちらの世界がどうなろうと知った事じゃないな」

クリム「その言葉がもつともだ。こんな建前の理由で、貴官等を止められるとは思っ

ていない」

キア「なら、本音で話すんだな」

クリム「： ミスルギのボンクラ統治者をこれ以上、つけあがらせるのは我慢ならん。奴を打倒するために貴官等の協力を要請する」

キア「なるほどな。そっちの方が、ずっと納得できる理由だ」

クリム「わかつてくれたか。ならば：」

キア「それとこれのは話は別だ。ミスルギのボンクラ統治者はともかく、あそこには俺達を仲介してくれた人間もいる。その義理を果たす必要がある」

クリム「金星まで行きながら、古風な事を：！」

キア「そういう事だ。悪く思うなよ、クリム・ニツク。各機へ。あの機体は、俺達の雇い主の敵だ。片付けて手土産にするぞ」

イオク「たった二機で交渉に来るとはバカか、それとも余程の大物か：」

ラカン「油断するなよ、イオク。二人共、腕は立つようだ」

クリム「やはり、こうなるか：。面白くないがな」

ミツク「この結果を予想していたのですか？」

クリム「うまくいけば、儲けもの：。だな、失敗したからといって、連中やミスルギに尻尾を振るつもりは毛頭無い！やるぞ、ミツク・ジャック！フラミニア女史への義理

を果たした以上、ここからは好きにやらせてもらう！この俺が天に才を与えられたものであるなら、必ずここも切り抜けられる！それに彼等も来たようだ！」

我々の背後からローゼン・ズール、グフ・イグナイテッド、ジェノアスOカスタムが現れた。

アンジエロ「ご無事か、クリム大尉」

クリム「迅速な出撃指揮……さすがと言おう、アンジエロ大尉」

オブライト「ここからは我々も援護します」

ハイネ「話を聞いても退かないのなら……やるしかないな！」

クリム「君達も協力、感謝するよ。オブライト中尉、ハイネ・ヴェステンフルス」

ハイネ「俺達を拾ってくれた借りは返さないといけませんからね」

ミック「私も了解です、クリム大尉。大尉の天才ぶりを私は信じます」

クリム「さあ行くぞ、ジツト団！レコンギスタをしたいのなら、この天才クリムを倒してからにするのだな！」

戦闘開始といこう！

〈戦闘会話　オブライトVS初戦闘〉

オブライト「レミ……。俺はこの世界に転移して来た……。どうやら、まだそちらに行けない用事があるようだ。だから、許してくれ、そして……。俺を見守っていてくれ、レミ」

〈戦闘会話　ハイネVS初戦闘〉

ハイネ「どいつもこいつもミスルギ、ミスルギって……。ちよつとは自分の力で元の世界へ帰還しようとは思わないのかよ！」

〈戦闘会話　アンジェロVS初戦闘〉

アンジェロ「見ていてください、大佐……。あなたが変わろうとするように私も変わります……。！戦争を広めようとするものはこの私が相手になるぞ！」

戦闘から数分後の事だった……。

キア「ヤザン、ラカン、イオク……。後は任せる。俺はフルムーン・シップに戻り、トワサンガへの入港の準備をする」

ヤザン「いいのか？あのクリーム・ニックつてのはかなり楽しめる獲物だぞ」

キア「俺は戦士でも、狩人でもないんでな。目的の遂行を第一にする。だが、お前達はすきにすればいい。それが俺達の間での契約だからな」

敵の指揮官機が撤退した……？

イオク「了解です、キア・ムベツキ。そうさせてもらいますよ」

ラカン「さすがはジツト団のリーダーだ。金星の人間達が、あの男に乗るのも理解でききる」

マツシユナー「ジツト団の隊長機、後退していきます」

シャア「彼等は友軍となるはずの我々に自分達の力を見せつけに来たのだろう」

ノウトウ「ビーナス・グロウブめ……！元の世界に帰還した後の事を考え、レコンギスタのイニシアチブを握るつもりか！」

マクギリス「ですが、ここで部隊を動かしたのは彼等のミスかも知れない……」

ハイネ「クリム大尉！こっちに接近する艦がありますよ！」

クリム「計算通り！つくづく天才だな、俺は！」

現れたのはエクスクロスの艦だった……。

―新垣 零だ。

宇宙についた俺達を待っていたのは戦闘だった。

クリム「待っていたぞ、エクスクロス！」

ドニエル「そのモビルスーツ、クリム・ニック大尉とミック・ジャックか！」

クリム「見ての通り、ビーナス・グロウブと交戦中だ。加勢を頼むぞ」

ドニエル「ビーナス・グロウブだと！」

倉光「リギルド・センチユリーの金星圏の住民達……。そんな人間もアル・ワースに來ていたのか……」

クリム「残念ながら、彼等もミスルギの戦力になるそうだ。よって、我々の敵という事だ」

つ……！ 奴等、撃ってきやがった！

ステア「ノーツ!!？」

ギゼラ「ビーナス・グロウブ、こちらに仕掛けてきます！」

ドニエル「全く……！あの天才殿に付き合っているとこちらの生命が幾らあっても足りなくなる！」

副長「どうします、艦長？」

ドニエル「応戦するしかなかろう！各機を発進させろ！」

俺達が出撃した……。

ルナマリア「あのグフ・イグナイトッドって…」

シン「ハイネさん…!?」

ハイネ「久しぶりだな、シン、ルナマリア、アスランも」

アスラン「お前もこの世界に来ていたのか」

ハイネ「それにキラ・ヤマトとガイアガンダムか…」

キラ「…」

ステラ「あ、あの…その…」

ハイネ「俺を討ち取った腕はなかなかのものだったぞ」

ステラ「え…」

ハイネ「あれは戦場で起こった事だ。俺は恨んでなどいない…。この別世界で俺達の世界の事情を持つてきたくないからな」

ステラ「ありがとう…！」

キラ「僕からもありがとうと言わせてもらおうよ、ハイネ」

ハイネ「ふっ、あんたとは訓練で対戦して見たいぜ、キラ」

アセム「そのジェノアス…オブライトか!?」

キオ「オブライトさん！」

オブライト「アセム…それにキオか…。久しぶりだな」

セリック「生きてきたなら、連絡ぐらいくださいよ、水臭いですね！」
オブライト「ふっ、再会をもっと盛大にしたかったんだ、許してくれ」

アセム「本当にお前らしいな、オブライト」

リデイ「あのモビルスーツは……」

フロンタル「アンジエロか……？」

アンジエロ「そうです、大佐。お久しぶりです」

フロンタル「君が何故、クリム大尉と……？」

アンジエロ「私も変わろうとしているのです……。バナージ・リンクスによって、変わろうとしているあなたのように……」

フロンタル「そうか……。やはり、君は素晴らしいよ、アンジエロ」

アンジエロ「お褒めの言葉をいただき、光栄です」

エル「所である人達って金星から来たんだよね……」

ピーチャ「信じられないぜ！見た事のあるモビルスーツだらけだ！」

プル「(何だろう……。気持ちが悪いわ……)」

マリィダ「(このおかしい感覚……。何だこれは……。?)」

バナージ「ビィナス・グロウプというのはネオジオンの事なのか……。？」

カミーユ「彼等はヘルメスの薔薇の管理者だと聞く。その技術で宇宙世紀のモビル

スーツを復元したのだろう」

三日月「明らかに俺達の世界のモビルスーツもいるよ」

ジュリエッタ「レギンレイズ……もしや、イオク様ですか？」

イオク「ジュリエッタか！何故、貴官が鉄華団と共にいる!?？」

ジュリエッタ「彼等は仲間です。それ以外何者でもない」

イオク「鉄華団は我等の敵……。我が部下の仇なんだぞ！それにラスタル様を裏切る

気か!?？」

ガエリオ「何を言っているんだ、お前は？ここは俺達の世界ではない。ラスタルも関係ない」

イオク「その声はヴァイダー……！貴官までもが……！」

明弘「……」

ラフタ「落ち着いて、明弘！」

アミダ「私等の仇はあんたが取ってくれたんじゃないか」

名瀬「それに俺達の戦いは終わったんだ、それでいいだろう？」

明弘「……俺はもう憎しみで戦うつもりはありませんよ」

ラフタ「さっすがは明弘！後でギューってしてあげる！」

明弘「ひ、人までそんな事言うな！」

シノ「たくよ……。羨ましいよな、明弘の奴……」

三日月「シノも元の世界に戻って、ヤマギにしてみらったら？」

シノ「やめろ、三日月。それこそ人前で言うな！」

ヤザン「そこにいるのはカミーユ……！それにジュードか！」

カミーユ「ヤザン？！お前もアル・ワースに来ていたのか！」

ジュード「ヤザンさん！シャングリラにいた、あのヤザンさんか？！」

カミーユ「あいつを知っているのか、ジュード？」

ジュード「まあね。と言っても、仲良しって言えるような関係じゃなかったけど」

ラカン「エウーゴのジュード・アーシタか！ここで貴様とまた戦えるとはな！」

マシユマー「ラカン・ダカラン！貴様もいるか！」

ラカン「マシユマー・セロ！まさか、お前が Rond・ベルの連中と行動を共にしてい

るとはな！」

マシユマー「ここは我々の世界ではない。組織のためではなく、私は義と愛のために

戦う！」

ラカン「フン…… 以前のお前に戻ったようだな。それを知れば、あいつも喜ぶかも知

れん」

カミーユ「ヤザン！お前が何故、ビーナス・グロウブにいる？！」

ヤザン「このアル・ワースに跳ばされた後、ネオ・ジオンの連中共々、あいつ等に拾われたのさ。今は傭兵みたいなものだが、それなりに楽しくやらせてもらっている」

カミーユ「そうやって遊び気分ですアル・ワースに戦いを広げるか！」

ヤザン「生きるために戦う事の何が悪い！今の俺は軍人じゃあなく、一人の人間だ！好きにやらせてもらうさ！」

アムロ「宇宙世紀の人間に告げる。俺は地球連邦軍に所属していたアムロ・レイだ。今、俺達がいるエクスクロスは元の世界への帰還の当てがある。これ以上、アル・ワースに無用な戦いを広げないためにも、こちらに合流して、事態の収束に協力してくれ」

ヤザン「生憎だったな。帰還の手段なら、俺達にもある」

カミーユ「ミスルギに協力する事で、それを手に入れようとするか！」

ジユドー「そのやり方が危険だつてのがわからないのかよ！」

ラカン「ミスルギが世界の覇権を握るだけの力を持っている事は既に承知している。ならば、より効率の高い手段である彼等への協力を選ぶのが道理だろう」

ヤザン「俺の場合、ジット団のやり方が性に合っているのも理由だかな」

明弘「イオク・クジャン！さつきも話した通りだ！俺達は元の世界へ戻る為に手を取り合う必要があるんだ！」

イオク「黙れ……」

オルガ「あ…？」

イオク「黙れ、黙れ!!？俺を侮辱し、沢山の部下を殺め、挙げ句の果てには俺をも討ち取った貴様等に手を取り合えるものか！ジュリエッタ、ヴィダール… お前達もだ！」

ジュリエッタ「… 本当にバカで邪魔ですわね、イオク様」

ガエリオ「ギャラルホルンを代表して謝るよ、みんな…」

零「要するにあのイオクって奴は口で言ってもわからないんですよ？だったら、相手をするしかない！」

ベルリ「どうして、自分達のやってる事が取り返しのつかない結果に向かっているのかわからないんですか、あなた達は！」

マシユマー「無駄だ、ベルリ君。彼等に君のような判断を求めても」

アムロ「俺達は彼等を納得させるだけの言葉は持っていない…」

ヴァン「そう言う事だ！話がわかんねえ奴をぶっ飛ばせばいいだけだ！」

クリム「腹は決まったかな、エクスクロスの諸君！」

こ、こんな時でも平常心であるクリム大尉って…。

アイーダ「クリム大尉…。あなたと言う人は…」

ラライヤ「あの人も、ある意味ではベルリと同じように過程を飛ばして結果に辿り着

く人ですね」

ドニエル「やるしかないぞ、各機！ビーナス・グロウブを迎撃するんだ！」

ベルリ「まったく…！どいつもこいつも…！」

青葉「ベルリ…？！」

アルト「キレイなよ、ベルリ。神様でもない俺達に出来る事は限られてるんだからよ」
ベルリ「わかってる…！わかってるけど…！こう言う手段しか、物事を解決できないようじゃ、シャア・アズナブルを否定できないじゃないか！」

…ベルリ…

俺達は戦闘を開始した。

〈戦闘会話　マリーダVS初戦闘〉

マリーダ「（この感覚…一体何なのだ…？）」

〈戦闘会話　三日月VSイオク〉

イオク「あのガンダムのパイロットか！貴様のせいで私の部下達は…」

三日月「え？俺何もやってないけど」

イオク「あくまでシラを切るといふのか、許さんぞ！」
三日月「…もういいや、メンドくさいよ、あんた」

〈戦闘会話 明弘VSイオク〉

明弘「イオク・クジャン…お前は！」

イオク「この俺を倒したからといって、いい気になるな！あの時の借りを返させてもらう！」

〈戦闘会話 名瀬VSイオク〉

名瀬「目標、イオク・クジャン！」

オルガ「兄貴…」

名瀬「悪いな、オルガ。明弘にああ言ったが、俺も家族をやられて腹が立ってんだ…付き合ってくれるか？」

オルガ「当たり前前だ、俺も兄貴達をやられてはらわたが煮えくり返していたところだ！」

〈戦闘会話 アミダVSイオク〉

アミダ「私と名瀬の事はいい……。だけど、他の娘達に手を出したとなると許してはおけないね！」

〈戦闘会話 ラフタVSイオク〉

ラフタ「私、あんた嫌いだから……。さっさと消えて！」

〈戦闘会話 ガエリオVSイオク〉

イオク「始めからお前の事は信用できなかったのだ、ヴィダール！」

ガエリオ「今の俺はガエリオだ。イオク・クジャン……。邪魔をすると言うのなら容赦はしない！」

〈戦闘会話 ジュリエッタVSイオク〉

ジュリエッタ「イオク様、あなたは別の世界にまで来て迷惑をかけてくれますね……」

イオク「迷惑……。？迷惑だど!?俺は一度も迷惑などかけていない！」

ジュリエッタ「……。もういいです。さっさと消えてください」

〈戦闘会話 オルフエンズ以外のガンダムVSイオク〉

イオク「別の世界のガンダム… 例え別世界だとしてもガンダムは俺の敵だ！」

ガンダムグシオンリベイクの攻撃でレギンレイズはダメージを負った。

イオク「大義を果たせないまま、負けるものか…！」

ジュリエッタ「その機体ダメージでは動かすのがやつとでしょう、潔く投降してください」

イオク「ふざけるな！俺は決して投降する気は無い！」

そう言い残し、レギンレイズは撤退した…。

オルガ「あいつは死んでも変わらねえな」

ジュリエッタ「イオク様の事は私が責任を持って対処します、ですから…」

明弘「そう気負うな、奴に関係があるのは俺も同じだ、手伝うぞ、ジュリエッタ」

ジュリエッタ「ありがとうございます、明弘さん」

ラフタ「むう…。」

ガエリオ「これはうかうかはしてられないな」

〈戦闘会話 バナージVSヤザン〉

バナージ「ミスルギの危険性に気付きながら、あなたは……！」

ヤザン「俺が俺の道を選んで何が悪い！止めたければ力付くぞ！」

ゼータガンダムの攻撃でハンブラビにダメージを与えた。

ヤザン「軍も組織も関係ない世界……！ここは俺にとつては楽園かも知れんな！」

カミーユ「ヤザン……！お前と言う男は！」

ヤザン「今日の所は、あいさつみたいなものだ！次の機会を楽しみにしてるぜ、カミーユ！」

ハンブラビは撤退した……。

エル「自由過ぎるね、あの人……」

ニール「サーシエスの野郎にそっくりだな……」

ビーチャ「あれじゃ、解き放たれた野獣だぜ！」

ジユドー「怖い……。無邪気に戦う存在ってのは……」

〈戦闘会話 フロンタルVSラカン〉

フロントル「過去のネオ・ジオンの兵士か」

ラカン「過去の……？ 貴官は一体……？」

フロントル「ネオ・ジオンから解き放たれた者とだけ言っておこう」

〈戦闘会話 アンジェロVSラカン〉

ラカン「そのモビルスーツは宇宙世紀のものだな！」

アンジェロ「そうだ、だが時代が違うがな」

ラカン「時代が違うだと……？」

アンジェロ「過去の亡霊……とまでは言わないが、ここからネオ・ジオンの歴史が続いていたとはな……」

ダブルゼータのハイメガキャノンでドーベン・ウルフにダメージを与えた。

ラカン「ジュード・アーシタ！ 今日の所は退いてやる！ だが、次の機会には必ずお前に雪辱を果たすぞ！」

ジュード「恨み言だけでも迷惑なのに、さらにそれを別の世界にまで引きずるなんて……」

マシユマー「あれは、そう言う男だ。気の済むまで相手をしてやるしかない」
プル「…」

マリーダ「…」

ミネバ「どうしたんですか、二人共」

プル「な、何でもないよ。(何だろう…。どんどん気持ちが悪くなる…。)」

マリーダ「(プルも感じているのか、このゾワゾワとした感覚…。)」

フェルト「敵部隊の壊滅を確認しました」

ドニエル「状況を確認に来たが、厳しい現実を突きつけられたな…。」

クリム「そう言うな、艦長。こうなった以上、私とミック・ジャックもそちらに合流する」

ハイネ「勿論、俺達も合流させてもらうぞ」

クリム「これでミスルギにはビーンズ・グロウプがついたが、これで戦力バランスも釣り合うだろう」

青葉「あの自信家ぶり…。ディオもびつくりだぜ…。」

ノレド「こんな状況でも気落ちしてないのが、クリム大尉の凄い所よね」

アイーダ「そちらの希望はわかりましたが、残ったアメリカの兵力はどうするのです？」

ミック「そつちはトワサンガのレイハントン派にかくまってもらってるよ」
クリム「戦いの舞台はアル・ワースの大地だ。我々さえ立ち去れば、ここが戦場になる事はない」

セシリー「その辺りは、ちゃんと考えているのね……」

アマリ「天才つて、すごいんですね……」

零「これは充分な戦力アツプだな」

クリム「何を言うんだ、零少年。君も天才だろう？」

零「いえ、俺は天才では……」

クリム「この天才の策をわかった君が何を言うんだ」

零「では……素直に受け取っておきます」

アスナ「照れちやつて……可愛いところもあるのね」

零「うつせえよ！」

すると、トワサンガのモランが現れた。

リンゴ「トワサンガのモラン……」

ケルベス「おいおい、また亡命者か？」

フラミニア「こちらはフラミニア・カツレです。お話ししたい事がありますので、着艦許可を願います」

ラライヤ「フラミイ！」

ベルリ「ラライヤさんの知り合いのフラミイさんか……」

アイーダ「艦長、着艦の許可を」

ドニエル「こちらはメガファウナ艦長のドニエル・トスだ。フラミニアさんは、誘導に従ってください」

フラミニア「ありがとうございます」

メル「このまま、この宙域に留まれば、余計なトラブルを引き起こします。各機は離脱してください」

カミーユ「……」

アムロ「後にしろ、カミーユ。奴との決着は、いずれつける」

カミーユ「了解です」

俺達はこの場を離脱した……

シヤア「アムロ、カミーユ……。私を感じたか……。お前達も認識しただろうな……。

人は地球を離れても、変化がなかった事を……。だから、私は戦いを選ぶのだ……」

マクギリス「何故、私は出撃しなかった……。何故、ガエリオを殺しに行かなかった……？何を躊躇っているのだ、私は……。カルタ……」

離脱した俺達はそれぞれの艦へと戻り、メガファウナの格納庫に集まった。

シン「ハイネさん！」

ハイネ「随分、居心地のいい部隊だな、ここは」

ステラ「…ハイネ」

ハイネ「お前がステラという子か」

ステラ「ごめんなさい… 本当にごめんなさい…」

ハイネ「だから、謝るなって… 気にしていないから」

ステラ「でも…」

ハイネ「…それなら、俺の言う事を聞いてくれるか？」

ステラ「うん…」

ハイネ「笑顔でいてくれ、シンと一緒にいる時のように」

ステラ「…うん！」

ハイネ「ステラはシンの事が好きか？」

ステラ「大好きだよ！」

シン「ステラ…」

ハイネ「シン、ステラを泣かしたら俺が許さないぞ」

シン「わかっていきます！」

メリツサ「むうー……」

ルナマリア「嫉妬しないの、メリツサ」

メリツサ「シンの女たらし」

シン「ち、違うって、ルナ、メリツサ！」

ステラ「シンは私の事嫌い？」

シン「い、いや……だから……！」

アルト「シンの意外と罪な男だな」

零「右に同じく」

シン「お前ら！」

セリツク「どうやら、あなたもあの世に行きそびれたようですね」

オブライト「別に構わない……。俺にはまたやる事が出来たのだからな」

アセム「そうだな……。頼りにしてるぜ、オブライト」

オブライト「ああ……！」

フラム「……」

オブライト「君がフラムだな？」

フラム「ええ……」

オブライト「これからよろしく頼む」

フラム「私のせいであなたは死んだのよ？」

オブライト「ハイネも言っていたが、それは俺達の世界の話だ。この世界にまで持ち込む気は無い」

フラム「強いよね、あなたは……」

オブライト「仲間が……俺を強くしてくれたのさ」

アンジエロ「大佐……！」

フロンタル「アンジエロ……。再会できて私も嬉しいよ」

アンジエロ「はい。大佐、私も戦います。平和な世が来るまで……」

フロンタル「微力ながら、私も手伝おう」

アンジエロ「バナージ・リンクス」

バナージ「はい……？」

アンジエロ「感謝する……。私と大佐を変えてくれて……」

バナージ「変わろうとしたのはあなた達自身ですよ」

アンジエロ「……そうか」

リディ「（全く、本当にすごいよ、お前は……）」

ラライヤ「フラミィ！元氣それで何より！」

フラミニア「ごめんね、ラライヤ……。今日はあなたにお別れを言うためにここに来た

の

「ラライヤ「え…」

「フラミニア「私はね… 今日あなた達が戦ったジット団の人間なの」

ベルリ「ジット団…」

「フラミニア「ジット団はビーナス・グロウブの中でもレコンギスタを強行しようとしている一派で私も彼等に合流するつもりよ」

「アイーダ「つまり、私達の敵となるという事ですね？」

「フラミニア「ええ…」

「ラライヤ「そんな… フラミイ… どうして…」

「フラミニア「それがビーナス・グロウブに生まれた私の戦いな」

「ベルリ「地球に住んでいた僕にはわかりません…。 どうして、宇宙に住む人達はそんなにもレコンギスタをしたがるのか…」

「フラミニア「母なる星への憧れ… 聖地の奪還…。 それぞれの理由はあるけれ

ど…。 私は… 人間の心と身体が地球に降りたがっているからだと思うの」

「アイーダ「心と身体が…？」

「フラミニア「ビーナス・グロウブで生まれた人間達の中に突然変異が生まれるようになった…。 原因は、低重力環境や宇宙線の影響と言われているわ。 宇宙世紀から遙

か未来のリギルド・センチュリーでも人は、完全には宇宙を生活の場にする事は出来なかつた証ね……」

カミーユ「……」

アムロ「……」

フラミアニア「だからと言って、地球の人達との衝突を引き起こしてまでレコンギスタをする事が正しいかはわからない。だけど私達にはそうするしか方法はないの」

刹那「戦う以外のやり方はないのか？」

フラミアニア「それは私達を迎える側である地球の人達の問題だと思うわ。取り敢えず、レコンギスタの問題は後回し……。まずは元の世界への帰還のためにジット団はミスルギにつくことにしたわ」

ライヤ「フラマイ……」

フラミアニア「さようなら、ライヤ……。またいつか、あなたと会える事を願うわ。そして、その時は敵同士ではなく、友人として会いたいわね……」

フラミアニアさんは歩き去った……。

ライヤ「……」

ノレド「ライヤ……」

ベルリ「(問題は後回しじゃないですよ、フラミアニアさん……。目的を果たす手段とし

て戦う……。そんなやり方をしていたら、人類は戦争を止める事が出来ないじゃないですか……」

クリム「顔を上げろ、ベルリ・ゼナム。落ち込んでいる暇はないぞ」

ケルベス「アメリカの天才はこんな状況でまも元気だな」

クリム「当然だ。私はアメリカ軍壊滅の借りを返すという使命もある。ジット団本隊もアル・ワースへ降下する。それを迎え撃つためにも我々も帰還しよう」

オズマ「クリム大尉の言う通りだ。異界人を含むジット団が合流するすれば、ミスルギはまた戦力を増大させる事になる」

ルカ「F」「戦いはさらに広がるんですね……」

克蘭「いつまでも、こんな状況を続けるわけにはいかんな……」

カナリア「対ドアクダー部隊と合流して、早急に対策を立てるべきだと思う」

クリム「この逆境に対しても闘志を失っていないのは、流石だな。それでこそエクスクロスだ。私とミック・ジャックやアンジェロ大尉達も加わり、戦力は強化させる。その力で状況を打開しよう」

ベルリ「…… やりますよ、クリム大尉。前を向いて、僕達は進むしかありませんからね」

アムロ「ベルリ……」

ベルリ「僕はシャアの考えやジット団のやり方を否定します。そのためにも、この戦

い：：必ず終わらせましょう！」

ーキア・ムベツキだ。

俺はジツト団のフルムーン・シツプブリツジまで帰ってきた。

クン「：：お帰りなさい、キア隊長」

キア「ヤザンとラカン、それからイオクが負けたと聞いたぞ、クン・スーン」

クン「噂に聞くエクスクロスが相手だそうですね」

キア「あそこで後退したのは悪手だったか：：俺の勘も鈍ったものだな。まあいい：：。地上に降りれば、連中と戦う機会など幾らでもある」

すると、グレミー・トトという男が歩いて来た。

グレミー「戦いを好む様はラカンやヤザンと同じだな、キア・ムベツキ」

キア「グレミーか：：。言っておくが、俺は戦いが好きなんじゃない。生きるために戦うだけだ。そして、俺の生命はジツト団の皆とレコンギスタをするためにある」

クン「キア隊長：：」

キア「まあ：：。ピアニ・カルータの思想には賛同しているがな」

グレミー「戦いによって人類という種を鍛える：：か：：。愚かな大衆に期待をして

も無駄だと思うがな」

キア「地球の近くにいなながら、ちんたらやっていたトワサンガの連中を見ているとそれにもうなずける。取り敢えず、連中に俺の力は見せてやった。この後の会談は、精神的に優位な状態で臨めるだろう」

グレミー「その場には私も出席させてもらおう」

キア「構わんぜ。あんたはジツト団に協力する異界人の頭頭だしな」

グレミー「君達のやり方に口を挟むつもりはないさ。だが、会談の席には会いたい人間も顔を出すようなのでね…。」

会いたい人間だと…？

それはいつたい…。

第48話 それぞれの迷い

「キア・ムベツキだ。」

俺は今、会談会場でトワサンガのシヤア・アズナブルとマクギリス・ファリドと話していた。

キア「：：そちらの挑発があつたとはいえ、初対面の挨拶が少々乱暴なものになつてしまつたのは詫びる」

シヤア「あれが金星流なのかな、キア・ムベツキ？」

キア「隕石を地球に落とすのに比べれば、おとなしいものだと思うぜ」

シヤア「私の事も知っているようだな」

キア「ビーナス・グロウプにはそれなりに宇宙世紀の記録も残っているんでな。シヤア・アズナブル：：。赤い彗星と呼ばれた宇宙世紀の英雄：：。」

マクギリス「地球を滅ぼそうとする者が英雄か：：。」

シヤア「：：。」

キア「子供の頃に読んだ伝説の登場人物にこうして会えるというのは感慨深いな」

「シャア「私としては、君やトワサンガの人間達には謝罪しなければならない……。私の中途半端な行いのために後の世の人間である君達に要らぬ苦勞をかける事になったのを」

キア「氣負い過ぎなんだよ、あんたは。個人が世界の未来を決めるなんてのは俺から言わせれば、思い上がりだ。少なくとも今、俺とあんたは同じ世界、同じ時間で生きている人間だ。ざつくばらんに行こうぜ」

「シャア「……そうだな」

マクギリス「流石はジツト・ラボラトリイの技術保全局長、キア・ムベツキだ。君がジツト団の隊長に選ばれたのもその器の大きさのおかげと見る」

キア「……マクギリス・フェアド……。あんたの事はイオクから聞いたぜ」

マクギリス「……成る程、彼も来ていたのか……」

キア「あんたもやり方が違うとはいえ、世界を変えようとした……。シャア・アズナブルと同じ言葉をかけさせてもらう」

マクギリス「必要ないよ、私の計画は私の世界で潰されたのだからね……。唯一の友人に……」

キア「友人、か……」

シャア「君はその友人でさえ、君の計画に利用したと聞く……。そこまでして君はどの

様な世界を作りたかつたんだ？」

マクギリス「誰にも等しく権利を与えられる世界……。世界は平等ではない……。弱き者は権利すら与えられないのだからな……」

キア「弱き者、か……。確かに何処の世界も平等ではない。だが、それはあなた一人で変えられるものじゃない」

マクギリス「……。私にも志を一つにしたもの達がいた……。だが、多くの者が命を落とした……。その元凶……。そして、私の命を……。夢を奪ったガエリオだけは……。許さない」
シャア「ガエリオ・ボードウィン……。君の友人で……。強敵のライバル……。今はエクスクロスにいるようだがね」

マクギリス「あいつだけは私が殺す……。私が……！」

キア「……。その割にはあなたには迷いが見えるぜ」

マクギリス「何……。!?」

キア「捨てきれていないんだろ？ガエリオ・ボードウィンとの友情を……」

マクギリス「……。随分、知った様な口を聞くな……。この話は終わりにしよう」

シャア「……」

キア「……。とりあえず、今日からはお仲間だ。よろしく頼む」

ノウトウ「……。キア・ムベツキ……。シャア・アズナブルとマクギリス・ファリドは客

分であり、トワサンガの責任者は、この私だ。今後の同盟の際にもそれを忘れないでもらおう」

キア「了解だ。：。じゃあ、これで儀式は済んだ。さつさとエクスクロスを追いなながら、あの星へ降りるとしよう」

シヤア「待つてもらおう、キア・ムベツキ。今度は私の方から話をさせてもらおう。もつとも、相手は君ではなく、そちらの彼だかな」

グレミー「：。無視されたまま、会談が終わるかと思いましたがよ、シヤア・アズナブル」

シヤア「グレミー・トト：。君の目的を聞かせてもらいたい」

グレミー「あなたもご存知の通り、私はハマーン・カーンに反旗を翻し、ネオ・ジオンを割った身です」

シヤア「あの時の戦いの中で行方不明となった君やネオ・ジオンの兵士達がアル・ワースに転移していたとはな：。」

グレミー「こうして生きながらえた幸運を私は有効に使うつもりです」

シヤア「元の世界へ戻り、再びザビ家を興すつもりか？」

グレミー「現ネオ・ジオン総帥であるあなたの前でその話をするつもりはありませんよ。この続きはお互いに元の世界に帰ってからにしましょう」

「シャア……君は知っているのだろうか？ エクスクロスにはミネバ・ザビがいる事を……」

グレミー「彼女は我々の世界のミネバ・ザビではありません。彼女に手を出すつもりはありませんよ」

シャア「……そうか」

グレミー「元の世界に帰還するために私は兵達と共にジツト団……ひいてはエンブリヲなる者に協力するつもりです」

シャア「いいだろう。まずは目の前の戦いに全力を尽くそう」

キア「シャア・アズナブル、マクギリス・ファリド……。あんた達も、あの星に降りるのなら、俺達が送ろうか？」

マクギリス「では、お願いしようかな」

シャア「私もだ」

キア「エクスクロスにいるあんた達の宿敵との決着をつけさせてやるぜ」
マクギリス「！」

シャア「……準備が出来次第、そちらの艦に向かう」

キア「了解だ。待ってるぜ」

グレミー「では後ほど、シャア総帥」

俺とグレミーは部屋を後にした……。

「シャア・アズナブルだ。

私達はキア・ムベツキ達が部屋を出たのを見送った。

「シャア……目の前の戦いか……。マクギリス、君の復讐もようやく終わるかもしれないな」

マクギリス「……さあ、それはわかりませんよ」

ノウトウ「あのキア・ムベツキという男……。このような席にもパイロットスーツで現れるとは何たる不調法……。！不愉快だ……。元の世界に戻ったら、あのような連中とは決別するぞ」

マクギリス「それは、その時に改めて考えればいいでしょう」

ノウトウ「シャア・アズナブル、マクギリス・ファリド……。貴公等も自らの立場というものをわきまえるべきだな」

ノウトウ・ドレットら部屋を後にした……。

「シャア……力で権力を手に入れ、それにより他者を圧する……。決して邪悪と呼ぶべ

き存在ではない……。だが、そこに誰かとわかり合う姿はない……。欲望を捨てない限り、人はそこにはたどり着けない……。人が人である限り、目指すべき姿に到達する事は出来ないのだろうか……」

マクギリス「あなたの言いたい事は理解出来る……。だが、エクスクロスのある人物は人と人がわかり合い、次なる道へとたどり着こうとしている」

シヤア「……刹那・F・セイエイ……。リボンズ・アルマークが目をつけている純粹種のイノベーターか……」

マクギリス「彼は私とガエリオをわかり合わせようとした……。恐らく、あなたとアムロ・レイも……。彼のガンダム・フレームから発せられる粒子……。あの粒子の暖かさが私の中の何かを狂わせる」

シヤア「それは私も感じていた……」

あのGN粒子の輝きと暖かき……。サイコミュ、人々の想いの光と擬似している……。イノベーターとニュータイプ……。この二つはもしかしたら、似た存在なのかもしれないな……。

クンパ「……会話は終わったようですね」

シヤア「別室で見ていたあなたの目にはそのように映ったかな？」

クンパ「ミスルギきは明確な敵がいます。いがみ合いによつて高められた闘争本能は

彼等に向けられる事になるでしょう」

マクギリス「そのエクスクロスが倒された後は？」

クンパ「その時は互いに食い合えばいい。そうやって人類は自らの種を強くしていく……。それが私とシヤア・アズナブル……。あなたの目指す世界のはずです」

シヤア「クンパ・ルシータ……。ビーナス・グロウブで生まれたあなたはその考えに基づき……。リギルド・センチュリーを再び戦争の世界にすべく、ヘルメスの薔薇を流出させた……」

クンパ「当時の私はピアノ・カルータと名乗っていましたかね……。私はトワサンガ、地球と渡り歩き、戦いの種を撒いてきた。そして、その種は花を咲かせようとしている……。戦争という花が咲き、そこで熟した人類という種はより強いものとなるはずだ」

シヤア「……」

マクギリス「……」

クンパ「迷っておられるのですかなら私に賛同した事を？」

シヤア「迷いは、今に始まった事ではないさ。その都度、それを捨ててきたから今の私がある」

マクギリス「……それが宇宙世紀の英雄、シヤア・アズナブルですか……」

シヤア「人が生活の場を宇宙に移して気が遠くなるような時間が流れても人は変わる

事が出来なかった……。平穩が人を停滞させるのならば、私は人類を未来に進めるための火種となろう……」

マクギリス「（これが、赤い彗星と呼ばれたシャア・アズナブルの覚悟、か……。私は……どうすればいいのかな……）」

ーバナージ・リンクスです。

俺達はメガファウナのパイロット待機室で具合が悪そうなマリィダさんとプルの様子を見ていた。

ミネバ「……落ち着きましたか、マリィダ？」

ファ「プルも落ち着いた？」

プル「うん……。ファと話したら、ゾワゾワが少し消えたよ」

マリィダ「私もです。姫様とお話していると心が安らぎます」

ミネバ「良かったです……。ですが、約束です。何かあつたら、すぐに相談してください」

ファ「私達もあなた達が心配だから……」

マリーダ「ありがとうございます、姫様」

プル「うん！ありがとうございます！」

バナージ「オードリー……」

リデイ「ミネバもミネバラしく、自分のすべき事をやってるんだな」

フロントル「同時にそれは彼女の強さでもある……。流星は姫様だ。バナージ君、そんな姫様を支えてあげてくれないか？」

バナージ「俺は既にオードリーを支えると決めましたから」

フロントル「ふっ、君も一人の男という事か」

リデイ「ならば、いい口説き方を教えようか、バナージ？」

バナージ「オードリーにその手の手段は通用しないとしますけど……」

リデイ「何……!?？」

フロントル「フハハッ！これはバナージ君の方が一枚上手だったようだな」

アンジェロ「(大佐がこの様に楽しそうに笑われるなんて……。やはり、変わりましたね)」

リデイ「全く……手厳しいな」

アンジェロ「どの様な凄腕のパイロットでも女性には勝てないという事か……。彼の様」

マシユマー「流石はフアさん……！まさに白衣の天使だ！」

リデイ「……あれは例外だと思うが……」

ジユドー「ハマーンの頃のネオ・ジオンの存在はプルに色々嫌な事を思い出させちゃうな……。それにマリィダも一緒だし」

カミーユ「プルとマリィダの心のケアは当面はフアとミネバに任せよう」

シーブック「次はカミーユの番だな」

カミーユ「俺の……？」

フロンタル「失礼だが、君はシヤアを感じて、ナーバスになっていると見るが……？」

カミーユ「……気付かれていますか……」

アマリ「あなたとシヤア・アズナブルの関係はアムロさんから聞いています」

カミーユ「アムロさんは、それなりに達観しているが、俺はダメだな……。クワトロ大尉が……シヤア・アズナブルが近くにいると思うと自分を抑えられない」

アマリ「それだけ強い影響を与えた人間なんですな……」

刹那「アムロ大尉も言っていた。シヤア・アズナブルは、ただのパイロットとは違い、歴史に残る様な存在だと」

カミーユ「だけど、クワトロ大尉は人間だった……。俺は、あの人の弱い所が許せなくもあり、好ましくもあった……。今思えば、俺の心が戻ってこられなかったのはあの人が

シヤアとして起ったという現実を認めたくなかったためかも知れない……」

シーブック「……正直、僕にはよくわからない……。宿敵だったアムロさん……。ハマーン・カーンを通して、あの男を見ているジュード……。そして、お前と違って……。僕にとつてのシヤア・アズナブルはクロスボーン・バンガードの鉄仮面と組んで地球を破壊しようとした男でしかない」と

カミーユ「それでいい、シーブック。お前のフラットな目が頼もしいよ。あの人だつて、余計な感傷の目で見てもらうのを望んでいるとは思えないしな……」

シーブック「カミーユ……」

ガエリオ「……」

ジュリエッタ「……マクギリス・ファリドの事を考えているのですか？」

ガエリオ「……あの時、俺は憎しみの心を持たずにあいつと向き合つていれば……。あいつが俺を恨む事なんてなかったのかもな……」

零「ガエリオさんはどうして、マクギリス・ファリドを憎んだのですか？」

ガエリオ「……マクギリスは腐敗したギャラルホルンを組織的に変えようとして、モントークと名乗り、暗躍していたんだ。それも俺やカルタをも利用して……」

零「カルタ……？」

ガエリオ「カルタ・イシュー……。俺とマクギリスの幼馴染だ。カルタはマクギリスに

好意を寄せていた……。だが、マクギリスは……。彼女の想いを踏み躪ったんだ」

零「……。今、カルタつて人は？」

ガエリオ「カルタは……。マクギリスの名を呼びながら死んだよ……。鉄華団との戦いでね」

三日月「……。多分、殺したのは俺だと思う」

零「なっ……。!?？」

ガエリオ「勿論、あの頃はカルタを殺した鉄華団も恨んでいた……。だが、一番は俺やカルタ……。そして、アルミリアの想いを踏みにじった奴がマクギリスが許せなかった……。！」

零「そのアルミリアというのは？」

ジュリエッタ「ガエリオさんの妹で……。マクギリス・ファリドの許嫁でもありました」

零「い、許嫁……」

ガエリオ「俺がマクギリスを討った後、話によるとアルミリアの精神状態は酷いもの様だ……。夫となるものを実の兄に殺されたのだならな」

零「アルミリアはマクギリスの迷惑に気がついていなかったんですか？」

ガエリオ「アルミリアは強い子だ……。マクギリスの計画を知り、騙されたとしてもあいつの妻だと言い切ったんだ」

ジュリエッタ「……」

ガエリオ「俺は……実の友を手につけ、実の妹の心を……壊したんだ」

零「ガエリオさん……」

ガエリオ「だからこそ、生きたい……。生きて、マクギリスを止める……。殺すのではなく、今度は止める！マクギリスのためにも……。カルタやアルミリアのためにも……。そして、俺のためにも……。！」

オルガ「手伝うぜ、ガエリオ。お前の復讐の原因は俺達にもあるんだからな」

三日月「勿論、俺達もチョコレートの人を止めるだけだから」

ガエリオ「鉄華団……」

ジュリエッタ「私も……。力及ばずながら、お手伝いします」

零「俺ですよ、ガエリオさん！」

ガエリオ「……ありがとう、俺はこのエクスクロスに入る事が出来て、幸せだ……」

イアン「そんな鉄華団に嬉しい報告だ」

ニール「どうしたんだ、おやつさん？」

イアン「鉄華団が渡してくれた資料でついにバルバトスとグシオンを強化する事が出来た」

シノ「つまり……。バルバトスとグシオンリベイクフルシティにもどつ

たつて事か！」

イアン「その通りだ」

三日月「ふーん、こつちのおやつさんもやるじゃん」

明弘「これでようやく全力を出す事が出来るぜ！」

イアン「それからオルガ。お前さんのモビルスーツももう時期出来るからな」

オルガ「… ああ、頼むぜ、おやつさん！」

ビスケット「オルガ、そのモビルスーツって…？」

オルガ「それは…」

オルガさんが何かを言いかけたその時、マリィダさんとプルが何かを感じ取った。

プル「！」

マリィダ「！」

ファ「どうしたの、マリィダ、プル!!？」

マリィダ「来る…」

ミネバ「何が来ると言うのですか!!？」

すると、メガファウナ内に警報が鳴り響いた。

セシリー「敵襲!!？」

克蘭「あのジット団という輩が追ってきたみたいだな！」

アイシャ「マリィダとプルはネオ・ジオンの人達が来るのを感じたのね…！」
プル「そうじゃない…」

ジュード「プル…」

プル「来るよ、ジュード…。あの子が…」

ジュード「あの子って、まさか…」

プル「プルツォが…来る…」

マリィダ「プル、ツォ…？」

プルツォ… 一体それは…。

第48話 それぞれの迷い

―新垣 零だ。

俺達は敵襲に備え、出撃した…。

イアン「どうだ、三日月、明弘？」

三日月「うん、ルプスレクスは問題ないよ」

明弘「こつちもだ！存分に暴れてやろうぜ、三日月！」

三日月「うん、わかった！」

プル「…」

マリーダ「…」

ジユドー「心配するな、プル。今度こそ俺が守ってやるから」

プル「うん…」

バナージ「大丈夫ですか、マリーダさん？」

マリーダ「…心配ない…だから、私に気にせずに戦え」

ビーチャ「本当にプルツォが来るのかよ…」

エル「確か、あの子って…アクシズでの戦いで行方不明になったんだよね…」

ジユドー「あのラカンも生きていたんだ。今更驚く事じゃない」

マシユマー「問題は…」

プル「…」

ジユドー「(アクシズでの戦いの時、プルツォは戦いを止めようとした…。だが、プルの怯え方は普通じゃない…。だとしたら、プルツォは…)」

マリーダ「…」

バナージ「(今度こそ、守るんだ…。マリーダさんを…。！そうしないとキャプテンに合わせる顔がない…)」

カミーユ「やるぞ、ジユドー、バナージ。俺達でプルやマリーダを守るんだ」

バナージ「はい……！」

ジユドー「ああ、わかってる……！」

ファ「カミーユ……」

プリシラ「カミーユ君、格好いい！」

ヴァン「……あいつ……」

シーブツク「(やれるのか、カミーユ……。そんな状態で……)」

アイーダ「ジツト団が来ます！各機は警戒を！」

ベルリ「ちよつと待った！あれ、何なんです!?？」

現れたのはネオ・ジオンのモビルスーツと……何だ、あのデカイの……!?？」

アムロ「ネオ・ジオンのモビルアーマーか……！」

クン「追いついたよ、エクスクロス！あたしのα・アジールの相手をしてもらう！」

プルツー「機械制御のファンネルなど、まがいものだ。当てになどなるものか」

ギユネイ「随分、強気で言ったじゃないか、プルツー」

クン「言ってくれるね、プルツー。悪いけど、あなたのお守りをするつもりはないか

ら。ギユネイ、任せたよ」

ギユネイ「……いつも俺だけが苦勞するんだ……」

プルツー「誰も、そんな事は頼んでいない。私は好きにやらせてもらうぞ」

クン「(グレミーの切り札だか何だか知らないけど、可愛くない…)」
プル「ジュード…！」

ジュード「ああ、わかっている！あの赤いキュベレイ…プルツーが乗っている！」

プルツー「久しぶりだな、ジュード、プル。お前達に、また会えるとはな」

ジュード「プルツー…。俺達と戦うつもりか？」

プルツー「何を下らない事を…。それが私の使命だ」

マリィダ「やめろ！お前が私達と戦う必要などない！」

プルツー「お前…。そうか、お前がプルトウエルブか」

マリィダ「…」

プルツー「お前も倒す、それだけだ」

プル「あたし…プルツーと戦いたくないよ！」

プルツー「腑抜けた事を…！失敗作のお前の存在を今度こそ完全に消して上げるよ
！」

カミーユ「この攻撃性…！」

アムロ「あの少女…！何らかの調整を受けているか！」

トビア「精神制御って事か！」

ギユネイ「その通りだ、アムロ・レイ！」

アムロ「そのギラ・ドーガに乗っているのは……ギユネイ・ガスか!?」

ギユネイ「そうだ！俺も再び、舞い戻って来たんだよ！」

アムロ「このアル・ワースは俺達の世界とは違う！ここで争って何になる!?」

ギユネイ「俺と大佐とお前がいる……。これが戦う理由だ！」

アムロ「……！」

ギユネイ「アムロ・レイ！今度こそ、お前を討ち取る！」

青葉「精神制御なんて、ひどい事をしやがって！」

ジユドー「みんな！プルツーは俺が何とかする！」

アルト「あのモビルアーマーと他の敵は俺達に任せろ！」

ミシエル「その代わり、あの子は何としても救えよ、ジユドー！」

カミーユ「……」

アムロ「(カミーユは別のプレッシャーを感じている……)」

プルツー「行くよ、エクスクロス！あの男が来る前に片付ける！」

プル「プルツー！」

ジユドー「くそっ！同じ事を繰り返させるかよ！」

ギユネイ「お前達は俺が倒す！」

アムロ「戦争をやめられなかった結果がこれか……！」

俺達は戦闘を開始した……。

戦闘から数分後、カミーユ達が何かを感じ取った。

カミーユ「うっ……！」

フロントル「これは……！」

アムロ「来たか、シヤア！」

サザビーとガンダムバエルが現れたか……！

シーブック「赤い彗星……！」

カミーユ「クワトロ大尉……！」

三日月「バエルもいるよ」

ガエリオ「マクギリス……！」

シヤア「今の私はシヤア・アズナブルだ」

マクギリス「ガエリオ……今後こそ……今度こそオ！」

カミーユ「かつてとは逆ですね……」

シヤア「君にシヤアである事を指摘され、自分はクワトロだと返した時の事か……」

カミーユ「あの時、俺は……自分のすべき事から目を背けるあなたに怒りをぶつけま

した。だけど……！あなたに望んだシヤア・アズナブルはあんな事をするような男ではなかった！」

シヤア「それは君の勝手な思い込みだ。私は私だ。それ以上でも、それ以下でもない」
カミーユ「あなたという人は！」

シン「落ち着け、カミーユ！あいつのペースに呑まれるな！」

フロントアル「シヤアはカミーユ君を挑発している……？一体なんのために……」

シヤア「来い、カミーユ。君が戦場に戻ったのなら、私が引導を渡す。君のため……そして、私自身のために」

ギユネイ「遅れて来て随分、大きな口を叩くじゃないですか、大佐」

シヤア「ギユネイ……。カミーユには手を出すな。彼は私が相手をする」

ギユネイ「……了解。（あいつがアムロ・レイの次に大佐が目をつけるカミーユ・ビダンか……。実力を拜ませてもらおうぞ）」

ガエリオ「マクギリス、もうやめろ！こんな事、アルミリアは望んでいない！」

マクギリス「……っ……。自分は復讐を果たせたからといい、正義の味方ぶるのか、ガエリオ！」

ガエリオ「違う、俺は……。！お前を友達として……。！」

マクギリス「友達など……。友情など、私には必要ない！私はお前を倒せばそれでい

いのだ！」

刹那「……ガエリオ、奴の機体を止めるしかない」

ガエリオ「刹那……」

刹那「マクギリス・ファリドを救う為にも奴を止めろ！」

ガエリオ「……わかった！これで、終わりにさせよう、マクギリス！」

マクギリス「こちらの台詞だ、ガエリオ！」

俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話 三日月VS初戦闘〉

三日月「行ける……これでまた、オルガを守る事が出来る……。そして、必ずアトラを助け出す……！三日月・オーガス、ガンダムバルバトスルプスレクス……行くよ……！」

〈戦闘会話 明弘VS初戦闘〉

明弘「さあ、何処からでも掛かって来やがれ！返り討ちにしてやる！明弘・アルトランド、ガンダムグシオンリベイクフルシテイ……行くぞ……！」

G―セルフの攻撃がα・アジールにダメージを与えた。

クン「ヘルメスの薔薇の設計図から再現したα・アジールがやられるとは……！」

クン「この借りは次の機会に返す！」

α・アジールは撤退した……。

アムロ「ヘルメスの薔薇の管理者、ビーナス・グロウブ……」

トビア「あいつ等の使う兵器には注意が必要ですね」

〈戦闘会話　アムロVSギユネイ〉

ギユネイ「アムロ・レイ！今度こそ、お前を倒す！」

アムロ「悪いが、簡単に負けるつもりはない！シヤアを止めるためにも！」

〈戦闘会話　カミーユVSギユネイ〉

カミーユ「お前は……！」

ギユネイ「カミーユ・ビダン！大佐の元へは行かせん！」

カミーユ「クワトロ大尉は俺が止める……だから、そこを退け！」

レガンダムの方アンネル攻撃でギユネイのギラ・ドーガにダメージを与えた。

ギユネイ「くっつ……！やはり、ギラ・ドーガではこれが限界か……！」

シヤア「ギユネイ、後は私に任せてもらおう」

ギユネイ「残念ですが、そうするしかありませんね……！（俺の道は大佐が後々、どうするかで決まるな……）」

ギユネイのギラ・ドーガは撤退した……。

アムロ「（シヤア、ギユネイ……お前達はどうするつもりなんだ……？）」

クシャトリヤがプルツールのキュベレイに近づいた。

マリーダ「やめてくれ、プルツール！お前は私の姉なのだ……！」

プルツール「うるさい、お前の姉などになった覚えはない！邪魔をするのなら、お前も潰す！」

マリーダ「プルの時のようにはいかないのか……！」

今度はプルのキュベレイがプルツのキュベレイに近づく。

プル「プルツー！戦いをやめて！」

プルツ「来たか、プル！お前とも決着をつけてやるぞ！」

プル「わかってよ、プルツー！あたし達は敵じゃないんだよ！自分が嫌いでも自分を捨てちゃいけないようにあたし達はお互いを受け入れなきやダメなの！」

プルツ「この期に及んで命乞いか！みつともないな！」

プル「バカ！どうして、わかってくれないのよ！」

ジュード「離れる、プル！こっちの声は届いちやいない！こうなったら、機体を止めて無理矢理でも戦いをやめさせるしかないぞ！」

次にダブルゼータがプルツのキュベレイに接近した。

ジュード「やめろ、プルツー！俺達が戦う必要なんてないはずだ！」

プルツ「それを決めるのは、お前ではない！私は自分の使命を果たすだけだ！」

ジュード「くそっ！俺一人じゃプルツを止める事は出来ないのかよ！」

〈戦闘会話　バナージVSプルツ〉

バナージ「どうして、戦いをやめないんだ！マリーダさんはお前を止めたがっているだぞー！」

プルツ「誰が私を止めようと知った事か！私は私の使命を果たすのみだ！」

〈戦闘会話　マリーダVSプルツ〉

プルツ「来い、プルツウエルブ！私が倒してやる！」

マリーダ「姉妹同士で争っている場合じゃない…何故、それがわからないんだ…！」

プル「キュベレイとクシャトリヤがプルツのキュベレイにダメージを与えた。

プルツ「機体の調整が不十分か！撤退する！」

プルツのキュベレイは撤退した…。

プル「プルツー！」

ジュード「くそっ…！これじゃ、あの時の繰り返しじゃないかよ！」

マリーダ「…！」

〈戦闘会話 零VSシヤア〉

零「シヤア・アズナブル！本当に戦いを止めるつもりはないのか？？」

シヤア「止める気だったら今、私はここには立っていないよ」

零「それもそうか……。だったら、こつちもこつちでやらせてもらう！勝負だ、赤い彗星！」

シヤア「（どうやら、彼の存在はエクスクロス内にも強い印象を与えているようだな……）」

〈戦闘会話 バナージVSシヤア〉

シヤア「バナージ君か……。人は可能性の光でも変える事は出来なかったのだよ」

バナージ「それでも、俺は可能性を信じます！だから、俺は全力を持ってあなたを止めます！」

シヤア「……。眩しすぎる光だ……。これがユニコーンの輝きか……」

〈戦闘会話 フロントラルVSシヤア〉

フロントル「そろそろ私達の戦いにも白黒つけようではないか」

シヤア「そうだな……。では消えてもらおう、フル・フロントル！」

フロントル「消えるつもりはないよ……。そして、あなたも世界も消させはしない……。赤い彗星の伝説を終わらせよう、シヤア・アズナブル！」

〈戦闘会話 シン or キラ VS シヤア〉

シヤア「君達も多くの犠牲を見て来たはずだ」

シン「だからって、多くの人間を殺すなんて間違っている！」

キラ「世界をもっと広く見てください！そうすれば世界はもつと……！」

シヤア「残念だが、広く見た所で私の決断は揺るがよ……！」

〈戦闘会話 刹那 VS シヤア〉

シヤア「その忌まわしい光を消してもらおうか、純粹種のイノベイター、刹那・F・セイエイ！」

刹那「消させはしない……。世界を消させるなどさせない！カミーユの為にも……！」
シヤア「(やはり、私にはこの光が暖かすぎる……。)」

〈戦闘会話 キオVSシヤア〉

シヤア「やはり、異世界でもガンダムは救世主なのだな」

キオ「戦闘をやめてください！これ以上、涙を増やさないためにも！」

シヤア「残念だが、私がここで止まってしまえば、これ以上に涙を流す者が増える」

キオ「だからって、人を消すだなんて間違ってる！僕がそんな事させない！」

〈戦闘会話 三日月VSシヤア〉

シヤア「阿頼耶識システム…。世界が違くと技術も違うようだね」

三日月「あんたって、世界を救う為に世界を壊そうとしているんだよね？それって、矛

盾しているよ」

シヤア「君の言う通りだ。だが、私は止まるわけにはいかんのだよ」

三日月「いいよ、止まらないで…。俺達が止めるから…。！」

ゼータのウェーブライダー突撃攻撃でサザビーにダメージを与えた。

シヤア「ちいっ…。！」

アムロ「お前の負けだ、シヤア！迷いを抱えたお前に負ける俺達ではない！」

シーブック「シヤアが迷っている…？」

シヤア「アムロ…。お前の目は誤魔化せないか…。」

ジユドー「今更何を言ってるんだよ！自分のやって来た事を後悔しているのかよ！」

ネロ「騙されるな！俺達を騙して、隙をつくつもりだろう！」

ホセ「悪党の手などお見通しだ！」

シヤア「…そうだ。私が人類を変革させる事が出来れば、宇宙世紀の文明は滅ぶ事はなかった…。だから、私は贖罪のために人類という種を、より強く成長させようとした」

マクギリス「…その手段が戦争…。」

シヤア「同じように人類の限界を憂う人間と共に私はアル・ワースに呼ばれた異界人に戦いの道を示した」

シーブック「それがシヤアの考える、絶望から人類の未来を守る術か…！」

カミーユ「おこがましいんですよ、あなたは…！人類の業の全てを一人の人間が背負うなんて！」

アセム「そうするまでお前は偉いのかよ！」

シヤア「私の中の絶望を乗り越えるためにはそうするしかなかったのだ…！カミーユ！私の中の迷いを振り切るためにもお前を…！」

カミーユ「感じる…。！ゼータを通して、あの人の中の絶望を…。！」

シヤア「精神が破壊されたお前の存在はお前の中に人類のあるべき姿を夢見た私を打ちのめした…。だから、私は…。悲劇を繰り返させないために人類の変革を望んだ…。！」

カミーユ「クワトロ大尉…。」

シヤア「カミーユ！お前に期待をかけた弱い自分を今、私は乗り越える！消せない後悔を自身に刻む事で大罪をも犯す覚悟を、もう一度…。！」

カミーユ「！」

ザザビーの攻撃をゼータは避け続ける。

何で、反撃しないんだよ…。！

ジユドー「反撃しろ、カミーユさん！」

カミーユ「やめてください、クワトロ大尉！俺は…。あなたと戦いたくない！」

シヤア「ならば、私に討たれろ！さもなければ、私を殺せ！」

カミーユ「それは…。！」

シーブック「ダメだ!!?!」

F91が前に…。?!?

トビア「シーブックさん！」

ゴーカイレッド「何考えてるんだ、あいつ！」

シブツク「シヤア！罰が欲しいのなら！」

F91がサザビーに攻撃を仕掛けた……。

シブツク「僕がやる……！機体の性能を限界まで引き出す……！」

ビームライフルとビームランチャーを連射し、サザビーの当てつつ、接近し、ビームサーベルで斬り裂いていく。

シブツク「この力ならば……！」

さらに接近して、ビームランチャーを構える。

シブツク「なんとおとおおっ！」

F91のフェイスがオープンした後、ゼロ距離でビームランチャーが放たれた。

シブツク「F91が僕に伝えてくれた……！」

シヤア「この力だ……！この力が私をも止めるのか!?？」

F91の攻撃を受けて、サザビーは吹き飛ばす。

シヤア「くっ……！」

カミーユ「シブツク……！」

シブツク「しっかりしろ、カミーユ！シヤアの言葉に惑わされるな！」

カミーユ「……！」

カミーユ……。

カミーユ「迷いの中にある、あの人が誰かに自分を止めてもらいたかったのはわかっていた……。だが、俺には……。その役は出来ない……。」

アムロ「その場合、シヤアは迷いを振り切るため、より大きな罪として、希望そのものであったお前の生命を自らの手で奪っていただろう。人類の未来を語りながら、あくまで個人のエゴで動く……。そういう男だ、シヤアは。シヤア……。ラアアの生命を奪った俺の後悔をお前も繰り返すつもりなのか？」

シヤア「……。」

マクギリス「後悔……。」

シーブック「そんな事をしてなんの意味がある！ 答えろ、シヤア・アズナブル！ 何が赤い彗星だ！ 自分の弱さを誰かの犠牲で乗り越える人間に人類の未来を口にする資格があるものか！」

フロントアル「わかるか、シヤア？ シーブック君の言葉が」

アムロ「確かにカミーユは倒れた……。だが、ジウドーやシーブックやトビアやバナージのようにいい素質を持った若者が次々に出て来る。遙か未来にはベルリのような人間もいる」

フリット「戦いなどなくとも新しい力は生まれて来る……。先人の者はそれを見守る

だけで良いのではないか？」

シヤア「新しい力：。」

カミーユ「シヤア・アズナブル：。。俺はこうして再び前に進む事が出来るようになり
ました。俺は：。あなたの迷いを振り切る生け贄などなるつもりはありません。です
が、共に歩む事ぐらいは出来ます」

シヤア「罪を犯した私にそれが許されるのか：。？」

シーブック「さらに罪を重ねるよりもマシだと思えますよ。それとも、そんな事さえ
もわからないんですか、あなたは？」

シヤア「シーブック・アノー：。。私という人間に何の思い入れもない君の言葉は直接
的だな。見せてもらったよ。私の知らない新しい力を。そして、私の知る者に私が知る
以上の力がある事を」

カミーユ「大尉：。」

すると、ギユネイのギラ・ドーガが現れた。

シヤア「ギユネイ：。」

ギユネイ「やつと迷いを断ち切りましたか：。。遅いんですよ、あなたは：。。まあ、で
も大佐が行く道は俺もついていきます」

シヤア「感謝する、ギユネイ」

トビア「シヤア・アズナブルとの決着…まさか、シーブックさんがつけるとは…」
シーブック「F91が僕に伝えてくれた結果だ」
セシリー「(あの時もそうだった…)。誰かのために戦うシーブックは限界を超えた力を見せてくれる…)」

ゴーカイブルー「後は…」

マクギリス「…迷いは消え去ったようでふね、シヤア・アズナブル」

シヤア「随分と気が楽になったよ、マクギリス・ファリド」

マクギリス「私も私で決着をつけるとしよう…。ガエリオ！」

ガエリオ「…いいだろう。来い、マクギリス！」

マクギリスとの決着は避けられないのかよ…！

〈戦闘会話 零VSマクギリス〉

零「どうして、友達同士で戦うんだよ…虚しいだけじゃねえかよ！」

マクギリス「君もオニキスに友人がいると聞いたが？」

零「そ、それは…」

マクギリス「友達だとしても切り捨てなければならぬものもあると知っていた方が

いい」

零「そんな事はない！そんな事… あつてたまるか！」

〈戦闘会話　アマリVSマクギリス〉

マクギリス「術士の君が私に何の用かな？」

アマリ「ガエリオさんはあなたのために苦しんでいます…。これ以上はやめてください！」

マクギリス「悪いが、止めるわけにはいかないよ…。それが私の覚悟だ！」

〈戦闘会話　シャアVSマクギリス〉

マクギリス「随分簡単に裏切るのでね、シャア・アズナブル」

シャア「そう思ってもらっても結構だ。実際そうなのだから…。そして、君もそうなる」

マクギリス「…全てをわかったように言うのをやめてもらいたいですね」

〈戦闘会話　刹那VSマクギリス〉

マクギリス「刹那・F・セイエイ…。君の機体の粒子は私を狂わせる」

刹那「それはお前が変わりつつある証拠だ」

マクギリス「… 変わったさ、復讐者としてな…。だから、これ以上、おかしくなる前にその機体を破壊させてもらう」

〈戦闘会話 三日月VSマクギリス〉

三日月「チョココの人…。いい加減諦めなよ」

マクギリス「いい加減にするのはそちらの方だよ、三日月・オーガス」

三日月「ガエリオを倒させるわけにはいかないよ」

マクギリス「それならば、君も死んでもらおう」

〈戦闘会話 名瀬VSマクギリス〉

オルガ「こういう戦いもそろそろ終わりにさせようぜ、マクギリス」

マクギリス「これが最後だ、鉄華団…。私と共に来ないか？」

オルガ「… 何度も言わせんじやねえ…。俺達の居場所はエクスクロスだ…。お前の元へは行かぬえよ！」

マクギリス「そうか、残念だ。オルガ・イツカ…。」

〈戦闘会話　ガエリオVSマクギリス〉

マクギリス「アルミリアは元気かい？」

ガエリオ「……」

マクギリス「……君の反応を見ればわかる……。彼女には悲しい想いをさせてしまったな……」

ガエリオ「だからこそ、アルミリアを悲しませないでくれ！」

マクギリス「……お互い、アルミリアを悲しませた者同士だ。蹴りをつけよう」

ガエリオ「アルミリアを悲しませた者同士、か……」

キマリスヴィダールの攻撃でバエルにダメージを与えた。

マクギリス「くっ……！！？」

ガエリオ「お前の負けだ、マクギリス！」

マクギリス「まだだ……私は……俺は……！」

オルガ「いい加減に目を覚ましやがれ！」

オルガの怒鳴り声が聞こえると、ハンマーヘッドから一機のモビルスーツが現れた。

三日月「オルガ、その機体……」

オルガ「俺専用の獅電だ……。これで俺もモビルスーツでの戦いに参加できるぜ」
マクギリス「オルガ・イツカ……」

オルガ「お前の為に苦しみ続けるガエリオの気持ちに分からねえのか！」

マクギリス「俺だって、何度も苦しんだ！だから……！」

オルガ「だから何だよ!!? お前が体験した苦しみをガエリオにも植え付ける気か!!?
そうやって、ダチ同士苦しみ続けるってのかよ!!?」

ガエリオ「オルガ……」

オルガ「お前等の幼馴染のカルタって奴やアルミアって妹はお前等に苦しみ続けて
欲しいと思ってるのかよ!!?」

マクギリス「……それが、俺の償っていく罪だ……」

オルガ「苦しめば、罪が償えるとも思ってるのか？」

マクギリス「……！」

オルガ「苦しみは新たな苦しみを生むだけだ！このままいけば、お前もガエリオもア
ルミアも苦しみ続ける……。そんなの悲しいじゃねえか……」

マクギリス「……」

ガエリオ「マクギリス、俺は……」

すると、レギンレイズとネオ・ジオンのモビルスーツ部隊が現れた。

ジュリエッタ「イオク様……!?」

イオク「いいチャンスだ！マクギリス・ファリド共々、エクスクロスを仕留めろ！」
イオクの野郎の指示でネオ・ジオンのモビルスーツの一機が剣を構え、キマリスヴィ
ダールに攻撃を仕掛けた。

ガエリオ「くっ……！」

ジュリエッタ「ガエリオさん！」

マクギリス「！」

しかし、バエルがキマリスヴィダールを庇い、カウンター攻撃で敵機体を撃墜し
た……。

イオク「な、何!?」

マクギリスさんが……ガエリオさんを守った……。

ガエリオ「マクギリス……」

マクギリス「……自分でも分からない……。あれ程憎んでいたガエリオを……なぜ
守ってしまったのか……。でも……騙していたアルミリアは騙された事を知っているも
俺の妻だと言ってくれた……。そんな、彼女をこれ以上、悲しませたくない」

ガエリオ「……俺もだ、マクギリス」

マクギリス「俺は自分のした事を許してもらおうとは思わない……。だが、もしもお前

が、俺の事をまだ友人だと思ってくれているのであれば……。共に戦わせてもらえないか？」

ガエリオ「当たり前じゃないか！お前は俺の掛け替えのない友人で……。愛する妹の夫になる男だからな」

マクギリス「ふっ……」

イオク「ヴィダール……。マクギリス・ファリドと手を取り合うなど、堕ちるところまで堕ちたか！」

ガエリオ「変わらないお前に言われたくない」

マクギリス「では、ガエリオ……。友人の連携を見せてやろう」

ガエリオ「いいな、よし！いくぞ！」

キマリスヴィダールとバエルがレギンレイズに攻撃を仕掛けた。

ガエリオ「イオク・クジャン……。向かってくるのなら……。！」

マクギリス「俺達で状況を打開するぞ！」

ガエリオ「ああ、やるぞ、マクギリス！」

マクギリス「遅れるなよ、ガエリオ！」

バエルとキマリスヴィダールがレールガンでレギンレイズを牽制した後、キマリスヴィダールがドリルランスでレギンレイズを何度で突き、膝部のドリルニーで蹴り飛ば

す。

ガエリオ「思い出すな、連携した頃を！」

マクギリス「あの頃とは違い、お互いの立場も変わったけどな！」

吹き飛んだレギンレイズを追い詰め、バエルはバエルソード、キマリスヴィダールは剣で斬り刻んでいく。

マクギリス「これで……！」

ガエリオ「終わりだ……！」

イオク「うっ……！うわあああああ！」

最後に交差する様に斬り裂き、レギンレイズにダメージを与える。

イオク「くうっ……！何故だ、何故勝てないんだ！」

ガエリオ「狭い視野しか持っていないお前では俺達には勝てない」

イオク「そうか……わかったぞ！あの時から……ヴィダール……貴様はジュリエッタを誑かし、マクギリス・フアリドと裏で繋がっていたのだな！ジュリエッタ！この様な男に近づくと碌な目に合わないぞ！」

ガエリオ「……はあ……」

ジュリエッタ「……イオク様がどんな理由で私達に挑んでくるかは知りたくもないし、興味ありません……。ですが、私の最も信頼でき、愛する者を侮辱する事は断じて

許しません！」

イオク「ヒツ：…
!!?」

ジュリエッタ「消えなさい、薄汚い下郎が！今消えないと言うのなら、ここであな
たを討ちとります！」

イオク「ヒツ：… ヒヤアアアアアッ
!!?」

格好悪い悲鳴を上げながら、レギンレイズは逃げる様に撤退した…。

ゴーカーイエロー「何あれ、ダッサ…」

イングリット「あの様な男にはあれぐらいで十分よ」

ユイ「はい、私も苦手です…」

レナ「普通に気味悪いし…」

ガエリオ「ジュリエッタ…」

ジュリエッタ「…はっ!!?あ、愛する者と言うのは慕っていると言う事で決してや
ましい想いではありませんから！」

ガエリオ「俺はそれ以上の関係になりたいと思っっているけどね」

ジュリエッタ「なあっ：… !!?あ、あなたと言う人は…!!」

この人達のイチャつきようも大概だな…。

マクギリス「…全く、ガエリオも隅におけないな」

シヤア「どうやら、私が言った通りになった様だな」

マクギリス「全く：：あなたには敵いませんよ、シヤア・アズナブル」

シヤア「いいじゃないか、これからはエクスクロスのメンバーとして共に進んでいこうじゃないか」

マクギリス「ええ、そうですね」

リオン「後は残りの機体を倒せば：：！」

一件落着かな：：？

メル「気をつけてください：：！何か来ます！」

零「そう簡単にはいかないってわけか！」

現れたのはジット団のモビルスーツか：：！

キア「全く：：イオクの奴、勝手な事をしやがって：：。まあいい、クンを可愛がってくれたエクスクロスに俺も挨拶をしないと」

クリム「キア・ムベツキ！ジット団の隊長が来たか！」

プル「グレミーだ！あっちのモビルスーツにはグレミーが乗ってる！」

ジユドー「何だって？！」

グレミー「久しぶりだな、プル。この様な再会をするとは夢にも思わなかったぞ」

ルー「あなたも生きていたのね、グレミー！」

グレミー「ルー・ルカ……。こうして君と再会できた幸運にも喜ばなければならぬ。だが今、私のすべき事はシヤア・アズナブルの粛清だ」

シヤア「グレミー・トト……」

グレミー「あなたには失望しましたよ、シヤア。大義ある者が個人の感情に溺れる様はハマーン・カーンを見ているかの様だった」

シヤア「私とハマーンを重ねるか……」

グレミー「その様な男にネオ・ジオンは任せてはおけない。これより再び、このグレミー・トトが正統なるジオンの後継者を名乗ろう！」

ギユネイ「何だと!?？」

シヤア「ザビ家の尻尾……。私が討たねばならんか……」

アムロ「シヤア……」

シヤア「確かに戦いは人を強くする……。私は、その代償として失われる生命を無視しようとしてきた……。だが今、グレミーによって私は自分の戦いの始まり……。大切な人が失われる痛みを思い出した」

グレミー「腑抜けたな、シヤア。犠牲なくしては何の改革も進まない。お前はハマーン以下の情けない男だ！」

? 「いいや、そんな事はない」

グレミー「！」

現れたのは：… 白いキュベレイ：… ！？

カミーユ「あのキュベレイは：… ！」

グレミー「ば、バカな：… まさか、彼女まで：… ！」

シヤア「… 来てくれたのか、ハマーン」

ハマーン「私以下の人間などいないのだからな」

シヤア「そう自分を下に見る評価をしなくてくれ、ハマーン」

ハマーン「だが：…」

シヤア「蔑みも侮辱も甘んじて受ける。私は、その程度の男だ」

ハマーン「シヤア：…」

シヤア「もう赤い彗星の名もジオン・ズム・ダイクンの名も捨てる：… 私もただの男

として一度は捨てた可能性にもう一度懸ける：… ！」

ギユネイ「大佐：…」

ハマーン「それがお前の覚悟か、シヤア：…。ならば、私も協力しよう」

マシユマー「ハマーン様：… ！」

シヤア「いいのか、ハマーン？」

ハマーン「女はな：…。一度、純粹に愛してしまった男を簡単には忘れる事は出来ない

のだよ」

シヤア「……ならば、この戦いが終わった後に話がある」

ハマーン「期待して待っている……。そういうわけだ、グレミー・トト……。ジオンの名を継承したいのならば、私とシヤアを倒してからにしてもらおう」

グレミー「いいだろう、シヤア、ハマーンよ！ならば、お前達を討つ事で私はジオン継承の証を手に入れる！」

キア「グレミー！気合いを入れるのはいいが、俺達の目的は降下である事を忘れるな」
グレミー「わかっている……。！3分で全てを終わらせる！」

ジュドー「あんたって男は別の世界に來ても身勝手な野望を捨ててないのかよ！」

グレミー「これは大義だ！それを理解できない子供は消えろ！」

ジュドー「どうでもいいが、それにプルツを巻き込むな！やりたきや、勝手に1人でやれ！」

ハマーン「口を挟むが、カミーユ・ビダンやジュドー・アーシタはただの子供ではない」

カミーユ「ハマーン……」

ハマーン「何と言っても私やシヤアを驚かせる若者なのだからな」

ジュドー「言ってくれませ！」

カミーユ「クワトロ大尉……！」

シヤア「やってみせるさ……！たとえわずかでも、そこに希望があるのならな！」

アムロ「（そうだ、シヤア。迷いを振り切ったお前の力を見せてくれ）」

マクギリス「俺達も行くぞ、ガエリオ！」

ガエリオ「ああ！」

シヤア「ありがとう、マクギリス」

マクギリス「今更ですよ、それに俺達はお互いに不器用な男なのですから……」

アムロ「ギユネイ！お前の会うモビルスーツなら、メガファウナの中にある！」

ギユネイ「そうなのか……？ならば……！」

ギラ・ドーガがメガファウナの中に入り、変わりに緑色のヤクト・ドーガが出て来た。

ギユネイ「やはり、この機体はいい……！これなら、やれる！」

よっしやあ！戦闘再開だ！

ダハツクのビームサーベルを受け、ジャイオンはダメージを負った。

キア「やってくれるな、エクスクロス！ヤザン達を退けただけはある！続きは、また

今度だ！地上で会おうぜ！」

ジャイオーンが降下していった……。

ベルリ「ジツト団の隊長、キア・ムベツキ……」

クリム「いい腕をしているな。相手にとって不足はない」

〈戦闘会話　マリィダVSグレミー〉

マリィダ「……漸く理解できた……。お前がプルツを縛っている者だな！」

グレミー「何？お前は、まさか……！」

マリィダ「私の姉に手を出した報いを受けてもらおう！」

〈戦闘会話　ハマーンVSグレミー〉

ハマーン「お前の過ぎた野望を成し遂げさせるわけにはいかんな」

グレミー「そういうのは私を倒してからにしてもらおうか、ハマーン！」

ハマーン「お前は私の過ちにより、生まれた存在だ……。私がお前の対処をする！」

サザビーとハマーンさんのキュベレイのファンネルでドーベン・ウルフはダメージを受けた。

グレミー「私は、このような所で終わる男ではない……！エクスクロス！そして、シャア、ハマーン！決着は地上でつけるぞ！」

ドーベン・ウルフは降下した……。

シャア「グレミー・トト……。お前の思い通りにさせるわけにはいかない……。」

ハマーン「お前の野望は我々が必ず止めてみせる……。」

やっと、戦闘が終わったか……。

ノレド「やったね！こっちの完全勝利だ！」

ラライヤ「この場は私達の勝ちですが、ジツト団はアル・ワースへ降下していきました」

ケルベス「奴等との決着は降下してからだな」

クリム「地上に降りたら、ミスルギに攻勢に出るぞ！」

アムロ「異論はないな、シャア」

カミーユ「ハマーンもどうだ？」

ハマーン「私は構わない」

シャア「……今も迷いは残っている。だが、それを超えてみせる。絶望に嘆く前に希望を見つける事だな」

ガエリオ「マクギリスは文句があるとか言わせないぞ」

マクギリス「勿論だ、ガエリオ」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、メガファウナの格納庫に集まった。

デュオ「まさか、オルガもモビルスーツに乗って来るなんてな」

オルガ「今日から俺はモビルスーツとして出撃できない場合はハンマーヘッドの補佐をやる」

名瀬「どっちだっかっていいぜ、オルガ……。お前の信じる道へ進んで」

オルガ「はい！」

ガエリオ「マクギリス……」

マクギリス「こうやって顔を合わせるの久しぶりだな」

ガエリオ「お互い、酷い顔だな……」

マクギリス「歳を取っていったのも原因かな」

ガエリオ「生々しい事を言わないでくれ……」

ジュリエッタ「……」

マクギリス「ジュリエッタ・ジュリス……。君に伝えておきたい事がある」

ジュリエッタ「何ですか……？」

マクギリス「ガエリオは本当に不器用な男だ……。女誑しな部分もある。だが、根はい奴何だ……。だから、君がこいつを支えてくれ」

ガエリオ「マ、マクギリス!!？」

ジュリエッタ「…承知しました、マクギリスさん」

ガエリオ「え、あ、え…？」

ジュリエッタ「…そちらからいつも誘って来るのに案外ウブなのですわ」

ガエリオ「ジュ、ジュリエッタ…！マクギリス、どうにかしろ！」

マクギリス「さあ…？」

オルガ「これはマクギリスの方が一枚上手だったな」

マクギリス「オルガ・イツカ…。君の言葉で目が覚めたよ、感謝の言葉を送らせてくれ」

オルガ「…俺は言いたい事を言っただけだ。感謝される事なんてしてねえよ」

マクギリス「ふっ、流石は鉄華団の団長だ。強いな」

三日月「オルガが強いのは元からだよ」

マクギリス「三日月・オーガス、君にも迷惑をかけたね」

三日月「別に…。俺は何とも思っていないよ」

マクギリス「…そうか」

三日月「えつと…これからなんて呼べばいい？マクギリス？」

マクギリス「君の好きな様に呼べばいいよ」

三日月「……ガエリオって名前も長いからな……。2人でチョコガリガリってのはどう？」

ガエリオ「だから、そのガリガリというのはやめろ！」

三日月「冗談だよ、これからよろしくね、マクギリス、ガエリオ」

マクギリス「ああ、こちらこそ、よろしく頼む、三日月」

シャア「……」

カミーユ「こうして顔を合わせるのはいっ以来でしょうね……」

シャア「思い出せないくらい昔の様に思える」

カミーユ「似合ってませんよ、そのオールバック」

シャア「かも知れんな。我ながら無理話やしていると思うよ。大人になりきれない私を君は修正するかな？」

カミーユ「ネオ・ジオンの総帥として取り返しのつかない事をやろうとしたあなたをその程度で許すつもりはありません」

シャア「……そうだな。だが、私はやってきた事を誰かに詫びるつもりはない」

カミーユ「その言葉を聞けて、良かったです。あなたが安易に詫びたら、それこそ俺はあなたを完全に見限りました。あなたの生き方は、あなたが決めてください。ネオ・ジオン総帥としてのあなたとの事は元の世界に帰ってからです」

シヤア「わかった。かりそめの時間だが、その時が来るまでまた共に戦おう」
カミーユ「期待しています、大佐」

シヤア「もう大尉には戻れないのだな……。だが、それでいい。君は私の事など振り切つて、前へ進んでくれ、カミーユ……」

ハマーン「いい顔になつたな、シヤア」

シヤア「そう言つてもらえるとは私もまだ捨てたものではないという事だな」

ハマーン「……シヤア、話というのは？」

シヤア「恥ずかしながら、私はどうやら女縁というものに疎いようだ。だから……」

ハマーン「……お前は女性に幻想を持ち過ぎている。お前が女に頼りたいようにお前に頼りたい女がいるのを覚えておけ。それが世間では鉄の女と呼ばれるような奴でもな」

シヤア「私と一緒に歩いてくれるか、ハマーン？」

ハマーン「……そう言つてくれるのを、ずっと待つていました。ありがとう、シヤア」

シヤア「礼を言われる程ではないよ」

ハマーン「本当に不器用な男だな、お前は……」

ミネバ「ハマーン……」

ハマーン「本当の初めましてだな、ミネバ」

ミネバ「おめでとうございます」

ハマーン「ありがとう、バナージ・リンクス……。ミネバをよろしく頼むぞ」

バナージ「フロントタルにも言われましたけど、わかっていますよ」

フロントタル「バナージ君はシヤアと違って、不器用ではありませんよ」

ハマーン「……本当にそっくりだな、シヤアに」

フロントタル「私は私、シヤアはシヤアですよ」

シヤア「そうだな、フロントタル……。君と共に戦える事を嬉しく思うよ」

シーブック「素顔のあなたはとても人類史上最大の虐殺を行おうとした人には見えませんね」

シヤア「君がシーブック・アノーか……。少しの間だろうが、よろしく頼む」

シーブック「拒絶はしませんが、あなたを積極的に受け入れるつもりはありません」

シヤア「そうしてくれ。私は誰の許しを請うつもりもないからな」

アムロ「針のむしろだな、シヤア」

シヤア「それなりの覚悟はしてきたさ」

トビア「まだ軽くを叩く余裕はあるみたいですね」

シヤア「久々に総帥の肩書きから解放されたせいだろう。（だから、好きにやらせてもらうさ。己の中にあつた絶望を超えてな……）」

零「マクギリスさん、ミスルギについて何か知っている事はありますか？」

マクギリス「…ミスルギにはエンブリヲの花嫁候補として囚われている者が多数いるんだ」

アスナ「は、花嫁!?？」

「ただけクソ野郎なんだよ、そのエンブリヲって奴は…！」

マクギリス「ガエリオ、落ち着いて聞いてくれ…」。アルミアもその花嫁候補の一人として囚われている」

ガエリオ「な、何…!?？」

零「ガエリオさんの妹が…」

ガエリオ「ま、待て、マクギリス！それを知っていて、なぜお前はアルミアを助けなかった!?？」

マクギリス「私も助けようとしたさ…。だが、奴の監視が強すぎて手を出せなかったんだ」

テイエリア「そこまでの強敵なのか、エンブリヲという者は…」

マクギリス「他にもエンブリヲはラクス・クラインやカガリ・ユラ・アスハも囚われている」

キラ「ラクスが…!?？」

アスラン「カガリまでアル・ワースに来ていたとは…」

マクギリス「篠ノ之 束とクロエという者もいたな」

アマリ「篠ノ之 束……。それって……」

零「箒の姉……。ISの開発者……」

マクギリス「そして、最後に……。クーデリア・藍那・バースタインも囚われている」

三日月「！」

アストン「そ、そんな……」

ハツシユ「マジかよ……。！」

マクギリス「どうかしたのか？」

ガエリオ「鉄華団のメンバーの1人、アトラという子がドアクダー軍団に囚われているんだ」

シノ「どっちも三日月や俺達、鉄華団にとつては大切な存在なんだ……」

三日月「……。エンブリヲやドアクダーはよっぽど俺を怒らせたみたいだな……。！」

オルガ「落ち着け、ミカ……。取り乱した所で何も変わらない……。クーデリアがミスルギにいるのなら、取り戻せばいい……。そうだろ？」

三日月「……。そうだね」

オルガ「よっしやあ！攫われた奴等を取り戻して、アル・ワースを救う！それまで、何があつても止まるんじゃねえぞ！」

オルガの声に俺達は頷いた……。

「クンパ・ルシータだ。」

クンパ「……シヤア・アズナブルとマクギリス・ファリドはエクスクロスに合流したそうさ。心の何処かでは、こうなる事を予想していたがな……。だが、これはこれで望むべき状況だ。彼の意図とは別に戦局は激化する事になるだろう。その結果、人類が滅ぶのならば、それは一つの答えだ。そこにたどり着くためにもそろそろあなたにも準備をしてみよう」

？「……いいだろう」

世界がどう動くかはこれから決まる……。

第49話 完全な世界

―新垣 零だ。

地上に降りた俺達、エクスクロスはシヤア大佐の話をメガファウナのパイロット待機室で聞いていた。

シヤア「…これで一通り、私の生い立ちからネオ・ジオンの総帥になったところまでを話した事になる」

アイーダ「ありがとうございます、シヤア大佐。幾つか質問してもよろしいでしょうか？」

シヤア「私に答えられる事ならな」

クリム「地上に降りてから、姫様はシヤア・アズナブルに付きつきりだな」

ノレド「そうなんですよ。あんな調子でずーつと話しています」

アスナ「うーん、もしかしてアイーダって、年上が好き…？」

零「どう見ても違うだろ」

ミック「姫様はお父上のスルガン総監とも仲がよろしいと聞いている。父親の影を、あの男に見ているんじゃないかな」

零「父親、か…」

アマリ「どうしたの、零君？」

零「…いや、ガキの頃に親父に海水浴へ連れて行ってもらった事を思い出してな…。海に興奮した俺は奥に行きまくって、溺れかけた事があったんだ」

アスナ「零の子供の頃って、余程ヤンチャな子だったんでしょ？」

零「ハズレだ。俺は泣き虫だったよ」

アマリ「え…」

ミーナ「30」零さんが泣き虫…。想像出来ません！」

アイシヤ「ガキ大将って、イメージが強かったから、意外なのよね…」

零「俺をどう見ていたんですか…」

アスナ「海水浴か…。良いわね、アル・ワースを平和にしたら、みんなで行きましようよ！」

カトル「平和にする前にあまり、そういう事を言うのは…」

デュオ「良いじゃねえかよ、カトル。夢は大きく持った方が」

五飛「ずいぶん、小さな夢だな」

トロワ「だが、悪くない」

青葉「そうだな、楽しそうじゃねえか、海水浴！」

メル「あの……私は遠慮します……」

アスナ「何、メル？ノリが悪いわね」

メル「……私、海が嫌いで……その……怖くて……泳げないんです」

……マジか……。ってか、怯え方が尋常じゃねえな……。

アスナ「ご、ごめん、メル！そんな事知らずに私は……」

メル「良いんです、アスナさんは知らなかったのですから」

シエリル「どうして、泳げなくなったの？」

メル「私が6歳くらいの頃……仲の良い人と海へ遊びに行つたのですが……海で泳いでいた私は脚をつらせてしまつて……もがく事も出来ずに溺れてしまつたんです……

それで気がつくまで浜辺に横たわつていて、話を聞くと仲の良い人が助けてくれたんです」

アスナ「あなたにとっては命の恩人ってわけね」

メル「それ以来、私は海に潜るのが嫌いになつてしまつて……」

零「それがあれだけ怯えていた原因か……。それで、その命の恩人は？オニキスのメンバーなのか？」

メル「実は……その……覚えていないんです……」

は……？

零「覚えてない？」

アスナ「どういう事？」

メル「わかりません……。ずっと一緒にいたという記憶はあるのですが……。その海での一件以降の彼の記憶……。そして、その人の声、顔……。全てが思い出せないんです……。記憶喪失ってやつか……？」

アスナ「記憶喪失にしては不自然ね……」

零「もしか、オニキスにその記憶を抜き取られた……？」

いや、でもそんな事して何になるんだ……？」

メル「アスナさんはどうですか？」

アスナ「……私も実はある男の人の記憶の欠落があるの」

零「アスナもか？」

アスナ「ええ……。彼とは幼馴染のはずなんだけど……。何も思い出せないの……」

零「……」

アスナ「でも、思い出せない記憶よりも今の記憶を大事にしたいわ」

メル「私も同感です！ 零さんと出会えた今を大切にしないと！」

零「……そうだな、その通りだな！」

ユイ「アスナさんは苦手なものとかはないんですか？」

アスナ「はっ、当たり前でしょう？ 私は何においても完璧だから、私に苦手なものなんてないのよ」

アマリ「…： そう言えば、この地域に肝試しに最適な心霊スポットがあるんですよ」

アスナ「ええ…：」

零「おつ、それは面白そうだな、行ってみたいな」

アスナ「い、いや…： その…： 今はそれどころじゃないから、行かなくても良いんじゃない？」

アマリ「それなら平和にした後にも行きましようか。有名なのが、蠟燭が勝手に動き出したりする噂です」

アスナ「ヒツ…： ！！？ア、アマリ…： 悪かったからやめて！」

アマリ「え？アスナさんは苦手なものがないんですよね？」

アスナ「そ、その…： えっと…：」

シノ「もしかして、アスナって、幽霊の類がダメなのか？」

アスナ「そ、そうなの…：」

零「へえ、それこそ意外だったぜ」

オルガ「まあ、今は昼だからあんまりそう言うのは意味ないけどな」

アスナ「え、ええ…：。そうね…：」

サラ「ワアアアアアアツ!!?」

アスナ「キヤアアアアツ!!?」

サラの奴かアスナを脅かしやがった…。

驚きすぎて、腰抜かしちまつてるし…。

レナ「サラ!!?」

ユイ「何やってるの、サラちゃん!!?」

サラ「いやー、苦手なものがないアスナちゃんを脅かそうと思つて…」

ティア「アスナちゃん、お化けが嫌いみたいだよ」

ケイ「いきなり、脅かしたらダメでしょ!」

カロツサ「それも、間が悪い…」

アスナ「うわああああん!」

メリツサ「泣いちやつた…」

ウー「本当に間が悪かつたからな…」

サラ「え、ご、ごめんね、アスナちゃん!」

アスナ「うううう! 零イイイツ!」

零「うおつ!!? なんで俺に抱き着く!!?」

てか、なんかアスナの性格、変わりすぎじゃねえか!!?」

零「お、落ち着け、アスナ！脅かしたのはサラだ！幽霊じゃない！」

アスナ「うぐつ、ひぐつ… ホントに？」

零「本当だ、本当！」

アスナ「じゃあ、手握って」

…はい？

零「は…？いや、何でそうなる？？」

アスナ「…私を一人にするの？」

零「ア、アスナ…？」

アスナ「一人に…するんだ…ひぐつ、えぐう…！」

零「え、あ、いや…な、泣くな！アマリ、メル！どうにかしてくれ！」

アマリ「アタック！」

零「返すな！」

アスナ「うわああああん！」

零「あーもう！泣かないでくれよ、アスナ！わかった！手握ってやるから、気がすむまで！」

アスナ「…えぐつ…うん、ありがとう…」

シン「アスナの性格、変わりすぎだろ…」

ルナマリア「怖い経験をするとは変わるタイプなのね……」

ミシエル「なる程、あれが女を落とす手か」

アルト「あまり、参考にしないうまいぞ、ミシエル」

ジユドー「そ、それにしても、ベルリはいいのか？ アイーダさんをシヤアに取られて
エル「シヤアは若い女の子を扱うのがうまいってアムロさんも言ってたよ」

ネロ「手は早く打って置かんとな！」

ベルリ「……行ってくる」

ハイネ「ベルリが起ったか、面白くなりそうだ」

アスラン「あまり、そうからかうのはダメなんじゃないか？」

ジョシユア「これって、アイーダさんを巡ってシヤアさんと直接対決ですか!?!？」

キラ「そんな事にはならないと思うよ」

シヤア「……詰まる所、社会自体がパラダイムシフト級の変化を迎えない限り、個人
の意識も変革を迎える事はないと言える」

アイーダ「それしか人類が変わる方法はないのでしょうか……」

ベルリ「そんな事はないと思います」

ハマーン「……」

アイーダ「ベルリ……」

シヤア「ベルリ・ゼナム君と言ったかな……。では、君の考えを聞かせてくれ」

ベルリ「社会が変われば、人間も変わる……。逆に言えば、一人一人が変わる事で社会……。つまりは世界も変わるんじゃないですか？」

シヤア「だが、それに期待しても報われないのはリギルド・センチュリーの歴史が証明している」

ベルリ「答えを急ぎすぎなんですよ。あなたの生きていた時代からどのくらいの時が流れて僕達の時代になるかわかりませんが……。人が変わるっていうのはもつと時間がかかるものだと思います」

シヤア「私は、それでは地球という星がもたないと判断した」

ベルリ「最低限、その問題はクリアしましたよ。だって、僕達の時代の地球の自然環境はだいたい回復していますから。確かに文明が滅ぶくらいの戦争が起きたのはあなたにとつて絶望的な事でしょうけど……。それでも人類は完全に滅びなかつたし、地球の環境も良くなつてる……。つまり、最悪の状況には堕ちてはいないんです」

シヤア「君は、それを良しとするのかな？」

ベルリ「完全無欠でなければダメって考えの方が危険だと思えますよ」

ハマーン「シヤアに対してここまで言うとは……。これが絶望の中に見る希望か……。」
ノレド「ねえ、エル……。ベルと、あの赤い人が何言ってるか、わかる？」

エル「よくわかんない……」

ビーチャ「あいつのぶっ飛んだ考え……意外にシャア・アズナブルと波長が合うのかもな」

バナージ「でも、ノレドだって何となくだけど、理解は出来るだろ？」

ベルリ「まあね。ベルとは付き合っても長いし。ベルは誰にでも、あんな調子だからあの子の考えてる事を理解できないで腹を立てちやう人もいるけどね」

刹那「だが、ノレドはそうじゃない。アイーダやラライヤも」

アンドレイ「それは、頭では理解できなくても心のどこかでベルリ君の言いたい事を感じられるからだと思うよ」

ノレド「わかる……じゃなくて、感じるか……。そういうの……理解できる」

ホープス「それは仲のいい人間同士ならば、当たり前的事と言えましょう。逆にみなが誰とでもそういう事が出来れば、争いというものが消えるかも知れません」

アイム「ホープスさんの言った通りです」

アマリ「何となくだけど、ホープスの言っている事……わかるわ」

ホープス「それは私とマスターが良好な関係だからと言えましょう」

ホ、ホープスの野郎……こつち見て、ニヤけるな！

こつちが動けないからっていい気になりやがって、あの腹黒オウム……！！

ホープス「その証として、今、マスターが考えている事を当てましょう」
アマリ「や、やってみて…」

ホープス「ホープスって素敵…では？」

零「はあ…!?」

アマリ「え、えくと…」

ホープス「違うのですか？だとしたら、私達の関係は破綻していると…」

アマリ「そ、そんな事ない！当たり前！当たり前よ！」

ラライヤ「ホープスって…やっぱ怖い…」

ホープス「そうですか」

零「くっ…！」

ホープス「どうした、女性泣かし？何か言いたい事でもあるのか？」

零「誰が女性泣かしだ！」

ホープス「私とマスターの関係に意義があるのなら、今、マスターの考えている事を当ててみる」

零「…いいだろう」

アマリ「…」

アマリの考えている事…。

零「…みんなが無事に世界を救えますように、だろ？」

アマリ「…！」

ホープス「…何を言い出すのかと思えば、お前は…」

アマリ「当たり前だよ、零君！」

ホープス「何と…?!？」

零「うっしやあ！」

俺は勝ち誇った顔でホープスを見る。

ホープス「ぐぬぬ…！」

アマリ「それなら、今度は私が零君の考えている事を当てるわ」

零「ああ、どうぞ」

アマリ「…愛してる、アマリ…」

零「当たり前だよ、アマリ」

アマリ「零君…」

アスナ「うわああああん！私を置いてイチャイチャしないでよおー！」

零「だあつ?!?ア、アスナ?!？」

キスしようとしたのにアスナに邪魔された…?!?

ホープス「あまり、調子に乗るなよ、引きこもり自害未遂が！」

メル「あ：：：ホープスさん、それは：：：！」

零「：：：上等じゃねえか、クソオウム：：：。羽ひん剥かれても文句言うなよ！」

アマリ「ちよ、ちよつと落ち着いて、零君もホープスも！」

アスナ「うええええん!!？」

アマリ「ひやあつ!!?アスナさん、急に抱きつかないでください!め、メルさん、助けてください!」

メル「：：：シュートです！」

アマリ「返さないでください！」

バリヨ「若いとほいいいな」

ホセ「俺達にもこんな時期があつたな」

カミーユ「取り敢えず、零達が良好な関係なのは間違いないな」

ジュード「直感的に物事の本質を理解する：：。つていう感覚：：。もしかして、それつて：：。」

カミーユ「そういう事だ、ジュード」

すると、デユオ達が来た：：。

デユオ「ここにいたのかよ、ベルリ!格納庫でハツパさんが呼んでるぜ！」

ベルリ「しまった!整備の手伝いをするつて約束、忘れてた！」

デュオ「トビアが文句言つてたぜ。お前がいけない分、二倍働かされてるって」
アイーダ「シャア大佐と議論する前にベルは自らの役割というものをきちんと認識する事が必要みたいね」

カトル「ハツパさんは、アイーダさんの事も探してましたよ」

アイーダ「・・・そう言えば、私もアルケインの改修の件で呼ばれてました・・・」

ベルリ「姉さん・・・」

アイーダ「人間は誰しも過ちを犯すものよ・・・そうですよね、シャア大佐？」

シャア「その通りだ。そこから何を学び、どうするかは当人にかかっているがな」

ベルリ「では、ベルリ・ゼナムとアイーダ・スルガンは格納庫へ行つて参ります！シャア

大佐！また後で、お話を聞かせてください！」

ベルリとアイーダはパイロット待機室を出て行つた。

バナージ「本当に嵐のような奴だな、ベルリって・・・」

アンジエロ「バナージ、ここにいたか」

バナージ「アンジエロさん・・・？どうかしたんですか？」

アンジエロ「お前、リディ・マーセナスとハツパという男に呼ばれていたのではなかつ

たのか？」

バナージ「・・・あ」

ミネバ「あなたもですが、バナージ……」

マリード「早く行かなければ、リデイの雷が落ちるぞ」

バナージ「わ、わかりました！」

バナージも部屋を後にした……。

シャア「……」

アムロ「面白い存在だろ？」

ハマーン「確かに、久しぶりに見たよ。あの様な少年は……」

シャア「トワサンガに拾われ、クンパ・ルシータに出会うのではなく、彼に先に会っていたら……。私も絶望より先に希望を見つけられたかも知れないな」

第49話 完全な世界

敵が来たとの報告があり、俺達は出撃した……。

ハツパ「アルケインの調子はどうです、姫様？」

アイーダ「問題ありません。フルドレスの武装も使える様になったのですね？」

ハツパ「シラノー5でロルツカさん達に調達してもらった資材で改修しましたので大丈夫なはずですよ」

アイーダ「これで少しはベルリに姉らしい所を見せられますね」

ベルリ「無理はしないでくださいね、姉さん！」

ノレド「ベルは出撃しないの？」

ラライヤ「G―セルフの調整が遅れているそうです」

シーブツク「トビアとバナージの方は……すごい重武装だな」

トビア「これ……ヘルメスの薔薇の中にあつたX―1の強化装備だそうです。元々はドレット軍が俺のX―1のために用意していたのをフラミニアさん達が横流ししてくれたんです」

フロンタル「まさか、フルアーマーもヘルメスの薔薇の中にあつたとはな……」

バナージ「タクヤが知ったら驚くと思います」

ハツパ「その名もフルクロスとフルアーマー・ユニコーンだそう。大事に使えよ、トビア、バナージ」

トビア「俺の知らないクロスボーンの装備……。こんな重装備が必要になる戦いが俺の未来に待っているのか……」

バナージ「俺達の時代の技術もヘルメスの薔薇に入っているのか……。いったい、何

処まで凄いんだ、ヘルメスの薔薇は……」

五飛「しかし、地上に降下してすぐに敵襲とはな……」

トロワ「アメリカ軍が壊滅した今、ミスルギは俺達を第一の標的としたのだろう」

ディオ「向こうはジット団が合流して、強気になっているしな」

クリム「面白い！エクスクロスの力をミスルギのジュリオに見せつけてやろう！」

青葉「さすがは天才！景気のいい事を言ってくれる！」

零「俺もあいつには痛い目を見てもらいたいですからね、クリム大尉の心意気に乗ります！な、アスナ」

アスナ「……ねえ、零」

零「どうした？」

アスナ「アマリが怖い話をしていた頃からの記憶がないのだけれど、どうしてあなたは私の手を握っていたの？」

メル「え……」

零「お、お前……覚えていないのか？」

アスナ「何を？」

アマリ「(下手にアスナさんを刺激しない方がいいですよ、これは……)」

メル「(何とか誤魔化してください、零さん)」

零「(わかった。)。俺がお前の手を握りたかったからだよ」

アスナ「ふえっ!?」

零「ダメ、だったか。？」

アスナ「だ、ダメじゃないけど。。」

アマリ「。。」

零「(誤魔化せて言ったのはそっちじゃねえか、その冷たい視線はやめてくれ。.)」
リー「零、流石にそれは。。」

ヤール「ないわ。。」

フロム「ホープスの女性泣かしという名前。あなたがち間違っていないね。。」

もう何とでも言ってくれ。。

シヤア「。。」

アムロ「呆れんばかりのバイタリテイだろ?」

シヤア「戦争などなくても人は強くなる。。それを信じたくなるな」

フリット「各機、警戒を怠るな!ミスルギの部隊が来るぞ!」

キャピタル・アーミィとマリーメイア軍のモビルスーツが現れた。

ケルベス「キャピタル・アーミィとマリーメイア軍か。!」

リング「先頭の二機のモビルアーマーはビーナス・グロウブが用意したっばいな」

バララ「気前がいいな、ジツト団の連中は。こんな面白い機体をこちらに回してくれるとは」

マニイ「(このジューラツハで私はマスクの力になってみせる...)」

バララ「気負いすぎるなよ、マニイ。マスクは機体の調整が遅れたおかげで出撃できないんだし」

マニイ「様子見がお望みなら、バララ中尉は後方で待機を。私のジューラツハが前に出ますから」

バララ「やる気があるのは結構だけど、G―セルフは出ていないみたいだね...。同じG系だ。あたしは、あのスカート付きを狙うよ」

アイーダ「各機、散開！キャピタル・アーミイの新兵器を叩き、敵の士気を挫きます！」

トビア「了解...！」

フルクロスが前に出た...
!!?

セシリー「トビア...！」

バナージ「前に出すぎじゃないか...
!!？」

トビア「ヘルメスの薔薇の設計図をばら撒いてる奴に教えてやるんですよ...！そんな事をしたって無駄だって！どんどん新型を投入してくるなら、片っ端から叩き落とす

！相手がバカらしくなるまでやります！」

ジユドー「トビアの奴……！新しい装備をもらって張り切ってるな！」

アイーダ「立派です、トビア。トビアの開けた突破口に続きます！各機は前へ！」

バナージ「待つんだ、トビア！俺も行く！（このフルアーマーで守ってみせる……みんなを……！）」

トビア「頼りにしてるぜ、バナージ！（このフルクロスが誰と戦うための装備なのかはわからないが、きっとロクでもない奴の相手をするためのものだろう……。だったら、このアル・ワースでもそういう奴等と戦うためにもこいつの力を使うぞ……！）」

戦闘開始だ！

戦闘から数分後の事だった……。

ホープス「……！」

アマリ「どうしたの、ホープス?!？」

ホープス「厄介な事になりそうです、これは」

現れたのは魔徒教団だった。

アマリ「魔徒教団！」

青葉「ついにミスルギと戦うために動いたか！」

イオリ「各機、攻撃を開始しろ！」

魔徒教団が俺達に攻撃を仕掛けて来た…。

三日月「狙いは俺達か…！」

パトリック「な、何でだよ?!？」

アマリ「どう言う事なの、イオリ君?!？」

零「エンブリヲがそこにいるんだぞ！」

イオリ「魔徒教団はミスルギ皇国を支持する事を決定した」

アマリ「何ですって?!？」

アムロ「法と秩序の番人である魔徒教団が人を差別し、周囲を侵略しようとするミスルギを認めるというのか？」

イオリ「それがアル・ワースのためであると判断したまでだ」

アマリ「待って！そんな事をすれば、戦いが拡大するだけです！」

イオリ「アマリ…。背教者であるお前の抹殺命令も出ている。だが、お前が投降するのなら、俺から上に取り計らう事も…。」

こいつ…！

アマリ「私の事よりも、ミスルギを支持する理由を説明してください！」

イオリ「残念だ、アマリ……。最後のチャンスを無駄にしたか……」
オルガ「問答無用かよ！」

シノ「こうなった以上、迎え撃つしかないぜ！」

零「……！ちいつ！こんな時にかよ……！」

今度はオニキスの機体が現れた。

アスナ「オニキスまで……！」

メル「で、でも何なんですか、あのアマテラスは……」

確かに……アマテラスの姿が……変わっている……？

リン「アマテラス・ツヴァイです」

零「カルセドニーじゃない……？誰だ……？」

ギルガ「彼女はリン・マスカライトちゃん。僕のパートナーだ」

メル「そ、そんな……リンちゃん……？！」

リン「……メルちゃん……。残念だよ。私はあなたを倒さないといけない……」

メル「……」

アスナ「メル、戦えるの……？」

メル「やり……ます……！」

ギルガ「今回来たのは僕達だけじゃないんだよ、ねえ、兄さん？」

また何か…… って、え……？

現れたのは…… 紫色のゼフィルス…… ！！？

零「む、紫色の…… ゼフィルス…… ！！？」

アイーダ「あれはいつたい何なのですか！！？」

アスナ「わ、私も知らないわよ、あんな機体！」

ラゴウ「これはナイトメア・ゼフィルスだ……」

メル「そ、その声は……！」

アスナ「嘘…… でしょう…… ！！？」

零「何者だ！！？」

ラゴウ「初めましてだな、新垣 零……。俺はラゴウ・カルセドニー……。ギルガの兄だ」

零「カルセドニーの兄貴だと…… ！！？」

アスナ「首領の左腕……！まさか、戻って来ていたなんて……！」

ラゴウ「弟が世話になったみたいだから……。今回は俺も参加させてもらう」

こいつ…… 今までの奴らとは大違いの殺気だ……！

零「…… だからと言って、お前には負けるわけにはいかない！」

ラゴウ「…… いいだろう、新垣 零……。此処で潰す」

アスナ「れ、零……！」

零「アスナ、メル……。怖いなら戻れ！」

アスナ「……わ、私だって、戦うわよ！」

メル「私もメルさんと一緒です！こうなる事は……わかっていましたから……！」

零「わかった……。でも、無理はするなよ？」

ラゴウ「愚かな……。お前達にも贖罪を与えてやる！」

零「させるかよ！お前を倒して、アスナ達には一歩も触れさせねえ！」

アマリ「考え直して、イオリ君！教団の決定ではなくあなたの考えを聞かせてください

い！」

イオリ「教団の決定は、俺の意思そのもの！背教者のお前の言葉はもう俺へは届かない！」

ホープス「マスター……。言っても無駄な以上、速やかに迎撃する事をお勧めします」

アマリ「今までの私は、疑いながらも心のどこかでは教団を信じていた……。でも

今……。その大切なものが壊れてしまった……。」

零「アマリ……。」

ホープス「マスター……。」

アマリ「戦うわ、ホープス……。私は……。私の信じた道のためにも！」

イオリ「ついに完全にエンデに背を向けたか！ならば、せめて俺の手で……！」

零「アマリはやらせねえって何回言えばわかるんだよ、お前は！」

ラゴウ「愛する者のために必死になるのは構わんが……俺の存在を忘れては困る」

零「忘れねえよ、てめえだけは！」

アマリ「戦いを広げる事が世界のためだと言うのなら、その証を見せてください！それが出来ないのなら、あなた達は……魔徒教団の敵です！」

俺達は戦闘を再開した……。

敵の数が多すぎる……！

イオリ「まだ抵抗を続けるか！ならば……！」

ルーン・ゴレムが増えやがった……！

アスナ「またルーン・ゴレムが出てきた……！」

アイーダ「私が行きます……！」

ユイ「無茶です、アイーダさん！」

Gーアルケインが敵陣にまで入った……
!??

アイーダ「魔従教団！あなた方の身勝手な法と秩序に私達は従うつもりはありません！」

イオリ「ならば、消えるがいい！教団の望む完全な世界にお前達のような異物は必要ない！」

アマリ「待っていてください、アイーダさん！すぐに行きます！」

零「少しでも持ち堪えろ！」

ラゴウ「行かせると思うか？」

零「…ちっ…！」

邪魔くせえ…！

ホープス「いや、どうやら大丈夫なようです」

アマリ「大丈夫なわけじゃないじゃない！いくらアルケインがパワーアップしたからって…」

ホープス「ご安心ください。姫を守る騎士が現れますから」

零「って、事は…！」

G―セルフがメガファウナから現れたが、何だ、あの姿は…？

ラライヤ「G―セルフ！」

ノレド「行け、ベル!!？」

ベルリ「うおおおおおっ！姉さんっ！！？」

G―セルフがアルケインの背後まで行く。

アイーダ「ベル！」

ベルリ「下がって！フォトン・トルピードを使います！」

G―セルフはアルケインを下がらせた。

ベルリ「やってみせろ、G―セルフ！！？」

G―セルフが攻撃を仕掛けた……。

ベルリ「パーフェクト……！名前負けするなよ！フォトン・トルピード！」

G―セルフから光の粒子が発せられて、周りにいたルーン・ゴーレム数機が跡形もなく碎け散った。

ケルベス「よくやった、ベルリ！！？」

ベルリ「これがフォトン・トルピード……！強力すぎる！」

アムロ「ハッパ中尉！あれは……！！？」

ハッパ「前から構想にあつた、G―セルフ用の究極のバックパック……。フラミニアさんから提供された資料を使い、これまで試作したバックのデータを組み込んだ結果、とんでもないものが出来上がったようです……」

アイーダ「まさにパーフェクトだな！」

ベルリ「これは… ちょっと僕の手に余るような…」

ハツパ「何を言ってる、ベルリ！ そのG―セルフは、コード制限があつたつて事は貴様達を救いたいシステムなんだぞ！」

ベルリ「え…」

ハツパ「いいご先祖様に感謝するんだな！」

ベルリ「はい！」

アイーダ「ハツパ中尉の言う通り、その力で私は助かりました。感謝します、ベル」

ベルリ「姉さん…」

アイーダ「キャピタル・アーミィの新兵器とトビアとバナージの新たな武装…。どちらもヘルメスの薔薇の生み出したものです」

アイーダ「片側は戦いを拡大させるものですが、トビアとバナージは、その力で戦いを止めようとしています。あなたも、そのパックの力であなたの望む世界のために戦いなさい」

ベルリ「… ありあとあす。姉さんは僕に道を示してくれました。この力は…。それ進むために使います。人が生命を大事にする世界…。生きてる事を誰もが喜べる世界…。そのために僕は戦いますよ！」

シヤア「これは…」

アムロ「直感的に物事の本質を理解する……。ついに素質を開花させたな、ベルリ……」

ベルリ「姉さんのおかげかな……。頭の中がスッキリしてきた！何だか元気が湧いてくる……。やるぞ！」

アイーダ「行きますよ、ベル」

ベルリ「はい！」

いい姉弟になったな、あの2人……。

バララ「G—セルフ……。！さらに強力な機体になったか！」

マニイ「(気のせいかな……。ベルリも強くなつたみたい……)」

アマリ「姫を守る騎士か……」

ホープス「……マスターにとつては零の事ですね」

零「ホープス……」

ホープス「悔しいが、私はマスターを導く事しか出来ない……。今は、お前が真正正銘のマスターを守る騎士だ」

零「……お前は本当に強力なライバルだよ」

ホープス「お互い様だ」

アマリ「(この2人もいいコンビですね……)」

ベルリ「武器もマシンも使い方は人次第……！機械だけでも人だけでも完全な世界には辿り着けない！やるぞ、G―セルフ！僕達が組み合わさって、初めてパーフェクトが見えてくるんだ！」

よっしやあ！戦闘再開だ！

G―ルシファアのスカートファンネル攻撃にジーラツハはダメージを負った。

マニイ「せっかくのジーラツハなのにまた負けた……！」

ノレド「もつやめようよ、マニイ！元の世界に帰りたいのなら、エクスクロスにおいてよ……！」

マニイ「ごめん、ノレド……。私の居場所はマスク大尉の隣だから……」

ジーラツハは撤退した……。

ノレド「マニイの分からず屋！」

ベルリ「マニイ……。学園にいる時は、あんなにルイン先輩にべったりだったのに……。そのマニイをあそこまで夢中にさせるマスク大尉って何なんだ……」

アルケインの攻撃でユグドラシルにダメージを与えた。

バララ「このユグドラシルでも勝てないなんて……！覚えていろ、エクスクロス！次は必ず借りを返してやる！」

ユグドラシルは撤退した……。

ベルリ「副官のあの子に新型が来たって事は、きつとマスクの所にも……。 (また面倒な事になりそうだな……)」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「もう僕は負けない！二人だと二倍の力になる！」

零「何倍になろうと俺だって負けるわけにはいかねえんだよ！」

リン「新垣さん……お手合わせを願います！」

零「お前達が何人来ようと……俺が相手になつてやる！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

メル「リンちゃん……」

リン「メルちゃん……。今なら私の言葉であなたをオニキスに戻す事が出来るわ……」

だから……！」

メル「何と言われても……私は戻ることは出来ない……。あなたに守りたい人がいるように私も守りたい人がいるから！」

リン「……やっぱり、ダメなのね……」

ギルガ「リンちゃん、行くよ？」

リン「……はい……。裏切り者のメル・カーネリアン！お前を拘束する！」

メル「簡単には捕まらない！」

〈戦闘会話 アスナVSギルガ〉

アスナ「ギルガ……あなた、リンまでタラシ込んだの!!?」

ギルガ「人聞きの悪い事を言わないでくれないか、アスナちゃん？」

リン「私は私の意思でここにいます！」

アスナ「……リン、あなたとは戦いたくないけど……向かってくるのなら倒すわ！」

リン「変わりましたね、アスナ先輩……」

リリスとメサイアの攻撃でアマテラス・ツヴァイにダメージを与えた。

ギルガ「下見は十分だ。兄さん、先に後退します」

ラゴウ「勝手にしろ」

メル「リンちゃん！」

リン「メルちゃん……。次は負けないから」

そう言い残して、アマテラス・ツヴァイは撤退した……。

零「メル……」

メル「私も……。そう簡単に負けないから……！」

〈戦闘会話 零VSイオリ〉

零「やつぱり、あの時にお前達と手を組まなくて正解だったって事だな！」

イオリ「愚かな奴等だ！エンデに逆らった罪は大きいぞ！」

零「何がエンデだ！間違った道へ進ませようとする神なんて、神じゃねえ！」

イオリ「許さんぞ、新垣！神エンデを馬鹿にする事は絶対にな！」

ゼルガードの攻撃でアイオライトの乗るデーベルはダメージを受けた。

イオリ「ここまでか……！後退するぞ！」

アマリ「待ってください、イオリ君！」

イオリ「アマリ！教団に戻る気になったか！」

アマリ「それはありません。戻って、導師キールデインに伝えてください。教団がエンプリヲに協力するのなら、私達はそれと戦います」

イオリ「アマリ……！お前はきつと後退する事になるぞ！」

アイオライトの乗るディーベルは撤退した……。

アマリ「後悔するような生き方はしたくない……。そう思ったから、私は旅に出たのです」

そう言う事だ、アイオライト。お前にアマリは渡さない……！

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

ラゴウ「オニキスの兵士達を退けてきたその力……見極めさせてもらう」

零「お前には全力で向かわないとおそらく勝てない……。だから、加減はしねえぞ！」

ラゴウ「いいだろう。ならば、俺も手を抜く気はない」

〈戦闘会話 メルorアスナVSラゴウ〉

ラゴウ「オニキスの裏切り者には死、あるのみだ」

メル「アスナさん：：本気で参りましょう：：！」

アスナ「ええ、冗談で勝てる相手じゃないわね：：！」

ラゴウ「本気を出そうと出さまいと：：お前達では俺には勝てん」

アスナ「舐めないでよね、私達の力を！」

〈戦闘会話 アマリVSラゴウ〉

ラゴウ「お前がアマリ・アクアマリン：：。新垣 零の愛する女か：：」

アマリ「私はあなたには負けません！」

ラゴウ「：：ほう：：」

ホープス「何ですか、あなたもマスターを連れ去るなどと言う気ですか？」

ラゴウ「私をギルガの様な愚かな弟と一緒にしてもらっては困る：：。だが、お前は敵であることには変わらない：：。それだけだ」

ゼフィルス、リリース、メサイアの連携攻撃でナイトメア・ゼフィルスにダメージを与えた。

零「どうだ!?？」

ラゴウ「なかなかやるではないか……。だが、それがお前達の限界だ」

ナイトメア・ゼフィルスの目が赤く……。?ハイバスターモードか……。!

零「させるかよ……。!」

俺はエボリューションモードを発動させ、ナイトメア・ゼフィルスと攻撃をぶつけ合ったが……。

奴はエボリューションモード以上の速さで攻撃を繰り返して来た為、ゼフィルスはダメージを受けた。

零「ぐっ……。!?？」

ラゴウ「この程度か?少々実力不足だな」

アマリ「零君!」

零「……果たして、そうかな……。?」

ラゴウ「何……。?ぬっ……。!?？」

ナイトメア・ゼフィルスに軽く電流が走った……。

通っていないか……。? ?

零「一発だけ……攻撃が通ったんだよ……！」

ラゴウ「……ふうー……。なるほど、お前の力を見くびっていた様だ。流石は我々、オニクスと敵対するだけの事はある。今日の所は俺に一撃を与えた事を免じて退いてやる……。だが、次はこうはいかなくて、零……」

零「その言葉……そっくりそのまま返してやるよ……ラゴウ……！」

ラゴウ「……その言葉が楽しみだ」

そう言い残し、ナイトメア・ゼフィルスは撤退した……。

正直助かった……。あのまま戦っていたら、確実にこつちが負けていた……。

アスナ「あのラゴウを退けるなんて……」

メル「流石は零さんです！」

零「ま、まあな……」

あはは……。こいつらの前では弱音は吐けねえよなあ……。

何とか敵を全て倒した。

青葉「よし！俺達の勝ちだ！」

ディオ「だが、戦術的勝利を重ねるだけでは最終的な勝利には到達できない」

青葉「要するに親玉を倒さなきゃダメって事だな」

マサキ「戦いの元凶……。当面はミスルギ皇国になるか」

ドニエル「既に別働隊には連絡を入れてある。彼等と合流したら……」
名瀬「いよいよ本格的にミスルギとの戦いになるだろうな」

ノレド「戦いが終わったら、またマニイと仲良く出来るかな……」

ベルリ「それはわからない……。でも、戦いが終わらなければ、それを確かめる事も出来ない。やりますよ、皆さん！僕達は戦いを終わらせるために戦いましょう！」

アムロ「(そうだ、ベルリ……。お前は感じるままに進め……)」

シヤア「(君こそが、遥かな刻の先に生まれた新時代のニュータイプかも知れない……)」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、メガファウナの格納庫に集まった。

アイーダ「……ありがとう、ベル。またあなたに助けられたわね」

ベルリ「今回はパーフェクトパックのおかげですよ……。ね、ハツパさん？」

ハツパ「いや……。俺の想定外に君はやつてくれた。君とG―セルフとパックの三つが揃って、初めてパーフェクトの名に相応しくなるな」

ベルリ「褒めすぎですって……！」

シヤア「ベルリ君……。今回の君の戦いは素晴らしいものだった。君は……。私が求め

た人類の姿かも知れない」

ベルリ「それって……変革した人類って事ですか？でも、そうだとしたら、意味ないですね」

シヤア「何……？」

ベルリ「出撃前にも話したじゃないですか。みんなが変わらなければ、世界は変わらない……。一人一人と世界が一緒に変わった時、初めてパーフェクトになるんだと思います」

シヤア「それが理想だろうな」

ベルリ「そこに向けて進みますよ、僕達は。やれる事を少しずつやりながら」

シヤア「……そうだな。何よりも君のその前向きさが私の求めた人類の姿だ」

ハマーン「お前は凄い男だ、ベルリ・ゼナム。シヤアをここまで言わせるなど」

ギユネイ「言ってる事は生意気ですけどね」

ケルベス「ベルリ！宇宙世紀の伝説に認められるとは元教官として鼻が高いぞ！」

デイン「凄えじゃねえか、ベルリ！」

ベルリ「ありあとあす！」

ケルベス「では、戦友として、キャピタル・ガード式のやり方で喜びを分かち合おう

！」

エリック「キャピタル・ガード式のやり方……？」

オブライト「一体何なんだ？」

カトル「あれをやるんですね」

アイム「でしたら、私達も参加しましょう」

マーベラス「仕方ねえな……」

鎧「何だか、わかりませんが、ワクワクします！」

シャナルア「何なの？」

ジラード「見ていたらわかるわ」

リオン「みんな、輪になれ！」

アルト「よし！思い切りいくぜ！」

フラム「私達もいい？」

ケルベス「もちろん！女性陣もどんどん来てくれ！」

リング「では、ラライヤは俺の隣に！」

レイル「あんたは、どさくさに紛れすぎだ！」

三日月「あれか……俺達もやろうよ、刹那、ヒロ」

刹那「わかった」

ヒイロ「…」

アムロ「さあ行くぞ、みんな！準備はいいな！」

ホープス「いつでも」

アムロ「この先、どんな事があっても俺達は…！」

メル「生き抜く！」

シヤア「どんな困難が待ち受けていようと…！」

アスナ「やってみせる！」

ゼクス「そして、勝利と未来を…！」

ノイン「掴んでみせる！」

零「俺達は…」

アマリ「一つだ!!？」

ケルベス「ファイト!!？」

ベルリ「ウオ、ウオ、ウオ、ウオーツ!!？」

やつぱり、気合が入るな、これ！

ベルリ「(きつとやれる…)！やってみる…！みんなと一緒に！それが僕の戦いだ

！)」

零「ホープス…お前に頼みがある」

ホープス「何だ、改まって？」

零「訓練に付き合ってくれないか？ベルリが成し遂げようと頑張ってるのを見て、俺も負けてられなくてな……。それに勝ちたい奴もいるし……」

アスナ「ラゴウね」

零「あの野郎……あの時は本気を出すとか言いながら、まだ本気を出してなかった……だから俺ももつと強くなって……アマリやみんなを守るようになりたいから……」

アマリ「零君……」

ホープス「お前の覚悟は理解できた。ならば、私も手を貸そう」

零「ありがとうな、ホープス！」

ホープス「その見返りはマスターとの2人の時間をだな……」

零「そんな事だろうと思っただけ、腹黒オウム！」

負けるかよ……。俺の為に力を貸してくれるホープスやみんなのためにも……絶対に……！

共通ルート

合流3

「名瀬・タービンだ。」

俺達は別働隊と合流しようとしていた。

ビスケット「別働隊の艦を確認しました」

目の前にN-1ノーチラス号とナデシコC、真ドラゴンが現れた。

ドニエル「…あのエンブリワはアンジユとナディアを狙っているようだ」

副長「時空さえも操る力を持つ男が女の子2人をですか…」

ドニエル「そして、ネモ船長とエンブリワの間にも因縁があると聞く…。いよいよエクスクロスの総力を挙げて、ミスルギと決着をつける時が来たようだ」

「新垣 零だ。」

俺達はシグナスの格納庫でそれぞれの情報交換を始めた。

グランデイス「……じゃあ、あんた……例の雛って子と2人つきりで話が出来たんだ……！」

青葉「ええ、まあ……」

ジャン「無人島で2人つきりなんて、ロマンチックじゃないですか！」

青葉「いや、実際に無人島にいたのは俺と雛だけじゃなかったよ」

エンネア「どういう事？」

メリツサ「私達も……いた」

カロツサ「……」

ルルーシュ「お前達はかぎ爪の男という人間の仲間だったな？」

シン「大丈夫だ、ルルーシュ。メリツサとカロツサはもう敵じゃない」

カレン「もしかして仲間になったのってシンが影響しているの？」

シン「ああ。俺とカロツサ、メリツサも青葉達と同じ無人島に遭難したんだ。まあ、青

葉達は流されてダメかと思っただが……」

青葉「運良く洞窟があつて助かったよ」

カロツサ「そこでシンは……メリツサのために一緒にリングを探してくれた……俺

を……助けてくれた」

メリツサ「あ、あの……ひどい事をした事は謝ります！だから……」

ヒデヨシ「全く……ガキがそんな心配しなくてもいいんだよ」

メリツサ「え……」

ワタル「メリツサ達だって、自分のすべき事をしていたんだから、怒らないよ」

しんのすけ「これから一緒に遊ぼうね、カロツサ君、メリツサちゃん！」

カロツサ「わかった、しんのすけ」

メリツサ「うん、しんちゃん」

青葉「遭難していなかったら、本当にロマンチックだったんだけど……。とてもそんな気分にはなれなかつたさ。それにあの子は、俺の知っている弓原 雛じゃなく、ゾギリアのヒナ・リヤザンだった……」

ジャンヌ「別人だったって事？」

青葉「あの子の言葉を、そのまま受け取るならな」

ディオ「そして、戦いの中で青葉のルクシオンは敵に奪われ……それをベースにして、ゾギリアはカップリング機を完成させた」

甲兎「ちよつと待てよ！幾ら何でも早すぎじゃないか!!？」

青葉「エルヴィラさんの話では、ゾギリアにもDr. ハーンっていうカップリングシステムの研究者がいるそうだ」

ディオ「ゾギリアのカップリング研究はコックピットの開発の遅れがネックだったた

め……。ルクシオンというサンプルを入手した事で開発計画が大幅に繰り上げられたと見ている」

ジョーイ「だからといって、アル・ワースにしながら新型機を開発するなんて……」
テイエリア「その事だが……ゾギリアは、定期的に元の世界に帰っていたんだ」

九郎「何だと!?？」

アレルヤ「だから、カップリング機開発のための資材や人材の調達は問題なかったわけです」

舞人「でも、カップリング機の実戦投入は何よりカップラーの養成が一番の問題だったはずでは……」

キオ「詳しい事は、よくわかりません。僕達も、ゾギリアのカップリング機にはまだ遭遇していないので……」

ノブナガ「アセム達も仲間に出会えたそうだな」

アセム「おう！紹介するぜ。俺の父さんのフリット・アスノに息子のキオ・アスノだ！」

フリット「よろしく頼む」

キオ「ここにも沢山の人達がいるんだ……」

ゼハート「次にセリック、シヤナルア、オブライト、デーンだ」

セリック「俺達の紹介は随分簡潔なんだな」

デイン「人数が多いからだと思えますよ」

オブライト「紹介とはこの様なものだろう」

シヤナルア「取り敢えず、これからはお世話になるよ」

ネロ「ふむふむ、ここにも優秀なロボット乗りがいるそうだな！」

ホセ「今は年寄りも若者ということか？」

チャム「このお爺ちゃん達は？」

プリシラ「私達の世界出身のエルドラメンバーです！」

ユキコ「リーダーのネロさん、ホセさん、バリヨさん、そして寝ているのがカルロス

さんです」

バリヨ「俺達も一緒に戦わせてもらおうぞ」

カルロス「…」

ヒミコ「キャハハハッ！本当に何しても起きないのだ！」

幻龍斎「コ、コラ、ヒミコ！やめるウラ！」

ヒミコ「そして、私がユキコ・ステイブンスです。生活班として動く事になりました

た」

シャーリー「一緒に頑張りましょう、ユキコさん！」

ユキコ「ええ、シャーリーちゃん」

九郎「鎧とナビイも久しぶりだな！」

ナビイ「みんなと会えて、オイラ嬉しいぞ〜！」

アル「妾も同じ意見だ」

箒「(何故だろうか…) ナビイの声を聞くと調子が狂う…)」

サイ「また、スーパー戦隊の話聞かせてくれよ、鎧さん！」

鎧「いいよ、サイ君！俺はゴーカイシルバーの伊狩 鎧です！よろしく！」

簪「あ、あの…！サインください！」

鎧「うわあ〜！俺にサインを求められるなんて… 嬉しいよ、簪ちゃん！」

楯無「あの男…」

千冬「目をどうにかしろ、更識姉…」

ヒイロ「…(ゾギリアの戦略は、常に俺達の先を行く…)。ゼロシステムの未来予測をも上回るゾギリア…。注意が必要だろう)」

デイオ「俺達もミスルギの用意したシンギュラーを通って、一度、元の世界に戻って状況を報告した」

青葉「そこで新型のカップリング機、ルクシオンネクストとブラデイオンネクストを受け取ったんだ」

ゼロ「ちょっと待て！じゃあ、シグナスのみんなは元の世界に帰れたつてのにまたアル・ワースに來たのかよ!?」

ディオ「ゾギリアがミスルギに荷担している以上、それを放置しておくわけにはいかない」

青葉「それにアル・ワースの戦いの行方ももう他人事じゃないしな。(そして、ゾギリアと戦つていれば、きつとまた雛に会える。。。雛は否定したけれど、やっぱり俺は。。。あの子は雛だと思う。。。だから、もう一度。。。あの子に会いたい。。。)」

ミツヒデ「シンとマーベラスは知り合いに会つたと聞いたが？」

マーベラス「あいつは。。。バスコは敵だ。。。ただ、それだけだ」

シン「・・・」

一夏「浮かない顔して。。。大丈夫か、シン？」

シン「ああ、大丈夫だ。(レイが何でミスルギにいるのかはわからない。。。もう一度、あいつに会つて確かめないとな。。。)」

ウー「こう見るとやはり、寄せ集めの部隊なのだ」

シモン「何でこいつがいるんだ？」

ウー「かぎ爪の男を殺す為だ」

エルザ「またそういうのが増えたのか口ボ?？」

ウー「取り敢えず、ウーだ。暫くだが、世話になると思う」

ヴァン「勝手な事を言うな！かぎ爪を殺すのは俺だ！」

ウー「いいや、私だ」

海道「俺達からしたらどっちでもいいっての…」

イングリッド「…」

ケイ「どうしたの、イングリッド？」

イングリッド「い、いえ…。私達がここにいてもいいのかと…」

ユイ「いいんですよ、イングリッドさん。あなたも私達の仲間なのですから」

イングリッド「ユイ…」

葵「ユイの言う通りよ。それにあなたはユイを助けようとしてくれたんでしょ？それ

でおあいこ」

ケイ「うん、ありがとう…」

イングリッド「私はイングリッド・テイエスト。こちらはメガエラのコア…ケイ・

テイエストよ」

サラ「ケイはヨハンに操られていたんだよ！」

マーベル「だから、見つけれなかったのね」

シヨウ「だけど、ケイ達を縛っていたヨハンを討ち取ったんだろ？」

アイム「はい。ですが……」

ハカセ「グラハム少佐がウエンデイのお兄さんの攻撃を受けて、意識不明なんなんだよ……」

さやか「グラハム少佐が……」

ウエンデイ「(兄さん……犠牲を出してまで得る幸せって、一体なんなの……?)」

ミック「……それとゾギリアはミスルギの中でも特別な立場にあるみたいだね……。ミスルギの手下って言うよりも協力者のな立場にあるようなんだ」

クリム「そのゾギリアの大部隊によってアメリカ軍本隊は壊滅させられたが、悲観する事はない。この天才・クリム・ニックがエクスクロスに合流したのだからな」

ワタル「この人達が天才クリム・ニックさんと相棒のミック・ジャックさんか……」
シバラク「噂通りの自信家じやのう」

クリム「私とミック・ジャックと他の者はアメリカ軍が壊滅した後、宇宙に上がり、トワサングのレイハントン家に接触したのだが……。そこでビーナス・グロウブの脅威を目の当たりにする事となった」

エイサツプ「ビーナス・グロウブ？」

ベルリ「僕達の世界の人間で金星圏に住んでいる人達です」

アイーダ「彼等はフォトン・バッテリーを生産し、宇宙世紀の遺産であるヘルメスの

薔薇を管理しています」

ハイネ「その中でレコンギスタを強行する一団…ジット団がミスルギに協力を誓ったんだ」

アンジエロ「奴等は、宇宙世紀からの異界人であるネオ・ジオンを引き入れて、既にアル・ワースに降下している」

クラマ「お前達は？」

ハイネ「シン達と同じ世界の出身、ハイネ・ヴェステンフルスだ、よろしくな」

アンジエロ「フロンタル大佐の部下のアンジエロ・ザウパーだ、これからは世話になる」

シヨウ「ネオ・ジオンって、ジユドー達の時代でシャア・アズナブルが率いていた一団か？」

ハマーン「いや…。その前には既にネオ・ジオンは生まれていた」

カズミ「あなたが、始めにネオ・ジオンを率いていたハマーン・カーンね…」

ハマーン「そして、グレミー・トトという男もいる」

ジユドー「(そして、そこには精神制御を受けたプルツォがいる…)」

シャア「…彼等は自らの目的を果たすためなら、アル・ワースの戦いを拡大させる事に何の躊躇いも持っていない」

万丈「シャア・アズナブル……」

シヨウ「では、聞きますが、同じように戦いを拡大させようとしたあなたはそいつ等と違うと言いたいんですか？」

シャア「戦いによって人類という種を強くする……。アル・ワースに転移して絶望の歴史を知った私はそう唱える人物……。クンパ・ルシータに賛同し、その思想の実行に力を貸そうとした」

万丈「それが、トワサンガやミスルギに協力し、戦いを広げようとした理由ですか……」
シャア「だが私は、絶望から這い上がる人間の強さを知り、戦いによって繰り返される悲劇こそ止めるべきものだという考えに至った。再び戦う覚悟を決めたカミーユや自らの限界を超えたシーブック達によってな」

アキト「シーブックが……」

トビア「凄かったですよ。F91から限界以上の性能を引き出して、シャア大佐を止めたシーブックさんは」

シーブック「夢中でやっただけだよ」

シャア「君やベルリのように私が知らない所で希望は育っている。その可能性の芽を阻むような行為……。即ち人の生命を奪っていく戦争を止めるべきだと私は判断した」

ギユネイ「それが大佐の新しい戦いなんですね？」

シヤア「許しは請わない。私は、ただ自分の信じる道を進むだけだ」

シヨウ「… あなたの決意はわかりました。先の事はともかく、アムロさん達が認め
た以上、今のあなたは俺達の仲間です」

シヤア「ありがとう。私を受け入れてくれて感謝する」

ギユネイ「俺はギユネイ・ガスだ。大佐共々よろしくな」

トオル「よろしくお願いします、ギユネイさん！」

アマタ「三日月と明弘のガンダムも強化したんだろ？」

三日月「うん、バルバトスルプスレクスとグシオンリベイクフルシティになったよ」

明弘「これでまた大暴れできるぜ」

シノ「それにオルガもモビルスーツに乗って戦ってくれるしな」

オルガ「おう！獅電に乗れない時はいつも通り、ハンマーヘッドのサブとして戦うけどな！」

マクギリス「これで鉄華団は元に戻ったな」

リユクス「マ、マクギリス・ファリド…!?」

ミラーナイト「どうして、あなたが…！」

ガエリオ「ま、待ってくれ、みんな！マクギリスは…！」

マクギリス「俺も許しを請わない…。俺の中にあつたのは完全なる憎しみではなく、

少量の友情だった。だから、俺はガエリオとの少量でも掛け替えのない友情を少しずつ元に戻していくだけだよ」

グレンファイヤー「敵じゃなくなっただんなら、何でもいいぜ！」

マクギリス「ふっ、ありがとう。それでもこれからはよろしく」

ネネ「ええ、よろしく！マツキー！」

ベルリ「トワサンガのロルツカさん達が資材を調達してくれたおかげでG―セルフのパーフェクトパックも完成しました」

アイーダ「G―アルケインも新しい武装が使えるようになり、トビアのクロスボーン・ガンダムやバナージのユニコーンガンダムもそれぞれフルクロスとフルアーマーに強化されました」

万丈「ジツト団を加え、カップリング機を完成させたミスルギの戦力は、さらに拡大している」

ベルリ「だけど、僕達だって負けていませんよ。あの人達が戦争をしたって言うんなら、相手をしてやります。そして、そんな事は馬鹿げているってさっさと教えてあげましょう」

ノリコ「ベルリ君の言う通りだね！」

シャア「(そうだ、ベルリ・ゼナム……。君のその前向きさこそが、私の求めた人類の

強さかも知れない……。遙かな時を経て出会った、新しいニュータイプ……。君達に期待させてもらう……。)

アンジュ「ミスルギにはまだ捕らえられている人がいるのね」

キラ「うん、カガリにラクス、アルミリアさんに篠ノ之 東さんと言う人やクロエさんと言う人もいる」

三日月「クーデリアもね」

一夏「東さんが……。すぐに助けださないと！」

千冬「落ち着け、一夏。奴を取り戻す為にはエンブリヲをどうにかする必要がある。心配するな、あいつを取り戻せるのも時間の問題だ」

箒「(姉さんがこの部隊に来た時……。私は姉さんを受け入れられるのだろうか……。)」

一夏「どうした、箒？ 険しい顔して。折角の可愛い顔が台無しだぞ？」

箒「な、なあっ……。!? な、何を言ってるのだ、お前は！」

一夏「い、いや！ 別に変な意味じゃないんだよ！」

シャルロット「ふくん、じゃあ、どう言う意味なのかな、織斑君？」

セシリア「成敗致しますわ！」

一夏「ちよっ……。逃げる！」

鈴「待ちなさい、一夏ー!!？」

今後はドアクター打倒組からの話を聞いた。

青葉「.:」

アレクサンダー「どうかしたか、小僧？」

青葉「ほ、本当にアレクサンダーと上杉謙信なのか？」

アレクサンダー「嘘をついて何になる？」

ケンシン「ノブナガ殿達がいる時点で予想は出来ているとは思いましたが？」

ヤール「い、いや.:。流石にここまで来ると目を疑うというか.:」

アレクサンダー「だが、我等は正真正銘の本人だ。普通に接して欲しい」

ルルーシュ「ここはこういう世界だと受け入れるしかないな」

C・C「お前が一番信じられないという顔をしていたがな」

ルルーシュ「だ、黙れ、魔女！」

ケンシン「まあ、ここで会ったのも何かの縁です。よろしくお願いします」

アレクサンダー「訓練ならばいつでも付き合おう」

シモン「ああ、よろしく頼むぜ！」

青葉「…あの虎王がドアクダーの息子…」

ワタル「うん…」

幻斎龍「虎王は、ドアクダー四天王のドン・ゴロ、エースのジョー、エムと共にワシ達に攻撃を仕掛けて来たのだウラ」

シバラク「その戦いで戦神丸と幻神丸は一度は生命を落としたのだが…。ワシと親父殿、ヒミコの正義の心によって戦王丸、幻王丸に生まれ変わり、パワーアップしたのだ」

クラマ「ついでに俺も空王丸で合流したぜ」

ラフタ「それは心強いけど…」

ワタル「大丈夫だよ、ラフタさん。僕は今でも虎王の事を友達だと思ってるから。だから、虎王を止めてみせるよ。友達として、そして救世主としてね」

セルゲイ「よく言った、ワタル君。我々も協力するぞ」

クラマ「ちなみに再合流したのは、俺だけじゃないぜ」

デュオ「って言うത്？」

舞人「ガインも復活して、マイトガインとマイトカイザーの合体によってグレートマイトガインが誕生したんだ」

マイトガンナー「おっと、俺の事も忘れてくれよ！」

カトル「このロボットは？」

マイトガンナー「俺の名はマイトガンナー。百発百中の射撃の腕が自慢だ」

ロックオン「へえ、随分自身があるじゃねえか」

ニール「お前とは気が合いそうだ」

ミシエル「今度、勝負しようか、射撃者同士」

マイトガンナー「勿論だ！戦闘の時はパーフェクト・キャノンに変形して、グレート

マイトガインに合体するぜ」

舞人「さらに勇者特急隊全車両が揃った事で究極の合体攻撃であるジョイントドラゴ

ンファイヤーも使えるようになった」

ディオ「エースのジョーとの決着は、どうなったんだ、舞人？」

青葉「あ、そうそう！一夏もエムって奴との決着を教えてくれよ！」

一夏「はあ：：はあ：：し、死にかけて：：って、え？」

舞人「グレートマイトガインと一夏が勝利した。そして、ジョーとエムはBD連合か

ら離反した」

ディオ「あれ程までに正義とお前達を憎んでいた奴等が：：？」

一夏「実はエムは一度、暴走したんだ。でも、俺と千冬姉のコンビネーションで正気

に戻したんだ！」

青葉「へえ、姉弟でナイスカップリングだな！」

千冬「青葉、殴られたいか？」

青葉「何で俺に怒ってんすか?!？」

舞人「ジョーは元々は悪人じゃない……。あいつは何者かに殺された父親……。穴戸

英二博士の死の真相を追っていたんだ。そして、その事件にはBD連合のパープルが関わっていたらしいんだ」

青葉「それでジョーとエムはどこに行ったんだ？」

一夏「わからない……」

舞人「だが、きっとジョーとエムは俺達の前に現れる……。その時、俺と一夏は……」
ベルリ「……じゃあ、ネモ船長もアル・ワースの人間だったんですか?!？」

ルルーシュ「ああ、そうだ。船長達は、アル・ワースの神話の時代にやってきたアトランティス人の末裔だそうだ。そして、あのガーゴイルも……」

刹那「あの男とネモ船長が同胞だったとは……」

ジャン「ネモ船長はアル・ワースにかつて存在していたタルテソス王国の王様で、ガーゴイルはその宰相だったそうです。今から十数年前、ガーゴイルはアトランティス文明の遺産を復元してアル・ワースの支配を企みました。そのためにガーゴイルはタルテソ

ス王国に巨大な兵器……バベルの塔を復元したんです」

ノブナガ「ネモ船長が、その完成を阻止した事によりバベルの塔は暴走して爆発し、それによってタルテロスという国は滅んだ……」

アイーダ「そんな……」

ルルーシュ「さらに、その爆発の衝撃でネモ船長とガーゴイルは、それぞれジャン達の世界に跳ばされ……それから10数年の間、ネモ船長はアトランティス文明の力で世界征服を目論むガーゴイルと戦い続けてきたんだ」

マリー「OO」「それがまた、このアル・ワースに事故で戻って来たのね……」

ルルーシュ「この話には、まだ続きがある……。当時、ガーゴイルと共にバベルの塔を復元しようとしていたのが、例のエンブリヲだ」

アニュー「また、あの男なのね……」

アンジュ「そのエンブリヲに、そそのかされてサリアとエルシャとクリスが私達の敵に回った……」

アンドレイ「な……」

パトリック「姿が見えないと思ったら、そんな事に……」

ロザリー「あいつ等、おかしいんだよ……！ 訳のわからないこと言って！」

ヒルダ「サリアはエンブリヲが愛をくれたから、エルシャは奴が子供達に未来を創つ

てくれるから、クリスは奴が友達になつてくれたから…。それがあいつ等が、あたし達を裏切つた理由だよ」

ナオミ「私も実はエンブリヲに連れていかれそうになつたんです。私はエンブリヲから死んだ人間を蘇らせて、私の借金を無くす事が出来ると言つて来たんです。私は勿論断つたのですが、無理矢理連れて行かれそうになつた所を一夏とゼロに助けてもらつたんです」

ゼロ「エンブリヲは何故か、ウルトラマンに対して非常に深い憎しみを抱いている…。あいつは一体何なんだろうな…。」

ビーチャ「所で、サリア達はどういう事なんだ？」

ロザリー「だから、言つただろ。訳がわからねえつて」

ジル「あの子達もかつての私のように身も心もエンブリヲに墮とされたのだろう」

オルガ「あんたは…？」

アンジュ「アルゼナルの司令のジルだよ。と言つても、元がつくけどね」

タスク「彼女も俺達と行動を共にする事になつた」

ジル「負け犬である私に出来る事はこの戦いを傍観する事だけだな…。」

タスク「(ノーマの解放のために立ち上がりながら、エンブリヲに身も心も奪われたアレクトラ…。その過去の傷が、今も彼女を苦しめる…。そして、エンブリヲに再開し

た今、彼女は自らの無力さに打ちひしがれて生きる氣力を失ってしまった。…」

ジル「…」

アンジュ「言っておくわね、司令。私はあなたの過去になんか、興味はないから。私は、この私を花嫁にするなんてふざけた事を言った、あのエンブリヲと戦う…。あいつにたぶらかされたサリア達ともね。あなたが負け犬だつて言うなら、そのやる氣が下がる顔を私に見せないで」

ユイ「言い過ぎだよ、アンジュ！」

ジル「氣を使わないでくれ、ユインシエル陛下…。私は、そう言われても仕方のない女だからな…」

トツド「聞けば聞く程、そのエンブリヲって男はとんでもない野郎なんだな…」

バーン「私も一度見た事があるが、隙が見えない妙な男だった」

カトル「トツド・ギネス…！」

五飛「バーン・バニングスまで…！」

トツド「どうしてお前達がここに…。なんて野暮は言うなよ」

シヨウ「トツドとバーンはドアクター軍団の第六界層のボス、ビビデ・ババ・デブーの所にいたんだ」

シルキー「あの魔法使いのおばあさんは、私の守っていた balan balan の秘宝…」

サーバインを狙っていたんです」

トロワ「妖精：：？ミ・フェラリオか」

シルキー「私の名前はシルキー・マウ：：。よろしくお願いします」

シヨウ「シルキーは、俺やトツドをバーストン・ウエルに呼んだシルキー・マウが禁忌を破った罰として転生した姿だ：：。本人にエ・フェラリオだった時の記憶は残っていないようだがな：：。」

シノ「そのサーバインってのは？」

シヨウ「ダンバインの試作型らしいオーラバトラード。高いオーラ力を必要とするが、強力な機体だ」

シルキー「あれは、私と一緒にアル・ワースに跳ばされて来ました。聖戦士シヨウ・ザマと仲間達：：。あなた達なら、サーバインを正しき事に使ってくれると信じます」

シヨウ「そして、俺達はバーンやトツドと決着をつけ、ビビデ・ババ・デブーを倒して、創界山の秘宝である千光の腕輪を手に入れたんだ」

チャム「元々、憎しみのオーラから解放されていたバーンは兎も角、負けを認めたトツドは？みたいに素直になって、あたし達と一緒に行く事になったの」

バーン「私を憎しみから救ってくれたシヨウに借りを返すだけだ」

トツド「少し前までの俺は、悪い夢の中にいたんだよ」

デュオ「それで：．．その千光の腕輪つてのは、どこにあるんだ？」

ワタル「僕がつけてる、これだよ」

五飛「その力は？」

ワタル「その人の持つ力を強化するらしいんだけど、正直、よくわからないんだ」

エイサツプ「もしかすると、この腕輪には何か秘密があるんじゃないかって俺達は考えているんだ」

サコミズ「その考え、見事だ。鈴木君」

エイサツプ「いや、だから俺だけの考えでは：．．」

ゼクス「失礼ですが、あなたは？」

サコミズ「サコミズ・シンジロウだ」

ノイン「サコミズって：．．！」

レナ「リユクスのお父さんなの？！」

リユクス「そうです。父上は私達の危機に駆けつけてくれたのです」

サコミズ「娘のリユクスとその婿の鈴木君が世話になったみたいだな、礼を言う」

リユクス「む、婿？！」

エイサツプ「さ、サコミズ王！」

サコミズ「フハハハッ！父親の軽い冗談よ」

ひろし「いや、冗談というのは必要ですよね」

サコミズ「わかってくれるか、流石は父親だな、ひろし君」

みさえ「父親同士、気があうってわけね」

ワタル「とにかく、これで第六界層までのボスを倒したから、ドアクダー軍団も少しは大人しくなると思う」

デュオ「その間に俺達はミスルギと決戦ってわけだな」

シヨウ「さらわれているシーラ様やサリーちゃん達も気になるけれど……。魔従教団がエンブリヲの支持を決めた今、急がなくてはならないだろう。」

エメラナ「それもそうですが、今はレイ様を元に戻す事が先決です」

ルナマリア「レイさんがどうかしたんですか？」

シン「この場にはいないようだけど……」

ゼロ「お前達と合流する前の戦闘で奴が蘇りやがったんだ」

マーベラス「奴だと……？まさか……！」

ルカ「ゴーカイ」「ベリアル……なの……？」

ゼロ「ああ。俺達はベリアルに立ち向かったが、レイは奴に闇の力を入れられ、レイモンとなり、バーストモードとなって暴走したんだ」

ヒイロ「レイモン……？」

ゼロ「レイのレイブラット星人として覚醒した姿だ。あいつが暴走した為、ゴモラもレイオニツクバーストを起こし、ただ暴れるだけの存在へとなってしまったんだ」

青葉「レイさんが敵に回るなんて……」

ヒユウガ「だが、レイは必ず、俺が救い出す……信じてくれ」

オズマ「勿論ですよ、ヒユウガ船長。それ以外の敵は俺達が引き受けます」

ヒユウガ「……ありがとう」

ダークケロロ「我等も力を貸す」

ノレド「あれ、黒いケロロじゃん？」

冬樹「大軍曹達はベリアルの復活を阻止しようとしていたんだ！」

ラライヤ「そうだったんですか……」

ダークケロロ「理由があったとはいえ、襲いかかってしまい、すまなかった」

ケルベス「このエクスクロスにはそういう人が多い、気にするな」

リンゴ「そちらのケロン人は君の仲間か？」

シヴァヴァ「俺たちはシヴァヴァだ！よろしくな！」

ドルル「ドルル……」

ダークケロロ「そういう訳だ。我等もドアクダー退治に全力を尽くそう」

ワタル「よしっ、みんな！これからも一致団結して頑張ろう！」

ワタルの言葉に皆は声を出し、頷いた……。

零「……」

一夏「どうした、零？」

零「いや、初めは俺と一夏、しんのすけの3人だけだったのに……様々な世界から来たみんなでこんな大部隊になるなんてな……って」

しんのすけ「最初はどうなる事かと思つたゾ」

一夏「行けるさ、俺達は必ずアル・ワースを平和にする……大切な仲間なんだからよ」
零「そうだな……」

そうだ……。その大切な仲間を守る為にも、俺はラゴウの奴に勝つ……。絶対に……！

―倉光 源吾だよ。

僕達はシグナスの艦長室でネモ船長から彼等の事を聞いていた。

ネモ船長「……以上が私とN―ノーチラス号の乗員達の今日までの戦いの経緯です」

倉光「アル・ワースのタルテロス王国の国王、エルシス・ラ・アルウオール……」

スメラギ「それがネモ船長の本当の名前……」

ネモ船長「個人的な事情から、今まで、これらの事実を隠していた事をお詫びします」
ドニエル「お気になさらんでください。このエクスクロスに参加している人間は皆それぞれに事情を抱えていますし」

名瀬「こうして全てを話してくださった以上、あなた方の戦い：：協力させていただきます」

ネモ船長「：：すまない」

ルリ「謝る必要などありません。私達は仲間なのですから」

ジェフリー「しかし、こうなるとますますエンブリヲ率いるミスルギを放っておくわけにはいきませぬね」

號「奴等の当面の敵であったアメリカ軍本隊が壊滅した今、どの道、俺達との激突も必至だろう」

ネモ船長「そして、エンブリヲはアンジュとナディアを標的にしています。エンブリヲと結託したガーゴイルの動きも読めない以上、こちらから打って出る事を提案します」

ルリ「私も賛成です。彼等を支持する魔徒教団も気になりますし」

倉光「では、決まりですね。エクスクロスは、対ミスルギ皇国を最優先戦略としましよ
う」

―新垣 零だ。

俺は夜になり、周りの警備に入っていた……。

零「……ふいー、なんか寒いな……。それにしても何で俺一人なんだよ……」
アマリも居てくれたら、楽しいのに……。

すると、俺の目の前にフードを被った人が歩いて来た。

ここら辺の村の人か……？

零「失礼ですが、あなたはこの近くの村の方ですか？」

？「……そうよ」

……この声……女の人か……？

零「そうですか。こんな夜遅くに何を？」

？「知り合いに……会いに来たの」

零「知り合い……？」

？「どうやら、ここには居ないようね……。それと、あなた……」

零「！」

突然、フードの人が優しく抱きしめて来た。

零「な、何を…!?」

?「しばらく、このままでいさせて…」

零「…」

ど、どうして、俺はこの人を引き離そうとしない…? それにこの人の声… 何故か
落ち着く…。

?「泣いているの？」

零「え…」

泣いている…? 俺が?

頬を触って確かめると確かに俺は涙を流していた…。

どうして… 何故、俺は泣いているんだ…?

?「ねえ、あなたが大切な人を守る方法があるわ…」

零「それは…?」

?「ゼフィルスから降りなさい…。そして、今後ゼフィルスに乗らないで」

零「…!」

な、何でこの人がゼフィルスの事を…!?

零「あ、あなたは一体…!?」

フードの人は俺を優しく離れた。

？「私は……」

アマリ「零君ー！」

？「っ……」

アマリの声が聞こえ、振り返るとアマリが手を振って歩いて来た。

零「アマリ、どうしたんだ？」

アマリ「倉光艦長が警備は終わりだって言っていたわ。私はそれを迎えに来たの」

零「そっか、ありがとうな！」

アマリ「所で誰と話していたの？」

零「あ、そうだ！あなたは……っ！！？」

フードの人の方を再び向くとフードの人はいなくなっていた……。

零「あ、あれ……！！？」

何処に行つたんだ……！！？」

アマリ「誰もいないけど……大丈夫？」

零「あ、ああ……。俺の気のせいだったようだ！戻ろうぜ、アマリ！」

アマリ「ええ！」

あの人……一体何だったんだ……？

あの人の声……聞いた事があるような……。

この時、俺は気づいていなかった……。

？「大きくなつたわね……」

艦へ戻ろうとした俺とアマリを岩の上から見ていたフードの人がまだいた事に……。

第50話 覚醒の一撃

―新垣 零だ。

俺達はシグナスのトレーニングルームにいた。

ゼロ「でやあああああつ！」

ヒュウガ「ぐあああつ！」

ヒュウガボスがゼロと組手をしていて、今蹴り飛ばされた。

ゼロ「この程度か、ヒュウガ！そんなんじやレイを救い出すなんて出来ないぜ！」

ヒュウガ「まだまだ！」

一夏「ヒュウガ船長… 必死だな…！」

シン「余程、レイさんを救いたいんだろな」

ウエンデイ「で、でも無茶ですよ！ウルトラマンのゼロさんに勝つなんて！」

カルメン99「いいえ、これは勝つか負けるかじゃないわ」

ジョシユア「そうなんですか？」

ラウラ「レイさんを取り戻したいという思いだろな」

セシリア「あら、皆さん！」

すると、セシリアがきた…。

箒「何処へ行っていたんだ、セシリア？」

セシリア「皆さんがお腹を空かしていると思い、サンドウィッチを作りましたの」

鈴「え…。」

シャルロット「こ、これは…。」

…何でみんなヤバそうな顔をしているんだ？

零「何やってんだよ、みんな。折角セシリアが作ってくれたのに喰わないのかよ？」

セシリア「ほら、ヒイロさんも食べてくださいな」

ヒイロ「頂こう」

一夏「よ、よせ、零、ヒイロ！」

この時、俺は後悔した…。

一夏の言葉を聞いていれば…。

俺とヒイロはセシリアのサンドウィッチを食べた…。

零「ごはあつ…！」

大きく吹き飛び、天井に激突し、地面に落下した。

アマリ「零君!?!？」

アスナ「え、何で吹き飛ぶの!?!?」

何だよこの味: : : 辛さと甘さと苦さと酸っぱさが混ざると身体が吹き飛ぶ程の味になるのか: : : てか、これヤバイ: : : い、意識、が: : : 。

零「わかった: : : セシ、リアに: : : 料理、はさせ: : : られない: : : ガクツ: : : 」
メル「零さんー!!?!?」

ーアマリ・アクアマリンです。

どうして、サンドウィッチを食べて、気を失うの!?!?

あのサンドウィッチに爆弾でも入っているの!?!?

って: : : 確か、ヒイロ君も食べていたはず: : : 。

ヒイロ「: : : 」

デュオ「さ、流石はヒイロだな: : : 。こんな時でも動じない無愛想: : : 」

トロワ「いや、これは: : : 」

ヒイロ君は黙ったまま、倒れました。

デュオ「ヒイロオオオオオオツ!?!?」

カトル「気を失っていたんですか!?!?」

一夏「だから言ったんだよ……！」

アスナ「ちよつと、一夏！何なのあのサンドウィッチは!?？」

メル「どうして、気を失う者が出るんですか!?？え、一夏さん達の世界のサンドウィッチはこうなんですか!?？」

箒「そんな訳あるか！」

ラウラ「セシリアは料理が下手なんだ……」

アキト「ま、まあ……お嬢様と聞いたからね……」

すると、今度はオルガ団長が倒れました……。

ビスケット「オルガ!?？」

リョーコ「まさか、お前も食ったのか!?？」

オルガ「いいか、みんな……。幾ら腹が減ったからって……怪しい料理に……手を出す

んじゃねえぞ……ガクツ……」

三日月「オルガ……うん、わかった」

セシリア「あらあら、倒れられる程美味しいとは……作った甲斐がありましたわ！」

夏美「本人に自覚はないの!?？」

ヴァン「ふあく……騒がしいな……」

あ、ヴァンさんが起きました……。

アンジュ「起きたの、ヴァン？」

ヴァン「ん、アンジュか……。何で何人か倒れてるんだ？」

……。あれ？待ってください……。

アイーダ「い、今、ヴァンさん……。アンジュの名前を呼んでませんでしたか？」

カルメン99「ちよつと、ヴァン！どうして、アンジュの名前だけ呼べるのよ!!？」

ヴァン「何でつて……。何でだ？」

カルメン99「知らないわよ！質問を質問で返さないで！それよりも私の名前は!!？」

ヴァン「えつと……。すみません……」

セシリア「あら、ヴァンさん。おはようございます。そう言えば、お腹はお空きですか？」

ヴァン「……。確かに腹減ったな」

セシリア「でしたら、これを食べてくださいいな！」

ヴァン「頂くぜ。調味料全部くれ」

セシリア「このまま食べてください！」

ヴァン「わ、わかった……」

あ、ヴァ、ヴァンさんまで……！

ヴァンさんはサンドウィッチを食べました……。

ヴァン「うまい!!?」

青葉「ウソオツ!!?」

シモン「確かにうまいな、このサンドウィッチ」

セシリア「本当ですか!!? もっと食べてくださいいな!」

ベルリ「シモンさんまで!!?」

刹那「彼等は、人間か……!!?」

アルト「いや、待て……。シモンは意外だったが、ヴァンさんは元々、調味料を全部かける人だったんだぞ」

キオ「た、確かに、言われてみれば……」

ガドヴェド「これは……もう彼女は止まらん……」

私達……どうなるのでしょうか……。

ゼロ「お前等、何やってんだよ?」

ヒユウガ「何か無法地帯に見えるな……」

この後、零君、ヒイロ君、オルガ団長は目を覚まし、事なきを得ました……。

ーベリアルだ。

俺はドアクターの野郎とゴゴールの野郎の前にいた。

ゴゴール「お久しぶりです、ベリアル様」

カイザーベリアル「ゴゴールか、てめえも偉くなったものだな」

ゴゴール「おかげさまで…」

カイザーベリアル「ドアクターも感謝しているぜ、俺様の復活を手助けしてくれたんだろ？」

ドアクター「代わりにそちらの戦力を提供してもらっているのだ。礼は不要だ」

カイザーベリアル「なら、俺様達は行かせてもらうぜ。なあ、レイモン？」

レイモン（バーストモード）「グウウウウ…」

ドアクター「（この者がレイオニクス…。確かに凄まじき力を感じる…）」

ドアクター「いいだろう、健闘を祈る」

カイザーベリアル「じゃあな」

そう言い残し、俺様とレイモンはドアクターの部屋を後にした…。

待っている、ゼロとエクスクロス…。てめえらを地獄に突き落としてやるぜ。

第50話 覚醒の一撃

―新垣 零だ。

俺達はベリアル軍が攻めてくるとの連絡を受けて、出撃した……。

カレン「いよいよ、本気で攻めてくるんだね！」

スザク「光の国を壊滅させたウルトラマンベリアル……今の僕達で敵うかどうか……」
ジエレミア「だが、ベリアルが来るといふ事はレイも来るだろう」

アーニヤ「だとしたら、レイを救い出せるチャンス」

ルルーシユ「ヒユウガ船長、準備はしておいてください」

ヒユウガ「わかった！」

ウイル「この気配は……！」

ゼロ「来たか……！」

ゼロの言葉通りにベリアル軍が現れた。

カイザーベリアル「よう、来てやったぜ、エクスクロス！」

ゴーカイレッド「ベリアル！」

カイザーベリアル「今回は宇宙海賊の奴らもいるのか… スーパー戦隊とやらの力を
見せて見やがれ！」

レイモン（バーストモード）「ゴモラアアアツ!!?」

レイさんはゴモラ（レイオニツクバースト）を召喚した。

ゴモラ（レイオニツクバースト）「キシヤアアアン!!?」

青葉「あれが… 暴走したレイさんとゴモラ…」

ディオ「確かに禍々しい力を感じる…!」

刹那「ヒュウガ! レイの救出は任せるぞ」

ヒュウガ「わかった! 待っている、レイ!」

ヒュウガボスはレイさんの元へ向かった…。

海道「行くぜ、ゼロ!」

ゼロ「おう! ベリアル! お前達の思い通りにはさせねえぞ!」

ベリアル「来やがれ、ゼロ! 俺達の因縁もここで終わりだ!」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話

零VSゴモラ（レイオニツクバースト）〉

零「レイさん！今行きますから、待つていてください！ヒュウガボスがレイさんを元に戻すまで俺が食い止めてみせる！」

〈戦闘会話　アマリVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ホープス「今更弱音は吐けません、行きましょう、マスター」

アマリ「ええ！私が負けるのが先か、レイさんが元に戻るか、勝負です！」

〈戦闘会話　万丈VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

万丈「本来ならばダイターン3の日輪の光であなたの闇を消したい所だが、それはヒュウガボスに託す……。だから、僕は君達の動きを止め続ける！」

〈戦闘会話　シヨウVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

シヨウ「レイさん、ゴモラ！もう少しの辛抱だから、我慢してくれ！」

〈戦闘会話　エイサップVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

エレボス「本気でかからないとゴモラに潰されちゃうよ、エイサップ！」

エイサップ「だが、本気を出すのは斬る為じゃなくて、止める為だ！行くぞ！」

〈戦闘会話　カミーユVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

カミーユ「レイさんは苦しみ続けている…。何としてでも此処で食い止めないと…！」

〈戦闘会話　ジュードーVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ジュードー「みんな、あんたの帰りを待っているんだよ、レイさん！だから、戻って来てくれ！」

〈戦闘会話　アムロVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

アムロ「これがレイオニクスの暴走か…。！レイを頼みます、ヒュウガ船長！ゴモラは俺達が…！」

〈戦闘会話　バナージVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

バナージ「望まぬ力の暴走…。俺達が止めるぞ、ユニコーン！」

〈戦闘会話　シーブックVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

シーブック「真つ正面から戦ってもゴモラには勝てない……。それなら、空中で時間を稼ぐしかない！」

〈戦闘会話 トビアVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

トビア「これがレイオニクスとしてのレイさんの姿……。！本来の自分を取り戻してください！」

〈戦闘会話 ヒイロVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ヒイロ「レイオニクスのレイ、お前を殺す……。そうなる前に早く目を覚ませ！」

〈戦闘会話 シンVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

シン「これ以上、レイさんに大切なモノを傷つけさせるわけにはいかない！俺が止めてやる！」

〈戦闘会話 キラVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

キラ「レイさんは心の中で泣いている……。これ以上、悲しませない！」

〈戦闘会話　刹那V S ゴモラ（レイオニックバースト）〉

刹那「地球人もレイオニクスも関係ない……。俺達はわかり合う事が出来る！だから、手を伸ばせ、レイ！」

〈戦闘会話　キオV S ゴモラ（レイオニックバースト）〉

キオ「目を覚ましてください！本当はこんな事、やりたくないはずですよ！……ダメか、それなら足だけでも止める！」

〈戦闘会話　アセムV S ゴモラ（レイオニックバースト）〉

アセム「待っているよ、レイ！俺達やヒュウガさんが絶対に止めてやるからな！」

〈戦闘会話　フリットV S ゴモラ（レイオニックバースト）〉

フリット「倒すよりも止める……。難しい事だが、それは為すべき事だ、必ず成し遂げる！」

〈戦闘会話　ベルリV S ゴモラ（レイオニックバースト）〉

ベルリ「僕は仲間ですよ！レイさん、ゴモラ！僕達だってそうじゃないですか！あな

たには何も傷つけさせない！」

〈戦闘会話 三日月VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

三日月「ボスが待ってるよ、レイ。早く帰ろうよ、みんな一緒に……！」

〈戦闘会話 ワタルVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

龍神丸「ワタル！正面から戦っても不利だ！」

ワタル「それなら、組みつく！何としてでもレイさんとゴモラを止める！」

〈戦闘会話 舞人VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

グレートマイトガン「舞人、ゴモラが来るぞ！」

舞人「今のレイさんは危険だ……！すぐにでも止めるぞ、ガイン！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ルルーシユ「ゴモラの超振動波は強力過ぎる……！絶対守護領域でも防ぎきれるかどうか……。だが、やるしかない！必ず、ヒュウガ船長がレイを止めてくれる！」

〈戦闘会話 青葉VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

青葉「ゴモラを攻撃するとレイさんにもダメージが通るんだよな……。それなら、なるべく攻撃を与えないようにしないと……。！」

〈戦闘会話 アンジユVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

アンジユ「何やってんのよ、レイ。ゴモラこと倒されなくなかったら早く戻って来なさい！」

〈戦闘会話 甲児VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

甲児「レイさんもゴモラもやめてくれ！俺は2人と戦いたくない……。くそっ！やるしかないのかよ！」

〈戦闘会話 海道VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

真上「此処まで撃ち抜き辛い相手は久しぶりだな……。！」

海道「ちょうど良い！ゴモラとも一回やりあってみたかったんだ！かかって来やがれ！」

〈戦闘会話 鉄也VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

鉄也「よもやこんな事になるうとは……。戻つて来い、レイ、ゴモラ。お前達の帰りを待つている者が沢山いるんだ！」

〈戦闘会話 シモンVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

シモン「レイの方はヒュウガ船長がぶん殴つて目を覚まさせてくれる！それなら俺がゴモラをぶん殴つて目を覚まさせてやる！」

ヴィラル「それが最適な手段だ！行くぞ、シモン！」

〈戦闘会話 ネモ船長VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

エレクトラ「射線上にゴモラが入りました」

ネモ船長「よし、牽制砲撃でゴモラの動きを止める。そして、彼を取り戻すぞ！」

〈戦闘会話 一夏VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

一夏「レイさん！今、目を覚まさせてあげますから、待っていてくださいね！」

〈戦闘会話 竜馬VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

弁慶「ゴモラが相手だな！」

隼人「間合いに入られると厄介だぞ、竜馬！」

竜馬「だったら、スピードで翻弄してやるぜ！」

〈戦闘会話 葵VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ジョニー「まるで獣ですね、今のレイさんは……」

朔哉「俺達といい勝負できそうだな！」

エイターダ「い、今はそんな事を言っている場合では……」

くらら「でも、気合いで負けると勝負が決まるわ」

葵「そういう事……私達は手加減はしないわよ、レイ！それが嫌なら早く戻って来な

さい！」

〈戦闘会話 九郎VSゴモラ（レイオニックバースト）〉

アル「全力でやらなければこちらがやられるぞ！」

九郎「だが、本気を出せば、レイ達にもダメージが来る……！」

アル「何を迷っておるのだ、九郎！レイとゴモラを取り戻すのだろう！」

九郎「……そうだな。それに必ずヒュウガ船長がレイを止めてくれる……。それまで

戦うまでだ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ヒーローマン「…」

ジョーイ「ヒーローマンもゴモラとレイさんを助けたいんだね…。僕も頑張るよ、2人を助けるために！」

〈戦闘会話 ヴァンVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ヴァン「殴って目を覚ますなんて面倒な真似はする気はねえ…。俺はぶっ倒してでも目を覚まさせてやる！」

〈戦闘会話 アマタVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

アマタ「レイさん！俺達もみんな、あなたを取り戻したいと思っています！だから、戻って来てください！」

〈戦闘会話 ノリコVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

カズミ「いつも怪物とは戦っているけど、これはわけが違うわね…。！」

ノリコ「行きましょう、お姉様。レイさんやゴモラを助ける為に！」

〈戦闘会話　ユイVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

レナ「ゴモラの攻撃は強力よ！迂闊に攻め込んだからこつちが負けるわよ、ユイ！」
ユイ「でも、ゴモラちゃんを止める為には懐に入り込まないと……。絶対に助け出し
ます！」

〈戦闘会話　ノブナガVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ノブナガ「俺はお前達を破壊するつもりはない……。早く戻って来い、レイ！」

〈戦闘会話　しんのすけVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ひろし「俺達でゴモラを止められるのか……。？」

シロ「ワン！」

みさえ「止められるかじゃなくて、止めるのよ、あなた！」

ひまわり「たいや〜！」

カンナム「倒さない程度に全力でやろう、しんのすけ君！」

しんのすけ「ホッホ〜イ！オラ達がレイお兄ちゃんとゴモラをお助けするゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ドロロ「ゴモラは強敵でござるよ！」

クルル「クーツクク！まともにやって勝てる相手じゃねえな」

タママ「どうするですか、軍曹さん？」

ギロロ「おい！勝算はあるんだろうな!!？」

ケロロ「正直、わからない！」

ギロロ「何イッ!!？」

ケロロ「でも、負ける訳にはいきません！」

〈戦闘会話 アキトVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

アキト「レイ……。君は悪の道へ落ちたらダメだ……。俺が阻止してやる……。！」

〈戦闘会話 アルトVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

アルト「レイ！あんたのリトラと一緒に飛んだ空を気持ち良かった……。！だから、もう一度リトラを飛ばしてもらうために俺はあんたを止める！」

〈戦闘会話　リオンVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

リオン「悪いがスピードで翻弄させてもらうぜ、ゴモラ！　ともに攻撃を受けたら無事じゃ済まないからな！」

〈戦闘会話　ゴークイレットVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ゴークイピンク「レイさんを救い出すまで戦いましょう！」

ゴークイグリーン「レイのゴモラって強いんだよね！？」

ゴークイブルー「ああ。相手にとって不足はない！」

ゴークイイエロー「勝手に燃えているようだけど目的はゴモラの動きを止めるだけなのよ！」

ゴークイレット「どっちでも一緒だ！　ゴモラ、レイ！　覚悟しろよ！」

〈戦闘会話　ゼロVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

ゼロ「かかって来い、ゴモラ！　レイはヒュウガに任せて、俺がお前を止めてやる！」

〈戦闘会話　マサキVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

マサキ「加減している場合じゃないってのは理解できるぜ……だから、強めにやるぜ

！」

〈戦闘会話　アーニーVSゴモラ（レイオニックバースト）〉

サヤ「どうしますか、少尉」

アーニー「どうもしない！ただレイさんとゴモラを止めるだけだ！相手になるぞ、レイさん、ゴモラ！」

何とか、ゴモラを止めようとするは俺達だが、ゴモラの強さに圧倒され始めた。

ゴモラ（レイオニックバースト）「キシヤアアン!!？」

ネロ「何という強さだ…！」

ジャンヌ「このままじゃ、こっちが負けるわよ…！」

ゼロ「くそっ…！まだなのかよ、ヒュウガ！」

ーヒュウガだ。

俺は暴走したレイの前に立っていた。

ヒュウガ「待っていたぞ、レイ」

レイモン（バーストモード）「グアアアッ!!？」

ヒュウガ「レイー！いい加減に目を覚ますんだ！」

俺はレイに飛びつき、馬乗りになる。

レイモン（バーストモード）「ガアアアアッ！」

ヒュウガ「うわあっ！」

しかし、レイに逃げられた俺は蹴り飛ばされる。

ルルーシュ「ヒュウガ船長！」

アマリ「お願いです！元のレイさんに戻ってください！」

メル「レイさん！」

ゼロ「お前は俺達の仲間だろ！」

零「俺達の戦いはまだ終わっていません！」

シン「戻ってきてください、レイさん！」

エクスクロスのみんなもレイに声をかける。

レイはそんな言葉にも耳を貸さず、俺はレイの攻撃を何度も受ける。

レイモン（バーストモード）「ウラアアアッ！」

ヒュウガ「ガハッ……！」

レイは俺の腹に右ストレートを打ち込んだが…… 捕まえたぞ……！

レイモン（バーストモード）「ー！」

ヒュウガ「いい加減に…… 目を、覚ますんだあああつ!!？」

俺はレイに目掛けて右ストレートを叩き込んだ……。

ーレイだ……。

俺は今、暗闇の中にいた……。

レイ「俺は…… いったい……」

そうだ、ベリアルに闇の力を流し込まれて…… 俺はまた…… 暴走しているのか……。

レイ「俺は…… 弱い……」

? 「弱いのはお前だけではないぞ、レイモン」

レイ「ー！」

この声は……！俺が振り返るとそこには死んだはずのケイトがいた。

レイ「ケイト……！」

ケイト「レイモン……。お前は数々の厳しい戦いを仲間と共に潜り抜けてきた……。世の中には強者などいない……。皆が弱者なんだ……。だから、人は手を取り合う……。そし

て、強大な力を得る」

レイ「強大な……力……」

ケイト「お前はそれを私にそれを教えてくれたのではないのか？」

レイ「……ああ、そうだったな」

ヒュウガ『（いい加減に……目を、覚ますんだあああつ!!?）』

ボスの声が聞こえる……！

レイ「呼んでいる……！ボスが、みんなが……！俺の事を……！」

ケイト「お前の帰りを待っている者がこんなにもいる……。彼等を待たせるな、レイモ

ン。行け、私の大切な弟よ……」

レイ「ありがとう、ケイト……。俺の大切な姉……！行ってくる！」

最後にケイトの笑顔を見て、俺の体は光に包まれた……。

レイモン（バーストモード）「ガ、アアアア……！」

俺の渾身の一撃を受けたレイは人間の姿に戻りながら、ゆっくりと倒れ、膝をついた。

レイ「はあ……はあ……ボ、ボス……！」

ヒュウガ「元に戻ったか、レイ……！」

―新垣 零だ。

レイさんが元に戻ったのと同時にゴモラもネオバトルナイザーに戻っていった。

マサオ「レイさんが元に戻った！」

ケンシン「これでゴモラとも戦わずにすみませぬ」

アレクサンダー「残るはベリアル軍の相手だけだ」

ダークゴーン「なかなかやりますね、地球人も」

カイザーベリアル「やつぱり、あいつじや使い物にならねえか……。ならば、死ぬ！」
しまった……。！レギオノイドの一機がレイさん達の方に……。！

グレンファイヤー「レイ！ヒュウガの旦那！」

ジャンボット「間に合わない……。！」

このままじゃ、レイさん達が……。！

？「行きな、レッドキング！」

レイ「！」

ネオバトルナイザー『バトルナイザー！モンスロード！』

レッドキング「キヤアアアン!!？」

突然、怪獣が現れ、レイさん達に攻撃を仕掛けようとしていたレギオノイドをぶん殴り、爆発させた……。

イングリッド「また怪獣……？」

マサキ「あれは……レッドキングじゃねえか！」

ヒュウガ「あのレッドキングは……！」

グランデ「よお！久しぶりだな！」

突然、男が現れたが、あの見た目……宇宙人なのか……？

あの人があの怪獣を呼び出した……という事か……？

レイ「グランデ！」

グランデ「覚えていてくれたようだな、レイ！」

レイ「お前もアル・ワースにいたんだな」

グランデ「おう、怪獣と戦っている時に転移して来たんだよ。それにしても面白そう
なバトルしてんじやねえか」

レイ「相変わらず、戦いか」

グランデ「それが俺の生きがいだからな！」

アイアロン「何だ、あいつは？」

カイザーベリアル「キール星人のレイオニクスが何故、地球のレイオニクスを助ける？」

グランデ「何か勘違いしちやつてるう？俺はただ楽しいバトルをしたいだけだつたうの！それにこいつとのリベンジもまだだし、こいつには姉ちゃんを紹介してもらわないとダメだからな」

レイ「相変わらずだな」

グランデ「お前もな。つーか、まだやれんדר？」

レイ「… 当たり前だ！行け、ゴモラ！」

ネオバトルナイザー『バトルナイザー！モンスロード！』

ゴモラ「キシヤアアアン!!？」

レイさんもゴモラを召喚した。

カイザーベリアル「フン！お前のゴモラじや俺様には勝てねえつてのはわかってんだろ！」

レイ「だからこそ… 俺も本気を出させてもらう… ハアアアアアツ…！」

レイさんはレイモンの姿になる。

ヒデオシ「おいおい！レイモンになつてんぞ!!？」

ゴーカイシルバー「大丈夫なんですか!!？」

レイモン「大丈夫だ、みんな」

あれが正義の力の姿のレイモン……。

レイモン「ゴモラ！お前もやれるな!!？」

ゴモラ「キシヤアアアン!!？」

グランデ「ぶちかますぜ、レッドキング！」

レッドキング「キヤアアアアン!!？」

ゴモラとレッドキングが並び、ベリアル軍を睨み付ける。

レイモン「ゴモラアアアツ!!？」

グランデ「レッドキングウウウツ!!？」

レイさんとグランデさんが叫ぶと、ゴモラとレッドキングの姿が変わった。

EXゴモラ「ゴガアアアアツ!!？」

EXレッドキング「キシヤアアアン!!？」

ウエスト「ゴモラとレッドキングの姿が変わったのである！」

エルザ「強そうロボ……！」

エンネア「EXゴモラとEXレッドキングって所だね！」

カイザーベリアル「進化した所で俺様には敵わねえよ！」

レイモン「敵うかどうか……俺達の力を見てから言え！」

グランデ「おうおう！面白くなって来たじゃねえか！」

レイモン「お前にも付き合ってもらうぞ、グランデ！」

グランデ「お前に言われなくとも俺は俺のやりたい戦いをするだけだ！行くぜ！」

カイザーベリアル「来な！地球のレイオニクスとキール星人のレイオニクス！」

レイモン「今度こそ終わらせる…レイブラッドとの戦いを！」

零「よし、俺達も…！」

？「いいえ、あなたの相手は私よ」

零「！」

現れたのは黒い機体だった。

零「お、お前は…?!？」

？「…あなたの実力、見極めてあげるわ」

零「その声…あんた、まさか…！」

あの時のフードの女…?!？」

？「声だけで私に気づくなんて、察し能力はいいのね」

零「その機体は何ですか?!？あなたはいつたい…?!？」

？「私の正体を知りたいのなら、私に勝ってみなさい」

零「だったら、俺はあなたに勝つ！」

？「(そうよ、来なさい…。そして、あなたの全てを私に見せなさい…)」
アマリ「零君、その人は!?？」

零「…わからない。だが、この人の相手は俺にやらせてくれ！」

ガドヴェド「わかった。他の敵は我等が請け負う！」

甲児「だから、零！絶対に負けるなよ！」

零「ああ！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 EXゴモラVS初戦闘〉

レイモン「見ていてくれ、ケイト…！俺はみんなと一緒に世界を守る…！）みんなに迷惑をかけた分を取り戻すぞ、ゴモラ！」

EXゴモラ「ガオオオオオン!!？」

レイモン「俺は戦う…大切な仲間を守るために！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVS初戦闘〉

〈戦闘会話 零VS?〉

零「あなたはゼフィルスの事や俺の事を知っていた…。あなたはオニキスのメンバーなんですか?」

?「私をあの人との組織と一緒にしないで。私は…。私よ、新垣 零君」

零「説明になってないんですよそれは…。!こうなったら力尽くで聞かせてもらいますよ!」

ゼフィルスのブレードビットでフードの女の人の乗る機体にダメージを与えた。

?「やつぱり、スペリオルではゼフィルスには敵わないようね…。!」

零「勝負は決まりました…。!さあ、話を聞かせてください!」

?「せつかな男は嫌われるわよ、新垣 零君? いずれ教えてあげるわ、いずれ、ね」
そう言い残し、スペリオルという機体は撤退した…。

零「く、くそッ!逃げられた…。!」

アスナ「あの人…。どう見てもオニキスの一因ではないようだけど…。」

メル「ですが、味方でもないようですね…。油断はしない方がいいですよ、零さん」

零「あ、ああ……」

くそッ……！あの人の声を聞くと、何か調子が狂う……！俺はあの人の事を……知っている……？

ミラーナイトのシルバークロスでアイアロンにダメージを与えた。

アイアロン「エクスクロスが……調子に乗りやがって……！」

ミラーナイト「あなたお得意の背中も機動性の高い私達には無意味です」

アイアロン「ならば、俺は早くなるだけだ……！今度はその攻撃を全て防いでやる！」
そう言い残し、アイアロンは撤退した……。

ゼロ「自分の長所を潰されつつあって、あいつのプライドも崩れているな」

ミラーナイト「ならば、今度は崩れさせてあげますよ、必ず……！」

ジャンボットのジャンナツクルでダークゴーネはダメージを負った。

ダークゴーネ「ふむ、やはりそう簡単にはいきませんか」

ジャンボット「理解しているのなら降参しろ」

ダークゴーネ「悪いがそれはできませんね……。特に陛下の前では……
そう言い残し、ダークゴーネは撤退した……。

グレンファイヤー「だいぶ、余裕そうだったぜ、焼き鳥？」

ジャンボット「心配ない、余裕を崩すのは得意だ。それから私は焼き鳥ではない、ジャンボットだ！」

〈戦闘会話　ゼロVSカイザーベリアル〉

ゼロ「お前はレイを甘く身過ぎていたようだな！」

カイザーベリアル「フン、所詮はレイブラットの恥晒し……使えないゴミだ！」

ゼロ「ゴミじゃねえ！レイは俺達の仲間で立派な正義のレイオニクスだ！レイに変わって、俺がそれを教えてやる！」

〈戦闘会話　EXゴモラVSカイザーベリアル〉

EXゴモラ「ガオオオオオン!!？」

カイザーベリアル「いちいち吠えるな、耳障りだ！一瞬で楽にしてやるからな！」

レイモン「俺達は負けない……！大切な仲間がいる限り……！」

カイザーベリアル「仲間なんて邪魔なだけだ！」

レイモン「ならば、見せてやる！これが……仲間との絆の力だ!!？」

〈戦闘会話〉 EXレッドキングVSカイザーベリアル〉

グランデ「お前とは一回戦ってみたかったんだよな。腕が鳴るぜ！」

カイザーベリアル「てめえ等が俺様に勝てる確率はねえ」

EXレッドキング「キヤアアアン!!？」

グランデ「おうおう、俺達舐められちまつてるなあ、レッドキング！なら見せてやろうぜ……俺達の強さを！」

〈戦闘会話〉 ゴーカイレッドVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「見せてみやがれ！スーパ―戦隊の力をな！」

ゴーカイピンク「では、存分にご覧ください……私達の力を！」

ゴーカイイエロー「へえ……アイムがあそこまで言うなんてね」

ゴーカイブルー「余程、ベリアルに腹を立てているんだろう」

ゴーカイレッド「俺達もアイムに負けてられねえぞ、行くぜ！」

EXレッドキングはフレイムロードを繰り出す。がカイザーベリアルはそれを難なくと避ける。

カイザーベリアル「てめえ等の攻撃なんざ当たるかよ！」

レイモン「甘いのはお前の方だ、ベリアル！……ゴモラアアア！」

カイザーベリアル「何……？！」

カイザーベリアルは避けた方向にEXゴモラがいて、尻尾による強力な一撃を与えた。

カイザーベリアル「グアアアツ……！」

ゴークカイブルー「ベリアルに一撃を与えた……！」

ゴークカイグリーン「流星はレイとゴモラだよ！」

レイモン「どうだ、ベリアル！」

ゼロ「あれだけ馬鹿にした相手に一撃食らうなんて、みつともねえな、ベリアル！」

カイザーベリアル「黙れ、地球のレイオニクス！ゼロ！俺様を舐めた事を必ず後悔させ

せてやるからな！」

そう言い残し、カイザーベリアルは撤退した……。

グランデ「つて、おーい！俺の事を忘れるなよ！」

グレンファイヤー「何だよ、偉そうな事言いながら、結局は逃げんのかよ」
ゼロ「決着は必ずつけてやるよ……。俺がな……」

全ての敵を倒した俺達……。

……結局、あの女の人は何だったんだ……？

……それに……何故か……眠、く……。

ーアマリ・アクアマリンです。

今回はどうなる事かと思いましたが、何とかレイさんも救い出せましたし、良かったです。

メル「無事にレイさんを助け出せましたし、取り敢えずは良かったですね」

レイモン「みんな、迷惑をかけてすまなかった……」

ゼロ「話は戻ってからにしようぜ、レイ！」

ヒュウガ「そうだな。別部隊で仲間になったメンバーの紹介もある」

エメラナ「少し長くなりますよ、レイ様」

レイモン「望むところだ……。グランデ、お前も来てもらおうぞ」

グランデ「まあ、仕方ないよなあ。わかったぜ」

アマリ「零君、私達も戻りましょう」

零「…」

アマリ「零君…？」

反応がないけど…何かあったのかな…？

零「…いいや、何でもねえよ」

あ、返してくれました…良かったです…。

それぞれの艦へ戻った私達はナデシコの格納庫に集まり、人間の姿に戻ったレイさんを出迎えました。

しんのすけ「レイお兄ちゃん！」

ワタル「もう大丈夫なんだよね!!？」

レイ「ああ、俺はもう大丈夫だ。心配をかけてすまなかったな、しんのすけ、ワタル」

アンドレイ「でも、無事で何よりだよ」

ヒュウガ「レイ、暴走していた時の記憶はあるのか？」

レイ「…いいや、ない…。だから、暴走している間に俺が何をしていたのかはわからないんだ」

セルゲイ「気にする事はない。君が戻って来ただけでも充分だ」

レイ「ありがとう」

グランデ「一応来たのはいいけど…俺はどうすっかなあ」

アイーダ「話は理解してもらえましたか？」

グランデ「ああ、ドアクターつてのを倒さないと俺達は元の世界に戻れないつて事だろ？」

ユノハ「そ、それですので力を貸してください！」

グランデ「つて言われてもな。俺は群れるのは嫌いだしな…」

ゼシカ「それなら、ずっとこの世界にいるんですか？」

グランデ「それも嫌だし、レイにリベンジをしたいし、姉ちゃんを紹介してもらわな
いといけないしな。仕方ねえ、一時的にだが、手を貸してやるよ」

レイ「グランデ…」

グランデ「まあ、一応レッドキング共々よろしくな！」

レイ「短い間だが、よろしく頼む」

レイさんとグランデさんは互いにクスリと笑いあいました…。

レイ「零も心配をかけてすまなかつたな」

零「…別に気にしていない。無事で良かったな」

…あ、あれ…!!? 零君つて、レイさんに対しては敬語だったはずなのに…? ?

アルト「零…… お前、何か雰囲気が変わったか？」

零「あ？俺は俺だ。変わってなんかねえよ」

千冬「…… 零、お前の彼女の名前は？」

零「アマリ・アクアマリンだろ？何当たり前の事、聞いてんだよ、千冬さんよ」

千冬「……」

千冬さんに対しても敬語じゃない……

!!?

アマリ「ど、どうしたの零君？いつもレイさんや千冬さんには敬語を使うのに……」

零「どうもしてねえよ、アマリ。何だよ、そんなに俺は変か？」

アマリ「へ、変ではないのだけれど……」

零「こんな俺は嫌か？」

れ、零君が私の顎を手でクイと上げました……。こ、これが俗に言う顎クイというもの

ですか……？

アマリ「ふ、ふえっ!!? れ、零君…… !!?」

零「俺はお前に俺の全てを知ってもらいたいって思ってたんだ」

アマリ「零君……」

零君は私に顔を近づけて来ました……。ああ、キスですね……。

……しかし、キスする事はありませんでした……。

零「ここまでか…」

何かを呟いた後、零君はバタリと倒れてしまいました…。

アマリ「零君！」

アスナ「な、何？どうしたの？！」

アマリ「わ、わかりません！突然、倒れてしまつて…！」

一夏「おい零！しっかりしろ！」

一夏君が零君の肩を揺ると零君はゆっくりと瞼を開きました…。

―新垣 零だ。

俺は目を覚ますと心配した表情の一夏の顔が見えた。

零「… 一夏？」

え、何で一夏はゼフィルスのコックピットに…？

つて、え…？ここ、ここはナデシコC…？

一夏「零、目が覚めたのか？！」

アマリ「だ、大丈夫なの、零君？！」

零「… あれ？俺何でナデシコCにいるんだ？確か、戦闘終了後に眠くなつて…そ

ここからは思い出せない……」

メル「な、何を言っているんですか！ 零さんが自分の意思でゼフィルスを操縦して、戻って来たではないですか！」

アンジュ「それでまたアマリとイチヤつこうとしていたじゃない」

零「ま、待って待って！ 記憶に……ない……」

ベルリ「だ、大丈夫ですか……？」

五飛「もしや、疲れが溜まっているのかもしれんな」

ゼクス「そうかもしれないな……。零、今日はもう休んだ方がいい」

……よ、よくわからないけど……。そうかもしれないな……。

零「……で、では……。お言葉に甘えて……」

みんなにそう言った後、格納庫を後にして、自分の部屋に戻っていった……。

アスナ「（もしかして、あの時の零は……！）」

第51話

さらなる高みへ

「アムロ・レイだ。

俺はメガファウナの格納庫で青葉とディオとシミュレーションをしていた…。

ディオ「…シミュレーションに付き合っていただき、ありがとうございました、アムロ大尉」

アムロ「気にしないでくれ、ディオ。この程度の事なら、お安い御用だ。だが、今の俺は軍人ではなく、一般の人間のつもりだ。階級はつけないでくれ」

ディオ「了解しました」

青葉「固いんだよ、ディオは。せっかくアムロさんがフランクに接してくれるのに」

ディオ「お前のようなシロウトに毛の生えた程度の腕ではアムロ…さんの凄さはわからないだろうな」

青葉「そりゃ確かに正面から戦って勝てるとは思わねえけど、カップリングさえ使えば…」

ディオ「勝つとか負けるとか、そういう問題じゃない。もっと大きなもの…言うな

れば人間の器の話だ」

青葉「人間の器ね……。まさか、お前がそういう事を言い出すとは思ってもみなかったぜ」

アムロ「そんな風に評価してもらうのは嬉しいが、買いかぶりだな」

青葉「いえ、そんな事は……」

アムロ「俺は、ただのパイロットに過ぎないさ」

シーブツク「ただのパイロットじゃありませんよ」

ベルリ「そうですね！ 凄腕パイロット……。超一流パイロットです！」

アムロ「それでも結局はパイロットというワクから抜け出る事は出来ていないか……」

ベルリ「ワク……。って何ですか？」

アムロ「……。ベルリは、自分の意思でキャピタル・ガードの養成学校に入学したのか？」

ベルリ「ええ、まあ……」

アムロ「俺は……。否定なしにパイロットになって、そのまま今に至るからな」

バナージ「アムロさん……」

アムロ「時々思うよ。もし、あの時……。ガンダムに乗らなかつたら、俺はどうしていたんだろうかな……。って」

キオ「軍人になった事を後悔しているんですか？」

アムロ「後悔とは違うかな……。でも、せつかくこうやって軍から離れた生活をしているんだ……。この機会に自分を見つめ直すとは思ってる」

すると、ハツパ中尉が来た。

ハツパ「アムロさん……。頼まれていたゥガンダム調整、やつてはみましたけど……」

アムロ「ありがとう。後は自分の方で合わせてみる」

ハツパ「申し訳ありません。出来る限りの事はやつてみたんですが……」

アムロ「構わないさ。急造の機体だから、限界があるのはわかっていた事だ」

三日月「急造の機体って……。ゥガンダムの事？」

アムロ「ああ、そうだ。あれはネオ・ジオンの動きに合わせて、無理矢理、実戦に投入したようなものだ。本当ならば、もつと時間をかけて、シエイクダウンをすべきだったんだがな」

シン「困った状況なのに何だか楽しそうですね、アムロさん」

アムロ「マシンの話をしているせいかな」

キラ「マシンの話……？」

アムロ「本当はモビルスーツの操縦よりもモビルスーツの開発の方が性に合っているのかも知れない……」

こんな事を言つてられるのもこのアル・ワースにいる間だけだろうがな……。

「アマリ・アクアマリンです。」

私はマクロス・クォーターの格納庫に来ていました……。
すると……。

シミュレーションルームから戻つて来た零君と会いました。

零「ふう……。今日はこのぐらいいにしておくか……。」

アマリ「れ、零君!? 何しているの!??」

零「あ……。? 何だ、アマリか……。何つて、シミュレーションを少ししていたんだよ」

アマリ「シミュレーションつて……。確か、デングル先生やエコリーナさんには部屋で休むように言われていたんじゃないの?」

零「…… ああ……。確かそんな事言われていたな……。忘れていたぜ」

アマリ「デングル先生達は零君の身体の事を思つて言つてくれているんだから、ちゃんと守らないと!」

零「わーつた! わーつたからそう吠えるなよ、怒つた顔も可愛いが、俺は笑つた方が

好きだからな」

アマリ「え……。って、その手には乗らないわよ！」

零「ちつ……。チヨロクはねえってか……。はいはい、わかりましたよ。戻るから、デングル先生達には言わないでくれよ」

アマリ「……。もう、仕方ないわね……」

そう言い、零君は自分の部屋にへと帰って行きました……。

アマリ「はあ……。零君には困ったものですね……」

アスナ「いい具合に尻を引いてるわね、アマリ」

アマリ「アスナさん、いらしたんですね」

アスナ「ねえ、前回の戦闘から、零の様子、おかしくない？」

アマリ「零君の様子ですか？確かに、最近変だとは思いますが、零君も疲れ
ているんだと思います」

アスナ「そう、よね……。（私の……。考えすぎ、よね……。）」

メル「あ、アスナさん。こんな所にいたんですね。私と一緒にリリスとメサイアの整備をすると言っていたのに何をしているんですねですか！」

アスナ「あ……。ヤバッ!?ご、ごめん、メル！」

メル「いいえ、許しません。こうなれば……。アスナさんの枕元に心霊のDVDを置く

のも面白いですね」

アスナ「お、お願いだからそれはやめてえええツ!!?」

…メルさん、稀に悪女っぽくなりますね…。

メル「…アマリさんは以前、サリアさんと一緒にしたコスプレを皆さんに見せますよ?」

アマリ「う、嘘ですからやめてください!」

こ、これ以上、メルさんの前で余計なことを言うのはやめましょう…。

ーキア・ムベツキだ。

俺はそれぞれ同盟を結んだもの達を見る。

キア「…時代を越えて、錚々たる顔ぶれが揃ったものだな」

イオク「…」

ヤザン「…」

マスク「…」

ロツクパイ「赤い彗星とマクギリス・ファリドが離反したとはいえ、これだけの戦力

が揃えば、エクスクロスなど恐るるに足らずだ！」

ワルズ・ギル「ほう、人類にしてはいい考えを持つな！」

キア「来たのはあんた達だけか？その…アクロス・ギルって奴は何処なんだ？」

インサーン「あのお方はギガントホースにいる…。だから、代わりに私達が出たのよ」

ラカン「エクスクロスの動きは？」

？「ミスルギの帝都へと向かってきているよ」

ん…？2人の男が歩いてきた…。

ロツクパイ「貴官達は…！」

リボンズ「リボンズ・アルマーク…こっちはアリー・アル・サーシエスだよ。僕達

は離反したマクギリス・ファリドの代わりとして来たんだ」

サーシエス「まあ、ここにいた方が楽しい戦争が楽しめそうだからな！」

ヤザン「おうおう！気の合いそうな奴だな！」

マスク「我々の役目は、第一次防衛ラインで連中を叩く事だ」

キア「ゾギリアの連中は？」

イオク「我々とは別で動いている」

サーシエス「俺達がエクスクロスを叩けば、どうでもいい事だよ！」

ロックパイ「ならば、赤い彗星とマクギリス・ファリドの相手は任せてもらう。ドレック艦隊を裏切った、あの男は肅清せねばならない」

マスク「では、G―セルフには手出し無用だ。あれは私の獲物だからな」

ワルズ・ギル「宇宙海賊は我々、ザンギャックが倒す！」

リボンス「僕も刹那・F・セイエイをやらせてもらう」

サーシエス「なら、俺の相手は野原 ひろしだ！」

クンパ「…彼等よりも優先すべき相手がいるのではないかな？」

マスク「クンパ・ルシート大佐…」

ロックパイ「(クンパ・ルシート)…キャピタル・アーミィを設立した人間であり、ト

ワサンガにも関わりのある人物…。そして、その正体は…。)」

キア「初めまして、クンパ・ルシート大佐…。いや、元同胞として、その当時の名前…

ピアニ・カルータとお呼びすべきかな？」

クンパ「君がジット団のキア・ムベツキ隊長だな、ビーナス・グループから、よく来

てくれた」

キア「あなたがヘルメス財団から持ち出したヘルメスの薔薇の設計図によって戦いは広がっていった…。まさか、それが、異世界まで続くとは思ってもみなかったがな」

クンパ「だが、ここでの戦いは必ずリギルド・センチュリーの人間を強くするだろう」

キア「あなたの理想には興味はない。とりあえず、場を混乱させてくれたおかげで我々のレコンギスタがやりやすくなった事だけは礼を述べさせてもらおう」

クンパ「それでいい。力で望みをかなえるのは人間の本来あるべき姿だからな」

ロツクパイ「クンパ大佐……。あなたのおっしやる優先すべき相手とは誰の事でしょうか？」

クンパ「赤い彗星の逸話は、宇宙世紀から遙かな時を経たりギルド・センチユリーにもそれなりに届いている……。だが、その宿敵である白き流星については意外に知られていないようだ」

イオク「白き流星？」

ラカン「アムロ・レイの事だな」

ロツクパイ「アムロ・レイ……。！シャア・アズナブルと共にトワサンガで保護していた男か……。！」

クンパ「政治的、社会的にも大きな役割を果たしたシャア・アズナブルの方が歴史的には注目される存在だが……。パイロットとしての能力はアムロ・レイの方が上だと言われている。一説によれば、彼は宇宙世紀最強のパイロットと呼ぶべきだそうだ」

ヤザン「それは聞き捨てならんな」

クンパ「宇宙世紀に生きた君のような人間は異を唱えたくもなるだろう。ならば、そ

れを事実によって証明してみせてくれないかな？」

ラカン「アムロ・レイの首を挙げると？」

クンパ「その通りだ。これならば誰も異論はないだろう」

リボンズ「僕達を焚き付ける狙いは何だい？」

クンパ「私の理想のため……と言うよりも、純粹な興味のためだ」

サーシエス「何だつていい！最強と言われるパイロットと本気の戦いも楽しみだ！」

キア「俺もいいだろう、クンパ大佐。あんたの思惑に乗ってやろう。俺としても障害を叩き潰す事には異論はないんでな」

ロックパイ「それに、いい機会でもあるな。ミスルギに集う者の中で、誰が真のエースであるかを決めるのも」

イオク「アムロ・レイを倒した者こそがその座につくというわけか……」

ラカン「面白い……。連邦の象徴とも言えるパイロットを叩くのは俺にとつても意味のある事だ」

マスク「残念だったな。真のエースの称号は、このマスクにこそ相応しいものだ」

リボンズ「(フツ、まるで餌を奪い合う獣だね……)」

キア「では、決まりだな。エクスクロスは潰す……。そして、ターゲットはアムロ・レイだ」

クンパ「競え…。そして、戦え。そうする事によって種は鍛えられる…。アムロ・レイ…。君には、その餌になってもらわねばならない。誰よりも高い位置に立ってな…。」

インサーン「陛下、私達はどうしますか？」

ワルズ・ギル「アムロ・レイという者には興味はない。我々の相手は宇宙海賊…。それには変わりはない。心配するな、インサーン！パワーアップしたグレートワルズで今度こそ海賊共の息の根を止めてやる…！」

インサーン「何故なの…。？何か、嫌な予感がする…。」

第51話 さらなる高みへ

―新垣 零だ。

俺達はミスルギの第一次防衛ラインに配備された部隊と接触するという事だ…。
出撃した…。

ドニエル「各機へ。間も無く我々は、ミスルギの第一次防衛ラインに配備された部隊と接触する」

ヒルダ「前にミスルギに殴りこんだ時は囷を使ったとはいえ、すんなり行けたのによ…。」

タスク「さすがにそのルートは警戒されているから、もう使えないな」

アンジュ「あの時は奇襲だったけど、今度は堂々と正面から行くよ。決着をつけるためにね」

ドニエル「ここを突破すれば、ミスルギの皇宮まで一直線だ。各機、頼むぞ」

零「わかりました！」

アマリ「零君、出撃しても大丈夫なの？」

零「ああ、大丈夫だ！デングル先生達の許可も取ってあるから心配はないぜ、アマリ！」

アマリ「…もう勝手な事はしたらダメだよ？」

零「…勝手な事…？嫌、俺、今日はずっと寝ていたけど…。」

アマリ「え…。」

アスナ「何言ってるの、零！あなた、マクロス・クォーターの格納庫でシミュレーションをしていたじゃない！」

零「… はあ!? いや、それはねえって！俺、起きたのもついさっきだぞ！」
アマリ「え、でも… 確かに…」

零「誰かと勘違いしていたんじゃないのか？」

アマリ「… そうなの、かな…？」

アスナ「(やつぱり…！あの零は…！)」

アムロ「…」

シヤア「珍しいな。お前が闘志を前面に出しているのは」

アムロ「わかるのか？」

シヤア「長い付き合いになったからな」

アムロ「… 自分の望む生き方というものを考えてみた…」

シヤア「ほう…」

アムロ「俺はワタルのような救世主ではなく、一人の軍人だった…。だが、その俺が戦う事で何かが守られるならば、それは意味のある事だと思っていた」

シヤア「このアル・ワースでも、そのつもりで戦っていたのだろう？」

アムロ「とは言いながらも、どこかに戦う事に対する押し付けられた義務感があったようにも思えてな…。お前と違って、俺のメンタルは少年の頃から成長していないのかも知れない」

シヤア「続きは、この戦いが終わってから、聞かせてもらおう」

：：アマリやアスナの言っていた事も気になるけど、今は敵に集中しないとな。：：。

すると、キャピタル・アーミー、トワサンガ、ジツト団、ネオ・ジオンのモビルスーツ部隊リボーンズ、ガンダム、アルケーガンダムとザンギヤックの軍団が現れた。

ジユドー「モビルスーツ部隊か。：：！」

ゴークイレッド「それにザンギヤックの奴らもいやがるな。：：！」

ウー「ミスルギに協力を誓った各組織の精鋭が来たようだな。：：。」

キア「フィン・ファンネルを背負ったモビルスーツ。：：。あれがアムロ・レイの機体か」
ラカン「俺達以外にも、アムロ・レイを倒して名を挙げようとする連中を連れて来た」
ロックパイ「この乱戦の中ならば、あの男にも隙が生まれる。：：！」

マスク「フフ。：：。痛快だな。歴史の中で生まれたクンタラ出の私が歴史上最強と呼ばれるパイロットを倒すとは」

バララ「(嬉しいよ、マスク。：：。マニイは留守番で、あたしを連れて来てくれて)」

ヤザン「さあ、狩りの時間の始まりだ！」

イオク「勝つのは私だ！」

サーシエス「いいや、俺だぜ！」

カミーユ「何だ。：：。？敵の動きがおかしい。：：。？」

カレン「どういう事なの、これ…。」

ルルーシユ「どうやら、敵の狙いはッガンダムらしい」

エイサツプ「アムロさんを…。」

ゴーカイレッド「ワルズ・ギル、インサーン！てめえ等もアムロを狙っているのかよ
!?」

ワルズ・ギル「勘違いするな、宇宙海賊共！我等の狙いはあくまで貴様等だ！」

インサーン「どちらにしろ、お前達全員は潰す…それだけよ！」

ノブナガ「ザンギャツクの狙いはゴーカイジャーというわけか…。」

ゴーカイブルー「だったら、返り討ちにするだけだ」

アムロ「どういう意図かはわからないが、むざむざやられるつもりはない。敵が俺を狙ってくるのなら、囮役をやるまでだ」

ジョーイ「大丈夫ですか、それは!?」

ウイル「あの男には野暮な質問だろうな」

ゼロ「わかったぜ、アムロ！その代わり、お前に近づく奴等は片っ端から叩き落とす
！」

ゴーカイピンク「ザンギャツクは私達にお任せください！」

アンジユ「あなたの光に惹かれてきた奴等は飛んで火に入る夏の虫って奴ね！」

零「おつ、アンジュはそれ言えるんだな」

アンジュ「あんたの友達と一緒にするんじゃないわよ！」

クリム「このクリム・ニツクを無視した報いをあいつ等には与えねばなるまい」

ヴァン「何だっつていいが…そろそろ始めようぜ」

アマリ「はい！あの人達に教えて上げましょう！エクスクロスは、アムロさんだけじゃないって事を！」

アムロ「頼んだぞ、みんな」

シャア「(それでこそだ、アムロ。だが、終生のライバルであるお前をつまらん連中にやらせはしないぞ)」

リボンズ「(この戦いで全てがわかるだろう…アムロ・レイという男が…)」
戦闘開始だ！

〈戦闘会話　　ゴークアイレッドVSインサーン〉

インサーン「今日こそ、引導を渡してあげるわ、宇宙海賊！」

ゴークアイレッド「悪いが、勝つのは俺達だ！」

ゴークアイエロー「そういう事、さっさと倒されなさい！」

〈戦闘会話　ゴークアイシルバーVSインサーン〉

ゴークアイシルバー「悪さもここまでだ、インサーン！」

インサーン「暑苦しい男ね……。でも、お前では私をときめかせる事は出来ない……。あの人以上は……」

ゴークアイシルバー「あ、あの人……。？　いったい誰の事を言っているんだ……。？」

豪獣神の攻撃を受け、グレートインサーンはダメージを受けた。

インサーン「くっ……。！　何の戦果も挙げられないとは……。！」

ワルズ・ギル「何をしている、インサーン！　早く退がるのだ！」

インサーン「で、ですが……。陛下が！」

ワルズ・ギル「私の事はいい！　早く退がれ！」

インサーン「……。了解しました」

グレートインサーンは撤退した……。

ゴークアイグリーン「ワルズ・ギルも部下思いなところ、あるんだな……」

ゴークアイピンク「はい、さすがに驚きです……」

〈戦闘会話　　ゴークイレッドVSワルズ・ギル〉

ゴークイブルー「帰った方が身のためじゃないか、ワルズ・ギル？」

ワルズ・ギル「ええい、黙れ黙れー！今日こそは貴様等を倒す！」

ゴークイレッド「やってみやがれ！後悔してももう遅いからな！」

〈戦闘会話　　ゴークイシルバーVSワルズ・ギル〉

ワルズ・ギル「銀色の男！海賊と共に死ね！」

ゴークイシルバー「俺だつて、今は海賊のメンバーなんだ…！だから、俺も戦う！」

な、何だ…？以前戦った時のグレートワルズよりも強くなっている…！??

ワルズ・ギル「この程度か！」

グレートワルズの傷が回復した…！??

ノレド「傷が回復したよ！」

アマルガン「以前よりも強くなっておる…！！」

ゴークイレット「だからなんだってんだ！倒す事には変わらない！鎧、豪獣ゴークイオーだ！」

ゴークイシルバー「はい！」

ゴークイオーは豪獣神と合体して、豪獣ゴークイオーとなり、グレートワルズに攻撃を仕掛けた……。

ゴークイレット「終わりにしてやるぜ、ワルズ・ギル！」

ゴークイグリーン「決めるよ、マーベラス！」

ゴークイシルバー「必殺技、行きましょう！」

ゴークイレット「おう！ド派手に行くぜ！」

豪獣ゴークイオーは右腕のドリルを高速回転させ、グレートワルズに接近した。

ゴークイジャー「「「「ゴークイ電撃ドリルスピン!!」」」」

しかし、グレートワルズはゴークイ電撃ドリルスピンを避けた。

グレートワルズ「いつまでも弱い私ではないのだ……!!……反撃と行かせてもらおう！」

グレートワルズは胸のワルズ・ギルの顔にエネルギーを蓄積させた。

ワルズ・ギル「焼き消えろ！ワルズギルテイ!!？」

胸から発射された熱光線が豪獣ゴークイオーに直撃した。

「ゴーカイレッド「ぐあああああつ……！」
豪獣ゴーカイオーは大きく吹き飛ばされ、ゴーカイオーと豪獣神は別れてしまっ
た……。」

九郎「ゴーカイジャー！」

エンネア「あの豪獣ゴーカイオーが簡単に吹き飛ばされる何て……」

ワルズ・ギル「私の力を思い知ったか、宇宙海賊！」

ゴーカイイエロー「どうするの、マーベラス!!？」

ゴーカイブルー「このままやつても奴には……！」

ゴーカイレッド「どうすれば……！」

「ゴーカイレッドこと、キャプテン・マーベラスだ。

このままではワルズ・ギルの奴に負けちまう…… どうすれば……！」

すると、俺は突然…… 光の空間にいて、変身も解除されていた……。

？「何を情けない顔をしている、マーベラス？」

この声は……！

マーベラス「アカレッド……！」

そこには行方知らずとなっていたアカレッドがいた。

マーベラス「どうして、あんたが……！」

アカレッド「私の事などどうでもいい……。マーベラス、何を迷っておるのだ？」

マーベラス「このままじゃ……。みんな負けちまう……」

アカレッド「負ける……。いや、それはないな」

マーベラス「何でそんな事がわかるんだよ!?？」

アカレッド「そんな事を言っていないながら、君からは闘志が消えていない……。君はまだ

やる気なのだろうか？」

マーベラス「……」

アカレッド「それにゴーカイオーにはまだ奥の手がある」

マーベラス「だが、アル・ワースに来て、試したが、出来なかった……」

アカレッド「戦士というのは極限の状態で強くなる……。そういうものだ」

マーベラス「極限の状態で……。そうか！」

アカレッド「アル・ワースの平和を取り戻すのを私は期待しているぞ、マーベラス」

マーベラス「アカレッド！」

アカレッドは光の中へと消えた……。

マーベラス「ああ。必ず……。俺達が平和を取り戻してやる……！」

俺も目を閉じて、光に包まれた……。

―新垣 零だ。

このままではゴーカイオーと豪獣神が……！

ゴーカイレッド「まだだ……」

ワルズ・ギル「何っ……!!？」

ゴーカイレッド「俺達はまだ……負けてねえ！」

ゴーカイオーと豪獣神は立ち上がった。

ゴーカイブルー「その言葉を待っていたぞ」

ゴーカイシルバー「流石はマーベラスさんです！」

ゴーカイレッド「来い、マツハルコン！」

ゴーカイジャーはゴーオンジャーのレンジャーキーの力でマツハルコンを呼び出した。

マツハルコン「バリバリー！行くぜー！」

ゴーカイレッド「あれで行くぞ！」

ゴーカイグリーン「あれ……？でも、使えないんじや……！」

ゴーカイレッド「何度でも試して、自分の手で掴む…それが海賊つてもんだろ！」
ゴーカイピンク「そうですね、やりましょう！」

ゴーカイジャーはゴーカイジャーのレンジャーキーをセットした。

ゴーカイジャー「……レンジャーキー、セット！……」

すると、ゴーカイオーと豪獣神のハッチから金色の炎神ソウルというものが出現した。

それをマツハルコンの左脇に装填すると、ゴーカイオーと豪獣神、マツハルコンが合体した…。

ゴーカイジャー「……カンゼンゴーカイオー!!?」

カンゼンゴーカイオー…あれが、新しい姿…!!

デントン「キタキタキター！カンゼンゴーカイオーだ！」

簪「す、凄い！ゴーカイオーと豪獣神、マツハ君が合体した…!!」

ガイ「合体の上の合体…暑すぎるぜ!!?」

ワタル「うん！ハツキシ言つて、超スパー完全カツコいいぜ!!?」

ゴーカイイエロー「本当に合体できたわね！」

ワルズ・ギル「その忌まわしき姿…！漸く見れたぞ！」

ゴーカイシルバー「このカンゼンゴーカイオーで今度こそ、倒す！」

ワルズ・ギル「勝つのは私とグレートワルズだ！」

ゴークイレッド「勝負だ、ワルズ・ギル！みんな、ド派手に行くぜ!!？」
俺達は戦闘を再開した……。

〈戦闘会話　ゴークイレッドVS初戦闘〉

ゴークイシルバー「やっとカンゼンゴークイオーに合体できましたね！」

ゴークイブルー「これで怖いものはない」

ゴークイイエロー「元々、怖いものなんてないけどね」

ゴークイピンク「はい、そうですね！」

ゴークイグリーン「みんな、嫌いな食べ物はあるけど」

ゴークイレッド「アカレッド……俺は何とか船長をできているぜ……」じゃあ、やる

ぜ、お前等！」

あいつ等……本気でアムロさんしか狙ってこないんだな……！

キア「さつきと片付けるぞ！各機、デタラメでいいから、アムロ・レイを狙え！」

ヱガンダムに集中放火かよ……！

アムロ「ちいつ！」

ハツパ「何とかしろ、ベルリ！ヱガンダムは万全じゃないんだ！」

何だと……！！？

ベルリ「そうなんですか！！？」

エルヴィラ「ごめんなさい……。私がヱガンダムを実験に付き合わせたせいで調整が

不十分に……」

青葉「エルヴィラさんが……」

アムロ「戦場に出た以上、言い訳にはならない……。！やってみせる！」

すると、ヱガンダムに通信が入った。

アムロ「通信……！！？こんな時に……。！何……。？」

ヱガンダムが突然、動き出した……。！！？

三日月「どこ行くの、アムロ？」

アムロ「すまない……。！少しでも戦線を頼む！」

ヱガンダムが飛び去ってしまった……。

ギゼラ「艦長！ヱガンダムが離脱した先に輸送機を確認！」

ドニエル「そいつがアムロを呼んだのか……」
アムロさん…… いったいどうしたっていうんだ……？

「アムロ・レイだ。」

俺は通信を送ってきた輸送機の中へと入った……。

クンパ「久しぶりだな、アムロ・レイ。顔を合わせるのはトワサンガで話をした時以來か。まずは私の招きに応じてくれた事への礼を述べよう」

アムロ「あなた個人に用はない。さつさと受け取るものを受け取ったら、戦場に戻る」
クンパ「意外だよ。シャア・アズナブルを非難した君の事だから、私の辛々な言葉を投げかけると思ったのだがな。それとも新たな力を与えようとする私に気を遣っているのかな？」

アムロ「戦いによって人類という種を強くする…… というあなたの思想……。それに興味がない以上、あなたと話す事もない」

クンパ「とは言いながら、君は私の与える力と共に戦場に戻ろうとしている」

アムロ「その力で戦いがさらに広がる事をあなたは期待しているだろうが、そうはならない。何故なら、俺達は戦いをさつさと終わらせるために戦っているからだ」

クンパ「君は人類という種が再び戦争に吞まれ、衰退していく事を放置するつもりかな？ シャアの革新を否定した君には人類を救う責任が……」

アムロ「そんな押し付けられた義務感で戦うつもりはない。では、行かせてもらうあのガンダムは、ありがたくもらっていくがな」

クンパ「……好きにしたまえ」

アムロ「最後に一つだけ言っておく。戦いを終わらせようとするのはエクスクロスの総意だ。あなたと同じリギルド・センチュリーの人間もそう考えている以上、元の世界に戻ってもあなたの望む展開にはならないだろう」

俺はそれを言い残し、新たなガンダムの元へ向かった……。

クンパ「……私の思想を理解できないとは所詮は只のパイロットか……。ならば、より強い刺激を与えなくてはならないだろう。その結果、人類の半分が死す事になろうと……」

――新垣 零だ。

ジュード「くそっ！ よくもアムロさんを！」

シン「待てよ、ジュード！ アムロさんはやられてない！」

キラ「何か来る……!?」

アスラン「あれは……. ヲガンダム!?」

フリット「いや、違う!」

本当だ……. ヲガンダムに似ているが違う……. !

アムロ「待たせたな、みんな」

シヤア「その機体は……. ?」

アムロ「H i i ヲガンダム……. ヲガンダムを発展させた機体らしい。事情は後で話す……. !今はこの場を切り抜ける!」

キア「アムロ・レイ……. !より強力な機体を手に入れたという事か!」

リボンズ「(クンパ・ルシータ……. 彼に渡してはいけない機体を渡してしまったな…….)」

アムロ「(クンパ・ルシータの思想など知った事ではない。俺もミスルギについた連中と、それぞれの目的のために戦うだけだ。どれだけ策を巡らそうと奴の思い通りにはならない……. !いや、させてなるものか!)」

〈戦闘会話　　ゴーカーレッドVSワルズ・ギル〉

ゴーカイレッド「どれだけ強くなっても俺達はその上をいつてみせるぜ！」
ワルズ・ギル「ならば、またその上を行くだけだ！」

ゴーカイイエロー「あんたには無理よ」

ゴーカイレッド「まず、俺達を完全に倒してから言うんだな！」

ゴーカイシルバー「俺達、海賊戦隊ゴーカイジャーをな！」

カンゼンゴーカイオーの攻撃がグレートワルズに大ダメージを与える。

ワルズ・ギル「ぐっ……！バカな……！またもやこの私が……！」

ゴーカイレッド「観念しな、ワルズ・ギル！」

ワルズ・ギル「まだだ……！まだ、私は負けていない！」

ゴーカイブルー「なら、これで終わりにさせてやる！」

カンゼンゴーカイオーがグレートワルズに攻撃を仕掛けようとすると……。

インサーン「陛下ああつ!!？」

グレートインサーンがカンゼンゴーカイオーとグレートワルズの間に入った……。

ゴーカイイエロー「ダメ王子はここで終わりよ！」

ゴーカイピンク「これで決めましょう！」

「ゴーカイグリーン「よし、行くぞー！」

「ゴーカイジャーはコックピットの操縦席の舵輪にゴーカイジャーのレンジャーキートを装填した。

「ゴーカイジャー「ゴッゴッゴーカイカンゼンバースト!!?」

「カンゼンゴーカイオーは左腕のゴーカイビッグハンドを超高速で射出し、ロケットパUNCHの要領で相手に繰り出した。

「インサーン「陛下は… 私がお守りする…！」

「グレートインサーンがグレートワルズを庇い、ゴーカイカンゼンバーストを受けた…。」

「インサーン「うわあああああ！」

「ゴーカイカンゼンバーストを受けたグレートインサーンは大きく吹き飛ばされた。

「ワルズ・ギル「イ、インサーン!?!」

「インサーン「へ、陛下… ご無事… ですか… ?」

「ワルズ・ギル「お、お前… 何故…！」

「インサーン「私の使命は… 陛下を、お守りする事なので…」

「ワルズ・ギル「インサーン…」

「インサーン「陛下… 必ず、海賊共を倒してください… それが… 私、の…」

最後の言葉を発する前にグレートインサーンは大爆発を起こした……。

ワルズ・ギル「インサアアアン!!？」

ゴーカイレッド「あいつ……」

ベルリ「生命をかけてでもワルズ・ギルを守りたかつたんだな……」

ワルズ・ギル「宇宙海賊共……！ 貴様達は絶対に許さん！ 必ず、報いを受けさせてやる！」

そう言い残しながら、グレートワルズは撤退した……。

鉄也「次のあいつは強いぞ、ゴーカイジャー」

ゴーカイレッド「望む所だ……俺達はそれでも負けねえ」

Gーアルケインの攻撃でユグドラシルはダメージを受けた。

バララ「あたしは何をやっているんだ！ せっかくマスクがチャンスを与えてくれたのに！ これじゃマニイに勝てないじゃないか！」

ユグドラシルは撤退した……。

ノレド「あのパイロット……マニイとマスクを争っているみたい……」

ベルリ「二人の女の子が競争するなんて、マスクって、そんなにいい男なのか……」

〈戦闘会話 アムロVSサーシエス〉

アムロ「戦いを広げようとするお前は俺が止める！」

サーシエス「なら止めてみるよ！その前に俺がお前を倒しちまうけどな！」

〈戦闘会話 刹那VSサーシエス〉

サーシエス「アムロ・レイを討つのもそうだが、お前を倒すのも忘れてないぜ、クルジスのにいちちゃんよ！」

刹那「お前の相手は俺がする……！アムロ大尉には近づけさせない……！」

サーシエス「やる気になったってわけか……なら楽しもうぜ！」

〈戦闘会話 ロックオンorニールVSサーシエス〉

ロックオン「てめえの相手は俺達だ！」

ニール「俺達の銃撃の嵐から逃げられると思うなよ！」

サーシエス「いいぜ、今度は兄弟纏めてあの世に送ってやるよ！」

〈戦闘会話　しんのすけVSサーシエス〉

サーシエス「見つけたぜ、野原　ひろし！」

ひろし「や、やっぱり来たー！」

みさえ「今更怯えてどうするのよ、あなた！」

しんのすけ「父ちゃん！ここは父ちゃんの足臭攻撃だゾ！」

ひろし「ロボットじゃ使えねえよ！と、とりあえず、やるしかない！」

クアンタの攻撃でアルケーガンダムはダメージを負った。

サーシエス「クソツ…！ここまで追い詰められるとは…！だが、次には必ず倒してやる！」

アルケーガンダムが撤退した…。

ロックオン「あいつのしぶとさも筋金入りだな」

ニール「いい加減、ケリをつけないとダメだな」

〈戦闘会話　アムロVSイオク〉

イオク「アムロ・レイ！この俺がお前を討つ！」

アムロ「悪いが、お前に討たれるほど俺の腕も落ちてはない……。その機体を破壊させてもらう！」

〈戦闘会話 三日月VSイオク〉

イオク「三日月・オーガス！いい加減俺に討たれろ！」

三日月「無理。だから、死んで」

イオク「き、貴様はやはり悪魔だ……！」

三日月「悪魔……なんかかっこいいな、それ」

〈戦闘会話 ガエリオorジュリエッタVSイオク〉

ジュリエッタ「まだいたんですか、イオク様？」

ガエリオ「お前もしつこい男だな」

イオク「お前達を正気に戻す……。そのために俺も戦っているのだ！」

ジュリエッタ「ガエリオさん」

ガエリオ「ああ。懲りない男には痛い目を見てもらわないとな！」

〈戦闘会話　マクギリスVSイオク〉

マクギリス「イオク・クジャン。俺を倒しに来たか」

イオク「ヴィダールやジュリエッタを惑わせたお前を俺は許さない！」

マクギリス「許されようとも思わないし、俺は惑わせてもない、勝手な事を言わないでもらおうか」

イオク「自覚がないのか……！やはり貴様は危険だ！」

バエルの連続攻撃でレギンレイズはダメージを受けた。

イオク「な、何故だあああつ！何故、勝てないんだあああつ!!？こ、ここは逃げる……！」

逃げる様にレギンレイズは撤退した……。

ジュリエッタ「はあ……あの人は相変わらずですね」

ガエリオ「妙な奴に目をつけられたな……」

ダブルゼータの攻撃でドーベンウルフはダメージを負った。

ラカン「ちいっ……！この俺が、こうも敗北を重ねるとは！次の機会こそ、この屈辱……必ず晴らすぞ！」

ドーベンウルフは撤退した……。

ジユドー「しっこいんだよ、あんたは……。個人的なこだわりを捨てなきや、戦いは終わらないってのに……」

マシユマー「ラカン・ダカラン……。貴官は、武人の面子よりも重要なものがあるのを知る必要がある。そう……。それは愛と呼ばれるべきものだ」

乙ガンダムはビームサーベルでハンブラビを斬り裂いた。

ヤザン「アムロ・レイ……。それにカミーユ……。！やってくれる！このアル・ワースに
いる間にお前達と決着をつけてやるぞ！」

ハンブラビは撤退した……。

カミーユ「ヤザン……。お前はまた、そんな事を言っているのか……」

アムロ「あの男もある意味、軍と言うワクを外されながらも戦いに縛られている人間
と言えるな……」

〈戦闘会話　アムロVSリボンス〉

アムロ「リボンスか…！」

リボンス「アムロ・レイ…。君を落とせば、僕は最強になるという事だな」

アムロ「お前に落とされるわけにはいかない…。それにお前は何かを考えている様にも思えるからな」

リボンス「さて、ね…。」

〈戦闘会話　刹那VSリボンス〉

リボンス「アムロ・レイを討つのもそうだが、そのダブルオークアンタも頂こうか」

刹那「リボンス・アルマーク…。アムロ大尉の元へは行かせない…！」

リボンス「そうか、ならばその機体ももらった後に彼を倒すでしょう」

刹那「させない…。俺が…。ガンダムが止めてみせる…！」

クアンタのトランザム攻撃でリボンスガンダムはダメージを負う。

リボンズ「ここまでやれば十分か……。また会おう、エクスクロス」
 そう言い残し、リボンズガンダムは撤退した……。

ティエリア「負けつつあるというのに随分余裕だな……」

刹那「(リボンズ・アルマーク……。お前は何を考えている……。?)」

〈戦闘会話　マクギリスVSロックパイ〉

ロックパイ「マクギリス・ファリド！お前を肅清する！」

マクギリス「ロックパイ・ゲティか……。君には謝らないといけないな」

ロックパイ「謝罪など必要ない。ここで討たれる！」

マクギリス「悪いが、今の俺は死ぬわけにはいかない……。全力の抵抗をさせてもらう！」

Gールシファアの攻撃でガイトラツシユはダメージを負った。

ロックパイ「真のエースとなれば、マツシユナー中佐も喜んでくれたのに……。！く

そつ……。！次だ……。次こそはやってやる！」

ガイトラツシユは撤退した……。

ノレド「あのロックパイって人……。ある意味、正直な人だよね……」

「ライヤ」ですが、欲望のままに他人を傷つける事は許されません。彼等が戦い以外の手段でレコンギスタする方法を見つけなければ、この戦いは終わらないでしょうね……」

G―セルフのパーフェクトアタックでマスクのマックナイフにダメージを与えた。

マスク「ちいつ……！私に用意された、あの機体の調整さえ間に合っていれば……！ベルリ！これを私の本気だと思ふなよ！」

マックナイフは撤退した……。

アイーダ「あのマスクという男……次の機会は、またベルリを狙うつもりの様ですね……」

ベルリ「アムロさんの迷惑になりますから、あいつは僕が相手をしますよ」

サザビーのオールレンジアタックでジャイオンにダメージを与える。

キア「ちいつ……！まだ重力への適応が、うまくいっていないか……！……まあいい。俺

の最終目的はレコンギスタだ。ここで終わるつもりはない」

ジャイオーンは撤退した……。

クリム「ジツト団隊長、キア・ムベツキ……」

ベルリ「レコンギスタのためだからって、悪人につく必要なんてないのに……」

それにしてもシヤアさんの動き……凄いな……。

トビア「やる……！さすがは赤い彗星！」

シヤア「これでもアムロのライバルのつもりだ。サザビーに乗っている以上、それなりの事はやらねばな」

カミーユ「(アムロさんへの対抗心を素直に出せている……。いい意味で大佐も立場を忘れているか……)」

ギゼラ「敵部隊の壊滅を確認しました」

ドニエル「まずは第一関門を突破か……」

アムロ「これ以上、アル・ワースの戦いを拡大させるわけにはいかない。ミスルギの皇宮へ急ごう」

シヤア「覚悟を決めたようだな」

アムロ「そうでもないさ。ただ、誰かの勝手な思惑のまま戦わされるのは嫌なだけだ。

俺も……そして、この世界もな」

ーアスナ・ペリドットよ。

私達はそれぞれの艦へ戻り、メガファウナの格納庫に集まった。

九郎「これでついにゴークイオーも本領発揮ってわけだな！」

ジョー「ああ、もう遅れはとらないぞ」

ゼロ「カンゼンゴークイオーか……。まさに完全って感じだな」

マーベラス「ああ。まだまだカンゼンゴークイオーの力はあるもんじゃねえつてのを教えてやるよ！」

シヤア「……あの機体を用意したのは、やはり、クンパ・ルシータだったか……」

アムロ「気付いていたか」

シヤア「あの男の狙いは理解しているからな」

アムロ「機体は受け取ったが、奴に乗せられるつもりはない。モビルスーツは道具だ。それを使う人間の意図でどうにでもなるものだ」

シヤア「戦争を拡大させる兵器になるのも、戦争を止める力になるのも、乗り手次第か……」

アムロ「それを証明してみせる。奴が用意した機体を使つてな」

ハツパ「Hiiraggandamですが、ざつとチェックした結果ではおかしなトラップは

仕掛けられてませんでした」

アムロ「すまないな、ハツパ中尉。手間をかけさせて」

ハツパ「お気になさらずに。この数日、レガンダムを重点的に整備したせいであの機体にも興味がありますので。レガンダムも戦場から離れた地点に放棄されていたコンテナから発見されました。なお、そちらにはダブルゼータとシナユジ用の追加装備も収容されていたそうです」

シヤア「(クンパ・ルシータめ……。これで戦力のバランスを取ったつもりか……。)」

ハツパ「ダブルゼータとシナユジ用の装備はジウドー達やフロントル大佐達が見た事があつたものなので、彼等に任せています」

アムロ「では、ハツパ中尉……。君は、レガンダムのデータをH i i r lに移す作業を手伝ってくれ」

ハツパ「了解です。あの機体……。おそらくはヘルメスの薔薇の設計図から組み上げられたものだからね。より実践的なデータをインストールする必要があります」

アムロ「レガンダムの発展型だけであつて、機体のバランスは悪くない。手をかける価値はある」

ハツパ「ですね。お手伝いさせていただきます」

アムロ「頼む、中尉。ミスルギに着く前に何とか完成させたい」

シャア「楽しそうだな、アムロ」

アムロ「パイロットより、指導者より、何より、こういう事が性に合ってるらしい」
グランデイス「最強パイロットの素顔は意外にシャイなんだね……」

アイーダ「ちよつと素敵ですね。大人の男性と少年が同居しているみたいで……」

ミツク「(姫様は年上好きのようだな……)」

アーニヤ「……」

エンネア「アーニヤもアムロの事が気になるの？」

アーニヤ「そうじゃない……。 (何だろう……。 心の奥が急に軽くなったような気がする、理由はわからないけど……)」

零「さてと……。 ミスルギに着くまで俺は休もうかな」

アマリ「やつぱり、身体が辛いのか？」

零「そうじゃねえよ。つてか、心配し過ぎだぜ、アマリ？何なら、一緒に寝るか？」

アマリ「み、みんなの前でそんな事言わないで！」

零「はいはい……。 じゃあ、みんな…… お先」

そう言い、零は部屋を後にした……。

また零がおかしい……。 ちよつと後をつけてみようかな……。

「エンブリヲだよ。」

私は今、シヨット・ウエボンと導師と共にいた。

シヨット「……第一次防衛ラインが突破されたと聞くが……」

エンブリヲ「問題ないよ。まだ、こちらにはダイヤモンドローズ騎士団もいる」

かぎ爪の男「それに第二次防衛ラインにはミハエル君やファサリナ君もいます。大丈夫でしょう」

シヨット「そうだな。それに、このミスルギという国自体がもうすぐ無意味になる」

エンブリヲ「君のいう通りだよ、シヨット。そのための準備はどうかかな？」

シヨット「既に理論は完成している。やはり、ここはただの平行世界とは違う……。言うなれば、生と死の狭間とすべき世界だ。何故、この様な世界が誕生したかを突き詰めていくと非常に興味深い結論に到達しそうだよ」

かぎ爪の男「あなたの魂が、バイストン・ウエルという世界ではなく、ここにたどり着いたのも無関係ではなさそうですね」

シヨット「そして、私達の計画を進めるのに必要なのは感性だろう」

エンブリヲ「というところ？」

シヨット「この生と死の狭間という感覚を実態として捉える事が出来るか……だ。それが出来た時、初めて我々の計画は実現に向けて第一歩を踏み出す事が出来るだろう」

？「……その計画……私達にも協力させていただけませんか？」

？2「なかなか興味深かったのですね」

エンブリヲ「何者かな？」

マリアンヌ「あなた達が望む、生と死を超越した感覚を知る者……」

アーサー「言わば、この世界の構造を知る者だよ」

この者達は…… いったい……

ーアスナ・ペリドットよ。

私は様子のおかしい零の前に立った。

零「ん、アスナ…… か？ どうした？ そんな険しい顔をして」

アスナ「あなた…… 零じゃないでしょ？」

零「…… 何を言い出すのかと思えば…… 俺は零だぜ？」

アスナ「本来なら敬語を使う人間に敬語を使わないの？」

零「……」

アスナ「私は分かっているわ、あなたの全てを……久しぶりね……ずっと、あなたに会いたかった……」

零「……誰だお前」

え……!!?

アスナ「わ、私よ！アスナ・ペリドットよ！覚えていないの!!? 私達、幼馴染じゃない！」

零「……いや、俺はお前の事知らねえよ」

アスナ「そ、そんな……」

じゃあ、私の彼との記憶は……何なの……!!?

零「いや、待てよ……。そういう事か、お前……偽りの記憶を植え付けられているんだな」

アスナ「偽りの、記憶……?」

零「今のお前も、本当のお前ではないのかもな」

アスナ「本当の、私では……ない……!!?」

そ、それじゃあ……私はいつたい……何なの……!!?

零「じゃあ、俺は休ませてもらうぜ」

アスナ「ま、待ってよ……むっ……!」

私は彼の名を叫ぼうとすると、キスで口を塞がれた……。口を話すと彼は口を開く。

零「今は余計な事言うな。死にたくなければな……」

それだけを言い残し、彼は部屋にへと戻っていった……。

私は足に力が入らなくなり、目に涙を浮かべ、その場に座り込んでしまった……。

メル「アスナさん!!?」

そんな私に気づいたのかメルが駆け寄ってきた……。

メルの声も私の耳には届かない程、私は動揺していた……。

私は……何者、なの……?

シークレットシナリオ3

赤い彗星の矜持

シークレットシナリオ3

赤い彗星の矜持

―新垣 零だ。

俺達はメガファウナの格納庫にいた。

青葉「…… やっぱり、アムロさんはすげえよな！昨日の戦いも痺れたぜ！」

バナージ「青葉はすっかりアムロさんのファンになったみたいだな」

青葉「当然だろ！あんな戦いを見せられたんだから！決めた！俺もルクシオンネクス
トで白き流星になる！」

零「なるために何年かかるだろうな」

青葉「そ、そう言う事言います、零さん？」

ワタル「そう言う零さんとアマリさんにも二つ名があるよ」

俺達にも……？

アマリ「どんな名前ですか？」

マサオ「零さんは漆黒の騎士だよ」

ネネ「アマリさんは魔法の女神です！」

アマリ「め、女神……!!? わ、私がですか……!!?」

零「漆黑つて……服で決めやがったな……」

アマリ「ちよ、ちよつと待ってください！私は女神というものでは……」

ワタル「何言っているの、アマリさん！アマリさんの笑顔でみんな頑張れるんだよ！」

しんのすけ「アマリお姉さんはエクスクロスの女神だゾ！」

アマリ「ほ、褒め過ぎです……！」

サラ「勿論、アスナちゃんとメルちゃんにもあるよ！」

メル「私達にも、ですか……？」

ティア「メルちゃんは光矢の銃撃者だよ！」

ケイ「アスナは笑顔の聖女」

アスナ「わ、私が聖女……？」

レナ「嫌だった？」

アスナ「嫌じゃないけど……なんかある事を思い出しちゃって……でも、ありがとう」

零「そう言えば、アスナ。昨日、具合が悪いつて聞いたが……大丈夫か？」

アスナ「ええ、大丈夫よ。心配かけてごめんなさい」

零「俺が言えた事じゃないけど、無理はするなよ」

アスナ「うん……」

ディオ「アムロさんもそうだが、さすがというべきは、彼の宿敵であるシャア大佐だな」

青葉「お！じゃあ、ディオはブラディオネクストで赤い彗星を目指すか？」

ディオ「それは置いておくとして、昨日のサザビーの戦いは、驚嘆に値するものだった。シャア大佐は、その人間性においても器の大きさを感心させてくれる」

ジュード「ディオ……。お前、あの人の肩を持つのかよ？」

プル「ジュード……」

ジュード「お前や青葉にとつちやあの人は伝説のエースパイロットかも知れないが、あいつは地球を……！」

ディオ「……すまない。そちらの世界の事情も聞いていながら、軽率な発言だった」

青葉「ごめん、ジュード……。お前達の気持ちも考えず、はしゃいじまって……」

ジュード「あ……。いや……。俺も……。悪かった……。他の世界の間人であるお前達にあの人の過去の事まで考えるなんてのは言いがかりみたいなものだよな……」

プル「ジュードは、シャア大佐の事……。やっぱり、許せないんだね……」

ジュード「あの人のやった事もそうだけど、俺の中ではハマーンの事が強く引つかかっている……。あの人が、もつと優しくければ、ハマーンもあんな風にならなかったかもつ

て思うと……」

マシユマー「その気持ち、私も理解できる。だが、ハマーン様とシヤア大佐の事は我々が口を出す事ではない。それに今のあのお二人はかつてのお二人とは違うんだ」

ジユドー「わかつてるよ、そんな事は……！でも俺は……やっぱりシヤア・アズナブルが好きになれないんだよ……！」

トビア「ジユドー……！」

すると、噂をしていたシヤア大佐とハマーンさんが来た。

シヤア「……ここにいたのか、トビア、バナージ、ジユドー……」

ハマーン「随分探したぞ」

ジユドー「ハマーン……シヤア・アズナブル……」

シヤア「ホープスから、面白い情報をもたらった。二人には少し付き合ってもらいたい。

フロンタル、君もだ」

フロンタル「いいが、まだネオジオングの調整が終わっていない」

シヤア「構わない。付いて来てもらうだけでな」

フロンタル「了解した」

シヤア「ドニエル艦長の許可は取っている。30分後に出るぞ」

シヤア大佐はそれだけをいうと立ち去ってしまった……。

ジユドー「待ってくれよ！俺、まだ行くとも何も言っていないのに！」

青葉「でも、あの調子じゃ文句を言っても無駄っぽいぜ」

ジユドー「つたく…！勝手なんだよ、やり方が！」

ハマーン「すまん、ジユドー…」

ジユドー「え、あ…いや、別にハマーンが悪いわけじゃ…」

ハマーン「奴は不器用な男なんだ…。さっきのは大目に見てくれ」

ギユネイ「トビア、バナージ、お前達は大佐に文句はないのか？」

トビア「まあね。ほら…俺、記憶喪失なんで宇宙世紀生まれだけど、あの人について特に思う所はないから」

バナージ「俺も…今のあの人には何か考えがあると思いますから」

ジユドー「…いい機会だ」

プル「え…」

ジユドー「どこに行くのか知らないが、そこで、あの人にはつきり言ってる…。俺は、あんたの言う事なんて聞かなくてもいいって」

ハマーン「…」

ージユドー・アーシタだ。

俺達はそれぞれ、出撃し、シヤア・アズナブルが指定した場所にまで来た。

ジユドー「こんな破壊された街に一体何があるんだよ…。」

シヤア「ここはミスルギの駐屯地になっている。つまり、昨日戦った部隊への補給物資の保管場所でもある。アムロの新しいガンダムと同じようにヘルメスの薔薇の設計図から生まれた機体が運び込まれている可能性もあるだろう」

ジユドー「もしかして、俺達でその補給基地を叩くのか…？」

トビア「みたいだな」

ジユドー「だったら、もっとたくさんで来ればいいのに…。」

バナージ「ミスルギ攻略戦前だから余計な戦力を動かしたくなかったんだよ、きつと」

ジユドー「じゃあ、何で俺達を選ばれたんだよ」

フロントル「信用されているからだと思うぞ」

ジユドー「それなら、アムロさんやカミーユさんの方が適任だろうさ」

トビア「シヤア大佐も感じてるんじゃないかな？ジユドーとの間がギクシヤクしてるのを。だから、この機会にその距離を少しでも縮めようとしてるんだと思うよ」

バナージ「俺達は、そのオマケかな」

ジユドー「あの人が、そんな事を機にするもんか。そんな風に他人の心を気遣う事が

出来るなら、ハマーンの事だつて……」

ハマーン「私の事を想っていつてくれたのであれば感謝するぞ、ジユドー。だが、先程も言ったが、不器用なのだ、シヤアは」

フロンタル「だから、この様なやり方しか出来ないと思う」

ジユドー「不器用……（そう言えば、前のハマーンもそんな感じだった……）」

シヤア「何をしている、お前達。遊びに来ているんじゃないんだぞ」

ジユドー「勝手に人を指名しておいて……！」

ハマーン「気をつけろ。出て来たぞ」

ハマーンの言葉通り、敵の部隊が出てきた。

シヤア「予想通り、大した数ではないな」

トビア「補給基地を襲つて、物資を強奪するなんてまるで宇宙海賊だ」

シヤア「君にぴったりの任務だと思つたが？」

トビア「人が悪いな、シヤア大佐は」

バナージ「兎に角、やれるだけの事はやりましょう！」

シヤア「ジユドー……。君にも期待させてもらうぞ」

ジユドー「くそっ……！こうなつたら、フルアーマーZZのテストをしてやる！」

ハマーン「その意気だ、ジユドー」

シヤア「カミーユよりも、さらに若い3人の力……。若者こそが世界を変える……。私やクンパ・ルシータの思惑を越える何かを見せてくれ」

ジユドー「そうやって人を値踏みする様な目で見て……。やる気がないんなら、引っ込んでろよ！」

シヤア「そう思われるのも心外だ。君達を危険な目に遭わせるからには私も責任を取る。ハマーン、フロンタル……。フォローを頼む。そして、付いてくるがいい、ジユドー、バナージ、トビア。私のやり方を見せよう」

ジユドー「誰があんたの言う事なんて聞くもんかよ！悪いけど、俺は好きにやらせてもらうからな！」

やってやるぞ！シヤア・アズナブルの事なんて知るか！

俺達は戦闘を始めた……。

〈戦闘会話　バナージVS初戦闘〉

バナージ「俺やトビアはそこまで思っていないけど、ジユドーは我慢の限界が来ているのかも……。取り敢えず、爆発しない様にフォローしないと……。！」

〈戦闘会話　フロンタルVS初戦闘〉

フロンタル「何やら不穏な空気になって来ているな……。このままおかしな事が起こらなければいいが……」

〈戦闘会話　ハマーンVS初戦闘〉

ハマーン「(私が何を言っても無駄なのだろうな……。シヤア、これはお前の不器用さが招いた結果なのかもしれない……。だが、そんなお前を支えるのもまた、私の役目なのかもしれないな)」

俺達はすべての敵を倒した。

ジユドー「よし……。！これでもう邪魔者はいない！」

シヤア「まだだ……。！」

何処かから砲撃が放たれ、サザビーが俺を庇って、受けた。

シヤア「ちいつ！直撃をもらったか！」

ハマーン「シヤア！」

トビア「シヤア大佐！」

ジユドー「シヤア・アズナブル……。俺を庇って……。！」

現れたのは：：ハンブルビとドーベンウルフ、レギンレイズ：：それとモビルスーツ部隊か：：！

ラカン「物資を回収して、撤退しようと思つたら、思わぬ連中に遭遇したか」

ヤザン「ヤキが回つた様だな、シヤア！ガキを庇つて、自分が撃たれるとは！」

イオク「今が好機と見た！」

ジユドー「ヤザンさん！それにラカン・ダカランとイオク・クジャンか！」

バナージ「シヤア大佐！大丈夫ですか？！」

シヤア「私は無事だが、サザビーの出力が上がらん：：！」

ジユドー「何だつて、そんな無茶を！」

シヤア「言つたはずだ。私には君達をここに連れて来た責任があると」

フロンタル「このような時にまで、その様な建前みたいな台詞を言う必要はないので

はないか？」

シヤア「そうだな：：。ジユドー：：。お前を守りたかつた：：。だから、身体が動いた」

俺を：：守りたかつた：：？

ジユドー「え：：。」

シヤア「ハマーンが期待をかけたお前を守る事は私が彼女に出来る償いだ」

ジユドー「償い……。そんなものをハマーンが求めてると思うのかよ！ そんな事より、優しい言葉の一つの方が欲しかったのに！」

シヤア「……お前の言う通りだ、ジユドー……。死んだ人間には、何をしても届く事はない……。そう思っていた……」

ハマーン「だが、私は今、このアル・ワースで生きている。言葉は……。届いている」
シヤア「すまん、ハマーン。私はとてつもなく不器用でこれしか出来る事がないだ」

ハマーン「そんな事、お前と出会った時から知っている」

ジユドー「……やつとわかつたよ……。かつて、あんた達がどうしてうまくいかなかったのか……。あんた達は似過ぎなんだよ！ 自分の弱さを素直に誰かに見せられないから相手に誤解される！」

ハマーン「ここまで言われると心にグサリと来るな」

シヤア「ああ、返す言葉もない。まるで子供の頃のハマーンに叱られているようだ」
ハマーン「そんな事もあつたな」

ジユドー「だったら、お返しだ！ ハマーンのためにも、シヤア・アズナブル……。あんなを死なせはしない！ ここは俺とトビアとバナージ、フロンタル大佐でやる！ あんたとハマーンは下がってくれ！ 嫌だとは言わせないぞ！」

シヤア「すまん……」

ジユドー「そういうのも要らないんだよ！急いでくれ！」

シヤア「わかった、行こう、ハマーン」

ハマーン「シヤアは任せろ……それから、後は頼む」

サザビーとキュベレイは撤退した……。

ラカン「無様なものだな、赤い彗星。やはり、奴にネオ・ジオンを任せるわけにはいかない」

ジユドー「黙れよ！お前にあの人の何がわかる!?？」

ヤザン「地球を破壊しようとした大罪人の肩を持つ気か、ジユドー？」

ジユドー「あの人のやった事は許せない！だから、元の世界に帰ったら、必ず償わしてやるさ！だから、それが終わるまであの人は死なせはしない！」

バナージ「ジユドー……」

フロントアル「(見事だ、ジユドー)」

イオク「威勢はいいが、たった四人で何が出来ると言うのだ！」

ラカン「赤い彗星やハマーン・カーンは既にいない！後はお前達を叩き潰すだけだ！」

シヤア「そうはいかん……！」

赤い機体が現れた……？あれは……！

ラカン「何だ、あのモビルスーツは!?？」

ヤザン「赤い機体……！まさか……!?？」

イオク「シヤア・アズナブルなのか……!?？」

フロンタル「シヤア……だと……？」

シヤア「ああ……」

バナージ「何なんですか、その機体は？」

シヤア「この機体の名はナイチンゲール……。ホープスは、これの存在を私に教えてく

れた」

すると、キュベレイも現れた。

ハマーン「どうやら当たりだったようだな。それは……サザビーの発展型という事な

のか？」

シヤア「おそらくそうだろう」

イオク「クンパ・ルシータめ……！アムロ・レイだけでなく、シヤアにまで機体を用

意していたか！」

ヤザン「面白い！ならば、あの新型ごと、赤い彗星を食うだけだ！」

ハンブラビがナイチンゲールという機体に攻撃を仕掛けたが、シナンジュがそれを受

け止めた。

フロンタル「悪いが、そう何度も彼を食わせるわけにはいかんよ」
シヤア「助かる、フロンタル」

フロンタル「今度は我々の番だ、シヤア」

ナイチンゲールとシナンジュは同時に仕掛けた……。

シヤア「やらせてもらう……！ ついてこれるかな、フロンタル？」

フロンタル「これでも伊達に赤い彗星の名を語ろうとしたわけではない」

ナイチンゲールはメガビームライフルをシナンジュはビームライフルを連射させ、ハ
ンブラビにぶつけ、二機はビームサーベルでハンブラビを斬り裂いていく。

フロンタル「これで……！」

シヤア「終わりだ……！」

ヤザン「こ、これが……新型の力か……！」

最後に二機は×を描くようにハンブラビを斬り裂き、最後に二機は同時にファンネル
を出し、ダメージを与えた。

ヤザン「ちいっ……！ まるでシヤアを二人、相手している気分だぜ！」

トビア「見事な連携ですね、二人共！」

ハマーン「少し妬けてしまうな」

フロンタル「止してくれ、ハマーン。あなたが向けるシヤアへの愛には敵うまい」

ジュードー「ここからは俺達もやる……！言っただい！シヤア大佐はやらせないってな！」

シヤア「ジュードー……」

バナージ「シヤア大佐とジュードー……。ようやく分かり合えたようですね」

フロンタル「これこそが人の持つ可能性なのかもしれないな」

シヤア「トビア、バナージ、フロンタル、ハマーン。付き合わせね悪かったな。フラットな眼を持つ君達しか、我々の間に立てないと思ったのでな」

トビア「構いませんよ。俺も大佐の本音が聞きましたしね」

ハマーン「言っただい。何があってもお前と共に歩み、支えろ……」

シヤア「そうか……」

バナージ「それに皆さんも来てくれました」

現れたのはエクスクロスの戦艦だった……。

―新垣 零だ。

ジュードー達を見つけた俺達は出撃した……。

アムロ「無事なようだな、シヤア」

シーブック「その機体は……」

シヤア「ヘルメスの薔薇の設計図から生まれたものだ。私の力となってくれる」
ホープス「よく似合っていますよ、シヤア様」

アマリ「調子いいんだから、ホープスは！」

ハツパ「フロンタル大佐。ネオ・ジオングの調整が完了しました」

フロンタル「了解した」

すると、シナンジュはメガファウナへ戻り、再び出てくると巨大モビルアーマーにシナンジュがいた。

リディ「またもやそれを見る日が来るとはな……」

フロンタル「このネオ・ジオングで私はまた可能性を目指し、戦える」

バナージ「そうですね、背中では任せましたよ、フロンタル」

アンジュ「ミスルギに乗り込む前の景気付けにさっさと片付けるわよ！」

ジユドー「シヤア大佐の方は俺達に任せてくれ！」

カミーユ「わだかまりが消えたようだな、ジユドー」

ジユドー「気付いていたんだな、カミーユさんも」

カミーユ「大佐とお前の問題だから、口は挟まなかったがな」

アムロ「シヤア……！この場の指揮は任せる！」

零「行きましょう、赤い彗星！」

シヤア「ああ。各機は私に続け！防衛ラインへの残存戦力を叩き、ミスルギへのルートを確保する！」

ジユドー「了解！赤い彗星に負けていられないぜ！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　バナージVS初戦闘〉

バナージ「シヤア大佐とジユドー……。この二人の分かり合いが世界を変えるのかもしれないな……」

〈戦闘会話　フロンタルVS初戦闘〉

フロンタル「人と人がわかり合う世界……。それはそう遠くないのかもしれない。彼等を見ているとそう思うよ……」

〈戦闘会話　ハマーンVS初戦闘〉

ハマーン「あの人は変わりつつある……。私も変わっていかねばならないな……」

〈戦闘会話　シヤアVSイオク〉

イオク「やはり、貴様は危険だ……シヤア・アズナブル！」

シヤア「悪いが君ではナイチンゲールのテスト役にもならない……。早く退きたまえ」
イオク「ば、馬鹿にするか！俺にだって大義があるんだ、こんな所で退けるものか！」

〈戦闘会話　ジユドーVSイオク〉

ジユドー「フルアーマーの力を見せてやるよ！」

イオク「どれだけ火力が強かろうが、俺は負けん！絶対にだ！」

〈戦闘会話　トビアVSイオク〉

イオク「海賊風情が……俺の前に立つな！」

トビア「その海賊の力……。じっくりと味あわせてやる、行くぞおっ！」

〈戦闘会話　バナージVSイオク〉

バナージ「人の話も聞かずに……。何をやっているんですか、あなたは？？」

イオク「俺の事を理解できない人間の話など聞く必要はない！」

バナージ「あの人も……。人の可能性を信じない人だ……。！止めないと、俺が……！」

〈戦闘会話　フロンタルVSイオク〉

フロンタル「君ではネオ・ジオングに傷一つつけられんよ」

イオク「いや、何処かに弱点があるはずだ…そこを狙えば…！」

〈戦闘会話　ハマーンVSイオク〉

イオク「ハマーン・カーンを落とせば…！」

ハマーン「お前などに落とされるのなら、私もそれまでの女という事だ…。だが、私に挑んで来るのなら、容赦はしないぞ！」

バルバトスルプスレクスの攻撃でレギンレイズはダメージを受けた。

イオク「このままでは、レギンレイズがもたない…！この屈辱…忘れはしないぞ！」

レギンレイズは撤退した…。

ガエリオ「あいつには諦めるって言葉はないのか…！」

ジュリエッタ「…これは少し、彼の事を考えないといけませんね…！」

〈戦闘会話　バナージVSラカン〉

バナージ「あなたも軍人さんなら話ができるはずですよ！」

ラカン「悪いな、坊主。俺はお前達の話を聞く気はない」

バナージ「どうして、言葉よりも手が出るんだ……。そんな事をしているから戦争が終わらないんですよ！」

〈戦闘会話　フロンタルVSラカン〉

ラカン「未来でネオ・ジオンを従えていた実力……。見せてもらおう」

フロンタル「ならば、ネオ・ジオングの火力と共に見るがいい……。私の実力を！」

〈戦闘会話　ハマーンVSラカン〉

ハマーン「ラカンか……」

ラカン「ハマーン・カーン……。悪いがもう戻る気はないぞ」

ハマーン「構わない……。だが、お前が私の邪魔をするというのなら相手をするだけだ
！」

ネオ・ジオングのサイコジャード攻撃でドーベンウルフにダメージを与えた。

ラカン「くっつ…！ここは後退して、本隊と合流する！覚えていい、エクスクロス！今日の借りは、いずれ返すぞ！」

ドーベンウルフは撤退した…。

プル「(グレミーの所にプルツーがいる…。このまま進めば、またあの子と戦う事になる…。)」

ジユドー「心配するな、プル。プルツーの事は俺が何とかする。だから、お前は生き延びる事だけを考えるんだ」

プル「うん！頼りにしてるよ、ジユドー！」

〈戦闘会話 バナージVSヤザン〉

ヤザン「俺の相手をしやがれ、一本ツノ！」

バナージ「自ら戦いを望むなんて…戦いを嫌う人だっているんですよ！」

ヤザン「逆に戦いを好む人間だっている……。俺みたいになー！」

〈戦闘会話　フロンタルVSヤザン〉

ヤザン「さつきみたいにはやられないぜ、赤い彗星擬きさんよー！」

フロンタル「擬き、か……。残念だが、私は赤い彗星ではないのでな……。フル・フロンタルとして相手をさせてもらう……。！」

〈戦闘会話　ハマーンVSヤザン〉

ハマーン「無様だな、戦いを忘れられない者というのは……。！」

ヤザン「てめえに言われる筋合いはねえな、ハマーン・カーン！」

ハマーン「そうだ。私も無様な女だ。だからこそ、変わろうとしている……。その障害となるのなら相手をする！」

ナイチンゲールのファンネルがハンブラビにダメージを与えた。

ヤザン「ちいつ……。！ここは出直す必要があるか……。まあいい。また楽しませてくれよ、エクスクロス！」

そう言い残し、ハンブラビは撤退した……。

エル「あの人……ぶれないね」

ビーチャ「ホントだぜ……。ある意味、尊敬しちまうな」

今の敵で……最後みたいだな……。

ジユドー「片付いたか……」

トビア「ついでに厄介な問題もな」

青葉「みたいだな！」

ジユドー「ずっとデイオとケンカしていたお前に言われたくないぜ」

ベルリ「でも、これでミスルギ攻略に障害はなくなった」

零「後は待つてるであろう第二次防衛ラインを突破して、一直線に進むだけだな」

アンジユ「待つてなよ、エンブリヲ……。それにサリア、エルシャ、クリス……。すぐ

に私達が行くからね」

シヤア「(エンブリヲを討ち、そして、ドアクダーを討ち、我々は元の世界に帰る……。

アムロや若い力との決着は、そこでつける……。それまでは彼等と共に往く。それが私

の戦いだ……)」

俺達はそれぞれの艦へ帰還した……。

?「……」

俺達が立ち去るのを見ていた金属の様な生命体が数体いた事も気付かずに……。

「ジユドー・アーシタだ。」

俺は外でシヤア大佐と話していた。

ジユドー「……今日はありがとう、シヤア大佐。助かったよ」

シヤア「いや……礼を言うべきなのは私の方だ、ジユドー。今日の事だけではなく、ハマーンの事も含めて」

ジユドー「……」

シヤア「彼女の孤独を救ってくれたお前に感謝する……」

ジユドー「でも、今はあんたがあの人を救っているんだろ？」

シヤア「そうだな……。それでは、失礼する」

そう言い残し、シヤア大佐は立ち去っていった……。

ジユドー「シヤア・アズナブル……」

カミーユ「大佐も孤独だった……。だけど、今は違う」

ジユドー「ああ……」

アムロ「このままでいいんだ。例え、何が変わろうが奴は歩みを止めない……。誰に頼

まれたわけでもなく、自分の意思で」

ハマーン「それがあいつのプライドなのだからな……」

カミーユ「ハ、ハマーン……!!? いたのか……?」

ハマーン「人を幽霊を見つけたような発言をしてくれるな、カミーユ」

ジュード「なあ、ハマーン……。俺は……あの人を理解できたのかな……」

ハマーン「完全ではないが……理解できているのではないか?」

ジュード「そうか……。そうだとしたら、俺やあの人の……。そして世界の未来ってのは

変わるのかもな……」

ハマーン「変わるさ、必ず……。良い方向にな……」

俺達はメガファウナへと戻っていった……。

第52話 未来への再誕

「フアサリナです。」

私とミハエル君はエクスクロスを迎え撃つ為に第二次防衛ラインの近くの待機所にいます。

ミハエル「フアサリナさん、明日、エクスクロスが来ます」

フアサリナ「その様ね」

ミハエル「ですが、第一次防衛ラインよりも戦力が薄くないですか？僕とフアサリナさん以外は無人機ですが……」

フアサリナ「あら？聞いていないの、ミハエル君？私達の部隊にはエンブリヲさんから与えられたあの子達が来るのよ」

ミハエル「エンブリヲさんから……？というと、あのバジユラと呼ばれる生物の事ですか？」

フアサリナ「バジユラさんもそうだけど、実はまた新しい子達が来るの」

ミハエル「新しい生物……？」

フアサリナ「直接触れる事は許されなかったけど、見た目は金属の様な身体をしていてわ：：。確か、ELSと呼ばれる子よ」

ミハエル「ELS?」

フアサリナ「あの子達の世界でつけられた地球外変異性金属体の英訳：：。Extra terrestrial Living metal Shape shifterの略称らしいわ。ELSは物体を侵食するらしいの」

ミハエル「物体を侵食：：。取り込まれるというわけですか：：。だから、触れられないんですね?」

フアサリナ「ええ、そうみたいよ」

ミハエル「ですが、これだけの戦力があれば心配はありませんね」

フアサリナ「だけど、油断は大敵よ、ミハエル君」

ミハエル「わかっていきます。ですが、導師の為にここを守り抜きましょう」

フアサリナ「そうね、頑張りましょう」

お待ちしていますよ、エクスクロスの皆さん：：。

―新垣 零だ。

俺はグラハムさんが眠るプロレマイオスの医務室へと来た。

零「グラハムさん……。もうすぐ俺達はミスルギ攻略に乗り出します……。だから、見ていてください。俺達……。絶対にエンブリヲを倒します」

俺はそれだけを言うのと医務室を後にした……。

この時、俺は気づかなかった……。グラハムさんの指がピクリと動いた事に……。

医務室を後にした俺はマクロス・クォーターの格納庫に来た。

オズマ「青葉！この程度でゾギリアと戦うってのか！」

青葉「ちよ、ちよつと待ってくださいよ、オズマ隊長！」

オズマ「嫌、待たん！お前の甘さを叩き直してやる！」

青葉「ヒ、ヒエツ……！！？」

ディオ「だから、あれ程甘さを捨てろと言っただろう」

オズマ「人の事を言っている場合か、ディオ！お前もカップリングシステムに頼ってばかりで甘くなっているだろう！」

ディオ「そ、そんな事は……！」

オズマ「お前達、バディ纏めて俺が可愛がってやるよ！」

オズマ隊長……相変わらず熱いな……。

青葉「あ、零さん！助けてください！」

零「これも強くなる為だけ、頑張れよ！青葉、ディオ！」

ディオ「た、他人事だと思つて……！」

ネロ「零ー！特訓するぞー！」

零「ネ、ネロさん……！！？いや、待つてくださいよ！」

ネロ「いや、待たん！お前の甘さを叩き直してやる！」

言つてる事はオズマ隊長と一緒になんですが！！？

オズマ「いいですね、手伝いますよ、ネロさん」

え、嘘だろ……！！？

零「い、いや……オズマ隊長は青葉達を……」

オズマ「そんなもの後からでも出来る！」

いや、そんなもの……

零「あ、青葉！ディオ！助けてくれ！」

青葉「頑張ってください、零さん！」

ディオ「これも強くなる為ですよ」

こ、こいつ等……！

ホセ「何なら、青葉とディオも一緒にやればいだろう！」

青葉「うえっ!!?」

ディオ「…しまった、ホセさんの存在を忘れてしまっていた…!」

オズマ「そうだな!お前達3人…覚悟しろよ!」

零「…勘弁してくれ…」

死ぬな、これ…。

イアン「大変だー!!?」

ひろし「大変だー!!?」

イアンさんとひろしさんが焦った表情で格納庫に入ってきた。

アルト「どうかしたんですか、二人共」

イアン「エクシアリペアIVが消えたんだ!」

シノ「は…?」

オルガ「消えたって…どう言う事だよ、イアンのおやっさん」

三日月「歳なの?」

イアン「そうそう…最近腰も痛くて…って、違うわ!」

零「それで、どう言う事なんですか?」

イアン「エクシアリペアIVの様子を見にトレミーの格納庫に行ったら、跡形も無く、消

えていたんだ」

オズマ「誰かが持ち去ったのか……？」

青葉「でも、誰が？ エクススクロスの戦艦は停泊していましたし」

デイオ「エクススクロスの中の誰かが持ち去るとは思えません……」

シノ「所でひろしさんはどうしたんすか？」

ひろし「ひまわりが……ひまわりがいないんだ！」

はあっ!!?

みさえ「ちよつと目を離れた際に何処かへ行つたの！」

零「そつちの方が大変じゃないですか！」

イアン「い、いや……悪かつたな……」

オルガ「ひまわりは赤ん坊だ……それ程遠くへは行つてないだろ」

ナオミ「じゃあ、早く探さないと！」

三日月「みんなにも連絡して、探そうよ」

俺達はひまわりを探すために動き出した……。

ーエンブリヲだ。

私はエクスクロスが来るといふ第二次防衛ラインの様子を見に来た。

すると……

ひまわり「たや？」

草むらから赤ん坊が……？それにこの顔……見た事が……

エンブリヲ「この近くの村の子かな？迷子かい？」

ひまわり「うゝ！」

私の顔を見て、警戒している……？

思い出した、彼女は野原 しんのすけの妹だったな。

エンブリヲ「怖がらなくてもいい。私は君には何もしないよ」

ひまわり「たいやたいや！」

エンブリヲ「そんな嫌わなくとも……」

ナオミ「ひまちゃん！」

そこへナオミが来た。

ひまわり「たや！」

ナオミ「やつと見つけた！ひろしさんやみさえさんが心配していたよ！」

エンブリヲ「やあ、ナオミ。奇遇だね」

ナオミ「エンブリヲ……！」

私を見たナオミは野原 ひまわりを抱き寄せ、私を睨んだ。

エンブリヲ「君にも嫌われているとは……少し、傷つくな」

ギルガ「騒がしいと思つたら、なかなか面白いメンバーがいるね」

彼は、確か、オニキスの……。

エンブリヲ「君は、オニキスのメンバーだね」

ギルガ「エクスクロスのひまわりちゃんにナオミちゃん……それにマナの国の支配者

エンブリヲか」

ナオミ「どうしてあなたがここに……？」

ギルガ「君達を倒すために決まっているだろ……それに、ひまわりちゃんと君を人質にしたら、いい事が起きそうだ！」

そう言い、彼はナオミに向けて、銃を発砲した。

ナオミ「きやあつ！」

何とか、銃弾を避けたナオミだが、野原 ひまわりを手放してしまう。

ひまわり「たや……？」

地面にコロコロと転がり、野原 ひまわりは顔を見上げると目の前にはカルセドニールがいる。

ギルガ「やあ、ひまわりちゃん」

ナオミ「ひまちゃん！」

ひまわり「う、ひっぐ…！」

前々からガッツがある赤ん坊だと思っていたが、流石の恐怖に泣き出す寸前だ。

ギルガ「怖くないよ、お兄ちゃんと一緒に行こう」

…見てられないな。

私は能力を使つて、カルセドニーを吹き飛ばした。

ギルガ「があっ!!？」

吹き飛ばしたカルセドニーを尻目に私は野原 ひまわりの前に立った。

エンブリヲ「赤ん坊にまで手を挙げるとは… オニキスの底も知れるな。大丈夫かい

？」

ひまわり「た、たや…！」

ふむ、どうやら怪我は無いようだね。

ナオミ「エンブリヲ…！」

エンブリヲ「ナオミ、早く、野原 ひまわりを抱き上げるんだ」

ナオミ「う、うん…！」

ナオミは私に言われた通りに野原 ひまわりを抱き上げた。

ギルガ「君が何故、エクスクロスに手を貸す!!？」

エンブリヲ「勘違いしてもらつては困るな、君のやり方が気に入らないだけだ」

ギルガ「ならば、纏めて倒してやる！」

零「倒されるのはてめえの方だ！」

突然、新垣 零が飛び出して来て、カルセドニーを蹴り飛ばした……。

―新垣 零だ。

騒ぎ声が聞こえると思つて来てみれば…… やつぱりオニキスカ。

ギルガ「ぐっ……！に、新垣 零……！」

零「性懲りも無く、人質作戦か……。変わらないな、お前は」

ギルガ「だ、黙れ！この借りは明日返す！」

そう言つて、カルセドニーは逃げ去つた……。

さてと、後は……！

零「支配者が自ら出て来るとはな…… エンブリヲ！」

エンブリヲ「新垣 零……。オニキスが現れたから来るとは思つていたよ」

零「ここでお前を倒せば……！」

ひまわり「たいやー！」

ナオミ「待つて、零！この人はひまちゃんを助けてくれたんだよ！」

零「何…？」

エンブリヲ「別に助けた訳ではないよ。彼の行いが許せないだけだよ」

零「お前…。」

エンブリヲ「では、失礼させてもらうよ。また、ミスルギ皇国でね」

ひまわり「あうう…。」

エンブリヲ「次会う時は敵同士だね、野原 ひまわり」

ナオミ「エンブリヲ…。」

エンブリヲ「ナオミ、君も必ず手に入れる…。忘れないで欲しい」

そう言い残し、エンブリヲは立ち去った…。

すると、そこへ野原一家とカンタムが走って来た。

しんのすけ「ひまろ!!？」

シロ「ワンワン！」

カンタム「どうやら、無事だったようだね、ひまわりちゃんは…。」

みさえ「もう、ひまったら…。めっ！」

ひろし「何にしても無事で良かったよ、見つけてくれてありがとう、零君、ナオミちゃん」

ナオミ「い、いえ…。無事で良かったですね」

エンブリヲ：… あいつは…。

第52話 未来への再誕

翌日、俺達は第二次防衛ラインの場所まで来て、出撃した…。

ウー「此処が第二次防衛ラインか…！」

ジャンボット「前回の戦闘で大方の敵を倒したに見えたが…。」

ガドヴェド「今回来る敵は既に予想している」

ヴァン「あ？誰が来るってんだ、ガドヴェド？」

竜馬「話はそのままで。敵さんのお出ませ」

現れたのはサウダーデ・オブ・サンデイとダリア・オブ・ウエンズデイと数十機の無人機ヨロイだった。

ウエンデイ「兄さん…！」

ノブナガ「かぎ爪の一味か…。」

アイーダ「前回いなかったたので、もしやと思いましたが、やはり出て来ましたね！」

プリシラ「つて事は…。ヴァン！」

ヴァン「かぎ爪の奴も… ミスルギって国にいるのか！」

バリヨ「ならば、尚更此処を突破せねばならんな」

カロツサ「ミハエル…！」

ミハエル「来たな、エクスクロス！」

ファサリナ「皆さんをミスルギに行かせるわけにはいきません」

ヒデヨシ「へっ！俺達も舐められたもんだな！」

ジャンヌ「そっちの戦力で私達に勝つつもり？」

ケンシン「… いえ、まだ何かあるようです」

アレクサンダー「まだ戦力を隠しておるな…！」

ファサリナ「流石ですね。それでは出て来てください」

今度はバジユラの軍勢と金属の様な生命体が現れた。

カナリア「バジユラか…！」

ブレラ「奴らもエンブリヲに操られている様だな…！」

パトリック「お、おい！バジユラと一緒にいるのって…！」

テイエリア「ELS…？」

ELS「… 刹那が対話をした生命体の…？」

ロツクオン「あいつ等もアル・ワースに来ていたのか…！」

刹那「ELS、俺だ！刹那・F・セイエイだ！応えてくれ……！」

ELS「……！」

刹那「ダメだ……！ELSの意思を感じない…… ELS達も操られている……！」

アレルヤ「ELSまで操るなんて……！」

ピールリス「エンブリヲ……なんて奴なの……！」

エンブリヲが…… そこまで……。

ナオミ「……」

隼人「どうするんだ、アルト、刹那？」

弁慶「向かって来るんなら相手をするしかないぜ！」

アルト「刹那……」

刹那「アルト、バジユラとELSを助けるぞ……！」

アルト「…… ああ！」

アンドレイ「私達も援護する！」

セルゲイ「君達はそれぞれバジユラとELSを助けるんだ！」

刹那「感謝する」

零「いっげ、ミハエル、ファサリナ！刹那達の邪魔はさせねえ！」

ミハエル「私達の目的はお前達だ！」

フアサリナ「どちらにしても倒させてもらいます」

ヴァン「てめえ等に構ってる時間はねえ！てめえ等を倒して、かぎ爪の元へ行く！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 刹那VSEL〉

刹那「止める……！俺達とガンダムが……！ELS、もう一度、俺の声に伝えてくれ……！」

〈戦闘会話 アルトVSEL〉

アルト「バジユラだけじゃなく、ELSつてのまで……！刹那の為に止めてやる！」

〈戦闘会話 刹那VSバジユラ〉

刹那「お前達もELSと同じだ……！わかり合う事が出来た……だから、絶対に助ける！」

〈戦闘会話 アルトVSバジユラ〉

アルト「刹那もE.L.Sを助け出そうと戦っている……。バジユラ！俺も何度だつてお前達を救つてみせる！」

どうやったらバジユラとE.L.Sを救い出せるんだ……！

ミラーナイト「このままでは埒があきません！」

シエリル「ランカちゃん！」

ランカ「はい！ミーナちゃんも！」

ミーナ「30」歌いますー！

シエリル、ランカ、ミーナ「30」が歌を歌うが……。

バジユラ「……！」

ランカ「そ、そんな……！」

ミシエル「シエリル達の歌も聞かないなんて……！」

テイエリア「刹那！」

刹那「了解！……クアンタム……！」

ミハエル「その技はやらせない！」

サウダーデがクアンタムバーストを発動しようとしたクアンタにビームを当てる。

刹那「くっ……！」

フェルト「刹那！」

ヴァン「ちいつ、めんどくせえ！もうこいつ等ごとぶっ倒す！」

クラン「待て！ELSとバジユラは倒してはダメだ！」

ヴァン「俺には関係ねえし、これじゃあ、埒があかねえんだよ！」

真上「覚悟を決めろ、奴等は敵だ！」

ワタル「待ってよ！それじゃあ、何の解決にもならないよ！」

海道「甘え事言っている場合じゃねえんだよ！」

ゼロ「だからって、このまま見捨てていいわけねえだろ！」

メリツサ「みんな、怖い……」

アーニー「（みんな、イラつきが見え始めている……このままじゃあ……！）」

千冬「みんな、落ち着け！」

グレンファイヤー「落ち着いてられるかよ、こんな状況で！」

竜馬「くそっ！やるしかねえ！ELSとバジユラを倒すぞ！」

シモン「だから待って言ってんだろ！」

このままじゃあ、全滅する……！

だが、そこで俺の意識が途絶えた……。

「アマリ・アクアマリンです。

皆さん、イラつきで言い合いを始めてしまいました……。

どうしたら……。

零「さつきからガタガタと……」

れ、零君……？

零「てめえ等、ちよつと黙れえええつ!!?」

零君の言葉で皆さんは黙り込みました……。

零「てめえ等な……。さつきからガキみてえにグダグダ良いやがって、口よりも手を動

かしやがれ、この無能共!!?」

一夏「れ、零……!!?」

ヴァン「誰が無能だ!」

真上「それは俺達に喧嘩を売っているのか、新垣」

零「喧嘩なら後で何度でも受けてやらあ!だが、今、あいつ等を救えるのは俺達だけ
だろうが!これ以上、俺を幻滅させるんじやねえ!」

アル「零……」

シバラク「零の言う通りだ、少しは落ち着け!」

ドニエル「お前達が喧嘩して何になる！」

ルルーシユ「…すまない、零。俺達は冷静さを失っていた」

海道「ちつ、悪かったよ…」

零「わかればいいんだよ、つたく…。世話がやける…。つ、これは…！」

すると、ダークネス・ヴァリアス、アマテラス・ツヴァイ、ナイトメア・ゼフィールス、

ジェイルとガルム数機が現れました。

ギルガ「昨日の借りを返しに来たよ、エクスクロス！」

リン「今度こそ、倒します！」

カノン「覚悟してください！」

アマリ「オニキス…！」

零「てめえ等…」

ラゴウ「今度は俺が勝つぞ、零」

弘樹「待て、零を倒すのは俺だ！」

零「うるせえんだよ、ガタガタと…。来るなら来やがれ！」

ラゴウ「…？ 貴様は…」

ギルガ「いい覚悟だね、新垣 零…」

？「彼はあなた達には渡せないわ…！」

すると、今度は零君を狙うスペリオルという機体が現れました。

リン「う、嘘……!!?」

カノン「その機体は……！」

弘樹「どうした、サファイア……？あの機体に何かあるのか？」

ラゴウ「スペリオル……！」

ギルガ「あなたは……！」

？「久しぶりね、ラゴウ、ギルガ」

ギルガ「どうしてあなたが此処にいるのですか!!? マリア様！」

マリア……？それがあの人の名前なのですか……？

マリア「私がない間にオニキスは随分偉くなったのね」

ラゴウ「首領がお待ちです、おかえりください」

マリア「悪いわね、私はオニキスに戻るつもりはないわ」

零「あんた……」

マリア「……！へえ、その段階にまで来ていたのね」

零「ちようどいい！ためえ等纏めてぶっ潰してやる！」

ファサリナ「随分、ややこしい状況になりましたね……。オニキスの方々、私達と手を

組みませんか？」

ラゴウ「悪いが、お前達の様な小悪党と組む気はない」

オニキスはミスルギ陣営にも攻撃を…!??

マリア「私も同感ね、それにエンブリヲっていう男も気に入らないし」

ミハエル「ならばお前達もエクスクロス共々、敵だ！」

こ、これで私達、オニキス、ミスルギ陣営、マリアという人の四巴になります…!

イングリッド「まずいわね… オニキスにバジユラやELSを倒されるわけにはいか

ないわ！」

ケイ「刹那、アルト… 早くよろしくね！」

刹那「わかつている…!」

私達は戦闘を再開させました…。

メサイアの攻撃でジェイルはダメージを負いました。

カノン「何の戦果も上げられないなんて… 私は… でも、私は立ち止まれないんで

す…! (氷室さんの隣に立つために…)」

そう言い残し、ジェイルは撤退しました…。

アスナ「カノン…」

メル「(彼女も氷室さんの為に必死なんですわね……)」
零「(成る程な、メル・カーネリアン、カノン・サファイア……。あいつ等も植え付けられた記憶を自身の記憶と思っているのか……)」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

零「ギルガか……」

ギルガ「いつ、僕の事を名前で呼ぶ事を許したんだい？ 気安く僕の名を呼ぶな！」

リン「新垣 零さん！ 覚悟してください！」

零「てめえは前からうつつとおしかつたんだ……。消えてもらおうぜ！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

メル「リンちゃん……！」

リン「メルちゃん…… 私は、あなたを……」

ギルガ「リンちゃん、君は僕のフォローをしてくれればいい」

リン「はい、わかっています……」

〈戦闘会話 マリアVSラゴウorrギルガ〉

ラゴウ「マリア様……相手があなたと言えど手加減はしません」

ギルガ「いくら、あなたがあの方の大切な存在だとしても、オニキスに敵対するとい
うのなら……！」

マリア「いいわよ、来なさい。でも、忘れたわけではないでしょ？あなた達に操縦を
教えたのが私だという事を！」

メサイアの攻撃でアマテラス・ツヴァイはダメージを受けました。

メル「降参してください、ギルガ・カルセドニーー！リンちゃん！」

リン「舐めないで、私は……弱くないから……！」

ギルガ「そういう事だ、メルちゃん。彼女は君の様には迷わないんだよ！」

アマテラス・ツヴァイは撤退しました……。

メル「本気でリンちゃんが向かって来るのなら、私は……」

アスナ「メル……」

零「（ギルガ、てめえも偉くなった様だな。それに、リン・マスカライトか……。あい
つの存在がどう出るかだな）」

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

零「よお、弘樹……。久しぶりだな」

弘樹「てめえ……。零じゃねえな、誰だ？」

零「……。さつすが親友！だが、馬鹿のてめえには教えられねえな」

弘樹「誰だか知らねえが零じゃねえ奴に馬鹿呼ばわりされる筋合いはねえ！」

ゼフィルスの攻撃でヴァリアスはダメージを負いました。

零「今回も俺の勝ちの様だな」

弘樹「てめえ……。零はどうした!?!？」

零「生きてるっての、いいから消えろ」

弘樹「……。ちっ」

ヴァリアスは撤退しました……。

零「ふーん、あいつが氷室 弘樹か……。やっぱり、あいつは障害になりかねないな」

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

ラゴウ「貴様のそのオーラ…新垣 零ではないな」

零「流石はオニキスのNo.2だな、ラゴウ」

ラゴウ「冗談はやめてください、あなたには勝てませんよ」

零「だが、全力でかかってこい。今はな」

ラゴウ「俺の目標はあなたでしたので、手などは抜きません」

零「いいぜ、俺もお前とは一度やりあってみたかったんだよ！」

す、凄い、零君…！ 前回苦戦していたラゴウ・カルセドニーをバスタードモードで
追い詰めるなんて…！

零「腕が上がったそうだが…まだまだだな、ラゴウ」

ラゴウ「や、やはり、零とは違う様ですね、あなたは…」

零「…」

ラゴウ「またお会いする事を祈っております…それでは…」

ナイトメアは撤退しました…。

零「零とは違う、か……。我ながら虚しいもんだな……」

〈戦闘会話 零VSマリア〉

零「……久しぶりだな」

マリア「また大きくなつたわね」

零「俺は止まる気はねえぞ、あんたが相手でもな！」

マリア「ならば、来なさい！そして、私を越えてみなさい！」

ゼフィルスの攻撃でスペリオルはダメージを負いました。

零「どうだ!?」

マリア「……やるわね。これは本当に越えられるかもね……！」

零「だが、あんたの腕も落ちてねえな……」

マリア「……今日の所は帰らせてもらうわ。またね、愛しているわ……」

スペリオルは撤退しました……。

零「（愛している、か……。今の俺は愛されていい存在なのか……？）……そろそろか……」

―新垣 零だ。

俺は目を覚めますが、記憶に違和感を覚える。

今さつき、気を失っていたはずなのにオニキスの軍団と戦っていた様な気がする…。
それにあの人はマリアっていうのか…。

アスナ「零、どうしたの？」

零「…いや、何でもない！行くぜ！」

アスナ「(また、元の零に戻っている…。)」

みんなを心配させるわけにはいかないな…。

ユイ「オニキスの方々を撃退させる事が出来ましたが…。」

リオン「肝心のバジユラとELSの方をどうするんだよ！」

アイシャ「ミーナ達の歌も聞かないんじゃないよ、どうする事も出来ないわよ！」

カズミ「頼みの綱はクアンタムバースト…！」

ゼシカ「でも、こんなごちゃごちゃしていたら、刹那さんも落ち着いて発動出来ないわ！」

アマタ「何とか俺達で注意を引ければ…！」

カイエン「それは何度もやっている…！」

どうする事も出来ないのかよ……！

ーグラハム・エーカーだ。

私は暗闇の中にいた……。

そう言えば、刹那の為に特攻した後もこの様な空間にいたな……。

そうだ……。私は零を庇って……。

ふっ、二度も死んでしまうとは……。我ながら情けないな……。

すると、辺りが光に包まれ、光が消えると、花畑の様な所へ来た。

グラハム「ここは……」

ELS「……」

空にELS達が飛んでいる……？

ELSの一体が私に何かを伝えようとしている……。

ふと、顔と髪を触ると何か違和感を感じ、手鏡で見ると……。

グラハム「ELSと同化している……！！？」

一体、どういう事だ……！！？

？「あなたがELSを受け入れた証拠ですよ」

目の前にある人物が現れた。

グラハム「君は……」

デカルト「デカルト・シャーマン……。あなた達の知る刹那・F・セイエイの次に覚醒したイノベーターですよ」

グラハム「君は……。ELSと同化して戦死したと聞いたが……」

デカルト「生き返った……。というより、アル・ワースに転移したんですよ」

グラハム「私に何の用だ？」

デカルト「あなたはまだ死すには早い……。故に迎えにきました。ELS達と共に……」

すると、複数のELSが彼の後ろに現れ、ELS達が散らばると一機の機体が現れた……。

こ、この機体は……！

グラハム「こ、これは……！」

デカルト「あなたに託します。それがソレスタルビーイングの意志でもありますから……。どうしますか？」

グラハム「……いいだろう。私はまだ生きる……。！未来を紡ぐ為に！」

デカルト「では、参りましょう」

私とデカルトは複数のE L Sに包まれた……。

―新垣 零だ。

複数のE L Sがクアンタに向かって、動き出した……!!?

刹那「ぐっ……！」

仕方なく、クアンタは数体のE L Sを攻撃する。

しかし、背後からE L Sが近づいている事に気がつかないでいた。

ニール「刹那、後ろだ！」

刹那「……！」

このままでは、刹那が取り込まれる……！

だが、次の瞬間、驚きの事が起きた。

突如、またもやE L Sの軍勢が現れ、クアンタを取り込もうとしていたE L Sの動き

を止めた。

九郎「現れたE L SがE L Sを止めた……!!？」

クラマ「どういう事だ、こりゃ……？」

すると、現れた無数のE L Sの中心から二機の機体が姿を現した。

一機はモビルアーマー…。それに、もう一機は…。ガンダムエクシアリペアIV!!?」
刹那「エクシア…。!!?」

イアン「何でエクシアリペアIVがこんな所に…。!!?」

パトリック「それにあのモビルアーマーは…。」

アンドレイ「ガデラーザ…。!!?」

デカルト「久しぶりですね、コーラサワー准尉」

パトリック「あー！お前、イノベイターの！」

デカルト「はい、デカルト・シャーマン大尉ですよ」

ロックオン「あんたはE.L.Sに取り込まれたんじゃないのか!!?」

デカルト「転移してきたんですよ、アル・ワースに…。」

セルゲイ「もう一機のエクシアには誰が…。?」

グラハム「よもや、私がガンダムに乗る日が来るとは…。!」

え、その声…。

零「ま、まさか…。!」

アーニー「グラハム少佐…。!!?」

グラハム「その通りだ、零、ベルジユ少尉」

零「良かった…。良かったです…。!」

グラハム「心配をかけた様だな、すまなかった」

刹那「グラハム、エクシアに乗ってくれたのか」

グラハム「違うな、刹那。これはエクシアではない……。グラハムガンダムだっ！」

刹那「え……」

グラハム「グラハムガンダムだっ！」

刹那「それはエクシアなのだが……」

グラハム「グラハムガンダムなのだよ、少年！」

刹那「俺のエクシアが……」

グラハム「不満かな、刹那？」

刹那「もういい。俺がお前に託したのだからな」

グラハム「ふっ、そうか。ならば、刹那……。君の力を見せてくれ」

刹那「……了解！クアンタムシステムを起動させる……！クアンタムバースト！」

クアンタムがクアンタムバーストを発動させると敵対していたELSとバジユラの動きが止まり、援護に来てくれたELSと共に飛び去ってしまう……。

ランカ「あ……」

シエリル「洗脳から解き放たれた様ね」

レナ「良かった……」

舞人「わかってくれた様だな！」

ミハエル「ば、バカな……！エンブリヲさんの洗脳から逃れるなんて……！」

グラハム「君には借りもある……此処で返させてもらおう！」

刹那「手伝うぞ、グラハム」

グラハム「感謝する……刹那！」

エクシアリペアIVとクアンタはサウダーデ・オブ・サンデイに攻撃を仕掛けた……

グラハム「行くぞ、グラハムガンダム……！」

刹那「俺達の連携で奴を止める……！」

グラハム「その案……乗ったぞ、刹那！」

エクシアリペアIVはGNベイオネット・ライフルモード、クアンタはGNソードV・

ライフルモードを連射して、サウダーデ・オブ・サンデイに当てる。

刹那「まだまだ……！」

クアンタはGNソードビットで攻撃して、さらにGNビットをトンファアのように使

い、斬り刻む。

グラハム「私を忘れてもらっては困るな！」

エクシアリペアIVは二本のGNバトルブレイド・ソードで斬り裂いた。

グラハム「私達の奥義……受けてもらおう！」

刹那「トランザム…！」

二機はトランザムを発動させ、それぞれの攻撃でサウダーデ・オブ・サンデイを攻撃する。

刹那&グラハム「うおおおっ!!?」

最後にGNタチとGNバスターソードでサウダーデ・オブ・サンデイを大きく斬り裂いた…。

ミハエル「ば、バカな…?!?」

エクシアリペアIVとクアンタのコンビネーションにサウダーデ・オブ・サンデイは吹き飛ばされた…。

フアサリナ「ミハエル君！」

ミハエル「だ、大丈夫です、フアサリナさん…。まだやれます！」

フアサリナ「何としてでもあなた方を通すわけにはいきません…！」

デカルト「ならば、強行突破をするまでだ！」

刹那「まだやれるな、グラハム？」

グラハム「当然だ！行くぞ、グラハムガンダム！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(さっきの気を失っていた時の記憶と今までのアマリ達の反応……。今の俺に、何が起きているんだ……。?)」

〈戦闘会話 アーニーVS初戦闘〉

アーニー「行くぞ、サヤ！此処から反撃だ！」

サヤ「良かったですね、アーニー……。わかりました、全力で参りましょう！」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「俺が誰かにエクシアを託す事になるとはな……。エクシア、おかしな名前をつける奴だが、グラハムと共に戦ってくれ！」

〈戦闘会話 グラハムVS初戦闘〉

グラハム「さあ、我々の初陣と行こうではないか、グラハムガンダム！此処から我々で未来を切り開くぞ！」

〈戦闘会話 デカルトVS初戦闘〉

デカルト「平和の為に戦うか……。かつての俺ではそんな事は考えられないな。だが、再び、戦場にたつた今……。俺も平和の為に戦おう！」

〈戦闘会話 零VSミハエル〉

零「悪いが、此処は突破させてもらうぞ！」

ミハエル「今度は負けない……。倒させてもらうぞ、新垣 零！」

〈戦闘会話 ヴァンVSミハエル〉

ヴァン「あのELSとかを操っていると知らねえが、やっぱりてめえ等のやり方は気に入らねえな！」

ミハエル「貴様に気に入られようとは思わない……。！ヴァン、此処で貴様を……。！」

ヴァン「やってみやがれ、バカ兄貴！変わりに返り討ちにしてやる！」

ダン・オブ・サーズデイ

〈戦闘会話 刹那VSミハエル〉

ミハエル「貴様のその機体は同志の計画の妨げとなる……！」

刹那「貴様達の歪んだ計画はヴァン達から聞いた……その計画は俺が破壊する！」

ミハエル「その様な事はさせない！」

〈戦闘会話 グラハムVSミハエル〉

ミハエル「グラハム・エーカー……。ただのパイロットと侮っていたが、お前の存在は危険だ……！」

グラハム「私を侮っていた事は許そう……。だが私はもうただのパイロットではない……！」

ミハエル「では、何だと言うんだ……？」

グラハム「ガンダムのパイロットだ！それは忘れないでもらおう！」

〈戦闘会話 デカルトVSミハエル〉

ミハエル「な、何と言う大きさだ……？？」

デカルト「中々の機体スピードだが、ガデラーザの敵ではない！一瞬で粉々にしてや

る！」

ダン・オブ・サーズデイの攻撃でサウダーデ・オブ・サンデイを斬り裂いた。

ミハエル「くっ……！サウダーデの限界がきたか……！」

メリツサ「ミハエル、あなたも一緒に……！」

ミハエル「ごめん、メリツサ……。私は同志を裏切る事は出来ないんだ。だから、何度

でもお前達と戦う……！」

そう言い残し、サウダーデ・オブ・サンデイは撤退した……。

ウエンデイ「兄さん……」

カメオ「クエ……」

メリツサ「ウエンデイ、大丈夫……？」

ウエンデイ「うん……！心配してくれて、ありがとう、メリツサ」

〈戦闘会話 零VSファサリナ〉

ファサリナ「あなたは少し、往生際が悪すぎです……！」

零 「珍しく怒ってんじゃねえか……。それがあんたの本性ってわけか？」
フアサリナ 「同志の為にもあなたを痛めつけて、連れて行きます！」
零 「何度ボコボコにされても、俺はお前達の元へはいかねえよ！」

〈戦闘会話　ヴァンVSフアサリナ〉

ヴァン 「この先にかぎ爪がいるんならためえ等に構っている時間はねえ！」
フアサリナ 「そんな事はさせません！あなた達を此処で止めてみせます！」
ヴァン 「少なくとも俺を止められると思うな！」

〈戦闘会話　刹那VSフアサリナ〉

フアサリナ 「美しき光ですが、今は忌まわしいものです！」
刹那 「多くの者を迷わせるその力……。貴様は危険だ……。！」
フアサリナ 「ふふふっ……。！ならば、あなたも共に参りませんか？」
刹那 「悪いが……。俺には大切な存在がいる」
フアサリナ 「ほう、それは……。？」
刹那 「……。ガンダムだ」
フアサリナ 「え……。それはそのヨロイの名前では……。」

刹那「冗談だ。(何故… マリナとフェルトの顔が頭によぎる…?)」

〈戦闘会話 グラハムVSファサリナ〉

グラハム「君がミハエルという青年に向ける感情… まさしく愛だな！」

ファサリナ「あら、おわかりになりました？ そうです、私はミハエル君の事を愛しています」

グラハム「では、君達が同志と呼ばれる男に向けている感情は何だ？」

ファサリナ「…」

グラハム「それを機体を通じて教えてやろう！」

〈戦闘会話 デカルトVSファサリナ〉

ファサリナ「大きいにお早いですね…」

デカルト「何せ、イノベーターであるこの俺が載っているのだからな」

ファサリナ「気に入りました、私達の元へ来ませんか？」

デカルト「悪いが、悪党に手を貸す事は死んでもごめんなのでな… 他を当たつてくれ！」

ファサリナ「… 残念です」

エクシアリペアⅠⅤのグラハム・ガンダム・スペシャルを受け、ダリアは大きく吹き飛ばされる。

ファサリナ「っ……！これ以上は……！ですが、皇宮にはエンブリヲさんがいます。そう簡単に行くと思わないでください」

そう言い残し、ダリアは撤退した……。

プリシラ「ベーっだ！そんな事言われたくないわよ！」

ガドヴェド「だが、ファサリナの言葉も一理ある……油断はしない方がいい」
全ての敵を倒した俺達……。

トオル「厳しい戦いでしたが、何とかかなりましたね」

マサオ「グラハムさん達が助けてくれたおかげだよ！」

ボーちゃん「ありがとう」

グラハム「いいや、私一人の力ではないさ」

アンドレイ「シャーマン大尉も協力感謝する」

デカルト「俺はなすべき事を行なったまでだ」

倉光「よし、みんな戻って来てくれ。次こそはミスルギとの最終決戦だ！」

倉光艦長の言葉に返事を返した俺達はそれぞれの艦へと戻り、ハンマーヘッドの格納庫に集まった。

ちなみにガデラーザはあまりの大きさに艦内に入る事が出来ないのでマクロス・クオーターの下部に係留された。

アニュー「お帰りなさい、グラハム少佐」

グラハム「ただいまと言わせてもらおう。それから心配をかけてすまなかったな」

零「謝るのは俺の方です……。俺があの時……」

グラハム「零、過ぎた事だ。気にするな」

零「グラハムさん……」

グラハム「過去の事を気にし続けるよりもその失態を今後を活かせばいい」

零「……はい！」

パトリック「それにしても、グラハム。お前がガンダムに乗るなんてな」

グラハム「私自身も驚いている」

イアン「所で何処でエクシアリペアIVを見つけたんだ？」

グラハム「花畑のような空間でシャーマン大尉やELS達から託されたんだ」

テイエリア「ELSから……？」

アレルヤ「という事は…… ELSが持ち去ったという事ね」

セルゲイ「その事について、何か知らないか、シャーマン大尉？」

デカルト「E L S 達は転移してしまった仲間をエンブリヲの支配から解放するために力を貸してくれたんだ」

刹那「そうか：。」

デカルト「今なら、お前がE L S と対話を成し遂げようとしていた理由がわかるぞ、刹那」

刹那「ふつ、俺達は同じイノベーターだからな」

デカルト「これからよろしく頼む、先輩」

刹那「その呼び方はやめてくれ」

パトリック「後、気になったんだけどよ：。：。グラハム、お前の顔と髪：。」

グラハム「：。ああ。私はE L S 同化したんだ：。：。いや、気がつけばしていたと言った方が正しいな」

マリー「〇〇」「大丈夫何ですか？」

グラハム「大丈夫でなければ私はここにはいないさ」

刹那「お前自身が：。：。E L S を受け入れたという証拠なのかもな」

デカルト「やはり、先輩。俺と同じ事を言ってくれるな」

刹那「先輩はやめろ」

グラハム「これも全て、君のおかげだ、刹那」

刹那「俺は特に何もしていない。変わろうとしたのはお前の意志だ」

グラハム「そう言ってもらえると嬉しい気持ちになる。そういえば、シャーマン大尉にとつてイノベーターの先輩だとしたら、私からしたらガンダム先輩か？」

刹那「やめろと言っている」

刹那、嬉しそうだな……。

ヒミコ「今回は零ニちゃんも大活躍だったのだ！」

え……。

カレン「ええ、いつも見せない零の怒鳴り声に一瞬に冷静になったわ」

スザク「君の一喝がなければ僕達は全滅していたのかもしれない……。ありがとう、零」

真上「フン、俺達に喧嘩を売った事は今回は水に流してやる」

グランデ「だが、次はねえぞく？」

零「あ、は、はい。わかりました！」

……何でだ？言っていないはずなのに言った記憶しか頭にない……。

アスナ「……」

俺の今の状態、オニキス、オニキスの首領、そして、あのマリアという女の人……。わ

からない事だらけだ……。

このままじゃあ、何か……俺が俺で無くなる……そんな気がする……。

……って、ダメだダメだ！もうすぐミスルギなんだ！気持ち切り替えないとな！俺達はそれぞれの準備を始めた……。

第53話 決戦、ミスルギ王国

「エンブリヲだ。」

私はミスルギ皇国内にいた。

そう言えば、私の一人が第二次防衛ラインへ向かったはずだが……。まあ、今はそのような事はどうでもいい、変わりならごまんといる。

エンブリヲ「……間も無く、このミスルギ王国にエクスクロスがやってくる」

サリア「……」

クリス「……」

エルシャ「……」

エンブリヲ「君達、ダイヤモンドローズ騎士団の使命はわかっているね？」

サリア「心得ています」

エルシャ「私達の役目……それは、エンブリヲさんをお守りする事です」

エンブリヲ「ありがとう、エルシャ。君の愛する子供達に未来を」

クリス「私達の役目……それは、エンブリヲ君の敵のエクスクロスを叩き潰す事です」

エンブリヲ「ありがとう、クリス。君は私の大切な友達だ」

サリア「私達の役目……。それは、エンブリヲ様に従わないアンジュに罰を与える事です」

エンブリヲ「ありがとう、サリア。ダイヤモンドローズ騎士団は君に任せよう」

ターニヤ「エンブリヲ様……。私達の生命も未来も……」

イルマ「すべてあなたに捧げます」

エンブリヲ「ありがとう、ターニヤ、イルマ……。信じているよ」

サリア「これよりダイヤモンドローズ騎士団は出撃の準備に入ります。私達の全身全霊を懸けて、任務を遂行する事を誓います」

エンブリヲ「サリア、クリス、エルシャ、ターニヤ、イルマ……。期待しているよ」

サリア「では、失礼します」

サリア達は部屋を後にした……

エンブリヲ「可愛い子達だ」

クロエ「……！」

東「……」

エンブリヲ「さて、と……。アルミリア、ラクス、カガリ、クーデリアは既に運命の場所へお連れした……。後は君達だ、東、クロエ」

東「お前のくだらない計画なんて…… いったんや箒ちゃん、ちーちゃんが止める！」
エンブリヲ「箒ノ之 箒…… 彼女も我が妻に相応しい存在だ……。今日、彼女もお連れするでしょう。その為にも君達にはまだ残ってもらおう」

クロエ「織斑 一夏さん達を…… 舐めすぎではないのですか？」

エンブリヲ「確かにエクスクロスは強敵揃いだ……。だが、神である私には敵うまい」

東「ふくん、お前が神ならこの国も底が知れるね」

エンブリヲ「そういう所も素敵だよ、東」

東「……！」

すると、マリアンヌとアーサーが現れた。

マリアンヌ「大した手並みね、エンブリヲ」

アーサー「女子の扱いが得意とみえるぞ」

エンブリヲ「これはこれは、マダム・ブリタニアとキング・アーサー……。おいでになるならば、一言欲しかったですな」

マリアンヌ「失礼……。肉体という縛りが無いせいでちよつと気軽すぎたわね」

かぎ爪の男「いやいや、興味深いですね」

エンブリヲ「それでも寝室への立ち入りはご遠慮願いましょう」

アーサー「そなたでも女子との戯れを見られるのが恥ずかしいのか？」

エンブリヲ「ご冗談を、キング。それよりもよろしければ、マダムもいかがかな？めくるめく快楽をご用意いたしますが」

マリアンヌ「遠慮しておくわ。私は夫がある身でもあるし」

エンブリヲ「火遊びはお嫌いとは……」

アーサー「そなたこそ、遊びは程々にしていた方がいい。もうすぐエクスクロスが来るのだからな」

エンブリヲ「ご安心を。彼等との戦いなど、私にとつてはそれこそ遊びの様なものですから」

マリアンヌ「油断は禁物よ。彼等の中にはルルーシユもいるわ」

エンブリヲ「マダムのご子息ですね」

マリアンヌ「奇跡はきまぐれに起きるもの……。それに魅入られれば、万一の事も……」
アーサー「それに我等西の星を震撼させた破壊王、オダ・ノブナガや救世王、アケチ・ミツヒデもおる……。彼等を敵に回す事の危険性を持つていた方がいい」

エンブリヲ「マダムとキングの忠告は、ごもつともです。では私も、花嫁とプリンセスを迎えるための準備をしましょう」

かぎ爪の男「おっと、では私もご覧させていただきます」

エンブリヲ「どうぞ」

マリアンヌ「では、お手並みを拝見させてもらうわね」

エンブリヲ「全ては……」

アーサー「新しき世の為に……」

―新垣 零だ。

そろそろミスルギに着くな……。

俺達はN―ノーチラス号の格納庫に集まっていた。

アンジュ「……」

モモカ「お気を付けて、アンジュリーゼ様」

アンジュ「ありがとう、モモカ。でも今回ばかりは、最初から全力で行くわ。何しろ、この戦い……やる事が多すぎるから」

タスク「やる事って……？」

アンジュ「囚われている人達を助けて、サリア達の目を覚まさせて、見せかけの平和の中にいる市民達に現実を突きつけて……決着を付けるべき奴等と戦って、全ての元凶であるエンブリヲを叩く……！この全部をやってみせるわ」

ヒルダ「戦うのはあんただけじゃないよ、アンジユ」

ロザリー「そうだぜ！少なくともクリスの奴だけはあたし達がぶん殴る！」

零「これまでの借りを返さなきゃならねえしな……。それにあの時のエンブリヲの事も聞きたいしな。…」

ワタル「僕もやるよ、アンジユさん」

アンジユ「ワタル……」

ワタル「僕も……。友達虎王と戦つて、悲しい想いをした……。だから、アルゼナルのみんながサリアさん、クリスさん、エルシャさんと戦わないで済むように僕が頑張るか」

メル「今、とても格好いいですよ、ワタル君！」

ヒルダ「頼りにさせてもらうよ、救世主」

一夏「ヒルダ、ロザリー！クリスを取り戻すの……。俺にも手伝わせてくれ！」

ヒルダ「一夏……」

一夏「クリスが一人で苦しんでいるんなら……。俺が支えてやりたい……。それが、友達だから！」

ロザリー「やっぱり、お前は格好いいぜ！」

ヒルダ「みんなが惚れるわけだね」

一夏「ほ、惚れるって……誰にだ？」

ロザリー「ははっ！一夏らしいぜ！」

みさえ「ねえ、ヴィヴィアンちゃん」

ヴィヴィアン「どうしたの、みさえ？」

みさえ「エルシャちゃんを救い出すの手伝ってくれる？」

ヴィヴィアン「あつたり前だよー！」

ひろし「勿論、俺達もだぜ！」

しんのすけ「オラ達、サリアお姉さん達も母ちゃんもお助けするゾ！」

みさえ「あなた、しんちゃん……」

トオル「アンジュさん、僕も……サリアさんの目を覚まさせる為に頑張ります！」

アンジュ「ええ、頑張りますよう、トオル」

ネネ「勿論、私達もやるわよ！」

マサオ「怖いけど……サリアさん達を助けないといけないから……」

ボーちゃん「僕達、春日部防衛隊だから……」

トオル「ありがとう、みんな」

ダークケロロ「皆、やる気は万端なようだな」

ケロロ「後は結果との勝負でありますな！」

サラマンディーネ「エクスクロスの突撃に合わせて、ドラゴン達も周辺から攻撃を仕掛けます。これで周辺に展開していたミスルギ軍を抑える事も出来るでしょうが、戦いは時間との勝負になります」

シヴァヴァ「燃えてきたぜ！」

ドルル「戦闘準備完了」

クルル「クーククツ！敵の本陣だからなあ。長期戦はこつちが不利になるだけだぜ」

サラマンディーネ「アンジユ。。。私宛の補給物資の中で、あなたのヴィルキスでも使える装備を譲ります」

アンジユ「気前いいわね、サラ子」

サラマンディーネ「切り込み隊長となるあなたの働きに期待しているからです。ミスルギを攻略して、アウラを救い出す。。。この戦いに懸けるわたくし達の想いを感じてください」

アンジユ「わかった。。。それはわたしも変わらないからね」

サラマンディーネ「なお、あなたが知りたがっていた、皇宮内防衛隊の配備状況も調べがついています」

アンジユ「どうやって、そんな情報を手に入れたの？」

サラマンディーネ「ミスルギ皇国、近衛長官のレイザ・ランドック。。。彼女は竜の民な

のです」

アンジュ「要するに……スパイって事？」

サラマンディーネ「その通りです。今日という日の為にミスルギに潜入し、皇族に近い位置にいたのです」

アンジュ「……今さら、その事を責めるつもりはないわ。でも、これで皇帝ジュリオのいる位置もはつきりするわね」

三日月「ちようどいいや、俺……。あいつの事嫌いだから」

ガエリオ「サラマンディーネ……。アルミリア達の居場所は突き止められないのか？」
サラマンディーネ「残念ですが、それは……」

マクギリス「そうか……」

モモカ「アンジュリーゼ様……」

アンジュ「お父様とお母様の生命を奪い、私を晒し者にしようとした借りはこの手で返すつもりよ」

ひまわり「あうう……」

ナオミ「大丈夫だよ、ひまちゃん……。大丈夫だから……。(エンブリヲ……)」

ヴァン「……」

ガドヴェド「随分、静かではないか、ヴァンよ」

ヴァン「ようやくこの日が来たんだ…。俺が、あの男を殺す日が…。エレナの仇を取る日が！」

ウー「奴に天罰を下す…。それだけだ」

ジル「…」

ネモ船長「見ているだけでは、何も変わらないな」

ジル「今の私に出来る事などない…」

ネモ船長「ノーマを解放する…。世界を変える…。それは、君が…。ではなく、多くの人間の力を結集してやる事だろう。君は、君にしか出来ない事に目を向けるべきだな」

ジル「私にしか…。出来ない事…」

行くぜ…。これで終わりにさせる！

第53話 決戦、ミスルギ皇国

ージュリオだ。

私達は既にエクスクロスを迎え撃つ配備を終えた。

デキム「壯観ですな、ジュリオ陛下」

ジュリオ「ふむ……。第一次と第二次の防衛ラインは突破されたが、ミスルギ本国の戦力は温存されている。エクスクロスが来るのなら、民達の目の前で叩き潰してやるまでだ。（それにあわよくばユインシエル陛下を我が手に……！）」

デキム「我がマリーメイア軍も総力を挙げて、帝都の防衛に当たらせていただきます」
ジュリオ「頼むぞ、デキム公。リギルド・センチユリーのまとめ役をやっているクンパ・ルシータはどうも信用ならんからな」

シヨット「始まるようだね」

マリアンヌ「フフ……。せっかくだから、特等席で見物させてもらいましょう」

アーサー「破壊王に救世王、それにアレクサンダーもいる……。実物だな」

かぎ爪の男「久しぶりにガドヴェド君やウー君、カロツサ君にメリツサ君の顔も見れますしね」

シヨット「バイストン・ウエルへ還るはずだった聖戦士達も来る……。面白い事になりそうだ」

「どうやら来たようだな。」

―新垣 零だ。

ミスルギ皇国に着いた俺達はすぐさま出撃した。

エレクトラ「機動部隊各機、展開しました」

サラマンディーネ「湾外のドラゴン達も交戦状態に入りました」

九郎「よっしやあ！俺達の手でエンブリヲと決着をつけるぞ！」

鉄也「その為には、まず奴の親衛隊を突破する…！」

アスラン「そして、カガリ達を助け出す！」

甲児「でも、サリアとクリスは出ていないみたいだぜ…！」

アスナ「どういう事なの、エルシャ!?!？」

エルシャ「…！」

ターニヤ「エルシャ…！」

イルマ「何をするつもりなの!?!？」

エルシャ「私が先鋒を務めるわ。ターニヤちゃんとイルマちゃんは後方から指揮をお

願い」

ヒルダ「上等だぜ、エルシャ！まずお前が相手か！」

ロザリー「要するにお前を倒さなきゃ、クリスもサリアも出てこないってわけかよ！」

みさえ「エルシャちゃん……」

ヴィヴィアン「エルシャ……。どうしても戦うのか……?」

エルシャ「……ヴィヴィちゃん、みさえさん、みんな……。これが私の選んだ道なの」

シーブツク「エルシャさん!自分をごまかさないでください!」

エルシャ「……!」

セシリー「あなたは迷いを抱えている。それを振り払うために前に出て来た……」

ラウラ「そんな苦しい想いをして戦うのなら、一層の事やめてしまえばいい!」

マサオ「そうだよ!僕達、エルシャさんと戦いたくないよ!」

ヒミコ「エルシャ!またあたしにパイを作ってよ!」

エルシャ「ごめんね、マサオ君、ヒミコちゃん……」

アンジュ「いいさ、エルシャ!あなたが踏ん切りがつかないなら、私達がつけてあげ

る!そのラグナメイルを叩き落としてね!」

C・C「過激なやり方だが、それが最もすつきりするだろう」

みさえ「私も覚悟を決めたわ……。!あなたを……。止める!これ以上、子供達を悲しま

せないためにも!」

ルルーシュ「各機へ!敵がどれだけの戦力を保有しているか、定かでない以上、長期

戦は避けたい!作戦時間は7分間!その間にエンブリヲを倒せないようなら、後退する

しかない！」

スザク「7分間……！」

カレン「それが私達に与えられた時間……！」

ヴァン「とつととあいつらをぶつ潰して、あの皇宮にいるかぎ爪をぶつ殺す！」

三日月「そして、クーデリア達を助ける……！」

アマリ「皆さん、頑張りましょう！ここで戦いを終わらせるためにも！」

零「此処からは本当の勝負だ……。気を抜かないでくださいよ！」

シヨウ「前線の部隊を叩けば、きつとエンブリヲやかぎ爪の男という人物も出て来る……！」

マサキ「だったら、一つずつハードルを越えていくだけだ！」

アンジュ「行くよ、エルシャ！あなたの迷いを断ち切って、エンブリヲを引きずり出す！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「あの時のエンブリヲの事は後回しだ……！」ミスルギ！今までのツケを倍にして返してやるぜ、覚悟しやがれ！」

〈戦闘会話 キラVS初戦闘〉

キラ「(こんな戦い… もう終わらせる… !その為にもラクス、君を必ず助ける… !)」

〈戦闘会話 アスランVS初戦闘〉

アスラン「(カガリ、待っていてくれ… !すぐに君の元へ向かう… !)」

〈戦闘会話 三日月VS初戦闘〉

三日月「俺の邪魔をするな… !俺は早くクーデリアを救わないといけないんだ… !」

〈戦闘会話 マクギリスorガエリオVS初戦闘〉

マクギリス「ガエリオ、此処を突破して、アルミリアを迎えに行くぞ！」

ガエリオ「ああ!ついでに俺の妹に手を出したエンブリヲも一発ぶん殴ってやる！」

〈戦闘会話 一夏or箒or千冬VS初戦闘〉

千冬「一夏、箒……。気を抜くなよ！」

一夏「ああ、箒！必ず、東さんを救い出そうぜ！」

箒「あ、ああ……。！（私情は後回しだ……。！今は姉さん達を助け出す事を考える……。！）」

〈戦闘会話　アルトVS初戦闘〉

アルト「(おそらくエンブリヲの野郎はまだ、バジユラを操っている……。だが、何故此処に出て来ていないんだ……。?)」

タスクのアーキバスの攻撃でエイレーネにダメージを与えた。

イルマ「申し訳ありません、エンブリヲ様！後退します！」

エイレーネは撤退した……。

ヒルダ「イルマ……。お前……。完全にエンブリヲの虜になっちゃったのか……」

ロザリー「あたし……。あいつの描く絵、好きだったのに……。もう見られないのかよ……」

焰龍號の攻撃でビクトリアにダメージを与えた。

ターニャ「エンブリヲ様の与えてくれた機体に傷をつけてしまった…！これは失態だ！」

ビクトリアは撤退した…。

ヴィヴィアン「ターニャの作るご飯… エルシャに負けないぐらいに美味しかったのに…」

ナオミ「… エンブリヲが本当にターニャを…」

〈戦闘会話　アンジュ or ヒルダ or ロザリー or ヴィヴィアン or ナオミ VS エルシャ〉

エルシャ「ごめんね、みんな…。これが私の選んだ戦いだから」

アンジュ「謝るぐらいなら、最初から戦うな！」

ヒルダ「アンジュの言う通りだよ、エルシャ！こんな戦い、やめちまえ！」

ロザリー「子供達の未来が欲しいんなら、あたし達全員で頑張りやいい！」

エルシャ「でも…」

ヴィヴィアン「エルシャ……。あたし、エルシャと戦いたくないよ……」
エルシャ「ヴィヴィちゃん……」

ナオミ「そうだよ、みんな……。エルシャとは戦いたくないんだよ！」

エルシャ「ごめんね……！」

アンジユ「だから、謝るぐらいなら戦うな!!？」

〈戦闘会話　しんのすけVSエルシャ〉

しんのすけ「止めるんだゾ、エルシャお姉さん！」

エルシャ「ごめんなさい、止まるわけにはいかないの……」

みさえ「止まらないのなら……。私が止めてあげるわ、エルシャちゃん！」

エルシャ「みさえさん……。あなたはいい母親です」

みさえ「あなたも私に負けない程にいいお母さんになれるわよ、きつと！その為にもあなたを止める！」

レイザーとカンタム・ロボの連携攻撃でレイジアを追い詰めた。

エルシャ「負けた……」

アイーダ「そうです、エルシャさん！大人しく投降してください！」

エルシャ「…」

みさえ「エルシャちゃん…」

ひろし「まだ迷っているんだとしても、これ以上、戦うのをやめてくれ！」

エルシャ「それでも私は… エンブリヲさんを信じるしかないんです」

万丈「子供達の未来のためにか？」

エルシャ「ノーマがノーマでいる限り、アルゼナルの幼年部の子供達は戦いの宿命から逃れられない…。それを変えられるのはエンブリヲさんしかいないから…」

アンジユ「違うよ、エルシャ！それは…」

シモン「待て、アンジユ！何か、来るぞ！」

邪鬼丸にBD連合のロボット…

!??

ワタル「虎王！」

虎王「見つけたぞ、ワタル！俺様と勝負だ！」

ワタル「待ってくれ、虎王！今、僕達はエンブリヲと戦っているんだ！」

虎王「そんな事は知るもんか！俺様はお前と決着をつける為に此処に来たんだ！」

刹那「ドアクダーの息子、虎王…」

青葉「くそっ！友達なのに二人は戦うしかないのかよ！」

アスナ「戦いさえなければ、二人は… ずっと友達でいられるのに…」

ワタル「それでもやるよ……。だって、僕は救世主で、虎王の友達だから！」
エルシャ「ワタル君……」

グランデイス「わかるかい、エルシャ？戦いがなくなならない限り、こんな事がいつまでも続くんだよ」

エイサツプ「そして、あのエンブリヲという男こそ戦いの元凶なんです」

アンジュ「あいつを倒さない限り、戦いは続く。そして、戦いが続く限り、悲しみは終わらないのよ」

みさえ「戻って来て、エルシャちゃん！」

エルシャ「私は……」

レイジアが移動した……？

エルシャ「ごめんなさい……」

そのままレイジアは何処かへ飛んでいく。

ヴィヴィアン「エルシャ！」

サラマンディーネ「私達の所に帰るでもなく、エンブリヲの下へ戻るでもなく、行つてしまった……」

アンジュ「エルシャ……。あなたは……。どうするつもりなの……？」

今度はテオドーラが現れたか……！

クリス「エルシャ……！持ち場を放棄するなんて！」

ヒルダ「出て来たな、クリス！」

ロザリー「待ってたぜ！今度こそ、ぶん殴ってでもお前の目を覚まさせてやる！」

クリス「うるさい！エンブリヲ君にテオドーラをもらった私があんた達なんかにも負けるもんか！」

葵「随分やる気ね、クリス！」

ヒルダ「上等だよ、クリス！その鼻つ柱をへし折って、泣かせてやるよ！」

一夏「やめろ、クリス！ヒルダもロザリーも！」

ワタル「それじゃあ、何の解決にもならないよ！」

虎王「余所見してんな、ワタル！お前の相手は、この俺様だ！」

ヒミコ「トラちゃん……！本気でやる気か？！」

虎王「俺様は……偉大なる父上の息子、魔界王子、虎王様だ！俺様は……誰にも負けない！」

ワタル「だったら……来い、虎王！僕が相手になってやる！友達の僕が、お前を止めてる！」

アンジュ「あいつの相手は任せるよ、ワタル！クリスと周りの奴等は私達が引き受ける！」

シバラク「行け、ワタル！ 決着はお主自身の手でつけろ！」
ワタル「でも、それは虎王を倒す事じゃない……！ 僕は…… もう一度、虎王と友達になつてみせる!!？」

戦闘再開と行くぞ！

〈戦闘会話　　アンジュ or ヒルダ or ロザリー or ヴィヴィアン or ナオミ VS クリス〉

クリス「覚悟してもらおうよ、あんた達！」

ヒルダ「何が覚悟だ！ 返り討ちにしてやるよ、クリス！」

ロザリー「そして、教えてやる！ こんな戦い、やる意味ないって！」

クリス「うるさい！ 私のやる事の邪魔はさせない！」

ヴィヴィアン「げげ……！ クリスって逆ギレすると強いタイプだ！」

ナオミ「それでも逃げるわけにはいかないよ！」

アンジュ「こうなったら、力づくでやるしかない！ 少し痛い目に遭ってもらおうよ、クリス！」

〈戦闘会話　　一夏 VS クリス〉

クリス「一夏君……！挑んで来るのなら……！」

一夏「もうやめろ、クリス！俺達は友達で仲間だろ！！？」

クリス「そう言つて一夏君だつて、私の事を能無しと思つていてるんでしょ！！？」

一夏「能無しつて……そんなわけないだろ！」

クリス「もういいよ！私の友達はエンブリヲ君、ただ一人だから！」

一夏「何でなんだよ……クリス……！」

ヒルダ機、ロザリー機、白式の連携攻撃でテオドーラを吹き飛ばした。

クリス「エンブリヲ君が見ているんだ！負けられない！」

装甲が回復している……！！？

ヴィヴィアン「すごい根性！」

アーニー「よくわからないけど、何かの力が、あの機体に流れ込んでいる……！」

サラマンディーネ「恐らくはエンブリヲの仕業です！ラグナメイルの次元制御技術を

使用していると思われます！」

ヒルダ「要するにクリスは不死身つてわけかよ！」

サラマンディーネ「完全に機体を消滅させれば、別でしょうが……」

ロザリー「ダメだ！そんな事したら、クリスが死んじゃう！」

ノブナガ「彼女と戦うのは得策ではない！ここはまず虎王を無力化するぞ！」
アンジュ「ワタル！」

ワタル「わかった！出来るだけ早く虎王を止めてみせる！」

クリス「見たでしょ！これが私とエンブリヲ君の友情の力よ！」

虎王「あんなものが友達の証であるもんか……。友達つてのは、もつと楽しくてもつとワクワクするような……。くそつ……。！俺様はいつたい何を言っているんだ……。！」

龍王丸の鳳龍剣で邪鬼丸にダメージを与えた。

虎王「くそつ！どうしてだ！？どうしてワタルに勝てないんだ！」

舞人「教えてやる、虎王！それは、心の何処かに迷いを抱えているからだ！」

虎王「迷いだと！？」

一夏「そうだ！お前は心の中ではワタルと友達に戻りたいって思ってるんだ！」

舞人「そのお前が、お前を止める為に戦うワタルに勝てるはずがあるものか！」

虎王「旋風寺 舞人と織斑 一夏！言わせておけば！！？」

ワタル「何をする気だ、虎王！」

虎王「こうなったら、メチャクチャやってやる！この街を焼き払って……。！」

？「やめておけ」

? 2 「みつともないぞ、虎王」

轟龍と黒騎士が来た……!!?

舞人「エースのジョー!」

一夏「エム……!」

虎王「ジョー! マドカ! BD連合を追放されたお前達がここに何をしに来た」

ジョー「そうだな……。取り敢えず、お前を止めてやる」

マドカ「私達でな」

虎王「何だと!!?」

ジョー「お前には旋風寺 舞人や織斑 一夏へメツセージを届けてもらった借りがあるからな」

マドカ「馬鹿な真似はやめろ、虎王。つまらない意地を張って、取り返しのつかない事をしようとしているお前を見てはいられない」

虎王「俺様の戦いを馬鹿にするのか!」

ジョー「そのつもりはない。迷っているのなら、答えが出るまでとことんやればいい。だが、お前は、まだ子供だ。取り返しのつかない事をして、一生を後悔と共に生きるには早過ぎる」

虎王「今度はガキ扱いか!」

マドカ「素直になれ、虎王。そうする事が許されるのは子供の特権というものだ」
ジョー「ドアクターの息子である事と友達……どちらが大事なのか、よく考えろ」

虎王「お、俺様は……！あああああつ!!？」
邪鬼丸は撤退した……。

ワタル「虎王！」

龍王丸「追つても無駄だ、ワタル。今は目の前の戦いに集中するんだ」

トツド「素直になれ……か。こいつは結構効く言葉だぜ」

バーン「全くだな」

鉄也「エースのジョー、エム……。虎王が去った今、お前達はどうするつもりだ？」

ジョー「さて……。どうしようかな」

舞人「ならば、ジョー……。俺達と一緒に来い。嫌とは言わせないぞ。前の戦いで負けたら俺に従うと約束させたはずだ」

ジョー「フ……。拒否権はないようだな。まあいい……。そろそろ野宿も厳しくなってきた。それにお前達と一緒にいければ、BD連合のパープルと接触するチャンスも生まれるだろうしな」

マドカ「……」

ジョー「お前は どうするんだ、マドカ？」

マドカ「私は・・・」

一夏「なら、エムも来いよ、俺達と一緒に！」

マドカ「誰がお前などと・・・！」

一夏「俺、決闘に勝つたはずなんだけどな」

マドカ「つく・・・仕方ない。私を暴走させたパールに借りを返さなければならな

い。・・・だが、勘違いするな！別にお前と共に戦うとかではないからな！」

一夏「何だつていいさ、よろしくな、エム！」

マドカ「マドカだ・・・」

一夏「え・・・」

マドカ「私の事はマドカと呼べ」

一夏「・・・おう！よろしくな、マドカ！」

マドカ「き、気安く呼ぶな！」

一夏「お前が呼べて言ったんだろ」

マドカ「フン・・・！」

おいおい、殺されるぞ、一夏・・・。

チャム「虎王にあんな事を言つてたのに自分達が一番素直じゃないっばい！」

シヨウ「やめろ、チャム！またヘソを曲げられたら面倒になる！」

舞人「言葉は要らない、二人共。お前達の力を貸してもらおうぞ」
ジョー「いいだろう、旋風寺 舞人。だが、忘れるなよ。この共闘は、あくまで一時的なものである事を」

舞人「わかっている！お前が望むのなら、元の世界に帰ってから相手をしてやる！」

甲児「収まる所に収まったようだな」

鉄也「宿命のライバルが手を組んだんだ。こいつは心強いぜ」

ボス「強敵と書いてともと読む……ってやつだな！」

マドカ「おい待て！私は織斑 一夏とは友でもなければ、ライバルなどでもない！」

海道「メンドくさい女だな……」

クリス「ああああああああっ!!？」

何だ突然!!？

ヒルダ「クリス!!？」

クリス「うざい！うるさい！何が友達だっ!!？」

アンジュ「ここにも素直になれない奴がいた！」

クリス「黙れ！私はロザリーもヒルダとあんた達と誰一人友達なんて思っちゃいない

！」

ヒミコ「あちしもか!!？」

クリス「え……あ……ヒミコは……あたしのあげた髪飾りを喜んでくれたから……」
うん……？

ネネ「私も違うの!?!?」

クリス「ネネは……リアルおままごとが楽しかったから……」

え、あれって楽しいか!?!?

さやか「私は!?!?」

クリス「さやかは……あたしの服を……選んでくれたから……」

お……？

簪「私はどうなの?」

クリス「簪は……あたしの趣味に興味を持ってくれたから……」

ほう……？

カレン「じゃあ、私はどうなのさ!?!?」

クリス「カレンは……あたしをからかった奴に怒ってくれたから……」

んお……？

ジャンヌ「それじゃあ、私は?」

クリス「ジャンヌは……訓練に付き合ってくれたから……」

ふむ……？

アイーダ「では、私は？」

クリス「アイーダは…… 為になる話を色々してくれたから……」

へえ……？

零「…… 何だよ。結局、みんなの事を友達だと思ってるじゃねえか」

クリス「でも、ロザリーとヒルダは違う！あいつ等はあたしを捨てようとしたんだ！」

ロザリー「誰もそんな事してねえだろうが！」

クリス「だって二人共、あたしよりもアンジュの方が好きで……」

ロザリー「また、ここでもイタ姫かよ！」

アンジュ「勝手に私を巻き込まないでよ！」

ヒルダ「クリス！友達への好きとアンジュへの好きは別なんだよ！」

ワタル「どういう事？」

千冬「零とアマリ…… 零とアンジュの様な感じだ」

え、何でアンジュの名前を……？

タスク「零、どういう事だい？」

零「は……？ちよ、何で俺を睨む……？？」

ワタル「結局、どういう事？」

カレン「そこは突っ込まないで！」

クリス「でも……でも!!？」

シン「結局……ヤキモチだったって事か？」

クリス「うるさい！あんた達にあたしの何がわかる!!？」

キラ「ダメだよ、シン！いくらその通りだからって、ストレートに言っちゃ！」

ハイネ「キラ！お前が一番余計な事を言っているじゃねえか！」

クリス「あああああああつ！みんな、嫌いだっ！」

ロザリー「クリス！」

ヒルダ「面倒な奴！」

ヒルダ機とロザリー機がクレオパトラに掴みかかった。

クリス「し、しまった……！」

ヒルダ「あたし達の勝ちだ、クリス！もう逃さないよ！」

クリス「変わらないね、そういうところ……！あたしの事なんて……弱くて使えないゴ

ミ人形くらいにしか思っていないんでしょう!!？」

ロザリー「待ってくれ、クリス！何で、あたし達が殺し合わなきやいけないんだよ!!

？」

クリス「あんた達は、いつもそう！あたしの気持ちなんて、お構いなしだ！7年前も、そうだった！」

ヒルダ「7年前…？」

クリス「やつぱり、覚えていないんだ！あの日、プレゼント交換でくれた髪留め…あたしは二つしぼりのおさげだったの！一つしかなかった！」

ロザリー「そう言えば、そんな事があつたような…」

クリス「ヒルダ！その時になんて言つたか、覚えてる!?？」

ヒルダ「え…」

クリス「二つしぼりの髪型は自分と被つてるから、おさげを一つにしろつて言つたのよ！あの髪型、気に入つてたのに！それからあたしは、ずっと髪を一つしぼりにしてきた！好きでも何でもないのに！」

ヒルダ「それが今更、何だつて…!?？」

クリス「それだけじゃない！ずっと…ずっと我慢してた…！何でも受け入れようとしてきた…！あんた達のがままも、自分の立ち位置も…！友達だと…思つてたから…。わかるわけないか、あたしの心なんて。人の気持ちをわからない女と…」

ヒルダ「…！」

クリス「何も考えてない馬鹿に」

ロザリー「あ…」

クリス「でも、エンブリヲ君は違う！エンブリヲ君は、あたしの友達になつてくれた

！そして、このテオドーラをくれたんだ！あたしを信頼して！」

ルルーシユ「友達か……」

クリス「何か文句あるの、男アンジユ!?？」

ルルーシユ「それは……」

一夏「待ってくれ、ルルーシユ……。此処からは俺が言う」

ルルーシユ「一夏……」

一夏「クリス……。今のお前の状況は絶体絶命のピンチだ。俺達に押されつつある……。だけど、お前の友達は何をしているんだ？」

クリス「！」

一夏「俺には……。あのエンブリヲがお前の友達だなんて思えない」

クリス「一夏君に……。一夏君に何がわかるの!?？ 沢山の友達に囲まれて……。信頼できる人がいっぱいいて……。！ISに乗ってみんなを守って……。強くて……。！私は無能で引つ込み思案で……。どうしようもない人間なの！」

一夏「甘ったれるなよ!!？」

クリス「……。！」

一夏「全世界でお前が一番、不幸な人間だと思うなよ！俺だって……。優秀すぎる姉を持つて……。比べられて……。辛かった事もある……。！」

千冬「一夏……」

一夏「千冬姉の弟だから出来て当たり前……。何でこんな事も出来ないんだって……！俺は俺で千冬姉は千冬姉だ！それなのに比べられた……！俺は……織斑 一夏として見て欲しかったのに……！」

箒「……」

一夏「でも、千冬姉はそんなどうしようもない俺を大切に思ってくれた……家族だと言ってくれた！俺の為に泣いてくれた、謝ってくれた！そんな、千冬姉に恩返しをした……そう思っていたのに……。千冬姉の大切な大会の時に俺は……捕まって、千冬姉は大会を棄権した……！」

千冬「第二回モンド・グロツソの一夏誘拐事件の時か……」

一夏「俺は……千冬姉にまた大きな迷惑をかけたんだ……！こんなどうしようもない俺のせいで千冬姉は優勝を逃したんだからな……！でも、千冬姉……そして、箒、弾、蘭、数馬、鈴は……俺が苦しんでいても友達だと言って守ってくれた……俺の居場所になつてくれた！自分達の立場が悪くなる状況でも俺を庇ってくれた！大切な友達なんだ！」

鈴「一夏……」

一夏「お前の中の友達つてのはどの様なものなんだ！？身体を張ってお前を止めようとしているロザリーとヒルダよりもお前がピンチなのに助けにも来ないエンブリヲの

方が友達だと思っっているのかよ！」

クリス「嘘……嘘だよ、エンブリヲ君……？？？また捨てられた……？？？また裏切られた……？！？」

ヒルダ「ザマあねえな、クリス！」

クリス「！」

ヒルダ「自分から友達だって名乗る奴が本物の友達なわけねえだろ！騙されやがって、バカが！」

クリス「あんた達が……あたしを見捨てたからでしょ！よってたかって、あたしの事をバカにして……！あたしはこんなにもつらくて、苦しんでいるのに……！どうしてわかってくれないのよ！」

テオドーラが暴れ出した……？！？」

ヒルダ「無茶するな、クリス！そんな事したら……！」

ロザリー「ダメだ！高度が維持できねえ！」

クリス「は、離せ！このままじゃ二人共落ちる！」

ロザリー「いいよ！一緒な死んでやる！あたしは、あんたがいなくちゃダメなんだ！」

クリス「ロザリー……！」

ロザリー「あたしは、あんたが好きなんだよ、クリス！あたし達だけじゃないか！あ

んたの胸のサイズも、弱い所もへそくりの隠し場所も全部知ってるのは！」

クリス「ロザ：：リー：：」

ロザリー「もう一回、信じてくれよ！もう一回、友達になつてくれよ、クリス！」
スザク「ダメだ！機体が落ちる！」

一夏「うおおおつ！！？」

白式が二機を抑えようと：：！

クリス「一夏君：：！」

ロザリー「バカか、お前！このままじゃお前も下敷きになるぞ！」

一夏「だからつて：：見捨てる事は出来ない！俺は：：みんなを守るつて：：決めたんだ！」

マドカ「織斑 一夏：：」

一夏「う、ウグググツ：：！」

クリス「もうやめて、一夏君！」

一夏「やめ、ない：：！俺は：：！」

ヒルダ「うおおおつ！！？」

今度はヒルダ機もカバーに入った：：

！！？

ロザリー「ナイス、ヒルダ！」

一夏「助かったよ、ヒルダ……」

ヒルダ「二機分の重量を受け止めたおかげでせっかくのアーキバスがおしやかになっちゃまったけどな……」

クリス「……」

ロザリー「ごめん……。ごめんな、クリス……！」

一夏「クリス……。これでもお前はエンブリヲの方が友達だつて言うのかよ！」
クリス「……。もういい。許さない……。新しい髪留め、買ってくれるまで……」

ロザリー「いい、一番いいのを買ってやる！」

クリス「ゲームする時……。ズルしない……？」

ロザリー「しない……！」

クリス「お風呂の一番……。譲ってくれる……？」

ロザリー「ああ！」

クリス「バカみたい……。決戦だつて言う時に……。何してるの、あたし達……」

ヒルダ「仲直り、だろ？」

ロザリー「あ！それ、あたしのセリフ!!？」

クリス「ロザリー!!？」

クリスがロザリーに抱きついた。

クリス「ごめん…ごめんね…」

ロザリー「あたしの方こそ、ごめん…」

何とかなったか…。

一夏「良かったな、二人共…」

千冬「(成長したな、お前は…)」

エレクトラ「クリスのラグナメイル、完全に停止しました！」

スメラギ「一夏、囚われている人達の救出にはあなたが行って！」

千冬「私も行こう！」

一夏「ああ！」

一夏と千冬さんは皇宮内に入った。

ー織斑 一夏だ！

入ったのはいいけど、何処に東さん達が…!??

クロエ「こちらです！」

千冬「貴様は…！」

ラウラに…似ている…？

東「いっくん、ちーちゃん！」

千冬「東！」

一夏「良かった、無事だったんですね！」

千冬「我々の仲間の知り合いがまだ囚われているはずだが、何処にいるかわかるか？」
東「いや、もう手遅れだよ……。私達、以外みんな連れて行かれちゃった……」

一夏「くそっ……！」

千冬「兎に角、まずは東達を連れて行くぞ、一夏！」

一夏「わかった！」

俺達は東とクロエという子を抱き抱え、皇宮から出た……。

―新垣 零だ。

一夏達が出てきた……！

一夏達は二人の人物をメガファウナまで運び、復帰した。

キラ「一夏、ラクス達は……!?」

一夏「東さん達以外はもう何処かへ連れて行かれたみたいだ……」

三日月「遅かったのか……！」

ネモ船長「だが、チャンスだ！各機はアンジュを援護しろ！」

俺達はミスルギの皇宮を攻撃した。

ジュリオ「う、うおっ!?？」

デキム「ジュリオ陛下!ここは避難を!」

アンジュ「感謝するよ、みんな!」

零「アンジュ、俺も行く!」

ヴァン「ここにかぎ爪がいるんなら俺も行くぜ!」

アンジュ「わかったわ!」

今度は俺達が皇宮の中へと入って行った。。。

ホープス「(お気を付けて、アンジュ様。。。ヴァン様。。。零。。。あそこには怪物共

がウヨウヨといます。。。)」

俺達は皇宮の中へと入り、ジュリオの前に立った。

ジュリオ「ア、アンジュリーゼ!それに新垣 零まで。。。!どうして、お前達がここ

に!?？」

アンジュ「知りたければ、あなたの有能な秘書官に聞いてみたら?」

ジュリオ「リ、リイザ!どういう事だ!?？」

リイザ「お別れです、ジュリオ陛下!」

アンジュ「リイザ。。。スパイだった、あなたの事をどうこう言うつもりはないわ。た

だ、この男をここまで誘導してくれた事は感謝する」

リイザ「では、お気の済むままに……」

リイザは歩き去った……。

ジュリオ「リ、リイザが……私を裏切ったのか……!!?」

零「裏切り……? お前に、その言葉を口にする権利はねえよ、クソ皇子」

ジュリオ「ま、待て! 話せばわかる!」

アンジュ「残念ね……。野蛮で暴力的なノーマに言葉は通じないわ」

ジュリオ「早まるな! 要求は何でも聞く! そうだ! お前の皇室復帰を認めてやろう!

だから……殺さないでくれえええつ!!?」

アンジュ「生きる価値のないクズめ……! くたばれえええつ!!?」

すると、エンブリヲが現れた。

エンブリヲ「その様な怒りの言葉さえ、君の唇から溢れば美しき詩に聞こえる」

アンジュ「エンブリヲ!」

ジュリオ「エンブリヲ様! こいつを……アンジュリーゼをぶつ殺してください! 今す

ぐに!!?」

エンブリヲ「アンジュ……。君は美しい……」

アンジュ「……」

エンブリヲ「君の怒りは純粋で…。白く何よりも熱い…。理不尽や不条理に立ち向かう焼き尽くす炎のように。気高く美しい炎…。つまらないものを燃やして、その炎を汚してはいけない。だから、私がやる」

アンジュ「え…。？」

エンブリヲ「君の罪は私が背負う」

零「お、おい待て!!？」

ジュリオはエンブリヲに斬り裂かれた。

ジュリオ「あああああつ!!？」

アンジュ「…。」

エンブリヲ「感謝の言葉は、もらえそうもないようだね。おかしな事は考えない方がいい。私不死の肉体を持っている事は知っているね」

アンジュ「でも、その身体を細切れにしてやったら、どうかしら？その為の準備とできてきたわ」

エンブリヲ「その賢さも愛しいな」

アンジュ「このタスクお手製の爆弾を食らっても下らない事を言えるかしら！」

ば、爆弾って…。!!？」

ヴァン「マジかよ…。！」

エンブリヲ「フ……」

すると、エンブリヲが指を鳴らすとアンジユの動きが止まった。

アンジユ「！」

エンブリヲ「君の身体の自由を奪った。私はこういう事も出来るのだよ。それだけではない。君に地獄のような痛みを与える事も天国のような快感を与える事も出来る。さて……君は、どちらがお望みかな？」

アンジユ「ふぎ……ける……な……」

エンブリヲ「この状態でも喋る事が出来るとはやはり君は規格外だ」

ヴァン「おい！」

エンブリヲ「君はヴァンだね、何かな？」

ヴァン「そんな事は後回しだ……かぎ爪は何処にいる!!?」

かぎ爪の男「私なら、ここにいますよ、ヴァン君」

手がかぎ爪の男が現れた……。こいつが、ヴァンさんの最愛の人を……!

ヴァン「かぎ爪えええっ!!?」

かぎ爪の男「久しぶりのご対面ですが、まだ私は死ぬわけにはいかないのですよ。エンブリヲ君、よろしく願います」

かぎ爪の男の言葉に頷いたエンブリヲは指を鳴らした。

ヴァン「っ…！な、何だと…！」

エンブリヲ「行くなら早く行つたほうが良いよ、同志」

かぎ爪の男「ならば、そうしましょう」

そう言うとかぎ爪の男は立ち去ろうとして行く。

ヴァン「待ちやがれ…！かぎ爪!!？」

かぎ爪の男「またお会いしましょう、ヴァン君」

ヴァン「かぎ爪えええっ!!？」

ヴァンさんの叫び声も虚しく、かぎ爪の男は立ち去つてしまう…。

エンブリヲ「さて、続きを…」

零「俺の存在を忘れてねえか、エンブリヲ！」

エンブリヲ「零か…。君も私とアンジユの邪魔をするのか？ならば…」

指を鳴らそうとしている…!!？させるか！

俺はエンブリヲが指を鳴らすよりも先に殴り飛ばした。

エンブリヲ「やるね」

零「お前には聞きたい事がある…。ひまわりの事だ！」

エンブリヲ「それは私ではない」

零「え…」

私ではない……だと……!??

じゃあ、あのエンブリヲはいったい……!??

エンブリヲ「それよりも私とアンジュの邪魔をする君には罰を与えよう」

零「！」

エンブリヲは俺の目の前まで瞬時に来ると、俺の頭を持つ。

すると、俺の頭の中に何かの映像と記憶が流れてきた……。

な、何だこれ……！

しかしその量に俺は頭に痛みを感じ始める。

零「うあつ……があつ……グアアアアアアアアツ!!?」

あまりの頭痛に俺は膝を地面につけ、頭を抑えながら、悲鳴の声を上げる。

零「あ、たまが……アアアアツ！割れ、る……！ウアアアアあああつ!!?」

アンジュ「零！あんた、零に何をしたのよ！」

エンブリヲ「彼に必要なものを与えているだけだよ。さてと、では、君には天国の様

な快感を……」

零「グウウアアアアアアツ!!?や、め、ろ……！ううあああつ!!?」

アンジュ「もういい！私の事はどうなつてもいいから、零を助けて！」

エンブリヲ「仕方ない」

エンブリヲが溜息を吐くと記憶や映像が流れなくなり、痛みが治まった。

零「はっ！はあ……！はあ……！アン、ジュ……お前……！」

エンブリヲ「では、今度こそ始めようか……」

そこへサリアが来た。

サリア「お待ちください、エンブリヲ様」

アンジュ「サリ……ア……」

エンブリヲ「私の楽しみの邪魔をするのかな、サリア？」

サリア「こ、この女は……私が倒すべき敵です……！エンブリヲ様のお手をわずらわせては、私の存在する意味がありません！」

エンブリヲ「……なるほど。それは一理ある。いいだろう、サリア……。では、ここは君に任せよう」

アンジュ「待ち……なさい……エンブリヲ……」

零「逃す……か……！」

エンブリヲ「時間ができた……。ナディアに舞踏会への招待状でも届けようかな……」

アンジュ「ナディアに……近付くな……！この……ヘンタイ……！」

エンブリヲ「フフ……ヤキモチかな？」

アンジュ「もう……口を開く……な……」

エンブリヲ「アンジュとサリア……。私の愛を受けるのは、果たしてどちらかな？」
零「……！待ち、やがれ……！」

エンブリヲ「……新垣 零。君は今のままでいいのかい？」

零「何が言いたい……？」

エンブリヲ「ヒントは先程見せた記憶の中ある」

そう言い残し、エンブリヲは立ち去った……。

あの時の記憶……。膨大な量過ぎてわからない……！

アンジュ「……身体が動く！」

ヴァン「ちいつ！漸くかぎ爪を見つけ出せたのに……！」

サリア「ヴィルクスに乗りなさい、アンジュ。決着を付けるわよ」

アンジュ「感謝するよ、サリア」

サリア「そんなものは必要ないわ。私は自分の手であなたを倒したかっただけ……

私もやっぱりノーマだわ……。エンブリヲ様の愛よりも、あなたとの決着を望むなん

て……」

アンジュ「礼代わりにあなたの望みを叶えるわ、サリア。私の全力で相手をする……

！そして、あなたに教えて上げるわ！勝つのは私だつて！」

サリア「それでこそよ、筋肉ゴリラ」

ライバルって事か……。

ヒルダ「まだかよ、アンジュ！」

タスク「出て来た！」

ワタル「無事だったんだね、アンジュさん、零さん、ヴァンさん！」

メル「零さん！」

モモカ「アンジュリーゼ様……」

アンジュ「決着はつけてきたわ……。私の手ではなかったけど……。クリスは？」

ロザリー「N-1ノーチラス号に収容したよ。もう大丈夫だ」

ヒルダ「あいつのラグナメイルには私が乗らせてもらうよ」

ヴィヴィアン「後はサリアだけだね！」

アンジュ「あの子なら、すぐに出て来るよ」

ガドウエド「ヴァンよ、かぎ爪の男はどうした？」

ヴァン「逃げられた……」

ウー「貴様ともあろうものが、何をやっている!?」

ヴァン「仕方ねえだろ、エンブリヲって奴のせいで動きを止められたんだからよ」

フリット「話は後だ、何か来るぞ！」

クレオパトラが出てきた。

サリア「待たせたわね、アンジユ」

アンジユ「余計な言葉はいらないよ、サリア。決着をつけようか」

ヴィヴィアン「おお！ついにこの日が来たか！」

エメラナ「止めなくていいのですか？」

くから「女と女の意地のぶつかり合いだもの。やらせておけばいいわ」

ミツヒデ「互いに全てを出し切った先には得るものがある……。それを信じよう」

ゼロ「頑張れよ、アンジユ、サリア！」

グレンファイヤー「決着を付けるんなら、心置きなくやれよ！」

ジョー「さて……。どうなるかな？」

舞人「後は二人の世界だ。任せよう」

ジョー「では、俺は俺の好きにやらせてもらう」

マドカ「私も同意見だ」

サリア「行くわよ、アンジユ！エンブリヲ様のため……。そして、私自身の為にあな

を倒す！」

アンジユ「来なさい、サリア！あなたをひっぱたいて、目を覚まさせてやるから！」

俺達は戦闘を再開させた。

〈戦闘会話　　アンジュ or ヒルダ or ロザリー or ヴィヴィアン or ナオミ VS サリア〉

サリア「私はアンジュを倒し、存在の証を立てる！」

アンジュ「はつきり言うけど、迷惑なのよね、そういうのって！」

ヴィヴィアン「アンジュ、正直過ぎ！」

ロザリー「お前よ！そんな風に言うから、サリアの奴が拗ねちまったんじゃねえかよ！」

ヒルダ「悪いのはアンジュじゃないよ！サリアが面倒な奴なだけだ！」

ナオミ「アンジュも似たようなものだけど…！」

アンジュ「何か言った、ナオミ!?!？」

サリア「黙りなさい！あなた達に私の何がわかるって言うのよ！」

アンジュ「わからないわよ！それが、どうしたって言うのよ！サリア！あなたも知っている通り、私は自分の敵に容赦しない！あなたの裏切りの理由なんて興味ない！でも、あなたが私と戦いたいって言うなら、全力で相手をするだけよ！」

サリア「感謝するわ、あなたのそういう性格……！でも、勝つのは私よ！ダイヤモン
ドローズ騎士団の誇りに懸けて！」

アンジュ「どうでもいいけど、ひどい名前！」

〈戦闘会話 トオルVSサリア〉

サリア「トオル……」

トオル「サリアさん、あなたは僕が止める！」

マサオ「ぼ、僕達もいるよ！」

ネネ「そこは僕達も、でしょう!?？」

ボーちゃん「行こう、風間君！」

トオル「うん、力を貸して、みんな！」

サリア「本当にいい友達ね、大切にしなさいよ」

ヴィルキスの攻撃にクレオパトラは吹き飛ばされた。

サリア「クレオパトラが……私が負けた……！」

アンジュ「さっきのお礼の代わりよ。とどめは刺さない」

サリア「情けをかけるつもり!?？」

アンジユ「そうじゃない。あなたと決着をつけなくてはならないのは私じゃないから……」

すると、数体のドラゴンとヒステリカが現れた。

アンジユ「エンブリヲ！」

サラマンディーネ「ドラゴンを精神制御して、自分の戦力として使うとは……！」

エンブリヲ「彼等は、かつての同胞の末裔だ。私の役に立てて本望だろう」

ナオミ「(……) 何かが違う……！ ひまちゃんを助けてくれたエンブリヲとは……)」

サリア「エ…… エンブリヲ…… 様……」

エンブリヲ「失望したよ、サリア。君は最後のチャンスを活かせなかった」

サリア「最後のチャンス……!?？」

エンブリヲ「私の楽しみを邪魔した以上、決死の覚悟でアンジユとの戦いに臨んだのだろう? ならば、敗北の責任を取ってもらわねばならないね。だからその前に……」

ヒステリカがミスルギの皇宮に攻撃を……!??

デキム「エ、エンブリヲ様……! 何故!?？」

エンブリヲ「あれだけの軍勢を預けられながら、この有様……。これは君の責任だよ、デキム・バートン。もう少し使えるかと思つたが、期待外れだったよ」

デキム「そ、そんな!!?」

ヒステリカは最後にきつい一撃を放った。

デキム「ああああああつ!!?」

エンブリヲの奴:. . !

デュオ「デキム・バートンの最期か:. .」

ゼクス「最後まで世界というものが見えていない男だった:. .」

トオル「サリアさん、逃げて!」

サリア「い、いや:. . !」

クレオパトラは逃げようとしたが、ヒステリカに追いつかれた。

エンブリヲ「ダメだよ、サリア。君は、もう逃げられない。さあ、お仕置きだ。それ

とも罰と言うべきかな」

ヒステリカの攻撃を突如、現れたレイジアが防いだ。

サリア「レイジア! エルシャが戻ってきたの!!?」

ジル「私だ」

ジルさん:. . !!?

サリア「アレクトラ!」

ジル「私にも何かが出来ると思ってた:. .。エルシャから、このラグナメイルを譲り受

けた」

エルシャ「司令……。レイジアはお任せします」

サリア「今更なんなの、アレクトラ！私の生命を救って、恩に着せるつもり!??もうあなたなんて必要ないわ！エンブリヲ様は私に全てを与えてくれたわ！強さも、愛も、全て！」

ジル「愛だど？奴は誰も愛したりしない。利用するために餌を与え、可愛がるだけだ」
サリア「！」

ジル「私もそうやって弄ばれ、全てを失った！目を覚ませ、サリア！」

サリア「言ったでしょう！あなたの言葉は信じないって！私を利用していたのは……あなたよ！」

サリア……

サリア「私には何もなかった！皇女でもない！歌も知らない！どんなに頑張っても選ばれなかった！ヴィルキスにも……あなたにも！そんな私をエンブリヲ様は選んでくれた！だから、アレクトラ！あなたなんて、もう要らないのよ！」

ジル「だが、私にはお前が必要だ」

サリア「駒として使うために!??」

ジル「そうじゃない……！サリア……。あんたを放っておけるわけじゃない

か……」

サリア「アレクトラ……」

ジル「ほんと……あんたは私にそっくりだよ……。まるで妹みたいに……。真面目で……。泣き虫で……。思い込みが激しい所から……。男の趣味までね……。だから、巻き込まれなかつた……。ごめんね、辛く当たって……」

サリア「アレクトラ！」

ヒステリカから拍手が聞こえてきた。

エンブリヲ「美しい姉妹愛だ。最後にいいものを見せてもらったよ」

ジル「エンブリヲ……！」

エンブリヲ「まさか全てを失った君が再び立ち上がるとはね。これだからノーマはしぶとい」

ジル「絶望の記憶よりもお前への怒り……。そして、何より皆が見せてくれた希望が勝つたのさ」

エンブリヲ「だからそれも終わりだ。サリアと共に旅立つがいい」

ジル「サリア……。私がエンブリヲに仕掛ける！その間に離脱しろ！」

サリア「いや……。！そんなイヤよ！」

ジル「サリア……。これが私から、最後に言つてやれる事だ。戦え！そして、生きろ！」

サリア「生きる…。」

エンブリヲ「アレクトラ…！古い女に、もう用はないんだ！」

サリア「アレクトラ！」

クレオパトラが次元跳躍を使って、ヒステリカを斬り飛ばした…。！！？

エンブリヲ「次元跳躍…。！！？クレオパトラの力を引き出しただと！！？」

ジル「サリア！」

サリア「クレオパトラが…。私に伝えてくれた…。」

ってか、サリアの服が元のライダースーツに戻っている…。！！？

ヒルダ「お前、その格好…。！」

サリア「ありがとう、クレオパトラ…。私の気持ちを形にしてくれて」

ジル「サリア！態勢を立て直すよ！」

サリア「了解！」

エンブリヲ「アンジユ！サリア、アレクトラ…。そして、エクスクロス！あくまで私

に刃向かうか！」

ワタル「それはお前が悪い奴だからだ！」

シモン「エンブリヲ！このアル・ワースを力で支配しようとしたお前に落とし前をつ

けさせてもらうぜ！」

ユイ「あなたは……許しません！」

エンブリヲ「身の程を知らぬ者達め！お前達に現実というものを教えてやる！」

サラマンディーネ「気をつけてください、皆さん！エンブリヲのデイスコード・フェ

イザーは時空さえも歪ませる力を持ちます！」

アンジュ「あれならヴィルキスにだってあるわ！」

カレン「でも、使いこなせないじゃない！」

アンジュ「そこは気合で……！」

ネモ船長「聞こえるか、アンジュ君。君の持つ指輪に想いを込めるんだ」

アンジュ「何故、ネモ船長が指輪の事を……!?？」

ネモ船長「それには人の意識や想いが込められている……！君の願いに応え、ヴィル

キスを目覚めさせる！」

アンジュ「……やってみる……！ヴィルキス！さっさと目覚めないと捨てるわよ！」

ヴィルキスに何かの力を込められた。

アンジュ「応えてくれたのね、ヴィルキス。いい子よ」

サリア「何が願ひよ！あれじゃ脅しじゃない！」

タスク「あ、あんなのでいいの……ヴィルキス……？」

サザンカ「もしかして、ヴィルキスはタスクさんと似たような趣味の持ち主なのかも

！」

エンブリヲ「タルテソス王め！余計な事を！」

ネモ船長「アンジユ君……。奴との決着……。君に任せる」

アンジユ「余計な期待まで背追い込む気はないけど、相手があいつなら話は別よ！」

エンブリヲ「来るか、アンジユ！」

アンジユ「エンブリヲ！あなたには、私の仲間も世界も何も渡さない！もちろん、私自身も！」

タスク「アンジユ！」

アンジユ「覚悟しなさいよ、エンブリヲ！絶対に復活できないようにチリ一つ残らず消滅させてあげるから！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　マドカVS初戦闘〉

マドカ「この世界にいる時だけ、しっかりと見せてもらうぞ、織斑　一夏……。私は私でなすべき事をするまでだ……。！」

〈戦闘会話　零VSエンブリヲ〉

エンブリヲ「零！あれ程の痛みを植え付けられながら、私に挑んで来るとはな！」
零「みんな、苦しみとも戦ってる…。俺だけ恐れて逃げる事なんてできないんだよ！
覚悟しやがれ、エンブリヲ！これで全て終わらせる！」

〈戦闘会話〉 ゼロVSエンブリヲ

エンブリヲ「私の新世界にウルトラマンは不要だ！」

ゼロ「新世界なんて知った事かよ！俺はお前を許さねえ！それだけだ！」

〈戦闘会話〉 しんのすけVSエンブリヲ

ひまわり「あうう…」

しんのすけ「どうした、ひま？」

ひまわり「たいや…」

カンナム「ひまわりちゃんかエンブリヲと戦う事を拒んでいる…。？」

エンブリヲ「来ないのかい、野原一家」

しんのすけ「今から行くぞ、ブリブリヲ！オラがお前を倒すぞ！」

〈戦闘会話〉 ヴァンVSエンブリヲ

ヴァン「てめえのせいでかぎ爪を見失っちまった…。その責任は取ってもらうぜ」
エンブリヲ「君の復讐など私には関係ないのでね」

ヴァン「俺の台詞だ！てめえの計画なんざ、知った事じゃねえんだよ！」

〈戦闘会話　ナオミVSエンブリヲ〉

ナオミ「エンブリヲ…」

エンブリヲ「私の為にいい顔をしてくれて嬉しいよ、ナオミ」

ナオミ「あの時は本当にありがとうって思った…。でも、今のあなたは許せない！だから、ここであなたを止める！それが私の戦う理由だから！」

ヴィルキスのデイスコード・フェイザーでヒステリカにダメージを与えた。

エンブリヲ「！」

そして、ヒステリカは爆発した…。

アンジュ「完全に撃破した！いくら不死身でも、これなら復活はできない！」
終わったか…。

タスク「これで長きに渡るエンブリヲとの戦いも終わるのか…」

アンジュ「後はアウラを解放して……」

サラマンディーネ「そちらの方は既にリザーディアが動いています。間もなくアウラの戒めも解かれるでしょう」

アンジュ「じゃあ、残るは……」

ヴィルキスはミスルギ皇宮の前まで移動した……。

ジル「何をするつもりだ、アンジュ？」

アンジュ「エンブリヲが消えた今、腐りきった、この国の人間達に真実をぶちまけるのよ」

イングリッド「そんな事をしたら、パニックが起きる可能性があるわよ！」

ルルーシュ「待て、アンジュ！やり方を考えろ！」

アンジュ「そんなの知った事じゃない。真実を知った事で、この国が壊れるなら所詮、その程度だったって事よ。それに、この腐りきった国を変えるには完全に叩き壊して、そこから作り直すしかないだろうしね」

？「…… 皇女アンジュリーゼ。君という人間は、とても面白い」

アマリ「この声って……！」

ワース・ディーンベル……！って事は……！

アマリ「ワース・ディーンベル！法師セルリックが来たのですか……？」

セルリック「久しぶりだな、藍柱石の術士、アマリ・アクアマリン。それと、新垣零」

ホープス「(雰囲気が変わりました…?)」

零「協力関係にあるエンブリヲを支援に来たのなら、遅かったな、セルリック」

セルリック「いや… 全ては計算通りだよ。既に彼に協力していた異界人は我々魔徒教団が保護している」

アムロ「キャピタル・アーミィやジット団を取り込んだのか!」

シヤア「ちいつ…! 連中が現れなかったのは既にエンブリヲの下を離れていたからか!」

?「手が早いが、いささか目が甘いな、魔徒教団」

セルリック「!」

零「こ、この気配は…!」

現れたのは… 忘れもしない…!

オニキスの首領の機体だ…!

メル「あ、あれは…! アルガイヤ…!」

アスナ「首領が来たの…!?!」

?「久しぶりだな、エクスクロス。そして、新垣 零とペリドットにカーネリアンも

な」

零「首領、自ら何しに来やがった！」

？「エンブリヲが洗脳していたバジユラと呼ばれる生物……。私達の方で運用させてもらっている」

ミシエル「何だと……。!?？」

クラン「今度はオニキスがバジユラを操っているというのか!?？」

アスナ「首領、あなたには聞きたい事があります」

？「裏切り者に話す事など何もない。それにその話はまだ未来の出来事だ」

アスナ「……」

アマリ「法師セルリック……。魔従教団は何をしようとしているのです？」

セルリック「それをお前達を知る必要はない」

ワタル「どうして、そんなに偉そうなんだよ！」

ノブナガ「言葉を割らぬというのであれば……。力尽くでも聞きだす……。！」

セルリック「そういきり立つな。それより逃げなくてもいいのかな？滅びの光は、すぐそこまで来ているぞ」

それだけを言い残し、ワース・ディーンベルは撤退した……。

？「つまらない事を……。それではまたの再会を楽しみにしている。まあ、生きていた

らの話だな……」

メル「ま、待ってください！」

首領の乗るアルガイヤという機体は飛び去ってしまう……。

アマリ「滅びの光って……!?」

零「……！こ、これは……！みんな、すぐに防御体制に入れ!!？」

マーベル「どうしたの、零！」

ホープス「零の言う通りです！まずいです、これは！」

エレクトラ「高熱源体、急速に接近！」

ネモ船長「各機、防御だ！」

アマリ「ダメ！間に合わない！」

俺達は光に包まれた……。

アンジュ「これは……！」

くそっ……！

ーヴィルヘルム・ハーンだ。

私は今、ガラプーシカの管制室にいた。

カガン「…これでよかったですでしょうか…」

ハーン「現地にいた魔従教団からの情報ではミスルギ軍は事実上、壊滅状態にあったそうです。つまり、あの場にいたのは敵戦力のみ…。この超長距離ネクター砲ガラプーシカで一掃する事に何の問題もありませんよ」

カガン「しかし…」

ハーン「帝都に住んでいた市民の皆さんはお気の毒でしたが、指導者を失った以上、どうせ待っているのは過酷な未来だけです。ならば、苦しむ前に楽にしてあげるのも慈悲というものでしょう」

カガン「これからゾギリアは、どうなるのでしょうか…」

ハーン「ミスルギという後ろ盾を失っても我々には魔従教団がいます。今後の戦略は、行政局と彼等が協議して決めるでしょう。ところで現地の状況はまだ報告されないのですか？」

カガン「程度に直撃したのは確認されたのですが、その後は…」

ハーン「まあ、いいでしょう。さすがのエクスクロスもあれを食らっては溜りもないでしょうから」

これで満足ですか、エフゲニー・ケダール…。あなたに無限の苦しみを与えていたエンブリヲが死んだ今、次は何を望みますかな…。

カガン「Dr. ハーン！ 現地からの映像が来ました！」

ハーン「これは…！！？」

ば、馬鹿な…！ こんな事が…！

第54話 心の涙

―新垣 零だ。

あの時の攻撃でもうダメかと思ったが……。

大きな龍がビームを防いでくれた。

ワタル「あれがアウラなんだね……」

ヒミコ「ふえ〜！大きいのだ！」

サラマンディーネ「今、この一帯はアウラが時空を歪めています」

ドロロ「それによって、この街は巨大なエネルギーから守られたのでござるな」

ダークケロロ「あの巨大なドラゴンがいなかったら、この街も吾等も消滅していたのかもな……」

サラマンディーネ「まだ完全にエネルギーが拡散しきっていませんので、アウラもここを動けない状態です」

ワタル「ありがとう、アウラ！おかげで助かったよ!!？」

サラマンディーネ「ワタル様のお役に立ててアウラもきつと喜んでいるでしょう」

アンジュ「……」

モモカ「終わったのですね、アンジュリーゼ様……」

アンジュ「まあね……。エンブリヲは倒した……。でも、いきなり砲撃を撃ち込んでくるような奴がこのアル・ワースにいる……。連中を全て叩き潰すまでゆつくりは出来そうにないわね」

ジル「そういう事だ、サリア、クリス、エルシャ。お前達にも戦ってもらおうぞ」

クリス「あたし達を許してくれるんですか、司令!?」

ジル「今の私は司令ではない。だから、アルゼナルのルールをお前達に適用するつもりはない。だが、エクスクロスはお人好きが多いんでな。この負け犬にお前達の処遇を任せるそうだ」

エルシャ「もし許されるのであれば、私は皆さんと一緒に戦いたいです」

ジル「……と言っているが、どうする、アンジュ?」

アンジュ「許すも許さないもないわ。戻って来てくれたなら、それでいい」

サリア「アンジュ……」

アンジュ「だけど、サリア……。私の事をゴリラ扱いたあなたとは別よ」

サリア「あ、あれは……。その……」

アンジュ「……冗談よ。だけど、二度目はないから」

サリア「偉そうに！そういう態度だから、こつちもゴリラって言いたくなるのよ！」
アンジュ「二度目はないって言ったわよ」

サリア「じゃあ、訂正よ！下半身デブ！」

アンジュ「言ってくれるじゃないの！この魔法少女！」

モモカ「サリアさんもドグマが使えるんですか？」

サリア「な、何でもないから！」

エルシャ「久しぶりね、この感じ……」

ヴィヴィアン「今まで通りなんだね！」

ヒルダ「問題は山積みだが、とりあえず、パラメイル第一中隊は一件落着だな」

クリス「ごめんね、みんな……」

ロザリー「詫びるんなら、あたし達もだ。だから、そういうのはやめようぜ」

クリス「うん……。ありがとう、ロザリー」

すると、ミスルギの市民の人達が来た。

市民「ノ、ノーマめ！この帝都に土足で入り込んだだけではなく、あんな怪物まで呼

び寄せるとは！」

市民2「あなた達さえいなければ、このミスルギは永遠に平和だったのに！」

こいつ等……！っ……！

? 『お前さえいなければ、彼女が消える事もなかったのにな…。この疫病神め!』
零 「つつう…。!」

な、何だ…。!? 今の、記憶…。!?

アマリ 「どうしたの、零君!?」

零 「な、何でもない…。」

モモカ 「何を言っているんです、あなた達は! アウラは、この街を守ってくれたんですよ!」

ヒルダ 「ちつ…。エンブリヲは死んだつてのにノーマは相変わらず化け物扱いかよ」
サリア 「皆さん、聞いてください! 全てはエンブリヲなる人物の。!」

市民 「化け物は消えろ!」

市民3 「化け物は消えろ!」

アキホ 「化け物は消えろ!」

すると、アンジュが銃を発砲した。

アキホ 「ひいっ!」

アンジュ 「…。時空が歪んでるせいかな…。照準がずれた…。」

アキホ 「ア、アンジュリーゼ…。」

アンジュ 「目の前で起きた事も受け止められず、数を頼みにぎやーぎやーと…。少し

痛い目をみないと現実がわからないみたいね、あなた達は」

アキホ「や、やめて！殺さないで！」

市民「た、助けてくれーっ!!？」

市民達は逃げていった。。。

三日月「アンジュに先を越された…。」

マーベラス「アンジュが撃つてなかつたら、俺達が撃つてやったのによ」

竜馬「何なら、一発ぶん殴つてやりたかつたぜ」

アンジュ「わざわざ手を下さなくてもいいわよ、あんな、愚民つて言葉がびつたりの
連中…。」

ジル「マナの源であつたドラグニウム…。それを供給していたアウラがいなくなつた以上、彼等は嫌でも現実に直面する」

アンジュ「それでも変わらないのなら、本気で引導を渡す事を考えないとね…。(そういう事よ、シルヴィア…。あなたもさっさと夢から覚める事ね…。)」

キラ「それにしても、ラクス達は一体どこへ…。」

千冬「東、何か知らないか？」

東「うーん、エンブリヲはラクちゃん達を運命の場所つて所に連れて行つたつて言つていたけど…。」

一夏「運命の場所……？」

楯無「それは何処にあるんですか？」

クロエ「申し訳ありませんが、そこまでは……」

ガエリオ「そうか……」

ジユドー「結局、俺達……これからどうするわけ？」

朔哉「まずはここに砲撃を撃ち込んだ野郎をどうにかしないとな」

ジヨニー「あのエネルギーは超高出力のネクター砲によるものと判明しました」

エイーダ「あれはゾギリアの攻撃だったんですね……」

ルルーシユ「超長距離の砲撃を可能とするネクター砲……。とりあえず、ゴーゴンと呼

ぶ事になった」

MIIX「ゴーゴン……。まさに食らえば一撃で終わりでしょうね」

アンデイ「ミスルギが事実上、壊滅した今、ゾギリアは、そのゴーゴンつてのを使つてアル・ワースを征服するつもりなのか？」

カイエン「だろうな。連中は元の世界に帰る事が出来る状況でもミスルギと手を組んでいたしな」

アマタ「考えるのは後にして、まずは彼等を止めよう！」

ミコノ「あれが何処から発射されたのか、わかりますか？」

ノブナガ「既に場所は判明している。準備が出来次第、俺達はゴーゴン攻略のために出る」

零「アマリ：。」

アマリ「うん：。。ゾギリアが強攻策に出られるのはバックに魔徒教団がいるからだと思うわ」

ベルリ「結局、ミスルギの位置に教団が収まったのか：。」

アイーダ「彼等も異界の門を開く力を持っていますからね。当然と言えば、当然でしょう」

ヒイロ「ゾギリアはゼロシステムを越える、未来予測システムを持っている可能性がある：。。今回の立ち回りもそれを使ったのか：。」

クリム「ゴーゴンの防衛にはアメリカ軍を壊滅させたゾギリアのカップリング機も出てくるだろう」

デカルト「アメリカ軍を本隊を壊滅させた、ゾギリアの切り札というものだな：。」

青葉「(そして、おそらく雛も：。：)」

デイオ「戦えるのか、彼女と：。：雛と？」

青葉「口に出さなくても、お前にはわかっちゃうみたいだな」

デイオ「答えろ、青葉」

青葉「……戦えないだろうな。こんな想いをするなら、無人島で会った時、無理やりでも雛を連れてくればよかったぜ……」

デイト「その気持ちは今も変わらないようだな」

青葉「ああ……」

デイト「お前のしようとしている事がどれほど危険な行為か、わかっているのか？」

青葉「わかっているさ。それでも俺は……」

デイト「……お前が思うようにやってみろ」

青葉「え……」

デイト「どうせお前の事だ。言っても聞かないだろう。ただし、お前が雛を大切に思っているように俺にもやらなければならない事がある。それを遂行しなくてはならない時には俺は雛より、そちらを取るからな」

青葉「ああ、わかった。ありがとな、デイト」

デイト「お前のバカがうつったみたいだな」

アルト「言っておくぞ、青葉。もちろん俺達も手伝うからな」

アキト「お前とデイトで、とことんやってみろ。俺達は、それをサポートする」

キオ「その代わり……」

青葉「わかっている。雛との事……必ず次で決着をつける。(弓原 雛とヒナ・リヤザ

ン……。俺は自分の中の直感を信じる……」

俺達は、それぞれの艦へ戻り、ゴーゴンの設置位置まで向かった……。

「ジャンキラーだ。」

ギルギロス大統領とビート・スター、カイザムがいた。

ギルギロス大統領「ミスルギが堕ちたそうだな」

ビート・スター「所詮、エンブリヲは奇妙だとしても有機生命体だという事だ」

カイザム「ですが、エクスクロスの力はだんだんと脅威となつてきています」

ギルギロス大統領「そうだな、ここで潰すのが手か」

ジャンキラー「ならば、その役目……僕がやろう」

ビート・スター「では、頼んだぞ、ジャンキラー。ギルギロスも異論はないな」

ギルギロス大統領「ああ。だが、もしもの事を考え、カイザム達も後方で待機させる」

ジャンキラー「わかった」

僕は部屋を出て、外へ行こうとするとカイザムに呼び止められる。

カイザム「一つ、質問してもいいか、ジャンキラー」

ジャンキラー「何だ？」

カイザム「エクスクロスにいるジャンボットというロボットはお前のベースモデルだったな？ いわば、お前達は兄弟ロボットだ」

ジャンキラー「僕は僕だ。兄弟など関係ない」

カイザム「そうか」

ジャンキラー「何故そのような事を聞いた？ お前の弟……カンタム・ロボと何か関係があるのか？」

カイザム「奴は愚かな弟だ」

ジャンキラー「その割には仲間へ何度も引き入れようとしているようだが……」

カイザム「やはり、同じ機械生命体だからだな」

ジャンキラー「だが、切り捨てなければならぬものもある」

カイザム「お前に言われなくともわかっている。カンタム・ロボは俺が確実に倒す」

ジャンキラー「悪いが、今回は僕に譲ってもらう」

カイザム「いいだろう。だが、後方で待機はさせてもらうがな」

ジャンキラー「構わない」

僕達はそれぞれの行動に移った……。

―新垣 零だ。

俺はメガファアウナのパイロット待機室で休息を取っていた。

零「ふう……たまにはこういう休みもいいな」

温泉にでも入りたいなと思う事はあるけどな。

すると……。

零「っ……！」

ま、また何かの記憶が頭の中に……！！？

『（これ程の事で根を上げるとはまだまだ未熟者だな）』

零「ぐうう……！」

未熟者……？ いったい、この言葉を発しているのは、誰なんだ……？

すると、頭痛が治った。

零「な、何なんだよ、いったい……？」

メル「零さん……？ どうかされましたか？」

零「……メルか、いや何でもない」

メル「それならいいのですが……あ、アマリさんがクッキーを焼いてくれたので行き

ましよう！」

零「おう！」

……記憶の事は今、考えても仕方ねえよな。

ージャンボットだ。

私はある事を聞く為にメガファウナの格納庫に来ていた。

ガイン「ん、来たな、ジャンボット」

ジャンボット「突然、呼び出してすまなかつたな、ガイン、ブラック」

ブラックガイン「私達に聞きたい事とは何だ？」

ジャンボット「二人は……兄弟に近い存在だったな？」

ガイン「そうだが……」

ジャンボット「弟を持つというのは……どう言った気持ちだ？」

ガイン「……そうだな。嬉しい気分だ」

ジャンボット「嬉しい気分……？」

ガイン「舞人とは違った、相棒の様な大切な弟が出来たのだからな」

ブラックガイン「ガイン……」

ジャンボット「そうか……」

カンタム「ジャンボット、君はジャンキラーの事を考えていたんだね？」

ジャンボット「よくわかった、カンタム」

カンタム「君は……彼を止めようとしている……。それはわかるよ」

ジャンボット「……」

ブラックガイン「ジャンキラーの正す事は簡単な事じゃない。最悪の場合も考えなければならぬ……」

ガイン「無論、私達も手を貸す。だから、そんな事にならない様にしたい、だが……」

ジャンボット「わかってる。私も覚悟をしていないわけではない」

カンタム「その意気だ、ジャンボット。(ジャンボット、君は僕達の様にはならないでくれ……)」

「カイザーベリアルだ。」

カイザーベリアル「エンブリヲの野郎も使えねえな」

ダークゴーネ「ですが、あの者は陛下をも恨んでいましたので結果的には良かったではありませんか」

カイザーベリアル「まあ、あの野郎のウルトラ一族への恨みは俺様やヤプール、エンペラ星人以上だからな」

アイアロン「陛下！今度こそ、俺にエクスクロスを潰すチャンスをご覧ください！」

カイザーベリアル「いいだろう、アイアロン。ついでならあの怪獣も連れて行け」

ダークゴーネ「：。ああ、あの怪獣ですか。：。あのレイオニクスに怨みをたぎらせている。：。」

カイザーベリアル「ちょうど使いどきだと思つてな、もういいだろう」

アイアロン「はっ！ありがたく使わせていただきます、陛下！」

カイザーベリアル「行って来い、アイアロン。精々、俺様を失望させんなよ」

アイアロン「了解しました！」

見せてもらうぜ。：。お前を切り捨てたレイオニクスへの怨念の力つてもんをな。：。：

第54話 心の涙

―新垣 零だ。

ミッドナイトとビート・スターの軍勢がこちらに向かつて来ていると連絡が入った。セルゲイ「ミッドナイト達が出るのは随分と久しぶりでもあるな」アンドレイ「いよいよ彼等も本腰を入れて来たというわけか……！」ミッドナイトやビート・スターの奴等はオニキスと繋がっていた……。でも、あいつ等の気配は感じない……。

何故、此処で出てこないんだ……？

？『他の者にうつつを抜かす暇があるのであれば……早く一人前になったらどうだ、未熟者が！』

こ、こんな時にまた記憶が頭の中に……！

未熟者……？早く一人前って、いったい何の……？

零「……っ！」

マイトガイン「ジャンボット、カイザム。おそらく彼等も来るぞ」

ジャンボット「言ったはずだ、私は既に覚悟を決めている」

エメラナ「ジャンボット……」

カンナム「僕は……」

ゼロ「来るぞ……！」

ゼロの言葉通り、ジャンキラーとビート・スター陣営のロボット怪獣が数十体、現れた。

ミラーナイト「来ましたね、ジャンキラー」

グレンファイヤー「おい！ミッドナイトの奴等がいねえぞ！」

シーブツク「後ろに控えているのか……？」

セシリー「でも、何の為に……？」

ジャンキラー「お前達を知る必要はない」

ジャンボット「ジャンキラー……！」

ジャンキラー「有機生命体に手を貸すというのなら……お前を消す」

ゼロ「そう簡単にジャンボットを消せると思うなよ！」

マイトガイン「ジャンキラー！お前は私達が止める！」

ブラックマイトガイン「我々は手を取り合う事が出来るかもしれないんだ！」

ジャンキラー「不可能だ、有機生命体と手を取り合っているお前達などとな！」

カンナム「不可能ではない！現に僕達がいるじゃないか！」

ジャンキラー「黙れ！エクスクロス、お前達は此処で倒す！」

エメラナ「…」

俺達は戦闘を開始した…。

ロボット怪獣達を倒し続けていた俺達…。

すると、アイアロンとダークロプス、レギオノイドの軍勢が現れた。

レイモン「ベリアル軍だと?!？」

アイアロン「ほう、エクスクロス。誰と戦い合っているのかと思えば…。」

ジャンキラー「ベリアル軍が何の用だ?」

アイアロン「お前達には用はねえよ、ビート・スター所のロボット!俺の狙いはエクスクロスだ!」

ジャンキラー「邪魔をしないのであればいい」

グランデ「ホント、懲りないね」

アイアロン「フフフ…キール星人のレイオニクス…お前の敵は我々ではない」

グランデ「あく?そいつあ、どういう事よ?」

アイアロン「こういう事だよ!」

すると、一体の怪獣が現れた。

タイラント「グアアアアアツ!!？」

グランデ「！」

レイモン「あのタイラントは…！」

エイサップ「どうしたんですか、レイさん!!？」

エレボス「グランデの様子もおかしいけど…！」

グランデ「てめえ…まさか、あのタイラントか？」

タイラント「グガアアアアツ!!？」

リュクス「あの怪獣から感じる怨みのオーラ…！」

バーン「グランデに向けられているな…！」

トッド「あの怪獣は何なんだよ!!？」

ヒュウガ「あの怪獣はタイラント…。元グランデの怪獣だ」

サコミズ「元…？」

マサキ「タイラント…厄介な怪獣が出て来たな」

ゼロ「タイラントはタロウを除くウルトラ5兄弟を倒した実力のある怪獣だ！気をつ

ける！」

ジョー「少しでも気を抜けばやられてしまうという事だな」

マドカ「面白い、その実力を見せてもらう」

一夏「突っ走り過ぎるなよ、マドカ！」

マドカ「お前に指図される程でもない！」

キキ「でも、あの怪獣はグランデを標的にしているよ！」

へべ「あの怪獣と何かあったのかい？」

グランデ「・・・まあ、俺があいつを捨てたからな」

アマルガン「捨てた・・・じゃと？」

ゴーカーレッド「今はそんな事どうでもいいだろ！敵は待つてくれないぜ！」

ステラ「やるよ・・・！」

タイラント「ギヤアアアアアアツ!!？」

グランデ「来るなら来やがれ、タイラント！お前が俺を狙って来るってんなら返り討

ちにしてやるよ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　ゼロVSタイラント〉

ゼロ「何だ・・・？このタイラントは普通じゃねえ・・・。いったい、グランデと何が

あったってんだ？」

〈戦闘会話　EXゴモラVSタイラント〉

レイモン「タイラントの怨念が此処まで強いなんて… 何とかしないと…！」

〈戦闘会話　EXレッドキングVSタイラント〉

タイラント「ギャアアアアツ!!？」

グランデ「いちいち叫ぶんじゃねえよ、うるせえな…。まあいい、さあやろうぜ、タイラント！俺のレッドキングとどっちが強いかな！」

EXレッドキングのフレイムロードでタイラントに大ダメージを与え、タイラントはその場に倒れた。

グランデ「ざまあみやがれ」

タイラント「グガアアアツ…！」

グランデさんを睨むように顔を上げたタイラントだが、すぐに目を閉じ、死んでしまった…。

レイモン「グランデ、お前…！」

グランデ「そういうのはいいぜ、レイ。これは俺達の問題なんだからな」

レイモン「…」

アイアロン「ふん、案外使えないな…。（お前達はまだ知らない…。 怨念に取り憑かれた怪獣の末路を…。）」

ミラーナイトのシルバークロスでアイアロンはダメージを負った。

アイアロン「まずは第一段階は成功だな、後はあいつが何とかしてくれるぜ」

ミラーナイト「何…。？何を企んでいるのですか？」

アイアロン「いざれ、わかるだろう…。。それまで楽しみにしている」

そう言い残し、アイアロンは撤退した…。。

ゼロ（タイラントを倒されても少しも驚かなかったな、あいつ…。。ベリアル野郎、何を企んでやがる…。？）」

〈戦闘会話　ゼロVSジャンキラー〉

ジャンキラー「今度こそ倒す」

ゼロ「お前に倒されるわけにはいかねえ！お前を止め、ビート・スターにあつてやる

ぜ！」

〈戦闘会話 ジャンボットVSジャンキラー〉

ジャンボット「よすんだ、ジャンキラー！私の全てをコピーしたのなら、お前は……！」

ジャンキラー「僕とお前を一緒にするな」

ジャンボット「違う！私とお前は……！」

ジャンキラー「それ以上言うな、僕とお前は敵……それだけだ」

〈戦闘会話 舞人VSジャンキラー〉

ジャンキラー「マイトガイン、何故だ、何故、有機生命体と……！」

グレートマイトガイン「私と舞人が堅い絆で結ばれているからだ！」

舞人「ガイン……！」

ジャンキラー「理解……不能……！」

舞人「ならば、教えてやる！俺達の絆と」

グレートマイトガイン「我々の正義の力を！」

〈戦闘会話　ブラックマイトガインVSジャンキラー〉

ジャンキラー「ブラックマイトガイン、お前はマイトガインを倒す為に生み出されたはずだ……。それなのにどうしてマイトガインと共に戦う……？」

ブラックマイトガイン「私にはマイトガインの正義の心が宿っている！だから、お前達、悪と戦うんだ！」

ジャンキラー「違う……。！有機生命体こそが悪だ」

ブラックマイトガイン「それこそ違うぞ、ジャンキラー！人間……。有機生命体は……。」
ジャンキラー「くどいぞ、お前が何度言葉を発しようが僕の意志は変わらない！」

〈戦闘会話　しんのすけVSジャンキラー〉

ひろし「こいつがジャンキラーか……。！」

みさえ「本当にジャンボットにそっくりね！」

ジャンキラー「力無き家族が僕の前に立つのか……」

しんのすけ「オラ達を馬鹿にしていると痛い目を見るゾ！行くゾ、カンタム！」
カンタム「……。」

しんのすけ「カンタム？」

カンタム「い、いや……。何でもないよ。（本当にこれでいいのか……。？）」

くそッ……！ジャンキラーが強過ぎる……！

ジャンキラー「この程度か？」

アスナ「あ、あんな全身武器……勝てるの!?？」

由木「ですが、ここで勝たなければ……！」

ジャンボット「待ってくれ！」

ケロロ「ジャンボット殿……？」

ジャンボット「彼は私の弟だ……私に任せてくれ」

ジャンボット……

グレートマイトガイン「……わかった！」

ジャンボット「聞け、ジャンキラー！お前は間違っている。ロボットは、殺戮兵器で

はない……我々は、命を守る為にあるのだ！」

ジャンキラー「理解不能」

ビームを出そうとするジャンキラーにジャンボットは掴みかかる。

ジャンボット「止めるんだ！我々は敵ではない！」

そう訴えかけるジャンボットにジャンキラーは光弾を放った。

ジャンボット「グアアアッ！」

バトルボンバー「ジャンボット！」

海道「ちいつ！やっぱ、話し合いじゃ無理かよ！」

ジャンキラーは拳を握り、俺達の元へ走ろうとすると……。

エメラナ「心を開いて、ジャンキラー!!？」

エメラナの声にジャンキラーは動きを止めた。

アンジユ「エメラナ!!？」

セシリー「いつの間にあんな所へ……!!？」

エメラナとヒユウガボスが外に……!!？」

エメラナ「心を開いて……！あなたを作った存在が何と言おうと私達は敵ではありません

せん！ゼロも私も…… エクスクロスの方々も皆、共に未来を歩む仲間なのです！」

ジャンキラー「……」

エメラナの言葉に…… 耳を傾けている……？

ビート・スター「有機生命体は敵である！」

しかし、目が赤く発光して、俺達に攻撃を浴びせてきた。

シン「くっ……！」

メリツサ「やっぱりダメなの……？」

さらにはエメラナに向けて、目から光線を放つ。

ジャンボット「姫様！」

ゼロ「やめろ！」

グレンファイヤー「野郎……！」

俺達はジャンキラーを止めようとするが、攻撃を受けてしまう。

エメラナ「お願いです、悪戯に命を奪う……無意味な戦いはやめてください！」

エメラナの奴……まだ……！

エメラナ「あなたがジャンボットの兄弟なら、理解出来るはずです！命を慈しみ、人を想う心が……！」

ジャンキラー「黙れ……！」

ジャンキラーは俺達を攻撃しながら、目から光線をだし、エメラナも攻撃する。

エメラナ「きやあつ！」

ヒルダ「姫さん！」

レイモン「これ以上は危険だ！」

エメラナ「いいえ……彼が心を開く事……それに全てがかかっています。大丈夫、私

にはわかりましたから」

レイモン「わかったって……何が……？」

再び、動き出したエメラナを止めようとしたレイさんだが、それをヒュウガボスが止

める。

ヒユウガ「レイ、彼女を信じてみよう」

なおもジャンキラーはエメラナに向けて光線を放つ……。だが、おかしい……。距離はそこまで遠くないはずなのに、命中しない……。？

エメラナ「わかりますか、ジャンキラー！あなたは私を何度も狙っています。でも、当たりはしないのです！決して、当たりはしません！」

ジャンキラー「何故だ……。？何故、命中しない……。!!?」

エメラナ「何故ならあなたには……。か弱気者を守る……。正義の心があるからです！」

ジャンキラー「正義の、心……。？」

こ、攻撃が収まった……。？って、あれは……。！

ヒユウガ「あれを見ろ……。！」

ブラックマイトガイン「ジャンキラーが……」

舞人「泣いている……。？」

エメラナ「ジャンキラー……」

自分の流している涙を見ながら、ジャンキラーは困惑する。

ジャンキラー「これは……。何だ……。？」

グレンファイヤー「フン、そいつはな、涙ってやつだ」

バトルボンバー「つまり、お前にも震える心があるって事さ！」

ジャンボット「お前も仲間になれる……」

ガードダイバー「その涙が……何よりの証です！」

ジャンキラー「仲間……？」

ブラックマイトガイン「心から信頼し助け合える掛け替えのない存在……それが仲間だ！」

ミラーナイト「我々の様に違う者同士でも心があれば理解し合えます！」

ジャンキラー「心とは、何だ……？」

ゼロ「心つてのはな……胸の奥で燃える熱い炎だ……命の雄叫びだ！」

ジャンキラー「命とは……何だ……？」

カンナム「命とは生命体そのものだよ。それを失ってしまえば、彼等は活動を停止する」

ヒュウガ「だがな、一つしかない生命だからこそ、我々は全力で生きるんだ！」

レイモン「そして、どんな困難も仲間がいれば、乗り越えられる！」

グレートマイトガイン「よく考えるんだ、ジャンキラー！自分自身の頭で……！」

ジャンキラー「……」

どうだ……？

ジャンキラー「……！」

すると、ジャンキラーが光線を放つたと同時にウルティメイトフォースゼロ達も光線を放った。

よく見ると俺達の周りにレギオノイド部隊が取り囲んでいたのだった。

ウルティメイトフォースゼロ達とジャンキラーの攻撃にレギオノイド部隊は爆発した。

エメラナ「ジャンキラー……！」

ジャンキラーが……俺達を助けてくれた……？

ゼロ「へっ、いい腕してるぜ！」

ジャンボット「わかってくれたのか」

ジャンキラー「……計算外だ」

グレンファイヤー「けっ、焼き鳥に似て石頭だぜ！」

ミラーナイト「いや、あなたは柔らかすぎます」

ジャンボット「というより、私は焼き鳥ではない！」

グレンファイヤー「な、何だよ!?!？」

カンタム「……良かったな、ジャンボット」

カイザム「所詮はこの程度だったか、ジャンキラー」

カイザムとロボット怪獣軍団が現れた……!??

カンタム「カイザム兄さん……!?」

カイザム「ジャンキラー、敵である有機生命体に言いくるめられるとはな」

ジャンキラー「笑いたければ笑え……。僕は新たな事を学んだだけだ」

カイザム「いいや、笑わないさ……。だが、裏切り者のお前は消させてもらう！そして、

カンタム！貴様もな！」

カイザム・ロボの後ろに4体のロボットの現れた。

カンタム「あ、あなた達は……！」

オータム「元気そうだな、カンタム」

カンタム「オータム叔父さん！」

ザンザム「やあ、カンタム」

カンタム「君は、従兄弟のザンザム君！」

キンタム「大きくなったわね、カンタムちゃん！」

カンタム「キンタム叔母さん！」

ジジザム「ぐ……ごほっごほっごほっ！」

カンタム「ジジザムお爺さん……！」

ひろし「そんな……敵は全員、カンタム君の親戚じゃないか……！」

ひまわり「たいや！」

カイザム「我々は……」

ミッドナイト五人衆「**「「ミッドナイト五人衆!!?」」**」

ジジザム「ごほっごほっ！」

全員、カンタムの親戚って……！

カンタム「神よ……僕に何という試練をお与えになったのですか……！」

カイザム「カンタムよ、ここで消えろ！」

カンタム「だが、僕はここで退くわけにはいかないんだ……！」

カイザム「いいだろう、ミッドナイト五人衆は俺の指揮下には入れ！」

援護攻撃してくるってわけか……！

ルルーシユ「エメラナ姫！ヒュウガボスと共に下がっていてくれ！」

エメラナ「わかりました！」

エメラナとヒュウガボスはメガファウナへと戻った……。

カンタム「僕は……僕は負けない！誰が相手だろうとしても！」

ジャンキラ「僕も手伝うよ、カンタム」

カンタム「ありがとう、ジャンキラ。カイザム兄さん！オータム叔父さん！ザンザ

ム君！キンタム叔母さん！ジジザムお爺さん！僕はミッドナイトに屈しない！」

カイザム「そうか、ならば… ジャンキラーやエクスクロス諸共始末してやる！」
俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話〉 ジャンキラーVS初戦闘〉

ジャンキラー「(僕に正義の心があるなんて、思わなかったな…。)。僕は変わる…！
そして、有機生命体を守ってみせる！」

〈戦闘会話〉 しんのすけVSカイザム〉

キンタム「カンタムちゃん、覚悟！」

ザンザム「悪く思わないでくれ」

オータム「ここでお前をスクラップにする！」

ジジザム「ごほっ！ごほっ！」

カイザム「カンタム！お前はミッドナイト五人衆によって敗北する！」

ひろし「やいやい！勝手な事言ってるじゃねえ！」

みさえ「そつちが親戚ならこつちは家族よ！」

ひまわり「たーい！」

シロ「ワン！」

カンナム「野原さん…」

しんのすけ「カンナム、オラ達、最後まで一緒だゾ！」

カンナム「ありがとう…。カイザム兄さん！仲間がいる限り、僕は…僕達は負けな
い！」

〈戦闘会話 ジャンボットVSカイザム〉

ジャンボット「カイザム、お前にも言ってる。お前達は間違っている！」

カイザム「俺達は言いくるめられないぞ、ジャンボット！」

ジャンボット「ならば、私の全力を持ってお前達を止める！」

〈戦闘会話 ジャンキラーVSカイザム〉

カイザム「あれ程、有機生命体を敵視していた貴様が有機生命体と共に手を取るとは
な」

ジャンキラー「有機生命体は敵とは限らない。僕はそれを理解した…。カイザム、君
も…」

カイザム「ふざけるな、俺はお前達の仲間になどならない！絶対にだ！」

超超カンタムの攻撃でカイザム・ロボはダメージを負った。

カイザム「ぐっ……！ま、またもや……！」

ジャンキラー「カイザム……」

カイザム「黙れ、ジャンキラー！次こそはお前達を倒してやる、覚悟している！」

そう言い残し、カイザム共々、ミッドナイト五人衆は撤退した……。

カンタム「カイザム兄さん……。そして、親戚達よ……。どうしても戦わないといけ
ないのか……」

これで終わりか……。

ノブナガ「予期せぬ足止めを食らったな」

アレクサンダー「だが、損はしていないと思うぞ」

ケンシン「そうですね、なんせジャンキラーがこちらの仲間へとなったのですから」

ジャンキラー「……」

ジャンボット「行くぞ、ジャンキラー。お前には聞く事や話す事が山ほどあるからな」

ジャンキラー「いいだろう」

俺達はそれぞれの艦へと戻り、この一帯を後にした……。

ダークゴーン「……行きましたか。それにしてもこのタイラント……。死してもなお、

キール星人のレイオニクスへの怨念が消えないとは…… まだまだ使えますね……」
「ダークゴーネがタイラントの死体を抱きかかえ、消えた事も気づかずに……。」

俺達はマクロス・クォーターの格納庫に集まった。

青葉「グランデさん、あのタイラントって怪獣、何だったんですか？」

グランデ「元俺の相棒なんだよな」

レイオ「元……？」

グランデ「まあ、色々あったんだよ」

シヨウ「だが、あんたに対しての怨念は半端じゃなかったぞ」

グランデ「…… そんな事どうでもいい。今の俺の相棒はレッドキングだからな」

レイ「グランデ……」

グランデ「それよりもよ、そのジャンキラーちゃんにビート・スターって奴の事を聞くのが先決だろう？」

ジャンボット「そうだな、ジャンキラー。ビート・スターは何処にいる？」

ジャンキラー「ビート・スター……。月にいる」

葵「月？」

くから「アル・ワースにも月があるの？」

アマリ「い、いや……。そんな惑星は聞いた事がないですけど……」

ジョニー「ゼロさん達の世界から転移してきた月と言った方がいいですね」

朔哉「月か……。俺達はあんまり良い覚えがないな……」

ノリコ「ムーンWILLとの戦いは壮絶でしたからね……」

スザク「ビート・スターの事もだけど、今はゴーゴンをどうにかした方がいいよ」

ルルーシュ「わかってる。引き続き、ゴーゴン攻略へ向かう」

ゼロ「そうだ！ジャンキラ、お前もエクスクロスの仲間になるなら、ウルティメイ
トフォースゼロの仲間になれ！」

ジャンキラ「仲間……」

ミラーナイト「なら、ジャンキラなんて物騒な名前は変えた方がいいですね」

グレンファイヤー「お！ならよ、俺が考えてやるよ！ジャンボットの兄弟だから……」

うーん「そうだな……。お、そうだ！ジャンボットツーターダッシュってのはどうだ？」

ジャンキラ「ツ、ダッシュ……？」

ゼロ「ダメだろ」

グレンファイヤー「何でだよ……？」

ゼロ「同じような事、二回言ってるし」

エメラナ「名前は、ジャンナイン」

九郎「え…」

ワタル「ジャンナイン？」

エメラナ「ウルティメイトフォースゼロ…。そして、レイ、ヒユウガ、ゴモラ、リトラに続く9番目の勇者ですから」

サンソン「待て待て！俺たちエクスクロスの事、忘れてねえか？！」

エメラナ「それならば…。 舞人君から聞きました。勇者特急隊の合体ロボにはトライボンバーという方がいたと」

バトルボンバー「そうだが…」

エメラナ「それならば、マイトガイン、バトルボンバー、トライボンバー、ガードダイバー、マイトガンナー、ブラックマイトガイン、カンタム、ジャンボットに続く意志を持つ9番目の仲間のロボットですから」

零「なる程…」

タスク「それなら、いいかも」

ジャンキラー「ジャンナイン…」

ベルリ「いい名前ですね！」

エメラナ「ありがとうございます。それと、ジャンボット」

ジャンボット「はい、姫様。姫様に刃を向ける愚かな私にどの様な処罰で？」

エメラナ「良い覚悟です。では、あなたにジャンナインの教育係を命じます」
ジャンボット「教育係……？」

エメラナ「断る事は許しませんよ、あなたはお兄さんなのですから」

ジャンボット「はっ、ありがとうございます、姫様！聞いての通りだ、いいな？ ジャンナイン」

ジャンナイン「ジャンナインか……。まあ、悪くはないな」

グレンファイヤー「生意気！」

ゼロ「ははっ、よろしくな、ジャンナイン！」

ジャンナイン「ああ！」

エメラナ「もう一つ、ジャンボット。これからは私もあなたの中に入り、戦います」

ミラーナイト「姫様……？」

ジャンボット「さ、流石にそれは……！」

エメラナ「いいえ、私だって、エクスクロスの一人なのですから……。私がいると不満ですか？」

ジャンボット「……いえ、そんな事は……。わかりました。姫様が側にいられると私ももっと強くなりますので」

エメラナ「期待していますよ、ジャンボット」

ヒュウガ「ジャンナイン、俺もお前中で共に戦っていいか？」

ジャンナイン「何故だ？」

ヒュウガ「俺はお前という存在をもっと知りたいたいし、俺だけ見ているってのは嫌なのでな！」

ジャンナイン「…勝手にしろ」

ヒュウガ「ああ、では、勝手にするぞ！」

零「新しい仲間が増えたな！…うっ…」

？『お前に仲間や友など必要ない』

また…記憶が…！！？

アマリ「零君…？」

零「な、何でもない…！少し、シャワーでも浴びてくる…！」

俺はアマリ達を心配させないように格納庫を後にし、廊下の壁に手をつく。

今回は未だ、記憶が消えず、俺に激しい頭痛が襲ってくる。

？『（この役立たずの無能が…）』

零「ガアツ…！ち、違う…！違う違う！俺は役立たずなんかじゃない！俺は…

俺は…！」

アスナ「零！」

頭を抱きながら、記憶の中で聞こえてくる声に対し、否定しているとアスナが俺を落ち着かせようと抱きついてきた。

アスナ「落ち着いて、零！しっかりして！」

零「ア、アスナ…？」

アスナの顔を見た途端、記憶が見えなくなり、頭痛も治まった…。

アスナ「最近、様子がおかしいわよ？ミスルギに乗り込んでから…」

零「アスナ…」

アスナ「お願いだから、言ってよ…」

零「ミスルギの皇宮に乗り込んだ時、エンブリヲにある記憶を複数見せられたんだ…。それから…。頭の中に記憶が過るんだよ…」

アスナ「…零」

俺はアスナに強く抱きしめられた。

アスナ「大丈夫よ、あなたはあなた…。どの様に変わろうとも私の大好きな新垣 零には変わりないだから！」

零「アスナ…」

アスナ「だから、気をしっかり持って…！」

零「ああ、すまない。それと…アマリ達にはこの事を…」

アスナ「はあ……。あなたって優し過ぎるわね、でも、わかったわ」

零「助かるよ、アスナ……。っ……！」

？『全く……。あなたは優し過ぎるのよ……。でも、それがあなたの良いところなのかもね、零』

こ、これは……。!??

零「い、今のは……。!?？」

アスナ「また記憶が見えたの？」

零「あ、ああ……。でも、今までののと違う……」

アスナ「何が違うの？」

零「今度は相手の顔も声もはつきり聞こえたんだ……。しかも、相手が……。俺の世界の学生服を着た、アスナだった……」

アスナ「え……。!?？」

いつたい……。どういふ事だよ……。!??

ービート・スターである！

よもやジャンキラーが裏切るとは……。

ギルギロス大統領「ジャンキラーの事、残念だったな……。ビート・スター」

ビート・スター「裏切り者は始末するのみ……。有機生命体に着くのならば、尚更だ」

？「ほうう？やはり、人類は邪魔だな……」

ビート・スター「……珍しい客人であるな」

ギルギロス大統領「やはり来たか……。同じく人類を憎む者同士……。これで人間を消

せるな、ムーンWILL？」

ムーンWILL「ああ……。今度こそ、人類を……。そしてダンクীগを消してやる

さア……！」

これでこちらの準備は整った……。後は……。アル・ワースを滅ぼすのみ……！

第55話 誰も知らない明日へ

「ビゾン・ジエラフィルだ。

俺はゾギリア艦の中へいた。

ビゾン「……エクスクロスはこちらに向かっているそうだ」

ヒナ「……」

ビゾン「俺達二人の力があれば、連合のカップリング機も敵ではない」

ヒナ「私は……お父様の仇を討ちます……」

ビゾン「そうだ。リヤザン少佐の無念……二人で晴らそう」

ヒナ「スラーヴァ・ゾギリア」

ビゾン「ヒナ……！ さあ、行こう！ 一緒に渡瀬 青葉を殺すんだ！」

ヒナ「はい……」

ビゾン「ハハ……！ これでいい！ ヒナは永遠に俺と一緒になんだ！」

レイ「Destiny」「ビゾン……」

ビゾン「レイ……！ お前はレイ・ラングレンと共に俺達の後方支援だ」

レイ「Destiny」「お前…！」

レイ「ガンソ」「やめろ、レイ・ザ・バレル。落ち着けと言ったはずだ」

レイ「Destiny」「くっ…！」

待っている、渡瀬 青葉…！

レイ「Destiny」「(シン、俺は…:)」

第55話 誰も知らない明日へ

ーアルフリード・ガラントだ。

エクスクロスがガラプーシカを狙いに来たのを知り、我々は守備体制に入った。

アルフリード「行政局は、こんなもので造らせていたとはな…:」

ラーシャ「巨大ネクター砲、ガラプーシカ…:」

タルジム「すごいな…:。こいつさえあれば、簡単にアル・ワースを征服できるんじゃないか？」

アルフリード「その威力は50メガトンを超える……。都市一つを消滅させるだけの力だ。だが、あれを一発撃つために必要なネクトオリビウムは、ゾギリアの一年の採掘量に匹敵する」

タルジム「何だって!?？」

ラーシヤ「いくら何でもそれは……」

アルフリード「そうだ……。戦いに勝つても国家が滅んでは無意味だ。(ましてや、それが異世界の征服のためだとしたら、愚かとしか言い様がない……。本国のマルガレタ特務武官には急いでもらわねばならんな……)」

バスコ「話している所、悪いけどさ……。何か来るよ、アルフリーちゃん」

現れたのは、四機の機体……。それに前衛にいる二機……。あれが、噂のカップリング機か……？

タルジム「前衛にいるあれが噂のカップリング機か……!」

ラーシヤ「試験運用に関わらず、凄まじい戦果を挙げていると聞くけど……」

ビゾン「お久しぶりです、アルフリード中佐」

アルフリード「ビゾン……。ヒナと共に行政局に転属になったと聞いてはいたが、カップリング機に乗っているとは……。という事は……」

ビゾン「はい。俺のパディはヒナです」

ヒナ「…」

ビゾン「俺達は行政局の管理ですので、好きにやらせてもらいます」

アルフリード「…わかった。君達の健闘を祈る」

ビゾン「中佐にもお見せしますよ、俺とヒナの力を」

ラーシャ「(ビゾン…ヒナ…)」

タルジム「(何か変わっちゃったな、あいつ等…)」

バスコ「あれ？一緒にいるのはレジエンドガンダムとヴォルケイン・改だね…。Wレ

イちゃんか」

レイ「Destiny」バスコ・タ・ジヨロキア…。あなたもいたとはな」

バスコ「二人の実力、期待しているよ」

レイ「ガンソ」無駄話は終わりだ。奴等が来る」

来たか、エクスクロス…！

―新垣 零だ。

俺達はゴーゴンが設置されている場所に着き、出撃した。

青葉「あれがゴーゴンか！」

倉光「全長420メートルにも及ぶ巨大ネクター砲……」

ディオ「この位置からミスルギの帝都を直接砲撃するとは……」

九郎「いくらエンブリヲの野郎がやられた後だからって、協力していた国を無差別に攻撃するなんて事、許せるかよ！」

ウエスト「確かに、ああいうものはさっさと壊すに限るのである！」

ルルーシュ「だが、気をつける……！ 場合によっては、敵はあれを我々に使ってくるぞ！」

アンジュ「アウラの助けもないんだから、撃たれたら、こっちの負けね！」

ジャンナイン「だったら、撃たれる前にあれを破壊すればいいだけの話だ」

万丈「ルルーシュ……！ 発射されるまでの時間はわかるか!?!?」

ルルーシュ「今、計算結果が出た！ 発射可能になるまで、後6分だ！」

アマタ「それまでに敵をどうにかする！」

クリム「気をつける！ ゴギリアのカップリング機もいるぞ！」

ディオ「あれがそうか！」

青葉「あの機体……まさか……！」

ヒイロ「気をつける、青葉。あの紫の機体に乗っている男はお前を狙ってくる」

青葉「どうしてわかるんだ!?!?」

ヒイロ「ゼロが教えてくれた。(少しずつゼロが真実に近づいていく……。そして、その先に待つのは……)」

リデイ「青葉、あの紫の機体から発せられる殺気は異常だ……！」

ヴァン「へえ、いい殺気してんじやねえか」

フリット「(あの機体に乗る者……もしや……！)」

バスコ「やあ、来たね、マベちゃん！」

ゴーカイレット「バスコ！」

バスコ「残念だけど、ここで君達を倒すよ！」

ゴーカイレット「ふん、やってみやがれ！」

ルナマリア「レジエンドガンダム……！」

シン「レイか……！」

レイ「Destiny」シン、ルナマリア、キラ・ヤマト、アスラン……。ここで決

着をつける！」

シン「くそっ……！何でなんだよ、レイ！」

プリシラ「ね、ねえ！あそこにいるのって……！」

ホセ「ヴォルケイン……！！？」

ジョシユア「兄さん……？レイ兄さん何ですか！！？」

レイ「ガンソ」「そうだ、ジョシユア」

ヴァン「レイ、お前何やってんだよ？」

レイ「ガンソ」「お前には関係ない」

ヴァン「ああ、俺にも興味はねえ……。だが、邪魔するってんならぶつ潰すまでだ！」

ビゾン「来たな、エクスクロス……。！そして、渡瀬 青葉！ヒナ！カツプリングするぞ！」

ヒナ「了解」

ビゾン「コネクティブ・ヒナ！」

ヒナ「アクセプト……」

青葉「雛！そのピンクのヴァリアンサーに乗っているのは雛なんだろ！」

ヒナ「！」

ビゾン「何をしている、ヒナ！アクセプトだろ！」

ヒナ「あ……。ああ……」

ハーン「外部要因に左右されるとは、まだまだメンタルに問題があるようだね」

ヒナ「くうっ！」

ビゾン「Dr・ハーン！」

ハーン「彼女の障害は取り除いた。もう大丈夫」

ビゾン「気をつける！俺のヒナに何かあったら、どうするんだ！」

ハーン「すまないね」

ビゾン「行くぞ！コネクティブ・ヒナ！」

ヒナ「う、うあああつ！」

敵のヴァリアンサーがカップリングしたのか……！！？

まゆか「敵ヴァリアンサー、カップリングしました！」

エルヴィラ「どう考えても、おかしいわ！あのカップラー、強制的にカップリングされてるとしか思えない！」

アムロ「どういう事です、エルヴィラ博士！！？」

エルヴィラ「エンファティアレベルを上げるための薬物投与……。場合によっては、意識を一方方向に向けるための精神制御……。ヴィルヘルム・ハーンならば、それらの非人道的な方法で無理矢理、カップラーを養成する事もあり得るわ！」

一夏「何て奴だよ……！」

青葉「雖が敵に操られてるって事か！！？」

ヒイロ「そして、そのバディはビゾン・ジエラフィルか……！」

シヤア「だが、敵の中核であるあのカップリング機を突破しなければ、こちらに勝機はない！」

青葉「待ってくれ、シヤア大佐！俺は雛を…。」

スカーレット「ぐだぐだ言っている暇はない！あの子を救いたいのなら、お前がやれ、青葉！」

箒「そのフォローは私達がする！」

アルト「ランカを助け出すのを手伝ってくれた様に俺もお前の手助けをするぞ、青葉！」

アマリ「きつと、あの子も青葉君が助けしてくれるのを待っています！」

零「行け、青葉！他の敵は俺達に任せて、お前は大切な女を救ってみせろ！」

ワタル「フアイトだよ、青葉さん！」

アスナ「救ったら、しっかりと手を握って上げるのよ！」

青葉「みんな…。」

ディオ「雛がカップリング機に乗っていたのは想定外だったが、それ以外は当初の予定通りだ」

青葉「手を貸してくれるのか、ディオ？」

ディオ「そのつもりだ」

青葉「でも、相手はカップリング機でアメリカ軍を壊滅するぐらいの力で…。」

ディオ「自信がないなら、引っ込んでろ！」

青葉「何っ!?？」

デイオ「あんな無理矢理のカップリングに俺達が負けると思うか？」

青葉「……負けねえ！」

デイオ「決まりだ！行くぞ！」

青葉「ああ！」

倉光「彼等の覚悟も決まったようだね」

フリット「各機へ！カップリング機を突破しなければ、我々に勝機はない！」

ノブナガ「片方を止めれば、カップリングも止まる！どちらかに攻撃を集中させろ！」
ルリ「6分以内にゾギリア軍を突破して、ゴーゴンを破壊できないと私達の負けです」

スメラギ「各機はそれを忘れないでね！」

アルフリード「各機はカップリング機を中心に、エクスクロスを迎撃しろ！」

ビゾン「行こう、ヒナ！渡瀬 青葉を殺すんだ！」

ヒナ「スラーヴァ・ゾギリア」

青葉「待つてろよ、雛！今、行くからな！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 ヴァンVSレイ「ガンソ」〉

ヴァン「お前、ミスルギなんかについてかぎ爪への復讐はどうするんだよ？」

レイ「ガンソ」「心配しなくとも奴は俺がこの手で殺す…！」

ヴァン「いいや、奴を殺すのは俺だ！」

レイ「ガンソ」「いい機会だ、ここでお前を消せば、かぎ爪は俺が殺せる」

ヴァン「奇遇だな、俺も同じ事を考えたぜ…。悪く思うなよ、レイ！」

〈戦闘会話 カロツサorメリツサVSレイ「ガンソ」〉

レイ「ガンソ」「お前達がかぎ爪を裏切るとはな」

カロツサ「俺達を、殺した奴…！」

メリツサ「今度は負けない…！」

レイ「ガンソ」「あの時と気迫が違う…。これは気を抜けばこちらがやられるな…。」

ダン・オブ・サーズデイの攻撃でヴォルケイン・改はダメージを負った。

レイ「ガンソ」「ここまで持てば十分か…。後退する…。(後は時間の問題だ)」

ヴォルケイン・改は撤退した。

ヴァン「……レイ、お前……」

ジョシユア「（今の戦い、兄さんは全力じゃなかった……。いったい、どうして……）」

〈戦闘会話 シンVSレイ「Destiny」〉

シン「レイ！戦いたくない人間を操ってまで戦わせる奴の味方に着くのかよ！」

レイ「Destiny」「それが今の俺に与えられた命だ！」

シン「この世界にデユランダル議長はいない！お前はお前の意思で生きればいいんだよ！」

レイ「Destiny」「これが……俺の意思なんだ……！」

〈戦闘会話 キラorアスランVSレイ「Destiny」〉

レイ「Destiny」「キラ・ヤマト、アスラン……。シンとルナマリアを狂わせた

元凶……。！今度こそ俺が引導を渡す！」

アスラン「俺達の戦いは終わった……。！もう俺達が戦い合う必要はないだろ、レイ！」

レイ「Destiny」「終わっていない……。！何一つとして！」

キラ「やろう、アスラン」

アスラン「キラ：：」

キラ「これが僕達に与えられたすべき事なんだ：：。シンのためにも：：。未来を託してくれたデュランダル議長のためにも：：。僕達は負けない！」

デイスティニーガンダムはアロンダイトでレジエンドガンダムを斬り裂いた。

レイ「Destiny」「ダメージが限界を超えたか：：。！後退するしかないのか：：」

！（これで終わりだ、シン。そして、ビゾン、ヒナ：：。必ず救い出すから待っている）
レジエンドガンダムは撤退した：：。

ステラ「シン、あの人：：」

シン「ああ：：。本当に不器用な奴だな、お前は：：」

〈戦闘会話　　ゴークアイレッドVSバスコ〉

バスコ「先にはいかせないよ、マベちゃん達！」

ゴークアイブルー「通してくれなくてもいい：：。無理矢理にでも通るだけだ」

ゴークアイピンク「それが海賊ですから！」

ゴークイレッド「そういう事だ……。覚悟しろ、バスコ！」

カンゼンゴークイオーの攻撃でグレートバスコはダメージを負った。

バスコ「さっすがにまずいね……。ここは退くとするよ……。じゃあね」

グレートバスコは撤退した……。

ゴークイレッド「(バスコ……。お前はまだ本気を出しちやいなえ……。一体何を考えてやがるんだ……。?)」

トールギスIIIのメガキャノンでアルシエルはダメージを負う。

アルフリード「ここまでか……。！後退する！(エクスクロス……。この様な事を言えた義理ではないが、今日ばかりは健闘を祈る。そして、ビゾン、ヒナ……。死ぬなよ)」

アルシエルは撤退した……。

ゼクス「(アルフリード・ガラント……。今回も、その真意は聞けなかったか……。)」

〈戦闘会話 シンVSビゾン〉

シン「青葉の元へはいかせるか！」

ビゾン「シン・アスカ……。何処までも邪魔を！」

シン「俺が言えた義理じゃない……。だが、過去に……。憎しみに囚われたまま戦うのはもうやめろ！」

ビゾン「黙れ……。お前には関係のない事だ……。！俺の……。邪魔をするなああつ？！」

〈戦闘会話 フリットVSビゾン〉

フリット「お前も大切な存在に縛られているのか……」

ビゾン「知った様な口を！貴様に何がわかる!?？」

フリット「経験者だからだ。だが、お前はまだ若い……。この様な老いぼれよりもまだ早くやり直せるんだ！」

〈戦闘会話 リディVSビゾン〉

リディ「お前の気持ちはわかる、だが……」

ビゾン「情けの言葉なんて必要ない！俺はヒナと共にお前達を倒す！」

リデイ「… 止めなければ…。君は俺の様になってはいけない!」

〈戦闘会話 ヴァンVSビゾン〉

ヴァン「いい殺気だ。やっぱり、愛する女のために戦う奴は違うな」

ビゾン「そうだ。だからこそ、俺は負けない!」

ヴァン「だが、まだお前の愛している女は生きてる…。それに女を無理矢理、戦わせるなんて気に入らねえんだよ!」

ルクシオンネクストとブラディオンネクストのカップリング攻撃でネルガルにダメージを与えた。

ビゾン「うおおおっ!ヒナアアアアアッ!!?」

ネルガルの出力が落ちた…? ?

デイオ「デカップリングした!」

ミシエル「今だ、青葉!」

青葉「雛!!?」

カルラも止まった!

青葉「よし！ 雛も止まった！ 雛！ 俺の声が聞こえるか！」

ヒナ「ああ……ば……。青葉！」

ジャンボット「デカップリングの影響で正気を取り戻したか！」

青葉「待ってろ、雛！ 今、行く！」

ビゾン「渡瀬 青葉！ ヒナは渡さん！ Dr. ハーン！ もう一度、カップリングだ！」

ヒナ「やめて、ビゾン！」

ビゾン「何を言っている、ヒナ？？ お前はゾギリアを裏切るのか？？」

ヒナ「Dr. ハーンにおかしな薬を打たれてからもおぼろげに記憶がある……。人の心を操ったり、無差別に市民を攻撃したりするようなゾギリアは私の愛したゾギリアじゃない！ お父様も嘆いていた！ ゾギリアがおかしな風が変わっていくのを！」

ビゾン「ヒナ！ 連合につく気か！」

ヒナ「違う……。私は……。本当の事が知りたい……」

青葉「雛……！」

ヒナ「私は幼い頃の記憶がない……。もしかしたら、青葉の言っていた弓原 雛という子が本当の私かも知れない……。だから、私は……。！ 青葉と行く！ お父様と私の愛したゾギリアはもうこの世にないから！」

ビゾン「ヒナアアアアツ！！？」

ハーン「大丈夫だ、ジェラフィル中尉。君の機体には、様々な試験的な装備が搭載されている。その一つとして、リヤザン少尉のカップリングを強制する機能もある」

エルヴィラ「ハーン！あなたはカップラーの意思を無視したカップリングを可能としたのね！」

ハーン「エルヴィラか……。君の開発したコックピットシステムは見事だったよ。だが、そのように既成概念に囚われるのは科学の進歩を止めてしまうな」

ビゾン「やるぞ!!? コネクティブ・ヒナ！」

ヒナ「あああああっ！」

青葉「雛！雛ーっ!!?」

ヴァン「あの野郎……！」

リディ「ここまでで彼女へ対する想いが強いのか……！」

アイーダ「ですが、あの紫の機体を落とせば……！」

エルヴィラ「ダメ！この状態で刺激を与えれば、彼女の精神が破壊される可能性もある！」

ディオ「じゃあ、どうすれば……!!?」

青葉「雛！今から俺達でカップリングするぞ！」

ヒナ「え……」

青葉「大丈夫だ、雛！俺を信じてくれ！」

ヒナ「青葉……」

ビゾン「うおおおつ！コネクティブ・ヒナアアアアツ!!？」

ディオ「行け、青葉！」

青葉「コネクティブ・雛！」

―渡瀬 青葉だ。

俺と雛は金色の空間にいた。

ヒナ「青葉……」

青葉「雛……」

ヒナ「私は最初、あなたを憎んでた……」

青葉「そうだな」

ヒナ「でもあなたは、私をずっと信じてくれていた……。だから今度は、私があなたを信じるわ、青葉」

青葉「雛……！」

ヒナ「アクセプション」

―新垣 零だ。

この気配……来たか……！

現れたのはナイトメア・ゼフィルスとガルド部隊だった。

リオン「オニキスだと……!?」

零「今回はお前一人か、ラゴウ？」

ラゴウ「ほう……今日はお前なのか」

零「な、何……？」

マリア「オニキスもしつこいわね」

違う方向からスペリオルが現れた。

零「スペリオル……マリア、さん……？」

マリア「ええ、そうよ。零」

何だ、マリアさんの顔を見ると頭、が……!??

零「あ……ああ……グアアアアツ!!?」

ま、また記憶が……！

メル「零さん！」

ゴーカイシルバー「零君に何を!?」

マリア「別に何もしていないわ、そろそろだし……」

零「え……」

い、痛みがひいた……？

ラゴウ「あくまでも邪魔をされるつもりですか、マリア様？」

マリア「私がここに出て来た時点でわかるでしょう、ラゴウ？」

ラゴウ「だったら、今度こそあなたを……！」

零「待て、ラゴウ！この人には沢山話があるんだ！」

ラゴウ「お前の事など知った事か！マリア様もろとも消す！」

マリア「あら、零？私もあなたを狙っているのよ？」

零「だったら、止める！そして、話を全て聞かせてもらう！」

ホープス「マスター、気をつけてください」

アマリ「来たのね！」

ワース・ディーンベルとルーン・ゴーレムにディーンベルか……！

魔徒教団も来たようだな……！

アマリ「法師セルリック！」

セルリック「アマリ・アクアマリン、そして、エクスクロスとオニキス……。お前達

は……目障りだ」

バーン「ミスルギの時も思ったが、奴のまとう空気が変わった…？」
C・C「(何だ、あれは…)」

アマリ「法師セルリック…。今はあなたと戦うよりもゴーゴンを止める事を優先します」

ラゴウ「貴様達、魔従教団に構っている時間はない」

セルリック「俺を…無視するなああつ!!？」

零「な、何…!!？」

マリア「この気迫は…!!？」

マサキ「何だ、ありや!!？」

アマリ「嘘…。あんな量のオドが収束するなんて…。あれが…法師セルリックの力…」

ラゴウ「(いや、この力は奴の物というよりも…)」

セルリック「アマリ・アクアマリン！教主の座はお前には渡さない！」

デイオ「まだか、青葉！」

青葉「今、届いた!!？」

ヒナ「アクセプション！」

青葉「雛！」

カルラが自由になったのか！

ヒナ「私はあなたの言う弓原 雛ではないのかも知れない……。でも、青葉……。私はあなたといきます」

まゆか「し、信じられません！三人でカップリングしています！」

エルヴィラ「青葉君とディオの完璧なカップリング……。それは二人の人間が一人になったと言える……。！あのゾギリアの少女は、その一人になった人格とカップリングしているんだわ！」

ビゾン「何故だ、ヒナ？！何故だあああつ？！」

すると、ネルガルに銃撃が襲う。

ビゾン「こ、今度は何だ？！」

銃撃を放ったのは……。ヴォルケイン・改……。？

レイ「ガンソ」「これがお前の彼女への対する想いが間違っていた証拠だ」

ジョシユア「兄さん！」

ビゾン「レイ・ラングレン……。！貴様も俺の邪魔をするのかあああつ？！」

ハーン「大丈夫だ、ジェラフィル中尉。君には別の力を与える」

ネルガルに力が……。？

ビゾン「うおおおおおつ？！」

ユイ「一人でカップリングを起動させた!!?」

レナ「エルヴィラ博士!これはどう言う事なの!!?」

エルヴィラ「わからない…。どうなってるの、これは…。!!?」

ハーン「スタンドアローンモードさ」

エルヴィラ「スタンドアローン?!?カップリングとは違うの?!?」

ハーン「システム内に造り上げた擬似人格とのリンクでカップリングを発生させるの

さ!まだ試作段階だけど、うまくいったようだ」

ビゾン「うおおおおおっ!ヒナ!渡瀬 青葉!俺は…。俺はっ!!?」

レイ「Destiny」
「もうやめろ、ビゾン!」

レジエンドガンダムが現れた…。!!?

シン「レイ!」

レイ「ガンソ」
「来たか、レイ・ザ・バレル」

レイ「Destiny」
「ビゾン、俺がお前を止める…。!」

ビゾン「俺の邪魔をするな、レイイイイイツ!!?」

銃撃がレジエンドガンダムを襲おうとするが、それをデイスティニーガンダムとイン

パルスガンダムが防ぐ。

レイ「Destiny」
「シン、ルナマリア…。」

ルナマリア「無事よね、レイ!?」

レイ「Destiny」「何故、俺を庇った…?俺は…」

シン「うるさい!何であつてもお前は俺達の仲間であつて俺の大切な友達だ!」

レイ「Destiny」「シン…」

シン「だから、お前が止めようとしている相手は俺達も一緒に止める!それでいいだろ!?」

レイ「Destiny」「フツ… 負けたよ、お前達には…」

ルナマリア「レイ…」

レイ「Destiny」「ならば、頼む、二人共…。ビゾンを助ける為に力を貸してくれ…!」

シン「おう!行くぞ!」

デイスティニーガンダム、インパルスガンダム、レジエンドガンダムは同時に仕掛けた…。

シン「憎しみを止めてやる…。絶対に!」

3機は一斉に動き出した。

ルナマリア「さあ、張り切って行くわよ!」

シン「やってやるさ!」

レイ「Destiny」「フォローは任せろ！」

3機はそれぞれ、ライフルやドラグーンでネルガルを牽制する。

ルナマリア「このおっ！」

シン「ルナ、ソードシルエットで！」

レイ「Destiny」「こちらにもエクスカリバーを！」

ルナマリア「トドメよ！」

レイ「Destiny」「各機、突っ込むぞ！」

ルナマリア「はああああっ！」

まずはエクスカリバーを装備したインパルスガンダムとレジエンドガンダムがネルガルを斬り裂いた。

シン「これで、終わりだ！」

最後にアロンダイトを構えたデイスティニーガンダムがネルガルを突き刺した。

シン「いつけええええっ!!？」

ビゾン「レイイイイイ！：：！シン・アスカアアアアッ！」

そして、突き刺したまま、突撃し、ネルガルに大ダメージを与えた。

ビゾン「何故だ：：何故、俺の邪魔をするんだ!!？」

ヒナ「ビゾン：：」

青葉「やるぞ、雖！俺達の力で、あいつを止めるんだ！」

デイオ「青葉！俺もいるのを忘れるな！」

青葉「最高のバディを忘れてなんているものか！」

ビゾン「殺してやる……！殺してやるぞ、二人共！」

ヒイロ「ビゾン・ジェラフィル……。感情に従う事と感情に吞まれる事は違う」

シン「もう憎んだりするのはやめるんだ！」

レイ「Destiny」「お前はそんな人間ではなかったはずだ！」

ビゾン「黙れ、ヒイロ・ユイ！シン・アスカ！レイ！お前達に俺の何がわかる!!?俺

は……ヒナを守りたかつたんだ!!?」

リデイ「守る、だと……?」

フリット「お前は何もわかっていない！」

ヴァン「お前のしている事はその女自信を傷つけているだけだろ！」

レイ「ガンソ」「それは彼女を縛り、自由をなくしているだけだ」

ビゾン「黙れ…… 黙れ黙れ！」

ヒナ「ありがとう、ビゾン……」

ビゾン「ヒナ……」

ヒナ「だから、ビゾン……！あなたは私が止める！」

青葉「違うぜ、雛。俺とディオの三人でやるんだ！」

零「青葉！ディオ！ヒナ！オニキスと魔徒教団はこつちに任せて、お前達はあの人を止めろ！」

アスナ「もう時間もあまりないわ！お願い！」

青葉「ああ、任せとけ！あいつとは決着をつけなきゃならない！」

ビゾン「渡瀬 青葉！」

青葉「どういう理屈かわからないが、お前…あの時の奴だよな…」

ディオ「あの時…？」

青葉「だから、俺はお前を止める。お前を止める事が、きっと雛を救う事になるんだ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSマリア〉

零「行きますよ、マリアさん！」

マリア「ええ、いいわよ。来なさい、零！今度は全力で相手をしてあげるわ！」

零「（この人なら知っているはずだ…。ずっと俺の頭によぎる記憶の事…その真実を！）」

俺はスペリオルにダメージを与えた。

マリア「くっつ：：！ここまでゼフィルスの力を引き出せているなんてね：：！」

零「おとなしく投降してください！」

マリア「それは出来ないわ：：。まだその時じゃないもの」

零「その時じゃない：：？」

マリア「じゃあね、零」

そう言い残し、スペリオルは撤退した：：。

やっぱり、あの人は俺の何かを知っている：：。あの口ぶりだといずれわかるって事なのか：：？

〈戦闘会話 零VSセルリック〉

零「お前：：。本当にあのセルリックなのか：：？」

セルリック「何を訊のわからない事を：：。お前はここで滅する、新垣 零！」

零「俺だつて、簡単に消えるわけにはいかねえんだよ！」

ゼルガードの攻撃でワース・デインベルはダメージを受けた。

セルリック「フ……。フフ……。ハハハハ!!？」

アマリ「法師セルリック……。？」

セルリック「ぬるい！ぬるい、ぬるい、ぬるい、ぬるい！ぬるいな、アマリ・アクアマリン！お前ごときの力で教主の座をつかめると思うなよ！魔徒教団の教主……。！それに相応しいのは、このセルリック・オブシディアンだ！」

そう言い残し、ワース・デインベルは撤退した……。

アマリ「法師セルリック……。どうして……」

マサキ「アマリ！あいつが言っていた教主ってのは何だ!!？」

アマリ「後で話します！今は、あのゴーゴンを止める事に全力を傾けましょう！」

ホープス「（法師セルリック……。ついに目覚めたのですね……。）」

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

ラゴウ「確かに前よりかは強くなった様だが、俺に勝てるのか？」

零「勝てるかじゃない……。勝つんだ！お前に勝てないと……。首領にだって勝てないん

だからな！」

ゼフィルスの攻撃でナイトメアにダメージを与えた。

ラゴウ「なる程、やはりお前は強い……。だが、その力はお前だけのものではない」

零「何だと……。？　どういう意味だ？！」

ラゴウ「いずれしれ……。そして、もつと強くなれ、零」

そう言い残し、ナイトメアは撤退した……。

零「ラゴウ……。お前も俺の何かを知っているのかよ……。？」

〈戦闘会話　レイ「Destiny」VSビゾン〉

ビゾン「お前も許さないぞ、レイ！　俺の邪魔をする者は誰であろうと殺す！」

レイ「Destiny」「そんな事はさせない……。何度でも俺がお前を止めてやる！」

〈戦闘会話　レイ「ガンソ」VSビゾン〉

ビゾン「レイ・ラングレン……。！　貴様の裏切りさえなければ……。！」

レイ「ガンソ」「ビゾン・ジエラフィル……。お前は大切な者を失わないためにも此処

で正氣に戻す……。俺は、それぐらいしかしてやれないからな……。！」

ルクシオン・ネクストとカルラのカップリング攻撃でネルガルは大ダメージを負った。

ビゾン「馬鹿な！馬鹿なあああつ!!?!」

ヒナ「ビゾン……」

青葉「もうあいつは戦えない！」

ディオ「急げ！ゴーゴンを破壊するぞ！」

倉光「各機、ゴーゴンに火力を集中させろ！」

俺達はゴーゴンを攻撃した。

カガン「いかん！これねはガラプーシカが！」

ハーン「カガン中尉、ガラプーシカを発射したまえ」

カガン「しかし、エネルギーの充填が不完全な状態では……。！」

ハーン「此処で撃たなければ、連中にガラプーシカが破壊されるだけです。さあ……

！」

カガン「……ガラプーシカ、発射だ！」

ミツヒデ「まずい！奴等は無理矢理、巨大砲を撃つつもりだ！」

ウー「そうなる前に潰す！」

俺達はさらにゴーゴンを攻撃した。

カガン「だ、だめだ！ガラプーシカのエネルギーが逆流する！」

よし！ゴーゴンが爆発した！

… って、何だ…？ ゴーゴンの前に時空の右図のようなものが…！

青葉「何だ、あれは…？」

まゆか「特異点です…！特異点が発生しました！」

ワタル「何なの、特異点って…？」

エルヴィラ「無限大の重力の場よ！そこでは時間も空間も意味を成さないわ！」

まゆか「重力異常増大！内部質量、級数的に増加中！」

ビゾン「う、うああああっ！！？」

ネルガルが特異点に吸い込まれていく…！

レイ「Destiny」「ビゾン！」

ディオ「あのカツプリンク機、特異点に吸い込まれるのか！」

青葉「わかった…！全て分かったぞ！」

鈴「何が分かったのよ、青葉…？」

青葉「俺も、あの特異点って奴に入って、70年後の世界に跳ばされた！あれはタイ

ムトンネルなんだ！」

ヒナ「タイムトンネル!?？」

青葉「あのビゾンって奴、あれに呑み込まれて70年前に跳ばされて俺を襲ったんだ！」

ヒナ「青葉が襲われる……。タイムトンネル……。そうか……。！」

カルラが特異点に近づいた……。!??

青葉「雛!?？」

ディオ「何をする気だ!?？」

ヒナ「青葉……。あなたの言う通りだったわ。ビゾンが70年前に跳ばされるなら、私も行かなくてはならない。70年前の世界であなたをビゾンから救い、そして、ディオと引き合わせるために」

青葉「そんな事したら……。！」

ヒナ「そう……。歴史は繰り返される……。私は70年前の世界に跳び、あなたを救って、その後、今から10数年前の世界に戻る……。記憶を失い、身体は子供に戻ってヴィクトル・リヤザンに育てられ、敵としてあなたに会う……。そして、またあなたを救うために70年前へ跳ぶ……。！」

エルヴィラ「閉じた時間の環……。繰り返される運命……。！」

青葉「それが…。雛の運命…。雛はずっとずっと同じ事を繰り返して、そして俺はいつも雛を止められずに…。」

ヒナ「またね、青葉…。」

青葉「行くな、雛！繰り返しは終わりだ!!？」

ヒナ「何言ってるの!!？私が行かないと、ビゾンがあなたを殺しに来るのよ！」

青葉「わかってる！でも…。」

つ…。！ウイングゼロのゼロシステムが発動した…。!!？

ヒイロ「今、全てが繋がった」

デュオ「何言ってるんだ、お前！こんな時に！」

ヒイロ「ゼロが教えてくれた。繰り返す時間の環を断ち切る方法を」

青葉「本当か、ヒイロ！」

ヒイロ「青葉…！お前は、あの女を救え！」

青葉「わかった!!？」

そして、ウイングゼロはネルガルの前に、ルクシオン・ネクストはカルラの動きを止めめる。

ビゾン「ヒイロ・ユイ！」

ヒイロ「ビゾン…！お前を解放してやる！」

ビームサーベルでネルガルを弾き飛ばした…!??

ビゾン「ぐうつ!!?」

ヒイロ「ビゾン・ジェラフィル…。不完全だが、お前にゼロの出した推論を送る…。

後はお前次第だ」

ビゾン「くそおおおつ!!?」

ネルガルが撤退した…。

ハーン「おおつ!!?」

ヒイロ「これで時間の環は断ち切られた」

ディオ「あの男が過去に跳ばなかったという事は…。」

青葉「俺は襲われないから、雛も過去に行く必要はない!」

サコミズ「歴史が変わるといふのか!!?」

エイサツプ「どうなるんだ、それ!!?」

青葉「わからねえ!わからねえけど、雛!お前は解放されたんだ!」

ヒナ「青葉!」

まゆか「特異点の範囲拡大!この周辺を呑み込みます!」

倉光「各機、回避だ!急げ!!?」

メル「ダメです!間に合いません!」

俺達は特異点の光に包まれた……。

ーヴイルヘルム・ハーンだ。

カガン「全て……消えた……」

ハーン「その結果は果たして……」

すると、通信が入った。

エフゲニー「私だ」

ハーン「おめでとうございます、局長。無事に世界は分岐したようです。ここからは誰も知らない明日……。あなたの思い通りの未来なのです」

ーエフゲニー・ケダールだ。

私は魔徒教団の神殿内にいた。

エフゲニー「……この時をずっと待っていた……」

導師キールデイン「……」

エフゲニー「ヒナ・リヤザンの繰り返される運命……。その中でビゾン・ジエラファイル

の果たす役割は共に70年前の過去へ跳ぶ事であった」

導師キールデイン「ですが今、ビゾン・ジエラファイルもヒナ・リヤザンも過去へと跳ばなかった……。繰り返される運命の環は断ち切られたのです」

エフゲニー「そう……。だが、俺はこうやって存在している……。繰り返される運命の環の中……。70年前の世界からヒナと渡瀬 青葉が特異点を通り、今という時代に来る時……。ビゾン・ジエラファイルは特異点からはじき出され、70年前の世界に取り残される事になった……」

導師キールデイン「そして、彼は憎しみと共に70年の時を生きる……。エフゲニー・ケダールと名乗って」

エフゲニー「そう……。それが俺……。ビゾン・ジエラファイルの運命だった」

導師キールデイン「いかががします、エフゲニー・ケダール。これからは本当の名……。ビゾン・ジエラファイルとお呼びしましょうか？」

エフゲニー「いや……。今更の話だ」

導師キールデイン「繰り返される運命の環の中であなたが……。エフゲニー・ケダールが存在するためには、ビゾン・ジエラファイルが特異点に呑まれる必要があった。そのためあなたにはアル・ワースへの門が開かれた後も、そこは同じ歴史を歩むように調整してきた」

エフゲニー「もし、ビゾン・ジエラフィルが特異点に飲み込まれる前に死亡していたり、他の要因が揃わなかったりした場合……。ビゾンが過去に跳ばない事によって俺という人間の70年の人生が存在しない事になるからな」

導師キールディン「ですが、並行宇宙の概念で見れば、それは正しくはありません。ビゾン・ジエラフィルが過去へ跳ばなかった場合でも、既にあなたが存在している以上……。それは時間の環とはならず、別の並行宇宙が誕生し、ビゾンとエフゲニーは別の人物として存在するだけです……。そう、アムロ・レイとリボンズ・アルマークの様に……」

エフゲニー「知っているさ。だが、俺達の生きてきた世界は並行世界への分岐が許されなかった……。世界そのものが時間の環の中にあり、タイムパラドクスという矛盾が発生する宇宙……。そこはエンブリヲによって管理された閉じた世界だった」

導師キールディン「ドラグニウム……。聖獣の力を使い、調律者を自称する男の実験場……。それが、あなた達のいた世界……。つまり、あなたとヒナ・リヤザン……。いや、渡瀬 青葉も何もかもが繰り返される運命の中にいたわけです」

エフゲニー「俺達の世界でウルトラマンキングが何度か、世界の修復を行おうとした……。だが、エンブリヲはウルトラマンキングの力が通らない様に結界を張った……。そのカラクリを教えてくれた教団には感謝している」

導師キールデイン「それには及びません。世界の理を歪めるエンブリヲの存在は放置できないものでしたから。彼を支援したのは世界に戦いを起こすために過ぎません」

エフゲニー「あの男は、玩具であつた俺達の世界にも、自分の住むアル・ワースにも飽きていた……。だから、新しい世界を創るための協力者を集め、その目処たつてからは世界に破滅を起こそうとした」

導師キールデイン「調律者を気取りながら、子供のような身勝手さを持つ者……。それがエンブリヲという男の本性でしょう」

エフゲニー「俺は俺自身の存在が確立するまで、奴の下に甘んじるしかなかった……。だが、エクスクロスはビゾン・ジエラファイルが過去に跳ぶ前にエンブリヲを始末してくれた」

導師キールデイン「そして、彼等の手により繰り返される運命の環は断たれた……。エフゲニー「だが、俺は生きています！エンブリヲの管理から俺達の世界は解放され、並行世界が誕生したのだ！」

導師キールデイン「あなたの世界とアル・ワースが接触した事も含め、ここからは誰も知らない未来です」

エフゲニー「わかつている。だが、どんな事になろうと俺は俺の手で渡瀬 青葉とヒナに復讐する！」

導師キールデイン「その意思は理解しました。引き続き、魔従教団はあなたに協力しましょう。エクスクロスの行方についてもすぐに調査します」

エフゲニー「何故、俺に手を貸す？」

導師キールデイン「そうする事が必要だからです。このアル・ワースの存続のためにもより大きな混乱が必要とされる……。あなたには、その力となつてもらいます」

フフフ……。いいだろう……。！

ー氷室 弘樹だ。

？「エクスクロスが特異点と呼ばれるものに呑み込まれた様だな」

弘樹「何処に行ったのか、わかるのか？」

？「勿論……。その事でお前に命令を与える」

命令だと……？

？「その世界で……。お前が新垣 零をひっ捕らえろ」

弘樹「！」

？「嫌とは言わせないぞ……。白木 優香がどうなつてもいいのなら、なくそッ……。！

弘樹「わかってるっての……。俺が零を捕まえてきてやるよ！」
俺はそれを言い残し、部屋を出た……。

悪く思うなよ、零……。これも優香のためなんだ……。

? 「…… 奴もそろそろ捨てどきなのかもしれないな……。あいつの穴はお前達に埋めてもらうぞ」

カノン「…… はい」

優香「…… 了解しました……」

サファイアと優香が部屋にいた事も気づかずに……。

第56話 俺／私の大切な場所

―新垣 零だ。

目を覚ますと俺は見慣れた場所にいた。

零「…こ、此処は…俺の、世界…？」

特異点に吞まれて、俺は…元の世界に戻ってきたのか…？

零「そうだ！エクスクロスのみんなは…!?？」

周りを見渡すが、エクスクロスのメンバーは誰もいなかった…。

それに周りの人が俺をジロジロと見ている。

… おそらく、今の服装のせいだろう。大方、コスプレをしている男と思われている

だろうな…。

零「それにしても…どうして、俺の世界に繋がったんだ…？いや、そんな事より

も今はエクスクロスのみんなを探さないと！…っ…！」

な、何だ…？また、記憶が…いや、違う…。これは…！

葵 伊織… 樹咲 明日菜… 鮎川 芽流… 結城 花音…そして、天野、亜真

里…!??

そうだ…… 思い出した……！ずっと感じていた違和感……。アイオライトやアスナ、メルやカノン・サファイアの事……。そして、アマリの事も……！
あいつ等とは何処かで会った様な感じがした……。いや、会っていたなんてものじゃねえ……。

特にアスナは俺の……。俺の……！

零「とにかく、みんなを探さないで！」

俺はみんなを探すために走り出した……。

ーアマリ・アクアマリンです。

私は目を覚ますと街中にいました。

アマリ「！…… ここ…… 何処です……？アル・ワースではないようですけど……」

私達…… 確か、ゾギリアのゴーゴンを破壊して……。あそこで発生した特異点に呑み込まれて転移したんですか……。

すると、市民の方々が私に声をかけてきました。

市民「お姉さん、コスプレ？」

アマリ「ええと…… そうじゃなくて……。これはね…… 旅装束って言って旅をする人

の格好なのよ」

市民2「変わったフアッションね……。写真に撮って、SNSにアップしていい？顔は写さないから」

アマリ「SNS……。ソーシャル・ネットワーキング・サービス……」

インターネットを使った個人間のコミュニケーションの場……。どうして私……。そんな事を知っているの……？

市民2「どうしたの？顔色、悪いわよ……」

アマリ「すいません……。ここは……。ううん、今は西暦何年ですか？」

市民3「え……。20XX年だけど……」

アマリ「20XX年……。何？」

じゃ、じゃあここは……。零君の……。平穩の世界なの……？

で、でも何なの……。この違和感は……！

市民3「お、おい……。大丈夫か？そんなに驚いて……」

アマリ「すいません……。失礼します……」

私は市民の方々に頭を下げ、その場を歩き去りました……。

市民「何なんだ、あれ……。？」

市民2「変な子……」

あたりの風景を見て、わかった……。まだ頭ははつきりしないけど、感覚は覚えてい
る……。この公園……。よく散歩に来てた……。あのランニングコース……。クラスの子が、
よく走ってた……。

零「アマリ……！」

目の前に零君が走って来ました……。

―新垣 零だ。

やっと、アマリを見つけた……！

零「アマリ……！」

アマリ「零君！零君なの……？？」

零「ああ……」

どうやら、無事なようだな……。

零「アマリ、他のみんなは……？？」

アマリ「わからない……。私も目を覚ました時は私しかいなかったわ」

零「そう、か……」

アマリ「それよりも零君……。私は……」

零「……言わなくていい……。俺も……思い出したからよ。天野 亜真里さん」

アマリ「うん、新垣 零君……」

零「漸く、本当のお前と出会えたってわけか」

アマリ「ふふっ！何だかおかしな感じね」

零「そうだな」

俺とアマリは笑いあつた。

零「アマリ……実は俺は……」

弘樹「久しぶりだな、この公園に来るのは……」

零「弘樹……！」

弘樹「よう、零……。それと……天野も久しぶりだな」

アマリ「氷室、君……！」

零「まさか、お前も記憶が……!?」

弘樹「ああ。全部、思い出させたぜ……。そんな事、どうでもいいがな」

どうでもいい、だと……？

弘樹「零、ゼフィルスを呼べ」

零「何……!?」

弘樹「オニキスの首領からお前を捕まえてこいと命じられたんだよ。丁度、お前とは

決着をつけたかったし、俺達をよく知る此処でケリつける方がいいだろ」

零「何故だ：：？ お前は何故、オニキスに手を貸すんだ！！？」

弘樹「その理由を知りたきや、俺に勝つんだな」

零「：：」

アマリ「零君：：」

零「わかった：：。受けてたつてやるよ」

アマリ「そんな、零君！」

弘樹「それでこそ零だ！」

零「アマリ、下がっていてくれ：：。大丈夫、すぐに片付けて帰って来るよ」

アマリ「うん：：」

俺の言葉に頷いたアマリが下がったのを見て、俺は弘樹の前に立ち、睨み合った。

零「俺に喧嘩を売った事、後悔すんなよ、弘樹：：！」

弘樹「後悔すんのはお前の方だつての、零！」

俺と弘樹は同時に息を大きく吸い込み：：。

零「ゼファイルス！！？」

弘樹「ヴァリアス！！？」

ゼファイルスとヴァリアスを呼んだ：：。

第56話 俺／私の大切な場所

時空の渦からゼフィルスとヴァリアスが現れて、俺達はそれぞれ乗り込む。

零「本当に何処にでもゼフィルスは来るんだな…。」

弘樹「まあ、そっちの方が助かるけどな！」

零「弘樹…。もう一度言う…。やめる気は無いんだな？」

弘樹「くどい！俺はお前に勝つまでやめる気はねえよ！」

零「そうか…。なら…。覚悟しやがれよ、弘樹!!？」

弘樹「今度こそお前に勝つてやるぞ、零!!？」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS弘樹〉

弘樹「零！お前に黒星をつけてやる！」

零「連続黒星のお前にそんな事を言われても説得力ねえな！」

弘樹「うるせえ！今に見ているよ！」

零「逆に痛い目を見ないように気をつけるんだな！」

ゼフィルスとヴァリアスは互角の戦いを見せていた。

弘樹「このままチンタラやっても埒があかねえ……。これで決めるぞ、零！」

零「望むところだ！」

ヴァリアスはゼフィルスに攻撃を仕掛けた……。

弘樹「零、ケリをつけるぜ！ダーククロスガン……ブラスターモード！」

ダーククロスガン・ブラスターモードの銃口をゼフィルスに向けた。

弘樹「終わりだあああっ!!？」

ダーククロスガン・ブラスターモードから放たれた紫色のビームはゼフィルスに直撃した……。

零「ぐっ……！やるじゃねえか……弘樹……！」

しかし、今の攻撃を耐えきったゼフィルスはヴァリアスに攻撃を仕掛けた。

零「今ので俺を倒せなかったのが、お前の敗因だ……弘樹！」

エボリューションモードの力を使い、俺は高速移動で動き出した。

零「エボリューションモードで決める……！」

俺は速さに乗り、クロスソードで何度もアマテラスを斬り裂き、クロスガンに変えて、撃ちまくった。

そして、クロスソードに戻し、バスターソードモードにした俺はゼフィルスをさらに高速に動かしした。

零「はあああああつっ！」

もはや瞬間移動並みのスピードでバスターソードで何度も斬り裂き、最後にクロスガン・ブラスターモードにした。

そして、ヴァリアスの周りをグルグルと回り、高速移動による分身を作り出す。

零「弘樹いいいいっ!!？」

分身は一斉に最大出力のブラスターモードからビームを放ち、それを受けたヴァリアスは大ダメージを負った。

弘樹「やつぱり強えな、零は……」

先程の攻撃を受け、ヴァリアスは大きく吹き飛ばされた。

零「俺の勝ちだ、弘樹……！」

弘樹「クソツ……！俺は結局、零には勝てないのかよ……！」

零「バーカ……。お前は別に弱くねえよ」

弘樹「え……」

零「さっきの攻撃……今までのどの攻撃よりも効いたぜ」

弘樹「零……」

零「お前みたいなのがバカにそんな顔は似合わねえんだよ。もつとバカらしくしろよ」

弘樹「うるせえ……。バカバカいうんじゃないやねえ……。！バカって言った方がバカなんだからな！」

零「なら、お前ももつとバカってわけだな」

弘樹「あ……。つて、零！引つ掛けやがったな！」

零「あはははっ！」

弘樹「全く……。はははっ！」

アマリ「(零君……。氷室君……)」

零「つて、敗者の弘樹君……。お前がオニキスに所属している理由を聞こうか」

弘樹「実は……。ぐっ……。!?？」

ヴァリアスに銃撃が襲った……。!?？」

零「弘樹！」

この感覚は……。来たのか……。！

現れたのはガラム部隊とアマテラス・ツヴァイだった。

ギルガ「ダメだよ、氷室 弘樹……。負けたからって、勝手な事を話したら」

弘樹「カルセドニー……！」

リン「氷室 弘樹さん……。首領様からの命令であなたを倒させてもらいます！」

弘樹「何だと……!?」

ギルガ「新垣 零を倒せない君はもう必要ないとの事だよ」

弘樹「首領め……！最初からこうするつもりだったんだな……！」

ギルガ「というわけで大人しく死んでよ」

零「……させるかよ」

弘樹「零……」

零「弘樹は……バカだが、俺の大切なダチなんだよ……。どんな理由があろうとこいつは殺させない！」

ギルガ「ならば、氷室 弘樹を倒し、君も連れて行く」

リン「仕方ありません……。覚悟してください！」

零「そういう事だ、弘樹。どうやら、もうオニキスにはお前の居場所はないみたいだ」
弘樹「(優香の事も気掛かりだが、今はこの場を乗り切るしかねえ……！) そうみたいだな……。おい、零。こいつ等を追っ払うために力貸せ」

零「貸してください、零さん、だろ？」

弘樹「なら、力を貸さなくていい」

零「冗談だって……。やろうぜ、弘樹！」

弘樹「ああ……。俺達のコンビネーションを見せてやろうぜ、零！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「やっぱり、弘樹と一緒に戦うとしつくり来るぜ……。だから、ここを切り抜けて、弘樹にはたっぷりと話を聞かせてもらおう！」

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

弘樹「（全く……。本当に零には敵わねえよ……。お前はいつまでも俺の目標だ。これまでも……。そして、これからも……。）」

数分後の事だった。

今度はアイオライトの乗るデインベルとルーン・ゴレムの軍勢が現れた。

零「魔徒教団……！」

アマリ「私を追って来たのですか!?!」

イオリ「その通りだ、アマリ・アクアマリン。どこに逃げようと我々はお前を逃がしはしない!そして、逃げるようなら、この街を焼けとの命令を受けている」

何だと…?!?!

零「ふざけるな!この街はやらせねえ!」

イオリ「今、お前達に構っている時間はない」

ギルガ「アル・ワースと関係ない街なら容赦無く、焼く、か…。魔従教団もなかなか悪だね」

イオリ「何とでも言え、オニキス…。邪魔をするのなら…」

ギルガ「いいや、今回の僕達の狙いは新垣 零と氷室 弘樹だけだからね。アマリちゃんは譲るよ」

イオリ「ならばいい」

アマリ「イオリ君…!」

イオリ「行け、ゴーレム!アマリを捕らえろ!」

零「させるかよ!」

俺達はルーン・ゴーレムを食い止めようとするが…。

市民「きゃあああつ!!?!」

市民2 「怖いよ、ママーッ！」

弘樹との決闘の時は街に被害を出さないようにしたつてのに、このままじゃあ……！

アマリ 「大丈夫よ。悪いモンスターは私達がやっつけるから」

市民2 「お姉さんが？」

アマリ 「そうよ。私……魔法使いなんだから。だから、君はお母さんと一緒に早く逃げて」

市民2 「う、うん……！」

男の子はお母さんと共に逃げ出しました。

アマリ 「やめてください、イオリ君！ここがどこなのか、わかってやってるんですか
!!？」

イオリ 「知った事ではない！俺は法師セルリックの命令でここに来た！」

弘樹 「魔徒教団の記憶改善は強力つて事かよ……！」

何とか街を守ろうと戦っていたが、ルーン・ゴーレムの三体がアマリを取り囲んだ。

零 「アマリ！」

アマリ 「心配ないわ、零君！倒せないまでも、怯ませるぐらいは出来るはずですよ……！
吹き荒れる、嵐！TEMPESTA！」

弘樹 「何やってんだよ、アクアマリンの奴……！」

零「……まさか、ドグマが使えないのか!?？」

アマリ「くっ……！」

イオリ「ついに完全に術士の資格を失ったか……。悲しいな、アマリ。お前に見せてやろう！智の神エンデの加護……。魔徒教団のドグマを！」

アイオライトはドグマを発動して、アマリにぶつけた。

アマリ「ああっ……！」

零「アマリ！」

弘樹「野郎……！」

イオリ「邪魔をするな！」

アイオライトは俺達にもドグマを放った。

零「ぐっ……!?？」

弘樹「くっ……!?？」

リン「強力なドグマです……！」

ギルガ「やるね、イオリ・アイオライト」

アマリ「零、君……！氷室、君……！」

イオリ「堕ちたものだ、藍柱石の術士！雷撃の壱式のドグマにも耐える事が出来ないとはい！許しを請えば、俺から法師セルリックに取り成しを……！」

すると、何処かからドグマが放たれ、アマリの周りを襲う雷撃のドグマをかき消した。イオリ「このドグマは!?？」

アマリ「来てくれたのね…！」

零「全く… お前はいつも遅えんだよ、ホープス！」

すると、ゼルガードが現れ、アマリの前に降りた。

ホープス「お迎えに上がりました、マスター」

アマリ「ホープス…。あなた、ドグマが使えたのね?」

ホープス「私の本来の役目は術士の補助ですのでたしなみ程度ですが」

アマリ「ありがとう、ホープス。あなたがきつと来てくれるって信じてた」

ホープス「ご期待に添える事が出来て、光栄に思います」

零「あ、てめ…！勝ち誇った顔でこっち見るんじゃねえよ！」

ホープス「これはこれは…。マスターの恋人とあろうお方がマスターを守れていな

い零ではないか」

零「し、仕方ねえだろ！相手が多かつたんだからよ…！」

ホープス「数で苦戦するとは、まだまだだな」

零「な、何をお…！そ、それならお前はあまりにも遅すぎるんじやないのか、来る

のがよ！」

ホープス「よく言うだろ、ヒーローは遅れてくるものだ」と

零「ぐつ…！こ、このクソオウム…！」

弘樹「オウムに押し負けてどうすんだよ…！」

アマリ「と、とにかく…行くわよ…！」

アマリはゼルガードに乗り、ゼフィルスとヴァリアスの隣に移動した。

アマリ「イオリ君…。私は…やめてって言ったのに…。それなのに戦うというのなら、相手になります！」

イオリ「何だ、あのオドは…？」

アマリ「ホープス！零君！氷室君！街に被害を出さないためにも出来るだけ早く片付けましょう！」

ホープス「かしくまりました。お気を付けて、マスター」

零「おう！やってやろうぜ、アマリ！」

弘樹「（零とアクアマリンとホープスというオウム…いいチームじゃねえか…）」

イオリ「抵抗する気か、アマリ・アクアマリン！」

アマリ「イオリ君…。あなたは…何も感じないのね…！」

イオリ「何を言っている…？」

アマリ「私は…あなたを止めてみせます！この世界で！」

戦闘再開だ！

数が多いな……！

イオリ「無駄だ！お前達では俺には勝てない！」

アイオライトの奴……ドグマを収束した……！！？

アマリ「何なの、あのオドは……！！？」

ホープス「世界からは、ほとんどオドを感じないのに対し、彼自身からオドがほとばしる……。故に教団は、この世界でもドグマが使えるのです」

アマリ「……」

ギルガ「そろそろ限界じゃないのかい、三人共……！」

零「くっ……！」

ホープス「状況の確認もあります。ここは一度、後退する事をお勧めします」

アマリ「それは出来ない……」

零「俺もだ……！」

ホープス「ここが、マスター達にとって特別な場所だからですか？」

アマリ「それもあるわ……。でも、そんな事は関係なく、街が焼かれるのを黙って見て

はいられない」

イオリ「もうやめろ、アマリ！お前では、俺には勝てない！」

リン「三人で何が出来るというのですか……？いい加減、観念してください！」

零「俺達だけだったら、そうかもしれないな……」

アマリ「でも、私達には一緒に戦ってくれる人達がいます」

すると、エクスクロスの戦艦が現れ、みんなが出撃して来た。

弘樹「エクスクロス……！」

ホープス「彼等も来てくれたか」

零「みんな、無事ですか!?？」

一夏「何とかな！」

ラウラ「あの場にいた人間は全員、こちらの世界にきています！」

シン「レイ「Destiny」もいるぜ！」

ジョシユア「兄さんもいます！」

青葉「もちろん、雛も一緒にだ！」

アマリ「おめでとう、青葉君！ついにやったんですね！」

青葉「今度は零さんとアマリさんの番だ！あのストーカー野郎と女たらし野郎をさっ

さと追い払おうぜ！」

アマリ「ストーリーカーって……イオリ君の事……!?」

零「女たらし……カルセドニーには似合っているな！」

ゼロ「手を貸すぜ、零、アマリ！言葉で言ってもわからねえ奴には力づくでわからせるしかねえんだよ！」

万丈「ミスルギを叩き、ゾギリアの切り札を叩いた今、教団との衝突は避けられない。彼との戦いは、その一歩目だ」

ヒデヨシ「アマリちゃん、昔の知り合いでやりづらいつてんなら、俺達が相手をしてやるぜ！」

アスナ「カルセドニーもここで倒すわ！」

零「アスナ、メル……。お前達も……」

メル「その反応を見るからに、零さんも記憶を取り戻したようですね」

アスナ「それに弘樹まで一緒にいるなんてね」

弘樹「……」

アスナ「まあいいわ。今は目の前の敵をどうにかしないと」

零「アスナ……。後でお前には話がある」

アスナ「ええ、期待して待っているわ」

アマリ「ありがとうございます、皆さん。でも、イオリ君の事は私自身が決着をつけ

なければいけないんです」

ルルーシユ「二人だけがはぐれて転移したが、原因に心当たりはあるか？」

零「… それについては後で話す」

アマリ「まずはイオリ君を止めます…！」

イオリ「出来るものか、お前達に！」

ギルガ「あまり、調子に乗らない方がいいよ」

アイオライトの乗るデインベルはオドを収束させ、カルセドニーはハイバスタードモードを発動した…。

チャム「何なの、あれ!!？」

シルキー「オーラ力…！」

エレボス「ううん、もつと邪悪な何かだよ…！」

トツド「この感覚…！覚えがある！」

バーン「憎しみに支配されていた頃のトツドと同じだ！」

ノブナガ「この前の戦いの時の法師セルリックとも似ている…！」

アマリ「イオリ君のは教団の精神制御によるものなの…！」

イオリ「アマリ・アクアマリン!!？」

アマリ「イオリ君…。あなたとの事…。ここで決着をつけます…。そして、思い出

してもらいます！この街の事…。私達の事も！」

零「行くぞ、弘樹！カルセドニーに達を止めないとこの街が危ねえ…！」

弘樹「ああ。こいつを止めてやる！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話　メルVS初戦闘〉

メル「（私の海に行った記憶…。それは零さんだったんですね…。鮎川 芽流…。
私の、本当の名前…！）」

〈戦闘会話　アスナVS初戦闘〉

アスナ「（樹咲 明日菜…。全部、思い出したわ…。私とメルは…。一年前に…。
この事も零に話さないと…。！）」

〈戦闘会話　零VSイオリ〉

零「アイオライト…。いや、伊織！俺達は戦っている場合じゃねえんだよ！俺達

は……友達だったじゃねえかよ！」

イオリ「気安く名前と呼ぶな！それに俺がお前の友達だと……？バカも休み休みに言え！」

零「クソツ……！やっぱりダメかよ……！」

〈戦闘会話 弘樹VSイオリ〉

弘樹「目を覚ませよ、アイオライト！本当のお前を取り戻せ！」

イオリ「何を訳のわからない事を……！今の俺が本当の俺だ！」

弘樹「だったら、ぶん殴って目を覚まさせるしかねえな……！行くぜ！」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「今日こそ君に引導を渡してあげるよ、新垣 零！」

零「残念だが、俺は負けるつもりはねえ！お前達にも勝って、首領を倒して……アル・ワースを救ってやる！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

弘樹「やっぱり俺にはこっちの方が性に合ってるぜ」

リン「どうして、そう平然としていられるのですか……！」

弘樹「俺が負けるつもりはないと思っっているからだよ、マスカライト……。だから、誰が来ても俺は退かねえぞ！」

ギルガ「退こうが退きまいが関係ないよ。君は倒すだけだ！」

〈戦闘会話　アマリVSギルガ〉

ギルガ「慣れない世界でよく頑張るね、アマリちゃん」

アマリ「確かに、アマリ・アクアマリンとしてはこの世界に未だ馴染んでいません……。しかし、ここは私達の大切な場所です！だからこそ、負けるわけにはいかないのです！」

ゼフィルスとヴァリアスの連携攻撃にアマテラス・ツヴァイはダメージを負った。

リン「これが……。新垣 零さんと氷室 弘樹さんの力……。!?？」

ギルガ「ぐっ……。！このままじゃあ、こちらが負ける……。！」

零「これで終わりだ、カルセドニー！」

? 「いいや、終わらせない」

零「！」

現れたのは：：アルガイヤ：：オニキスの首領だった。

弘樹「首領！」

？「ギルガ・カルセドニーをやられると困るんだよ、新垣 零」

零「だからって、首領自らが出てくるなんてな：：」

ロツクオン「ここであいつを倒せば：：！」

ニール「オニキスは総崩れだな！」

？「そういきり立つな、エクスクロス：：。まずは、氷室 弘樹。組織を裏切った報いを受けてもらう」

弘樹「裏切った：：？よく言うぜ、そっちから裏切ったのによ！」

零「弘樹を狙うつもりか：：！」

？「ああ。だが：：。奴を狙うのは俺ではない。彼女達だ」

すると、アルガイヤの背後に2機の機体が現れる。

一機はジェイル：：！！？そして、もう一機は：：。ピンク色のゼフィルス：：！！？

弘樹「ジェ、ジェイル：：！！？カノンか！！？」

カノン「氷室 弘樹を消去します：：」

な、何：：！！？

ジル「様子がおかしいぞ！」

アムロ「もしや… 洗脳されているのか… ?」

弘樹「洗脳、だと… ? 首領、てめえ！」

？「驚くのはまだ早い…。氷室 弘樹を消すのはお前がやれ、白木 優香」

優香「了解しました、首領様」

零「なっ… ?」

弘樹「ば、バカな… !」

メル「そんな… !」

アスナ「やっぱり… !」

あのピンク色のゼフィールス似の機体に乗っているのは… !

零「優香… ? 白木 優香なのか… ?」

優香「ええ、そうよ。新垣 零」

エイサツプ「優香って…」

ジョーイ「零さんのお友達の… !」

アキト「彼女も操られているのか… !」

零「弘樹、どう言う事だ、説明しろ！」

何で、優香がオニキスに… ?

弘樹「… 俺と優香はお前がアル・ワースに転移した後、転移したんだ。だが、転移

した場所がオニキスの基地だった……」

？「そこで我々は白木 優香を捕らえ、白木 優香を解放する条件を氷室 弘樹に出した」

零「まさか、それが……？」

弘樹「ああ……。ヴァリアスに乗って、オニキスの一員となり……。お前を捕らえる事だ」

零「お前は……。優香を助け出すために俺を襲ったのか……。なんで言ってくれなかつたんだよ……？」

弘樹「言えるなら言っていた！でも、言えば、優香の生命がないって言われて……！」
脅されていたって事かよ……。許さねえぞ、オニキス……！

弘樹「だが、首領！これは約束が違うだろ！優香は戦いに巻き込まないと言っていたじゃねえか！」

？「お前がオニキスを裏切った時点でこの約束は破られた。彼女達はお前の穴埋めとして、働いてもらう」

零「……ま、まさか……。！お前等、最初からそれが目的で弘樹を……！」

弘樹「な、何……。？」

？「流石は新垣 零……。鈍い男とは大違いだ。氷室 弘樹……。お前は俺の掌で踊ら

されていたに過ぎないんだよ」

弘樹「う、嘘だろ……。じゃあ、俺は……。今まで何の為に……。？ 優香を助ける為にダチの零を傷つけて……。多くの人を巻き込んで……。俺は……。俺はなんて事を……。！」

零「しつかりしろ、弘樹！」

？「苦しいのなら、解放してやる。お前が助けようとした白木 優香の手によつてな……。白木 優香、やれ」

優香「了解。カオス・デイビウスの力……。受けてみなさい」

弘樹「優、香……！」

優香の乗る機体、カオス・デイビウスがヴァリアスに攻撃を仕掛けた。

このままじゃあ、弘樹が……。！くそッ……。！

零「間に合えええええええつ！！？」

ゼファイルスはヴァリアスを庇うべく、動き出した……。

優香「沈めてあげるわ、氷室 弘樹」

デイビウスはハンドガンを連射した。

零「弘樹をやらせるわけにはいかねえ……。！」

間一髪、ヴァリアスを下がらせたゼファイルスだったが、変わりに銃撃を受けた。

優香「ブラストビット……。これで蜂の巣よ」

デイビウスから発射された無数のブラストビットから銃撃の雨が放たれ、ゼフィルスはダメージを負った。

零「ぐあああつ……！や、やめろ……！優香……！」

ブラストビットの攻撃を受けたゼフィルスは軽く吹き飛ばされた。

零「ぐつ……！」

アマリ「零君！」

弘樹「零、お前……」

零「言つたろ……そんなウジウジした顔はお前には似合わないってな……！」

？「美しい友情だな……。だが、好都合だ。少し眠つてもらうぞ、新垣 零」

零「！」

すると、アルガイヤは動き出し、ゼフィルスに攻撃を仕掛けた。

？「そろそろ終局だ、新垣 零。ホーミングミサイルからは逃れられない」

アルガイヤから無数のミサイルがゼフィルスに向かって、飛んで来て、ゼフィルス全体に突き刺さり、爆発した。

？「さあ、消えろ」

アルガイヤは巨大砲を取り出し、エネルギーを充填させる。

？「デットエンドキャノンを受け、光となれ……！」

巨大砲……デッドエンドキャノンから高出力ビームが放たれ、ゼフィルスを飲み込んだ。

？「さよならだ、新垣 零」

ビームの威力を上げ、それに耐えきれなくなった。ゼフィルスは……。

零「ぐああああああつ!!？」

今までにない大爆発を起こした……。

当然、中にいた俺にもダメージが入り、俺はゼフィルスと共に地面に落下した。

零「ぐあつ……！」

アマリ「零君……!!？」

アマリ達が叫んでくれたが、俺は気を失ってしまった……。

ーアマリ・アクアマリンです。

そ、そんな……ゼフィルスが……零君が……！

弘樹「零……？零……！」

氷室君がボロボロになったゼフィルスを見て、叫んでいます。

？「安心しろ、死んではいない。各機、新垣 零とシャイニング・ゼフィルスを回収

しろ」

そ、そんな……！

アマリ「零君！目を覚まして、零君!!？」

アスナ「みんな、零を助けて！」

刹那「零！」

皆さんが零君を助け出そうと動きましたが……。

ギルガ「させないよ！」

オニキスの攻撃によって、防がれました。

バナージ「くそっ！これじゃあ、近づけない……！」

レイ「ガンソ」「この距離では……彼にも当たってしまう……！」

ギルガ「では、御機嫌よう、エクスクロス」

そのまま、零君の乗ったゼフィリスを抱え、オニキスの機体達は撤退していきました。

アマリ「零君……零君……!!？」

ホープス「お待ちください、マスター！」

私はゼルガードを動かして、オニキスを追おうとしましたが……。

イオリ「行かせるわけないだろう！」

イオリ君のデインベルに阻まれました。

アマリ「そこを退いてください、イオリ君！このままでは零君が！」
イオリ「奴の事など知らん！俺はお前を倒す！」

アセム「アマリ、まずは魔徒教団をどうにかするのが先だ！」

ゼハート「彼はその後に必ず追う！」

デイン「早く片付けましょう！」

アマリ「わかり、ました……」

待っていて、零君……！

弘樹「零……優香……花音……。俺のせい……」

アスナ「弘樹、戦う気がないのなら下がりなさい、邪魔よ！」

弘樹「……ああ」

メル「ルリちゃん、弘樹さんを収容してください」

ルリ「わかりました」

弘樹「……」

ヴァリアスはナデシコCに収容されました……。

氷室君……。

私達は戦闘を再開しました。

〈戦闘会話　メルVSイオリ〉

メル「もうやめてください！あなたは…本当は優しい人なのですよ！」

イオリ「オニキスだったお前が俺の事を分かったような口を聞くな！」

メル「(わかっていきますよ…。あなたは何処までも真っ直ぐな方なのですから…。)」

〈戦闘会話　アスナVSイオリ〉

アスナ「私、あなたの事はそれなりに評価していたのよ」

イオリ「お前などに評価されたくないな！」

アスナ「こうなったら引っ叩いてでもあなたを止めるわ、葵！」

ゼルガードの比翼天翔でイオリ君のデインベルはダメージを負いました。

イオリ「うおおおおおっ!!？」

またオドを…！

カミーユ「くうっ…！」

シーブック「ああっ!!？」

バナージ「ま、まずい…！」

マシユマー「意識が……感情が暴走しているのか!?!」

フロントル「これだけの感応波だ……! 下手をすれば、精神が崩壊するぞ……!」

イオリ「智の神エンデよ! 我に力を!!?」

イオリ君を止めないと……!

アマリ「イオリ君! やめて、イオリ君! お願だから、やめて!」

イオリ「黙れ、アマリ! お前が俺の下へ戻らず、新垣の下へと行こうというのなら……!」

アマリ「今すぐにも零君を助けに行きたいです……。でも、私はあなたも助けたいんです、イオリ君!」

イオリ「アマリ……」

アマリ「ここがどこだかわからないんですか、イオリ君……。葵 伊織君……。ここは私達や零君達の学校がある街です……」

イオリ「!」

イオリ、君……?

イオリ「葵……伊織……」

アマリ「それがあなたの本当の名前です。私は……天野 亜真里……。あなたのクラスメートでした」

イオリ「天野……さん……」

アスナ「……私の事も覚えてないの？同じクラスの樹咲 明日菜よ」

メル「私は零さんや弘樹さんの後輩の……鮎川 芽流です」

イオリ「新垣……氷室……樹咲さん……鮎川さん……俺は……葵……伊織……」

アマリ「葵君！記憶を取り戻したのね！」

オ、オドが……まだ……！

アマリ「！」

ホープス「後退を、マスター！」

イオリ「うおおおおっ!!？」

ディーンベルがゼルガードを殴り飛ばしてきました……！

アマリ「あああっ！」

そして、その衝撃で私は気を失ってしまいました……。

ーアスナ・ペリドットこと樹咲 明日菜よ。

ゼルガードが吹き飛ばされたのを見て、思わず私は叫んでしまった……。

アスナ「アマリ！」

メル「イオリ先輩、何をしているのかわかっているんですか!!?」
イオリ「お、俺は…何を…」

ホープス「イオリ・アイオライト! 貴様はっ!!?」

レナ「ホープス! アマリは!!?」

ホープス「負傷して、意識を失っています!」

ルルーシュ「後退するぞ! ゼルガードは任せる!」

ワタル「待って、此処で退いたら零さんが!」

ガドヴェド「今のまま追っても無駄だ! 一度は体制を立て直す!」

しんのすけ「わかったゾ」

ホープス「かしこまりました!」

私達はそれぞれ、撤退していく…。

イオリ「天野さん…!」

ホープス「イオリ・アイオライト…。お前は絶対に許さない…。」

最後にリリスとゼルガードが撤退した…。

イオリ「俺は…。何て事を…」

零…。アマリ…。こんな事って…。

ーイオリ・アイオライトだ。

俺はディーンベルから降り、法師セルリックの前に立った。

セルリック「……では、君はアマリ・アクアマリンを討つ事も出来ず、おめおめと逃げ帰ってきたと？」

イオリ「申し訳ございません、法師セルリック……。ですが、かなりのダメージを与えました」

セルリック「結果は、0か100のどちらかだよ。その意味で彼女の息の根を止められなかった君のやった事は0に等しい」

イオリ「……」

セルリック「まあいい……。君の努力は認めよう。問題は……。何の成果も挙げてなければ、努力の跡も見せていない無能共だ」

術士「も、申し訳ございません！」

術士2「次の機会には必ず……！」

セルリック「あるわけないだろうが！次なんてのが！」

術士「ほ、法師……。お許しを！」

セルリック「異界より放たれる獣……。その顎……。汝の魂を喰らい、獣は悦びの声を上

げる：． EXHALATIO！」

術士「ひいいっ!!？」

術士2「あああつ!!？」

術士達は消えてしまった：．．

セルリック「ちつ：．．。役立たず共が：．．」

イオリ「法師セルリック：．」

セルリック「イオリ・アイオライト：．。君の願いを聞いて、彼女の事は任せていたが、もう待てないな。この世界に智恵の実は生らない：．。こんな所に長居をしたくないからね。それに新垣 零という邪魔な分子がいらない今が好機だ」

イオリ「かしこまりました：．」

セルリック「待っているがいい、アマリ・アクアマリン：．。術士全ての夢：． 魔徒教

団の教主の座は、私のものだよ」

俺は：．． どうしたら：．．

ーラゴウ・カルセドニーだ。

俺は今、ギルガと通信を行っていたがまさかな：．．。

ラゴウ「そうか、了解した。すぐに出迎えの準備をする」

「そう言い残し、俺は通信を切った。」

ラゴウ「：。」

ジン「ギルガ・カルセドニーからの通信だったのだろうか？何と言っていた？」

ラゴウ「零を捕らえたそうさ」

アユル「新垣さんを：。」

ジン「（ついに捕まってしまったか：：：）。：。その割には浮かない顔をしているな」

ラゴウ「私情に意味はない：：：。俺達は命令をこなすだけだ」

ジン「そうか：：：。（そろそろ俺達も潮時だな：：：）」

零：：：。お前は本当に此処で終わってしまうのか：：：？

第57話 帰るべき世界

―新垣 零だ。

俺は撃墜された後、気を失っていたが、つい先ほど目を覚ました。

… オニキスに捕まったのか…。

ギルガ「おや、目を覚ましたのかい、新垣 零？」

零「…俺を何処へ連れて行く気だ？」

リン「首領様の所です。そして、あなたの知りたかった事をすべて話します」

全て、だと…？

俺は今、縄で身体をぐるぐる巻きにさせられて、両腕を使えない状態で、カルセドニーに引つ張られていた。

そして、ある部屋に入ると、目の前には王座に座る首領の姿があった。

零「首領…！」

ギルガ「頭が高いよ！」

首領を睨んでいた俺の頭をカルセドニーが地面に叩きつけ、俺を倒れさせた。

零「ぐうっ……！」

？「そう、手荒に扱わなくていい、ギルガ・カルセドニー」

ギンガ「はい」

？「さてと、生身で会うのは初めてだったな、新垣 零？私がオニキスの首領だ」

零「……自己紹介はどうでもいい……。お前達の事を聞かせろ……！」

リン「あなたと言う人は……！」

？「良い……。さて、まずは何から聞きたい？」

零「お前達……オニキスの事だ」

？「いいだろう……。我々オニキスの目的……それは世界の混沌だ」

世界の、混沌だと……？

？「世界は争いに満ちている……。それも様々な世界でな。だが、争いは何も戦いや戦

争だけではない……。それは何か理解できるか？」

零「喧嘩や……意見の食い違い……」

？「そうだ、例えば戦争という概念は無くとも、人は争い……。そして、最悪には相手を

殺す……。それが人間だ。そこで俺はある結論に出た……。世界を一つにし、誰かが世界

を管理すれば、争いはなくなるとな」

零「待て……。争いを無くしたいというお前の言葉とオニキスの行なっている行為は

矛盾している！」

？「お前の仲間のソレスタルビーイングと同じだ。武力による根絶でもしなければ、世界は一つにはならない……。故に我々はまずこのアル・ワースを一つにするために動いている」

刹那達と、同じ……。

？「そして、我々はついに異なる並行世界への進出に身を乗り出した。最初に目をつけたのは……。争いが最も小さいお前達の世界だ」

平穏の世界……？

？「お前達の世界を一つにするためにある者をもその世界に送った……。だが、転移システムに異常が起き、その者はお前達の世界で子供に戻り、記憶を失ってしまった」

零「そ、それは一体……」

？「お前だ、新垣 零……。いや、レイヤ・エメラルド」

え……？

零「レ、レイヤ・エメラルド……。俺が……。アスナの言っていた……。レイヤ・エメラルドなのか……。？？じゃあ、俺は……。アル・ワースの人間……。？？」

？「そうだ。そして、お前は……。我がオニキスの首領……。ハデス・エメラルドの息子なのだ」

ハデス・エメラルド……。それがあいつの……。いや、待て……。！あいつは何と言った……？

零「む、息子……。!? お前が……。俺の本当の父親って事なのか!? う、嘘だ！」

ハデス「この様な時に嘘を言って何になる？ お前は俺の息子なんだよ」

そんな……。俺が、オニキスの人間で……。弘樹達の住む世界を侵略しようとしていたのか……？

零「ゼ、ゼフィルスは何なんだよ！」

ハデス「……。あれはお前がお前の向かった世界で乗るはずだった機体だ……。かつて、オニキスは魔徒教団の様にアル・ワースの秩序を守る為に活動していた……。だが、ある男が気づいたんだ……。この力があれば簡単に世界を一つにできると……」

零「じゃあ、お前は……。これまで正義の組織だったオニキスを……。変えたのかよ……！」

ハデス「そうと言えるな。そして、ゼフィルスは代々、エメラルド家の者が乗っていた機体だ」

零「ゼフィルスが……」

ハデス「そのゼフィルスには兄弟機が二機あった……。それが……」

零「弘樹のヴァリアスと優香のデイビウス……」

ハデス「そして、ゼフィルスのデータを基にして作ったのが、ラゴウ・カルセドニーの乗るナイトメアだ」

零「…アスナとメル、カノン…。三人はアル・ワースの人間ではなかった…。お前達がアル・ワースに転移させたのか!?？」

ハデス「そうだ。使える手駒が欲しかったので…。記憶を改善し、配下としておいたのだ。そして、再び、18となったお前を俺はこのアル・ワースに転移させ、ゼフィルスに巡り会わせただけだ」

零「じゃあ…。俺とゼフィルスの出会いは…!?？」

ハデス「ああ、俺が仕組んだシナリオ通りだったんだよ。だが、そこでアクシデントが起きた…」

アクシデント…？

ハデス「本来ならお前がゼフィルスに触れた時点でお前の記憶が蘇るはずだった…。だが、新たに生まれた新垣 零という人格が強すぎて、お前は記憶を取り戻さなかった…」

零「俺という…。人格…？」

ハデス「レイヤが記憶を失った事によって、お前という新たな人格が生まれ、レイヤの人格はお前の心の奥底に眠っている」

零「じゃあ、時よりのアマリ達の反応……。そして、俺に呼びかけていたのは……！」
 ハデス「レイヤの人格が目覚まし、活動を開始したという事だ。もう一つ、話す事がある……。お前に何度も接触したマリアという女の事だ」

マリアさん……。？

ハデス「彼女の本当の名はマリア・エメラルド……。俺の妻だ。つまり……。お前の母親だ」

零「マリアさんが……。俺の母さん……。？」

ハデス「マリアはお前を凄く愛していた……。愛していた故にお前を別世界に送る事に最後まで反対し……。オニキスから出て行った……」

母、さん……。

ハデス「これがオニキスの真相だ……。さて、此処まで聞いてだが、質問するぞ？ 新垣零……。いや、レイヤ……。オニキスと協力し、我々の理想となる世界を作る為に奮闘してくれるな？」

俺は……。オニキスの人間で……。アル・ワースの人間……。オニキスの首領の息子……。
 レイヤ・エメラルド……。

だが……。だが……！

零「……。断る……！」

ハデス「何…？」

零「お前の言っている事が嘘偽りのない事だとわかった…。俺はお前の息子で…ゼファイルスに乗り、俺の住んでいた世界を支配しようとした事も…。でも、今の俺はアル・ワースや全世界を救う為に戦い、平和を取り戻そうと戦うエクスクロスのメンバーの一人、新垣 零だ！俺は、お前達の仲間になどならない！絶対にだ！」

ラゴウ「零…」

ジン「…」

ギルガ「黙れ！」

ハデス「… 仕方がない…。手荒な真似はしたくはなかったが…」

零「言っておくが何しようが俺は仲間にはならない…。どんな拷問にも屈しないぞ…！」

ハデス「… いや、その必要はない」

何…？

ハデス「白木 優香、カノン・サファイア」

優香と花音が頷き、俺を動けないように取り押さえた。

零「ガッ… グアッ…！ やめろ、優香…！ 花音…！」

優香「大人しくしてもらおうわ、新垣 零…」

優香：！

ハデス「お前でダメならば… お前の中にいるレイヤに直接出てきてもらう」

零「何、だと…?!？」

ハデス「お前は用済みだ、新垣 零」

そう言うのとハデスは俺の頭を持ち、ある力を注ぎ込んだ。

零「ガッ…! グアアアアツ…! アアアアアツ!!？」

こ、このままじゃ、まずい…!

零「や、めろ…! アアアアアアツ…! 俺が…俺で、無くなる…!」

ハデス「甦れ、レイヤ。そして… サヨナラだ、新垣 零… 永遠にな」

い、意識が途絶えていく…。

みんな… 弘樹… 優香… 明日菜… 芽流… 花音… 伊織… ホープス… ア

マ、リ… ごめん…。

そして、俺は意識を失った…。

「みんなの前ではアスナ・ペリドットと呼ぶわね。
てか、みんなって誰だろう……」

まあ、いいや。

私達はメガファウナの待機室でアマリの事について話していた。

アイーダ「……アマリさんの様子は？」

カレン「眠ってるよ。当分は安静にしてなきやダメだつて」

ライヤ「ナディアとヒミコとマリー、春日部防衛隊が看病するって横についていま
す」

ノレド「あの子達は、あたしが鍛えた生活班の精鋭ですから、任せておけば大丈夫で
す」

テイエリア「零の行方は……？」

まゆか「……申し訳ありません。見失ってしまいました……」

一夏「そんな……！じゃあ、早く零を探さないと！」

千冬「落ち着け、闇雲に探した所で、零は見つからん」

一夏「こんな時に落ち着いていられるかよ！千冬姉は零の事が心配じゃねえのかよ
！」

千冬「心配だからこそ……今は冷静にならなければいけないのだから……！」

一夏「千冬姉……」

マドカ「織斑 一夏。少しは姉さんの気持ちもわかってやれ」

一夏「ごめん、千冬姉……」

千冬「謝らなくてもいい、一夏。お前の気持ちはわかる」

クラマ「でもよ、急がないといけないのは事実だぜ。もしかしたら零は殺されるかもしれないしよ」

ティア「そ、そんな……！」

リョーコ「コラ、クラマ！子供の前で何言つてんだよ!?!?」

クラマ「わ、悪い……」

すると、誰かが歩いて来た。

マリア「その心配はないわ」

メル「その声……あなたは……！」

マリア「マリア・エメルルド……。スペリオルのパイロットよ」

ディオ「スペリオルだと……!?!?」

青葉「あんた……零さんを何度も襲った女か！」

マリア「正解よ」

メル「あなたが何の用ですか!?!?」

アスナ「……待って、メル。エメラルド……？」

マリア「そうよ、アスナちゃん。私はマリア・エメラルド……。零の本当の母親よ」
ワタル「ど、どう言うこと……？」

マリアという人は全てを話した……。零がレイヤ・エメラルドで平穩の世界を襲おうとしたオニキスの一員で、アル・ワースの人間だった事を……。

そして、首領の正体……。ハデス・エメラルドの息子だと言う事を……。

トロワ「零が……。レイヤ・エメラルドという人物……」

カトル「それにオニキスの一員でアル・ワースの人だったなんて……」

ロックオン「オニキスの奴ら……。そんな目的で動いていたとはな」

アレルヤ「あなたは……。そのオニキスのやり方に不満を覚え、組織を抜けた……」

マリー「OO」「そして、零を助ける為に……。彼をゼファイルスから降ろそうとした……」

パトリック「だがよ、それならどうして直接伝えなかったんだ？」

グラハム「零の中にいるレイヤとなる者に気づかれないためかな？」

マリア「ええ、そうよ。あなた達がこの世界に転移したのを知って、私もこの世界に
来たのだけれど……。遅かったみたいね」

ルルーシュ「所で、零が殺される心配はないとはどういう事だ？」

マリア「ハデス達の目的の為に零……。レイヤとゼファイルスの存在が必要不可欠だか

らよ」

アキト「だから奴等は零とゼフィルスを狙っていたというわけか」

マリア「エクスクロスの皆さん……。私も。零を助け出す手助けをさせてもらえませんか？」

ノブナガ「お前の息子はレイヤであつて零ではないのだぞ？」

マリア「それでも……。彼は私のもう一人の息子と同じなのよ……。だから……」

みさえ「良いんじゃないですか」

ひろし「み、みさえ……。そんな簡単に……」

みさえ「零君をそこまで大切に思っていないとこんな別世界にまで来ないわよ」

エルシャ「みさえさん……」

倉光「わかりました、これからは手を取り合いましょう」

マリア「ありがとうございます……」

みさえ「その変わり、零君を助け出せたら、彼に謝ってくださいね」

マリア「ええ、わかつているわ」

弘樹「俺もやらせてくれ」

アスナ「弘樹……」

弘樹「俺のせいで……。零は連れ去られ、優香や花音も操られた……。だから……。俺が

必ず、あいつ等を絶対に助け出す！それが俺の出来る、唯一の償いだから……。頼む……！」

アスナ「その覚悟に嘘はないわね？」

弘樹「ああ」

アスナ「だったら、やりましょう、弘樹。あなたはバカだけど最後までやり通す男だから」

弘樹「ありがとな……。それと、アスナ。過去の俺とは決別したい……。だから、一発ぶん殴ってくれ」

アスナ「……わかったわ、歯を食いしばりなさい」

そう言い、私は弘樹の両頬を一発ずつ殴った。

弘樹「ぐっはあっ!!?」

当然、吹っ飛ぶわよね。

メル「え、あ……。アスナ先輩、それ二発……！」

弘樹「痛って……」

アスナ「もう一発は私やメルを傷つけた分よ……。それよりも目が覚めた？」

弘樹「おう……。って、効いたぜ……。流星は男勝りの暴力女の拳だぜ……」

アスナ「……今度は蹴られたい？」

弘樹「じよ、冗談だつて！」

メル「フフフ…」

何だか懐かしいわね、このやり取り…。

マーベル「それにしてもここ…。アマリ達の生まれた世界だったのね…」

ユイ「はい…。まさか、アマリさんやメルさん、アスナさんも異界人だったなんて…」

さやか「この平穩の世界つて、ロボットも空中戦艦も存在してないつて話だったよね？」

ルー「そんな所で戦つたつて事は…」

ミネバ「はい…。世間では大騒ぎになっています」

マリーダ「その様な状況では、私達が人前に姿を現したら混乱を招くだけだな」

アンジェロ「早く何とかしなければ、面倒な事になりかねないな…」

すると、アマリの看病をしていたはずのヒミコ達が入つて来た。

ヒミコ「大変、大変！大変なのだ！」

ジャンヌ「どうしたの、みんな!?!」

ネネ「ちよつと目を離した隙にアマリさんがいなくなつたんです！」

ミツヒデ「何つ!?!」

アンジュ「誰かが連れ出したか、自分で出て行ったか……」
ルー「安静にしてなきやダメな状態なんですよ！だったら、連れ出されたって事じゃないの？！」

アキト「いや、零の事もある……」

弘樹「まさか、一人でオニキスの奴等の元に向かったってのかよ？！」

マリア「もし連れ出されたのだとしたら……！」

ミラーナイト「もしや……！」

レイ「大怪獣」「魔従教団が……！」

トオル「……これ……アマリさんのベッドの横に落ちてましたよ」

ヒュウガ「置き手紙……？」

ベルリ「アマリさんが書いたものなの？」

エイーダ「そうみたいですけど……」

アマリ…… いったい何処へ……

ーアマリ・アクアマリンです。

帰って来たのね、私……。ずっと自分の事……アル・ワースの人間だと思ってたから、

実感がわかないけど……

グランデイス「こんな所にいたんだね、アマリ……」

グ、グランデイスさん……！

アマリ「グランデイスさん……」

グランデイス「ダメだよ、あんな書き置きだけじゃ。みんな、心配しちゃうだろうが。ただでさえ、零の事があるんだし……。事実、ヒミコとナディア達は慌てて手紙があるのに気付かなかつたんだから」

アマリ「ごめんなさい」

グランデイス「……で、家族に会って来たのかい？」

アマリ「……」

グランデイス「何だい？そのために怪我した身体で抜け出したんだろ？」

アマリ「お父さんとお母さんとお姉ちゃん……。遠くから顔だけは見てきました……」

その後、電話で元気でやってるから安心して……。って伝えました」

グランデイス「それでいいのかい？」

アマリ「自分でも……。よくわからないんです……。どうして、そんな風にしたのか……。きつと……。自分がこの後……。何をすればいいかが……。わかってないからだと思います……」

グランデイス「しつかりしなよ、アマリ。あんたは、それを探すために魔徒教団を抜けたんだろ？」

アマリ「あ……」

グランデイス「自分が何者なのかがわかった事であんたの旅は一応の終わりを迎えたのかも知れない……。でも、そこからだつて生きるつていう旅は続くんだよ。生きていく限りね」

アマリ「生きていく限り、旅は続く……」

グランデイス「旅の行き先は誰にもわからない……。だから、楽しいんだよ」

アマリ「グランデイスさんも……。そうやって生きてきたんですか……？」

グランデイス「まあね……。他人様に自慢できるようなもんじゃないけど……。山あり谷あり……。燃えるような恋もあれば、異世界への転移もありだよ……。つて、恋に関してはあんたの方が上だったね。でも、もっと目の前の事を……。生きてる事を楽しみな」

アマリ「零君……」

グランデイス「それにあんたには自分自身のやる事が見つかつてなくても、まずはやる事があるだろ？」

アマリ「零君を、助ける……」

グランデイス「まずは、それがあんたの新しい旅への第一歩としてやればいいんだよ」

アマリ「はい……」

グランデイス「あなたの事は急ぎ過ぎる必要はないよ。まだ記憶も戻ったばかりだしね。取り敢えず、無事だつて事をみんなに教えてやんなよ」

弘樹「その必要はねえよ」

皆さん……。

ワタル「アマリさん……」

ナディア「よかつた……。無事で……」

ジャン「アマリさんはちゃんと書き置きを残したのにナディアが見落としたから、騒ぎになつたんじやないか……」

アマリ「ううん……。私がちゃんと伝えなくて抜け出したのが悪かつたんです」

ヴァン「お前……俺達が話している時、聞き耳を立てていただろ？」

ジュード「え……」

アマリ「き、気づいていたんですか!?!」

ウエンディ「ちよ、ちよつとヴァン!それならどうして言わなかつたのよ!?!」

ヴァン「すみません……」

メル「もう、心臓に悪かつたですよ……」

ケイ「どうして、一人で行つたの?」

アマリ「少し考える時間が欲しかったから…。でも、もう大丈夫です。皆さん、心配かけてすいませんでした」

シバラク「その笑顔が見られれば、もう安心だな」

アマリ「グランデイスさんにいいアドバイスをもらいましたから」

ハンソン「姐さんから？」

サンソン「そりやまた何のアドバイスだ？」

グランデイス「女同士のナイシヨの話さ。な、アマリ？」

アマリ「ええ…」

クラマ「流石はグランデイスの姐さんだ。こういう時には年の功だな」

グランデイス「焼き鳥になりたいかい、クラマ？」

クラマ「めっそうもない！」

シバラク「とにかく、よかった。アマリが落ち込んでいると拙者達も行き先を見失うからな」

ワタル「そうだね。アマリさんは僕達の道案内役だから」

シバラク「言っておくが、それは現実の地図の問題ではないぞ。心の話だ」

アマリ「心の話…」

ヒルダ「それにアマリが落ち込んだ表情だと、零も心配するだろうしな」

サリア「ええ、そうなっていると申し訳ないわね」

弘樹「それよりもいいのか、アマリ……。零は……」

アスナ「……」

アマリ「……」

アル「何かあるのか？」

メル「……実は私とアスナ先輩が転移する前は……。零さんとアスナ先輩は恋人同士

だったんです」

ベルリ「ええっ!!?」

アネツサ「恋人同士って……!」

キオ「じゃあ……。零さんとアスナさんはそれぞれ記憶を失って、お互いの事も忘れてしまっていたんですね……」

アマリ「……。零君がどの様な選択をしようとするかは受け入れます」

アスナ「私もよ……」

青葉「考えてみれば、エクスクロスって零さんとアマリさんが出会った事で始まったんだよな」

一夏「ああ、そうだな！俺としんのすけはこう大人数になると思わなかったよ」

しんのすけ「後で千冬お姉さん、アンドレイのおじさん、刹那お兄ちゃん、ティエリ

アちゃん、セルゲイのおじさん、ワタル君やシバラク先生、カンタムと出会ったんだゾ
！」

エイサツプ「そういう事だから、エクスクロスの精神的な支柱のアマリと零には頑
張ってもらわないとな」

アマリ「私と零君が……精神的な支柱……」

ヒミコ「あちしはシチューもカレーも大好きなのだ！」

しんのすけ「違うゾ、ヒミコちゃん！そのシチューじゃないんだゾ！」

アルト「め、珍しくしんのすけがまともなツツコミをしてる……」

ヒミコ「だから、シチューのアマリ姉ちゃんには元氣になつてもらいたいのだ！」

サラ「そのためにも零を絶対に助けないとね！」

アマリ「……ありがとう、ヒミコちゃん、サラちゃん」

ルルーシュ「話してくれるか、アマリ？今、わかつている事を」

アマリ「はい……。私の本当の名前は、天野 亜真里……。この世界で生まれ育ちまし
た。家族は父と母と姉さん……。召喚される前は高校の三年生でした。私は学校から下
校している途中にアル・ワースに召喚され、こちらの世界では行方不明つて事になつて
いたそうです」

シヨウ「家族に事情に話したのか？」

アマリ「いえ……。昨日の戦いの事もありませんから、余計な事を話して混乱させたくないと思って……。とりあえず、ちゃんと生きていて、元気でやっているとだけ伝えました」

シヨウ「そうか……。それでいいと思う……」

アスナ「私達の事も話しておくわ……。私の本当の名は樹咲 明日菜……。アマリと同じく高校三年生で下校中、メルと一緒にアル・ワースに転移させられたのよ」

メル「私は鮎川 芽流と言います。ですが、オニキスは零さんや弘樹さんを始めとする私達の世界の人達から私とアスナ先輩、カノンちゃんの記憶を消したんです」

弘樹「それだけじゃなく、アマリの記憶も消されたけどな」

アスナ「私とメル、カノンも実は零と弘樹、優香と幼馴染なのよ」

エルザ「そ、そうだった口ボか!!?」

アマリ「では、零君が自殺しようとした時は……」

メル「勿論、私達も止めました」

アスナ「ホント、あの時の零は見てられなかったわ」

ヒデヨシ「お前等の家族は？」

メル「私とアスナ先輩も零さんと同じ、孤児院出身なので……」

ケロロ「そうだったでありますか……」

アマリ「私のアマリ・アクアマリンの名は魔徒教団で記憶を書き換えられた時につけ

られたものだと思います。私を追ってきた術士……。彼も私達と同じ世界の人間です」

弘樹「あいつの名前は葵 伊織……。俺達と同じ高校のクラスメートだったんだ」

ユイ「も、もしかして伊織という人はアマリさんの恋人だったのですか?!?」

アマリ「いえ、そういう関係じゃなかったです……。そんなに話もした事なかったですし……」

イングリッド「(アマリはそう思っている、向こうは違うんだと思う)」

カレン「(そんな気がする……)」

アスナ「ダメよ、みんな。アマリはこつちの世界でも零に夢中だったんだから。知っているのよ、影で零の事を見ていた事を」

アマリ「ど、どうしてそれを?!?」

メル「バレバレでしたよ」

アマリ「完敗です……」

ゼクス「君と彼が、魔徒教団によって召喚された理由に心当たりはあるか?」

アマリ「わかりません……。ですが、ドグマを使うには素質が必要ですから、それを私達が持っていたんだと思います。私とイオリ君……。葵君のどこに共通点があるかまではわかりませんが……」

三日月「そうだね。あんなストーリーカーとアマリに似ている所なんて全然ないし」

アスナ「アル・ワースに召喚される前の葬は真面目で優しい奴という印象だったのよ」
アマリ「あれは教団に植え付けられた記憶のせいだと思います」

シーブック「人格まで改造されたのか……」

アスナ「その点では私も似たようなものよ」

サラ「そういえば、忘れていたけど、最初のアスナって酷かったよね」

アスナ「む、昔の事は言わないで……」

アマリ「でも、少しだけ……私もイオリ君の様になれたら……って思います」

トビア「アマリさんも暴れたいって事……!?」

アマリ「そういうわけじゃないですけど……私……ずっと引つ込み思案な自分を変えたいって思ってしまったから……。だから、あんな風に感情をストレートに出せる事がちよつと羨ましく思えるんです……。だって、変われば……引つ込み思案のせいで虐められていた私を助けてくれた男の子を振り向かせられると思いましたが……」

カミーユ「欲望をむき出しにするのはひとまず置いておくとして……」

アムロ「君は、君の望む人間になりつつあると思うな」

アマリ「私ですか？」

グランデイス「そうだね。出会ったばかりの頃は、ビクビクおどおどして頼りなかつたけど……」

刹那「今は全く、そんな事はない」

テイエリア「君は意思の力で自分を変えていった」

シモン「教団のインチキじやなく、自分自身の力で自分を変えたんだり胸を張っていると思うぜ」

ワタル「アマリさんは昔の自分を乗り越えたんだよ、きつと！」

弘樹「零の奴もお前のそういう所に惚れたのかもな」

アマリ「ありがとうございます、皆さん」

シャア「だが、これでますます魔徒教団の狙いがわからなくなってきた…」

シーブック「教団はドアクダーと戦う駒として僕達を召喚したと思っていましたけど…」

九郎「アマリ達のような術士の召喚は別物って見るべきだろうな」

ウエスト「そう言えば、ゴーゴン攻略戦の時、あのセルリックなるものが言っていた教主こいいうのは何なのであるか？」

アマリ「教主…。それは魔徒教団の最高位であり、究極の術士に与えられる榮譽でもあります」

フロンタル「究極の術士…」

リディ「今となつては、胡散臭いな…」

バナージ「最高位は、導師って呼ばれる人間じゃないんですか？」

アマリ「導師キールディンは教団の代表ではありませんが、教主はその上……智の神エインデの教義、即ちドグマを極めた存在です。そして、教主は教団の歴史の中で未だかつて存在した事がないのです」

タスク「相対評価で決まるのではなく、絶対評価で決まるのか……」

ユイ「でも、教団は3000年くらい前に出来たと言われています。その間に一人も選ばれないなんて……」

アマリ「だからこそ、術士達はそれを目指して修練に励んできたのです。ドグマを極める……それはつまり智の神エインデに最も近付いた存在になるという事ですから」

アーニー「教主……。術士の究極の到着点か……」

アマリ「記憶を取り戻した私には何故それ程までに教主に固執していたかはよくわかりませんけどね」

マスター「それでいいのです、マスター」

アマリ「ホープス……」

ホープス「ここからがマスターの本当の旅なのです。その手助けをする事を私は望みます」

アマリ「ありがとう、ホープス。あなたがいてくれれば、きっと何とかなるように思

える」

ヒナ「あの人も記憶を失っていたのね……」

青葉「雛……」

ヒナ「私もいつか……あの人のように記憶が全て戻るのかな……」

青葉「その日まで……いや、その日が来てからと俺……ずっと雛を守るから」

ヒナ「青葉……」

青葉「そして、いつか一緒に帰ろう……。俺達の世界に」

ヒナ「うん……」

すると、通信が入って来ました。

アムロ「みんな、艦に戻れ……！魔徒教団が仕掛けてきた！」

ルルーシュ「セルリック・オブシディアンも出てきた。これは敵の総攻撃と見るべき

だろう」

甲児「わざわざ別の世界まで俺達を追ってくるとは暇な連中だぜ！」

ワタル「だったら、とつちめて僕達をアル・ワースに連れて行ってもらおう！」

アマリ「ホープス……。私達も……」

ホープス「マスター！」

アマリ「う……」

痛みが、ここで……！

そのまま、私は気を失ってしまいました……。

ホープス「マスター！ マスターアアアアツ!!？」

第57話 帰るべき世界

ー氷室 弘樹だ。

俺達はそれぞれ出撃した……。

フリット「来るぞ……！」

やっぱり、魔徒教団か……！

万丈「黒いオート・ウオーロック……！セルリック・オブシディアンか！」

セルリック「アマリ・アクアマリンは出てないようだね」

エンネア「だから、何だというの!!？」

シャルロット「アマリさんは、私達が守る！あなたにも、あのイオリって人にも指一本触れさせない！」

イオリ「…」

メル「イオリ先輩…」

セルリック「まあいい…。前線は任せる、イオリ・アイオライト。邪魔者を排除して、あの魔法生物とゼルガードを手に入れ…。アマリ・アクアマリンを消滅させろ」

イオリ「了解です」

マサオ「あの人、記憶を取り戻したんじゃないの!?？」

楯無「今はそんな事知った事じゃないわ！向こうが来るなら、迎え撃つまでよ！」

ルルーシュ「各機は応戦しろ！セルリック・オブシディアンを倒せば、勝負はつく！」

セルリック「出来るかな、お前達に？」

鈴「やってみないとわからないでしょ！」

イオリ「(アマリ…。天野さん…。俺は…)」

マリア「みんな、オニキスが来る可能性があるかもしれないから気をつけて！」

弘樹「了解！」

俺達は戦闘を開始した…。

待っていてくれよ、零…！

戦闘開始から数分後の事だった。

甲児「お、おい！メガファウナのデッキにいるのって…！」

クリス「嘘…！」

おいおい、マジかよ…！

ゼルガードが現れた…！！？

しんのすけ「ゼルガード！」

ゼロ「大丈夫なのか、アマリ！！？」

ホープス「マスターは、まだ眠っていらっしやいます」

レイ「Destiny」「ホープス！お前が一人で乗っているのか！」

ステラ「戦えるの！！？」

ホープス「愚問ですよ。マスターが戦えないのなら、私が戦うまでです！マスターを守るために！」

グレンファイヤー「熱いじゃねえかよ、ホープス！」

ジャンボット「したり顔で皮肉を言うだけだと思っていたが、見直したぞ」

ホープス「他人の評価など必要ありません。私は私の思うままに生きるだけです。それこそが、マスターに教えられた生き方です」

ヒルダ「（これって…）」

サリア「(もしかして……)」

アンジュ「(愛の力ってやつ……?)」

ナオミ「(ここに零がいたら、荒れるね……)」

ホープス「イオリ・アイオライト……」

イオリ「……！」

ホープス「まずはマスターを傷つけた貴様を零に変わって叩き潰してやる！」

イオリ「俺は……。俺だって！」

弘樹「伊織……！」

イオリ「俺だって、天野さんを守るために戦うんだ！」

セルリック「血迷ったか、イオリ・アイオライト？」

イオリ「俺はもう……。偽りの記憶に惑わされない……。俺はイオリ・アイオライトで

あり、そして、葵 伊織だ……。！お前達の言いなりにはならない！」

ホープス「(この男……。エンデの加護を自ら打ち破ったか……。！)」

イオリ「エクスクロス……。！この戦いだけでいい！俺も教団と戦わせてくれ！」

弘樹「どうやらお前も完全に記憶を取り戻したようだな、イオリ」

イオリ「すまない、氷室……。俺は……」

弘樹「俺もお前の事言えねえし、お互い様だぜ。それよりもアマリはお前の事を心配

していたぜ」

アスナ「アマリが眠っている間にあなたが死んだとなると、合わせる顔がないわね」
ホープス「待ってください！マスターの心と身体を傷つけたこの男を許すと言うんですか！」

ゴークアイエロー「あれ、前も作戦とはいえ、ホープスもアマリの心を軽く傷つけたんじゃないか？」

ホープス「そ、それは……その……」

メル「それに私達は今、あのセルリックを倒さなければならぬんです！」

ホープス「だからと言って……！」

イオリ「ホープス……と言ったな……。俺の事が許せないのなら、それでいい。だが、俺も天野さんを守りたいんだ。俺の生命に代えても」

ホープス「……お前の事は信じられない……。だけど、なぜだろう……。さっきの言葉だけは信じられる……」

イオリ「それはきつと俺とお前が同じ想いで戦っているからだろうさ」

ホープス「お前ごときの二流術士と私と一緒にするな！」

千冬「喧嘩は後にしろ！」

箒「今はセルリックを倒す！」

ホープス「セルリック・オブシディアン！」

イオリ「天野さんには指一本、触れさせないぞ！」

セルリック「イオリ・アイオライト……。裏切り者は粛清するのみだ。そして、魔法生物！お前には誰が主であるか、痛みと共に教えてやろう！」

ホープス「マスター……。ゆっくりお休みください……。あの男は私が必ず倒します……。私自身と……。マスターのために……。！そして、零……。今の間だけ、マスターを私に任せてくれ……。！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

弘樹「零、優香、花音……。俺は必ずお前達を助け出す……。待っていてくれ……。！」

〈戦闘会話 マリアVS初戦闘〉

マリア「来なさい、魔徒教団！あなた達を倒して、早く、零を助けに行くわ！」

マリア「気をつけて、オニキスが来るわ！」

やっばり来やがったか……！

現れたのはガラム部隊とアルガイヤだった。

アスナ「アルガイヤ……首領が来たのね……！」

ハデス「また会ったな、エクスクロス」

カミーユ「零とゼフィルスを捕らえた今、何の目的で俺達に挑む、ハデス・エメラルド……？」

ハデス「ほう、マリアから聞いたか」

マリア「ハデス……もうやめなさい！こんな事をしたって……！」

ハデス「オニキスを抜け出したお前が口を挟むな、マリア……。俺達の目的は変わらん」

レナ「そんな事より、零を返して！」

サラ「そうだ！零を返せー！」

ティア「返せー！」

ハデス「フン、そんなに奴と会いたければ会わせてやる……来い」

現れたのは……ゼフィルス……？

サヤ「ゼ、ゼフィルス……？」

レイモン「乗っているのは、零なのか……？」

リチャード「だが、何故、あそこまでボロボロの状態で…。」

ハマーン「あれほど大破した機体を急遽、修理したと言う感じだな」

ユイ「零さん、聞こえますか!? 戻って来てください!」

? 「フツ…」

アスナ「待つて! そいつは零じゃない!」

メル「え…!?」

? 「流石はアスナ…。よくわかったな」

こいつ… まさか…!

マリア「あなた… レイヤね!」

レイヤ「そうだ、俺だぜ…。お袋」

レイヤ・エメラルドかよ…!

スザク「あれが零の身体の中にいたもう一つの人格…。」

五飛「そして、本当の零である…。」

ノイン「レイヤ・エメラルド…!」

レイヤ「そうだな…。初めましてと言っておくぜ、エクスクロス。俺はオニキスの首

領… ハデス・エメラルドの息子、レイヤ・エメラルドだ」

サイ「ちよつと待つて…! あいつが表に出て来たって事は…!」

リナ「零さんは……まさか……」

レイヤ「いいや、安心しな。あいつはまだ、俺の心の中の奥底で眠っているぜ」

ゴークイレッド「つまり、お前を倒せば、零をまだ救い出せるチャンスがあるって事か！」

海道「なら、ぶん殴って新垣の目を覚まさせてやる！」

竜馬「覚悟しやがれよ、レイヤ・エメラルド！」

レイヤ「ははっ……！ 良いねえ、盛り上がって来たぜ……！ 親父、ここは俺に任せてくれ……。目覚めの運動も兼ねて暴りたいんだ」

ハデス「良いだろう、久しぶりのお前の力…… 遠くでだが、見せてもらうぞ、レイヤ」
そう言うアルガイヤは後退しやがった……。

レイヤ「そう言うわけだ、魔徒教団さんよ。今はあんた達を襲うつもりはねえ。俺達は俺達で勝手にやらせてもらおうからよ」

セルリック「ほう…… 顔や声は同一だが、人格が変わるとそこまで違いが出るとはな……。こちらも魔法生物とゼルガードさえ、始末できればいい」

レイヤ「交渉成立、だな……。じゃあ、始めるとするか！」

弘樹「レイヤ・エメラルド……！」

マリア「気負いすぎないでね、弘樹君！」

弘樹「わかっています…。！行くぞ！」
戦闘再開だ！

〈戦闘会話 弘樹VSレイヤ〉

弘樹「レイヤ・エメラルド！零を返してもらおうぞ！」

レイヤ「新垣 零にも勝てないお前が、俺に敵うわけねえだろ！」
弘樹「だとしても…。俺は負けるわけにはいかねえんだよ！」

〈戦闘会話 アスナVSレイヤ〉

アスナ「あの時…。力尽くでもあなたを止めるべきだったわ…。！」

レイヤ「おー、怖い怖い…。でも、そういう女は嫌いじゃねえぜ」
アスナ「零の顔をして、冗談を言わないで！」

〈戦闘会話 メルVSレイヤ〉

レイヤ「やめておけて…。お前じゃ俺には敵わねえよ」

メル「その様な事…。やってみなくてはわかりません！」

レイヤ「だったら、死んでから後悔すんなよ！」

〈戦闘会話　ホープスVSレイヤ〉

ホープス「マスターの為にもお前を倒し、零を取り戻す」

レイヤ「残念だが、魔法生物の出る幕じゃねえ、消えろ！」

ホープス「そうはいかん！これ以上、マスターの涙は見たくない！それから、ライブルが零でないと張り合いがない！」

〈戦闘会話　イオリVSレイヤ〉

レイヤ「へえ、魔従教団の洗脳を自分で解くんなんて、案外やるじゃねえかよ」

イオリ「新垣、お前をあれほど憎んだ俺を助けようとしてくれた…。だからこそ、今度は俺がお前を助ける番だ！」

〈戦闘会話　マリアVSレイヤ〉

マリア「もうこんな事はやめて、レイヤ！」

レイヤ「俺を見捨てて、一人だけオニキスから消えたあんたがよく言うぜ。俺は親父と共に進む…。それだけだ！」

マリア「どうして… どうしてなの、レイヤ…！」

くそッ…！あんなボロボロの機体に乗っているのになんて強さだよ…！

レイヤ「オラオラ！どうした、エクスクロス！この程度か！」

簪「つ、強すぎる…！」

ジャンナイン「このままでは、こちらが全滅する…！」

レイヤ「まだだ…まだ、俺を奮い立たせる！」

ゼフィルスが俺達に襲いかかろうとしたが…。

レイヤ「ぐっ…！」

何処かから銃撃が放たれた…！?

現れたのは… ヴィジャーヤとドラウパだった。

アーニー「ジン！アユル！」

レイヤ「何のつもりだ… ジン・スペンサー… アユル・テイラン！」

ジン「見てわからないか、レイヤ・エメラルド。その男はやらさん」

レイヤ「へえ、裏切るってわけか…。だったら、エクスクロスごと… うぐっ…！」

な、何だ…。ゼフィルスの動きが止まって、レイヤ・エメラルドが苦しみ出したぞ…

!!?

レイヤ「ぐっ……こ、こいつ……！まだ抵抗する力を……！仕方、ねえ……！今日はここまでにするか……！命拾いしたな、エクスクロス……！次は殺してやるよ……！」

ゼフィルスが撤退すると、残りのガルド部隊も撤退した……。

弘樹「今、あいつの動きが止まったな……」

マリア「（レイヤは零の人格がまだ、彼の心の中で眠っていると聞いた……。まさか、レイヤを一時的に止めてくれたのは……！）」

アユル「退きましたね……」

ジン「だが、これで俺達はまだオニキスへ戻る事は出来ない」

弘樹「なら、エクスクロスに会いよ、スペンサー」

ジン「……俺は……」

アーニー「ジン、アル・ワースを救う為……。お前達の力を貸して欲しい」

アユル「どうしますか、ジン？」

ジン「決まっている……。アル・ワースを平和にするまでだ、俺達が手を組むのはアーニー「ああ、わかってる！行くぞ、ジン！」

よっしゃあ！これで鬼に棍棒だぜ！

〈戦闘会話 ジンVS初戦闘〉

ジン「懐かしいな、アーニーと共に戦うのは……。悪い気はしない。まあ、こんな事、口が裂けても言えないがな」

〈戦闘会話 アウルVS初戦闘〉

アウル「私はジンとなら何処へでもいけます……。！お母さん、見ていてください、私は正義のために戦います！」

〈戦闘会話 弘樹VSセルリック〉

セルリック「まさか、君がオニキスを裏切るとはね」

弘樹「何とでも言え」

セルリック「君ごときが、新垣 零の変わりになるとでも思っているのか？」

弘樹「変わりになんてなれるわけねえだろ！俺は氷室 弘樹だ！新垣 零じゃねえ！だから、俺にできる事を全力でやるまでだ……。！」

ホープスの乗るゼルガードの攻撃にワース・ディーンベルはダメージを負った。

セルリツク「ちいつ！」

イオリ「セルリツク・オブシディアン！俺達の勝ちだ！」

セルリツク「クソがああつ！！？」

ワース・ディーンベルはが移動した…！！？

ホープス「逃しはしません！」

イオリ「天野さんの為にも、ここでお前を討つ！」

ゼルガードとイオリのディーンベルがワース・ディーンベルの前に立った。

セルリツク「魔法生物に三流術士が！舐めるなよ！」

き、機体が回復した…！！？

ケンシン「ダメージを回復させた！」

アレクサンダー「これもドグマの力か！」

セルリツク「消えろおおおつ！！？」

ゼルガードとイオリのディーンベルはワース・ディーンベルのドグマ攻撃により、弾

き飛ばされた。

イオリ「ぐっ！詠唱もなしで、これだけのドグマを…！！！」

ホープス「セルリック・オブシディアン！まだ戦うつもりなのですか！」

セルリック「当然だ！教主の座を掴むのはこの俺をおいて他にはいない！その為にもアマリ・アクアマリンは俺自身の手で叩き潰す！」

ホープス「させるものか、そんな事は！」

セルリック「ならば、お前から潰してやる！死ね、魔法生物！」

アマリ「待ちなさい……！」

ア、アマリ……！！？

アマリ「ホープスから離れてください、法師セルリック」

イオリ「天野さん……！」

ホープス「マスター！」

セルリック「アマリ・アクアマリン……観念して出て来たか！」

アマリ「法師セルリック……。あなたは、それ程までに教主になりたいのですか？」

セルリック「お前にはわからないのか！教主となる意味……究極のドグマの意味が！」

アマリ「そのために誰かの幸せや自由を奪うのなら、私はあなたと戦います」

アスナ「アマリ……」

ホープス「どうやら教団は、3000年の間、空位だった教主をついに決めるようだ」

すね。導師キールデインが私とゼルガードを求めるのはそのためでしょう」

セルリック「魔法生物ごときが知った口を……！」

ホープス「セルリック・オブシディアン……。あなたは、私とゼルガードの意味を知らないのですね。私とゼルガード……。それは、教主のために用意されたものなのです」

セルリック「何だかつ……？」

アマリ「ホープスとゼルガードは……。教主のためのもの……」

ホープス「だが私は、その役目を嫌いました。誰かに自分の在り方を決められるなど、承服できるものではありませんから。そうです、マスター……。あなたと同じだったのです」

アマリ「それが……。私と旅に出た本当の理由なのね……」

ホープス「そして、マスター……。あなたとの旅は、まだ終わりません」

アマリ「ホープス！今、行くから！」

アマリはゼルガードに乗った。

ホープス「マスター！無茶をして！」

アマリ「一人でゼルガードを動かしたホープスに言われたくないわ」

セルリック「ゼルガードに乗ったか！ならば、お前を消滅させ、魔法生物とゼルガードを我が物にする！」

ワース・ディーンベルはゼルガードに攻撃を仕掛けたが、イオリのディーンベルがそれを代わりに受けた。

アマリ「葵君！」

イオリ「違う、天野さん……。俺は……イオリ・アイオライトだ……」

アマリ「……！」

メル「イオリ先輩……！」

イオリ「俺は……操られていたとはいえ……君に……酷い事をした……。だから、俺は……奴等に授けられた、この力で……君を守る……」

セルリック「イオリ・アイオライト！ 貴様は何処までも……！」

さらにワース・ディーンベルはイオリのディーンベルを攻撃した。

イオリ「グアアアツ！」

メル「も、もうやめてください！ 例えあなたがアマリさんに酷い事をしたとしても……これではあなたが！」

アスナ「メル……」

イオリ「鮎川さん……ありがとう。でも、俺はやめる気はない……！ 天野さんだけじゃない！ 君や樹咲さん、新垣への償いの為もだ！」

メル「イオリ、先輩……！」

アマリ「イオリ君……。あなたも、このオドのない世界でドグマが使えるのね！」

ホープス「マスターも、アル・ワースから出た事でドグマの意味というものがわかってきたようですね」

アマリ「う、うん……」

ホープス「自由条約連合とゾギリアの世界は、アル・ワースと繋がった世界です。ですから、少ないながらもオドが存在していました」

アマリ「でも、平穩の世界にオドは存在していない……」

ホープス「オドというものは本来は世界に存在しているものではありません。生物自身を持つているものです。マスターやイオリ・アイオライトの中にもオドがあるので。それは魔力とは別の存在……。術士ではないエクスクロスのメンバーも持っているのです」

マリア「ええ、そうよ。オニキスのメンバーが使う、バスタードモードなどの力はオドの力を応用したものなのよ」

弘樹「そ、そうだったのかよ！」

セルリック「何を言っている、魔法生物！ドグマはエンデの加護を受けた教団の術士の上に許された奇跡だ！そして、教団の使命はドグマにより法と秩序を守る事にある！」

イオリ「黙れ、セルリック！天野さんを傷つけようとするお前達に正義などあるものか！」

アマリ「イオリ君……」

ホープス「イオリ・アイオライトもマスターと同じです。破壊の心を宿しているので」

アマリ「破壊……」

ホープス「それは別の言い方をすれば、どんな障害があろうとも自らの欲望を貫き通す意思……。それが理を変えるための力……。ドグマを使う者の素質なのです」

アマリ「それが……。ドグマの意味……」

セルリック「イオリ・アイオライト！邪魔をするなら、お前から始末してやる!!?」
またイオリのディーンベルが攻撃を受けた。

イオリ「ぐうっ！」

メル「嫌、イオリ先輩！」

セルリック「死ねえええっ!!?」

アマリ「イオリ君!!?」

デイ、ディーンベルは爆発した……。

メル「そ、そんな……。イオリ先輩……」

イオリ……

アマリ「ご心配なく、イオリ君は生きています」

イオリ「ここは……!?」

アマリ「ゼルガードの中では、イオリ君」

イオリ「天野さん！」

アマリ「服……お揃いになりましたね」

ホープス「勘違いするなよ、イオリ・アイオライト。教団の服が目障りだったから、変えたまでだ」

アマリ「イオリ君、あなたのオドも貸してください。私とホープスとあなたの力を合わせれば、きっと何かが出来ます！」

イオリ「わかった、天野さん！俺の力も君に！」

アマリ「イオリ君……。私は天野 亜真里じゃない……。今の私は、エクスクロスの一員……藍柱石の術士、アマリ・アクアマリンです」

こ、この力は……!?

セルリック「この力は……！」

ホープス「マスターと私とイオリ・アイオライトのオド……。それが一つとなり、ゼルガードに力を与える……」

アマリ「今ここに新しいドグマが生まれます！」

セルリック「アマリ・アクアマリン！」

アマリ「法師セルリック！あなたのエゴを破壊します！私の… 私達のドグマで！！」
？」

ゼルガードはワース・ディーンベルに攻撃を仕掛けた…。

イオリ「すごい…！何て魔力だ！」

アマリ「私の全てを見せます！ゼルガードの翼が開く！」

アマリとイオリは同時にオドを収束した。

アマリ& amp ;イオリ「新しい力をここに…！！」

アマリ「そして、何かが生まれる！」

無数の魔法陣が現れ、ワース・ディーンベルを覆った。

そこからレーザーが発射され、ワース・ディーンベルを襲い、魔法陣がワース・ディーンベルを拘束した。

イオリ「天と地、陰と陽…！全ての力を…！」

アマリ「これが…最後のドグマです！」

そして、最後に最大威力のレーザーを発射し、ワース・ディーンベルに直撃した…。
セルリック「ぬ、ぬあああああつ！！？」

アマリ「その名は… 天地真名！」

新しいドグマ：… 天地真名を受け、ワース・デインベルは大きく吹き飛んだ。

エレボス「新しいドグマだ…！」

リユクス「すごい…！ これまでとは桁が違います！」

イオリ「アマリさん…」

アマリ「ホープスとあなた… そして、ゼルガードが私に力を貸してくれてこのドグマは完成しました」

ホープス「勘違いするなよ、イオリ・アイオライト。お前の存在は、ただのオド袋だ」
イオリ「それでもいいさ。アマリさんの役に立てるなら」

アマリ「ありがとう、イオリ君」

メル「…」

アスナ「メ、メル？ 目が怖いわよ？」

メル「別に…」

弘樹「(おいおい、もしかしてメルの奴…)」

アスナ「(どうしてこう、ややこしい男に好意を寄せるのかな、あの子は…)」

アマリ「ホープスもイオリ君と仲良くしてね」

ホープス「か、かしこまりました…」

セルリック「アマリ・アクアマリン!!？」

まだやるつてののか!

ミシエル「しぶといな!」

ノブナガ「執念が奴に力を与えているのか!」

セルリック「許さん……!許さんぞ、アマリ・アクアマリン!教主は、この俺……セ

ルリック・オブシディアンのものだ!」

ホープス「奴の破壊の心は、さらに階段を上がったようです!」

アマリ「でも、負けません……!誰かの自由を奪う者を討つ……!それが私のドグマ

です!」

イオリ「アマリさん……!」

アマリ「ホープス、イオリ君!私達の力で、法師セルリックを倒します!」

反撃開始だ!

ゼルガードの天地真名を受けて、ワース・ディーンベルは大ダメージを負った。

アマリ「法師セルリック!負けを認めてください!」

セルリック「おのれえええつ!!?この屈辱……忘れはせんぞ!」

ワース・デインベルは撤退した。

九郎「取り敢えずは追っ払えたな」

アル「しつこい男だ……」

終わつたな……。

アマリ「ありがとう、イオリ君、ホープス。二人のおかげで私はまた戦えるわ」

ホープス「それはマスター自身が戦う意思を見せたからです」

イオリ「俺達はフォローをしただけだよ、アマリさん」

メル「イオリ先輩、少し鼻の下を伸ばし過ぎではありませんか？」

イオリ「そ、そんな事は……！」

イオリの奴も隅に置けないな。

倉光「各機は帰艦してくれ。その後、零君救出の作戦を立てる」

アマリ「わかりました！」

リリスとメサイア以外の機体は帰艦する。

アスナ「次は頑張りましょうね、メル」

メル「はい、アスナさん！」

リリスとメサイアも帰艦しようとした……その時だった。

レイヤ「戦いの後つてのが、一番人が油断しやすいんだよな」

て、撤退したはずのゼフィルスが現れた。

弘樹「ゼフィルスだと!!?」

ワタル「退いたんじゃないの!!?」

マリヤ「まさか……出方を伺っていたの……!!?」

レイヤ「まあいい……。まずはお前だ、メル・カーネリアン!」

メル「あ、ああ……!」

ゼフィルスがメサイアに攻撃を仕掛けたが……。

アスナ「メルウウウツ!!?」

リリスがメサイアを弾き飛ばし……変わりに攻撃を受けた……。

アスナ「ぐっ……はっ……!」

弘樹「アスナ、」

メル「アスナさん!」

レイヤ「ちいつ、邪魔が入ったか……。まあいい、じゃあな」

そう言い残すとゼフィルスは今度こそ撤退した……。

メル「アスナさん……アスナさん!!?」

アスナ「バカ、早く……戻りなさい……」

メル「ア、アスナさんも……!」

アスナ「良いから…。早く、行って…。零を、お願い…。」

そう言うとりリスはメサイアを突き飛ばした…。

アスナ「零…。ごめんね…。」

そう言い残し、りリスは跡形もなく爆発した…。

嘘、だろ…。!??

メル「あ、あああああ…。！アスナさあああああん!!?」

メルの叫び声が通信越しに響いた…。

りリスも艦に戻り、俺達は辺りをくまなく搜索したが、アスナの姿はどこにもなかった…。

フェルト「ダメです、辺りに私達以外の生体反応はありません…」

アマリ「そ、そんな…。！」

メル「も、もう少しだけ探させてください！絶対…。絶対にアスナさんは生きています！だから…。！」

倉光「メルちゃん…。残念だけど、もう…。」

メル「あ、ああ…。！」

メルは力をなくした様にその場に座り込んだ。

イオリ「鮎川さん！」

そんな彼女にイオリが駆け寄った……。

メル「う、うう……！」

ジン「……」

アユル「……」

弘樹「メル……」

メル「アスナ、さん……うう……！うわあああああん!!？」

メルの泣き声が一带に響いた……。

零……！お前はこれで良いのかよ……！

第58話 輝く絆の翼

「レイヤ・エメラルドだ。

俺は心の中で新垣 零と顔を合わせていた。

零「…」

レイヤ「アスナは死んじまったな…。俺の、嫌… お前の手にかかってな」

零「レイヤ… お前…！」

レイヤ「まあ、安心しろ。このまま時間が経てばお前もあの女の後を追う事になる」

い

なんせ、お前はもうすぐ消滅するんだからな…。

レイヤ「もし戻れたとしてもお前には帰る場所なんてねえよ…。何故なら、お前はも

うその手で仲間の事を殺めているんだからな」

零「俺は…」

レイヤ「残る人生を有意義に過せよ、じゃあな」

零「…」

俺は意識を元に戻した……。

ーメル・カーネリアンです。

アスナさんが死んでから、私の心にはポカリと穴が開いてしまいました……。

メル「アスナさん……零さん……」

漸く……記憶を取り戻せたのに……。

アマリ「メルさん、皆さんが心配していますよ、早く帰りましょう」

アマリさんが私を心配して、来てくれました。

メル「はい……。ありがとうございます……」

アマリ「明日も早いんですよ。なんと云っても明日は零君の救出作戦が決行されますから」

メル「そう、ですよね……。アスナさんに託されたんですよ、零さんの事を……」

アマリ「そうですね！きつといつまでも考えているメルさんを見たら、アスナさんだって、また怒りますよ」

メル「ふふ、学生の頃なども良き姉の様な存在でしたんですよ」

アマリ「それに確か、クラスの学級委員もしていたので面倒見も良かったんだと思

ます」

メル「アスナさんらしいですね」

？「死んじまった人間の昔話か？」

こ、この声は……！

メル「レイヤ・エメラルド……！！？」

アマリ「どうしてここに……！」

レイヤ「何、お前達の顔を見るのも最後になるからな。顔を拝んでおこうと思ったんだよ。それにしても、アスナの事は残念だったな」

メル「あなたのせいでアスナさんは……！」

レイヤ「待って待って、確かに殺したのは俺だが、新垣 零が殺したも同然なんだぜ？俺達は同じ存在なんだからな」

アマリ「あなたという人は……！」

レイヤ「それよりも、ここでお前等にトドメを刺していれば、後々楽になるし、新垣 零の消滅も早まるな」

零さんの……消滅……！！？

アマリ「ど、どういう事ですか！！？」

レイヤ「新垣 零は未だ俺の心の中で生きているが、消滅しつつある。俺という存在

が強くなり、奴の存在が弱まった証拠だ。さらにアスナの死や自分の手でアスナを殺めてしまった悔しみが奴の消滅を早めた……。つまり、あいつが絶望する程、あいつが早く消える事になるって事だ」

零さんが消える……。

アマリ「そんな事、させません！」

レイヤ「勇ましくなったじゃねえか。まあ、新垣 零よりもメルの方がよっぽどダメージが大きい様だな」

メル「……」

レイヤ「まあ、そっちの方がやりやすいけどな」

レイヤ・エメラルドがバスタードモードを発動させて、私に急接近して、蹴り飛ばしてきました。

メル「ぐうっ…… ！？？」

アマリ「メルさん！？？」

レイヤ「メル……。お前じゃ、誰も守れないんだよ」

メル「私では、誰も……。守れない……」

アマリ「いい加減にしてください……！」

アマリさんが私を守る様にレイヤ・エメラルドの前に立ちふさがりました……。

アマリ「零君やアスナさんだけでなく、メルさんまで……！あなたはどれだけの人を傷つければ気が済むんですか?!？」

レイヤ「誰がどう傷つこうが、俺には関係ねえんだよ」

アマリ「あなたは……零君じゃない」

レイヤ「……あ?」

アマリ「例え、その姿の本来の持ち主があなただとしても……あなたは零君にはなれません。零君はどの様な時でも誰かの事を考え、誰かを守ってきました……。他者を切り捨てるあなたでは絶対に零君にはなれません!」

レイヤ「黙れ……黙れ!」

突然、レイヤ・エメラルドが大声を上げ、アマリさんを睨みつけました。

レイヤ「俺が新垣 零じゃねえだど? 当たり前だろうが! 俺は俺だ……新垣 零じゃねえ! 俺とあいつを比べてんじゃねえぞ、てめえ!」

レイヤ・エメラルドがアマリさんに詰め寄り、首を締め付ける。

アマリ「ぐっ……あああ……っ!」

レイヤ「てめえは最後までとっておこうと思ったが、気が変わった。てめえから死ぬ!」

アマリ「あ、あああ……!」

メル「アマリさんを……離してください！」

レイヤ「……何……？」

気がつけば、私はアマリさんの首を絞めるレイヤ・エメラルドの腕を掴んでいました。さらに目を赤く発光させて……。

アマリ「メル、さ……ん……！」

レイヤ「メル、てめえもバスタードモードを使える様になった様だな。本来、この世界から召喚されたてめえやアスナ、カノン・サファイアを記憶改変と同時にオドによる力も植えた……。だからこそ、てめえ等もバスタードモードが使えるんだよ」

メル「これ以上、私の大切な人達を傷つけさせはしません！」

レイヤ「勇ましいだけで、俺に勝てると思ってるのか？」

弘樹「悪いがこれ以上はやらせねえぞ！」

イオリ「アマリさんとメルさんから離れる！」

そこへ弘樹さんとイオリ先輩にマリアさんとホープスさんが駆け付け、弘樹さんの攻撃でレイヤ・エメラルドはアマリさんの首から手を離しました。

レイヤ「ぐっ……！」

マリア「レイヤ、もうこんな事はやめて！」

ホープス「他のエクスクロスのメンバーが来るのも時間の問題だ。さて、どうする？」

レイヤ「てめえ等……どこまでも俺の邪魔をしやがって……いい加減にうぜえんだよ！」

レイヤ・エメラルドが私達に再び、攻撃をしようとしたその時でした。

レイヤ「ガッ……!!? グアアアアッ……！」

弘樹「な、何だ……？」

レイヤ・エメラルドが急に苦しみ出した……!!?

レイヤ「て、めえ……！ま、だ……抵、抗を……！グアアアアッ！」

アマリ「い、一体何が……!!?」

レイヤ「ア、マリ……！みんな、な……！」

レイヤ・エメラルドの様子がおかしいです……！

弘樹「お、お前……大丈夫なのか……!!?」

マリア「零……なの……!!?」

え!!?」

メル「え……」

アマリ「零君!!?」

零「あ、ああ……！」

零さんが元に戻った……!!?

零「弘樹、イオリ、ホープス、母さん……！アマリとメルを連れて、早く逃げてくれ……！レイヤを抑え込めるのも……時間の、問題なんだ……！」

弘樹「零、お前……！」

零「頼む……！早くしてくれ……！」

マリア「……わかつたわ。行きましよう、みんな」

メル「でも、零さんが！」

弘樹「堪えてくれメル……。零は俺達を守る為にあいつを抑えているんだ。零の努力を……無駄にしないでくれ……！」

メル「弘樹さん……」

本当は弘樹さんも零さんを助け出したいはずなのに……。

メル「わかり、ました……」

イオリ「メルさん、行こう」

私はイオリ先輩に連れられ、マリアさんと立ち去ろうとしました。

ホープス「マスター、行きましよう！」

アマリ「零君……」

零「行つてくれ、アマリ……！早く……！」

アマリ「私は……！」

零「俺はもう……アスナの様に大切な人間をこの手で殺めたくないんだよ……！」
弘樹「行くぞ、アマリ！」

アマリ「はい……」

そう言い、アマリさんも立ち去ろうとしましたが、もう一度振り返り言いました。
アマリ「必ず、助けるから……！」

零「フツ、期待……しているぜ……」

零さんを残して、私達はメガファアウナへと戻って行きました……。

零「頼んだぞ、みんな……」

私達を見送った零さんの意識はまた心の奥底へ押し込められた事も知らずに……。

ーレイヤ・エメルルドだ。

新垣 零の奴……。やってくれたな……；！

俺は奴の意識を封じ込めて、息を吐いた。

レイヤ「勝手な事、してくれたん……；」

俺はそのままオニキスの基地へ戻る。

レイヤ「今帰ったぜ」

ハデス「随分、遅かったじゃないか」

レイヤ「エクスクロスに会っていったんだよ。だが、新垣 零に邪魔された」

ギルガ「何処までも邪魔な奴ですね……」

レイヤ「まあ、明日にでもエクスクロスに総攻撃をかけるつもりだ。親父、明日も俺に指揮を任せてくれるよな？」

ハデス「いいだろう」

レイヤ「つてなわけだ。白木 優香、カノン・サファイア、ギルガ、リン・マスカライト、ラゴウ……。明日は一緒に来てもらうぜ」

優香「わかりました」

ラゴウ「……」

レイヤ「どうした、ラゴウ？何か不満でもあるのか？」

ラゴウ「い、いえ……。わかりました」

明日が楽しみだぜ……。明日、全てが決まるのだからな。俺や新垣 零の運命……。そして、世界の運命も……。

ーメル・カーネリアンです。

私はメガファアウナの廊下で外を眺めていました。

イオリ「考え事かい、メルさん」

メル「イオリ先輩……」

イオリ「あまり、遅くまで起きていると、明日に触るよ」

メル「私、決めました……。アスナさんが私にしてくれた様に……。私も誰かを守る為に戦います！」

イオリ「そうか……。ならば、俺も君の力になるよ」

メル「イオリ先輩……。ありがとうございます！あ、今からイオリ先輩の部屋にお邪魔してもよろしいでしょうか？」

イオリ「え、ええっ!?今からか!?」

メル「ダメ、ですか？」

イオリ「い、いや……。ダメじゃない」

そして、私はイオリ先輩の部屋へ行き、お話をしました……。

ですが、そのまま意識を失ってしまい、眠りについてしまいました……。

「氷室 弘樹だ。」

俺はアマリと共にイオリを起こしに来た。

部屋をノックするが、一向に起きない為、俺とアマリはイオリの部屋に入る。

すると、ベッドにはイオリと……メルが寝ている……!!?

アマリ「え、ええっ!!?」

やりやがったか、イオリの奴……。

イオリ「ん、うん……?」

イオリが起きた。

弘樹「起きたか、イオリ」

イオリ「おはよう、アマリさん、氷室。所で、どうして2人が……えっ……!!?」

イオリが隣にメルが寝ている事に気づき、目を見開く。

イオリ「え、は、ええっ!!?」

メル「むうう……騒がしいですね……ふえっ……!!?」

メルがゆつくりと目を覚まし、隣に居るイオリの顔を見た途端、顔を真っ赤にする。

メル「あ、あ、あわわわ……!わ、私……!」

弘樹「へえ、お前達、昨日は楽しかったみたいだな」

イオリ「……、誤解だ!」

アマリ「イオリ君……！」

ア、アマリの目が笑ってねえ……！

イオリ「ま、待ってくれ、アマリさん！これは違うんだ！」

アマリ「女の子に簡単に手を出すなんて……許しません！」

イオリ「ア、アマリさあん……！」

これはイオリの自業自得だな。

すると、警報が鳴り響いた。

マリア「みんな！オニキスが来たわよ！」

来たか……！

弘樹「アマリ……！」

アマリ「今日こそ、零君を助け出します……！」

俺達はオニキスを迎え撃つ為にメガファウナへと戻っていった……。

第58話 輝く絆の翼

俺達はそれぞれ出撃した。

青葉「ついに作戦を執行する時だな」

ヒナ「零という人を本当に助け出せるの……？」

ディオ「零さんは俺達を何度も助けてくれた……。だから、必ず助け出す……！」

デュオ「そのイキだぜ、ディオ！」

メル「皆さん……頑張りましょう！」

アンジユ「メル、何か変わった？」

メル「変わった……というのは？」

サリア「アスナが死んで落ち込んでいたけど、随分いい顔になったじゃない」

メル「落ち込んでいても何も始まらないと思いましたが。今、私に出来る事をす

る……それだけです！」

イオリ「今の君ならば、新垣も振り向くかもしれないな」

メル「……あなたは一夏さんぐらい鈍いですね」

イオリ「え……」

一夏「え、待ってくれ！何で俺の名前を出すんだ……？」

簪「自分で考えて」

楯無「簪ちゃん、きつめね」

シヤア「緊張感が薄めだな」

アムロ「確かに問題でもあるが、変に気負うよりかはいいだろう」

シヤア「そうだな。それに、これこそがエクスクロスでもあるからな」

フロントル「このエクスクロスという部隊を理解できてきたそうだな」

シヤア「様々な世界の若者を見て、私も感化されたのかもしれない」

マリア「話はここまですべて…来るわ！」

マリアさんの言葉通り、ガルム部隊とジェイル、デイビウス、アマテラス・ツヴァイ、

ナイトメア、ゼフィールスが現れた。

レイヤ「準備万端な様だな、エクスクロス！」

刹那「レイヤ・エメラルドか…！」

ティエリア「オニキスの戦力を総動員で出撃させたそうだな…！」

ギルガ「今日が君達の命日だよ、エクスクロス」

アマリ「零君！私達の声が聞こえるのなら、返事をして！」

ベルリ「僕達、あなたを助けに来たんですよ！」

ドロロ「気をしっかりと持つでござる！」

レイヤ「新垣 零を呼びかけても無駄だぜ。なんせ、あいつには俺の邪魔をできない

様に意識を完全に封印させたからな。恐らく、声は届かねえよ」

クリス「そんな…！」

海道「だったら、てめえをぶん殴って、新垣の目を覚まさせてやる！」

真上「意識を封印という事は新垣はまだ消滅していないという事だな」

由木「それなら、零君の救出はまだ出来る…！」

レイヤ「出来るかな、お前等に」

九郎「やってみなけりやわかんねえだろ！」

シモン「俺達を甘く見るんじゃないねえぞ！」

ヴァン「何だっつていい！取り敢えず、ぶった斬る！」

ギルガ「相変わらず、血の気が多い者が多いな」

弘樹「優香！カノン！お前等はこれでいいのかよ!?!？」

優香「裏切り者の言葉など聞く気は無いわ」

カノン「ここで排除します」

レイヤ「そういうわけだ、ラゴウもいいな？」

ラゴウ「…」

レイヤ「おい、返事はどうした？」

ラゴウ「わかりました…」

マリア「(ラゴウの様子がおかしい…。何かあるの…?)」

レイヤ「来い、エクスクロス！俺が直々に潰してやるよ！」

メル「そうはいきません！」

アマリ「零君と約束したんです…。だから、必ず零君を助け出します！」

レイヤ「不可能だと思いがやってみやがれ！（覚醒まで後一步…。早く立ち上がりやがれよ、相棒…！）」

俺達は戦闘を開始した。

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

弘樹「この勝負に全てをかける…。！待っているよ、零！」

〈戦闘会話 メルVS初戦闘〉

メル「見ていてください、アスナさん…。私、頑張りますから…。！あなたの様に強く生きてみせます！」

〈戦闘会話 アマリVS初戦闘〉

ホープス「助けられる確率が低くともやりましょう、マスター！」

イオリ「ホープス、お前がこんな事を言うなんてな……」
アマリ「ありがとう、ホープス。零君を助ける為に……行きましょう、二人共！」

〈戦闘会話 弘樹VSカノン〉

弘樹「目を覚ましてくれ、カノン！俺には……お前が……！」

カノン「消去します」

弘樹「言葉じゃダメなのかよ……！」

〈戦闘会話 メルVSカノン〉

カノン「裏切り者は消去します」

メル「カノンちゃん……。必ず目を覚まさせてあげるからね、待っていて！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

ギルガ「君達をレイヤ様の所へは行かせないよ！」

弘樹「何としてでもたどり着いてやる！そして、てめえ等もぶっ飛ばす！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

リン「メルちゃん、本当の記憶を取り戻したのね」

メル「それでも、リンちゃんが友達だった事には変わりないよ」

リン「! : : : だ、だから何？私はあなたの敵、だから倒すわ!」

メル「少なくとも、零さんを取り戻すまでは倒されないよ!」

〈戦闘会話 弘樹VS優香〉

優香「氷室 弘樹、覚悟! : : : !」

弘樹「くそツ! : : : !お前と戦う事になるなんて! : : : !少し我慢してくれよ、優香!」

〈戦闘会話 メルVS優香〉

メル「優香さん! : : : 。忘れましたか?いつも私の事を妹の様に想ってくれたじゃないですか!」

優香「そんなこと知らないわ、あなたは裏切り者のメル・カーネリアン! : : : それだけ

よ」

〈戦闘会話 マリアVSラゴウ〉

ラゴウ「マリア様! : : : !」

マリア「ラゴウ、まさかあなた……！」

ラゴウ「何でもございませぬ……！覚悟してください……！」

俺達はアマテラス・ツヴァイにダメージを与えた。

リン「こ、攻撃を受けました……！」

レイヤ「心配すんな、ほらよ！」

ゼフィールスから何かの力が与えられ、アマテラス・ツヴァイのダメージが回復した……

!!?

ロザリー「ダメージが回復したぞ!!?」

ヒイロ「あれが、レイヤ・エメラルドの力か……？」

ハイン「あんなものどうすればいいんだよ!!?」

オルガ「それなら、まずはレイヤ・エメラルドをどうにかするぞ！」

ハツシユ「その方がいいっすね……！」

どちらにしろ、零を救い出す為にはレイヤ・エメラルドを止めるしかねえなら、やっ

てやる！

〈戦闘会話 万丈VSレイヤ〉

レイヤ「破嵐 万丈、てめえの日輪の光とやらでも俺を消し去る事はできねえよ！」
万丈「ならば、試してみるかい？ 僕の日輪の輝きで零を君の手から救い出してみせる！」

〈戦闘会話 ショウVSレイヤ〉

レイヤ「見せてみる、ショウ・ザマ。てめえのオーラ力というものを！」
チャム「零……。こんなのやだよ……！」
ショウ「あいつを倒して、零を連れ戻す！ 俺のオーラ力にかけて！」

〈戦闘会話 エイサツプVSレイヤ〉

エレボス「レイヤ・エメラルドを止めるよ、エイサツプ！」
レイヤ「無駄だぜ、エイサツプ・鈴木。お前じや俺には勝てない」
エイサツプ「そんなものやってみないとわからないだろ！ あまり、俺達を舐めるなよ！」

〈戦闘会話　カミーユVSレイヤ〉

レイヤ「一度、戦意を喪失したてめえが俺の邪魔してんじやねえ、カミーユ・ビダン！」

カミーユ「戦争を遊びだと考えているお前を野放しになど出来るか！覚悟しろ！」

〈戦闘会話　ジュードVSレイヤ〉

ジュード「この野郎！いい加減、零さんを返しやがれ！」

レイヤ「何を勘違いしてんだ、ジュード・アーシタ？この身体は元から俺の物なんだよー！」

〈戦闘会話　アムロVSレイヤ〉

レイヤ「てめえとやりたくてずっとウズウズしていたんだよ、アムロ・レイ！」

アムロ「本当に零とは違う性格なんだな……！だが、零を取り戻す為にもここで奴を止めねば……！」

〈戦闘会話　シャアVSレイヤ〉

レイヤ「赤い彗星、シヤア・アズナブルか……。相手にとつて不足はねえ！」
シヤア「悪いが私は君との戦いを楽しむつもりはない。すぐにカタをつける……！」

〈戦闘会話 バナージVSレイヤ〉

レイヤ「てめえの可能性の力つてものを見せてくれよ、バナージ・リンクス」
バナージ「零さんを救い出す為だ……！お前をここで止める！」

〈戦闘会話 リデイVSレイヤ〉

レイヤ「てめえの相手をしている暇はねえんだよ、リデイ・マーセナス」
リデイ「そう言うな。零には俺の世話になった事がある……。だからこそ、お前の存在は許されないんだよ！」

〈戦闘会話 フロンタルVSレイヤ〉

フロンタル「君を野放しには出来ないな、レイヤ・エメラルド」
レイヤ「フル・フロンタル……。てめえは強敵と見た……勝負だ！」

〈戦闘会話 シーブックVSレイヤ〉

シーブック「このままでは零さんが消えてしまう……！必ず救い出してみせる！」
レイヤ「そういうのは俺を倒してからにしゃがれ、シーブック・アノー！」

〈戦闘会話 トビアVSレイヤ〉

レイヤ「俺はてめえの本当の事を知っているぜ、トビア・アロナクス……いや、クロ
スポン・バンガードのエースさんよ」

トビア「この世界での俺はただのトビア・アロナクスだ！そして、エクスクロスの一
員だ！」

〈戦闘会話 ヒイロVSレイヤ〉

レイヤ「ヒイロ・ユイ。てめえの苦しむ顔を見るとするか」

ヒイロ「趣味が悪いな、レイヤ・エメラルド……。零は返してもらおう……！」

〈戦闘会話 シンVSレイヤ〉

シン「零さんの事……。そして、アスナさんの事も全部纏めて借りを返してやる！」

レイヤ「いちいち迷いを持っていたお前に出来るわけないだろう、シン・アスカ。運
命に縛られていたてめえではな！」

〈戦闘会話 キラVSレイヤ〉

キラ「こんな事はもうやめなんだ！争い合っても何にもならない！」

レイヤ「言葉なんて不要なんだよ、キラ・ヤマト！何でも話し合いで済むと思っ
てんじゃねえよ！」

〈戦闘会話 刹那VSレイヤ〉

刹那「レイヤ・エメラルド…俺達は…！」

レイヤ「また分かり合えるとか言っているのか、刹那・F・セイエイ？俺とお前は敵
同士…これ故に俺達に対話なんて必要ないんだよ！」

〈戦闘会話 キオVSレイヤ〉

キオ「お願いです、零さんを返してください！」

レイヤ「甘いな、キオ・アスノ。俺がそんな言葉で止まるわけないだろ！」

〈戦闘会話 アセムVSレイヤ〉

アセム「お前は散々、俺達を怒らせたんだ…覚悟してもらおうぜ！」

レイヤ「キャプテン・アツシュ… いや、アセム・アスノか…。いいぜ、相手してやる！」

〈戦闘会話 フリットVSレイヤ〉

フリット「お前はまだまだ青いな、レイヤ・エメラルド」

レイヤ「ジジイがわかったような事言ってるじゃねえぞ、フリット・アスノ！青いかどうか試してみやがれ！」

〈戦闘会話 ベルリVSレイヤ〉

ベルリ「零さんの声や顔で悪さをするのにやめてください！」

レイヤ「やめろも何もこれは元は俺の体だ！てめえこそ、俺の邪魔してんじゃねえよ、ベルリ・ゼナム！」

〈戦闘会話 アイーダVSレイヤ〉

アイーダ「私が家出をした時、零は私とアマリを連れ戻しに来てくれました…。今度は私の番です！」

レイヤ「悪いな、てめえの出番はねえよ、アイーダ・スルガン！てめえはどこへも

突撃している！」

〈戦闘会話 クリムVSレイヤ〉

レイヤ「天才クリム・ニツクの腕を拝見させてもらおうか！」

クリム「いいだろう。だが、零少年は返してもらおう！エクスクロスには彼の存在が必要不可欠だからな！」

〈戦闘会話 三日月VSレイヤ〉

三日月「行くよ、零の偽物」

レイヤ「俺は偽物じゃねえ……！あまり、調子に乗んじゃねえぞ、三日月・オーガス！」

〈戦闘会話 オルガVSレイヤ〉

レイヤ「てめえは大人しく指揮に専念した方がいいんじゃないか、オルガ・イツカ？」
オルガ「心配無用だ。俺はこっちでも充分にやれるからな！」

〈戦闘会話 ワタルVSレイヤ〉

龍王丸「パワーは以前、暴走した時の零以上だ……！」

レイヤ「当然だ。これが俺の本当の力だからな。救世主なら、俺を止めてみせろよ、戦部　ワタル！」

ワタル「止める……！僕達……　エクスクロスには零さんが必要なんだ！」

〈戦闘会話　　舞人VSレイヤ〉

レイヤ「旋風寺　舞人とガイン……。ここであめえ等の正義道もラストだ」

グレートマイトガイン「な、何と言う気迫だ……！」

舞人「俺達の正義は永遠に不滅だ！それがわからないお前に俺達は負けない！」

〈戦闘会話　　ルルーシュVSレイヤ〉

レイヤ「ギアスで俺を操ってもいいんだぜ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア……。それともルルーシュ・ランペルージって、呼んだ方がいいか？」

ルルーシュ「いいや、ギアスは使わないと決めたのでな。それから今の俺は只のルルーシュだ、それを忘れるな！」

〈戦闘会話　　青葉VSレイヤ〉

青葉「悪さもここまでだぞ、レイヤ・エメラルド！」

レイヤ「はいはい、いいからとっとかかってこい、渡瀬 青葉。ボコボコにしてやるからよ！」

〈戦闘会話 アンジユVSレイヤ〉

レイヤ「相手になるぜ、アンジユリーゼ・斑鳩・ミスルギ皇女……いや、今はアンジユだったな？」

アンジユ「零と似たような顔してムカつくわね……！あんたが零になろうなんて100万年早いわ！」

〈戦闘会話 ヒルダVSレイヤ〉

レイヤ「友達を救い出す為に頑張ってみせろよ、ヒルダ」

ヒルダ「あんたに言われなくたって、零は必ずあたしが助けてやるよ！あんたをぶっ飛ばしてね！」

〈戦闘会話 甲児VSレイヤ〉

レイヤ「マジンガーにマジンカイザー……。てめえには魔人との縁がありそうだな、兜

甲児

甲児「おう、その通りだ！この力で零を必ず助け出してやるぜ！」

〈戦闘会話 鉄也VSレイヤ〉

レイヤ「戦闘のプロ、剣 鉄也が相手か……。燃えてくるぜ……。！」

鉄也「お前の私情など知らんぞ！俺は零を助け出すだけだ！」

〈戦闘会話 海道VSレイヤ〉

レイヤ「俺に地獄というものを見せてくれよ、海道 剣、真上 遼」

真上「どうやら、奴はもう勘違いをしているみたいだな」

海道「そうだな！てめえの間違いはただ一つ……。俺達が地獄だ！」

〈戦闘会話 シモンVSレイヤ〉

レイヤ「螺旋王を倒した螺旋の男、シモン……。てめえなら楽しめそうだな！」

ヴィラル「お前に興味津々の様だぞ、シモン」

シモン「今お前と楽しむつもりはねえ！アスナの仇を取らせてもらおうぜ！」

〈戦闘会話　ネモ船長VSレイヤ〉

レイヤ「てめえには一度会って、話してみたかったんだ、エルシス・ラ・アルフォー
ル……。いや、ネモ船長」

ネモ船長「私はお前と話す気などない。零を取り戻させてもらう」

〈戦闘会話　一夏VSレイヤ〉

一夏「許さない……。お前だけは許さないぞ、レイヤ・エメラルド！」

レイヤ「てめえみたいなタイプは嫌いだが、織斑　一夏。正義の味方の様な爽やかな
てめえがな！」

〈戦闘会話　千冬VSレイヤ〉

レイヤ「新垣　零の様なガキ如きに何、必死になっているんだよ、織斑　千冬？」

千冬「ガキだと……。？ふん、お前と零を一緒にするな。あいつは私達にとって必要な
存在だから助けるまでだ！」

〈戦闘会話　竜馬VSレイヤ〉

弁慶「情けねえな、零！他の人格に負けるなんてな」

隼人「まあ、俺達が助けてやろうぜ」

レイヤ「つて、お仲間は言っているが、てめえはどうなんだ、流 竜馬？」

竜馬「零を元に戻すためだ！ぶっ飛ばしてやるぜ、偽物野郎！」

〈戦闘会話 葵VSレイヤ〉

レイヤ「チームDの野生の本能は見ものだったぜ。特に飛鷹 葵……てめえみたいな女は好みのタイプだぜ」

ジョニー「言われてますよ、葵さん」

朔哉「でも、俺達の事も褒められてるぜ！」

エイターダ「ですが、喜ぶものでもありません！」

くらら「それで、どうするの、葵？」

葵「言われるまでもないわ！それに、零なら兎も角、あんたはタイプじゃないのよ！行くわよ、あたし達の全力をかけて、零を取り戻す！」

〈戦闘会話 九郎VSレイヤ〉

九郎「今まで沢山の奴を見てきたが、ひさびさに頭に來たぜ！」

アル「妾も同じ意見だ、九郎！」

レイヤ「なら、俺をぶん殴ってみろよ、大十字 九郎……魔術の力とやらでな！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSレイヤ〉

レイヤ「ジョセフ・カーター・ジョーンズとヒーローマン。ヒーローならば、悪である俺を倒してみろよ」

ヒーローマン「ムウン……！」

ジョーイ「うん、わかっているよ、ヒーローマン！零さんは大切な僕達の仲間だもんね……絶対に助け出すよ、ヒーローマン！」

〈戦闘会話 ヴァンVSレイヤ〉

レイヤ「ヴァン、何故、てめえは俺に挑む？てめえの目的には新垣 零は関係ないはずだ」

ヴァン「確にかぎ爪を殺す事に関しては零を助ける必要はねえ……。だが、少なくともあいつには世話になった事もある……。その借りを返すだけだ！」

〈戦闘会話 アマタVSレイヤ〉

レイヤ「アマタ・ソラ……。前からてめえには興味があつたんだ……。てめえは何か犬

の様な感じがするからな」

アマタ「犬の様な感じ……？何の事だかわからないけど、零達を傷つけようとするのなら、相手になるぞ！」

〈戦闘会話 ノリコVSレイヤ〉

レイヤ「来いよ、タカヤ・ノリコ！俺を宇宙怪獣と同じだと思ふなよ！」

カズミ「わかっているわね、ノリコ？」

ノリコ「はい、お姉様。今は零さんの救出を最優先にします！」

〈戦闘会話 ユイVSレイヤ〉

レイヤ「ユインシエル・アステリア。皇女は皇女らしくルクスの国のエナストリアにいたらどうだ？」

レナ「ユイ……」

ユイ「そうはいきません……！零さんを……私の兄の様な方を放つてはおけません
！」

〈戦闘会話 ノブナガVSレイヤ〉

レイヤ「あまり、やり過ぎると新垣 零を破壊するぞ、オダ・ノブナガ」

ノブナガ「心配する必要はない。俺は破壊王だ……。お前だけ、破壊する事など容易だ！」

〈戦闘会話 しんのすけVSレイヤ〉

みさえ「零君……。こんな事になるなんて……」

ひろし「頼むから零君を返してくれよ！」

カンナム「待ってください、ひろしさん、みさえさん！」

しんのすけ「頼んでも無駄だゾ！あいつは零お兄ちゃんを返す気なんてないゾ！」

レイヤ「よくわかってんじやねえかよ、野原 しんのすけ、カンナム……。それに気づいた褒美として、一瞬で消してやるよ！」

〈戦闘会話 ケロロVSレイヤ〉

ギロロ「おい、ケロロ！奴が来るぞ！」

ドロロ「迎え撃つでござる！」

クルル「クーククツ！零を助け出す手段はあるのか？」

レイヤ「ないない。奴が目覚める事なんて、もうねえんだよ。ケロロ軍曹とケロロ小

隊」

タママ「ほ、本当なんですかね…？」

ケロロ「確信がない以上、諦めるわけにはいかないでありますよ！」

〈戦闘会話　アキトVSレイヤ〉

アキト「観念しろ、悪党。零を返さないというのなら倒す！」

レイヤ「観念するのはそっちの方だけ、テンカワ・アキト。世の中には取り戻せないものもある…。それが新垣　零だ！」

〈戦闘会話　ルリVSレイヤ〉

ハーリー「ゼフィルスが射線上に入りました！」

ユリカ「零君を返して！」

レイヤ「うるせえな。ホシノ・ルリ…電子の妖精であるてめえも新垣　零を取り戻したいのか？」

ルリ「零さんを取り戻すのに、電子の妖精という名は関係ありません。零さんは助け出します、エクスクロスの一員として」

〈戦闘会話 アルトVSレイヤ〉

アルト「何が本物になるだ！他人から翼を奪って、お前は何を考えてるんだよ！」

レイヤ「これは元々、俺の翼だ、早乙女 アルト。それから奪ってなんかいいえよ！」

〈戦闘会話 リオンVSレイヤ〉

リオン「今まで色んな奴見てきたけど、お前の様な奴もいたんだな！」

レイヤ「世界には様々な人間がいるんだよ、リオン・榊。俺やオニキスみたいな人間がな！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSレイヤ〉

ゴーカイシルバー「零君は返してもらおうぞ！」

ゴーカイイエロー「それにあんたの顔……零と重ねてみると、腹が立つのよね」

ゴーカイブルー「だったら、潰すだけだ！」

ゴーカイグリーン「行こう、みんな！」

ゴーカイピンク「覚悟してください！」

レイヤ「海賊は宝探しをしていればいいのによ！なあ、キャプテン・マーベラス！」

ゴーカイレッド「勿論、探すぜ。だが、今はエクスクロスの宝を取り戻す！零という

宝をな！」

〈戦闘会話　ゼロVSレイヤ〉

レイヤ「ウルトラマンの力は侮れないな。特にてめえの力は未知数だから、全力で行くぞ、ウルトラマンゼロ！」

ゼロ「へっ、わかってんじゃねえか！だが、もう遅いぜ、俺のビックバンはもう止められねえぜ！」

〈戦闘会話　レイモンVSレイヤ〉

レイヤ「地球のレイオニクスのレイ。てめえが暴走した時は見ていらなかったぜ」

レイモン「そうか、あの時はお前が……。感謝する。だが、今は話は別だ！零を取り戻すためにも！」

〈戦闘会話　マサキVSレイヤ〉

レイヤ「マサキ・アンドー。死にたくなければ、降参した方がいいぜ」

マサキ「仲間が目の前にいるのに尻尾巻いて逃げれるかよ！」

〈戦闘会話 アーニーVSレイヤ〉

サヤ「レイヤ・エメラルド……。沢山の人を傷つけたその報い、受けてもらいます！」
アーニー「それこそが僕達の役目だ！受ける、僕達の覚悟を！」

レイヤ「真正面から受けてやるから、ガツカリさせんなよ、アニエス・ベルジュ！」

〈戦闘会話 アマリVSレイヤ〉

イオリ「新垣……！」

ホープス「今、お前を解放してやるから待っている！」

アマリ「零君は誰かを傷つける事は望んでいません……。私が阻止します！」

レイヤ「アマリ・アクアマリン。新垣 零が愛した女だ。ゆっくりと痛ぶってやるよ……！」

〈戦闘会話 弘樹VSレイヤ〉

レイヤ「てめえとの勝負にもケリをつけてやるよ、氷室 弘樹！」

レイヤ「うるせえ！俺は零を連れ戻す！お前との勝負なんて知るかよ！」

〈戦闘会話 メルVSレイヤ〉

メル「レイヤ・エメラルド…！あなただけは…！」
レイヤ「てめえだけは此処で消してやるよ、メル・カーネリアン！」

〈戦闘会話　マリアVSレイヤ〉

レイヤ「親父の邪魔をしようのならば、いくらお袋でも容赦はしねえ！」
マリア「レイヤ、あなたは私が止める…。あなたの母親として！」

ゼフィルスに攻撃を当てたが…。

レイヤ「こんなもので俺を倒せるわけねえだろ！」

ゼフィルスが回復した…？

朗利「あいつも回復出来るのかよ…？」

金本「こんなのどれだけやっても一緒にゃないか！」

ロロ「ですが、諦めるわけにはいきません！」

ルルーシュ「必ず、零を助け出すチャンスがある…！」

ギルガ「無駄なものによく頑張るね」

ラゴウ「エクス、クロス…」

レイヤ「まあいい……。まずは予定通り」

メル「！」

ゼフィールスがメサイアに近づいた……。!??

レイヤ「メル！てめえから殺してやるよ！」

クロスソードでメサイアは斬り裂かれた。

メル「うあああっ！」

アマリ「メルさん！」

レイヤ「抵抗しない方が痛い目をみないぜ」

レイヤ・エメラルドの奴……。！

メル「それでも……。私は抵抗する事をやめません！」

イオリ「メルさん……」

リン「メルちゃん、どうしてそこまで……」

メル「私は……。お世話になった零さんやアスナさんの想いも受け持っているんで

す……。！だから、逃げるわけにはいきません！」

メル、お前……。

レイヤ「……。もういい。さっさと死ね」

メル「つ……。！」

ゼフィルスがもう一度、メサイアに攻撃を仕掛けた……が……。
メル「え……」

レイヤ「な、何だと……!?」

ゼフィルスの動きが……止まった……!??

―新垣 零だ。

少し時間がかかったが……心の奥底で身体を動かせる様になったぜ……！
俺はレイヤの腕を掴み、動きを止めさせた。

レイヤ「新垣 零、てめえ……！」

零「これ以上……！お前に誰も傷つけはさせない……！」

レイヤ「何故だ……！てめえの身体は、もう動かせないはずだ！」

零「メルが頑張ってくれているのに……俺が指をくわえて待つていれるわけないだろ……！」

レイヤ「何処まで……ふざけやがって……！アスナを殺めたてめえの居場所なんてないんだよ！」

零「居場所は……俺自身が作る……！アスナを殺めたという……罪を背負いながら！」

例え孤独の道を歩もうとも…俺は生きる！それが俺の生きる資格だ！」

レイヤ「お前…」

零「そして、俺はお前でお前は俺だ…。だから、お前の罪も俺が背負う。それが新垣零として生まれてきた俺のすべき事だ！」

レイヤ「…」

零「レイヤ…だから、俺はお前を…！」

レイヤ「…合格だ」

零「え…？」

レイヤ「やーつと、俺と同じ位まで辿り着きやがったか、遅いんだよ」

ど、どういう事だ…？

零「レ、レイヤ…？」

俺はレイヤの腕を離し、レイヤの顔を見ると、少し微笑みながら、レイヤは口を開く。
レイヤ「今なら、俺達は真の力を発揮できる」

零「真の力…？」

レイヤ「その為には俺とお前の力を入れて均等にしなければならなかった。だから、あえてお前を心の中へと押し込み、力を出させようとしたんだよ」

零「じゃあ、お前は俺を試したのか？俺が…仲間の為にお前に反抗する程の力が出

せると思つて……」

レイヤ「そうだよ。だから、エクスクロスまで敵に回したのによ」

零「だったら……アスナを殺したのも俺が力を出す為に過ぎなかつたって事か!!?」

レイヤ「ああ。仲間の死は何よりの力になる」

零「ふざけるな！人の生命を何だと思つてるんだよ!!?」

レイヤ「大切なもの……そのぐらいわかつてるつての」

零「だったら、何故、アスナを!!?」

レイヤ「はあ……話は最後まで聞け。アスナは死んでいねえよ」

零「え、はあ……?」

レイヤ「……お前も趣味が悪いな。そろそろ出てこいよ」

レイヤがそう言う俺の背後にある人物が現れた……。

零「なつ……!!?そ、そんな……!嘘、だろ……!!?」

アスナ「……また会えたわね、零」

ア、アスナ……!!?

零「お、お前……何で!!?」

アスナ「レイヤに助けられたのよ」

れ、レイヤに……?

レイヤ「忘れたか？俺は他の機体のダメージを回復させる事が出来る。リリースが爆発する寸前にアスナを俺……つまり、俺達の心の中へと転送させたんだよ。だから、アスナは死んでもねえし、心の中から出す事も出来る」

零「よ、良かった……！本当に良かった……！」

アスナ「あなたが力を出すまでレイヤに出てくるなって言われていたけど、これでもういいわね」

レイヤ「おう、完璧だぜ。よし、相棒。もう少し力を高めろ」

零「力を……高める……？」

アスナ「今のあなたやレイヤでもハデスには勝てない……。勝つには……真の力を得るにはあなたとレイヤの力を一つにするしかないの」

レイヤ「俺が少し時間を稼いでやる。相棒はその隙に力を高めろ。アスナ、相棒のフオローを頼むぜ」

アスナ「ええ！」

そう良い、レイヤは光となって、消えた……。

アスナ「始めましょう、零。オニキスを倒す為に……！」

零「……わかった！」

俺は力を高め出した……。

ーレイヤ・エメラルドだ。

俺が意識を戻すのと同時に親父の乗るアルガイヤが現れた。

ハデス「なかなかやるではないか、エクスクロス」

ウイル「ハデス・エメラルドか！」

ハデス「レイヤ、あれ程意気がついていた割には苦戦しているではないか」

レイヤ「…」

ハデス「まあいい、ならば俺が裏切り者を消そうとしよう」

メル「くっ…！」

イオリ「メルさん！」

アルガイヤがメサイアに攻撃を仕掛けた、が…。

レイヤ「！」

俺がアルガイヤの攻撃を防いだ。

ラゴウ「な、何…？！？」

ハデス「何の真似だ、レイヤ？」

レイヤ「悪いな、親父…。俺はやっぱり、あんたの事が好きになれないぜ」

ハデス「血迷ったか、貴様……！」

エンネア「ど、どう言う事?!？」

デュオ「何で、あいつがメルを助けるんだよ?!？」

アイーダ「これも何かの罫では……?!？」

マリア「レイヤ、あなた……」

レイヤ「エクスクロス、俺も手を貸すぜ」

箒「何のつもりだ?!？」

シャルロット「あんたなんて信じられるわけないよ！」

やつぱり、そう言われるか……。

メル「……何か、考えがあるのですよね？」

レイヤ「メル……」

メル「……少なくとも私は力を貸します、早くしてください」

レイヤ「……サンキューな、メル」

メル「皆さん、今はレイヤ・エメラルドの話に乗りましょう！」

サラマンディーネ「で、ですが……！」

ウー「奴は敵なのだぞ！」

ルリ「ですが、彼も敵に回すと私達がピンチになるのも事実です」

倉光「ルリちゃんの言う通りだ、今から彼を味方する！」

ロザリー「ま、マジかよ!?？」

アンジュ「良いじゃない、面倒事がなくなったんだし」

ナオミ「相変わらず、アンジュはポジティブだね」

ハデス「ならば、奴らと共に死ね、レイヤ！」

アルガイヤはゼフィルスに攻撃を仕掛けた……。

レイヤ「ぐっ……！」

マリア「レイヤ！」

レイヤ「まだかよ、相棒……！」

ハデス「お前に時間を取るつもりはない！」

アルガイヤの連続攻撃にゼフィルスはダメージを負っていく。

レイヤ「グアアアアツ!!？」

弘樹「このままじゃ、やべえ！」

レイヤ「まだ、だ……！相棒だったら、こんな時でも諦めねえんだよ！」

ハデス「ふっ、ならばエクスクロスと共にくたばるがいい！」

アルガイヤが高速で動き、剣を構えて来た……。くそっ、ここまでののか……！

レイヤ「くそッ……」

ひろし「うおおおおっ!!?」

しかし、ゼフィルスに接近したアルガイヤをカンタム・ロボが殴り飛ばした。

ハデス「ちいっ…！」

ひろし「くたばれて… 自分の子供でもか!!?」

ハデス「何…!!?」

ひろし「自分の子供にくたばれと言う親が何処にいる!!? 親は子供に生き抜けて言うもんだろがああつ!!?」

さらに、アルガイヤを蹴り飛ばし、ゼフィルスに駆け寄ってきた。

ひろし「大丈夫か、レイヤ君!!?」

レイヤ「… あんたは良い父親だよ、野原 ひろし」

アスナ『（レイヤ、準備が出来たわ!）』

やっとかよ…！

俺は心の中へと意識を集中させた…。

―新垣 零だ。

俺が力を高められたと同時にレイヤが現れた。

レイヤ「遅いぞ、相棒」

零「これでも早くしたっての……！」

レイヤ「なら、さっさと始めるぞ！」

零「……なあ、力を一つにすると、どうなるんだ？」

レイヤ「俺達も一つになる」

そ、それって……！

アスナ「弱い人格が消え、強い人格が残るわ……」

つまり……俺かレイヤのどちらかが消える……って事か……？

レイヤ「何だ、怖気ついたか？」

零「ち、違う！俺が生き残ったら……お前は……」

レイヤ「はあ……もう勝った気でいやがるのかよ……。歯ア食いしばれ！」

零「ぐあっ！」

レイヤは俺を殴り飛ばし、倒れる俺の胸ぐらを掴んだ。

レイヤ「俺を舐めるのも大概にしろよ！俺が簡単にてめえに負けると思ってたのか!!

?それに、お前の覚悟はそんなもんか!!?どちらかが消えると聞いて、簡単に崩れるものなのかよ!!?ええ?答えろよ、零!!?」

零「レイヤ……」

レイヤ「それでもやる気がないってんなら、ここで消えろ！腰抜けに用はねえ！」

そうか、そうだよな……！俺はもう、立ち止まらないって決めたんだ！

零「お前も……俺を舐めるんじゃないやねえ……！」

レイヤ「あ？」

零「こんなんじゃ俺は止まる気はねえ！俺はお前の罪も償うって言っただろ！それに、どっちが勝ったとしても片方は消えねえよ」

レイヤ「何……？」

零「負けた方が勝った方の心の中に生き続ける……。俺達は二人で一人なんだからな」
レイヤ「フツ、言ってくれぬぜ、相棒！……始めるぜ」

零「……ああ」

俺とレイヤは少し離れて、それぞれ力を溜め、俺はエボリューションモード、レイヤはバスタードモードを発動した。

レイヤ「元々、俺の力であったバスタードモードと……」

零「俺と言う人格が新たに得たエボリューションモード……これを合わせれば……！」

そして、俺達はそれぞれ、右腕を上げ、そこからレイヤは赤色、俺はエメラルド色の光を放ち、お互いが激突した……。

それにより、辺りは光に包まれる。

アスナ「零……！レイヤ……！」

零& a m p；レイヤ「うおおおおおつ!!?」

そして、さらに強い光が俺達を包んだ。

暖かい、光だ……。

レイヤ「相棒……」

零「レイヤ……」

レイヤ「俺は……お前が羨ましかったんだ」

零「え……」

レイヤ「俺は親父に必要なないゴミと何度も言われてきた……。だから、俺は親父に必要とされる為に頑張ってきた……。でも、俺を助けてくれるのはお袋しかいなかった……。そのお袋もいなくなつて、俺は孤独になつた……」

零「孤独……」

レイヤ「でも、お前は違う。辛い目にあつても多くの仲間や友人がお前を支えてくれた。誰かの温もり……。俺が経験していなかった思いだ。俺にはそれがなかったからな……。だから、お前は凄いよ、零」

零「……何言つてんだよ、お前」

レイヤ「え……」

零「言っただろう？俺はお前で、お前は俺だ……。もう、お前は孤独じゃねえ。俺やアスナ、アマリ、母さんにエクスクロスのみんながいる」

レイヤ「！」

零「お前の側にも沢山の人がいるんだよ」

レイヤ「そう、か……。！ありがとう、相棒……。！」

俺達はさらに強い光に包まれ、お互いの事が見えなくなった……。

ーアスナ・ペリドットよ。

あれだけ強かった光が消えると、そこには一人の男が立っていた。

どうやら、一つにする事は成功したようね！でも、彼はどっちなの……。？零？それともレイヤ……。？

アスナ「うまく言ったのね！」

レイヤ「……。おう、お前のおかげだ。アスナ」

アスナ「レイヤ……。なの？」

レイヤ「ああ」

つて事は零が……消えた……。

レイヤ「アスナ。俺は相棒の心の中にいた時……お前の笑顔が眩しかった……。お前と言う存在が暖かかった」

アスナ「レ、レイヤ……？」

レイヤ「だ、だからよ……。その……俺は、お前の事が一人の女として好きだったんだよ」

アスナ「っ……！」

レイヤ「相棒の力を高める為とはいえ、巻き込んじゃってすまなかつたな」

アスナ「そ、そんな事……言わないでよ……！私、私……！」

レイヤ「ちつ、もう時間か……。アスナ……相棒を頼んだぜ、支えてやってくれ。もう一人の俺だからな」

アスナ「……！」

もしかして消えるのは……！

アスナ「仕方、ないわね……。！だったら、一つ言う事を聞いて」

レイヤ「何だ？」

アスナ「キス、して……」

レイヤ「……お安い御用だ」

そして、私とレイヤはキスをし、レイヤが私を離した。

レイヤ「またな、アスナ……。ありがとう」

アスナ「うん……！」

そう言い残し、レイヤは目を閉じる。

さようなら、レイヤ……。

――新垣 零だ。

俺は目を開けると、目の前には涙を流すアスナがいた。

その彼女を見て、俺は悟った。

零「そうか……。レイヤは……」

アスナ「消えてないよ……。だって、あなたの心の中に生き続けているんでしょ？」

アスナ……。

零「…… ああ！」

アスナ「だったら、泣いてなんかいられないわね！」

零「行こう、アスナ。みんなが待ってる」

アスナ「ええ！」

俺とアスナは光に包まれた……。

―氷室 弘樹だ。

ハデス「これで終わりだ、レイヤ！」

アルガイヤはゼフィルスに攻撃を仕掛けた。だが……。

ゼフィルスが攻撃を受け止めた……。

それにこの感じ……あいつが戻ってきたのか……！いつも、遅いんだよ、馬鹿野郎……

！

―新垣 零だ！

意識を取り戻した俺はゼフィルスを動かし、アルガイヤの攻撃を受け止めた。

零「終わるわけねえだろ……！お前達を倒すまではな！」

そして、ゼフィルスはアルガイヤを蹴り飛ばした。

ハデス「ぐっ……！き、貴様、まさか……！」

マリア「この気は……！」

ホープス「……フフ、帰ってきたようですね、マスター。あなたの騎士が……！」

アマリ「零君……！」

零「待たせてすみません！新垣 零、ただ今復活しました！」

ラウラ「零さん！」

簪「良かった……！」

ミツヒデ「まったく、心配をかけさせおつて……」

ギルガ「何故、君が出てきたんだ？？」

リン「まさか、レイヤ様は……？？」

マリア「零……」

零「レイヤについては、後で話すよ、母さん」

マリア「……ええ……！」

ハデス「新垣 零……！何処までもしつこい男だな。だが、お前では俺には勝てない……！」

零「そうだ、俺ではお前には勝てない……。いや、俺だけではな……！」

ハデス「フハハハ！わかつているではないか！ならば……！」

零「だが、俺には沢山の人がいる！弘樹やメル……アマリにホープスやエクスクロス……そして、レイヤも！だから、俺は俺を繋いでくれている絆を力に変えて戦う！」

ハデス「絆だと……？そんな脆いもので！」

？「絆は……脆くなんかいいわ！」

メル「こ、この声は……！」

アスナが現れたのを見て、メル達は驚愕の表情を浮かべる。

アスナ「それをわからないあなたに零は倒せないわ！」

ギルガ「アスナちゃん!!？君は死んだはずでは……!!？」

メル「アスナ、さん……？」

アスナ「心配かけてごめんね、メル！詳しい事は後で話すから」

メル「もう……あなたはいつも勝手です！」

零「ちよつと遅刻だぜ、アスナ」

アスナ「いつも遅いあなたには言われたくないわよ！」

零「はは、そうだな！」

アスナ「零、ハッチを開けて！私も乗るわ！」

パトリック「乗るって、ゼフィルスは一人乗りだろ!!？」

零「わかった、来いアスナ！」

ラフタ「ええ!!？」

俺はゼフィルスのハッチを開け、コックピットにアスナを乗せる。

… 狭い…。

零「お前、もうちよつと痩せた方がいいんじゃないか？」

アスナ「失礼ね！これでも痩せている方よ！それにどさくさ紛れで変な所、触らないでよ！」

零「触ってねえよ！お前だつて密着しすぎだ！」

アスナ「仕方ないでしょ、狭いんだから！」

零「お前が乗ったせいだろう！」

アスナ「あなたも乗れつて言つたでしょ！」

アマリ「…」

ホープス「…」

メル「お二人共、痴話喧嘩は後にしてください！」

弘樹「久しぶりだな、あの二人の喧嘩を見るの」

イオリ「クラスでよく言い合っていたからな」

ハデス「茶番を…！」

零「… アスナ」

アスナ「… ええ！」

俺とアスナは笑いあつた後、力を高めると同時にゼフィールスが光り出した。

零「ハデス・エメラルド！確かに人は争いを捨てられないのかもしれない。でも、争いは争いでも誰かを守る為の争いもある！」

アスナ「意見の食い違いでお互いを傷つけ合うのが人間……。でも、それはお互いを信頼しあっているから、本音を言い合える……。それが人間の良いところでもあるわ！」

ハデス「信頼など、いずれ壊されるものだ！」

零「人間全てがそんな奴等じゃねえ！だから、俺達は変わっていく！一人一人の絆を繋げて、力にして！」

アスナ「そして、それは新たな絆を生むの！」

零「それが人間に隠された力だあああつ！！？」

ゼフィルスが光に包まれ、光が消えるとゼフィルスの姿が変わっていた。

エイサツプ「ゼフィルスの姿が……」

バナージ「変わった!?？」

スカレット「それに二人乗りになった様な……！」

ハデス「な、何だ、その姿は……!?？」

アスナ「多くの人の絆の力……。そして、輝く絆の翼……。！その名も……」

零「シャイニング・ゼフィルスネクサス……。！」

アマリ「あれが、新しいゼフィルス……」

零「そして、これが俺の新しい力だ！」

ゼフィルスネクススはアルガイヤに攻撃を仕掛けた……。

零「絆の力を見せてやる……！行くぞ、ハデス・エメラルド！」

俺は右瞳を赤く発光させ、左瞳をエメラルド色に発光させるとゼフィルスネクススも同じ様に発光し、アルガイヤに突撃した。

ゼフィルスネクススに変わった事により、クロスソードとクロスガンが分かれているため、同時に使用する事が出来る様になった。

二丁のクロスガンを連射させ、アルガイヤにダメージを与え、今度は二刀のクロスソードを構える。

零「バスタードモードとエボリューションモード……！レイヤ・エメラルドの力と新垣 零の力を一つにした……それがクロスレイズモード……！これが、俺達の真の力だ！」

バスタードモードの力とエボリューションモードの速さを合わせた力、クロスレイズモードでの攻撃でアルガイヤを斬り裂いていく。

零「アスナ！」

アスナ「私もハイバスタードモードでやらせてもらおうわ！ブレードビット！ガンズビット！いけええええつ!!？」

アスナもハイバスターモードを発動させ、ブレードビットとガンズビットを同時に出し、アルガイヤにダメージを与える。

クロスガン・ブラスターモードの銃口にクロスソード・バスターソードモードを連結させ、アルガイヤに接近し、突き刺す。

アスナ「これが私達の……！」

零「絆の力だあああつ!!？」

そして、ブラスターモードの引き金を引き、巨大なビームソードを出し、アルガイヤを大きく斬り裂いた。

ハデス「グアアアアツ!!？」

クロスレイズモードの攻撃を受け、アルガイヤは吹き飛ぶ。

ハデス「く、クソオツ……！」

一夏「す、凄え！何だよ、あのパワーとスピード！」

スザク「あれが零達の新しい力……！」

ハデス「許さない……許さないぞ、新垣 零！」

ギルガ「首領様、ここは退避しましょう！」

リン「仕方ありませんね、首領様！」

ハデス「この借りは……必ず返させてもらう……！」

傷ついたアルガイヤと共にジェイル、デイビウスは撤退するが、ナイトメアだけは動かなかった。

ラゴウ「フハハハツ！ そうだ、それでいい……！」

ギルガ「兄さん……!?」

ラゴウ「首領様は任せたぞ、ギルガ。俺はしんがりを請け負う！」

ギルガ「だ、だが……！」

ラゴウ「さつさと行け、邪魔だ」

ギルガ「わかったよ……。（兄さんが笑っている。新垣 零の復活が兄さんにそこまでの影響を……）」

アマテラス・ツヴァイも撤退した……。

ラゴウ「ククク……！ さあ、始めるぞ、零！」

零「ラゴウ…… お前は残ったか」

ラゴウ「首領様を倒したければ俺を越えていけ！」

零「今は追いかける様な真似はしねえ……。だが、お前は倒す！」

ルルーシュ「各機は残るガラムとナイトメア・ゼフィルスの相手をしろ！」

零「行こうぜ、アスナ！ 此処からオレ達2人の新しい初陣だ！」

アスナ「ええ、遅れないですよ、零！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「零、フオローは私がするから全力でやりなさい！」

零「了解！ やってやろうぜ、ゼフィルスネクサス！」

〈戦闘会話 零VSラグウ〉

ラグウ「漸く、俺の中のものもやもやの正体がわかった…。俺が戦いたかったのは、レイヤ様ではなく、お前だったのだとな！」

零「そう言ってもらえるのは光栄だな！俺もお前を越えたいと思っていた所だ！」

ラグウ「ならば、越えてみせろ！この俺を！」

アスナ「あのー、もしもし！私、蚊帳の外何だけど!?？」

クロスレイズモードの攻撃でナイトメアにダメージを与えた。

ラグウ「くっ…。！此処までか…。！」

零「俺達の勝ちだ、ラゴウ！」

ラゴウ「フフフ：：！俺を楽しませてくれた礼だ、受け取れ」

すると、ナイトメアが異界の門を発生させた。

ホープス「異界の門が発生しました」

つまり、アル・ワースに戻る：：。

ラゴウ「零、決着はアル・ワースで着けるぞ」

零「当たり前だ、ラゴウ！」

そして、俺達は光に包まれた：：。

俺達は目を覚ますとアル・ワースにいた。

いつの間にか、ナイトメアの姿はなかった

アーニー「ここは：：？！」

ホープス「アル・ワースです」

ワタル「僕達、帰ってきたんだね」

甲児「アマリ：：。後悔はしていないのか？」

アマリ「全然。だって、ここは私にとって第2の故郷ですから。例え、無理矢理連れてこられて、一年ぐらいしか時間が経ってなくても、ここは大切な場所です」

ホープス「強くなりましたね、マスター。旅を始めた頃は、こんな風になるとは思ってもみませんでしたよ」

アマリ「まだまだだよ。もつと強くなるつもりだから。だから、零君、ホープス……。私に力を貸してね、これからも」

零「ああ。わかっているさ、アマリ」

ホープス「私ももちろんです。それは私にとつても大いなる喜びですから」

アマリ「(ドグマの意味……。それが自分を貫く事にあるのなら、もう私は迷わない……。私は戦います、藍柱石の術士として、エクスクロスとして、そして、アマリ・アクアマリンとして……)」

ボス「零はどうなんだ？」

零「そもそも此処が俺の第一の故郷だったからな……。それに俺は自分の道を曲げるつもりはねえよ」

アスナ「あなたらしい答えね」

零「勿論、これからもお前には手伝ってもらうぜ、アスナ。嫌とは言わせないぞ」

アスナ「拒否権はないのね、まあわかっているけど」

メル「お二人共、戻ったら、詳しく話を聞かせてもらいますからね、覚悟しててください！」

アスナ「アハハ：：メル、お手柔らかにね」

行こうぜ、レイヤ：：。何処でどんな風になろうと俺とお前は一緒だ。俺も生きる：：。エクスクロスの一員として、レイヤ・エメラルドとして、そして、新垣 零として：：。

この後、俺達はそれぞれの艦へ戻り、メガファウナの格納庫へと集まった：：。

サラ「零ー!!？」

ティア「零だー!!？」

零「うおあつ!!？」

サラとティアが俺の顔を見た途端、飛びついて来て、俺は倒れてしまう。

零「サラ！ティア！急に飛びつくな！」

サラ「アハハ！ごめんごめん！」

そして、俺はみんなにレイヤの事などを話した：：。

アスラン「レイヤ・エメラルドは悪い奴ではなかったんだな」

葵「じゃあ、零。これからあなたの事なんて呼ばばいいの？零？レイヤ？」

零「人格としては零ですが、俺はレイヤとしてもあります。どっちでもいいですよ。

それと、葵さん。聞いていましたよ、俺なら兎も角、レイヤはタイプじゃない、ですよ

ね？それってつまり：：。」

葵「あ、いや、その：：。って、大人をからかうんじゃないわよ！」

零「葵さんの焦りって珍しいですね！」

葵「だ、だから…！」

くから「こんな葵、見たことない…。」

朔哉「つてか、零。何か変わったか？」

零「何も変わってないですよ」

ジョニー「（これは…零とレイヤの性格が合わさったようですね）」

マリア「…零、無事で良かったわ…！」

零「…心配かけてごめん、母さん。俺、レイヤの記憶もあるんだ。だから、久しぶりに母さんの手料理、食べたいんだ」

マリア「ええ！腕によりをかけて、作るわ！」

メル「アスナさんも生きていたのなら、言ってくださいよ！私、すごく心配していたんですから！」

アスナ「だから、ごめんって、メル！」

アマリ「…その割には昨日の夜はイオリ君とお楽しみだったみたいですけど…」

イオリ「ア、アマリさん！」

メル「アマリさん！それは言わないという約束じゃないですか！」

アスナ「ふーん、乗り換えたのね、メル」

メル「の、乗り換え……!?」

零「あまり、いじり過ぎるなよ、アスナ」

アスナ「それはそうと、零。ちよつと話があるんだけど」

零「……そうだったな。みんな、すみません……少しアスナと二人で話させてもらえませんか？」

ドニエル「わかった、ではみんな、行こう」

俺とアスナを残し、みんなは格納庫を後にした……。

アスナ「やっと、落ち着いて話が出来るわね」

零「アスナ、すまない……。俺はお前の事を忘れてしまっていた……」

アスナ「お互い様よ。私もあなたの事を忘れて、憎んで……傷つけた……。ごめんなさい……」

零「あの時のお前、酷かったからな……。あれがお前の素なんじゃないか？」

アスナ「そんなわけないでしょ。我ながら酷いつて思っているんだから……」

零「なんで私の思い通りにならないのー！」

アスナ「あなたねえ……！」

零「冗談だったの」

俺達は笑いあった……。でも、言わないと……！

零「… アスナ、俺は…。」

アスナ「わかつているわ。あなたにはアマリがいるんでしょう？付き合っていた女を振ったんだもの、アマリを泣かせたら許さないんだからね！」

零「アスナ…。」

アスナ「… 隠れていないで出てきたらどう？」

アマリ「… すみません、盗み聞きするつもりはなかったんですけど…。」

アマリ「…！」

アスナ「じゃあ、後は二人で楽しく話しなさいよ！お邪魔虫はさっさと退散するわ！」
そう言い残し、アスナは走り去った…。

アスナの目に涙が浮かべていた事も気付かずに…。

零「アマリ…。」

アマリ「昔の話をしましょうか。私と零君が初めて話したあの時の話を…。」
ここで回想をいれるか。

↓アマリ・アクアマリンです。

1年前、天野 亜真利だった頃の私は気弱で臆病な性格だった為、よく虐められてい

ました。

始めの頃は物を隠されるなどの小さなものでしたが、日に日に虐めはエスカレートして、髪を引つ張られたり、叩かれたりしていました。

家族には言えませんでした……。心配はかけられませんでしたので……。

助けて欲しいと何度も思った事は何度もありましたが、誰も助けてもらえませんでした……。

ある日、また私は虐められ、上履きを隠されてしまいました。

亜真利「ど、何処に……。このままじゃ、遅刻しちゃう……！」

すると、一人の男子生徒が私の下へ来ました。

？「どうした？もうチャイムがなるぜ」

亜真利「あ、あの……。上履きが……。なくって……」

？「そうか……」

それだけを言うと男子生徒は上履きを探す私の横を通り過ぎて、歩き出しました。やっぱり、助けてもらえませんかよね……。

？「何やってんだよ、早く探すぞ！こんなので遅刻になるのはくだらないだろ？」

亜真利「で、でも……。あなたまで……」

？「そうならない為にも早く探そうぜ」

そう言うとう男子生徒は私の上履きを探し始めました。上履きはすぐに見つかりました。

？「良かったな、見つかった！」

亜真利「あ、ありがとうございました……」

零「所で、どうしてこんなところに君の上履きがあつたんだ？」

亜真利「そ、それは……私、天然で置く場所を間違えたみたいです」
作り笑いをして、私は苦し紛れの言い訳をしました……。

そう、助けてくれた彼に嘘をついてしまったのです……。

亜真利「あの……ところで、あなたは……？」

？「あなたは……同じクラスの新垣 零だよ！……って、ヤベツ！時間ギリギリだ！早く行こう、天野さん！」

あ、ああ、同じクラスの……。

クラスにはあまり、馴染んでいなかったもので、名前はわかりませんでした……。
新垣君と私は早歩きで教室に駆け込みました。

優香「あれ、零？遅かったね？」

零「ちよつと、用事があつてな」

弘樹「さてはお前、宿題をやり忘れて、昨日夜遅くまでしていたんだろ？」

零「お前と一緒にするな、バカ」

弘樹「バカって言うな！」

明日菜「喧嘩しないの！」

彼の周りには沢山の人がいる…。

新垣 零君、か…。

新垣君は女子に人気がある様で私が一緒にいた事に腹が立ったのか、私はいじめっ子の三人に体育館裏まで連れてこられました。

亜真利「や、やめて… ください…！」

生徒「え？何て言ったの？聞こえないなく？」

生徒2「もっと大きな声でいいなよ、天野さん！」

私は髪を掴まれて、叩かれました。

アマリ「っ…！」

生徒「ねえ、天野さん？どうして、新垣君と一緒にいたの？もしかして、新垣君に助けられて…！って、言ったの？」

亜真利「ち、違っ… 私…」

生徒2「臆病なのに男に色目使ったんだ？」

亜真利「っ、使っていません…」

生徒3 「あーそう。私なら色目使わなくても男を落とせるって事？」

亜真利 「わ、私は……」

生徒 「ハツキリと話しなさいよ！」

私はまた打たれ、倒れてしまいました……。

生徒2 「やつぱり、ムカつくわねあんた！」

倒れている私をいじめっ子三人は蹴ったり、踏みつけたりしてきました。

亜真利 「痛っ……！やめて……！やめて、ください……！」

生徒3 「やめるわけじゃないでしょうが！」

生徒 「あんたは痛い目を見ないとわからない様ね！」

いじめっ子のリーダーはそばに置いてあつた鉄パイプを持ち、私に近づいてきました。
た。

亜真利 「いや…… いや……！」

生徒 「心配しなくても殺しはしないわよ。何発が殴れば、ムカつく行動もしないで
しよ」

助けて…… 誰か、助けて……！

亜真利 「助けてえええええつ!!？」

生徒 「うるさいのよ！」

いじめっ子のリーダーは鉄パイプを勢い良く振り下ろしました……。

やっぱり、私の事なんて、誰も……。

零「助けないわけないだろ！」

すると、私に振り下ろされた鉄パイプを新垣君が掴み、受け止めてくれました……。

亜真利「！」

零「何とか、間に合ったな……！」

亜真利「新垣……君……」

生徒「に、新垣君！どうしてここに？」

零「……お前等、何しようとした？」

生徒2「ち、違うのよ、新垣君！」

生徒3「こ、これは……そう、スキンシップ！スキンシップよ！私達、天野さんと友

達になりたくって！」

零「友達になりたいか……。なら、鉄パイプはおかしいんじゃないか？」

生徒「い、いや……その……」

零「明日菜から聞いたぜ。お前等、何かと腹の立つ相手にそう言う事ばかりして、病院送りにしているみたいじゃねえか」

生徒3「っ……！」

零「これを先生に伝えれば、お前等は終わりだな」

生徒2「や、やめてよ、それは……！そんな事したら！」

零「やめて……？お前等、その言葉何度聞いてきた？何度その言葉を嘲笑ってきた？」

新垣君が……怒っている……？

零「お前等は虐められた方の気持ちができるのか？わからねえだろうな、だからいじめるんだもん！」

生徒「……何なの？さつきから！この女に必死になって……。あなた、この女の事が好きなの？だから、必死になっているの？！」

零「何言つてんだ、お前？俺が天野さんを好きだとか嫌いだとか、関係ねえよ。俺はお前等のやり方が気に入らねえって言つてんだよ！」

生徒「あんたこそ、何言つてんの？気に入らない？あんた、ヒーローにでもなつたつもり？意気がつてんじやないわよ！」

零「ならよ……。いじめる事でストレス発散になるんだつたら、俺が相手になつてやるよ」

生徒2「……」

零「それと、今後とも天野さんに手を出すつてんなら……許さねえぞ……！」

生徒「フ、フン……！興ざめね、行きましよう！」

いじめつ子達はこの場から立ち去りました……。

それを見た新垣君は私の下へと駆け寄り、私を立たせてくれました。

零「大丈夫か？」

亜真利「また…… 助けていただき、ありがとうございます……。でも、どうして……？」

零「え……」

亜真利「私は気弱な性格で…… いつも虐められてばかりいました……。これまで誰にも助けてもらえませんでした……。それなのにどうして、私を助けてくれたんですか？」

零「どうして…… 人を助ける事に理由が必要なのか？」

亜真利「え……」

零「俺は誰かを助きたい……。困っていたり、辛い顔をしていたのなら尚更な」

亜真利「何ですか……。？どうして、私なんかの為にそこまでしてくれるんですか!!」

？私なんて……。いてもいなくても変わらないのに……」

零「いてもいなくても変わらない……。？甘ったれるのもいい加減にしろ！」

亜真利「っ……！」

零「今の言葉はお前の事を大事に思ってくれている人に対しての侮辱だ！それをわ

かっているのか!!?」

亜真利「それは……」

零「お前の帰りを待っている人はいる……。そうだろ?」

亜真利「……います……家族が……」

零「だったら……。自分を切り捨てる様な事はするな。それに……。俺が君を助けたらダメな理由なんてない、そうだろ……?」

亜真利「う、うう……!」

零「助けるのが遅れてごめん。よく、頑張ったな」

亜真利「ありがとう、ごさいます……。!うわああああん!!?」

私の泣き声は学校中に響きました……。

そして、この時、私の中の何かが変わりました……。もつと彼を知りたい、彼ように強くなりたい、と……。

これが、私と零君の出会いでした……。

―新垣 零だ。

その翌日、確かアマリやイオリ、メルやアスナがアル・ワースに召喚されたんだった

な。

アマリ「天野 亜真利としてと、アマリ・アクアマリンとしても… 私はあなたに助けられた…。本当にありがとう…。 零君」

零「言つたろ？お前を助けたらダメな理由なんてないって…。それに、俺が助けたいから助けたんだよ」

アマリ「零君…」

零「それと、よ…。お前に話があるんだ」

アマリ「何…？」

零「前に言つたよな？異界人とか魔徒教団の術士だとか関係ない…。俺はお前自身が好きなんだって…。もう一度言わせて欲しい…。俺は…。お前の全部が好きだ。天野 亜真利としても、アマリ・アクアマリンとしても…。だから、アマリ。俺ともう一度、付き合ってくれ！」

アマリ「…」

零「確かに俺はアスナの事が好きだった…。あいつが側に寄り添ってくれて、俺は嬉しかった。でも、お前は違うんだ…。俺は…。お前の勇気に何度も力をもらった。俺は…。お前がいないとダメなんだ…。だから…。！」

一緒にいてくれ…。そう言おうとした瞬間、アマリが勢い良く、抱き着いてきた。

アマリ「私も……零君にたくさん力をもらった……。だから、一緒にいたい……。！これからもずっと……。こちらこそ、お願いします、零君！」

零「アマリ……」

アマリ「零君……」

俺とアマリはお互いに見つめあつてキスをした……。

ー氷室 弘樹だ。

俺は影で零とアマリのキスを見て、微笑んだ。

弘樹「良かったな、零……。アマリ……」

アスナは目に涙を浮かべて、走り出したが、あいつなら大丈夫だろう……。本当に強い女だからな……。だが、それで辛そうにしているなら、助けてやるとするか……。

それよりもこれで一つの目的は達成した……。だが、零……。俺はもうお前の所にはいない……。いてはダメなんだ……。

俺は部屋へと戻った……。

ホープス「……」

この場にホープスがいた事にも気付かずに……。

「セルリック・オブシディアンだ。

私達はアル・ワースに戻って来て、神殿へと帰って来た。

導師キールディン「魔法生物もゼルガードも奪還できず、逃げ帰ってくるとはな…。」

セルリック「…。」

導師キールディン「君には失望したよ、法師セルリック」

セルリック「返す言葉もございません…。」

導師キールディン「アマリ・アクアマリンが智の神エンデの加護から完全に切り離されない今、君に期待をかけるしかないのに…。」このままでは教団の悲願である教主の座は空位のままとなってしまう」

セルリック「…。」その心配はいらない」

導師キールディン「！」

セルリック「魔徒教団の教主…。」それは、この俺をおいて他にはいない…。」

導師キールディン「わ、わかった…。」次の働きに期待する…。」

そう言い残すと導師キールディンは歩き去った…。」

セルリック「…。」

？「それでいいのです…。その感情のままに進みなさい…。それがアル・ワースを…。この世界を存続させる力になります…。そのための力…。それをあなたに授けましょう…。」

ーラゴウ・カルセドニーだ。

俺がオニキスの基地へと戻ると、オニキスのメンバー全員が首領様の元へと集まっていた。

ハデス「ラゴウ・カルセドニー…。！新垣 零に負けて、ノコノコと帰ってくるとはな…。！」

ラゴウ「…。次こそは必ず、奴を倒します」

ギルガ「しゅ、首領様！あまり、動くとお体に…。」

ハデス「黙れ…。！俺に指図するな！」

ギルガ「も、申し訳ありません！」

ハデス「新垣 零…。！必ず、必ずこの手で殺す…。！覚えていろ…。！」

ラゴウ「！」

首領様の目が紫色に発光した…。！！？あれは一体…。！！？

「虎王だ。」

俺様は部屋にいた。

シーラ「！」

虎王「どうした、シーラ？」

シーラ「いい事がありました。あなたにとつても、私達にとつても」

虎王「ワタル達がアル・ワースに戻って来たのか!?？」

シーラ「そうです」

アトラ「あれ、虎王君？嬉しそうだね」

虎王「ちよ、ちよつと待て！俺様はワタルが戻って来てもちつとも嬉しくなんてない

からな！」

サリー「でも、虎王君はワタル君と決着をつけるって言ってなかったかしら？」

虎王「そう！それだ！やったぜ！これでワタルと決着をつけられる！よく帰ってきた

な、ワタル！」

暁「虎王、嬉しそうだね」

アトラ「うん、そうだねー。お父さんも帰って来たみたいだよ、暁」

暁「父さん……」

虎王「そうと決まったら……」

リリーナ「ダメですよ、虎王君。まずは宿題を片付けなさいと」

マリナ「この前も無断で出撃してドン・ゴロさんに怒られていたではないですか」

虎王「うるさい……！ 戦いに勉強なんて役に立つかよ！」

リリーナ「……うるさい？」

虎王「ひ……」

リリーナ「あなたはドン・ゴロさんに宿題をちゃんとやると約束しました。それを破るのですか？」

シーラ「約束を破る事は人と人の間の信頼が失われる事です。それは悲しい結末を呼びます」

マリナ「それに、約束を破り続けると、分かり合える事も出来なくなりませう」

虎王「わ、わかった！ ちゃんとやる……！ ちゃんと宿題やるから！」

イチヒメ「良き心がけです」

ちえ……。こいつ等、女のくせに妙に迫力あんだよな……。

暁「虎王、頑張れ」

虎王「お前はいいよな、暁。宿題が無くて」

暁「?… うん」

サリー「宿題が終わったら、オヤツにしましょう。頑張ってくださいね」

虎王「それを聞いたら、百人力だ！ 一気に片付けるぜ！」

よーし、頑張るぜ！

ードン・ゴロだ。

ドアクダー「… 時が来た」

ザン・コック「では… ?」

ドアクダー「アル・ワースの構造は、既に解き明かした。これも、その娘の存在によるものだ」

マリーメイア「…」

ドアクダー「ブルーウォーターに記載されたアトランティス人の想いは手に入らなかったが… 。アル・ワースの構造そのものとも言える、この娘の意思がワシに答えを示してくれた」

マリーメイア「私が…」

ドアクダー「そうだ。お前は世界の在り方の本質を体得していると言ってもいい存在な

のだ。だが、魔徒教団との戦いの前に世界を破壊する必要がある」

ドン・ゴロ「世界を……破壊ですと……？」

ドアクダー「そうだ。そうする事によって、このアル・ワースの真実が浮かび上がる。その鍵となるのが、この娘だ」

ニア「……」

ドアクダー「流石は奴の使者だ。その封印を解くには少々時間がかかった」

アイラ「もしや……！」

ドアクダー「そうだ。八稜郭を束ねる者……。今より、世界は破壊される……。さあ、目覚めよ……！メツセンジャーよ！」

アイラ「おやめなさい！」

ドアクダー「もう遅い！」

ニア「！」

こ、これは……！

第59話 双翼の友人

―新垣 零だ。

アル・ワースに戻ってきて、数日が経った。

俺は今、プトレマイオスの格納庫でアマリ、アスナ、イオリ、メル、ホープスと俺達が学校に通っていた時の話をしていた。

ホープス「そう言えば、アスナ様は学級委員というものをやられていましたと聞きましたか：。」

アスナ「ええ、そうよ。それがどうかしたの？」

ホープス「：。その、私生活がズボラなあなた様が：。」

アスナ「それ以上言ったら、焼くわよ」

ホープス「申し訳ありません。ですが、良くその学級委員というものをやろうと思いましたがね」

イオリ「それはだな、ホープス：。」

零「俺が推薦したんだよ」

アマリ「確か：… もう片方の学級委員は零君だったよね？」

零「ああ。半ば無理矢理に押し付けられたけどな」

アスナ「今更だけど聞いただいたいわ。どうしてあの時、私を選んだの？学級委員なら優香が適任だったと思うのだけれど」

零「一つ目、あいつは家の事などで大忙し、二つ目、部活動に大忙し、三つ目、選ばうとしたら鬼の様な形相で睨んできた。さあ、どれでしょう？」

メル「… 三つ目です」

イオリ「ええっ!!？」

アマリ「そうなんですか!!？」

アスナ「あなたって、優香には頭が上がらないわよね」

零「あいつを怒らせたら命がない。覚えているか、アスナ？俺とお前がマジで喧嘩した時の事」

アスナ「あ、あー！確か、優香達が必死に止めても、止まらなくてそれで優香がマジギレしたあれね！」

メル「あの時の優香さんは本当に怖かったです…」

イオリ「白木さん… イメージとだいぶ違うな…」

アマリ「え、ええ… 優しいお姉さんの様な方だと…」

アスナ「それは表のあの子。裏はやばいわよ」

零「… アスナ。それ以上言うと死ぬぞ」

メル「この様な事を言っているとバレたらタダじゃすみませんよ…！」

アスナ「そ、そうね…！」

イオリ「みんなは白木さんを何だと思っているんだよ…！」

そんな俺達を遠くで見ているものがいた。

弘樹だ…。あいつ、この数日間、俺と話そうともせず、顔を合わせただけで、何処か

へ行くんだよなあ…。

アスナ「弘樹ー！そんな所にいてないであなたもこつちに來なさいよ！」

弘樹「… 大きなお世話だ」

そう言い残すと、弘樹は歩き去ってしまう。

アスナ「何なの、あいつ…！」

アマリ「弘樹君… まだ、許せないんだと思います。零君や白木さんの事を…！」

メル「それにカノンちゃんの事もありません…。弘樹さん、無茶をしなければいいので

すけど…！」

イオリ「やけに弘樹に気をかけるね、メルさん。もしかして、弘樹の事が好きなの…」

?…痛っ…!!？」

一夏並みの唐変木なイオリの言葉にイラツときたのか、メルがイオリの足を踏んだ。メル「あまり、変な事を言うのなら、足を踏みますよ、イオリ先輩？」

イオリ「も、もう踏んでいるじゃないか……！」

つたく、イオリのやつも気づけよな……。

それよりも弘樹のバカが……。ウジウジ考え込むのはお前のキャラじゃねえだろうがよ……。

俺は弘樹の後を追おうとするが、アマリに腕を掴まれる。

アマリ「待って、零君。今はそつとしておいた方がいいわ」

零「だが、一回悩んだあいつは引きずるのが長いんだよ」

アマリ「それでもよ……。弘樹君を信じてあげて」

アマリ……。

零「はあ……。わかったよ」

弘樹、早く戻って来いよ、この馬鹿野郎……。

ホープス「……」

「氷室 弘樹だ。」

俺はアスナの誘いを断り、メガファウナの格納庫に置いてあるヴァリアスの下まで来た。

弘樹「…悪いな、みんな」

ホープス「何処へ行くつもりですか？」

弘樹「！」

振り返るとホープスとカイエンの姿があつた。

弘樹「何だよ、ホープス、カイエン。俺に何か用か？」

カイエン「理由はお前が一番知っているんじゃないか？」

弘樹「…」

カイエン「零と何故、話さない？」

弘樹「これが俺に対しての罰だ。俺はオニキスに騙されて、零や優香を傷つけた…。それに、カノンも…。零を助け出すという目的は達成した。今度はカノンを助け出す…。俺一人だな」

ホープス「後悔なされませんか？」

弘樹「後悔する権利なんてもう俺にはねえ…。邪魔するってんなら、力尽くでも…」

！」

カイエン「止めるつもりはない。だが、これだけは言っておくぞ、弘樹。友人は失つてからじゃもう遅い」

弘樹「カイエン……」

カイエン「お前の友人はまだ生きている……。近くにいる事だけを忘れるな」
……カイエンは友人を亡くしたと聞く……。

弘樹「わかった……肝に命じておく」

カイエンの言葉に頷いた俺はヴァリアスに乗り、エクスクロスを後にした……。

第59話 双翼の友人

エクスクロスの艦の光も見えなくなつたな……。

これでいいんだ。俺はあそこにいない方がいい。

弘樹「抜け出したのはいいが……。行くあてがねえ……」

しまった……。行くあてを考えていなかった……。だから、零の奴にバカ呼ばわりされ

るだな、俺は……。

弘樹「取り敢えず、俺とヴァリアスの身を隠せる場所で今日は休むとするか…」

チャム「ん、うーん…。騒がしいな」

シルキー「ふあ」

…へ？

チャム「あれ…？どうして、ヴァリアスが動いているの？」

シルキー「本当ですね、これはいつたい…」

弘樹「チャ、チャム?!?シルキーまで…何でヴァリアスに乗っているんだ?!?」

チャム「あ、弘樹！」

シルキー「ヴァリアスのコックピットの中でチャムと話をしていたら、いつの間に眠くなってしまうて…」

チャム「それで寝ちやっていたの」

…マジかよ…。

シルキー「それよりも弘樹、どうして出撃しているのですか？他の方は？」

弘樹「…抜け出したんだよ」

チャム「え？どうして…」

弘樹「…」

シルキー「答えたくないのであれば、それでいいのですが…」

… そんな事より、こいつ等をどうするか…。
もう戻る訳にはいかないしな…。

弘樹「取り敢えず、降りて休むとするぞ」

チャム「わかったー！」

… 乗り出しは最悪だな。

シルキー「待ってください！何かが来ます！」

すると、現れたのはガルド部隊とデイビウスだった。

チャム「オニキス！」

優香「まさか、偵察中にあなたと会うなんてね、氷室 弘樹」

弘樹「優香…！」

優香「あなた一人なの？」

弘樹「…」

優香「まあいいわ。ここであなたを倒して、その首を首領様の下へと持っていくわ」

弘樹「そう簡単に負けてたまるかよ！優香、お前の目を覚まさせてやる！」

優香「何を言ひ出すのかと思えば… 目などどつくに醒めているわ！」

弘樹「悪いな、チャム、シルキー。ここは付き合ってもらおうぞ！」

チャム「うん、全力でやって、弘樹！」

シルキー「私達の事は気になさらないでください！」

弘樹「そうさせてもらうぜ！来やがれ、オニキス！俺が相手をしてやる！」
俺は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

チャム「わわっ!!?危ない！弘樹、右に避けて！」

シルキー「いいえ、左です！」

チャム「右だよ！」

シルキー「左です！」

弘樹「あーもう！お前等、耳元で怒鳴るな！集中できねえから！」

敵の数が多すぎる……！

優香「あなた、バカ？この数に勝てると思っていたの？」

弘樹「それでも……負ける訳にはいかねえんだよ！」

優香「だったら、これで終わりよ！」

すると、伏兵のガラムが四機現れ、ヴァリアスの周りを囲む。

チャム「囲まれちゃった！」

シルキー「このままでは……！」

弘樹「……」

くそツ……！ここまでかよ……！

だが、俺を囲んでいた内の二機が何処かから放たれた援護射撃により、破壊される。

弘樹「何だ!?？」

現れたのは……メサイア……!??

メル「今です、零さん！アスナさん！」

今度はゼフィールスネクススが現れた……。

↓新垣 零だ。

弘樹がエクスクロスを出て行つたと知り、搜索を開始しようとした時にオニキスの気

配を

アスナ「零、残る敵を！」

零「わかっている！」

ゼフィールスネクサスはクロスソードで残る二機を撃墜させた。

アスナ「間に合ったようね！」

メル「弘樹さん、ご無事ですか!?!?」

弘樹「お前等、何で……?」

アスナ「あなたとチャム達がいなくなつて、搜索していたのよ！」

メル「弘樹さん! どうして、勝手にいなくなつてしまったのですか!」

弘樹「俺はもう零の隣にはいられない……。いてはダメなんだよ！」

零「いい加減にしろ！」

弘樹「！」

零「俺としてはダメ……? 誰がそんな事決めたんだよ! 少なくとも本人である俺はそんな事一ミリも思つた事ねえよ！」

弘樹「零……」

零「俺達の事で罪悪感があるつてんなら、俺達から逃げるな! その罪を背負いながら戦いやがれ! そんな事もわからないぐらい、お前はバカなのかよ！」

弘樹「……るせえ……!」

零「……?」

弘樹「さつきから人の事をバカバカと……! うるせえんだよ! そんなぐらい、俺にでも

わかる！」

零「それでいいんだよ、弘樹。それでこそ、お前だ」

弘樹「……つたく、本当にお前は凄いよ、零……」

アスナ「零……弘樹……」

優香「いつまで友情ごっこを見せつけなければ気がすむの？」

零「ごっこじゃねえよ、優香！お前もこの輪に入っていたじゃねえか！」

優香「くだらない冗談は好きじゃないわ。新垣 零が来たのなら、一石二鳥よ！」

メル「それはこちらの台詞です、優香さん！」

アスナ「あなたの目は私達が必ず覚まさせてあげるわ！」

零「俺達の力でな！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「まったく……あのバカは世話がやけるぜ」

アスナ「その割には満更でもない顔をしているじゃない」

零「う、うるせえな！それよりもアスナ！弘樹に負けないうようにいくぜ！」

アスナ「ええ、おうせのままに！」

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

弘樹「（ありがとうな、零……。なんか気が楽になったぜ）」

シルキー「良き顔になりましたね、弘樹」

チャム「うん！今の顔、凄くいいよ！」

弘樹「二人にも心配をかけたな、さあ、反撃開始と行くぜ！」

〈戦闘会話 零VS優香〉

零「優香！俺は加減しねえから覚悟しておけよ！」

優香「する必要はないわ！私は負けないもの！」

アスナ「今のあなたは全然、怖くないわ！いつものあなたの方がもっと怖いわ！」

優香「物凄く酷い事を言われているのはわかるわ……。そんなに死にたいのなら覚悟しなさい！」

〈戦闘会話 弘樹VS優香〉

優香「勝手に振り切れたようだけど、そんなので私に勝てると思ってるの？」

弘樹「少なくとも今のお前に負けるつもりはねえよ！お前を取り戻すまではな！」

〈戦闘会話　メルVS優香〉

メル「優香さん！あなたは本当は優しい方なのですよ！」

優香「私の事を知ったような口で言わないで！私はあなたの敵……それだけよ！」

ゼフィルスネクサスとヴァリアスの攻撃でデイビウスにダメージを与えた。

優香「そ、そんな……！」

零「お前の負けだ、優香！」

優香「負けてない！私は……まだ……！」

零「そうだ、優香！お前は誰よりも負けず嫌いだった！」

優香「私が……負けず嫌い……」

弘樹「そして、お前は誰に対しても優しかった！」

優香「あ……あああああつ！」

よし……！このままいけば、優香の洗脳が解ける！

ギルガ「随分荒いやり方をするんだね」

ガラム部隊とアマテラス・ツヴァイ、ジェイルが現れた。

弘樹「カノン……！」

カノン「……」

チャム「あ、女たらしだ！」

シルキー「何の用ですが、女たらし！」

ギルガ「君達、酷くないかい!!？」

優香「ギ、ギルガ様……！」

リン「優香さん、今は戻ってください」

優香「了解……！」

デイビウスは撤退した……。

弘樹「優香！」

アスナ「弘樹！今はカノンをどうかしないと！」

弘樹「くっ……！」

零「エクスクロスのみんなも来たみたいだ！」

エクスクロスの戦艦が現れ、みんなが出撃してきた。

ワタル「大丈夫、弘樹さん!!？」

ボーちゃん「怪我は、ない？」

弘樹「心配かけて悪かったな、もう大丈夫だ！」

カイエン「お前……」

ホープス「迷いが晴れたみたいですね」

弘樹「おかげさまでな！」

シヨウ「チャム、シルキー！そこにいるんだな!?？」

チャム「シヨウが来てくれた！」

マーベル「怪我はない？二人共」

シルキー「私達は大丈夫です！」

アンジユ「それよりも弘樹！勝手に抜け出した事について何か言う事あるでしょう

？」

弘樹「すみませんでした……」

エル「意外！弘樹さんがしつかりと謝ってる！」

ビーチャ「それはそれで失礼だが、確かに驚くな！」

ジユドー「そうか？弘樹さんらしいと思うけど」

マシユマー「うむ、良き面構えとなつたな、弘樹君」

弘樹「皆さんや……零達のおかげです」

アマリ「弘樹君……」

弘樹「だから、皆さん、お願いがあります！カノンを救い出すのを手伝ってください！お願いします！」

ゼロ「弘樹、お願いされなくても手伝うぜ！」

シバラク「お主もエクスクロスの一人なのだから、当然であろう！」

弘樹「…ありがとう」

零「勿論、俺達もやるぜ、弘樹！」

アスナ「カノンを救い出したいと思っっているのはあなただけじゃないもの！」

メル「やりましょう、弘樹さん！」

弘樹「ああ、頼りにしているぜ！零、アスナ、メル！」

リン「エクスクロスの狙いはカノンの様です！」

ギルガ「今回はそう簡単にはやらせないよ。（それに既に切り札は用意してあるからね…）」

俺達は戦闘を再開した。

敵を倒していく俺達…。

カノン「このままではこちらの戦力が削られるだけです」

ギルガ「心配ないよ、カノンちゃん。既に手配はできている……。来たよ」
何だ……。!? 現れたのは黒いアクエリオン……。!?

アマタ「あれは……。！」

ゼシカ「嘘、あれって……。エンシエントA Q!?」

九郎「何だよ、あのアクエリオンは!?」

アンデイ「エンシエント・アクエリオン……。！」

ミコノ「神話型アクエリオンの本来の姿です！」

モロイ「簡単に言うとE V O Lの元となったアクエリオンだ！」

デュオ「元になったって……。！」

甲兎「つまり、E V O L並みに強力な奴って事かよ！」

M I X「どうして、オニキスがエンシエントを!?」

ギルガ「機体のみ転移してきたので僕達の力で無人機としたんだよ」

サザンカ「趣味の悪い事をするね……。！」

ギルガ「何とも言うがいいさ！君達に勝てればそれでいい！」

ユノハ「ま、またあれと戦う事になるなんて……。！」

カイエン「だが、あんなものを野放しには出来ない！」

アマタ「やろう、みんな！あいつを倒すんだ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　アマタorミコノorゼシカVSエンシエントAQ〉

アマタ「あの様なものをアル・ワースでは使わせない！」

ミコノ「必ず止めよう、アマタ君！」

アマタ「ああ、ミコノさん！」

ゼシカ「お熱いのは後にしてよー。。。まあ、これが二人だもんね。よし、行くよ！」

〈戦闘会話　カイエンorアンデイor MIXVSエンシエントAQ〉

アンデイ「俺が相手だ、エンシエントAQ！そのボディに大穴を開けてやるぜ！」

MIX「その穴を私が塞ぐわ！」

カイエン「塞いでどうする！いいから行くぞ！」

〈戦闘会話　ユノハorモロイorサザンカVSエンシエントAQ〉

ユノハ「モロイさん！サザンカさん！私が隙を作ります！」

モロイ「わかった！その後に俺が奴を脆くする！」

サザンカ「じゃあ、私が相手を腐らせるわ！」

俺達の攻撃でエンシエントA Qはダメージを負った。

ベルリ「後一息で勝てる！」

ギルガ「それはどうかな？」

するとエンシエントA Qのダメージが回復した。

ジル「バカな・・・！」

克蘭「ダメージを回復させたけど・・・!?？」

ミシエル「あれだけ与えたのに全回復されたらたまったもんじゃないぞ！」

カナリア「だが、そうも言っていられないぞ！」

オズマ「どちらにしても奴を倒さなければ道は開けん！気を引きしめろ、お前等！」

鈴「けど、永遠に回復する相手にどうしろって言うのよ！」

ギルガ「どうする事も出来ないさ。真の機械天使にはね」

アマタ「違う！そんなものは機械天使・・・アクエリオンじゃない！」

ギルガ「強がりによした方がいいよ、アマタ・ソラ。君達ではエンシエントA Qには

勝てない！」

弘樹「いや、確かに回復されては倒せないが、回復する以上のダメージを与えればいい！」

零「弘樹にしては冴えてんじゃねえか！」

弘樹「してはは余計だ！」

トオル「で、でも実際にどの様な攻撃をすれば……！」

ギルガ「ほらね、無理じゃないか！」

アマタ「無理じゃない……！アクエリオンの力は無限大だ！アクエリオンは人と人の想いの力……！何の想いもない偽りのアクエリオンの負けのつもりはないんだ！」

ギルガ「現実を見なよ、敗北は目に見えている！このまま君達はエンシエントAQに潰されるのだ！」

？「現実を見ないのは君の方だ、ギルガ・カルセドニー」

アマテラス・ツヴァイの前に男の人が現れた……！！？

リン「あ、あなたは何者ですか！！？」

不動「不動ZEN……単なる司令官だ」

アマタ「不動司令！」

ゼシカ「司令もアル・ワースに来ていたんですか！！？」

不動「遅くなってすまなかつたな、エレメント達」

ギルガ「君が何者かは知らないが、君がエンシエントA Qを止めると言うのかい？」
不動「ふつ、止めるのは私ではない。私の中で眠る者だ」

すると、不動さんの身体の中から女性の様な人が出てきた。

？「よもや、私が扱っていた物を使われるとはな」

ミコノ「あ、あなたは…！」

ゼシカ「ミカゲ…?!？」

ミカゲ「久しぶりだね、機械天使に選ばれし者達」

カイエン「どうしてお前が?!？」

不動「詳しい話をしていない。ミカゲ、頼むぞ」

ミカゲ「わかってるさ。神話型アクエリオンよ…我が声を聞け！」

ミカゲという人が叫ぶと、エンシエントA Qの動きが鈍くなった…。

ギルガ「ど、どうしたんだ、エンシエントA Q?!？」

リン「エンシエントA Qの出力が下がっていきます！」

MIIX「そういう事ね！」

アンデイ「何がそういう事なんだ、MIIX？」

MIIX「神話型アクエリオンをエンシエントA Qに変貌させたのはミカゲよ。例え、

オニキスに無人機にされたとしても、ミカゲが支配権を奪う事なんて容易いわ！」

ミカゲ「そういう事だ、流石はM I X Yだね」

M I X「私はM I X…女よ！」

ミカゲ「まあいい、これで奴は動く事が出来ない。倒すのなら今だ！」

カイエン「倒せていうが、どうすれば…！」

不動「案ずるな、来たぞ」

サザンカ「え…」

今度は四人の人物が現れる。

クレア「来ましたよ、不動」

ミコノ「クレア理事長！」

クレア「ご無事で何よりです…。あなた達も何か言いたいのではないですか？」

カグラ「うるせえ、お前に言われなくてもそうするつての！」

アマタ「カグラ！」

ゼシカ「何よ、クソ男！あんたもいたの？」

カグラ「また会ったな、ドン底女！寂しくて泣いてなかったか？」

ゼシカ「鳴くのはあんたでしょ、この犬！」

カグラ「相変わらず、騒がしい女だな！」

アマタ「無事でよかったよ、カグラ」

カグラ「お前もな、アマタ」

カイエン「お前は… シュレードなのか…?!?」

シュレード「勘弁してくれ、親友。俺様な人間が複数もいるはずないよ」

カイエン「まったく… お前は…！」

シュレード「再会でできて、嬉しいよ…。親友」

カイエン「俺もだ、シュレード」

ジン「E V O L」「えっと… 久しぶり、ユノハ…」

ユノハ「ジ、ジン君…？本当に、ジン君なの?!?」

ジン「E V O L」「うん、そうだよ、ユノハ」

ユノハ「ジン君… ジン君!!?」

これでアマタ達の仲間は揃ったって事か！

シュレード「行こう、親友！俺達の演奏を奏でよう！」

カイエン「ああ！」

E V O Lはアクエリオンスパーダになり、エンシエントA Qに接近した…。

シュレード「俺達の新たなメロディを聞け…！」

カイエン「息を合わせろ、シュレード！」

シユレード「共鳴演奏を今ここに！」

スパードが剣を構えると、彼の背中にゲパルドの両腕が現れる。

カイエン「スパードとゲパルトの力を合わせる！」

シユレード「奏聖のレクイエム！」

エンシエントAQ「！」

剣の斬撃と両腕から放たれるビームを受け、エンシエントAQはダメージを負った。

サザンカ「やつぱりいい……！カイエン様とシユレード様の掛け合い……！」

青葉「へ、平常運転だな、サザンカちゃんは……」

デイオ「だが、倒しきれていないぞ！」

ギルガ「そう！さらにここで戦力増加だ！」

ダメージを負ったエンシエントAQの周りに大量のガルド部隊が現れた。

ロツクオン「おいおい……何だよ、あの数は！」

ジョーイ「エンシエントAQに近づけさせないつもりか……！」

パトリック「あんな奴らを一体ずつ倒してもラチがあかねえぞ！」

ユノハ「大丈夫です、ジン君！」

ジン「E.V.O.L.」「ああ！」

すると今度はゲパルトに変形して、さらに変形する。

ジン「E V O L」 「空間断絶砲…！いつけええええつ！！？」
変形したゲパルトの砲身からワープ空間を閉じるエネルギーが放射され、空間に閉じられたガラム全機は爆発した。

ノレド「あれだけいた機体を全部倒しちゃった…。」

ジン「E V O L」 「後は任せるよ、カグラ！」

カグラ「おう！行くぜ、アマタ、ドン底女！」

アマタ「ああ！」

E V O Lに帰り、攻撃を仕掛けた…。

アマタ「アクエリオンの力を見せてやる…！」

ゼシカ「私の捻る力！」

カグラ「俺の逆さまの力！」

アマタ「そして、俺の翼！」

E V O Lは両腕の無限拳を繰り出した。

アマタ「三つの力を一つに！」

そして、両腕の無限拳は渦を巻く様にエンシエントA Qに直撃した。

アマタ& a m p；ゼシカ& a m p；カグラ 「三位一体拳！いつけええええつ！！？」

エンシエントA Qを空高く殴り飛ばし、両腕が一撃ずつ攻撃を浴びせ、最後にWパン

チを直撃させた。

エンシエントA Q「!!?」

三位一体拳を受けたエンシエントA Qは大爆発を起こし、跡形もなく消えた。

ギルガ「ば、バカな：：！あのエンシエントA Qが跡形もなく：：！」

アマタ「これがアクエリオンの力だ！」

不動「流石だな、エレメント達」

ミカゲ「では、行くとしようか、アポロニアス」

不動「そうだな、では、機械天使に乗る者達：：さらばだ！」

不動という人とミカゲという人は消えてしまった：：。

三日月「消えた：：?」

シノ「何だったんだ、いったい：：?」

アマタ「(ありがとう、司令；、ミカゲ：：)」

シモン「：：」

ヴィラル「ん?どうかしたのか、シモン?」

シモン「い、いや：：。ここまで来るとアクエリオンって何でもありだなんて：：」

竜馬「同じようなグレンラガンに乗っているお前が言うんじゃねえよ」

零「いや、ゲッターも相当ですけど：：」

ギルガ「もういい！こうなったら僕が直々に倒してやる！」

零「諦めが悪いのはお前の悪い癖だぜ、カルセドニー！覚悟しな！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　カグラVS初戦闘〉

カグラ「さあ、行くぜ！足引つ張ったら承知しねえぞ、ドン底女！」

ゼシカ「あんたに言われなくてもわかってるわよ！そっちこそ私の足を引つ張らないでよ！」

カグラ「へっ！今に見ていやがれよ！俺の力を！」

〈戦闘会話　シュレードVS初戦闘〉

カイエン「まだやれるな、シュレード！」

シュレード「当然さ、まだまだ君には負けられないからね、親友。では行くでしょう！」

〈戦闘会話　ジン「EVOL」VS初戦闘〉

ユノハ「ジン君！」

ジン「E V O L」 「行こうユノハ！僕は戦う！世界の為…。そして、君の為に！」

〈戦闘会話 クレアVS初戦闘〉

クレア「私の動きを捉えられますか？（不動、見ていてください…。この世界でも私達は戦い抜きます…。！）」

〈戦闘会話 零VSカノン〉

カノン「覚悟してください、新垣 零！」

零「悪いがカノン、お前の目を覚ませるのは俺やアスナじゃねえ！」

アスナ「その為にもあなたの動きを止める！弘樹の為に！」

〈戦闘会話 弘樹VSカノン〉

弘樹「カノン…。」

カノン「理解出来ない…。！どうしてあなたは私を倒そうとしないのですか！」

弘樹「お前が大切だからだ、カノン…。だから、何としてでも助け出す！俺と…。仲間達の力で！」

〈戦闘会話　メルVSカノン〉

メル「行くよ、カノンちゃん！」

カノン「ええ、来てください、メル・カーネリアン……。そして、死になさい！」

ゼフィルスネクサスとヴァリアスの攻撃でジェイルはダメージを負った。

カノン「こ、この様な所で……！」

しんのすけ「今だぞ！弘樹お兄ちゃん！」

弘樹「うおおおっ!!？」

ヴァリアスがジェイルに飛びついた。

カノン「は、離してください！」

弘樹「離すかよ！もう二度と！」

カノン「どうして……。そこまで、私の事を……？」

弘樹「決まってるだろ……。お前の事が好きだからだよ！カノン！」

カノン「！」

弘樹「一人の女として……。掛け替えない存在として、お前が好きなんだよ！だから、手を伸ばす！お前が俺の手を握ってくれるまで、ずっとな！」

カノン「弘樹……さん……！私は……私は……！結城 花音……そして……！カノン・サファイア……！私も、あなたの事が大好きです！弘樹さん！」

カノンの意識が……！

弘樹「洗脳から解放されたんだな、カノン！」

カノン「はい！」

……つて、ヤバイ！ジェイルが音を立て出した……！

零「弘樹！カノンをヴァリアスに運べ！ジェイルが爆発するぞ！」

弘樹「カノン、乗れ!!？」

ジェイルが爆発する前に弘樹はカノンをヴァリアスのコックピットにへと連れ込んだ。

アスナ「カノン、大丈夫!?!？」

カノン「はい……何とか……！」

弘樹「な、何とか間に合ったな……！」

カノン「あ、あの……弘樹さん……」

弘樹「ん？」

カノン「そ、そんなに抱きしめられると……その……」

弘樹「わ、悪い……！」

… あいつら、何やってんだよ…。

チャム「わく！弘樹大胆！」

シルキー「破廉恥です！」

弘樹「誤解だつての！」

アスナ「弘樹！カノンに変な事をしたら、殴るわよ！」

弘樹「してねえって！」

カノン「私…弘樹さんになら…全てを差し上げても…」

弘樹「お前もやめてくれ、カノン！」

零「お前等ー。イチヤつく前に相手、ブチ切れるぞー」

ギルガ「君もだ、新垣 零！」

リン「カノン・サファイアが敵となるのであれば相手をするまでです！」

弘樹「カノン！俺達も力を合わせていくぞ！」

カノン「ヴァリアスもゼフィルスの兄弟機だとすれば…弘樹さん！」

弘樹「ヴァリアスも進化する！俺とカノンの力で！」

すると、ヴァリアスが紫色に輝き出し、光が消えると、ヴァリアスの姿が変わっていった。

アスナ「ヴァリアスもネクサスに進化したの!?？」

カノン「それは違います、アスナさん！」

弘樹「ヴァリアスのこの姿は悪しき者を破壊する力……闇の破壊の翼……！ダークネス・ヴァリアスデストロイだ！」

零「ヴァリアスも進化するなんてな……」

ギルガ「氷室 弘樹……！君もなのか……！」

弘樹「そして、これが俺の新たな力だ！」

ヴァリアスデストロイがアマテラス・ツヴァイに攻撃を仕掛けた……。

弘樹「お前の企みもここまでにしてやるぜ、カルセドニー！行くぜ、ハイバスタードモード！」

何と、弘樹はハイバスタードモードを発動した。

それと同時にヴァリアスデストロイも瞳を赤く輝かせ、二刀のクロスソードで何度も斬り裂く。

弘樹「カノン、頼むぜ！」

カノン「私もハイバスタードモードでいきます！セイバービット！」

ハイバスタードモードを発動したカノンはブレードビットに似たセイバービットを複数出し、アマテラス・ツヴァイを斬り裂いていく。

弘樹「ナイスだ、カノン！後は任せる！これで終わりだ！喰らえええええつ！！？」

クロスソードをバスターソードモードにして、剣身に紫色のエネルギーを蓄積させ、アマテラス・ツヴァイを大きく斬り裂いた。

リン「きやあつ……！ギルガさん……！」

ギルガ「こ、これ程までとは……！」

零「弘樹、お前もハイバスターモードを……！」

弘樹「お前が強くなるなら俺だって強くなるだけだ！」

カノン「俺じゃなくて俺達ですよ、弘樹さん！」

弘樹「そうだったな！」

見せつけてくれんじゃねえかよ、こいつら！

ギルガ「リンちゃん、まだやれるよね？」

リン「と、当然です！」

アスナ「諦めが悪いわね！零！私達も負けていられないわよ！」

零「そうだな！此処からは連携していくぜ、弘樹！」

弘樹「おう！見せようぜ、俺達の連携を！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

リン「そちらが二人ならばこちらも二人で勝負です！」

ギルガ「僕達のコンビは負けるつもりはないけどね」

零「俺達だって、負けるつもりはない！なあ、アスナ！」

アスナ「ええ！少なくともあなた達よりもいい連携ができるわ！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

カノン「カルセドニーさん！あなたの行った行為は許しません！」

弘樹「カノンは怒ったらグチグチと責められるぜ」

カノン「人をしつこい女のように言わないでください！」

リン「(どうしてこう、イチヤイチヤとする人が多いのでしょうか...)」

ギルガ「いいよ！ならば、二人仲良く倒してあげるよ！」

〈戦闘会話 メルVSギルガ〉

リン「メルちゃん、あなた一人で私達に勝つ気なの!!？」

メル「き、機体に乗っているのは一人ですけど、私には沢山の方がいます！」

ギルガ「一人ならば、僕が側にいようか？」

メル「嫌です！」

ギルガ「ス、ストレートに言われると傷つくね……」

リン「……少しは自重してください、ギルガさん」

ギルガ「どうして君が怒るんだい!!？」

メル「(リンちゃんの好きな人って……もしかして……)」

俺達の攻撃でアマテラス・ツヴァイにダメージを与えたが……。

ギルガ「まだだ!まだ……!」

アーニヤ「しつこい……」

ルルーシュ「あの男の執念はそれだけのものということか……!」

零「いい加減狙われるのも飽き飽きしていたんだよ!」

弘樹「それなら、ぶっ飛ばしてやろうぜ、零!」

零「……そういう事か。よし!弘樹、合わせろよ!」

弘樹「お前がな!」

ゼフィールスネクサスとヴァリアスデストロイが同時に攻撃を仕掛けた……。

零「カルセドニー、マスカライト!これで終わりにしてやる!」

弘樹「合わせてやるから、遅れんなよ、零！」

零「合わせんのはこっちだ！お前はいつもノロマだからな、バカ弘樹！」

弘樹「バカって言うな、ウジ野郎！」

零「やんのか、馬鹿野郎！」

アスナ「喧嘩せずにやるわよ、二人共！」

カノン「本当に仲がいいですね！」

零「仕方ねえ……！やるぞ！」

俺はクロスレイズモード、弘樹はハイバスタードモードを発動させ、ゼフィルスネクスとヴァリアアスデストロイは同時に動き出し、二刀のクロスソードで同時に斬り裂いていく。

零「はあっ！」

弘樹「吹き飛びやがれ！」

ゼフィルスネクスが回転斬りを決め、ヴァリアアスデストロイが回し蹴りでアマテラス・ツヴァイを蹴り飛ばした。

アスナ「私達も負けてられないわよ、カノン！ブレードビット！」

カノン「はい、いきます！セイバービット！」

複数のブレードビットとセイバービットがアマテラス・ツヴァイを斬り裂いていく。

零「これでラストだ、弘樹！」

弘樹「ああ！」

お互い、バスターソードモードに連結させ、接近する。

零 & a m p ; 弘樹「はあああああつ!!?」

最後は同時にバツを描く様に斬り裂いた…。

ギルガ「うっ…うわあああつ!!?」

零「数秒遅かったんじやねえのか、弘樹？」

弘樹「お前が早すぎたんだよ、零！」

斬り裂かれたアマテラス・ツヴァイは大ダメージを負った…。

リン「ダメージが限界レベルを突破しました！これ以上は…！」

ギルガ「くっ…！新垣 零！氷室 弘樹！次こそは君達を倒す！覚えていろ！」

そう言い残し、アマテラス・ツヴァイは撤退した…。

零「その言葉、何回目だよ…」

弘樹「お前も大変だな」

アスナ「他人事のように言っているけど、これからはあなたも狙われるのよ」

弘樹「何だつて!!?」

零「普通、気づくだらうが、バカ…」

今ので敵は最後か……

ニール「終わったみたいだな……」

五飛「オニキスも本格的に動き出してきたな」

トロワ「それにどうやら、弘樹まで狙われることになった様だ」

弘樹「勘弁して欲しいぜ……」

カノン「大丈夫ですよ、弘樹さん。あなたは私が守ります！」

弘樹「ありがとうな、カノン」

零「いい雰囲気のところ悪いが、弘樹……。お前には鬼よりも怖い千冬さんの説教が待っているからな」

千冬「ほう……。？どうやら、お前も受けたい様だな、零？」

零「い、いや……。冗談ですよ！」

一夏「千冬姉に冗談は通じないのはわかってはいるはずなだけだな……」

箒「それ以上言うな、一夏……。お前も巻き込まれるぞ」

束「箒ちゃんも恐ろしいと思っても言っちゃダメだよ！」

箒「ね、姉さん……。！そんな事は一言も……。！」

千冬「安心しろ、一夏、篠ノ之姉妹……。既に聞こえている」

一夏「う……。！」

箒「私は何も言っていないのに……！」

カグラ「随分賑やかな奴等なんだな」

シユレード「なかなかいい人が揃っているな」

カイエン「ああ。本当にお人好しな奴が多い」

カノン「それは敵対していた時からわかります」

弘樹「お前も来てくれるよな、カノン？」

カノン「そちらがよろしいのであれば……」

ジエフリー「勿論、構わないさ」

弘樹「ありがとうございます、ジエフリー艦長！」

俺達はそれぞれの艦に戻り、Nーノーチラス号の格納庫に集まった。

アンディ「そうか、お前等は不動司令の所にいたんだな」

クレア「ええ、だから、すぐに助けにはいけなかつたんです」

ジン「E V O L」「ごめんね、みんな……」

ユノハ「ううん！ジン君にまた会えて嬉しい……！」

ジン「E V O L」「僕もだよ、ユノハ……」

ユノハとジン「E V O L」……。いい感じじゃねえか……。

アストン「ユノハってあんな感じだったっけ？」

アミダ「いい事教えてあげるよ、アストン。女つてのはね……好きな男の目の前だと
雰囲気を変えるんだよ」

名瀬「まつ、そう言う事だ」

クレア「取り敢えず、紹介します。私はクレア・ドロセラ。彼等の通う聖天使学園理事長を務めています。エレメント能力は瞬間移動です」

シユレード「シユレード・エランだ。エレメント能力は精神演奏。楽器を奏でること
で深層心理に干渉し、感情を操ったり、エレメント能力を一時的に強化・操作する事が
出来るんだ」

ジン「E.V.O.L.」「ジン・ムソウです！エレメント能力は断ち切る力……。物理的な繋
がりを断ち切ることが出来る能力です！」

カグラ「カグラ・デムリだ。エレメント能力は逆さまの力だ。よろしくな！」
ラウラ「どうして、お前はアマタとそっくりなのだ？」

アマタ「俺とカグラは本当は一人の存在なんだよ」

零「……俺とレイヤみたいな関係って事か？」

アマタ「どちらかと言うと二人に分断されたと言うのが正しいんですけど」

ジユドー「難しいのはいいじゃないか！とりあえず、よろしくな、みんな！」

シユレード「ああ！」

弘樹「成る程、カイエンの親友らしいな」

シユレード「親友の親友は俺の親友だ。よろしく」

弘樹「…な、なんかややこしいけど…おう、こちらこそ！」

カイエン「どうやら、バカには通じなかった様だな」

弘樹「うるせえ、バカって言うな！」

カノン「…」

アスナ「あなたも想いを告げたのね、カノン」

カノン「アスナさん…メルちゃん…」

アスナ「あいつはバカだから、苦勞するわよ」

カノン「それでも弘樹さんは優しい方です…。だから、苦勞なんてしませんよ」

メル「同じ恋をする乙女同士、頑張ろうね！カノンちゃん！」

カノン「うん！メルちゃん！」

メルとカノンは握手をした。

アマリ「良かったね、カノンさんを救い出せて…」

零「ああ、そうだな…」

弘樹「零…」

…弘樹か…。

弘樹「その… 悪かったな。心配かけちまって…」

それを聞いた俺は息を吐き、弘樹にデコピンを浴びせた。

零「バーカ。誰もお前の事なんて心配してねえよ」

弘樹「っ…！そ、そこは嘘でも心配しているって言ってくれよ…！」

零「お前に嘘ついても何の得もねえだろ」

弘樹「そ、それもそうだな…」

零「… 弘樹。訓練に付き合え！お前との連携を再確認しておきたいからな！」

弘樹「お安い御用だ！」

俺と弘樹は拳をぶつけ合い、笑い合った…。

すると、警報が鳴り響く。

ヒイロ「敵か？」

摩耶「じ、実は三機のロボットが通信をしてきたんですけど… そのリーダーらしき女性が艦に入れて欲しいと言ってきたんです」

スカレット「そのリーダーの名は？」

摩耶「ハリケーンさん… と言っています」

由木「ハ、ハリケーンさんって、まさか…！」

由木さんが知っている…？ いったい… 何者なんだ…？

ーエンブリヲだ。

私は今、運命の場所にいた。

エンブリヲ「エクスクロスも着々と力をつけてきているようだね」

アーサー「だが、よもや死んだはずのそなたが生きているとは思わぬ」

マリアンヌ「それにしてもかぎ爪の人はどうしたの？」

エンブリヲ「彼等も色々忙しい様だ。それよりもマダム……君の世界から可愛い二人の花嫁を連れてきたのだが……お会いになるかな？」

マリアンヌ「私の世界から？」

私は二人の花嫁をマダムの前に差し出した。

ユーフェミア「マリアンヌ皇女……」

マリアンヌ「あら、ユーフェミアじゃない。それに……」

ナナリー「お、お母様……？ どうしてこの様な所に……？」

マリアンヌ「久しぶりね、ナナリー。我が愛しの娘……」

ナナリー「(どうしてでしょう……このお母様は私の知るお母様ではありません……。

お兄様、スザクさん……私も……戦います……！)」

親子の感動の対面、
だね……。

第60話 楽園の終わり

―新垣 零だ。

俺達はメガファウナの格納庫で通信を送ってきた三人の女の人と話し合っていた。

由木「お久しぶりです、ハリケーンさん、ミステイさん、フラッシュさん！」

ミステイ「久しぶりだね、由木」

フラッシュ「あなた達の活躍は聞いていたわ」

真上「それならば、何故早くに合流しなかった？」

ハリケーン「私達もある調査をしていたんだ」

スカーレット「ある調査？」

ハリケーン「アイラ様がドアクダーに捕らえられている事がわかったんだ」

海道「何……？」

由木「アイラ様が……？」

ミステイ「あたし達も助け出そうとしたんだけど……」

フラッシュ「ドアクダーの戦力は驚異的で迂闊に手が出せなかったの」

ハリケーン「それで同じくドアクダー軍団を倒そうとしているあんた達と合流しようって事になったんだ」

シバラク「そのアイラという女性はどの様な人物なのだ？」

ハリケーン「アイラ様は私達、八稜郭を治めるお方だよ」

ヒイロ「また世界に関連する人間か……」

零「ドアクダーはそんな人達を拐っていったい何がしたいんだ……？」

マリア「考えてもわからない以上、今は前に進むしかないわね」

アニユー「そうね、私達にはまだやるべき事がたくさんあるもの……」

ジャンヌ「そういえば、アウラはどうなっているの？」

サラマンディーネ「……ミスルギとわたくし達を守ってくれたアウラはかなりのダメージを受けています」

アンジュ「無理もないわね。帝都全体を守るために時空を歪めたんだから」

サラマンディーネ「現在、アウラはわたくし達の世界へ戻っていますが、エンブリヲに酷使されたせいもあり、力を取り戻すまで、かなりの時間がかかると思われます」

カノン「アウラの力を使って、元の世界へ戻るのは無理だという事ですね……」

ベルリ「だったら、やる事は一つ……」

ワタル「ドアクダーを倒そう！そして、創界山の虹を元に戻して、元の世界へ帰るん

だ！」

ジョーイ「それがアル・ワースの人達にとつても一番だろうね」

青葉「ああ！救世主一行として務めを果たそうぜ！」

九郎「どちらにしろ、アウラが万全だったとしても元の世界へ帰るのは、ドアクダーを倒してからにするつもりだったしな」

シヨウ「そうだな。アル・ワースの戦いの元凶である奴を放置しておくわけにはいかない」

シャア「もう片方の戦いの元凶であったエンブリヲは倒したが、あの男の下にいた異界人達は魔徒教団に集められている」

ティエリア「おそらく、アリー・アル・サーシエスやリボンズもそちらにいるだろう」
アムロ「教団の動きがわからない以上、受け身に回るしかないな…」

束「多分だけど、ラクちゃん達もそこにいるよ！」

クロエ「エンブリヲの言っていた運命の場所というものがよくわかりませんが、おそらくそうでしょう」

シーブツク「でも、あのセルリックはともかく、ドアクダーを倒せば、戦いは最終して、教団と和解する道があるかも知れません」

カミーユ「彼等の言う、法と秩序の番人という言葉が信じられるならな…」

アマリ「(教団の戦いの目的は導師キールデインが言っていたように世界の存続なの…。？わからない…。どうして戦いを起こす事が世界を存続させる事になるの…。)」

零「大丈夫か、アマリ？」

アマリ「不安はあるわ…。でも、先の事がわからないなら、目の前の事から片付けていくだけよ」

イオリ「俺も手伝うよ、アマリさん」

アマリ「ありがとう、イオリ君！」

ゼロ「それに敵は魔徒教団やドアクダー軍団だけじゃないぜ」

ジャンボット「ベリアル軍にミッドナイト、ビート・スターもいる。それに…。」

ヴァン「…。あれつきりかぎ爪の情報も入らずじまいだな」

ウエンディ「仕方ないよ、ヴァン。ミスルギの一件以来、かぎ爪の人や兄さん達は出てきていないもの」

ミラーナイト「彼等も倒すべき敵ですね」

アルト「そして、エンブリヲが操っていたバジュラはオニクスの下にいるんだよね？」

零「奴等はエンブリヲの洗脳を上書きして自分達の思い通りに出来るようにしている…。二元に戻す為にも攻撃する事はやむを得ないだろう」

… ハデス・エメラルド……。オニキスの目的は全並行世界を一つに融合させる事だった；；それなのにどうして、バジユラを操る必要がある；；？ただ単に手駒が欲しかったのか；；？

アスナ「何辛気臭い顔しているのよ」

弘樹「オニキスの事……考えても仕方ないだろう」

零「レイヤの幼い時の記憶……俺が生まれた時のかすかな記憶だが、ハデスはその様な野望を持つ人間ではなかったはずだ……。母さんは何か知らないのか？」

マリア「……私が愛していたハデスは今のハデスとは違うわ……。私に寄り添ってくれた優しい性格の持ち主だった……。でも、レイヤの物心がついた頃に性格が豹変したの」

メル「何かの野心がハデス・エメラルドを変えたという事ですか？」

マリア「わからない；；」

零「母さんはいいのか？このままいくとハデスを倒す事になる……愛する者を手にかける事になるかもしれないんだ」

マサキ「それはお前も一緒だぜ、零」

ユイ「あなたも実の父親をその手にかける事になるんですよ」

零「……俺はハデスを止めたい……。それがレイヤの……俺の意志だから……！」

マリア「零……。(ハデス、私達の息子は立派に育っているわ……。それなのにどうして、あなたは変わってしまったの……?)」

零「でも、まずはドアクダー軍団討伐に専念したい。オニキスのことはそれからだ」

ヒイロ「ドアクダー打倒を決めたのなら、急ぐべきだ」

オルガ「奴の下には様々な人が捕らえられている」

チャム「時々シーラ様のオーラを感じるから、無事に入ると思うけど……」

ノブナガ「何のために彼女達をさらったのかははつきりとしませんが、急ぐに越した事はない」

シノ「で、ドアクダーの打倒ってのは具体的にはどうすりやいいんだ?」

クラマ「ドアクダーは、創界山の最上界層……第七界層にある魔神殿にいる」

ワタル「ちよつと待って! 創界山の秘宝は全部で六つあって、その全てを揃えたら……。ドアクダーを倒す力が目覚めるんだよね!」

ケロロ「ドッコイ山の赤龍と青龍はそう言っていたでありますな!」

ワタル「神部の笛、真実の鏡、灼熱の剣、極寒の剣、ヨカツタネ、千光の腕輪……六つ揃ったのに何も起きてないじゃない!」

しんのすけ「全部、偽物とかじゃない?」

一夏「いや、少なくとも千光の腕輪以外はワタルが力を使ったじゃないか」

幻龍齋「その事何だがな、ワタル……。鍵は、その千光の腕輪にあると見ているウラ」
ワタル「千光の腕輪に……？」

トッド「ビビデ・ババ・デブーが守っていた秘宝……。秘められな力を解放すると言つてたが……」

ルカ「『ゴーカイ』」でも、ワタルがつけても何も起こらなかったじゃない」

マサオ「じゃあ、しんちゃん言う通り、偽物だったって事？」

幻龍齋「そうではないウラ。その千光の腕輪は、まだ完全ではない……。ワシはそう睨んでいるウラ」

マーベラス「完全ではない？」

ヒミコ「どういう事なのだ、父上？わかりやすく説明するのだ」

幻龍齋「要するに赤龍と青龍の言う秘宝はまだ完全に揃ってないという事ウラ。そして、その鍵を解く鍵は、創界山の第七界層にあると見ているウラ」

シバラク「創界山の一番上……。ドアクダーがいる界層……」

幻龍齋「これまでの秘宝は界層ボスがそれぞれ待っていた……。ならば、それ以上を求めのならば、その上……。第七界層に行くしかないウラ」

ワタル「ドアクダーを倒すために第七界層は行くって決まってるんだ。秘宝の謎もそこで解いてやる」

舞人「その意気だ、ワタル」

ジャン「さすが救世主！気合十分だ！」

ワタル「へへ：今の僕、ハツキシ言つて、面白かつこいいぜ！」

アーニー「お得意の決め台詞が出たね」

零「俺達も頑張りましょう！アル・ワースの平和のため：。そして、全ての世界のためにも！」

万丈「：。そう言えば、シモンとルルーシュがいない様だが：。」

スザク「ルルーシュは今、ドアクダー打倒の作戦を立てています」

ロロ「どうやら、少しは一人で考えたいというらしいです」

シャーリー「後で何か作つていつてあげないとね」

カレン「ルルーシュ：。あんたは本当に変わったわね：。自分の為ではなく、誰かの為にその知恵を使うだなんて：。」

ヴィラル「シモンは一人で覚悟を決めている。(ニア姫様を具体的には救う：。これからの戦い：。シモンにとつても正念場となるな：。）」

ー ルルーシユだ。

俺は今、自室でドアクダー軍団打倒のプランを考えていた……。

ルルーシユ「ふう……少し休むとするか……。あまり、考え過ぎるとシャーリーに文句を言われるからな……。」

ふつ、それにしても俺が誰かの為にここまで考える時がくるなんてな……。かつて、自分やナナリーだけのために頭を使っていた頃とは大違いだ。

……いや、本来ならば使っていたはずだ……。俺が、ユファイにあの様なギアスをかけていなければ、今頃……。

……ユファイ……。今の俺を見たらお前は何と言うだろうな……。

? 「あの頃より随分と丸くなった様だね、ルルーシユ」

ルルーシユ「!……誰だ!?」

V・V・「酷いな、ルルーシユ。僕の事を忘れるなんて」

ルルーシユ「V・V・!? 何故、貴様が……!?」

V・V・「死んだはずの人間がいるんだ、驚く事でもないだろう?」

ま、まさか……!

ルルーシユ「シャルルの奴もアル・ワースに來ているのか!?」

V・V・「いいや、シャルルは來ていないよ」

シャルル、は…？

ルルーシユ「貴様はこのアル・ワースで何をする気だ!?？」

V・V・「それはまだ言えないよ。何せ、今日は君に会いに來ただけだからね」

C・C・「ルルーシユにだけ挨拶とは随分と寂しいじゃないか、V・V・」

V・V・「C・C・も久しぶりだね。それじゃあ、僕は失礼するよ。いずれまた、会う事もあるだろうし」

ルルーシユ「お前が何を企んでいようが、俺達が阻止してやる!」

V・V・「勇ましくなったね、ルルーシユ。それじゃあね」

そう言い残すとV・V・は消えた…。

C・C・「ここに来て、面倒な奴が出てきたな…。」

ルルーシユ「C・C・、お前は何故ここに來た?」

C・C・「嫌な予感がしてな。坊やの身に何かが起こってはダメだと思ったんだよ」

ルルーシユ「相変わらず、勘の鋭い魔女だ」

C・C・「戻るぞ、ルルーシユ。シャーリーとジレミアが心配している」

ルルーシユ「ああ」

V・V・、お前が何を企もうと俺は戦う…ただのルルーシユとして…。

ーシモンだ。

俺は外でニアの事を考えていた。

ニア…待っている…。必ずお前を救い出すからな…。

すると、ホープスが飛んできた。

ホープス「シモン様…」

シモン「ホープスか…」

ホープス「お気を付けて」

シモン「何…?」

ホープス「もうすぐ世界が壊れます…」

シモン「!」

世界が…壊れる…?

ホープス「その戦いの渦…螺旋の中心に立つのはあなたでしょう」

そう言い残すとホープスは飛び去ってしまう。

シモン「あいつ…何を言ってるんだ…」

?「シモン…」

こ、この声は…!

シモン「ニア…なのか…」

ニア「…」

シモン「ニア！ドアクターの所から逃げ出してきたのか！」

ニア「…」

シモン「ニア…？」

ニア「…」

シモン「どうしたんだ、ニア?!? 何があつたんだ?!?」

ニア「わかつてしまったから…」

シモン「な、何が?!?」

ニア「あなたと私は…決して相容れる事はない…」

シモン「…!」

ニア「スパイラルネメシスは、この宇宙に滅亡をもたらす…。それを阻止する為に我等アンチスパイラルは存在する…」

シモン「アンチスパイラル…?!? 熱でもあんのか?!? いつも以上に言ってる事がわからないぞ！」

ニア「シモン…。あなたの持つコアドリルこそ、スパイラルネメシスの象徴…。その力…螺旋力こそが宇宙を滅ぼす…」

シモン「やめろ、ニア！どうしちまったんだ!!?」

ニア「これが本来の私…。アンチスパイラルのメッセンジャー…」

シモン「メッセンジャーだと!!?」

ニア「私が目覚めた事でこのアル・ワースに小さなほころびが生まれた…。そのほころびを破る姿が現れた時、世界は…楽園は終わりを迎える」

それを言い残すとニアは消えてしまった…。

シモン「ニア…。ニアアアアアアアツ!!?」

ヴァイラル「どうした、シモン!!?」

シモン「ニアが…現れた…。宇宙が滅びる…アンチスパイラル…スパイラルネメシス…楽園の終わり…。俺には…何を言ってるかわからない…」

ヴァイラル「しつかりしろ！話は後で聞く！出撃だ！オリュンポスとスクラッグが来るぞ！」

ニア…。俺は…幻を見たのか…。

第60話 楽園の終わり

―新垣 零だ。

オリュンポススクラッグを迎え撃つ為に俺達は出撃した。

シモン「(ニア……。あれは幻だったのか……)」

ヴィラル「寝ぼけているな、シモン！もうすぐ敵が来るぞ！」

シモン「わかつている！」

エーコー「オリュンポスならびにスクラッグの軍勢、間もなく目視できる距離に入ります！」

エレクトラ「これは……」

ネモ船長「どうした、副長？」

エレクトラ「地磁気に微妙な偏りが見られます。宇宙空間の一点がひずみ、その影響と思われます」

ネモ船長「過去のデータにない現象だ……。戦闘と並行して観測を続けろ」

ハリケーン「私達も行くよ、二人共！」

フラッシュ「ええ、エクスクロスの一員として！」

ミステイ「いいよね、由木？」

由木「勿論ですよ！」

スカーレット「サイコギア隊は私と由木の援護に回ってくれ」

スカーレット「了解！」

エーコー「オリユンポスとスクラッグ、来ます！」

オリユンポスとスクラッグの軍勢が現れた。

甲児「来やがったな、お前等！」

鉄也「俺達がドアクダーに攻め込む気配を察知したようだな！」

ガラダブラ「兜 甲児、剣 鉄也……。今日はお前達に用はない」

甲児「言ってくれるじゃねえかよ、ガラダブラ！用はないのは、お前の方だぜ！」

鉄也「ワタルを狙ってくるというなら、俺達全員であいつを守るまでだ！」

ウイル「暗黒大將軍とゴゴールはいないようだな……」

ガラダブラ「足掻くがいい、人間共。既にお前達では手の届かぬ所に戦いのステージは上がろうとしているのだ」

シモン「黙って聞いてれば、いい気になりやがって！」

ヴィラル「シモン……！」

シモン「オリユンポス、スクラッグ！今日の俺は機嫌が悪いんだ！八つ当たりをさせてもらうぞ！」

ガラダブラ「そうだ、螺旋の男！その血をたぎらせろ！そして、その戦いを我等に捧げろ！」

零「……！」

な、何だ……!? さつきから背筋が凍りそうな何かを感じる……!

舞人「何を言っているんだ、あいつは……」

零「……嫌な予感がする……! ガラダブラを集中的に狙うぞ!」

アスナ「え、ええ……! (さつき、一瞬だけど、零の表情が驚きになった……。何かを感じたの……?)」

甲児「覚悟しやがれよ、ガラダブラ! お前を突破して、ドアクダーまで一直線だ!」
戦闘開始だ!

〈戦闘会話 由木VS初戦闘〉

ミステイ「何だか、久しぶりね、これ!」

フラッシュ「これで私達も戦えるわ!」

由木「皆さん、頼りにしています!」

ハリケーン「ああ、サイコギア隊……由木達に続くぞ!」

〈戦闘会話 海道VSガラダブラ〉

ガラダブラ「ドクロの魔神を操る者達…。貴様達でも越えられないものがある！」
真上「越えられない…。だと…？」

海道「へっ！何の事だ知らねえが、負け惜しみ言っている暇があるんならかかって来やがれ！」

マジンカイザーはガラダブラにダメージを与えた。

ガラダブラ「やってくれるな、人間共…！」

鉄也「負け惜しみか、ガラダブラ！勇者の名が泣くな！」

ガラダブラ「時は満ちた…。！我は使命を果たした！」

すると、暗黒大將軍、ゴゴール、カイザーベリアルが現れた。

甲兎「暗黒大將軍！」

ジョーイ「ゴゴール！」

ゼロ「ベリアル…てめえまでいやがるのか！」

グランデ「へっ。奴等が本命って事か！」

暗黒大將軍「そう焦るな、人間共」

ゴゴール「我々は案内役に過ぎん」

ジャンボット「何っ!!?」

暗黒大將軍「世界を混沌へと導くのは、この者の役目だ」

マ、マジンガーZEROが現れた…!!?

甲児「マジンガーZERO!」

グレートマイトガイン「あれが最凶の魔神と呼ばれる存在…!」

舞人「ついに奴と決着をつける時がきたのか!」

暗黒大將軍「そうではない。さあ、マジンガーZEROよ!アル・ワースの理を破壊するのだ!」

ジン「UX」「何…!!?」

アユル「理を破壊する…!!?」

マジンガーZERO「グオオオオオオツ!!?」

弘樹「異界の門を開くつもりか!!?」

アマリ「何が起きてるの、ホープス!!?」

ホープス「次元が…世界が歪みます…」

しかし、何も起こらなかった…。

エイサツ「何が理の破壊だ!何も起こらないじゃないかよ!」

ノブナガ「悪いが、その手のハッターは通用せんぞ!」

零「ち、違う…！お、お前等、気を緩めるな！！？」

アスナ「ちよ、ちよつと！急にどうしたのよ、零！！？」

ゼフィールスネクサスが怯えている…。つて事は相当の事が起きる…！

カイザーベリアル「へっ！これは始まりに過ぎねえよ！」

ゼロ「どういう事だ、ベリアル！」

カイザーベリアル「楽園の終わり…。てめえ等の目で確かめて見るんだな」

敵が全て撤退した…！！？

カレン「何なのよ、あいつ等…」

スザク「奴等が、脅しをかけに來ただけとは思えない」

C・C「…」

ルルーシュ「どうした、C・C。！！？」

C・C「なるほど…。理の外から來る者か」

ルルーシュ「何っ！！？」

零「この気配…上だ！」

あ、あいつ等が…ゼフィールスネクサスが怯えている元凶の機体…！！？

ジュード「何だよ、あれ！！？」

シーブック「兵器…なのか？」

龍王丸「あれは……」

ワタル「知っているの、龍王丸!!?」

龍王丸「あれは……我々の敵だ……!」

こ、攻撃してきやがった!!?

リョーコ「攻撃してきたぞ!」

サブロウタ「クソっ!自己紹介も宣戦布告もなしかよ!」

サコミズ「パイロットの意思は感じられん……!」

アマルガン「無人機という事か!」

リユクス「何らかの組織が送り込んだ自動操縦兵器という事ですね……!」

ヴィラル「顔のない兵器……。ムガンとでも言えばいいのか……」

ジャンナイン「待て!まだ何か来るぞ!」

現れたのは……巨大なケロン人……!!?

冬樹「あれって……!」

ダークケロロ「ば、バカな……!!?」

九郎「おい!あの馬鹿でかいケロン人は何だよ!!?」

ケロロ「キ、キルル……!!?」

キルル「キルルキルル……」

ケロロ「自動判別型究極侵略兵器キルミランの”実行する者…キルルであります！」
エルザ「キルル…?」

クルル「クーククッ！古代ケロン人が作った最悪の侵略兵器だぜ」

ギロロ「一度動き出せば侵略するどころか惑星の全生物を死滅させその惑星を滅ぼす
奴だ！」

タママ「僕達は何度も封印したです！」

ドロロ「よもや、このアル・ワースで蘇るとは…！」

夏美「キルルに謎の敵のムガン…！突然の事が多すぎるわね…！」

シモン「…」

ヴァイラル「シモン…！」

シモン「(滅亡)…楽園の終わり…。あれがニアの言っていたアンチスパイラルなのか
…」

ヴァイラル「しつかりしろ、シモン！奴等は明らかに俺達の敵だ！」

シモン「あ、ああ…！」

ルルーシュ「各機へ！現時刻より、アンノウンをムガンと呼称する！コミュニケー
ションが不可能な以上、奴等を迎え撃つしかない！」

アルト「やむを得ないか…！」

ネモ 船長「…」

エレクトラ「船長…」

ネモ 船長「奴等が…来たと言うのか…」

零「落ち着け、ゼフィルスネクサス！ 怯えている場合じゃないだろう！」

アマリ「零君も焦っているよ、どうしたの!?!」

ホープス「ゼフィルスネクサスの怯えが零にも伝わっているのでしょ…」

メル「まるでゼフィルスネクサスと零さんの身体は…一心同体のようですね…」

アスナ「零、怯えているの:?!?」

零「…」

よくわからねえが…あのムガンって奴等がやばいって事はわかる…!

それにゼフィルスネクサスが怯えているのなら、俺達で気を和らげるしかねえ…!

零「だ、大丈夫だ、お前もいけるだろ、ゼフィルスネクサス!」

俺の言葉に呼応するかのようにゼフィルスネクサスの出力が上がった。

零「さすがは俺の機体だ!」

アスナ「みんな、ごめん! 何とか大丈夫みたい!」

アマリ「無理はしないでね、二人共!」

戦闘…開始だ!

あの動き…本当に無人機のような…！

エーコー「上空より、また来ます！」

ムガンの増援か…！

グレンファイヤー「なんて数だよ！」

ジャンボット「敵は数により、こちらを圧倒する戦術のようだよ！」

ミラーナイト「このままでは体力の前に気力が尽きてしまいますよ！」

シモン「…」

ヴァイラル「シモン！ 奴等はグレンラガンを標的にしているぞ！」

シモン「やつぱり、あいつ等…ニアに関係しているのか…」

ニアさんがムガンに関係しているだと…!!?

ヴァイラル「ニア姫と!!?」

三日月「ニアはドアクダーに捕らえられているんじゃないの？」

シモン「ニアが俺の前に現れて言った…。螺旋力こそが宇宙を滅ぼす…と」

ワタル「え…え…? どう言う事なの!!?」

シモン「何もわからない…」

ヴァイラル「シモン…」

シモン「だが…」

シモン…！

シモン「だが、こいつ等がニアに関係しているんなら、やる事は一つ！こいつ等をぶつ飛ばす！そうすりゃ、ニアの事だつてきつと何かがわかる！」

ルルーシュ「それでこそ、お前だ。シモン」

一夏「ああ！何が立ちふさがろうとドリルでぶち抜くのがシモンさんのスタイルだ！」

キオ「僕達も続きます！考えるのは後でも出来るから！」

シモン「よし！やるぜ、みんな!!？」

ルルーシュ「各機はシモンに続け！ここで奴等を殲滅する！」

すると、何処かから援護射撃を放たれた。

ドニエル「援護射撃!!？何処からだ!!？」

倉光「あれは…!!？」

現れたのは一機の戦艦と9機とガンメン、8機のナイトメア・フレイムだった。

ロザリー「ガンメン！それもとつともなく巨大な奴が来た！」

クリス「グレンラガンに似た機体もある！サイズは全然違うけど！」

ナオミ「それに見慣れない戦艦とナイトメア・フレームまでいるよ！」

シモン「お前達は……！」

キタン「よう、シモン……！相変わらず、飛ばしてやがるな！」

ヨーコ「助っ人なんていらなかったかもね」

ギミー「つて言うけど、ヨーコさん！俺達、ロシウさんからの指示で来たんだから！」

ダリー「そう言う事です、シモン総司令！これより援護します！」

シモン「キタン、ヨーコ！それにギミーもダリーも！」

ゾーシイ「おいおい、シモン！俺達の事はスルーかよ！」

アイラツク「せっかく助けに来てやったのによ！」

キッド「ありがたく思えよ」

マツケン「間に合ったようだな」

ジョーガン「うおー！シモオオオオン!!？」

バリンボー「助けに来たぞオオオオツ!!？」

シモン「何言ってるんだよ、大グレン団の仲間をスルーするわけないだろ！ゾーシイ、ア

イラツク、キッド、マツケン、ジョーガン、バリンボー！」

舞人「あれは……ヨマコ先生か！」

アンジュ「じゃあ、他の連中もシモンの仲間って事!!？」

ヨーコ「そうよ。大グレン団のメンバーが再び終結したの」

アイラック「まあ、大グレン団じゃあ、ない奴らもいるけどな」

シモン「それって、その戦艦とナイトメア・フレイムの事か？」

ルルーシュ「お、お前達は……！」

扇「ようやく出会えたな、ルルーシュ、カレン」

玉城「助けに来たぜ！」

カレン「斑鳩……?!? 扇さんと玉城……?!?」

C・C「ほう、黒の騎士団が来たか」

藤堂「我々もいるぞ」

朝比奈「久しぶりだな、この感じ……」

ルルーシュ「藤堂、朝比奈、千葉……」

千葉「……無事で何よりだ」

星刻「まあ、感動の再会とはいかないがな」

カレン「星刻さんまで……」

コーネリア「随分、苦戦しているようではないか、ルルーシュ、枢木」

ギルフォード「だからこそ、私達がいるのですよ、姫様」

ダールトン「そうだな。何より、枢木の腕は確かだったからな」

スザク「コーネリア副総督、ギルフォード副官、ダールトン將軍まで……！」
ジノ「俺もいるぜ！」

カレン「ジノ！」

アーニヤ「あなたもいたんだ」

ジノ「いたらダメのような言い方をするな、アーニヤは……」

レナ「今度はルルーシユ達の仲間なの……？」

ルルーシユ「今の俺には仲間と言い難いがな……」

扇「ルルーシユ、お前には話したい事が沢山ある」

コーネリア「だが、今はこの場を乗り切るぞ！」

ルルーシユ「扇、姉上……」

玉城「俺達も手を貸すぜ！」

星刻「早くいつもの指揮をしてくれ」

藤堂「皆、お前の指揮力だけは認めているからな」

ルルーシユ「玉城、星刻、藤堂……。ふっ、いいだろう。だが、今の俺はただのルルー

シユだ。だから、各機、俺に続け！」

カレン「ルルーシユ……」

C・C「(王の力は人を孤独にする……。フ、だが、やはり、少しだけ違っていたかな

…。な？ルルーシユ…」

ギミー「取り敢えず、紹介だ！俺はギミー・アダイ！カミナシティ防衛隊の隊長だつたけど、エクスクロスのさぼーとにきた！」

ダリー「私はダリー・アダイと言います。ギミーの双子の妹です。よろしくお願いします」

キタン「キタン・バチカだ！元法務局長で、今は最強の助っ人だ！」

キッド「キッド・コイーガだ」

アイラック「アイラック・コイーガだ。キッドとは相棒同士だ」

ゾーシイ「ゾーシイ・カナイだ。よろしくな！」

ジョーガン「ジョーガン・バクサ！」

バリンボー「バリンボー・バクサ！」

マッケン「マッケン・ジョーキンだ。よろしく頼む」

幻龍斎「防衛隊の隊長に法務局長…！獣の国の重鎮が来たウラ！」

ヨーコ「そりゃそうよ。総司令のピンチなんだから」

ひろし「総司令…!?？」

ヨーコ「シモンの事よ」

ヒルダ「総司令って事は…！」

サリア「一番偉い人って事!?!?」

ルルーシユ「シモン…! 何処か普通の人間とは違うとは思っていたが、その様な大物だったとはな…!」

シモン「違うぜ、ルルーシユ。おれもお前と一緒にただのシモンだ。そして惚れた女を救い出すために全力で戦う、ただの男だ!」

キタン「それでこそだ、シモン! やっぱり、お前は俺達のリーダーだぜ! 扇達もいな!」

扇「扇 要です。一応、黒の騎士団の事務総長で今は日本国首相です」

シヨウ「扇さん、お久しぶりです!」

玉城「シヨウもいるのか! こりや、百人力だぜ!」

デュオ「相変わらず騒がしい奴だな、玉城!」

星刻「言ってるな、デュオ。五飛も久しぶりだな」

五飛「身体は大丈夫なのか?」

星刻「あの後、治療を受けてな…。徐々に回復している」

カトル「良かったです、星刻さん!」

トロワ「コーネリア副総督やギルフォードも久しぶりだな」

コーネリア「相変わらず、落ち着いているな、トロワ・バートン」

ジノ「ダイターンもいるとなると心強いな！」

万丈「取り敢えず、ジノ。これが終わったら、カレンに会ってやったらどうだい？」
ジノ「そうだな」

カレン「ちよ、ちよっと二人共！」

藤堂「やれるか、枢木！」

スザク「当然です！」

藤堂「そうか。では、千葉、朝比奈。私の援護を頼む」

千葉「わかりました！」

朝比奈「久しぶりに暴れるとしますか！」

コーネリア「グロースター・エアの性能も試したい…。援護を頼むぞ、ギルフォード、

ダールトン」

ギルフォード「了解！」

ダールトン「何処までも姫様についていきますと決めましたからね！」

キタン「キッド、アイラック、ゾーシイ、ジョーガン、バリンボー、マツケン！一

緒にやるぜ！」

キッド「ああ」

アイラック「やってやるか！」

ゾーシイ「仕方ねえ」

マツケン「ふつ、ならば合わせるぞ、キタン」

ジョーガン& amp ;バリンボー「やるぞ！やるぞ！やるぞ！やるぞ！」

キタン「へっ、準備万端の様だな！なら、行くぜ、シモン！」

シモン「ギミー、ダリー…」

ギミー「おう！」

ダリー「はい！」

シモン「キツド、アイラック、ゾーシイ、ジョーガン、バリンボー、マツケン…」

キツド「行くぞ」

アイラック「おう！」

ゾーシイ「よっしやあ！」

ジョーガン「うおおおっ！！？」

バリンボー「うおおおっ！！？」

マツケン「任せろ」

シモン「キタン、ヨーコ…」

キタン「いつでもいいぜ！」

ヨーコ「こっちもOKよ！」

シモン「みんなの力を貸してくれ……やるぜ！顔無し野郎をぶっ飛ばして、俺はニアを救い出す！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「ゼフィルスネクススが奴等に怯える理由……。まさか、今までのゼフィルスのパイロットが何か関係しているのか……？」

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

レナ「ユイ、手を抜いて勝てる相手じゃないわ！油断せずにいくよ！」

ユイ「わ、わかった……！（レナがここまで真剣になるなんて……もしかして、過去のレガリアと何か関係しているの……？）」

〈戦闘会話 キタンVS初戦闘〉

キタン「ロシウの奴、まさか、こんな馬鹿でかいガンメンを用意していたとはよ！」

ゾーシイ「これで俺達も後腐れなく戦えるな！」

マツケン「容赦なく切り捨てる」

キタン「まあ、やっぱ俺は机の前に座ってるより現場の方が性に合ってるぜ！」

キッド「同感だ」

アイラツク「ストレス解消とさせてもらおうぜ！」

キタン「やるぞ、お前等！久々に暴れるぜ！」

ジョーガン「うおおおおおっ！！？」

バリンボー「やるぞオオオオツ！！？」

〈戦闘会話 扇VS初戦闘〉

ラクシャータ「斑鳩の準備は万端だよ」

扇「俺達はこの様な所で負けるわけにはいかない……やるぞ、みんな！」

玉城「おうよ！砲撃は任せろ！」

〈戦闘会話 星刻VS初戦闘〉

星刻「悪いが私はこの様な所で死ぬわけにはいかないのな！天子様の待つ世界へと戻るために……！」

〈戦闘会話 藤堂VS初戦闘〉

朝比奈「いつでもいけますよ、藤堂さん！」

藤堂「ふっ、頼りにしているぞ、二人共」

千葉「私達はいつでも藤堂さんに付いていきます！例え、別の世界へ来ても！」

〈戦闘会話 コーネリアVS初戦闘〉

ダールトン「姫様、参りましょう！」

ギルフオード「我々の心はいつでも姫様と共にあります！」

コーネリア「信じているぞ、二人共！では、行くのでしょうか！」

〈戦闘会話 ジノVS初戦闘〉

ジノ「この世界にスザクもアーニヤも…そして、カレンもいる！だったら、俺も生き抜いてやるよ！エクスクロスでな！」

〈戦闘会話 ケロロVSキルル〉

ドロロ「このアル・ワースでキルルと戦う事になるとは…！」

クルル「クーククツ！これはマジでやらないとやばいぜ」

タママ「やるって言うのなら、容赦なくやるです！」

ギロロ「行くぞ、ケロロ！」

ケロロ「わかっていてあります！キルル！我輩達が何度でも相手をするであります！」

〈戦闘会話 夏美VSキルル〉

夏美「あんたの顔はもう見たくないのよ！デカかろうとぶん殴ってやるから、覚悟しなさい！」

〈戦闘会話 ダークケロロVSキルル〉

シヴァヴァ「この状況はマジでやべえぞ！」

ドルル「強敵出現」

ダークケロロ「だが、ここで退くわけにはいかん！それが吾が決めた道なのだからな！」

ゴッドケロンの攻撃でキルルはダメージを受けた。

キルル「キルキルキル…」

キルルは撤退した…。

ドルル「撤退確認」

ギロロ「倒しきれなかったか…!」

ケロロ「だけど、絶対にまた我輩達が止めるであります!我輩達、ケロロ小隊が…!」

全ての敵を倒した…。

レーネ「敵部隊の壊滅を確認…」

倉光「増援はない様だね、取り敢えず…」

シモン「…」

ヴィラル「聞かせてもらうぞ、シモン。ニア姫の事を」

シモン「俺にも…よくわからない…。だが、ニアは…」

ニア「あなた達に通告します」

二、ニアさん…!??

キタン「お、おい…!あれって…!??」

ヨーコ「ニアなの…!??」

シモン「ニア…」

ニア「楽園への逃亡者よ…。我々、反螺旋族アンチスパイラルはアル・ワースと呼ばれる閉鎖宇宙への侵入ルートを確保しました。我々は、螺旋力危険レベルが規定値を突破した、この世界の住人に対し…。殲滅を決定します」

トオル「殲滅って…!」

イングリッド「皆殺しにしようの!」

シモン「ドアクダーに操られているのか、ニア?!?だから、そんな訳のわからない事を言うのか?!?」

ニア「違います。私の覚醒の契機は彼が関与してきますが、私は私の使命を果たしているだけです。私はアンチスパイラルのメッセンジャー…。螺旋遺伝子の中に潜伏し、機が来れば目覚める仮想生命…。ドアクダーには感謝します。これで私は使命を果たす事が出来ます」

シモン「頼む、ニア!頼むから、俺の通じる言葉で言ってくれ!お前は、そんな言葉で話さなかっただろ?もつと取り留めがなくて、意味わかんなくて…。でも、もつと温かくて気持ちよくて…。うまく言えないが、そんなんじゃない!お前は、そんな奴じゃない!お前は、そんな奴じゃない!」

ニア「これが本当の私です」

シモン「そんなバカな……！」

ニア「反螺旋因子を遺伝子に隠した人間が、螺旋王ロージェノムの娘に生まれてきたのも皮肉な宿縁です。しかし、一度発動してアンチスパイラルとなった私が再び人間に戻る事はない……」

それを言い残し、ニアさんは消えてしまった……。

シモン「ニアアーツ!!？」

イオリ「消えた……!!？」

アマリ「ホープス！ニアさんの行方を追って！」

ホープス「残念ながら、不可能です。彼女は我々とは違う理の存在となったのです」

エレクトラ「船長……。マジンガーZEROが出現してから、宇宙のひずみが拡大して
います」

ネモ船長「そこから、あのムガンが来たと見るべきだろう」

アムロ「彼女の言っていた侵入ルートとはそのひずみを指すのか……！」

カミーユ「そして、このアル・ワースの人間を殲滅すると言う事は……」

バナージ「そのひずみから何かがやってくる……！」

シモン「だったら、そこへ行く！」

ヨーコ「シモン……！」

キタン「お前一人に行かせやしねえ！」

アキト「これはアル・ワース全ての問題だ。だから、エクスクロス全員で行く」

ルルーシユ「扇…。話は落ち着いてからでいいか？」

扇「言っついていられる状況ではないようだから…。！」

ルルーシユ「すまない。各機は速やかに帰還しろ。我々はアンチスパイラルなる者を

迎撃するために宇宙へ上がる！」

シモン「待つてろよ、ニア…。お前が何者だろうと知った事か…。！俺は…。必ずお前を救い出すからな！」

ーロシウ・アダイだ。

ロージエノム「…まさか、このような形で楽園が終わりを迎えるとはな…」

ロシウ「楽園…？」

ロージエノム「忘れる。過ぎ去りし日を懐かしんだだけだ」

ロシウ「既に事態は抜き差しならない所にきている。そのような煙を巻くような物言いはやめてもらおう。今日こそ、答えてもらうぞ。アンチスパイラルの正体…。そして、奴等がシモンさんを狙う理由を」

ロージエノム「…」

ロシウ「お前達の居城であったテツペリンに残されていた資料を調べ、僕は人類の根源的な敵の存在を知った…。杞憂に終わるのなら、それでいい…。だが僕は、いつかその敵との戦いの日が来る事を感じ、それに備えようとした」

ロージエノム「お前のような男を指揮者に迎えた人類は幸運だったな」

ロシウ「勘違いするな。僕達の指導者は、シモンさんだ。あの人の戦う姿が僕に未知の敵に備える決意をくれたんだ」

ロージエノム「…よかろう。いつまでも私も傍観者のままではいられないようだからな。アンチスパイラル…。その存在を語る前にまずは螺旋力について語ろう」

ロシウ「…」

ロージエノム「螺旋力とは進化する力…。螺旋遺伝子を持つ生命、螺旋構造を持つ銀河も全て上昇する螺旋エネルギーにより無限増大する。それが、この宇宙の理だ。だが、その力を恐れる者達も現れた。それが反螺旋族、アンチスパイラルだ。我が肉体、ロージエノムもかつては銀河を守るため、アンチスパイラルと戦う螺旋の戦士だった」

ロシウ「螺旋の戦士…」

ロージエノム「螺旋王ロージエノムの持っていた戦力も元はアンチスパイラルと戦うための兵器…。そしてそれは、このアル・ワースの兵器の原型となった…」

ロシウ「まさか、創界山の魔神とガンメンが似ているのは…?!?」

ロージエノム「そうだ。それは、このアル・ワースが誕生した時の戦いを契機とする。ロージエノムも楽園のために光の龍と共に暗黒の龍と戦った…。そして、螺旋の男の乗るガンメンは我々の最強兵器の一つだ」

ロシウ「シモンさんのラガンが…」

ロージエノム「あれは合体したメカを支配できる螺旋力発動のコアマシンだ。もう使う者はいないと思い、地中に封印していたものを人間が見つけるとはな…。因果なものだ」

ロシウ「しかし、何故だ?!? お前が螺旋の戦士…人間ならば、何故、同じ人間を弾圧した?!? 何故、獣人を使い、人間を地下に押し込めた?!?」

ロージエノム「ロージエノムは恐れたのだ。いつか、螺旋力が高まった者が、このアル・ワースを突破する事を。それはつまり、奴等を…アンチスパイラルを呼び込む事になるからな。確かにアル・ワースにほころびを作ったのはドアクダーとオリユンポスカも知れない…。だが、螺旋の男のような存在がロージエノムを打ち破った以上、この日が来るのは時間の問題だったのだろう」

ロシウ「シモンさんの…人間の力がアンチスパイラルを呼んだと言うのか…?!?」

ロージエノム「その通りだ」

ロシウ「何故はつきり、そう言わなかつた！そうすれば、もっとやり方があったのに！」

ロージエノム「無駄だ。螺旋の本能に突き動かされた愚かな生命は闇雲に天を目指す。言動や理性では、その衝動は抑えきれない。それが出来るのは恐怖だけだ。それでもお前達は反抗した」

ロシウ「…」

ロージエノム「だが、全ては無駄だった…。闇の力を持つ者達の手によってアル・ワースは開かれた…。螺旋遺伝子の中に潜伏し、アンチスパイラルに螺旋族の動向を伝える役目を持ったメツセンジャー…。閉じた世界、アル・ワースの中でそのシステムは目覚める事はないはずだった。だが、ドアクダーの手によりメツセンジャーは目覚め、それによって生じたわずかな宇宙のひずみを闇の魔神が強引に広げた」

ロシウ「いったい何のためにそんな事を…!?」

ロージエノム「このアル・ワースを無にして、創り変える気になつたのだろう。今となつては、どうでもいい事だが。しかし、メツセンジャーがロージエノムの娘とは皮肉なものだな…」

ロシウ「この後、何が起きる？」

ロージエノム「圧倒的な物量を以て、アンチスパイラルは、この宇宙を破壊するため

にやってくる。それを止める術はない」

ロシウ「…」

キノンが焦った表情で走って来た。

キノン「リーロン長官から報告が入りました！宇宙のひずみが、一気に加速したとの事です！」

ロシウ「シモンさんとエクスクロスは？」

キノン「宇宙に上がりました。恐らく、アンチスパイラルを迎え撃つためだと思われるます」

ロージエノム「無駄な事を…」

ロシウ「それを決めるのはお前ではない。キノン！関係各所に連絡を！これより最終計画を発動する！」

キノン「では…！」

ロシウ「僕達は…座して死を待つつもりはない…！アークグレンを起動する！僕達の希望を彼等に託すぞ！」

シモンさん…！待っていてください…！

第61話 天を貫く螺旋と無垢なる翼

第61話 天を貫く螺旋と無垢なる翼

―新垣 零だ。

俺達はひずみから現れるアンチスパイラルの軍団に対抗するために宇宙へ出た。

ワタル「久々に見たね、アル・ワースの星」

ヒミコ「何度見てもキレイなのだ！」

クラマ「はしゃいでる場合じゃないぜ！周りを見てみる！」

あれが例のひずみか……！

シン「宇宙が……歪んでいる！」

ルナマリア「この前に来た時とまったく違う事になってるわ！」

ハイネ「アンチスパイラルとかいう奴が何かやったからか……？」

キラ「恐らく、そうじゃない……」

アスラン「キラの言う通りだ。これまでの状況から察するに宇宙がこんな状態になっ

たからアンチスパイラルがやって来られたんだと思う」

ステラ「別の宇宙からやってくる敵：アンチスパイラル…」

エレクトラ「空間の歪み：加速度的に増大していきます…！」

ネモ船長「来るか…！」

アンチスパイラルの軍勢が来たか…：！

ジェフリー「何という数だ…！」

號「だが、アル・ワースの人間を殲滅するためだとしたら、この程度では済まないだろう」

スメラギ「機動部隊は出撃して！ムガン部隊を迎撃するわよ！」

一夏「あ、ISでも大丈夫なのかよ!?？」

アンジュ「それにパラメイルの気密もどうなってるのよ!?？」

ジャン「メカニック全員でコックピット周りにフィールドを張れるように改造しました！これで空気漏れはありません！だから：お願いします！」

アンジュ「任せて、ジャン。あんな奴等の好きにさせるつもりはないから」

東「ISの方も東さんがちよこつと弄ったから大丈夫だよ！後、いっくん、ちーちゃん、箒ちゃんと：ついでに他の奴等のISも出力を上げておいたよ！」

セシリア「つ、ついで：ですか…！」

鈴「してもらえないよりかはマシでしょ！」

ゼロ「レイ「大怪獣」、グランデ！お前等のゴモラトリトラ、レッドキングにもバリアを張った！これで宇宙でも戦えるぞ！」

レイ「大怪獣」「感謝するぞ、ゼロ！」

トビア「ジョーイは大丈夫なのか？」

ジョーイ「僕もバリアを張っているから大丈夫だよ！」

アスナ「これで心配はないということね！」

俺達は出撃した…。

ワタル「魔神は宇宙でも戦えるんだね」

龍神丸「全ての魔神はあのアンチスパイラルと戦う宿命にある…」

ワタル「そうなの!?!？」

アマリ「どういう事なんですか、龍神丸さん!?!？」

龍神丸「恐らくはアル・ワース創世に関係しているのだと思う…」

ワタル「恐らくって…龍神丸も、よくわかっていないの?？」

龍神丸「今の私は、ある意味では不完全な存在なのだ。故に受け継がれたはずの記憶についてもよく思い出せないものがある」

ワタル「龍神丸…」

ホープス「話は後です。まずはアンチスパイラルを撃退しなくては全てが終わりです」

甲児「やるぜ！人間殲滅なんて絶対に認めない！」

マサキ「数を出しや俺達が黙るなんて思うんじゃないぞ！」

メル「そちらが物量で押ししてくるといふのなら片っ端から叩き落としま… うっ… !!

？」

アスナ「メル、どうかしたの!?？」

メル「な、何でもありません！（何なの、今の心臓を鷲掴みにされた様な痛みは… !!

？）

零「メル…?？」

どうしたんだ…あいつ…?？」

ネモ船長「この戦いの指揮は私が執る！」

ルルーシュ「ネモ船長…」

ネモ船長「アトランティスの古い記録にもあのアンチスパイラルについての記述が残されている…。どうやら、我が祖先も奴等と戦った事があるらしい」

アマリ「古代アトランティス人もアンチスパイラルと戦っていたなんて…」

レナ「ユイ、油断したらダメだよ！」

ユイ「レガリアも関係しているんだよね？」

レナ「よくわからないけどね……！」

弘樹「零、アスナ！ゼフィルスネクサスはどうか!?？」

アスナ「やっぱり、何処か怯えがあるようなの！」

カノン「戦えるのですか!?？」

零「それに対しては心配ない！」

ゼフィルスネクサス……。お前がどんな理由でアンチスパイラルを恐怖するかはわからねえ……。だが、アル・ワースを救う為だ、我慢してくれ……！

キタン「よくわからねえが、あいつ等がとんでもねえ敵だつてのは確かなようだな！」

ネモ船長「各機攻撃開始！アル・ワースを守る為にも一機たりとも奴等を通すな！」

ヴィラル「やれるな、シモン！」

シモン「つまらん事を聞くな、ヴィラル！俺を誰だと思つてやがる！」

ヴィラル「フン……ニア姫の事で落ち込んでいるかと思つたが、それを聞ければ心配ないな」

シモン「こいつ等をぶつ倒せば、必ずニアも出て来る……！だったら、全てをぶち抜いてやるぜ！この俺のドリルでな！」

九郎「アル……。気をつけろ」

アル「どうしたのだ、九郎!?？」

九郎「今回は何か嫌な予感がする…！」

アル「だが、妾達は立ち止まっていられる状態ではないのだ！」

九郎「…ああ、そうだな！行くぜ!!？」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「ゼフィルスネクサスはオニキスで代々と受け継がれてきた機体…。まさか、前のパイロットがアンチスパイラルの軍勢と戦った事があるから、お前は怯えているのか、ゼフィルスネクサス…？」

〈戦闘会話 メルVS初戦闘〉

メル「この痛み…私に何が起きているの…？」

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

レナ「古きレガリアがアンチスパイラルと戦ったのだとしたら、そこには必ずルクス

エクスマキナが関係して来る……。でも、ヨハンもない今、それはないのかもしれないけど……」

ユイ「レナ、来るよ！」

レナ「え、ええ！わかつているわ、ユイ！」

アンチスパイラルの軍勢を倒している俺達……。

この気配は……！奴まで来たのか……！

すると、アルガイヤ、ナイトメア・ゼフィールスが現れた。

リチャード「オニキスか！」

サヤ「今はあなた達の相手をしている暇はないのですよ！」

ハデス「そう悲しい事を言わずに俺達も混ぜてもらおう」

マリア「ハデス！アンチスパイラルを放置すれば、アル・ワース……私達の故郷が滅びるのよ！」

ハデス「ならば、それはそれでいい。滅びによってアンチスパイラルを受け入れ、世界を一つとする」

アーニー「沢山の人が死ぬんだぞ！」

ハデス「世界を一つにする為だ：致し方ない」

弘樹「な、何て野郎だ：！」

アスナ「優香は連れてきていないのね」

ラゴウ「彼女とギルガ達は待機中だ。零！今度こそお前を倒す！」

零「正直の所を言うと、後にして欲しいんだけどな…。だが、俺もお前達に聞きたい事がある。ゼフィルスネクサスが怯えている理由だ」

ハデス「ゼフィルスは過去代々、オニキスのパイロットが乗っていたと言ったな？遙か昔、俺達の先祖もアンチスパイラルの軍勢と戦ったのだ。ゼフィルスに乗りな。しかし、圧倒的な戦力を前に撤退せざる得なかったようだが…」

零「それが理由か：！」

ハデス「故にお前達ではアンチスパイラルを倒す事など出来ない」

青葉「勝手に決めてんじやねえ！」

ディオ「俺達は必ず、アンチスパイラルを止める！」

ハデス「フツ、何か勘違いをしているようだが、理の外から来るのはアンチスパイラルやキルルだけではない」

ケロロ「何ですと？！」

ハデス「来たぞ…。最強最悪の大導師、背徳の獣がな」

ひずみから巨大な翼や髑髏を模した頭部、カッターナイフのように鋭い指先をした口ボットが現れた。

アーニー「なに？あ、あれは……！」

ジョーイ「も、もしかして……！」

アル「忘れるはずがない……！あれは、リベル・レギス……！」

九郎「マスター……テリオン……！」

マスターテリオン「久しぶりだな、大十字 九郎、アル・アジフ……。そして、白き巨人を操る者と宇宙海賊」

ゴーカイレッド「何でてめえが……！」

マスターテリオン「余も理の外から再び、舞い戻ってきた……。それだけだ」

ジユドー「あいつはなんなんだよ……！」

ゴーカイブルー「俺達の世界で暗躍を企てていた大導師……マスターテリオンだ」

ゴーカイピンク「あの方までこのアル・ワースに来てしまうとは……！」

ウエスト「性格は残忍なのである！」

エルザ「おまけにとんでもない強さロボ！」

瑠璃「この異世界に来た今、あなたは何をするつもりなのですか……？」

マスターテリオン「余のすべき事はあの頃となんの変わりもない。大十字 九郎との

戦い……。それが余の望みだ」

エンネア「変わらないね、マスターテリオン……！」

マスターテリオン「お前もいたか、暴君ネロ」

エンネア「違うね、今の私はエンネアだよ！」

マスターテリオン「どちらでも構わん。余は大十字 九郎と戦えればそれでいい。お

前も構わぬな、エセルドレーダ？」

エセルドレーダ「マスターの逢瀬のままに」

マスターテリオン「フフフ……では、始めるとしよう、大十字 九郎」

九郎「勝手に話を進めてんじやねえよ！今、お前に構っている時間はねえんだよ！」

マスターテリオン「貴公の理屈が余に通じると思つか？」

アル「九郎……」

九郎「やるしかねえか……！みんな、マスターテリオンは俺とアルに任せてくれ！」

一夏「アンチスパイラルとオニキスは俺達に任せてください！」

エンネア「その代わり、必ず勝ってね、九郎！」

九郎「当たり前だ！」

ラゴウ「（一人の者に執着するその目……。俺と通じるものがあるな）」

ハデス「この乱戦……お前達是对処できるか？」

零「どんな敵が来ようとお前達の思い通りにはさせてたまるかよ！」
戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

ラゴウ「他の奴など関係ない。俺はお前を倒す！」

零「アル・ワースが滅んだとしてもか！」

ラゴウ「アル・ワースがどうなろうと俺の知った事ではない！」

アスナ「な、なんて奴なの…!?？」

零「この…馬鹿野郎！」

ゼフィルスネクサスの攻撃でナイトメア・ゼフィルスにダメージを与えた。

ラゴウ「ぐっ！し、しまった…！」

零「これで終わりだ、ラゴウ！」

ラゴウ「まだだ…！俺はまだ負けてはいない！」

そう言い残し、ナイトメア・ゼフィルスは撤退した…。

アスナ「しつこい所はギルガと一緒ね…！」

ラグウ……。お前は本当に他人を見捨てるような人間なのか……？俺はそう思えないんだ……。

〈戦闘会話 零VSハデス〉

ハデス「せめてもの情けだ。俺の手でお前を消してやる、新垣 零」

零「悪いが消されるわけにはいかねえんだよ！そして、アンチスパイラルも通さねえ！絶対になだ！」

アスナ「そして、あなたも止める！」

ハデス「ならば、苦しんで死ね！」

〈戦闘会話 弘樹VSハデス〉

ハデス「カノン・サファイア……。あのまま洗脳に身を委ねていけば、苦しい思いをしなくとも良かったのにな」

カノン「誰かに与えられた居場所など、幸せではありません！居場所と幸せは……：自分の手で掴みます！弘樹さん共に！」

弘樹「よく言っただけ、カノン！ハデス、俺達がお前をぶっ飛ばしてやるよ！」

ゼフィルスネクサスとヴァリアスデストロイの攻撃でアルガイヤはダメージを負った。

「ハデス……いいだろう。俺が直接手を下さずともお前達に待っているのは絶望だと知れ」

「そう言い残し、アルガイヤは撤退した……」

弘樹「アンチスパイラルには敵わないって事なのか……？」

零「そんな事ねえ……！絶対に勝ってみせる……！」

「これだけ倒してもまだ敵の数があるのか……！」

ビーチャ「くそっ！まだこんだけの数があるのかよ！」

プル「もうやだ！倒しても倒しても敵がいる！」

オルガ「まずいな……！こっちの体力にも限界がある……！」

ビスケット「いくらエクスクロスの規模が大きいとは言え、これでは……！」

シノ「だが、やるしかねえだろ！アル・ワースを守る為に！」

マーベル「気をつけて、何か来るわ！」

あれは……！パープルの軍勢とテイベリウスとかいう野郎のロボットか……！

ジョー「空中戦艦ブランカ！パープルが来たのか！」

パープル「その通りだよ、ジョー。旋風寺 舞人に尻尾を振るとはお前も堕ちたものだな」

ジョー「何とでも言え。お前の言葉など、聞くつもりはないがな」

マドカ「何をしに来た、パープル。こちらはお前に構っている時間はない」

パープル「随分と冷たいじゃないか、マドカ。あれだけ恨んでいた織斑 一夏に寄り添っている役立たずが」

マドカ「だ、黙れ……！」

ジョー「乗せられるな、マドカ。あいつの思う壺だ」

パープル「ふん、まあいい……。アル・ワースを守るというのか……。ご苦労な事だ」

舞人「何っ!?？」

パープル「異世界の人間が何人死のうと知った事じゃないってのに正義の味方というのは本当にお節介だよ！」

三日月「うるさいな……。めざわりだから、消えてよ」

テイベリウス「そうはいかないのよね」

マスターテリオン「テイベリウスか……」

ティベリウス「あら、大導師ちゃんじゃない！久しぶりね！」

エセルドレーダ「その様な小物と手を組むとは…随分と腕が堕ちましたね」

ティベリウス「悪いけど、もうあんた達の部下じゃないのよ！あんたもエクスクロス共々倒してやるわ！」

九郎「くそっ！この忙しい時に…！」

グレートマイトガイン「パープル！お前も邪魔をするというのか！」

パープル「当然だ。俺はパープル…！お前達と世界を地獄へと誘う者だ！」

真上「フツ、地獄である俺達の前でその言葉を使うとはな」

由木「あなた達は何を考えているの！ここで私達が戦わなければ、アル・ワースの間が脅威にさらされるのよ！」

パープル「ドアクダーは、それが望みなんだよ！だから、あのメッセンジャーを覚醒させた！その協力者である俺達も、当然、その手伝いをするさ！」

海道「仕掛けて来るってか…！」

アキト「パープル！お前は悪党以下の存在…外道だ」

パープル「言ってくれるな、テンカワ・アキト…。だが、お前の相手をするのはこいつだ」

すると、一機の機体が現れたが…あの機体って…！

簪「あ、あの機体って……！」

ハリー「夜天光です！」

アキト「北辰か……！」

北辰「随分と早く出会えたな、テンカワ・アキト」

シャルロット「あ、あいつって、アキトさんに負けたんじや……?!？」

北辰「言ったはずだ。我は何度でも蘇ると……」

アキト「俺も言ったはずだ。貴様が蘇る限り、俺が消すと……！」

北辰「フン、ドアクダーなるものには感謝しなければならんな」

万丈「ドアクダーが彼を蘇らせたとしてもいうのか……?!？」

ユリカ「やれるの、アキト……？」

アキト「心配ないよ、ユリカ……。俺は戦える……！」

ネモ船長「奴等の戯言に付き合う必要はない！各機は攻撃を集中させろ！」

ティベリウス「てな訳で大十字 九郎、それから大導師ちゃん！纏めて消してあげるわ！」

マスターテリオン「フン、下郎が……。身の程を教えてやる」

九郎「おい、マスターテリオン！これでもやるつてのによ……?!？」

マスターテリオン「この様な者達など知らん。余は余の為すべき事を果たすだけだ」

九郎「この…分からず屋が…！」

北辰「行くぞ、テンカワ・アキト」

アキト「来い、何度でも俺が闇へと落としてやる…！」

舞人「覚悟しろ、パープル！これで終わらせる！」

俺達はブランカを攻撃した。

パープル「無駄な事を！」

な、何…!!?」

ブラックマイトガイン「バカな！ダメージが回復していく！」

パープル「恐れおのけ！これが魔のオーラの力だ！」

ガードダイバー「魔のオーラだと!!?」

バトルボンバー「はったりが決まっている、そんなもの！」

エセルドレーダ「この力は…！」

マスターテリオン「お前も感じるか、エセルドレーダ。この力…些か危険だな」

パープル「流星は大導師！この力に気がつくとはな！エクスクロス！認めたくないだろうが、これが現実だ！」

ヒナ「彼等には攻撃が通用しないの…!!?」

青葉「だとしたら、どうやって倒すんだ!!?」

パープル「フッフ…お前達の敵は俺達だけじゃないのをわすれちゃいけないかな？」
エレクトラ「重力場に異常！宇宙のひずみから、何かが現れます！」

ネモ船長「あれは…！」

コーネリア「何だ、あれは?!?!」

星刻「巨大な手と足だと?!?!」

藤堂「あれもムガンの仲間らしいな！」

玉城「くそっ！数に苦戦しているところにも面倒なのが来やがった！」

扇「どうする、ルルーシユ?!?!」

ルルーシユ「パープル達は後回しだ！まずは奴等を叩く！」

パープル「賢明な判断だ。では俺達は、そこを後ろから攻撃させてもらう！」

舞人「パープル！」

パープル「ハハハ、旋風寺 舞人！自らの無力さに絶望しろ！ここは天国の裏側だ！

全て黒く塗り潰される！」

メル「何が天国の裏側ですか…?!?!つ…!（ま、また痛みが…!何なの、一体…?!?!）」

マスターテリオン「…大十字 九郎」

九郎「何だよ?!?!」

マスターテリオン「致仕方ないが…ここは休戦と行こうではないか」

アル「どういう風の吹き回しだ！」

マスター「テリオン」「邪魔が多い。それだけだ」

九郎「…わかったよ」

アル「九郎!?」

九郎「この状況で手を貸すと言ってんだ…。敵に回すよりかはいい！」

マスター「テリオン」「利口な判断だ…。お前も良いな、エセルドレーダ？」

エセルドレーダ「イエス、マスター」

やるしかねえ…戦闘開始だ！

敵を倒している時だった…。

エレクトラ「重力場異常、さらに増大！これまで以上の何かが来ます！」

ネモ船長「敵の本隊か！」

何だ、あの馬鹿でかいのは…!??

ヴィラル「何だ、あれは!?」

リョーコ「人型だと…!?」

サブロウタ「これまでのムガンとは違う…！」

シモン「あれが奴等の大将か！」

ニア「まだ諦めていなかったのですね」

シモン「ニア！そのデカブツに乗っているのか！？？」

ニア「このカテドラル・ラゼンガンはあなた達に絶望を与えるもの……」

キタン「ラゼンガンだと！？？」

ヨーコ「ロージエノムの乗っていたガンメンと同じ名前……」

パープル「こいつはいい！イカしたメインの登場でステージの興奮は最高潮だ！」

ジョー「お前は黙っている、パープル！」

ニア「理の外にある者……。この様な者まで集うとは……。やはり、この宇宙は消滅させ

なくてはなりません」

シモン「そんな権利が誰にある！？？」

ニア「権利の問題ではありません。これは全ての宇宙のためなのです」

シモン「もういい、ニア！全てはお前を取り戻してからだ！」

ヴィラル「待て、シモン！アル・ワースから何か来るぞ！」

シモン「あれは！」

アル・ワースから戦艦が来た……。！？？」

シモン「巨大戦艦！」

ダリー「アークグレン！来てくれたのね！」

ギミー「やったぜ、ロシウさん！間に合ったのか！」

シモン「あの戦艦……！ロシウが用意したものなのか……？」

ダヤツカ「その通りだ、シモン！」

シモン「ダヤツカなのか……？」

リーロン「乗っているのはダヤツカだけじゃないわよ！」

ブータ「ブーツ！」

シモン「リーロン！ブータ！お前達もいるんだな！」

ロージェノム「そして、私もいる」

シモン「お前は！」

ヴィラル「ロージェノム様！」

リーロン「問題ないわ。彼の細胞から再生した整体コンピュータよ。彼が丸ごと、蘇ったわけじゃないわ」

ロージェノム「そこにいるのはヴィラルか。まさか、こんな形で再会するとは思わなかったが、これもまた一興だ」

ヴィラル「ロージェノム様……。どの様な形でも、こうして共に戦える事を嬉しく思います」

ニア「ロージェノム…螺旋の戦士…。その存在は許されません」
戦艦が攻撃された!!?」

ダヤツカ「いきなり集中砲火かよ！」

リーロン「もちこたえて！このアークグレンは私達の希望なんだから！」

北辰「笑わせる。姿形は立派であるが、戦力としては大した事はないようだ」

テイベリウス「それなら、あんた達の切り札に私達が引導を渡してあげるわ！」

一夏「やめろ、お前等！」

パープル「グツバイ、希望！ハロー、絶望！ジ・エンドだ！」

虎王「やめろ！」

邪虎丸が現れただと…!!?」

ワタル「邪虎丸！虎王なの!!?」

パープル「これはこれは、魔界王子…。先程の言葉は、俺の聞き間違いですか？」

虎王「聞こえなかったのなら、もう一度、言つてやる！やめろ、パープル！お前達は

アル・ワースを滅ぼすつもりか!!?」

パープル「これは異なる事を。アンチスパイラルを呼び寄せたのは、あなたのお父上な

のですよ」

虎王「そ、それは…」

サリー「虎王君！自分の気持ちを言葉にして！」

舞人「サリーちゃん！邪虎丸にはサリーちゃんも乗っているのか！」

サリー「虎王君に頼んで連れてきてもらったんです。一目でいいから、舞人さんに会いたくて」

パープル「大事な生け贄を連れ出して、お父上のやろうとしてる事の邪魔をすることはとんだ親不孝息子ですな」

虎王「黙れ、エグゼブの腰巾着！」

ジョー「エグゼブ：！！？それがパープルの上位にいる人間の名か！」

パープル「プリンス・虎王……。おふぎけも、それぐらいしておかないとお仕置きでは済まないぞ」

虎王「俺様はふざけてなんていない！父上が何を考えているか知らないが、人間がいなくなったアル・ワースなんて意味がないじゃないか！そんなのは俺様は絶対に認めないからな！」

ワタル「虎王！」

虎王「勘違いするなよ、ワタル！これはお前を助けるためにやつてるんじゃないからな！これは俺様が自分で決めた事だ！俺様のアル・ワースを荒らそうとする奴は許さない！」

パール「…ここは戦場…。何が起こってもおかしくない…」
マドカ「まさか…！やめろ、パール！」

パール「もう遅い！グツバイ、魔界王子！のこの戦場に出て来たお前は流れ弾に当たって、この世とおさらばだ！」

虎王「！」

ワタル「逃げろ、虎王！」

パール「だから、遅いと言っている！」

舞人「サリーちゃん！」

サリー「ダメええええつ！！？」

な、何だ今のは…！！？

パール「何っ！！？」

ゼロ「あいつ等を守っていた力が消えていくぞ！」

零「よくわからねえけど、魔のオーラが消えた今なら…！」

弘樹「奴等を倒す事が出来るって事だな！」

パール「何だ…！！？何が起こったんだ！！？」

ワタル「虎王！今の内に逃げろ！」

虎王「ワタル…」

ワタル「アル・ワースは僕達を守る！だから…！」

舞人「頼む…！サリーちゃんはお前が守ってくれ！」

虎王「…わかった」

サリー「聞いてください、皆さん！私の他に囚われている人達も無事です！みんな、信じています！エクスクロスが助けに来てくれる事を！」

シヨウ「シーラ様が…！」

刹那「マリナ・イスマイル…！」

ノブナガ「イチは無事なのか…！」

ハリケーン「アイラ様の無事が聞けただけでも良かった！」

ヒイロ「…リリーナに伝える。必ず助ける、と」

三日月「アトラと俺の息子にも伝えて…。家族で必ず会おうって」

サリー「はい！」

虎王「負けるなよ、ワタル！俺様とお前の決着のためにも！」

ワタル「約束する！必ずまた会おう、虎王！」

虎王「おう！またな、ワタル！」

邪虎丸は撤退した…。

パール「あのチンピラ王子め！よくも邪魔をしてくれたな！」

ジョー「パープル！インチキが効かなくなった以上、お前に勝ち目はないぞ！」

パープル「黙れ！魔のオーラは完全に消えたわけではない！旋風寺 舞人…そして、ジョー！次の機会には、必ずお前達を消してやる！」

テイペリウス「ちよつと、勝手に逃げてんじやないわよ！」

北辰「汝は逃げぬのか？」

テイペリウス「いいわ。ここで奴等を倒せば、私の株もグンと上がるもの！」

北辰「欲深い者め！」

舞人「パープルは逃げたか…！」

ジョー「エグゼブ…。どうやら、その男こそが俺の追い求める本当の敵らしい…」

ニア「想いが力となる…。それこそが宇宙を滅ぼす…」

シモン「ニア！まだ、そんな事を言ってるのか！」

巨大な手が一機、グレンラガンに迫った…!!?

ニア「シモン…。螺旋力は…あなたの存在は許されない」

シモン「ニア!!？」

ダヤツカ「シモン！アークグレンを使い！」

シモン「巨大戦艦を!!？」

リーロン「あなたなら、このアークグレンを使えるはず！そのために私達は、ここに

来たのよ！」

シモン「わかったぜ！逆転の秘策が！」

ヴィラル「シモン！」

シモン「ヴィラル！お前の生命、俺が預かる！見せてやるぜ、ニア！俺の…人間の力を！！？」

お、おい…！見せるってまさか…！

シモン「因果も宿命も突破して！」

ヴィラル「生命の叫びが銀河に響く！」

シモン「怒濤合体！アークグレンラガン！やるぜっ！！？」

グレンラガンは攻撃を仕掛けた…。

シモン「ニアを取り戻す邪魔をするなら、容赦はしねえ！やるぞ、ヴィラル！」

ヴィラル「上等だ！」

グレンラガンの下半身がドリルになり、巨大な手にぶつかった。

リーロン「シモン、OKよ！いっちゃって！」

シモン「うおおおおおっ！！？」

そして、グレンラガンはアークグレンと合体した。

アークグレンラガンとなり、拳を構え、巨大な手に接近し、左手で殴り、右手に力を

込めた。

シモン「くらえ！時空烈断！」

ヴィラル「バーストスピニングッ！」

シモン & amp ; ヴィラル「パアアアアンチッ!!?」

そして、最後に強力な一撃を叩き込み、巨大な腕は粉々に爆発した…。

キタン「よっしゃ！さすがはシモンだ！」

ダリー「アークグレンと…合体した！」

ノリコ「もう何でもありじゃない！」

リーロン「いいじゃない！あれがラガンの…ううん、シモンの力なんだから！」

ギミー「シモンの力…」

ヨーコ「そう…土壇場で信じられない力を出すのが、シモンよ」

アマタ「もうE.V.O.Lの力をとやかく言えませぬ、シモンさん」

竜馬「どっこいどっこいだろ」

甲児「だから、ゲッターも相当ですって…」

さやか「甲児君、マジンガーも相当よ…」

シモン「見たか、ニア！アークグレンラガンの力を！」

ニア「アークグレンラガン…」

ロージエノム「グレンラガンから送られた螺旋エネルギーを使い、本艦は次元潜航が可能となった」

ダヤツカ「つまり？」

リーロン「この艦は亜空間に待機し、グレンラガンの呼び出しに応じて通常空間に復帰する戦術でいく…って事ね」

ロージエノム「その通りだ」

シモン「流石だな、リーロン！」

リーロン「そういうのも嫌いじゃないわ！でも、ただの褒め言葉じゃイヤーン！あなたの熱いハートが欲しいの！」

しんのすけ「お、おとおおっ…!?？」

ひろし「これまた強力なのが来たな…！」

みさえ「私達に関わる人って、こういう人、多いわよね…」

ひまわり「たいや…」

ヴィラル「…殺していいか？」

リーロン「それはダメ！ってなわけで、私達は亜空間に退却！」

ダヤツカ「頼むぞ、シモン、エクスクロス！必ずアル・ワースを守ってくれ！」

アークグレンは亜空間に消えた…。

ニア「まだ諦めないのですね」

シモン「お前も知つての通り、それが俺だ！」

楯無「BD連合の機体にもダメージが通るようになったわよ！」

マスターテリオン「お前達は飽きた……。余が終わらせる」

テイベリウス「キーツ！勝った気でいるんじゃないわよ！」

北辰「滅する……！」

アキト「シモン……！周りの敵は俺達に任せて、お前はカテドラル・ラゼンガンを狙え

……！」

シモン「そうさせてもらう！」

ニア「シモン……」

シモン「待つてろよ、ニア！今、そのデカブツをぶち抜いて、お前の所に行くからな

！」

逆襲開始だ!!？

〈戦闘会話　アキトVS北辰〉

アキト「お前は随分と迷惑な奴となったな」

北辰「貴様の事情など知った事ではない」

アキト「悪いがお前に構っている時間はない。消えろ……！」

ブラックサレナの攻撃で夜天光はダメージを負った。

北辰「不覚……！」

アキト「トドメだ……！」

北辰「否、ただでは死なん。こうなれば、電子の妖精とミスマル・ユリカをも道連れに……！」

なっ!? ああの野郎、ナデシココ目掛けて突撃しやがった……!??

アキト「……ルリちゃん！ユリカ！」

ユリカ「ルリちゃん、来たよ！」

ルリ「ハリー君、回避を……！」

ハリー「ま、間に合いません！」

北辰「我と共に……散れ……！」

メル「させ……ません……！」

すると、メサイアが夜天光とナデシココの前に立ち、夜天光の攻撃を受けた……。

メル「ぐっ……！つはあああああつ！ハイバスタードモード……!!?」

しかし、ハイバスタードモードを発動させて、夜天光のボディを撃ち抜いた。

北辰「ふ、フフフ…。よもやテンカワ・アキト以外の…ましてや女子に敗れるとはな…。我、一生の…不覚、だ…。」

そう言い残し、夜天光は爆発した…。

メル「はあ…はあ…はあ…！」

零「メル、大丈夫か?!？」

メル「な、何とか…。」

ユリカ「ありがとう、メルちゃん！」

ルリ「おかげで助かりました」

メル「い、いえ！ご無事で何よりです！」

アスナ「まだ戦えるの？」

メル「当然です！」

アキト「(北辰…)。今回のお前の敗因は俺やユリカしか見ていなかった事だ…。俺達の仲間…エクスクロスをな…)」

テイベリウス「あんた達もいい加減、私にやられなさいよ！」

アル「フン、お前の様な奴に妾達が負けるものか！」

九郎「それからいい加減はこっちのセリフだよ！ここで終わりにしてやる！」

〈戦闘会話　　マスターテリオンVSテイベリウス〉

マスターテリオン「余の力の前に消えるがいい」

テイベリウス「大導師だからって、調子に乗るんじゃないわよ！」

エセルドレーダ「調子に乗っているのはあなたです。マスターに敵うはずのないあなたに立たないでください」

マスターテリオン「そういう事だ。この余が直々に異界の地へと送ってやろう」

デモンベインのレムリア・インパクトでベルゼビュートにダメージを与えた。

テイベリウス「キイイイイツ!!? 腹が立つわね！」

エルザ「倒せてないロボ！」

ウエスト「やはり、倒すにはシャイニング・トラペゾヘドロシしかないある！」

箒「ですが、あれは前回、ギリギリのところまで避けられたではないですか！」

マスターテリオン「…避けられない様にすれば良い」

アル「…何？」

エセルドレーダ「マスター…！まさか…！」

マスターテリオン「そのまさかだ…。合わせろ、大十字 九郎」

九郎「！」

マスターテリオン「今の貴公ならば、余と合わせる事など造作もないはずだ」

九郎「…へっ、当たり前だろ！遅れるなよ、マスターテリオン！」

マスターテリオン「余の台詞だ」

アル「何をするつもりだ、九郎！？？」

九郎「俺達のシャイニング・トラペゾヘドロンだけでダメなら…もう一発を撃てばい

い！」

アル「汝は正気か！？そんな事をしてみる！少しでも力が弱い方が異界へと跳ばされるぞ！」

九郎「だから、力を合わせるんだよ！俺を信じてくれ、アル！」

アル「…仕方がない…。だが、消える時は一緒だぞ、九郎」

九郎「そんな事にさせてたまるかよ！行くぞ、マスターテリオン！」

マスターテリオン「待ちわびたぞ！」

デモンベインとリベル・レギスは同時に攻撃を仕掛けた…。

九郎「これで終わりだ、ゾンビ野郎！」

マスターテリオン「今、二つのシャイニング・トラペゾヘドロンが衝突し合う…！」

九郎「違うな、一つに合わさるんだよ！」

デモンベインとリベル・レギスは同時にシャイニング・トラペゾヘドロンを発動させる。

アル「荒ぶる螺旋に刻まれた、神々の原罪の果ての地で…」

エセルドレーダ「血塗れて、磨り減り、朽ち果てた」

マスターテリオン「聖者の路の果ての地で」

九郎「我等は今、聖約を果たす」

エセルドレーダ「深き昏き怨讐を胸に」

アル「その切実なる、命の叫びと胸に…」

マスターテリオン「埋葬の華に誓って」

九郎「祝福の華に誓って」

九郎&amp;マスターテリオン「我は世界を紡ぐ者なり！」

シャイニング・トラペゾヘドロンを発動させ、ベルゼビュートに狙いを定めた。

アル&amp;エセルドレーダ「最終必滅兵器！」

九郎「シャインニング……！」

マスターテリオン「トラペゾヘドロン！」

九郎「いけええええつ!!？」

マスターテリオン「はあああああつ!!？」

一つになった光の刃はベルゼビュートごと空間を斬り裂き、空間の裂け目を作り出した。

九郎&アル「リベル……レギスウウウツ!!？」

マスターテリオン& amp ; エセルドレーダ「デモン……ベイインツ!!？」

テイベリウス「こ、こんなの逃げられない……！嫌アアアアアツ!!？」

巨大な空間の裂け目から逃げられるはずもなく、ベルゼビュートは引き摺り込まれていく……。

テイベリウス「こ、こんな事で……！この、私がアアアアアツ!!？」

空間の裂け目に引き摺り込まれたベルゼビュートは空間を閉じられ、消え去った……。

ジャンナイン「凄いエネルギーだ……！」

カンナム「冗談でもあれは受けたくないね」

ベルリ「デモンベインも……相当に何でもありだと思ってきました……」

アルト「そ、そうだな……」

マスターテリオン「これは前座に過ぎん」

九郎「そうだな、まだまだやれるぜ！」

アークグレンラガンの時空烈断バーストスピニングパンチでカテドラル・ラゼンガンを吹き飛ばした。

アンジユ「やったの!?？」

ミツヒデ「あれだけの巨体だ……戦闘能力を奪いはしたが、爆発まではいかないか！」

あ、あいつ……！アル・ワースに近づいていく……！

ブレラ「あいつ……！アル・ワースに突っ込む気か！」

ルカ「ダメです！このままじゃ止められません！」

シモン「だったら、俺のドリルで……！」

すると、亜空間からアークグレンが現れた。

ロージエノム「待て。あれを止める方法はある」

シモン「本当か、ロージエノム！」

ロージエノム「あれは、かつて我が旗艦だったものだ」

シモン「旗艦？」

ロージェノム「そのコアに螺旋力の源を差し込め。それで制御可能になる」

シモン「要するにグレンラガンで突入して、コアドリルを突っ込めて事だな！」

鉄也「急げ、シモン！」

ウー「こうなれば、貴様が頼りだ！」

メリツサ「お願い、シモン！アル・ワースを救って！」

カロツサ「頼む……！」

シモン「任せろ!!？」

グレンラガンはカテドラル・ラゼンガンに接近した……。

シモン「いくぞおおおおお!!？」

グレンラガンはカテドラル・ラゼンガンの中へと入っていった……。

リーロン「頼むわよ、シモン」

ロージェノム「だが、あの中で奴を待っているのは……」

ーシモンだ。

俺はカテドラル・ラゼンガンの中に入った……。

ニア「……待っていました、シモン」

シモン「ここにいたのか、ニア」

ニア「…」

シモン「そこをどけ、ニア！俺はコアドリルを差し込んで、このデカブツを止める！」

ニア「それは出来ません。私はアンチスパイラルのメッセンジャー…。この宇宙を消滅させるのが、私の使命…」

シモン「御託はいい。どけ」

ニア「だったら、私を砕いてそのドリルを差し込めばいい」

シモン「…」

ニア「出来ないでしょう。それが、螺旋族の限界なのです。私がメッセンジャーとなり、あなたが螺旋の戦士となった事…。全ては運命だったのです」

シモン「…」

ニア「あなた方、螺旋族の生存本能はとてつもなく強い…。だから、一つずつ希望の芽を潰していくのです。希望があるように見えながら、それがダメだとわかった時、あなた方は深く絶望する。恐怖と絶望こそ上昇する螺旋への最大の抑止力なのです」

シモン「…それはどうかな？」

ニア「何が言いたいのです？」

シモン「お前も見たいはずだ。俺達が魔のオーラを打ち破つたのを。俺達は決して絶望

しない！どんな時でも、その絶望を打ち砕いて、前へ進む！」

ニア「ならば、ここでも絶望を…私を砕くのですか？」

シモン「お前は絶望なんかじゃねえ！いつだって俺の希望だ！」

ニア「…！」

シモン「お前がいるから、俺は戦える！お前を救うためなら、どんな敵が来ても俺はぶち抜いて進む！お前だってそうだろう、ニア！希望があるから、俺の前に現れるんだろ！」

ニア「それは違います。私は…あなたに絶望を与えるために…」

シモン「違う！自分でも気付いてないかも知れないが、お前は俺の前に現れた時、助けを求めていたんだ！」

ニア「違う…：私は…」

シモン「ニア！俺はお前を必ず救い出す！どんな障害があろうと、どんな敵が来よう！だから、そこをどいてくれ！俺達と俺達の住む世界の明日のために！」

ニア「私は…：私は…」

シモン「ニアアアアアアアツ！！？」

「新垣 零だ。」

シモンがカテドラル・ラゼンガンに入ってから、少し経ったが…まだなのか…!??

すると、カテドラル・ラゼンガンが止まった。

エイサツプ「カテドラル・ラゼンガンが止まった！」

アマリ「シモンさん、やったんですね…！」

すると、カテドラル・ラゼンガンからグレンラガンとニアさんが出てきた…。

ニア「…」

シモン「ありがとう、ニア」

ニア「でも、運命は変わりません」

シモン「…」

ニア「今回の侵攻が失敗した事でアンチスパイラルは全面戦闘状態に入ります。彼等が本気になれば、いくらあなた達でも敵わない…。アンチスパイラルの本隊は発見した螺旋族を滅ぼすため、この宇宙へとやってくるでしょう」

ヴィラル「まだ戦いは続くのか…」

シモン「もし俺達が勝ったら、お前は元に戻るのか？」

ニア「その可能性は果てし無くゼロに近い…」

シモン「でも、ゼロじゃないんだな」

ニア「…」

シモン「だったら、俺にとつては100%と同じだ」

ニア「迎えに来てくれるのですか…?」

シモン「ああ！俺を誰だと思ってる？」

ニア「シモン…。待っています！」

ニアさんは消えた…。

でも、今…一瞬だけど元のニアさんみたいに笑っていたな…。

シモン「約束するぜ、ニア…」

終わった…。いや、まだ終わってないな…！

マスターテリオン「邪魔者は消えた…。大十字 九郎。さあ、踊ろうではないか」

九郎「…まあ、約束だからな。やってやるよ！みんな！これは俺達にやらせてくれ！」

シモン「おう！必ず勝てよ、九郎！」

九郎「おう！」

デモンベインを残し、俺達はそれぞれの艦へ戻り、デモンベインの戦いを見守る事にした…。

マスターテリオン「参るぞ、エセルドレーダ」

エセルドレーダ「イエス、マスター」

九郎「行くぞ、アル！」

アル「いつでもいいぞ、九郎！」

デモンベインとリベル・レギスは戦い始めた…。

〈戦闘会話 九郎VSマスターテリオン〉

マスターテリオン「輪廻が解放されたとしても余達が相見える事は運命的に決まっていた」

九郎「因縁って奴かもな…。それもここまでにしてやる！」

エセルドレーダ「マスターの望みを果たすのが私の使命…。それを今ここで…！」

アル「妾達も負けるわけにはいかない！見せてやるぞ、妾達の力を！」

九郎「そうだな、アル！これで全て、終わりにしてやるぜ、マスターテリオオオオンツ
!!?」

デモンベインとリベル・レギスは互角の戦いを見せていた。

九郎「姫さん！」

瑠璃「はい！ナアカル・コード、送信！」

九郎「はあああああつ……！レムリアアツ……！」

マスターテリオン「こちらも見せてやろう、エセルドレーダ」

エセルドレーダ「イエス……。ハイパーボリアアツ……！」

九郎「インパクト!!？」

マスターテリオン「ゼロドライブ!!？」

二つの技がぶつかり合う……だが……。

九郎「うぐつ……!!？」

アル「ぐつ……！」

デモンベインが吹き飛ばされた……!!？

マスターテリオン「終焉の時だ」

リベル・レギスがデモンベインに攻撃を仕掛けた。

マスターテリオン「決着だ、大十字 九郎……。深き暗き怨讐を胸に！」

エセルドレーダ「埋葬の華に誓って！」

マスターテリオン「我は世界を紡ぐ者なり！」

あの構えは……シャイニング・トラペゾヘドロ……！

マスターテリオン& a m p ; エセルドレーダ「デモン……ベイイイイン!!？」

九郎「ぐあああああつ!!？」

デモンベインごと空間を切り裂き、デモンベインは空間の裂け目の中に引き摺り込まれ、爆発しながら、空間の裂け目は閉じてしまった…。

瑠璃「だ、大十字さん…？」

エルザ「そ、そんな口ボ…！」

エンネア「う、嘘だよね、九郎…!!？」

ワタル「デ、デモンベインが…！空間の裂け目に…！」

カノン「デモンベインが…九郎さんとアルさんが…負けた…？」

瑠璃「嫌…嫌…大十字さあああん!!？」

マスターテリオン「終焉は呆気ないものだな」

エンネア「九郎…」

ウエスト「大十字 九郎…」

ワタル「そんな…そんな…」

マスターテリオン「受け入れろ、これが現実だ」

ジョーイ「九郎さんは…アルさんは…消えていない！」

舞人「ジョーイ…」

ジョーイ「九郎さんはデモンベインは…どんな時でも這い上がって、負けなかった！」

九郎さん達を見て、僕とヒーローマンも負けなくらいにヒーローになろうと思ったんだ！」

ゴークイレッド「あいつはバカだ……。だが、簡単に負ける様な奴じゃねえ！それは俺達が一番わかっているんだよ！」

マスターテリオン「白き巨人を操る者、宇宙海賊、ならば、問おう。理の外へと消えた奴等がどうやって戻ってくるというのだ？理論的に不可能だ！」

ゴークイレッド「てめえ、あいつの宿敵のくせしてあいつの事をわかっていねえみたいな」

マスターテリオン「何……？」

ジョーイ「不可能を可能にする……それが、大十字 九郎さんだ！」

ー大十字 九郎だ

俺は……どうなったんだ……？

そうだ……。確か、リベル・レギスのシャイニング・トラペゾヘドロンを受けて……

ここは……異界の地なのか……？それにしても何も無い……真っ暗だな……

アル「九郎……！」

九郎「アル、か…？無事の様だな」

アル「無事とは言い難い状況だがな…」

九郎「俺達…負けたんだな…」

アル「…ああ」

…こんな所で終わりだなんて…！くそッ…！

アル「暗いな…。それに少し肌寒い…。九郎よ、寄り添っても良いか？」

九郎「ああ…。2人しかいないんだ、側にいよう、アル…」

俺とアルは身体を寄せ合った…。

アル「暖かいな、九郎は…」

九郎「アルもな…」

俺とアルはお互い見合つて、笑つた。

アル「九郎…。妾は…嫌だ…！」

九郎「え…」

アル「九郎と共に居れる事は嬉しい…。でも、こんな形は嫌だ！九郎の周りには沢山の人がいる…。妾はその者達とも一緒にいたい！」

九郎「アル…」

アル「お前は…こんなワガママな妾は嫌か？幻滅したか…？ならば、妾は…！」

俺はアルを抱きしめた。

アル「！」

九郎「馬鹿野郎……！幻滅するわけないだろ。お前は……俺の大切な……大切な存在なんだから……！」

アル「九郎……」

九郎「俺が……お前を帰してやる……！みんなにまた会わせてやる！」

アル「うつけが……！」

ジョーイ「九郎さん！アルさん！」

ゴーカイレッド「帰って来い、お前等！」

この声……！ジョーイとマーベラスか……！

アル「聞こえる……！皆の声が……！」

九郎「行こう、アル……！みんなが待っている場所へ……俺達の帰るべき場所へ！」

――新垣 零だ。

突然、空間にヒビが入り、割れるとそこからデモンベインが現れ、空間は元に戻る。エルザ「デモンベインロボ！」

九郎「みんな、心配をかけて悪かったな！」

瑠璃「本当です…！でも、よかった…！」

エセルドレーダ「バカな…！この様な事が…！」

マスターテリオン「フ、フフフ…！」

エセルドレーダ「マ、マスター…?!？」

マスターテリオン「そうだ…！それでこそだ、大十字 九郎！」

九郎「今度は…こつちの番だ、マスターテリオン!!？」

デモンベインはりベル・レギスに攻撃を仕掛けた…。

九郎「ケリをつけるぜ、マスターテリオン！こいつで全てを断ち切る！」

アル「この力…使いこなすのならば、今だ！最終必滅兵器、シャイニング・トラペゾヘドロン！」

九郎「うおおおおっ！」

デモンベインもシャイニング・トラペゾヘドロンを発動した。

九郎「アル、ずっと側にいてくれ。お前がいればなんだってできる！」

アル「勿論だ、妾が愛する者よ！」

九郎&amp;アル「祈りの空より来たりて、切なる叫びを胸に我等は明日への路を拓く！汝、無垢なる翼！デモンベインツ！」

マスターテリオン「見事だ、大十字 九郎……！」
最大出力のシャイニング・トラペゾヘドロンを受けたリベル・レギスは空間の裂け目に引き摺り込まれた。

九郎「させるかよ……！」

ベルリ「な、何する気なんですか、九郎さん！」

だが、それを追って、デモンベインも裂け目の中にへと入っていつてしまう……。

――余はマスターテリオンだ。

余とエセルドレーダはデモンベインの攻撃を受け、異界の地へと飛ばされようとしていた……。

エセルドレーダ「マスター……」

マスターテリオン「また、余の私欲に付き合わせてしまったな、エセルドレーダ」

エセルドレーダ「いえ、マスターのいる先は私のいる先でもありませんから」

マスターテリオン「だが、これでいい。余の欲は満たされた……。もう、これで……！」

九郎「勝手に満足してんじゃねえぞ、マスターテリオン！」

この声……大十字 九郎……？

ー大十字 九郎だ！

ようやくリベル・レギスを見つけたぜ！

マスターテリオン「何っ…?!？」

エセルドレーダ「何故、デモンベインが…?!？」

マスターテリオン「大十字 九郎、何故、異界の地へ来た？ここは貴公の居るべき場所ではない」

九郎「そんな事、わかってんだよ！俺は…俺とアルはお前等連れ戻しに来たんだよ！」

エセルドレーダ「何故…?」

アル「邪神ナイアルラトホテツプに縛られていた汝達…だが、奴を倒した事によって、汝達は自由を得た」

マスターテリオン「自由…」

九郎「だから、お前は俺と戦う為に異世界であるアル・ワースにまで来たんだろう？だからよ、違う生き方を知る機会くらいはあってもいいんじゃないかねえのか？」

マスターテリオン「違う…生き方…」

エセルドレーダ「マスター……」

マスターテリオン「エセルドレーダ：お前はどうしたい？」

エセルドレーダ「え……」

マスターテリオン「永劫の刻の中、余に付き従い続けてくれた礼だ。一度ぐらい、お前の意思に従うのも悪くない」

エセルドレーダ「私は……もし、赦されるのなら……私はマスターと共に違う未来を歩みたい……。滅びを待つのではなく、ただこの世界を生きていく、比翼の鳥として……」

マスターテリオン「フ、長き輪廻の果てに、ようやくたどり着いた終焉だ……。最後にそのような生き方をしてみるのも、また一興と言えよう。ならば、共に行こう、エセルドレーダ……果てなき未来へ……」

エセルドレーダ「イエス、マスター」

マスターテリオン「頼む、大十字 九郎、アル・アジフ……。余とエセルドレーダを……助けてくれ……!」

九郎「言われなくてもやっつてヤラア!」

デモンベインはリベル・レギスに手を伸ばすが、あと少しのところまで届かないでいた。アル「早くしろ、九郎……このままでは此奴等を助け出す前に妾達も帰れなくなるぞ!」

九郎「後、少しなのに……クソオツ!!?」

？「ならば、手を貸そう」

九郎「お、お前は……！」

俺はある機体と人物の手助けによって、リベル・レギスの腕を掴む事に成功した……。

―新垣 零だ。

空間の裂け目が少しずつ、閉じ始めた。

エンネア「何やっているの、九郎！このままじゃ……！」

ホープス「いえ、どうやら両方無事の様です」

空間の裂け目が閉じる寸前でデモンベインとリベル・レギスが出て来た。

チャム「デモンベインだ！」

シルキー「リベル・レギスもいます！」

九郎「ふー、間一髪だったぜ！」

リチャード「よく無事だったな、2人共」

九郎「こいつが助けてくれたんだ」

すると、空間が閉じると同時にある機体が現れる。

そう……エンシエントA Qだ……。

弘樹「エンシエントA Qだと…!!?」

イオリ「もしかして、また誰かが操っているのか!!?」

ミカゲ「そうではない」

アマタ「ミカゲ！」

ミコノ「どうして、あなたが…!!?」

ミカゲ「アポロニアスから君達の手伝いをしてくれと頼まれてね…。そちらがいいのなら、私もエクスクロスとして戦わせて欲しいのだが…」

ゼシカ「いいですね、皆さん」

スメラギ「構わないわよ」

ミカゲ「感謝する。これでアクエリオンLOVEも使える様になったな」

カグラ「へっ、戦力増加って事か！」

ゴーカイイエロー「所でどうして、リベル・レギスが？」

九郎「こいつも俺達の仲間に入れてやりたくてよ」

ウイル「正気か、九郎!!?」

名瀬「良いじゃねえか、偶然とはいえ、彼だつてアル・ワースを守る為に戦ってくれたんだからよ」

シヨウ「それにもう悪いオーラは感じない」

ジエフリー「では、マスターテリオン、エセルドレーダ…。君達の仲間になるのを認めよう」

マスターテリオン「…」

エセルドレーダ「不満ですか、マスター？」

マスターテリオン「…いいや、このだけ居心地のいい場所を見つけたのはいつぶりだろうと考えに浸っていた所だ」

エセルドレーダ「ふふ、そうですね」

これで本当に終わった…。

ドニエル「取り敢えず、何とかなったようだな…」

倉光「ですが、あのアンチスパイラルなる者が再び襲来したら…」

ホープス「皆さん、ご注意を。彼等が来ます」

魔徒教団か…！

アマリ「ワース・ディーンベル！法師セルリックが来たの…？」

セルリック「アマリ・アクアマリン…。今日は君に用はないよ」

アマリ「え…」

セルリック「各機、展開」

な、何をする気だ…!!？

セルリック「記憶の底に眠る原初の炎……。今一度、世界を燃やせ……」
マスターテリオン「これは……！」

ケロロ「何事でありませうか?!?!」

俺達は光に包まれ、光が消える……。

アマリ「さっきのドグマ……一体何なんです……」

フリット「宇宙空間が……！」

アセム「ひずみができる前の状態に戻ってやがる……！」

エレクトラ「船長……。この宙域の重力場異常が停止しました」

ネモ船長「世界の理が正されたか……」

アマリ「法師セルリック……」

セルリック「この世界を守るのは、我々魔徒教団の務めだよ。応急処置はした……。これで当面は奴等の侵攻は食い止められる」

シモン「教えてくれ! アンチスパイラルとは何だ?!?!? ニアは、今どこに?!?!?」

セルリック「それに答える義理はないな」

アスナ「何ですって?!?!」

アマリ「……」

セルリック「アマリ・アクアマリン……。お前と私の実力の差がこれではつきりしただ

ろう。自らが教主に相應しいか、今一度、考えてみるのだな」

魔徒教団は撤退した…。

シモン「くそっ…!!」

アムロ「魔徒教団はアンチスパイラルについても知っているようだな」

ルルーシュ「どうなんだ、アマリ？」

アマリ「ごめんなさい…。私には…わかりません…」

サラ「じゃあ、零は？」

ティア「ゼフィルスネクサスはアンチスパイラルと戦った事があるんだよね？」

零「…見えないんだ」

レナ「え…?」

零「何とかして見ようとしているが、これ以上のゼフィルスネクサスの記憶が見れないんだ…。それに…これ以上、踏み込んじまうと…ゼフィルスネクサスも…俺まで壊れてしまいそうなんだ…」

ケイ「ど、どうしたの、零!?!?」

アスナ(同じく、ゼフィルスネクサスに乗る私には理解できるわ…。これは確実に零とゼフィルスネクサスの心が一つになりかけている…。一心同体…に…)「

ロージエノム「急ぐ必要はない。いずれ、お前達は全てを知る事になる」

リーロン「その口ぶり…自分からは話すつもりはないようね」

ロージエノム「出来る事ならば、このまま奴等が現れない事を願う身だからな」

シモン「だが、それではニアが…！」

ロージエノム「焦るな、螺旋の男…。時はいずれ来る。その日に備え、我々は、あの
カテドラル・テラを整備しよう」

ダヤツカ「あのデカブツか？」

リーロン「シモン…。このアークグレンは、あなた達に預けるわ。使い方は、これま
でと同じ…。必要な時には亜空間から呼び出してね」

シモン「…わかった。ロシウには礼を言っておいてくれ」

リーロン「これから、あなた達はどうするつもり？」

シモン「…アンチスパイラルと戦う為にはもつとこの世界の事を知る必要がある…」

アマリ「私も同感です。私の知る創世神話では語られていない何かがこれからの戦い
では重要になる様に思えます」

イオリ「でも、どうやってそれを…」

零「ドアクダーなら、何か知っているんじゃないやねえか？」

弘樹「そうだな、アンチスパイラルを呼び込んだのもあいつだし」

ネモ船長「おそらく、奴に接触するのが一番の近道だろう」

ノブナガ「イチを救い出し、ドアクダーを叩く…」

アレクサンダー「同時に、この世の謎を解き明かす…」

ケンシン「それが私達の次の戦いですね」

シモン「待っているよ、ニア…。俺はかならず約束を果たす…。俺はまだ…お前にプロポーズするっていう大勝負が残っているんだ…」

デモンベイン、リベル・レギス、エンシエントA Qも艦に戻り、俺達はアル・ワースの星へと戻った…。

―導師キールデインです。

私はエンデの神樹の前にいた。

導師キールデイン「…仰せの通り、処理をいたしました。これでアンチスパイラルも当分の間は干渉する事は出来ないでしょう。…かしこまりました。もう少しだけ時間を稼ぎます」

な…!??

導師キールデイン「…しかし、それでは法と秩序の番人であった教団の威信というものが…。も、申し訳ありません…！決して、そのようなつもりはなく…！…こ、心得ております。全ては御心のままに…それが私共の悦びなのですから…」

―新垣 零だ。

メガファアウナの格納庫に集まり、今日のメルの頑張りについて話していた。

零「それにしても今日はメルも大活躍だったな」

メル「そ、そんな事ないですよ…」

アスナ「あらあら照れちゃって」

ルリ「ナデシココを代表させて言わせていただきます。本当にありがとうございますまし
た」

メル「も、もういいって、ルリちゃん！」

カノン「メルちゃんの照れ顔可愛い！」

メル「やめて〜！」

弘樹「にしても土壇場でハイバスタードモードを発動しちゃうとはな」

イオリ「メルさんの努力の結果だと思っ。彼女、至る所で努力しているからな」

零「へー？よく見ているんだな」

イオリ「ちや、茶化すなよ、零！」

アマリ「でも、メルさんは本当に努力家ですね」

アキト「その努力が、今回俺達を助けてくれたんだからね」

一夏「これからも頼りにしているよ、メル」

メル「はい！これから…も…みな、さん…と…」

アスナ「メル…?」

メル「うぐっ…!!?」

突然、メルが胸を抑えて倒れた。

弘樹「お、おい！どうしたんだよ!!?」

カノン「メルちゃん!!?」

零「おい、しつかりしろ、メル！メルウウウツ!!?」

第62話 希望を司る混沌の翼

―新垣 零だ。

N―ノーチラス号の医務室に俺達はいた。

アンチスパイラルの軍勢との戦いの後、倒れたメルの様子を見るためだ…。

デングル「…」

アスナ「デングル先生：メルの容体は…？」

デングル「心臓が弱っている…」

カノン「え…?!？」

アスナ「ど、どういう事なんですか?!？」

デングル「原因はわからないが、心臓の機能が低下しているんだ…」

イコリーナ「このままでは…いつ止まってもおかしくない状態なの」

セシリア「ど、どうしてその様な事に…」

マドカ「彼女は倒れるまでは正常だったはずだ。何故、急に…」

零「まさか…!」

マリア「…」

アマリ「何か心当たりがあるの、零君!!?」

零「バスタードモードが原因だと思っ…」

弘樹「バスタードモード…!!?」

マリア「恐らく、彼女はバスタードモードを使いこなせていなかったのよ」

イオリ「何をバカな事を！メルさんはバスタードモードの上位であるハイバスタードモードをも使いこなせていたじゃないか！」

零「…母さんは何か知っているのか？」

マリア「彼女は物凄く珍しいケースの人間なのかもしれないわ。彼女は守りたいという人間を守ろうとする時、彼女はバスタードモードを使える様になる…。でも、知らず内に彼女の肉体自身にダメージが蓄積されていたのね…。彼女自身も気づかず内に、ね…」

簪「じゃあ、このまま行けば、メルは…」

マリア「心臓が止まり…死ぬわ…」

イオリ「そ、そんな…!」

アスナ「…零!どうにかできないの!!?」

弘樹「そうだ!レイヤの力をお前も使えるんだろ!!?だったら…!」

零「…ごめん、無理だ…。確かにレイヤの力を少し使える様になったが、全部じゃない…。それに心臓が止まりそうな人間を助ける様な万能な力は…ない…」

弘樹「じゃあ、メルがどうなってもいいって事かよ！」

零「そんな事、一言も言っただろ！俺だってメルを助けたいさ、でも…俺じゃ助けられないんだよ…！」

カノン「零さん…」

弘樹「お前は…みんなを守るんじゃないのかよ！」

零「…勝手な事を言いやがって…！俺だって、助けたいって言っただろ！」

アスナ「やめなさい！あなた達が喧嘩をしても、メルが治るわけではないでしょう！！？」

零「…悪い」

弘樹「…すまない」

メル「…もう…そうやって、すぐに…喧嘩するのですから…」

一夏「メル！」

ナオミ「起きていたの？？」

メル「デングル先生…私は、もう長くないのですよね…？」

デングル「…すまない。医師である私でももうどうする事も出来ない…」

メル「構いません…。デンギル先生のせいではありませんから」

アスナ「嫌…そんなの嫌よ！メル！」

アスナがメルを抱きしめた。

メル「もう、アスナさん…。病人に勢いよく抱きつかないでくださいよ」

アスナ「メルが死ぬなんて…そんなの嫌だよ！」

アル「アスナ…」

マスターテリオン「…何を泣く必要がある。人は必ず、死を迎える。彼女は少し早い死を迎えるだけだ」

九郎「そんな簡単なものじゃねえんだよ…！口を挟むなよ！」

エセルドレーダ「しかし、彼女の気持ちも少し、理解できます…。大切な人の死は…悲しいものだから…」

マスターテリオン「…」

ミカゲ「君にも理解できる日が来ると思うよ」

マスターテリオン「貴公は理解できているのか？」

ミカゲ「まだ、さ。だから、早く理解したいと思っている」

マリア「彼女を救い出せる方法を探してみるわ」

零「俺も手伝うぜ、母さん！」

弘樹「俺も……！」

ヴァン「お前、腹が減ってないか？」

ジョシユア「ヴァンさん……？」

ヴァン「最後だ最後じゃないとしても……今できる事をやっておけ。後悔しないように」

ウエンデイ「ヴァン……」

メル「ありがとうございます、ヴァンさん」

ヴァン「良いから黙って寝てろ。何か飯を持ってきてやるから。後、調味料たくさんと」

アスナ「メルにこれ以上のダメージを与える気ですか、あなたは!?？」

ガドウエド「アスナ、ヴァンについて行ってくれぬか？主に監視のためにも……」

アスナ「ええ、トンデモナイものを持ってこないためにも……」

ヴァン「お前は俺を何だと思っているんだよ、アスカ？」

アスナ「アスナです！」

ヴァン「すみません……」

ホープス「私も別の方法でメル様を助け出せるか、探してみます」

アマリ「手伝います、ホープス」

イオリ「メルさん、俺に何かできる事はないかい？」

メル「…手、握ってもらえませんか？」

イオリ「え！そんなのでいいのかい？」

メル「お願いします、イオリ先輩」

イオリ「わかった…」

一夏「イオリさん…鈍いな」

箒「お前が言うか…」

シャルロット「というか、一夏に鈍いって言われるイオリさんって…」

楯無「同類と言えば同類ね」

ひどい言われ様だな…。

すると、警報が鳴り響いた。

ミシエル「敵さんのお出ましか！」

クラン「どの敵が来たんだ!?!？」

ガエリオ「バジユラの様だ！」

アルト「バジユラだと…?!？」

つて事は…オニキスも来る可能性があるって事なのか…！

メル「わ、私も…ぐっ…！」

イコリーナ「ダメよ、メル！ 安静にしていなと！」

弘樹「ここで待っている、俺達がすぐに終わらせて帰ってくる！」

メル「でも……！」

すると、イオリがメルの頭に手を置いた。

イオリ「待っていてくれ、メルさん……。俺達は必ず帰ってくるから」

メル「……はい、わかり、ました……」

俺達はそれぞれ出撃準備に入った……。

第62話 希望を司る混沌の翼

俺達は出撃した……。

リオン「オニキスは完全にバジユラを操れている様だな！」

ミーナ「30」「それではバジユラが可哀想です……」

アルト「くそッ……！ どうすればバジユラを救い出せるんだ……！」

刹那「前を向け、アルト」

オズマ「バジユラを救い出すのは戦いながら考えるしかない！」

アルト「…了解！」

零「お前等に構っている時間はない！速攻で終わらせて、メルを治す方法を探さないとダメなんだからな！」

それに、オニキスが来る可能性もある…！出来るだけ、早く終わらせないと…！

フリット「…」

アセム「どうしたんだ、父さん？」

フリット「…いいや、何でもない。行くぞ！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 ミカゲVS初戦闘〉

ミカゲ「これが私の初陣となるのだな…。誰かのために戦うとはどのようなものかを学ぶとしよう」

〈戦闘会話 マスターテリオンVS初戦闘〉

エセルドレーダ「マスター、戦闘を開始します」

マスターテリオン「構わん。余とお前が新たに通る道となる…。その邪魔をするとうのなら相手をするだけだ」

バジユラを倒していく俺達…。

アイシャ「やっぱり、操られているものを倒すのは後味が悪いわね…！」

カナリア「これは一刻も早く、バジユラを助け出す方法を考えねばならないな」

…この気配…！

零「オニキスが来る…！」

現れたのはガルム部隊とアマテラス・ツヴァイとデイビウスだった。

マリア「やはり、来たわね！」

九郎「今回はラゴウとハデスは不在かよ！」

ギルガ「各機、攻撃を開始！エクスクロスをここで叩け！」

優香「了解…！」

弘樹「零！」

零「わかっている！此処で、優香を救い出す！」

ジン「UX」「行け、二人共！」

アユル「必ず、優香さんを助け出してください！」

アキト「他の敵は俺達が引き受ける！」

カノン「私達がカバーします！」

アスナ「行きましょう、零！弘樹！」

零「ありがとう、みんな……！行くぞ……優香！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS優香〉

零「悪いが、全力でやらせてもらうぜ、優香！加減してお前に勝てるとは思っていないからな！」

優香「今度は負けない……ギルガ様の為……首領様の為にも……！」

アスナ「優香がギルガ様と言うなんて……！」

零「目を覚ませてやるよ……俺が……いや、俺達が……！」

〈戦闘会話 弘樹VS優香〉

カノン「デバイブウスの性能はヴァリアスと同等の様です！」

優香「そう、あなたでは私は止められないわ！」

弘樹「果たしてそうかな？俺を舐めていると痛い目を見るぞ！」

カノン「それは敗者への負けフラグですよ、弘樹さん…」
弘樹「と、取り敢えずやるぞ！」

〈戦闘会話　アマリVS優香〉

アマリ「白木さん！目を覚ましてください！」

イオリ「本来の君を取り戻すんだ！」

優香「うるさい！私は私：何者でもないわ！」

ホープス「彼女の洗脳の強さは相当の力の様です」

アマリ「だったら、少し荒っぽく行きますよ、我慢してください！」

ゼフィルスネクサスとヴァリアスデストロイの攻撃でデイビウスにダメージを与えた…。

優香「くっ…!!? そんな…！」

弘樹「今だ、零！」

零「優香アアアツ!!？」

ゼフィルスネクサスとヴァリアスデストロイはデイビウスに組み付いた。

優香「は、離して！」

カノン「漸く捕まえました…！」

アスナ「離す訳ないでしょ！あなたを救い出すまでは…！」

ギルガ「…そろそろ潮時だね」

リン「え…」

ギルガ「面白いものを見せてあげるよ、リンちゃん」

すると、カルセドニーは指を鳴らす。

優香「…！え、こ、此処は…?!?!」

零「優香…?どうしたんだ！」

優香「その声…零なの?!?!」

何…?!?!

零「俺がわかるのか、優香?!?!」

優香「当たり前でしょ！新垣 零…私の大切な幼馴染よ！」

弘樹「優香の洗脳が解けたのか！」

優香「弘樹もいるのね！それに明日菜ちゃんと花音ちゃんも！」

カノン「良かったです、優香さん！」

アスナ「…。(どうして急に洗脳が解けたの…?何かキーになったわけでもないの

に……」

リン「ギルガさん！優香さんの洗脳が解けてしまいましたよ！」

ギルガ「心配はないよ……。来たよ」

すると、超大型の機体が現れた。

ルー「何なの、あの巨大な機体は……?!?!」

ジユドー「モビルアーマーなのか……?!?!」

アセム「あれは……！」

キオ「違います！あれはモビルスーツです！」

アムロ「モビルスーツだと?!?!」

フリット「ヴェイガンギア・シド……！」

ゼハート「ゼラ・ギンスもアル・ワースに来ていたのか?!?!」

ギルガ「いいや、このヴェイガンギア・シドには誰も乗っていないよ」

オブライト「無人機だというのか……?!?!」

シャナルア「前回のエンシエントA Qといい……オニキスは様々な世界の技術を取り込

んでいる様だね……！」

アスナ「優香！あなたはナデシコCに戻って！」

優香「う、うん！わかった！」

ギルガ「そうはさせないよ」

すると、カルセドニーがまた指を鳴らす。

優香「っ……！な、何……!?？身体が……勝手に動く……!?？」

零「どうしたんだ、優香!?？」

マリア「これは……！零、弘樹君！すぐにデイビウスから離れて！」

弘樹「な、何を言っているんですか、マリアさん!?？」

アスナ「っ……！避けて、二人共！」

戸惑う俺達だったが、突然、デイビウスがゼフィルスネクサスとヴァリアスデストロイに掴みかかる。

カノン「くっ……！何をするのでですか、優香さん!?？」

優香「私じゃない！身体が……勝手に動くのよ！」

何だと……!?？」

零「カルセドニー……てめえ……！優香に何をした!?？」

ギルガ「確かに優香ちゃんの洗脳は解いて上げたよ。でも、彼女の身体は僕が操っている……。いわばもう彼女は意思を持つ僕の操り人形さ」

弘樹「何だと……!?？」

カノン「酷い……！」

ギルガ「幼馴染同士、仲良く喰らうといいよ！ヴェイガンギア・シド！」
ヴェイガンギア・シド「！」

ヴェイガンギア・シドからビーム砲が放たれ、デイビウスによつて動きを封じられていたゼフィルスネクサスとヴァリアアスデストロイはデイビウスごとビームを受けてしまふ。

零「ウワアアアツ！！？」

弘樹「グアアアツ！！？」

優香「キヤアアアツ！！？」

三機は撃墜こそはされなかったが、大ダメージを受けた。

アマリ「零君！アスナさん！白木さん！」

イオリ「弘樹！カノンさん！」

零「ぐっ……！お前等、無事か！？？」

アスナ「な、何とか……！」

弘樹「俺とカノンも無事だ……だが……！」

優香「イヤ……イヤだよ……！止まってよ……！私はこんな事したくない！」

ヴェイガンギア・シドがミサイルを出し、ゼフィルスネクサスとヴァリアアスデストロイがそれを避けるが、避けたところをデイビウスの攻撃が襲う。

零「ぐっ……！」

弘樹「くっ……！」

アスナ「まずいわよ、このままじゃあ……！」

カノン「機体ダメージが蓄積されていきます……このままでは撃墜されます！」

優香「零……弘樹……アスナちゃん……メルちゃん……。私……私は……」

零「気にするな、優香！」

アスナ「私達は大丈夫よ！」

弘樹「お前を必ず、元に戻してやるからな……！」

カノン「待っていてください！」

優香「みんな……。私なんかの為に……」

メル「なんかではないです！」

ナデシコCからメサイアが出てきた……!!?

優香「芽流ちゃん……!!?」

零「メル……!!? お前、何やってんだよ!!?」

アスナ「安静にしてなさいって、言ったでしょ！」

メル「零さん達が命がけで戦っているのに……私だけ指を啜えているなんて出来ません

！」

零「お前……！」

千冬「だからと言って、心臓が低下しているお前を戦わせるわけにはいかん！」

箒「戻れ、メル！」

鈴「今のアンタに何が出来るのよ!!?」

メル「確かに今の私は足手纏いです……。ですが、優香さんを救い出すぐらいの事は出来ます！」

優香「メルちゃん……やめて……！私なんかの為に死なないで！」

メル「いい加減にしてください、優香さん！あなたを助けようとしている人がこれほどいるのにあなたは自分の事をそんなふうに思うのですか!!?」

優香「っ……」

メル「私の知る白木 優香さんは……誰にでも優しく、そして厳しい……私の目標の人でした！それがあなたでしょう!!?」

優香「メル……ちゃん……！」

メル「必ず救い出します……私達が！」

っ……！ウェイガンギア・シドがビームサーベルでメサイアに斬りかかった……!!?」

零「逃げろ、メル！」

メル「しまっ……キヤアアアアッ!!?」

ビームサーベルでメサイアは真つ二つに斬られ、コックピットからメルを弾き飛ばし、爆発した…。

さらに、ヴェイガンギア・シドは空中に投げ出されたメルに向けて、ビームライフルを構えている。

弘樹「メル！」

アスナ「イヤ…メルウウウツ!!？」

そして、ビームライフルからメルめがけて銃撃が放たれる。

メル「！」

間に合わない…！

優香「メルちゃん…私だって…負けない…！はあああああつ!!？」

すると、デイビウスが突然動き出し、空中に投げ出されたメルを掴み、代わりに銃撃を受けた。

優香「うっ…！」

メル「優香…さん…？」

優香「ふふっ…大事な妹分を殺させはしないわ！」

ギルガ「バ、バカな…僕の支配から自ら抜け出したというのか…!!？」

流星は優香だ…！

零「優香！」

優香「心配をかけてごめんね、みんな！」

アスナ「全くよ！後で何か作りなさい！」

カノン「出来れば、パフェでお願いします！」

優香「お安い御用よ！」

メル「優香さん！コックピットを開けてください！私も…戦います！」
優香「メルちゃん…。！」

すると、デイビウスが輝き出し、光が消えると、姿が変わっていた…。
ベल्ली「デイビウスも姿を変えましたよ…。！」

アイーダ「綺麗…！」

メル「希望を司る混沌の翼…カオス・デイビウスホープレイです！」

優香「メルちゃん！」

メル「はい！」

メルはデイビウスホープレイに乗り、動き出した。

優香「私達の…希望と混沌の力…！」

メル「受けてみてください！」

デイビウスホープレイはヴェイガンギア・シドに攻撃を仕掛けた…。

優香「私を信じてくれたみんなの為に……これで決めるわ！ハイバスターモード！」

二丁のクロスガンを連射させ、至近距離で何度も撃つ。

優香「メルちゃん、お願い！」

優香「はい！ハイバスターモード……！ブラストビットで勝負です！」

ブラストビットを出し、無数のレーザービームがヴェイガンギア・シドを襲い、その隙にクロスガンを連結させ、ブラスターモードに変えた。

優香「最大出力……いっけええええっ！！？」

ヴェイガンギア・シド「!?？」

クロスガン・ブラスターモードから放たれたビームはヴェイガンギア・シドに直撃し、大ダメージを与えた。

ヒナ「凄い……」

ディオ「流石は零さんと弘樹さんの友人だ……！」

青葉「格好いいぜ、優香さん！」

ギルガ「か、彼女にこれ程の力が……!?？」

零「……なんか全部、優香に持ってかれたな」

弘樹「俺達の努力って……」

アマリ「ま、まあまあ……」

優香「まだやれるでしょう、メルちゃん？」

メル「つ……は、はい……！」（ヴァンさんの言葉通り……後悔はしたくない……。だからこそ、私は最後まで戦います……！これが最後だとしても……！）」

ヴァン「……」

ギルガ「まだだ！まだ、ヴェイガンギア・シドは動く！まだ負けていない！」

優香「零、弘樹！付いてきて！一緒に行くわよ！」

零「ああ！俺達三人の力を見せてやろうぜ！」

弘樹「久しぶりだな、三人揃うのは！」

アスナ「ちよつと！私達も忘れないですよ！」

カノン「六人揃つての私達ではないですか！」

メル「私達、六人いれば怖いものはないです！」

零「その通りだな！行くぜ、みんな！」

戦闘再開だ！

アスナ「これで操られた人は助けられたわね！」

零「そうだな、後はオニキスをぶっ潰すだけだ。行こうぜ、アスナ！優香達に負けてられねえぞ！」

〈戦闘会話 弘樹VS初戦闘〉

弘樹「やっぱり、優香には敵わないな」

カノン「流石は私達のお姉さんポジションの人です。私達も負けてはいられませんよ！」

弘樹「ああ！カノン、一緒にやるぜ！お前達を利用したオニキスを倒すために！」

〈戦闘会話 優香VS初戦闘〉

メル「はあ…はあ…！優香さん、フォローを任せてください！」

優香「メルちゃん、あなた…！うん、頼りにしているわ！二人でやろう！」

〈戦闘会話 キオVSヴェイガンギア・シド〉

キオ「まさか、無人機になってくるなんて…。僕達の世界のもので争いを広げさせはしない！」

〈戦闘会話　アセムVSヴェイガンギア・シド〉

アセム「何度だって、俺達が破壊してやる！世界を戦火で包むってんならな！」

〈戦闘会話　フリットVSヴェイガンギア・シド〉

フリット「オニキスは各世界の技術を取り込んでいたとはな。アル・ワースを滅ぼす前にここで倒すでしょう！」

〈戦闘会話　ゼハートVSヴェイガンギア・シド〉

ゼハート「イゼルカント様の意志を継ぐ…。その為にも貴様はここで私が倒す！」

AGE—FXの攻撃でヴェイガンギア・シドにダメージを与える。

ヴェイガンギア・シド「!!？」

シヤア「まだ動くか…！」

ギユネイ「しぶとい野郎だな！」

フリット「心配ない。キオ、アセム！やれるな？」

アセム「ふっ、誰に聞いているんだ、父さん？」

キオ「やろう！爺ちゃん！父さん！」

ガンダムAGEーFX、ガンダムAGEー2、ダークハウンド、ガンダムAGEー1、グランサがヴェイガンギア・シドに攻撃を仕掛けた…。

キオ「お前は…僕達とガンダムが止める！大丈夫だよ。ガンダムが…僕達が力を合わせれば！」

アセム「ふっ…」

フリット「行くぞ！」

三機は同時に動き出し、グランサはグラストロランチャーを発射し、直撃させる。

アセム「ふっ…やるじゃないか、父さん」

キオ「押してる…やれる！」

FXがCファンネル、ダークハウンドがドツズガンを繰り出し、ダメージを与えている。

フリット「うおおおっ!!？」

アセム「何処を見ている！」

キオ「ハアアアッ!!？」

グランサ、ダークハウンド、FXがシールドサーベル、ドツズランサー、ビームサー

ベルで斬りきざんでいき、最後にFXがCファンネルバリアアタックを発動する。

キオ「これで：最後だあああつ!!？」

ヴェイガンギア・シド「!!？」

Cファンネルバリアアタックで突撃し、それを受けたヴェイガンギア・シドは爆発した…。

アセム「俺達の：勝ちだ！」

フリット「ああ…！」

キオ「僕達が力を合わせれば、どんな困難だって、乗り越えられるよ！」

これでヴェイガンギア・シドを撃破できた！

フラム「凄い連携…！」

デイン「流石はキオ達だ！」

レイル「俺達も負けてられないですね、ゼハート様！」

ゼハート「そうだな」

ギルガ「ヴェイガンギア・シドが…。これがガンダム之力…！」

リン「何を恐れているのですか、ギルガさん！私達は負けるわけにはいかないのですよ！」

ギルガ「…そうだね。僕達は勝つ！」

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

リン「新垣 零さん！大人しく拘束されてください！」

零「言われてハイそうですって言うわけねえだろ！」

アスナ「そうよ！零は人の言う事を全く聞かない男なのだから！」

零「…待て！全くではないだろ！」

ギルガ「いいや、合っているよ。君は聞き分けがなさすぎる！」

零「お前に言われたくねえんだよ！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

リン「氷室 弘樹さんの頭ならば…想定外の動きをすれば、ついてこれないはずですよ！」

弘樹「おい、マスカライト！何気に酷いこと言ってるじゃねえ！」

カノン「そうだよ！弘樹さんは…少しだけ鈍いだけです！」

弘樹「フォローになつてないぞ、カノン！」

ギルガ「…苦労しているね、色々…」

弘樹「カルセドニーにまで心配される俺って一体…」

〈戦闘会話 優香VSギルガ〉

リン「白木 優香さん！もう一度、あなたを洗脳させていただきます！」

メル「そんな事…私がさせないわ！リンちゃん！」

ギルガ「優香ちゃん、君は後悔することになるよ」

優香「気安く名前で呼ばないで！あなたにはこれまで全ての借りを返させてもらおうか
！」

ゼフィールスネクサス、ヴァリアスデストロイ、デイビウスホーププレイの連携攻撃でア
マテラス・ツヴァイにダメージを与えた…。

リン「まだです…！私達は負けていません！」

優香「しつこいわね…！零！」

零「…。よし、やるか！」

優香「よくわかったわね。私の考えている事が」

零「お前の考えは大体予想がつく。行くぜ、優香！」

優香「ええ！アスナちゃんとメルちゃんも行くよ！」

アスナ「いつでもいいわ！」

メル「やりましょう！」

ゼフィールスネクサスとデイビウスホープレイはアマテラス・ツヴァイに攻撃を仕掛けた。。

零「仕掛ける…！優香、連携でいくぞ！」

優香「足手纏いにならないように頑張るわ！」

零「心配するな、お前がいるだけで敵はビビる！」

優香「どう言う意味よそれ!!？」

アスナ「れ、零！優香の逆鱗に触れる前にやるわよ！」

メル「行きます！」

ゼフィールスネクサスとデイビウスホープレイはクロスガンを取り出し、連射する。

そして、二機はクロスソードで何度も切り裂き、斬りとばす。

アスナ「行くわよ、メル！ガンズビット！」

メル「合わせます、アスナさん！プラストビット！」

ガンズビットとブラストビットから無数のレーザーが放たれ、アマテラス・ツヴァイにダメージを与えていく。

それを見て、二機はクロスガンをブラスターモードに変える。

零「トドメだ！クロスガン、ブラスターモード……！」

優香「シユート!!？」

二つのブラスターモードから放たれたビームがアマテラス・ツヴァイに直撃する。

零&mp;優香「いつけええええええつ!!？」

リン「キヤアアアアツ!!？」

ギルガ「リンちゃん……！これ以上は……！」

ビームの威力をフルパワーに上げ、アマテラス・ツヴァイに浴びせた。

零「ナイスだったぜ、優香！」

優香「そう言う零もね！」

フルパワーのビームを受けたアマテラス・ツヴァイはダメージを負った。

リン「っ……！」

ギルガ「撤退だ……。リンちゃん……！これ以上は限界に近い……！」

リン「は、はい……！」

アマテラス・ツヴァイは撤退した……。

優香「やったね、零！」

零「いい連携だったぜ、優香」

アマリ「…」

ホープス「嫉妬とはみつともないですよ、マスター」

アマリ「ホ、ホープスに言われたくないわよ…」

フェルト「今ので全敵を撃破しました」

オブライト「まさか、オニキスがヴェイガンギア・シドを使ってくるとはな…」

ジラード「今後の彼等の動きにも気をつけないといけないわね」

イオリ「それにしても、白木さんを取り戻せてよかったよ」

優香「皆さんのおかげです。ありがとうございます！ね！メルちゃん！」

メル「はあ…はあ…」

優香「メルちゃん…？」

メル「うっ…！がはっ…！」

優香「メ、メルちゃん！」

零「どうした、優香!？」

優香「メルちゃんが血を吐いて…！」

アスナ「何ですって…!?!？」

ヴァン「ネモのおっさん！」

ネモ船長「ああ……！各機はすぐに帰艦しろ！」

そんな……嘘だろ……？メル……！

俺達はすぐに帰還し、メルをNーNーチラス号の医務室へ運んだ。

メル「はあ……はあ……うっ……！」

アスナ「メル……！メル！」

メル「ごめん、なさい……。私は……ここまで……の様です……」

シエリル「そんなの……そんなのダメよ！私だって、まだV型感染症と戦っているのよ！あなただって……！」

ランカ「頑張つて、メルちゃん！」

アルト「シエリル……ランカ……」

メル「ありがとうございます……シエリルさん、ランカさん……。アルトさん、お二人を……守つて、上げてください……」

アルト「お前……」

メル「カノン、ちゃん……。弘樹さんと……いつまでも仲良く……ね」

カノン「うん……うん……！」

メル「弘樹さん……。カノンちゃんを、お願いします……」

弘樹「ああ……！任せろ……！」

メル「優香さん……。最後に……あなたのパートナーとして……戦えて、嬉しかったです……」

優香「私だって……メルちゃんと一緒に戦えて、嬉しかったよ……！」

メル「アスナさん……。あなたには本当にお世話になりました……。ありがとう、ごさいます……」

アスナ「う、うう……！」

メル「そして……零さん。あなたは……あなたの道を進んでください……。あなたは……。皆さんにとって、必要な存在、なのですから……」

零「メル……！」

メル「エクスクロスの方々も……お世話になりました」

青葉「こんな……こんな事ってあるかよ！」

アキト「メルちゃん……」

リオン「俺達だって……お前に世話になったんだ！」

ノブナガ「感謝する、メル……」

メル「ふふっ……。ノブナガさんに感謝されちゃいましたね……。ヴァンさん……。あなたの言葉が最後の私を動かしてくれました……。ありがとう、ごさいます……」

ヴァン「……俺がとやかく言う権利はないのかも知れねえ……。だが、これだけは言わせ

ろ……。よく戦ったな、メル……」

メル「やつと……私の名前を覚えてくれましたね……」

アマリ「メルさん……！」

メル「アマリさん……。零さんを助けてあげてください……。ホープスさん、も……」

アマリ「はい……」

ホープス「かしこまり、ました……」

イオリ「……」

メル「イオリ先輩……。あなたを救い出せて良かったです。（でも……大好きだとは恥ずかしくて言えません……）……。お願い、聞いてくれますか？」

イオリ「……何だ？」

メル「キスして、もらえますか……」

イオリ「……わかった」

イオリはメルの唇にそつと口付けをした……。

メル「ありがとうございます……。皆さんがドアクダーを倒し、アル・ワースを平和にし……。元の世界へ帰還できる、事を……。祈って……。いま、す……」

そう言い残し、メルは目を閉じた……。

優香「メルちゃん……。？メルちゃん……。イヤだよ、メルちゃん！目を開けてよ！」

弘樹「クソ…クソオオオオツ!!？」

アスナ「メル…うう…うわああああん!!？」

零「…」

メルが死んだ…。もうその目は二度と開かれる事はない…。

マリア「…」

マスターテリオン「…聞いて欲しい事がある」

九郎「…何だよ。こんな時に…！」

マスターテリオン「彼女を蘇らせる事が出来るかも知れないと、言えば？」

エセルドレーダ「本当ですか、マスター!?!？」

マスターテリオン「それには…新垣 零、氷室 弘樹、白木 優香、アスナ・ペリドツ

ト、カノン・サファイア…。お前達の存在が必要不可欠だ」

零「俺達が…？」

マリア「まさか…!ダメよ、その方法は！」

母さん…何か知っているのか？

弘樹「どういった方法なんですか？」

マリア「オニキスの力を使える者から…力を…生命エネルギーを分け与える方法よ」

カノン「生命…エネルギー…？」

マスターテリオン「だが、この方法が確実に成功するわけではない。失敗すれば、貴公達も生命を落とす事になる」

アマリ「そ、そんな…！」

零「成功する確率は？」

マスターテリオン「約40%だ」

そんな低いのか…。でも…！」

零「40%もあるのか」

アマリ「零…」

零「俺はやる…！メルを助け出せるなら…！」

俺は右手をメルの方へ向ける。

すると、弘樹とカノンもメルの方へ右手を向ける。

弘樹「一人でカツコつけようとすんなよ」

カノン「私達もやりますよ、零さん！」

頷く俺の横で優香とアスナも動いた。

優香「私達も…やる！」

アスナ「メルを助け出せるチャンスがあるのなら…！」

アマリ「あなた達、正気なの!?？失敗すれば、死ぬのよ!?？」

零「それでも…助けられる確率が1%あるのなら、俺はそれにかけてい」

弘樹「大丈夫ですよ、死ぬ気はありませんから」

そして、俺達は力を込め、俺はクロスレイズモードを、それ以外の者はハイバスタードモードを発動する。

零「いくぞ…！」

俺の言葉と同時にメルに向けて、力が流し込まれた。

優香「うつ…！」

アスナ「つ…！」

弘樹「堪えろ、みんな…！」

これが…生命エネルギーを分け与えるつて事なのか…！心臓を掴まれているような痛みだ…！

だが…メルの為…退くわけにはいかねんだよ…！

暫く、流しているとメルの腕がピクリと動き出したと同時にメルはゆっくりと目を開ける。

メル「ここ…は…？」

メルの声を聞き、俺達は力を流すのをやめた…。

それと同時に俺達は床に膝をついた。

零「はあ…はあ…。う、うまく…いったのか…？」

優香「はあ…はあ…メルちゃん…目を覚ましたって事は…うまくいったんだと思
う…」

弘樹「疲れた…。もう…。動けねえ…」

メル「…あれ？零さん達…どうして、そんなに疲れているんですか？…それよりも私
は死んだはずなのですが…。心臓の苦しみもありませんし…」

すると、首を傾げるメルにアスナが勢い良く抱きついた。

アスナ「メル！」

メル「うわあっ！？ア、アスナさん…！？！」

アスナ「良かった…本当に良かった…！」

マリア「あなたの心臓は元に戻り、あなたは蘇ったのよ。そして、これからはハイバ
スタードも使えるわ。零達に感謝しなさい」

メル「…よ、よくわかりませんが…。零さん達にはまた、迷惑をかけてしまったよう
ですね…。ありがとうございます」

カノン「ふっ…ふっ…メルちゃんが無事で…良かった…」

ルルーシュ「…」

扇「これで一段落だな…」

ルルーシユ「扇…俺は…」

扇「俺は…。今でもお前を許さない。そして、これからも許す事はないのかも知れない…」

ルルーシユ「…」

扇「だが、今のお前ならば、もう一度信じれる。ゼロでもルルーシユ・ヴィ・ブリタニアでもない…。ただのルルーシユならば…」

ルルーシユ「扇…」

玉城「それによ！どんな姿でも、お前は俺達のリーダーなんだからよ！」

ルルーシユ「玉城…」

藤堂「アル・ワースを平和にする為、しっかりと動いてもらうぞ」

ルルーシユ「藤堂…」

星刻「そして、俺達を元の世界へ戻してくれ…」

ルルーシユ「星刻…」

ラクシャータ「…で？どうするの、ルルーシユ？」

ルルーシユ「…決まっている。俺は…ただのルルーシユは…。アル・ワースの為に戦う！」

カレン「ルルーシユ…」

スザク「僕達も何処までもついていくよ、ルルーシュ」
ルルーシュ「感謝する、みんな…」

ルルーシュ…良かったな。

つてか、バリンボーさんとジョーガンさんなんて、感動しすぎて泣いてるし…。

優香「メル…。これからも私のパートナーとして、戦ってくれる？」

メル「はい！」

メルの返事を聞き、優香は立ち上がり、俺の前に来た。

優香「…私はもう…止まらないから…。例え、ライバルがいたとしてもね」

零「え…」

すると、優香は無理矢理、俺を立たせて…そして…。

零「…!?？」

俺に唇にキスしてきやがった…。

アマリ& amp ;アスナ「うえっ!?？」

俺は優香を力尽くで離し、言った。

零「お、おおお…！お前は何やってんだ!?？」

優香「好きな男にキスするのは当たり前でしょ？」

零「す、好きって…お前、そんな積極的な女だったか!?？」

優香「私も変わったのよ。この世界で…」

零「優香…」

…ん？何か後ろから殺気が…。

アマリ「零君…」

アスナ「あなたねえ…！」

千冬「少し、授業をしてやる」

アンジユ「今回ばかりは…」

ヒルダ「もう許さない…！」

…。おいおい、待てよおい…！

零「お、落ち着け！みんな！」

アマリ「零君…お話ししよっか」

零「え…あ、いや…」

アマリ「私の部屋でじっくりと…！」

零「ア、アマリ…？目が怖いぞ！」

アマリ「大丈夫よ。話をするだけだから」

…何でこうなるんだよ…。

弘樹「優香、なかなか悪いやつだな…」

カノン「あ、あははは…」

メル「フフフツ…。やっぱり、私…この部隊が大好きです！」

まあ、ひとまず…。一件落着でいいか。

シークレットシナリオ4 シュワルビネガーの秘密

シークレットシナリオ4 シュワルビネガーの秘密

ーエレクトラです。

私はレーネ副長も共にメガファウナの格納庫にいました。

レーネ「…もう…終わりかも知れない…」

エレクトラ「ええ…。まさか、こんな強敵が潜んでいたなんて…」

レーネ「潜んでいた…と言うより、私達が目を背けてきた結果だと思います」

エレクトラ「おっしゃる通りです。戦い続けていけば、いつか状況は好転する…。その希望にすがりついて、今日まで過ごしてきましたが」

レーネ「所詮は幻想だったという事です」

エレクトラ「残念ながら…」

レーネ「認めるしかないのですね…」

エレクトラ「はい…。計算の結果、このままでは我々は資金繰りが出来ず、破産しま

す」

レーネ「まさか、ドアクダーとの決戦を前にしてエクスクロスの活動資金が底を突くなんて……」

エレクトラ「世知辛い話ですが、お金がなければ、活動できません。我々にとつては、なによりも恐るべき敵と言えるでしょう」

レーネ「今までは倒した敵のスクラップを売ったり、アメリカ軍やエナストリアからの資金救助を受けたりでやってきましたが……。ここ最近の激戦の連続によつて完全に支出が収入を上回っていますね」

エレクトラ「さらにこれからの事を考えると各機体も、もつとチューンしたいでしょう」

レーネ「何か打開策はないのですか？」

エレクトラ「元の世界では資産家で知られる万丈君や舞人君もこのアル・ワースではどうしようもないですし……」

エレクトラ「シモン総司令を通じて獣の国に救助をお願いしたいところですが、あちらもカテドラル・テラの整備がありますし……」

エレクトラ「ルルーシュ君やミツヒデ君にも資金調達のプランをお願いしたのですが、合法的な手段では時間がかかると言われましたし……」

レーネ「こうなると何やかの方法で即効性のある資金稼ぎをやるしかありませんね
…」

すると、メガファウナの副長が来ました…。

副長「こんな所にいたんですね、お二人さん」

レーネ「何かあったんですか？」

副長「偵察に出ていたシバラク先生から連絡が入ったんですが、この先の村が山賊団の被害にあっているそうです」

エレクトラ「またですか…」

レーネ「…困っている村の方々には申し訳ありませんが、これはチャンスですね」

エレクトラ「ええ…。山賊退治で資金稼ぎをしましょう」

そうと決まれば…行動開始よ！

ーシュワルビネガーだ。

獣人「監督…。みんな、揃ったぜ」

シュワルビネガー「監督ではない！隊長…または大佐と呼べい！」

獣人2「って言うけどよ…」

獸人「監督は、監督って呼び方がぴったりだもんな」

シユワルビネガー「そ、そうか？？確かに俺も、それが一番しつくり来る…。理由はわからんが…」

獸人2「で、俺達を集めたって事は…」

シユワルビネガー「機は熟した！我等、レッドゴリラ団はこれより村を攻め、一気に制圧する！」

獸人「おお！ついにこの日が来たか！」

獸人2「しかし、監督も強欲だな。まだ稼ぎ足りないとは」

シユワルビネガー「ヌフフ…あれのおかげでこうして俺は自前の軍団を備えるまでになった…。だが、もつとだ！この混乱のアル・ワースでレッドゴリラ団は天下を取るぞ！」

獸人「ついて行かず、監督！」

獸人「俺達は監督の強運に惚れ込んだんだ！見せてくれ、アル・ワース・ドリームを！」

シユワルビネガー「行くぞ、お前等！金と力は我にありだ！」

我々は機体に乗リ、出撃した。

シユワルビネガー「いくぞ、レッドゴリラ団！突撃だ！」

獣人「ちよつと待った、監督！何か来るぜ！」

あ、あれは…!??

―新垣 零だ。

俺達は山賊によつて被害に遭っている村にまで来たが、既に山賊の部隊が展開されていたようだな。

それを見て、俺達は出撃した。

シュワルビネガー「な、何だ!??村の奴等が雇った用心棒か！」

ワタル「お前は、モンジャ村で戦ったシュワルビネガー！」

シュワルビネガー「救世主ワタル！ここまで戦力を集めていたとは…！」

シバラク「そう言えば、あいつ…いつの間にかドアクダー軍団から見えなくなっていたのう」

零「それが、こんな所で山賊団のリーダーをやっているなんてな…」

シュワルビネガー「うるさい！もう俺はドアクダー軍団のやり方についてはいけないのだ！」

龍神丸「何…?」

シヨウ「つて言うけど、やってる事が山賊団じゃそんなに変わらないと思うが…」

獸人「黙れ！うちの監督はすごいんだぞ！」

獸人2「そうだ、そうだ！俺達は監督についていくつて決めたんだ！」

ベルリ「へえ…あいつ、人望があるんだ…」

九郎「確かにこれだけの戦力を揃えた事は褒めてやつてもいいな」

ワタル「シユワルビネガー！ドアクダー軍団を抜けたお前がどうやつて山賊団を作つたんだ？？」

シユワルビネガー「知りたいか、ワタル？ならば、教えてやる！それは、俺が金鉱山を発見したからだ！」

アマリ「金？？」

ホープス「話の途中ですが、何か来ます」

あれは…金色のゴーレム…？

ティア「金色のゴーレムだ！それも、あんなにたくさん！」

イオリ「術士がないという事は逸れゴーレムか」

ホープス「今、分析してみました、教団の使っているものよりもかなり多くの金を含有しています」

…へえ、成る程ね…。

レーネ「何っ？？」

エレクトラ「もしかして、これって…天の助け…」

弘樹「このタイミングでこの地点に現れたって事は…」

カノン「あのシュワルビネガーという人の見つけた金鉱山の金を吸収したと見ました

！

シュワルビネガー「ちよつと待て！じゃあ、あのゴーレムの金は俺のものじゃないか

！

優香「いいえ、それは違うと思います」

しんのすけ「あのゴーレムを放っておいたら、村の人達が困るゾ！」

一夏「しんのすけの言う通りだな」

ゼロ「正義の味方のエクスクロスとしてはゴーレムも退治しないとな」

シュワルビネガー「お、お前等！俺の大事な金を！」

甲児「心配するな！お前も一緒に退治してやるさ！」

海道「今日は人助けと金儲けがいっぺんにできそうだぜ！」

シュワルビネガー「そ、そうはさせるか！金のゴーレムは絶対に渡さないぞ！」

マスターテリオン「貴様のものではない」

アイーダ「欲しいものは奪っていく…。ふふ…まるで本当の海賊になったみたいですよ

ね」

トビア「それなら、海賊らしく…」

ゴークイレッド「いただくぜ！」

メル「…いい、いやいや！何か皆さん、理由を無理矢理こじつけてますけど、これは流石に…」

零「何言ってるんだよ、メル」

弘樹「俺達は人助けをするだけだ」

アスナ「やましい事なんて、何も考えてないわよ」

メル「…え、いや…でも…」

優香「メルちゃん…」

メル「は、はい…？」

優香「つべこべ言わずにやるのよ！」

メル「りよ、りよりよりよ…了解しましたですー!!？」

さあ、戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VSウォルンタス〉

アスナ「ここが稼ぎ時って所ね！」

零「ああ……。容赦なくいたただく！一機残らずな！」

アスナ「（私が言えた事じゃないけど、目の色が変わりすぎよ、零……）」

龍王丸の攻撃でシュワルビネガーの魔神はダメージを負った。

シュワルビネガー「う、うおおおおおっ！お、俺は必ず帰ってくるぞおおっ！！？」
シュワルビネガーの魔神は爆発した……。

ヒミコ「やられちゃったのか？」

幻龍斎「いや、脱出したウラ」

ワタル「ドアクダー軍団を抜けたんなら、真面目に働けばいいのにね」
終わったな……。

レーネ「山賊団ならびにゴーレムの壊滅、確認しました！」

エレクトラ「これで私達の抱えていた問題の殆どが解決するでしょう！」

倉光「そ、そうか……」

ネモ船長「それは良かった……」

ワタル「ところでシュワルビネガーは……？」

ヒミコ「あそこ、あそこ！見つけた！」

…ん？なんだアレ…？

ワタル「え！あれって…!?？」

戦闘を終えた俺達はシュワルビネガーがいる場所まで来たが…。

どういう事だ、これは…？

？「…」

ワタル「シュワルビネガー…なの？」

シュワルビネガー「少し前は、そんな名前で呼ばれていたような気がします」

姿が変わりすぎだろ…。

何かの罠か…？

シバラク「よくわからんが、ドアクダーによつて姿を変えられていたのか…？」

クラマ「だろうな。ついでに精神制御も受けていたらしい」

そのパターンか。

シュワルビネガー「本来の私は、工事の現場監督をやっております」

獣人「道理で穴掘りが上手いと思つた！」

獣人2「だから、監督って呼ばれるのにも慣れてたんだ！」

エイサツプ「ドアクダーに姿を変えられていたのはわかつたけど、それがどうして元

に戻つたんだ？」

ナディア「ク라마みたいに呪いが解けたようなものなの？」

ク라마「多分、それだな。ワタルに負け続けて、ドアクダー軍団にいるのがイヤになって…。その結果、ドアクダーの精神支配から逃れたんだろうさ」

トッド「もしかして、ドアクダー軍団の連中つてのは、みんな、姿を変えられてるのか!?？」

零「その可能性が高いですね」

ワタル「あの界層ボス達も元は普通の人間だったのか…」

幻龍斎「あいつ等も完全に負けを認めれば、シュワルビネガーのようにドアクダーの支配から逃れる事が出来るかも知れんウラ」

グランデイス「要するにぶん殴って目を覚まさせりやいってわけか」

ハンソン「じゃあ、やる事は変わらないね」

サンソン「余計な遠慮はいらないって事だな」

ワタル「よおし！ドアクダーを倒して、みんなを元の姿に戻すぞ！」

シュワルビネガー「では、少ないですが、レッドゴリラ団の蓄えも使ってください」

トオル「いいんですか!?？」

シュワルビネガー「もちろんです。もつとも金のほとんどは、あのゴーレムが吸収してしまいましたか…」

獸人「か、監督……！それを渡しちまったら……」

獸人2「レッドゴリラ団は解散なのか!?!?」

シュワルビネガー「今日から、我々は土木工事を請け負うレッドゴリラ組に転職だ。みんなには社員として働いてもらう。ちゃんと給料も出すから心配するな」

獸人「監督……」

シュワルビネガー「私についてくると言った言葉はもう無効かな?」

獸人2「そんな事はねえ！これから監督の下で働かせてもらうぜ！」

シュワルビネガー「ありがとう。みんなと一緒に頑張っていこうな」

シバラク「これにて一件落着だな」

ワタル「虎王……。もしかしたら、君もドアクダーに心を操られているのかな……。僕は君と、もう一度友達になると決めただ……。だから、君との戦い……必ず勝ってみせるぞ……」

第63話 正義と盟友の名の下に

ードン・ゴロだ。

私はドアクダー様の前にいた。

ドン・ゴロ「…ドアクダー様…。あのアンチスパイラルなるものを呼び寄せたのは、どの様なおつもりですか？」

ドアクダー「…」

ドン・ゴロ「奴等の目的は、世界そのものの破壊です。第一波は撃退したものの、このままでは…」

ドアクダー「構わん。そのつもりで、あのメッセンジャーを覚醒させたのだ」

ドン・ゴロ「何と…?!？」

ドアクダー「世界は創り直せばいい。暗黒龍が復活すれば、何も問題ない」

ドン・ゴロ「アル・ワース創世をやり直すと…?」

ドアクダー「その通りだ。世界を闇で塗り潰すには、それが一番手っ取り早い。そのためには魔徒教団と決着をつけねばならんがな」

ドン・ゴロ「あの者達を、そのための生け贄にすると？」

ドアクダー「そうだ。悲しみや苦しみは、いい餌になる。あの女達の処刑は地脈の上でやるようにしろ」

エグゼブ「その役目：私が承りましょう」

ドアクダー「エグゼブか？」

エグゼブ「ドラマチックかつ悲劇的な結末は我々としても望む所ですしね」

ドアクダー「いいだろう。任せる」

カイザーベリアル「それなら、俺様も手を貸すぜ」

ドアクダー「ウルトラマンベリアル……」

カイザーベリアル「丁度いい手駒の怪獣が出来たんだよ。そいつを試したい……。ダークゴーネ、お前が行け」

ダークゴーネ「かしこまりました、陛下」

カイザーベリアル「ゴゴール、てめえも実験体を試したいんだろ？」

ゴゴール「実験体というより、過去に実験体にしたものを再び、洗脳したという事です」

カイザーベリアル「別にどつちでもいいじゃねえか」

ドン・ゴロ「エグゼブ殿……。虎王様は彼女達に懐いておりました。くれぐれも、その

事はお忘れなく」

エグゼブ「フフ…そうでしたな。ならば今回の件は、魔界王子の甘さを断つ、いい機会となるでしょう」

ドン・ゴロ「…！」

何…!??

エグゼブ「暁という少年の事もありますので、素晴らしいシヨールになる事は間違いありませんね。それにドアクター様は私に任せるとおっしゃいました。ですので、私の流儀でシヨールを盛り上げさせていただきます」

この男…。異界人でありながら、完全な闇の使徒だ…。何故だ…? 何故、平和の世界から来た人間がこのような闇を抱えている…?」

ーマリナ・イスマイルです。

私は空中戦艦ブランカのブリッジでエグゼブさんから話を聞きました。

シーラ「…」

リリーナ「…」

イチヒメ「…」

サリー「…」

マリナ「…」

アトラ「…」

エグゼブ「そういうわけで、お嬢さん方の処刑は、この私がプロデュースする事になった」

シーラ「お前は何者か？」

エグゼブ「私の名前はエグゼブ…。闇に生きる者…とでも名乗っておこう。出身は平和の世界だ」

イチヒメ「平和の世界…?」

アイラ「このアル・ワースを支える複数の世界の一つです。彼やサリーさんは平和の世界から、シーラさんとリリーナさんは革命の世界から、アトラさんと暁君は鉄の世界から、おイチさんは戦の世界から、マリナさんは対話の世界から…そして、私は激闘の世界からアル・ワースに來ています」

エグゼブ「流石はアイラ様だな…。私が言おうとした事を全て言われてしまった」

シーラ「お前はアル・ワースの構造を理解しているのか？」

エグゼブ「故に色々と出来る事がある。ドアクダー氏に渡りつけたのも、その一つだ」
パープル「エクセレント！流石はミスター・エグゼブだ」

エグゼブ「パープル…。私は、君のパフォーマンスを気に入っていてね…。彼女達の処刑も君に任せようと思っっている」

パープル「光栄だね。あの目障りな旋風寺 舞人が最高に悔しがるステージを用意するよ」

エグゼブ「期待している。彼の正義の心が碎ける様を見たがっっている方もいるしな」
リリーナ「あなた達は異世界に来て、一体何をしています？戦いを広げる事に何の意味があるのですか？」

エグゼブ「私達の求めるもの…。それは混沌だ」

マリナ「戦いにより人の心が荒む事がお望みという事ですか？」

エグゼブ「その通り。ドアクダーも、そのために君達を処刑し、怒りと苦しみと悲しみで大地を満たそうとしている」

リリーナ「マリーメイアは、どこにいますのですか？」

エグゼブ「彼女は別の使い道があるので、まだドアクダーの下にいる。では、パープル…。後は任せるぞ」

パープル「了解だ、ミスター・エグゼブ。最高のステージを期待してくれ」

エグゼブ「フフ…楽しみにしている」

そして、エグゼブさんは立ち去りました…。

パープル「…お前達の処刑には、とびっきりのゲストを招待する」
マリナ「それは…?」

パープル「エクスクロスだよ。旋風寺 舞人の絶望に歪む顔が今から楽しみだ」

サリー「舞人さん…」

パープル「お前に危害を加えようとしたら、あいつはかなり動揺していたからな。処刑と気けば、仲間と共にすっ飛んで来るだろう」

サリー「…」

パープル「そうだ！泣け、嘆け！自らの境遇を呪え！それこそがステージを彩る！」
暁「紫色の人…サリーを泣かしたな…」

パープル「何だ、その反抗的な目は…?お前、今自分がどんな状況にあるか、わかっているのか？」

アトラ「やめなさい、暁！」

暁「わからない…。でも、俺、お前の事嫌いだ…!」

パープル「…ほう。やはり、三日月・オーガスの子供だな…。まあ、お前達を奴の目の前で殺せば、奴も苦しむだろうな」

暁「父さんは…負けないよ」

アトラ「暁…」

パープル「その生意気な言葉を言えるのも、最後だと思えよ、ボーイ」
リリーナ「あなたは…最低の人間です」

パープル「そんなありきたりの言葉じゃ、俺の心は動かないよ、レディ。俺はパープル…！このアル・ワースに咲いた、紫色の悪の華だ！」

イチヒメ「あなたは華などではありません」

パープル「では、何だと言うのかな、イチヒメ殿？」

イチヒメ「兄上の様に言うと、あなたは野蛮な猿同然です」

パープル「何だと…？」

イチヒメ「外道もここまでいくと、醜きものですね」

パープル「…どうやら、処刑の前に死にたいようだな…！」

イチヒメ「！」

カエサル「我が妻に手を挙げるのはやめてもらおうか」

カエサルさん…。

イチヒメ「カエサル殿…」

カエサル「イチヒメに手を挙げると言うのであれば、私が相手になるが…どうする？」

パープル「…ちっ！わかったよ…。だが、今回のショーにはお前も参加してもらおうぞ、

カエサル」

カエサル「了解した……」

パープル「フフフ……！今回のショーが楽しみだ……！」

シーラ「（この禍々しいオーラ……。これが、この男に力を与えているのか……）」

ーヴォルフガングじゃ。

イツヒ「……なあ、今度の作戦……聞いたか？」

リーベ「エクスクロスの目の前で女の子達を処刑するんだってな……」

デイツヒ「俺達……そんな作戦に参加しなきゃならないのかな……」

オードリー「出来る事ならば、私も拒否したいと考えています」

チンジャ「金儲けのためなら非道な事もやってきましたが、流石にこれは……」

ホイ・コウ・ロウ「とは言うが、ワシ達自身が生きていくためには仕方ないネ」

ミフネ「情けない話だが、同意する……」

ビトン「ドアクダーとそれに通じるパープル……あたくし達の想像を超えたような力を

持つてるし……」

ヴォルフガング「どいつもこいつも情けないのう」

ホイ・コウ・ロウ「口だけなら何とでも言えるネ！」

ビトン「そうよ！あたくし達に力さえあれば……！」

ミフネ「あのパープルのような青二才の好きにはさせないのに……！」

ヴォルフガング「その力を用意すると言ったら？」

ビトン「え……？」

ヴォルフガング「ワシはBD連合の機体の整備をしておるからな。これまでの全ての戦いのデータを手に入れる事が出来る。パープルの持つ超常的な力……魔のオーラについてのデータも分析する事が出来た」

ホイ・コウ・ロウ「あれの正体がわかったのか？」

ヴォルフガング「……残念ながら、それには失敗した……」

ミフネ「ぬか喜びさせおって！」

ヴォルフガング「だが、あの魔のオーラを破る方法については目処が立った」

ビトン「本当なの、それ……？」

ヴォルフガング「ある者のお陰でな。理論だけだが、理解は出来た。そして、それを応用した起死回生のシステムの完成にはまだ時間がかかる」

ミフネ「結局、ぬか喜びではないか！」

ビトン「ちよっと待って……！そのある者って、誰なの？」

？「私です」

何だ、来ておったのか。

ミフネ「女子ではないか！」

ホイ・コウ・ロウ「何者ネ？」

タミコ「金有　タミコ……。タミコ、タミ、タミさん。好きに呼んでください」

ヴォルフガング「彼女が魔のオーラについての理論を共に考えてくれたんだ」

ビトン「だだの女にしか見えないけど……」

ヴォルフガング「こう見えても彼女は自ら、未来からこのアル・ワースに來たそうなのじゃ」

ホイ・コウ・ロウ「未来……!?？」

ミフネ「何故、また……？」

タミコ「ある人を助けたくて、未来から來たんです。私の……婚約者を……」

ビトン「まあ！そんな若くて婚約者がいるなんて！」

ホイ・コウ・ロウ「その女の事はどうでもいいネ！もうすぐワシ達に出撃命令が下るネ！それまでに何とかならんのか!?？」

ヴォルフガング「金有　タミコと共に努力はしてみる……。だが、もしもの時には、お前達に時間稼ぎを頼む事になる」

ホイ・コウ・ロウ「……」

ミフネ「…」

ビトン「…」

タミコ「皆さん…」

ヴオルフガング「まあ…当てにはしとらんよ。正直に言えば、ワシもパープルとその背後にいる人間が怖いからな。だが、ワシにも科学者の意地がある…。このままワシの頭脳を奴等の食い物にされたまままで終わるつもりはないのでな」

ビトン「…勝算はあるの？」

タミコ「切り札は用意しました。とびつきりのエースを…。（私もやれるだけの事はやるわ…。だから、後はお願ひね、しんちゃん…!）」

第63話 正義と盟友の名の下に

―新垣 零だ。

俺達はパープルが指定した場所に来た。

甲児「パープルが指定したのは、この場所か…」

舞人「……」

グレートマイトガイン「大丈夫か、舞人？」

舞人「心配はいらない、ガイン。俺は必ずパープルを倒して、サリーちゃんを救い出す」

シヨウ「そうだ、舞人。余計な事は考えずに戦いに集中しろ」

マーベル「シーラ様とリリーナさん、アトラさんとイチヒメ様、アイラ様、マリナ姫にサリーちゃん……。わざわざ私達の前で処刑しようとするなんて……」

マリア「私達を誘き出すための罠なの……？それとも、ただの悪趣味なだけ……？」

弘樹「そんな嫌味な奴がいるなんて、信じたくないですけどね」

キオ「でも、もしパープルが彼女達を人質に取り、降伏を迫ったら……」

アキト「今はそれを考えても仕方がない」

ルルーシュ「その通りだ。出来る限りの備えはした。後は出たとこ勝負だ」

バーン「らしくないな、ルルーシュ。貴様が、その様な事を言うとはな」

ルルーシュ「奴等の悪意は、俺の計算をも上回る……。別の言い方をすれば、奴等の思考は既に人間のものでない……」

舞人「(サリーちゃん……)」

シヨウ「(シーラ・ラパーナ……)」

三日月「(アトラ…)」

由木「(アイラ様…)」

ヒイロ「(リリーナ…)」

刹那「(マリナ…)」

ノブナガ「(イチ…)」

しんのすけ「来たゾ！」

BD連合とクオ・ヴァデイスが来たか…！

パープル「よく来たな、エクスクロス。ここがお前達のラストステージだ」

舞人「パープル！約束通り、俺達は来たぞ！サリーちゃん達を開放しろ！」

パープル「寝言は寝て言え、旋風寺 舞人。俺は、お前達に来いとは言ったが、生け贄達を開放するとは一言も言っていないぞ」

舞人「お前という男は…！」

チャム「シヨウ！パープルの戦艦から、シーラ様のオーラを感じるよ！」

シヨウ「この場にシーラ・ラパーナ達がいるのは確かという事か…！」

パープル「心配するな。彼女達を人質にして、お前達に降伏を迫るなんていう野暮な真似をするつもりはない」

ウー「何…!?？」

パープル「俺の望みは、ただ一つ！お前達には、大切な人も救えず、無様に敗北する絶望を与える事！そして、彼女達には自分を助けに来た者達が目の前で殺される光景を見せ、絶望を与えてから処刑する事だ！」

青葉「こいつ…完全に歪んでやがる！」

零「あいつの自信…あの力が根拠なのか…!!?」

パープル「さあ、見るがいい！これが魔のオーラだ！」

魔のオーラを発動したのか…!!

九郎「この間のインチキ回復力か！」

パープル「もう奇跡は起こらない。お前達には方に一つの勝ち目もないぞ。ガイウス・ユリウス・カエサル、ヴォルフガング、カトリーヌ・ビトン、ショーグン・ミフネ、ホイ・コウ・ロウ…。魔のオーラの洗礼を受けていないお前達は自力で頑張るのだな。今日は決戦だからな。逃げようとしたら、後ろから撃つ。特に、カエサルはな」

カエサル「その様な事は思っていないさ」

ミツヒデ「(何故、奴はイチヒメ様の処刑を見逃しているのだ…?)」

ホイ・コウ・ロウ「(好き勝手言ってくれて…!ワシらは鉄砲玉扱いネ!)」

ミフネ「(こうなれば仕方ない…!エクスクロスを叩き、活路を開く!)」

ビトン「(それしか方法はないみたいね…)」

ヴォルフガング「あと少し…。あと少しだけ時間があれば…」

パープル「さあ、絶望のステージの始まりだ！全機、攻撃開始！エクスクロスを壊滅させ、絶望を乙女達に！」

ジユドー「どうすりゃいいんだよ…?!?!」

シーブック「あの魔のオーラの力を得ている奴は攻撃してもダメージを与えられない…！」

ノブナガ「まずはカエサル達を叩き、敵の戦力を減らすしかあるまい！」

舞人「やるしかない…！きつと戦いの中でパープルに隙が生まれるはずだ！」

ヒイロ「…ターゲット確認…！」

三日月「やるよ…！」

刹那「目標を…駆逐する…！」

海道「後悔させてやるぜ！」

シヨウ「行くぞ！俺達がやらなければならない、必ずシーラ様達を救う方法が見つかる！」

舞人「待っていてくれ、サリーちゃん！俺は…俺達は必ず君達を救い出す！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 由木VS初戦闘〉

ハリケーン「由木、アイラ様を助け出すために力を貸してくれ！」
由木「分かっています！必ず、助け出しましょう！皆さん！」

〈戦闘会話 ノブナガVS初戦闘〉

ノブナガ「カエサルの方策など知らん…。イチ、今一度、俺は破壊王としてはなく、一人の兄としてお前を助け出す…。それが、俺に出来るせめてもの事だ！」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「マリナ・イスマイル…。俺は貴方に何度も助けられた…。今度は俺が助ける番だ…。！」

〈戦闘会話 三日月VS初戦闘〉

三日月「アトラと俺の子供を処刑させたりなんかしないよ…。父親である俺が助け出すからね…。！」

戦闘からしばらく経った時だった。

龍神丸「気をつけろ、ワタル！奴が来るぞ！」

ワタル「あれは……！」

邪虎丸……!!?」

虎王「やいやい、パール！サリー達を渡せ！」

パール「虎王様……。勝手に言うのはやめてもらおう。あの女達を処刑しろと命じたのはあなたのお父上のドアクダーであり、俺の主のエグゼブ様だ」

舞人「エグゼブ……。前にも聞いたが、それがパールのバックにいる人間……」

虎王「そんな事知るか！あの女達を殺す事は俺様が許さない！大体、カエサル！イチはお前のヨメなのだろう！いいのか!!?」

カエサル「……」

パール「では、この俺と戦うか？お父上の命令に逆らって」

虎王「それは……」

パール「あなたの戦うべき相手は別だろう？ほら……お待ちかねだよ、救世主が」

虎王「ワタル……」

ワタル「決着をつけよう、虎王」

シバラク「いいのか、ワタル!!?」

クラマ「事情はわからんが、虎王はサリーちゃん達をパールから取り返そうとしてるんだぜ」

ワタル「だからだよ」

幻龍齋「何と!?？」

ワタル「だから、ここで虎王と決着をつけるんだ!」

アンジユ「わかつたわ、ワタル。頑張りなさいね」

ジョーイ「ワタル君! 虎王の事は君に任せるよ!」

零「お前がやりたい様にやれ! 俺達はそれをフオローする!」

アマリ「頑張ってください、ワタル君。私達は、まだやらなきゃならない事が沢山ありますから」

ワタル「うん!」

虎王「望む所だぜ、ワタル! ここで俺様がお前を倒せば、父上も俺様を認めて女達の処刑をやめるかも知れない! 行くぜ、ワタル! ここでお前との戦いも終わらせる!」

ワタル「来い、虎王! 僕はもう迷わない!」

ヒミコ「頑張れ、ワタル!」

ワタル「虎王! お前ともう一度、友達に戻るため僕はお前を倒す!」

虎王「言ってくれるじゃねえか、ワタル! 俺様の本当の力を見せてやる!」

ワタル「全力で来い、虎王! 僕は、その上を行ってやる! この正義の心で!」

俺達は戦闘を再開した。

ホイ・コウ・ロウの乗るシャオマイにダメージを与えた。

チンジャ「ダメです、ホイ・コウ・ロウ様！これ以上は無理です！」

ホイ・コウ・ロウ「こうなれば死んだふりネ！パールの目を誤魔化すにはそれしかないネ！」

チンジャ「かしまりました！では、煙幕と共に退散！」

シャオマイが爆煙に吞まれたか…。

グレートマイトガイン「アジアマフィアのホイ・コウ・ロウの最期か…」

ブラックマイトガイン「どうだろうな。あの男のしぶとさは台所に現れる黒い昆虫並みだからな。（それでも私を造ってくれた人間だ…。生き延びて改心する事を願うぞ…）」

カトリーヌ・ビトンの乗るスノービーにダメージを与えた。

ビトン「や、やだ！こんな所で終わるなんて絶対にやだ！」

オードリー「では、どうします？」

ビトン「もちろん、逃げるのよ！この混乱の中なら、パールも追ってこないでしょ！」

スノービーは撤退した…。

サンソン「あの姐さんも、しぶといな…」

ハンソン「ほんと、うちの姐さんといひ勝負だ」

グランデイス「じゃあね、カトリーヌ・ビトン…。もう会う事もないだろうけど、達者でね」

シヨーグンロボにダメージを与えた。

ミフネ「ま、負けた…！こ、ここで辞世の句を…。男は黙つて…！退却だ！」

シヨーグンロボは撤退した…。

シバラク「何じゃ、あれは…。逃げるのなら辞世になつたらんではないか」

幻龍斎「良いではないか。人間、生きてこそ花…というものウラ」

ヒミコ「父上はサルだけだな！」

シユタルク4126にダメージを与えた。

イツヒ「ヴォルフガング様！もう戦えません！」

ヴォルフガング「丁度いい！退却するふりをして、例の装置を仕上げるぞ！」

シユタルク4126は撤退した…。

舞人「（ヴォルフガング…。ジョーに秘密の通信を送ったのはお前なのか…）」

〈戦闘会話 ノブナガVSカエサル〉

ノブナガ「イチが処刑されるとお前は知っているのか？」

カエサル「勿論、わかっているさ」

ノブナガ「…俺はお前の事を買いかぶりすぎたようだな」

カエサル「それは心外だな、義兄上」

ノブナガ「お前にそう呼ばれる筋合いはない…！」

ザ・フルルの攻撃でクオ・ヴァデイスはダメージを負った。

カエサル「これでは私の立場も危ういな。混乱に乗じて、退かせてもらおう
クオ・ヴァデイスは撤退した…。」

ノブナガ「（カエサル。愛していたイチを前で何を企んでいる…？）」

アレクサンダー「（奴の考えは未だわからぬ…）」

前線にいる奴等を全て倒した時だった。

ウイル「来るぞ！」

現れたのはダークゴーネとレギオノイド、ダークロプス、スクラッグ兵士部隊だった。ゼロ「ベリアルの奴等が何の用だ!?？」

ダークゴーネ「我々がドアクダー軍団と共にいる事は分かりきっていたはずですよ。それに実験体を試してみなかったのです」

ミラーナイト「実験体…？」

ダークゴーネ「ええ、来なさい」

現れたのは…巨大な怪獣と一体のスクラッグだった。

つて…あのバカデカイ怪獣は…!

グランデ「…おいおい、冗談でしょ」

レイモン「タ、タイラント…なのか…？」

ヒュウガ「だが、何だ、あの大きさは!?？」

ダークゴーネ「あなた方が倒したタイラントを少々、改造させていただきました」
グレンファイヤー「少々って、レベルじゃねえだろ、あれ…!」

EXゴモラ「グルウウウウ…!」

ゼロ「新たにゴモラとジェロニモンの部分が追加されてやがる……これは強敵になるぞ！」

ウイル「……」

ジョーイ「ウイ、ウイル……！あれって……！」

ウイル「……またか、スクラッグ……！お前達はまた、俺の友人を駒とするのか！どうして何だよ、ニツク！」

ニツク「……」

サイ「ニツク……お前……！」

リナ「酷い……！」

ウイル「ゴゴール……！許さないぞ！」

ジョーイ「落ち着いて、ウイル！僕達でニツクを助け出そう！」

ウイル「ジョーイ……」

ジョーイ「だから……力を貸して！」

ウイル「……すまない」

グランデ「あの馬鹿でかいタイラントは俺に任せてくれればいいさ！デカくなった所で俺とレッドキングに勝てないって事を教えてやるよ！」

EXタイラント「キャアアアアン!!？」

ダークゴーネ「というわけなので、そちらはシヨアの続きをお楽しみください」
パール「盛り上げ感謝するよ、ベリアル銀河帝国」

ダークゴーネ「いえいえ、エクスクロスの方々が絶望を見る事は我々も望む事なので」
ゼロ「そう簡単に絶望するわけねえだろ！」

優香「こうなったら、勝つまで戦うわ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　ヒーローマンVSニック〉

ニック「…」

ジョーイ「ニック…。今度こそは必ず、君を助けてみせる…！行こう、ヒーローマン
！」

ヒーローマン「ムウン！」

〈戦闘会話　ウイルVSニック〉

ニック「う、うう…！ウ、ウイ、ル…！」

ウイル「微かにニックの意識がある…！待っている、ニック！お前をスクラッグの呪

縛から解放してやる！」

ウイルの攻撃でニツクはダメージを負った。

ニツク「……！あ、あアアアツ……！」

ウイル「ニツク！」

ニツク「俺は……俺は……！僕はああああつ!!？」

ニツクはウイルに掴みかかった。

ジョーイ「ウイル！」

ニツク「来るな！」

ニツクの奴……！

ウイル「ニツク……。お前は俺の事をよく思っていないかったんだろ？」

ニツク「……！」

ウイル「俺は……お前にも謝らないといけない……。俺の傲慢な心がお前を苦しめてしまった……。俺のバカな考えが、お前をスクラッグにしてしまった……。すまない、ニツク」

ニツク「……今さら……今さら何を言っているんだよ！もう、遅いんだよ……！僕達はスクラッグとしか、生きる事が出来ないんだ！一人でしか……！」

ウイル「俺がいる……！」

ニツク「ウイルス…」

ウイル「もうお前を苦しめたりはしない！それが俺の償うべき罪だからだ！だから、ニツク…。戻ってきてくれ…！」

ニツク「本当に…ウイルスはズルイよ…」

ウイル「そうだな、俺はズルイ男だ」

ニツク「でも、そんなウイルにみんなはついてくる…。僕も、その一人さ」

ウイル「…ありがとうな、ニツク」

ニツクの洗脳が解けたみたいだな…。

スクラッグ兵「ゴゴール様の洗脳から逃れたとでもいうのか…!??ならば、ここで…！」

一体のスクラッグ兵が二人に攻撃を仕掛けた。

リナ「お兄ちゃん！ニツク！」

ウイル「あまい…！」

ウイルがニツクと共にカウンター攻撃を仕掛けた。

ウイル「やらせるものか…！ニツク、援護を頼む！」

ニツク「わかったよ、ウイル！喰らえ！」

ニツクは二丁のビームガンを乱射し、スクラッグ兵に直撃させ、触手を突き刺した。

ウイル「やるな！俺も負けてはいられない！はあああつ！」

ウイルはニツクの触手によって、動きを封じられたスクラッグ兵にナギナタで攻撃し、ブレイドトンファーで斬りつけた。

ニツク「ウイル、これで決めて！」

ウイル「任せろ……！これで……終わりだあああつ！！？」

ニツクは触手を動かし、スクラッグ兵を地面に叩きつけ、それを見たウイルは右手にプラズマを纏わせ、スクラッグ兵を殴り飛ばした。

スクラッグ兵「うがあああつ！！？」

ニツク「流石はウイル！」

ウイル「ニツクもなかなかだったぞ」

スクラッグ兵「な、なんとという力だ……！」

スクラッグ兵を倒した。

ジョーイ「ウイル……ニツク……」

サイ「何て連携しやがるんだよ、あの二人！」

ニツク「当然さ！」

ウイル「俺達もジョーイとヒーローマンには負けてはいられないからな」

ダークゴーネ「そうですが、ならば役立たずはここで処分するしかありませんね」

ニツク「お前に何て負けるかよ！」

ウイル「ニツク、お前は俺の援護を頼む！」

ニツク「わかったよ、ウイル！」

ゴークイレッド「へっ、ダークゴーン！お前はウイルとニツクを甘く見ていた様だな」
ゴークイグリーン「例え、スクラッグになつたとしても決して二人の友情は消えな
いって事だね」

ゴークイシルバー「なんかもう、感激だよ！」

ウイル「や、やめろ…！恥ずかしいだろう！」

ジョーイ「ふふっ」

ウイル「笑ってんじやねえぞ、ジョーイ！」

ジョーイ「ごめんごめん！（ニツクが戻ってきた事でウイルも前のウイルに戻つてき
ている…。よかったね、リナ）」

九郎「まだまだ行くぞ、二人共！」

ウイル「当然だ！」

ニツク「僕達の力…まだまだ見せてあげるよ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 EXゴモラVSEXTাইラント〉

レイモン「改造されたタイラント……！強敵には代わりはない！気をつけろ、ゴモラ！」
EXゴモラ「キシヤアアアン!!？」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSEXTাইラント〉

EXTাইラント「ギヤアアアアン!!？」

グランデ「改造されてまでご苦労な事だぜ、タイラント……。いい加減、鬱陶しいだよ！」

〈戦闘会話 ZEROVSEXTাইラント〉

ZERO「なんてデカさだ……！だが、こんなもんで怯むウルトラマンゼロじゃねえ！行くぜ、デカタイラント！」

EXレッドキングの攻撃でEXTাইラントを撃破した。

EXTাইラントはその場に倒れる。

ジャンボット「終わったか……」

グランデ「…あばよ、タイラント」

シヨウ「…！ま、待て！タイラントの周りに怨念のオーラが…！」

怨念のオーラがタイラントの中にへと入っていくだと…！！？

怨念のオーラ達がEXタイラントの中に入ると EXタイラントは姿を変えた。

もう肉のない…いわば骨の怪物へと…。

さらに、怨念の影響か、空が雲に覆われた。

グランデ「タ、タイラント…！！？」

ヒュウガ「何だ、あの姿は…！！？」

グレートマイトガイン「あれではまるで…」

舞人「骨のゾンビだ…！」

チャム「怨念のオーラのせいで暴走してる…。怖いよ…！」

ダークゴース「ほう…。怨念を取り込むところなるのですか。興味深いものですね」

ゼロ「ダークゴースでめえ…！タイラントだつて生きているんだぞ！」

ダークゴース「敗北した怪獣の生死など興味ありません。ただ陛下の為に使えるか、

使えないか…。それだけです…！」

レイモン「許さないぞ、ダークゴース…！」

グランデ「来いよ、タイラント…。お前の全てを俺にぶつけて来い」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 EXゴモラVSEXTাইラント(デスポーン)〉

レイモン「タイラントの怨念がここまで強いなんて…だが、負けるわけにはいかない！お前を止める！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSEXTাইラント(デスポーン)〉

EXTাইラント(デスポーン)「ガオアアアッ!!？」

グランデ「…タイラント…。他の怨念まで取り込むとはな…。お前は本当に息の根を止めるしかないようだな…！覚悟しろよ！」

〈戦闘会話 ZEROVSEXTাইラント(デスポーン)〉

ゼロ「ここまで怨念の強いタイラントを見るのは初めてだぜ…！くそッ！俺が浄化の力を使えていれば、お前を助けられるのに…！すまない…！」

俺達はEXTাইラント(デスポーン)を倒した。

零「こ、今度こそ…！」

サコミズ「いいや、まだだ……！」

倒れたEXタイラントにまたもや怨念のオーラが取り憑いた。

EXタイラント（デスポーン）「ギヤアアアアツ!!?」

EXタイラント（デスポーン）が立ち上がった……!!?

ヒカル「う、嘘っ!!?」

ガイ「まだ立ち上がるのかよ……!!?」

イズミ「しつこいってレベルじゃないね、これ……！」

ダークゴーン「フフフ……。あなた達では一生、デスポーン化したタイラントを倒す事は出来ませんよ」

グランデ「舐めんじゃねえ！レッドキング、こうなったら、お前の技を全てぶつけてやれ！」

EXレッドキング「ギヤアアアアツ!!?」

果てぬ怨念がある限り……EXタイラント（デスポーン）を倒す事が出来ない……。どうすればいいんだよ……！

〈戦闘会話

EXレッドキング V S EXタイラント（デスポーン）〉

EXタイラント(デスボーン)「グウウウウツ……！」

EXレッドキング「キヤアアン」

グランデ「……ああ。わかつてるき、レッドキング。タイラント、お前が何度蘇ろうと俺はお前を倒す……。元お前を使っていた俺がな」

EXレッドキングの全ての技をぶつけ、EXタイラント(デスボーン)を倒したが、またもや立ち上がる。

ゴークカイブルー「キリがない……！」

青葉「倒しても蘇る敵と攻撃してもダメージを回復する敵達……」

ヒナ「こんな敵に勝てるの……?!?!」

ディオ「何か……何か方法があれば……！」

零「……蘇る……怨念……骨のゾンビ……」

アスナ「零……？」

零「……怨念によつて、覆われた雲……。遮られた太陽……。そういう事か！」

優香「な、何がそういう事なの？」

零「万丈！日輪の光、頼めるか？」

万丈「構わないが……どうするつもりだい？」

零「いいから、頼む！」

万丈「……わかった！日輪は我にあり！行くぞおっ！」

ダイターン3から光が放たれるとその光を浴びたEXタイラント（デスポーン）に取り憑いていた怨念は消え、EXタイラントも苦しみ出した。

カロツサ「タイラント、苦しんでる……！」

メリツサ「どうして……？」

シン「そうか……！今のタイラントは幽霊同様……つまり、陽の光を浴びれば、弱体化するって事か！」

零「ああ。アル・ワースの太陽は弱いが、怨念には効く……。だから、奴等は雲で覆ったんだ」

アマリ「……零君って、凄い……」

優香「零が凄いのは当たり前よ。何てったって、私の未来の旦那様だからね！」

アマリ「れ、零君は私の旦那様になるんです！」

アスナ「……。（私って、入る隙がないよね……）」

零「お、お前等、こんな時に何言ってるんだ？！アマリも無理しなくていいぞ！」

アマリ「む、無理なんてしてないわよ……」

ホープス「お話はこちらまでにしましょう。あれを見てください」

怨念が消えたタイラントの姿が元のタイラントに戻っていた。

ダークゴーネ「バ、バカな…!!? タイラントが改造前に戻っただと…?」

レナ「これで弱体化したはずよ!」

ケイ「倒すなら…今だよ!」

グランデ「…」

ダークゴーネ「ならば、タイラント!あのダイターン3という機体を破壊しなさい!」

タイラント「ギヤアアアアン!!?」

ダークゴーネの指示を無視し、タイラントは何と、ダークゴーネに攻撃を仕掛けた。

ダークゴーネ「な、何の真似ですか、タイラント!!?」

グレンファイヤー「何だ?仲間割れか?」

ゼロ「いや、違う。おそらく、ベリアル達はタイラントを無理矢理、改造したんだ」

レイモン「その事に腹を立てたというわけか」

ダークゴーネ「…生意気な…!もういいです!あなたも死になさい!」

ダークゴーネはタイラントにめがけて、光弾を放つが、それをEXレッドキングが代

わりに受けた。

EXレッドキング「キヤアアアアン!!?」

グランデ「ぐおっ！」

当然、フィードバックしたため、グランデさんもダメージを受ける。

レイモン「グランデ！」

ジャンナイン「どうして、タイラントを庇ったんだ…?!？」

グランデ「ダークゴーネって言ったか…？勝手な事してんじやねえよ…！こいつを…

タイラントを倒すのは俺とレッドキングだ！お前が手を出すんじやねえ！」

タイラント「！」

ダークゴーネ「誰が倒そうと一緒です！ならば、仲良く、あの世に行きなさい！」

ダークゴーネがEXレッドキングにトドメを刺そうとしたが、それをタイラントが阻

み、ダークゴーネを弾き飛ばした。

グランデ「タイラント、お前…」

タイラント「…」

グランデ「ふっ、お前も俺と同じって事か！」

タイラント「ガアアアアツ!!？」

グランデ「…わかったよ、仕方ねえな！」

グランデさんがネオバトルナイザーを掲げるとタイラントは光となり、ネオバトルナ

イザーの中に入っていった…。

ベルリ「タイラントが…」

ライヤ「バトルナイザーの中に入りました…」

リンゴ「仲間に…なったのか…?」

ケルベス「いいや、違うな。お互いを狙う者同士が手を組んだと見るべきだな」

グランデ「そういうこつた! さあ、やるぜ!」

EXレッドキングはダークゴーネに攻撃を仕掛けた。

グランデ「これまでの借り…返させてもらうぜ! ボコボコにしてやれ、レッドキング

!」

EXレッドキング「ギヤアアアツ!!?」

EXレッドキングは駆け出し、ダークゴーネを何度も殴りまくった。

グランデ「お前も行ってこい、タイラント!」

ネオバトルナイザー『バトルナイザー! モンスロード!!?』

タイラント「キシヤアアアン!!?」

グランデさんはタイラントを召喚して、タイラントは鉄球からロープを出し、ダークゴーネの腕に絡ませ、地面に叩きつけた後、ロープを切り離し、釜で何度も斬りつけ、鉄球で殴り飛ばした。

グランデ「決めろ、レッドキング!」

EXレッドキング「ギャアアアアアッ!!？」

殴り飛ばされ、地面に叩きつけられたダークゴーネ目掛けて、EXレッドキングはフレイムロードを繰り出し、ダークゴーネに直撃させる。

ダークゴーネ「グアアアアアッ!!？」

グランデ「やるじゃねえか、お前等」

ダークゴーネは大ダメージを負った。

ダークゴーネ「この…小癩な…！」

グランデ「タイラントを手元に置けなくなつて、裏切られて、ザマアねえな！」

ダークゴーネ「許しませんよ、キール星人！地獄を見せてあげます！」

グランデ「見るのはどっちだろうな？タイラント、お前はレッドキングの援護役だ！」

タイラント「…」

なんか、渋々了承しているな…。

ユイ「ものすごく嫌そうな顔をしていますね…」

グランデ「可愛くねえ奴だぜ…」

ゼロ「ははっ！流石はグランデの怪獣だぜ！」

グランデ「ゼロちゃん、それどういう意味よ！」

レイモン「そのままの意味合いだ」

グランデ「まあいいぜ！こっから反撃と行くぜ！」
俺達は先頭を再開した。

〈戦闘会話 ウイルVS初戦闘〉

ニック「ウイルス、僕が合わせるから、全力でやって！」
ウイル「任せろ！俺達の力を見せてやるぞ、ニック！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVS初戦闘〉

グランデ「よっしゃあ、盛り上げていくぜ、レッドキング、タイラント。俺を楽しませてくれよ！」

龍王丸の攻撃で邪虎丸はダメージを受けた。

虎王「俺様が…負けた…」

ワタル「そうだ、虎王！勝ったのは僕達だよ！」

虎王「…好きにしろ、ワタル…。救世主に負けたんじゃ、父上に合わせる顔もない…」
ワタル「負けて当然だよ、虎王」

虎王「何っ!?？」

ワタル「だって、虎王は迷いながら戦っていたからね」

虎王「俺様が…迷っていた…」

シバラク「ワタルの言う通り。お主は、サリーちゃん達を生け贄にしようとするドアクターのやり方に疑問を持った。同時に友達であるワタルとの戦いを心のどこかで避けようとしていた…。それが、この結果となった」

ヒミコ「ワタルはトラちゃんやんと戦う事が嫌じゃなかったのか？」

幻龍斎「無論、ワタルも迷っておったウラ」

シバラク「だが、悪を許さぬ正義の心と友達である虎王を救いたいという決意が、その迷いを上回ったのだ」

虎王「俺様が迷っていた…」

ワタル「いいんだよ、虎王…。迷ったって」

虎王「ワタル…」

ワタル「迷ったら、うんと考えてそれで答えを出せばいいんだよ。そして、困った時には仲間…友達に頼ってもいいんだ」

虎王「友達…」

ワタル「虎王…。一緒に答えを探そうよ」

虎王「ああ……！」

邪虎丸がブランカに近づいた……？

パール「何をするつもりだ、虎王!!？」

虎王「俺様は……父上がわからない……。父上のように他人を支配するやり方では誰も喜ばない！そんなのよりも俺様は友達と笑って生きていける世界の方が好きだ！」

パール「血迷ったか！ならば、まずはお前から片付けてやる！」

虎王「そうは行くかよ！」

ブランカのハッチが開いて、邪虎丸が中にへと入っていった。

パール「しまった！ハッチ開放コードが使われたか！」

シヨウ「隙が生まれた！」

刹那「チャンスは、今しかない……！」

ー虎王だ。

俺様はブランカの中にへと入った。

虎王「イチ、マリナ、アトラ、シーラ、リリーナ、サリー、暁、アイラ！俺様と一緒に逃げるぞ！」

リリーナ「虎王君！」

サリー「ワタル君と仲直りしたんですね」

虎王「決闘で負けちまったからな。仕方なく、あいつと一緒に行く事にした」
シーラ「そうですか。それは残念でしたね」

暁「でも、虎王…。いい笑顔している」

アトラ「そうだね」

イチヒメ「良きお顔になりましたね」

すると、ブリキントン達が来た。

ブリキントン「ブリーツ！」

ブリキントン2「ブリーツ！」

マリナ「追っ手が来ました！」

虎王「引っ込んでろ、ブリキントン！俺様は魔界王子、虎王だぞ！」

ブリキントン「ブ、ブリ…!?？」

アイラ「戸惑っています…」

虎王「よし！今のうちに逃げるぞ！」

すると、俺様目掛けて、銃弾が放たれた。

虎王「う…！」

暁「虎王！」

虎王「大丈夫……！こんなのかすり傷だ！」

……パープルか……！

パープル「次は外さないぞ、虎王」

虎王「パープル……！」

パープル「とは言ったもののさすがにドアクターの息子を殺すのはちよつとばかり気が引ける。虎王……。女達を返せば、ここは丸く収めてやるぞ」

虎王「やだね」

パープル「何……」

虎王「俺様は、俺様に優しくしてくれたこいつ等が殺されるのを黙って見ているつもりはない！それに、お前達みたいな世界を破壊しようとする奴よりもワタル達と一緒にの方が楽しいに決まってる！」

パープル「そうか……。ならば、死ね！グッバイ・虎王！」
すると、別の方向から銃弾が放たれた。

ジョー「男のヒステリーはみつともないな、パープル」

パープル「ジョー！それに……」

ジョーと奴は……。

万丈「決着をつける前に君の顔を見てみたくなつたのでね。僕もジョーに同行させて

もらった」

パープル「破嵐 万丈……！貴様達、どうやってここに……？」

ジョー「内通者がいたのは。悪党の中にも、少しはマシな奴がいたって事だ。なあ？
カエサル」

カエサル「混乱に乗じて退き、準備を整える時があつた時点でうまく行くとは思つて
いたが……感謝するよ、金有 タミコ殿」

タミコ「いえ！私だけではないので！」

パープル「カエサル……貴様、よくも……！」

カエサル「申したのであろう、パープル。イチヒメに手を出させはしないと」
パープル「おのれ……！」

万丈「ジョー、虎王、カエサル！ここは僕に任せて、彼女達と先に行け！」

虎王「待てよ！後から出てきて、美味しい所は総取りか！」

タミコ「囚われた女の人達を救い出す事以上の役目があるとは思えないな」
虎王「そ、そうか……」

万丈「さあ、急げ！外でワタル達が待っている！」

虎王「わかつた！見せ場は譲ってやる！」

ジョー「気をつけろよ、万丈！奴は只の外道ではない！」

俺様達は万丈という男にこの場を任せ、リリーナ達と共に走り去った…。

「破嵐 万丈だ。」

僕は金有 タミコという女性と共にこの場に残った。

万丈「良かったのですか？あなたは行かなくて…」

タミコ「行った所で私はもう長く、この世界にはいられないから…」

万丈「…そうですか…」

パール「破嵐 万丈…！ことごとく俺の邪魔をしてくれるな！」

万丈「醜いな…」

パール「何だと!?!」

万丈「元々そういう人間だったのか、それとも魔のオーラに染まったためか…。どちらにしても悪に堕ち、暴力とエゴに支配されたお前は醜い存在だ」

パール「貴様…！それを言うためにわざわざ、ここに残ったのか！」

万丈「そうだ」

パール「！」

万丈「ジョーも言っていたが、魔のオーラやドアクターの力は僕達の想像を絶するよ

うな悪らしい。その下っ端であるお前に宣言する！僕達は…そんな力には絶対に負けないとな！」

パープル「ほぎけ！魔のオーラがある限り、貴様達に勝ち目はない！」

万丈「ならば、パープル…！お前とも決着をつける！そして、その勝利を以て、巨大な悪に対して、僕達は宣戦布告する！」

パープル「いいだろう…！ならば、機体に乗れ！」

パープルは走り去っていった…。

タミコ「さてと、頑張ってるね。万丈君」

万丈「あなたはどうするのですか？」

タミコ「私にはまだやる事があるから…。じゃあね！」

タミコさんは走り去ってしまう。

それを見送って、僕も虎王達の後を追った…。

―新垣 零だ。

ブランカから邪虎丸とクオ・ヴァ・デイスが出てきた。

万丈「待たせたね、みんな」

カエサル「タミコ殿は？」

万丈「やる事があると云って、どこかへ行ってしまったよ」

ジョー「用事は済んだのか？」

万丈「ああ……。後はパープルを倒すだけだ」

サリー「ありがとうございます、ジョーさん」

ジョー「お前と旋風寺 舞人には借りがあるんでな。それを返したまでだ」

シーラ「万丈さん……」

万丈「お久しぶりです、シーラ女王、ドーリアン外務次官。出来れば、もう少し落ち着いた状況で再開したかったです。皆が待っています。安全な所までお送りしましょう」

マリナ「お願いします」

虎王「それじゃ行くぜ！しっかり捕まってくれよ！」

パープル「逃がさんぞ、虎王、カエサル！」

増援か……！

虎王「面倒な奴が出てきやがったか！」

パープル「虎王、ジョー、万丈、カエサル！女達ごと、まとめて叩き潰してやる！」
すると、シユタルク4126が現れた。

タミコ「ヴォルフガングさん！」

ウォルフガング「ああ……！時間稼ぎをしたおかげで増幅装置は完成した！」

パープル「何の真似だ、ヴォルフガング！」

ウォルフガング「パープル！お前の魔のオーラも、これで終わりだ！食らうがいい！
ワシと金有　タミコで協力して発明したシステムで増幅されたイノセントウェーブを
！」

何だ……？あの光は……？

イツヒ「……何も起きませんね……」

ウォルフガング「ま、魔のオーラは……イノセントウェーブの干渉によってその効果を失うはず……。イノセントウェーブは、脳の松果体からごく微量に検出される精神波の一種で人間なら誰もが持っているもの……それを増幅したのに何故、何も起きない!?？」

タミコ「……」

パープル「何をしようとしたか知らないが、お前が俺に齒向かったのは事実だ！覚悟しろ、ウォルフガング！」

ウォルフガング「い、いかん！逃げるぞ！」

退こうとしたシユタルク4126を邪虎丸が止めた。

ウォルフガング「は、離せ、小僧！邪魔をするな！」

虎王「ごちやごちや言っていないで、その何とかって装置を俺様に貸せ！」
タミコ「…そうか、サリーさんね！」

虎王「そうだ！この前、魔のオーラを止めたサリーなら…！」

ウオルフガング「そうだな！彼女なら、もしかしたら！」

シユタルク4126から邪虎丸に何かの装置が渡された。

虎王「サリー！その装置を頭に被るんだ！」

サリー「こ、こう…？」

タミコ「そして、願って！魔のオーラを払う為に！」

サリー「そ、そんなこと言われても…！」

リリーナ「サリーさん！」

アイラ「私達の想いも一緒に！」

舞人「サリーちゃん！」

サリー「舞人さん！」

この光…アンチスパイラルの軍勢が攻めてきた時と同じだ…！

舞人「この感じ…！あの時と同じだ！」

パール「バカな！奇跡が二度起きるといふのか！」

箒「魔のオーラが消えていくぞ！」

ワタル「ありがとう、虎王！お前のおかげだ！」

虎王「そ、そうか？」

ジョー「虎王！俺達を向こうの戦艦へ運んでくれ！」

虎王「任せておけ！今日の俺様は機嫌がいい！」

邪虎丸とクオ・ヴァデイスはメガファウナの下まで来た。

ウオルフガング「さて：ちと予定していた展開と違ったが、一応目的は達した」

パープル「貴様達……！」

ウオルフガング「パープル！お前の親玉のエグゼブにも伝えておけ！ワシ達をコキ使
い、その生命を虫けらのように扱った事を後悔させてやるとな！」

タミコ「そして、あなた達の野望はエクスクロスの方達必ず阻止します！（そうだよ
ね、しんちゃん。頑張れ！）」

シユタルク4126は撤退した……。

しんのすけ「……」

みさえ「しんちゃん、どうしたの？」

しんのすけ「何でもないゾ。（ありがとう、タミさん）」

パープル「おのれ……！おのれええっ！」

ゼロ「悪党共の友情なんて、所詮そんなもんか！」

舞人「パープル！これがお前達、BD連合の末路だ！」

パープル「黙れ、旋風寺 舞人！」

メガファウナからダイターン3と轟龍が出てきた。

万丈「無様かつ醜いな、パープル！」

パープル「破嵐 万丈！お前達さえ、いなければ！」

万丈「魔のオーラのメッキが剥がれたお前は、悪党にも届かぬ小悪党だ！」

ジョー「決着をつけるぞ、パープル！そして、お前達の企みの全てを吐いてもらう！」

カエサル「私もやろう」

ミツヒデ「カエサル……」

ノブナガ「何故だ？」

カエサル「我が妻に手を出した彼等を肅清するためだ」

ノブナガ「……ふっ、是非もなし。だが、後で話をするのだな。イチと」

カエサル「わかっている」

ワタル「虎王！一緒に戦ってくれるんだね！」

虎王「まあな！こんな奴と一緒にいるより、お前達の方が楽しいしな！」

パープル「舐めるなよ！完全回復の力を失っても、まだ魔のオーラの全てを失われた

わけじゃない！」

シモン「往生際の悪い野郎だぜ！」

ゴークイレッド「舞人！一発、かましてやれ！」

舞人「パープル！お前に世の中の真理を教えてやる！正義は必ず勝つ！お前が悪である限り、絶対に俺達は負けない！」

決まったぜ：反撃開始だ！

〈戦闘会話　カエサルVS初戦闘〉

カエサル「さて、今度は義兄上からの信頼もいただかなければならんな…。お前達にはその礎となつてもらおう！」

〈戦闘会話　ウイルVSダークゴーネ〉

ウイル「ニツクにした事の報いを受けさせてやる！」

ダークゴーネ「スクラッグ如きが私に勝てると思いですか？」

ニツク「僕達はただのスクラッグじゃない…。人間の心を持つ、確かな戦士だ！」

ウイル「よく言った、ニツク！ダークゴーネ、お前にも教えてやる。俺達の覚悟をな
！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSダークゴーネ〉

EXレッドキング「ギヤアアアン!!？」

タイラント「キシヤアアアンツ!!？」

グランデ「おうおう、レッドキングもタイラントもお前を倒す気満々だぜ」

ダークゴーネ「怪獣如きが生意気な…！」

グランデ「その怪獣にお前は負けるんだよ、覚悟しな！」

EXレッドキングとタイラントの攻撃でダークゴーネはダメージを受けた。

ダークゴーネ「ぐっ…！小癩な真似をおおつ!!？次は必ず、我々があの世に送って差し上げます！」

そう言い残し、ダークゴーネは撤退した。

ゼロ「出鼻を挫かれて、奴等もマジになってきたな」

ジャンボット「その時になったら、倒せばいい。ベリアルごとな」

〈戦闘会話 刹那VSパール〉

パール「お前が刹那・F・セイエイか。マリナ嬢がいつもお前の事を話していたぞ」

刹那「…そうか。ならば、そのマリナを苦しめたお前を駆逐する…！俺が…ガンダムが…！」

〈戦闘会話 三日月VSパープル〉

三日月「アトラ達に手を出した事を後悔させてやる…！」

パープル「やはり、お前と息子はそっくりだな…。三日月・オーガス…！」

三日月「まあ、だって、俺の息子だしね」

〈戦闘会話 ノブナガVSパープル〉

ノブナガ「イチに…我が妹に手を出した事…許しはしない」

パープル「成る程…。お前の妹なのか、破壊王」

ノブナガ「イチは泣かぬが苦しむ事はある…。それを助けるのが兄の役目だ！」

〈戦闘会話 カエサルVSパープル〉

パープル「カエサル！裏切り者は許さないぞ！」

カエサル「私は初めから君達につくとは言っていない…。裏切りは予想できたと思うがな」

パープル「何…!?？」

カエサル「覚悟してもらおう。イチヒメに手を出した事を！」

グレートマイトガインのジョイントドラゴンファイヤーでブランカにダメージを与えた。

パープル「お、俺は負けない！悪の華は決して散らないんだ！」

魔のオーラでブランカが回復した…!??

オルガ「魔のオーラか…！」

シノ「あいつ、まだ戦う気かよ！」

舞人「決着をつけるぞ、パープル！」

サリー「舞人さん！私の想いも！」

舞人「やるぞ、ガイン！サリーちゃんの想いの共に！」

グレートマイトガインが攻撃を仕掛けた…。

舞人「ここがお前の最後のステージだ、パープル！行くぞ、ガイン！全ての力を振り

絞れ！」

グレートマイトガイン「了解！やるぞ、舞人！」

サリー「舞人さん！私の力を受け取って！」

舞人「感じる……！これは……サリーの想い！ダブル動輪剣！」

グレートマイトガイン「ダブル！動輪剣！てえええつ！とおつ！」

グレートマイトガインは二本の動輪剣を合体させ、ブランカに接近した。

舞人「正義の力をおおつ！」

グレートマイトガイン「今ここにいつ！」

ダブル動輪剣でブランカを斬り裂いた。

パープル「な、何かがマイトガインに力を与えている!?？」

斬り裂かれた事によって、ブランカは大ダメージを受けた。

パープル「ば、バカな！馬鹿なあああつ!!？」

それを受け、ブランカは爆発した。

ジョー「悪党の散り際にしては綺麗な花火だったな」

万丈「パープル……。日陰に咲く悪の華は太陽の……正義の下では散るのが宿命だ」

舞人「ありがとう、サリーちゃん。君のおかげでパープルを倒す事が出来た」

サリー「ううん……。舞人さんの正義の心が勝利を呼んだんです」

虎王「ちえつ……。女達を救い出した俺様が一番の功労者だと思うがな……」

アンジュ「あのね、あなた……。年上の女性を女呼ばわりしてはダメよ」

グランデイス「これはちよつとばかり、躰が必要かもね」

優香「覚悟してね！」

虎王「な、何だ…!??女というのは優しいものじゃないのか!」

ワタル「大丈夫だよ、虎王! エクススクロスの女の人達はみんな、綺麗で優しいから!」
セシリア「ま、まあ! ワタル君ったら…」

楯無「言うようになったわね」

虎王「本当か?」

ワタル「本当だよ!」

虎王「そつか! じゃあ戦いも終わったし、遊ぼうぜ!」

ワタル「うん!」

舞人「(パープルは倒れ、サリーちゃん達は救われ、虎王はワタルの友達に戻った…。正義の心がある限り、俺達は希望と共に戦う事が出来る…。その先には勝利がある事を信じて…)」

? 「正義の力という物は流石だな」

現れたのは…ダンクーガか…!??

朔哉「あれは…オリジナルダンクーガ…!??」

くから「まさか…!」

？「久しいな、ダンクラーガに選ばれし者達よ」

葵「ムーンWILL…！」

ジョニー「まさか、あなたまで蘇るとは…！」

ムーンWILL「そう構えるな…。私は戦いに来たのではない」

エイター「では、あなたは何をしにきたのですか…？」

ムーンWILL「宣戦布告だ。月で私はビート・スターと共に待っている」

ジャンナイン「ビート・スターとだと…?!？」

カンタム「という事はミッドナイトも月に…！」

ムーンWILL「お前達は我々が必ず、潰す。覚えていろ」

そう言い残し、オリジナルダンクラーガは撤退した…。

竜馬「ムーンWILLがオリジナルダンクラーガに乗っているなんてな」

真上「決戦が近いという事か…」

葵「…（来るなら来なさい、ムーンWILL。私は負けないから…！）」

俺達はそれぞれ戦艦に戻った…。

ーウオルフガングだ。

ミフネ 「…パープルの下から逃れたのはいいが…」

ビトン 「結局、行く当てがないのよね…」

ホイ・コウ・ロウ 「どうする？山賊でもやるネ？」

ビトン 「ダメダメ！そんな事したら、エクスクロスに潰される！」

ホイ・コウ・ロウ 「畑を耕して、野菜でも作るネ？」

ミフネ 「刀をクワに持ち替えて、ショーグン・ミフネが、ノーミン・ミフネか…。そ

れもいいかもな」

ビトン 「ちよつと、ウオルフガング！あんたはどうするのよ？？」

ウオルフガング 「ワシか…？ワシはもう行き先は決まっている」

ホイ・コウ・ロウ 「何？？」

ミフネ 「お主、いつの間に仕官先を見つけていたのだ！」

ウオルフガング 「行く当てがないのなら、お前達も来い。ワシは青戸工場へ行く。そ

この機材を使って、研究する」

ビトン 「研究？」

ウオルフガング 「ワシは科学者だ。科学者として、もつともつとこの世界の事を知りたい。きつとイノセントウエーブがそれを解き明かす鍵になるはずじゃ」

忙しくなりそうじゃ！

―新垣 零だ。

俺達はN―ノーチラス号の格納庫に集まった。

舞人「…ごめんよ、サリーちゃん。遅くなっちゃって」

サリー「何も不安はありませんでした。だって、私…舞人さんが来てくれるって信じてましたから」

舞人「ありがとう…。俺を信じ、俺達に力を貸してくれて」

サリー「あのウォルフガングという人が言っていた、イノセントウェーブってなんなんですか？」

舞人「人間なら誰でも持っている精神波の一種だそうだ」

甲兎「だったら、ウォルフガングも持っているんだよな」

さやか「でも、あの人が装置を使っても魔のオーラに影響はなかった…」

舞人「サリーちゃんのイノセントウェーブが特別だという事か…」

サリー「もし、よかったら、私の脳を調べてください」

舞人「いいのかい？」

サリー「私も…少しでも舞人さんの力になりたいから…」

舞人「サリーちゃん…」

ジョー「マイトガイン」「フ…こいつはご馳走様だな」

東「じゃあ、サリーちゃんの脳は東さんが調べるよ！ついでに隅から隅まで…つて、イギヤアアアツ！」

千冬さんが東さんにアイアンクロウを…。

千冬「お前に任せられるわけないだろう、馬鹿者が」

東「ちーちゃん、ギブっ！東さんの頭が割れるー!!？」

千冬「ほう、それは実物だな」

東「ちーちゃああん!!？」

サリー「…ありがとう、ジョーさん…。私達を助けてくれて、そして、舞人さんに力を貸してくれて」

ジョー「マイトガイン」「あの場でも言った通りだ。俺は借りを返したに過ぎん」

万丈「素直じゃないな、君は」

ジョー「マイトガイン」「あいにく、俺は旋風寺 舞人やお前みたいには生きられないんでな」

万丈「だが、こうして君は僕達と共に戦っている。光から顔を背け続け、行き先を見失ったパープルとは違う」

ジョー「マイトガイン」「成る程な…。お前という存在が、パープルの気取った仮面を剥ぎ取ったというわけか…。(パープルは倒した…)。おそらく次は、奴の黒幕…エグゼブが出てくるだろう…)」

マリナ「刹那…」

刹那「無事でよかった、マリナ・イスマイル」

マリナ「あなたが来ると信じていましたから」

刹那「…そうか。実はあなたに伝えたい事がある」

マリナ「何…?」

刹那「俺に…気になる存在ができた」

マリナ「え、ええっ?!? 刹那に…?!?」

ロックオン「マジかよ…!」

ティエリア「あのイノベーターなのに鈍感な刹那にか…?!?」

刹那「…そこまで驚かれるのか…」

ニール「おうおう、青春だね。相手は誰だ?」

刹那「…俺の側に寄り添ってくれる人だ」

フェルト「え?せ、刹那、それって誰なの?!?」

刹那「考えてみるんだな、フェルト」

スメラギ「へえー、そういう事なのね」

ミレイナ「(グレイスさんも鈍いですね…)」

シーラ「シヨウ…。トッド・ギネスやバーン・バニングスと和解したのですね」

シヨウ「和解…と言えるかはわかりませんが、今は仲間として行動しています」

トッド「ま…こいつがどうしても言って言うんでな」

バーン「仕方なくだ」

チャム「調子いいんだから、もう！」

シーラ「シヨウ…。おそらくまだオーラマシンを巡る戦いは終わっていない…。それは、これから我々の進む先で明らかになるでしょう…」

シヨウ「(何だ…？俺達の進む先に、いったい何が待つ…)」

イチヒメ「兄上、ミツヒデ…。ただいま戻りました」

ミツヒデ「お怪我がなくて、良かったです。イチヒメ様」

ノブナガ「無事で何よりだ、イチ」

イチヒメ「カエサル殿が私を助けてくれたので…」

カエサル「当然さ、イチヒメ。私は君の夫なのだから」

ミツヒデ「調子のいい奴だな…」

ノブナガ「では、これからもイチの為に働いてもらうぞ、カエサル」

カエサル「義兄上の言葉には逆らえないな」

ノブナガ「十分に逆らっているとは思うがな」

ハリケーン「アイラ様、お帰りなさいです！」

アイラ「皆さん、ありがとうございます」

海道「気にする事はねえよ」

真上「あんたを助け出したのはエクスクロス全員なのだからな」

由木「そうですね、アイラ様」

アイラ「ふふっ、そうですね……」

ニツク「……みんな、本当に僕がスクラッグでも何とも言わないんだな……」

ジョーイ「ここには妖精やカエルの宇宙人もいるからね」

ウイル「相当なお人好しの集まりだがな」

ニツク「でも、居心地はいいよ！」

ウイル「それなら、良かった」

リリーナ「ヒイロ……」

ヒイロ「すまん……。遅くなった」

リリーナ「あなたが、この世界に來ていると知った時、また会える日が來るのを信じ

ていました」

リリーナ「あなたは、いつだってどんな困難もぐり抜け、私の前に現れてくれますから」

ヒイロ「それが俺の戦いだ」

デュオ「久々に見たぜ、ヒイロの笑顔」

青葉「へえ…あいつ、あんな風に笑うんだな。写真に撮っておきたいぜ」

ディオ「二人共、覗き見とは悪趣味だな」

ヒナ「青葉…。見損なつたわ」

青葉「ち、違うんだ！これは仲間の幸せを見届けようと思つて…」

ヒナ「冗談よ」

青葉「へ…？」

ヒナ「今のヒイロを見ていると、私を救い出してくれたあなたを思い出す…。そして、口ではふざけながらも心から彼の事を祝福しているのがわかるから」

青葉「へへ…そんな風に言われるとちよつと照れるな…」

デュオ「こつちも仲がよろしい事で…」

ディオ「仲がいいと言えば、あちらもそうだな」

アトラ「三日月！」

三日月「アトラ、無事だったんだ」

アトラ「うん！三日月なら、必ず助けに来てくれるって、信じていたよ！」

三日月「ちよつと遅れたけどね」

暁「…」

三日月「…？」

アトラ「ほら、暁！お父さんだよ！」

三日月「え、じゃあ…俺の子供…？」

アトラ「そうだよ！」

暁「お父さん…？」

三日月「そうみたい」

すると、暁は三日月に抱き着いた。

暁「やつと…会えた…！」

三日月「待たせてごめんな…」

暁の顔を見て、三日月も暁を抱きしめ、アトラも二人を抱きしめた。

シノ「ちえ、あそこまで良いムードだと、茶化しにくいぜ」

明弘「まず、茶化すなよ…」

オルガ「よろしくな、暁。ミカにいい目をしてる」

暁「うん。オルガおじさん」

オルガ「お、おとおおじっ…?!?」

ビスケット「フ、フフ…!」

オルガ「何笑ってんだよ、ビスケット!」

三日月「懐かれたね、オルガおじさん」

オルガ「ミカあああっ!」

ゼクス「…リリーナ…。お前と彼女達を使い、ドアクダーは何をしようとしていたんだ?」

リリーナ「詳しい事は分かっていません。そして、まだドアクダーの下にはマリーメイアがいます」

ゼクス「マリーメイア・クシユリナーダ…。マリーメイア軍の象徴か…」

ヒイロ「何のために奴は残された?」

リリーナ「わかりません。ただ彼女とニアさんは、私達とは別の扱いを受けていました」

シモン「ニアのような特殊な力が、そのマリーメイアって子にあるのか…」

リリーナ「そうは思えませんが…」

シヨウ「彼女の事はひとまず置いておき、まずはシーラ様達が処刑されそうになった理由を考えよう」

万丈「神話の時代にいた暗黒の龍を復活させようとしたのでは？」

シーラ「確かにドアクダーは、その龍を蘇らせようとしています」

ワタル「やっぱり！」

シーラ「ですが、私達の処刑はそれとは別の目的だったようです」

サリー「悲しみや苦しみを引き出すため…みたいな事を言っていましたけど…」

舞人「悲しみや苦しみに？」

甲兎「いったい何のために、そんな事を…？」

ジョー「マイトガイン」「絶望を捧げるとかいうのはパープル特有の言い回しだと思っていたが、そうではないようだな…」

リリーナ「あの場所で私達を処刑する事にも何か意味があったようです」

鉄也「あんな何もない場所で…」

アマリ「…」

メル「何か心当たりがあるのですか、アマリさん？」

アマリ「あえて言うならですけど、あそこは地脈が通っている地点です」

弘樹「地脈…？」

カノン「このアル・ワースを支える力…言うえば、アル・ワース自体の力が網の目の様に大地に走っているんです」

ホープス「その力のラインを地脈といい、魔徒教団の神殿も、その地脈上に建てられています」

アマリ「ですがそれが、彼女達の処刑とどう結びつくかは見当もつきません…」
すると、虎王が来た。

虎王「おい、お前等！俺様のヨメ候補を集めて、何をしてやがる?!?」

ワタル「ヨメ候補って…?!?」

虎王「決まつてる！シーラとリリーナ、アイラとイチとマリナとアトラ、サリーだ！」
サリー「虎王君…」

リリーナ「年上の女性性は、さん付けで呼びなさいと教えたはずですよ」

シーラ「もう私達の教えを忘れてしまったとは嘆かわしい事です」

イチヒメ「虎王君はすぐに忘れるのですね」

虎王「い、いや…！そうじゃなくてだ！」

カエサル「それと、プリンス・虎王」

三日月「夫の俺達を前にして堂々と夫宣言とはな」

虎王「う…！」

アイーダ「彼には礼儀作法を教え込む必要があります」

カレン「今まで好き放題で生きてきたから、なかなか矯正には時間がかかりそうね」

レナ「心配いらないよ」

アンジュ「必要とあれば、体罰も辞さない……。その覚悟でいけばいい」

ジル「フフ……。鍛え甲斐がありそうな小僧だよ」

千冬「しつかりとじつくりと行おうか」

虎王「ワ、ワタル……。エクスクロスの女達はみんな、優しいんじゃないのか！」

ワタル「うん。優しいよ」

サラマンディーネ「救世主様は、ご自分で使命を果たそうとする、立派な方です」

カナメ「ですから、私達は皆……。救世主様をお慕いしています」

ナーガ「礼儀知らずのガキとは違うのだ」

虎王「何だよ、この女達！俺様の時と全然対応が違うじゃないか！」

ヒミコ「トラちゃん！女って言いかたするとまた怒られるのだ！」

虎王「ヒミコ！やっぱり、俺様のヨメはお前だ！」

幻龍斎「このませガキがああっ！ワシが猿の内は、ヒミコに近づく事は許さん

ぞおおおっ！」

虎王「くそっ！俺様は来る場所を間違えたかも知れない！」

マドカ「そう言いながらも随分の楽しそうだな、虎王」

虎王「そ、そんな事は……」

ワタル「これからは友達で仲間だ！よろしくな、虎王！」

虎王「ああ！俺様はお前達と一緒に戦い、父上が何を考えているか、確かめてやる！」
ルルーシユ「…くつろいでいる所に済まないが、悪い知らせだ」

ロロ「どうしたの、兄さん？」

ルルーシユ「魔徒教団に率いられた異界人の部隊が各地で侵攻を開始したそうだ」
バナージ「何だって!!？」

ユイ「法と秩序の番人を自称するあの人達が、どうして、そんな事を…」

ルルーシユ「詳しい状況は調査中だが、放っておくわけにはいかないだろう」

アマリ「…」

零「アマリ…」

アマリ「(魔徒教団が直接的な行動に出た…。教団の理念に反する行動をする意味…。
いったい教団に何が起きているんです…)」

エレクトラ「零、いる!!？」

零「どうしました、エレクトラさん？」

エレクトラ「オニキスのハデスから通信が入ったの！」

何…!!？」

零「ハデスから…!!？」

マリア「ハデスは何と…!?？」

エレクトラ「明日…お前達、エクスクロスを潰しに向かう。オニキスの総力にかけて…と言っていたわ」

アマリ「零君…！」

オニキスとの決戦の日は近いつて事か…！

すると、俺の頭の中にある声が聞こえてきた…。

? 『(マスター…。Nには気をつけてください…い…)』

だ、誰だ…!?? N…とは何だ…?今の声は…いつたい…!??

ノレド「そう言えば、しんちゃんは？」

万丈「彼ならば今、ある人物と話している」

一夏「ある人物…?」

ーホツホーイ! オラ、野原 しんのすけだゾ!

オラは今、タミさんの前にいるゾ。

タミコ「来てくれたのね、しんちゃん」

しんのすけ「タミさん…」

タミコ「久しぶりね、元気にしてた？」

しんのすけ「してたゾ！タミさんは？未来のオラと上手くいってる？」

タミコ「聞いてよ！しんのすけさんったら、またお姉さんだー！って、ニヤニヤするのよ」

しんのすけ「う…！情けないゾ、オラ…」

タミコ「でも、私の大好きなしんのすけさんには変わらないわ…」

しんのすけ「…」

タミコ「あ…」

タミさんの身体が消えかかっていくゾ…。

タミコ「しんのすけさんからアル・ワースの事を聞いて、またしんちゃんを助けたい
と思つて、来たけど…。もう時間切れみたいね」

しんのすけ「ありがとう、タミさん」

タミコ「ふふっ！どういたしまして、またね」

タミさんはオラのオデコにキスをすると、完全に消えた…。

しんのすけ「オラ、大人になったら…必ず、タミさんをお嫁さんにするゾ！」

ひろし「しんのすけ、大変だ！」

みさえ「オニキスから宣戦布告の通信が届いたわ！」

しんのすけ「わかったゾ！」

タミさん……。オラ、戦うゾ。未来でタミさんと会う為に……。だから、未来でオラと見て……。オラ、頑張るから……！

ーハデス・エメラルドだ。

俺は台座に座り、ある者と話していた……。

俺の中にある者と……。

？「エクスクロスとオニキスの決戦か……。素晴らしい混沌になりつつあるな」

ハデス「……これ以上……零達に何をするつもりだ……！」

？「ネタバレには早すぎるだろう。まあ、明日、全てがわかるだろうな……。そして、このアル・ワースでの戦いも変わる。お前も、本当のお前として、零達に会えるんだ、楽しみにしている、ハデス」

ハデス「くっ……！」

俺には……。何も出来ないのか……。！すまない、零、マリア……。俺では、奴を止める事は出来ない……。！ネメシスを……！

第64話 NとZの真実

「アマリ・アクアマリンです。」

私達はオニキスとの決戦に向けて、各々準備をしていました。

オニキスは総力を上げて、私達に挑んできます…。

アマリ「私もいずれ魔徒教団との決戦の日が来ます…。零君が抱いている想いがわかる日が来るのかな…」

アスナ「アマリ、ここにいたのね。零を知らない？」

アマリ「零君なら、シミュレーションをしていますよ」

アスナ「ハデス・エメラルドとの決戦ですものね…。無理しなきゃいいけど」

アマリ「今の零君なら、大丈夫ですよ」

アスナ「そうね」

優香「二人共！いい事考えたんだけど」

アマリ「いい事とは？」

優香「頑張っている好きな男がいるのだとしたら…どうする？」

アスナ「…そういう事ね！」

アマリ「では、やりましょう！」
零君「喜んでくれたら、いいな…。」

―新垣 零だ。

オニキスとの決戦は明日…。

俺はシミュレーションルームで訓練をしていた。

零「ふう…。やり過ぎもよくねえな…。明日は決戦だし、早めに休むか」

俺はシャワーを浴びた後、自室へ戻ろうとしたその時だった。

カノン「零さん！食堂へ来てください！」

メル「ご飯食べましょう」

零「へ…？お、おう…。って、うおわあああつ?!?何だ何だ?!?引つ張るな、二人共
！」

俺はメルとカノンに引つ張られて、メガファウナの食堂にまで来た。

すると、そこにはテーブルの上に大量の食事が並べられていた。

零「これは…」

アマリ「私とアスナさん、優香さんで作ったのよ」

アスナ「シミュレーションでお腹が空いていると思っただのよ」

優香「みんなで食べましょう。もう少ししたら、エクスクロスのみんなも来るから」

零「…アマリ、アスナ、優香…。ありがとう！」

俺は幸せ者だな…。こんなにも俺の事を思ってくれる人達がいるなんて…。

明日の決戦…負けるわけにはいかないな…！

優香「はい、零！あーん」

零「は…いや…！待て！自分で食べる！」

アマリ「む…！はい、零君！あーん」

零「アマリまで…！」

アスナ「…」

零「アスナ、二人を止めてくれ！」

アスナ「零…口を開けて。はい、あーん」

零「お、お前もかよ…！」

優香「零…」

アマリ「私達の誰を選ぶの…？」

アスナ「答えるまで帰さないから」

零「あ、あははは……。マジかよ……」

三人共……怖いよ……。

この後、俺はエクスクロスのみんなと食事会を開いた。
守ってみせる……絶対に……！

ーラゴウ・カルセドニーだ。

明日にエクスクロスとの決戦が決行される……。

ギルガ「兄さん、ナイトメアの調整が終わったみたいだよ」

ラゴウ「そうか……。ギルガ、一つ聞きたい事があるのだが……」

ギルガ「何だい？」

ラゴウ「ハデス様は：何故、急にエクスクロス打倒の作戦を始めた……？確かにエクスクロスを潰す事はオニキスが望むべき事だった。だが、なぜ急に……」

ギルガ「言われてみれば、そうだね……」

ラゴウ「ギルガ、気をつけろ……。何か、嫌な予感がする……」

ギルガ「わかったよ……」

この嫌な予感はいったい何なんだ……？

ーリン・マスカライトです。

私は廊下でラゴウさんとギルガさんの会話を聞いていました。

すると、扉からギルガさんが出てきました。

ギルガ「あれ？いたんだ、リンちゃん。どうしたの？」

リン「あの…ギルガさん。エクスクロスとの決戦の前に伝えたい事が…」

ギルガ「伝えたい事？」

リン「…私は…。あなたの事が好きです！…だから…」

最後まで言い切ろうとしたその時、ギルガさんは人差し指を私の唇にそつと、起きました。

ギルガ「これ以上の言葉は不要だよ。…こんな僕で良ければ、よろしくね」

リン「はい…！」

今度の戦い…負けられません…。私達の未来の為に…！

第64話 NとZの真実

―新垣 零だ。

翌日、俺達はオニキスとの戦いの為に出撃した。

アムロ「零、体調はどうだ？」

零「ぐつすり、寝たので大丈夫です！」

マリア「零……。頑張りましょうね」

零「……ああ。母さん……本当にいいのか？相手は……あんたが愛した男なんだぞ？」

マリア「……いいかどうかはわからない……。でも、彼を止めなければならぬのは確かだから」

零「わかったよ、やろう母さん……。俺達でハデスを止めるんだ」

マリア「ええ！」

シヤア「我々を忘れてもらっては困る」

イオリ「もう話はオニキスだけの問題じゃないんだ」

ホープス「私達、エクスクロスの問題でもありますよ」

青葉「だから俺達全員、力を貸します！」

零「みんな……。ありがとう……。来るぞ！」

ガラム部隊とナイトメア・ゼフィールス、アマテラス・ツヴァイが現れた。

ラゴウ「今日の決戦：受け入れてくれた事に感謝するぞ、エクスクロス」

零「どうせ、受け入れなかったら、後ろから攻撃されるだけだからな」

リン「こちらも全力でいきますので、覚悟してください！」

メル「リンちゃん、私達も負けないから！」

刹那「ハデス・エメラルドがいない……？」

ギルガ「ハデス様なら、後方で待機しているよ」

ロツクオン「高みの見物とは余裕じゃねえか」

ニール「なら、あいつらを倒せば、出てくるって事だな」

ハレルヤ「はっ、面白え！てめえ等をボコボコにして、炙り出してやるよ！」

ラゴウ「そう簡単にはいかない事を教えてやる。零、決着をつけるぞ！」

アスナ「零、ラゴウは本気で来るわよ！」

アマリ「零君、負けないで！」

零「心配するな、アマリ！簡単に負ける気はない！」

ラゴウ「各機、我々に続け！」

ギルガ「エクスクロスに総攻撃をかける！」

優香「来るわよ！」

弘樹「来るなら、来やがれ！返り討ちにしてやるよ！」

マリア「零！」

零「ああ……！オニクス……お前達の企みは俺達が潰す！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「君とも長い付き合いだったね、新垣 零」

零「そうだな。お前にも何回か負けた事があった……」

ギルガ「その度に君は強くなつていく……。腹ただしい程にね！」

アスナ「でも、これで終わりよ、ギルガ！」

零「俺達は決して負けはしない！」

リン「それはこちらの台詞です！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

ギルガ「君には振り回されてばかりだった事を思い出したよ、氷室 弘樹」

弘樹「そうだな、零を助ける為に何度もお前に反抗した」

ギルガ「その借りを今日、ここで返させてもらおうよ！」

弘樹「俺にもお前には負けられない理由があるんだよ、行くぞ、カルセドニー！」

〈戦闘会話 優香VSギルガ〉

メル「優香さん、全力で相手をしましょう」

優香「メルちゃん……」

リン「来るのね、メルちゃん！」

メル「因縁の相手……という関係にはなりたくない……。でも、友達として……私は負けるわけにはいかないの！」

リン「それはこっちの台詞よ！」

優香「そういう事みたいよ、ギルガ・カルセドニーさん」

ギルガ「ああ、そうだね。それぞれ、相手のフォローで勝負だ！」

〈戦闘会話 マリアVSギルガ〉

マリア「ギルガ……リン……。あくまでハデスについていくのね？」

リン「それが私達の選んだ道です！」

ギルガ「マリア様にはお世話になりました……。でも、僕達の道の邪魔をすると言うのなら、あなたを倒します！」

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

ラゴウ「まさか、ここまでお前の事を認める事となるとはな」

零「お前は強い。そんなお前を超えたいと思っただんだ！」

ラゴウ「ならば、全てをぶつけて来い、零！」

零「当たり前だ！ここは俺にやらせてくれ、アスナ！」

アスナ「ええ、わかったわ！」

ラゴウ「来い…零イイツ!!？」

零「覚悟しろ、ラゴウウウツ!!？」

〈戦闘会話 弘樹VSラゴウ〉

ラゴウ「零を倒す前の前菜として、頂くとするか」

弘樹「俺は野菜じゃねえ！」

カノン「言うべきところはそこではないですよ、弘樹さん！」

弘樹「え、そうなのか？」

ラゴウ「フツ、お前の様な奴だからこそ、零は信頼出来るのだろうな…。それを超えるのもまた一興と言える！」

〈戦闘会話 優香VSラゴウ〉

ラゴウ「白木 優香。こうして話すのは初めてだな」

メル「優香さん、油断しないでください。ラゴウさんは強敵です！」

優香「わかっているわ、メルちゃん！こっちは一切油断する気はないわ！」

ラゴウ「零の昔馴染みだけあるな。行くぞ…！」

〈戦闘会話 マリアVSラゴウ〉

マリア「あなたは強くなったようね、ラゴウ」

ラゴウ「何を言うのですか。まだまだあなたには届きませんよ」

マリア「そう…。なら、最後の指導をしてあげるわ！」

アマテラス・ツヴァイとナイトメア・ゼフィルスにダメージを与えた。ギルガ「くそっ…！こんな結果…認めない！」

ラゴウ「まだだ：俺はまだ…！」

ベルリ「相変わらずしぶといな！」

アイーダ「ですが、ここで討ちます！」

ライヤ「出来れば投降して欲しいのですが、そうもいきませんので」

ハデス「ああ、俺達はまだ終わらない」

来たか…！

アルガイヤとガルム数機が現れた。

ヒイロ「ハデス・エメラルドか」

デュオ「ついに来やがったな！」

五飛「ここで奴を叩く！」

ハデス「ギルガ・カルセドニー、ラゴウ・カルセドニー…。よくやつてくれた、受け取れ」

アルガイヤから光が発せられるとナイトメア・ゼファイルスとアマテラス・ツヴァイのダメージが回復した。

カトル「ダメージが回復した…?!？」

トロワ「これも奴の力なのか…！」

ノイン「これではいくら攻撃しても回復される…！」

ゼクス「ならば、ハデス・エメラルドを狙うしかない」

倉光「そうだね。それに彼を討てばオニキスの士気は総崩れになる」

名瀬「それなら、答えは一つだ！」

オルガ「ああ！全機、アルガイヤに集中攻撃だ！」

ハデス「フフ…来い、エクスクロス！」

零「…！」

な、何だ…?!? この背筋が凍りそうな寒気は…?!? また、ゼフィルスネクサスが怯えているのか…?!?

アンチスパイラルの軍勢でもないのに…。

アキト「零、どうした？」

零「…な、何でもない！ハデス！ここで決着をつけるぞ！」

ハデス「…新垣 零、マリア…。最後にもう一度聞く。オニキスに戻って来る気はないか？」

マリア「ないわ」

零「俺と母さんは決めたんだよ。お前を止めるって！」

ハデス「そうか…。ならば、ここでエクスクロスと共に死ね！」

戦闘再開だ！

アマテラス・ツヴァイにダメージを与えたが、ハデスによって、回復した。
ゼハート「やはり、ダメージが回復するか……！」

アセム「こりや、早くハデスの野郎をどうにかするしかねえな！」

フリット「各機はアルガイヤを狙え！」

セリツク「了解……！」

〈戦闘会話 万丈VSハデス〉

万丈「悪の闇はここで消させてもらおう」

ハデス「日輪の光……。それを消せば、世界は闇に覆われる。お前はその妨げになるのはわかっている。だから、波嵐 万丈……お前を倒す！」

〈戦闘会話 ショウVSハデス〉

ハデス「聖戦士ショウ・ザマ。いくら聖戦士でも俺を討つ事が出来るかな？」

チャム「ショウをバカにするな！」

シヨウ「挑発に乗るな、チャム！俺は殺す為ではなく、お前の悪しきオーラを止めるためにお前を討つ！それだけだ！」

〈戦闘会話 エイサップVSハデス〉

エレボス「ここで負けれないよ、エイサップ！」

エイサップ「そうだな！アル・ワースの為にも負けるわけにはいかない！」

ハデス「勇ましいな、エイサップ・鈴木。だが、無意味だ。お前では俺には勝てない……絶対にだ！」

〈戦闘会話 カミーユVSハデス〉

カミーユ「ハデス・エメラルド！苦しめられた人達の代わりに俺達がお前を止める！」

ハデス「これも世界の為だ。逆に感謝して欲しいのだがな、カミーユ・ビダン」

カミーユ「黙れ！お前に感謝する者は誰もいない！」

〈戦闘会話 ジュドーVSハデス〉

ジュドー「誰も世界の混沌なんて望んでない！あんたはそんな事もわからないのかよ！」

ハデス「俺の望みをわからないお前に言われたくないな、ジュードロー・アーシタ」
ジュードロー「それぞれの世界にそれぞれの人達が住んでる…。そんな平和な世界を壊させてたまるかよ！」

〈戦闘会話 アムロVSハデス〉

ハデス「全ての人の想いを一つにする…。俺の行なっている事はお前の想いと同じはずだ、アムロ・レイ！」

アムロ「違うな…！他人の意見も聞かず、力で一つにしようなど世界が望むはずがない…。お前のしている事を俺達は認めない…！」

〈戦闘会話 バナージVSハデス〉

バナージ「全ての人達が手を取り合う…。確かに素晴らしい事です」

ハデス「そうだろう、バナージ・リンクス。ならば、俺に従え！」

バナージ「だけど、力で屈服させようなやり方は間違っています！自分自身の意志で手を取り合わなければならぬんだ！」

〈戦闘会話 シーブックVSハデス〉

ハデス「俺の邪魔をする権利がお前にあるのか、シーブック・アノー？」

シーブック「確かに僕にはないのかもしれない。だが、全ての世界を一つにする権利がないのはお前も同じだ！世界の為に僕は為すべき事をする！それだけだ！」

〈戦闘会話 トビアVSハデス〉

ハデス「見せてもらおう、トビア・アロナクス。海賊の流儀というものを」

トビア「いいだろう。だが、見て後悔すんじゃないやねえぞ！俺のやり方は並みじゃないからな！」

〈戦闘会話 ヒイロVSハデス〉

ヒイロ「お前のやり方では本当の平和は訪れない」

ハデス「言ってくれるな、ヒイロ・ユイ。ならば、兵士だったお前ならば、出来ると？」

ヒイロ「違う。世界を平和にするのは人々の想いだ。俺達はそれを手助けするだけだ。ターゲット、ハデス・エメラルド……！」

〈戦闘会話 シンVSハデス〉

ハデス「シン・アスカ。俺が君の望む花が散らない世界を作ってやるよ」
シン「ふざけんな！世界を一つにする時点でそんなの間違っているんだよ！そんな事、絶対にさせるか！」

〈戦闘会話 キラVSハデス〉

キラ「世界は混沌なんて必要としてありません…！」

ハデス「いいや、必要なんだよ。このままいけば、世界は滅びる…。だからこそ、無理矢理にでも世界を一つにする必要がある！」

キラ「あなたは視野を狭く持ちすぎてるんです！そんな事は絶対にさせない！」

〈戦闘会話 刹那VSハデス〉

ハデス「俺達の計画が成功すれば、お前の望む対話後の世界が訪れる。刹那・F・セイエイ、あとは俺に任せるのだな！」

刹那「貴様は力で屈服させようとしている…。そんなもの、対話であるものか…！止めてやる…俺達とガンダムが！」

〈戦闘会話 キオVSハデス〉

ハデス「多くの者が苦しんでいる。だからこそ、俺は世界を一つにする。おとなしく見ている、キオ・アスノ！」

キオ「そんな事言われて、大人しくなんて出来ません！確かに、今も人は苦しんでいるのかもしれない…。でも、あなたのやり方はもつと多くの人を苦しませる！だから、僕達が絶対に止める…！」

〈戦闘会話 アセムVSハデス〉

ハデス「アセム・アスノ。世界の滅びがお前の望む事なのか？」

アセム「違うな。未来が滅びを待っていたとしても、俺達が未来を変える…。変えてみせる！」

〈戦闘会話 フリットVSハデス〉

フリット「世界を知らないお前に世界を一つにする資格はない」

ハデス「知っているからこそ、世界を一つにするのだよ、フリット・アスノ」

フリット「ならば、ここで止める…！輝かしい未来へ子供達を進ませる為に！」

〈戦闘会話 ベルリVSハデス〉

ハデス「争いにウンザリしていたんだろう、ベルリ・ゼナム？ならば、俺が争いをな
くしてやろう」

ベルリ「その為に誰かが犠牲になるんなら、意味ないじゃないですか！それは世界の
為ではなく、あなた自身のエゴだ！」

〈戦闘会話 三日月VSハデス〉

ハデス「三日月・オーガス。世界が一つになれば、平和を得る……。お前達、家族は共
に暮らせる事になるんだ」

三日月「よくわからないけど……誰かに与えられた平和なんて、価値はないよ。俺達は
掴んでみせる。平和の未来つてのを！それを邪魔するなら、あんたを倒す……！」

〈戦闘会話 ワタルVSハデス〉

ハデス「安心しろ、戦部 ワタル。世界を一つにしたら、ドアクダーは俺が倒す。だ
から、お前は救世主などやめて、大人しく、学校へでも行っている」

ワタル「お前の言葉なんて信じられるか！ドアクダーは僕が倒すんだ！救世主として
！」

〈戦闘会話 舞人VSハデス〉

グレートマイトガン「オニキスの首領…ハデス・エメラルド…！」

ハデス「旋風寺 舞人。俺は世界の為に動いている。そんな正義の味方の俺を倒すというのか？」

舞人「お前は正義の味方じゃない！誰かを犠牲にする奴に正義を語る資格なんてない！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSハデス〉

ハデス「平和な世界を作る事は君も望んでいたはずだ、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアことルルーシユ・ランペルージ。それとも、ゼロと呼んだ方がいいか？」

ルルーシユ「違うな、間違っているぞ、ハデス・エメラルド。力で屈服させるようなやり方では真の平和は訪れない。全ての悪はこの俺が破壊する…！」

〈戦闘会話 青葉VSハデス〉

ハデス「渡瀬 青葉。世界が一つになれば、お前は元の時代でヒナ・リヤザンと共に過ごせる事になるのだぞ？」

青葉「誰もそんな事望んでねえよ！俺達は自分達の力で元の時代へ帰る！その邪魔を

するんじやねえ！」

〈戦闘会話 アンジユVSハデス〉

ハデス「アンジユ。それともアンジユリーゼ・斑鳩・ミスルギと呼んだ方がいいか？
俺がお前達、ノーマに救いの手を差し伸べよう」

アンジユ「お生憎様。私達にそんなものは必要ないから。だから、とつとと消えなさい！」

〈戦闘会話 甲児VSハデス〉

ハデス「マジンガーは俺の計画の邪魔になる。兜 甲児、マジンガーから降りた方が身のためだぞ」

甲児「誰がお前のいう事を聞くかよ！ だったら、全力で邪魔をしてやるよ、俺とマジンガーで！」

〈戦闘会話 鉄也VSハデス〉

ハデス「剣 鉄也。お前程の男ならば俺の考えはわかるはずだ」

鉄也「ああ。わかるぞ……。お前の計画は必要ないと。悪いが止めさせてもらおうぞ

！」

〈戦闘会話 海道VSハデス〉

ハデス「海道 剣、真上 遼。平和よりも戦いを望むお前達は異端な存在だ」

真上「フツ、酷い言われようだな」

海道「異端だろうがなんだっていい！俺達はてめえが気に入らねえ！それだけだ！」

〈戦闘会話 シモンVSハデス〉

ハデス「螺旋の男、シモン。お前が望むのならば、アンチスパイラルのメツセンジャーをお前の元へと戻そう」

ヴィラル「フツ、奴は言っではいけない事を言ったな！」

シモン「そうだな、ヴィラル！ニアは俺達が助け出す！お前の助けなんていらねえんだよ！」

〈戦闘会話 ネモ船長VSハデス〉

ハデス「エルシス・ラ・アルフォール。皮肉だよな、大切な者に嘘をつき続けているお前は……」

エレクトラ「船長……」

ネモ船長「心配は無用だ。私はその嘘と隣り合わせで生きていく……。貴様を倒し、ガーゴイルを倒してな……！」

〈戦闘会話 一夏VSハデス〉

ハデス「ISを使えるのがお前だけだというのは寂しいものだ。俺がお前を助けてやろう。ISそのものを消せばいいだけの話だからな」

一夏「確かに、ISによって俺の人生は変わった……。けど、ISがあったから、今の俺がいる……。誰かを守るようになった。だから、ISは消させはしない！」

〈戦闘会話 竜馬VSハデス〉

ハデス「ゲッター線。世界を一つにした後、それを俺が有効利用させてもらう」

竜馬「何もわかってねえな、お前は。ゲッター線にちよつかいを出すとロクな目に合わねえぞ。それに、俺達がいる限り、世界を一つになんてさせねえよ！」

〈戦闘会話 葵VSハデス〉

くらら「世界を一つにだなんて、スケールが大きいのか、小さいのか」

ジョニー「明らかに度がすぎていると思いますかね」

朔哉「でも、悪いがそんな事はさせねえよ！」

エイターダ「私達、チームDがあなた達を止めます！」

ハデス「流石は野生の力に目覚めた、チームDだな、飛鷹 葵。世界を一つにしたあかつきにはお前達の記憶を消し、平凡な日常をプレゼントをしてやるよ」

葵「生憎と私達は刺激のある毎日の方が性に合ってるのよ。だから、野生らしく反抗させてもらおうわ！」

〈戦闘会話 九郎VSハデス〉

ハデス「大十字 九郎とアル・アジフ。お前達に永遠の愛というものを与えてやろう」

アル「悪いが、他人から与えられる愛は受け付けておらぬのでな！」

九郎「そういう事だ！とつとと倒されろ、親玉さんよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSハデス〉

ヒーローマン「…」

ハデス「安心しろ、ジョセフ・カーター・ジョーンズとヒーローマン…。世界が平和になったとしても、お前達の存在は残してやる」

ジョーイ「平和の世界というのは：誰も苦しまない世界です！ですが、あなたは沢山の人を苦しめて来ました…。僕とヒーローマンが止めます…！」

〈戦闘会話 ヴァンVSハデス〉

ハデス「悲しいな、復讐に生きるというのは…。ヴァン、俺が解放してやるよ」

ヴァン「余計な事をしようとしてんじやねえ！俺はかぎ爪を殺す！俺から復讐を奪おうってんなら、てめえも容赦しねえ！」

〈戦闘会話 アマタVSハデス〉

アマタ「平和な世界を望むのは悪い事じゃない…。でも、あなたのやり方は間違っています！」

ハデス「間違つてなどいないぞ、アマタ・ソラ。俺が間違つていないと思つている限りな」

〈戦闘会話 ノリコVSハデス〉

カズミ「すぐに攻撃をやめ、投降してください」

ハデス「断る、お前の言う事など聞く気はない」

ノリコ「お姉様をバカにして…！後悔させてあげるわ！」

ハデス「やってみろ、タカヤ・ノリコ。返り討ちにあうのが関の山だろう」

〈戦闘会話 ユイVSハデス〉

ハデス「自らエナストリアの国民を危険に晒そうとするとは、とんだ分からず屋な女皇だな、ユインシエル・アステリア」

レナ「黙りなさい！あなたにユイの何がわかるの!?!？」

ユイ「大丈夫だよ、レナ！あなたに何と言われようと私はあなたを止める事をやめません！エナストリアの女皇としてだけではなく、エクスクロスの一員として、あなたに抗い続けます！」

〈戦闘会話 ノブナガVSハデス〉

ハデス「また新たな争いを生むつもりか、破壊王、オダ・ノブナガ」

ノブナガ「俺が破壊するのはこの世の民を傷つける者だ。よって、お前がその傷つける者…破壊王、オダ・ノブナガが討ち取る！」

〈戦闘会話 しんのすけVSハデス〉

ハデス「野原 しんのすけ、カンタム・ロボ。お前達は戦わずに平和な世界でのんびりとしている」

みさえ「のんびりとしていられるなら、そうしたいわよ！」

ひろし「生憎と俺達にはやる事が沢山あるんだよ！」

カンタム「世界を一つになんてさせない！」

しんのすけ「オラ、わかるゾ！お前のやっている事は悪い事だつて！オラ達が世界をお助けするゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVSハデス〉

クルル「クーツクク！ハデス・エメラルドが来るぜ！」

ドロロ「強敵でござるよ！」

ハデス「平和な世界の為、お前達、侵略者はここで消すとしよう、諦めろ、ケロロ軍曹」

タママ「このお……！上から目線で腹が立つですウ！」

ギロロ「簡単に消されるわけにはいかんぞ、ケロロ！」

ケロロ「侵略者にも侵略者魂というものがあります！それがある限り、我輩達は諦めないであります！」

〈戦闘会話 アキトVSハデス〉

ハデス「テンカワ・アキト。辛かっただろう。俺がお前を元に戻してやろう」

アキト「黙れ、悪党。お前の手など借りなくとも俺はユリカとの人生に戻る…。お前を倒して…！」

〈戦闘会話 アルトVSハデス〉

ハデス「世界が一つになったあかつきにはお前に素晴らしい空を提供しよう、早乙女アルト」

アルト「誰かに与えられた空でなんて飛べるかよ！俺達の空を汚そうとするんじゃないやねえ！」

〈戦闘会話 リオンVSハデス〉

リオン「悪党の考える事はみんな同じってわけか！」

ハデス「悪党…？違うな、リオン・榊。悪党と言うのは俺の邪魔をする者の事だ！お前の様な存在のな…！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSハデス〉

ゴーカイグリーン「観念しろ、ハデス・エメラルド！」

ゴーカイピンク「あなたの企みもここまでです！」

ゴーカイイエロー「世界を一つにしようなんて古臭いのよ！」

ゴーカイブルー「徹底的に邪魔させてもらうぞ」

ハデス「宇宙海賊というのは愚かだな。キャプテン・マーベラス。世界が一つになれば、お前達が望む宝を幾らでもやろう」

ゴーカイレッド「悪いな、俺達は海賊だ。欲しい物は自分達の手で手に入れる。てめえから貰う必要はねえんだよ！」

〈戦闘会話 ゼロVSハデス〉

ハデス「世界が一つになれば、お前達、ウルトラマンの存在も必要なくなる。俺達に任せろ、ウルトラマンゼロ」

ゼロ「ふざけんな！そんなの俺達だけじゃなく、全ウルトラマンが認めねえんだよ！全てのウルトラマンを代表して、俺がお前を銀河の彼方まで吹っ飛ばしてやるぜ！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSハデス〉

ハデス「レイオニクスのレイ……。いや、レイモン。レイオニクスバトルが終わった今、お前はなぜ戦う?」

レイモン「レイオニクスバトルが終わろうと世界は平和にはならない。だから俺達は平和の為に戦っている!お前がその平和を脅かすというのなら、俺とゴモラが相手になつてやる!」

〈戦闘会話 マサキVSハデス〉

ハデス「この戦いにお前は関係ないはずだ、マサキ・アンドー。ラ・ギアスへ戻してやろう」

マサキ「ああ、戻るさ……!お前達をぶつ倒してな!」

〈戦闘会話 アーニーVSハデス〉

サヤ「少尉、ここが正念場ですよ!」

アーニー「わかった、サヤ!ここでオニクスとの戦いを終わらせる!」

ハデス「いい目をしているな、アニエス・ベルジユ。だが、それでも無意味という事を教えてやろう!」

〈戦闘会話　アマリVSハデス〉

ハデス「アマリ・アクアマリン。魔徒教団を抜けたお前が俺の邪魔をする資格があるのか？」

イオリ「資格など関係ない！」

ホープス「マスターは自分自身が信じる道へと進んでいるだけです」

アマリ「ええ、そうよ……！私はエクスクロスの一員として、あなたを止めます！」

〈戦闘会話　零VSハデス〉

アスナ「零、出力は私がカバーするから、気にせずに全力でやりなさい！」

ハデス「無駄な事を……。新垣　零……勝ち目のない戦いに身を投げ出す、愚かな息子が……！」

零「勝ち目があるうがなかるうが、俺は戦う……！お前が世界を壊そうとする限り……！終わりにするぞ、ハデス……！」

〈戦闘会話　弘樹VSハデス〉

ハデス「氷室　弘樹……！バカのお前に何度も引つ掻き回される事になろうとは……！」

カノン「弘樹さんをバカにすると痛い目を見る事になるといふ事です！弘樹さん！」

弘樹「おう！今まで傷つけられてきた人達の報いを受けさせてやるよ、ハデス・エメラルド！」

〈戦闘会話 優香VSハデス〉

ハデス「あのまま、俺の下で操られていけば苦しむ事がなかったのにな、愚かな女だ。

白木 優香」

メル「優香さんにひどい事をしてきたあなただけは…絶対に許しません！」

優香「ありがとう、メルちゃん！その借りは返させてもらおうよ！」

〈戦闘会話 マリアVSハデス〉

マリア「終わりにさせましょう、ハデス…。私達の因縁も…！」

ハデス「ああ、そうだな…。マリア、これで終わりだ…！」

ゼフィルスネクサスの攻撃でアルガイヤにダメージを与えた。

ハデス「な、何だと…!?？」

ギルガ「ハデス様…！」

零「…終わりだ、ハデス！」

ハデス「バ、バカナ……！この……俺が……！こんな所で……いい、嫌だ……！死にたくない……！俺はこんな所で死んでいい人間じゃないんだ！俺は……俺は……！」

マリア「ハデス……」

零「……」

アルガイヤに電撃が走っていく……。もう爆発まで時間がないだろう。俺達の攻撃で脱出装置も死んだのだろう。

ハデス「許さない……許さないぞ、エクスクロス……！お前達だけは絶対に許さないからな！！？」

アルガイヤが音を立て出し……爆発……しなかった……。

カノン「……ど、どうして爆発しないのですか！！？」

ハデス「……なーんてな！」

ラゴウ「な、何……！！？」

オルガ「バカナ……アルガイヤは確かに爆発寸前だったはずだ！」

シノ「どうなってやがるんだ！！？」

ハデス「いやー、滑稽だったぜ。ラストボスを倒したと思ったお前達の顔がな」

リン「ハデス、様……？」

ハデスの様子がおかしい……。それにこの妙な寒気は何だ……！！？

ハデス「今どんな気持ちだ、エクスクロス？倒したと思った敵が死なないっていう展開がな」

マリア「ハデス…どうして…?!？」

ハデス「さて、と…。そろそろ潮時か」

零「潮時…？」

ハデス「零…いや、レイヤとマリア…。家族のご対面だ」

零「え…？」

マリア「家族…？」

ハデス「ぐっ…！レイヤ…マリア…！」

え…?!？これはまるで…俺がレイヤに乗っ取られていた時に似ている…！

ハデス「二人共…久し、ぶりだな…！」

マリア「ひ、久しぶりって…！何言っているの、ハデス！」

ハデス「時間が…ないんだ…！二人共、頼む…！俺を…殺してくれ…！」

マリア「殺してくれって…どういう事なのよ?!？」

零「…まさか…！」

ハデス「頼む…このまま、では…！グッアアアアツ!!？」

突然、ハデスの悲鳴が聞こえた。

ギルガ「ハデス様…!!?」

ハデス「…ふう…。危ねえ危ねえ…。つたく、ハデスの奴、油断も隙もないな」
エイーダ「また様子が変わりましたよ!」

ルルーシユ「待て…!今、奴はハデスと言った…。これは、どういう事だ…?」

零「…お前、ハデスじゃねえな…!」

ノブナガ「何だと…!!?」

ジャンヌ「何言っているのよ、零!!?」

ヒデヨシ「そうだぜ! どう見ても、ハデスじゃねえか!」

零「…どうなんだよ? 勿体ぶらずに正体を現せよ…!」

ハデス「…フフ…クククツ…!フハハハハツ!!? 流石は零だな。お前にはお見通し
だったか。いかにも! 俺はハデスではない…。ハデスに取り付いた…ネメシスだ、よろ
しくな!」

ネメシス…だと…!!?

ホープス「ネメシスだと…!!?」

イオリ「どうしたんだ、ホープス!!?」

ホープス「かつてアル・ワースを破滅にまで追い込んだ…究極生命体です…!」

究極生命体…!!?

「マリア「そんな…！ネメシスはオニキスの先祖が封印したはず…それなのにどうして…?!?!」」

ネメシス「封印されたのは俺の分身だ…。だが、分身を作り出した事によって、俺は力を使い果たしちまってな…。それで、ハデスに取り付いたんだよ」

ギルガ「ハデス様では…ない…?!?!」

ネメシス「ご苦労だったな、ラゴウ、ギルガ、リン。お前達のお陰で俺は力を取り戻しつつある」

ラゴウ「貴様は…チカラを取り戻すために俺達を…オニキスを利用したと言うのか?!?!」

ネメシス「ああ、そうだ。実に滑稽だったぜ…。俺をハデスだと思い込み、従うお前達や俺の意識が覚醒する前のハデスに裏切られたと思っただけなんだマリアの顔は…」

マリア「え…じゃあ…。私は…騙されていたの…？ハデスは何も…変わっていないかったというの…？そんな…そんな…！私は…ハデスを…！」

ネメシス「ハデスは今でもお前を愛しているって、言っていたぜ。幸せ者だな、お前は」

マリア「あ…あああつ…！私は…何んて事を…！ハデスが苦しんでいたというのに…私…！」

ネメシス「フハハハハッ！ そうだ、その顔だよ！ やはり、絶望に落ちる人間の顔はい……！」

ラゴウ「…ネメシス…貴様は…俺やギルガ…オニクス皆の誇りや想いを踏みにじったというのか…？」

ネメシス「正解だ、ラゴウ！」

ラゴウ「貴様アアアツ!!？」

ナイトメア・ゼフィールスがアルガイヤに攻撃を仕掛けたが、アルガイヤは簡単に受け止める。

ネメシス「らしくないな、お前が感情的になるなんて…。少し、お仕置きしてやるか！」

すると、アルガイヤが紫色の炎に包まれ、炎が消えると紫色に鬼の様な姿に変わっていった。

ネメシス「消し飛びな！」

姿を変えたアルガイヤはナイトメア・ゼフィールスを殴り飛ばすと、殴った部分が爆発し、大きく吹き飛んだ。

ラゴウ「グアアアアアツ!!？」

零「ラゴウ！」

ギルガ「兄さん！」

アスナ「あのナイトメア・ゼフィールズを一撃で……！」

九郎「なんて奴だよ……！」

ギルガ「よ、よくも兄さんを……！」

ネメシス「ギルガ、お前達も邪魔をするのか……？」

ギルガ「君だけは……！つ……？リンちゃん……？」

リン「あ、ああああ……！」

ギルガ「！……。ククク……！ヒヤハハハハハツ!!？」

ネメシス「あん……？」

リン「ギルガ……さん……？」

ギルガ「フウ……。やーめた！ネメシス……僕はあなたにつきます」

ネメシス「ほう……」

リン「だ、ダメですよ、ギルガさん！彼は……！」

すると、カルセドニーがマスカライトの首を絞めた。

リン「ぐっ……！」

ギルガ「ネメシスに脅えている子は黙ってなよ、リンちゃん……。大人しく僕に従え……」

さもなければ、殺すよ……？」

リン「わ、わかり…ました…！」

それを聞くとカルセドニーはマスカライトを離した。

ネメシス「いいだろう。受け入れてやるよ、ギルガ、リン」

ラゴウ「ギルガ…何故だ…?!？」

ギルガ「僕は強い者につく…それだけだよ、弱者の兄さん」

ラゴウ「バカな…俺は…俺は…！」

ナイトメア・ゼフィルスは飛び去ってしまいました…。

ネメシス「お前も酷いやつだな。実の兄に対し、あそこまで言うとはな」

ギルガ「僕は僕自身が生き残れるなら、何んでもするよ」

リン「そんな…」

ネメシス「さて、と…。マリア、お前の存在は邪魔だ。消えてもらおうか」

マリア「い、いや…！」

零「させるかよ…！」

ゼフィルスネクサスで姿が変わったアルガイヤに攻撃を仕掛けた…。確実に直撃し

た…はずだったのだが…。

ネメシス「ふあゝ。蚊に噛まれた方がまだ痒いぜ」

アスナ「そ、そんな…！」

零 「聞いていない…だと…?!？」

ネメシス 「お返しにアルガイヤ・ノヴァの力を教えてやる」

アルガイヤ・ノヴァがゼフィルスネクサスに攻撃を仕掛けてきた…。

ネメシス 「受けてみるか、零？ 気がついた時にはあの世だ…」

アルガイヤ・ノヴァはゼフィルスネクサスに接近し、何度も殴りまくると、殴られた場所が爆発していく。

ネメシス 「中から消し飛ば。エクスプロージョンバースト！」

アルガイヤ・ノヴァが最後に右手でゼフィルスネクサスにきつい一撃を浴びせる。

零 「うわああアアアアアッ!!？」

それを受けたゼフィルスネクサスは大ダメージを負った。

アスナ 「ぐっ…!!」

零 「ぐはっ…!!」

ネメシス 「ジ・エンドだ、零、アスナ。アディオス！」

零 「こんな…所で…俺、達が…!!」

俺の言葉が最後に俺とアスナはゼフィルスネクサスの爆発に巻き込まれた…。

―氷室 弘樹だ。

ゼフィルスネクサスが跡形もなく爆発した…？嘘…だろ…？そんな…こんな事つて

…！

優香「れ、零…？アスナ…？」

メル「そ、そんな…！」

アマリ「イヤ…イヤアアアアアアツ！！？」

カノン「零さん！アスナさん！」

マリア「零…？そんな…私を守って…零いいいいいつ！！？」

みんなが零達が死んだ事に驚きを隠せなかった…。

ネメシス「フハハハハツ！！？いいぞ、その絶望の表情…実にいい…！」

シモン「てめえ…よくも零とアスナを！」

ゼロ「許さねえ…てめえだけは許さねえ！」

弘樹「てめえだけはぶつ倒す！」

ネメシス「いいぜ！俺をもつと楽しませてくれ！エクスクロス！」

零…仇はとつてやるからな…！

―新垣 零だ。

俺とアスナは暗闇の中にいた…。

零「ここは…?」

アスナ「暗闇の中ね…」

零「俺達…ネメシスに負けたのか…」

くそッ…! こんな所で終わるのかよ…!

アスナ「嫌よ…! こんな所で終わるなんて…!」

アスナ…。

? 「お二人はまだ死んでいません…」

すると、俺達の前に一人の少女が現れた…。

小学1年生ぐらいの子だった。

この声…何処かで…。

アスナ「あなたは…? 死んでないってどう言う事…?」

? 「ここは私の精神世界…そして、私もお二人も生きています」

アスナ「せ、精神世界…?」

私も…? この子…まさか…!

零「ゼフィールス…なのか…!?？」

ゼフィールス「…はい、そうです。マスター」

アスナ「え、ちよつ…！ゼフィールスって…！ゼフィールスは機体の事でしよう!?？」

ゼフィールス「私…ゼフィールスには超A Iまでとはいきませんが、人格…A Iが搭載されていたのです。ずっと…はるか昔から…」

零「ゼフィールス…。教えてくれないか？お前の事…」

ゼフィールス「私は、ネメシスを倒す為に作り出されたんです。そして、ヴァリアスとデイビウスもそうです」

アスナ「じゃあ、ヴァリアスとデイビウスもA Iが…？」

ゼフィールス「いいえ…。ヴァリアス達にはA Iは搭載されていません…。ネメシスを倒す為に作られた私達ですが…ネメシスには敵いませんでした…。そんな時、あるパイロットの方がオドの力を使って、ネメシスを封印しました…」

零「だが、封印したのはネメシス本人ではなく、分身だった…」

ゼフィールス「私は…本来の役割も果たせず…多くのマスターが命を落としていきました…。私は何も出来なかつたんです…」

アスナ「ねえ、ゼフィールス。どうして過去のパイロットの時にもこうやって、話さなかつたの？」

ゼフィルス「話さなかったのではなく、話せなかったんです。確かに私は人格がありました。話す事が出来なかったんです。ですが、そんな私はある方が触れた時に話せるようになったのです。それが：零様です」

零「お前に初めて触れたあの時か：」

ゼフィルス「そして、私がネクサスにへと進化して：零様とアスナ様の絆に触れて：こうして想いを伝えられるようになったのです」

零「お前は：ずっと戦ってきていたんだな」

ゼフィルス「私は：多くのマスターを救う事が出来なかった：。本来の目的も果たせないガラクタ同然なんです。申し訳ありません、零様、アスナ様：。私のせいでお二人にも迷惑を：」

零「：迷惑な事なんてあるものかよ」

ゼフィルス「え：」

零「俺は、お前がいたから：エクスクロスとして戦う事が出来るようになった。そして、アマリヤ他のみんなと出会う事が出来た：。お前は俺の：大切な相棒なんだからよ」

ゼフィルス「でも：これからもお二人を傷つけたり、苦しめたりしてしまうかもしれないですよ!!?」

アスナ「それがなんだって言うの？ゼフィルスだって、十分に苦しんで、傷ついて来た…。私達だって、あなたを支えたい」

ゼフィルス「私では…ネメシスを倒す事が出来ないんですよ!!？」

零「一人では無理でも…俺やアスナがいる…。エクスクロスのみんながいる。ゼフィルス！お前は…一人じゃないんだよ！お前が辛いなら俺達が支える！それが、お前に乗る俺達のすべき事だからだ！」

ゼフィルス「…」

零「だから、ゼフィルス…！お前はガラクタでも失敗作でもねえ！俺達の…大切な仲間だ！」

ゼフィルス「私、は…私は…！」

目に涙を浮かべ出したゼフィルスは俺とアスナは優しく抱きしめた。

ゼフィルス「ううっ…！マ、スター…！私…私…！…うわあああん!!？」

零「辛かったな…今まで、よく頑張ったな」

泣き出したゼフィルスに優しく声かけ、俺は彼女の頭を優しく撫でた。

ゼフィルスは…ずっと一人で苦しんでいたんだ…。これ以上、ゼフィルスを苦しめるわけにはいかない…！

暫く、泣き止んだゼフィルスを離し、俺は彼女の顔を見る。

覚悟を決めた目をしていた。

零「ゼファイルス……。まだ戦えるか？」

ゼファイルス「勿論です……！私の戦いはネメシスを倒すまで終わりませんから……！マスタ、アスナ様……。力をお貸しください！」

アスナ「ええ、勿論力を貸すわ！」

零「俺とアスナとゼファイルス……。三人の絆が揃つてのゼファイルスネクサスだからな！」

さあ……行くぜ……！」

アスナ「ええ！」

零& a m p ;アスナ「ゼファイルスネクサス!!？」

ゼファイルス「行きます……！」

俺達は光に包まれた……。

―氷室 弘樹だ。

マリア

アルガイヤ・ノヴァに苦戦する俺達……。

ネメシス「無駄って事がわからねえようだな！」

弘樹「無駄だろうがなんだろうが……ここでお前を倒さねえと零とアスナに顔向けできねえんだよ！」

マリア「私の……せいで、零が……！」

優香「前を向いてください、マリアさん！あなたがそんな顔をしているところなんて、零は望んでいません！」

マリア「優香、さん……！」

アマリ「零君……アスナさん……！」

イオリ「アマリさん！しっかりするんだ！」

ホープス「お二人の想いを無駄にしないためにも私達は戦わなければならぬんです」

アマリ「ホープス……イオリ君……」

ネメシス「何だよ、アマリ。そんなにも零に会いたいんなら、後を追わせてやるよ」

アマリ「！」

ホープス「逃げてください、マスター！」

イオリ「アマリさん！」

アマリ「ま、間に合わない……！」

零君……！

アルガイヤ・ノヴァの拳がゼルガードに直撃…する前に光る機体によつて止められた。

ネメシス「何だ…？」

光が消えるところには粉々に砕け散ったはずのゼフィルスネクサスがいた…。

―新垣 零だ。

ゼフィルスの精神世界から戻ってきた俺達はまず、ゼルガードに攻撃を仕掛けようとしていたアルガイヤ・ノヴァの攻撃を受け止めた。

ギユネイ「ゼ、ゼフィルスネクサスだと…!?？」

ハマーン「乗っているのは、零とアスナか!?？」

零「ええ、そうですよ！」

アスナ「心配かけてすみません！でも、大丈夫です！」

ギルガ「な、なぜ君達が生きているんだい!?？ゼフィルスネクサスも粉々に破壊されたはずだ！」

ゼフィルス「マスター達は簡単には殺させるわけにはいきません！」

ネメシス「成る程…ゼフィルスが零達を助けたのか…」

そう、少女の姿のゼフィルスが俺とアスナが座るコックピットに座っていた。まさか、三人乗りになるとは…。

ネメシス「お前とも長い付き合いだな、ゼフィルス。話せるようになったんだな」
ゼフィルス「ネメシス…今度こそ、あなたを討ちます！」

ネメシス「今まで俺に勝てなかったお前が随分強気じゃねえか！」

零「今回は俺やアスナもいる…。もうゼフィルスは一人じゃねえんだよ！」

アスナ「私達、三人があなたを倒す！」

ゼフィルス「ネメシスは力を溜めた。」

ネメシス「何だ、この力…?!？」

零「うけてみやがれ、ネメシス！これが全てを一つにした…俺達三人の力だ！」

ゼフィルス「ネメシスはアルガイヤ・ノヴァに攻撃を仕掛けた…。」

零「勝負だ、ネメシス…！ゼフィルス！シンクロクロス、発動だ！」

ゼフィルス「了解です、マスター！シンクロクロス、スタート！」

零「行くぞ…！俺たち三人の心を合わせる…！」

俺はクロスレイズモードを発動させ、ゼフィルス「ネメシスはクロスソード・バスターソードモードを構え、アルガイヤ・ノヴァを何度も斬り裂き、蹴り飛ばした。

アスナ「今度は私よ…！ゼフィルス、フォローをお願い！」

ゼフィルス「任せてください、アスナ様！」

ゼフィルスがブレードビットとガンズビットの両方を操作し、攻撃している間にゼフィルスネクサスはクロスガン・ブラスターモードを至近距離から放った。

零「トドメだ……！」

クロスガン・ブラスターモードの銃口にクロスソード・バスターソードモードを連結させ、ビームソードを出した。

ゼフィルス「私達は三人で一人……！」

アスナ「三人が一つになる限り……！」

零「俺達は何度でも立ち上がるんだよ！」

クロス・ブラスターソードでアルガイヤ・ノヴァを斬り飛ばし、剣先を向けた。

零「はあああっ！」

今度はビームサーベル型のビームを放ち、アルガイヤ・ノヴァに直撃させた。

零「俺達は……！」

ゼフィルス「これからも一つです……！」

零& amp; ;アスナ& amp; ;ゼフィルス「……いつけえええええっ!!?」

ネメシス「イギヤアアツ!!?」

さらに、ビームの出力を上げ、それを受けたアルガイヤ・ノヴァは軽く爆発し、大ダ

メージを負った。

零「息びったりだったぜ、二人共！」

アスナ「一緒に戦うパートナーなもの」

ゼフィールズ「当然です！」

アルガイヤ・ノヴァは吹き飛んだ。

ネメシス「ダメージを吸収仕切れないだと…!? 奴等にこれ程の力が…！フッフ…やはり、お前は俺を楽しませてくれるようだな、零。ギルガ、今日は退くぞ」

ギルガ「了解」

弘樹「カルセドニー！お前は…これでいいのかよ!?」

ギルガ「何度も言わせないでくれないか？僕は自分が生き残ればそれでいいんだよ」

リン「…」

メル「リンちゃん…」

リン「またね、メルちゃん…」

アルガイヤ・ノヴァとアマテラス・ツヴァイは撤退した…。

ビーチャ「退いたな…」

プル「それにしても、ハデスの中に違う生き物がいたなんて…」

ルー「オニキスとの戦いはまだ終わりそうにないわね…」

エル「どうして？」

マシユマー「おそらく、ネメシスはオニキスの兵士達を操る可能性がある」

ユイ「そんな…」

アムロ「…俯いていても始まらないぞ」

フロンタル「そうだな。零君、アスナ君…君達にも話を聞く必要があるみたいだな」

零「わかりました、お話しします」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、Nノーチラス号の格納庫に集まった。

リュクス「ゼフィルスの精神世界へ言っていたのですか？」

零「ああ。俺とアスナは爆発に巻き込まれる寸前、ゼフィルスが俺達を精神世界にま

で送ってくれたんだ」

アマルガン「それで生きておったのか」

アマリ「バカ！零君のバカ！私…心配したんだよ」

零「悪かったな、アマリ。それと、みんなに紹介したい子がいるんだ」

ミラーナイト「紹介したい子…？」

すると、アスナが少女の姿のゼフィルスを連れてきた。

ゼフィルス「えつと…あの…」

リー「誰だ、その子？」

フロム「へえー、可愛い子だね」

ヤール「…成る程な。零、アスナ…。おめでとさん！まさか、こんな子供がいたなんてな」

アスナ「え!?？ちちちちち、違いますよ!」

零「この子は俺達の子じやありませんし、子供自作つてません!だから、アマリ、睨むのやめろ!」

ユイ「あなたのお名前は?」

ゼフィールス「…ゼフィールス、です」

ユイ「え…?」

カイエン「今、なんと言った…!??」

ゼフィールス「わ、私の名前はゼフィールス…です!」

真上「…」

スカーレット「…」

優香「え…」

メル「は…?」

弘樹「ぜ…ぜ…ぜ…ゼフィールスウウウツ!??」

ゼフィールス「は、はい…」

カノン「ど、どういう事なんですか、零さん、アスナさん！説明してください！」

俺は精神世界でゼフィルスから聞いた話をみんなに話した。

レナ「そうだったんだ……」

イングリッド「ずっと……一人で戦ってきたのね」

ゼフィルス「あ、あの……！これからも皆さんと一緒に戦いと思います！だから、お願いします！」

ゼフィルスがペコリと頭を下げると……。

アイーダ「ええ、よろしくね、ゼフィルス」

カンナム「これからも頑張ろう！」

ゼフィルス「皆さん……」

零「言っただろ？お前を突き放す奴はここにはいないって」

ゼフィルス「……はい！マスター！」

零「あ、そのマスターって呼び方なんだけどよ……。もつと別の呼び方で呼んでくれな
いか？その呼ばれ方、なれなくて……」

ゼフィルス「私は……あなたが触れた事によつて、こうして話せるようになりました……。
生まれました……。それならば、パパ……お呼びしてもよろしいでしょうか？」

零「パ、パパ……!?？」

そ、そう来たか……!

ゼフィールス「ダメ、ですか……?」

零「…いや、ゼフィールスがそう呼びたいのなら、それでいいぜ」

ゼフィールス「はい、パパ!」

優香「どうせなら、ゼフィールスの名前も新しく呼んで上げましょうよ」

サラ「うーん、何がいいだろう…」

ジャンナイン「機械生命体、ガール」

ジャンボット「それはダメだぞ、ジャンナイン」

アマリ「安直だけど…ゼフィちゃん…というのはどうでしょうか?」

ゼフィ「ゼフィ…いいです…!ありがとうございます、アマリママ!」

アマリ「ええっ?!?わ、私がママですか?!?」

ゼフィ「迷惑…でしたか?」

アマリ「い、いえ…そういうわけでは…!」

零「いいじゃねえかよ、アマリ。いずれそうなる予定なんだからよ」

アマリ「…そ、そうね。よろしくね、ゼフィちゃん」

ゼフィ「はい、ママ!」

アンジュ「って、零の奴。物凄い爆弾発言したわね…」

タスク「これはまた荒れるね…」

優香「ママの座…取られちゃったわね」

アスナ「でも、ゼフィの笑顔を見てると何も言えないわ」

ゼフィ「優香お姉ちゃんとアスナお姉ちゃん、メルお姉ちゃんとカノンお姉ちゃんもよろしくお願いします！」

メル「私達が…お姉ちゃん…？」

カノン「優香さん、アスナさん」

優香「ええ、そうね」

アスナ「お姉ちゃんとして、これからもあなたを支えるわ、ゼフィ」

弘樹「それにしても、その歳で子供ができちまうとはな、零パパ、アマリママ」

零「ぐっ…!!弘樹、てめえ…!!」

ゼフィ「パ、パパをイジメないでください、弘樹叔父さん！」

弘樹「お、叔父さん!!？」

零「おー、ピツタリじゃねえか！弘樹叔父さん」

弘樹「れ、零…!!お前な！」

ゼフィ「ふふ、冗談ですよ、弘樹お兄ちゃん」

弘樹「…フツ、これからも頑張ろうぜ、ゼフィ！」

ゼファイ「パパ、ママ！私、この部隊が大好きです！」

アマリ「ええ、私もよ、ゼファイちゃん！」

零「そして、お前もこの部隊の一人だ、ゼファイ。これから一緒にネメシスを倒そうぜ
！」

ゼファイ「了解です！」

ゼファイの笑顔を見て、俺とアマリは微笑み、ゼファイの頭を撫でた…。

分岐シナリオ4

―新垣 零だ。

俺とアマリ、ゼファイはエクスクロスの今後の目的を話すためにシグナスの艦長室に来た。

アマリ「…では、エクスクロスは部隊を二つに分けて、事態に対応するんですね」

スメラギ「その通りよ」

零「編成は今までと同じですか？」

倉光「それでね…。編成は以下のように考えている」

ルルーシユ「片方は、N―ノーチラス号、真ドラゴン、斑鳩、ナデシココ、ハンマーヘッドを母艦にこのまま創界山へ向けて進む部隊だ」

ルリ「こちらには、ワタル君を始めとする魔神部隊、ナデシコクルー、グラタン、オーラバトラー、真ゲッター、アクエリオンEVO L、ガンバスター、ダイターン3、勇者特急隊、ケロロ小隊とその関係者、ヒーローマンさんとジョーイさんとウイルさん達、チームD、ガンメン部隊、イクサヨロイ、KMF、パラメール部隊、マジンガーチーム、WSO、ウルティメイトフォースゼロ、レイオニクスと怪獣達、野原一家、春日部防衛

隊、カンタムさん：それとシンさんやキラさん達のモビルスーツと鉄華団、タービンスのモビルスーツ部隊を編成します」

ドニエル「一方は、メガファウナとシグナス、マクロス・クォーター、プロレマイオスを母艦に魔徒教団率いる異界人の侵攻を止める。なお、奴等は元の世界に帰る事をレコンギスタと称しているそうだ」

ゼファイ「レコンギスタ軍：ですか…」

ジェフリー「こちらにはシンやキラ、三日月達以外のモビルスーツ、ヴァリアンサー、バルキリー、レガリア、ゴークイジャー、ヨロイ：それから、デモンベインの関係者とIS操縦者を配置する」

アマリ「変更点はシン君やキラさん、三日月さん達のモビルスーツ部隊と九郎さん達と一夏君達がそれぞれ入れ替わるのですね」

ゼファイ「でも、どうして…?」

名瀬「シン達や三日月達の要望だ。それに合わせる形で九郎達や一夏達には変わってもらったんだよ。それぞれにはもう伝えてある」

零「俺達の行き先は、いつも通り、俺に選ばせてくれるんですね」

ルリ「教団との対決を考えるドアクダー軍団、教団の率いるレコンギスタ軍…。そのどちらの戦いにおいてもあなた方の果たす役割は大きいものとなるでしょう」

號「それと、戦術効果を考え、サイバスターとアーニー達、そして弘樹達もお前達と同じ部隊に編成するつもりだ」

ゼファイ「パパ…」

アマリ「零君に任せるわ」

零「じゃあ…」

どうしようかな…。

〈対ドアクダー部隊を選択する場合〉

零「オニキスの事も俺は気がかりですが、魔徒教団とドアクダー…。両者の戦いが何を意味するか、確かめたいと思っていますのでそちらにします」

ネモ船長「了解だ。では、君達とマサキ、アーニー達とNーノーチラス号に来てもらう」

零「よろしく願います、皆さん。ところで…わざわざこうして俺達だけを呼び出したのって、何か理由があるんですか？」

ネモ船長「…ホープスの事で話がある」

アマリ「え…」

ゼファイ「ホープス先輩の事ですか？」

…ん？

零「ホープス先輩…？ゼファイ、どうしてあいつの事を先輩って呼んでるんだ？」

ゼファイ「私がそう呼びたいからです」

零「そ、そうか…」

スメラギ「アマリとホープスの間にある絆については疑うべきものではないわ」

號「ただホープスは…どうもまだ、何かを隠しているように思えてな…」

零「…ホープスの事に関してはアマリの方がいいと思います…。それで、アマリはどうなんだ？」

アマリ「確かに…全てを話してくれてるとは私も思つてませんけど…」

ドニエル「君にもわからんようだな…。あいつが何を考えているかは…」

アマリ「でも、私はホープスを信じます。だって、ホープスは零君と共に自分の生命を懸けて私を助けてくれましたから」

零「アマリ…」

ゼファイ「大丈夫ですよ、皆さん、ママ！ママに何があつても私とパパが守ります！ね、パパ？」

零「ああ、その通りだ。だから、アマリ…。お前はお前の信じる事をしろ」

アマリ「零君…ゼファイちゃん…。ありがとう」

倉光「君達の仲には敵わないね。まあ、そんなわけなんで、アマリくんがいる限り、彼が我々を裏切るような事はないと思っている。少々樂觀的ではあるが、疑心暗鬼に囚われたままで戦うのは危険なんでね」

アマリ「私も、そう思います」

ネモ船長「この話は、これで終わりだ。以後の事は、君達に任せる。と言うより、君に任せるしかないだろう」

アマリ「何かわかったら、すぐに報告します。そして、もしホープスが私達を…私達を」

ゼファイ「ママ、大丈夫です…大丈夫ですから！」

アマリ「…うん」

ネモ船長「…わかった。そんな事にならないのを我々としても願おう…」

ホープス…。俺もお前を信じたい…。だから、バカな事は考えるなよ…！

零「よしっ！飯にでもするか！」

アマリ「零君…」

零「お前の不安を全て取り除く事は俺達には出来ない…。だからこそ、俺は少しでも不安を和らげたいと思っているからよ」

アマリ「本当にありがとう…。大好きだよ、零君」

零「ゼフィにも美味しい物、作ってやるからな」

ゼフィ「わーい！楽しみです！」

ネモ船長「零…」

零「…はい？」

ネモ船長「君は…いい父親になりそうだな…。いや、いい父親だな」

零「え…」

ネモ船長「その想いは忘れるな」

零「は、はい…」

ネモ船長「…いったいどうしたんだ…？」

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

・ N-1 ノーチラス号 / ネモ船長

・ ナデシココ / ルリ

・ 真ドラゴン / 號

・ 斑鳩 / 扇

- ・ハンマーヘッド／名瀬
- ・ダイターン3／万丈
- ・ダンバイン／マーベル
- ・ビルバイン／シヨウ
- ・ビアレス／トツド
- ・アツカナナジン／エイサツプ
- ・ギム・ゲネン／リユクス
- ・ギム・ゲネン／アマルガン
- ・シンデン／朗利
- ・シンデン／金本
- ・オウカオー／サコミズ
- ・デイスティニーガンダム／シン
- ・ストライクフリーダムガンダム／キラ
- ・インフィニットジャスティスガンダム／アスラン
- ・フォースインパルスガンダム／ルナマリア
- ・レジェンドガンダム／レイ
- ・ガイアガンダム／ステラ

- ・グフイグナイテッド／ハイネ
- ・ガンダムバルバトスルプス／三日月
- ・ガンダムグシオンリベイク／明弘
- ・ガンダムフラウロス／シノ
- ・百鍊／アミダ
- ・百里／ラフタ
- ・辟邪／ハツシユ
- ・ガンダムキマリスヴィダール／ガエリオ
- ・ガンダムバエル／マクギリス
- ・レギンレイズ・ジュリア／ジュリエッタ
- ・ランドマン・ロディ／アストン
- ・龍神丸／ワタル
- ・戦王丸／シバラク
- ・幻王丸／幻龍斎
- ・空王丸／クラマ
- ・邪虎丸／虎王
- ・グレートマイトガイン／舞人

- ・バトルボンバー
- ・ガードダイバー
- ・轟龍／ジヨウ
- ・ブラックマイトガイン
- ・蜃気楼／ルルーシユ
- ・紅蓮聖天八極式／カレン
- ・ランスロット・アルビオン／スザク
- ・ランスロット・フロンティア／C・C
- ・モルドレット／アーニャ
- ・トリスタン／ジノ
- ・サザーランド・ジーク／ジエレミア
- ・ヴァインセント可翔式／ロロ
- ・神虎／星刻
- ・斬月／藤堂
- ・グロースター・エア／コーネリア
- ・ザ・フルル／ノブナガ
- ・オルレアン／ジャンヌ

- ・ゴ・クウ／ヒテヨシ
- ・クオ・ヴァデイス／カエサル
- ・毘修羅／ケンシン
- ・ガイア／アレクサンダー
- ・ジョーイ& amp ;ヒーローマン
- ・ウイル
- ・ヴィルキス／アンジユ
- ・クレオパトラ／サリア
- ・テオドーラ／ヒルダ
- ・レイザー／ヴィヴィアン
- ・グライブ　ロザリー・カスタム／ロザリー
- ・ハウザー　エルシャ・カスタム／エルシャ
- ・ハウザー　クリス・カスタム／クリス
- ・アーキバス　バネッサ・カスタム／タスク
- ・グレイブ　ナオミ・カスタム／ナオミ
- ・レイジア／ジル
- ・ダンクーガノヴァアマックスゴッド／葵

- ・ガンバスター／ノリコ
- ・アクエリオンEVO L／アマタ
- ・ゴッドケロン／ケロロ
- ・パワード夏美／夏美
- ・マジンカイザー／甲児
- ・マジンエンペラーG／鉄也
- ・ビューナスA／さやか
- ・ボスボロット／ボス
- ・グレンラガン／シモン
- ・スペースガンマール／ギミー
- ・スペースガンマール／ダリー
- ・スペースキングキタン／キタン
- ・スペースヨーコWタンク／ヨーコ
- ・真ゲッター／竜馬
- ・マジンカイザーSKL／海道
- ・ウイングル／スカーレット
- ・ブラックサレナ／アキト

- ・ エステバリスカスタム／リョーコ
- ・ スーパーエステバリス／サブロウタ
- ・ スーパーエステバリス／ガイ
- ・ ウルトラマンゼロ
- ・ グレンファイヤー
- ・ ミラーナイト
- ・ ジャンボット／エメラナ
- ・ ジャンナイン／ヒユウガ
- ・ ゴモラ／レイ&ゴモラ
- ・ レッドキング／グランデ&レッドキング
- ・ カンタムロボ／しんのすけ
- ・ 鉄人ボーちゃん28号／トオル
- ・ グラタン／グランデイス
- ・ サイバスター／マサキ
- ・ オルフエス／アーニー
- ・ ライラス／サヤ
- ・ ライオットB／リチャード

- ・ ヴイジャーヤ／ジン
- ・ ドラウパ／アユル
- ・ ゼルガード／アマリ
- ・ シヤイニング・ゼフィルスネクスス／零
- ・ ダークネス・ヴァリアスデストロイ／弘樹
- ・ カオス・ディビウスホープレイ／優香
- ・ スペリオル／マリア

〈対レコンギスタ軍を選択する場合〉

零「オニキスの事も俺は気がかりですが、魔従教団が直接的にたたかいを広げる…、それが、何を意味するか、確かめたいと思っっているのでそちらにします」

ジェフリー「了解だ。では、君達とマサキ、ベルジュ少尉達にはこちらの部隊に来てもらう」

零「よろしくお願いします、皆さん。ところで…わざわざこうして俺達だけを呼び出したのって、何か理由があるんですか？」

ネモ船長「…ホープスの事で話がある」

アマリ「え……」

ゼファイ「ホープス先輩の事ですか？」

……ん？

零「ホープス先輩……？ゼファイ、どうしてあいつの事を先輩と呼んでるんだ？」

ゼファイ「私がそう呼びたいからです」

零「そ、そうか……」

スメラギ「アマリとホープスの間にある絆については疑うべきものではないわ」

號「ただホープスは……どうもまだ、何かを隠しているように思えてな……」

零「……ホープスの事に関してはアマリの方がいいと思います……。それで、アマリはどうなんだ？」

アマリ「確かに……全てを話してくれてるとは私も思ってますけど……」

ドニエル「君にもわからんようだな……。あいつが何を考えているかは……」

アマリ「でも、私はホープスを信じます。だって、ホープスは零君と共に自分の生命を懸けて私を助けてくれましたから」

零「アマリ……」

ゼファイ「大丈夫ですよ、皆さん、ママ！ママに何があっても私とパパが守ります！ね、パパ？」

零「ああ、その通りだ。だから、アマリ……。お前はお前の信じる事をしろ」

アマリ「零君……ゼファイちゃん……。ありがとう」

倉光「君達の仲には敵わないね。まあ、そんなわけなんで、アマリくんがいる限り、彼が我々を裏切るような事はないと思っっている。少々楽観的ではあるが、疑心暗鬼に囚われたままで戦うのは危険なんでね」

アマリ「私も、そう思います」

ネモ船長「この話は、これで終わりだ。以後の事は、君達に任せる。と言うより、君に任せるしかないだろう」

アマリ「何かわかったら、すぐに報告します。そして、もしホープスが私達を……私達を」

ゼファイ「ママ、大丈夫です……大丈夫ですから！」

アマリ「……うん」

スメラギ「……わかったわ。そんな事にならないのを私達も願っているわ……」

ホープス……。俺もお前を信じたい……。だから、バカな事は考えるなよ……！

零「よしっ！飯にでもするか！」

アマリ「零君……」

零「お前の不安を全て取り除く事は俺達には出来ない……。だからこそ、俺は少しでも

不安を和らげたいと思っっているからよ」

アマリ「本当にありがとう……。大好きだよ、零君」

零「ゼファイにも美味しい物、作ってやるからな」

ゼファイ「わーい！楽しみです！」

ネモ船長「零……」

零「……はい？」

ネモ船長「君は……いい父親になりそうだな……。いや、いい父親だな」

零「え……」

ネモ船長「その想いは忘れるな」

零「は、はい……」

ネモ船長「……いつたいたいどうしたんだ……？」

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

・メガファウナ／ドニエル

・シグナス／倉光

- ・ プトレマイオス2改/スメラギ
- ・ マクロス・クォーター/ジエフリー
- ・ Zガンダム/カミーユ
- ・ メタス/フア
- ・ フルアーマーZガンダム/ジユドー
- ・ 百式/ビーチャ
- ・ ガンダムMk-III/エル
- ・ キュベレイMk-III/プル
- ・ キュベレイ/ハマーン
- ・ ザクIII改/マシユマー
- ・ Hii-llガンダム/アムロ
- ・ ナイチンゲール/シヤア
- ・ ヤクト・ドーガ/ギユネイ
- ・ リ・ガズイ/ルー
- ・ ジエガン/ケルベス
- ・ フルアーマーユニコーンガンダム/バナージ
- ・ バンシイ・ノルン/リディ

- ・クシャトリヤ／マリーダ
- ・シナンジュ／フロンタル
- ・ローゼン・ズール／アンジェロ
- ・ガンダムF91／シーブツク
- ・ビギナ・ギナ／セシリー
- ・クロスボーンガンダムX1改・改／トビア
- ・ウイングガンダムゼロ／ヒイロ
- ・ガンダムデスサイズヘル／デュオ
- ・ガンダムヘビーアームズ改／トロワ
- ・ガンダムサンドロック改／カトル
- ・アルトロンガンダム／五飛
- ・トールギスIII／ゼクス
- ・トールラス／ノイン
- ・ダブルオークアンタ／剎那
- ・ガンダムサバーニャ／ロックオン
- ・ガンダムハルト／アレルヤ
- ・ラファエルガンダム／テイエリア

- ・ガンダムデユナメス／ニール
- ・ガツデス／アニュー
- ・ガンダムエクシアリペアIⅤ／グラハム
- ・GNⅠX IⅤ／パトリック
- ・GNⅠX IⅤ／アンドレイ
- ・GNⅠX I I I／セルゲイ
- ・ガンダムAGEⅠFX／キオ
- ・ガンダムAGEⅠ2 ダークハウンド／アセム
- ・ガンダムAGEⅠ1 グランサ／フリット
- ・クランシエカスタム／セリック
- ・クランシエ／シヤナルア
- ・ジエノアスOカスタム／オブライト
- ・ジルスベイン／ディーン
- ・ティエルヴァ／ジラード
- ・ガンダムレギルス／ゼハート
- ・フオーンファルシア／フラム
- ・ギラーガ改／レイル

- ・ Gーセルフ／ベルリ
- ・ Gーアルケイン／アイーダ
- ・ Gールシファー／ラライヤ
- ・ モラン／リンゴ
- ・ デモンベイン／九郎
- ・ 破壊ロボ／ウエスト
- ・ ネームレス・ワン／エンネア
- ・ リベル・レギス／マスターテリオン
- ・ YFー29 デュランダル／アルト
- ・ VFー25 メサイア／オズマ
- ・ VFー25 メサイア／ミシエル
- ・ RVFー25 メサイア／ルカ
- ・ クアドラン・レア／クラン
- ・ VBー6 ケーニツヒモンスター／カナリア
- ・ YFー30 クロノス／リオン
- ・ VFー27γ ルシファー／ブレラ
- ・ VFー19 エクスカリバー／アイシヤ

- ・V F ー ー ー サンダーボルト／ミーナ
- ・ダン・オブ・サーズデイ／ヴァン
- ・ブラウニー／プリシラ
- ・エルドラソウル／ネロ
- ・ヴォルケイン改／レイ
- ・ディアブロ・オブ・マンデイ／ガドヴェド
- ・メツア・オブ・チューズデイ／ウー
- ・シン・オブ・フライデイ／カロツサ
- ・セン・オブ・サタデイ／メリツサ
- ・ルクシオン・ネクスト／青葉
- ・ブラディオオン・ネクスト／ディオ
- ・カルラ／ヒナ
- ・アレクト／ユイ
- ・テイシス／サラ
- ・メガエラ／イングリッド
- ・ゴークイオー／ゴークイレッド
- ・豪獣神／ゴークイシルバー

- ・ 白式／一夏
- ・ 紅椿／箒
- ・ ブルー・ティアーズ／セシリア
- ・ 甲龍／鈴
- ・ ラファール・リヴァイヴ・カスタムII／シャルロット
- ・ シュヴァルツェア・レーゲン／ラウラ
- ・ 打鉄式式／簪
- ・ ミステリアス・レイディ／楯無
- ・ 暮桜／千冬
- ・ 黒騎士／マドカ
- ・ サイバスター／マサキ
- ・ オルフエス／アーニー
- ・ ライラス／サヤ
- ・ ライオットB／リチャード
- ・ ヴィジャヤー／ジン
- ・ ドラウパ／アユル
- ・ ゼルガード／アマリ

- ・ シャイニング・ゼフィールズネクスス／零
- ・ ダークネス・ヴァリアスデストロイ／弘樹
- ・ カオス・デイビウスホープレイ／優香
- ・ スペリオル／マリア

創界山ルート2

第65話 崩れ始める理

「アーニヤ・アールスノレイムよ。

私の前に何かがいた。

「アーニヤ……来ないで……」

「? どうして……?」

「アーニヤ「私は私……。あなたのものじゃない……」

「? 「それは決めるのは、あなたじゃないわ。そう……全ては新しい世界の為に」

私、は……!

「ルルーシユだ……」

俺はある夢を見ていた……

そう、俺の目の前にV・V・がいた。

ルルーシュ「やめろ……！」

V・V「君が悪いんだよ、ルルーシュ。この呪われた皇子が……！」

ナナリー「お兄……様……！」

シャーリー「ルル……！」

ルルーシュ「ナナリーとシャーリーは関係ない……！」

V・V「君は何一つとして、変わっていない……。いや、変われないんだよ。そこで見ていなよ。変わろうとした君の目の前で……大切な二人が消えるのを」

シャーリー「ルル……！ごめんね……！」

ナナリー「助けて……！お兄様……！」

ルルーシュ「ナナリイイイツ！シャーリイイイツ！」

俺はまた……守れないのか……！」

ーオダ・ノブナガだ。

何故だ……。何故、俺の目の前に親父とノブカツが……？

ノブカツ「兄上……。どうして何ですか……？僕は……兄上を信じていたのに……」

ノブヒデ「お前のせいなのだ……。俺とノブカツが死んだのは……」

ノブナガ「違う……！俺は……俺は……！」

ノブヒデ「お前の存在が……多くの民の心を蝕む」

ノブカツ「そして、多くの民を破壊します……。破壊王……！」

ノブヒデ「お前はここで討つ……！それがお前を生み出してしまった俺の役目だ……」

ノブナガ「俺の……俺の存在が……！うわああああつ!!？」

俺はやはり、全てを破壊する破壊王なのか……！

―新垣 零だ。

俺達はハンマーヘッドの格納庫にいた。

アーニヤ「……」

ルルーシュ「……」

ノブナガ「……」

なんか、アーニヤとルルーシュ、ノブナガの三人の様子が変なんだよな……。

コーネリア「どうした、三人共？寝不足か？」

アーニヤ「そうみたい……。何だか頭がフワフワしてる……」

星刻「寝つきが悪いようなら、デングル先生に診てもらおうといい」

アーニヤ「…いい…」

ルルーシユ「…大丈夫だ」

ノブナガ「心配ない…」

アーニヤ「眠ると怖い夢を見るから…」

ジェレミア「アーニヤ…」

ルルーシユ「…」

スザク「本当に大丈夫かい、ルルーシユ？」

ルルーシユ「…ああ」

スザク「…」

ジャンヌ「ノブナガ、疲れているのなら、私が部屋まで送るけど…」

ノブナガ「そこまですなくとも良い…」

三人共「…どうしたんだ…？」

シヨウ「しかし、アマリも大胆な事を考えるよな…」

アマリ「そんな…大胆だなんて…」

アーニー「創界山行きの進路…わざわざ地脈に沿うようにネモ船長へ申し出たと聞いたよ」

アンジユ「要するに魔徒教団の神殿の近くを通るって事？」

アマリ「ドアクダーとの戦いもレコンギスタ軍の事も、どちらも魔徒教団が関係しています。私達が神殿の近くに現れれば、教団への牽制になると思うんです」

メル「大丈夫なのですか、アマリさん？ またセルリック・オブシディアンがあなたを狙ってくるかも知れないですよ」

アマリ「だからって、何もしないで相手の出方を待っているだけじゃ、状況に置いていかれてしまいます。これからは、こちららも積極的に動かないといけないと思います。それに：もし危険になったら、零君が守ってくれますし：」

零「期待に添えるよう、全力でお前を守るぜ、アマリ」

ゼフィ「む。私を忘れるなんて、酷いですよ、ママ！」

アマリ「勿論、忘れていないわよ、ゼフィちゃん！ゼフィちゃんは強い子だって、私わかってるから」

零「そうだな。なんて言ったって、俺とアマリの娘だからな」

ゼフィ「ふふふっ！」

アスナ「：ゼフィがああ輪に入ってから、より一層、零とアマリの距離が縮まった様な気がする：」

カノン「あれはどうみても家族ですね：」

弘樹「：だが、一種の親バカにも見えるがな」

優香「く、悔しくないもん…!」

イオリ「悔しいと顔に書いているよ、優香さん」

マリア「まさか、もう孫の顔を見る事になるなんてね…」

アスナ「ば、ババくさいこと言いますね、マリアさん…」

マリア「何か言ったかしら、アスナ?」

アスナ「な、何でもございません!」

ホープス「これは…私もウカウカはしてられませんね」

アマリ「…」

ホープス「どうしました? 私の尾羽が曲がっています?」

アマリ「そ、そういうわけじゃないけど…」

ホープス「何か内密のお話がありましたら、私の研究所にご案内しますが?」

イオリ「そうやって二人きりになる気か!?」

ホープス「…言っておきますよ、イオリ・アイオライト。あなたが来る前は、ゼルガードのコックピットで私達はずっと二人きりでした。要するに、あなたはお邪魔虫なので。オドの供給源は黙っていてください」

イオリ「う…」

ゼファイ「ホープス先輩はイオリ様に厳しいですね…」

ホープス「憶えておきなさい、ゼファイ。大切なものの為には厳しくしなければならぬ事を」

ゼファイ「成る程……。勉強になります！」

零「ゼファイに変な事を教えてんじやねえよ、この腹黒オウム……！」

ホープス「親バカも大概にしるよ、零。子供が出来ようが、私はまだ負けてはいないからな」

零「過保護野郎が何言つてやがる！」

ホープス「親バカには言われたくないな！」

アマリ「け、喧嘩しないで二人共……！」

シノ「も、物凄く惨めな喧嘩だ……」

タスク「零も厳しい時は厳しいな……」

アンジュ「お望みならば、私も零やホープスを見習つて同じように接するけど」

タスク「遠慮するよ。今でも俺……結構、立場がないから」

ホープス「タスク様が私に依頼されたアンジュ様の隠し撮りの件がバレたらさらに状況は悪くなるでしょうな」

アンジュ「タスク！あなた、ホープスにそんな事を頼んだの……？」

タスク「お、落ち着いて、アンジュ！俺をはめるためのホープスの罠だよ！」

ゼファイ「…アンジュ様。この間、タスク様がカメラを持って、アンジュ様の部屋を覗いていましたけど…。あれは何をしていたのですか？」

零「ゼファイ、お前は知らなくていい」

アンジュ「タスク、あなたねえー！」

タスク「誤解だよ、アンジュ！」

ホープス「ははは…お二人は仲がよろしいですね」

オルガ「こいつの腹黒さ…半端ねえ…！」

アマリ「(いつもと変わらないやりとり…。ホープス…。あなたの事…信じていいのよね…)」

ホープス「どうしました、マスター？ 潤んだ瞳で私を見て…。やはり、ここは私の研究室にお招きして、じっくり話を…」

アマリ「心配いらないわ。だから、ホープス…。これからもよろしくね！」

ホープス「お安いご用です。私の心は、ずっとマスターと共にありますから」

ゼファイ「…ママの心はパパと共にあると思うのですが…」

暁「これは浮気だね」

アマリ「ち、違います！」

ゼファイ「ママ、浮気はダメですよ！」

アマリ「だ、だから…！」

ゼファイ「パパを見捨てるなんて…」

アマリ「違うよ、ゼファイちゃん！」

ゼファイ「…冗談です！」

アマリ「ゼファイちゃんああああん!!?」

…なんか、ホープスみたいだな…。

ホープス「ふふふ…ゼファイも良い性格になりつつありますね」

零「やっぱりてめえの仕業か、腹黒オウム！」

マリア「私の可愛い孫に余計な事を吹き込んでいるわね」

ホープス「え…」

アスナ「ちよつと、お話しまししょうか」

メル「覚悟してくださいね、ホープスさん！」

ホープス「え、あ…ちよつ…！零、助ける！」

零「さてと、アマリとゼファイと一緒に部屋にでも戻るか」

ホープス「零、貴様あああつ!!?」

ホープスがアスナ達に連れて行かれた。

ざまあみやがれ！

ージルだ。

私はNーノーチラス号の船室にいた。

もうすぐ魔徒教団の神殿近くを通る…。連中はアルゼナルを支援しながら、同時にエンブリヲと手を組んでいた…。

ジル「わからない…。いったい教団は何を考えている…」

エンブリヲ「知りたいのなら、教えてあげようか？」

な…!!?ば、バカな…!

ジル「エンブリヲ!何故、お前が…!!?」

エンブリヲ「どうして生きている…?その質問は、野暮というものだね。私は調律者…。不死不滅の存在なのだよ」

ジル「ラグナメイル共々、完全に消滅させたのに…」

エンブリヲ「そんな事よりも再会を喜ぼう、私の可愛いアレクトラ。君が昔のように私の腕の中で笑ってくれるなら、この間の無礼は許してあげてもいい」

ジル「…そんな戯れ言を言う為にここに来たのか？」

エンブリヲ「手厳しいな、君は。そういう所を可愛いと思う時もあったが」

ジル「くっ……！これは……悪夢なのか……!!?」

エンブリヲ「悪い夢だと思ふのならば、それでいい。悪夢は終わり、これから新しい世界が始まるのだよ。今日、ここに来たのは君達をその世界に招待するという最後の慈悲を見せる為……。そして、新世界に相応しい乙女を迎えに来たんだよ」

エンブリヲは消えた。

ジル「奴の狙い……。アンジュとナディアか……！」

私は廊下に出て、アンジュとあつた。

ジル「アンジュ！」

アンジュ「司令の所にも来たんだね、あいつが！」

ジル「エンブリヲはどうした!!?」

アンジュ「……殺したよ。すぐに蘇ったけどね」

ジル「やはり、奴は不死身なのか……」

アンジュ「その後はプリンセスを迎えに行くとか言つて、あいつは消えた……」

ジル「急ぐぞ！ナディアが危ない！」

敵襲の警報が鳴つた……!!?」

アンジュ「敵襲……!!?」

ジル「魔徒教団が動いたか……！」

私達は出撃を急いだ…。

―新垣 零だ。

今の敵襲の警報…魔徒教団が動いたのか…！

早く、出撃の準備をしないと…！

シャーリー「零！」

零「シャーリー！お前は部屋にいろ！」

シャーリー「うん、頑張ってるね！」

V・V「その必要はないよ」

…!?何だ、この子…!??

V・V「初めましてと言った方がいいかな？シャーリー、それから、レイヤ・エメラルド」

俺の本当の名前を知っている…？

少なくともオニキスの兵士ではないようだが…。

零「何者だ、お前…!?？」

V・V「僕の事はV・Vと呼んでよ」

シャーリー「V・V……？」

C・C・と似ている……？」

V・V・「今日、僕はね……。君を連れ去る為に来たんだ、シャーリー」

シャーリー「えっ……？！？どうして……？！？」

V・V・「どうして……？！？どうして……？！？」

零「ルルーシユ……だと……？！？」

V・V・「僕はルルーシユを絶対に許さない……。だからこそ、君を利用させてもらう

よ、シャーリー」

シャーリー「い……いや……！」

零「シャーリーから離れやがれ！」

V・V・「君はお呼びじゃないんだよ、レイヤ」

俺のパンチはV・V・に避けられ、俺は蹴り飛ばされた。

零「ぐっ……！」

シャーリー「零！」

V・V・「さあ、行こう。シャーリー」

V・V・がシャーリーの腕を掴んだ。

ルルーシユ「待て、V・V・！」

そこへルルーシユとスザク、ジェレミアさんが走つて来た。

スザク「V・V・V・V・V? どうして君が…!?」

ジェレミア「お前もアル・ワースで蘇ったのか…!」

V・V・V「遅かったね、ルルーシユ、スザク、ジェレミア。もう僕の用事は終了したよ」
シャーリー「ル、ルル…!」

ルルーシユ「V・V・V、貴様…! シャーリーを離せ!」

V・V・V「離せと言われて、離す奴はいないよ。じゃあね」

シャーリー「ルル…!」

ルルーシユ「待て…! シャーリー!」

ルルーシユの叫びも虚しく、シャーリーはV・V・Vと共に消えてしまった…。

ルルーシユ「シャーリー…シャーリーイイイイツ!!」

くそツ…! 俺が助けられなかったばかりに…!

ジェレミア「怪我はないか、零?」

零「は、はい…。ルルーシユ…」

ルルーシユ「…」

スザク「ルルーシユ、シャーリーの事も気がかりだけど、今は敵襲に備えよう」
ルルーシユ「わかつている…!」

俺達は出撃の準備を急いだ…。

第65話 崩れ始める理

出撃の準備は出来たけど…！

エーコー「魔徒教団、来ます！」

エレクトラ「あれだけの数を出して来たという事は、こちらが来るのを待ち受けていたと見るべきでしょう」

ネモ船長「我々の意志を見せる必要がある。各機を発進させろ。だが、状況がはつきりするまで、手出しは禁ずる」

エレクトラ「了解です」

俺達は出撃した…。

アンジュ「（エンブリヲはナディアの所には現れなかった…。あいつ…。ナディアの事を諦めたの…？）」

ジル「（それともあれは…アンジュと私だけが見た幻だったのか…。それか、シャリーを連れ去る為の罠だったのか…？）」

ルルーシュ「…」

ナオミ「ルルーシュ君…」

ノブナガ「顔を上げろ、ルルーシュ。今はこの場を振り切り、シャリーの行方を追うしかない！」

ルルーシュ「ああ…！」

虎王「行くぜ、魔徒教団！俺様の力を見せてやる！」

ワタル「ダメだよ、虎王！教団の動きを探るのが目的なんだから！」

ヒデヨシ「頼むぞ、アマリ」

アマリ「はい…。魔徒教団の術士の皆さん…。私はアマリ・アクアマリン…。藍柱石の術士です。ご存知ない方もいらっしゃると思いますが、魔徒教団は法と秩序の番人名乗りながら異界人を召喚し…このアル・ワースを戦いで包もうとしています。私達は、あなた達に真実を伝えます。その上で、あなた達がどうするかを聞かせてください」

こ、攻撃して来やがった…!!?

舞人「撃ってきた…！」

アスラン「話し合いの余地はないのか…!!？」

ヨハネ「法と秩序の番人つてのは、どうやら奴等にとつて都合の悪い奴を叩く為の大義名分らしいな！」

ゼファイ「どうしますか、ママ!?!?」

アマリ「あの人達も私やイオリ君のように精神を制御されているのなら、こちらの言葉は届かないかもしれません……」

イオリ「俺も……アマリさんにショックを与えられるまで教団以外の人間の言葉を聞く気にならなかつた」

ホープス「ですが、術士達の融通の利かなさは、明らかに我々が旅に出た時よりもひどくなっています」

アマリ「やはり、教団に何らかの変化があつたと見るべきなの……」

つ……!この気配は……!

ギルガ「いい線つくね、アマリちゃん」

アマテラス・ツヴァイとガルム部隊……それに新たな量産機部隊か……!?!?

零「カルセドニー……!」

優香「どうして、あなた達が……!?!?」

ギルガ「どうして……。手を組んだ相手を助けるのは当たり前前の事だろう?」

手を組んだ……だと……!?!?

マリア「まさか…オニキスは魔徒教団と手を組んだというの!?？」

ギルガ「正解ですよ、マリア様」

イオリ「バ、バカな…!法と秩序の番人の魔徒教団が世界を戦火に包むオニキスと…
ネメシスと手を結ぶなんて…!」

弘樹「魔徒教団の術士達はネメシスに操られているじゃねえか!?？」

ゼファイ「…彼等からはネメシスの力を感じません…!」

名瀬「という事は本当に教団とオニキスは協定を結んだという事か…!」

ギルガ「だから、そう言っているじゃないか」

カノン「カルセドニーさん!何故、ネメシスに従うのですか!??あなたも利用されて
いたのですよ!」

ギルガ「言っただろ?僕は自分の生命を守る為に行動していると…ねえ、リンちゃん
?」

リン「はい…。私の心はギルガさんと共に…」

マスカライトの様子…まさか…!

メル「リンちゃん…?どうして…!?」

ギルガ「リンちゃんがあまりにも抵抗するから、ちよーつと脳を弄らせてもらったよ」
明弘「洗脳したというのかよ…!」

ラフタ「やつぱり、あんたは最低ね！」

ゼフィ「ネメシスは何処ですか!?!」

ギルガ「今回は僕だけだよ。僕だけで充分だからね」

弘樹「なめやがって……!」

零「今はオニキスと魔徒教団の関係の事は後にして、この場をどうにかするぞ!」

イオリ「どうにかって……」

アマリ「……戦うしかないわ」

ホープス「そうです。言葉が届かない事がわかったのなら、力を示すしかありません」
ジャンボット「ドアクダーとのパワーバランスを考えている場合ではないな」

アマリ「オニキスと手を組んだ教団を放置しておけば、アル・ワース全土が戦火に包まれます……!その前に導師キールデインに真意を問いたさなくては……!」

零「こっちはこっちでネメシスをあぶり出さねえとな!」

ギルガ「そう簡単に行くかな?ネメシスによって、アマテラス・ツヴァイも強化された……。これまでの僕と同じだと思わない事だね!」

メル「リンちゃんはあなたに好意を寄せていたのを気が付かなかったのですか!?!」

ギルガ「気付いていたもの何も告白されたよ」

優香「それなのに彼女にそんなひどい事をしたの!?!」

ギルガ「僕に大人しくついて来るのだったら別だったけど、抵抗した彼女が悪い」

メル「リンちゃんの想いを踏みにじったあなただけは絶対に許しません！」

リン「…」

メル「待っていて、メルちゃん！絶対に助けるからね！」

俺達は戦闘を開始した。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「魔従教団も堕ちる所まで堕ちたつて訳ね…！」

ゼファイ「あまり、魔従教団とは争いたくはありませんが、攻撃してくるのならば、相

手をするしかありません…！」

零「教団はネメシスの存在に気づいていないのか…？それとも、知っていて手を組んでいる…？…考えていても仕方ねえか…今は相手をするしかねえ！」

〈戦闘会話 ルルーシュVS初戦闘〉

ルルーシュ「俺の行った事がまたシャーリーを傷つけてしまった…。何としてでもシャーリーを助け出す…！待っていてくれ、シャーリー！」

〈戦闘会話 ノブナガVS初戦闘〉

ノブナガ「何だ、この感覚は…？俺が、何かに怯えているのか…？）それに何か嫌な予感がする…気を付けなければ…！」

戦闘をしていた時だった。

三日月「何か来るよ…！」

現れたのはジークフリートと一機の土偶の様な姿のイクサヨロイだった。

カレン「ジークフリート…!!？」

ダールトン「誰が乗っているのだ…!!？」

ジェレミア「一人しかいませんよ。そうであろう、V・V・？」

V・V・「正解、流石はジェレミアだね」

ルルーシュ「V・V・！シャーリーを何処へ連れて行った!!？」

V・V・「悪いけど、教えるわけにはいかないね。まあ、言うとしたら、運命の場所と
いう所だね」

シン「運命の場所だって…!!？」

キラ「ラクスやカガリが連れて行かれたって言う…！」

ガエリオ「答える！その運命の場所とは何処の事だ!?!?」

V・V・「そう言えば、君そっくりの女の子がいたけど君の妹の様だね」

マクギリス「アルミリアの事を知っていると言う事はその運命の場所と呼ばれる場所にアルミリアやクーデリア・藍那・バーンスタインがいるのは確かなようだな」

ルナマリヤ「教えないって言うなら、力尽くで聞き出すわ……!」

V・V・「まあ、僕は初めからやる気だったけどね。君もそうだろう?……いや、君の目的は破壊王だったね?ノブカツ」

ノブナガ「何……!?!?」

イチヒメ「嘘……!」

ノブカツ「お久しぶりですね、兄上」

ヒデオシ「ノブカツ様……!?!?」

ジャンヌ「そんな……!」

ノブカツ「……織田 信勝の事かよ……!?!?」

ミツヒデ「ノブカツ様……何故、V・V・と……!?!?」

ノブカツ「破壊王であるノブナガを討つ為だよ、ミツヒデ」

ノブナガ「……!」

ヒデオシ「な、何言っているんだよ、ノブカツ様!」

ミツヒデ「ノブはあなたの兄上なのですよ！」

ノブカツ「ミツヒデ、ヒデヨシ。僕と来ないか？救星王の役目は破壊王を倒す事のはずだ」

ミツヒデ「申し訳ないが、私はノブに付いていくと決めました。ノブの家来ではなく、友として……」

ヒデヨシ「俺達はノブ様を裏切る事なんてできねえよ！」

ノブカツ「そうか……。ならば、兄上と共に討つ！」

ギルガ「遅かったね、V・V。」

V・V「僕達も用事が長引いちやってね、来ただけでも大目に見てよ」

ギルガ「まあいいよ。遅れた分はきっちり働いてもらうから」

ノブカツ「勿論です」

カズミ「あの人達はオニクス側の人達の様ね……！」

ノリコ「異界人との戦いは今に始まった事じゃないわ、お姉様！」

ルルーシュ「V・V。！シャーリーの居場所を何としてでも吐いてもらうぞ！」

V・V「簡単には吐かないけどね」

ノブナガ「ノブカツ……。本気なのだな？」

ノブカツ「覚悟無しにこの場には来ませんよ、兄上」

ノブナガ「…ならば、俺が…お前の相手をする！オダ家嫡男として…！」

ノブカツ「兄上、参りますよ…いざ尋常に…」

ノブナガ「勝負…！」

イチヒメ「兄上…ノブカツ…」

俺達は戦闘を再開した。

〈戦闘会話〉 ノブナガVSノブカツ

ノブカツ「兄上、このイシユタールの力を見せます…！」

ノブナガ「よもやお前がイクサヨロイに乗り、俺の前に立ち塞がる日が来るとはな

ノブカツ「今日こそ…兄上を越えます…！」

ノブナガ「お前が俺を超える日はないと言う事を教えてやる！来い、ノブカツ！」

〈戦闘会話〉 ジャンヌVSノブカツ

ジャンヌ「やめてください、ノブカツ様！私はあなたと戦いたくありません！」

ノブカツ「君の事は聞いたよ、ジャンヌ。兄上に付き従うと言うのなら、君も僕の敵だ…！」

〈戦闘会話 ヒデオシVSノブカツ〉

ヒデオシ「何やってんだよ、ノブカツ様！あれだけノブ様に従っていたじゃねえか！」
ノブカツ「僕は破壊王を討つ…。全ての世に平穩をもたらすため…！邪魔をするのなら、お前も討つ！」

ザ・フルはイシユタールにダメージを与えた。

ノブカツ「戦果を上げられないとは…！」

ノブナガ「それがお前の結果だ。降伏しろ、ノブカツ」

ノブカツ「僕は…あの時の僕とは違うのです！兄上…次はこうはいきません！それに…迷いのある兄上には僕は討てませんよ」

ノブナガ「！」

イシユタールは撤退した…。

ミツヒデ「ノブカツ様が敵になるとはな…」

ジャンヌ「ノブナガ、大丈夫？」

ノブナガ「問題…ない…。(お前の言う通りだ、ノブカツ…。今の俺は破壊王でも何でもない…。お前が本当に俺達を殺す気にいるのならば、その時、俺は…！)」

イチヒメ「(兄上もノブカツも苦しんでいると言うのに、私は何もできないの…?)」

〈戦闘会話 零VS.V.V.〉

V.V.「シャーリー人守れないなんて、君も無力だね」

零「お前には借りができた…。シャーリーの為…ルルーシユの為…。お前は絶対に許さない！」

〈戦闘会話 ルルーシユVS.V.V.〉

ルルーシユ「V.V.！お前を倒し、シャーリーの居場所を吐いてもらうぞ！」

V.V.「そう簡単に吐く訳にはいかないよ。お前だけには絶望を何度も与えてやる！」

ルルーシユ「俺に絶望を与えるためだけにシャーリーを巻き込むお前だけは許しはしない！」

〈戦闘会話 スザクVS.V.V.〉

V.V.「久しぶりだね、スザク。ユーフェミアの仇だったルルーシユと一緒にいる

なんてね」

スザク「笑いたければ笑うがいいさ。だが、僕はルルーシユと共に進むと決めたんだ……！まずはシャーリーを返してもらおうぞ！」

〈戦闘会話 C・C・V S V・V〉

C・C 「お前とこんな形で再会するとはな、V・V。」

V・V 「因縁は途切れないって事だね」

C・C 「お前との因縁も終わりにさせてもらおう。そして、シャーリーの為にも戦わせてもらおう」

〈戦闘会話 ジェレミア V S V・V〉

V・V 「ジェレミア、君は元々僕の刺客だったんだよ。僕に従いなよ」

ジェレミア 「冗談はやめてもらおう。私が忠義を果たすのはルルーシユ様の為……！私のはあの方の為ならば、地獄の果てまでお供するだけだ！」

〈戦闘会話 アーニヤ V S V・V〉

V・V 「ふーん、そう言う事か」

アーニャ「何…？私に何か用？」

V・V・「いいや、何でもないよ。取り敢えず、君の相手をさせてもらおうよ」

〈戦闘会話　コーネリアVS V・V〉

V・V・「コーネリア…あの時の借りを返させてもらおうよ！」

コーネリア「悪いな、私もお前を許すわけにはいかない」

ギルフォード「ユーフエミア様の為…貴様を倒す！」

コーネリア「いい心がけだ、ギルフォード。ギアスの根源は何度でも根絶やしにする…！」

蜃気楼の攻撃でジークフリートはダメージを負った。

V・V・「今日はここまでだね」

ルルーシュ「ここまでだと…？ふざけるな！シャーリーは何処だ！何処にいる!!？」

V・V・「いづれ教えてあげるよ、いづれ、ね」

ジークフリートは撤退した…。

ルルーシュ「ブイツウウウウツ!!？」

蜃気楼はジークフリートを追いかけてやろうとしたが、それをランスロット・アルビオンと紅蓮が止めた。

カレン「待って、ルルーシユ！」

スザク「今追ってはあいつの思う壺だ！ここは落ち着くんだ、ルルーシユ！」

ルルーシユ「…すまない、スザク、カレン…」

零「ルルーシユ…。俺もシャーリー救出に手を貸す…。俺のせいでシャーリーを連れて行かれてしまったから…」

ルルーシユ「何、お前のせいではない…。気にするな」

…ルルーシユ…。

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

アスナ「ギルガ！ネメシスは危険な存在なのよ！」

ギルガ「わかっているからこそ、僕はネメシスにつく！」

ゼファイ「恐怖のあまり、ネメシスに手を貸すだなんて…！」

零「それなら、その恐怖からお前を解放させてやる！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

カノン「墮ちる所まで墮ちましたね、ギルガさん。そこまでいくとは…」

ギルガ「笑いたければ笑うがいいよ。これが僕の生き様だ！」

弘樹「そんなもんは生き様でも何でもねえ！お前はただ逃げているだけだ！ネメシスの力の前にな！」

〈戦闘会話 優香VSギルガ〉

リン「戦闘を開始します」

ギルガ「そうだ、リンちゃん。僕達の敵を倒そう」

メル「リンちゃんを苦しめて…あなたは本当にリンちゃんを愛しているのですか！！？」

ギルガ「勿論、愛しているからこそ、僕の言う通りにしてもらっている」

メル「そんなものは愛しているとは言いません！愛と言うのは…誰かの為に必死になつて…それで…！」

優香「メルちゃん、あいつに何を言っても無駄よ！愛を言い訳に大切な女の子を苦しめるといふのなら…私達が止める！」

アマテラス・ツヴァイにダメージを与えた。

ギルガ「良いよ、ひと時の勝利ならいくらでも上げるよ。だが、君達はネメシスには勝てない…。いずれ知る事になるよ」

それだけを言い残し、アマテラス・ツヴァイは撤退した。

ゼファイ「確かにネメシスは強敵です…。それは私が一番理解しているつもりです。ですが、今の私にはエクスクロスの人達がいまます」

零「(カルセドニー…お前は何に恐怖してんだ…う…ネメシスの力にか?それとも…)」
俺達は魔徒教団とオニキスの敵機を全て撃墜した。

キタン「オニキスに魔徒教団…しぶとい奴等だったな」

ヨーコ「教団のあの力を使って、アル・ワースの支配を考えたら…」

マツケン「恐ろしい事になるな」

ゾーシイ「だが、オニキスと手を組んでる時点で支配も既に考えてんじやねえか?」

アイラック「そこら辺は教団の導師に聞くしかねえだろ」

キッド「アマリに頼むしかないな」

アマリ「はい。私も問いたかったですから…」

すると、俺達に向けて、射撃攻撃が起きた。

ジノ「何だ!?」

扇「魔徒教団の増援か…!?」

藤堂「いや、教団の建物まで巻き込まれていると言う事は援護射撃ではない！無差別攻撃だ！」

千葉「何か来るぞ！」

現れたのは…ラグナメイルが3機…!?それに戦闘にいますのは…!

クリス「う、嘘…」

エルシャ「あのラグナメイル…!」

サリア「生きていたの、エンブリヲ!?」

エンブリヲ「随分とご挨拶だね、クリス、エルシャ、サリア。私は調律者…。不死不滅なのだよ」

ヒルダ「インチキ野郎が！完全に消滅させたのにどんな手品を使いやがった！」

エンブリヲ「インチキ…手品…。君達の小さな脳では、その程度の認識しかないだろう」

ヒルダ「何だと!?」

ゼロ「そうか…。そう言うことか…!エンブリヲ、どうしてお前が超能力を使えるのか…どうして、俺達、ウルトラ一族を恨むのか…ようやくわかったぜ！」

グレンファイヤー「何がわかったんだよ、ゼロ!?」

ゼロ「エンブリヲ、お前は…。俺達、ウルトラ一族が超人の姿になる前の…光の国の住人だったんだな」

ジル「何…!?？」

サラマンディーネ「エンブリヲが…ゼロ様と同じ…!?？」

エンブリヲ「そうだ！私は元は光の国の科学者だった。そして、滅びを迎えかけた光の国を存続させる為、私達はプラズマスパークタワーを完成させた…！しかし、私はプラズマスパークの光で超人にはならず、そのせいで私の体はプラズマスパークの光に耐えきれず、光の国から追放された…」

ケロロ「何ですと!?？」

ギロロ「では、エンブリヲもウルトラマンとなる可能性があったと言うことか…！」

エンブリヲ「しかし、超人の姿とならない代わりに私は超能力を得た…。そして、私はエンブリヲとして、活動を始めたのだ！だからこそ、お前達、ウルトラ一族は許さない…のうのうとその力を使い続けているお前達が！」

ヒュウガ「そんなものはただの嫉妬じゃないか！」

エンブリヲ「黙れ！お前達に私の気持ちなどわかるはずもない！」

ゼロ「お前が俺達に恨みを持つのは構わねえ…。だが、他の宇宙の奴等を巻き込んでんじやねえ！」

エンブリヲ「私にはある目的がある……。それを成し遂げただけだ！」

アンジュ「その目的とは何なの!?？」

ネモ船長「エンブリヲ……。まずお前は何をしに来た？」

エンブリヲ「まずは……」

ヒステリカが教団の神殿に近づいた……。!?？」

エンブリヲ「古き因襲に縛られた彼等に鉄槌を！」

神殿に攻撃を仕掛けた!?？」

エンブリヲ「この程度では神木は倒れないか……。まあ良い……。全ては準備が整ってからだ。その時こそ私は教団の力を……。エンデの力を手に入れる……」

リチャード「教団に攻撃をしたぞ……！」

タスク「どう言うつもりだ、エンブリヲ……。!?？」

アレクサンダー「ミスルギに協力していた異界人を奴等に奪われた事への仕返しか……？」

エンブリヲ「あんなものは駒に過ぎない」

アスラン「お前という男は人の生命を何だと思っている!?？」

キラ「あなたは生命の意味を知らない人だ！」

C・C「キラ、お前の言う通りだ。この男は生命の価値というものをわかってはい

ない」

エンブリヲ「君に言われるとは思ってもみなかったよ、ギアスの魔女」

ルルーシユ「(C・C・の事を知っているのか…?)」

エンブリヲ「エクスクロス…。私は君達にチャンスを与える為にここに来たのだよ」

ハツシユ「チャンスだと?!?」

エンブリヲ「そうだ。私が新しい世界を創る為には君達の協力が必要だ」

鉄也「新しい世界…」

エンブリヲ「その創造に魔徒教団とオニキスは邪魔になる。もつとも向こうとしても世界の真理に近づいた私の存在は邪魔だっただろうがね」

アマリ「それが神殿を攻撃した理由ですか…」

エンブリヲ「エクスクロス…。私の力を認め、跪けば、君達の存在を許してやろう」

ロザリー「何が許すだ！バカじゃねえのか、お前！」

葵「私達は私達の力で生きるわ！あなたの承認なんて必要ないのよ！」

海道「出直してきやがれ、クソ野郎！それとも、ここで決着をつけるか！」

真上「こちらとしてはその方が都合なのだがな」

エンブリヲ「私の不死不滅の力を見せても理解してもらえないか…」

ナオミ「そんなの何度見せられても理解なんてしないよ！」

ワタル「わかった！この前の戦いで倒したのは、お前の偽物だったんだ！」

シバラク「その手のカラクリはゼロに見慣れている……。拙者達をびつくりさせようとしても無駄だ！」

零「：エンブリヲ、お前に問いたい事がある」

エンブリヲ「何かな？」

零「お前は：ネメシスの存在を知っているのか？」

エンブリヲ「：勿論。彼も私の目的の為の邪魔な存在だ。いずれ、合間見える事となるだろう」

零「そうか、わかった。兎に角、お前に従うつもりはない！」

エンブリヲ「そうか：。世界の真理を理解した私から見れば、あまりにも無様だよ」と、ある機体が現れた。

？「全く以て、彼の言う通りだな」

舞人「何者だ!?？」

エグゼブ「私の名はエグゼブ：。君達が倒したパープルの上位者だ」

ジョー「お前が：！お前がエグゼブか!?？」

エグゼブ「エースのジョー：いや、穴戸 ジョー：。お前の知りたかった事を教えてやる。お前の父、穴戸 英二を殺したのはこの私だ」

ジョー「貴様あああつ!!？」

万丈「よせ、ジョー！奴は明らかにお前を挑発している！」

舞人「エグゼブ！お前は何のために、ここに来た!!？」

エグゼブ「ミスター・エンブリヲと同じだよ。君達をスカウトに来た」

グレートマイトガイン「何だと!!？」

エンブリヲ「ほう……。どうやら、お前もアル・ワースの理を理解しているようだな」

エグゼブ「ドアクダー氏とは懇意にさせてもらっているのだな」

エンブリヲ「なるほどな……。闇の力というやつか」

エグゼブ「そう……。私は、この宇宙の真理……。光と闇、正と負……。その片方の体現者だよ」

エンブリヲ「面白い……。時間があれば、ゆっくり話をしたかったよ」

エイサップ「悪党同士で勝手に盛り上がるな！」

みさえ「つまり、あっちの人はドアクダーの協力者の悪い人ってわけね！」

アンジュ「何だって一緒よ！」

エンブリヲ「どうすると言うのかな、アンジュ？」

アンジュ「決まってる！私や世界を好き勝手にしようとする奴とは全力で戦う！」

エンブリヲ「それでいい。だが、今の君達で闇の使徒である彼に勝てるかな……？」

ヒステリカ達は撤退した……。

ヴィヴィアン「帰っちゃった…」

エルシャ「イルマちゃん、ターニヤちゃん…。それでも、あの人についていくの…」
アンジユ「あんな奴は放っておけばいい！今は、あのエグゼブとかいう奴の相手が先よ！」

エグゼブ「話を聞いていなかったようだね、レディ。私は君達をスカウトに来たと
言つた筈だ」

虎王「騙されるなよ、みんな！こいつの正体はドン・ゴロにもわからなかったんだ！」
エグゼブ「魔界王子…。あなたの事もドアクダー様に取りなしてやつてもいいのですぞ」

虎王「うるさい！俺様はワタルと一緒に往くつて決めたんだ！」

舞人「虎王…。お前は、こいつの正体がわからないと言つたが、一つだけはつきりしている…。それは、こいつが悪という事だ！」

エグゼブ「否定はしないよ、勇者特急隊長、旋風寺 舞人君。だが、君のお得意の理屈：正義は決して悪に負けないというやつは真つ向から否定させてもらおう。私の力によつてね」

部隊を展開させてきたか…！

バトルボンバー「出たな！魔のオーラの軍団！」

ガードダイバー「だが、サリーさんのイノセントウエーブがあれば、恐れる事はない！」

エグゼブ「何故、彼女のイノセントウエーブが魔のオーラの効果を弱めるか、わかるかな？」

舞人「それは…」

エグゼブ「私の問いに答えられない者はこの先の戦いで生き残る事は出来ない。さあ、決断するがいい！私と共に闇の力の使徒となるか、それとも絶望の中で死するかを！」

舞人「…」

零「任せるぜ、舞人」

舞人「零さん…」

しんのすけ「みんな、舞人君と同じ気持ちだゾ！」

竜馬「だから、言ってやれ！自分を神か何かと勘違いした悪党野郎に！」

舞人「はい！エグゼブ！お前がどれだけの絶望を用意しても正義の心は決して折れない！お前を倒して、それを証明してやる！」

エグゼブ「愚かな…。だが、それでこそだ。では、君に教えてやろう。正義の…そして、君の無力さを」

ルルーシユ「攻撃目標はエグゼブの乗る巨大兵器だ！あれに攻撃を集中させろ！」
万丈「気をつけろ！魔のオーラの洗礼を受けたロボットは1分あれば機体のダメージを回復させる！」

弘樹「つまり、倒す時には攻撃を集中させて、一気にやれって事だな！」

ジョー「エグゼブ！貴様を倒し、俺は親父の仇を討つ！」

舞人「行くぞ！正義の力を見せてやる！」

エグゼブ「無駄な事を……」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VSエグゼブ〉

エグゼブ「ネメシスに対抗する中心の存在……。それが君か」

零「お前もネメシスの事を知っているのか……！」

エグゼブ「ああ。何故なら、彼もアル・ワースの真理を知っているからな」

零「その真理も気になるが、まずはお前を止める……！そして、その真意など聞きたい事を全て聞かせてもらう！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSエグゼブ〉

エグゼブ「その白き巨人……。あらゆる世界の可能性を一つにした存在……。ゴゴールと対をなす者か……。そして、君もまたその白き巨人を操る者……。ふふふ、君達がアル・ワースに來たのは必然なのかもしれないな」

ジョーイ「僕達がアル・ワースに來たのは必然……。!? よくわからないけど、僕とヒーローマンがあなたを止める！」

〈戦闘会話　ゼロVSエグゼブ〉

エグゼブ「ウルトラマンゼロ……。二度もウルトラマンベリアルを倒した君に賞賛の言葉を送ろう」

ゼロ「そんな言葉はいらねえよ！ベリアルの野郎は何度でも倒すだけだ！エグゼブ、お前も止まる気がないというのから、俺が銀河の彼方まで吹っ飛ばしてやるぜ！」

轟龍がドリルアタックでインベリアルにダメージを与えた。

エグゼブ「なるほど……。パープルを倒しただけの事はあるな」

舞人「負け惜しみを！」

エグゼブ「だが、この世界の真理をお前達が解き明かさない限り、私には……闇には勝

てない」

ジョー「黙れ！そのべらべらとよく動く口を一生利けなくしてやる！」

エグゼブ「いいのかな？お前達の母艦に招かざる客が来ているぞ」

零「何…!!？」

Nーノーチラス号に警報が鳴り響いた。

エレクトラ「居住ブロックに侵入者あり！侵入者は…エンブリヲです！」

ネモ船長「何っ!!？」

アンジュ「あの男…！ナディアを狙って…！」

ゼロ「ナディアは連れて行かせるかよ！ジエアツ!!？」

ヴィルキスとゼロはNーノーチラス号に入った。

すると、俺は何か嫌な予感がした。

零「…な、何だ…!!？」

ゼファイ「パパ…？」

零「こ、これは…！アキト！すぐにナデシココに戻るぞ！」

アスナ「ど、どうしたの、零!!？」

零「早くしないと…ユリカさんとルリが危ねえ！」

アキト「何…!!？ユリカ…！ルリちゃん…！」

ゼフィルスネクサスとブラックサレナはナデシコCの中にへと入った。
間に合え……！

ーナディアよ。

ど、どうしてエンブリヲは私の部屋に……!??

ナディア「……！」

エンブリヲ「さあ、プリンセス……。約束通り、君を迎えに来た」

ジャン「ナディアに近寄るな！それ以上、近づいたら……」

エンブリヲ「プリンセスを守る騎士のつもりか。目障りだな」

エンブリヲの力でジャンが吹き飛ばされた……。

ジャン「うわっ！」

ナディア「ジャン！」

エンブリヲ「今の所、生命に別状はないよ。だが、この後はわからない。プリンセス……。彼の生命を助けたければ、何をすればいいか、わかるね？」

ナディア「ブルーウォーターが欲しいなら、あげるわよ！」

エンブリヲ「それだけではダメなのだよ。ガーゴイルは保険を求めている」

ナディア「保険……？」

エンブリヲ「そうだ。君の兄上だけでは、もしもの時があつたら困るからね」

ナディア「私の……お兄さん……」

すると、アンジュとゼロが駆けつけてくれた。

アンジュ「エンブリヲ！ナディアから離れなさい！」

ゼロ「今度という今度は許さねえぞ！」

エンブリヲ「今は君には用はない、ウルトラマンゼロ。それにヤキモチは不要だよ、ア

ンジュ。私は君も迎えに来たのだから」

アンジュ「ふざけた事を！」

エンブリヲ「私はいつでも真剣だよ。さあ、アンジュ……。新世界の花嫁となる君にプ

ロポーズだ」

ゼロ「やらせるわけねえだろ！」

エンブリヲ「邪魔だ！」

エンブリヲの力でゼロを吹き飛ばし、ゼロは変身を解かれてしまった。

ゼロ「な……?!? 何故、ウルトラマンの力が……?!?」

エンブリヲ「今回の君の光を奪わせてもらった。暫くは変身できないだろう」

ゼロ「エンブリヲ……てめえ……！」

エンブリヲ「それともう2人の花嫁候補の元にもプロポーズが届いているだろう。ナデシコCでね」

ゼロ「な、何だと…!!?」

ナ、ナデシコCで何が…!!?

ーホシノ・ルリです。

エンブリヲさんはNーノーチラス号にいるはず…。それなのに…。

エンブリヲ「迎えに来たよ、ユリカ、ルリ」

何故、エンブリヲさんがナデシコCのブリッジにいるのですか…!!?

ユリカ「ど、どうしてあなたが此処に…!!?」

ハリー「もう片方のあなたは偽物…!!?」

エンブリヲ「いずれ、わかるよ。まずは君は邪魔だね」

ハリー「うわあっ!」

エンブリヲさんは超能力でハリー君を吹き飛ばし、ハリー君は気を失ってしまいました…。

ユリカ「ハリー君!」

エンブリヲ「さあ、行こう。運命の場所へ：君達も招待される資格がある」
そこへ、零さんとアキトさん、アスナさんとゼフィさんが駆けつけてきました。

―新垣 零だ。

な、何とか間に合ったか…！

ユリカ「アキト！零君！」

アキト「ユリカ！ルリちゃん！」

エンブリヲ「随分早いご登場だね、零、テンカワ・アキト」

アキト「エンブリヲを：N―ノーチラス号にいるはずのお前が何故此処にいる!!？」

エンブリヲ「私程ならこのぐらい可能だ」

零「アキト、今はそんな事はどうでもいい！」

アスナ「間に合ったのなら…：ここであなたを追い出すわ！」

エンブリヲ「アスナ・ペリドット。君も私と共に来る気はないか？」

アスナ「お断りよ！」

エンブリヲ「そうか、ならば…」

アスナ「あ…」

エンブリヲが指を鳴らすとアスナは気を失い、倒れてしまった。
ゼフィ「アスナお姉ちゃん！」

零「てめえ…アスナに何をした!?？」

エンブリヲ「何、少し眠ってもらっただけだよ。生命に別状はない」

アキト「エンブリヲ！2人から離れろ…！」

エンブリヲ「君は彼の相手でもしてなよ」

現れたのは…北辰…!?？」

北辰「…」

零「こいつ…また蘇ったのか…！」

アキト「いや、違う…！」

零「え…!?？」

エンブリヲ「彼から提供してもらったペルフエクタというものは素晴らしいな」

アキト「ペルフエクタ…？」

エンブリヲ「人によって作り出された不死人間…所謂、ホムンクルスだよ。戦の世界で使われていた代物だ」

零「死者を…ホムンクルスにして生み出すなんて…！」

北辰「…」

アキト「くっ……！感情を失っても、俺の相手となるのか……！」

エンブリヲ「さて、と……。これで邪魔者は君だけだね、零」

零「ルリとユリカさんは渡さない！」

エンブリヲ「君には、これだ！」

すると、俺に凄まじい重力をかけられ、地面に叩きつけられる。

零「ガアツ……！こ、この……！」

エンブリヲ「さらに重力を上げるよ」

零「グアアアアアアアツ！！？」

じゅ、重力に押し潰される……！

アキト「零！」

ゼフィ「。パパ！」

エンブリヲ「ん……？パパ……？」

ゼフィ「パパを離してください！」

ゼフィ……！

エンブリヲ「君は……成る程、ゼフィルスネクサス本人だね……。まさか、零を父と呼ぶとは……。さしずめ、母はアマリ・アクアマリンだろうね。ならば、ゼフィ……私はもつと彼に重力をかける事が出来る……。その意味が理解できるかい？」

ゼフィ「……！」

エンブリヲ「君は興味深い存在だ……。よって、君も運命の場所に招待しよう。断れば……」

零「グアアアアつ!!？」

また重力を上げやがった……!

エンブリヲ「君の愛するパパが重力に押し潰されるがね」

ゼフィ「……パパ……」

零「ダ、メだ……!ゼフィ……!そいつの……言葉に……従うな……!」

エンブリヲ「頭のいい君ならば、わかるよね?」

ゼフィ「パパ……。ごめんなさい……」

エンブリヲ「では、ユリカ、ルリ、ゼフィ……。行こう、美しき女神達……」

零「やめろ……!ゼフィ……ゼフィイイツ!!?」

アキト「ルリちゃん!ユリカアアアツ!!?」

俺は……また……!

ーアマリ・アクアマリンです。

Nーノーチラス号とナデシココから何かが出てきました。

グランデイス「あれは……！」

カレン「アンジュ！それにナディア、ユリカさんとルリもいる！それに……！」

アマリ「ゼフィちゃん……!!？」

ど、どうして、ゼフィちゃんまで……!!？」

ジル「逃がさんぞ、エンブリヲ！」

エンブリヲ「逃げる……？そんなつもりはないよ。君達には私とアンジュや他の花嫁達の婚礼に参列してもらおうつもりだ」

な、何……!!？この感覚は……!!？」

ワタル「何が起きるの!!？」

エグゼブ「さすがだ、エンブリヲ。君は一足先に、この世界を見限るか」

エンブリヲ「そういう事だ、エグゼブ。後は好きにするがいい」

ナデシココからゼフィルスネクスとブラックサレナが出て来ました。

アキト「ルリちゃん！ユリカ!!？」

タスク「アンジュ!!？」

零「ゼフィ!!？クソオオオオオオツ!!？」

私達は光に包まれました……。

「導師キールデインです。」

導師キールデイン「！」

セルリック「何を驚いておられるのかな、導師キールデイン？」

導師キールデイン「無礼であるぞ、法師セルリック！この地に足を踏み入れる事が許されるのは代々の導師だけだ！」

セルリック「無論、存じ上げております」

導師キールデイン「お前には前線を預けはしたが、ここ最近の勝手な行動は目に余る」
セルリック「私は教団の理念に従って、行動したまです」

導師キールデイン「我々のすべき事は戦乱のコントロールであり、戦乱を起こす事ではない」

セルリック「それを決めたのは誰です？」

導師キールデイン「それは…」

セルリック「…」

導師キールデイン「まさか、お前は…」

セルリック「考えてみれば、教主の任命を持つ必要などなかったわけですよ。教団の中で智の神エンデに最も近いものは、既にあなたではなく、この俺なのだから」

導師キールディン「や、やめろ…」

セルリック「ようやく気づいたようだな。既に自分が用済みである事に。そう…世界は生まれ変わる。ドアクダーもエンブリヲもオニクス…いや、ネメシスも、そして、エンデもそれを望んでいる。そのエンデが選ぶのは、この俺…セルリック・オブシディアんだ」

導師キールディン「法師セルリック…！いや、教主セルリック…！私に慈悲を！」

セルリック「それこそエンデのドグマに反するものだ」

導師キールディン「な、何故です!?？私は導師としてエンデの声を聞き、職務を果たしてきたのに！」

セルリック「理由が欲しいか？ならば、くれてやる。お前は目障りなんだよ…！EX HALATIO！」

導師キールディン「ああああっ!!？」

私が…消えるなんて…！

ーセルリック・オブシディアんだ。

セルリック「エンデの名と教団の歴史を盾に取れば、俺達が黙ると思うなよ、ペテン師め……」

ネメシス「おーおー、今までの導師は消すなんて、怖い事をするな？」

ネメシスカ……

セルリック「情などに意味はない。これで名実共に俺が、魔従教団のトップだ……。後は好きにやらせてもらう」

ネメシス「そうだったら、これからは教主セルリックと呼んだ方がいいのか？」

セルリック「そうだな、それもいいが……。まずは目的を果たしてからだ。待っている、アマリ・アクアマリン……。お前ともいわずれ決着をつけてやるぞ……」

そう言い残し、私はこの場を去った……

ネメシス「(全て、お前の思い通りかよ……。ますます、面白い事になりそうだな。なあ、エンデさんよ……)」

ービート・スターである。

ギルギロス大統領「エクスクロスが運命の場所にへと招かれたか……」

ムーンWILL「これで、私達の邪魔をする者はいない……。計画を執行するのは今で

はないか？「ビート・スター」

「ビート・スター」「そうであるな。それでは…今こそ、アル・ワース全ての有機生命体撲滅を開始する…！」

カイザム「（ビート・スター天球が動き出す時が来たか…。さあ、どうするエクスクロス、そして、カンタム…。早く戻って来なければ、アル・ワースが滅びる事になるぞ…）」

第66話 眞実の黙示録

ーアンジュよ。

私は目を覚まし、飛び起きた。

アンジュ「……ここは！」

エンブリヲ「目が覚めたようだね、アンジュ。髪を整え、ドレスに身を包んだ君の美しさは格別だ」

ラクス「……」

カガリ「……」

アルミリア「……」

クーデリア「……」

アンジュ「そつちの人達は……？」

エンブリヲ「嫉妬かな？ まあいいだろう。彼女達は、ラクス、カガリ、アルミリア、クーデリア……。私の花嫁候補だ」

彼女達が……キラ達や三日月達の……！

エンブリヲ「そして、ここに新たな2人が追加される」

ユリカ「…」

ルリ「…」

アンジュ「ユリカ艦長！ルリ！」

ゼファイ「アンジュ様…！」

アンジュ「ゼファイまで…！」

でも、ここにはナディアやエクスクロスのみんながいない…！

アンジュ「ナディアは…?!? エクスクロスは?!?」

エンブリヲ「プリンセスなら、別の部屋にいる。エクスクロスも、もうすぐこの空間

に来るだろう」

アンジュ「この空間…?!?」

エンブリヲ「窓の外を見るがいい」

こ、これは…！

第66話 真実の黙示録

アンジュ「ここは…アルゼナル…?!?」

エンブリヲ「そうだ。こここそが真実のアルゼナル……。そして、ここから新世界が生まれる」

アンジュ「真実の……アルゼナル……」

真実とは……一体……？

ーナディアよ。

ナディア「……アンジュさん達は、どこにいるの？」

エンブリヲ「別室で愛を語らっているよ、この私とね」

ナディア「な、何を言っているの!!？」

エンブリヲ「理解できないか……。アトランティスの血を引きながら、何も知らないんだね」

ナディア「わ、私は……ノーチラス号の人達とは違う……」

エンブリヲ「ん？タルテソス王は何も話してくれてないのかな？」

ナディア「タルテソス王……ネモ船長……」

エンブリヲ「自分の父親に対して、随分と他人行儀なんだね」

ナディア「……！」

エンブリヲ「おやおや……それさえも知らなかったのか……。君の本当の名前はナディア・ラ・アルウォール……。タルテロス王国の王、エルシス・ラ・ウォールの娘だよ」

ナディア「私が……ネモ船長の子供……」

そ、そんな事って……！

ーアンジユよ。

私達は囚われていたルリ達を連れて何とか逃げ出そうとしたけど……。

アンジユ「……！」

エンブリヲ「この空間の意味もわからずに逃げ出すとは、ドレスに着替えても無鉄砲な所は変わらないね。だが、安心してくれ。その溢れる野生味も君の魅力の一つだよ、アンジユ」

ルリ「ナディアさんは何処ですか……？」

エンブリヲ「心配しなくても、彼女には、別の私がついている」

ユリカ「別の私……？」

クーデリア「気をつけてください！その方は…」

エンブリヲ「クーデリア、真実は彼等自身が気がつかないとダメだよ。その言葉の意味が理解できない以上、君やエクスクロスが私に勝つのは、不可能だよ」

カガリ「何故、そんな事がわかる…?!?」

エンブリヲ「私は調律者だからね。もうすぐ彼等も自らの無力さを知る。そして、私の協力者になってくれるだろう。私と君達の結婚式は私とエクスクロスの講和の場となる」

アルミリア「ヒッ…?!?」

ラクス「あなたという人は…!」

アンジュ「どこまで妄想を広げれば、気が済むのよ!」

エンブリヲ「ゼフィ、君もその候補だ」

ゼフィ「私は…あなたには屈しません…!」

エンブリヲ「流石は零とアマリ・アクアマリンの娘だ…。だが、君の晴れ姿を2人に見せるいいチャンスだ」

ゼフィ「…!」

アンジュ「あんたはどれ程の女を…!」

エンブリヲ「彼等を迎える準備もある。君には大人しくしてもらおう」

な、何…!??

アンジュ「何を…したの…!?？」

エンブリヲ「君の痛覚を50倍にした。これで肌に触れる服でさえ、地獄の責め苦にならだろう」

アンジュ「ぐ…うう…」

ゼフィ「アンジュ様…!」

エンブリヲ「さらにこれはどうかな？」

ラクス「おやめなさい…!」

アンジュ「!」

エンブリヲ「痛覚を全て快感に変換した」

そ、そんな…!

エンブリヲ「美しいよ、アンジュ。さあ…もつと声を聞かせてくれ」

アンジュ「だ、誰が…あんたなんか…」

エンブリヲ「アンジュ…。君を操るなど簡単なんだよ。では、もつと敏感にしてあげよう」

く、くそっ…!

エンブリヲ「美しいものが苦しみ、虐げられ、絶望する姿は実に美しい…!そろそろ

素直になれたかな？」

アンジュ「はい…エンブリヲ…さ…。くたばれ…！クス野郎！」

エンブリヲ「素晴らしいよ、アンジュ！この状況で抵抗できるとは！だが、身体を動かす事は出来まい。その間に私は準備を整えよう」

エンブリヲは歩き去った…。

アンジュ「…エンブリヲ…！いやあああつ！熱い…熱い…いいいつ！！？たすけ…て…タ…スク…」

こんな事で…！

―新垣 零だ。

俺達は出撃した。

エレクトラ「機動部隊各機並びに他艦は健在！なお、エグゼブとその配下の機体は確認できません！」

ネモ船長「ここは…」

ここは…アルゼナルか…？

サリア「あれって…アルゼナル…」

ヒルダ「つて言うが、どう見ても周りは宇宙だ！」

ジル「我々はエンブリヲによって、ここに転移させられたのか……」

タスク「アンジュは……?!?!」

ノブナガ「囚われた者達はあのアルゼナルにいるのか……!」

ルルーシュ「(シャーリーはエンブリヲではなく、V・V・に攫われた……。奴等は繋がっているのか……?)」

ジャン「三日月さん! 明弘さん! バルバトスルプスレクスとグシオンリベイクフルシテイはどうですか?!?!」

三日月「うん、元通りだよ、ジャン」

明弘「イアンのおやつさんとお前には感謝しないとな! まあ、イアンのおやつさんと会うのは後だが……。これで全力でやれる!」

オルガ「クーデリア達もあそこにいるのかもしれないな」

零「だったら、とつとと突っ込む……!」

アスナ「ゼファイが不在でもゼフィルスネクススは動かせるわ……!」

ゼロ「俺も変身できる様になった!」

三日月「あそこにクーデリア達がいるのか……!」

アキト「必ず、救い出す……!」

キラ「待つて、何か出てくる！」

エンブリヲとその配下か……!

シン「出てきたな、エンブリヲ！」

アマリ「あなたが私達をここへ呼んだのですか!?!?」

エンブリヲ「その通り。君達は私の同志として私とアンジュ達の結婚式に立ち会って
もらう」

ルナマリア「アンジュ達……?」

アスラン「まさか……!」

エンブリヲ「その通り。クーデリア、アルミリア、ラクス、カガリ、ルリ、ユリカ、ゼ
ファイも私の花嫁なのだよ」

ガエリオ「何だと……!?!?」

マクギリス「やはり、アルミリア達もそこにいるのだな……!」

零「ゼファイもだと……!?!?」

エンブリヲ「そう。少し早いですが、君達の大切な娘の晴れ姿が拝めるといふ事だ」

零「貴様あああつ!!?」

メル「落ち着いてください、零さん！」

カノン「私達がいる限り、そんな事させません！」

優香「ゼファイちゃんだって、恋をさせてあげたいもの」

零「……」

弘樹「ゼファイをお前になんてやるかよ！ゼファイは…俺の妹でもあるんだからな！」

マリヤ「大事な孫を…好きにはさせないわ！」

アスナ「零！ゼファイを救い出したいと思っっているのは私達も同じよ！」

零「みんな…」

ヒルダ「友達の娘なんだ…。助けださないと友達が廃るだろ！」

アマリ「大丈夫だよ、零君！ゼファイちゃんは強い子なのよ！何と言っても私と零君の娘なのだから…！」

零「ああ…！」

シモン「何が同志だ！俺達はお前をぶつ潰す！」

エンブリヲ「そういきり立たないでくれ。君達にアル・ワースの理について説明しよう」

イオリ「アル・ワースの理…」

エンブリヲ「そうすれば、私が何のために新世界を求め…。そして、この真実のアルゼナルで何を研究していたかも理解できる。君達が、これからドアクダーや魔徒教団、ネメシスと戦う上でも有益な情報となるう」

ルルーシュ「…」

ミラーナイト「…」

エンブリヲ「私の同志になるか、それとも敵になるかは、それを聞いてからでも遅くないのではないかな？」

ホープス「騙されてはなりません」

アマリ「ホープス…!」

ホープス「この男が真実を話すとは思えません。逆に、この男が真実を話すとしたら、それは私達を利用する為に決まっています。そして何より、私の大切な後輩に手を出した時点で万死に値します!」

零「ホープス…お前…!」

エンブリヲ「教団の魔法生物は黙っている」

ネモ船長「…ホープスの言う通りだ。アトランティス文明の遺産を狙ってタルテソス王国の滅亡に間接的とはいえ関与し…そして、ナディア達をさらった貴様の言葉など聞くに値しない」

エンブリヲ「後悔するぞ、タルテソス王…」

ネモ船長「そんなものは腐る程してきた…。だが、それでも失わなかったもの…意思の力が我々にはある!」

ワタル「僕もネモ船長に賛成！悪い奴の言う事なんて聞くものか！」

舞人「エンブリヲ！お前を倒し、全ての企みを吐かせてやる！」

甲児「正義の味方だからって、いつもお行儀よくいくと思つたら、大間違いだぜ！」

鉄也「悪党に容赦するつもりはない……それが俺達のやり方だ！」

ゼロ「お前もベリアルと同じ、光の国が生み出しちまった闇だ……俺が止めてやる！」

アマリ「ホープス！あなたは、この空間から脱出方法を考えて！」

ホープス「かしこまりました。こんな所で私も死ぬつもりはありませんので。その代わり、必ずゼフィを助け出してください！」

零「当たり前だ！」

北辰「……」

アキト「火星の後継者のパイロットもペルフエクタによって、生み出されたか……！」

ノブナガ「本当にペルフエクタが使われているとは……！」

カエサル「(何故、西の星の技術を奴が使っている……？誰が提供したのだ……?)」

サリア「イルマ、ターニャ！戦いをやめなさい！」

イルマ「でも……」

ターニャ「私達は……」

ジル「エンブリヲに恐怖で支配されているか……！」

ヒルダ「だったら、エンブリヲを倒すだけだ！」

エンブリヲ「愚かだよ、君達は。最後のチャンスを失った……」

ホープス「そう思っているのはあなただけでしょ？」

エンブリヲ「では、君達に残酷な現実と調律者たる私の力を見せよう……！」

名瀬「ハリー、ナデシココを下がらせる！」

號「ここは俺達が請け負う！」

ハリー「了解しました！」

ナデシココは後方へ下がった。

行くぞ！ 戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(必ずゼファイ達を取り戻す……！俺の全てにかけて……)」

〈戦闘会話 アキトVS初戦闘〉

アキト「待っていてくれ、ユリカ、ルリちゃん……！復讐鬼ではない、俺が迎えに行く

……！」

〈戦闘会話　キラorアスランVS初戦闘〉

キラ「行くよ、アスラン……！ラクス達を救い出す為に……！」

アスラン「ああ！待っている、ラクス、カガリ！俺達がすぐに行く！」

〈戦闘会話　三日月or明弘VS初戦闘〉

明弘「行くぜ！本当の力を取り戻した俺達に敵うものはいねえ！」

三日月「やろう、明弘。クーデリア達を取り戻す……！お前も力を貸せ、バルバトスル
プスレクス……！」

〈戦闘会話　ガエリオorマクギリスVS初戦闘〉

ガエリオ「ここが正念場だぞ、マクギリス！」

マクギリス「わかってる。俺の全てをかけて、アルミリアを救い出す……！」

〈戦闘会話　アキトVS北辰（ペルフェクタ）〉

北辰「……」

アキト「死人になってまで俺を付け狙うか……！いいだろう、何度でも地獄に送ってや

る……！」

ブラックサレナはデイストーションアタックで夜天光にダメージを与え、夜天光は爆発した。

アキト「…眠れ、北辰……！」

エンブリヲ「…蘇らないとは……。彼は欠陥品の様だね」

アキト「人の心を嘲笑っているお前が言うな……！」

エンブリヲ「どうでもいいのだよ、死んだ人間なんてね」

〈戦闘会話 零orアマリVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「零、アマリ。結婚式の邪魔はさせないよ」

アマリ「何と言われても阻止します！」

零「ゼフィをお前にやるわけねえだろ！」

エンブリヲ「そう怒らないでくれ、お義父さんとお義母さん」

零「もういい、てめえは喋れない様になるまでボコボコにしてやる！」

俺達はヒステリカにダメージを与えた。

エンブリヲ「バカな……」

ジル「私達の勝ちだ、エンブリヲ！この空間の意味を話してもらおうぞ！」

エンブリヲ「それは……出来ないな……」

ヒステリカは爆発した……。

エレボス「やったの……？」

アマルガン「完全に撃墜した……。だが、この前も同じようにしたのに奴は生きていた

……

サコミズ「まだ戦いは終わっていない。気を抜くな」

リュクス「まだ何か来ます！」

ミスルギの無人機とドラゴン……それにレギンレイズが現れた。

イオク「見つけたぞ、エクスクロス！」

ジュリエッタ「イオク様……!?」

ガエリオ「魔徒教団には降らず、未だエンブリヲに付いていたのか……！」

アミダ「何しに来たのさ？」

イオク「エンブリヲ殿の元で動き、お前達を此処で討ち倒す！」

明弘「お前は本当にしつこい男だな……！」

イオク「ヴィダール！ジュリエッタ！もうお前達を止めようとしな！エクスクロスもろともくたばるがいい！」

マクギリス「…と言っているが、どうする、二人共？」

ガエリオ「アルミリアを助け出す邪魔をするのなら、倒すだけだ！」

ジュリエッタ「これで終わりにしましょう、イオク様！」

タスク「…」

タスクのアーキバスがアルゼナルに…！

ヒルダ「タスク…！」

タスク「アンジュやナディア達を探してくる！前線は任せる！」

モモカ「お願いします、タスクさん！」

優香「零、アマリちゃん！あなた達も行つて！」

零「優香…」

メル「ゼフィちゃんをお願いします！」

アマリ「ありがとうございます…！」

零「お願いします！」

ゼフィルスネクスとゼルガードはアルゼナルに近づいた。

イオク「させるものか！」

レギンレイズが俺達の前に移動した…!!?

アスナ「みんな、気をつけて！」

零「くっ…!!」

しかし、そんなレギンレイズをブラックサレナ、バルバトスルプスレクス、ストライクフリーダム、インファイニットジャステイスが阻んだ。

アスラン「行け、零、アマリ！」

キラ「彼は僕達に任せて！」

三日月「クーデリア達を頼むよ…!!」

アキト「そして、必ずゼフィちゃんを救い出してくれ！」

助かる…!!

俺達はアルゼナルへ入った…。

―氷室 弘樹だ。

零達なら、必ず大丈夫だ…!!

それにしてもエンブリヲを倒したはずなのに何なんだ、この息苦しきは…。あいつ…また復活するのか…!!?

兎に角、戦闘開始だ！

〈戦闘会話 三日月VSイオク〉

三日月「あんたもしつこい男だね」

イオク「諦めないのが俺の取り柄だ！」

三日月「あ、そう。どうでもいいよ。今回で終わらせるから」

〈戦闘会話 明弘VSイオク〉

イオク「今度こそ、貴様から受けた屈辱を返してやる！」

明弘「来い……！何度でも粉々に打ち砕いてやるぞ、イオク・クジャン！」

〈戦闘会話 ガエリオorマクギリスorジュリエッタVSイオク〉

マクギリス「君を倒し、俺達もアルミリア達を迎えに行くでしょう」

イオク「あくまでも俺を無視するというのか……！」

ガエリオ「イオク・クジャン……投降する気はないんだな？」

イオク「当然！ここで引けば大義が果たせなくなる！」

ジュリエッタ「あなたはいつまでもわけのわからない事を……！それならば、覚悟して

ください！」

バルバトスルスプレクスの攻撃にレギンレイズはダメージを受けた。

イオク「ま、まだだ……！俺はまだやれる……！」

ラフタ「しつこい……！」

シノ「それなら、零達が戻って来るまでやるだけだ！」

―新垣 零だ。

零「タスクも独自でアンジュ達を探している……！」

イオリ「零、アマリさん！二人はゼファイを！」

アスナ「私とイオリは他の人達を探すわ！ホープスは引き続き、この空間から出られる方法を探して！」

ホープス「わかりました！」

俺達はそれぞれ動き出した……。

待つてろよ、ゼファイ……！

ーアンジュよ。

私は何とか中庭まで来た。

アンジュ「…」

エンブリヲ「驚いたね…。もう身体を動かす事が出来るとは…。そして、さらに逃げ出そうとするとは…。アンジュ…君の生命力は美しいの一言に尽きる」

アンジュ「エンブリヲ…。あなたは…さつきエクスクロスに倒されたはずじゃ…。あれは…偽物だったの!?？」

エンブリヲ「そうではないよ」

誰かが歩いて来た…。

って、そんな…!

エンブリヲ「彼もエンブリヲだよ」

エンブリヲ「正確にはエンブリヲという人間の可能性の一つだ」

アンジュ「!」

エンブリヲが…複数いる…!??

エンブリヲ「いつまでも秘密にしておいては君もかわいそうだ」

エンブリヲ 「そろそろ種明かしをしてもいいだろう」

エンブリヲ 「答えは君も見ての通りだ」

エンブリヲ 「この真実のアルゼナルはあまたの並行世界の接点にある」

エンブリヲ 「ここは私の：私達の為に用意された可能性の分岐点なのだよ」

エンブリヲ 「だから、ここに集う私達は全て同じエンブリヲだ」

エンブリヲ 「その内の一人がやられたからといって、私という存在は揺るがない」

エンブリヲ 「だがこのまま、ちまちまとした戦いをしていても仕方ないだろう」

エンブリヲ 「では、アンジュは私に任せて、皆はエクスクロスを」

エンブリヲ 「ルリ達の所には行かなくともいいのかい？」

エンブリヲ 「：もう手遅れだろう」

エンブリヲ 「では、ゼフィの元に向かった彼はどうする？」

エンブリヲ 「人の楽しみを取るわけにはいかないさ」

エンブリヲ 「愚かな道化を笑いにいった彼の方は？」

エンブリヲ 「フフ：エフゲニー・ケダールの最期：。それを看取つてやるのも調律者

たる私の使命だろう」

エンブリヲ 「やる気をなくした彼の処遇はどうする？」

エンブリヲ 「エクスクロスの後にでも始末すればいい」

エンブリヲ「了解した。では、行ってくる」

エンブリヲ「一番乗りは君に譲ろう」

複数のエンブリヲは一人残し、全て歩き去った。

アンジュ「…」

エンブリヲ「わかっただろう、アンジュ？何をしても無駄なんだよ。この空間がある限り、私は可能性をいくらでも引き出す事が出来る…。つまり、彼等を全て倒せば、それで終わりというわけではないんだ」

アンジュ「…」

エンブリヲ「…少し昔話をしようか。光の国を追放された私はこの島にへと訪れた。この島は世界最高の素粒子研究所でね。私はここで多くのものを発見し、生み出した。統一理論、超対称性粒子…そひて、多元宇宙…。別世界への進出は、新たな大航海時代への幕開けとなる…。ウルトラマンの力を使わず、別世界へ行く方法、それは…有人次元観測機ラグナメール…。あの機体で、別世界への扉を開く計画だった」

別世界への扉…!!?

エンブリヲ「だが、突然発生した局所的インフレーションにより、システムが暴走…。この島は時空の狭間に取り残された。だが、それこそが全ての始まりだった。ここは時の止まった世界だからね」

アンジュ「……」

エンブリヲ「無限の時間を持つ私だけの庭……。宇宙で最も安全な場所……。私はここからラグナメイルを操り、世界への干渉を始めた。そして、私は生と死の狭間にある、閉ざされた世界……。アル・ワースを見つけた。後は君も知つての通りだ。ドラグニウムの制御を学び、新たな人間を造つた。人類を導く調律者としてね。残念ながら、マナによる高度情報化社会……。ミスルギは失敗した……。だが、君だけが違つた！」

アンジュ「……」

エンブリヲ「もうすぐ世界は滅ぶ……。あるいは生まれ変わる……。だが、この空間があれば、私は無関係だ。いずれ、智の神エンデの秘密にも迫る事ができよう。そして……。世界が滅びた後は……。私は、光の国を消滅させる！私を必要としなかった……。私の居場所を奪つたあの星を……。さあ……。イレギュラーから生まれた天使……。私と共に人類の新たな千年を創ろう！」

アンジュ「お断りよ！」

エンブリヲ「ならば、君を精神から浄化しよう！私の愛で！」

アンジュ「！」

う、動けない……。それに私の服を……！

アンジュ「この……。暴力ゲス男！偉そうな事言つて、結局はやりたいただけなんですしょう

！
」

エンブリヲ「愛する夫に、そんな口の利き方をしてはいけないよ」

アンジュ「くっ……！」

タスク「アンジュ！」

そこへタスクが駆けつけた。

アンジュ「来てくれたのね、タスク！」

エンブリヲ「私とアンジュの愛を邪魔する者め！消えるがいい！」

ま、まずい……！

タスク「！」

エンブリヲの攻撃を受けて、タスクは倒れた。

アンジュ「タスク！」

エンブリヲ「エクスクロスの方は48人の私が叩き潰してくれるだろう。邪魔者は消えた。さあ……愛し合おう、アンジュ！」

ーアスナ・ペリドットよ。

私とイオリは何とかルリ達の元へとたどり着いた。

アスナ「ルリ！ユリカさん！」

ユリカ「アスナちゃん！イオリ君！」

ルリ「来てくれると信じていました」

イオリ「そちらの人達は？」

ラクス「ラクス・クラインです」

カガリ「カガリ・ユラ・アスハだ」

アルミリア「アルミリア・ボードウインです…」

クーデリア「クーデリア・藍那・バースタインです。来てくれた事に感謝します、エ

クスクロスの方々」

アスナ「挨拶は後にしましょう、まずはここから逃げないと！」

イオリ「ハーリーに連絡を入れて、ナデシコCを近くに停泊させてもらう！」

ルリ「わかりました、行きましょう！」

―氷室 弘樹だ。

イルマ「無差別攻撃…!?!?」

ターニヤ「そうじゃない！私達を狙っている！」

イルマ「でも、この空間にいるのはエンブリヲ様の手の者だけでは……」

ジル「逃げる、イルマ！ターニヤ！エンブリヲは用済みとなった者を処分している！」

サリア「このままでは、あなた達もやられるわよ！」

イルマ「司令、サリア……」

ターニヤ「エンブリヲ様についた私達を心配してくれるなんて……」

イルマ「……いいえ、私達も戦います！エンブリヲと！」

ヒルダ「二人もエンブリヲの呪縛から解放されたか！」

ジル「それならば、二人は私の援護を頼む！」

イルマ「了解！」

ターニヤ「全てをかけて、司令を援護します！」

イオク「エンブリヲ殿を裏切るなど……！」

すると、ヒステリカが現れた。

エンブリヲ「イルマとターニヤは君達についたか……。まあいい。もう彼女達に用はない。

エクスクロスの共々、消えるがいい」

エイサップ「エンブリヲ！生きていたのか！」

シーラ「違います、エイサップ。あれはエンブリヲであって、エンブリヲでない者で

す」

チャム「どういう意味なの!?？」

エンブリヲ「シーラ女王の言う通りだよ。私はエンブリヲでありながら、君達がさっき倒したエンブリヲではない。そう…。エンブリヲとは無限に存在する私なのだよ」

な、何だと…!?？」

ヒステリカが新たに51機現れた。

優香「ええっ!?？」

メル「エンブリヲが51人…」

弘樹「何の冗談だよ、これは…!?？」

エンブリヲ「我々の全てがエンブリヲだ」

エンブリヲ「無論、君達が今ますで倒したエンブリヲとエンブリヲだよ」

エンブリヲ「私達それぞれが、エンブリヲの可能性だ」

エンブリヲ「次元の狭間にある、この空間は可能性の分岐点であり、無数の可能性からエンブリヲを集める事が出来る」

エンブリヲ「一人のエンブリヲが倒れば、そこに新たなエンブリヲを送り込むだけだよ」

C・C「それがお前の不死のカラクリか」

万丈「そして、この空間こそが奴の力の源…」

ルルーシユ「エンブリヲ！お前の目的はいったい何なんだ？？」

エンブリヲ「まだわからないかな？」

エンブリヲ「私の目的…。それは…」

エンブリヲ「アル・ワース亡き後に新たな世界を創造する事だ」

舞人「何？？」

ワタル「アル・ワースが…なくなるの…」

エンブリヲ「ドアクダーやネメシス、アンチスパイラルは、そう願っている」

エンブリヲ「魔徒教団にしても、そろそろ世界をリセットする気なのだろう」

マリア「教団が世界の滅亡を願っているですって…？？」

カノン「(アマリさんの話では導師キールデインの望みは世界の存続だったと聞きま

した…)」

鉄也「世界の創造だと…？？そんな事がお前に出来るのか？？」

エンブリヲ「凡人にはわかるまい…。ドラグニウムの制御を身につけた私はその研究

のために費やした日々を…」

エンブリヲ「私は時空を制御する術を手に入れ、その力で新たな世界を創造する」

エンブリヲ「既に実験は完了している」

エンブリヲ「ウルトラマンゼロとレイオニクスのレイの世界……。いや、お前達の仲間……。渡瀬 青葉や隼鷹・ディオ・ウエインバーグの時代の世界を使つてな」

ジョーイ「そ、それつて……！」

ウイル「弓原 雛：ヒナ・リヤザンが繰り返す運命に囚われていたのも……」

エンブリヲ「そう……。私がそうなるように調整したのだよ」

エンブリヲ「閉じた世界の環：所謂タイムパラドックスが発生する時間軸は並行世界への分岐が起きてはならない」

エンブリヲ「世界を生み出さない事と世界を生み出す事は表裏一体……。あの世界を使い、私はその技術を確立させた」

エンブリヲ「あの世界では苦勞したよ。ウルトラマンキングに目をつけられていたからね」

エンブリヲ「見つからないように工夫して、漸く実験は成功したのだよ」

エンブリヲ「もつとも、もうあの世界には興味がないので、その制御を解除したがな」

エンブリヲ「つまり、弓原 雛が繰り返す運命から解放されたのは私のおかげと言ってもいいだろう」

朔哉「黙りやがれ！」

くらら「ヒナや青葉達の運命は……こいつによって仕組まれていた……」

エイター「どうして、青葉君達の世界を実験の場に選んだんですか!?？」

エンブリヲ「一つは、渡瀬 青葉と弓原 雛に不幸を与えたかったからだよ」

葵「嫉妬つてわけね…。どこまでも見苦しい男ね…」

アーニー「そんな理由で…！」

エンブリヲ「私にとつては、あの二人の結びつきは許せなかったのだよ」

エンブリヲ「そして、もう一つは…」

エンブリヲ「いや、それは語る必要はないな」

カイエン「ふざけやがって…！」

アマタ「お前は俺達が止める！」

エンブリヲ「出来るかな、君達に？」

エンブリヲ「決して君達の力を侮っているわけではない」

エンブリヲ「事実、私は君達の力を求めている」

エンブリヲ「今後、ドアクダーや魔徒教団、ネメシス、ウルトラマンベリアルと戦う

時は、君達の力を借りたいと思っているからね」

ジョニー「要するに僕達に兵隊をやらせるつもりですか!?？」

エンブリヲ「君達とレコンギスタ軍を名乗っている連中…。それを戦わせて、勝った方をスカウトしようと考えていたのだけだね」

カズミ「それがキャピタル・アーミィやゾギリアなどを保護し、その対となるアメリカや自由条約連合と戦わせた理由ね！」

エンブリヲ「その結果として、君達を選んだ。光榮に思ってくれていい」

カグラ「俺達が、てめえの言いなりになると思うなよ！」

エンブリヲ「では、どうする？抵抗するつもりかな？」

エンブリヲ「ここまで、こちらの手の内を明かしたのに、まだそんな気になるとはね」
グラランデイス「舐めた事を言ってくるね！」

エンブリヲ「もちろん、君達と戦えば、私も無傷では済まないだろう」

エンブリヲ「だが、この51人に欠員が出来れば、また別の世界から私自身を呼び寄せればいい」

エンブリヲ「つまり、この空間が存在している限り、私という存在は消滅する事がないんだよ」

ゼシカ「…」

ネモ船長「…」

エンブリヲ「それがどれだけ絶望的な事であるか、理解したようだね」

カノン「マリアさん…」

マリア「…ホープスからの連絡だけど、手の打ちようがないようよ。内部から、この

空間を破壊する事は不可能だつて…。出来る事は、勝利を信じて、闘志を失わない事だけよ……！」

弘樹「聞いた通りだ、みんな……！諦めない事が勝利の道だ！」

ミコノ「はい！私達は……希望を捨てません！」

ノリコ「こんなインチキ空間、私達の気合いで壊してあげるわ！」

マリア「(万に一つの可能性だけど、それを外部の人が拾ってくれば……)」

エンブリヲ「では、説明が終わったところで絶望の宴を始めよう」

エンブリヲ「残念だよ、エクスクロス。君達には、私とアンジュ達の婚礼に参加してもらいたかったのだが……」

な、何だ……!??空間に攻撃が……!??

エンブリヲ「何っ!??」

何が起こつてんだ……!??

エンブリヲ「バカな！私の世界が……真実のアルゼナルが外部から干渉を受けるなんて……！」

マリア「……どうやら、私達の声が次元の壁を越えて、アル・ワースに届いたようね」

エンブリヲ「何だと!??」

マリア「エンブリヲ……。あなたは私達を侮り過ぎだようね」

エンブリヲ「ほ、崩壊する…！私の…私だけの世界が!!?」

エンブリヲ「誰がやった!!? 魔従教団か！」

エンブリヲ「それともネメシスか！」

突然、金色の渦が現れ、そこからルクシオン・ネクストとブラディオ・ネクスト、カ
ルラ、ネルガルが現れた。

青葉「俺達だ、エンブリヲ！」

エンブリヲ「渡瀬 青葉！」

ディオ「お前が俺達の世界を管理していたのは俺達の前に現れたエンブリヲから聞いた！」

ヒナ「私や青葉やビゾンの運命を歪めていた事も！」

ビゾン「そして、俺…いや、エフゲニー・ケダールを嘲笑っていた事もだ！」

舞人「青葉！ディオ！」

カレン「それにヒナも！」

レイ「Destiny」「ビゾンが何故…!!?」

青葉「へへ…渡瀬 青葉とバディ達、エクスクロスのピンチに参上だ！」

ビゾン「俺を救おうとしてくれた借りを返したぞ、レイ！」

ヒナ「これでエンブリヲの力の源である、この異空間は崩壊します」

エンブリヲ「おのれえええつ!!？」

青葉「残念だったな、エンブリヲ！俺達は、この空間でも希望を失わないみんなの声を聞いた」

ディオ「そして、この空間に通じる特異点を開く事に成功した」

エンブリヲ「まさか、お前達……！」

青葉「そうだ！これが、お前の恐れていたカップリングの真の力だ！」

ユノハ「エルヴィラ博士の組み込んだ、新しいシステムの力ですね……！」

エンブリヲ「許さない……！許さないぞ、お前達！」

ディオ「だが、お前にトドメを刺すのは俺達ではない」

ビゾン「そろそろ特異点が消滅するぞ！」

ヒナ「青葉！ディオ！」

ディオ「我々は先にアル・ワースに戻っている。後の事は頼む」

青葉「アンジュ！決着は、お前達に任せるぜ！」

そう言い残し、四機と特異点は消えた。

マリア「みんな！次元境界線が崩壊を始めているわ！もう、この異空間は終わりよ！」

ハイネ「やってくれたぜ、あいつ等！」

レイ「Destiny」
「ありがとう、ビゾン……」

万丈「これは、運命を歪めていたエンブリヲへの彼等の反撃だ！」

しんのすけ「ありがとう、青葉お兄ちゃん、デイオお兄ちゃん、ヒナお姉さん、ビゾンお兄ちゃん！」

クレア「後は！」

―新垣 ゼファイです。

私はある部屋でエンブリヲと共にいました。

エンブリヲ「どうやら、この空間も終わりに近いようだね」

ゼファイ「エクスクロスの皆さんがやってくれました…！諦めてください！」

エンブリヲ「いいや、私はもうこの空間には興味はない。君さえいればね」

ゼファイ「え…」

エンブリヲ「言つたはずだ、君は興味深い存在だと…。これからの私の計画に大いに役立つであろう。さあ、ゼファイ…！妻になる前に君の身体を詳しく調べさせてくれ」

ゼファイ「い…いや…！」

エンブリヲ「怖がる必要はない。さあ…私に身を委ねるんだ」

ゼファイ「来ないでください…来ないでええええつ!!？」

? 「その子から離れろー!」

突然、現れた黄色の髪の毛の女の子が私に迫るエンブリヲを蹴り飛ばしました。

エンブリヲ「な、何っ…?!?」

ゼファイ「え…」

? 「大丈夫? 怪我はない?」

ゼファイ「は、はい…」

? 「パパ、間に合ったよ!」

? 2 「よくやったな、ヴィヴィオ!」

あれ…? この方は…。

エンブリヲ「何者だ?!?」

一誠「俺は一条 一誠! この子は一条 ヴィヴィオだ!」

エンブリヲ「お前達も私の邪魔をするのか?!?」

ヴィヴィオ「それは違うよ…!」

一誠「お前の邪魔をするのは…あいつの役目だ!」

零「ゼファイイイっ!!?」

一誠「来たか…!」

パパとママが走って来ました…。

―新垣 零だ。

漸く、ゼファイを見つける事が出来た…!

エンブリヲ「零!アマリか…!」

ゼファイ「パパ!ママ!」

アマリ「ゼファイちゃん、無事なのね!」

ゼファイ「はい!この方達が助けに来てくれたので…!」

黄色の髪の子はわからねえが…。あいつは…!

零「一誠…?!?」

一誠「久しぶりだな。俺だけじゃなく、ドライグやイストワールもいるぜ」

ドライグ「お久しぶりですね、零さん!」

イストワール「お元気で何よりです!(へーへ)」

零「どうしてお前達が…?!?」

一誠「俺達の事よりもまずはやる事があるだろう?」

そうだった…!

零「エンブリヲ…!ゼファイに手を出した事を後悔させてやる…!」

エンブリヲ「後悔だと…?私は調律者だ!例え、オニキスの首領、ハデスの息子だと

しても…！私には…！」

零「喰らええええっ！！？」

俺はクロスレイズモードを発動して、エンブリヲに回し蹴りを浴びせた。

エンブリヲ「ば、バカな…！」

そのまま、エンブリヲは倒れ、消滅した…。

ゼファイ「パパ！ママ！」

零「ゼファイ！」

アマリ「ゼファイちゃん！」

俺達3人は抱き合った。

零「ごめんな…遅くなって…！」

アマリ「良かった…！無事で…！」

ゼファイ「パパとママなら、必ず来てくれると信じていました」

俺達は一度離れ、一誠達を見た。

零「一誠、どうしてお前達が…？」

一誠「実はヴィヴィオがどうしてもお前に会いたって言ってな」

零「俺に…？」

一誠「ほら、ヴィヴィオ。挨拶しな？」

ヴィヴィオ「初めまして、一条 ヴィヴィオです！一誠パパの娘です！」

アマリ「ええっ!?？」

零「一誠の…娘!?？」

一誠「そんな驚く事でもねえだろ。俺だって35歳なんだし」

はいいいいつ!?？」

零「35歳って…お前、あの時と見た目が変わってないじゃねえか！それにイストワールとドライブだって、変わってねえし…」

イストワール「私とドライブさんはあまり歳を取りませんし老けません。一誠さんや一誠さんのお仲間の場合は仮面ライダードライブの元になったドラゴンライダーの鎧の力や習得や手に入れた力の影響で歳を取らなく老けたり出来なくなったのです（一コー）」

零「つまり、年齢はとっても老けないって事か。…大変だな、お前も」

一誠「他人事みたいに言ってるじゃねえよ!…まあ、他人事だが…」

イストワール「ちなみに後、20万年は生きられます（*ーωー）」
に、20万年…。

一誠「流石にそこまで生きるつもりはないんだけどな」

アマリ「私も長生き出来たとしてもそこまで生きたくはないですね…」

ゼファイ「あの…。ヴィヴィオさん」

ヴィヴィオ「どうしたの、ゼファイちゃん？」

ゼファイ「ヴィヴィオさんのお母さんは誰ですか？」

ヴィヴィオ「誰…というより、いつぱいいるよ」

零「いつぱい…？まさか、複数の人と結婚したとか言わねえよな？」

一誠「残念だがその通りだ」

零「因みに何人と結婚したんだ？」

ヴィヴィオ「美遊ママやドライグママを入れて50人位居るよ」

…美遊も入ってるのかよ…。

てか…。

アマリ「ご、50人ですか!?!？」

零「ハーレムにも程があるだろ！」

ゼファイ「…という事はアスナお姉ちゃんと優香お姉ちゃんもママになる可能性があるという事ですね！」

零「ないから！一誠の世界を基準にしないでくれ、ゼファイ！それから、アマリは睨まないでくれ！…俺は、アマリ一筋なんだからよ…」

アマリ「零君…」

一誠「見せつけてくれるな…。さて、そろそろ俺達は帰る。後はお前達に任せるぜ」
零「…一誠、ありがとな！」

一誠「頑張れよ、零」

俺と一誠は拳をぶつけ合った。

ヴィヴィオ「応援してるよ、ゼファイちゃん！」

ゼファイ「はい、ヴィヴィオさん！」

ゼファイとヴィヴィオは握手をした後、俺とアマリ、ゼファイはゼフィールスネクサスとゼ
ルガードの元に急いだ。

ヴィヴィオ「行っちゃったね」

一誠「あいつ等なら大丈夫だろ（別の世界からだが、信じてるからな。お前達がアル・
ワースを救うのを…）」

一誠達は元の世界へ戻った…。

ーアンジュよ。

青葉達がやってくれたみたいね…！

エンブリヲ「バカな……！こんな事が認められるか！」

アンジュ「無様ね、エンブリヲ！あなたは調律者なんて立派なものじゃなく、ただの
ピエロよ！」

エンブリヲ「アンジュ！！？」

アンジュ「後は、あなたを含めて52人のエンブリヲを倒せば……！」

エンブリヲ「そうは……」

……起きてくれたわね……！

エンブリヲ「ぐああっ！！？」

タスク「アンジュには、もう指一本、触れさせない……！」

エンブリヲ「き、貴様……！死んだはずでは……！」

タスク「死ねないさ……！アンジュを幸せにするまでは！」

アンジュ「ありがとう、タスク！銃を貸して！」

エンブリヲ「ア……ア、アンジュウウウ！！？」

アンジュ「あなたに構っている暇はないのよ！」

エンブリヲ「！」

私は銃を発砲して、エンブリヲを倒した。

アンジュ「これで残るは51人！」

終わらせるわよ……！全部……！

ー氷室 弘樹だ。

ナデシコCがアルゼナルの近くに停泊し、ルリ達を乗せ、動き出した。

へべ「囚われていた人達は救い出せた様だね」

エンブリヲ「ふざけるな……！私が愛してやろうとしたのに……こうなったら……！」

ヒステリカの一機がナデシコCに接近した。

キラ「しまった！」

アキト「ユリカ！ルリちゃん！」

三日月「クーデリア！」

エンブリヲ「私の妻にならぬ女はここで死ぬがいい！」

シン「させるかあああつ!!？」

しかし、ヒステリカの攻撃をデステイニーガンダムが防いだ。

エンブリヲ「シン・アスカ……!!？」

シン「これ以上……花を散らせない為にも……ラクスさん達を殺させるわけにはいかないんだ！」

エンブリヲ「ならば、お前ごと彼女達を……！」

キラ「シン……！」

アスラン「今行く！」

ヒステリカの攻撃に押され気味だったデステイニーガンダムをストライクフリーダムとインファイニットジャステイスが助けた。

シン「キラさん！アスラン！」

キラ「君の想いは僕達も一緒だ」

アスラン「力を貸すぞ、シン！」

シン「ありがとうございます……エンブリヲ！人の運命を弄んだお前を……俺達は許さない！」

デステイニー、ストライクフリーダム、インファイニットジャステイスは同時にヒステリカに攻撃を仕掛けた……。

シン「人の運命は……弄ぶものじゃないのを教えてやる！」

キラ「やろう、シン、アスラン」

アスラン「俺達3人が揃えば……！」

シン「じゃあ、行きますよ！」

デステイニーとインファイニットジャステイスはフラッシュエッジとシャイニング

エッジビームブーメランを投げ、ビームライフルを撃ち、ストライクフリーダムはドラグリーンとビームライフルで攻撃する。

さらに、インファイニットジャステイスは接近して、グリフォン ビームブレイドで斬り刻み、蹴り飛ばす。

キラ「はあああああつ!!?」

シン「喰らええええつ!!?」

ストライクフリーダムはドラグリーンで攻撃し、デステイニーはパルマファイオキーナでヒステリカを吹き飛ばした。

アスラン「キラ!」

キラ「アスラン!」

ストライクフリーダムとインファイニットジャステイスはビームサーベルとスーパーラケルタ ビームサーベルでヒステリカを斬り裂いた。

シン「これで…終わりだあああつ!!?」

最後にアロンダイトを構えたデステイニーがヒステリカを斬り裂いた。

エンブリヲ「この…私がああああつ!!?」

立ち込める爆煙からストライクフリーダムを中心にインファイニットジャステイスとデステイニーが上昇して、ダメージを受けたヒステリカを見下ろした。

アスラン「俺達の…勝ちだ！」

キラ「花が散らない世界を作る為…」

シン「俺達は戦い続ける！」

エンブリヲ「バカな…！」

ヒステリカは爆発した…。

ステラ「すごい連携…！」

ハイネ「あの3人だからこそこそでできる技だな」

イオク「まだだ…！まだ俺が…！」

今度はレギンレイズがナデシコCに接近したが…。

明弘「三日月！」

三日月「了解…！」

今度はバルバトスルプスレクスとグシオンリベイクフルシティがレギンレイズに攻撃を仕掛けた…。

三日月「これで終わらせようか…！やれるよね、明弘？」

明弘「当たり前だ！」

三日月「それじゃあ…三日月・オーガス、バルバトスルプスレクス…！」

明弘「明弘・アルトランド、グシオンリベイクフルシティ…！」

三日月& amp ; 明弘 「行くぞ……！」

明弘 「距離があるなら……！」

バルバトスルプスレクスとグシオンリベイクフルシティは腕部200mm砲とロングレンジライフルを発砲する。

三日月 「引き寄せる……！はあっ！」

明弘 「喰らいやがれ！」

バルバトスルプスレクスのテイルブレードでレギンレイズに突き刺して引き寄せ、両腕レクスネイルとグシオンリベイクハルバードで何度も斬り裂く。

明弘 「粉々にしてやるよ！」

グシオンリベイクフルシティはシザーシールドでレギンレイズを挟み、挟む力を強めていく。

明弘 「やれ、三日月！」

三日月 「終わらせる……！」

シザーシールドで挟み潰すと同時にバルバトスルプスレクスがレギンレイズの顔部を超大型メイスで殴り倒した。

イオク 「う、うわあああああつ!!？」

それを受けたレギンレイズはダメージを受けた。

三日月「ふう…」

イオク「そんな…俺は間違っていない…！それなのに…う、うわあああああつ！！？」
敗北を認めずにレギンレイズは爆発した…。

ガエリオ「今度こそ、イオク・クジヤンの最後だな」

ジュリエッタ「これで永遠にさようならです、イオク様。もう会う事はないと思われ
るので…」

葵「これでエンブリヲは残り50人よ！」

サリア「見て、みんな！アルゼナルにアンジュが！」

ヒルダ「ダメだ！みんな、見るな！」

ヒルダの声と同時に俺の視界はカノンによって塞がれる。

弘樹「な、何すんだよ、カノン！！？」

カノン「み、見てはダメなんです！」

アンジュ「決着をつけるわよ、エンブリヲ！」

モモカ「アンジュリーゼ様！よく、ご無事で！」

エンブリヲ「あ、あちらのエンブリヲもやられたのか…！」

エンブリヲ「アンジュ！君とさえども、許される事ではない！」

アンジュ「ヴェイルキス！主人のピンチよ！さっさと来なさい！今すぐ！時空を越えて

！私の為に！」

アンジュの声に応えてか、ヴィルキスが現れた。

アンジュ「いい子ね、ヴィルキス！」

ヴィヴィアン「アンジュ！その服、どうしたの!!?」

アンジュ「ヴィルキスが用意してくれたみたいね」

そして、ゼフィルスネクサスとゼルガード、タスクのアーキバスが現れた。

―新垣 零だ！

アマリ「遅れてすみません、皆さん！」

アスナ「私達も戦線に復帰します！」

リュクス「ゼフィの救出は!!?」

ゼフィ「皆様、ご心配をおかけしてすみません！」

零「無事に完了した！」

ハツシユ「無事なら良かった！」

ロロ「シャーリーさんとナディアさんは!!?」

アスナ「探し回ったけど、二人は見当たらなかったわ…」

イオリ「今はこの場を乗り切る事に専念しよう！」
ルルーシユ「ああ……！」

タスク「それよりもヴィルキス……余計な事を……」

アンジュ「タスク！」

タスク「ご、ごめん、こんな時に……！」

アンジュ「いいわ。今日は私を助けに来てくれたから、許してあげる」

エンブリヲ「アンジュウウウツ!!？」

ヒステリカの一機がヴィルキスに接近した。

アンジュ「やるわよ、ヴィルキス！私達の全てを出し切る！」

な、何だ？この光……!!？

エンブリヲ「この光……！」

エンブリヲ「アンジュの想いに応えて、ヴィルキスの真の力が目覚める！」

アンジュ「翔びなさい、ヴィルキス！私の想いと共に！」

ヴィルキスはヒステリカに攻撃を仕掛けた……。

アンジュ「最低で最悪の変態男！ここで、永遠に、サヨナラよ！やるわよ、ヴィルキ

ス！全力で！」

ヴィルキスが光るとボディに赤いラインが浮かび上がった。

アンジュ「間合いに入った！」

ヒステリカに接近してラツイーエルで斬り付けて晴嵐を撃ち込み、爆煙の中から更にラツイーエルを突き刺して蹴り飛ばして、デイスコード・フェイザーを撃ち込んだ。

アンジュ「これで…トドメ！ つけえええつ！！？」

最後にエネルギー・ブレードで真っ向から斬り下ろした。

エンブリヲ「ぐわあああああつ！！？」

斬り裂かれたヒステリカはダメージを負い…。

エンブリヲ「ぬあああああつ！！？」

爆発した。

エンブリヲ「ああっ！」

アンジュ「これで残るは49人…！」

エンブリヲ「ぜ、ゼフィに付いていたエンブリヲは…！！？」

零「そのエンブリヲなら俺が倒したぜ！」

エンブリヲ「零イイっ！ よくも…よくもおおつ！！？」

ネモ船長「各機、攻勢に出るぞ！」

ルルーシュ「後49人のエンブリヲを倒せば、完全に奴は消滅する！」

エンブリヲ「おのれ、アンジュ！ おのれ、エクスクロス！」

エンブリヲ「正面から戦えば、私に勝てると思うなよ！」
アンジュ「もうあなたのハツタリは効かない！覚悟なさい！エンブリヲ！この空間と
一緒に、あなたを終わらせる!!？」
反撃開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「一誠…お前にはまた助けられてしまったな。見ていてくれ、俺達がアル・ワース
の平和を取り戻すのを…！」

〈戦闘会話 零VSエンブリヲ〉

エンブリヲ「零！ゼフィは返してもらおう！」

アスナ「返せて言ってるわよ、零。言ってあげなさい！」

零「ゼフィはお前のものじゃねえ！ゼフィは…俺のいや…俺達の大切な家族だ！」

ゼフィ「パパ…！」

エンブリヲ「私はお前が父親というのが気に食わない！」

零「お前の許可など取る必要はねえ…。ゼフィは俺の大切な娘！それに手を出したお

前を俺は許すつもりはないって事だ！父親として、お前を倒してやるよ、エンブリヲ！」

〈戦闘会話　ナオミVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「そう言えば、君を迎え入れる事を忘れていたね、ナオミ」

ナオミ「私は…あなたを許さない…！アンジュやナディア…そして、多くの人の生命を弄んで来たあなたは…ここで止める！」

〈戦闘会話　ジルVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「ターニャ！イルマ！お前達も私を裏切るといふのか！」

ターニャ「冗談言わないで！そっちが裏切ったんでしよう!?？」

イルマ「エンブリヲ…！恐怖で私達を抑え付けていた借りをここで返すわ！」

ジル「これがお前の末路だ、エンブリヲ。女の怖さを知る時だな！」

〈戦闘会話　シンorキラorアスランVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「お前達のせいで貴重なエンブリヲが敗れてしまった…！その報いを受け
てもらう！」

アスラン「報いを受けるのは貴様の方だ、エンブリヲ！」

シン「ラクスさん達に変わって、俺達がお前を倒す！」

キラ「戦火で世界を包むというのなら…僕達は止まる気はない！終わりにするよ、エンブリヲ！」

〈戦闘会話 三日月VSエンブリヲ〉

エンブリヲ「何故だ、三日月・オーガス！何故、クーデリアまで助ける!?？」

三日月「クーデリアも俺達、鉄華団の大切な仲間だからに決まってんじゃない。俺の家族に手を出したんだ…。どうなるか、わかっているよね？」

〈戦闘会話 ガエリオorマクギリスVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「お前達が私と花嫁の結婚式の邪魔をする資格がどこにある!?？」

マクギリス「あるさ。何故なら、俺はアルミリアの夫であり…」

ガエリオ「俺がアルミリアの兄だから！だから、お前を倒すんだよ！」

〈戦闘会話 アキトVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「テンカワ・アキト！ユリカ達を捕らえた私も復讐の対象として殺すのか

？」

アキト「俺はもう復讐鬼ではない。それにお前は恨む程の人間の器でもないという事だ、エンブリヲ！」

〈戦闘会話　ルリVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「ルリ！ユリカ！私から逃げようなどとは後悔するぞ！」

ユリカ「後悔なんてしません！私達はあなたの妻にならないし、私にはアキトという大事な旦那様がいます！」

ルリ「というわけなので、ラクスさん達の方まで容赦なくいきます」

〈戦闘会話　ノブナガVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「私の結婚式を破壊するとは…流石は破壊王だな、オダ・ノブナガ！」

ノブナガ「当然だ。だが、一つ忘れてるぞ、エンブリヲ。それはお前も破壊するという事だ！」

クレオパトラがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「あり得ない…！これは…何かの間違いだ！」

ヒステリカは爆発した。

サリア「3機目、撃墜！後45機！」

テオドーラがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「愚か者共め！わ、私は調律者だぞ！」

ヒステリカは爆発した。

ヒルダ「四つ！覚悟しやがれよ、残りのエンブリヲ！」

レイザーがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「何故だ…?!? 何故、調律者である、この私が…！」

ヒステリカは爆発した。

ヴィヴィアン「5機目、いただき！ちよろいね、エンブリヲ！」

エルシャのハウザーがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「愚か者共め！わ、私は調律者だぞ！」

ヒステリカは爆発した。

エルシャ「6機目を撃墜…！エンブリヲ！私達は負けません！」

クリスのハウザーの攻撃がヒステリカの一機を捉えた。

エンブリヲ「あり得ない……！これは……何かの間違いだ！」

ヒステリカは爆発した。

クリス「7機目！もうエンブリヲの顔は見たくない！」

ロザリーのグレイブがヒステリカの一機に攻撃を与えた。

エンブリヲ「バカな……！こんな結果は認められない！」

ヒステリカは爆発した。

ロザリー「これで8機！ざまあみやがれ、クズ野郎！」

ナオミのグレイブはヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「ふ、復活できない……！これでは……！」

ヒステリカは爆発した……。

ナオミ「9機目の撃墜したよ！エンブリヲ……もう全て終わらせようよ！」

焰龍號がヒステリカの一機に攻撃を与えた。

エンブリヲ「バカな…この…私が…！」

ヒステリカは爆発した。

サラマンディーネ「10機目の撃墜を確認！年貢の納め時です、エンブリヲ！」

オデュッセアがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「消える…！この私が…！」

ヒステリカは爆発した。

サヤ「11機目を撃墜！諦め時です、エンブリヲ！」

ドラウパがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「終わる…私が…！」

ヒステリカが爆発した。

アユル「12機目の撃墜を確認しました！私も怒っていますよ！」

ダンクーガノヴァがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「バカな…！こんな事が…！」

ヒステリカは爆発した。

エイダ「13機目を撃墜しました！」

くらは「あなたにはこのぐらいの最後がお似合いね！」

葵「まだまだ行くわよ、エンブリヲ！」

紅蓮がヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「そんな…！調理者である私が…！」

ヒステリカが爆発した。

カレン「14機目！そろそろ焦ってんじゃない、エンブリヲ！」

ランスロット・フロンティアがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「あり得ない…！これは…何かの間違いだ！」

ヒステリカは爆発した。

C・C「15機目か…。もつと私達を楽しませろ、エンブリヲ」

モルドレットがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「何故だ…!? 何故、調律者である、この私が…!」

ヒステリカは爆発した。

アーニャ「16機目の撃墜を確認。怖い、エンブリヲ?」

斬月達がヒステリカの一機を捉えた。

エンブリヲ「認めん…認めないぞ、こんな事…!」

ヒステリカは爆発した。

千葉「17機目…! 今までの行いを死をもって思い知れ!」

グロースター・エアがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私、は…!」

ヒステリカ爆発した。

コーネリア「18機目だ! これ程度で済むと思うなよ、エンブリヲ!」

オルレアンがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私が敗れるなど…!」

ヒステリカは爆発した。

ジャンヌ「19機！エンブリヲ、報いを受けなさい！」

ダンバインがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「ふ、復活できない……！これでは……！」

ヒステリカは爆発した。

マーベル「これで20機！エンブリヲのオーラは、ここで完全に断つ！」

サーバインがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私の新世界が……こんな所で……！」

ヒステリカは爆発した。

シルキー「やった！これで21機目！」

チャム「エンブリヲ！もう謝っても遅いからね！」

アツカナナジンがヒステリカの一機を捉えた。

エンブリヲ「終わる……！私の新世界が……！」

ヒステリカは爆発した。

エレボス「22機目！終わりだよ、これで！」

リユクスの乗るギム・ゲネンがヒステリカの一機にダメージを与えた。
エンブリヲ「こんな…事が…！」

ヒステリカは爆発した。

リユクス「23機目の撃墜を確認！無様に散りなさい、エンブリヲ！」

アマルガンさん達のギム・ゲネンはヒステリカに攻撃を与えた。

エンブリヲ「こんな結果…！認めるものか…！」

ヒステリカは爆発した。

へべ「24機目を倒したよ！」

キキ「そろそろ、泣いてもイイツすよ！」

インパルスがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「復活できない…！このままでは…！」

ヒステリカは爆発した。

ルナマリア「25機目を撃墜したわ！往生際の悪さもここまでよ！」

ガイアガンダムがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「愚か者共が…！私は調律者なのだぞ…！」

ヒステリカは爆発した。

ステラ「26機目！私…あなたの顔、もう見たくない！」

百錬がヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「こんな所で終わる訳にはいかないのだ…！それなのに…！」

ヒステリカは爆発した。

アミダ「27機目撃墜だよ！女の敵にかける情けはないね！」

百里がヒステリカの一機を捉えた。

エンブリヲ「消える訳にはいかない…！私は…！」

ヒステリカは爆発した。

ラフタ「28機目！どんどん行くよ！」

レギンレイズ・ジュリアがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私が…死ぬのか…!!?」

ヒステリカは爆発した。

ジュリエッタ「29機目です！下劣な男はここで討ちます！」

アクエリオンEVO Lがヒステリカは殴り飛ばした。

エンブリヲ「私は…新世界を…！」

ヒステリカは爆発した。

クレア「30機目を撃墜しました」

ユノハ「ま、まだいますね！」

サザンカ「流星に私もこんな男は願い下げよ！」

MIIX「下品な男はここで倒すわ！」

ゼシカ「覚悟しなさい、エンブリヲ！」

ミコノ「多くの人の愛を歪めたあなたを私達は許しません！」

ガンバスターがヒステリカの一機を蹴り飛ばした。

エンブリヲ「嫌だ！こんな所で私は終わる…訳には…！」

ヒステリカは爆発した。

カズミ「31機目を倒したわ！」

ノリコ「全世界の女の人が変わり、私達があなたを止めるわ！」

幻王丸がヒステリカの一機に攻撃した。

エンブリヲ「バカな…！私は調律者だぞ…！」

ヒステリカは爆発した。

ヒミコ「えーと、えーと、32機目！ロングのおっさん、覚悟できてる？」

ジューナスAがヒステリカにダメージを与えた。

エンブリヲ「何故だ…!?何故、調律者である、この私が…！」

ヒステリカが爆発した。

さやか「33機目を撃墜！女の敵は私達で倒す！」

ウイングルがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私が…消える…!?？」

ヒステリカが爆発した。

由木「34機目を撃破しました！」

スカーレット「お前にはこのぐらいの罰がちょうどいいな！」

ジャンボットがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「あり得ない……！これは……何かの間違いだ！」

ヒステリカが爆発した。

エメラナ「35機目です！私もあなたの行いは許していません……！」

パワード夏美がヒステリカの一機を攻撃した。

エンブリヲ「私は……新世界を……！」

ヒステリカは爆発した。

夏美「36機目……！私だって、あなたを許さないんだから！」

エステバリスカスタムがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私の……新世界が……！」

ヒステリカが爆発した。

リョーコ「37機！全部ぶっ飛ばしてやるよ、クズ野郎！」

カンナム・ロボがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「こんな所で終わる訳にはいかないのだ……！それなのに……！」
ヒステリカが爆発した。

みさえ「38機目よ！あんたに女の怖さを教えてあげるわよ！」

鉄人ボーちゃん28号がヒステリカの一機を攻撃した。

エンブリヲ「バカな……！この……私が……！」

ヒステリカが爆発した。

ネネ「えつと……39機目を倒したわね！子供でも舐めたら怖いのよ！」

ヨーコタンクがヒステリカの一機を攻撃した。

エンブリヲ「復活できない……！このままでは……！」

ヒステリカは爆発した。

ヨーコ「40機目！逃げても無駄よ、エンブリヲ！」

ダリーのガンマールはヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「愚か者共が……！私は調律者なのだぞ……！」

ヒステリカは爆発した。

ダリー「これで41機目！あんな人は許してはいけません！」

グラタンがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私が…負ける…！」

ヒステリカが爆発した。

グランデイス「42機目！今の気分はどうだい、クソ野郎！」

ゼルガードがヒステリカを攻撃した。

エンブリヲ「私が敗れるなど…！」

ヒステリカは爆発した。

アマリ「43機目、撃墜です！私達、エクスクロスの力を見せてあげます！」

ゼフィルスネクススがヒステリカの一機を攻撃をした。

エンブリヲ「負ける…この私が…？」

ヒステリカが爆発した。

アスナ「44機目を撃墜よ！」

「ゼファイ「言ったはずですよ！私は屈しないと……！」

ヴァリアスデストロイがヒステリカにダメージを与えた。

エンブリヲ「私の……新世界が……！」

ヒステリカが爆発した。

カノン「45機目ですよ！そろそろ終わりですよ、エンブリヲ！」

デイビウスホープレイの攻撃でヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「バカな……！」

ヒステリカは爆発した。

メル「46機目、撃墜ですよ！」

優香「そろそろ、終わりよ！」

スペリオルがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私、は……」

ヒステリカが爆発した。

マリア「47機目！女の底力も怖いものでしょう？」

レイジアがヒステリカの一機にダメージを与えた。

エンブリヲ「私は…新世界を…！」

ヒステリカは爆発した。

ジル「48機、撃墜！終わらせるぞ、最後のエンブリヲ！」

ヴィルキスが残りの49機目のヒステリカにダメージを与えた。

エンブリヲ「う、う…うわっ…うわああああっ!!？」

アンジユ「消えなさい、エンブリヲ！その腐った野望と共に！」

エンブリヲ「い、嫌だああああっ!!？」

最後のヒステリカは爆発した…。

ジル「…終わったんだね、これで…」

グランデイス「後はナディアとシャーリーを迎えにいつて、ここからオサラバすればいい」

ん…？モルドレッドの様子がおかしいな…？

？「だらしないわね、エンブリヲ…」

アーニャ「！」

な、何だ…!!?」

ジェレミア「アーニヤ!」

ルルーシユ「何が起きている!!?」

モルドレットドがもう一機現れた…!!?」

スザク「モルドレットドが分身した!!?」

マリアンヌ「やっぱり、乗り慣れた機体が一番いいものね」

C・C・「!」

コーネリア「なっ…!!?あ、あなたは…!」

ルルーシユ「ば…かな…」

マリアンヌ「フフ…久しぶりね、ルルーシユ」

ルルーシユ「マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア!生きていたのか!!?」

マリアンヌ「アル・ワースで、その質問は無意味よ、ルルーシユ」

カレン「マリアンヌって…ルルーシユのお母さんの…」

ジェレミア「あの方はギアスの力を使い、アーニヤの心の中に潜り込んでいた…」

スザク「シャルル皇帝と共にCの世界で消滅したはずではなかったのか!」

マリアンヌ「こうして、あなた達の前に姿を現せたのはアル・ワースのおかげよ」

?「それは私も同じだ」

現れたのは超大型のイクサヨロイだった。

ケンシン「あれは…イクサヨロイですか…?!?」

ヒデヨシ「な、何てデカさだよ！」

ジャンヌ「だ、誰が乗っているの…?!?」

?「お迎えに上がったぞ、マリアンヌ殿」

マリアンヌ「ありがとう、王様」

カエサル「！」

アレクサンダー「その声は…！」

ミツヒデ「ぼ、バカな…！」

ノブナガ「アーサー王…なのか…?」

アーサー「いかにも…破壊王。理由は不要だな?」

アーニヤ「あ…あ…ああ…！」

マリアンヌ「ありがとうね、アーニヤ。あなたのモルドレッドまで、こうして複製する事が出来て嬉しいわ」

アーサー「破壊王…。次会う時はこのナイトオブラウンドで相手をしよう」

マリアンヌのモルドレッドとナイトオブラウンドはアルゼナルにまで移動した。

ルルーシユ「何処へ行くつもりだ?!?」

マリアンヌ「それが母親への口の利き方？」

ルルーシユ「黙れ！お前など、俺の母ではない！」

マリアンヌ「そう？だったら、あなたも私と陛下の息子じゃないわね」

シヨット「急ごう、クイーン、キング。こちらの準備は出来ている」

シヨウ「！」

マーベル「シヨウ！あれは…?!？」

バーン「見間違うはずもない…！シヨット・ウエポンだな…！」

エンブリヲ「アンジュ！エクスクロス！この屈辱は忘れない！」

アンジュ「エンブリヲ！まだ残っていたなら…！」

カレン「撃たないで、アンジュ！ナディアとシャーリーもいるわ！」

ナディア「…！」

シャーリー「ルル！」

ネモ船長「ナディア！」

ルルーシユ「シャーリー！」

エンブリヲ「タルテソス王！ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア。娘のナディアと大切な

女性のシャーリーは私が預かる！」

ま、待て…！奴は今、なんと…?!？」

ハンソン「何だつて!!?」

サンソン「ナディアがネモ船長の娘…!!?」

マリアンヌ「娘…ね。それなら、こちらの二人も見せてあげるわ」

ナナリー「お兄様!スザク!」

ユファイ「スザク!お姉様!スザク!」

ルルーシユ「そ、そんな…!」

スザク「ナナリー!ユファイ!」

コーネリア「二人も…アル・ワースにいたのか…!」

マリアンヌ「シャーリーにナナリーにユファイ…。あなたに関わる女の子はみんな怖い

思いをするわね」

ルルーシユ「マリアンヌ、貴様ああつ!!?」

V・V・「そろそろ時間だよ、マリアンヌ」

V・V・「もいるのかよ…!」

アーサー「では、向かうとしよう」

マリアンヌ「そうね、さあ行くわよ。みんな、モルドレットに捕まつて」

ルルーシユ「マリアンヌ!V・V・!お前達の目的は何だ!!?何故、エンブリヲと一

緒にいる!」

マリアンヌ「私達の目的……？そんなもの、決まっているじゃない」

V・V・「新しい世界の創造だよ。そこで僕とマリアンヌは、君に消滅させられたシャルルと共に永遠を生きるんだよ」

モルドレットとナイトオブラウンドは他の者と共に消え去った。

ルルーシユ「ナナリー！シャーリー！」

スザク「ユフイ！」

ネモ船長「ナディア！」

エレクトラ「ネモ船長……次元境界線の歪曲が加速しています！」

ネモ船長「……各機を帰還させる。あの二機のルートをトレースして、我々も脱出する」

操舵長「了解です！」

俺達は二機の後を追った。

ジャン「ナディア……。ナディアアアアツ!!？」

光に包まれる中、ジャンの叫び声が響いた……。

俺達は目を覚ますと、外にはアル・ワースの景色が広がっていた。

ネモ船長「……現在位置は？」

エーコー「創界山の近くです。間違いありません」

ネモ船長「戻ってきたという事か……」

エレクトラ「各艦と機動部隊各機の無事も確認しています」

ネモ船長「そうか…」

エレクトラ「いかがします、船長？エンブリヲ一行を追いますか？」

ネモ船長「その必要はない。奴等の行き先は、ガーゴイルの所に決まっている。そして、ガーゴイルは時が来れば、我々に仕掛けてくるだろう。私の下に、もう一つのブルーウオーターがある限り…」

エレクトラ「では…？」

ネモ船長「進路を創界山に向ける。エンブリヲが、その力を失った今、我々はドアクダー打倒を最優先する」

エレクトラ「了解です」

ネモ船長「待っている、ナディア…。必ずお前を救い出す…。そして、ガーゴイル…。その時こそ、お前と最後の戦いをする事になるだろう…。それで、何か用か、零？」

零「聞かせてもらえませんか？あなたとナディアの関係を…」

ネモ船長「いいだろう…実は…」

すると、ゼロがブリッジに入ってきた。

ゼロ「話している所悪い！ネモ船長はいるか？！」

エレクトラ「どうしたの、ゼロ？」

ゼロ「すぐに部隊を宇宙に向かわせてくれ！」

ネモ船長「どうしてだ？」

ゼロ「ビート・スターの鉄の惑星が…アル・ワースに接近しているんだよ！ここまじや、アル・ワースと衝突しちまう…！」

ネモ船長「な、何だと…?!？」

零「鉄の惑星とアル・ワースが衝突する…?!？」

ど、どういう事だよ…！それ…?!？」

第67話 流星の誓い

―新垣 零だ。

俺達は映像でビート・スターの天球がアル・ワースに向かっていているのを見た。

エイサップ「どうしてこんな事に…!!」

ミラーナイト「ビート・スター達は私達がアルゼナルの空間へ跳ばされたのを見て、動き出したようですね…!!」

ジャンナイン「急いで止めなければ、アル・ワースが死の星となる…!!」

ジャンボット「艦長達の話で、我々は天球の中の月へ向かう事になった!」

グレンファイヤー「レコンギスタ軍つてのと戦つてる別働隊の奴等はどうしてんだ?
」

ダークケロロ「現在、戦闘中でこちらへは向かえないそうだ」

ケロロ「増援は期待できそうにないでありますな…!!」

タママ「でも、間に合うんですか!?!」

クルル「クーククツ! 月にはビート・スターの他にもムーンWILLIやミッドナイト

の奴等もいるからな」

カンナム「そう簡単にはいかないという事か」

シモン「だったら、天球を破壊した方がいいんじゃないやねえか？」

ジャンナイン「それは不可能だ」

ヨーコ「不可能？どうして？」

キタン「何でそんな事がわかるんだよ？」

ジャンボット「ジャンナインはビート・スターによつて生み出されたのだぞ？あの天球がどんなものくらいわかるだろう」

ジャンナイン「あの天球はちよつとやそつとじゃ破壊できない」

ゼロ「じゃあ、どうすればいいんだよ！」

？「ゼロ！」

突然、声が聞こえた。

ゼロ「この声は…親父…?!？」

零「ゼロの父さん…？」

俺達を外を見ると3人のウルトラマンがいた。

マサキ「セブンにウルトラマン！ゾフィーもいるじゃないか！」

ゼロ「どうして、親父達が?!？」

セブン「レオからお前がこの宇宙で戦っていると聞き、駆けつけたんだ。天球は任せろ。我々が時間を稼ぐ」

ウルトラマン「お前達は天球のコースを変えろ！」

ゾフィー「力を合わせよう！」

ウルトラマンさん、セブンさん、ゾフィーさんの3人は力を合わせて、ビームを出し、天球にぶつける。

ギミー「凄えぜ！」

アキト「彼等の行為は無駄には出来ない」

ゼロ「みんな！行くぜ！」

俺達、エクスクロスはビート・スター達の待つ天球の中の月へ向かった…。

ーカイザムだ。

どうやら、ウルトラマン達が邪魔をしているようだな。

ビート・スター「無駄な事を…。天球が止まる事などあり得ない！」

ギルギロス大統領「対した自身だな、ビート・スター」

ビート・スター「間も無くエクスクロスがここへ来る。ギルギロス大統領、ムーンW

ILL、お前達にも協力してもらおうぞ」

ムーンWILL「ダンクーガに選ばれし者達もいる。良いであろう」

ギルギロス大統領「こちらはミッドナイト五人衆を派遣する。お前も異論はないな、

勇者カイザム？」

カイザム「はい」

ビート・スター「カイザム、お前達には前線を任せる。我々は様子を見てから出る事とする」

ムーンWILL「期待しているぞ」

カイザム「わかっている…」

ムーンWILL「では、行くとしよう」

ビート・スターとムーンWILLはこの場を後にした…。

ギルギロス大統領「フン…そろそろ奴等との関係も潮時の様だな」

カイザム「潮時…?」

ギルギロス大統領「勇者カイザムよ。お前はエクスクロスとビート・スター達…何方が勝つと思っている?」

カイザム「それは…」

ギルギロス大統領「ミッドナイト五人衆は様子を見て、後退しろ」

カイザム「奴等に…カンタムに背を向けろと言うのですか!?!?」

ギルギロス大統領「今まで様々なロボットを作って来たが、どれも使い物にならないかったんだ。私はお前を買っている。お前の変わりはいないからな。頼むぞ、勇者カイザム」

変わり…? ギルギロス大統領は他のロボットの事を道具だと思っているのか…? いや、そんな事あるわけないな…。

第67話 流星の誓い

―新垣 零だ。

俺達は天球の中に入り、月にある施設に乗り込み、出撃した。

アスナ「ここにビート・スター達がいるのね」

くから「ムーンWILLも出てくる可能性があるわ、気をつけてね、葵!」

朔哉「心配するな!俺達もついてる!」

ジョニー「ムーンWILLと因縁があるのは僕達全員なのですからね」

エーダ「頑張りましょうね、葵さん！」

葵「ありがとう、みんな！何が出てこようと私達は負けないわ！」

ゼロ「その意気だぜ、葵！」

ヒュウガ「ジャンナイン、戦えるか？」

ジャンナイン「倒すよりも止める…！お前達がそうしてくれた様にな」

ジャンボット「お前も変わったな、ジャンナイン」

ジャンナイン「兄さん達のおかげだ」

カンナム「(ロボットも…機械も変わる事が出来る、か…)」

ステラ「どうして、デステイニーは出撃してないの？」

アスラン「調整がまだ終わっていない様だ。前回の戦闘で無理させすぎたんだな」

キラ「シンの分で僕達が戦うだけだよ！」

しんのすけ「来たゾ！」

ロボット怪獣と四機のオリジナルダンクーガ、ミッドナイト五人衆が現れた。

カイザム「ようこそと言おうか、エクスクロス！」

ザンザム「今度こそ、君達を倒す！」

キンナム「手加減はしないわ！」

オーナム「覚悟してもらおう！」

ジジザム「ゴホッ！ゴホッ！」

カンナム「みんな！カイザム兄さん……！」

グレートマイトガイン「ビート・スターとムーンWILLは何処に……？」

カイザム「奴等は後方で待機している。安心しろ、お前達は俺達で倒す！」

ガードダイバー「私達も舐められていますね」

バトルボンバー「だったら、お前達を倒して、出してやる！」

カイザム「ジャンキラー！ビート・スターはお前の事を凄く心配していたぞ。帰ってきたらどうだ？」

ジャンナイン「断る！僕はお前達を止めるために戦う！それに僕はエクスクロスのジャンナインだ！」

カイザム「残念だ。ならば、ジャンナインとして死ぬ……！」

ゼロ「お前達を倒して、天球を止めてやるぜ！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VSカイザム〉

カイザム「……お前も機械なのか？」

ゼファイ「あなたの言う通り、私は機械です。あ、でも…お風呂も入れますし、ご飯もたべれます！」

カイザム「だが、お前の飼い主もお前を裏切る日が来るぞ」

ゼファイ「そんな事…あるわけないです！パパもママも私の大切な親です！それに飼い主ではなく、家族です！」

アスナ「娘があそこまで言っているわよ、零」

零「そうだな！俺もアマリもゼファイを裏切る日などない！ゼファイは…俺達の大切な娘なんだからな！」

カイザム「機械が人間の娘に…!?？理解が出来ない…！」

ゼファイ「その理解不能の事を私が教えて差し上げます！」

〈戦闘会話　しんのすけVSカイザム〉

カンタム「退いてくれ、みんな！早くビート・スターを止めなければ、アル・ワースの人々が死んでしまう！」

カイザム「それが俺達の望む事だ。止めなければ、俺達を倒してでも行くんだな！」

カンタム「くっ…！やはり、やるしかないのか…！やろう、しんのすけ君！」

しんのすけ「ホッホーイ！カンタムを苦しめるのは許さないゾ！」

カイザム・ロボにダメージを与えた。

カイザム「…やはり、そう簡単にはいかないか」

ドロロ「負けた事に驚いていない…？一体どうして…」

カイザム「そろそろ高みの見物を終えたらどうだ？」

現れたのは一機のオリジナルダンクーガと一機のロボットだった。

ビート・スター「そうであるな」

ムーンWILL「ご苦労だったな、ミッドナイト五人衆」

葵「ムーンWILL！」

ノリコ「オリジナルダンクーガに乗っているのね！」

真上「という事はもう一機が…！」

ゼロ「貴様がビート・スターか…！」

あれが…ビート・スター…。

ゼロ「天球を止めろ！アル・ワースに衝突するぞ！」

ビート・スター「アル・ワース上に大量の有機生命体を感じ、抹殺しなければならな

い」

ゼロ「ふざけるな！」

ムーンWILL「ふざけているのは、お前だ、ウルトラマンゼロ。ビート・スターの話も聞かずに戦闘の意志を見せるとはな」

ジョニー「話……？」

ビート・スター「遠い昔……。邪悪なる宇宙人の侵略によって、ある宇宙が消滅した」

エイサップ「宇宙が消滅……？」

ビート・スター「生き残った有機生命体は、私とこの天球を作り、別の宇宙へ脱出……。だが、天球の中でも争いは絶えず、彼等は戦争を続け、ついにはこの天球の存在すら、脅かすようになった」

零「それって……！」

ゼロ「まさか……お前は……?!？」

ビート・スター「私は、天球の安全と環境を維持すべく、一切の障害を排除するようプログラムされている」

ゼロ「お前は……自分の生みの親を……天球内の生命体を滅ぼしたというのか！」

ムーンWILL「その通り、悲しいものだ。天球を守るはずの有機生命体が自ら天球を危険に晒した。そして、多くの機械を利用し、その手を下さず、戦争に勝とうとした」

カイザム「それはお前達の戦ってきた相手もそうだっただろ？」

アンジュ「ミスルギの事ね……！」

ムーンWILL「それだけではなく、様々な世界で様々な方法で機械は有機生命体
利用された……。ロボットとは共存出来る世界を作るなどと言っておきながら、これだ」

カズミ「……」

アマタ「……」

ビート・スター「有機生命体は宇宙を滅ぼすガン細胞である。我々、機械が支配する
事でのこの地球のみならず、宇宙の平和と秩序が守られる！」

ゼロ「バカ言ってるじゃねえええつ!!？」

ジャンナイン「ビート・スター……」

ビート・スター「ジャンキラー！」

ジャンナイン「有機生命体は敵とは限らない。もう一度、考え直さないか？」

ビート・スター「非論理的である。消去する！」

ジャンナイン「是非もなしか……！」

ブラックマイトガイ「確かに有能な機械を利用する人間もいる……。だが……！」

グレートマイトガイ「機械との共存を本気で望んでいる人間もいるんだ！」

カンナム「そんな事は……僕達がさせない！」

ゼファイ「私達が止めてみせます！」

ムーンWILL「やはり、言っても無駄か……。ならば、相手をするしかないな」

ムーンWILL「がそう言うとは大量のオリジナルダンクラーとロボット怪獣が現れた。

カイザム「頃合いか、退くぞ」

ミッドナイト五人衆は撤退した。

ムーンWILL「奴等め：勝手な事を……！」

ビート・スター「良い。我等の勝利は時間の問題だ」

ジャンボット「お前達の計画は私達が止めてみせる！」

葵「決着をつけるわよ、ムーンWILL！」

ゼロ「有機生命体の抹殺なんて……させてたまるかよ！」

ムーンWILL「良いであろう、今度こそ根絶やしにしてくれる！」

ビート・スター「抹殺する……！」

戦闘開始だ！

戦闘から数分後の事だった。

ムーンWILL「結構粘っているが、もう終わりだ！」

ビート・スター「来るのである！」

現れたのは…金色の龍…!!?

ゼロ「ナースか…！」

あれもロボットのなか…!!?

ナースと呼ばれる怪獣はNーノーチラス号を攻撃した。

ルナマリア「Nーノーチラス号が…！」

完全に組み付かれたか…！」

エーコー「巻き付かれました…！」

ネモ船長「すぐに振りほどけ！」

エレクトトラ「ダメです！力が強くて振りほどけません！」

優香「すぐにNーノーチラス号を助けないと…！」

ビート・スター「邪魔はさせない」

ビート・スター達の攻撃で、Nーノーチラス号に近づけない…！」

MーんWILL「それにも刺客を送った。墮ちるのも時間の問題だな」

ジャンボット「何だと…!!？」

オルガ「このままじゃあ、Nーノーチラス号が…！」

ハイネ「Nーノーチラス号にはシンもいるんだぞ！」

ルナマリア「シン…！」

インパルスがNーノーチラス号に近づこうとしたが、攻撃を受けた。

ルナマリア「くっ……!!」

ステラ「ルナマリア……!!」

ヒルダ「無茶するな！」

ルナマリア「でも、シン達が……!!」

どうすれば、いいんだよ……!!

ーシン・アスカだ。

Nーノーチラス号は攻撃を受け続けていた。

シン「クソツ……! デステイニーの調整が終われば、こんな奴なんて……!」

すると、Nーノーチラス号のブリッジに宇宙人が現れた。

? 「動くな！」

シン「なっ……!!?」

ネモ船長「何者だ!!?」

ゼットン星人「私はゼットン星人……。ベリアル陛下から派遣された者だ」

シン「ゼットン星人だと……!!?」

ゼットン星人「この艦を落とし、他の艦を落とせば、貴様達は終わる。まずはこの艦を消す」

シン「そんな事、させるかよ！」

俺はゼットン星人に殴りかかったが…。

ゼットン星人「無駄だ、人間！」

シン「ぐあああつ！」

避けられて、変わりに蹴り飛ばされた。

エレクトラ「シン！」

ゼットン星人「ナーズの締め付けに巻き込まれるつもりはない。その前に貴様達を消させてもらう！」

ゼットン星人はネモ船長に銃を向けた…が…。

突然、あたりが光り、一人の男の人が現れてゼットン星人を蹴り飛ばした。

ゼットン星人「ぐおつ…!!？」

蹴り飛ばされたゼットン星人は銃を落としてしまう。

ゼットン星人「貴様…何者だ!!？」

?「ゼットン星人…。俺が相手だ！」

男の人とゼットン星人は素手で殴り合ったが、ゼットン星人の攻撃を男の人は全て払

い、きつい蹴りをゼットン星人に浴びせた。

ゼットン星人「ぐあああつ!!?」

蹴りを受けたゼットン星人は壁に激突した。

? 「見たか、俺の超ファインプレー!」

ゼットン星人「バ、バカな…」

ゼットン星人は消滅した…。

? 「…あ、無事でしたか?」

ネモ船長「…すまない、助かった。所で君は?」

アスカ「俺の名前はアスカ・シンです」

シン「アスカ…シン…?!?」

アスカ「まあ、ウルトラマンダイナでもありますが…」

エーコー「ウルトラマン、ダイナ…?」

エレクトラ「あなたもウルトラマンだと言うの?」

アスカ「はい、そうですね」

シン「アスカ・シン…」

アスカ「ん? どうかしたか?」

シン「い、いや…。俺の名前は…シン・アスカなんで…」

アスカ「シン・アスカ……!? ははっ！ 凄い偶然だな！ 似た名前同士だな！ 俺達！」
すると、N-1ノーチラス号が揺れた。

「そうだ！ ナースって怪獣の事、忘れてた……！」

ネモ船長「ウルトラマンである君にこんな事を頼んですまないが……我々に手を貸して貰えないか？」

アスカ「ええ、見逃せない状況ですからね……」

ジャン「シンさん！ デステイニーの調整が終わりました！」

シン「ありがとな、ジャン！」

アスカ「それじゃあ、行くぜ、シン！ 本当の戦いは……ここからだぜ！」

シン「はい、アスカさん！」

俺とアスカさんは格納庫に行き、俺はデステイニーに乗った。

シン「シン・アスカ、デステイニー！ 行きます！」

アスカ「ダイナアアツ!!？」

俺は発進して、アスカさんは光に包まれた……。

―新垣 零だ。

まずい状況だな……!

ビート・スター「この天球を止めるには私を倒すしかない!」

ゼロ「くっ……!」

ビート・スターはゼロを捕らえ、ゼロ距離ビームを浴びせる。

ゼロ「ぐあああああつ!!?」

ルルーシユ「ゼロ!」

あんな至近距離から受けたら、流星にウルトラマンのゼロでも耐えられない……!

ビート・スター「有機生命体は脆く不完全な存在である!それ故に破滅をもたらす!」
ゼロ「くっ……!……確かに俺達は……不完全な存在だ……!だがな……!俺達は失敗の中から何度でも立ち上がる……成長する……!うおおおつ!!?」

何とかビート・スターを振り解こうとするゼロ……。その時だった。

?「その通りだぜ、ゼロ!」

Nーノーチラス号からデステイニーと一人のウルトラマンが現れた。

シン「いつけええつ!!?」

デステイニーはアロンダイトでビート・スターを救出し、ジャンナインがゼロを支えた。
た。

現れたウルトラマンはNーノーチラス号に巻きついたナースを殴り飛ばし、引き離

す。

レイモン「あれは……！」

ダイナ「ナイスガッツだぜ、ゼロ！」

ゼロ「ウルトラマン……ダイナ……!? どうしてお前が……！」

ダイナ「旅の途中でこの天球を見つけてな。後を追って、俺もアル・ワースに来たん
だ」

ゼロ「そうか……。何にしても助かったぜ。シンもありがとな！」

シン「気にするなよ、ゼロ！」

ジャンナイン「大丈夫か、ゼロ？」

ゼロ「ああ！ ビート・スター！ 成長するのはロボットも同じだ！ ジャンナインや勇者
特急隊のロボット達……そして、ゼフィヤカンタムの様にな！」

ビート・スター「認めない……！ 認めるものか……！ 有機生命体は敵……！ 有機生命体は危
険な存在……！ 抹殺しなければならない！」

ムーンWILL「そして、我々が世界を支配する！」

ゼロ「そんな事は俺達がさせねえ！」

ダイナ「ビート・スター！ ムーンWILL！ 俺達がお前の計画を阻止する！」

葵「終わらせるわよ……全部！」

戦闘再開だ！

ダイナのソルジェント光線でナースは爆発した。

ダイナ「やったぜ！」

ゼロ「過去に親父を追い詰めた様だが、俺達の敵じゃねえ！」

〈戦闘会話　ダイナVS初戦闘〉

ダイナ「どんな場所だろうとやってやるぜ！来い、ロボット怪獣！俺が相手になってやる！」

〈戦闘会話　葵VSムーンWILL〉

エイーダ「あなただけには負けません……！」

ジョニー「何度蘇ろうと僕達が倒します！」

ムーンWILL「ならば、お前達の気力が尽きるまで戦うのみだ」

朔哉「確かに並以下の奴なら絶望に負けて気力が下がるかもな！」

くらら「生憎とこの部隊にはそんな弱々しい人は一人もないのよ！」

葵「そう言う事よ！私達が生きている限り、あなたが勝つ事は絶対ないわ！やってやろうじゃない！」

〈戦闘会話　ゼロVSムーンWILL〉

ムーンWILL「お前は間違っているぞ、ウルトラマンゼロ。人間は成長しない：故に何度も同じ過ちを繰り返す」

ゼロ「例え過ちを犯したとしても、人は気づき、変わっていく！お前達は狭い価値観でしか俺達を見ているからそんな事もわからねえんだよ！それを俺が教えてやるぜ！」

〈戦闘会話　海道VSムーンWILL〉

ムーンWILL「世界を戦火に包むと言う意味ではカイザーを利用してはいるお前達も我らと同じだ」

真上「確かにそうかも知れんな。だが、人類など支配したいとは思わないな」

海道「そうだ！俺達は戦いたいから戦い、潰したいから潰しているだけだ！いちいち使命感にかられているてめえとは違うんだよ！」

〈戦闘会話 ノリコVSムーンWILL〉

ムーンWILL「宇宙怪獣との戦いは辛いだろう？私に任せれば楽になれるぞ」

カズミ「確かに宇宙怪獣との戦いは辛い事の連続よ……！」

ノリコ「でも、辛い事を乗り越えてこそ、手に入れたものもあつたわ！他人には任せられない！私達は宇宙怪獣との戦いを止めるわけにはいかないの！」

〈戦闘会話 竜馬VSムーンWILL〉

ムーンWILL「ゲッター線……。それは滅びの光……。それを利用する人類は自ら滅びを迎えようとしている！」

隼人「人工知能がゲッター線の事を語るとはな」

弁慶「人工知能なりにゲッター線の事を理解しているのかもな」

竜馬「ゲッター線を利用しているのは破滅を迎えさせるためじゃねえ！ジジイは人類の未来のためにゲッター線を使おうとしていたんだよ！それをゲッターと俺達が教えてやるよ！」

ムーンWILLの乗るオリジナルダンクローガにダメージを与えた。

ムーンWILL「な、何故だ…！私は…！私は不滅なのだ…！」

葵「あのね、不滅とか言っている奴は惨めなだけなのよ」

ムーン「黙れ、飛鷹 葵！貴様さえ…貴様さえ、消せば…！」

葵「お生憎様、私は簡単に消されるわけにはいかないのよ！そして、消えるのはあんたよ、ムーンWILL！」

ダンクーガノヴァマックスゴッドがオリジナルダンクーガに攻撃を仕掛けた…。

葵「世界も人も…あんたの好きにはさせないわよ、ムーンWILL！みんな！アブソリュートノヴァビースト、行くわよ！」

チームD「…「やってやるぜ！／やってやるわ！／やってやります！」」

葵「みんな、翼を！」

チームD「…「おう！／ええ！／はい！」」

ダンクーガノヴァにエネルギーが蓄積される。

ジョニー「葵さんに全てを託します！」

くらら&mp;朔哉&mp;エイターダ「…「いけええええつ！！？」」

ダンクーガノヴァマックスゴッドはパーツをパージしていき、ノヴァイーグルだけになった。

葵「ありがと、みんな！やってやろうじゃん！」

いわ。あんたが何度蘇ろうとね……」

ビート・スター「バ、バカな……！ムーンWILLが……！」

ジャンナイン「ビート・スター……。今ならまだやり直せる……。だから……！」

ビート・スター「……止まるわけにはいかない……！私は……その為に活動している……！」

ジャンナイン「ダメ、なのか……！」

〈戦闘会話　ゼロVSビート・スター〉

ゼロ「人間の……いや、生命体全ての生命の雄叫びをお前にも聞かせてやる……！」

ビート・スター「生命に雄叫びなどない。非現実的である……！」

ゼロ「理屈じゃねえんだよ！それを教えてやる……！」

〈戦闘会話　ジャンボットVSビート・スター〉

ビート・スター「お前の優秀な人工知能はまだ使い道がある……！」

ジャンボット「これ以上……私の人工知能で悪さはさせない！ジャンナインに代わり、

私がお前を止める……！」

〈戦闘会話 ジャンナインVSビート・スター〉

ビート・スター「お前が失敗作となるとはな、ジャンキラー。消去し、作り直す」
ジャンナイン「今の僕は消えるわけにはいかない！そして、僕の生みの親であるお前を止めてみせる！」

〈戦闘会話 ダイナVSビート・スター〉

ビート・スター「伝説の英雄……ウルトラマンダイナ。お前も私の邪魔をするのか」
ダイナ「お前みたいなたましいな野望を持つ奴らとは何度も戦ってきたんだよ！行くぞ、デスフェイサーそっくりのロボット！」

〈戦闘会話 しんのすけVSビート・スター〉

ビート・スター「諦めるのだな、カンナム。お前では私に勝つ事など出来ない！」
しんのすけ「そんな事ないゾ！カンナムは……強いんだゾ！」
カンナム「僕が強くないとしても、ビート・スター！アル・ワースを滅ぼす様な事はさせない！」

〈戦闘会話 舞人VSビート・スター〉

舞人「お前も優秀な知能を持っているのだとしたら、俺達とわかり合う事だって、出来るはずだ！」

ビート・スター「そうなのである。お前達の超AIを駆使すれば、大量のロボットを開発し、有機生命体を撲滅できるのである！」

グレートマイトガイン「それではわかり合うではなく、支配だ！ロボットであり…超AIを持つ私達が教えてやる！」

〈戦闘会話 零VSビート・スター〉

アスナ「この天球を止めなさい！このままではどうなるかはあなたならわかるでしょう!!？」

ビート・スター「無論。それにその事を私は望んでいる」

ゼファイ「人類を…有機生命体を滅ぼす事は悲しい事なんですよ」

ビート・スター「有機生命体を野放しにしている方が悲しみを生む…。私と共に来んだ、シャイニング・ゼフィルス」

ゼファイ「私はゼファイ…私はパパやママと共に歩みます！エクスクロスの一員として、あなたの計画を阻止します！」

零「そして、アル・ワース出身として、アル・ワースの人達の救ってみせる！終わり

だ、ビート・スター！」

俺達はビート・スターにダメージを与えたが…。

ビート・スター「まだだ…！」

ダメージが回復したと…!!?

ビート・スター「私は負けん…！私が負ければ、全世界は滅びる！」

ジャンナイン「そんな事はない…！」

ビート・スター「いや、この地球の様にいつかは滅びる！」

ジャンナイン「僕は知った…有機生命体の可能性を…成長を…！僕は…有機生命体を
守ってみせる！」

ジャンナインはビート・スターにビームを撃つが、全て撃ち落とされ、爆煙が起きた。
ビート・スター「無駄である！お前の攻撃は全て、解散済み…！」

しかし、爆煙の中からジャンナインがビート・スターに飛び出し、顔面を殴った。

ヒュウガ「人間にはな…論理を超えた無限の可能性つものがあるんだ！」

成る程…ジャンナインの動きが読まれていたとしても操縦しているヒュウガ船長の
動きまでは読めなかつたって事か！

ジャンナイン「今だ、ゼロ！」

ゼロ「ああ！」

ゼロがビート・スターに攻撃を仕掛けた。

ゼロ「人間の可能性つてものを教えてやるぜ、ビート・スター！」

ゼロはゼロスラッガーを合体させて、ゼロツインソードにした。

ゼロ「シエアツ！」

ゼロツインソードを構え、地面を蹴り、ビート・スターに接近した。

ゼロ「デエリヤアアツ！シユツ！」

ビート・スターを斬り裂き、もう一撃、回転斬りを浴びせた。

ビート・スター「私は…私は…！」

斬り裂かれたビート・スターはダメージを負った。

ゼロ「心を持たないお前なんかには俺達の生命を裁く権利はねえ！」

ビート・スター「何故だ…私が…間違っていたというのか…?!? 私は間違つてなごい

ない…! 私は、正しい…! 私が…私があつてこそ…全ての宇宙の平和と秩序が保たれる

…! 私があつてこそ…! 私が…私があつ…!…私は…怖かったっ…!」

ゼロ「…えっ?!?!」

ダイナ「何っ…?!?!」

怖…かった…？

それを言い残し、ビート・スターは爆発した。

それと同時に天球内が揺れ出す。

まさか…天球も爆発するのか…?!?

ハーリー「天球が爆発します！」

ルリ「急いで各機を収容し、脱出しましょう」

俺達は戦艦に戻り、天球を脱出した。

俺達が脱出した後、天球は爆発した…。

終わった…のか…。

ゾフィー「終わった様だな、ゼロ」

ゼロ「ああ…仲間達のおかげでな！」

ウルトラマン「ウルティメイトフォースゼロ…それにエクスクロスか」

セブン「良い仲間が出来たな、ゼロ」

ゼロ「へへっ！ああ！なかなか頼りになる連中だ」

弘樹「何であんなに上からなんだよ…」

カノン「ま、まあまあ…」

セブン「ゼロ！」

ゼロ「ん…？」

ウルトラマン「宇宙に今…不穏な空気が流れている」

ゾフィー「また近いうちにあう時が来るかも知れないな」

セブン「忘れるな。我々は常にお前と共にある事を…」

ウルトラマン「そして、君達エクスクロスならば、必ず…この宇宙を平和に出来る」

セブン「この世界は…君達に任せる。そして、ゼロを頼む」

ワタル「わかったよ、ウルトラマンさん達！」

零「またお会いしましょう…皆さん！」

俺の言葉に頷いたウルトラマンさん、セブンさん、ゾフィーさんの3人は飛び去って
いってしまった…。

マサキ「行っちゃまったな…寂しいんじやねえか、ゼロ？」

ゼロ「はっ、バカ言え！この世界を平和にしたら、また会いに行くさ」

アスカ「それじゃあ、俺も行くとするか！」

アマリ「もう、ですか…？」

アスカ「俺はまだ、旅の途中だからな。それに…ビート・スターの言葉も気になるし
な」

ゼロ「…」

アスカ「また会う日が来るかもな。その時は、よろしく頼むぜ、ゼロ」
ゼロ「ああ！」

シン「アスカさん……」

アスカ「これからも仲間を大切にしろよ、シン」

シン「……はい！」

シンの返事を聞いたアスカさんはダイナになった。

アスカ「ダイナアアツ!!？」

ダイナになり、外に出たダイナは俺達に向けて、サムズアップをした。

ダイナ「俺も信じてるぜ！エクスクロスがこの世界を救う事を！」

ゼロ「おう！任せろ！」

ゼロもサムズアップで返し、ダイナは自身で作り出したワープホールに入って、ワープホールは消えた……。

ウルトラマンさん達に託されたんだ……無下にはできないな！

ネモ船長「彼等の期待に応える為にも前に進もう」

零「そうですね。まずはアル・ワースへ戻りましょう！」

俺達は新たに気合を引き締め、アル・ワースへ戻った……。

第68話

究極・極限・最強

「カイザムだ。」

ビート・スターとムーンWILLが倒された今、ギルギロス大統領は本格的にエクスクロスを倒す為にロボット軍団を集めた。

ザンザム「ハイホー！ハイホー！ギルギロス大統領、ハイホー！」

オータム「ハイホー！ハイホー！ギルギロス大統領、ハイホー！」

配下のロボットの言葉にギルギロス大統領は手を挙げた。

ギルギロス大統領「諸君静粛に！諸君も知つての通り、ビート・スターとムーンWILLはエクスクロスによって、討ち倒された！このままでは、ロボットはまた、人間共に支配される歴史を送る事になる…。良いか、これからの戦いで全ての決着をつける！我々が生き残るか、人間共が生き残るか…道は一つだけだ！」

キンタム「お言葉ですが、ギルギロス大統領。エクスクロスのロボット達はどうしますか？」

ギルギロス大統領「人間共と心を通わせようとしているロボットなど…ロボットでは

ない！彼等も人間共と共に根絶やしにしろ！」

カイザム「了解……！ギルギロス大統領。一つご質問があります」

ギルギロス大統領「何だ？」

カイザム「何故……ビート・スターやムーンWILLは見限る様な事をしたのですか？」
ギルギロス大統領「……彼等は良きコマだった……。だが、エクスクロスとの決戦を急ぐあまり、彼等は負けた。あの場に我等がいたとしても負けは確定していた。我々、ミッドナイトまで敗れてしまつてはロボットが支配する世界を作れなくなるからな」

カイザム「大統領は……ロボットが支配する世界を作る為ならば、他のロボットをも犠牲にしますか？」

ギルギロス大統領「新しき世界を作る為には犠牲はつきものだ……。仕方のない事だよ、勇者カイザム」

カイザム「そう、ですか……」

仕方ない……？そんな事で割り切つて良いのか……？

だが、やるしかない……！ギルギロス大統領の望みを叶える為にも……！俺達が……！

―新垣 零だ。

アル・ワースへ戻った俺達は創界山を突き進んでいた…。

アンジユ「ねえ、ゼファイ」

ゼファイ「はい？ どうしました、アンジユ様？」

アンジユ「エンブリヲはあなたに何をしたの？」

ゼファイ「…身体を調べられそうになりました…」

アンジユ「…ごめん。嫌な事を思い出させて…」

ゼファイ「い、いえ！ パパ達が助けてくれましたしたので！」

ヒルダ「それにしてもよく間に合ったな、零、アマリ」

零「一誠が助けてくれたんだ」

サリア「え、一誠って、あの一誠…?!？」

アスナ「彼…また助けてくれたんだ！」

零「今回は娘も連れてきていたけどな」

エルシャ「娘…?!？」

メル「類は類を呼ぶとはこの事ですね…」

零「な、何だよ、メル…？」

イオリ「…それで彼は？」

アマリ「アル・ワースの事を私達に任せて、元の世界へ戻りました」

海道「何だよ…それなら残って、戦っても良かったのによ！」

零「あいつにはあいつの守るべき世界があるんです。無理は言えません」

所で気になる事がある…。

前回の時もそうだが、ジャンの事だ。

ジャンは最近、無理をしている様に見える…。ナディアの事が原因だろうかな…。

しんのすけ「ジャン君…忙しそうだよ…」

トオル「ナディアさんの事だと思うよ…」

ネネ「可哀想…」

ボーちゃん「ボー…」

アマリ「ジャン君…身体を壊さなければ良いのですが…」

零「…そうだな」

マサオ「そう言えば、ビート・スターの天球の中にギルギロス大統領はいなかったね」

ひろし「ミッドナイト五人衆はいたけど、何処にいるんだ…？」

みさえ「きつと、ビート・スターとムーンWILLを見捨てて逃げたのよ！」

ゼロ「だが、そんな事して何になるんだ？」

カンナム「…確かに…ロボットの支配する世界を目指すミッドナイトがビート・ス

ター達を見限るなんて、不自然だ…。ギルギロス大統領は何を考えているんだ？」
すると、警報が鳴り響いた。

万丈「敵か…？」

クリス「ドアクダー軍団が攻めてきたの!?!？」

ルルーシユ「いいや。今、名瀬艦長から話を聞いた。ビート・スターの天球で倒したはずのロボット怪獣がこちらへ向かって進行中の様だ。その中心には、ミッドナイト五人衆の姿も確認している」

カンタム「！」

しんのすけ「カンタム…！」

カンタム「わかってるよ、しんのすけ君…！」

…ミッドナイトが総攻撃をかけてくるのか…！

第68話 究極・極限・最強

ミッドナイトの軍団を迎え撃つ為に俺達は出撃した…。

カンタム「エクスクロスの皆さん。ミッドナイトとの決戦の前に言っておきたい事があるんです」

名瀬「どうしたんだ、改まって？」

カンタム「皆さんには感謝しています。元々、ミッドナイトとの戦いは僕の使命だったのに皆さんまで巻き込んでしまつて……」

三日月「気にしなくても良いよ。カンタムだつて、アトラ達を助け出すのを手伝つてくれたじゃないか」

カンタム「だが、僕は例え、悪だとしても同胞のロボット達をこの手にかけている……。僕は同族殺しなんだよ……」

ワタル「そんな……でも、カンタムは正義の為に戦っているじゃないか！」

虎王「悲しむ必要はないぞ！」

カンタム「機械が感傷的になつちやおかしいかい？ 僕は結果的には自分を育ててくれた世界を裏切り、かつての同胞達を殺してきたんだ」

グレートマイトガイ「カンタム……」

しんのすけ「でも、相手はロボットだぞ！」

ひろし「しんのすけ!!？」

しんのすけ「あ……ごめん、カンタム……」

カンタム「気にしてないさ、しんのすけ君。こつちこそ変な事を言い出して悪かつたよ」

ジャンボット「カンタム：例え、君が同胞殺しだと言われても、君は我々の仲間だ」
ジャンナイン「それに僕だって、生みの親であるビート・スターを倒したんだ：。だからこそ、僕も君の力になりたい」

カンタム「：ありがとう、ジャンボット、ジャンナイン。さあ、今日こそ不毛な戦いに決着をつけるよ！」

マリア「来たわ！」

ロボット怪獣軍団とミッドナイト五人衆が現れた。

カイザム「待たせた様だな、エクスクロス」

カンタム「みんな：：！」

カイザム「今日で世界の行方が決まる：。人間が勝つか、ロボットが勝つかな！」

しんのすけ「オラ達が勝つゾ！」

オータム「いいや、我々だ！」

ミラーナイト「あなた達はどうして、ビート・スターやムーンWILLを見限る様な真似をしたんですか？」

グレンファイヤー「あいつらはお前等の仲間じゃなかったのかよ！」

ザンザム「新しき世界を作る為には犠牲が必要なんだよ」

ゼファイ「そ、そんな：：！そんなのって：：！」

零「犠牲が必要だと…？本気で言っているのかよ、それ！」

オルガ「犠牲にして良い生命なんて、あるわけねえんだよ！」

シヨウ「それがわからない時点で新しい世界なんて作れるものか！」

カイザム「…！」

ザンザム「犠牲にして良い生命はない、か…。君達の中には犠牲の上に生きている者がいるはずだがな」

ルルーシユ「…」

ノブナガ「…」

オータム「そんな君達にとやかく言われる筋合いはないな」

アキト「…だとしても…生命を切り捨てているお前達とは違う…！」

ガイ「俺達は犠牲になった奴等の想いも背負って戦ってんだよ！」

キンタム「理解できないわね。ねえ、カイザムちゃん？」

カイザム「…」

オータム「どうした、カイザム？」

カイザム「い、いや…！何でもない！カンタムよ、最後にもう一度だけ聞こう！ロボツトとして、男として！俺の弟して！ミッドナイトに戻ってこないか？」

カンタム「僕は…僕がここまで戦ってこれたのは自分一人の力ではないことをわかつ

ているつもりです。だからこそ！僕はミッドナイトのやり方では何も解決できないと、新たな憎しみを作り出すだけだと言いたいんです……だから、すまないみんな、僕はカントムロボとして生きたいんだ！」

カイザム「残念だな、カントム。お前達、エクスクロスの戦力では我等、ミッドナイトには勝てない！故に、お前には、死あるのみだ！」

カントム「それならば、カントムロボとして散ろう!!？」

弘樹「勝手な事言うなよ、カントム！」

優香「私達は負けるつもりはないし、あなたを散らせるつもりもないわ！」

しんのすけ「みんな、カントムの味方だゾ！」

ひまわり「たいやく！」

カントム「…ありがとう。それじゃあ、皆さん！最後まで僕に手を貸してください！」

バトルボンバー「了解だ！」

ガードダイバー「やりましょう、カントム！」

カイザム「…愚かな…！」

カントム「カイザム兄さん！みんな！僕は抵抗する事を諦めない！必ず、ミッドナイトの野望を止めてみせる！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　しんのすけVS初戦闘〉

しんのすけ「よーし！オラ達の力を見せる時が来たゾ、カンタム！」

カンタム「ああ、そうだね！しんのすけ君！（僕の身に何が起きようと彼等だけは僕が守ってみせる…！）」

〈戦闘会話　しんのすけVSカイザム〉

カイザム「哀れな男だ。そうまでして人間を守りたいか！」

カンタム「僕は…人間と共に暮らして…そして、このエクスクロスの一員となって、多くの事を学んだんだ！彼等との生活は楽しかった…。だからこそ、この楽しみを消させたいけないんだ！」

ひろし「そして、お前にも教えてやるよ！」

みさえ「家族の素晴らしさってものをね！」

シロ「ワン！」

ひまわり「たいや〜！」

しんのすけ「家族で…お友達でいっしょにいたら、みんな楽しいんだゾ！カイザム

だって、カンナムと一緒にいたいんでしょ!?!?」

カイザム「……!」

カンナム「カイザム兄さん……?」

ジジザム「ゴホッ!ゴホッ!」

キンナム「騙されたらダメよ、カイザムちゃん!」

オーナム「こうやって、奴等は俺達を操るんだ!」

ザンザム「奴等の言葉に耳を傾ける必要はない!」

カンナム「待ってくれ、話を聞いてくれ!」

カイザム「だ、黙れ黙れ!お前達はここで潰す!」

〈戦闘会話 無人orバトルボンバーorガードダイバーorブラックマイトガイン

VSカイザム〉

カイザム「勇者特急隊のロボット達!お前達も我等と共に来い!」

ガードダイバー「生憎ですが、それは出来ませんね」

バトルボンバー「俺達は自分の意志で無人達と一緒に戦っているんだ!」

ブラックマイトガイン「確かに人間は間違いを犯すのかも知らない……。だが、人間全

てがそうではないんだ!」

グレートマイトガイン「そして、人間とロボットは共に進化していくんだ！」

カイザム「理解出来ない…！何故、そこまで旋風寺 舞人の事を…！」

舞人「それはみんなが正義の心を戻ったロボットだからだ！それを教えてやる！」

〈戦闘会話〉 ジャンボットVSカイザム

カイザム「お前ぐらいの知能を持つていれば、人間が危険な存在だと言う事はわかるだろう！」

ジャンボット「いいや、私達は生命あるものに助けられてきた…。そして、これからも…。だからこそ、生命あるものを消させるものか！」

〈戦闘会話〉 ジャンナインVSカイザム

カイザム「お前とこうして話すのも最後になるかもしれないな、ジャンナイン」

ジャンナイン「カイザム、僕は…」

カイザム「言っておくが、言葉などで止まると思うなよ！お前とも決着をつける…来い、ジャンナイン！」

ジャンナイン「…カイザム…！ならば、僕も応えよう！君を止めるために！」

俺達の攻撃でカイザム以外のミッドナイト五人衆が爆発した。

カイザム「お、おのれ……！」

カンナム「超超カンナムで一気に決めるよ、しんのすけ君！」

しんのすけ「わかったゾ！」

超超カンナムは凄まじい攻撃でカイザム・ロボにダメージを与えた。

カイザム「ふ、ふ……。やはり、お前に負けたか……」

カンナム「カイザム兄さん……」

カイザム「お前達は知る事に……。なる。ギルギロス大統領の恐ろしさを……！」

それを言い残し、カイザム・ロボも爆発した……。

しんのすけ「カンナム……」

カンナム「……これが望みか……！ギルギロス大統領！こんな事をする為に、あなたは……

！」

？「その通りだ」

カンナム「！」

こ、この声は……!!??

すると、破壊されたはずのミッドナイト五人衆のパーツが一つになり、巨大なロボットとなった。

夏美「合体した……!!??」

ギロロ「カイザム達がまだ生きていたのか…!?？」

ジャンナイン「違う…！」

ジャンボット「何が違うというんだ、ジャンナイン！」

カンタム「あなたは…あなたは…！」

？「久しぶりだな、カンタム！私はウルトラトラカイザム見参！またの名をギル

ギロス大統領!!？」

巨大ロボに黒い影が乗り移った。

竜馬「奴がギルギロス大統領か！」

凱「確かにとんでもなさそうな奴だな！」

ギルギロス大統領「初めましてだな、エクスクロス」

溪「仲間は全員やられちゃったよ！」

號「後はお前だけだ！」

ひろし「お前は俺達が倒す！」

みさえ「それが嫌なら降参しなさい！」

ギルギロス大統領「何故降参する必要がある？私はお前達に負ける要素がないのだからな」

海道「へっ！随分と強気じゃねえか！」

スカーレット「ならば、負けというものを教えてやる！」

ギルギロス大統領「なんと愚かな…。やはり力の差を教えてやらねばな」

カンタム「ギルギロス大統領…！僕があなたを止める！」

ギルギロス大統領「お前も愚かだな、カンタム・ロボよ。今ここでエクスクロスを討てば、もう一度私のもで働かせてやろう」

カンタム「断る…！彼等は僕の大切な仲間だ！討つような真似ができるか！」

ギルギロス大統領「ならば、奴等と共に滅びるがいい！」

ロボット怪獣にオリジナルダンクークーガが五機だと…!!?

朔哉「オリジナルダンクークーガだと…!!?’

エイーダ「ムーンWILLを倒したのにどうして…!!?’

ギルギロス大統領「所詮、ロボットだ。量産は出来る。いくらでも駒を作り出す事など可能だ！」

万丈「ロボットが駒だと…!!?’

シモン「てめえ…！仲間に対してなんて事を言いやがる！」

ギルギロス大統領「敗北を喫するロボットなど存在に値しない…。それはお前達も同じだ！」

しんのすけ「そんな事…ないゾ！」

トオル「ロボットだって、生きているんだ！カイザム達に謝れ！」

ギルギロス大統領「スクラップになったロボットになど謝罪するのも惜しい…。話は終わりだ、エクスクロス。ここで全てが決まる！」

カンタム「あなたは…沢山の…そして、僕の家族のロボットを駒として見ていた…。もう、許さない！あなたは僕が倒す！」

俺達は戦闘を再開した。

戦闘から数分後の事だった。

ギルギロス大統領「無駄だと言う事を理解していないようだな。ならば…！」

ギルギロス大統領が超カンタム・ロボに攻撃を仕掛け、超カンタム・ロボはダメージを受ける。

カンタム「ぐっ…！」

しんのすけ「うわあっ！」

ジョーイ「カンタム！野原さん！」

カンタム「すまないしんのすけ君！ 最後はアンハッピーエンドになりそうだ…！」

しんのすけ「そんな事ないゾ…！そんな事、オラ達がさせない！」

ワタル「絶対にハッピーエンドを手に掴むんだ！」

カンナム「しんのすけ君：ワタル君：」

ギルギロス大統領「フン、いくらあがこうがお前達に未来はない。ロボットは私、ギルギロス大統領が管理し、操作してこそ、真の存在意義をみせる。所詮は駒なのだ！」

ジャンナイン「そんな事はない：！」

ジャンナイン：!??

ジャンナイン「ロボットは：お前の駒などではない！」

ギルギロス大統領「ビート・スターによつて生み出されたジャンキラーよ：。何を言う？お前達、ロボットは命令には従えない：。動く人形なのだ！」

ジャンナイン「僕は：ゼロや兄さん達と出会つて、沢山のロボットや有機生命体を見てきた：。そして、ウルティメイトフォースゼロやエクスクロスのみんなと話して知つた！ロボットにも燃える心や魂がある！流せる涙がある！ロボットにも：れつきとした存在意義があるんだ！」

ゼロ「ジャンナイン：お前：！」

ジャンナイン「それを僕が：いや、僕とヒュウガが教えてやる！ヒュウガ、行けるか!?？」

ヒュウガ「いつでも、準備OKだ！ジャンナイン！」

ジャンナイン「それなら…行くぞ！」

ジャンナインはギルギロス大統領に攻撃を仕掛けた…。

ジャンナイン「ギルギロス大統領！ ロボットの燃える心を見せてやる！ ヒュウガ、ガンパッドで援護してくれ！」

ヒュウガ「了解だ！」

ヒュウガ船長はジャンナインの中でガンパッドと呼ばれるタブレットを変形させて、拳銃型のガンモードにした。

すると、ジャンナインにも巨大なガンパッド・ガンモードが現れ、構えた。

ジャンナイン& amp ;ヒュウガ「ジャンスターダスト!!?」

銃からビームが発射され、ギルギロス大統領に直撃した。

ギルギロス大統領「ぐおおおっ?!?こ、これ程の力が…!」

ビームを受けたギルギロス大統領はダメージを受ける。

ギルギロス大統領「うぐっ…!それしきの攻撃!」

レイモン「ボス、今の技はなんだ?!?」

ヒュウガ「わからない。だが、目の前にこのパッドが現れたんだ！」

ジャンナイン「ガンパッド…僕とヒュウガの絆の証さ」

ヒュウガ「…そうか！」

エメラナ「あの二人：良きコンビですね」

ジャンボット「ジャンナインに彼を乗せたのは正解だったようですね」

ギルギロス大統領「何が絆だ！ロボットと人間の絆など：片腹痛い！ロボットは駒だと何度言えばわかる！」

？「お前こそ：何度俺達、ロボットは駒じゃないと言え、わかる？？」

え：ギルギロス大統領からカイザムの声が：！！？

ギルギロス大統領「ゆ、勇者カイザム！！？何故だ：貴様は破壊され、私の一部となつたはず！」

カイザム「全て：お前の中で聞いていた！ロボットが命令される人形だと？俺達の想いを：忠誠を踏みにじったお前を俺は許さない！」

ギルギロス大統領「許さないだと：？では、どうするつもりだ！」

カイザム「こうするんだ！」

すると、ギルギロス大統領の中から、カイザム・ロボが現れた。

カンタム「カイザム兄さん！」

ギルギロス大統領「ぐっ、ぐおおおおっ！！？何故だ：何故、貴様のボディが：！！？」

カイザム「家族が：ミッドナイト五人衆のみんながパーツを与えてくれ：ジャンナインの先ほどの攻撃でエネルギーも元に戻った！感謝するぞ、ジャンナイン」

ジャンナイン「フツ、漸くこちら側に来たか、カイザム！」

カイザム「カンタム…すまない。俺が…俺達が間違っていた…」

カンタム「構わないよ、カイザム兄さん。また…優しい兄さんを見て、僕は嬉しいよ！」

カイザム「カンタム…！」

カイザムが味方になったか…！

ギルギロス大統領「フフフ…！ならば、兄弟揃って、地獄に落ちるがいい！」

？「待って！」

今度は女性型のロボットが現れた。

イオリ「誰だ…？」

カンタム「君は…シーラ・ロボ！」

しんのすけ「あー！カンタムのこんにやく屋さんだゾ！」

シヨウ「こ、こんにやく屋さん…？」

エイサツプ「…もしかして、婚約者か、しんのすけ？」

しんのすけ「そうとも言うー！」

エレボス「へえー！カンタムに婚約者がいたんだ！」

カンタム「シーラ、J r. はどうしたんだい？」

シーラ「親戚のおばさんに預けてきたわ！あなたを助ける為に！」

メル「え…J r.？」

カノン「え…もしかして…！」

しんのすけ「カンタムの子供だゾ！」

…何いいいつ!!?

アマリ「え、ええっ!!？」

零「こ、子供…!!？」

アスナ「カンタムもやる事はやっていたのね」

カンタム「いやあ、照れるなあ」

弘樹「照れてる場合かよ！」

ゼフィ「あの…やる事とは何でしょうか？」

カエサル「君にはまだ早いかな」

イチヒメ「もう少し、大人になってからです」

ゼフィ「え…は、はい」

アマリ「れ、零君！私は何人でもいいから！」

零「ゼフィの前でお前は何言ってるんだ!!？」

優香「みんな、緊張感が…」

シーラ「カンタム、私も力を貸すわ！」

カンタム「ありがとう、シーラ！」

ギルギロス大統領「カンタムの婚約者だと……？ならば、仲良く地獄に落ちるがいい！」

カンタム「そんな事はさせない！行こう、シーラ！」

シーラ「ええ！」

カンタム「ギルギロス大統領！これが僕達の力だ！」

カンタム・ロボとシーラ・ロボが攻撃を仕掛けた。

カンタム「終わらせるぞ、ギルギロス大統領！僕達の戦いを！」

シーラ「カンタム……！私も戦うわ！」

カンタム「ああ……！行こう、シーラ！カンタム！」

シーラ「シーラ！」

カンタム& a m p ;シーラ「究極・極限・最強合体！」

超カンタム・ロボとシーラ・ロボが合体して、白いカンタムが現れる。

カンタム「究極カンタム・ロボ、参上！」

みさえ「まずはビームよ！」

ひろし「カンタムビームだ！」

究極カンタム・ロボは指からカンタムビームを出し、ギルギロス大統領にぶつける。

シーラ「行って、カンタム！しんのすけ君！」

しんのすけ「カンタム、一緒に決めるゾ！」

カンタム「了解だ、しんのすけ君！行くぞ!!？」

究極カンタム・ロボは蟹挟みの状態に入った。

しんのすけ&p;カンタム「究極・極限・限界・名物！カンタムかにはーさみ!!

?」

ギルギロス「ぐわあああつ!!？」

蟹挟みでギルギロス大統領を挟み、力を込めると、ギルギロス大統領は爆発した。

カンタム「これがロボットと人間の力だ…！」

爆煙の中から究極カンタム・ロボが飛びし出してきた。

そして、元の超カンタム・ロボとシーラ・ロボに分離する。

爆煙が晴れるとボロボロだが、立っているギルギロス大統領の姿があった。

マサオ「究極カンタム…やっぱり格好いい！」

カイザム「お前もつと上に行くんだな」

ギルギロス大統領「ま、負けるものか…！」

ギルギロス大統領のダメージが回復した。

クルル「クーククツ！しつこい野郎だな」

ドロロ「活路は見えた！これで終わらせるでござる！」

シーラ「カンタム！究極カンタムになる時には私も援護するわ！」

カンタム「わかった！」

カイザム「俺もやる…！行くぞ、カンタム！」

しんのすけ「ギルギロス大統領！オラ達は最後まで負けないゾ！」

カンタム「そして、ロボットと人間の共存の未来を作ってみせる！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 カイザムVS初戦闘〉

カイザム「お前達も奴に操られているのか…！俺が解放してやる…必ず…！」

〈戦闘会話 しんのすけVSカイザム〉

カイザム「ぐっ…！こんな…お前、死ぬ気か!?？」

カンタム「生き残るさ…！」

しんのすけ「オラ達は死なない！死んでない！」

カンタム「もうパワーアップしていくだけの殺し合いはたくさんだ！そこからは何も

生まれない！」

ギルギロス大統領「ロボットはパワーアップしていくものだろう！」

ひろし「そうとも限らねえよ！」

しんのすけ「力で強くなくても…みんなを守る事が出来るゾ！」

〈戦闘会話〉 カイザムVSギルギロス大統領〉

ギルギロス大統領「勇者カイザム！もう一度、俺の元で働くと言うのなら取り合う事は出来るぞ」

カイザム「もう俺はお前の口車には乗らない…！共存…悪くはないと思ってきたからな！行くぞ！勇者としてお前を倒してやる！」

〈戦闘会話〉 ゼロVSギルギロス大統領〉

ギルギロス大統領「エンペラ星人を倒したウルトラ一族は危険だな…！」

ゼロ「やっぱり、ためえはエンペラ星人の事を知っているのか！」

ギルギロス大統領「奴の闇は素晴らしかったのだな…覚えている」

ゼロ「だったら、尚更ためえを野放しには出来ねえな！」

〈戦闘会話　ジャンナインVSギルギロス大統領〉

ギルギロス大統領「ジャンキラー！お前の攻撃のせいで俺はダメージを受けてしまつた…。その責任は取ってもらおう！」

ジャンナイン「責任など取る気は無い…。！その代わり、お前を倒してやる…。！行こう、ヒュウガ！」

ヒュウガ「ああ！無限の可能性を教えてやる！」

〈戦闘会話　舞人VSギルギロス大統領〉

ギルギロス大統領「ロボットは兵器だ。正義の心などは宿らない！」

舞人「そんな事はない！AIにも…正義の心は宿る！ガインやカンタム達のように！」

グレートマイトガイン「ロボットを道具のように考えているお前では私達には勝てない！見せてやる！正義の力を！」

〈戦闘会話　零VSギルギロス大統領〉

零「ロボットとの共存…険しい道のりかもしれない。だが、不可能ではない！」

ギルギロス大統領「あまい！人間はいずれ、ロボットを裏切る！」

ゼファイ「そんな事はないです！ロボットの裏切ったあなたには一生わかりません！」
零「全てのロボットの仇：俺達が取ってやる！」

究極カンタム・ロボの攻撃でギルギロス大統領はダメージを負う。

ギルギロス大統領「こ、こんな…！私が…負けるだとおつ…！こ、今回するぞ…！お前達は必ず…！」

カイザム「だからこそ、後悔しない世界を作る」

カンタム「僕達と人間達で…！」

しんのすけ「オラ達は立ち止まらないゾ！」

ギルギロス大統領「おのれ…おのれえっ…！うぐわああああつ!!？」

ギルギロス大統領は爆発した…。

カンタム「(ギルギロス大統領…)」

カイザム「(どの様な結果であれ、俺達はお前に生み出された存在だ…)」

カンタム「(だからこそ、僕達は僕達で生きる…。人間達と共に…)」

カズミ「今ので最後みたいね」

ノリコ「ギルギロス大統領も倒す事が出来ました。これでドアクダー打倒に専念できますね」

ルリ「はい。ですので皆さんは帰還してください」

俺達はそれぞれ戦艦に戻り、ナデシコの格納庫に集まった。

シーラ「カンタム…漸く会えた…！」

カンタム「僕も…君に会えて、嬉しいよ。シーラ」

カンタムとシーラは抱き合った…。

メル「ロボットでも恋愛はするのですね…」

ゼファイ「しますよ。好きという感情を持つていたら」

アマリ「…はっ?!?ゼ、ゼファイちゃんにはまだ早いよ！」

ゼファイ「でも…いつかは恋というものをしてみたいです」

零「ゼファイなら出来るさ。絶対な」

カイザム「…」

ジャンナイン「行かないのか、カイザム?あの輪に」

カイザム「今はあの輪に入る事など出来ないさ」

カンタム「そんな事はないさ、カイザム兄さん」

シーラ「私がお義兄さんからもお話をお聞きたいです」

カイザム「…ふっ。カンタム、元の世界へ戻った時はJ r. というのは見せてくれ」

カンタム「勿論さ!甥っ子の顔をしっかりと見て欲しいからね！」

しんのすけ「これで一心動乱だゾ！」

ミカゲ「それを言うなら、一件落着だよ、しんのすけ君」

しんのすけ「そうとも言うー！」

これなら、人間とロボットの共存もそう遠くはないのかもな…。

俺達は再び、創界山を進んだ…。

第69話 王者の資格

―新垣 零だ。

俺達はN―ノーチラス号の格納庫にいた。

ジャン「アンジュさん！ ヴイルキスの整備、終わってますからー！」

アンジュ「あ、ありがとう…」

ジャン「もうすぐ創界山ですからね。これまでの戦いでダメージを受けた機体は急いで修理しないと！ じゃあ、僕…次はマジンガーの整備に行ってきます」

タスク「ジャン…」

モモカ「ジャン君…。こここの所、ずっと部屋で泣いているみたいですよ…」

アンジュ「ごめん、ジャン…。ナディアを救い出せなくて…」

零「それを言うなら俺達もだ…」

アマリ「ゼフィちゃんばかりに気が行き過ぎていたばかりに…」

アスナ「もつとあの時、しっかりと探していれば…」

グランデイス「それをジャンに言う必要はないよ」

イオリ「グランデイスさん…」

アンジュ「でも…」

グランデイス「ジャンが泣いていたのは、自分にナディアを救い出す勇気がなかったからだよ…」

ゼファイ「勇気…」

サンソン「ああ、そうだよ。たとえば足手まといになっても、あの時、タスクや零達と一緒に行くべきだったって…」

ハンソン「ジャンは、誰かに任せるしかなかった自分の無力さが悔しかったんだ」

グランデイス「ドンパチは出来ないだろうが、アルゼナルに突撃する事は出来たはず…。あいつはそれを後悔しているんだよ」

零「ジャン…」

グランデイス「だが、心配はいらないよ。ジャンは、もう吹っ切った」

サンソン「頼むぜ、ハンソン。チャンスがあったら、俺達はジャンの運転手をやってやらなきゃならねえからな」

ハンソン「任せておいてよ。その時のためにグラタンも万全の状態にしておくから」

モモカ「皆さん…決して諦めてないんですね」

グランデイス「当然だよ。そして、あんな想いをするのは二度と御免だ…。だから、こ

こまできたらアル・ワース中のクソ野郎を全部退治してやるつもりだ」

アンジュ「それ、私も乗るよ。最後のエンブリフだけじゃなく、ドアクダーも闇の帝王もベリアルもゴゴールも全部やる…。ルルーシユのママとV・V、アーサー王にキバ、バイストンウエルの戦いの元凶も、かぎ爪の男もザンギヤックも、レコンギスタ軍もまとめてね」

ルルーシユ「(アンジュ達はそれぞれの目的の為に動こうとしている…。それなのに、俺は…。俺は、二度と…ナナリーやシャーリー達を巻き込まないと決めたはずなのに…!)」

コーネリア「辛気臭い顔をしていると、格好いい顔が台無しだぞ、ルルーシユ」

ルルーシユ「姉上…」

コーネリア「私も枢木も…ユファイ達を救い出す為に動き出している…。お前は どうするつもりだ?」

ルルーシユ「俺はギアス以外にそこまでの力は…」

コーネリア「ならば、ギアスを使って、ユファイ達を助け出すか?」

ルルーシユ「ふざけるな! ギアスの力は二度と使わないと決めたんだ! それに、ギアスを使うと…また、誰かを傷つけてしまう…!」

コーネリア「…だったら、ギアスを封じ、ゼロという仮面を隠したお前に残されてい

るのは何だ？」

ルルーシユ「俺に：残されているのは：」

コーネリア「お前はゼロの時、私までも陥いれた頭脳があるだろう？」

ルルーシユ「！」

コーネリア「これからも私達が勝つ為の：そして、ユファイ達を助け出せる為の指揮をしてくれ、ルルーシユ」

ルルーシユ「：ふっ、流石は姉上：。俺の事をよく知っている」

コーネリア「姉だからな。敵対していたとしても」

ルルーシユ「少し、戦略を立てます。手伝ってもらえますか、姉上？」

コーネリア「当たり前だ」

ルルーシユも覚悟を決めたか：。

ノブナガ「(アーサーと共にV. V. がいたとなると、あそこにはノブカツもいる：。俺は：ノブカツを討つ事が出来るのか：?)」

ジャンヌ「ノブナガ：」

ミツヒデ「：」

タスク「それにしてももうすぐ創界山か：」

アスナ「そこにドアクダーがいるのね：」

タスク「エンブリヲすら恐れた、闇の支配者……。俺達は勝てるのか……」
すると、突然、Nーノーチラス号が揺れた。

零「な、何だ!?？」

マリア「何が起こったの!?？」

エレクトラ「エクスクロス各員へ。本艦は創界山周辺に張られた結界に衝突した模様……。なお、結界を破る術はない為、本艦は進路を変更します」

カイザム「結界だと……!?？」

カンナム「それがある限り、僕達は創界山へは行けないという事か……！」

進路を変更して……何処に行く気なんだ……？

結局来たのはモンジャ村か……。

何だか懐かしいな……。

オババ「おおっ！あれは……！」

オジジ「第四世代型超光速恒星航行用超弩級万能宇宙戦艦エクセリオンとはもう……」

オババ「は？」

ヒミコ「やっほー！ヒミコだよー！」

ワタル「オババ様、オジジ様！救世主ワタル、モンジャ村に帰ってきたよ！」

オジジ「ヒミコにワタル……。二人共、元気そうぞ何よりじゃ」

オババ「いよいよ、その時が来たという事か…」

俺達は艦を降りて、オババさん達の所まで来た。

オババ「…そうか。ついにドアクダーに挑むか…」

ワタル「でも、バリアみたいなのが張られているおかげで僕達、創界山に入れないんだ」

アマリ「ドアクダーと戦う為の力…創界山の秘宝…。それこそが道を拓く鍵だと思っ
んですが…」

ワタル「でも、赤龍と青龍に言われた通り、六つの秘宝は集めたよ」

オババ「おお…お前達、秘宝を揃えたのか」

シバラク「界層ボス達が守っていた六つの秘宝…神部の笛、真実の鏡、灼熱の剣、極寒の剣、ヨカッタネ、千光の腕輪…」

ヒミコ「ぜくんぶ集めたけど、何も起こらなかつたのだ」

オババ「六つの秘宝の力で最後の秘宝を手に入れなければ先には進めん…」

ワタル「オババ様は秘宝の事を知っていたの？」

オババ「お前達の旅の様子は幻龍齋が逐次報告してくれたからな。こちらでも色々
調査を進めていたのじゃ。そのおかげかのう…。ワシにもお告げが降りてきた」

ワタル「お告げって…予言みたいなもの？」

オババ「そうじゃ。心して聞くがいい、ワタル。六つの秘宝が揃う時：ドアクダーを倒す為の最後の秘宝が現れる…。その名：龍王の剣と龍神の盾…」

ワタル「龍王の剣と龍神の盾…」

零「それこそがドアクダーを倒し、創界山の虹を元の色に戻す力なんですわね…」

オババ「おそらく、その龍王の剣と龍神の盾があれば、創界山を覆うドアクダーの闇の結界も破壊する事ができるだろう」

ワタル「それって…どうやって手に入れるの？」

オババ「残念ながら、そこまでは分からん…」

ヒカル「ありやりや！肝心なところで！」

イズミ「それじゃあ、あたし達はこれからどうやって戦っていけばいいんだい？」

リョーコ「言っても仕方ねえよ、イズミ。別の方法を考えるしかねえ」

ワタル「そうだね！それしかないね！」

オババ「強くなったようじゃな、ワタル」

ワタル「へへへ…今日までずっと旅をしてきたからね！」

しんのすけ「ワタル君の成長ぶりは、すごかったゾ！流星は救世主だゾ！」

アマリ「はい、見違えるようになりました！」

オババ「そう言う術士殿も随分と強くなりましたな」

アマリ「もし、そうならば、それはワタル君達に鍛えてもらった為です」

オババ「(何故じやろうな…。術士殿のまとう気…神部七龍神の加護を持つワタルと同じように感じる…。それに…)」

零「確かに、アマリも強くなったよな。ブリキントンを前に悲鳴を上げていた頃とは大違いだ」

アマリ「も、もう！その事は言わないで！」

オババ「零…お前も真実に辿り着いたようだな。よもや、お前も同じアル・ワースの人間だったとは…」

零「驚くのも無理はありません。ですが、今の俺はレイヤ・エメラルドであり、新垣零ですから」

オババ「最近の若者というのはドンドンと強くなっていきおるな…。ネメシスと呼ばれる存在の調査を続けている所じや」

零「奴の力は未知数です…。調査には気をつけてください」

オババ「お前も無理をするなよ？」

零「肝に命じておきます」

アスナ「それは無理な相談ですよ、オババさん！」

メル「零さんが無理するのはもう病気みたいなものですから」

零「酷いな、二人共!?」

ゼファイ「そんな事はないですよ!」

零「ゼファイ!」

ゼファイ「病院では治らないので病気ではないです!ですが、無理矢理付き合わされた私も辛い目にあつていましたけど!」

零「: : : なんか、それはごめん」

オジジ「じーっ!」

虎王「な、何だよ、このジジイは!?」

幻龍斎「ふむ: : :。やはり、ジイ様も虎王に何かを感じているようだな: : :。シユワルビネガールもそうだったように虎王もドアクダーの力で本来の姿を変えられているかも知れん: : :。そうなると虎王がドアクダーの息子というのも疑うべきだろう: : :」

すると、クラマが走つて来た。

クラマ「ワタル! ドアクダー軍団が、こちらに向かつてるらしい!」

ワタル「僕達を創界山に行かせないつもりだな!」

シバラク「ならば、迎え撃つまで! 行くぞ、皆の者!」

オババ「気をつけろ、ワタル」

ワタル「大丈夫だよ、オババ様。エクスクロスのみんなもいるんだし」

オババ「感じるんじゃ…。とてつもなく巨大な力がモンジャ村に近づいているのを…」

ワタル「え…」

オババ「わからない…。この力…光なのか、それとも闇なのか…」

俺達はそれぞれの艦へ戻った…。

第69話 王者の資格

ドアクダー軍団が来たか…！

エレクトラ「ドアクダー軍団、確認！界層ボスも複数、見られます！」

ネモ船長「機動部隊を発進させろ」

俺達は出撃した。

虎王「界層ボスが、揃ってお出ましかよ！」

クルージング・トム「エクスクロス！これ以上、先へは進ませんぞ！」

ヴィラル「クルージング・トム…！」

デス・ゴット「我等、界層ボスの力を結集して、お前達を止める！」

ルルーシユ「デス・ゴットか……」

ソイヤ・ソイヤ「俺達の力を甘く見るなよ！」

甲兎「ソイヤ・ソイヤの奴……！調子に乗りやがって！」

ドクトル・コスモ「ワシの計算では、今度こそ、勝てるはず！」

アンジユ「ドクトル・コスモ……。相変わらずみたいね」

アック・スモツグル「ヘドロ御殿の借り、必ず返したる！」

幻龍斎「アック・スモツグル……！性懲りも無く！」

ビビデ・ババ・デブー「あたし達がいる限り、あんた等はここで終わりだよ！」

トッド「気合い入ってるな、ビビデ・ババ・デブーのババア！」

ゼフィ「……」

アスナ「どうしたの、ゼフィ？睨んじゃって……」

ゼフィ「あのアック・スモツグルという人……確か、ママをいやらしい目で見ていたおじさんですよね？」

メル「え……う、うん。そうだよ」

ゼフィ「許しません……！ママをいやらしい目で見ていただけでなく、ママの笑顔は私とパパのものなのに！」

アマリ「ゼ、ゼフィちゃん……？怒る所そこじゃないよ……？それから、嫌な思い出を思

い出させないで！零君もゼフィちゃんを止めて！」

零「…よく言った、ゼフィ！よっしゃあ、二人でママをいやらしい目で見ていたあのクソ親父をぶっ飛ばそうぜ！」

アスナ「…親娘は似るものね」

アマリ「はい…」

ワタル「(オババ様が感じていた巨大な力って…いつ等の事なのか…)」

龍神丸「ワタル…」

ワタル「考えていても仕方ない！やるよ、龍神丸！」

弘樹「界層ボスを全員フルで出してきたって事はドアクダーは、ここで俺達を止める気らしいな！」

カノン「決戦という事ですな…！」

ウィル「ならば、それをぶち抜くだけだ！」

ニツク「僕達は、こんな所で止まってはいられないんだ！」

ノブナガ「狙いは各界層ボスだ！奴等に攻撃を集中させろ！」

ワタル「行くぞ、界層ボス！お前達を突破して、僕達は創界山へ向かうんだ！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 エイサップVSクルージング・トム〉

エレボス「本当にしつこいね、あの人！」

クルージング・トム「うるさい！俺の積年の恨みを思い知れ！」

エイサップ「恨みとか知った事じゃない！何度でも来るなら叩き斬ってやるだけだ
！」

グレンラガンとアツカナナジンの攻撃でセカンドガンにダメージを与えた。

クルージング・トム「くっ……こ、これは不可能なミッションだったか！」

セカンドガンが爆発した。

朗利「あばよ、クルージング・トム……」

金本「しつこい男だし、どうせ、どこかで生きていると思うけどね」

〈戦闘会話 ノブナガVSデス・ゴッド〉

デス・ゴッド「見えるぞ、破壊王。お前の迷いが！そんな状態で俺様に勝てるのか？」

ノブナガ「俺の迷いにお前は関係ない！俺はお前を越えて、迷いも斬り伏せる！」

蜃気楼とザ・フルルの攻撃でスケルバットはダメージを受けた。

デス・ゴツド「い、いかん！機体が復活不可能な程、バラバラになる！」

スケルバットは爆発した。

ノブナガ「死神を気取る男だ…。何だかんだ言って、本物の死神に連れて行かれる事はないだろう」

〈戦闘会話　ヒーローマンVSソイヤ・ソイヤ〉

ソイヤ・ソイヤ「ヒーローごっこもここまでだ、小僧！」

ヒーローマン「……！」

ジョーイ「僕達の戦いはごっこじゃない！そして、お前達も倒してやる！」

マジンカイザーとヒーローマンの攻撃でキングヘラクロスにダメージを与えた。

ソイヤ・ソイヤ「う、うおおおおっ！お、俺の祭りが終わるうううっ！！？」

キングヘラクロスは爆発した。

甲児「どうせちやつかり逃げ出して行くせに最後まで騒々しい男だったぜ……」

〈戦闘会話 竜馬VSドクトル・コスモ〉

ドクトル・コスモ「今度こそ、ゲッター線を頂く！」

竜馬「懲りねえな、てめえは！ だったら、たつぷりと味わえやがれ！ ゲッターの恐ろしさをな！」

ヴィルキスと真ゲッターの攻撃にギーガンはダメージを負った。

ドクトル・コスモ「こ、この結果……ワシの計算でも導きだせなかつたああつ!!？」

ギーガンは爆発した。

隼人「……自分に自信を持つのは勝手だが、最後まで計算違いを認めなかつたな……」

弁慶「まあ、しぶとく逃げ出したみたいだけどな……」

〈戦闘会話 零VSアック・スモッグル〉

アック・スモッグル「今度こそ、お前達を倒して、勝利のホールインワンを決めてやるわい！」

アスナ「あの手のおじさんって、本当にゴルフが好きね」

零「だったら、ゴルフで応えてやるよ！てめえを地面に埋めて、顔面にゴルフクラブをぶっ放してやるよ！」

アック・スモッグル「な、何?!?!」

アスナ「怖い事言わないでよ！ここにはゼファイもいるのよ！ねえ、ゼファイ！」

ゼファイ「…生温いですよ、パパ！ゴルフクラブよりも金属バットの方が効果的です！
ヴァンさんの代わりに私達が相手になります！」

アック・スモッグル「さ、最近の若者は怖い…！」

アスナ「もう嫌だ、この親娘…！」

幻王丸とゼフィールスネクサスの攻撃にコンボスはダメージを負った。

アック・スモッグル「は、破産だ！ワシの人生の破産だあああつ!!?!」

ギーガンは爆発した。

ヒミコ「はさんだ、はさんだ！あのオッサン…カニに何かを挟まれたのか！」

幻龍斎「憎まれっ子、世にはばかる…。だが、ドアクダーさえ倒せば、あの連中もまともになるかも知れん…！」

ゼファイ「ふう…何だかスッキリしました！」

零「次、アマリに手を出したらこんなものじゃ済まねえからな」
アスナ「…もう何も言う気力はないわ…」

〈戦闘会話 バーンVSビビデ・ババ・デブー〉

ビビデ・ババ・デブー「元気でやっているようだね、バーン」

バーン「おかげさまでな。手は抜かんど、ビビデ・ババ・デブー！」

ビビデ・ババ・デブー「望む所だよ！掛かってきな、バーン！」

ピアレスとズワウスの攻撃でヘルライガーはダメージを負った。

ビビデ・ババ・デブー「や、やるじゃないか！だが、こんな攻撃じゃやられないよ！」

バーン「ならば…シヨウ！力を貸して欲しい！」

シヨウ「わかった、バーン！」

サーパインとズワウスが同時に攻撃を仕掛けた…。

シヨウ「界層ボスはここで倒す！」

バーン「シヨウ、二体同時攻撃で仕掛けるぞ」

シヨウ「よし、ここで決めるぞ！」

二機は接近して、ズワウスはオーラキャノンで牽制する。

バーン「我々のオーラ力、とくと味わつてもらおう！」

そして、二機はオーラソードで斬り裂いていく。

シヨウ「バーン、しくじるなよ！」

バーン「心配無用だ！」

最後に二機同時にオーラ斬りで斬り裂いた。

バーン「朽ちるがいい！」

シヨウ「落ちろおおおっ!!?」

ビビデ・ババ・デブー「う、嘘だろ!?!」

サーバインとズワウスの攻撃を受けて、ヘルライガーは大ダメージを負った。

ビビデ・ババ・デブー「ええい！寄る年波には勝てないって事かい！」

ヘルライガーは爆発した。

トッド「あばよ、ババア…。隠居して、息子達と暮らせよな…」

リチャード「勝負ありだな」

ホープス「…」

アマリ「どうしたの、ホープス？」

ホープス「ここからが本番のようです」

暗黒大將軍にアイアンカイザー……ケドラの大群か……！

鉄也「暗黒大將軍か！」

真上「キバもいるようだな」

ワタル「オババ様の言っていた巨大な力ってあいつ等の事だな！」

龍王丸「気をつけろ、ワタル！今日の暗黒大將軍達は、これまでとは違う！」

暗黒大將軍「流石は龍神の化身……。気がついたか」

甲児「どういう事だ、暗黒大將軍……？」

キバ「そうさ！この俺達こそが、てめえ等の待ち望んでいたものだ！」

暗黒大將軍「そして、同時にお前達を底知れぬ闇へと送り込む者だ！」

シバラク「何だと……？」

幻龍斎「言葉の意味はわからんが、確かにいつも以上の迫力ウラ！」

暗黒大將軍「その証を見せてやろう！」

この闇は……？

ワタル「何なの、これ……？」

龍王丸「気をつけろ！圧倒的な闇の力だ！」

サラマンディーネ「これは……！」

さやか「場所は確かにモンジャ村だけど……」

ボス「こ、これって……闇の帝王が出てきた時と同じだ！」

暗黒大將軍「お前達も理解しただろう。今の俺の力……圧倒的な闇を」

由木「どうやって、これだけの力を得たの……？」

暗黒大將軍「知りたいのなら、教えてやる」

剣を取り出した……!!??

海道「剣だと……？」

暗黒大將軍「この剣の名は……龍王の剣！」

ワタル「えええっ!!??」

零「龍王の剣……だと!!??」

優香「ドアクダーを倒すための力をどうして、あなたが持っているの……？」

暗黒大將軍「我が主である闇の帝王の盟友、ドアクダーは自らを倒す力を秘めた、龍王の剣に呪いをかけた。それによって、龍王の剣は強大な力そのままに闇の力を持つ魔剣として生まれ変わった！そしてその力は、最強の闇の戦士である、暗黒大將軍の剣に宿ったのだ！」

ワタル「そんな……」

龍王丸「しつかりしろ、ワタル！神部七龍神の力を秘めた龍王の剣を闇の者に使わせるわけにはいかない！」

ワタル「そ、そうだね、龍王丸！」

スカレット「暗黒大將軍！龍王の剣を返してもらおう！」

暗黒大將軍「出来るかな、お前達に！」

こ、今度は地震か…!!?

キバ「おーおー。やってくれるぜ！」

シバラク「な、何だ、天変地異か!!?」

クラマ「全ては暗黒大將軍を中心に起きてやがる！」

葵「あいつの持つてる龍王の剣の力って事!!?」

シーラ「そうです…。あれは今、邪龍の剣と呼ばれるべき存在となっています」

アイラ「恐ろしい力です…！」

暗黒大將軍「邪龍の剣か…。悪くない銘だ」

シヨウ「ただでさえ手強い暗黒大將軍がそんな力を手にしたら…！」

チャム「そんなのとどうやって戦うのよ！」

しんのすけ「怖がっている場合じゃないゾ！」

ワタル「しんちゃん言う通りだ！方法なんてわからなくても、やるしかない！」

サコミズ「そうだな。行くぞ、みんな！」

キバ「いいぜ、いいぜ！面白くなってきた！」

暗黒大將軍「そうだ！それでこそだ！お前達こそ、この俺が正面から戦うに値する戦士達だ！来るがいい、魔神達よ！この俺の全身全霊を以て、お前達の相手をする！嵐よ、吹け！大地よ、揺れろ！暗黒大將軍最大の戦いをお前達も祝福しろ！」

甲児「行くぜ、暗黒大將軍！キバ！」

海道「龍王だか、邪龍だろうが俺達を止められると思うな！」

真上「今日がお前達の命日となる……！」

ワタル「僕達は絶対に諦めるもんか！」

鉄也「お前達を倒し、その邪龍の剣を止めてみせるぞ！」

戦闘開始だ……！

〈戦闘会話 海道VSキバ〉

キバ「てめえ等とも長い付き合いになっちまったな、髑髏！」

海道「そうだな。なら、そろそろ白黒つけようじゃねえか！」

真上「どちらかが負け、どちらかが勝つ……それを今、証明する！」

キバ「ああ、そうだ！行くぜ、髑髏オオオツ!!？」

海道「来やがれ、キバアアアツ!!？」

〈戦闘会話 甲児VSキバ〉

キバ「カイザー！暗黒大將軍にはわりいが俺が引導を渡してやるよ！」

甲児「そう簡単に負けてたまるかよ！覚悟しやがれ、キバ！俺とマジンカイザーの力を！」

〈戦闘会話 鉄也VSキバ〉

キバ「今日こそは皇帝の座から引き摺り下ろしてやるぜ、エンペラー！」

鉄也「悪いが、皇帝の座から引き摺り下ろされるつもりはない！俺とエンペラーは前などには負けん！」

SKLはインフェルノブラスターでアイアンカイザーにダメージを与えた。

キバ「やるじゃねえか！だが、こんなもんで俺を倒せると思うなよ！」

海道「てめえかしぶといつてのは俺達が嫌ってほどわかってんだよ！」

真上「いつまでもダラダラと戦っているほど、暇ではない…。キバ、これでケリをつけるぞ！」

キバ「いいぜ！これで終わりだ！」

アイアンカイザーがSKLに攻撃を仕掛けた…。

キバ「髑髏オ…！引導を渡してやるぜ！串刺しにしてやる！」

アイアンカイザーは双頭の槍でSKLを串刺しにしようとしたが、SKLはそれを避けた。

真上「ぬるい攻撃だな」

海道「腕が鈍ったんじゃないか、キバの大将！」

今度はSKLが攻撃を仕掛けた。

海道「キバ！今度こそ終わらせてやるよ！真上、一気に決めるぜ！」

真上「奇遇だな。俺もそう思っていた！」

SKLは可変式バイク、SKL—RRに跨り、運転して、ブレストリガーを連射して当てた。

真上「こいつのスピードは一味違うぞ！」

突進したと同時にSKL—RRは骸骨馬の姿になる。

真上「無論、パワーもな！」

海道「さあ、こつからが本番だ！でりやあつ！」

SKLは槍を投げ、アイアンカイザーに突き刺し、牙斬刀で斬り、突き刺した槍を持ち、空高くへ吹き飛ばした。

真上「今だ、海道！」

海道「インフェルノギガブラスターアアアツ!!？」

インフェルノブラスターよりも強力な熱光線を出し、アイアンカイザーにぶつける。

真上「うおおおおおつ!!？」

キバ「ぐつ…ぬあああああつ!!？」

さらに威力を上げ、熱光線はアイアンカイザーを飲み込み、アイアンカイザーは大ダメージを受けた。

海道「神が恐れ、悪魔すら慄く…！」

海道& a m p ; 真上「俺達が地獄だ！」

インフェルノギガブラスターを受けたアイアンカイザーは大きく吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

キバ「へ…へへつ…。また、負けちまったか…」

真上「もう蘇ってくるな、面倒だからな」

キバ「つれねえな…。ちつとは、静かに休む、か…」

アイアンカイザーは爆発した…。

由木「キバ：最後まで戦いに吞まれた男でしたね…」

真上「それが奴の生き様でもあつたのだろうな。まあ、もうその様な事を考える必要はないがな」

海道「あばよ、キバの大将…」

暗黒大將軍「キバが敗れたか…。だが、私は簡単には倒されんぞ」

甲兎「やってみないとわからないだろう！行くぜ、暗黒大將軍！」

〈戦闘会話 海道VS暗黒大將軍〉

暗黒大將軍「髑髏の魔神よ。地獄を見せてやるぞ！」

真上「そうか。だが、それは不可能だ！俺達が地獄だからな」

海道「邪龍の剣だかなんだから知らねえが…俺の剣と勝負してみようぜ、暗黒大將軍
！」

三大魔神皇帝の攻撃に暗黒大將軍はダメージを負った。

暗黒大將軍「ぐうっ…！」

鉄也「俺達の勝ちだ、暗黒大將軍！」

暗黒大將軍「…その通りだ、劍 鉄也…。死力を尽くして戦った結果だ…。何の悔いもない…」

甲児「暗黒大將軍…」

海道「気に入らねえ奴だったが、お前は將軍の名に相応しい戦士だったぜ」

暗黒大將軍「お前達程の戦士にそう言われた事は、いい手向けになる…。さら…ば…」
今度は何だ…!!?

トオル「何が起きているの!!?」

カイザム「邪龍の剣に込められた闇の力が主である暗黒大將軍を失う事で暴走を始め
ているぞ！」

暗黒大將軍「ウオオオオオオツ!!?」

邪龍の剣の力が…!!

ガードダイバー「また天変地異が起きる！」

バトルボンバー「さっきのとは比べものにならないくらい、大きいぞ！」

暗黒大將軍「グアアアアアアツ!!?」

カノン「も、もうメチャクチャです！」

メル「暗黒大將軍を中心にマグマが噴出し、吹雪が吹き荒れています！」

ハーリー「ダメです！全ての計器類が正常に作動しません！」

マリア「理が崩壊を始めているのね……！」

アスナ「大気まで汚染されているわ！このままじゃモンジャ村は……！」

弘樹「どうするんだよ！ここにいれば、俺達も……！」

零「モンジャ村にはまだ多くの村人がいるんだぞ！」

ネモ船長「零の言う通りだ！我々の手で何とかする！」

エレクトラ「船長……」

ネモ船長「どんな手段を使っても、我々は目的を成し遂げなければならない……！だが、人の生命をその犠牲にするのは最後の最後の手段だ」

ネモ船長……

零「こうなったら……！」

ゼフィルスネクサスは暗黒大將軍の前まで移動した。

イオリ「何をするつもりだ、零……？」

零「俺の中に残されたレイヤの力を解放して……あの闇の力を抑え込む……！」

カレン「そんな事出来るの……？」

零「やってみなければわからねえ！ハアアアツ……！」

俺は力を込めた。

零「うおおおおおっ！！？」

そして、光の手を出し、暗黒大將軍を包んだが…。

暗黒大將軍「グオオオオツ!!？」

零「くっ…！な、なんて力だ…！抑え、込めない…！」

暗黒大將軍「グアアアアアアツ!!？」

闇の力が増幅し、光の手は破壊された。

零「うわあああつ!!？」

そして、その力に俺は押し負けてしまった。

ゼファイ「パパ！」

アマリ「零君、大丈夫!!？」

零「な、何とかな…！」

リユクス「零さんの力でも不可能だなんて…！」

ワタル「こんなの…どうすれば…！」

アマリ「諦めてはダメです、ワタル君！救世主のあなたなら、この状況をひっくり返

せるかも知れないんです！」

龍丸「ワタル！今こそ、秘宝の力を使う時だ！」

ワタル「創界山の秘宝…。そうか！やってみせる！」

千光の腕輪が光った…!!？」

ワタル「千光の腕輪が光ってる……！今、わかった！千光の腕輪は秘宝を集めて、その力を使えるんだ！」

龍王丸、マジンカイザー、マジンエンペラーG、SKLがゼフィルスネクススの隣に立った。

ワタル「お願い、神部の笛！地震を止めて！お願い、真実の鏡！本物の暗黒大將軍を教えて！お願い、灼熱の剣！吹雪を押し返して！お願い、極寒の剣！マグマを冷やして！お願い、ヨカッタネ！空気を綺麗にして！」

秘宝の力で天変地異が収まった……？

ヒミコ「やったのだ！モンジャ村が元通りになったのだ！」

ワタル「後は……！」

暗黒大將軍「グオオオオツ!!？」

暗黒大將軍が龍王丸に攻撃したが、攻撃を防いだ。

シバラク「邪龍の剣を防いだ！」

ワタル「千光の腕輪の真の力は、秘宝の力を使うだけじゃない……。その中に龍神の盾を宿していたんだ」

クラマ「どうして、その力は今まで出てこなかったんだ？」

幻龍斎「待っていたのだらう。ワタルが真の救世主と成長するのを」

ワタル「真の救世主……」

暗黒大將軍「どうやら、邪竜の剣も対となる盾の真の持ち主を見つけ、本来の姿へと戻るようだ……」

邪龍の剣が龍王の剣に戻り、龍王丸の元へ渡った。

ワタル「この光が……龍王の剣……」

龍王丸「そうだ。龍王の剣と龍神の盾は、千光の腕輪に納められ、必要な時に力を貸してくれるだろう」

暗黒大將軍「見事だ、救世主……。お前は……王者の資格を持つ……」

甲児「暗黒大將軍！」

鉄也「最後は俺達が相手になる！」

真上「見せてやるぞ、暗黒大將軍」

海道「魔神三皇帝の力をな！」

魔神三皇帝は暗黒大將軍に攻撃を仕掛けた……。

甲児「行くぞ、暗黒大將軍！これがマジンガーの力だ！」

鉄也「カイザー、エンペラー、SKL……。魔神三皇帝が揃えば、勝てない敵などいない！」

真上「ふっ、そう言う事だ」

海道「それなら、行くぜ！」

三大魔神皇帝は動き出した。

鉄也「それでも、喰らえ！サンダーボルトブレイカアツ!!?」

海道「もうぜ、剣！トールハンマーブレイカアツ!!?」

マジエンペラーがサンダーボルトブレイカーで攻撃し、その雷を牙斬刀の剣身で受

け止めたSKLが斬り裂いた。

甲児「俺も負けていられないな！光子カビイイイム!!?」

斬り裂かれた暗黒大將軍目掛けて、カイザーは光子カビームをぶつける。

真上「吹き飛ばせ！ルストストリーム！」

甲児「ルストトルネード！」

鉄也「ルストタイフーン！」

三つの突風が暗黒大將軍を襲う。

甲児「行くぜ、鉄也さん！ファイヤーブラスタアアアアツ!!?」

鉄也「任せろ！グレートブラスタアアアツ!!?」

カイザーはファイヤーブラスター、エンペラーはグレートブラスターを出す。

海道「やるじゃねえか、兜、剣！俺達も負けていられねえぞ、真上！」

真上「当然だ！インフェルノブラスタアアアツ!!?」

SKLもインフェルノプラスターを出した。

暗黒大將軍は魔神三皇帝の熱光線を受ける。

甲児「終わりだあああああつ!!？」

暗黒大將軍「ぐがああああああつ!!？」

三機はさらに熱光線の威力を上げ、それを受けた暗黒大將軍は大ダメージを受けた。

甲児& a m p ; 鉄也「俺達か……」

甲児& a m p ; 鉄也& a m p ; 海道& a m p ; 真上「「地獄だ!!？」」

魔神三皇帝の攻撃で暗黒大將軍は吹き飛ばされた。

暗黒大將軍「礼を言うぞ、劍 鉄也、兜 甲児、髑髏の魔神……。お前達にやられるの

なら、悔いはない……。さらばだ……。エクスクロス……。戦士として……。将として……。良い人生で

……。あつたぞ……」

暗黒大將軍は爆発した……。

鉄也「オリュンポスの将……。俺達は、お前の強さを忘れないだろう……」

シモン「龍王の劍と龍神の盾……」

舞人「それが揃った今……」

シヨウ「創界山への道が開かれるのか……」

零「どうだ、ワタル？」

ワタル「今からわかる…。龍王の剣と龍神の盾の力があれば、闇の結界を払う事が出来るよ」

エレクトラ「ネモ船長…。別働隊からこちらに合流するとの通信が入りました」

ネモ船長「では、このモンジャ村を合流地点として伝えてくれ」

ワタル「いよいよ決戦か…」

アマリ「(でも、このままでもいいんでしょうか…。このアル・ワースの真理を知ったエンブリヲとエグゼブは超常的な力を私達に見せつけました…。光と闇…その片側の頂点に立つドアクターと闇の帝王…。今の私達で勝てるのでしょうか…)」

…オニキスと…いや、ネメシスと手を組んでいたV・V・はエンブリヲ達と一緒にいた…。まさか、ネメシスはエンブリヲ達を取り込もうとしているのか…？

ーネモだ。

私達はNーノーチラス号の艦橋にいた。

エレクトラ「…別働隊からの報告を読み上げます」

ネモ船長「うむ…」

エレクトラ「別働隊はキャピタル・アーミィ、トワサンガ、ジット団それぞれの戦力の中核を撃破…。さらに最後に現れた鉄仮面なる者を討ち、レコンギスタ軍との戦いを

集結させたとの事です。それと、アクドズ・ギル率いるザンギヤツクを壊滅させ、ゾギリアがオニキスから提供されたバジユラ・クイーンの洗脳を解き、バジユラとの戦いも終結させたようです」

ネモ船長「ゾギリアとの戦いは？」

エレクトラ「我々の救出に現れた青葉君達はゾギリアの支配者であるエフゲニー・ケダールとの戦いの中…宇宙空間で巨大ネクター砲の破壊に成功し、そのエネルギーで真実のアルゼナルへ通じる特異点を開いたとの事です。なお、エフゲニー・ケダールもエンプリヲによって繰り返される運命に翻弄されていた者だったそうです」

ネモ船長「あの男の存在により、どれだけの世界や人が被害を受けたのだ…。」

エレクトラ「また別働隊は戦いの中でプルの妹であるプルツの救出に成功し…レコンギスタ軍の中からこちらに協力を申し出る者達を受け入れたとの事です」

ネモ船長「そちらは別働隊の判断に任せよう」

エレクトラ「現在、彼等はモンジャ村へと向かってきています」

ネモ船長「警戒を怠るな。ナディアとブルーウォーターを手に入れた今、ガーゴイルは必ずこちらに仕掛けてくる。そして、その時こそがネオ・アトランティスと我々の最後の戦いになる」

私達は奴を倒す…必ず…！

レコンギスタ軍ルート

第65話 それぞれの決着

「マスクだ。」

私達は今、レコンギスタ軍の野営地にいた。

マニイ「…マスク大尉…。私達…本当に元の世界に帰れるんでしょうか…」

マスク「魔従教団は、この戦いが終われば、異界の門を開くと約束してくれた」

バララ「大尉は、連中を信じられるのかい？」

マスク「信じる、信じないの問題ではない…。我々に選択枠は残されていない」

マニイ「大尉…」

マスク「そして、私はベルリと決着をつけねばならない…。奴はタワー運営長官のむすこであるだけでなく、トワサンガのレイハントン家の血を引く者だとクンパ大佐なら聞いた…」

バララ「レイハントンってトワサンガの王様だった家ね…」

マニイ「じゃあ、ベルリは王子だったって事…」

マスク「奴は権力者になる血筋だ…！クンタラなど虫けら以下に扱う奴になるんだ…」

！
」

マニイ「…」

そこへプルツーという少女が来た。

プルツー「…」

バララ「グレミー・トトのペットか…」

プルツー「私は戦士だ」

バララ「何の用だ？」

プルツー「…」

マニイ「こつちにおいでよ、プルツー。一緒に焚き火に当たろう」

プルツー「いい…。私は散歩に出ただけだ」

マニイ「遠慮しなくていいよ。今、ココアを入れるから」

プルツー「…」

マニイ「ココア、嫌い？」

プルツー「…嫌いではない」

バララ「面倒な子ね。来るなら、さっさと来なよ」

マニイ「バララ中尉…！お茶に誘うんなら、もっと優しい言い方で！はい…ココア、どうぞ」

プルツー「…お前達は何のために戦う？」

マニイ「え…」

プルツー「答えろ」

バララ「何のためって…」

マニイ「私は…マスク大尉のためにたたかいます」

マスク「マニイ…」

マニイ「元の世界に戻れなくてもいい…。大尉がいてくれるなら」

バララ「抜け駆けは許さないよ、マニイ。私だって、とつくにその覚悟は出来てるんだから」

マニイ「では、中尉…。一緒に頑張りましょう」

バララ「…了解だ。共に全力を尽くそう」

プルツー「そうか…」

マニイ「あなたはグレミーさんのために戦っているんじゃないの？」

プルツー「そのつもりだった…」

バララ「だった？」

プルツー「だけど、だんだんわからなくなつて…」

グレミー・トトが来たか…。

グレミー「何をしている、プルツー？」

プルツー「グレミー……」

グレミー「あの機体の整備にはお前とサイコミユの同調が不可欠だ。こんな所で油を売っている余裕はないぞ」

マスク「グレミー殿……。エクスクロスの動きは？」

グレミー「……マスク大尉。私にもネオ・ジオンを率いる立場というものがある。それなりの名前で呼んでもらおう」

マスク「……失礼しました、グレミー閣下……」

グレミー「貴官の問いに答えよう。エクスクロスは我々に呼応し、この地点へと向かってきている。おそらく、明後日には接触する事になるだろう」

マスク「ジツト団を後方に置き、我々で前線を構成する意図についてもお聞かせください」

グレミー「決まっている。エクスクロスを討つたという事実が欲しいからだ」

マスク「……」

グレミー「今後の事もある。私は功を挙げねばならぬのだ。エクスクロスとの決戦では貴官等には先鋒を任せる。後詰めの前に総戦力を消耗させろ」

マスク「……了解です」

グレミー「では、プルツー…。戻るぞ」

プルツー「はい…」

マニイ「待って、プルツー！」

プルツー「何だ？」

マニイ「自分の心に素直になつてね」

バララ「つまらない事に縛られた生き方なんでもつたいたいよ」

プルツー「…わかった。ココア、ありがとう」

グレミー「行くぞ、プルツー。ネオ・シオン最強のモビルスーツがお前を待っている」

グレミーとプルツーはこの場を去った…。

マニイ「…あのグレミーって人…宇宙世紀で偉い人だつて聞きましたけど…」

バララ「偉い人って言うよりもあれは偉そうな人だね」

マスク「…クク…フフフ…。ハハハハハ！」

バララ「マスク…!?」

マスク「グレミー・トト…。クンタラの俺とは生まれた時代も立場も違うのにやる事は同じとはな。クンタラのため…と大義名分を掲げる俺は馬鹿なのかも知れん…」

マニイ「大尉…」

マスク「自分の心に素直になる…。つまらない事に縛られるのは、もつたいたい…。」

お前の言葉、胸に響いた……。そして、何よりも俺のために戦うと言ってくれた言葉が……！

マニイ「それに嘘はないわ」

マスク「ならば、俺も胸の内を曝け出す……俺はベルリに勝ちたい……！クンタラもキャピタル・タワーも関係ない、この世界で俺の戦う意味は、ベルリ・ゼナムだ……！あいつを超えなければ、俺はこの先……前に進む事が出来ないのだ」

マニイ「やつと素直に言葉にしたね」

バララ「わかったよ、マスク。好きにやりなよ」

マスク「こんな俺を助けてくれるのか？」

バララ「私はマスク隊の副隊長だよ」

マニイ「私はあなたを支えると決めていた。学園の頃から、ずっと」

マスク「すまん、マニイ、バララ……。カバカーリーの調整も完了した今、俺はG―セルフに……ベルリに勝ってみせるぞ！」

第65話 それぞれの決着

我々はエクスクロス打倒のための部隊の配置を完了させた。

マスク「諸君……。もうすぐエクスクロスが、このエリアにやってくる……。薄々感づいている者もいると思うが、我々はグレミー・トトの部隊の弾除けにされた」

バララ「……」

マニイ「……」

マスク「だが、そんなものは知った事ではない。功を挙げたい者、元の世界に帰りた
い者……。皆それぞれだと思うが、勝利する事こそ全員共通の目的だ！やるぞ！誰のため
でもなく、自分のために勝利を掴め！」

バララ「全機、マスク大尉に続け！」

来い、ベルリ……。俺はお前を超えてみせる……！

マニイ「エクスクロス、来ます！」

来るか……！

エクスクロスの艦が来た。

―新垣 零だ。

敵部隊を確認し、俺達は出撃した。

ケルベス「先鋒はキャピタル・アーミイか！」

シヤア「レコンギスタ軍がどういった布陣か、わからないが、後詰めがいるのは確かだろう」

ネロ「要するに増援が来るという事か！」

ホセ「ならば、まず第一波を素早く撃退する」

マスク「来たな、エクスクロス！」

ベルリ「マスク大尉か……！」

マスク「ここで決着をつける……！過去に決別して、未来へと進むために！」

青葉「魔徒教団に踊らされているくせに言ってくれるぜ！」

アマリ「あの人達を放っておけば、アル・ワースに戦いが広がっていくだけです！ここで止めてみせます！」

アムロ「各機はマスクの乗る黒いモビルスーツに攻撃を集中させろ！」

バララ「そうはいかない！」

マニイ「マスクは私達を守る！」

ノレド「マニイ！まだ、そんな事を言つて！」

ベルリ「マスク大尉！そっちがその気なら、相手になります！その代わり、これが最

後ですからね！」

クンパ「始まったか……。この戦いの勝敗によつては、あなたに動いてもらう事になるでしょう」

? 「……」

戦闘開始だ！

Gーアルケインはユグドラシルにダメージを与えた。

バララ「ダメだ！これ以上は機体が保たない！」

マスク「もういい、バララ！お前は後退するんだ！」

バララ「すまない、マスク！後は任せる！」

ユグドラシルは撤退した……。

マスク「(これ以上、俺のワガママにバララを付き合わせていいのか……。ならば、この戦いでベルリを倒すしかない……!)」

Gールシファーはジーラツハにダメージを与えた。

マスク「マニイ！」

マニイ「ごめん！ここまでみたい！」

マスク「後退しろ、マニイ！お前を死なせるわけにはいかない！」

マニイ「わかった！マスクも死なないでね！」

ジューラツハは撤退した…。

ノレド「大丈夫かな、マニイ…」

ラライヤ「爆発する程のダメージは受けていません。きつとお友達は無事ですよ」

マスク「すまん、マニイ…。俺のために無理をさせて…。これ以上、俺のワガママにお前を付き合わせるわけにはいかない…」

G―セルフはカバカーリーにダメージを与えた。

マスク「しまった…！こんな所で…！」

ベルリ「終わりですよ、マスク大尉！」

マスク「まだだ！まだ私の心は折れてはいない！」

まだやるってのかよ…！

ノレド「往生際が悪い！」

アイーダ「各機はマスクに攻撃を！」

俺達は射撃でカバカーリーを攻撃したが、突然現れたジーラツハとユグドラシルがそれを防いだ。

マスク「マニイ、バララ！」

バララ「行きな、マスク！」

マニイ「納得してないんなら、とことんまでやりなよ！」

マスク「…すまん。だが、ここからは俺一人で戦う」

マニイ「え…」

マスク「それが俺のプライドだ。今までの事を感謝する、マニイ、バララ」

カバカーリーは撤退した…。

クンパ「マスク大尉は、まだ闘志を失っていないか…。流石だな」

マニイ「(ルイン)…。男を見せてね…)」

レイ「逃したか…！」

プリシラ「あの二人…マスク大尉って人を逃がそうとして…」

ウー「マスクというのは、余程いい男の様だな…」

ヴァン「気を抜くんじゃねえ。次が来たぞ！」

…ある一箇所が爆発した…？

クンパ「な、何iiiiiiiiっ!?？」

ルー「あれは……！」

増援が来たか……！」

ジュード「あの巨大モビルスーツ……！アクシズで戦ったやつか！」

グレミー「その通りだ、ジュード・アーシタ。今度は、あの時のようにいくと思うなよ」

ルー「グレミー！」

プル「プルツー！あなたも、そこに乗っているの……？」

プルツー「それが私の務めだ」

マリーダ「まだわからないのか、プルツー！グレミー・トトはお前を戦いの道具にしているんだぞ！」

プルツー「それは……」

グレミー「騙されるな、プルツー！奴等は我々の敵だ！」

プルツー「わかっている……！」

グレミー「マスク部隊の生き残りはこちらに合流しろ！以降は私の指揮下に入ってもらう！」

バララ「マニイ……！」

マニイ「うん……！」

グレミー「何をしている!?? 私の指示に従え!」

バララ「やなこった!」

マニイ「マスクは自分のために戦いました!だから、私達も自分のために戦います!」
グレミー「それが私に刃向かう事か!」

マニイ「プルツを縛るあなたや魔徒教団はクンタラを差別する人達と同じです!」

バララ「そういう人間に大きな顔をされるのは好きじゃないのさ!」

ノレド「マニイ!」

ケルベス「いいぞ!だったら、エクスクロスに来い!」

アイーダ「あなた達がレコンギスタ軍から離反するのならこちらには受け入れる用意があります」

バララ「じゃあ、そうさせてもらうよ」

マニイ「今まで敵対してきた身ですが…」

ベルリ「そういうのは無し!過ぎた事より、これからだから!」

マニイ「ごめん、ノレド…。私…」

ノレド「いいよ、マニイ!何よりマニイと戦わなくて済む事が嬉しいから!」

マニイ「ありがとう、ノレド!」

バララ「そういう事だよ、グレミー・トト!あんたみたいなたまらない男の言いなり

なんかになるつもりはないから！」

グレミー「いいだろう…！私に刃向かう者はまとめて始末してやる！」

リング「ロックパイ・ゲティ！あんたはどうする気なんだよ！！？」

ロックパイ「自分は最後までトワサンガとマツシユナー中佐のために戦うだけだ！」

シャア「(グレミーと一緒にいるのはトワサンガの部隊…。グレミーめ…。己の立場を固まるためにジツト団を出し抜く気か…)」

グレミー「各機、攻撃開始！ここでエクスクロスを叩くぞ！」

ジユドー「グレミー・トト！戦いを望むあんたはここで止める！そして、返してもらうぞ！プルツの心を！」

戦闘再開だ！

Gールシファアはガイトラッシュにダメージを与えた。

ロックパイ「くそつ！ここで自分が負けたら、トワサンガは…マツシユナー中佐は！」

ラライヤ「いい加減にしてください！守りたい方がいるなら、何故このような無意味な戦いに参加するのです！」

ロックパイ「無意味な戦いだと…！！？」

リング「ミスルギや魔徒教団なんて連中を信用するのが、おかしいって言ってるんだ

！

ロツクパイ「ならば、お前達は信用できると言うのか！」

ラライヤ「私の誇りに懸けて、誓います」

ロツクパイ「……！」

ラライヤ「私はトワサンガの人間として、トワサンガを元の世界に帰すためにエクスクロスとして戦っています！あなたも、その気があるのなら部隊の皆さんと共に投降してください」

ロツクパイ「お、俺は……」

ガイトラツシユは撤退した……。

ノレド「最後の方……少し心が揺らいでたみたいだね」

ケルベス「あいつもラライヤさんの言葉にぐらつと来たのかもな」

リンゴ「あいつ……！マツシユナー中佐の飼犬のくせに！」

ラライヤ「（ロツクパイさん……。あなたやトワサンガの人達が正しい判断をしてくれる事を願います……）」

H i—ッガンダムがある場所へ行くと……。

アムロ「こんな所で何をしているんです!?？」

老人「戦いを見ている…。ずっと長い間…」

アムロ「ここは戦場になる！早く避難を！」

老人「そうだね…。では、出会った記念に君にはこれをあげよう」

アムロ「（この感じ…。まるで父さんみたいだ…）」

アムロさんが何かを老人からもらった…？

老人「頑張るのだから、若者」

アムロ「ありがとうございます。あなたもお気をつけて」

何だったんだ、あの人…？

〈戦闘会話　ハマーンVSプルツ〉

プルツ「ハマーン・カーンか…！」

ハマーン「プルツ、ジュドールの言葉に耳を傾けろ」

プルツ「煩い！お前の言葉もジュドールの言葉も聞く気は無い！」

ハマーン「だったら、その機体を止める…。お前を助け出すためにもな…！」

〈戦闘会話　バナージVSプルツ〉

バナージ「こんな事はやめて、投降してくれ！俺は君とは戦いたくないんだ！」

プルツ「ならば、消えろ！私は退く気はない！」

バナージ「それでも、何もしないわけにはいかないんだ！プルやマリィダさん…そして、ジュードのために君を止める！」

〈戦闘会話　マリィダVSプルツ〉

プルツ「何故、私の邪魔をするんだ、プルトゥエルブ！」

マリィダ「私が…そして、プルがこのような事を望んでいないからだ！」

プルツ「妹の分際で姉に逆らう気か!?!」

マリィダ「妹だからこそ、苦しんでいる姉を見てはいられないんだ！お前を縛るその機体を破壊する…！」

プルのキュベレイの攻撃でクイン・マンサにダメージを与えた。

プルツ「…」

グレミー「何をしている、プルツ！クイン・マンサの性能を引き出せていないぞ！」

プルツ「グレミー…。この戦いに意味はあるのか…？」

グレミー「何を言っている!?!」

プルツー「この世界でジユドー達を倒せば、グレミーは本当に満足なのか？そんな事をしても…何も変わらないように私には思える…」

ジユドー「そうだ、プルツー！アル・ワースに戦いを広げる事に何の意味もない！そうする事で喜ぶ奴等のために戦うなんておかしいんだよ！」

グレミー「黙れ、ジユドー・アーシタ！私のやろうとしている事に口を出すな！」

ジユドー「あんた、まだわからないのかよ！所詮、あんたのやろうとしている事は血に縛られた自己満足なんだよ！あんたみたいな人間がいるから、リギルド・センチュリーの時代になつてもつまらない意地の張り合いの戦争が起きるんだ！」

グレミー「私が人類を滅ぼした元凶だとしても言いたいのか！」

ジユドー「あんた一人じゃない！エゴで戦争を起こそうとする人間全てが元凶なんだよ！その自分勝手な戦争に戦いたくない人間を…プルツーを巻き込むな！」

プル「そうだよ、グレミー！プルツーの心を縛るのは、もうやめて！」

マリィダ「彼女はもう充分苦しんでいる！もうそんな姿を見たくない！」

プルツー「プル…！プルトウエルブ…！」

マリィダ「プルツー！嫌な事は嫌と言っていいんだ！」

プル「あたしとマリィダの事が嫌なら、いくらでも喧嘩してあげる！でも、あたし達は殺し合いなんてしたくない！だって、プルツーはもう一人のあたしでマリィダのお姉

さんなんだから！」

プルツー「だけど、あの時、お前は私を殺そうとした！」

プル「あの時のあたしは自分が嫌いだった！だから、あたしもあなたも消えてしまつていいと思つた！でも、今は違う！ジユドーはあたしを許してくれた！あたしは生きて良かったんだ！」

マリーダ「お前も同じだ、プルツー！戦わなくてもいい！プルツーは生きていいんだよ！」

プルツー「わ、私は……」

グレミー「敵の言葉に惑わされるな、プルツー！お前は戦士だ！」

アンジェロ「いつまでもつまらない物に縛られるのだな、お前は！」

グレミー「何だと……!? お前に何がわかる！」

アンジェロ「私もかつてある事で精神が崩壊し、エゴに……忠誠心に囚われてしまった」
フロンタル「……」

アンジェロ「だが、バナージ・リンクスを通して、知つた！人は戦士などではない！

一人の人間だ！」

グレミー「戦士ではない、だと……!?」

フロンタル「我々の為すべき事は戦士をつくる事ではなく、優しき世界と人を作つて

いく事だと思うがな」

グレミー「黙れ、赤い彗星擬きが！」

フロントル「私は擬でもないよ。私は私だ……」

ジユドー「そうだ！そして、プルツーはプルツーだ！」

プル「プルツー！プルツーが生きたいように生きればいいんだよ！」

マリーダ「お前は縛られなくてもいいんだよ！」

マニイ「素直になって、プルツー！」

バララ「誰かに縛られて生きるなんてつまらないんだよ！」

ハマーン「自分の心のままに生きていいんだよ！」

ジユドー「プルツー！」

プルツー「私は……」

グレミー「プルツー！」

プルツー「私は……プルやプルトウエルブやジユドーと戦いたくない！」

プルツーが降りた……！

ジユドー「今行くぞ、プルツー!!？」

ダブルゼータがプルツーを乗せた。

プルツー「ジユドー！」

ジュード「迎えに来たぞ、プルツ」

プルツ「私は……」

ジュード「何も心配いらぬ。俺達がプルツを守る」

プルツ「うん……」

ジュード「行くぞ！プルも待っている！」

ダブルゼータはプルツをメガファウナに運んだ。

プル「ジュード！」

ジュード「プルツはメガファウナに届けた！もう大丈夫だ！」

グレミー「ジュード・アーシタ！」

クイン・マンサが動いた……!!?

グレミー「私一人でもクイン・マンサは扱える！」

マシユマー「グレミー！まだ戦う気か！」

シヤア「グレミー・トト……。血に縛られた哀れな男……」

リデイ「悲しいよな……。血に縛られるのは……」

バナージ「リデイさん……」

リデイ「バナージ……手を貸してくれ！二人の連携であいつを血から解放する！」

バナージ「はい！わかりました！」

ジュード「あんたが、その気なら相手になってやるよ！そして、全て吐き出してもらう！あんたのちっぽけな自己満足を！」

戦闘再開と行くぜ……！

〈戦闘会話　ハマーンVSグレミー〉

ハマーン「グレミー・トト……お前を解放する」

グレミー「私の中に入ってくるな、ハマーン・カーン！」

ハマーン「いいや、私はお前を包み込もうとしている」

グレミー「！」

ハマーン「お前がネオ・ジオンを二つに割った原因はわたしにもあるのだからな！その責任を取る！」

〈戦闘会話　バナージorリディVSグレミー〉

バナージ「グレミーさん……！」

グレミー「邪魔をするな、ガンダム！」

リデイ「そうはいかない……！俺達は決めたんだ！血に縛られたお前を助け出すと」
バナージ「覚悟してください！俺達の全力であなたを止めます！」

〈戦闘会話　アンジエロVSグレミー〉

アンジエロ「もうそれ以上、血に縛られ、エゴを振りかざすとはやめろ！」

グレミー「黙れ！私の邪魔をするな！」

アンジエロ「止めてやる……！元ネオ・ジオンの私が……！」

〈戦闘会話　フロンタルVSグレミー〉

フロンタル「エゴを振りかざした所で世界は変わらない。それを教えてやろう」

グレミー「知ったような口を……！お前に言われる筋合いはない！」

フロンタル「だからこそ、私はお前の前に立ち塞がるのだ！」

〈戦闘会話　マリーダVSグレミー〉

マリーダ「お前も苦しめられているのだな……」

グレミー「プルトゥエルブ……よくも！」

マリーダ「今の私はマリーダ・クルスだ！それを忘れるな！」

ルーの乗るリ・ガズイがクイン・マンサにダメージを与えた。

グレミー「ここまでか……！フ……所詮は、その程度の器の男だったという事か……」

ジユドー「グレミー！」

グレミー「ジユドー・アーシタ……。プルとプルツの事を頼むぞ……」

シヤア「とどめだ、グレミー・トト！」

プル「待って、シヤア大佐！」

マリーダ「グレミーを攻撃しないでください！」

カミーユ「プル……！」

アル「マリーダまで……！」

シヤア「君達は、あの男を許すのか？」

マリーダ「本当ならば、許せない……だが……」

プル「グレミーは……私に優しくしてくれた時もあるから……」

シヤア「君を利用するためだったとしてもか？」

プル「それでも……楽しかった時の記憶は嘘じゃないから……」

プルツ「私も……プルと同じ気持ちだ」

グレミー「プル……プルツ……」

マシユマー「シヤア大佐……。グレミー・トトという男は本来は素直で純粋な人間だった。彼も戦争によって己の生き方を歪められた人間なのだ……。私も彼の新たな生き方に期待したい」

グレミー「マシユマー様……」

ジユドー「あんたが根つからの悪い人じゃないのは知ってるよ。リイナも、そう言っていた。あんただって、こんな所で終わる気はないんだろ？ だったら降参して、俺達と来いよ」

グレミー「私の……。完敗だ……。プルツーに去られ、戦いにも負けた男に世界を統べる資格などないの进行い知らされた……。ならば、一人の人間としてみつともなくも、この生命に執着する……」

ジユドー「それでいいんだよ。生きている人間なんだから」

終わったか……。

ギゼラ「艦長……。後退した敵部隊の何名かから、こちらに投降したいとの通信が入っています」

ドニエル「受け入れると伝える。連中が戦いの無意味さをわかつたのなら、それでいい」

アレルヤ「今日の戦いで、レコンギスタ軍の戦力は大きく削られたね」

テイエリア「次の戦いはおそらく、彼等との決戦になるだろう」

ロックオン「まだジット団の戦力も残っているし、油断はならないだろうな」

ニール「それにリボンズやサーシエス、ゾギリアにザンギャックの奴らもいるからな
刹那「だが、終わりに向けて進んでいる…。それでよしとしよう」

ベルリ「(だけど、マスクは、まだ諦めていない…。またあいつと戦うことになるのか
…)」

ーアマリ・アクアマリンです。

私達はそれぞれの艦へ戻り、メガファウナの格納庫に集まりました。

プルツー「…ごめんね、プル…」

プル「いいんだよ、プルツー。それに謝らなきゃならないのはあたしの方だよ」

プルツー「え…」

プル「初めて会った時、あたしがプルツーの事を否定したから、戦いになった…。あたしの方がお姉さんなんだから、ちゃんとプルツーに優しくしなきゃいけなかったの
に」

ジユドー「それを言うなら、そうやってプルを追い込んだ俺にも責任がある」

プルツー「でも、プルもジユドーも私を助けてくれた…」

カミーユ「じゃあ、全て丸く収まったって事でいいんじゃないか？」

ジユドー「そうだな。過ぎた事を考えるよりもこれからの事が大事だ」

エル「敵部隊のキャンプ跡からプルツー用のキュベレイも見つかったよ」

プルツー「それがあれば、私もプルやプルトウエルブ、ジユドーと一緒に戦える」

プル「プルツー！これからは、ずっと一緒だよ！」

プルツー「うん！」

マリーダ「良かったな、プルツー」

プルツー「お前にも感謝している、プルトウエルブ…いや、マリーダ」

マリーダ「当然だよ、お姉さんのためなんだから…」

ホープス「では、皆さん…。仲直りの印にアイスクリームをどうぞ」

アマリ「私…氷雪系のドグマを特訓しましたから、材料さえあれば、どんどん作れますよ」

弘樹「そりや凄え！これでカキ氷が食い放題だな！」

カノン「食べ過ぎはダメですよ、弘樹さん！お腹を壊してしまいます」

プル「すごいよ、アマリ！ほら…食べよう、プルツー、マリーダ！」

プルツー「うん！ありがとう、術士さん！」

マリーダ「ありがとう」

私のドグマで誰かが笑顔になる…。いいものですね…。

優香「そう言えば、零とゼフィちゃんは？」

アスナ「あの二人なら、ゼフィルスネクサスの調整をしているわ」

メル「どうして、アスナさんはここにいるんですか？」

アスナ「ア、アイスを食べたら手伝いに行くわよ…！」

アマリ「では、その時に零君とゼフィちゃんにも差し入れを持っていきましよう」

マリア「そうね。アマリが作ったって知ると二人は喜んで食べるでしょうね」

グレミー「…」

シャア「どうした、グレミー？」

グレミー「プルとプルツの心からの笑顔を見て、自分がやった事の愚かさを思い知りました。彼女達を利用した事だけでなく、分不相応な野望で戦争を広げた事も今は後悔しています」

ルー「そういう生真面目さもあなたのいいところよね」

グレミー「ルー・ルカ…」

ルー「言っておくけど、あなたを許す、許さないは保留にさせてもらうわね」

グレミー「了解した。少なくとも君に恥じない生き方をしてみせるつもりだ」

マシユマー「いい心がけだ。昔のお前が戻ってきたようだ」

グレミー「マシユマー様に負けてはいただけませんからね」

アンジェロ「これからもよろしく頼むぞ、グレミー」

グレミー「ああ！（死んだと思った私が、こうやって生きている…。それに意味があるのだとしたら、ザビ家の血に縛られるより、私は私らしく生きてみよう…）」

ロツクパイ「…随分と自由なのだな、ここは…」

ラライヤ「ロツクパイさん…。あなたがエクスクロスに参加してくれて嬉しく思います」

ロツクパイ「自分は部隊を預かる身として最善の選択をしたまでだ。このまま魔徒教団の命で動くのはトワサンガのためにならないと考えている」

リンゴ「どうせトワサンガのためと言いながら、マツシュナー中佐のためだろ？」

ロツクパイ「そ、そんな事は…」

リンゴ「でも、大げさな大義名分を掲げるよりもそういう人間の方が信用できる」

ケルベス「さすがはラライヤさん目当てでエクスクロスに参加したリンゴ少尉殿下だ！」

リンゴ「そ、そんな事は…」

ラライヤ「でも、私はリンゴ少尉の事を信用しています」

リンゴ「ラライヤさん……」

ケルベス「まあ、そういう事だ。取り敢えず、歓迎するぞトワサンガのエース殿」

クリム「もつとも、この私がいる以上、エクスクロスのエースを名乗るのは不可能だ
がな」

九郎「他にもエースを名乗っている奴はいるけどな」

ユイ「ま、まあいいじゃないですか」

ロックパイ「キャピタルとアメリカとトワサンガが一つの目的のために力を合わせる
……。悪くないな」

ミック「それだけじゃないよ。エクスクロスは色んな世界から集まった色んな人がい
るから」

ロックパイ「そうだな。これからは俺もよろしく頼む」

マニィ「よかったね、プルツ……」

バララ「しかし、戦っていた時から思ってたけど、本当に寄せ集め部隊なんだね、こ
こつて……」

アイーダ「そういうわけですから、あなた達も変な遠慮はいりません」

ノレド「みんな、生きるために一生懸命だったんだものね。昨日の敵は今日の友でい
いから」

マニイ「でも…」

ベルリ「マスクの事だね」

バララ「あんたがベルリ・ゼナムか…」

ベルリ「な、何…?」

バララ「マスクが言うように支配者や独裁者になるようには見えないけどね…」

ベルリ「あの人…そんな事を言ってるんですか!?!?」

アイーダ「ベルが独裁者…」

ノレド「全然、ピンと来ないなあ…」

マニイ「マスクは…あの人は自分の中のプライドのためにベルリと戦っているの…」

バララ「そして、目指すはサクセス…ってわけ」

ベルリ「よくわからないけど、あの人…また来るのかな…」

マニイ「多分…」

ベルリ「いいさ」

マニイ「え…」

ベルリ「だったら、あの人の気が済むまで相手をするよ。こつちも死にたくないから全力で」

バララ「何か凄いな、あんた…。あつさりしてるってどうか…切り替えが早いってい

うか…」

マニイ「変わってないんだね、ベルリは…。(でも、きつと…そういう所がルインは許せないんだと思う…)」

アムロ「各員、第三戦闘配置につけ。場合によっては、すぐに宇宙に上がるぞ」

青葉「何があつたんですか、アムロさん?!?」

アムロ「トワサンガのレイハントン派から連絡が入った。ゾギリアの超長距離ネクター砲が宇宙空間に建造されている事が判明した」

ディオ「何つ?!?」

リー「それも前にぶつ壊したやつ4〜5倍の大きさはあるらしい」

ヒナ「そんなものが用意されていたなんて…」

マーベラス「いつもの事ながら、ゾギリアは手回しが良すぎるぜ!」

ヒイロ「ゾギリアは地上のゴーゴンが破壊させるのを予測していたとしか、思えない…。未来予測…。その鍵を握るのは…」

アムロ「なお、もう一つ悪い知らせがある…。創界山に向かっていた別働隊が消息を絶つたようだ」

イングリッド「彼等に一体何が…?!?」

アムロ「直前の状況では彼等はエンブリヲと接触していたようだ」

アルト「エンブリヲだと…!?？」

リオン「ミスルギでの戦いで倒したと思っていたけど、生きていたのかよ…！」

アイシャ「あいつは真正正銘の不死身なの…！」

リー「とにかく今は宇宙のゴーゴンへの対処が先だ。あんなもので地上を攻撃されるわけにはいかない」

アムロ「各員は、すぐに配置につけ」

ヒナ「…」

青葉「ヒナ…」

ヒナ「そんなものでアル・ワースを攻撃しようとするなんて、ゾギリアはどこに行くとして…」

ヒイロ「ヒナ・リヤザン…」

ヒナ「ヒイロ…」

ヒイロ「全ての鍵を握るのは、お前と青葉だ」

青葉「俺とヒナが…」

アムロ「アマリ、零とゼファイにも伝えてもらえないか？」

アマリ「わかりました！」

アスナ「二人なら、シグナスの格納庫にいるわ！」

私とアスナさんは零君にこの事を伝える為にシグナスの格納庫へ向かいました…。

―新垣 零だ。

俺とゼフィはゼフィルスネクサスの調整をしていた。

ゼフィ「パパ、こちらは終わりました」

零「ありがとうな、ゼフィ！こつちも完了だ」

ゼフィ「アスナお姉ちゃん…来ませんでしたね」

零「あの野郎…今度、全部やらせてやる。…よし、俺達もメガファウナの格納庫にい

くか！」

ゼフィ「はい！」

すると、拍手が聞こえ、そこに視線を向けると…。

ファサリナ「ふふ…お久しぶりですね」

ミハエル「久しぶりだな、新垣 零」

ファサリナ…ミハエル…!!?それに…。

カギ爪の男「素晴らしい親娘愛ですね、感激します」

零「カギ爪の男…！」

ミハエル「今日はお前達をスカウトに来た」

ゼファイ「ど、どうやって…侵入者の警報も鳴りませんでしたし…」

フアサリナ「私達にとってはこの様なセキュリティを破るのには動作もありません」

零「スカウトの件は前に断わった筈だぞ…！それよりもカギ爪、こんなところでモタモタしているとヴァンさんかレイさん…ウーさんに殺されるぞ…！」

カギ爪の男「それは嫌ですね…。零君、まずは握手をしましょう」

カギ爪の男は俺に近づき…カギ爪で俺を切り裂いた。

零「ガツ…!!?アアツ…！」

俺の身体から大量の血が噴き出し、俺は倒れ、意識を失ってしまふ。

―新垣 ゼファイです。

倒れたパパを見て、私はパパの元へ駆け寄りました。

ゼファイ「パパ…?パパ…！」

パパを呼びましたが、意識を失っているのか、パパは答えません…！

そ、それよりも血が…！

カギ爪の男「ああ…またやっちゃいました…！」

「ファサリナ「大丈夫です、同志。彼は強い人ですから」

カギ爪の男「まあ、そうでしょうね」

すると、足音が聞こえてきました…。

ミハエル「同志、誰かが来ます…！」

カギ爪の男「見つかると厄介ですね…。ゼファイ君を連れて行きましょうか」

ゼファイ「パ、パパ…！」

ファサリナ「さあ、行きましょう、ゼファイちゃん…」

パパの今の姿を見て、私は絶望し、抵抗もできずにファサリナさんに連れ去られてし

まいました…。

そして、カギ爪の人と一緒にこの場を去る事になってしまいました…。

零「ゼ…ファイ…！」

微かに呟いた。パパの言葉も聞こえずに…。

第66話

対話と復讐の螺旋

ーリボンズ・アルマークだよ。

僕とサーシエスは今、カギ爪の人達といた。

ミハエル「まもなく、エクスクロスがここに来る」

サーシエス「へへっ！腕がなるぜ！」

ファサリナ「それに伴い、リボンズさんには前線をお任せしたいのです」

リボンズ「アリー・アル・サーシエスは？」

カギ爪の男「彼には後衛をお任せします。良いですか？」

サーシエス「構わねえぜ！」

ミハエル「今、我々には操っているバジユラとザンギャックのズゴーミン、ゴーミン部隊がいる…。リボンズ、君はうまくそれを使ってくれ」

リボンズ「…いいだろう。それよりも捕らえている新垣 ゼフィに昼食は持っていないのかな？」

カギ爪の男「そういえば、まだでしたね…。リボンズ君、お願いできますか？」

リボンズ「構わないさ、では…行ってくる」

僕は昼食を持って、新垣 ゼファイが囚われている部屋に入ると椅子に拘束されていた新垣 ゼファイの姿があった。

ゼファイ「リボンズ・アルマークさん…！」

リボンズ「気分はどうだい？」

ゼファイ「いいわけありません…」

リボンズ「昼食を持ってきたよ」

ゼファイ「いりません。食べたく…ありません…」

リボンズ「沢山、食べないと大きくなれないよ？」

ゼファイ「…」

リボンズ「…君は強い」

ゼファイ「え…」

リボンズ「君には素晴らしい仲間や家族がいる。それを忘れるな。昼食、渡しておくね」

そう言い、僕は彼女に昼食が乗っているトレイを渡し、部屋を出た。

ゼファイ「これは…！」

頭のいい彼女なら、気がつくだろう…スープの中に拘束を解く鍵と部屋の鍵を入れて

いる事に…。

「アニエス・ベルジユだよ。

僕達は今、シグナスの格納庫にいて話し合いをしていた。

話の内容は、今、マクロス・クォーターで治療を受けている零君の事だ。

僕達、エクスクロスは超長距離ネクター砲を破壊する為に宇宙へ上がる事を決めていた。

その事をアマリさんとアスナさんが零君に伝えに行こうと向かったその先にはゼフィちゃんの姿はなく、代わりに血だけで倒れている零君の姿があったらしい。

アマリさん達からの連絡を受けて、僕達も零君を運んだ。

一夏「零の容体は…？」

カナリア「何とか一命をとりとめた」

楯無「良かった…」

千冬「だが、血が流れ過ぎた為か、しばらくは目を覚まさないらしい」

シャルロット「アマリさんとアスナさんは？」

東「今、レー君の看病をしているよ」

箒「だが、いったい零さんに何があつたんだ？」

鈴「ゼフィも姿もなかつたわよね」

簪「連れ去られたんじゃない？」

倉光「簪ちゃんのビンゴだ。ゼフィちゃんは連れ去られてしまったんだ」

ラウラ「いったい誰に？」

ドニエル「…ミハエルという男とファサリナという女性…それから右手がカギ爪の男だ」

ヴァン「！」

レイ「カギ爪だと…?!？」

ウエンデイ「兄さんがどうして…?!？」

ジョシユア「でも、どうして彼等は皆さんに気づかれずに入つたのでしょうか…？」

カルメン99「あいつ等ならそのぐらい容易いんでしようね」

ユキコ「じゃあ、どうしてカギ爪の人はゼフィちゃんを？」

ヴァン「あの野郎は…前に零を仲間に引き込もうとしていた」

ユイ「それでゼファイちゃんを……！」

ディオ「ゼファイはゼファイルスネクサスそのものだからな……」

ヒナ「目の前で零さんを斬り裂かれて……ゼファイちゃんは怖くなっただけでしょうか……」

刹那「これから俺達はどうする？超長距離ネクター砲に向かうのか？」

ジェフリー「その事だが……」

スメラギ「実は零の服のポケットからあるメモが見つかったの」

ケイ「メモ……？」

ブレラ「そのメモにはなんと書かれているんだ？」

倉光「……新垣　ゼファイを連れ戻したいのなら、指定した場所へ来い……。これだけだね」

ウエンディ「これは……ミハエル兄さんの字です！」

ウー「ゼファイは人質という事か……」

カロツサ「ということは狙いは零……！」

メリツサ「零だけじゃないよ、カロツサ」

ガドヴェド「あくまでゼファイは零を釣る餌……。カギ爪の狙いは零とゼファイ……そして、

ゼファイルスネクサスだろう」

ジョシユア「でも、どうしてゼファイルスネクサスを？」

マリア「ゼファイルスネクサスがネメシスを倒す鍵だからでしょうね」

ネロ「だが、奴等は協力関係ではないか？」

プリシラ「もしかして、零達を仲間に引き込んだら、裏切る気なのかな？」

ホセ「ありえるな……」

バリヨ「姑息な手を考える男だな……」

カルメン99「確かに、奴等の計画にネメシスの存在は不要だからね」

刹那「彼等は前回の戦闘でE L Sやバジユラを率いていた」

アンドレイ「ネメシスと協力関係にあるのだとしたら、また引き連れてくるな」

パトリック「けどよ！ E L Sは刹那のお陰で何とかなっただろ」

セルゲイ「残るはバジユラか……」

アルト「……」

ランカ「アルト君……」

ヴァン「カギ爪の野郎がそこにいるなら、バジユラだろうが何だろうがぶった斬るだけだ！」

アルト「待てよ！バジユラを攻撃するのはやめてくれ！」

ヴァン「知るか、そんな事。カギ爪の野郎を殺す邪魔をするなら、誰だって斬り捨てる」

アルト「バジユラはあいつ等に操られているだけなんだぞ！」

ヴァン「操られる方にも問題があると思うがな」

アルト「何だと……!?？」

ヴァン「つまらねえ事で悩んで死ぬ気か、お前？」

アルト「あんたの個人的な復讐に他の奴らを巻き込んでんじやねえよ！」

ヴァン「お前に俺の何がわかる！」

アルト「同じ事を言つてやる！あんたに何がわかるんだよ！」

ミシエル「おいおい、落ち着け、アルト！」

カルメン99「ヴァンも何熱くなつてるのよ！」

ヴァン「対話なんてあまい事を考えるぐらいなら、どうするかを考えやがれ！」

アルト「何でもかんでも斬ればいってわけじゃねえんだよ！」

刹那「……」

シエリル「ちよつと、二人共、落ち着きなさいよ！」

アルト「シエリル……こいつは……！」

ヴァン「けっ……！」

ヴァンさんは舌打ちをして、歩き出した。

アルト「おい、ヴァン！」

アルト君がそれを追いかけてしようとしたその時だった。

シエリル「うっ…!!?」

シエリルさんが倒れた…!!?

ランカ「シエリルさん!!?」

アルト「どうした、シエリル!!?」

シエリル「…」

オズマ「アルト!すぐにシエリルを運ぶぞ!」

アルト「ああ!シエリル、しっかりしろ!」

僕達はシエリルさんを担架に乗せて、運んだ…。

刹那「…」

刹那君がヴァンさんの歩いてきた方向へ歩いてきた事も知らずに…。

「ただのヴァンだ。」

俺はアルトとの言い合いの後、一人、食堂へ来た。

ヴァン「…言いすぎちまったか…?」

刹那「…そう思うのなら、アルトに言ったらどうだ?」

ヴァン「お前は…ガンダムマイスターさんじゃねえか」

刹那「刹那・F・セイエイだ」

ヴァン「俺に何か用か？」

刹那「シエリルが倒れた」

ヴァン「シエリル……？ああ……えーっと……歌を歌う……デカイ方のアルトの女か。確か、病気だったな。それを何故俺に言う？」

刹那「ヴァン……お前は、対話が甘い事だと……つまらない事だと言ったな？」

ヴァン「……」

刹那「お前にすれば……対話はくだらない事なのかも知れない……。だが、それを目指して戦っている人間もいる」

ヴァン「復讐の方がくだらないって言いたいのか？」

刹那「そうじゃない。人にはそれぞれ戦う目的があると言っている」

ヴァン「お前も……対話の為に戦っているのか？」

刹那「今はな」

ヴァン「今は……？」

刹那「俺はかつて、ガンダムになろうとした」

ヴァン「は……？」

刹那「だが、ガンダムにはなれなかった」

ヴァン「当たり前だろ、お前は人間なんだからよ」

刹那「それでも…俺達みんなでガンダムになれた」

ヴァン「なれたのかよ!?」

刹那「ヴァン、お前もガンダムだ」

ヴァン「ガンダムのヴァン…。悪くはねえが、そいつはお前達のもんだ」

刹那「お前の復讐は愛する者を殺された所から始まったのだったな？」

ヴァン「ああ…。カギ爪の野郎がエレナを殺した時からな…」

刹那「…俺は実の両親をこの手で殺した」

ヴァン「！」

刹那「だからこそ、俺は今…守りたい人間がいる」

ヴァン「その為の対話の道か…」

刹那「それはアルトも同じだ」

ヴァン「あいつが…」

刹那「カギ爪の男と分かり合えとは言わない…。だが、自分だけは見失うな」

ヴァン「ふっ、わかったよ」

守るべき者の為の戦い…。俺も…エレナがいたらこうなっていたのか…?

刹那はクアンタの整備をしようとっていたので俺は手伝う事にした…。

「氷室 弘樹だ。」

まさか、シエリルまで倒れるなんてな。

メル「カナリアさん、シエリルさんは…？」

カナリア「V型感染症が再発した」

アルト「やっぱりかよ…！」

優香「零が続いて、シエリルさんまで…」

医務室に零とシエリルが眠っている…。

二人共、重体だ…。

アマリなんて、零が倒れたと知った時からずっと浮かない顔をしているのをアスナが心配している…。

弘樹「アマリ、大丈夫か？」

アマリ「は、はい…ありがとうございます、弘樹君」

カノン「カナリアさん、シエリルさんは治るんですか？」

カナリア「わからない…」

リオン「くそっ！どうすりゃいいんだよ！」

アムロ「…こんな時にすまないが、出撃の準備をしろ」

カミーユ「アムロさん…」

アムロ「ミハエル・ギャレットが指定した場所にまもなくつく」

アマリ「…」

アムロ「アマリ、戦況が緩くなったら、お前はゼフィのいる施設へ入り、ゼフィを救い出せ」

アマリ「アムロさん…」

アスナ「私も手伝うわ、アマリ！一人ででもゼフィルスネクススは動かせるから！」

ホープス「勿論、我々もサポートいたします」

イオリ「必ず、ゼフィを助け出そう！アマリさん！」

アマリ「はい…！（零君…私が必ず、ゼフィちゃんをすくいだしてみせるから…零君は休んでね）」

アルト「シエリル…」

ランカ「アルト君…行つて」

アルト「ランカ…」

ランカ「アルト君にしか出来ない事があるなら…アルト君にはそれをして欲しいの！」

アルト「…ああ！」

俺達は出撃を急いだ…。

「シエリル・ノームよ。

…やつと誰もいなくなつたわね…。

シエリル「ふう…起きているってバレるとアルトが出撃しなくなるかも知れなかつたから、よかつたわ…」

それにしても、医務室に零と二人つきりか…。

でも、零は未だ眠り続けているわね…。

シエリル「零、私達の大切な人が私達の為に戦おうとしているわよ。あなたはいいの？ずっと寝ていて…。私は…そんなの嫌よ」

って…言つても、重症だから起きるわけない、か…。

零「アマ、リ…ゼ、ファイ…」

第66話 対話と復讐の螺旋

俺達は出撃した…。

ヴァン「…」

アルト「…」

ヴァン「そのよ…アルト」

アルト「…何だよ？」

ヴァン「…悪かったな」

アルト「え…」

ヴァン「お前の戦い想いを否定しちまって…」

アルト「ヴァン…」

ヴァン「だが、俺はカギ爪を殺すことはやめるつもりはねえ…。だが、お前の手助けは出来る。…だから、倒れている歌姫さんの為にもバジュラつてのを救い出すぞ」

アルト「…ヴァン…。俺も悪かったな」

ヴァン「お互い様だ」

ミシエル「勝手に喧嘩して、勝手に仲が治ってやがる…」

ルカ「それがアルト先輩ですから」

オズマ「アルト！スーパーパック、使いこなしてみせろよ！」

アルト「はい、分かっています！」

刹那「…」

テイエリア「アルトとヴァンの件、君が一枚噛んでいたんだろう、刹那？」

刹那「さあな」

イアン「セルゲイ大佐、アニニュー、二人の機体にもトランザムを搭載した」

アニニュー「ありがとうございます、イアンさん！」

セルゲイ「これでアンドレイ達と対等に戦える！」

イアン「サバーニヤとハルトもELSの決戦の時の仕様にしたぞ」

ロックオン「ありがとう、おやつさん！」

イアン「刹那、ライザーソードは…」

刹那「わかつている。ライザーソードがなくとも俺は戦える…！」

フェルト「敵機来ます！」

現れたのはバジユラ数体と無人機ヨロイ、ゴーミン、スゴーミン部隊とリボーンズガンダムだった。

リオン「やつぱり、バジユラも出てきたか…！」

「ゴーカイレッド」「ゴーミンやズゴーミンがいるって事は奴等はザンギヤックとも繋がってるってわけか！」

ヴァン「バカ兄貴達はいねえな……」

レイ「後方で控えているようだな」

デカルト「ああ……そして……！」

リボンズ「よく来たね、エクスクロス」

ティエリア「リボンズか……！」

リボンズ「君達をこの先の施設へ入れるわけにはいかないね」

アムロ「何故、お前がカギ爪の男を手伝う？」

リボンズ「君達には関係のない事だよ。さあ、これで最後だ」

刹那「貴様の思い通りにはさせない……！貴様は俺達が止める……！」

アルト「バジユラ……！」

ヴァン「アルト！バジユラを助け出す方法を探せ！俺達が援護するからよ！」

アルト「助かる！」

千冬「ゼフィの救出は敵の数が減り次第実行するぞ、アマリ！」

アマリ「わかりました！」

俺達は戦闘を開始した。

〈戦闘会話　刹那VSバジユラ〉

刹那「(バジユラは操られているだけだ…。その原因さえわかれば…)」

〈戦闘会話　ヴァンVSバジユラ〉

ヴァン「おい、虫野郎。アルトはお前等の為に努力してんだぞ。だから、大人しくしてろ！すぐに助けてやっからよ！」

〈戦闘会話　アマリVS初戦闘〉

イオリ「まずはこの場を乗り切る！」

ホープス「ここにはいない零の分でゼフィを助けましょう、マスター！」

アマリ「ありがとう、二人共！ゼフィちゃん、待っていてね！絶対に助けるから！」

〈戦闘会話　アスナVS初戦闘〉

アスナ「零…見ていてね、私が貴方の代わりに戦ってみせるから…！」

〈戦闘会話 刹那VSリボンズ〉

リボンズ「バジユラは…苦しんでいるよ、刹那・F・セイエイ」

刹那「それは、お前もではないのか？」

リボンズ「…」

刹那「お前の感情に…苦しみが見える」

リボンズ「何を言うかと思えば…。僕は悩みなど持たない、人類を導くガンダムだ！」

〈戦闘会話 アルトVSリボンズ〉

アルト「そこを退きやがれ！お前に構っている時間はないんだ！」

リボンズ「僕は君に対しても興味があるのだよ、早乙女 アルト。バジユラに対して、対話をしようとしていた君がね」

アルト「そうだ！だから、邪魔をするんじゃないやねえ！」

〈戦闘会話 アムロVSリボンズ〉

アムロ「異世界であるアル・ワースを侵略する事がお前の望むべき事なのか！」

リボンズ「侵略とは違うね。僕が望むべき世界は僕がアル・ワースの住人達を導く事だ」

アムロ「お前にその資格があるはずがない！」

リボンズ「あるさ。何せ僕は人類を導くガンダムだからね」

アムロ「違う！お前はリボンズ・アルマークだ！終わらせるぞ、お前のエゴと共に！」

Hi—ルガンダムの攻撃でリボーンズガンダムにダメージを与えた。

リボンズ「ちいっ……！ここまでか……！」

刹那「リボンズ・アルマーク……！」

リボンズ「僕はこの様な所で終わるわけにはいかない……！」

リボーンズガンダムが撤退した……。

アムロ「リボンズ……」

刹那「(リボンズ・アルマーク……。人は変わる事が出来る……。だが、それはイノベイド

も同じなのだな……)」

マドカ「今だ、アマリ！」

アマリ「はい！」

ゼルガードが施設の中へと入っていった……。

優香「これでゼフィちゃんを助け出せば……」

「マリア「そう簡単にはいかないようね……！」

「バジユラの群れと無人のヨロイ軍団、ダリア・オブ・ウエンズデイ、アルケーガンダムが現れた。」

「サーシエス「ところがギツチョン！」

「ファサリナ「まだまだバジユラさんは沢山いますよ」

「アルト「てめえ……！」

「ヴァン「相変わらず、いい性格してるぜ」

「ファサリナ「褒め言葉として受け取ります。それでは女王様のお通りです」

「ブレラ「女王だと……!?？」

「現れたのは……デカイバジユラ……!?？」

「ジェフリー「バジユラクイーン……!??!いや、クイーン・フロンティアか……！」

「スメラギ「クイーン・フロンティア……?あれは何なのですか!??!」

「ブレラ「バジユラの意思総体の中枢を担う存在だ」

「アルト「クイーン・フロンティアはバジユラクイーンとバトル・フロンティアが融合したバジユラなんだ！」

「九郎「バジユラと融合したって……！」

「ルカ「僕達の世界の電腦貴族達がインプラントを使用して、融合させたんです！」

弘樹「だが、どう見ても勝手に動いてんだろ！」

カノン「クイーンも彼等に操られていると言う事ですか…!!？」

オズマ「そうみたいだな…！」

ミーナ「30」「私がクイーンを止めます！」

そう言うともミーナ「30」が歌を歌うがクイーンは動きを止めなかった。

ミーナ「30」「そんな…！」

アイシャ「ミーナの歌が聞かないなんて…！」

ファサリナ「というわけです。あなた方ではバジユラさん達を助け出す事なんて出来

ないんです」

ヴァン「やってみなけりやわからねえだろうが！」

マスターテリオン「早乙女 アルト。他の敵は我等が引き受ける」

エセルドレーダ「貴方はクイーンを！」

アルト「…わかった…！」

俺達は戦闘を再開した…。

ーアマリ・アクアマリンです。

施設に入った私はゼルガードから降りました。

イオリ「俺達が見張っている間にアマリさんはゼフィを……！」
アマリ「ありがとう！」

私は囚われているゼフィちゃんを探し始めました……。

―氷室 弘樹だ。

〈戦闘会話 アルトVSバジュラクイーン〉

アルト「やめてくれ、クイーン！俺達はお前達を倒したくないんだ！」

バジュラクイーン「……！」

アルト「くそっ……！力尽くで止めるしかないのかよ……！」

ダメだ……！バジュラクイーンが止まらない……！

ウエスト「あ、あんな怪物……止められるのであるか……？」

キオ「諦めてはダメです！必ず道は開けます……！」

ヒイロ「……刹那！」

刹那「……了解……！クアンタムシステムを作動させる！」

ニール「つて、ELSには効いたけど、バジユラには効かねんじやねえのか!!?」
テイエリア「だが、やってみる価値はある!」

クアンタは移動して…。

刹那「クアンタムバースト!」

クアンタムバーストを発動した…。

辺りがGN粒子で満たされるが…。

バジユラクイーン「…!」

刹那「くっ…!」

クイーンが攻撃してきた…!

ユイ「ダメです!クアンタムバーストでも止まりません!」

アルト「どうすれば…!」

ヴァン「諦めんじやねえよ、アルト!」

アルト「ヴァン…」

ヴァン「お前はバジユラを救うって決めたんだろ!!?お前が諦めてどうすんだよ!」

アルト「…」

刹那「アルト!バジユラと対話するのはお前だ…!俺がその道を切り開く…!」

アルト「刹那…俺は…俺は…!」

すると、歌が聞こえた……この声は……ランカか……!

オズマ「ランカの歌……!」

ブレラ「ランカ……!」

ランカ「(アルト君、私も歌うよ……!バジユラ達を助ける為に……それが、アイ君と約束した事だから……!)」

?「一人だけにはいい格好はさせないわよ、ランカちゃん」

ランカ「!」

アルト「シエリル!」

シエリルだと……!??

シエリル「私も歌うわよ……バジユラ達を救い出す為……そして、アルト達を手助けするため……!行くわよ……私達の歌を聞けええっ!!?」

ランカとシエリルのデュエット曲……なんか凄え!

刹那「……!ランカとシエリルの歌にクアンタが共鳴している……!今なら……うおおお

おっ!!?」

今までの比でもないGN粒子が溢れかえり、クイーンを包み込んだ。

ランカ「(凄……全てを包み込むような優しい光……)」

シエリル「(身体の苦しみが……治っていく……?)」

サーシエス「くっ…！何が起こってやがる…！」

ファサリナ「この光は…！」

クアンタムバーストが終了し、GN粒子が消える。

すると、何処かクイーンが抵抗する動きをしていた。

ルカ「バジュラクイーンが自らの意志で洗脳に抵抗しています！」

刹那「アルト！」

アルト「ああ！」

デュランダルがファイター形態になり、クイーンに突っ込んだ。

ファサリナ「させません…！」

しかし、それをダリア・オブ・ウエンスデイが阻もうとデュランダルを三節棍で攻撃しようとしたが、ダン・オブ・サーズデイがそれを防いだ。

ヴァン「アルトの邪魔してんじやねえよ！」

ファサリナ「対話…。同志はあなた達と対話をしようとしているのですよ。しかし、あなた達はそれを拒んでいます。それなのに、あなた達はバジュラさん達と無理矢理対話をしようと言うのですか？」

ヴァン「復讐の為に生きている俺には対話つてのはよくわからねえ…。だがな！お前達のしようとしている対話とアルトや刹那の対話は違う！」

フアサリナ「何が違うと言うのですか？」

ヴァン「お前等の対話は：世界の為とか言っておきながら、カギ爪の為だけの対話だ！だが、アルトと刹那の対話は：本当にみんなや世界の為の対話なんだよ！お前等の気の悪い対話とアルト達の対話を一緒にするんじゃないやねえ！」

フアサリナ「あなたと言う人は……！」

ヴァン「行きやがれ、アルト！お前の信じる対話つてのを見せてみる！」

アルト「任せろ！」

デュランダルはクイーンに攻撃を仕掛けた……。

アルト「応えてくれ、女王バジユラ！こいつの性能、引き出しきつてみせる！」

デュランダルはビームガンポッドを連射させ、クイーン・フロンティアにぶつける。

パトロイド形態になり、ビームガンポッドの連射とビームキャノン撃つ。

さらにマイクロミサイルで攻撃し、ファイター形態に戻ると、ランカとシエリルの歌に呼応するかのように金色に光る。

アルト「うおおおおっ！」

デュランダルはまるで舞を踊っている様に飛び、ビームキャノンを撃ち続ける。

アルト「こいつも……！もってけ！」

最後にビームガンポッドの重量子ビームをクイーン・フロンティアに浴びせた。

バジユラクイーン「！」

アルト「よし、やったぞ！」

デユランダルの攻撃でクイーン・フロンティアの動きが止まった。

ミシエル「あいつ…歌舞いてやがる！」

エルザ「綺麗ロボ…」

刹那「あれがアルトの…対話の翼か…」

ヴァン「へっ、やれば出来るじゃねえか」

そして、クイーン・フロンティアはアルトに何かを語るように頷き、他のバジユラ達と共に消えた…。

アルト「女王バジユラ…」

ゴークイグリーン「消えた…？」

ルカ「フオールドしたんだと思います」

アルト「バジユラ達は救い出せた…後は、ゼファイだ！」

頼んだぞ、アマリ…！

―新垣 ゼファイです。

私はリボンズさんから渡された鍵で脱出しようとしています。外にはママ達が戦っています。

先程の光と歌…刹那さんとシエリルさん達でしょうか…？

ミハエル「どこに行く気だ、新垣 ゼファイ？」

ミハエルさんがズゴーミンとゴーミンを大量に引き連れて、来ました。

ゼファイ「ミハエル・ギャレットさん…！」

ミハエル「どうやって、あそこから逃げられたのかは知らないが、勝手な行動はさせない！」

こんな所で…！

アマリ「ゼファイちゃん！」

ママが来ました…！

ゼファイ「ママ！」

ミハエル「アマリ・アクアマリンか！」

アマリ「ゼファイちゃんは返してもらいます！」

ミハエル「そう簡単に返しはしない！」

？「ううん、その子は返してもらおうよ！」

突然、黄色の髪の人がミハエルさんを蹴り飛ばしました。

ゼファイ「え…」

ミハエル「ぐっ…！だ、誰だ!?？」

? 「もうこの子は大丈夫ですよ」

アマリ「え…は、はい。ありがとうございます」

? 「パパ！間に合ったよ！」

? 2 「よくやったな、ヴィヴィオ！」

あれ…？この方は…。

アマリ「あなたは…！」

ミハエル「何者だ!?？」

一誠「俺は一条 一誠！この子は一条 ヴィヴィオだ！」

アマリ「一誠さん！」

一誠「久しぶりだな、アマリ！元気そうで何よりだ！」

ヴィヴィオ「ザンギャツクの怪人は私達に任せて！パパ！」

一誠「ああ！変身!!？」

ドラグニツクドライブバーレッド《チェンジ！ドラゴンライダー！ドライブグウ！》

一誠さんは仮面ライダードライブに変身しました。

仮面ライダードライブ「さあ、この運命のシナリオは俺達を書き換える!!」

仮面ライダードライグはズゴーミンとゴーミンと戦い始めました…。

ヴィヴィオさんという人も生身でゴーミン達と戦っています。

それにしても…仮面ライダーというのは強いですね！

ミハエル「邪魔を…ならば、この世界のために消えるがいい！アマリ・アクアマリン、新垣 ゼファイ！」

ミハエルさんの言葉と同時に数体のズゴーミンが私とママに向けて、光弾を放ちました。

仮面ライダードライグ「っ！」

ヴィヴィオ「しまった…！」

ママはドグマの発動が遅れてしまい、光弾の一つが私達の足元に直撃し、爆発、私達は爆煙に包まれました…。

複数の光弾が私達に向けて放たれました…。

しかし、一つも当たっていません…。

爆煙が晴れて、私とママは顔を上げ、笑顔を浮かべました。

私達の視線の先には…

零「俺の大切な女と娘に手を出すなんて一千万年早いんだよ、ミハエル！」

私の強くて優しい…大好きなパパが立っていました！

―新垣 零だ！

俺は目覚めた後、ゼファイが捕らえられていた施設に入ると、アマリもゼファイに向けて光弾が放たれたのを見て、二人の前に立ち、バリアを張った。

アマリ「零君！」

ゼファイ「パパ！」

零「遅くなって悪かったな、アマリ！ゼファイ！」

ミハエル「バカな…お前は重症のはずだ！」

零「あんな綺麗な光と歌が響いているのにおちおち寝てられるかよ。GN粒子の光が俺の傷を治してくれたみたいだ。原理が理解できないけどな」

アマリ「それよりも零君…そのバリアは…？」

零「GN粒子の光は俺の中に眠るレイヤの力も目覚めさせたくれたみたいだ。何でもってわけじゃないけど、力が使えるようになったんだ！」

仮面ライダードライブ「いつの間にかチート野郎になったんだよ、零」

零「お前…一誠か？どうして、お前が…？」

仮面ライダードライブ「話は後だ！まずはこいつらはどうにかするぞ！」

零「ああ！アマリはその子と一緒にゼフィを守ってくれ！」

アマリ「ええ、わかったわ！」

俺はズゴーマン達の光弾を避け、空中で一回転して、回し蹴りで二体ほどゴーマンを蹴り飛ばす。

さらに光弾を放ってくるが、バリアを張り、それを防いでバリアを飛ばし、ズゴーマンとゴーマン軍団に浴びせた。

仮面ライダードライブ「やるな！俺達も負けていけないぞ、ドライブ！イストワール！」

ドライブ『はい！』

イストワール『やりましょう、一誠さん！o(ω)o』

一誠：…何をやる気だ？

仮面ライダードライブ&ドライブ『我に宿りし紅蓮の赤龍よ、覇から醒めよ。我が宿りし真紅の天龍よ、王と成り啼け。濡羽色の無限の神よ、赫赫たる夢幻の神よ、際涯を超越する我らが禁を見届けよ。汝、燦爛のごとく我らが？にて紊れ舞え、D∞D(ドライブ) インフィニティ(ドライブ)！』

仮面ライダードライブとドライブが呪文のようなものを唱えると、仮面ライダードライブの姿が六枚の羽を持ち、鎧も変化し追加されメインカラーが真紅と金で統一され鎧

に付いている宝玉の全てに∞の記号が浮かび上がっている姿になった。

仮面ライダードライブは背中に生えている尻尾でゴーマン軍団を切り裂いていく。

仮面ライダードライブ(D x D)「締めは必殺技で……!」

ヴィヴィオ「パ、パ、パ……インフィニティドラゴニックかめはめ波はダメだよ!アル・ワースが消滅しちゃうよ!」

仮面ライダードライブ(D x D)「……それもそうだな……。なら、これで終わりだ!」

仮面ライダードライブは残るゴーマン達に蹴りを当て、爆発させる。

仮面ライダードライブ(D x D)「決める、零!」

零「これでも……喰らえ!」

俺は右拳に電撃を纏わせて、残るとズゴーマン軍団を殴り飛ばし、爆発させた。

ミハエル「そんなバカな……!」

零「俺達とやり合うか?ミハエル!」

ミハエル「新垣 零……!決着は機体でつける!」

そう言い残し、ミハエルは走り去った。

アマリ「れ、零君……いつの間にあそこまでの力を……!?」

零「刹那とランカ達のおかげって事だ」

すると、仮面ライダードライブが変身を解除し、此方に歩いて来た。

一誠「見ない間に強くなったじゃねえか、零」

零「いや、一誠には及ばねえよ。それよりも何故、アル・ワースに？」

一誠「実はヴィヴィオがどうしてもお前に会いたいわって言うてな」

零「俺に……？」

一誠「ほら、ヴィヴィオ。挨拶しな？」

ヴィヴィオ「初めまして、一条 ヴィヴィオです！一誠パパの娘です！」

アマリ「ええっ!!？」

零「一誠の……娘!!？」

一誠「そんな驚く事でもねえだろ。俺だって35歳なんだし」

はいいいいっ!!？

零「35歳って……お前、あの時と見た目が変わってないじゃねえか！それにイストワールとドライグだって、変わってねえし……」

イストワール「私とドライグさんはあまり歳を取りませんし老けません。一誠さんや一誠さんのお仲間の場合は仮面ライダードライグの元になったドラゴンライダーの鎧の力や習得や手に入れた力の影響で歳を取らなく老けたり出来なくなつたのです（一

ムー）」

零「つまり、年齢はとっても老けないって事か。……大変だな、お前も」

一誠「他人事みたいに言ってるんじゃないよ……まあ、他人事だが……」
イストワール「ちなみに後、20万年は生きられます（*ーωー）」
に、20万年……。

一誠「流石にそこまで生きるつもりはないんだけどな」

アマリ「私も長生き出来たとしてもそこまで生きたくはないですね……」

ゼファイ「あの……。ヴィヴィオさん」

ヴィヴィオ「どうしたの、ゼファイちゃん？」

ゼファイ「ヴィヴィオさんのお母さんは誰ですか？」

ヴィヴィオ「誰……というより、いっぱいいるよ」

零「いっぱい……？まさか、複数の人と結婚したとか言わねえよな？」

一誠「残念だがその通りだ」

零「因みに何人と結婚したんだ？」

ヴィヴィオ「美遊ママやドライグママを入れて50人位居るよ」

……美遊も入ってるのかよ……。

てか……。

アマリ「ご、50人ですか……？」

零「ハーレムにも程があるだろ！」

ゼファイ「…という事はアスナお姉ちゃんと優香お姉ちゃんもママになる可能性があるという事ですね！」

零「ないから！一誠の世界を基準にしないでくれ、ゼファイ！それから、アマリは睨まないでくれ！…俺は、アマリ一筋なんだからよ…」

アマリ「零君…」

一誠「見せつけてくれるな…」

零「そう言えば、あの時のお前の姿、あれ何なんだよ？」

一誠「仮面ライダードライグの最強フォームの一つ、DxD（ディアボロス・ドラゴン・ゴッド）…別名、龍神化だ」

イストワール「一誠さんのこれまで取得した力やドライグさんと私の全能力、ドライグさんと同じ龍族の龍の神から貰った『無限の龍神』『オーフィス』と真なる赤龍神帝『グレートレッド』の力の一部、六つのインフィニティ・ストーンの力の吸収によってこのフォームが生まれました（…？…？）」

零「何を言ってるのか、さっぱり、わからねえ…」

一誠「まあ、お前達には関係のない事だから、気にしないでいいぜ。ちなみにヴィヴィオも龍神化を使えるからな」

ゼファイ「え!? そうなんですか!?!」

ヴィヴィオ「うん！でも、龍神化の姿になったら、アル・ワースの危機はパパ一人で解決しちゃうよ」

零「人にチートとか言えねえじゃねえか…」

一誠「まあ、力の違いだな。さて、そろそろ俺達は帰る。後はお前達に任せるぜ」

零「…一誠、ありがとな！」

一誠「頑張れよ、零」

俺と一誠は拳をぶつけ合った。

ヴィヴィオ「応援してるよ、ゼフィちゃん！」

ゼフィ「はい、ヴィヴィオさん！」

ゼフィとヴィヴィオは握手をした後、俺とアマリ、ゼフィはゼルガードの元に急いだ。

ヴィヴィオ「行っちゃったね」

一誠「あいつ等なら大丈夫だろ（別の世界からだが、信じてるからな。お前達がアル・

ワースを救うのを…）」

一誠達は元の世界へ戻った…。

ゼルガードの元へ急ぐ俺達だったが、その前にカギ爪の男が現れた。

カギ爪の男「いけませんね、零君、アマリ君、ゼフィ君。勝手に逃げては」

零「カギ爪……！」

アマリ「ゼファイちゃんは返してもらいました……。あなたの野望は私達が打ち砕きます！」

カギ爪の男「……仕方ありませんね。この方達をお部屋へ案内してください」
カギ爪の手下が俺達を囲む。

ゼファイ「……！」

リボンズ「無理やりというのは感心しないね、クー・クライング・クルー」

リボンズ「……!!？」

カギ爪の男「おやおや、リボンズ君。この場から去ったと思っていました……。何をしに来たのですか？」

リボンズ「新垣 零、アマリ・アクアマリン、新垣 ゼファイはこのアル・ワースを平和に導く為に必要な人物だ。彼等を君に渡すわけにはいかないな」

ゼファイ「リボンズさん……」

リボンズ「ここは僕に任せて、君達は戦線に復帰するんだ」

零「……すまない、あとは頼む！」

俺達はリボンズに後を任せ、ゼルガードの元へ急いだ。

ーリボンズ・アルマークだよ。

新垣 零達を見送った後、僕はクー・クライング・クルーを見た。

カギ爪の男「ああ…言ってしまいましたか」

リボンズ「その割には悔しそうじゃないな」

カギ爪の男「そんな事はないですよ。それよりもリボンズ君。君に関して楽しい話があるのですよ」

リボンズ「楽しい話…？」

カギ爪の男「複数の並行世界に同じ人間が別の人生を歩んでいる事は知っていますか？」

リボンズ「…パラレルワールドというものだね。それがどうかしたのかな？」

カギ爪の男「君はね…。ある並行世界…アクシズを止め、生命を絶ったアムロ・レイの生まれ変わりなのですよ」

な、何…!!?!

リボンズ「ぼ、僕が…アムロ・レイの生まれ変わりだと…!!?」

カギ爪の男「皮肉ですね。世界の為に戦い、生まれ変わると世界の敵になったのですから」

リボンス「……」

カギ爪の男「どうですか？もう一度、世界を救う為に私に力を貸してもらえないでしょうか？」

リボンス「……くだらない冗談は好きじゃないね」

カギ爪の男「はい……？」

リボンス「僕はリボンス・アルマーク……。例え、アムロの生まれ変わりだとしても、僕は僕だ！」

カギ爪の男「……残念です。それではあなたをお部屋へご案内しましょう」

兵士達が僕を捕えようとしたが、そんな彼等をなぎ倒し、僕の手を引く者がいた。

リボンス「君は……」

ビゾン「アルフリード中佐にお前にあるものを届けろと言われたんだ。ついてきてもらう」

僕はビゾン・ジェラフィルに連れられ、外に出る……。

カギ爪の男「……逃げられてしまいましたか……」

僕はビゾン・ジェラフィルと共にある部屋に入る。

リボンス「これは……！」

ビゾン「俺はまた戻らなければならない。エクスクロスを頼んだぞ」

また僕達で戦う事になるなんて…これも運命かな…。

―新垣 零だ。

俺達はゼルガードの元へ着いた。

イオリ「アマリさん！」

ホープス「ご無事で何よりです、マスター…。所で何故、零がいる？」

零「話は後だ、俺達も出るぞ！」

アマリ「出るって…ゼフィルスネクサスは今、アスナさんが操縦して…」

零「呼ぶに決まってるだろ…ゼフィルスネクサス!!？」

すると、俺達の目の前にゼフィルスネクサスが現れ、ハッチが開いた。

アスナ「あ、あれ!!? どうして勝手にハッチが…!!?」

零「落ち着け、アスナ！」

アスナ「れ、零…!!? どうしてあなたが!!?」

零「話は後だって！席、変わってくれ！」

アスナ「わ、わかった！」

俺とゼフィはゼフィールスネクサスに乗り、戦線に復帰した。

優香「アスナちゃん、突然ゼフィールスネクサスが消えたけど、どうしたの!?!?」

アスナ「そ、それが…」

零「俺が呼んだんだよ」

一夏「零…?!?お前が何でそこに!?!?」

零「傷が完治したんだ。刹那とランカ達のおかげでな」

シエリル「零…」

すると、サウダーデ・オブ・サンデイが現れた。

ミハエル「新垣 零! 決着をつけるぞ!」

零「俺の場合、あの時の借りもある…。お前は俺が倒す!」

ゼフィ「もう、私達ですよ、パパ!」

零「そうだな。俺達の力で、だな!」

?「零、残念だが、それは僕に譲ってもらおうか」

ガンダムが現れた…?

って、あの声は…?!?

ラッセ「0ガンダムだと…?!?」

ソーマ「誰が乗っているの!?!?」

アニュー「来てくれたのね！」

刹那「リボンズ・アルマーク……！」

リボンズ「君達にはお見通しか、刹那・F・セイエイ、アニュー・リターナー」

ティエリア「どうして君が……?!？」

ゼファイ「リボンズさんは私を解放してくれたんです！」

零「リボンズ……」

リボンズ「別に僕は君を助けようと思っていなかったがね」

アムロ「来ると思っていたぞ、リボンズ」

リボンズ「アムロ……僕と君は……」

アムロ「……やはり、お前は俺の生まれ変わりだったのだな」

フア「えっ……?!？」

カミーユ「リボンズが……アムロさんの生まれ変わり……」

リボンズ「……気がついていたのか」

アムロ「お前の感覚と俺の感覚が全く同じものだったのだな。シャアも気づいていた

んだろう？」

シャア「初めて、リボンズと出会った時にアムロが変装しているのかと思ったほどだ」

アムロ「他人の空似だろう？……いや、他人ではないか」

リボンズ「…だが、僕はリボンズ・アルマークだ」

アムロ「わかつている。そして、俺はアムロ・レイ。俺達はそれぞれ別の存在だ」

リボンズ「フツ、僕が君を理解しなかった理由がわかったよ」

アムロ「全く同じ存在：それに嫉妬心を抱いていたのだな」

リボンズ「恥ずかしながらね」

ミハエル「いつまで話し込んでいるのだ！」

ファサリナ「リボンズさん：私達の敵となるのですか？」

リボンズ「僕は君達の仲間になったつもりはない。君達の計画では平和な世は訪れない！ミハエル・ギャレット、退場を願おう！」

刹那「合わせるぞ、リボンズ」

リボンズ「まさか、僕と君が肩を並べて戦う事になるなんてね。では、やろう！」

クアンタと0ガンダムがサウダーデに攻撃を仕掛けた…。

刹那「幸せの時：その計画を駆逐する！」

リボンズ「君と肩を並べて戦う時が来るなんてね！」

刹那「遅れるなよ、リボンズ」

リボンズ「フツ、君こそ！」

クアンタがまず、GNソードビットを放ち、サウダーデにダメージを与え、GNソー

ドV・ライフルモード、0ガンダムがビームガンを撃つ。

それを受けたサウダーデに接近して、クアンタはGNソードVで、0ガンダムがビームサーベルでサウダーデを切り裂いた。

刹那「トランザム、始動！」

リボンズ「トランザム！」

二機はトランザムを発動させて、攻撃して、行く。

刹那「俺が……！」

リボンズ「僕達が……！」

刹那「未来を切り開く……！」

リボンズ「人類を導く……！」

そして、最後にクアンタはGNバスターソード、0ガンダムはビームサーベルでサウダーデを突き刺した。

刹那& amp ;リボンズ「ガンダムだ!!?」

突き刺している状態で二機は勢いよくサウダーデを斬り裂いた。

ミハエル「バカな……ここまでだというのか……！」

リボンズ「これが世界を変革させた……！」

刹那「ガンダムの……俺達の手だ……！」

二機の連携攻撃にサウダーデは吹き飛ばされた。

ミハエル「うわあああああつ!!?」

パトリック「す、凄え攻撃だな…」

アレルヤ「これが世界をかけて戦った二人の連携か…」

ロックオン「つて、0ガンダムもトランザムを使えたのかよ…!」

リボンズ「既に搭載されていた様だ」

グラハム「その力、驚嘆に値する…即ち、流石と言っておこう!」

ミハエル「こ、この…!」

フアサリナ「下がって、ミハエル君!あなたとサウダーデを失うわけにはいかないわ

!」

ミハエル「は、はい…!」

サウダーデは撤退した…。

サーシエス「ここまでの事をしたんだ…。もう容赦はしねえぜ、元大将!」

リボンズ「手加減など必要ないよ!」

ニール「てめえもそろそろ終わりにしてやるよ、アリー・アル・サーシエス!」

ヴァン「さあ行くぜ!刹那!アルト!」

アルト「ああ!操られていたバジユラの分まで倍返しにしてやる!」

刹那「了解…！刹那・F・セイエイ…！」

アルト「早乙女 アルト…！」

ヴァン「対話のヴァン…！」

刹那&アルト&ヴァン「『未来を切り拓く!!?』」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「対話を目指すアルトの翼と復讐を目指すヴァンの剣…。お互いの目的は違うが一つになれば、分かり合える。そんな世界を俺達が作る…！」

〈戦闘会話 リボンスVS初戦闘〉

リボンス「対話による平和か…。思えば簡単な事だったのかもしれない。僕も見よう…人と人が手を取り合う世界を…！」

〈戦闘会話 アルトVS初戦闘〉

アルト「俺達はわかり合う道を進んでいく…！例え、険しい道のりだとしても、俺は

翼がある限り飛び続ける！」

〈戦闘会話　ヴァンVS初戦闘〉

ヴァン「(対話か…。俺にとつては無縁の事だと思っていたが、手伝ってみると案外スカつてするもんだな。だが、俺の目的はカギ爪の野郎を殺す事だ…それを曲げるつもりはねえ！」

〈戦闘会話　零VS初戦闘〉

零「みんなが戦っている間にぐっすり寝ていたんだ…。ここからはビシバシいくぜ！」

ゼフィ「無理は禁物ですよ、パパ！」

アスナ「病み上がりが一番、身体を壊しやすいんだから！」

零「わかってはいるって！じゃあ、行くぞ！」

〈戦闘会話　刹那VSサーシエス〉

サーシエス「今度こそ、終わらせるぜ！クルジスの兄ちゃん！」

刹那「何故、貴様はわかり合おうとしないんだ！」

「サーシエス「簡単な事だ！人間みんながお手手つないだら戦争がなくなるだろうが！」」

刹那「変わらないんだな、お前は……！」

サーシエス「戦争屋なんだから当たり前だろ！」

刹那「ならば、駆逐する……！争いを広めようとしている貴様を……！」

〈戦闘会話　ロックオンorニールVSサーシエス〉

サーシエス「てめえ等、兄弟には何かと縁があるな！」

ロックオン「俺はてめえを狙い撃った……。次は兄さんの番だ！」

ニール「ライル……」

ロックオン「俺に見せてくれよ、1代目ロックオン・ストラトスつてのを！」

ニール「了解だ、元ロックオン・ストラトス……狙い撃つぜ！」

サバーニヤとデユナメスの攻撃でアルケーに電撃が走った。

サーシエス「バカな……！こんな、事が……！」

ロックオン「終わりだ、アリー・アル・サーシエス」

ニール「これで…俺達、兄弟の戦いの一つは終わりだ」

サーシエス「クソツ…クソクソクソツ！チクシヨオオオツ!!？」

アルケーは爆発した…。

テイエリア「戦争の中でしか生きられなかった男…」

刹那「(アリー・アル・サーシエス…。人に争いは必要ない。そんな世界を俺達は作っていく…。二度とあなたの様な人間を生まない様に…)」

〈戦闘会話 刹那VSファサリナ〉

ファサリナ「刹那さん、あなたとその機体の力があれば、世界を平和に…同志の目的が果たせます。私達の元へ来ませんか？」

刹那「悪いが、俺は誰かに言われて、対話をする気はない。俺自身が、対話を望んでいるから、対話をする…！お前達の計画は俺達が駆逐する！」

〈戦闘会話 リボンズVSファサリナ〉

ファサリナ「ふふふ…同志を裏切ると痛い目を見ますよ」

リボンズ「残念だが、僕は既に痛い目を見ている…。君達の協力者となった事がね！」

〈戦闘会話　アルトVSファサリナ〉

ファサリナ「美しき翼です…。私、ときめいてしまいます」

アルト「ありがとよ！だが、お前に言われてもちつとも嬉しくねえよ！バジユラ達を傷つけた分も受けやがれ！」

〈戦闘会話　ヴァンVSファサリナ〉

ファサリナ「ヴァンさん…あなたはもうお友達にはなれませんね」

ヴァン「初めっから、なる気なんてねえんだよ！とつとと消えやがれ！」

〈戦闘会話　レイ「ガンソ」VSファサリナ〉

レイ「ガンソ」「お前達は手を出してはいけないものに手を出したな」

ファサリナ「あら？あなたのお仲間の事ですか？」

レイ「ガンソ」「…俺に仲間などいない。だが、愛する者を手にかける貴様達は何も変わらない…さあ、カギ爪の居場所を吐いてもらおうぞ！」

〈戦闘会話　零VSファサリナ〉

ファサリナ「零さん：戦いなんてやめて、私と癒しのひと時を…」

零「黙れ」

ファサリナ「そんなひどい事を…」

零「黙れ」

ファサリナ「…流石にそのような態度を取られると私もムツと来ますよ」

零「それがお前の本性か…。俺にならまだいい…だがな！俺の仲間…それに大切な娘のゼファイに手を出した事を後悔させてやる！」

ゼファイ「パパに抱きついた事もです！」

ファサリナ「…私、嫉妬します」

零「覚悟しろ、ファサリナ！俺達、親娘がお前をぶつ飛ばす！」

ヴォルケイン改の攻撃でダリアにダメージを与えた。

ファサリナ「やはり…あなた達は私達の…同志の敵となるのですね」

ヴァン「何、当たり前の事を言ってるやがる！カギ爪は何処だ!?どこにいやがる!?」
ファサリナ「もうここにはいません。しかし、後、数週間で同志の生命は散ります…。
ですが、もうじき、この世界でも幸せの時が発動できます」

ゼファイ「あなた達の計画は私達が止めます！」

ヴァン「それでカギ爪の野郎を必ず殺す！」

フアサリナ「ふふ、できますかね、あなた方に……」

ダリアは撤退した……。

ウー「後数週間であの男が死ぬのか……」

ガドヴェド「だが、奴等の計画も発動できるに至る所まで来ているようだ」

アルト「どうするんだ、ヴァン？」

ヴァン「決まってるんだろ……。その数週間以内にあいつを見つけ出して……殺すまでだ！」

スメラギ「話している時間が惜しいわ、みんな。宇宙に上がる準備をするから、旗艦して」

俺達はそれぞれの艦に帰艦し、トレミーの格納庫に集まった。

アルト「ランカ、シエリル……。お前達の歌のお陰でまた、バジユラを救い出す事が出来た。ありがとうな」

ランカ「ううん！アルト君だって、バジユラの為に戦っていたんだし……私達も歌いたかったから……」

シエリル「あなたは翼で応えて、私達は歌で応える……。それが私達の意地よ」

アルト「そう言えば、シエリル……身体はどうなんだ？」

シエリル「それがね……。不思議と身体が楽なのよね」

カナリア「…戦闘後、彼女の身体を診断したんだが…実はV型感染症が治っていた」

ランカ「え…!?？」

ミシエル「どういう事だよ、それ!?？」

シエリル「よくわからないけど…あのクアンタムバーストの粒子を浴びると、身体が楽になったの」

テイエリア「GN粒子を浴びて、治ったという事か!?？」

アルト「じゃ…じゃあ、シエリルは…！」

ブレラ「これまで通り、歌を歌えるという事だな」

アルト「良かった…本当に良かった…！」

シエリル「アルト…」

ランカ「良かったね、アルト君」

アルト「刹那もありがとうな！」

刹那「俺はバジュラとの対話の道を切り拓いただけだ。シエリルの事で感謝される程でもない」

リボンズ「その割には満更でもない顔をしているね」

刹那「余計な事を言うな」

アムロ「リボンス……」

リボンス「アムロ：僕は君と出会えて良かったと思う」

アムロ「俺もだ。だが、まだ終わっていない」

リボンス「そうだね。微力ながら、僕も手伝わせてもらうよ」

アムロ「頼りにしている」

グレミー「カギ爪の集団が使っていた基地からリボンスガンダムも回収しました」

デカルト「場合によっては乗り換えられるという事か」

ヴァン「アルト、良かったじゃねえか」

アルト「ヴァン、お前にも感謝しているぜ」

ヴァン「：俺はカギ爪を殺す事はやめねえ」

アルト「わかつているさ。それがお前の戦いならな」

ヴァン「へっ、言うようになったじゃねえか。：それよりも、お前はどっちの歌姫さ

んを選んだ？」

アルト「バツ……！今ここでする話じゃないだろう!!？」

ヴァン「早くどっちかをお嫁さんにしないと、逃げられるぞ」

アルト「まだ早いつての！」

ランカ「アルト君……」

シエリル「じっくりと話を聞きましょうか」

アルト「う、嘘だろ…」

優香「もう！本当に心配したんだから！」

零「すまなかつたな。俺もGN粒子を浴びて、怪我がすぐに治って、ゼフィを助けに向かったんだ。そこには一誠もいたけどな」

アスナ「一誠って…あの一誠!!?」

零「ああ、すぐに自分の世界へ戻ったけどな」

ゼフィ「パパ、凄いですよ！ザンギャックの怪人を拳に電気を纏わせて、パンチで倒しちゃうんですから！」

弘樹「どう言う事だ？」

零「こう言う事だ」

俺は右拳に電撃を纏わせた。

カノン「！」

アスナ「…あ、貴方…レイヤの力を…」

零「全部じゃないけど、軽く取り戻せたぜ」

アスナ「そうなんだ…」

零「それと、アスナ…。俺やゼフィのために一人でゼフィルスネクサスに乗って戦っ

てくれたんだろ?…ありがとな」

アスナ「うん!」

ヒナ「(幼馴染…か…)」

青葉「どうしたんだ、ヒナ?」

ヒナ「う、ううん! 何でもないわ! (ビゾン…私はまた、あなたの会えるのかな…?)」

第67話 あのに空に還る未来で

「アルフリード・ガラントだ。

私達はガラブーシカ内の施設にいた。

アルフリード「何っ…?!?!」

ドルジエフ「理解できないようなので、もう一度告げよう。昨日22:00:00:大ゾギリア共和国に新政権が発足した」

アルフリード「クーデターか…」

ドルジエフ「結果としては、そうなったが、これはゾギリアの未来のために必要な通過儀礼のようなものだ」

ドルジエフ「新政権発足に伴い、軍編成の変更が通達された。これはエフゲニー・ケダール臨時最高会議議長の正式な文書である」

エフゲニー・ケダール…。これまでは行政局局长長という立場でゾギリアをコントロールしていた、あの男が…。ついに表舞台に立ったか…。

ドルジエフ「以後、全ゾギリア軍は行政局が統轄…。君達、国防軍は行政局親衛軍の

指揮下に入る」

タルジム「何だよ、そりゃ!!?」

ラーシヤ「よすんだ、タルジム…!」

ドルジエフ「不服かね?」

タルジム「当たり前だろうが!」

ドルジエフ「では、貴官の階級を剥奪…。国家反逆罪として処罰する」

アルフリード「お待ちください。我々は、宇宙に上がってすぐであり、このガラプーシカ防衛に配属されたばかりです。そこに国家の体制が変わったとの報が入れば、動揺してしまうのも致し方ないかと」

ドルジエフ「…これまでも行政局はゾギリアの在り方を決定してきた。それが、より直接的な統治となっただけだ。諸君等は国の安全と国民の利益のために今まで通りに戦えばいい」

アルフリード「…了解です」

ドルジエフ「なお、このガラプーシカ防衛の指揮は局長の代理としてD r. ハーンが務める」

タルジム「軍人でもない人間の指揮で戦えっていうのかよ…!」

ドルジエフ「全てエフゲニー議長が決定された事だ。諸君等の健闘も期待させてもら

う」

アルフリード「異世界への侵攻……。意図の見えない戦略のどこに国民の利益がある……。だが、今は命令に従うしかない……。本国の事はマルガレタ特務武官殿に任せよう」

ーエフゲニー・ケダールだ。

私は今、ガラプーシカの制御室にいる。

ハーン「……ではあなたは、エンブリヲは死んでないと判断すると？」

エフゲニー「魔徒教団やオニキスも、そう見ているし、事実、地上では奴が目撃されたそうだ」

ハーン「さすがは調律者と言うべきでしょうか」

エフゲニー「このガラプーシカは奴を完全に消滅させる為の力でもある」

ハーン「なるほど……。ミスルギを焦土にする程の出力ならばさすがの彼も生きてはいられないでしょう」

エフゲニー「これの完成には魔徒教団とオニキスの協力が大きい。感謝している、ネメシス」

ネメシス「別に感謝される程でもないさ」

ハーン「それにしても、あなたはエンブリヲとも協力体制に入っていたと聞きますが……」

ネメシス「それだけでなく、ドアクダー軍団、カギ爪の男にも手を貸してるぜ」

エフゲニー「数多の組織に手を貸し、お前は何を企んでいる？」

ネメシス「俺はただ見たいだけなんだよ。本来、一つになるはずのない複数の世界の人間がこのアル・ワースに集まり、それぞれの野望のために動き出した……。この戦いの勝者は誰なのかをな。俺はその戦いを効率よく進めるために手を貸しているだけだ」

エフゲニー「その割にはエクスクロスは手を貸していないように見えるが……」

ネメシス「そんな事はない。新垣 零……。あいつの存在そのものが凄まじき力となる」

エフゲニー「ハデス・エメラルドの息子か……。成る程、奴をこの世界に呼んだ時点でお前もエクスクロスに力を提供していたと言いたいのか」

ネメシス「流星は元ビゾン・ジエラファイル様だな」

エフゲニー「……」

ネメシス「だが、零の存在は周りの人間をも奮い立たせ、エクスクロスは俺の予想を超える組織となった……。面白くなりそうだ」

ハーン「あくまでゲームとして楽しむのですか。ところで局長は教団の目的はご存知なのですか？彼等は法と秩序の番人を名乗りながら、ここに来てアル・ワースの動乱の加速を望んでいるかのようですが…」

エフゲニー「知った事ではない。エンブリヲと渡瀬 青葉に復讐を果たせば、後の事などどうでもいい。それこそ、世界が滅ぼうとも…」

ハーン「了解しました。私としては、あなたにお預けした最高傑作が奴等を圧倒する様を楽しみにさせていたたくのみです」

エフゲニー「ガラプーシカは任せる。前回は失敗したが、今度こそ完全にミスルギの皇宮を燃やし尽くせ」

来るがいい、渡瀬 青葉…。そして、エンブリヲ…。俺の運命を歪ませたお前達にこの手で復讐してやる…！

第67話 あのに空に還る未来で

ーアルフリード・ガラントだ。

私達は向かって来ているエクスクロスを相手するために出撃した。

タルジム「ジット団やザンギャックの連中はいないんだな…」

ラーシヤ「彼等は彼等で別の任務についてるらしいよ」

やはり、ゾギリアと…と言うよりエフゲニー・ケダールと魔従教団とオニキスは特別な関係にあるようだ…、ゾギリアのアル・ワース侵攻…。それも彼等と関係しているのか…？

ドルジエフ「諸君…！もうすぐエクスクロスが、このガラプーシカの攻略に来る…！大ゾギリアの発展のため、なんとしてもガラプーシカを守り抜くぞ！」

親衛師団兵「スラーヴァ・ゾギリア！」

我が祖国ゾギリア…。一体どこへ向かうのだ…。

ラーシヤ「エクスクロス、来ます！」

来たか…！

―新垣 零だ。

既に敵は部隊を展開させていたか…。

俺達も出撃した…。

ディオ「ゴーゴンを確認……！」

青葉「想像以上にでけえ……！」

ヒナ「こんなものが地上に向けて放たれたら……！」

アマリ「アウラの守りがない今……いや、アウラの守りがあつたとしても取り返しのかないような被害が出ます……！」

弘樹「何としてでもあれを破壊しないと……！」

デュオ「あいつ等、自分の世界じゃないからつて滅茶苦茶やってくれるぜ！」

アムロ「オニキスはともかく、魔徒教団はあんなものの存在を許すというのか……！」

零「……」

ゼファイ「パパ……」

この感覚……奴が……ネメシスがいるのか……？

エルヴィラ「ヒイロ君……。君のガンダムに必要な情報は全てインプットしたわ。状況をリアルタイムで反映させれば、ゴーゴンの稼働状況が導き出せるはずよ。異変が起きたら、すぐに報告して」

ヒイロ「任務、了解。（そして、ゼロの導き出す答えは……）」

イアン「刹那、前回のクアンタムバーストの影響でライザーソードが使用可能になっている！」

刹那「やはり、何かが鍵だったんだな」

グラハム「これで刹那の本領が発揮されるな」

ゼクス「アルフリード・ガラント……！ 奴もいるか！」

アルフリード「（エクスクロス……。ゾギリアが道を踏み外した時には彼等を抑止力にしようと考えていたが……。エフゲニーの意図が見えない今、彼等と戦うしかない……）」

倉光「ゴーゴンを叩くには、まずは周辺の防衛部隊を突破しなければならぬ。各機は突撃を！ 可能な限り、敵の数を減らせ！」

ホープス「お気をつけて、マスター」

アマリ「分かっています……。教団が出て来た時には……」

零「ゼファイ、アスナ……」

アスナ「言われなくてもわかっているわよ……！」

ゼファイ「私達の出番ですね……！」

青葉「デイト、ヒナ！ 俺達が突破口を開くぞ！」

デイト「了解！」

ヒナ「私やお父様が愛したゾギリアはこんな無法を働く国ではなかった……。だから、私はゾギリアを止める……。！ 祖国のために！」

青葉「行くぜ！ あんな破壊兵器は俺達がぶっ壊してやる！」

戦闘開始だ！

戦闘開始から数分後の事だった…。

アネツサ「レーダに反応！これは…魔徒教団です！」

倉光「やはり、来たか…！」

現れたのは魔徒教団のオート・ウオーロック部隊が現れた。

シーブック「来たか、魔徒教団！」

シャア「手筈通り頼むぞ、アマリ」

アマリ「はい…！魔徒教団の術士の皆さん…。私はアマリ・アクアマリン…。藍柱石の術士です。ご存知ない方もいらっしゃると思いますが、魔徒教団は法と秩序の番人。名乗りながら異界人を召喚し…さらにはゾギリアと手を組み、あのような兵器で大地を攻撃しようとしています。私達は、あなた達に真実を伝えます。その上で、あなた達がどうするかを聞かせてください」

アレルヤ「撃ってきた…！」

ソーマ「やはり、あの人達…ゾギリアの援護に来たのね…！」

セルゲイ「法と秩序の番人というのは、どうやら彼等にとつて都合の悪い奴を叩く為の大義名分らしい！」

ゼファイ「どうしますか、ママ!!?」

アマリ「あの人達も私やイオリ君のように精神を制御されているのなら、こちらの言葉は届かないかもしれないかもしれません」

イオリ「俺も：アマリさんにシヨックを与えられるまで教団以外の人間の言葉を聞く気にならなかった」

ホープス「ですが、術士達の融通の利かなさは、明らかに我々が旅に出た時よりもひどくなっています」

アマリ「やはり、教団に何らかの変化があったと見るべきなの」

この感覚：来たか、ネメシス！

ネメシス「その通りだ、アマリ」

アルガイヤ・ノヴァとガルド部隊：それから新たな量産機部隊か：！

メル「新しい量産機!!?」

ネメシス「俺が作らせたグレモリーだ。性能はメサイアやリリスと同型だ」

零「お前が直々に来るとは：：！」

優香「どうしてあなた達が：：!!?」

ネメシス「どうしてって：。手を組んだ相手を助けるのは当たり前前の事だろう?」

手を組んだ：だと：：!!?

マリア「まさか…オニキスは魔徒教団と手を組んだというの!?？」

ネメシス「正解だぜ、マリア」

イオリ「バ、バカな…!法と秩序の番人の魔徒教団が世界を戦火に包むオニキスと…
ネメシスと手を結ぶなんて…!」

弘樹「魔徒教団の術士達はネメシスに操られているじゃねえか!?？」

ゼファイ「…彼等からはネメシスの力を感じません…!」

ドニエル「という事は本当に教団とオニキスは協定を結んだという事か…!」

ネメシス「だから、そう言っているじゃねえか」

カノン「ギルガさんは何処ですか!?？」

ネメシス「今ここには奴等はいない。俺だけで十分だからな」

弘樹「なめやがって…!」

零「今はオニキスと魔徒教団の関係の事は後にして、この場をどうにかするぞ!」

イオリ「どうにかって…」

アマリ「…戦うしかないわ」

ホープス「そうです。言葉が届かない事がわかったのなら、力を示すしかありません」

アマリ「オニキスと手を組んだ教団を放置しておけば、アル・ワース全土が戦火に包まれます…!その前に導師キールデインに真意を問いたたださなくては…!」

零「ネメシス：俺達がお前を倒す！」
行くぜ、戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「魔徒教団も堕ちる所まで堕ちたつて訳ね…！」

ゼファイ「あまり、魔徒教団とは争いたくはありませんが、攻撃してくるのならば、相手をやるしかないです…！」

零「教団はネメシスの存在に気づいていないのか…？それとも、知っていて手を組んでいる…？…考えていても仕方ねえか…今は相手をやるしかねえ！」

着々と敵を倒していく俺達…。

青葉「いけるぜ！この調子で敵を蹴散らして、ゴーゴンに向かうぞ！」

ディオ「待て、青葉！何か出てくるぞ！」

現れたのは巨大なヴァリアンサー…！！？

カトル「ヴァリアンサー…！！？」

トロワ「だが、サイズが大きい」

な、何だ、この力は…!!?」

青葉「ぐっ…!!?」

ディオ「何だ、これは!!?」

ヒナ「ああっ!」

五飛「カップリングが解除された!」

マスターテリオン「あの巨大ヴァリアンサーの力か…!」

まゆか「おそらくは!何かノイズのようなものがカップリングシステムに介入したと

思われます!」

エルヴィラ「あれもカップリングマシンよ」

リー「だが、単機だぞ!」

まゆか「スタンドアローンモード…!」

フロム「地上のゴーゴン攻略戦でも出てきた奴か!」

エルヴィラ「(ハーン…。あれの特性に気づいたようね…)」

青葉「くそっ!カップリング出来なくても…!」

エフゲニー「そうだ…!それでいい、渡瀬 青葉!」

青葉「俺の名前を知っている…!!?」

ヒイロ「！」

ゼロシステムが発動した…!!??

ヴァン「こいつは…」

ヒイロ「…気をつけろ、青葉」

レイ「奴はビゾン・ジエラファイルだ」

青葉「何っ!!?」

ヒナ「そんな…! さっきの声はどう聞いても老人のものだった!」

エフゲニー「黙れ、ヒナ! お前に俺の苦しみがわかるものか!」

ヒナ「…!」

エフゲニー「そうだ…。俺はビゾン・ジエラファイル…。特異点から弾き出され、70年の時をエフゲニー・ケダールとして生きてきたのだ!」

アルフリード「行政局局长エフゲニーがビゾンだったというのか…」

フリット「特異点から振り落とされたというのは…」

青葉「そうか! あの時だ! 70年前の世界で俺を殺そうとして雛に撃墜された後か!」

エフゲニー「その通りだ…。俺はあの時から復讐を胸に生きてきた…」

ディオ「繰り返される運命に囚われていたのはヒナだけじゃなく、あいつもだったの

か……！」

ヒナ「それでは、現在のビゾンと70年前のビゾンが一つの世界に共存していたという事になってしまう……」

エルヴィラ「やはり、私達の世界は……タイムパラドックスが起こりうる世界だった……」
トビア「タイムパラドックス……？」

まゆか「時間軸の中でその矛盾の事です、本当ならビゾン・ジエラファイルという人間が過去に跳ばされた時点で、その世界は並行世界への分岐が起きるはずです」

リボンズ「つまり、僕とアムロの関係と似ているようなものだ。僕も並行世界のアムロが転生した存在なのだから」

アムロ「いないはずの人間がそこに存在するようになった事は後の歴史へと影響を与える……。つまり、そこでビゾン・ジエラファイルが過去へ跳ぶという事象が発生しない世界が誕生したはずなのに、それが起きている」

カミーユ「時間軸の中でループしているヒナの存在についても同じ事が言えます」

ディオ「ヒナやビゾンの存在は本来ならあり得ないという事か……」

エルヴィラ「そうよ。タイムパラドックスが起こりうる私達の世界は不自然なんだわ」

ハーン「君達の疑問ももつともだよ」

エルヴィラ「ハーン！」

青葉「あれがDr.ハーン……！雛とビゾンが無理矢理カップリングさせた奴か！」

ハーン「過去に何らの形で接触しても並行世界への分岐によりパラドックスは発生しない……。それが一般的な理屈だろうね。だけど、誰かがそれを人為的に制御していたとしたら……？」

千冬「並行世界への分岐を防いで繰り返される運命が起きるようにする……」

一夏「そんな事が可能なのか!?？」

束「それが出来るのは……」

あのラグナメイルは……！

エンブリヲ「そう……。調律者である私だよ」

ネメシス「おー、役者さん総動員だな」

エフゲニー「来たか、エンブリヲ！」

エンブリヲ「ビゾン……。いや、もうエフゲニーと呼んだ方がいいかな。君が魔徒教団から私の存在を聞き、独自に動いていた事は知っていたよ」

エフゲニー「そうだ……。渡瀬 青葉とヒナに復讐するために生きていた俺は俺達の世界の不自然さに気づいた……。その俺に魔徒教団とオニキスはお前の存在を教え、復讐の機会を与えてくれた」

ディオ「では、俺達のアル・ワースが繋がったのは……！」

エフゲニー「俺と魔徒教団の契約のためだ」

倉光「…君は個人の感情で連合とゾギリアの戦いをアル・ワースに持ち込んだのか？」

エフゲニー「全ては俺達の世界を管理するエンブリヲを討つためだ」

青葉「だったら、そう説明しろよ！お前の勝手なやり方のおかげでどれだけの人が迷惑したかわかっているのか！」

エフゲニー「黙れ、渡瀬 青葉！お前とヒナとエンブリヲに復讐するためなら他の人間の事などどうでもいいのだ！」

アルフリード「ゾギリアの変化も…全ては、あの男の私怨のためだったのか…」

エンブリヲ「それにしても君が彼等にも力を提供していたとは思わなかったよ、ネメシス」

ネメシス「言ったはずだぜ。俺はあくまでこの戦いをより面白くするために力を提供しているだけだ。片方だけに力を貸してもフェアじゃないだろう？」

零「戦いは…生命は…ゲームの要素じゃねえんだぞ！」

ヒナ「何故なの…」

エンブリヲ「何かな、雛？」

ヒナ「何故あなたは私達を…私達の世界を歪ませたの!?？」

エンブリヲ「趣味と実益を兼ねてというやつだよ」

青葉「何だと!?!」

エンブリヲ「私は、このアル・ワースという世界に辟易していてね…。だから、新たな世界：私が理想とする世界を創ろうと考えた。その手段として並行世界への分岐の制御の実験をしたかったのだよ」

ディオ「それに俺達の世界を使つたのか！」

青葉「それが実益だとしたら、趣味つてのは何なんだ!?!」

エンブリヲ「その答えは：渡瀬 青葉、弓原 雛…。君達二人にある」

ヒナ「私は：やっぱり弓原 雛だった…」

青葉「どういふ事だ!?!」

エンブリヲ「君達二人の仲睦まじき姿を見てると私の中に悪戯心が芽生えてね…」

アルト「要するにお前は青葉とヒナに嫉妬しえ世界を歪ませたのか！」

リオン「お前という男は：…！」

ミシエル「とんでもない嫉妬野郎だな…！」

エンブリヲ「君達如きの怨嗟の言葉など何の意味も持たない。何しろ私は不死不滅の存在だからね。そして、私はウルトラ一族だ」

ゴークイレッド「なんだと!?!」

「ゴーカイシルバー」「エンブリヲが…ゼロさんと同じウルトラ一族…!?」

「ゴーカイイエロー」「ハツタリもいいところね！あんたはウルトラマンの姿じゃないじゃない！」

エンブリヲ「姿はなれなくとも出身はウルトラ一族なのさ。それに君達の世界に目をつけたのは私の科学者としての興味もある」

エルヴィヲ「それは…!?」

エンブリヲ「答えを教える義理はないな」

エフゲニー「エンブリヲ！あのガラプーシカは、お前を討つための力だ！あれが完成した今、お前を完全に消滅させる！」

エンブリヲ「無駄だよ、エフゲニー。それでも私は復活する。エクスクロスの諸君にも教えておこう。君達の仲間は今、私の用意した異空間の中で死を迎えようとしている」

ユイ「ワタル君達が…!?」

ジェフリー「やはり、別働隊はエンブリヲに囚われていたのか…！」

ドニエル「それも異空間とは…！」

エンブリヲ「私がここに来たのは、私の用意した世界で練り広げられてきた愛憎劇のクライマックスを観に来たんだ。エフゲニー…。知つての通り、私はもう君達の世界の

管理を放棄した。だから、後は好きにやりたまえ」

エフゲニー「渡瀬 青葉とヒナを始末した後はエンブリヲ…貴様を殺す」

エンブリヲ「出来るものなら、やってみるがいいさ」

ネメシス「いいね、いいね！盛り上がってきた！」

零「ネメシス、てめえ…！」

青葉「ふざけるな！俺達をバカにするためにお前はここに来たのか！」

エンブリヲ「それが何か？」

青葉「許さねえぞ！俺達の運命を歪め、俺の仲間を苦しめるお前を！」

ルクシオンネクスト、ブラデイオンネクスト、カルラがヒステリカに近づいた…。

エンブリヲ「カツプリングシステム…。私の恐れたテクノロジ…」

エルヴィラ「え…」

エンブリヲ「だが、それが使えない今、君達では私には勝てない！」

青葉「そんな事、やってみなきゃわからねえだろうが！」

エンブリヲ「無駄な事を！」

何処かから攻撃が放たれた…!!?

エンブリヲ「どこからの攻撃だ!!？」

リボンズ「…漸く、来たか」

現れたのは…ネルガル…!!??

エフゲニー「何っ!!?」

青葉「ゾギリアのカップリング機！」

ヒナ「ビゾン…!あなたなの!!?」

ビゾン「そうだ…。エンブリヲ…!お前を討つために俺もここに来た！」

ハーン「あり得ない!ジエラファイル中尉は、スタンドアローンモードを長時間持続させているのか!!?」

ビゾン「…連合の技術者。今からスタンドアローンモードの稼働データを送る」

データがシグナスに…。

エルヴィラ「これがあれば…!」

ハーン「ジエラファイル中尉…!何をするつもりだ!!?」

ビゾン「俺も…復讐のためにここに来た…。俺の運命を歪めたエンブリヲと俺を利用した俺自身…エフゲニーに！」

エフゲニー「…これも並行世界への分岐の影響か」

エンブリヲ「笑わせてくれる、ビゾン・ジエラファイル!誰かの掌の中で踊っていた君に今更何が出来る!!?」

ビゾン「そんな俺でも一つだけやらなくてはならない事がある…」

エフゲニー「それは何だ？」

ビゾン「ヒナを守る事だ！」

ヒナ「ビゾン……」

エルヴィラ「青葉君！準備が出来たわ！」

青葉「よし……！」

まゆか「スタンドアローンモード、起動！」

青葉「コネクティブ・ルクシオン！」

カツプリングが起動した……！

ハーン「何だと?!？」

エンブリヲ「カツプリングが起動した?!？」

ネメシス「ほう……」

エルヴィラ「カツプリングマシンのシステム内に擬似人格を作り、それに仮想リンクを張る事で単独カツプリングを可能にする……。残念だったわね、ハーン。こちらでもスタンドアローンモードの理論は完成していたのよ」

ハーン「ビゾンの提供したデータがあつたとはいえ、この短時間で構築できたというのか?!？」

エルヴィラ「地上でのゴーゴン攻略戦の時から研究はしてきたのよ。おかげで、あの

巨大ヴァリアンサーのスタンドアローンモードがカップリングを阻害するシステムもすぐにわかったわ。カップリングは、異なるパイロットの思考を同調させるために思考データを素粒子レベルで1ナノ秒未来に送っている。単独でのカップリングでは、自身とリンクしているようなものだから、受信の必要はない。でも、そうすると送信データが余る事になる…。その送信データを発信する事で他のカップリングシステムに介入する…。それがジャミングの正体よ」

弘樹「す、凄え…！何言っているのかさっぱりわからねえ…！」

優香「うーん、取り敢えず、弘樹は黙っておこうか」

弘樹「うぐっ…！」

エルヴィラ「そして、青葉君のスタンドアローンモードで生じた余剰の送信データをぶつけられ、ジャミングを相殺できる！」

ハーン「バカな！そんなものは机上の空論だ！」

エルヴィラ「既にジャミングは相殺されているわ！ディオ、ヒナ！」

ディオ「コネクティブ！」

ヒナ「青葉！」

まゆか「ルクシオンネクスト、スタンドアローンモード解除！」

青葉「アクセプション!!？」

三機がカップリングした…！

まゆか「三機のカップリング成功です！」

ハーン「そんなバカな！私のカップリングシステムが敗れたのか？？」

エルヴィラ「アムロ大尉や刹那君から提供されたサイコミュとクアータムシステムの応用で新しい方式の思考共有システムも起動させたわ。これでジャミングも怖くない」

エンブリヲ「バカな…！そんな事したら！」

青葉「エンブリヲ！」

ディオ「俺達の怒りを…！」

ヒナ「あなたに運命を歪められた人達の悲しみを！」

青葉「受けてみやがれ!!？」

三機はヒステリカに攻撃を仕掛けた…。

青葉「お前だけは絶対に許さねえぞ！ディオ、雛！」

ディオ「わかつている！」

カルラがネクターバレットライフルで牽制した。

ヒナ「私達の力を一つに…！」

青葉「やるぞ…！今がその時だ！」

ディオ「必ずやれる…！」

続けてルクシオンネクストとブラディオンネクストがネクターソードで斬り込んだ。

青葉「これで終わりだ！」

青葉& a m p ; デイオ& a m p ; ヒナ「二はあああつ!!?」

最後は2つのネクターライフルとネクターバレットライフルの斉射でヒステリカにぶつけた。

エンブリヲ「私が…この、私があああつ!!?」

ヒステリカは大ダメージを受けた。

青葉「やったぞ！俺達の勝ちだ！」

三機のカップリング攻撃を受けて、ヒステリカは軽い爆発を起こす。

エンブリヲ「これが…私の恐れたカップリングの力…。だ、だが…まだ、私は負けていない！」

青葉「しぶとい…！」

ビゾン「…」

ネルガルがヒステリカに近づいた…?

デイオ「ゾギリアのカップリング機…！」

ヒナ「ビゾン…?」

ビゾン「ヒナ、俺にこんな事を言う資格はないのかもしれない…。だが、今の一瞬だ

けでいい…。俺に…エンブリヲを倒す力を貸してくれ…!」

ヒナ「…ふふ、やっと昔のビゾンに戻ったわね」

ビゾン「俺はもう戻る事は出来ない…。だが、ヒナの未来を守る事は出来る!」

ヒナ「…ビゾン、カップリングよ!」

ビゾン「!わかった…!スタンドアローンモード、解除!」

ハーン「何を言い出すのかと思えば…ジェラフィル中尉とヒナ・リヤザンのエンファティア波形は合わなかったはずだ!故に彼等のカップリングは出来ない!」

ビゾン「そんなものは…やってみなければわからない!行くぞ、ヒナ…!」

ヒナ「了解よ、ビゾン!」

ネルガルとカルラはヒステリカにちかづいた…。

ビゾン「お前だけは…俺達が終わらせる!コネクティブ・ヒナ!」

ヒナ「アクセプション!」

ネルガルとカルラがカップリングした…!?!?

ビゾン「俺達の力を…」

ヒナ「見せてあげるわ!」

ネルガルがネクターバレットバズーカ、カルラがネクターバレットライフルをそれぞれ撃ち、ヒステリカにダメージを与える。

ビゾン「これが…本当のカップリング…！」

そして、ネルガルがネクターランス、カルラが大鎌で斬りきざんでいく。

ヒナ「これで…」

ビゾン「トドメだ！」

最後に二機は交差するようにヒステリカを斬り裂いた。

エンブリヲ「ぐあああああつ!!？」

斬り裂かれたヒステリカは大ダメージを受けた。

ヒナ「ありがとう、ビゾン！」

ビゾン「これも…ヒナやみんなのためだ」

連続のカップリング攻撃を受けた為か、既にヒステリカはボロボロだった。

エンブリヲ「バカ…な…」

ヒステリカは爆発した…。

エフゲニー「何っ…!!？」

ハーン「バカな…ありえない！何故、カップリング出来たんだ!!？」

エルヴィラ「もしかして…」

まゆか「エルヴィラさん、どうかしたんですか？」

エルヴィラ「青葉君とヒナのエンファティア波形はほとんど同じだった…。つまり、

地上のゴーゴン攻略戦の時にゾギリアの彼とヒナが強制カップリングした事でゾギリアの彼のエンファティア波形が変化した……。だから、ヒナとカップリングする事が出来た……」

ビゾン「俺にも……カップリングが出来た……」

ヒナ「ビゾン……」

ビゾン「ありがとう、ヒナ……。お前のおかげで俺は変わる事が出来た」

ヒナ「ううん、あなたが変わろうとしてくれたから……私達が無事なのよ」

エフゲニー「何故だ……何故、俺には出来なくて、お前には出来たんだ!?? 同じ、ビゾン・ジエラフィルの筈だ！」

ビゾン「違うな……! お前はビゾン・ジエラフィルに戻れなかった……哀れなエフゲニー・ケダールだ！」

エフゲニー「貴様アアアアツ!!?」

青葉「とりあえず、エンブリヲを倒せた！」

ヒナ「でも、エンブリヲの不死身の謎はまだ解明されていない……」

ディオ「今はゴーゴンを止めるのが先だ」

エフゲニー「ハーン! ガラプーシカのエネルギー充填を急がせろ! 発射の制御は俺がやる!」

ハーン「わ、わかりました……！」

ヒイロ「急げ。ゼロシステムの計算では、後3分でゴーゴンは発射される」

アルフリード「エフゲニー・ケダール！ ガラプーシカの発射を止めろ！」

エフゲニー「ミスルギはエンブリヲの造った国だ！ まずはあれを焦土する！」

青葉「そんな事をして何の意味があるんだよ……?!？」

エフゲニー「黙れ！ 全ては、この俺が支配する！ 俺の復讐は、今から始まる！ 70年間抱き続けていた俺の復讐が！」

ビゾン「……エフゲニー・ケダール……。戦いの意味を忘れてしまったお前は、もう俺ではない……」

ヒナ「ビゾン……」

ビゾン「ヒナ……。お前を苦しめた詫び代わりだ。俺も共に戦う」

ヒナ「ありがとう……。幼い頃から私を守ってくれたあなたとまた一緒に戦えて嬉しく思う。でも私は、あなたの想いに……」

ビゾン「それでもいい。お前を守る事が俺の戦いだ」

ヴァン「（へっ、いい顔するようになったじゃねえか）」

レイ「（自らが籠っていた殻を突き破ったか……）」

アルフリード「私はアルフリード・ガラント中佐だ！ 国家を私物化したエフゲニー・ケ

ダールはゾギリアの敵と判断する！」

アルフリード「私に賛同する者はガラプーシカの裏面に回り、そちらからの攻撃を頼む！」

アルフリード「よく戻ってきてくれた、ビゾン」

ビゾン「中佐……。自分は……」

アルフリード「何も言わなくていい。自分の守るべき者のために戦え」

ビゾン「はい……！」

倉光「各機は3分以内にエフゲニー・ケダールを討て！奴を倒し、ゴーゴンを止まるぞ！」

エフゲニー「俺の復讐は誰にも邪魔させない！」

青葉「いい加減にしろ！だったら、俺達の力を合わせてお前を止めてやる！」

エフゲニー「渡瀬 青葉！俺は……俺は!!？」

青葉「行くぜ、みんな！あいつを止めて、ゾギリアとの戦いを終わらせるんだ!!？」
戦闘再開だ！

ガルシエルの攻撃でグバルディアSはダメージを受けた。

ドルジエフ「ゾ、ゾギリアに栄光あれーっ!!？」

グバルディアSは爆発した…。

アルフリード「(ドルジエフ…。最後まで祖国を盲信するしか出来なかったか…)」

〈戦闘会話 零VSネメシス〉

ネメシス「お前は俺を楽しませてくれるのか、零！」

零「お望みなら楽しませてやるよ！だが、楽しませるのは俺だけじゃねえ！」

アスナ「私達がいる事を忘れない事ね！」

ゼフィ「今度こそ、あなたを討ちます！」

零「俺達、ゼフィールスネクサスのパイロット3人で相手をしてやる！」

〈戦闘会話 弘樹VSネメシス〉

弘樹「ノコノコ出てきた事を後悔させてやる！」

ネメシス「気付いた時にはお前が後悔していると思うがな」

カノン「バカにしないでください！私達の力を甘くみないでください！」

弘樹「お前の脅威は零だけではない事を教えてやるよ！」

〈戦闘会話　優香VSネメシス〉

ネメシス「悲しいよな、優香。叶いもしない恋をして、零を追いかけてよ」

メル「あなたという人は……!」

優香「怒らなくていいわよ、メルちゃん。そんなやすい挑発に乗るつもりはないから。でも、女としては許せないわ……。行きましよう、メルちゃん! 零には悪いけど、ネメシスは私達が倒すわ!」

〈戦闘会話　マリアVSネメシス〉

マリア「ハデスを返してもらおうわよ、ネメシス!」

ネメシス「悪いな、こいつの身体はまだ使い道があるからな!」

マリア「人を駒の様に使うだなんて……あなただけは絶対に許さないわ!」

俺達の攻撃でアルガイヤ・ノヴァにダメージを与えた。

ネメシス「ふう……。今日はここまでにするか……。面白いものもたくさん見れたしな」

零「ネメシス……!」

ネメシス「そう焦るなよ、零。また、次に会おうぜ、あばよ！」
アルガイヤ・ノヴァは撤退した…。

弘樹「あいつの態度…人を小馬鹿にしている様で腹が立つ…！」

零「相手にするな、弘樹…。あいつの性格上改善は難しいだろうからよ」

何故、父さんの身体を返さないんだ…？まだ、何か利用する必要があるってのか…？

〈戦闘会話　フリットVSエフゲニー〉

フリット「よもや、歳を取ってまで復讐心にかられるとはな…。やはり、お前は私と似ている」

エフゲニー「黙れ！貴様と一緒にするな！俺は…俺はこの手でヒナと渡瀬　青葉を殺す！」

フリット「愛する女にまで手を染めようとするのか…。ならば、お前は私が止める！」

〈戦闘会話　ヴァンVSエフゲニー〉

ヴァン「お前の気持ち…少しはわかるぜ。大事な女を取られたら腹が立つよな」

エフゲニー「理解しているのならば、俺の邪魔をするな！」

ヴァン「そうはいかないね。青葉やカップラーの女には世話になった身だ。それに復讐で関係のない人間を殺してんじやねえよ！お前の根性…叩き直してやる！」

〈戦闘会話　レイVSエフゲニー〉

レイ「貴様はそこまで…。やはり、変われなかったか」

エフゲニー「何を知った様な事を！」

レイ「復讐のためなら人間をやめる…お前は本当に俺に似ている…。だが、アル・ワースにはカギ爪もいる…。奴を殺すのは俺だ！レイ・ザ・バレルの代わりに俺が相手をしてやる！」

ルクシオンネクストの連携攻撃でカルキノスにダメージを与えた。

エフゲニー「これしきの攻撃で…！」

アルフリード「諦めが悪いな…！」

ディオ「青葉、ヒナ！もう一度、三機のフォーメーションで行くぞ…！」

青葉「…」

ディオ「おい、聞いているのか、青葉！」

ヒナ「青葉……？」

青葉「なあ……。俺とヒナのエンファティア波形が同じって事は四機でカップリング出来るんじゃないか？」

ヒナ「え……」

エルヴィラ「……確かに……！エンファティア波形が同じ青葉とヒナがそれぞれカップリングして、青葉とゾギリアの彼がカップリングすれば、四機でカップリング出来るかも知れないわ！」

ディオ「お前は何という事を考えるんだ……」

青葉「だけど、やってみる価値はあるだろ？」

ヒナ「でも……」

ビゾン「……」

青葉「あ、悪い……。俺なんかとカップリングしたくないよな……」

ビゾン「……誰が嫌だと言った？」

青葉「え……」

ビゾン「それで奴を倒せると言うのならやるぞ、渡瀬 青葉」

ヒナ「ビゾン……」

ビゾン「だが、少しでも遅れたら置いていくぞ」

青葉「それはこっちのセリフだ！」

ディオ「…」

ヒナ「嫉妬？ディオ」

ディオ「そ、そんな事はない！」

青葉「それじゃあ行くぜ、みんな！」

ルクシオンネクスト、ブラディオネクスト、カルラ、ネルガルがカルキノスに攻撃を仕掛けた…。

青葉「お前は…俺達が倒す！行くぞ、ディオ、ヒナ、ビゾン！」

ディオ「四機のフォーメーションだ！」

ヒナ「私達は…負けない！」

ビゾン「では、いくぞ！」

四機はそれぞれ動き出す。

ディオ「青葉、まずは俺達だ！」

青葉「ああ！コネクティブ・ディオ！」

ディオ「アクセプション！」

ルクシオンネクストとブラディオネクストがカップリングして、カルキノスの周り

を飛び、ネクターライフルを撃ちまくり、ネクターソードで斬り裂いた。

ヒナ「次は私達よ、ビゾン！」

ビゾン「行くぞ、ヒナ！コネクティブ・ヒナ！」

ヒナ「アクセプション！」

ネルガルとカルラもカップリングして、ネクターバレットバズーカとネクターバレットライフルを撃ち込み、ネクターランスと大鎌で斬り刻む。

ディオ「今だ！」

ヒナ「青葉、ビゾン！」

青葉「コネクティブ・ビゾン！」

ビゾン「アクセプション！」

ディオ「これが…真のカップリング…！」

ビゾン「負けるはずがない！」

四機はカップリングを発動、その機動性を利用して、それぞれネクターソード、ネクターランス、大鎌で斬り裂いていく。

ヒナ「連合とゾギリアのカップリング機の力…！」

青葉「その身で味わいやがれ！」

最後にルクシオンネクストとブラディオネクストはネクターライフルを、カルラは

ネクターバレットライフルを、ネルガルはネクターバレットバズーカを構え、発射した。

青葉& amp; デイオ& amp; ヒナ& amp; ビゾン 「「はあああああつ!!?」「」
エフゲニー「ヒナアアアツ! 渡瀬 青葉あああつ!!?」

銃撃と実弾を受けたカルキノスは大ダメージを負った。

ビゾン「俺達は進む…!」

青葉「例え違った道でもな!」

四機のカップリング攻撃を受けたカルキノスは吹き飛ばされる。

エフゲニー「う、うああああああつ!!?」

まゆか「四機のカップリング…成功です!」

エルヴィラ「本当に凄いわね、彼等は!」

エフゲニー「お、おのれえええつ!」

青葉「お前の気持ち…ちよつとはわかるよ。ざつと雛を見つめてきてさ…」

エフゲニー「ううう…渡瀬 青葉あああつ!!?」

青葉「だけど、お前が守りたかったのは自分のプライドとエゴだ!」

デイオ「だが、俺には…俺達には守りたいものがある!」

エフゲニー「お、俺は…滅びるのか…!!?ならば…!」

アネッサ「敵攻撃衛星に高エネルギー反応!」

まさか…ゴーゴンが発射されるのか…!!?

レーネ「ゴーゴンの発射までにはまだ時間があるはずだ!」

エフゲニー「衛星に貯蔵されていた三年分のネクトオリビウムを一気に解放した!これでガラプーシカは限界を遥かに超えた出力でアル・ワースに向けて発射される!」

ハーン「バカな!そんなエネルギー量にこの衛星自体が耐えられるわけがない!」

エフゲニー「ハーン!アル・ワースだけは、この手で滅ぼす!お前も一緒に死ぬ!」

ハーン「くそつ!ふざけるな!私はこんな所で死んでいい人間ではない!私の頭脳と私の研究は、こんな所で!」

エフゲニー「これが俺の復讐だ!ハハハハハ、ハハハハハ!」

狂ってやがる…!

青葉「お前は!」

エフゲニー「渡瀬 青葉!自らの無力さを嘔み締めろ!ハハハハハ、ハハハハハ!」
カルキノスは爆発した…。

ハーン「嫌だ…死にたくない…助けてくれ!」

エルヴィラ「ハーン…」

青葉「最後までエゴを撒き散らして!」

ディオ「こうなったら衛星を破壊するしかない!」

アムロ「今からで間に合うのか…!!?」

カミーユ「それにあれだけのエネルギーの塊を破壊したら…!」

青葉「それでもやるんだ! カップリングマシンなら、きつと!」

ディオ「俺と青葉なら、跳べるはずだ!」

ハーン「ムダだよ…。もう…3秒しかない…」

零「諦めるんじゃない! 俺達は何とかする!」

青葉「やるぞ、ディオ!」

ディオ「いつでもいいぞ、青葉!」

青葉「見せてやろうぜ! 俺達には無限の可能性があるって事を!」

この力は…!

ヒナ「何が起きているの!!?」

零「動けるのは俺とヒナとホープスだけか…」

ホープス「今、私と零とヒナ様は停止した時間の中にいるのです」

ヒナ「どういう事!!?」

零「性格には青葉とディオの二人が時間を跳んでいるのを俺とヒナのホープスが観測しているって事だ」

ホープス「カップリングシステムは思考をタイムラグなしで同期するため、素粒子レ

ベルで信号を1ナノ秒未来に送っています。それがサイコミュとGN粒子を使用する事により、二人の思考シンクロはその信号の交換を必要としないレベルに達しています。0秒から0秒へ信号を送る…。だけど、1ナノ秒未来へ送るといふ事象を補完するため…1ナノ秒ずつ受信者と受信機…この場合、青葉様とデイト様を機体ごと過去に送っているのです」

零「それを絶対的な位置から見れば、まるで時が止まっている…いや、時が戻っているように見えるだろう」

ヒナ「そんな事が本当に起きるんですか…?」

ホープス「私達は起きた事をお伝えしたまでです。ですが、これこそがカップリングシステムの真の力と言うべきものです。これを応用すればタイムリープなどの時空制御すら可能となる…。それこそがエンブリヲの恐れたものでしょう」

ヒナ「エンブリヲが私達の世界を管理したのはカップリングの研究が、いつか自分の存在を脅かすからだったのね…」

ホープス「今、青葉様とデイト様は1ナノ秒過去に戻るジャンプを何百万回と繰り返しています」

零「この時の狭間で二人は世界を…みんなを救うために気の遠くなるような戦いをしているんだ」

ホープス「零、行くなら今しかないぞ」

零「わかつている！」

ヒナ「何をする気ですか!?!」

零「ハーンって男を助ける！」

ヒナ「でも……」

零「確かにあいつはお前にもビゾンにも……俺達にも許されない事をした……。だが、それでも、見捨てていい生命なんてない！」

ヒナ「零さん……」

ホープス「急げよ、零。少しでも遅ければ、爆発に巻き込まれるぞ」

零「行くぜ！」

俺はゴーゴンの中に入った。

青葉「うおおおおおっ!!?」

ディオ「ぐおおおおおっ!!?」

ヒナ「青葉! デイオ！」

青葉「いつけえええっ!!?」

俺はハーンを連れ、外に出るとゴーゴンは爆発した……。

零「な、何とか間に合った……。ふう、死ぬかと思った……」

ホープス「そのまま巻き込まれれば良かったのにな」

零「…なんか言ったか、腹黒オウム？」

ホープス「気にするな」

それよりも…ゴーゴンがあつた場所に特異点が現れたな…。

ヒナ「あれは…!?」

ホープス「青葉様とディオ様はゴーゴンの爆発エネルギーを制御して特異点を開きました」

ヒナ「あれは…どこに繋がっているの？」

青葉「エンブリヲの造つた異空間だ」

ヒナ「え…!」

ディオ「気の遠くなるような時間跳躍の中で俺達は次元の狭間にあるエンブリヲの異空間で戦う仲間の声を聞いた」

青葉「決して諦めない、みんなの想いが時空を越えて、俺達に届いたんだ」

ディオ「ガラプーシカの爆発を奴の空間と接触させる事でそこへの入り口となる特異点が生まれた」

青葉「行くぞ、ヒナ！神様気取りのエンブリヲにカップリングの…俺達の力を見せてやるんだ！」

ヒナ「はい……！」

ビゾン「俺も行くぞ……！」

ヒナ「ビゾン……！」

ビゾン「動けるのに時間がかかったが、何とか間に合ったようだな。俺にも行く責任はある」

青葉「わかった！四人で行こう！」

ホープス「お気をつけて、皆さん」

零「別働隊のみんなを頼むぜ、四人共！」

青葉「じゃあ、ちよつと行つてくるぜ！」

四機は特異点の中へ入り……少ししたら出てくると周りの時間が動き出した。

ベルリ「青葉、ディオ!!？」

アルト「大丈夫か、お前等!!？」

一夏「え……!!？」

箒「ゴーゴンが！」

ラウラ「完全に破壊されている……」

カミーユ「発射された形跡もない……」

倉光「僕達は……夢を見ているのかな……」

ハーン「い、一体何が…所でここは…？」

アスナ「え…どうしてこの男がゼフィルスネクサスの中に…!?？」

零「お目覚めかよ、マッドサイエンティストさんよ」

ハーン「私は…ガラプーシカ内にいたはずだ…それなのになぜ…」

零「奇跡が起こったんだよ」

ハーン「君が…助けてくれたのか？」

零「さあな」

ハーン「…ありがとう…本当にありがとう…！」

零「その代わり、罪はしっかりと償えよ」

ハーン「ああ…！」

ゼフィ「パパ…格好いいです！」

ゼフィの笑顔を見て、俺はゼフィの頭を撫でた…。

アマリ「え…え…?？?？?？?？?？?？?？?？」

ホープス「零の言葉を聞いていなかったんですか、マスター? 奇跡が起きたんです。

人の力による奇跡が」

ディオ「零さんやホープスの言う通りだ」

青葉「ついでと言っては何だけど、別働隊の危機も救ってきたぜ」

エンネア「どういう事!?？」

マスターテリオン「お前達は…」

ヒナ「そうです。私達…時間の中を旅してきたの」

アマリ「よくわからないけど、何とかなったって事ですね」

アムロ「(人はいつか時間さえも支配する…か…)」

青葉「ありがとうよ、ディオ…。お前がバディじゃなかったら、奇跡は起きなかった…」

ディオ「…一度だけ言うぞ、青葉。お前に会えて良かった」

青葉「こいつ…! そういうのは何度言ってもいいんだぜ!」

ヒイロ「青葉、ディオ、ヒナ、ビゾン…。ゼロが言っている…。お前達は運命を越えて、未来へ向かっている…と」

ビゾン「未来…」

青葉「そうかもな…」

ノイン「切り札であるゴーゴンと指導者であるエフゲニーを失った以上、ゾギリアは終わりだろう」

ゼクス「だが、まだ戦いは続くようだ」

ジツト団のモビルスーツが現れた…!

フロントル「ジット団か…！」

ヤザン「ゾギリアを相手にして随分と消耗してるようだな、エクスクロス」

ラカン「だが、手加減はせんぞ」

キア「悪いが、ここでお前等を叩き、俺達は元の世界へレコンギスタさせてもらう
いい加減休ませてくれよ…！」

倉光「一難去つて、また一難…。連戦になるか…」

スメラギ「各機は一度、帰還して応急処置と補給を済ませて！」

ベルリ「これがレコンギス軍と最後の戦いとなるのか…」

俺達は連戦に備えるために帰還した…。

―導師キールデインです。

導師キールデイン「！」

セルリック「何を驚いておられるのかな、導師キールデイン？」

導師キールデイン「無礼であるぞ、法師セルリック！この地に足を踏み入れる事が許されるのは代々の導師だけだ！」

セルリック「無論、存じ上げております」

導師キールデイン「お前には前線を預けはしたが、ここ最近の勝手な行動は目に余る」

セルリック「私は教団の理念に従って、行動したままです」

導師キールデイン「我々のすべき事は戦乱のコントロールであり、戦乱を起こす事ではない」

セルリック「それを決めたのは誰です？」

導師キールデイン「それは……」

セルリック「……」

導師キールデイン「まさか、お前は……」

セルリック「考えてみれば、教主の任命を持つ必要などなかったわけです。教団の中で智の神エンデに最も近いものは、既にあなたではなく、この俺なのだから」

導師キールデイン「や、やめろ……」

セルリック「ようやく気づいたようだな。既に自分が用済みである事に。そう……世界は生まれ変わる。ドアクダーもエンブリヲもオニクス……いや、ネメシスも、そして、エンデもそれを望んでいる。そのエンデが選ぶのは、この俺……セルリック・オブシディアナだ」

導師キールデイン「法師セルリック……！ いや、教主セルリック……！ 私に慈悲を！」

セルリック「それこそエンデのドグマに反するものだ」

導師キールデイン「な、何故です!?？ 私は導師としてエンデの声を聞き、職務を果た

してきたのに！」

セルリック「理由が欲しいか？ならば、くれてやる。お前は目障りなんだよ……！EX HALATIO！」

導師キールディン「ああああっ!!？」

私が…消えるなんて…！

ーセルリック・オブシディアンだ。

セルリック「エンデの名と教団の歴史を盾に取れば、俺達が黙ると思うなよ、ペテン師め……」

ネメシス「おーおー、今までの導師は消すなんて、怖い事をするな？」

ネメシスか……

セルリック「情などに意味はない。これで名実共に俺が、魔従教団のトップだ……。後は好きにやらせてもらう」

ネメシス「そうだったら、これからは教主セルリックと呼んだ方がいいのか？」

セルリック「そうだな、それもいいが……。まずは目的を果たしてからだ。待っている、アマリ・アクアマリン……。お前ともいわずれ決着をつけてやるぞ……」

そう言い残し、私はこの場を去った……

ネメシス「(全て、お前の思い通りかよ…。ますます、面白い事になりそうだな。なあ、エリデさんよ…) お前さんもそろそろ働き時だな、ヨハン」

ヨハン「…ふふっ」

「アクトス・ギルだ。

ゾギリアが終わったか…。

ワルズ・ギル「父上、ゾギリアが潰されたようですよぞ！」

アクトス・ギル「そのようだな…。今、エクスクロスはジット団との決戦を迎えようとしている」

ワルズ・ギル「ならば、我々も参戦しましょう！インサーンを倒した憎きエクスクロスを今この手で…！」

アクトス・ギル「いや、その必要はない。ジット団は負ける…。(そう…所詮は人間同士醜い戦争なのだから…)」

第68話 光る風の中

―新垣 零だ。

俺達は一度、帰還し、外にいるジット団を迎え撃つためにそれぞれの艦は慌ただしく準備をしていた。

このシグナス内もそうだった。

ドン「手の空いている奴はヴァリアンサー隊のチェックに回れ！想像以上にダメージを受けてるぞ！急げ！敵はもう目の前にいるんだ！補給が終わった機体から出すぞ！」

エルヴィラ「忙しいわね、もう……！」

ハーン「カップリングシステムの調整だろう？僕にも手伝える事があるはずだ！」

エルヴィラ「…手伝ってくれるの？」

ハーン「こんなもので罪を償えるのと思わないが、動かないよりかはマシだ」

エルヴィラ「頼りにしているわ、ハーン」

アマリ「…じゃあ、エンブリヲの異空間に囚われていた別働隊は……」

青葉「もう大丈夫のはずです」

ディオ「俺達の開けた特異点によって閉鎖された空間であったエンブリヲの拠点……真

実のアルゼナルは崩壊を始めました。奴の不死身の秘密は並行世界の分岐点である、その空間から自らの可能性を引き出していたんです」

バナージ「よくわからないけど……」

青葉「要するにエンブリヲのスペアが何人もいて、一人が死んだら、完全に記憶や経験を共有した次が出てくるだけだったんだ」

ディオ「だが、あの空間が崩壊した以上、もうスペアを呼ぶ事は出来ない」

青葉「あいつ等なら、残ったエンブリヲを倒して、あの空間から脱出できるさ」

九郎「だけど、カップリングシステムに時空を制御する力があるなんてな……」

ディオ「現時点で安定性も確実性もありませんが……」

青葉「今回うまくいったのはサイコミュとGN粒子のサポートと火事場の馬鹿力のおかげだよ。とてもじゃないが、もう一回同じ事をやれって言われてもお手上げだ」

アムロ「今はそうかもしれないが、未来はわからない……」

シヤア「エンブリヲが恐れていたのはカップリングシステムだけではない……。君達を持つ可能性もだ」

青葉「可能性か……」

ディオ「先の事はわからない……。だが、その未来に進む為にも俺達は今を乗り越えていかなければならない」

ベルリ「行こう……！レコンギスタ軍との戦いを終わらせる為に！」

ヒナ「ビゾン……」

ビゾン「お前は何も気にする事はない。全ては俺の……エフゲニー・ケダールの弱さが招いた事だ」

ヒナ「でも……」

ビゾン「……お前に一言だけ言わせてくれ。すまなかつた」

ヒナ「ありがとう、ビゾン……。私はあなたにずっと守られてきた……」

ビゾン「子供だったんだ、お前も俺も……。これからは奴に……渡瀬 青葉に守ってもらえ」

青葉「お前……」

ビゾン「渡瀬 青葉……。ヒナを頼むぞ」

青葉「約束する。いつか、俺達の世界に還るまで、ヒナは俺が守る」

ヒナ「青葉、ビゾン……」

アルフリード「一人の少女を守る為に連合とゾギリアの男が手を取り合う光景を拝める事となるとはな……」

ビゾン「アルフリード中佐……!?」

ヒナ「タルジムとラーシャも……！」

タルジム「よう、さつきぶりだな、二人共！」

ラーシャ「ビゾン…今の君、すごく格好いいよ」

ビゾン「3人はゾギリアを纏める為に戻ったのでは…？」

アルフリード「実はな。マルガレタ特務武官殿がこちらは任せて、我々はエクスクロスに同行しろとの通達が来たんだ」

ヒナ「という事は…」

アルフリード「我々もエクスクロスの一員になるという事だ。既に倉光艦長の許可は取っている。微力ながら、よろしく頼む」

ディオ「あのアルフリード・ガラントが味方となるとはな…心強いな」

ゼクス「こちらこそ、よろしく頼む」

アルフリード「まさか、君と肩を並べて戦う日が来ようとは…運命というのは何が起るかわからないな」

ゼクス「まったくもってそうだな」

ビゾン「では、行くぞ…！」

青葉「ああ…。まずは、この世界を守る為に」

第68話 光る風の中

応急処置と補給を済ませ、俺達は出撃した…。

キア「出てきたな、エクスクロス」

シヤア「キア・ムベツキ…。我々の準備が整うまで仕掛けてこないとはどういうつもりだ？」

キア「俺達は魔従教団にお前達の始末を命じられたただけだ。その方法は問われてない」

ヤザン「そういうわけなんで俺達の流儀でやらせてもらうってわけだ」

カミーユ「正々堂々と戦うとでもいうのか…！」

キア「欲しいものは力尽くでも手に入れる…。だが、汚いやり方をすれば、心にシミが残るんでな」

ゴーカイレッド「へっ、その考えは嫌いじゃないぜ！」

青葉「待ってくれ！ゴーゴンは破壊されたけど、もしかすると生きてる人間がいるかも知れない！」

クン「こちらでも生体反応は確認している」

シーブツク「ならば、まず救助を…！」

キア「スポンサーもお待ちなんで、そうも言つてられん。心配しなくても救助隊はこちらで手配した。安心して俺達を迎え撃てよ」

零「取り敢えず、心配はしなくていいようだな」

ベルリ「悪い人ではないかも知れないけど、やっぱり、いい人とも言えない……！」

グレミー「キア・ムベツキ！元の世界に帰る事が目的ならば、エクスクロスと手を取り合うんだ！」

ヤザン「グレミー坊ちゃんは、あちらについたか」

ラカン「結局は甘さを据えられんかったようだな」

キア「悪いな、グレミー。俺達は自分の手で欲しいものをつかみ取りたいんだ。だからと言つて、今までやってきた事を捨てて、敵に尻尾を振るなんてのも性に合わんのさ」

トビア「戦うしかないのか……！」

キア「そういう事だ！お前等を叩いて、俺達はレコンギスタを遂行する！」

ラカン「決着をつけるぞ、エクスクロス！」

ヤザン「これが最後の戦いだ！ここにいないイオクの坊ちゃんの分まで、お互いに全力を尽くそうぜ！」

ジユドー「力でしか、物事を解決できない分からず屋め！」

ベルリ「でも、あの人達を止める事で戦いが終わるなら……！」

アイーダ「そうです、ベル……！」

ベルリ「やるしかない……！ここでレコンギスタ軍との戦いを終わらせる為にも！」
俺達は戦闘を開始した……。

戦闘開始から数分後の事だった……。

ベルリ「この感覚……！来る！」

カバカーリーか……！

マニイ「マスク！」

キア「お前も来たか、マスク」

マスク「すまん、キア・ムベツキ……。俺は好きにやらせてもらう」

キア「構わんさ。己の心の命じるままにやるがいい」

ヤザン「俺達も似たようなものだ」

マスク「自由という事か……」

バララ「ベルリ・ゼナムと戦うんだね、マスク？」

マスク「今の俺に残されているのは、それだけだ」

マニイ「ここで負けたら、その執念から解放される？」

マスク「それはわからない……」

ベルリ「わからないんなら、試してみればいいんですよ」

マスク「ベルリ・ゼナム……」

ベルリ「あなたが何を考えているかなんて、僕にはどうでもいいです。でも、ここでレコンギスタ軍との戦いは終わりです！あなたとの戦いも終わらせませす！」

マスク「貴様という男は、どこまでも自分勝手に好き放題で……！自由なんだ……」

マニイ「マスク……」

マスク「決めたぞ、マニイ！俺は、この戦いで全てを吹っ切る！クンタラも飛び級生も全てをだ！」

マニイ「頑張つて、マスク！」

ノレド「ちよつとマニイ！敵を応援するのは……！」

アイーダ「許します。勝つのはベルですから」

ノレド「言つときますけど、あたしだってベルが勝つて信じてますから！」

ベルリ「来い、マスク大尉！最後なんだから、あなたの全てを吐き出してください！」

マスク「行くぞ、ベルリ！私の全てを懸けて、お前を越えてみせる！」

頑張れよ、ベルリ……！

〈戦闘会話　ハマーンVSラカン〉

ハマーン「ラカンか…」

ラカン「ハマーン様…愚かな私を笑いますか？」

ハマーン「いいや、笑わないさ。お前は愚かだが、勇ましい男だ…。私にはそれがわかる」

ラカン「私は…あなたに忠誠を誓ってよかった…。だが、手加減はせん…！」

ハマーンさんのキュベレイがラカンの乗るドーベン・ウルフにダメージを与えた。

ラカン「ちいっ…！ここまでなのか…！」

グレミー「投降しろ、ラカン！私が責任を以て、お前を受け入れる！」

ラカン「申し出はありがたいが、俺にもプライドというものがある。投降はせん！連中に頭を下げるぐらいならば、この世界で生きていく道を探すわ！」

ラカンの乗るドーベン・ウルフは撤退した…。

グレミー「ラカン…」

ジユドー「放っておけよ、グレミー。それがあいつの選んだ道なんだから」

「Zガンダムがハンブラビにダメージを与えた…。

ヤザン「ちいつ！これ以上は無理か！」

カミーユ「投降しろ、ヤザン！お前は元の世界に帰りたくないのか！」

ヤザン「…お前等と違って、俺はこの世界をそれなりに気に入ってるんだ」

カミーユ「え…」

ヤザン「じゃあな、カミーユ！また会えたら会おうぜ！俺は、ここで好きにやらせてもらうぜ！」

ハンブラビは撤退した…。

カミーユ「ヤザン…」

ビーチャ「よくわからないけど、ヤザンさん…ずっとアル・ワースで生きていくつもりか…」

エル「そうみたいね…」

ジウドー「自由過ぎるな、あの人は…」

Hイーレガンダムは攻撃でa・アジールはダメージを負った。

クン「ここまでか……！」

キア「後退しろ、クン！」

クン「しかし、隊長を残しては……！」

キア「お前にはレコンギスタより何よりやつてもらわなくちゃならん事がある！」

クン「……わかりました。隊長もご無事で」

a・アジールは撤退した……。

キア「頼むぜ、クン。俺達の子供のために」

ダハックがジャイオーンにダメージを与えた……。

キア「俺はレコンギスタを遂行するまでは死ぬ気はないんだよ！」

ジャイオーンは撤退した……。

ベルリ「逃げた！」

クリム「キア・ムベツキ……。面白い男だった」

シヤア「団員達は、あの男に全幅の信頼を寄せている。彼の考え次第でジット団との

戦いは終わるだろう」

G―セルフの攻撃でカバカーリーはダメージを負った…。

マスク「何故だ…?!? 何故、私は勝てないのだ!」

ベルリ「そんなマスクを被っているからですよ!」

マスク「何っ?!?」

ベルリ「もつと自分を曝け出さなきゃ本気なんて出せるもんじゃありません! 後ろめたさを抱えたまま戦っている人に負けるわけじゃないんですよ!」

マスク「…そんな簡単な事だったのか…」

マスク「マスク!」

マスク「俺は…バカだったよ…」

カバカーリーは撤退した…。

バララ「これで終わりなの、マスク…」

マニイ「ううん…。必ず戻ってくる…。(信じていいよね、ルイン…)」

これで全部の敵を倒したな!

メル「敵部隊の壊滅を確認しました!」

ベルリ「これで戦いは終わるんですね……！」

シーブック「みんな、よけろ！」

と、突然の砲撃……!!?

トビア「何っ!!?」

セシリー「この感覚は……！」

現れたのは……ラフレシアのようなモビルアーマー……!!?

シーブック「鉄板面のモビルアーマー！」

ケルベス「その鉄板面ってのは何者だ!!?」

トビア「宇宙世紀でシーブックさん達と戦ったクロスボーン・バンガードの指導者で

す」

リディ「あのモビルアーマー、ヘルメスの薔薇の設計図で復元されたのか！」

アンジェロ「乗っているのは、ジツト団の者か……!!?」

シーブック「違う……！」

セシリー「あれに乗っているのは……！」

鉄板面「久しぶりだな、ベラ」

セシリー「やはり……」

シヤア「鉄板面カロッゾ・ロナ……！お前もアル・ワースに来ていたのか！」

アムロ「奴はアクシズでの戦いで、シーブックに倒されたはずでは……！」
鉄仮面「シヤア・アズナブル、アムロ・レイ……。お前達もここに居るのだ。何も驚く事はない」

シヤア「……クンパ・ルシータの所には私とアムロとトビア、バナージや姫様の他にも異界人の客人がいた気配があつたが……」

アムロ「それが、あの男だと……?!?!」

鉄仮面「その通りだ。あの男は私にラフレシアを用意し、戦いの全てを共に観察してきた。だが、奴の思想は生ぬるいとしか言い様がない」

シーブック「何っ?!?!」

鉄仮面「弱肉強食の摂理を説くのなら、より徹底的な手段が必要なのだ」

あれつて……ミスルギが使つていた殺戮兵器か……!!

フア「あれは……?!?!」

ルー「ミスルギの使つていた無人兵器!」

セシリー「まさか、それをバグの代わりに?!?!」

鉄仮面「察しが早いな、ベラ。お前の予想通りだ。バグ以上の殺傷能力を持つ、あの兵器こそ新たなラフレシア・プロジェクトの中核を成す」

シヤア「ラフレシア・プロジェクト……。増えすぎた人類の半数以上を抹殺し、残った

者を統治する計画……」

ベルリ「何だつて!?!?」

青葉「あいつ、そんな滅茶苦茶な事をやろうとしているのか!?!?」

鉄仮面「このアル・ワースで私は宇宙世紀の未来と全ての世界に共通する人類の愚かさを知った。それを正しく導くにはまず人類の数というものを制限する必要がある事を再認識した」

シーブツク「お前は元の世界に戻り、再び悪魔の計画を実行するつもりか!?!?」

鉄仮面「魔徒教団との契約も完了している。レコンギスタ軍の残党も私が統べる事になるだろう。もつとも……私とラフレシアがあれば、他の人間は必要はないがな」

マリーメイヤ軍のモビルスーツか……!

ゼクス「マリーメイヤ軍のモビルスーツ!」

ノイン「パイロットの生体反応はない……!」

カトル「では……!」

ヒイロ「あれは……モビルドールだ」

鉄仮面「革命の世界の技術を使用させてもらった。これがあれば、私一人でラフレシア・プロジェクトを遂行できよう」

あの男……何故、革命の世界という言葉を知っているんだ……?

デュオ「くそっ！変な所で勉強熱心な野郎だぜ！」

五飛「言い換えれば、奴は複数の世界の悪意を束ねる存在だ！」

フロンタル「クンパ・ルシータめ……！このような男に力を与える事の危険性がわからなかったのか！」

鉄仮面「では、お前達に新たなバグの力を見せてやろう」

また殺戮兵器が増えた……!!?

ビゾン「奴の狙いはガラブーシカか！」

アルフリード「まずい……！あそこではまだ救助作業を行なっている……！」

鉄仮面「あそこにいる人間は敗残者だ。既に必要ない。不要な人間は抹殺する！」
すると、ジャイオーンが現れた。

キア「そうはさせせん！」

ジャイオーンの攻撃でゴーゴンの残骸に集まっていた殺戮兵器は破壊された。

クリム「キア・ムベツキ！」

ミック「あの男……救助隊を助けたのか！」

キア「当然だ。あそこには俺の部下もいる。何より人の生命を虫けらのように奪うような男にレコンギスタ軍を預けるわけにはいかん」

鉄仮面「愚かな男だ。この私に刃向かうつもりか？」

キア「俺は邪魔者は排除するが、生命そのものを邪魔だと思つた事はないんでな」
シヤア「手を貸してくれるのか？」

キア「その代わりと言つてはなんだが、残つたジツト団の連中の受け入れは頼むぜ」
アイーダ「わかりました。アイーダ・スルガンの名の下、約束しましょう」

鉄仮面「何故、理解できないのだ！人類を管理し、導く者が必要であることを！」
ハンブラビ、ドーベン・ウルフが現れた。

ヤザン「楽しそうな事をやっているじゃねえか！」

ラカン「我々も混ぜてもらおうか」

カミーユ「ヤザン！」

ジュード「ラカンまで……！」

さらにカバカーリーも現れる。

マスク「……見せてもらったぞ。本物の支配者……独裁者というものを」

バララ「マスク！」

マニイ「全て吹っ切れたんだね！」

マスク「完全に……というわけではないがな」

鉄仮面「ヤザン・ゲール、ラカン・ダカラン、キャピタル・アーミイのマスク！お

前達も私を否定するのか！」

ヤザン「お前の事などどうでもいいんだよ」

ラカン「だが、その上から目線は気に食わんがな」

マスク「お前は…その仮面の下に何を隠している…？」

鉄仮面「何っ!?？」

マスク「過去か…？それとも、か弱い自分か？どちらにしても、マスクを被っているような奴にロクな人間はいないな！」

ゼクス「クザリと来るものがあるが…」

グラハム「あの青年の言う通りだな」

ゼハート「筋が通っている」

フロンタル「(いい加減、私も外してみるか…うー)」

シヤア「彼も仮面やマスクの呪縛から解き放たれたか」

マスク「そんな男に支配者面をされては世界は何も変わらない！」

マスクの奴がマスクを取った…！

ノレド「え…！あれってキャピタル・ガード養成学校の…！」

ベルリ「ルイン先輩！」

マスク「いや…俺はキャピタル・アーミイのマスクだ」

すぐにマスクをつけるなよ、マスク…。

マスクのマスク：「ややこしいな！」

マスク「俺は自分と世界を変えるためにあの鉄マスクと戦う！」

ベルリ「ありあとあす、マスク先輩！」

ケルベス「それでいい！歓迎するぞ、マスク生徒！」

ジユドー「ヤザンさん、ラカン：。二人も一緒に戦ってくれるのか？」

ヤザン「この世界が気に入っていると云ったが、やはり、元の世界に帰りたくてな」

ラカン「だが、勘違いするな。お前達に投降する気はないと言ったはずだ」

バナージ「ほ、本当に自由な人達ですね：」

鉄仮面「おのれ！」

シーブック「鉄仮面！生命の意味のわからないお前の居場所はこの世界にもない！」

セシリー「私達はあなたを止めます！その歪んだ思想と共に！」

鉄仮面「所詮、凡人に理解を求めても無駄という事か！」

トビア「偉そうに！お前のような奴が選ばれた貴族だというなら、俺はずっと凡人の

ままでいい！」

アムロ「今こそ、俺達の手で終わらせる！」

カミーユ「宇宙世紀からリギルド・センチュリーまでを巻き込んだ、この戦いを！」

ジユドー「そして、守ってみせる！」

バナージ「世界を…生命を！」

ベルリ「前へ進んでいく！戦いの向こうにある未来を！」

シーブック「鉄仮面！お前という悪意の源を叩いて！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　バナージVS鉄仮面〉

バナージ「人類を殺すなんて…そんなの認められるはずがありません！」

鉄仮面「何もわかっていない！私の理想を理解できぬ者に生きている資格はない！」

バナージ「あなたは神でもなんでもない…。ただのエゴを撒き散らす化身だ！」

〈戦闘会話　マスクorシャアorフロントalorグラハムorゼクスorゼハートVS鉄仮面〉

マスク「よもや、マスクや仮面をしていた者がこれ程いるとはな」

シャア「そのマスクや仮面をかぶった者は何かとガンダムに縁があるらしい」

ゼクス「それは世界が違えど同じ事なのかもしれない」

フロントal「そして、ガンダムに乗った者達によって、変わった」

ゼハート「ふっ、さらにはガンダムに乗る事になった者もいる」

鉄仮面「私は変わるつもりはない！お前達と一緒にするな！」

グラハム「仮面やマスクとガンダムの関係……。人それを因縁と言う！それを我々が教えてやる！」

F91の攻撃でラフレシアにダメージを与えた。

鉄仮面「ラフレシアが……。この私が二度も敗れるのか！」

シーブック「終わりだ、鉄仮面！」

鉄仮面「化け物が！この力が無益な戦いを繰り返させるのだぞ！」

セシリー「化け物は、あなたです！」

シーブック「僕達は力の使い方を誤らない！人はどれだけ時間がかかろうとも戦いを乗り越えてみせる！」

鉄仮面「そんな世界が来るものか！だから、人は導かれねば……！」

ラフレシアは爆発した……。

シーブック「それが来るのを待つんじゃない……。自分達の足で、そこへ向けて進むんだ……」

トビア「終わったんですね」

シーブック「いや…これは始まりに過ぎない」

セシリー「レコンギスタ軍との戦いが終結した今、アル・ワースの戦いも終わりが見えてきた」

シャア「それぞれの世界への帰還ももうすぐか…」

アムロ「それは新たな戦いの始まりを意味するかも知れない」

ベルリ「でも、その戦いつて必ずしも戦争つて意味じゃありませんよね…」

アイーダ「レコンギスタ軍の残存戦力にはアメリカ軍総監の娘である私の名で受け入れを提案します」

クリム「あの鉄仮面のような存在を見れば、魔徒教団に手を貸す事の危険さが流石にわかるだろうさ」

シーブック「…」

セシリー「どうしたの、シーブック？」

シーブック「宇宙に漂っている生命の鼓動が聞こえるような気がする…」

セシリー「このアル・ワースの宇宙でも多くの生命が散つていった…」

シーブック「鉄仮面には、ああ言つたけど、本当に戦いの向こうなんてものがあるのかな…」

セシリー「自分の目で確かめましょう。それが私達の生きる意味なのだから」

シーブック「セシリー……。君と一緒になら出来るような気がするよ……」

トビア「（シーブックさん、セシリーさん……。この先にどんな事が待ち受けていようとも……。お二人の幸せがある事を僕は心から願います……）」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、メガファウナの格納庫に集まった……。

キア「当面は世話になるぞ、エクスクロス」

シヤア「こうして手を取り合う事が出来た事で宇宙世紀からリギルド・センチュリーを巻き込んだ戦いは終わった」

クリム「後はアル・ワースを平和にして、それぞれの世界へ帰るだけだ」

ヤザン「そう言うわけだ、俺達も世話になるぜ」

ラカン「平和にするというのはよくわからんが、この世界での戦いを終わらせ、とつとと元の世界に戻るぞ」

ジユドー「……いいんですか、カミーユさん。この二人まで受け入れて……」

カミーユ「戦う目的は違えど、共に戦ってくれるだ。今はそれでいいとするさ」

キア「レコンギスタ軍は解散になったが、俺達のレコンギスタは、まだまだ終わらん
さ」

クン「キア隊長……」

キア「クン…。ジット団の指揮はお前に任せる。当面はシラノー5で待機だ。お前のα・アジールは置いていけ。ヘルメスの薔薇の設計図から生み出したスターク・ジェガンと共にこちらで運用する」

クン「了解です。隊長のご無事を祈りします」

キア「腹の中の子を頼むぞ」

プルツー「腹の中の子って…！」

クン「私と隊長の子供だ」

ミック「それはめでたいね。そんな話を聞いたからには、何としてもみんなで生きて帰らないと」

クン「そうだね」

プルツー「お腹…触っていいか？」

クン「まだ動きはないぞ」

プルツー「それでもいい…。生命を感じたいんだ」

キア「許可する、プルツー。存分に新しい生命の芽吹きを感じるがいいさ」

プルツー「うん…」

アスナ「子供、か…」

優香「やっぱり憧れるよね」

ゼフィ「…キアさんとクンさんのお子様もコウノトリさんが運んできたのでしょうか…？」

零「そこは気にしなくてよろしい、ゼフィ」

アマリ「ふっ！」

ホープス「(コウノトリの話…まだ信じているんですね、ゼフィは…)」

マニイ「…マスク…」

マスク「生き恥をさらす事になった私を笑ってくれ、マニイ」

マニイ「笑わないよ。マスクはいつだって私にとって最高に格好いいから」

バララ「せつかく素直になっただから、気取った事は言わなくてもいいよ」

マスク「そうはいうが…」

ベルリ「おかしな遠慮はいらないですよ、先輩」

マスク「ベルリ…。俺は自分のやってきた事を詫びるつもりはないぞ」

ベルリ「僕もどれだけ先輩に憎まれても、僕である事をやめませんよ」

マスク「…お互い様…という事にしてくれるか…。そういう所が鼻につくんだよ、飛

び級生め！」

ベルリ「すいません！」

ケルベス「いいぞ！若い内はぶつかり合って、前へ進めばいい！（ですよ、デレン

セン大尉……)

マスク「元の世界に帰るまでは、取り敢えずの休戦だ、ベルリ」

ベルリ「帰ったら、また戦うって言うんですか？」

マスク「それは、その時に考える」

ベルリ「了解です。それまでは、取り敢えずよろしくお願いしますね、マスク先輩」

リー「おい、みんな！大変だ！」

ヤール「どうしたんだよ、リー？」

リー「ザンギヤックが……ギガントホースと部隊を動かし始めやがった！」

ジョー「何……!?？」

マーベラス「今度はザンギヤックとの最終決戦ってわけかよ……！」

本当に休みなしなのかよ……！

第69話 海賊の誇り

「アクトス・ギルだ。」

我々はギガントホースの中にいた。

バスコ「レコンギスタ軍とゾギリアがエクスクロスに負けたようだね」

アクトス・ギル「だからこそ、我々が動いた……。グレミー・トト率いるネオ・ジオン、カギ爪の男の集団率いるバジュラ、エフゲニー・ケダール率いるゾギリア、そして、レコンギスタ軍……。この連戦でエクスクロスは消耗している。なおかつ、二つに分かれてい
る今が高貴だ」

バスコ「へえ、結構考えているんだね」

ワルズ・ギル「バスコ！ 貴様に宇宙海賊を倒す機会をくれてやる！」

バスコ「俺に前衛を任せてくれるんだ、じゃあ、その期待に応えないとね」

バスコ・タ・ジョロキアがその場を歩き去った……。

アクトス・ギル「ワルズ……最悪の場合……わかつているな？」

ワルズ・ギル「勿論です、父上……」

フツ…バスコ・タ・ジョロキアよ…。エクスクロスと共に散るがいい…。
バスコ「そんな事だろうと思ったよ…。さてと、移籍の準備としておかないとね…」

―新垣 零だ。

俺はマーベラスさんの剣の勝負に付き合っていた。

マーベラス「オラアツ！」

零「はあっ！」

一通り、剣の勝負をした後、終わって休憩をする事にした。

マーベラス「悪いな、零。付き合わせちまって」

零「いえ、俺も力がつくので訓練になります」

マーベラス「そう言ってもらえて助かるぜ」

零「それにしても俺なんかよりもっとてきした人がいたと思えますが…」

マーベラス「ジョーはヴァンと特訓、ハカセは機体の修理、アイムは昼食の準備、ルカ「ゴーカイ」は相変わらず、鎧は簪とヒーローアニメ鑑賞…だな。全く、緊張感がないぜ」

零「海賊らしくていいと思いますよ。それに急に緊張感を持ってても身体が疲れるだけ

ですし」

マーベラス「それもそうだな」

トビア「あ、いた！マーベラスさん！」

マーベラス「どうしたんだ、トビア？」

トビア「もうすぐ、ザンギヤックの部隊と戦闘態勢に入ります。艦長達がザンギヤックとの戦闘経験のある船長のマーベラスさんと戦略を立てたいそうです」

マーベラス「ああ、わかった。わざわざ悪いな。零、付き合ってくれてありがとな」
マーベラスさんは部屋を後にした…。

トビア「やつぱり、船長の威厳があるな…。マーベラスさんは…」

零「元の世界で海賊だったお前の憧れの的って所だな」

トビア「うーん、だったというか、よく覚えていないんですけどね」

零「ふーん…。トビア、記憶喪失ってのは嘘だろ？」

トビア「へっ…!?？」

零「お前はシーブック達の住む時代の未来から来たんだろう？さしずめ、未来のシーブックと知り合いつて所か？」

トビア「そ、そんなわけないじゃないですか！」

零「記憶喪失なのに何で断言出来るんだ？」

トビア「そ、それは…」

零「宇宙海賊クロスボーン・バンガードのエースだったか？」

トビア「ど、どうしてそれを…?!? あっ…!」

零「レイヤはお前について知っていた…つまり、あいつの中にいた俺も知っていて当然だろ？」

トビア「…初めから言ってくださいよ!」

零「悪い悪い! まあ、お前が記憶喪失と偽っているのにも理由があるだろうし、アムロさんも一枚噛んでいるっばいからな。黙っておいてやるよ」

トビア「ありがとうございます!」

零「その代わり、お前の事や世界の事を詳しく聞かせてもらおうからな」

トビア「はい、わかりました!」

―更識 簪です。

今私は自宅で鎧さんにスーパー戦隊の歴史について教えてもらっています。

簪「34番目のスーパー戦隊は天使何ですか?」

鎧「そうだよ! 護星天使である天装戦隊ゴセイジャーまでが地球を守ってきたスー

パー戦隊なんだ！」

簪「その後にもスパー戦隊が？」

鎧「うん、俺達の後にも様々なスパー戦隊が誕生したんだ！そして、みんな、地球を守る為に戦ったんだ！今は確か：43番目のスパー戦隊が活躍していると思うよ」

簪「43番目：本当にたくさんいるんですね」

鎧「簪ちゃんほどのスパー戦隊が好きになった？」

簪「どのスパー戦隊も素敵：だけど、やっぱり一番はゴーカイジャーです」

鎧「ありがとう！マーベラスさん達も喜ぶと思うよ！」

マーベラス「ここにいたか、おい、鎧！」

鎧「マーベラスさん！どうしたんですか？」

マーベラス「他の艦長達と今回の戦闘の件で話がある。今回は豪獣ゴーカイオーで出る」

鎧「いきなり、豪獣ゴーカイオーですか!?!？」

簪「それだけ、きつい戦闘になるんですね」

マーベラス「ああ。だから、いつでもカンゼンゴーカイオーになれるようにしておかないとな」

鎧「よし！今回こそ絶対にザンギャックを倒しましょう！エイエイオー！」

マーベラス「鬱陶しい」

鎧「そんな事言わずに！ほら、簪ちゃんも！」

簪「オ、オ……！」

マーベラス「無理すんなよ、簪……」

第69話 海賊の誇り

―新垣 零だ。

俺達はザンギヤックが来るであろう地点に来て、それぞれ出撃した…。

倉光「みんな、戦闘前に伝える事がある」

ドニエル「今回のザンギヤック戦では我々、メガファウナとベルリ、姫様、アセム、ゴーカイジャー、トビアを軸として戦闘を行う」

「夏「どうしてですか？」

箒「待て、その構成は…」

アセム「そうだ。ザンギャツクの天敵はゴークカイジャー…。宇宙海賊って事でメガ
フアウナ隊や俺、トビアで組ませてもらった」

アイーダ「グレンファイヤーもいれば、加えているのですが…」

トビア「負ける気はないですね！」

シーブック「記憶喪失で海賊かどうかもわからないのに強気だな、トビア」

トビア「な、何か気合が上がるんですよ！」

アムロ「(トビア…)。浮かれてバレルのだけはやめてくれよ…」

ベルリ「でも、実際の宇宙海賊、ゴークカイジャーの腕を見せてもらいますよ！」

ゴークカイグリーン「これは責任重大だね、マーベラス」

ゴークカイレッド「気にするな、俺達はいつも通りにやるだけだ！」

ゴークカイブルー「海賊らしく、な」

青葉「何でだろうな、海賊って、みんなを困らせるってイメージがあるけど…マーベ
ラスさん達やトビア達ってそんな気がしないんだよな」

デイオ「みんなを困らせる海賊というのは作り話だったのかもな」

ゴークカイピンク「そうでもないですよ、デイオさん」

「ゴーカイイエロー」「実際にみんなを困らせる海賊はいるわよ。私達が珍しいだけで」
「ゴーカイルバー」「基本的に海賊は自由を愛していますからね」

九郎「確かに、始めの頃のゴーカイジャーも地球の為に戦うというよりも宝探しを邪魔したザンギヤックやアンチクロス、スクラッグと戦うって感じだったからな」

「ゴーカイレッド」「何言ってるんだよ、九郎。俺達は今でもそんな感じで戦ってるだけだぜ」

「ゴーカイピンク」「アル・ワースという大切なお宝を守る為に戦っているだけです」

トビア「それがゴーカイジャーの海賊としての誇りですか…」

「ゴーカイレッド」「そんな大層なもんじゃねえよ」

トビア「(俺もクロスボーン・バンガードの一人として頑張らないと…)」

「マリア」「話はこちらまでよ…来るわよ!」

現れたのはズゴーマン、ゴーマン部隊とグレートバスコだった。

バスコ「やあ! マベちゃん!」

「ゴーカイレッド」「バスコか!」

刹那「奴だけか…?」

バスコ「ワルズ・ギルとアクドス・ギルは後方に控えているよ」

グラハム「我々など、彼だけで充分という事か」

「ロツクオン」「ずいぶん、舐められたもんだな!」

バスコ「いやいや、こう見えても俺からは危険分子として見ているよ」
ビゾン「白々しい事、この上ないな！」

アルフリード「だが、彼の軽い態度の裏腹に凄まじい力を感じる…」

ヒナ「あの人が、絶対に強い…！」

テイエリア「だが、突破しなければアクドス・ギル達を出す事は出来ない！」

パトリック「悪いが、倒させてもらおうぜ！」

バスコ「なかなかいい仲間にも恵まれたね、マベちゃん」

ゴーカイレッド「ああ、俺達にはもつたいないぐらいだ」

バスコ「じゃあ、その大切な仲間というお宝を壊させてもらおうかな」

トビア「そんな事、させるかよ！」

ゴーカイレッド「トビアの言う通りだ！俺達の宝は俺達が守ってやる！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 トビアVS初戦闘〉

トビア「(記憶喪失と偽っても俺自身の誇りを捨てるつもりはない…。ゴーカイジャーのみんなに負けない様に戦うだけだ！)」

〈戦闘会話 アセムVS初戦闘〉

アセム「まさか、宇宙海賊絡みでこんな事になるなんてな。俺自身の海賊の誇りも見せてやるぜ！」

〈戦闘会話 ベルリorアイダordニエルVS初戦闘〉

ドニエル「海賊の誇りという大層なものはないが、負けるつもりはない！ベルリと姫様を援護するぞ！」

ステア「イエッサー！」

アイーダ「ベル、前に出過ぎない様に気を付けてください」

ベルリ「わかりました、姉さん！行きましょう！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVS初戦闘〉

ゴーカイブルー「海賊の誇り…か」

ゴーカイピンク「他の方からすれば、私達は正義のヒーローみたいですね」

ゴーカイスilver「何せ、俺達は35番目のスーパー戦隊ですからね！」

ゴーカイイエロー「別にそこまで大層な事じゃないけどね」

ゴーカイグリーン「でも、言われて悪い気はしないよ」

「ゴーカイレッド「それじゃあ、他の奴らに見せるか！俺達、ゴーカイジャーの誇りつてのを！」

〈戦闘会話 トビアVSバスコ〉

バスコ「あんたの事は聞いているよ。あんたも海賊みたいだね」

トビア「そうだ！でも、あんたと一緒にするな！自分の欲しいものの為に仲間を捨てるお前はなんかとな！」

バスコ「甘いね、欲しいもののために切り捨てる事を大事だよ」

トビア「間違えても俺はそんな事はしない！それがお前のやり方というなら、俺が止めてやる！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSバスコ〉

バスコ「別世界に来て俺達は戦い合う定めだね」

ゴーカイレッド「だが、これで最後にしてやる！」

バスコ「いいよ、俺も負けるつもりはない。本気でマベちゃん達を潰すだけだ！」

ゴーカイレッド「上等だ！やってみやがれ！」

豪獣ゴーカイオーの攻撃でグレートバスコはダメージを負った。

バスコ「…やっぱり、これだけの戦力で勝てるはずないよな…。まあいいや！マベちゃん、ザンギヤツクに勝てるかな？」

ゴーカイレッド「一回倒してんだ…次も倒してやるよ！」

バスコ「じゃあ、それを見させてもらおうよ」

グレートバスコが撤退した…。

弘樹「逃げやがった！」

優香「あの人をバカにしている態度…腹がたつわね…！」

メル「ですが、あの人退いたという事は…」

ワルズ・ギル達に来る…！

俺の予想通り、ゴーマン、ズゴーマン部隊とグレートワルズ、ギガントホースが現れた。

ワルズ・ギル「バスコめ…勝手な真似を！」

アクロス・ギル「初めましてだな、エクスクロス。私がザンギヤツクの皇帝、アクド

ス・ギルだ」

マスターテリオン「アクトス・ギル……久しいな！」

アクトス・ギル「アンチクロスの大導師か。確かに、久しぶりだな」

九郎「また、てめえの顔を見る事になるとはな！」

アクトス・ギル「デモンベインを操る者……。またもや我々の邪魔をするとはな。……白き巨人を操る者はいない様だな」

ウエスト「ジョーイ達は別の所にいるのである！」

ワルズ・ギル「エクスクロスよ！今こそ、インサーンの仇を取る！覚悟しろ！」

ヒイロ「奴も憎しみで戦う気か」

ヴァン「いや、あれは憎しみと言うか、許せなさって感じた」

アクトス・ギル「エクスクロスよ、一つお前達に聞きたい事がある」

カトル「聞きたい事？」

アクトス・ギル「我々、ザンギャックと手を組まないか？お前達の力と我々の戦力が合わされば、全世界を支配する事なども簡単な事だ」

トロワ「予想通りの問いが来たな」

五飛「誰が悪党などと手を組むものか！」

デュオ「五飛の言う通りだ！俺達がお前等の仲間になるつもりはない！」

ワルズ・ギル「父上の誘いを断るとは…」

レナ「逆に今まで敵として戦ってきた私達を取り込めるなんて本気で思っていたの？」

ケイ「それはそれでバカすぎね」

アクトス・ギル「そうか、残念だ。ならば、ここで倒させてもらう」

イングリッド「断ったら即に関手を潰す…本当の悪ね！」

ワルズ・ギル「宇宙海賊などと共にいるお前達に言われたくない！」

ゼクス「確かに彼等は海賊だが、悪ではない」

ユイ「悪というのは多くの生命を散らすあなた達の様な人達の事です！」

グラハム「そういうわけだ。邪悪はここで討たせてもらう！」

アクトス・ギル「ならば、知るがいい。ザンギヤツクの恐ろしさを」

ゴーカイレッド「てめえももう一回知りやがれ！海賊の力をな！」

戦闘再開だ！

戦闘再開から数分後の事だった…。

ゴークイレッド「このままチンタラやっけてもラチがあかねえ！カンゼンゴークイオーで一気に決めるぞ！」

マツハルコンを召喚し、合体して豪獣ゴークイオーはカンゼンゴークイオーになった。

アクトス・ギル「ムダだ、宇宙海賊」

カンゼンゴークイオーがギガントホースに攻撃を仕掛けようとしたが、何処から射撃され、後退する。

ゴークイブルー「何…!?」

ゴークイシルバー「今の攻撃は…!?」

現れたのは…ガンダム…!?

ゴークイグリーン「ガンダムが出てきたよ！」

トビア「あれは…！」

アクトス・ギル「ある世界で使用されていたモビルスーツ、アマクサだ」

トビア「何故だ！何故、木星帝国のモビルスーツをお前達が持っている!?」

アクトス・ギル「この世界に流れ着いていたのを我々が修理した。なかなかの性能を見せてくれる」

トビア「異世界にまで木星帝国の技術を…！」

シーブック「どうしたんだ、トビア!??らしくないぞ!」

アムロ「…何だ、この違和感は…!」

リボンズ「この感覚…あの機体は…!」

トビア「気をつけてください!あのモビルスーツ、アマクサは一年戦争時のアムロさんの戦闘データを組み込んだバイオ脳を搭載した機体です!」

ジユドー「何だと!??」

カミーユ「一年戦争時のアムロさんの戦闘データ…!??」

バナージ「それってつまり…」

フリット「一年戦争時のアムロと戦う事になるという事か…!」

トビアが記憶喪失の演技をする暇がないほどの奴って事か…!

ワルズ・ギル「フハハハハッ!さらに驚かせてやる!」

すると、四機のアマクサが現れた。

アスナ「う、嘘!??」

メル「アマクサが合計五機に…!」

アクス・ギル「お前達は五人のアムロ・レイと戦う事になる。アムロ・レイの強さはお前達がよく知っているはずだ」

刹那「…」

ヒイロ「……」

アクロス・ギル「フフフ：絶望するがいい、エクスクロス！アマクサは幾らでも量産出来る……。ここでこの五機を破壊したとしてもまだ出す事が出来るのだ！」

ゴークイレッド「やろう……！」

トビア「……だからどうした？」

ゴークイレッド「トビア……？」

トビア「人の力はデータなんかで表せるものじゃない！それにはアムロさん本人と転生したりリボンズがいる！そんなデータ如きで俺達を止められると思うなよ！俺は逃げない！アマクサが何度でも出てくるってんなら、何度でも破壊してやる！それが俺の誇りだ！」

？「よく言ったな、トビア！」

現れたのは……クロスボーン・ガンダムX1改・改……！！？

セシリー「あのクロスボーン・ガンダムは……」

シーブック「トビアの乗るフルクロスに改修したはずだ！」

トビア「その声……まさか……！」

キンケドウ「一人でどれだけ戦えているかと思ったが、なかなかやれているな！」

トビア「ど、どうしてキンケドウさんがアル・ワースに……！！？」

キンケドウ「俺もこの世界に来ていたんだが、アムロさんからお前の成長を見たいって頼み込んでな、今の今まで別行動を取っていたんだ」

トビア「それならそうと言ってくださいよ！」

キンケドウ「悪いな、お前を驚かしたかったんだよ！所でお前は記憶喪失としていたんじゃないのか？」

トビア「え…あつ…！」

キンケドウ「…安心しろ、今は個人通信だ」

トビア「もう、キンケドウさん！」

キンケドウ「ははっ！よし、お前の成長も見られた事だし、一丁海賊らしくやるか！」

トビア「はい！」

フルクロスとX1改・改がアマクサ一機に近づいた。

X1改・改は機動性を生かし、アマクサの攻撃を避けていく。

トビア「ここだ！」

その隙をついて、フルクロスが攻撃する。

キンケドウ「喰らえ！」

さらにX1改・改も攻撃を仕掛け、アマクサは爆発した。

アニュー「アマクサを倒したわ！」

ヴァン「何だよ、トビアとあいつの連携……」

レイ「奴はトビアの仲間なのか……?」

キンケドウ「俺はキンケドウ・ナウ。恐らくトビアと同じ世界から来た」

ウー「恐らくだと……?」

プリシラ「随分曖昧な答えだね」

キンケドウ「すまないな。なんせ俺も記憶喪失でな」

サラ「また記憶喪失?!?」

ティア「トビアの世界ってそんな人ばかりだね」

アムロ「彼は味方だ。俺も接触した事がある!」

ゴーカイレット「アムロが言うなら、心配ねえな!」

キンケドウ「アマクサは所詮データだ!みんななら負けない!」

シーブック「……」

セシリー「……」

ユイ「どうしたの、シーブック君、セシリーちゃん?」

シーブック「い、いや……」

セシリー「な、何でもないわ……」

キンケドウ「(昔の俺やベラを見る事になるなんてな……。こんなこともあるんだな)」

ワルズ・ギル「おのれ、宇宙海賊！おのれ、エクスクロス！」

アクトス・ギル「だが、アマクサを量産すれば……！」

キンケドゥ「残念だが、それも破壊させてもらった！宇宙海賊らしき男、舐めるなよ！」

ゴーカイレッド「へっ！気に入ったぜ、キンケドゥ！まだやる気はあるだろ……？」

キンケドゥ「ああ！俺も共に戦わせてもらおうぞ！」

ドニエル「各機はゴーカイジャーと二機のクロスボーン・ガンダムを軸にして戦闘を再開しろ！」

アクトス・ギル「いいだろう、我々が直々に潰してやる！」

ゴーカイレッド「上等だ！これでザンギャクとの戦いを終わらせてやる！」

戦闘再開と行くぜ！

〈戦闘会話　キンケドゥVS初戦闘〉

キンケドゥ「（シーブツク・アノーとしての俺か……。何だか懐かしいな……。戦うぞ……。俺自身も戻るために……！）」

〈戦闘会話 アムロVSバイオ脳〉

アムロ「俺の戦闘データと戦う事になるとは……。今の俺と過去の俺……。どちらが強いかな勝負だ！」

〈戦闘会話 シアアVSバイオ脳〉

シアア「アムロのデータを使ったバイオ脳か……。フツ、人の強さはデータでは表せない事を教えてやろう。彼のライバルとして……！」

〈戦闘会話 トビアVSバイオ脳〉

トビア「バイオ脳は何度だって破壊してやる！行くぞ、これが俺の全力だ！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSバイオ脳〉

キンケドゥ「俺達の世界の技術を異世界で利用される訳にはいかない！俺が全て破壊してやる！」

〈戦闘会話 リボンズVSバイオ脳〉

リボンズ「今度は過去のアムロとの戦闘か……。僕の力を見せてあげるよ！」

全てのアマクサを破壊した…。

キオ「これでアマクサは全て倒しました！」

アムロ「自分のデータを使われるとはあまりいい気がしないな」

シヤア「だが、お前はあの頃よりも確実に強くなっている。私が保証する」

アムロ「そうか？ そう言われて嫌な気はしないな」

〈戦闘会話 トビアVSワルズ・ギル〉

ワルズ・ギル「宇宙海賊は皆殺しにする！」

トビア「やってみやがれ！ ただし怪我しても知らねえぞ！」

〈戦闘会話 キンケドウVSワルズ・ギル〉

キンケドウ「お前達の悪行を全て見させてもらった！」

ワルズ・ギル「悪行だと…？ 違うな！ 我々、ザンギヤツクの邪魔をするものこそが悪

だ！」

キンケドウ「悪者の言う事はどの世界でも同じだな！ 覚悟しろ、俺たち海賊は甘くな

いぞー！」

〈戦闘会話　　ゴークイレッドVSワルズ・ギル〉

ゴークイブルー「お前もしつこい男だな、ワルズ・ギル」

ゴークイイエロー「しつこい男って嫌われるだけよ」

ワルズ・ギル「煩い、宇宙海賊！インサーンの仇を取らせてもらおう！」

ゴークイシルバー「こっちだって、倒させてもらおうぞ！」

ゴークイレッド「ワルズ・ギル！これで今度こそ終わらせてやる！」

カンゼンゴークイオーの攻撃でグレート・ワルズは大ダメージを受けた。

ワルズ・ギル「俺は…俺はこのまま…終わってしまうのかあつ!!?俺は…インサーンの仇を！」

ゴークイレッド「てめえじや俺達には勝てねえよ。あの世で後悔しやがれ。俺達、海賊とエクスクロスを敵に回した事をな！」

ワルズ・ギル「う、うわあああああつ!!?」

グレートワルズは爆発した…。

ゴークイピンク「ワルズ・ギルを倒しましたね！」

ゴーカイグリーン「後はアクドス・ギルだけだね！」

ゴーカイレッド「(ワルズ・ギル……。前も言ったはずだ……。お前の調子に乗りやすい性格が俺達に負けた理由だつてな。生まれ変わるってんなら、その性格……直しやがれ)」

アクドス・ギル「(ワルズ……。お前分まで世界をこの手に掴んでみせる……)」

〈戦闘会話 トビアVSアクドス・ギル〉

アクドス・ギル「お前の事は知っている……。宇宙海賊、クロスボーン・バンガードのトビア・アロナクス。」

トビア「……」

アクドス・ギル「お前が我々の邪魔をする理由はないはずだ」

トビア「関係ならある！お前がアル・ワースを滅ぼすと言うのなら俺はそれと戦うだけだ！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSアクドス・ギル〉

キンケドゥ「お前は……人類皆の敵だ！」

アクドス・ギル「ふん、大人しく従えば、奴隷としてでも扱ってやろうと思ったのに

な」

キンケドウ「それだけで戦う理由は充分だ！覚悟しろ、アクロス・ギル！」

〈戦闘会話 九郎VSアクロス・ギル〉

アクロス・ギル「大十字 九郎！お前も私の邪魔をすると言うのなら、ここで潰す！」

九郎「奇遇だな、俺もお前を潰したいと思つていたんだ！俺達の戦いもこれで終わりだ！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSアクロス・ギル〉

アクロス・ギル「今こそ、お前達に最後のひと時を与えてやる！」

ゴーカイブルー「それはこちらのセリフだ！」

ゴーカイシルバー「アクロス・ギル！アル・ワースの平和は俺達が守る！」

アクロス・ギル「ならば、アル・ワープと共に散れ！」

ゴーカイイエロー「散る気なんてないわよ！」

ゴーカイピンク「マーベラスさん！」

ゴーカイグリーン「行こう、マーベラス！」

ゴーカイレッド「おう！これで全て終わりだ！アクロス・ギル！ド派手に行くぜ！！？」

カンゼンゴーカイオーの攻撃でギガントホースにダメージを与えた。
アクロス・ギル「ギ、ギガントホースが…！」

ナビィ「ギガントホースの機能が停止したよ！」

九郎「今だ、ゴーカイジャー！」

ゴーカイレッド「行くぜ！」

カンゼンゴーカイオーがギガントホースの中にへと入っていった…。

ーゴーカイレッドことキャプテン・マーベラスだ。

俺達、ゴーカイジャーはギガントホースの中に入った。

すると、人間サイズのズゴーマンとゴーマンが来る。

ゴーカイブルー「アクロス・ギルの元へ行かせないつまりか！」

ゴーカイグリーン「こいつらを相手にしていたら、にげられちゃうよ！」

ゴーカイイエロー「でも、やるしかないでしょう!?？」

？「それなら俺達に任せてくれ！」

現れたのは…こいつ等…!!？

ジユウオウイーグル「大空の王者、ジユウオウイーグル！」

アカニンジャー「暴れてアツパレ、アカニンジャー！」

サソリオレンジ「ポイズンスター、サソリオレンジ！」

アナウンス「トツキユウ5号、トツキユウ5号」

トツキユウ5号「は〜い！」

大和達は俺達の前に立った。

ジユウオウイーグル「マーベラスさん！こいつ等の相手は任せてください！」

トツキユウ5号「皆さんはアクロス・ギルの所に行ってください！」

ゴーカイレッド「お前等、どうしてアル・ワースに…？」

サソリオレンジ「リタからお前が危険だと知らされてな、集まったんだ」

アカニンジャー「世界を守る為にアクロス・ギルを倒してくれ、お兄さん！」

ゴーカイレッド「へっ、上等だ！行くぜ、お前等！」

ゴーカイルバー「よろしくね！」

俺達は大和達にこの場を任せ、先へ進んだ…。

アカニンジャー「じゃあ、変わり者らしく忍ばずいくか！」

ジユウオウイーグル「よし！アル・ワースを舐めるなよ！」

大和達はズゴーミン、ゴーミン軍団と戦い始めた…。

そして、俺達はアクロス・ギルの元まで辿り着く。

アクロス・ギル「来たか」

ゴーカイピンク「ギガントホースは動きません…もう諦めてください！」

アクロス・ギル「いいや、まだ負けてはいない」

ゴーカイレッド「それなら、俺達が引導を渡す！行くぜ！」

俺達はアクロス・ギルと戦い始めるが、アクロス・ギルの強さに押し負ける。

ゴーカイレッド「ぐっ…!?？」

アクロス・ギル「諦めろ、それがお前達の限界だ」

ゴーカイレッド「諦めねえ…絶対に諦めねえ！」

バスコ「相変わらずしぶといね、マベちゃん達も」

バスコが怪人体で現れやがった…！

ゴーカイレッド「バスコ…！こんな時に何の用だ！」

バスコ「…」

アクロス・ギル「よく来たな、バスコ・タ・ジヨロキア。丁度いい、お前の手で宇宙

海賊共にトドメをさせ」

バスコ「はいよ。…でも…トドメを刺すのはあんたを倒してからだ」

アクトス・ギル「ぐっ…?!? な、何…?!?」

バスコの攻撃でアクトス・ギルはよろめいた。

ゴークアイブルー「今だ！」

ジョー、ルカ、ハカセ、アイム、鎧はそれぞれの攻撃でアクトス・ギルにダメージを与えた。

ゴークアイシルバー「マーベラスさん、トドメを！」

ゴークアイレッド「バスコに助けられて気に食わねえが…おう、任せろ！」

俺はゴークアイサーベルにレンジャーキーをセットする。

ゴークアイサーベル《ファーンイナルウエーブ!!?》

ゴークアイレッド「はあああああつ！でりやあああああつ!!?」

ゴークアイスラッシュでアクトス・ギルを二回斬り裂いた。

アクトス・ギル「私が…またもや、敗れるとは…! フフフ…所詮お前達では、このアル・ワースを救う事など出来ん…奴を…奴を倒さない限り、はな…!ひと時の勝利を身に占めるがいい！フハハハハッ！」

そう言い残し、アクトス・ギルはゆっくりと後ろに倒れ、爆発した…。

ゴークアイグリーン「終わったね…」

ゴークイレッド「ああ…」

アクトス・ギルの奴という言葉が気になるが、そんな事を考えるのは後でいいか…。
そう言えば、バスコは…?!?

ゴークイシルバー「バスコ、いませんね…」

ゴークイブルー「既にどこかへ行つたんだろう」

ゴークイグリーン「僕達も脱出しようよ！」

ゴークイシルバー「そうですね！」

ゴークイレッド「(バスコ…)。お前がどんな手で挑んでこようが俺達は負けねえ…。
お前との決着…必ず勝つ…!」

俺達はカンゼンゴークイオーに乗り、ギガントホースから脱出した…。

―新垣 零だ。

ギガントホースからカンゼンゴークイオーが出てくるとギガントホースは爆発した…。

零「皆さん！」

ゴークイレッド「待たせちまつたな、みんな」

九郎「マーベラス、アクトス・ギルは？」

ゴークイレッド「倒したぜ。これでザンギャックとの戦いは終わりだ」

ゴークイブルー「だが、まだバスコが残っている」

ゴークイシルバー「まだまだ終わりには遠いですね」

ゴークイピンク「でも、遠すぎるわけでもありません」

ゴークイイエロー「そうね。現に決着がついてきているし」

弘樹「取り敢えず今はそれでいいですね」

優香「少しずつ確実に、今はそれしかないからね！」

キンケドウ「終わったか……」

アイーダ「ありますがどうございました、キンケドウさん。あなたのお陰で今回の戦いに勝つ事が出来ました」

キンケドウ「俺だけの活躍じゃないさ。みんながそれぞれ活躍したから勝てたんだよ」

ドニエル「君には少し話を聞きたい事があるが、構わんか？」

キンケドウ「はい、勿論です」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、プロトレマイオスの格納庫へ集まった……。

クリム「では、君も記憶喪失で何も覚えていないと？」

キンケドウ「ああ。だから、トビアについては話せない。だが、知り合いだったような気はするんだ」

トビア「俺もそんな気がします」

ロツクオン「まあ、二人のあの息のあった連携を見れば、そんな気がするぜ」

テイエリア「君は今の今まで何をしていたんだ？」

キンケドウ「俺もトビア達と同じ所で目が覚めて、それぞれの組織の出方を伺う為に行動していたんだ」

刹那「それを終えて、こちらに合流したという事か」

キンケドウ「そんな訳で俺もこれからこの部隊で戦う事になった、よろしくな！」

シーブック「よ、よろしくお願いします、キンケドウさん」

キンケドウ「そう硬くなるな、シーブック。気楽にいこうぜ！」

シーブック「は、はい……！」

セシリー「(キンケドウさんって、少しシーブックに似ているわね……)」

シーブック「(ああ、他人の気がしない……)」

俺はキンケドウさんとトビアで話がしたいと言い、彼等と呼んだ。

キンケドウ「どうしたんだ、零？俺に何か用か？」

零「キンケドウさん、あなた……大人のシーブックでしょう？」

トビア「え……」

キンケドウ「……やっぱり、お前には気づかれるか」

零「雰囲気は少し変わってもシーブックらしさは変わっていないからな」

トビア「……敵いませんね、零さんには……」

キンケドウ「そうだな……」

零「一つ質問があるんだが……あんたは今ここにいるシーブックだったキンケドウか？」

キンケドウ「……さあな、想像に任せるぜ」

零「悪い性格だな。まあ、今日からよろしくな、キンケドウ」

キンケドウ「おう、零！」

トビア「そう言えば、あの場にマーベラスさんがいませんでしたが……」

キンケドウ「あいつなら別の仲間にあっているぜ」

別の戦隊の仲間……後輩って事か。

ーキャプテン・マーベラスだ。

俺は今、一人で変わり者戦隊の奴等と会っていた。

マーベラス「お前等も無事だったんだな」

ステインガー「当たり前だ。爆発に巻き込まれるほどドジじゃないからな」

天晴「お兄さんも勝ってたんだな！」

カグラ「うんうん！勝てるかどうか心配だった〜」

マーベラス「当たり前だ、俺達をだれだと思っついていやがるんだ」

大和「宇宙海賊の海賊戦隊、ゴーカイジャーですよね」

マーベラス「フツ、わかってんじゃねえか」

すると、大和達の身体が消えかかり始めた…。

ステインガー「…そろそろ、戻る時間か」

カグラ「これからも頑張ってくださいね、マーベラスさん！」

天晴「応援しているからよ！」

大和「俺達：マーベラスさん達が：エクスクロスが勝利する事を信じています！」

マーベラス「ああ、任せておけ」

そう言うのと大和達は消えた…。

あいつ等に大口を叩いたんだ：勝つしかねえだろう！

―倉光 源吾だよ。

僕達はシグナスの艦長室にいた。

倉光「これでこちらもひと段落出来るね……。では、我々は大気圏に降下し、別働隊と合流しよう」

レーネ「Nーノーチラス号より、状況の報告が入っています」

倉光「青葉君の期待通り、彼等はエンブリヲを打ち破ったんだね」

レーネ「さらにBD連合の真の頭目と思われるエグゼブなる人間とも戦い、これを退け、ギルギロス大統領とビート・スター並びにムーンWILLを撃破し、天球とアル・ワースの衝突を防いだとの事です。また、渡瀬 青葉達の報告通り、真実のアルゼナルの破壊には成功し、その場に囚われていた者達の救出に成功したのですが：V・V・なるものにシャーリーを：そして、最後に一人になったエンブリヲにナディアをさらわれたそうです」

倉光「それは見過ごせない状況だ：」

レーネ「なお、エンブリヲの協力者として、新たに三人の人物が現れたとの事です。一人はマリアンヌ・ヴィ・ブリタニア：。ルルーシユの母親です」

倉光「その人物は既に死んでいると聞いていたが：」

レーネ「彼女はギアスと呼ばれる特殊な能力でアーニヤの心の中に潜んでおり、それが実体を得たそうです」

倉光「何でもありだね、このアル・ワースは……」

レーネ「二人目はアーサー王。戦の世界の西の星を統治していた王です。彼もノブナガ達との戦いによつて、死んだと思われていましたが、このアル・ワースで蘇り、ノブナガの弟、オダ・ノブカツと共に彼等の前に立ち塞がったようです」

倉光「ノブナガ君が辛い状態だね……」

レーネ「もう一人はシヨット・ウエポン……。バイストン・ウエルでオーラマシンを開発した人間です。彼等がどういった事情でエンブリヲに協力しているかは不明との事です。そして、彼等の元にはルルーシユの妹、ナナリー・ヴィ、ブリタニアと異母妹であるユーフェミア・リ・ブリタニアも彼等の元で捕まっているそうです」

倉光「ネモ船長達はエンブリヲを追っているのかい？」

レーネ「いえ……ドアクダー打倒を優先しています。なお、戦いの中でナディアがネモ船長の娘である事が発覚したそうです」

倉光「……状況が状況だとはいえ、ネモ船長の心中を察するね……」

レーネ「創界山はドアクダーによる結界が張られているのですが……オリュンポスの暗黒大將軍とキバを打ち破り、最後の秘宝である龍王の剣と龍神の盾を手に入れたワタルならば、その結界を破る事が出来るそうです」

倉光「了解した。では、僕達も別働隊と合流し、創界山へ向かおう」

レーネ「ドアクダーを倒せば、いよいよ帰還の術が手に入るのですね」
倉光「まあね……。でも、まだまだ一波乱あると思うよ。これは僕の勘だけどね……」
僕の勘って、よく当たるから嫌なんだよな……」

共通ルート

第70話　タキシードは明日に舞う

―新垣　零だ。

俺達はモンジャ村で別働隊と合流した。

それぞれの部隊の話を終えたと通信が入った。

そして、それに応答する。

マーガレット「エクスクロスの皆様、お久しぶりです。マーガレット・バーンリーです」

通信相手はエナストリアのマーガレットさんか…。

ユイ「マーガレットさん！」

マーガレット「ユイ様達もお元気そうで何よりです」

レナ「マーガレット…通信をできてどうしたの？」

マーガレット「実はエクスクロスの皆様に伝えておきたい事がございます」

サラ「伝えたい事？」

マーガレット「ルクスの国のエナストリア皇国の付近で謎の集団の動きが見られました」

ティア「謎の集団？」

イングリッド「その人達の特徴は…？」

マーガレット「特徴…ですか…。実は付近に建物らしきものが建設されていて、そこに右手がカギ爪の男の方がいました」

ケイ「それって…！」

リボンズ「クー・クライング・クルー達か…」

マーガレット「きつと良からぬことが起きると思います…。どうか、ご武運を…。ユイ様、レナ様…ご無事に帰ってきてください」

アオイ「ご心配なく、マーガレットさん」

ナル「ユイ様は強いお方です。きつと大丈夫です」

マーガレット「私達、全員…あなた方の勝利を信じています」

そう言い残し、通信が切れた…。

刹那「奴等に動きがあったと言う事は…」

ティエリア「彼等の計画が動き出したと言う事だな」

ワタル「あの人達の計画はよく理解できないけど、絶対にいい事にならないのはわか

る！」

しんのすけ「オラ達で止めるゾ！」

ヴァン「あの野郎の計画なんてどうだっていい……！」

アキト「ヴァン……」

ヴァン「俺はあの野郎を殺す……！ただ、それだけだ！」

レイ「ガンソ」「エクスクロスはカギ爪の元へと向かうのか？」

リー「艦長達に聞いたが、流石に見逃してはおけないようだ」

ヒュウガ「エクスクロスはカギ爪の男の計画を止める為に彼等の元へと向かうぞ！」

ヴァン「わかっているとは思いますが、カギ爪は俺が殺す」

アルト「わかっているって、それがお前の戦いならな」

ヴァン「それならいい」

そう言い残すとヴァンさんは歩き去った……。

その後、レイ「ガンソ」さんも歩き去った……。

――今は……復讐のヴァンだ。

俺はメガファウナの格納庫にいた。

ヴァン「…」

レイ「ガンソ」「この様な所で黄昏ていたか」

ヴァン「…何の様だよ、レイ？」

レイ「ガンソ」「今回の戦闘で決まる…。どちらがカギ爪を先に殺すのが…」

ヴァン「…標的は1人、狙うは2人…」

レイ「ガンソ」「少し多すぎる…」

ヴァン「減らしておくか？」

レイ「ガンソ」「同感だ」

俺は蛮刀を、レイの奴は銃を抜く。

ヴァン「嬉しいね、同じ考えか！」

蛮刀を回しながら切り掛かった俺だが、レイに避けられる。

レイ「ガンソ」「そこかっ！」

すかさずレイは銃を撃つが、俺はギリギリでその弾丸を蛮刀を切り上げて防ぎ、そのまま、地面に突き立てるように、蛮刀をレイの銃口の前に振り下ろし、銃口と刃がぶつかり火花が散る。

ヴァン&amp;amp;レイ「ガンソ」「フっ…」

暫く、ぶつけ合った俺達は静かに笑う。

ヴァン「ポンコツめ」

レイ「ガンソ」「ガラクタが…やはりカギ爪を殺るのは俺だ」

ヴァン「ちよつと待て、そりゃ俺だろ」

レイ「ガンソ」「いいや、俺だ」

睨み合っていた俺達は、静かに武器を納めた。

ヴァン「やれるもんならやってみやがれ」

レイ「ガンソ」「お前もな」

俺は捨て台詞を吐き、この場から去ろうとした俺はレイのヨロイを見上げ言い放つ。

ヴァン「てめえは虫が好かないが、こいつは良いヨロイだ」

レイ「ガンソ」「…お前も…ヨロイと女には、恵まれたようだな」

ヴァン「…ああ」

そう言い残し、俺はこの場を去った…。

ーレイ・ラングレンだ。

ヴァンが立ち去ったと同時にジヨシユアが来た…。

ジョシユア「兄さん！」

レイ「ガンソ」「どうした、ジョシユア？」

ジョシユア「僕もヴォルケインの調整を手伝おうと思ひまして…」

レイ「ガンソ」「そうか…」

すると、ジョシユアはヴォルケインの調整を始めた…。

レイ「ガンソ」「ジョシユア…」

ジョシユア「何ですか、兄さん？」

レイ「俺はヴォルケインでカギ爪を殺す。お前が反対していたことだ。本当に、それでいいんだな？」

俺の問いにジョシユアは顔を伏せながら言う。

ジョシユア「だって…兄さんは、もう止まらないじゃないですか。僕は、兄さんに生きていて欲しい、生き続けて欲しい。もし、カギ爪の人を殺さないと、次に進めないから…そうして欲しい。それを助けたいんだ！だって、僕には、それしかできないから！レイ兄さんの為に…レイ兄さんを好きだったシノさんの為に…それしかできないんだ！」

レイ「ガンソ」「ジョシユア…」

こいつは…成長したんだな…。

レイ「ガンソ」「ジョシユア：お前は、シノを好きだったのか？」

一瞬驚いた表情をしたジョシユアは誤魔化すかの様に笑い返答する。

ジョシユア「当たり前じゃないですか、あんな素敵な人を嫌いな訳が…」

だが、観念したのかジョシユアは言葉を止めた。

ジョシユア「はい、好きでした」

レイ「ガンソ」「そうか…」

ジョシユア「…はい、だから兄さんが羨ましかった。義姉さんと義姉さんのヨロイを手に入れて…」

心の奥底にあつた想いを吐き出すジョシユアの言葉を俺は、何も言わず受け止める。

ジョシユア「でも、僕は兄さんみたいになれなかつた義姉さんが死んでも兄さんみたいなには…。とても、とても悲しかったけど兄さんみたいなことはできなかつた…僕は臆病な人間です」

レイ「ガンソ」「それは違う」

ジョシユア「でも…」

レイ「ガンソ」「俺は逃げたんだ。悲しみから…今も逃げ続けている。そうしなければ俺はシノを失った悲しみに耐えられない。臆病なのは…俺だ」

ジョシユア「兄さん…」

レイ「ガンソ」「だが、それも、もう終わりだ。奴とのケリをつけたら、俺は昔に戻る。もう、一度…：シノと向き合うつもりだ。お前も、お前の夢をみつけれ、誰にも邪魔されないお前のやりたい事を」

ジョシユア「僕の夢は、この先もずっと兄さんと一緒にいたいです！」

レイ「ガンソ」「そうか…：そうなるといいな」

ジョシユア「…すみません、感情的になつてしまつて…。ここは僕が引き受けるので兄さんは自室で休んでください」

レイ「ガンソ」「そうする。後は頼むぞ、ジョシユア…」

俺はヴォルケインをジョシユアに任せ、この場を後にしようとすると、ユキコという女が俺の元へと来た。

ユキコ「ジョシユア君、頑張っていますね」

レイ「ガンソ」「あれがジョシユアの強さなのかも知れん」

ユキコ「どうするんですか？復讐が終わったら」

レイ「ガンソ」「ヴォルケインを…あいつを静かな海に沈めてやりたい…誰も来ない…深く静かな海に…それで、やっとシノは…」

ユキコ「レイさん…」

俺は…必ず、カギ爪を殺す…その前に…奴の、夢を…！

「ミハエル・ギャレットだ。

私達はルクスの国のある場所で施設を建て、幸せの時の準備をしていた。

ファサリナ「ミハエル君、おそらくエクスクロスがこの場所を嗅ぎつけたわ」

ミハエル「ということは…エクスクロスが来ますね」

カギ爪の男「素晴らしいことではありませんか。計画の前にたくさんのお友達が来るのですから」

ミハエル「同志、バースデイ起動にまだ時間がかかると思いますので、私達が彼等を迎え撃ちます」

ファサリナ「いいえ、前線にはあれを出します」

ミハエル「あれですか!?? ですが、運用は難しいのでは…」

ファサリナ「ようやく、扱える様になりました。無人機ですが前衛は任せても大丈夫でしょう。よろしいですか、同志?」

カギ爪の男「良いですよ。彼にはこれから一つになるエクスクロスの方々を迎え入れて貰わなければなりませんから」

ファサリナ「では、最終調整を行います」

カギ爪の男「よろしくお願いします」

来るなら来い、ヴァン、エクスクロス…。だが、計画は絶対に遂げさせる…。お前達に勝ち目などない…！

第70話 タキシードは明日に舞う

―新垣 零だ。

俺達はカギ爪の男の集団がいると思われる場所につき、出撃する。

ゼファイ「あの建物の中にカギ爪の人がいるのですね…」

弘樹「確かに慌ただしい様子だな」

カノン「計画発動の準備をしているのでしょいか…」

メル「恐らく、そうだと思います」

優香「全ての人の意識を一つにするって…気味が悪いね…！」

アスナ「そんな事、させないわ！」

ジョーイ「僕達が絶対に阻止する！」

フアサリナ「ムダですよ、エクスクロスの皆さん」

ガドウエド「フアサリナか…！」

ウー「あの施設から話しているのか！」

フアサリナ「もう計画は発動しています。現にほら」

すると、辺りが揺れだした。

シモン「地震か…?!？」

ヴイラル「違う、これは…！」

この一帯が空に浮き出している…?!？」

ユイ「この辺り一帯が浮き出しています！」

レナ「な、何なの、これ?!？」

イングリッド「まさか、彼等は上空から計画を発動するつもりだったって事?!？」

ケイ「つまり、この切り離された大地が、彼等の望む位置に着くと計画が完了する…

？」

マリア「あまり、時間がないという事ね…！」

ファサリナ「お分かりいただけましたか？ 幸せの時間が完了するのも時間の問題…もう諦めて受け入れませんか？」

アンジュ「そんなの死んでもお断りよ！」

サリア「まだ時間はある…！」

ヒルダ「カギ爪の男をぶっ倒して、その施設を破壊できれば、あんたらの計画を潰せる！」

ジョシユア「一つ聞かせてください」

ファサリナ「何でしょう？」

ジョシユア「アル・ワースには月もプリズン・プラネット・デストロイヤーもないはずです…。それなのにどうして、幸せの時間が発動できるのですか！」

ファサリナ「この世界のオドという力のおかげです」

アマリ「オドが…?!？」

ファサリナ「オドの力を応用して、私達は幸せの時間がこの世界で発動出来ると知ったのです」

イオリ「オドの力を悪用するとは…！」

ヴァン「だったら、今ここでその建物に乗り込んでカギ爪を殺す！」

ファサリナ「そう来ると思いました」

ネロ「待て、ヴァン！来るぞ！」

現れたのは無人機のヨロイ軍団と…一機のISS…!!?」

千冬「あれは…！」

一夏「シルバリオ・ゴスペル?!?」

箒「まさか、あれまでこの世界に流れていたとは…！」

青葉「あのISSはいつたい何なんだ?!?」

ラウラ「シルバリオ・ゴスペル。別名、銀の福音…アメリカ・イスラエル共同開発の

第三世代型軍用ISSだ」

シャルロット「あれは無人機で、僕達が前に倒したんですけど…」

鈴「この世界に流れついて、あいつ等が修理したそうね！」

ファサリナ「そうです。喜んでいただけましたか？」

セシリア「ご冗談を！喜ぶはがありませんわ！」

楯無「残念だけど、ISSを悪用するというのは見過ごせないのよね！」

簪「あれを壊す…！」

東「(コアまで組み直すなんて…カギ爪はそこまでの腕があるって事…?)」

ヴァン「誰だろうと斬り捨てる！」

レイ「ガンソ」「カギ爪を殺すために！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 一夏VS銀の福音〉

一夏「この世界で蘇ったなら、俺が何度でも倒してやる！行くぞ、シルバリオ・ゴスペル！」

〈戦闘会話 箒VS銀の福音〉

箒「私にとっては思い出深いISだが、今はお前に構っている時間はない！刀の錆になれ！」

〈戦闘会話 セシリアor鈴VS銀の福音〉

セシリア「鈴さん、準備はよろしいですか？」

鈴「ええ、バツチリよ！今度は私達が勝つわ、絶対に！」

〈戦闘会話 シャルロットorラウラVS銀の福音〉

シャルロット「前と何かが変わっているかも知れないから気をつけていこうね、ラウ

ラ！」

ラウラ「ああ、わかっている。私達の連携を今一度見せてやる！」

〈戦闘会話 簪 or 楯無 VS 銀の福音〉

簪「私とお姉ちゃんには福音との戦闘経験がない……！」

楯無「だとしても私達だけが指をくわえて見ている訳にはいかないわ！行くわよ、簪ちゃん！」

〈戦闘会話 千冬 VS 銀の福音〉

千冬「福音よ、私の生徒達に手を出した事を後悔させてやる！そして、弟を傷つけた事もな！」

〈戦闘会話 マドカ VS 銀の福音〉

マドカ「フン、無人機のIS如きが私に敵うとも思っているのか？粉々にしてやるぞ！」

白式が福音にダメージを与えた…。

銀の福音「！」

箒「やったか！」

福音のダメージが回復した…!!?

夏美「そんな…！」

ギロロ「くそッ！奴に構っている時間はないのに…！」

タママ「どうするですか!!？」

一夏「俺達がやる！」

鈴「俺達がつて…！」

ラウラ「実際どうするんだ!!？」

一夏「シルバリオ・ゴスペルを倒したのは…俺達、だろ？」

箒「あの時の連携か…！」

セシリア「承知しましたわ！」

シャルロット「今回は箒と楯無さんも手伝って！」

箒「わかった！」

楯無「中心は任せたわよ、一夏君！」

一夏「はい！行くぞ、みんな！」

白式、紅椿、ブルーティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタムII、シュヴァルツェア・レーゲン、打鉄式式、ミステリアス・レイディが福音に攻撃を仕掛けた。
…。

一夏「俺達は負けない！絶対に元の世界へ帰ってみせる！」

簞「まずは私が牽制する…！」

打鉄式式が春雷を2発放ち、山嵐で福音を攻撃する。

簞「次は私だ！」

紅椿が雨月と空烈で福音を何度も斬り裂いていく。

簞「一夏、今だ！」

一夏「うおおおっ！」

紅椿は福音から離れ、白式が零落白夜で斬り裂き、蹴り飛ばす。

一夏「ラウラ、頼む！」

ラウラ「任せろ！」

次にシュヴァルツェア・レーゲンがパンツァー・カノニアを発射し、福音に直撃させる。

一夏「はあああっ！」

白式がさらに斬り裂き、福音の背後からブルーティアーズのビットが襲いかかる。

セシリア「私がおりにましてよ！」

さらに甲龍が崩山で攻撃する。

鈴「一夏、もう一回よ！」

楯無「一夏君の道は私達で作るわ！」

仰け反った福音をミステリアス・レイデイが蒼流旋で攻撃した。

シャルロット「一夏、急いで！そろそろ保たない！」

その後にヴェントとマシンガンで攻撃するラファール・リヴァイヴ・カスタムII。

一夏「今度は逃がさねえ！」

そして、白式が福音に接近して、最後にエネルギーを込めた左手を叩き込み、福音を

地面に直撃させた……。

銀の福音「!!？」

箒「やったな、一夏！」

一夏「俺達の……勝ちだ！」

白式達の連携で福音は大ダメージを受けた。

福音「……」

一夏「終わりだ、シルバリオ・ゴスペル！」

福音は爆発した……。

簪「福音の撃破を確認……」

セシリア「やりましたわ！」

千冬「（一夏、お前は周りの人間を惹きつける力がある……。それがお前の強さなのかも知れないな）」

マドカ「邪魔な福音は倒した！後は……！」

ファサリナ「流石はエクスクロスの皆さんですね」

ダリアとサウダーデが現れた……。

ミハエル「エクスクロス、同志の邪魔はさせない！」

ファサリナ「あなた達をここから先へ行かせるわけにはいきません」

竜馬「本腰を入れてきやがったか！」

隼人「だが、こいつは好都合だ！」

弁慶「奴等を倒せば、後はカギ爪のオヤジだけだ！」

ヴァン「退けよ、お前等に構っている時間はねえんだ！」

レイ「ガンソ」「だが、邪魔をすると言うのならお前達も消す」

ミハエル「同志を否定する者達め！全ての世界の為に消えろ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　ヴァンVSファサリナ〉

ファサリナ「ヴァンさん、最後です。私達と共に…」

ヴァン「何度も言わせんなよ、俺はカギ爪を殺す！お前等の計画なんぞ知るか！」

ファサリナ「ならば、力尽くで倒します」

ヴァン「つたく、相変わらずおっかない女だな、お前は…！」

〈戦闘会話　レイ「ガンソ」VSファサリナ〉

ファサリナ「何故あなたはそんなヨロイでオリジナル7である私に向かってくるのです？」

レイ「ガンソ」「シノの遺したヴォルケインを侮辱する者は俺は許さない！」

ファサリナ「シノさん…。あなたの奥様ですね」

レイ「ガンソ」「お前ごときがその名を口にするな!!？」

ファサリナ「一途な愛…。それを与える者、受ける者…。少しでも嫉妬してしまいます…！」

〈戦闘会話 零VSファサリナ〉

ファサリナ「零君、もう少しであなたと私も一つになりますよ」

零「残念だが、お断りだな。一つになるのは心に決めた人間だけだと決めてんだ」

アスナ「そう言う事よ、私達は何度でもあなた達を否定するわ!」

ファサリナ「多くの愛を受ける者…。悪いですが、八つ当たりをさせてもらいます…

!」

ゼファイ「こちららもパパを引き入れようとした事に対しての対処をします!」

ヴォルケイン改の攻撃でダリアはダメージを負った。

ファサリナ「そんな…!ダリアが何故!?!」

レイ「ガンソ」「勝負はあった。消えろ」

ファサリナ「わかりません…。レイ・ラングレン…。あなたの事が…」

レイ「ガンソ」「…」

ファサリナ「そんなヨロイでオリジナル7でもないただのヨロイ乗りのあなたが何故、私と互角に渡り合えるのです…」

レイ「ガンソ」「知らなかったのか…。お前達が使っている光学兵器…基になった、そ

の技術は……。その根本こそが……！このヴォルケインだと！だから、俺は負けるわけには
いかないのだ！シノの魂に誓って！」

ファサリナ「ああ……！」

ダリアは爆発した……。

カロツサ「ファサリナを撃破した！」

ジョシユア「兄さん……」

レイ「ガンソ」「障害の一つが消えたに過ぎん。行くぞ」

カルメン99「（ファサリナの奴……。爆発の前に逃げ出したみたいね……。あの女と決
着をつける……。それは私の役目よ……）」

ミハエル「よくもファサリナさんを！」

メリツサ「ミハエル、すごい気迫……！」

アル「愛する者がやられて頭に血が上った様だな！」

ミハエル「黙れ！私とファサリさんはその様な関係ではない！私達は夢を……魂を一つ
にした存在だったのだ！」

ウエンデイ「兄さん……」

〈戦闘會話　ヴァンVSミハエル〉

ヴァン「そこを退け、バカ兄貴！」

ミハエル「退くのは、貴様の方だ！同志の夢を阻む事は許されない！」

ヴァン「俺は色々な戦いの後で疲れてんだ！てめえに構っている時間はねえんだよ！それにいい加減覚えろ！俺はあいつを殺すんだ！」

ミハエル「貴様こそ何度も言わせるな！同志は間もなく死ぬ！貴様に殺させるものか！」

ヴァン「それじゃ意味がねえんだよ！俺が殺さなきゃよ！その邪魔をするんなら、死ぬ気で来やがれ！」

ミハエル「言われるまでもない！私は同志のためにも生命さえ投げ出す覚悟だ！」

ヴァン「大馬鹿鹿野郎が！ウエンディに土下座して謝れ!!？」

〈戦闘會話　零VSミハエル〉

ミハエル「あれだけの同志の誘いを断るなど万死に値する！」

零「お前等の計画自体が万死に値するがな！」

ゼファイ「パパを傷つけた借りは返します！」

ミハエル「同志を否定する者には当然の報いだ！」

零「それなら、世界全ての敵に対する報いを受けてもらうぜ、ミハエル！」

ダンの攻撃でサウダーデはダメージを負った。

ミハエル「何故だ!? 何故動かない、サウダーデ!?」

ヴァン「見てわからねえのか、バカ兄貴! それはお前が負けたからだ！」

ミハエル「貴様に兄と呼ばれる覚えはない！」

ヴァン「じゃあ、バカだけでいいな! バカカ！」

ミハエル「バカは貴様だ! 何故、間も無く死ぬ同志をわざわざ殺すと言うのだ!?」

ヴァン「そうしなけりや俺の気が済まねえんだよ！」

ミハエル「この分からず屋が! 同志の想いを無駄にして……！」

ヴァン「知るか! お前こそ、ウエンデイの気持ちをほったらかしにしてよ！」

ミハエル「私は自分のやるべき事をやってきた！」

ヴァン「俺だって、そうだ! 俺だけじゃねえ! ウエンデイも、みんなもそうだ! そし

て、お前は負けた! それだけの話だ! わかったら、さっさと引つ込め！」

ミハエル「そ、そんな……！」

サウダーデが爆発した……。

シン「1人の男に執着し、妹を見られなくなった、兄か…」

ユキコ「ウエンデイちゃん…」

ウエンデイ「大丈夫です、ユキコさん。私…。(兄さんは、まだ死んでいないと思うから…)」

アムロ「彼等も退けた！」

シャア「残るはカギ爪の男ただ1人だ」

ウエンデイ「すみません、皆さん！」

カルメン99「私達は別行動を取らせてもらおうわ！」

クロエ「お二人共、お気をつけて！」

ヴァン「出てきやがれ、カギ爪！出てこないなら、その施設をぶっ壊してやる！」

1カルメン99よ。

漸く見つけたわよ、ファサリナ…！

ファサリナ「…無駄です。私達を倒しても同志の計画は止まりません」

カルメン99「それはどうかしらね？エクスクロスを甘く見ない方がいいわよ」

ファサリナ「カルメンさん、ですね…」

カルメン99「そうよ。覚えていてくれてありがとう」

フアサリナ「忘れませんよ。トリトアノで栽培されたオルフェの花は同志の計画において重要な役割を果たしてくれからです。あの花に含まれる成分が触媒となり、粒子記憶素子を誘導して、同志の意志を世界中に植えつけてくれるのです」

カルメン99「私にとっては腐った花ね。故郷を汚した最低の花……」

フアサリナ「あの街は、元々そんなに綺麗なものでしたか？それにあなたは自分で故郷を捨てたのでしょうか？」

カルメン99「……」

フアサリナ「私には故郷がありません。生まれた時から一人でした。それが日常だったので寂しいと言う心すら持てません。あなたのように故郷を想う気持ちもわかりません。ですから、同志の為に動きます」

カルメン99「じゃあ、始めましょうか！」

フアサリナ「ええ、お相手します！」

ーウエンデイ・ギャレットです。

私はミハエル兄さんの前に立ちはだかりました……。

ウエンデイ「兄さん……」

ミハエル「ウエンデイ……。お前も来ていたのか」

ウエンデイ「私だつて……エクスクロスの一員だから……!」

ミハエル「そこを退くんだ、ウエンデイ。私は同志の下へ行かねばならないのだ。何故、その邪魔をする?」

ウエンデイ「兄さんが間違っているから!」

ミハエル「間違っているものか。同志が夢見た世界は皆が望んだ幸せの……」

ウエンデイ「そんな幸せ、誰も望んでいないわ!」

ミハエル「だが、もうすぐ幸せが世界を満たす」

ウエンデイ「幸せしかない世界なんておかしいわ、そんな幸せ……無いのと同じよ!それに誰かに無理矢理なんて……間違ってる!」

ミハエル「ウエンデイ!」

ウエンデイ「そんなの幸せじゃない!ただの心の暴力だわ!」

ミハエル「黙れ!」

ミハエル兄さんは私を押し退け、先に進み出した……。

ミハエル「通して貰うぞ!」

私は拳銃を兄さんに向けて、発砲し、兄さんの頬を掠った……。

ミハエル「っ……う、ウエンデイ……！」

ウエンデイ「行かないで……行っちゃ……ダメ！みんな、それぞれの世界が好きなのよ！辛い事もいっぱいあるけど、だから好きなの！」

ミハエル「狭い視野で語るな！お前に世界の何がわかる……？」

ウエンデイ「私は、この目で見てきたわ！この足で確かめてきた！兄さんこそあの人以上に何を知っているって言うの……？」

ミハエル「同志以上のものなどない！」

ウエンデイ「どうして、あの人しか見ないのよ！」

ミハエル「……」

ウエンデイ「……そうよ。わかったわ。あの人は世界や夢と言う言葉で誤魔化して本当のみんなを見ていないのよ！自分のわがままを押しつけるだけの人を兄さんは……信じたいだけなんだわ、あんな偽物を！」

ミハエル「黙れ！同志を否定すると言う事は僕を否定すると言う事だ！それだけは……それだけはああああつ……！！？」

ウエンデイ「兄さん……！」

―新垣 零だ。

カギ爪の男「ちゃんと聞こえてますよ、大丈夫ですから」

ヴァン「この声は……！」

フェルト「地下から膨大なエネルギー反応！」

スメラギ「これは……！」

現れたのは……巨大なヨロイ……!??

キタン「巨大なガンメン……いや、違う……!?？」

ヨーコ「何なの、あれ!?？」

ヒイロ「あれがああの男の切り札か」

カギ爪の男「そうです。その名もバースデイと言います。今日は全ての世界が生まれ

変わる日……。それに相応しいヨロイでしょう」

零「全ての世界とはどういう事だ？」

カギ爪の男「どう言う事、とは……？」

零「本来ならばその計画はアル・ワースにしか通用しない。だが、この世界でその計画を実行してもお前達には意味はないはずだ……。だが、お前は全ての世界と言った。それは……このアル・ワース以外の世界も巻き込めると言う事なのか!?？」

カギ爪の男「その通りです。幸せの時の発動と同時にネメシス君に異界の門を開いてもらい、全ての世界を繋ぐんです」

デュオ「何だと!?？」

五飛「アル・ワースだけでなく、他の世界まで巻き込む気か…!」

カギ爪の男「そうです。全ての世界の人達が私と一つになるのです」

レイ「ガンソ」「カギ爪!」

ヴォルケイン改がバースデイに近づいた…!??

ビゾン「待つんだ、レイ・ラングレン!」

カギ爪の男「レイ君、あなたの執念も素晴らしいですね。ですが、無意味です」

空からG—ER流体が降り注ぎ、ヴォルケイン改を襲った。

レイ「ガンソ」「ぐっ…!」

ジョシユア「兄さん!」

何だよ、あの力…!??

ーカルメン99よ。

ヴァン達がドンパチやっているみたいね…!

ファサリナ「大したものですね。この爆発の中でも逃げようとしないうんて」
カルメン99「こっちにも維持つてもんがあるのよ！」

ファサリナ「あなたは、私をどうすれば気が済むのですか？その前にどうして私はここまで憎まれているのです？」

カルメン99「ハエツタの事…忘れてないでしょうね？それに…あんた…可愛いじゃない…」

ファサリナ「は…？」

カルメン99「好きな事になりふり構わず突っ込んで…好きな男とも一緒にいて…残酷だけど、素直に生きてる…」

ファサリナ「と言われましても…」

カルメン99「いい気になんないで！みんながみんな、あんたみたいに可愛く生きてるわけじゃないのよ！」

ファサリナ「いい加減にしてください。それはただの嫉妬です」

カルメン99「そうよ…！私だって、あんたみたいに素直になりたかった！」

ファサリナ「なればいいじゃないですか」

カルメン99「それは死んでも無理！」

ファサリナ「あなた…ワガママです！」

ヴァン、みんな…私も負けないから、あんた達も負けないでよ…!

―新垣 零だ。

ゼロ「あれが…バースデイの力か…!」

カギ爪の男「そうです。だから、諦めてください」

ヴァン「この野郎…!」

レイ「ガンソ」「カギ爪…」

レイさんがヴォルケイン改のコックピットから降りた…!!?

カギ爪の男「これ以上、あなたに付き合っている時間はありません。さあ、バースデイ。私を迎え入れる為に扉を開いてください」

カギ爪の野郎…始めるつもりか…!

レイ「ガンソ」「…夢を奪われた者がどうなるか知っているか?」

カギ爪の男「はあ…?」

レイ「ガンソ」「どうにもならない決してうまらない苦しみに、怒りに、悲しさに心と

身体を苛まれるんだ！それがどれ程苦しいか…選べ！生命を取るか!!？夢を守るか!!
？」

カギ爪の男「そのどちらも」

レイ「ガンソ」「貴様あああつ!!?」

レイさんは銃を発砲するが、カギ爪の野郎に弾かれる。

カギ爪の男「残念でしたね。当たりませんよ。私はバースデイに乗り込みます。悪し
からず」

カギ爪がバースデイに乗った。

カギ爪の男「では、お別れです。新世界でお会いしましょう」

ジョシユア「逃げて、兄さん！」

ヴァン「レイ！」

バースデイはヴォルケイン改に向けて、攻撃を放ったが、レジエンドガンダムとネル
ガルがそれを防いだ。

ビゾン「くっ…！」

レイ「Destiny」「無事ですか、レイ・ラングレン？」

レイ「ガンソ」「！」

ビゾン「早く、コックピットに戻れ！」

レイ「ガンソ」「お前達が何故、俺を助けた？」

ビゾン「俺は…お前達のお陰でエフゲニー・ケダールにならなくて済んだ…。だから、このぐらい当然の事だ」

レイ「Destiny」「それにここでああなたが散れば、ジョシユアも悲しみます」

レイ「ガンソ」「…感謝する」

レイさんはヴォルケイン改に乗り込み、3機ともバースデイから距離を取ると、ヴォルケイン改の隣にダンが並ぶ。

ヴァン「奴を殺すのは俺だ」

レイ「ガンソ」「いや、カギ爪を殺るのは俺だ」

ヴァン「ちよつと待て！それは俺だつて言つてるだろう！」

レイ「ガンソ」「いや、俺だ」

ネロ「何をやっているんだ、二人共！」

零「カギ爪が目の前にいるのに喧嘩している場合じゃないでしょう!?」

ヴァン「違いねえ」

レイ「ガンソ」「ならば、早い者勝ちだ。文句を言うなよ」

ヴァン「俺のセリフだ。行くぜ！」

レイ「ガンソ」「ああ…！」

カギ爪の男「素晴らしい！仲違いしていた二人が共通の目的の為に手を取り合う！貴方達こそ、新世界の誕生の場に相応しい者達です！さあ、このバースデイと…！」

レイ「ガンソ」「黙れ」

ヴァン「お前はここで死ぬんだよ！俺の手にかかってな！」

戦闘開始だ！

くそッ…！バースデイの力は半端ないな…！

ヴァン「殺してやる…！殺してやる！」

レイ「ガンソ」「カギ爪！お前だけは！」

カギ爪の男「せつかちな人達だ…！」

ヴァン「殺してやる！殺してやるうううっ!!？」

カギ爪の男「今はダメ…。でも、私の生命を使えば、もつと素敵な事ができますよ」

ヴァン「黙れ！」

カギ爪の男「夢に向かう、その執念…。あなたは本当に素晴らしい！だから、プレゼントを差し上げたい。あなたの婚約者…生き返らせます」

レイ「ガンソ」「何…だと…？」

カギ爪の男「この世界に満ちているオドの力を使い、近辺の時系列を圧縮し、歴史をやり直します。つまり…死んだ人間が生き返る」

ヴァン「エレナが…」

カギ爪の男「勿論、ヴァン君の婚約者だけではありません。ここにいる皆さんも、それぞれにやり直したい事があるでしょう。別離、失敗、挫折…。何でも構いません。それぞれの歴史をやり直しましょう」

刹那「家族が…生き返る…」

シモン「兄貴やメツセンジャーとなったニアが戻ってくる…」

ヒイロ「戦争によって失われた生命も…」

ゴーカイレッド「アカレッドが…」

アキト「ユリカの悲しみも消え、俺の下も元に戻る…」

ウイル「俺やニツクも人間に戻れるのか…」

みんな…。

カギ爪の男「私はいなくなり、あなた達の後悔は消え、世界は平和になる…。あなた達やそれぞれの世界にとっても、素晴らしく都合のよろしい世界になるのです」

ヴァン「…」

カギ爪の男「ヴァン君…。私はあなたを救いたい…。最後にあなたの友達に…友達に

なりたいのです」

ヴァン「黙れええええつ!!?」

カギ爪の男「あら?」

ヴァン「エレナは死んだ!お前が殺したんだ!俺からエレナの死まで奪う気か!死んだ奴はなあ:絶対に生き返らねえんだ!」

アルト「ヴァン:」

一夏「何を戸惑っているんですか、皆さん!死んだ人間は生き返らない:そんな事、当たり前じゃないですか!」

青葉「:」

千冬「一夏:」

一夏「俺達はそれぞれ間違いを犯したり、辛い道を進んできました!でも、やり直すつて事はそれから逃げるつて事です!そんな事をする為に俺達は戦ってきたんですか!!?」

しんのすけ「一夏お兄ちゃんの言う通りだゾ!あの変な手のおじさんの言っている事は訳がわからないゾ!」

零「みんなは何を胸に今まで戦ってきたんですか!!?あいつの言葉だけで今までの決意が崩れる程のものだったんですか!!?」

甲児「…そうだな」

九郎「迷う事なんてない…!」

ケロロ「吾輩達は辛い事も悲しい事も乗り越えてきたであります!」

ジョーイ「やり直して、得た幸せなんてただの空想の世界だ!」

カギ爪の男「あ、あら?」

キラ「生命の意味を理解していないあなたの言葉なんて信じられません!」

カギ爪の男「成る程…。あなたと私が友達になれなかったのはその見解の相違の為だったのですね。…では、あなた達の存在はなかったものとして、計画を進めましょう。オルフェの花がない為、多少乱暴なやり方になります、やってやれない事はないはずです。脳が耐えきれず死んでしまう方は申し訳ありません」

バースデイから光が…!」

マリア「これは…!」

ゼクス「本当に歴史が改変されるのか?!?」

ヴァン「カギ爪ええええつ!!?」

ダンがバースデイに攻撃を仕掛けた…。

カギ爪の男「君という人は本当に…」

しかし、逆にバースデイの攻撃を受けてしまう。

ヴァン「ぐっ……！」

カギ爪の男「そうか……！わかりました！ヴァン君……君はつまり、バカなんだ！」

ヴァン「ぐうう……」

カギ爪の男「そうか……。これがバカというものなんだ……。ああ……バカよ……。バカ……バカ……。愛しきバカよ……。勝算など考えない純粋な衝動……。そうでなくては、人は夢など見られないものです」

ダンが……ヴァンさんが倒れるなんて……！

プリシラ「ヴァン！」

アルト「ヴァン！」

ヴァン「……」

カギ爪の男「ヴァン君……。最後に君と出会えて……良かった……。バカが、これ程興味深いものとは知りませんでしたよ。すぐにあなたと私は一つになる。後でゆっくり心の中で語り合います。では、世界を……」

どうにもならないのか……！

すると、バースデイが軽く爆発した……。

カギ爪の男「え……制御システムに異常……？何故です……？バースデイの内部にダメージは到達していないはずです」

レイ「ガンソ」「果たして、そうかな？」

カギ爪の男「まさか……」

ニール「レイの撃ったあの弾だ！カギ爪に弾かれてコックピットに当たったみたいだな！」

レイ「ガンソ」「そうだ！たった一発の銃弾がカギ爪の計画を潰す！」

カギ爪の男「そんな……。だが、まだ機能の全てが停止した訳ではありません！応急処置をすれば……」

アキト「今がチャンスだぞ、ヴァン！」

刹那「いつまで寝ているつもりだ！」

アルト「お前の戦う理由はこんなものだったのかよ！」

零「起きてください、ヴァンさん！」

ーヴァンだ。

俺は走馬灯を見ていた……。

みんなの、声が聞こえる……。だが、これ……ヤバイだろ、ヤバイって……コレ。すると、今度はウエンデイの顔が浮かび上がった。

あ、コイツ…覚えてるかな、ちゃんと…お嫁さんつてのは…幸せで…幸せで…幸せの
絶頂の時に…」

そして、俺の脳裏に…エレナが…俺の愛する者の後ろ姿が浮かび上がった。

ヴァン「エレナアアアアツ!!?」

―新垣 零だ。

ダンが凄まじい力を纏って、立ち上がった!!?

ジユドー「ダンが立ち上がった!」

ハマーン「だが、何だ!あの力は…!!?」

ガドウエド「バカな…オーバーフロウだと…!!?」

ウー「オーバーフロウ?」

ガドウエド「ヴァンは…改造などしなくとも…初めからヨロイを動かせたのか…!」

カギ爪の男「おお?」

ヴァン「チエアアアツ!」

ダンはバースデイに攻撃を仕掛けた。

ヴァン「バラバラにしてやる!エレナの仇イイイイツ!!?エレナアアアツ!!?」

「ダンはおーバーフロウを使い、腕を上にと上げるとG—ER流体で巨大な剣が形成された。」

ヴァン「終わりだ、カギ爪！ちえやあああつ！」

そして、巨大な剣を振り下ろし、バースデイを斬り裂いた。

そして、G—ER流体の剣を消し、勢い良く跳躍して、バースデイに近づいた。

ヴァン「チエエエエエストオオオオツ!!？」

蛮刀を逆手持ちにして、バースデイの頭から全てを斬り裂いた。

カギ爪の男「執念の力が…素晴らしい…！」

ヴァン「ふう…！」

斬り裂かれたバースデイはダメージを負う。

サラ「凄いい！バースデイにダメージを与えたよ！」

ガドウエド「奴め、この土壇場で化けたか」

カルロス「若い者も着々と強くなるのだな」

ネロ「カルロス！」

バリヨ「起きたのか！」

カルロス「若い者が頑張っているんだ。寝てばかりはいられないわ！」

ミレイナ「今のヴァンさんの攻撃で次元の歪曲が止まりました！」

ラッセ「やったぜ！」

カギ爪の男「やめなさい、ヴァン君。このままでは計画が水の泡に：どうして、あなたはこんな事を：どうして：」

ヴァン「決まってるだろう！それはなあ！お前が：！俺を怒らせたからだ！！？」
これで終わらせるぞ、カギ爪！

〈戦闘会話 万丈VSカギ爪の男〉

万丈「人の想いを無視するお前のやり方は許せない！」

カギ爪の男「大丈夫です。受け入れてしまえば、簡単な事ですよ」

万丈「どの様な言われ方をしようと僕はお前を受け入れるつもりはない！」

〈戦闘会話 ショウVSカギ爪の男〉

ショウ「お前はここで止める！」

カギ爪の男「計画が成功すれば、戦いがなくなるのですよ？」

ショウ「戦いのない世界は俺達自身が手に入れる！お前の手など借りなくともな！」

〈戦闘会話 エイサツプVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「世界を想いの力で満たしたいのであれば私に協力してください」

エイサツプ「他人の意志を無視する様なやり方じゃ平和な世界を作る事なんて出来ない！それを教えてやる！」

〈戦闘会話 カミーユVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「皆さん、酷いですよ。私の言葉も聞かないで…」

カミーユ「お前自体が他人の言葉を聞かないのに聞いてくれると思うなよ！お前の計画は必要ないんだよ！」

〈戦闘会話 ジュドーVSカギ爪の男〉

ジュドー「あなたのやり方は間違っているんだよ！」

カギ爪の男「どうして君がそんな事を言うんですか？」

ジュドー「じゃあ、他のみんなに聞いてみるよ！誰一人としてお前の計画に賛同する人間はお前の仲間じゃないんだよ！」

〈戦闘会話 アムロVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「あなたの力…私の計画と似ていますね」
アムロ「一緒ではない。お前の夢を他人に押し付けるお前と一緒にするな！」

〈戦闘会話　バナージVSカギ爪の男〉

バナージ「お願いです、降参してください！」

カギ爪の男「何故、降参する必要があるのですか？あなた達こそ、私の計画を手伝ってください」

バナージ「それは出来ません…。あなたの計画は俺が止めます！」

〈戦闘会話　シーブックVSカギ爪の男〉

シーブック「死んだ人間を蘇らせる…。そんな事本当に出来ると思っているのか、あんたは!?」

カギ爪の男「出来ます。私の計画は完璧ですから」

シーブック「完璧なんて言葉はない！絶対に何処かで歯車が合わなくなるんだ！そんな曖昧な計画は止める！」

〈戦闘会話　トビアVSカギ爪の男〉

トビア「あなたの計画は認めるつもりはない！」

カギ爪の男「君に計画を認めてもらわなくても計画に支障はありませんから」

トビア「そういうところが認められないんだよ！覚悟しろ、そんな計画は絶対に潰してやるからな！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「大丈夫です、後は楽になりますから」

キンケドゥ「悪いが、そんな計画を受けるつもりはない！荒っぽく止めるぜ！」

〈戦闘会話 ヒイロVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「あなたも辛いでしょう。計画が成功すれば、争いとは無縁の生活を送れますよ」

ヒイロ「争いをなくす事は出来ても過去を消す事は出来ない。お前の計画は遂げさせない。ターゲット、カギ爪の男……！」

〈戦闘会話 シンVSカギ爪の男〉

シン「あなたの計画……何処かデュランダル議長の計画と似ている……！」

カギ爪の男「おお：似た様な計画を経験しているのなら、あなたは受け入れてくれますよね？」

シン「ふざけるな！強制の計画なんて、認めてたまるかよ！」

〈戦闘会話　キラVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「生命も一つにすれば、皆さんが幸せになる世界を築けます」

キラ「生命の意味も理解していないあなたでは、無理です！その前に僕達はその計画を破壊します！」

〈戦闘会話　刹那VSカギ爪の男〉

カギ爪の男「異性と対話と成し遂げたあなたは賞賛に値します」

刹那「そうか……。だが、俺はお前の計画を否定する！強制による対話など世界には必要ない！」

〈戦闘会話　リボンズVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「リボンズ君、君はそちら側にいましたか」

リボンズ「残念だよ、クー・クライング・クルー。この様な結果になるとはね。これ

「も運命かな、君の計画を全力で否定しよう」

〈戦闘会話　キオVSカギ爪の男〉

キオ「確かにあなたは世界を平和にしようとしています！」

カギ爪の男「そうです。よくお分かりで」

キオ「でも、僕はその計画を受け入れるつもりはありません…。本当の平和を掴むために！」

〈戦闘会話　アセムVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「私と共に世界に平和を…」

アセム「平和なら俺達の手で掴むさ。だから、あんたは退場しな！」

〈戦闘会話　フリットVSカギ爪の男〉

フリット「歳を取ると他の者の為に動きたくなくなるのはわかるが…お前のはお前自身の為に動いているな」

カギ爪の男「と言われましても…。私と皆さんは夢を共有していますので…」

フリット「だが、それはお前の仲間だけだ。全人類を代表して、お前を止める！」

〈戦闘会話　ベルリVSカギ爪の男〉

ベルリ「他の世界にはおかしい事を考える人もいるんですね」

カギ爪の男「そこまでおかしい事ですか？」

ベルリ「それに気づかない時点であなたはおかしいんですよ！」

〈戦闘会話　三日月VSカギ爪の男〉

三日月「よくわからないけど、あんたの計画に乗るつもりはないから」

カギ爪の男「では、少し話を…」

三日月「悪いけど、あんたの話を聞く気もないから。暁やアトラの世界を守る…！」

〈戦闘会話　オルガVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「あなたが望むなら、新世界で家族と共に暮らせる様にしますよ」

オルガ「俺が独断でそんな事しちまえば、家族の為に戦ったあいつらを否定する事になる…。そんな事させてたまるかよ！」

〈戦闘会話　ワタルVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「全てが一つになれば、君も救世主になる必要なんてありませんよ」

ワタル「僕は望んで救世主になったんだ！だから、みんなを一つになんて僕がさせないよ！」

〈戦闘会話 舞人VSカギ爪の男〉

カギ爪の男「辛いですね、その年齢で正義の味方として活動するなんて……」

舞人「辛い事などない！俺は正義の為に戦ってきたんだ！俺から正義を奪う事は出来ない！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「君の心には悲しみに満ちていますね」

ルルーシユ「黙れ。俺の事を分かった様な口で話すな。お前の計画は俺の戦略によって破壊される」

〈戦闘会話 青葉VSカギ爪の男〉

カギ爪の男「元の時代に戻りたいのなら、戻して差し上げましょう」

青葉「必要ねえよ！俺と雛は自分達の力で元の世界に戻るんだ！」

〈戦闘会話 アンジユVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「エンブリヲ君のお気に入り君とも新世界で一つになりましょう」
アンジユ「新世界を望む人間はろくな奴がないわね！それから、訳の分からないオヤジと一緒にいるなんて生理的に無理だから！」

〈戦闘会話 甲児VSカギ爪の男〉

甲児「悪い奴の考える事は本当に理解できないな！」
カギ爪の男「そんな事はありません。よく話し合えばわかり合うはずですよ」
甲児「そんな必要はねえよ！どれだけ話したって意味はねえんだからよ！」

〈戦闘会話 鉄也VSカギ爪の男〉

鉄也「無理矢理計画を実行するというのならこちらも考えがあるぞ！」
カギ爪の男「どうするといふのですか？」
鉄也「力尽くで止める…。それだけだ！」

〈戦闘会話 海道VSカギ爪の男〉

真上「妙な計画を思いつくものもいたものだな」

カギ爪の男「あなた達は…どちらかというところでも平和よりも争いを求めていますか？」

海道「そうだな。だが、平和つてのも悪くねえんだよ。だから、てめえのくだらねえ計画は終わりにしてやるよ！」

〈戦闘会話 シモンVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「シモン君、あなたの大切な彼女を救い出して上げましょう」

シモン「余計な事をしてんじやねえよ！ニアは俺達の手で救い出さないと意味がねえんだよ！ニアとこの世界を生きる為にもお前の計画なんざ一捻りで潰してやるからな！」

〈戦闘会話 ネモ船長VSカギ爪の男〉

カギ爪の男「あなたの娘さんを助け出してあげましょう。そして、家族団欒で暮らしてください」

ネモ船長「お前の手など借りなくともナディアは私が助け出す。お前の野望を潰してからな」

〈戦闘会話 一夏VSカギ爪の男〉

一夏「お前の話は全部、空想の中の夢物語だ！」

カギ爪の男「夢物語などでは済ましませんよ」

一夏「信じられるか！そんな馬鹿げた計画でみんなを騙そうとする奴の言葉なんてな
！」

〈戦闘会話 竜馬VSカギ爪の男〉

カギ爪の男「野蛮な方ですね。少し、私の話を聞いてください」

竜馬「聞いて反論した所で俺達の話の聞こうともしない奴にいわれる必要はねえ！覚悟しろよ、カギ爪のジジイ！俺達のやり方は無事じゃ済まねえぞ！」

〈戦闘会話 葵VSカギ爪の男〉

葵「年貢の納め時ね、カギ爪さん！」

カギ爪の男「いえ、私の夢はここから始まります」

葵「じゃあ、今日で最初で最後にしてあげる…。私達がね！」

〈戦闘会話 九郎VSカギ爪の男〉

アル「九郎、その様な輩を許すなよ！」

カギ爪の男「何を言っているのですか、あなた達もいつまでも一つになれるのですよ」
九郎「他人に一つにしてもらうつもりはねえ…。平和な世界は俺達の手で勝ち取つてみせるからよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSカギ爪の男〉

ジョーイ「これで終わりにします！」

カギ爪の男「ええ、そして新世界が始まります」

ヒーローマン「…！」

ジョーイ「新世界なんて、誰も望んでいません！僕とヒーローマンが止めます！」

〈戦闘会話 ヴァンVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「待ってください、ヴァン君。私の話を聞いてください」

ヴァン「待てるかよ！この時を俺はずっと待っていたんだ！カギ爪！お前を殺してやるううううつ！！？」

カギ爪の男「ああ…残念です。私は、あと少しだけ死ぬわけにはいかないのですから」
ヴァン「お前はああああつ！今すぐ死ねええええつ！！？」

カギ爪の男「やはり、あなたは普通ではない…。私が今まで出会った誰とも違う…。そう…これがきつとバカなのですね…」

ヴァン「うるせええええつ！死ねええええつ！！？」

〈戦闘会話 レイ「ガンソ」VSカギ爪の男〉

レイ「ガンソ」「カギ爪！全てを終わらせてやる！」

カギ爪の男「あなたもしつこい方だ。私の生命が欲しいのなら、どうして、あと少しが待てないのです」

レイ「ガンソ」「今日まで俺は待ち続けた…！だからもう、一分一秒も待つつもりはない！シノの仇！今こそ討たせてもらうぞ！」

カギ爪の男「ダメです」

〈戦闘会話 ネロorプリシラVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「あなた達も私と同じ世界の人でしょうか？何故、手を取り合おうとしないですか」

ホセ「そんな事決まっている」

バリヨ「悪党の手など取る正義の味方はおらん！」

カルロス「そして、悪党は正義の味方が倒す！」

プリシラ「ヴァンに想いを伝えるためにもあなたは倒すわ！」

ネロ「そして、世界の平和は俺達を守ってみせるぞ！」

〈戦闘会話　　ガドウエドorウーorカロツサorメリツサVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「ガドウエド君、ウー君、カロツサ君、メリツサ君……。あなた達まで私を否定するとは……」

メリツサ「同志、ごめんなさい……」

カロツサ「でも、俺達……俺達の意志で生きたい！」

ウー「母上が望んだ世界を守るため！」

ガドウエド「お前を倒すぞ、カギ爪！」

〈戦闘会話　　アマタVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「受け入れられる愛も受け入れられない愛も……全て真実の愛へと変えませす」

アマタ「人にはそれぞれの愛がある……。それを勝手に変えさせはしない！」

〈戦闘会話 ノリコVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「宇宙怪獣との戦いは辛いでしょう。私が解放させてあげます」

カズミ「折角ですが、お断りします」

ノリコ「私達は自らの手で宇宙怪獣の脅威から地球を守ってみせます！」

〈戦闘会話 ユイVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「安心してください。あなたの方々も幸せを得れます」

レナ「そんなの幸せじゃない！」

ユイ「幸せというのは誰かに与えられるものではありません！それを証明してみせます！」

〈戦闘会話 ノブナガVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「君の国の人達も蘇らせてあげましょう」

ノブナガ「民が平和に暮らせる世の中が出来るのはいい事だ。だが、そこには俺とお前は必要ない！幸せは他の者が自らで得るものだ！」

〈戦闘会話 しんのすけVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「いつまでも平和に暮らしてください。そんな新世界を作るので」

しんのすけ「オラ達はこれまで通りの世界でいいゾ！」

カンタム「他人の幸せなんて必要ない！僕達はそれぞれの幸せや苦しみを持っている
∴。だから、明日へと生き抜くんだ！」

〈戦闘会話〉 ケロロVSカギ爪の男

カギ爪の男「侵略なんてやめて、みんなで平和に暮らしましょうよ」

ケロロ「平和が一番なのはわかっているであります。だがしかし！お前の幸せは苦し
み並みに必要ないのでありますよ！」

〈戦闘会話〉 アキトVSカギ爪の男

カギ爪の男「あなたも元に戻りたいのでしょうか？ならば、何故私を受け入れないんで
すか？」

アキト「俺はユリカと共に自らで幸せを得る！お前などに与えられなくともな…！」

〈戦闘会話〉 ルリVSカギ爪の男

カギ爪の男「可愛い方が相手なのですね」

ハーリー「艦長……」

ユリカ「ルリちゃん、幸せを勝ち取ろうね！」

ルリ「はい。では、あの分からず屋の老人に一発与えましょう」

〈戦闘会話　アルトVSカギ爪の男〉

アルト「バジユラ達を操っておきながら何が平和だよ！」

カギ爪の男「彼等も一つになれば、蘇りますよ」

アルト「そういう事を言ってるじゃねえ！蘇ろうが何だろうが、生命を弄ぶ権利はお前にはねえんだよ！」

〈戦闘会話　リオンVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「どうして……どうしてこんな事を……」

リオン「当たり前前の事言ってやる！俺はお前をなどでも否定してやるからな！」

〈戦闘会話　ゴーカイレッドVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「あなたが望むのなら最高級のお宝を差し上げましょう」

ゴーカイレッド「そんなのは必要ありません！」

「ゴーカイレッド「欲しい物は自らで手に入れる。それが海賊だ！海賊の流儀を知らない奴が口を挟んでんじゃねえ！」

〈戦闘会話　ゼロVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「平和を望むあなたなら、私達の計画を理解できるでしょう？」

ゼロ「悪いな、全く理解できねえ。ただわかるのはお前の計画がとんでもなくくだらねえものだったって事だ！」

〈戦闘会話　EXゴモラVSカギ爪の男〉

EXゴモラ「キシヤアアン！」

カギ爪の男「私達で怪獣達と共に暮らせる世界を作りましょう！」

レイモン「それは俺達の手で作る…。お前の手など借りなくてもな！」

〈戦闘会話　マサキVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「世界に争いがなくなりたいのなら、私が無理矢理変えます」

マサキ「人の意志を無視して、行いう奴の方がよっぽどタチが悪いんだよ！いい加減気づきやがれ！」

〈戦闘会話　アーニーVSカギ爪の男〉

サヤ「皆さんが望む世界にあなたの夢は必要ありません！」

カギ爪の男「そんな事はありません。必要ですよ、絶対」

アーニー「それに気づかない時点でお前は終わりだ、カギ爪！」

〈戦闘会話　アマリVSカギ爪の男〉

カギ爪の男「術士の方ならこの世界を救いたいはずです」

アマリ「ですが、それは私達が成し遂げます！そして、あなたの計画も阻止してみせます！」

〈戦闘会話　零VSカギ爪の男〉

カギ爪の男「零君、君もわからない人ですね」

アスナ「わかっているのはあなたよ！もうあなたは必要ないのよ！」

ゼファイ「未来を…他人に決められるのは真つ平ゴメンです！」

零「だからこそ、お前を止める！その歪んだエゴと共にな！」

ダンとヴォルケイン改の攻撃にバースデイらダメージを受けた。

カギ爪の男「あ…ああ…！」

モニカ「島の上昇が止まりました！あのバースデイと連結したシステムにトラブルが発生した模様です！」

ブレラ「これで奴の計画は終わりだな」

レイ（ガンソ）「どうだ、カギ爪！もうお前には何も残されていないぞー！」

カギ爪の男「…この施設にいる私と夢を共有する皆さん、聞いてください。今回の計画はヴァン君の活躍によって頓挫しました。遺憾ではありますが、事実です。そこでもう一度計画を最初からやり直します」

ワタル「ええっ!!?」

クラマ「しつこい野郎だな！」

カギ爪の男「ああ…私は嬉しい…。また皆さんと共に歩めるとは…。夢を叶える、その日まで私は何があっても死にません！」

ヴァン「うるせえええええっ!!?」

カギ爪の男「そう…これもヴァン君達のお陰です。私は…！彼を！彼こそ！新計画にとつての最初の友人として迎えたいと思います。前計画に欠けていたフアクター…バ

カ代表として」

みさえ「な、何なの？あの人…」

刹那「奴と俺達では分かり合う事は出来ない…」

カギ爪の男「ヴァン君！ありがとう…ありがとう！」

レイ「ガンソ」「貴様に次の計画などない！」

ヴァン「お前はここで死ぬんだよ！俺の手で！」

レイ「ガンソ」「いいや、俺だ！」

ヴァン「何言ってやがる！奴は俺の剣で…」

レイ「ガンソ」「俺の銃で…」

ヴァン & amp; レイ「ガンソ」「絶対に殺す！」

え：ダンとヴォルケイン改が同時に仕掛けた…!??

ヴァン「与太話を聞きに来たんじゃねえ！俺は、てめえを殺しに来たんだ！カギ爪は

俺が殺す！」

レイ「ガンソ」「いや、俺が殺す！」

ヴァン「俺だあああつ！ちえやあつ！」

ダンが突つ込み、蛮刀をバースデイに突き刺した。

レイ「ガンソ」「漸くこの手でカギ爪を…！デリートオオオオツ!!？」

ヴォルケイン改はダンことバースデイをロックオンして、全武装を一斉発射した。

間一髪、ダンはそれを避け、バースデイに直撃した。

ヴァン「しつげえぞ、カギ爪は俺が殺すって言ってるんだろ！」

ダンは刀型に変形し、バースデイに突撃する。

レイ「ガンソ」「俺だと言っている！」

ダンが通り過ぎたと同時にヴォルケイン改がエナジーブリットキャノンに至近距離で一発、放った。

ヴァン「死ね、カギ爪！」

上空に上がり、ヨロイの姿に戻ったダンは蛮刀を振り回して、逆手持ちで持ち、落下する。

ヴァン「チエエエストオオオツ!!?」

ダンはバースデイを大きく斬り裂いた。

カギ爪の男「ああ…私はあなたを愛しています…」

斬り裂かれたバースデイは大ダメージを受けた。

ヴァン「今だ！」

レイ「ガンソ」「覚悟しろ、カギ爪！」

ダンとヴォルケイン改がバースデイに近づいた…。

ーヴァンだ。

俺とレイはバースデイの中に入った。

ヴァン「…」

レイ「ガンソ」「…」

カギ爪の男「…フツ、ヴァン君、レイ君…。私はあなた達を愛して…」

カギ爪の言葉を遮る様に刀を抜く音と銃声が同時に聞こえ、カギ爪は倒れた。

倒れたカギ爪をよく見ると身体は横に真っ二つになり、頭には銃弾の穴があった。

ヴァン「…おい。こいつを殺したのは俺だ。お前の銃弾がこいつの頭をぶち抜く前に

俺が斬った」

レイ「ガンソ」「何を言う…。お前が斬る前に俺が撃ち抜いていた」

ヴァン「…」

レイ「ガンソ」「…」

ヴァン「…へっ、やめだやめだ。カギ爪が死んだ事には変わらない」

レイ「ガンソ」「そうだな。どちらが殺していようがもうカギ爪を殺す事は出来ない」

ヴァン「…戻るか」

レイ「ガンソ」「ああ…」

俺達はそれぞれのヨロイに乗った…。

―新垣 零だ。

バースデイの爆発の一步手前でダンとヴォルケイン改が出てきた。

プリシラ「ヴァン！」

ウー「奴はどうなった？」

ヴァン「俺が殺した」

レイ「ガンソ」「いや、俺が殺した」

アマリ「え、ええっ!?どっちなんですか!?」

零「どっちでもいいじゃねえか、アマリ。カギ爪の野郎を倒した事には変わらねえん

だからよ」

ヴァン「零の言う通りだ。さてと、後は…」

まだあいつ等が残っていたな…。

ウエンデイ・ギャレットです。

ミハエル「同志が…死んだ…？そんな…そんな…！」

ウエンデイ「兄さん…」

すると、私の上から瓦礫が落ちてきた…。

ウエンデイ「あ…」

ミハエル「ウエンデイ！」

兄さんが私を抱きしめ、変わりに瓦礫の下敷きになった…。

ウエンデイ「兄…さん…？」

ミハエル「…大丈夫か、ウエンデイ？」

ウエンデイ「…兄さん…私を守ってくれたのね…。昔みたいに…」

ミハエル「…そうだ…。僕の戦いの始まりは…ウエンデイを守る事だった…。そのウエンデイの悲しむ事を僕は…やろうとしていた…」

ウエンデイ「兄さん…」

ミハエル「ウエンデイ…。お前が…正しいのかも知れない…」

ウエンデイ「え…」

ミハエル「でも、僕が選んだ道も…正しいと思うんだ…。だから、僕は僕の道を進みたい…。お前はお前の道を行け…。カメオ…」

カメオ「クエ？」

ミハエル「ウエンデイを頼んだよ…」

カメオ「クエー！」

兄さんが歩いていく…。

ウエンデイ「あ…。さようなら、ミハエル兄さん…！」

…私も早くカルメンさんと合流しないと…。

ーカルメン99よ。

どうやら、あいつ等がやったようね！

ファサリナ「同志がお亡くなりになるなんて…！」

カルメン99「ファサリナ…」

ファサリナ「殺してください…」

カルメン99「何言ってるのよ！」

ファサリナ「私には…もう生きる意味なんて…ないから…！」
カルメン99「…そう。じゃあ…！」

ミハエル「待て…！」

こいつは…ウエンデイのお兄さんの…！」

ミハエル「ファサリナさんから離れる！」

カルメン99「え…！」

ファサリナ「ミハエル君！」

ミハエル「その人は…！その人は僕の大切な…！」

ファサリナ「ミハエル君…！」

ミハエル「わかつたんです、ファサリナさん…。同志がお亡くなりになつても、僕にはファサリナさんがいてくれれば…！」

ファサリナ「ああ、ミハエル君…。私も…あなたがいてくれれば…！」

カルメン99「あくあ、あなたが生きる理由なんてそれで十分でしょ。生き延びてよね、それがあなたの生きる理由になるんだから…！」

ウエンデイ「カルメンさん！」

カルメン99「ウエンデイ、どうやら終わつ…つ、ファサリナ、ミハエル！」

ウエンデイの元へ行こうとすると、ファサリナ達の上から大きな瓦礫が落ちてきた事

に気がついた。

ウエンデイ「兄さん！」

ミハエル「！」

ミハエルは咄嗟にフアサリナを抱きしめ、守ろうとしたその時だった…。

ヴァン「チエアツ！」

ヴァンが蛮刀で瓦礫を真つ二つに斬った…。

―新垣 零だ。

俺達は機体をそれぞれの艦へ戻し、カルメンさんとウエンデイを迎えに行こうとしたが、偶然、抱き合うフアサリナとミハエルの上に瓦礫が落ちていたのを見つけ、ヴァンさんが蛮刀で瓦礫を真つ二つに斬った。

ウエンデイ「大丈夫、兄さん!!？」

ミハエル「あ、ああ…」

フアサリナ「ヴァンさん…どうして、私達を助けてくれたのですか…?」

ヴァン「…バカ兄貴が死んだら、ウエンデイが悲しむ。その女が死ねば、バカ兄貴が悲しむ…。それだけだ」

ミハエル「…ありがとう、ヴァン」

ヴァン「お前が礼なんて言うな、気持ち悪い」
もうミハエル達も敵じゃないな！

？「嫉妬する愛情だね、ミハエル・ギャレット、ファサリナ…」
タスク「お前は…！」

ジル「エンブリヲ…！」

エンブリヲ「ちようど手駒が欲しかった所だ。ミハエル・ギャレット、お前だ」

ミハエル「！」

ファサリナ「ミハエル君！ああつ！」

エンブリヲがミハエルに何かの光線を放ったが、ファサリナがミハエルを押し飛ばし、光線を受けた。

ミハエル「ファサリナさん！」

ファサリナ「…！」

エンブリヲ「とんだ誤算だが、まあいい。君の愛しのファサリナは連れていくよ」
エンブリヲがファサリナを担いだ…!!?

ミハエル「ふざけるな、ファサリナさんを…ファサリナさんを返せ！」

アンジュ「エンブリヲ！」

エンブリヲ「アンジュ、君との決着も後だ。じゃあね」

ファサリナことエンブリヲは消えた……。

ミハエル「ファサリナさん……ファサリナさん！」

ウエンデイ「兄さん……」

ミハエル「そんな……僕のせいだ……！」

カロツサ「……顔、上げろ！ミハエル！」

ミハエル「……！カロツサ……」

メリツサ「ミハエル、私達と一緒に行く？私達もエンブリヲを倒すし、それにファサリナと一緒に救い出そう！」

ミハエル「……メリツサ……」

ヴァン「どうするんだ、バカ兄貴？俺達と来るのか？それとも一人であの女を救い出すのか？」

ミハエル「……エンブリヲの力は想定以上だ……。だから、お願いします……！ファサリナさん救い出す為に、僕も仲間に入れてください！」

ガドウエド「歓迎するぞ、ミハエル！」

ヴァン「じゃあ、あの嫉妬野郎をぶっ飛ばしていくのと愛する女を救うとするか、ミハエル！」

ミハエル「ああ！」

ミハエルも仲間に加わった…。後はフアサリナを救い出して、エンブリヲ達を倒すだけだな…！

？「カギ爪のお爺さんを倒して、一気団結か…。楽しそうだなあ、僕も混ぜてよ」
この声は…！

イングリッド「！」

ユイ「あなたは…！」

ヨハン「やつほー、久しぶり」

ヨハン…だと…!!?

ヴァン「このガキ…生きていたのか！」

イングリッド「ヨハン！」

イングリッドさんは拳銃を発砲し、弾はヨハンに直撃し、ヨハンは崖から転び落ちた…。

ヨハン「酷いなあ。普通、いきなり撃つ？」

ヨハンが背後に…つて、え!!?

カミーユ「ヨハンが…二人だと!!？」

サラ「なんか、増えた!!？」

ヨハン「せっかくまた会えたんだから。冷たい態度を取らないでよ」

俺達を囲む様に複数のヨハンが……!!??

クリス「ど、どういう事!!?」

ロザリー「こいつもエンブリヲと同じカラクリを使ってるのか!!?」

ヨハン「残念、ハズレだよ。まあ、僕の事はどうでもいいじゃない。あ、それと安心しなよ。もう、イングリッドとケイには興味はないから。新しい玩具を見つけたからね」

すると、俺達の上空に複数の機体が現れた。

ヨハン「凄いでしよう? 君達を迎えに来た為にわざわざ呼んだんだよ?」

ユイ「迎えに来た……?」

レナ「何処に連れて行くつもり?」

ヨハン「いやあ、君達に世界の終わりを特等席から見せてあげたくてね」

ユイ「レナ!」

レナ「うん……!」

イングリッド「ユイ、私達も行くわ……! 今度こそ奴の息の根を止めないと。いいわね、ケイ?」

ケイ「勿論!」

ティア「サラ……ティア達は?」

サラ「見逃しておけないね、行くよ、ティア！」

ティア「うん！」

サラとティアはティシスを、イングリッドさんとケイはメガエラを召喚した。

？「サラ…ティア…」

ティア「え…」

サラ「姉様…？」

零「俺達も戻って、機体で…」

レナ「ユイ!!？」

何だ…!!？

レナとユイの方を見るとユイが倒れていた。

レナ「ユイ…ユイ…!!」

俺達もユイの元へ駆け寄った。

アスナ「ユイ…？どうしたの、ユイ!!？」

ヨハン「あらら…。やっぱり、お姉さん、倒れちゃったか」

零「どういう意味だ!!？」

レナ「え…!!？」

ヨハン「えって…まさか、気づいていなかったの？もう君と女皇様、かなりボロボロ

だよ」

レナ「そ、そんな…!!? ユイ…!」

ヨハン「まあ、レナと女皇様の契約は最も最近だったけど、色々な戦いを経験して、無茶したからね」

イングリッド「くっ…ユイ…!」

レナ「だ、ダメ…! ユイイイツ!!?」

ヨハン「ふふっ、これから始まるゲームでお姉さんがどんな顔をするか、楽しみだねえ」

すると、俺達の上空に魔法陣の様なものが現れる。

そして、メガエラ、テイシス、レナはそれに吸い込まれて行く。

レナ「な、何…!!? 嫌アアツ!」

サラ「うわあっ!」

ケイ「イングリッドツ…!」

イングリッド「っ…ヨハン…!」

ヨハン「はい、は…い。エリニウスのレガリア御一行様、ご案内」

レナ「ユイ…ユイ…ユイイイツ!!?」

ベルリ「まずい! レナ達が連れて行かれる!」

ヴァン「こうなったらダンを呼び出して…！」

この力は…！

零「ち…違う！みんな！すぐにこの場から離れる!!？」

ヨハン「流石、レイヤお兄さん…。でも、もう遅いよ。エクスクロスの皆さんも楽しいゲームのキャラになっただけ」

俺達は光に包まれた…。

第71話 家族 / FAMILY

「ユインシエル・アステリアです。

私は目をさしました。

辺りを見渡すと、そこは私の部屋でした…。

どうして…？ 私達は確か、カギ爪の人を倒して…。

それで…それで…ヨハン君が…そうだ！私、アレクトを呼び出そうとして、気を失っ
ちやつて…。

あの後、どうしたんだろう…？

アオイ「ユイー！入るわよー！」

アオイが入ってきた…！

アオイ「あら、おはよう！」

ユイ「お、おはよう、アオイ！」

アオイ「ごめん、今日の予定なんだけど…」

ユイ「ねえ、アオイ。レナ達の事知らない？ 何処にも見当たらない…」

アオイ「レナ？ユイの友達？」

ユイ「え：何言っているの？レナは私のお姉ちゃんで：！」

アオイ「お姉ちゃん？ちよつと、ユイ。私をからかって楽しい？」

ユイ「か、からかってなんか：！そ、そうだ！エクスクロスの皆さんは？？」

アオイ「エクスクロス？ああ、アル・ワースを平和にするために戦ってくれている部隊の事ね。そのエクスクロスがどうかしたの？」

ユイ「どうかしたのって：私達もエクスクロスの一員だったじゃない！」

アオイ「えつと：ユイ、まだ寝ぼけてる？それとも熱でもあるの？私達がエクスクロスの一員だなんて、そんな事、あるわけないでしょ」

ユイ「そ、そんな：」

アオイ「あ！そんな事よりもユイ、学校に行かないと！」

ユイ「う、うん：」

アオイ：どうしちゃったんだろう：。レナ達やエクスクロスの皆さんの事まで忘れてしまうなんて：。

兎に角、学校に行かないと：。

私は支度して、家を出て、電車に乗りました。

そこでレッちゃんを見つけて、声をかけました。

ユイ「レッちゃん！」

レツ「お、ユイ。おはよう！」

ユイ「う、うん。おはよう。あのね、レッちゃん……」

レツ「そう言えば、サラとティアはそっちにいる？」

ユイ「う、ううん。いないよ」

サラ「そつか。今日も朝から仕事だって言っておいたのに……」

ユイ「そ、そうなんだね……」

レッちゃんもレガリアの事、忘れているのかな……？

学校に行つて、違和感がありました……。レッちゃんが話しかけてくれない事……。いつ

もならレッちゃんは私に話しかけてくれるのに……。

その後、私は皇宮に帰りました……。

でも、皇宮にも入れませんでした……。皇宮の人達は私をユインシエル・アステリアで

はなく、ただの一般人だと言いました。

もしかして……私の事も……!!??

あ、アオイに電話を……。

しかし、繋がらなかった……。

ユイ「いつもはすぐに出るのに……アオイ……」

どうなっているの……?

街の人達も……私の事をただの女の子と思っている……。みんな、私の事を忘れているの……?

そうだ！レッちゃん……!

私はレッちゃんの家に向かいました……。

レッちゃんの家に着くと、家の前にレッちゃんがいました。

ユイ「レッちゃん、あのね！」

レッ「すみません、今日はもう店じまいで……。せつかく来たのにごめんなさい。今度来た時にサービスしますので……」

ユイ「レッちゃん……」

レッ「レッちゃん……?確かに私の名前はレッですけど……あなたとお知り合いでしたっけ?」

ユイ「!……わ、私……ユイだよ。小さい時からユイって呼んでくれるの、レッちゃんだけだったんだよ。私、お友達になりたくて、思い切ってレッちゃんって呼んでみたの。そしたら、レッちゃん、すっごく嬉しそうに笑ってくれて……」

レッ「あの、言いづらいんだけど、それ人違いじゃないかな?」

ユイ「そ、そんな……!」

すると、レッちゃんの身体が倒れ、私はレッちゃんを支えました。

ユイ「レ、レッちゃん!!?」

レッ「なんか…眠い…」

ユイ「レッちゃん、大丈夫!!?」

私はレッちゃんをレッちゃんの家に運び、ベッドに寝かせました。

レッ「ユイさん、だっけ…? 面倒かけてごめんね。助かった、よ…」

そのまま、レッちゃんは眠ってしまいました…。

ユイ「おやすみ、レッちゃん…」

レッちゃんの家を出た後、私は当てもなく歩いていました…。

どうして…? エナストリアのみんなも…レッちゃんも…私の事を忘れるなんて…。

俯いて歩いているとある人と肩をぶつけてしまいました…。

ユイ「あ、すみません…」

? 「こちらこそすみません。お怪我はありませんか?」

ユイ「は、はい…。っ! あ、あなたは…! アマリさん!」

アマリ「え…? はい。私はアマリですが…。あなたは?」

ユイ「私です! ユインシエル・アステリア、ユイです! レナやサラちゃん達と同じ、レ

ガリアの契約者でエクスクロスの一員です!」

アマリ「…すみません、私もエクスクロスに所属していますが、あなたとはお会いした事はありませんが…。人違いではないですか？」

ユイ「…！」

アマリ「すみません、人を探しているので失礼します。…もう、零君とゼフィちゃん、どこに行つたの…？」

アマリさんは立ち去りました…。

エクスクロスのアマリさんまで…。

私…みんなに忘れられちゃつたの…？

エクスクロスの人達にも忘れられているとわかり、雨が降つても私は俯きました…。

そして、溢れてくる涙を止められませんでした…。

ユイ「私…私…どうしたら…！」

雨で髪や制服がびしょ濡れになつた事も気に留めず、私はしゃがみ込み、泣き出ししました…。

このまま、私は…孤立したままなのかな…？

すると、急に雨が当たらなくなつた事に気付き、顔を上げると男の人が傘を私の上に差していました。

零「…皇女様がこんな所で泣いてどうしたんだ、ユイ？」

ユイ「…零、さん…？」

零「やつと見つけたぜ。探し回ったんだぞ」

ユイ「零さんは…私の事を…覚えてるんですか…？」

零「当たり前だろう？ユインシエル・アステリア、通称ユイ。エナストリアの若き皇女でレナ・アステリアの妹。マグナ・アレクトの契約者でエクスクロスの一員。そして、俺の妹分だ」

ユイ「覚えていて…くれた…！零さん…私、私いつ…！」

私は零さんに抱きついてしまい、零さんの胸に顔を埋めて、泣き出してしまいました。

零「…今まで辛かったな…。一人にさせて悪い…」

そんな私を零さんは優しく私の頭を撫でてくれました。

ユイ「うう…うわああああああん！」

私は今まで溜めていたものを全てを吐き出すように泣き上げました…。

―新垣 零だ。

漸く、ユイを見つける事が出来た…。

俺はユイが泣き止むまで頭を撫でた…。

泣きたくなる気持ちはわかる…。エクスクロス内でもユイやレナ達の事を覚えてい

るのは俺やアスナ、ゼファイだけだ…。

ヨハンが放った光に包まれる前に俺は近くにいたアスナとゼファイ、そして俺自身にバリアを張り、何とかユイ達についての記憶を失わずに入られた。

すると、ユイが俺の胸から顔を離した…。

ユイ「す、すみません、零さん…」

零「落ち着いたか？」

ユイ「はい…」

ゼファイ「あ、パパ！勝手に行かないでくださいよ！」

アスナ「ただでさえ、この国は広いんだから！」

ユイ「アスナさん…ゼファイちゃん…？」

ゼファイ「ユイさん!!？」

アスナ「どうしたの、びしょ濡れじゃない！」

俺達は屋根のある所まで移動した…。

アスナ「ユイ、良かった…。無事だったのね！」

ユイ「皆さんもご無事で良かったです…」

零「無事とは言い難い状況だな…」

ユイ「あの…ヨハン君が現れて、私が気を失った後、どうなってしまったのですか？」

零「ヨハンの呼び出したロボットが作り出した魔法陣にレナやサラ達が吸い込まれて、俺達、エクスクロスは光に包まれたんだ」

アスナ「それで気がつくどエクスクロスはエナストリアの近くで停泊していて、ユイ達の事を忘れていたの」

ゼファイ「ミハエルさんもいて、ファサリナさんも連れ去られていたままなのであの出来事は夢ではありませんが……」

零「カギ爪を倒した後、エクスクロスは補給の為にエナストリアに来ている事になっている」

ユイ「どうして……こんな事に……」

零「ヨハンの仕業だという事は確実なんだがな……」

すると、近くで物音がした。

ユイ「……何?」

ゼファイ「行ってみましょう!」

俺達は音がした路地裏へ行くとそこには身体を寄せ合っているサラとティアがいた。

ユイ「サラちゃん、ティアちゃん!」

サラ「ユイちゃん!」

ティア「零とアスナとゼファイちゃんも……やつと会えた!」

俺達の顔を見るなり、二人は泣きながら俺達に抱きついてきた…。

零「サラ、ティア…。お前等、どうしてここに…？」

ユイ「取り敢えず、皆さん。私の家へ案内します」

俺達はユイの家に案内された…。

ユイの家に着き、ユイとサラ、ティアはシャワーを浴び、俺達はリビングで夕食を召し上がる事になったのだが…。

サラ「…」

ティア「…」

アスナ「サラ、ティア…大丈夫？」

サラ「…うん、大丈夫だよ。ありがとう、アスナ…」

…二人の食欲がない…。だいぶ参っているな…。

ユイ「たくさん作って、零さん達の間もあるから遠慮しなくていいんだよ」

サラ「ユイちゃん、ごめんなさい…」

ティア「ユイちゃん、ごめん…」

ユイ「聞かせてくれる？レナ達の事…」

ティア「うん…」

サラ「私達はあの後…ヨハンにルクス・エクスマキナの中に連れていかれたの…」

零「ルクス・エクスマキナだと…!?？」

ゼフィ「ちよつと待ってください！ルクス・エクスマキナは過去にレナさん達が封印したのではないのですか!?？」

ティア「そうだよ。確かにティア達が封印したんだ」

サラ「でも…あの時、ケイを取り戻した時…ルクス・エクスマキナの封印も解かれたの…」

ユイ「ど、どうして…!?？」

零「まさか…エリニウスの共鳴でケイを取り戻したのが原因なのか!?？」

サラ「ヨハンはそう言っていたよ。それにあの時、現れた三機のレガリア・ギア…。その一つにノア姉様に乗っていたの」

アスナ「サラとティアが探したいとお姉さんね…!」

ユイ「ヨハン君はサラちゃんとティアちゃんのお姉さんまで…」

ティア「それでヨハンはルクス・エクスマキナを動かして、みんなからユイちゃんや私達の記憶を消したんだ…」

零「やはり、ヨハンの仕業だったのか…」

ティア「零達の記憶がなくならなかったのは予想外とも言っていたよ」

サラ「それで戦いになって、レナは一人でアレクトを呼び出したんだけど…立てない

ぐらいボロボロで…」

ユイ「レナ…」

ティア「ティア達は一時的に支配を解いたノア姉様が作った魔法陣でエナストリアに戻ってきたの」

零「それ以降の事はわからない…か…」

サラ「ごめんね、ユイちゃん。ユイちゃんが辛い目にあっていたのにサラ達、何も出来なかった…」

ユイ「ううん、大丈夫だよ。零さん達は覚えていてくれたし…」

ティア「ユイちゃん、寂しかった…？」

ユイ「ちよっぴりね。でも、今は二人や零さん達がいるから…」

それを聞いたサラとティアはユイに抱きついた…。

ユイ「戻ってきてくれて、ありがとう…。サラちゃん、ティアちゃん」

夕食を食べ終えた俺達はこれからどうするかを話し合う事にした。

ユイ「何とかしてレナ達の所に行かないと…！」

サラ「どうやって…？」

ティア「ティアはまだ飛べないよ…」

ユイ「今はわからない…。でも、今の私達にできる事はあるよ！」

サラ「ホント!?？」

ティア「何々!?？」

ユイ「あつたかいご飯を食べて、あつたかいお布団で寝るの!」

…ん?

サラ& amp ;ティア「どういう事?」

ゼファイ「わ、私もわかりません…」

ユイ「サラちゃん、あつたかいご飯を食べると嬉しい気持ちにならない?」

サラ「そ、それはそうだけど…」

ユイ「ティアちゃん、あつたかい布団で寝ると幸せな気持ちになるよね?」

ティア「うん!ティア、お布団大好き!?？」

ユイ「悲しいや辛いのは放っておくと心の中でどんどん膨らんじやうから大きくなる前に嬉しいや楽しいでやつつけちゃうの!それに、レナ達を助けるんだったら、体力だつて必要でしょ?」

サラ「うん!」

ゼファイ「そうですね!」

これが…ユインシエル・アステリアの強さか…。

ユイ「だから、もう一度あつたかいご飯を作るね!」

アスナ「え、また!?」

サラ「私達も手伝うよ!」

ユイ「とびつきり美味しいご飯を作ろう!」

ティア「おー!」

俺達はまた夕ご飯を作り、食べ始めた。

零「…ユイ」

ユイ「はい?」

零「ヨハンの件だが、今回のエクスクロスは頼れない」

ユイ「…」

零「だからこそ、俺達はお前達に協力する。一時的にエクスクロスから抜けるつもりだ」

ユイ「そ、そんな…! 零さん達にそこまでしてもらうわけには…!」

アスナ「何言ってるのよ! 仲間なんだからこのぐらい当然でしょう?」

ゼファイ「私達もレナさん達を助けたいんです!」

ユイ「…ありがとうございます、皆さん…」

零「俺達は一度戻って、一時的に抜ける事を艦長達に報告しなければならぬから帰る。アスナ、今日一日、ユイの家に泊まってくれないか? ヨハンが何か仕掛けてくる可

能性がある」

アスナ「ユイがいいなら…」

ユイ「勿論、大歓迎です！」

零「明日の朝、またユイの家に来る。取り敢えずエクスクロスは明日にはもうエナス
トリアを後にするみたいだからな」

ユイ「わかりました！お待ちしています」

零「じゃあ、ユイ達を頼んだぞ、アスナ」

アスナ「任せておいて」

零「ゼファイ、帰るぞ」

ゼファイ「はい、パパ！」

俺達はユイの家を出て、エクスクロスの元へ向かう…。

零「なあ、ゼファイ」

ゼファイ「何ですか？」

零「エクスクロスを一時的に抜けるって事はレナ達を取り戻すまではママと…アマリ
と会えなくなる…。それでもいいのか？」

ゼファイ「…ママに会えなくなるのは寂しいです…。でも、ユイさんはもつと寂しい事
を経験しています。だから、私もユイさん達のお助けをしたいんです」

零「そうか、ゼフィは強いな」

俺はゼフィの頭を撫で、ゼフィは笑顔になった…。

ユイの為にも…ゼフィの為にも…この件は早く終わらさないとな…！

ーユインシエル・アステリアです。

零さんとゼフィちゃんが家を出て、私達は就寝する事にしました。

眠ろうとしていると…。

サラ「ユイちゃん、寝ちゃった？」

ユイ「ううん、まだだよ。どうしたの、サラちゃん？」

サラ「…あのね、ヨハンが言ったの！ユイちゃんとレナはもうボロボロだって」

ユイ「！」

サラ「だからね…。ユイちゃん達がリユーとロウみたいになっちゃう…」

ユイ「そっか…」

サラ「私、ユイちゃんとレナに居なくなつて欲しくない…」

ユイ「ありがとう、サラちゃん。話してくれて。さあ、寝よう」

サラ「うん」

サラちゃんも寝ようと思いました…。

ユイ「…」

居なくなる、か…。

アスナ「(ユイ…)」

私達は眠りにつきました…。

―新垣 零だ。

エクスクロスの元に戻った俺達は艦長達に一時的にエクスクロスを抜ける事を離した…ユイ達の事は話していないが…。

倉光「エクスクロスを一時的に抜ける？」

扇「どうしたんだ、零？」

零「いえ…ただ、やり残した事がこの国であるので…」

スメラギ「やり残した事？」

號「友人の家に泊まっているアスナと何か関係があるのか？」

ルルーシユ「それならば、俺達も手を貸すぞ」

零「いや、すぐに片がつくから、俺とアスナ、ゼフィだけで充分です。みんなは引き続き、創界山を突き進んでください」

ドニエル「零…」

ネモ船長「わかった、許可する」

ドニエル「ネモ船長…?!?」

ネモ船長「我々、エクスクロスは寄せ集めの部隊だ。一人の意見を無視して、無理矢理連れて行く事は出来ないはずですよ」

倉光「そうですね。でも、零君。必ず戻ってくるんだよ。みんなやアマリ君が心配するからね」

零「わかっています。すぐに終わらせて、追いかけます。では、失礼します」

俺とゼフィは艦長室を後にして、ゼフィルスネクサスの下へと向かっているとそこに、アマリと弘樹達が来た。

弘樹「お前等、何するつもりだ？」

優香「私達に協力できる事はないの？」

零「心配すんな、そんなに時間のかかる事じゃねえからよ」

アマリ「零君、ゼフィちゃん…」

ゼフィ「ママ、大丈夫です。パパをお強い人ですから」

アマリ「私にもその残る原因を話してくれないの？」

零「…悪い、アマリ…。今のお前に手を借りるわけにはいかない…」

アマリ「…そう、わかったわ。気をつけてね」

零「ああ」

アマリは浮かない顔をしていた…。すまないな、アマリ…。

俺はアマリ達を通り過ぎ、暫く歩いていると、ホープスがいた。

ホープス「…マスターを放つたらかして何処に行く気だ？」

ゼファイ「ホープス先輩…」

零「…」

ホープス「まあいい…。その用事というものを早く済ませ、ユイ様達と共に戻って来
い」

零「！ホープス、お前…！」

ホープスも…ユイ達の事を覚えているのか…！

ホープス「さもなければ、マスターを私のものとするからな」

零「それは死んでもさせねえよ。…けど、俺がいない間、アマリを頼むぞ、ホープス」

ホープス「任せろ。ユイ様達を頼むぞ」

零「ああ」

俺とホープスは掌と翼でハイタッチをして、歩き出した…。

ゼフィルスネクサスの下へ着いた俺達は乗り込もうとすると…。

ヴァン「何処に行くんだ、零？」

海道「俺達も連れて行けよ！」

振り返ると海道さん、真上さん、ヴァンさんにマスターテリオン、エセルドレーダがいた。

零「海道さん、真上さん！」

ゼフィ「ヴァンさんに、マスターさん、エセルドレーダさんまで…！」

零「みんな、どうしたんですか？」

エセルドレーダ「どうしたではないですよ」

真上「アステリアの所へ行くのだろう？」

マスターテリオン「我等も力を貸す」

ゼフィ「え…」

零「みんなも…ユイ達の記憶を…?!?でも、どうして?!?」

マスターテリオン「大道師を舐めないでもらおうか」

海道「俺達にあんなもん通じるわけねえだろ」

ヴァン「光に包まれる前にオーバーフロウ?みたいな現象が起こった」

そう言えば、この人達って、メチャクチャな強さだったな…。

零「じゃあ、皆さんの力も借ります！」

エゼルドレーダ「では、行きましょう」

俺達はユイの家へ向かった…。

ーユインシエル・アステリアです。

数時間後、私は目を覚まして、皇女の服を着ました。

ユイ「レナ…」

私はお母さんからもらった指輪を握り締めました…。

アスナ「ユイ、おはよう。早いわね」

ユイ「おはようございます、アスナさん」

そして、サラちゃんとティアちゃんも起きてきて、私達は外に出ました…。

サラ「ユイちゃんは怖くないの？」

ユイ「怖いよ…。昨日思ったの…。独りぼっちって凄く寂しい事なんだなって…」

アスナ「…」

ユイ「私は…サラちゃんやティアちゃん、イングリッドにケイちゃん、エナストリア

のみんなやエクスクロスのみんなとみんな生きていきたい。まだ、私に出来る事があるって、信じてる」

ティア「ユイちゃん……」

ユイ「でも、やっぱり怖いから……勇気が欲しいから……女皇の服を着てみました！」

サラ「……決めた！私もユイちゃんのお手伝いをする！それで、ノア姉様を助けてみせる！」

ティア「え？ノア姉様を助け出せるの？」

サラ「私達を助けてくれたんだよ。だから、きつと大丈夫！」

ティア「そっか、じゃあ、ティアもやる！」

ユイ「ありがとう、サラちゃん、ティアちゃん！」

すると、家のチャイムが鳴り、玄関のドアを開けると零さんとゼフィちゃん。

それに海道さん、真上さん、ヴァンさん、マスターテリオンにエゼルドレーダちゃんがいきました……。

零「おはよう、ユイ！頼れる助っ人付きで来たぜ」

ユイ「み、皆さん！」

エゼルドレーダ「内容は大体、零から聞きました」

ヴァン「小さい姉さん達を助けだすんだろ？」

マスターテリオン「手を貸そう」

ユイ「ありがとうございます！」

真上「それで、これからどうするんだ？」

海道「どうやって、そのルクス・エクスマキナって所まで行くんだよ？」

ユイ「わかりません……」

ヴァン「わからないって……」

零「でも、どうする事も出来ないのが現実ですからね……」

すると、俺達の背後にレナに似た少女が立っていた……。

サラ「え……」

ユイ「レ、レナ……!? でも、違う……!」

?「……」

魔法陣を開いた……!??

彼女は……一体……!??

ーイングリッド・テイエストよ。

アレクトが倒れ、サラ達が魔法陣に消えた今、私達が敵と戦っているわ…。

ケイ「このままじゃあ…！」

イングリッド「ちよつと待って、ケイ！あれは…！」

ヨハン「！」

魔法陣からユイ、サラ、テイア…そして、零達が現れた。

ー新垣 零だ。

レナそっくりな少女についていくとある空間に出た。

サラ「戻ってこられた！」

ヴァン「ここがエクス何とかの中か…」

ユイ「ヨハン君…！」

ヨハン「…君、誰？」

?「…」

ヨハン「…ま、いつか。アレクトならあそこで虫の息だよ」

ユイ「レナ…！」

ユイが倒れているアレクトの下まで走るが、アレクトの周りの闇にユイが吞まれていく……。

零「ユイ！」

ユイ「皆さん！ 私達は大丈夫ですから……イングリッドとケイちゃんを……ノアさんを助けてあげてください！」

ゼファイ「ユイさん……」

アスナ「わかったわ！ あなたも気をつけてね！」

サラ「ティア！」

ティア「うん！ 闇を斬り、光を護持する教徒の復讐者……我が身に宿り、奈落の咎を刃に移せ！ 曇る事なく、煌めきを放つ、天雷の神器……エリニウスの名においてその身を晒せ！……アウレア・ティシス！」

ティアがティシスを呼び出し、俺達もそれぞれの機体に乗る。

零「ユイ、レナを頼んだぞ！」

ユイ「はい！……っ……！」

ヨハン「はあ……何処が大丈夫なんだか……」

俺達はメガエラの隣に立つ。

サラ「イングリッド、ケイ！」

イングリッド「あなた達……」

ティア「お待たせ！」

海道「俺達も加勢するぜ！」

ノア「エクスクロスか……。何処までも邪魔をするんだね」

ヴァン「てめえが大食い姉妹の姉貴か！」

イングリッド「今、彼女はヨハンに操られているの！」

ケイ「ルクス・エクスマキナは生贄を作らない為、人々によつて作られたもの……」

ノア「そう、そしてルクス・エクスマキナによつて取り込まれた魂はこのノア姉様のように僕の玩具になるのさ」

サラ「ふざけるな、ノア姉様を返せ！ノア姉様を助けて、ユイちゃんやみんなと一緒に帰るんだ！」

俺達も負けないからよ……。ユイ、お前も負けんじゃねえぞ……！

ーユインシエル・アステリアです。

私は倒れているアレクトに呼びかけました……。

ユイ「レナ……レナ！」

ヨハン「無駄だよ、君のお姉さんが元の姿に戻る事はもうないよ」
ユイ「え……!?？」

ヨハン「君のせいさ……。君のせいでレナはこんな風になったのさ」
ユイ「私の……せいで……」

ヨハン「レナを守る……みんなを守る……国を守る……。立派だね、女皇としては満点な回答かもね。でも、力を使いすぎた君の姉さんは……」

ユイ「……」

ヨハン「もう少し、話を聞いてよ……。君、前に僕に大切な人はいないのかって聞いたよね？」

ユイ「まさか……!」

ヨハン「この星全ての人間の魂が……僕の大切な玩具になったのさ」

ユイ「どうしてこんな事をするの？」

ヨハン「……理由なんてないさ。ただ、大切な人を全て失った君の顔が見たくなっただけさ。イングリッド達やレイヤ兄さん達ももうすぐ死ぬ……」

ユイ「!」

ヨハン「君の大切な人達は……もらった。……闇の中、永遠に続く時の中で絶望しろ、ユインシエル・アステリア」

私は闇に飲み込まれてしまいました…。

―新垣 零だ。

ノア「ご苦労な事だけど、アレクトはもう助からないよ」

サラ「え…!!?」

ノア「あの女皇様もね」

アスナ「何ですって…!!?」

サラ「う、嘘だ!」

ノア「君達も見たんだろ? 力を使い果たしたレガリアの末路を…」

サラ「!」

ノア「安心しなよ。君達も連れて行って上げるよ。二人の所にね」

サラ「ノア姉様の声で…そんな事言うなああつ!!?」

戦闘開始だ…!

〈戦闘会話 海道VS初戦闘〉

真上「ウイングクロスは出来ないが、行けるな、海道!」

海道「誰に言ってるんだよ、このぐらい楽勝なんだよ！」

〈戦闘会話　マスターテリオンVS初戦闘〉

エセルドレーダ「行きましょう、マスター！」

マスターテリオン「いいだろう。誰かの笑顔を取り戻す為に動くのも、また一興と言えよう。共に舞い踊るぞ」

〈戦闘会話　ヴァンVS初戦闘〉

ヴァン「忘れられて一人になるつてのは死ぬよりも辛い事だ。あのデカイ妹にそんな思いはさせられねえ！」

〈戦闘会話　零VS初戦闘〉

アスナ「負けれない…ユイやみんなのためにも！」

ゼフィ「そして、ママ達の記憶を取り戻します！」

零「まずはサラの姉貴を助けるぞ！」

〈戦闘会話　サラVSノア〉

サラ「ヨハン、ノア姉様から出て行けー！」

ティア「出て行けー！」

ノア「無理、これはもう僕の玩具なんだから…」

俺達はプリムス・ピルスにダメージを与えた…。

ティア「全然止まらない！」

真上「何か手を考えねば、こちらが消耗するだけだぞ！」

ケイ「私に考えがあります…！」

マスターテリオン「言ってみろ」

ケイ「私達が囷になって、サラとティアに大技を叩き込んでもらってます！」

海道「今はそれしかねえみてえだな！」

ヴァン「いけるか、大食い姉妹！」

サラ「任せて！」

イングリッド「でも、他の二機の攻撃をかわして、どうやって…」

ケイ「イングリッド、ちよつと無茶をしてもいい？」

イングリッド「！…勿論！」

ケイ「ありがとう！」

すると、全武装を出したメガエラが凄まじい攻撃を見せる。

そして、プリムス・ピルスが隙を見せた！

ケイ「今よ、二人共！」

ティシスがプリムス・ピルスに攻撃を仕掛けた…。

サラ「ノア姉様を返してもらおうから！」

ティシスは力を込める。

サラ& amp ;ティア「エリニウスの名において、ティシスが断ち切る…。奈落を切り裂く、天来の光…！数多の刃に光り、塞がる闇を払う、輪行となれ！俊撃の刃に宿り、虚空を貫く閃光となれ！クズリユー！」

大蛇を纏わりつかせ、刃を食いこませて大蛇を纏わりつかせ、プリムス・ピルスを切り裂く。

サラ& amp ;ティア「ナルカミ！」

そして、水鏡から天雷の力を居合の斬撃で飛ばし、プリムス・ピルスを切断した。

ノア「サラ、ティア…」

切断されたプリムス・ピルスはダメージを受けた…。

零「どうだ!?？」

ノア「そんな事しても…うぐつ！ま、まさか…！う、うう…！うわあああああつ！！

「？」

サラ「ノア姉様!?」

ノア「サラ…：ティア…：！オービスを…：壊して！あれが…：人の魂を捕らえるの…：」
エゼルドレーダ「人の…：魂を…：？」

ノア「私達を作り出してしまった、ルクス・エクスマキナが…：今を生きる人達に災いをもたらしているのなら…：私達が破壊しなければならぬ…：！おね、がい…：！」

サラ「ノア姉様…：。わかった。ティア、あれを壊して、ユイちゃんやイングリッド達の大切な人達を取り返す。…：それから、姉様も助ける！」

ティア「うん！」

ティシスがオービスに向けて、サンコウジンを放った。

サンコウジンはオービスのシールドを突き破り、オービスに直撃したが…：？

その寸前で、弾かれてしまう。

サラ「そんな…：！」

ティア「あとちよつとだったのに！」

ケイ「サラ、ティア！退いて！」

メガエラはランスをオービスに突き刺し、インフェルノ・スキュアを発動させ、それを受けたオービスは爆発した…：。

その中のコアのようなものをテイシスが握る。

サラ「姉様、やるよ」

そして、握りつぶすと、複数の光の粒が飛んでいく。

ヴァン「やったぜ！」

ゼファイ「これで囚われていた人達の魂は解放されます！」

ヨハン「フフフフ……！」

海道「何だ!?？」

ヨハン「想像の怒りを知り、猟師の支配者……。無限の回路を超えて、ここにあれ……。大暑の光を知る叡智の神器。天空の無より出でてその身を晒せ。——オフルマズド」

あれに……。ヨハンが乗っているのか……。!??

イングリッド「ヨハン、あなたは……」

ヨハン「何者かって？人の国で暴れておいて、随分な言い草だね。僕はヨハン……。このルクス・エクスマキナの真の王様さ」

マスターテリオン「何……。!?？」

ヨハン「折角、僕が面白くしたのにさ……。何してるの、君達……。？王の御膳だよ、跪いて、ひれ伏しなよ」

ヴァン「気に入られねえな……。そういう態度！」

零「舐めるんじゃねえぞ！」

俺達はオフルマズドに攻撃を仕掛けたが…。

ヨハン「君達には無理だつて」

オフルマズドの攻撃を受ける。

イングリッド「ぐっ…！」

ノア「うっ…！」

このままじゃ、まずい…！

ーユインシエル・アステリアです。

私は泣いていました…。まるで小さな子供の様に…。

ユイ「ひぐっ…うぐっ…！」

レナ「ユイ…」

ユイ「お姉ちゃん…」

レナ「ユイ、来てくれてありがとう。行こう、みんなが待ってる」

ユイ「…一緒にいよう、お姉ちゃん」

レナ「え……。ユイ、どうしたの？」

ユイ「だって、お姉ちゃん……。アレクトから戻れなくなっているんでしょ？」

レナ「……！……そうだね。多分、私はもう人間には戻れないと思う」

ユイ「だ、だったらもういい！私はこちらで一生お姉ちゃんと一緒の方がいい！お姉ちゃんだってそうでしょう！！？」

レナ「私は……ちよつと違うかな」

ユイ「えっ……！！？」

レナ「私ね、ユイの事ずつと凄いと思つてた」

ユイ「わ、私、凄くなんて……！」

レナ「ううん、ホントは泣き虫なのに、友達といっぱい遊びたいのに、お父さんとお母さんがいなくなつて、寂しいはずなのに……ユイはずつと頑張つてた」

ユイ「それは……お姉ちゃんがいてくれたから……！」

レナ「うん、知ってる。そんな凄いユイのお姉ちゃんであるように私も頑張つてたから」

ユイ「お姉ちゃん……」

レナ「だから、ユイがやりたい事、知ってるの。お姉ちゃんですから！」

お姉ちゃん……。

レナ「ユイはヨハンに取られたものを取り返しに来たんでしょ？」

ユイ「でも…私、何も言い返せなかった…」

レナ「うん、私もあいつの前で何も出来なかった…。でもね、ゆい、お母さんとの約束覚えてる？」

ユイ「二人で力を合わせる…。」

レナ「私達、お母さんの自慢の娘達だから」

ユイ「うん…！」

レナ「お母さんは嘘つきじゃない」

ユイ「うん…！」

私達は立ち上がった。

レナ「一人じゃ無理かもしれないけど…」

ユイ「二人なら、何とかできる…！」

私達は光に包まれ、光が消えると、私はアレクトに乗っていました。

ユイ「レナ…。私達、死んじやったらどうなるのかな？」

レナ「わからない…。でも…」

ユイ「でも…？」

レナ「私も一人で死ぬかと思った時は凄く怖かった…。だけど、今はそうでもない

よ。もし死んじやっても、ユイが側にいてくれるから」

ユイ「お姉ちゃん…」

すると、お姉ちゃんそっくりの女の子が現れました…。

ユイ「この子…」

レナ「多分、この子は私…。アレクトから生まれたもう一人の私…。この子のお陰で

またユイに会えたんだと思う」

ユイ「そっか、ありがとう」

?「…」

レナそっくりの子は微笑むと消えました…。

レナ「まだ終わってない…。ケイやティア…零達も戦ってる。行くよ、ユイ!」

ユイ「はい、お姉ちゃん!」

私達の言葉に呼応するかのようにアレクトは動き出しました…。

―新垣 零だ。

このままじゃ、負ける…!

ヨハン「じゃあね」

オフルマズドから無数のビームが放たれた……！
ここまでか……！

だが、ビームと俺達の間には黒い球体が現れた。

サラ「えっ……?!？」

イングリッド「あれは……?!？」

そして、その球体からアレクトが現れる。

零「ユイ！」

アスナ「ユイ、大丈夫なの?!？」

ヴァン「小さい姉さんも無事なのか！」

レナ「うん、何とか……」

ヨハン「何だ……まだいたの？それじゃあ改めて……ようこそ、ルクス・エクスマキナへ

……。エナストリア皇国の女皇、ユインシエル・アステリア」

ユイ「ルクス・エクスマキナ……！」

ヨハン「そう、僕こそがこの神の器、ルクス・エクスマキナを統べる王さ。まあ、とはいえ、ご覧の通り、僕と君とじゃ王様としての格が違うけどね」

ユイ「そうかもしれません……。でも、私はエナストリアの女皇として……一人の人間として……大切な人達を返してもらうために来ました！」

ヨハン「そんなボロボロになつてまで来たのに……もう解放されちゃったよ。無駄な努力ご苦労様」

ユイ「でも……！あなたは、また同じ事をするんでしょ？」

ヨハン「そうだよ。君達を消した後にゆっくりやり直す事にするよ」

ユイ「だから……！」

ヨハン「だから、何さ？」

ユイ「だから、こんな事を二度と繰り返し返えさせない為に、あなたをここで止めます！」

ヨハン「人間なんか……何が出来るって言うのさ!!?」

？「人間は……あなたを……神の器を統べる王だつて止める事が出来ます！」

魔法陣から現れたのは……ゼルガードとエクスクロスの戦艦……！

戦艦からみんなが出撃した。

青葉「エクスクロス、ただいま到着！」

エイサツプ「どうやら、無事みたいだな！」

アマリ「零君、ゼフィちゃん、皆さん！大丈夫ですか!!?」

ゼフィ「ママ！」

零「アマリ……」

アマリ「……私は……ユイさんにとんでもなくひどい事をしました……」

ユイ「アマリさん達も…記憶が…！」

アンジュ「ええ、思い出したわよ、ユイ！」

シモン「待たせて悪かったな、みんな！」

ノブナガ「ここからは俺達も加勢する！」

海道「よつしやあ！これでウイングクロスも使えるぜ！」

九郎「マスターテリオン…」

マスターテリオン「遅かったな、大十字 九郎」

九郎「ユイの為にありがとな」

マスターテリオン「余はヨハンのやり方が気に入らなかつただけだ」

プリシラ「ヴァーン！勝手に行かないでよ！」

ヴァーン「だって、お前等、あいつらの事忘れてたじゃねえか」

真上「それにしても、なぜお前達がここに来れた…？」

由木「レナさんそっくりの女の子の開いた魔法陣でここまで来たんです」

ベルリ「ユイさん！あのヨハンって奴に一発ブチかましましょう！」

ユイ「はい！ヨハン君、私はあなたを止めて、みんなの所に帰ります！」

ヨハン「いいよ、だったら、みんなまとめてここで死ね！」

すると、無人機のヨロイ軍団が現れた。

レイ「ガンソ」「カギ爪の兵器か！」

ヒルダ「そんなものであたしらを止めれると思うなよ！」

レナ「殺させない…。ユイも、ティア達も：エクスクロスのみんなも絶対に！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 ミハエルVS初戦闘〉

ミハエル「待つていてください、ファサリナさん。僕は必ず、あなたを迎えに行きます…！」

〈戦闘会話 ユイVSヨハン〉

ヨハン「こいつ…何なの？人間の癖に何できつきとひれ伏さないんだよ！わからないの？僕と君とじゃ、王としての力が違い過ぎるんだって！」

レナ「そうだね、違い過ぎる…。確かに、ユイはあなたや私みたいな力は持つてない。でも、そんな力…ユイには必要ない！ユイはいつもみんなの事を考えてる…。みんな、そんなユイの力になりたいって、思ってる！それが人間…そして、ユイの力！あなたや

私の力なんかじゃ比べモノにならない！本当の力よ！」

ユイ「ヨハン君…あなたを止めます！」

ヨハン「うおおおおおっ!!？」

〈戦闘会話　サラo r イングリッドVSヨハン〉

サラ「ノア姉様が受けた屈辱…倍にして返す！」

ティア「返してやる！」

ヨハン「お前達に…お前達に何が出来るって言うんだ！」

ティア「出来るよ。それが本当の人間の力だから！今度こそ、素粒子レベルまで分解する…！」

イングリッド「終わらせてあげるわ、ヨハン…。12年間続いたあなたとの因縁を！」

〈戦闘会話　ノアVSヨハン〉

ヨハン「僕の玩具如きが…僕には向かうなよ！」

ノア「サラやティア…そして、多くの人間を苦しめたあなただけは…私達が止める！」

アレクトの攻撃でオフルマズドはダメージを負う。

ヨハン「くっ…！一人じゃ何も出来ない事を何偉そうに語ってんだよ！結局、他人の力がなければ、何も出来ないんだろ？僕は違う…！僕はそんなのなくともなんでも出来る！僕の力こそ、本当の力なんだ！だから、お前等みたいな奴等は…大人しく僕の玩具になつていればいいんだよ！」

ユイ「ヨハン君は、人間が羨ましいの？」

ヨハン「はあ？」

ユイ「私、みんなに忘れられた時、凄く寂しかった…。ひとりぼっちがあんなに怖いって知らなかった…」

レナ「…」

ヨハン「黙れよ…！」

ユイ「あなたもそうなんですよ！」

ヨハン「黙れって言ってるだろ！僕はもう一度、玩具集めをしなくちゃならないから、忙しいんだ！さっさと死んでよ、女皇様…！」

ユイ「あなたも大切な人を欲しいのかもしれない…。でも、あなたのやる事を私達は受け入れる事は出来ません！」

すると、アレクトの身体から黒い闇の炎が出てきた。

アイーダ「あれは…！」

ライヤ「アレクトが暴走しているのですか!?!」

マスク「いや、おそらく違う…！」

アレクトの中にもう一人のレナが…。

レナ「あなたは…！」

?「…！」

ユイ「うん、わかった!ヨハン君、私達は何度やられても諦めません！」

アレクトがオフルマズドに攻撃を仕掛けた…。

ユイ「私達はあなたのやっている事を受け入れるつもりはありません！」

レナ「これで決める…！」

アレクトから闇の炎が出て、走り出し、右手でオフルマズドを一発殴る。

さらに跳躍する。

ユイ「レナ！」

レナ「任せて！」

アレクトが全霊を捧げて右腕を巨大化させた。

ユイ&p;レナ「アストラル・ブロー!!?」

巨大化させた右腕でオフルマズドを殴り飛ばした。

ヨハン「グアアアアアッ!!？」

アストラル・ブローを受けたオフルマズドは大爆発を起こした…。

優香「やった！」

メル「オフルマズドにダメージを与えました！」

マリア「いや…まだよ！」

ヨハン「女皇様…。君には本当に腹がたつよ。僕に仲間はいない。大切な人もいない。人間の魂は結局、玩具にしかならなかった…。君みたいに、全て持っている奴に言われるのだけは我慢できないな。だから、もう何もいらぬ。人間なんてどうでもいい。だから…」

オフルマズドの中から…人型のレガリアが出てきた…!??

ヨハン「ユインシエル・アステリア…お前は殺す」

リユクス「何なんですか、あれは!?？」

サコミズ「あれが奴の真の姿か…！」

ヨハン「消えろ」

オフルマズドの攻撃でアレクトはダメージを負っていく。

レナ「くっ…！」

ユイ「れ、レナ…！」

アマルガン「これは……！」

ゼロ「闇が……！」

そして、アレクトの身体が完全に闇に包まれ、闇は広がり、俺達まで飲み込んだ……。

ーユインシエル・アステリアです。

私が眼を覚ますと、目の前にレナがいました。

ユイ「お姉ちゃん……！ここは……？」

私は辺りを見渡すと門のようなものとその前にレナそっくりの少女が立っていました。

？「……」

レナ「この子は多分、私達を迎えに来てたんだね」

ユイ「え……」

レナ「レガリアの力の根源……。光の力、ルクス……」

ユイ「ルクス……」

この子が……ルクス……。

レナ「きつと、リユーとロウの所にいたレガリア達もこの門を通って行ったんだよ」

ユイ「！」

レナ「ユイ…。ちよつとだけ、届かなかつたみたい。でも、後悔はしていないから」

ユイ「…まだだよ、お姉ちゃん」

レナ「え…」

ユイ「まだ私達はみんなからもらつた想いを…誰にも伝えられてない。お母さんやアーベルさんが私達に想いを託してくれたようにみんなが自分達の想いを明日に託せるようになる為に…」

私はルクスちゃんに笑いかけた。

ユイ「光の力、ルクス…。じゃあ、ルクスちゃんだね」

ルクス「…」

ユイ「ルクスちゃん、もう少しだけ時間を頂戴！」

レナ「ユイ…」

ユイ「私達…想いが届かなかつたり、失敗したりばかりだけど、少しずつ前に進んでいきたい」

ルクス「！」

ユイ「私達の想いを…何処までもつなげて行って欲しいから…」

そして私達はルクスちゃんに連れられ、門の中へと入つたが、また同じ空間に出て、さらに、空間はお花畑になる。

その光景を見て、私達は笑い、光に包まれた…。

―新垣 零だ。

闇に包まれた俺達…。

このままどうなるんだ…？

外からヨハンも攻撃してきている…。

だが、攻撃は弾かれた…！

ルクス「…！」

ヨハン「お前は…！」

あれは…レナのそっくりな少女…！

そして、闇が消えるとアレクトの闇も消えていた…。

ユイ「ありがとう、ルクスちゃん」

ナオミ「ユイ！」

ユイ「みんな…」

イングリッド「一体、どうなったの…？」

サラ「みんな、あれ見て！」

少女がオフルマズドの前に…？

すると、少女から光が放たれた。

ヨハン「この力…お前がルクスなのか…!!?」

アマリ「あの子が…光の力、ルクス…?」

ヨハン「ルクスが人間の姿になって…しかも人間を助けるなんてね…。何で…何でお前ばっかり! たかが人間の癖に、何でルクスまで味方につけてんだよ!」

ユイ「人間の力は小さいから…だから、私達は力を合わせるんです! 二人で切り開けない未来なら…みんなで切り開くんです!」

レナ「私達、レガリアは…ユイの、みんなの明日を繋げる力になる!」

アレクト、ティシス、メガエラが並んだ。

ユイ「ルクスちゃん!」

ルクス「…!」

ルクスがアレクト、ティシス、メガエラに手を翳すと謎の光が放たれ、三機を包み込み、光が消えると三機は合体していた…。

アルト「アレクト達が…合体した!!?」

ヨハン「な、何…!!?」

ノア「あれは…エリニウスのレガリアの…真の姿…!」

ユイ「ありがとう、お姉ちゃん、ルクスちゃん!」

ケイ「光が…力が溢れてる！」

ユイ「サラちゃん、ティアちゃん、ケイちゃん、イングリッド…。この世界でみんなの想いを繋げる為に…私達に力を貸して！」

サラ「いいよ、ユイちゃん！」

ティア「いいよ、」

ケイ「勿論！」

イングリッド「私達にできる事なら喜んで！」

一夏「当然、俺達も手を貸しますよ！」

零「俺達は全員、仲間だからな！」

レナ「行こう、ユイ！」

ユイ「うん…！ヨハン君、あなたは…みんなの力で絶対に止めます！」

ヨハン「ああ…やってみるよ。ルクスの力…みんなの力、いくらでもかかってくるがいいさ。非力な人間が何人束になったって、僕に敵うわけないだろ！」

ユイ「勝ってみせます、絶対に！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　万丈VSヨハン〉

万丈「自らの力に過信して、相手を見下す…悲しい男だな、君は…」

ヨハン「僕が王だから、当然の事だ。お前も大人しく僕の前に跪け！」

万丈「悪いが、そう簡単に頭を下げる気などない！」

〈戦闘会話 ショウVSヨハン〉

ショウ「お前の中の悪のオーラは俺達が断つ！」

ヨハン「聖戦士如きが僕を断ち切れると思うな！逆に僕がお前を殺す！」

ショウ「俺は死ぬわけにはいかない！争いを終わらせるまでは…！」

〈戦闘会話 エイサツプVSヨハン〉

ヨハン「もういい、お前等全員、邪魔なんだよ！」

エイサツプ「邪魔なのはお前の方だ！世界も人もお前から解放してやる！」

〈戦闘会話 カミーユVSヨハン〉

ヨハン「人は必ず、争いを起こす。だから、僕が玩具にして、管理する！」

カミーユ「人は変わっていく…そして、争いはなくなっていく！人はお前の管理など必要ないんだ！」

〈戦闘会話 ジュドーVSヨハン〉

ジュドー「玩具、玩具つて…ガキか、お前は！」

ヨハン「黙れ！お前も僕の玩具になれ！」

ジュドー「誰が好き好んで玩具なんかになるかよ！」

〈戦闘会話 アムロVSヨハン〉

アムロ「今まで色々な奴を見てきたが、お前の様な歪んだエゴを持つ奴は初めてだ！」

ヨハン「お前達がエゴと言っているもの…。だが、それは僕の望みでもあるんだ！」

アムロ「ふざけるのも大概にしろ！お前のエゴは俺達が止める！」

〈戦闘会話 バナージVSヨハン〉

ヨハン「お前達は大人しく僕に従っていればいいんだよ！」

バナージ「王というのはみんなを幸せにする人の事のはずです！お前はエゴを振りか

ざす、悪魔だ！」

〈戦闘会話 シーブックVSヨハン〉

ヨハン「僕は人間の生命を奪う奴等よりもマシなはずだ！」

シーブック「ふざけるなよ！お前のやり方もたちが悪いんだよ！お前は止める…絶対
に！」

〈戦闘会話 トビアVSヨハン〉

ヨハン「記憶喪失だと、みんなを偽っているお兄さんにとやかく言われたくないね！」
トビア「それとこれとは関係ない！人の魂を…想いを弄ぶお前は許さねえ！」

〈戦闘会話 キンケドウVSヨハン〉

ヨハン「お前の世界の大切な人も僕の玩具にしてやる！」
キンケドウ「そんな事してみろ！ただで済まさないからな、覚悟しろ！」

〈戦闘会話 ヒイロVSヨハン〉

ヨハン「お兄さんもさ。沢山の人を殺してきたよね？僕の邪魔、する資格ないんじゃない？」
ヒイロ「平和の妨げとなるのから、お前を殺す。ターゲット、ヨハン…！」

〈戦闘会話 シンVSヨハン〉

ヨハン「多くの人を失わない為にも僕が玩具にしてあげるよ」

シン「その為に俺達が平和の為に戦っているんだ！平和の為、お前も倒す！」

〈戦闘会話 キラVSヨハン〉

ヨハン「多くの人の魂をまた集めないといけないから、素早く終わらせるよ」

キラ「人の生命を何だと思っているんだ！そんな事、僕達がさせない！」

〈戦闘会話 刹那VSヨハン〉

ヨハン「人間如きが異性体とわかり合うだなんて、おこがましいと思わない？」

刹那「そんな事はない…！俺達やどんな異性体とも分かり合う事が出来る…それも不

可能な事ではない！」

〈戦闘会話 キオVSヨハン〉

キオ「このアル・ワースは君には渡さない！」

ヨハン「渡されなくとも自分で手に入れるから必要ないよ」

キオ「やらせない！僕達が止めてみせる！」

〈戦闘会話 アセムVSヨハン〉

アセム「人類みなお前の玩具か……。とんでもない事を考える小僧だな」

ヨハン「僕はただの子供とは違うからね。このぐらいは当然だよ」

アセム「だが、見逃すわけにはいかねえな！」

〈戦闘会話 フリットVSヨハン〉

ヨハン「おじさんの出る幕はないよ」

フリット「生意気な子供だな。少し、仕置が必要な様だな。まずは計画を止めてやろう」

〈戦闘会話 ベルリVSヨハン〉

ヨハン「頭のいいお兄さんじゃ、僕の考えなんてわからないだろうね」

ベルリ「頭が悪くても君の計画はおかしいって理解できる！人間を舐めるなって事だよー！」

〈戦闘会話 三日月VSヨハン〉

ヨハン「お前等の様に戦いの中にいるぐらいなら、とつと僕の玩具になった方が楽じゃない？」

三日月「何言ってるのお前？玩具は玩具、人は人だよ。人を玩具にさせる様な事、させないから」

〈戦闘会話　オルガVSヨハン〉

ヨハン「お兄さんさ……。人の玩具を取る事は悪い事って知らないの？」

オルガ「普通ならそうだが、お前の場合は別だ！容赦なく、取り上げさせてもらうからな！」

〈戦闘会話　ワタルVSヨハン〉

ヨハン「救世主君も大変だね、ドアクターを倒したところでみんな、僕の玩具になるのに」

ワタル「そんな事、僕がさせるもんか！人を玩具なんて、バカな事は絶対に阻止するから！」

〈戦闘会話　舞人VSヨハン〉

ヨハン「お兄さんも超AIっていう玩具を持っているよね？」
舞人「超AIは玩具なんかじゃない！俺の正義でお前を止めてみせる！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSヨハン〉

ヨハン「僕を止めたいのなら、ギアスとかいうもので止めてみたらどう？魔王のお兄さん」

ルルーシユ「偽りの王が魔王に敵うとでも思っているのか？お前など、ギアスを使わずとも止めてみせる」

〈戦闘会話 青葉VSヨハン〉

青葉「何処の野郎も人間の生命を何だと思っているんだ!!？」

ヨハン「僕の玩具だよ」

青葉「何考えてるか、わからねえがそんな事させてたまるかよ!!」

〈戦闘会話 アンジユVSヨハン〉

ヨハン「ミスルギ皇国のお姉さんも僕の邪魔をするの？」

アンジユ「ええ、そうね。聞き分けの悪い子供は好きじゃないの。だから、遠慮なく

やらせてもらおうわ！」

〈戦闘会話 甲児VSヨハン〉

ヨハン「無限の可能性を持つマジンガーのパイロットのお兄さん。神にも悪魔にもなれるマジンガーなら僕を止められると思ってるの？」

甲児「ああ、そうだ！マジンガーの力を見せてやるよ！」

〈戦闘会話 鉄也VSヨハン〉

ヨハン「戦闘のプロのおじさん。僕と勝負しようよ！」

鉄也「いいだろう。負けても泣きべそをかくなよ！」

〈戦闘会話 海道VSヨハン〉

ヨハン「お兄さん達さ、どうやって記憶消去から、逃れられたの？」

真上「あんなもので俺達の記憶を消せると本気で思っていたのか？」

海道「俺達の記憶を消したいんなら、もつと強いもん持ってこい！」

〈戦闘会話 シモンVSヨハン〉

ヨハン「螺旋王を倒した螺旋のお兄さん。ドリルなんかひ弱な武器で僕を貫けると思ってるの？」

ヴィラル「随分と舐められているな、シモン」

シモン「だったら、そのニヤケ顔に風穴を開けてやるよ！」

〈戦闘会話　ネモ船長VSヨハン〉

ヨハン「船長さんさ……。安心しなよ、君の娘さんも魂にしてあげるから」

ネモ船長「そんな事はやらせん。ナディアは私が取り戻す！」

〈戦闘会話　一夏VSヨハン〉

一夏「ユイさんを泣かした分、ぶん殴ってやるよ！」

ヨハン「へえ、相変わらずの惹きつけだね。じゃあ、お前の大切な人達も泣かせるとするか」

一夏「ふざけるな！俺の大切な人に指一本も触れさせないぞ！」

〈戦闘会話　竜馬VSヨハン〉

ヨハン「ゲッター線……。そんなものもルクス・エクスマキナの前では無意味さ」

竜馬「だったら、受けてみるか？ゲッターのパワーと共にな！」

〈戦闘会話 葵VSヨハン〉

葵「馬鹿げた事を考えているお子様にはお仕置が必要みたいね」

ヨハン「人間如きが僕にお仕置きをするだって？獣は獣らしく、檻に入れてあげるよ
！」

葵「だったら、獣らしく噛み付くとしますか！」

〈戦闘会話 九郎VSヨハン〉

九郎「お前にはまんまとやられたぜ！」

ヨハン「ユインシエル・アステリアの無様な姿は滑稽だったね」

九郎「てめえだけは許さねえ！ぶっ飛ばしてやらあ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSヨハン〉

ヨハン「へえ、面白い玩具を持っているじゃん。僕の玩具にしてあげるよ！」

ジョーイ「ヒーローマンは僕の相棒で玩具なんかじゃない！お前にヒーローマンは渡さない！」

〈戦闘会話 ヴァンVSヨハン〉

ヨハン「お前の存在は計算外だった…！」

ヴァン「いいじゃねえか、ニヤケ顔ばかり見せるガキの怒り顔…。大人を舐めるなつて事だ！俺はガキだろうと容赦なく、ぶった斬るからな！」

〈戦闘会話 アマタVSヨハン〉

ヨハン「機械天使が神の器の王である僕を止める気？」

アマタ「止める…！魂なき世界なんて俺達は認めない！」

〈戦闘会話 ノリコVSヨハン〉

ヨハン「気合と根性でどうにかなる程、僕は甘くないよ」

ノリコ「ならば、あなたに見せてあげるわ！ガンバスターの真の力を！」

〈戦闘会話 ユイVSヨハン〉

レナ「私達は一人では生きていけない…！」

ヨハン「だから、みんなと一緒に生きていくんです！」

ヨハン「そうやって、生きてたって最後は結局死ぬんだ！死んだら、何の意味もない。僕の玩具になれば、そんな事にせず、永遠に存在し続けられるのに！」

ユイ「永遠なんてなくても、次に受け継がれていけば、私達の想いが消える事はないんです！」

レナ「あなたの世界では、それが出来ない！」

イングリッド「私は、ユイとユイのお母様からそれを教えてもらった！消えていったリムガルドの人達の想いを受け継いで私達は生きる！」

サラ「ティアも私達もユイちゃん達と一生懸命に生きるんだから！ノア姉様とみんなの為に！」

レナ「私達はみんなで泣いたり、笑い合いながら……」

ユイ「生きて、生きて……生き抜くんです！」

ヨハン「だったら、それをここで断ち切ってやるよ！」

〈戦闘会話 ノブナガVSヨハン〉

ヨハン「消えろ、みんな消えてしまえばいいんだ！」

ノブナガ「いや、消えるのはお前だ。偽りの王……破壊王が滅する！」

〈戦闘会話 しんのすけVSヨハン〉

ヨハン「お前等は大人しく魂となって、僕の玩具になっていけば、苦しむ事もないんだ！」

カンナム「そんなの真っ平御免だ！」

しんのすけ「オラ達はお前の玩具になるつもりなんてないゾ！みんな大切な人間だから！」

〈戦闘会話 ケロロVSヨハン〉

ケロロ「ペコポン人を玩具にするなど、古い手は認められないでありますよ！」

ヨハン「侵略者に言われたくないんだよ！」

ケロロ「ならば、侵略行為の妨げになるのなら、我輩達が止めるであります！」

〈戦闘会話 アキトVSヨハン〉

アキト「世界の人達をお前に好きにさせるわけにはいかない……！」

ヨハン「だったら、邪魔をするお前ごと殺してやる！」

アキト「やってみろ、悪党。返り討ちにしてやる……！」

〈戦闘会話　ルリVSヨハン〉

ルリ「神と自称する方はロクな方がいませんね」

ヨハン「お前に：：お前に何がわかる?!？」

ルリ「わかりません。人間を玩具と考える幼稚な方の考えなど：：。私達がその計画を潰します」

〈戦闘会話　アルトVSヨハン〉

ヨハン「人間に翼なんて必要ないんだよ！」

アルト「そんな事ねえよ！人間の魂を縛ろうとするお前なんか俺達を否定する資格はねえんだよ！」

〈戦闘会話　リオンVSヨハン〉

リオン「お前のお遊びもここまでだ！」

ヨハン「終わらせるものか：：。お前等を殺して、もう一度一からやり直す！」

リオン「諦めの悪い王様はみつともねえな！これで終わらせる！」

〈戦闘会話　ゴーカイレッドVSヨハン〉

ヨハン「何故だ!?! 宇宙海賊のお前達にはこの星の人間の生命など関係ないだろう!?!」

ゴーカイレッド「生命ってものはな、そいつ一人一人にとっての大切な宝なんだよ! それを奪うってんなら、相手をしてやるよ!」

〈戦闘会話 ゼロVSヨハン〉

ヨハン「たったちっぽけな生命の為にお前等はどうして、僕に歯向かうんだ!?!?」
ゼロ「生命に大きいも小せえもねえんだよ! 何で、そんな事もわからねえんだ!」

〈戦闘会話 EXゴモラVSヨハン〉

レイモン「ヨハン、お前はここで止める!」

ヨハン「レイオニクス風情が: 怪獣を従えるからっていい気になるなよ!」
レイモン「従えているのではなく、一緒に戦っているんだ! それを教えてやる!」

〈戦闘会話 マサキVSヨハン〉

マサキ「このお前の遊び場ごと、お前をぶっ飛ばしてやるぜ!」
ヨハン「やってみろよ! 後悔しても知らないからな!」

マサキ「それはこっちの台詞だ、いくぜ！」

〈戦闘会話　アーニーVSヨハン〉

アーニー「駄々をこねる子供の対応も楽ではないな」

ヨハン「なら、お前を殺して、楽にしてやるよ！」

アーニー「やれるものならやってみろ！だが、こっちは仕事上、手は抜かないぞ！」

〈戦闘会話　アマリVSヨハン〉

ヨハン「ドグマでも僕を止める事は出来ないんだよ！」

アマリ「それならば、食らわせて上げます！私達の全力のドグマを！」

〈戦闘会話　零VSヨハン〉

ヨハン「お前達さえいなければ、ユインシエル・アステリアは孤独で絶望したんだ！お前達さえいなければ！」

零「そういうのも計算に入れておくもんだぜ、ヨハン！それから俺も怒ってんだ…。大事な妹分を泣かされて黙っていらねえんだよ！」

三機のレガリアが合体したエクテレウ・アレクトのトリニティ・ストライクを受けて、オフルマズドは大ダメージを受けた。

ヨハン「バカな…神の器の王である…この、僕が…！」

ユイ「…」

ヨハン「…殺せよ…。僕も、ルクス・エクスマキナももう終わり…。君達の勝ちだ」

ユイ「ヨハン君…」

ヨハン「同情なんていらぬ…。僕は今まで、一人で生きてきた…。死ぬ時だって、一人で消えてやる…」

ヨハン…。

ルクス「…」

レナ「あ…ルクス…？」

ルクス「…」

レナ「行っちゃうんだね？」

ユイ「え…そっか。じゃあ、ルクスちゃん、これを」

ルクス「…？」

ユイはルクスに指輪のペンダントを渡した。

ユイ「ルクスちゃん、覚えていてね。ルクスちゃんも私達の家族だって事を」
ルクス「！」

ルクスは頷き、ヨハンの元へ行った。

ヨハン「…何だよ、今更…。お前なんてもう必要ない。ほっといてくれ…」

すると、ルクスはヨハンの額に手をかざし、ルクスの力でオフルマズドは粒子化して、消えた。

ヨハン「これは…」

俺達の下に巨大な金色の魔法陣が現れる。

ヨハン「お前が…一緒に行つてくれるつて言うのか？」

ルクス「…」

ルクスは微笑み、ヨハンにユイから貰ったペンダントをつけた。

ヨハン「…ユインシエル・アステリア…。僕を作ったのが、君みたいな奴だったら良かったのにな…」

最後にヨハンは優しく微笑み、ルクスと共に魔法陣に吸い込まれ、魔法陣は閉じた…。

それと同時にルクス・エクスマキナは崩壊した…。

レナ「終わったんだね…」

ユイ「ううん。まだだよ、お姉ちゃん」

レナ「…そうだね」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、シグナスの格納庫に集まった…。

イングリッド「私達…帰ってきたのね」

ケイ「うん！」

サラ「ただいまー！」

ティア「ただいまー！」

ヒナ「おかえりなさい、みんな」

アマリ「ごめんなさい…。私達、皆さんの事を…」

ユイ「気にしないでください、アマリさん。こうして、みんなとまた会えたんですから！」

アマリ「ユイさん…」

零「皆さん、俺達も無事、帰還しました」

倉光「うん、お疲れ様」

ルルーシュ「いなかった分、きつちりと働いてもらうぞ」

海道「へっ、勿論だぜ！」

ノア「今までサラとティアがお世話になってしまつて…ありがとうございます。私もこれからはエクスクロスの一員として、戦わせていただきます！」

ジル「勿論、大歓迎だ」

マーベル「よろしくね、ノア」

レナ「ユイ、これからどうするの？」

ユイ「うーん、まずはアル・ワースを平和にする為に戦う！」

レナ「平和にしたら？」

ユイ「あつたかいお風呂に入って、ご飯を食べて、眠るの」

レナ「そう言う事じゃなくって…」

ユイ「その後、これからどうするか、一緒に考えよう。お姉ちゃん」

レナ「ユイ…」

ユイ「大丈夫、きっと何とかなる…。だって、今度はみんながいるんだから！」

レナ「うん！」

一人じゃ出来なくてもみんななら出来る、か…。大丈夫だ、エクスクロスのみんななら、アル・ワースをきつと平和な世界へ戻す事が出来る…。俺は、そう信じている…。

第72話 新たなる皇帝

「ナディアアです。

私はレッドノアのブリッジにいました。

ナディアア「…」

ガーゴイル「来たまえ、ナディアア姫。君の父上に代わって、この船の中をご案内しよう」

ナディアア「…」

ガーゴイル「どうかね、その服は？サイズまで調べて、君のために特別に作らせたのだ。気に入っていただけだったかな？」

ナディアア「氣にいる訳ないわ！恥ずかしい！」

ガーゴイル「残念…。私としては大変氣に入ってるんだがね。ところでナディアア姫…。君は今、自分が何に乗っているか、わかるかな？」

ナディアア「ネオ・アトランティスの空中戦艦じゃないの？」

ガーゴイル「あんなものとは比べ物にならないよ。この船はレッドノア…。古代アト

ランティス人最大の遺産だ」

ナディア「レッドノア……」

ガーゴイル「知っているかな、ナディア姫？アトランティス大陸に住んでいた者は二種類に分けられる事を」

ナディア「そんなもの、知るわけないじゃない！」

ガーゴイル「父上は……ネモ君は君に何も話してくれなかったのだな……。ならば、私が教えよう。アトランティス大陸の住民……。それを創った者と創られた者だ」

ナディア「創った者……」

ガーゴイル「それは創造主と言うべき存在だ。私や君の遠い先祖……古代アトランティス人の事だよ」

ナディア「じゃあ、創られた者って……」

ガーゴイル「いわゆる人間と呼ばれる者達だ。人間とは、アトランティス人の下僕になるために創られた生命体なのだ」

ナディア「！」

ガーゴイル「遙か過去……地球に来たアトランティス人はまず自分達に忠実な下僕を創ろうとした。彼等だけでは、あまりに数が少なすぎたのでね。まず、生物の中でも比較的知能が高かったクジラを使ってみたのだが、上手くいかなかったようだ。まあ……その

末裔が今でも若干生き残っているがね」

ナディア「アトランティスのイリオン……」

ガーゴイル「そうだ。よく知っていたな。その失敗を基に今度はサルを利用したのだ。より使いやすくなるために割と高度な知恵を与えてね。そして、アトランティス人が大陸ごと、アル・ワースに移住した後も他の大陸に残された人間達は勝手に繁殖し……やがて、世界を埋め尽くし、勝手に文明を築き上げていったんだよ。そう……。君の友人のジャン君も、所詮はアトランティス人の下僕の末裔なのだよ」

ナディア「そんな……」

ガーゴイル「信じられないかね？だが、事実なのだよ。このレッドノアの中には人間を創り出すために試行錯誤を重ねた実験体が何種類も保存されている。機会があれば、君にも見せてあげよう。もともと、化け物と呼ぶべきものばかりだけだね」

ナディア「自分達が生み出したものを化け物扱いするなんて……!」

ガーゴイル「その程度で驚いてもらってはいささか困るよ。我々アトランティス人は創造主なのだから。ナディア姫にも重々自覚していただかないとね」

ナディア「その思いがり……あのエンブリヲと同じだわ!」

ガーゴイル「彼も智の神エンデの存在を解明するためにアトランティス人の遺産を求めて私に接触してきたのだよ。もともと可能性の選択という力を失った今の彼は哀れ

で無力な人間と、そう変わらないがね」

ナディア「…」

ガーゴイル「君には姫としての振る舞いを期待する」

ナディア「何故？ブルーウオーターは手に入ったのだから、私を殺せばいいのに…」

ガーゴイル「そうはいかない。あれはアトランティス文明の継承者に受け継がれるものだ。つまり、ブルーウオーターと継承者が揃わなければ、アトランティスの遺産の力を完全に引き出す事は出来ない」

ナディア「ブルーウオーターに、そんな力が…」

ガーゴイル「あれは古代から現在に至るまでのアトランティス人の記憶や想いの結晶…。そして、その存在自体が、このアル・ワースでは、神にも等しき力を生むのだ」

ナディア「そんな力があるのなら、戦争なんて止められたはずよ…！」

ガーゴイル「それは君がまだ、アル・ワースの真理を知らないからだ」

ナディア「その言葉…エンブリヲも言っていた…」

ガーゴイル「まずは姫である君に紹介したい方がいる…」

ガーゴイルが指を鳴らすとある人が来ました…。

ネオ皇帝「…」

ガーゴイル「紹介しよう。ネオ・アトランティス皇帝のネオ陛下だ」

ナディア「この人が…皇帝…」

ネオ皇帝「ナディア…。お互いの理解のために私は君と話をしておきたい」

ナディア「あなた達の手助けをするくらいなら死んだ方がマシよ！」

ネオ皇帝「悲しい事を言うものではない」

ナディア「…！」

ネオ皇帝「これからは私と共に生きていくのだ。片意地を張るのはやめたまえ」

ナディア「あ、あなたなんか…大っ嫌いよ！」

ネオ皇帝「嫌われなものだな…。同じアトランティス人の私よりも人間の方が良いと見える」

ナディア「当たり前よ！あなたも人間と一緒に生きてらどうなの!?!？」

ネオ皇帝「…このアル・ワースにいる人間の多くはアトランティス人の創り上げたものではなく、自然発生した生物だ…。だが、アトランティス人の創った人間もその他の人間も、愚かという点では同じだ」

ナディア「勝手に決めないでよ！」

ネオ皇帝「ナディア、人間をよく見てみなさい。同じ人間でも自分の嫌うものを平気で差別し、戦争を起こし他者の生命を奪い、自分だけを守ろうとする浅ましい心の生き物…。彼等にとって君は異邦人…。受け入れてもらえるはずがない」

ナディア「そんな事はない……！エクスクロスは、どんな人間でも同じように接していた！異界人も、ノーマのアンジュさんも、獣人のヴィラルさんも、レガリアのコアであるレナ達も、宇宙人であるゼロさんやケロ口達も、ロボット達もみんな同じだった！」

ネオ皇帝「それは一部の特別な者だけだよ。人間には、我々という主が必要だ」

ナディア「このレッドノアでアル・ワースを征服するというの……？」

ネオ皇帝「それは、いずれの話だ。まずはその前に我々は、アトランティス人の責務を果たさなくてはならない」

ナディア「責務って……！どうせ、自分達に従わない者達を殺していく事に決まっている！でも、覚えておきなさい！舞人さんが言っていたけど、この世に悪の栄えた試しはないわ！」

ガーゴイル「……君は考え違いをしている。我々は悪ではない……。善なんだ」

ナディア「なんて傲慢な！私から奪ったブルーウオーターを使って、悪魔になるに決まっている！」

ガーゴイル「それは違うよ。皇帝陛下は神とられる、ブルーウオーターの正統な継承者なのだ」

ネオ皇帝「そう……。ブルーウオーターは私が父から受け継いだものだ」

ナディア「え……」

ネオ皇帝「…」

ナディア「あなた…。私のお兄さん…。なの…」

ネオ皇帝「そうだ。我が妹よ」

マリアンヌ「…生き別れの兄妹の対面…。感動的ね」

ガーゴイル「では、計画を実行に移す」

アーサー「いよいよか」

バスコ「まあ、カギ爪の人やヨハンもエクスクロスに敗れたしね」

エンブリヲ「…」

ガーゴイル「心配しなくていい、エンブリヲ。ナディアを保護し、ファサリナという手駒を用意してくれた君には感謝している。いや…。10数年前のあの日から君は私の同志だった。事が成った暁には望むがままの新世界を創るといふ君の計画にも協力しよう」

シヨット「寛大な措置に感謝する、ガーゴイル卿」

マリアンヌ「たとえば、かりそめとは言え、私達は共犯者…。あなたの野望のお手伝いをするわ」

アーサー「ここで共にいるのも何かの縁だからな」

ネメシス「仲がいいってのはよろしい事だな」

アーサー「何を言っておる。お主もその一人ではないのか？」

ネメシス「やめろやめろ。俺はただお前達に力を提供しているだけだ。それに…力を提供しているのは他の組織も同じだ」

エンブリヲ「貴様…！私達を裏切る気もあるという事か！」

ネメシス「…勘違いするなよ、エンブリヲ…。俺の中ではお前にもう興味はない。ただ、他の奴等がまだ伸びしろがあるからお前にもう力を提供しているだけだ。他の奴等がお前を見捨てていたら、既にお前は虫の息だったぞ」

エンブリヲ「貴様…！」

ガーゴイル「やめたまえ。仲間にないにしても今は身内で争う必要はない…。それにエクスクロス…。彼等を潰す事は、君達にとつても利益の筈だ」

バスコ「そうだね。俺もケリをつけないきやならない男がいるし」

アーサー「私も排除しなければならぬ者達がいる」

ノブカツ「…」

マリアンヌ「それは私もあの子を排除しおかなければならないから」

V・V・「ふふ、マリアンヌの考えている事は僕と同じだね。君達にも特等席で見せてあげるよ」

ユーフェミア「…」

ナナリー「……」

シャーリー「(ルル……気をつけて……)」

ガーゴイル「では、行こう。彼等を消去した時こそがネオ・アトランティスの真の始まりだ」

ネメシス「(そうだ、もつと俺を楽しませろ。だが、誰が勝ち残ろうと結局はアル・ワースと運命を共にする事になるがな……)」

―新垣 零だ。

色々、あったがついに俺達は創界山に突撃する時が来た。

マサキ「いよいよ創界山に突撃か……」

九郎「だがよ、創界山にはドアクターの張った結界のせいで進入できないって聞いたが……」

シバラク「心配はいらん。最後の秘宝である龍王な剣の力があれば、闇の結界を破れる」

アンジユ「頼んだよ、ワタル」

ワタル「任せといて！龍王の剣！僕達に道を切り拓く力を!!？」
これが…龍王の剣の力か…。

幻龍斎「この光は…！」

万丈「心地いい…。まるで太陽のようだ」

サラマンディーネ「きつと、この光こそが神部七龍神の力なのです…」

エレクトラ「ネモ船長…！創界山を覆っていた正体不明のフィールドが消滅していき
ます！」

ネモ船長「道は拓かれたか…」

ルルーシュだ。

俺は斑鳩の格納庫でスザク達と覚悟を決めていた。

スザク「…いよいよドアクターのいる創界山へ行くんだね」

ルルーシュ「ああ…」

カレン「やつぱり、シャーリーの事が気になりなの？」

ルルーシュ「…いや、大丈夫だ…」

？「隠してもダメ…。あなたの中は不安でいっぱい…」

この声は……!

ルルーシユ「お前は……!」

マリアンヌ「久しぶりね、ルルーシユ……。少し大人っぽくなったかしら?」

ルルーシユ「マリアンヌ!!?」

ジノ「どうやって、ここに入り込みやがった?!?」

マリアンヌ「ふふ……今の私には扉も鍵も意味がない……。私にとって実体なんてあつてないようなものだから」

玉城「それって、幽霊って事か?!?」

扇「何なんだ、お前は!」

マリアンヌ「私は大いなる力によつてアル・ワースに導かれた存在……。あなた達とは、ちよつと違うの」

コーネリア「マリアンヌ様……!」

マリアンヌ「久しぶりね、コーネリア。あなたも大人になったわね」

C・C・「……」

マリアンヌ「そう言う事よ、C・C。あなたも心の何処かでそれを感じていたから、この世界に来たのでしょうか?」

藤堂「C・C。はゼロ達と同じで自分の意思でここに来たのか……」

C・C「…」

ルルーシュ「何をしに来た、マリアンヌ？」

マリアンヌ「その目…やっぱり、私の存在を許さないみたいね…」

スザク「ユフィ達は何処だ!?!」

マリアンヌ「心配しなくてもちやんと生きているわ。まあ、これで堂々と宣戦布告が出来るわ」

ルルーシュ「何っ!?!」

マリアンヌ「では、決戦の場にあなた達を招待しましょう」

―新垣 零だ。

突然、目の前に戦艦が現れた…!?!?

ネモ船長「何っ!?!」

エーコー「しよ、正面に巨大な未確認飛行物体！事前の反応なく、いきなり出現しました！」

ネモ船長「あれは、まさか…！」

ガーゴイル「そのまさかだよ、ネモ君」

ネモ船長「ガーゴイル！」

ガーゴイル「君の娘のナディアの協力もあり、我々はレッドノアの起動に成功した！」
ネモ船長「やはり、エンブリヲはお前の所にナディアを届けていたか……」

機関長「レッドノア……!?」

ネモ船長「N-1ノーチラス号と同じくあれも本来は宇宙船だ。レッドノアは、遙か過去……古代アトランティス人が地球に訪れた時に乗っていたものだ」

ガーゴイル「そう……。そして、アトランティスがアル・ワースに転移した時、このレッドノアも封印された。我々の祖先である古代アトランティス人はこの力を不要と考えたからね」

ネモ船長「だが、お前は……それを復活させた」

ガーゴイル「世界にアトランティスによる秩序を復活させる神の力としてね。君が超蒼穹万能戦艦エクセリヲンを手に入れた以上、こちらも相応の力が必要になったのだよ。そして、君も知つての通り、そのエクセリヲンでもレッドノアとともに戦う事は出来ない」

甲児「黙って聞いていれば、勝手な事を言いやがって！」

ユイ「あの中には、きつとナディアちゃんやシャーリーさん達もいる筈です！生きましょう、みんな！」

ガーゴイル「無駄だよ。君達が、どう足掻いても私には勝てない。レッドノアの…アトランティス文明の力の一端を君達にも見せよう」

零「この力は…！」

エレクトラ「この一帯の次元境界線が歪んでいきます！」

ネモ船長「やめろ、ガーゴイル！我々にアトランティス人の文明など不要なのだ！」

ガーゴイル「あの頃から変わらない君の持論など聞く気はないよ。私はアトランティス人の末裔として責務を果たすのみ…！その邪魔をする者には消えてもらう！」

ま、まずい…！

第72話 新たなる皇帝

ここは…何処かに跳ばされたのか…!!?

エレクトラ「ここは…!!？」

エーコー「今、座標を確認します…！」

ネモ船長「その必要はない…。ここはアル・ワース南部…タルテソス王国の跡地だ」

スメラギ「この廃墟が…」

名瀬「ネモ船長やナディア達の故郷…タルテロス王国…」

ルリ「私達は、あのレッドノアという戦艦の力によってここに跳ばされてきたのですね…」

ネモ船長「来るぞ…!」

現れたのはネオ・アトランティスの艦隊軍とヒステリカ、モルドレッド、ジークフリート、ナイトオブラウンド、イシユタール、グレートバスコが現れた。

エーコー「ネオ・アトランティスの艦隊です!」

ネモ船長「機動部隊各機を発進させる!」

俺達は出撃した…。

アンジュ「出てきたわね、エンブリヲ!」

青葉「お前の力の源をぶっ壊してやったのに懲りない奴だぜ!」

エンブリヲ「黙れ、アンジュ! 黙れ、渡瀬 青葉! お前達のお陰でこの私が…調律者たる、この私がガーゴイルに頭を下げねばならなかったのだ!」

マリアンヌ「やめなさい、エンブリヲ。協力者であるガーゴイルに失礼よ」

アイーダ「どうなっているのです!? アーニヤのモルドレッドはこちらにあるのに…!」

ジェレミア「あれに乗っているのはマリアンヌ・ヴィ・ブリタニア…。ルルーシュ様

の母上だ」

C・C・「マリアンヌの持つギアスは他人の心の中に自分の意識を潜ませるもの……」

ルルーシユ「あの女……Cの世界で消滅したはずなのにこのアル・ワースに転移していた……。さらにどういう理屈か不明だが、意識体と実体を自在に使い分けている」

V・V・「このモルドレッドもそうだよ。アーニヤの機体を、マリアンヌの力で複製したんだよ」

コーネリア「V・V・もいるのか……!」

マリアンヌ「実の母親をあの女呼ばわりは失礼じゃなくて、ルルーシユ?」

ルルーシユ「黙れ! 俺のナナリーを捨て、自らの欲望を優先し、シャーリー達を捕らえているお前を俺は母とは認めない!」

マリアンヌ「いいわよ。私も、両親であるシャルル陛下と私を消滅させようとしたあなたを子供と思わないから」

スザク「あの人が……エンブリヲに協力していたなんて……」

カレン「いったい何が目的なのよ、あんたは!?」

マリアンヌ「真実のアルゼナルでも言った通り、陛下と共に生きる新しい世界の創造よ」

ルルーシユ「皇帝シャルルを蘇らせるというのか!?」

マリアンヌ「そうよ。そして、過去の改変のためにはエンブリヲの時空制御の技術も必要になる…。それなのにあなた達と来たら、彼の研究所を破壊して…」

カエサル「アーサー王のイクサヨロイ…それに…」

ノブナガ「ノブカツ…」

ノブカツ「兄上…今度こそ、あなたを討ちます…！」

ノブナガ「…」

アーサー「兄弟同士の戦…実物じやのう」

ヒデヨシ「なんて野郎だ！」

アレクサンダー「あれが…アーサー王の本性か…」

カエサル「私達はその様な者に従っていたとは…！」

バスコ「決着をつける時が来たね、マベちゃん！」

ゴーカイシルバー「バスコ！」

ゴーカイイエロー「どうしてあなたがエンブリヲ達と…?!?!？」

バスコ「いやー、誰かの下にいれば、必ずマベちゃん達と会えると思ってるね」

ゴーカイレッド「あくまで俺達とのケリをつけるってわけか！」

アンジユ「あなた達はエンブリヲを認めるっていうの?!?!？」

アーサー「あまり好ましい人柄ではないが、有能である事は認めよう」

マリアンヌ「何より、私達の目的を果たすためには彼の力は不可欠だから」
ミツヒデ「アーサー王、あなたの目的も西の星の復旧か？」

アーサー「そうだ。破壊王とアレクサンダーによって、私は死んだが、また一からやり直させてもらう！」

アムロ「何だ、あいつ等のエゴは……」

カミーユ「他人と分かり合う事を拒否し、自らの欲望を最優先する存在……」
ヴァン「カギ爪の野郎と同じって事だな……！」

アマリ「それと同時にエンブリヲと同じって事です……！」
ルルーシユ「その通りだ。物腰や口調な騙されるな……！」

ミハエル「……」

零「どうした、ミハエル！」

ミハエル「あのマリアンヌという女性……少し、ファサリナさんに似ている……」
弘樹「考えが読み辛いつていう点はそっくりだな」

マリアンヌ「あら、あんな女と一緒にされるのはいい気持ちがないわね」
レイ「ガンソ」「彼女は何処にいる？」

エンブリヲ「彼女はガーゴイルの手駒となったのでここにはいない！」

ミハエル「くっ……！」

カロツサ「大丈夫だ、ミハエル！こいつら、倒して、ガーゴイル、倒せばいいだけの話だ！」

ミハエル「ああ……！」

ケンシン「あの者達に道理や論理を求めても無駄な様です」

ルルーシユ「我々と進む道が違う以上、奴等と分かり合う事は決してない！」

刹那「そのようだな……！」

マリアンヌ「それがわかつているから、話が早いわ。あなた達には、ここで消えてもらおう」

エンブリヲ「それがガーゴイルの望みであり、何より私の望みだ！」

アーサー「ここで破壊王を討ち取っておけば、後が楽になるといふもの！」

バスコ「俺はマベちゃんを倒せればそれでいいよ！」

アンジユ「へえ……。エンブリヲ、もう復活できなくなつたから、何処かに隠れているかと思つたら、意外に潔いじゃない」

タスク「決着をつけるというのなら、こちらとしても望む所だ！相手になるぞ、エンブリヲ！」

ノブナガ「アーサー王……何度でも俺が討つてやる……。そして……ノブカツ！」

ノブカツ「……」

ノブナガ「俺の前に立ちはだかると言うのであれば……お前は、敵だ！」

ゴークイレッド「バスコ、望み通りにここでケリをつけてやるよ！」

V・V「フフ……滅んだ王国を舞台に決戦……。悪くない傾向だね」

マリアンヌ「ええ、そうね……」

ルルーシユ「何だ、マリアンヌ達のあの余裕は……？ 戦略的には、向こうの方がやや有利ではあるが、決定的とは言えない……。切り札のギアスにしてもジエレミアのキャンセラーがある限り、絶対の逃げ道とは言えないはずなのに……。考えていても仕方がない……！ ここを乗り切り、ナナリー達を救い出す……！」

エンブリヲ「始めるぞ、エクスクロス……私の受けた屈辱……倍にして返してくれる……！」
サリア「勝手な事を！」

ディオ「俺達の世界の運命を弄んだお前の存在は許されない！」

青葉「覚悟しろよ、エンブリヲ！」

アンジュ「今度こそ、あなたを完全に叩き潰す！」

シーラ「ショウ・ザマ！」

ショウ「わかっています！（エンブリヲ達がいるなら、その協力者であるショット・ウエポンも必ずこの場にいる……！）」

マリアンヌ「フフ……互いの意地と誇りを懸けたぶつかり合い……。きつとステキなもの

になるでしょうね」

ルルーシユ「リアンヌ！」

リアンヌ「来なさい、ルルーシユ。閃光と呼ばれた私の戦い…あなたに見せてあげるわ。そして、あなた達の戦いを大地に捧げなさい」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(ネメシスは様々な組織に力を貸している…。という事はリアンヌ達にも何かしらの力を提供している可能性があるな…)」

ゼフィ「パパ！」

アスナ「どうしたの、零!?!？」

零「いや、何でもない！行くぞ！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSバスコ〉

バスコ「異世界に来てまで因縁をつける事になるなんてね、マベちゃん」

ゴーカイレッド「そうだな…。お前との付き合いも長いもんになったな」
バスコ「じやまあ、終わらせようか、マーベラス!!?」

ゴーカイレッド「来い、バスコ!!?」

カンゼンゴーカイオーの攻撃でグレートバスコはダメージを負った。

バスコ「グレートバスコが限界か…!」

ゴーカイレッド「バスコ!」

バスコ「来い、マーベラス!今度は自分自身の力で勝負だ!」

グレートバスコは爆発したが、バスコは脱出した…。

ゴーカイブルー「行けよ、マーベラス」

ゴーカイピンク「バスコとの決着をつけてきてください!」

ゴーカイレッド「お前等…」

ゴーカイグリーン「負けたら、承知しないよ!マーベラス!」

ゴーカイレッド「ああ、任せろ!」

ゴーカイレッドがカンゼンゴーカイオーから降りた。

ーキャプテン・マーベラスだ。

俺はバスコの目の前に立つ。

バスコは既に怪人達になってやがるな…。

バスコ「君一人なの？」

ゴーカイレッド「お前だけは俺が倒すからな」

バスコ「じゃあ、やろうか！」

ゴーカイレッド「ああ、派手に行くぜ！」

俺は武器を何度もバスコとぶつけ合った。

バスコ「へえ、腕は鈍っていないようだな！」

ゴーカイレッド「てめえこそな！」

バスコ「だが…！」

俺とバスコの攻撃が相打ちになり、俺は変身を解除され、バスコも人の姿に戻る。

バスコ「勝つのは、俺だ…！」

マーベラス「いいや、俺だ！」

俺とバスコは銃を向け合い、発砲し、お互いに直撃してゆつくりと倒れた…。

マーベラス「ぐっ…！」

バスコ「う……！あははは……。まさか、ここまできて……相打ち、とはね……」

マーベラス「……ふざけんな……。てめえと、相打ちなんて……死んでも……ごめんなんだよ……！」

俺はゆつくりと立ち上がった……。

バスコ「な、何故……？弾は……確かに直撃した……はず……」

マーベラス「……これだ」

俺はあるペンダントのカケラをバスコに見せた……。

バスコ「……はあ……。また、サリーに……邪魔をされたのか……。というか、まだそれを……持っていたんだね……」

マーベラス「サリーの形見だからな。また、こいつに助けられるとはな……」

バスコ「本当に何処迄も、あいつは……。はは……マーベラス、じゃあね……」

バスコは目を閉じ、赤と黒の粒子となつて消滅した……。

マーベラス「もう生き返ってくんじゃねえぞ、バスコ……」

俺はゴーカイレッドに変身して、カンゼンゴーカイオーに乗り込んだ……。

グレンファイヤー「マーベラス！」

ゼロ「勝ったんだな！」

ゴーカイレッド「当たり前だろうが」

ミラーナイト「それもそうですね」

マリアンヌ「バスコ……。面白い子だったけど、まあ仕方がないわね……」

〈戦闘会話 ノブナガVSノブカツ〉

ノブカツ「兄上……いや、破壊王、オダ・ノブナガ！あなたは今日ここで私が討つ！」

ノブナガ「迷いは人の太刀を鈍らせる……。俺はもう迷わない……アル・ワースを戦さ場で包むというのなら、俺が……破壊する！」

ザ・フールの攻撃でイシュタールはダメージを負った。

ノブカツ「……やはり、兄上には勝てませんでしたか……」

ノブナガ「降参しろ、ノブカツ。俺達はまだ手を取る事が出来る」

ノブカツ「……殺してください、兄上……。生き恥を晒すぐらいならば、死んだ方が……」

ノブナガ「……死んだ方が良いだと……？ふざけるのも大概にしろ」

ノブカツ「……兄上……」

ノブナガ「武士の意地と言うのなら、剣を捨てる。無駄な生命の灯火を消して、何が

平和な世だ。それに、迷いを持つお前を討ったとしても何も得ない」

ノブカツ「…その心の広さ…。変わりませんね、兄上…。私も、あなたのように…」
イシユタールは爆発した…。

ヒデヨシ「お、おい！爆発しちゃったぞ！」

ミツヒデ「心配するな、ヒデヨシ。ノブカツ様は脱出している」

ノブナガ「（こちらに着くつもりはない…。お前は…自らの道を進むという事か…）」

〈戦闘会話　ノブナガVSアーサー〉

アーサー「あの時の雪辱を屈辱を晴らさせてもらうぞ、破壊王！」

ノブナガ「お前と一対一でやり合うのはこれが初めてだな。悪いが俺は負ける気は無い！」

アーサー「黙るがいい！貴様を倒し、救星王をこちらに引き入れる！」

ノブナガ「ミツをお前などにやらん！俺が守ってみせる！」

〈戦闘会話　ジャンヌVSアーサー〉

アーサー「天啓の魔女、ジャンヌ・カグヤ・ダルク…。お前の天啓の力は危険と判断

する！」

ジャンヌ「私は…天啓の魔女という言葉には負けない！あなたを倒して、今度こそ、この戦いを終わらせてみせる！」

〈戦闘会話 ヒデオシVSアーサー〉

アーサー「東の星のサル如きが私の邪魔をするな！」

ヒデオシ「あなたにサル呼ばわりされる筋合はねえ！西の星にあなたはもう必要無いんだよ！とつとと消えやがれ！」

〈戦闘会話 アレクサンダーVSアーサー〉

アーサー「アレクサンダーよ…。もう一度、私と共に来い」

アレクサンダー「黙るがいい。偽りの王…。お前の本性を知った今、お前は我の王ではない！」

アーサー「後悔するぞ…王にたてついた貴様は…！」

アレクサンダー「後悔している事ならばある…。貴様の下に付いていた事だ！」

〈戦闘会話 ケンシンVSアーサー〉

アーサー「東の星のウエスギ・ケンシン……。その力は如何なものかな？」
ケンシン「ならば、西の星の元総大将に見せて差し上げましょう……。私の力を！」

〈戦闘会話　カエサルVSアーサー〉

アーサー「ガイウス・ユリウス・カエサル……。私の言葉を聞け」

カエサル「……黙れと言っておこう。私にはもうイチヒメがいる……。アーサー王、私はあなたを否定する……。あなたの存在そのものを！」

ザ・フルとガイアの攻撃でナイトオブラウンドはダメージを負った……。

アーサー「わ、我が魂はまだ……。この様な所で消えていいものではない！」

ノブナガ「ならば、その脆い魂を破壊してやる……。行けるか、アレクサンダー？」

アレクサンダー「誰に聞いているのだ、ノブナガ？」

ノブナガ「ならば……。参る……！」

ザ・プールとガイアはナイトオブラウンドに攻撃を仕掛けた……。

ノブナガ「西の星の総大将、アーサー王……。ここで破壊する！」

アレクサンダー「我に付いて来られるか、ノブナガ？」

ノブナガ「ふっ、是非もなし！」

ザ・フルルには紫の、ガイアには金色の光が包み込んだ。

ノブナガ「今、東と西…二つの星の龍が目覚める…！」

アレクサンダー「二体揃えば、まさに無敵…。それが俺達だ！」

ザ・フルルが紫の龍、ガイアが金色の龍に変化する。

そして、二体の龍はナイトオブラウンドにぶつかっていき、上空へ飛ぶ。

アレクサンダー「これで…！」

ノブナガ「終わりだ！」

そのまま、二体の龍は渦を巻く様に下へ突き進み、ナイトオブラウンドに直撃する。

アーサー「ば…バカな…！」

爆炎と金と紫の光が消えると、ザ・フルルとガイアは元の姿に戻っていた…。

攻撃を受けたナイトオブラウンドはダメージを負った。

アーサー「ナイトオブラウンドが…！」

ノブナガ「…諦めろ、アーサー王」

アーサー「まだだ！イクサヨロイがなくとも私は…！」

ナイトオブラウンドは爆発したが、アーサーは脱出した。

ジャンヌ「アーサー王は脱出したみたいね…！」

ミツヒデ「逃がさん…！」

ノブナガ「行くぞ、ミツ、ジャンヌ！」
ザ・フル、オルレアン、ミツヒデはアーサーを追った…。

ーオダ・ノブナガだ。

俺達はアーサー王を追い詰めた…。

ノブナガ「追い詰めたぞ、アーサー王」

ミツヒデ「大人しく投降しろ、差すれば生命までは取らん」

アーサー「ククク…生命だと？生命を取られるのは…破壊王、お前だ！」

アーサー王は銃を取り出し、俺に向けて発砲した。

ミツヒデ「ノブ！」

ジャンヌ「ノブナガ！」

だが、突然何者かが俺に覆い被さり、代わりに銃弾を受けた。

ノブナガ「お、お前は…！」

ノブカツ「ご無事、ですか…？兄、上…」

ノブカツ…！

ノブナガ「ノブカツ…ノブカツ！」

アーサー「くっ……！仕留め損なつたか！ならば、もう一度……！なっ……!?」

もう一度、銃を発砲しようとしたアーサーの銃をジャンヌが剣で弾いた。

ジャンヌ「よくも、ノブカツ様を……！」

ノブナガ「……ミツ……」

ミツヒデ「何だ？」

ノブナガ「今一度でいい……。こいつを斬るのを手伝って欲しい……。頼む、救星王」

ミツヒデ「是非もなしと言わせてもらおう」

俺とミツは剣をアーサー王に向けた。

アーサー「な……何をしているのだ!? 救星王と破壊王は対をなす存在……。決して、手

を取り合う事はないのだぞ！」

ミツヒデ「そんなものは知らん」

ノブナガ「訳は簡単だ……。俺とミツが友だからだ！」

俺達は剣を振り下ろし、アーサー王を斬った。

アーサー「ば……かな……！」

アーサー王が倒れるのを確認して、俺は血を流し、倒れているノブカツの下へ駆け寄

る。

ノブナガ「ノブカツ……！」

ノブカツ「兄上……」

ノブナガ「お前は……俺よりも本当のうつけだ！何故……何故……破壊王である俺を庇ったりなんかしたんだ!!？」

ノブカツ「兄上が……皆を破壊する破壊王だとしても……あなたは、私の……大切な兄上です……」

ノブナガ「ノブカツ……！」

ノブカツ「ミツヒデ……ジャンヌ……。これからも兄上を頼む」

ジャンヌ「ノブカツ様……わかりました……！」

ミツヒデ「……承知……！」

ノブカツ「兄上……アル・ワースを……頼み、ました……」

そのままノブカツは息を引き取った……。

ノブナガ「ああ、任せておけ……ノブカツ」

アーサー「私は……私はこの様な……所で……！」

ミツヒデ「まだ、息があつたか……」

アーサー「やめろ……やめろ！私は……まだ……まだ……！やめろおおおつ!!？」

突然、アーサー王が声を上げ、消えた……。

ジャンヌ「消えた……!!？」

ノブナガ「何が…起こったんだ…!?？」
俺達は皆の下へ戻った…。

―新垣 零だ。

ミツヒデがメガファウナに戻り、ザ・フルとオルレアンも戻って来た…。

アレクサンダー「戻ってきたか」

カエサル「アーサー王はどうした？」

ノブナガ「…あいつが俺達の前に現れる事はもうない」

アレクサンダー「…そうか」

ヒデオシ「ノブ様、ノブカツ様は…？」

ノブナガ「あいつは…強き男であった…」

ヒデオシ「…ああ、そうだな。何と言ってもノブ様とイチヒメ様の弟君だからな！」

イチヒメ「(ノブカツ…天で私達が平和な世を取り戻す所を見守ってください…)」

〈戦闘会話　ルルーシユVS　V・V〉

ルルーシユ「決着をつけるぞ、V・V。！」

V・V。「ああ、君を倒して、今度こそ僕の復讐を終わらせる！」

ルルーシユ「俺達の因縁を終わらせる為にお前に負けるわけにはいかない！」

蜃気楼の攻撃でジークフリートはダメージを負う。

V・V。「ジークフリートが保たない……！例え、機体が破壊されても僕は……！」

ジークフリートは爆発した……。

扇「ギリギリのところまで脱出した様だな……」

コーネリア「しぶとい男め……」

ルルーシユ「何度挑んで来ようが、俺は負けない……！」

〈戦闘会話　藤堂VSマリアンヌ〉

マリアンヌ「あなたが奇跡の藤堂ね。ルルーシユがあなたを欲した理由が何となく理

解できるわ」

藤堂「自らの息子であるルルーシュに愛情を見せないお前はここで倒す！」

〈戦闘会話 扇VSマリアンヌ〉

マリアンヌ「ルルーシュが作った黒の騎士団…。あなた達では私には勝てないわ」

玉城「舐めんじやねえぞ！」

扇「閃光だろうが何だろうが、負けるつもりはない！」

〈戦闘会話 コーネリアVSマリアンヌ〉

コーネリア「マリアンヌ様…」

マリアンヌ「コーネリア、あなたなら、私の強さを知っているでしょう？」

コーネリア「知っています、閃光のマリアンヌ様…。私はあなたを目標としていた…。ですが、息子であるルルーシュを息子と見ていないあなたは私の目標としていたあなたではない！」

〈戦闘会話 ジノVSマリアンヌ〉

マリアンヌ「ナイトオブスリーが私に牙を剥くなんてね」

ジノ「ここではナイトオブスリーでなく、エクスクロスの一人だ！だから、あんたの敵として接する！」

蜃気楼とランスロットの攻撃でマリアンヌの乗るモルドレットはダメージを負う。

マリアンヌ「思ったよりもやる……。少しブランクが長すぎたかも知れないわね」

カレン「余裕を見せて！」

スザク「逃げてても無駄だ！協力者を全て潰せば、お前の計画も終わりになる！」

ジェレミア「マリアンヌ様……。あなたのギアスは私が封じます！どうか自らの罪をお認めになってください！」

コーネリア「そして、ユファイ達を返してください！」

マリアンヌ「…あなた達は何もわかっていないのね」

逃げる気か…!??

ルルーシユ「マリアンヌ！」

蜃気楼がマリアンヌのモルドレットを追った。

マリアンヌ「さすがね、ルルーシユ。この場で私を何としても仕留めようとするのは賢明な判断だね。でも、感情のままに自らの手で討とうとしたのは下策だったわね。や

はり、大好きな女の子と妹が関わると人というのは冷静さを失うわね」

ルルーシユ「！」

マリアンヌ「さようなら、ルルーシユ」

蜃気楼はモルドレットの攻撃を受けた。

ルルーシユ「だ、ダメだ！うわああああつ!!？」

蜃気楼が爆発した…！

ノブナガ「ルルーシユ！」

零「よくもルルーシユを！」

みさえ「息子を、その手にかけるなんて、最低の母親ね、あなた！」

マリアンヌ「では、実の両親を消滅させた、あの子は最低以下ね」

C・C「く…」

マリアンヌ「言い返せない様ね、C・C。じゃあ…」

C・C「待て、マリアンヌ！本当にエンブリヲやガーゴイルはお前の願いを叶えて

くれるのか！」

マリアンヌ「教えないわ」

C・C「かつての同志である私にもか？」

マリアンヌ「変わったわね、C・C…。あなたはもつと達観していると思ったのに」

C・C。「目の前でルルーシユをやられたのだ…。動揺しているのかも知れない…」
マリアンヌ「そういうあなたが見られたのは新鮮だったわ。フフ…次にあなたに会う時には陛下も一緒だと思うわ。さようなら、C・C。」

マリアンヌのモルドレッドが撤退した…。

カレン「C・C…」

C・C。「やれるだけの事はやったさ」

コーネリア「枢木…。もしもの時はお前も頼むぞ」

スザク「はい！」

ー
ルルーシユだ。

俺は魔徒教団の神殿でマリアンヌを待ち構える為にゼロの仮面をつける。

マリアンヌ「…ガールゴイル達では、やっぱり力不足ね…。それでも最大の障害となるルルーシユは排除できたから、よしとしましょう。ごめんなさいね、あなた達の愛するルルーシユを目の前で手にかけてしまつて…」

ナナリー「…」

シャーリー「息子のルルーシユを迷いなくて手にかけるなんて……！」

ユーフェミア「マリアンヌ様、あなたは……！」

マリアンヌ「何を言っても無駄よ。ルルーシユは死んだのだから……」

ゼロ（ルルーシユ）「……それはどうかな？」

ナナリー「お兄様……！」

シャーリー「ルルー！」

ユーフェミア「無事だったのね、ルルーシユ！」

マリアンヌ「！」

ゼロ（ルルーシユ）「動くな、マリアンヌ。下手な動きを見せれば、遠隔操作の蜃気楼がお前を撃ち抜く」

マリアンヌ「ルルーシユ……。先回りしていたの……？」

ゼロ（ルルーシユ）「ホープスに聞いた所、戦場から近い位置に教団の神殿があるのを知った……。お前の持つ自信……。魔徒教団やオニキス……ネメシスがバックにいると考えれば納得もいく」

マリアンヌ「なるほどね……。その為にわざとやられたふりを？」

ゼロ（ルルーシユ）「攻撃が来るのがわかっていれば、絶対守護領域の範囲を絞り、撃墜を偽装する事も出来る。先回りする為に仲間にはお前の足止めを頼んでおいた」

マリアンヌ「C・C・の必死の問いかけも芝居だったのね…」
俺は仮面を取った。

ルルーシユ「もしものためにジエレミアも手配してある。万が一に俺達に何かあった場合、スザクも動く事になっている。お前のギアスを使おうとしても無駄だ」

マリアンヌ「…大したものね。さすがは私と陛下の子だわ」

ルルーシユ「都合のいい時だけ、息子扱いか…」

マリアンヌ「だって、息子だもの」

すると、銃声が聞こえ、マリアンヌを襲った。

マリアンヌ「！」

V・V・「息子というのはそういうものだったかい、マリアンヌ？」

V・V・「が銃を発砲したのか…?!?」

マリアンヌ「これはなんの真似かしら、V・V・？私の邪魔をするという事は陛下を蘇らせる事の邪魔をしている事になるのよ？」

V・V・「シャルルを蘇らせる…。そんな事、本当に僕が手伝うと思っていたの？」

マリアンヌ「何ですって…？」

V・V・「僕はシャルルに嘘をついた…。でも、シャルルは僕を殺した…。僕を殺してまで計画を進めた君達二人を許すわけないだろう？」

マリアンヌ「…そう。ならば…！」

マリアンヌは銃を取り出し、発砲した。

V・V・「あ…」

それはV・V・に直撃し、V・V・は倒れた。

ルルーシユ「V・V・！…マリアンヌ、貴様…！」

マリアンヌ「取引しない、ルルーシユ？」

ルルーシユ「…」

マリアンヌ「どうやって、私が蘇ったか…。いえ…どうして異界人がアル・ワースに召喚されたか知りたくない？ 全ての答えは、この世界そのものにある…。これは魔従教団の術士達ですら、知らない事よ」

ルルーシユ「…」

マリアンヌ「この先を聞く気はないかしら？」

ルルーシユ「…その代わりに見逃せと言うのか？」

マリアンヌ「今後、あなたの前に現れる事はないわ。計画は別の所で続けるから。あなたと私は、今後一切関わらない…。それでいいでしょ？」

ルルーシユ「…ふざけるな」

マリアンヌ「え…？」

ルルーシュ「俺はゼロ……！世界に害をなすお前の言葉など聞く気はない！」

マリアンヌ「どきなさい、ルルーシュ！自分が何をやろうとしているか、わかっているの……？」

ルルーシュ「無論だ。今度こそ、お前を……そして、シャルル・ジ・ブリタニアを完全に消滅させる」

マリアンヌ「実の親をその手にかけるの……？」

ルルーシュ「俺とナナリーを捨てた人間の言う言葉か！」

マリアンヌ「う……！ナナリー、ルルーシュを止めなさい！ルルーシュは母親である私を殺そうとしているのよ！」

ナナリー「マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア……。あなたは……もう私達のお母様ではありません！」

マリアンヌ「ナ、ナナリー……！あなたまで……！」

ルルーシュ「無様だな、マリアンヌ。ナナリーにまで見放されたか」

マリアンヌ「ルルーシュ！」

ルルーシュ「お前とシャルルは……自らの目的のために俺達や世界を踏みにじつてきた……！その報いを受けてもらう！ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが……いや、ただのルルーシュが命じる！マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアよ、シャルル・ジ・ブリタニアに関する

一切の記憶を捨てろ！」

マリアンヌ「い……いや……！あああああつ！！？」

俺はマリアンヌにギアスをかけた。

マリアンヌ「あ……ああ……」

ルルーシユ「……シャルルの存在を失った今、もうマリアンヌに計画を続ける意味はない。後は好きに生きるがいい」

マリアンヌ「喰わ……れる……」

な、何だ……!!？

ルルーシユ「何っ!!？」

マリアンヌ「ああ……！」

マリアンヌが消えた……!!？

ルルーシユ「マリアンヌ……!!？何が……起こったんだ……」

スザク「ルルーシユ！」

ユファイ「スザク！」

そこへスザクが来た。

スザク「マリアンヌは……？」

ルルーシユ「……わからない」

スザク「え……!?？」

ルルーシユ「俺はマリアンヌにシャルルについての記憶を失えと言うギアスをかけた……。その後にマリアンヌは消えた……」

スザク「き、消えた……!?？」

ルルーシユ「……」

V・V・「……フフ……やった、ようだね……ルルーシユ」

ルルーシユ「……V・V……」

V・V・「どうやら、僕はここまでのようだ……」

ルルーシユ「……」

V・V・「ふう、やっぱり、君に関わると……ロクな目に……合わない、ね……。本当に君は

……呪われた、皇子だよ、ルルーシユ……」

V・V・は目を閉じた……。

ルルーシユ「……安らかに眠れ、V・V……」

ユーフェミア「スザク……」

スザク「ユファイ、無事で良かったよ」

ユーフェミア「必ず来てくれると信じていたわ……」

スザク「当然だろう？ 僕は、君の騎士なんだから……」

ナナリー「お兄様……」

ルルーシユ「……俺はただのルルーシユ……。君の兄である皇帝ルルーシユは死んだ」

ナナリー「……そうでしたね。でも、あなたをお兄様と呼ぶのは私の勝手ですよね？」

ルルーシユ「……。相変わらず、言い出したら聞かない子だ、ナナリー……」

ナナリー「お兄様の妹ですから」

シャーリー「ルル、来てくれたんだね」

ルルーシユ「……スザクがユフイの騎士だとしたら、俺はお前の騎士だからな」

シャーリー「C・Cは良いの？」

ルルーシユ「あいつは共犯者だ。だが、大切な存在には間違いはない」

シャーリー「フフ、そうね」

スザク「ルルーシユ、みんなの下へ戻ろう！」

ルルーシユ「ああ……！」

俺達はシャーリー達を連れ、蜃気楼の下へ走った……。

――新垣 零だ。

蜃気楼とランスロットが戻って来た。

カレン「ルルーシュ、スザク！」

藤堂「無事のようなだな」

コーネリア「ユフィ達の救出は…？」

ユーフェミア「私は無事です、お姉様」

シャーリー「私とナナちゃんも無事だよ！」

ナナリー「エクスクロスの皆さん、助けていただき、ありがとうございます！」

カレン「シャーリー、ナナリー…！良かった無事で…！」

ルルーシュ「お前達の協力に感謝する」

C・C「マリアンヌは？」

ルルーシュ「二度と俺達の前に現れる事はないだろう。V・Vもだ」

C・C「そうか…」

ルルーシュ「(マリアンヌを消滅させた力…あれは何だったんだ…)」

突然、俺の頭に声が響いた…。

？「マリアンヌも所詮はこの程度の女だったってわけか…」

零「！」

俺は光に包まれ、目を開けると目の前にネメシスがいた。

ネメシス「よっ、零！元氣してるか？」

零「ネメシス！」

ネメシス「そう身構えんなよ…。俺はお前と戦うつもりはねえ。今日は話をしに来たんだよ」

零「話…？」

ネメシス「どうやら、チカラが増してきたみたいじゃねえか。今のお前なら、資格があるな」

零「何の事だ？」

ネメシス「なあ、零…。俺の仲間にならねえか？」

零「何…?!? 何の冗談だ?!?」

ネメシス「冗談じゃねえ、真剣な話だ。なら、お前の力についての話をしてやる」

零「俺の力はレイヤの力でオドの力を応用したものではないのか？」

ネメシス「バスタードモードやハイバスタードモードならそうだ。だが、お前はレイヤにはないエボリューションモードやお前とレイヤの力を合わせたクロスレイズモードを持っている…。それはオドの力ではない」

零「だ、だったら、何なんだ？」

ネメシス「お前のその力…俺の遺伝子から作り出された力なんだよ」

零「何…だと…!?？」

俺の力の一部が…ネメシスの遺伝子によって生み出された力だと…!?？」

零「だ、だが…俺はお前に力なんて…いや、待てよ…まさか!」

ネメシス「そうだ、俺やお前が生まれる前からハデスの中に潜んでいたんだぜ?つまり、お前がマリアの腹の中で誕生したという事は必然的に俺の遺伝子も受け継いでいるんだよ。いわば、お前は俺の息子でもあるんだよ」

零「俺に…ネメシスの遺伝子が…」

ネメシス「そして、お前は着々と力をつけてきている…。それは俺と同等の力を得る事になる。つまり、お前も世界を破壊出来る程の力を手に入れる事が出来るってわけだ」

零「…」

ネメシス「どうだ?俺の仲間になる気になったか?」

零「お前は…最終的にアル・ワースを破壊する気なのか?」

ネメシス「俺のゲーム内容を教えてやる。エクスクロス、魔徒教団、ドアクダー軍団、エンブリヲやガーゴイルおよびその協力者…。この複数の組織が戦い合い、一番を決める…。そして、場合によってはこのアル・ワースの支配者となる。その舞い上がった一番の組織をアル・ワースごと消し去る。例え一番でも勝てないものがあると教えてな」

零「あくまでも俺達はゲームのコマだと言うのか……！」

ネメシス「俺以外の生命体なんて、そのぐらいが丁度いいんだよ。何故なら、俺が本気を出せば、全世界なんて一瞬で滅ぶからな。例え、三人の伝説の巨人が現れてもな」

零「……」

ネメシス「まあ、でも……お前が俺の仲間になると言うのなら話は別だ。俺がお前達、エクスクロスを勝利に導いてやるよ。結局、エクスクロスも潰すがな。だが、お前の愛するアマリや愛娘のゼファイだけは生かしてやってもいいぜ」

零「アマリとゼファイは……生きられる……」

ネメシス「どうだ、零？悪くない話だと思うがな」

零「……ふざけるな」

ネメシス「あ？」

零「ふざけんじゃねえ！俺はお前の仲間になんてならねえ！お前を倒し、父さんを取り戻して……アル・ワースを平和にする！」

ネメシス「……そう、か。そう言うと思ったがな……。俺が言うのも何だが、せいぜい頑張れよ。あ、そうだ……。エンブリヲに伝えてくれないか？」

零「何をだ？」

ネメシス「くたばれっつてな……」

零「…いいだろう、伝えておいてやる」

ネメシス「サンキューな、じゃあ、あばよ！」

ネメシスが指を鳴らすと俺はゼフィールスネクサスのコックピットに戻された。

ゼフィ「パ、パパ!? 何処へ行つていたんですか!?」

零「…ネメシスに呼び出されたんだ」

アスナ「だ、大丈夫だったの!?」

零「話をしただけだったから、何ともねえよ。それよりも、今はこの場を乗り切るぞ

！」

〈戦闘会話〉 ナオミVSエンブリヲ

エンブリヲ「ナオミ! 私の所へ来ないのなら、消すしかない!」

ナオミ「…私は少しでもあなたがいい人だっただらと思つた…でも、今は違う!」

エンブリヲ「何が違うと言うのだ!?」

ナオミ「あなたは…私達の…世界の敵…! だから、私達が倒す!」

〈戦闘会話　ゼロVSエンブリヲ〉

エンブリヲ「ウルトラマンゼロ！お前を倒し、光の国を消滅させる！」

ゼロ「お前は光の国が生み出しちまった存在だ…。青葉達の運命を狂わせたのは俺達にも責任がある」

エンブリヲ「そうだ！だから、お前に私の邪魔をする権利などない！」

ゼロ「だがな、自分のやっている事を棚に上げて、他の奴らを巻き込むてめえを無視できねえんだよ！光の国が生み出したお前は光の国の全ウルトラマンを代表して、俺がトドメを刺してやる！」

ヴィルキスの攻撃でヒステリカはダメージを受けた…。

エンブリヲ「わ、私が死ぬ!? 私が消滅するのか！な、何故だ!? 何故、こんな仕打ちを受けなければならない！私は愛を求めただけなのに！」

アンジュ「かわいそうなエンブリヲ…」

エンブリヲ「アンジュ…」

アンジュ「あなたが、その力を正しい事に使ったら、きっと私達の関係も違うものになったのに…」

エンブリヲ「ああ…アンジュ…。最後に君は私の事を…」

アンジュ「何て言うと思つたら、大間違いよ！あれだけの可能性を引つ張り出してもまともなあなたが現れなかつたって事はあなたに更生の余地はなしって事よ！」

エンブリヲ「そ、それは私の愛を受け入れてくれる者がいなかったからで…」

アンジュ「みつともない言い訳ね！調律者が他人任せとは笑わせてくれる！」

エンブリヲ「アンジュ！この私が選んでやったと言うのに！」

アンジュ「私はあなたを選ばない！」

エンブリヲ「こうなつたらヒステリカを暴走させて、この世界を破壊してやる！」

サリー「お願いです…。これ以上、罪を重ねないでください！」

マリナ「心を、落ち着かせてください！」

リリーナ「あなたは自らの罪を認め、潔く消えるべきなのです」

アイラ「そして、反省してください」

シーラ「消えなさい、下郎。その醜き欲望と共に」

エンブリヲ「こ、この力は…!!?ヒステリカが抑え込まれる！」

サリー「…」

マリナ「…」

リリーナ「…」

アイラ「……」

シーラ「……」

エンブリヲ「や、やめろ……！私を憐れむな！魔徒教団やネメシスからドグマとオドの秘密さえ、手に入れば、私は全てを手に入れる存在になったはずなのだぞ！」

零「エンブリヲ……。ネメシスからの伝言だ。くたばれだ」とよ

エンブリヲ「な、何……!?？」

零「所詮、信頼のない奴らの関係なんて、その程度つて事だな」

アンジュ「慈悲深い、あの子達や協力者のネメシスまでに見放されたあなたにもう居場所はない！」

エンブリヲ「私の愛を理解できぬ女など……！もはや不要！」

アンジュ「何が愛よ！キモい髪型でニヤニヤしてて、服センスもなくていつも斜に構えてる恥知らずのナルシスト！女の扱いも知らない、千年引きこもりの変態オヤジの遺伝子なんて……！生理的に絶対に無理!!？チリに還れ!!？私を抱こうなんて1000万年早いわあああつ！」

エンブリヲ「ぐあああああつ！」

ヒステリカは爆発した……。

タスク「エンブリヲの真の最後だ……」

ジル「奴の欲望の犠牲となった者達の魂にやつと安らぎが訪れる…」
ビゾン「これで俺達は過去と決別し、未来へと進んでいける…」

ヒナ「大切な人達と共に…」

サリア「エンブリヲ…。もう奴の事など思い出す事はない」

アンジュ「そうよ…。私達は生きる事に忙しいのだから」

？「だったら、私も討ってもらおうか」

ナオミ「え…!!?」

ひまわり「たや…!!?」

ヒステリカが現れた…!!?

エンブリヲ「ついに私一人になったか…。流星はエクスクロスだ」

ジル「エンブリヲ…!!」

タスク「まだ生き残りがいたのか！」

エンブリヲ「安心したまえ、私が本当の最後だ。だが、私にはもう未練はない。さあ、

トドメを刺してくれ」

ヒルダ「はっ！いい心がけだね！」

サリア「これで本当に終わりね、エンブリヲ！」

ひまわり「あ、あう…」

ディオ「俺達の手でお前は……！」

青葉「覚悟しやがれ！」

ひまわり「あ……！め……だ……め……！」

アンジュ「今度こそ、チリに還りなさい！」

ひまわり「だあめえええええつ！！？」

ひ、ひまわり……！！？」

しんのすけ「ひまわり……！！？」

ひろし&mp;みさえ「ひまわり……！！？」

ひまわり「う……ひぐつ！うええええええん！！？」

アンジュ「ど、どうしたの、ひまわり！！？何で泣くのよ！！？」

エンブリヲ「私なんかの為に泣いてくれるのか、野原 ひまわり……」

ナオミ「え……まさか……！」

零「お前は……前にひまわりを助けてくれたエンブリヲなのか……！！？」

エンブリヲ「……そうだ。私だけ、他のエンブリヲと別行動を取っていたんだよ」

青葉「ちよ……ちよつと待ってくれよ！」

ヒナ「エンブリヲがひまちゃんを助けたってどう言う事何ですか！！？」

零「ミスルギ皇国との決戦前にカルセドニーからひまわりを守ってくれたんだよ」

カンタム「ひまわりちゃんが生なくなつたあの時か！」

エンブリヲ「別に私は彼女を守つたつもりはないさ。だから、アンジュ…私を討つてくれ。君や渡瀬 青葉達の運命を歪めた私を…」

アンジュ「…」

ひまわり「うぐつ…ひぐつ…！」

ナオミ「アンジュ…」

アンジュ「…なんか、興が冷めたわ」

エンブリヲ「え…？」

アンジュ「前後撤回よ。ただ一人…あなただけはまともな可能性のエンブリヲだった
ようね」

エンブリヲ「だが、私は…」

アンジュ「私は良いって言っているのよ？青葉達はどう？」

ビゾン「俺は先程のエンブリヲを倒した事でいい」

ヒナ「青葉、ディオ…」

ディオ「俺は青葉に任せる」

青葉「…俺も良いや」

エンブリヲ「渡瀬 青葉…」

青葉「それに無理矢理お前を倒し、ひまちゃんに嫌われるのも嫌だしな」

ナオミ「私も…今のあなたなら信じられる…。あなたはもう道を踏み外す事はないわ」

エンブリヲ「ナオミ、君まで…」

アンジュ「タスクやジルもいいでしょう？」

タスク「ああ」

ジル「構わないぞ」

アンジュ「という事よ、エンブリヲ…。私の気が変わる前に消えなさい」

エンブリヲ「…だが、それでは私の気がすまない…」

ナオミ「いい加減にして！」

エンブリヲ「ナオミ…!?」

ナオミ「気が済まないって…これ以上、ひまちゃんを悲しませる様な真似はしないでよ！あなたが罪を感じていると言うのなら、死ぬ事以外で罪を償ってよ！」

エンブリヲ「…今まで私は、調律者としてマナの国を見守っていた。実体を次元の狭間に置いたまま、まるで亡霊のように。新しい世界に私の実体が存在できる可能性は半々だ。もしかしたら、永遠に次元の狭間に取り残されてしまうかもしれない。私も生きてみたくなったのだよ。そのためなら多少の危険は覚悟の上だ。他に方法はない。」

チャンスは一度きりだ。だが、最後に君に叱られて。私は選択を誤っていないことを確信したよ、ナオミ。すまない、優しき乙女よ……君と出会えてよかった。ありがとう」

ナオミ「エンブリヲ……」

エンブリヲ「ひまわり……。私の為に流した涙を私は決して忘れない」

ひまわり「たや……」

エンブリヲ「では、私は行くとするよ……。私は君達の勝利を信じている……」

ヒステリカは飛び去ってしまう……。

倉光「まさか、ひまわりちゃんの涙でエンブリヲを見逃す事になるなんてね……」

レーネ「どの様な強い人間でも赤ん坊には勝てないという事ですね」

流星はしんのすけの妹だな、ひまわりは……。

チャム「あつちよ、シヨウ！シヨットのオーラを見つけた！」

トッド「シヨウ！奴との決着をつける役はお前に任せる！」

バーン「頼んだぞ、シヨウ！」

シヨウ「わかった！行くぞ、チャム！」

ビルバインが降りた……。

ーシヨウ・ザマだ。

俺とチャムはビルバインから降りて、シヨット・ウエポンの前に走った。

シヨウ「シヨット・ウエポン！」

シヨット「シヨウ・ザマか……」

チャム「あれ……逃げない……」

シヨット「何故、そんな必要がある？他の奴等が倒れた今、自前の部隊もなければ、戦士でもない私に出来る事は限られている」

シヨウ「それはそうだけど……」

シヨット「どうする、シヨウ・ザマ？私を討つて、オーラマシンを作った罪を償わせるかな？」

シヨウ「……お前と何らかの決着をつける事が俺がアル・ワースに送られた意味だろうけど、それは力による解決ではないと思う」

シヨット「流石は聖戦士だ。自らの役割というものを認識しているか。そんな君相手ならば、話す気になるな」

シヨウ「何を……!?？」

シヨット「このアル・ワースの存在する意味だよ」

シヨウ「え……」

シヨット「君は、このアル・ワースの存在を何だと思っている？戦争の世界、平和の

世界、革命の世界などの複数の世界と同じような並行世界の一つだと考えているのかな？」

シヨウ「その三つの世界の呼称……。エクスクロスだけが使うものではないのか……」

シヨット「なるほど……。君達は、独自にそこに辿り着いたか。その概念を理解している君達だから、アル・ワースに呼ばれたとも考えられるな」

シヨウ「いったい何が言いたいんだ？？」

シヨット「単刀直入に言おう。このアル・ワースは、複数の物質世界とはその存在が異なる。ここは生と死の狭間の世界だ」

シヨウ「生と死……？」

シヨット「物質世界の住人だった君にわかりやすく説明すれば……。物質世界を生の世界、バイストン・ウエルを死の世界とするなら、その狭間にあるのがアル・ワースだ」

シヨウ「何だつて？？」

シヨット「君も経験しただろう。死んだはずの人間と、このアル・ワースで再開した事を」

シヨウ「確かにな……。俺やあんたも太平洋の戦いで死んだはずだ……」

シヨット「逆に物質世界で生きていた人間も、ここにいる……。それが生と死の狭間という意味だ。我々はバイストン・ウエルへ行くはずだったのに、この世界で足止めを食

らったようなものだ。まあ、死の世界がバイストン・ウエルだけではないがな」

シヨウ「どういう意味だ？」

シヨット「バイストン・ウエルの他にも死の世界が存在する……。戦の世界で存在するヨモツヒラサカ：そして、怪獣墓場だ」

チャム「怪獣墓場って……」

シヨウ「ゼロ達の世界の怪獣の墓場の事か……！だが、待て！怪獣墓場はどの宇宙人でも訪れる事の出来る場所だと聞いたぞ！」

シヨット「当然だ。怪獣墓場の周辺には異様なバリアが張られている……。つまり、その目に見えないバリアを通り、あたかも同じ世界に存在すると思わせているのだ」

シヨウ「……そんな事が……。何故、そんな事が起こるんだ？」

シヨット「その答えは魔徒教団が握っている。エンブリヲも彼等の力の源については独自に調査を進めていたが、彼等こそが世界の真理に最も近い位置にいるらしい」

シヨウ「この世界を創ったっていうエンデの使徒だからか……」

シヨット「そして、このアル・ワースを成立させているエネルギーは複数の世界のサイクルが生み出している」

シヨウ「サイクル……。回転してるといふ事か？」

シヨット「その通りだ。戦争、平和、革命……その三つは時代と共に移り変わり、永遠

に回り続ける……。戦争の世界が平和になれば、平和の世界で革命が起こり、革命の世界では戦争が始まる……。その歴史の動きによって生まれるエネルギーが、三つの世界と接するアル・ワースを支えているんだ」

シヨウ「だが、世界は三つだけじゃないはずだ！それ以外の世界はどうなるんだ？？」

シヨット「エルシス・ラ・アルウォール達がいた世界：エンブリヲが手つけたM78星雲スペース、ウルトラマンゼロがウルトラマンベリアルを倒したアナザースペース、新垣 零達が暮らしていた平穏の世界：そして、ラ・ギアス、始まりの世界……。その他に沢山の世界が存在する……。だが、世界は複数などなかった……」

シヨウ「どういう事だ？？」

シヨット「それはいずれわかるだろう……。取り敢えず、三つの世界や複数の世界とアル・ワースは一つの連動したシステムなのだ」

チャム「おかしいよ！地上とバイストン・ウエルの間になんか世界があるなんて聞いた事がない！」

シヨット「そのフェラリオの疑問も、最もだ。本来なら、この世界は存在していないものだ。複数の世界のエネルギーを使い、アル・ワースを存在させているもの……。それは意思の力だ。その謎を解き明かす為にドアクダーは強い意思を持つ彼女達を集めたのだろう」

シーラ「お前の言葉…理解できる」

シーラ様…！リリーナ達も…！

チャム「シーラ様！それにリリーナとサリー、マリナとアイラ、アトラも！」

リリーナ「戦争と平和と革命の三拍子…。終わらないワルツ…。その言葉…マリメ
イアも言っていました」

マリナ「同時に複数の世界も絡み合っていると行っていました」

シヨット「その少女は、ナチュラルにアル・ワースの真理を理解していた希有な存在
と言えるな」

サリー「だから、マリメイアちゃんはドアクダーに特別扱いされていたんですね…」

アイラ「同時に彼女は心に傷を…」

アトラ「可愛そう…」

シヨット「実に興味深い…。完全にアル・ワースのシステムを理解し、次元制御技術
と合わせれば…複数の世界に干渉する事も可能になるだろう」

シヨウ「シヨット！それではバイストン・ウエルでやった事の二の舞になるだけだ！」

シヨット「私は理論を構築するだけだよ。それを行使するのは他の者がやればいい」

シヨウ「お前がいたから、あいつ等はあんな事を…！」

シヨット「その責を私に求められても困るな」

シーラ「シヨット・ウエポン……。お前は何も変わっていないのだな……」
シルキーが飛んできた……？

シルキー「世界に災いをふりまく者よ……」

チャム「シルキー！」

シヨウ「この感覚……！シルキーからジャコバ・アオンのオーラを感じる……！」

シヨット「何だ、このフェラリオは……？」

シルキー「シヨット・ウエポン……。世界に災いをふりまく者よ……。生と死の狭間に身を置いてもその意味が理解できないのならば……。お前には、死という救済のない永遠の責め苦を与えよう」

シヨット「何……？」

シルキー「災いをふりまく者よ！お前をバーストン・ウエルへ封じる！」

シヨット「あ、ああああつ……！」

シルキーの力でシヨットは姿を消した……。

シーラ「……シヨット・ウエポン……。これがお前の犯した罪への罰だ」

シルキー「え……？私……何を……？」

シヨウ「もう終わったんだ、シルキー……。何も気にする事はないよ」

シーラ「ご苦労でした、シヨウ。あなたは聖戦士としての務めを果たしました」

シヨウ「いえ、まだです。ここも俺達の世界の一部ならば、俺はアル・ワースを平和にするまで戦います」

それが…俺に出来る事なら…!

―新垣 零だ。

ビルバインが戻って来た…。

エイサップ「シヨウさん！」

マーベル「シヨウ…」

シヨウ「オーラマシンをめぐる戦いは終わった…。だが、このアル・ワースに平和が戻るまで俺達は戦わなくてはならない。それが聖戦士の務めだ」

エレクトラ「敵部隊の壊滅を確認しました」

ネモ船長「機動部隊各機を收容しろ。ガーゴイルの意図がわからない以上、すぐここから離れる」

すると、レッドノアが現れた。

ガーゴイル「思い出の地なのだ。もう少しゆっくりしていてもいいのでは?」

グランデイス「出たね、ガーゴイル！」

ガーゴイル「ご苦勞だったね、エクスクロス。まずは君達の勞をねぎらおう。用済みであつたエンブリヲ達を処分してくれて感謝する」

ノリコ「あの人達を倒させるために私達と戦わせたの！」

ガーゴイル「君達と共倒れになつてくれるのが望ましかつたのだがね」

アンジュ「そんな事はどうでもいい！ナディアを返してもらおうよ！」

ガーゴイル「焦らなくてもいい。彼女も、ちゃんとこの場に連れてきている。ほら……この通りだ。見えるかな？」

ナディア「……」

ナ……ディア……!??

ジャン「ナディア！」

エレクトラ「あの目……まさか!?？」

ネモ船長「貴様！ナディアの意識を消したな！」

ガーゴイル「そうだよ。必要のないものだからね。では、ネモ君……いや、エルシス・ラルウォール君……。娘との再会も果たした事だし、我々の決戦の場へと案内しよう」

ネモ船長「何っ!?？」

ガーゴイル「そこで私はアトランティス人としての責務を果たす」

レッドノアから力が……！

エレクトラ「次元境界線が歪曲していきます！」

ネモ船長「ガーゴイル!!？」

ガーゴイル「アトランティスの遺産を手にした私は今、神になるのだよ！」

零「そう何度もお前の思い通りにさせるかよ！」

俺は力を発動し、次元境界線の歪曲をかき消そうとしたが…。

ネメシス「おいおい、キャラクターが新たなステージに行かないとゲームが始まらないだろう？」

アルガイヤ・ノヴァが現れて、俺の力をかき消した…。

零「くっ…!!ネメシス…!!」

ネメシス「じゃあ、見せてもらうぜ、ガーゴイル。お前の力をな」

ガーゴイル「勿論だともネメシス…」

ジャン「ナディアアアアツ!!？」

俺達は光に包まれた…。

第73話 星を継ぐ者

「ジャン・ロック・ラルティーングです。

僕は目を覚ました。

ジャン「ここは…!?？」

パリの…街…?」

ジャン「パリの街…。ナディアと初めて会った場所…。僕は…元の世界に帰ってきたの…? エクスクロスは…!? ナディアは…!?」

市民「お、おい…! 空を見る!」

市民2「巨大な人…!?」

ジャン「あれは!」

巨大な人が言い放った。

ネオ皇帝「私はネオ・アトランティス皇帝、ネオ・アイコン・エビファネスである。全世界の人類に告げる。我こそが人類の創造主であり、真の主である。よって、我に服従せよ。服従できぬものは死を以て、その罪を償う事になるであろう。以後、諸君はネオ・

アトランティスの命に従い、ネオ・アトランティスのしもべとしてのみ生きる事が許されるのだ。愚かなる者は、私の言葉が理解できないであろう。そこをわからせるため、これよりお前達の文明の中心たるパリを燃やす」

ジャン「このパリを……!?」

すると、グランデイスさん達が来た……。

グランデイス「ジャン！ここにいたのかい！」

ジャン「グランデイスさん！サンソンにハンソンも！」

ハンソン「エクスクロスもこっちの世界き来ている！」

サンソン「やるぜ！ガーゴイルの野郎にパリを好きにさせてなるものか！」

グランデイス「奴をぶん殴つて、ナディアを救い出す！準備はいいかい、ジャン!?」
ジャン「はい！」

第73話 星を継ぐ者

―新垣 零だ。

ここがジャン達の世界のバリか…!

ネオ・アトランティスの戦艦軍団とダリア、レッドノアが出てきた。

ガーゴイル「さあ、エクスクロス…。審判の時の始まりだよ」

俺達は出撃する。

ワタル「ここがジャンさん達の世界…」

ネモ船長「そうだ。同時に古代アトランティス人が最初にたどり着いた世界であり…タルテソス王国が崩壊した後、私やナディア…そして、ガーゴイルが跳ばされた世界でもある」

カイザム「先程の立体映像の人間が言っていた、造物主の意味は何だ？」

ネモ船長「古代アトランティス人は遙か過去、この世界に降り立ち、人類を創り上げたのだ」

甲児「何だって!?」

由木「この世界の人類は…古代アトランティス人によって創られた…」

スカレット「では、ガーゴイルの口にしていた責務とは…」

ネモ船長「古代アトランティス人が大陸と共にアル・ワースへと跳ばされた後に独自の文明を築き上げた人類を…再びアトランティス人の下僕とする事だ」

鈴「げ、下僕…!?」

ネモ船長「ガーゴイルはアル・ワースから、こちらの世界に跳ばされて以降、ずっとその野望に取り憑かれていた。アトランティス文明の遺産を手に入れ、アル・ワースとこの世界を自在に行き来できるようになった今…その野望を実現させるのだろうか」

ゴークイレッド「あいつ…！何様のつもりだ?!?」

ジョーイ「そんな事が許されるはずがない！」

ネモ船長「その通りだ。確かに人類の発祥はアトランティス人によるものだったかも知れないが…。自らの力で生きる人々の自由や幸せを奪う権利は、何人にもない。それから、ゼロ…。君にも伝えねばならん事がある」

ゼロ「何だ？」

ネモ船長「古代アトランティス人が暮らしていた星雲の名前は…M78星雲だ」

ゼロ「な、何だと?!?」

ミラーナイト「それは…!」

グレンファイヤー「ゼロの故郷と一緒にやねえか！」

ジャンボット「では、N-101チラス号やレッドノアも…」

ジャンナイン「M78星雲で造られたという事なのか…?!?」

ネモ船長「その通りだ」

ゼロ「ま、待てよ！そんな話、光の国のどの歴史にも乗っていなかったぞ！」

ネモ船長「当然だ。同じM78星雲でも世界が違うのだから」

零「つまり、ゼロ達の世界ではM78星雲の人達がウルトラマンとなり、ネモ船長達の世界ではウルトラマンになっていないと言う事なのか……！」

アンジュ「ネモ船長やナディアは……ゼロやベリアル、エンブリヲと同じ星の人間……」

ネモ船長「そして、古代アトランティス人が使っていた文字……それが、君達、ウルトラ一族が使うウルトラサインだったのだ」

ゼロ「そ、そんな事が……！」

ネモ船長「ガーゴイルの事はすまない……。全ては宰相であった奴を止められなかった私の責任だ……。私は、生命に代えても奴の打倒を誓う」

シモン「……」

ヴァン「……」

ネモ船長「エクスクロスの諸君……。そして、N-1ノーチラス号の乗組員達へ……。皆、今までよく私に付き合ってくれた……。だが、これ以上は私とガーゴイルの問題だ。諸君達は、ここより離脱し、アル・ワースへの帰還の為に行動してくれ」

オルガ「ネモ船長……」

スメラギ「あなたは、そう望むのですね……」

ネモ船長「もはや私に残されているのはそれだけだ……。最後に一言だけ言っておきた

い。ありがとう…」

すると、グラタンが出て来た。

グランデイス「そんな言葉はまだ聞きたくありませんわ、ネモ様」

エレクトラ「グランデイスさん！ジャン君は…」

ジャン「ここにいます！ネモ船長！僕もグランデイスさん達と一緒に戦います！」

ネモ船長「ジャン君…」

ジャン「僕の出来る事なんてたかが知れています！でも、僕もナディアのために何かをしたいんです！」

サンソン「たかが知れてないぜ、ジャン！」

ハンソン「君のナディアを助けたい気持ちに僕達を奮い立たせてくれる！」

ジャン「聞いてください、ネモ船長！ナディアは、きつと僕達を待っています！」

ナディア「しかし、ナディアは…」

ジャン「僕…こっちの世界に跳ばされる時、ナディアの声を聞きました。きつと僕だけ、みんなと離れて跳ばされたのはナディアが僕を呼んだからだと思うんです」

ネモ船長「だが…」

ひろし「何を諦めかけているんですか、ネモ船長！」

サコミズ「きつとナディアはあなたとジャンが迎えに来る事を祈っているであろう」

三日月「それなのに父親が行かなくてどうするの？」

零「あなたは本当にナディアを見捨てるつもりですか!?!？」

ネモ船長「君達……。ナディアの意識は……。完全に失われたわけではない……」

ルルーシユ「希望は残されています、ネモ船長。捨て鉢になるのは、まだ早いのではない？」

ノブナガ「あんたなら、まだやれるはずだ」

ワタル「それにネモ船長って、まだお父さんとしてナディアさんに会ってないんだよね！」

しんのすけ「だったら、ナディアを置いて、死んじやダメだゾ！」

青葉「生きてナディアに会うために戦いましょうよ、船長！」

マサキ「船長とナディア：親子の対面か。こいつは見物だぜ」

万丈「無論、僕達も一緒に戦いますよ。科学の力で人を不幸にする者を許してはおけないですしね」

ジユドー「このきれいな街を……。世界を奴等の好きにさせるかよ！」

ゼロ「ネモ船長が別世界だとしても俺達の同族ってんなら……。力を貸さないとウルトラマンが廃るぜ！それにM78星雲の技術を悪用させねえ！」

ジル「タルテソス王……。あなたも未来の為に戦うべきだ」

ネモ船長「…すまん」

グランデイス「お礼もお詫びも必要ないですよ。みんな、自分の意思で戦うと決めたんですから。勿論、あたしはネモ様のためですけど」

エレクトラ「グランデイスさん！こんな時に…！」

グランデイス「それぐらい言わせておくれよ。覚悟を決めるためにね」

サンソン「ハンソン！行けるな!!？」

ハンソン「ジャンと一緒にチューンしたんだ！グラタンもパワーアップしてるよ！」

ファサリナ「全ては、ガーゴイル様の為に…」

カロツサ「ミハエル…！ファサリナ、頼んだ！」

ミハエル「わかったよ、カロツサ！」

ネモ船長「…N-1ノーチラス号の乗組員へ…。先程の言葉を訂正する。私に力を貸してくれ！ガーゴイルを討ち、ナディアを救い出すために！」

操舵長「了解！」

エーコー「やりますよ、俺達も！」

機関長「今日という日のために我々は戦ってきたのです」

エレクトラ「あのレッドノアの電磁バリヤーを破るための新たな戦術パターン構築も完了しています」

ガーゴイル「この世への別れの覚悟は済んだようだね、エクスクロス」
ネモ船長「既にこの生命に執着はない……。だが、最後の瞬間まで足掻いてみせる！ 未
来を我が子に残す為に！ エクスクロス全部隊、突撃！ レッドノアを叩き、この世界を守
るぞ！」

戦闘開始だ！

戦闘から数分後の事だった…。

ホープス「異界の門が開きます…！」

アマリ「えっ…!?？」

零「やはり、あいつは…送り込んできたか！」

異界の門からルーン・ゴレム、デインベル、ガラム、グレモリー部隊が現れた。

弘樹「魔徒教団とオニキスか！」

イオリ「俺達と戦う為にこの世界まで追ってくるなんてな…！」

メル「どうして、そこまでエクスクロスに執着するのですか…!?？」

カノン「彼等に尋ねても答えは得られません」

マリア「魔徒教団はネメシスと手を組んだおかげで任意の世界へ転移する事が出来る

ようになったようね……」

シヨウ「(シヨットが言っていたようにアル・ワースから他の世界へ干渉が可能だという事か……)」

ネメシスやカルセドニーが出て来ていないって事はまた、ネメシスのゲーム感覚で兵士達を送り込んできたつてところか……何処までもふざけやがつて……!

ルルーシユ「……」

C・C・「ルルーシユ?」

ルルーシユ「(マリアンヌをアル・ワースから追放した力……。神殿で起きた以上、教団の関係があると見るべきだろう……)」

ノブナガ「(ルルーシユも教団の異変に気づいているのか……。?魔従教団……。一体奴等は何を目的とする……。?アル・ワースに戦乱を巻き起こす事と俺達を標的とする事は何か関係があるのか……。?)」

グランデイス「ネオ・アトランティスとあたし達だけじゃなく、あんな連中まで現れたらパリは大混乱だろうね!」

ガーゴイル「ネメシスの差し金か……。有り難い。エクスクロスは異物であり、我々こそが古代アトランティスの継承者としてアル・ワースに迎えられる存在なのだろう」

アンジュ「どこまでも身勝手な奴……!」

優香「ここまでくるとどちらの相手もするしかないわ！」

ネモ船長「急ぐぞ！これ以上、戦いを広げない為にもレッドノアに攻撃を集中させろ！」

俺達は戦闘を再開した…。

グラタンが次々と敵を倒していく…。

サンソン「ハンソン！グラタンの調子は最高だ！」

ハンソン「僕とジャンでチューンしたからね！今のグラタンをただの小型戦車だと思ったら、大間違いだよ！」

グランデイス「何度も何度も言ってるけど、グラタンじゃなくてカトリイヌだよ！」

〈戦闘会話　ヴァンVSファサリナ〉

ファサリナ「全ては…：ガール様の為に…」

ヴァン「たく、本当にお前は面倒な女だな…。お前の生きる目的はミハエルと一緒にいる事だろうが！それを思い出させてやるよ！」

〈戦闘会話 レイ「ガンソ」VSファサリナ〉

レイ「ガンソ」「ファサリナ…。新たな生きる意味を見つけた貴様を撃つ気はない…。その代わりに目を覚まさせてやる」

〈戦闘会話 ミハエルVSファサリナ〉

ミハエル「ファサリナさん！僕です、ミハエルです！戻ってきてください！」

ファサリナ「全てはガーゴイル様の為に…」

ミハエル「くっ…！やはり、ダリアを止めなければならぬか…！もう少しの辛抱です、ファサリナさん！」

サウダーデの攻撃でダリアの動きが止まった…。

ファサリナ「っ…！」

メリツサ「今だよ、ミハエル！」

ミハエル「うおおおっ！」

サウダーデがダリアに組み付いた…。

ミハエル「ファサリナさん、目を覚ましてください！僕が…僕が助けに来ましたから！」

ファサリナ「ガーゴイル様の敵は…排除します…」

ミハエル「僕はガーゴイルの敵ですが、あなたの敵ではありません！」

ファサリナ「…?!? あ、あああつ…!」

ミハエル「ファサリナさん…こんな時ですが、言わせてください…。僕は…あなたが…ファサリナさんを心の底から愛しています！」

ミハエル「あ、ああ…がー、ゴイル…様…!」

ヴァン「何がガーゴイル様だよ！みつともねえな！」

ウー「ファサリナ、自らの愛と使命を思い出せ！」

ガドウエド「お前もミハエルも、もう自由なのだ！」

カルメン99「戻ってきなさいよ、ファサリナ！戻ってきて、あんたの本音を聞かせなさい！」

レイ「ガンソ」「お前の心は完全に失われていない！」

ウエンディ「お願い…これからも…兄さんの側にいてあげて！義姉さん！」

ファサリナ「私は…私はあああつ!!?」

もう少してファサリナの洗脳が解ける…!

ガーゴイル「手駒を手放すわけにはいかないな」

レッドノアがサウダーデに砲撃を放ったが、砲弾をダンが斬り裂いた。

ヴァン「俺はミハエルと約束してんだ…。あの女を取り戻すってな！」

ミハエル「ヴァン…」

ヴァン「後一息だ、やれ、ミハエル！」

ミハエル「ああ！ファサリナさん、僕はあなたの事が…好きだあああつ!!？」

ファサリナ「…：わた、しも…：大好きよ、ミハエル、君…！」

ミハエル「ファサリナさん!!？」

ファサリナ「ありがとう、ミハエル君…。あなたのおかげで、私…戻ってくる事が出来たわ」

ミハエル「僕だけの力じゃないです。ヴァンやエクスクロスの皆さんが力を貸してくれたおかげです」

ガーゴイル「…洗脳がこんなにも簡単に…！」

ヴァン「これこそが愛の力って奴だ」

ガーゴイル「愛だと!!？」

ヴァン「他人の愛に土足で踏み込んだお前は斬る！」

すると、ダンの横にディアブロ、メッツア、ダリア、シン・オブ・フライデイ、セン、

サウダーデが並んだ。

ガドウエド「我等もやるぞ、ヴァン！」

ウー「私達も奴に腹を立てていた」

カロツサ「ミハエルとファサリナ、泣かせた奴…許さない！」

メリツサ「うん！やろう、みんな！」

ファサリナ「借りはお返しします！」

ミハエル「オリジナル7の力、受けてみる！」

ヴァン「連む気はねえんだがな、まあ、仕方ねえ…。こういうのもありか！」

ダン達はレッドノアに攻撃を仕掛けた…。

ヴァン「その薄気味悪い仮面ごとぶった斬ってやる！」

ウー「新生オリジナル7の力をとくと見よ！」

ヴァン「俺はそんなのに入る気はねえけどな」

ガドウエド「そう言うな、ヴァン。旅は道連れというものだ！」

ヴァン「まあ、いいや。行くぜ！」

ダン達は一斉に動き出した。

ガドウエド「まずは、私の攻撃を受けろ！うおおおっ！」

ディアブロが斧でレッドノアを斬り飛ばす。

ウー「遅いぞ、次は私の番だ！我が太刀で斬り刻む！」

メツツアはレイピアでレイピアを何度も突き刺し、斬り飛ばす。

カロツサ「俺達もやるぞ、メリツサ！」

メリツサ「うん、カロツサ！」

シン・オブ・フライデイとセンは合体して、ビームを放ち、分離してそれぞれ、トンファーとチャクラムで攻撃する。

ファサリナ「ふふふ、捕まえましたよ、はああつ！ミハエル君！」

ダリアがG—ER流体でレッドノアを絡めとり、地面に叩きつけ、三節棒で攻撃を与え、レッドノアを上空へ投げ飛ばす。

ミハエル「任せてください、ファサリナしん！」

上空へ投げ飛ばされたレッドノア目掛けて、サウダーデが青い羽を広げて飛翔し、重粒子弾ライフルを連射し、銃モードに変形し、突撃し、数発、銃撃を放つ。

ミハエル「喰らええええつ！」

ヨロイの姿に戻ったサウダーデは銃剣でレッドノアを斬り下ろす。

ミハエル「ヴァン！」

ヴァン「やっと俺の番か！こいつの加速を使って！」

今度はダンが刀型に変形後何度も突撃して上空に離脱し再変形した。

ヴァン「じゃあな、ガーゴイル！チエエエエとオオオオツ!!？」
そのまま左手に持った蛮刀で斬り落とした刹那で右手に持ち替えて斬り上げるV字
斬りで斬った。

ガーゴイル「バカな…オリジナル7のヨロイにこれ程の力が…！」
ファサリナ「これが私達の力です」

ミハエル「もつと息を合わせたいので、もう一度やりましょう！」
ヴァン「勝手にやってるよ…」

斬り裂かれたレッドノアはダメージを負った…。

ガーゴイル「う、うおっ…!!？」

ネロ「あいつら、何と息の合った連携だ！」

ホセ「我々に匹敵する程の連携だな」

ガーゴイル「何故だ…ヨロイ如きが…神の船に傷を…!!？」

ネモ船長「その見下した態度を直さない限り、お前に勝ち目はないな、ガーゴイル」
ガーゴイル「調子に乗るな、ネモ！これしきの攻撃でレッドノアは落ちん！」

レッドノアのダメージが回復した…。

カルロス「しつこさは一級品のようだな」

バリヨ「だったら、もう一度、倒すだけだ」

すると、辺りに異変が起こった。

ホープス「！」

アマリ「どうしたの、ホープス!?!」

ホープス「何者かがこの世界に来ます！」

イオリ「魔徒教団とオニキスの増援か!?!」

零「いや…違う！」

俺達の前に赤い魔法陣が現れた。

サラ「ねえ、あれって…」

ノア「まさか…！」

? 「そのままかだよ、エクスクロスのみんな」

? 2 「間に合ったようだね」

魔法陣から人型のオフルマズドとヒステリカが現れ、魔法陣は消えた。

イングリッド「オフルマズドという事は…」

レナ「ヨハン!?!」

ティア「あれ?ヨハンって、ルクスと消えなかったっけ…?」

ケイ「どうして、あなたがここに？」

ヨハン「助けに来たんだよ、慢心していた僕を解放してくれたユイシエル・アステリ

アと君達、エクスクロスをね…」

ルクス「…」

ユイ「ルクスちゃんも！」

アンジユ「ヒステリカ…?!? エンブリヲなの?!?」

エンブリヲ「ああ、そうだよ。アンジユ」

ジル「お前まで何故、この世界に?!?」

エンブリヲ「それは…」

ひまわり「たいやー！」

エンブリヲ「私は…ひまわりやナオミに恩を返すため…。そして、アンジユや渡瀬

青葉、世界を混乱させた罪を償う為にここへ来た！」

ナオミ「エンブリヲ…」

ヨハン「みんなが僕達を信用できないのはわかってるよ…」

エンブリヲ「だが、私達の覚悟は本当だ」

イングリッド「…どうするの、アンジユ、ユイ?」

アンジユ「あいつ等がやりたいって言っているならやらせておけば? それにあのエン

ブリヲはまともなエンブリヲだし」

ユイ「ルクスちゃんもいますし、今のヨハン君は信じられます！」

ヨハン「ありがと、みんな」

エンブリヲ「では、その期待に応えられるようにやるとしよう！」

ヨハン「そうだね！」

ファサリナ「私も戦います…。ミハエル君と生きる未来を守る為に！」

ガーゴイル「いいだろう、エンブリヲ、ヨハン…。私の邪魔をするのだと言うなら、エクスクロスと共に散れ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話　ファサリナVS初戦闘〉

ファサリナ「私は生きてます…。例え、辛い道に直面してもミハエル君となら、頑張れる…。だから、その未来を壊されないためにも私は戦います！」

〈戦闘会話　ヨハンVS初戦闘〉

ヨハン「ごめんね、ルクス。僕の罪を償う為につき合わせちゃって」

ルクス「…」

ヨハン「そんな事ない、か…。君にも感謝しないとね…。じゃあ、行こう！未来を守るために！」

〈戦闘会話 エンブリヲVS初戦闘〉

エンブリヲ「まさか、私が自分の為でなく、誰かの為に戦う様になるとは、思いもしなかつたよ…。今の私は神でも調律者でもなく、ただの戦士だ…。世界に生きる皆やアングジュの愛する世界を守る為、私は戦う！」

突然、グラタンがタワー付近で停止した。

グランデイス「何やってんだよ、サンソン!?!?こんな所でカトリイヌを止めて、どういうつもりだい!?!?」

サンソン「それはハンソンが停止を指示したからで…」

ハンソン「見なよ、サンソン!万博で展示されていた、すごい発明品がここに保管されているんだ!こいつを僕の手でちよつと改良すれば、エクスクロスの戦力にもなる!」

グランデイス「だったら、さっさと回収しな!あのガーゴイルを倒してもきつとまだ戦いは続くからね!」

〈戦闘会話 エイサツプVSガーゴイル〉

ガーゴイル「ええい！邪魔な小虫を撃ち落とせ！」

エイサツプ「そう簡単に落とされてたまるか！お前の野望とエゴは俺が斬り裂いてやる！」

〈戦闘会話 バナージVSガーゴイル〉

ガーゴイル「そのガンダムから発せられる光は多くの者を惑わせる！」

バナージ「そんな事はありません！可能性の光は…多くの人を導きます！あなたは俺が止める！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSガーゴイル〉

ガーゴイル「バカな…モビルスーツで突っ込んでくるとは、死ぬのが怖くないのか！」

キンケドゥ「そんなのでいちいち怖がっていると海賊なんてやれないんだよ！」

〈戦闘会話 シンVSガーゴイル〉

ガーゴイル「人間は挑んでくるから生命を散らす…。だからこそ、我々の僕になるの

が相応しいのだ」

シン「ふざけるな！生命があつたとしても俺達は僕になる事なんて、真つ平御免なんだよ！」

〈戦闘会話　キラVSガーゴイル〉

ガーゴイル「君も造られた人類の一人の筈だ。何故、私に刃向かう？」

キラ「造られたとしても、生まれれば生命です！その生命がある限り、僕達は刃向かう事をやめません！」

〈戦闘会話　刹那VSガーゴイル〉

ガーゴイル「人間は異性体とわかりあう必要などない。所詮は我らの下僕と成り下がるのだからな」

刹那「そんな事はない……！俺達は自分で考え、自分達の手で対話の道を切り拓く……！対話を切り捨てるお前を俺は駆逐する……！」

〈戦闘会話　リボンズVSガーゴイル〉

ガーゴイル「皮肉だね、多くの人間を見下していたイノベーターの君が人間と共に戦

うとは……」

リボンズ「僕達も所詮は一つの生命だったのさ。それは君も同じだよ、ガーゴイル」

〈戦闘会話　キオVSガーゴイル〉

ガーゴイル「Xラウンダー……その存在は危険すぎる」

キオ「危険なのは生命を無駄に散らそうとするあんただ！人間は自分達の足で歩けるんだ！」

〈戦闘会話　アセムVSガーゴイル〉

ガーゴイル「何故、お前達は何度も向かってくるのだ!?？」

アセム「人間はな……。諦めが悪いんだよ！仮面の男とは何かと縁があるんだ、容赦なく行かせてもらおうぜ！」

〈戦闘会話　フリットVSガーゴイル〉

ガーゴイル「老いぼれの出る幕ではない。下僕に下ると言うのなら、丁重に扱ってやってもいいのだぞ」

フリット「必要ない。あまり、老いぼれや人間を舐めるなよ、ガーゴイル。この私に

出来る事は今を生きる子供達に未来を託す事だけだ！」

〈戦闘会話 三日月VSガーゴイル〉

ガーゴイル「その動き…まさに悪魔だ…！」

三日月「どう言われたって構わないよ。でもね、アトラや暁、仲間みんなを下僕として利用するなら、俺は一切の容赦はするつもりはない！」

〈戦闘会話 オルガVSガーゴイル〉

ガーゴイル「指揮を出している貴様を崩せば、エクスクロスの一部が崩れるというものだ！」

オルガ「そう簡単に出来るか？あまり、俺を舐めんじやねえぞ！」

〈戦闘会話 エンブリヲVSガーゴイル〉

ガーゴイル「エンブリヲ、私と共に来るといふのなら、もう一度チャンスを上げよう」
エンブリヲ「いい話だが、今の私には必要のない事だ。私は未来を守ると決めたのだからな！」

〈戦闘会話 海道VSガーゴイル〉

ガーゴイル「破壊を司る髑髏の魔神……！その存在は危険だ！」

真上「ならば、その危険度を上げてやろう」

海道「俺達二人がSKLに乗れば、危険度は二倍だぜ！」

〈戦闘会話 一夏VSガーゴイル〉

ガーゴイル「そのISでレッドノアに挑んでくるとは……何と生命知らずな小僧だ！」

一夏「こうでもしないとお前にダメージを与えられない！それに、ナディアを救い出す事も出来ないからな！」

〈戦闘会話 竜馬VSガーゴイル〉

ガーゴイル「ゲッター線の危険性は把握済みだ。よって、ゲッターロボはここで破壊する」

竜馬「いいぜ、かかってきな！お前の神の船が沈むか、ゲッターが負けるか、勝負だ！」

〈戦闘会話 葵VSガーゴイル〉

ガーゴイル「そうだ。人間は野生の動物の様に私達に飼われるべき存在なのだよ」
葵「そうやって、人間を家畜扱いする所はムーンWILLと同じね！悪いけど、あんなの支配に屈するつもりはないから！」

〈戦闘会話 九郎VSガーゴイル〉

ガーゴイル「その異界の力を野放しには出来ないな」

九郎「だったら、その力でお前を異界までぶっ飛ばしてやるよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSガーゴイル〉

ガーゴイル「その白き巨人は人間の可能性の現れだとも言えるのか…!?？」

ヒーローマン「…！」

ジョーイ「そうだ！そして、僕達はお前を止めてみせる！」

〈戦闘会話 ヴァンVSガーゴイル〉

ガーゴイル「カギ爪の男を倒した貴様の力は侮れない…！」

ヴァン「よくわかってるじゃねえか。神の船だか、なんだか知らねえが俺がぶった

斬ってやる！」

〈戦闘会話 ミハエルorファサリナVSガーゴイル〉

ガーゴイル「ファサリナ、私を裏切るとどの様な目に合うか、見せてやろう」

ミハエル「ファサリナさんには指一本、触れさせない！」

ファサリナ「ありがとう、ミハエル君。私もミハエル君やみんなの為に戦うわ……！」

〈戦闘会話 アマタVSガーゴイル〉

ガーゴイル「未知の力を秘めた機械天使……。興味深いものだな」

アマタ「アクエリオンで……お前の野望は破壊する！俺達の手で……！」

〈戦闘会話 ノリコVSガーゴイル〉

ガーゴイル「凄まじいパワーだが、レッドノアほどではないな」

カズミ「ノリコ、随分と舐められているわね」

ノリコ「大丈夫よ、お姉様。ガーゴイル、あなたの野望はガンバスターが打ち崩す！」

〈戦闘会話 ユイVSガーゴイル〉

ガーゴイル「エナストリアの女皇、私の邪魔をするのなら、君でも容赦はしないよ」

レナ「ユイ、あの戦艦の攻撃は強力よ、気をつけてね！」

ユイ「わかっているよ、レナ！ガーゴイルさん、ナディアちゃんを返してもらいます！」

〈戦闘会話〉 ヨハンVSガーゴイル

ガーゴイル「ルクス・エクスマキナ……。神の器の君が神に等しい力の持つ私に挑んでくるとはな」

ヨハン「今の僕はただのヨハンさ。そして、お前を倒す敵だ！」

ルクス「……」

ヨハン「わかっているよ、ルクス。ガーゴイル、お前にアル・ワースは渡さない！」

〈戦闘会話〉 ノブナガVSガーゴイル

ガーゴイル「あの機体を中心にエクスクロスの士気が上がっている……。つまり、奴を落とせば、エクスクロスの士気が下がるといふものだ！」

ノブナガ「このノブナガをそう簡単に落とせると本当に思っているのか？ならば、試してみろ！」

〈戦闘会話 しんのすけVSガーゴイル〉

ガーゴイル「お前達は機動兵器による戦闘はプロではないと見た！落とすならお前達からだ！」

カンナム「あまり、人間を舐めない方がいいぞ、ガーゴイル！」

しんのすけ「オラ達、野原一家の戦いを見せるゾ、アーカイブ！」

ガーゴイル「ガーゴイルだ！」

〈戦闘会話 ケロロVSガーゴイル〉

ガーゴイル「侵略者の君達は私達とやっている事は同じだと思うがな！」

ケロロ「そうだとしても、お前の様にペコポン人を奴隷にする様なやり方はしないであります！侵略者として、お前を倒してやるであります！」

〈戦闘会話 アキトVSガーゴイル〉

ガーゴイル「レッドノアの攻撃を恐れずに迫ってくるとは…。黒衣の復讐者の考えはわからない…！」

アキト「恐れていれば、助けられる仲間も助けられない…。ワールドは安定している…。仕掛けるぞ…！」

〈戦闘会話　ルリVSガーゴイル〉

ガーゴイル「対艦戦闘でレッドノアが負ける事はない！」

ユリカ「うわ、すごい自信！」

ルリ「では、レッドノアを破壊して、その自信を打ち崩して差し上げましょう」

〈戦闘会話　アルトVSガーゴイル〉

ガーゴイル「うるさいハエめ！その翼を折ってやる！」

アルト「そうは行くかよ！ナディアを返してもらうぞ、仮面野郎！」

〈戦闘会話　リオンVSガーゴイル〉

ガーゴイル「我々の僕になっていれば、苦しい思いをしなくても良かったのにな！」

リオン「誰が女の子をさらう奴等の僕になんてなるかよ！俺は絶対にお前には屈しない！」

〈戦闘会話　ゴーカイレッドVSガーゴイル〉

ガーゴイル「海賊如きが私の邪魔をするな！」

ゴーカイレット「その海賊如きつてのが気に入らねえな！それから、ジャンの宝を返してもらおうぜ！」

〈戦闘会話 ゼロVSガーゴイル〉

ガーゴイル「ウルトラマンゼロ、別世界の同胞よ…。私と共に人間を支配しよう」

ゼロ「そんな事、するわけにはいかねえ！ガーゴイル、お前をレッドノアごとM78星雲まで吹っ飛ばしてやるよ！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSガーゴイル〉

ガーゴイル「レイオニクス！本当はお前も人間を支配する存在だったはずだ。それなのに何故、人類の為に戦う!?」

レイモン「レイオニクスバトルは終わった！俺は人類との為に戦うと決めた！それが仲間達から学んだ事だ！」

〈戦闘会話 アーニーVSガーゴイル〉

ガーゴイル「あの機体は他の機体と何かが違う…！」

アーニー「そう言ってもらえて光栄だが、女の子をさらう様な奴を、僕はお前を許す

つもりはない！」

〈戦闘会話 零VSガーゴイル〉

ガーゴイル「ネメシスのお気に入りの新垣 零の力を拝ませてもらおうとするか！」

零「いいぜ、飽きないほどに見せてやる！その代わり、ナディアは返してもらおうからな！」

Nーノーチラス号の攻撃でレッドノアはダメージを受けた。

ガーゴイル「このレッドノアをここまで追い込むとはな……。さすがと言っておこう。だが、無駄な足掻きだ。完全に破壊されねいなければ、いくらでもやり直しが利く」

レッドノアから光が……！

エレクトラ「次元境界線の歪曲を確認！」

ネモ船長「また転移を使うつもりか！」

フリット「全機、攻撃を集中させろ！奴を逃すな！」

ダメだ、攻撃が電磁バリヤーで弾かれる……！

ガーゴイル「ムダだ！その距離からではレッドノアの1億ボルトの電磁バリアーは破れない！」

グランデイス「けどね！完全に破れなくても、小さな隙間ぐらいは空くんだよ！」

ハンソン「ジャン！」

ジャン「見つけた！右25度の地点にバリアの切れ目ができた！」

サンソン「よっしゃ!!? 突っ込むぜ!!?」

グラタンがレッドノアに突っ込んだ……!

エレクトラ「グラタン、レッドノアに突入を確認！」

グラタンの攻撃で歪曲が止まった。

ガーゴイル「ゴミ虫め！内部からレッドノアを破壊するつもりか！」

エレクトラ「次元境界線の歪曲、停止！」

エーコー「戦艦のバリア、出力の低下を確認！」

ネモ船長「全速前進！ノーノーチラス号でバリアを突き破る！」

操舵長「了解!!?」

零「アスナ、ゼファイ！俺達もノーノーチラス号を援護するぞ！」

ゼファイ「はい、パパ！」

アスナ「行くわよ！」

ルリ「アキトさん！」

アキト「わかつている！」

Nーノーチラス号に続き、ゼファイルスネクスとブラックサレナはレッドノアのバリアを突き破り、中へと入る。

ガーゴイル「奴等め！発掘戦艦や機動兵器ごと突入したか！」

名瀬「各機も零達に続け！」

ジェフリー「突入したネモ船長達を援護！内部から戦艦を破壊しろ！」

他のみんなもレッドノアに近づいた。

ガーゴイル「エクスクロスめ！お前達の好きにはさせんぞ！」

俺達はNーノーチラス号と少し離れた場所に着く。

アスナ「Nーノーチラス号と少し、突入場所がズレたようね！」

ゼファイ「すぐにネモ船長達と合流しましょう！」

ネメシス「そうはいかねえぜ！」

俺達の前にネメシスが立ちはだかった。

アキト「ネメシス……！」

零「やつぱり、お前もこの世界に来ていたか！」

ネメシス「零……。そう何度もお前達に都合のいい事ばかりさせるかよ！」

零「アキト、アスナとゼファイを連れて、みんなと合流してくれ！」

アキト「零……」

アスナ「何言っているのよ、零?!?あなた一人じゃ……!」

ゼファイ「……わかりました。行きましよう、アスナお姉ちゃん！」

アスナ「ゼ、ゼファイまで何を言っているのよ?!?」

ゼファイ「今、私達がここにおいてもパパの邪魔になるだけです！」

アスナ「……わかったわ」

アキト「零、絶対に死ぬなよ！」

アキトはアスナとゼファイを連れて、走り去った……。

ネメシス「自ら、しんがりを引き受けるなんぞ、格好いい事するじゃねえかよ、零」

零「俺は……お前の遺伝子から生み出された力を持つていたとしても、今これは俺の力

だ!この力でお前を全力でぶっ倒す!」

ネメシス「はあ……俺も舐められたもんだなあ……。だったら、少しだけ痛い目を見せて

やるよ!」

俺はネメシスと戦い始めた……。

頼むぞ、みんな……。今の俺では、そう長くは保たないからよ……!

ー ジャン・ロック・ラルティークです。

ハンソン「グラタンは弾切れです、姐さん！」

グランデイス「こうなりや生身で戦うまでだ！やるよ、お前達！」

サンソン「周り全部が敵なんだ！撃ちまくってやるぜ!!？」

すると、万丈さん達が来た…。

万丈「手を貸すぞ、サンソン！」

サンソン「おう、万丈！お前達も来たか！」

鉄也「他の連中は機体に乗ったまま、別のブロックを破壊している！」

ヒイロ「俺達は彼等を先導してきた」

ネモ船長「よくやってくれた、グランデイスさん」

グランデイス「そう言ってくだされば、身体を張った甲斐もあったというものです！」

サンソン「Nーノーチラス号まで突っ込んだとなりやさすがのデカブツも只では済ま

ないだろうぜ！」

アスナ「遅れてすみません！」

イオリ「アスナさん、零は!!？」

アキト「今、たった一人でネメシスと交戦している！」

剎那「何…!?」

九郎「あのバカ！相変わらず無茶な事をしやがって！」

エンブリヲ「アマリ、君は零の所へ行くんだ」

アマリ「で、ですが、私が行ったところでネメシスには…！」

ヴァン「そういうもんじゃねえんだよ。お前がいれば、零は安心出来る！」

ゼロ「行け、アマリ！どんなやり方でもいいから、零を援護してやってくれ！」

アマリ「…わかりました！ゼファイちゃん、案内して！」

ゼファイ「こちらです、ママ！」

アマリさんとゼファイちゃんは零さんの下へ急ぎました…。

アスナ「頼んだわよ、アマリ、ゼファイ…！」

エレクトヲ「船長…！」

ネモ船長「…もし私が一時間経っても戻らなければレッドノアの動力炉を破壊して、

皆と共に離脱しろ」

エレクトヲ「…！」

ネモ船長「私には、ここでやらねばならん事が残っている」

エレクトヲ「ナディアを助けにいかれるのですね」

ネモ船長「すまん…！」

機関長「船長……。自分の娘を助けるのは親の務めだ。誰にも詫びる事じゃない」

エレクトラ「機関長の言う通りです。ただし、私も同行します」

アキト「俺も行かせてもらおう」

エーコー「アキト……!?」

アキト「二人にもしもの事があれば、今、命懸けで戦っている零に顔向けができない」

ネモ船長「……許可する」

ジャン「僕も行きます！」

エレクトラ「ジャン……」

ジャン「ダメだと言ってもついていきますからね！」

ネモ船長「わかった。君も一緒に来てくれ」

ジャン「はい！」

ネモ船長「おそらくガーゴイル達は王座の間にいるだろう」

万丈「では、そこまでの護衛はお任せください」

グランデイス「最後は……」

ネモ船長「うむ……。私の手で全てに決着をつける」

「倉光 源吾だよ。」

僕達、戦艦組は周辺の敵を倒していた。

レーネ「周辺の敵機は掃討しました！」

倉光「ネモ船長からの連絡は？」

アネツサ「依然ありません！」

號「まだ動けるのか?!？」

ジエフリー「レッドノアが…上昇していく…！」

「ネモだ。」

私達は王座の間まで来た。

ネモ船長「出て来い、ガーゴイル！ここにいるのはわかってる！」

ガーゴイル「仲間達を犠牲にして、ここにたどり着いたのは、たったの四人…。悲し

いね、ネモ君…」

ネモ船長「ガーゴイル！」

ガーゴイル「久しぶりだね、ネモ君。いや、旧タルテソス王国、エルシス・ラ・アル

ウォール君でしたな。こうして直接会うのは13年ぶりだな」

ネモ船長「貴様こそ、いつまでその暑苦しい面をつけているつもりだ、旧タルテソス王国宰相ネメシス・ラ・アルゴール」

ガーゴイル「懐かしい響きだね」

ネモ船長「お互い既に捨てた名前だ」

ガーゴイル「そうだな。もうあの頃には戻れないがね」

ネモ船長「お互い様だ。：とところで、これはいつたい何の真似だ、ガーゴイル？」

ガーゴイル「神前裁判だよ」

ネモ船長「裁判だと!?？」

ガーゴイル「そうだ。君の犯した罪を問い、ここでその罰を受けるのだ」

ネモ船長「神前だと言ったな。その神はどこにいる？」

ガーゴイル「ここにいるよ。私が神だからね」

ネモ船長「茶番だな。弁護士はどうした？」

ガーゴイル「必要ないよ。神が神の名において君を裁くんだからね。今、別の裁きを受けている者もいる」

ネモ船長「別の裁き…?」

すると、ガーゴイルはあるスイッチを押す。

ネメシス「ほれほれ！まだまだやれるだろ、零！」

零「ぐあああつ!!?」

零の声……!!?」

アキト「零!」

ガーゴイル「彼も愚かな男だ……。勝つ見込みもない敵に挑むなど……」

零……!

ガーゴイル「では、判決の執行人達を……!」

ネオ皇帝「……」

ナディア「……」

ジャン「ナディア!」

エレクトラ「やはり意識を消されている……!」

ネモ船長「ガーゴイル! 貴様は……!」

ガーゴイル「さて、神前裁判の開延だ! 被告のエルシス・ラ・アルウォール君。君はアトランティス人の王でありながら、人間との共存を図ろうとした」

ネモ船長「当然の事だ。確かに人間を創り出したのは、古代アトランティス人かも知れん。だが、彼等も生きている。その生命は、我々と何ら変わりはない」

ガーゴイル「違うよ。人間は愚かな生き物だ。我々の祖先が創り出した、この世界の人間も、それ以外の世界の人間も等しくね。だから、我々が管理しておかないと愚かな

戦争を繰り返し、世界を滅ぼしてしまう！そんな生き物に未来などない！」

ネモ船長「それはどうか？」

ガーゴイル「その人間を信頼している所が君の罪だよ。そのような軟弱なアトランティス人には必要はない。さあ…執行人よ！判決を！」

ナディア「…」

私はナディアに撃たれてしまう。

ネモ船長「ぐ…！」

ジャン「ナ、ナディア…ネモ船長を撃った！」

エレクトラ「船長！船長っ！！？」

アキト「ガーゴイル、貴様…！」

ガーゴイル「やはり、この場にブルーウォーターを持ってきているんだね、ネモ君」

ネモ船長「…」

ガーゴイル「その加護があるから、それだけの傷を負いながらも君は生きていられる…もつとも、その分…地獄の責め苦が続くだろうがね」

エレクトラ「ガーゴイル！」

ガーゴイル「抵抗しても無駄だよ。君達の手持ちの銃では私は殺せない」

エレクトラ「個人用のバリア…」

ガーゴイル「これもアトランティスの遺産の一つだよ。そして、この王座の周りには防衛装置が備えられ、近づく事も不可能だ」

ネモ船長「ジャン君……。ナディアとネオを撃て！」

ジャン「！」

ネモ船長「あの二人にはバリアはない……。ブルーウオーターの継承者である、あの二人が死ねば、ガーゴイルの野望は終わる！」

ジャン「……」

アキト「だが、ネモ船長、それは……！」

ガーゴイル「ジャン君と言ったな……。君にナディアが撃てるかな？」

ジャン「僕は……。ごめんなさい……。僕には……。撃てません……」

ナディア「……」

ジャン「ナディア！目を覚ましてよ、ナディア！」

ガーゴイル「ジャン君……。君の愛の力を以つてしてもナディア姫の意識は、もう戻らないよ。永遠にね」

ジャン「そんな……」

ネモ船長「ガーゴイル……！」

ガーゴイル「さて……。寛大な慈悲の心を以つて君にもう一度生きながらえるチャンス

あげよう。アトランティスの王として私達と一緒に愚かな人間達を正しき道へと導く事に協力してはくれないかね。なお、この事はネメシスや魔徒教団にも承認を得ている」

ネモ船長「答えは13年前と同じだ……！断る！」

ガーゴイル「バカな奴め……。まだ目が覚めないのかね」

ネモ船長「人間を舐めるなよ、ガーゴイル！人間は貴様が思うほど愚かではない！」
ガーゴイル「それはどうかな？現にその少年はナディアを撃てなかった。目的を果たすためにはためらいなく撃たなければならなかったのにね」

ネモ船長「違う！それが人間の優しさであり、いい所だ！」

ガーゴイル「いや、不要なものだよ。君と同じくね。さて、そろそろ君には消えてもらうが、その前に自分の息子の声を聞かせてあげよう。君に友人として贈れる最後のプレゼントだからね」

ネオ皇帝「……」

ネモ船長「ビナシス……」

ネオ皇帝「私はネオ・アトランティス皇帝、ネオ・アイコン・エピファネスである」

ネモ船長「ガーゴイル！貴様、まさか……!?」

ガーゴイル「察しの通りだよ。君の息子は、もはや私の操り人形に過ぎん」

ネモ船長「貴様！」

ガーゴイル「見たまえ、ネモ君。君の息子の身体を」

ネオ皇帝「…」

ガーゴイル「どうかね？よく出来ているだろう？我々ネオ・アトランティスの科学の結晶だよ」

ジャン「機械の…身体…」

ガーゴイル「彼の肉体は13年前にネモ君がタルテソス王国のバベルの塔と一緒にバラバラにしてしまったのでね。私が科学の力で助けて差し上げたのだよ」

ネオ皇帝「…」

ガーゴイル「そして、13年間も君の息子を生かし続けてやったのだ。感謝されても恨まれる筋合いはないよ」

ネモ船長「く…！」

ガーゴイル「さあ、ネモ君！子供達が君の生命を絶つ時が来た！これはかつての親友であった私の好意だよ！そして、君の持つもう一つのブルーウォーターを手に入れ、私はアトランティスの…」

爆発…!!?

ガーゴイル「ぬああああつ!!？」

みんなか……!

アンジュ「人間という存在を……そして、私達を甘く見ていたのが、あなたの敗因よ、ガーゴイル!」

グランデイス「ちよつと時間はかかったけれど、あなたの用意した護衛は全部、突破してきたよ!」

ガーゴイル「エクスクロスめ! 神聖な王座に土足で入り込んだか!」

弘樹「てめえのような人間が神を気取るなんてのは許せねえんだよ!」

―新垣 零だ。

ネメシスと戦い続ける俺だが、奴には敵わないでいた…。

ネメシス「ほれほれ! まだまだやれるだろ、零!」

零「ぐあああつ!!?」

俺はネメシスの念力で吹き飛ばされ、壁に激突し、地面に倒れる。

零「ぐつ……!」

ネメシス「なあ、零。お前なら、俺に勝てねえ事ぐらいわかってんだろう？それなのに何故、抵抗をやめねえんだ？」

零「…仲間が…戦っているからだ！」

ネメシス「その仲間の為にそこまでボロボロになっているのか？俺から言わせれば、バカだぜ…。自分の生命がなくなったらそこで終わりなのによ」

零「だからだ…！」

ネメシス「あん…？」

零「一つしかない生命だからこそ…誰も失わせない為に俺達は生命を守る為に戦っているんだ！」

ネメシス「他の生命を守る為に自らの生命を張る、か…。素晴らしい響きだが…。現実には残酷だぞ？」

零「…そうだな…。それでも！」

俺は勢い良く立ち上がり、ネメシスに組み付いた。

ネメシス「何の真似だ…？」

そして、俺は自身の力を高める。

零「まともなやり方じゃあ、お前は倒せない…。なら、少し荒っぽいやり方でやらせてもらう！」

ネメシス「お前…そこまでの力を高めれば、身体が力に耐えられなくなり、爆発するぞ！」

零「だから言っているだろう…？まともなやり方じゃ、お前は倒せない…。仲間の為に…そして、お前の為に…生命、かけてやる…！」

ネメシス「くっ…！この…！話やがれ！」

零「悪いな、ネメシス。今の俺じゃあ、お前には勝てない。だから、巻き込ませてもらうぜ！」

ネメシス「やめろ…やめろおおおっ!!？」

俺は力を暴走させ、ネメシスもろとも爆発した…。

ーアマリ・アクアマリンです。

私はゼフィちゃんを連れ、零君が戦っている場所へ向かっていました…。突然の爆発音が聞こえ、急いで向かうと…。

そこには零君もネメシスの姿はなく、爆発した後を思わせる爆煙が舞っていました。

ゼフィ「パ、パ…!!？」

すると、爆煙からネメシスが出てきました…。

ネメシス「ふう……。まさか、自爆するなんてな……。流星の俺もやばかったぜ」

アマリ「自爆……？零君が……!!?」

ネメシス「おお、アマリにゼファイじゃねえか。零を心配して来たようだが、遅かったな」

ゼファイ「パパは……。パパは何処なの!!?」

ネメシス「俺を倒す為に力を暴走させて、自爆しやがった……。俺もバリアを張るのが遅れていたら、アウトだったぜ。あー、危ねえ……」

アマリ「そ、そんな……。零君……!」

ネメシス「そう悲しそうな顔すんなよ……。すぐに零の後を追わせてやるからよ!」

ネメシスは私に向けて、エネルギー波を放とうとしました……。しかし……。

?「その必要はねえぜ、ネメシス!はあああつ!!?」

ネメシス「なっ……。!!?ごああああつ!!?」

突然現れた人が手に電撃を纏って、ネメシスを殴り飛ばしました……。

ネメシスは壁に叩きつけられ、倒れましたが、すぐに立ち上がり、彼を殴りつけた人を睨みました……。

ネメシス「何故だ……。何故、てめえが生きてやがる、零!!?」

そう、ネメシスの話で自爆したと言っていた零君を……。

―新垣 零だ。

ネメシスに何故生きているのかを聞かれて、俺は少し笑う。

零「お前がバリアを張る事なんざ、お見通しだったんだよ。あの自爆はお前を油断させる為の演技だ」

ネメシス「だが、確実にお前の身体は爆発で吹き飛んで…まさか…!」

零「そうだ。お前に組み付いた俺は俺がオドの力を応用して作ったコピーだ。お前に吹き飛ばされたのと同時にコピーを作り、本当の俺は光学迷彩で姿をくらましていたんだよ。まあ、体力を大分、持ってかれたが、うまく言ってみたんだな」

ネメシス「そして、油断した俺を殴り飛ばしたってわけか…。ククク…クハハハハッ!俺を殴り飛ばす奴がいたとはな!零、やっぱり、お前をここで殺すは惜しい!お前は俺のメインディッシュとして、最後まで置いておいてやるよ!今日は、特に楽しかったぜ!あばよ!」

そう言い残し、ネメシスは消えた…。

それを見送った後、俺はゆっくりと倒れたが、アマリに抱き抱えられた…。

零「アマリ…ゼファイ…」

ゼフィ「パパ：無事で、良かったです…！」

アマリ「もう、また無茶をして…！」

零「悪かったよ…。でも、これであいつをギャフンと言わせたぜ…。アマリ、みんなの下へ連れて行ってくれないか？体力回復までにしばらくかかりそうなんだよ…」

アマリ「わかったわ、ゼフィちゃんも手伝ってくれる？」

ゼフィ「勿論、お手伝いします！」

俺はアマリとゼフィに担がれて、みんなの下へ急いだ…。

ーネモだ…。

みんなが王座の間に入って来た。

ガーゴイル「何故だ!? 何故、お前達は別の世界の人間達を救うために自分の生命を懸けられる！」

シモン「知りたいならば、教えてやる！」

一夏「それは、俺達が人間だからだ！」

ガーゴイル「何も答えになっていない！」

ラウラ「ご無事ですか、ネモ船長？」

ネモ船長「何とかな……」

ガーゴイル「何故だ!? お前達は死ぬのが怖くないのか」

ケロロ「ネモ船長もナディアも我輩達の仲間であります。生命を懸け、仲間を救いに来るのは当然の事でありますよ」

零「人間を……誰かを信じる事の出来ないお前にはわからないだろうがな！」

そこへ零達も合流した……。

ー新垣 零だ。

俺はアマリとゼフィに連れられ、王座の間まで来た。

ガーゴイル「新垣 零!? 何故、お前がここに!? ネメシスはどうしたんだ!?」

零「撃退してやったよ……。まあ、無茶したおかげで身体のうちがちがボロボロだけだよ」

ホープス「何処までもしぶとい男だな」

零「それが俺の取り柄でもある」

ガーゴイル「だが、ネオとナディアは我が手の内にある！ 彼等とブルーウォーターが

あれば、私に敗北はない！この王座の防衛装置は生きています！お前達も、それ以上は近づけまい！」

ネオ皇帝「…黙るが…いい…。ネメシス・ラ・アルゴール」

ネモ船長「！」

ネオ皇帝「父上…」

ネオが…意識を取り戻した…!!?

ガーゴイル「バカな！爆発のショックで意識が戻ったというのか!!?」

ネオ皇帝「そうでは…ない…。彼等の見せた絆とブルーウォーターが…私に…力をくれた…」

ネモ船長「ビナシス…」

ネオ皇帝「父上…」

ネモ船長「ナディアを…頼む…！」

ナディア「…」

ネオ皇帝「ナディア…目を覚ませ…」

ネモ船長「ダメだ…！制御装置を壊さない限り、ナディアは蘇らん！」

ネオ皇帝「ならば…。ナディア…今行く…」

ガーゴイル「やめろ！ナディアに触れるな！」

ネオ皇帝「私に残された生命でナディアだけは…」

ネオが…動かなくなった…？

ガーゴイル「ハハハハハ！残念だったね、ネオ君！今、君の電源を切ったよ！奇跡は、これで終わりだよ！機械人形の君は、もはや指先一つ動かせまい！さあ、そのまま死にたまえ！」

ネオ皇帝「まだ…だ…」

ネオがまた動いた…！

ガーゴイル「バカな！こんな非科学的な事が！人の意志の力は科学をも超えるというのか！！？」

ナディア「…」

ネオ皇帝「ナディア…。お前…だけは…」

ナディア「…」

ネオがナディアの制御装置を破壊した…。

ーナディアです。

今…私を呼んだ人が…。

…誰…？

ネオ皇帝「すまなかつた、ナディア…」

…お兄さん…？

ネオ皇帝「後は頼む」

ナディア「お兄さん！！？」

ネオ皇帝「私も人と共に生きたかつた…」

兄さん…！

―新垣 零だ。

ネオは…最後の最後までナディアの為に…。

ナディア「お兄さん！」

ネオ皇帝「…」

ナディア「いやあああああつ！！？」

ガーゴイル「茶番は終わりだ、ナディア姫。ネオ皇帝が亡くなった今、ブルーウオーターの継承者は君だよ、ナディア姫」

ナディア「自分が殺したくせに！」

ガーゴイル「必要がなくなつたからね。処分しただけだよ。さあ、ナディア姫…。こ

のレッドノアの防衛機能を制御し、邪魔者達を葬りたまえ」

ナディア「嫌です！私はブルーウオーターの継承者として、この船を沈めます！」

ジャン「それでいい、ナディア！そして、一緒に帰ろう！」

ナディア「ジャン！」

ガーゴイル「相変わらず勇敢な少年だな？だが、他の連中と同じく自分の生命を顧みない愚か者だ」

ナディア「愚かなのは、あなただわ！何でも自分の思い通りになると信じてるあなたの方だわ！でも、人の心は機械のように操れないのよ！」

ガーゴイル「ほう…」

ナディア「父も兄も仲間達も自分の信念に生命を懸けました。私も、その意志を継ぎます。あなたの思い通りにはならないわ！」

ガーゴイル「仕方がない。では、愛する者の死体を見て、ワガママを後悔したまえしまっ…！」

ジャン「！」

ガーゴイルは銃を発砲して、それを受けたジャンは倒れてしまった…。

ジャン「…」

ナディア「ジャン…。ジャン！ジャン!!？」

グランデイス「ジャン！しっかりしなよ、ジャン！」

リオン「ダメ…だ…。もう…呼吸も脈も止まっている…」

アマタ「そんな…。ここまで来て…」

零「だったら、俺が生命エネルギーをジャンに…ぐっ…！」

優香「ダメだよ！今の零じゃできないよ！」

ネモ船長「…アマリ君…。私を…ナディアの所へ運べるか？」

アマリ「可能ですけど、近づけば、防衛装置の攻撃が…」

ネモ船長「ギリギリの所まで頼む」

アマリ「わかりました。では、浮遊のドグマを使います」

アマリの浮遊のドグマでネモ船長はナディアの下へ行つた。

ナディア「ジャン…ジャン…」

ガーゴイル「この事態を招いたのは君自身だよ、ナディア姫。これ以上の悲劇を起こ

したくないのなら…」

ネモ船長「黙れ、ガーゴイル…！」

ガーゴイル「黙るのはそちらだ、ネモ！そこから指をくわえて見ているがいい！」

ネモ船長「ナディア！」

ナディア「これは…」

ネモ船長「私のブルーウォーターだ。お前の持つブルーウォーターと一つにする時が来た」

ガーゴイル「まさか、貴様……！」

ネモ船長「二つのブルーウォーターに願いなさい。きつと応えてくれる筈だ」

ガーゴイル「馬鹿な事を！今、お前の生命を繋ぎとめているのはブルーウォーターの力だ！それを失えば……！」

ネモ船長「私もエクスクロスの彼等と同じだ……。大切なもののためなら、生命を懸けられる」

ナディア「……！」

ネモ船長「私の事は考えなくてもいい」

ナディア「でも……」

ネモ船長「やるんだ、ナディア。ネオの想いを無駄にしない為にも」

ナディア「うん……。ブルーウォーター……。私の願いを……」

ブルーウォーターが光った……。!!?

ガーゴイル「いかん！やめろ！そんな事をすれば、ブルーウォーターの輝きは永遠に失われてしまう！やめろんだ、ナディア！私の夢を……希望の光を消してはならん！」

ネモ船長「よせ！ブルーウォーターの光の中で生きられるのはアトランティス人だけ」

だ！」

ガーゴイル「ああっ！」

ガーゴイルの身体が塩になっていく……!??

ガーゴイル「何故……？ 何故、私の身体が塩になって崩れていく……!?? まさか……！」

ネモ船長「そうだ……。もうこの世に純粹なアトランティス人は二人しかない……。ネメシス・ラ・アルゴール……。君は人間だ」

ガーゴイル「私が……人間……。私の中に……人間の血が入っていた……。それでは……私をやっていた事は全て……」

ネモ船長「幻だったのだよ。だが、それでいい……。アトランティスの血は人間と混じり、そして、次の世代にその遺伝子は引き継がれていく……。それこそが我々の祖先が望んだ永遠の平穏だ」

ガーゴイル「ネモ君……。無様な私を……笑うがいい……」

ネモ船長「ガーゴイル……」

ガーゴイル「ネメシスと魔徒教団には……セルリック・オブシディアンには……気をつけろ……」

ガーゴイルは完全に塩になった……。

ーナディアです。

私は語りかけました…。

? 「…私の眠りを再び覚ますのはどなた?」

ナディア「私です」

? 「ナディア…」

ナディア「お願いします。ジャンを…ジャンを助けて!」

? 「彼の生命は既に尽きています」

ナディア「でも、ネモ船長は助かるって!お願い!ジャンを助けて!」

? 「それはブルーウォーターを失う事になります。アトランティス人としてあなたに与えられている全ての力…つまり、神への道を捨てる事になりますよ!」

ナディア「構わないわ!そんなの何もいらなからジャンを…ジャンを助けて!」

? 「わかりました」

ナディア「待つて!もう一人、助けて欲しい人がいるの!」

? 「わかつていますよ、ナディア。あなたのもう一人の大切な人…エルシス…ネモ船長の事ですね。ブルーウォーターはアトランティス人の魂の繋がりで。私達の生命を彼等にあげましょう。それと、ある一人の災いも取り除いて差し上げましょう。さよ

うなら、ナディア…」

ナディア「…お母さん…なの…?」

? 「私達の最後の力でアトランティス人の願いを託します。ナディア…。私達のもう一つの故郷…アル・ワースを守ってください…」

わかったよ、お母さん…。

―新垣 零だ。

俺達はそれぞれの機体ごとN―ノーチラス号に乗り込み、レッドノアから脱出して、宇宙に出た。

ジャン「う…うう…」

ナディア「ジャン！目を覚ましたのね！」

ジャン「ここは…」

ネモ船長「窓の外を見てみるといい」

ジャン「もしかして…あれって僕達の…」

ナディア「そうよ…。あなたの生まれた地球よ」

グランデイス「まさか、あたし達が突入している間にレッドノアが宇宙に出てきたと

はね……」

ジャン「アル・ワースの宇宙にきた事があつたけど、ここが僕達の世界の宇宙なんだね……」

ネモ船長「アトランティスの文明など頼らなくても人間は自分の手で作り出した科学の力でいつか、ここまでする事が出来る」

ジャン「僕……その為にもつともつと色んな事を学びます」

ネモ船長「だが、まだ我々は君をあの青く美しい星へ送り届ける事は出来ない」

ジャン「分かっています」

ナディア「ジャン……」

ジャン「行こう、アル・ワースへ……。君の故郷を守る為に。でも忘れないでね、ナディア。君がどこから来たつて、これからはずっと僕と一緒にだよ」

ナディア「うん！」

エンブリヲ「美し過ぎる愛だね」

ヨハン「また、嫉妬？」

エンブリヲ「いいや、私はあのような者達を守ると決めたんだ」

ヨハン「ふっ……僕もだよ」

ルクス「……」

アキト「みんな、お疲れ様……。ラーメンを作ったんだが、食べないか？」
ユリカ「え……」

ルリ「アキトさん……？」

ノレド「ラーメン……ですか？」

箒「では、いただきます」

俺達はアキトの作ったラーメンを食べた……。

物凄く美味い……！こんなラーメン、作れねえよ！

って、アキトの奴、まさか……よし……！

ベルリ「美味しいです、アキトさん！」

アンデイ「ああ！こんなラーメン、食べた事ねえぜ！」

ユリカ「アキト、これはいい……？」

零「……アキト、美味しいラーメンをありがとうな。ほら、水」

アキト「ありがとう、零」

アキトは俺が手渡したコップを手に取り、水を飲み干した……。

アキト「少し、塩の入れすぎじゃないか、零？」

零「ははっ、バレちゃったか」

ルリ「ア、アキトさん……。まさか……」

アキト「ブルーウォーターのおかげかな…。五感の全てが元に戻ったんだ」
ユリカ「じゃ、じゃあ…!」

アキト「この戦いが終わるまで、黒衣を脱ぐ事は出来ないけど…俺は元のテンカワ・アキトに戻れたんだ」

ユリカ「アキトオオオオツ!!?」

ユリカはアキトに抱きついた…。

アキト「ユリカ…長く、待たせてごめん…」

ユリカ「ううん、そんな事ないよ!おかえり、アキト!」

アキト「ただいま、ユリカ…」

ルリ「アキトさん、ユリカさん…。良かったですね…」

レッドノアが爆発した…。

エーコー「レッドノアの爆発を確認」

エレクトラ「次元境界線、歪曲していきます」

アル・ワースに戻れるのか…。

ネモ船長「問題ない。転移する先はわかっている。(さらば、アトランティス…。我々人間として愛する者達と共に生きていく…。そして、戦い続ける…。世界を…未来を守る為に…)」

俺達はアル・ワースに戻った…。

第74話 暗黒の王、光の勇者

―新垣 零だ。

アル・ワースに戻った俺達はドアクダーの下へ行く準備をしていた。

ジャン「…じゃあブルーウォーターは、僕達を蘇らせた代償に輝きを失ってしまったんだね」…

ナディア「いいの…。アトランティスの力なんて私には必要ないから。でも、たとえ輝きを失ってもブルーウォーターはお母さんの形見みたいなものだから、手放しはしないわ」

グランデイス「…で、決心はついたのかい？」

ナディア「何のです？」

ハンソン「ネモ船長をお父さんって呼ぶ事だよ」

ナディア「それは…」

サンソン「複雑な感情はあるだろうが、あの人が命懸けでお前さんを救いにいったのは紛れもない事実だ」

グランデイス「外野がグダグダ言うつもりはないけど、それだけはわかってやりな」

ナディア「はい…」

マリ「ナディア」「ナディアはお父さんだとイヤなの？」

ナディア「そんな事はないけど…ただ…」

ジャン「ただ…？」

ナディア「実感がわかなくて…」

ネモ船長が来た…

ネモ船長「…無理をする必要はない」

ジャン「ネモ船長…」

ナディア「…」

ネモ船長「ナディア… 今日までお前が過酷な人生を送ってきたのは全て私のせいだ。そんな人間に父と呼ばれる資格などない」

ナディア「でも…！」

ネモ船長「…もしお前が、私を許してくれるのだとしても全ては戦いが終わってからだ。私とN-1ノーチラス号はエクスクロスの一員としてこのアル・ワースに平穩を取り戻す為に戦う。その日まで、全てはこれまで通りだ」

不器用だな、ネモ船長は…

ネモ船長は歩き去った…

ナディア「…」

サンソン「相変わらず自分の言いたい事だけ言ってくれる御仁だぜ」
ハンソン「ほんと…。感動の対面を期待した僕達が甘かったよ」

グランデイス「いいじゃないか。ナディアには伝わったようだしね」

ジャン「ナディア…」

ナディア「頑張ろうね、ジャン…。アル・ワースに平穩が戻るまで」
ジャン「うん」

ナディア「(その日が来るまで私も一緒に頑張ります、お父さん…)」

零「…なあ、アマリ」

アマリ「何、零君？」

零「俺は…父親としてしっかりと全う出来ていると思うか？」

アマリ「うん。しっかりとゼフィちゃんと向き合っている…。だから、零君は立派な父親よ」

ゼフィ「そうですよ、パパ」

零「ゼフィ…」

ゼフィ「パパは私の大切な…パパです」

笑顔で言うゼフィに俺はクスリと笑い、頭を撫でた。

ゼフィ「あ、パパ、ママ。いつか、私にも弟か妹が出来ますか？」

アマリ「え、ええっ!??そ、それは…」

ゼフィ「実は…赤ちゃんがお腹の中に出る方法を教えてもらったんです…」

零「…え…?」

ゼフィ「その…親密なる関係になれますよね…」

零「…ゼフィ、誰からそれを聞いたんだ？」

ゼフィ「千冬さんです」

千冬「何…!??」

零「…千冬さん？」

千冬「わ、私か!??」

ゼフィ「千冬さん…たくさん、お酒を飲んでいましたよ…」

千冬「あ…そ、それは…」

一夏「…千冬姉。暫く酒飲むの禁止な」

千冬「だ、だが…!」

一夏「つべこべ言わない、禁止したら禁止だ!」

千冬「そ、そんなああつ!」

弘樹「ま、まあ、ゼフィ。弟か妹が出来るのはまだもう少し後だと思っぜ。まだそこ

までの関係は築いていないと思うからな。なあ、零、アマリ？」

零「…」

アマリ「…」

弘樹「何で目をそらすんだよお前等?!? お、お前等もしかして…」

優香「う、嘘でしょう?!?」

零「さ、さあ…アマリ、出撃の準備をするか!」

アマリ「え、ええ! そうね!」

アスナ「待ちなさい、二人共! 詳しく話を聞かせてもらおうわよ!」

俺とアマリは逃げる様に走り出したが、アスナと優香に追いかけられた…。

幻龍斎「…親子の形というものは親子の数だけ、あるものウラ」

ヒミコ「あちしと父上みたいに人間とサルの子もいるのだ!」

虎王「親子…か…」

ジョー「マイトガイン」「虎王…。次の戦い…お前は出撃するな」

マドカ「その方がいいだろうな」

虎王「何言つてやがる、ジョー、マドカ?!?」

舞人「俺もジョーやマドカの意見に賛成だ。次の戦いはドアクダーとの決戦になる」

暁「虎王とドアクター…。親子で戦うのは…良くない…」

虎王「…」

ワタル「虎王…」

虎王「心配してくれるのは、ありがたいが、そういうのは余計なお世話ってんだ！俺様は父上に力を認めさせて、このアル・ワースをぶっ壊すのをやめてもらおうつもりだぜ！」

ヒミコ「トラちゃん、カツコイー！」

ワタル「わかったよ、虎王。一緒に頑張ろう」

虎王「お前にも見せてやるぜ、ワタル。俺様の力をな」

甲児「暗黒大將軍は倒したが、決戦となれば、闇の帝王自らが出てくるだろう」

鉄也「何より、奴もきつと出てくる…」

真上「マジンガーズEROか…」

竜馬「けどよ、奴等を倒さねえとアル・ワースって、世界の存在自体に危険が迫るぞ」

海道「ちようどいいじゃねえか。次の戦いはアル・ワースを賭けての勝負だな！」

弁慶「つまり…！」

隼人「絶対に負けられないな」

ジョーイ「…」

リナ「ジョーイ…」

サイ「ドアクターの下に行くって事はゴゴールもいるって事だよな」

ジョーイ「うん…」

ウィル「今度こそ、奴とのケリをつける」

ニツク「ジョーイ、大丈夫なのか？」

ジョーイ「大丈夫だよ、ニツク…。デントン教授がヒーローマンの強化アーマーを修理してくれたし、戦えるよ」

デントン「(そう、そしてゴゴールを完全に倒す為にはあれも修理しないとね…)」
ワタル「やるぞ！闇の力を倒して、世界に平和を取り戻すんだ！」

第74話 暗黒の王、光の勇者

俺達は創界山の最上界の第七界層に着き、出撃した…。

鉄也「ここが創界山の最上界…第七界層か…」

甲児「見るからに薄気味悪い所だな…」

幻龍齋「第七界層は聖龍妃様がお住まいになる美しい地であつた筈だ……。それが、ドアクダーの闇の力でこの様な醜い姿に変えられたのだろう」

ワタル「その聖龍妃様って？」

幻龍齋「創界山を納める御方だ。だが、ドアクダーが創界山を征服してから、その消息は不明なのだ……」

九郎「あれがドアクダーの居城か……」

虎王「聞こえますか、父上！虎王が参りました！話があります、父上！返事をしてください！」

クラマ「気をつけろ！何か来るぞ！」

シバラク「ドアクダーか……!?？」

ドンゴロとガツタイダー、ガラダブラに機械獣、ミケーネ神、スクラッグの兵士か！

ドン・ゴロ「虎王様……」

虎王「ドン・ゴロか！」

ザン・コック「甘いな、ドン・ゴロ！」

ザン・ゴロツキー「ドアクダー様に刃向かった以上、あれは既に魔界王子ではない！」

ザン・ギャック「奴は虎王様ではなく、裏切り者の虎王なのだ！」

ケロロ「ザン兄弟でありますか！」

ガラダブラ「ここまで来たのは褒めてやるぞ、エクスクロス」

甲兎「ガラダブラ！」

ドン・ゴロ「だが、これ以上は進ません！ドアクダー様に従わぬ者はここで叩き潰してくれる！」

ゼロ「ベリアル達が居ねえ：どういう事だ!?？」

ザン・コック「ベリアルの奴ならば仲間と共に既に何処かへ行った」

ミラーナイト「何だと：!?？」

ザン・ゴロツキー「お前達など、我々だけで充分なのだからな！」

ザン・ギヤツク「充分だ、充分だ！」

虎王「父上：：！俺は父上と話がしたいんです！応えてください、父上！」

ザン・コック「無駄だ、虎王！ドアクダー様は貴様を見捨てたのだ！」

虎王「：：！」

ワタル「虎王：：」

ジョー「下がっている、虎王！後は俺達がやる！」

虎王「黙れ!!？」

ヒミコ「虎ちゃん：：」

虎王「父上が俺様の言葉を聞く気がないのなら、力づくで聞かせてやる！ドン・ゴロ

！その邪魔をするのなら、相手がお前でも容赦しないぞ！」

ドン・ゴロ「…わかりました、虎王様。ならば、私も心を鬼にしてあなたをいさめましょう！そして、お父上の下へお連れします！」

海道「こいつ等を倒さねえとドアクダーも闇の帝王もゴゴールも出てこないようだな！」

真上「ならば狙いは、指揮官のあの鬼の魔神だ！」

ドン・ゴロ「来るがいい、エクスクロス！この第七界層をお前達の墓場にしてくれる！」

虎王「そうはいくかよ！俺様の…俺様達の力を見せてやる！」

ワタル「行こう、龍神丸、みんな！あいつ等を突破して、今こそ闇の力と決着をつけるんだ！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「ベリアル野郎…ドアクダーと別れて、何を企んでやがる…？あいつの事だから、良からぬ事を考えていると思うが…」

マジンカイザーの攻撃でガラダブラにダメージを与えた。

ガラダブラ「こ、ここまでか！だが、このガラダブラ：勇者として生き、そして戦いの中で果てるのだ！何の悔いもない！暗黒大將軍！今、お側に行きますぞ！」

ガラダブラは爆発した…。

甲児「見事だったぜ、ガラダブラ…」

鉄也「お前は俺達の敵だ…。だが、確かにお前は勇者だった…」

龍王丸の攻撃でガツタイダーはダメージを負った…。

ザン・コック「ば、バカな…！バカなああああつ！」

ザン・ゴロツキー「ザン兄弟が負けるなんて！」

ザン・ギヤック「い、嫌だ！負けるのは嫌だあああつ！」

シバラク「往生際が悪いぞ、ザン兄弟！」

ザン・コック「ドアクダー様！我等に力をおおつ!!？」

移城からエネルギー波が…!!？」

ザン・コック「ぎゃああああつ!!？」

ドアクダー「ザン兄弟……。もはやお前達のような役立たずき用はない！」

ザン・コック「うわあああああつ!!？」

ガツタイダーが爆発した……。

ワタル「さっきの声……！」

虎王「そうだ、ワタル……。あれは父上だ」

ワタル「じゃあ、ドアクダーは自分の部下の生命を……！」

シバラク「な、何という酷い事を……！」

ワタル「許さない……！許さないぞ、ドアクダー！」

邪虎丸の攻撃でドンゴロはダメージを負った……。

ドン・ゴロ「何という事だ！このドン・ゴロがドアクダー様の前で不覚をとるとは！」

虎王「俺様達の勝ちだ、ドン・ゴロ！」

ワタル「よし……！このまま、ドアクダーの城へ一気に攻め込むぞ！」

ホープス「……！」

零「この威圧感……！」

メル「どうしたんですか、零さん、ホープスさん!!？」

ホープス「来ます……。闇の王達が！」

闇の帝王とゴゴール：それに、あいつが：ドアクターか……！

闇の帝王「エクスクロスよ……。自ら地獄へと足を踏み入れるとはな」

ゴゴール「本当に愚かな者達だ」

シモン「出やがったな、闇の帝王！」

ゴークイレッド「来たな、ゴゴール！」

エイサップ「向こうの暗黒の球は……！」

ドアクター「よくここまで来た、ワタルとその仲間達よ。まずは褒めてやろう」

ワタル「お前がドアクターだな！」

ドアクター「その通りだ。だが、お前の相手は後だ」

な、何……!? ドンゴロにビームを……！

ドン・ゴロ「ぬぐわっ！」

虎王「ドン・ゴロ！」

ドン・ゴロ「な、何故でございます、ドアクター様……!?」

ドアクター「ワタルごときにしてやられるとは、お前の力も、その程度か……。ならば、

ドン・ゴロ……。もうお前に用はない」

ドン・ゴロ「そ、そんな……！」

虎王「退け、ドン・ゴロ！このままではお前は父上に殺される！」

ドン・ゴロ「しかし……」

虎王「これは命令だ、ドン・ゴロ！」

ドン・ゴロ「……わ、わかりました……。虎王様もお気をつけて……」

ドンゴロは撤退した……。

虎王「父上……！」

ドアクダー「虎王……」。ワシに刃向かったお前にもう用はない。ワタルの仲間となつた以上、お前に待つのは死のみだ！」

ワタル「そうはさせない！」

ドアクダー「ほう……虎王を庇うか」

ワタル「自分の子供を殺そうとするなんて……！許さない……！許さないぞ！来い、ドアクダー！僕がお前の相手になる！」

闇の帝王「バカな、小僧よ。お前達に方に一つも勝ち目はないと言うのに」

ゴゴール「お前達に待っているのは絶望だけだ」

舞人「黙れ、闇の帝王、ゴゴール！」

万丈「お前達がどれだけの力を持っていようと僕達全員の力を合わせれば、必ず勝利は掴める筈だ！」

ドアクダー「いいだろう、エクスクロスよ。お前達が光の力を集めて、このワシに挑むと言うのなら…。ワシが究極の闇の力を見せてやろう！」

ゼロ「究極の闇だと…!!?」

ドアクダー「魔界の守護神、暗黒龍よ！今、甦れ！」

龍王丸「暗黒龍だと！」

ドアクダー「はあああああああつ!!?」

ドアクダーが闇に取り込まれ、闇が消えると巨大な龍になった…。

暗黒龍「…」

ワタル「あれが…!」

アマリ「アル・ワース創世の伝説にあった闇の龍…!」

ドアクダー「そうだ！全てを滅ぼし、暗黒龍とワシが新たなアル・ワースを創るのだ

！」

闇の帝王「その時こそ、このアル・ワースは新たな楽園となる！」

ゴゴル「その楽園にお前達の存在は必要ない！」

青葉「ふざけるな！」

アルフリード「悪党が創る世界が楽園などになるものか！」

サヤ「暗黒龍を倒せば…!」

アーニー「お前達の野望を叩き潰せる！」

ドアクダー「ほざくがいい、エクスクロス！そして、虎王、ワタル！さあ行くぞ、暗黒龍！奴等の持つ光を、そのキバで噛み砕け！」

虎王「…」

ヒミコ「大丈夫か、虎ちゃん？」

虎王「心配はいらないぜ、ヒミコ…！俺様の心は決まった！あんな奴を野放しにしておいたら、本当にアル・ワースは滅びちまう！俺の中の何かが言っている！あいつを許しちゃいけないと！」

ドアクダー「好きにするがいい、虎王！息子といえども、役に立たなくなった者など、ワシには不要だ！」

ひろし「お前は…！それでも人の親かよ！」

闇の帝王「お前達には理解できまい！闇に生まれた者に人間の情けなど何の意味もないのだ！」

ゴゴール「そう、そしてお前達は我々には支配される存在なのだ！」

ゼファイ「あなた達は、人の心をもたない悪魔です！許すわけにはいきません！」

零「覚悟しろ！正義を、光を、絆を、人間の力をお前等に見せてやるぜ！」

ホープス「皆さん、闇の帝王とゴゴールとドアクダーは互いを闇の力で支援していま

す。一体倒した後、1分以内に残り二体を倒さないと倒した方も復活します」

弘樹「何だよ、それ!?？」

カノン「そうだったら、こちらに勝ち目はありません…!」

優香「要するに一体を倒したら1分以内に残り二体を倒せばいいんだね!」

マリア「やりましょう、みんな! 私達の中にある光を一つにする時よ!」

ドアクダー「来るがいい、エクスクロス!」

闇の帝王「どちらにしても、もうアル・ワースは終わりだ!」

ゴゴール「お前達を倒し、魔徒教団とネメシスを片付けたら、我々は新たなアル・ワー

スの創造主となる!」

甲児「そうはさせるかよ!」

ジョーイ「僕達がいる限り、お前達の思い通りにはさせない!」

ワタル「行くぞ、ドアクダー、闇の帝王、ゴゴール!これが最後の戦いだ!!?」

ドアクダー「フフ…龍王の剣を使いこなせないお前がワシに勝てるかな?」

戦闘開始だ…!

俺達の攻撃でゴゴールにダメージを与える…。

ゴゴール「やるではないか、人間共！」

ウイル「これで終わらせるぞ、ゴゴール！」

ゴゴール「そうはいかん！」

ジョーイ「…！に、逃げて、ヒーローマン！」

ヒーローマン「！」

ゴゴールの攻撃がヒーローマンに直撃し、強化アーマーが外れた。

ヒーローマン「グアアアアアツ!!？」

ジョーイ「ヒーローマン！」

ゴゴール「フハハハハッ！所詮、それはガラクタ…。お前達では私には勝てない！」

ヒーローマン「…」

今の攻撃で…ヒーローマンが倒れた…！

ジョーイ「そんな…ヒーローマン…！」

ウイル「ヒーローマンが…！」

ゴゴール「白き巨人が何度も私に勝利できるわけではないのだ！」

ニツク「…」

サイ「…」

リナ「ジョーイ…」

ジョーイ「…」

ゴゴール「諦めろ、白き巨人を操る者…。お前に勝ち目はない！」

ジョーイ「まだだ…」

ゴゴール「何…？」

ジョーイ「まだだ！僕達はまだ、負けていない！」

ゴゴール「フハハハハッ！何を言う？白き巨人はもう立ち上がれないではないか！」

ジョーイ「ヒーローマンは…僕の、ヒーローは…何度でも立ち上がる！そうでしょう、

ヒーローマン!!？」

？「その通りだよ、ジョーイ君！」

一機の機体が現れた…!!？」

サイ「MR—1…!!？」

リナ「デントン教授が乗っているのですか!!？」

デントン「その通りだとも！ジョーイ君、ヒーローマン…受け取れ！」

MR—1からヒーローマンに電気エネルギーが送り込まれた。

ヒーローマン「ウオオオオオオッ!!？」

エネルギーが回復したヒーローマンは立ち上がった…。

しんのすけ「ヒーローマンが…！」

ワタル「立ち上がった！」

ゴゴール「バ、バカな……！」

ジョーイ「ありがとうございます、教授！みんなの為にも……行くよ、ヒーローマン！」

ヒーローマン「ウオオオツ!!？」

ヒーローマンがゴゴールに攻撃を仕掛けた……。

ジョーイ「ヒーローマアアーン、ゴオオオオオツ!!？」

ヒーローマン「ンンツ！」

ジョーイ「ヒーローマアアーン、オースパアアアク!!？」

ヒーローマン「!!？ンンンオオオオオオツ!!？」

ゴゴール「グアアアアアツ!!？」

ヒーローマンは腹部から巨大ビームを発射し、それを受けたゴゴールは大ダメージを受けた……。

ゴゴール「ば、バカな……！」

ニツク「凄いや、ジョーイ、ヒーローマン！」

ウイル「流石だ、二人共……」

ゴゴール「まだだ……このままでは終わらせんぞ！」

デントン「ジョーイ君！私もM R ーで援護するよ！」

ジョーイ「お願いします、教授！僕達は絶対に諦めない！平和を掴むまで……！」

俺達の攻撃で闇の帝王にダメージを与える…。

闇の帝王「やってくれるな、人間共め！」

甲児「どうした、闇の帝王！もうギブアップか！」

闇の帝王「ならば、お前達に絶望を与えてやる！全ての可能性を食い尽くす闇の魔神の力で！出でよ、マジンガーZERO！」

マジンガーZEROが現れた…!!？

ボス「で、出た！やっぱり出やがった！」

さやか「マジンガーZERO！」

マジンガーZERO「グオオオオツ!!？」

鉄也「待っていたぜ、ZERO！この時が来るのを！」

海道「漸くお前をボコボコに出来るぜ！」

甲児「お前に光の魔神の力を俺達の可能性を見せてやる！」

真上「覚悟しろ！」

竜馬「あいつを倒すのはマジンガーだけじゃないぜ！」

隼人「ゲッターの力でお前達を援護する！」

弁慶「やるぜ！」

鉄也「ああ、行くぞ、みんな！」

海道「おうよ！」

真上「フツ…！」

甲児「いつでもいいぜ！」

竜馬「派手に決めてやるよ！」

カイザー、エンペラー、SKL、真ゲッターーから光が放たれた…。

闇の帝王「この光は…！」

甲児「俺達が引き出したダイナミックなロボットの力…！」

竜馬「マジンガーとゲッターの可能性だ！」

海道「ZERO！お前にそれをぶつけてやるぜ!!？」

カイザー、エンペラー、SKL、真ゲッターーは同時に攻撃を仕掛けた。

甲児「俺達の光の力を…受けてみやがれ！」

竜馬「よっしゃあ！これで決めるぜ！」

真上「いいだろう！」

まず、SKLがブレストリガーを連射し、ZEROにぶつける。

海道「おらよ！」

カイザー、エンペラー、SKL、真ゲッターはそれぞれ、シオルダースライサー、エンペラーソード、牙斬刀、ゲッタートマホークで斬り裂いた。

4機は空高く飛ぶ。

鉄也「終わらせるぞ、みんな！」

4機はそれぞれ、ファイアーブラスタ、グレートブラスタ、インフェルノブラスタ、ゲッタービームを放ち、ZEROに直撃させた。

甲児「ファイナルダイナミックスペシャルウウウツ!!?」

マジンガーZERO「!!?」

甲児「俺達が……!」

甲児&mp;鉄也&mp;海道&mp;真上&mp;竜馬「「「地獄だ!!
?」」」

4機の連携技、ファイナルダイナミックスペシャルを受け、マジンガーZEROはダメージを負い……。

マジンガーZERO「グオオオオオオツ!!?」

爆発した……。

アマタ「凄い……あれがダイナミッククロボの真の力か！」

ワタル「やったぜ、甲児さん、鉄也さん、海道さん、真上さん、ゲッターチーム！ハツキシ言つて、超ダイナミックカッコいいぜ！」

闇の帝王「ば、バカな！マジンガーZEROが！」

甲児「闇の帝王！お前の切り札は俺達が倒した！」

鉄也「残るはお前だけだ！覚悟しろ！」

闇の帝王「お、おのれ！言わせておけば……人間共め！オリュンポスの神々を従える、この闇の帝王を甘く見るなよ！」

竜馬「お前こそ、俺達を甘く見るなよ！」

真上「俺達はエクスクロスだ！」

甲児「悪を倒して、世界を守る力だ！」

海道「そう、俺達が地獄だ!!？」

俺達の攻撃で暗黒龍にダメージを与える。

ドアクダー「その程度でこの暗黒龍とドアクダーを倒せると思つたか！」

凄まじい力だ……！

ジョー「化け物め！なんて力だ！」

虎王「…」

ヒミコ「虎ちゃん…」

虎王「悪いな、ヒミコ…。俺様は行かなきゃならない」

ヒミコ「何処へ行くのだ？」

虎王「ヒミコ…。お前を本当に俺様のヨメにしたかったぞ」

ヒミコ「虎ちゃん！」

虎王「さらばだ…」

ドアクダー「死にに來たか、虎王」

虎王「刺し違えてでも父上を止める…！それが息子である俺の務めだ！」

ドアクダー「バカな奴め！自分の事を本当にワシの息子だと思っているのか…？」

虎王「何っ…？」

ドアクダー「冥土の土産に教えてやる！お前はワシの息子ではない！」

邪虎丸が攻撃を受けた…。

虎王「うわあああああつ…！！？」

ワタル「虎王！」

ドアクダー「トドメだ、虎王！死ぬがいい！」

突然、ドンゴロが現れて、暗黒龍の攻撃から邪虎丸をかばった…!!?

ドン・ゴロ「ぐうっ！」

虎王「ドン・ゴロ！俺を庇って…！」

ドン・ゴロ「虎王様…。おかしな夢を…見ました…」

虎王「夢…？」

ドン・ゴロ「このドン・ゴロと…虎王様が…平和な創界山で…暮らしているのです…」

虎王「平和な創界山…」

ドン・ゴロ「もしかすると、それは夢などではなく…私達の…あるべき姿なのかも…」

虎王「もういい、ドン・ゴロ！もう喋るな！」

ドン・ゴロ「虎王様…。この次に生まれる時も…虎王様と…ご一緒に…」

ドンゴロが消滅した…。

虎王「ドン・ゴロオオオオツ!!？」

ドアクダー「悲しいか、虎王？その悲しいという感情こそがお前がワシの息子ではな

い証だ」

虎王「ドアクダー！」

ドアクダー「安心しろ、虎王！すぐにドン・ゴロの所に…あの世に送ってやる！その悲しみを大地に捧げよ！お前を生け贄にして、奴を呼び寄せてやる！」

ワタル「やめろ!!？」

ドアクダー「来るか、ワタル!ならば、お前もまともて生け贄になるがいい!」

ワタル「負けない…!だって、僕は…!救世主なんだ!」

龍王丸が光った…!

ドアクダー「この光は…!」

龍王丸「どんな相手にも立ち向かう勇氣…!どんな時にも諦めない希望…!今、ワタルは真の救世主としての力に目覚めた!」

ワタル「真の救世主…!」

龍王丸「空高く龍王の剣をかざせ!今こそ神部七龍神の力が目覚める時だ!」

ワタル「わかる…わかるよ!龍王丸も神部七龍神の一人だったんだね!」

ドアクダー「ワタル!!？」

ワタル「行こう、神部七龍神!ドアクダーを倒す力を僕に!!？」

龍王丸が暗黒龍に攻撃を仕掛けた…。

ワタル「救世主としての使命、今こそ果たす!」

龍王丸「龍王の剣でドアクダーを倒す時が来た!」

ワタル「よおし!やるぞ、龍王丸!」

龍王丸から光が射出され、龍王丸は石化したが、龍王丸から出た光は光の龍となり、ワ

タルが乗っていた。

龍王丸「天の時、至り、神部七龍神よ！救世主ワタルの下、一つになるのだ！」

神部七龍神が合体して、虹龍となった。

ワタル「みんなの希望、僕が背負う！行くぞ、龍神丸！うおおおおおっ！だああああつ
!!?」

真の力を解放した龍王の剣と共にワタルが相手へと突撃し、突き抜け、上空へ飛ぶ。
ワタル「ドアクダー！覚悟おお!!?」

そして、虹龍から飛び降りたワタルは龍王の剣を構え、ドアクダーを斬り裂いた。

ドアクダー「うおおおおおっ!!?」

斬り裂かれた暗黒龍は大ダメージを受け、ワタルは虹龍に戻った…。

ワタル「これが僕達の真の力だ！」

そして、虹龍は龍王丸にもどる。

ドアクダー「神部七龍神め！蘇りおったか！」

龍王丸「まだ完全に力を取り戻したわけではない…」

ワタル「だけど、ドアクダー！僕と神部七龍神の力を合わせれば、お前を倒せるはず
だ！」

虎王「やるな、ワタル！」

ワタル「言っただろ？僕は救世主なんだから！」

ドアクダー「く、くそおおおつ!!？」

幻龍斎「龍王の剣と龍神の盾……まさにドアクダーを倒すための力！」

シバラク「よくやったぞ、ワタル！師として鼻が高い！」

ヒミコ「オツサンの団子鼻は全然高くないのだ！」

シバラク「そうではなくて〜！」

ワタル「行こう、みんな！全員の力を一つにしてドアクダーを倒すんだ！」

ドアクダー「そうはしません……！そうはしませんぞ！我こそは創界山の支配者……このドアクダーの真の恐ろしさを知らない！」

虎王「うるさい！お前の言葉なんか、もう聞かよ！」

ワタル「行くぞ、ドアクダー！決着をつけてやる！」

〈戦闘会話　　エイサップVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

エレボス「やろう、エイサップ！」

エイサップ「ああ！闇のオーラは俺達、聖戦士が払ってやる！」

〈戦闘会話 バナージVSドアクダーor闇の帝王orgogool〉

バナージ「俺はあなた達の思い通りにさせるつもりはありません！闇の力はここで倒します！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSドアクダーor闇の帝王orgogool〉

キンケドゥ「お前達を倒して、この世界の平和を取り戻してやる！」

〈戦闘会話 シンVSドアクダーor闇の帝王orgogool〉

シン「覚悟しろよ、お前等！この世界の人達を困らせた分を何倍にしても返してやるからな！」

〈戦闘会話 キラVSドアクダーor闇の帝王orgogool〉

キラ「この世界の花を散らさない為に…あなた達を倒します！それが今の僕に出来る事だ！」

〈戦闘会話 刹那VSドアクダーor闇の帝王orgogool〉

刹那「世界を破壊し、多くの人を悲しませると言うのなら、俺達は戦う…！ガンダ

ムと共に！」

〈戦闘会話　キオVSDアクターor闇の帝王orgoゴール〉

キオ「ガンダムは救世主だ……。だから、この世界でも救世主になってみせる！」

〈戦闘会話　アセムVSDアクターor闇の帝王orgoゴール〉

アセム「悪の親玉を倒せば、アル・ワースは平和になる……。簡単な話だ！ 終わりだ、悪の親玉！」

〈戦闘会話　フリットVSDアクターor闇の帝王orgoゴール〉

フリット「悪の王と言うのは何処の世界でも同じ様な事を考えるのだな。そんな事は私がさせん！」

〈戦闘会話　三日月VSDアクターor闇の帝王orgoゴール〉

三日月「俺は正義の味方って柄じゃないけど……。悪い奴は流石に見逃せないんだよね……。行くぞ、バルバトス……！」

〈戦闘会話　オルガVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

オルガ「どいつもこいつも敵だ！だったら、容赦なくやっつけてやるよ！」

〈戦闘会話　一夏VSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

一夏「ラスボスを倒して、ここの戦いを終わらせる！そして、光を取り戻す！」

〈戦闘会話　葵VSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

葵「かかってきなさい、悪の親玉さん！ダンクーガノヴァがお相手をしてあげるわ！」

〈戦闘会話　九郎VSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

アル「九郎、相手は敵の親玉だ！手加減は無用だぞ！」

九郎「わかってる！覚悟しろよ、悪の王様よ！」

〈戦闘会話　ヴァンVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

ヴァン「来いよ、親玉共！てめえ等が何だろうがぶった斬ってやる！」

〈戦闘会話　アマタVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

アマタ「世界を救う為に俺達はお前達と戦う！それが機械天使の使命だ！」

〈戦闘会話　ノリコVSドアクターor闇の帝王orゴゴール〉

カズミ「油断せずに行くわよ、ノリコ！」

ノリコ「はい！悪の親玉は私達が相手をします！」

〈戦闘会話　ユイVSドアクターor闇の帝王orゴゴール〉

レナ「ユイ、この戦いで創界山を元に戻そう！」

ユイ「うん、わかっているよ、お姉ちゃん！そして、アル・ワースを平和にします！」

〈戦闘会話　ノブナガVSドアクターor闇の帝王orゴゴール〉

ノブナガ「来るがいい、闇の王！破壊の王、ノブナガが相手になるぞ！」

〈しんのすけVSドアクターor闇の帝王orゴゴール〉

カンナム「簡単に勝てる様な相手ではないよ、しんのすけ君！」

しんのすけ「それでも逃げるつもりはないゾ！悪い奴は正義に負けるものなんだゾ

！」

〈戦闘会話 ケロロVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

ケロロ「親玉を倒せば、平和が来る。手っ取り早く終わらせるであります！」

〈戦闘会話 アキトVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

アキト「来い、悪党共……正義の前に散れ……！」

〈戦闘会話 ルリVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

ルリ「悪が滅びるのは不滅のお約束です。なので、悪を滅ぼします」

〈戦闘会話 アルトVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

アルト「お前達を倒して、闇を払い、創界山の綺麗な空を取り戻してやる！」

〈戦闘会話 リオンVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

リオン「来やがれ、悪党！俺は一步も譲る気はないから、覚悟しやがれよ！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSドアクダーor闇の帝王orゴゴール〉

「ゴーカイレッド「お前達を倒して、この世界の宝…創界山の虹つての取り戻してやる！」」

〈戦闘会話　ゼロVSDアクターor闇の帝王orゴゴール〉

ゼロ「お前達の闇は俺の光で吹っ飛ばしてやる！闇は光には勝てないって教えてやるよ！」

〈戦闘会話　EXゴモラVSDアクターor闇の帝王orゴゴール〉

EXゴモラ「キシヤアアアン!!?」

レイモン「俺達は平和の為に戦う！お前達を倒して、創界山を平和な場所にしてな！」

〈戦闘会話　アーニーVSDアクターor闇の帝王orゴゴール〉

サヤ「行きましょう、少尉！」

アーニー「覚悟しろ、悪党！こちらは一切の容赦はしないで！」

〈戦闘会話　零VSDアクターor闇の帝王orゴゴール〉

ゼファイ「パパ、アスナお姉ちゃん！この戦いで世界の闇を消し去りましょう！」

アスナ「ここが正念場よ、零！」

零「ああ、覚悟しろよ！悪の親玉共！ゼフィルスネクサスの光でこの世界の闇を吹っ飛ばしてやる！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSゴゴール〉

ゴゴール「今度こそ、貴様達を倒し、世界を我等の物とする！」

ヒーローマン「ウオオオッ！」

ジョーイ「そうだね、ヒーローマン！」

デントン「ジョーイ君、後方支援は任せてくれ！」

ジョーイ「はい！ゴゴール、これで本当に終わらせる！」

〈戦闘会話 ウイルVSゴゴール〉

ゴゴール「失敗作が…！ここでスクラップにしてやる！」

ニツク「最後の正念場だよ、ウイル！」

ウィル「ああ！ゴゴール、お前との因縁はこれで終わりだ！」

〈戦闘会話　ワタルVSゴゴール〉

ゴゴール「救世主だとしても所詮は子供…討つのは簡単だ！」

ワタル「僕を舐めると痛い目を見る事になるぞ！」

〈戦闘会話　甲児VSゴゴール〉

ゴゴール「マジンカイザーに乗る者よ…。ここで滅する！」

甲児「ジョーイとヒーローマンには悪いが、俺が相手をしてやる！覚悟しろよ、ゴゴール！」

〈戦闘会話　鉄也VSゴゴール〉

ゴゴール「エンペラーに乗る者め…！危険分子になる前に消しとばす！」

鉄也「人間を舐めるなよ、ゴゴール！エンペラーの力を存分に見せてやる！」

〈戦闘会話　海道VSゴゴール〉

ゴゴール「髑髏の魔神に乗る者達か…！お前達は危険だ！よって、地獄に送ってやる

！」

真上「ほう、俺達を危険だと判断する頭は持ち合わせているようだな」

海道「だがな、一つ間違っているぜ、ゴゴール！もうここが既に地獄の一丁目と化しているんだよ！」

〈戦闘会話 竜馬VSゴゴール〉

ゴゴール「ゲッター線…それを取り込めば、我等スクラッグも強くなれる！」

竜馬「誰がためえにゲッター線を渡すかよ！ためえはここで俺達に大人しくやられるんだ！覚悟しやがれよ！」

ヒーローマンの攻撃で、ゴゴールはダメージを受けた…。

ゴゴール「我はまた…負けるのか…？人間如きに…」

ジョーイ「そうだ、ゴゴール。お前はその人間如きに負けたんだ！」

ウイル「とつとと消えろ、ゴゴール！」

ゴゴール「グアアアアアッ!!？」

ゴゴールは爆発した…。

ウィル「…これで俺達の因縁は終わった…」

ニツク「まだだよ、ウィル！」

ジョーイ「ゴゴールを倒したから、残り、1分でドアクダーと闇の帝王を倒さないとい！」

ドアクダー「舐めるな、エクスクロス！」

闇の帝王「我々がいれば、ゴゴールはまた蘇る！」

鉄也「そうはさせるか！」

甲児「お前達も終わらせてやるぞ、ドアクダー、闇の帝王！覚悟しやがれ！」

〈戦闘会話 海道VS闇の帝王〉

闇の帝王「髑髏の魔神、SKLよ！ここで引導を渡してやる！」

真上「引導を渡すのは俺達の方だぞ、闇の帝王！」

海道「てめえの炎…俺達の力で吹き飛ばしてやるよ！」

〈戦闘会話 竜馬VS闇の帝王〉

闇の帝王「ゲッター・ロボ…その存在は危険である！よって、ここで抹殺する！」

隼人「ゲッターの力は危険なのはわかってるがな」

弁慶「だが、お前じゃ俺達は倒せないぜ！」

竜馬「行くぜ、闇の帝王！お前の闇をゲッターで打ち消してやるぜ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVS闇の帝王〉

闇の帝王「白き巨人…貴様の光と私の闇の真つ向勝負だ！」

ヒーローマン「…！」

ジョーイ「光は闇には絶対に負けない！それを僕達が証明するんだ！」

カイザー達の攻撃で、闇の帝王はダメージを負った…。

闇の帝王「ほ、滅びる…！オリュンポスの神の頂点に立つ我が滅びると言うのか！」

甲児「その通りだ、闇の帝王！」

鉄也「お前の敗因は人間の…俺達の力を侮った事と…」

竜馬「俺達に勝負を挑んだ事だ！」

闇の帝王「う、うおおおおおっ!!？」

闇の帝王は爆発した。

真上「闇の帝王も撃破した！」

海道「後は、ドアクダーだけだ！」

ドアクダー「バカめ！まだ、このワシがいる事を忘れるな！」

シモン「勿論、忘れていないぜ！次はお前の番だ、ドアクダー！」

アル「もう一息だ、お前達！この一分でドアクダーにトドメを刺さなければ、妾達の負けだ！」

ワタル「行くぞ、ドアクダー！僕達の全力を受けてみる！」

〈戦闘会話 海道VSドアクダー〉

ドアクダー「闇の帝王が危険視する罫體の魔神…。相手にとって不足はない！」

真上「ほう、ドアクダーにもそう言われるとはな」

海道「だが、所詮、お前は俺達に負けるんだよ！そのトカゲとSKL、どっちが強い
か勝負だ！」

〈戦闘会話 竜馬VSドアクダー〉

ドアクダー「ゲッター線とゲッターロボ……。ワシを脅かす存在になりかねん……。ここ
で消去する！」

竜馬「悪いな！逆にためえを倒して、創界山を元に戻してやるぜ！覚悟しな、ドアク
ダー！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSドアクダー〉

ドアクダー「ゴゴールを一度倒した白き巨人とそれを操る者……。その力はいかがなも
のかな？」

ジョーイ「行くよ、ヒーローマン！ドアクダーを倒して、この世界の平和を取り戻す
んだ！」

ヒーローマン「オオオッ！」

龍王丸とワタルの攻撃で暗黒龍にダメージを与えた……。

ドアクダー「バカな！魔界の王である、このワシが滅びるなど有り得ない！」

ワタル「終わりだよ、ドアクダー！お前は負けたんだ！創界山もアル・ワースもお前
みたいな悪い奴に絶対に渡さない！」

ドアクダー「こ、こうなれば、闇の帝王とゴゴールを蘇らせて……！」
闇の帝王とゴゴールが蘇りやがった……！」

アスナ「また出て来た……！」

ゼファイ「ですが、もう彼等に戦う力は残っていません！」

ドアクダー「エクスクロス！」

闇の帝王「確かにお前達は我等に勝った……！」

ゴゴール「だが、この世界は……アル・ワースは崩壊する……いや、我等が崩壊させる……！」

甲児「最後に負け惜しみとはみつともないな……！」

ドアクダー「お前達はわかっていない……このアル・ワースが楽園と呼ばれる意味を……！」

闇の帝王「この宇宙は、奴との戦いで生き延びた者達が創り上げた世界なのだ……！」

ジョーイ「奴……？」

ゴゴール「全ての宇宙の生物の敵……数々の銀河を滅ぼしてきた者……アンチスパイラルだ……！」

シモン「何……？」

闇の帝王「我等の残った力で、この閉じた宇宙に亀裂を作る……！」

ヴィラル「そんな事をすれば……！」

ドアクダー「アンチスパイラルが来るだろう！大艦隊を引き連れて！」

ゴゴール「ハハハハハ！お前達に待つのは絶望だけだ！」

シモン「そうか……。奴等が来るのか……」

ドアクダー「螺旋の男：お前は、奴を恐れないのか？？」

シモン「アンチスパイラルが来るんなら、ニアを取り戻すチャンスだぜ！」

闇の帝王「な、何だと？！」

ノブナガ「残念だったな、闇の王共！俺達はとつくに絶望などは捨てている！」

ルルーシュ「アンチスパイラルだろうと何だろうと悪が来るからば戦うまでだ！」

ゴゴール「つ、強がりなどではない……！」

闇の帝王「奴等は本気でアンチスパイラルと戦う気だ！」

甲児「そういう事だ！わかったんなら、さっさと消えろ！」

海道「あいつ等が来るんなら、お前等に構っている時間はないんだよ！」

闇の帝王「わ、分からん！奴等の頭の中が理解できん！」

ドアクダー「あれが光の力……！希望を信じる者の力なのか！」

ワタル「そうだ！勇気と希望を胸に戦う僕は……僕達は救世主なんだ！だから、負けな

い！どんな敵が来たって、必ずみんなを守ってみせる！」

竜馬「消えやがれ、外道！もうお前達に用はねえ！」

ドアクダー「ぬ、ぬああああああああつ!!?」

暗黒龍、闇の帝王、ゴゴールは爆発した…。

ホープス「アル・ワースを覆っていた闇の力の最期です…」

シバラク「ドアクダーと闇の帝王とゴゴール…。悪は滅んだ…」

幻龍斎「闇の力は消滅していく…。きっと創界山の虹も、元の色に戻るだろう」

クラマ「だが…」

ワタル「僕達の戦いは終わっていない」

ネモ船長「アンチスパイラルが来るのなら我々はそれを迎え撃つ」

ギロロ「それにまだキルルやベリアル達が残っているからな」

ジョーイ「奴等を倒さなくては、アル・ワースに平和は来ません」

ヴァン「やるぜ、シモン」

シモン「ああ…。アンチスパイラルと決着をつける…。そして、必ずニアを取り戻す

!

虎王「…」

ワタル「虎王…」

虎王「俺様もいくぜ、ワタル。ドアクダーの息子じゃないんなら、胸を張って正義の味方がやれるってもんだ。このアル・ワースを守るため、俺様も全力で戦うぜ」

ワタル「行こう、宇宙へ…！そこで最後の戦いだ！（やるぞ…。ドアクダーは倒したけど、アル・ワースの危機は、まだ続くんだ…。僕は救世主ワタル…。世界に平和が戻るまで、龍王丸や仲間と一緒に戦うんだ…）」

ーゼクス・マーキスだ。

私とリリーナ、ヒロ、零はドアクダーの間にいたマリイメリア・クシュリナーダを保護した…。

リリーナ「マリイメリア！」

マリイメリア「リリーナさん…」

ゼクス「…こちらは突入部隊だ。マリイメリア・クシュリナーダの保護に成功した。意識ははっきりしているが、かなり衰弱している」

マリイメリア「リリーナさん…。あなた達に伝えたい事があります…」

リリーナ「喋らないで、マリイメリア…。今は自分の身体の事を考えなさい」

マリイメリア「いえ…。今…あなた達に伝えなくてはならないのです…。革命の世界で戦いを起こした私の罪を…償う為にも…」

リリーナ「マリイメリア…」

マリメイア「このアル・ワースは…複数の世界のワルツによって支えられています…。そして、世界を存在させているのは意思の力なのです…」

リリーナ「意思…?」

マリメイア「知る事、感じる事、確かめる事…。意思こそが力を持つ世界…それが、このアル・ワース…。力だけに頼らないで…。あなた達の想いこそが…未来を切り拓く力になる…。お願い…です…。あなた達の…想いで…この世界を…」

マリメイアが倒れた…!

リリーナ「マリメイア…!」

ヒイロ「早く医務室に運ぶぞ」

ゼクス「急ごう。さっき報告が入ったが、宇宙に異変が発生したとの事だ」

ヒイロ「奴等が来るのか…」

ゼクス「エクスクロスは獣の国が用意した超大型戦艦と合流するそうだ」

ヒイロ「アンチスパイラル…。この世界を滅ぼそうとする者との戦い…」

リリーナ「(意思こそが力を持つ世界…。マリメイアが生命を懸けて伝えてくれた言葉…。それは…いったい何を意味するの…)」

零「(ネメシス…。全ての敵を倒した先に奴はいる…。奴の力は恐らく、アンチスパイラル以上だ…。それでも、俺は…俺達は負けない…。このアル・ワースを救ってみせる

…！」

俺達は戦艦に戻った…。

？「ドアクダー軍団をも倒したか…。零、流石だ…。お前とも決着をつける、俺には

もう…何も残されていない…。お前を、倒す事以外は…」

俺達の事を見ていた者がいた事にも気がつかずに…。

第75話 果てしなき群れ

―新垣 零だ。

俺達は獣の国に着き、超々弩級ダイガンの中に入った。

キタン「…凄えな、この戦艦…」

ギミー「デカすぎだよ、これ！艦内を移動するのに徒歩じゃ無理なんて！」

リーロン「驚いたでしょ。この前、戦ったカテドラル・ラゼンガンをこっちで使うように改装したのよ。元は螺旋王が過去にアンチスパイラルと戦うために使ってたカテドラル・テラだから、そう時間はかからなかったけど」

ダリー「この艦を中心に、アンチスパイラルを迎え撃つんですね」

ヨーコ「カテドラル・テラ…。これが人類の切り札になる…」

シモン「だがそれは、昔の名だ」

ブータ「ブーツ！」

リーロン「あら、似合うじゃない、シモンもヴァイラルも」

ヴァイラル「これからの戦いは宇宙が主戦場になるからな…」

シモン「何よりニアを迎えに行くんだ。気合も入るってもんだぜ」

キタン「お前の言う通りだぜ！これからの戦いの切り札は愛と気合だ！」

ヨーコ「愛ね……。キタンの口から、そんな言葉が出るなんて思わなかったわ」

キタン「お、おう……。俺も成長してんだよ！」

ギミー「（そこで、俺の愛はお前のためだ……。とか言えば、もつと株が上がるのに……）」

ダリー「（頑張ってくださいね、キタンさん……）」

リーロン「で、シモンはカテドラル・テラって名前が気に入らないわけ？」

シモン「大グレン団とエクスクロスのみんなが乗り込むんだ。昔の名前を使う必要は

ねえ……。この艦の名前は、超銀河ダイグレンだ」

ギミー「超銀河ダイグレン……！」

ヨーコ「悪くない……。って言うより、その名前しかないわね」

ゼロ「超銀河……。いくつもの銀河を滅ぼしてきたアンチスパイラルと戦うのならば、

それくらいスケールが必要だな」

青葉「銀河を滅ぼすって……。本当にそんな事が出来るのかよ……」

舞人「ドアクダーは、そう言っていたけど……」

カミーユ「ドアクダー達の言葉から察するに奴等との戦いで生き延びた者達がこのア

ル・ワースに来たと言う事になる」

葵「本当なの、それ？」

シモン「どうなんだ、ロシウ？」

ロシウ「ロージエノムは口を閉ざしています。と言うより、アル・ワースを創世に関わる部分はその場にいたはずの彼も記憶が曖昧だそうです」

ラーシヤ「そこだけ記憶喪失になっているんですか…」

タルジム「それって、不自然すぎじゃねえか…？」

ビゾン「だが、嘘ではないようだぞ」

ワタル「うん、神部七龍神の一人だった龍神丸も同じような事を言っていたし…」

カノン「ゼフィちゃんはどうかの？」

ゼフィ「…確かにオニキスのご先祖様が私に乗り、戦っています。ですが、その時の

私はまだ人格を保っていないので、詳しい事は…」

ユイ「レナ達はどう？」

レナ「…わからない」

ヨハン「多くのレガリア達もアンチスパイラルと戦ったよ…。まあ、でもその時の僕も自分の事でいっぱいだったから、よくは覚えていないけどね」

シモン「過去の事なんて、どうでもいい…！重要なのは、俺達のこれから…未来の事だ！」

アムロ「シモンの言う通りだ。まずはアンチスパイラルを迎え撃つぞ」

甲児「勝手にやってきて、問答無用でこつちを滅ぼそうとすると奴なんかの好きにはさせるかよ！」

竜馬「そつちがその気なら、こつちは死ぬ気で抵抗してやるまでだぜ！」

シモン「（見ろよ、ロシウ…。これだけの奴等が集まったんだ。きつと勝てるさ）」

ロシウ「ありがたい事です。異界人の皆さんが、このアル・ワースのために戦つてくれて…」

シヤア「いや…。事は、このアル・ワースだけの問題ではないかも知れない…」

シモン「どういう事だ？」

ルルーシユ「それについては、マリーメイアが目を覚ましたら、はつきりするだろう」

マサキ「まずは目の前の一戦だ…。それを越えられなきや、どうしようもねえ！」

シモン「やるぞ、みんな！俺達がアル・ワースを守るんだ！」

ロシウ「（お願いします、エクスクロス…。この世界の未来…。あなた達に託します…）」

ホープス「…」

アマリ「どうしたの、ホープス？体調が悪いの？」

ホープス「私は魔法生物ですから、そう言った事はございません」

アマリ「もしかして…ホープスも不安なの？」

ホープス「…」

アマリ「いいのよ、ホープス。不安ならば、不安だつて言ってくれて」
ホープス「しかし、それは…」

アマリ「旅が始まったばかりの頃…私が不安になるとホープスは励ましてくれた…。
ちよつと言葉がキツイ時もあつたけれど、私…感謝してるから」

ホープス「マスター…」

アマリ「だから、もしホープスが心細くなっていたら、今度は私がホープスを助けるつて決めていたの。聞かせて、ホープス…。あなたが何を考えているかを」

ホープス「…。今後、想像を絶する敵が来ると思っています…」

アマリ「想像を絶する敵…」

ホープス「申し訳ありません…。この私が、マスターを不安がらせる様な事を言うとは…」

アマリ「いいのよ。私…どんな敵が来ても負けるなんて思つてないから」

ホープス「え…」

アマリ「だつて、私にはエクスクロスのみんながいるんだから」

ホープス「…お強くなられましたね」

アマリ「これもホープスや零君達のおかげよ。だから…がんばろうね、最後まで」

ホープス「はい…。(ありがとう)ございます、マスター…。これで私も覚悟を決める事

が出来ます…）」

ゼファイ「…？（ホープ先輩…？）」

零「…」

恐らく、ネメシスもアンチスパイラルの存在を熟知している…。つまり、あいつにとつてはアンチスパイラルもゲームのキャラだという考えか…。

ノリコ「零さん、怖いんですか？」

零「そんな事はない。今まで戦つて来たんだ、今回も何とかなる…。それよりもみんなに伝えておきたい事があるんだ」

シヨウ「どうしたんだ、改まって？」

零「…俺の身体の中には…ネメシスの遺伝子も流れているんだ」

ハカセ「え…？」

弘樹「何だと!?？」

優香「え、何？それってつまり…ネメシスは零の父親に近いものでもあるって事なの!?？」

零「…ああ」

マリア「やっぱり、そうだったんだ」

零「…母さんは…気づいていたのか？」

マリア「ええ、オニキスの力にしてはあなたの力はありませんにも大きすぎたから…」

零「皮肉だな、俺は敵であるネメシスの遺伝子も身体に流れてる…。悪の遺伝子がな」

アマリ「零君…」

零「みんなに頼みがあるんだ」

ノブナガ「頼み…?」

零「もし、俺の中のネメシスの…悪の遺伝子が暴走して…俺がみんなや世界にとって危険な存在になったら、手がつけれられなくなる前に俺を討って欲しい」

メル「零さん、それは…!」

零「わかっている。俺も悪の遺伝子なんかには負けるつもりはないよ。でも、万が一の事を考えて…。俺はこの話をした」

アマリ「零君…」

零「お願いします!」

アマリ「わかったわ」

ゼファイ「ママ!」

アマリ「でも、あなたが例え、邪悪な存在になっても…取り戻せるんだったら、私はあなたを取り戻す…。無理だったら、考えるけど…」

零「ありがとう。愛してるよ、アマリ…」

アマリ「私もよ、零君…」

ヒルダ「いいムードだけど、そんなの一生来ないよ」

ワタル「零さんの正義の心が簡単に負けないのはこのみんなが知っているもん！」

零「みんな…」

リチャード「お前さんは力の扱い方を理解している。大丈夫だ」

零「…はい！」

マリア「零…これを…」

母さんは俺にブレスレットを渡して来た…。

零「これは…?」

マリア「昔、私がレイヤにプレゼントしたもののよ。まあ、私がオニキスを出した時に返

されたけど…」

零「…レイヤのブレスレット…。ありがたくもらうよ」

マリア「それから、これも渡すわ」

今度はペンダントを渡して来た…。

マリア「これはハデスが私にプレゼントしてくれたものなの」

零「そ、そんな大切な物、貰えないって！」

マリア「いいえ、受け取って欲しいわ。私とハデスの為にも…」

零「…わかった。ありがとう」

俺は母さんからブレスレットとペンダントを受け取り、つけた。

母さんと父さん…それからレイヤの想い…確かに受け取ったぜ…！

第75話 果てしなき群れ

俺達は宇宙に上がり、出撃した…。

ジン「くっ…！わかつてはいたが、また宇宙が歪んでいる！」

アユル「ドアクダー達の力ですね…」

シヨウ「そして、あの歪みを通して、アンチスパイラルがやってくる…」

マニイ「アンチスパイラルの軍団って凄く強くて、すごい数だって聞くけど…」

マスク「数という暴力で他者を踏みこむなど最低最悪の輩のようだな」

ベルリ「そんな奴等に負けるわけにはいかないんですよ」

しんのすけ「オラ達の後ろにアル・ワースがあるゾ！」

カンナム「そこに住む人達を守る為にも、僕達は戦う！」

シモン「ダヤツカ、リーロン、ロージエノム、それにみんな…。超銀河ダイグレンを

頼むぞ」

ダヤツカ「俺達もやるぞ、シモン！アル・ワースで待ってるみんなのために！」

ガバル「舵取りは任せろ！」

アーテンボロー「撃って撃って、撃ちまくってやるぜ！」

シモン「力は集まった！後は全力で奴等にぶつかるだけだ！」

この感覚…来たか…！

テツカン「次元境界線の歪曲を確認！」

シベラ「歪みから多数の巨大な物体が現れます！」

シモン「来たか！」

カズミ「待って、これは…！」

次元の歪みからアンチスパイラルの群れとインベーダーの群れ、宇宙怪獣の群れが現れた。

號「インベーダーと宇宙怪獣だと…?!?!？」

溪「何で、あいつ等までここに?!?!？」

隼人「アンチスパイラルの力に惹かれてきたのか…！」

グレミー「何という数だ！」

プルツ「あれ…全部、敵なの…！」

ブル「そうだよ。あれが全部：アル・ワースの人を殺す為にやってくるんだ」

ジノ「アンチスパイラルの軍勢の方も手足だけじゃなく、頭がたくさんついてる奴も来た……！」

ダリー「あれが敵の母艦みたいね……！」

イオリ「よ、よくわからないが大きさの感覚が……つかめない……」

アマリ「敵がとてつもなく巨大にも思えるし、私達とそんなに変わらないようにも思える……」

零「理の崩壊で事象の概念が曖昧になった結果だな……！」

ホープス「(ですが、奴等の大きさがこちらと同じくらいと感じられるのなら、勝算はあります……)」

ビゾン「トワサングで待機していた旧レコンギスタ軍も、こちらを後方から支援してくれる」

ロックパイ「ここで奴等を撃退しなければ、シラノー5も戦場になる……！」

キア「そうなったら、元の世界に帰るとか、レコンギスタとか言っている場合ではないな……！」

アムロ「やるしかないぞ……！各機、準備はいいな！」

ルルーシュ「まずは前線のムガン部隊と宇宙怪獣、インベーターの群れを叩き、敵艦

に仕掛ける！」

ネモ船長「だが、こちらにも限界がある……」

エレクトラ「計算が出ました！我々が戦線を維持できるのは10分が限界です！」

ウエスト「10分……」

エルザ「その間に、あの艦隊を撃破しなくてはならないか……！」

アンジュ「結構ハードね、これ……」

ステラ「でも、私達の後ろにはアル・ワースがあるんだよ……！」

ハイネ「一体たりともここを通すわけにはいかないぜ……！」

シモン「行くぜ！俺達の……人間の底力をアンチスパイラルに見せてやるぞ！」

この感覚……まだ何か来るのか……？ネメシスではない、何か……！」

俺達は戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 エイサップVS初戦闘〉

エレボス「これはきつい戦いになるね！」

エイサップ「だが、負けるわけにはいかない！アル・ワースを守る為に！」

〈戦闘会話 バナージVS初戦闘〉

バナージ「退くつもりはない……！アル・ワースの人達を助けてみせる！」

〈戦闘会話 キンケドゥVS初戦闘〉

キンケドゥ「何処を見ても敵ばかりなんだ！荒っぽく行くぜ！」

〈戦闘会話 シンVS初戦闘〉

シン「無理でも何でも、生命を奪うなんて行為をさせてたまるかよ！」

〈戦闘会話 キラVS初戦闘〉

キラ「アル・ワースは守ってみせる……。生命を散らさないためにも！」

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「わかり合う事の出来ない異種……。生命を奪うと言うのなら俺が相手をする！」

〈戦闘会話 キオVS初戦闘〉

キオ「僕達が退けば、アル・ワースの多くの生命が失われる……。そんな事、させない

！」

〈戦闘会話 アセムVS初戦闘〉

アセム「この戦い…乱戦と言われてもおかしくないな。来な、一体残らずぶつ潰してやるよ！」

〈戦闘会話 フリットVS初戦闘〉

フリット「加減をしている余裕はない…。初めから全力を出す！」

〈戦闘会話 三日月VS初戦闘〉

三日月「敵は一体残らず、潰す…！アル・ワースはやらせない！」

〈戦闘会話 オルガVS初戦闘〉

オルガ「やるぜ！弾を惜しんでいる暇はねえ！全てぶつ潰す！」

〈戦闘会話 海道VS初戦闘〉

真上「行くぞ、海道！撃って、撃って、撃ちまくる！」

海道「おう！斬って、斬って、斬りまくってやるぜ！」

〈戦闘会話 一夏VS初戦闘〉

一夏「考えて、戦わないとシールドエネルギーと尽きちまう……！それでも俺達は負けるわけにはいかないんだ！」

〈戦闘会話 竜馬VS初戦闘〉

隼人「増援の事も考えて、長引かせると厄介になるぞ！」

竜馬「そんな事、わかっているんだよ！なら、加減せずにぶつ放す！」

〈戦闘会話 葵VS初戦闘〉

ジョニー「ものすごい数ですね……！」

朔哉「見るだけでも嫌になるぜ！」

葵「こういうことは考え済みよ、やってやろうじゃない！」

〈戦闘会話 九郎VS初戦闘〉

アル「九郎、全力でやるぞ！」

九郎「おう！一体残らず、倒してやるよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVS初戦闘〉

ジョーイ「こんな所で負けるわけにはいかない！やろう、ヒーローマン！」

ヒーローマン「うおおおっ！！？」

〈戦闘会話 ヴァンVS初戦闘〉

ヴァン「どうせ、どいつもこいつも敵なんだ。わかりやすくいいじゃねえか。やるぜ！」

〈戦闘会話 アマタVS初戦闘〉

アマタ「アル・ワースの生命を守る為に…俺達は戦う！」

〈戦闘会話 ノリコVS初戦闘〉

カズミ「気合で負ければ、こちらの負けよ、ノリコ！」

ノリコ「私は気合いで負けるつもりはありません！私は気合いと根性で乗り切ります！」

〈戦闘会話 ユイVS初戦闘〉

レナ「無茶せずにやろう、ユイ！」

ユイ「多少の無茶は覚悟の上だよ！アル・ワースを…エナストリアのみんなを救うんだから！」

〈戦闘会話 ノブナガVS初戦闘〉

ノブナガ「ふつ、破壊王がアル・ワースの民の為に剣を取る、か…。だが、悪くはないと思えてきた！」

〈しんのすけVS初戦闘〉

ひろし「な、なんて数だよ…！」

みさえ「これでまだ増えるの!?!？」

カンナム「しんのすけ君、気合いで負ければ、僕達は負けるぞ！」

しんのすけ「今のオラは気合も勇氣も100倍だゾ！アル・ワースの人達をお助けするゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

ギルル「来るぞ、ケロロ！」

クルル「クーククツッ！ 凄え数だな！」

ケロロ「数で怯えるケロロ小隊ではないでありますよ！ ケロロ小隊、舐めるんじゃねえ！」

〈戦闘会話 アキトVS初戦闘〉

アキト「数は多いが、戦闘員だと考えれば造作もない…。攻撃開始…！」

〈戦闘会話 ルリVS初戦闘〉

ハーリー「ものすごい数ですよ、艦長！」

ルリ「では、出し惜しみなく攻撃しましょう」

〈戦闘会話 アルトVS初戦闘〉

アルト「こういう戦いは慣れてんだよ！ スピードで翻弄してやるよ！」

〈戦闘会話 リオンVS初戦闘〉

リオン「見るのも嫌になる敵の数だな……！だが、簡単に退くつもりはない！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVS初戦闘〉

ゴーカイグリーン「こ、こんな数に勝てるの!?!？」

ゴーカイイエロー「今更、怯えてもどうにもならないでしょ！」

ゴーカイレッド「ああ！ここまで戦いだ！ド派手に行くぜ！」

〈戦闘会話 ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「行くぜ、化け物共！俺は一步も退く気はねえ！ブラックホールが吹き荒れるぜ
！」

〈戦闘会話 EXゴモラVS初戦闘〉

EXゴモラ「キシヤアアアン!!？」

レイモン「ベリアルとの戦いを思い出すな……やるぞ、ゴモラ！俺達は負けない！」

〈戦闘会話 アーニーVS初戦闘〉

アーニー「数が多くとも退くつもりはない……！容赦なく倒してやる！」

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「零、援護は任せて！」

ゼフィ「私達の本気を見せます！」

零「ああ、やるぜ！（何かの感覚を感じるが…今はやるしかねえ…！）」

俺達は敵を50体ほど撃破した…。

シベラ「アンチスパイラル艦隊、新たに接近！」

ダヤツカ「また来るのか！」

ジャンナイン「待て、ロボット怪獣も来る！」

アンチスパイラル艦隊の増援とロボット怪獣軍団も現れた…。

グレンファイヤー「お、おいおい！何でロボット怪獣まで来るんだよ!?？」

ミラーナイト「このロボット怪獣はベリアルの下へ送られたはず…」

ゼロ「つて、事は…ベリアル達が近くにゐるつて事か…！」

ディオ「それにしてもなんて数だ…！」

ヒナ「人の生命を奪うための果てしない群れ…！」

青葉「気持ちで負けるな！気合で押し返すしかねえ！」

ジユドー「青葉の言う通りだ！やるぞ、みんな！」

ロージエノム「…！」

リーロン「言いたい事があるなら、言いなさいよ、ロージエノム」

ロージエノム「無謀を理解しない…。あるいは、それを理解しても進む…。今は、それに賭けるしかない。だが、忘れるな。このままでは…！」

シモン「そんな言葉は聞く気はねえ！」

ダヤツカ「シモン…！」

シモン「やるぞ…！やるしかねえんだ！どれだけ数が来ても、俺達の心のドリルを折れると思うなよ！！？」

アスナ「待って、何か近づいてくるわ！」

ゼファイ「この反応は…ナイトメア・ゼファイルスです！」

ナイトメア・ゼファイルスが現れた。

ラゴウ「…！」

零 「ラゴウか！」

マリア 「あなたも来てくれたのね！」

ラゴウ 「零…俺と戦え」

…はあっ…!??

零 「何っ…!?？」

ラゴウ 「俺は全てを失った…。オニキスも…弟も…居場所も…！だから、俺に残されているのはお前との勝負に勝つ事だけだ！」

零 「何バカな事言っているんだよ！今の状況がわからねえのか！アル・ワースが滅ぶかも知れないって時にお前に構っている時間はねえんだよ！」

ラゴウ 「うるさい、黙れ！アル・ワースの危機など知った事か！俺は…俺はお前に勝たなければならぬんだ…！」

零 「ラゴウ、お前…！」

ラゴウ 「俺との勝負を拒むと言うのなら、それでいい。だが、俺はお前に勝負をしかけ続ける！」

零 「…あくまでも邪魔する気だな？…わかった、来いよ」

アスナ 「零…!?？」

零 「自分の出身世界をほったらかしにして、決闘を申し込んでくるようなバカの根性

を叩き直してやる！」

ラゴウ「何とも言うがいい！俺は本気だ！」

零「みんな！ラゴウは任せてくれ！」

アイラツク「出来るだけ早く頼むぜ、零！」

キッド「俺達もギリギリの状態だからな！」

零「分かっています！ラゴウ、お前との戦いもこれで最後だ！」

ラゴウ「来い、零！俺の全てを賭けて…お前を倒す！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 零VSラゴウ〉

零「ラゴウ！俺に勝ったとして、お前に何が残るんだよ！アル・ワースが滅んだら意味が無いだろうが！」

ラゴウ「後の事など知らん！俺は今ここで、お前に勝つ！そして、俺の生きる意味を証明する！」

アスナ「ラゴウ、変わったわね…」

零「お前の生きる意味を証明するのに他の生命を見捨てるんじゃないやねえよ、この…バカ

野郎！」

ゼフィルスネクサスの攻撃でナイトメアはダメージを負った。

ラゴウ「ば、バカな……！俺では……零を倒す事は出来ないのか……?!?じゃあ、俺の生きる意味は……?!?」

零「俺に勝つのが生きる意味だと……?バカなんじゃねえか？」

ラゴウ「何だと……?貴様は、俺の生き様を否定するのか！」

零「そうじゃねえ！お前の生き様つてのはアル・ワースの人達を見捨ててまで証明するものなのかよ！」

ラゴウ「！」

零「俺に勝ちたいなら、いつでも来い！俺は逃げも隠れもしない！だがな、それはアル・ワースが平和になってからだ！お前は状況を読めない男じゃないだろ！」

ラゴウ「零……俺は……俺は……！」

ナイトメア・ゼフィルスは撤退した……。

アスナ「今ので分かってくれたかしら、ラゴウは……」

零「……わからない。だが、あいつなら大丈夫だ、そう信じる」

あいつは…俺のライバルだから…。

っ！この感覚は…！！

アルガイヤ・ノヴァとアマテラス・ツヴァイ、そして、ガルム、グレモリー部隊が現れた。

ネメシス「よう、頑張っている様だな、エクスクロス！」

ゼファイ「ネメシス！」

青葉「何をしに来やがった!?？」

ネメシス「何、もつとゲームを面白くしてやろうと思つてな。さて、エクスクロスを攻撃しろ！」

ギルガ「了解しました！」

オニキスも攻めてくるのか…！！

九郎「ネメシス達まで来るなんて…！！」

リデイ「このままではこちらが消耗するだけだぞ！」

バナージ「でも、相手をするしかありません！」

マリィダ「アンチスパイラルや宇宙怪獣、インベーター、ロボット怪獣もネメシス達を無視して、私達を狙ってきているぞ！」

アンジエロ「完全に我々だけを消す気なのか…！！」

フロントル「やるしかないだろう…！ 一体でも逃せば、こちらの負けなのだから…！」

弘樹「カルセドニー！ アル・ワースが滅んでもいいのか？！」

ギルガ「知った事じゃないよ。僕さえ生きていればね」

優香「何て奴なの…！」

メル「あなただけは…許しません！」

リン「…」

ネメシス「さあ、エクスクロス！ ゲームの再開だ！ どう俺達の相手をしつつ、この化け物供の相手をできるのかをな！」

零「そう何でもかんでもお前のゲームの台本通りに行くと思うなよ！ 俺達は何が何でもアル・ワースを救うんだ！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 零VSギルガ〉

ギルガ「今回は流石の君達も終わりだね！」

零「そうは行くかよ！ 俺達もアル・ワースも終わるつもりはねえ！ お前達を蹴散らして、アンチスパイラルの軍勢供をぶっ飛ばす！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

弘樹「カルセドニー、お前は本当のバカだな！」

ギルガ「君にバカと言われる筋合いはない！」

弘樹「確かに俺はバカだ！だが、お前は取り返しのつかないバカなんだよ！」

〈戦闘会話 優香VSギルガ〉

リン「…」

メル「待っていてね、リンちゃん！絶対に助けるから！」

ギルガ「リンちゃんを助けるか、アル・ワースを救うか…どつちかにしなよ。欲張り

だな」

優香「それぐらいの欲張りが丁度良いの！あなたなんかの言葉を聞く気はないわ！」

デイビウスホーププレイの攻撃でアマテラス・ツヴァイはダメージを負った…。

ギルガ「つ…流石だね、エクスクロス…！だが、君達は必ず、後悔する事になるよ。ネ

メシスを敵に回した事をね！」

そう言い残し、アマテラス・ツヴァイは撤退した…。

刹那「あいつとはわかり合うことは出来ないのか…」

弘樹「今までのカルセドニーの雰囲気と何か違う…？あいつ、何を考えているんだ…

？」

〈戦闘会話 零VSネメシス〉

ネメシス「気負つても無駄だぞ、零。アンチスパイラルを倒した所でアル・ワースは俺が滅ぼすんだからな」

零「そんな事はさせねえ！アンチスパイラルを倒して、お前も倒す！」

ゼファイ「それが私達の使命です！」

零「だから、今、お前に構っている時間はねえ！とつとと消えやがれ！」

〈戦闘会話 マリアVSネメシス〉

ネメシス「安心しな、マリア。お前達が死んだ後、ハデスもお前達の所へ送ってやる

よ」

マリア「私達が再開するのはアル・ワースですよ！あの世なんかじゃないわ！」

ネメシス「だったら、力づくでやってみるんだな！」

〈戦闘会話 シモンVSネメシス〉

ネメシス「螺旋王を倒したお前でも、流石にきついだろ、シモン？」

シモン「うるせえ！俺達の心は絶対に折れはしねえんだよ！」

ネメシス「ほう、だったら、その気合がどこまで保つか、試してやるよ！」

俺達はアルガイヤ・ノヴァにダメージを与えた…。

ネメシス「流石、ここまで戦ってきただけの事はあるな」

甲児「分かったら、さっさと消えろ！」

ネメシス「そうだな…。んじや、消える前にプレゼントだ！」

ネメシスが手をかざすと時空の裂け目から力が溢れ、中から大量のインベーダーと宇宙怪獣…そして、巨大なインベーダーが現れた…。

インベーダー「漸く蘇る事が出来たね、コーウエン君」

インベーダー「そうだな、ステインガー君」

MI X「インベーダーが喋った…!?？」

隼人「コーウエン博士とステインガー博士か……！」

竜馬「たくよ……！面倒な時に蘇りやがって……！」

弁慶「本当に面倒な奴等だな……！」

インベーター「そう言うな、ゲッターチーム」

インベーター「今度こそ、世界を我等の手にする！」

藤堂「さらに敵の数が増えるとは……！」

ミツク「待つて、また来るよ！」

クリム「ええい！加減を知らない奴等め!!？」

今度は大物ばかりの登場か……！」

キタン「大物ばかり、そろそろと来やがって！」

ダヤツカ「応戦するぞ！とにかくアル・ワースに近づけるな!!？」

ロージエノム「気をつけろ。面倒等な奴が来た」

インペリアル……エグゼブとペリアルか……！」

エグゼブ「面倒な事をしてくれる」

ジョー「エグゼブ！」

ゼロ「ペリアル！」

舞人「何をしに来た!!？」

エグゼブ「正義が力尽きる所を見物に来たのだ」

甲児「あいにくだったな！まだ俺達は欠片も諦めちやいないぜ！」

ワタル「そうだ、そうだ！どんな敵が来たって、跳ね返してやる！」

カイザーベリアル「アンチスパイラルはまだまだ来るぜ…。その全部と戦えるか？」

カミーユ「…」

アマタ「…」

エグゼブ「賢明な者は私達の言葉の意味がわかったようだな」

カイザーベリアル「そうだ。この果てのない戦いの結末は絶望しかねえんだよ」

青葉「何なんだよ、お前等は！異界人だから、アル・ワースが滅んでも平気だったの

かよ！」

エグゼブ「少しニュアンスが違うな。この場合、異界人であるのはそう関係ない。た

だ、こういう結末を迎える世界があっても面白いと考えただけだよ」

グレートマイトガイン「あの男の思考が…理解できない…」

舞人「パープルとは違う…。もつと俺達の想像を越えた何かがああのエグゼブにはある

…」

エグゼブ「さあ…エクスクロスよ！絶望の宴で踊るがいい！」

舞人「黙れ、エグゼブ！俺達は…！」

カイザーベリアル「お前達の限界なんて、所詮そんなもんだよ！」

ゼロ「ベリアル、てめえ……！」

ジャンボット「待て、ゼロ！アル・ワースの方向から何か来る！」

バトルボンバー「BD連合か！」

ガードダイバー「まさか、このタイミングでこちらに仕掛けてくるのか……？」

ミフネ「お、落ち着け！」

ホイ・コウ・ロウ「我々はお前達の加勢に来たネ！」

ビトン「あんな連中に滅ぼされるなんてたまったもんじゃないしね！」

エグゼブ「笑わせてくれる！焼け石に水どころか、マグマに水滴だ！お前達のような

雑魚が来た所で状況は何も変わらない！」

？「そんな事はない！」

今度は宇宙船が現れた……!!?

トオル「あの宇宙船って……！」

シリリ「しんのすけ、大丈夫か……？」

しんのすけ「シリリ！」

みさえ「どうして、シリリがアル・ワースに……!!？」

タミコ「私が連れてきたんです！」

しんのすけ「タミさん！」

タミコ「また、来ちやった！しんちゃん、私達には応援する事しか出来ないけど…応援する人を連れてきたわ！」

つばき「しんちゃん、皆さん！頑張ってください！」

みさえ「つばきちゃん！」

ミライマン「野原さん、私達は全員、皆さんの味方です！」

ひまわり「たいやー！」

ロボひろし「諦めるな、俺、みんな！みんなが勝つ事を信じているぞ！」

ひろし「俺…！」

マタ「しんちゃん達が私達を救ってくれたように！」

シロ「ワン！」

又兵衛「立て、しんのすけ！我々は応援する事しかできないが、それでもお前達の間となる！」

しんのすけ「オマタのおじさん！」

タミコ「エクスクロスの皆さん！私達は応援しています！」

カイザーベリアル「くだらねえ…。応援が何だってんだ！」

ウォルフガング「BD連合の真の支配者、エグゼブと暗黒のウルトラマン、ベリアル

…！ワシ達を甘く見るなよ！」

エグゼブ「目障りだ。お前達は消えろ」

インペリアルが彼等に攻撃を…！

シリリ「くっ…！」

タミコ「きやあっ！」

ミフネ「うおおっ！」

ホイ・コウ・ロウ「や、やっぱり、ムチャだったネ！」

ビトン「泣き言を言ってるんじゃないわよ！何もしないまままでやられるなんて絶対にイヤだつて覚悟を決めてきたじゃないの！」

又兵衛「そうだ！我々が引き下がってどうする…！」

舞人「やめろ、エグゼブ！」

しんのすけ「タミさん達に手を出すな！」

エグゼブ「黙れ、野原 しんのすけ。力なき者に存在する意味はないのだ。それから、

旋風寺 舞人…。悪を庇うというのかな？」

舞人「確かにあいつ達は悪党だった…！だが今は、世界のために力を貸してくれると言っている！ならば、俺達の仲間だ！」

しんのすけ「タミさん達は強いゾ！オラ達を何度もお助けしてくれる！友達でいてく

れるんだゾ！存在する意味がないわけないゾ！」

ホイ・コウ・ロウ「マイトガイン……」

ミライマン「しんのすけ君……」

ビトン「言ってくれるじゃないのさ、坊や達！」

つばき「ありがとう、しんちゃん」

ロボひろし「それでこそ、俺達の息子だぜ、しんのすけ！」

マタ「（しんちゃん、本当に君は凄いよ……）」

カイザーベリアル「めんどくせえ！なら、その雑魚共を使って、このピンチをひっくり返してみやがれ！」

ゼロ「……」

舞人「……」

サリー「舞人さん……！」

ウォルフガング「そうじゃ、お嬢さん！勝利の鍵は、お前さんだ！」

サリー「え……」

ウォルフガング「ワシの造ったイノセントウエーブ増幅装置を使うんじゃ！」

舞人「あれは魔のオーラへの対抗策じゃ……」

ウォルフガング「今はワシの言葉を信じるんじゃ！心から祈るんじゃ！想いを力に変

える事が出来るのはお嬢さんだけなのだ！」

サリー「は、はい…！ 舞人さん！ あなたに力を！」

グレートマイトガインに力が…！

舞人「力が…湧き上がってくる…。くじけそうだった心が勇気と希望で満たされていく…」

エグゼブ「まさか…！」

シーラ「そのまさかだ、闇の使徒よ」

シヨウ「シーラ・ラパーナ！」

アイラ「サリーさんの清らかな想いが、力を生み出したのです」

シーラ「そう…。彼女は、この世界の真理にたどり着いたのだ」

チャム「真理って…」

シーラ「このアル・ワースは…意思こそが力を持つ世界…」

ジユドー「何だって!?？」

ゴークアイエロー「それって願い事が何でも叶うって事!?？」

龍王丸「欲望から生まれた想いでダメだ。心の底から湧き上がる強く純粋な想いだけがこの世界の理を変える」

アマリ「今、わかりました。それこそが…」

ホープス「その通りです。ドグマも、意思による力の一つなのです」
つ……！俺にも力が……！

零「力が……溢れてくる……！」

ネメシス「俺の力とオドの力は……対を為す存在……。だが、零の身体の中で共鳴を起し、混ざり合ったのか……？」

マリア「もしかして、レイヤや私とハデスの想いの力が零に力を与えたの……？」

零「今の俺は……負ける気がしねえ！」

弘樹「全く……何処まで強くなるんだよ、お前は！」

リリーナ「マリーメイアが言っていたのは、この事だったのですね」

ラクス「素晴らしい力を感じます！」

ホープス「智とは知る事、感じる事、確かめる事……。何もない無の中でエンデが認識する事で世界が生まれた……」

アマリ「アル・ワース創世の神話……。それは真実を示していた……」

ホープス「そしてドアクダーは、その体現者であるシーラ様達を求めたのでしよう」

ウォルフガング「イノセントウエーブが生み出す奇跡……！それは、このアル・ワースを存在させる力そのものだ！その力を使いこなせた時、人間は世界を変える事も出来るのじゃ……！」

舞人「ウォルフガング！お前達は、それを伝えるためにここに来たのか！」
ホイ・コウ・ロウ「そういう事ネ！」

ミフネ「見たか、エグゼブ、ベリアル！我輩達は決して雑魚ではない！」

ビトン「どう？！？お望み通り、状況をひっくり返してやったわよ！」

エグゼブ「おのれ……！」

カイザーベリアル「舐めた真似をしやがって……！」

インベーター「フン、想いの力が何だ！」

インベーター「ならば、その想いの力の根源を潰せばいい！」

インベーターの一体がメガファウナ目掛けて、突っ込んだ……？！？

舞人「サリーちゃん！」

？「させるか……！」

突如、現れたナイトメア・ゼフィルスがメガファウナに接近したインベーターを倒した。

零「ラゴウ！」

ネメシス「敗者が何しに来たんだよ、ラゴウ？」

ラゴウ「……笑いたければ、笑うがいい。一度は堕ちた人間だ。だが、俺はお前に勝つ目的は変わらない！」

零「お前…」

ラゴウ「お前に勝つのはこのアル・ワースでないという意味がないんだ！だから、俺も戦う！そして、ギルガの目を覚ませ…ネメシスを倒す！」

零「…歓迎するぜ、俺の永遠のライバルさんよ！」

ラゴウ「ああ…！」

ウオルフガング「ワシ達も戦うぞ、エクスクロス！力はない弱くとも、世界を…生命を守る事は出来る！」

タミコ「…そろそろ時間、か…」

シリリ「そうか…」

タミコ「元の時代に戻っても、私達は皆さんが勝つ事を信じてます！」

宇宙船は消えた…。恐らく、元の時代に戻ったのだろう…、

しんのすけ「ありがとう、タミさん、シリリ、つばきちちゃん、ミライマン、マタ、オマタのおじさん…」

シーラ「エクスクロスの皆さん…。私達が、この力を発現させたのはきつと弱き者だったためでしょう」

アトラ「私達はみんなのように戦う力がありません…。だから、願ったんです」

マリナ「平和を…大切な人達の無事を…」

クーデリア「それは愛と呼ばれる想いです」

万丈「力がみなぎってくる！」

ヒイロ「機体のダメージまで回復していく…」

三日月「これがアトラ達の想いの…意思の力…」

マスターテリオン「それが、このアル・ワースを存在させているのか…」

エグゼブ「下らん！何が愛だ！」

カイザーベリアル「そんなもの必用ねえんだよ！」

シモン「お前達にはわからねえだろうな！愛する事、愛される事が力を生む！そして、

その力がドリルを回すんだよ！！？」

ロージエノム「…ついに、その門を開けるか…」

ダヤツカ「超銀河ダイグレンがシモンに引っ張られる…」

リーロン「こうなったら、シモンに全部お任せでいきましょう！」

グレンラガンが囲まれた…！

ヴィラル「シモン！囲まれたぞ！」

シモン「構うもんか！やるぞ！」

グレンラガンはアークグレンラガンとなり、超銀河ダイグレンと合体して、攻撃を仕掛けた…。

シモン「どんなデカブツだろうと、俺のドリルがブチ抜く！」

ヴィラル「こちらは気にせず、好きなだけやれ！」

シモン「そうさせてもらう！」

超銀河グレンラガンはフリドリライズで敵を攻撃し、両肩のギガドリルを連結させ、右手に装着した。

シモン「超銀河ツ！ギガア！ドリルツ！ブレイクウウウツ！！？」

ASII「…」

超銀河ドリルブレイクを受けて、敵は爆発した…。

シモン「友の想いを、この身に刻み！無限の闇を光に変える！天上天下一機当神！超銀河グレンラガン！！？人間の力！見せて！やるぜえええつ！！？」

ワタル「やったぜ、シモンさん！！？」

青葉「え…？え…？ええつ！！？超銀河ダイグレンが変形した！！？」

ヒナ「そんな事…出来るものなの！！？」

アマタ「グレンラガンだからね」

ミコノ「…」

ゼシカ「…」

カグラ「いや、理由になってねえって…。それからミコノとドン底女は固まってん

じゃねえ！」

リーロン「全然アリよ！全ては超銀河ダイグレンのコアになったグレンラガンが生み出した螺旋力によるもの……つまり、これも人間の意思の力よ！」

エグゼブ「バカな……！こんな事は有り得ない！」

カイザーベリアル「こんなふざけた事……認めるはずねえだろ！」

ヴィラル「往生際の悪い悪党がいるぞ、舞人、ゼロ」

舞人「そうですね、ヴィラルさん！」

ゼロ「諦めろ、ベリアル、エグゼブ！これが俺達の力だ!!？」

エグゼブ「ちいっ！だから、ドリルは嫌いなのだ！」

カイザーベリアル「いいぜ！これが終わっても絶望が待っている事を俺が教えてやる！」

インペリアルとカイザーベリアルは撤退した……。

ジョー「無様だな、エグゼブ……」

舞人「サリーちゃん！君達の想いが、俺達に力をくれた！」

ゼロ「それこそが僕達の……いや、世界の希望の日だ！」

アンジュ「最高の応援を受けたんじゃ、負けられないね！」

ネメシス「……また強くなったか、エクスクロス。じゃあ、俺はここらでお暇させても

らうぜ」

零「覚悟しておけ、ネメシス！全て終わったら、お前とも決着をつける」

ネメシス「そうだな、零」

ラゴウ「ネメシス、戻ったら、ギルガに伝える。お前の目は俺がかならず覚まさせる
とな」

ネメシス「覚えていたら、伝えといてやるよ。じゃあ、あばよ！」

アルガイヤ・ノヴァは撤退した…。

エレクトラ「次元境界線の歪みが収まっていきます！」

ネモ船長「これも世界の存続を願う皆の想いの力か…！」

倉光「つまり…」

ドニエル「これ以上、増援はないって事だ！」

ルルーシュ「攻勢に出るぞ！一気に敵を押し返す！」

インベーター「まだ我々がいる事を忘れるなよ！」

インベーター「今こそお前達を倒し、世界を…！」

號「もうお前達の存在は眼中にない」

インベーター「何だと…!?？」

隼人「全力でやれ、竜馬！」

竜馬「おう！終わらせてやるぜ、インベーター共！」

ノリコ「ここで宇宙怪獣との戦いも終わらせるわ！」

シモン「アンチスパイラル！俺達は誰一人諦めちやいねえ！見せてやるぜ！俺達の生命の力を！！？」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 ヴォルフガングVS初戦闘〉

イツヒ「ヴォルフガング様、やりましょう！」

リーベ「我々は負ける気はありません！」

ドイツヒ「我々の力、見せてやりましょう！」

ヴォルフガング「そうじゃな、イツヒ、リーベ、ドイツヒ！力を合わせていくぞ！」

〈戦闘会話 ビトンVS初戦闘〉

オードリー「カトリーヌ様、ここまで来たらやりきりましょう！」

ビトン「ええ！私達の覚悟、見せてあげるわ！」

〈戦闘会話　ホイ・コウ・ロウVS初戦闘〉

チンジャ「ホイ様、大丈夫ですか？」

ホイ・コウ・ロウ「大丈夫ネ！このホイ・コウ・ロウの力を見せてやるネ！」

〈戦闘会話　ミフネVS初戦闘〉

ミフネ「人間の底力、味あわせてやる！男は黙って…攻撃開始！」

〈戦闘会話　ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「ベリアル…これが終わった後にでもケリをつけてやる…！だから、待っていやがれ！」

〈戦闘会話　零VS初戦闘〉

ゼフィ「パパ、私達はここで立ち止まるわけにはいきませんよ！」

零「そうだな、ゼフィ！（ネメシス…俺達は絶対に負けねえ…！アンチスパイラルにも、お前にもな…！）」

〈戦闘会話　ラゴウVS初戦闘〉

ラゴウ「零は俺が倒す……その為にもアル・ワースは救つてみせる！」

〈戦闘会話 竜馬VSインベーター〉

インベーター「ゲッター・ロボ！今度こそ、倒す！」

インベーター「覚悟しろ！」

竜馬「覚悟するのはお前等の方だ！今度こそ、てめえ等を全滅させてやるぜ！」

〈戦闘会話 號VSインベーター〉

インベーター「真ドラゴン……今度は破壊させてもらう！」

インベーター「死ね！殺してやる！」

凱「簡単に死ぬわけにはいかねえよ！」

溪「何度でも倒してあげるよ！」

號「行くぞ、みんな！インベーターとの戦いは真ドラゴンでケリをつける！」

真ゲッターの攻撃に巨大インベーターはダメージを負った。

インベーター「何だと……!?？」

インベーター「何故だ：我等が負けるわけはないはずなのに！」

竜馬「諦めが悪いのは相変わらずの様だな……！」

インベーター「黙れ、流 竜馬！」

インベーター「我等は負けん：負けないのだ！」

竜馬「だったら、終わらせてやる！行くぜ、號！」

號「ああ！受ける、ゲッターの力を！」

真ゲッター1と真ドラゴンが巨大インベーターに攻撃を仕掛けた……。

竜馬「見せてやるぜ、ゲッターの力をな！」

號「六人の力を合わせるんだ！」

溪「了解！」

凱「おああああああっ!!？」

真ドラゴンは真ゲッター1にゲッターエネルギーを集中させた。

弁慶「す、凄えエネルギーだ……！」

隼人「フン、機体が保つかどうか……！」

竜馬「死なば諸共よ！」

ゲッターエネルギーの影響で真ゲッター1のゲッタートマホークが巨大化した……。

竜馬「ゲッターアアアアトマホオオオオオオク!!？おおおりやああああっ!!？」

そして、巨大化したゲッタートマホークを振り下ろし、巨大インベーターを一刀両断した…。

インベーター「こ、これで終わったと思うなよおツ!!?」

インベーター「我が種族は永遠なりイイイツ!!?」

一刀両断された巨大インベーターはダメージを負い…。

インベーター「ば、バカな…」

インベーター「我等がこんな所でええええつ!!?」

爆発した…。

隼人「コーウエン博士とステインガー博士…やはり、変わる事はできなかつたか…」

竜馬「これがあいつ等の運命だ。ゲッター線に関わつたな…」

何とか全ての敵を倒した…。

ヴイラル「終わったか…」

シモン「だが、ニアの行方もアンチスパイラルの存在も何もわかつていない…」

ヴイラル「どうする…?」

シモン「ならば、あの歪みの向こうに打って出る…!」

ゼロ「!待て、シモン!」

どうしたんだ、ゼロの奴…?

ゼロ「ベリアルからの…ウルトラサイン…!?？」

ジョーイ「ウルトラサイン…？」

ジャンボット「ウルトラ戦士が通信用に使う信号だ。基本的にウルトラ戦士にしか見る事が出来ないんだ」

ネモ船長「お前達を潰す…。どうやら、ベリアルは本格的にこちらを潰す気になったようだな」

グレンファイヤー「ネモのおっさん、読めるのか!?？」

ミラーナイト「何を言っているのですか、別世界とはいえ、ネモ船長もM78星雲の出身ですよ」

グレンファイヤー「あ、そうか！」

ジャンナイン「どうする、ゼロ？」

ゼロ「決まっているぜ！ベリアルが挑んでくるってんなら、返り討ちにしてやる！いいよな、シモン？」

シモン「ああ！歪みに行くのはその後だ！」

ゼロ「すまねえな。じゃあ、ネモ船長！」

ネモ船長「うむ。我々は今からベリアルが指定した場所へと向かい、ベリアル銀河帝國を壊滅させる！」

俺達はそれぞれの艦へ戻った…。

舞人「ありがたい、ヴォルフガング。お前のおかげで俺達は再び立ち上がろう事が出来た」

ヴォルフガング「フツ、お安い御用だ」

ホイ・コウ・ロウ「ちよ、ちよつと待つネ！」

ビトン「私達の事を忘れているわよ、坊や！」

ミフネ「我輩達も生命懸けだったのだぞ！」

舞人「勿論、忘れていないさ。お前達にも感謝している。ホイ・コウ・ロウ、カトリーヌ・ビトン、シヨーグン・ミフネ。これからは俺達は仲間だ」

ホイ・コウ・ロウ「お礼を言われるなんて、随分と久しぶりネ…」

ビトン「そうね、それに悪い気はしないわ！」

ミフネ「いい事をする、心が気持ちよくなるものだな！」

ヴォルフガング「という事だ。ワシ等も最後まで戦う事になった。足手纏いになるつもりはない。よろしくな」

舞人「ああ、よろしく頼むぞ！みんな！」

しんのすけ「タミさん、シリリ、オマタのおじさん、マタ、ミライマン、つばきちゃん、ロボ父ちゃん…」

みさえ「みんな、私達を応援してくれているのね」

シロ「ワン！」

ひまわり「たや！」

ひろし「勝つぞ、しんのすけ！応援してくれているみんなの為にも！」

しんのすけ「ブ・ラジャー！」

零「ラゴウ……」

ラゴウ「零、おまえの気が済むまで俺を殴れ……。俺はアル・ワースの多くの生命を見逃そうとしたのだからな……」

零「……そうか、なら……。俺が殴るのは筋違いだぜ」

ラゴウ「何……？」

零「お前のその罪はアル・ワースを救う事で償え。それがお前に出来る償いだと、俺は思うぜ」

ラゴウ「零、すまない……」

零「その代わり、罪を償えたら、いくらでもお前との決闘を受けてやるぜ！」

ラゴウ「その時まで、俺は強くなるつもりだ」

零「バーカ、簡単に負けるかよ」

メル「零さんって、相手を惹き入れるなにかを持っていきますよね」

アスナ「確かに！記憶が改竄されていたとはいえ、敵だった私とメルもエクスクロスに引き入れたのは零だし…」

アマリ「それが零君の魅力なのでしよう」

ゼファイ「はい、パパの強さです！」

マリア「（ハデス…。私達の息子は大きくなっているわよ。だから、あなたにも必ず見せて上げる…。零の姿を…）」

第76話 運命のしづく

―新垣 零だ。

みんなはそれぞれベリアル銀河帝国との決戦に向けて、準備をしていた。

ゼロ「…」

ゼロの奴…ずっと精神統一をしているな…。

ディオ「ゼロはずっとあの調子だ」

青葉「流石はレオの弟子だ…貫禄があるな」

一夏「青葉、俺も師匠の弟子だけど、どうだ？」

青葉「う、うん。いいんじゃないか？」

一夏「素直にダメって言ってくれよ…」

タルジム「次の戦いは宿敵との戦いなんだろう？」

ラーシャ「その前に集中したいんだと思うよ」

アルフリード「だが、今の彼はウルティメイトイージスという力を失っていると聞い

たが…」

ゼロ「ウルティメイトイージスがあろうとなかろうと関係ねえよ」

ヒナ「ゼロさん…」

ゼロ「俺はベリアル野望を叩き潰す…。ベリアルにそう言ったからな。あいつが何度蘇ろうと、俺は負けるわけにはいかねえんだよ」

ビゾン「お前の覚悟はわかった」

サラマンディーネ「ゼロ様、私達も全力であなたのサポートをします」

ケロロ「ベリアルを野放しにしていたら、ペコポン侵略を落ち着いて出来ないでありますからな！」

ゼロ「ほう、ケロロ。もし地球を侵略するってんなら、俺が相手になるからな」

ケロロ「ケ、ケロー!??じよ、冗談きついであります！」

夏美「自業自得よ、ボケガエル」

冬樹「これじゃ、軍曹も迂闊に地球を侵略出来ないね」

一夏「それに、下手したらエクスクロス全員でケロロ達を止める事になるかもな」

ギロロ「さ、流石にそれは…」

ケロロ「考えたくねえ…」

ダークケロロ「(ベリアルの強大な力…キルルも引き寄せられるかもしれないな…)」

もう少して、ベリアル達と接触する…。負けるわけにはいかねえ…!

ーベリアルだ。

「どうやら、俺の送ったウルトラサインはゼロ達に届いたようだな。

ネメシス「それにしても、まさかあんたから挑戦状を送るとはな」

アイアロン「貴様、陛下に無礼だぞ！」

カイザーベリアル「いい。こいつには力を提供してもらっているからな」

「ダークゴーネ」ですが、ネメシスさん。あなたはアル・ワースを滅ぼすと聞きましたか？」

ネメシス「ああ、そうだ。だが、俺と雌雄を決するのはあんた達か、エクスクロスか。それともアンチスパイラルか、魔徒教団か。今からが楽しみだ」

カイザーベリアル「へっ、エクスクロスを潰した後、アンチスパイラルを倒し、お前を倒してやる。首を洗って待っている」

ネメシス「なら、俺はここでお暇させてもらうぜ。あんたに言われた代物は持つてきたからな」

カイザーベリアル「礼は言わねえぜ」

ネメシス「構わねえよ。俺は新たなあんたの力を拝見させてもらうだけだからな」

カイザーベリアル「ああ、望み通り、見せてやるよ。俺様の力をな」

ネメシス「楽しみにしているぜ、陛下さんよ」

ネメシスは立ち去った…。

ゼロ：「今度こそ、この力でお前を…お前の仲間を含めて、根絶やしにしてやる…！」

第76話 運命のしづく

俺達はベリアル達の指定した場所へと来て、出撃した…。

ジャンナイン「間も無く、ベリアル銀河帝国と接触するな…」

ゼロ「ベリアルとの戦いの前にみんなに伝えたい事がある」

刹那「どうした、ゼロ？」

ゼロ「みんなにはすまないと思っっているんだ」

タスク「え…」

ゼロ「俺はベリアルと二度と戦い…そして、二度目で漸く倒した。だが、ベリアルは蘇り、今度はこのアル・ワースを巻き込んだ…。ウルトラマンを代表して謝る。」

すまない。それにシモンはニアを救い出せるチャンスだったのに……」

シモン「気にするなよ、ゼロ！」

ワタル「ゼロだって、アル・ワースを平和にするのを手伝ってくれているじゃない！」
ネモ船長「それに君の責任ではない」

舞人「それにアル・ワースに元の世界の戦いを持ち込んでいるのは君の世界のベリアルだけじゃないしな」

ゴーカイレッド「もうベリアルはお前達の敵だけじゃねえんだ。俺達も力を貸すぜ」

ゼロ「……たく、本当に気のいい奴らだぜ。まあ、ありがとうよ。本当に仲間ってのはいいものだな」

レイ「大怪獣」「ああ。ウルトラマンとか、レイオニクスとか、怪獣とか、地球人とか、獣人とか関係ない。俺達はみんな仲間だ」

グランデ「いい事言うね、レイ」

シモン「だからよ、ゼロ。俺達みんなでニアを取り戻すぞ！その為にもベリアルを倒す！」

ゼロ「おう！」

フアサリナ「敵部隊の反応を確認しました」

ミハエル「来たか……！」

レギオノイドやダーククロス部隊とアイアロン、ダークゴーネ、カイザーベリアルが現れた。

カイザーベリアル「逃げずによく来たな、ゼロ、エクスクロス！」

ゼロ「それはこっちの台詞だぜ、ベリアル！」

カイザーベリアル「ドアクターや闇の帝王、ゴゴールが倒れた今、俺達がお前等を倒す！」

ジョー「エグゼブの姿はない…？」

舞人「ベリアル、エグゼブは何処だ！」

カイザーベリアル「さあな、あの野郎は何かの用があるとか言つて、俺様達と別れたぜ」

舞人「(ベリアルと別行動をとつて、何をするつもりなんだ、エグゼブは…?)」

ダークゴーネ「さて、ここであなた達との戦いも終わりにさせましょう」

アイアロン「お前達を倒し、全ての世界はベリアル陛下のものとなる！」

グレンファイヤー「そうはさせるかよ！」

ミラーナイト「舞人ではありませんが言わせてもらいます。悪は必ず、滅びるのです！」

カイザーベリアル「へっ、なら…俺達、悪を倒してみろよ！」

ゼロ「言われずともやってやる！覚悟しろよ、ベリアル！」
俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 シモンVS初戦闘〉

ヴィラル「シモン、こいつ等に遠慮はいらんぞ！」

シモン「わかっている！てめえ等をぶっ飛ばして、俺はニアを迎えに行くんだ！」

〈戦闘会話 ケロロVS初戦闘〉

ケロロ「お前達に侵略者の意地というものを見せてやるであります！」

クルル「クーククツ！珍しくやる感じがやねえか」

ドロロ「ゼロ殿に感化されたのでござるな！」

ギロロ「感化されてはダメな相手だがな…」

〈戦闘会話 ダークケロロVS初戦闘〉

ダークケロロ「ベリアルあの余裕…まだ何かあるな。気をつけて、かからねば…

！）」

〈戦闘会話　ゼロVS初戦闘〉

ゼロ「退きやがれ！他の奴等には興味はねえんだよ！ベリアル、待っているよ！容赦なくぶん殴ってやるからな！」

〈戦闘会話　ゼロVSアイアロン〉

アイアロン「陛下の下へはいかせん！」

ゼロ「だったら、お前をぶっ飛ばしてでも俺はベリアルを倒す！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSアイアロン〉

ミラーナイト「あなたの防御力並みにしぶとい方ですね」

アイアロン「俺の防御力も強化されている！前みたいに行くとは思うなよ！」

ミラーナイト「何度やっても同じです。あなたは…鏡に翻弄される運命なのですか
ら」

ミラーナイトの攻撃でアイアロンはダメージを負った…。

アイアロン「バカな…俺は…また敗れるのか…！」

アイアロンは爆発した…。

ミラーナイト「ゼロがベリアルとの因縁を着けるように私もあなたとの因縁をつけないければなりませんでしたからね」

〈戦闘会話　ゼロVSダークゴーネ〉

ダークゴーネ「ウルトラマンゼロ！陛下には指一本、触れさせるわけにはいきません！」

ゼロ「悪いが、触れさせてもらうぜ。お前を倒してな！」

〈戦闘会話　ジャンボットVSダークゴーネ〉

ダークゴーネ「あの時のようにはいきません！あなたのデータは予測済みです！」

エメラナ「私とジャンボットの力はデータでは予測不可能です！」

ジャンボット「姫様……」

ダークゴーネ「では、エスメラルダの姫君ごとそのガラクタを破壊します」

ジャンボット「姫様は私が守る！これで終わりにさせるぞ、ダークゴーネ！ジャン、ファイト！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSダークゴーネ〉

タイラント「キヤアアアン！」

ダークゴーネ「キール星人のレイオニクス、役立たずのタイラント！あなた方は私、直々に始末します！」

EXレッドキング「グルルルツ…！」

グランデ「おおいおい、レッドキングも忘れてやるなよ！俺達、全員で相手をしてやるからよ！」

ジャンボットの攻撃でダークゴーネはダメージを負った…。

アイアロン「わ、私は…ベリアル陛下と共に…」

ジャンボット「いいや、お前は終わりだ、ダークゴーネ」

ダークゴーネ「うわあああああつ!!？」

ダークゴーネは爆発した…。

エメラナ「お眠りください、ダークゴーネ…」

ジャンボット「(ナオ…) 私達はやったぞ…」

〈戦闘会話　ゼロVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「ゼロ！今日こそてめえを倒し、光の国を再び、壊滅させてやる！」
ゼロ「そんな事、させるかよ！こっちこそ、てめえの顔はもう見飽きてんだよ！お前とのケリは俺がつける！」

カイザーベリアル「そうだな、俺もお前とはケリをつけたいと思っただよ！」
ゼロ「見せてやる…俺達の正義の光をな！」

〈戦闘会話　グレンファイヤーVSカイザーベリアル〉

グレンファイヤー「覚悟しやがれよ、ベリアル！俺の炎で燃やし尽くしてやる！」

カイザーベリアル「鬱陶しい！暑苦しいか

近づくんじやねえ！」

グレンファイヤー「悪いな、俺は炎の戦士だ！暑いのは我慢しやがれ！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「ミラーナイト、お前ならもう一度、俺様の部下として働かせてやつてもいいぜ」

ミラーナイト「それは遠慮します。もう二度と姫様やゼロ達に迷惑をかけないために
もー！」

〈戦闘会話 ジャンボットVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「エスメラルダの皇女が相手かよ。姫如きが俺様に勝てると思つて
いるのかよ？」

ジャンボット「姫様の侮辱は私への侮辱だ！」

エメラナ「ベリアル、今度は私が…いや、私達が、あなたを倒します！」

〈戦闘会話 ジャンナインVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「ビート・スターが作ったガラクタロボットか」

ヒュウガ「あまり、ロボットを甘くみていると、痛い目を見るぞ！」

ジャンナイン「僕はお前との因縁はない…。だが、ゼロ達の敵ならば、僕の敵でもあ
る！そして、このアル・ワースを争いに包むと言うのなら、倒す！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSカイザーベリアル〉

レイモン「これで終わりだ、ベリアル！」

カイザーベリアル「もうお前には用はねえよ、地球のレイオニクス！お前はエクスクロスと共に滅びやがれ！」

レイモン「滅ぼさせはしない…。お前を倒し、今度こそ、レイオニクスとの戦いを終わらせてやる！」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSカイザーベリアル〉

カイザーベリアル「キール星人のレイオニクス、俺様の部下となるなら、お前は見逃してやってもいいぜ」

グランデ「悪いが、俺は自由気ままにやるのが一番なんだよな。だから、お前の部下になるつもりはねえよ！」

ゼロの攻撃でカイザーベリアルにダメージを与えた…。

カイザーベリアル「ちいっ…！」

ゼロ「これで終わりだ、ベリアル！」

カイザーベリアル「はっ！おめでたい奴等だな。お前達に俺様の新しい力を見せてやるよ！」

ベリアルが移動し、移動した場所にあったものは…。

ラカン「あれは……！」

サラマンディーネ「ドラグニウム……!!？」

大量のドラグニウムだった……。

ヤザン「ヴィルキスとかのエネルギーになっているあれか！」

アンジユ「どうしてあなたがドラグニウムを持っているのよ!!？」

カイザーベリアル「ネメシスだ。あいつに提供してもらってな！」

エンブリヲ「何だと……!!？」

零「あいつ……！厄介な奴に面倒な物を渡してくれたな……！」

カイザーベリアル「……おっと、この力に引き寄せられたか」

キルルが現れた……!!？」

キルル「キルキル……」

ケロロ「キルル！」

ダークケロロ「やはり、来たか！」

カイザーベリアル「人造ケロン人、お前にも見せてやるよ……俺様とドラグニウムの力をな」

ナオミ「何をするつもりなの!!？」

カイザーベリアル「まあ、見てな！うおおおおおっ!!？」

ベリアルは大量のドラグニウムを取り込み、紫の光に包まれ、光が消えると、ベリアルは巨大な怪獣にへと変貌していた。

ギロロ「な、何だ、あれは!?？」

タママ「巨大な…怪獣です…！」

ドロロ「あれは…ベリアルなのでござるか!?？」

クルル「クーククツ。あいつ、ドラグニウムを取り込んで、そのエネルギーを得やがったな」

ミラーナイト「あれは…アークベリアル…!?？」

アークベリアル「そう、俺様は…アークベリアル…。ドラグニウムのエネルギーを得た姿だ！」

ゼロ「姿が変わろうが俺達は負けねえ！」

キルル「…」

夏美「キルルもベリアルを無視して、私達を攻撃するみたいね…！」

シヴァヴァ「だったら、キルルも倒してやるぜ！」

ドルル「任務再開」

アークベリアル「今に見ていやがれ！バラバラにしてやるぜ！」

俺達は戦闘を再開した…。

アークベリアルが強敵の上にキルルの相手までなると……!

ゼロ「ぐっ……!」

アークベリアル「どうした、ゼロ!俺様とキルルの力に手も足も出ないか!」

ゼロ「まだまだ……!諦めるわけにはいかねえ……!」

アークベリアル「お前達、ウルトラ一族の悪い所は諦めの悪い所だったな!なら、終わりにしてやるぜ!」

アークベリアルはゼロに攻撃を仕掛けた……。

アークベリアル「これで終わりだ、ゼロ!」

アークベリアルは口にエネルギーを蓄積させる。

アークベリアル「粉々になりやがれ!」

そして、破壊光線を発射し、ゼロはそれを受ける。

ゼロ「グアアアアアツ!!?」

破壊光線を受けたゼロは大ダメージを負った……。

刹那「ゼロ!」

ノブナガ「あの光線……何という威力だ……!」

ゼロのカラータイマーが鳴り始め……。

アークベリアル「あばよ、ゼロ」

ゼロ「俺達は…負け…！」

カラータイマー止まり、光が消えるとゼロは光の粒子となって、消滅した…。

一夏「ゼ、ゼロ…？ゼロ！」

ベルリ「そんな、ゼロが…！」

アークベリアル「フハハハハ！ついに俺様はゼロを倒した！」

アマリ「ゼロさんが…負けるなんて…！」

アルト「認めねえ…認めねえぞ、そんなの！」

アークベリアル「だが、現実だ。ゼロは俺様に負け、消滅した…」

マサキ「…」

アーニー「…」

零「ゼロ…」

アークベリアル「安心しろ、エクスクロス。お前達もすぐにゼロの後を追わせてやる
ぜ！」

キルル「キルキルキル…！」

グレンファイヤー「ふざけんじゃねえ…」

アークベリアル「あ？」

グレンファイヤー「ふざけんじゃねえぞ、この野郎！ゼロは死んでねえ！あいつは…あいつは、簡単に死ぬような奴じゃねえんだよ！」

アークベリアル「相変わらず、暑苦しい奴だぜ…。なら、そのゼロを出してみろよ！」
グレンファイヤー「ぐっ…！」

竜馬「グレン…」

ケロロ「…」

アークベリアル「結局、俺様に逆らう者は死ぬ運命なんだよ！」

ケロロ「…お前に逆らわないなんて、冗談きついでありますな！」

アークベリアル「…おいおい、ケロン人がでしゃばるなよ」

ケロロ「フン、お前こそ、小物がでしゃばるなであります！」

グレンファイヤー「ケロロ…」

アークベリアル「何だと…？」

ケロロ「大皇帝とか言われているけど、二度もゼロに負けているよね？ たった一回、ゼロに勝てたぐらいで威張るなんて、笑わせてくれるであります！」

アークベリアル「…調子に乗んなよ、てめえ！」

アークベリアルはゴッドケロンに攻撃した。

ケロロ「ぐっ…！」

冬樹「みんな！」

夏美「バカ、何あいつを挑発してんのよ！」

ギロロ「止めるな、夏美！」

夏美「ギ、ギロロ……」

ケロロ「お前はまたゼロ殿に負ける！それは絶対に防げないであります！」

アークベリアル「てめえ、まだ言いやがるか！」

クルル「……クークク！見つけたぜ、隊長……。微かだが、ゼロの光が残っているぜ」

ケロロ「位置を設定するであります！」

タママ「了解です！」

ドロロ「これなら、いけるでござるよ、隊長殿！」

ケロロ「よし……！」

アークベリアル「何をするつもりだ!?!？」

ケロロ「ゼロ殿の光は……絶対に消させるわけにはいかない！ケロンスターの輝きを見

よ！」

ゴッドケロンのケロンスターから凄まじい光がある場所に放たれた。

キルル「……！」

アークベリアル「な、なんだ……この光は……!?!？」

ケロロ「ゼロ殿、我輩達の光を受け取るであります！」

「ウルトラマンゼロだ。

俺は…負けたのか…。ペリアルなんか…！

っ…!!? 何処かから、光が…!!?

光を受けて、俺のエネルギーは回復した…。

ケロロ「ゼロ殿！」

ゼロ「この声…ケロロか！だが、何処に…!!?」

? 「ゼロ…」

ゼロ「！キ、キングの爺さん！」

キング「どうやら、光を取り戻せた様だな」

さらに、キングの爺さんの後ろに二人の巨人が現れる。

ノア「ウルトラマン」「…」

レジェンド「…」

ゼロ「ウルトラマンノア…ウルトラマンレジェンド…」

キング「ゼロ、お前に我々の力を託す…。必ずや、アル・ワースを救え」

ゼロ「…ああ！任せろ！」

キング「…さあ、行け、ウルトラマンゼロ！」

キングの爺さん、ノア、レジェンドは俺に光を託してくれた…。

ゼロ「うおおおおおつ!!？」

俺は巨大な光に包まれた…。

―新垣 零だ。

巨大な光が消えると、そこからゼロが現れた。

ゼロ「ゼロ殿！」

ゼロ「ゼロ、お前達のお陰で助かったぜ！」

アークベリアル「バカな！お前の光は失われたはずだ！」

ゼロ「光は…何度でも輝く！誰かが照らし続けてくれる限りな！それを教えてやる

！」

ゼロはアークベリアルに攻撃を仕掛けた…。

ゼロ「ベリアル、お前の好きにはさせないぜ！ウルティメイトイージス！」

ゼロはウルティメイトイージスを纏い、ウルティメイトゼロソードでアークベリアルを何度も斬り裂き、ソードレイ・ウルティメイトゼロで叩き斬る。

ゼロ「これで決める！」

ウルティメイトイージスをウルティメイトゼロモードからファイナルウルティメイトゼロモードへと変形させ、超弓状に変え、エネルギーを蓄積させる。

ゼロ「ベリアル、受けてみる！これが、俺達の…！」

そして、ゼロはウルティメイトイージスを矢の様に撃ち出した…。

ゼロ「光だ!!?」

イージスはアークベリアルに命中すると、回転し、アークベリアルを貫いた…。

アークベリアル「ゼロオオオオオオツ!!?」

ファイナルウルティメイトゼロを受けたアークベリアルは大ダメージを受け、ウルティメイトイージスはウルティメイトブレスに戻った…。

アークベリアル「ぐおおおっ…！」

ミラーナイト「イージスの力が戻りましたよ！」

グレンファイヤー「やったぜ、ゼロ！」

サラマンディーネ「ああ…あれがノア様がお与えになったウルティメイティージェスの力…」

ヒルダ「ドラ姫様はメロメロだな」

アークベリアル「この…ふぎけやがって！まだ、終わりじやねえ！」

ジャンボット「相変わらず、しぶといやつだな」

ケロロ「ならば、キルルと共に終わらせてやるであります！」

ゼロ「覚悟しやがれ、ベリアル、キルル！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 ケロロVSキルル〉

ドロロ「キルルが来るでござるよ、隊長殿！」

ギロロ「奴との因縁は俺達、自らがつけるぞ！」

タママ「こつちも準備万端です！」

クルル「いつちよやろうぜ、隊長」

ケロロ「了解であります！キルル、お前は我輩達が倒すであります！」

〈戦闘会話　ダークケロロVSキルル〉

ダークケロロ「キルル、吾が責任を持って眠らせてやる。お前を二度と蘇らせぬ為にもな！」

〈戦闘会話　ゼロVSキルル〉

ゼロ「お前に人間を滅ぼさせはしねえぞ、キルル！俺が銀河の彼方まで吹っ飛ばしてやるぜ！」

ゴッドケロンの攻撃でキルルはダメージを負った…。

キルル「キルキル…」

キルルは爆発した…。

夏美「キルルを倒したわよ！」

シヴァヴァ「後はベリアルだけだぜ！」

アークベリアル「キルルを倒したぐらいでいい気になってんじやねえぞ！」

ゼロ「お前も倒す！それがウルトラマンとしての俺の役目だ！」

〈戦闘会話 万丈VSアークベリアル〉

アークベリアル「日輪の光だか、何だか知らねえが。そのロボット、粉々にしてやるよ！」

万丈「お前は本当に最悪の皇帝だな…。その悪意、見逃すわけにはいかない！」

〈戦闘会話 ショウVSアークベリアル〉

チャム「あいつのオーラ…怖い…！」

ショウ「闇のオーラが強すぎるのか…！」

アークベリアル「チヨロチヨロめんどくさいハエだな…邪魔だ、消えろ！」

ショウ「そう簡単に消えるわけにはいかない！」

〈戦闘会話 エイサップVSアークベリアル〉

エレボス「こういう奴には遠慮無用だよ、エイサップ！」

アークベリアル「妖精だか、何だか知らねえが、俺様を舐めていると痛い目を見るぞ

！」

エイサップ「その前に俺がお前を倒す！そして、お前の闇も斬り裂く！」

〈戦闘会話 カミーユVSアークベリアル〉

アークベリアル「想いは勝手だが、そんなもので俺様に勝てると思うな！」

カミーユ「想いの力を知らないお前に負けるわけにはいかない！世界はお前の支配など必要ないんだよ！」

〈戦闘会話 ジュドーVSアークベリアル〉

ジュドー「デカけりやいってもんじゃねえぞ！」

アークベリアル「てめえこそ、高火力がいいってもんじゃねえ！容赦なく、叩き潰してやる！」

ジュドー「叩き潰されるのはお前の方って事を教えてやる！」

〈戦闘会話 アムロVSアークベリアル〉

アムロ「お前は暗黒大皇帝と呼ぶに相応しいな……！」

アークベリアル「エンペラ星人みたいでいいな、それ！気に入ったぜ。そのお返しとして、潰してやるよ！」

アムロ「巨大な身体の分、動きは鈍いはずだ…機動性を活かしていく！」

〈戦闘会話 バナージVSアークベリアル〉

アークベリアル「その機体の光は俺様の邪魔となる！破壊してやる！」

バナージ「可能性の獣を破壊させない！変わりにお前という悪の獣を倒す！」

〈戦闘会話 シーブックVSアークベリアル〉

アークベリアル「動きが早くとも攻撃を与えれば、一撃で終わる！」

シーブック「そう簡単にいくかよ！お前の思い通りにはさせない！」

〈戦闘会話 トビアVSアークベリアル〉

アークベリアル「荒っぽいやり方は嫌いじゃねえ！だが、そんな攻撃じゃ俺様にダメージを与える事は出来ねえぞ！」

トビア「フルクロスを舐めるな！あつという間にダメージを与えてやるよ！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSアークベリアル〉

アークベリアル「知っているぜ、お前。シーブック・アノーだろ？大変だな、過去の

自分に嘘をつき続けるのは」

キンケドウ「お前に同情される筋合いはない！ベリアル、お前をここで討つ！」

〈戦闘会話 ヒイロVSアークベリアル〉

アークベリアル「戦う奴は戦いから逃れられない…それがそいつの運命だからな！」

ヒイロ「その運命を変える為に俺は戦う。ターゲット確認、カイザーベリアル、排除開始…！」

〈戦闘会話 シンVSアークベリアル〉

アークベリアル「お前の中には憎しみの力が隠されている…。その力を解放しろよ
！」

シン「俺はもう…憎しみで戦う事はしないって決めたんだ！俺はみんなを守るために
戦うんだよ！」

〈戦闘会話 キラVSアークベリアル〉

アークベリアル「何だ…！奴の動きは…!?？」

キラ「ベリアル、あなたの野望は僕が砕く！守りたい世界を守る為に！」

〈戦闘会話 刹那VSアークベリアル〉

アークベリアル「戦いを止め、わかり合う心……。お前、ウルトラマンコスモスの様だな！だが、そんなゆるい考えでは俺を倒す事は出来ねえぞ！」

刹那「ウルトラマンコスモスが何者かは知らないが、世界を支配するというのなら、俺はお前と戦う！」

〈戦闘会話 キオVSアークベリアル〉

アークベリアル「妙な力だな、俺様の部下にならないか？」

キオ「ふざけるな！僕は悪者の仲間にならない！争いを止めるために戦うんだ！」

〈戦闘会話 アセムVSアークベリアル〉

アークベリアル「宇宙海賊にはいい思い出はなくてな、潰させてもらうぜ！」

アセム「いいぜ、そういうのは嫌いじゃねえ！だが、こつちも海賊らしくいかせてもらうぜ！」

〈戦闘会話 フリットVSアークベリアル〉

アークベリアル「英雄か……。てめえを見ているとキングのジジイを思い出して、腹が立つ！」

フリット「私が見つけた事ではないな。では、そのキングという人の変わりにお前を地獄へ送り返してやろう！」

〈戦闘会話 ベルリVSアークベリアル〉

アークベリアル「世界は決して、平和にはならねえ！それはお前達の時代が証明しているはずだ！」

ベルリ「あなたに僕達の世界の事とやかく言われたくない！僕達の世界の未来は僕達が変わっていくんだ！」

〈戦闘会話 三日月VSアークベリアル〉

アークベリアル「お前、俺様の部下にふさわしい逸材だな！」

三日月「冗談言うなよ、俺はお前の部下になるつもりはないし、オルガを裏切るつもりもないから」

〈戦闘会話　オルガVSアークベリアル〉

アークベリアル「てめえがトップのうちの一人か！どれだけの力量か、試させてもらうぜ！」

オルガ「いいぜ、後で泣きべそかいても知らねえからな！」

〈戦闘会話　ワタルVSアークベリアル〉

アークベリアル「ドアクダーを倒したぐらいでいい気になってんじゃねえぞ、救世主の小僧！」

ワタル「いい気になるのは、アル・ワースを救ってからだ！お前もドアクダーと同じ様に倒してやる！」

〈戦闘会話　舞人VSアークベリアル〉

アークベリアル「正義正義言っている奴はいずれ、自分の新たな力の欲しさを求めるようになるんだよ！」

グレートマイトガイン「舞人はお前の様にはならない！」

舞人「その通りだ、ガイン！ベリアル、お前にも俺達の正義の力を見せてやる！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSアークベリアル〉

アークベリアル「絶対遵守の王の力…興味深いが使うのがお前みたいなひよっこじゃ意味がないな！」

ルルーシユ「ほう、言ってくれるじゃないか。だが、その力を使うつもりはない。俺の知能全てでお前を崩していく！」

〈戦闘会話 青葉VSアークベリアル〉

アークベリアル「俺様が閉じ込められている間に人間も面白い力を持つようになったじゃねえか！」

ヨハン「黙れよ、ベリアル！ウルトラマンを貶すお前を俺は絶対に許すわけにはいかねえ！」

〈戦闘会話 アンジユVSアークベリアル〉

アークベリアル「野蛮で下品な姫は好きじゃねえな！」

アンジユ「あら、残念。私も暴力的で野蛮な皇帝は嫌いなもの。だから、とつとつ消えなさい！」

〈戦闘会話 甲児VSアークベリアル〉

アークベリアル「ゼウスが認めた魔神か！その力は俺様にこそ、相応しいんだよ！」

甲児「マジンガーを悪に渡すかよ！これは俺達の希望の光なんだよ！」

〈戦闘会話 鉄也VSアークベリアル〉

アークベリアル「地球人の中でも強いというお前の實力を見せてもらおうぜ！」

鉄也「ならば、見せてやろう。だが、手を抜く気は無いからな！」

〈戦闘会話 海道VSアークベリアル〉

真上「これはもうもはや、ハンティングだな」

アークベリアル「俺様を獣扱いしてんじやねえ！」

海道「どつちだろうが、お前は俺達に狩られるんだよ、ベリアルさんよ！」

〈戦闘会話 シモンVSアークベリアル〉

アークベリアル「アンチスパイラルと戦う前に俺様がお前に引導を渡してやるよ！」

シモン「そうはいくかよ！俺はお前を倒して、ニアを救い出す！」

〈戦闘会話 ネモ船長VSアークベリアル〉

アークベリアル「お前もM78星雲人の様だな。いわば、俺達は同胞だ」

ネモ船長「同胞ではない。お前は私達の敵：それだけの事だ」

〈戦闘会話 一夏VSアークベリアル〉

アークベリアル「そんな小さい身体で俺にダメージを与えられると思っっているのかよ！」

一夏「大ダメージは難しくても、ちよつとずつダメージを蓄積させればいけるはずだ！やるぞ！」

〈戦闘会話 竜馬VSアークベリアル〉

アークベリアル「俺様とインベーターをいっしょにしない事だな、ゲッターロボ！」

竜馬「敵だつて事には変わりはない。ここでバラバラにしてやるぜ！」

〈戦闘会話 葵VSアークベリアル〉

アークベリアル「ムーンWILLを倒したお前達を褒めてやるぜ！」

葵「本当なら嬉しい所だけど、あなたに言われたら、嬉しさ半分ね。最後まで抵抗す

る事を諦めないから！」

〈戦闘会話 九郎VSアークベリアル〉

アル「奴に手加減は無用だぞ、九郎！」

アークベリアル「逆に手を抜かれるなんぞ、この俺様も舐められたもんだな！」

九郎「てめえは手を抜いて、勝てる敵じゃねえつてのはわかってんだよ！だから、全力でぶっ飛ばしてやるぜ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSアークベリアル〉

アークベリアル「ゴゴールを倒したというお前達の力…見せてもらうぜ！」

ジョーイ「ヒーローとして…地球人として…お前の思い通りには僕とヒーローマンがさせない！」

〈戦闘会話 ヴァンVSアークベリアル〉

アークベリアル「てめえのそのデタラメな強さは何だ！」

ヴァン「言う必要はねえよ！…これからてめえは俺に倒されるんだからな！覚悟しろよ！」

〈戦闘会話 アマタVSアークベリアル〉

アークベリアル「天使なんかの出る幕じやねえんだよ！ さっさと消えやがれ！」

アマタ「お前を許すわけにはいかない！ 俺達が必ず、止めてみせる！」

〈戦闘会話 ノリコVSアークベリアル〉

アークベリアル「俺様を宇宙怪獣なんかと一緒にしていると痛い目を見る事になるぜ
！」

ノリコ「宇宙怪獣じゃなくても、怪獣は私達が倒すわ！ それガンバスターの使命だ
もの！」

〈戦闘会話 ユイVSアークベリアル〉

レナ「あなただけは許せない……！」

アークベリアル「お前に許されなくても関係ねえんだよ、レガリアのコア！」

ユイ「それでも、あなたの計画を進ませるわけにはいきません！ 私達が阻止してみせ
ます！」

〈戦闘会話 ノブナガVSアークベリアル〉

アークベリアル「全てを滅ぼす破壊の王…。お前も俺様と同じじゃねえか！」

ノブナガ「お前と俺は違う…！俺は民を傷つけるような真似はせん！お前は…全ての敵だ！」

〈戦闘会話 しんのすけVSアークベリアル〉

カンナム「ベリアル、お前の好きにはさせないぞ！」

アークベリアル「小さい力しか持つていないお前等が俺様の邪魔をしてんじゃねえよ！」

しんのすけ「小さくても…お前を倒す事が出来るゾ！ゼロの変わりにオラが世界をお助けするゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVSアークベリアル〉

アークベリアル「てめえ等だけは許さねえぞ、ケロン人共！」

ケロロ「我輩の安い挑発に乗るほどお前もバカなのでありますな！今度は我輩達の力でお前を止めるであります！」

〈戦闘会話 アキトVSアークベリアル〉

アークベリアル「お前は変わらない。所詮、お前は復讐の中でしか生きられないんだよ！」

アキト「俺は変わった……！後は、この世界を平和にするだけだ！」

〈戦闘会話 ルリVSアークベリアル〉

ハーリー「アークベリアルを補足しました！」

ユリカ「親玉との戦いだね！行こう、ルリちゃん！」

アークベリアル「戦艦を落とすのは容易い……電子の妖精だとか言われている様だが無意味だ！」

ルリ「では、私の力をご覧に入れましょう。怪獣退治を開始します」

〈戦闘会話 アルトVSアークベリアル〉

アークベリアル「ブンブン、煩いカトンボだな！撃ち落としてやる！」

アルト「そう簡単に落とされて、たまるかよ！高速戦闘でお前を倒す！」

〈戦闘会話 リオンVSアークベリアル〉

アークベリアル「翼を折れば、お前に勝ち目はないな！」
リオン「攻撃を当てればの話だがな！俺のスピードに追いつけるか勝負だ！」

〈戦闘会話　ゴークイレッドVSアークベリアル〉

アークベリアル「てめえ等を倒して、スーパー戦隊も皆殺しにしてやるぜ！」

ゴークイレッド「俺達は負けるつもりはねえ。それにスーパー戦隊もお前に屈しねえ！スーパー戦隊の力…その身で味わいやがれ！」

〈戦闘会話　ゼロVSアークベリアル〉

アークベリアル「今度こそ、終わりにさせようぜ、ゼロ！」

ゼロ「そうだな！お前との因縁もこれで終わりだ！」

アークベリアル「お前を倒して、光の国を壊滅させてやる！」

ゼロ「そんな事、させるかよ！お前は俺が倒す！」

〈戦闘会話　グレンファイヤーorミラーナイトorジャンボットorジャンナイン

VSアークベリアル〉

アークベリアル「てめえ等を倒せば、ゼロの絶望した顔が拝めるかもな！」

ミラーナイト「ゼロを悲しませるわけにはいかない！」

ジャンボット「私達はウルティメイトフォースゼロだ！」

ジャンナイン「何が何でもゼロは守ってみせる！」

グレンファイヤー「行くぜ、ベリアル！今度は俺達が相手だ！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSアークベリアル〉

レイモン「怪獣になってまで、野望を捨てる気はないんだな、ベリアル！」

アークベリアル「当たり前だ！そして、その野望を邪魔するのなら、お前も倒してやるよ、地球のレイオニクス！」

レイモン「俺は…俺達は負けない！レイブラッド星人の遺伝子はこれで終わらせる
！」

〈戦闘会話 マサキVSアークベリアル〉

マサキ「怪獣になるウルトラマンなんて、初めて見たぜ！」

アークベリアル「それが俺様の力だからな！」

マサキ「それなら、尚更お前を見逃せないぜ、覚悟しろ！」

〈戦闘会話 アーニーVSアークベリアル〉

アークベリアル「俺様は今度こそ、世界を手にする！邪魔をするんじゃないやねえ！」

アーニー「お前が世界を手にする事はない。僕達が止めるからな！」

〈戦闘会話 アマリVSアークベリアル〉

アークベリアル「魔徒教団の術士か。ドグマの力を見せてもらうぜ」

アマリ「いいでしょう、お望みとあらば、見せてあげます。そして、私のドグマであなを討ちます！」

〈戦闘会話 零VSアークベリアル〉

アークベリアル「ネメシスの遺伝子を持つお前は俺様と同じ境遇だな」

零「悪いが、おれは追放なんて、されてねえんだよ！ベリアル、お前から世界を守つてやる！」

俺達の攻撃でアークベリアルはダメージを受けた…。

アークベリアル「この…ふざけやがって…！」

弘樹「まだ倒れねえのかよ……！」

アスナ「本当にしぶといわね……！」

ゼロ「なら、何度だって、ぶち込んでやるぜ！」

刹那「ゼロ、俺もやる」

ゼロ「刹那……」

刹那「俺達の手で、奴を駆逐するぞ！」

ゼロ「おう、わかったぜ！」

ゼロとクアンタはアークベリアルに攻撃を仕掛けた……。

ゼロ「今度こそ……光を受けて消えろ、ベリアル！行くぜ！」

ゼロはウルティメイトイージスを纏い、クアンタと並ぶ。

ゼロ「お前みたいに歪んだ野郎は……！」

刹那「俺達が断ち切る！全力でいけ、ゼロ！」

ゼロ「ああ！ここには俺と……！」

刹那「クアンタと……！」

ゼロ「みんなの力がある！」

ゼロとクアンタはそれぞれ、ソードレイ・ウルティメイトゼロとライザーソードを発

動させ、二つのエネルギーは合わさる。

ゼロ& a m p ; 刹那 「はあああああつ！うおおおおつ！」

アークベリアル 「うおおあああああつ！！？」

ゼロとクアンタは同時に巨大なエネルギーソードを振り下ろし、アークベリアルを斬り裂いた。

ゼロ 「これが未来を切り拓くガンダム之力！」

刹那 「これが…みんなを守る、ウルトラマンの力…！」

ゼロ& a m p ; 刹那 「俺が…俺達が…！」

刹那 「ガンダムだ！」

ゼロ 「ウルトラマンだ！…って、最後ぐらい決まらねえのかよ」

刹那 「すまない」

ゼロとクアンタの合体技を受けて、アークベリアルはダメージを負った。

アークベリアル 「バカな…！俺様の覇道はまだ始まったばかりだ！こんな所で…こんな所で…！」

ゼロ 「シヨウウから聞いたが、怪獣墓場はノブナガ達の世界のヨモツヒラサカやバイストン・ウエルに繋がっているみたいだ。お前はどこに行くんだらうな？」

アークベリアル 「ぐうううつ！ゼロオオオオオオオッ！」

ゼロ 「光の前に消えやがれ、ベリアル！」

アークベリアル「グオアアアアアアアアツ!!？」

アークベリアルは爆発した…。

ゼロ「…みんな、ありがとう…」

タスク「やったね、ゼロ！」

ケロロ「キルルもベリアルも倒した事でありまして、ちよつとずつ、平和になつてきているでありますな」

くらら「でも、まだまだ終わりじゃないわ」

ゼロ「そうだな。次はお前の番だぜ、シモン」

シモン「ああ、ニアは必ず取り戻す！」

エイーダ「でも、どうするんですか？」

朔哉「肝心のアンチスパイラル本人が来ないと意味がないしな」

ジョニー「ニアさんが来る気配もないですしね」

シモン「取り敢えずはあの歪みの中に飛び込む！」

みさえ「ええっ!!？」

零「それしかないな…」

シモン「よっしゃあ!行くぜ、みんな！」

？「残念ながら、そこまでだよ、螺旋の男…」

歪みから顔が…あれが、アンチスパイラル…!

ヴァイラル「宇宙が割れる!」

シモン「あれが…アンチスパイラルか!」

アンチスパイラル「生存のための破壊を顧みる事のない生き物…」

アマリ「…!」

アンチスパイラル「それこそが螺旋の民の宿業だ。螺旋力とは宇宙と生命を繋ぐ力…。無限の宇宙の力を一個の生命が引き出せる。だが、その力を生命を制御できない。それが、宇宙の真実だ。螺旋の力は暴走し、肉体から噴出したエネルギーは一個の銀河になる。螺旋力の暴走が始まると一瞬にして生命の数だけ宇宙に銀河が誕生する。過剰銀河は互いに食い潰し、ブラックホールとなり、宇宙は無に帰る…それがスパイラルネメシスだ」

スパイラル…ネメシス…!

アンチスパイラル「進化という名の暴走が、一瞬にして宇宙を滅ぼすのだ…」

シモン「それが俺達を滅ぼそうとする理由か!」

アンチスパイラル「多元宇宙迷宮…。無限の可能性の地獄の中で閉ざされた人生を送るがいい…」

零「俺達を飲み込む気か…!そうは行くかよ!」

アンチスパイラル「運命に抗う少年よ、お前の相手は彼だ」

ネメシス「よう、頑張っているじゃねえか、零」

零「ネメシス……！」

ネメシス「お前だけは他の奴らとは違う、VIP席に案内してやるよ！」

零「何……?!?ぐっ……！な、何だ……これは……?!?があああつ……?!?」

アスナ「零?!?」

ゼファイ「どうしたんですか、パパ！」

身体が……動かねえ……！嘘……だろ……！

零「グアアアアアアアアアアツ!!?」

シモン「ニアアアアアアアアツ!!?」

アマリ「零君ー!!?」

俺達は闇に吞まれた……。

第77話

起死回生

「シモンだ。」

シモン「……う……」

？「……シモン……」

声が……聞こえる……!??

シモン「う……う……」

？「起きろ、シモン……起きやがれ！」

シモン「この声は……」

俺は目を開けると、前にはカミナが……兄貴がいた……。

カミナ「調子はどうだ、シモン！」

シモン「兄貴……」

カミナ「頼むぜ！お前のドリルで地下を掘り進んで銀行の金庫室まで一直線……。そこで俺達は大金をガツポリって寸法だからな！」

シモン「う、うん……」

カミナ「たまんねえな！成功すれば、しばらくは遊んで暮らせるぜ！どうせ俺達みたいな逸れもんはまともにもやっつたつてうまくいく事はねえんだ。セコく、コスく、お天道様の目を盗んで生きていく！それが俺達だ！」

シモン「そ、そうだね、兄貴……」

何だろう……。何かを忘れているような気がする……。とても大事な事のはずなんだけど、思い出せないや……。

――新垣 零だ……。

俺は目を覚ますと十字架の様な物に囚われていた……。

零「こ、これは……!? そうだ、シモン達は……!?」

ニア「零君！」

零「ニアさん！ニアさんがいるという事は……！」

アンチスパイラル「そうだ、愚かにも運命に抗う者よ」

零「アンチスパイラル……！ここは何処だ！俺をどうするつもりだ！」

アンチスパイラル「勘違いするな。お前を連れてきたのはネメシスだ」

ネメシス「よう。お目覚めか、零？」

零「ネメシス！アマリ達はどうした!?？」

ネメシス「奴等は別の所にいる。安心しろ、全員無事だ」

零「…」

アンチスパイラル「…お前達がアル・ワースと呼ぶ宇宙で螺旋力を持つ者達は独自の進化を遂げた…」

ニア「…」

アンチスパイラル「そして、その中核となる螺旋の男は因果の果ての多元宇宙の迷宮に囚われた。あれも一つの可能性…。心の何処かで望んでいる、甘く、平穏な夢の世界…。可能性を認識できる知性がある限り、あそこからは絶対に抜け出せない…。螺旋力が発動する事もない」

ニア「…」

アンチスパイラル「螺旋族との戦いは不毛だ…。いくら絶対的絶望を与えても、どこかでまた別の愚か者が立ち上がる…。また、メッセンジャーとして送り込みながら、螺旋族として成長したお前の様なイレギュラーもいる…」

ニア「…」

アンチスパイラル「だが、お前を分析する事により、彼等という存在が解明できれば、完全消滅も可能となる」

ニア「……」

アンチスパイラル「抵抗しても無駄だ。螺旋の男は、多元宇宙迷宮に囚われ、他の者は皆、因果の渦へと沈んだ。彼等はそこで永遠に続く責め苦を受け、いつしか心を折られるだろう」

そんな…アマリ達が…！

ニア「そんな事は…！」

アンチスパイラル「それだ…。その抵抗因子を解明しなければならぬ。読ませてもらうよ、お前の情報を…」

ニア「(シモン…)」

零「くっ…！ニアさんから離れろ！」

ネメシス「おおっと、これから二人のお楽しみの間だ。邪魔はするなよ」

ネメシスが指を鳴らすとニアさんとアンチスパイラルが消えた…。

零「お前も俺を絶望させる気なのか？」

ネメシス「何？」

零「アマリ達が絶望していくのを俺自身に見せつけるんじゃないのか？」

ネメシス「あー、それも面白いんだが…。そうだな、少し昔話をしてやるよ」

零「昔話、だと…?!？」

ネメシス「むかし昔、ある惑星に一人の生命体がありました。その生命体はその惑星の住人達と仲良く暮らしていました。時には笑いあい、時には泣き、地球に住む地球人と何ら変わらない：：そう、平穏な毎日を過ごしていたのです：。しかし、平穏は長くは続きはしませんでした。遙か彼方の惑星の異星人が生命体の住んでいた惑星を侵略しました。生命体が住んでいた惑星は瞬く間に侵略され、多くの者が亡くなり、ついにはその一人の生命体を除き、全滅してしまい、惑星は滅びました」

惑星の侵略：。

ネメシス「そして、その生命体は宇宙船で難を逃れ、逃げ延びました：。そこで、生命体は誓いました。必ず、侵略者に復讐すると：。生命体は侵略者の住む惑星に飛び、全てを破壊し尽くしました：。皆の仇と：。全てを滅ぼした生命体はある衝動にかられました。惑星を破壊する快感：多くの者が泣きながら、逃げ惑う無力さ：。そこからその生命体は惑星の破壊中毒に陥り、新たな名前を名乗りました：。それが、この俺だ：。：」

零「お前は：復讐を遂げ、惑星を滅ぼす楽しさを知ったつてのか：！」

ネメシス「そうだ。今の俺に復讐心も恨みもない。ただ、面白いゲームがしたいだけだ」

零「ふざけるなよ！お前の惑星の奴等はそんな事、望んでねえぞ！」

ネメシス「何でそんな事がわかるんだよ？」

零「何……!?？」

ネメシス「死んだ奴の考えなんて、わからねえ……。もう死んで話せないんだからな。そして、俺は様々な惑星でゲームを楽しみ、滅ぼし、このアル・ワースへとたどり着いたってわけだ。ここからはお前もわかるだろう？」

零「わかったぜ……。お前が相当に狂った野郎だつて、再認識する程にな！」

ネメシス「何言つてんだよ？お前にもその遺伝子が入っているんだぜ？お前の中にも惑星を滅ぼしたいつて、衝動があるんだ」

零「黙れ！俺はそんな衝動にかられる事はない！俺はお前とは違う！」

ネメシス「正直にならねえか……。なら、俺からのプレゼントだ」

ネメシスは俺の額に手を置き、何かの力を流し込んできた。

零「ガアツ……!?？これ、は……！」

ネメシス「確かにお前自身自分の力と俺の力を合わせ、新たな力にした様だが……。もしそこに俺の力を更に足したら、どうなるんだろうな？俺の力が濃くなるだけだろうか」

零「あ、あああああつ！身体……焼ける……！」

ネメシス「そりや、直で俺の力を受けているからな。心配すんな。お前は死ぬ事はな

い。まあ、お前がどんな奴になるかは知らねえがな」

零「ガアアアアアアアッ！グッ、ガアッ……！」

ネメシス「苦しいか？頑張つて、耐えろ。この力を耐えたら、楽になるし、お前にも惑星の破壊の楽しみが理解できるからよ」

零「や……め……ろ……！」

ネメシス「さて、これもまたゲームだ。お前の身体が持つか、エクスクロスが持つか……。結果が楽しみだぜ」

零「やめろおおおおおつ!!？」

苦、しい……！誰、か……。助けて……くれ……！

ーアマリ・アクアマリンです。

私達は謎の空間に飛ばされました。

アマリ「何なの、ここは……!?？」

万丈「一切の光なき空間……」

舞人「空間が渦を巻いている……」

シャア「まるで意識が果てしない底へ堕ちていくようだ」

甲児「(この感覚……)」

鉄也「(覚えがある……)」

アル「(九郎……)」

九郎「(一瞬の事でも忘れねえよ……!)」

青葉「空間の裂け目から現れたあいつがアンチスパイラルなんだよな……」

ヒイロ「そして、奴によって俺達は、ここへと跳ばされた」

ヨーコ「グレンラガンは……?!？」

ダリー「シモンさんが……いない……」

アスナ「みんな、零を見てない?!? 何処を探してもいないのよ!」

イオリ「何だと……?!？」

ゼファイ「パパ……!」

ギミー「う、嘘だろ……!まさか、あの渦に吞まれちまったのか?!？」

キタン「(シモン……)」

マリア「(零……)」

アマリ「そんな……零君!」

私達は超銀河ダイグレンの格納庫に集まりました……。

ノブナガ「状況は?」

ルルーシュ「ロージェノムの説明では、この空間はアル・ワースとは完全に別の次元だそう。観測した結果、周辺には一切の光がなく、完全な闇が広がっている」

ジョーイ「あの渦のようなものは？」

ミツヒデ「今の所、その実態はわからない…」

オズマ「無人観測機を飛ばしたところ、あの渦の最深部で圧壊に似た状況になり、消滅したそう」

ミシエル「爆発ではなく消滅とはね…」

マスターテリオン「…」

九郎「…」

マーベラス「さつきからどうしたんだ、お前等？」

甲児「この空間…。俺と鉄也さんはきた事がある…」

エセルドレーダ「お二人もそうだったんですか!?!」

マスターテリオン「この空間は…因果の果てと似ている」

九郎「俺達も跳ばされた所と甲児達が跳ばされた所が同じだったとはな」

シーブック「ちよつと待ってください!」

アンジュ「それって、まさか…?!?!」

アル「そうだ…。ここは妾達と甲児達が跳ばされた因果の果てだ…」

ワタル「そんな……!じゃあ、ここからは……」

ベルリ「内側からは脱出不可能って事なんですか!?!?」

甲児「……」

九郎「……」

アイム「皆さん……」

ハカセ「そうだ!ゼロのウルティメイトイージスの力があれば、出来るんじゃない!」

ゼロ「無理だ」

ルカ「『ゴーカイ』」『どうしてよ!』

ゼロ「イージスの力が勝てない程、この闇は深すぎる……。力を使った所でこの空間に

逆戻りってわけだ」

ルルーシュ「……超銀河ダイグレンの時空転移航法でもこの空間からの脱出は不可能だ

そうだ」

メル「こんな時にシモンさんと零さんがいないなんて……」

優香「うん……。二人なら、どんな状況でも何とかしてくれるのに……」

カノン「やはり、あの渦に……」

アマリ「零君……」

キタン「ガタガタ言ってるな!」

弘樹「俺達が落ち込んだ所で二人が戻ってくるわけじゃないだろ！」

ヨーク「キタン…」

カノン「弘樹さん…」

ギミー「でも、こういう状況の時こそ、シモンさんとエクスクロスの支えの零さんがいなきゃ…」

キタン「今、俺達がしなきゃなんねえのはこの状況をどうにかする事だ！」

弘樹「零達がいる、いないが問題じゃない！俺達の力で何とかする方法を考えるしかないんだよ！」

ヴァン「それ以外の言う通りだぜ。希望つてのと一緒に戦う事が力になるのはさっき知ったばかりだろ」

ネロ「そうだ！誰かに頼るではなく、一人一人が自分の力でここから脱出する方法を考えるぞ！」

ワタル「でも…」

アイーダ「…」

箒「…」

一夏「みんな…」

アムロ「(この未知の状況で希望を持つというのも無理な話か…)」

サリー「…」

リリーナ「…」

マリナ「…」

フロンタル「（どうする…？我々に希望を与えてくれる彼女達にもこの状況では頼れない…）」

イオリ「どうするんだ、アマリさん…」

アマリ「ホープス…」

ホープス「申し訳ありません…。私にも状況の解析は不可能です…」

マリア「ホープスでも…無理なのね…」

ホープス「ですが、希望はあります…。同時にそれは絶望でもありませんが」

イオリ「どう言う意味だ？」

ホープス「我々がここで朽ちていくのを待たず、自らの手で討たんとする者…。それが必ずやつてきます…」

セルリック「その魔法生物の言う通りだ」

イオリ「セルリック・オブシディアン！？？」

ギルガ「また会ったね、エクスクロス」

ラゴウ「ギルガ！」

ギルガ「へえ、兄さんはエクスクロスのメンバーになったのか」

アマリ「どうやって、ここに来たんです?!?」

ギルガ「それはね」

セルリック「愚問だな…。エンデの加護に決まっている」

アマリ「そんなドグマがあるなんて…」

セルリック「エクスクロス…。エンデの加護により、お前達をこの空間から脱出させてやろうか?」

エイサツプ「何っ?!?」

サコミズ「…一体何が目的で、この期に及び、我々に協力するのだ?」

セルリック「それは、この空間を出ればわかる」

ルルーシュ「自らの都合を一方的に押し付け、こちらからの問いには答えない…」

ノブナガ「結局、お前達は俺達を自らの目的の駒としか考えていないようだな」

ギルガ「そう思いたければ、そう思うがいいさ。言っておくけど、今回は君達に見返りを要求するつもりだよ」

ウィル「何が望みだ?」

セルリック「ゼルガードと魔法生物をよこせ」

アマリ「…教主になるためですか?」

セルリック「言葉は正確に使え、アマリ・アクアマリン。俺は既に教主だ」

えっ…!!?」

アマリ「法師セルリック！それは導師キールデインの決定なのですか!!?」

セルリック「キールデインなら死んださ。いや、物事は正確に伝えよう。俺が始末した」

イオリ「何だと！」

アマリ「何の為に…導師を…？」

セルリック「あの男は、もはや不要だったからだ。導師など、智の神エンデの存在を後ろ盾にし、教団を運営していたペテン師に過ぎん。エンデの声を、より直接的に聞く俺がいる今、導師の存在など不要だ」

アマリ「エンデの声を直接…!!?」

セルリック「そうだ！」

法師セルリックの姿が…!!?」

セルリック「エンデの声を聞く俺こそが魔徒教団史上初の教主だ！」

ヨハン「何だ、あの姿は…!!?」

エンブリヲ「禍々しさしか、感じない…！」

ホープス「オドの逆流…ドグマの暴走…。もう彼は、我々の知るセルリック・オブシ

ディアンではありません…」

イオリ「そんな事が…」

ギルガ「…すごい姿だね。そうだ、新垣 零の居場所が知りたいんだよね？」

弘樹「知っているのか!?!」

ギルガ「勿論。彼は今…ネメシスと共にいる。そして、何も無い暗闇で拘束され、ネメシスに力を注ぎ込まれている」

マリア「何ですって…!?!」

アスナ「元々あるネメシスの力に合わせて、さらに力を注ぎ込まれたら、零が狂ってしまうわ…!」

優香「ネメシスは強硬手段に出たわね…!」

ギルガ「現に新垣 零は抵抗の意志を見せているが、後に自分を制御できなくなり、墜ちるだろうね」

ラゴウ「ネメシスめ…!」

ゼファイ「ですが、傍観者だったネメシスが自ら動いたと言う事は、それ程、彼はパパの力に焦っていると言う事になります!」

ギルガ「へえ、君、賢いね」

メル「やはり、ネメシスを倒す鍵は零さんが握っているようですね…!」

マスク「ますます彼をとり戻さなければならぬ！」

アマリ「セルリツク！教団の…いえ、あなたの目的は何です!?？」

セルリツク「俺の意思はエンデの意思…。選ばれなかったお前に話す義務はない」

アンジュ「何がエンデの意思よ！」

ワタル「世界中に戦いを広げて、アンチスパイラルが来ても知らんぷりでお前達はアル・ワースを滅ぼすつもりか!?？」

セルリツク「結果的にそうなっても構わないと思っっている。このアル・ワースはエンデがアンチスパイラルとの戦いに備え、力を蓄える為の場だったのだからな」

アマリ「どう言う事です!?？」

セルリツク「言っただはまずだ！お前に応えるつもりはない！」

アマリ「あなたと言う人はっ!!？」

ダイグレンが揺れた…!??

ケロロ「ケロツ!?？」

ギロロ「これは艦の外からの攻撃だぞ！」

弘樹「魔徒教団とオニキスがきたのか!?？」

セルリツク「俺以外にもお前達を目標りに思っている者はいる！」

ギルガ「さあ、エクスクロス！理の外にいる者に君達は勝てるかな！」

セルリックとカルセドニーは消えました…。

アマリ「セルリック！」

ラゴウ「ギルガ！」

舞人「理の外にいる者…」

マドカ「それが仕掛けて来たのか…？」

第77話 起死回生

私達はそれぞれ、出撃しました…。

エーコー「敵機、来ます！」

エレクトラ「あれは…！」

エグゼブとロボット軍団…！

エグゼブ「苦戦しているようだな、エクスクロス」

ジョー「エグゼブ！どうして、貴様がここに…？」

エグゼブ「私はお前達とは違う理の存在…いわば、闇の使徒なのだよ」

アマリ「理の外…。それが闇の力…」

エグゼブ「ベリアル陛下の事は残念だ。あの方は良き理解者だったのにな。そして、その闇の力があるからこそ、この因果の渦にも自由に出入り出来る」

舞人「因果の渦だと…!?」

エグゼブ「因果の果ての果て…ここで全てが無へと帰す…。お前達は、そこに迷い込んだ哀れな囚われた人だよ」

舞人「エグゼブ！どんな状況だろうと俺達は決して諦めない！」

エグゼブ「威勢のいい事だ。さすがは正義の味方…嵐の勇者、旋風寺 舞人だ。だが、その強がりがいっつまで続くかな？」

舞人「何っ!?」

エグゼブ「周りを見るがいい。既に絶望がお前達の背後に迫り、それに足首を掴まれている者もいるぞ」

舞人「そんな事は…」

エグゼブ「我々は問答をする為にここに来たのではない」

優香「我々って…?」

エグゼブ「見るがいい。教主殿が、お前達を罰する為に来た」

ワース・ディーベルとアマテラス・ツヴァイにそれぞれの量産機が現れました…!

ギルガ「僕は教主じゃないんだけどね」

リン「…」

メル「リンちゃんとギルガ・カルセドニー！」

アマリ「セルリック！」

セルリック「決着をつけてやるぞ、アマリ・アクアマリン！」

アマリ「この状況でも自分の事しか考えられないなんて…！」

セルリック「もうすぐ法も秩序も崩壊する！そして、アンチスパイラルが世界を滅ぼせば、悲しみや苦しみが大地を満たす！その時、教主である俺が生きていれば、世界はどうにでもなる！」

ラゴウ「ギルガ…本当に退く気はないのだな？」

ギルガ「僕は自分の信念を曲げるつもりはない。それが僕の戦いだ！」

ラゴウ「ならば…。ギルガ・カルセドニー！アル・ワースを守る為…お前を討つ！」

ギルガ「いいよ、ラゴウ・カルセドニー…。邪魔をするのならば、あなたを討つ！」

カノン「あの砲台は何なのですか？」

確かに…あれは一体…。

ネメシス「おっと、手は出さないでくれよ」

弘樹「ネメシス！」

あの砲台からネメシスの声が…。

アスナ「あなたは零と一緒にいるんじゃないの!?？」

ネメシス「分身だ、分身…。まあ、記憶を共有し合っているから、どちらも俺なんだがな」

アマリ「零君を返しなさい！」

ネメシス「その零だがな…。そろそろ限界な様だぜ。もはや、理性と記憶を失いかけている」

千冬「何だと…!?？」

グレミー「流石の彼でも…不味い状態なのか…！」

ネメシス「苦しいんだとよ。悲しいよな、誰も助けてくれない暗闇の中…必死に抵抗したが、無力と化す…。今、どんな気分だ、アマリ？」

アマリ「…」

ヒデヨシ「何て、最低な野郎だ…！」

真上「あの砲台は何だ？」

ネメシス「あれはな…。絶望をエネルギーに変え、発射するデイスペア・ブラスターだ。まあ、供給源は零だがな」

海道「新垣だと…!?？」

ネメシス「あいつ、一人で全てが溜まりそうなんだな。ほら、見ろよ。もう半分も溜まっているぜ。それに、デイスペア・ブラスターはアル・ワースに向けられている」

カレン「という事は……！」

C・C「あの砲台のエネルギーが溜まった時……零とアル・ワースが終わるという印か」

スザク「だが、エネルギーが半分という事はまだ零の理性が残っているという事だ！」
ロロ「まだ救い出せるチャンスはあります！」

ネメシス「さて、お前達にギルガ達を倒し、零を救うのを間に合うかな？」

ホープス「……これ以上は話しても無駄でしょう」

アマリ「……わかったわ……。私達は今やるべき事を全力でやる……。アル・ワースや零君を守る為戦います！」

セルリック「足掻いてみせろ、エクスクロス！そして、アマリ・アクアマリン！お前達の痛みと嘆きを大地に捧げろ！そして、魔法生物とゼルガードと共に俺はエンデと一つになる！」

術士「教主セルリック！」

術士2「我等を導いてください、教主！」

エグゼブ「教主セルリック……。我々もエンデに全てを捧げるつもりです。そして、智

の神エンデの加護をあまねく世界に」

アマリ「えっ!?？」

舞人「エグゼブも魔従教団の一員だったのか…！」

エグゼブ「何を驚く事がある。私の魔のオーラを目の当たりにしてとわからなかったのか？感謝するのだな、エクスクロス。お前達が絶望に取り込まれる前に私が引導を渡してやろう」

エルザ「零が堕ちてもダメ、私達が負けてもダメロボ…！」

ウエスト「きつい状況であるな…！」

ジョー「そうはさせない！」

舞人「エグゼブ、セルリック、カルセドニー、ネメシス！この空間に出入り出来るお前達を倒し、脱出の方法を見つけやる！」

セルリック「新垣 零だけでなく、螺旋の男もいない！お前達では無理だな！」

キタン「シモンの事を言っているのか…!?？」

エグゼブ「終わりだ、エクスクロス！正義は敗れ、勇気も希望も全てが因果の渦に呑み込まれる！」

ネメシス「そして、お前達は大切な者も失うんだよ！」

セルリック「そう、世界はエンデの名の下、生まれ変わるのだ！」

ギルガ「(きて、この戦いがどう転ぶかな…)」

私達は戦うわ…。だから、零君…。あなたも負けないで…!

戦闘開始です!

〈戦闘会話　アスナVS初戦闘〉

ゼフィ「生きましょう、アスナお姉ちゃん!」

アスナ「ええ、絶対に零を助け出すわよ!」

〈戦闘会話　ヴォルフガングorビットンorミフネorホイ・コウ・ロウVSエグゼ
ブ〉

エグゼブ「BD連合のゴミ共はここで始末しなければならぬな」

ホイ・コウ・ロウ「わし等を甘く見るんじゃないネ!」

ミフネ「お前をここで斬り伏せる!」

ビットン「そう。あなたは見下していたゴミに敗れるのよ!」

ヴォルフガング「トドメじゃ、エグゼブ!我等の力を知れ!」

グレートマイトガインがインペリアルにダメージを与えました…。

エグゼブ「ちいつ！」

ジョー「お前の負けだ、エグゼブ！」

エグゼブ「果たして、そうかな?!?」

機体のダメージが回復した…?!?」

グレートマイトガイン「ダメージが回復していく…！」

舞人「魔のオーラか！」

エグゼブ「その通り！この暗黒の意思がある限り、私は不滅だ！さあ、旋風寺 舞人

！お前の絶望を私に見せろ！」

鉄也「エグゼブ！お前は、何故そこまで舞人に執着する?!?」

エグゼブ「正義と悪…！その対立において、私の相手となるのが彼だからだよ！」

オルガ「つまり、悪の代表がお前で、正義の代表が舞人だということのかよ！」

シノ「それに何の意味があるんだよ！」

エグゼブ「お前達にはわかるまい？世界の存在さえも決定づける力の存在が！」

舞人「だが、その力が悪である限り、俺は…」

エグゼブ「旋風寺 舞人…。お前の様な存在が、悪を生んでいる事がわからないのか

「？」

舞人「何っ!?？」

しんのすけ「おバカな事を言うな！何で、正義のヒーローの舞人君が悪い奴を生み出してきているのかわからないゾ！」

エグゼブ「光があるから闇が生まれる…。そして、その光が強ければ強いほど、闇はその濃さを増す…」

ゼロ「…！」

エグゼブ「お前達、ウルトラマンならば、この答えの意味はわかるな、ウルトラマンゼロ？旋風寺 舞人、お前と言う存在があるからこそ、お前と対立する悪も、その強さを増す…。それが私の理だ」

舞人「俺が悪を生む…」

エグゼブ「見るがいい、旋風寺 舞人！悪の…闇の力を！」

闇の力が…強い…！

ジョー「くそっ！奴の纏う魔のオーラの強さはパールとは比べ物にならない！」

リオン「サリーのイノセントウエーブでも払う事が出来ないのかよ！」

ビトン「どうなの、ヴォルフガング！」

ヴォルフガング「結論から言うと、不可能じゃ…」

ミフネ「絶望的ではないか！」

舞人「…」

エグゼブ「正義が悪に…光が闇に吞まれる時がついに来た！絶望しろ、旋風寺 舞人
！今こそ悪が正義に…」

万丈「黙れ、悪党！」

万丈さん…！

万丈「まだ勝負はついていない！」

エグゼブ「お前が波嵐 万丈か…。パールから報告は受けているよ」

万丈「ならば、僕とダイターン3の事も知っていよう！」

ダイターン3が日輪の光で…。

鉄也「万丈！」

ユイ「何をやる気ですか、万丈さん?!？」

万丈「ダイターン3に蓄えられた太陽の力の全てを解放する…!!」

エグゼブ「笑わせてくれる！その光で、私の闇を払うつもりか！」

万丈「それだけではない！この状況を突破する！」

エグゼブ「何を根拠に?!？」

万丈「みんな、顔を上げろ！太陽の光を受けるんだ！」

私達に太陽の光が…。

ラウラ「何だ…？」

シャルロット「少しだけ元気が出て来た…」

万丈「太陽の光を受け、君達の脳内物質が活性化したんだよ」

エグゼブ「そんなもので闇を払えると思うのか！」

すると、ゼロさんがダイターン3の隣に立ちました。

万丈「ゼロ…！」

ゼロ「俺も手伝うぜ、万丈！光の戦士としては、この状況を見逃せねえからな！」

ゼロさんはウルティメイトイージスを纏いました。

エグゼブ「無駄だ、ウルトラマンゼロ！ウルティメイトイージスの光を用いても、闇は払えん！」

ゼロ「そんな事、やってみなくちゃわからねえだろうが！」

万丈「エグゼブ…。お前は、光が闇を強くすると言った…。だが、その闇を越えた光は全てを照らす力を持つはずだ！」

ゼロ「光は…受け継がれていく絆でもあるんだ！この世界から光が消える事はねえんだよ！」

舞人「万丈さん…ゼロ…」

万丈「舞人……。君はまだ若い……」

舞人「え……」

ゼロ「知っているか？挫折を知った奴は前よりもずっと強くなるんだぜ」

万丈「闇を越えた人間の光はより強さを増す……！今こそ君は恐れや不安を越える時だ！」

舞人「万丈さんやゼロも……そうやって強くなつたんですか？」

万丈「……そうありたいと思つて生きてきた……」

ゼロ「俺の場合、大きな罪を犯したからな」

一夏「ゼロ……」

万丈「君は、その先へ進むんだ！君こそ、誰もが憧れる正義のヒーローになるべき男なのだから！」

ゼロ「頼んだぜ、嵐のヒーロー！」

二人はまた光を……！

ダイターン3は電気が起き、ゼロさんはカラータイマーが鳴り出しました……。

エグゼブ「無駄だ！何をやろうと私の闇は払えん！」

万丈「ダイターン3……。父への復讐の為に生まれた、僕の中の闇……。お前の力の全てで未来を照らす光を生み出すんだ！」

ゼロ「まだだ…。俺の力は…こんなもんじゃねえ！」

アムロ「やめろ、万丈、ゼロ！それ以上や機体やお前の身体がもたない！」

万丈「それでもやるんだ！この無限の闇に…そして、みんなの心に光を灯す為に！」

ゼロ「俺達は諦めねえ！光が存在する限り、絶対にな！」

舞人「万丈さん!!？」

刹那「ゼロ！」

万丈「日輪は我にあり！そして、誰の心にもあるんだ！」

ゼロ「守るべきものがある…俺は、ウルトラマンだ！」

最後の光を振り絞り、ダイターン3は爆発し、ゼロさんは光の粒子となり、消滅しました…。

エグゼブ「ば、バカな！魔のオーラが消えていく！奴等は生命と引き換えにこの私の闇を…！」

アマリ「万丈…さん…」

ミラーナイト「ゼロ…」

ワタル「そんな…！そんなのってないよ！」

グレンファイヤー「くそッ…！バカやろおおおおおつ!!？」

舞人「エグゼブ!!？」

私達にも光が…!

舞人「万丈さんやゼロの教えてくれた真の強さ…俺の中の光でお前を討つ!」

舞人「悪のはびこる世界など、決して許しはしない!勇者特急隊の全てを集結する!

全機、連結!」

勇者特急隊「一二了解!一二」

勇者特急隊のロボット達はそれぞれ、分離しました。

舞人「全員の心が今、一つになった!」

分離した後、電車の様に連結し、インペリアルに向かっていきました…。

舞人「勇者特急隊、究極の攻撃!ジョイントドラゴンファイアアアアアツ!!?はあ

あああつ!!?」

ま、まるで炎の龍の如き姿を見せて、インペリアルに突撃し、大ダメージを与えました。

エグゼブ「うおおおつ!ドリル…ドリルがああああつ!!?」

ジョー「今度こそ終わりだ、エグゼブ!」

エグゼブ「こ、この力を…!世界にすら穴を空ける、この力を許してはならないのだ

!」

インペリアルは爆発した…。

舞人「エグゼブの最期だ……」

弘樹「でも、俺達は万丈のゼロを……」

アスナ「まだ戦いわ続くわ……。万丈さんとゼロに報いる為にも、全力を尽くしましよ
う」

キタン「……万丈、ゼロ、俺もやるぜ」

ヨーコ「キタン……!!?」

キタン「この空間から脱出する方法……その答えは、エグゼブの野郎と万丈とゼロが教
えてくれた！」

キングキタンが超銀河ダイグレンの中に入りました……。

ーキタン・バチカだ。

俺は超銀河ダイグレンの格納庫からある物を取り出した。

キタン「……シモン……ギガドリルの予備……使わせてもらうぜ」

ヨーコ「何をするつもりなの、キタン？」

キタン「説明している時間はねえんだ。黙って見てな」

ギミー「……特攻ですか？」

キタン「……」

ギミー「万丈さんやゼロもキタンさんも死ぬのが怖くないんですか？ずるいですよ、そうやって死に場所を求めて…僕には…そんな真似は出来ない…」

キタン「バカか、お前は！どこに死ぬのが怖くない人間がいる！」

ギミー「…」

キタン「でもな…仕方ねえんだよ…。これしか能がねえんだよ…。俺達あ好きでやってんだよ…！怖えからなおの事、前に進むしかねえんだ…！…これだけは言つとくぞ。お前等がいるから、ムチャが出来るんだ。後ろにお前等がいるから前に進めるんだ。シモンが上から引つ張つて、俺が下から押し上げるとすりや、それは俺の背中をお前等が押ししてくれたからだ。お前等がどこまで行けるか、楽しみにしているぜ！」

ヨーコ「待つて、キタン！」

キタン「待てねえよ！」

ヨーコ「キタン…」

キタン「ここで振り返つて、お前の顔を見ちまったら未練が出ちまう…」

あばよ…。もし、生きてたら…。お前の唇を奪いたかつたな…。

「アマリ・アクアマリンです。」

超銀河ダイグレンか、キングキタンが出てきました…。

ダヤツカ「何をする気だ、キタン!?!?」

キタン「ちよつくら、この渦の底まで潜ってくるぜ!」

リーロン「そんな事したら…!」

ロージエノム「次元の壁に押しつぶされて、完全に消滅するだろう」

キタン「だがよ!こいつが渦を巻いて、俺達を引き込もうとするなら、その逆に回れば何とかなるってもんだ!一番底に渦の回転の中心があるんだ!そこにドリルをぶち込んで、一気に逆回転させてやる!」

ダヤツカ「やめろ、キタン!無茶だ!」

キタン「無茶かどうかなんてのは誰かが決めるもんじゃねえ!」

ダヤツカ「お前…!」

キタン「あばよ、ダチ公!…なんてキザな台詞は言わねえ!行ってくるぜ、野郎共!」
スペースキングキタンが渦の中に入って行きました…!

シベラ「スペースキングキタン、因果の渦に潜行していきます!」

九郎「キタン!」

レナ「戻ってよ!死ぬ気なの!」

キタン「死ぬかも知れねえが、死ぬ気もねえよ！万丈とゼロが教えてくれた自分の光を信じて、ドリルをぶち込むだけだ！」

ヨーコ「キタン!!？」

キタン「見せてやるぜ、俺の生き様をつ!!？」

キタンさん……！

キタン「道つてのはあ！俺が通った後に出来るんだよおつ！くらえええつ！グレンラガンのドリル！使わせてもらうぜ！キングキタアアアン！ギガドリル！ブレイクウウウツ!!？」

因果の渦から光が……！

キタン「これが螺旋の力かよ……！大したもんじゃねえか……！

シベラ「スペースキングキタンの……消滅を……確認……！

マツケン「キタン……！

アイラツク「嘘……だろ……！……！

キツド「馬鹿野郎……！……！

ダヤツカ「状況は……！……！

リーロン「何も変わっていないわ……！……！

アーテンボロー「犬死にかよ、馬鹿野郎!!？」

ヨーコ「キタン…」

ギルガ「ふう、ちよつと焦ったけど、無駄だったようだね」

ネメシス「全くだ。螺旋の力も底が知れないな」

セルリツク「だが、それが人間の限界だ！諦めろ、エクスクロス！」

弘樹「…うるせえんだよ…！」

アマリ「…あなた達の言葉など聞く気はありません…。万丈さんのゼロさん、キタンさんが燃やした生命…！それが私達に力をくれます！」

セルリツク「何…？」

ラゴウ「ギルガ、セルリツク！」

アマリ「私達の生命をドグマに変え、あなたを必ず倒します！」

ダヤツカ「スペースキングキタンを援護をしていたガンメン部隊は超銀河ダイグレンの直庵に回ってくれ！」

ゾーシイ「わかった！」

戦闘再開です！

〈戦闘会話　アスナVSギルガ〉

ギルガ「新垣 零のいないゼフィルスネクサスなんて、敵じゃないな！」

アスナ「舐めないでよね！私にだって、ゼフィルスネクサスは使えるんだから！」

ゼフィ「ギルガ・カルセドニーさん！あなたを止めてみせます！」

〈戦闘会話 弘樹VSギルガ〉

弘樹「落ちるところまで落ちたって事なのかよ、カルセドニー」

ギルガ「何を今更！僕達はそうやって、戦ってきたんだ！」

弘樹「そうかよ！でも、もうお前に構っている時間はないんだよ！とつとと消えろ！」

〈戦闘会話 優香VSギルガ〉

リン「…」

ギルガ「そろそろ君の言葉も終わりにしよう、メルちゃん。リンちゃんは一生僕の奴隷として働いてもらうから！」

メル「人を…想いを何だと思っているのですか、あなたは！」

優香「カルセドニー！全女の子を代表して…あなたを倒すわ！」

〈戦闘会話　ラゴウVSギルガ〉

ラゴウ「ギルガ…」

ギルガ「アル・ワースの存続をかけた兄弟喧嘩と行こうじゃないか、兄さん」

ラゴウ「そうだな…。そして、これが最初で最後の喧嘩だ」

ギルガ「その喧嘩を勝利で飾るのは僕だ！今日こそ、あなたを越える！」

ラゴウ「そうはいかん！お前に見せてやる！俺の全てを！」

ナイトメア・ゼフィルスの攻撃でアマテラス・ツヴァイはダメージを負いました…。

リン「…！」

ギルガ「ク、クソっ！ここまでか…！逃げるよ、リンちゃん！」

弘樹「待ちやがれ、カルセドニー！」

ギルガ「待たないよ！僕は生きなくちゃならないんだ！」

アマテラス・ツヴァイは撤退した…。

ネメシス「勝手に退きやがって…。まあ、いいか」

セルリック「所詮、奴もそれまでの男だ！」

アマリ「後はあなたです、セルリック！」

私達は戦闘を再開させました…。

ゼルガードの攻撃で、ワース・デインベルにダメージを与えました…。

セルリック「うがあああああああつ!!?」

イオリ「あの獣のような吠え声…。あれが術士達の尊敬を集めていた法師セルリックとはな…」

アマリ「終わりです、セルリック！自分の負けを認めて、戦いを止めてください！」

セルリック「がああああああつ!!?」

セルリックが暴走しているの…!!?

ホープス「セルリックの中の破壊の力が完全に暴走しています…！」

イオリ「アマリさん！」

アマリ「私達でセルリックを止めます！」

セルリック「殺してやる…！殺してやるぞ、アマリ・アクアマリン！」

アマリ「法師セルリック…」

ゼルガードはドグマを発動し、ワース・デインベルに浴びせた…。

セルリック「攻撃のドグマではない…!!?」

アマリ「あなたの中の悪意を破壊します」

セルリツク「何っ!?？」

イオリ「これは…：教団に精神を制御された術士達を救うために用意したドグマだ…」

アマリ「アル・ワースからのオドを断ち切る事で人は自分の中のオド…つまり、意思の力を思い出す事が出来るはず…。それこそが、この浄化のドグマ…」

セルリツク「や、やめろ！オドはエンデの意思…！それは神の言葉…！」

アマリ「セルリツク・オブシディアン…。あなたの魂をエンデから解放します。L A

V A T I O …」

セルリツク「！」

セルリツクの姿が元に戻りました…！

セルリツク「アマリ…。私の負けだ…。僕は…：教主になりたかった…。教主になって色んな人に褒めてもらいたかった…。アマリ…。君にも褒めて…いや、愛してもらいたかったよ…」

ワース・ディーンベルは爆発しました…。

アマリ「セルリツク・オブシディアン…」

イオリ「うまくいかなかったのか…?」

アマリ「わかりません…。でも、指導者を失った事で教団の暴走も止まると思います

…

トビア「エグゼブとギルガとセルリックは倒した…！」

アルト「だが、こっちは万丈さんとゼロ…キタンさんを…」

ブレラ「顔を上げろ、みんな！」

クラン「まだ、あの砲台を破壊して、零を助け出すという役目が残っている！」

ルカ「そうですね…！」

ネメシス「そうはいくかよ」

砲台からアルガイヤ・ノヴァが現れました…。

ネメシス「流石にデイスペア・ブラスターを破壊されると困るんだよ」

優香「出てきたわね、ネメシス！」

ネメシス「それに見ろよ、これ。エネルギーが80%も溜まっている。今、デイスペ

ア・ブラスターを破壊したら、ここ等一帯が吹き飛ばぜ」

アマリ「そ、そんな…！」

イオリ「やはり、零の目を覚まさせるしかないのか…！」

ネメシス「悪いが、もう零に記憶はないほど弱っている…。自力で這い上がる事も目

を覚まさせる事も出来ない」

セシリア「そんな…！」

アマリ「零君……！」

ジョー「気を抜くな！また何か来るぞ！」

きよ、巨大な戦艦と複数のインペリアルが現れました……!!??

ブラック・ノワール「抵抗をやめろ。全ては無駄なのだ」

舞人「何者だ!!?」

ブラック・ノワール「我が名はブラック・ノワール……。お前達に絶望の終末を与えるものだ」

キキ「何なの、あれ!!?」

アマルガン「分からん……！だが、奴の存在……まるで魔のオーラの塊だ！」

ブラック・ノワール「その通りだ。想いの世界の戦士よ。我は世界の平衡を保つシステム……。そのためにパープルやエグゼブに力を与えてきた」

グレートマイトガイン「奴こそがエグゼブの背後にいた者……！」

舞人「全ての黒幕という事か！」

アマリ「！」

イオリ「アマリさん……！」

まさか……。まさか、あれが……！

ブラック・ノワール「全て……。その認識は正しい。我は全ての世界をあるべき形に導

く者……。お前達は、その手の平で踊る哀れな駒だ」

楯無「何ですって!?!」

ブラック・ノワール「お前達は因果の渦に吞まれ、世界は……アル・ワースは一度終焉を迎える……。それが私の決めた結末だ」

ジュード「ふざけやがって! 勝手に筋書きを決めるな!」

マサキ「てめえの思い通りの結末になると思うなよ!」

ブラック・ノワール「ふざけているのではない。それが私の使命なのだ」

舞人「ブラック・ノワール……。お前は、紛れもなく悪だ……」

ブラック・ノワール「だとしたら、どうする?」

舞人「決まっている! 俺達の使命は悪を倒す事だ! そして、この空間から抜け出し、お前の決めた結末を覆してやる!」

ブラック・ノワール「無駄な事を……」

舞人「黙れ! 希望を捨てなかった万丈さんとゼロ、キタンさんの為にも俺達は必ずやってみせる!」

ネメシス「という事らしいぜ。ブラック・ノワールさんよ」

ブラック・ノワール「私のやる事は変わらない。究極生命体、お前は どうする?」

ネメシス「デイスペア・ブラスターを破壊されても困るしな。ちよつくら暴れるとす

るぜ！」

ブラック・ノワール「いいだろう」

マリア「ネメシス、あなたを倒して、零は返してもらおう！」

戦闘開始です！

ブラック・ノワール…何という力なの…！

ブラック・ノワール「まだ戦うか…」

舞人「言ったはずだぞ、ブラック・ノワール！俺達は決して諦めないと！」

ブラック・ノワール「魔のオーラを破った、お前達の力は認めている。だが、それも全ては私の描いた筋書き通りなのだ」

舞人「ブラック・ノワール…！お前は何者なんだ…？」

ブラック・ノワール「知りたくば、教えてやろう。私は次元を越えて存在する調律者…高次元人だ」

ネモ船長「高次元人だと…？」

ブラック・ノワール「もっと分かり易い言葉で言うならば、神だ」

エンブリヲ「かつての私やヨハンの様な事を言うのだな…！」

ブラック・ノワール「私の役目は複数の世界をコントロールし、アル・ワースを支える事にある」

イオリ「アル・ワースを存続させる存在……」

アマリ「そんな……では、あなたが……！」

ブラック・ノワール「そうだ、藍柱石の術士よ。私は智の神エンデでもある」
ルルーシユ「何だと……?!?」

ヨハン「そんなバカな事が……！」

ルクス「……」

ゴークイレッド「あいつが……教団の崇拜していた智の神エンデだったのか……！」

ゴークイシルバー「アル・ワースの創造主……それが実在していたなんて……」

ゴークイイエロー「それも、あんな得体の知れない化け物だったなんて……！」

アマリ「……」

ブラック・ノワール「アル・ワースは、複数の世界によって発生するエネルギーで存在している。だが、元は世界は複数ではなかった……」

シヨウ「それは……シヨットも言っていた……。それはどう意味なんだ?!?」

ブラック・ノワール「ウルトラマンゼロや渡瀬 青葉達、ネモ達、始まりの世界、アラの世界、そして……新垣 零達が暮らす世界以外の世界は……元々、平和の世界、戦争

の世界、革命の世界と同等の世界だった」

イオリ「何…!?？」

ワタル「ど、どういう事!?？」

ブラック・ノワール「正義の世界、激戦の世界、笑顔の世界、機械の世界、共存の世界、神話の世界は平和の世界に、バナージ・リンクス達の世界は戦争の世界に、運命の世界、対話の世界、救世主の世界、鉄の世界、愛の世界、女尊男卑の世界、歌の世界、戦の世界、想いの世界、希望と絶望の世界は革命の世界にそれぞれ割り当てられる」

アムロ「複数の世界は…平和の世界、革命の世界、戦争の世界からそれぞれ派生した世界だと言うのか…!?？」

シヤア「だが、何故世界が複数に別れた…!?？」

ネメシス「遙か昔に俺がバカやらかした影響だよ」

ラゴウ「ネメシスが…三つの世界を複数に分けた元凶…!」

刹那「俺がヒイロや三日月を見た事があると思っていたのは…複数に分けられる前に出会った事があるかも知れなかったという事か…!」

アキト「複数に分かれた事によつて、時間軸もバラバラになってしまったという事か…しんのすけ「オラ達…そんな関係があつたんだね」

ブラック・ノワール「そうだ。戦争と平和と革命…。その終わりなき変転をスムーズ

に発生させる為に私がいるのだ。私の直近の働きは平和の世界を革命の世界へと変えようとした事だ」

舞人「何っ!?？」

ブラック・ノワール「その為に私はかつてアル・ワースから平和の世界に侵攻したオリュンポスの遺産を使う者を支援した」

甲児「まさか、それは……！」

ブラック・ノワール「そうだ。Dr. ヘルと呼ばれる人間だ。それに抵抗する光の魔神達も誕生し、平和の世界を舞台に闇と光の戦いが再び始まった。それだけでは足りない為、私はパープルやエグゼブという悪とそれに対する正義を用意した」

舞人「！」

ブラック・ノワール「そうだ、旋風寺 舞人……。お前の存在は、その核となるヒーローという駒だ。こうして平和の世界に戦いは起こった。後は悪が勝利する事で秩序が失われればいい……。そうすれば、世界は混沌に落ち、そこから新たな秩序が生まれる革命の世界へと変転していく事になる。それに呼応して、戦争の世界は平和の世界に、革命の世界は戦争の世界へと変わっていく……。時代が動く巨大なエネルギーはアル・ワースにいる私へと流れ込み、それによって世界は存続するのだ」

舞人「俺達の世界……いや、複数の世界はあのブラック・ノワールによって管理されて

いた…」

アマリ「そして、それによって生じたエネルギーがアル・ワースを支えていたなんて…」

ブラック・ノワール「そして、私は見たかった事もある」

ジョー「それは何だ!?？」

ブラック・ノワール「ヒーローが最後の戦いで死ぬ瞬間だ」

ラゴウ「ヒーローが…死ぬ、だと…!?？」

ブラック・ノワール「そう、オダ・ノブナガ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、三日・オーガス…お前達だ」

ルルーシュ「まさか…俺達の死もお前の筋書き通りだったというのか!」

ブラック・ノワール「そう、形は違うが、お前達は悪よりの正義で世界や家族の為に戦い、死んだ」

三日月「…」

ノブナガ「…」

ブラック・ノワール「そして、悲しみの内、復讐の為に立ち上がるヒーローも用意した」

アキト「!」

ヴァン「俺達だって、言いたいのか……」

ブラック・ノワール「全て、面白きゲームだった。だが、ある世界でたった一人だけ、私の存在に気づいた物がいて、ある物を私のエミュレーターとして開発した……。それが、対話の世界に存在するヴェーダだ」

ロックオン「何だと!?？」

アレルヤ「ヴェーダが……ブラック・ノワールのエミュレーター……!?？」

テイエリア「では、イオリアがその様な過程でヴェーダを開発したとは……!」

ブラック・ノワール「それにより、イノベイドと呼ばれるイレギュラーな存在が生まれたがな」

リボンズ「……」

ブラック・ノワール「私の存在を理解出来たのなら、私の用意した筋書き通りに従え。それこそが、三つの世界とアル・ワースで構成されるシステムにとって、最も正しい結果となる」

シーブック「……」

ユイ「……」

ブラック・ノワール「何も言う事が出来まい……。それが人間の……私の用意した駒の限界だ」

? 「果たして、そうかな?」

? 2 「お前は生命を舐めすぎているんだよ!」

こ、この声は……!

ダイターン3とゼロさんが現れました……?

万丈 「人間はお前が想定した以上の力を持っている!」

ゼロ 「そして、それはいつも俺達を助けてくれるんだよ!」

甲児 「万丈さん!」

鈴 「ゼロ!」

ゴークイレッド 「生きていたのか、お前等!」

万丈 「奇跡が起きた……」

ゼロ 「いや……俺達は奇跡を起こしたんだよ」

舞人 「奇跡……?」

万丈 「そうだ……。それはキタンも同じだ」

ヨーク 「キタンが……!」

ゼロ 「キタンは生命の全てを捧げ、この因果の渦に小さな傷をつけたんだ。きつとそれが奇跡を呼ぶぜ!」

「シモンだ。」

カミナ「…行くぜ、シモン。俺達はお天道様に背を向けて、下を向いて生きていきやいいんだよ」

シモン「う、うん…」

？「(それでいいのかよ、シモン…)」

シモン「！」

キタン「俺とお前が信じた男が、あんなチンケな野郎か…?」

シモン「キタン…！キタンなんだね！でも、俺にはわからない…。何が真実で、何が嘘なのか…」

キタン「(それを決めるのは、お前だ…)」

シモン「でも…」

キタン「(可能性を、未来を、真実を、自分で決める…。それが想いの力になるって事だ…。今の俺なら、それがわかる…)」

シモン「キタン…！まさか…」

キタン「(急げ、シモン…。みんながお前を待っている…)」

カミナ「何してやがる、シモン！俺様を待たせんな！」

シモン「…俺は…下は向かない…」

カミナ「は…?」

シモン「俺のドリルは…!天を貫くドリルだあああつ!!?」

俺はコアドリルで空間を貫いた…。

そして、俺の目の前に本当の兄貴が立っていた…。

カミナ「よう、シモン…」

シモン「兄貴…」

カミナ「お前の選んだ俺は、やっぱり、こっちの俺だったな」

シモン「ああ…」

カミナ「行け、シモン…!もしかか、たらとか、ればとか…そんな思いに惑わされんな。自分の選んだ一つの事が、お前の宇宙の真実だ」

シモン「ああ、そうだな。その通りだ」

キタン「へ…収まる所に収まったな」

カミナ「…誰だっけ?」

キタン「黒の兄弟のキタン様だよ!また忘れたのか、お前!?!」

カミナ「へ…バアカ!忘れるわけねえだろうがよ!」

キタン「んだよ、この野郎!」

シモン「ありがたいな、キタン」

キタン「おう……！後は任せるぜ、シモン！」

シモン「ああ……！」

カミナ「……いつの間にか背え抜かれちまったな……」

シモン「ほんとだ！……行くよ、兄貴」

カミナ「ああ……。今度こそ、ほんとにアバヨだ！行けよ、兄弟！」

シモン「アバヨじゃねえ……。一緒だろ、いつまでも」

カミナ「ああ……！」

シモン「じゃあ……行くぜ!!？」

俺は消えた……。

ーよう、キタン・バチカだ。

キタン「お前の信じた弟分は立派になったな」

カミナ「そうだな。今では追い抜かれちまった……。さてと、俺達も行くとするぞ、キ

タン」

キタン「行くつて……何処にだよ!!？」

カミナ「決まってるだろう…兄弟やダチ公の所だよ！」

キタン「!…へっ、ああ。上等だ！」

まだまだやるぜ…俺達も…!

「アマリ・アクアマリンです。

ブラック・ノワール「何をしようとしてもムダだ。この因果の果てすら自在に行き来するからこそ、全知全能の存在、智の神エンデなのだ」

シモン「ごちゃごちゃとうるせえ!!?」

すると、ブルーウオーターが一瞬、光った…!!?

ナディア「ブルーウオーターが…!」

ジャン「一瞬だけど、光った…!!?」

すると、空間を突き破り、グレンラガンとスペースキングキタン、それからスペースのエンキドウドウが現れました…。

シモン「神だか何だか知らねえが、敵ならぶっ飛ばすだけだ!」

カミナ「そのイキだぜ、シモン!」

シモン「え…兄貴…!?? 兄貴がどうして、グレンに!??」

カミナ「何言ってるんだよ、可愛い弟分が戦おうとしているのにおちおち寝てられるかよ、そうだろう、キタン！」

キタン「その通りだぜ！」

ギミー「キタンさん！」

万丈「さらなる奇跡を生んだか、キタン」

ナディア「(ありがとう、ブルーウオーター…)」

ダリー「じゃあ、そっちのエンキドウドウに乗っているのは…」

ヴィラル「スペースエンキドウドウ…。また、俺と戦ってくれるのか…」

カミナ「お前の席を奪っちゃまって、悪いな、ヴィラル」

ヴィラル「構わん。それにスペースエンキドウドウがあるのに、そちらに乗るわけにはいかんからな。仕方がないが、お前に託すぞ、カミナ」

カミナ「ありがとうよ、ダチ公！エクスクロスのみんな！俺は元大グレン団の鬼リダー、カミナ様だ！覚えておけ！」

クリス「あ、暑苦しい…」

ロザリー「シモンがああなる理由がわかったぜ」

竜馬「お前とは気が合いそうだが、カミナ！」

カミナ「そういうお前こそな！」

ブラック・ノワール「螺旋の男……どうやって、多元宇宙迷宮から抜け出したのだ！」
ダリー「そうです！今まで、何処にいたんです!?!？」

シモン「ちよつと遠くにいた……。だが、キタンが俺を迎えに来てくれた」

キタン「へへっ……」

ヨーコ「キタンが……」

カミナ「お前、ヨーコか……？しばらく見ない間にいい女になったじゃねえか！」

ヨーコ「あなたは変わらずね、カミナ」

カミナ「それが俺だからな」

万丈「キタンの命懸けの行動が小さな奇跡を生んだ……」

シモン「そして、それを俺達が大きな力とする！」

ヴイラル「いい気合だ、シモン」

シモン「兄貴が近くにいるからな」

ヴイラル「そうか……。それではハマは打てんな」

カミナ「そうだぜ、シモン！」

シモン「ああ！やるぜ!!？」

舞人「シモンさんのドリル……こんな状況でも回っている……」

ヴァイラル「怒りも悲しみも…生きている事全てがシモンのドリルを回すエネルギーだ」

舞人「生きている事がエネルギー…」

カミナ「そうだ。それが、シモンの強さなんだよ！」

シモン「舞人！お前はどんなんだ?!？お前の生きている意味は…正義は死んじまったのか！」

舞人「！」

ブラック・ノワール「神の力を理解した時、旋風寺 舞人の全ては終わった。もう正義は…」

舞人「…黙れ、ブラック・ノワール…。お前は神などではない！」

ブラック・ノワール「私の言葉が理解出来なかったようだな」

舞人「お前が何者であろうと俺の正義は負けない!!？」

イノセントウエーブが発動しました！

ブラック・ノワール「これは…イノセントウエーブ！アル・ワースの真理に到達したのはごく僅かな弱き者だったはず…！何故、それを旋風寺 舞人が！」

舞人「万丈さんとゼロが教えてくれた！俺達一人一人が太陽を…光を持っている事！そして、キタンさんが教えてくれた！勝利の為に生命を懸ける事を！俺達の生命も生

き方も俺達のものだ！お前の思い通りにはならない！」

ブラック・ノワール「バカな…！そんな力をお前達に持たせたつもりはないぞ！」

ジユドー「だが、持っている！」

キオ「僕達の想いが…戦う意思がお前という神を打ち破る！」

舞人「ブラック・ノワール！人間に負けるお前に神を名乗る資格はない!!？」

シモン「俺も舞人も立ち上がったぞ！お前はどうかんだよ、零!!？」

ネメシス「流石に無理だ。零はもう終わる」

シモン「勝手に零の終わりを決めてんじゃねえ！」

舞人「零さんは…必ず立ち上がる人です！」

―新垣 零…なのか、俺は…？

声が聞こえる…。でも、誰の声か覚えていない…。俺は…誰だ…？

俺は…何の為に戦っていたんだ…？そもそも、戦うって、なんだ…？どうして、そこ

まで苦しんでいるんだ…？

ネメシス「仲間が、お前を呼んでいるぜ、零」

零「仲、間…？」

何も…思い出せない…。

もう、いいや…こんなに苦しいんなら…いつそ、楽になつても…。

レイヤ「(本当にそれでいいのかよ?)」

零「え…」

レイヤ「(お前の覚悟はその程度のもだったのかつて、聞いてんだよ、相棒!)」

零「誰…だ…?」

この声…でも…聞いた事がある…。

レイヤ「(俺の事まで忘れちゃったのかよ…この馬鹿野郎!)」

零「!」

気づけば、俺は真つ白な空間にいた。

零「ここは…」

レイヤ「どうだ、目え覚めたか?」

零「…レイヤ…」

そうだ…。こいつはレイヤ・エメラルド…。もう一人の…いや、俺自身か…。

レイヤ「思い出したのかよ。つたく、お前は本当に世話のかかる奴だな。なあ、相棒

? お前にはまだ守るべきものがたくさんあるだろ?」

零「守るべき…もの…!」

レイヤ「立てよ。みんな、お前の帰りを待っているぜ」

零「…そうだな…。すまない、レイヤ。また迷惑をかけたな」

レイヤ「全くだぜ…。頑張れよ、相棒」

零「ああ…！」

俺の視界は光に包まれた…。

ネメシス「絶望のエネルギーが97%、98%、99%…チェックメイトだな、零」

零「…勝手に…決めるな…」

ネメシス「！」

零「俺はまだ…諦めてねえんだよ！」

俺は力を込めて、拘束を破壊した…。

ネメシス「零、お前…！まさか、今まで俺が全て、注ぎ込んだ力を自分の力に変換し

たつての…か…？」

零「どんな力も使いこなせば俺の力だ…！」

ネメシス「そうかよ。なら、機体で勝負だ！まあ、この空間から抜け出せればな」

ネメシスは消えやがった…！

零「…ああ、お望み通り、抜け出してやるよ！」

仲間を守る為…俺は行くぜ、レイヤ…！

「アマリ・アクアマリンです。」

リユクス「砲台のエネルギー供給が止まりました！」

マーベル「という事は……！」

ルルーシユ「やつと、目を覚ましたか……！」

ネメシス「つまんねえ……。なら、零が戻ってくるまでに残ったエネルギーでデイスペア・ブラスターを発射するまでだ！」

トッド「何だと!?？」

バーン「この距離では間に合わんぞ！」

？「その動きは読めていた！」

アマテラス・ツヴァイが現れました……。

ラゴウ「ギルガ！」

ネメシス「お前、今更何しに来やがった……？」

ギルガ「こうするのさ！」

アマテラス・ツヴァイは動き出し、デイスペア・ブラスターを攻撃しました。

弘樹「何やってんだよ、お前は!?？このままじゃ、俺達も木っ端微塵だぞ！」

ギルガ「計算済みさ！リンちゃん！」

リン「はい！ミラーフィールド、展開！」

アマテラス・ツヴァイから発射されたビームがフィールドを展開し、デイスペア・ブラスターを包み込み、フィールド内でデイスペア・ブラスターは爆発し、爆発のエネルギーは全て、フィールド内で消えました…。

ネメシス「何だと…!!?」

アネツサ「デイスペア・ブラスターの破壊を確認！」

倉光「やってくれたね、ギルガ・カルセドニー」

ギルガ「…何とかなつたね」

ラゴウ「ギルガ…」

ネメシス「てめえ…裏切る可能性は考えていたが、こんな事をしてくれたとはな」

ギルガ「僕が君なんかに従うわけないだろう？」

弘樹「え…ど、どういう事だよ!!?」

ギルガ「ネメシスを騙したんだよ。彼の大きな目的を潰すためにね。名付けて、敵を騙すなら、味方から作戦！」

リン「そのまんまですわね…」

ギルガ「仕方ないじゃないか、思いつかなかつたんだから」

ネメシス「リンも洗脳から解除されていたのか……。ふざけやがって……！」
ラゴウ「ギルガ、お前……」

ギルガ「ごめんね、兄さん。結果的に騙す様な真似をして……」

ラゴウ「……ふう……。兄である俺をも騙すとは……流石だ、ギルガ」

ギルガ「兄さんには力では勝てないからね。頭を使うしかなかったんだよ」

ラゴウ「……全く、恐ろしい弟だ」

ギルガ「恐ろしい兄さんの弟だから」

ラゴウ「それも、そうだな」

マリア「ギルガ……ラゴウ……」

弘樹「お、俺だって、頭は使えるぞ！」

優香「弘樹の場合は頭突きだけどね！」

弘樹「何気に酷いな、優香!?!」

ギルガ「事実じゃないか」

弘樹「何だとぶっ飛ばすぞ、てめえ！」

カノン「怒っては相手の思うつぼですよ、弘樹さん……」

リン「もう、ギルガさん……」

メル「リンちゃん……」

リン「あ…メルちゃん。ごめんね…騙すような真似をして…何でもするから許して！」

メル「うん、それなら、ビンタ30発で許して上げる！」

リン「それは勘弁してええええつ！」

アスナ「(恐ろしいわね、メル…)」

ネメシス「そうか…そうかそうか…。なら、お前達から消してやるよ、ギルガ、リン！」

ギルガ「！」

アルガイヤ・ノヴァは拳からエネルギー弾をアマテラス・ツヴァイに向けて、放たれましたが、突如、アマテラス・ツヴァイの前にバリアが張られ、エネルギー弾は弾かれました…。

リン「こ、これは…！」

ギルガ「漸く来たね」

ゼファイ「！ママ、帰ってきましたよ！私達の、大切なパパが…！」

アマリ「…ええ、ゼファイちゃん！」

空間を突き破り、零君が現れました…。

―新垣 零だ。

漸くあの空間から脱出出来たぜ…。

零「出てきてやったぜ、ネメシス！」

ネメシス「やはり、そこまで時間をかけなかったか…」

零「構造が厄介だったがな、何とか抜けれたぜ。アスナ、頼む！」

アスナ「ええ！」

ゼファイルスネクサスが俺の前に来て、俺はゼファイルスネクサスに乗った。

零「一発、かましてやるぜ、ネメシス！」

すると、ゼファイルスネクサスの隣にヴァリアスデストロイとデイビウスホープレイが並んだ。

優香「私達もやるよ、零！」

弘樹「あいつに一発かましてやりてえのは俺達も一緒だ！」

零「いいぜ、なら三人…いや、七人で決めるぜ！」

ゼファイ「はい、パパ！」

ゼファイルスネクサス、ヴァリアスデストロイ、デイビウスホープレイはアルガイヤ・ノヴァに攻撃を仕掛けた…。

零「ネメシス、俺達の一撃：喰らいやがれ！三機のフォーメーションで行くぜ、みんな！」

優香「援護は任せて！行くわよ、メルちゃん！」

メル「はい、ブラストビット！」

デイビウスホーププレイはクロスガンとブラストビットを連射させ、アルガイヤ・ノヴァにダメージを与え続ける。

弘樹「斬り込み役は俺達の役目だ！」

零「行くぜ、弘樹！」

ゼフィルスネクサスとヴァリアスデストロイはブレードビットとガンズビット、セイバービットで攻撃し、クロスソードで何度も斬り裂いた。

アスナ「いい調子よ、二人共！」

カノン「優香さんお願いします！」

優香「了解！」

デイビウスホーププレイもクロスソードで斬り刻む。

ゼファイ「弘樹お兄さん、優香お兄さん！」

弘樹「おう！」

優香「はああああっ！」

ヴァリアスデストロイとデイヴィスホーププレイはアルガイヤ・ノヴァを大きく斬り裂いた。

弘樹「零！」

零「消し飛べ、ネメシス！うおおおおつ！！？」

最後にゼフィールスネクサスが一刀両断した…。

ネメシス「グアアアアアツ！！？」

零「俺達の…勝ちだ！」

攻撃を受けたアルガイヤ・ノヴァはダメージを負った…。

ネメシス「グツ…！この力は…！」

零「俺達と…兄弟機の方だ！」

ネメシス「…やはり、お前達とのゲームは面白い！ならば、再び、傍観者として見せてもらうぜ。ブラック・ノワールとアンチスパイラルをどう倒すのかをな！それから、マリア。ハデスの身体はもう用済みでな…エクスクロスの艦に運んでやったから、看病をしてやれよ」

そう言い残し、アルガイヤ・ノヴァは撤退した…。

マリア「ハ、ハデスが戻ってきているの！？？」

レーネ「確かに…ハデス・エメラルドが送られて来ました」

ゼファイ「良かったですね、パパ！」

零「ああ、そうだな」

：用済み……。ネメシス、お前は力を取り戻したって、事なのか……？

ジョー「これではブラック・ノワールを倒すだけだ！」

ブラック・ノワール「バカな……！こんな事態は想定していないぞ！」

ルルーシュ「メツキがはげたな、神を騙る者！」

竜馬「俺達一人一人がイノセントウエーブで想いを力に変えれば、どんな闇だろうと打ち破れる！」

万丈「そうだ！その力により僕とダイターン3やゼロも無限の闇から蘇ったんだ！」

ゼロ「観念する時だぜ、ブラック・ノワール！」

キタン「俺達の力を舐めた報いを受けやがれ！」

ブラック・ノワール「そんなはずはない！私は……私は……！」

ジョー「往生際が悪いな、外道！」

舞人「認める、ブラック・ノワール！確かにお前は強い力を持っているだろうが、神ではない！」

ブラック・ノワール「そんな事はない！そんな事はない！そんな事はない！」

シモン「馬鹿の一つ覚えみたいに！壊れた機械かよ！」

カミナ「なら、もつとバラバラにしてやるぜ！」

零「ギルガ、リン……。お前達もやるだろ？」

リン「勿論です！」

ギルガ「作戦とはいえ、みんなを騙したからね……。その責任は取らないと」

舞人「行こう、みんな！今こそ俺達の想いを一つにしてブラック・ノワールを倒すん

だ!!？」

ブラック・ノワール「旋風寺 舞人……お前は、お前は、お前は……」

舞人「もう一度言うぞ、ブラック・ノワール！お前は神ではない！」

ブラック・ノワール「では、私は何なのだ!!？」

舞人「お前は……悪だつ!!？」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話 シモンVS初戦闘〉

カミナ「久しぶりだな、この感じ！」

シモン「ああ、そうだな！」

カミナ「よっしゃあ、シモン！あの頃以上に熱く行くぜ！」

シモン「勿論だ、兄貴！俺達のドリル：受けてみやがれ！」

〈戦闘会話　ヴィラルVS初戦闘〉

ヴィラル「やるな、シモン！スペースエンキドウドウ、俺達も負けていられないぞ！」

〈戦闘会話　キタンVS初戦闘〉

キタン「俺は死ななかつた！つまり、まだまだ暴れろつて、事だな！それなら、容赦なく行くぜ！」

〈戦闘会話　零VS初戦闘〉

零「アスナ、ゼファイ！二人だけで戦わせて、悪かつたな」

アスナ「心配ないわ、零！」

ゼファイ「私達だって、戦えてましたよ！」

零「そうだな…。よし、二人共、今度はフォローを頼むぜ！」

〈戦闘会話　ギルガVS初戦闘〉

リン「ギルガさん、ここから新たな初陣です！」

ギルガ「ああ！リンちゃん、何処までもついて来てくれるかい？」

リン「当たり前です、私はギルガさんのパートナーなのですから！」

ギルガ「ありがとう……。では、行くよ！」

〈戦闘会話 エイサップVSブラック・ノワール〉

エレボス「行こう、エイサップ！私達のオーラ力で闇を斬るんだ！」

エイサップ「ああ！オーラに斬れないものはないんだ！」

〈戦闘会話 バナージVSブラック・ノワール〉

バナージ「可能性を潰そうとする悪の化身……。あなたの闇は俺達が打ち消す！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSブラック・ノワール〉

キンケドゥ「人の生命や想いを踏みにじったお前を俺は許しはしないぞ！」

〈戦闘会話 シンVSブラック・ノワール〉

シン「確かにお前は俺達の世界を管理していたかもしれない……。だがな、何でもかんでもお前の筋書通りに行くと思うなよ！」

〈戦闘会話 キラVSブラック・ノワール〉

キラ「僕はあなたの思い通りにはならない！みんなと生きる為に！」

〈戦闘会話 刹那VSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「お前がイノベーターとして覚醒した事もELSと対話できたのも私の筋書通りなのだよ」

刹那「違うな。俺達は自分の意志で対話をした！そこにお前の存在は関係ない……！」

〈戦闘会話 リボンズVSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「消えろ、イレギュラーが！お前の存在は許されない！」

リボンズ「君に許しを問う必要はない。僕は僕として生きるだけだ！」

〈戦闘会話 キオVSブラック・ノワール〉

キオ「戦争を引き起こしたお前を僕が倒す！救世主、ガンダムと一緒に！」

〈戦闘会話 アセムVSブラック・ノワール〉

アセム「俺達は駒じゃねえ！それを全力で教えてやるよ！」

〈戦闘会話 フリットVSブラック・ノワール〉

フリット「悪の化身が相手だろうが、人間の光には勝てん！それを教えてやろう！」

〈戦闘会話 三日月VSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「滑稽だったぞ、仲間を庇って、死んでいく様は……」

三日月「どうでもいいよ、そんなの。あの時は俺自身がそうしたかったからそうしただけ、あんたの筋書ってのは関係ないよ。だけど、鉄華団の生命を弄んだ事だけは許さない……！」

〈戦闘会話 オルガVSブラック・ノワール〉

オルガ「鉄華団を……俺の家族をゲームの駒の様に扱ったお前を俺は許すつもりはねえ！」

〈戦闘会話 海道VSブラック・ノワール〉

真上「とんだ堕ちた神だな」

海道「そうだな。お前は俺達を管理する事なんて、出来ないんだよ！俺達は地獄だからな！」

〈戦闘会話 エンブリヲVSブラック・ノワール〉

エンブリヲ「私が言えた事ではないが、無様だな、ブラック・ノワール」

ブラック・ノワール「黙れ、エンブリヲ！調律者の分際で……！」

エンブリヲ「悪いが今の私はただのエンブリヲだよ。お前を倒す男だ！」

〈戦闘会話 一夏VSブラック・ノワール〉

一夏「俺達の考え：俺達の意味を俺達のものだ！それをお前に管理される筋合いはねえんだよ！」

〈戦闘会話 竜馬VSブラック・ノワール〉

弁慶「とんだ勘違い神が出て来たもんだぜ」

隼人「竜馬、あのバカに教えてやれ」

竜馬「おう！ゲッターの力はゲームなんかでは測れない事を教えてやるぜ！」

〈戦闘会話 葵VSブラック・ノワール〉

エーダ「私達は全て、自分で考えて来ました！」

くらら「あなたがそう仕向けたとしても、私達にとつては自分自身の考えよ！」

葵「そういう事！悪いゲームマスターはここで退場してもらおう！」

〈戦闘会話 九郎VSブラック・ノワール〉

アル「妾と九郎の出会いがお前の筋書通りだとかそんな事は関係ない！」

九郎「俺とアルの出会いには運命だ！それを嘲笑う事は許さねえ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「お前達をヒーローとして仕向けたのも私だ」

ジョーイ「だとしても、僕達は僕達の意思で戦つて来たんだ！それはゲームなんかとは関係ないんだ！」

〈戦闘会話 ヴァンVSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「どうだ、最愛の人を殺され、敵討ちを終えた気持ちは？」

ヴァン「さあな。敵討ちを終えた俺にはどうでもいい事だ。だがな、お前の考えはム

カつくんだよ！」

〈戦闘会話 アマタVSブラック・ノワール〉

ミコノ「アマタ君、私達の力を見せてあげよう！」

アマタ「ああ、ミコノさん、任せて！ブラック・ノワール！お前のゲームは俺達が終わらせる！」

〈戦闘会話 ノリコVSブラック・ノワール〉

カズミ「確かに私達の戦いはあなたにとってはゲームの一部かもしれないわ……」

ノリコ「でも、私達はいつでも全力で戦っているわ！例え、あなたの筋書がバッドエントでもハッピーエンドを勝ち取るわ！」

〈戦闘会話 ユイVSブラック・ノワール〉

レナ「あいつも今までの敵と同じく、欲に縛られるているんだね」

ユイ「私はあなたにとっては、女皇というお人形さんかもしれない……。それでも、私はエナストリアや全ての国の人達の為に戦います！」

〈戦闘会話 ヨハンVSブラック・ノワール〉

ヨハン「お前も僕と同じ、神の器ではないメツキだったって事だね」

ブラック・ノワール「黙れ、ルクス・エクスマキナ！」

ヨハン「何言っているの？僕はヨハン、ルクス・エクスマキナなんて、もう存在しないんだよ！」

〈戦闘会話 ノブナガVSブラック・ノワール〉

ノブナガ「俺が破壊王として、戦つて来たのは運命だ…。お前の思い通りではない！ならば、お前の筋書という物を破壊する！」

〈戦闘会話 しんのすけVSブラック・ノワール〉

ひろし「俺達は一人一人の人間だ！」

みさえ「そして、それぞれの考えを持っているわ！」

カンナム「それをお前が管理する資格はない！」

しんのすけ「オラ達はいつでもどこでも、どんな時でも、自分で考えているんだゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVSブラック・ノワール〉

タママ「ペコポン侵略がうまくいかないのもあいつのせいじゃないですか、軍曹さん？」

ケロロ「そうでありたいと思うが、他人のせいにする必要はありません！我輩達は駒ではないのであります！」

〈戦闘会話 アキトVSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「何故だ、テンカワ・アキト！何故、お前は元に戻った…!??そのまま、お前は誰とも会わずに生涯を終えるはずだったんだぞ！」

アキト「人の運命は…何が起きるかわからない。それがわからないお前に権利者としての資格はない！」

〈戦闘会話 ルリVSブラック・ノワール〉

ユリカ「ルリちゃんを可愛いのもあの人かそうしたかもしれないね」

ルリ「関係ないです。私は私として、生まれて来たので…。どの様な容姿でも私は私です」

〈戦闘会話 アルトVSブラック・ノワール〉

アルト「例え、俺達の世界の空が、お前の作った空だとしても、俺達は全力で飛んでいるんだよ！だから、そうやって、色々いじられるのもこれで終わりだ！」

〈戦闘会話 リオンVSブラック・ノワール〉

リオン「覚悟しろよ、神を気取るお山の大将！俺達は何度でも反抗してやるぜ！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSブラック・ノワール〉

ゴーカイブルー「俺達の結成も全てのスーパー戦隊もあいつの筋書通りなのかもな」
ゴーカイレッド「そんなのは関係ねえ！例え、全部があいつの筋書通りだとしても、俺達は海賊の誇りを忘れはしねえ！」

〈戦闘会話 ゼロVSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「お前の光の強さは想定外だ、ウルトラマンゼロ！」

ゼロ「知るかよ、そんな事！俺達の光は無限大だ！お前の闇如きで覆えると思うなよ！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSブラック・ノワール〉

レイモン「レイオニクスバトルもお前のゲームの一貫だと言うなら、責任は取らなければならぬ。いくぞ、ゴモラ！」

〈戦闘会話 アーニーVSブラック・ノワール〉

サヤ「私達の戦いは私達自身が、平和を望んで戦った事です！」

アーニー「相手をしてやる、ペテン師。だが、今回は荒っぽくいくぞ！」

〈戦闘会話 零VSブラック・ノワール〉

ブラック・ノワール「ネメシスの遺伝子を持つ者！本来ならお前は、既にネメシスの道具となっているはずだ！それなのに何故……！」

零「そう何でもかんでもお前の思い通りになると思ったら大間違いだぜ！これは俺自身を選択なんだからな！」

グレートマイトガインの攻撃で超巨大空中要塞にダメージを与えた。

ブラック・ノワール「わ、私が……！智の神エンデが滅びるといのか！」

舞人「お前が負けるのはあらゆる世界の絶対不変の理だ！」

ブラック・ノワール「そ、それは何だ……？」

舞人「正義は必ず勝つ！それだけだ！」

ブラック・ノワール「そんな…！そんなあああつ!!?」

ホープス「ブラック・ノワール…。最後にあなたに一つだけ教えてあげます。あなた

は智の神エンデなどではありません。その様に思い込まされていたのでしよう」

ブラック・ノワール「な、何だとおお!!?」

超巨大空中要塞は爆発した…。

グレートマイトガイ「悪の最期か…」

舞人「ブラック・ノワール…。人間はお前のゲームの駒ではないんだ…」

夏美「敵はいなくなっただけど、どうやって、ここから脱出するんですか？」

ドロロ「その答えは勇者殿が教えてくれましたでござるよ」

夏美「…わかったわ！」

キタン「その通りだぜ、夏美！」

カミナ「じゃあ、シモン！お前が先陣を切れ！」

シモン「おう！やるぞ、みんな…！」

グレンラガンが先行して、俺達は因果の渦の中に入った。

シモン「俺達全員が一つのドリルになる…！」

零「俺達は心の中の弱さ…闇を越えて、想いを力にする術を身につけた」

ゼロ「その力を回転によって増幅し、一点にぶち込む……！」

舞人「それがエグゼブが恐れていた、次元さえも……世界の理さえも貫くドリル……！」

万丈「僕達にもう言葉はいらない」

ベルリ「不思議だ……、何もしなくても想いが伝わってくる……」

青葉「この感覚……！まるで全員でのカップリングだ！」

アマリ「みんなの想いと力が、今、一つに……！」

シモン「行くぜ、ダチ公！これがエクスクロスというドリルだ!!？」

俺達は想いを力に変え、空間を突き破った……。

第78話 可能性の宇宙

「ニア・テツペリンです。

シモン達が…やったのですね！

アンチスパイラル「…多元宇宙迷宮から抜け出しただけでなく、因果の渦を逆転させるとは…。我々の理解の範囲を越えている…」

ニア「あれが彼等の…人間の力です」

アンチスパイラル「急がなければならない…。お前を分析して答えを出さなければ、スパイラルネメシスが…」

ニア「どんなに私の身体を調べても、今のあなたでは彼等には勝てないでしょう。あの人は来ます…！必ず…!!？それがシモンです！」

空間を突き破り、シモンが現れました…！

シモン「来たぞ、ニア！約束通りにな!!？」

ニア「うん！」

アンチスパイラル「バカな…！因果の渦を抜けただけでなく、この隔絶宇宙にまで侵

入してくるとは！」

シモン「舐めんじやねえ！時間だろうが！空間だろうが！多元宇宙だろうが！そんな事知った事じゃねえ！てめえの決めた道を、てめえのやり方で貫き通す！それが俺達、エクスクロスだ!!？アンチスパイラル！ニアは返してもらおうぞ!!？そして、見せてやる！俺の…俺達の力をつ!!？」

シモンから螺旋力が溢れる…！

第78話 可能性の宇宙

ーシモンだ！

シモン「天元突破…グレンラガン!!？」

大グレン団「〃〃〃俺達を誰だと思っついていやがる!!？」

俺達は天元突破グレンラガンを呼び出した。

シモン「出て来やがれ、アンチスパイラル！」

アンチスパイラル「成る程…。全員の力を結集して、お前を、この隔絶宇宙へと送り

込んだか…。そして、認識宇宙を理解し、自身の思念を実体化させたのが、その姿だな…」

シモン「御託はいい！決着をつけるぞ！」

アンチスパイラル「いいだろう。お前達と同じカタチで戦ってやろう」

あれがアンチスパイラルの兵器か…！

テツカン「な、何だ、あれ!?？」

アーテンボロー「天元突破グレンラガンに似てる！」

ダヤツカ「どうなってるんだ!?？」

ロージエノム「それが奴の手だ。同等の姿で戦い、勝利する事で我々に絶対的絶望を与えようとしている」

キタン「成る程な、あいつがやりそうな事だぜ！」

シモン「ロージエノム…！その身体は！」

ロージエノム「ここもアル・ワースと同じ…想いが力となり、認識が実体化する超螺旋宇宙…」

リーロン「この天元突破グレンラガンがとてつもない大きさなのは、そのためなのね」

ロージエノム「かりそめの身体だが、今は共に戦わせてくれ」

キッド「まさか、ロージエノムが力を貸してくれるとはな」

アイラック 「何か、盛り上がって来たぜ！」

マツケン 「そうだな」

シモン 「心強いよ、ロージェノム……！」

ロージェノム 「ニア、今さら父親面出来るとも思わぬが、よく頑張った……」

ニア 「ありがとう、お父様」

ゾーシイ 「家族の感動の対面か」

バリンボー 「うおおおおっ！感動だあああつ！！？」

ジョーガン 「いいぞおおおっ！！？」

ヴィラル 「数千年の倦怠から目が覚めましたか、螺旋王……」

ロージェノム 「王ではない。今はただの戦士だ。ヴィラル……お前と同じな」

ヴィラル 「は……！」

アンチスパイラル 「螺旋族め。貴様等の心を折ってくれよう」

アンチスパイラルの艦隊が数十体現れた……！！

シベラ 「アンチスパイラル艦隊、出現！」

ガバル 「あいつ等もデカくなってるぞ！」

カミナ 「これも超螺旋宇宙って奴の力かよ！」

アンチスパイラル 「その通りだ。全ては我々の意思だ。螺旋の男よ。お前がどれだけ

足掻こうとこれで勝負は見えた」

シモン「要するにタイムマンじゃ俺に勝てないから仲間を呼んだってわけかよ」

アンチスパイラル「何とでも言うがいい。我々は己の使命を果たすのみだ」

シモン「じゃあ、ここからは総力戦だな！」

エクスクロスのみんなが来てくれたぜ……！！

―新垣 零だ。

俺達が出撃した……。

零「待たせたな、大グレン団のみんな！」

アマリ「エクスクロス、ただいま参上です！」

ワタル「すごい！みんな、銀河より大きくなってる！」

一夏「だ、大丈夫なのかよ、俺達の身体は……？」

マドカ「何とも無いようだが……」

千冬「ならば、大丈夫なのだろう」

アンチスパイラル「これは……」

ゼロ「残念だったな、アンチスパイラル！俺達は想いを力にする術を身につけたんだ

よ！」

バナージ「これであなたの軍団とも互角に戦える！」

アンチスパイラル「我々の恐れていた事態が起きようとしている…。やはり、お前達は消滅させなくてはならない！」

キオ「やれるものなら、やってみなよ！」

三日月「ここに来た時にもう覚悟はできているよ」

舞人「守るべきものがある俺達は決して退かない！」

エイサツプ「お前が俺達を滅ぼす事を使命とするなら、俺達の使命はお前を倒す事だ！」

リデイ「お互いに退けない理由があるなら、全力で戦うまでだ！」

イングリッド「やりましょう、全てを懸けて！」

サラ「レッツ達を守るよ！」

リチャード「決着をつけてやろう！」

九郎「勝負だぜ、アンチスパイラル！」

アンチスパイラル「螺旋族…いや、人間よ！お前達の好きにはさせせん！」

ギルガ「それはこちらの台詞だ！」

零「俺達は全力で生きる！その邪魔をするお前は生命そのものの敵だ！」

シモン「行くぜ！俺達全員の全てをお前にぶつけてやる!!？」
戦闘開始だ！

戦闘から数分後の事だった…。

アンチスパイラル「人間め…！何故、我々の言葉を理解しない!!？」

葵「そんな事もわからないとはね！」

朔哉「勝手な理屈でこちらを滅ぼそうとする奴を別れという方が無理だろうが！」

アンチスパイラル「お前達の存在が宇宙を破壊するのだぞ！」

マリーダ「スパイラルネメシスというやつか…！」

アンジェロ「そんなものは理屈だ！」

朗利「勝手に宇宙が滅びるなんて決めつけるなよ！」

アンチスパイラル「何故、そう言い切れる！」

イオリ「人間が銀河を創り、それが互いに食い合って宇宙が消滅するというなら…」

アマリ「その宇宙自体を人間が創り出します！」

アンチスパイラル「何だと!!？」

ホープス「そうやってアル・ワースは何も無い無から生まれたのです」
アンチスパイラル「それは……」

シモン「出来ねえはずはない！人間は限界を越えられる！だから、こうして俺達は天元を突破して、ここにたどり着いたんだ！」

アンチスパイラル「だとしたら、我々のやってきた事は……」

ヨーコ「みんな、見て！あいつの頭の部分！」

ダヤツカ「何だ!?？あれ……星なのか！」

リーロン「まさか、あれって……！」

ニア「あれはアンチスパイラルの母星です」

アンチスパイラル「そうだ……。我々、アンチスパイラルも元は螺旋族だ」

シモン「何っ!?？」

弘樹「俺達と同じように生身の身体があつたつてのっか!?？」

アンチスパイラル「だが、螺旋力の進化の果てが宇宙の崩壊に繋がる事に気づいた我々は螺旋の力を持つ者を滅ぼし……。残ったわずかな生命も宇宙の片隅に押し込めた！そして我々は進化を止め、この隔絶宇宙に我が身を閉じ込めたのだ！母星に肉体と進化の可能性を封印した、この醜き姿こそ、我々の決意の印！」

ノリコ「自分達の仲間を母星に押し込めて、宇宙を守ると言うの！」

アマタ「そんなのおかしいだろ！」

アンチスパイラル「それが我々の決意！宇宙を守る者の義務だ！その覚悟の前にお前達が勝つ可能性はゼロだ！」

シモン「可能性は自分で決める！」

アンチスパイラル「甘いわ！お前達がどう足掻こうと望むもの全てなど決して手に入りはしないのだ！お前達は自分達の行動の意味をいつも理解していない！」

シモン「そんな事はない！」

アンチスパイラル「ならば、螺旋の男よ！何故、我々と戦う？お前が救おうとしているイレギュラーは我々の仮想生命体……！」

シモン「ニアの事か！」

アンチスパイラル「我々が滅びれば、彼女も消える！わかっているのか！」
な、何だと……!??

シモン「何……だと!?？」

ダリー「アンチスパイラルを倒すと……」

ギミー「ニアさんが死んじゃうのか！」

シモン「ニア……」

ニア「……」

アンチスパイラルを倒さなければ、アル・ワースが滅ぶ…。でも、アンチスパイラルを倒せば、ニアさんが死ぬ…。そんな事が…！

アンチスパイラル「甘いのだ！」

シモン「！」

アンチスパイラル「この程度の因果も理解せずに闇雲に進む！その本能が、宇宙を破壊に導く事に何故気づかん！螺旋の力に溺れる愚か者よ！たかがイレギュラーの消失に動揺するお前達に我々ほどの覚悟があるか！元は同族だった者を倒し、我が身の進化を封じ込め、この宇宙を守ろうとする我々の覚悟に敵う道理があるか！否！否！否！否！否！否！否！断じて否ああああっ！！？」

グランゼボーマは天元突破グレンラガンに攻撃を浴びせた…。

アンチスパイラル「決意もなく！覚悟もなく！道理もなく！己の欲望のままに螺旋の力を使い、その力に溺れる！だからこそ、滅びなければならないのだああっ！！？」

シモン「くっつそ…！」

零「そんなの…誰が決めたんだよ！！？」

アンチスパイラル「何…！！？」

零「人間はちよつと間違えたら、滅びなければならぬのかよ！！？罪を償うチャンスも与えてくれないのかよ！」

アンチスパイラル「そうだ！その小さな間違いが世界を滅ぼすのだ！」

零「それはお前が悪い方の可能性しか見ていないからだろうが！人間には…もう一つの…未来を平和にして…その平和を次の世代の人間に繋ぐ事だ…出来るんだ！」

アンチスパイラル「否！例え、新たな種が生まれたとしても、いつしか滅びる！」

零「ならば、お前はその未来を見たのかよ！」

アンチスパイラル「！」

零「人間の螺旋力によつて、世界が滅ぶ未来をお前は見たいの…かつて聞いてんだよ！」

アンチスパイラル「そ、それは…」

零「見てもねえのに、勝手に俺達の未来が滅びだと決めつけてんじやねえええええつ

!!?」

アンチスパイラル「だ、黙れ…！」

零「結局、お前は世界の滅びを言い訳に、世界を自分の思い通りにしたいだけなんだろうがよ！」

アンチスパイラル「黙れええええええつ!!?」

グランゼボーマはゼフィールスネクサスに攻撃を仕掛け、ゼフィールスネクサスはダメージを受ける。

零「ぐっ…！」

アマリ「零君！」

アスナ「な、何という攻撃なの…?!?!」

ゼファイ「出力が桁違いです…！」

アンチスパイラル「究極生命体の遺伝子を持つお前の力も危険だ！その力で多くの者を傷つける！そして、人間はいずれ、お前の事を危険分子として排除する事になるだろう！」

零「だから、何だ！」

アンチスパイラル「何っ?!?!」

零「俺は…覚悟が出来てんだよ！俺自身の力が世界にとって、危険なものとなるなら…自らの生命を絶つ事もな！だが、そうなりたくない！だからこそ、そうならない様に戦っているんだよ！」

アンチスパイラル「違う！違う！違う！断じて、違う！世界は…世界は滅んでしまおうんだあつ?!?!」

シモン「勝手に決めるなああつ?!?!」

天元突破グレンラガンの出力が上がった…！

アンチスパイラル「何いっ?!?!」

シモン「助かったぜ、零！お前の言葉が再び、俺の生命に火をつけてくれた！アンチ

スパイラル！どれだけ言葉を並べて、どれだけ攻撃しようと俺の心は折れねえ！」

螺旋力が上がった……！

シモン「うおおおおおっ！！？」

ニア「どんなに辛くてもシモンは、もう迷わない！私が信じるシモンは……！エクスクロスの心は……！決して折れたりしない！」

アンチスパイラル「イレギュラー如きが我々に刃向かうか！」

ニア「私はあなたに造られた……！それは覆せない運命……。でも最後まで、それに抗う事は出来る！やってみせる、シモンと一緒に！！？」

シモン「ニア……！」

ニア「ありがとう、シモン……！ここまで迎えに来てくれた……。それだけで私は嬉しい……！」

シモン「まだだ、ニア……」

ニア「え……」

シモン「あいつを倒すまで……！みんなの未来を守り通すまで！俺は……俺達は戦い続ける！！？」

ゼロ「シモン！一人でいい格好はさせないぜ！」

オルガ「俺達だって、やるぜ！」

刹那「想いを力に、意思を形にして……！」

ワタル「だって、僕は救世主……エクスクロスだもの！」

アンチスパイラル「ぬううっ！」

シモン「見たか、アンチスパイラル！これが俺の……俺達、エクスクロスの覚悟だ！
何度でも言う！俺達を誰だと思つてやがる!!？」

アンチスパイラル「成る程……因果の渦を脱出出来ただけの事はある！だが、まだだ！
所詮は我々にねじ伏せられるだけの哀れな存在！その思い上がり後悔させてやろう！」

グランゼボーマがエネルギーを高めた……！

ニール「なんてエネルギーだ！」

アーニー「まるでビッグバンだ！」

ノブナガ「それをグレンラガンにぶつけるつもりか！」

シモン「そんなものに負けるかよおおおおつ!!？」

天元突破グレンラガンの前にロージエノムが……！

ロージエノム「シモン！ここは任せてもらおうかあああつ!!？」

ニア「お父様！」

ロージエノム「嘆くな、娘よ……！一度は絶望と倦怠の海に沈んだ魂がここまで来れた
！かりそめの身体が螺旋の生命の明日を作るならば、本望だ!!？」

ニア「そうです！その通りです!!？」

アンチスパイラル「所詮、犬死にだ！消えろおおつ!!？」

グランゼボーマはロージエノムに攻撃を…！

シモン「ロージエノム！」

ロージエノム「それを…！待っていたあああつ!!？シモン！受け取れえええつ!!？」

ロージエノムはアンチスパイラルから受けたエネルギーを螺旋力に変えて、天元突破グレンラガンに送った…。

アンチスパイラル「奴め！我々のエネルギーを螺旋力に変換して…！」

シモン「受け取ったぜ、ロージエノム!!？お前の生命を!!？」

カミナ「やるぞ、シモン！」

シモン「うおおおおつ!!？」

す、凄い力だ…！

アンチスパイラル「この力は！」

シモン「見せてやるぜ、アンチスパイラル！人間の底力を!!？」

天元突破グレンラガンはグランゼボーマに攻撃を仕掛けた…。

シモン「螺旋の力に限界なんてないつて事を教えてやるぜ！さあ！行くぞ、みんな！」

大グレン団 「二二「うおおおおっ!!?」「二二」

天元突破グレンラガンは分裂した。

そして、複数の天元突破ガンメンとなり、それぞれ動き出した。

ニア「まずは私が行きます!えいつ!やああつ!たあああつ!!?」

まずはニアさんの乗る天元突破ソルバーニアがスピードでグランゼボーマを攻撃していく。

ヴィラル「お見事でした、ニア姫様!俺も、負けてはいられん!」

今度はヴィラルの乗る天元突破エンキドウルガーが天元突破エンキソードと12本の腕による剣の攻撃で、斬り刻む。

ヨーコ「ナイスよ、ヴィラル!おまけ!持って行きなさい!」

ヨーコさんの乗る天元突破ヨーコWタンクが銃撃とミサイルで援護攻撃をする。

キッド「圧倒する…!」

アイラック 「超銀河つむじ風ブラザーズのスピードを味わいやがれ!」

キッドさんが乗る天元突破キッドナックルとアイラックさんの乗る天元突破アインザウルスが超高速攻撃を仕掛ける。

ジョーガン&mp;バリンボー「うおおおおっ!!?」

落下したグランゼボーマ目掛けてジョーガンさんとバリンボーさんの乗る天元突破

ツインボーコンが強力なアツパーを浴びせた。

ゾーシイ「これでも食らいやがれ！」

上空に吹き飛ばされたグランゼボーマにゾーシイさんの乗る天元突破ソーゾーシンが特殊波長ビームを浴びせ、ダメージを与える。

マツケン「超銀河ギャラクシー斬り！」

特殊波長ビームで拘束されたグランゼボーマに対して、マツケンさんの乗る天元突破モーシヨグンが斬り飛ばした。

ダリー「ギミー！私達も！」

ギミー「当然、撃ちまくりだぜ！」

さらにギミーとダリーの乗る天元突破グラパールが射撃で攻撃する。

キタン「お前等もやるようになったじゃねえか！」

キタンさんの乗る天元突破キングキタンが天元突破キヤルランサーで何度も貫いていく。

ダヤツカ「まだまだ行くぞ！超次元アンカー！」

ダヤツカさんやリーロンさん達が乗る天元突破ダイグレンが超次元アンカーでグランゼボーマを拘束する。

カミナ「シモン、ラストはお前が決めやがれ！」

カミナの乗る天元突破グレンが飛び膝蹴りとパンチでダメージを与えた。
シモン「ああ、任せろ！」

最後に天元突破ダイグレンを足場に跳躍した天元突破ラガンがラガンインパクトの体制に入った。

シモン「ラガンッ！インパクトオオオオッ！！？」

アンチスパイラル「ぬううううっ！！？」

ラガンインパクトを受けたグランゼボーマは大ダメージを受けた…。

シモン「これが天元突破を超えた、超天元突破だ！！？」

アンチスパイラル「何だと！？？貴様等如きがそれだけの巨大なエネルギーを支配した
と言うのか…！信じられん！」

シモン「終わりだ、アンチスパイラル！」

アンチスパイラル「まだだ！」

まだ戦う気か…！

カミーユ「まだ戦うつもりか…！」

ハマーン「それが奴の信念か…！」

アンチスパイラル「人間よ！互いの死力を尽くし、宇宙の未来を継ぐ者を決めるぞ！」

ニア「皆さん、行きましょう！」

アマリ「でも、それではニアさんが…！」

ニア「…！」

零「アマリ、覚悟を決めろ…！」

アマリ「でも…！」

シモン「…大丈夫だ」

しんのすけ「さすがシモンお兄ちゃん！何かあるんだね！」

シモン「やるぞ！今はそれだけを考えろ！」

…シモン、お前…！」

ニア「お父様の代わりに私が皆さんを支えます！」

アンチスパイラル「人間めえええっ！お前達の存在を許せば、スパイラルネメシスが起きるのだ！この宇宙を守るために我々は！！？」

？「ナラバ…！」

マジンガーZEROが現れただと…！？？

甲児「マジンガーZERO！」

真上「あいつも天元突破しているのか！」

アンチスパイラル「お前は…！」

マジンガーZERO「我ハ全テの可能性ヲ食ラウ者…！」

アンチスパイラル「いいだろう……！全てを食い尽くせ、闇の魔神よ！そうすればスパイラルネメシスも回避できる！」

鉄也「マジンガーZERO！創界山で簡単に退いたのはこの時を待っていたようだな！」

マジンガーZERO「オ前達ハ強クナツタ。ダガ、我ノ前デハ無力ダ」

海道「自分の力を見せつけるために最高の舞台が整うまで待っていたのかよ！」

マジンガーZERO「我ハ、オ前達ヲ滅ボス。我ノ……マジンガーノ存在ハ唯一デアリ絶対デアル事ヲ示スタメニ」

鉄也「ZERO！その思い上がりがお前の敗北を呼ぶ！」

甲児「望み通りに相手をしてやるぜ、ZERO！」

ケロロ「そちらも天元突破したようではありますが、今の我輩達を止められると思わない事でありませぬ！」

キオ「僕達の想いの力がお前の傲慢で邪悪な意思を打ち破るんだ！」

真上「終わらせるぞ、マジンガーZERO！」

マジンガーZERO「アリエヌコトダ。全テハ無意味……。全テハ不変……。可能性ヨ、ZEROニ還るルガイイ」

竜馬「俺達が帰るのは元の世界だぜ！」

海道「終わりだ、マジンガーZERO！お前自身をZEROに還してやるぜ！」

甲児「見せてやるぜ、ZERO！マジンガーの力を！人とマシンが一つになった鋼の魂を!!？」

アンチスパイラル「人間めえええつ!!？」

シモン「俺達の行く手を阻む者達！最後の勝負だ！そして…勝つのは…俺達だあああああつ!!？」

行くぜ、戦闘再開だ!!？

〈戦闘会話 エイサツプVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ソノオーラバトラーハ想イヲ乗セテイルノカ…！」

エイサツプ「そうだ！生きている人の生命、そして、散っていった多くの生命を背負って、俺は戦っているんだ！想いの力で、お前を倒す！」

〈戦闘会話 バナージVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「可能性ヲ秘メタガンダム…。ソノ存在ハ許サレナイ」

バナージ「あなたからしたらそうでしょうね。でも、可能性の獣として、可能性を消

させはしない！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「我二挑ンデクルカ、クロスボーン・ガンダム」

キンケドゥ「トビアのもそうだが、俺のクロスボーンとも戦ってもらうぞ、闇の魔神
！」

〈戦闘会話 シンVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「運命ノ名ヲ司ルガンダム…。オ前ノ運命ハ死ダ」

シン「勝手に決めるな！俺の運命は俺が決めるんだ！」

〈戦闘会話 キラVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「オ前ト自由ノ名ヲ司ルガンダムハ危険ダ」

キラ「人々の可能性を消すと言うのなら、僕は戦う！例え、暗黒の魔神だとしても！」

〈戦闘会話 刹那VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「異種トノ想イを繋ゲルガンダム…破壊スル」

刹那「させるか……！クアンタは対話の為の機体だ……それを壊させはしない！」

〈戦闘会話 キオVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ガンダムハ救世主ナドデハナイ。悪魔ノ兵器ダ」

キオ「確かに、ガンダムは乗る人によつては、善にも悪にもなる……。だからこそ、ガンダムを悪にしてはいけないんだ！」

〈戦闘会話 アセムVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「黒キガンダムノパイロット……。我ニ勝ツ事ハ不可能ナノダ」

アセム「誰が決めたんだよ、そんな事！なら、不可能つてのを可能にしてやるよ！」

〈戦闘会話 フリットVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「カッテ、ガンダムヲ復讐ノ道具トシテ使ツタ者ガ我ノ邪魔ヲスルナ」

フリット「復讐の道具として使ったからこそ、私は間違いを正さねばならん！それを
お前を倒す事で証明する！」

〈戦闘会話 三日月VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「共二来イ、悪魔ノガンダム…。オ前ハ我ノ下僕ニ相応シイ」

三日月「悪魔のガンダムって、バルバトスの事？どうでもいいけど、あんたの下僕になんてなるつもりはないから…！」

〈戦闘会話 オルガVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「頭ノオ前ヲ潰セバ、敵ノ士気ガ下ガル」

オルガ「やつてみやがれ、マジンガーZERO！鉄華団団長を舐めるんじゃないぞ！」

〈戦闘会話 海道VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「髑髏ノ魔神ヲ操ル者…。海道 剣、真上 遼、ココデ消サセテ

モラウ」

真上「わかりやすくていいだろう、マジンガーZERO！」

海道「俺達が滅ぶか、てめえが滅ぶかの勝負だ、行くぜええええつ!!？」

〈戦闘会話 一夏VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「人類初ノ男性IS操縦者…。オ前モ新タナ可能性ノ一人…ナラ

バ、潰サナケレバナラナイ」

一夏「俺達の世界からすると、俺は確かに新たな可能性なのかもしれないな。だが、お前に潰されるわけにはいかないんだよ！」

〈戦闘会話 竜馬VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ゲッターロボ……。マジンガーと同等な危険性ヲ持ツロボット……。倒ス」

竜馬「ほう、わかってんじゃねえかよ、ゲッターの恐ろしさを！だがな、そう簡単に倒せると思うなよ！」

〈戦闘会話 葵VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ダンクーガノヴァ……。ダンクーガノ意思ヲ継グ、ロボットカ」
ジョニー「過去のダンクーガの事を知っているようですね」

葵「私達の先輩の事なんて、今はどうでもいいわ！私達が今のダンクーガノヴァのパイロット……。それだけで十分よ！」

〈戦闘会話 九郎VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「魔ヲ断ツ劍…イヤ、無垢ナル刃、デモンベイン…侮レナイ」
アル「ほう、闇の魔神のお墨付けとはな」

九郎「だったら、そのお墨付きのこいつでぶん殴ってやるぜ、マジンガーZERO！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSマジンガーZERO〉

ヒーローマン「…！」

マジンガーZERO「白キ巨人、人々ノ可能性カラ生マレタ存在。我ト対ヲナス存在、ソノ存在は許サレナイ」

ジョーイ「僕もヒーローマンも屈するつもりはない！世界を平和にする為に、悪の魔神だろうと倒す！」

〈戦闘会話 ヴァンVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ソノヨロイ…通常ノヨロイトハ違ウカヲ感ジル。危険ダ」

ヴァン「ダンノ事を褒めてくれて、ありがとよ！お札に真つ二つに叩き斬ってやる！」

〈戦闘会話 アマタVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「数々ノ神話ヲ守リ続ケテキタ、アクエリオンノ新タナ可能性ノ

「ツカ」

アマタ「過去のアクエリオンの事を知っているのか……！だとしても、EVOLだって、アクエリオンド！負けるつもりはない！」

〈戦闘会話 ノリコVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「人類ガ宇宙怪獣ト戦ウ為ニ開発シタ、ガンバスター……。ソレヲ破壊スレバ、人類ノ可能性ハ破壊サレル」

ノリコ「そんな事、絶対にさせないわ！人類もガンバスターも私とお姉様が守ってみせるわ！」

〈戦闘会話 ユイVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「エリニウスノレガリア……。強力ナカヲ秘メタ危険分子ダ」

ユイ「レナ達は危険ではありません！私達の大切な、家族です！家族を危険に晒すと言うのなら、私はあなたと戦います！」

〈戦闘会話 ノブナガVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「破壊王ガ乗ルベキ存在デアツタイクサヨロイ、ザ・フル……。破

壊王ト共ニ消滅サセル」

ノブナガ「破壊王と闇の魔神の戦か……。本来ならば、楽しめるところだが、すぐに斬り捨てる！」

〈戦闘会話 しんのすけVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「カンタム・ロボハトモカク、他ノ者ハ素人ノハズダ。ソレナノニ何故、ソコマデノ力ガ出ル？」

カンタム「それは僕達が固い絆で結ばれているからだ！」

しんのすけ「マジンガーなのに、そんな事もわからないなんて、おバカだゾ！オラがお友達の大切さを教えてやるゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ケロン人ノ兵器ナド一捻リデ破壊シテヤル」

ケロロ「闇のマジンガーだからと言って調子に乗るなであります！最強なのはマジンガーだけではない事を教えてやるでありますよ！」

〈戦闘会話 アキトVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ブラックサレナ……。復讐心ノ塊ノ結晶……。素晴ラシイ復讐心
ダ」

アキト「煽つてもムダだぞ、マジンガーZERO……。俺はもう復讐を捨てた……。今の俺
はただのテンカワ・アキトだ！」

〈戦闘会話 ルリVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「新タナナデシコト電子ノ妖精……。無謀ト勇氣ハ違ウゾ」

ルリ「いえ、今から私のする事は無謀ではなく、勇氣を示す事です。こんな私でも闇
を払う事は出来ますから」

〈戦闘会話 アルトVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「想イトイウ歌ヲ届ケルバルキリー……。ダガ、戦闘デハドウカナ
？」

アルト「舐めるな！こいつの速さならどんな高速戦闘もお手の物なんだよ！それを教
えてやるよ！」

〈戦闘会話 リオンVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「確カニ素早イガ他ノバルキリートハナンラ変ワリハナイ」
リオン「へえ、そう言う言い方するのか？逆に燃えてくるぜ、後で泣きべそかいても
文句言うなよ！」

〈戦闘会話　ゴークイレッドVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「スーパ―戦隊ガ相手ダロウト我ハ負ケン」

ゴークイレッド「それはこつちの台詞だ！お前相手に手を抜く気はねえ…覚悟しやが
れ！」

〈戦闘会話　ゼロVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「光ノ戦士、ウルトラマンゼロ。オ前ノ光ハ、充分ニ危険ダ」

ゼロ「お前も闇の魔神だってんなら、俺の光で浄化してやるぜ！行くぜ、マジンガー
ZERO！ゼロの名をかけて勝負だ！」

〈戦闘会話　EXゴモラVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「レイオニクス、怪獣ヲ従エル者ヨ。オ前ハココデ倒ス」

レイモン「倒されてたまるか！俺もゴモラもリトラも…平和の為に戦っているんだ！

その平和の妨げとなるなら、お前も倒す！」

〈戦闘会話 アーニーVSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「カリ・ユガヲ討チ倒シタソノ力、見セテモラウ」

アーニー「カリ・ユガを知っているのか…?! いや、今はそんな事は関係ない！ 全ての可能性が集う世界を僕は守ってみせる！」

〈戦闘会話 零VSマジンガーZERO〉

マジンガーZERO「ネメシスヲ倒ス使命ヲ果たス為ニ作ラレタシヤイニング・ゼフィルスネクサス…。想イヲ光ニ変エル危険ナ兵器ダ」

零「人の愛機で娘のもう一つの姿を悪く言うじゃねえよ！ 俺達がお前に光の力を見せてやるよ！」

三代魔神皇帝の攻撃でマジンガーZEROにダメージを与えた…。

マジンガーZERO「何故ダ?!? 何故、我方負けタ?!?」

鉄也「教えてやる、ZERO！」

甲児「それはお前がZERO：つまり、空っぽだからだ！」

マジンガーZERO「何ッ!?!？」

甲児「俺達は仲間と互いを高め合い、ここまで来た！」

鉄也「自分以外の存在を認めない、お前にはわかるまい！この無限の力が！可能性が

!!?」

甲児「それこそが、俺達の光だ！」

マジンガーZERO「ソレデイイノカ、兜 甲児？」

甲児「何ッ!?!？」

マジンガーZERO「才前トイウ存在ガ生ミ出シタ、無敵ノ魔神、マジンガー……。ソノ存在ガ敗レルトイウ事ハ、才前自身ノ夢ガ終ワルトイウ事ダゾ」

甲児「俺の夢は終わらない！何故なら、勝ったのは俺：つまり、マジンガーだからだ！そして、俺達の力はZERO：お前によって引き出された！」

マジンガーZERO「我ニヨッテ：」

甲児「そうだ、ZERO！この光を生んだのはお前でもあるんだ！」

マジンガーZERO「コノ光：コノ可能性ハ：我ガ生ンダ：」

鉄也「だが、まだまだだ」

鉄也「ZERO！お前も俺達と共に光の道を進め！！？」

マジンガーZEROから光が……！

マジンガーZERO「光……無限ノ可能性……。ソノ中ヲ……我モ進ム……。無敵ノスーパー

ロボット、マジンガートシテ……」

甲児「ZERO……」

マジンガーZEROに……甲児が乗っているのか……!!？

ボス「こ、これって……」

さやか「ZEROが……その身を甲児君に預けた……！」

真上「フツ、俺達にはできない事だな」

海道「やるじゃねえか、兜、剣」

鉄也「人とマジンガー一つになって、マジンガーは最強の存在となる……」

甲児「ZERO……。お前の想いも受け取った。行くぞ！お前も俺達と共に光になるんだ！」

アンチスパイラル「人間め……！また一つ、自らの宇宙を広げたか！」

シモン「これが俺達の可能性だ、アンチスパイラル！それを滅ぼそうとする者は俺達

のドリルがぶち抜く!!？」

戦闘再開と行くぜ！

〈戦闘会話 エイサップVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「この者は全ての人間の想いを背負っているのか！」

エイサップ「そうだ！俺は想いを応える為に戦っているんだ！」

アンチスパイラル「ならば、その思いごとお前を消滅させる！」

エイサップ「俺は負けない！平和な世界を見るまで、負けるわけにはいかないんだよ！」

〈戦闘会話 バナージVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「可能性を信じると言うのなら、何故、私の考えが理解できない！」

バナージ「視野が狭すぎるんですよ、あなたは！人を信じようともせず、何が可能性なんですか！」

アンチスパイラル「お前は何もわかっていない！」

バナージ「何もわかっていないのはあなたの方です！人間には無限の可能性がある…

それを見せてあげます！俺とユニコーンが！」

〈戦闘会話 キンケドゥVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「何故、お前は私を恐れないんだ！」

キンケドゥ「生憎だが、恐れは過去に捨て去ったんだよ！多少の無茶でも通ってやるぜ！」

〈戦闘会話 シンVSアンチスパイラル〉

シン「世界を救う為に人間を消すだなんて、矛盾しているんだよ、お前は！」

アンチスパイラル「平穏な世界を保つ為には多少の犠牲も必要なのだ！」

シン「そんなものは平和って、言わねえんだよ！あんたは俺が止めてやる！」

〈戦闘会話 キラVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「何故、わからない!?？お前達のその思い上がりがスパイラルネメシスを起こすんだぞ！」

キラ「人々の想いの力はあなたが思うにそんな単純なものじゃない！可能性を信じないで世界なんて救えませんか！」

〈戦闘会話 刹那VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「人間は種を増やし、あまつさえ、他の異種にまで破滅の手を伸ばすのか！」

刹那「俺達が手を伸ばしているのは、わかり合う為だ！そして、異種とも平和な世界を送っていく為に俺はお前を倒す！」

〈戦闘会話 キオVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「戦争を止めたいなどと所詮は偽善者がやる事だ！」

キオ「違う！もう僕は人が血を流す所は見たくないんだ！」

アンチスパイラル「だが、お前達は破滅の道を歩もうとしているのだぞ！」

キオ「だからこそ、僕達は変わっていかねばならないんだ！人間一人一人が！お前は答えを急ぎすぎているんだよ！」

〈戦闘会話 アセムVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「このままいつでも人間は破滅の道を防げない！」

アセム「お前が俺達の何を知っているんだよ！」

アンチスパイラル「情報を得終えたからこそ、私は人類を消滅させるのだ！」

アセム「なら、お前は何もわかっていないな！人間つてものをよ！」

〈戦闘会話 フリットVSアンチスパイラル〉

フリット「自分の考えが思い通りに行かなければ、誰かを傷つける…。お前は子供と同じだ」

アンチスパイラル「黙れ！お前達の考えなど、知った事ではない！」

フリット「その傲慢な考えこそが自分自身を子供だと言っているようなものだ！しっかりと教育してやる！」

〈戦闘会話 三日月VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「人間はいつまでも戦争をやめる事が出来ない。だから、滅ぶのだ！」

三日月「だからって、あんたが世界を滅ぼしていい理由にはならないだろ？」

アンチスパイラル「それが私の使命なのだ！」

三日月「だったら、俺達の使命はそんなあんたを倒す事だ。これで終わらせる…！」

〈戦闘会話 オルガVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「お前はまた家族を失いたいのか！」

オルガ「俺はもう二度と家族を失うつもりはねえ！それにお前のくだらねえ野望も認めるともりはねえんだよ！」

〈戦闘会話 海道VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「そうだ！お前達がいる限り、世界は滅びるのだ！」

海道「人間全てのせいとか言ったり、俺達のせいだとか言ったり、忙しい奴だな」

真上「ならば、俺達の力を見せてやろうじゃないか！」

海道「おう！アンチスパイラルさんよ、お前にも見せてやるよ！地獄をな！」

〈戦闘会話 一夏VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「お前は何故、生身にも等しい身体で私に挑んでくるのだ!!？」

一夏「そんなの簡単だろ！お前が人間を滅ぼすとかふざけた事を言っているからだろ！」

アンチスパイラル「ふざけてなどいない！これは我が使命なのだ！」

一夏「そんな使命、認めるわけにはいかねえんだよ！俺がそんな使命、バラバラに壊してやる！」

〈戦闘会話 竜馬VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「ゲッター線、その力も危険すぎる！」

隼人「だとよ、竜馬。あの手の奴には何を言っても無駄だぜ」

竜馬「そんな事は言われなくてもわかってるぜ！アンチスパイラル、世界は俺達に任せてとつと消えやがれ！」

〈戦闘会話 葵VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「獣の力…その力が世界を滅ぼす事に何故気づかん!?」

葵「気づかないも何も、この力で世界を滅ぼす気はないのよ！狭い空間は好きじゃないの、あんたを倒して、アル・ワースに帰らせてもらおうわ！」

〈戦闘会話 九郎VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「その力だ！その力が世界をも滅ぼす力を持っているのだ！」

九郎「いい加減にしろ！滅ぶ滅ぶって、しつこいんだよ、お前は！」

アンチスパイラル「わ、私は世界の為に…！」

九郎「誰もお前に世界を救ってほしいなんて思っていないねえよ！世界は俺達自身で平和

にしていくんだよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「その白き巨人はヒーローなどではない！悪魔の使徒だ！」

ジョーイ「ヒーローマンの事を何も知らないのに、勝手な事を言うな！ヒーローマンは…僕達のヒーローだ、それはまぎれもない事実なんだ！」

〈戦闘会話 ヴァンVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「何だ、お前のそのデタラメな力は!?？」

ヴァン「知るかよ」

アンチスパイラル「何!?？お前は世界が滅んでもいいと言うのか!?？」

ヴァン「誰がそんな事を言ったんだよ！被害妄想もいい加減にしやがれ、お前はバカだ！バカ、バカ、バカ！」

〈戦闘会話 アマタVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「機械天使…その力で人類は必ず滅ぶ！神話の伝説などかりそめに過ぎないのだ！」

アマタ「アクエリオンの力は滅びの力じゃない！神秘の…みんなを守る力だ！そして、お前の様に世界を滅ぼそうとする奴を倒す力でもあるんだ！」

〈戦闘会話 ノリコVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「宇宙怪獣を倒してもムダだ！世界は滅ぶ！スパイラルネメシスによって！」

ノリコ「そんなのあなたの理屈じゃない！私達はそんな未来は絶対に認めないから！」

〈戦闘会話 ユイVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「エリニウスのレガリアの力…お前達は再び、リムガルドフォールを起こす気なのか!?」

レナ「私はもう暴走しない！」

ユイ「私達の世界の未来は私達自らが勝ち取ります！あなたに世界は滅ぼさせません！」

〈戦闘会話 ノブナガVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「わかるか、お前は一度、自らの世界を滅ぼそうとしたのだぞ！」
ノブナガ「そうだな。俺は自分の力を過信し、世界を滅ぼしかけた。だが、お前も同じ事をやろうとしている」

アンチスパイラル「違う、私は世界を救おうとしている！お前と一緒にするな！」
ノブナガ「いいや、違わないな。犠牲を出す奴が世界を救う事など出来ないんだよ！」

〈戦闘会話 しんのすけVSアンチスパイラル〉

カンナム「アンチスパイラル、僕達はお前を許さない！」

アンチスパイラル「お前達はそこまでの力もないはずだ！なのに、何故、刃向かう？」

しんのすけ「世界の大きさはオラはわからないゾ……。でも、沢山の人が暮らしているぐらいは知っているから！オラはお前には屈しないゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「邪魔な侵略者め！息の根を止めてやる！」

ケロロ「お前も侵略ではなく、破滅を望む男なのでありますな！だったら、ケロロ小隊が黙っていないであります！」

〈戦闘会話 アキトVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「その黒い機体でお前は何をしようとしているのだ！」

アキト「知った事を聞くな。お前と言う悪党を倒す」

アンチスパイラル「私が悪党だと……?!?!」

アキト「人類滅亡を考えるなどお前は立派な悪党だ。お前の野望は俺達が潰す」

〈戦闘会話 ルリVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「お前が妖精だと……? お前のその力は墮天使だ！」

ルリ「酷いですね、何気に傷つきます……。なので八つ当たり、させていただきます」

アンチスパイラル「やはり、お前は墮天使だな……!」

ルリ「後、私は墮天使ではなく少女です。それをお忘れずに」

〈戦闘会話 アルトVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「人類に空を飛ぶ術など必要ない」

アルト「お前にそんな事を言われる筋合いはねえよ! お前が世界を滅亡させる筋合いがないのと同じだ!」

〈戦闘会話 リオンVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「結局人間は争いから逃れる事は出来ないんだ」

リオン「そうだな。だが、それで世界を滅ぼす理由にはならねえぜ！勝手な理由をつけて、世界を滅ぼそうとする奴は見逃せねえな！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「スーパー戦隊、その力がいつ世界に牙を向けるかわからないな！」

ゴーカイレッド「お前はスーパー戦隊を舐めすぎなんだよ！スーパー戦隊は覚悟も全て、出来ている奴等なんだよ！お前なんかとは違うんだよ！」

〈戦闘会話 ゼロVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「ウルトラマンも危険だ！光の国のウルトラマンの内二人も悪に堕ちているのだからな！」

ゼロ「ベリアルとトレギアの事かよ……！確かに危険ではないとは言えないが、そうならない為に俺達は宇宙の為に戦っているんだよ！」

アンチスパイラル「黙れ！人間を破壊した後は光の国も破壊してやる」

ゼロ「そんな事、俺がさせるわけねえだろうが！（まあ、トレギアの奴は未だに行方不明だがな……）」

〈戦闘会話 EXゴモラVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「地球のレイオニクス！お前はレイオニクスとしての使命はどうしたのだ！」

レイモン「俺は平和の為に戦っているんだ！レイブラッドの血や使命には負けはしない！」

〈戦闘会話 アーニーVSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「世界はお前達の世界のように単純ではないのだ！何故、それがわからん！」

アーニー「お前こそ、何故、世界が単純だとわからないんだ！」

アンチスパイラル「人間の考えなど理解不能だ！」

アーニー「だったら、世界をお前に渡すわけにはいかないな！」

〈戦闘会話 零VSアンチスパイラル〉

アンチスパイラル「お前の何処にそこまでの力があるのだ！究極生命体の力に抗うな
どと！」

零「そうでもしないと世界を奴に渡しちまう事になるからな」

アンチスパイラル「その考えがあるからこそ、世界から戦争がなくならないのだ！」

零「お前は世界の事を思っただけ動いてくれている。その事は認める。だがな、人間を消したら、意味がねえんだよ！人類抹殺なんて、させてたまるかよ！」

天元突破グレンラガンが変化した超天元突破グレンラガンの超天元突破ギガドリル
ブレイクでグランゼボーマを貫いた…。

アンチスパイラル「我々が…宇宙を守ってきたアンチスパイラルが負けるのか…。信
じられん！これが…人間の力なのか！」

カミナ「俺達は1分前の俺達よりも進化する！一回転すれば、ほんの少しだけ前に進
む！それがドリルなんだよ！」

アンチスパイラル「それこそは滅びへの道！螺旋族の限界になぜ気づかん！」

シモン「それが貴様の限界だ！この閉ざされた宇宙で王様気分で他の生命を封じ込め
た貴様自身の限界に過ぎない！」

ヨーコ「そう！人間にだって、もつと大きなヤツがいるわ！その人達のためにも私達は前に進む！」

キタン「例えそれが苦難な道でも、俺達は突き進むんだよ！」

ニア「人の心は無限！その大きさに私も賭けた！」

アンチスパイラル「そんなものがあああつ!!？」

シモン「覚えておけ！このドリルは宇宙に風穴を開ける！その穴は後から続く者の道となる！倒れていった者の願いと後から続く者の希望！二つの想いを二重の螺旋に織り込んで明日へと続く道を掘る！それが天元突破！それがグレンラガン！俺のドリルは！天を創るドリルだあああつ!!？」

アンチスパイラル「認めん！認めんぞ！そんなものは無駄な足掻きだあああつ!!？」

シモン「それでも俺は…！俺は信じる…！俺が信じる俺達を…！人間を…！未来を…

！俺は信じる…！ドリルは…！俺の！魂だあああつ!!？」

アンチスパイラル「ぬあああああああつ!!？」

グランゼボーマが消滅していく…。

アンチスパイラル「ならば、この宇宙…必ず守れよ…」

シモン「当然だ…。お前も信じてくれ…俺達、人間を…」

シモンと会話を残し、アンチスパイラルはグランゼボーマと共に消滅した…。

九郎「…終わったんだな…」

鉄也「ああ…」

ワタル「やった！やったんだ！」

青葉「俺達、勝ったんだ！」

ベルリ「アル・ワースを…宇宙をアンチスパイラルの手から救ったんだ！」

ホープス「ですが…」

ニア、さん…。

ニア「シモン…」

シモン「ニア…。お前の事は忘れない。この宇宙が滅んでも…」

ニア「バカね、滅びないわ…。そのために…みんな、頑張ったんじゃない…」

シモン「そうだったな」

ニア「愛しているわ、シモン」

シモン「ああ、俺もだ…。愛してる、ニア…」

ダリー「ニアさん…消滅してしまうの…？」

ギミー「そんな！大丈夫じゃなかったのか？！」

ゼファイ「何か言ってくださいよ、シモンさん！」

シモン「…」

零「やめろ、ギミー、ゼファイ！」

シモン「零……」

ゼファイ「で、でも……！」

零「なら、あの時にニアさんを助け出す方法がわからないって、言えば良かったのか？」

ギミー「そ、それは……」

零「もし、ニアさんを助け出す方法がわからなければ、俺達は手を出す事を躊躇し、アンチスパイラルに負けていた……。シモンは、そんな俺達を勇気付けようとしてくれたんだ！それはわかってくれ！」

ゼファイ「はい、パパ……」

ギミー「そんなのって！そんなのって、あるかよおおつ！！？」

テイエリア「……」

アレルヤ「……」

一夏「……」

ネモ船長「……我々に出来る事は何も……」

ナディア「ううん……」

ブルーウォーターが光った……！

ジャン「ブルーウォーターが輝きを取り戻した…！」

ホープス「この宇宙に漂っていた魂がブルーウォーターに集まっていきます…」

ナディア「その力はきつと…」

ブルーウォーターの輝きは俺達に降り注いだ…。

ウイル「！」

ニツク「ウイル、これは…！」

ウイル「…俺達にも、奇跡は起きたんだな…」

ジョーイ「ウイル、ニツク…？」

ロージェノム「…仮想生命体であるニアはその創造主たるアンチスパイラルの消滅に伴い、自身の永遠を失う…」

リーロン「ロージェノム…？」

ヴィラル「消滅したのではなかったのですか…？」

ロージェノム「今、この宇宙に満ちた願いはアトランティスの遺産により少しの奇跡を呼んだ…。それにより私は、肉体を失いながらもこうしてデータとして再び復元された。さらに、そのスクラッグの二人も影響が出た」

リナ「え…！」

サイ「ど、どういう事だよ…？」

ロージエノム「人間に戻れた…とだけ言っておこう」

リナ「!」

デントン「だ、だが…今はどう見てもスクラッグの姿じゃないか!」

ニツク「ロージエノムの言う通りだよ」

ウイル「俺達は…人間の姿とスクラッグの姿を任意で入れ替える事が出来るようになったようだ」

ジョーイ「それって…!」

エンネア「変身ヒーローと同じだね!」

ウイル「変身ヒーロー、か…」

ニツク「僕達はダークヒーローっほいけどね」

サイ「何だっついていい!良かったぜ…二人共…」

リナ「お兄ちゃん!」

ウイル「今まで待たせて悪かったな、リナ」

ジョーイ「(良かったね、リナ…)」

ロージエノム「そして、それはニアにも影響を与えたようだ」

ニア「お父様…」

ロージエノム「ニア…。お前の崩壊を止める事は出来ない…。アンチスパイラルの

メッセンジャーとして永遠の存在であったお前の生命は……。長く見積もってもおそろく、あと80年程となつてしまつた」

ヨーコ「それつて……」

キタン「人間と同じつて事か……!」

ロージエノム「フ……永遠に比べれば、なんとも短く儂い生命だな」

ニア「構いません。私は限りある時間を大切にいきます。明日をも知れない生命は誰もが同じです。私はその時間をシモンと共に過ごします。私は誰かに与えられた永遠なんていりません」

シモン「ニア!!?」

ロージエノムも復活して、ウィルやニツクも人間に戻れるようになって、ニアさんも普通の人間と同じ時を生きれるようになるなんて……いい事づくしじゃないか!

ニア「シモン……」

シモン「ニア!結婚してくれ!」

ヨーコ「今、ここでいう事!!?」

優香「しかも、ドストレートに!」

弘樹「シモンらしいな」

メル「はい、それがシモンさんの旅のゴールでもありますから!」

カノン「そして、シモンさんとニアさんの新たな旅の始まりなんですわね！」

マリア「全てはニアにかかっているけどね……」

シモン「ニア、返事は？」

ニア「よろしくお願いします、シモン！これからもずっと！生命ある限り！」

シモン「ありがとう、ニア！」

ゼシカ「やったああああつ!!？」

アンデイ「よつしやああつ！やったぜ、シモンさん！」

ユノハ「おめでとうございます、お二人共！」

ワタル「ハツキシ言つて、超スーパーめでたいぜ！」

零「やったな、シモン！末永く幸せになれよ！」

シモン「ありがとう、みんな！俺はニアと共に生きる！限りがある時間……だが、かけがえない時間を……俺達が守った世界で！」

結婚、か……。

アスナ「まだ早いわよ、零」

零「勝手に心を読むな！」

カミナ「言うじゃねえか、シモン！まさか、弟分に先を越されちまうとはな！だが……

そのよ、おめでとさん！」

シモン「ありがとう、兄貴！」

ニア「ありがとうございます、兄貴さん！」

シモン「でも、今度は兄貴の番だぜ！」

カミナ「それもそうだな！」

ヨーコ「…」

ギミー「でも、カミナさんも楽な道じゃないな。キタンさんって言うライバルが居るんだし」

キタン「お、おい、ギミー！」

カミナ「何いつ？ そうなのか、キタン!?？」

キタン「お、おう、そうだ！ 何が悪いんだよ！」

ダヤツカ「人気者だな、ヨーコ！ お前はどっちを選んだ？」

ヨーコ「そ、それは…その…えっと…そ、そう言えば、気がつかなかったけど、この宇宙…綺麗ね！」

ダリー「(ヨーコさん…)」

リン「(逃げましたね…)」

ギルガ「兄さんも頑張りなよ！」

ラゴウ「ギルガ、貴様！ 人が気にしている事を…！」

気にしていたのかよ…。

ニア「確かに綺麗ですね。キラキラと輝いて…」

シモン「俺達の目に映る光は全て星…。そこには生命が満ち溢れている。天の光は全ての未来だ」

ホープス「では、皆様…帰りましょう。私達のアル・ワースへ。（そこには、あなた達を待つ者がいます…）」

決着の時間が近いぞ、ネメシス…。だが、その前にもう一つ、越えなければならない壁がある、か…。

俺達は天元突破グレンラガンの力でアル・ワースへ戻った…。

シークレットシナリオ5

遭遇のZ

―新垣 零だ。

アンチスパイラルを倒した俺達はアル・ワースへ戻ろうとしていた。

アスナ「これで残る敵はネメシスだけね」

メル「長かった戦いももうすぐ終わりです。皆さん、頑張りましょう」

本当にネメシスだけなのか？？何か嫌な予感がする…。

カノン「でも、戦いが終われば、アル・ワースは平和になり、異界人の方々は元の世界へと戻ってしまうのですね…」

弘樹「そうなれば、エクスクロスも解散になるな」

優香「そして、もうみんなと会えなくなるのか…。寂しくなるな…」

零「確かに寂しいが、みんなにはみんなの住んでいく世界があるんだ。だから、一刻も早くアル・ワースを平和にしないといけないんだ」

イオリ「みんながみんな、同じ世界出身だったら、同窓会とかも出来るんだけどな」

アマリ「確かにそれは楽しそうですね！」

でも、俺達の世界を全部同一にするか…。カオスになるな…。
マリア「みんな、もうすぐワープを抜けるわよ」
よし、待っているよ、ネメシス！

シークレットシナリオ5 遭遇のZ

さて、戻ってきたぞ、アル・ワース…つて…。

倉光「え、何処、ここ…?」

レーネ「どう見ても、アル・ワースでは無いようですね」

アネッサ「現在の位置、特定できません！」

ワタル「じゃあ、何処なの、ここ!!?」

スメラギ「居場所がわからない以上、動くわけにはいかないわ」

ホープス「お気をつけください、次元の歪曲を感じました」

現れたのは複数の機体だった。

ドニエル「何だ、あれは…!!?」

號「複数の機体……?!?」

アマリ「見た事がありません。あれは、異世界の兵器です!」

量産機に恐竜の様な機体：明らかに俺達の知る兵器じゃないしな……!

エレクトラ「船長、彼等はこちらの呼びかけに応えません!」

ネモ船長「向けているのは明らかかな敵意だけという事か……」

零「これは……!また次元歪曲が起ります!」

次元歪曲が起こり、今度は四機の機体と一隻の戦艦が現れた。

ヒビキ「こ、ここは……?!?」

スズネ「大丈夫、ヒビキ君?!?」

ヒビキ「はい……。それよりもスズネ先生、どうしてジェニオンに……?」

スズネ「た、確かに……私はソーラリアンに乗っていたはずなのに……!」

ランド「ジェニオンって事はヒビキとスズネ先生か?!?」

セツコ「どうして二人が?!?」

メール「久しぶりだね、二人共!」

クロウ「どうやら、チーフがソーラリアンに乗っているみたいだな」

トライア「そうみたいだね、直衛部隊はいないけどね」

エスター「私もいるよ、クロウ!」

クロウ「プラスターEs…。エスターか！」

ヒビキ「ランドさん、メール、セツコさん、クロウさん、トライア博士！」

トライア「元気そうだね、二人共！」

エスター「いや、呑気に挨拶している場合じゃないよ！」

クロウ「確かに、今の状況を整理しないとな」

ランド「ヒビキ、お前達はこうして、この世界に…？」

ヒビキ「…ワープして…ダメだ、思い出せません…」

セツコ「ヒビキ君達もなの?!？」

クロウ「実は俺達も至る所の記憶が抜けているんだよ」

メール「でも、それぞれの事は覚えているね」

エスター「じゃあ、完全な記憶喪失じゃないって事だね」

彼等は一体…？

トライア「問題なのは、あっちだよ」

ヒビキ「アンゲロイ・アルカにエル・ミレニウム…！」

スズネ「御使いの機体がどうしてここに…?!？」

クロウ「考えても仕方ないみたいだぜ、二人共」

エスター「うん、明らかにあいつら、敵意を持つてる」

ランド「へっ、わかりやすくもいいじゃねえか！」

メール「行こう、みんな！」

あいつら…戦うつもりか…?!?

トライア「それはいいけど、あっちの方はどうするんだい？」

スズネ「あちらの戦艦には人が乗っているそうですが…」

クロウ「いや、機体を出して来たぞ」

俺達もそれぞれ出撃した…。

セツコ「見た事があるような、無いような機体がありますね」

ネモ船長「そちらの戦艦と各機に告ぐ。私はエクスクロスのネモだ。君達の所属を聴

きたい」

ヒビキ「ここは俺が答えてもいいですか？」

ランド「任せるぜ、ヒビキ」

ヒビキ「俺はヒビキ・カミシロ。俺達はZ―BLUEに所属しています。俺達は敵で

はありません！」

ネモ船長「こちららも君達には危害を加えない。ここは協力して、敵戦力の撃破をしよ

う」

ヒビキ「わかりました！」

スズネ「良かったね、ヒビキ君。話せる人達で」

ヒビキ「はい、スズネ先生。俺達も行きましょう！ランドさん、メール、セツコさん、クロウさん、エスター、トライア博士！」

ランド「よっしゃあ！」

メール「うん！」

セツコ「やりましょう、ヒビキ君！」

クロウ「仕方ねえ！」

エスター「いつでもいいよ！」

トライア「AGはいないが、自律なら何とかなるさ！」

ヒビキ「よし、行くぞ！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　ランドVS初戦闘〉

メール「ダーリン、ガンレオンも私も準備OKだよ！」

ランド「よっしゃあ！容赦なく、バラバラにしてやるぜ！」

〈戦闘会話　セツコVS初戦闘〉

セツコ「また異世界へ跳んでしまうなんて…でも、私は逃げない！勝ってみせる！」

〈戦闘会話　クロウVS初戦闘〉

クロウ「俺もリ・ブラスタも万全の状態だぜ！いくぜ、この見知らぬ世界で借金を作るなんて、真っ平御免だからな！」

〈戦闘会話　エスターVS初戦闘〉

エスター「クロウが側にいるなら、私は戦える！いくよ、私が相手をしてやる！」

〈戦闘会話　トライアVS初戦闘〉

トリア「AGも他の子もいなくなって、私一人になったけど、まあ、後は自律でどうかしてくれる。さあて、行くよ！」

〈戦闘会話　ヒビキVS初戦闘〉

スズネ「ヒビキ君、気力が上がれば、ジェニオン・ガイやジェミニオン・レイも使えるわよ！」

ヒビキ「はい、俺も全力で行きます！行くぞ、ジェニオン！」

あのジェニオンって、機体：どどん姿が変わっていく…！

イオリ「二回も姿を変えらるとは…。何と未知な機体だ」

零「ジェニオン：ヒビキ・カミシロ、か…」

あのジェニオンって機体もそうだが、ヒビキって男の腕も相当だな。

俺達は全ての敵を撃墜した…。

セツコ「エクスクロスという部隊のお陰で早く終わりましたね」

エスター「敵もそんなに強くなかったしね」

ランド「でも、そのエクスクロスから金を請求されたりしてな」

トライア「その時はクロウの借金を増やせばいいさ」

クロウ「あんたは俺の人生を滅茶滅茶にする気か！」

メール「もう半分ぐらいは滅茶滅茶だけどね」

スズネ「それよりも、これからどうしましょう、ヒビキ君…」

ヒビキ「まずは、エクスクロスに合流するしかないですね」

アマリ「どうやら、こちらに来るようですね」

ネモ船長「構わん。彼等は味方だ」

零「……！エクスクロスのみんなとヒビキ達、気をつけろ！また、次元歪曲が起こるぞ
！」

ヒビキ「何？！？」

次元歪曲が起こり、Z—BLUEのみんなは何処かへ消えてしまった……。

メル「Z—BLUEの皆さんが消えてしまいました！」

ゼファイ「また、何処かへ跳ばされてしまったのでしようか……」

零「……この感覚……どうやら、俺達も跳ばされるぞ。アル・ワースに……！」

アマリ「彼等は……何だったのでしょうか？」

零「多分、別の世界で戦って、そして……時空の狭間で偶然出会ったのかもしれないな」

アマリ「偶然、か……」

自分で言つて、何だが、本当に偶然か……？

あいつらとは……また会える、そんな気がする……。

俺達はまた、光に包まれた……。

第79話 永遠のアル・ワース

第79話 永遠のアル・ワース

―新垣 零だ。

俺達はついにアル・ワースへ戻ってきた…。

ドニエル「時空転移バイパス…無事に通過したようだな…」

ネモ船長「我々はアンチスパイラルの隔絶宇宙からアル・ワースに帰還した」

倉光「だが…」

な、何だ…これは…!!?

ダヤツカ「このひび割れた宇宙は何なんだ…!!?」

號「ここは本当にアル・ワースなのか…!!?」

ルリ「…オモイカネはここは間違いなく、アル・ワースだと言っています…」

スメラギ「どういう事なの…!!?」

名瀬「俺達のない間に何があったんだ…!!?」

ロージエノム「アル・ワースは崩壊を始めている…。全ては奴の意思だ」

ジェフリー「奴…?」

ヒユウガ「ネメシスの仕業か…?」

零「…」

何だ…この嫌な感覚…?ネメシスじゃない…?

モニカ「アル・ワースの方向から未確認機、来ます!」

魔徒教団のルーン・ゴレムとデーインベルだと…!??

キャシー「魔徒教団…!こんな状況で仕掛けてくるなんて…!」

ジェフリー「機動部隊各機を出撃させろ!」

俺達は出撃した…。

イオリ「指導者であるセルリックを失っても、まだ戦うのか…!??」

アマリ「目を覚ましてください、皆さん!このひび割れた宇宙を見て、何も思わない

んですか!??今、私達がすべき事はこの状況をどうにかする事のはずです!」

反応は無しか…。

九郎「応える気はねえって事かよ!」

マスターテリオン「構っている時間はない。とつととカタをつけるぞ」

アスナ「ねえ、零。もしかして、ネメシスが魔徒教団を取り込んだんじゃない…」

カノン「指導者であるセルリック・オブシディアンがいなくなったのなら、考えられ

ますが……」

零「……考えていても、仕方ねえ。今は相手をするしかない！」

万丈「向こうは既に戦闘態勢に入っている。やむを得ないな」

フリット「各機、散開だ！教団を迎え撃つぞ！」

ロージエノム「シモン……。この宇宙ならばグレンラガンを天元突破させる事も可能だ」

シモン「本当か！」

リーロン「まずはあなたとダヤツカが氣力を上げて、超銀河ダイグレンに合体してからよ！サイズはあなたの思うまま！この空間で戦うのに適したサイズに調整してね！」

カミナ「なら、鬼に金棒だな、シモン！」

シモン「ああ！それがわかれば、何が出てこようと恐れる事はないぜ！」

ホープス「……」

アマリ「どうしたの、ホープス？」

ホープス「お気をつけください、マスター。おそらく、これがネメシスを除くアル・ワースでの最後の戦いになります」

アマリ「ネメシスを除く最後って、どういう意味？」

ホープス「答えは、その目でお確かめください。私から言えるのは、それだけです」

アマリ「ホープス…」

ホープス「…」

ゼファイ「今、ホープス先輩から何かしらの感情が…？いつもと違う…少し怖い感情…
一体何なのでしょう…？」

零「ゼファイ、黙り込んでどうした？」

ゼファイ「パパ、お気をつけください！」

零「何だ、急に…？」

ゼファイ「この戦い…ただの戦いではありません…！」

零「わ、わかった…！」

ゼファイ「私の考える嫌な予感…。これが当たらなければ、いいのですが…！」

ホープス「ゼファイ、あなたはやはり、気づきつつあるんですね…」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「(何だ、この感覚…嫌な予感が止まらねえ…！)」

ゼファイ「パパ、気になる事もありますが、今は集中を！」

零「ゼファイ、お前は何か知っているのか？」

ゼファイ「搜索は後です！まずは目の前の敵を対処しましょう！」
零「わかった！その変わり、後で話は聞かせてもらおうぞ！」

少しずつ敵を倒していく俺達…。

アル・ワースの方から何かの音が…!!?

マサキ「何だ、この声は!!?」

アーニー「何かの雄叫び…!!?」

今度のはつきりと聞こえる…!

舞人「今度のはつきり聞こえた！」

バナージ「空間を伝わってきた音じゃない…!俺達の脳に直接響いてきています！」

ワタル「何なの、これ!!?動物が唸っているの!!?」

龍王丸「これは…!」

ルルーシュ「この声は…!」

ノブナガ「アーサー王の時に聞いたものと同じだ…!」

アムロ「いったい何が起こる!!?」

ホープレス「ついに来るか…!」

ゼファイ「皆さん、気をつけてください！」

アル・ワースから…何かの化け物が現れた…!!?

弘樹「何なんだ、あれは!!?」

優香「獣…!!? ううん、バケモノ!!?」

魔獣エンデ「…恐レヨ、人間…。我コソハ、エンデ…。アル・ワースノ創造主、智ノ

神エンデ…」

アマリ「え!!?」

零「エンデ…だと…!!?」

ワタル「あ、あのバケモノが…魔従教団の信じていた神様…!!?」

シバラク「ブラック・ノワールと同じように自分でエンデと名乗っているだけかも知

れんぞ!」

マスターテリオン「貴公達の目は節穴か…」

ミカゲ「あの獣の中の力…底が知れない…!」

エンブリヲ「確かに、並大抵の獣ではないようだ」

リボンズ「どうだい、アマリ?」

アマリ「この威圧感…私の精神と身体が覚えていきます…。教団にいた時に感じてい

た、強大な何か…。それと同じものを、あれから感じます…!」

イングリッド「じゃあ……！」

ユイ「本当にエンデという事ですか……！」

ゴーカイレッド「今更神が出てこようが驚かねえが、あの姿……」

レイモン「神と言うよりも魔獣だ！」

イオリ「あれが……智の神エンデ……」

アマリ「そして、あれから感じる底知れぬ害意……！あれは私達の……人間に害をなす者です！」

魔獣エンデ「敵……？思イ上ガルナヨ、人間。才前達ハ、我ノエサニ過ギナイ」

ヒユウガ「な、何だと……!?？」

グランデ「俺達がエサだと……？」

グレンファイヤー「あいつ、他の生命体を食うのかよ！」

魔獣エンデ「人間ノ尺度デ、我ヲ語ルナ。我ハ高次元生物……。活動ノタメノエネルギーハ、宇宙カラ得ラレル」

カイザム「高次元生物……」

カンタム「宇宙のエネルギーを使うって……！」

サラマンディーネ「それでは、まるで……」

龍王丸「そうだ。奴は神部七龍神と同じく、聖獣と呼ばれる存在の一つだ」

ロージエノム「そして、奴こそが、このアル・ワースの創造主だ」
シモン「ロージエノム…」

ロージエノム「どうやら、我々の記憶の一部が曖昧なものも奴の力によるものなのだろう。だが、こうして実物と対峙した事で記憶が鮮明になってきた…」

魔獣エンデ「螺旋ノ戦士…神部七龍神…。3000年ブリダナ。ソシテ、エリニウスノレガリアモナ」

レナ「…！」

ロージエノム「我々が今いる空間…即ち、このアル・ワースもアンチスパイラルのいた隔絶宇宙と同じ存在であり…同時に意識が実体化する認識宇宙だ」

龍王丸「そう…。そして、このアル・ワースという宇宙はあの魔獣エンデの認識で出来ている」

アマリ「それが神話にあった、何も無い無の中でエンデが認識する事で世界が生まれた…の意味…」

ケイ「あのエンデは、この宇宙のエネルギーが形になったもの…聖獣と呼ばれる高次元生物よ」

ヨハン「魔獣エンデは、その強大な意思の力で自らの住む場所としてアル・ワースを創り上げたんだ」

零「いったい何のために…?!？」

ホープス「自らのエサ場とするためです」

アスナ「エサ…」

ゼフィ「魔獣エンデのエサ…。それは人間の発する様々な感情です」

ホープス「もつとも、生きるための食糧ではなく、それを食らうのは快楽や娯楽に近い感覚ですが」

アマリ「快楽のために人を食らう魔獣…」

ホープス「約3000年前…人間とアンチスパイラルとの戦いが全宇宙規模で発生しました…。エンデは、その戦いで生き延びた人間達…即ち感情を持つ生物をアル・ワースへと招き入れたのです。自らのエサにするために」

アマリ「それがアル・ワース創世の真実…」

ホープス「特に奴は、人間の痛みや苦しみ、悲しみや憎しみを好物とします」

ゼロ「負の感情…マイナスエネルギーって事か…!」

ホープス「その感情で大地を満たすため、奴は魔徒教団を作り上げ、アル・ワースの戦乱をコントロールしてきたのです」

イオリ「教団の存在する意味は…平和を守る事ではなく…戦いを操る事…」

メル「そして、そこで生まれた悲しみや苦しみをあの魔獣が食べる…」

マリア「教団の不可解な行動もこれで説明がつくわ」

カノン「彼等の行動は、正義のためではなく、魔獣エンデキ戦いを捧げるためだったという事なのですね…」

ラゴウ「では、俺達やアル・ワースの人間達は奴の楽しみの為に戦わされてきたというのか…!!?」

ギルガ「僕達はネメシスだけでなく、エンデにまで踊らされていたというのか…!」
リン「そんな…」

コーネリア「奴は無慈悲な神などではない…」

ロロ「自らの欲望に忠実な獣…いえ、魔獣です!」

ホープス「アル・ワースで生まれた感情は大地を潤し、そして知恵の実となります…」
しんのすけ「え…!!?」

千冬「あれは、奴のエサだったのか!」

ゼファイ「あの実を直接、食べるのではなく、そこに込められた人の想いを吸収するのです」

ホープス「悲しみや苦しみで知恵の実を実らせるために魔徒教団は行動していました。もつともエンデの声を直接聞く事が出来るのは代々の道師だけでしたが」

アマリ「導師キールデインもあの怪獣の操り人形だったなんて…」

イオリ「じゃあ、教団の術士達は……」

ホープス「エンデと意識をリンクさせる素質を持った者達……つまり、この世界を創ったエンデの因子である大地のオドを感じられる者達です。その者達は、今ある事象を変化させる意思……即ち、破壊の意思を持っています」

アマリ「それが、私やイオリ君や術士達……」

零「待て……！じゃあ、セルリックの姿が変化したのは……！」

ホープス「そうです。魔獣エンデとより直接的にリンクした事による結果です」
メル「で、でも、それはおかしいです！」

カノン「ええ、ホープスが言う通り、このアル・ワースが、あのバケモノのエサ場だとすれば……どうして教団やセルリックさんはアル・ワースが滅んでもいいなんて言ったんですか……？」

C・C「それはあいつが、アル・ワース以外をエサ場にする事を考えているからだろう」

零「何だと……？」

C・C「その証拠に奴は、ここ数年……様々な世界に接触を繰り返してきた」

ルルーシュ「(マリアンヌやアーサー王もそこでエンデの力に触れたのか……)」

ヒイロ「目を覚ましたマリーメイアも言っていた」

ゼクス「アル・ワースは次元の狭間にあり、接する複数の世界だけでなく、他の世界ともつながりがあるようだ」

ノイン「アマリやイオリ、術士達が様々な世界から召喚されたのはそのためと聞く」
ホープス「誕生から約3000年：アル・ワースで集められた感情に飽きたエンデは、他の感情を食べてみたくなった：。その試食こそが、異界人の召喚だったのです」

アスナ「あの魔獣の食欲を満たすためにアル・ワースに呼ばれた者達：」

アマリ「私が見た精気を失った異界人はその犠牲：」

ホープス「だが、イレギュラーな事が起こりました。それはネメシスの手によって、零達が召喚された事：。自らが召喚していない異界人が訪れる事だ」

弘樹「そうか！俺達はエンデが召喚したんじゃないやなかつたな！」

優香「だから、教団はオニキスをも危険視していたのね：」

マリア「でも、それなら、どうしてネメシスと教団が手を組んだの：!!?」

ゼファイ「恐らく、ネメシスを利用して彼が召喚した異界人：つまり、パパ達の感情をも食べようとしたからです」

零「：ネメシスもエンデの力を利用してしようと考えたわけか：！」

ホープス「そして、教団の誘導により異界人の存在は、アル・ワースの戦乱を加速させました。奴は食欲であると同時に繊細な味覚を持っています。それ故に悲しみや苦

しみを引き立たせるため、喜びや愛などの感情も必要だと考え……。戦いを望む人間と、それと対となり、平和のために戦う人間……さらには復讐に燃える人間を同時に集めたのです」

マーベル「それが私達、エクスクロスの役割……」

ヴァン「あの野郎は俺やレイ」「ガンソ」の復讐……アキトや九郎の愛まで利用したつての……！」

シルキー「あの魔獣は生と死の狭間で摂理を歪める者……」

エイサップ「だが、エンデの思い通りにはならない！俺達はネメシス以外の敵を打ち破り、アル・ワースに平和を取り戻しつつある！」

エレボス「そうだよ！あんなバケモノ、みんなの力を一つにしてやっつけようよ！」

魔獣エンデ「……」

ウエスト「あいつは黙ってしまったのである！」

エルザ「こっちは、ここまですぐにあいつの手下をやっつけてきたロボ！」

九郎「黒幕気取りで最後らへんに出てきたが、こっちにとつては都合だ！」

エンネア「あいつは……私達の世界を襲うつもりなんだよね！」

アル「であれば、放っておくわけにはいかない！」

リオン「やるぞ！俺達の……いや、全ての世界を守る為にあいつを倒す！」

魔獣エンデ「…怒り、使命感、覚悟、意地、誇り、憎シミ…。ソレラガ一ツニナリ、コレマデニナイ美味ガ生マレル…」

ミーナ「30」「え…」

アイシャ「この状況で私達の感情を吸収しているなんて…!」

魔獣エンデ「オ前達ノ希望ナド、コレカラ起コル絶望ノスパイスニ過ギン。ソノ小サキ者ガ、我ノ存在ヲ明カシ、オ前達ヲ、イクラ奮イ立タセテモ結局ハ我ノ舌ヲ喜バサルダケダ」

イオリ「小さき者…」

アマリ「ホープスの事…?!?!」

魔獣エンデ「オ前達ノ感情ヲ、ヨリ美味ニスルタメニ我ノ力ヲ見セテヤル」

これが…奴の力か…!」

バトルボンバー「超AIの俺にもわかる…!」

ガードダイバー「この圧倒的な悪意…!まるで、魔のオーラだ!」

魔獣エンデ「魔ノオーラ…?我ノ息吹ノ事ヲ言ッテイルヨウダナ」

ブラックマイトガイン「ブラック・ノワールは自らを智の神エンデと名乗っていたが

…」

ジョー「奴は、魔獣エンデに造られた存在なのか?!?!」

魔獣エンデ「ブラック・ノワール……。アレハ、アル・ワースニ移住シタ文明ガ造ッタ
社会管理システム……。ダガ、我ノ発スル氣ニ当テラレ、自ラノ存在ヲ見誤ツタヨウダ」
舞人「要するに全てはお前のせいか！」

魔獣エンデ「イイゾ……。モット怒リヲタギラセロ。タダノ苦シミヤ悲シミハ、モウ食
イ飽キタ。オ前達ノ中ニアル正義ヤ愛……。ソレガ砕ケタ時ニ生マレル至高ノ美味を食ワ
セロ」

甲児「野郎！俺達の想いを隠し味ぐらいにしか、考えてないのかよ！」

さやか「何が智の神よ！食欲しかないケダモノじゃない！」

ボス「で、でもよ！世界を創っただけあって、その力……。ハンパじゃないぜ！」

海道「だから、何だっつてんだ！」

真上「どの様な力を見せようが、俺達は勝つだけだ！」

鉄也「弱みを見せるな、ボス！それはあいつにエサを与えるだけだ！」

魔獣エンデ「フフフ……。口デハ抵抗シテモ、オ前達ノ中ニ焦リヤ不安ガ生マレ始メテ
イル……」

セシリー「そうだとしても、それを乗り越える想いが私達にはあります！」

シーブック「それは力となり、お前を討つ！」

トビア「覚悟しろよ！大食らいのバケモノが！」

キンケドウ「あまり、俺達を舐めない事だな！」

魔獣エンデ「イイゾ……。ソウヤツテ己ヲ鼓舞スルガイイ。抵抗スレバ抵抗スル程、オ前達ノ痛ミヤ苦シミハ、美味トナル」

ノレド「もうやだ！何なのよ、こいつ！」

ラライヤ「私達をエサとしか考えていない……！」

リンゴ「理解しようとするだけ無駄か……！」

ケルベス「話を通じる相手じゃない！」

ミツク「この傲慢さ……！」

クリム「世界の頂点に立つ存在……！即ち神！即ち創造主！」

アレルヤ「その力は、宇宙を揺るがす……！」

ロツクオン「くそっ！このヒビ割れた宇宙もあいつの仕業だつてのかよ！」

ハレルヤ「だが、あいつは既にアル・ワースに対して興味を失っている様だぜ」

セルゲイ「奴が認識を放棄した事により、この世界が崩壊を始めているのか……！」

アンドレイ「つまり、このままでは……！」

デカルト「アル・ワースが滅びるつてのかよ……！」

魔獣エンデ「ソノ通り……。コノ認識宇宙ニオイテ我ノ意思は絶対ダ。アル・ワースニ

存在スル生命ノ在リ方ハ我方決メル」

キラ「あなたは！生命の意味をまるでわかっていない！」

アスラン「だが、このアル・ワースを存在させているのが奴の意味だとしたら……」

イオリ「エンデを倒してもアル・ワースの崩壊は……」

ホープス「今は奴をどうにかする事が先決です」

マサキ「ああ……やるしかねえ……！」

アーニー「全ての世界を守るため……そして、僕達自身が生きるために！」

ケロロ「許さんでありますよ、魔獣エンデ！お前は我輩達が倒すであります!!？」

魔獣エンデ「足掻クガイイ、人間。コノ戦イハ、アル・ワースノ住民達ニモ届ケラレ
テイル。オ前達ノ敗北ニヨツテ、地ニハ絶望ノ果実ガ満チルダロウ」

アマリ「ホープス、イオリ君、零君、ゼフィちゃん！私達の手で、この戦いに決着を
！」

イオリ「了解だ、アマリさん！行こう！」

零「わかつてる！ゼフィとアスナも準備はいいな！」

アスナ「もちろんよ！」

ゼフィ「行きましょう、パパ！」

ホープス「急いでください、マスター。この世界は、もうもたない所まで来ています。

私の計算では、残された時間は、あと6分です」

弘樹「たった6分……！」

零「それでもやるしかねえんだよ！」

アマリ「やってみせます！この6分に全てを懸けて！」

魔獣エンデ「来い、人間共。才前達ハ、我ノエサダ」

戦闘……開始だ！

魔獣エンデ……なんて強さだ……！

魔獣エンデ「無駄ナ事ヲシテクレル……。我サエ存在シテイレバ、人形ナドイクラデモ作レルトイウノニ」

ガエリオ「あいつめ……！調子に乗って！」

マクギリス「だが……！」

ジュリエッタ「悔しいですが、彼の力……ケタが違います……」

奴のダメージが回復したと……!??

エレクトラ「魔獣エンデ、ダメージを回復させていきます！」

ネモ船長「バケモノめ……！」

ジャンボット「これが神の力……」

ジャンナイン「このままでは、こちらが確実に負ける……！」

エメラナ「そんなの……嫌です……」

ゼロ「まだだ！戦う意思がある限り、身体が動く限り、やるんだ！」

アマリ「……」

零「アマリ……？」

ホープス「大丈夫ですか、マスター？」

アマリ「……ホープス……。教主って何なの？」

ホープス「……」

アマリ「導師が魔獣エンデの代行者だとしたら、教主とは一体何なの？何のために教団はエンデとリンクできる人間達に教主を目指すように仕向けたの……？」

ホープス「教主はエンデが生まれ変わるために必要な因子なのです」

イオリ「エンデが生まれ変わる……?!?!」

アマリ「どういう事なの……?!?!」

ホープス「魔獣エンデは、いずれは全ての世界を自分のエサ場にする事を考えていました……。その障害となる他の聖獣やアンチスパイラルとの戦いのためにこのアル・ワースで力を蓄えると同時に……。新たな肉体となる、自らのスペアを用意しようとしたのです」

アマリ「スぺア…」

ホープス「教主の育成こそが教団設立の、もう一つの意味です。エンデ同様の強大な意思を持つ教主…そして、その肉体となるゼルガード…。それらが融合して完成する器にエンデは自らを憑依させて、生まれ変わりを果たすつもりだったのです」

アマリ「教団の術士となった者達はそのためにアル・ワースに…」

ホープス「気の遠くなる様な遙か過去に誕生した魔獣ですが、いつかは寿命が来る…。奴にとつて、この3000年は自らの肉体のスペアを探すための時間だったと言えますでしょう」

魔獣エンデ「ソノ小サキ者ノ言ウ通りダ」

アマリ「魔獣エンデ…!」

魔獣エンデ「藍柱石ノ術士…。智の神エンデノ名ノ下ニオ前ヲ教主ニ任命スル。オ前ダケハ生カシテヤル。ソシテ、コノ食事方終ワツタ後、ソノ全テヲ我ニ捧ゲヨ」

アマリ「私の生命も心も身体も全て私のものです!」

魔獣エンデ「選択権ナドナイ。オ前ハ、我ノ器トナルタメニ我ニ呼バレタノダ。我カラノオドロ断ツタ状態デドグマヲ使ウオ前ハ、イイ素材トナル」

アマリ「やめて! 私は私なのだから!」

魔獣エンデ「マダ自分ノ立場ガ、ワカラナイカ…。マアイイ…。我ハ食事ヲサセテモ

ラウ」

奴がアル・ワースに近づいた…!!?」

ヒミコ「あの犬さん、何を言っているのだ？」

幻龍斎「ま、まさか…！」

クラマ「奴の食事とは！」

シモン「やめろおおおつ!!?」

アル・ワースが…消え…た…?」

アンジユ「アル・ワースが!!?」

クリス「う、嘘…！」

ロザリー「き、消えちまった…！」

サリア「まさか…！」

ヒルダ「言うな！そんな事が起きるはずがないんだ！」

魔獣エンデ「認メロ。アノ星ハ我が食ラツタ」

エルシャ「そんな…！」

ヴィヴィアン「バカヤロー！何て事してくれたんだ！」

魔獣エンデ「元々アノ星ハ我が、エサヲ育てルタメニ用意シタモノダ。知恵ノ実ガ生
ルノヲ待ツノモバカラシクナツタノデ一氣ニ食ラツテミタガ…。チマチマシタ果実デ

ハ味ワエナイ極上ノ美味デアツタ」

ジル「バケモノめ！」

タスク「奴を倒さなければ全ての世界が危険にさらされる！」

魔獣エンデ「出来ルカ？ 恐怖ニ囚ワレツツアル、才前達ニ？」

リチャード「黙れ！ 俺達もアル・ワースの人達もお前のエサになるために生きてきたわけではない！」

魔獣エンデ「イイヤ、違ウ。全テノ生命ハ我ノエサ…。グ…グウウ…グウウウウウ…グウウ！」

な、何だ…？！？

零「エンデが…！」

アマリ「苦しがつている…？！？」

魔獣エンデ「グ…グボ…グボアアアツ！！？」

え…アル・ワースが戻ってきた…？

ユイ「アル・ワースが！」

レナ「復活した！」

魔獣エンデ「グホッ！ ボゲツ！ 絶望デ塗り潰サレタアル・ワースカラ不快ナ味ガスルウウウウ！」

「ゴーカイグリーン「不快な味!?!」

アトラ「それって……!」

アイラ「エクスクロスはドアクダーやエンブリヲといった脅威からアル・ワースを守ってきました」

束「他の奴等も信じているんだね。エクスクロスのみんななら、この絶望を越える事を!」

?「そう……。今、この星を満たしているのは希望です」

ワタル「あれは……!」

龍王丸「聖龍妃……。創界山を治める者だ」

虎王「!」

ルルーシュ「そうか……。希望や信頼などは、魔獣エンデにとって料理のスパイスのよなもの……」

鈴「それがメインとなった料理は口に合わなかったみたいね!」

箒「つまり、今のあいつは唐辛子の塊を口に突っ込まれたようなものか!」

シャルロット「拾い食いなんてするから、そうなるんだよ!」

魔獣エンデ「黙レ、人間ツ!!?ゴボツ!ベホツ!!?ボエエエツ!!?」

セシリア「その様に噎せながら強がっていても全く怖くはありませんわ、はしたない

！」

ラウラ「もう既に神でも魔獣の威厳もないな！」

聖龍妃「エクスクロス……。あなた達にアル・ワースの希望を託します」

アル・ワースからみんなの声が聞こえる……！

オババ「ワタル！皆の者！頑張れい!!？」

クルージング・トム「俺達も信じているぞ！」

デス・ゴツド「お前達の勝利を！」

ソイヤ・ソイヤ「祭だ！祭だ！魂をたぎらせろ！」

ドクトル・コスモ「見せてくれ！計算を越えた力を！」

アック・スモッグル「うおおおっ！俺達の気合よ、あいつ達にホールインワンだ！」

ビビデ・ババ・デブー「根性だよ！頑張れ、エクスクロス！」

ワタル「もしかして、あれって!?!？」

クラマ「ドアクダー軍団の界層ボス達も元の姿に戻った様だな」

ヴァン「あれがああゴルフ親父の本当の姿か」

トッド「ビビデ・ババ・デブー！元氣そうじゃないかよ！」

クラマ「へ……どうもこいつもこいつもこの間まで悪党だったとは思えないツラしてる

ぜ」

みんな…変わりつつあるって事か…!

リユー「エクスクロスの皆さん! 私とロウも信じています、このアル・ワースを平和にしてくれる事を!」

ティア「リユーとロウだ!」

サラ「うん、二人のためにも負けるわけにはいかないね!」

今度は青戸から…!

浜田「頑張れ、舞人! 頑張れ、エクスクロス!」

大阪「こちらは誰一人、諦めていないぞ! 君達がいる限り!」

舞人「浜田君! 大阪室長!」

ジョー「フツ、これは負けるわけにはいかなかったな」

テオドア「負けないでください、エクスクロスの皆さん!」

ジョナサン「我々は皆、あなた方の事を信じています!」

マーガレット「ユイ様、レナ様、皆さん! そして、無事におかえりください!」

レツ「ユイ、レナー、サラとティアも頑張れ!」

ユイ「レツちゃん、マーガレットさん!」

ナル「テオドアさんやジョナサンさんまで!」

アオイ「それだけではないわ、エナストリアのみんなも応援してくれている!」

今度は獣の国からも……!

キヨウ「頑張つて、エクスクロス!この子の明日のためにも!」

キヤル「頼んだぞ!世界を守ってくれーっ!!?」

キノン「私達の全てを、あなた達に託します!」

ロシウ「あなた達こそが、僕達の:アル・ワースの希望です!」

ダヤツカ「うおおおおおっ!キヨウ、アンネ!!?俺はやるぞおおおっ!!?」

キタン「やるぜ、キヤル、キノン!」

カミナ「へえ、ロシウの奴もデカくなつたじゃねえか!」

ニア「皆さん:信じてくれるのですね、私達を」

シモン「ああ:!!それが俺達の力になる」

あれは:シルヴィアか:!!?」

シルヴィア「全員、諦めるな!私達の戦う意思は、必ずエクスクロスに届く!戦つて未来を掴み取る!私に続けーっ!!?(お姉様:。あなたの強さ:信じています:)」

モモカ「あれって:!!?」

タスク「アンジュの妹の:!!」

アンジュ「シルヴィア!あなたも戦っているのね!」

変わったな、シルヴィア:。

ザン・コック「頼みまずぞ、エクスクロス！」

ザン・ゴロツキー「あなた達に我々の希望を託します！」

ザン・ギャツク「あなた達こそが、このアル・ワースに正義を打ち立てる者です！」

武宝「ご武運を！エクスクロス！」

シバラク「ほう！あれがザン兄弟の本当の姿か！」

虎王「あ、あの最後の一人は……」

聖龍妃「そうです。あれは、かつてドン・ゴロと呼ばれていた者です」

虎王「わかる……わかるぞ……。そして、あんたは俺の……」

聖龍妃「待っています……。アル・ワースに平和が戻った時こそ私達の再会は果たされ

ます。そのためにもこの世界に未来を……！」

これが……想いの力か……！」

ナディア「あ……！」

ジャン「ナディア!?？」

ナディア「ブルーウオーターがみんなの想いを受け取った……。未来を望むみんなの思

いを！」

力が溢れてくる……！」

シーラ「今、この世界の生きとし生ける者全ての想いがあなた達に託されました」

シヨウ「感じる…！生命のオーラを！」

ジョーイ「僕達の身体を通して、想いが力になっていく！」

アマタ「未来を望む想い…可能性を信じる希望！それが俺達に力をくれる！」

魔獣エンデ「チ…チ…違ウ！ソウデハナイイイツ！愛ヤ勇氣ヤ希望ナド、悲シミヤ苦シミヤ絶望ヲ引キ立タセルタメダケニ存在スレバイイノダ！ソクナモノデ満タサレタ世界ナド、我ハ食ベタクナイイイツ！！？」

万丈「認めろ、魔獣エンデ！」

ノブナガ「この世界を創ったのはお前かも知れないが、アル・ワースはそこに生きる民達のものだ！」

青葉「お前の好き勝手にさせねえ！アル・ワースも生命も！！？」

シモン「覚悟しやがれよ、大食らいのバケモノ！みんなの希望を背負った俺達がお前を倒す！」

魔獣エンデ「オ…オ…愚力者達メ！創造主デアリ、世界ヲ支エル意思デアル我ヲ滅ボセバ、コノ世界ハ…」

ホープス「そんな脅し文句で我々を止められると思いますか？そう思ってるのだとしたら、智の神を堕ちたものですね」

魔獣エンデ「貴様ハアアアツ！！？」

ホープス「奴の言葉にためらう必要はありません。さつさと卑しい獣は退治して、このアル・ワースを救いましょう」

ダリー「本当に大丈夫なの、ホープス!?!」

ギミー「シモンさんみたいなハツタリじゃないだろうな!」

ホープス「この生命を賭けてもいいです」

アスナ「その言葉…嘘はないでしょうね?」

ゼファイ「ホープス先輩…」

アマリ「ホープス…」

ホープス「私を信じてください、マスター」

アマリ「うん…!だって、私はホープスのパートナーだもの!」

零「仕方ねえ、信じてやるとするか!お前は俺のライバルだからな!」

アンジュ「血が沸騰する…!力が湧き上がる!」

ベルリ「うおおおおおっ!元気が爆発する!!?」

舞人「やるぞ、正義の為に!」

ユイ「みんなのために!」

ワタル「世界のために!」

魔獣エンデ「人間如キガアアアツ!!?」

イオリ「終わりだ、魔獣エンデ！」

アマリ「私達とアル・ワースはあなたを越えていきます!!？」

零「まだネメシスも残っているんだ：お前に構っている時間はねえんだよ！」

戦闘再開だ！

〈戦闘会話 ショウVS魔獣エンデ〉

チャム「やっちゃえ、ショウ！」

シルキー「今こそ、みんなのオーラを一つに！」

魔獣エンデ「バカナ…？コノ男…多クノ人間ノ想イニ守ラレテイル！」

トツド「わからないだろうな、化け物！」

バーン「それこそが、この男…ショウ・ザマだ！」

マーベル「人々の希望を背負って戦う者…！それが聖戦士よ！」

シーラ「ショウ・ザマ…。今こそ、世界の歪みを正す時です！」

ショウ「俺のオーラ力の全てをこの一撃に込める！」

魔獣エンデ「ヤメロ！ソレハ我ノ欲スルモノデハナイ！」

シヨウ「受けるがいい、魔獣エンデ！俺の…俺達のオーラがお前を討つ!!？」

〈戦闘会話 エイサップVS魔獣エンデ〉

エイサップ「世界を人間をお前の好きにはさせない！」

魔獣エンデ「何ダ、想イが奴ノ下ニヘト集マツテイク！」

エレボス「それがエイサップの力だよ！」

アマルガン「彼によつて、多くの者が手を取り合う未来が見えているのだ！」

サコミズ「そして、それは想イが集まる程、大きくなり、強くなつていく！」

金本「元々敵同士でも、想イが繋がれば一つになるんだ！」

朗利「エイサップには他の奴等をまとめる力があるんだよ！」

リユクス「人々をエサだと思つているお前では、到底理解は出来ないだろう！」

魔獣エンデ「ヨセ！ソナマズイモノヲ我ニ食ベサセルナ！」

エイサップ「お前の好みには付き合つてられないんだよ！これで終わらせる！人間の…想いの力を知れ！」

〈戦闘会話 カミーユVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「ナ、何ダ！コノ者ノ周囲カラ、様々ナ人間ノ想イヲ感ジル！」

カミーユ「わかるか、エンデ！俺の身体を通して出る、みんなの思いが！」

ファ「みんながカミーユを信じている！カミーユから、やってくれるって！」

ヤザン「こいつは不思議と他の奴等を引きつける何かがあるって事だな！」

魔獣エンデ「信頼、希望、願イ……！我ハ、コンナモノハ食ベタクナイ！」

カミーユ「エンデ！遊びでやってるんじゃないんだ!!？お前の引き起こした戦いで散っていった人達の想いは、俺が背負う！消えろ、魔獣！アル・ワースはお前を越えていくんだ!!？」

〈戦闘会話　ジユドーVS魔獣エンデ〉

ジユドー「生きるために人間を食うならともかく、快樂のためにだって言うなら、こつちも抵抗するだけだ！」

魔獣エンデ「足搔ケ、足搔ケ！ソノ心ガ折レタ時、才前ハ至高ノ美味ヲ我ニ献上スル事ニナル！」

ビーチャ「野郎！どこまでも人間をバカにしやがって！」

エル「だったら、見せてやろうよ！あたし達の底力を！」

ルー「そして、私達の希望は、あいつを弱らせる事になる！」

ブル「行こう、ブルツー！」

プルツー「プルと一緒にやらされる！」

魔獣エンデ「ヤメロ！才前達ハ殺シ合イをサセルタメニアル・ワースへ呼ンダノダゾ
！」

グレミー「何という破廉恥な！」

マシユマー「まさに下衆の極み！お前に神を名乗る資格などない！」

ラカン「貴様のような獣には加減は必要ないな！」

ハマーン「ジユドー、私達の力で奴を倒すぞ！」

ジユドー「ああ！魔獣エンデ！俺達はお前の企みを越えて、ここまで来たんだ！お前の好きにはさせないぞ！俺達も、アル・ワースも!!？」

〈戦闘会話　アムロVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「才前トシヤア・アズナブルノ因縁ハコノアル・ワースヲ戦火ニ包ムハズ
ダツタノニ！」

アムロ「誰かに踊らされる程、シヤアは愚かな男ではない！」

シヤア「アムロ……」

魔獣エンデ「ダガ、我ニハワカッテイル……！シヤア・アズナブルノ中ニ乗り越エル事
ノナイ絶望ガアルノヲ！ソレハ、イツカ……」

ギユネイ「大佐の事をわかっていないお前が、大佐を語ってんじやねえぞ！」

アムロ「俺とシヤアの戦いの行方にお前は関係ない！」

シヤア「アムロの言う通りだ！我々の決着は、元の世界に帰ってからだ！」

アムロ「魔獣エンデ！そのためにも俺達はお前を討つ！アル・ワースのため！何より、自分自身のために！」

〈戦闘会話　バナージVS魔獣エンデ〉

アンジェロ「無知の獣に鉄槌を下す時だぞ、バナージ！」

フロンタル「今までエサと嘲笑ってきた人間の力を見るがいい」

魔獣エンデ「調子ニ乗ルナ、人間如キガ！所詮才前達ハ、我ニ食ワレル運命ダ！」

マリィダ「まだその様な事を言っているのか」

リデイ「分ならず屋の獣には教育が必要な様だ！」

バナージ「魔獣エンデ！お前の最も嫌いなものを与えてやる！可能性の獣の力を……！」

魔獣エンデ「ソノヨウナモノヲ食ラツテタマルカ！」

ミネバ「バナージ、戦ってください。全ての人々の為に……。そして、必ず私の下へと帰ってきてください！」

バナージ「わかってるよ、オードリー。受ける、魔獣エンデ！これが…俺達の力だ！」

〈戦闘会話 トビアVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「オ前達ハ、アムロ・レイヤシーブック・アノーニ絶望ノ未来ヲ突キツケルタメニ呼ンダノニ…！」

トビア「もしかして、お前…俺があの人達に未来を話さなかった事を怒っているのか？」

魔獣エンデ「ソノ通りダ！ソウスレバ、奴等ハ絶望シ、至高ノ美味ヲ我ニ献上シタダロウ！」

キンケドウ「その割には俺自身を呼び出すなんて、だいぶ間抜けなんだな、お前は！」
トビア「笑わせるな、ケダモノ！お前は、あの人達の事も人間の事もまるでわかつちやいない！アムロさんやシーブックさんが絶望に負けるなんて事はない！必ず、そこから立ち上がるさ！」

キンケドウ「つまり、どうやってもお前はエサにありつけないんだよ！」

魔獣エンデ「オ、オノレ！ナラバ、オ前達ヲ…」

トビア「力づくで俺達を絶望させようとしてもムダだ！俺達にはやるべき事があるか

らな！行くぞ、魔獣エンデ！俺達はお前達を倒して、ベルナデット達の所に帰るんだ！」

〈戦闘会話 シンVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「運命…友情…何モカモガクダラナイ！」

ハイネ「黙れよ、食べる事しか出来ないケダモノ野郎！」

ステラ「人を食べるのはダメな事何だよ！」

魔獣エンデ「黙レ、人間如キニ言ワレル筋合イハナイ！」

レイ「Destiny」その見下した態度が、既にお前を小物としか見えない証拠だ
！」

ルナマリア「人間はあなたの考えているものよりも簡単じゃないのよ！」

魔獣エンデ「ナラバ、痛メツケテ、再ビ絶望ニ叩キ落トシテヤル！」

シン「ここまで言つて、まだわからないのかよ！俺達はもう戦争なんてしたくない！それがわからないお前を野放しにさせるかよ！戦いの元凶であるお前を倒して、争いを終わらせてやる！」

〈戦闘会話 キラVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「何故ダ…！何故、お前達は我ニ恐レズ突ツ込ンデクルノダ!?？」

アスラン「お前が人間を食するというバカな考えを持つているからだ！」

魔獣エンデ「何ダト!?？」

キラ「人々の想いを…生命を無駄にはさせない！」

アスラン「だから、俺達はお前を倒す為に退く訳にはいかないんだ！」

魔獣エンデ「ムダダ、我ニ勝ツ事ナド不可能ダ！」

キラ「不可能だとしても僕達は諦めはしない！例え、無謀でも…僕達は、守りたい世界があるんだ！」

〈戦闘会話 刹那VS魔獣エンデ〉

ティエリア「異種との対話を目指してきた僕達ではあるが彼の場合は別だな」

ロックオン「まあ、俺達を食べる事しか考えていないからな」

ニール「同時に対話も難しいな」

魔獣エンデ「ドウシテエサデアル我ガ才前達ト対話ヲシナケレバナラナイ」

刹那「奴の意思からは捕食願望しか感じない…！」

パトリック「諦めるしかない様だぜ、刹那」

デカルト「口で言っただけでわからない奴は力で証明するしかない」

魔獣エンデ「我ヲ侮ルナヨ、人間如キガ！」

セルゲイ「お前も俺達、人間を侮るなよ、魔獣エンデ」

アンドレイ「我々は世界の新たな未来を掴む！」

ソーマ「そして、平和な未来を作ってみせる！」

ハレルヤ「いいな、盛り上がりすぎてきたぜ！」

アレルヤ「みんなの意思が一つになっていく……！」

スメラギ「これこそが、イオリアが目指した未来なのね……！」

リボンズ「ふっ、やはり、人間は面白い」

アニュー「もうイノベイターも人間も関係ないわ！」

魔獣エンデ「ヤメロ！我ハソクナモノヲ食ベタクナイ！」

グラハム「行くぞ！この戦いでこの世界の争いを根絶する！」

マリナ「刹那……アル・ワースの未来をあなた達に託します」

刹那「了解！刹那・F・セイエイ……！アル・ワースの未来を切り拓く！」

〈戦闘会話　キオVS魔獣エンデ〉

デイン「年貢の納め時だぜ、バケモノ！」

シヤナルア「あんたは私達に破れるんだよ！」

魔獣エンデ「バカメ！我方負ケル事ハ絶対ニナイ！」

セリツク「流石は魔獣：相当な自信だな」

魔獣エンデ「ソウ、我ハ絶対無二ノ神ナノダ！」

ジラード「じゃあ、自称神の魔獣さんにトドメをさしてあげましょうか！」

キオ「うん！お前に人間達は渡さない！お前は：僕達とガンダムが止めてみせる！」

〈戦闘会話〉 アセムVS魔獣エンデ

魔獣エンデ「才前達ノ友情ヲ通り越シタ因縁デ絶望ヲ得ル為ニ呼ンダツイウノニ！」

アセム「ふつ、どうやら考え通りにいなくて、ご立腹みたいだ」

フラム「ゼハート様達を利用しようなどと……！」

レイル「あんなケダモノに言ってもムダだぜ、フラム」

ゼハート「だが、我々の友情の事で怒ってくれて感謝するぞ」

フラム「ゼハート様……！」

魔獣エンデ「ヤメロ、ヤメルンダ！我ニソノヨウナアジハ必要ナイ！」

ゼハート「やめろと言われて、止める奴はいない！俺達の力、みせるぞ、アセム！」

アセム「おう！魔獣さんよ、これで終わりだ！」

〈戦闘会話〉 フリットVS魔獣エンデ

魔獣エンデ「何故ダ、貴様ハ凄マジイ憎シミヲ持ッテイタハズ！」

フリット「勉強不足だったな、もう私は憎しみを吹っ切れた」

魔獣エンデ「何ガオ前ヲソコマデ強クシタ!?？」

フリット「強いていえば、家族…だな」

魔獣エンデ「ナラバ、ソノ家族トヤラヲ破壊スレバオ前カラ美味ナル絶望ヲ得ラレル

トイウ事ダナ！」

フリット「そんな事をしてみる、お前はタダで済まなくなるぞ！」

〈戦闘会話 三日月VS魔獣エンデ〉

三日月「いかにもっていう敵だな」

ハツシユ「今更つすね、三日月さん」

アストン「讃えられていた神様がこんなケダモノだったなんて」

ジュリエッタ「少し興味がありました、ガツカリです」

マクギリス「教団も落ちぶれたものだな」

ガエリオ「みんな、言いたい放題だな」

魔獣エンデ「我ヲバカニスルノカ！」

暁「でも、事実だし」

シノ「ははっ！三日月に似て、ズカズカと言うなあ、暁は！」

アミダ「でも、可愛いじゃないか」

名瀬「そうだな、そしてこの子達が未来を掴んでいくんだな」

ラフタ「そうだね、ダーリン！」

魔獣エンデ「黙レ、才前達ニ未来ナドナイ！」

オルガ「黙るのはお前だ、バケモノ野郎！」

明弘「たまには未来の為に戦うのも悪くない！」

アトラ「三日月！」

クーデリア「私達は皆さんを信じています！」

アルミリア「頑張ってください！」

オルガ「これは負けられねえな……」

魔獣エンデ「ナラバ、才前達ニ大キナ絶望ヲ……」

三日月「もううるさいよ、お前」

魔獣エンデ「何ッ!?？」

オルガ「お前は俺達に喧嘩を売ったんだ……。遠慮する必要はねえ、やつちまえ、ミカ

!!
?」

三日月「おい、バルバトス……！オルガの期待に応える為にあのバケモノを倒す力を貸

せ……！一気に終わらせるから！」

〈戦闘会話 海道VS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「オ、オ前達ハソノチカラデアル・ワースニ新タナ生モウトサセテイタノニ……！」

スカーレット「ふっ、甘いな、魔獣エンデ」

ハリケーン「この二人があんたの言いなりになるわけないだろ！」

由木「あのケダモノはそう言っているわよ、地獄のお二人さん？」

真上「フン、俺達も舐められたものだな」

海道「まあ、何でもいいぜ！お前をぶっ潰せるならよ！」

魔獣エンデ「ダガ、オ前達カラハマダ美味ナルモノヲ食エル可能性ガアル！」

アイラ「あの魔獣にお見せください、戦士達よ……。何者にも負けない魔神の力を」

真上「当然だ！行くぞ、海道！」

海道「おうよ、真上！ケダモノ野郎！お前は既に地獄に足を踏み入れてんだ……。それ相応の報いを受けやがれ！」

〈戦闘会話 舞人VS魔獣エンデ〉

舞人「魔獣エンデ！全ての黒幕であるお前を討ち、俺達はアル・ワースを救ってみせる！」

魔獣エンデ「正義ナド、絶望ヲ際立タセルタメニ存在スレバイイノダ！ソレヲ、才前達ハ……」

ジョー「こいつの正義嫌いは俺よりも下らない理由だな」

バトルボンバー「どれだけ理屈をつけようとも快樂のために世界を破壊する奴は悪党でしかないぜ！」

ガードダイバー「我々は、その悪から人々を守るために存在する！」

ブラックマイトガイン「例え、相手がどれだけ強大でと我々は決して退きはしない！」
グレートマイトガイン「それが勇者特急隊だ！」

魔獣エンデ「ナラバ、才前達ノ存在ヲ消去スル！ソシテ、希望ハ消エ去ル！」

ホイ・コウ・ロウ「神だか知らないが、あまり、調子に乗らない方がいいネ！」

ミフネ「まあ、我々は勇者特急隊ではないがな」

ビトン「それでも世界がなくなったら、住む場所がなくなってしまうよ！」

ヴォルフガング「今じゃ、イノセントウエーブの力を見せる時だ！」

サリー「舞人さん！みんな！負けないで！」

舞人「サリーちゃん……君に勝利を約束する！」

魔獣エンデ「ヤメロ！不快ナ味ガ、舌ニヨミガエル！」

舞人「お前の思い通りにはさせない！何故なら、正義は不滅だからだ！覚悟しろ、魔獣エンデ！勇者特急隊がある限り、世界を、人々の想いをお前に渡しはしない！」

〈戦闘会話　ルルーシユVS魔獣エンデ〉

ルルーシユ「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア…。世界ヲ混乱ニ陥レルタメニ才前ヲ呼ンダトイウノニ…。！」

ルルーシユ「…」

ロロ「兄さん…」

カレン「黙れ、化け物！ルルーシユの本当の想いも何もわかってなくせに！」

星刻「お前とルルーシユを一緒にするな！」

ジェレミア「ルルーシユ様の願いはお前の望みとは正反対の世界だ」

アーニヤ「貪欲に支配されたケダモノにはわからないかも知れないけど…」

ジノ「ルルーシユは例え、世界を敵に回してでも、世界のために戦っている！」

コーネリア「そう、我々の世界が平和に進んでいるのはルルーシユのおかげなのだ！」

藤堂「そして、ルルーシユの敵は我々の敵だ！」

スザク「僕達はルルーシユと共に戦う！彼の望む平和と自由を実現させるために！」

扇「そのためにはルルーシユが必要だからだ！」

C・C「言つてやれ、ルルーシユ。あの食べる事しか考えていない卑しい獣に」
ルルーシユ「いや：俺の言いたい事はみんなが言ってくれた」

ユーフェミア「いい顔になりましたね、ルルーシユ」

魔獣エンデ「人間如キガ、我ヲ愚弄スルカ…！」

ルルーシユ「まだわからないか、魔獣エンデ！既にお前に勝ち目は無い！なぜなら、俺達は希望を捨てない！それがお前の望む絶望を必ず打ち砕くからだ！」

魔獣エンデ「ウウ…。我ノ言葉ガ跳ネ返サレル！」

ナナリー「お兄様！」

ルルーシユ「条件は全てクリアした！魔獣エンデ！後は貴様を倒すだけだ！」

〈戦闘会話 アンジユVS魔獣エンデ〉

アンジユ「キモい髪型のナルシストもうんざりだけど、腹ペコのケダモノの相手つてもね…！」

魔獣エンデ「我ノチカラヲ見テモマダソノヨウナ言葉ガ吐ケルトハ…！」

エンブリヲ「それがアンジユだからな」

ヒルダ「力だあ!!?ゲホゲホむせるだけの化け物が言ってくるよ！」

ロザリー「そりや食べる事は楽しいけどよ！」

クリス「あたし達はあんたみたいに卑しくないから！」

魔獣エンデ「黙レ！人間如キガ！」

ナオミ「好き嫌いする獣に言われたくないよ！」

ヴィヴィアン「でも、その人間の心を食べたいんでしょ？」

エルシャ「食べ物に感謝の気持ちが変わらないから、食いしん坊って言われるんです
！」

サリア「そんな奴に私達は負けない！絶対に！」

ジル「人間の誇りと共にお前と言う化け物を討つ！」

サラマンディーネ「お前が聖獣であろうと我々は一歩も退かない！」

タスク「アンジュ！僕の想いは全部、君に捧げる！」

モモカ「私の想いもアンジュリーゼ様に！」

アンジュ「ありがとう、タスク、モモカ！」

魔獣エンデ「ヤメロ！ソナモノヲ我ニ食べサセルナ！」

アンジュ「誰もあなたに上げるなんて一言も言っていないわよ！覚悟しなさいよ、魔獣
エンデ！人を襲うケダモノはお仕置きじやすまないからね！」

〈戦闘会話 青葉VS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「何故ダ！何故、才前達ハ憎シミト誤解デ殺シ合ワナイ!!?」

青葉「そんなのは決まってるだろ！俺達が人間だからだ！」

魔獣エンデ「何ダト!!?」

ディオ「人間は戦うだけの生き物ではない！」

ヒナ「戦いを越えて未来へと進んでいく！それが出来るはずだから！」

倉光「その通り…！だから、僕達は希望を失わない！」

ビゾン「正しき事のために国や組織を越えて、手を取り合う事も出来る！憎しみさえも越える事が出来る！」

アルフリード「それが…それこそが我々人間の力というものだ！」

魔獣エンデ「ナラバ、ソレヲ叩キ潰シテヤル！コノエンデノチカラニヨツテ！」

ディオ「お前に出来るものか！」

ヒナ「行つて、青葉！私達の想い共に！」

青葉「やるぜ、ディオ、雛！俺達の絆の力で、あの化け物を越えるぞ！俺達の目指す先は、奴の向こうにある未来だ!!?」

〈戦闘会話 シモンVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「アンチスパイラルヲ倒した事ハ褒メテヤル。ダガ…」

シモン「お前みたいな化け物と話す気はねえ！」

ヴィラル「今、全てが分かった…！お前こそがアル・ワース3000年の全ての戦いの元凶である…！」

ニア「お父様の望みはいつの日か、アンチスパイラルを越え、さらにあなたを越える者が現れる事だった！」

キタン「教えてやるぜ、ケダモノ野郎！それが…俺達だ！」

ダヤツカ「やるぞ、みんな！アル・ワースを…俺達の大切なものを守るために！」

ヨーコ「散っていった者の想いも背負って！」

ダリー「あの星で待っている人達のため！」

ギミー「俺達の勝利を信じてくれる人達のため！」

魔獣エンデ「人間メ！我ハ、アンチスパイラルヲモ越エル存在ダゾ！」

カミナ「それがどうした！そんなもん…俺達の前ではな無力なんだよ！」

シモン「お前がどれだけ巨大な存在でも、俺達はそれをぶち抜いて未来へと進んでいく！それが俺達の生き方…全てを突破するドリルだあああつ！！？」

〈戦闘会話 一夏VS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「織斑 一夏！何か才前ヲソコマデ強クシタ!?？」

一夏「俺はまだ強くなかない！でも、俺がまだこうやって戦えているのは仲間達のお陰なんだよ！」

楯無「それに一夏君には他の人を惹きつける力があるわ」

シャルロット「そうやって、僕達は一夏に助けられてきたんだ！」

魔獣エンデ「ナラバ、織斑 一夏ヲコノ手デ倒セバ……！」

セシリア「させませんわ、その様な事は！」

ラウラ「私の嫁には指一本と触れさせん！」

鈴「一夏が私達を助けてくれるのなら、私が一夏が助けるわ！」

マドカ「終わりだ、落ちぶれた神め！」

簪「悪は許さない……！」

摩耶「みなさん、頑張ってください！」

箒「お前の邪気はここで断ち切る！」

千冬「終わらせるぞ、一夏！我々の手でこの戦いに終局を迎えさせる！」

一夏「了解だ、千冬姉！魔獣エンデ！俺の……俺達の力を受けて見やがれえええつ!!？」

〈戦闘会話 竜馬VS魔獣エンデ〉

凱「インベーター以上の存在か……！」

溪「怖じ気付いている場合じゃないよ、凱！」

魔獣エンデ「ムダダ。所詮、才前達ニ絶望ガ訪レル」

弁慶「何もわかっていない様だな、神さんよ」

竜馬「俺達とゲッターは絶望なんて、絶対にしねえんだよ！」

魔獣エンデ「コ、コレガゲッター線ノチカラ……?？」

隼人「腹一杯に食いたいのなら、食わせてやるよ」

號「ゲッターは世界を救うための力……それを教えてやる！」

竜馬「お前みたいなのはおよびじゃねえんだよ。とつとと消えやがれ、魔獣エンデ！」

〈戦闘会話 葵VS魔獣エンデ〉

ジョニー「月刊、男の獣にはあの様なケダモノは載っていませんよ」

エイターダ「載っていたら、驚きます……」

魔獣エンデ「我ヲ才前達ノ様ナ野生ノ本能デ生キテイル奴ト一緒ニスルナ！」

くから「ひどい言い草ね」

葵「残念、あなたはそれ以下よ」

魔獣エンデ「ナ、何ダト……?？」

朔哉「ならば、教えてやるよ。お前自身の力のなさをな！」

葵「私達はあなたの食料になるつもりはないの。だから、ぶっ飛ばしてあげる！行くわよ、みんな！やってやろうじゃん！」

〈戦闘会話 九郎VS魔獣エンデ〉

ウエスト「神はやはり、ロクでもない存在なのである」

エルザ「面倒なのも一緒ロボ」

魔獣エンデ「オ前達ノ世界ノ神ト我ヲ一緒ニスルナ！」

エセルドレーダ「神は神です」

エンネア「そして、私達の敵だよ！」

マスターターリオン「跪け、墮神よ。貴様に未来などない」

魔獣エンデ「オ前達ハ我ガ怖クナイノカ!?」

九郎「今から倒す敵に怯えてどうするんだよ！」

アル「それに愛する者が側にいるだけで、妾は戦える！」

魔獣エンデ「マ、マズイ味ガスル……！」

瑠璃「世界を……皆の想いをあなた達に託します！」

九郎「人間の愛を理解できないお前が出る幕じゃねえんだよ、カ・ミ・サ・マよオつ

！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「可能性ニヨツテ生マレタヒーロー…ソシテ、ソレヲ操ル者…才前達カラ
ハ別ノ感情ヲ得ル事ガ出来ルナ」

ニツク「本当に僕達の感情を食べるっていうのか…！」

デントン「彼を野放しにしては、世界が滅ぶ！」

サイ「俺達の全て、お前にやるつもりはないんだよ！」

魔獣エンデ「ナラバ、自ラノ無力サヲ知レ！」

ウィル「黙れ、堕ちぶれた神が！俺達の未来をお前の好きにはさせないぞ！」

ジョーイ「悪を倒す…それは神でも変わらない！世界に平穏をもたらすために僕と
ヒーローマン達は戦うんだ！」

リナ「頑張つて、みんな！」

ジョーイ「これで最後だ、ヒーローマン！ヒーローマアア…ゴオオオオオツ!!？」

〈戦闘会話 ヴァンVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「才前達ノ憎シミハ美味タルモノダツタゾ」

ウー「我々の感情を利用するとはな……！」

ガドヴェド「そして、奴を倒さない限り、平和な世界など来ない！」

ホセ「それは世界の破滅を意味する……」

バリヨ「負けるわけにはいかないな」

カルロス「そう、若者やベテラン、男や女などはもはや関係ない！」

ネロ「俺達、みんながヒーローだ！」

魔獣エンデ「何ダ?! 奴ラカラ闘志ノ様ナモノを感じル……！」

プリシラ「私達はまだ負けていないんだから！」

カロツサ「オレ達、お前の事、嫌いだ！」

メリツサ「消えて、墮神」

ファサリナ「ふふふ、こうなると智の神もかたなしですね」

ミハエル「終わりにさせよう、世界の平和のために！」

レイ「ガンソ」「俺はシノの生きた世界へ帰る……。お前を倒して……！」

ヴァン「みんな、それぞれの明日に進み始めてんだよ。俺もそうだ！ エレナの方まで生きてやる！」

魔獣エンデ「ヨ、ヨセ！ 才前達カラソノ様ナモノヲ得ルツモリハナイ！」

ウエンデイ「私達はもう逃げない！ 世界から……敵から！」

ヴァン「そういう事だ。俺はお前を倒して、エレナと生きた世界に帰るんだよ！」

〈戦闘会話　アマタVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「機械天使：才前達ヲ呼ンダノハ間違イデアツタヨウダ」

アンデイ「今更だな、魔獣エンデ！」

ジン「E.V.O.L.」「僕達は負の感情に呑まれたりはしない！」

ユノハ「誰かが側にいる限り……！」

シュレード「友が側にいる限り……！」

モロイ「俺達は何度でも立ち上がる！」

サザンカ「例え変わった愛でもね！」

M.I.X「男も女も関係ないわ！」

カイエン「俺達人間は愛という強大な力を持っているんだ！」

魔獣エンデ「フザケルナ！愛ナドマズイモノガ存在スル意味ハナイ！」

クレア「あなたのようなケダモノにはわからないでしょう」

ミカゲ「愛という素晴らしき真理を……」

ゼシカ「行こう、アマタ！」

カグラ「あの間違った神野郎をぶっ飛ばすぞ」

ミコノ「アマタ君！私達の方も使って！」

アマタ「ありがとう、ミコノさん！エンデ、お前の野望は俺達が阻止してやる！」

〈戦闘会話 ノリコVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「宇宙怪獣トイウ存在二人類は絶望スルハズダツタノニ！」

カズミ「例え、宇宙怪獣が何度も攻めてこようと人類は負けないわ！」

ノリコ「努力と根性：それを得て、人類は強くなるのよ！」

魔獣エンデ「ナラバ、才前達ニ教エテヤル。努力ト根性ナルモノがイカニ無意味ナノカヲ」

ノリコ「私もあなたに教えてあげるわ！あなたが食糧と想っていた人類の底力を！」

〈戦闘会話 ユイVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「ユインシエル・アステリア。孤独ニ苦シンデイタ才前ノ悲シミハ美味ナ

味ガシタゾ」

ノア「人の悲しみを糧として生きるなんて、なんて性格の悪い……！」

ヨハン「ボクの計画をも利用していたなんて腹が立つね」

魔獣エンデ「ルクス・エクスマキナニヨツテ生ミ出サレタ感情モ美味タルモノダツタ

ゾ

ケイ「今更だけど、わかったわ。あなたは…世界の…みんなの敵よ！」

イングリッド「私達は決してくじけない！帰るべき場所がある！」

ティア「待っているご飯もある！」

サラ「そして、待っていてくれる人がいる！」

アオイ「行って、みんな！」

ナル「私達の想いもいっしょに！」

ユイ「私達は…あなたを倒して、大切な人達の元へ帰ります！」

魔獣エンデ「ムダダ。全テノ生命ハ我ガ喰ラウ」

レナ「そんな事、私達が許さない！」

ユイ「アル・ワースの人間として…人類として…私達があなたを止めます！」

〈戦闘会話 ノブナガVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「破壊王、ヤハリ、才前ハ争イヲ生ム存在ダ！」

ノブナガ「そう、それと同時に争いを破壊する存在だ」

魔獣エンデ「何ッ…!!？」

アレクサンダー「何か忘れていないか、魔獣よ？」

ケンシン「あなたの前に立ちはだかっているのは全てを破壊する破壊王ですよ？」

ヒデオシ「つまり、お前も破壊されるって、事なんだよ！」

カエサル「そして、新たな世が生まれるのだ」

イチヒメ「破壊による創造：兄上は新たな世を築く人柱へとられたのです！」

ジャンヌ「ノブナガは：ただの破壊王だけではないのよ！」

魔獣エンデ「バカナ…！何故、不快な味ガスル!?？」

ミツヒデ「当然だ。お前の前にいるのは破壊王と救星王だぞ！」

ノブナガ「愚かな魔獣よ。全ての世の民の為：俺達がお前を破壊する！」

〈戦闘会話 しんのすけVS魔獣エンデ〉

カイザム「よもや、こんな魔獣と戦う事になるとはな」

魔獣エンデ「平和な世界で生キテキタ才前達方何故、負ノ感情ヲ出サン!?？」

ひろし「お前は俺達を舐めすぎなんだよ！」

シロ「ワン！」

ひまわり「たいやー！」

みさえ「確かに私達は何の力もないわ。でも、これでも何度か世界を救っているのよ！」

シーラ・ロボ「そして、私達をも助けてくれています！」

魔獣エンデ「ソナチツポケナチカラナド……！」

ボーちゃん「ちっぽけだから……力を合わせる！」

ネネ「人間はあなたと違って、一人じゃないのよ！」

マサオ「怖くても……世界が無くなるのは嫌だ！」

トオル「春日部だけじゃない……。全ての人達を守る為に僕達、春日部防衛隊は戦うんだ！」

魔獣エンデ「ナ、何故ダ……!? 何故、コノ様ナ者達ノ気迫ニ押サレテイルノダ……!?」
カンタム「まだわかっていない様だな、魔獣エンデ！人間とロボットの……家族の絆の力を！しんのすけ君！」

しんのすけ「ホッホーイ！オラ達が全部の人達をお助けする為にお前を倒すゾ！」

〈戦闘会話 ケロロVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「侵略者ガ何故、異世界ノ為ニ戦ウノダ!?」

ギロロ「理由は簡単だ。お前が俺達の侵略行為の妨げとなる存在だからだ！」

クルル「俺達も喰われちゃったら、侵略どころじゃねえからな」

タママ「それにお前のやり方は気に入らないですッ！」

シヴァヴァ「タママの言う通りだぜ！」

ドルル「削除開始」

夏美「人間、舐めるんじゃないわよ！」

ドロロ「ケロン人も舐めるなでござる！」

ダークケロロ「吾よ、あの醜き魔獣に教えてやれ。友達というものがどんなものか
！」

魔獣エンデ「必要ナイ！オ前達カラ得ラレルノハ負ノ感情ダケダ！」

冬樹「行って、軍曹ー！」

ケロロ「了解であります、冬樹殿！エンデ、お前にも見せてやるであります！我輩達
の力を！」

〈戦闘会話 アキトVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「テンカワ・アキト！何故、オ前カラハ不快ナ味ガスルノダ！」

ガイ「それはな、バケモノ！愛の力って奴だよ！」

サブロウタ「愛は全てを救うんだよ！」

魔獣エンデ「ナラバ、モウ一度、絶望ニ墮とせば……！」

リョーコ「諦めが悪い犬ところだな！」

ハーリー「僕達は決して挫けません！」

ルリ「つまり、あなたに対しては眼中にないのです」

魔獣エンデ「コ、言葉デ丸メ込マレテイク……！」

ユリカ「お願い！勝って、アキト！そして、帰ってきて！」

アキト「ユリカの期待に応えてみせる……！魔獣エンデ、悪が滅びる時だ……！」

〈戦闘会話 アルトVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「オ前達ハバジユラドモノオマケトシテ連レテキタダケダツタハズナノニ

！」

カナリア「私達はオマケ扱いだったのか」

クラン「差し詰め、バジユラ達と戦わせて、悲しみを得る為だったのだろうか」

ミシエル「見た目に似て、残酷な事をする奴だな！」

ルカ「この自身こそが……魔獣エンデの全て……！」

魔獣エンデ「ソウ、ソシテ、イズレ全テノ人間ハ我ノ食材トナル！」

オズマ「調子に乗るなよ、魔獣エンデ！」

ブレラ「俺達はお前の食材などになるつもりはない！」

ランカ「私達も全力で歌います……。全ての世界……全ての人達の為に！」

シエリル「聞かせてあげるわよ、魔獣さん！私達の愛と想い…人々の全てを込めた最高の歌を！」

魔獣エンデ「ナ、ナンダコノシタガ不快ニナル歌ハアアアツ！」

ジェフリー「彼女達の想いを無駄にするな！各機、波に乗れ！」

アルト「見せてやるぞ、ランカとシエリルが歌を届けるなら、俺は俺の舞をみせる！俺たち全て人の想いを乗せてな！」

〈戦闘会話 リオンVS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「オ前達ヲ呼ンダノハ我ノ失態ダツタ！」

アイシャ「もしかして、あいつ…。私達がバジュラを救い出すのを手助けした事を怒っているの？」

魔獣エンデ「ソウダ！オ前達ガ余計ナ事ヲサエシナケレバ今頃、美味ナヒト時ガ…！」

リオン「お前の理屈なんて知るかよ！」

ミーナ「30」では、私もランカさんやシエリルさんほどではないですが、全力で歌います！」

魔獣エンデ「ヤメロ！ソノ不快ナ歌ヲ今スグ止メロオオオツ！」

リオン「ミーナの歌を不快とかいうとはな。これはお仕置きが必要だぜ！世界はお前

の好きには絶対にさせないからな！」

〈戦闘会話〉 ゴーカイレッドVS魔獣エンデ

魔獣エンデ「ドウシテ、我ノ思い通りニ動カナイ、宇宙海賊!?？」

ゴーカイレッド「何言つてんだよ、お前？」

ゴーカイピンク「あなたは海賊の何もわかっていませんね」

魔獣エンデ「ナ、何ダト…!?？」

ゴーカイグリーン「僕達はお前の思い通りにはならない！」

ゴーカイイエロー「それもゲホゲホ咽せるケダモノの言う事なんてね！」

ゴーカイブルー「だが、その辛さもここまでだ」

ゴーカイルバー「お前は俺達が倒してやる！」

魔獣エンデ「ダ、黙レ！我ハ絶対ニ滅ビヌ！」

ナビィ「みんな、最後の正念場だ〜！」

ゴーカイレッド「黙るのはお前だ、エンデ！海賊に喧嘩を売った事…そして、人間つていう宝に手を出した事を後悔しやがれ！」

〈戦闘会話〉 ゼロVS魔獣エンデ

魔獣エンデ「理解出来ヌ：何故、生マレタ世界ガ違ウノニ手ヲ取り合エルノダ！」

ジャンナイン「それは僕達の想いが一つだからだ」

ジャンボット「例え、種族が違っても心が一つになれば、手を取り合える」

エメラナ「そして、巨大な悪を前にすると、協力して戦うんです！」

魔獣エンデ「ダガ、弱キ者達ガイクラ集マツタ所デ我ニハ勝テン！」

ミラーナイト「何もわかっていないんですね、お前は…」

グレンファイヤー「強い奴なんて、この世にはいねえんだよ！みんなが弱いからこそ、力を合わせると強くなるんだよ！」

魔獣エンデ「クダラン！所詮、傷ヲ舐メアツテイルダケダ！」

ゼロ「その人間をエサにしているお前に言われたくねえんだよ！覚悟しろ、エンデ！ここでケリをつけてやるぜ！」

〈戦闘会話 EXゴモラVS魔獣エンデ〉

EXレッドキング「グウウウツ…！」

グランデ「今まで色々な怪獣と戦ってきたがこんな怪獣は初めて見るぜ！」

魔獣エンデ「我ヲ怪獣ナドト一緒ニスルナ！」

ヒュウガ「怪獣まで下に見るとはな…！」

レイモン「魔獣エンデ、お前は……！」

魔獣エンデ「現二怪獣ノ中ニハ悲シミヲ背負ツテイル奴モイル！所詮ハ、我ノエサナノダ！」

ヒュウガ「それは違うな。地球人も宇宙人も怪獣も……みんなそれぞれの生命があるんだ！」

レイモン「その生命を汚す権利は誰にもない！」

魔獣エンデ「コノチカラ……！レイオニクストシテノチカラガ覚醒シタノカ！」

EXゴモラ「キシヤーン！」

レイモン「俺はレイオニクスの遺伝子にはもう負けない！そして、俺とゴモラはお前にも負けない！」

〈戦闘会話〉アーニーVS魔獣エンデ

魔獣エンデ「様々な戦イヲ経験シタオ前達カラハ美味ナ感情ヲ得ラレルカモシレナイ」

リチャード「残念だったな、魔獣さんよ。俺達から得られる物は何も無いぜ」

魔獣エンデ「何ダト……!!？」

ジン「UX」「俺達が言えた事じゃないが、俺達の世界は全ての想いが集う場所なんだ

よー！」

アユル「そして、その想いが集まって初めて、人々の新たな力が目覚めるんです！」
魔獣エンデ「想イガ力ダト!? ソンナ曖昧ナモノガチカラナドニナルハズガナイ！」

アーニー「わからないのなら、教えてやる。僕達の全力で！」

サヤ「行きましょう、少尉！ここに在るのは、命という名の、意志の輝き！この宇宙に生きとし生ける、全ての命たちよ！集え、始まりのもとに……！」

アーニー「アル・ワースと全ての世界の生命……守ってみせる！」

〈戦闘会話 零VS魔獣エンデ〉

魔獣エンデ「ネメシスガ呼び込ンダイレギュラーメ！ヨクモ我ノ邪魔ヲ！」

リン「私達はイレギュラーではないはずですが……」

ギルガ「言っても無駄さ、リンちゃん」

ラゴウ「どちらにしろ奴が敵としては変わらない」

魔獣エンデ「才前ノ周りニハ何故、敵ヲモ集マルノダ、新垣 零！」

メル「それこそが零さんの魅力であり、力でもあります！」

カノン「操られていた人でも絶対に助ける……それが零さんなのです！」

優香「みんな、零に助けられているのよ！」

弘樹「それで俺達が零を助けているんだよ！」

零「そういう風に俺達は明日を生きるために戦っているんだ！」

マリア「零もレイヤも関係ない……。この子はこの子自身の道を選んで進んでいるの
！」

魔獣エンデ「ナラバ、ソノ道ヲ阻ンデヤル！」

アスナ「できるものなら、やってみなさい、エンデ！」

ゼファイ「パパは…ネメシスにも、あなたにも…どんな相手が立ち塞がっていても、絶
対に負けません！」

零「終わらせるぞ、魔獣エンデ！俺達の絆の力…たつぷりと味わせてやる！」

ゼルガードの攻撃で魔獣エンデはダメージを負った…。

魔獣エンデ「人間メエエエツ!!?ヨクモ…ヨクモオオオツ!!?」

まだ何かやるつもりか…!

魔獣エンデ「我ハ滅ビヌ！ダガ、アル・ワースハ、モウ終ワリダ!!?アノ星ニ住ム者
達ト、才前達ノ絶望ヲ我ニ食ワセロ！」

九郎「くそっ！あいつ、まだ戦えるのかよ！」

ゴークアイブルー「あいつの力は無限なのか！」

克蘭「このままでは時間がない！」

アマリ「…」

ホープス「マスター…」

アマリ「付き合ってもらうわね、ホープス…」

イオリ「アマリさん…！何をする気だ!!？」

アマリ「…お別れです、イオリ君」

イオリがゼルガードから降ろされた…!!？」

イオリ「アマリさん!!？」

零「何をする気だ、アマリ!!？」

ゼファイ「ママ！」

魔獣エンデ「来たカ、3000年ノ時ヲ経テ誕生シタ教主ヨ！」

アマリ「…ホープス…。ゼルガードと私が、エンデの新たな器となるなら…。真の力を發揮したゼルガードならエンデと対等に戦えるのよね？」

ホープス「可能性はゼロではありません。ですが、そうなった時…マスターは意思を生み出すシステムとなり、人格は失われるでしょう」

何…だと…!!?」

アマリ「…それでも構わない…」

ホープス「何故、そんな風に生きられるのです?」

アマリ「…本当は怖い…。どうしようもないぐらい怖い…」

ホープス「マスター…」

アマリ「でも…そんなものに負けて、自分の大切なものを失いたくない…。それが私のドグマよ」

ホープス「…かしこまりました。私もやれるだけの事はやらせていただきます」

アマリ「ありがとう、ホープス…。頼りにさせてもらうわね」

ホープス「…はい…」

零「アマリ!」

アマリ「零君…ゼフィちゃんをよろしくね」

ゼフィ「ダメです、ママ!」

アマリ「ゼルガード! 私達の全てを!!?」

これが…アマリの最大のドグマ…!

アンジュ「アマリ!」

サヤ「何をする気ですか!!?」

アマリ「みんな…今までありがとう…」

しんのすけ「アマリお姉さん!!？」

アスナ「何を言っているのよ!こんな…こんな事って…!」

魔獣エンデ「来ルガイイ、教主!器トナルオ前達ヲ吸収シテ、我ハ再誕ヲ果タソウ!」

アマリ「魔獣エンデ!内部から、あなたを破壊します!」

イオリ「アマリさんっ!!？」

零「頼むアマリ…やめろ…やめてくれ!」

ゼルガードは魔獣エンデに接近した…。

零「やめろおおおおお!!？」

そして、魔獣エンデの中にゼルガードが入った…。

アマリ「はああああああっ!!？」

魔獣エンデ「グエエエエエエエツ!!？」

え…ゼルガードが出てきた…!!？」

零「アマリ!無事なのか!!？」

アマリ「う、うん…」

イオリ「アマリさん!」

マリーダ「エンデはどうなったんだ!!？」

アンジエロ「先程までの殺気は感じないが…
リデイ「じゃあ！」

プル「やったね、アマリ！エンデを倒したんだね！」

ゼフィ「…気を抜かないでください、皆さん！ママ、ホープス先輩はいますか？？」
アマリ「え…いい、いない！ホープスがいない！」

零「何だと？？」

ホープス「私なら、ここにいる」

魔獣エンデからホープスの声が…！

アマリ「ホープス？？？どういう事なの、ホープス？？？どうして、あなたがエンデの所にいるの？？」

ホープス「エンデ…。もう奴は、私の器に過ぎない」

弘樹「な、何言っているんだよ、お前？？」

ホープス「お前達にもわかるように言おう。魔獣エンデの肉体は、この私のものとなった」

優香「何ですって？？」

真上「そんな事ができるとは…！」

ギロロ「ホープス…。お前は何なんだ？」

ホープス「私は魔法生物ではない…。あの魔獣エンデや神部七龍神と同じく、聖獣と呼ばれる存在の幼体だ」

夏美「聖獣…!?？」

クルル「この宇宙のエネルギーそのものを使う事が出来る高次元生命体…」

タママ「ええっ!?？」

ドロロ「まさか…ホープス殿が!?？」

ホープス「先程、エンデの生まれ変わりに必要な器の話をしたが…。もう一つ必要なものがある」

アマリ「まさか…」

ホープス「そう…教主とゼルガード…そして、私の三つが揃った時、魔獣エンデの器が完成する。教主はエンデの心…ゼルガードはエンデの肉体…そして、私はエンデの生命…。その三つが融合して新たなエンデの器となるはずだった。私はマスターと共にエンデの存在を破壊し、その肉体を我が物としたのだ」

アマリ「ホープス…」

ホープス「私はエンデの器とされるために別の宇宙から連れてこられた…。だが、私は生きたかった…。そのためにマスターを使おうとした。エンデの意思から切り離し、私とリンクさせ、ゼルガードと共に教団から脱走した」

アマリ「私が記憶の一部を取り戻したのはあなたの力だったのね…」
ホープス「私は生きて良かった…。生きて色々な感情を食べたかった」

アマリ「え!?？」

メル「ホ、ホープスさん…!?？」

ホープス「そうだ！この肉体を得た今、私は思うままに感情を食う！」

魔獣エンデから力が…！

ラゴウ「バカな、それではまるで…」

ギルガ「エンデと同じじゃないか…！」

アマリ「ホープス…嘘よね…」

ホープス「感謝するぞ、マスター！そしえ、エクスクロス！お前達のおかげで私は宿命を打ち破り、逆にエンデを器とする事に成功した！その礼だ！まずはお前達の絶望を食う！」

零「ホープス、お前…！」

魔獣エンデが力を込めると複数のワース・ディーンベルが現れた。

アマリ「ワース・ディーンベル！」

リョーコ「何なんだよ、あの数は！」

ホープス「法師専用のオート・ウォーロック…。それを大量に生み出す事すら今の私

にとつては造作もない事だ」

ゼフィ「ホープス先輩、やはり、あなたは…!」

ホープス「気づいていたのだな、ゼフィ。なのに何故、他の者に伝えなかった…」

ゼフィ「信じたくなかったのです…。ホープス先輩が…私達の敵になるなんて…」

カノン「ゼフィちゃん…」

ホープス「ふっ、まあいい。さあ絶望しろ、エクスクロス!それこそが私にとつて最上のディナーとなる!」

アマリ「…」

イオリ「アマリさん…」

ホープス「無理もあるまい。信頼していた相棒に最後の最後まで裏切られたのだからな。フフ…ここまで待った甲斐があったよ。これでお前達の絶望を…」

零「…そういう事かよ、ホープス…。そういう事なんだな…!」

ホープス「…お前も絶望したか、零?」

零「…するかよ、そんな事…!そして、アマリもだ!」

アマリ「ホープス…。私達は負けない!」

ホープス「何っ!?」

甲児「今日まで俺達と行動を共にしてきたくせにわかってないようだな!」

ゼロ「俺達は常に絶望を乗り越えてきた！」

シヨウ「お前が敵になったのは残念だ……。だが、俺達はそれでも前に進む！」

万丈「それが僕達、エクスクロスだ！」

ワタル「ホープス！バカな事を言っていないで戻ってこい！」

ホープス「フ…フフ…」

竜馬「何がおかしい!?？」

ホープス「エンデの言っていた意味がわかった！愛や勇氣や希望によって痛みや苦しみや絶望が引き立つという事の意味が！」

一夏「お前！本気で俺達と戦うつもりかよ！」

楯無「言っておくわよ。敵として向かってくるのなら私達は手加減しないわよ！」

ホープス「とは言いながら、私が情にほだされて本気を出せないと思っていないか？」

シノ「こいつ…！」

アストン「最後の最後まで！」

ハツシユ「じゃあ、望み通り、見せてやるぞ！」

オルガ「俺達の全力を!!？」

三日月「お前を潰す…！」

ホープス「この日を待ちわびたぞ、エクスクロス！お前達を食らう日を！来るがいい

！お前達を絶望に叩き落とし、その魂を食らう！」

アマリ「ホープス！」

イオリがゼルガードに乗った。

イオリ「アマリさん……！俺達の力で！」

アマリ「うん！」

ゼルガードがドグマを解放した……！

ホープス「ここに来て、さらにゼルガードの力を引き出したか！まったく楽しませてくれる！」

ヒイロ「……お前は、もう喋るな」

刹那「ホープス、お前を駆逐する……！」

ケロロ「覚悟するであります！我輩達を騙してきた事を後悔させてやるであります！」

アルト「もうお前は俺達の仲間じゃねえ！人々の……世界の敵だ！」

ノリコ「私達は絶対に負けないわ！」

葵「最後まで抗ってみせる！」

ホープス「エサが偉そうにさえずるか……」

マサキ「てめえは！完全に魔獣に成り下がっちゃまったな！」

ホープス「言葉に気をつける！私は至高の存在となったのだ！もうエンデの影に怯え、教団から逃げ回り、人間に頼る私はいない！我が名は魔獣ホープス！お前達の捕食者だ！」

アマリ「…さよなら、ホープス…」

零「これで終わらせるぞ、ホープス…いや、魔獣ホープス！」

ネモ船長「アル・ワース崩壊までの残り時間は!?!」

エレクトラ「あと4分です！」

スメラギ「聞いたわね、みんな！私達はこの4分でホープスを倒すわよ！」

號「俺達の全力を見せる時だ！」

ホープス「さあ来い、エクスクロス！お前達の魂を私に捧げろ！」

零「ホープス!!?」

アマリ「あなたの思い通りにはさせない！私達は絶対に負けない!!?」

ホープス…これで終わらせよう…。戦闘開始だ!!?」

〈戦闘会話　バーンVSホープス〉

ホープス「バーン、憎しみに囚われていた頃のお前からは美味たる感情が得られたも

のを……」

バーン「私は過去の自分と決別したのだ。今ここにいるのは新たなバーン・バニングスだ」

ホープス「強がるのはよせ、人は簡単には変わらない」

バーン「人間を家畜としか思っていないお前に人間の事を語る資格はない！世界の闇のオーラを断つ為……お前を討つ！」

〈戦闘会話 エイサップVSホープス〉

エイサップ「ホープス、本気で俺達の相手をする気なのか！」

ホープス「何度も言わせるな、エイサップ。お前達は私の計画通りに動いていたのだ」

エレボス「そんな……少し腹がたつけど、いい奴だと思っていたのに……！」

ホープス「私の演技に気づかなかったお前達が悪い」

エイサップ「そうか……。わかった。俺はもう迷わない！お前が俺達の敵として立ちはだかるというなら、俺はお前を斬る！」

〈戦闘会話 リュクスVSホープス〉

ホープス「エイサップと共に喰らってやるぞ、リュクス」

リユクス「あなたまで：悪なる存在だったなんて：」

ホープス「そう。そして、私こそが真のエンデとなる」

リユクス「そんな事はさせない！仲間として：お前の敵として、私はお前を討つ！」

〈戦闘会話　アマルガンVSホープス〉

アマルガン「覚悟せよ、ホープス！敵となったのならば、容赦はしないぞ！」

ホープス「覚悟するのはお前の方だ、アマルガン。歳なのだから、無理をするな」

アマルガン「侮るなよ、オウムめが！長年の力を見せてやろう！」

ホープス「確かに、お前の力は認めよう。だが、無意味だ」

アマルガン「無意味かどうかはその身体に直接教えてやろう、お前を打ち倒してな！」

〈戦闘会話　朗利VSホープス〉

ホープス「かつて敵であったお前が私の邪魔をするとはな、朗利」

朗利「ホープス、お前には騙されたぜ！こんな大望を抱いていたとはな！」

ホープス「そう、そして、エクスクロスに勝つ事でその大望は実現される」

朗利「それはないな。エクスクロスが負ける事はない！エイサップや俺達がいるんだ

からな！」

〈戦闘会話 金本VSホープス〉

金本「なんでなんだよ、ホープス！俺達、今日までいつしよに戦ってきたじゃないか！」

ホープス「それも私の計画の一部だったのだ。感謝するぞ、金本」

金本「お前は……！何処までも人を馬鹿にして！」

ホープス「それが私がお前達に向けている感情だからな」

金本「もう我慢できない！お前の企みなんて、絶対に阻止してやる！」

〈戦闘会話 サコミズVSホープス〉

サコミズ「本当の敵は近くにいるとは言ったものだが、実際になるとはな」

ホープス「その通りだ、サコミズ王。私の悪のオーラに気がつかないとは、聖戦士失格だな」

サコミズ「確かに……私にはまだ甘いところがあるのかもしれない。だが、甘いところがあるからこそ、人は強くなっていく」

ホープス「人間は進化する必要などない」

サコミズ「お前が人類の進化の妨げとなるのであれば、未来を繋いでいく若き生命の

為に私も戦おう！そして、この世界に平和な世を迎えさせるために！」

〈戦闘会話 ヤザンVSホープス〉

ホープス「戦闘を楽しむお前の黒い感情…お前には何度も美味しいものを得らせても
らったぞ、ヤザン」

ヤザン「それがお前の本当の面か。今までの面よりも全然いい面をしているな」

ホープス「この神の力を得た私を前にしても臆さないか。ならば、今度はお前を絶望
に墮としてやろう」

ヤザン「調子にのるなよ、獣風情が！俺の感情は俺のものだ！お前なんかにやるつも
りはないんだよ！それからな…俺が絶望に墮ちる時は世界が滅びる時だ！」

〈戦闘会話 ハマーンVSホープス〉

ホープス「ハマーン、お前の不器用な愛には楽しませてもらったぞ」

ハマーン「お前も俗物の魔獣と同じ存在だったとはな」

ホープス「今更だな。だが、お前達人間も欲深い存在であるだろうか？」

ハマーン「黙れ！お前に人間を語る資格はない！確かに人間は欲深い所もある…だ
が、お前達とは違う！人間にはそれぞれの想いがある！それがわからないお前はもう仲

間でも何でもない！」

〈戦闘会話 ラカンVSホープス〉

ホープス「今まで、軍人として多くの生命を奪ってきたお前が正義の為に戦うとはな」
ラカン「勘違いするなよ、ホープス。俺は元の世界に戻るために戦う。お前がその邪魔をするなら、尚更だ」

ホープス「その自らの為だけに戦う姿勢…やはり、お前は危険だ、ラカン。だが、私にも譲れないものがある」

ラカン「そうか。ならば、もう容赦はせん。いくぞ…！」

〈戦闘会話 ギユネイVSホープス〉

ホープス「ギユネイがくるか」

ギユネイ「ホープス、この野郎！俺達を騙していたなんて、いい度胸をしているな！」
ホープス「騙されていた方が悪い。お前やシャアとアムロもまだまだだつたという事だ」

ギユネイ「俺の事はともかく、大佐やアムロの事をとやかく言わせるつもりはない！敵になったなら、もう手加減はしないぞ！」

〈戦闘会話　バナージVSホープス〉

ホープス「この光……やはり、バナージとユニコーンは危険だ……！」

バナージ「ホープス、本当に俺達と敵対するの……？」

ホープス「クドいな。わかりきっていた事だろう？見せてみる、可能性の獣の力を」

バナージ「お前は俺達の仲間だ……！倒すのではなく、止めてみせる！行くぞ、ユニコーン！」

〈戦闘会話　リディVSホープス〉

ホープス「これが……絶望と怨みを乗り越えたリディの新たな力か……！」

リディ「ホープス、お前は本当に俺達を裏切ったのか？俺にはお前が何かの理由で俺達に敵対しているしかみえない！」

ホープス「期待を寄せるのは勝手だが、現実を見る。私はお前達の敵だ。そして……お前を喰らった後はミネバも喰らってやる」

リディ「そうか……。なら、詮索はお前を止めてからだ！バナージにもミネバにも手は出させない！俺とバンシイが止めてやる！」

〈戦闘会話　マリーダVSホープス〉

ホープス「辛いだろう、苦しいだろう、マリーダ？お前は兵士として散々人間に利用されてきたんだぞ」

マリーダ「確かに辛いと思った事はあった…もう全て流れに身を任せたいぐらいにな。だが、私はキャプテンやバナージ達と出会って変わった…そして、このアル・ワースに来て生きたいと思ったんだ！」

ホープス「ならば、そのキャプテン諸共喰らってやる！」

マリーダ「させない！キャプテンの未来…そして、生きとし生きる者達の未来は私が守る！」

〈戦闘会話　フロンタルVSホープス〉

ホープス「かつて人類を滅ぼそうとしたお前が私の邪魔をするとはな」

フロンタル「私も信じてみたくなったのだよ…。人間の可能性というものを。君はそれを妨げる存在となったようだな」

ホープス「ならば、私を止めてみせろ、フロンタル。お前を止めたバナージの様な」
フロンタル「いいだろう。だが、止めるのはバナージ君の様ではなく、私…フル・フロンタルとしてだ！」

〈戦闘会話　アンジェロVSホープス〉

アンジェロ「許さんぞ、ホープス！私達を裏切ったお前を！」

ホープス「私も許されるつもりはない。どちらにしろお前達は私に食べられるのだ」

アンジェロ「お前という奴は……！」

ホープス「その前にお前を絶望に突き落としてやるぞ、アンジェロ！」

〈戦闘会話　キンケドゥVSホープス〉

ホープス「この世界でまさか、二人のシブツクとである事になるとはな」

キンケドゥ「やはり、お前は俺の事を知っていたのか。だがな、今の俺はキンケドゥ・

ナウだ！」

ホープス「ならば、見せてみる、キンケドゥ！過去の自分との違いを！」

キンケドゥ「言われなくとも見せてやるさ！俺はお前に勝って、ベラの所に戻ってやる！」

〈戦闘会話　シンVSホープス〉

ホープス「シン、憎しみの感情というものはそう簡単には消せないのだ」

シン「知ったような事を言うな！俺達を騙して、お前は何を考えているんだよ！」
ホープス「私の企みは先程言ったはずだがな。安心しろ、すぐにお前の妹の所に送ってやる」

シン「ふざけるな！俺はお前を止める！今できる最大の力を込めてな！」

〈戦闘会話 ルナマリアVSホープス〉

ホープス「お前はそう簡単には絶望に堕ちないとわかっているぞ、ルナマリア」

ルナマリア「ホープス…あなたの恋の感情も…演技だったの!?？」

ホープス「…」

ルナマリア「答える気がないのなら、良いわよ！私は敵となった人には容赦しないからね！」

〈戦闘会話 レイ「Destiny」VSホープス〉

ホープス「運命に抗い、運命を切り開くのか、レイ」

レイ「Destiny」「そこまで大層なものではないがな」

ホープス「ほう、意気がる気はないか。この勝負、面白くなりそうだな」

レイ「Destiny」「俺は戦いを楽しむつもりはない。争いを終わらせる…それが

俺の選んだ戦いだ！」

〈戦闘会話　キラVSホープス〉

ホープス「残念だったな、キラ。もうすぐお前の守りたい世界の全てが私のエサとなる」

キラ「君が…エンデと同じ計画を企てていたなんて…」

ホープス「良いぞ、その表情。仲間裏切られた時に見える最高の負の表情だ」

キラ「でも、君を野放しには出来ない！僕が…君を止める！」

〈戦闘会話　アスランVSホープス〉

アスラン「今すぐ降参しろ！まだお前は戻ってこれる！」

ホープス「説得など不要だ、アスラン。どのみち、人類は私のエサとなる」

アスラン「迷いはないと言う事なのか…！」

ホープス「そうだ。来い、決着をつけよう」

アスラン「ホープス…この、馬鹿野郎！」

〈戦闘会話　ステラVSホープス〉

ステラ「ホープス、嘘だよな？いつもの冗談だよな？」

ホープス「そう見えるのなら、お前は甘いな」

ステラ「そんな……」

ホープス「辛いなら私のエサとなれ、ステラ」

ステラ「それは……出来ない！シン達が見たい世界……私も見たいから！それをホープスが邪魔するなら、私が相手をするから！」

〈戦闘会話　ハイネVSホープス〉

ハイネ「最後の敵は仲間内にいる……。裏切りとは舐められたものだな」

ホープス「気づかないそちらにも原因はあるがな」

ハイネ「だから、こそ……。落とし前はつける！」

ホープス「それは私に勝ってから言うんだな、ハイネ」

ハイネ「そのつもりだ！あまり、俺を甘く見るなよ、ホープス！」

〈戦闘会話　刹那VSホープス〉

ホープス「刹那、私に対話を試みようとしても無駄だぞ」

刹那「……！」

ホープス「私はお前との対話を拒む。何故なら、イノベーターであろうと私のエサなのだからな」

刹那「お前の企みに気がつかなかったのは俺達の盲点だった…。だから、俺はお前を駆逐する…！これこそが、お前とのラストミッションだ！」

〈戦闘会話　ロックオンVSホープス〉

ホープス「その様な雑な射撃が私に当たると思っているのか、ロックオン？」

ロックオン「悪いな、ホープス。俺は今お前を無性に打ち抜きたくて、ウズウズしてんだ」

ホープス「怒りの感情に飲まれるとはスナイパー失格だな」

ロックオン「言ってくれるな。だがな！お前の行為を見逃すほど、俺は優しくねえんだよ。いくぜ、乱れ撃つぜ！」

〈戦闘会話　アレルヤVSホープス〉

ソーマ「ホープス、お前と言う男は…！」

ホープス「アレルヤ、マリ…。二人仲良く食べてやろう」

アレルヤ「とんでもない大食い野郎だな！」

アレルヤ「やめるんだ、ホープス！僕は君とは戦いたくない！」

ホープス「甘いな、お前は…。敵を前にしてでもその様な事を言うとは」

ハレルヤ「迷っている暇はねえぞ、アレルヤ！」

ソーマ「アレルヤ…！」

アレルヤ「…わかったよ、ハレルヤ、マリー…！ホープス、世界を歪ませると言うのなら、僕が君の相手になる！」

〈戦闘会話〉 ティエリアVSホープス

ホープス「お前でも私の企みに気がつかなかったとはな、ティエリア」

ティエリア「全くだ、僕も丸くなったものだ。かつての僕ならば、ひとまず君を疑っていた」

ホープス「良い意味でも悪い意味でも変わったのだな。だが、それが命取りとなる」

ティエリア「そうだな。それでは、世界の為、自分の為に抵抗させてもらおう」

〈戦闘会話〉 スメラギVSホープス

ホープス「お前も苦勞をするな、スメラギ。争いがいつ終わるかわからないのに、何度も戦うとは」

スメラギ「それが私達の選んだ戦いよ」

ラッセ「それにな、俺達の世界で散っていった仲間もいるんだ！」

ミレイナ「パパとママの為に頑張るです！」

フェルト「ホープス、いくらあなたが相手でも退かない……！」

ホープス「やはり、お前達とは戦い合う運命か。来い、プトレマイオス組」

スメラギ「言われなくても、やってやるわよ！みんな、これで終わらせるわよ！」

〈戦闘会話　グラハムVSホープス〉

ホープス「E.L.Sと一つとなった新たな可能性。グラハム、お前がその第一号となるのだな」

グラハム「さてな、元の世界に帰ってみなければわからんな。それよりも私は裏切った君への対処を考えよう」

ホープス「この私を倒す気なのか。いくら、お前とて私を倒すのは簡単ではないぞ」

グラハム「その様だ。だが、私とグラハムガンダムの方があれば、不可能ではない！」

さあ、始めるとしよう、ホープス。世界の命運をかけた最終決戦を！」

〈戦闘会話　パトリックVSホープス〉

ホープス「パトリック、お前の不死身の二つ名もここで終わる」

パトリック「お前、俺達の仲間だったのに知らないのか？俺の名前には幸せのコーラサワーって、名前もあるんだよ！」

ホープス「幸せか……。それも負の感情に変換され、私のエサとなる」

パトリック「そうかよ！だがな、俺の大佐に向ける愛はお前じゃ喰いきれない事を教えてやるぜ！」

〈戦闘会話 ニールVSホープス〉

ホープス「ニール、お前にも狙い撃てないものがあると教えてやる」

ニール「へえ、そう言われると試したくなるのが、スナイパーなんだぜ、ホープス」

ホープス「ならば、見せてみる。成層圏まで狙い撃つ男をな」

ニール「お望みなら、見せてやるよ！ニール・デイランデイ…狙い撃つぜ！」

〈戦闘会話 アンドレイVSホープス〉

ホープス「アンドレイ、お前とは長い付き合いとなったな」

アンドレイ「そうだな、ホープス。君とは良い関係を気づけていたと思っていたのだがな」

ホープス「怒らないのか？私はお前達を騙していたのだぞ」
アンドレイ「ああ、怒っているさ。だからこそ、君を倒させてもらおうぞ！」

〈戦闘会話　セルゲイVSホープス〉

セルゲイ「お前の裏の顔に気づかなかったとは、私の目も衰えてきた様だな」

ホープス「ならば、引退時だぞ、セルゲイ。まあ、世界を食い尽くすのなら、関係ないか」

セルゲイ「私を侮るなよ、ホープス！お前の企みなど止める力はある！だからこそ、仲間であった私がお前に引導を渡す！」

〈戦闘会話　アニニューVSホープス〉

ホープス「人間とイノベーターの関係。架け橋となったお前とロツクオンの関係は楽しませてもらったぞ、アニニュー」

アニニュー「どうしてなの、ホープス？どうしてこんな事を……！」

ホープス「わかりきった事を聞くな。私はお前達の敵となった。ただ、それだけの事だ」

アニニュー「許さない……！私達を騙してきた事じゃない……！アマリを悲しませた事が許

せない！だからこそ、私があなただを止めるわ！」

〈戦闘会話　デカルトVSホープス〉

ホープス「異性体との共存を望んでいなかったお前が誰かの為に戦うとはな」

デカルト「人は誰しも変わる事が出来る。それは人間もイノベーターも関係ない！それはお前も同じだ、ホープス！変わった方向は違うがな」

ホープス「そうだな、そうかも知れない。だが、少しだけ違う所があるので、デカルト。私とお前達を一緒にするな」

デカルト「例え、俺達を裏切ろうとお前は俺達の仲間だ！目を覚まさせてやる！」

〈戦闘会話　リボンズVSホープス〉

ホープス「下等と見ていた人間と手を取り合うとは、堕ちたものだな、リボンズ」

リボンズ「何とでも言えば良いさ。だが、人間の事を知らない君にも言う資格はないね」

ホープス「何…?」

リボンズ「人間はエサでも下等でもない。一人一人が明日を懸命に生きようとしている。そして、他種とも手を取り合う。その邪魔をする権利は誰にもないんだよ！」

〈戦闘会話　キオVSホープス〉

キオ「ホープス、何でこんな事をするんだよ!?!?」

ホープス「私がエンデと同じ存在だからだ、キオ。現実を受け入れたくないのはわかるが、これが真実なのだ」

キオ「本当は戦いたくない……仲間だったホープスと……!」

ホープス「お前はいつまでも優しいな。それがお前の良いところでもある……だが、それが命取りとなる」

キオ「そうだよね……。君は世界を食い尽くそうとしているんだよね……。だったら、止める! 僕とガンダムが!」

〈戦闘会話　アセムVSホープス〉

ホープス「私の道を阻むか、キャプテン・アツシユ」

アセム「悲しいな、ホープス。あれだけ一緒にいたのに俺の事をキャプテン・アツシユと呼ぶとはな」

ホープス「それは悪かったな、アセム。どちらにしろ喰われるなら、名前などどうでも良いと思っただけだ」

アセム「そうか、ならば俺も腹黒オウムでいいな？どのみちお前は俺達に倒されるんだからな！」

〈戦闘会話 フリットVSホープス〉

ホープス「お前の腕は知っている、侮れない相手だな」

フリット「それを分かっている、お前は私に挑むのか。余程、命知らずだな、ホープス」

ホープス「粹がるな、フリット。いくらお前が強かろうと歳には勝てないだろう」

フリット「その言葉、そっくりそのまま返してやろう。子供達の未来を奪うと言うなら、私は全力をもって、お前の相手をする！」

〈戦闘会話 セリックVSホープス〉

ホープス「セリック、安心しろ。お前の世界の艦長もいずれ喰らってやる」

セリック「そして、あの世で会えるってわけか。確かにみんなにはまた会いたい所だが、それはあの世じゃない。俺達の世界でだ！」

ホープス「夢物語を語るの私を倒してからにしろ」

セリック「俺は夢物語は語らない主義なんでな、お前を倒して、俺は元の世界に帰ら

せてもらう！」

〈戦闘会話　シャナルアVSホープス〉

ホープス「妹は病に苦しんでいると言ったは、シャナルア？」

シャナルア「それが何？」

ホープス「私が食せば、病から解放されるぞ」

シャナルア「…失望したよ、ホープス。あんたがそんな事を言うなんてね。妹は私が絶対に助ける…その為にもあんたの好きにはさせないよ！」

〈戦闘会話　オブライトVSホープス〉

オブライト「最大の敵は身内にいるとよく言ったものだな」

ホープス「必ずしもそうとは限らないが、今回はそうみたいだったな」

オブライト「ホープス、やめるつもりはないのだな？」

ホープス「今更だな、オブライト。私は止まるつもりはない！」

オブライト「そうか、残念だ。ならば、せめてもの情けだ…全力でお前の相手をする
！」

〈戦闘会話　　ディーンVSホープス〉

ホープス「驚いている様だな、ディーン。私が敵だった事に」

ディーン「当たり前だろ！もうやめてくれよ、ホープス！どうしてこんな事を！」

ホープス「敵だと言っているはずだ。安心しろ、せめてもの苦しませずに妹の元へ送ってやる」

ディーン「…止まる気はないのかよ…！ごめんな、ルウ…俺もまだそつちにはいけない…。こんな奴を野放しにしてはいけないんだ！」

〈戦闘会話　　ジラードVSホープス〉

ホープス「ジラード、愛する者に合わせてやろう。その変わり、私に食される」

ジラード「うるさいわよ、ケダモノ！誰があなたに食べられるのですか！」

ホープス「この私をケダモノ呼ばわりとは…絶望を教える必要があるな！」

ジラード「残念ね、もう私は絶望を乗り越えたの…。そんなちっぽけな攻撃じゃ、私は絶望をしないって事を教えてあげるわ！」

〈戦闘会話　　ゼハートVSホープス〉

ホープス「下らない友情を何度も見させてもらって、感謝するぞ、ゼハート」

ゼハート「今まで、私達と共にいて、友情をくだらないと思つていたとは、お前もくだらない存在なのだ、ホープス」

ホープス「私がくだらないだと…?」

ゼハート「その通りだ!もうお前には説得は不要と見た!魔獣め、世界を喰らい尽くすと言うのなら、私が相手になる!」

〈戦闘会話　フラムVSホープス〉

ホープス「無理をするな、フラム。お前はゼハートの背中を歩き続けていけば良い」
フラム「あなたが私の道を決めないで!確かに、私はゼハート様のお側にいると決めたわ!でも、あなたを止める事も出来る!」

ホープス「ならば、来い。最大の絶望を突きつけてやる」

フラム「ゼハート様が側にいけば…私は絶望する事はないわ!行くわよ、平和のために…あなたを落とす!」

〈戦闘会話　レイルVSホープス〉

ホープス「お前が私の相手をする気か、レイル?」

レイル「確かに俺はゼハート様程強くないが、お前を止める力は持っている!」

ホープス「いや、不可能だ。奇跡など起こらない」

レイル「奇跡じゃねえ！奇跡を待たずとも、俺は戦い抜くんだ、ホープス…お前とな
！」

〈戦闘会話 三日月VSホープス〉

ホープス「三日月、まさかお前に妻と子供がいたとはな」

三日月「ホープス、まさかお前が俺達を裏切るなんてね」

ホープス「お前から様々な感情を得られそうだ」

三日月「俺の感情なんて、関係ないよ。お前がオルガの邪魔をして、アトラや暁を狙うって言うなら、容赦はしないから！」

〈戦闘会話 オルガVSホープス〉

ホープス「お前は本当に団長たる器だ、オルガ」

オルガ「敵となったお前から評価を受けるなんてな…。ホープス、今すぐこんな事をやめて戻ってこい！」

ホープス「悪いが戻るわけにはいかない。私には為すべき事があるからな」

オルガ「だったら、容赦はしねえ！エクスクロスに喧嘩を売った報いを受けさせてや

る！」

〈戦闘会話 明弘VSホープス〉

ホープス「何も心配する事はないぞ、明弘。死んでいった仲間の元へ私が連れて行ってやろう」

明弘「元々、俺達は行くつもりだったんだがな…。まあ、お前に連れて行ってもらわずともいざれ行く事になる」

ホープス「そう言うな、結局の所、お前はエサとなるのだ」

明弘「ふざけるな！お前は俺達を何だと思ってるんだ！そこまでいうなら、相手になつてやる！」

〈戦闘会話 シノVSホープス〉

ホープス「話を聞く限り、お前はアンジュと似たような感情を持っている様だな、シノ」

シノ「ホープス、この野郎！俺は敵になった奴には容赦はしねえぞ！」

ホープス「全く…お前の後先考えない行動には毎回ヒヤヒヤさせれる」

シノ「うるせえ！お前にヤマギ達を喰わせるわけにはいかねえ！みんなは俺達を守つ

てやる！」

〈戦闘会話 名瀬VSホープス〉

ホープス「再び、そのハンマーヘッドを墓にしてやるぞ、名瀬」

名瀬「悪いな、ホープス。俺はそう簡単にくたばるつもりはないんだ。この世界で戦ってきてわかった：俺はまだ生きたいんだとな」

ホープス「そうか。だが、生に縋り付くお前の感情：良きものが得られそうだな」

名瀬「勝手に人の感情を喰うんじゃねえ！俺からは多くの愛を与えてやるぜ！」

〈戦闘会話 アミダVSホープス〉

ホープス「お前の前で名瀬を喰らえば、お前から絶望の感情を得る事ができる様だな」

アミダ「言っておくよ、ホープス。女のプライバシーに踏み込んだ男はいずれ滅びるんだよ」

ホープス「そうなのか、いい事を知った。だが、滅びるのはお前の方だ、アミダ。名瀬と共に散れ！」

アミダ「名瀬と一緒にというのは本望だけど、まだ死ぬわけにはいかないんだ…。抵抗はさせてもらおうよ！」

〈戦闘会話　ラフタVSホープス〉

ホープス「名瀬という男がいないながら、明弘に好意を示すとは…。変わった女だな、ラフタ」

ラフタ「話すオウムに変わった女とか言われたくないよ！ホープス、もうこんな事やめてよ！」

ホープス「お前の言葉では私を突き動かす事などできない」

ラフタ「それならもういいよ！力尽くで止めるから、覚悟しなよ！」

〈戦闘会話　アストンVSホープス〉

アストン「ホープス…」

ホープス「覚悟を決めた目だな、アストン。いい目をしている」

アストン「俺の機嫌を取ろうとしても無駄だ、ホープス。お前は俺達の敵…だから倒すだけだ！」

〈戦闘会話　ハッシュVSホープス〉

ホープス「三日月の後ろを金魚のフンの様に着いていたお前が変わったな、ハッシュ。

臆せず私に向かってくるとは……」

ハツシユ「確かに、自分でも驚きだな……。だが、それはお前を止めたいという俺の想いの力だ！」

ホープス「いいだろう、かかってこい！」

ハツシユ「俺は俺の戦いで……ホープス、お前を止めてやる！」

〈戦闘会話　ガエリオVSホープス〉

ホープス「残念だ、ガエリオ。まさか、この様な結末が待っていていようとはな」

ガエリオ「ホープス、それはこつちの台詞だ」

ホープス「だが、安心しろ。ジュリエッタと仲良く喰ってやろう」

ガエリオ「悪いな、ホープス！俺は簡単に喰われるつもりはないんでな！世界の為、お前に抵抗させてもらうぜ！」

〈戦闘会話　ジュリエッタVSホープス〉

ホープス「共にいて、わかった事がある。ジュリエッタ、お前は気難しい女だな」

ジュリエッタ「裏切り者のオウムに何を言われようが気にしません」

ホープス「相変わらず、クールだな。その余裕がいつまで保つか楽しみだ」

ジュリエッタ「ええ、では、私もあなたの身体が私の攻撃でどれだけ保つか、試させてもらいます！」

〈戦闘会話　マクギリスVSホープス〉

ホープス「マクギリスが来るか…」

マクギリス「君達と敵対していた私が言うのも何だが、バカな事はやめて、投降してくれないかな？」

ホープス「バカな事を言うな。これが私の覚悟だ」

マクギリス「…ならば、世界の為…そして、アルミリアの為に私も覚悟を決めよう…。一人の男として！」

〈戦闘会話　海道VSホープス〉

ホープス「海道…お前には感謝している。お前のその本能が私の舌を刺激してくれる」

海道「そんなもんが美味いんだな。なら、もつと喰わせてやろうか？」

ホープス「何を私に与えられるつもりだ？」

真上「言ってやれ、海道」

海道「知れた事だろ！お前には敗北の…そして、地獄の調味料をプレゼントしてやるぜ！」

〈戦闘会話 真上VSホープス〉

ホープス「お前は少し、普通の人間とは違うはずだろう、真上」

真上「ふつ、確かに俺は少し違うな。だが、オウムであるお前にとやかく言われるつもりはない」

ホープス「わたしはオウムではなく、魔法生物だ。そんな事もわからないとは、お前の銃もまだまだだなようだな」

海道「おい、真上。あいつはお前に撃ち抜かれないみたいだぜ」

真上「お望みなら、応えてやろう！俺の銃弾からは決して逃れられない事を教えてやるぞ！」

〈戦闘会話 スカレットVSホープス〉

ホープス「スカレットと由木…。地獄コンビも退けをとらないか」

スカレット「あいつらと比べるな、ホープス。それよりも今降参すれば、許してやるぞ」

ホープス「一度死んだ人間が言ってくれる。ならば、再び、墓場に戻してやろう」
由木「ホープス：あなたという人は……！」

スカレット「そうか、残念だ。私と由木のコンビは荒っぽいから、覚悟しろよ！」

〈戦闘会話　ヴォルフガングVSホープス〉

ホープス「ヴォルフガング、お前の知能は確かに、認めるものがある。時に悪として使い、時に正義のために使う……それがお前の戦いなのだな」

ヴォルフガング「ほう、ワシの偉大さがわかったか、ホープス。いい事じゃ」

ホープス「だが、調子に乗る事もあるな」

ヴォルフガング「それはお前の方じゃ！お前がワシの妨げというのなら、相手になつてやるぞ！」

〈戦闘会話　ビトンVSホープス〉

ホープス「決して揺れないその欲望……。ビトン、お前は良き小悪党だな」

ビトン「貶しているのか、褒めているのか、どちらかにしなさいよ！」

オードリー「この場合は貶していると思います」

ホープス「オードリーの方がよくわかっているな」

ビトン「やっぱり、あなたは気に入らないわ！敵になるのなら、覚悟しなさい！」

〈戦闘会話 ミフネVSホープス〉

ミフネ「裏切り行為は切腹ものだぞ、ホープス！」

ホープス「やめておけ、ミフネ。お前では武士などにはなれない」

ミフネ「…この我輩をも侮辱するとは…。もう許せん！一人の人間として、お前を斬り捨てる！」

〈戦闘会話 ホイ・コウ・ロウVS〉

ホイ・コウ・ロウ「裏切りの代償は大きいネ、ホープス」

ホープス「アジアマファイアだったら、即殺されているだろうな。だが、私は神に等しい存在だ」

チンジャ「自らを神を名乗る人をロクな奴がいないな」

ホープス「何…？」

ホイ・コウ・ロウ「アジアマファイアでも関係ない。今は、共に戦った仲間として、お前に罰を与えてやるネ！」

〈戦闘会話　　ロロVSホープス〉

ホープス「ロロ、ルルーシユはお前を散々利用したのだぞ？何故、あいつに着いて行く？」

ロロ「例え、兄さんが本当の兄でなくても…兄さんは最後に僕を弟として認めてくれたんだ！」

ホープス「理解できない。何故、お前をぼろ雑巾として扱ってきた奴の為に生命をかける？」

ロロ「それが僕の生きている証だから…。だからこそ、兄さんと…兄さんが愛した世界や人達を守ってみせる！」

〈戦闘会話　　藤堂VSホープス〉

千葉「ホープス…本当に私達を裏切ったのか？」

ホープス「その通りだ。私はエンデの力をも手に入れた存在となったのだからな」

藤堂「力に呑み込まれたのか、ホープス…！」

ホープス「違うな、藤堂。これは受け入れるべき力だったのだ」

朝比奈「胡散臭いとは思っていたけど、こんな形で敵対する事になるとはね」

藤堂「ならば、容赦はせん！ホープス、お前を討ち取り、平和な世界を掴んでみせる

ぞー！」

〈戦闘会話　コーネリアVSホープス〉

ホープス「お前はルルーシユを恨んでいたのではないのか、コーネリア？」

コーネリア「確かにまだ私はルルーシユを許してはいない」

ホープス「では、私と共に来ないか？お前なら、美味な感情を得る事が出来る」

ダールトン「姫様を侮るなよ、反逆オウムめ……！」

ギルフオード「姫様はお前には渡さない！」

コーネリア「ありがとう、ダールトン、ギルフオード……。ホープス、私はお前の事も許していない。人間を喰うなど、その様な事は私達がやらせん！」

〈戦闘会話　ジノVSホープス〉

ホープス「私に挑んでくるか、ジノ」

ジノ「当たり前だろ。お前の好きにさせるわけにはいかないからな」

ホープス「ならば、見せてみる。ナイトオブスリーの力というものを」

ジノ「望み通り、見せてやるぜ！俺の……嫌、俺達の力をな！」

〈戦闘會話 扇VSホープス〉

玉城「おい、このバカ鳥！謝るなら、今のうちだぞ！」

ホープス「何故、私が謝らなければならぬ？お前達こそ、抵抗をやめ、大人しく食われろ」

扇「変わったな、ホープス……。いや、それがお前の本性だったんだな」

ホープス「そうだ、扇。辛い思いをしたくなければ、諦めろ」

扇「そういうわけにはいかないんだよ！俺は元の世界に帰らなければならぬ！もうすぐ俺の子も産まれるからな！その未来をお前に壊させるわけにはいかない！」

〈戦闘會話 ナオミVSホープス〉

ナオミ「ホープス……。もうこんな事はやめてよ！」

ホープス「お前はいつまでも甘いな、ナオミ。そんな事では世界を救う事はできないぞ。すぐにゾーラ達の所へ送ってやる」

ナオミ「……それが、あなたの覚悟なんだね？」

ホープス「……」

ナオミ「それなら、私も応える！あなたを止めて……私はみんなと平和な世界で生きる！」

〈戦闘会話 エンブリヲVSホープス〉

ホープス「調律者が好きな女にプライドをズタズタにされ、堕ちた神となったのだな、エンブリヲ」

エンブリヲ「なんと言われようが構わないさ。今更、何を言おうが私の罪は消えない」
ホープス「良き心を持ったエンブリヲの可能性：調律者ではなく、一人の世界の人間というわけか…。人としては強敵だな」

エンブリヲ「そうさ。では、ホープス…。アンジュの愛する世界や人達を喰らうと言うのであれば、私が相手をしよう！」

〈戦闘会話 シモンVSホープス〉

カミナ「シモン！余計な情けはかける必要はないぜ！」

シモン「わかってている！ホープスが本気で来る以上、こっちも全力で迎え撃つ！」

ホープス「いい気合だ、螺旋の男…。思えば、お前がその気合でドリルを回すのを何度も見てきたな…」

シモン「それならば、俺達が必ず勝つのもわかってるはずだ！」

ホープス「思い上がるなよ。エンデの力を手にした私の勝利は揺るがない」

シモン「そうかよ！だったら、無理で道理を蹴飛ばすだけだ！」
ヴィラル「最後の戦いだぜ、シモン！お前の持てる力、全開でドリルを回しやがれ！」
シモン「ホープス！敵に回ったのなら、容赦はしねえ！勝つのは……！未来をつかむのは俺達だつ!!？」

〈戦闘会話　ヴィラルVSホープス〉

ホープス「グレンのシートから降ろされて、どんな気分だ、ヴィラル？」

ヴィラル「その様な挑発に私が乗るとでも思っていたのか？」

ホープス「……やはり、お前は強敵だな。気迫が違う」

ヴィラル「それが俺達と共に過ごしたお前の心情か……。だが、敵となるならば、容赦はせん！」

〈戦闘会話　キタンVSホープス〉

ホープス「折角、死の淵から蘇ったのに、ご苦労な事だな」

キタン「うるせえよ、バカ鳥が！俺達、みんなを騙しやがって！」

ホープス「騙される方が悪い。キタン、お前の想いが実る事はない」

キタン「そんな事、お前に決める権利はねえんだよ！行くぜ、ホープス！」

〈戦闘会話 一夏VSホープス〉

一夏「ホープス、お前いい加減にしろよ！アマリさんの想いを踏みにじって…それまでに野心に囚われてしまったのかよ！」

ホープス「野心を持つ者とはそういうものだ。野心を持つからこそ成し遂げたいモノがある」

一夏「お前も今まで戦った奴等と同じって事なのかよ…！」

ホープス「それは違うぞ、一夏。奴等と私を一緒にしては困るな。あの様な無能共と一緒にするな」

一夏「いいや、違わない！お前はあいつらと一緒に…だから、アル・ワースの平和のためにも俺がお前の目を覚まさせてやる！」

〈戦闘会話 箒VSホープス〉

ホープス「私に臆せず向かってくる様になるとは…強くなつたな、箒」

箒「裏切り者のお前の言葉を聞く気はない。私が切り捨ててやる」

ホープス「いいだろう。お前の太刀でこのエンデの肉体を斬り裂けるのならばな」

箒「あまり、私を舐めるな！私の太刀…受けてみる！」

〈戦闘会話　セシリアVSホープス〉

ホープス「お前の銃撃では私に傷をつける事は出来ない」

セシリア「認められてはいないと思っただけでしたが、今のあなたに言われると腹ただしいですわ！」

ホープス「それはすまなかつたな。セシリア、お詫びとして、容赦なく喰ってやろう」
セシリア「俗物な方にかける情けはございませんわ！あなたは、このセシリア・オルコットが成敗いたしますわ！」

〈戦闘会話　鈴VSホープス〉

ホープス「確かな腕だが、私を倒すには至らないな」

鈴「へえ、相変わらず人を馬鹿にする態度は変わらないのね、ホープス」

ホープス「お前が活発な性格が変わらないようにな、鈴。泣き付かれようが、私は止まるつもりはない」

鈴「誰があんたなんか泣きつくのよ！私は悪いオウムを駆除するだけよ！」

〈戦闘会話　シャルロットVSホープス〉

シャルロット「ホープス……。僕は手加減をしないよ！」

ホープス「そう言いながら、迷いを捨てきれていない様だな、シャルロット」

シャルロット「……」

ホープス「お前は優しすぎる……。故にその身を滅ぼすのだ」

シャルロット「そうだね……。本当はホープスにも戻って来て欲しいよ。でも、みんなを危険に晒すって言うなら、僕は君を見逃す事は出来ないんだよ！」

〈戦闘会話　ラウラVSホープス〉

ホープス「いい目をしているな、ラウラ」

ラウラ「ホープス……。何を考えているのかわからない奴だったが、悪い奴ではなかったぞ」

ホープス「悪い奴ではないだと？現に私はお前達を食らおうとしているのだぞ？」

ラウラ「……そうだな。ならば、私が止めてやろう。元仲間として……これ以上、お前に罪を重ねさせないために！」

〈戦闘会話　簪VSホープス〉

ホープス「打鉄式式の物量には気をつけないといけないな」

簪「ホープス…あなたは、許さない…！」

ホープス「いつもの内気な性格とは違うな、簪。もうヒーローを待つお姫様ではない様だな」

簪「だけど、私はヒーローにはなれない…。でも、世界を守る事は出来る…。だから、あなたを止める！」

〈戦闘会話 楯無VSホープス〉

ホープス「学園最強の力を見せてもらおうか、楯無」

楯無「ホープスちゃん、お姉さん、すごく怒っているのはわかってるわね？」

ホープス「…ああ。目が笑っていないからな。恐ろしい女だ」

楯無「覚悟しなさいよ。内部からズタズタにしてあげるわよ！」

〈戦闘会話 千冬VSホープス〉

ホープス「千冬…。お前はいい存在だったぞ」

千冬「ホープス…お前は…！」

ホープス「…言葉は不要だ。私が滅びるか、お前達が餌となるか…。ただ簡単な事だ」
千冬「フツ、よくわかっているではないか。では、私は必ずお前に勝とう！世界を守

るため！」

〈戦闘会話　マドカVSホープス〉

マドカ「オウムめ…裏切った事を後悔しろ」

ホープス「理解できない。何故、恨んでいる一夏と共に戦える？」

マドカ「勘違いするなよ。私は織斑　一夏を必ず殺す…。その為にも元の世界へ戻らなければならぬだけだ！」

ホープス「あくまでも自らの復讐のためか…。いい復讐心だ、マドカ。美味な味がするぞ」

マドカ「だが、私の復讐心をお前にやるつもりはない！ここで消してやる！」

〈戦闘会話　竜馬VSホープス〉

ホープス「ゲッター線に選ばれし者…そのお前が破天荒とはな」

竜馬「悪いな、ホープス。俺はお前の挑発には乗らねえぜ」

ホープス「ほう、隼人の挑発に乗るお前が成長したな。竜馬、さすれば見せてみる…お前達の力を！」

竜馬「望む所だ！二度とその減らず口を聴けないようにしてやるぜ、ホープス！」

〈戦闘会話 隼人VSホープス〉

ホープス「早乙女博士が認めた者：お前もゲッター線に選ばれし者だったんだな、隼人」

隼人「俺も竜馬と一緒にいる事か。フツ、悪い気はしないな」

ホープス「では、ゲッターチーム仲良く喰らってやろう」

隼人「そいつは遠慮するぜ。まだ俺達にはやるべき事が残っているからな！」

〈戦闘会話 弁慶VSホープス〉

弁慶「まさか、お前が敵として立ちはだかつてくるとはな、ホープス！」

ホープス「想定外の事態に備えるのもまた戦いと言えるぞ、弁慶」

弁慶「へっ、言ってくれれば。憎まれ口は相変わらずのようだな」

ホープス「話をしている暇はない。ここで喰らってやる」

弁慶「喰えるモンなら喰ってみやがれ！腹を壊しても知らねえぞ！」

〈戦闘会話 號VSホープス〉

溪「ホープス、あんた…最低だね…！」

凱「今のあいつに何を言っても無駄だ、溪！」

ホープス「その通りだ、新たなゲツターチームよ。お前達も私の糧となれ」

號「今まで持っていた仲間意識も演技だったと言うのか……！」

ホープス「それを見抜けなかったお前達のまだまだだという事だ、號」

號「そうだな。だが、俺達を倒すという事を言ったお前もまだだ、ホープス。俺達は負けないぞ！」

〈戦闘会話 葵VSホープス〉

ホープス「葵、くらら、朔哉、ジョニー、エイーダ……。獣が眠る時だ」

ジョニー「面白くない冗談を言いますね、ホープス」

葵「私達はまだ眠るつもりはないわ！」

くらら「それにあなたの方こそ、獣じゃない」

エイーダ「眠るのはあなたの方です！」

朔哉「覚悟しやがれよ、ホープス！裏切り者には容赦はしねえからな！」

ホープス「良い気迫だ、チームD。喰いごたえのある相手だ」

葵「獣同士の戦い：悪くないわね。でもね、世界をかけた戦いに目を背けるつもりはないの。行くわよ、みんな！やってやろうじゃん!!？」

〈戦闘会話 九郎VSホープス〉

アル「お前が敵になるとは……これも運命だったのか？」

ホープス「運命……確かにそうかもしれないな。そして、お前達が私に食べられるのも九郎「舐めんじゃねえぞ、ホープス！俺達の強さはお前が一番知っているんだろ！」

アル「そして、妾達が簡単に諦めぬ事もな！」

ホープス「知っているからこそ、お前達から得る感情が更に美味なものになる。お前達の愛……見せてみる」

九郎「いいぜ、そんなに見たいなら、見せてやる！俺とアルと……デモンベインの力をな！」

〈戦闘会話 ウェストVSホープス〉

ホープス「絶対的な自信……そうか、お前達がバカというものなのだな」

エルザ「むっ!?博士は兎も角、エルザはバカじゃないロボ！」

ウェスト「エルザー!?さりげなく我輩をdisっていないのであるか!?」

ホープス「緊張感がないな、ウェスト。失敗作ではないのか？」

エルザ「それはないロボ！エルザと博士が組めば、最強ロボ！」

ウエスト「よく言ったのである、エルザ！ホープス、これで終わらせるのである！」

〈戦闘会話 エンネアVSホープス〉

ホープス「私を止めたいのであれば、本気で来い、暴君ネロ」

エンネア「誰なのそれ？もうそんな奴はいないよ、ホープス」

ホープス「…挑発をするつもりだったが、効かないようだな、エンネア。ならば、力尽くでいくしかないな」

エンネア「ホープス、私はあなたを止めるよ。世界のため…みんなのため…そして、ホープスのため！ホープスと仲間同士であった私のために！」

〈戦闘会話 マスターテリオンVSホープス〉

ホープス「かつての大導師の面影もないな、マスターテリオン」

マスターテリオン「…」

ホープス「何も言えないか、失望したぞ。お前からは美味な感情を得られると思ったのにな」

エセルドレーダ「あなたは…言いたい事を言って…！」

マスターテリオン「良い。何を言っても、奴を思い上がらせるだけだ。言葉は不要…」

敵となつたならば、潰すだけだ」

〈戦闘会話　ヒーローマンVSホープス〉

ジョーイ「残念だよ、ホープス…。僕達は君を仲間だと思つていたのに…」

ホープス「いつまでも甘いな。今の私は敵なだけだ」

ジョーイ「敵…。そうだよな、君が世界の平和を脅かす存在なら、僕達が相手をするしかない！」

ホープス「その息だ、ジョーイ、ヒーローマン。私にヒーローというものを見せてみる！」

ジョーイ「ホープス…今までありがとう。そしてこれで終わりだ、魔獣ホープス！行こう、ヒーローマン！」

ヒーローマン「ウオオオオオツ！」

〈戦闘会話　ウイルVSホープス〉

ホープス「スクラッグにされ、人の道を歩けなくなつたお前達の悲しみの感情はいいものぞ、ウイル」

ウイル「性格が悪いオウムだとは思っていたが、ここまでとはな」

ホープス「悪いな、これは生まれつきなのだ」

ウィル「ならば、その嘴を閉じる。そして、お前の企みをぶっ潰す！」

〈戦闘会話　ヴァンVSホープス〉

ホープス「堪え難い憎しみの連鎖……。お前からはその感情が得られてばかりだな、ヴァン」

ヴァン「そうか、それは良かったな。だが、食事の時間はここまでだ」

ホープス「復讐鬼だったお前が、世界を守るヒーローとなるのか？」

ヴァン「ヒーローなんて柄じゃねえ！ただ俺はお前の餌になるつもりはねえって言うてんだ！それにエレナが愛した世界を喰わせてたまるかよ！」

〈戦闘会話　ネロVSホープス〉

バリヨ「胡散臭いオウムだとは思っていたが、この様な大望を抱いていたとはな」

カルロス「全くだ。これだから、世界は平和にならん」

ホープス「ネロ、ホセ、バリヨ、カルロス……。そろそろ引退したらどうだ？」

ホセ「それは無理な相談だな、ホープス」

ネロ「お前みたいな悪党がいる限り、俺達はまだまだ現役だ！」

ホープス「それがエルドラメンバーの誇りか…。流石に世界を一度救った事はあるな。相手にとって、不足はない」

ネロ「ホープス！悪は決して許さん！敵に回ったお前は俺達が止めてやる！」

〈戦闘会話　プリシラVSホープス〉

ホープス「悲しいな、プリシラ。叶いもしない恋の想いに囚われてしまうなど…」

プリシラ「どうしてあなたにそんな事がわかるのよ？確かにヴァンにはエレナさんって人がいたよ！でも、ヴァンからまだ返事を聞いてないのよ！」

ホープス「…その返事は聞けない。何故なら、お前達は私に喰われるのだからな」

プリシラ「私達は食べられるつもりはないわよ！絶対に抵抗してやるんだから！」

〈戦闘会話　レイ「ガンソ」VSホープス〉

ホープス「レイ、復讐を終えたお前が何故、私の前に立ちふさがる？」

レイ「ガンソ」「確かに、俺の復讐は終わった…。お前と戦う必要はないのかもしれない」

ホープス「だったら、何故…？」

レイ「ガンソ」「だが…お前が喰らおうとしているのはシノが愛した世界だ。同時にそ

の世界はジョシユが住む世界だ。その未来だけはお前には奪わせはしない！」

〈戦闘会話　ガドヴェドVSホープス〉

ホープス「ガドヴェド、助かった生命を無駄にするのか？」

ガドヴェド「お前に心配される程、私もヤワではない」

ホープス「流石はヴァンの師匠だ。気迫が並ではないな」

ガドヴェド「気迫が読み取れるなら、私の攻撃も効くのだな！ホープス、自らの罪と共に散れ！」

〈戦闘会話　ウーVSホープス〉

ホープス「ウー、私が母親の下へ連れて行ってやろう」

ウー「成る程、それも良いかもしれんな」

ホープス「ならば……」

ウー「だが、やはり、必要はない！私はまだ……生きる！母上の想いと共に！それが私の決めた運命だからだ！」

〈戦闘会話　カロツサVSホープス〉

ホープス「カロツサ、お腹が空けば、食べ物欲しくなる。お前なら分かるはずだ」
カロツサ「…」

ホープス「安心しろ。メリツサと仲良く食べてやる」

カロツサ「メリツサ、食べさせはしない…！ホープス、お前は…俺達の…世界の敵だあああつ！！？」

〈戦闘会話　メリツサVSホープス〉

メリツサ「どうしてこんな事を？悲しいよ、ホープス…」

ホープス「そうだ！その感情…もつと私に食べさせてくれ。カロツサを食べれば、もつとお前からその感情を得る事が出来る！」

メリツサ「カロツサを…食べる…？そんな事…させない…！」

ホープス「この気迫…私の前にいるのは本当にメリツサなのか…？」

メリツサ「私達は食べられるつもりはない。それに…ホープスは間違っているから…。だから、お仕置きして止める…！」

〈戦闘会話　ファサリナVSホープス〉

ホープス「ファサリナ、お前は掴み所のない女だな」

フアサリナ「あら、ホープスさんも相当ですよ。それにあなたがただ私達と敵対するとは思えないんですよ」

ホープス「…やはり掴み所はないな。これ以上、深入りされる前にお前を喰おうとしよう」

フアサリナ「それは抵抗させていただきます。私はミハエル君と未来へ進むためにあなたを止めて見せませす」

〈戦闘会話　ミハエルVSホープス〉

ホープス「尊敬していたカギ爪の男が倒され、ヴァン達と共に歩むとはな」

ミハエル「都合がいい事は私もわかっている。だが、人は変わる事は出来るんだ！」

ホープス「それがフアサリナとの愛が変えたものか…ならば、フアサリナを…！」

ミハエル「フアサリナさんは僕が守る！ホープス…その醜い魔獣の肉体こと消えろ
！」

〈戦闘会話　アマタVSホープス〉

ホープス「機にする事はないぞ、アマタ。お前はミコノと共にいさせてやる」

アマタ「お前の胃の中でか？そんなのは真つ平ごめんだ！俺は…絶対に元の世界に

戻って、ミコノさんの手を繋ぐ！」

ミコノ「アマタ君！」

ホープス「これがアマタとミコノの…アクエリオンで結ばれた愛か！」

アマタ「ホープス、これで終わらせる！俺達の障害となるなら、覚悟しろよ！」

〈戦闘会話　ミコノVSホープス〉

ホープス「目の前でアマタが喰われれば、お前も絶望するだろうな、ミコノ」

ミコノ「そんな事…させない！アマタ君は…私が守る！」

アマタ「俺も、ミコノさんを守るよ！」

ホープス「輝かしい愛だな。それを引き裂くのもまた楽しみというものだ」

ミコノ「ホープス…。あなたをいい人と思っていたけど…アマタ君達を傷つけると言

うのなら、私は絶対に許さない！」

〈戦闘会話　カイエンVSホープス〉

ホープス「親友と出会えて、喜びの感情が見えたぞ、カイエン」

カイエン「ああ、異世界に来て、戸惑ってしまったが、ここでは様々な事を学ばせて

もらった。だからこそ、この世界の平和を守りたいと思っただんだ！」

ホープス「それがお前の覚悟なのだ。でな、その異世界のために私に喰われる」
カイエン「誰がお前に喰われてやるか！お前を倒し、アル・ワースを守ってやる！」

〈戦闘会話〉 ゼシカVSホープス

ホープス「悲しいな、ゼシカ。お前のやる事全て、無駄に終わっているなんてな」

ゼシカ「…あんたに言われたくないわよ」

ホープス「いいや、お前はここで終わる。私を倒そうとしてな」

ゼシカ「勝手に人を終わらな人間と思わないで！ド心底女呼ばわりされるのはあいつだけで十分なのよ！これ以上、言うならあんたでも徹底的に潰すからね！」

〈戦闘会話〉 アンディVSホープス

ホープス「MIXが男でも愛する、か…。お前は変わっているな、アンディ」

アンディ「何言っているんだ、お前は！俺は女だろうと男だろうと関係ねえ！MIXって、存在が大好きなんだよ！」

MIX「ありがとう、アンディ…」

ホープス「そうか、ならば、MIXと共に…」

アンディ「それ以上言わなくてもいいぜ、ホープス！俺は喰われるつもりも、MIX

を喰わせるつもりもないからな。つまり、お前を倒すって事だ！」

〈戦闘会話 MIX VSホープス〉

ホープス「愛するアンディを目の前で食べられるとどんな顔をするんだろうな、MIX」

MIX「…」

ホープス「恐ろしくて声も出ないか」

アンディ「黙りやがれ、ホープス！MIX、俺も力を貸すぞ！」

MIX「ええ、ありがとう、アンディ！それなら、あなたの力も貸して！」

〈戦闘会話 シュレードVSホープス〉

ホープス「皮肉なものだな、シュレード。生き返ったものの、またもや異世界に転移してしまおうとは…」

シュレード「戦いは終わらない…。その言葉がこの世界にはあるのかも知れないね」

ホープス「そうさ。だからこそ、楽になっただろうだ？」

シュレード「折角だが、断らせてもらおうよ。僕がまだ存在している時点で、諦めるわけにはいかない！世界のレクイエムは阻止してみせる！」

〈戦闘会話　モロイVSホープス〉

ホープス「お前まで、私の前に立ち塞がるか、モロイ」

モロイ「お前に挑んでいるのはエクスクロス全員だぜ」

ホープス「やめておけ。世界を救っても、誰もお前を褒める奴はいない」

モロイ「そういう事じゃねえんだよ、世界を救うって事は！例え、影が薄くても、存在している事が俺の証明だ！」

〈戦闘会話　サザンカVSホープス〉

ホープス「どうだ、サザンカ？私の胃の中でイケメンの男達と出会えるぞ？」

サザンカ「うん、確かにイケメンに囲まれるのはいい事かも…」

ホープス「お前ならそういうと思った。では…」

サザンカ「でもね！エンデの臭い胃の中でなんて真つ平御免よ！私は私の戦いをする！それだけなんだから！」

〈戦闘会話　カグラVSホープス〉

ホープス「お前の鼻でも私の邪悪な匂いを感じ取る事は出来なかったか」

カグラ「俺の鼻はそこまで便利じゃねえって事だ。だがな、調子に乗った鳥の羽をへし折る事は出来るぜ！」

ホープス「お前こそ調子に乗るな、カグラ。犬如きに何が出来る？ 所詮は負け犬の遠吠えとなる」

カグラ「それなら、お前の首筋に噛み付いてやるから、覚悟しやがれ！ 行くぜ、これで終わりだ！」

〈戦闘会話 ジン「EVOL」VSホープス〉

ホープス「せっかく得たその生命…わざわざ無残に散らす気か、ジン？」

ジン「EVOL」無残に散らすつもりはない！ 僕の生命は…ユノハや世界の為に使う！ そして、死ぬつもりはない！」

ホープス「な、何だ…？ 何かの力で抑え込まれる…！」

ユノハ「ジン君！」

ジン「EVOL」「わかっているよ、ユノハ！ 俺達は生きる！ 愛と希望を持って…そして、お前を倒す！」

〈戦闘会話 ユノハVSホープス〉

ホープス「強くなったな、ユノハ。それもジンの影響か？」

ユノハ「はい。でも、それだけじゃないです！ジン君やアマタさん達…そして、エクスクロスのみなさんのお陰です！」

ホープス「仲間…何もかもがくだらない」

ジン「E.V.O.L.」「ユノハ！僕の力も君に！」

ユノハ「うん、ジン君！ホープスさん、私達があなたの野望を止めてみせます！」

〈戦闘会話　クレアVSホープス〉

ホープス「お前達では私には勝てない…。そんな事はお前ならば、わかるはずだ、クレア」

クレア「いえ、わかりません。何故なら、私は勝つと思っっているからです」

ホープス「何だ…？奴の絶対的な自信は…？」

クレア「不動、見ていてください。私達は絶対にこの世界を救ってみせます！」

〈戦闘会話　ミカゲVSホープス〉

ホープス「かつて憎しみのまま戦っていたお前がここまで変わるとはな」

ミカゲ「ふつ、私が一番驚いているさ。ここまで変わる事が出来るなどね」

ホープス「だが、変わっても無意味だ。ミカゲ、お前はここで消える」
ミカゲ「消させないさ……。人も世界も……。アポロニアスが愛した全てを……。私が守ってみせよう！」

〈戦闘会話 ノリコVSホープス〉

カズミ「ホープス、覚悟しなさい！」

ホープス「ノリコとカズミか……。ガンバスターの力には要注意だな」

ノリコ「わかっているなら、降参しなさい！」

ホープス「無理だ。私にも覚悟がある」

カズミ「そう……。なら、もう迷いは必要ないわ、ノリコ」

ノリコ「はい、お姉様！ホープス、あなたの野望は私とお姉様とガンバスターが打ち砕くわ！」

〈戦闘会話 ユイVSホープス〉

ホープス「エリニウスのレガリア……。そして、ユイとレナの姉妹の力……。見せてみる」

ユイ「ホープス……！」

レナ「あなた、本当に的になったのね！」

ホープス「見ての通りだ。お前達を食べた後、エナストリアの国民達も食べてやる」
レナ「そんな事、私とユイが許さない！」

ユイ「私はエナストリアやアル・ワースだけでなく…全ての世界の人達を守ってみせます！それが…私がアレクトに乗った…レナといっしょに戦うっていう覚悟だから！だから、私はあなたには屈しません！」

〈戦闘会話 サラVSホープス〉

ティア「ホープス、こんな事をやめて、戻って来てよ！」

ホープス「戻るつもりはない。エサの所などな」

サラ「人間は食べ物じゃないよ！どうしてわからないの!?!？」

ホープス「サラとティアが腹を空かせるように私も腹が減っている…ただ、それだけだ」

ティア「サラ、このままじゃ、レッツやみんなが食べられちゃう！」

サラ「そんな事…させない！ティア、私達がホープスを止めるよ！」

〈戦闘会話 イングリッドVSホープス〉

ホープス「国を壊され、ケイを操られ、人生を狂わされた皇女…悲しみしかないな」

イングリッド「ホープス…あなたを仲間だと思っていたのに…」

ケイ「イングリッド…」

ホープス「それはイングリッド、お前が勝手に思っていただけの事だ。私はお前達を食する神だ」

ケイ「何が神なのよ！あなたにイングリッドを渡さない！」

イングリッド「ケイ…。ありがとうね。ホープス！世界のみんなを危険に晒すと言うならば、私達が…あなたを倒す！」

〈戦闘会話　ノアVSホープス〉

ホープス「ヨハンに散々弄ばれ、妹達と戦わされたのに…まだお前は戦うのか、ノア？」

ノア「当然よ…。私はまだ戦えるのだから…！」

ホープス「何がそこまでお前を突き動かす？」

ノア「サラとティアが生きる未来を…そしてその世界を守る為よ！大切な…妹達の為には私は何度でもあなたと戦うわ！」

〈戦闘会話　ヨハンVSホープス〉

ホープス「異界の力、ルクスとルクス・エクスマキナの器のヨハンが共に向かってくるとはな」

ヨハン「ホント、ちよつと前までは立場は逆だったのにね」

ホープス「そう、お前が私の邪魔をする権利はないはずだ。それなのに何故？」

ルクス「…」

ヨハン「人間の未来を見たくなくなったからさ。ルクスと共に…それを妨げるお前が許せないだけだ！行こうか、ルクス！」

〈戦闘会話 ノブナガVSホープス〉

ノブナガ「ホープス、お前は不器用な男だな…」

ホープス「余計な事は言うな、ノブナガ」

ノブナガ「…それがお前の覚悟だ」

ホープス「話は終わりだ。お前の刀で私に挑んで来い、破壊王！」

ノブナガ「そうか、ならばお前の期待に答えてやろう！破壊王、ノブナガとして！」

〈戦闘会話 ジャンヌVSホープス〉

ジャンヌ「ホープス、あなたは…！」

ホープス「天啓で未来を見たか。やはり、厄介な能力だな、魔女よ」
ジャンヌ「：変わらない未来もあるのは知ってるわ。だからこそ、あなたの賭けに乗ってあげるわ！」

ホープス「いいだろう、来い、ジャンヌ」

ジャンヌ「ホープス、これであなたを終わらせるわ！」

〈戦闘会話　ヒデヨシVSホープス〉

ホープス「猿のご登場か」

ヒデヨシ「お前が猿って呼ぶな！今まで俺達を助けてくれたのも演技だったのかよ！」

ホープス「そうだ。ヒデヨシ、お前は本当の猿のように手のひらで踊らされていたのだ」

ヒデヨシ「もう許さねえ！このバカ鳥が…！後で降参しても許さねえからな！」

〈戦闘会話　カエサルVSホープス〉

ホープス「カエサル…。再び、イチ姫と共に食らってやろう」

カエサル「君がそこまでの俗物だったとはね。失望したよ」

ホープス「お前に失望されても、悔しくないな」

カエサル「ならば、悔しさを教えてやろう。そして、イチ姫に牙を向ける不屈きものに天罰を与えよう！」

〈戦闘会話 アレクサンダーVSホープス〉

ホープス「アレクサンダー、お前でも私の野望には気がつかなかったか」

アレクサンダー「…」

ホープス「悔しすぎて、言葉も出ないか」

アレクサンダー「もう何も話すな、鳥めが。ここで消えるお前と話しても意味はないだけだ！」

〈戦闘会話 ケンシンVSホープス〉

ケンシン「ホープスさん、あなた…何を企んでいるのですか？」

ホープス「…」

ケンシン「都合が悪くなったら、沈黙ですか」

ホープス「無駄な詮索はやめてもらおうか、ケンシン。お前はここで消した方がいいな」

ケンシン「ふっ、では…抵抗させていただきましょう…。そして、あなたを倒し、話をゆつくりと聞かせていただきます！」

〈戦闘会話　しんのすけVSホープス〉

シロ「ワン！」

ホープス「吠えるな、シロ。ひろし、みさえ…。大切な息子娘のしんのすけとみさえを戦わせるとはな」

ひろし「それは違う！俺達は家族でお前と戦っているんだ！」

みさえ「あなたが子供達の未来を奪うと言うのなら、私達は全力であなたを止めるだけよ！」

ひまわり「たいやー！」

しんのすけ「母ちゃん、父ちゃん…」

カンタム「ホープス、君なら理解できていると思っただけだ、カンタムがね」

ホープス「くだらな過ぎて、理解する必要もなかったただけだ、カンタム。安心しろ、お前の息子も喰らってやる」

カンタム「そうはさせるか！僕は…僕達は人間を守ると決めたんだ！たとえ相手が、君だとしても！」

しんのすけ「ホープス、ごめんなさいしたら、許してやるゾ！でも、みんなを困らせるなら、オラ達、野原一家とカンタム達が相手になるゾ！行くゾ、野原一家とカンタム達、ファイヤー!!？」

〈戦闘会話 トオルVSホープス〉

マサオ「ホープス、こんなのヤダよ……！」

ホープス「トオル、ネネ、マサオ、ボー……。これは遊びと違う。子供は家に帰って、ママやパパの所へ行ったら、どうだ？」

ネネ「出来るなら、そうしているわよ！」

ボーちゃん「でも、悪い奴を倒せないと、帰れない」

トオル「そうだよ！だから、こんな事やめて、みんなの下へ戻ってきてよ、ホープス！」

ホープス「何と言われようが、私は戻る気は無い。安心しろ、私の胃の中で両親に会わせてやる」

トオル「そんなの、こつちから願ひ下げだよ！僕達は絶対に、元の世界に帰る！僕達、春日部防衛隊が君を止めてみせる！」

〈戦闘会話　カイザムVSホープス〉

ホープス「カイザム：お前は弟のカンタムと同じく、生みの親を裏切ったガラクタだ」
カイザム「：そう言われてもおおかしく無いな。俺達は人間を滅ぼす為に生み出されたはずの存在だからな」

ホープス「ならば、なぜ私の前に立つ？」

カイザム「人間と人間の未来を守りたいからだ。だから、俺はどれだけ罰せられようとお前を止める事はやめない！それが俺の新たな道だからだ！」

〈戦闘会話　ケロロVSホープス〉

ドロロ「ホープス殿！本当に敵となるのでござるか!?!？」

ホープス「何度も言わせるな、私はお前達の敵だ、ケロロ、ギロロ、タママ、クルル、ドロロ」

クルル「クーククツ！これは本気みたいだぜ〜」

ケロロ「我々の本気を出すしかないでありますな！」

ホープス「いいだろう、ケロロ小隊の力：私に見せてみる」

タママ「望み通りに見せてやるですうっ！」

ギロロ「終わりにするぞ、ケロロ！あの獣にトドメをさせ！」

ケロロ「了解であります！ホープス殿、我がケロン人魂…受けるであります！」

〈戦闘会話 夏美VSホープス〉

ホープス「夏美、ただの地球人が私の相手をするとはな」

夏美「ただの地球人ねえ…。こんな化け物を前にして、戦う地球人も珍しいけどね」

ホープス「だが、どれだけ強かろうと私には勝てない」

夏美「そんなものやってみないとわからないでしょ！簡単に諦める程、私は甘く無いからね！」

〈戦闘会話 ダークケロロVSホープス〉

ホープス「ケロロのデータを元にキルルに作られた存在…それがお前なのだな、ケロロ大軍曹…いや、ダークケロロと呼んだ方がいいか？」

ダークケロロ「呼び方などどうでも良い。お前が敵となった事が問題だ」

ホープス「ただ単に敵となっただけではダメなのか？」

ダークケロロ「友とはそれほど簡単なものでは無い！それを教えてやる！」

〈戦闘会話 アキトVSホープス〉

ホープス「漆黒のヒーロー…。絶望と復讐を乗り越え、新たな道へと進み始めたようだな、アキト」

アキト「ホープス：悪側に回るとは思わなかったぞ。お前のアマリへの愛は本物だと思っていたのにな」

ホープス「…」

アキト「悪になったのなら、容赦はしない…！お前が俺とユリカの未来を奪うのなら、なおさらな！」

〈戦闘会話　ルリVSホープス〉

ハリー「魔獣ホープスが射程内に入りましたよ、艦長！」

ホープス「ルリ：愛らしいお前を喰うのは素晴らしい味がする気がするな」

ユリカ「本当に人を食べるなんて…そんなの悲しいよ、ホープス…」

ルリ「はい、ですが、私を食べても美味しくありません。私には負の感情はありませんから」

ホープス「ならば、ユリカとアキト達を目の前で食べて…」

ルリ「…もういいです。あなたは何も食べる事は出来ません。私が防ぎますから」

〈戦闘会話　リョーコVSホープス〉

ホープス「報われない恋にうちヒレされても尚、生き続けるか、リョーコ」

リョーコ「お前：：本当に性格が悪い奴だな！」

ホープス「すまないな、これは生まれつきなのでな」

リョーコ「仲間のよしみで手加減してやろうと思ったが、もう頭にきたぜ！お前をボコボコにしてやるから、覚悟しやがれよ！」

〈戦闘会話　サブロウタVSホープス〉

ホープス「サブロウタか：：」

サブロウタ「こんな結末になるなんて、悲しくなるぜ、ホープス」

ホープス「私もだ。かつての仲間を食する事になるとはな」

サブロウタ「誰が好き好んで食べられるかよ！悪いが、俺はまだくたばる訳にはいかねえんでな。相手させてもらうぜ！」

〈戦闘会話　ガイVSホープス〉

ホープス「暑苦しいな、山田 二郎。少しは落ち着きを持つたらどうだ？」

ガイ「おいしい、勘弁してくれよ、ホープス：。俺はな、ダイコウジ・ガイだ！今ま

で一緒にいたのにそんな事も知らないとはな！」

ホープス「やはり、お前は苦手な相手だ、ガイ。お前は一目散に食した方がいいだろう」

ガイ「そうか、だがな、俺を喰って、腹をくだしても知らねえからな！覚悟しやがれよ！」

〈戦闘会話　アルトVSホープス〉

ホープス「ランカとシエリルの歌とお前の舞をもったとしても、私を止める事は出来ないぞ、アルト」

アルト「くっ……！お前、本当に俺達を裏切ったのかよ!?俺達は、仲間じゃなかったのかよ、ホープス!?」

ホープス「私はお前達を利用したに過ぎない。戦いたくなければ、私に大人しく食われろ」

アルト「そういうわけに行くか！ランカもシエリルも必死に戦っているんだ！だってら、俺は何度でも俺の舞をお前に見せてやる！それが俺の戦いだ！」

〈戦闘会話　ミシエルVSホープス〉

ホープス「ミシエル、お前の存在は面白い。ある可能性の世界では、お前は生命を落とす」

ミシエル「そんな言葉で俺を惑わす気なら、見込違いだぜ、ホープス！」

ホープス「まあ、可能性の世界など関係ない。どちらにしろ、お前は生命を落とす事には変わらない」

ミシエル「誰が生命を落とすだつて？ 悪いな、俺はそう簡単に死なないんだよ！ ホープス、お前に俺の射撃を何発もプレゼントしてやるよ！」

〈戦闘会話　ルカVSホープス〉

ホープス「愛するナナセという女もいずれ私の胃の中で生き絶える事となるぞ、ルカ」
ルカ「ホープス、君は……！」

ホープス「嫌ならば、私に勝って、世界を救ってみせるのだな」
ルカ「言われなくともやってやるさ！ ナナセさんも世界も……君には渡さない！」

〈戦闘会話　オズマVSホープス〉

ホープス「オズマ、お前の熱血指導には胸を打たれたぞ」
オズマ「煽てるのも演技なんだろう？ もう騙されんぞ！」

ホープス「…ならば、力押しでお前を喰わせてもらう」

オズマ「うるさい！お前には裏切り者としての罰を受けてもらうぞ、ホープス！」

〈戦闘会話　クランVSホープス〉

ホープス「どれだけお前達、ゼントラーデイが大きくとも私の餌になる事には変わらん」

クラン「そうか。あくまでもお前は私達よりも食欲を取るつもりだな？」

ホープス「そうだと言っているが…理解をするのが遅いな、クラン」

クラン「わかった。ならば、容赦はしないぞ、ホープス！」

〈戦闘会話　カナリアVSホープス〉

ホープス「カナリア、お前を喰う前にお前の家族を食らった方がまた美味な味となるかもしれないな」

カナリア「そういうのは私に勝つてから、いうものだぞ、ホープス」

ホープス「いいや、私は既に勝っているに等しい」

カナリア「その余裕…いつまで続くか、試してやるよ！」

〈戦闘会話 ジェフリーVSホープス〉

ホープス「マクロス・クォーター……。マクロスキャノンには要注意だな」

ゴビー「ヒュ、流石はホープスちゃん。マクロス・クォーターの危険性は調査済みね」

キャシー「ですが、負けるわけにはいきません！」

ジェフリー「彼女の言う通りだ、我々は負けるわけにはいかん！」

ホープス「だが、同時にマクロス・クォーターが落ちれば、お前達の敗北は近くなるぞ、ジェフリー」

ラム「各武装に問題はありませぬ！」

ミーナ「F」マクロス・クォーターも問題なく戦闘を行えます！」

モニカ「索敵は完了していますよ、艦長！」

ジェフリー「よしっ！これで終わらせる！行くぞ、野郎共、この波に乗れ！」

〈戦闘会話 ブレラVSホープス〉

ホープス「ブレラ、ランカはお前の下には戻ってこないかもしれないぞ」

ブレラ「アルトの下であろうと、オズマの下であろうと問題ない。二人共、大切な仲間だからな」

ホープス「そうか、ならば、遠慮なく喰えというわけか」

ブレラ「だが、お前には渡さん。ランカや世界も…全ての人もな！俺が…俺達が守ってみせる！」

〈戦闘会話　リオンVSホープス〉

ホープス「異世界の為にその力を振るうとは、お前も変わった男だな、リオン」

リオン「俺の世界だろうと異世界だろうと…俺は守れる人がいれば、守るだけだ！」

ホープス「それがお前の戦う意志…お前の翼か」

リオン「俺は俺自身の意志を曲げるつもりはない！例え、お前が相手でも飛び続けてやる！」

〈戦闘会話　アイシャVSホープス〉

ホープス「自称天才美少女のお前では私を止める事は出来ないぞ、アイシャ」

アイシャ「あなたにそんな事言われたくないわよ。私はやる前に諦めるつもりはないの。それにね…」

ホープス「何だ…？」

アイシャ「私は自称ではなく、本当に天才美少女なのよ！その所、覚えておきなさい」

いー！」

〈戦闘会話 ミーナ「30」VSホープス〉

ホープス「ミーナ、新たな歌姫か」

ミーナ「30」「ホープスさん…私は悲しいです。私の歌も聞いてもらえないなんて…」

ホープス「お前の歌では私は止まらない」

ミーナ「30」「私はシエリルさんやランカさんほどの歌でなくとも、歌う事をやめません！絶対にあなたを止めてみせます！ホープス、私の歌を聞いてください！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSホープス〉

ホープス「マーベラス、ジョー、ルカ、ハカセ、アイム…。宇宙海賊が世界を救うとは妙な話だな」

ゴーカイイエロー「あんた、何を言っているの？」

ゴーカイブルー「勘違いするなよ、ホープス。俺達はお前のやり方が気に入らないだけだ」

ゴーカイグリーン「そして、アル・ワースのお宝を守る為に戦っているだけだよ」

「ゴーカイピンク「それをあなたが妨げているから、私達はあなたと戦っているだけなのです！」

「ゴーカイレッド「って、わけだ！海賊に喧嘩を売って、ただで済むと思うなよ、ホープス！」

「ホープス「いいだろう、ゴーカイジャー！全てのスーパー戦隊の力を集結し、私を倒してみせろ！」

「ゴーカイレッド「言われなくても、やってやるよ！これで最後だ：ド派手に行くぜ！！？」

〈戦闘会話　　ゴーカイシルバーVSホープス〉

「ホープス「全てのスーパー戦隊の知識を持っていたとしても、私を倒す事は出来ないぞ、鎧」

「ゴーカイシルバー「それでも俺は諦めない！欲しい物は手に入れる…。それが海賊だから！俺はアル・ワースの平和を勝ち取ってみせる！」

「ホープス「その大口は私を倒してから言うんだな」

「ゴーカイシルバー「お前のその挑発も俺に勝つてから言え！さあ、ギンギンに行くぜ！」

〈戦闘会話　ゼロVSホープス〉

ゼロ「ホープス、お前をエンデの肉体ごと銀河の果てまで吹っ飛ばしてやるぜ！」

ホープス「お前はいつまでも過激だな、ゼロ。たしかにお前は可能性の塊だが、それを破壊するのも美味な感情を得る事が出来る」

ゼロ「俺達、ウルトラマンも喰うつてか…。やってみやがれ！そう簡単にはいかねえぞ！」

ホープス「まずはお前から光エネルギーを全て使い切らせる…。食すのはその後だ」
ゼロ「その暇があるかどうか、試してみるか？やるぜ、お前の野望…。このウルトラマンゼロが阻止してやる！」

〈戦闘会話　グレンファイヤーVSホープス〉

ホープス「相変わらず、暑苦しい男だな、グレンファイヤー」

グレンファイヤー「ホープス…。この、馬鹿野郎！」

ホープス「バカのお前にバカと言われたくないな。待っている、お前の炎が消える時だ」

グレンファイヤー「へっ！そう簡単に消せるか、やって見やがれ！俺は手を抜く気は

ねえからな！」

〈戦闘会話　ミラーナイトVSホープス〉

ホープス「お前の心に持つ鏡でも私の闇を映し出す事は出来なかったか、ミラーナイト」

ミラーナイト「そうですね、それは盲点でした。ですが、今のあなたも本当のあなた様には見えませんが…」

ホープス「…」

ミラーナイト「…ですが、今はそれを考えても仕方ないですね。なら、あなたはここで倒します！」

〈戦闘会話　ジャンボットVSホープス〉

エメラナ「ホープス、あなたの野望は私達が止めます！」

ホープス「一国の星の姫が随分と私をバカにしてくれるな、エメラナ」

ジャンボット「姫様を侮辱する事は私が許さないぞ、ホープス！」

ホープス「ならば、どうする気だ、ジャンボット？」

ジャンボット「お前を止める！世界を危機に晒すと言うのなら、ウルティメイトゼロ

のメンバーとして…エクスクロスのメンバーとしてな！」

〈戦闘会話 ジャンナインVSホープス〉

ヒュウガ「ホープス…今でもお前の事を私は信じているぞ」

ホープス「勝手に信じているがいいぞ、ヒュウガ。だが、気付いた時には私の胃の中だぞ」

ジャンナイン「お前には心があったはずだ…。誰かを助ける優しい心が…。その心も演技だったと言うのか?!？」

ホープス「そうだ、ジャンナイン。私に心などない」

ジャンナイン「いいや！君には確かに心があった！僕がお前の心を取り戻してやる！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSホープス〉

ホープス「レイとゴモラ…確かにいいコンビだ」

レイモン「ホープス…お前も世界を危険に脅かす悪だったんだな」

ホープス「レイオニクスも似たような者だろう？怪獣を使役し、世界を滅ぼす」

レイモン「俺はレイオニクスの遺伝子には負けない！そして、お前にも負けるつもり

はない！必ず、平和を勝ち取って見せるんだ！行くぞ、ゴモラ！」

EXゴモラ「キシヤアアアアン!!？」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSホープス〉

ホープス「お前達の力は理解している。手を抜く気はないぞ、グランデ、レッドキング」

グランデ「嬉しい事を言ってくれるねえ、ホープス。だが、お前は一つだけ理解していない事があるぜ」

ホープス「何だ、それは…？」

グランデ「俺達に喧嘩を売ったらタダじゃ済まないって、事だよ！お前は終わりだ、ホープス！やろうぜ、レッドキング！」

EXレッドキング「ギヤアアアアン!!？」

〈戦闘会話 アーニーVSホープス〉

ホープス「お前は以前と変わったと聞く。何がお前をそこまで変えた？」

アーニー「仲間達の存在…。そして、守るべき存在のおかげだ」

ホープス「それがアルティメット・クロスか。いいだろう、アーニー。ならば、お前

の全力をぶつけて来い」

アーニー「言われなくともそうするさ！これは仕事なんぞな…悪く思うなよ！」

〈戦闘会話 サヤVSホープス〉

ホープス「クールに見えて、情に熱いのは知っているぞ、サヤ」

サヤ「だから、何ですか？ホープスさん。その様な事は戦闘には関係ありません」

ホープス「それもそうだな。では、戦闘を始めよう」

サヤ「はい。裏切り者のあなたを許す程、私は優しくはありませぬので…！」

〈戦闘会話 リチャードVSホープス〉

ホープス「せっかく生き返ったのにまた喰われて、死ぬ事になるとはな、リチャード」

リチャード「全く…お前の企みに気がつかなかったなんて…俺も甘くなつたな」

ホープス「悔いるのは私に喰われてからにしてもらおうか」

リチャード「いや、お前さんを倒して、汚名挽回といこう。何しろ、輝かしい未来を

お前さんに渡すわけにはいかんのでな！」

〈戦闘会話 ジン「UX」VSホープス〉

ホープス「人生を狂わされ、友人と戦わされ、新たな力を得た…お前の人生は騒がしいな、ジン」

ジン「UX」「だが、俺はその人生から逃げる事なく、生きている。そして、これからも生き続ける」

ホープス「それがお前の決めた道か…。だが、お前の道はここで終わりだ」

ジン「UX」「勝手に俺の人生の終わりを決めるな！お前にも教えてやる…生命の意味を！」

〈戦闘会話　アウルVSホープス〉

ホープス「生命に目覚めたアウルの力…試してやる」

アウル「ホープスさん…。あなたに…お母様や皆さんの愛する世界を好きにはさせません！」

ホープス「勇ましいな。ならば、勝負だ。…世界と人をかけたな」

アウル「絶対に負けません！私はジンと…皆さんと未来へ進みます！」

〈戦闘会話　零VSホープス〉

ホープス「零、アスナ、ゼファイ…。お前達との付き合いも長くなつたが…。それもこ

ここで終わりだ」

アスナ「ホープス…あなたはどこまで人を…！」

ゼファイ「…ホープス先輩…」

零「…行くぞ、アスナ、ゼファイ…。ホープスを…倒す…！（戦う事がお前の望みなら…俺はそれを叶える…！）」

ホープス「来い、零！これでお前との対決も決着だ！（ふっ、やはり零も私の思惑に気がついたか…。ありがとう、零…）」

零「終わりだ、魔獣ホープス！アル・ワースも全ての世界と人々も…お前には渡さない…！」

〈戦闘会話 弘樹VSホープス〉

カノン「ホープス…これがあなたの望んだ結末なんですね…！」

ホープス「その通りだ、カノン。お前達は私のシナリオ通りに事を運んだのだ」

弘樹「信じねえぞ、ホープス！お前は人を小馬鹿にして、何考えているか、わからない奴だったか…誰かを悲しませる事だけはしなかった！」

ホープス「相変わらずバカだな、弘樹。それも私の演技だ」

弘樹「バカって言うな！それも演技なんじゃねえのか!?俺にはそうしか思えないん

だ！だから、本当の事を聴くためにお前を止めてやる…覚悟しやがれよ！」

〈戦闘会話　優香VSホープス〉

メル「ホープス先輩…私はあなたの事を凄いと思っていました…。種族は違えどもアマリさんに恋をして…私達を何度も助けてくれました…。それなのに…」

ホープス「メル…」

優香「これがメルちゃんの本当の思いなのよ、ホープス！これを聞いても、何も思わないの？！」

ホープス「所詮は餌の戯言だ、優香。こんな言葉では私の心は揺るがない」

優香「許さない…！アマリちゃんやメルちゃんを泣かせた事…後悔させてやるから！」

〈戦闘会話　マリアVSホープス〉

ホープス「マリア…零やハデスと共に喰われるがいい」

マリア「食べられるつもりはないわ…。少なくとも、ネメシスを倒すまでは死ねないもの！」

ホープス「…ネメシスも私の餌となる。安心しろ」

マリア「誰も安心できないわよ、そんな事！あなたに頼らずとも私達はネメシスに勝ってみせるわ！その前にあなたを倒してみせるから！」

〈戦闘会話 ラゴウVSホープス〉

ホープス「オニキスのエースがエクスクロスに入るとはな」

ラゴウ「後悔はしていない。俺はここで仲間の素晴らしさを知った」

ホープス「仲間など…美味しくとも何ともない存在だ。そんな事よりも私と勝負しろ、ラゴウ」

ラゴウ「いいだろう、ホープス。まだネメシスが残っている…お前を倒し、俺達は前へと進む！」

〈戦闘会話 ギルガVSホープス〉

ホープス「ギルガ、リン…。お前達の存在には驚かされたぞ」

リン「私もあなたの野望には驚かされたわ」

ギルガ「君もたちの悪い存在だったのだね」

ホープス「お前に言われてはおしまいだな」

ギルガ「酷いなあ…。まあ、話はこのぐらいにして…終わらせようか。僕は世界の素

晴らしさを知ったんだ。そんな世界を君に食べさせるわけにはいかないんだ！」

俺達の攻撃で魔獣ホープスはダメージを負った…。

ホープス「ぐっ…！」

アマリ「ホープス！負けを認めなさい！」

ホープス「…そうだな、マスター…。やはり、エクスクロスは強かった…」

ホープス…。

すると、辺りに次元境界線の歪曲が起こった。

リーロン「次元境界線、急速に歪曲！」

ロージェノム「残念だ…。どうやら、アル・ワースは終わるらしい」

ダヤツカ「俺達は…どうする事も出来ないのか!?!？」

アマリ「ホープス！」

ホープス「敗者は潔くなければならない。私の知る限りを伝えよう」

アイーダ「そうやって、また私達を騙す気ですか!?!？」

零「早くしろ、ホープス!!？」

アマリ「ホープス、お願い!!？」

ジン「UX」「零、アマリ……」

ホープス「全ての生命の想いを背負った皆が願うんだ。このアル・ワースの未来を……」
ワタル「全員で願う……」

ホープス「その想いの力が魔獣エンデの強大な意思の代わりにこのアル・ワースを存在させる。エンデを……そして、私を倒した皆ならきつと出来るはずだ」

シモン「いいか、みんな！俺達……いや全ての生命の想いを集めてアル・ワースの未来を創るんだ！」

ノブナガ「やるしかない！俺達の全てを懸けて！」

アマリ「今こそ想いを一つに!!？」

俺達は想いの力を一つにした……だが……。

アユル「ダメです！崩壊が止まりません!!？」

デイン「ここまでなのか……！」

ホープス「心配はいらない」

ホープス……!!？」

ホープス「足りない分は私が何とかする」

イオリ「ホープス……！」

簪「負けたから、こっちに協力するの？」

ノブナガ「そうじゃない」

ルルーシユ「ホープスは、我々の敵になったのではなかったのだ」

零「お前は…初めから全て…」

ホープス「…ノブナガ様、ルルーシユ様、零…。やはり、あなた達の目は誤魔化せませんでしたね…。それとマスターも…」

スカーレット「何だと…?!?!」

由木「そうなの、アマリ?!?!」

アマリ「ええ…。何となくですが、わかっていました…。でもどうして、ホープス？ どうして、あなたは私達と戦ったの？」

ホープス「…まずは私の考えに乗ってくれたマスターに感謝いたします。私に害意がない事をエクスクロスの皆様が知ってしまったら計画の全てが台無しになったでしょうから」

プリシラ「じゃあ、私達の想いを食べるって話も嘘だったの?!?!」

ホープス「それは本当の話です。私の本質は、魔獣エンデとそう変わりませんから。ですが、一つ大きく違うのは奴と私の味の好みです。皆様と過ごしたせいでしょうか…。私は悲しみや痛みよりも愛や希望が好きになったのです…」

イオリ「エンデとは、まったく逆……」

ホープス「私はアル・ワースを守りたかった……。だが、幼体である私の意思だけでは力が足りなかった……。だから、マスター達の敵となったのです。愛と勇気と希望で戦うエクスクロスの想いを直接吸収するために」

ゼロ「馬鹿野郎！なんで、ちゃんと説明しなかったんだよ!!?」

レイモン「そうすれば、お前と戦う必要なんて……」

ホープス「必要だったのです。絶望的な状況を乗り越える、皆様の想いを私が食い、力とするために……」

アマリ「何をやる気なの、ホープス!!?」

零「……お前、エンデの代わりにアル・ワースを支える気じゃねえだろうな」

ホープス「その通りだ」

弘樹「そんな事、出来るのかよ!!?」

ホープス「私という存在は失われるでしょうが」

アスナ「それって死ぬ事と同じじゃない!」

メル「待ってください、ホープスさん!」

優香「そんな事ってないよ!」

ホープス「引き留める必要などありません。これが私の選んだ道なのですから。故

に覚悟は出来ています」

ゼファイ「ホープス先輩！」

ホープス「ゼファイ、これからお前の笑顔で零やマスターを支えて欲しい…。頼めるか？」

ゼファイ「…ズルイですよ、ホープス先輩は…。そんな…そんな事…。大好きなホープス先輩の頼みを断れるわけじゃないじゃないですか！」

ホープス「お前は本当にいい子だ」

零「ホープス…この…バカオウムが…！」

ホープス「最後の最後まで…私の事をしっかりと呼ばないとはな、零」

零「お前は…いつも勝手すぎるだよ…！」

ホープス「ふっ、零…お前は…いつまでも私の永遠のライバルだ」

零「…ありがとうな、アマリの事…アル・ワースの事…」

ホープス「それは私の台詞だ。ありがとう、零。お前に出会えて、良かった…。マスターをよろしく頼む。我が永遠のライバル…そして、最高の友人よ…」

零「バカ野郎…！」

アマリ「ホープス…」

ホープス「泣かないでください。マスターの涙は見たくありません。言った通りで

す。私は悲しみや痛みよりも愛や勇気や希望が好きなのですから」

アマリ「愛や勇気や希望……」

ホープス「私の食欲はエクスクロスで過ごす事で十分に満たされました。エンデのよ
うに戦乱を起こさなくてもこんなにも美味を堪能できたのです。思い残す事はありません。
……というのは嘘で、本当はマスターに未練たっぷりですけどね」

アマリ「だったら……!」

ホープス「でも、ダメなんです。私の使命は、マスターを守る事ですから。そして、私
自身の中に愛という感情があるからこそ、幼体でありながら、あの卑しい獣の代わりが
出来るのです」

アマリ「待って、ホープス! せめて、もう少しだけ……」

ホープス「ありがとうございます、マスター。あなたのくれたホープスという名……凄
く気に入っています」

アマリ「ホープス!!?」

ホープス「我が名はホープス! その名を胸に、もう一度アル・ワースを創造する!!?」
ホープスから光が放たれ、俺達は光に包まれる。

ホープス「(さようなら、マスター、零……。そして、ありがとう……)」
こちらの台詞だ。ありがとう、ホープス……。

光が消えると、宇宙のヒビとエンデの肉体が消えていた…。

マスク「崩壊が止まった…」

ロツクパイ「という事は…」

キア「アル・ワースは…救われたって事だな」

マニイ「でも…」

バララ「ホープスが…」

アマリ「…」

零「アマリ…」

アマリ「大丈夫です、皆さん。ホープスは…ホープスはいつでも私達を見守ってくれています」

イオリ「そうだな…」

見守っていてくれ、ホープス…。俺達の未来を…。

…！この気配は…！

ネメシス「まさか、エンデまで倒しちまうとはな…。やっぱり、俺の目は間違っていないなかつたようだな、エクスクロス！」

零「ネメシス…！」

ネメシス「まさか、あのオウムがあんな形でアル・ワースの崩壊を止めるとはな。さ

てと…いよいよ、ラストステージへ案内する時だな…だが、そこへ行けるのは全員じゃねえ！」

弘樹「全員じゃねえ…だと…!?？」

優香「どういう事なの…!?？」

ネメシス「無駄話はしない主義なんだな…。さあ、ご招待だ！」

ネメシスが指を鳴らすと、辺りが歪み始めた。

零「これは…！」

イオリ「時空が歪む…!?？」

ゼファイ「何をするつもりですか、ネメシス!?？」

ネメシス「今にわかる。俺という名の…ラスボス戦の舞台がな！」

俺達は光に包まれる。

アマリ「零君！」

零「アマリイイツ!!？」

その後、俺達は完全に光に飲まれた…。

最終話

絆の光（前編）

―天野 亜真利です。

私は伊織君達といつもの様に学校で話していました…。

弘樹「はあ…漸くテストが終わったぜ…」

花音「弘樹さん、結果はどうだと思えます？」

弘樹「聞かないでくれ…」

芽流「これは、また補修のパターンですね」

優香「ねえ、弘樹。今度赤点だったら、パフエ奢ってもらうからね」

弘樹「無茶言うなつての?!?」

亜真利「伊織君は? どうだったの?」

伊織「問題ないさ。亜真利が教えてくれたおかげだ」

亜真利「どういたしました! そうだ! 夏休みにデートでも行きましょう!」

伊織「あ、ああ。そうだな!」

弘樹「お、いいなそれ! みんなで行こうぜ!」

花音「そうですね。おそらく弘樹さんは補修ですが」

弘樹「クソっ！何で俺は頭が悪い人生なんだ！」

伊織「自分のせいだろ」

亜真利「…あ」

伊織「亜真利…？」

亜真利「あ、ごめんなさい…。何かを忘れている様なその様な気がするの…。でも、大丈夫！伊織君達が側にいてくれるから！」

伊織「そうだな」

今の私は幸せです…。でも…どうしてこんなに悲しくなるのでしょうか…。忘れてはいけない事を忘れている…そんな気がします…。

最終話 絆の光

―新垣 零だ。

俺は目を覚ますとある宇宙にいた…。

零「ここは…？つ…！アスナ、ゼファイ、起きろ！」

アスナ「う、うん…？零…？」

ゼファイ「パパ…ここは何処でしょう…？」

零「わからない…」

ギルガ「零、目が覚めたのかい…？」

零「ギルガ！リンもいるのか！」

リン「ご無事で何よりです！」

零「ギルガ、ここは何処なんだ？」

ギルガ「すまない、僕達も先ほど目を覚ましたんだ。ここが何処かまでは…」

アスナ「待って、零！あれは…！」

あれは…地球…？

零「地球…だと…？」

ゼファイ「と言う事は…ここはアル・ワースではないのですか…？」

ギルガ「どう見ても偽物ではないからそうだと思うけど…」

リン「ギルガさん、皆さんがいません！」

ギルガ「何…？」

たしかに……いるのはゼフィルスネクサスに乗る俺達とアマテラス・ツヴァイに乗るギルガ達だけしかない……!??

ゼフィ「ママ……!?? どうしていないのですか!??」

零「ネメシスの仕業か……!?? まさか、別の世界に跳ばされたのか!??」

アスナ「無事だといいのだけれど……」

ネメシス「ラストステージへようこそと言っておくぞ、お前等！」

現れたのはガルム、グレモリー部隊とアルガイヤ・ノヴァが現れた……。

リン「ネメシス……！」

零「お前……！他のみんなをどうした!??」

ネメシス「他の奴らか？元の世界に戻って平和に暮らしてるよ」

アスナ「何ですって……!??」

ネメシス「お前達以外の奴等にはちよいと偽りの記憶を与えてやったぜ」

ギルガ「偽りの記憶……？」

ネメシス「ああ。魔獣ホープスを討ち倒し、アル・ワースに平和が訪れましたとき……めでたし、めでたし……ってな、感じで奴等からお前達や俺の存在を消し、魔獣ホープスを倒して、平和を迎えたって事にしたんだよ」

ゼフィ「そ、そんな……！」

ネメシス「後、アマリとイオリは平穩の世界に戻し、晴れて二人は恋人同士となりましたとき」

アスナ「アマリとイオリが…恋人同士に…」

零「アマリ…！」

ゼファイ「ママ…」

ギルガ「零…ゼファイちゃん…。ネメシス、君と言う奴は…！」

リン「ラストステージとはどう言う事？」

零「そもそもここは何処なんだ？」

ネメシス「何処だって…おいおい、零。そりやねえだろ。お前が暮らした世界なのだよ」

零「…まさか!?？」

アスナ「平穩の世界だと言うの…!?？」

ネメシス「ご名答！お前達からしたら、いい舞台だろう？」

ギルガ「何故、平穩の世界がラストステージなんだい？」

ネメシス「そうだな。ラストステージまで来れた褒美だ、話してやるよ。意思が大きな力を持つ異世界、アル・ワース…。そのアル・ワース内では様々な種族が存在し、それぞれ文明を築いていった…。同時に沢山の争いを…。そして、アル・ワースを中心

に複数の世界も多くの戦いが起こった…。そこで俺はある世界に目をつけた。それがこの平穏の世界だ。この世界だけは争いが起こらず、平和な日常を続けている…」

零「平和な日常…」

ネメシス「この平穏の世界もアル・ワースと同等の力が秘められていると知った俺はその力に目をつけた…」

ゼファイ「世界の…力…?」

ネメシス「世界には必ず大きな力が眠っている…。だが、その力は戦いの始まりにより、世界中に拡散される…。そして、人類のみならず様々な種族は力を得る…。それならば、争いが起こらない平穏の世界の力はどうか? 解放されないが為に力だけが蓄積されていく…。そして、その力はすべての世界を滅ぼす程のエネルギーを秘めているんだよ」

ギルガ「全ての世界を滅ぼす程のエネルギーだと…?!?」

零「ネメシス…お前の狙いは…!」

ネメシス「そう。そのエネルギーを手に入れ、俺は更なる力を得る! 本当の神に等しい存在になるんだよ!」

零「神…?!?それとお前のゲームと何の関わりがある?!?世界のエネルギーが欲しければ、お前なら簡単に手に入れられるはずだ!」

ネメシス「それじゃあ、たのしくねえだろ？正義のヒーローが全ての世界を守るため、俺からそのエネルギーを守る為に世界をかけて戦う…。そして、そのヒーローが俺という悪魔との最終決戦を全ての計画のこの世界で行う」

ゼフィ「もし、私達ではなく、他の組織がこの場に來た場合は、どうするつもりだったんですか!!？」

ネメシス「いや、他の奴らが勝った場合はゲームはその場で終わり…この世界にも呼ばなかったよ。だってよ、悪対悪なんでもの見た目も面白くないだろ？その場合はすぐその場に奴等を潰し、エネルギーをもらっていたさ」

ギルガ「では、君は…僕達が全ての組織に勝利する事を読んでいたとも言うのか!!？」

ネメシス「その通り」

リン「それなら、どうして私達だけでエクスクロスの全員をこの場に呼ばなかったのか!!？」

ネメシス「いやー、呼ぼうとしていたんだが流石にお前等全員を相手にするのは面倒だったからな。俺が強敵と認めた奴だけ呼ぼうと決めたんだ」

ギルガ「待つんだ！ゼフィルスネクサスに乗る零達はわかる…。何故、僕達まで…!!？」

ネメシス「はあ？ 忘れたわけじゃねえだろ、ギルガ？ 俺はお前に騙されたんだぜ。本気でな。その件で俺の強敵になりうる存在ってわかったんだよ」

リン「私達まで目をつけられたなんて…」

ネメシス「お話は終わりにしようぜ。ゲームの内容を簡単に説明すると、俺はお前達を倒し、エネルギーを手に入れ、全ての世界を滅ぼす。お前達はそれを阻止すりゃいいんだよ」

零「ネメシス…わかり合う事はできないのか？」

ネメシス「…おいおい、ここまで話し合いで終わるわけないってのはお前が一番知っているだろ？ そろそろ、エメラルド家ともケリをつけたいんだよ！」

アスナ「零！」

零「わかってる！ 俺達だけだろうと俺達は負けない！ アマリ達が元に戻る事を信じているからだ！」

ネメシス「確かに、お前達は何度も奇跡を起こしてきた…。だが、もうそんな奇跡は起こらねえよ！」

零「奇跡は…起きるものじゃない！ 起こすものだ！ それを教えてやるよ！」

戦闘開始だ…！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

アスナ「零、ここが正念場よ！」

ゼフィ「ママ達の分まで私達は戦います！」

零「ああ！最後まで力を貸してくれ！（そう、最後のその時まで……！）」

〈戦闘会話 ギルガVS初戦闘〉

ギルガ「まさか、僕達までネメシスのお気になりになっていたとはね」

リン「ギルガさんの作戦のおかげです。ギルガさん、最後まで一緒ですよね？」

ギルガ「当たり前さ。これからもずっと、僕がリンちゃんを守る……。だからこそ、この戦い、負けるわけにはいかないよ！」

戦闘開始から数分後の事だった……。

ネメシス「たった2機で粘るじゃねえか」

ギルガ「言ったはずだ！僕達は負けないと！」

アスナ「どれ程の敵を出そうと私達は負けないわ！」

ネメシス「それなら……こういうのはどうだ？」

現れたのは…今まで戦ってきた無人機やロボット怪獣、量産機…!!?」

アスナ「今まで戦ってきた雑魚の敵達…!!?」

ネメシス「俺の力で復元してやったよ。何なら、バースデイやビート・スターなどの
奴等も出せるぜ」

リン「そんな…!!?」

ギルガ「その様な嘘に騙されるとでも思っているのか…!」

ゼファイ「…ネメシスの力なら、可能です…!」

ネメシス「流石はゼファイだな。俺の事をよくわかってるな!」

零「…」

アスナ「そうだとしても私達は退くつもりはないわ!」

ゼファイ「そうです! 私達を舐めないでください!!…パパ?」

零「…ネメシス…。ようはお前を倒せば、世界は救われるんだよな?」

ネメシス「ん? ああ、そうだぜ」

零「…そうか」

アスナ「零…?」

零「リン…。お前と関わった時間は少ないが、俺はお前を大切な仲間だと思っているぞ。…ギルガと仲良くな」

リン「えっ……!?」

零「……ギルガ、お前には本当に迷惑をかけられたぜ……。お前のせいで何度死にかけた事か……。でも、少しだけでも、お前と共に戦えて、良かったぜ。リンを守ってやれよ」

ギルガ「君は……まさか……!?」

零「アスナ……。ごめん、お前を泣かせてしまって……。でも、お前が側にいてくれたおかげで……お前が寄り添ってくれたおかげで何度も立ち上がれた事もある……。元気でな」

アスナ「零……何を言っているの!?」

零「ゼファイ……。お前は、最高の娘だ。俺とアマリの自慢の娘だ。だから、これからも生きてくれ……。そして、大きくなって、俺の変わりにママを……アマリを守ってくれ。大好きだ、ゼファイ……。アマリを頼むな」

ゼファイ「パパ……嫌です!」

零「みんな……ここまでありがとう……。ここからは俺がやる」

ギルガ「ふざけるな!君一人で背負い込む必要はない!僕達だって……!」

零「世界には……アル・ワースには、お前達が必要だ。生きてくれ」

アスナ「嫌よ……!そんなの……!零!」

リン「零さん、待ってください!零さん!」

零「…じやあな」

俺はアスナ達に転移の力をぶつけた…。

ゼファイ「ダメです、パパ！そんなの…そんなの！」

零「最後まで…勝手な父親で悪いな、ゼファイ。愛してる」

ゼファイ「パパ…！パパアアアアアツ！！？」

俺の言葉を最後にゼファイとアスナは平穩の世界の地球へ、ギルガとリンはアル・ワースへ転移していった…。

ネメシス「最後まで戦わせてやらねえのか？俺はお前がいればどつちでもいいが」

零「…保険さ、俺を無茶するためにはゼファイ達がいては出来ないからな」

ネメシス「その覚悟は褒めてやるよ。だが、お前一人でこの数に勝てると思ってるのか？」

零「…さあな」

ネメシス「…珍しいじやねえか。お前が勝つ自信を言わねえとは…。現実は見えてるみたいだな」

零「だが、抵抗はやめねえ…。俺がここにいる限りな！」

戦闘再開だ…！

〈戦闘会話 零VS初戦闘〉

零「久しぶりだな…。一人で機体を動かすのは…。もし、世界が平和になっても…。俺はその世界を見れるかわからない…。だが、まだ死ぬ気もない…。だから、ゼファイ、アスナ、ギルガ、リン…頼んだぞ…！」

分かってはいたが…一人でやるのには相当負担がかかるな…！俺がどれだけ、エクスクロスのみんなに頼っていたのかがわかる…。

ネメシス「おい、零。そろそろきつくなつて来たんじゃないやねえのか？」

零「はっ、まだまだここからだ！」

ネメシス「気負うのは勝手だが、ゲーム終了も間近だぜ」

零「…」

ネメシス「ほら、お前等…零にトドメをさせ！」

ネメシスの配下の機体達がゼファイルスネクサスに向けて、一斉砲火を放った。

零「うわあああああつ！」

一斉砲火を受けて、ゼファイルスネクサスと俺はダメージを受ける。

零 「まだだ……！俺はまだやれる……！」

ネメシス 「ほう、粘るな。だが、いつまで保つかな？」

零 「俺は……！」

アマリ……ゼファイ……みんな……！

―天野 亜真利です。

私達は弘樹君達と別れて、伊織君と下校していました。

伊織 「亜真利、デートの場所は何処がいいんだ？」

亜真利 「うーん、遊園地かな……。最近行けてないしね」

伊織 「じゃあ、弘樹達と行くのとは別に二人で行こうか」

亜真利 「うん！」

伊織君とのデート……楽しみだな。

ゼファイ 「ママ！」

女の子……？

ゼファイ 「漸く見つけました！ママ、イオリお兄ちゃん！パパが戦っています、行きま

しよう！」

亜真利「え、え？ママって…私の事ですか?!?誰かと勘違いしていないですか？」

伊織「迷子かな？一緒にお母さんを探そう」

ゼファイ「そんな…。今、パパは世界やママ達の為に必死に戦っています！それなのにママ達はそれでいいのですか?!?」

伊織「すまない、君の言っていることがよくわからないのだが…」

ゼファイ「ママ…。どうして…私もパパもママが大好きです！思い出してください！」

亜真利「ごめんね、あなたと会った事はないの。…お巡りさんの所に行きましょう？きつと、お父さんが待っているわ」

ゼファイ「…私では…ママを救い出す事は出来ないのですか…?」

?「いいえ、ゼファイ…。あなたは十分に戦ったわ」

ゼファイ「こ、この声は…」

突然、女の人が見れました…。

マリア「ゼファイをここまで悲しませるなんて、零には後で叱らないといけないわね」

ゼファイ「お婆ちゃん！」

マリア「後は私は任せなさい…。アマリ、イオリ…。あなた達の零の記憶はそれ程のモノなの？」

亜真利「…これ、い…?」

伊織「…!」

マリア「私が思い出させて、あげるわ。あなたは零の大切な彼女だもの…!」
女の人が私達に向けて、ある光を放ちました…。

その光に触れると、次々と記憶が蘇ってきます…。

零君との出会った時の事、アル・ワースへ転移させられた時の事、教団を抜け出した時の事、零君に告白された時の事、ゼフィちゃんと出会った時の事…そして、ホープスとの別れの時の事…。

伊織「そうだ…!俺は、葵 伊織であり、イオリ・アイオライト…!」

亜真利「私…どうして、忘れていたの…?大切な人で…絶対に忘れてはいけない人…。零君…!」

ゼフィ「ママ…!」

アマリ「ごめんね、ゼフィちゃん。大切な娘を忘れるなんて、母親失格だよね」

ゼフィ「そんな事ないです!思い出してくれただけでも…!」

イオリ「そうだ!弘樹達の下へも行かないと!」

マリア「大丈夫よ、イオリ。彼等の下にはアスナとあの人が行っているから…」

あの、人…?

ーアスナ・ペリドットよ。

アマリ達をゼフィに任せ、私は弘樹達の下へ来たわ。

アスナ「探したわよ、みんな！零が待っているわ、行きましょう！」

芽流「え、え…？待っている…とは？」

弘樹「それに零って、誰だよ！！？」

アスナ「ふざけないで！あなた達が一番、忘れてはダメな名前なのよ！」

花音「そ、その様な事を言われても…」

優香「それに、あなたは一体…？」

私の事まで忘れているなんて…！

？「今の彼等に何をしてても無駄だ」

アスナ「えっ…！！？」

こ、こいつは…！！？」

アスナ「ハデス…エメラルド…！！？どうしてあなたが！！？」

ハデス「ネメシスではないと見破ったか、流石だ。安心してくれ、私はもう君達の味

方だ」

アスナ「…信じるわ。零の本当の父親なもの」

ハデス「…ああ、ありがとう。…零の友情を壊させるわけにはいかない。これで私の罪が消えるわけではない…。だが、少しでも息子の為になるのなら…！」

ハデスが光を出し、弘樹達に浴びせた…。

芽流「あ、暖かい光です…！」

弘樹「…つたく、何で忘れちまっただのかな…。本当にバカだな、俺は…！」

花音「はい。私達には忘れてはダメな人がいます…！」

優香「うん…。早く、零を助けないと…！」

みんなの記憶が元に戻った…！

ハデス「行こう、エクスクロスのみんなも待っている」

アスナ「ええ…！」

待っていてね、零…！

ーラゴウ・カルセドニーだ。

何だ…この胸にポツカリと空いた穴は…俺は、なにかを忘れてしまっているのか…？

ハデス「そう、兄さんは忘れてしまっているのだよ。永遠のライバルを」
ラゴウ「お前は…?」

ギルガ「酷いなあ、僕だよ。兄さんの弟のギルガ・カルセドニーだよ」

ラゴウ「ギルガ…カルセドニー…。俺の弟…。そうだ…俺のライバルの名は…新垣零…！俺がはずれ、超えるべき壁…！」

リン「自力で記憶を戻すとは…流星はラゴウ様です」

ギルガ「兄さん、行こう。まだ戦いは終わっていない」

ラゴウ「だが、ここからどうやって出るつもりだ？」

ギルガ「僕達の仲間にはいるじやないか。どんな空間、壁でも突き破るドリルを持つ男が！」

他のみんなも集まりつつあるだろう…。零、君だけにいい格好はさせないよ…！

―新垣 零だ。

何度も一斉砲火を受けて、ゼフィルスネクサスも俺もボロボロになっていた…。

ネメシス「そろそろ年貢の納め時だぜ、零！」

零「ぐっ……！」

ネメシス「トドメは俺の手で刺してやるよ。…あばよ、零！永遠にな！」

？「零の終わりを勝手に決めてんじゃねえ！」

突然、叫び声と何かが回転する音が聞こえた…。

間に合ったんだな…！

ネメシス「なんだこの音は…？何かが回転する音…まさか…！」

零「そのまさかだ。…天を貫く螺旋の男が…お前の作った偽りの空間を突き破るんだよ！」

シモン「うおおおおおっ！」

空間の一部に穴が開き、そこからギガドリルブレイクを発動したグレンラガンが現れる。

それと同時に空間がひび割れ、破壊されるとそこにはゼルガードとエクスクロスの全艦がいて、みんなが出撃してきて、ゼフィルスネクサスの中にはアスナとゼフィも現れる。

弘樹「零、無事か!?？」

優香「助けに来たよ！」

零「…遅いよ、全く…！」

ルルーシユ「すまない、お前を思い出すのに少々時間がかかってしまった」
アマリ「零君、大丈夫!? もう、また無茶して!」

零「悪かったよ、アマリ。でも…またみんなと出会えてよかった」

ネメシス「何故だ…俺の力がそう簡単に破れるなど…!」
すると、スペリオルとアルガイヤが現れた…。

ハデス「我々を侮ったツケだ、ネメシス」

ネメシス「お前は…ハデスか!俺の操り人形だった奴が今更何の用だ!」

ハデス「お前の操り人形だったからこそ、お前を止めなければならぬ…。零の為、マリアの為、オニキス皆の為、そして何より…世界の為に!」

マリア「零、無事そうよかったわ」

零「母さんも無事だったんだな。…それから…」

ゼファイ「…パパ、お爺ちゃんは私達を…」

零「わかつているよ、父さん」

ハデス「こんな私を…父と呼んでくれるのか?」

零「当たり前だろ?父さんは父さん!それだけだ!」

ハデス「…ありがとう、零」

マリア「零…ハデス…」

ネメシス「へえ、家族勢揃いってわけか。面白くなってきたじゃねえか！」

メル「ネメシス、今度は私達全員で相手になります！」

リン「覚悟しなさい！」

カノン「必ず、あなたを討ちます！」

ネメシス「やってみやがれよ、エクスクロス！ラストゲームの開始だ！」

倉光「みんな、この勝負…絶対に勝つよ！」

ネモ船長「全機全艦突撃…！今こそ、全ての世界を救うぞ！」

カミーユ「了解！」

ジユドー「やってやるぜ！」

零「…勝負だ、ネメシス…！全てをかけた最後のな！」

戦闘…開始だ！

〈戦闘会話 万丈VSネメシス〉

ネメシス「たった一人、アル・ワースに召喚されて、寂しいだろう、万丈？死ぬ前に他の仲間も呼んでやろうか？」

万丈「いいや、結構だ。この世界にはルルーシュやシヨウ、ヒイロ達も跳ばされてい

る。だから、一人ではないよ」

ネメシス「そうか。それなら心置きなく消える事が出来るな」

万丈「消えるのはお前の方だ、ネメシス。僕はお前の様な奴を許すつもりはない！」

〈戦闘会話 ショウVSネメシス〉

ショウ「お前の企みもここまでだ、ネメシス！」

ネメシス「いいか、聖戦士？俺を倒した所で来るのは一時期の平和だけだ。世界にオーラ力というものが存在する限り、戦争は終わらないぜ」

バーン「そうかも知れんな。だが、我々はオーラ力の可能性を信じている」

トッド「そういう事だ。そもそもお前の話なんぞ、初めから聞く気はないんだよ！」

マーベル「あなたに見せてあげるわ。人間の…愛と想いの力を！」

ネメシス「愛…愛か。そんなもので世界を救えているのなら、世界は既に平和だと思うがな」

シルキー「いいえ、あなたは愛の素晴らしさを何もわかっていません！」

チャム「誰かが誰かを想って、応援したり、祈る…。それだけで大きな力になるの！それがわからないあなたじゃ、ショウには絶対に勝てない！」

シーラ「消えなさい、下郎。あなたの存在は我々が許しません」

シヨウ「ネメシス、お前の邪悪なオーラは俺が断つ！そして、教えてやる…。愛の力が究極を越えると！」

〈戦闘会話 エイサツプVSネメシス〉

ネメシス「何度話し合おうと人は結局、武器を取る。戦争は繰り返されるってことさ」
朗利「うるせえよ、お前が勝手に決めるな！」

金本「確かにすぐには武器を捨てる事は無理かも知れない…。でも、俺達には沢山の時間があるんだ！」

アマルガン「そして、我々のすべきことは人々が武器を捨てるまでに死者を出さぬ事だ」

エイサツプ「みんな、それぞれの目的で戦っている！生命をゲームの様に弄ぶお前にはわからないだろうな！」

サコミズ「そう、平和な世界に貴様の存在は不要だ」

リユクス「消えなさい、外道…。全ての邪悪なオーラと共に！」

ネメシス「俺は消えねえよ！消えるのは世界の方だ」

エレボス「本当に最後まで分かんず屋だね…！」

エイサツプ「口で言ってるわからない奴の対処は慣れてる！世界を消させない…全て

の世界を守ってみせる！」

〈戦闘会話　カミーユVSネメシス〉

ネメシス「もう恐怖に怯える必要はねえぜ。なんて言っただって、仲良しな奴ら全員、結局は世界と共に滅びるんだからな！」

ファ「あなたは…世界を何だと思っているの!?!」

カミーユ「ファ、あいつに何を言っても無駄だ」

ヤザン「そうだぜ、相当な分からず屋だからな」

ネメシス「その通り、お前達が俺を理解しない様にな！」

カミーユ「お前を理解する日なんて来ない！戦争を遊びだと思っているお前をな！戦争は…遊びじゃないんだよ！」

〈戦闘会話　ジュードVSネメシス〉

ネメシス「ガキに戦争させるなんて、酷い世の中になったものだな」

マシユマー「そうだな。子供を戦わせるのは間違っている」

ハマーン「その様な世の中にしてしまったのは我々のせいでもある」

グレミー「だが、彼等がいてくれるから、戦いだけでなく、話し合いという道も見つ

けられる」

ラカン「フン、本当に厄介な奴等だ」

エル「なんか、色々言われているけど…」

ルー「関係ないわ。私達は私達でやるだけよ！」

ビーチャ「おうよ！シヤングリラ魂、見せてやろうぜ！」

ジユドー「ルーやビーチャの言う通りだ！俺達は戦わされているんじゃない、自分の意志で戦っているんだ！」

プル「だから、ジユドーは負けない！」

プルツ「そして、私達も負けるつもりはない！」

ネメシス「ヤンチャもここまでいくと考えるものだな！それなら、力で分からせるしかないねえな！」

ジユドー「そういう奴が一番、俺達は嫌いなんだよ！あまり、俺達を舐めるなよ！」

〈戦闘会話 アムロVSネメシス〉

ネメシス「ガンダム歴史はお前達から始まった…つまり、お前らが戦争を引き起こした本人でもあるって事か！」

ギユネイ「勝手な事を言うな！大佐やアムロは悪くない！お前達のような歪んだエゴを

まき散らす奴等がいるからだだろうが！」

アムロ「お前も戦争の被害者なのかも知れない。だが、その被害者が戦争を引き起こしてどうする!?」

ネメシス「何度も言わせんなよ。これはゲームだ！俺が楽しむ最大の娯楽なんだよ！」

シャア「何を言っても無意味だろう。彼の頭からゲームという単語が抜ける事はないだろうからな」

アムロ「ならば、お前の様な邪悪なエゴを持つ奴を俺は見逃さない！終わらせてやるぞ！」

〈戦闘会話 バナージVSネメシス〉

フロンタル「ネメシス、お前の野望が潰える時だ」

アンジェロ「消えろ、その歪んだエゴと共に！」

ネメシス「へえ、歪んだエゴを持っていたお前達がそれを言うか？」

リディ「だが、俺達は変わった：バナージと言う存在によって！」

バナージ「俺だって、ユニコーンやオードリーの存在によって変わりました！」

マリィダ「人は変わる事が出来る。だが、変わろうとしないお前の存在する場所はな

いー」

ネメシス「可能性なんて起こりうるか分からないものにすぎるお前達が究極生命体である俺の存在を否定する義理はねえよ！」

ミネバ「いいえ、私達には否定する権利があります。私達はそれぞれ、生きて、意志を持つているのですから。そうですね、バナージ？」

バナージ「そうだね、オードリー……。ネメシス、可能性を信じられないのなら、見せてやる！俺とユニコーンの……可能性の獣の力を！」

〈戦闘会話 シーブックVSネメシス〉

ネメシス「お前達の未来……どうなるか実物だな」

シーブック「まるで僕達の未来を知っている様な物言いだな……！」

ネメシス「知っているぜ。何から何までな。なんなら、教えてやろうか？」

セシリー「いいえ、結構よ。未来は……私達自身が見る！シーブックと一緒に……！」

シーブック「セシリー……！ネメシス、お前に世界の未来を奪わせるわけにはいかない！僕達が……絶対に止めてみせる！」

〈戦闘会話 トビアVSネメシス〉

ネメシス「記憶喪失で本来の未来を伝えないなんて、痴がましいとは思わないのか？」
キンケドウ「逆に未来を知ったら、面白くないだろう？」

トビア「お前はその事で未来が変わると言う考えだろうが、それは見間違いだ！何故なら、アムロさん達は未来を知ろうと決して考えを変えないからだ！」

ネメシス「信頼しているねえ……。まあ、でも未来なんてもう来ないがな！」

トビア「そう言うのは俺達を倒してから言いやがれよ！少なくとも、俺達がいる間は全力で抵抗してやるからな！」

〈戦闘会話　ヒイロVSネメシス〉

五飛「ついに本物の悪の下へたどり着く時が来た！」

ノイン「行くぞ、ネメシス。究極の名を持つお前が負ける時だ！」

ネメシス「ずいぶん強気だが、人をゲームのコマとして使う俺と兵士として人の生命を奪うお前達と何が違うんだ？」

トロワ「その様な簡単な事もわからないのか、お前は？」

カトル「僕達は散っていった人達の想いを背負って、平和な世界を築こうとしているんだ！」

デュオ「それが兵士として戦ったきた奴の末路つてもんだ！」

ゼクス「そして、人は平和な世界を望んでいる」

ネメシス「わからねえな…。それはお前達が都合のいい様に解釈しているだけじゃねえのか！」

リリーナ「いいえ、違います。平和を望むヒロ達と自分自身の快樂の事しか考えていないあなたでは全く違います」

ヒロ「平和への道のりは長いかも知れない。だが、いずれ、訪れる平和な世界の為に…俺は戦う。それを邪魔すると言うのなら、ネメシス…お前を殺す」

〈戦闘会話 シンVSネメシス〉

ハイネ「この野郎！散々、多くの生命を弄びやがって…！」

シン「お前が弄んでいる生命の中には子供もいるんだぞ！」

ネメシス「子供だろうが女だろうがゲームのコマはゲームのコマだ。平等に扱ってやっただけマシだろう？」

レイ「Destiny」「奴に何を言っても無駄な様だな…！」

ルナマリア「そんな事、わかりきっている事だわ！」

ネメシス「つたく、多くの生命を奪ってきたお前達だけには言われたくないんだがな
！」

シン「確かに俺達は生命を奪った事もある……。だからこそ、もうそんな世界を作らない為に……。二度と花が散らない世界を作るために……。俺達はお前と戦う！」

〈戦闘会話　キラVSネメシス〉

キラ「生命の大切さもわからないあなたに世界は渡さない！」

ネメシス「生命の大切さね……。結局の所、お前達は自分達の考えを相手に押し付けているだけだろうが！」

アスラン「それは違う！俺達はみんなと共に平和への道へ進もうとしている！」

ネメシス「それを押し付けだと言っているんだよ！わからない奴らだな」

キラ「あなたこそ、生命の意味も理解してください！それがわからないあなたを僕達は赦しはしない！」

〈戦闘会話　刹那VSネメシス〉

アンドレイ「ネメシス……。全ての世界をお前の好きにはさせない！」

セルゲイ「生命の重さはゲームなどでは測れない事を知れ」

ネメシス「生命の重さねえ……。ソレスタルビーイングが散々世界を引つ掻き回したのに、そんな事言われたくないな」

パトリック「いいや、ソレスタルビーイングとお前とは全く違うな！」

アニュー「武力による戦争根絶：確かに矛盾しているやり方だけど、ガンダムを中心に世界は変わってきているわ！」

刹那「人は変わる事が出来る…。そして、人は異性体とも分かり合う事も出来る！」

ロックオン「お前が言うのと変に説得力があるぜ」

グラハム「戦わずして、手を取り合う…。それが刹那のガンダムだ」

ニール「ホント、あの頃より大分変わったぜ」

ネメシス「変わるって事はそいつが弱いつて事だ！いずれ、人はELSと大きな戦争を起こす！」

スメラギ「いいえ、私達は信じているわ！」

アレルヤ「人間の想いの力を…！」

ソーマ「人々の可能性を…！」

ハレルヤ「てめえに俺達の生き様をとやかくは言わせねえ！」

ティエリア「お前が平和への妨げになると言うのであれば、僕達が相手になる！」

リボンズ「ガンダムと共に…。人々と共に僕達は進化していく！」

マリナ「刹那、信じています。世界が平和になる事を…」

刹那「俺が…俺達全員がガンダムだ！未来を切り拓く為…ネメシス、お前を駆逐する

！」

〈戦闘会話　キオVSネメシス〉

キオ「ネメシス、お前は僕達とガンダムが倒す！」

ネメシス「三世代によって、受け継がれるガンダムの歴史……。だが、それもここで終わる。救世主ガンダムの敗北によってな！」

シヤナルア「相当性格が悪い奴だね」

セリツク「救世主ガンダムの敗北か……。俺達の世界の人達が知ると大騒ぎだな」

オブライト「まあ、そんな事は起こらんがな」

フラム「救世主ガンダムはこれからも受け継がれていきます」

レイル「今度は地球人とヴェイガンが手を取り合う象徴としてな！」

デイン「ガンダムを破壊させる事は俺達が許さない！」

ゼハート「同じガンダムに乗る者として、譲れないものもある！」

ネメシス「地球人とヴェイガンに未来なんてない！俺が滅ぼすのだからな！」

フリット「言っている、ネメシス。お前には教えなければならぬ事がたくさんあるらしいな」

アセム「人間の意志の強さ……。そして、何より人々が手を取り合った時の強さをな！」

キオ「世界を守る為：僕達は何度でも立ち上がる！僕達が力を合わせれば、どんな敵にも負けない！」

〈戦闘会話 ベルリVSネメシス〉

ロックパイ「マッシュユナー中佐や世界の為：お前の進行をここで食い止める！」

ノレド「悪さもここまでだよ、ネメシス！」

ラライヤ「今まで生命を弄んできた罪：償ってもらいます！」

ネメシス「おー、怖い怖い。そんなに怒鳴らなくてもいいだろうが」

ケルベス「いいや、ラライヤさんの言う通りだ！」

リンゴ「まずはラライヤさんと世界のみんなに謝れ！」

マニイ「あなたが全ての元凶なんだよね！」

バララ「だったら、あんたを倒せば全てに決着がつくって事だよね！」

マスク「お前の様な外道を許しはしない！」

キア「生まれてくる俺の子供が平和な未来を歩めるために、お前をここで倒す！」

ドニエル「今の我々に住む星など関係ない！皆がお前の行いに怒りを表せている！」

ベルリ「そうだ！バラバラだった心が今、一つになっているんだ！」

ネメシス「それは良かったな。じゃあ、その一つに纏まったまま、世界と共に滅びや

がれ！」

アイーダ「いいえ、滅びるのはあなたです。ベル、行きましょう！」

ベルリ「了解です、姉さん！未来がどうであれ、今できる事をする！それだけだ！」

〈戦闘会話 三日月VSネメシス〉

アストン「全ての世界を守るための戦い……！」

ハツシユ「どんどんスケールが大きくなっていくな……！」

ネメシス「折角、貰ったその生命……無駄にするのか？まあ、どのみち消えるのは避けられないがな」

ジュリエッタ「あなた……最低ですね……！」

アルミリア「お兄様、マツキー……あの様な方を野放しにしては世界の危機です！」

マクギリス「任せてくれ、アルミリア」

ガエリオ「応援された以上、無下には出来ないな！」

シノ「みんな高ぶってきたな！これならやれるぜ！」

ラフタ「うん！いこう、みんな！」

三日月「俺もやるよ。あいつは許せないから」

アミダ「フフツ、やる気満々だね、みんな」

名瀬「まあ、俺達も若い連中には負けてられないな！」

昭弘「お前は潰す……！全ての世界の住人を代表してな！」

クーデリア「三日月、皆さん……どうかご無事で……！」

アトラ「頑張って、みんな！私達は応援しているよ！」

ネメシス「いいぜ、決して散らない鉄の華の生き様つてのを見せてみやがれよ！」

暁「父さん……頑張れ」

オルガ「なら、望み通り……俺達鉄華団とエクスクロスの生き様つてのを見せてやるぜ

！行くぞ、ミカアツ！」

三日月「ああ、わかつているよ。オルガ……！今は俺も一人の人間として……お前を倒す

から！」

〈戦闘会話　ワタルVSネメシス〉

クラマ「本当の黒幕との最終決戦か」

ヒミコ「あたしも決着をつけるのだ！」

幻龍斎「その意気ウラ、ヒミコ！」

ワタル「ネメシス、もう許さないぞ！」

ネメシス「許される必要なんてないさ。謝罪を述べる相手はいなくなるんだからな

！」

シバラク「お主はあくまでも自身の勝利に自信があるようじやのう」

虎王「いい気になるのもここまでだ！俺様達が貴様を倒す！」

龍王丸「今こそ、決着をつけるぞ、ワタル！」

ワタル「わかったよ、龍王丸！ネメシス、お前は救世主である僕達が倒してやるから覚悟しろ！」

〈戦闘会話 舞人VSネメシス〉

ブラックマイトガイン「お前はブラックノワールと一緒にだ！自分の存在以外はゲームのコマだと思っている！」

ホイ・コウ・ロウ「そんな奴に付き合ってはいられないネ！」

ミフネ「我輩達が引導を渡してやろう！」

ビトン「あんたは私達が弱いと思っただけでしょうが、私達をいつまでも雑魚扱いしていると痛い目を見るよ！」

ヴォルフガング「ワシの発明の前にひれ伏すがいい！」

ジョー「終わりにさせてやるぞ、生命体野郎。人間に楯突いた事を後悔させてやる」

ネメシス「おーおー、やる気満々だな。それから、俺をブラックノワールの様なガラ

クタと一緒にするんじゃないやねえよ！あいつも俺のコマに過ぎねえよ！それからな…俺自身もゲームのキャラの一人だ」

ガードダイバー「傍観者ではなく、キャラクターの一人と自身を認識するとは…！」

舞人「だが、奴が生命を散らしている事には変わらない！」

バトルボンバー「そうだな！結局、あいつは正義の敵だ！」

ネメシス「正義ねえ…。なら、やってみろよ！正義の味方さんよ！悪である俺をぶつ倒してみやがれ！」

マイトガイン「言われなくとも、見せてやる！私達の正義の力を！」

サリー「舞人さん、私の力も受け取ってください」

舞人「ありがとう、サリーちゃん。ネメシス…！悪は必ず滅びる…勇者特急隊がお前の計画を阻止してやる！」

〈戦闘会話 ルルーシユVSネメシス〉

藤堂「邪悪の根源はここで断つ！」

ジノ「こいつを倒せば、本当の平和が訪れるんだな！」

アーニヤ「だつたら、倒す」

星刻「我々の最後の戦いだ…！」

扇「みんな、無茶せずに行くぞ！」

ネメシス「理解できないぜ。お前達と一緒にいるのは世界を支配しようとした魔王なんだぜ？」

ルルーシユ「…」

コーネリア「いや、お前も私達もルルーシユの事を何もわかっていなかったただだカレン「ルルーシユはね…。いつもみんなの為に戦っていたんだよ！」

ジエレミア「それがルルーシユ様の霸道であつた！」

ロロ「兄さんは…ナナリーだけでなく、他の人々の為にも動いていた！」

ユーフェミア「ルルーシユもスザクも…そして、ゼロも私達の英雄です！」

ナナリー「お兄様、スザクさん…！そして、皆さん！彼を止めてください！」

C・C「頼まれた以上、断る事は出来ないな。お前達はもう孤独ではないのだからな」

スザク「ルルーシユ、行こう！僕達と君がいれば、できない事なんてない！」

ルルーシユ「了解だ！みんな、今から伝える事はギアスによる命令ではない…必ず、勝つ…そして、平和な世界を取り戻すぞ！」

〈戦闘会話 青葉VSネメシス〉

ネメシス「エンブリヲによって、繰り返されていた歴史の中にいたんだっただな。いけば、お前達は実験体だな」

ビゾン「もう俺たちの運命を弄んでいたエンブリヲはいない」

アルフリード「では、元実験体である我々も抵抗しよう」

倉光「ええ。絶対に平和な世界へ戻ると誓ったんだ。君に邪魔はさせないよ」

青葉「もう諦めろよ、ネメシス！」

ネメシス「調子に乗るんじゃないやねえよ！カップリングシステムごときで俺に勝てると思うな！」

ヒナ「カップリングシステムは…青葉やディオ、ビゾンとの絆の証よ！」

ディオ「お前にも見せてやる。エンブリヲやエフゲニーが恐れた真のカップリングを！青葉、最後まで一緒にやるぞ！」

青葉「ああ、任せろ、ディオ！ネメシス、俺はお前を倒して、ヒナと一緒に元の時代に戻る！みんなが暮らしている世界を破壊なんてさせない！」

〈戦闘会話 アンジュVSネメシス〉

ネメシス「世界が消えれば、ノーマも人間も関係なくなる。それでいいじゃねえか」
ヒルダ「よくねえよ！」

ナオミ「世界が変わっても、私達が生きていないと意味がないよ！」
クリス「まだあたしは生きたい…！」

ロザリー「そうさ、まだやりたい事もあるんだよ！」

アンジュ「みんな、今を懸命に生きているの…。その邪魔はさせないわ！」

サリア「ええ、それに世界が変わりつつあるもの！」

ジル「その変わりつつある世界にお前は不要だ！」

ネメシス「いいや、世界は変わる前に滅ぶんだよ！」

サラマンディーネ「何処までも外道な奴め…！」

タスク「アンジュと生きる未来…壊させはしない！」

アンジュ「いくわよ！世界を滅ぼそうとする神擬は此処で消えなさい！」

〈戦闘会話 甲児VSネメシス〉

ネメシス「光子力のエネルギーを力に変え、戦う魔神…。だが、マジンガーの未来は神でも悪魔でもない！全てを壊す破壊神だ！」

甲児「マジンガーが…破壊神になるだと…?!？」

さやか「例え、それが未来でも…変えることが出来るわ！」

ボス「なんと言っても、乗っているのがあの兜 甲児だからな！そんな事、絶対に起

こもらないぜ！」

鉄也「甲児を絶望に突き落とそうとしたそうだが、無意味だった様だな」

ネメシス「そうかよ。だったら、面倒になる前に粉々にしてやるよ！」

甲児「させるかよ！世界もマジンガーも…俺達が絶対に守ってみせる！行くぞ、鉄の城の力…受けてみやがれ！」

〈戦闘会話 海道VSネメシス〉

ネメシス「全てを滅ぼすドクロの魔神…！お前達が手にするのは宝の持ち腐れだな！」

真上「ほう、言ってくれるな」

海道「てめえが俺達を舐めているのは、痛いほどわかったぜ！」

スカーレット「この二人をバカにする者がいたとはな」

アイラ「ドクロの魔神よ…世界をお救いください」

ネメシス「無駄だ！そいつらに世界など救えない！」

由木「って言われているけど、どうなの？地獄さん達」

海道「言われるまでもねえ！俺達は戦いたいから戦いたい」

真上「潰したいから潰す」

海道& a m p ; 真上 「俺達に大義名分はない！ただ、それだけだ！」

〈戦闘会話 シモンVSネメシス〉

ネメシス 「アンチスパイラル戦は実物だったぜ。思わず手に汗を握ったぜ」

キタン 「お前の様な奴がいるから、アンチスパイラルが人類を滅ぼそうとするんだよ
！」

ギミー 「俺達は変わろうとしている…邪魔すんな！」

ダリー 「もう、私達はあなたの好きにはさせません！」

ヴィラル 「このゲームの結末はラスボスを倒し、世界が平和になる事だ」

シモン 「言うじゃねえか、ヴィラル！まあ、その通りなんだがな！」

ヨーコ 「子供達の未来…あなたには奪わせないわ！」

ダヤツカ 「俺の家族や仲間達もな！」

ネメシス 「全てを貫くドリル…だか、ドリルもいつか止まる時が来る！それがお前達の最後だ！」

カミナ 「いいや、てめえはシモンのドリルの存在を何もわかっていねえよ！」

ニア 「シモンのドリルは…永遠に回り続けます！シモンという人間がいる限り！」

シモン 「そして、俺というドリルがいる限り、お前の野望なんて、いくらでも打ち砕

いてやるよ！覚悟しろよ、お前にも俺のドリルを喰らわせてやるぜえええつ！！？」

〈戦闘会話　ネモ船長VSネメシス〉

ネメシス「奇跡を起こすブルーウオーター…。そんなもんは破壊してやるよ！」

グランデイス「随分簡単に言ってくれるじゃないか！」

ナディア「ブルーウオーターは…私が守ります！」

ジャン「そして、そんなナディアを僕が守る！」

ナディア「ジャン…！」

ネモ船長「見ていてわからないのか、ネメシス。いずれ彼らの様な子達が未来を担っていく」

ネメシス「人間の未来など知った事じゃねえよ！」

ネモ船長「そうか。言葉で言っただけわからないのであれば、私も相手になろう。…ナディア達の未来を守る為…ここでケリをつけてやる！」

〈戦闘会話　一夏VSネメシス〉

ネメシス「今までよく巨大な敵相手を前に戦ってきたな。褒めてやるよ」

一夏「何処までも俺達を馬鹿にする気か…！」

摩耶「織斑君……」

楯無「堪えなさい、一夏君」

ラウラ「あいつを許せないのは私達も同じだ」

簪「だからこそ、あの人を止めなくちゃダメ……!」

鈴「ええ……。私達には待っていてくれている人たちがいるわ!」

セシリア「その待っていてくれてくれる方々の為にも負けるわけにはいきませんの!」

シャルロット「僕は絶対にあんたのゲーム通りにはならないから!」

箒「待っている、ネメシス。お前を斬り捨ててやる」

束「いいぞ、箒ちゃん!頑張れー!」

クロエ「私達の未来、あなた方に託します!」

マドカ「消えろ、生命体風情が……。私はお前に構っている時間はないのだ」

ネメシス「そうかよ。だったら、すぐに終わらせてやるよ!」

千冬「すぐに終わらせるそうだがぞ、一夏。言い放ってやれ」

一夏「ああ、そうだな、千冬姉さ……!ネメシス、俺は負けない!この力で……絶対にみんなを守る!終わるのはお前の方なんだよ!」

ネメシス「ゲッター線……その力で世界が滅びる事をお前らは知らないだろうか？」

凱「いいや、知っている！」

湫「私達も伊達にゲッターに乗っていないさ！」

竜馬「残念だったな、生命体野郎！俺達はもう覚悟を決めて、ゲッターに乗っているんだよ！」

弁慶「そして、お前はそのゲッターに負ける！」

隼人「俺達がゲッターに乗っている限り、ゲッターの暴走も有り得ない！」

ネメシス「馬鹿な奴らだぜ……。なら、俺が直々に破壊してやるよ！」

號「お前にゲッターは破壊できない……。ここには俺達がいるからな！」

竜馬「終わりだ、ネメシス！ゲッターの力の前に粉々になりやがれ！」

〈戦闘会話 葵VSネメシス〉

ネメシス「獣の飼ひ慣らし方は知っているぜ。ほら、まずはお手からだ」

朔哉「こいつ……何処までも舐めやがって……！」

ジョニー「相手にするだけ無駄ですよ、朔哉」

エイター「ええ、ムーンWILLの脅威から世界を守ったのです！」

くらら「だから、私達は過ちを繰り返さない様に今を生きるわ！」

葵「そういう事よ。私達は、あんたに従うつもりはないから！」

ネメシス「そうか、そうか……。なら、聞き分けのない獣にはお仕置きが必要な様だな
！」

葵「逆に嘯まれない様につける事ね！これで最後よ、やってやろうじゃん！」

〈戦闘会話 九郎VSネメシス〉

ネメシス「邪神ナイアルラトホテップを倒したお前の強さは本物と認めるぜ！あいつとは語り合った仲でもあったからな！」

エルザ「あいつと知り合いだったロボ!?？」

九郎「どうりであいつと同じ感じがしたんだ！」

エセルドレーダ「行動も彼女と擬似しています」

マスターテリオン「力も同等か……」

ウエスト「厄介な奴が最後の敵である……」

エンネア「でも、止めないと……全ての世界が滅んじやう！」

ネメシス「止められるか？お前達に……。あいつの仇は打たせてもらうぜ！」

アル「貴様と奴の関係など知った事ではない！」

九郎「アルの言う通りだ！お前みたいな奴を神になんて、させるかよ！」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSネメシス〉

ネメシス「未知の存在であるヒーロー…。ヒーローマンか。俺の玩具には最適だな！」

ニツク「ヒーローマンが玩具だって…?!？」

サイ「あいつ…言いたい事を言いやがって…！」

デントン「ジョーイ君…」

ジョーイ「ヒーローマンは僕の友達だ！お前には渡さない！」

ネメシス「そうかよ。そう言われると力尽くで奪いたくなつまうな！」

ウィル「お前の様な奴らは滅びるサダメだ！俺達が滅ぼしてやる！」

リナ「私達は…ずっと、応援しているわ…。ヒーローの勝利を！がんばって、ジョーイ！」

ジョーイ「いこう、ヒーローマン…！世界を守る為…僕達の明日を奪わせない為に！」

ヒーローマン「ウオオオオッ！」

〈戦闘会話 ヴァンVSネメシス〉

ネメシス「吹き溜りの星に暮らしていたボンクラ共が！俺の邪魔をするんじゃないよ

！

ウー「だまれ！貴様の様な奴がいるから、奴がおかしな計画を実行しようとするのだ

！

ガドヴェド「どの様な星でも私達は生きていた」

カロツサ「俺…まだ生きたい！」

メリツサ「私もだよ、カロツサ…！」

ネロ「こんな老いぼれでも若い連中の未来を守る事は出来る！」

ミハエル「守ってみせる…！ウエンデイやフアサリナさんと共に生きる未来を！」

フアサリナ「ミハエル君…」

レイ「ガンソ」「シノが眠る星を…貴様に破壊などさせん！」

プリシラ「覚悟しなさいよ、私達が絶対にやっつけてやるから！」

ヴァン「こいつ等全員、滅びなんて、待っていないんだよ」

ネメシス「宇宙のゴミが…！何で、お前達はそのままで世界を守ろうとすんだよ！」

ウエンデイ「それは私達が生きているからよ！」

ヴァン「世界を守るなんて関係ねえ！お前が俺達を怒らせた…ただ、それだけだ！」

〈戦闘会話　アマタVSネメシス〉

クレア「ついに最後の決着です……！」

モロイ「お前を倒して、俺達のハッピーエンドだ！」

サザンカ「覚悟しなさいよ……。今回も本気で行くからね！」

ネメシス「神話のアクエリオン……！機械天使の存在は本当に目障りだな！」

アマタ「お前達の様な存在がいる限り……アクエリオンは何度でも飛ぶ！」

ジン「E.V.O.L.」散っていった魂の為！」

ユノハ「大切な人の為！」

アンデイ「待っている奴等の為！」

M.I.X「愛する人の為！」

シユレード「世に流れる音楽の為！」

カイエン「苦楽を共にした友人の為！」

ミカゲ「そして、何より……愛する世界の為！」

ゼシカ「その全てを守る為に……！」

カグラ「俺達はお前と戦うんだよ！」

ネメシス「二言目には愛、愛と……世界が滅びれば一緒なんだよ！」

ミコノ「愛は決して、消えませんが……！私達がいる限り……アマタ君！」

アマタ「わかったよ、ミコノさん！ネメシス……！これで終わりだああああつ！」

〈戦闘会話　ノリコVSネメシス〉

ネメシス「世界が滅びれば、宇宙怪獣とも戦わずに済む。楽になれるんだぜ？」

カズミ「私達は誰一人として、そんな事は望んでいないわ」

ノリコ「私達は自分達の気合いと根性で宇宙怪獣を倒すわ！」

ネメシス「暑苦しい奴は嫌いだね…。消えな！」

ノリコ「消えるのはあなたよ！ガンバスターの力、受けてみなさい！」

〈戦闘会話　ユイVSネメシス〉

ネメシス「レガリア…そして、ルクス…。お前達の存在はゲームをさらに盛り上げてくれた。感謝するぞ！」

ノア「ヨハンの存在すらも操っていたなんて…！」

ヨハン「うん、腹立たしい事、極まらないね」

イングリッド「こいつを野放しにしては、絶対にダメよ…！」

ケイ「ここで絶対に倒す…！」

ティア「ティア達もやるよ！」

サラ「決めたんだ…！姉様やユイちゃん達と平和な世界で暮らすって…！」

ユイ「私達はあなたには屈しません！」

ネメシス「勇敢な女皇様…だが、お前の出番もここまでだ！」
ルクス「…！」

レナ「ユイ…！私達は前に進もう！明日を掴む為に！」

ユイ「うん…！みんなの明日は私達が守ってみせます！」

〈戦闘会話 ノブナガVSネメシス〉

ノブナガ「お前が神などになる前に俺が破壊する…！」

ネメシス「破壊王が救世主などにもなるつもりか？」

アレクサンダー「奴は破壊王であり、破壊王ではない」

ケンシン「彼には最後まで我々の味方になってもらわなければならぬんです」

イチヒメ「それが兄上の使命です」

カエサル「そなたに誰かの未来を決める事はできない」

ヒデヨシ「さあ、終わりにするぜ、生命体野郎！」

ネメシス「終わるかよ、そう簡単に…力を手に入れるまではな！」

ジャンヌ「人々の生命を弄んで…狙うのはそれなのね…！」

ミツヒデ「お前が力を手に入れる必要はない」

ノブナガ「消えろ、ネメシス。お前は破壊王である俺が必ず破壊する……！」

〈戦闘会話　しんのすけVSネメシス〉

マサオ「ひいっ！来るよっ！」

ネネ「この怖がりおにぎり！ここまできて、情けない声を上げるじゃないわよ！」

ボーちゃん「風間君……！」

トオル「うん、僕達は逃げるつもりはないよ……！怖くてもやり切るんだ！春日部防衛隊……ファイヤー！」

ネメシス「いい気迫だねえ……。流星は春日部を守る防衛隊だな。だが、所詮はガキのままごとだ」

しんのすけ「風間君、ネネちゃん、ボーちゃん、マサオ君……」

カンタム「彼等も、本当に強いね……！」

ひろし「俺達も……負けてられないぞ！」

みさえ「ええ、そうね！子供が必死に戦っているのに、大人が黙ってみてはられないわ！」

ひまわり「たいやー！」

シロ「ワン！」

シーラ・ロボ「私達の気持ちは簡単には揺らぎません！」

ネメシス「くだらねえよ！結局はくたばる生命だ！」

カンタム「いいや、人間の生命の意味をわからないお前では、勝てない！」

しんのすけ「オラ達が全ての世界の人達をお助けるゾ！エクスクロス：ファイヤー！」

〈戦闘会話 ケロロVSネメシス〉

ネメシス「本来の目的を忘れ、地球人と馴れ合う恥さらしの宇宙人じゃねえか！」

タママ「このーっ！当たっていて、むかつくですーッ！」

ギロロ「簡単に挑発に乗るな、タママ！」

ドロロ「隊長殿、勝算はあるのでござるか？！」

ケロロ「勝算は…戦いの中でみつけるであります！」

夏美「ボケガエル…！」

クルル「クーククツ！格好いい事言うじゃねえか」

ダークケロロ「フツ、流石は吾だ」

ネメシス「勝算は戦いの中で見つけるだあ？そう言うのは俺を圧倒してから言うんだな！」

冬樹「軍曹、みんなー！世界のみんなを…助けて！」

ケロロ「了解であります！ネメシス、お前にケロン人魂の全てを見せてやるであります！」

〈戦闘会話　アキトVSネメシス〉

ガイ「おーおー、ネメシスよ！悪が滅びる時が来たぜ！」

リョーコ「バカ！こんな時に正義の味方はやめろ！」

サブロウタ「いつでもガイはブレねえな」

ネメシス「俺が言えた事じゃねえが。緊張感のない奴等だな」

アキト「フツ、それが仲間の素晴らしさの一つだ」

ルリ「そして、私達はその大切な仲間を守る為に戦います」

ユリカ「私達の未来は奪わせない！これからはみんな、幸せに生きていくの！」

ネメシス「じゃあ、その幸せを絶望で塗り潰してやるよ！」

ルリ「そうはさせません。そうですね、アキトさん？」

アキト「その通りさ、ルリちゃん。ネメシス…闇へと消えろ…！」

〈戦闘会話　アキトVSネメシス〉

ネメシス「人間が空を飛ぶ必要なんてねえよ」

アルト「人間の生命の価値も分かっていないお前が勝手な事を言ってるじゃねえよ！」

オズマ「俺達はな。それぞれの為に空を飛んでんだよ！」

ブレラ「大切な妹の未来：貴様に壊させるつもりはない」

カナリア「要するにお前の計画は阻止されると言う事だ」

ルカ「バジュラ共、共存の道ができたんです…。こんなところで消さしはしない！」

ミシエル「これ程、スナイパーの腕がなる展開はないぜ…！お前を撃ち抜き、世界を守る！」

クラン「ああ、全力でやるぞ！」

ジェフリー「これが最後の戦いだ…総員、戦闘開始だ！」

ランカ「アルト君！」

シエリル「私達も全力で歌うわ！」

ネメシス「耳障りな歌だな。すぐに消してやるよ！」

アルト「そうはいくかよ！ランカもシエリルも…ほかの奴らも誰一人として、消さしはしない！」

〈戦闘会話　リオンVSネメシス〉

リオン「お前を倒せば、全てが解決する…簡単な事だ！」

ネメシス「簡単に俺を倒せると思うなよ。逆に撃ち落としてやるぜ！」

アイシャ「お生憎様、簡単に落とされる程、やわな腕はしていないのよ」

ミーナ「30」「リオン、私の歌と共に…！」

ネメシス「いいだろう。お前らの歌と俺の力のぶつかり合いだ！」

リオン「勝つのは俺達だぜ…！そして、未来を掴むのも俺達だ！」

〈戦闘会話　ゴーカイジャーVSネメシス〉

ネメシス「ゴーカイジャー…スーパ―戦隊の歴史もここで終わるぜ」

ゴーカイブルー「勝手に終わらせるな」

ゴーカイスilver「そう簡単に終わって、たまるか！」

ゴーカイイエロー「それにあんたに倒されるなんて、真つ平ごめんよ！」

ゴーカイグリーン「僕達はこれからも宇宙を旅するんだ！」

ゴーカイレッド「お前に俺達の邪魔はさせねえ！」

ゴーカイピンク「そして、世界というお宝も守ってみせます！」

ネメシス「安心しろ、お前らの大切な宝は俺がいただいてやるからよ！」

「ゴーカイレッド」「そうはいくかよ！欲しいものは手に入れる…それが海賊だ！行くぞ、みんな！派手に行くぜ！」

〈戦闘会話　ゼロVSネメシス〉

ネメシス「来いよ、ウルティメイトフォースゼロ！相手をしてやる」

グレンファイヤー「へえ、やる気じゃねえか！」

ミラーナイト「世界をかけた戦いで熱くなりすぎないでください」

ゼロ「ネメシス、全ウルトラマンを代表して、お前をぶっ飛ばしてやる！」

ジャンボット「最後の戦いだ…。気負いすぎるなよ、ジャンナイン！」

ジャンナイン「分かっているよ、兄さん」

エメラナ「皆さん…この戦い、必ず勝ちましょう！」

ネメシス「いいぜ、ウルトラマンとの決戦…これまでにないラストステージだぜ！」

ゼロ「お前のゲームを盛り上がるつもりはねえ！お前の野望…俺が叩き潰してやるぜ！」

〈戦闘会話　EXゴモラVSネメシス〉

ネメシス「レイオニクス共！俺の仲間になるなら、お前らだけは生かしてやるよ！」

ヒュウガ「何だと……!?？」

レイモン「そう言つて、俺達を利用するつもりだな」

ネメシス「よく分かつているじゃねえか。まあ、断るつてんなら、容赦はしねえけどな！」

EXレッドキング「グウウウウツ……！」

グランデ「なら、断るぜ。誰かに命令されるのは性に合わねえんだ」

レイモン「俺も断る。俺は平和の為に戦うと決めたんだ。お前の思惑通りに動くつもりはない！行け、ゴモラ！」

EXゴモラ「キシヤアアアアン！」

〈戦闘会話　マサキVSネメシス〉

ネメシス「よう、マサキ。決着をつけようぜ」

マサキ「言われなくても、やってやるよ！」

ネメシス「サイバスターの火力には驚かされているぜ。今からの勝負が楽しみだ！」
マサキ「なら、初めから最大で行くぜ！」

〈戦闘会話　アーニーVSネメシス〉

ネメシス「カリ・ユガを倒したお前達をこの世界に召喚したエンデには感謝しねえとな！」

リチャード「当然ながら、カリ・ユガの存在を知っていたか」

ジン「UX」「お前は倒す。世界の生命を止めない為に」

アユル「世界はあなたの遊び場ではないのです！」

アーニー「僕は生きる…全ての世界を助けて！」

ネメシス「無駄だよ。お前達じゃ、世界は救えない！」

サヤ「これまでも不可能な状況を可能にしてみました…！」

アーニー「僕達が不可能という言葉を開く…。そして、生命を輝かせて、お前を倒す！」

〈戦闘会話 アマリVSネメシス〉

ネメシス「エンデ撃破おめでとう。だが、魔法生物のいない今のお前達がどこまで太刀打ちできるかな？」

アマリ「確かに、今この場にはホープスはいませんが、ホープスは私達を見守ってくれています！」

ネメシス「心の中に居続けているって、やつか。まあ、安心しろよ、すぐにあいつの

元へと送ってやるよ！」

イオリ「今だけはホープスに変わって、俺がアマリさんを守る……まあ、零に比べたら、頼りにはならないとは思うが……」

アマリ「そんな事はないわ、イオリ君。ありがとう。力を貸してもらおうわね……！ホープスが守った世界をあなたに壊させはしません！」

〈戦闘会話　零VSネメシス〉

ネメシス「零を倒す前にまずはお前らを倒してやるよ！」

弘樹「俺達はおくまで前菜って事かよ！」

メル「では、彼に教えてあげましょう……！」

カノン「ええ……！敵は零さんだけではない事を！」

優香「零を散々傷つけたカンは返すからね！」

リン「そして、多くの生命を弄んだ事を後悔させます！」

ラゴウ「今度こそ、貴様に引導を渡してやる……！」

ギルガ「ああ……！アル・ワース出身として、君を許しはしない！」

アスナ「零、もう一人で戦わせるわけにはいかないわよ！」

零「みんな……ありがとう……！」

マリア「力を合わせるわよ、零、ハデス！」

ハデス「今度こそ、私達がお前を討つ！」

ネメシス「随分と大所帯になったが…この勝負にケリをつけようぜ、零！」

ゼフィ「私も終わらせます…！これまで続いたあなたとの戦いを！」

零「仲間が…俺に力をくれる！もう…負けられないんだよ、」

〈戦闘会話　ハデスVSネメシス〉

ネメシス「お前とも結構な付き合いになったんだ。お前だけ生かしてやってもいいぜ」

ハデス「ふざけるな…！零達を傷つけたお前だけは私は許さない！家族のためにも私はお前にトドメを刺してやる！」

俺達はアルガイヤ・ノヴァにダメージを与えた…。

ネメシス「グツ…!!?ま、まさか…この俺が…！」

一夏「観念しやがれ、ネメシス！」

青葉「もうお前に勝ち目はないぞ！」

ネメシス「確かに、な……。ここまで追い詰められたのは久しぶりだ……。決めた……。お前達、全員……。容赦なく皆殺しにしてやるぞ！」

アルガイヤ・ノヴァが禍々しく光るとその姿を変える……。

まるで悪魔じゃねえか……！

ネメシス「アルガイヤ・ネメシス……。最終段階へ到達だ……！」

トビア「アルガイヤ……」

バナージ「ネメシス……!?？」

ハデス「ネメシス……。貴様はまだ力を隠し持っていたのか……！」

ネメシス「これ以上はない俺の全力だ！」

すると、グレモリー、ガラム部隊が複数現れた。

シヨウ「何という禍々しいオーラだ……！」

エイサツプ「オーラだけで押しつぶされそうだ……！」

ネメシス「さあ、俺の全力に何処まで抵抗できるかな？」

来る……！やるしかねえ……！

俺達はアルガイヤ・ネメシスに攻撃したが…。

ネメシス「効かねえよ、そんな攻撃」

バリアに防がれた…!!?

刹那「何っ…!!?」

ヒイロ「バリアか…!」

ネメシス「軽い攻撃じゃ、このバリアは破れねえよ。さあ、何処まで保つか…やるぜ
!」

どうすればいいんだよ…!

クソっ…! 何度やっても攻撃が防がれる…!

ネメシス「痛くも痒くもねえぜ。そろそろ、限界だろう? エクスクロス…大人しく敗
北を認めるなら、楽に消してやるぜ」

三日月「ふざけるなよ…!」

舞人「俺達は決して、諦めない!」

九郎「例え、不可能な状況でも俺達は希望を捨てねえ!」

ネメシス「何処までも現実を見ない奴らだな…。それなら、悪い知らせだ。実はつい

先ほど、アル・ワースに俺の配下を送った」

アンジュ「何ですって…!?？」

ネメシス「今頃、アル・ワースは地獄と化しているぜ」

ユイ「そ、そんな…!! レツちゃん…!! 皆さん…!!」

零「ネメシス、てめえ…!! すぐにやめさせろ!」

ネメシス「これもゲームの一部なんだよ。とつても楽しいデスゲームのな! さあ、早く俺を倒さないと、みんなが死ぬぞ?」

甲児「何処まで人の生命を弄べば気が済むんだよ…!!」

鉄也「外道め…!!」

ワタル「でも、どうするの!? これじゃあ、アル・ワースが…!!」

ルルーシユ「…」

ノブナガ「…」

こうなったら…!!

マリア「待って、零…」

ハデス「馬鹿な真似はよせ」

零「でも、このままじゃ、アル・ワースが…!!」

ハデス「だからこそ、私達が行く」

零「な、何を言っているんだよ!?？」

マリア「あなたが消える事はないわ。…あなたには未来がある…愛すべき彼女もいる…。そして何より、私達の大切な息子の未来…守ってあげたいもの」

零「だからって…!」

ハデス「…零、幸せに生きろ。…そして、世界を頼んだぞ」

零「待つてくれ…待つてくれよ!とうさん、母さん…!俺は…俺とレイヤはまだ二人に言いたこともたくさんあるんだよ…!」

マリア「私達も沢山あるわ。…でも、これだけは言わせて…」

ハデス「生まれてきてくれて、ありがとう…」

そう言い残すとアルガイヤとスペリオルは力を纏わせて、アルガイヤ・ネメシスに突っ込んでいく…。

零「ダメだ、父さん!母さん!」

俺の叫びも虚しく、アルガイヤとスペリオルはアルガイヤ・ネメシスのバリアに激突し、大爆発を起こした…。

アスナ「マリアさん!」

ラゴウ「ハデス様!」

立ち込める爆煙…。その爆煙が晴れるとそこにいたのは…。

ネメシス「馬鹿な奴等だぜ。ハデスもマリアも、勝手に自爆するとは
無傷のアルガイヤ・ネメシスがいた…。

零「そ、そんな…！」

アルト「嘘、だろ…？」

ネメシス「無駄に生命を散らして…犬死だったな」

真上「あの攻撃を受けて、無傷だと…!?？」

海道「バケモンが…！」

ゼファイ「お爺ちゃん…！お婆ちゃん…！」

零「…」

優香「零…！」

ネメシス「おーおー、悲しんでるねえ。俺はこれが見たかったんだよ！さてと、ゲ
ムもクライマックスだ…。まずは零、俺の優しさだ。マリア達のもとへ送ってやるよ
！」

アルガイヤ・ネメシスが接近してくるにも関わらず、俺は俯いている…。

アスナ「来る…！零、避けて！」

零「父さん…母さん…俺は…！」

ゼファイ「パパ！」

アマリ「零君！」

ネメシス「絶望で身体が動きませんってか？ だったら、死にな！」

アルガイヤ・ネメシスは拳をゼフィルスネクサスに突き出した…。

アルガイヤ・ネメシスの攻撃はゼフィルスネクサスに…当たらなかつた…。

ネメシス「ん…!?？」

アマロ「零…！」

しんのすけ「攻撃を…受け止めたぞ…」

そう、ゼフィルスネクサスがアルガイヤ・ネメシスの腕を掴み、攻撃を止めた…。

零「父さんと母さんは…俺に未来を託した…。お前を止めるように言った…！ だから、こんな所でくたばっちゃったら…二人に顔向け出来ねえ！ 俺はまだ…生きているんだよおおおっ!!？」

ゼフィルスネクサスはアルガイヤ・ネメシスを吹き飛ばした。

ネメシス「グツ…!?？ 何だと…!?？」

ゴーカイレッド「攻撃が当たったぞ！」

ゼロ「おい、見ろ！ 奴のバリアが！」

ネメシス「何故だ…!?？ なぜ、バリアが展開されない…!?？ まさか…！」

ケロロ「マリア殿とハデス殿のあの攻撃でバリアを破壊したのでありますか…!?？」

ネモ船長「彼等の行動は無意味などではなかったのだな」

シモン「バリアが破壊されたんなら、攻撃が通るぜ！」

ルリ「彼を倒すなら今です」

アキト「仕掛けるぞ……！」

ネメシス「あいつ等……！何処までも面倒くさい事を……！俺のゲームのシナリオにバリアの破壊なんて含まれていなかった！どうして、てめえ等はいつも俺のシナリオ外の行動をする!?？」

竜馬「簡単な話だよ！俺達がそれぞれの意志を持つてっからだよ！」

ノリコ「私達はあなたのゲームのシナリオ通りに動くつもりはないわ！」

ケロロ「所詮、物事を進められても、全てをそれ通りには進められないのであります
！」

しんのすけ「オラ達はお前の玩具じゃないゾ！」

ネメシス「……舐めるなよオツ！たかが下等生物がアツ！もういい……！俺のシナリオ通りに動かなかつた罰だ……！お前等！アル・ワースを滅ぼしやがれ！」

ネメシスが配下に命令した……！

ネメシス「くははははッ！これでお前等が勝つたとしてもアル・ワースは滅んでいる
なあ？」

？「いや、悪いがそうはさせないぞ」

ネメシス「何…!? 誰だ!?」

この声は…!

一誠「…零、聞こえるか?…一誠だ」

零「一誠…!?」

ヴァーリ「俺もいるぞ」

零「ヴァーリまで…! どうしてお前達が…!?」

ヴァーリ「簡単な話だ。お前等の援護にきたんだよ」

一誠「それよりも零、映像を見ろ」

俺は一誠に言われるがままに映像を見ると、そこには時空ゲートが現れ、様々なヒーローや戦士達が現れる。

ブラックパンサー& amp; ウカンダ軍兵士「Yi b a m b e (イバンベ)! Yi b a m b e (イバンベ)!」

凄い…何で数の人達だ…これが全て、一誠達の仲間なのか…!

それに一誠達の世界の一夏達やウルトラマンなどもいる…!

ヴァーリ「これで全部か?」

園子「もう少し来るんよ」

まだ一誠達の仲間が……!

零「この人達、全員がお前の仲間なのか……?」

一誠「ああ」

ネメシス「てめえ等アツ……!俺のゲームに割り込んでくるんじゃねえ!どうして、俺の思い通りにならねえんだ!」

一夏「仮面ライダードライブ」「当然だろ?完全な生命体だろうが究極生命体だろうが、この世には読めない展開があるんだよ!」

ネメシス「舐めんじゃねえ!いくら、そっちの数が多かろうとこっちの比じゃねえよ!」

辰也「確かにな……!だが、俺達は諦めない!だから、お前達も諦めるな、零!」

零「辰也!ジゼラ!」

ジゼラ「私達は……零さん達、エクスクロスの勝利を信じています!」

辰也「さあ行くぜ、ジゼラ、イールソウル!零達の世界を守る為に!」

セイヤ「零さん!僕達も仲間です!」

風輝「世界は違えど、絆はつながっています!」

零「セイヤ!風輝も!」

アマリ「皆さん……」

零「これが…俺達が繋いできた絆…！」

ヴァーリ「零、エクスクロス！こっちは任せろ！」

辰也「敵は俺達が食い止める！」

セイヤ「皆さんはネメシスを！」

風輝「信じています！皆さんの勝利を！」

一誠「行け！この世界の運命を今こそかえてやれ！」

零「みんな…ああ！」

キャプテン・アメリカ「D×D：アッセンブル！」

一誠達は戦い始めた…。

みんなも俺達の世界を守るために戦ってくれている…！

？「全ての世界の住人が応援しているぞ」

あれは…！

ホープス「我々、エクスクロスをな」

アマリ「ホープス！」

イオリ「お前どうして…!?？」

ホープス「身体が復活するのに時間が掛かったが、何とかなったな」

ヴァン「ホープスの言う通りだ。俺達もあいつ等に負けていられないぜ」

アルト「行くぞ、みんな！この戦いを終わらせる！」

ネメシス「俺は終わらねえ！全てを手に入れ、俺の勝利でゲームを終了させてやる！」
シヤア「それは不可能だ」

ネメシス「何っ…?!？」

一夏「俺達はエクスクロス！アル・ワースや全ての世界を守る組織だ！」

キオ「うん！僕達みんなが救世主なんだ！」

ジヨーン「そして、一人一人がヒーローだ！」

アマタ「どんな状況でも俺達は諦めない！」

ノリコ「努力と根性がある限り…私達は何度でも立ち上がるわ！」

葵「そういう事、あなたは此処で終わらせて事よ！」

リオン「俺達の力と意志…その全てを喰らいやがれ！」

ネメシス「ふざけんな！そんなもので…俺を止められると思ってるんじゃないやねえ！」

零「そんなもん…？その力を持っていないお前が…台詞じゃねえ！」

ネメシス「零…！」

アマリ「零君！」

アスナ「これで全て終わらせるわよ！」

ゼフィ「私達の全てをかけて…！」

零「ああ……！ネメシス……俺達は挫けない！絆の光がある限り……そして、俺達が存在する限りな！」

これで最後だ……戦闘……開始だ!!？

最終話 絆の光（中編）

―新垣 零だ…。

俺達は最終決戦を開始した…！

〈戦闘会話 万丈VSネメシス〉

ネメシス「万丈！お前とダイターンの日輪の光とやらで俺を止めてみる！」

万丈「お前に言われなくとも、やってやるさ。この世界にお前の様な闇が栄える事はない！」

ネメシス「悪ねえ…。もうその概念もなくなるぞ！お前等を倒して、俺は神となるんだからな！」

万丈「お前は神になどなれない…。世界を破壊することに快感を得る奴ではな！僕とダイターンはそんな奴らと戦う！それはこれからも変わらない！」

〈戦闘会話 ショウVSネメシス〉

ネメシス「シヨウ！何故、お前は俺の邪魔をする！オーラマシンの戦いは終わったはずだ！」

シヨウ「わかり切った事を聞くな！オーラマシンを巡る戦いが終わったとしても、お前の様な存在がいる限り、世界は平和にはならない！」

ネメシス「無駄な事だ！所詮、俺を倒したとしても、お前が戻るのは無なのだから！」
シルキー「それでも、シヨウは…戦います！」

チャム「それが聖戦士シヨウ・ザマなのよ！悪いオーラを持つ奴は許さないんだから！」

シヨウ「ネメシス！聖戦士として…いや、一人の人間として、お前の悪しきオーラを断つてやる！全ての世界の為にお前を討つ！」

〈戦闘会話　　マーベルVSネメシス〉

ネメシス「世界の滅びを見せる前にここで消してやるよ、マーベル！」

マーベル「私も聖戦士の一人よ…。だから、そう簡単には負けないわ！何故なら…シヨウがここにいるもの！」

ネメシス「お前の愛って言葉はもう聞き飽きたんだよ！なら、お前の前でシヨウの野郎をズタズタしてやるよ！」

マーベル「出来るものなら、やってみなさい！私とシヨウの愛を破れる者などいないわ！」

〈戦闘会話 トッドVSネメシス〉

ネメシス「何だよ、トッド。お前が相手かよ！やるなら、シヨウとが良かったぜ！」
トッド「悪いな、ネメシス。俺は別にもうシヨウのほうが強いだの、気にしていねえよ。俺は俺の力で、アル・ワースを守る為に戦うだけだ！」

ネメシス「ほう、迷いを捨てたってわけか！だったら、さらに弱くなったってことか！弱者のお前とやり合うつもりはねえ…ママの所に帰りな！」

トッド「戻る為にもお前を倒すんだよ！俺だって、聖戦士なんだ…！お前の邪悪なオーラ…ぶった斬ってやるぜ！」

〈戦闘会話 バーンVSネメシス〉

ネメシス「よう、バーン。黒騎士だった時のお前の方が輝いていたぜ」

バーン「挑発の仕方がなっていないな、ネメシス。黒騎士は黒だ。輝く筈がない」

ネメシス「冗談が通じない騎士様だな！相変わらず、頭が硬い野郎だ！憎しみというオーラに囚われていたお前が俺を止める権利があるのかよ!?？」

バーン「それでも私は、聖戦士の端くれだ！憎しみが消えた今ならわかる……。シヨウが私の憎しみのオーラを断ち切ってくれた事！私も……お前の邪悪なオーラを断ち切る！」

〈戦闘会話 エイサップVSネメシス〉

ネメシス「元の世界の戦いでは、あまり、目立たなかったって言うじゃねえか、エイサップ！」

エイサップ「誰からの情報かは知らないが、俺は目立つつもりはない！俺は戦争を止めるだけだ！」

ネメシス「戦争を止める、か……。そうだったな、お前も聖戦士だったな！だったら、俺を斬ってみろ！出来るものならな！」

エレボス「何処までも人をバカにする態度……もう許せないよ！」

エイサップ「聖戦士だとか、関係ない！争いを繋げていくのなら、俺は何度だって、お前を斬る！」

〈戦闘会話 リュクスVSネメシス〉

ネメシス「サコミズ王の娘だろうが、お前はここで終わるんだよ、リュクス！」

リユクス「例え：私の持つオーラ力が劣っていたとしても：お前の様な悪き者を許しはしない！」

ネメシス「仮にもお姫様つてわけか。ならば、俺を斬ってみろよ！」

リユクス「言われなくとも：お前を斬り捨て、世界の平和を掴んでみせる！」

〈戦闘会話　アマルガンVSネメシス〉

キキ「全ての世界を守る戦い：負けるわけにはいかないっすね！」

ヘベ「そうだね。何で言っても世界の生命を私達が握っているようなものだからね」

ネメシス「それは責任重大だな、お前等。アマルガンもいい歳してまだ、平和に暮らせなさそうだな」

アマルガン「それでもワシは戦う。いずれ生まれてくる生命達の未来を守るため：そして、ワシ達の生きる未来の為に！」

ネメシス「いい覚悟だ。お前の歴戦の力と俺の神に等しい力の真っ向勝負だな！」

アマルガン「神を気取るのもそこまでじゃ！此処で切り捨てる！」

〈戦闘会話　朗利VSネメシス〉

朗利「悪の元凶を倒し、世界を救う…。まるでヒーローものの物語だな」

ネメシス「そう、そしてヒーローの敗北によつて、この物語は幕を閉じるんだよ！」
 朗利「勝手にそんな事決めてんじやねえ！そういうのは俺達に勝つて言うんだな！」
 ネメシス「じゃあ、遠慮なく勝たせてもらうぜ、朗利！」
 朗利「言つてろ！俺達に喧嘩を売つた事を後悔させてやるぜ！」

〈戦闘会話 金本VSネメシス〉

ネメシス「いつも朗利に付き添う奴が一人で俺の相手をするつてののか、金本？」

金本「それは違うな、ネメシス！俺はもう一人じゃない！此処には沢山の仲間がいる！」

ネメシス「どちらにしろ、此処で消える生命なんだよ！」

金本「させるか！俺は…俺達は決してお前には負けない！」

〈戦闘会話 サコミズVSネメシス〉

ネメシス「せっかく助かった生命を無駄にする気か、サコミズ？」

サコミズ「私が助かったのは…リユクスと鈴木君のおかげ…故にこの生命、彼らの為に燃やす…それが私の贖罪だ！」

ネメシス「罪なんて受ける必要はねえぜ！世界が滅びれば、そんなものは必要なくな

るんだからよ！」

サコミズ「世界は滅させせん！私が…今を生きる者がお前を必ず止める！…未来を守る為…いざ、勝負！」

〈戦闘会話　カミーユVSネメシス〉

ネメシス「カミーユ！お前をまた絶望に墮としてやるぜ！」

カミーユ「そう簡単にいくかよ！戦争を止める為…お前を倒してやる！」

ネメシス「それでこそゲームのしがいがあるつてもんだぜ！さあ、ラストゲームの開幕だ！」

カミーユ「ネメシス…！お前に言つてやる…戦いは遊びでやつてるんじゃないんだよ！」

〈戦闘会話　ファVSネメシス〉

ネメシス「メタスで挑んでくるとは、随分な命知らずだな！」

ファ「例え、そうでも…私は退く訳にはいかないわ！カミーユだって、戦っているんだから！」

ネメシス「カミーユねえ…。だったら、そのカミーユと一緒にあの世へ送つてやると

するか！」

フア「カミィユには手を触れさせない！そしてこの世界も…あなたの好きには絶対にさせない！私だって…戦ってみせるわ！」

〈戦闘会話 ヤザンVSネメシス〉

ネメシス「始めようじゃねえか、ヤザン！お前の大好きな戦争をよ！」

ヤザン「わかってんじゃねえかよ！なら、俺もお前のゲームとやらに付き合ってやるよ！ただ、お前はゲームオーバーになるけどな！」

ネメシス「言ってくれるな！ゲームはやってみないとわからねえだろ！」

ヤザン「どうでもいい！さっさと始めようぜ！世界をかけた戦いつて奴をよ！」

〈戦闘会話 ジュドーVSネメシス〉

ネメシス「やる気は満々の様だな、ジュドー！未来を担う若者の力…見せてもらおうぜ！」

ジュドー「お前の思い通りにさせるつもりはないが、お前を止めるためなら、俺の力を見せてやるよ！」

ネメシス「いいじゃねえか！やっぱり、ゲームはこうでなくてはな！」

ジュード「ゲームゲームって…いい加減にしろよ！俺達はゲームのキャラでもない！一人一人がしっかりと生きているんだ！それがわからないお前じゃ、俺達には絶対に勝てないんだよ！」

〈戦闘会話　ルーVSネメシス〉

ネメシス「ジュードと共に平和な世界で生きる…。そんな夢みたいな話、本当に実現できると思っているのかよ？」

ルー「確かに、あなたからしたら、夢でしようね。でも、不可能ではないわ！」

ネメシス「なら、実現させるんだな、ルー！俺との勝負に勝って、全ての世界の平和を掴んでみやがれ！」

ルー「あなたに言われなくても、そうするわよ！私だって、誰かを守れるって事を証明するから！」

〈戦闘会話　ビーチャVSネメシス〉

ネメシス「リーダーってのは、可愛そうだな、ビーチャ！お前よりもジュードが目立っているんだからな！」

ビーチャ「確かに俺はジュードに劣るかもしれねえ…。だがな、いつかかならず、越

えてやるさー！」

ネメシス「へえ、なるほどな。だが、越える前に世界は消えるぞ！」

ビーチャ「なら、俺が守ってみせる！お前はジウドーを越える前の壁にすぎないんだよ、ネメシス！」

〈戦闘会話 エルVSネメシス〉

エル「ネメシス、今日であんたも最後だよ！」

ネメシス「最後の宣告をお前にされるとはな、エル。なら、終わりを見せてもらうとするか！」

エル「こんなんじゃ、あんたを警戒させる事は出来ないか」

ネメシス「ああ、まだまだだな。俺を怖がらせたのなら、それ相応の力で示す必要があるぜ！」

エル「いいさ、怖がらせなくとも…あんたを止められればね！でも、私の力は教えてあげるよ！」

〈戦闘会話 プルVSネメシス〉

ネメシス「遊び相手が欲しいなら、俺がなってやるぜ？ほーら、プルプルプルー！…っ

てな」

プル「真似するな！それに私はあんたなんかで遊んで欲しくないから！」

ネメシス「その言い方、グサツとくるねえ…。聞き分けのないガキにはお仕置きが必要だな、プル！」

プル「それは私のセリフだよ！アル・ワースも全ての世界もあんたの好きにはさせないから！」

〈戦闘会話　プルツォVSネメシス〉

ネメシス「プルのクローンか。プルと見比べられる気持ちはどうだ？」

プルツォ「見比べられてもいい。私は私…プルはプルだ！」

ネメシス「強い意志を持つようになったな、プルツォ。じゃあ、その強い意志が何処まで持つか…試してやる！」

プルツォ「いいだろう。だが、見せるのは私達全員の意志だ！ネメシス、お前の好きにはさせない！」

〈戦闘会話　マシユマーVSネメシス〉

ネメシス「洗脳を乗り越え、新たな自分を取り戻した…。いい展開だな」

マシユマー「それもお前の思惑だと言いたいのか？生憎だが、これは私がジウドー君達や天使殿と共に掴んだ道だ！」

ネメシス「掴んだ道ねえ…。ならば、マシユマー。その新たな道をお前のその薔薇と共に散らしてやるよ！」

マシユマー「させん！この薔薇は私の生き様…そして、新たな道への目標！それを散らす事は容易では無いことを教えてやる！」

〈戦闘会話〉 グレミーVSネメシス

ネメシス「お坊ちゃんが俺の邪魔をしない方がいいぜ、グレミー」

グレミー「私をお坊ちゃんと呼ぶな！今の私はただのグレミー・トトだ！」

ネメシス「ただの、ねえ…。そう簡単に人つてものは変わらねえよ。お前は自分自身の運命すら変える事はできないんだよ」

グレミー「やってみなくては分からない！人間を駒のように扱ってきた貴様に人間を語る資格はない！これは私が変わる第一歩でもあるのだ…貴様をここで討つ！」

〈戦闘会話〉 ハマーンVSネメシス

ハマーン「争いの根源…ネメシス、貴様を断つ！」

ネメシス「やる気じゃねえかよ、女傑さんよ？」

ハマーン「私をその名で呼ぶな！新たな世界：私はそれを見たくなくなったのだ」

ネメシス「新しい世界ねえ：世界は滅びる運命にあるのにご苦労な事だな、ハマーン
！」

ハマーン「そうか？ここにはこのエクスクロスには名だたる猛者がいる…。それに学んだ事も沢山あるのだ…。運命は変わる、人の手によつてな！私も世界の運命を変えるため、この戦いに生命を懸けよう！」

〈戦闘会話　ラカンVSネメシス〉

ネメシス「ラカン、お前が平和の為に戦うとはな」

ラカン「勘違いするな。俺は元の世界に戻る為に戦っているだけだ」

ネメシス「それなら、お前だけでも元の世界へ戻してやってもいいぜ」

ラカン「俺を甘くみるのも大概にしろよ、ネメシス！そもそも全ての世界を滅ぼすと
言うのなら、戻っても意味がない！お前を倒して、元の世界へ戻らせてもらう！」

〈戦闘会話　アムロVSネメシス〉

ネメシス「伝説のエースパイロット…。そうだ、お前の様な存在と戦えば、俺の欲が

さらに広がる！」

アムロ「あくまでも自らの欲望を解放する事を望むのか……！その先に貴様は何を得る
!?？」

ネメシス「さあな。先の事なんざ知らねえよ。俺は今を懸命に楽しめば、それでいいんだからよ。アムロ、俺を精々楽しませてくれよ！」

アムロ「エゴを止めるつもりはないのか！お前を楽しませるつもりはないが、争いを止めるため、お前を倒してみせる！」

〈戦闘会話〉 シヤアVSネメシス

ネメシス「赤い彗星とやれるなんて、思っても見なかったぜ！」

シヤア「それは君のシナリオでは、私はエクスクロスには所属していない事になっていたのかな？」

ネメシス「さてな、自分で考えてみるよ、シヤア。選ぶ道を変えたお前の思想でな」

シヤア「いや、すでに考える必要はないさ。ここで争いである君を肅清すればいいだけの話だからな。君の様な存在は生かすわけにはいかんのだよ！」

〈戦闘会話〉 ギユネイVSネメシス

ギユネイ「神を気取るのもここまでだぜ、ネメシス！」

ネメシス「なんか、間違っついねえか、ギユネイ？俺は神になる存在だ。気取っつてないんていねえよ」

ギユネイ「神になるって事はまだ神じやねえって事だな。なら、俺にも勝てる見込みはあるって事だ！」

ネメシス「おーおー、頑張れー。不可能に近いけどな」

ギユネイ「その余裕もここまでだ！大佐やアム口でなくても…やってやる！」

〈戦闘会話　バナージVSネメシス〉

ネメシス「お前の光…戦うのが楽しみだぜ！」

バナージ「ユニコーンの輝きの事を言っているのか…！」

ネメシス「可能性により、ユニコーンと共に進化し続けるお前の力を見せてみやがれ、バナージ！可能性がどれだけちっぽけなものか、教えてやるからよ！」

バナージ「確かに…人によってはちっぽけかも知れない…。でも、人は信じれば可能性を大きく持つ事が出来る！その輝きを失わないためにも…行くぞ、ユニコオオオン！！」

〈戦闘会話 リディVSネメシス〉

ネメシス「一度は心を闇に落としたのによく這い上がってこれたな、リディ」

リディ「そうだな。自分でも情け無い過去を持っていると思っっている。だが、過去の俺があつて今の俺がある」

ネメシス「過去を受け入れる必要なんてねえよ。未来は……ここで終わるんだからよ！」

リディ「終わらせはしない！可能性がある限り……そして、ここに俺達がいる限り……未来は続いていくんだ！それを証明するぞ、バンシイイイツ!!？」

〈戦闘会話 マリーダVSネメシス〉

ネメシス「聞かせろ、マリーダ。これまでお前は散々な扱いを受けてきたはずだ？それなのに何故、生きようとする？」

マリーダ「辛い人生であつたが、同時に心のありどころの人達もいた。バナージやマスター達がそうだ！」

ネメシス「その心の在りどころを守るために生きるってか？それを潰すのも楽しそうだな！」

マリーダ「お前の戦闘快樂に付き合うつもりはない。……マスター達を守る……その為

私は何度でもお前に立ち向かう！」

〈戦闘会話　フロンタルVSネメシス〉

ネメシス「これも運命が変わる原因か、本来ならばお前は死んでいたはずだ、フロンタル」

フロンタル「それもまた可能性という事か。世界とは何が起きてもおかしくないな
ネメシス「そう、そしてお前もここで終わるんだよ！」

フロンタル「ならば、抵抗させてもらおう。新たな奇跡を起こす為に！」

〈戦闘会話　アンジェロVSネメシス〉

ネメシス「選べ、アンジェロ。フロンタルと一緒に死ぬか、孤独のまま死ぬか」

アンジェロ「どちらも死ぬ事は確定か。：ならば、その選択を私は行わない」

ネメシス「何っ…!?？」

アンジェロ「人の選択は無限にある。貴様はただ縛り付けているだけだ。：私が選ぶ
選択は貴様を倒し、世界を平和にするただそれだけだ！」

〈戦闘会話　シーブックVSネメシス〉

ネメシス「シーブック、お前の才能には驚かされるばかりだ」

シーブック「…僕はお前を楽しませるつもりはない」

ネメシス「だろうな！なら、無理やりにもお前をやる気にしてやる！セシリー辺りが狙い目か？」

シーブック「させない！セシリーにも全ての世界にも手は出させない！僕が…僕が止めてみせる！」

〈戦闘会話〉 セシリーVSネメシス

ネメシス「愛の力…成る程な。お前を見るとその理由が理解できるぜ」

セシリー「…」

ネメシス「だが、その愛つてのを崩せば、人間は簡単に壊れるつてもんだぜ！セシリー、お前から愛を奪ってやるよ！」

セシリー「愛は…必要な感情だから…。あなたには奪わせない！必ず守ってみせる…世界と共に！」

〈戦闘会話〉 トビアVSネメシス

ネメシス「クロスボーン・バンガードのエースの腕…間近で見せてもらうぜ、トビア

！」

トビア「こつちの情報は筒抜けか…！なら、手を抜く必要もねえな！」

ネメシス「勿論だ！全力で来いよ！」

トビア「ネメシス、なら、最後に教えてやる！これが俺の…海賊流のやり方だ！」

〈戦闘会話 キンケドウVSネメシス〉

ネメシス「未来は続き、シーブツクはお前にへとなる。だが、ここでシーブツクを殺せばお前も死ぬ！」

キンケドウ「そうか？あまり、俺も過去の俺もなめない方がいいぜ！」

ネメシス「自分自身だから、信頼できるってわけかよ、キンケドウ！その余裕、何処まで持つかな！」

キンケドウ「いや、余裕を持っているのはお前も同じだろう。ならば、どちらの余裕が保つか…ここでハッキリさせてやる！」

〈戦闘会話 ヒイロVSネメシス〉

ヒイロ「ターゲット確認…！これより排除に入る」

ネメシス「相変わらず冷静だねえ、ヒイロ。そんなお前の苦しむ顔も見てみたいもの

だ」

ヒイロ「趣味がいいとは言えないな、ネメシス。だが、俺は兵士の前に人間だ…悲しむ事だつてある」

ネメシス「へえ、それを聞いたら余計にやってみたくなくなったぜ！手始めにリリーナの生命をお前の目の前で奪ってやるとするか！」

ヒイロ「…お前はもう喋るな。ターゲット、ネメシス…これで戦争を終わらせる…！」

〈戦闘会話　デュオVSネメシス〉

ネメシス「死神か…。見た者は死んじまうな、おー怖い怖い」

デュオ「そう思っていない態度で俺を挑発しようとしているが、無意味だぜ、ネメシス！」

ネメシス「…まあ、通じないか。流石はデュオだな。…だが、死神もここで終わりだ」
デュオ「終わるのは死神の姿を見たお前の方だぜ！さあ、行くぜ…相棒！」

〈戦闘会話　トロワVSネメシス〉

ネメシス「名無しのトロワか。名前があるんなら、名無しとか言わないだろ」

トロワ「確かに俺は名無しだ。だが、名前がないと不便なのでな。トロワと名乗らせ

てもらっている」

ネメシス「まあ、名前がないと不便なのは確かだな。じゃあ、お前を倒したら、そのトロワって名前を頂くとするか！」

トロワ「この名にそこまでの思い入れはないが、阻止させてもらう。そもそも俺は負けるつもりはない」

〈戦闘会話　カトルVSネメシス〉

ネメシス「カトル、お前…裏の顔があるだろ？」

カトル「そんな事ないよ。あまり適当な事を言っていると…潰すよ？」

ネメシス「おいおい、裏でてるぞ！」

カトル「…冗談さ。でも、君を止める事には全力を懸けるよ…！世界から争いをなくす為…行くよ、サンドロック…！」

〈戦闘会話　五飛VSネメシス〉

ネメシス「悪を倒す為に生きているのなら、俺はお前にとっての最大の悪だよな、五飛？」

五飛「わかっているのなら、話は早い。ネメシス、悪として…俺に討たれろ！」

ネメシス「そういうわけにはいかないな！なら俺はお前を倒し、俺が正義となる！」
五飛「正義を易々と口にするな！貴様は絶対に許さん！覚悟しろ、ネメシス！」

〈戦闘会話　ゼクスVSネメシス〉

ネメシス「勝負といこうぜ、ミリアルド・ピースクラフト」

ゼクス「様々な情報網を持つているお前でも間違える事はあるのだな」

ネメシス「何だと…？何が違うというんだよ、ゼクス？」

ゼクス「呼び方だ。既にミリアルド・ピースクラフトは死んだ。お前のいう通り、私はゼクス・マーキスだ。それを忘れるな！」

〈戦闘会話　ノインVSネメシス〉

ネメシス「ノイン、守ってみろよ！お前の大切なゼクスを…世界をな！」

ノイン「言われなくても、ゼクスにも世界にもさよならは言わない！そして、平和を待つつもりはない！平和な世界は私たちの自身の手で掴む！もうこれ以上…待つのはおめんだからな！」

ネメシス「そうか、そうか！なら、お前の前で市民を手にかけるのも面白そうだな！」
ノイン「汚い闘いをするな！お前に生命の大切さというものを見せてやる！」

〈戦闘会話 シンVSネメシス〉

ネメシス「憎んでいたキラやアスランと手を取り合う様になるとはな。お前の戦いの決意つてのはそんなものだったのか？」

シン「違う！俺はもう憎しみは捨てたんだ！平和な世界…花の散らない世界を作る為、俺は戦っているんだ！」

ネメシス「例え争いがなくなっても、花は散るぞ？お前は過去の運命から逃れられないんだよ、シン！」

シン「お前が俺の運命を決めるな！ここでお前を止める！…全ての生命の為に！」

〈戦闘会話 キラVSネメシス〉

ネメシス「キラ、綺麗事じゃ世界は救えないぜ？」

キラ「確かに僕の言葉は綺麗事かも知れない…。でも、守りたい世界がある！」

ネメシス「守りたいだけじゃ…守れないものもあるんだよ！…そんなものがあつたら俺だって、自分の星を救えた…！」

キラ「あなたは…。それなら、あなたも救ってみせる！破壊による快樂でなく、生きる事の素晴らしさを見せて！」

〈戦闘会話 アスランVSネメシス〉

アスラン 「どうしても戦闘をやめないと言うのか、ネメシス！」

ネメシス 「今更だろう、アスラン？俺とお前達が戦い合う事は既に決まっていたんだよ！」

アスラン 「倒さなければ…ならないのか…！」

ネメシス 「迷いなく来い！じゃなきや死んじまうぞ！」

アスラン 「…俺は死ぬつもりはない…！お前を倒すのではなく、止めてやる！」

〈戦闘会話 ルナマリアVSネメシス〉

ネメシス 「射撃はやめてくれよ、ルナマリア！当らない銃撃を撃たれてもつまらないからよ！」

ルナマリア 「あんたの指示なんて、受けるつもりはないわ！」

ネメシス 「強気だねえ、まあ…目の前で愛するシンを殺されれば、その強気も消えるだろうよ！」

ルナマリア 「そんな事させるわけないでしょ！シンも世界も…私が守るから！」

〈戦闘会話 レイ「Destiny」VSネメシス〉

ネメシス「レイ……。お前の親のデュランダル達はいない。それなのに何故、俺の邪魔をする？」

レイ「Destiny」「少なくともギルはこの世界を愛していた……。だから、ギルの愛した世界を守るだけだ」

ネメシス「いいぜ、ならばデュランダルの元へ送ってやるよ！シンという親友と共にな！」

レイ「Destiny」「俺は兎も角、シンを殺させるつもりはない！そして、俺も死ぬ気はない！ギルの愛した世界で俺も生きていく！」

〈戦闘会話 ステラVSネメシス〉

ネメシス「ステラ、シンにはルナマリアがいるんだぜ？お前がどれだけ頑張ってもルナマリアを越える事は出来ない」

ステラ「ルナマリアを越える必要はない。だって……ルナマリアも友達だから」

ネメシス「……その手は通じないってか。何だよ、つまんねえな」

ステラ「でも、二人の事を馬鹿にするなら、許さない……！私も、あなたに対して怒っているから！」

〈戦闘会話 ハイネVSネメシス〉

ネメシス「残りの人生、有意義に過ごそうとしないのか？」

ハイネ「何言っているんだ？これが俺の有意義な使い方だ。まだまだ俺達には未来を見る資格があるからな」

ネメシス「未来を見る資格か……。それは俺に勝ってから言うんだな！」

ハイネ「喧嘩売ってんなら、買わせてもらうぜ！世界を懸けた喧嘩なんて、そう簡単に出てこないからな！」

〈戦闘会話 刹那VSネメシス〉

ネメシス「純粋種のイノベーター！そして、ELSとの対話へ導いたお前には称賛の言葉を送るぜ、刹那！」

刹那「お前は対話の意志を見せるつもりはないのか……！」

ネメシス「当たり前だ！何故、俺が下等生物の人間と対話しなけりやならないんだよ！」

刹那「対話を望まぬ意志……！世界を滅ぼすのなら、止める……！未来を切り拓く！ダブルオークアンタ、これが……世界を救うラストミッションだ！」

〈戦闘会話　ロックオンVSネメシス〉

ネメシス「乱れ撃つたら、狙い撃つ男じゃねえだろ、ロックオン」

ロックオン「それもそうだな。だが、この名前を変えるつもりはないぜ」

ネメシス「なら、雑な乱れ撃ちで生涯を最後にしやがれ！」

ロックオン「流石にそう言うわけには行かねえんだよ！アニューとの未来…お前に邪魔させるかよ！」

〈戦闘会話　アレルヤVSネメシス〉

ハレルヤ「楽しいゲームの時間も今日で最後だぜ、生命体野郎！」

ネメシス「…ゲームにもいずれ、エンディングが来る、か…。だが、俺の場合、勝利のエンディングだかな」

アレルヤ「僕達が負ければ、世界が滅ぶ…！」

ネメシス「その通りだ、アレルヤ！お前達、ソレスタルビーイングの行った事も無駄になるんだよ！」

ソーマ「いいえ、無駄じゃないわ！」

アレルヤ「僕達は全ての世界を守る為に集まったんだ！それは平和な世界を目指す為

に、一つとなった証拠だ！アレルヤ・ハプティズム、ソーマ・ピーリス…世界の為に飛翔する！」

〈戦闘会話 ティエリアVSネメシス〉

ティエリア「年貢の納め時だぞ、ネメシス」

ネメシス「そう怖い顔するなよ。綺麗な顔が台無しだぞ？」

ティエリア「そこまで僕を怒らせたい様だが…無意味だ」

ネメシス「流石はティエリアだな！冷静なのは相変わらずか！だったら、お前を力で屈服させてやるよ！」

ティエリア「良いだろう！平和な世界の為…君を止めてみせる！それこそが僕達の真の対話への道だ！」

〈戦闘会話 スメラギVSネメシス〉

ラッセ「今まで世界を懸けてきて戦って来たが、謎の生命体との戦いとは逃れられないようだな」

スメラギ「そんな事、今更よ。ラッセ」

ネメシス「戸惑いを見せない…それこそがお前の戦術予報の腕か、スメラギ！なら、お

前達の世界の大切な奴等もまとめて消してやるよ！」

ミレイナ「パパやママ達を消させる様な真似はさせないです！」

フェルト「生き残る……。私達、エクスクロス全員が！」

ネメシス「いいねえ、それこそゲームのしがいがあるってもんだぜ！」

スメラギ「あなたのゲームもここで終わりよ、ネメシス！私達の存在意義……。あなたにも見せてあげるわ！」

〈戦闘会話　ニールVSネメシス〉

ネメシス「勝負だぜ、一代目ロックオン・ストラトス！」

ニール「俺達はお前の様な世界の歪みと戦って来た……。そして、お前を倒せば、歪みが消えるってもんだぜ！」

ネメシス「そうか、ニール？お前にも仕留められないものがあると教えてやるよ！」

ニール「是非とも教えて欲しいな……。だったら、俺も教えてやる……。俺からは逃げられないとな！世界の為……。狙い撃つぜ！」

〈戦闘会話　グラハムVSネメシス〉

ネメシス「一度はガンダムに心を奪われ、修羅の道へと堕ちた男が、ガンダムに乗る

とは酷な話だな」

グラハム「全くもって、人生とは何が起こるか、わからないな」

ネメシス「じゃあ、そのガンダムを墓標にしてやるよ。ガンダムを愛したお前にとつては最高の墓だろ、グラハム？」

グラハム「いいや、私とて、ここで死ぬ訳にはいかん。生きて未来を切り拓く…今度こそ、刹那に胸を張ってそう言える様に…私も戦うのだ！」

〈戦闘会話〉 パトリックVSネメシス

ネメシス「幸せ過ぎて、不死身じゃなくなるんじゃないか、パトリック？何せ、俺が目の前にいるからな」

パトリック「さあな、そんなものやってみなくちゃわからないぜ？ELSの時も案外生き残ったしな」

ネメシス「いいや、今回は確実に言ってる。お前は死ぬんだよ！」

パトリック「そんな事、お前が勝手に決めんじゃねえ！大佐の下に帰る為…そして、大佐達が住む世界をお前なんか壊させてたまるかよ！」

〈戦闘会話〉 アンドレイVSネメシス

ネメシス「お堅い奴が来たな」

アンドレイ「そう思うのなら、君は他人を見る目がないな。私はもう過去の私とは違う」

ネメシス「お前もガンダムによって変わった男ってわけか。そう言えば、お前には好意を寄せていた女がいたな？ なんなら、先にそいつから殺してもいいんだぜ、アンドレイ？」

アンドレイ「…准尉にはもつと強い男がついている…。だからこそ、軍人として…私は彼等を守るだけだ！それが唯一、私の出来る償いだ！」

〈戦闘会話　セルゲイVSネメシス〉

ネメシス「大切な息子に討たれた気持ちはどうだったんだ、セルゲイ？」

セルゲイ「あまり、いいものではなかったさ」

ネメシス「安心しろ、アンドレイ共々、再び妻の下へ送ってやるからよ！」

セルゲイ「私は笑えない冗談があまり好きではない。ネメシス、アンドレイに手を出すと言うのなら、お前を許すわけにはいかん！」

〈戦闘会話　アニューVSネメシス〉

ネメシス「イノベイドが人間の事を好きになるなんてな。人生、何が起こるかかわからないな」

アニュー「イノベイドも人間も関係ないわ！私達は分かり合えたのだから！」

ネメシス「お前がその架け橋となる気か、アニュー！」

アニュー「そうかも知れないわ……。でも、私はライルとの生きる未来が欲しい……。だから、足掻き続けているのよ！」

〈戦闘会話〉 デカルトVSネメシス

ネメシス「異性体の存在を否定してきたお前にとっては俺もその対象か、デカルト？」

デカルト「そうだな。かつての俺は異性体の存在を否定し、ELS達の声さえも聞かずにいた。だが、お前はELS達とは違う……。話し合いをしようとしなさい！」

ネメシス「話しても一緒だ。俺とお前達がわかり合う事なんてない」

デカルト「ならば、遠慮する必要はないな！ここでお前を倒す！」

〈戦闘会話〉 リボンズVSネメシス

ネメシス「よう、リボンズ。俺が置いておいた0ガンダムの乗り心地はどうだ？」

リボンズ「……成る程、やはりこの0ガンダムは君が置いたものだったのか」

ネメシス「へえ、気づいていたのか。その機体の性能も動きも把握済みだ！」
リボンズ「では、君の把握を上回るとしよう！僕に会った事を後悔するといいさ！」

〈戦闘会話　キオVSネメシス〉

ネメシス「フリット、アセムと続いてきたヴェイガンとの戦争による歴史……。キオ、まさか、お前が止めるとは思ってもみなかつたぞ！」

キオ「戦争には色々な止め方がある……。僕はその可能性を見つけたただけだ！」

ネメシス「だが、どちらにしろ。地球人もヴェイガンも消える事になるがな！」

キオ「そうはさせない！世界は平和を望んでいるんだ……。僕達がその道筋を作っていかんだ！」

〈戦闘会話　アセムVSネメシス〉

ネメシス「ダークハウンド：格好いいねえ、アセム。いや、キャプテン・アツシユと呼んだ方がいいか？」

アセム「出来れば、アセムと呼んでくれ。キャプテン・アツシユは世界が平和になった時に終わったからな」

ネメシス「平和のために戦う海賊：興味深いじゃねえか！」

アセム「それなら、俺の戦いにも釘付けにしてやるよ！散々、悪さしてきたんだ…その報いは受けてもらうぜ！」

〈戦闘会話 フリットVSネメシス〉

ネメシス「歴戦の戦士、フリット・アスノが目の前にはな」

フリット「ヴェイガンを憎み続けてきた私はが歴戦の戦士か…」

ネメシス「憎しみ…その感情が俺のゲームをさらに面白くしてくれる！」

フリット「だが、連れてくる時期が遅かったな、ネメシス。私はもう憎しみには呑まれていない！」

〈戦闘会話 セリックVSネメシス〉

ネメシス「俺の攻撃を読み解けるかな、戦場のホームズさんよ？」

セリック「そう言われると読み甲斐があるが、生憎と読み解く必要はないさ」

ネメシス「どういう意味だ、セリック？」

セリック「そのままの意味さ！お前の力による支配…俺が止めてやるんだよ！」

〈戦闘会話 シヤナルアVSネメシス〉

ネメシス「スパイの末路ってものを教えてやるよ、シヤナルア」

シヤナルア「あなたに教えてもらわずとも結構だよ」

ネメシス「連れねえ事言うなよ！ついでに俺が恐怖つてのをみっちり教えてやるよ！」

シヤナルア「結構だつて言ったよ！しつこい男は嫌いなんだ…子供達の未来を奪うと言うのなら、容赦しないからね！」

〈戦闘会話　オブライトVSネメシス〉

ネメシス「オブライト、俺が大切な女の下へ送つてやるよ」

オブライト「大切な女、か…」

ネメシス「それがお前の居場所のはずだよな？」

オブライト「居場所は…家は俺が決める。お前に決める権利はない。…俺は…お前にだけは負けられないのだ！」

〈戦闘会話　デーンVSネメシス〉

ネメシス「愛するルウと会えるチャンスだけ、デーン。どちらにしろ世界は終わるんだから、抵抗しても無駄だぜ？」

デイン「確かに：俺一人では、不可能かもしれない。でも、ここにはキオやエクスクロスのみんががいる！」

ネメシス「何人いようと俺には勝てないんだよ！」

デイン「俺達は諦めが悪いって事を知らないみたいだな！：やってやる：！世界を：みんなを守る為に！」

〈戦闘会話　ジラードVSネメシス〉

ネメシス「多くの悲しみを受け、さらに悲しみを受けようとするのかよ？」

ジラード「ええ、本当に辛い人生だったわ」

ネメシス「それなら楽にしてやるよ、ジラード」

ジラード「必要ないわ。たとえ辛い人生でも：私は受け入れて戦う：！未来へ生きていこうとしているキオ達に負けないようにね！」

〈戦闘会話　ゼハートVSネメシス〉

ネメシス「地球人とヴェイガン：その異なる種族同士で友情を育んだお前とアセムには楽しませてもらったぞ」

ゼハート「我々の戦いを見ていたとはな」

ネメシス「その友情：壊してやるよ、ゼハート！」

ゼハート「アセムはかけがえない友人だ……。彼との繋がりを潰させるわけにはいかない！そして、彼等の生きていく世界を：お前の好きにはさせない！」

〈戦闘会話　フラムVSネメシス〉

ネメシス「お前は馬鹿な女だな、フラム。ゼハートの側になんかいないければ死ぬ事はなかったのによ！」

フラム「何を言っても無駄よ、ネメシス。私はゼハート様と一緒に居続けるって、決めたのよ！」

ネメシス「なら、愛するゼハートと一緒に消してやるよ！」

フラム「私達はまだ死ぬつもりはないわ！これから生きていく未来：それを見届けるまでは！」

〈戦闘会話　レイルVSネメシス〉

ネメシス「惨めな最後を与えてやるぜ」

レイル「お前は本当に性格の悪い奴だな、ネメシス！」

ネメシス「褒め言葉と受け取っておくぜ、レイル！ゼハートの前に死ぬよ！」

レイル「俺もゼハート様も…まだ死ぬわけにはいかないんだよ！これからの未来を…絶対に見続けるんだよ！」

〈戦闘会話　ベルリVSネメシス〉

ネメシス「世界は争いを止める事はない。それはお前等の世界の未来でも争いは治らないんだよ！」

ベルリ「だからって…世界を滅ぼしていいわけないだろ！争いを必死に止めようとする人だっているんだ！」

ネメシス「だつたら、俺を止めてみろよ、ベルリ！お前とG―セルフの力で！そして、もつとゲームを面白くしろ！」

ベルリ「あんたを止める…！でも、ゲームをするつもりはない！人の生命をゲームのコマと思っているあなたには絶対に負けない！」

〈戦闘会話　アイーダVSネメシス〉

アイーダ「ネメシス、あなたの悪だくみもここまでです！」

ネメシス「そう熱くなるなよ。突撃娘が突撃する気かよ？」

アイーダ「私を挑発しても意味はありませんよ。…私は私…突撃娘と呼ばれようと私

は私自身の為すべき事をするだけです！」

ネメシス「それがお前の強さか、アイーダ。だったら、変わったお前を見せてみろよ！」

アイーダ「言われなくとも…見せてあげます！私達の力を！」

〈戦闘会話　　ラライヤVSネメシス〉

ノレド「ネメシス！悪さもここまでだよ！」

ラライヤ「あなたの野望は私達が阻止します！」

ネメシス「いい心意気だな、ラライヤ、ノレド！だが、お前等じゃ俺を止める事は出来ねえぜ！」

ノレド「そんな事、やってみないとわかんないよ！」

ネメシス「じゃあ、かかって来いよ！その顔を悲しみに変えてやるからよ！」

ラライヤ「私達はあなたを決して許しません！平和な世界…それを作る為にあなたを討つてみせます！」

〈戦闘会話　　ドニエルVSネメシス〉

ネメシス「メガファウン組か！お前達も災難だな、こんな事件に巻き込まれてよ！」

副長「確かに…全世界の未来を背負っているなんて…」

ギゼラ「確かに…これまで次元を超えすぎて来たが、もうそんな簡単な事じゃない！」
ドニエル「だが、ここまで来たらやるしかないだろう！世界の命運は我々にかかつているのだからな！容赦なくいくぞ！」

ステア「イエツサー！」

ネメシス「ほう、随分やる気だな、ドニエル。お前は吹っ切れた様だな」

ドニエル「こうもしておらんと戦えなくなるからな。もう問題はアル・ワースだけじゃないんだ。さあ、お前達…行くぞ！」

〈戦闘会話　ケルベスVSネメシス〉

ネメシス「お前の他の奴らを奮い立たせる力は認めてやるよ、ケルベス！」

ケルベス「ほう、俺も認められていたとは光栄だな」

ネメシス「その褒美にあの世へ送ってやるよ！」

ケルベス「悪いがまだ死ぬわけにはいかない。生徒達の未来を見る事と…ライヤさんに伝えなければならぬ事が沢山あるからな！」

〈戦闘会話　リングVSネメシス〉

ネメシス「モランで立ち向かってくるとは随分と生命知らずだな、リングォ！」
リングォ「このモランでも：俺は戦う事ができるんだ！」

ネメシス「何がお前をそこまで奮い立たせる？ ラライヤの為か！」

リングォ「それが一番だけど、それだけじゃない！ 今を：そしてこれからを生きていく人達の為にもお前に屈するわけにはいかないんだ！」

〈戦闘会話　クリムVSネメシス〉

ネメシス「天才が破れる時だぞ」

クリム「ほう、神を自称するだけの事はあるな。それは私を倒してから言うんだな！」
ネメシス「お前がそれをいうとはな、流石天才クリムだ。お望み通り、敗北を教えるやるぜ！」

クリム「残念だが、敗北を知るのは貴様の方だ。世界を守る為だ：私も全力を出して、貴様を討つ！」

〈戦闘会話　ミックVSネメシス〉

ネメシス「なかなかの腕だが、所詮は人間：。限界だつて来ているはずだろ？」

ミック「まだまだ私をなめてもらっては困るね。それに限界が来たとしても言うつも

りはないよ」

「ネメシス「相変わらず、強情な女だな、ミック。だが、その強気がどこまでも続くか、見ものだな！」

ミック「そっちこそ！その余裕の表情を焦りに変えてあげるよ！」

〈戦闘会話　マスクVSネメシス〉

ネメシス「あれだけ恨んでいたベルリと共に戦うとは……クンタラの意志とはそんなものだったのかよ、ルイン？」

マスク「元の世界へ戻る為に手を組んでいるだけだ。後、今の私はマスクだ！」

ネメシス「それは悪かったな、マスクー！そのお詫びに元の世界へ戻る前にあの世に送ってやるよ！」

マスク「悪意そのものを治めるつもりはないか……！ならば、貴様を討つ！そして、私はベルリに勝ってみせるのだ！」

〈戦闘会話　マニイVSネメシス〉

ネメシス「マニイ、ここは戦場だ。応援しかできないチアリーディングの女は大人しく帰りな！」

マニイ「それは関係ないわよ！…今ここにいるのは争いを止める為…そして、ルインと一緒に生きていこうとするマニイ・アンバサダだから！」

ネメシス「安心しろ。もうすぐ愛するルインといつまでも一緒にいる事ができる」

マニイ「誰もあなた何かに未来を決めてもらおうと思っていけないわ！私達は自分達の方で未来を進んでいく…あなたを倒してね！」

〈戦闘会話　バララVSネメシス〉

ネメシス「可愛そうだな、バララ。お前の信頼しているマスクはマニイを選んだ様だぜ？」

バララ「そんなんで私の心を乱す気かい？悪いけど、それに引つかかるほど、私は甘くないよ！」

ネメシス「チツ、そうかよ。だったら、力で黙らせるしかないな！」

バララ「話が早くて助かるよ。遅かれ早かれ、あんたを倒すつもりだったからさ！」

〈戦闘会話　ロックパイVSネメシス〉

ネメシス「恐れずに来るとはたまげたものだな！」

ロックパイ「俺の勝利は揺るがない！大切なものを守る為に俺は戦うだけだ！」

ネメシス「またマツシユナーか。いい加減聞き飽きたぜ！」

ロツクパイ「破壊しか考えのない貴様に言われる筋合いはない！行くぞ…マツシユナー中佐と我々に勝利を！」

〈戦闘会話 キアVSネメシス〉

ネメシス「産まれてくる子供の顔も見れないとは悲しいと思うか、キア？」

キア「全く思わないな。クンも産まれてくる子供も死なせはしない。勿論、俺やエクスクロスの奴等もな」

ネメシス「たいした自信だな。口だけなら、何とでも言えるぜ！」

キア「なら、俺の言葉が口だけではないと言う事を証明してやるから覚悟しやがれよ、ネメシス！」

〈戦闘会話 三日月VSネメシス〉

ネメシス「家族を守る為に自分の生命を犠牲にする…。お前は格好いいヒーローだな、三日月！」

三日月「ヒーロー…？そんなつもりじゃなかったんだけどな…。ただ守りたいものを守っただけだ」

ネメシス「それをヒーローって言うんだよ！んじやあ、今からお前の大切なものを壊してやるよ！」

三日月「そんな安い挑発に乗る気はないよ。どの道、お前はここで倒すつもりだったしな…。さあ、最後まで俺に力を貸せ…バルバトス…！」

〈戦闘会話　オルガVSネメシス〉

ネメシス「オルガ、お前の努力も水の泡と消えるぜ。お前の家族の鉄華団の奴等は全て消えるんだからよ！」

オルガ「誰がそんな事を決めたんだよ？」

ネメシス「俺に決まってるんだろ！全ての人間の生命は俺が握っていると云っても過言じゃねえんだからよ！」

オルガ「だからと云って、あいつ等の未来をお前に渡すわけにはいかねえよ！俺達は絶対先の未来へ行く…もう俺も止まらねえ！」

〈戦闘会話　昭弘VSネメシス〉

ネメシス「ここに来れなかった弟の下へ連れて行ってやるよ、昭弘！」

昭弘「昌弘を侮辱するのは許さん！それに俺は理由もなく死ぬわけにはいかないの

な！」

ネメシス「死ぬ事に理由が必要だとは…お前、変わっているな」

昭弘「お前にだけは言われたくないな。…そういうわけだ。俺は最大級の抵抗をしてやる！」

〈戦闘会話 シノVSネメシス〉

シノ「覚悟しやがれよ、ネメシス！今日の俺は一味違うぞ！」

ネメシス「何が違うと言うんだよ、シノ？」

シノ「そうか、俺と流星号の力も見えないんじゃないやお前もまだまだだな！」

ネメシス「訳分からねえ事言っていないでとつととかかつて来い！」

シノ「言われなくても、お前は俺達がぶっ飛ばしてやるぜ！」

〈戦闘会話 名瀬VSネメシス〉

ネメシス「お前の世界の仲間も全員滅ぶんだ…愛した女達との再会を見させてやる俺の邪魔をどうしてするんだよ？」

名瀬「確かにあいつ等には会いたいのが、死なせるわけにはいかないんでな」
ビスケット「クッキーとクラッカーの2人の未来を壊させはしない…！」

ネメシス「未来などあつてない様なモノだ。人間に未来を見る資格はねえんだよ！」
名瀬「本当にそうか？人間も捨てたモンじゃねえぜ？教えてやるよ：極限の状態の人間の力つてものをな！」

〈戦闘会話　アミダVSネメシス〉

ネメシス「来い、アミダ。悪いが、名瀬共々葬つてやる」

アミダ「いいよ、やつてやろうじゃないか。私に喧嘩を売ったらどれほど怖いかわかっていない様だね！」

ネメシス「さあな。是非とも教えて欲しいな！」

アミダ「なら、教えてやるよ！女：そして、人間の怖さというものをね！」

〈戦闘会話　ラフタVSネメシス〉

ラフタ「世界を滅ぼそうとする生命体との戦い：最終決戦には相応しいね！」

ネメシス「随分乗り気だな、ラフタ。俺の力をよく見ていなかった様だな」

ラフタ「いいや、見ていたよ。でもだからこそ、負けたくないって思ったんだ！」

ネメシス「フン、やつぱり人間は理解不能だな！」

ラフタ「人間の事をわがろうとしないから、そうなるんだよ！覚悟しなよ、私は手加

滅しないからね！」

〈戦闘会話 アストンVSネメシス〉

ネメシス「確かお前には大切な友人がいたんだったな、アストン？」

アストン「……！」

ネメシス「そいつ等に合わせてやる。何、苦しませずに一瞬で楽にしてやるから心配するな」

アストン「タカキ達には手は出せない！確かにあいつ等には会いたいが……死なせるわけにはいかない……！だから、俺があいつ等を守る！」

〈戦闘会話 ハツシユVSネメシス〉

ネメシス「ついていないな、ハツシユ。三日月についてきていなければ、楽にしねたのにな」

ハツシユ「いいや、俺はこれが一番だ」

ネメシス「苦しんで死ぬるほうが好みて事か？」

ハツシユ「勝手に俺を殺すな！俺は三日月さん達と一緒に世界を救えるって事が嬉しいだけだ！俺の微力でも勝ってみせる！」

〈戦闘会話　ガエリオVSネメシス〉

ネメシス「良かったな、ガエリオ。マクギリスと和解できて」

ガエリオ「それもお前のゲームのシナリオの内か……」

ネメシス「その通りだ！そして、お前達はここで消滅する！」

ガエリオ「ふざけるな！俺もマクギリスも……そして、ここにいる全員、負けるつもりはない！決着をつける時だ、ネメシス！」

〈戦闘会話　ジュリエッタVSネメシス〉

ネメシス「俺はそう簡単に負けるつもりはないぜ？」

ジュリエッタ「私も同じです。ここであなたに勝利し、平和な世を勝ち取ってみせます！」

ネメシス「それがお前の大義ってやつか、ジュリエッタ！なら、証明してみろよ！お前の全てをぶつけてな！」

ジュリエッタ「言われずとも……あなたを討ち、この戦争に決着をつけてみせます！」

〈戦闘会話　マクギリスVSネメシス〉

ネメシス「ギャルホルンに反旗を翻し、親友を裏切ったお前が俺の邪魔をする資格はないんじゃないか？」

マクギリス「君の言う通りだ。私はそれ程の大罪を犯した」

ネメシス「わかってんじゃないやねえかよ、マクギリス。じゃあ大罪人はここで処刑しないといけない！」

マクギリス「罰は受けるつもりだ。…だが、それは君の手ではない！私は…罪を背負いながら、生き続ける…！そして、ガエリオとアルミリアの未来を私は守る！」

〈戦闘会話　ワタルVSネメシス〉

ネメシス「ドアクターやエンデを倒したぐらいで意気ならない方がいいぜ、救世主さんよ！」

ワタル「僕は意気がつてなんかいない！救世主としての使命を果たしたただけだ！」

龍王丸「そう。そして、我々は悪しき魂を持つ貴様も倒す！」

ネメシス「いいぜ、来いよ。ワタル、龍王丸！お前等を倒して、救世主伝説はここで終わりだ！」

龍王丸「そうはいかん！これで最後だ…奴を倒すぞ、ワタル！」

ワタル「わかったよ、龍王丸！ネメシス…！救世主ワタルが退治してやるぞ！」

〈戦闘会話 シバラクVSネメシス〉

ネメシス「田舎侍の末路は世界と共に散る…。いいシナリオだぜ！」

シバラク「拙者はそうは思わんな。…拙者と戦王丸はまだ負けるとは思っておらんからな！」

ネメシス「その気迫…流石は侍と言ったところだな。なら、勝負だ！剣ではないがな！」

シバラク「お主にそれ程の事は期待していない。拙者は世界を破滅に導く者を斬り伏せるだけだ！」

〈戦闘会話 幻龍齋VSネメシス〉

ヒミコ「これが本当の最終決戦なのだ！」

ネメシス「その通りだぜ、ヒミコ。この戦いで全てが決まる！」

幻龍齋「そう聞いてしまうと負けるわけにはいかんウラ！」

ネメシス「猿の姿で威張っても怖くねえぞ、幻龍齋！」

ヒミコ「父上はサルも格好いいのだ！父上、最後まで一緒に戦うのだ！」

幻龍齋「ヒミコ…若き生命を未来へ繋げていくために…ワシも全力をかけるウラ

「！」

〈戦闘会話 クラマVSネメシス〉

ネメシス「お前も馬鹿だな、クラマ！大人しく村にいれば良かったのによ」

クラマ「ジツとできないタイプでな。なんせ、俺は鳥だったんだぜ？飛びたくてたまらなかつたんだよ！」

ネメシス「言われてみるとそうだな！それじゃあ、鳥を狩るとするか！」

クラマ「俺と空王丸を簡単に狩れると思つたら、大間違いだぜ、ネメシス！逆に狩られるのはお前だつて事を教えてやるよ！」

〈戦闘会話 虎王VSネメシス〉

ネメシス「ドアクダーの息子、虎王！…いや、聖龍妃の息子、翔龍子と呼んだ方がいいか？」

虎王「翔龍子…！やはり、俺様は…！」

ネメシス「母親との再会…それを果たせなくて悪いな！」

虎王「わかつた事がある…！お前は本当に嫌な奴だつてな！尚更、その人に会う為に…負けるわけにはいかない！」

〈戦闘会話 舞人VSネメシス〉

ネメシス「勇者特急隊の停車場はここみたいだな！」

グレートマイトガイン「いや、私達は止まらない！」

舞人「そうだ！俺達の正義がある限り！俺達は走り続ける！」

ネメシス「正義正義と……いい加減ウザいんだよ！舞人、ガイン！お前達に絶望を教えてやるよ！」

グレートマイトガイン「来るぞ、舞人！」

舞人「ああ、ガイン！ネメシス……！ならば俺達はお前に俺達の正義をもう一度教えてやる！」

〈戦闘会話 バトルボンバーVSネメシス〉

ネメシス「トライボンバーの魂と意志を引き継いだのがお前だったな、バトルボンバー」

バトルボンバー「そうだ！だからこそ、トライボンバーの魂と意志を無駄にするわけにはいかねえんだよ！」

ネメシス「魂と意志なんて、所詮小さいものだ。お前は機械なんだからな！」

バトルボンバー「お前…何もわかっていないな！機械だろうと人間だろうとな…生きてるんだよ！しっかりと心を持っている！だからこそ、俺はお前に抵抗するんだよ！」

〈戦闘会話　ガードダイバーVSネメシス〉

ネメシス「レスキューロボの出番じゃねえぜ、ガードダイバー！」

ガードダイバー「レスキューに特化したロボットでも、人々を守る事が出来ます！」

ネメシス「後悔するぜ！俺の前に立ち塞がった事をな！」

ガードダイバー「私は勇者特急隊です…。後悔など一切するつもりはないのです！」

〈戦闘会話　ブラックマイトガインVSネメシス〉

ネメシス「ホイ・コウ・ロウによつて生み出されたロボット…。それが正義のロボットとなるとはな！」

ブラックマイトガイン「生まれがどうでも、正義の心を持つていれば…正義の戦士となる！」

ネメシス「正義だの悪だの…意味がないんだよ！ブラックガイン…人間もロボットも全て滅びるんだからよ！」

ブラックマイトガイン「私のすべてにかけて、そんな事はさせない！悪が滅びる時だ、ネメシス！」

〈戦闘会話　ジョーVSネメシス〉

ジョー「年貢の納め時つてやつだ、ネメシス」

ネメシス「フツ、それはこつちのセリフだぜ、ジョー。お前のエースの通り名もここで終わる」

ジョー「ほう、是非そうしてもらいたいな」

ネメシス「憎んでいた正義の味方と共にいる時点でお前の敗北は決まってるんだよ！」

ジョー「共闘しているだけだ。…だが、貴様の様な存在は許してはおけん…それだけだ！」

〈戦闘会話　ヴォルフガングVSネメシス〉

リーベ「ヴォルフガング様、ネメシスが来ます！」

ドイツヒ「わ、我々だけで勝てるんですか!?!」

ヴォルフガング「ここまで来て、怖気ついている場合か!」

ネメシス「全く…ヴォルフガング、お前の知能には絶賛の言葉を送りたいのだがな」

イツヒ「ほ、褒められてる…？」

ネメシス「だが、その優秀な知能も消滅する…お前と共にな！」

ヴォルフガング「いいや、消えはせん！科学とこのヴォルフガングは永遠に不滅じゃ！消えるのは貴様の方じゃ、ネメシス！」

〈戦闘会話 ビトンVSネメシス〉

ネメシス「ビトン、ダイヤモンドダストの様に粒子にして消滅してやるぜ？」

ビトン「それは宝石ではないわ！」

オードリー「確かに美しいですが、凄くもなんともありません」

ネメシス「つたく、注文が多い女だな！」

ビトン「女は欲深いのよ…特に、私の様な女はね！簡単に消えるわけにはいかないのよ！」

〈戦闘会話 ミフネVSネメシス〉

ネメシス「とつとと逃げた方が身のためだぜ、偽侍」

ミフネ「偽侍とは無礼な！吾輩の強さも知らず、よく言える！」

ネメシス「…言葉で言っつてわからねえのなら、力尽くで黙らせてやるよ、ミフネ！」

ミフネ「元よりそのつもりだ！ネメシスよ、貴様をここで斬りつける！」

〈戦闘会話　　ホイ・コウ・ロウVSネメシス〉

ネメシス「マフィアが正義の為に戦うなんて片腹痛いな！」

ホイ・コウ・ロウ「その何が悪いネ！」

チンジャ「世界を滅ぼそうとする大悪党に何も言われたくありません！」

ネメシス「なら、小悪党が大悪党に歯向かうなよ、ホイ・コウ・ロウ！」

ホイ・コウ・ロウ「大きいも小さいもない！勝者が一番ネ！そしてそれは我々ネ！」

〈戦闘会話　　ルルーシユVSネメシス〉

ネメシス「魔王様が来るか」

ルルーシユ「魔王であるルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは死んだ。ここに居るのはただのルルーシユだ」

ネメシス「成る程。世界を救う為に全てを捨てたか、ルルーシユ！」

ルルーシユ「捨てたのは全てではない！世界の平和を願い…俺は再び戦っているだけだ！ネメシス…貴様は我々の敵だ。容赦はしない！」

〈戦闘会話　スザクVSネメシス〉

ネメシス「ナイトオブゼロか！」

スザク「確かに、僕はルルーシユがいる限り、彼の騎士となり続ける…！そして、彼を守る！」

ネメシス「いい心意気だな、スザク。だが、全世界が滅びれば無意味なんだよ！」

スザク「その様な事…僕がさせない！ルルーシユが託した世界を…僕達が繋げていくんだ！」

〈戦闘会話　カレンVSネメシス〉

ネメシス「副射波動には当たらないぜ、カレン！」

カレン「そう、だったら掴んでゼロ距離で当てる！」

ネメシス「随分な自信だが…あんまり俺を舐めない方がいいぜ！」

カレン「あんただって、あたしを舐めているでしょう？それでお互い様だよ！私達がこの手で未来を掴む…あんたを倒して、私達自身でね！」

〈戦闘会話　C・C・VSネメシス〉

ネメシス「C・C。俺はお前の全てを知っているんだぞ？」

C・C・「…」

ネメシス「何なら、ここで大声でお前の本当の名を叫んでもいいんだぜ？」

C・C・「ふむ。これは本格的に黙らせる必要がある。女の秘密を暴露しようとする男には一切容赦はせん」

〈戦闘会話　ジェレミアVSネメシス〉

ネメシス「お前も不幸な男だな、ジェレミア。オレンジと馬鹿にされ、俺なんていう存在と戦わされる羽目になったんだからな」

ジェレミア「私はルルーシユ様に一生付き従うと決めた…！不幸だとは一度も思った事はない！」

ネメシス「なら、死んでもそんな事が言えるのかよ！」

ジェレミア「私は我が主君を置いては死なぬ！必ずやルルーシユ様と共の平和な世を生き抜いてみせると決めたのだ！それを阻むというのであれば、貴公を討たせてもらおう！」

〈戦闘会話　アーニャVSネメシス〉

ネメシス「マリアンヌの人形だったアーニャ…。楽にしてやるぜ、もう？」

アーニヤ「私は……」

ネメシス「空っぽもお前じゃ生きる意味もないだろ？」

アーニヤ「私は……空っぽの人形じゃない。私はアーニヤ・アールストレイム……人間……！だから、人間として、あなたを止める……！」

〈戦闘会話 扇VSネメシス〉

ネメシス「何の力も持たないお前等が俺の邪魔をするんじゃねえ！」

玉城「てめえ！調子に乗りやがって……！」

扇「落ち着け、玉城！」

ラクシャータ「挑発に乗ったら、あいつの思う壺だよ！」

ネメシス「冷静な判断だな、扇。流石は日本国首相だな」

扇「ネメシス、例え俺達にギアスの様な力がなくとも……お前と戦う事が出来る……！平和になりつつ世界をお前の好きにはさせない！」

〈戦闘会話 藤堂VSネメシス〉

ネメシス「いかなる戦況でも生存している……お前は本当に奇跡の藤堂だな」

藤堂「そうだ。故に今回も奇跡を起こしてみせる」

ネメシス「そう易々と奇跡を起こさせるかよ！」

藤堂「ならば、見せよう。俺と…エクスクロス皆の奇跡の力を！」

〈戦闘会話　コーネリアVSネメシス〉

ネメシス「ブリタニアの魔女と戦えるなんて、光栄だな」

コーネリア「懐かしい名を口にする。だが、もうその呼び名は必要ない」

ネメシス「そうだな。全ての世界は滅びるんだからな。魔女も滅びる時だ、コーネリア！」

コーネリア「悪いがそうじゃない！もうあの時のブリタニアは存在しない。…平和になりつつある世界の邪魔は貴様にはさせせん！」

〈戦闘会話　青葉VSネメシス〉

ネメシス「時空を越え、未来へ導かれた気分はどうだ、青葉？」

青葉「さらに別の世界にまで来たからな。もう何が起きても驚かねえよ。…！例え、目の前に究極の敵がいてもな！」

ネメシス「機体操縦の素人が言う様になつたじゃねえか！なら見せてみるよ！お前が得た真のカップリングってやつをよ！」

青葉「言われなくてもやってやる！俺は絶対に雛と一緒に過去に帰るんだ！」

〈戦闘会話　ディオVSネメシス〉

ネメシス「父親と和解も出来ずに両方消える。そして、お前の妹もな」

ディオ「お前という男は……！」

ネメシス「冷静なお前が怒るのは見ものだな、ディオ。妹や父親を守りたいのなら、俺を倒してみろ！」

ディオ「ゾギリアを倒す為に戦っていた俺が世界を守る為に異形の存在と戦う事になるとは……。だが、退くわけにはいかない……！元の世界へ帰る為にも俺も戦い抜いてみせる……！」

〈戦闘会話　ヒナVSネメシス〉

ネメシス「弓原　雛とヒナ・リヤザン……。二つの人物を持つお前は特別な存在なんだな、ヒナ」

ヒナ「特別な存在……私が……」

ネメシス「だが、そのどちらも消滅する。全世界と共にな」

ヒナ「……お父様や青葉達が生きてきた世界を消させない！弓原　雛でも、ヒナ・リヤ

ザンとしてもあなたを止める！」

〈戦闘会話　倉光VSネメシス〉

ネメシス「そう言えば、お前が乗った艦は撃墜された事なかったんだってな、倉光」

倉光「そう言えば、そうだったね」

ネメシス「じゃあ今日が初めて撃墜される日って事だな！」

レーネ「シグナスが撃墜される事はありません。準備は整いましたよ、艦長」

倉光「了解。全員の生命、僕に貸してもらおうよ。…攻撃開始！」

〈戦闘会話　ビゾンVSネメシス〉

ネメシス「エフゲニー・ケダールにならなかつたビゾン・ジェラフィルか」

ビゾン「お前はどちらの展開を予想していた？」

ネメシス「さあな。自分で考えてみるよ、ビゾン」

ビゾン「…答える気がないのなら、答えなくともいい。お前はここで倒すつもりだったしな！」

〈戦闘会話　アルフリードVSネメシス〉

ネメシス「アルフリード、お前の腕は流石と言いたいが俺には勝てないな」

アルフリード「誰がその様な事を決めたのかな？私の腕もまだ捨てたものじゃない」

ネメシス「やる気ってか？なら、勝負をしようぜ！」

アルフリード「その挑発…あえて受けよう。ゾギリアの平和の為に私は君を止める…！」

〈戦闘会話 アンジユVSネメシス〉

ネメシス「アンジユ、お前は这个世界に絶望したんじゃないのか？世界を潰したいと思っただんじゃないのか？」

アンジユ「ええ、そうね。あんな腐った世界潰したいと大いに思ったわ。でもね、今の世界は違う…シルヴィアも、マナの国の人達も現実から目を背けずに生きているのよ！」

ネメシス「無駄だったの。いずれまたエンブリヲの様な奴が現れるだけだ！」

アンジユ「その時は私がまた倒してあげるわ！だから、あなたも大人しく倒れなさい。

…行くわよ、ヴィルキス！」

〈戦闘会話 サリアVSネメシス〉

ネメシス「お前が嫉妬深く、闇に吞まれやすいのは知っているぜ、サリア」
サリア「以前の私は確かにそうね……。でも、エクスクロスの人達と出会って変わったわ」

ネメシス「へえ、なら変わったお前を見てみたいものだな！」

サリア「あなたにみせるものは何も無いわ！今度こそ、私がみんなを守ってみせる！」

〈戦闘会話　ヒルダVSネメシス〉

ネメシス「家族に裏切られた世界で何の未練があるっていうんだよ、ヒルダ！」

ヒルダ「未練ね……。そんなものはただ一つだよ。アンジュと生きていく世界だからだよ！」

ネメシス「お前とアンジュが結ばれる事は絶対にねえよ！」

ヒルダ「そんな事、やってみなくちゃわからないだろ！いいからあんたは大人しくやられちまいな！」

〈戦闘会話　ロザリーVSネメシス〉

ネメシス「今逃げるってんなら、見逃してやってもいいぜ、ロザリー？」

ロザリー「本当なら、逃げ出したいぜ。世界の命運を背負うなんてあたしには荷が重

いからな」

ネメシス「…その割には逃げないんだな」

ロザリー「逃げられた所で住む世界が亡んじまえば一緒だろ！ だつたらやるしかないんだ…やれるところまでやってやる！」

〈戦闘会話 クリスVSネメシス〉

ネメシス「いつもビビリまくっていたお前がよくここまで来られたな、クリス」

クリス「本当は今でも怖いよ…」

ネメシス「なら、どうして向かってくるんだよ！」

クリス「もう、逃げる事はやめたから…。誰かを守りたい…それを思ってるから、あたしは戦うの！」

〈戦闘会話 ヴィヴィアンVSネメシス〉

ネメシス「クイズだ。今から俺に倒されるのは誰だ？」

ヴィヴィアン「誰もいないよ。誰もあんたに負けないから！」

ネメシス「不正解だ、ヴィヴィアン。よって、罰ゲームとしてお前等を倒す！」

ヴィヴィアン「じゃあ逆にクイズです！…今から悪魔と戦う為に立ち上がるのは誰で

しよう?…答えはあたしです!」

〈戦闘会話 エルシャVSネメシス〉

ネメシス「多くの世界にも子供はたくさんいるぞ、エルシャ」

エルシャ「それがわかっていながら、世界を滅ぼそうとするなんて…!」

ネメシス「大人だろうとガキだろうと…下等生物の人間なのには変わらないからな
!」

エルシャ「私は…今度こそ、子供達を守ってみせます!そして、私達も生き抜いてみ
せます!」

〈戦闘会話 ナオミVSネメシス〉

ネメシス「友人の死を受け入れ、ここまでたどり着くとは流石じゃねえか!」

ナオミ「大切な人の失う悲しみは辛いよ…。でも、それが私を強くしてくれるの!」

ネメシス「そうか。じゃあ、ナオミ。もつと多くの人間をお前の目の前で消してやる
!」

ナオミ「でも、目の前で困っている人がいるなら、私はあなたを止める!…終わりだ
よ、ネメシス!」

〈戦闘会話　タスクVSネメシス〉

ネメシス「ビルキスの騎士か！」

タスク「悪いけど、今の俺はアンジュの騎士だ！」

ネメシス「アンジュの騎士、タスクか……。アンジュを目の前で殺せばどうなるか楽しみだな」

タスク「お前は聞かなかったのか？俺がいる限り、アンジュには手を出させない！アンジュと共に住む世界を滅ぼさせはしない！」

〈戦闘会話　ジルVSネメシス〉

ネメシス「アレクトラ……エンブリヲによって人生を変えられた哀れな女か」

ジル「今の私はジルだ。何とでもいうがいい。どれだけ罵られ様と私はお前を討つ事をやめはしない！」

ネメシス「流石は元司令様だな、ジル。俺も全力でお前を潰すとするか！」

ジル「いいだろう。私も一切の加減はしない……罪を償う為、世界を平和にしてみせる！」

〈戦闘会話　サラマンディーネVSネメシス〉

ネメシス「世界が滅べば、アウラやその民も全て滅ぶ。お前の努力は水の泡となるんだよ、サラマンディーネ」

サラマンディーネ「ええ、だからこそ私がいる」

ネメシス「お前がいるからって、何になる！龍の姫だからと言って調子に乗るんじゃないねえよ！」

サラマンディーネ「それはこちらの台詞だ！下郎の討ち、世界に平穏をもたらす…それが今の私の役目です！」

〈戦闘会話　エンブリヲVSネメシス〉

ネメシス「複数のエンブリヲの中にいたただ一人いた良いエンブリヲか…。いやいや、可能性っていうのは何が起こるかわからないな！」

エンブリヲ「まったくもってそうだね。まさか、君の前に立ち塞がっているとは」

ネメシス「まあ、何処にしようとお前は消すつもりだったからな。同じ事だ！」

エンブリヲ「ならば抵抗しよう。そして、アンジュ達の世界を守る為に私も生命をかけるでしょう！」

〈戦闘会話 甲児VSネメシス〉

ネメシス「様々な魔神を操るお前には相応しいな、甲児！」

甲児「その俺の記憶まで消し去るなんて、よほど俺とマジンガーを恐れているって事だな！」

ネメシス「ああ。その魔神の力だけは俺の脅威となりうる存在だからな！」

甲児「それだけ聞ければ満足だぜ。なら、俺とマジンガーがお前を倒してやる！ いくぜ、マジン、ゴー!!?」

〈戦闘会話 鉄也VSネメシス〉

ネメシス「戦闘のプロか。いいねえ、楽しくなりそうだぜ！」

鉄也「お前を楽しませるつもりはない。すぐに終わらせてやるさ」

ネメシス「そう悲しい事言うなよ、鉄也！折角の最終決戦だ…楽しもうぜ！」

鉄也「俺は戦闘を楽しむつもりもない！そして、最終決戦…俺が勝つてやる！」

〈戦闘会話 さやかVSネメシス〉

ネメシス「甲児の側にいるとロクな目に遭わねえな、さやか」

さやか「甲児君がマジンガーのパイロットになってからね」

ネメシス「それでも甲児を愛し続けるってのか？俺には理解できないぜ」
さやか「愛の力つてのはね…理屈だけじゃ測れないのよ！例え私自身が力不足でも…
甲児君と一緒にならやれるわ！」

〈戦闘会話　ボスVSネメシス〉

ネメシス「そのオンボロボットでよくここまで来れたもんだぜ。褒めてやるぜ！」
ヌケ「お、俺達褒められてる…！」

ムチャ「これ…もしかして俺達、勝てるんじゃないか!?!？」

ボス「馬鹿野郎！あいつは俺達を調子に乗らせて隙を作らせようとしてんだよ！」

ネメシス「お、珍しいな。お前がそれに気づくとは…。じゃあ、力ずくで行くしかねえな！」

ボス「鼻つからそのつもりだぜ！ついて来い、ヌケ！ムチャ！俺達でも世界を救えるって事を証明してやろうぜ！」

〈戦闘会話　海道or真上VSネメシス〉

ネメシス「地獄コンビの使いが来たって事はここはもう地獄なんだな！」

海道「よくわかってんじゃねえか、ネメシス！」

真上「だが、一つだけ違う。俺達は使いではなく地獄そのものだ」

ネメシス「そうか。それは悪かったな！海道と真上…地獄のコンビと髑髏の魔神…面白くなりそうだぜ！」

真上「そうだな。お前とは何かと気が合うな」

海道「だったら、やりあおうぜ！地獄と生命体の…戦いをな！」

〈戦闘会話　スカレットVSネメシス〉

ネメシス「スカレット、由木！お前等も地獄コンビに負けないぐらい強いぜ！」

由木「あの人達と一緒に扱いだなんて…」

スカレット「良いようで悪い気がするな…」

ネメシス「いや、お前等…仮にも仲間のくせに酷いな」

由木「気にしなくて良いわ、ネメシス！」

スカレット「まあ、あいつ等に負けるつもりはないからな。…お前を倒し、あいつ等にも私と由木の強さを見せる！」

〈戦闘会話　シモンVSネメシス〉

ネメシス「何でもブチ破るなんて…本当に規格外のドリルだな、シモン！カミナ！」

カミナ「おうよ！シモンのドリルに貫けねえもんはねえからな！」

シモン「兄貴や仲間達がいってくれたからだ。だから俺のドリルが強く回転するんだ！」

ネメシス「じゃあ、俺も貫けるか…試してみたくなるだろ？」

カミナ「へっ、そんな必要はねえよ！」

シモン「ネメシス、俺達を誰だと思っついていやがる！俺のドリルは回り続ける…！てめえの様な悪党を貫く為にな！それが…俺のドリルだあああああつ!!？」

〈戦闘会話　　ヴァイラルVSネメシス〉

ネメシス「お前と尺で勝負する事になるとはな」

ヴァイラル「アンチスパイラルを倒した俺達にはもう怖いものなど存在しない」

ネメシス「その余裕…いつまで保つか試してやるよ、ヴァイラル！」

ヴァイラル「いいだろう。俺とスペースエンキドウドウの力…たつぷりと味わえ！」

〈戦闘会話　　ヨーコVSネメシス〉

ネメシス「ほらほら、俺を倒さねえとお前の教え子達も消滅する事になるぞ？」

ヨーコ「性格が悪いわね、ネメシス。でも、それで挑発しても無駄よ。…あの子達は

何としても私が守るから」

ネメシス「良い先生だな、ヨーコ。なら、守ってみやがれ！」

ヨーコ「言われなくても…容赦なく撃ち落としてやるわよ！」

〈戦闘会話　ギミーVSネメシス〉

ネメシス「ガキは家に帰って寝たほうがいいぜ、ギミー」

ギミー「子供扱いしていると痛い目を見るぞ、ネメシス！」

ネメシス「へえ、それなら是非とも痛い目を見せて欲しいな」

ギミー「言ったな！痛い目見えてから後悔しても遅いからな！俺だって、戦う事が出来るんだ！」

〈戦闘会話　ダリーVSネメシス〉

ネメシス「ダリー、お前みたいな女に手は挙げたくはないな」

ダリー「…！」

ネメシス「大人しく退いてくれよ。そうしたら痛い事はしないぜ」

ダリー「バカにしないで！私だって、ガンメンのパイロットよ！…世界を救える為に戦えるわ！」

〈戦闘会話　キタンVSネメシス〉

キタン「よう、ネメシス！今の俺には怖いもんはねえぜ！」

ネメシス「確かにあの状況で生き延びいたお前は褒めるに値するな。だからこそ、お前を倒した時の他の奴等の絶望も大きいな！」

キタン「つまり、俺はシモンやカミナ並みの要つて事か！」

ネメシス「お前自身の重要性が分かった所で…潰してやるよ！」

キタン「やってみやがれ！キタン様に喧嘩を売った事…後悔するんだな！」

〈戦闘会話　ダヤツカVSネメシス〉

ロージェノム「究極生命体、ネメシス…。その実力は計り知れん」

リーロン「でも、撤退できる状況でもないわよ！」

ダヤツカ「そもそも逃げる必要はない！」

ネメシス「ああ、もちろん逃すつもりはないぜ！」

ニア「ネメシスさん…！私達は諦めません！例えばあなたがどれ程の力を持っていたとしても！」

ネメシス「ダヤツカもニアもやる気満々ってか…。じゃあ、勝負だ！」

ダヤツカ「俺達は負けない！アル・ワースで待つていてくれる人達のためにもお前を倒してみせる！」

〈戦闘会話　ネモ船長VSネメシス〉

ネメシス「ネモ…。ガーゴイルを倒したお前が何故俺の邪魔をするんだよ！」

ネモ船長「当然、お前が子供達の未来を奪おうとしているからだ」

エレクトラ「今を生きている人…そしてこれから生まれてくる新たな生命を守る為に私達は戦っているんです」

ネメシス「…それはエレクトラの腹のガキの事か？悪いがそのガキが生まれてくる事はねえよ！」

ネモ船長「言いたい事はそれだけか、ネメシス？人類を敵に回したお前を我々は見逃しておくわけにはいかない！総員、これで最後だ…最後まで突撃で行くぞ！」

〈戦闘会話　グランデイスVSネメシス〉

サンソン「思えば俺達…よくここまでやってこれたよな」

ハンソン「うん…何度死にそうな目にあつたか」

ネメシス「懐かしに浸っている所悪いがそろそろケリをつけようぜ、サンソン、ハン

ソン！」

グランデイス「随分とやる気だね、ネメシス！このカトリイヌを前にして！」

ネメシス「グラタンじゃなかったか？…まあ、どっちでも良いが…そう言うグランデイスもやる気満々そうじゃねえか！じゃあ、白黒つけるか！」

サンソン「上等だ！」

ハンソン「行きましょう、姐さん！」

グランデイス「そうだね…！ここまで来たんだ。後は出た所勝負だよ…お前達！」

最終話 絆の光（後編）

―新垣 零だ…。

俺達の戦いは続く…。

〈戦闘会話 一夏VSネメシス〉

ネメシス「一夏、どうして男のお前がISを扱えるかは気にならないのか？」

一夏「お前…何か知っているのか!?!」

ネメシス「ああ。だが答える気はねえ。そっちの方が面白くなりそうだからな！」

一夏「お前は何処まで人をバカにすれば気が済むんだよ!…だったら俺だって大人しく負けるつもりはない！」

〈戦闘会話 箒VSネメシス〉

箒「ネメシス…お前を斬る！」

ネメシス「おー、怖い怖い…。流石は暴力少女の箒だな」

箒「貴様…私を侮辱するのか！」

ネメシス「おいおい…事実を言ったただけだぜ？」
箒「貴様というやつは…！やはり、許せん！覚悟するのだな、ネメシス！」

〈戦闘会話　セシリアVSネメシス〉

ネメシス「いくら学園首席でも無理があるんじゃないのか、セシリア？」

セシリア「そんな事ありませんわ！諦めない限り、道は開くものです！」

ネメシス「なら、その道を閉じ、絶望を教えてやるよ！」

セシリア「あなたには不可能です…！私は簡単には負けて差し上げませんわよ！」

〈戦闘会話　鈴VSネメシス〉

ネメシス「お前みたいな元気な女はすぐ壊れやすいつて聞かぜ？」

鈴「へえ、そうなの。…余程ぶつ飛ばされたらいいよ！」

ネメシス「随分と過激じゃねえか、鈴。嫌いじゃない性格だぜ！」

鈴「あんたに好かれたいなんて思わないわよ！あんたはここで私に倒されるの…だから、大人しくやられなさい！」

〈戦闘会話　シャルロットVSネメシス〉

ネメシス「お前はやつぱり、男の方が向いているぜ、シャルロット」

シャルロット「そうやって僕を怒らせて、挑発しても無駄だよ」

ネメシス「意外と冷静だな。これは潰し甲斐があるぜ！」

シャルロット「みんな戦っているんだ…！僕だって、やってみせる！」

〈戦闘会話 ラウラVSネメシス〉

ネメシス「軍人が女の子として過ごせるはずがないんだよ」

ラウラ「そんな事、誰が決めた？私は軍人の前に人間だ。…平和に過ごす権利はある」

ネメシス「お前からそんな言葉を聞くとはな、ラウラ。じゃあその平和を守ってみせろよ」

ラウラ「言われなくともやってやる。嫁と共に過ごす未来…貴様には邪魔させん！」

〈戦闘会話 簪VSネメシス〉

ネメシス「現実にはヒーロー番組の様にはいかないぜ、簪」

簪「そんな事わかってる…！絶対にハッピーエンドになるわけじゃない事も…！」

ネメシス「だったら…お前の未来はバッドエンドだ！」

簪「…それでも、私は自分の手でハッピーエンドを掴んでみせる…！一夏達と一緒に

…！
」

〈戦闘会話 楯無VSネメシス〉

ネメシス「学園最強のお前でも俺には勝てないぜ、楯無」

楯無「あら？そう言われるとやる気が出てくるわね」

ネメシス「おーおー、流石は更織家17代目当主の更織 刀奈だな。…怖い怖い」

楯無「その事まで把握済みとはね。ますますあなたを野放しには出来なくなつたわ
！」

〈戦闘会話 千冬VSネメシス〉

ネメシス「ブリュンヒルデ…世界を滅ぼす前にやりあえるなら、光栄だぜ！」

千冬「おいネメシス。私をその名で呼ぶな…まあ、お前に言つたところで聞く気はないだろがな」

ネメシス「わかかってんじやねえか、千冬！…そんじやあ、始めようぜ！」

千冬「（こいつなら、あの事を知つていてもおかしくない…）余計な事を話される前に
こゝで潰す…！」

〈戦闘会話　マドカVSネメシス〉

ネメシス「フアントムタスクのお仲間も一緒に消えるんだ…嬉しいだろ、マドカ？」

マドカ「気安く呼ぶな。…私はお前に語る事など何もないぞ」

ネメシス「その迷いのない目…やっぱりお前は千冬の…」

マドカ「黙れ！ここで消える貴様には関係のない事だ！貴様は織斑　一夏を消す前の障害の一つに過ぎない事を教えてやる！」

〈戦闘会話　竜馬or隼人or弁慶VSネメシス〉

ネメシス「ゲッターチーム…ゲッター線の扱いには気をつけた方がいいぜ！」

弁慶「俺達にそれを言ってくるとはな！」

隼人「相当バカにされているみたいだぜ、竜馬」

竜馬「俺だけじゃなくお前等もだろうが！」

ネメシス「そうやって血の気が高いのもゲッターの宿命なのかもな！竜馬、隼人、弁慶…纏めてかかってこい！」

竜馬「言われなくてもたっぷりと味わせてやるよ！ゲッターと俺達三人の想いをな
！」

〈戦闘会話 號VSネメシス〉

ネメシス「新ゲッターチーム：竜馬達に比べればまだまだだな」

凱「な、何だと…!!?」

湫「凱、挑発に乗らないの!」

號「俺達を怒らせて自滅を狙っても無駄だ」

ネメシス「そうかよ。じゃあ、力尽くで黙らせてやるよ!」

號「やってみる!俺達こそ負けない…!行くぞ、ゲッターアアつ!」

〈戦闘会話 葵VSネメシス〉

ジョニー「月刊、男の生命体を読んで正解でした」

朔哉「そんなものがあるのかよ!!?」

エイーダ「な、何でもありませんね…」

ネメシス「個性豊かだな、チームDってのは!」

くらら「そして、全員強いのよ!」

葵「そう、獣の私達に喧嘩を売ったら、痛い目を見るのはわかっているでしょう?」

ネメシス「だからこそ、獣は駆除しないとイケない。来い、葵、くらら、朔哉、ジョ

ニー、エイーダ!」

葵「じゃあ…これで終わりにするわよ！やってやろうじゃん！」

〈戦闘会話 九郎VSネメシス〉

アル「ネメシス…今日が汝の最後の日だ！」

ネメシス「ナイアの野郎にエンデ…お前等は何人の神を倒せば気が済むんだよ、九郎、アル！」

九郎「何人でもだ！誰かを困らせるってんならな！」

ネメシス「そのデカイ口は俺を倒してから言うんだな！」

アル「言われなくともそうしてやる！終わらせるぞ、九郎！」

九郎「応よ！ネメシス…俺達の力、受けてみやがれえええつ！」

〈戦闘会話 ウエストVSネメシス〉

ネメシス「自称天才科学者のウエストとその助手エルザ…俺から見れば最強のコンビだと思うけどな」

エルザ「…エルザは博士なんかよりダーリンの方がいいロボ」

ウエスト「エルザ？それはあんまりじゃないか？？」

ネメシス「…調子が狂うな…。とつとと潰すか」

ウエスト「潰されるのは貴様なのである！それなら…吾輩自称ではなく、本当の天才なのである！」

〈戦闘会話 エンネアVSネメシス〉

ネメシス「暴君ネロ…。エンネアという名前に変えたとしてもお前はその宿命から逃れる事はできないぜ？」

エンネア「そうだとしても、私はエンネアとして生きると決めた…！」

ネメシス「いい覚悟だ。だが、それももう終わるがな！」

エンネア「終わらせない…！私はこれからも九郎達と平和な世界で暮らしていくの…だから邪魔しないで！」

〈戦闘会話 マスターテリオンVSネメシス〉

ネメシス「大導師、マスターテリオンとエゼルドレーダ…。まさかお前等とやる事になるとはな」

マスターテリオン「究極生命体、ネメシス…ふっ、相手にとって不足はない」

ネメシス「その目…どっちが悪かわからねえな！」

エゼルドレーダ「マスターに正義や悪などない…！」

マスターテリオン「その通りだ。余は戦いたいから戦う…ただそれだけだ。行くぞ、エゼルドレーダ…最後まで舞い踊ろう」

〈戦闘会話 ヒーローマンVSネメシス〉

ネメシス「可能性の塊のヒーローマン…俺から見れば最低最悪のヒーローだぜ…！」

ヒーローマン「…！」

ジョーイ「最低最悪はお前の方だ！みんなを困らせて、僕は許さないぞ！」

ネメシス「許されなくて結構だぜ、ジョーイ！それじゃあ、俺の手でヒーローにトドメを刺してやるよ！」

ジョーイ「そんな事、させない！ヒーローマンも世界のみんなも…お前の好きにはさせない！行こう、ヒーローマアアアン、ゴオオオオツ！！？」

ヒーローマン「ウオオオオオツ！！？」

〈戦闘会話 ウイルVSネメシス〉

ネメシス「スクラッグによって改造されたダークヒーロー…。格好いいじゃねえか、ウイル」

ウイル「改造された時の記憶は忌わしきものだ。それ以上口にするな。…だが、一つ

感謝している事もある」

ネメシス「何なんだよ、それは？」

ウィル「お前の様な存在をこの手で倒せる事だ！人間も異性体も関係ない……！俺達の意志でお前を倒す！」

〈戦闘会話　ヴァンVSネメシス〉

ネメシス「愛するエレナの元へ送ってやるよ、ヴァン！」

ヴァン「俺はどうなってもいい。だが、エレナが生きていた世界を壊すのは許されねえな。だから、俺はお前をぶった斬ってやるんだよ！」

ネメシス「な、何だよこの力は……！これがバカの力って奴なのかよ!!？」

ヴァン「復讐が終わっただとか関係ねえ！俺はお前が気に喰わねえ……ただ、それだけなんだよ！」

〈戦闘会話　ネロVSネメシス〉

バリヨ「これが本当の最後の戦いだ……！」

カルロス「俺達の全てをかける……！」

ネロ「そうだ！正義は俺達と共にある！」

ネメシス「まったく、爺さんってのは前置きが長いな」

ホセ「そう言うな。お前には力で教えてやる」

ネメシス「爺さんが調子に乗ってんじやねえよ、ネロ、ホセ、バリヨ、カルロス！」

ネロ「その言葉そっくりそのまま返してやる！エルドラソウルの力と共にな！」

〈戦闘会話 プリシラVSネメシス〉

ネメシス「よくここまで戦ってきたな、プリシラ。褒めてやるよ」

プリシラ「あんたに褒められても嬉しくないわよ！」

ネメシス「手厳しい女だな。…だからこそ潰し甲斐がある！」

プリシラ「潰されるのはあんたの方だから！あんたに勝って、ヴァンから返事をもらうんだから！」

〈戦闘会話 レイ「ガンソ」VSネメシス〉

ネメシス「復讐が終わったお前に何が残っているんだよ、レイ？」

レイ「ガンソ」「俺の中に残っているのは家族の想い…ただそれだけだ」

ネメシス「へえ、復讐に燃えていたお前からそんな言葉を聞けるとはな」

レイ「ガンソ」笑いたければ笑え。…だが俺は一切の手加減はしない。…容赦なく貴

様を撃ち殺す……！」

〈戦闘会話　　ガドヴェドVSネメシス〉

ネメシス「ガドヴェド、罪を償おうとしていたお前が罪から逃げているのかよ？」

ガドヴェド「逃げてなどおらん。……ただ、少し勘違いをしていただけだ」

ネメシス「勘違い……？」

ガドヴェド「死ぬ事は償いではない。……その事をバカ弟子に教えられた……だからこそ、私は生きると決めたのだ！」

〈戦闘会話　　ウーVSネメシス〉

ネメシス「すぐに母親に逢わせてやるよ」

ウー「必要はない。……私はもう乗り越えた」

ネメシス「母の死を……つてか？まあどちらにしろお前に選択枠はねえがな！」

ウー「この俗物が……！貴様に我々の力を証明してやる！」

〈戦闘会話　　カロツサVSネメシス〉

ネメシス「ガキは大人しくしているよ、カロツサ」

カロツサ「俺…もう子供じゃない…！」

ネメシス「そこで意地になるのがガキだつて言つてんだよ！そんなじやメリツサも守れねえぜ！」

カロツサ「お前…腹が立つ…！メリツサは俺が必ず守る…！」

〈戦闘会話　メリツサVSネメシス〉

ネメシス「メリツサ、挑んでくるなら手加減はしねえぞ！」

メリツサ「手加減なんてしなくてもいいよ」

ネメシス「何だと…？」

メリツサ「私はもう泣き虫の私じゃない…みんなを守る為に戦う…！」

〈戦闘会話　ファサリナVSネメシス〉

ネメシス「あれだけかぎ爪を尊敬していたお前があいつを裏切るとはな」

ファサリナ「新たな道を見つけただけです」

ネメシス「そうか。でもよ、その道もここで通行止めだぜ、ファサリナ？」

ファサリナ「ふふっ、冗談が好きですね。…でも、私はそう言う冗談は好きではないので…覚悟してください…！」

〈戦闘会話　ミハエルVSネメシス〉

ネメシス「かぎ爪が死んで、お前に何が残っているんだよ、ミハエル？」

ミハエル「大切な人達だ！」

ネメシス「だがそれも滅びる！」

ミハエル「ふざけるな！僕が絶対にそんな事をさせない！ファサリナさんもウエン
デイも…守ってみせる！」

〈戦闘会話　アマタorrミコノVSネメシス〉

ネメシス「アクエリオン…面倒な存在だぜ…！」

アマタ「そうだ！そしてこの力でお前を止める！」

ミコノ「世界にはまだ生きたいと願っている人達がいるんです…！」

ネメシス「アマタとミコノ…この2人の愛がアクエリオンの力を強くするのか…！」

ミコノ「行こう、アマタ君！」

アマタ「わかった、ミコノさん！ネメシス！俺達の…アクエリオンの力を受けろ！」

〈戦闘会話　ゼシカorrカグラVSネメシス〉

ネメシス「ゼシカとカグラ…お前等意外と良いコンビだな！」

ゼシカ「はあっ!? 誰がこんなワンコと…!?」

カグラ「ワンコは余計だ! ドン底女!」

ネメシス「これも一種の愛なのか…!?」

ゼシカ「これが愛なのかは知らないけど…私達力なのは間違い無いわ! ねえ、カグラ?」

カグラ「へっ! 悪い気がしないのは悔しいぜ。…じゃあ行くぜ、ゼシカ!」

〈戦闘会話 アンデイ or MIX VS ネメシス〉

ネメシス「穴を作り、穴を埋める…対極の存在なのに何故愛することが出来るんだよ?」

アンデイ「対しているからお互いの良いところやダメなところがわかるんだよ!」

MIX「そしてそれは大きな力になるわ!」

ネメシス「理解できねえぜ、アンデイ、MIX!」

MIX「それは出来ないでしょうね…。人間を駒としか思っていないあなたには!…アンデイ!」

アンデイ「おう、MIX! 行くぜ、ネメシス! お前に愛つてのを教えてやるから覚悟しておけよ!」

〈戦闘会話　ユノハ or ジン「EVOL」VS ネメシス〉

ネメシス「本当は敵同士だったお前等が何故、手を取り合えるんだ…!?」

ジン「EVOL」「例え、生まれた場所が違ってても理解し合えば、手を取り合える！」

ユノハ「私は同じ生命なんです！笑ったり、怒ったり…悲しんだりできる…だから強くなるんです！」

ネメシス「感情に意味はねえ！死ねば、そこで終わりなんだからよ！」

ジン「EVOL」「ユノハは死なせない…！僕が守ってみせる！」

ユノハ「ありがとう、ジン君…！私もジン君を守り続けます…！」

〈戦闘会話　クレア or モロイ or サザンカ VS ネメシス〉

ネメシス「クレア、モロイ、サザンカ…！俺の邪魔をするんじゃないやねえよ！」

クレア「それは聞き入れない願いです」

モロイ「そもそも悪党であるお前の願いなんて聞くかよ！」

サザンカ「それも世界を滅ぼすなら尚更ね！」

ネメシス「つたく…エレメント候補生の中でも異質なお前等はここで潰してやるよ

！」

モロイ「やれるものなら、やってみろよ！」

サザンカ「腐らされても文句言わないでよね！」

クレア「…私がこの2人と同等と言う事には納得いきませんが…。まあ、いいでしょう。世界を守るため、あなたを討ちます…！」

〈戦闘会話 ミカゲVSネメシス〉

ネメシス「ミカゲ…。頭翅の憎しみから生まれた存在…それが世界を救う為に戦うとはな」

ミカゲ「そうだね。おかしな話だ。…だが、悪い気はしないね」

ネメシス「じゃあ…お前も世界と共に消えろ！」

ミカゲ「消えるのは君の方だよ、ネメシス。…アポロニアスに変わり、私が君を断罪する！」

〈戦闘会話 ノリコVSネメシス〉

ネメシス「俺を倒して、元の世界へ戻ったとしても宇宙怪獣との戦いが続くだけだぜ？」

カズミ「そんな事、百も承知よ」

ノリコ「私達はそれがわかって、ガンバスターに乗っているのよ！」

ネメシス「それがノリコとカズミの勇氣と根性ってわけかよ……！」

カズミ「その通りよ。……いきましよう、ノリコ」

ノリコ「はい！お姉様……世界を守る為、ネメシス……あなたの野望は私達とガンバスターが打ち砕いてみせるわ！」

〈戦闘会話　ユイVSネメシス〉

ネメシス「大きな絶望や闇を乗り越えたお前等の力……見せてみる！」

レナ「言われなくても見せてあげるわよ！」

ユイ「ネメシス……本当ならあなたを受け止めてあげたかった……」

ネメシス「……うるせえ！同情の言葉は必要ねえんだよ！来いよ、ユイ、レナ！」

レナ「ユイ……！」

ユイ「……うん、わかったよ……レナ！ネメシス……私達はあなたを倒すのではなく、止めてみせます！」

〈戦闘会話　サラVSネメシス〉

ティア「ネメシス……ティア達が懲らしめてやるから！」

ネメシス「強気だな、ティアは……。サラはどうだ？」

サラ「私もティアと同じだよ！」

ネメシス「レガリアの契約者とコアは同じ考えを持つのか！だが、それもここまでだ！」

ティア「ティア達は終わらないよ……サラ！」

サラ「うん……！折角、平和な世界への道のりが見えたんだ……邪魔はさせないよ！」

〈戦闘会話〉 イングリッドVSネメシス

ネメシス「イングリッド、ケイ。リムガルドの奴等と逢わせてやろうか？」

ケイ「必要ないわ」

イングリッド「どうせ、死ねば会えるといいたいのでしょう？」

ネメシス「よくわかってんじやねえかよ！ちなみにお前等に選択権はねえがな！」

ケイ「イングリッド……！最後まで2人で……！」

イングリッド「ええ！これからもみんなで生きていく世界を守る……！これ以上、リムガルドの様な被害を出さない為にも！」

〈戦闘会話〉 ノアVSネメシス

ネメシス「お前も散々だな、ノア。操られ、妹達と戦わされて…さらにはここで死ぬ運命なんだからな！」

ノア「私は…いや、私達は死なないわ！」

ネメシス「死ぬ奴は大抵そう言うんだよ！」

ノア「あなたこそ知らないようね…！運命は覆す事が出来るって…！今度は私がみんなを守る為に戦うわ！」

〈戦闘会話　ヨハンVSネメシス〉

ネメシス「ルクス・エクスマキナの真の王だったお前が人間なんかと一緒にいるとはな」

ヨハン「僕が言えた事じゃないけど、なんかとか言わない方がいいよ」

ネメシス「…変わったな、ヨハン…。人間と仲良しごっこってか？」

ルクス「…」

ヨハン「好きに言えばいいさ。…僕は君を倒すだけだから…！」

〈戦闘会話　ノブナガVSネメシス〉

ネメシス「来たか、破壊王ノブナガ」

ノブナガ「ネメシス、お前を破壊する時が来た」

ネメシス「いくらお前等が俺に勝ったとしても破壊王であるお前がいる限り、世界は破壊し尽くされる！」

ノブナガ「だからと言って、お前が破壊していいわけじゃない。…それに忘れたのか？例え、俺達の未来が破壊だとしても…俺がその未来を破壊してやる！」

〈戦闘会話〉 ジャンヌVSネメシス〉

ネメシス「天啓でも俺との勝負の決着は見られない様だな、ジャンヌ」

ジャンヌ「…」

ネメシス「つまり、俺が負ける可能性はないって事だな！」

ジャンヌ「逆よ！私達が負ける可能性もないって事…天啓も何も関係ない！…私達の力で…世界を守ってみせる！」

〈戦闘会話〉 ヒテヨシVSネメシス〉

ネメシス「猿は檻に入って、キーキー鳴いておけばいいんだよ！」

ヒテヨシ「お前に猿呼ばわり筋合いはないが…猿をあんまり舐めていると引つ搔かれるぞ！」

ネメシス「そうかそうか…。なら、引つ掻いてみるよ、ヒデヨシ！」
ヒデヨシ「その言葉を言って、後悔すんなよ、ネメシス！引つ掻きだけじゃ済まねえからな！」

〈戦闘会話　カエサルVSネメシス〉

ネメシス「カエサル：アーサー王はもういいのかよ？」

カエサル「心配ご無用さ。：私にはイチヒメがいる」

ネメシス「そうかよ：だったら、目の前でイチヒメを消すのも面白いな！」

カエサル「世界を懸けた戦の相手がこの様な俗物とは：まつ事残念だ。：イチヒメもこの世も：滅ぼさせはせん！」

〈戦闘会話　アレクサンダーVSネメシス〉

ネメシス「西の星最強のお前でも世界最強の俺には勝てねえぞ、アレクサンダー！」

アレクサンダー「言葉は不要のはずだ、ネメシス」

ネメシス「それもそうだな！やるかやられるか：それを試せばいいだけの話だ！」

アレクサンダー「行くぞ：！勝つのは我だ！」

〈戦闘会話 ケンシンVSネメシス〉

ケンシン 「邪悪なる心は……ここで討つ……！」

ネメシス 「流石はケンシン……心まで読めるのかよ！」

ケンシン 「ネメシス……退く気はないのですね？」

ネメシス 「今更だろうがそんな事！」

ケンシン 「そうですね……。では、平和な世の為に私も動きましようか」

〈戦闘会話 しんのすけVSネメシス〉

ひまわり 「たいやたいや！」

シロ 「ヴウッ！」

ネメシス 「ひまわりもシロもやる気だな！ひろしとみさえはどうだ？」

みさえ 「私達だってやる気満々よ！」

ひろし 「娘達がやる気なのに俺達が黙ってみていられるかよ！」

カンタム 「ネメシス……お前も生命があるはずだ。それなのに何故、見下す？」

しんのすけ 「オラ達、お話しする事は出来るゾ！」

ネメシス 「甘いな、しんのすけ、カンタム。俺を止めるには倒すしかないぜ？」

カンタム 「やるしかないのか……！しんのすけ君、これで終わらせよう！」

しんのすけ「ホッホーイ！オラ達、エクスクロスが全世界の人達をお助けするゾ！」

〈戦闘会話 トオルVSネメシス〉

ネネ「行くわよ、ネメシス！」

マサオ「もう：怖いなんて言ってられないよ！」

トオル「僕達じゃ力不足でも：逃げられないんだ！」

ネメシス「トオル、ネネ、マサオ、ボー！春日部防衛隊がどこまでナワバリを増やすつもりだよ！」

ボーちゃん「僕達は春日部防衛隊であり：エクスクロス……！」

ネメシス「そうかよ！なら、泣きべそかいても文句は言うなよ！」

トオル「言わないよ！お前を倒さないとママ達も危ないんだ……！行くよ、みんな！春日部防衛隊：ファイヤー！」

〈戦闘会話 カイザムVSネメシス〉

ネメシス「人類を抹殺する為に生み出されたお前が人類を守るとは尺な話だな！」

カイザム「そうだな。俺もこの様になるとは思っていなかった」

ネメシス「じゃあ、その人類と共に滅べよ、カイザム！」

カイザム「折角、人類の素晴らしさを知れてきたんだ…。邪魔はさせん！」

〈戦闘会話　ケロロVSネメシス〉

クルル「クーククツ！侵略者の俺達が世界を守る為に戦う事になるなんてな」

ドロロ「でも、悪い気はしないでござるよ！」

ネメシス「確かに…どちらかと言うとお前等は退治される立場だからな」

タママ「その前にお前を退治してやるです！」

ケロロ「我輩達に喧嘩を売った事、後悔するのでありますな！」

ネメシス「いいぜ、ケロロ、ギロロ、タママ、クルル、ドロロ…。ケロロ小隊全員で

かかってこいよ！」

ギロロ「ケロロ…！俺達の力、全てをかけるぞ！」

ケロロ「勿論であります！ケロロ小隊…ペコポン侵略の為にネメシスを倒すであり

ます！」

〈戦闘会話　夏美VSネメシス〉

ネメシス「地球人がここまでよくやったよな、夏美」

夏美「自分でも驚いているわよ」

ネメシス「疲れただろ？お前を楽にしてやるよ」

夏美「余計なお世話よ！ボケガエル達だけでも忙しいんだから、大人しく倒されなさい！」

〈戦闘会話　　ダークケロロVSネメシス〉

ネメシス「ケロロとダークケロロ…なんだかややこしいな…！」

ダークケロロ「そんなもの吾が知った事ではない」

ネメシス「冷たい奴だな…。まあ、大軍曹殿を潰すのも楽しさの一つだがな！」

ダークケロロ「いい趣味とは言えないぞ、ネメシス。来るのなら、こちらも容赦はせんがな…！」

〈戦闘会話　　アキトVSネメシス〉

ネメシス「お前って本当に変わったよな、アキト？前のお前とは思えない変わり様だな」

アキト「いずれ元に戻るつもりだ」

ネメシス「それは俺を倒してから言うんだな！」

アキト「ならば、そうさせてもらう。…お前という悪を滅ぼして…！」

〈戦闘会話 ルリVSネメシス〉

ネメシス「電子の妖精：可愛い名前じゃないかよ」

ルリ「お褒めの言葉ありがとうございます」

ユリカ「意外！ルリちゃんが普通にお礼を言ってる！」

ネメシス「いや、緊張感がねえな。ルリとユリカは……」

ユリカ「それがナデシコでもあるから……」

ハーリー「準備はできていますよ、艦長！」

ルリ「では、参るとしましょう。平和な世界を守る為に」

〈戦闘会話 リョーコVSネメシス〉

ネメシス「男勝りなのはいいが、痛い目を見るぜ」

リョーコ「うるせえ！お前に言われる筋合いはねえんだよ！」

ネメシス「聞き分けが悪いんだな、リョーコは！」

リョーコ「聞き分けが悪いもの何もてめえの言う事なんざ、誰も聞かねえよ！吹っ飛ばしてやるから、覚悟しやがれ！」

〈戦闘会話 サブロウタVSネメシス〉

ネメシス「サブロウタ、お前は俺と戦うより、女を追いかけていた方がいいんじゃないか？」

サブロウタ「是非ともそうしたいが、世界が滅んじまったら、女の子を追いかける事も出来ないからな」

ネメシス「そりゃそうだな。：なら、来るか？」

サブロウタ「当然だ！世界を守るヒーロー…格好良く決めるぜ！」

〈戦闘会話 ガイVSネメシス〉

ネメシス「ゲキガンガーみたいに現実の戦争は甘くないぜ！」

ガイ「そんなことわかってら！だとしても、お前を見逃すなんて事出来ねえよ！」

ネメシス「流星はダイコウジ・ガイ。：なら、ヒーローを夢見消えろ！」

ガイ「消えるのは悪だって昔から決まってるんだよ！」

〈戦闘会話 アルトVSネメシス〉

ネメシス「シエリルとランカの歌といい、お前の舞といい…お前等は楽しませてくれるな！」

アルト「シエリル達の歌も俺の舞も…お前だけを楽しませるものじゃない！」

ネメシス「そう言わずに、もつと見せてくれよ、アルト！」

アルト「言われずとも何度も見せてやるよ！俺のとおきおきの舞をな！」

〈戦闘会話 ミシエルVSネメシス〉

ネメシス「ミシエル、お前は極めて特別な存在なのかもな。…別の世界では死んでいたしな」

ミシエル「俺が死んでいた…？」

ネメシス「そして、今ここでもお前は死ぬ！俺の手によつてな！」

ミシエル「悪いが、笑えない冗談は嫌いだな…！容赦なく撃ち落としてやるよ！」

〈戦闘会話 ルカVSネメシス〉

ネメシス「ルカ、お前は使えるかもしれない。俺の部下にならないか？」

ルカ「なる気はありません」

ネメシス「ナナセもお前の生命も助けてやると言つてもか？」

ルカ「何を言われようが、僕達は自分自身で生命を掴んでみせます！僕達の意志で…

！」

〈戦闘会話　オズマVSネメシス〉

ネメシス「隊長さんも大変だな。色んな部下を持つと気疲れするだろ？」

オズマ「そうだな。特に勝手な行動をされると困る」

ネメシス「助けてやろうか、オズマ？お前を隊長から解放してやるよ！」

オズマ「悪いがお断りだ。俺は今の役割に満足しているんだ！お前を倒した後も隊長を続けてやる！」

〈戦闘会話　クランVSネメシス〉

ネメシス「クランが来るか」

クラン「ネメシス、覚悟……！」

ネメシス「するわけねえだろうが！大人しく消えろ！」

クラン「消えるのは貴様の方だ……私達の未来、貴様の好きにはさせん！」

〈戦闘会話　カナリアVSネメシス〉

ネメシス「決着といくか、カナリア」

カナリア「そうだな、ネメシス……」

ネメシス「言い残す事はないか？」

カナリア「必要ない！その前にお前が言い残す事を考えておくんだな！」

〈戦闘会話 ジェフリーVSネメシス〉

ラム「各武装、準備の完了終わりました！」

ミーナ「F」「いつでもいけますよ、艦長！」

ネメシス「へえ、マクロス・クオーターのメンバーは全員やる気満々だな」

ジェフリー「そうだ。我々の心は一つだ！」

ポビー「そして、あんたを倒すって目標もね！」

キャシー「私達はくじけない！」

ネメシス「ジェフリー、こいつ等はいい部下じゃねえか」

モニカ「いい、いい部下……！って、それどころじゃない……！艦長、行きましよう！」

ジェフリー「ふむ！その大事な部下達の未来を守る為にも……この戦い、必ず勝利するぞ！」

〈戦闘会話 ブレラVSネメシス〉

ネメシス「また特攻して死ぬなよ、ブレラ」

ブレラ「死ぬつもりはない。：俺はもう一度やり直してみせる」

ネメシス「それは俺に勝つてから言うんだな！」

ブレラ「では、勝たせてもらう。：全ての生命の未来の為に……！」

〈戦闘会話　　リオンVSネメシス〉

ネメシス「行くぜ、リオン！俺のスピードについてこられるかな？」

リオン「お前、俺を舐めすぎじゃないか？」

ネメシス「そんな事はないぜ？気を悪くしたなら、謝るぜ」

リオン「ああ、そうかよ！だったら、お望み通り、追いついてやるよ！」

〈戦闘会話　　アイシヤVSネメシス〉

ネメシス「ちっ、美少女が相手だとやりにくいねえ」

アイシヤ「あら、わかっているじゃない。それなら、負けてくれない？」

ネメシス「おっと、そういうわけにはいかねえな、アイシヤ。俺にも意地つてもんが

あるからな」

アイシヤ「そっか。：じゃあ力尽くでいくしかないわね！」

〈戦闘会話 ミーナ「30」VSネメシス〉

ネメシス「ミーナ、お前は戦うより歌っていた方がいいぜ」

ミーナ「30」「……」

ネメシス「だからよ……大人しく落とされたやがれ！」

ミーナ「30」「そういうわけにはいきません！私でも……誰かを守りたい……！そう思っているから、ここにいます！」

〈戦闘会話 ゴーカイレッドVSネメシス〉

ネメシス「マーベラス、ジョー、ルカ、ハカセ、アイム……。海賊戦隊の力を見てやるよ」

ゴーカイイエロー「何であなたが上からなのよ！」

ゴーカイグリーン「ルカ、抑えて！」

ゴーカイピンク「ここで怒ってしまえば、彼の思う壺です！」

ゴーカイレッド「ずいぶん余裕そうだが……後で後悔すんなよ！」

ネメシス「後悔するのはお前等の方かも知れねえぞ、ゴーカイジャー！」

ゴーカイブルー「あいつに構っている時間はない。とつとと決めるぞ、マーベラス！」

ゴーカイレッド「おう！野郎ども、これで最後だ……ド派手にいくぜ！」

〈戦闘会話　　ゴークアイシルバーVSネメシス〉

ネメシス「鎧、これまでスーパードーム戦隊は世界を救って来たが、ここまでの様だな！」

ゴークアイシルバー「そんな事、お前が決めるな！」

ネメシス「じゃあ、防いでみるよ、ゴークアイシルバー！」

ゴークアイシルバー「言われなくても…ギンギンにいくぜ！」

〈戦闘会話　　ゼロVSネメシス〉

ネメシス「ベリアルを何度も倒したお前は評価せざるおえないな、ゼロ」

ゼロ「そりやありがとよ！その礼にお前をぶっ飛ばしてやるぜ！」

ネメシス「へえ、なら逆に俺がお前を銀河の星屑にしてやるよ！」

ゼロ「やってみやがれ！俺のビックバンは…もう止まらないからな！」

〈戦闘会話　　グレンファイヤーVSネメシス〉

ネメシス「お前の炎で俺を燃やす事は出来るかな、グレンファイヤー？」

グレンファイヤー「随分と余裕じゃねえか！後で吠えず等吐くなよ！」

ネメシス「お前こそ、負けてメソメソすんなよ！」

グレンファイヤー「当たり前だ！ここから全開だ！ファイヤーアアアツ！！？」

〈戦闘会話 ミラーナイトVSネメシス〉

ネメシス「お前の鏡なら、俺の攻撃も跳ねかせるのか、ミラーナイト？」

ミラーナイト「さてね、試してみなければわからないな」

ネメシス「なら、やってみるか！鏡が破壊されて、攻撃を受けても文句言うなよ！」

ミラーナイト「そちらこそ、攻撃が跳ね返り、ダメージを受けても何も言わないでくださいよ！」

〈戦闘会話 ジャンボットVSネメシス〉

ネメシス「いくら鋼鉄の戦士でも破壊する事は簡単だ！」

ジャンボット「私を甘く見るなよ、ネメシス！」

エメラナ「ネメシス！あなたの行いの数々は…絶対に許しません！」

ネメシス「許さない、か…。なら俺を止めてみるよ、ジャンボット、エメラナ！」

ジャンボット「では、行かせてもらう！世界を救う…それがウルティメイトフォースゼロの使命だ！…ジャンファイト！」

〈戦闘会話 ジャンナインVSネメシス〉

ネメシス「羨ましいぜ、ジャンナイン。：お前は大切な物を見つけられたんだな」

ジャンナイン「ネメシス、君は…！」

ネメシス「何も言うな。：俺はお前等の敵だからな！」

ヒュウガ「ジャンナイン…今は…！」

ジャンナイン「わかつている…！君を止める！これ以上、有機生命体から涙を流させないためにも！」

〈戦闘会話 EXゴモラVSネメシス〉

EXゴモラ「グウウウウツ…！」

ネメシス「ゴモラとレイ…こりや本気でかからないと負けちゃうな」

レイモン「ネメシス…手加減をするつもりはないぞ！」

ネメシス「勿論、そんな事すんなよ！ゲームが楽しくなくなるからな！」

レイモン「お前もレイブラッド星人と同じだ！生命はゲームじゃない！それを教えてやるぞ、ゴモラ！」

EXゴモラ「キシヤアアアン！！？」

〈戦闘会話 EXレッドキングVSネメシス〉

ネメシス「グランデ、最後の戦いを始めようか！」

グランデ「おうおういいねえ！お前とは気が合いそうだぜ！」

EXレッドキング「キヤアアアン!!？」

ネメシス「レッドキングもやる気か！楽しくなりそうだぜ！」

グランデ「そうだな！だが、勝つのは俺とレッドキングだぜ！」

〈戦闘会話 マサキVSネメシス〉

クロ「マサキ、ネメシスが来るニヤ！」

シロ「負けられないぞ、マサキ！」

ネメシス「ファミリアはやる気だが、お前はどうかなんだよ、マサキ？」

マサキ「俺もお前を倒す気満々だぜ、ネメシス」

ネメシス「なら、決着をつけるか！」

マサキ「そうだな！俺達とサイバスターの力…受けみやがれ！」

〈戦闘会話 アーニーorサヤVSネメシス〉

ネメシス「カリ・ユガを倒したお前等の力…面白くなりそうだな！」

サヤ「ネメシス…あなたと言う人は…！」

アーニー「挑発に乗るな、サヤ…。僕達は戦争を楽しむつもりはない」

ネメシス「変わったな、アーニーもサヤも…。それなら、お前等の全てを俺にぶつけてこい！」

サヤ「アーニー！」

アーニー「ああ…！いこう、サヤ！ネメシス…僕達の想い、受けてみる！」

〈戦闘会話　リチャードVSネメシス〉

ネメシス「リチャード…お前はいい父親なのかも知れねえな」

リチャード「そう言ってもらえて光栄だが、それがお前の本音なのか、ネメシス？」

ネメシス「…さあな」

リチャード「…そうか。もう何も語る必要はない。…お前を止めてやる、必ずな！」

〈戦闘会話　ジン「UX」VSネメシス〉

ネメシス「お前の意志の強さはアーニー以上かもな、ジン」

ジン「UX」「いや、俺はまだまだだ。…違う意味でアーニーを超える！」

ネメシス「その前に俺を越えてみやがれ！」

ジン「UX」「ああ！お前を倒せないで、アーニーは越えられない！だからこそ、お前をも俺は越える！」

〈戦闘会話 アユルVSネメシス〉

アユル「ネメシスさん。私はわかりますよ…本当のあなたは…」

ネメシス「おいおい、アユル…それ以上は黙ってくれないか？」

アユル「いえ、黙りません！あなたは本当は優しいお方なのですよね！」

ネメシス「…いい加減にしろ…黙れと言ったはずだ！」

アユル「ネメシスさん…！私が本当のあなたを解放します！そして、あなたを救ってみせます！」

〈戦闘会話 アマリVSネメシス〉

ネメシス「エンデを倒したからって、意気がるなよ、アマリ、イオリ、ホープス！」

イオリ「お前こそ、神を気取るな！」

アマリ「ネメシス…術士として、あなたを打ち破ります！」

ネメシス「お前等を倒せば…術士は総崩れってわけだな！」

ホープス「やれやれだな、ネメシス。エンデを打ち破った我々にもはや怖いものなど

ない。マスター」

アマリ「ええ！ネメシス：受けてみてください！これが私達の真のドグマです！」

〈戦闘会話 零VSネメシス〉

アスナ「漸く最終決戦よ、ネメシス！あなたに世界を好きにはさせないわ！」

ゼファイ「ネメシス：私とあなたの長い戦いもこれで終わりです！」

ネメシス「舐めるなよ！アスナ、ゼファイ！勝つのは俺の方だ！」

零「…ネメシス、ありがとな」

ネメシス「何っ…?!？」

零「みんながいたから…そして、お前がいたから、俺はここまで力をつける事が出来た

…!!お前の遺伝子が俺の中にあるから！」

ネメシス「…お前は本当に腹が立つ野郎だぜ…!もう無駄話は終わりだ！これで本当

のラストだ！零イイツ!!？」

零「ああ…!来やがれ…ネメシスウウツ!!？」

〈戦闘会話 弘樹VSネメシス〉

ネメシス「雑魚の癖に何処までも調子に乗りやがって…!」

カノン「私達が雑魚かどうか…見せます！」

弘樹「ネメシス、零との決戦の前に俺との決着もつけようぜ！」

ネメシス「良いぜ！弘樹、カノン！そんなに死にたいなら…先に楽にしてやるよ！」

弘樹「終わらせるぜ、ネメシス！平和な世界を掴み、みんなで生きていつてやる！」

〈戦闘会話 優香VSネメシス〉

メル「ネメシス…私達の全てをかけてあなたを倒します！」

ネメシス「それなら、俺も全力でためえ等をぶつ潰す！」

優香「沢山の人達の想いを踏みにじったあなただけは絶対に許さない…！」

ネメシス「優香、メル！俺もお前達を許さねえぞ…ゲームと全く違う行動をとつたためえ等だけはな！」

優香「私達はゲームの駒じゃないってまだわからない様ね！私達は一人一人生きていくの…あなたの思い通りになんて絶対にならないわ！」

〈戦闘会話 ギルガVSネメシス〉

ネメシス「ギルガ、リン！お前等も大人しく死ねよ！」

リン「簡単には死にません！」

ギルガ「僕には沢山の罪があるからね…。ここで死んで償う事が出来ないなんて、真平ごめんだよ！」

ネメシス「てめえは何処までも俺をイラつかせる奴だ！」

ギルガ「君こそ…いい加減わかってくれないかな？僕達は君を倒す！…ハデス様達の仇も僕達が取る！」

〈戦闘会話　ラゴウVSネメシス〉

ネメシス「何故だ！何故お前は俺に向かってくるんだよ、ラゴウ!?？」

ラゴウ「俺は貴様に負けると少しも思っていない。…そして、零を倒すのは俺だ」

ネメシス「零と戦いたいなら、よそでやれよ！」

ラゴウ「まずは貴様を潰す。…オニキスの想いを踏みにじった貴様だけはな！」

ゼフィルスネクサスの攻撃でアルガイヤ・ネメシスはダメージを受けた。

ネメシス「グッ…！ば、バカな…！俺は全力を出したはず…それなのに何故俺が負け

た…!?？」

零「…ネメシス…」

ネメシス「何故だ…俺は究極の生命体のはず…何故、俺がお前等みたいな下等生物に！」

零「…俺達には絆があるからだ」

ネメシス「絆だと…?!? そんなふざけんな！くだらねえモノで…!」

弘樹「でも、現にお前はそのくだらない力で負けてんだよ！」

優香「確かに一人ではあなたには勝てない…。でも、私達の力が弱くても、私達全員が一つになれば、大きな力になるの！」

ゼファイ「それが絆…あなたにはない物です！」

ネメシス「何だよ…何で何だよ！あの時の俺達だつて…力を合わせたはずだ！それなのにどうして、俺達の星は滅ぼされなきゃならないんだよ！どうしてお前等だけが生き残つて…!」

零「ネメシス、お前…」

ネメシス「…なあ、教えてくれよ、零…。俺達の何がダメだったんだ…?」

零「…お前達は自分達の星を守る事だけ考えて、仲間の事を何も考えていなかったんじゃないのか？」

ネメシス「…!」

零「それは絆じゃない…。ただ力を合わせていただけだ。本当の絆の力じゃないんだ！」

ネメシス「そうか…」

つ…！ネメシスが泣いている…！

ネメシス「何だよ…そんな簡単な事だったのかよ…。零、トドメをさせよ…」

零「…」

ネメシス「俺で最後だろ？これでお前等の勝利だ。…敗者に相応しいエンディングをくれよ」

零「…」

アマリ「零君…」

零「…ふざけるな」

ネメシス「えっ…？」

零「死が相応しいエンディングなんて、誰が決めた？…お前には罪を償ってもらおう
俺の言葉にネメシスは驚愕の表情を浮かべた。

ネメシス「お前…馬鹿か?!？俺は今まで沢山の生命やマリアとハデスの生命を奪ったんだぞ！」

零「だから、死ぬ事以外で罪を償えって言うてんだよ！」

ネメシス「零……」

零「皆さんもそれでいいですよね？」

ネモ船長「零に任せる」

海道「つたく、相変わらず甘いやつだぜ」

ヴァン「全くだぜ……」

青葉「零さんがそれでいいなら、いいと思いますよ！」

アムロ「おそらく反対する者はいないだろう」

零「つてわけだ、ネメシス」

ネメシス「俺が……また世界を滅ぼそうとしたら、どうするんだよ？」

零「その時は今度こそ俺が責任を持ってお前を倒す」

ネメシス「……フツ、お前は本当にお人好しな奴だぜ」

零「知らなかったか？そこが俺のいいところなんだよ」

わかってくれたか、ネメシス……。

これで本当に終わったな……。

エレクトラ「……！船長、地球付近が急速にエネルギーが増大していきます！」

ネモ船長「な、何だと……?!？」

ワタル「ネメシスは何もしていないんでしょ?!？」

ネメシス「さっきの戦いでエネルギーが跳ね上がったのか…!?？」

アンジュ「このままじゃ世界が滅ぶわよ！」

アスナ「みんな！私達の想いを一つにして、エネルギーを落ち着かせるわよ！」

ホープス「…ここはアル・ワースではありません。想いの力では…どうする事も出来ません…！」

アマリ「そ、そんな…！」

ジユドー「何とかならないのかよ!?？」

トビア「…」

ルルーシユ「エンデの肉体もない以上…どうする事も…出来ない…！」

弘樹「くそッ！ここまで来て…！」

ネメシス「…俺がやる」

ネメシス「…!?？」

真上「何だと…!?？」

ネメシス「…俺の力でエネルギーを封じ込める！」

ゼファイ「ですが、今の弱ったあなたの力では…！」

ホープス「それにそんな事をすれば、あなたの身体を消滅します…」

ネメシス「やらせてくれよ…これは俺が巻いた種なんだからよ」

ゼファイ「ネメシス……！」

アルガイヤ・ネメシスは力を込め、エネルギーを出し、歪んだエネルギーとぶつめた。
ネメシス「ぐっ……！」

メル「ダメです！押されています！」

シモン「もういい！このままじゃお前も……！」

ネメシス「生命つてのは……諦めないんだろ？どんな絶望的状况でもお前等は諦めなかつた……だから、俺も……諦めねえ！」

零「……その通りだ」

アスナ「零……？」

零「アスナ、ゼファイ……ごめん」

俺はアスナとゼファイをメガファウナに移動させ、ゼファイルスネクサスのアルガイヤ・ネメシス同様、エネルギーをぶつけた。

ゼファイ「ば、パパ……!? どう言うつもりですか!?？」

零「見ての通りだ……！俺とネメシスの力を合わせれば、何とかなる……！」

ネメシス「バ、馬鹿野郎……！そんな事したら、お前も……！」

零「……逆に今のお前に任せていたら、どのみち全滅だろ……！それに、お前がやるなら、遺伝子を持つ俺もやる必要が……あるだろ……！」

エピローグ 輝く未来

ーアマリ・アクアマリンです…。

私とゼフィちゃん、アスナさんは零君やワタル君達と初めて出会った場所に来ています。

…まずはあの決戦の後に何があったかをお話ししないといけませんね。

私達は零君とネメシスが発した光に包まれ、目を覚ますとアル・ワースへ戻ってきました。

一誠さん達はアル・ワースにいた全ての敵を倒し、元の世界へ戻りました。

世界が滅んでいない事を確認する限り、エネルギーの緩和には成功したのでしよう…。

ですが、戻ってきた人達を確認しましたが、零君とネメシス…ゼフィルスネクサスとアルガイヤ・ネメシスの姿はありませんでした。

ホープスの言う通り、二人はエネルギーを使い果たして消滅したと言う事なのでしよう…。

そして、平和になった事を確認し、私達は異界人の方々を元の世界へ戻す前にエクスクロスの始まりの場所：モンジャ村でシモンさんとニアさんの結婚式を挙げる事になりました。

式は今現在も盛り上がり、私とゼフィちゃん、アスナさんは少し抜け出し、零君がゼフィちゃんと初めて出会った研究所、そして、今現在、この場所に来ています…。

ゼフィ「ここでママはパパと出会ったんですね！では、ここがエクスクロスの始まりの場所でもあるのですね！」

アマリ「何もない所だけだね」

…あの戦い以降、ゼフィちゃんは無理に笑っています。

本当は零君の事が悲しいはずなのに…それは私も同じですが…。

零君は…私達を守る為に…！

アマリ「…零君…」

ゼフィ「ママ…」

アスナ「…戻りましょうか。みんなが心配するわ」

アマリ「…はい…」

零君…こんなのも…ないよ…！

私はゼフィちゃんの手を握り、アスナさんとその場を後にしようと思いました…その時

でした。

遠く空から何かが飛んできます。

アマリ「あれは…?!？」

間違えるはずありません…あれは機体…それも…!

ゼファイ「そんな事って…」

アスナ「ゼファイルスネクサス…?!？」

そう、零君と共に消滅したはずのゼファイルスネクサスでした…。

ゼファイルスネクサスはゆっくりと私達の前に降り立つと、ハッチが開き、一人の男の人が降りてきました。

その人の顔を見た途端、私は目に涙を浮かびました。

? 「…フウ…」

だって、その人は…零君でしたのです…。

アマリ「零君!」

ゼファイ「パパ!」

? 「…!」

零君は私達に気づくと、勢い良く駆け出して来て…私…を通り過ぎて、アスナさんに抱きつきました。

アマリ「えっ……？」

アスナ「ちよ、ちよつと、零!!？」

? 「やつと……やつと会えたぜ……アスナ……！」

零君の嬉しそうな表情を見て、私の中の何かがゆっくりと崩れていきました。

アスナ「な、何やっているのよ、零!!?抱きつく相手が違うでしょ!!?」

? 「これでいいんだよ。アマリに抱きつくのは俺じゃねえ」

アスナ「何を言ってる……！」

アマリ「零君……」

零君は……やっぱりアスナさんの事を……。

私が俯いたその時……突然、後ろから誰かに抱きつかれました。

アマリ「……！」

? 2 「待たせてごめん」

私に抱きついてきた人の言葉を聞いて、ついに私は泣き出してしまいました。

何故なら……私に抱きついてきた人は零君だったからです……!

零「ただいま、アマリ、ゼファイ」

アマリ「零君……！」

ゼファイ「パパ……！」

「みんなもただいま、新垣 零だ。」

アマリとゼフィは目に涙を浮かべ、俺に抱きついてきた。

まあ、二人には心配をかけちまったしな。

アスナ「れ、零…?!?じゃああなたは…?!?」

?「おいおい、気付いてくれてもいいだろうが…」

零「気づくわけねえだろうが。勝手に先に行きやがって！おかげでアマリに誤解をさせる所だっただろ！」

?「悪い悪い！アスナの顔を見たらいてもたってもいられなくてな」

アスナ「え…誰なの？」

?「…おいおい、ここまで言って気付かないのか？」

アスナ「…ま、まさか…?!?レイヤ…?!?」

レイヤ「気づくの遅いつての、アスナ」

レイヤには流石のゼフィ達も驚いていた。

零「みんな、兎に角エクスクロスのみんなとも話がしたい。…だから、行こう」

レイヤ「俺達についてはそこで話すからよ」

アマリ「わ、わかったわ…」

俺達はモンジャ村へとたどり着くと…俺の姿を確認したエクスクロスのみんなが驚いていた。

ベルリ「れ、零さん…!?？」

アルト「本当に…零なのか？」

零「ああ。ただいまです、皆さん！」

サラ「零ー！」

ティア「零だー！」

サラとティアが勢い良く抱きついてきた…これも定番になってきたな。

アムロ「零…何故お前が…？」

ディオ「それにそこにいるのはレイヤ・エメラルドか…？何故…」

レイヤ「おい、ディオが気付いてなんでアスナはすぐに気づかないんだよ」

アスナ「ご、ごめんなさい…」

拗ねるレイヤを放置し、俺はあの決戦の後の事を話し始めた…。

零「光に包まれ、肉体が消滅した俺とネメシスは魂の状態の時空の狭間に飛ばされたんです」

ルルーシユ「時空の狭間…？」

零「あの世とこの世を繋ぐ隙間の様なものだ。そこでネメシスは俺に残ったエネルギー

ギーを与え、俺の肉体を再生させてくれたんです」

ノブナガ「では、何故レイヤがいる？」

レイヤ「俺もネメシスに作り出されたんだよ。…以前、ある戦いネメシスに作り出された様にな。だが、安心して、身体は普通の人間だし、ドグマも使えるが、寿命も普通の人間とさほど変わらない」

あの時の戦いか…！何だか懐かしいな…。

メル「では、ネメシスは…」

零「…本当の意味でエネルギーを使い果たして、消滅した…」

カノン「そう、ですか…」

レイヤ「あいつ…最後の最後に格好つけやがって…」

シヤア「我々はネメシスに助けられたのだな…」

弘樹「それよりも零…俺達に何か言う事があるんじゃないやねえのか？」

優香「そうだね。私達、すごく心配したんだよ？」

零「…皆さん、勝手な真似してすみませんでした…」

千冬「まったく、馬鹿者」

一夏「二度とすんなよ、こんな事！」

零「ああ！」

アスナ「それにしても…あなた達二人の扱いはどうなるの？」

零「え…？」

レイヤ「扱い？」

カミーユ「二人は同じ存在なのですよね？双子としても十分いけますが…」

零「双子か…」

レイヤ「いいな、それ」

零&mp;レイヤ「じゃあ…俺が兄だな…あ？」

おい待て、こいつ…！

レイヤ「何言ってるんだよ、零。お前よりも先に生まれた俺が兄だろ」

零「先に生まれたとか関係ねえよ。あの時の勝負に俺が勝ったんだから、俺が兄だろ」

レイヤ「あ、あの時は腹の調子が悪かっただけだ！」

零「何処のガキの言い訳だそりや!?!？」

レイヤ「う、うっせえ！何なら、ここで本当にどっちが強いか、決めるか！」

零「やってやるよ、コラ！」

俺とレイヤは殴り合おうとしたが…。

アスナ「やめなさい、二人とも！」

零「がはっ！」

レイヤ「ぐっ！」

アスナに殴られた…レイヤのせいで…!

ギルガ「二人とも、本当に似た者同士だね」

リン「まあ、本人ですし」

ラゴウ「レイヤ様…」

レイヤ「やめろ、ラゴウ。俺は首領じゃねえ。…オニキスの新しい首領は零だ」

…は!!?

零「待て! そんな話始めて聞いたぞ!

レイヤ「俺からのプレゼントだ。…それに父さんの意志も継がないといけないだろ

?」

零「…そうだな。わかったよ」

そうだ…それよりも!

零「シモン、ニア…結婚おめでとう!」

シモン「ありがとな、零!」

ニア「ありがとうございます!」

キタン「じゃあ、パーティーの続きをするか!」

俺達はパーティーを楽しんだ…。

そして、翌日…。

ついに異界人のみんなは元の世界へ帰る時が来た…。

そう、この日いっぱいエクスクロスは解散となる。

ちなみに俺、弘樹、優香、アスナ、メル、カノンはアル・ワースに残る事になった。

まあ、俺はオニキスの新しい首領になる事になったし、弘樹達も俺のサポートをしてくれるみたいだ。

もちろん、アマリヤイオリも残るみたいだ。

…そう言えば、後で仕入れたら情報だが、アウラが解放された事でマナの国はマナの力を失ったため、国家群で、内乱状態が続いているみたいだ。でも、混乱の中で自然発生的にリーダーが誕生して事態の収束に導いているみたいだ。

さらに、創界山付近もドアクダーを倒した事により、虹が戻った。

アンジュは内乱を止めている集団のリーダーで妹のシルヴィアと会った様だ。

アンジュ達は旧ミスルギ復旧を手伝う事になっている。

それにアンジュ達はアンジュが言っていた喫茶アンジュつてものをアルゼナルのみんなで開く様だ。

サラマンディーネとヴィヴィアンは一度アウラの世界へ戻るみたいだが。

そして、ルクスの国は変わらず、平和に暮らす様だ…。

そしてここ…魔徒教団の神殿で、エクスクロスの全員が集まった。

俺達はアル・ワース組も異界人のみんなを見送る為だ。

ワタル「ついに、この日が来たんだね…」

シバラク「創界山の虹は蘇り、聖龍妃様は、その力を取り戻された。これで異界人達は元の世界へと帰る事が出来る」

ヒミコ「いいのか、オツサン？ グランデイスとお別れだぞ」

クラマ「その他、沢山の女性ともな」

シバラク「う…うう…結局、魅力的な女の人が多すぎて拙者、一人を選ぶ事が出来なかつた…」

ハンソン「まあまあ、シバラクの旦那…。別れに涙は禁物ですよ」

サンソン「そう言う事。カラツと明るくいきましょうぜ」

シバラク「サンソン、ハンソン…。お主達も世話になつたな」

クラマ「よかつたな、元の世界へ帰れる事になつて」

サンソン「元の世界に戻るって事はまた裏稼業に戻るって事か」

ハンソン「そうなるね…」

ジャン「正義の味方をやったんだから、そういう仕事からは足を洗ったら？」

マリー「ナディア」「マリーも賛成！」

キング「！」

ハンソン「キングも、そう思うんだね……」

サンソン「仕方ねえ……。そういう道も考えてみるか……」

マリー「ナディア」「サンソン！それなら、お嫁さんになってあげてもいいよ！」

サンソン「敵わねえな、マリーには……」

グランデイス「好きにしな、サンソン、ハンソン」

ハンソン「姐さんは、どうするんです？」

グランデイス「決まってるだろ……。新しい恋を探すんだよ」

サンソン「(ネモの事は諦めたみたいだな……)」

ハンソン「(エレクトラさんのお腹の中にはネモ船長の子供がいるからね……)」

ナディア「頑張ってくださいね、グランデイスさん。応援してますから」

グランデイス「ナディア……。あなたは、どうするんだい？」

ナディア「今はまだ……。わかりません……」

ジャン「だから、ナディアは僕と一緒に暮らして、これからの事を考えるんです」

マリー「ナディア」「マリーとキングも一緒だよ！」

グランデイス「それでいいよ、ナディア。時間は、まだたっぷりあるからね」

サンソン「で、NーNーチラス号はどうするんだ？」

ハンソン「元々ノーノーチラス号もネモ船長達もアル・ワースの生まれなんだよね……」
エレクトラ「私達も一度、自分達の今後の事をゆっくり考えるためにアル・ワースを
離れるつもりです」

ネモ船長「我々はアル・ワースから転移した後、10年以上もの間、ネオ・アトラン
ティスと戦ってきた……。あの世界の海の美しさに目もくれず……」

エレクトラ「ノーノーチラス号というアトランティスの遺産を世界に持ち込むわけに
はいきませんが……。誰もいない深海ならば、大きな問題にはならないでしょう」

グランデイス「いいね……。七つの海を股にかけての冒険の旅ってわけか……」

ジャン「ネモ船長……」

ネモ船長「ジャン君……。君に言った通り、いつか人類の科学は宇宙にまで手を伸ばす
……。私は、科学の進歩が誤った方向に進まない様に見守るつもりだ」

ジャン「わかりました、ネモ船長。僕は、この戦いで学んだ様に科学を正しく使って
いく事を誓います」

ネモ船長「ナディア……」

ナディア「はい……」

ネモ船長「何か困った事があつたら、いつでも私を呼べ。世界中の何処にいてもお前
を助けに来る」

ナディア「ありがとう、お父さん」

ノリコ「父親であるネモ船長とナディアちゃんの和解……。最後にいいものが見れました！」

カズミ「さあ、ノリコ。元の世界へ戻った後は今まで以上に宇宙怪獣との戦いを頑張るわよ」

ノリコ「はい！お姉さま！」

溪「そっか！まだ、宇宙怪獣が残っていたね！」

凱「帰ったら、また大忙しだな」

號「ふっ、だが、平和な世界はいずれ来る……。アル・ワースの様にな」

竜馬「へっ、言うようになったじゃねえか、號」

カズミ「旧ゲッターチームはどうするの？」

弁慶「俺達も戦線に復帰するさ」

隼人「世界の平和：早乙女博士の願いでもあるからな」

竜馬「まあ、世界が平和になるまでゲッターの闘いは終わらないって事だ」

スカーレット「それは私達も同じだ」

由木「元の世界へ戻ったら、いろいろ報告しないといけませんね」

海道「死んだと思っていた人間が生きていた……。だけでいいじゃねえか」

由木「そんな簡単なものじゃないわ！」

真上「全く：相変わらず何も考えない猿だな」

海道「何だとナル野郎！」

ハリケーン「はあ：この2人はいつまでもこの状態だね」

アイラ「異界の方達よ：お気をつけて」

シーラ「アイラ殿もお元気で」

真上「：それよりもチームDはどうするんだ？」

朔哉「俺達か？俺達も勿論、戦うぜ」

くらら「一度、平和な日常に戻った私達が言うのも何だけど、みんなが戦っているの

に平和に暮らしている暇はないわ」

エイダ「はい！皆さん、頑張りましょう！」

ジョニー「まず、エイダは表の仕事を頑張らないといけませんね」

エイダ「う…！が、頑張ります…！」

葵「私達の世界もいずれ、笑顔が絶えない世界にしないといけないからね」

海道「笑顔か：へっ！」

葵「そうでもないかと、みんなに笑われるでしょ？」

ノリコ「確かにそうですね」

万丈「いい覚悟だな、みんな。そうだ、ジャン……。僕からも言葉を贈らせてくれ。心を忘れた科学は人を不幸にするだけだ。それを忘れないでくれ」

ジャン「ありがとうございます、万丈さん。その言葉……覚えておきます」

ジョニー「万丈さん……。元の世界へ戻ったら、あなたはどうするんですか？」

万丈「まだ考え中だよ。当分の間は暇を楽しみたいしね」

デュオ「世界を混乱させたマリーメイア軍はアル・ワースで壊滅しちまったからな……」

トロワ「要するに俺達の世界は平和になっていると言う事か」

カトル「革命の世界は、平和の世界に変わりつつあるのですね」

五飛「だが、それは待っていれば自然に来るものではない」

ノイン「そうだな。平和の世界を待つのではなく、平和の世界を創り出さなくてはならない」

ゼクス「その為にも我々も力を尽くそう」

マリーメイア「私も出来る限りの事をします。あの人の娘としてではなく、一人の平和を望む人間として」

万丈「僕としては、出番がない事を願うけどね」

リリーナ「ヒイロ……。あなたの力も貸してください」

ヒイロ「俺は…お前の進む道にある障害を排除するだけだ」

リリーナ「でも、いつかきつと戦う必要がなくなる日が来ます。その時は、私の隣を歩いてください」

ヒイロ「その日が来たならな」

シヨウ「ヒイロの奴…最後にいい笑顔を見せてくれたな」

三日月「うん。そうだね」

デュオ「な…可愛い所もあるだろ？」

シヨウ「アル・ワースのいい土産になるよ」

カトル「シヨウさん達はバイストン・ウエルに帰るんですか？」

シヨウ「どうだろうな…」

シルキー「シーラ様と私はともかく、シヨウ達はわからないわね」

チャム「ええ！そうなの!!？」

シヨウ「俺もマーベルもトッドもバーンも一度、生命を落としているからな」

マーベル「アル・ワースが生と死の狭間にあるのなら、どちらでもない状態とも言えるけどね」

バーン「つまり、我々の場合は、バイストン・ウエルと地上…どちらへ行くかは、わからないのだ」

シーラ「あなた達の魂がどちらに引かれているかで、その答えは決まるでしょう」
トッド「どっちでもいいぜ、俺は。行った先で思い切り生きるだけだ」

バーン「フツ、そうだな」

マーベル「ええ、あるがままに任せるわ」

シヨウ「シルキー……。サーバインは、君に任せる」

シルキー「シヨウ……」

シヨウ「何となく思うんだ……。いつか君は、そのオーラバトラーの真の乗り手となる人間に出会う事になるって」

シルキー「それはシヨウだと思っていたけど……」

チャム「その答えも、きつとわかるよ。バイストン・ウエルに帰れば」

シルキー「そうね」

シーラ「では、帰りましょう。私達の魂のあるべき場所に」

エイサツプ「シヨウさん……お世話になりました！」

シヨウ「エイサツプも元気でな」

チャム「そっちの世界のジャコバ様にもよろしくね！」

エレボス「うん！」

リユクス「エイサツプ……地上の事はお願いします」

エイサップ「ああ、任せてくれ」

朗利「エイサップの事は俺達がしっかりとサポートするから任せとけて！」

金本「浮気もしないか、しっかりと見張っておくから」

エイサップ「ふ、2人とも…！」

アマルガン「キキ、へべ…。元の世界へ戻ったら、平和に暮らすぞ」

キキ「そうっすね！」

へべ「ようやく、楽が出来るよ…」

サコミズ「皆…それぞれの未来へと歩み出すか」

エイサップ「サコミズ王はどうするのですか？」

サコミズ「このアル・ワースで君達の事を見守っていよう」

エイサップ「そうですか…」

リュクス「父上、お元気で」

サコミズ「リュクスもな」

エレボス「…で、鉄華団やタービンスのみんなはどうするの？」

シノ「俺は元の世界へ戻って、ヤマギ達に会いに行くぜ」

三日月「俺は…」

オルガ「ミカ、俺の事は気にするな。…お前が行きたい未来へ進めばいい」

三日月「…わかったよ、オルガ。なら俺も戻るかな…。暁やアトラ、クーデリアもいるし」

アトラ「三日月…!」

三日月「戻ったら、沢山遊ぼうな、暁」

暁「うん…!」

クーデリア「团长はどうしますか?」

オルガ「俺の場合…ギヤラルホルンの奴等に顔を覚えられているからな…」

三日月「あ、俺もだ」

ガエリオ「お前達の身の安全は俺達が保証しよう」

ジュリエッタ「はい。もう争いは終わりましたから」

三日月「…そう、ありがとう。…じゃあ、オルガも来なよ」

オルガ「いいのか?」

暁「勿論だよ!オルガおじさん!」

オルガ「フツ…。ここだったのかもな俺達の居場所は…」

三日月「そうかもね」

ハツシユ「三日月さん、お元気で…」

三日月「何言ってるの、ハツシユ?お前も来いよ」

ハツシユ「え…いいんスカ!?!」

三日月「当然じゃん。…ハツシユも家族なんだから」

ハツシユ「あ、ありがとうございます!」

オルガ「昭弘はどうすんだ?」

昭弘「か、考えていなかった…」

名瀬「それならよ、昭弘。俺とアミダ、それからラフタは元の世界に戻り次第、現タービンを影から支えようとしているんだが…ラフタのパートナーを勤めてくれないか?」

昭弘「え…」

ラフタ「ちょ、ちよつとダーリン!聞いてないよ、それ!?!」

アミダ「今考えたからね。…で、どうだい、昭弘?」

昭弘「ラフタがいいなら…」

ラフタ「え、じゃあ…お願い…」

昭弘「ま、任せろ…」

アストン「最後にいいものが見れたよ」

昭弘「アストン、お前は どうするつもりだ?」

アストン「戻ったら、タカキ達に会いに行こうと思っっているんだ。…そして、一緒に

暮らそうかと……」

昭弘「そうか。元気でな、アストン」

三日月「そうだ。マクギリスはどうするの？」

マクギリス「私はアル・ワースに残る」

アルミリア「マツキー……?!？」

ガエリオ「な、何でだよ……?!？」

マクギリス「流石に私の事までは隠蔽できないだろう。……ガエリオ、元の世界を頼む」

ガエリオ「任せろ！」

アルミリア「マツキー……」

マクギリス「勝手な私を許してくれ、アルミリア。……だが、私はこのアル・ワースで多くの経験を積み、次に会う時は必ずや君にふさわしい男になってみせる。……だから、

元気で」

アルミリア「うん……!」

マクギリス「鉄華団、君達に出会えてよかった」

オルガ「色々あつたが、俺達もだ」

三日月「元気でね、マクギリス」

刹那「家族、か……」

イアン「刹那とテイエリアはELSの母星へとまた旅立つんだろう？」

刹那「ああ。今度こそ完全な対話を実現する」

テイエリア「随分途中旅をしてしまったからな。…ELSが待ちくたびれているかもしれないぞ」

刹那「そうだな。…テイエリア、1人だけ連れて行きたい人がいるのだが…」

テイエリア「君の好きにすればいいさ」

パトリック「連れて行くって…誰を連れて行くんだ、刹那？」

刹那「フェルト…」

フェルト「え…」

刹那「お前についてきてほしい」

フェルト「い、いいの…？マリナさんじゃなくて…」

刹那「俺のそばにいて欲しい…。ダメか？」

フェルト「だ…ダメじゃないよ！よろしくね、刹那…」

刹那「ああ…」

ミレイナ「良かったですね、グレイスさん…」

マリナ「刹那、また会いましょうね」

刹那「必ず会いに行く」

アレルヤ「ふっ、刹那らしいね」

マリー「00」「ええ」

ハレルヤ「俺達も旅を続けようぜ」

アレルヤ「ああ、そうだね」

ロツクオン「じゃあ、俺達は結婚と行くか、アニュー！」

アニュー「それは気が早すぎよ、ライル。…時間はゆつくりあるんだから、考えていきましよう」

ロツクオン「ふっ、そうだな」

ニール「最後の最後まで見せつけてくれるぜ。この馬鹿弟は…」

アレルヤ「ニールはどうするんですか？」

ニール「俺か？…考えてねえな…」

ロツクオン「なら、一緒に住もうぜ、兄さん」

ニール「はあ？！？マジで言ってるのかよ、ライル！」

刹那「ニール…。生きてくれ。俺がいない地球で…」

ニール「…ははっ。相変わらずだな。お前は…んじゃ、世話になるぜ。ライル、アニュー」

アニュー「はい。義兄さん」

パトリック「アンドレイ達はどうするんだ？」

アンドレイ「私は軍から離れ、父さんと暮らす」

セルゲイ「まずは母さんの墓から行かないとな」

アンドレイ「はい、父さん」

グラハム「平和な世界か……。刹那、君にこのガンダムを返す」

刹那「いや、そのガンダムはお前のパートナーだ、グラハム」

グラハム「…そうか。感謝する。…またよろしく頼む、グラハムガンダム」

スメラギ「ガンダムを使うなら、あなたにもソレスタルビーイングのマイスターにな

ってもらうわよ」

グラハム「勿論」

ラッセ「歓迎するぜ、グラハム！」

リボンズ「…」

アニュー「リボンズ、あなたはどうするの？」

リボンズ「僕もサコミズ王同様：アル・ワースで君達の世界を見守るよ」

刹那「そうか…」

リボンズ「人間達の未来を切り開いてくれ、刹那」

刹那「任せろ」

朝比奈「鉄華団もタービンスもソレスタルビーイングも未来へ向かっているんですね」

千葉「私達も負けてられませんね」

藤堂「そうだな」

スザク「シーラ・ラパーナ……。地上の平和は我々の手で守っていきます」

シーラ「よしなに。地上とバイストン・ウエルは表裏一体です。恒久的な平穩には、双方の世界の平穩が必要となります」

ラクシャータ「責任重大だね」

玉城「お、おう……！」

カレン「私達も頑張ろうね。革命の世界を平和の世界にする為に」

ジェレミア「だが、我々のKMFは認識宇宙であるアル・ワースで再生されたものだろう」

アーニヤ「じゃあ、元の世界に戻ったら、モルドレッドは消えてしまうの……」

ロロ「おそらくは……ね」

扇「機体の問題じゃないさ。みんなが求めた平和を実現させる為に出来る事をやろうって話だ」

ジェレミア「私の力が必要になるのなら、いつでも力を貸すつもりだ」

アーニャ「農園の仕事の方も頑張る」

スザク「みんな…」

ユーフエミア「私も…スザクを支えます」

スザク「ありがとう、ユファイ…」

ルルーシユ「頼んだぞ、スザク…。いや、新たなゼロよ」

スザク「ルルーシユ…」

ルルーシユ「俺はアル・ワースに残るつもりだ」

カレン「ルルーシユ…！一緒に帰らないの!?!」

ルルーシユ「当然だろう？俺は生きていてはいけない人間だ」

カレン「…」

ルルーシユ「そんな顔をするな、カレン。もし、俺の力が本当に必要な時が来たら…」

カレン「来たら？」

ルルーシユ「いや…俺の一存で決めていい事ではないな」

カレン「でも…!」

C・C「心配するな、カレン。その時が来たら、私がこいつの首に縄をつけてでも、

ひきずって行ってやる」

ロロ「勿論、僕もですよ」

C・C・「スザクも、それでいいな？」

スザク「任せるよ、C・C。」

コーネリア「ルルーシユを頼んだぞ、C・C。」

ギルフォード「ふつ、大変ですね、ルルーシユ様」

ダールトン「3人とも元気で」

C・C・「そういう事だ、ルルーシユ。お前に自由などないぞ」

ルルーシユ「お前に俺の生き方を決められるとはな……」

C・C・「決めるのは、私ではない。世界だ」

ルルーシユ「そうか……。ならば、それに従うしかないのかもな……」

シャーリー「私もルルを支えるからね！」

ルルーシユ「ありがとう、シャーリー」

ゼクス「ルルーシユ……。それまではアル・ワースでゆっくりするがいい」

万丈「出来れば、二度と僕達が出会う事がないのを願うよ」

ルルーシユ「俺も同感だ」

ヒデヨシ「……で、ノブ様はどうするんだ？」

ノブナガ「決まっている。俺もアル・ワースへ残る」

ヒデヨシ「な、何でだよ!?？」

ノブナガ「俺は破壊王だぞ？…それに俺は乱が好きなのでな…こちらにいる」
ジャンヌ「私も…ノブナガと一緒にいるわ」

ノブナガ「ふっ、是非もなし」

ミツヒデ「ノブ…」

ノブナガ「ミツ…世を頼んだぞ」

ミツヒデ「ああ…」

ノブナガ「アレクサンダー、ケンシン…。ミツ達を支えてやってくれ」

ケンシン「はい」

アレクサンダー「約束しよう、ノブナガ。必ず平和な世にしてみせると」

カエサル「我々もその様な世が来る事をアル・ワースから祈っている」

ヒデオシ「カエサルとイチヒメ様もアル・ワースに残るのかよ？」

イチヒメ「ええ…。任せましたよ、ミツヒデ」

ミツヒデ「お任せを…イチヒメ様…」

アンデイ「俺達も帰ったら、また学園生活だな」

MI X「私達も未来へ向けて、頑張りましょう」

アンデイ「そうだな！」

ゼシカ「あんたも学園に入るんでしょ？」

カグラ「まあな。…よろしく頼むぜ、どん底女」

ゼシカ「ええ、ワンコ」

モロイ「はあ…進路も不安だがな」

サザンカ「そうだね〜」

クレア「情け無い声をあげないでください。皆さんも頑張っているんですよ」

シユレード「そうだね。僕達も頑張っていこう、親友」

カイエン「任せろ、シユレード」

ユノハ「ジン君、私達はとうしようか？」

ジン「E.V.O.L」 「焦らなくていいよ、ユノハ…。まだ時間はたっぷりあるだから」

ユノハ「うん、そうだね!」

ミカゲ「君達の未来に幸せがある事を願っているよ」

ゼシカ「ミカゲはどうするの？」

不動ZEN「私と共に帰る」

ミカゲ「そういう事さ」

ミコノ「お二人もお元気で」

不動ZEN「未来は君達の手で掴んでくれ…エレメント候補生達を」

アマタ「はい!…ミコノさん、頑張ろう」

ミコノ「うん！アマタ君！」

シャルロット「いいなく、アマタ君とミコノはラブラブで」

セシリア「私達は程遠そうですわね」

一夏「何の話をしてるんだ？」

ラウラ「…セシリアに激しく同意する」

千冬「浮かれるのは勝手だが、元の世界に戻ったら、遅れた分を取り戻すぞ」

一夏「げっ…！」

箒「まあ、私達も頑張ろうではないか」

楯無「もう弱音は吐けないしね」

簪「うん。みんなに負けていけないからなね」

摩耶「先生ももう少し頑張ります！」

鈴「じゃあね、みんな！みんなの事は忘れないから！」

マドカ「…織斑 一夏…」

一夏「マドカ…」

マドカ「今度会ったら必ず殺す」

一夏「望む所だ！」

東「おーおー、青春だねー！」

千冬「何処が青春だ……」

零「一夏、これからも頑張れよ！」

一夏「零もな！」

千冬「零、お前には本当に世話になったな」

零「千冬さんもお元気で！」

ゼロ「一夏、修練を怠るんじゃないぞ！」

一夏「ゼロもな……後、師匠に会ったら、また会いましょうって、伝えておいてくれないか？」

ゼロ「わかった。確かに伝えるぜ！」

ひろし「若い一夏君達が頑張ろうとしているんだ。俺達も負けていけないな」

みさえ「ええ、そうね！」

ひまわり「たや！」

シロ「ワン！」

カンタム「しんのすけ君、お別れだ」

カイザム「お前に出会えて良かったぞ」

しんのすけ「カンタム……カイザム……」

カンタム「僕も頑張る、だから、君も頑張ってくれ」

しんのすけ「ブ・ラジャー！オラ、カンタムやカイザム…それからエクスクロスのみんなを忘れるまで忘れないゾ！」

一夏「いや、忘れたら、忘れるのかよ!!？」

零「最後まで、しんのすけらしいな」

しんのすけ「いや、それほどでも！」

トオル「褒めてない！」

ネネ「さあ、帰ったらリアルおままごとの続きよく！」

マサオ「か、帰りたくない…！」

ポーちゃん「悪夢…」

リオン「つ、強く生きろよ、みんな…」

アイシャ「じゃあ、私達も戻りましょうか」

リオン「帰ったら、ちよつとはゆっくりしたいな」

ミーナ「30」
「では、私の歌でリラックスして差上げますよ！」

アイシャ「ありがとう、ミーナ」

リオン「歌といえば…アルト。お前、シエリルとランカ…どっちを選ぶんだ？」

アルト「ばっ…!!？
リオン、今それを聞くなよ！」

ミシエル「言っちゃまえよ、アルト！」

ルカ「F」「アルト先輩、フアイトです！」

アルト「お前等な！」

ランカ「アルト君……」

シエリル「アルト……どちらを選ぶのかしら？」

アルト「う、ううっ……！」

ブレラ「アルト……」

オズマ「勿論、ランカだろうな？」

アルト「ど、どうすんだよ、これ……?!？」

クラン「これは……箒達同様、苦勞しそうだな」

カナリア「そうだな」

ジェフリー「だが、これを見ると……平和になったのだと思うな」

キャシー「そうですね。ジェフリー艦長」

九郎「平和と言ったら、俺も探偵業に戻るってわけか」

アル「売れていないがな」

九郎「気にしてる事言うなよ?!？」

エンネア「だったら、私が受付嬢をやってあげるよ！」

瑠璃「依頼なら、私達が提供します」

ウエスト「吾輩達ももつと暴れるのであーる！」

九郎「エンネアは兎も角、お前は大人しくしろ！」

エルザ「博士は馬鹿だから言っても無駄口ボ」

ウエスト「エルザ：!!? 言い過ぎではないか!!?」

アル「：マスターテリオン、エゼルドレーダ：汝等はどうするつもりだ？」

マスターテリオン「この世界の全てを見て回ろうと思っている。：付き添い、頼めるか？エゼルドレーダ」

エゼルドレーダ「マスターのおうせのままに」

ニツク「ねえ、ウイル：。僕達って：」

ウイル「人間の姿に戻れる様になったんだ。平和に暮らそう、ニツク」

リナ「お兄ちゃん：」

ウイル「今までのすまなかつたな、リナ」

リナ「ううん：：！」

サイ「でも、これでヒーローマンの活動も終わりだな」

デントン「それでもないよ、サイ君」

ジョーイ「そうだよ、サイ。世界はまだ完全な平和とは言えないんだ。：もし、必要になったら、僕とヒーローマンは戦うよ」

ジョー「ゴークイ」「いい目だ、ジョーイ」

マーベラス「安心して、地球を任せられるな」

九郎「マーベラス達はまた宇宙の果てにお宝を探しに行くんだろ？」

ルカ「ゴークイ」「ええ」

ハカセ「僕達は海賊だから」

アイム「皆さん、お元気で！」

ナビィ「風邪ひくなよ〜！」

ジョーイ「ナビィもね！」

鎧「俺達も頑張るから、みんなもがんばってね！」

マーベラス「また暇になったら、飯でも食いに行くからな」

九郎「ああ、待ってるぜ！」

ゼロ「宇宙の果てって事は…また俺達とも会うかもな」

マーベラス「その時はよろしく頼むぜ、ゼロ」

ミラーナイト「戻ったら、ペリアル軍の残党を倒さないといけませんね」

グレンファイヤー「休む暇はないってことか」

ジャンボット「それが我々ウルティメイトフォースゼロだ」

ジャンナイン「そう言うものなのか？」

ジャンボット「そう言うものだ」

エメラナ「皆さん、本当にありがとうございました！」

ヒユウガ「こちらこそ、ありがとう。さあ、戻ったらバカンスだぞ！」

レイ「大怪獣」「もう終わつてると思うがな」

グランデ「じゃあ、俺もまた強くなるとするか！」

海道「お前も相変わらずだな、グランデ」

ケロロ「それにしても、いい経験をしたであります！」

クルル「クーククツ！様々な技術も見られたしな」

ドロロ「そして、様々な人も見られたでござる！」

タママ「皆さん、いい人でよかったです！」

ギロロ「元気でな！」

ケロロ「ゲーロゲロゲロ！これでペコポン侵略にも活かせるであります！」

夏美「このボケガエルは……！」

ゼロ「あんまりやりすぎて、俺達に目をつけられるなよ？」

ケロロ「ケ、ケロッ」

ダークケロロ「冬樹、またお前に出会えてよかった」

冬樹「僕もだよ、軍曹。元気でね」

シヴァヴァ「ケロロの事は俺っち達に任せろ」

ドルル「任務続行」

ガードダイバー「様々な世界が平和の世界へと変わる…」

バトルボンバー「平和の世界であった俺達の世界は革命…あるいは戦争の世界に変わっていくのかよ」

グレートマイトガイン「そんな事を心配する必要はない」

舞人「勇者特急隊がある限り、俺達の世界は、永遠に平和の世界だ」

ブラックマイトガイン「舞人のいう通りだ。その為に、我々は悪と戦おう」

ガードダイバー「そう言えば、BD連合とジョーは青戸の街と一緒に元の世界に帰るんだな」

バトルボンバー「ジョーの奴…せっかく勇者特急隊に誘ったのに断るなんてよ…」

舞人「あいつには、あいつの生き方があるのさ。それに俺は信じてる。その力が必要な時が来たら、きつとあいつは来てくれると」

サリー「舞人さん…」

舞人「さあ…帰ろう、サリーちゃん。ブラック・ノワールは滅んだ…。これからは俺達の手で世界を創っていくんだ」

ワタル「流石は嵐の勇者（ヒーロー）、旋風寺 舞人！最後までカッコいいぜ！」

舞人「ワタル……。元の世界に帰ったら、旋風寺コンツェルンを訪ねてくれ。お前も特別隊員として勇者特急隊に協力してもらいたい」

ワタル「ありがとう、舞人さん！僕、頑張るよ！」

グレートマイトガイン「歓迎するぞ、ワタル」

甲児「勇者特急隊はやる気満々だな」

ボス「二大ヒーローのお前としちゃ、どうなんだよ、兜？」

甲児「勿論、あいつ等と同じだ。また悪が現れるなら、俺とマジンガーは戦うつもりだ」

さやか「でも、いいの？マジンカイザーとマジンエンペラーGとお別れして」

甲児「カイザーとエンペラーは全ての世界のマジンガーの可能性の結晶だ」

鉄也「今回は俺と甲児に力を貸してくれたが、きつと別の世界で、あいつ等の力を必要としている奴がいる。今度は、そいつ等の為にその光の力を使うだろうさ」

ヌケ「本当に大丈夫なのかな……」

ムチャ「心配ないさ！俺達がピンチになれば、カイザーとエンペラーが助けに来てくれるさ！」

鉄也「最初から、そんな事を考えてるようじゃ、先が思いやられるな」

甲児「言っておくぜ、鉄也さん。俺はカイザーの力に頼らずに戦っていくつもりだ」

鉄也「いい覚悟だ、甲児」

甲児「光子力のパワーを引き出すのは乗っている人間だ。俺の力でマジンガーの可能性を引き出し、平和を守ってみせるさ」

セリック「やはり、ヒーローは言う事が違うね」

シヤナルア「さて、私も早く家族の元へと帰らないとね」

ジラード「私達の世界は少しでもゆっくりできるんでしょ？」

オブライト「そうらしいな」

デイン「キオ、戻ったら、ルウの墓についてきてくれないか？」

キオ「勿論だよ、デイン！」

アセム「さて、俺達もゆっくりできるな」

ゼハート「だが、私達もこれからだ」

アセム「そうだな。サポート、頼むぜ：ゼハート」

ゼハート「任せろ、アセム」

フラム「ゼハート様……」

レイル「俺達も手伝いますよ！」

ゼハート「ありがとう、2人とも」

サブロウタ「平和な世界、か」

ハーリー「それを聞くと僕達も頑張らないといけませんね」

リョーコ「気負いすぎずにいこうぜ」

イズミ「そうだね」

ヒカル「必ず平和な世界は来るからね！」

ガイ「俺もナデシコクルーの一員として、頑張るぜ！」

ルリ「アキトさんとユリカさんはどうするんですか？」

ユリカ「それはもうラブラブなひと時を……」

アキト「……俺は……」

ヴァン「気にすんなよ、アキト。どの様な服装でもそれがお前のタキシードだ。胸を

張って生きろ」

アキト「ヴァン……」

ヴァン「もう俺みたいになるんじゃないやねえぞ」

アキト「二度と調味料を全てかける様な男にはならん」

ヴァン「酷え言い方だな」

ウエンディ「そう言うヴァンは何するの？」

ヴァン「さあな。戻ったら、決める。……お前は？」

ウエンディ「エヴァーグリーンに戻るわ。兄さんと義姉さんは？」

ミハエル「僕達は戻ったら、旅に出るよ」

フアサリナ「全てを旅したら、エヴァーグリーンでお世話になります」

ウエンデイ「待っているわ！」

プリシラ「ねえ、ヴァン。あの時の答えは？」

ヴァン「元の世界に戻った時でいいだろ」

カルロス「ZZZ」

ホセ「やれやれ、漸くゆっくりと休めるな」

バリヨ「だが、俺達はまだまだ現役だ」

ネロ「世界が危機に陥った時、エルドラソウルは立ち上がる！」

ガドヴェド「…我々も我々で生き方を探すか」

ウー「私は母の元へ行こうと思っています」

ガドヴェド「そうか」

カルメン99「じゃあ、私も本業に戻ろうかしら。…で、ジョシユアはどうするの？」

ジョシユア「僕は…」

レイ「ガンソ」「俺とジョシユはヴォルケインを静かな場所で眠らせる事にする。…漸く、静かに眠らせられるからな」

ユキコ「私も手伝います」

レイ「ガンソ」「勝手にしろ」

メリツサ「シン…」

シン「メリツサ…」

カロツサ「メリツサ…俺達はシンの世界に行くか？」

メリツサ「ううん。…今シンの世界へ行くと…また弱くなっちゃうから」

カロツサ「強いぞ、メリツサ」

シン「元気でな、メリツサ、カロツサ」

メリツサ「シンもね！」

ハイネ「さてと、戻ったら、花が散らない世界を作るんだっただな？」

アスラン「ああ。争いが全てなくなったわけじゃないからな」

レイ「Destiny」「ギルの見えなかった世界…作っていくぞ」

カガリ「これからも大変だな」

ステラ「ステラも手伝う！」

ルナマリア「頼りにしてるわよ、ステラ！」

キラ「頑張ろうね、シン」

シン「はい！キラさん！」

ラクス「(あなた達なら、きっと世界を平和に出来ます…)」

ベルリ「皆さん、言う事が違いますね」

シン「そっちはどうなんだよ、ベルリ？」

鉄也「いつまでも戦争の世界を続けるつもりか？」

ベルリ「まさか！僕達だってやりますよ！」

アイーダ「宇宙世紀とリギルド・センチユリーも頑張つて、戦争の世界の名を返上しなくてはなりません」

ノレド「でも、宇宙世紀が平和になったら、歴史が変わつちやうけど、その場合、あたし達はどうなるの？」

ライイヤ「心配はいりません、ノレドさん」

クリム「そうなったら、並行世界への分岐が起こり、宇宙世紀とリギルド・センチユリーは別の歴史を歩む事になる」

ミツク「要するに問題なしって事だよ」

ケルベス「連中が頑張るなら、我々も頑張らないとならん！気合を入れるぞ！」

リンゴ「宇宙で待機しているトワサンガとジット団もこつちと一緒に元の世界に帰る事になる…」

ドニエル「そうなれば、またレコンギスタを巡って戦いが起きるかも知れないな…」
ベルリ「そうでもないと思いますよ」

マスク「ベルリ……。アル・ワースの戦いでお前との決着がついたと思うなよ」

バララ「懲りないね、マスクは……」

マニイ「いいじゃない。その心意気がマスクなんだから」

ベルリ「そつちがその気なら、受けて立ちますよ、マスク先輩。ただし、生命のやり取り以外の戦い方で」

マスク「いいだろう、ベルリ」

キア「とりあえず、ジツト団はやり方を変えるつもりはないぜ。俺達の邪魔をする奴がいるなら、実力で排除するだけだ」

ロックパイ「トワサンガの方は地球の出方次第だろうな」

リング「心配するな。俺とライヤさんがトワサンガと地球の架け橋となるさ」

ケルベス「ライヤさんはともかく、そんな大役がリングに務まるかは疑問だがな」

ベルリ「全てはこれからですよ！」

ノレド「つて言うけど、何をどうすれば、平和になるのか、よくわからないよ」

ライヤ「それをみんなで考える事が大切だと思います」

ベルリ「僕は帰ったら、まずやる事があるけどね」

アイーダ「それは？」

ベルリ「世界を自分の身体で感じる事です」

ノレド「世界を…?」

アイーダ「感じる…?」

ベルリ「そうやって、自分が生きている意味を感じれば、きつと生命を大切に出来ます!それをみんなで分け合えば、世界はきつと変わるんです!」

甲児「だつたら、ベルリ!富士山に登れ!」

ベルリ「富士山?」

スザク「日本の一番高い山だよ」

一夏「自分の足で登るのにちょうどいい高さだぜ!」

シヨウ「富士山を登り切った時、きつとお前は生きている意味を感じられる」

ベルリ「ありあとあす!やってみます!」

カミーユ「最後までベルリはベルリだな」

フア「あの子を見ているところも元気になるわね」

ジユドー「リギルド・センチュリー組に負けてられない!俺達も頑張るぞ!」

ビーチャ「で、でもよ…」

エル「あたし達…アクシズ攻防戦の最中にこつちに跳ばされてきたから…」

ルー「帰るとなつたら、あの戦いの中に戻る事になるの…?」

シーブック「望む所だよ」

セシリー「シーブック…」

シーブック「あの戦いは、まだ終わっていないんだ…。だったら僕達は、自分の目でその結末を見届けなくちゃならない」

ジュード「シーブックさんの言う通りだ。俺達には決着をつけなければならない相手がいる」

アムロ「…」

カミーユ「アムロさん…」

アムロ「とつくに覚悟は出来てるさ、俺もシヤアも」

シヤア「ああ…。カミーユ…。お前も選ぶがいい。状況を見守るか、私と戦うかを…」

カミーユ「俺の意思は決まっています」

シヤア「そうか…」

マシユマー「ならば、私も自らの進む道を改めて選ぶ」

ジュード「でも、俺は…マシユマーさんと戦う事になるのは嫌だな」

マシユマー「私もだよ、ジュード」

ハマーン「誰も自ら争いを望む者はいない」

ギユネイ「確かにそうだな」

プルツ「私は…」

プル「いいんだよ、プルツォも！自分の生き方を自分で選んで！」
プルツォ「プル……」

グレミー「プルの言う通りだ、プルツォ。もうお前は自由なんだ」

プルツォ「ありがとう、グレミー。だったら、私はプルと行く」

プル「つて事は、ジユドーやみんなと一緒にだね！」

グレミー「私も血の呪縛を忘れ、自分自身の生き方を見つめ直そう。その手助けをしてくれるか、ルー・ルカ？」

ルー「ごめん。それは自分でやって」

グレミー「そ、そうか……」

ラカン「振られたな、グレミー」

ヤザン「ここまでバツサリやられりや諦めもつくだろうさ」

マリィダ「……」

ミネバ「プル達はそれぞれの道を決めましたよ、マリィダ」

マリィダ「私も自分の決めた道へ進みます」

リディ「俺もだ」

アンジェロ「皆、いい目をしているな」

フロンタル「バナージ君。私とアンジェロはアル・ワースに残り、可能性の素晴らし

さを広めるつもりだ」

バナージ「お願いします、フロンタル」

トビア「みんな、それぞれの世界に帰っていく…。俺も帰ろう…。ベルナデットの所（に…）」

シーブック「トビア…。フルクロスの装備はアル・ワースに置いていくんだな」トビア「Hiirllガンダムとかと同じですよ。本来の時代には、あつてはいけないものですから」

シーブック「本来の時代か…。そこに帰った時、トビアの記憶も戻るといいな」

トビア「記憶…。ああ、そう言えば、俺…記憶喪失って事にしてたんでしたね！」

シーブック「え!?？」

キンケドウ「き、気にするな、シーブック！」

トビア「お別れですね、シーブックさん。俺…このアル・ワースでシーブックさんとお会えた事、絶対に忘れませんから」

キンケドウ「未来を生き抜けよ、シーブック。俺達も応援しているからな」

シーブック「…よくわかりませんが、2人の事は信用しています。ありがとう、トビア、キンケドウさん。僕の方こそ、お二人とお会った事は忘れません」

トビア「（このシーブックさんが元の世界の未来でトビア・アロナクスに出会うかわか

らない……。未来は万人の手の中にある……。シーブックさん、セシリーさん……。お二人が幸せになる事を願います……」

青葉「それぞれの世界が新しい時代を迎えるのか……」

倉光「では僕達も輝かしい未来に向けて出航しようか」

レーネ「そうおつしやられても……」

リー「自由条約連合とゾギリアの戦いの行方はどうなるか、わからないんですよ」

ラーシャ「ゾギリアの影の支配者、エフゲニー・ケダールは倒れましたが……」

タルジム「ゾギリアと連合との戦いがどうなるかは何とも言えないな」

アルフリード「国内の混乱はマルガレタ特務武官をリーダーとするチームが対処してくれているはずだが……」

倉光「未来が分からないのなら、自分が望む結末になる様に力を尽くせばいい」

アルフリード「おつしやる通りです、倉光艦長。ゾギリアを代表して、そのために尽力する事を誓います」

倉光「よろしく、アルフリード中佐。僕としても二度と戦場で君に会いたくないからね」

青葉「さつすが、艦長！最後にいい感じで締めてくれるぜ！」

ディオ「青葉……」

青葉「…湿っぽいのはやめようぜ、ディオ」

ディオ「だが…」

青葉「俺と雛…そして、シグナスのみんなはそれぞれの世界に帰る…。もしかしたら、二度と会えないかも知れない…」

ディオ「…」

青葉「俺さ…夢にも思わなかったよ。まさか70年後の未来に親友が出来るなんてさ。ディオだけじゃない！シグナスのみんなにも感謝してる！」

まゆか「青葉さん…」

ディオ「お前は…突然、現れて俺達を引っ掻き回して…！」

青葉「忘れないぜ、ディオ…。お前のこと、絶対に」

ディオ「俺もだ、青葉。…雛も元気だな」

雛「ありがとう、ディオ」

エルヴィラ「…青葉君、雛さん…。もしかしたら、時を越える時にあなた達は記憶を失う可能性もある」

青葉「え…！」

雛「私がお父様に拾われた時の様に…」

エルヴィラ「歴史の修正力と言えはいいのかしら…。その時代に不都合が起きそうな

事に対して、超常的な力が働く事がある……。恐らく、あなた達のヴァリアンサーは時を越える際に失われ、その記憶も……」

青葉「大丈夫ですよ」

雛「大丈夫つて、青葉……」

青葉「俺……ディオやみんなの事……絶対に忘れませんから。そして、例え記憶を失つても俺は必ず雛に巡り合います」

雛「青葉……」

ディオ「お前が言うのと、どんな無茶なことでも本当にそうなりそうな気がする」

青葉「流石は相棒！俺の事を、よくわかってるぜ！」

ディオ「調子に乗るな」

青葉「お前こそ、偉そうなんだよ！」

シーブツク「最後の最後まで、この二人は……」

ベルリ「いいじゃないですか、これがなきや青葉とディオじゃありませんから」

万丈「心ゆくまでま、やらせてやればいいさ」

ヴァン「仕方ねえ。終わるまで待つてやるか」

雛「（青葉とディオ……。二人の絆に私は救われた……。ありがとう……。私も決して、あなたたちの事を忘れない）」

ビゾン「…」

アルフリード「感傷に浸っている時間はないぞ、ビゾン。我々の前には課題が山積みだ」

ビゾン「俺も務めを果たします。ゾギリア軍人として、祖国のために」

アルフリード「期待させてもらうぞ、ビトン」

雛「(さようなら、ビゾン…。そして、ありがとう…)」

ビゾン「(ヒナ…。幸せになってくれよ…)」

シモン「みんな、希望に満ちているな」

ニア「ええ…」

ヨマコ「何言っているのよ！一番、希望と幸せに満ちているのはあなた達じゃない！」

キタン「そうだぜ！」

ギミー「エクスクロス解散前の最後の大事な…」

ダリー「お二人の結婚式が終わったから、みなさん、元の世界へ帰るんですから」

カミナ「みんなには感謝してるぜ！」

ヨマコ「どうしてあなたが感謝するのよ…」

シモン「ありがとうな、みんな！帰還を遅らせてまで式に出てくれて！」

ベルリ「こっちこそ素敵な結婚式をご馳走様でした！」

青葉「シモンさんとニアさんを見届けなきや、元の世界に帰るわけにはいかねえぜ！」
アキト「幸せに、2人とも」

ヴァン「嫁さんを大事にしろよ、シモン」

アンジユ「お似合いよ、シモン、ニア！」

サリア「皆さんもお元気で！」

ロザリー「またな！」

ヒルダ「あたし等の事、忘れるなよ！」

しんのすけ「勿論だゾ！ヒルダお姉さん！」

クリス「みんなには本当に助けられた」

エルシャ「私は絶対に皆さんのことを忘れません！」

ヴィヴィアン「またね〜！」

サラマンディーネ「皆さんの未来に幸あらんことを願います」

ジル「アルゼナルを代表して、感謝する」

エンブリヲ「君たちならば、必ずや平和を掴む事が出来る」

ナオミ「私達も応援してるから！」

タスク「そして、俺達も頑張るよ！」

キタン「ここには来られねえダヤツカ達からもメッセージをもらってるぜ！」

ニア「シモン……」

シモン「何だ、ニア？」

ニア「この生命が尽きる日までご一緒させてもらいます」

シモン「誓うぞ、ニア。その日が来るまで、2人で全力で生きるって」

「ヴィラルル（二つの世界が終わり、新たな世界が始まる……。螺旋王……。俺は、この生命が続く限り、時の流れを見届けます……）」

レナ「ユイもこれで普通の皇女に戻れるわね」

ユイ「そうだね……。いなかった分を取り戻さないと……！」

アンジュ「気負いすぎるんじゃないわよ、ユイ」

ユイ「うん、ありがとう、アンジュ……！イングリッドとケイちゃんは旅に出るのよね？」

イングリッド「ええ。この世界をもっと見て周りたいたいと思ったの」

ケイ「でも、必ずレナ達に会いに行くわ」

サラ「ノアお姉様もエナストリアにいるよね？」

ノア「ええ。サラとティアがお世話になったレツさんにもお礼をしないといけないから」

ティア「やったー！姉様と一緒に入れるー！」

ルクス「…」

ヨハン「そうだね、ルクス。僕達はもう帰ろうか」

ユイ「ルクスちゃん…ヨハン君…」

ヨハン「悲しそうな顔はやめてよ、ユイお姉さん。永遠の別れじゃないんだから」

レナ「ルクス、本当にありがとう」

ルクス「…」

ルクスは笑顔で頷いた。

ユイ「皆さん、エナストリアの皆さんからもメッセージをもらっています。本当にありがとうございます！」

マサキ「さてと…ラ・ギアスへのゲートも確実に開けるだろうし、俺達も帰るとするか」

クロ「今回は思いがけない大冒険だったニヤ」

シロ「ホントだニヤ。マサキって、余程ツイてない星の下に生まれたんだニヤ」

マサキ「ま、そうかも知れねえが…。そのおかげで色んな仲間達と出会えるんだ。悪くねえと思ってるぜ、俺は」

甲児「…元気でな、マサキ、クロ、シロ。また何処かで会えるといいな」

マサキ「ああ…出来れば、戦場以外でな。あばよ、甲児」

サヤ「では、少尉：私達も帰りましょう」

アーニー「帰ったら、孤児院のみんなにこの事を説明しないとね」

サヤ「アレルヤさんやマリーさんにも迷惑をかけていると思いますし」

リチャード「安心しろ、今度は俺もいるからな」

サヤ「お願いします、お父さん」

アレルヤ「アーニー少尉、そつちの世界の僕達にもよろしくね」

グラハム「ベルジュ少尉、いつまでも胸を張って生き続けるといい」

アーニー「はい！」

零「じゃあな、アーニー、サヤ、リチャード少佐」

リチャード「お前さんも元気だな、零」

アーニー「僕は君の事を絶対に忘れないよ」

零「俺もだ。また、サヤの落語を聞きたいしな」

サヤ「では、今度お聞かせできる様に訓練をしておきます」

ジン「UX」「アーニー……」

アーニー「ジン……。君とアユルはどうするんだい？」

ジン「UX」「俺とアユルはこのアル・ワースで生きようと思う。お前達が元の世界で必死に生きようとしている様にな。アユル、ついてきてくれるか？」

アユル「当然です、ジン。あなたと一緒に生きると決めたから」

ジン「UX」「だが、忘れるなよ。お前には負けないからな!」

アーニー「望む所だよ」

聖龍妃「では、皆さん……。そろそろ元の世界へ帰るための異界の門を開きます」

シバラク「ついに、この時が来たか……」

幻龍齋「聖龍妃様が力を取り戻された今、すべてはあるべき場所へと還っていく……」

ヒミコ「おっさん、誰だ?」

幻龍齋「いい加減に慣れろ、ヒミコ!お前の父、幻龍齋だ!」

クラマ「しかし、驚いたぜ……。親父様が、お猿の姿から人間に戻った時には」

シバラク「うむ……。未だに慣れないヒミコの気持ちもよくわかる」

ヒミコ「それにお猿の方が、カッコいいのだ!」

幻龍齋「あら!?」

クラマ「本来の姿を取り戻したのは親父様や俺だけじゃない」

翔龍子「ワタル……」

ワタル「虎王……じゃなかった……。翔龍子様……」

聖龍妃「私はドアクダーによって封印されており、息子の翔龍子もまた、姿を変えら

れ虎王としてドアクダーの息子のされていました」

翔龍子「ワタル……。余は、虎王だった時の事を何も覚えていない」

ワタル「いいんです、翔龍子様……。虎王だった頃の悲しい事は忘れてしまっても」

翔龍子「だが、お前との友情は微かに覚えている。だから、今だけは虎王と呼んでくれ」

ワタル「虎王……。君に会えて、よかったよ」

ヒミコ「トラちゃん！ヨメにするって言った、あちしの事は!!?」

翔龍子「お前の事も微かに覚えている。世話になったな、ヒミコ」

聖龍妃「ワタル……。そして、エクスクロスの勇者達……。あなた方の勇氣は救世主伝説として永く語り継がれるでしょう」

ワタルは龍神丸から降りた。

ワタル「先生、ヒミコ、親父様、クラマ……。色々な事があったけれど、みんなのおかげで僕はやってこられたんだ。ありがとう、みんな」

クラマ「水臭い事は言いつこなしだぜ」

幻龍斎「元の世界に戻っても、忘れんでくれよ」

ヒミコ「ワタル！またアル・ワースに来るか!!?」

ワタル「ああ、また来る……。きつと！」

シバラク「ワタル！拙者が教えた事を忘れるな！どんな時でもくじけず勇氣を持つて

生きるのだ！」

ワタル「はい、先生！」

龍神丸「ワタル……。長い戦いだつたが、よく耐えた。これでお前も一人前の男だ」

ワタル「龍神丸……。僕は……」

龍神丸「顔を上げるんだ、ワタル。私はいつでも、お前の側にいる。お前が空を見上げれば、雲の中に、虹の中に、星の中に私はいる」

ワタル「うん……！きつとまた、僕達……会えるよね！」

アマリ「元気でね、ワタル君。元の世界に戻つても、頑張つてね」

零「何があつても負けるなよ。お前は立派な救世主である前に男なんだからよ」

ワタル「ありがとう、零さん！アマリさん！またいつか会おうね！」

聖龍妃「では、導師セルリック……。異界の門を」

セルリック「かしこまりました、聖龍妃様」

アンジュ「しかし、あのセルリックが生きてきたとはね……」

万丈「エンデに意識を乗っ取られていたとはいえ、自らの行いを悔いた彼は、魔徒教団を真の法と秩序の番人に再編するそうだ」

ノブナガ「あの男も自らの中の闇を越えた……。信頼出来るだろう」

セルリック「そして、これから魔徒教団はオニキスと共にこのアル・ワースを平穏な

世界へとしていきます。よろしくお願いしますよ、首領の新垣 零様」

零「俺が首領か…なんか、パツとしないな」

アルト「何言ってるんだよ、零」

マーベラス「お前に向いているぜ。お前には誰かを導く力があるんだからよ」

ゼロ「頑張れよ、零！俺達みんな、別世界からだが、応援しているからな！」

零「皆さん…本当にありがとうございます！」

セルリツク「では…。エクスクロスの皆さん…。今、門が開きます」

セルリツクの力で異界の門が開かれた。

聖龍妃「戦争と平和と革命の世界のサイクルがなくとも、この世界は未来を願う人々と聖獣の想いで回っていきます。ありがとうございます。勇者達…。アル・ワースは、あなた達にくれた希望と共に未来へと進んでいくでしょう」

異界の門が輝きを増す…いよいよか。

一夏「じゃあな、みんな！」

シヨウ「どんな辛い事にも負けるなよ！」

九郎「俺達はいつでも仲間だ！」

シーブック「何にだって全力でぶつかっていきよ！」

ケロロ「我がケロン人の友人として…エクスクロスの事は絶対に忘れないであります

！」

ベルリ「アル・ワースで学んだ事を僕は忘れません！」

青葉「どんな世界、どんな時代に行こうとも……！」

ゼロ「どんな宇宙、どんな次元に行こうとも……！」

シモン「どんな困難や、どんな敵にぶつかっても……！」

ルルーシュ「俺達は乗り越えていく！」

ヴァン「そして、それぞれの生き方をすりゃいい」

ワタル「だって、僕達は……！」

アマリ「アル・ワースの救世主であり……！」

零「エクスクロスだからな！」

そうだよな、父さん、母さん、ネメシス……。

しんのすけ「じゃあ、そういう事で……！」

光が消えると、異界人のみんなの姿は消えていた……。

元の世界に帰れたんだろう……。

セルリック「アマリ……」

アマリ「少し時間をください、導師セルリック」

セルリック「待っているよ、藍柱石の術士……。いや、法師アマリ……。零様、アマリを

「お願いします」

零「任せてください、セルリックさん！」

イオリ「アマリさん……」

アマリ「本当にイオリ君は帰らなくてよかったの？」

イオリ「色々考えたけど、アマリさんを放っておくわけにはいかなからね」

……おいおい。

弘樹「どうするんだ、零？ありや、愛の告白だぜ？」

零「ホープスにも言ったはずだぜ？受けて立つてな」

アマリ「もう、零君ったら……。でもね、私……まだ戦いは終わっていないと思うの」

イオリ「え……」

零「……」

アマリ「ドアクダー等が倒れな事で今まで潜んでいた小悪党が動き出したり、混乱が起きたりする……。エクスクロス程の力が必要ないけど、私は平和を守るため、生まれ変わった魔徒教団の一員として戦おうと思うの。そして、戦いが完全に終わったら、元の世界に帰るか、もう一度考えるわ」

零「手伝うぜ、アマリ。これからもずっと……」

イオリ「勿論、俺も手伝う。そのためにアル・ワースに残ったんだ。俺が君を支える

よ」

ホープス「黙っていれば、調子に乗るなよ、オド袋が」

イオリ「な、何だよ！」

アマリ「け、喧嘩しないで2人とも！」

零「それにしても…お前らは戻らなくてよかつたのかよ？」

カノン「勿論です！」

弘樹「お前を残して戻れねえだろ」

優香「これまでも一緒にやってきたんだから、これからも一緒だよ！」

メル「私達も零さん達もお手伝いします！」

アスナ「だって、私達は…家族なんだから！」

レイヤ「家族、か…。へっ」

ギルガ「前までは馬鹿らしく聞こえていたこの言葉も今では良い聞き心地だ」

リン「はい！」

ラゴウ「俺達も助けていこう。零達を…」

ホープス「(始まりのアル・ワース…。神と獣、光と闇、過去と未来が集う世界…。それは永遠に覚めぬ夢…。大地は人の想いを吸い、木々には智慧の実が熟す…生と死の狭間に浮かび、誰にも知られず世界は回る…。全ては、そこに生きる人々の未来への願い

と共に」

俺達は機体から降り、集まった。

アル・ワースに残った他のメンバ―とアル・ワース出身組もそれぞれの居場所へと帰っていった…。

そして、俺とアマリは2人で話がしたいと、みんなに待ってもらおう事にした。

ー新垣 ゼファイです！

私達はパパとママを待つ事にしました。

弘樹 「つたく、あの2人はこんな時でもイチャイチャしやがって…」

カノン 「それがあの2人ですもの」

メル 「イオリさんはものすごく睨んでますけど…」

イオリ 「め、メルさん…!?？」

ラゴウ 「そういうお前もだぞ、メル」

リン 「ギルガさん、浮気は許しませんから」

ギルガ 「しないよ！」

優香 「うむむ…！」

アスナ「嫉妬深すぎよ、優香」

優香「だ、だって…！って、アスナちゃんもでしょう!!？」

アスナ「わ、私は…」

レイヤ「…やつぱり、まだ零に未練があるか？」

アスナ「…少しは…。でも、今大好きなのレイヤだから」

レイヤ「俺も好きだぜ、アスナ」

ホープス「こちらもちちらですね…。ゼフィは良かったのか？2人と一緒に話に入らなくて」

ゼフィ「お二人と話せるのはいつでもできます。…今はお二人だけにしたいんです」

ホープス「本当にお前はいい子だな」

パパ、ママ…私もお手伝いします。

お二人といつまでも幸せに暮らすためにも…。

―新垣 零だ。

俺はアマリと2人で話をしていた。

アマリ「それにしても魔従教団の法師とオニキスの首領って、私達凄くなったわね」

零 「肩書なんて意味はねえよ。これからどう頑張るか…それで変わってくる」

アマリ 「そうね…。そろそろみんなの所に戻らないと…」

零 「そ、そうだな…。あ、あのよ…アマリ…」

言うなら、今だ…！

アマリ 「何？」

零 「も、もし…世界が平和になったら…。平穩の世界でもこのアル・ワースでもいい…。俺と、結婚…してくれないか？」

俺はアマリに指輪を手渡す。

アマリ 「…！」

アマリは驚きながらもそれを受け取り…涙を流しながら、指にはめた。

アマリ 「はい、こちらこそお願いします、零君」

零 「…じゃあ、その日が来るまで、お互いがんばろう…アマリ」

俺の言葉にアマリは頷き、俺はゆっくりとアマリの顔に自分の顔を近づけ…アマリの唇と俺の唇を重ね合わせた…。

本当の平和なんていつ来るかわからない…。

それでも俺達は諦めない…。

エクスクロスで学んだ沢山の大切な事…それを無駄にしないためにも…。

┆俺達は前に進み続ける…。

┆END┆